

シンフォギアの消えた世界で

現実の夢想者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夜勤終わりのどこかボケた頭でアプリゲームの『戦姫絶唱シンフォギアXD UNLIMITED』をスマホとPC両方でやっていた只野仁志（ただのひとし）は、手元を狂わせてスマホをPCへ落下させてしまう。

その瞬間、PCの画面がブラックアウトし再び点いた時にはどこかで見慣れたものが映し出されていて……

「つと……あれ？」

そこから出てくるのは『立花響』その人。そして判明する衝撃の現実。

「嘘、だろ……」

シンフォギアという作品どころか声優達さえ響が出現した影響なのか変化しており、世界全てから『戦姫絶唱シンフォギア』そのものが消滅したのだ。

ただ一つ、只野の記憶を除いて……。

異なる結末を描いた分岐作品が出来ました。

こちら<https://syosetu.org/novel/228962/>です。

目次

| | | | | |
|-------------------|-----|-----|-------------------------------|-----|
| 花咲く勇氣 | 624 | 番外編 | ウルトラマン編 (メビウス&ウルトラ兄弟・ティガ&ダイナ) | 662 |
| 花咲く勇氣 | 624 | 番外編 | スーパー戦隊編 (スーパー戦隊199ヒーロー大決戦) | 582 |
| 陽だまりメモリア | 472 | 番外編 | 仮面ライダー編 (BLACK・クウガ) | 532 |
| Vitalization | 420 | | | 472 |
| はっぴー すまいる ばけいしょん | 357 | | | 420 |
| PRACTICE MODE | 312 | | | 357 |
| Stand up! Lady!! | 267 | | | 312 |
| Stand up! Ready!! | 231 | | | 267 |
| 此の今を生きて | 202 | | | 231 |
| 誰かのためのヒカリ | 165 | | | 202 |
| 君ト云ウ 音奏デ 尽キルマデ | 143 | | | 165 |
| 逆光のリゾルヴ | 124 | | | 143 |
| ORBITAL BEAT | 99 | | | 124 |
| 空へ | 76 | | | 99 |
| 防人ノ歌 | 56 | | | 76 |
| Synchrorgazer | 39 | | | 56 |
| TRUST HEART | 27 | | | 39 |
| 繋いだ手だけが紡ぐもの | 19 | | | 27 |
| FIRST LOVE SONG | 9 | | | 19 |
| 私ト云ウ 音響キ ソノ先ニ | 1 | | | 9 |
| 始まりの歌 | | | | 1 |

| | |
|-----------------------------------|------|
| ダイスキスキスキ | 711 |
| 裸になって…夏 | 787 |
| 番外編 戦姫にラブソングを | 824 |
| エンドレス☆サマータイム | 846 |
| Dark Oblivion | 887 |
| 花咲く勇氣 Ver. Amalgam | 926 |
| はっぴーばーすでのうた | 982 |
| Exterminate | 1010 |
| 恋の桶狭間 | 1054 |
| 番外編 男はつらいよ… | 1096 |
| キミだけに | 1155 |
| 番外編 明けバカ日誌 | 1193 |
| デンジャラス・サンシャイン | 1231 |
| KNOCK OUTツ! | 1293 |
| 番外編 仮面ライダー編 (クウガ) | 1345 |
| メロディアス・ムーンライト | 1381 |
| 番外編 二つの衝撃的展開 (ゴジラ・BLACK&BLACK RX) | 1422 |
| Just Loving X-Edge | 1457 |
| 未完成愛Mapputatsu! | 1517 |
| 未熟少女Buttagiri! | 1570 |
| TESTAMENT | 1611 |
| Bye-Bye Lullaby | 1677 |
| 番外編 仮面ライダー編 (クウガ) | 1733 |

| | |
|--------------------------|------|
| Glorious Break | 1776 |
| ルミナスゲイト | 1836 |
| いつかの虹、花の思い出 | 1884 |
| 君が泣かない世界に | 1927 |
| ギザギザガラリ☆フルスロットル | 1970 |
| かばんの隠し事 | 2014 |
| アカツキノソラ | 2060 |
| 此の今を生きるヒカリ | 2115 |
| 永愛プロミス | 2188 |
| リトル・ミラクル grip it tight | 2236 |
| 双翼のウイングビート | 2289 |
| UNLIMITED BEAT | 2347 |
| METANOIA | 2379 |
| アクシアの風 | 2421 |

始まりの歌

「それで、どうだったの?」

俺の目の前でバイト先でもらってきた廃棄のシュークリームを食べようとしていた少女が動きを止める。

それでもシュークリームから手を離さない辺りが可愛くて非常にらしいと思う。

「えっと、どうもこのこと私達の世界は時間の流れ方が異なるらしいんです」

そう言って難しい顔をするのは立花響という名の少女。

そう、つい一週間前なら名前を検索をかければウィキに引っかけられるぐらいの有名人……と言えるのだろうか。

まあ、そういう存在だった。

今から一週間前の事、俺はバイト帰りの疲れた頭でオーナーから目こぼし頂いた廃棄のおにぎりを食べながら、スマホとノートPCでゲームをやっていたのだ。

そう、戦姫絶唱シンフォギアXD UNLIMITEDである。

だが、やはり夜勤終わりのボケた頭だったからか、俺は手元を狂わせスマホをノートPCへ落とした。

その瞬間、何故かノートPCの画面が真っ暗になったかと思うとどこかで見たような光景へ変わったのだ。

その光景が、ゲーム中でいう平行世界を行き来出来る聖遺物 “ギヤラルホルン” の中だと気付いた時にそれは起きた。

「つと……あれ?」

「へ? え?」

ノートPCのモニターから見覚えのある姿の少女が現れたのである。

それが、俺、ただのひとし只野仁志と立花響との出会いであった。

軽くパニックになった立花さんを疲れからテンションを上げられない俺が落ち着かせ、まず彼女の事情を聞く事になったのだが、これがまた非現実的だった。

目の前の少女は本当に「あの」立花響であり、とある一件以来静かになったはずのギャラルホルンがアラートを発したために、たまたま本部を訪れていた立花さんを含む三人（残りは雪音さんと小日向さんらしい）でアラートの発信先を見つけたのだが、そこは今までと違って穴ではなく裂け目だったとの事。

「それで、ちよくつと近付いたら私だけ吸いこまれちゃいまして……」

そう言って立花さんは申し訳なさそうに後ろ手で頭を触った。

「じゃあ、今頃二人は大慌てしてるんじゃない？」

「そうかもしれない。でも……」

後ろを振り返る立花さん。そこには今もギャラルホルン内のような画面のノートPCがある。

「さすがにこんな事初めてなんで、もう少し調べてから戻ろうかなって」

「それはいいけど……」

一部の人達にはある意味有名な彼女を普通に外に出す訳にはいかない。

そう思った時、俺は彼女への説明材料としてスマホを手に取りゲーム画面を見せようとして——気付いたのだ。

「なくなってる……？」

そう、ついさつきまであったはずのアプリが消えているのだ。

ならばとネットでシンフォギアを検索してみたのだが、有り得ない事にヒットしなかった。

それでダメならと声優さんの名前で検索したのだが、こちらも何とヒットしなかったのである。

それも全員だ。

嘘だろと思いつながら他の作品を調べれば、そちらはヒットしたので見てみたところ……

「嘘、だろ……」

声優さんの名前が違っていたのだ。

立花響の声を担当していた悠木碧さんや風鳴翼の声を担当していた水樹奈々さんの他の代表作で、彼女達の代わりに声を担当している

人達は悠木碧でも水樹奈々でもなかった。

ただ、サンプルボイスを聞くと声は一緒。

つまり、芸名が変わっているのである。そこでようやく俺は理解したのだ。

この世界からシンフォギアに関する全てが消えたのだ、と。

何せ俺の持っていたシンフォギアライブのパッケージが見た事のないアニメのものへ変更されており、中身の映像も映っている人達は同じ顔でも名前や歌は異なっていたのだ。

「えっと、立花さん。信じられないかもしれないけど聞いて欲しい」「何ですか?」

そこで俺は自分の知る限りの情報を話した。

さすがに立花さんもビックリしたり恥ずかしがったりと色々な反応を見せたが、絶対に知り得ないはずの事を初めて出会った俺が知っていると事事で信じてくれたのだ。

「ここは、ノイズもギアもない世界なんだ……」

「そう。で、ついでに言えばここでは君達はアニメの一つ、だったんだけどなあ……」

それを証明する証拠が全て消えてしまった以上、物的に証明する手立てがない。

「そこは……今でも正直信じられません。だけど、サンジェルマンさんやキャロルちゃん、シエム・ハさんの事も知ってる以上、只野さんの言葉は信じます」

「ありがとう。とりあえず、この辺を歩いてみるか? 何も無いとは思うけど……」

「そうですね。じゃあ……」

「おおっ、格好が一瞬で」

ギアを解除した立花さんは普通に愛らしい少女だった。

俺の暮らす六畳一間には似合わない感じだな。

「じゃ、気を付けて行ってらっしゃい」

「え? 只野さんは一緒に来てくれないんですか?」

「……ごめん。俺、コンビニの夜勤やってるんだ。で、今日もシフト

入ってるから寝たい」

「あつ、そうなんです。分かりました。じゃ、私一人で行ってきます」

「うん、悪い。あつ、これここの鍵だから」

「いいんですか?」

「大丈夫だと思うけどさ。ああ、もし誰かに俺との関係を聞かれたら高校の後輩ですとか誤魔化しておいて」

「はい。じゃあ、おやすみなさい」

「……うん」

にっこり笑顔で可愛い女の子におやすみって言われるとか、これどんなギャルゲーだよ。

そう思いながら俺は万年床に近い布団へ入り、立花さんは玄関を出ようとして不自然な感じで動きを止めた。

「あ、あれ?」

「どうした?」

「い、いや、あのですね? 何故か急に体が動かなくなつたと言いますか、まるで紐か何かで引っ張られてるみたいで」

「は?」

困惑する立花さんを見て俺は布団から起き上がり、そのまま玄関を開けて外へと足を踏み出した。

うん、普通に出れる。

「何も無いけど?」

「で、ですよ。でも私は……こ、この通りで……」

何とか足を上げて玄関から先へ行こうとするも、玄関がまるでライオンのように立花さんは足を下ろさない。

「……ふざけてるとかじゃ……」

「ないです!」

「だよなあ」

真剣な表情で断言された。さて、じゃあ何か原因は……あつ。

「もしかして……」

そもそもの切っ掛けを思い出せば、スマホとノートPCの両方でシ

ンフォギアのゲームをやった事だ。

で、ノートPCはゲートみたいになった。じゃあ、スマホは？
枕元のスマホを拾い上げ、俺はそれを持って玄関から外へ出る。
すると急に立花さんが足を下ろして外へと出れたのだ。

「動いた!?!」

「みたいだな。じゃ、やっぱりそういう事か」

ノートPCがこの世界と立花さんの世界を繋ぐゲートなら、スマホはおそらく立花さんをこの世界に固着させている依り代なんだ。

その話をするに立花さんは成程と納得し、こちらを申し訳なさそうに見上げてくる。

うわ、これは中々ズルい。結構心に来るぞ。

「あ、あのお……」

「……一回部屋戻っていいか？ 着替えるから」

「っ！ はいっ！」

まあ、こんな嬉しそうな笑顔を見せられたら多少睡眠時間を削ってもおつりがくる。

そう思っただけは立花さんと一緒に部屋へと戻った。

で、着替えて二人でアパート近くを歩いてみて、立花さんは明確にここがこれまでと異なる事を理解してくれた。

と言うのも物理的な証拠が出て来たのだ。

「新聞の日付、か……」

忘れてたけどそもそもシンフォギアは近未来の設定だった。

対してこちらはまだ2020年だ。

それが決め手となり、俺は新聞を一部買って立花さんへ渡す事にした。

「あの、何だか色々すみません」

「いいって事さ。もしかしたらこれは俺が見てる夢かもしれないって思ってるんだ」

「夢?」

「だって会えるはずないと思った美少女と会えて会話も出来て、ギアも見せてもらったしデートみたいな事も出来た。この思い出だけで

七十億の絶唱を超える事が出来るよ」

「大袈裟だっ!? あとさらっとキャロルちゃんの言葉使ってる!」

そんなやり取りをしてノートPCの中へ吸い込まれていったのが丁度一週間前。

そして今日再び彼女は現れた。で、最初のやり取りに繋がる訳。

「時間の流れが違うって?」

「エルフナインちゃんが言うには、多分ここは平行世界じゃなくても一つの根幹世界にあたるんじゃないかって。実は、あの後戻ったらまだクリスちゃんと未来がいて、二人は驚いたんです。私が吸いこまれてすぐって言えるぐらいで戻ってきたからって」

「……はい?」

さらっととんでもない事を言ったな。

「その、どうもあの時ここでの過ごした時間は私達の方だと五分にも満たないみたいで」

「……つまり、例えばここで一日過ごしても立花さん達の方じゃ半日経ってるかも怪しい?」

「はい」

あの時普通に二時間ぐらいは経ってたよな。

それが五分にも満たないとか怖すぎるだろ。

「そ、そっか。で、どうして今回も一人なの?」

「え、えっと……ここを複数人で通れるのが不安だからって事が一つと」

「うん」

「もう一つは、尻ごみしちゃってるんです」

「へ?」

言っている事がいまひとつ分からない。一体何を尻込みすると言うのだろうか?

「……只野さんが私達の事、かなり詳しく知ってるから」

「……………あゝ」

言い辛そうに立花さんが告げた言葉で理解した。

そりやそうだ。誰だって見も知らない相手が自分の隠してるはず

の秘密や過去を知つてるとなれば怖いし嫌がるだろう。

立花さんはもう俺と出会ったからその辺りを開き直るしかなかったけど、他の装者達はそうはいかないよな。

「可能なら僕が行きたいってエルフナインちゃんは言っていましたけど……」

「あの子は知られて困る事がないからなあ」

「はい。逆にキャロルちゃんの事を詳しく聞きたいって」

「あー、そうか。キャロルの思い出を集めたいんだろうな。何なら紙に覚えてる事、書き出そうか?」

「あつ、それは喜んでくれそう! お願いしてもいいですか?」

「お安い御用だよ。じゃ、待ってて」

「はい!」

元気な笑顔で返事をする立花さんは本当に太陽みたいだと思う。

ただ、シユークリームの中身が口の端についてる。

「立花さん、クリームが口の端についてる」

「え? どこですか?」

「じつとして。……取れたよ」

指についたカスタードクリームを見せると何故か立花さんが顔を赤くする。

「あ、あはは……只野さんって」

「あむ……ん?」

指についたクリームを口へ入れて綺麗に舐め取る。

するとこつちを見ていた立花さんが顔を真っ赤にして固まってしまった。

一体どうしたって言うんだ?

「立花さん? どうかした?」

「……っ?! え? あ? え、えつと……」

しどろもどろになりながらあたふたする立花さんを眺め、俺は疑問符を浮かべるしかない。

とりあえず俺は布団へと入って横になりながらキャロル情報をメモ用紙へ書いていく。

そんな俺を見て立花さんも次第に落ち着いてきたらしく、気付けば俺の書いている事を読もうと隣へ移動し覗き込んできていた。

「……………え？ アダムさんとキャロルちゃんのお父さんって友達なんですか？」

「らしいよ。ただし、それはあの平行世界の話で立花さん達の世界では分からない」

「あく……………って、ええっ!? キャロルちゃんが子供のためにサンタさんの真似をつ!? そんなファウストローブがあっただっ!?」

「……………立花さん、これ書き終わったら渡すだろ？ その時、帰る前にここで読んでからゲート通るといいよ」

「え？ あっ……………そ、そうします」

気が散る訳じゃないけど、このままじゃその内俺へ直接詳しい話をつて言い出すのが読めた。

なのでそれを避けるために終わった後で読む事を勧めた。

立花さんも恥ずかしそうに身を縮めて俺の隣から移動する。

若干していた甘い匂いが遠くになって、俺はそれがやっぱり立花さんの匂いだと分かって内心惜しい事をしたなと思いつつ手を動かす。

何とか書き終えて、俺はメモを立花さんへ渡すとそのまま目を閉じる事に。

「あつ、おやすみなさい只野さん」

「ああ、おやすみ……………」

最後に見た立花さんの笑顔を臉に焼き付け俺は眠りに落ちる。

目覚めた時にはもうそこに彼女の姿はなく、メモ用紙を使った置き手紙があつた。

——また来ます。バイト、頑張ってくださいね。シュークリーム、ごちそうさまでした！ 立花響

それを読んで俺は彼女が出来たみたいない気持ちになつて、寝起きながらテンションがMAXになったの言うまでもない。

そして心に誓った。またいつ彼女が来てもいい様に、廃棄のシュークリームをバイトの度にもらつておこうと。

私ト云ウ 音響キ ソノ先ニ

「っと、只野さーん。来ましたよって……」

三度目の訪問。私はパソコンの中から出てきて只野さんの部屋へ降り立つ。

最初来た時は散らかってたけど、この前来た時は片付いてた。

今日も片付いてるけど静か過ぎる。それに暗い。

でも夜って感じじゃない。カーテンが閉められてるから多分外は少し明るいんだと思う。

「……寝てる」

視線を動かすと只野さんが布団で寝てた。そつと枕元のスマホを手に取る。充電中みたいで画面を表示させると日付と時刻が……

「あれから三日経ってるんだ……」

こつちじゃあれからまだ一日だ。やっぱり時間の流れ方が違う。

時刻はそこまでずれてないからそれだけは安心。

「深夜勤務、なんだよね」

こう言ったらなんだけど死んだように眠ってる只野さんを見てると、すつごく申し訳ない気持ちになる。

まだこの世界の事はよく分からないけど、エルフナインちゃんや師匠はあの新聞からここが私達の世界の歴史と繋がってない事を調べてくれた。

つまり、ここにはフィーネさえない。下手をしたらバラルの呪詛も神の力さえもない。

——そもそも僕らの事が創作物として存在していたとするなら、そこはもしかすれば上位世界なのかもしれません。

エルフナインちゃんの言っていた言葉を思い出す。

上位世界、かあ。

簡単に言えば、只野さん達の世界は私達からすると神様の世界って事だつてクリスちゃんと言ってたっけ。

——あたしらが自分だけで隠してるような事をそいつは知ってるだろ？ しかも、そいつの話が本当なら、それが映像やら文章で存在

してたんだ。神様の世界って考えた方が分かり易いだろ。

クリスちゃんの言葉を聞いた時、私はそんな事ないって思ったけど、言う事は出来なかった。

実際最初に只野さんから色々話をされた時、私もちよつと怖くて嫌だった。

大事な思い出を見も知らない人が知ってる事に、どこか嫌悪感を覚えただけから。

だけど、あの時の只野さんは私が外へ出てしまったら危険だよって教えるために必死だったと今なら分かる。

ただ、何故かその『戦姫絶唱シンフォギア』って言うものが全て綺麗に消えちゃったらしいけど。

「……なのに只野さんは覚えてる。エルフナインちゃんは私と接してるからだって言ってたけど」

多分私がかここへ来た瞬間、この世界には変化が起きた。

だけど只野さんはその影響を受けた時に私と喋っていたから影響を撥ね退けたんじゃないかって、そうエルフナインちゃんは考えてるみたい。

だから定期的に私達の誰かが会わないと只野さんもいつ影響を受けるか分からない。

そうなつちやったらこの世界を戻す事は出来ないし、そもそもここがアラートを発したって事は何かここに事件が起きるって事だ。

それを何とかするために来たんだから、せめて解決するまでは只野さんの協力は必要だもん。

「……それにしても」

ちよつと伸びてきてる髭を見て、そういえばこの前はそうじゃなかったなって思い出す。

最初の時と二回目は朝の時間だったけど、今は夕方だからだろうな。

「髭って、こんな時間で伸びるんだ……」

コンビニの深夜って十時ぐらいから、だよな？　ご飯とかどうしてるんだらう？

見た感じお父さんの暮らしと同じ感じだけど、こっちはもつと家電とかがない。

炊飯器さえないし、冷蔵庫は小さな物が一つだけ。洗濯機もないみたいだし、精々あるのはレンジぐらいだ。

「男の人の一人暮らしって、こんななんだね」

そういえば、最初来た時に言ってたっけ。ここは帰ってきて寝るだけの場所だって。

「そんな暮らし、私だったら辛いなあ」

今は未来がいるし、昔はお母さんやお祖母ちゃんがいた。

いつも、一人じゃなかった。

でも只野さんはそうじゃない。

いつからこういう暮らしなのか知らないけど、多分今年からって感じじゃない、と思う。

「んっ……響……っ？」

「っ!? お、おはようございます。って言っても、もう夕方ですけど」
こつちを見てぼんやりとした顔と声の只野さんだけど、い、今響って呼んだ!

男の人から名前で呼び捨てなんてお父さん以外いないからビックリしちゃった。

で、でも、今の只野さん、ちよつとだけ可愛いかもしれない。

普段も眠そうだけど、今は本当に眠そうだ。

って、急に起き上がった。

「な、何でこんな時間に?」

「えっと、今日は学院終わりで来たんです。時間はどうもあまりずれてないみたいで」

「そ、そうなんだ。あつ、そうだ。ちよつと待ってて」

シャツとジャージ姿で只野さんは這うように移動して冷蔵庫へと向かうと、そこから何かを……。

「シユークリーム?」

「そう。毎日のように廃棄が出るんだ。良かったらどうぞ」

「いいんですか? じゃあ遠慮なくいただきますーす!」

えへへ、これで三回目のシュークリーム。実はこれ、私達の世界じゃ食べられないんだよね。

というのも、やっぱり只野さんが働いてるコンビニ、こっちにはないから。

タダだからかもしれないけど、美味しいんだよねえ。

「はむっ……ん〜」

コンビニスイーツって何でこんなに美味しいんだろ？ ちよつとしたケーキ屋さんだと結構な値段取る気がする味だよ。

「それで、エルフナインちゃんの反応はどうだった？」

「んう？」

只野さんがどこか嬉しそうに私を見つめてくる。

そういえば、只野さんは私を美少女なんて言ってくれた人だった。私とちよつと一緒に歩いてお話ししただけで七十億の絶唱を超えられるって、そんな事を言ってくれた人。

……そ、それに、私の口の端についてたクリームを指ですくい取って舐めちやつた人、なんだよね。

顔が熱くなってくるけど、まずは口の中の物をちゃんと飲み込もう。

って、そうしてたら目の前にグラスに入ったお茶が出て来た。

「良かったらどうぞ」

そこには眠そうじゃない顔の只野さん。何か新鮮かもしれない。

「……ありがとうございます。で、すっごく喜んでました。平行世界でもキャロルちゃんはキャロルちゃんだって」

「そっか。役に立てたなら嬉しいよ」

そう言つて微笑む顔が、一瞬だけとお父さんに重なった。

只野さん、まだそんな歳じゃないと思うけど……何でだろう？

「それで、色々質問があるんですけど、いいですか？」

「いいよ。俺に答えられる事なら」

師匠達からの質問を書いたメモを取り出して只野さんへ聞いていく。

まずは師匠の場合は風鳴関係のもの。

で、只野さんが言うには、そもそも師匠や翼さんのお父さんみたいな防人なんているならもう少しましな政治をしてくれる。だからいないと断言した。

次はエルフナインちゃんの問題。只野さんの世界ではシンフォギアってどんな物語だったのか。

「えっと、すつぐくぎつくりでいい？」

「え？ あ、はい」

「何があっても諦めずに手を伸ばし続けよう。そうする事で必ず何かが変わるから。そんな事を思わせてくれる物語」

その言葉に私は思わず息を呑んだ。

だって、それは私がやってきた事を意味するような言葉だったから。

私が信じ続けた事。思い続けた事。それが全てそこに詰められていた。

「……立花さんにこの言葉はかなりズルいかもしれないな。ごめん」

「い、いえっ！ その、嬉しいです。私達のやってた事、そういう風に感じてくれる人がいるんだって、そう思えたから」

「そんな事ないよ。俺だって君達の姿に生きる気力をもらってたんだ。生きるのを諦めるなって、そう自分へ言い聞かせて」

「只野さん……」

握った拳を見つめる只野さんは、少しだけ大人の男の人って感じがした。

きつと、私とは違った意味で只野さんも辛い想いをしたんだ。

それでも、奏さんの、そして私の言葉で頑張ってくれてる。そう思うと心があつたかくなる。

「あとはちよせえとかもよく使ってた。心の中で、だけど」

そう言つて恥ずかしそうに笑うのが、何だかとっても心に響いた。そこで分かった。只野さん、どこことなくお父さんに似てるんだって。

外見じゃない。言動が、かな。

「次は何？」

「え……う。あつ、えつと……」

何だかお父さんみたいって思った途端、急に恥ずかしくなってきた、そこから私は只野さんを見れなくなった。

運良くメモへ顔を向ければいいから助かったけど、今度からどうしよう？

お父さんに外見も似てればまだ良かったけど、外見はボサツとしてる感じで私の回りにはいなかった感じの人だし……。

とにかく、今は質問をしていこう。

「体重とかも知ってるんですか？」

「それは言ったと思うけど、数字関係はあまり覚えてないし、俺はそこまでコアなファンじゃないんだ。だからスリーサイズとかも同様に知らないよ」

マリアさんの質問は終わりつと。ついでにクリスちゃんのもだね。

「私達の事は、生まれてから今まで全てを知っているんですか？」

「作品として描かれた部分しか知らないからそれはない。だから本当の両親が誰とか本当の誕生日とかは原作者じゃないから分からないんだ。ごめん」

うわ、これが調ちゃんか切歌ちゃんって分かってるんだ。

しかも二人の多分知りたい事を答えてくれてる。

でも、少し残念だな。きつと二人ががっかりするだろうから。

チラッと見ると只野さんもどこか申し訳なさそうだった。

……やっぱり優しい人なんだな。

「えつと、平行世界の事はどれぐらい知ってますか？」

「どういうところへ行って、どういう敵と戦ったとかぐらいは知ってる。立花さんが巨大ヒーローになった事とか」

「えっ!? そこまで知ってるんですか？」

「まあ。フルパワーグリッドマンギア、完凸出来なかったんだよ……」

「かんとつ？」

よく分からないけど、グリッドマンの事を知ってるって事はそういう事だね。翼さんの質問も終わりつと。

「ノイズがない事は、幸せですか？」

「……難しいね。もしかしたら、そういうのがいる方が人類は手を取り合えるのかもしれないから」

「少しだけ、少しだけ只野さんが困った顔をした。未来、難しい事聞くなあ。」

「もしシンフォギアって作品がなくなったらままになれば、私達と繋がりに続けるってなったらどうしますか？」

その質問に、只野さんは驚いた顔をした。

「だけど、すぐに悲しそうな笑みを見せてゆっくり首を横に振った。」

「それは駄目だよ。多分だけど、ここは立花さん達が関わっていい世界じゃない。むしろこうなって欲しいよ。俺が立花さんと出会った事をなかった事にすれば、全てが元通りになるって」

私の質問へ只野さんはそう返して照れくさそうに頭を掻いた。

「なんて、そう想い切ればカツコイイんだらうけどさ……」

「只野さん……」

私を見てそう言う只野さんは、困ったように笑みを浮かべてる。

「それが、何だか嬉しくて、だけど申し訳ない気持ちになった。」

「出来る事なら、俺はこの思い出をなくさず生きて行きたい。だけど、同時にそうする事で誰かが困ったり苦しんだりするなら諦める。あくまでも、今の状況を喜んでいられるのはこの世界が平和で何も特異災害が起きてないからだから」

「……はい。私も、私も同じです。そして、出来れば何も起きないままか、起きる前に解決したいです」

「うん、それが一番だ。俺に出来る事はほとんどないけど、この部屋はいつでも来てくれていいから。それに、今は無理だけど近い内にスマホ一つ増やすんだ。そっちを俺は仕事や連絡用にするから、今のスマホはここへ置きっぱなしにする」

「ええっ!? さ、さすがにそれは……」

「いいんだ。今言った通り、この世界にシンフォギアが、装者が来た。それは絶対良くない事が起きるはずだ。それを阻止するにはこの世界の人間としてやれるだけの事はしたい」

私を見つめる只野さんは、凄く真剣な目をしてた。

それは、これまで出会ってきた私達を助けてくれた色んな人達と同じ目だ。

「……分かりました。じゃあ、お言葉に甘えますね」

「うん。ただ、泊まるのは止めておいた方がいいよ。布団、これだけしかないし」

「あはは……その時は寝袋とか持ってきてきます」

「いやいやっ！ 男の一人暮らしの部屋で女の子が寝るって意味、分かってる？ 俺がバイトで帰ってきた時起きてなかったら、変な事されるかもしれないだよ？」

「あっ……ご、ごめんなさい」

思わずノリで言った事だけど、只野さんが言ってくれた言葉で理解出来た。

わ、私っては何て事を……。

でも、只野さんなら大丈夫だと思っただよね。優しいし、気は利くし、私を可愛いって言ってくれたし……ん？

「だから危ないのか!？」

「いきなりどうしたのっ!？」

頭の中に浮かんだ想像につい大きな声を出した。

でも只野さんもそれに大きな声を出したのには笑っちゃった。

その後近所迷惑って言われるかもしれないから、この時間は大声はお互い程々にしようって言われて反省。

でも、何だかこれ、同棲してるみたい。

な、何だかドキドキしちゃうな。

それからしばらく私は只野さんと過ごした。

只野さんの晩ご飯はバイト先でもらってきたお弁当。しかもとんかつ弁当だった。

私がそれを見つめると……

——同居人にバレないようにな。

って言っるとんかつ一切れとご飯を一口くれた。

何だかとっても美味しくて、そして胸がドキドキした。

だけど、その後の只野さんは顔が真っ赤になりながら嬉しそうにお

弁当を食べていた。その理由ははっきり分からないけど、きっと私なんだろうなって事は分かる。

お弁当を食べ終わってから、私が只野さんの事を聞かせてもらった。

歳はとか、一人暮らしはどれぐらいなのかとか、お料理はするのかとか。

それに只野さんは嫌な顔一つしないで、むしろどこか嬉しそうに話してくれた。

そこで分かったのは、只野さんは今年で三十になるって事と、一人暮らしはもう十年になるって事。

そしてお料理は出来なくなけれど、今の仕事内容的にそこまで気力がわかないのでほとんどやってない事。

「そこまで大変なんですか？」

「……年齢もあるからなあ。二十代前半の頃は深夜帯も割と平気だったんだけどさ」

うーん、私にはまだ遠い話だ。だって三十どころか二十さえまだ先だし。

「でも、こうして立花さんが来てくれるなら頑張れるから大丈夫」

「そうですか？」

「そうそう。へいき、へっちゃら」

そうやって軽く笑う表情が、本当にお父さんに重なった。

思わず胸がきゅんとなる。心が騒ぐ。

だって、只野さんが何でそう言っているか私は分かるから。

その言葉の意味を、使い方を、この人は知ってるはずだから。

「……響って、そう呼んでくれていいですよ？」

だから、私は支えたいって思った。たった一人で私の事を助けようとしてくれる、優しい協力者を。

「で、でもなあ……。恥ずかしいんだよ、この歳にもなって情けない話だけ」

「そうなんですか？」

「そう。自慢じゃないけど年齢イコール彼女いない歴だから」

言って胸を張ってみせる只野さん。それが照れ隠しだって分かる。うん、分かっちゃう。男の人って、こんなにも分かり易いんだ。何か新鮮。

「じゃあ、私で練習です。その代わり……」

「その代わり？」

きっと、これが私の一番の目標なんだと思う。

私を、可愛いって、正面から初めて言ってくれた異性への、私なりのお礼。

——こ、今度来た時、私とデートしてくれませんか？

FIRST LOVE SONG

二階建ての古いアパート。その一階部分の一番奥の部屋。そこが男の住家であった。

特に夢もなく、ただ親元を離れたいだけで一人暮らしを始め、気付けば十年が経過していたが、それでも男は何とか生きていた。

辛い現実から目を背けるようにアニメやゲームへ夢中となりながら。

「お家デート、ですか？」

そんな男に転機は突然訪れた。謎の現象で目の前に現れた本来であれば存在しないはずの少女、立花響と出会う事で。

「恥ずかしい話だけど、財布に余裕がなくてな。ごめん」

仁志の言葉に響は慌てて両手を振った。

「そんなそんな！ それに、どんな形でもデートってだけで初めてなんで嬉しいです！」

「そっか。リディアンは女子校だもんな。ナンパとかされた事は？」

「……ないです」

肩を落とす響に仁志は腕を組んで疑問符を浮かべた。彼の目から見れば十分可愛い響が何故男運がないのだろうか。

だが、そこで彼は思い出すのだ。響には唯一無二とも言える親友にして、ファン達や関係者達さえも嫁と評していた同性がいる事を。

「もしかすると小日向さんがいるからかなあ」

「え？ 未来？」

「そう。だって響が一人でいるなんて滅多にないだろ？」

「それは……そうかも」

「で、もし二人でいる時に男に声を掛けられたら響は小日向さんを守るモードにならないか？」

その言い方で響はその状況を想像し、やがて力なく項垂れて頷いて見せる。

彼女に男運がない訳ではない。ただそれを寄せ付けないような状況や環境になっていると気付いたのである。

仁志は残念そうに項垂れる響を見て励ましを送る事にした。彼は作品を通して彼女の事を知っている。装者としている時は誰よりも強くあろうとするが、そうでない時は普通の少女である事を。

「響、そんなに落ち込まないでもいいって」

「でもお……」

「大丈夫。その、リディアンを卒業してからも永遠に小日向さんと生活する訳じゃないだろ？ 進路だって異なるかもしれないし、就職先だってそうだ。そのうち、今よりは距離が離れる時はきつと来る」

自身の経験から告げる言葉には響が知らない重みがあった。だからか、彼女も顔をゆつくりと上げて仁志を見つめていた。

「世の中に絶対はない。これは俺の親父の言葉だ。これを良い方に使えるようにしていきたいよな、お互い」

「……そうですね」

ちゃんと自分の目を見て返事をした響に仁志はここだと思ってる言葉を放つ。

「大体、響はちゃんと可愛いから心配いらなくて。その気になれば彼氏もすぐ出来る」

「そ、そんな事言ってくるのは只野さんだけですって！」

「じゃあ何度も言ってやろう。それで自信を得るんだ。響は可愛い。明るくて元気でお嫁さんにしたい子。いいお母さんになりそう」

「だ、だから、そういうの、止めてくださいよお」

最初に出会った頃に言われた時から響は素直な褒め言葉に弱かった。しかも、今はそれだけでなく、好意を寄せ始めている年上の男性に言われているのである。

彼女の乙女心は今や恋愛モード。おそろくだが、仁志がその気になって響を口説けば彼の悲しい記録はすぐにも終止符を打たれる事だろう。

「ははっ、ごめんごめん。でも、君が魅力的な女性だったのは事実だ。それは、ちゃんと自覚しておくべきだよ」

「は、はい……」

顔を赤くして俯く響だが、その心は珍しいぐらいに動揺していた。

(み、魅力的?! わ、私が、魅力的な女性……かあ。只野さん、お世辞じゃないんだよ、ね? で、でも、十歳以上離れてるもんなあ……) 一回り以上の歳の差はやはり大きい。だが、どこかでだからいいのかもしれないと響は思うのだ。

彼女が師と呼んで慕う男性に近い年齢の仁志。頼もしさは比べるまでもなく負けているが、それとは別の居心地の良さが響には感じられていた。

「とりあえず、じゃあ、えっと、始めようか、デート」

「は、はい。よろしくお願いします」

お互いに緊張感を漂わせ見つめ合う二人だったが、早々に仁志が顔を背けた。

「……やっぱり恥ずかしいな。何をどうすればいいかも分からないし」

「あ、あはは……実は私もです」

「あー……よし、なら響からの質問に答えるよ。サンジェルマン達の事とかさ」

デートと考えるから緊張する。そう考えた仁志がそう切り出すと、響は複雑そうな表情を見せて頬を掻いた。

「あ……それは嬉しいですけど、止めておきます。誰だって知られたくない事とかあるだろうし」

以前キャロルの情報を書き出したメモを読んで響は思ったのだ。それがどれだけ相手の心を踏み躪る行為かを。

そう、仁志にとってはそれは架空の存在の、しかも創られた物語だという認識で読んでいるが、それが響達にとっては現実であり、時には大切な思い出なのだ。

それを許可なく晒され、あるいは教えられる。それを自分に当てはめた時、彼女はメモを読んだ事を後悔したのだから。

「そっか。ごめん、無神経だった」

その気持ちを仁志も響の反応から察した。彼にとってはどこかでまだ響以外の存在は架空の物に近い。それでも、目の前の少女がいて、その口から名前が出る以上正しく認識を改める事が出来るぐらい

には仁志にも良識や常識があった。

「いえ、いいんです。只野さんなりに私を喜ばせようとしたって、そういう事ですから」

「ありがとう。そう言ってくれればと助かる」

そこで少しの間だけ沈黙が流れる。互いに何か話題をと考えるものの、異性との付き合いが皆無に等しい二人に気の利いた話題が浮かぶはずもなく、ただ時間だけが過ぎていく。

そこで、響は周囲へ目を動かして何か話題に出来そうなものはないかと考え、自分が通ってきたノートPCを見た。

「……あの、一ついいですか?」
「何?」

仁志のノートPCはあの一件以来響の記憶の中では常に電源が点いた状態である。それはつまり電力を消費している事で、もつと言えばゲートとして機能している以上本来の用途には使用出来ていないのではないか。そう響は考えたのである。

仁志は響の考えを聞いて苦い顔をして頷き、こう告げるしかなかった。

「今から電気代の請求が不安なんだよ……」

「あ、その、ごめんなさい……」

これまでの平行世界では協力者は組織だったりあるいは資金に困っている事がない者達であった。

その違いに気付いて響は戻ったら弦十郎へ相談しなければならぬいと痛感していた。

(このままじゃ只野さんが生活出来なくなっちゃう。ただでさえ余裕なさそうな感じだもんね)

学生の響でさえ感じられる仁志の生活の困窮具合。言い方は悪いが三十が見えてきているのに定職に就けずコンビニの深夜アルバイトで生計を立てているのは、やはり苦しい人生と言うほかない。

そこに常時稼働するノートPCと常に充電を強いられるスマホ。その電気料金がそんな脆い収入の人間を襲えばどうなるか。

「でも、仕方ないさ。その、逆を言えば俺のPCがゲートになって良

かったよ。もしこれがシンフォギアをまったく知らない人の家やら、もしくはどこかの公園とかならこの世界で君達は孤立無援で動く事になってたんだ」

「それは……きつとそうですね」

仁志の世界は平行世界ではない。つまりこれまでギヤラルホルン関連で得た動き方や考え方が一切通用しない事になる。

何せここには風鳴家もなければ、錬金術師もフィーネもギアや聖遺物さえもない。もつと言えばノイズがない以上、ギアを持つ事がメリットではなくデメリットになる可能性が高いのだ。

「だから、まあ、あまりそこは気にしないでくれ。この世界を守るためなら安いもんだ」

「只野さん……」

安心させるように笑みを見せる仁志が響には強がる大人のそれには見えなかった。だからこそ、彼女は何も言わず、心から感謝するように微笑みを返して頷いた。

「はい……」

「うん。さてと、じゃあ気を取り直して……」

言いながら立ち上がると仁志はスマホと財布をズボンのポケットへ入れる。それに小首を傾げる響だったが、そんな彼女へ彼は笑いかけてこう告げた。

「やっぱり少し外に出よう。このままここにしていると気が滅入る感じがするしさ」

平日の昼間だからか、あるいは元々アパート近くが閑散しているのかとにかく道行く人が少なかった。

そんな道を仁志と響は隣り合って歩いていった。最初に来た時も歩いた道ではあるが、その時とは大きく異なる事がある。

「い、意外とこれだけでも照れるもんだな」

「そ、そうですね……。でも、ほら、これだけでそれらしく見えませんか？　ね？」

「……そうだな」

その手を繋ぎ、歩いていたのである。恋人らしい事の筆頭として響が挙げたもので、仁志もそれぐらいなら出来ると頷いての現状なのだ。やはり恋愛初心者の二人はまるで中学生の恋愛のような状態となっていた。

「いやあ、でも不思議ですよね。未来と手を繋ぐ時はこんなにドキドキしないんですよ。お母さんやお祖母ちゃんもかな。あーそうそう、お父さんともです。何でしょうね、この感じ」

「……まあ、他人の、しかも男だから、じゃないか?」

「や、やっぱりそうですかね? あつ、でもでも、私は只野さんの事好きですから。そ、それもやっぱり関係……してるのかな、なんて」

視線は基本前かやや上。あるいは下や相手とは逆の方へ向けるだけ。仁志は口数が減り、響は逆に増えるという何とも微笑ましいものである。

「うわっ、ど、どうしよ? ただ男の人と手を繋ぐだけでこんなに私ってアワアワするんだ!?!」

「やばいやばいやばい。響の手あつたかくて柔らかくてどうにかなりそう。てか、俺、全然駄目だろ! 年下の女の子に気を遣わせてどうすんだ!」

互いに相手へ顔を見せないように背いて歩きながらその顔の熱を冷ます。

「(……よし、しっかりしよう!)」

同時に同じ決意を抱き、男女は相手へと顔を向ける。

「っ?!」

そして見事に向き合う事となり、その視線がぶつかった。

仁志の少し疲れた顔を見つめる響と、響の赤くなった顔を見つめる仁志。たっぷり一分以上見つめ合い、横の車道を通るトラックの音で二人は同時に我に返ると弾かれるように逆方向を向いた。

「な、何か用か?」

「さ、先に只野さんからどうぞ……」

「いや、響からで」

「い、いえいえ、只野さんから……」

互いに相手へ会話の切っ掛けを譲り合う二人。このままではそれが続くと思つたのだろう。ならばと彼らは口を開いた。

「あの……」

声が重なる。心もある意味で重なる。

「っ?!」

そしてすぐさま心が少し離れる。それでも手は離さない。そこで仁志は思い切つて行動を起こした。

「響、一旦手を離してもらつていいか?」

「え……は、はい……」

戸惑いながらも少しだけ悲しさを声に乗せる響だが、仁志はそれにも関わらず手を離れた。

(あつたかき、なくなつちやつた……)

二人を繋いでいたものが切れたように思えて視線を落とす響だったが、その目がすぐに驚きに満ちる事となる。

「嫌だつたら言つて欲しい」

その言葉と共に仁志が響の手の指へ自分の手の指を絡ませたのだ。

俗に言う恋人繋ぎとなり、響は弾かれたように顔を上げて仁志を見た。

「ど、どっかの自販機で飲み物でも買おう。何だか、今日は暑いから

……さ」

「……はいっ!」

そう元気よく答える響の視線の先には、真っ赤な顔の大人のような少年の顔をした仁志の照れくさそうな笑顔があつた……。

仁志と響が飲み物の自動販売機を前にどれを買うかで迷っている頃、仁志の部屋に来訪者が現れようとしていた。

「つと、うわっ、本当に狭い部屋だな……」

ゲートを通つて出て来た少女は部屋の様子をその場で一通り見回して把握すると、誰もいない事に首を傾げた。

「つかしーな。只野つて奴がいるはずだろ? あのカバの言葉じゃ日中はほとんど寝てるつて話だつたし……」

当てが外れた事に後ろ手で髪を搔くと、少女は身に纏っていた赤いギアを消して息を吐く。

「いつまでもあのバカだけに押し付ける訳にもいかねーよな」

眩く声は何かを噛み締めるようなもの。が、そこで彼女は気付いた。

「な、何だ？ 体が……動かねえ……っ!？」

とりあえず外へ探しにと思つて足を動かそうとしても動かず、少女は持てる力を振り絞るように奮闘するが、まるで床に張り付いたように足は動かない。

ならばと座ろうとするのだが、それさえも叶わない。出来る事は、考える事と首や腕を動かすぐらいだった。

「ち、ちくしょう……何だよ、これは……っ」

響から仁志の事を聞いた他の装者達は、全員が少なからず彼と会う事に拒否感を抱いた。

あの響でさえ最初の突発的な出会いとその後のやり取りがなければ同じ事を思つたので、そうなつてもおかしくはない。

問題は、それを感じ取つた響は仁志のスマホの説明を忘れてしまったのである。きつと自分以外が彼に会いに行く事はなく、また自分がいない時に会いに行く事もないだろうと思つて。

こうして少女、雪音クリスは二人が帰ってくるまでの間、その場で直立不動で待つ事となつてしまふのである。

余談ではあるが、二人がアパートのドア前に着いた時にその場で座る事が可能になり、帰宅した仁志を見た時にはクリスは涙目で彼を睨み付ける事となるのだが、それはまた別のお話……。

繋いだ手だけが紡ぐもの

「つたく、酷い目に遭ったぜ……」

そう言いながらこちらを涙目で睨むのは雪音クリスマスと言う名の美少女だった。

響とのデートというか散歩を終えて部屋でのんびり過ごそうと思っただら、まさかの来客が来ていたと言う訳だ。

「それにしても何でクリスマスちゃんがここに？」

「そりゃこっちの台詞だ。何でお前がここにいるんだよ？」

その問いかけに響が言葉に詰まったみたいになってこっちへ視線を向けてきた。助けてって事かな？

「ここでの拠点を確保し続けるためだよ」

「あ？ 拠点確保？」

「そう。こっちには二課どころか風鳴機関さえないのは知ってる？」

つまりこれまでの平行世界みたいに君達を支援出来るまたはしてくれる組織や場所はない。この俺みたいなただの一般人の暮らすこのボロアパートの一室。これが君達が持てる唯一の出入り口であり拠点なんだ」

「そ、そうなんだよ。エルフナインちゃんも言ってたでしょ？ いつ只野さんも変化の影響を受けるか分からないって」

俺の言葉に響が慌てて言葉を足してくれた。成程、たしかにそれはある。どうして俺だけがこの変わってしまった世界で唯一影響を受けなかったのか、か。

「だからお前はこうしてこいつに会いに来てるのかよ？」

「そ、そうだよ。それに、調査もしないといけないし」

「調査だあ？ お前一人で一体何をどう調べるって」

「ストップ。雪音さん、そこまでだ。君の言いたい事は分かるけど、それを少なくとも今の君が言う事は出来ないと思う」

響へ食って掛かる雪音さんを制止する。知ってはいるけど、本当にこの子は素直な言い方が出来ないんだなと実感。

「どういう意味だ」

「俺が言うのも何だけど、君は、いや響を除いた装者達は自分達の色々を知ってる俺と会うのが嫌って理由でここへ来るのを避けたんだろ？ 人としては分かるけど、装者って立場で言ったらそれはちよつと無責任じゃないか？ 本来響じゃなくてイヴさんや風鳴さん、そして君のような年長で分析や推理が出来る人間が来るべきじゃないだろうか。少なくとも響一人であたらせる状況じゃないと思うよ」

「只野さん……」

俺は装者の子達よりも年齢だけなら上だ。正直人生経験で言ったら負けてると思うけど、それなりに社会で揉まれただけの三十路間近の独身男だつて言う時は言うぞ。

響はきつと寂しかったはずだ。今までだつて平行世界で一人きりなんてなかった。この子は誰かという事で強くあれる子だつて、俺は太陽の三撃槍で改めて感じたんだ。

「……………お前の言う通りだ。あたしらのすべき事を、今までそいつに丸投げしちまった」

「クリスちゃん……」

「だからこそ、こうしてあたしは来た。たった一人に面倒事を押し付けるつもりはねえ」

「そつか。なら感謝するよ雪音さん。俺は只野仁志。好きに呼んでくれ。名前で呼ぶのに抵抗あるならあんたとかお前でもいい」

俺がそう言うのと雪音さんは一瞬だけ息を吞んで、それから息を吐いて観念するような顔でこつちを見つめた。

「はっ、ホントにご存じつて訳か。なら、お望み通りで呼ばせてもらおうぜ」

「ああ、それでいい。色々キツイ事を言つてすまなかつた」

「いいつての。その、そつちも悪い奴じゃないつてのは分かったからな」

少しだけ照れくさそうな雪音さんを見て本当に可愛い子だと思つた。

きつと情報だけで俺の事を勝手な思い込みで見ってたんだろう。無理もないと思うからそこには何も言わない。

何せこっちは彼女の辛い過去や平行世界での親子の再会なんかも知っているんだ。なら、避けられて当然だと思う。

「にしても、じゃあさつきまで調査に行ってたのか？」

「うえっ?!」

「……ま、こうなったら正直に話そう。それが良さそうだ。」

「えっと、雪音さん。落ち着いて聞いて欲しいんだけど……」

そうして説明をする事十分少々。雪音さんも最初こそ眉を顰めていたが、最後には呆れていた。

「つまりなんだ？ お前はこいつとデートしてたと？」

「そ、その、うん……」

「……普段なら文句の一つでも言うところだけどな、今回はまあ許してやる。大体調査って言っても何から手を付ければいいか分からねえし」

「そう！ そうなんだよ！ 未だに何も起きてないんだ、こっちで」
「起きてもらっても困るんだけどね」

事実、俺だけが認識している大きな異変はあるんだ。何で『戦姫絶唱シンフォギア』に関わる全てが変化したのか。それだけは本当に謎だ。

「もうカルマ・ノイズが出る事はないだろうし、まさかあれが復活するとか考えたくねーぞ？」

「あれって……世界蛇？」

俺がそう予想を告げると二人が驚いた顔をして、すぐに納得する顔へ変わった。

「只野さん、そこまで知ってるんですね」

「じゃ、あの世界蛇の巫女の事も知ってるんだよな？」

「まあ。ミヨルニル関係の色々やスクルドの事なんかも」

何せあのイベントはゲームの一種の目玉だったからなあ。

「……じゃ、ここは装者絡みの色々が解禁出来るって事か」

「まあ、俺が知ってるだろうし、何より聞かれたところで誰も何とも思わないよ。きつとよく練られた作り話だなんて思うぐらいだ」

何せそもそもそういうものだったんだ、ここでは。数多くある創作

物の一つ。それが戦姫絶唱シンフォギアだったんだから。

それが、どうやら雪音さんには衝撃だったらしい。分かつてはいたけど改めて言われると色々思うんだろう。

実は俺が言わないようにしている事がある。それは、彼女達を使つたエロい物があつたと言う事。これ、絶対彼女達の心を大きく傷付ける。

だから絶対この事は言わない。教えるつもりもない。創作物として彼女達の存在はこの世界にあつた。この事からそこへ思い至る人間が出ないとも限らないけど、俺は絶対に認めない。

……例え、俺もそういうもののお世話になつていたとしても。

「ホント、ここはとんでもねーとこだな。でも先輩辺りは喜ぶかもしれないねー」

「翼さんが？」

「あとはイヴさんもだろうね。ここならあの二人も有名人じゃなくただの一人の女性でいられる」

「あつ……」

「そういうこつた」

雪音さんはそう言つてこちらへ顔を向けた。

「なあ、ホントに何か妙な事が起きたりしてないのかよ？ その、シンフォギアつてアニメがなくなった以外に」

「それがさつぱり。もしかしたら国家レベルとかになればあるのかもしれないけど、悲しいかな俺は何の権限もない一般人だ。得られる情報も新聞やテレビみたいに検閲される可能性が拭えない物ばかりだね」

そう、国家レベルで隠蔽なんかされたら俺には知りようもない。勿論調べる事も出来ない。それはきつと目の前の少女達も同様だろう。「……だとするとやべえな。もしかするともう何か起きてるかもしれないねーって事か」

「可能性はゼロじゃない。でも、変な話だけど君達が動くような事件つて隠蔽が出来るレベルじゃないと思うんだ。必ず何らかの形で発表する事になると思う」

「……………例え誤魔化すとしても隠し通せないって?」

「多分。あつ、そうだ。雪音さん、響も、もし良かったらなんだけどちよつと協力してくれないか?」

「協力?」

訝しむような雪音さんと疑問符を浮かべる響という違いはあつたけど、二人共こつちの話を聞いてくれるようだ。

と言っても大した事じゃない。俺の勤務先のコンビニで夕方勤務の人が足りなくなりそうなのだ。

で、オーナーが頭を抱えているのを見て、俺は何とか力になりたいと思つたのだが、俺は俺で夜勤の要となつていたので動かす事も出来ない。

「そこで、二人にこつちに来ている間だけでも助けてもらえないかと」
「あのな、あたしらがいつこつちに来るか分からねえんだぞ?」

雪音さんの正論で返事をしようとしていたであろう響が口を軽く開けたままで止まった。

「分かつてる。だから確認したいんだ」

「確認?」

俺は雪音さんではなく響へ目を向ける。

「響、こつちで過ごした時間とそつちで流れてた時間はずれてた。これは間違いない?」

「は、はい」

「この前の時はそつちで一日がこつちでは三日。これも間違いない?」

「そ、そうですけど?」

「そういう事か…………」

どうやら雪音さんは察してくれたらしい。一方の響は首を傾げている。可愛い。

「最初に響がこつちで二時間ぐらい過ごした時、そつちは数分しか時間が経過していなかった。多分なんだけど、そうなるこつちとそつちは時間の流れ方が違うって事じゃないと思う」

「ああ、だとすればその違いが一度目と二度目で違うなんてのは有り

得ないからな」

「ええっ!？」

「もしかしたら、戻る時にその人が無意識で願う経過時間に設定しているのかもしれない。二人なら分かるんじゃないかな? あの同じ一日が繰り返し返される夏の出来事。あれに近いような感じ」

「えっ!?! あ、あれと似てるんですか、この世界」

「んな事もあったな、そういえば」

この二人共通の出来事で時間の流れが関係する事件、ヴァルキリーズ・エンドレス・サマー。あれと同じように、この世界だけが彼女達の世界の時間と切り離されているんだ。

まだ確証が取れた訳じゃない。でも、何となくそんな気がする。じゃないと響の体験した経過時間のズレが説明出来ない。

「響、雪音さん、自分達がギャラルホルンを通った時間、覚えてる」

「私は本部に行った時間なら」

「あたしもだ。でも、それで十分だな」

「そうだな。じゃあ、二人で答え合わせをしてくれ」

その間に俺は飲み物でも用意するか。立ち上がって冷蔵庫まで移動。中にはいつものように廃棄のシュークリームが一つ。ここに来るのは響だけだと思ってたからなあ。これは……いや、きっとあの二人なら半分こするだろう。

そんな事を考えながら家用に買ってるコンビニで置いてる安い紙パックの緑茶をグラスへ注ぐ。で、もう一つは湯飲みへ注ぐ。

……一人暮らしだから自分の分だけしかそういう物がないのが悲しい。いつそ百均でも行ってコップでも買うか? いや、どうせなら本人に選んでもらおう。

で、グラスと湯飲みシュークリームを持って戻ると二人がこっちへ同時に顔を向けた。

「あつ、シュークリーム!」

「そう。響大好きの廃棄品」

「廃棄?」

「コンビニって毎日なんやかんや捨てないといけない食べ物が出るん

だよ。で、本来は捨てるんだけど、俺のどこみたいにこっそりともらつてもいいって言うところはあるんだ」

本当は駄目な事なので大っぴらには言えない事だけど、俺みたいな人間にはこれが意外と生命線だったりする。だから今のバイトを辞められない。

「あれ？ 一つだけ？」

「そりやあたしが来るなんて予想出来ねーからな」

「そっか。じゃ、半分こしよう」

「はあ？ 別にいいっての。一人で食えよ」

「いやいや、クリスマスちゃん、これ本当に美味しいんだよ！ 私、この世界に来る一番の楽しみになってるぐらいだもんっ！」

「お前はシュークリームを食いにここ来てんのかっ!？」

うん、このまま見事な漫才をやってくれそうだけど、近所迷惑って言われると困るので止めに入る。

「そこまでしてくれないか？ ここ、見ての通り作りがそこまで良くないんだ。壁も薄いからさ。隣は今いないけど上はいるし、苦情来るかもしれないから」

「そ、そうか。わりい」

「すみません……」

「いいよ。で、雪音さん、悪いけどここは折れてくれない？ 響の性格だと頷いてくれないとしばらく引きずるだろうから」

「うっ……それは……」

俺の言葉を後押しするように肩を落としながら雪音さんを見つめる響。何というか、あざとい。

雪音さんもそれは分かっているらしく、チラリと響へ目を向ける。そこにはシュークリームの袋を両手で持って見せつけるようにしている響がいた。

「……出来るだけ綺麗に分けろよ？」

「うんっ！」

少し照れくさそうな雪音さんと嬉しそうに笑う響。何かこれはメモリアカードになりそうな絵だな。

で、シユークリームを響が上手く割れなくて、雪音さんが呆れつつも小さ目な方を奪うように持っていった辺りに彼女の不器用な優しさが見えた。

二人して美味しそうにシユークリームを食べる姿を眺め、俺は正直満足してた。

何だろうな。まだ三十前だけど、気分は下手したら父親だ。まあ親戚のおじさんが妥当だとは思う。

その後、二人から互いの時刻に関しての話聞いて複雑な気持ちとなった。

「そっか。やっぱりおかしいのか」

「はい。私が本部に来た時間とクリスマスちゃんが来た時間がそこまで変わらないんです」

「開いてるのが大体多く見積もっても五分程度だ。でも、お前らはデートやら何やらしててそれ以上の時間を過ごしてる。てなると……」

「もしかしたら、ここの時刻とそっちの時刻が合致してるのってその日最初にここへ来た人間だけかもしれない」

「じゃ、一旦戻ってみようよクリスマスちゃん。それで戻ったらクリスマスちゃんが本部に着いた時からほとんど変わってないかもしれないし」
「……それが一番検証には適してるか。うし」

立ち上がる雪音さんと響が聖詠を唱えてギアを纏った。リアルで見ると本当に一瞬なんだよなあ。アニメじゃ結構エツちな感じも受けたのに、現実はこのまんま。

「じゃあ、只野さん。すぐ戻ってきますね」

「ああ、またすぐに来る」

「待ってるよ。でも、そこまで慌てないでいい。あと、出来れば一週間ぐらいこっちで滞在するかもって言っておいて」

響だけなら泊まりは駄目だけど、雪音さんも一緒ならいいだろう。あと、夜勤明けの今の俺じゃ正直性欲よりも睡眠欲を優先すると思う。

一人暮らし始めたばかりの頃なら危なかっただろうなあ。ホント、

体力落ちてるの実感するよ。徹夜とかもう出来ないし。

そんな事を考えながらノートPCへ吸い込まれるように消える二人を見送り、俺は畳んであるペラペラな布団へ目を向けた。

「……布団、もう一組買おうかなあ」

さすがにおっさんの使っている布団を嫁入り前の女の子に使わせるのは気が引ける。そうと決まればネットで……あつ。

「そうだ。今、PC使えないんだった」

仕方ない。スマホでやろう。画面やら何やらで面倒なんだよな、こつちだと。

というか、気分が完全に親戚の女の子を預かるおじさんの気分だ。響とあんな時間を過ごしても、やはり年齢差を考えるとこういう風になるんだらうか？

……いや、これは女性経験がないのも影響してる。臆病なんだろうな、そういう事に。

「まっ、今はそういうのに臆病なぐらいで丁度いい」

何せ自分ここに年頃の女の子二人を置く事になるんだ。問題は履歴書の記入だろうけど、まあそこはネカフェの住所を借りるなり俺の地元の学校を書く事で何とかしよう。

採用自体は俺が口添えすれば確実だろうし、何より二人して可愛い女の子だ。おそらく俺が何も言わないでもほぼ採用は間違いないと思う。

「つと、戻りましたー！」

「はやっ!？」

「よつと、戻ったぞ」

「お、おかえり……」

体感五分ぐらいだ。てか、二人して何か荷物を持つてる？ もしかして、あれっってお泊りセットが入ってるんだらうか？

えっ？ もしかして本部へ戻って報告した上に宿泊用意までしてきたのか？ あの短時間で？ となると本気でこつちと向こうの時間の流れはおかしい。もしかするとこれもこつちの異変に関係してるのか？

「只野さん、やっぱり予想通りでした!」

「お前の言ったように、あたしらが一度おっさんのところへ戻った時、あたしが本部に着いてから十分と経ってなかったぞ」

「ま、マジか……」

自分で言っておいてなんだけど、いざそう言われると驚くもんだ。

「それで、師匠や未来にも許可をもらってきました」

「この時間の流れ方の検証もかねて、あたしらがこっちに一週間滞在してもいいってな」

「只野さんが心配してた事もクリスマスちゃんと一緒なら解消出来るだろうって」

「あ、うん。そこはそうだろうけど……」

問題は寝具がない事なんだよな。まだ寝ないといけない時刻まで時間もあるし、今から買いに行くか？

「よし、じゃあ二人共買い物に行こう。せめてもう一組布団を買わないといけない」

「あつ、そっか。私は只野さんと一緒でもいいけどクリスマスちゃんは」

「は?」

響の言った事に俺と雪音さんの声が重なる。その瞬間、響が自分の言った事に気付いたのか、顔を真っ赤にして口を押さえた。

俺と一緒にでもって、そう言ったよな? え? 何? 俺みたいなおっさんと一緒に寝てもいいって……え?」

「……まあ今のは聞かなかった事にしてやる。でもいいのか? 正直そんなに裕福じゃねーだろ、お前」

あまりの内容に頭がパニックになりそうな俺へやや申し訳なさそうな顔を向ける雪音さん。それで俺も意識を切り換える事が出来た。

たしかに俺の財政はいつもギリギリだ。貯金もほとんど出来ていない。酒もたばこもギャンブルもやらないから生活出来るけど、なあ。

「そうだけど、少しぐらい男の見栄を張らせてくれ。何より可愛い女の子二人をおっさんの使い古した布団で寝かせるなんて出来ないし、床の上で寝かせるのなんてもっと気が引けるんだ」

チラつと下へ目を向ければ、そこには色褪せたようなカーペット。雪音さんもそれを見て表情を歪めたので俺の言葉を拒否する事は出来ないらしい。

「と言う訳で、今から行こう。ホントはネットで頼むか色々見てからと思っただけど、すぐに必要になったから」

「そう、だな。悪いが頼む」

「お、お世話になります」

「いや、むしろこちらこそだ。ついでに百均にも行こう。二人共着替えなんかは持ってきただろうけど、コップとかはないんじゃないか？」

俺がそう問いかけると二人は揃って失念していたって顔をした。いや、そうだろうな。今まではきつとそんな事を心配するような泊まりはなかったはずだから。

「だからそれも買わないと。で、二人には履歴書書いてもらうから」「履歴書？」

上がった疑問の声に俺は思い出す。そういえばこの子達ってちゃんとしたバイト経験とかないもんな。

なので簡単に説明する。そこでついでに二人の簡単な設定も考える事に。

まず二人は高校の友人で、色々訳ありのためネカフェ生活をしている。そこで俺と知り合ってバイト先を探していた事を聞いた俺から夕勤の人手不足を知って応募したと、こんなところ。

学歴に関してはクリスはい最近まで外国暮らしだったので高校だけ書いてもらって、響は中学高校と書いてもらう事に。で、当然俺が卒業した高校にしてもらう。それもあって俺が口添えするって流れに出来るし。

「な、何だかちよつと無理ないですか？ それに、嘘つくなんて……」「仕方ないよ。二人はこっちじゃ存在しないはずの二人なんだ。学歴も何もかもでっち上げるしかない」

「そうだな。で、これまでと違って金銭的にも状況的にも余裕はねえ。なら、あたしらも多少は稼ぐ事をやらねーと」

「そ、そうだけど……」

どうやらここに互いの育ちの差が出てるようだ。これまで一般社会の中で生きてきた響は、経歴や自分を偽るような事に抵抗感を覚え、一方の雪音さんは幼少の頃の経験もあるから、生きるためには汚い事や嘘も受け入れると腹を括れるんだろう。

「ごめんな響。俺がもう少しまともな仕事に就いてれば良かったんだけど……」

「只野さん……」

「しようがねーよ。今回は色々異常事態だ。おっさんも金銭面の支援は難しいって苦い顔してたし」

「だろうね。何せ時代も違えば世界も違う。換金できる物で支援をしようにも、それも下手をすれば面倒事になりかねない」

俺みたいな奴が金塊や宝石を持って換金へ行くなんてのは、周囲から警戒や奇異の目で見られる事請け合いだ。

でも、正直このままだと二人にバイトしてもらったとしてもキツイ事に変わりはない。資金援助は無理でも、何か他に援助してもらえる方法は……あつ。

「そうだ！ ならせめて食料で支援は無理かな？ 野菜とかだけでももらえるかと非常に助かる」

「食べ物か……。多分それなら何とかなるだろ。今度戻ったらおっさんへ話してやるよ」

「ありがとう。最近野菜が高くてさ。おかげで栄養も偏る偏る」

一応勤務時に野菜ジュースを買ってはいるけれど、やっぱり直接食べる事もするべきかなと思うのだ。

とにかく、こうして俺は二人を連れて寝具やコップなどを買に行く事になった。

それにしても、まさかあの立花響や雪音クリスと、ど、同居する事になるとは夢にも思わなかった。

今日はシフトに入ってるからいいけど、休みの日、どうなるんだろうな、これ。

TRUST HEART

「いらっしやいませっ!」

「い、いらっしやいませ」

あのバカが元氣よく声を出すから仕方なくあたしも声を出す。こうやってしつかり働くのなんて初めてだからよく分からねーが、あいつが言うにはそこまで難しい事はないらしい。

それに初日の今日は基本的な事しか教わらないしな。あと、教育係が……

「雪音さん、レジの打ち方はもう大丈夫そう?」

「あ、ああ。メモも取ったしな」

「そっか。じゃあ……」

そう言っであいつは目を動かす。どうやらレジに客が来そうだ。

「やってもらっていい?」

「お、おう……」

な、何だっつてんだよ、この妙な感じは。初めて先輩達と戦った時よりも緊張してるのか、あたしは。

「いらっしやいませ」

「い、いらっしやいませ」

あいつが出す声に合わせてあたしも声を出す。でも何故か言葉がどもつちまう。すると目の前のおっさんはあたしの胸元を見てどこか笑いやがった。でもエロい感じじゃねえ。

それでも普段なら文句の一つも言うところだが、今のあたしにはんな余裕はねえ。とりあえず目の前に置かれた缶コーヒーを手にとってバーコードを読み取らせる。

「百二十八円、です」

「はいよ。二百円で」

「二百円、お預かりします」

丁寧な言葉遣いなんてしてこなかったからか、正直業務よりもそっちの方が難しいな。

金額を打ち込んで現計を押せば引き出しが開いてくる。そこから

おつり分の硬貨を手を取っていく間、ずっと後ろであいつが見てるのが分かった。

「兄ちゃん、珍しいな。いつもは夜中だろ？」

「今日は色々あってヘルプですよ。新しい学生バイトの子が二人入ったので」

「あー、やっぱ新人さんか。あつちの嬢ちゃんは元気いいな」

「出来るだけ優しくしてやってください。二人共初めてのバイトなんで」

「おお、そうか。じゃ、他の奴らにも言っとくわ」

「お願いします」

お、おつりを渡そうにも会話が続いてて隙がねえ。と、そう思ってたら会話が切れた。

「七十二円のお返し、です」

「おう、ありがとな嬢ちゃん。バイト頑張れよ」

「あ、ありがとうございます」

その場で頭を下げてレジが終わる。な、何て言うか、これだけであたしは疲れたぞ。

「雪音さん、操作自体は大丈夫。言葉遣いは大変かもしれないけど言ってる内に慣れてくるから」

「あ、ああ」

「只野さーん、ちよつといいですかー？」

「今行く。じゃ、ちよつと一人で頑張って」

「あ、おいつー！」

あのバカに呼ばれてあいつが離れてく。そこへ別の客が来た。しかもカゴに結構な量の品を入れてやがる。

「い、いらっしやいませ……」

と、とりあえず処理していくしかねえ。そう思って大きい袋を取り出してそこへ考えながら通した商品を詰めていく。

チラッとあのバカの方を見ればホットスナックの打ち方を教えてもらってやがる。

おい、それはさつき一緒に教えてもらったろ。だからあいつがメモ

を取れって言っただだろが！

「あつ、すいません。マイルドセブンも一つ」

「ま、まいるどせぶん？」

「一体何の事だ？ ホットスナック、じゃねーよな？ なら……タバコか？」

「す、すみません。あ、あたしタバコ詳しくないんで」

番号で言ってくれてってそう言おうとしたら、よりにもよって目の前の野郎は……

「あー、そつか。えつと……メビウスの事」

「め、めびうす？」

「何で名前が変わるんだよ!? てか、こつちの話を最後まで聞けってんだっ！」

「どうしたの雪音さん」

と、そこへあいつが来た。で、客の顔を見て何かに気付いたらしい。

「タバコですか？」

「そうそう、メビウス一つ」

「何番のやつです？」

そこから交わされた会話はあたしには何の事だか分からなかった。一ミリの奴じやないとか何だとか言っただけの気もする。

その間、あたしはただ商品を通して袋に詰めるを繰り返すだけ。

あいつが客と話しながらタバコの箱を一つ持ってきて、それをあたしへ渡してくれたのでそれも通す。

で、会計を終えて客がいなくなったのを見てからあいつが謝ってくれた。タバコは銘柄だけを言う奴がいるから、必ず番号で言ってくれて押し切るように言わなかったって。

でも、それはあたしはちやんと聞いてた。なのに言えなかったのはあたしの責任だったのに、こいつは自分がちやんと念を押さなかったのも悪いからって責任を半々にしやがった。

「なあ、さっきのまいるどせぶんとかめびうすってのは何なんだ？」

「どうやら昔はメビウスって銘柄はマイルドセブンって呼んでたらしい。で、昔からタバコ吸ってる人達は自分達の常識が一般常識って思

うらしくてね。ま、覚えなくてもいいよ。すみませんが番号でお願いできますかって言い続けられればいいから」

「わ、分かった」

そう言いながらあたしはすぐメモへマイルドセブンとメビウスの事を書き始める。と、その間あたしの代わりにあいつがレジをやってくれた。こういうとこ、気が利くよなこいつ。

メモを書きながらチラつとあのバカを見れば平気そうにレジをやってる。言葉遣いもあたしよりも簡単に対応出来てるし、こう見るとこういう仕事はあたしよりあのバカの方が向いてるんだろうな。

それにしても、あたしはレジを手慣れた感じでやってるあいつを見る。

今日、本当はこいつは休みだった。だけど、あたしらのためにこの時間のヘルプって事で働いてる。

オーナーのおっさんは新人二人を同じ日に入れる事をどうかって思ってたらしいが、あいつが自分が教育するからって押し切ったらしい。

まあ、本来はもう一人この時間帯に入ってる奴がいるから余裕があったらしいが、よりにもよってそいつが休みやがったせいでこの有様だ。

あいつはあたしとあのバカの教育をしながら業務を回してやがる。これだけでもあたしからすりゃ大したもんだ。

「只野君、新人さん達はどうだい？」

メモを書き終えたところで裏からオーナーが出て来た。何でも人手不足で昼から深夜まで毎日のように仕事してるらしい。

ただ、あいつが入ってる時だけは深夜帯だけ休みみたいな過ごし方をしてるって聞いた。あいつはもう店長みたいなもんだってオーナーも言ってたしな。

「初めてって思えないぐらいです。立花さんは愛想がいいし、雪音さんは覚えが早いし、きつと三日目ぐらいで基本は一人で対処出来ると思いますよ」

「そうか。それは助かるなあ」

「あと、出来るだけ二人は一緒のシフトがいいと思います。互いの足りないところを補うような長所と短所なんで」

「うーん、そうかあ。でもなあ、茂部君や近藤さんとも組んでもらう必要もあると思うんだけど……」

「近藤さんはいいですけど、茂部君とは組ませない方がいいですよ。何なら少しだけオーナーも立花さんのフォローしてやってください。それで俺の言う事分かるはずですから」

あいつの言葉でオーナーはそういう事ならってあのバカの方へ歩いて行つた。

「なあ、何であたしとあのバカをセットにするんだよ？ 人手不足って言うならバラバラでシフトに入った方が」

「茂部って奴は大学生の男なんだけど、正直仕事はいい加減なんだ。元々深夜希望で入ってきたんだけど研修期間からちよいちよいサボるもんだから、俺が夕方へ回した方がいいってオーナーへ言ったんだ」

「……ホントにそれだけか？」

正直少しサボるってだけでこいつがんな事を言うとは思えねえ。

「……飲み物の在庫を保管してる場所があるんだけど、そこで寝てた事があってさ。だから最初は断るべきって言った。でも人がいなくてそれは出来ないって言うから、ならせめて深夜よりは忙しくて早々サボれないだろう時間帯へって」

「そこまで厄介なのかよ？」

「夕方ではまともに働いてはいるらしいけどな。ただ、もう辞めたけど可愛いバイトの子へ連絡先を渡した事があるような奴だから……」

そこで納得した。要はこいつはあたしとあのバカを心配してるんだ。そのもぶ？ とか言う奴があたしやあのバカへ迫ってくるんじゃないかって。

何て言うか、完全に保護者じゃねーか。ま、あのバカとデートをしてやったぐらいだもんな。

その後も基本レジ中心で時間は過ぎてつた。あたしもバイト終わりにには詰まる事なく言葉を発する事は出来るようになったし、あのバ

カも多少ミスはあったらしいがあいつがフオロー出来るレベルのもんだつたらしく、大きな問題なく終わる事が出来た。

廃棄の見分け方も思ってたより簡単だった。ごみ袋の交換はちよつと抵抗感ある場合もありそうだけど、まあそこは運次第だ。

帰り際、オーナーがバイト初日お疲れって事で小さなチョコをくれた。正直嬉しかった。

深夜勤務の人間と軽く挨拶をしてから三人で店を出ると、少しだけ冷たい風が吹き抜ける。普段こんな時間に外にいる事ないから妙な感じだ。

「どうだった?」

「楽しかったです!」

「まあ、いい経験にはなった」

「そう。続けていけそう? 次は俺はいないけど」

その瞬間、あたしとバカの顔が曇る。そうなんだよな。次はオーナーはいてもこいつがいないんだ。

だからってあたしらが深夜帯つてのは無理だ。未成年なあたしらじゃ駄目だって言われたし。

「で、出来れば只野さんがいて欲しいです……」

「あ、あたしとしてもあんたがいてくれた方が安心出来る」

その言葉であいつが嬉しそうに笑ったかと思うと顔を急いで背けやがった。照れてやがるのか。

「そ、そうか。そういう風に言われると嬉しいけど、さすがに夕方と深夜続けて勤務はキツイからなあ」

「で、ですよね……」

見るからに肩を落とすバカを見て、あたしは無理もないと思った。多分だけこのバカはあいつに惚れ始めてる。

一緒に布団で寝てもいいみたいだな事を思わず言っちゃもうぐらいた。まず間違いないだろ。と、そんなバカを見てあいつは仕方ないって感じで息を吐くと後ろ手で頭を掻いた。

「……ちよつと待っててくれるか? 少しオーナーと話してくる事が出来た」

そう言つてあいつはまた店へ戻つて行つた。その背をどこか期待を込めたような目でバカが見つめてた。

「おい」

「え？ 何？」

こつちへ向いた顔は普段のバカだ。でも、どつか違う気もする。

「きつとあいつ、あたしらが入る時だけ夕方から入る気だぞ」

「……やっぱりそうかな？」

「しかねーだろ」

「わ、悪い事しちゃつたかな？」

「ま、あいつはそう思わねーだろ。きつと出来ない事はないんだろ
さ」

「……お礼言わないと」

「止めとけ。きつとあいつもこつちに申し訳なく思つてるから堂々巡りになる」

「でも……」

「悪いと思つてんならメモを取る習慣つけろ。一度教えてもらった事、何回聞いてんだ？」

「あうつ、それはあ……」

「言い訳すんな。お前、あいつだけじゃなくオーナーにも聞いてただろ」

「ど、どうしてそれを？」

「丸聞こえなんだよ。お前の声、大きいからな」

「で、でも、元気よくていいって只野さんもオーナーさんも褒めてくれたよ？」

「そりやそうだろうがな、客への挨拶と同じ大ききで喋るなつての。時々客が笑つてたの聞いてなかつたか？」

「ええっ!?! あれつて私の事笑つてたの!?! てつきりクリスちゃんの言葉遣いに笑つてたんだと」

「おい、ちよつと待て。てーのは何か？ お前はあたし様の苦勞を聞いて笑つてたつて事か？」

「そ、そんな事はないよ？」

「こっちの目を見ていいやがれっ！」

あたしがこのバカへ掴みかかろうとした時、あいつが店から戻ってきた。手には店で買ったのだろう何かが入ったそれなりの大きさの袋がある。

「お待たせ。じゃ、帰ろうか」

何を話してきたかを言わず、あいつは歩き出した。その後を追う形であたしすらも歩く。

「あ、あのっ、何を話してきたんですか！」

「二人は週三の希望だろ？ 俺も稼がないといけなかったし、オーナーに言って研修中の間だけ夕方から出れるようにしてもらった」「ホントですか!？」

「ああ。ただ、俺も年齢があるから付き合えるのは研修期間だけ。それが終わったら悪いけど……」

「分かってるっての。大体あたしらはこっちで一週間過ごしたら一旦戻るんだからな？」

「それは分かってるよ。でも、すぐに戻ってきてくれるんだろ？」

「はいっ！」

バカが即答しやがった。ただ、あたしは即答は出来ない。

「雪音さんは無理そうかな？」

でも、こいつの暮らしを見てると放置は出来ねえ。それに、この世界で何か起きるもしくは起きてるのは間違いないんだ。

それを調べるにも金はある。そうだ。ここじゃ今までみたいな動き方じゃ不味い。調べてくれる人手はいないし入ってくる情報だつてない。こうなるとやっぱあたしだけじゃ足りないな。

「戻ってくるっての。ただ、やっぱり調べる事に時間を割ける人間を連れてくる必要がある」

「え？ 誰か連れてくるの？」

「しかねーだろ。あたしらはバイトしないとならねーのに、その上で調査なんて体力が持つか不安だろうが」

「そうだな。響はともかく雪音さんは体力ないもんなあ」

ぐっ、こ、こいつそんな事まで知ってやがるのか。と、そこで思い

出した。そういやこいつ、搬入の荷物が来た時あたしにはレジを任せ
てたな。

あれ、今思えばあたしの体力を心配してたのか。でもそれをそのま
ま言うとあたしが反発すると思ってレジを任せた？

「……そういうことだ」

あまりしたくないが体力作りに走る事でもやるか。きつとあのバ
カは喜んでやるだろう。てか、下手したらこっちでもやるな、こいつ。
そんな風に思っただけで見てたらこっちへバカが顔を向けてきた。

「クリスマスちゃん、明日も頑張ろうね！」

「……ああ」

ま、いいか。向こうじゃ装者って事もあつてバイトなんてやりたく
ても出来ねーしな。そう思っただけであたしは手にしてた物を思い出した。

オーナーがくれたチョコ。このままじゃ体温で溶けるか。そう
思ってもらったチョコの包みをはがして食べる。でも口の中に広
がる味は思ってたような普通の味じゃなかった。

「ん〜……このチョコ、プリン味だあ」

どうやらバカも同じタイミングで食ったらしい。なんつーか、妙に
気恥ずかしいな。

「あー、ちゃんとしたプリン食べたくなってきちゃった。クリスマス
ちゃん、どう？」

「……否定はしねえ」

それどころか賛成したい。何だよ、この感じ。何て言うか、こんな
会話あまりこいつとした事ないな。

「ははっ、とにかく早く帰ろう。っと、その前に晩飯を買おうか」

「買う？」

あたしさらに笑みを見せてあいつは先導するように歩き出した。ア
パートへの道じゃねえなこれ。

そう思いながらもその後を追う様に歩いてると、やがてあいつの足
が一軒の店前で止まる。

「ここは……弁当屋か。」

「すみませーん。まだ間に合いますかー？」

あいつが店の中へ声をかける。すると、少し間があつてエプロンを着けたおばさんが出て来た。

「はいはい。あら、仁志くんじゃない。今日はどうしたの？ いつもなら夕方に来るのに」

「色々あります。いつもの出来ませう？」

「いいわよ。まだ火を落としてないからって……」

そこであたしらへ気付いたのかおばさんの目がこつちへ向いた。で、若干ニヤツとした感じに笑つてあいつへ顔を向ける。

「あくら、隅に置けないわねえ。そんな可愛い子二人連れて」

「今日から入ったバイトの後輩ですよ。なので先輩として初日ぐらいイイカツコしたいんで、いつもの三つお願いします」

「はいはい、そういう事にしておくよ。盛りは？」

「えつと……」

店のおばさんと話すのを見てここによく来てるのが分かった。あと、多分休みの日にしか使つてない事も。

視線を動かせばあのバカは店のメニューを眺めてやがった。その目がキラキラとしてる気がするのは気のせいか？

「クリスちゃん、見て見て！ のり弁が二百八十円だつて！」

「マジかよ、安いな……」

「うわつ、唐揚げ弁当は三百六十円だよ！ ご飯の大盛りは……えつ!?! 無料なのっ!?!」

「大盤振る舞いな店だな、おい」

「そうだよ。だから今もたまに使つてるんだ」

あたしら話していると注文が終わつたあいつが話に入ってきた。

「たまに、何ですか？ その割に凄く親しげでしたけど……」

「コンビニの前はここで働いてたんだよ」

「そうなのか。何で辞めたんだよ？」

「まあ、悲しい話さ。年齢のせいかここでの週五勤務がきつくなつて、シフトを減らして続けてたけど今度は当然収入が苦しくなつた。で、同じ日数で収入が上がるころへ行つた。食事に関してはコンビニよりも良かったんだけど、掛け持ちは無理だつたしな」

複雑な顔をするのを見て、多分ここを辞めたくなかったのは分かった。だからこそおばさんも笑顔なんだろうな。

で、そこで三人で会話しながら待つ事に。こここのオススメはあいつ曰く生姜焼き弁当らしい。でも一番人気は唐揚げで、二位がのり弁当。三位がしやけ弁当そうだ。

「あの、一体何を注文したんですか？」

「それは帰ってからの楽しみ。ただ、ヒントを出すなら値段は五百円」

「五百円……」

結構な値段な気がするのがすげえな。普通に考えりやそこまで高いつてはずじゃないんだが、他の弁当の値段見るとそう思うんだよなあ。

あと、あたしらの時給の半分以上が飛ぶって考えるとやっぱたけえ。なんつーか、今までは装者としての給料だったからそこまで稼ぐのが辛いとは思わなかったけど、ああして普通の働きで稼ごうとすると辛いつてよく分かる。

ギアが使えない世界じゃ、あたしらはただの小娘だもんな。

「はいよ、いつもの」

「ありがとうございます」

「お嬢ちゃん達、仁志くんと仲良くしてやってね。この子、真面目で良い子だから彼氏には向いてるわよ」

「や、止めてくださいよ。この子達はまだ高校生なんですからね？」

「俺みたいなおっさんと付き合うなんて罰ゲームです」

「だから彼氏にはって言ったのよ。旦那には、ねえ」

「あの、悲しくなるんで止めてください。ほら、千五百円置いておきますから」

「そんな事言ってるといつまでも一人になっちゃおうよ？ 十歳ぐらいの年齢差なら最近じゃ珍しくないし」

「俺が良くてもこの子らには選ぶ権利ともっといい相手と出会う可能性がありますから。じゃ、これで失礼します」

「あつ、待ってくださいよ只野さんっ！」

逃げるように歩き出すあいつをバカが追い駆ける。あたしも追い駆けようとして……

「お嬢ちゃん」

「え？」

「仁志くんなら大丈夫だと思うけど、それでも注意はするんだよ？」

家とか簡単に入らないようにね。思春期迎えたら男はみんな狼を飼ってるからさ」

何とも言えず、とりあえず頷いてあたしも二人を追い駆ける。

あのおばさん、あたしとバカがあいつの部屋で寝泊まりするって聞いたらどんな顔すんだろうな。

てか、よく考えたら着替えとかどうすんだ？ あそこじゃ仕切りもないから無理だろ。ホント、あたしも考えが足りてねえけど、あいつも大概だな。

「……ま、そりやそうか」

すっかりしてるように見えても、あいつは自分で言ってた通り一般人だ。今までのような抜かりない考えとか手回しとか出来ない方が普通なんだよ。

ホント、駄目だなあたしも。どつかで今までみたいに考えてやがる。やっぱ、このままじゃ駄目だ。

でも……

「クリスちゃん、早く早く！」

「弁当が冷める前に食べよう！」

こつちへ手を大きく振るバカと弁当の入った袋を見せるように持ち上げるあいつを見て、あたしは息を吐いてちよつとだけ速度を上げて走る。

「分かってるってのっ！」

今はこの何でもない時間を楽しんで過ごすつつか。

仁志の買った弁当は、簡単に言えばミックス弁当だった。唐揚げが二つに生姜焼きもあり、昆布の佃煮がのりの下に敷かれたご飯の上にちくわの磯部揚げと白身フライが乗っているというものだ。

しかもクリスののは普通盛りで、響の分は大盛りになっているという配慮がされていた。

「おおく……」

「美味そうだろ？ これ、俺だけの特別弁当なんだ」

「元従業員ならではってやつですね！」

「すげえボリュームだな。でも、美味そうな匂いだ」

慣れない仕事をしたためか、二人は午後十時半近くという本来であれば食事をするはずのない時間にも関わらず強い空腹感を感じていた。

そこへ食欲を刺激する香りと見た目である。油ものをこんな時間に、それも寝る前に食べては太ると二人もどこかで分かっている。それでも目の前の食事を前にして箸を手にしないという選択肢はなかった。

六畳間の狭い部屋。そこにある折り畳み式のテーブルへ三つの弁当と三つのコップが並ぶ。

響が黄、クリスが赤、仁志が黒という配色のコップには緑茶が注がれている。更に二人の少女はそれぞれ座布団を敷いており、それらは全て前日の買い物で手に入れた物である。

そして仁志の使い古していた布団の傍には真新しい布団が一組あり、その上に枕が二つ置かれていた。響とクリスが一緒に寝るための寝具である。

「じゃ、食べようか」

「はいー」

「おう」

三人揃って手に箸を持った。それらも百貨店で購入したものだ。

「いただきます」

まず仁志はご飯を、響は唐揚げを、クリスは生姜焼きをそれぞれ口に入れる。

「ん〜……」

幸せそうな顔をする三人。空腹で食べる温かく美味しい食事というものやはり幸せになってしまうものなのだ。

「只野さんっ！ これ、すっごく美味しいです！ 下味が付いてるんですよ、これ」

「そうだよ。あの店特製のタレがあるんだけど、それに一晚漬け込んでおくんだ」

「この生姜焼きもすげえぞ。お前がオススメって言うだけあるぜ」

「だろ？ 特にそのタレが絡んだ玉ねぎがいいんだよ。店で白飯の廃棄が出た時は、生姜焼きのおかずだけ頼んで生姜焼き丼にして食べる時もあるんだ」

「そんなに美味しいんだ。じゃ、次は生姜焼きを食べよう」

「あたしは唐揚げにいくか」

こうして二人の少女は夜遅い時刻に食べる高カロリーという禁断の味に舌鼓を打ち、食後のお茶を飲んで一息つく。そこへ仁志は更なる悪魔の味を二人へ差し出すのだ。

「で、これは俺からのバイト初日お疲れさまってやつ。あのチョコを食べたらきつと欲しくなるかなって思ってたさ」

そう言っただけがテーブルの上に置いたのはコンビニのプリンだった。

「これって……」

「買ったのかよ？」

「当然。まあ深夜なら廃棄で一つは出たかもしれないけど、あの時間じゃまだ早いから」

「い、いいんですか？」

「むしろ俺の台詞だよ、それは。今後こつちでバイトしてもらうんだ。これで向こうに戻った時に経過時間が同じか下手して加速したら申し訳ないじゃ済まないから」

その言葉に響くとクリスは思わずプリンへ向けていた視線を上げて仁志の顔を見た。彼は真剣な表情をしていたのだ。

「その、今回の事はお互いに予想出来ない事だらけだ。俺が知ってる知識は結局そつちとそこまで変わらないけど、それでもこれだけは言える。平行世界じゃないところと繋がったっていうのは、どう考えても悪い事しかない」

「だな。これまではあたしらのいた世界と同じか似たものが多数あった。でも、ここはそれがまったくない」

「そう。で、極めつけに時間の流れ方が明らかに狂ってる。これ、もしかすると今回の事件に関係してる可能性が高いと思う」

「かもしれない。こうなるとやっぱり調査専門の人間を」

「で、でも、スマホがないと動けないんじゃないや調査出来ないよクリスマスちゃん」

響の言葉に仁志とクリスが同時に同じ表情を浮かべた。失念していたとそういう顔である。と、そこでクリスは何かを思い付いて仁志を見た。

「なあ、そのスマホ、今度あたしらが戻る時に借りてもいいか？」

「……調べてもらうんだな？」

「ああ。エルフナインなら何か分かるかもしれないねーからな」

「分かった。じゃあ、その時に」

そこで難しい話は終わり、二人は食後のデザートを堪能する。が、その後で問題が一つ。

「あ、あの、只野さん。そういえばシャワーとかって……」

「……申し訳ないけどない」

実は初日は二人も慣れない場所などで疲れたのか仁志がバイトへ向かう前に眠ってしまい、汗を流す事を意識せずに過ごした。

翌朝はクリスが起きた時には仁志が眠っており、また聞けずじまい。さすがに今夜は汗を流したいと思っても普通である。

それに対する答えがそれだった。そもそも部屋の作りからしてそんな場所がない事は二人も薄々は覚悟していた。

もし仁志が風呂なしトイレ共同の場所で暮らしていれば、きっと彼は共同生活を持ちかける事もしなかっただろう。

だが、やはり風呂は無理でもシャワーぐらいは欲しいのが女性と言うものである。そういう意味では響はしっかりと乙女であった。

「マジか。お前、今までどうしてたんだ？」

「たまに歩いて十分ぐらいのところにスーパー銭湯。それ以外は二日か三日に一回ネカフェでシャワーだけ借りてた」

「い、いくらですか？」

「俺が行つてるとこは三十分利用で三百円」

「ぐっ、あたしらの時給の三分の一強ぐらいか」

「そ、そう考えると高いような気がする……」

寝間着へ着替えるかどうかとなったところで女性ならではの問題発生。汗を流すという事だ。

男性で一人暮らしが長かった仁志は気にしないでも、年頃の響とクリスはそうはいかない。

そしてそうなれば仁志の行動は一つだった。彼は立ち上がると上着を手に取り、財布とスマホをポケットへ突っ込んだ。

「スーパー銭湯はちよつと無理だけどネカフェへ案内するよ。申し訳ないけどしばらくはそれで我慢してもらえるか？」

「ほ、ホントにいいんですか？」

「男の俺と同じようにしろなんて女の子二人には言えないよ。身綺麗にしていたいのが女性だし」

「その、わりい。あまり金の余裕がないつてのに」

「いいんだ。それに俺にもメリツトはあるよ。こんな可愛い女の子二人を連れて夜道を歩いてネカフェへ行って、その後は湯上りの姿を見せてもらえるんだしさ」

二人が気にしないように笑みを見せて仁志は玄関へと向かう。響とクリスもそれに続こうとして、はたと動きを止める。

——く、クリスちゃん、着替えはどうする？

——さ、さすがにパジャマに着替えてここまで歩いてくるのは恥ずかしいな……。

——そ、それだけじゃなくてさ。し、下着は？

——……あいつはきつとそこまで気付いてないと思う。なら、服はこのままで帰ってきて、あいつに少し外で待ってもらってパジャマに着替える。これでどうだ？

——の、ノーブラノーパンで帰ってくるのっ!?

——ブラは着けても平気だろ。

——じゃ、じゃあ……。

——…下は仕方ねーだろ。お前、一度脱いだやつ、履くか？ もしくは帰りだけのために新しい下着持っていくか?!

——そ、それはたしかに考えるとこだけど…。

——だろ？ だからここはどうせ寝る前には脱ぐって思ってたな…。

話題が話題故に小声でもテンションが上がる二人。だが、結局狭く静かな六畳間である。それが聞こえた仁志は頭を抱えた。

(こ、これは聞かなかった事にしておこう。てか、ホント配慮足りないなあ、俺)

男一人の気ままな暮らしとはいかないのだ。そう改めて思い直し、仁志は天井を見上げた。

「…マジで引越し、考えようかな」

四畳半になってもいいからシャワーがある部屋を。そう考えて明日にでも住宅情報誌を立ち読みに行こうと決意して。

その決意の呟きを他所に少女二人の話し合いは続く。その結果、いつしか仁志が耳を塞いだ事は言うまでもない。

S y n c h r o g a z e r

「お先に失礼します（！）」

「はい、お疲れ様」

オーナーへ挨拶し響とクリスはスタッフルームという名の事務所を出る。午後十時を過ぎても店内はそれなりの客がいて、そんな中でも仁志は平然と業務をこなしていた。

「只野さん、お先に失礼します！」

「お疲れ様。忘れ物はない？」

「はい！」

「おう」

仁志の確認に響がビニール袋を、クリスがスマホを見せる。それに仁志も頷いて笑みを返した。

「じゃあ気を付けて帰ってね」

「はい」

「じゃあな」

これから深夜勤務へと入る仁志へ手を振り二人は店を出た。

外の空気は春が近いとはいえ昨日と変わらぬ冷たさであるが、何故か昨日よりもそれが強いように彼女達は感じていた。

（ううっ、何だか寒いや。どうして？）

（何か昨日よりも風が強くなーか？）

そこで二人は同時に気付く。昨日は自分達を守るようにいた存在がいないからだ。

（只野さん（あいつ）がいないからか……）

密かに風よけとしても動いていた事を察して二人は一度だけ店へ振り返る。そのガラス越しに見えるレジ応対している仁志の姿に、彼女達は小さく息を吐いた。

「……帰るぞ」

「……うん」

これから早朝六時まで彼は仕事をしなければならない。いくら待ってもそこまで仁志は解放されないのだ。

そう思つてクリスは歩き出す。響も返事はするものの、その場から動こうとはしなかった。

「おい」

「……すぐ行くから」

寂しげな眼差しを向け続ける響を見て、クリスは色々と考えて言葉では動かすのが面倒だと判断した。

なので、恥ずかしさが強くはあるが思い切つて空いている方の響の手を掴んだ。

「え……う」

「いいから帰るぞ。変な噂を立てられたら困るのはあつちだ」

軽く引つ張るように響の手を掴んで歩き出すクリス。そんな彼女の行動に理解が追いつかない響だったが、ゆつくりとその行動を理解し嬉しそうに笑みを浮かべてしつかりと手を握り返した。

「うんっ！」

昨日と違い今日の二人の食事は小休憩時に食べた廃棄のパンだった。コンビニでの廃棄期限は物によつて異なるのだが、期限切れで廃棄になるのではなく多少猶予があつてそうする事が常である。

よつてその日に食べるだけなら問題はないと言える。ただし、仁志の店はオーナーの厚意で許可されているだけであり、しかも本来であれば持ち出しは禁止となつていた。

仁志は勤務年数が長い事とオーナーの信頼も厚いために密かに特別扱いされているのである。

ただ、大食らいではないクリスはともかく、響は休憩時の量では若干の物足りなさを覚えていた。そこで彼女の食欲をよく知る仁志は中華まんの廃棄を彼女へ回して後でクリスと食べるように持たせていた。

勿論それもオーナーへ許可を取っている。こういうところに彼が店長扱いと言われる部分があつた。

そうして二人は仁志の部屋へと戻り、預かっている鍵で中へと入ると中華まんを食べ始めた。若干冷えているものの、また仄かに温かいそれに二人は笑みを浮かべた。

「ピザまん美味しく」

「カレーまんも中々だな。あまり食う事なかったけどこれを機会に食べてもいいぞ」

「それにしても、ホットスナックって売れるものと売れないものが分り易いね」

「まったくだぜ。あれじゃ捨てるために揚げてるようなもんだ」

「中華まんもだよ。肉まんは多くても売れてるけどピザまんとかは全然……」

「あたしも売った事あるの肉まんとかあんただけだな。ま、おかげで今食えてる訳だけど」

二日目の勤務で既に二人はコンビニバイトならではの疑問や不満を抱き始めていた。

今まで彼女達は装者という立場でしか仕事をしてこなかった。それは少しの油断やミスも禁物の世界。

故に関わる者達は良い意味での緊張感や使命感を持つて事にあたっていた。そこに怠慢や手抜きなどなかったのである。

それとは真逆の世界がコンビニと言ってもいいだろう。ある程度であれば手を抜いてもいいと思う者達が基本であり、例えば何かミスをして謝れば何とかなると思ってるのだから。

つまり、二人からすれば普通のコンビニの裏側は見るに堪えない部分が多かったのだ。

「商品の補充とか、したくても中々出来ないし」

「深夜と昼間は出来るらしいけど……なあ」

「只野さんが言ってた事はこういう意味だったんだね」

今日バイトへ向かう前に二人へ仁志はこう忠告していたのだ。

——今日は少し周囲や色んな事に意識を向けられるだろうけど、あまり厳しい目で見ないでくれ。

仁志は長くコンビニで働く故に、これまで立派な人々に支えられて働いてきた二人がどう思うかを読んでいたのだ。

バイトなど手を抜いてもと思う者や他の時間帯がやればいいと思う者がいるのが普通だと知っていたからである。

「さてと、食べ終わった事だし……」

「汗流しに行こうっ！」

二人は立ち上がってシャワーセットを手にすると再び部屋を出て鍵を閉める。

向かう先は歩いて十分ほどのネットカフェ。そこでシャワーを借りて汗を流すのだ。

仁志との共同生活三日目。バイトは順調であり、就寝時も特に問題はなかった。ただ、そこには仁志の多少行き過ぎた気遣いもあったが。

「それにしても昨日は驚いたよねえ」

「だな。まさかあいつがあんな事言ってくるとはなあ」

「うん。俺の手を縛ってくれ、だもん」

そう、仁志は寝る前の二人へタオルを出してそう頼んだのだ。これなら自分が変な気を起こしても碌な事が出来ないからと。

響もクリスもそこまでしなくても言ったのだが、仁志は信頼してくれているからこそして欲しいと頼んだ。なのでクリスが仕方なく彼の両腕を結び、三人は眠りに就いたと言う訳だった。

「跡、残らなくて良かったね」

「正確にはバイトまでに消えて良かった、だな」

「あ、あはは……朝はくつきりだったっけ」

「ああ。で、問題は明日だろ」

「え？」

「あいつが朝の六時でバイト終わって戻ってくるだろ？ その時あたしらはきつと寝てる」

「だ、大丈夫だよ。只野さん、変な事しないって」

「あたしも信じてるけどな。でも、疲れてる時ってのは、人間信じられないミスをやらかすもんだ。あいつだってあたしらへ変な事を」

「そんな事ないよっ！ 只野さんはそんな人じゃないっ！」

クリスの言いたい事を察して響は思わず大きな声を出した。

それにクリスは目を見開いて驚きを露わにする。

その顔を見て響も我に返り慌てて頭を下げた。

「ご、ごめん！」

「いや、いい。たしかに今のはあたしも軽率だった。でもな、あいつもあたしらと一緒にあの部屋で暮らすって事の意味を分かっているからあんな事言っただ。なら、こっちも信頼しているからこそその警戒心を無くしちゃならねーと思う」

「信頼してるから警戒するの？」

「要はあいつがこっちへ変な気を起こす切っ掛けを与えないでやるって事だ。あたしらがあいつを信じて色々と氣い抜いてみる。それって、考え方変えたら誘ってらるって事だろうが」

クリスの言葉に響は普段自分が未来という時を思い浮かべ、そこにいるのが同性の未来ではなく仁志だったらと仮定し、その顔を真っ赤にした。

「そ、そうかもしれない……」

「だろ？ だからあたしらも警戒するんだ。あいつが自分の望まねー事をしなくて済むように、な」

「うん」

クリスの言いたい事を理解し響は笑顔で頷く。クリスはクリスなりに仁志の事を考えていると分かったのだ。

やがて二人はネットカフェへ到着すると店内へ入って受付でシャワー利用を告げる。料金を支払い二人はシャワーへと向かう。

一日の汗を流し外へ出た二人を夜の寒風が襲う。身を縮め、二人は目を細めた。

「ううっ、やっぱりシャワーじゃ体が温まらないね」

「だな。でも、仕方ねえ。風呂じゃ一回で五百円だ」

「うん、二人で千円は……」

「世知辛い話だぜ。あっちじゃこんな話した事ないってのに」

「私は意外とあつたり……」

「お前は無駄遣いが多いんだっての」

隣り合って歩く姿はどこから見ても仲の良い友人。

ただその髪には南国風の飾りを付けていて、その顔は多少赤みを帯びている。

「……クリスちゃん、私さ、今までそんなに裕福な暮らしをしてないって思ってたんだけど」

「ああ」

「……十分裕福だったってここに来てから実感してる」

「奇遇だな。あたしもだ。てか、あたしの場合は今の暮らしってのはやっぱり恵まれてたって痛感したぜ」

二人はそう言って視線を相手の髪飾りへ向けた。それが意味する事を思い出し、二人は苦笑する。

実は、昨夜シャワーを浴びに行く事で浮かび上がった問題点を解消するための手段として、今の二人はある意味技術の無駄遣いをしていったのだ。

「まさかギアをこんな風を使う日が来るなんて……」

「逆転の発想だったよな」

そう、今の二人はギアを展開していた。それも水着ギアである。その上から服を着て歩いているのだ。

これは、実は仁志の発案だった。あの夜の二人の密談（と本人達は思っていた）を聞いていた仁志が、シャワー帰りだけ下着のようなギア、つまり水着ギアを展開してしまえばいいと言ったのだ。

当然それを聞いた二人は名案だと感心したのだが、すぐさま彼が自分達の話聞いていた事に気付いて真っ赤になった事は言うまでもない。

——すまない。最初の方は聞いてしまったんだ。でも途中から耳を塞いだから本気で聞いてない。その証拠に二人が揺さぶるまで俺じつとしてただろ？

それに幾分か心を軽くした二人であったが、仁志へ文句を言う事はなかった。彼は彼なりに自分達へ出来る限りの事をしようとしていると分かっているからだ。

それがより強く分かったのは今日の昼間。調査を兼ねて響とクリスは二人で出かけたのだが、その途中で仁志の姿を書店で見かけたのだ。

そこで読んでいたのが住宅情報誌。それが何でかは二人も口に出

さずでも分かった。

「クリスちゃん」

「ん？」

「只野さん、引っ越すつもりなのかな？」

「……だろうな。それも、あたしらのために」

「何か、お手伝い出来ないかな？」

「今はないだろ。精々出来て肩たたきみたいな事ぐらいだ」

「そっか……」

残念そうに肩を落とす響だったが、クリスはそんな彼女を見てため息を吐いた。

（つたく、どう見ても駄目な男に入れ込む女じゃねーか）

そう思うクリスではあったが、彼女は彼女で仁志に感謝し自分に来る範囲で手伝おうと思っっているので強く響の事を言えない。

つまり二人は優しい心の持ち主であった。

これまでのギャラルホルン絡みの事件では彼女達は装者として戦う事が出来た。それがここではまったくなく、故に何も役に立てない事を申し訳なく思っていたのだ。

調査も素人にも近い二人ではどこをどう調べればいいのかも分からず、また伝手などもない以上下手な事は出来ない。

かと言ってここを離れて戻ったところで今回の事件を解決出来るはずもなく、下手をすれば仁志の生活が破綻するか彼自身の記憶までも変化して手詰まりになる可能性さえある。

実は、今回はこれまでにない程の危機と言えたのだ。

仁志の部屋まで戻った二人は鍵を開けると郵便受けに鍵を入れて中へ入る。

「何だかドキドキするね」

「まあ、なんつーか古いドラマみたいではあるよな」

昭和時代の同棲生活と弦十郎辺りなら思ったかもしれない。それぐらい仁志の生活は時代に取り残されている感が強かった。

服を脱ぎギアを解除すると寝間着へと着替えていく二人。昨夜はその間仁志は鍵をかけたドアの前で座って空を眺めて待っていた事

を思い出し、二人は小さく笑った。

「何笑ってんだよ？」

「そういうクリスマスちゃんこそ」

お互いに相手と夜を過ごす事は今までなかった訳ではない。だがそれがこの二人だけでとなると話は別だった。

響には未来がいたし、クリスマスも完全に誰かと二人きりと言うのは珍しかったのだ。

未来と共同生活をした際もカーバンクルという存在がいたのだから。

「よつと、じゃあ寝ようか？」

「だな」

自分達用の布団を敷き、仁志用の布団も敷いておく二人。帰ってきた時に敷くとその音などで起こしてしまうかもしれないと彼が考えたためである。

こうして本来一人用の布団へ小柄とはいえ二人の少女が入る。それは若干の狭さを感じると共に互いの体温を感じる事でもある。

「な、何だかやっぱり慣れないや」

「……あの子とはよく寝てるんだろ」

「未来とは……一緒に寝るって言ってもここまで密着しないから」

「そ、そっか。そりや、そうだよな」

揃って天井を見つめながら横になる。午後十時半を過ぎてアパトは静かなものだった。

その静けさの中に時々話し声やテレビの音が微かに聞こえ、それが二人には新鮮に思えた。

「……クリスマスちゃん」

「……何だよ？」

「もし、もしもだよ？ こっちでの一週間が戻ったら一日にもなつてなかったらどうする？」

その問いかけの持つ意味を悟りクリスマスは息を呑んで顔を響へ向けた。彼女はどこか真剣な表情で天井を見上げていた。

「……どうするって」

「私、時々思う事があるんだ。もしも装者にならなかつたらどうして
たんだろうって。それが、ここでの私なんじゃないかなって思う。ギ
アを使う必要もないし、呼び出しも訓練もない。まあ未来がないの
は凄く寂しいけど……」

そこで響は顔を横へ動かしてクリスを見た。

「代わりにクリスちゃんがいるから」

「っ?!」

どこか照れくさそうな笑みを響はクリスへ向ける。その笑みにク
リスは顔を真っ赤にすると慌てて響へ背を向ける。

「ば、バカ言ってるじゃねえ」

「あはは、そうかもね。でも、思うんだ。ノイズも、アルカ・ノイズも、
錬金術師もない。聖遺物もなければギアもなくて、ここは私達の世
界での怖い要素がないって言ってもいい世界」

「……でも戦争は、紛争はある」

「でもそれは私達の世界でもある事だよ。それに……」

そう言ってから響は少しだけ悲しそうな顔を見せた。

「師匠達が、大人が悔しい気持ちを押し殺して私達を戦場へ向かわせ
る必要もない」

「……お前」

そこで振り返ったクリスが見たのは苦しそうな表情の響であった。

「ギアが必要ない世界なら、師匠はきつと私達を戦わせたりしない。
ううん、むしろギアを私達から回収しちゃうかも。戦場は子供が行く
ような場所じゃない。後は大人に任せておけて」

「……だろいな」

「ね、クリスちゃん。どうしてここと繋がっちゃったんだろうね？」

もしかして私がギアなんて必要ない世界になって欲しいって思って
たからかな?」

「んな訳ねーだろ」

「でも、でもさ? じゃあどうして時間の流れ方もおかしいのかな?

私がこういう世界でずっといたいって思うからじゃない?」

瞳一杯に涙を浮かべ、クリスへ問いかける響。その表情にクリスは

呆れるようにため息を吐くと、体の向きを変えて響の事を抱き締めるように動いた。

「そんな事ねーから。だから泣くな」

「ひっくっ……クリスちやあん」

響の顔を優しく抱き寄せるようにし、クリスは普段よりも幾分あつたかい声を彼女へかける。

陽だまりと離れ、生まれて初めての淡い恋心に揺さぶられ、自分のどこかで願っていた状況へ置かれ、響は精神が弱っていた。それを感じ取り、クリスは年上らしい包容力を見せたのだ。

今は、自分が未来の役割を果たす時なのだ。それが最初にここへ来る事を拒んだ自分が出る罪滅ぼしなのだ、そう思っただ。

そうしている内に泣き疲れて響は眠り、クリスも間近で感じる他者の温もりに眠りへと落ちるのだった……。

「えっと、鍵はつと……」

あく疲れた。やっぱ夕方から続けて夜勤は堪えるな。

ただ、こうやって郵便受けから鍵を取り出すのは母さんが見てた昔のドラマとかみみたいだ。

出来るだけ静かに鍵を開け、そつとドアを閉める。ただ、古いせいで立てつけが良くないせいかわそれでも音はしてしまうけど。

と、そこで香る嗅ぎ慣れない匂い。それが今寝ている二人の少女の物だと思ふと妙な気分になりそうだが……。

「……眠い」

ムラムラするのではなくウトウトする。これが三十路間近の文化系男の悲しさ。

それでも買ってきたお茶の紙パックを冷蔵庫へしまい、廃棄のシュークリームを二つ入れて、いつもなら食べる廃棄のおにぎりも今日は眠気優先なので袋ごと入れておく。

そしてジーパンのファスナーやボタンを外し、上着を脱いでシャツ一枚へ着替え、夜の内に敷いておいてくれた布団へジャージの下を持って入る。で、掛布団の中でジーパンを脱ぎ、ジャージの下へ履き

替えて目を閉じた。

でも、最後に一度だけ目を開けて眠る二人の顔を見た。

「……可愛いなあ。おやすみ、二人共」

気分は完全親戚のおじさんである。そして目を閉じると実にあっさりとした俺の意識は遠のいていき……

「ん……？」

目を覚ましたのは何かを炒めるような音が聞こえてきたから。

流しがある方へ目を向ければ、そこでは銀髪の天使がフライパンを振っていた。

「あつ、起きました？」

そして背後からは明るい声。振り返ればそこには元気な笑顔の太陽がいた。

「……おはよう」

「はい、おはようございます。って言っても、もうお昼過ぎですけど」
言われて枕元のスマホを……ない。

「はい、これですよね」
すると視界の中へ差し出されるスマホ。どうやら響が持っていたらしい。

と、それもそうか。昨日は二人が先にあがるからスマホを持たせただもんな。

「ありがと……一時か」

七時間近く寝た計算だ。それでも気怠さは消えない。もう慣れた事ではあるけど、やはり辛い事には変わりはない。

「今クリスちゃんにご飯作ってくれてますから」

「ご飯……？」

そんな材料はなかったはずだ。そう思ったのが顔に出たのだろう響が笑顔で教えてくれた。

「実は、二人で一旦戻ったんです。で、師匠へ食べ物での支援をお願いしますしたら許可が出ました」

「……そうなんだ」

「おう。しかも、だ。こっちで三日は経ったつてのに向こうは一日は

おろか半日も経過してなかった」

「えっ!？」

一瞬で目が覚めて起き上がる。本気で時間の流れがおかしい。こうなると本当に行き来する人間の意識が重要な気がする。

「師匠もそれを聞いて驚いていました。エルフナインちゃんへスマホの事を話しておいたので、今度持って行こうと思います」

「……いつそ今から行って、向こうで何らかの成果が出るまで二人は戻った方がいいかもしれないな」

もし、もしも俺の想像が当たっているのなら向こうで一週間経過しても俺の体感は一日にも満たないかもしれない。

あの時、二人は本部へ戻り報告をしてから宿泊の用意までして戻ってきた。それが俺には五分程度。でも実際にはもつとかかかってるはずだ。

「えっと、いいんですか?」

「むしろ行くなら今日がいい。今日と明日、二人はバイト休みだろ?」

なら最悪何とかなる」

逆に言えば、早めにスマホの事を分析してもらわないと不味い。このままじゃ二人は別々に行動が出来ない。

「……分かった。なら飯食ったら二人で一旦戻る」

「ああ、そうして欲しい。で、結果が出るまでは戻ってこないでいい。もしかすればそれでも……」

「一日も経ってない、ですか?」

「こうなると有り得るな。っと、出来たぞ。皿出してくれ」

「あ、うんっ!」

響が大皿を取り出してそこへ雪音さんがフライパンの中身を流していく。

あれは……野菜炒め? いや、この匂いは違う。もしかして回鍋肉か?

「ほらほら、起きたんならさっさと布団畳んで場所作れっつての。あとテーブルも出しやがれ」

「あ、ああ、分かった」

きつと響が持ってきたんだろうエプロンを着けた雪音さんは幼な妻みたいな感じがした。

俺が布団を畳んでテーブルを出すとその中央へ響が大皿を置いた。

「はい、どうぞー」

「おおっ……」

やっぱり回鍋肉だ。豚肉にキャベツ、ピーマンに長ネギ。この部屋で料理なんてももの自体久しぶりだ。自然と心が躍る。

「何がどうぞだ。まだ肝心なもんが残ってるだろ」

「あつ、そうだった」

「え？」

まだ何か出てくるのだろうか？ そう思っていると響がいそいそと流しの方へって……あれ？

「な、なあ、そんな物なかったと思うんだけど……」

響が笑顔で蓋を開けてご飯をよそっているそれは、どこからどう見ても炊飯器だった。

「あたしのだ。どうせこっちにいる間は使わないんだ。なら有効活用しようってな」

そう言いながら三つのコップに緑茶を注いでいく雪音さん。本気で奥さんみたいだ。

「師匠も人に見せる訳じゃないのなら大丈夫だろうって」

「ああ、成程」

近未来の技術だろうと、一般人の俺には分からないし仮にバレたとしても炊飯器だもんな。大きな問題にはなりにくいかな。

でも、何というか一気に所帯じみた。俺、一人暮らしで自炊してた時も炊飯器じゃなくて鍋で米炊いてたもんなあ。家電買うのケチって、だけど。

「只野さん、御茶碗一つしかないんですね」

「あ、うん。ごめん」

テーブルへ置かれていくお椀や小どんぶり。そこには綺麗に炊けた白米が盛られている。小どんぶりは盛りが多めだから響のだろう。

「こうなると戻ったら向こうである程度買ってくるか」

「あつ、ならついでに只野さんの布団も買ってこようよ」

「いや、さすがにそれは……」

いろんな国の税金で動かしてる組織の金を、俺個人の事で不必要なまでに使わせるのは気が引ける。

「大丈夫だつての。そういうのはあたしらの金で買うんだ」

「はい。この食材も本部の食堂で仕入れてる物を同じ値段で買い取つてきました」

「な、何て言うか……色々気を遣わせてすまない」

本当に出来た人達だな、S・O・N・Gの人達は。それとこの子達も、だろう。金銭面で言えば目の前の二人は俺よりも稼いでるんだよなあ、ある意味で。

「いえいえ。師匠が言つてました。一般人の只野さんがこちらでは頼りだ。世界の運命を握るかもしれない立場に置いてしまった事を申し訳なく思うつて」

「いやいやっ！俺は自分の住む世界を守りたいって思つてやってるだけだから！ある意味当然の事してるだけだし、むしろこんな環境しか提供出来なくてすみませんだよっ！」

頭の中にあのアニメのままの男性が申し訳なさそうに頭を下げているのを想像し、俺は慌てて両手を動かした。

俺はあんな立派な人に頭を下げられるような人間じゃない。力もなければ金もなく、伝手もないし知恵もない。

そんなナイナイだらけの人間なのだ。そんな俺へ色々便宜を図ろうとしてくれるだけで有難いんだ。

「んな事ないつての。あたしらの事をお前が知つてくれたから今みたいになれてんだ」

「そうですよ。もし只野さんじゃなかったら、私達今頃こっちで動けたかどうか……」

言われて思い出す。たしかにシンフォギアを知らない人だったら、響の事を見てその話を聞いてすぐに不味い事になったと思わないだろう。

下手をしたら警察を呼んで面倒な事になっていたかもしれない。

もつと言えば、ゲートを閉じてしまう可能性だつてある。

「分かったか？　じゃ、冷める前に食べちまおうぜ」

「うんうん。まずは腹ごしらえですよ、只野さん！」

笑顔でこちらを見てくる二人に俺は感謝するように頷いた。どうやら俺は本当に彼女達の仲間として認められているらしい。

「そう、だな。じゃ、手を合わせて……」

「いただきます」

こうして三人で食事するのもこれでやっと二回目。一度目はあの初日の後の弁当。

そして今、か。何て言うか、女の子と一緒に食事するのなんて記憶にあるのが小学校ぐらいで止まつてるからやっぱり慣れない。

「ん〜っ！　クリスちゃん、やつぱりお料理上手だね！」

「市販の素使つてやってるから誰でも出来るつての」

「いやいや、これにはクリスちゃんの愛情が」

「こつぱずかしい事言つてんじゃねえ！」

笑顔の響と若干照れくさそうな雪音さんを見てると、早く彼女達が本当にいるべき場所へ帰れるようにしたいと思う。

本当ならこれを見ているのは俺じゃなくて、もっと親しい友人であり仲間達なのだから。

「二人共、仲が良いのは分かったけど今は食事を優先してくれ」

「はい」

「な、仲が良いとか一々言うなつての」

「え〜？　私は嬉しいけどなあ」

「だから、そういう事を」

「雪音さん、そうやって反応するから響も反応するんだよ？」

「ぐぬっ……わ、分かつてるけどな」

「只野さん、そういうの言わないでくださいよ〜」

本当に姪っ子とかを預かつてる気分だ。可愛いし癒されるけど、この子達を幸せにするのは俺には無理だ。

そもそも住む世界が違うし、何より俺に将来性が無さ過ぎる。この子達に釣り合う男は、そもそもきつとこつちの世界にはいない気がする。

る。

その後も二人は時折じやれ合いながら食事を進めた。俺は初めて食べる身内以外の女性の手料理が雪音クリスの物という事に気付き、一口一口よく味わって食べた。

そのせいか、途中から二人に食欲がないのかと聞かれたが、素直に雪音さんの手料理だから味わっていると返すと何故か響が若干拗ねていた。

で、雪音さんはやはり俺みたいなおっさんでも男からそう言われるのは恥ずかしいらしく「そ、そうかよ……」と返して顔を赤くしていた。

「雪音さん、もし良かったら和食を練習してみるといいかも。日本人男性は基本和食好きだし」

「な、何で急にんな話が出てくるんだよ？」

「いや、何となく。それにほら、司令さんとかお世話になってるだろ？」

たまには差し入れとかあげてみたら？ 男の一人暮らしだし、酒も飲むみたいだから酒の肴になるような……ブリ大根とかいいんじゃないかな？」

「ぶ、ブリ大根な……」

恋心か単なる好意かはさておき、雪音さんの恩返しの後押しぐらいしておこう。

と、そこで思う。あの人がもし雪音さんの中で男の基準になってるとしたら、きつと世界中探してもそれを超える相手は見つからないだろうと。

そうして食べ終わった後、後片付けを俺が引き受け、二人はスマホを持ってゲートへと消えた。

いらぬビニール袋へ皿に残った油やタレを捨てて、更にティッシュで皿を拭き取り捨てる。

で、茶碗やお椀に小どんぶりをスポンジで綺麗に洗ってから皿を洗い、一気に水で泡を落としていく。

「……こういうのも久しぶりだな」

一人暮らしを始めた頃の頃、俺はまだ自炊をちゃんとしていた。た

だ、金がないのは変わらなかったのでもよくやったのは具なしカレー。後は鍋か。もやしとキャベツはよく食べた。コンソメの素を使った鍋、と言うより簡易スープで山ほどのもやしやキャベツに時々安いベーコンとかを入れて食って飢えを凌いだ頃もあった。

その頃はパチンコ屋でバイトしてたから賄いがあったて、お代わりも出来たもんだから一食そこで浮かしてたっけ。

思えばあの頃はまだ裕福だったなあ。今の生活でも蓄えがそこそこあるのはあの頃のおかげだ。

「つと、これびよっ」

洗い物を終え、どうしようかとテーブルを片付けながら考える。

引越しは出来ない訳じゃない。今の家賃より高くなるのは当然だから仕方ないが、それだって許容できない訳じゃない。

問題があるとすれば、この近くに俺の求める条件があるかって事だ。最悪の場合はこの隣も俺が借りて、そこで彼女達には生活してもらうしかない。

下手したらその方が家賃は安く済む可能性だってあるし。

「さすがに今回は前回みたいにはならないか」

前回はこれぐらいで帰ってきた。今回はそうはいかないだろうと思う。

ただ、本気で考えないと不味いかもしれない。

俺が響と出会ってもう半月が経過したけど、未だに世界では何も起きていないらしい。それが影でこそこそという感じだったら困るけど、きつと装者が必要という事はノイズとかそういうこの世界の人達じゃどうしようもない事のはず。

仮にノイズが出たでしょう。軍人やその場の人達が炭にされて終わり。だが、これが一度じゃなく何度も、それも出現場所もランダムならとつくに大騒ぎになってる。

今やみんなが簡単に動画を投稿できる時代だ。ノイズが出現したならそういう動画が上がってもいい。

つまりこれはまだ起きてない。起きるとしても、すぐに拡散する可能性が高い。

次に有り得るのが、実はこの世界にも錬金術師がいるって方向。
一応言葉としては存在するし、魔女狩りみたいな事も行われた事実
が残ってる。

これだとすれば、発覚するのは難しいだろうしその頃には手遅れに
なる場合がある。

で、最後。これが俺が一番可能性が高いと思ってる。

それは「戦姫絶唱シンフォギア」が消えた事こそが最大の問題と
いう事。

正直俺はこれこそが彼女達がここに呼ばれた理由なんじゃないか
と思う。

その根拠は、響が言ったあの言葉。

——いつ只野さんも変化の影響を受けるか分からないって。

もしかすると、本当は今、響達の存在そのものは消滅してたんじや
ないだろうかと思うんだ。

それを阻止するためにギャラルホルンはアラートを発し、裂け目ま
で作ってここへ彼女達を呼んだ。

そう考えると色々納得出来るんだ。何故俺のノートPCがゲー
トみたいになったのか。何故スマホがある付近しか彼女達は動けない
のか。

俺はそもそもあの瞬間シンフォギアのゲームをやっていた。それ
も、スマホとノートPCの両方で。

で、その二つをあの瞬間俺は不意の出来事で接触させた。それがこ
の現状に繋がっている。そう思っていた。

だけど違うんだ。本来はギャラルホルンのアラートが先にあった。
で、それを受けて響達は動いた。その同時期か少し遅れて俺のポカ
があった。

結果、裂け目は俺のノートPCへ繋がりに、スマホが消滅するはず
だった彼女達の依り代となったんじゃないだろうか。

「よく言うもんな。人の死は二つある。肉体の死と記憶の死。今回は
肉体があるうと記憶から殺してしまえばそちらも殺せるって、そうい
う事じゃないだろうか？」

そう呟いて俺は思うのだ。もしそうだとすれば、これは俺の世界への響達の世界かそれに類する平行世界の侵略じゃないかと。

装者の存在を鬱陶しく思っている存在が、彼女達を根本から消そうとしている。そう考えれば納得出来なくもない。

「でも、そんな事出来そうな相手、いるか？」

XVでシエム・ハさえも退けた彼女達だ。バラルの呪詛もなくなり、様々な困難も乗り越え、平行世界の問題だって解決し、遂には世界蛇にまで打ち勝ってみせた。

もうそれらを超える敵や存在なんていないはずだ。じゃあ、これもやっぱりハズレだろうか？

「……………いや、待てよ？」

記憶の中から甦る嫌な記憶。それはギャラルホルン編の最後を飾る戦いの後の、ベアトリーチェの最期の言葉だ。

「もしかして、彼女の中にすくっていた悪意や怨念が今回の事をしでかしたのか？」

自分は消滅してもいつかまた復活するという、言うなれば悪のお約束な台詞だったが、考えようによつてはあれは世界を越えた負の念の塊の台詞だ。

となれば、装者達にやられた恨みを晴らすべく様々な世界へ忍び込み、探り、仕返しをする方法を見つけないとも限らない。

「……………何でだろうな。これを否定出来る材料が無さ過ぎる」

俺が何故変化の影響を免れたか。それはエルフナインちゃんが言った通り、響と出会ったからだ。俺の記憶に強く、深く、刻まれたからだ。

“戦姫絶唱シンフォギア”ではなく“立花響”という存在が実在すると。そこから付随して俺はシンフォギアの事を忘れずに済んだんだ。

拡大解釈かもしれないが、立花響の物語Ⅱシンフォギアなのだから。

「っと、戻りました！」

「えっ？」

そこへ突然響が戻ってきた。手には買い物袋を持っている。何て言うか、ギアに買い物袋つて違和感が凄い。しかも両手。

「よつと、戻ったぞ」

「雪音さんまで？」

響に続いて雪音さんまで戻ってきた。こちらもギア姿に百均の大き目の袋と言う出で立ちで違和感全開。

「ま、まあ二人共戻って来てくれて」

よかった。そう言おうとした時だった。

「こ、ここが上位世界か……」

目の前に青いギアを纏った女性が大き目の荷物を両手に現れたのは。

「か、風鳴翼……さん？」

俺の声に彼女はギアを解除するとゆつくりと顔を動かした。

「ええ、私が風鳴翼です。しばらくの間お世話になります」

すらりとしたモデルのような美女がどこかぎこちない表情を向ける。

どうやら、引越しを早急に考えないといけないらしい。

そんな事を思いながら、俺は防人モードの美人を見つめるのだった

……。

防人ノ歌

風鳴さんの来訪に動揺していた俺だったが、三人が荷物を置いてギアを解除したのを見てまず懸念していた事を聞くと、やはり彼女達の世界では一日経過しているらしい。

その一日で響だけじゃなく雪音さんも一緒になってこちらの状況を説明、その内容にどうやら旧F・I・S組が同情するような反応を見せたようだ。

で、問題はここから。雪音さんと響がこちらでバイトしていると聞いて小日向さん達は言葉を失ったとの事。

「凄かったですよ。質問がわくわくしてきました」

「特に後輩二人が凄かったな。コンビニだつて言ったら目をキラキラさせてよ」

「そんなにいいものじゃないって教えてくれた？」

紛れもない本音を告げると二人は苦笑して頷いてくれた。

どうやらそれを聞いて暁さんと月読さんはがっかりしたらしい。でも、一度やってみたいと言い、ついでに働いてる二人を見てみたいとも言ったそうだ。

「話しているところすまない。雪音、まずあの解析結果から伝えるべきではないか？」

「つと、そうだな。スマホを調べてもらった結果、ある物に似てるってのが分かった」

「ある物？」

「えっと、ミーナさん達が持ってた物って言うて分かります？」

「スクルドの……もしかしてデユプリケーターとかつてやつ？」

「そう、それです。完全に同じではないですが、似たような物という結果が出たのです」

風鳴さんが頷いてスマホを差し出した。

「何故そうなったのかは分かりません。ですが、エルフナインが言うにはあれはギャラルホルンの中を、即ち平行世界を行き来出来るようにする道具でした。それに似ている事から、この携帯端末はこの上位

世界へ我々がいられるようにしてくれているのではないかと」

「要はお前が表現した依り代つてのがピッタリつて事だ」

告げられた言葉に頷きながら俺は肝心の質問をする事に。

「で、君達が独自行動出来るように出来た？」

「えっと……」

「エルフナインちゃんと言うには複製は無理そうだって」

「え？」

「正確にはそれ自体を複製は可能だけど今の状態と同じには出来ねーつて事だ」

その結論で納得。要はこのスマホがどういう物になっているかは分かったけど、それと同じ効果を持つ物を作る事は不可能つて事か。

困ったな。これじゃ風鳴さんが調査に行けない。そして響と雪音さんがバラバラに行動も出来ない。

「ただ、依り代を増やす事は出来ました」

「どういう事？」

風鳴さんの言葉に思わず顔を上げる。そこには凜々しい表情の美人がいた。

「それと同じ効果を持つ物を作り出す事は出来ませんでしたか、逆を言えばその携帯端末自体が依り代となっている事が分かりました」

「なので、ごめんなさい！ スマホ、少し壊しました！」

「は？」

まったく話が見えない。壊したつて、見た感じ別にどこも変わっていないように感じるんだけど。

「スマホよく見てみるよ。ほら、少し直された場所があるだろう？」

「え？ あつ、ホントだ」

言われて見れば、ほんの少しだけど四隅に修復したような跡が見える。

「その欠片を私達のギアへ組み込みました。これでおそらく行動出来るはずですよ」

そう言つて風鳴さんはギアペンダントを見せた。

たしかによく見ると、一部分だけ色が異なっている箇所がある。

それにしても、ギアへの組み込みかあ。

「何だか愚者の石みたいに使われ方だな」

俺がそう言った瞬間、三人が軽く驚き、すぐに響と雪音さんが苦笑した。ただ、風鳴さんは俺をまじまじと見つめてきたけど。

「そんなもんもあつたなあ」

「懐かしいね」

「そうだな。それにしても、本当にご存じなのですね？」

「まあ。っと、そうだ。じゃあ早速試してみてくださいるか？ スマホはここに置いておくから」

その言葉に三人は頷くと揃って玄関へと向かって行き、ドアを開けて外へ出た。

「お〜……」

部屋の外で響が嬉しそうに飛び跳ねているし、雪音さんが安堵するように息を吐いていた。で、風鳴さんは動けなかった経験がないためによく理解出来てないらしい。

ふむ、じゃあギアペンダントを風鳴さんだけ回収してみようか。

「響、風鳴さんからペンダント回収してみて」

「はい。翼さん、という訳でお願いします」

「あ、ああ」

俺の考えた事が分かったのか響は風鳴さんへ手を差し出す。

まだ半信半疑の風鳴さんはギアペンダントを首から外してそれを響の手へ落とした。

でも、何も変わっていないぞとばかりに首を傾げた。

「先輩、そこから動いてみるよ」

「動く？ 造作も……っ!？」

足をきつと上げようとしたんだろう。その瞬間、風鳴さんの表情が強張った。

で、二人がニヤニヤと笑い出す。こらこら、それじゃあ悪者だよ君達。

「こ、これは……」

「影縫い喰らったみたいだろ。それが依り代なしって事だぜ、先輩」

「私も足上げたところでそうなたんで気持ち分かりますよ翼さん」
「くっ……た、立花、もう分かった。分かったからペンダントを」

「はい」

「んだよ。もう返すのか？ あたしはそのまま十分ぐらいは放置され
たんだぞ」

仲が良いような感じを受けるやり取りだ。風鳴さんはペンダント
を受け取ってホツとするような表情をしていた。

でも、これでやっと彼女達が自由行動出来る訳だ。スマホをもう一
台持とうと思っただけど、どうやらそれはせぜに済みそうだな。

で、その後は部屋に戻って三人が持ってきた荷物開封。

響は食糧、雪音さんは食器などで、風鳴さんは……寝具と……ノー
トPC用のマイク？

「これは？」

「はい。二人の話からここでは収入を得る事が肝要だと思い、不肖こ
の風鳴翼、歌にて稼ぐ事をしています。なので、こちらでもそれをと」
「動画配信、でしたっけ。それで翼さんの歌をつて事らしいです」
「それならここでも可能だろ？」

成程、いい考えだ。それに、ここにはもうシンフォギア関連の楽曲
は存在しない。つまり著作権云々はなく面倒な揉め事も有り得ない
訳だ。

そして風鳴さんの歌の上手さは言うまでもない。だが、そこで俺は
ある事を思い付いた。

「風鳴さん、それは良い考えだと思う。でも、いくら君の歌が凄くて
も、それだけじゃ釣り針が小さい」

「どういう事でしょう？」

「……じゃ君は名も無い一人の女性だ。ツヴァイウイングだった風鳴
翼ではないんだよ。そんな状況で歌を唄っても簡単に衆目は集まら
ない」

「……宣伝が大事と言う訳ですね？」

さすがは芸能関係で生きてる女性。俺の言いたい事をすぐ察して
くれたらしい。

そう、そうなのだ。風鳴翼は歌が上手い。ただ、それを知っている人がこつちには皆無だ。

そうになると、まず上げる歌動画へアクセスしてもらおうように工夫しないといけない。そして、意外とそれは彼女の場合簡単に出来る方法がある。

一種卑怯ではあるけどね。

「そういう事。で、実はこれが君の場合は簡単に出来る。と、言う訳でちよつと遠いけどカラオケへ行こう。そこで可能なら動画も撮ればいいし」

「分かりました。お願いします」

水樹奈々の、もとい今は芸名が変わってるのでその通りではないか。

とにかく彼女が歌っている曲を風鳴さんに歌ってもらう。

そうすれば否応なく話題になるはずだ。彼女は紅白歌手でもある訳だし。

「ちよつとお、只野さーん。翼さんだけですか？」

「あ、あたしらは留守番とは言わないよな？」

「勿論。ただ、優先するのは風鳴さんの方だからね？」

「そうだぞ二人共。これは遊びに行く訳では」

「いや、それでいいんだけど？」

「なっ……」

目的は風鳴さんへ奈々さんの有名どころの歌を覚えてもらいそれを歌ってもらう事だけど、若干響と雪音さんへの息抜きも兼ねている。

思えば装者になってから平和な、それこそ普通の女子高生みたいな時間を彼女達はろくに過ごしてないんじゃないか？

そう思えば、こつちにいる間は少しでもそれらしい事や時間を過ごしてもらいたい。

「風鳴さん、今は難しい事を考えず、楽しむ気持ちでいてくれないか？

今から行くのは世界を救うためじゃなく、見知らぬ歌を知って、聞いて、歌ってみるっただけ。レコーディングとかじゃなくて、さ」

「見知らぬ歌を、知り、聞き、歌う……ですか」

俺の言葉に風鳴さんは小さく俯いて、少しだけ間を置いて顔を上げた。

「分かりました。今は気楽にしようと思います。ここでの私は歌手でさえないと」

「うん、それでもいいよ。ただの歌う事が好きな女性。それがここでの風鳴翼でいいんだから」

「……はい」

少しだけ、ほんの少しだけ風鳴さんの表情が柔らかくなった。

その微笑みに安堵し、俺は財布やスマホを持って外へと出る。

風鳴さんに続いて響と雪音さんが出て来たところでドアの鍵を閉めた。

「で、カラオケはいくらかかるんだよ?」

「えっと……この時間なら……」

「翼さんとカラオケなんてあの時以来ですね」

「そうだな。もう懐かしく感じてしまう」

真っ先に料金を心配する辺りが雪音さんらしい。それと、響達の会話を聞いて俺も懐かしい気持ちになった。

始まりは一期の頃の話だもんなあ。とにかくあそこは飲み物とかないのでそれも用意するべきか。

そんな事を美少女三人を連れながら考える。平日の昼過ぎにある意味で凄まじいリア充に見えるだろうが、残念ながら財政はボロボロなんだよな、これが。

「只野さんはよくカラオケとか行くんですか?」

「たまくにかな」

「どんなジャンルが好きなんですか?」

「ほとんどアニソンや特撮ものばかりだよ」

「ガキっぽいんだな」

「雪音、そんな言い方をするものじゃない」

「いいよ。でも、最近はそういうジャンルもメジャーアーティストが関わってるから馬鹿には出来ないんだ。それと、こう言いたくないけ

ど君達の歌も本来アニソンだったんだからね？」

「うっ……」

してやったり顔で告げた言葉に雪音さんが呻いた。そう、君の尊敬する先輩の歌も馬鹿にする事になるんだよと暗に告げたからだ。

「私達の歌、ですか？」

「ギアを纏った時のやつとかね」

「ええっ!? あれ、カラオケに入ってたんですか!？」

「そう。俺もある程度で良ければ歌えるよ」

「では、少し聞かせて頂いても？」

まさかの風鳴さんが食いついた。でも、よく考えれば彼女が一番歌への情熱があるんだった。

なので若干気恥ずかしさもありながら、俺は「正義を信じて、握り締めて」を一番だけ歌う事に。

それを聞いて三人が見事に目を見開いたのはちよつとだけ楽しかった。

「凄い……ホントに私が歌ったやつだ……」

「な、なあ、まさかあたしのも？」

「そらで全部歌えはしないけどね。挨拶無用のガトリングとかは」

「うえっ!? ま、マジかよ……」

「ツヴァイウィングの歌も、ですか？」

「こっちには二曲ぐらいしかなかったけどね」

何せそれだけしかりリースされてないし。まあアレンジ変えた逆光が出たつけ。たしかゲーム楽曲のアルバムで。

そこからは三人からの質問攻め。何て言うか、予想はしてたけどここまでとは。

やっぱりみんな戦闘曲が歌詞まであつて歌えていた事が衝撃らしく、雪音さんは若干恥ずかしそうにしていた。

まああれって本人達の心情だもんなあ。そりやそうもなる。なので具体的な歌詞を教えるのは止めておいた。

途中で百均に寄って紙コップとペットボトル飲料を四本購入。

俺がコーラ、響がオレンジジュース、雪音さんがストレートティー

で風鳴さんが緑茶という、いかにもな感じだ。

その足で学生御用達のルーム料金だけで利用出来るカラオケへ到着。そこで料金を支払い移動開始。

「こ、ここって持ち込みOKなんですね」

「代わりに一切何もサービスしないんだ。食べ物も飲み物も」

「成程なあ。それで人件費を削減って事か」

「だが、理に適っている。正直こういう場所での料理は期待できないしな」

「そうそう。っと、ここだ。じゃ、まずは入って入って」

ドアを開けて女性陣を先に中へ入れ、最後に俺が入る。

長椅子と一人掛けの椅子が一つ、か。なら俺は一人掛けだな。

「只野さん、こつちこつち」

「え？」

だというのに、何故か響が自分の隣を手で叩いていた。

「折角なんですからみんなで座りましょうよ」

「いや、でも……」

たしかに四人が余裕で座れるけど、男の俺がいると嫌じゃないか？

「只野さん、立花はこういう性格ですの」

「時間ももったいなーからさっさと座ってくれ」

「そ、そっか。分かった」

二人の許可まで出てしまっっては拒否するのもあれだ。なので大人しく響の横へ座る事に。

ちなみに入口近くに俺、響、雪音さん、風鳴さんの順番で座ってる。

「じゃ、早速風鳴さんに歌って欲しいやつを入れるから。ガイドボーカルが流れてくるんでそれで覚えてくれ」

「はい」

「どんな歌か楽しみだなあ」

「そもそもどんな歌を先輩に歌わせる気だ？」

奈々さんファン以外にも反応しそうな曲がいい。となるとまずはパチスロで有名になってるWILD EYESとかだな。

後は……まあETERNAL BLAZEがいいか。遠藤さんが

歌ってくれたし。まずはその二曲だろう。

で、一回ずつ流してみた結果、風鳴さんは「やってみます」と言つてその二曲へ挑戦。

その結果は、何て言うか贅沢な時間だなと俺は思った。何せ間近で奈々さんが歌っているようなものなのだ。

こんなライブ、いくら支払えばいいんだろうか。それと、たった一回聞いただけで完璧に歌える辺り、さすが世界で活躍するアーティストだ。

「……どうでしょう？」

「いや、凄いとしか言えないって。たった一回でよく覚えるよ」

「はい！ お手本よりも上手かったですっ！」

「それは当たり前だろう！ こっちはプロだぞ！」

「ありがとう。だが、あのガイドもプロだ。おかげでかなり助かった」
このようにガイドボーカルへのフォローまでするのだから出来た女性である。

で、この後は響が知ってる歌がないと嘆き、雪音さんがそれに呆れた表情を見せて、風鳴さんは俺の入れた歌が一人のアーティストの物だと知ってそれをデンモクで検索。

その間、俺は盛り上がるだろう歌を、要は知らないでもサビを一度聞けば歌えるやつを歌う事に。

いやあ、やつぱ一緒に殴りに行く歌はいい。俺が歌える限られた一般向けの歌だし。

「テンション上がりますね、今の歌っ！」

「そうだろ？ ライブ向けの歌だしな」

「こうなるとあたしからすれば古い歌しかないんだな」

「そうだな。だが、歌謡曲や演歌は同じ物が多い。それだけは救いだ」
「どちらにしろ、私は知らない歌ばかりです……」

「いつそギアを使って歌うかい？」

「その手があった!？」

「あのなあ……」

「ギアを単なるカラオケ機器として使う？ その発想力は凄いです

ね」

褒められてるような、そうじゃないような微妙な感じだけど、考えようによつては今俺って凄い恵まれた面子といるんだよなあ。

いっそ響や雪音さんに中の人の楽曲覚えてもらって歌って欲しい。てか、その気になつたら三人曲とか歌ってもらえるんだろうか？

「じゃ、次は動画撮影しながら歌ってもらえる？」

「分かりました」

備え付けのカメラを使って風鳴さんだけが映るようにしての歌唱。

そしてそこで俺はさっきの歌が全力ではなかった事を知る。

「……マジかよ」

どうやらさっきの歌唱は風鳴さんも探り探りだったらしい。一度歌った事で彼女の中ではもうあの二曲が持ち歌のようになったのだろう。

本人と間違える事請け合いの、いや下手をすればこちらの方が迫力があるように感じられる歌声に俺は言葉がなかった。

それが終わった後、俺はならばと甲賀忍法帳を聞いてもらってそれも歌ってもらう事にした。

風鳴翼ならばこの和風なテイストの漂う楽曲が似合うと思つただ。だ。

ガイドボーカルを聞き、一度歌って、再び本番。

「……すげえ」

圧巻とはまさにこの事。歌手本人とはまた違う味というか良さが出たそれに俺は確信めいたものを感じていた。

間違いない話題になると。これなら収益化も狙える。まずこの三曲で名前を売り、その後に風鳴さんの個人曲を歌ってもらえばいける！

「……どう、だろうか？」

「凄いっ！ 凄いですよ翼さんっ！」

「さすがだぜ先輩！ 歌の感じとドンピシャって感じだっ！」

「只野さんはいかがですか？」

こちらの感想を求める風鳴さんには、微かな不安が見えた。多分だ

けど本人の中ではまだ納得出来ない部分や不満があるんだろう。

「……多分今ので問題なくみんなから響達と同じ感想はもらえると思うよ。実際、俺もそう言うしかない」

「そうですか」

「でも、風鳴さんが納得出来ないなら納得出来るまで歌ってくれ」
「えっ……」

こちらを見つめる風鳴さんは微かに驚いてた。響と雪音さんも似た感じだけど、すぐに何かを察して苦笑に変わる。

「やっぱり歌手、になってしまうんだろ？　じゃあ出す物はどんな形であれ自分の作品になる。いくら割り切ろうと思っても、そこに妥協はしたくないんじゃないか？」

「それは……」

「向こうじゃ色々あって考えないといけない事は多いかもしれないけど、今の君は装者としての仕事も歌手としての仕事もある状態じゃない。だからここの利用時間内なら何度も歌い直してくれていい。歌う事だけ考えていいんだ。まあカラオケだから音響や曲の品質はお察しだけだね」

「………分かりました。なら、もう一度いいですか？」

凜々しくもどこか嬉しそうに笑う風鳴さんへ俺は頷きを返す。

彼女はそのまま響や雪音さんへも同じ問いかけをし、二人も当然頷き返した。

そうして風鳴翼歌唱の甲賀忍法帳が再び始まる。先程よりも情感や雰囲気を感じたそれに、俺だけでなく響と雪音さんまで沈黙。

何というか、これを歌いながら戦う姿さえ幻視出来る程に、風鳴翼の持つ防人の部分と女性の部分へ合っている気がしてくる。

最後のフレーズのビブラートが余韻を残して消えていくのを聞きながら、俺は生まれて初めての感覚に陥っていた。

これがライブでしか味わえない感覚、というものなんだろうか？

どう表現していいか分からないが、深い感動っていうのはこういう事なんじゃないだろうか。

「………どうだろうか？」

満足げな笑みを見せる風鳴さんの声で俺はやつと我に返った。

「その、言葉にすると陳腐になつてしまふんだけど……良かった」

「私もです……すつごく良かった」

「ホント、言葉にするのが難しいな。でも、すげえよ先輩。それだけだ」

「そうか。ありがとう、みんな。私も新曲を唄つたような気分だ。ああ、そうだな。まさしくそうだ」

噛み締めるようにそう言つて風鳴さんは俺へ顔を向ける。

「只野さん、どうやら貴方は本当に私の事を御存じのようですね。それがどこか不気味で不快でもありましたが、こうも言えます。それ故に貴方は私の気持ちを汲んでくれるのだと。先程の言葉、胸に沁みましました。ここでは、私は防人である必要がない。それを言われ、心が軽くなつたような気がしました」

「そっか。なら良かった。ここにいる間は、心の洗濯だと思つて羽を伸ばしてくれ。また本来の場所で飛び回れるように」

「……はい」

そう言つて微笑む姿は、俺がゲームなどで見た本来の風鳴翼の笑顔だった……。

翼の歌つた動画は、仁志の予想通りすぐに話題になつた。

何せ歌声だけならかの有名声優にして歌手と同じである。

そんな翼の動画専門チャンネル「戦姫絶唱シンフォギア」は何と初日にして登録者数十万人を達成する事となる。

それを受け、翼は仁志のアイデアやクリスの助言を参考に、水着ギアを展開し服を着る事で彼女の戦闘曲も動画配信する事に成功する。

それにより僅かではあるが広告収入が望めるようになり、仁志達はそれを喜び合つた。

響とクリスのバイトも研修期間が終わり、他の夕勤バイトと組む事も発生したが大きな問題はなかった。

ただ、やはり仁志が心配したように大学生の茂部からのアプローチ

は発生。クリスはそれとなくあしらえるのだが、響はやはりそういう事が不得意なため若干苦手となってしまったのだ。

——只野さん、私、あの人苦手です……。

——分かった。まずオーナーに相談するといい。このままじゃ続けていけないかもしれないって。大丈夫。もし言い難いなら俺からも言っておくから。

仁志の言葉を受け、響はオーナーへ相談。結果、響はクリスカ女性の近藤としか組まないシフトとなった。

ただ、そうなるとクリスはクリスで不満が生まれるもので……

——あいつ、本気でぶちのめしていいか？ 仕事にあたしの胸ばかり見てくんだよ。

——……分かった。そっちは俺から言っておく。

業務引き継ぎの際、仁志は茂部へそれとなく忠告する事にしたのだ。

——お前、視線だけでも今の世の中下手したらセクハラで訴えられるぞ？ 気持ちは分かるけど、雪音さんからオーナーの耳に入る前に自重しろ。

同じ男故に同調を見せつつ現実味ある結末をちらつかせ、仁志は茂部の視線へ警告を促した。

それでもクリスの胸元を見る事は減らず、仁志は苛立つクリスを宥め、最後にもう一度だけチャンスをと説得したのだ。

——雪音さんから相談されたんだが、どういう事だ？ 何とか俺が頼んでオーナーへ言うのは待ってもらったけど次はないぞ？

それを最後通牒と受け取った茂部はやっとクリスの苛立ちを起す行動を減らした。

そうして彼女達が平和な世界と関わるようになって一か月が経過したある日の事……。

「「引っ越しっ？」」

「ああ、そうだ。店からは遠くなるけど、まだ歩いて通える距離にいい場所があったんだ」

ニコニコ笑顔で俺が見せたのはスマホの画面に表示された1DKの見取り図。

「シャワーとトイレ別で家賃は今と八千円しか変わらないんだ。まあ部屋の広さは四畳半になるけど十分だろう」

「シャワーがあるんだあ」

「やつとネカフェ通いとおさらばだな」

「そうだな。ただ、只野さんはそれで構わないのですか?」

正直店まで歩いて二十分は辛い。でも、今の暮らしじゃ彼女達への負担が大きいんだ。

「むしろ俺が響と雪音さんに聞きたいよ。ここに住むとなると店まで最低片道二十分はかかる。今の大体三倍強だし、下手すればもつとかかるかもしれない。往復するだけで一時間弱って考えた場合……」

「私は構いません」

「あたしもだ。それぐらいの方がいい運動になるってもんだ」

二人が頷いてくれたので俺は風鳴さんへ目を向ける。

「風鳴さんはどうかな? 駅まで三十分以上かかるけど」

「私も正直構いません。ただ、ここよりも狭いというのが不安ではあります」

「あー、うん。それは分からないでもないよ」

今は六畳あるので何とか大人四人でも寝られていた。

これが四畳半となれば結構苦しい。ギリギリ寝られない事もないだろうけど、それはノートPCを置かない場合だ。

それを風鳴さんは心配しているんだろう。だが大丈夫。俺はちやんとその事への解決法を考えてある。

「でも心配いらないよ。ほら、ここに押入れがあるだろ? ここに布団を敷いて俺が」

「二それは駄目です(だ)」

何故だろう。まさかの三人一致で反対を食らってしまった。

「家主である只野さんを押入れで寝かせるなど心苦しいです」

「そうですよ。今だって若干狭そうに寝てますし……」

「あたしらへ気い遣うのは分かるけどな、少しぐらい触れたって大丈夫

夫だつての」

そう、風鳴さんが来てから寝る時は玄関近くが俺、風鳴さん、雪音さんと響だ。

そうそう、風鳴さんの部屋を散らかす癖は何とか発動を免れていてた。

というのも、そもそも物を散らかせる程広くなく、更に俺と言う他人の異性がいるというのが風鳴さんの羞恥心を刺激し服などを散らかす事を抑制させていたらしい。

——し、下着を男性に見られるのは私とて恥ずかしいんです。

緒川さんという俺の問いかけに、風鳴さんはもう一種家族に近い故に平気なのだと言った。

そしてそれもあつてか、雪音さんには割と真剣に頼まれたのだ。

——これを機に先輩の悪いところを矯正してくれ。

まあ、俺も正直下着を見るぐらいの役得はと、そう思わないでもなかったので正直に風鳴さんへ言う事で自覚を促したのだ。

——俺、風鳴さんの下着とか片付けてもいいよ？

——け、結構ですっ！ 私だつてやろうと思えばやれますっ！

真っ赤な顔でそう言い放ち、風鳴さんは割とまめに片付けを行うようになっていった。

そもそもずっと一人でいた事も原因なのだろうと思う。

実際俺達と暮らし出したら、衣服をあちこちへ脱げないし、下着も出しっぱなしは出来ない。

そもそもバイトがある俺達と違い、風鳴さんは基本フリー。なので調査として新聞やテレビなどの情報を探ってくる以外はやる事が無い。

そうなった風鳴さんの日課は掃除などの家事となった訳だ。

ズバリ、部屋の中ではポンコツ可愛い女の子と化したのである。

——た、只野さん、そろそろ洗濯物を洗うべきだと思うのですが……。

——そんなに下着の余裕ない？

——そ、そういう訳ではありません。ただ、四人分ですし天候も不

安ですので出来る時にするべきかと。

——正直に言いまししょうよ翼さん。元々持ってきた下着、少なかったんですよね？

——っ!? た、立花あ！

まず洗濯が常に出れると思っていた事から発生した〃替えの下着不足事件〃。

——あ、あの、掃除はどうすれば？

——悪いけどこれをお願い。

——こ、こんな小さなローラーで？

——百均で色々賄ってるからね。

——わ、分かりました。では、掃除はお任せください！

で、見事にコロコロの用紙を使い切ってくれた〃コロコロ瞬殺事件〃。
シユンコロ

——洗い物ぐらいは出来るよな？

——馬鹿にするな雪音。これしきいくら私でも失敗などしない。見ろ、綺麗になってるだろう。

——……えっと、風鳴さん？ お椀の表面が剥げてるんだけど……？

——わわっ！ 翼さん、ダメですよ！ 金属たわしは金属にしか使っちゃ駄目なんですっつ！

——そ、そうなのか？ よく汚れが落ちるから……。

——汚れじゃなくてその物落としてどーすんだ!?

木製品やプラスチック製品へ傷を付けた〃金ダワシゴシゴシ事件〃など、たつた数日で面白おかしい、けどある意味笑えない事をやってくれたのだ。

「な、何を笑っているんですか？」

そんな事を思い出していると風鳴さんが恥ずかしそうにこちらを睨んでくる。

「いや、風鳴さんの奮闘を思い出してね。コロコロ瞬殺事件とか」

「わ、忘れてくださいっ！ い、今ではちゃんと考えてコロコロを使っていますっ！」

「それが普通だったの」

「翼さん、本当に家事苦手なんですわね」

「ううっ、これでも一人暮らしは長いのに……」

シユンとしよげる風鳴さんは可愛いけど、一言だけ言わせて欲しい。

「あのね風鳴さん。一人暮らしって言うのは緒川さんにも頼らずに生きる事なんだよ?」

「うっ!」

「ですよええ」

「掃除に洗濯、どんだけ甘えてるか分かったか先輩」

「くっ、認めたくないがその通りだ。私は一人暮らしをしているつもりで緒川さんにおんぶにだっこだったと」

「まあ、そんな風鳴さんも可愛いけどね」

「かわっ!? そ、そうでしょうか?」

「俺は気にならないよ。正直稼いできてくれる奥さんや彼女なら、俺が家事やって支えるのが筋だしさ」

それに風鳴さんはなんだかんだで女の子というか女性らしい。

それに俺が思っていたよりもよく笑うし、やはり音楽に関心が強いらしくこの世界の流行やアニソンなどへも興味を示していた。

つい昨日なども給料が入ったから四人でカラオケに行き、俺が歌う特撮ソングを一緒に歌ったのだ。

いや、やっぱ鎧武のOPはいいな。三人も本編映像に興味持ってくれたし、これを機に彼女達へ布教を……なんて思ってたところから立て続けにライダーソングやウルトラソングを聞かせてしまったのだ。

まあ、そちらも思ったよりも好評だった。特に響は分かり易い歌詞のウルトラソングに盛り上がってくれた。あとは夢のヒーローだろうか。グリッドマン映ったから雪音さんや風鳴さんもテンション上げてくれたし。

「むっ、只野さん、今は大事な話の途中ですよ!」

「ごめんごめん」

響に注意されたので素直に謝る。今は引越しに関して話さない

といけないもんな。

「でも、正直これ以上の条件は厳しいんだ。部屋の広さを求めると家賃は当然上がる。で、それを下げようとすると店への通勤が辛い」

「なら、私達のお給料もありますしもう少しいい場所へ」

「響、気持ちは嬉しいけどそれはずつとじゃない。そうなった時、俺が一人でも暮らしていけるように考えないといけないんだ」

「っ……」

俺がそう告げると響が辛そうな表情を見せた。本当に優しい子だ。

たしかに今は二人の給料と風鳴さんの動画による収入が見込めるから財政は上向いた。

ただ、それは一時的なもの。この事件を解決すれば彼女達はいなくなる。

俺はその後もここで生きていかないといけない。だからオーナーからの店長就任要請を受けるかどうか悩んでいるんだ。

もし受ければ俺は夕方から早朝まで最悪週六勤務となる。というか、ほぼほぼそうなるだろう。

今なら響と雪音さんがいてくれるから夕方は免除になるだろうけど。

「な、ならそうなった時にここへ戻ってくればいいだろ」

「雪音さん、それは俺も考えた。でも、ここだっていつまであるかわからない。見て分かる通り、かなり古いからね。実際取り壊しになってもおかしくないんだよ」

「雪音、立花も聞いてくれ。只野さんはこれまで一人で生きてきて、その辛さと苦しさを知っている。この人なりの考えがあつて私達へ話をしてきているんだ」

「翼さん……でも……」

「情けねえ……。ホントにこつちじゃあたしらはただの小娘だ……」

「二人共……ありがとう」

悔しそうな、悲しそうな、そんな顔をする響と雪音さんに心が熱くなる。

ほんの半月弱の生活だけど、二人は俺の事を本気で心配し慕っても

くれてると分かる。

「ですが只野さん、私も先程のやり方でしか無理なら考えがあります」
「え？」

「押入れて寝るのは私が引き受けます」

「いやいやっ！ 女性にそんな事は！」

「それと同じ気持ちを私達は貴方の言葉に抱いたのです。分かって、いただけませんか？」

そうこられると弱い。でも、さすがに四畳半でノートPCだのを置いて大人四人で寝るのは辛い。

「あ、あの、四畳半だと大体ここから……ここまでぐらいです、よね？」

「え？ そう、だな」

響が立ち上がって体を使って四畳半を示す。

「なら、クリスちゃんも翼さんに一緒に寝てもらって」

「却下」

「まだ何も言っていないのにつ！」

いや、言わなくても分かるよ。見れば雪音さんも俺と同じ顔をしてる。

「あのなあ、お前がバカなのは知ってるが、あたしが前に言った事忘れたのかよ？」

「覚えてるけど、このままじゃお金がかかり過ぎちゃうもん。今だとシャワーだけで一日九百円だよ？」

「「うっ……」」

響の告げた現実が俺達の胸を突き刺す。そう、シャワーがある部屋へ引越すのは実は家賃以上にプラスがあるのも大きいのだ。

「私なら只野さんと同じお布団でも平気だから！」

「いやいや、俺が怖いんだって」

「だよなあ」

「立花は無意識に雪音を抱き締めているからな」

そうなのだ。響はよく寝ている雪音さんを抱き締めている事がある。あれを俺にやられたら正直色々自信がない。

何せこの状況になってから、俺は所謂性欲処理が出来ていないに等

しいのだ。

俺がバイト休みで響と雪音さんがバイトでも風鳴さんはいる訳だ。なら三人が動く朝はと言うと、俺の体力がそこまでもたない。

「分かった。なら俺はDKで寝るよ。テーブルは今みたいに畳んで置けば寝るぐらいのスペースはあるから」

「ホントか？」

「ああ」

「信じて良いのですね？」

「もちろん」

「……只野さんのニブチン」

「はい？」

こうして俺達は引越を決め、新居への荷物の移動を始める事に。

一か月分とはいえ二ヶ所の家賃を支払うのは厳しいが、まず三人だけ新居の方へ移動してもらい寝泊りをそちらでもらう事にしたのだ。

……おかげで性欲処理が出来るからな。

そして、今の俺達には一つ大きな利点がある……と言えるのかな？

「冷蔵庫を少し大きめのにしましょう」

「だな。先輩、報告ついでに買い物してきてもらっていいか？」

「任せてくれ。洗濯機も買ってこよう」

新居へ初めて訪れた際の会話である。

ゲートとなつているノートPCを使った家電の世界間輸送だ。風鳴さん曰く稼いでいるので心配いらぬとの事。

本気で自分の情けなさで辛くなった。ちなみに小さい冷蔵庫も捨てずに取っておく事にした。まあ、俺が一人に戻った時はこれでいいからな。

それと、新居で初めて過ごす事になった日の夜、俺は三人へあの予想を話した。

あの時は風鳴さんの登場とそれに付随した色々ですっかり忘れていたのだ。

ただ、今まで思い出さなかったのもどうかと我ながら思う。
疲れてるのかな？ 最近歳のせいかわ物忘れも増えてきたんだよ
なあ。

一番直近だとベアトリーチェの傍付きみたいな眼鏡の名前を忘れたし、歳は取りたくないもんだ。

「えっと、実は俺なりにこの状況を考えてみたんだけど……」

この状況はベアトリーチェの中にすくっていた悪意が引き起こしたものじゃないかというそれに、三人は驚くのではなく納得するような表情を見せていた。

「ベルちゃんが……」

「響……」

が、当然響がそれに沈んだ表情を見せた。彼女は最後までベアトリーチェと手を繋ごうとしていたから当然だろう。

だからこそ、俺は伝えなければいけない。ちよつとズルいだろっけど、俺の存在にある一つの事実を使って俺は嘘を真実として響へ思い込ませるんだ。

「響、よく聞くんだ」

「只野さん……」

「この状況を引き起こしたのはベアトリーチェであつてベアトリーチェじゃない」

「「え？」」

「彼女は最期に言ったはずだ。もうベアトリーチェの魂もフィーネの魂さえも塗り潰されたよ」

「……はい」

「つまり、この状況は彼女を歪めた悪意が引き起こしているんだ。そして、ベアトリーチェは最期の最後までそれに抗って消えたんだ」

「っ!? ど、どういう事ですか!?!」

食いついた。ごめん響。これは真実じゃない。だけど、君が強くなるためには俺はこの嘘を真実だとばかりに言い切ってみせる。

「考えてみてくれ。ベアトリーチェは世界蛇を使って平行世界を滅ぼそうとしていた。その途中で君達と出会い、付け狙うようになった」

「は、はい」

「だけど、本来なら邪魔者の君達を最後に回して、先に障害のない世界を全て滅ぼしてからでもいいはずだ。むしろ確実性を取るならそうだろうか？」

「たしかにな。わざわざ面倒なあたしらを相手にする必要はねえ」

「それこそが悪意に塗り潰されながらもベアトリーチェという少女が抗った結果なんだ」

「……そうか。逆転不可能の状況になる前に挑ませる」

「で、でも、ベルちゃんには私に悪意の種を」

「響、ベアトリーチェは幼い女の子だったんだ。そんな子が幾多もの平行世界を潰して取り込んだ悪意へ完全に抗える訳はない。だから、彼女に出来たのはほんの僅かな、悪意の望む方向での些細な抵抗だったんだよ」

「悪意が望む方向での、些細な抵抗……」

「本来であれば殺せるはずの立花を敢えてじわじわと侵蝕する。それは希望を最後まで残す事、か……」

「そう言われると納得出来なくもないけどよ……」

腑に落ちないって感じの顔の雪音さんだけど、まったく信じてないって訳じゃないらしい。

これが俺がみんなの事を知っていると言う事実がもたらす効果だ。つまり、三人は俺が曖昧な言葉や表現を避ける事であたかもそれが真実であったように感じてくれるのだ。

「響、あの最期の言葉はベアトリーチェの言葉じゃない。悪意の残した言葉なんだ。そして忘れないで欲しい。君の世界のフィーネが、櫻井了子さんが残した言葉を」

「私の世界の了子さんが……」

そこで俺と響の目が合う。そして同時に頷いた。

「胸の歌を信じなさい」

もう響に沈んだ様子はない。なら、最後の確認だけしておこう。

「君の胸の歌はこんな事を引き起こすのがベアトリーチェだと叫んでいるか？」

「……いえ」

「あんな言葉を残すのがベアトリーチエだと叫んでいるか？」

「いえ」

「君達が出会った時のベルと名乗った姿こそ、きっと本当の彼女だった。違うか？」

「いえっ！ 私も、私もそう思いますっ！」

力強い表情で答える響に俺は安心した。これで大丈夫だろう。

「只野さん、私達は今の話を司令に報告してきます」

「あいつに巢食つてた悪意つてなると、ちよつと事情が変わってくるしな」

「分かった。気を付けて」

風鳴さんと雪音さんが立ち上がってギアを纏う。

「只野さん、その、私も行ってきます」

「うん。忘れ物はない？」

「はい」

そう言つて響は胸を、多分かつてあのf型の痕があつた場所を触つた。

「そっか。なら、鍵は閉めておくよ。もし必要になったら明日の朝悪いけどあの部屋まで取りに来て」

「はいっ！」

こうして俺は三人を見送つて新居を後にした。ドアの鍵を閉め、見慣れぬ道を歩いていく。

途中で一旦止まって振り返る。電気が消えたままなのでまだ帰ってきてはないらしい。

「……何だろうな。たったこれだけで一人ぼっちが寂しくなるもんだな、人って」

折角色々と解消出来るとテンションが上がるはずだったのに、今の俺にはそれよりも彼女達がいなくて辛い。

そんな事を思いながら俺は住み慣れた部屋へと戻る。夜道を一人、静かに歩きながら……。

空へ

今、私の目の前には所在なさげな男性が一人、正座して項垂れている。

場所は最近引越した部屋ではない。私が一週間強過ごした六畳間である。

「た、只野さん！ その、無断でドアを開けた私も悪いとは思いますが！
で、ですが、さすがにこれを見たのが立花や雪音だったらどうするつもりですかっ！ せめて鍵は閉めてくださいっ！」

「返す言葉もない……。閉めた気になってた……」

私の手には裸の女性が表示されているスマートフォンがある。

時刻は朝六時半。私は目覚ましついでに散歩がてら只野さんの様子を見に来たのだが、やはりまだ意識が切り替わっていないのだろう。私は何の躊躇もなくドアを開けたのだ。

鍵が閉まっていれば気付いただろうが、おそらく只野さんも先程の言葉を聞く限り気が抜けていたらしい。

何せ最近まで私が既に起きていて、只野さんは私と挨拶を交わしてから眠っていたのだから。

それにしても、ま、まさか開けたら只野さんがいかがわしい動画を見ているとは。

最初は何かを見ているとしか分からず……

——只野さん、おはようございます。一体何を？

——っ?! か、風鳴さんっ!?

まるでこの世の終わりが来たような顔をし振り向いた只野さんの手元にあったスマートフォンには、黒髪の女性が裸で映っていたのだ。

それと、一瞬だけ見えたのだ。只野さんのズボンの一部が、その、盛り上がっているのが。

思い出すだけで顔が熱くなるのが分かる。とにかく今は事態を收拾しよう。

「と、とりあえず頭を上げてください。その、私ももう成人が近いです

から男性のそういう事には多少理解があるつもりです」

「……本当にごめん」

顔の熱を感じたまま、私は視線を只野さんの傍にあるボックスティッシュへ向ける。

あ、あれがあんな場所にあると言う事は、私があるのがあと少し遅かったら……っ！

だ、だめだ。考えないようにしよう。で、でも、そうしようとする
と余計色々浮かんできてしまう！

「それで、俺はどうお詫びをすれば？」

「ひ、必要ありません。その、今後はえっと、そ、そういう事はちゃんと施錠して行つてください」

言つた後で思わず頭の中にぼんやりとはあるがそういう光景が浮かび、私は反射的に顔を下へ向けた。

「そ、そうか。えっと、本気でごめん」

「……いえ、いいんです。私達あまり男性のそういう事への理解や配慮が無さ過ぎたのですし」

考えてみれば、只野さんは立花と出会ってからある意味で気が抜けなかつたのかもしれない。

何せいつ立花が来るか分からなかつたのだ。そして雪音が来てからは共同生活。そこからこの人は性欲を抑え込んでいたのだろう。

そう考えれば私達がこの人へ無意識とは言え我慢を強いていたと言える。それを発散しようとしても当然だ。

「そ、それで？ 一体どうしてここへ？」

「あの、様子を見に来たのです」

「え？」

何故か理解出来ていない只野さんへ私は苦笑した。まったくこの人は。

「私のここでの役割は調査です。ただ、只野さんの予想から調査するべきは貴方本人だとエルフラインが」

「俺？」

「はい。その、只野さんが私達の事を覚えているからこそ今も私達は

存在出来ていると仮定すれば、悪意は貴方を狙うはずだと」

「それは、まあ分かるけど……」

「そして、物理攻撃だけでなく精神攻撃も注意するべきだとも」

私がそう言った瞬間、只野さんが訝しむような顔をした。

「精神って……」

「只野さんの記憶を消すか奪う。そういう事をしてくるかもしれないと」

「ど、どうやって?」

「分かりません。ですが、立花と接して会話した事が只野さんが変化の影響を免れた理由だとすれば、やはり毎日私達の誰かと接してもらうべきと思います」

「ま、まあそれは分かるけど……」

只野さんの顔を覗き込むように体を倒す。そんな私の言葉に理解を示してくれる只野さんだが、どこか姿勢が前かがみなのはどうしてだ?

それとなく視線も外されている気もする。何か格好に不味いところでもあっただろうか? Tシャツとデニムのパンツだが、そこまでおかしくはないと思うのだが……?

まあいい。とにかく只野さんが眠るまで家事でもしよう。もう私は今までの私ではないのだ。

「では、掃除でもします。只野さんは流し近くで待っていて」

「えっと、寝ちや駄目?」

腕まくりをして動こうとした私へ、只野さんの少しだけ申し訳なきような声が聞こえた。

振り向けば、そこには若干眠そうな只野さんが。おかしい。さつきまでは目が冴えていたと思ったのだが……?

「眠い、のですか?」

「その、言い難いけどエロい事しようと思ってたから起きていた訳で……」

「な、成程……」

顔が熱くなるが仕方がない。ま、まさか堂々と正面から言われてしま

うとは思わなかった。

ある意味男らしいのかもしれない。いや、もしかしたら眠気で思考能力が落ちているからこそか？

「で、でしたらどうぞ。あ、いえ、少しだけ待ってください」

只野さんが布団を敷く場所だけまずコロコロで掃除する。そうすれば後で掃除する時に寝ていても構わない。

「……ああ、そういう事かあ。風鳴さんは賢いね」

「こ、この程度でそう言われると逆に馬鹿にされている気がします……」

それと、何となくだが今の只野さんは叔父様のような感じがする。褒め方がどこか幼い頃の叔父様に似ているからだろうか。くすぐったいような、照れくさいような、不思議な気分だ。

つと、これでいいだろう。そこで私は只野さんの使っている布団を見た。

長く使っているせいか本来よりも薄くなっただろうそれに、私は只野さんの過ごした年月を想う。

「……さあどうぞ」

「ありがとう」

布団を敷いて呼びかけると嬉しそうに微笑んで只野さんは布団へと入って横になる。

思えば、こんな事を今までした事はなかったな。お父様にさえ、結局出来なかった。

「風鳴さん、可能なら一時過ぎにも様子を見に来てもらっていいかな？ で、俺がそこで起きてなかったら起こしてくれと」

「分かりました。では、一応鍵は閉めて預かっておきます」

「うん、それでいいよ。さつきは本当にごめんね。あと、来てくれてありがとう」

「いえ、お気になさらず。おやすみなさい」

「うん、おやすみ……」

まるで少年のような雰囲気です。只野さんは笑顔のまま目を閉じた。そこで少し静かにしていると、あっさりと寝息が聞こえてきた。

ふふっ、まるで子供だ。何となくだが立花が惹かれた理由が分かる気がする。

この人は大人を懸命に演じている人だ。叔父様やお父様のような感じではない。それが、どこか保護欲というか母性を刺激するのだろうか。

「……もしくは、私達の事を知った上で今のようにつけてくれるからか」

立花はあのライブで人生を大きく狂わせた人間だ。それを只野さんは知っている。

そしてあの日、ガングニールを訳も分からず起動させてからの事も。

それでも、この人は立花を一人の少女として受け入れ、心配し、支えようとしている。

自分の暮らしさえ危ないのにも関わらず、可能な限り私達へ配慮をしてくれる。

立花や雪音に自分など司令に頭を下げられる人間ではないと言ったらしいが、私はそうは思わない。

きつと司令も、そして立花と雪音もそう思っているはずだ。「只野さん、この世界で立花が出会ったのが貴方で良かった」

立花は些か人を疑う事が苦手だ。そこへ付け込み、いかがわしい事をしようと思えば出来たはずだ。

にも関わらず、この人は良心と常識に従い立花へ忠告や注意を行った。

我々の個人的な事情なども知っていると明かしたのも、元をただせばこの世界が異常である事を伝えるのと同時に、立花の存在がこの世界で本来どれ程危険かを教えるためだったのだろうと今なら分かる。

出来るだけ静かに立ち上がり、鍵を手にして玄関へ向かうと外へ出て鍵を閉めた。

「……ここに来るのもあとどれだけか」

まだ私は半月にもならない生活だったが、正直楽しくもあった。常に誰かがいて、しかも年上の異性がいるという状況。色々と思う

事はあつたが、少しだけ私の至らぬ点も改善された気がしている。

鍵をデニムのポケットへ入れ、私は部屋を後にした。

まずは駅へ向かおう。そこで念のために新聞やテレビのニュースを見ておくために。

だが、私の脳裏にはあの夜三人で戻った後の会話が色濃く残っていた。

「まさか、本当にあそこまで時間の流れが異なるとは……」

私が立花と雪音と共にここへ来て過ごした時間は決して短くはない。それなのに戻った時、向こうでは一週間どころか一日さえ経過していなかったのだ。

まず私達は司令へ只野さんの予想を報告し、そして今回の経過時間の差を告げたのだが……

——そうになると、やはり向こうに誰か一人装者を最低でも常駐させるべきか。幸か不幸かこちらと経過時間が大きく異なるなら一人いなくても対処は可能と言えるしな。

そうして私達は急いで戻る事にしたのだが、そこでエルフナインから忠告されたのだ。

——もし仮に只野さんと言う方の予想が当たっているのなら、必ず何らかの攻撃があるはずです。それも、その只野さんと言う方を狙つて。

——ど、どういう事!?

——上位世界に存在していた僕らの物語が一齐に消えようとした。そんな中、只野さんだけが響さんと出会った事で戦姫絶唱シンフォギアという作品を忘れなかった。逆に言えば、その方の存在か記憶を消してしまえば……。

——あたしらそのものを消す事が出来る、ってか。

——はい。まず何があつても只野さんを守ってください。物理的にも精神的にも、です。もしかすれば今も静かに攻撃されているかもしれない。

あの時の立花は中々見た事のない表情をしていた。あれは、小日向に何かあつた時ぐらいの顔だった。

それに気付いた私へ雪音が密かに耳打ちしてくれた。立花が只野さんへ恋心を抱いているかもしれない事を、だ。

言われて考えてみればそうと思える事が多々見られた。

コンビニでの勤務でシフトが重なる時は心なしか立花が嬉しそうにしていたし、帰ってきた時も嬉しそうに話題にしていた事が多かった。

炊事が苦手な私に代わり、雪音が勤務の時は立花が料理を作りながらも只野さんへ常に助言を求めていた。味見も只野さんへ頼んでいたしな。

「何より一番はあれか」

これは私しか聞いていない。だが、あの新居で過ごした初日の翌朝、立花は寝言で只野さんの名を呼んでいたのだ。

あれもそういう事だと思えば納得出来る。こう言っては何だが、立花の小日向離れが進んでいると言えるな。

「……恋、か」

思えばここに来てから私は生まれて初めての気持ちで過ごしている。

防人たらんとする必要もなく、歌女である必要もない。

こうして変装もせず街を歩け、サインも何も求められないというのは新鮮だ。

と、ふと足が止まる。視線の先には一軒のコンビニ。只野さんや立花達が勤める店だ。

「……少しだけ、私も只野さんと共に働いてみたいな」

立花はともかく雪音の話によると店員でありながら店長のような扱いを受けているらしい。

つまりあの人は信頼を寄せられる働きぶりと言う事だ。しかも深夜という中々大変な時間帯の要もしながら。

雪音や立花は年齢や学生を理由に断られたらしいが、私は学生ではないしじき二十歳だ。ならば深夜に働くのも不可能ではない。

「……動画配信は何も締切がある訳ではないし」

そうだ。もし只野さんが狙われるのなら勤務中も誰かが傍にいた

方がいいのではないだろうか？

しかも深夜帯は私達も寝ている。そんな中、あの人は働いているのだ。そこを襲われでもしたら不味い。

「これは、相談してみる必要があるな」

結論を出して私はその場から動き出す。ふふっ、本当に現金なものだな、私も。

立花から色々聞いても私は、只野さんの事をどうしても好意的に受け取る事は出来なかったのに。

それでも雪音さえ好意的な意見を述べたので直接会って判断しようと思ひ、初めて見た只野さんの印象は、まあ素直に言えば冴えない男性だった。

物腰が柔らかいと言うよりは情けない感じもあり、年齢もあつて正直どうかと思う部分もあつた。

だが、それ故に立花と雪音は慕つていったのだと分かつた。

あの人は強要をしない。強制もしない。まるで親のように二人を、今では私もだろうか。私達を優しく見守つてくれている。

異性というよりはどこか兄や叔父のように感じるぐらい、只野さんは大人であろうとしていると分かつた。

資金に困っているのにも関わらず私達のためなら散財を厭わない決断力と行動力はまさにそれだ。

本人は男の見栄と言つてはいるが、それが照れ隠しだと私は思つてはいる。そう言う事で私達の罪悪感を弱めてくれているのだとも。

——こんな美人を三人連れて歩けるなら毎日九百円支払つても余裕でおつりがくるよ。

そんな事を言つて笑う姿は無理して大人の男をしているようにしか見えなかつたが、それ故に私は、いやきつと立花や雪音も彼を助けたいと思つたのだろう。

建て前だけではなく本音も告げ、弱い部分を隠す事なく見せているように感じさせつつ、本当に見せたくない部分は見せないようにする。

只野さんは叔父様や緒川さんとは違つた意味で大人だと思う。あ

れでは立花が恋心を抱いても無理はないか。

「実際、そもそも私達の周囲は男性の影が少なすぎるからな」

特にリディアンは女子校だ。立花達は出会いそのものがないと言ってもいいだろう。

まあ、私やマリアとてそれは同じなのだが……。

「……とにかく情報収集を終えたら新しい部屋へ戻ろう」

芸能界という華やかな世界に身を置きながら女子校通いの後輩達と同じような状況にどこか悲しさが漂ってきた気がして、私は速度を上げる。

今日もいい天気だ。帰ったら早速昨日使えるようになった洗濯機で洗濯でもするか。雪音も立花も寝ているだろうし、ここで私の成長を見せてやろう！

「で、こんな事したのかよ？」

クリスの目が若干呆れ気味に翼を見つめた。彼女の目の前には意気消沈する翼がいる。

「そ、その、だな？ 私なりに」

「言い訳はいい。あたしはやったのかやってないのか聞いてんだよ先輩」

深くため息を吐いてクリスは翼を見る。その雰囲気は駄目な姉を叱る妹のようである。

「……私がやった」

実は下着を洗濯しようとした翼だったが、よりにもよってそのまま洗ってしまったのだ。

それで下着が一気に駄目になる訳ではないが、痛んでしまうのであまりオススメ出来ないのも事実。

実際、洗濯機が止まったので中を覗いたクリスが盛大なため息を吐いているのはそういう事だ。それでも、良かれと思ってやった翼のためにと怒りを抑えての現状となっていた。

「あのかな先輩。こういうのをやってくれるのは助かるし嬉しい。でも、出来れば正しいやり方や方法でやってくれねーか？ 下着は可能

なら手洗いすんだよ」

「て、手洗い？　だが、これまではたしか……」

「ああ、たしかにあの部屋の頃はまとめてコインランドリーだった。でもな？　ひっそりとあいつが寝てる時とかに流しを使ってあたしが洗ってたんだよ」

「そうなのか。すまない。その、これまでは緒川さんがやってくれていたもので」

「翼さんの家事をやるうって気持ちは嬉しいですけど、今は共同生活なんですから色々聞いてくれていいですよ。まあ、私も未来に頼つてるところ多いんであまりお役に立てないかもしれないかもしれませんけど」

「ま、そのバカが役立つかは置いといて、だ。とにかくそういうこつた。その、助け合っつていこうぜ」

「立花……雪音……」

しっかり者の次女と人懐っこい三女の心に触れて嬉しく思う長女。そんな表現がぴったりくる三人である。

新居は部屋の広さこそ狭いものの、洗濯機を置けるスペースが用意されていたりしてこれまでの部屋よりは三人の記憶にある暮らしにかなり近くなったと言える。

ただ、相変わらずテレビはない。これには理由がある。ズバリ仁志が不要と断言したのだ。

——下手にテレビのアンテナがあると集金に来る組織がある。悪いけど俺はテレビなんて一人暮らしになってから見ていないし、今更見たいとも思わない。

ネットで動画を見るか見たい物はレンタルや配信で済ませてきた彼にとって、テレビは必需品ではなかった。そのため、三人も特に見たいものがある訳ではなかったためテレビの購入は見送られたのである。

さて、次女に叱られた長女であったがそれでめげる程ヤワな心ではない。すぐに立ち直り、ならばと次は料理をしようとエプロンを手にしようとしたのだが、それはタッチの差で響に奪われてしまう。

「さてと、じゃあ、朝ごはんちやちやつと作りますね」

「あ……ああ……」

「頼む。あたしは洗濯物干してるから」

「あっ……」

やろうとする事を全て取られ、翼はどうしたものかと腕を組んだ。

(このままでは私の気が治まらない。何か、何かないだろうか?)

炊事は響に、洗濯はクリスに取られた。残るのは掃除だ。そう考えた翼はならばと掃除をしようとして、はたと気付いた。

「……さすがに食事前には埃を立てる訳にはいかないな」

良識はしっかりと持つている翼は何とか自分の暴走を止め、大人しくテーブルを拭くだけに留めるのだった。

やがて響作の簡単な朝食がテーブルに並ぶ。今朝はハムエッグにトースト、そして昨夜の野菜の残りを使ったコンソメスープである。

「いただきます」

仁志のいない食卓は、何故か少しだけ寂しさがあつた。普段も彼が夜勤の時はそうなのだが、それでも部屋の中にいたというのがやはり大きいのだろう。

特に響は自分達が寝ていた四畳半の部屋へ目を向けて寂しそうな表情を浮かべていた。まだしばらく朝の時間にここへ来ない存在を幻視するかのよう。

「そーいや、先輩は今朝あつちに行つたんだろ? あいつはもう寝てたのか?」

「っ?! いや、起きていたぞ」

明らかに動揺した翼に響とクリスは疑問符を浮かべる。そして同時に確信するのだ。

(何かあつたね(な)……)

(い、言えない。これはさすがに只野さんの名誉に関わる……)

かくして仁志のために口を閉ざそうとする翼と、それを何とかして割らせようとする響&クリス連合軍の戦いが勃発する。

「翼さん、只野さん、何してました?」

「っ?! ど、動画を見ていたな」

「動画?」

「あいつが動画、ねえ。夜勤明けでんな事するなんて珍しいな。どんな動画だ？」

「っ!? そ、それは……すまないがタイトルまでは覚えていない」

「どうやら勝負はあっさりとは勝敗が着きそうである。それも、仁志のいない場所での公開処刑という形で。」

「よし、上手く誤魔化したぞ」

（タイトルは……か。じゃあ、他は覚えてるんだ（な））

「何とか凄いだと思う翼と、むしろここからが攻め所だと感じて目付きを鋭くするクリスと響。」

「なあ先輩。タイトルは分からねーなら、何なら覚えてるんだ？」

「な、何も覚えてなど」

「あれれ〜？ 翼さん、自分の言った事忘れちゃったんですか？ さつき、タイトルは、つて言いましたよね？」

その瞬間翼が息を呑み、クリスと響の目が光る。

「大体妙なんだよなあ。先輩もあいつが明けの日にさつきと寝る事は知ってるだろ？」

「そ、それはそうだが……」

「なのに、動画を見るなんて行動を見て、その動画の事を覚えてないなんてちよ〜つとおかしくないですか？」

「そ、そうだろうか？」

「百歩譲ってタイトルは覚えてないにせよ、だ。どんな内容かは覚えてるんじゃないか？」

「翼さん、教えてくださいよ。隠されると余計気になりますって」

チエックメイト。いや、翼相手だから詰みと言うところだろう。

こうして彼女は一言成人指定の内容だと告げて真っ赤な顔で食事を再開する。

ただ、その言葉で二人の少女は一瞬の間の後揃って真っ赤になっってしまったが。

「なっとなっとなっ……」

「せ、成人指定って……あう」

「せ、先輩？ マジでそうなのかよ？」

「……あまり言いたくはないがこれまで只野さんはそういう欲求を解消出来ない環境だった。その、どうやらそれを発散しようとしていたらしい」

「そ、そうか……」

真つ赤な翼に感化されたようにクリスも真つ赤な顔で俯いて食事を再開する。

「あ、あの、それって私のせい、ですよね？」

「そんな事はない。その、むしろ私のせいだ」

「先輩……」

「私が常に部屋にいるようになったからな。おそらくそれが決定打だったのだろう」

「いや、あたしらと一緒に暮らし出したのが一番でけーよ。その、こう言っちゃなんだけど、あたしみたいな歳の女と一緒にいるんだ。スケベな気持ちが強くなっても仕方ねーよ」

「私達、知らない間に只野さんへ辛い事させてたんだ……」

赤面していたのも一変、今や沈んだ顔をする三人であった。

ただ、きつと仁志がこれを聞けば恥ずかしさと申し訳なきでのた打ち回ったであろう。

それでも、この事は今後も考えないといけない問題だと三人は思っていた。

何せあの部屋を借りているのは後半月程。その後はこの新居で彼も寝泊りをするのだ。

そうなった時、彼は性欲をどうするのか。また発散させるとして自分達はどうすればいいのか。そんな事を考え始めた。

（只野さんは男の人、だもん。仕方ないよね。で、でも、エツチな気持ちになつてたのに私と寝るのを嫌がったって事は……わ、私の事を大事に思ってくれてるって事かな？）

（まったく、男が基本スケベな生き物だつての忘れてたぜ。おっさん達みたいなのが周囲にいるもんだから勘違いしてたな。……あ、あたしの目をしっかり見るようにしてんのもそういう事かよ……）

（私の下着を片付けてもいいと言った事があつたが、あれは本音だつ

たとそういう事か。それに以前など私を可愛いと評したし、も、もしかして只野さんは成人に近い私ならと、そう思っているのだろうか？)

嬉しそうに笑みを零して食べる響。複雑そうな表情で食べるクリス。難しい顔で食べる翼。そんな風に三者三様の様子で朝食は進む。食べ終わると三人は後片付けを始め、それが終わると今度はトレーニングウェアへと着替えてその場で軽い柔軟を行い、それぞれタオルを手に部屋を出た。

「では、行くか」

「はい」

「おう」

引越すに際し周囲を散策した結果小さな公園を発見した彼女達は、引越しを機に毎朝訓練代わりにランニングをする事にしたのだ。

歩いて大体十分程の距離ではあるが、それは最短距離で向かった場合だ。まず彼女達は新居のアパートから仁志達が働くコンビニまで向かう。

そこを折り返し地点として三人はぐるりと一周するように新居のある方へ戻り、公園まで向かうのだ。

装者としての訓練はこの世界では出来ない。だが、仁志を狙って襲撃者が現れないとも言いきれない以上、最低限の事はしておこう。

そう決めた彼女達なりに始めたトレーニングがそれだった。しかし、どこかでそれを楽しんでいる自分達がいると彼女達は気付いていた。

(何だろうな。以前立花に付き合う形で叔父様や雪音としたものよりも軽いというのもあるが……)

(何て言うか、部活みてーだよな、これ)

(楽しいなあ。体動かすのは嫌いじゃないけど、何だろう？ 昔未来の自主練に付き合ってた頃を思い出すからかな?)

揃って笑みを浮かべながら無理のないペースで走り続ける三人。その視界に、つい最近まで住んでいたアパートが見えてくる。

(あつ、アパートだ。只野さん、まだ寝てるかな?)

翼とクリスが普通に通り過ぎる中、一人響だけが仁志の部屋へ目を向けて走り抜ける。

その時、響の脳裏に朝食時の話が甦った。

「っ……」

頭の中に浮かんだのはいかがわしい動画をスケベな顔で見ている仁志。それがとても許せなくて、そして悲しくなったのだ。

(そ、そういう事したいならちゃんと言わんと彼女さんを作ってお願ひするべきです! って、そ、そう言ったら只野さん、どうするんだろ?)

頬を赤くし、響は頭を左右に大きく振って視線を前へと戻す。知らず速度が落ちていたように翼達と少しだけ距離が出来ていた。

「いけないいけない……っ!」

少しだけ速度を上げ、クリスの後ろへと迫る響だったが彼女は気付いていない。

先程の想像で抱いた気持ちは紛れもない嫉妬である事を。

そして、その相手に自分を選んで欲しいという欲求でもあると、まだ響は自覚する事が出来ないでいたのだ……。

「のさん……」

「ん……う?」

体を揺さぶられて目をゆっくり開ける。視界に飛び込んでくるのは綺麗な青みがかかった黒髪と美しい顔の女性。

「起きましたか?」

「……ああ、凄く良い目覚めだよ」

「そうですか。それなら良かったです」

そう言つて優しく微笑む様は本当にため息を吐きたくなる程綺麗だ。

「大和撫子って、こんな感じなんだなあ」

「はい?」

「いや、風鳴さんって本来は良いところのお嬢様だからさ」

「……そんな事はありません、と言いたいですね、そうですね。たしか

にそう取られてもおかしくない環境で育ちました」

困ったような風に笑う風鳴さんだけど、その表情には若干の影も見える。風鳴、か。それが彼女には一種の重石になってるんだろうな、やっぱり。

「それでは只野さん。起きたのなら布団を片付けますので出て下さい。私はそのまま掃除をします」

「いや、それぐらい俺が自分で」

「それと、相談したい事も出来ました。なのでまず顔を洗って目を覚ましてきてください」

有無を言わせない感じの風鳴さんに逆らえるはずもなく、俺はいそいそと布団から出て流しとへと向かった。

冷たい水で顔を洗って蛇口を締めると同時に差し出されるタオル。

「どうぞ」

「ありがとう」

タオルを受け取り顔を拭くと完全に目が覚めた。

「ふう……今何時？」

「一時……七分ですね」

「そっか」

どうやら本当に一時ちょうどここへ来たらしい。こういうところは本当に几帳面というか真面目だな。

そのまま風鳴さんは部屋の掃除を始めたので、俺はその様子を流しから眺める事に。

コロコロを手にカーペットを綺麗にしていく姿を見ると、本当に風鳴さんが彼女になったかのような錯覚を覚える。

というか、よく考えたらこれってエロい、かもしれない。こっちへ向けてお尻を突き出しているんだ。それも、それが細かに動く。

「……やばこ」

下半身に血が集まり出したのを感じ取り、顔を上へ向ける。そこで今朝の事を思い出す。

あの時は本当に自分の失態を呪ったけど、不幸中の幸いは風鳴さんだったってとこだよなあ。

もしあれが響なら俺は彼女の心に大きな傷を作ったかもしれないし、雪音さんなら当分口を利いてもらえなかったと思う。

そういう意味では風鳴さんは大人だしそういう事への耐性もある方、なんだと思う。実際、今もこうしてここへ来て俺を起こしてくれただぐらいだし。

「そうだ。風鳴さん、二人はどうしてるの?」

「立花は留守番をしています。雪音は夕食の買い物です。初任給が入った事もあり今夜は引越祝いをしよう」と

「そっか。引越祝いかあ」

「只野さんは勤務ですが、雪音と立花は休みです。今日を逃すとまた面倒なシフトだからと」

「成程ね。じゃ、六時ぐらいから?」

「そうなるかと」

雪音さんらしいな。でも、一体何をやるつもりなんだろう? おそろくそこまで高い物は出来ないはずだ。

でもお祝いと言うからには多少の贅沢さも出すだろうし……ダメだ想像出来ない。

「風鳴さんは何か聞いてる?」

「いえ、特には何も。ただ、楽しみにしているとは言われました」

小さく苦笑する声に俺も笑みが浮かぶ。不敵に笑う雪音さんを想像したのだ。

「……よし、これでいいでしょう」

「ありがとう。お疲れ様」

コロコロの用紙を数枚使つての掃除は終わったようだ。新しい部屋はフローリングだからここより掃除は楽だけど、その分目立つだろうから考えものかもしれない。

掃除機、必要だよな、やっぱ。そういえば、本当に冷蔵庫や洗濯機は使えるようにしたのだろうか?

「風鳴さん、その、聞きたいんだけどさ」

「何でしょう?」

「もう洗濯機は使える?」

「ああ、その事ですか。はい、もう大丈夫です。昨日電気屋の方に来て頂き使えるようにしてもらいました。既に今朝私が使用し洗濯したんですよ」

「へえ、そうなんだ。なら良かった」

持ってきたはいいけど配線などがあるので素人には無理だからなあ。

「性能は折り紙つきですよ。何せ緒川さんに同行してもらいましたので」

「納得」

あの人なら抜かりなく色々と指示及び助言出来るだろう。で、きっと風鳴さんではなく雪音さんへ諸注意を行ったはずだ。

「本来は買った店の人間にやってもらうのがいいのですが、そういう訳にも行かないですから」

「まあそうだよな」

「工事費などがかかってしまいましたけど、本当に良かったのですか?」
「それぐらいなら構わないよ。俺も使う事になるしね」

全て買う事を考えればまったくもって安いものだ。

でも近未来でも家電が勝手に動いたりはしないんだなとがっかりしたのも事実。

まあ、もしそうなら電気屋なんて呼べないけどさ。

「それで、相談をしても?」

「ああ、そうだったね。どうぞ」

「実は、今朝話した事に関連するのですが……」

風鳴さんの話は俺にはやはり現実味のないものだった。何せ姿のない悪意というものがどうやって俺に危害をと思うからだ。

でも、そういうのをアニメやゲームで見た事があるし、何だったら小さい頃から好きな特撮ならそれこそよくある話と言える。

だからって、風鳴さんを深夜勤務として店に入れるのは抵抗がある。何も色々ミスをしそうだからじゃない。単純に彼女はコンビニ

二の、それも深夜に来るような客と相性が悪いと思うからだ。

「だ、ダメですか?」

「仕事内容だけで考えれば何も問題ないと思う。でも、深夜は少ないけど客も来る。で、そういう時間帯の客は総じて厄介な傾向が強いんだ」

「そ、それでも私は」

「酔っ払って君へいかがわしい事や言葉をかけても手を出さずにいられる?」

「そう、そして俺には心配いらぬような事が女性の風鳴さんには発生する事も。」

「……それは、分かりません」

「まあ今の時勢なら過剰じゃなければ問題ないと思うけど、それでも店やオーナーの事を考えると揉め事は避けたい。風鳴さんの気持ちは分かるし嬉しいけど、これは止めておいた方が良い」

「ううっ、そう、ですね。私は接客がそもそも向かない気がします」

「うーん……客層にもよるんじゃないかなあ。例えば料亭とか老舗旅館とかなら似合そうだよ」

綺麗な着物を着て楚々と出迎える風鳴さん。うん、実に絵になる。

「そ、そうでしょうか?」

「そうそう。美人女将とか呼ばれて、時折お客さんに頼まれて歌を披露なんかして」

「ふふっ、そうですね。それは楽しそうです」

「小料理屋の女将なんかも似合そうだなあ」

「りよ、料理は苦手ですが、将来像の一つとしては考えてみるのもいいかもしれません」

「きつと人気店になるよ。あの風鳴翼の店だもの」

「そうになったら、只野さんを雇ってあげましょうか?」

「そりゃあいい。家庭料理なら頑張って練習すれば出来るようになるしね」

「では、歌唱小料理屋にでもしましょうか。私が時々客の頼みで歌い、只野さんが一品料理などを作って、お客様はそれを食べながら、酒を飲みながら誰もが楽しく過ごす」

「うん、いいね。カウンターだけの小さな店で、壁にはきつとツヴァイ

ウイングや風鳴翼の楽曲のジャケットが飾られて」

俺がそう言うのと風鳴さんは目を閉じてその光景を想像したのか、柔らかな笑みを浮かべたままで息を吐いた。

「……いっそ、向こうでの活動を辞めた後はこちらでそんな風に暮らすのもいいかもしれません」

告げられた言葉はそれまでの楽しげなものとは違って何か諦めるようなものだった。

どうして急にそんな事をと、そう思っていると風鳴さんは微かに哀しげな表情で瞼をゆつくりと上げた。

「ご存じなのですよ、ね？ お父様の事も……」

「……うん、娘を守って亡くなった事は」

もう、それだけで分かった。やはり風鳴八紘の、戸籍上の父であり精神的な父の死は風鳴翼にとって未だ癒える事のない傷である事が。

「向こうにいれば、嫌でも私はお父様の事を思い出します。それを乗り越えて強く生きていかなければならない。それがお父様の望みである事も分かっています。でも、でも……」

「風鳴さん……」

「ここで過ごしていると、私は風鳴の名から解放される。お父様のいない世界を忘れていられる。強くある事を止める事が出来る」

「それは……」

今にも泣きそうな声と顔。それがきつと今の風鳴翼の真実の表情なんだと、そう思った。

「もう泣き尽くしたはずなのに、もう乗り越えたはずなのに、ここでただの女として生きているとそれがただの強がりだと、思い込みだと分かかってしまう。私は、私は、お父様を失った辛さに打ち勝てない……っ！」

「風鳴さん……」

俯いて肩を小さく震わせる風鳴さんを見て、俺は何てか弱い姿だろうと思った。

あのカラオケで見た時とは別人な程に、今の彼女は儚く脆い。それが本来の風鳴翼なのかと思うと胸が締め付けられる思いがした。

考えてみれば、彼女も青春時代を防人として過ごした人だ。望む望まずに関わらず、国を、世界を守るために力を手にさせられた存在だ。

「風鳴さん、いいんだよ泣いて」

「つく……只野さん……」

こちらへ顔を上げる風鳴さんは、もう涙でぐしゃぐしゃになっていた。多分だけあの時は緊急事態というのもあつて本当に泣き尽くす事が出来なかつたんだろう。

「気の済むまで泣いてあげるといい。亡くなった人はそれを喜びこそすれ悲しまないさ。今も想ってくれている。そう感じ取つて微笑んでくれるよ。平行世界でも見ただろ？ 風鳴八紘は血の繋がりなんかじゃなく、心の繋がりで君を、風鳴翼を娘として想っている事を」

「っ！………はい」

ボロボロと涙を流しながら風鳴さんは笑つてくれた。泣き笑いのそれは、いつかのカラオケで見た笑顔と同じぐらい俺の心を打つ。

「只野さん、その……胸をお借りしても？ このままでは近所迷惑になつてしまいそうですので」

「こんな貧相な男でよければどうぞ？」

「クスッ………今はその方がいいのです。お父様の胸も、そこまで逞しくありませんでしたから」

そう言つて風鳴さんは俺の胸に顔を埋めてしばらく震えた。声を押し殺しながらの慟哭は、俺だけに響いた。

俺はまだ幸いにも両親を失っていない。だけど、もしそうならとしても彼女のように泣けないと思う。

それが良いとか悪いとかではないと思うけど、今の風鳴さんを見ていて俺は思うのだ。

風鳴八紘さんはきつと幸せだったのだろうと。こんなにも娘に思われ、慕われていたのだ。不器用な親子だったけど、その間にあつた絆は本物だろうと思う。

「風鳴さん、これは俺の独り言なんだけど、君のお父さんは例え君がここで暮らすとしてもその決断を尊重すると思うよ。だって、あの人の一番の願いは君がその名の通り翼となつて羽ばたける事だ。それが

出来るのなら、どんな世界であろうとあの人はそれを後押ししたはずだ」

そつと風鳴さんの背中を擦って告げる。翼という名へ込めた想い。それをGXで知っている俺は、故人の想いを勝手に推測してそう言った。

すると、風鳴さんの手が俺の胸を二回叩いた。視線を下げると、そこには未だに胸へ顔を押し付けるようにしている風鳴さん。

「風鳴さん？」

少しだけこちらを見上げるように顔を上げる風鳴さんだけど、その表情はやや拗ねていた。

「……ズルいです。このタイミングでそんな事を言われたら、もつと泣きたくなるじゃありませんか」

「いいじゃないか。歳を取ると泣きたい時に泣けなくなるんだ。それが出来るって事はまだ若いって証拠さ」

「若いって……ふふつ、只野さんだって若いじゃないですか」

「あれ？ 聞いてない？ 俺、もうじき三十になるおっさんだよ？」

「十分若いです」

「いやいや、世間的にはもうおっさんだよ」

返ってくる声が少しだけ、ほんの少しだけ明るいものになった事に気付いて俺は安堵していた。

ただ、また胸に顔を埋めて笑われているのでくすぐったさはある。だけど泣き止んだのなら離れてって今言うのも何だかな。それは風鳴さんを突き放すような気がするので言えない。

結局風鳴さんが自主的に離れてくれるまで俺はそうしていた。そこで見た風鳴さんは真つ赤に腫れた目をしていたけど、どこかとつても可愛く見えた。

「只野さん、今のは誰にも」

「勿論。墓までもつてく」

「大袈裟ですね」

「むしろ教えろと言われたって言うものか。あの風鳴翼との二人だけの秘密なんだから」

「そ、そう言われると何だか恥ずかしくなります」

「どちらにせよ、良かったよ。今の風鳴さん、良い表情してる」

憑き物が落ちたと言うか、晴れ晴れとした笑顔だ。

「だとしたら、只野さんのトドメのおかげです。あそこで私の名前の事を出すなんて」

「ごめん。大切な思い出にずかずかと踏み込んで」

「あつ、いえっ！ 責めている訳ではないんです！ ……おかげで、大事な事を思い出せました。そして、少しだけ嬉しくなったのです」

「えっ？」

一旦顔を伏せたかと思うと、風鳴さんは満面の笑みを浮かべてこちらへ顔を向けてくれた。

「この世界にも、お父様の事を覚えていてくれる人がいるんだと、そう思っ」

「……うん、忘れないよ。八紘さんの事も、風鳴さんの事も絶対に」

俺がそう返すと風鳴さんは嬉しそうに頷くと、そのまま口を開いて

……

「翼と、そう呼んでください」

「え………？」

「お父様は名前なのに私は苗字というのは納得いきません。なので、名前で呼んでくれて構いませんので」

「えっと………いいの？」

「良いも悪いもありません。それに立花は名前で呼んでいるじゃないですか」

「それは、まあ」

と、そんなこんなで風鳴さん改め翼と呼ぶ許可を頂きました。何と
いうか、響が自分で練習と言ってくれたけど、それでもまだやはり女性を名前で呼ぶのは気恥ずかしいものがある。

ただ、翼って呼ぶのもいずれ慣れるんだろうな。そう思いながらその後俺は翼と一緒に部屋を出て新居へと向かった。

その道中、翼からはあのお店の話を振られた。どこに構えるのがい
いかとか、席は何席にするかとか、そんなありもしない与太話を。

だから俺もそれに乗って色々と言った。翼は着物が絶対で、髪も結って上げる感じと告げると割烹着でもいいのではと言われたので迷ってしまった。

「あー、どちらも捨てがたいなあ」

「ふふつ、只野さんのご希望の格好をしますよ?」

「艶やかな着物か、素朴な割烹着か。どっちも翼には似合そうだからなあ」

「沢山悩んでください。時間は十分ありますから」

こちらへそう言つて微笑みかける翼には、もう影のようなものは一切ないように見えた。

それも嬉しく思いつつ、俺はくだらないありもしない想像で思い悩む。

「翼はちなみにどっちが好み?」

「そうですね……ん?」

そう問いかけて翼の方へ顔を向けると、彼女はそれに答えようとして足を止めた。そして後ろを振り返ると首を傾げる。

「どうかした?」

「いえ、後ろで何か物音がしたような気がしたのですが……」

俺も言われて振り返るも誰もいない。

「気のせいじゃないか?」

「……かもしれせん。少々神経質になっているのかも」

「気楽でいいよ。正直俺はまだ半信半疑だ。だって、その気ならすぐにでもノイズでも差し向ければいいんだから」

「そうかもしれませんがあまりそう言わないでください。言霊というのがあるんですよ?」

俺の言葉に苦笑しながら歩き出す翼。こうして俺は彼女と共に色々話しながら響の待つ部屋へと向かうのだった……。

仲良さそうに歩いていく仁志と翼。その後方の曲がり角で、一人の少女が隠れるようにしながら複雑な表情を浮かべていた。

「何であいつ、先輩を名前で呼んでんだよ……」

片手に買い物袋を下げ、クリスは先程見聞きした光景を思い浮かべる。

買い物帰りで見かけた仁志と翼へこっそりと近付いて驚かせてやろうと思ひ、彼女は出来る限り気配を殺して近付いて仁志の翼への問いかけを聞いたのだ。

その瞬間動揺し、手にしていた袋が音を立てたので慌てて横の路地へと隠れた。そして今に至っていた。

「……笑ってたな、先輩」

初めて聞いた仁志の翼呼びと、その後の親しげな翼の反応。

響と仁志ならまだ分かる。だが、クリスは知っていた。翼がそう簡単に人へ懐く事はないのを。

（何でだよ？ 何で先輩があいつに名前呼びさせてんだ？ あいつもあいつだ。慣れ慣れしく先輩を呼び捨てるんじゃないやねえ。あたしの立場ってもんはどうなるんだよ？ あたしは先輩程親しくないってか？ あのバカみたいに可愛げがないってか？）

響は仁志に好意を寄せている事もあって名前呼びは分かる。きっと彼女から仁志へ言い出したのだろうと。

なのに、何故後から来た翼が名前呼びになっているのか。しかも翼はどうしてそれを嬉しそうに受け入れているのか。

二人の間にあつた事を知らぬクリスにその過程が分かるはずもない。ただ、先程まで引越し祝いをしようと弾んでいた気持ちが沈んでいくのを覚えていた。

尊敬する先輩、あつたかい場所へ引張ってくれた相手、そして兄や親戚のように思い出した男性。

彼らが少しだけ自分から遠くなつたような感覚がして、クリスは無意識に袋の持ち手を握り締める。

——やつと面白く出来そうね……。

そんな彼女を頭上から黒いもやのようなものが静かに見つめていた……。

ORBITAL BEAT

雪音さんの様子が変わだなと感じたのは帰ってきた時にこつちを見た時からだ。

翼や響と次の動画配信はどうしようと話し合っていた時に雪音さんは帰宅したんだけど……

—— おかえり雪音さん。

そう俺が言った瞬間、何故かこつちへ顔を向ける事もせず「おう」っただけ返して来た。それがどうにも気になった。

雪音さんは言葉遣いこそ乱暴だけど礼儀はしっかりしている子だ、挨拶する時は基本こつちを見てしてくれるのに、何故かそれをしなかった。

まあその時はそんな時もあるだろうと思ったんだけど、買ってきた物を冷蔵庫へ入れるのを響が手伝おうとした時、雪音さんがやや冷たい声で「二人でいいからお前はあつちで喋ってる」と返した瞬間、やっぱりおかしいと確信出来た。

「クリスマスちゃん、どうしたんだろ？ 機嫌悪いのかな？」

「そうかもしれないな。何か出先であったのかもしれない」

若干辛そうな響を見て翼が複雑そうな表情をしていた。

俺はそんな二人を見てから雪音さんへ視線を戻す。彼女は冷蔵庫の戸を閉めるとチラリとこちらへ目を向けた。

「雪音さん、どうかしたの？」

「……別に何でもねえ」

「そうは見えないぞ雪音。何かあったのだろう？ 私達に話せない事か？」

「クリスマスちゃん、今朝助け合おうって言うってくれたじゃん。何でもいから私達へ話してくれないかな？」

「……ホントに、何でもないんだって」

「雪音さん、正直そうは見えないよ。翼も響も心配なんだよ」

「つ……何でもねえって言うってんだろ！」

その怒鳴り声に響だけでなく翼さえも小さく驚きを見せた。勿論

俺もだ。

俺達の反応を見てクリスが大きく驚きを見せた。まるでこんな事を言うつもりはなかったとばかりに。

「そ、その……ちよつと外の空気吸ってくるっ！」

「あつ！ クリスちゃんっ！」

弾かれるように部屋を出ていく雪音さんの背中を俺はやや呆然と見送るしか出来なかった。

響は追い駆けようとしたけどそれを翼が腕を掴んで止めていたのだ。

「翼さん、どうして……」

「明らかに雪音の様子が普段と違う。しかも出かける時は何のおかしさもなかった。ならば出先か戻ってくるまでに何かあったと思うのが妥当だろう。だが、私達に言えない事なら追い駆けても事態を悪化させるだけだ」

「でも……」

翼の意見も理解出来るけど心情的には雪音さんを追い駆けたいのだろう。響は顔を玄関へと向けていた。

ただ、俺も追い駆けるべきな気がする。最後にこちらへ見せた表情はバイトでミスをした時の雪音さんによく似ていたから。

「……言えないって事はどつちかだと思うよ。本当に言えないか、言えなくはないけど言いたくないか」

そして俺は何となく雰囲気的に後者な気がする。

「言えなくはないけど言えない……」

「雪音の性格上そちらの可能性が高そうだな」

そして俺が思う事は付き合いの長い二人が思わないはずはないワケだ。

なんてプレラーティイの口調になってしまいうぐらいには俺も動揺してるらしい。

それにしても、だ。一体何があったんだろうか？

言えなくはないけど言えないとなると、雪音クリスという少女の性格上自分自身の何かの場合が多いはずだ。

例えばもし雪音さんが響や翼へ悪い事をしてしまったのなら言える子だ。

だがこれが自分にしか関係ないか、あるいは言い出す事で周囲へ迷惑をかけたリするとなると途端に言い出せず自分で何とかしようとする。

「……俺がちよつと探ってみるよ。それで言えないって言われたら翼、行ってもらえるか？」

「……分かりました。それでも駄目なら立花ですね？」

「え？ 私？」

「そうだな。で、ここでも駄目となったら雪音さん自身でしか何とも出来ない事が確定だ」

「あつ、そういう事か！ 要は誰が原因か、誰が理由かを確かめるんですね？」

「正解。で、まずは関係性が浅い俺が行くんだ。もし二人に関連するならそこで終わるし、俺が原因ならそれらしい事を言われるはずだしさ」

言いながら靴を履く。さて、問題はどこへ行つたかだ。こうなると行きそうな場所は……。

「雪音さんが行きそうな場所に心当たりある？」

「雪音の……」

「行きそうな場所、ですか……」

二人して腕を組んで考え込むのを見ると急に姉妹感が凄い。

でも、ここで真つ先に浮かぶのはおそらく……

「コンビニかあのアパートだと思います」

「だよなあ」

「あるいは近くの公園です。正直こちらではそれぐらいしか」

「公園、か。うん、分かった。とりあえずその三か所探して見つからなかったら戻ってくる」

そう言つて俺は部屋を出て、まずは遠い場所から見て回る事に。

コンビニは正直ないと思うけど立ち寄った可能性はないとも限らない。で、その後に部屋を見て最後にこの近くの公園へ行つてみよ

う。

軽く走りながら念のために周囲を探しながら移動する。

そうやっていると思ったら以上の早さでコンビニへ到着。中へ入ると丁度良くオーナーがいた。

「あれ？ 只野君？ 珍しいね、こんな時間に」

「まあちよつと運動不足なので軽く運動してたんです」

「ああ、それはいいね。もうすぐ三十だっけ。そろそろくるよお。お腹とかさ」

「やめてくださいよ」

雪音さんが来てないかを聞くとしても直接聞くのはやや不味い。何せ俺と彼女の関係は表向きは高校が同じだけの他人なのだ。

でも、この感じだとここに来てはいないらしい。もし来ていたらオーナーが最初に俺へそれらしい事を言うはずだ。

まあ、一応確認しておこう。オーナーと話しながらあんばんと紙パックの牛乳を一つ手に取りレジへ。

オーナーがそのままレジをしてくれるのでそこへ探りを。

「そういえば、さつき雪音さんらしい人を見ましたけど店に来てたんですか？」

「え？ いや、来てないよ。人違いじゃないかな？ はい、二百十六円ね」

「マジですか。うーん、だとしたら視力ヤバいかな？」

「おーおー、これは一気に老け込む前兆かな？ つと、八十四円のお返し」

「どうも。あと、それなら白髪が増える方がマシですね。じゃ、また夜に」

店を出てアパートへ向かう。店に立ち寄ってないなら今後も寄らないだろうし、多分もう大丈夫だ。

さて、部屋の前にでもいてくれたらいいんだけど……。

「……いる訳ないよなあ」

一期の時を意識してあんばんとパックの牛乳を選んだんだけど、さすがに居場所までそれらしくはなってくれないよな。

こうなると残りはあの新居近くの公園か。そこが駄目だったら……気が重いな。その場合は三人で手分けして探す事になるぞ。

そんな不安を抱きながら俺はまた軽く走って移動する。それだけで息が上がってくるのが悲しい。

割と本気でオーナーの言葉が頭をよぎる。体力作り、するべきか？ いや、運動をする必要があるかも。

筋トレか軽い散歩かな。いっそバイト帰りにアパートへ直帰するんじゃないかと引越先へ行つて、起きてるだろう翼へ廃棄のシユークリームとか渡して帰るって事でもするか？

「……………か」

公園に到着するもパツと見た感じいいない。若干焦りも生まれてくるけど、不幸中の幸いはゲートは響や翼がいる部屋にあるって事だ。

だから絶対この世界に雪音さんは残ってる。とりあえずここを探して見つからなければ一度部屋へ戻ろう。

そう思つて公園の中を歩く。

平日の昼間だけどそこまで人がいないのは遊具がないに等しいからだろうか。

それともまだ別の場所にあるのだろうか。俺もあまりこの辺の事に詳しくないからその辺りがあやふやだ。

住んで十年近くになるってのにこれだ。まあ、子供の頃と違って探索とかしないからなあ。

「……………いない、か」

公園の中を探しても雪音さんは見つからなかった。

と、そこでふと思う。雪音さんは俺達に見つかりたいと思つていないか。

もし見つかりたくないと思えば心当たりない場所へ行く。だがあまり遠くへ行く心配させ過ぎて大事になる。

読むんだ。雪音クリスの思考を。こういう場合の彼女がどう考えそうか。

「……………俺達の思いつきそうな場所を敢えて避けるぐらいが精一杯だなあ」

所詮俺の頭などそんなものだ。仕方ない。一旦二人の待つ部屋へ戻ろう。

そう思っただけで公園を後にしてトボトボと歩く。二人には残念なお知らせを持って帰る事になるな。

「待てよ」

「え？」

不意に背後から聞こえてきた声に振り向けばそこには雪音さんの姿。

ただ、俯いていて顔が見えない。

「あたしを……探してたんだろ？」

「あ、ああ……」

「そうかよ。で、何の用だ？」

「えつと……さつき何も俺達に言ってくれなかったけど、それは俺がいたから？」

どこか妙な雰囲気を漂わせる雪音さんに内心疑問符を浮かべつつ、俺は確かめたい事を尋ねる事に。

すると雪音さんは小さく震えてしばらく黙り込んだ。俯いたまま微動だにしない雪音さんを俺はただただ黙って見つめる。

「……お前に、聞きたい事がある」

「俺に？」

「ああ。ここじゃなんだ。場所、変えようぜ」

そう言っただけで雪音さんは歩き出した。俺の横を通り過ぎ、雪音さんはそのまま二人が待つ部屋とは反対の方向へと向かう。

多分だがあの部屋へ行くつもりなのだ。そこまであの二人には聞かれたくない事なんだろう。となると今はついて行くしかないか。

そこから雪音さんはまた黙り込んだ。今は何も聞くなつて空気を思出して歩く雪音さんを見て、俺は何となく響と手を繋ぐ前の状態を思い出していた。

でも、何故そうなっているのかは分からない。どことなく部屋を飛び出す前よりも雰囲気が良くない気がする。

色々と考えている間に気付けばアパートへ辿り着いていた。雪音

さんは無言で部屋のドアの前へ移動する。

「……開けてくれよ」

「あ、ああ……」

今はとにかく話を聞く方が大事だ。そう思っただけで鍵を開けてドアを開けると雪音さんが玄関へ入って靴を脱いだ。

俺もドアを閉めて念のため鍵を閉める。これで雪音さんがここを飛び出そうにも若干まごつくはずだ。

「それで、聞きたい事って？」

今や座布団さえないので雪音さんは俺の布団を敷いて腰掛けていた。それでも顔は俯いたままだけど。

「……何で、先輩を名前で呼んでんだ？」

その問いかけに俺は響の事を思い出した。彼女もまったく同じ事を聞いてきたのだ。

——な、何で翼さんを名前で呼んでるんですかっ!?

動揺を顔に丸出しにして俺へ迫ってきた彼女へ、簡単に名前で呼んで欲しいと言われたからと返すと、何故か響は一瞬だけ翼を見てから複雑な表情をした。でもすぐに俺の耳元へ顔を近づけてこう尋ねてきた。

——れ、練習ですよね？

まあ俺の気持ち的にはそうなので迷う事無く頷いた。それで響は納得してくれたらしく、それならいいですと安心するように笑っていたのが印象的だ。

その間、翼は何の話をしているんだろうと不思議そうに首を傾げていたが。

「えっと、単純に言うのなら翼の方から名前で呼んで欲しいって言われたんだ」

「先輩から……」

「そう。どうやら俺の事を信頼したというか、距離感を変えたいって思ってくれたみたいなんだ。響の事も名前で呼んでいるだろうって言われたしね」

「……そうかよ」

そこでやつと雪音さんが顔を上げた。その表情は俺が初めて見るぐらい怖いものだった。

「じゃあ何か？ お前は呼び方を変えないと信頼してないって言うつもりか？ あたしら三人いて一人だけ苗字にさん付けになったらそいつがどう思うかとか考えねえのか!？」

「ゆ、雪音さん？」

「っ!? それだっ! 何だよあたしだけ雪音さんって! あのバカと先輩は名前で親しげに呼んで、あたしだけ仲間外れか! あいつもっ! 先輩もっ! あたしを除け者にして楽しそうに笑ってやがるっ! あたしだけっ! あたしだけ置いてっ!」

憤怒、って言えばいいんだろうか。雪音さんの怒りがまるで灼熱のマグマのように言葉となつて噴き出した。

俺の配慮が足りなかったせいで彼女は寂しさと怒りを覚えたんだ。響と同じだからと安易に翼と呼んだ事で。

まずその説明を雪音さんへするべきだったのかもしれない。あるいは俺から雪音さんへも尋ねてみるべきだったのかもしれない。名前でもいいかって。

そんな事を考えていると雪音さんはその恐ろしい表情のまま俺へ掴みかかってきた。

「あたしはなっ! お前よりも先にあの二人に会ってんだっ! あのバカに手を繋いでもらって! 先輩にあたしのバカを止めてもらって! あたしは! あたしはやつとあつたけえ場所に、人達に、出会えたってのに……」

じわりと表情が変わる。怒りから悔しさが悲しみへと。

「あたし、こんな気持ち嫌だ……。あの二人を恨みたくない……憎みたくない。お前の事だっ……」

「雪音さん……」

「なのに、何でかさつきからどんどん嫌な気持ち湧いてくるんだ。あたしを除け者にするような奴らを許すなって。あたしに寂しさを、辛さを与えるような相手へ仕返ししちまえてっ!」

俺へ掴みかかったままだけど、その掴む手の力はまだ抜けていな

い。だけど表情は先程までの怖さは薄れ始めている。

何となくだけど自分で自分の感情が制御出来ないんだろう。きっと大切な仲間の二人が俺と距離感を縮めていて、なのに自分だけがそう出来ないししてもらえないのが嫌なのだ。

だけど素直になれない性格もあって、それがグチャグチャになって今のような状態になってるんだろうな。

やや言動が物騒なのは雪音さんらしいと言えるし。

「そっか。なら、今更だけど少しいいかな？」

「んだよお……」

「クリスって、そう呼ばせて欲しい」

そう言った瞬間、雪音さんの顔が驚きに染まった。目を見開いて俺の事を見つめてきたのだ。

何を言ってるんだと、そんな感じにも見えたのもう一度駄目押しをしておく事にしよう。

「俺は、君も、クリスと呼べるなら呼びたい」

「……それはあのバカや先輩を呼んでるからか？」

「呼んでもいいなら呼んでたよ。いや、ある意味一期のアニメを見た頃からクリスちゃんって呼んでたんだよ、本来は」

「く、クリスちゃん？」

他ならぬ本人の口から出た貴重な発言に俺は自分の中の何かが切れたような気がした。

「そうだよ。響の事はビツキーって呼んでた事もあるし、翼の事は翼さんって呼び方で一人で脳内で呼んでたっつての」

「はっ」

「それに、こっちは君が未来の体操服を着てた事とかを知ってるんだ。いつだってパパとママの目指した夢のためにその小さな体で頑張っている事だっつてそうさ。歌う事は嫌いだったのが、周囲の人達との触れ合いを通じて本当は好きだった事を思い出しながら歌った事も。初めて明確な後輩が出来て、先輩として頑張ろうと空回った事も俺は知ってる。そんな俺が君を名前で呼びたくない訳ないだろ」

俺の気持ち悪い告白に雪音さんは完全に飲まれていた。ただただ

目を見開いたままで俺の事を見ている。

もう、掴んでいた手から力は抜けていた。それと同時に表情から怖さも消えていた。

「……でも、それは君達を架空の存在として捉えていたからだ。こうして直接会って、過ごして、それでも遠慮なく名前で呼ぶ事なんて出来ないよ、俺みたいなヘタレにはさ」

「お前……」

「響も翼も向こうから名前で呼んでいいと言われて、それでやっと呼べるようになるおっさんだよ、俺は。だからこそ、君の気持ちへ思い至らなかつた。たかが呼び方だと、どこかで思っていたのかもしれない。本当に申し訳ない」

頭を下げる。体勢的に若干締まらないが仕方ない。

そのまま俺は待った。雪音さんが言葉を発するのを。

許すか許さないかを決めるまで、ただ静かに頭を下げ続けて待った。

どれぐらいそうしていただろう。何となくその場に流れる空気が変わった気がした。

それまでのどこか重たさがあるものが軽くなるような感覚を覚えたのだ。

「……頭、上げろよ」

そんな時間こえた言葉にゆっくりと頭を上げる。そこにはこちらからは顔を背ける雪音さんがいた。

「その、何だ。今のであたしの気持ちも何だか静まった。でも何て言うか、複雑な心境ってやつだ」

「そうか……」

また沈黙が訪れる。俺も自分の言った事の気持ち悪さに内心で転げ回りがかった。

よりにもよってとんでもない事口走ったと思う。三十間近のおっさんが十代の少女へ何て事カミングアウトしてんだよ、ホントに。

あゝっ！ 出来る事なら大声で叫び回って転がりたいつ！ 意味もなく奇声を発してしまいたいつ！

「イイ歳したおっさんがクリスマスちゃんとか何言ってるんだ！ 親戚の子とかでもない限り十代後半にそんな呼び方しないぞ！」

「せめて俺が四十代とか五十代ならまだしも、三十もいってないのにちゃん付け呼びはないだろうっ！」

「……呼べよ」

俺が声にならない声で心の中で叫びながら転がっていると、そんな言葉が聞こえてきた。

聞き間違えかと思って雪音さんの事を見つめっていると、その頬がゆつくりと赤くなつていく。

「呼べって……何を？」

「っ……だから呼べって言うてるんだろ」

「えつと……？」

「~~~~~っ！ 名前で呼べつつつてんだろ！」

真つ赤な顔で怒鳴られてやつと理解出来た。どうやらクリスマスと呼んでよしという事らしい。

「い、いいのか？」

「あ、あたし様がいいって言ったんだ。それをひっくり返すつもりはねえ」

「あんな気持ち悪い事や触れられたくない事を言ったのに？」

「……でもそれをあんたは今まで黙ってただろ。あたしがそういうの誰にも言われたくないのを知ってるんだから、それをネタにからかったり出来たのに」

その言葉の後に何か小さく呟いたみたいだけど、俺には残念ながら聞こえなかった。

ただ、雰囲気からきつと悪い事ではないらしい。それだけは伝わった。

と、そこでクリスマスの目が俺の顔から手元へ移った。

「そーいや、ずっと気になってたけどそれ何だよ？」

「ん？ ああ、忘れてた」

クリスマスの指摘で俺は持っていた袋を思い出した。中身を取り出そうとして、俺はちよつとだけある大人を意識してみる事に。

「クリス、腹減ってるだろ？ これでも食べる。毒は入ってない」
「は？ あんぱんと……牛乳……」

俺の手にある物を見てクリスの表情が訝しむものから何かを思い出したような顔へ変わる。

それに小さく笑みを浮かべて俺は持っていた物をその手へ渡した。

「最初に店へ行っただ。立ち寄った可能性があるかもって」

「……そうかよ」

小さく笑みを浮かべながらクリスはあんぱんの包みを開けた。その表情は懐かしんでるようにも見え、嬉しそうにも見えた。

と、何故か彼女はあんぱんを半分に割ってこちらへ一つ差し出したのだ。

「これは？」

「毒が入ってないってんなら目の前で食べよ。おっさんはそうしたぞ」

ニヤリと笑って告げられたのは詰めが甘いぞという暗黙の指摘だった。

やはり俺なんかが真似出来るような大人の男ではないようだ。そう思っただけは両手を軽く上げてからあんぱんを受け取る。

しばらく静けさが室内を包んだ。隣り合って布団に座りながら半分に割ったあんぱんを食べる。

牛乳はさすがにクリスだけに飲んでもらおう。俺は後で水でも飲もうと、そう思っていた時だった。

隣でストローで牛乳を飲んでいたクリスがチラリとこちらを見たかと思うと、少しだけ照れくさそうに牛乳パックを差し出してきたのだ。

「ほら、あんたも飲めよ」

「え？ いや、俺は水で」

「いいから飲めよ。あんたの金で買ったもんだろ？ ならこれも半分はあんたのもんだし、あたしがそうしたいんだ」

こう言われてしまっただけは断るのもどうかと思う。なので遠慮なく受け取り、ストローの先端を触らぬようにして抜くと、若干パックを

口から離して上へ持ち上げる。

「……マジかよ」

飲み辛いけどこれなら間接キスを阻止出来る。少しだけもらい、パックの向きを戻すと再びストローを飲み口へ差し込んだ。

「ありがとう」

「……いらねえ気を回すんじゃないやねーっての。あたしは気にしない……って事もねーけど煩くは言わねえぞ?」

「俺が狼狽えるんだって。実際以前響へ弁当を少し食べさせた時、何も考えず俺の使ってた割り箸で食べさせた事があって……」

食べさせた後に気付いたんだよなあ、あの時は。おかげで何というか複雑な心境で弁当を食べたもんだ。

「はあつ!? じゃ、何か? あんたはあのバカとは間接キスしても良くて、あたしとは嫌だったか?」

「ええ……どうしてそうなるのさ……」

「だ、大体直接キスする訳じゃないならどうだっていいだろ! 男ならな、んな事気にせず過ごしやがれってんだ!」

「俺は良くてもクリスが気にするだろ?」

「っ!? う、煩く言わないって言っただろ」

「いやいや、気にはするって」

「男の癖に細けえ事言うなっ!」

近未来から来た割に中々差別的な物言いをするなあ。ま、いいけど。実際俺もそうかもと思いついてたし。

「分かった。じゃ、もう一度飲ませてくれ」

「へっ? お、おう」

クリスの手からパックを受け取り、今度はストローを使って飲む。その瞬間クリスが息を呑んだ気がした。

「……ふう、旨い。ありがとうさん」

「あ、ああ……」

若干呆気にとられたようなクリスへ俺はしたり顔を向けた。

「俺だつて男だからな? クリスみたいないな可愛い女と間接キスってなれば喜ぶ以外の選択肢はないんだぞ?」

「なっ!？」

「ま、これに懲りて男を変に煽る様な事は」

控えるようにと、そう言おうとした時だった。

「そ、そうだよな。あんたも男、なんだもんな」

隣から神妙な声が聞こえてくるのではないか。どうしたのだろうか。顔を向ければ、そこには真っ赤な顔をして牛乳パックを見つめるクリス。

「クリス……?」

「……な、なあ、その、あたしと話す時絶対目を見てくるのは、胸を見ないようにつて事、なんだよな?」

心臓を掴まれたような気分になった。いや、実際その通りなので何も言えないのだが、まさかこんな状況で聞かれるとは思わなかった。

クリスの性格上こんな事は察しても問い質す事はないだろうと思っていたからだ。

「正直さ、バイトの時には薄々気付いていた。あんたはあたしが、いや女が嫌がる事を知つてて行動してんだろうなつて」

「そ、そうか」

「ああ。あのスケベ野郎がいたおかげでよく分かった。あんたはあたしの胸を絶対見ない。いつも目を見て話す。その理由がああなスケベとは真逆だつてな」

少しだけ嬉しそうに言つてクリスが笑う。

「ホントは見たかつたんだろ?」

「……まあ。でも、アニメとかで十分見たし」

「現実に見れるつてなつてもどうでもいいつて?」

ニヤニヤした声でそう問いかけるクリスは完全小悪魔だ。

なので俺は抵抗せず両手を上げる。

「ははっ、そうそう。人間素直が一番だ。やつとあんたから一本取れた気がするぜ」

「そうでもないだろ?」

実際これまでの生活で何度も俺はクリスに注意や助言を受けている。

「はあく……ほん……つとうに鈍いな、あんたは」

呆れたようにそう言ってからクリスは苦笑する。その顔はとても可愛い。

「ま、いいき。そうそう、これだけは言っておく。こ、これからはあんなならスケベな目であたしを見ても許してやるよ」

「へ?」

「だ、だから、もう変な動画とか見るんじゃないやねえ。そういうのも金がかつたりすんだろ? む、無駄な金使うなよ……」

「えくつと……」

これは、あれか? 自分がそういう事 of 材料になってもいいからエロ動画を買うなって、そういう事?

でも、それって彼女とかの考えや意見で……と言うかちよつと待てっ!?

「く、クリスっ!?! じ、自分の言っている事分かってるのか?!? てか、どうしてエロ動画の事を!?!」

「はっ! あたし様はこう見えても大人の汚えとこを見てきてんだ。あんたぐらいの歳の男の考える事なんざあお見通しだったの」

真つ赤な顔で強がるクリスだけど、もう何となく読めた。きつと翼が漏らしたんだ。

つて事は、多分響にも知られてる。あくつ、死にたい。死んでしまいたい。

「だから……つて、おい。そ、そんな沈んだ顔すんなって」

「無理……。これ、そつちで例えるなら、本当は名前で呼びたいって練習してるところを響や小日向さんに見られたようなもんだ」

「ぐっ!?!」

少しは俺の気まずさや心境を分かってもらえただろうか。クリス、男つてな、意外とこういうところは繊細だったりするんだ。覚えておいてくれ。

「と、とにかく元気だせつての。その、あたしじゃ、不満か?」

……ズルいよなあ。気弱そうな声でそんな台詞男に吐いたら押し倒されても文句言えないつての。

だからこそちゃんと注意をしておく。

「クリス、今のは絶対好きな相手にしか言わないように。じゃないと」「わ、分かっているっての。でもさ、あんたはこう言ってもスケベ全開にはならねーでくれる、だろ?」

信頼が嬉しくもあり辛くもある。俺だって色々忘れて欲望に忠実に動きたいって思わないでもないんだぞ?

その気持ちを視線に込めてクリスへ向ける。と、何故か彼女は赤面して視線を上へ向けた。

「そ、そんなに熱っぽく見つめんな」

「……うん、今のは俺が悪かった。信頼には可能な限り応えるけど俺は君が特別視してる人のような男じゃないって分かって欲しい」

「は? あたしが特別視している男……?」

俺の言葉に怪訝そうな顔を見せるクリスだけど、それがあつ瞬間真っ赤に変わった。

「な、何言ってるんだっ! あたしは別におっさんの事を」

語るに落ちるとはまさにこれ。告白と言うか自供と言うか、とにかくクリスは意外とこの手の方面は弱いらしい。

「俺、何も司令さんって言ってるじゃないけど?」

「っ?!」

絶句。そして俯いて沈黙。いかん、ちよつと追い詰め過ぎたか。

「えっと、クリス? 今の俺もちよつと調子に乗り過ぎた。その、だから……」

人の恋心へ踏み込み過ぎたと気付き、俺は血の気が引くような気持ちでクリスへどう謝ろうとかと言葉に困った。

すると、そんな俺へクリスはゆっくりと顔を上げて目を合わせてきた。

「……勘違いすんなよ? あたしはたしかにおっさんの事を他の奴らとは違う扱いしてる。でもな、それは色恋とかじゃねえ」

その声は自棄になったとか観念してとかのものじゃない。噛み締めるような、そんな声だった。

「まあ、少しはあんたの予想通りそういうのもあつたかもしれない。

でも、今のあたしはこう言える。それは、淡い想いってやつだって」「淡い?」

「ん。何て言えばいいんだ? おっさんは気になるってか、頼りになる大人って感じた。これは、多分父親とかに思うやつに近いんじゃないかって、思う……」

「成程……」

遅しく父性に溢れる弦十郎さんに父を見た、か。納得出来てしまう。クリスは確実に父性や母性に、もつと言えば家族に飢えてるだろうから。

「でも、これまでのあたしはこれに気付かなかった。いや、違うな。女が男に惚れるってやつをちゃんと分かったからだ」

「そうなんだ。それはやつぱりここでの時間で?」

「以外にあるか?」

そう言っただけクリスはこっちへ笑みを見せた。とつても可愛くて守りたくなるような、そんな笑顔を。

「……もしそうならこの状況も少しは君達へ良い事があつたんだと嬉しく思うよ」

「まったくだ。アルカ・ノイズも錬金術師もいねえ。訓練もなけりや呼び出しもない。まあ紛争は絶えないみたいだが、それは完全人間だけで何とか出来るもんだ。錬金術師もアルカ・ノイズも関わらないなら、な」

そこでクリスは立ち上がった。

「ここはあたしらの一種理想の世界だ。だからこそ、あたしはここを守りたい。悪意だか何だか知らねーが、ここに特異災害なんて言葉を生み出させてなるかってんだ」

「クリス……」

まるでそれは誓いに聞こえた。それも俺に対しての。

「さてと、帰ろうぜ。今のあたしらの家に」

そう言っただけこっちへ振り返ったクリスの顔は、とても晴れやかなものだった。力強くて凛々しくて、でもどこか愛らしい、そんな笑顔だった……。

アパートを後にして隣り合って歩く仁志とクリス。来る時とは真逆の雰囲気です。歩くその姿は、さながら仲の良い兄妹か、あるいは歳の差カップルか。

それでも少しだけ仁志がクリスの後ろを歩いている。それがどういう考えからかを察し、クリスは小さく苦笑していた。

「まったく、男らしいかと思えば普段はそうじゃねえ。ま、いいさ。決まなきゃいけない時だけでも男らしくなれるなら」

仁志はお世辞にも逞しくなどない。頼りがいもないと言える。それはクリスが父性を感じた男性と大きく異なっていた。

だからこそ、クリスは分かったのだ。自分が何故響や翼へ嫉妬にも似た感情を抱いたのか。何故仁志へ恨みのような感情を抱いたのか。

弦十郎は意識せず父性を出せる。対して仁志は意識して何とか父性を出せる。つまり仁志はクリスから見ればやはり異性の男なのだ。

独り身の男が何とか年下の少女達の保護者であろうと奮闘しているとしかクリスには見えない。それ故、彼女はそんな男の姿に好感を抱き、好意を抱き、不意に見せる男らしさに心をときめかせるようになった。

（多分、今のあたしは恋、してんだ。おっさんと生活するなんて考えた事ねーけど……）

そつと後ろを振り返るクリス。そこには自分を優しく見つめる仁志がいる。

「ん？ どうかした？」

「……何でもねえ」

顔を赤めるも少しだけ笑みを浮かべてクリスは顔を前へ戻す。

（こいつとは考えられちゃうんだよな。きつとこれが、恋ってやつなんだ……）

共同生活をした事もあり、クリスの中には仁志との生活が容易に思いつかぶのだ。

ただ、それは今のような部屋ではなく彼女が本来の世界で暮らす部屋。

そこでS・O・N・Gの仕事を終えて帰ってくる自分を仁志が出迎えてくれる光景。それを思い浮かべてクリスは息を吐いた。

「……バイトぐらいしてもらわねーとな」

「何か言った？」

「何でもないっての」

今度は振り向く事なく告げ、クリスは笑みを浮かべた。そんな彼女の後ろ姿を見つめて首を捻る仁志であったが、感じられる雰囲気は明るくなっている事に笑みを浮かべる。

そうして部屋へと戻った二人だったが、そこには予想もしていない存在が待ち構えていた。

「よっ。何だかとんでもない事になってるって？」

二人を出迎えたのは困惑している響に翼、そしてどこか楽しげに笑う赤髪の女性だった。

「な、何でここに……」

「あ、天羽奏さん？」

そこにいたのは仁志さえも会う事はないだろうと思いついでいた天羽奏。

その彼女は仁志の問いかけに笑顔のまま頷く。

（まさかの人が来たよ……。でも、これって不味い事になってるって事じゃないか？ 平行世界の装者だぞ？）

その仁志の考えを肯定するかのように彼らのいる部屋の上で黒いもやのようなものが蠢く。

——失敗、か。やっぱあれぐらいじゃ無理みたいね。もう少し様子を見る事にしましょ。

逆光のリゾルヴ

「定期報告に行ったらマリアと会ってき。妙な顔してたからどうしたんだって聞いたたらここの事を教えられたんだよ。何でも翼達の事を詳しく知ってるんだって？」

「まあ……」

DKでクリスと響が夕食の支度を始める中、俺は四畳半の方で翼と共に天羽さんと相対していた。

ちなみに夕食は「豚しゃぶ」だそう。成程、牛肉程高くなく旨味も栄養価も高い上美味しい。野菜なども用意し、鍋に出汁を張ってそこへ先に野菜を入れて煮ておいてから豚肉を潜らせて巻いて食べる方法との事。

なので今室内には野菜を刻む音や響がスライサーで人参などを千切りにする音が聞こえている。

「じゃあ、あたしの事はどうだい？ ほら、翼達の方じゃあたしは、さ」「えっと、俺が君の事で知ってるのは響達と出会った時からだ」

「成程ね。じゃ、あたしが翼を失ってからの事やその前は知らない？」
これは、どう答えるべき、だろうか。天羽奏の事も一期は多少描かれた。そこには正直言いたくない事もある。

一番は彼女ではなく根幹世界の天羽奏の家族を失う原因がフィード、つまり櫻井了子である事。

でもこれははつきり言ってダメージ受けるの響なんだよなあ。しかもそこにあつたのが神獣鏡って言うね。これは言う訳にはいかないな。そもそも必要もないし。

「……一部は知ってるだけ」

「一部？」

「何故装者になったのか。どうやってなったのか。その辺りだよ」

俺の言葉で天羽さんは納得するように頷いたけど、翼だけは何かに気付いたのか息を呑んでいた。

もしかして俺の言い方で何か隠してるって分かった？ 有り得ないと言えないのが俺らしい。

正直心苦しいんだよなあ。あの頃は創られた物語だと思っていたのが、今や本当にあつた事でその人達の人生ですと言われているんだ。つまり俺は一気にあのシンフォギアに出て来たキャラクター達の人生を一部とは言え覗き見た事になる。

しかも、本来ならその本人さえ知り得ない情報も得ている事があるんだから。

「じゃ、デュオレリックの事はどうだい？」

「知ってるよ。ブリーシングガメンや天叢雲剣、ミヨルニルにネフシユタン。そういう……完全聖遺物、だっけ？ それをギアを纏った状態で使用する事だ。それと、そちらの世界ではパヴァリア、アダム率いる錬金術師達と秘密裏に手を組んでいる事も」

そこまで告げると天羽さんの顔から笑みが消えた。

「か、奏、只野さんは敵じゃないから。この人は私達の事を創作物の人物だと思って見てきた人で」

「聞いてる。いや、聞いてた。まさかここまでとはね。本気で嫌になるな、これ。ホントに神様じゃないかって思うよ」

「二つだけ言わせてもらうなら、今でこそ俺しか知らない事だけど本来なら何万人以上の人が知ってる事だったんだよ、今のは。君が力を求める挙句響のギアを盗んで纏おうとした事なんかもね」

絶句。天羽さんはこの短時間で一気に笑みを失い頭を抱えていた。

好奇心は猫をも殺すって言うけど、こういう事なんだろうか。

とにかくこれで分かってもらえただろう。この世界が彼女達にとって異質であつた事と、本来関わるべきじゃない事が。

「只野さん、少し言い過ぎです」

「いいんだよ翼。要はあたしへ怒ってるんだ、この人は。安易な気持ちで首を突っ込めば痛い目見るのはこっちだぞって」

「そういう事。響達の時は状況的に仕方ないから俺も色々配慮したし注意もした。だけど君は平行世界の人間なのにわざわざここへ来て、それも興味本位で首を突っ込んだように見えた。そんな相手にまで優しく出来る程俺も人間が出来てない」

はつきり言い切る。もしこれが最初のクリスや翼のような態度な

ら俺も心を砕いた。だけど天羽さんはどこか観光にも近い印象を受けた。

多分だけど彼女はどこか事の重大さが分かってないんだと思う。おそらく響達の世界を訪れてそのままここへ来た。じゃないとこんな軽薄さはないはずだ。

「ははっ、本当にそっちの言う通りだ。ごめん、謝るよ。あたしはどっかであんたの事を試してた。神様みたいに何でも知ってるはずなんてないって」

「気持ち分かるよ。それと俺だって何でも知ってる訳じゃない。平行世界の天羽奏がどうやって生きてきたかも、響達の世界の天羽奏がどうやって生きてきたかも断片的にしか知らないんだ」

「……みたい、だね。あたしの質問に答えてくれてありがとう。下手に遠慮されるよりも良かったよ。ガツンと言ってくれてさ。これなら翼達を預ける相手として安心出来る」

「奏……」

翼へ優しい笑みを浮かべて天羽さんは頷く。そうか、彼女なりに俺が翼達と共にいるに適してるか確かめたのか。

となると、最初から全て計算して……？ うん、あの神算鬼謀な弦十郎さんの部下だけある。

「その、君の懸念はもつともだ。俺みたいな男が彼女達と一緒に暮らしてるって聞けばそりゃ心配にもなる。大人げない事をしてすまない」

「いいって。マリアの話を聞いてると不安しかなかったもんだからさ。何せ響やクリスをあつという間に懐かせたって」

「え（は）っ!？」

その一言でそれまでこちらの様子を眺めていただろう二人が同時に声を出した。

「どうでもいいけど、せめて刃物から手を離しなさい。危ないだろう。」

「そ、そんな事をマリアが？」

「そうだよ。絶対騙されてる。もしくは本性を隠してるに違いないっ

て」

「あー……」

なんだかんだで響もクリスマスも優しく良い子だ。俺の年齢と状況だけ聞いてイヴさんはロクでもない男を想像しているんだろう。

ある意味で間違っていないけど、おそらく彼女の場合は人間的な面も最悪な人物のはずだ。

そして、そんな駄目男にまだ学生の二人が欺かれてると思ったのだ。

「あー……って納得しないでくださいよ只野さんっ！」

「そうだぞー！ お前はそれでいいのかよ！」

「いや、だって普通に考えればこの状況で何もしない男ってのもどうかと思うだろうなあっ」と

「そうそう。それも言ってた。すぐに手を出すと二人が逃げるから、しばらく我慢してから少しずつエロい事をしてくんじやないかってさ」

「か、奏えっ！」

少しずつエロい事と言いながら天羽さんが手をいかがわしい感じで動かした。

それに翼が赤面しながら立ち上がり、響とクリスマスは真っ赤な顔で俯きながら作業へと戻った。

うん、見事なまでに初心な反応だ。おじさんとしてはそのまま欲しいような、もう少し成長して欲しいような複雑なところである。

ま、それはそれとして、未だにスケベな顔と手付きをする美人を止めるとしよう。

「天羽さん、そこまで」

「つと」

右の手首を掴む。それで天羽さんの動きが止まり顔が普通に戻った。

「嫁入り前の美人がする事じゃありません」

「嫁入り前の美人って……まあ嫁入り前はそうだけどさ」

頬を搔いて困惑する天羽さんだけど、彼女ももしかしてあれか？
異性に正面から女性として褒められた経験が少ないんだろうか？

よくよく見ると彼女の私服はやや開放的過ぎる。今日の翼と同じで胸元が少しだらしない。よし、それをまずはとっかかりに行動を大人しくさせよう。

「あのさ天羽さん。一ついいか？」

「何？」

「その格好、結構大胆だぞ。普通の男の前には、だけど」

「そ、そう？ 別にそこまででもっ!？」

論より証拠。ならば耐えてみよとばかりに胸元をガン見してやる。まあ真顔なのである意味で怖いだろうけど、それでもやはり天羽さんは瞬時に胸元を隠して……。

あれ？ 何だろうか、この周囲から感じる冷たい視線は。それも三対あるような気がしますけど……。

「「じー……」」

視線を動かして見れば、響達がまるで月読調のような行動を取っているではありませんか。

ただ、一様にジト目へ若干の怒りが宿っている。これは、あれか。例え真顔だろうと女性の胸元を凝視するなという事だろう。

「すみません。もう二度とやりませんのでお許しを」

「「……ならいい(です)」」

頭を垂れて心の底から己の浅慮を詫びると三人からお許しの言葉が出た。

「あつはっは、何だ何だ？ あんた達、結構いいチームじゃないか」
で、そんな俺達を見て天羽さんが楽しげに笑う。

俺がその声に顔を上げると天羽さんと目が合った。

「只野さんって言ったっけ。あたしはあんたを信じるよ。何より翼達がかっこまで打ち解けてるんだ。なら悪い人じゃないさ」

「まあ聖人君子ではないだろうけど極悪人でもないとは自負してる」

「ふふっ、何だよそれは。まあいいよ。うし、あたしからリアアへは言っというてやる。心配し過ぎだ。そこまで疑うのなら自分の目で確

かめに行けつてね」

「そんな事言うとな当に来るから出来れば止めて欲しいんだけどなあ」

正直今の状態で精一杯だ。しかも来月からは俺もここで暮らす事になるのだから。

「まあ、この狭きで四人は厳しいか」

「えっと、その場合は五人だったり……」

「は？」

気まずそうに響がそう言った瞬間、天羽さんが怪訝そうな表情へ変わる。うん、まあそうだろうなあ。

そこから翼が説明を開始。それを最初はまだ怪訝な顔で聞いていた天羽さんだが、途中からは呆れ、最後にはやや怒り顔となっていた。「あのさ、いくらこいつが信頼出来るからってあんた達何考えてんだ」「ごもつともです（だ）……」

今、俺達は揃って四畳半の部屋へ正座している。その前には仁王立ちの天羽さん。

「いいか？ あんた達は互いにもう子供じゃない年齢で、男の方はまだまだ働き盛り、女の方はこれからより女として成熟してく。これで問題が起きないって確信出来る方がどうかしてるんだよ」

「「はい……」」

「いくら財政的に仕方ないとはいえ、そしてこれまでの事で何もなかったとはいえ、それが今後もそうとは言えないだろ？」

もう、見事なまでの正論であり一般論である。俺はおろかクリスや翼さえも返す言葉がない。

どうやら俺達はこの半月程の共同生活でその辺りの感覚が麻痺していたらしい。そう天羽さんの言葉を聞いて思った。

「で、でも奏。今までと違ってこつちじゃ私達が生活する拠点さえ用意するのが厳しくて」

「それは分かるよ。でも、だからってこんな狭い空間で適齢期の男女が寝泊まりなんて見過ごせない」

「じゃ、じゃあどうすればいいんですか？」

「そ、そうだけ。言つとくがここ以上の条件はないんだつて」

「ま、まあ俺は最悪今の部屋も借り続けて生活すればいいよ。たまにシャワーを貸してもらつて」

「それは駄目です(だ)」

何故か俺の案は最近却下傾向だ。おかしいなあ。少し前ならほぼほぼ通つたはずなのに。

「あたしはそれでいいと思うよ。で、ここの家賃はここにいる間翼達で何とかする」

「それは、うん。そうするつもりだけど……」

「で、只野は今暮らしてる部屋で生活を続ける。立ち退きとか取り壊しとかなつたらその時はそのアパートから多少便宜を凶つてくれるだろ?」

「それは、まあ……」

多分そうなるはずだ。最低でも何らかの支援はしてもらわないと俺だつて黙つてないつもりだし。

「とにかく、只野がヨボヨボのじいさんならともかく働き盛りの男人以上、あたしはこの環境での同棲みたいな事は許さない。これをもし強行しようつて言うならマリアやあんた達のとこの旦那へ報告するよ」

「えつと、その辺はそういえばどうなつてるの? 引つ越した事は伝えたんだよね?」

響とクリスが来た際は許可を取っていた。翼が来た時もおそらく許可は出てると思うが、それはあくまであのボロアパートの時。

この部屋はそれと環境などが異なるから判断も変わるかもしれないと思わなくもないんだけど……。

「お、おっさんは許可を出したぞ」

「未来もです!」

「奏、これでも?」

三人の言葉を聞いて天羽さんは目付きを鋭くする。あ、これヤバイ流れだ。

「それ、ここへ引つ越す前だろ? そつちの旦那達は今、あんた達がこ

「こんな狭い部屋で寝食を共にしようとしてるって知ってるかい？」
沈黙。え？ 嘘？ この前戻った時に報告してないの？

その意味合いで三人へ目を向けると、彼女達は揃って肩身が狭そうに顔を背けた。

「じ、実はあ……」

「あん時はあんたの予想を報告する事で話題が終始しちまって……」

「お、思えばここへの引越しの事を言い忘れていました」

「なん……だと……」

後頭部をハンマーで殴られたような感覚とはこの事だ。

クリスと翼がいながら何やってるの？ 響だけなら仕方ないかもしれないけど、せめて君達はちゃんとしてくれないと困るよ。

「やっぱりね。旦那達はあんた達が六畳ってまだそれなりの広さにいると思ってるから許してんだよ。今の状況を聞いたらいくら旦那でも悩むだろうし、あの子なんか絶対許可なんて出さなはずさ」

そこで天羽さんは大きいため息を吐いた。俺も同じ気持ちだ。まさか結果的にとはいえ騙す形になりかけていたなんて。

「天羽さん、悪いけど戻ったらこの事とさっきの案を報告してくれるか？」

「只野さんっ!?!」

響が驚いた声を出すけど仕方ない。家賃よりも大事なものがある。

「みんな、俺達は少し勘違いしてたかもしれない。あの部屋は壁も薄いし部屋もそれなりの広さがあった。だから問題も起きにくいし、仮に問題を起こしても周囲にすぐに気付かれるだろうって、そんな気持ちや考えが潜在的にあったんだ。ここは、そう考えると不味い方向だ。壁は多少厚くなってるのに部屋は狭い」

「……只野さんの言う通りですね。私達は少し冷静になるべきかもしれません」

「翼さんまで……。く、クリスちゃんは？」

「あたしも先輩達と同意見だ。でもな、一つだけ言わせてくれ」

そう言ってクリスは天羽さんを見つめる。

「いくら今はあたしやこのバカもバイトして収入があるって言って

も、んなもんたかが知れてるんだ。ここの家賃や水道・光熱費、食費。それらを賄うってなると結構苦しいんだよ。しかもだ。こんな事言いたかねーがたまには息抜きだってしたいんだ。そのための交遊費だっている。で、あたしら二人のバイト代より多少色が付くぐらいのこの人だって同じだ。ギリギリなんだよ、色々」

「そうなんですっ！ それに、もし只野さんが病気になって倒れたら深夜のシフトが破綻するんですっ！」

「……そうなの？」

天羽さんの軽い驚きに静かに頷く。実は俺はあの店にバイトとして入って一度だけ風邪を引いた事がある。

休もうと思っただけど、俺が休んだらオーナー一人で大量の荷物の処理をして通常業務もやるんだなあと思うと休めなかった。

結局マスクをして風邪薬を休憩中に飲んで、そんな感じで休まず三連勤した事がある。あの時はマジで死ぬかと思ったなあ。

「そして、今ならあたしらも一気に厳しくなる。もつと言えばな？ その人が死んだらあたしら全員アウトなんだよ」

「はっ？」

「奏、聞いてないの？ 実は……」

そこで翼からこれまでの推測が説明され、天羽さんは顔色を失っていった。

「どうやらイヴさんもその推測を伝えていなかったらしい。」

「で、全てを聞き終えた天羽さんは今度こそ頭を抱えてしまった。」

「嘘だろ……。あたし達の存在って、そんな簡単に消せるもんなのか？」

「エルフナインちゃんと言うには、ここは上位世界って言って私達からすれば神様の世界みたいなものなんです」

「で、この人の話だところこじじゃあたしらの戦いや何やらが映像になってたんだと」

「映像……」

「アニメだよ。もしくはゲームとか」

俺の説明で天羽さんは響達へ本当かと問う様に顔を向けた。で、

返ってきたのは無情な頷き。

「奏もさつき聞いたでしょ？　只野さんは一般人なのに機密に当たる事さえ平然と知ってるの」

「……だよ、な。それに、あの世界蛇との戦いさえも知ってるんだ。これは、あたしも本気で一度帰って旦那や子さんへ相談しないと」

真剣な表情と声で告げる天羽さんだけど、俺としてはその前に一つお願いしたい事がある。

「天羽さん、もし自分の世界へ戻るならその前にイヴさんと会って話をしてくれないか？」

「……いいよ。さつきの事だろ？」

「それだけじゃない。こうも言っておいて。相手の狙いがこつちだけと思わないで欲しいと」

その瞬間天羽さんだけじゃなく響達も息を呑んだ。

「世界蛇で思い出したんだよ。ウロボロス、だっけ。あの構成員は全滅してないんだ。それとベアトリーチエの傍付きの眼鏡の男。あいつもベアトリーチエと似た事を言い残して死んだ。で、もしあいつも今回の事に関わってるとなるとその残党を組織して連携のような行動を取りかねない」

そう、あの風鳴弦十郎さえもすぐに倒せない相手の眼鏡の男。そんなのが更なる力を得て復活でもしたら、そしてカルマ・ノイズの力を使える奴らが組織立って動き出したら悪意への対応どころじゃない。「今の君達はスクルドがない。もし平行世界を移動中に攻撃されたら面倒だ。特に最近色々落ち着いてるから余計に」

「……そう、だね。分かった。マリア達にも伝えておく」

「そうして。あと、出来れば暁さんと月読さんにセレナちゃんのことへ行くようにも」

「セレナちゃんのこと？」

「読めました。彼女は一番年少で戦いに不向き。一番組み易いと思われる」

「そういう事。あと、眼鏡の奴はミレニウムパズルでセレナちゃんとヴェイグさんに痛い目に遭わされてる。復讐に現れてもおかしくな

い」

俺がそう言うのと天羽さんは凛々しく頷いてくれた。

「ならあたしとマリアですぐに行つてくるよ。こういうのは早い方がいい」

「そうして欲しい。あの子は姉や同じ装者の友人や仲間と会うのが楽しみのはずだ。あの年齢じゃそんな時に警戒しているはずがない」

「しかも今は世界蛇を倒した後、ですもんね」

「そうだね。うし、じゃあたしはこれで帰るよ」

ギアを纏う天羽さんを見て俺は最後にもう一つ頼み事をする事にした。

その内容に天羽さんは首を傾げていたが、もしそうだったらそうすると返してゲートの中へと消えて行つた。

で、それを聞いていた響達はどこか苦い顔だ。

「只野さん、本当にさっきのような事になると思います?」

「可能性は高いと思うよ」

「まあ、あたしらも否定はしないけどなあ」

「そうになったら、奏、きつと思いつきり驚いた顔で来ると思う……」

そう言つて三人共ゲートへと目を向けた。

そこでは、いつものようにあの光景が映し出されているのだった……。

あいつ、只野に言われたようにあたしは急いでまずマリア達のところへと向かつた。

で、まず発令所に行こうとしたら何故かギャラルホルンから少し歩いたところをマリアが歩いてるじゃないか。

運が良いね。そう思つてあたしは見えてる背中へ声をかけた。

「マリアっ!」

「……奏? 何よ、忘れ物?」

「は?」

声をかけたらのほほんとそんな返しをしやがった。おいおい、あたしがここを出てどれだけ時間が経つたと思つてるんだ。

「何言ってるんだ。もうあれから十分以上経ってるんだぞ？」

「は？ 貴方こそ何言ってるのよ。ついさつきそこから出て行ったばかりじゃない」

「はあ!？」

理解出来ないあたしへマリアはため息混じりに腕時計を見せてきた。その時刻はあたしが向こうで見た時間と大きく違っている。

「どう？ からかうならもう少しマシな」

「マリア、落ち着いて聞いてくれ」

「もうっ、忙しいわね。今度は何？」

只野が言ってた内容を話すとマリアの顔がみるみる真剣なものへ変わっていく。

で、まず二人で発令所へ向かう事にした。ここの風鳴の旦那へ報告をしないと不味い内容だしね。

「……分かった。確かにその可能性は考慮すべきだ。実際俺達も今回の事が起きるまでどこか平和ボケしていたようなものだしな」

「すぐに戻ってくるわ」

「あたしらで行けば余程があっても大丈夫だし」

「頼む。それとあちらには今後は定期連絡に来ないように依頼しておいてくれ。代わりにこちらから定期的に連絡を取りに行く」と

「ええ」

こうしてあたしとマリアは急いであの子の世界へ向かった。

幸い何事もなく到着し、あたしは初めてあの子の世界へ足を踏み入れる事になる。

マリアに案内されて進むと立派な研究所が見えてくる。そこでマリアが責任者の名前を出して中へ通された。

案内された部屋にはあの子とやや険しい雰囲気の女性が一人。あれがナスターシャ教授、か。

「姉さんっ！」

「セレナ、久しぶりね」

「よく来てくれました。それと……」

「あ、はじめまして。天羽奏と言います」

「ようこそ天羽さん。私はナスターシャ・セルゲイヴナ・トルスタヤ。ナスターシャで結構です」

「分かりました、ナスターシャさん」

聞いてた通り若干おっかない感じだね。ま、これも表向きの顔って奴なんだろうけど。

そこであたしとマリアから今回起きてる事を話すとさすがのナスターシャさんの表情も変わった。

セレナは最初こそ理解出来ない顔をしてたけど、最後には怯えた顔をしてた。まあ、自分達の存在を知らない内に勝手に消滅させられそうだったなんて聞いて平然としてる方がどうかしてる。

「……信じられない内容ですがマリアだけでなく他の世界の装者も来た以上は事実なのでしよう」

「ママ……」

「セレナ、辛いかもしれませんが今は耐えるのです。幸いこちらはノイズの出現さえもまったくくないと言ってもいいです。おそらくですが、その悪意とやらの影響でしょう」

まさかの意見に耳を疑う。どうしてノイズが出ない事があのむかつくチビの残滓の影響だって言うんだ？

「ママ、どういう事？」

「予想ですが、きつとその悪意は今力を失っているはず。あの世界蛇との決戦。それで悪意はその力のほとんどを貴方達に碎かれました。今はその力を取り戻している途中なのでしよう」

「なら余計ノイズでみんなを苦しめるんじゃない？」

「セレナ、忘れてはいけません。そもそもノイズとは通常出現するのが天文学的な確率なのです。それを無理矢理出現させるにはそれなりの労力が必要です」

「そっか。今の力じゃそれをやっても消耗の方が激しい……」

「きつとそういう事でしょう。天羽さんの世界ではどうです？」

「言われてみれば錬金術師やアルカ・ノイズも大人しいよ。そっか。悪意を、負の感情を吸い取られてるって考えれば分からなくもない、か……」

納得出来た。要はあたしの世界やここが平和であればある程悪意って奴は力を取り戻していつてゐるって事だ。

逆に言えば、まだそいつの力は万全に程遠い。マリアを見れば同じ事を考えてるんだらう、目がこつちへ向いた。

「素直に喜べないわね」

「同感だよ。でも、逆に言えば、だ」

「ええ。面倒事が起きれば不味い」

「そういう事です。悪意の力が戻ればこれまでと同じか、それ以上の災厄をもたらす可能性があります」

「そうはさせないわ。何とかその前にこの事件を解決してみせる」

「でも、どうやるの？ 今度は倒す敵も分からないんですよ？」

セレナのもつともな指摘にマリアが苦い顔をする。つたく、締まらないね。折角妹の前でカツコつけたつてのにさ。

「……何よ？」

「別に？」

「つ……言いたい事があるなら言えばいいでしょう」

そうやって拗ねてる顔も中々可愛いじゃないか。でも無視する事にした。

「セレナ、今度からしばらくここへ直接マリア達が会いに来てくれるからな」

「はい。ちょっと寂しいけど、それまではヴェイグさんとお話します」

「ごめんなさいね」

本当はちよつとじゃないだろうに、強い子だね、ホント。

そこであたしとマリアは帰ろうと思つてたんだけど、まさかの引き留めにあつた。

「あ、あの、姉さん達にヴェイグさんが聞きたい事があるって」

「私達に？」

「一体何だつてんだい？」

「えつと……その只野さんって人はどんな人かって」

「私は直接会つた事はないの。奏、お願い出来る？」

「そうだねえ。まあ、悪い奴じゃないよ。どこか抜けてる感じはしたけどね」

「……優しいかって」

「翼達が信頼するぐらいには、って言えば分かると思うよ」

「一体そんな事を聞いてどうするんだろうね。まあ、あたしに分かるはずもないか。」

「……え、ええつと……いつか会わせて欲しいって言ってます」

「彼が？」

「珍しいね。たしか人間嫌いだろ、そいつ」

「は、はい。でも、興味が沸いたって。神の世界に住む人間を見てみたって」

「気持ちには分からないでもないけど、それってあたしが怒られた動機に近い。」

「ま、いいか。あの人は、只野はヴェイグの事も知ってるみたいだし。」

「こうしてあたしとマリアはセレナ達に別れを告げ戻る事に。ただ、あたしは途中で別行動。元の世界へ帰らないといけないからだ。」

「じゃあな」

「奏、貴方も気を付けてね。今回の事、下手をしたらあの世界蛇絡みよりも厄介だわ」

「かもね。ちゃんと用心するよ」

「マリアと別れてあたしは自分の世界へ戻って急いで風鳴の旦那へ会いに行った。」

「ん？ 奏か。ご苦労だった」

「旦那、聞いて欲しい事がある。出来れば了子さんにも」

「……分かった。少し待っててくれ」

「あたしの雰囲気で察してくれる辺りさすがは風鳴の旦那だ。程なくして発令所に了子さんが顔を出した。」

「なあに？」

「奏、頼めるか？」

「ああ。実は……」

「あたしは自分が見聞きした事と経験した事の全てを話した。」

当然風鳴の旦那や了子さんでさえ信じられないって顔をしてた。それでも、あたしの話最後まで聞いてくれた。

しかも、あたしと違って顔色を失う事なく、だ。ホント、この二人は凄いいよ。

「……上位世界、か」

「私達の事や根幹世界の事がアニメやゲームになんて、ねえ」

「でも本当なんだよ。ただの一般人然とした奴が世界蛇との戦いまで知ってたんだ。例のスクルドって連中の事やミレニウムパズルってこの出来事まで」

「うむ、そうなるとその彼を世界蛇の巫女の悪意とやらが狙うのは当然か」

「しかも、そこには支援出来る組織どころかギアや錬金術もない世界で、頼りになるのが深夜バイトの一般人」

「……厳しいとしか言えないな」

風鳴の旦那が真っ先に弱音を吐くとか相当だ。まあ、あたしも正直どうかと思う。

何て言うか力付くでどうにか出来る事じゃないんだよね、今回。

で、知恵を使ってどうにか出来るかって言うと、それも無理。

本気で打つ手が無いに近いんだよなあ。

「了子君、何かあるか?」

「無理よお。だって西暦さえも違うんでしょ? 下手な技術介入したらそれこそ何を引き起こすか」

「ううむ……」

さすがの了子さんでも出来ない事があるって事か。

にしても、そこで翼は暮らしてるんだよな。

それも、たしか動画配信で収入を得ようとしてるとか。それも歌ってるって言ってたっけ。

ん? 歌ってる……?」

「っ!? 旦那っ! 頼みがあるっ!」

さっきのナスターシャさんの話が本当なら、今のこの世界はあたしが離れても当分大丈夫のはずだ。

それに、早めに何とかしないと不味いなら、あたしに出来る事をしたい。

待ってろよ翼。何のしがらみもない場所で両翼を羽ばたかせるために、あたしもそっちに行くからなっ！

「何だか悪いね」

そう言いながら奏は鍋の中に浮かぶ豚肩ロースを割り箸で搦んで沈ませる。

そのままゆつくりと左右に動かして出汁の中で泳がせていると肉の色が綺麗に変化していく。

「まあいいっての。多めに肉も買ったし」

やや諦め顔でクリスは肉で人参や白菜を巻いて口へと運ぶ。

野菜に染み込んだ出汁がそれらの旨味を吸って極上のスープとなって肉の旨味と混ざり合い、その味に彼女は頬を緩ませた。

「そうそう。鍋は大人数で囲むもんだし」

「立花、この肉はもういいぞ」

「じゃ、もらいまーす」

片手に肉のパックを持って鍋へ投下していく仁志。既に鍋奉行のような状態だが、彼はただ肉を適宜投入するだけの存在と化していた。

そんな中、翼は食べごろになった肉を見つけては響やクリスへ教えてる事を続けている。そうしているのは理由があり……

「た、只野さん、どうぞ」

「え？ あ、うん。ありがとう」

「あ、あーん」

給仕役になっている仁志へ食べさせる役割を引き受けるためだった。

両手を塞がらせながらも常に肉を投入する裏方へ徹する仁志を見て翼が自発的に行っている事なのだが、クリスも響もそれに文句を言う事はなかった。

何故なら、そんな事を続けていれば必ず彼女へストップをかける存

在が今のこの場にはいるからだ。

「翼、それぐらいにしな。どうせ只野は後で自分の箸で食べるんだから。な？」

「まあ……」

「あ、あつたかい内に食べてもらいたいって思ったの！ それに、みんなが食べ終わった後に一人だけなんて悲しいし」

「ご心配なく翼さん。私、まだまだ食べられますからっ！」

「あたしもだ。そこまでガツガツ食べてないしな」

しれつと二人してこの中では小食な部類の翼が食べ終わった後も食事を続ける宣言をする。

要は三人なりの仁志へのアピールが始まっていたのだ。

ただ、明確に恋心を自覚したクリス、淡く恋心を抱き出した翼、まったく自覚のない響という違いはあつたが。

「野菜、そろそろ追加するか？」

「そうだね。もう残りも少ないし」

「じゃ、持ってきてきまーす」

立ち上がって残る野菜の入ったボールを取りに行く響の背中を見送り、翼は視線を向かいの奏へ戻す。

「それで、本気なの奏」

「ああ。もう旦那の許可は取った」

「でもなあ。いくら何でも強引過ぎやしないか？」

「俺は有難いよ。正直天羽さんなら適任だし」

実は奏もここでしばらく暮らす事になったのだ。悪意が力を取り戻す前にこの世界を元に戻すために。

そのため、彼女は仁志に最後頼まれた事を果たすついでに宿泊用意をしてきたのだ。

——あんたの言った通り、あたしの世界も時間の流れが停止してたみたいになつたよ。

そう、仁志が頼んだのは、もしも奏の世界でも経過時間に大きな差があつたら戻ってきて教えて欲しいと言うものだったのだ。

ただ、まさかその報告と同時に奏から自分もしばらくここで暮らす

と言われた時は仁志も言葉を失っていたが。

そして奏はただ暮らすだけではない。翼と二人でツヴァイウィングとして歌い、動画での収益へ役立とうとしていた。

更にもう一つ、彼女の協力する事が仁志の言った適任との言葉へ繋がるのだ。

「あたしも興味あったんだよ。コンビニの夜勤ってやつにさ」

翼が却下された仁志と同じ時間帯のバイト。それを奏がやる事になったのである。

勝気で一般家庭で育った奏なら翼と違っていい意味で緩さも持っている。

酔っ払いなどのあしらいも翼よりも穏便に出来るだろうと仁志は思っていたのだ。

「これでオーナーが夜勤せずに済むよ。俺以外の夜勤は一人で週三だからさ」

「あたしも週三でいいんだろ？ それなら何とかなるさ」

「十分だよ。若い女性だからオーナーも渋るだろうけど、そこはクリスから口添えしてくれ。高校でお世話になった先輩だからお願いしますって」

「分かった。で、それとなく夜勤に向いてるって言つとく」

「頼むな。俺からもそれとなく言っておく。きっと俺へ相談が来るはずだから、その時にオーナー働き過ぎですから少し休めるように人増やしましょうって」

「あの、疑問なのですが、人件費がかかるから夜勤を増やすのは嫌がるのでは？」

翼の疑問に響も頷いた。だが、クリスはそんな二人へ苦い顔をしてこう告げた。

「だけど社員とか責任者いなくても構わない時間はどこだ？」

ぐうの音も出ない正論であった。早朝では意味がないのだ。何故ならそこはそもそもオーナーの出勤しない時間なのだから。

で、夜勤に関しては仁志が週四で入っている。その彼をオーナーは店長のようなものと信頼している。ならばそこへ奏が入って二人で

深夜を回せばオーナーが三日休める日が出来るという訳だ。

「口には出さないけどオーナーも結構疲れてると思う。何せ俺が入ったばかりの頃は早朝からいたんだ。とはいえ、朝のピークがくる少し前の七時からだけど」

「それで深夜まで？」

「昼のピークが過ぎたら一旦帰って仮眠取って、夕勤が来る頃にまた来てた」

「よく体を壊しませんでしたね……」

「本人曰く、倒れたら終わりだと思ってたつてさ。で、俺が夜勤に慣れてきて一人でもある程度出来るようになったらオーナーも少し気が抜けるようになって、深夜は短時間だけど事務所で眠るようになってね。で、去年あたりから早朝は出るのを止めたんだ。というのも本人曰く起きれなくなったらしい。で、以前から朝の時間帯は責任者がいなくても問題なかったから、昼前から来てくれれば問題ないからって朝勤や昼勤がね」

そこで女性達は言葉を失っていた。下手をすれば装者の自分達よりも過酷な事をしている一般人がいるのかと、そう思ってた。

「本当は休ませてあげたいんだけど、さすがにそれは無理なんだ。いや、正確には不安が強いらしくてさ。夕勤の時間はどうしても自分がいないとつて」

「そうなのか？」

翼が夕勤として働いている二人へ視線を向けると、彼女達は揃って頷いた。

「はい、そういう事を言ってます」

「あたしはこうも言われたぞ。あたしが二人いれば夕方もゆっくり出来るんだけどつて」

その言葉を聞いて仁志は何か思い出すような目をした。

「……それ、最近になって言い出してない？」

「ああ。どうして分かつ……そういう事か」

「えっ？ えっ？ どういう事？」

仁志の言い方で何かを悟るクリスとまったく分からない響。翼と

奏は何となくだが察しているのか苦笑していた。

つまり、仁志も似たような事を過去言われた事があるのだ。只野君が二人いれば深夜を任せられるんだけどなあ、とこういう訳である。

「簡単に言うけど、もうクリスマスはオーナーからは一人前扱いって事」

「そ、そうなんだ……」

「お前は言われた事ないのかよ？」

「私？ うくん……立花さんみたいにみんなが挨拶出来たら、うちはもっと売上がるのについて言われた事なら」

「「あ……」」

その言葉に仁志とクリスマスだけでなく翼と奏までも同意するように声を出した。

容易に想像が出来たのだろう。響が元気よく挨拶をしている様子が、である。

「な、何だかそうやって納得されると複雑です……」

「いや、実際俺も響と引き継ぎの時に会うと元気もらえるからなあ。正直響と店で会うのはこことかで会うのとはまた別の元気をもらえるし」

「ほ、ホント、ですか？」

「うん、ホントホント」

優しく微笑む仁志に響は胸がときめくのを覚え、嬉しそうに笑みを見せた。

（えへへ、そっかあ。只野さん、私と同じ事思ってくれてるんだあ）

つい数時間前まで一緒にいたのに店で会うと嬉しくなる。それは響が感じていた事だったのだ。

会話だけ聞けば付き合いたての恋人のようであるが、悲しいかな仁志は男女愛と言うより兄妹愛に近く、響とは大きな隔りがある。

だがそれを本人達が気付くはずもない。周囲は、クリスマスがそれを感じ取るぐらいであった。

その後も、話題は動画配信の次の歌は何にするから始まり、明日仁志が休みなため初めてスーパー銭湯へ行く事に移り変わり、夕食の片付けを終えて仁志が店へ向かうまで会話は尽きる事はなかった。

「じゃ、そろそろ行くよ」

「はい、気を付けて」

「頑張ってください」

「廃棄を食うのもいいけど体の事考えて選べよ？」

「響オススメのシュークリーム、期待してるよ」

「はいはい。じゃ、行ってきます」

「「行ってらっしゃい」「」」

美女四人に見送られ仁志はコンビニへと向かって歩き出す。

その彼の顔はやや赤くなっていた。

(ヤバいなあ。さっきの、まるでハーレムギャルゲーだったよ)

緩む頬をどうしても止める事出来ないまま、仁志は一人夜道を歩く。

そんな彼を見つめるように月明かりの中、黒いもやが不気味に浮かんでいた。

——あれに手を出せば話は早いんだけど……まだ無理、ね。

その声にならぬ声には明確な苛立ちが宿っているのだった……。

君ト云ウ 音楽デ 尽キルマデ

「それじゃ、全員飲み物は持った？」

俺の確認に響達が頷く。その手には百均の紙コップが握られている。

場所は以前も利用したカラオケ店の一室。そこで天羽さんの歓迎会をする事となったのだ。

「それじゃ、戦姫絶唱シンフォギアチャンネル登録者数十五万突破と天羽さんの合流を祝して、かんぱーいっ！」

「こかんぱーい(っ)！」「こ」

乾杯と言いつつ中身は全部ソフトドリンクだったりするのはご愛嬌。

それにしても、受付の店員の視線が痛い何の。

あつ、こいつ前も来たよな。しかもあの時よりも一人美人が増えてやがる。そんな目だった。

あれに優越感を感じられない辺り、俺には縁遠い世界だよな、ハーレムものって。

「さくっと、まずは何から歌ってくれるんだい？」

そんな事を考えながらカルピスを飲んでみると天羽さんが俺の方を見てそう言った。

え？ 俺に歌えって事なの？ そう思っていると何故か響も俺を見ている。

ちなみに今回は長椅子に女性達四人が座り、俺は一人掛けに座っていた。

「只野さん、出来ればこの前とは違うのお願いしますっ！ あつ、でもグリッドマンの歌はいいですよ！」

「ぐりっどまん？」

「私達がとある事件の際に出会った存在だ」

「ああ。巨大ヒーローって奴だ」

「へえ、中々面白い事経験してんだね」

この中での話を唯一知らない天羽さんが二人の説明に興味深そ

うな反応を見せる。

まあ言われてもピンとこないか。じゃ、実物……でいいのだろうか？ まあ彼女達が見たのとは少々異なる雰囲気ではあるが天羽さんに見せてあげるとしましようか。

なので夢のヒーローを入力。その曲名が表示された瞬間、響が嬉しそうに笑った。

「あつ、奏さん！ 今から出てきますよ！」

「は？ 出てくるって……」

音楽と共に画面に流れ始める電光超人グリッドマンの本編映像。それを見ながら響が天羽さんへ説明開始。

さて、じゃあ歌いませようか。合いの手、入れてくるだろうか？

まあ自分でも歌うつもりだけだよ。

そう思いながら歌い始めると何と響が合いの手を入れてくれた。で、それを聞いて天羽さんまでやってってくれるように。

最終的には翼やクリスもやってくれ意外と盛り上がった。

「いい歌じゃないか。さすがヒーローソングって感じだね」

「誰もがみなヒーローになれる。あの戦いを経験すると意味が分かるな」

「ああ、この歌のような奴らだったもんな、あいつら」

「只野さん、こういう歌いっぱい知ってるんです。知らなくてもサビは途中から歌えるものが多いし」

「まあ、ヒーローソングは子供向けでもあるからね。一度聞けばサビだけは歌えるようにしてるものが多いんだ」

特に戦隊ものはその傾向が強い。よし、じゃあ今回はそっちをメインに歌ってみようかね。

響達とのカラオケは正直俺にとって気楽でいい。オタクっぽい選曲でも嫌な顔せず聞いてくれ、むしろ興味を持ってくれるんだ。こんな嬉しくて優しい子達はいない。

お次は翼が天羽さんへ甲賀忍法帳を聞かせた。それに天羽さんは驚き、歌手としての気持ちに火が点いたのかならばと同じ歌を唄って返したのだ。

正直言つて凄かった。翼のが情感メインなら天羽さんののは盛り上がり方メインだった。

サビからの力強さが凄く、まさしく静と動の落差が如実に出ていた。

「どうだい?」

「凄い……凄いです奏さんっ!」

「ああ、先輩に負けてねえ」

「私よりもこの歌の持つ情熱を前面に出す感じだね。そんな歌い方もいいと思う」

「でもあたしは翼みたいにこの歌の情念みたいなのを活かした歌い方は出来ないからね。あたしにはこの歌の気持ちはまだちよつと分からないな」

微かに悔しそうな天羽さんに意外な印象を受けた。天羽さんはこの歌がどういう歌かをもう読み取ったのか。

「天羽さん、この歌難しい?」

「ん? 歌う事が? それとも歌いこなすのが?」

「後者」

「……あたしには難しいよ。これ、古い時代の男女愛だろ? それも戦国とかその辺りの。死生観とかが違い過ぎるし、そもそも恋愛の意味合いも違う。それがあたしには読み取り切れないんだよ」

思わず感心してしまった。たった一度聞いて一度歌っただけでこれか。これが、プロか。

俺と同じ事を思ったのか響とクリスも感心するような表情だ。翼だけは天羽さんの言葉に深く頷いていたけど。

「そうなんだ。少し只野さんに教えてもらったけど、これのテーマは愛する者同士で殺し合うしかなくなつた男女らしくて」

「うわあ、そりゃあたしには無理だ。翼、よくあれだけ汲み取れたね」
「う、うん。正直最初は全然だった。でも、今は少しだけ、少しだけこの女性の気持ちが分かる気がして……」

「へえ……好きな男でも出来た?」

「……分からない。でも、気になる人は出来た」

そう言つて照れくさそうに笑う翼が一瞬だけこちらへ視線を向けた気がする。

で、何故かクリスがやや困り顔で響は疑問符を頭の上に浮かべていた。

天羽さんは翼の視線に気付いたらしく、俺を見てきてニヤアつと笑つた。正直言おう。怖い。

「よし、次は響、行こうか」

「えっ!? わ、私ですか?」

「大丈夫。ガイドボーカルつけるから。ほら、この前俺が歌つて気に入ってたやつ、歌つてごらん」

そう言いながら俺はデンモクで曲名検索からその歌を入力する。

表示されたのはウルトラマンメビウス。この歌詞が響にはかなり刺さつたらしく、結構お気に入りみたいなんだよな。

「はい、どうぞ」

「う、歌えるかな?」

「何なら只野、一緒に歌つてやったら?」

「はっ」

マイクを手にやや緊張気味な響を見て天羽さんがそんな事を言ってきた。いやいや、これデュエット曲じゃないんだけど……。

でも、こちらを見る響はして欲しそうに見える。まあ、仕方ないか。

何せ無理矢理空気を変えるために押し付けたんだ。責任取つて付き合おうとマイクを手にし電源を入れる。

「おっ、いいね。男はそうでなくっちゃ」

「響、分かるなら全部歌つてくれ。で、サビは任せるからな?」

「はい、サビは大丈夫です!」

こうして俺と響によるウルトラマンメビウスの歌唱が始まる。

最初は俺や響を見てニヤニヤしてた天羽さんも、その歌詞を聞いて段々笑みの質が変わっていった。

そう、遠い光の国からやってきたルーキーの歌は押せ押せなカッコイイ歌じゃないんだ。優しく強くあつたかく、みんなを支える歌なんだ。

最後のサビは俺の呼びかけで全員で歌う事にした。すると、何となく妙な感動のようなものが。

「あく、やっぱりこの歌好きです」

「いいよなあ。希望に溢れてる感じだよ」

響の感想に俺も応じる。というか、薄々思ってたけど響の考え方や生き方は平成ウルトラマンのコスモスに近いよなあ。

ま、正確には変身するムサシだろうけど。

「守りたいのはみんなて描く夢、か……」

「奏、少し目が潤んでる」

「いいじゃないか。てか、最後のあれは反則だろ？ みんなで歌うとサビの歌詞が胸にくるんだよ」

「絆は途切れやしないやら仲間を信じていたい、だもんなあ。あたしも若干じーんとしちまった」

おや、珍しくクリスが素直だ。もしこれが歌の効果だとすれば、ウルトラマン恐るべし。

「でもこのちよつとしんみりした空気を変えないとな。て事であたしが歌ってやる」

「おおつ、クリスちゃんが乗り気だ」

「へっ、よく聞いてろよ？」

そう言つてクリスが入力したのは……マジか。

「これは……只野さんが最初の時に歌っていたものか」

「合いの手とラップのところ、あんたに任せるからな？」

「え？ あ、うん。いいけど……」

JUST LIVE MORE、か。たしかにこれは合いの手必須の歌だ。

本編映像の流れる中、クリスの愛らしくも力強い歌声が響く。で、途中から入る俺の声。

天羽さんも初めて聞くのに途中からはサビの合いの手で参加出来る上に最後にはノリノリで歌っていた。

「いいねこれっ！ テンション上がるしノリいいしっ！」

「だろ？ あたしもこういうの嫌いじゃねーんだ」

「絶対これ切歌ちゃん好きそう」

「映像なら眺だけでなく月読も興味を示しそうだがな」

そこで一旦小休憩。何せ今回は歓迎会とツヴァイウイングの動画撮影を兼ねている。

ただ、ここに当然ながら逆光のフリーユージェルは入っていない。なので二人が持ち歌を歌うとすれば本来はアカペラとなるのだが……。

「ギアを下着に？」

「そう。その上から服を着て歌うの。そうすれば……」

「成程ね。やってみるか」

こうして一旦ツヴァイウイングは揃ってトイレへ向かった。多分だけど服を脱いで下着姿となってギアを展開するんだろう。

「只野さん、えつとウルトラマンってどんなヒーローなんですか？」

「試しにデンモクで検索かけたらメチャクチャ沢山名前が出てくるし、どうなってんだ？」

「えつと……」

で、俺達は二人が戻ってくるまで雑談。話題はまさかのウルトラマン。

なので響とクリスへ単純にざっくりした説明をする事になった。

基本は宇宙人で、作品によってそこが異なる事があるものの、本質は光である事を教える。

様々な超能力を持っていて、空も自由に飛行可能。体内のエネルギーを使った光線技などもあり、それは防御にも転用可能。

参考資料としてそこで俺はウルトラマン80を入れた。流れてくる映像と歌詞でウルトラマンの基本みたいなのを教えている辺りでお時間。

「待たせたな。やはり奏が少々手間取ってしまった」

「いやあ、苦労した苦労した」

頭に南国な感じの飾りを付けたツヴァイウイング登場となった。で、俺は演奏を停止する。

「では聞いて欲しい」

「ツヴァイウイングで」

「逆光のフリーユージェル」

そこからは俺にとつちや夢の一時だった。

アニメの一期一話を超えるものがそこにはあった。

響とクリスもテンションを上げてたし、俺も本当に目の前の光景に夢中となったんだ。

本当ならもう揃うはずのないツヴァイウィングが、両翼が、目の前で並び立ち歌っているのだから。

そんな夢のような時間はあつという間に過ぎ、終わった時には以前の翼の時以上に言葉がなかった。

ただ、あの時は言葉にしたいくないだったけど、今回は言葉に出来ないという違いがある。この喜びを、興奮を、どう言語化しようと考えるても俺の語彙力じゃ思い浮かばない。

「どうだった？」

「これなら登録者数も激増するでしようか？」

二人が自信満々の笑顔で問いかけてくる。なので、俺はせめて力強く頷く事で感想及び返事とした。

で、響とクリスも同じタイミングで頷いたので目の前の両翼が嬉しそうに笑顔を見せた。

更にここで天羽さん個人の動画も撮影する事にした。曲をどうしようかと思っただけど、そこは響と同じで若干卑怯な手を使わせてもらう事に。

高山みなみさんがやっていたユニットであるTWO—MIXの曲を聞いてもらって歌ってもらおうのだ。

何せ有名ロボットアニメのOPを歌っていたのだ。ならそこを外す事は出来ない。

天羽さんも翼の時と同じくガイドボーカルで聞いてもらい、一度歌って本番となった。

「……カッコイイ」

響の呟きが全てだった。曲調もあるのかもしれないが、天羽さんは全てがカッコイイ傾向が強かった。

翼もカッコイイのだが、彼女は凛としたもので天羽さんは力強さと

いう違いだろうか。

うん、きつと翼が細身の刀なら天羽さんは西洋剣の重厚さだ。同じ剣でも見た目や戦い方が異なっている。だから同じ歌でも違う風に聞こえるのだ。

「ふくつ……どう？」

「……感想、いる？」

俺はそう言っつて響達三人を見た。天羽さんも苦笑しつつ俺と同じ事をして首を横に振った。

「何だろうね。新鮮な感覚だよ。新曲を真つ先にスタッフじゃなくて仲間聞いてもらうってのは」

「ああ、そうか。そういう感覚だったのか、あの時の私も」

翼が納得出来たとばかりに苦笑する。あー、そうかそうか。普通これまで彼女達は新曲を歌う時はスタッフの前だったはずだ。

それが俺達の前で一種仮歌を聞いてテスト、本番とやってるから妙な感覚に陥ったのだろう。

「奏、今ので満足？」

「満足？」

「翼さんは同じ事やった時、歌い直した事があるんです」

その言葉に納得するように細かに頷き天羽さんは何故か俺へ目を向けた。

「何？」

「あんたはどう聞こえた？ 今のあたしの歌はベストだと思う？」

まさかの問いかけが来た。キラーパスにも程がある。

以前の翼は本人に不安や不満のようなものが見えたけど天羽さんにはそれがない。

その上でこう聞いてくる、か。あれ、これってまた試されてない？

……ならこっちは頓智でお返ししてやる。

「ベストだと思うよ」

「へえ」

「だって、君達プロはその時その時の仕事に全力を出しているはずだ。その瞬間の自分が出る最大限を。なら、それは失敗だろうと何だろ

うとその時の天羽さんのベストだ。ただ、今歌ったらさつきを超える事はあるだろうさ。それは、前回がベストじゃなかったって事じゃなくその経験を踏まえて上回るってだけだし」

「……いいね、そういう考え。あたし、嫌いじゃないよその考え方。その時その時がいつもベスト、か。うん、そうだね」

一瞬間食らったような顔をしてた天羽さんだが、すぐに好戦的な笑みを浮かべてそう言った。

で、マイクを再び手にした。これはそういう事だろう。

「なら歌えば歌っただけベストを更新出来るってとこ、見せてやろうじゃないか！」

どうやらアーティストとしての闘志に火が点いたらしい。翼と響が苦笑し、クリスがどこか呆れていた。

「さあ！ やるよっ！」

髪色のようなやる気の炎を燃やすように天羽さんは吼えた。

そして俺は痛感する。翼と同じく天羽さんもその精神状態というかテンションが如実に歌唱に出るのだと。

何であれだけ叫びそうなテンションで始めて普通に歌えるんだ？
なのにその熱量みたいなものは明らかに一回目よりも高いんだからもう脱帽である。

“お前を殺す” って台詞が淡々とじゃなく “お前を、殺す……っ！”
“になりそうだよ、こんなOPじゃ。”

「あ〜っ！ 気持ちいいっ！」

歌い終えた瞬間ライブ中のMCのような事を言う天羽さんである。
すかさず紙コップを手にし中身を一気に呷った。

「つかあ〜……生き返るね、これ！」

「親父くせえ……」

「く、クリスちゃん……」

いや、同感だよクリス。俺には缶ビールを呷る仕事終わりのOLにしか見えない。

「え、えっと、次は誰が歌うんだ？」

珍しく翼が空気を変えようとしている。いや、これは天羽さんが今

の反応に対して何か言い出す前に曲で阻止しようというやつか。

「じゃ、言いだしつぺの法則で」

「わ、私、ですか?」

「おっ、いいね。翼もこの世界だけの歌を何か歌ってよ」

俺の提案に天羽さんが紙コップへスポーツドリンクを注ぎながら乗って来た。

「というか、もしかしてもう飲み干しそう? ニリッターサイズなのに?」

「こ、この世界だけの歌……。わ、分かった」

「うんうん、頼むよ」

他ならぬ天羽さんのお願いだ。当然翼が頷かぬはずはなく、デนมクを手にしておそらく奈々さんの曲を入れようとしたんだろう。

歌手名検索を選択し選ぼうとしたところで……

「動画にしてない奴でね」

「っ?!」

梯子を外されたのである。しかもにっこり笑顔で。

「か、奏? それじゃ私が歌えるものが」

「只野が歌ったやつが何曲かあるんだろ? 響達みたいになんか歌ってよ」

「た、只野さんが?」

「覚えてない? 一曲も?」

「そ、そんな事はないけど……」

チラリとこちらを見る翼。うん、言いたい事は分かる。

何せ俺が一回目と二回目で歌ったのは見事に特撮ばかりなのだ。

翼としては若干恥ずかしさもあるんだろう。覚えやすいのはどうしても子供向け感が強いしな。

「ならあれを歌ってやれよ翼。俺が入れてやるから」

となると俺がフォローするしかあるまい。天羽さんが何のつもりで翼を困らせたいかは……困った翼が可愛いからだろうな、うん。

そこは同意するしかないのだが、口にする事なく俺は翼が恥ずかしく思わず歌えて、しかも覚えているか思い出せそうなものを選ぶ。

「えつと……がろう？」

「牙狼^{ガロ}って読むんだよ、牙に狼^ガって書いて」

天羽さんの疑問へ答えた瞬間翼があつと言う顔をした。

そう、実は今の質問を彼女もしたのだ。これ、翼が気に入りそうな歌だからと歌ったんだけど、まず名前で反応したんだよなあ。

「翼、行けるだろ？」

「はい。見事金色になってみせます」

俺と翼のやり取りに首を傾げる天羽さん。響とクリスはもう思い出したのか画面の方を見ていた。

これの本編映像はカッコイイからな。大人向け特撮の凄さと迫力、天羽さんにも見せてやろう。

歌い出しから翼はもう世界に入っていた。

守りし者。これが作品の根幹だと軽く教えたら翼は防人の在り方とそれをすぐ重ね合わせた。

騎士は自分には似合わないが剣を持って弱き者達を守るは同じと、そう目を輝かせたつけ。

「行けっ！ 疾風^{かぜ}の如くっ！」

サビに入る頃には翼はノリノリ。で、二度目とはいえその映像に魅入る響とクリス。そして、ぽかーんとする天羽さん。

そりやそうだろう。あの風鳴翼が特撮ソングを熱唱である。しかもその歌詞がどこか防人状態の翼みたいなのだ。

俺はもう色々な意味で楽しくて堪らなかった。こんな光景、二度と見れないだろう。

「闇に光を……」

見事に歌い切り、翼はまるでマイクを剣のように一度腰近くへ下げ、それからテーブルへ置いた。

「最高だったよ翼っ！ 俺、感動したっ！」

「カッコ良かったですっ！」

「さすが先輩だな！ 剣士なんでもっともすぎて納得しかねえ！」

「あ、ありがとう……」

我に返ったのか若干照れが見える翼が可愛い。で、天羽さんと言え

ば俯くように顔を伏せていた。

「奏……う？」

「どうかしたんですか？」

「気分でも悪くなったのかよ？」

傍の三人が一斉に天羽さんへ顔を向けるも、彼女が顔を上げる気配はない。

一体どうしたんだろうと思って見てみると、小さく笑い声が聞こえてきた。

「ふふっ……ははっ……あははははっ！ つ、翼が、こういう歌をあんなに楽しそうに歌ってるとか、くくっ……」

「そ、そんなに笑う事？」

「当然だよ。今の翼はあたしの知らない翼だった。歌手でも装者でも防人でさえない。たまに見せてくれた本当の翼なんだろうけど、でも歌ってる時に翼が素を見せる事なんてなかったからさ」

最後には優しい微笑みを見せる天羽さんに誰も言葉がない。

彼女は今喜んでいるんだ。二人の風鳴翼を知っているからこそ、その変化を目の当たりにする事で。

「これがあたしの知らない時間がそうさせたのか、それともここでの経験かは分からない。でも、これだけは言える。今の翼は良い顔してるよ」

「奏……」

「一人でも飛んでいこうって、そうあたしより先に決意しただけあるね。あたしも負けてられないな、これは」

「うん、奏なら大丈夫。今の奏も、良い顔してるから」

「おっ、言うようになったね」

「私もいつまでも子供のままじゃないから」

ファンが聞いたら感動もののやり取りであり、どこか片翼の装者を彷彿とさせる。

例え世界は違えど、この二人は顔を合わせれば両翼なんだろう。

と、そうやって感慨に耽っていると全員の視線がこちらへ向いた。

「な、何？」

「いえ、今の只野さん、とても優しい顔をしていたので
「そう?」

自覚はない。ただ、目の前のやり取りと光景に心を持って行かれて
ただけだと思っただけだ。

「とりあえず、次は只野さんの番ですよ」

「俺? というか番って……」

「全員一周したからな。スタートに戻るって事だ」

「そうそう。何ならもつと色々見せてくれよ。さっきの映像、カッコ
良かったし」

「歌と共に映像だけとはいえその作品を軽く触れられるのは面白いの
で」

……美女四人からまさかの許しが特撮オタクへ出たぞ。

本編映像を使った歌、ねえ。でも、出来ればこれだけ歌う事が上手
い子達なんだ。JAMとかを教えて一緒に歌ってくれるようになって
欲しい……っ!

迷った挙句、俺はならばと二曲連続で歌う事に。

最初は俺の大好きなヒーローソングを。二番目には知ってる人と
行けば否応なくテンションやら何やらが爆上がりなJAMをそれぞれ
入れた。

「仮面ライダー……?」

「クリスちゃんが歌った歌に出てきたヒーローです! あのスイカへ
入った奴っ!」

「ああ、あれね」

「ただ、デザイン違いが凄まじく沢山あるんだよ」

「これは名前の通り黒が基調になってるヒーローだよ」

一度見てるだけあって軽い説明は出来るのがこの子達の凄いところ。
ろ。

さて、天羽さんはリボルクラッシュを見てどう思ってくれるだろう
か?

そんな事を思いながら俺は歌い始めた。流れ始める古さを感じる
映像。でも、そんな事は俺には関係ない。

分かり易いメッセージを込めた歌詞だけど、これは勸善懲惡を下敷きにそこへ熱さと微かな孤独感を乗せた歌なんだ。

「……どう？」

「え？ ああ、うん。きつと古いんだろうなっていうのは分かった」

まあこんなもんだよな。どこかで分かっていたけど、それでも若干気落ちするって事は俺はどんだけ期待してたんだよ。

「でも、最後の必殺技？ あれはカッコイイって言うか、凄いね。相手の攻撃をあんな風に避けて突き刺すってのもあつてちよつと痺れた」

「……ありがとう」

「へ？」

もう今の感想だけで満足です。やはりオタクに差別的な思考や視線を向けられないだけで女神や天使なんだよなあ。

次は“鋼のレジスタンス”を。これはもうド直球の熱血ソングだ。俺が装者ならエクストライブはこれやGONGだろう。SKILLも捨てがたいが、あれはどうせなら歌うんじゃないやなく周囲で歌って欲しい。

本当は複数で歌う歌を一人で歌う辛さ。しかも女性もいるグループだからキーもキツイ時がある。それでも歌う事を止めない。止めるつもりはない。

そうして歌い終わった時には俺の喉はもう終了のお知らせである。

「だ、大丈夫ですか？」

「……まあ何とか」

「あんな風に声を出していればそうもなります」

「喉から出してるもんね。まあ普通はそうだろうけどさ」

「たしかのど飴買ってたろ？ ちゃんと舐めとけ」

「そうする……」

四人から心配されたけどよしとする。だって幸せだもの、色々。で、俺がのど飴を舐めている間、四人はデンモクを見ては気になった歌をガイドボーカルで流していた。

おそらくランキング系からのそのチョイスはやはり女の子と思うものばかりだ。と、その途中で響が俺の近くへやってきてのど飴を欲

しいと言ってきた。

「龍角散だけど平気？」

「はい」

「そう。じゃ、はい」

「ありがとうございます。……只野さんの好きな味かあ。どんなのだろ？」

最後にやや心配になる事を言っただけ、まあ大丈夫だろう。口に合わなければ吐き出せばいいし。

「な、なあ、あたしにもくれ」

響が席に戻ると同時に今度はクリスマス登場。まあカラオケにのど飴は必需品だもんな。

「龍角散だけどいい？」

「……辛いのか？」

「辛くはないし、どちらかといえば優しい方だよ。もし合わないなら吐き出せばいいから」

「そ、そうする。……は、吐き出す、か。見られたくないし、そんな時はトイレに行くか」

もしもしくリスさん？ 最後の呟き聞こえていますよ？ そう思うもあの子も花も恥じらう乙女なのだ。

そりや俺みたいなおっさん相手でも男の目の前で口から物を吐き出すなんてしたくないだろう。

「あの、只野さん。私にもくれませんか？」

お次は翼である。こうなると最初からみんなに一つずつ渡しておくべきだったか。

「龍角散だけど？」

「構いません。念のため私も喉を気遣いたいので」

「そっか。じゃあどうぞ」

「ありがとうございます。……意外と渋い味を選んでいるんだな。ふっ、私と気が合うかもしれない」

渋い、かあ。まあハチミツとかカリンとかじゃないもんな。

でも、のど飴のチョイスが渋いからって自分と気が合うかもって、

どう思う考え？

ま、翼らしいと言えればいいか。

「なっ、あたしにもくれよ」

で、こうなると最後の一人もこうなるわな。ただ、天羽さんだけ三人と違って手をくいくいと細かに動かしている。

「龍角散でもいいか？」

「平気平気。余程じゃない限り舐めるって」

「さいで。じゃ、どうぞ」

「ん。サンキュ」

掌へ落とすとかさず握り締めてお礼と共に天羽さんは俺に背を向ける。

と、そこで次の曲が流れ始めた。って、また逢う日まで？ ランキングからじゃないだろ、これ。

もしかして、わざわざ探したのか、響辺りが。エルフナインちゃんが熱唱する姿を思い出すなあ。

「あのさ」

「ん？」

そんな時、天羽さんがこちらへ振り返って笑みを浮かべた。とても可愛らしい、笑みを。

「またこうやって騒ごうよ。出来ればマリア達も一緒にさ」

「……この異変を解決出来たら、な」

俺はそう返して席を立つ。

「どこ行くのさ？」

「雉撃ち」

わざと古い言い回しをして部屋を出てトイレへ向かう。

ただ、顔が熱いのが分かった。原因は明確。天羽さんの最後の笑顔だ。

姉御肌の大人な子だと思っているところへ、ちゃんと可愛い女の子な顔されたもんだから思いの外いいところに入った。

「あゝ……危ないところだった」

響とのデートの時から心に決めていた事を破るところだった。

俺は絶対に彼女達へ男として踏み込み過ぎない。踏み込む時は精一杯大人であろう。それが俺の中での誓い。

そうじゃないと、この一件が解決した時に辛い事になってしまったらキツイんだ。

架空じゃないって分かった今、見事に惚れた挙句に二度と会えないなんてなった時、俺は耐えられないから……。

カラオケが終わり、早速ツヴァイウイングによる逆光のフリユージェルがアップされた事により「戦姫絶唱シンフォギアチャンネル」は急上昇ランキングへ躍り出る事が出来た。

更にその二時間後には奏一人で歌った曲がアップされ、その反応に奏は目を見張る事になる。

「こ、こんなにも生の声が見れるんだね」

「でしょ？ 私も驚いたんだ。まあ、中には厳しいとか心無い言葉もあるけど……」

「でもでも、凄いじゃんこれ。未来のディーヴァ現るだってさ。ある意味アタリだつて教えてやりたいよ」

「あはっ、見て見て奏。私達の名前でこんな事書かれてる。風を奏で天へ鳴る羽で出来た翼、だって」

「洒落てるね。うん、こつちでの意味合いはこれでいいんじゃない？」

「新しいツヴァイウイングって事？」

「そうさ。こつちでのファンが創ってくれた、新しい意味」

概ね好評をもらい、登録者数はまた急激な上がり方を見せる中、動画のコメントを読むのに夢中なツヴァイウイング。

そんな二人とは違い、仁志と響はクリスと共にかなり早めの夕食準備へ取り掛かろうとしていた。今日は響とクリスがバイトなため午後五時半には部屋を出るためだ。

「今夜は質素にいくぞ」

「うん」

「で、何を作るんだ？」

仁志の問いかけにクリスは市販の中華シリーズの箱を手にする。

「麻婆豆腐だ」

「おう」

「でもこれだけは寂しいからな。スープ、頼んでいいか？」

「了解。じゃ、メインはお嬢さん方に任せた」

みんな大好き麻婆豆腐。辛さを抑えれば子供だって大好物。

今回は無難な中辛をチョイスし、まずクリスがフライパンへ油を引いてひき肉を炒め始める。

響はその間に豆腐の水切りをした上で軽く水道水を入れて再度水切りし、手の上へ豆腐を置いて包丁でおっかなびっくり賽の目状に切っていく。

仁志は鶏ガラスープの素を使って簡単な中華スープを作り始めていた。具はわかめと溶き卵に昨日の残りの残りのネギである。

こうして出来上がった簡易的な麻婆定食を五人は食べ、動画のコメントなどを話題にしながら笑みを見せ合う。

それは一種のサークルのような雰囲気であった。

二人だけでなくクリスや響も歌って動画を上げてみるかと仁志が言えば、翼と奏も面白いとそれに乗って二人を困らせ、逆に響とクリスが仁志を巻き込もうとすると本人は全力で拒否して翼と奏を苦笑させる。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、綺麗に食べ尽くした五人は後片付けを始める。奏と翼が洗い物を担当し、仁志は動画の評価やチャンネル登録者数を確認、響とクリスはそろそろバイトへ向かわねばと準備を始めた。

というのも、今夜は二人のバイト終わりですーパー銭湯へ行くからである。そのための荷物を持って出るためだった。

「じゃ、行ってくる」

「バイト終わったらお店の近くで待っていてくれるですよね？」

「ああ、駅前へ向かって歩いてくれればいいよ。ただ俺と一緒にするのは……」

「分かってるっての。あんたの事は出さないって」

「はい。気付かれないようにしてますから」

自分達が仁志と必要以上に親しいと思われると面倒だと二人も理解していた。

それでもそれとなく慕っているぐらいは匂わせている。ただ、それはクリスマスであり、響は計算してそんな事が出来ないので自然とそうなっているだけであった。

揃って部屋を出て行く二人を見送り、仁志はどうしたものかとスマホを見る。

時刻は午後五時半。二人のバイト終わりが午後十時。つまりまだ四時間半あるのだ。

「さて、どうする?」

「どうって言われてもねえ」

「そう言えば、奏、履歴書は書いたの?」

「一応ね。確認してもらっていいかい?」

「どれ……」

差し出された履歴書を受け取る仁志とその横へ移動する翼。その目が同じ動きを見せ、同じ場所で止まる。

「……書き直し」

「何?」

別に誤字や脱字があった訳ではない。ちゃんと仁志の出身高校が書かれていたし、他の記入にも漏れも間違いもない。

だが、ある一点において仁志と翼は見解が一致していた。

「ちゃんと卒業って書いて」

そう、何故か奏は高校を卒業ではなく中退と書いていたのである。だがこれには彼女も文句があった。

「え? でもあたしの設定ってあちこちのバイト転々としてるってやつだろ? そんな奴が高校はちゃんと卒業っておかしくない?」

仁志の考えた奏の設定は高校卒業後大学受験に失敗し、特にやる事も決まらずあちこちでバイトをしてはある程度で辞めるを繰り返しているというもの。

奏はそれを聞いてそんな事をするような人間が高校を卒業する事が出来るのかと思ったのだ。

「あのな、たしかにそつちの考えも分かるよ。でも、高校なんて最低限やってくれば誰だって卒業出来るだろ？」

「そうかなあ……」

「え、えつと、奏？ 高校までにはちゃんとしてたけど、受験に失敗したから自信を無くしていい加減になったってしたらどうかな？」

「むっ……それなら、まあ……」

翼の意見に唸るように腕を組む奏へ仁志は苦笑して息を吐いた。

「要は天羽さんは自分の設定なんだからもつと納得いくようにしたい訳か」

「そう、それ。全部只野の言いなりだからさ」

「い、言いなりって……」

「いや、まあ否定はしないよ。じゃ、天羽さんに任せていいか？」

「ああ。安心しなよ。ちゃんと深夜バイトしそうな設定考えるからさ」

にっこりと笑顔を見せる奏だが、仁志と翼は互いの顔を見合わせ若干の不安を覗かせるのだった。

さて、その頃響とクリスはコンビニ二へ向かいながらバイト終わりの事を話していた。

「楽しみだね銭湯」

「だな。久しぶりの広い風呂だもんなあ」

「うんうん。正直言うともつと早くお風呂行きたかった」

「仕方ないだろ。一回で五百円だぞ？ 今なんて五人だから二千五百円だ」

「ううっ、私の三時間分のお給料……」

会話だけ聞けば今時珍しい苦学生である。

「ほぼ、な。て考えたら週一だって厳しいんだっての」

「分かってるけど……」

時期が真冬でなくて良かったと、仁志だけでなく響達も思う程シャワーのみは辛いのだ。特に装者は皆年頃の女性であるから他にも不満が上がっただろう事は言うまでもない。

これも仁志が実家住まいであれば当然風呂はあり部屋も多少余裕

はあったのでそういう面での問題点は解消出来ただろう。

ただ、その場合は別の事でもっと面倒な事態になっていたので少し悪しである。

「とにかく、片翼の先輩の事はあたしがオーナーへ話をするから、お前は普段通りに仕事しろ」

「うんっ！」

「手を洗ってからノートへまず目を通せ」

「うん！」

「それが終わったらカウンターフーズの廃棄チェック」

「う、うん」

「で、タバコのストックチェックや箸やスプーンなんかの不足がないかもだな」

「うん……」

「何で段々テンション下がってるんだっ！」

既に夕勤のバイトリーターな思考になりつつあるクリスマスであった。

この辺り生真面目な彼女らしい部分である。そして響はそういう意味で言えば……

「な、何だか考えてたらもう仕事してる気分になってきちちゃって」

「それで何で気落ちすんだよ？」

「ほら、最初の頃、ピアニツシモをカートンであるかって言われてさ」

「ああ、カートンで置いてない系のやつで後でないって返したら文句言われた時か。お前なあ……もう忘れろっての」

「でも、あそこで私があると思いますなんて言わなきゃ良かったからさ……」

真面目で優しいが、少々思慮に欠ける事があるアルバイトだろうか。

ちなみにその時はオーナーが対応し事なきを得、響がタバコの中で真っ先にピアニツシモという銘柄を覚えてしまった要因となったのである。

とにかくそんな二人だからこそ一緒にいるといい具合に助け合える。

対人が若干苦手なクリスマスと得意な響。対業務が苦手な響とお任せなクリスマス。まさしく仁志の読み通り、この二人は互いに長所と短所が噛み合うのだから。

ただ、お分かりの通りやや響の方がクリスマスへ助けられる部分は多いのだが、それはまあご愛嬌と言うものであろう。

そうして二人は店へ到着し勤務を始める。

愛想のいい響は既に常連の中で顔を覚えられており、彼女もよく顔を見る客達は何人か名前を覚え始めていた。

クリスマスはクリスマスで、やはりその身体的特徴もあつてか男子学生や男性客が若干目当てにしている程である。まあ、あまりにもスケベな目で見ている野郎達をクリスマスが快く思うはずもないので、例え連絡先などを手渡そうとバーンっとそのスケベ心を撃ち碎かれるのがオチだが。

「いらっしやいませ〜」

「いらっしやいませ」

初日は声が大き過ぎたきらいがあつた響も既に程よい声量を覚えており、クリスマスもそれに近い大ききで挨拶を言うようになっていた。

少し前まではどこか気だるげに動く茂部やそこまで愛想のない近藤という時間帯の店内も、テキパキと動くクリスマスと愛想の塊の響となればその相乗効果で不思議と活気のある店に見えるものなのだ。

「よう嬢ちゃん」

「あつ、いつもありがとうございますっ!」

「おうおう、今日も元気だな」

「はい! で、今日はコーヒーどうします?」

「あく……どうしようかな」

「たしか、コーヒーのS、フレッシュありでお砂糖一つ、ですよね?」

「……頼んじやうか」

このように特定の客であればその買う物なども覚えるぐらい響も慣れてきていた。

そして可愛い女性に愛想よくされれば男というのはいくつになつても単純なもので、余程がない限りその愛想に意思を動かされてしま

うのである。

買うのは止めておこうと思っても、愛らしい少女にどうしますと問われるだけで、しかもその砂糖やフレッシュの有無まで覚えられては悪い気はしないと言う物。

「はい、お待たせしました！ お仕事、頑張ってくださいね！」

こうして近くの工場勤務の男性がコーヒー分代金を余計に払う事になった。ただ、響がコーヒーを両手で差し出しながらの笑顔のエルを考えれば安いものだろう。

「いらつしゃいませ」

「お、お願いします」

「つと……温かい物と冷たい物分けて良かったですか？」

「い、一緒にいいです。あとすみません。肉まんも一つください」

「肉まんを一つ、と……。他は良かったですか？」

「は、はい」

何か手に握り締めている制服姿の少年。たまに見る顔だが高校生だろうか、そんな事を思いながらクリスは蒸し器の上段から肉まんを一つトングで掴んで専用の包みへ入れる。

そしてレジへと戻って袋詰めを終えて合計金額を告げた後だった。

代金と共に彼女へ差し出されたのは一枚の折り畳まれた手紙。

(これ、もしかするともしかするやつか?)

そう思っ顔を上げたクリスを貫くのは、真っ直ぐで強い眼差しとやや緊張した表情の少年。

「こ、これ、良かったら読んでくださいっ」

自分の予想が間違ってなかったと気付いた瞬間、クリスは反射的に顔を下げってしまった。

若干の間が開き、クリスはその手紙へ手を伸ばして——そっと押し返した。

少年の表情が喜びから悲しみへと変わる。それを顔を上げたクリスはしっかりと見つめて口を開いた。

「……ありがとな。でもあたし、好きな奴いるんだ。気持ち嬉しいけど、これは受け取れねえ」

スケベ心全開ではなく純粋な好意からの行動だと分かったクリスは、目の前の彼にだけ聞こえる少し優しい声で話す。

しかもそれは業務用の言葉遣いではなく彼女の普段のもの。それが意味する事を感じ取ったのか、少年はがっかりしながら手紙を引っ返めた。

「……十三円のお返しです。ありがとうございました」

肩を落として去っていく背中を見送り、クリスは小さくため息を吐いた。

（ああいうの、あたし弱いんだな。一瞬顔が熱くなっちゃった……）
多少はスケベな気持ちもあるだろうが、それよりも自分を好きになった好意からの強い眼差しと行動。

それにぐらついた事にクリスは意外なものを覚え、同時に理解したのだ。

きっとそれは自分が恋をして相手の気持ちに共感出来るようになったからだろうと。

そんな事もありつつこの日も多少の忙しさはあったものの、大きな問題もなくバイトは無事終了。

クリスは退勤の際にオーナーへ奏の事を相談し悪くない返事をもたらう事に成功すると、二人は夜勤の人間やオーナーへ挨拶して揃って店を出た。

「ううっ、まだ夜は冷えるね」
「だな」

上着なしでも過ごせるようになってきたとはいえ、まだまだ夜は寒い。

そんな中を二人は歩く。店から駅方面へ向かうとすぐに仁志達の姿が見えた。

「只野さーんっ！」

「ははっ、お疲れさま。何も問題なかった？」

「はいー」

真っ先に仁志の下へと駆け寄り笑みを見せる響。

そんな彼女へ苦笑しながら労いの言葉をかける仁志を翼と奏が微

笑みながら見つめる。

そこへ少し遅れてクリスマスが合流し、やや呆れ気味に響を見つめた。

「ったく、時間を考えて声出せてんだ」

「そう言うな雪音。この辺りはまだ静まり返っていないんだ。大目に見てやれ」

「そうそう。それに、この子は誰よりも只野に懐いてるから仕方ないって」

「ま、それは分かってるけど……」

仁志への恋心を自覚したクリスマスからすれば若干面白くないのも事実である。

それでも響への不満ではなく自分への不満を抱くのが雪音クリスマスという少女だ。

（いつそあたしもあいつぐらい……いや、無理だ。で、でも、そのうち、そのうちにはもう少しぐらい……）

仁志をあんたやあの人ではなく「只野」と呼べるようになりたい。それが今のクリスマスの密かな目標であった。

「じゃ、とりあえず行こう。あまり遅くなると物騒だし」

「はい」

仁志が先導するように歩き出し、そのすぐ横を響が歩き出す。するとクリスマスがさり気無く仁志の空いている側の隣へ移動する。

「オーナーへ話は通しておいた。少し考えてみるってよ」

「そっか。ありがとうクリスマス」

「礼を言われる程じゃねーよ。ま、これぐらいはな」

相変わらず自分の目をしっかりと見て話す仁志に、嬉しいような少しだけ悔しいような気持ちとなりながらクリスマスは顔を少しだけ背けた。

「そういえば今日はもう中華まんが肉まんしか残ってなかったです」

「ああ、それは俺とオーナーで昨日話し合ったんだ。そろそろカレーやピザは売れ残る確率が跳ね上がるから仕込むのは朝に二個だけ。売れても補充は一個にしようって」

「成程な。道理で」

「そ、そんな事もあんたがオーナーと話し合って決めてるの？」

それまで黙って会話を聞いていた奏がそこで口を挟んだ。
彼女からすればただの一バイトに過ぎないだろう仁志が店の事へ
口出ししている事が驚きだったのだ。

「決めてるんじゃないよ。俺はオーナーから意見を求められたら答えるだけ。今の話だって毎年の事だからそろそろじゃないですかって俺が話を振ったら、オーナーがそうだねってそういう感じ。俺がもう減らしましょうって言った訳じゃないよ。ただそれも考えた方が良くないですかって言うだけ」

「いや、それでもさ……」

「奏、只野さんはどうやらオーナーの方から店長扱いをされてるんだって」

「正確には勝手に店長って言われてるだけの古参バイトだけだな」

若干苦い顔で告げ、仁志はため息を吐いた。未だ店長を引き受けるか否かを迷っているためである。

今後の、それも現状を考えればなるべきだと分かっている。だが、どうしても不安が尽きないのだ。

年齢もあつて体力が落ちてきている事だけではなく、今だと週のほとんども仕事を埋められ、その拘束時間も長い事が予想されるためだった。

（店長になつても給料が安定する訳じゃない。いや、安定はするのか。だけど状況は今より確実に悪化する。まあ、俺が何かしないといけない訳じゃないからそこが唯一の救いと言えば救いだけど……）

店長となるからと言って社員になる訳ではない。それはつまり保険などは任意で入る事となる。

要は今と労働条件はそこまで改善されず、ただ責任と仕事の負担が大きく増え、給料が多少上がる程度であった。

これもあつて仁志は踏ん切りが付けられずいたのである。
「でも大したもんじゃないか。そこまで信頼されてるとか、あたしのところで言うう子さんみたいだよ」

「そんないい扱いじゃないって。まあ信頼はしてくれてるだろうけどさ。真面目に二年以上も働いていれば誰でもこれぐらいにはなれる

よ」

そう告げて仁志はふと彼女達に自分の悩みを相談してみる事にした。とはいえ、素直に話すのではなく例え話としてではあったが。

「なあ、もし俺が店長になれるとしたらなつた方がいいと思うか？」

ほんの思いつきの冗談。そんな感じの切り出し方に響達は小さく苦笑し頷きを返す。ただ一人、奏だけは首を縦に振らなかった。

「天羽さんは止めた方がいいって？」

「というより判断出来ないってところ。何せあたしはコンビニの内情とか知らないし、店長つてのがどういう扱いでどういう待遇なのかも知らない。それで判断は出来ないよ」

「か、奏、意外と真剣に考えてるんだね」

「驚きです」

「ああ、同感だぜ」

意外そうな表情を見せる響達だったが、奏は小さく苦笑してから仁志を見た。

「いや、さ。今のが冗談じゃなくてマジだったらつて思つてね」

そう告げる奏の表情は笑みを浮かべていたが、仁志は何となく彼女が今の質問の意図を見抜いたような気がしていた。

その後も会話は続き、話題は仁志の趣味である特撮絡みへと変わっていた。

「私の友達にアニメとか好きな子がいるんですけど」

「板場弓美さん、か」

「はい。その子と只野さん、話合いそうだなつて」

「どうだろう？ 見ている作品が噛み合わないからなあ」

「なら、あんたが持つてる奴を貸してやるとかだな」

「オススメとありますか？」

「ええ？ こういうのはその人の傾向が分からないとつて、あつ……」

「どうしたのさ？」

急に足を止める仁志に全員が足を止める。するとそれを見て仁志は困ったように笑つて……

「俺、少しだけど知つてたわ」

とうっかりしてたように告げて思わず四人を苦笑させる一幕もあつた。

そんな風に会話していれば店から数分のスーパー銭湯などあつという間である。

受付で料金を支払い、休憩が出来る場所で待ち合わせる事にし彼らは男女で別れた。

「おっふる、おっふる」

「こんな時間でも意外と客がいるもんだな」

「ああ、私もそう思った。まあ、それでも数える程だが」

「だね。この状況を見ればほぼ貸切みたいなものだよ」

女四人で脱衣所で服を脱ぎながらの会話。思えばこんな時間は今までなかったと思ひ、彼女達は小さく笑みを見せ合う。

「何だか楽しくなってきました」

「そうだね。あたしもだ」

「ふふつ、まるで旅行に来たみたいだ」

「そうだな。そんな感じだ」

それぞれギアペンダントを首にかけたまま、タオルを手にして浴場へと向かう。

ちなみに奏のギアにはまだスマホの欠片が組み込まれていないが、仁志からスマホそのものを預かって脱衣所に持ち込んでいた。

浴場内の女性客は時間もあつてか片手で足りる程。そのため洗い場が混雑していて使えないと言う事もなく、四人はそれぞれ体などを洗い始めたのだが……

「やっぱりクリスちゃんのおっぱい大きいよね」

「じ、ジロジロ見んな」

「奏さんも見事なもので……」

「まあね」

「翼さんは……」

「な、何だ？」

「……とってもスレンダーで綺麗だと思います」

「………何故だろうか。今、私は無性にここへ小日向を呼びたい」

「きつとあの子がいれば叱ってくれただろうな、これ」

と、若干翼がブルーになつていた。

それでも久しぶりの広い湯船や大きな洗い場という状況に響達三人は気分を高揚させていた。

奏も親しい仲間達との入浴と言う初めての経験に笑みを浮かべ、四人の雰囲気は穏やかで楽しげなものであった。

体の泡を流し、次は髪を洗い始めると、如実にその洗髪時間に差が出始める。

「つは……終わったあ」

「だな」

短めの響とクリスが早々に洗い終わり……

「うーん、やっぱもつと短くしようかな？」

「こういう時だけは立花達が羨ましい……」

長い奏と翼が中々洗い終わらず苦戦する事となつたのだ。

「翼さん、奏さん、私達先にお風呂入ってますね？」

「ああ、分かった。すぐに……後を追う」

「先輩達、あんま急がなくていいぞ」

「分かっているって。そっちもこつちを気にせずゆっくり浸かってな」

こうして二手に別れて動き出す女性陣。

響とクリスはまず普通の湯船へ入った。少し熱めのお湯が二人の体を包む。

仕事の疲れが全て溶けだしていくような感覚に、二人は思わず目を閉じて息を吐いた。

「はあく……」

極楽極楽と続けそうな響とそう言いたそうなクリスであったが、そこで言葉にしない辺りにクリスの乙女心と響の変化が見える。

「いやあ、幸せだねえ」

「そうだな……」

ゆったりと湯に浸かる。しかも気心の知れた仲間であり友人と。これが響とクリスには大きい。

中学時代の一件で心に大きく傷を負った少女と、幼少期の一件で心

に大きく傷を負った少女。共に共通するのは人への恐怖を刻み付けられた事だ。

それでも、今こうして裸の付き合いさえ出来る相手が出来た。しかも共に暮らしている。更に言えば、それはこれまでのような守られた生活ではない。

自分達で稼ぎ、考え、助け合うものだ。まさしく共同生活なのである。これは二人が未来とさえもした事のなかったものだった。

「ね、クリスちゃん」

「何だ？」

二人揃って天井を見上げ言葉を交わす。思えばこの世界で初めに支え合った二人は彼女達である。

三日間程であるが共に仁志の部屋へ身を置き、苦しい事も辛い事も楽しい事も嬉しい事も分かち合ったのだ。

その密度だけなら響にとっては未来に次ぐ濃さと言える。クリスからすれば、生まれて初めてのものだった。

「ここでの暮らしは大変な事多いけどさ」

「おう」

「でも、私ね、今とっても楽しいんだ」

「おう」

「ずっと、こうしていられたらなあって思っっちゃうぐらい……」

「……おう」

「……これが、本当の世界だったなあって願っっちゃうんだ」

「……おう」

「ねえ、これって……さ。やっぱり、駄目な考え……かな？」

「駄目な訳あるか」

その即答に俯きかけていた響は思わず顔を上げて横を見た。

そこには今も天井を見つめるクリスがいた。ただ、その顔は響が初めて見るぐらいに優しく笑っている。

「戻ったってこうしていきやいいんだよ。あたしらが諦めずに手を伸ばし続ければ、いつか届く。今日歌っただろ。夢を諦めたくないって」

「クリスちゃん……」

「どんな希望も積み上げてくんだ。だろ？」

そこで響へ顔を向けクリスは照れくさそうに笑みを見せた。

「……うん、そうだね。俯かずに顔を上げて、どこまでも曲がる事なく、信じた道を行くんだもん」

「おう、そういうこった」

互いに今日相手が歌った歌から引用しての言葉を送り合う二人。その浮かべる表情は綺麗な笑みであった。

一方、やつと髪を洗い終わってタオルでその髪が湯に入らないようにとしていた翼は、似たような事をしている奏へ目を向ける。

彼女は小さく苦笑しながら翼を見つめていた。若干ではあるが自分の方が遅くなってしまう事もあり、申し訳なさそうに翼は目を伏せた。

「お、お待たせ……」

「別にいいよ。にしても、翼が髪洗うのに時間かかるのは知ってたけど大変だね。それを毎日だろ？」

「う、うん。やつぱり短くするべきかな？」

「翼がしたいんならすればいいんじゃない？　ただ、その場合はマネージャーと相談だ」

「うっ……そ、そうだね」

と、そこで翼はある事に気付いて笑みを浮かべた。

「ねえ奏。こっちにいる間なら構わないんじゃないかな？」

「あー……たしかにね。でも、こっちにいつまでいるか分からないのに切れる？」

一瞬で翼は撃沈させられ、項垂れたままトボトボと浴場内を歩き出す。その姿に奏は小さく苦笑しながらその後を追う。

「翼、一気にバツサリはどうかと思うけど少しなら平気じゃない？」

「それじゃ意味ないんだってば。いつそショートぐらい思い切らないと」

脳裏に浮かぶのはもう一人の自分。あれぐらい短くすれば手入れも楽だろうと思ったのだ。

「まあ言いたい事は分かるけどって……」

「どうしたの？」

突然言葉を切った奏に翼が足を止めて振り返ると、奏の視線はある物を見つめていた。

翼もその視線を追って目を向け、そこに書いてある説明文を読み上げる。

「えっと……シルキーバス？」

「美肌の湯だつてさ。翼、あれに入ろうよ」

「で、でも立花達は向こうで」

「きつと向こうもその内こっち来るって。それにここから見ると二人の世界って感じで邪魔しちや悪いし」

「ちよ、ちよつと奏……。もうっ！」

マイペースな奏に頬を膨らませながらも結局ついて行く辺り、翼も美肌が気になる年頃らしい。

美肌効果のある成分が溶けているせいか若干湯も普通とは異なる感触をしている。

そんな真つ白な湯の中へ二人はその体を沈めるとその温かさに息を吐いた。

「ふく……」

多少温い気もするがそれ故にじっくり入っていられると思い、二人は笑みを浮かべる。これなら長湯してもものぼせる事はなさそうだと考えたのだ。

「で、どうかな？ こっちの生活は？」

「そうだねえ……思ってた以上に楽しい、かな」

「楽しい、か」

「そう、楽しい。金銭的な面や居住環境で言えば不満や不安はあるよ？ でも、何だろうね。女だけの共同生活時々親戚のお兄さんって感じでさ、楽しい事が多いんだ」

「ふふっ、何それ」

そう言いつつ翼も奏の言いたい事は理解出来ていた。

地元を離れて親しい友人達だけで暮らそうとしたが、それでは住ま

いを借りられず仕方なく近くに住む親戚が部屋を代わりに借りてくれ、そこに四人で住んでいるところへ、時折様子を見にその親戚がやってきているようなものと奏は言いたいのだろうと。

「だって只野ってそんな感じじゃない」

「えっと、奏？　気になつてたんだけど、どうして只野さん呼び捨てに？　たしか最初はさん付けしてたよね？」

「いい大人なのにあたしが言うまで自分のしようとしてた事の意味に気付けないんだ。なら、そんな奴は呼び捨てでいい。あたしがちゃんと敬意を払えるようなところ見せてくれたら戻すよ」

「そういう事か……」

奏らしい理由に翼は小さく苦笑した。敬意は失つても認めてはい

る。

それがそこから伝わったのだ。

そしてきつと仁志もそうなのだろうと思ひ翼は息を吐いた。

(只野さんが受け入れてるのはそういう事だ。あの人らしい……)
自分にも非があれば認めて詫びる。それが例え他人の行動からの失態であろうとも。

仁志のそういうところを翼は好ましく思っていた。ただ、どこかでそれが行き過ぎなければいいなとも思っていたが。

「でも、本当に大丈夫？　奏、夜勤なんてやった事ないよね？」

「大丈夫だって。あいつに出来るんだから若いあたしに出来ない事ないよ。それに、今のあたしは嬉しいんだ」

「嬉しい？」

「そ。ここではあたし達は本当のツヴァイウイングだ。風鳴翼を失つた天羽奏と、天羽奏を失つた風鳴翼じゃない。ここでは、あたし達こそがツヴァイウイングなんだよ」

「……奏」

「ここでのツヴァイウイングは最初からあたし達。ここでの成果は全部あたし達のもの。だからさ、思いつきり飛び回ってやろうよ。お互いに止まっていた時間なんか忘れるぐらいにさ」

「……うんっ！」

新たに結ばれる両翼の誓い。

この世界ならば自分達は片翼を失った者同士ではない。そんな想いを胸に二人は笑みを見せ合うのだった。

午後十時半をとうに過ぎ、仁志は一人休憩所で待ちぼうけをくらっていた。

店内も閑散とし、もう彼以外はいないようなものだ。時折通り過ぎる店員の憐れむような視線が仁志にはやや痛い。

「……女は長風呂って聞いてたけど、ここまでとはなあ」

彼は心持ちゆつくりと浸かって二十分程で風呂から上がり、ここで十分以上待たされていたのだ。

上がった直後は精々三十分程で出てくるだろうと思っていたのだが、まさかそれさえも超えるとは予想外としか言いようがない。

実は彼女達は一旦風呂から出て無料の給水器を利用した上でサウナへと入っていたのだ。

何せ響達は実に半月以上湯に浸かる事が出来なかった。そのため、その間の老廃物をここで全て綺麗に洗い流しておこうとしていたのである。

それを知らず仁志は何するでもなくだらだらとテーブルに突っ伏していた。

そこで考え始めたのは何と住居の事であった。彼も冬場のシャワーの厳しさは知っている。まだまだ春先の今から考えれば先の話だが、男の自分と違い女性達は可能なら風呂が欲しいと分かっていたのだ。

「……………いつそ風呂付の部屋を探すか。で、それでいいところ見つかったら俺があっちへ移動して、響達にはその新居へ移動してもらえばいい」

もしそうなれば、下手をするとゲートは彼の方へ置かれる事となり、有耶無耶となっていた性欲処理問題が再燃するのだがそれに彼は気付いているのだろうか。

いや、気付いてはいないのだ。何せ湯上りの疲労と気怠さ、そこへ

きての待ちぼうけで仁志の思考は大分停止気味になっていたために。「響とクリスの収入に天羽さんの分も入れば家賃は結構上限あげられるし、翼との動画収入も割と期待出来るレベルになりそうだなあ。なあ。なら、彼女達だけでも1LDKか2DKとかを視野に入れて……」

ゆっくりと下がってくる瞼。それに抗う力もなく仁志はそのまま眠ってしまう。

だが、その眠りは長く続かない。

「只野さん、寝ちや駄目ですよ」

「風邪引くぞ」

「んあ？」

意識を手放して五分もしない内にそこへ四人がやってきたのである。

「おっ、起きた」

「すみません只野さん。少し長湯してしまいました」

「……お〜」

寝惚け眼で見た光景は湯上り美人四姉妹とでも呼べるものだった。

格好こそ来た時と同じだが、その頭に見える南国風の髪飾りで仁志は気付いたのだ。

(今の四人はあの水着状態かあ……)

この中で唯一自分だけ服の下を知っている。そんな妙な優越感を覚え、仁志は起き上がって目を擦るとテーブルの上へ何枚かの硬貨を出した。

「これは？」

「ほら、あそこ」

そう言って仁志が指さしたのは一台の自動販売機。ただし、売っているのは瓶の牛乳などだ。

響達が自動販売機の前へと移動し、その販売物を見るや嬉しそうな表情を見せる。

「牛乳だっ！」

「コーヒーやフルーツもあるな」

「イチゴなんてもんもありやがる。マジかよ」

「好きなものをどうぞ。おっさんの奢り。あるいは眼福な光景の代金」

「やったあ」

予想通りだったのか響が笑みを浮かべて拳を握る。それを見てクリスと翼が苦笑し、奏はテーブル近くへ戻るとそこにある小銭を拾いながらどこか眠そうな仁志へ笑みを見せた。

「サンキュ、只野。風呂上りといえればやっぱこれだよねえ。で、何飲む？」

「はいはい、私はフルーツがいいです」

「クリスは？」

「イチゴにしとく」

「ん。翼はコーヒー？」

「それも惹かれるけど普通の牛乳にしておく」

「じゃあたしはコーヒーに」

その会話を聞きながら仁志はどこか楽しげに笑って翼へ疑問をぶつけた。

「夜八時以降の食事は控えるようにしてるんじゃないの？」

「っ?! の、飲み物はいいんです！」

「ははっ、そうだね。それに、ここじゃあたしらはただの女だ。体型維持を厳しくする必要はないもんな？」

「そ、そういう事」

若干照れくさそうに答えて翼は奏から小銭を受け取ると牛乳を購入した。

「どうせなら分け合いたいですね」

「回し飲み？ まああたしは抵抗ないけど」

「あたしも特にないぞ」

「わ、私もないが……」

「へ？」

翼の視線が自分へ向いている事に気づき、仁志は首を傾げた。

「そっういやあんたはどうするんだよっ」

「まさかとは思いますが、只野さんだけ飲まないなんてないですよ
ね?」

「……ああ、そういう事か」

そこでやつと彼は理解する。要は女性達だけ飲み物を飲む中、自分
だけ我慢するんじゃないかと思われていると。

「なら心配いらないよ。俺はもう飲んでるから」

「え〜……」

その言葉を聞いた瞬間、響と奏が声を揃えて不満を見せた。クリス
と翼も似た心境なのか表情は苦い。

「えつと、ちなみに何を?」

「ラムネ」

「おいっ! 何てイイモン飲んでやがる!」

「いいないいな」

「ちよつと、それは分け合おうレベルだろ?」

「ええ……」

四人中三人から明らかな文句を言われ仁志は困惑していた。彼と
しては男の自分と回し飲みなど彼女達が嫌がると思っていたのだ。

クリスと牛乳を回し飲みした事は、彼からすれば様々な要因があつ
ての事と捉えているという証拠である。

ただ、一つだけ彼の名誉を守ると言うか擁護をするのなら、ここで
奏の代わりにいるのがマリアか調、未来などであればその配慮は正解
だった。

たまたま奏のノリがやや体育会系だった事と、残る三人が仁志へ好
意を抱いているが故に気遣いが逆の結果になってしまっただけなの
だ。

結局女性達はそれぞれの物を一口ずつ分け合い、残りを一気に飲み
干す事で決着となった。

だが、そこで仁志は一つの約束を彼女達と交わす事となる。

次は必ずラムネも一緒に買って分け合おうという、そんな約束を
……。

誰かのためのヒカリ

「先輩、こっち終わったよ」

そう言つて笑うのは天羽さんである。今夜から彼女のバイト研修が始まったのだ。

ちなみにこれに先駆け彼女もギアヘスマホの欠片を、依り代を組み込んでもらいに行つていた。

……体感三分ぐらいで帰ってきたけど。それでもあつちだと数時間経過しているんだからホントにどうなってるんだか？

時刻は午前一時を過ぎ、店内には客の姿もない。オーナーは荷物が大量に来る三時ぐらゐまで仮眠中。

よつて今は俺と天羽さんだけ。教えないといけない事はそこまで大量にある訳ではない。残りはまだ来てない冷凍商品とか本の納品処理に、トイレ掃除などの店内清掃だ。

ああ、ドライやアルコールとかのリーチ行きの飲料もそうだ。ただそこまで面倒な事はない。その荷物の多さに最初は閉口するかもしれないけど。

「分かった。じゃ、バックヤードのオリコンから商品補充をよろしく」「バックヤードね。了解」

大通り沿いや深夜でも人通りのある場所ならともかく、こんな住宅街に近いコンビニの深夜など基本静かなものである。

まあ金曜の夜や土曜の夜なんかはそうでもないのだが、今日のような平日の夜はこの通りだ。

にしても、先輩、かあ。今まで呼ばれた事ないからどこかくすぐつたい。この先輩にはバイトの先輩という意味だけでなく設定上の「高校の先輩」も含まれているらしい。

天羽さんの考えた設定はこうだった。高校卒業と同時に地元を離れ音楽で食つて行こうとしたのだが、そう簡単に行くはずもなくバイトに明け暮れる日々。

そうなると短時間で稼げる仕事を探すようになり、そこに加えて日々の食費も減らせるのが望ましいと思つていたところ、高校時代の

後輩であるクリスからバイト中なら廃棄品での食事を許されると知ってやってきたと、こんなところである。

オーナーはその話を聞いて天羽さんを雇う事に決めたそうだ。

——いや、僕も若い頃はバンドをやっていたね。

そう照れくさそうにオーナーは言っていた。夢のある若者を応援したいと、そうも言っていた。

それを教えたら天羽さんは若干心苦しそうにしつつも最後には……

——ま、ある意味事実だからいつか。今のあたしは歌い手系配信者、だっけ。それだしさ。

なんて笑っていた。実際今の彼女は場所が場所ならそれなりの人気者だ。

まだ翼と合わせて十曲にも満たない動画配信であるが、それでもツヴァイウィングの力は凄まじく、逆光のフリーユゲルは既に三日で五十万再生を超えている。

それに影響され翼の上げている動画の再生数も伸びているし、天羽さんの個人曲もカバーが二十万再生でオリジナルの「逆光のリゾルヴ」に至っては三十万再生だ。

チャンネル登録者数も二十万がもう見えている。正直言ってみるとちよつと怖いぐらいだ。

でも、もしかしたらこれはシンフォギア効果なのかもしれない。この世界から消えた「戦姫絶唱シンフォギア」だけど、その事を知っていた人達はどこかで覚えているんじゃないだろうか？

じゃないと、いくら奈々さんの名前で釣ったとはいえ翼の歌で初日に十万以上もチャンネル登録者数がいくとは思えない。

「せんぱーい、補充の仕方は品出しと一緒に？」

「そうだよ。日付を見て古いのが前になるようにしてくれ」
「はいよ」

楽しげにお菓子の補充を始める天羽さん。どうやら本当にバイトを楽しんでいるらしい。

何せ鼻歌まで歌って……ん？ このメロディって……。

「天羽さん、それってもしかして……」

「ん？ ああ、これ？ そ、先輩から借りたCDに入ってたやつ」

そうニヤリと笑う天羽さん。そう、実は前から響達に俺のよく聞いていた音楽を知りたいと言われていたのだ。

ただ、残念ながらほとんどデータとしてノートPCへ落としていて手元にあるのは本当に僅かな物しかなく、それでも言われたので渡したら何と彼女達は中古のCDラジカセを買ってきたらしい。

で、今やあの部屋では近所迷惑にならない程度の音量で特撮やアニメの歌が流れるのだ。

「でもどうして仮面ライダーV3……」

と、そう言った瞬間思い出す。彼女は風見志郎と同じく両親と妹の四大家族だった事を。

「ま、色々理由はあるけど一番は途中のフレーズかな。父よ母よ妹よって」

「……悪い」

「いいって。何となくあの歌があたしには自分の歌にも思えてね。ま、あたしの場合はデストロンじゃなくてノイズだったけど」

終始笑みを浮かべながら補充を続ける天羽さん。その横顔はたしかにどこか昭和ライダーのような悲哀を秘めているような気がした。

考えてみれば彼女はあのライブで片翼を失ってからたった一人でノイズと戦い続けていたんだ。始まりは家族を失った事への復讐。本当に昭和のヒーローみたいだ。

「でも、V3で良かった。彼は途中から死んだと思っていたダブルライダーや終盤には相棒とも言えるライダーマンを得るんだ。天羽さんもそれと同じと言えなくもないし」

「へえ、そうなんだ。てつきりあたしは一人きりで戦い続けるかと思っただよ。てか、ダブルライダーって何？ 死んだと思っただって……どういう事？」

「ええと……」

隣へ移動して俺も補充を手伝いながら話す。静まり返った店内に店内放送と俺達の会話だけが響く。

会話だけなら男と女がするものじゃない。それでも俺も天羽さんも気にしなかった。

補充を終えてからはトイレ清掃を教える事に。天羽さんは学校を思い出すと言って苦笑してた。その笑顔がとても可愛くて、やっぱりこの子もまだまだ少女に近いんだなと思った。

「それにしてもさ」

「ん？ 何か分からない事でもあった？」

今は二人でカウンター内で廃棄時間の確認中。洗い物はとっくに終わってるし油交換は明日する予定なので必要なし。

廃棄処理も既に終わっているので問題はない。休憩中の食糧には困らないと言える。まあ、それも善し悪しなのだが。

「違うよ。思ってたよりも楽だなあってさ」

「ああ、それか。ご心配なく。深夜の大変なところはこれからだから」
「そうなの？」

「そう。荷物は多い日だと全部で五回くる。まずは米飯やサンドイッチにチルド飲料系。次はパン。ここまではいい？ で、次は本が来て、下手すると同時に冷凍商品が来る。で、最後に来るのがドライ。つまり店内の大半の商品だ」

「……うん、分かった。つまりあたしはまだ全然荷物をやってないって事か」

「そゆこと」

「ぶっ、何さその口調。似合わないって」

「いいだろ別に。っと、そろそろ肉まんアウトか」

管理票を見れば残った一つが残念ながらタイムアウト。トングで取り出し捨てようとして……天羽さんを見た。

「食べる？」

「え？ いいのかい？」

「いいよ。オーナーからは深夜のカウンターフーズに関しては持ち出さないなら確認要らないって言われてるしね」

「そうなんだ。じゃ、ありがたく」

「一応裏で食べてくれ。お客さんが来ると面倒だ」

「了解。へへっ、何だかテンション上がるなあ」

いそいそと裏へ引っ込んでいく天羽さん。うん、気持ちは分かる。俺も最初の頃はそうだった。

これが一月もしない内に慣れ、あまりワクワク出来なくなるのだ。特にオーナーと二人だと揃って廃棄が出る度にため息が出る。

「売上にならないってのは、遠回しに俺の首を絞めてるようなもんだって気付いてしまったからなあ」

弁当屋は若干違う。あそこでは賄いが新メニュー開発も兼ねていた。つまり意味のある無駄と言うか、先行投資のようなものだった。でもコンビニは違う。ここでの無駄は本当に意味がない。食べてやるしかないのに、本来はそれさえも許されないのだ。

そんな事を考えているともう一時半を過ぎた。あと三十分ぐらいでパンが来るな。

今日の食事はパスタにするかパンにするか迷うとこだ。正直言えば天羽さんが何を食べるかによる。

まあ今日は初日だし、天羽さんの好きな物を選んでもらおうと思っている。オーナーはいつもパンを食べてるしな。

……きつと理由がいつも必ず何か廃棄として出るからだろうけど。「ねえ」

ぼんやりと考え込んでいると後ろから聞こえる声。振り向けば天羽さんがメモを手にして若干首を傾げていた。

「どうした？」

「いやさ、メモを読み返してたんだけどさ、もう一回教えて欲しい事あるんだけどいい？」

「いいよ。何？」

「えっと……」

天羽さんはクリスとこういうところは似てる。ただ、クリス程几帳面ではない。

メモを全部取るのではなく必要だと思った事や部分だけ取るタイプだ。

天羽さんの疑問や質問へ答えていると時折来客があり、そのレジは

全部彼女にやってもらった。何もサボった訳じゃない。深夜はそもそもレジをやる事が少ない。

十時から一時まではそれなりにある方だが、そこからは本当に一時間に五回やったら多い方になってくるのだ。

なので経験値を積んでもらうために天羽さんへやってもらっている訳。まあ、正直問題なさそうだけど。

「おっ、パンが来た」

「え？ ああ、あのトラック？」

「そうそう。大体二時前後に来るから覚えておいて」

「了解」

中華まんの蒸し器の清掃の仕方や注意点を教え終わった頃に次の荷物が到着。

すると天羽さんが既に手にリーダーを持っているではないか。

「これ、使うんだよな？」

「さすがにもう分かるか」

「当然」

軽く笑みを浮かべる天羽さん。どうやらこれなら大丈夫そうだな。そう思いながら俺は商品を運んでくる馴染のおじさんを見つめるのだった……。

「あ〜っ、疲れた」

店を出て少ししたところであたしがそう言いながら伸びをすると、隣の只野が苦笑した。

「途中まで楽勝過ぎるって言ってただろ」

「途中まではね。何、あの荷物。えっと、カゴ車って言うの？ あれで三台とかどうなってるのさ」

「多いともっと来るぞ。今日は新商品もなかったし、飲み物もアルコールが少な目だったから」

嘘だろ。しかもただ運んだりとかだけならあたしも平気だけど、あれのバーコードを商品別に読み取っていかないといけないってのが面倒だ。

しかもその荷物が来てからはもう大変。今日はオーナーがいたから三人でやれたけど、普段は二人でやらないといけない。

あたしはまだ店内の商品配置とか覚えてないから右往左往してた。まあ、それを見ては只野やオーナーが教えてくれたんだけどさ。

「そんな顔するなつて。俺の言った事覚えてるか？ 多い時は最大で五回荷物が来る」

「うん」

「つまり、だ。逆言えば少ない時もあるんだ。週に二回冷凍はこない日があるし、何と週に一度はドライが来ない日がある」

「じゃ、四回になるんだ」

そう言うのと只野は小さく首を横に振った。

「違うんだ。実は、そのドライが来ない日は冷凍の来ない日と重なってる」

「じゃ、その日は三回しか荷物がこない？」

笑みを浮かべながら頷く只野を見てあたしはふと気付いた。

あたしの初日が今日になったのつて、何でもオーナーと只野の相談の結果らしいんだよね。

最初オーナーは明日にしようとしてたらしいけど、それを只野が反対したつて。

「まさか……」

「おめでどう。今夜は荷物が少ない日だ。ただし、冷凍がないだけだけど」

「やっぱり。要はこいつ、あたしが初日で楽を味わうのを嫌がったんだ。」

それがどういう理由かは考えないけど、単なるいやがらせとかじゃない事はあたしにだって分かる。

「なら一番荷物が少ないのはいつ？」

「毎週土曜の夜勤。つまり三日後」

「……あたし入ってる」

「オーナーも出来るだけ荷物の少ない日を休みにしたいのさ。心配事が減るからな」

納得。それにしても、今日は中々大変だったけど楽しくもあった。知ってるつもりのコンビニだけど、裏側に入ると色んな発見があるもんだ。

オーナーからも、少しだけなら廃棄持ってっていいって言われたし。

「それにしても、そのシュークリームは響達用？」

「そ。で、この小さいクリームパンはおやつかな」

「気を付けないとすぐ太るからな。夜勤はデブるぞ？」

「分かってるよ。こっちじゃ訓練も出来ないしね。精々ランニングとか筋トレでもするさ」

「それもそうか。俺も何かやった方がいいかなあ……」

「やった方がいいんじゃない？ 言いたくないけど、廃棄の食事って油分や塩分多くなるよ」

そんな話を話していると只野が足を止める。そこがどうもあたし達の住むアパートとあいつのアパートへの分かれ道みたいだ。

「じゃ、気を付けて帰れよ。おやすみ」

「ん。おやすみ」

軽く手を上げ合って別れる。只野はあたしへ背を向け道を曲がる。その背を少しだけ見送って、あたしはそのまま直進する。

何て言うか、バイト中は先輩って呼んだけど、いつそ外でもそう呼んだ方がいいかな？

何せどこで誰が見てるか分からない訳だし、店と外で呼び方が違うって逆に言うって怪しいもんな。

「……よし、これからは先輩って呼び続けてやるか」

言っただけ笑う。きつと只野は店の中は平気でも外だと恥ずかしがると思ったから。

とりあえずさっさと帰ろう。でシャワーを浴びて翼達と朝ごはんを食べて……ん？

「あたしはいつ寝れるんだ？」

今夜もバイトなら寝ないといけない。となると遅くても昼前には寝たい。でも朝ごはんはきつと八時とか早くても七時半。

食べ終わってからいきなりは走らないから遅いと九時だ。終わって帰ってきてシャワーを浴びて……おいおい十時ぐらいになるかもしれないのか、これ。

「十時に寝たとして……晩ご飯は早いと五時、遅くても六時。つまり寝てられるのは七時間？」

でも、それだと起きてすぐ食事だ。うん、これは不味いね。

こうなるとあたしだけバイト終わりは翼達と別の行動をするしかない。

そうと決まれば急いで帰ろう。で、シャワーは後回してシユークリームを冷蔵庫にしまつたらそのままランニングだ。

「これからはバイトに行く格好からトレーニングを考えないといけな
いね」

軽く走りながらあたしは笑う。いいじゃん、やってやるよ。どうせ週三日の事だ。

夜の暗闇から働き出して、こうして朝の眩しい日の光を浴びて汗を掻けるなんて気持ちいいじゃないか！

それに、もしこれで太りでもしたら絶対あいつが笑う。ほら見ろ言った通りだつて。

そんなのは絶対嫌だ。見てろ。あたしは絶対体重も体型も維持してみせるっ！

その気持ちでアパートへ戻ると心持ち静かに階段を上がる。二階建ての一番手前側の部屋。そこが今のあたしの住家。

鍵を取り出して開錠してそつとドアを開けると翼がもう起きていた。クツションの上に座つてテーブルに肘をついてる。つと、こつちに気付いた。

「ただいま」

初めて出すような小声でそう告げた。奥にまだ寝てる響とクリスが見えたからだ。

「おかえり奏。お疲れ様」

その小さな一言と笑顔が結構心に効いた。何だろうね、これ。多分
だけどこれまであたしと翼がいたら一緒に戦つてたからだ。

つまり、こうやって出迎えてもらう事はなかった。それが何て言うか、これが平和なんだって感じられるからだろうか。

「これ、お土産。定番のやつ。冷蔵庫に入れておいて」

「分かった。シャワー浴びるよね？ 着替え出しておくから先に入つて」

「あつ、ちよつと待って」

そつと立ち上がって寝室へ行こうとする翼を制止する。というか、あれ？ 翼ってこんなに気を利かせる子だったっけ？

「どうしたの？」

「えつと、あたしこれからちよつと走ってくるんだ」

「……………そういう事か。分かった。でもちよつと待ってて。タオルぐらいは必要だよ」

そう言つて翼は静かに足音一つ立てず寝室へと入り、タオルや下着などを入れた三段ボックスの一番上段からタオルを一枚取り出した。

そしてまた音もなく戻ってくる。本当にどうやってるんだろ、あれ。

「はい」

「ありがとう」

「気を付けてね。一応鍵持ってく？」

「いいよ。朝ごはんは二人が起きてからだろ？ それまで汗掻いてくるよ」

「分かった。行つてらっしゃい」

「行つてきます」

こうして再び部屋を出る。何だろうね、あの翼の奥さん感。

もしあれが只野と出会ったからって言うなら、ちよつと色々あいつに問い詰めなきやいけない事が出来たかも。

さて、目的地はいやルートはどうしようか？ 翼達と一緒に走つたやつもいいけど、どうせあたし一人なんだ。ならこの辺の散策も兼ねるか。

「……………ならジョギングだね」

軽くその場でストレッチをし、あたしは見知らぬ街を走り出す。

朝の風は心地良く、まだ静かな街は穏やかで、柔らかな陽射しが優しく辺りを照らしていく。

まだ知らないに近い場所だけど、もうあたしはこの街が好きになり始めてる。いや、この平和な世界がだろうね。

——あたしの世界も、いつかこんな風になつて欲しいもんだよ……。

奏が出て行つたのを見送り、翼はそつと立ち上がつて靴を履き出した。

「まだ只野さんは起きてるかな？」

そう呟く彼女の表情はまさしく恋する乙女のものだ。

本当は奏がシャワーに入っている内に散歩と言つて出かけようと思つていた翼だったが、まさか彼女が一人でランニングへ出ると思つておらず完全に予想外だった。

だがそのおかげで自分も自由に動けると思い直し、翼は小さく笑みを零しながら部屋を出ようとした。

「つと、着いた」

そこに可愛らしい声が聞こえてこなければ、だ。

「なつ……」

「あ、あれ？ 暗い？」

聞こえた声と生まれた気配に振り向いた翼が見たのはアガートラームのギアを纏うセレナであった。しかも彼女だけである。

「せ、セレナ？」

「え？ あつ、良かった。翼さん、お久しぶりです」

寝室の隅に置かれていたノートPCから現れたセレナはカーテンを閉め切られている室内に首を傾げるも、玄関にいた翼を見つけて嬉しそうに笑みを浮かべると同時にギアを解除する。

「あ、ああ。その、セレナ。少しだけ音量を落としてくれるか？ まだ立花と雪音が寝ているんだ」

「え？ あつ、本当だ。ごめんなさい」

「いや、いい。その、待っていてくれ。おそらく動けないだろうから」

「え？っ?!」

依り代のないセレナではその場から動けないだろうと踏み、翼は静かに彼女の近くへと移動する。

一方のセレナはまったく身動き出来ない事に驚愕しつつ頑張って動こうともがく。その奮闘する様子が愛らしく、翼は小さく苦笑しながらギアを纏う。

「おそらく私が触れば……」

「あ、あれ？」

抱き抱えるように翼がセレナを持ち上げるとその足は簡単に床から離れた。

「このまま運ぶ。大人しくしてくれ」

「は、はい。ありがとうございます」

生まれて初めてのお姫様抱っこ。その相手が同性の翼という事にセレナはガツカリ——ではなく照れていた。

(っ、翼さん、王子様みたい……)

やや照れくさそうに頬を赤めるセレナに翼は微笑ましく思つて笑みを浮かべつつ、ダイニングへと移動しセレナをそつと下ろすとそのすぐ近くへ響用の座布団を置いた。

その初めて見る物に小首を傾げつつ、クッションと似たようなものだとセレナは判断したが当然座れないため、翼が手を触れてやるとやっと可愛らしくそこへ座る事が出来た。

「あ、あの、今のはどういう事ですか？」

「簡単に言えば、ここでは私達は存在が不安定らしい。依り代、と呼んでいる物があるんだが、それが近くにないと動けないようだな」

「依り代……」

「ああ。……見てくれ。ペンダントに微かに色の異なる場所があるだろうか？」

ギアを解除しペンダントを見せる翼。そこには微かに色が異なっている部分がある。

「はい。それが依り代なんですか？」

「正確には組み込んだ証拠、だろうか」

「そうなんだ……。あ、あのっ、もしかしてこっちは夜なんですか？」

「いや、朝だ。ただ、まだ起こすには早い時間だな」

「そ、そうなんですか？」

やや驚きを表情に出すセレナだったが、その反応に翼は何か嫌な予感を覚えて表情を少しだけ真剣なものへ変えた。

「そういうえばセレナ、どうしてここへ？ たしか君は一人で行動するなど言われていたはずだが？」

「え、えっと、実はヴェイグさんが只野さんって方やその世界に興味がありました、遊びに来てくれた暁さんと月読さんをお願いしてこの近くまでついてきてもらったんです」

そのセレナの話は翼には初耳だった。何よりあの人間嫌いのヴェイグが人と自発的に会ってみたいと言い出すのは驚きでしかなかったのだ。

ちなみに切歌と調はマリアの言い付けにより仁志の世界へ勝手に行ってはならないと言われているので裂け目の手前で待機中である。

そしてヴェイグが来た事で一つ分かった事実があった。

「匂いがない？」

「はい。その、ヴェイグさんが言うには、この世界は嫌な匂いも優しい匂いも一切しないそうなんです」

「……それがどういう意味を持つのか説明してもらえるか？」

「えっと……つまりここに住んでる人達の心が優しいとか汚れてるとかがヴェイグさんにも分からないって事みたいです」

「そうか。彼であってもこの世界の人間の善悪を事前に察知するのは不可能か」

「……らしいです」

得られた情報に翼は内心でため息を吐いた。やはりこの世界は異常なのだと改めて感じ取って。

沈黙してしまった翼にセレナはどうしたものかとオロオロとしていた。と言うのもヴェイグが何とセレナの中から出てみたいと言いつ出したからである。

——ヴェ、ヴェイグさん、本当に大丈夫ですか？

——ああ、この感じなら平気だ。

——わ、分かりました。気を付けてくださいね？

そんなやり取りをした後、翼の目の前に久しぶりにヴェイグが姿を見せた。

「ヴェイグさん、どうです？」

「ああ、思った通りだ。ここなら俺も平気だ」

「平気、か。やはりここは特殊な世界で間違いないんだな」

「それで、タダノ？ その人間はどこだ？ 一緒じゃないのか？」

「ああ、只野さんはこことは別の場所に住んでいる。歩いて十五分程だが、今は多分寝ているはずだ」

「そう、そこなんですけど聞いていいですか？」

そのセレナの切り出し方で翼はもう何かを察していた。

「分かっている。セレナ、君が月読達と来たと言う事はそちらはもう既に活動するような時間なのだろう？」

「は、はい」

「ちなみに何時か教えてもらえるか？」

「えっと、十時です」

思わず翼は息を呑んだ。これまでこの世界へやってきた者達は時間の経過がずれている事があっても、そこにはそれなりの法則や条件があつた。

今回のセレナはそれから外れていたのである。この日初めてやってきた装者であるのに、その到着時間が大きくずれていたのだから。

「……そこまで違うのか」

「え、えっと、こちらは何時なんですか？」

「朝の六時半になるかならないかだな」

今度はセレナが息を呑む番だった。三時間以上のズレという想像もしない現実には幼い彼女は感じ取ったのだ。この事が意味するのは絶対に良い事ではないと。

翼とセレナの視線が交わる。そこに宿る色が同じである事に気づき、二人は同時に小さく頷いた。

「セレナ、暁と月読と共に一度私達の世界へ行ってくれ。そこで今の

事を報告してもらえらるだろうか？ それと、君もここで活動できるようにギアへ細工をしてもらって欲しい。もしマリア達もまだならそちらも同様の処理をと」

「分かりました」

凜としたセレナに頷きを見せて翼は視線をヴェイグへ向けた。

「君はどうする？ 可能なら只野さんと話をして欲しい。それで見えてくるものや事があるかもしれない」

「……一旦出直す。ここへの興味は強くなったがそれでもセレナから離れるつもりはない」

「ヴェイグさん……」

「そうか、分かった。では、また来てくれ。待っている」

「はい。ヴェイグさん、行きましょう」

「ああ」

ヴェイグは翼の前から姿を消し、セレナはまた翼によってゲートまで運ばれて一旦出直す事となった。

再び静まり返る室内。翼はため息を吐くと立ち上がって再び靴を履いた。

そして部屋を出ると施錠しやや急ぎ気味に動き出す。向かうは仁志の部屋だ。

(遂に時間のズレが露骨になった。しかも今回はこちらよりも向こうの方が時刻が進んでいる。これは、何か嫌な予感がする)

焦る気持ちが足へ宿り、その速度は早足から駆け足へと変わっていき。

と、翼が仁志の住むアパート近くまで来たところで思いがけず奏と出くわした。

「あれ？ 翼？」

「奏？」

期せずして共に走っていたところで遭遇し、しかもそこが仁志のアパート前という偶然に二人は瞬きをするも先にそこから脱したのは翼だった。

「奏、実はさっきセレナが来て……」

告げられる内容に奏の表情が一瞬にして真剣なものへ変わる。理解したのだ。その内容の異常さに。

「よし、只野の部屋へ行くよ」
「うんー」

時刻は午前七時前。これまでの経験から言えばもう寝ていると翼は思った。それでも一縷の望みを託すように彼女はドアをノックした。

「只野さん、只野さん。まだ起きてますか？ 起きていたら聞いて欲しい事があるんです」

時間もあつて大きな声は出せない事もあり、翼はノックも声も控えめにならざるを得なかった。

だが奏はそこから動いて裏へと回る。そして窓までやってきてカーテンが閉まっているかどうかを確認したのだ。

「……開いてる」

この時間に寝るのであればカーテンは閉められているはず。なのに開いたまま。これで寝ているとは考えられない。

そう思つて奏は急いでドアの前まで戻った。翼はもう仁志が寝ていると考えたらしく若干肩を落としていた。

「翼、多分だけど只野は部屋にいない」
「え？」

「カーテンが開いたままになってる。夜勤明けの人間がこの時間に寝るとして、カーテン閉め忘れる？」

その言葉に翼は首を横に振った。ならばもう答えは一つ。仁志はどこかへ出かけている。

「奏、もしかしたら只野さんの身にも何か起きてるかもしれない」

「……手分けするよ。翼、あんたは一旦あつちの部屋まで戻つて。で、もしセレナがいたら情報をもらう。あたしはこの辺を探してみる」
「分かった。またこの辺りで落ち合おう」

頷き合つて二人は動き出した。急いで部屋まで戻る翼とアパート周辺を探す奏。

その頃仁志はと言えば……

「あーっ、良い気持ちではあるけど疲れたあ」

額から汗を流しながらあの公園にいた。彼は一旦部屋に戻った後、自分も運動をしようと思立ち、楽な格好へ着替えてこの公園までやってきてから今まで、のんびりゆったりとしたペースで延々歩き続けていたのだ。

要は体力作りのウォーキングである。スマホのアラームをセットし、七時になったら振動するようにし、ようやく終わりを迎えたと言う訳だった。

「でもこれなら続けていけそうだな、うん」

取水場へ行き、汗を流すのではなく顔を洗うようにして涼を取り、持ってきたタオルで顔を拭いて頭の汗なども拭っていく。

最後に水を少しだけ飲んで一息つくど、彼は自分のアパートを指す――のではなく響達の暮らす部屋へ向かった。

「シャワーだけ貸してもらおう」

七時になれば確実に翼が起きているはず。そんな考えで彼は女性達の部屋を目指す。

それと同じくしてゲートからセレナが再び現れる。だが、今度は翼がおらず、彼女は困惑した。

「あ、あれ？ つ、翼さん？」

いるはずの相手がない事に戸惑うセレナだったが、その目の前にヴェイグが姿を見せる。

「セレナ、誰か来るぞ」

「え？ 翼さん？」

「いや違う。何の匂いもしない奴だ」

その言葉の直後、ドアを軽くノックする音が響く。

「翼、悪いけど開けてくれないか？」

「……男の人の声？」

「タダノって奴じゃないか？」

「あれ？ おかしいな。翼？ おーい」

「あ、開けた方がいいかな？」

「分からない。匂いがないんじゃないや俺でも判断出来ない」

揃って困り顔をするセレナとヴェイグだったが、すぐに一つの結論に達した。

「確認しよう」

こうして二人はドアの近くまで移動した。ただ、やはりヴェイグも動けなかったのでセレナが抱き抱える形での移動となったが。

「あの、只野さんですか？」

「え？ 誰？」

「え、えっと、私、セレナって言います」

「セレナ？ え？ セレナってイヴさんの妹の？」

「あつ、はい。そうです」

疑問符を沢山浮かべる仁志だが、その受け答えで大丈夫だと判断したセレナは鍵を開けた。

ゆっくりと開くドアの向こうに立っていた汗をタオルで拭いている男性の姿を見て、セレナは目をパチクリとさせる。

「うわあ、本当だ。思ってた以上に小さくて可愛いなあ」

「え？ あ、えっと……ありがとうございます」

生まれて初めて年上の男性から本心で褒められた事にセレナは照れから下を向いた。

だが、仁志の意識はすぐに別のものへと奪われる。

「つて、ええっ!?! ヴェ、ヴェイグさん？」

「……ホントに俺の事まで知ってるんだな。しかも、名前を」

「どうしてここに？ いや、違うか。どうしてこうして外に？ てか

人間嫌いでしょ？」

しやがんでヴェイグへ視線を合わせる仁志にセレナは直感で彼が優しい人だと思った。

同じようにヴェイグも彼が悪い人間ではないと感じ取っていた。

「……この世界やお前からは嫌な匂いがしない」

「匂い……？ ああつ、そっか。君は人の悪意とかを感じ取れるんだっけ。でもそれなら良かったよ。きつとここも俺も酷い匂いではないと思うけど、絶対セレナちゃん程優しい匂いではないだろうし」

「そ、そんな事ないと思います」

あつけらかなと自分や世界は良くない匂いをさせると言い切る仁志にヴェイグは瞬きをし、セレナは少し困った顔でそれを否定する。

二人はこのやり取りだけで仁志が本当に自分達の事を知っているのだと理解し、しかも自分達しか知らないはずのやり取りからの発言である事も悟っていた。

「とにかく中へ入れてもらっていいかな？」

「あ、えっと……」

しゃがんだままセレナへ問いかける仁志。セレナは自分が判断してもいいものかと困った。

そこへ翼が現れたのである。

「た、只野さん？ それに、セレナとヴェイグも……」

「翼、おかえり。というか、汗掻いてるけど……」

「説明は後です。セレナ、もう組み込んでもらったのか？」

「はい。姉さん達も今頃はギアにあの欠片を組み込んでもらってるはずです」

「一人で来たのか？」

「き、緊急を要するって事で」

翼とセレナのやり取りで仁志も何となく良くない状況になった事を察したのか苦い顔をしていた。

何せ一番年少の装者が一人でここへ来たのだ。しかも一度やってきて再度出直す程に。

実際はヴェイグが自分に会ってみただけとは知らず、ただ時間のズレというこれまで深く考えてこなかった部分での異変が起きたため、その認識は間違っではない。

「……翼、すまないけどシャワーを貸してもらえないか？ 汗と一緒に眠気も流したいんだ」

「分かりました。バスタオルは後で出しておきます」

「ありがとう。セレナちゃん、ヴェイグさん、申し訳ないけどちよつとだけ待っていてくれ。すぐに俺も話を聞かせてもらうから」

「はい」

「ああ」

こうして仁志はシャワーへと向かい、翼はバスタオルを用意するとセレナへ留守番を頼み、奏と合流するため再び来た道を戻っていく。薄暗い部屋でセレナはヴェイグを抱き抱えたまま寝ている響達を見ていた。

「……何だか不思議な感じ」

「何がだ？」

ぽつりと呟いた言葉へヴェイグが顔を動かす。セレナはどこか楽しそうな表情を浮かべていた。

「響さん達の寝顔なんて初めて見るんです」

「……そういう事か」

セレナも響達と行動を共にした事がない訳ではない。ただ、一緒に眠る事などなかったので寝顔を見る事もなかった。

つまり、本来なら見る事のなかったものを見ているからこそセレナは楽しそうにしているのだとヴェイグは理解したのだ。

「只野さん、良い人みたいです」

「……かもしれない」

「ヴェイグさんは、そう思いませんか？」

「分からない。ただ、ああやってはつきりと自分や世界が優しくなっていくと言えるなら、悪い奴ではないと、思う。それに……」

「それに？」

セレナの問いかけにヴェイグは少しだけ遠い目をした。

「……俺の名前を初めて会う人間に呼ばれるなんて、複雑な気持ちになった。俺の事を迎えに来てくれるはずだった友人の知り合いじゃないかって、そう思った」

「ヴェイグさん……」

「でも、きつと違う。あいつは俺の事を知ってるだけだ。でも、それが俺には嬉しい。あいつは聖遺物なんかに興味はないだろうし、ドヴェルグなんて事にもこだわらないはずだ。ただ、俺がヴェイグって事に喜んでくれた。それが、俺には嬉しかった」

これまで自分の持つ力や技術を狙ってきた者達しか知らないヴェイグにとって、仁志の純粋な興味や接し方は好ましく映っていた。

初めて見る自分に対しての興味を示す様は、かつての未熟な頃の自身を思い出させるものがあつたのだ。

「……会いに来て良かったですか？」

「……まだ分らない。でも、これが悪い出会いとは思いたくない」「んう……？」

二人の話し声でクリスが目を覚ましてゆつくりと目を開ける。そのまま布団から出ようとして何かに気付いて軽く掛布団を捲り上げた。

「……またかよ」

自分を拘束するように響の腕がしっかりと巻き付いていたのだ。

「えへ〜」

「……放せつての」

「ううっ……」

優しく腕を引き剥がそうとするクリスに寝ながらも悲しそうな声を出す響。

その光景を見てセレナは小さく笑う。まるで姉にじゃれつく妹のようだったからだ。

(今のクリスさんと響さん、姉さんと私みたい)

(何だか今のこいつらからもセレナに近いぐらい優しい匂いがする。前と匂いが変わるとか、そんな事あるのか?)

微笑むセレナの腕の中でヴェイグは首を傾げる。彼は知らないのだ。今の二人は恋をしていると。

心の中に新しく咲いた恋と言う名の花。響とクリスはそれが咲き誇っている二人なのだ。ただ、自覚しているか否かの違いはあつたが。

「つたく、やっと動けるぜ……んく……っは」

大きく伸びをするクリス。その豊かな胸元が揺れセレナは思わず自分の胸を見ようとして……

「どうかしたのか？」

「っ!? え、えっと、何でもないです……」

抱き抱えていたヴェイグと目が合う事となつた。

(い、いつかは私も姉さんやクリスさんみたいになれるかな?)

まだまだ成長途中の少女は血縁の女性を思い浮かべ、それが自分の将来像であると信じたかった。

「ん? セレナ……?」

「あ、はい。おはようございます」

「……………先輩はどうした?」

「えっと、奏さんと呼んでくるって」

「は?」

「それと只野さんがシャワーを浴びてます」

「はあっ?!」

寝起きで情報が交通渋滞を起こした。クリスはそう思うも口にする事はない。セレナに言ったところで意味がないと分かっているからだ。

それでも彼女は何か面倒事が起きていると判断し、すぐさま振り向くと今も幸せそうに眠っている響を起こす事にした。

「おい、起きろ」

「んく……あと五分……」

「お約束の答え返してるんじゃねえ。すぐ起きて顔を洗うんだよ」

「んんっ……せめてあと三分」

「ダメだ。起きろっての」

「うく……じゃああと一時間」

「増えてんじゃねーかっ! てかもう起きてんだろっ!」

この世界に来てから急速に距離感が縮まっている二人である。未来が見れば嫉妬する程見事なコンビ芸だ。

セレナとヴェイグもそんな二人を見て思わず笑顔を浮かべていた。

「仲が良いですね、あの二人」

「だな」

「そつちもあたしらを見て和むんじゃねえ!」

その照れ隠しの一言にセレナとヴェイグは笑い出し、響も寝転がりながら笑う。

そんな中、仁志はバスタオルで頭を拭きながら疑問符を浮かべて姿

を見せた。

シャツは汗を吸って気持ち悪かったので軽く水洗いをしてハンガーへかけ、元々履いていたジャージ姿という格好で。

「……何があつたんだ？」

楽しげに笑うセレナ達と一人照れているクリスを見て彼は首を傾げる事しか出来なかった。

やがてそこへ翼と奏が戻ってきて、奏が汗を流す間にクリスと翼が簡単な朝食を作る事となる。

セレナはもう食べているので遠慮し、仁志も帰ってから食べる物があるので断った。

そうなると食べる四人が気を遣うかとも思い、二人はダイニングから寝室へと移動する事に。

「セレナちゃんもスマホの欠片組み込んだんだ？」

「はい。翼さんがそうした方がいって」

「成程なあ。ヴェイグさんはどうしてここへ？」

「神の世界と聞いて興味が出た」

「ああ、そういう事か。申し訳ないね。面白くない世界で」

「いや、そんな事もない。十分面白い事があつた」

「そう？ 例えば？」

「お前とかだな」

「まさかの返答におっさんビックリ」

セレナの腕の中から離れ、ヴェイグは部屋の中を自由に歩けるようになっていた。

仁志のスマホがあるおかげである。今はセレナの横にちよこんと座って、まるでぬいぐるみのようなようであった。

そんな光景を横目で眺め、響達は食事を進める。

今朝は炒り卵に焼いたソーセージがそれぞれ四本とスライストマト、そしてバタートーストだ。

「なあ、あんなに喋る奴だったか？」

「ヴェイグの事だろ？ あたしも思った。たしかシリウス相手には結構手厳しかった記憶がある」

「多分只野さんはヴェイグさんの力とかに興味ないからじゃないかな？」

「そうだろうな。只野さんからすれば彼は愛らしい生き物だろう」

その翼の言葉に三人は揃って頷き、はたと何かに気付いて視線を彼女へ向ける。

「「愛らしい？」」

「っ?! さ、さあ早く食事を終えよう。話さないといけない事もあるし奏や只野さんも今夜に備えて眠らないといけないし」

急かすように告げて翼は食事へ意識を向ける。どこからどう見ても照れ隠しである事は明白だが、今は翼の言う事も一理あるため彼女達はそれ以上何も言わなかった。

ただ……

(翼さん、ヴェイグさんの事可愛いって思ってるんだ)

(まったく、先輩にもそんな面があるんだな)

(ははっ、まあたしかに可愛いもんな、あいつの見た目)

(ううっ、絶対みんなして笑ってる……)

翼の思わぬ一面にニヤニヤと笑い、それを空気から感じ取って翼だけが恥ずかしそうになっていたが、それもまた楽しい思い出の一ページとなる。

「思ったんだけどさ、これ、もしかすると時の流れ方がここ以外遅くなってるんじゃないか？」

その俺の切り出しに全員が息を呑むのが分かった。自分でもとんでもない事言っているのは分かる。でも、こう仮定すると納得出来る事が多いんだ。

「この考えの理由の一つは天羽さんが体験した事。ここへ来る前と来た後で根幹世界の経過時間がほぼ動いていなかった。これ、明らかにおかしい。しかもだ。天羽さんの本来の世界なんて、根幹世界で過ごした時間とセレナちゃんの世界で過ごした時間まで流れていない事になってる。これは響やクリスが経験した事を超えてる」

「では、このままだとどうなるのですか？」

「俺の予想だと、いや色んな作品とかで似たような題材を扱うと出てくる展開は……ここ以外の時間が停止するとか、あるいは浦島太郎状態にされる」

「うらしまたろう?」

俺の挙げた例えに二つの声が重なる。勿論セレナちゃんとヴェイグさんだ。

「説明は後でするね。つまり、こっちでの一日がそれぞれの世界では一年にも十年にも、下手をしたら百年にもなるって事ですわね!」

「今までは逆はあってもそれはねーって思ってたのに……」

「でも、どうして急に? 何か状況が変化する切っ掛けはあったか?」

その天羽さんの問いかけにセレナちゃんは首を横に振った。心当たりはないって事だろう。

そして当然俺達にもそれはない。まさか天羽さんが夜勤始めたとかじゃないだろうしなあ。

「とりあえずセレナへ頼んでマリア達にも依り代をギアへ組み込んでおくように言ってもらった」

「え? どうしてですか?」

「あのなあ、そもそも今回の事が起きた場所はどこだ?」

クリスの指摘で響がやっと思いついたらしい。そう、騒動の中心地はここなんだ。なら、最悪の場合ここへ装者九人勢揃いとなる。でもその時動けないとなったら面倒な事この上ない。

おそらく翼はもう最悪の状況を想定したんだ。ここへ来る来ないではなく、来なければならなくなった時を。

と、そこで俺は思い出す。切っ掛けかどうかは分からないけど、まだ根拠も証拠もないものだけど、たしかに最近あった大きな出来事を。

「なあ、これはまだ俺の妄想でしかないんだけど……」

この世界には元々「戦姫絶唱シンフォギア」という作品があった。そのファンは数多くいて、少なくとも十万は超えるだけの適合者と呼ばれたファン達がいた。

だけど、それがある日突然俺の記憶以外の全てからシンフォギアは

消えた。そんな中で、俺達は「戦姫絶唱シンフォギア」という名の動画配信チャンネルを作った。

更に風鳴翼が歌をアップし、ツヴァイウィングと言うユニットが逆光のフリーユージェルをアップ。その後天羽奏が歌をアップした。

おかげでチャンネル登録者数は二十万へ届きそうな程であり、少しは世間に「戦姫絶唱シンフォギア」というものが知れ渡ったと言える。

それが悪意には目障りなんじゃないだろうか？ 折角消したはずのものを甦らせようとしている、と。

「……って思うんだけど、どうだろう？」

俺のそんな考えを聞いて全員が考え込んでいた。あまりにも突飛な考えだとは思う。

でも、悪意が平行世界などの悪意を取り込んで力を戻そうとしているとすればないとは言いきれない。

そもそもこの上位世界とか扱われるところから戦姫絶唱シンフォギアそのものを消滅させて装者達を一掃しようとしたぐらいだ。なら、彼女達を孤立させてやろうとしてもおかしくない。

「なくはない、って感じかな」

「そう、だね。ただ、状況的に私達ツヴァイウィングが関係はしてる気はする」

「もしくは奏さんがセレナちゃん達へもこの事を伝えたからかもしれない。あの世界蛇と戦った世界の「つだし」

「あり得るな。って事はだ。下手するとあのフィーネのいる世界やもう一人のあたしらがいるところは……」

「手遅れになっているかもしれない、な」

俺の言葉に翼達が立ち上がる。今は行動するしかないもんな。でも……

「天羽さんは留守番。というより寝る」

「只野……でも……」

「駄目だ。むしろ寝不足の状態で何かあったらどうするつもりだ？」

そう言う翼達も揃って頷いた。今は不測の事態でも対応出来る

人間だけが平行世界間移動を行うべき。そう三人も考えているんだろう。

「翼さん、私とクリスちゃん、ファイネさん達の世界へ行ってきました！」

「分かった。私はセレナと共に一旦本部へ戻り、今の推測を報告してからシャロン達の世界へ行ってみる」

真剣な、微かな緊迫感が漂う中、俺はやや申し訳なく思いながら手をゆつくりと上げた。

「あのさ、俺は自分の部屋へ戻って寝てもいい、かな？」

「どうせならここで寝ていきなよ。どうせあたししかないし、何かあった時誰もいないより疲れてても装者がいる方がマシだ」

そう言つて天羽さんは真剣な表情を向けてきた。これは俺の事を信頼するのと同時に心配してくれてるって事か。

「只野さん、私も奏さんの言う通りだと思えます。少なくとも今は一人は止めてください」

「そうだぜ。しかも眠るなんて襲われたら逃げる事も出来ねえ」

「私達も出来るだけ早く戻ってくるつもりですが、時間のズレが大きくなっている以上向こうの五分がこちらでは二時間や三時間となる可能性もあります」

「そう、だな。分かった」

「あたしの布団をいな。あたしは翼の使うから」

こうして俺と天羽さんは四人を見送ってから眠る事に。

で、俺はダイニングに布団を敷こうと思ったのだが……

「い、一緒？」

「あのさ、いくらあたしでも状況は考えるよ。それにあたしもあんたも夜勤明けで疲れてる。そんな時に離れてたら何か起きてても気付けないかもしれないだろ？」

あの天羽さんが寝室で寝ろと言ってきたのである。いや、俺も彼女の言わんとしてる事は分かるけど……

「いいのか？ 疲れて眠くても、男は男だぞ？」

「別にいいよ。むしろそんな眠そうな顔でスケベな事優先出来るぐら

いの体力があるなら頼もしいね」

「……分かった。ありがとう天羽さん。おやすみ」

「そうそう、それでいいのさ。じゃ、おやすみ」

と、そこでふと今朝の別れ際を思い出して思わず笑ってしまった。

「どうしたのさ?」

「ん? ああ、悪い。今日の別れ際にも言ったのになってさ」

「……あははっ、ホントだ。同じ日に二回も同じ奴におやすみって言
うなんてね」

「本当だ。でも、うん、悪くないよ。やっと天羽さんと仲良くなれてき
たって感じがした」

「やっとねえ……。ま、そうだね。とにかく早く寝よう」

「あつと、念のためアラームセットしとく」

「よろしく。あとさ、やっぱあたしらも連絡手段欲しいよ」

「……………考えておく」

「ん。お願い」

そこで俺達は揃って目を閉じる。するとすぐに睡魔がやってきて

……

「た、只野さん、起きてください」

「ん……………」

あまり聞き慣れない愛らしい声と力で意識を揺り起こされた。

目をゆっくりと開ければそこには可愛らしい天使のような子が。

ただ、最後に見た時よりもかなり元気がないように見える。

「お、おはようございます」

「そうは言ってももう夜になるがな」

更に視界に入ってくる可愛らしい生き物。うん、こんなぬいぐるみ
あつたら売れそう……。

「っ!?!」

そこで意識が覚醒した。夜になる!?! とうにかセレナちゃんがど
うしてまたいるんだ?!

「やっと起きたね……」

「天羽さん……」

聞こえた気怠そうな声に目を向ければ、そこにはいかにもさつき起きたばかりですという顔の天羽さん。

これが世界が世界ならトップアーティストなんだから笑えない。すると目の前へ差し出されるコップ。これは色合いからして響のか。

「お水をどうぞ」

ただ、差し出してきたのは小さな愛天使。でもやはり明るさがない。

「ありがとう。ところでどうしてセレナちゃんか？」

「……えっと」

「セレナの世界へのゲートが消えたんだ」

この時程俺は自分の迂闊さを呪った事はないだろう。考えてみれば確実に彼女に良くない事が起こった事ぐらい分かるはずなのに、気落ちしていると分かっただろうに。

ヴェイグさんの声には悲しみが宿っていて、それを聞いたセレナちゃんが俯いた事が俺の心に重くのしかかった。

そして同時に思う。帰り道が見えなくなってしまうこの子を、帰る事が出来るその時まで何としても守らないといけないのだとも……。

此の今を生きて

「あの翼って奴と一緒にゲートを使ってまずはあいつの世界へ行つた。そこでお前の考えを教えて、すぐ二人で別の平行世界へ行つたんだ。でも、もうそこへのゲートが消えてて」

「そこで既に？」

「ああ」

今、俺はヴェイグさんからセレナちゃんが経験した事を教えてもらっていた。天羽さんはシャワーを浴びに行っていてここにはいない。

セレナちゃんはさつきから俯いて寝室の奥でうずくまっている。多分だけど、泣きたいんだと思う。

でもそうしたら周囲に心配させると思っただけで耐えているんだろう。強い子だ、ホント。

「それで、不味いと判断した二人はすぐにセレナの世界へのゲートを見に行ったんだ」

「でも、それも消えていた……」

ヴェイグさんは小さく頷いてセレナちゃんへ目を向けた。

「あいつは事態が落ち着くまで姉と一緒に居る方がいいと言っただが……」

「セレナちゃんがそれを拒否した？」

「そうだ。どうしてかは分からない。でも、多分姉の傍にいと嫌でも思いうすんだろ」

「……ママの、ナスターシャ教授の事を、か」

納得出来た。セレナちゃんにとってはもう一人の母親だった人だ。多分死んではないと思うけどどうなってるかが分からない以上不安は尽きないだろう。

ましてや今回は色々これまでの事と違い過ぎる点が多い。でも、正直言つてここよりも姉であるイヴさんのところに身を置くのが一番だと思ふんだ。

ここは貧乏だし色々制約も多い。S・O・N・G本部の方が

色々と便利のはずだ。

それでも、今はナスターシヤ教授を思い出すような場所にいたくないって事か。

「それで翼は？」

「何でもセレナの宿泊用意が何も無いからそれを買ってくると言ってもまた出かけていった」

「そっか」

俺は言ってから振り返る。今もセレナちゃんは部屋の隅で小さくなっていた。

俺を起こしてくれたのは、多分だけど沈み切ってはいないというアピールなんだろうな。

もしくは天羽さんがいたから彼女へのアピールかもしれない。実際今は完全に落ち込んでいる訳だし。

「セレナちゃん」

「っ……何ですか？」

声をかけたら一瞬震えた。でも顔を上げる事はしない。上げたくないのかそれとも……。

「きつと俺なんかの言う事じゃ信用できないとは思うけど、それでも言っておくよ。明けない夜がないように、止まない雨がらないように、必ず好機は、チャンスは来るから。それまでは体力を保って気持ちを、心を折らないようにした方がいい。じゃないと、いざ助けられるって時に全力の全力を出せなくなっちゃうぞ？」

「全力の、全力……？」

ゆつくりとセレナちゃんが顔を上げた。その目は今にも泣きそう。だからこそ俺は笑みを見せる。

「そうさ。ゲートがなくなつた。でも、それは向こうへ行けなくなつただけだ。君の、セレナちゃんの世界がなくなつた訳じゃない」

「本当に、本当にそうなんですか？」

「ああ。もしその世界自体が消えたのなら君がいなくなってるはずだ。ここで起きた事は聞いている？」

「……少しだけなら」

「そつか。じゃあ簡単に説明するね。ここにはセレナちゃんのお姉さんの世界での出来事が映像などになって存在していたんだ。そして君とお姉さんの出会いとそこでの出来事もね。それがあある日突然全て消えたんだ。映像も何も、人々の記憶からさえも」

「……一緒です。今の私と一緒に。全部、消えちゃった」

目の涙が少しだけ零れる。まだ慌てない。まだ慌てるような時間じゃない。

「そうだね。だからこそ俺は大丈夫だって言いたいんだ」

「え？」

涙が止まる。顔が上向く。ここだ。

「だって、俺も君も覚えてるじゃないか」

気付いて欲しい。セレナちゃんが今もいてその記憶を失っていない事。これが何よりの答えなんだと。

「覚えて、いる？」

「そう。俺が君達の事を覚えていたから君達は消滅しなかった、らしい。じゃあ、逆に考えてごらん。セレナちゃんが自分の世界の事を、ナスターシャ教授たちの事を覚えているって事は？」

「……ママ達は、消えてない？」

「そうさ。君が覚えている限り、悪意がどれだけ頑張ろうと君の世界を消滅させる事は出来ない。出来るのは精々帰り道を隠す事ぐらいだ。でも、それが君の心を曇らせ、意思を脆くすると知ってる。だからセレナちゃん、負けちゃ駄目だ。悪意の、悪い奴の思い通りにならないと、そう強く心を持って欲しい。君が強く心を持つ事。それが隠されたゲートへの道を切り開く光になるんだ」

「強く心を持つ事が、ママ達を助ける道になる……」

セレナちゃんの涙はもう完全に止まっていた。その目には、表情には、さつきまでは失せていた精気が戻っているように見えた。

「うん、その通り。だから、この事で泣くのは今日だけだ。明日からは、笑顔で明るいセレナちゃんに戻ってくれと嬉しい」

「え……？」

「悲しい時には泣けばいい。だけど泣き続けるのはいけないよ。その

涙を明日の笑顔へ変えるんだ。そして次に泣く時は悲しい涙じゃなくて嬉しい涙にするんだ。そのために、今日で悲しい涙は出し尽くす。もし泣き声を聞かれるのが恥ずかしいなら天羽さんが出たらシャワーを使えばいい」

「……はい。ありがとうございます」

そう言っただけにセレナちゃんが見せたのは、とても可愛い笑みだった……。

「只野さん、優しくていい人です」

「そうだな」

今、私はヴェイグさんと一緒にシャワーを浴びていた。ヴェイグさんはあまり濡れる事が好きじゃないみたいだけど、今日は特別だって言っただけしてくれてる。

いつもみたいに私の中にいてくれればいいのに、きつと私の事を思っただけ。

「奏さんも、優しくかったし」

只野さんがシャワーを貸してあげて欲しいと言った時、奏さんは私の顔を見て頷いてくれた。

そして横を通り過ぎる時、小さな声でこう言ってくれたんだ。

——こっちはそれなりの音量で音楽かけてるから気にしなくて大丈夫だよ。

そこでまた涙が流れそうになったから頷く事しか出来なかった。

「セレナ、俺もあいつの、タダノの言う通りだと思う。本当に悪意がセレナの世界を消滅させたのならきつとセレナ自身も消えてるはずだ。もしくは記憶が失われるだろう」

「はい、私もそう思います。ううん、思ってます。私がいる限り、ママ達は、私の世界は消えてないって」

「そうだ。信じていけば、諦めなければきつといつかその気持ちは報われる。俺が、そうだったように」

「ヴェイグさん……」

私をじつと見上げるヴェイグさんの目はとっても強くて優しい。

うん、そうだよね。絶対、絶対諦めない。只野さんの言うように、悲しむのは今日で終わり。明日から、明日からはもうこの事で悲しむ事は止める。

だから、少しだけ、いいよね？ 今だけ、思いつきり泣いても。

「っ……ママ……っ！」

こんな事ならもっとお話しすれば良かった。ちゃんと出かける時に挨拶すれば良かった。

もう会えない訳じゃないって思うけど、どうしてもそんな気持ちが浮かんでくる。

翼さんがもしあの時一緒じゃなかったら、きっと私はあのまま泣き崩れてどこか分からない平行世界に落ちてたかもしれない。

シャワーを浴びながら泣き続ける私の事をヴェイグさんが触れてくれた。何も言わず、ただ黙ってそうしてくれた。

一人じゃないって、俺もここにいて、そう言ってくれるような。それが嬉しくて、あつたかくて、余計泣いちゃった。

どれくらい泣いてたか分からないくらい泣いて、指の皮がシワシワになるぐらいまでお湯を浴びた。

シャワーを出て体を拭いているとヴェイグさんがシャワールームで体を大きく震わせて水を飛ばしてた。それがワンちゃんみたいで思わず笑っちゃった。

「セレナ、今何で笑った？」

「ふふっ、ご、ごめんなさい」

「……まあ今日はいい。やっぱりセレナは笑ってる方がいいしな」

「ヴェイグさん……」

につこりと笑うヴェイグさんへ私も笑顔を返した。うん、もう大丈夫。夫。

私、頑張るねママ。絶対そこへ戻るから。

体を拭いて髪をドライヤーで乾かそうと思って探す。あつ、あつた。

髪を乾かしながら私はヴェイグさんへ目を向ける。そうだ。今日はヴェイグさんも濡れてるから乾かさないと。

「ヴェイグさん、乾かすからこつちへ」

「……それも正直好きじゃない」

「文句言わないでください。えいっ」

「ううっ、妙な感じだ。風が温かいのは」

ふふっ、ヴェイグさんは本当にドライヤーが苦手なんだ。でも、こんなにお喋りするのには珍しい。

私と二人の時もそんなに自分から話す事はないのに。

「あの、ヴェイグさん」

「ん？」

だから聞いてみる事にした。どうしてこんなにも喋ってくれるのか。

私の質問にヴェイグさんは少しだけ目を閉じると、ポツリとこう言った。

「多分、あいつが、タダノがどこか昔の俺に似てるからだ」

「昔のヴェイグさんに？」

「ああ。何の力もなくて、知恵もなくて、自分なんか役立たずだっけってそう思ってた頃の俺に」

言われて思い出す。只野さんはギアもなくてノイズもない世界の人。で、えっと、何でもばいど？ って言う立場らしくてあまりお金に余裕がないらしい。

でも、思っていたような人とは違った。初めて会った時の只野さんは、少し眠そうな顔でどこか優しい目をした男の人だったから。

それに、私の事を小さくて可愛いって、そう言ってくれた。あれ、姉さんが私を褒める時と同じだった。本当にそう言ってくれてるって、そう思ってた嬉しかったけど恥ずかしかったから顔を伏せちゃった。

「セレナ、ここに居る間だけ俺はこうして過ごしてもいいか？」

そんな事を思い出してたらヴェイグさんがそんな事を聞いてきた。だから答えは決まっていた。

「当然じゃないですか。だって、ヴェイグさんは私の友達ですから」

「……そうか。うん、そうだった。ありがとう、セレナ」

「はいっ！」

初めて出来た装者じゃない私の友達。きつとヴェイグさんは只野さんとも友達になりたいんだ。

だって、ヴェイグさんも昔は人間を嫌ってなかったはずだから。友達だった相手だっているはずだから。

用意してもらったシャツと……ハーフパンツ？ それに着替えて戻るとそこには響さん達がいた。代わりに只野さんと奏さんが見当たらない。

「おかえりなさい、響さん、クリスマスさん」

私が声をかけると三人してこつちを向いて、そして笑顔を見せてくれた。

「うん、ただいまセレナちゃん」

「もう大丈夫か？」

「はい。ご心配かけました」

「ところでタダノはどこだ？」

ヴェイグさんがキョロキョロと部屋の中を探すけどどこにもいない。

「すまない。只野さんは仕事もあるからと既に部屋へ戻ったんだ」

「えっ!?! 夜なのに、ですか？」

「ああ。夜勤と言って分かるか？」

「は、はい。夜中に働く事ですよね」

「只野さんと奏さん、それをやってるんだ。コンビニで」

「コンビニに？」

響さんの言葉に私とヴェイグさんの声が重なる。初めて聞く言葉だ。あつ、違う。見た事や聞いた事はある。

姉さん達の世界でお出かけした時に入った事もある場所だ。たしかなんでも屋さん、だっけ？

「あれ？ 知らない？」

「年中無休、二十四時間営業の店だ」

「あ、はい。思い出しました。なんでも屋さんですよ？」

「……まあそう言えなくもないか」

何故か私の言葉に翼さん達が苦笑した。何か間違った事言ったか

な？

「そうか。タダノは大変な事をやってるんだな」

「そうですね。奏さんもなんて……」

「まあ、そっちはここにいと寝そうだからって理由で部屋を出たんだけだな」

そう言つてクリスさんが笑いながら寝室へ目を向けた。

視線を動かすと寝室にはまだ奏さんが寝てた布団が残ってる。

「翼さん、セレナちゃんですけどどうします？」

「そうだな。今夜は私と共に寝てもらおうとして……」

「一緒に、ですか？」

姉さんぐらいとしか寝た事ないから何だか変な感じがする。

で、でも翼さんならいいかな。今日だつてお姫様みたいな事してもらつたし。

「ああ。嫌だろうか？」

「そ、そんな事ないです。よろしくお願いします」

「で、そっちはどうする？」

クリスさんがヴェイグさんを見た。多分ヴェイグさんは寝る時は戻るんじゃないかな？

「……俺ならそのクッションで十分だ。それを寝床にする」

「あ、あれ？」

まさかの宣言です。ヴェイグさん、本当にここだとずっとそうしてるんだ。

「どうした？ 何かあつたか？」

「え、えっと、ないとさえはないですし、あると言えはあります」

「セレナちゃんはヴェイグさんと一緒に寝たいんだよ」

「そういう事か。でも俺がいると邪魔だろうし、久しぶりに俺も一人で寝てみたいんだ。ごめん」

「いえ、いいんです。私こそごめんなさい」

「仲が良いなあ……」

私とヴェイグさんのやり取りを眺めて響さんがそんな風に呟いた。思わず笑みが浮かぶ。だって私とヴェイグさんは友達だから。

「はい、私達友達ですから」

「……まあ、そういう事だ」

「何だあ？ お前、照れてるのか？」

「うるさい」

「うわあ、可愛いなあ。ねえねえ、ヴェイグさん。私とも友達になつてくれないかな？」

「……考えといてやる」

「おおっ、思ったよりもイイ返事が来た！」

「ふふっ、そうだな」

何だかヴェイグさんがここだと皆さんへ優しい気がする。もしかしてここだと匂いがしないからかな？

もしそうだとすれば、それだけ人間の出す嫌な匂いがヴェイグさんは嫌いって事だ。

そっか。それもあつて只野さんの事を気に入ってるのかもしれない。

そうやって話しているとふと翼さんが私を見た。

「良かったら一度行ってみるか？」

「え？」

どこにだろうと思つていたらヴェイグさんが少しだけ驚いた顔で翼さんを見ていた。

「こんにびに、へか？」

「ああ。興味があるのだろうか？」

「い、いいんですか？」

こんな時間に外出なんて姉さんも許してくれないのに。

「ああ。ここから二十分ほどだ。いや、セレナと一緒にだともう少しかかるか。寝る前の散歩みたいなものだが、どうする？」

「い、行きます！」

夜のお出かけなんて大人みたいでドキドキする。この機会を逃したら当分出来ないかもしれない。

「俺もいいのか？」

「構わない。ただ、分かっていると思うが」

「他の人間の目がある時は動かないし喋らない」

「そうしてくれると助かる。では、行こうか」

「はいっ！」

こうして私とヴェイグさんは、翼さんと一緒に只野さんと奏さんが働くコンビニへ行く事になりました。

ヴェイグさんは私が抱っこする形で初めて見るこの世界の街に目を見開いてた。

やっぱり匂いがなくて、そう言っで。

私は姉さん達の住んでいる場所よりも静かな気がするって思った。

「嬉しそうだな」

「はい。だって、こんな時間に外へ出るなんて初めてだから」

「そうか。気持ちは分かる。私も初めて遅い時間に外出した時はワクワクしたものだ」

「そうなんですか？」

何だか意外だ。翼さんはもつと大人な人だと思ってたし。

「ああ。これで私も大人へ一歩近付いたと、そんな風に思った」

一緒だ。今の私の気持ちもそうだもん。

「セレナ、今は色々と思う事もあると思う。だからこそ、溜め込まないでくれ。今の私達はここで生活を共にする仲間であり家族のようなものだから」

「家族、ですか？」

「そうだ。見て分かったと思うが、ここでは私達を支えてくれる組織などない。あの部屋も立花と雪音がコンビニで働き、得た資金で全てを賄っている。故にこれまでのように何でも手に入れる事は出来ない。それでも、私達はむしろそれを楽しむようにしている」

「楽しむ？」

「どうしてだ？」

ヴェイグさんも疑問を浮かべたみたいでそう言っで。翼さんはそんな私達に小さく笑みを見せると足を止めて空を見上げた。

「ここには、ギアもなければノイズや錬金術師などもない。私達が求める平和の一欠けがここにある。ここで暮らしていると思うんだ。」

これがギアの必要なくなった私達の可能性かもしれないと」

「ギアの、必要がなくなった私達……」

心がドクンッと動くのが分かる。訓練も出動もない。怖い敵や恐ろしい事件がない。そんなの、何て幸せなんだろう。

「それ故に苦勞しても、多少辛くても楽しむようにしているのだ。セレナも分かるだろう？ 訓練や実戦に比べれば、大抵の事は平気なものだ」

「……はい」

「だがそれは皆で支え合うからだ。セレナ、いきなりは無理かもしれないが、少しずつでいい。私達をマリアだと思つて甘えてくれ。代わりに私達もセレナへ頼み事や何か仕事をお願いするかもしれない」

「私に仕事、ですか？」

翼さんは小さく頷いて笑みを見せた。

「あそこで暮らす以上は何か仕事をしてもらう。テーブル拭きや洗濯物を畳むなど、何でもいい。それに応じて少額だが小遣いも出そう」
「お小遣い？」

「ここで暮らしていくのだから、セレナも自分で物を買ったり食べたりにしたいだろう？ そのための資金は自分で稼ぐ。そう思えば手伝いにも身が入るといふものだ」

そう言つて翼さんは歩き出した。その背を見つめて私は思い出す。姉さんは欲しい物があるなら何でも言つてみてつて、そう言つてくれた。

でも翼さんはそうじゃなくて、欲しい物があるなら自分で頑張つて買いなさいいつて言つてくれる。

それは、どつちも私の事を思つてくれてる言葉だと、思う。優しさには色んな見せ方があるつて、私は姉さんやママを見て分かったから。

そこから会話はなかった。でも、全然寂しく感じなかった。ううん、むしろ頑張ろうつて思えてきたぐらい。

私の世界へ戻れた時、ママが驚くぐらい色んな事を出来るようになっていた。そのためにもここで頑張ろうつて、そう強く思いだし

てる私がいる。

「あそこだ」

翼さんが指さした先を見ると明るい光が。近くにはお店の看板みたいな物もある。

「ヴェイグさん、少しの間我慢してくださいね」

「ああ」

小声でヴェイグさんへ話しかけると小声で返してくれた。

お店の中へ入ると結構人がいる。あつ、奏さんがこっちに気付いた。で、手を振ってくれる。

「軽く店内を見て回ろう」

「はい」

何だかワクワクする。見た事のある物やない物。色んな物がお店の中には溢れてる。

あれ、今裸の女の人が写ってた本があったような？

「あの、翼さん」

「ん？ 何か欲しい物でもあったのか？」

そう言つて私を見つめる翼さんはどこか姉さんに似てた。

「いえ、聞きたい事があるんです。さつき、裸の女の人が表紙の本があった気がして」

「……見間違いだ。さあセレナ、何か飲み物を選んで欲しい。部屋にはジュースの類はないんだ」

「え？ あ、はい」

私の質問に翼さんはさつきまでの優しい表情を消してそう言うのと、素早く私の後ろへ回つて体を前へとおしやつてきた。

この感じ、答えたくない事を聞かれた時の姉さんそっくり。つまり、さつきの本は私には知られたくない事なんだ。

「えつと……？」

飲み物の入ったケースの中を眺めているとヴェイグさんが少しだけ顔を動かした気がした。

何かあったかなつて思つてそつちへ目を向けると……

「いらっしやいませ」

「奏さん！」

そこには奏さんがいた。お店の制服が何だか似合ってる気がする。

「奏、油売ってていいの？」

「むしろあたしがそう聞いたぐらい」

その答えでもう分かった。只野さんが奏さんをここへ来させたんだって。

「にしてもどうしてここへ？」

「セレナやヴェイグがコンビニへ来てみたいようだったから」

「そっか。何か気になる物はあった？」

「えっと……」

さつき見た本の事を聞こうと思うけど、翼さんの反応を思い出すと止めた方がいい気がするので確認してみる。

チラつと翼さんへ目を向けると翼さんがちよつとだけ苦い顔をして首を横に振った。うん、じゃあこれは聞かないでおこう。

「まだないです。奏さん、何かオススメとかありますか？」

「おっと、さすがにそれは予想外だね。答えてやりたいとこだけど、あたしもここで働き出したの昨日からなんだ」

「そうなんですか」

「つと、じゃごゆっくり」

そう言つて奏さんが慌てて動き出した。多分只野さんがお客さんの相手で忙しくなってきたからかな。

「レジが混んでいるな」

「みたいですね」

見ると只野さんはそれでも平然としてるけど奏さんはどこか焦ってるようにも見える。

しばらくすると只野さんがお客さんの相手を全部終えて奏さんの隣へ移動した。

で、奏さんのお手伝いを始める。奏さんが商品を機械に読み込ませてる間に終わった物を袋に入れていってる。

「セレナ、見ていたいの分かるがそろそろ帰らないとさすがに不味い」

「あつ、すみません」

言われて思い出す。もう遅い時間だったんだ。なので周囲に誰もいない事を確認してヴェイグさんへ聞いてみる事に。

「俺の欲しい物？」

「はい。ヴェイグさんと一緒に来たから選んで欲しくて」

「……ならあれがいい」

そう言つてヴェイグさんが指さしたのはコーヒー豆が描かれた飲み物。

「これですか？」

「ああ」

「決まったようだな。ならレジへ行こう」

翼さんが紙パックに入った四角いコーヒーを手に取つて歩き出す。その後をついて行くと翼さんは只野さんのレジへ立った。

「いらつしやいませ」

「お願いします」

「ストローはお付けしますか？」

「どうする？」

「えつと、お願いします」

「一本でいい？」

「に、二本でお願いします」

「かしこまりました」

最初は翼さんに話しかけてた只野さんが、翼さんが問いかけてきたところから私へ話しかけてきてちよつとだけビツクリ。

でも、優しい声と話し方は朝と一緒に。本数はヴェイグさんと飲むからって二本にしてみました。

小さな袋へ入れられる紙パックのコーヒー。ストローも二本ちやんと入れられて、持つところを少しだけねじって差し出された。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「では帰ろうか」

「はい。お仕事頑張ってください」

最後に只野さんへそう言うとは何故か苦笑された。奏さんは手を振ってくれたので振り返ってお店を出る。

外は少し寒かった。お店の中が少し温かいんだってそこで気付いた。

「あの、お二人はいつまで働くんですか？」

「朝の六時までだ」

「夜通し起きてるんですか？」

「そうなる。客数自体は少ないがその分やる事が多いと聞いたな」

翼さんと並んで歩く。袋はヴェイグさんがそれとなく持ってくれてる。見た目的には私がヴェイグさんを抱えて、そのヴェイグさんが袋を抱えてる感じかな。

「……甘い匂いだ。それと香ばしい感じも少しする」

ヴェイグさんはずっと袋の中の匂いを嗅いでる。そんなにコーヒーの匂いが気になるのかな？

でもちよつと可愛いので黙って見つめる事にした。翼さんもそんなヴェイグさんを見て微笑んでる。

「ふふつ、帰ったら飲んでみればいい。ただし、飲み過ぎないように。寝れなくなるかもしれない」

「そうなのかな？」

「コーヒーは眠気覚ましに飲まれるからな。まあそれは子供でも飲めるように作られているからそこまで心配はないと思うが」

「そうなんだ。良かったあ」

でも飲んだら歯磨きしないと。それに明日からは新しい生活が始まる。

お手伝いをいっぱいしてお小遣いをもらって、ヴェイグさんと色んなところへ行つて……。

あれ？ そう思うとちよつとだけ楽しくなってきたかも……。

「とにかく、セレナ、明日からよろしく頼む」

「はい」

「俺もいるぞ」

「クスツ、そうだったな。ヴェイグもよろしく頼む」

袋から顔を上げたヴェイグさんだけど、それがとっても可愛かった。翼さんが思わず笑っちゃうぐらいに。

——マム、待っててね。必ずそっちに帰れるようにしてみせるから。

「それじゃ、後はお願いします」

「はい、お疲れ様です」

「お先に失礼します」

「お先に失礼しまーす」

朝勤の一人へ後を託して天羽さんと一緒に事務所を出る。カウンターにいる南條さんへも挨拶をしようと近付くと、向こうがこつちを見て笑みを見せた。

「お疲れ様。もう帰り？」

「ええ。さっさと帰って運動しないといけないんで」

「運動？」

「先輩、歳もあつて太りそうだつて」

「あー、成程ねえ。只野君、もう三十だっけ？」

「ま、立派なおっさんですから」

天羽さんの言葉で南條さんが理解したとばかりに笑うので俺も苦笑で応じる。

それにしても天羽さんは凄いな。もう南條さんと親しくなり出してる感じがある。

「とにかく後お願いしますね」

「はいはい。店長も早く帰って休んでちょうだい」

「それ、止めてくださいって。たまに本気でお客様にも言われるんですから」

「いいじゃない。それぐらいみんな只野君の事頼りにしてんのよ」

「俺以外に二年以上やってる夜勤がないだけです。じゃお先に失礼します」

「失礼します」

「はーい。気を付けて帰ってね」

あまり長居するとあの人の長話が始まるので適度なところで切り上げる。

店を出れば見事な晴れ晴れとした空が広がっていた。

「ん〜……南條さん、だっけ。あの人、長いの？」

「朝勤としては古参だよ。俺より少し前に入った人らしい」

「そうなんだ。気の良いおばちゃんだよね」

「ああ見えて三人の子供を育てた人だからな」

「そりや凄い」

天羽さんと並んで歩く。二日目だけどさすがは若いだけある。昨日言った事はほとんど覚えてるし、荷物の来る時間を考えて補充や掃除も率先してやってくれる。

はつきり言って仕事がかどるはかどる。オーナーがいれば間違はなく言われたはずだ。俺と天羽さんがずっといれば夜勤は安心だっけ。

それにしても困ったもんだ。何と天羽さんは外でも先輩呼びをする事にしたらしい。

それが分かったのは昨夜の勤務前。俺は部屋にあった朝飯用のおにぎりを食べるために響達の部屋を出たのだが、天羽さんもそれについてきたのだ。

——あのままいるときつと寝る。

そう眠そうな顔で言われた時は思わず苦笑してしまった。

やはり慣れないリズムの生活は天羽さんといえど若干疲れるものらしい。で、俺の部屋なら寝る事はないからとついてきたのだ。

そこからの方が近いというのもあったけど、元々響達が暮らしてた部屋を見てみたいという気持ちもあったんだと思う。

で、俺がおにぎりを食べてる間天羽さんは俺の布団をちやつかり敷いて横になった。

——あー、先輩こんなじゃ疲れ取れないって。悪い事言わないからもう少しマシな布団買いなよ。

そこで言われた先輩との呼び方に俺は思わず食べていたおにぎりを詰まらせるかと思ったのだ。

あと、今にして思えばあれってかなり問題行動だったよな。何せ夜に女性を部屋へ連れ込んだんだから。

それと、多分天羽さんもやっぱりどこか頭が回ってなかったんだと思う。俺の布団で寝転がるぐらい眠かったんだろう。

「どうしたのさ。そんな風に笑って」

「天羽さんの昨夜の行動を思い返してた」

「……忘れてって言ったじゃん。あたしもどうかしてたんだって、あの時はさ」

若干恥ずかしそうに俯いて頬を掻く天羽さんが可愛い。ま、だろうなと思う。

「無理無理。俺の布団を散々けなしておいてちよつと目を離れた隙に軽く寝てたんだから」

「だからあれは……」

色々と言いつを繰り返す天羽さんだが、残念ながら俺の耳には届かない。

あの天羽さんは多分だけど誰にも見せてない天羽さんだ。何て言うか子供っぽかった。なのでそつと心のアルバムに綴じておく。

「ちよつとつ、聞いているの先輩！」

「聞いている聞いている」

「絶対聞いてないやつだ、それ」

「んな事ないない。しっかり聞いている」

「白々しい……」

「天羽さんは赤のイメージだから紅白で縁起が良いな」

「このお……どこまでふざけるつもりだ、この先輩は」

そうこうしているとあつという間に分かれ道へ到着。

「じゃ、今度は土曜に」

「ん。じゃあね先輩」

少しだけくすぐったいが少しは慣れてきた。それと、ちよつとだけテンションが上がっている自分がある。まあ、可愛い女性に先輩と親しみを込めて呼ばれて悪い気はしないし。

足取りも軽く見慣れたアパートへ到着し鍵を開けて部屋の中へ入

る。もらってきた大盛りペロンチーノを冷蔵庫へしまつて運動着へ着替え、スマホとタオルを持って再び部屋を出て鍵を閉めて歩き出す。

この間、わずか一分程だ。さてさてでは散歩を開始しますかね。まず目指すはあの公園。ゆつたりとのんびりと歩く。

それにしても、こうやって散歩するようになって気付いた事がある。

この辺つてこの時間意外と静かつて事と、思ったよりも散歩つて気分がいいつて事。

「ま、一番は俺の心境の変化かもしれないな」

響と出会つて変わり出した俺の日常。それまではただ漠然と働いて暮らしていただけだった。

それが彼女達と出会つて、このままじゃいけないと強く思うようになった。とはいえ、だからと言っていきなり正社員になんて不可能だし、今の職場での出世なんてもんも難しい。

出来たのは彼女達への衣食住の不完全な提供とこちらでの収入源の提供ぐらい。他には役に立てていないのが現状だ。

でも、今後はそれじゃ不味いかもしれない。セレナちゃんは帰る道を隠されてしまい、他の平行世界のゲートも同じようにされたらしい。

天羽さんも境遇だけならセレナちゃんと同じ訳だ。ただ、彼女はセレナちゃん程は堪えてないらしい。

「……いや、そう見せてるだけかもしれない」

実際そういう思い込みで俺はクリスの心を傷付けた。なら天羽さんの事も考えないといけない。

さすがに彼女は呼び方で不満などはないはずだ。俺の敬称を外したぐらいだしな。

「……とりあえず、住宅情報誌をまた立ち読みしないとな」

セレナちゃんも来た以上あの1DKも手狭だ。せめて1LDKか2DKを探そう。それと天羽さんから言われたここでの連絡手段の確保。

ただスマホを人数分となるとさすがにキツイ。となるとせめて二台か一台。二台の場合は天羽さんとクリスに持つてもらう事になるかな。

でも、今考えるべきはそれじゃない。どうして平行世界のゲートが隠されてしまったかだ。

そう、隠されただ。消滅したなんて思いたくない。あのセレナちゃんへの言葉は俺自身への言葉でもある。

「もうこんなところまで来てたか」

気付けばもう公園が見えてきた。さて、なら公園内をグルグル歩きながら考えるか。

まず、セレナちゃんがここへ来た時から既に異変の兆候は出ていた。時間のズレがそれだけど、今まではこっちで一週間が他でも一日にも満たないとかのズレだった。

これは要するに時間の流れがここ以外がゆっくりなんだと思っただ。かと思えば、あっちで数時間がこっちでは数分だった事もあった。

こうなると時間の流れに関しては確たる事が言えなくなる。ただ、これがかもし悪意のやっている事かあるいはそれに付随する事だとすれば、だ。

「……その目的は絶対響達へ良くない事のはずだ」

そう、悪意の目的はあくまでも装者達への復讐。その第一段階は初手にして王手だった。

間一髪響が俺と出会ったおかげで何とか詰みは避けられたけど、未だに苦しい展開が続いていると言える。

そんな中、俺が期せずして反撃の一手を打った。それが「戦姫絶唱シンフォギアチャンネル」というものだ。そこで風鳴翼や天羽奏、ツヴァイウィングがその歌を上げた。

しかもツヴァイウィングは「逆光のフリーユゲル」だ。これ程強烈なものではなかったんじゃないだろうか。

あのシンフォギアの始まりを告げた歌だ。きっとそれが悪意を焦らせた。このままだと今までの苦労が徒労に終わると。

「それで平行世界へのゲートを閉じた」

そうする事で装者達の心や気持ちを乱そうと思ったのだろう。実際セレナちゃんはかなり参っていた。

もし彼女にヴェイグさんがいなかったら、そしてここに響達がいなかったらどうなっていたか。

イヴさんはきつと複雑な想いをしているだろう。そしてそれはザババの二人もだ。あの世界にはママが、ナスターシャ教授がいる。

天羽さんはセレナちゃん程依存している相手がいらないからまだ軽傷で済んでいるが、それでもダメージがない訳じゃないだろう。

そして、このままで行くと最悪根幹世界へのゲートも閉ざされる可能性がある。もしそうなったら終わりだ。

一つは九人の装者が揃わない事であの世界蛇を倒した時よりも戦力が落ちる事。

ただ、これを回避すると今度は別の意味で不味いのだ。

何故なら俺の許容量を超える数の女性の人生を一時的とはいえ預かる事になるからだ。今だって響達には半分以上自分達で何とかしてもらおう方向で対処している。

幸い彼女達は年齢やその技能でそれぞれに収入を得る事が出来ている。ただセレナちゃんは無理だ。どう逆立ちしたってバイトが出来る子じゃない。

イヴさん達四人はまだマシかもしれないがもう店へ紹介は無理だ。人手が足りている。

「……もし仮にここへ残る四人の装者を呼ばないといけなくなったらどうするか」

総勢九人もの女性。それを一か所で生活は難しいと言わざるを得ない。可能ならば三か所ぐらいに分散だろう。

響に小日向さんとクリス、翼と天羽さん、そして残りの四人か。そうなった時、俺の少ない蓄えでは支えきれないのは明白。

「待てよ？ 今の最悪が実際に起きるとして、装者だけで事を解決出来るのか？」

言っただけだがみんなで作れるのは力で何とかする時だけだろう。

となると、今回には向かないかもしれない。

頭脳方面で何とか出来る存在がいる。錬金術とか聖遺物とかの知識がある存在が、フィーネや櫻井了子やキャロルとかの知識人が。

だがそんな存在との協力は既に断られた。そうか、平行世界との連携で世界蛇は負けた。そこを踏まえてまず連携を断ってきたのか！

となると最低でも頭脳担当の人間を確保しないといけない。ただ、響達の世界でそういう方面となると……

「……エルフナインちゃんかっ！」

俺は善は急げとばかりにみんなの部屋を目指した。何があるか分からない今、俺はもしかしたらと思っっている事を試そうと思っただ。

階段を可能な範囲で静かに上がり、すぐそばのドアをノックする。

「翼、起きていたら開けてくれ。頼みたい事がある」

少し待つとドアがゆっくり開いた。

「只野さん、どうしました？」

「翼、何も言わずにこれを持って行ってエルフナインちゃんへ聞いてくれ。これがあれば君はこの世界へ来れるかって」

「これとは……只野さんのスマートフォン？」

「ああ。以前君達は言ったな？ これはデュプリケーターに近い、と。

あれは生身の人間がギャラルホルンの中を行き来出来る物だったはずだ。なら、もしかしたら」

「……これがあればエルフナインもギャラルホルンを通過出来る、かもしれない。分かりました。聞いてきます」

「頼む。それともう一つ。下手をすると君達の世界へのゲートも危ない可能性がある」

「何ですって？」

「思い出してくれ。世界蛇は君達だけじゃなくいくつもの平行世界が連携する事で敗れた。それを悪意は覚えていた。だからまずその連携を断ってきた可能性がある」

「……っ！ こちらの要を潰そうとしてる？」

「可能性がある。実際この件に関して有力な意見をくれそうなフィーネに櫻井了子、キャロル達錬金術師達とはもう手を組めない」

そう言った瞬間翼が息を呑んだ。そう、そうなんだ。相手は本気で敗戦を糧にしてきている。

スクルドもない今、ここの行き来を可能とするのはこのスマホぐらいかもしれない。だが、これの欠片で何とか出来るのは多分装者だけだ。

とてもではないがこちらに何人も送り込む事は出来ない。経済的な面でも住環境的な面でも、だ。

「翼、急いでくれ。悪意は多分力を取り戻し切る前に動いたはずだ。奴は恐ろしく用心深い。現状で出来る最大の効果を発揮する行動を適宜とって来てる気がする」

「ええ、同じ気持ちです。なら今すぐ行つてきます」

「天羽さんはもう寝た？ そうじゃないなら一緒に行つた方が……」
「奏は運動のために外出中です。連絡などは出来ないので難しいかと」

天羽さんの声がしないからと思つたらそんな答えが返ってきた。

どうやら彼女は彼女なりに体型などへ気を配っているみたいだ。

とにかくもう俺に出来る事はない。スマホを翼へ託し、一縷の望みに賭けるだけだ。

「分かった。気を付けて」

「はい」

ドアを閉めて俺は部屋へと戻る事にした。さすがにこんな気持ちでは散歩どころじゃない。

そうして部屋へ戻つた俺は冷蔵庫からパスタを出してレンジで温め、それを食べながらまた考えた。

悪意が恐れている事がもし仮に『戦姫絶唱シンフォギア』の認知度の上昇だとするなら、何故平行世界との行き来を封じたのか？

俺なら真つ先にここへの裂け目を封鎖する。でも何故かそれをしていない。それは……何故だ？

「出来ない理由がある……のか？」

天羽さん経由で聞いたナスターシャ教授の話じゃ、何でも悪意はその力を世界蛇との戦いで大きく失っていて、それを取り戻すため様々

な世界から悪意などの負のエネルギーを吸い取っているのではないかの事。

その結果として各平行世界が平和になっているというのは皮肉なものだが、今回の事から察するにその力がある程度戻ったと見るべきかもしれない。

「あるいは、そのなけなしの力を使っても動かないといけなくなっただか」

よくある展開だ。敵の幹部クラスがヒーローを弱体化させるための手段として仲間との連携を断ち切るのは。

その方法は様々だが、今回は物理的に行ったって事か。精神的じゃなくて良かった。多分だけど装者のみんなはそっちの方が弱い。

あのアルゴスイベントなんかそれだった。信じてるけどそれでもって、かなり揺らいでいた。

もしあれがイヴさんの意識を改変してのものだったらヤバかった。あるいは、翼も洗脳とかだったら話が変わっていた可能性が高い。

もしくは意識は本人のままだけど体だけが操られてるとかだな。

「……悪意がそういう事をしてこないといいけど」

装者の誰かの中へ入り込み、その闇を増幅して手先にするなんて特撮じゃ珍しくない展開だし。

「その場合、狙われるのは主人公に一番近い存在だよなあ」

つまり小日向さん。この上なくピツタリな人選である。何せ彼女の場合は前科というか似たような事をされた事があるからなあ。

しまいにはXVではラスボスに体を乗っ取られるという事までされた。そう考えると響というシンフォギアを代表する人間を狙うにこれだけ向いている存在はいない。

それに、小日向さんって本人は自覚ないけど響への友情が既に愛情レベルまで行ってる気がするんだよ。あれ、本人が自覚したら本気で嫁になるんじゃないだろうか？

「……とまあ、くだらない事はおいといて」

食べ終わった容器を口を拭いたティッシュである程度拭いてから水洗い。後は乾くまで流しへ立てかけて放置。

「悪意の目的が装者達への復讐なら俺がするべきは彼女達の保護及び支援。何の力もない人間だって、諦めなければ英雄に、ヒーローになれるって俺は教えてもらってるんだからな」

そう、変身出来るから、ギアがあるからヒーローじゃない。諦めな
い心を持つからこそヒーローなんだ。

彼女達はそうだった。俺だってギアがないだけで同じだ。同じ人間だ。

「生まれた世界は違っても、言葉や見た目が違っても、夢は繋ぎ合える。俺は、そう信じてるし信じて行きたい」

人生に必要な事は特撮やアニメ、ゲームが教えてくれた。オタクで結構。何も熱中出来るものが、夢中になれるものがないよりマシだ。

「……とりあえず寝るか」

そう呟いて布団へと横になる。若干香るのは、もしかして天羽さんの匂いか？

「………食べたばかりで寝るのは良くないよな、うん」

もう少しばかり起きていよう。いや、別に天羽さんの残り香が影響したとかじゃなくてやっぱり食べてすぐ横になるのはいけないと思っただけだ。

とりあえず鍵は閉めてある事を確認。カーテンも閉めてある。うん、寝る準備は完璧だな。後は消化するまで待つだけだ。

そうそう、燃えるゴミの日近いけど捨てないといけない量か確認しないと。ティッシュの残量は大丈夫かな？

そうだそうだ。今日は中途半端なところで運動を切り上げたし、筋トレでもしようかな。うん、それがいい。

こうして俺が寝たのはそれからしばらく後になった。

布団、買い換えよう。そう思いながら俺は目を閉じるのだった
……。

「結論から言えば可能だと思います」

エルフナインの言葉に翼だけでなく発令所にいた全員が安堵するように息を吐いた。

「以前も言ったと思いますが、これはスクルドの方達が使っていたデuplicキーターに非常に似ています。ここで似ているのはその仕組みではなく効果です。上位世界という本来であれば訪れる事の出来ない場所へ響きさん達を固定化させて行動を可能にしている時点で、その性能はデuplicキーターを超えていると言っているのでしょうか？」

「では、その欠片を持てば我々も世界を越えられるのか？」

「いえ、それは無理です。装者の皆さんはギアという聖遺物の欠片から生まれたプロテクターでこの依り代の力を増幅している状態です。何もない状態ではこのサイズで持っていなければ世界の壁を越える事などは不可能でしょう」

「つまり行き来は何とか出来ても現地での行動に差し支えたと、そういう訳か……」

弦十郎の呟きにエルフナインは頷く。スマホを持って世界を越えて仁志の世界へ行き、またそれを装者が運んでとすれば行き来だけは可能だ。

だが、行った先で自由に行動出来ないのであれば意味がない。特に最悪の場合自分が行つて力仕事で稼ぐ事を考えていた弦十郎にとつては死活問題である。

「こうなると、やはりその只野さんと言う方の希望通りエルフナインちゃんを送る方がいいと思います」

「そうですね。俺達じゃ色んな面で面倒事が多いですし」

あおいと朔也も仁志の世界では役立てない事が多すぎると言えた。二人は後方支援のプロフェッショナルだが、それは雇ってくれる組織や会社を見つける必要があり、加えて常にスマホを持ち歩かないと行動が出来ない以上、勤務先によっては行動出来なくなる可能性もあるのだ。

そもそも朔也に至つては男性であるが仁志と同じ生活は送れない都会っ子である。

「そうだな。それに、彼の言う様に最悪なこと上位世界との行き来を封じられる可能性もある。そうなった時、装者達だけでは対処出来ない事も起きる可能性がないとは言い切れない。だが、やはり不安は残

る。翼、エルフナイン君とギャラルホルンを通過する際は彼女の体を抱えて行ってくれ」

「分かりました」

「待って頂戴。なら私も一緒に行くわ。護衛は必要でしょ？」

「ならばついでにセレナとも会って欲しい。一晩でかなり気持ちを上向きに出来たようだ」

「嘘でしょ？ だってあの時は……」

「それも含めてマリアには見て欲しいんだ。あの世界や、只野さんを」
その言葉でマリアは悟る。翼が自分の抱いている只野仁志という人物像を変えたいと思っている事を。

（そう、それだけ貴方が言うと言う事は私の想像通りではないんでしようね。でも、きつとその男は何か企んでる。だって、響は仕方ないにしてもクリスマスまでいるのよ？ しかもあのクリスマスが信頼するつて、一般人にそんな男いるはずないわ。少なからずいやらしい目であるの子の事を見るはずだもの！）

確信レベルでそう思っているマリアだが、だからこそ仁志はクリスの目を見つめて話す事を義務付けているのである。

そしてマリアが考える事は仁志も考える訳で、それもあって彼は出来る限り紳士的に振舞おうとしているのだ。

「あ、あのっ！」

「未来君か。どうした？」

話も終わり、このままだと翼はエルフナインを連れてマリアと共に仁志の世界へ戻ってしまうと思ったのだろう。未来は意を決して声を上げた。

「わ、私も一緒に行つていいですか？」

「未来君もか……」

響が未来の傍を離れて一週間以上が経過しようとしているが、未だ連絡も顔を合わせる事もない。

一度クリスと共に戻ってきた際に少し話をしたきり、未来は響の顔を見ていないのだ。

思いもしないだろう。あの響が未来と会えない事を寂しく思うよ

りも仁志と過ぐせる時間へ想いを馳せているとは。

「行つてくるといいデスよ未来さん」

「うん。こっちは少しぐらい私と切ちゃんで大丈夫だから」

「二人共……」

「依り代とやらも組み込み済み済みデスし、今なら失われたユニゾンが復活出来るかもしれないって言われました」

「私達は元々不安はないけど、より一層ユニゾンの精度が上がるかもしれない。なら、余程の敵がこない限り負けません」

二人してギアペンダントを見せる切歌と調。そう、かつてイグナイトモジュールがあつた頃に磨いたユニゾン。それはダインスレイフの欠片を失つた事で手放す事となつたのだが、依り代と言う新たな欠片を組み込む事でまさかの共鳴を確認。

まだ検証はしていないが、上手くすればあの頃よりも凄いいユニゾンが可能かもしれないと、そうエルフナインは考えていたのだ。

「よし、未来君の同行を許可しよう」

「ありがとうございますっ！」

「ただし、まだマリア君と未来君の滞在は時期尚早として認めない。用件を済ませたら素早く帰還してくれ。向こうの住宅及び財政事情はひっ迫している。資金の余裕が出来ない限り、向こうが望むエルフナイン君以外にこちらから新しく住人を増やす訳にはいかない」

「は、はい」

「分かっているわ。セレナと会って、只野と言う人と話をしたら戻ってくる」

「うむ。それと翼、また食料を持って行け。食堂へは俺から話を通しておく」

「ありがとうございます。そろそろもやしやキャベツの頻度を増やす事になりそうで困っていたので」

その翼の一言でエルフナイン以外が戦慄した。

——風鳴翼がもやしやキャベツを使って飢えを凌いでいるという事に……。

何だろう？ 遠くで何かを叩く音が聞こえる。工事……？ いや、そんなはずはない。

「只野さん、只野さん。すみません起きてください」
「っ!？」

聞こえた声に目を開けて勢い良く体を起こす。時間を確認しようとして枕元を見て……スマホがない事に気付く。

「と、とりあえず今は開けるか」

四つん這いで布団から這い出して玄関へと向かう。鍵を外しドアを開けるとそこには翼が立っていた。

「すみません。寝ていたでしょうが緊急を要すると思ひまして」

「いや、いいよ。で、どうだった？」

「その前に中へ入れてもらってもいいでしょうか？」

「ああ、そうだね。どうぞ」

そう言つて俺は玄関から離れて部屋へと戻る。すると翼が入つてきて……ええ？

「お邪魔します」

「し、失礼します」

「失礼するわ」

翼に続いて見慣れない、いやある意味見慣れた二人が現れたのだ。

「え、エルフナインちゃんにマリア・カデンツァヴナ・イヴさん？」

「は、はい。僕がエルフナインです。よろしくお願いします」

「ご丁寧なフルネームありがとうございます。そう、私がマリア・カデンツァヴナ・イヴよ。よろしく」

「あつ、はい。こちらこそよろしくお願いします。只野仁志と言います」

ぺこりと頭を下げるエルフナインちゃんへ合わせて俺も頭を下げる。イヴさんは会釈さえもないけど、無理もないと思うので何も言わない。

「只野さん、見ての通りエルフナインはあのスマートフォンでこちらへ来れました」

「みたいだね。良かった。これで少しセレナちゃんの支えが増えた

よ」

俺がそう言うのと三人が揃って疑問符を浮かべた。まあ無理もないだろうな。これはエルフナインちゃんが来れたら話そうと思つてたし。

「セレナちゃんは最年少だろ？　つまりは末っ子だ。どこへ行つても自分が一番年下。これ、意外とストレスになる事もあるんだ」

常に年下扱いを受け、時には未熟者扱い。俺も最初にバイトした時がそうだった。最初の内はいい。でも、ある程度して仕事なんかも覚えてきたのにそれでも子供扱いみたいなのが気に障つた時もある。

甘えてもいいとかミスしてもいいんだとか、とにかくそういう扱いを前向きに捉えられる人ならいい。でも、きつとセレナちゃんはそうじゃない。

「エルフナインちゃんはきつとそういう扱いをされても気にしないだろう？　だから、セレナちゃんがエルフナインちゃんを妹分として見られるし扱えるんだ。翼とイヴさんなら分かるんじゃないか？　自分よりも年下がいるつて、守らなきゃしつかりしなきゃつて支えにならない？」

「そうですね。私も立花や雪音を得てそういう気持ちは強くなりました」

「否定はしないわ。そう、セレナの心の支えをね……」

「僕としても僕がいる事でセレナさんの支えになれるのなら嬉しいです」

イイ子だなあ。でも、やっぱり格好がちよつと問題だ。幼い外見で白衣だもんなあ。せめて外出する時は歳相応と言うか外見相応な格好をしてもらいたい。

「それで、イヴさんはどうして？」

「翼に……」を、そして貴方を見てみると言われたの」

やや冷たい口調のイヴさん。翼は苦笑している。エルフナインちゃんは どうしてイヴさんがそんな感じなのか理解出来ないように小首を傾げていた。

多分、イヴさんはここに来る前にセレナちゃんと会つたはずだ。

で、彼女が前向きになつていている事に気付いたんだろう。それをやったのが俺だつて、そう言われたか聞いたかしたんだ。

……これ、若干嫉妬してない？ 最愛の妹を姉を差し置いて他人の男が立ち直らせたつて。

「えつと、それは何というか、わざわざご足労をおかけしまして申し訳ない」

「別にいいわ。セレナやヴェイグから貴方の事は聞いたし、奏達からも色々聞いた。随分慕われているのね」

「マリア……」

「いいよ。イヴさんの気持ちも分かる。なんたつてこんなところに住むしかないような奴が、こぞつて好印象を述べられるんだ。人間の表と裏を色んな意味で見えてきてるイヴさんからすれば、色々勘ぐりたくなるのも無理ないよ」

「っ……そういう事よ」

一瞬だけど表情が動いた。でもすぐに無表情へ戻る。どうやらかなり警戒されてるらしい。

「それで、エルフナインちゃんは今後こつちに来てくれるのかい？」

「はい。只野さんの予想された事態になつても対処出来るよう、僕はこつちで分かっている情報を分析し推理していこうと思います」

「そつか。イヴさんは？」

「私は一旦帰るわ。こつちで暮らそうにもあの部屋じゃ無理よ。エルフナインでギリギリじゃない」

もつともな答えだ。でも、そうか。今のセレナちゃんとならイヴさんも一緒に居られるはずだ。

いや、下手したらイヴさんの方が参つてるかもしれないな。なんだかんだで抱え込んでしまう女性だし、彼女も。

………決断の時か。イヴさんも来てくれれば悪意の恐れる事も加速出来るだろうし。

「イヴさん、なら戻つて司令に、風鳴弦十郎さんに尋ねて欲しい。装者全員をこつちで預かってもいいですかつて」

「「えつ?!」」

「少ないけど俺には蓄えがある。それを使えば他の部屋を探して二か月ぐらい君達の生活を支える事は出来るさ。その間にイヴさん達にもバイトや収入を得る手伝いをしてもらいたいんだ。俺の予想が正しければ、これが上手くいけば悪意は次の行動へ出る」

「ど、どういう事ですか？」

意を決して告げた言葉に真っ先にエルフナインちゃんが反応してくれた。まだ翼とイヴさんは驚きで戸惑っているようだ。

「俺達がこっちで『戦姫絶唱シンフォギア』って名前の動画チャンネルを開設したのは知ってる？」

「はい。それは聞きました。その知名度が上がった事が今回のゲート封鎖の要因じゃないかって」

「そう。だからその知名度をもっと上げるんだ。忘れられてしまった戦姫絶唱シンフォギアをみんなに、世界に思い出してもらえるように。それにはマリア・カデンツァヴァ・イヴの協力が必要不可欠なんだよ」

「私の？」

「そうだ。ツヴァイウィングが逆光のフリーユゲルを歌ってアップした事。これが悪意が動いた一番の原因だと思う。なら、次は君達の世界で七十億の人達を繋いだ際に歌われた歌や、ツヴァイウィングにイヴさんを加えた……言うならばドライディーヴァか。その歌声を世界中に向けて配信する。はつきり言おう。これはここでもまだ実現してなかったものなんだ」

「こちらでも実現していない……。じゃあ、それだけ衝撃度は高いんですね？」

エルフナインちゃんは本当に賢い。俺が何を狙い何を企んでいるかを読んでくれている。

「そうなんだよ。もしかしたら、それで以前知っていた人達が何か思い出してくれるかもしれない。実は俺達ファンが見たいものの一つでもあるんだ、歌姫三人の曲つてのは。その姿だけならゲームでカード化されたんだけどさ」

「ゲームでカード化、ね。本当に不思議な言葉だわ」

「ああ、だけどそれがここでは真実だったんだ」

「やつとイヴさんの表情に感情が乗った。微妙な顔だけど無表情よりはいい。でも、やっぱ美人だよなあ。」

「何？ 人の顔をジロジロと」

「あつ、すまない。こうして直接会ってみるとアニメやゲームで見たよりも美人だなんてさ」

「……それはありがとう。でも、本当に大丈夫なんでしょうね？ 女十人も貴方が背負えるの？」

「当然の疑問だ。正直言えば背負えないだろう。だから、ここは包み隠さず全てを伝える。」

「ずつとは無理だ。さつきも言った通り、精々二か月ぐらいがやっとだよ。でも、もうじつくり動ける状況じゃない。悪意は平行世界との連携を断ち、これまでの君達の利点を潰しにかかっている。次にこことの行き来を封じれば、双方に待っているのはジリジリと追い詰められ、翱られ、殺されるだけだろう」

「根幹世界との行き来が封じられるとすれば、その時はどちらかしかないと思う。」

「それだけ向こうが追い詰められたか。あるいは悪意がその力を完全に取り戻したか、だ。」

「……マリア、ここが勝負どころだと私は思う」
「翼……」

「俺の顔を見つめ翼が凜々しい表情を見せる。その眼差しは俺の決意や覚悟を見極めようとしている風にも見えた。」

「只野さんは本気だ。本気で自分の今持てる全てを使つて勝負を仕掛けに出してくれた。私はその勝負に乗りたい。乗つて見事に勝ちを収めたい」

「気持ちは分かるわ。でも、ここにはS・O・N・Gも二課もF・I・Sさえもないのよ？」

「だからこそだ。マリア、只野さんは一般人で見ての通り生活はとてもではないが裕福ではない。そんな人でさえ、この世界を、そして私達の世界を守ろうとしてくれている。ここで失う財産の補填など、誰

もしてくれないと分かっただけだ」

「そ、それは……」

「イヴさん、最悪君だけでもいい。何とかこちらへ来てくれないか？ ゲートが消えた以上、それを他の平行世界の関係者達が知れば不安や恐怖を抱く可能性が高い。それを悪意は狙ってるとも考えられるんだ」

「十分にあり得ます。きっと失った力を取り戻すために不安や恐怖を煽るはずですよ」

エルフナインちゃん言葉にイヴさんが息を呑んだ。そうか。ナスターシヤ教授だ。いくら平行世界とはいえ、ママはママだろうしな。

「マリア、頼む。あちらの暮らしに慣れた今、こちらでの暮らしは不便で不快かもしれない。それでも、どうか首を縦に振ってはくれないだろうか？」

「イヴさん、頼む。俺が信頼出来ないのはいい。だけど、セレナちゃんのためにもこつちに来てくれ。今のあの子は元居た世界へ戻る事を目指して頑張り始めてる。それを傍でちゃんと見てやって欲しい。ここでは、君達は誰に憚る事なく姉妹でいられるんだ」

「……誰に憚る事なく、姉妹で……」

そう呟いてイヴさんは俯いた。俺はそれを見て時間を与えるべきだと思っただけだ。

「少し出てくる。翼達はここで待っていてくれ」

「どちらへ？」

「ちよつと確認をね」

そう言っただけで俺は部屋を出た。向かうのは駅前の銀行。俺の口座を作った銀行の支店だ。

走って向かえば十分もかからない。到着したら運良く待つ事もなくATMを使った。

まずは残高照会。キャッシュカードを入れ、暗証番号を入力する。

「……これだけか」

表示されたのは46万円弱。なので次は引き出しを選び、暗証番号

を入力して出せるだけ全てを引き出す。

残ったのは1000円にも満たない金額。キャッシュカードを回収し、近くに置いてある銀行の封筒を手にとってそこへ出て来た札をしまつてその場を後にする。

生まれて初めて持つ大金にどこか緊張しつつ、俺は急いで部屋へと戻る。ドアを開けるともうイヴさんは顔を上げていた。

「お、お待ちせ……」

「走って来たのですか？」

「あ、ああ……」

靴を乱雑に脱いで彼女達の前へ移動する。そして持っていた封筒を目の前へ置いた。

「ここに46万1000円ある。これが俺の引き出せる全ての金だ。これで君達の世界と、この世界の未来を守りたい。賭け金としては不足かもしれないが、どうかこの賭けに乗ってくれないか？」

俺はイヴさんの目を見つめてそう尋ねた。彼女は一度も俺から目を逸らす事無く見つめ返してきた。

「……46万1000円、ね。随分安く見られたものだわ」

「っ!? マリアっ!」

「落ち着きなさい翼」

そうはつきりとした口調で告げ、イヴさんは封筒を手にした。

「でも、きつとこれだけ重いお金もないでしょう」

言いながらイヴさんはゆっくりと封筒を持ち上げる。その表情はどこか凜々しい。

「二つの世界の未来を賭けた46万1000円、たしかに受け取ったわ。私もこの賭けに参加してあげる」

「……ありがとう」

「礼はいい。それはこの賭けが成功したら言つて頂戴」

封筒を見つめ、イヴさんは囁み締めるように俺へこう言った。

「それにしても、嘘が付けないのね。これはまだ一部だとか言つても分からないでしょうに」

「嘘を吐いていい時といけない時ぐらい分かつてるさ。今は俺を少し

でも君に信じてもらわないといけなかった。俺の覚悟と気持ちを、伝えないといけなかった」

「……そう。じゃあ、これは一旦返すわ。私が来るまでにセレナと暮らす部屋を見つけておいて」

「分かった。ただ、そこまで良い物件は」

「了承してる。ただ、こんなところみたいなのは止めて」

「分かってるさ。最低でもトイレとシャワーがあつて、それが別になつてるところを探すよ。ああ、部屋はワンルームでもいいかな？ 広さの要望はない？ 三畳一間でも構わないとかなら助かるんだけど」

「……………相当苦労してるのね、貴方」

最後にそう言ってくれた時、イヴさんは初めて笑ってくれた。呆れながらの笑みだったけど、それはとても可愛い笑みに俺には見えた……………。

Stand up! Ready!!

それは、只野が翼達の訪問で起こされる前の事だった。

時刻は十一時を過ぎた辺りで、クリスどころか響さえも起床し三人で翼の帰りを待っていたのだが……

「戻った」

「翼さん、おかえり……ってええっ!？」

「エルフナイン、だどっ!？」

「お、お久しぶりです、響さん、クリスさん」

「おいおい、どうなってるんだいこれ……」

ノートPCから現れた翼に抱かれたエルフナインの姿を見た響は目を何度か擦り、クリスはまるで弦十郎のような口調をする始末。

奏も勿論驚いていたが、彼女の驚きはその後から現れた者達であった。

「ここが……上位世界」

「ほ、本当に狭い……」

マリアと未来が現れ、一気に四畳半の寝室は人口過多となったのだ。

「セレナっ!」

「ね、姉さん?」

ギアを消すやマリアは軽く驚くセレナへ駆け寄るとその体を抱き締めた。

実はセレナにはまだあの衝撃の出来事から一夜明けただけだが、マリアは既に三日は経過していたのである。

それでもまだ若干割り切れていないマリアからすれば、曇りが消えたセレナの顔はとても喜ばしい事だったのだ。

「良かった。本当にもう気持ちを持ち直したのね」

「う、うん。ヴェイグさんや奏さん達、それに只野さんが元気づけてくれたから」

どこかほにかむようなセレナの表情を見てピクンとマリアの眉が動いた。だがそれに気付いたのは残念ながら一人もいない。

「セレナ、その只野って男に何を言われたの？ 何をされたの？ 私に教えてくれる？」

「え、えつと……うん、あのね……」

只野に言われた事や翼とのやり取りで抱いた事。それらをセレナはマリアへ伝え始める。

さて、イヴ姉妹がそうして話を始めるのと同じように、響は久しぶりの親友との対面を果たして……

「響、どうして一度も顔見せてくれなかったの？ 心配してたんだよ？」

「い、いやあ、こつちだと一週間でもそつちじゃ一日とかあったからつい……」

まるで単身赴任の夫が妻に詰め寄られるような会話を繰り広げていたのだ。

クリスや翼は触らぬびみくに崇りなしとばかりに距離を取り、エルフナインとヴェイグをダイニングへ避難させていた。

「それで、その荷物は何だよ先輩」

「食料だ。それと、すまないがこれから私は只野さんの部屋へエルフナインを連れて行くこうと思っている。私達と違いエルフナインはスマートフォンサイズの依り代なしでは動けないんだ」

「マジか？」

「はい。これは只野さんの物だそうですし、僕がずっと所持しているいいものかと」

「嘘だろ？ ヴエイグの奴は結構動いてるぞ？」

「それはセレナが抱えているからだ。セレナが来た時に偶然分かった事だが、私達依り代を持っている者が触れている間は動けるらしい」

「でも、逆に言えばそうじゃないと動けない、か」

「それと、その機械がある場所なら俺も自由に動けるぞ」

「おそらくですが、このスマートフォンサイズの依り代なら、その建物全てを対象内としてくれるはずです」

その説明にクリスは心当たりがあったために頷いた。

コンビニ勤務の際は事務所のロッカーの中にスマホはあり、スー

パー銭湯の際は脱衣所にあった。

それでも当時の欠片をギアへ組み込む前の装者達はどちらも差し障りなく活動出来たのだ。

その事を聞いてエルフナインは自説の裏付けが取れて安堵する。何せ分らない事だらけなのだ。上位世界というものが存在する事もそうなら、そこでは自分達が容易に活動出来ないというのも初めての情報だったのだから。

「エルフナイン、そろそろ只野さんの部屋へ向かおう。昼前、か。おそらく寝ているだろうが状況が状況だ。只野さんも理解してくれるだろう」

「はい。じゃあ」

「待つて」

動き出そうとした翼とエルフナインへ待ったをかける声。マリアであった。

彼女の横ではセレナが少し疲れた顔をしている。今までマリアへ長々と話をしていたためである。

ただ、どこか満足そうでもあった。短い時間だったが、今の自分の決意などを全て姉へ伝えられたからである。

「私も行くわ」

「……分かった。では行こう」

「あ、あのっ！ 未来はいいんですか!？」

助けてとばかりに声を上げる響だったが、翼は申し訳なさそうに顔を逸らした。

「小日向は、お前に会いに来たのだ、立花」

「いつ!？」

「なあ〜んで嫌そうな声出すの?」

「そ、そういう事じゃないんだ！ その、今まではみんな只野さんへ興味を持ってたし……」

「そっか。でも私は違うから。ない事もないけど、それよりも今まで響が何をしてたのか、ちゃんと勉強とかやってるのか心配なんだ」

「べ、勉強……?」

「うん。響、こつちでアルバイトしかしてないでしょ？戻った時どうするの？勉強、ただでさえ遅れ気味なのに、それでちゃんと卒業出来る？」

「く、クリスちゃんがいるから何とかなるってっ！」

にっこり笑顔で（響にとっては）怖い事を告げてくる未来。そのあまりの怖さにクリスを頼る響だったが、それが未来の怒りを買う。

「何でクリスを頼るの？あと、どうして響からクリスの匂いがするのかな？ねえ！ねえ！」

「ひいひいっ！ごめん未来うううっ！」

断っておくが一度として未来は響の体へ顔を埋めた事もその近くで匂いを嗅いだ事もない。それなのにはつきりと響からするのがクリスの匂いと看破したのだ。完全にホラーかサスペンスである。

これで未来が笑っていたら完璧だったと言えよう。ただ、今の未来は若干拗ねていた。それがその光景を見ているクリスにとっては唯一の救いと言えた。

（ホント、あの子のバカへの愛情は時々重いよな……）

とはいえセレナもいる今、あまりそんなやり取りを見せるのもどうかと思ひ、クリスは小さくため息を吐きながら響と未来へ近付いていく。

「まあ落ち着けて。とりあえず座れよ。な？あたしのクッション使っっていいから」

そのクリスの言葉を背に翼達は部屋を出た。

残される形となったセレナとヴェイグは奏へと視線を向ける。彼女は一人CDラジカセを手に寝室へと移動を始めていたのだ。

「か、奏さん、どうしたんですか？」

「ん〜？そろそろ寝ようかなって。休みだからと思っって眠気来るまで起きてようって思っってたけど、今それが来たからさ」

「どうしてその機械を持っっていく？」

「ああ、これ？今聞ってるやつにさ、いい夢見れそうなの結構入ってるんだ。それだけをチョイスして再生するようにしてあるから、それを聞きながら寝ようってね」

眠そうな、でもどこか幸せそうな顔で奏は答えるとフラフラと寝室へ入り、そこで揉めている響と未来を他所に自分の布団を敷き始めた。

それを視界に捉えた響は藁をも縋る思いで彼女へ声をかけた。

「か、奏さん、助けてください」

「えく？ あたしこれから寝るんだけど……」

「え？ お昼寝ですか？」

奏の眠たげな、そして面倒だと言わんばかりの言葉に未来が反応した。その瞬間、ここだとばかりにクリスが会話へ入った。

「実はな、片翼の先輩、コンビニで夜勤やってるんだ。で、今日も勤務明けで疲れてるんだよ」

言いながら響へ軽く肘を突いてクリスは話を合わせると合図する。

それに気付いて響は細かく頷き、未来を大人しくさせようとした。

「そ、そうなんだよ。だからあまりうるさくは」

「そっか。じゃあ響、ちよつと外で話そう？ どこか向いてる場所、ない？」

響は逃げ出した。しかし回り込まれてしまった。

そんなメツセージウインドウがクリスの脳内には浮かんでいた。

——く、クリスちゃん、どうしよう？

——……諦めろ。

視線や首の動きだけでそんな会話を交わし、響は観念するように肩を落とすと未来へついて来てと告げ玄関へと歩き出す事となる。

こうして響は未来と共に近くの公園へと向かう事となった。

それを見送り、クリスは翼の持つてきた食料を冷蔵庫へとしまい始め、セレナもそれを手伝う事に。

その様子を見つめ、ヴェイグは寝室へと視線を向けた。

「……優しい歌が聞こえるな」

奏が眠りながら聞いているのは、仁志が渡した内の一枚。所謂メタルヒーローと呼ばれる特撮ヒーロー達のOPとEDが収められたベストであった。

そのEDばかりを奏は選んで流れるようにしていたのだ。この事

が切っ掛けでヴェイグもヒーローソングへ興味を持ち始めるのだが、それはまた別の話……。

「だから、未来の事を忘れてた訳じゃないんだって」

その私の言葉を聞いて未来はっーんと顔を背けた。

「ふーんっだ。どうせ響はこの平和な世界でクリス達と仲良く暮らしてる方が良くなったんでしょ？ 私の事だってそこまで心配してなかった癖に」

「そんな事ないよお」

「ホントに？」

「ホントホント」

実際寂しく思ってた訳じゃない。でも、クリスちゃんや翼さん、奏さんなんかもいてくれたから強く未来を求めるっていうか、傍にいて欲しいって思わなかったのは事実。

だからって心配してなかった訳じゃない。実際平行世界とのゲートが消えたって分かった時、私はクリスちゃんに止められるぐらいの勢いで本部へ戻ろうとしたんだから。

——落ち着けてっ！ 気持ちは分かるけど単独行動は避けろっ！

——でもっ！ もしかしたら未来達にも何か起こってるかもしれないっ！

——っ！ だから落ち着けてのっ！ あたしは一人で行くなんて言ってるんだっ！

——クリスちゃん……。

——あたしも一緒に行く。あの子やおっさん達が心配なのはこっちも一緒だ。

本部へのゲートは無事だったけど、それを確認したら今度は二人揃って只野さんの世界への裂け目が心配になった。

それで急いで戻ったんだよね。未来の事も気になったけど、只野さんはギアがない。なら、いざとなった時危ないのは只野さんだ。そう思ってた私とクリスちゃんはこっちへ戻ってきたんだから。

「……響、まだ戻ってこれそうにない?」

そんな事を思い出していると未来がそんな事を聞いてきた。

「ごめん……。こっちでアルバイト始めたのは知ってるでしょ? 私さ、今じゃ結構頼りにされ始めてるんだ。それに、私がないと今の部屋で暮らすのも厳しくて」

「それは……分かるけど……」

「未来、確認したい事があるんだ」

「何?」

「本当なら私達は知らない間に消滅させられてた。これはいい?」

「……うん」

何となくだけど未来はまだ実感が薄いんだと思う。私達だって只野さんと話をして、色々経験してやつと受け入れる事が出来たんだ。

ここは未来にもこの世界が本当に本来関わるはずじゃなかった世界だって事と、今もまだ危機は去ってないって分かってもらわないと。

「元々この世界では私達が大きな事件に関わってた時の事がアニメになってたんだって。最初はルナアタックの時。次がフロンティア。キャロルちゃん達との事にサンジェルマンさん達との事。そして、神の力に関連したヴァネッサさん達との事」

「で、でも、平行世界の事とかも知ってるって」

「そっちはゲームだったんだって。只野さんは言ってた。私達の日常みたいな部分はそんなに詳しく知らないって。でも、逆に言えば軽くなら知ってるんだ。それも、本当なら沢山の人達が」

その瞬間、未来が息を呑んだのが分かった。うん、嫌だよね。でもこう言えばきつと未来にも分かるはず。

「板場さんとたまにアニメ見たりするよね? あれが私達だったんだ

よ、只野さんの世界じゃ」

「そんな……」

「只野さん達は私達を実在しないって思ってた。だからその戦いや暮らしとかを見ても何も罪悪感を抱かなかったんだ。だって、作り物だって思ってたから」

「……そっか」

やっと未来にも伝わった。只野さんは私達の生活を覗いてたなんて思ってたなかったって。こうして私達と出会った事でそういう事だったんだって気付いたんだって。

なら次は只野さんの考えや気持ちを教える番だ。そしてそれを聞いて私がどう思ったのかも。

「未来、聞いて。只野さんはこう言ってくれたんだ。ここにあった私達の物語は、諦めずに手を伸ばし続ければきっと何かが変わるかもしれないって思わせてくれるものだって。それを聞いて私は嬉しかった。私が目指してたものを、願ってたものを、作り物だって思ってた人が感じとってくれたんだって」

「響……」

「だから私は思ったんだ。ここで出会ったのが只野さんで良かったって。何も頼る組織や物もない中で只野さんは私達を一生懸命支えてくれてるんだ。今までのような暮らしも支援もないけど、だからこそ私は懸命にここで生きてる。それがここでの私の戦いだって」

「ここでの、戦い？」

「うん。ベルちゃんを歪めた悪意は私達を消そうとしてた。それを只野さんが食い止めてくれたけど、このまま放置じゃ変わらない。翼さんと奏さんがツヴァイウィングとしてここで歌を唄ってる。それを配信してるチャンネルを只野さんが戦姫絶唱シンフォギアにしてくれたんだ」

「それは聞いた。それが私達の事を描いた作品名だったんだよね？」
「そう。だから今、私達はここでの暮らしを守るために戦ってる。私とクリスちゃんはコンビニの夕勤で働いて、奏さんは夜勤。翼さんは普段掃除や洗濯をしながら動画で配信する歌を覚えたり悩んだりしてる」

今、ここでの暮らしは戦いだ。楽しいし幸せだけど、いつか終わる……。

ううん、終わらせないといけない。そう、頭では分かってるんだ。

「あのね未来、ホント言うよね。私、何度もこの暮らしが本当だった

「らしいのにつてクリスマスちゃんに言ってるんだ」

「そうなの？」

「その度にクリスマスちゃんが私を受け止めてくれて、まるで未来みたいに私の弱さを包んでくれる。だから今の私からクリスマスちゃんの匂いがするんじゃないかな？　一緒に寝てるし」

そう言ったら未来は目を見開いた。うん、そりや驚くよね。だつてクリスマスちゃんだし。

でも、今のクリスマスちゃんはとつても優しくてあつたかい。うん、こつちに来てからクリスマスちゃんとの距離は前以上に縮まつたつて言える。

今じゃ未来と同じぐらい私の隣にいてくれる。親友とはまだ呼べないかもしれないけど、それに近いぐらいに。

「……クリスマスがいるから寂しくないの？」

「えつと、難しいな。未来がない事への寂しさはあるよ。でも、広い意味での寂しさはないかな？」

未来がない。だから寂しい。そういうのはない。

でも、未来がない。いてくれたらいいのにつて、そういう寂しさはある。

「そつか。今の響は私が絶対必要とかじゃないつて事だね」

その言葉を聞いて私はいつかの只野さんの言葉を思い出した。

いつまでも一緒にいられる訳じゃない。いつかはきつと今よりも距離が離れる時が来る。

もしかしたら、それが今軽く来てるのかもしれない。将来起きるはずの私と未来の距離が離れる時が。

「……そう、かも」

「そつか……」

一度も目を逸らす事なく、私は未来の目を見つめた。未来も私の目を見つめてくれた。

あの時はお互いに言いたい事を言えないで別れちゃったけど、今回はそんな事はしたくない。言わないと、言葉にしないと伝わらないつて知ってるから。それに、言葉だけじゃなく目や顔にも出さないと伝わ

らないから。

私が未来の事を嫌ったとかじゃないって。今も大好きだけど、好きだからこそ未来の人生は未来だけで決めて歩いて欲しいって。

「未来、私と一緒に歩いてくれるのは嬉しいよ。でも、常にじゃなくてもいいから。未来が私とたまには別れて歩きたいならそれでいい。私にもそういう時はあるかもしれない。いつも一緒だけが仲良しじゃないでしょ?」

「……うん」

「私ね、こつちに来て色々な事を勉強してるんだ。これはきつと学校じゃ教えてくれない事。知りようがない事。生きるために、必要な事」

「生きるために?」

「うん……」

そこで私は一度だけ深呼吸。未来はそんな私を見て首を傾げてる。「突然だけどクイズです! シャワーなし、トイレあり、台所ありで六畳の部屋があります! 駅まで歩いて十分ぐらいで、徒歩十分圏内にコンビニ、ネットカフェ、スーパーもあります! さて家賃は大体いくら?」

「ええっ!?!」

さすがの未来もこれには即答出来ないみたいだ。そうだよね、分からないよね。

でも、これが生きるための勉強なんだよ未来。学校じゃ教えてくれない。私はここで只野さんと暮らしてる内に学んだ事なんだ。

「ひ、ヒントは?」

「えっと……今の私達が暮らしてる部屋、あるでしょ? あそこより8000円も安い」

「ヒントになってるようになってないよ……」

何というか未来がこんなにも弱ってるのは珍しい。さて答えは出るかな?」

「……三択にして」

「三択? うーん……」

どうしよう？ ベタに行くならとんでもなく安いのと中間と高いのだけど、正解から考えると現実味が無さ過ぎるし……

「じゃ、一番は3万円台。二番は2万円台。三番は4万円台」

「えっと……じゃあ二番」

「残念。正解が一番。只野さん曰く、トイレが共同なら3万円を切れるんだって」

「は、反応に困るよ……」

だよね。私も初めて聞いた時は理解出来なかった。トイレが共同ってどういう事って聞いたなら、そのアパートには一つしかトイレがなくて、それを住人全員で使うっていう事って知ってちよつと気持ち悪くなったもん。

だから女性でそんな条件飲む人はいないって。女性は大抵バス・トイレ完備が最低条件じゃないかって只野さんは言ってた。

「ね、こんなの学校じゃ知りようがないでしょ？」

「うん、それはまあ……」

「でも、こういう事知っておいた方がいいんだ。学院を卒業した後、私達はもう寮を出るんだもん。そこでどういう条件でどういう立地でどんな土地に住むか。その家賃は適正かどうか。シャワーだけでいいのかお風呂も欲しいのか。あるいはシャワーとトイレは一緒にいいのか。家賃を優先するのか条件を優先するのか、とかね。そういうのをちゃんと考えられるようにならないといけないんだ」

只野さんは男の人だったからあの部屋でも平気だった。

でも私は無理。今の部屋みたいなのがギリギリかなってぐらい。

「響、卒業したら一人暮らしするの？」

未来がどこか意外そうな、でも寂しそうな顔をする。

「正直迷ってる。今みたいに未来と二人で暮らすのも楽しそうだから。でも……」

「でもっ？」

「私も未来も装者を続けたいといけなければ、一人で暮らした方がいいとは思うんだ」

はつきりと未来へ伝えた。今はまだいい。学生だし、寮生活だし。

でも、卒業したらそうはいかない。

大学へ行くならまだいいかもしれないけど、そこはもうS・O・N・Gの関連じゃない。じゃあ、今みたいな融通は利かないんだ。

専門学校なんかでもそう。装者としての任務がある限り、私達は普通の生活は出来ない。

「未来、思えばあの時から私をずっと支えてくれてありがとう。私が今もこうして笑っていられるのは、間違いなく未来のおかげ」

「響……」

「だからこそ、一度卒業を区切りにしよ？ 私と未来が二人で支え合うのは一先ず学院生活まで。そこからは、一旦距離を開けてみようよ」

「距離を……？」

「うん。それで見えてくるものや分かる事があると思うんだ。今の暮らして私がクリスちゃんや翼さんから感じたものや事のように。近くじゃ見えない時は離れて見る。今の私と未来は近くに居過ぎて見えなくなってるものとかあるんじゃないかって、そう思うから」

そこで私は息を吸い込む。ここでちゃんと未来へ伝えないといけない気持ちがあるから。

「私は、もっと未来の事を知りたい。そして未来にも私の事を知って欲しい。そのためには、一度これまでと違う距離でお互いを見る事も必要じゃないかって」

「これからも仲良くいるために？」

「ううん、これからもっと仲良くなるために、だよ。きっと私も未来もお互いに当たり前になって忘れてる事があると思うんだ。それに二人して気付いてないと思う」

クリスちゃんや翼さん、奏さんだってそうだった。今までと違う距離感になって、初めて見えてきた事があった。

只野さんは、私にそれを教えてくれた。いつも手を繋ぎ合ってるだけじゃ分からない事もあるって。手を離す事も時には必要だって。

だって、手を離してもまた繋ぎ合えばいい。離れた時の寂しさを知るから、繋ぎ直した時の嬉しさを、喜びを知るんだって、私はあのデー

トで教えてもらえたから。

「未来、私は未来と手を離しても心を離すつもりはないから。絆は途切れさせやしないから」

「響……。うん、分かった。私も響をもっと知りたい。だから卒業したら二十歳になるまでは離れて暮らそっか」

「うんっ！二十歳になって、大人になって、そこでもう一度一緒に過ごすか考えようよ」

「約束だよ？」

「勿論っ！」

未来と私の小指を結ぶ。口で紡ぐのは小さい頃に教えてもらったわらべ歌。

小さい頃未来とこうして歌った事がある。ううん、小さい頃だけじゃない。何度か歌ったものだ。

約束、か。これまで何度か破りそうになったけど、それでも何とか破る事なく叶えられてきた。

これからも、そうしていこう。未来との約束だけじゃなく、誰かと交わした約束は。

「二指切ったっ！」

これで五人目。また道行く人がこちらを見て微笑んでいく。何でだろう？僕には理解が出来ません。

「エル、どうした？」

そう言っ僕へ問いかけるのは只野さん。エルというのはこちらの僕の愛称だそうです。エルフラインではこの世界では目立ちすぎること、そういう事らしいです。

「いえ、どうして道行く人達が僕を見て笑っているのかと」

「あー、それは格好にあるんだよ」

「格好に？」

言われて視線を下げる。汚れもないしどこもおかしくないはずなんですけど……。

「えっと、エル？よく考えてごらん。君は見た目からして子供だ。

そんな子が白衣を着て道を歩くなんておかしいんだ」

「そ、そうですか？」

「そう。だからこそこれから君の、エルの服を買いに行くんだよ。せめてもう少し子供らしい格好をね」

「わ、分かりました」

只野さんはこの世界の協力者であり支援者。それもただの一般人。なのにこの人はこれまでの平行世界の方達と同じぐらい僕らへ援助をしてきている。

金銭的なものは無理でも、響さん達の事を受け入れ、生活できる体制をこちらに構築しつつある。それに、僕にキャロルの事を教えてくれた。

まさかパパがアダムさんと友人だったなんて思わなかった。これはキャロルも知らない事だ。

僕は自分の思い出がほとんどない。だから只野さんと会う事に何も嫌悪感はなかった。でも実際会ってみて分かった事がある。

この人は本当に普通の人だ。僕がこれまで出会った人達の中でも目立った才能や資質が分からない。

だけど、とっても優しい。今も僕の服や依り代を持ち歩けるケースを買いに行くところだ。

僕の手は片方只野さんと繋がれている。そしてもう一つの手は……。

「どうして私も同行しないといけないのよ……」

マリアさんがそう呟いてため息を吐いた。そう、残る手はマリアさんと繋がれている。

「仕方ないだろ？ 俺がエルと二人で歩いてみる。即通報だ。君がいるからまだ親子かなって思われるんだよ」

「それが嫌なの。どうして私が貴方と夫婦を演じなければいけないのよ」

「別に演じる必要はないって。ただ今は黙って買い物について来てくれ。翼とじゃエルの髪色がどちらからも繋がらないんだ」

「だからってねえ」

「あ、あの、僕のせいですみません」

このままじゃお二人が口論を始めるかもしれない。そう思っ
て止めに入る。

すると同時にお二人が苦い顔をした。

「……イヴさん、とりあえず今はエルの事を片付けよう」

「そうね……」

「あ、あれ？」

何故か一瞬でお二人が意見を同調してくれた。よく分からない
けど、僕の行動は正解だったみたいだ。

それにしてもこうやって街を歩くなんて久しぶりだ。しかも誰か
と両手を繋いで歩くなんて初めてだし、何だかワクワクする。

お休みに外へ出る事も稀だったし、何より僕はキャロルの思い出を
見る事がしなかった。でも、ここでは仮想脳領域へダイブする必要は
ない。

何故なら只野さんがいるから。只野さんにキャロルの事を教えて
もらおうと、僕はそう思っている。

「あの、今の赤い看板のお店は何ですか？」

「あれ？・焼き鳥屋。飲み屋の一種」

「のみや？」

「えっと、居酒屋って分かる？」

「いざかや？」

聞いた事があるようなないような。そう思っているとマリアさん
が小さく笑った。

「ふふっ、要するにアルコールを、お酒を楽しむ場所よ」

「そうそう。安く酒を飲めて、ついでにツマミ、酒の御供になる物を提
供してる店」

「成程。只野さんは」

「エル？・おじさんは、だ」

僕の言葉をそう遮って只野さんは小さく苦笑した。そうだった。
ここにいる時は僕は見た目に反しないような言動を心がけないとい
けない。

「おじさんは、行った事があるんですか？」

「ない事はないよ。数える程で足りるけどな」

「あら、お酒は嫌いなもの？」

「嫌いじゃないけど好きにはなれない、かな。それに、金がない奴が酒好きだったらもつと頑張つて稼ぐさ。酒とタバコにギャンブルは金食い虫だからなあ」

どこか遠い目をしながらしみじみ告げる只野さんにマリアさんも何も言わなかった。でも、その顔は呆れてる。

「そうじゃなくてももつと稼ごうと思わなかったの？」

「元々夢もなくこっちに出て来たんだ。親と一緒に暮らしてるのが嫌でさ」

「そうなんですか？ 僕だったら嬉しくて堪らないんですが……」

僕には信じられない言葉だった。家族と暮らせるなんて幸せだと思ふのに。

「エル、人間の多くは失ってからしかその事の有難みを分らないんだよ。それがどれだけ良い事だったか。どれだけ恵まれていた事なのかを。俺もそうだった。一人で暮らしていて良かったと思つていたのは最初の一年ぐらいだ。三年目辺りから良かったなんて思わず、ただただ日々を生きるだけになり、五年目ぐらいで何も考えないようになり、七年目からはこのまま一生こんな暮らしかと絶望し始めた」

「只野……貴方……」
遠くを見つめるように歩く只野さん。その横顔はとても疲れているように見えた。

僕はそんな顔をした人を初めて見た。生きる事に疲れたというように、そんな顔を。

「死んだ方がマシじゃないかって、そう思った事がない訳じゃない。一度なんて本気で死のうと思つて色々考えた。でも、出来なかった」「出来なかった？」

「ああ。生きるのを諦めるな。そんな言葉が頭をよぎったんだよ」「生きるのを……諦めるな……」

そこで只野さんは足を止めた。そして僕の目の高さへしやがんで

くれた。

「エル、きつと君なら分かるんじゃないか？ 死にたくないのに死んでしまう人が世の中にはいる。なら、自分から死を選ぶなんてとんでもないって」

「……はい」

僕がそうだった。そんな僕をキャロルは助けてくれた。僕の心を自分の体へ入れてくれたんだ。

「だから、今も俺は何とか生きてる。そうしたら、まさか俺が死ぬ事を踏み止まれた言葉を言つてた子達と出会うなんてな」

「……そう、そういう事」

マリアさんが何かに納得するように呟いた。僕も少しだけ分かった。只野さんが自殺を止めた理由に響さんが関わっているんだと。

そしてどうして只野さんが響さん達へ一生懸命支援してくれるのかも。この人は恩返しをしてるんだと思う。自分がこうやって生きるのを諦めないでいられる事への、恩返しを。

「さて、湿っぽい話はここまでにしよう。そうだ。この面倒事を片付けたら、エルにそのスマホをしばらく貸すよ」

「え？」

「それで平行世界のキャロルに会いに行くといい。思い出のキャロルと会うのもいいけど、もう一つの可能性と出会ってみたら思いがけない化学反応でエルの中のキャロルも活性化するかもしれない」

その言葉に僕の中で色々な事が駆け巡った。どう言葉にしているか分からないけれど、きつとこれは感動なんだと思う。

キャロルに会える。平行世界でも、僕がまたキャロルと会える！

「いいんですかっ!？」

「いいよ。今回の事で俺も覚悟が決まった。諦めずに生きていくだけじゃない。何とか現状を少しでも変えていこうってな。そのスマホは丁度俺がシンフォギアに出会った年に買ったやつなんだ。GXの時、つまり君とキャロルの物語だ」

「僕とキャロルの物語……」

「俺は思うんだ。どうしてキャロルは君を、エルフナインという別人

格とも言える存在を作り出していたのか。計画に利用するためと彼女は言うかもしれないけど、俺はこう思ってる。君こそがキャロルの良心だったんだと」

「僕が……キャロルの良心？」

「人は二面性を持つてる。善と悪だ。目の前でパパを殺され、キャロルは自分の中の悪が膨れていくのを止められなかったんじゃないかと思うんだよ。でも、それじゃあいけないとどこかで彼女の良心が叫んだ。パパの願いは、託したかった事は本当に今の自分の解釈でいいのかって」

思わず息を呑んだ。只野さんの言葉は僕がどこかで願っていた事に近かったから。

「その気持ち君が君を生んだ。キャロル・マールス・デインハイムとしての善の部分を見が、悪としての部分を自身へ残して」

そう言っただけで只野さんは僕を見た。その表情はどこか優しいもの。

「俺は、そう思いたいんだ。キャロルはキャロルで自分を止めたかったんじゃないかって」

「……はい、僕も、僕もそう思います」

そして僕の中のキャロルもそう言ってくれれると思う。パパの命題は、世界を分解して再構築する事で果たされるものじゃない。

今のキャロルならきつとそれを分かってくれてる。ううん、きつとどこかで分かっていたんだ。それでも、只野さんの言う様に自分の中の恨みや憎しみを止められなかった。

「只野、貴方はどうしてそこまでこちらに入れ込むの？ 創作物だったんでしょ？」

マリアさんの言葉に只野さんは一瞬驚いた顔をして、すぐに苦笑した。

「まさか自分で言うかね。でも、それがあある意味普通か」

どこか楽しそうに告げて、只野さんはマリアさんの目を見てこう言い切った。

——もう架空じゃないって知ったからな。あれは現実で、俺の知らない世界で本当にあった物語ってさ。

真剣な表情で告げられた言葉にマリアさんは何も言わなかった。僕も何も言えなかった。

この人は、もう受け入れたんだ。響さんと出会い、過ごした事で。創作物としてあった僕らの、ううん装者達の戦いの記憶や日々。それは紛れもない現実だと。

「エル、俺のは一つの意見だ。答えなんてどこにもない。あるとすれば、それは君に体を託したキャロルだけが知ってる」

「はい」

「だから、君は君の答えや意見で生きて行けばいい。真実を探す事もいいが、自分の信じたものや事を信じて生きてたっていい」

「え?」

「ちよつと、いきなり過ぎでしょ」

「いいんだよ。この子は生真面目過ぎる。真実を気にし出したら寝食を忘れる子だぞ?」

ひ、否定出来ません。実際皆さんからも休みの日にやっている事で心配をおかけした事がありますし。

「気楽に生きろと言つてもこの子はそう簡単に出来ないさ。だから俺が言えるのは、答えを出す事は大事だけど、それが周囲から見ても正しいか否かは突き詰めないでいいってぐらいだ。ああ、他人に迷惑をかけるならって注意事項も忘れずにね」

「それが只野さんの生き方ですか?」

「そうだな。俺の答えは俺にしか意味が無いし変えられない。それが世の中からは間違っていたとしても、俺にとっては正解だ。ただ、それを誰かに押し付ける事はしないし、逆もされたくない。互いに迷惑をかける限り、な」

何となくだけど、一瞬だけ只野さんが司令と重なった。きっと今の人がとしての芯なんだと思う。

マリアさんも少しだけ只野さんを見直したような顔をしている。そして只野さんが見てない時に小さく微笑んだ。

「で、イヴさん。エルにはどういう格好がいいかな?」

「そうね……。スカートとパンツならどっちがいい?」

「えっと、下着で歩くのはさすがに恥ずかしいです」

一瞬お二人が足を止めて同じような顔で僕を見つめた。何を言ってるんだろうって、そんな顔で。

「え、えっと……パンツって下着の事ですよね？」

「ぶっ……あははははっ！ い、イヴさん、エルには分かり易い表現じゃないと通じないと思うぞ、これ」

「……みたいね」

急に笑い出す只野さんと額に手を当ててるマリアさん。

「ぼ、僕は何か間違った事を言っただろうか？ でも、たしかにマリアさんはスカートとパンツと言ったし……」

「え、エル、パンツって言うのはこの場合ズボンの事だ」

「そ、そうなんですかつ?!」

「知らなかった。まさかそんな呼び方もあるなんて……」

「ごめんなさい。えっと、なら改めて聞いわ。スカートとズボン、どちらが好き？」

「しよ、正直どちらでも。ただ、動き易い方が助かります」

「……ねえ、只野。このままだとエルフナインは……」

「ファッションへの興味ゼロで生きていくだろうな。教育していくなら今からだぞイヴさん。ここに居る間は白衣で済ませる事も、休みの日に一日中おこもりさんも出来ないからな」

「そうね。なら……エルフナイン？ これから私が貴方にファッションの楽しさを教えてあげるわ」

「え、えっと……よろしくお願いします」

「ええ、任せて頂戴。只野、予算はどれだけ？ まさか1万円以下って事はないでしょうね？」

「ええ……駄目か？」

「駄目に決まってるでしょ。女の子の、それもこんな可愛い子の服よ？ 貴方みたいに余程変じゃなければ安物でいいみたいにはいかないのっ」

「そう言われて只野さんが大きく肩を落としていたのが印象的だった。」

僕も只野さんの考えに賛成なんだけど、この状況でそれを口にしてはいけない気がした。

その後、マリアさんが凄くやる気で、只野さんと僕は二人で困る事になった。そこまで多くない服屋さんを回り、僕は何度も服を着替えさせられて正直とても疲れた。

只野さんなんか量販店でいいじゃないかと言い出してマリアさんに叱られていたぐらいだ。

だけど僕が服を着替える度に、マリアさんと只野さんが喜んだり驚いたりしてくれたのは僕も嬉しかったし楽しかった。

その中で僕が気に入った物を一着と、マリアさんと只野さんが話し合って決めた一着を購入して帰る事になった。只野さんが若干辛そうに支払いをしているのを見てマリアさんが苦笑してたけど。

帰り道の途中でひゃっきん？ というお店へ立ち寄り依り代を入れる首掛け袋を買って、今はお二人と手を繋いでゲートのあるアパートを目指していた。

ちなみに格好は早速買ったものへ変わっていた。元々の服装はこの着ている服を入れるはずだった袋へ入れて只野さんが持つてくれる。

ちよつとだけ足元がスースーします。スカートなんて初めて履きました。でも、マリアさんと只野さんが似合うと言ってくれたからお気に入りです。

色は淡い緑。上着は黄色。それを見た只野さんが僕とキャロルの色みたいだつて言ったのが印象的でした。

「イヴさん、エルの事なんだけど、可能なら君達姉妹と暮らしてもらっていいだろうか？ 三姉妹で通ると思うんだよ」

「いいわ。エルフナインさえ良ければ、だけど」

「僕は構いません。それに、僕とセレナさんが一緒の方が只野さんも安心なんですよね？」

「安心って言うよりはお互いによい影響を与えるんじゃないかなって思うんだ。そうそう。エル、こっちにいる間はイヴさんやセレナちゃんをお姉ちゃんとか姉さんって呼ぶように」

「お姉ちゃん、ですか？」

そう僕が口にした瞬間、マリアさんがとつても嬉しそうに笑った。いいわねそれ。じゃあ、私もエルって呼ぼうかしら？」

「その方がいいよ。マリア、セレナ、エルフナインじゃ姉妹感が薄いだろ？」

「マリア、セレナ、エル。そうね、こちらの方が姉妹って感じがするわ」
「あ、あの……」

何だか大変な事になってきた。でも、マリアさんが楽しそうだからいいかな？

それに僕も少しだけ嬉しい。擬似的とは言え姉が出来るなんて、思いましなかつたから。

「えっと、じゃあ改めてよろしくお願いします、マリアお姉ちゃん」

「エル、ダメよ。お姉ちゃんに敬語はなし」

「いいんじゃないか？ 家族に丁寧語使うぐらいは」

「そう？ 距離感を感じるけど……」

「敬意があるって事でいいと思うけど……じゃあこうしよう。お姉ちゃんじゃなくて姉様だ」

「姉様？」

「マリア姉様、ですか？」

「っ!？」

マリアさんが凄く驚いた顔をして僕を見てきた。

そしてそれを見て只野さんが面白くて仕方ないみたいに笑ってる。

「え、エル……その呼び方でもう一度挨拶してやって？」

「分かりました。マリア姉様、よろしくお願いします」

「~~~~っ?! ああっ! もうっ! 只野っ! 私に妙な趣味を作ろうとしないでっ!」

「いたっ!?! ちよっ!?! 痛い痛いっ! 叩くなつての!」

ど、どうしよう! お二人が喧嘩を始めてしまいました!

こ、こうなったらあの時と同じように僕がお二人を止めないっ!

「や、止めてください姉様! 兄様!」

「……えっ!」

や、やった！　またお二人を止める事が出来ました。

「えつと……エル？　今、何て言った？」

「え？　止めてください姉様って」

「その後よ。只野の事、何て言ったの？」

「兄様ですが？」

何かいけなかっただろうか。マリアさんを姉と呼ぶなら只野さんは兄じゃないかなって考えたんだけど？

年齢で考えても間違っていないはず。只野さんはマリアさんより七つ程度上だ。そして夫婦は嫌だとマリアさんが言っていたから兄妹が妥当なはずだ。

「……ま、それでいいんじゃないか？」

「良くないわよ。結局私と貴方が夫婦に思われそうじゃない」

「ないない。呼び方だけで俺とイヴさんを夫婦に勘違いなんて、そいつは余程想像力がないよ。大体俺みたいな男が、どうやって、イヴさんみたいな美人の嫁さんもらえるって言うんだ？」

「それはそうだろうけど……」

「ですが、マリア姉様は結婚願望が強い傾向にあると思いますのでなくはないかと」

「はっ？」

「え、エルっ!?　何を言ってるのよっ!?」

あれ？　でも、たしか時折疲れたようにマリアさんが自分は結婚出来るのかって自問自答しているのを見た事がある。

でもそれを言う事は出来なかった。只野さんがマリアさんの反応から意外なものを見たと言うように表情を驚きに変えたからだ。

もしかして、僕は言っただけじゃない事を言ってしまったんだろうか？　そう思うけど、言ってしまった事をなかった事には出来ない。

「あー……まあそうだよなあ。そっちの世界じゃ君程高嶺の花はないもんな」

「……………やっぱりそう思う?」

「そりゃあね。ただでさえ美人でスタイルも良くて家庭的。なのに世界の歌姫で救国ならぬ救世主だ。そんな女性へプロポーズ出来る男

なんて、そつちにだつて中々いないと思うのが普通だつて」

その言葉でマリアさんが目に見えて肩を落とした。まるで服を買う前の只野さんだ。

マリアさんはその後只野さんへ色々聞いていた。どうすれば男性から声をかけてもらえるのかとか、どういう事を出来れば男性は喜ぶのかつて。

それに只野さんは自分の意見が男性全てに通用するとは思わないでと前置いて意見を述べていた。僕はその話を聞きながら思う。

マリアさんと只野さん、本当に兄妹みたいだつて。

今の話も妹が兄へどうすれば結婚出来るか聞いているようにしか思えないし。

「でも……」

チラリと視線を上げる。そこでは……

「料理が出来る方がいいのは知ってるの。でもそれだけじゃ弱いんでしょ？」

「いやいや、イヴさんみたいなステータスの女性が家事が得意とかはむしろ強みだよ。あとは得意料理とかを家庭的なものにすればいい。ポトフとかの煮込み料理辺りがいいんじゃないかな？」

最初の時の雰囲気はどこへ行つたのか。そんな風に思うぐらいマリアさんが只野さんと会話していた。

でも、姉様と兄様、か。うん、ここでの僕はマリアさん達の妹だ。ならちゃんとそう思つて振舞おう。

そんな事を思いながら僕は歩く。頭上から聞こえるお二人の会話に笑みを浮かべながら……。

一先ずマリアと未来は自分達の世界へと戻つて行つた。それを見送り仁志はすぐさま行動開始。マリアとセレナ、そしてエルフナインとヴェイグが暮らす部屋を探すために彼は駅前の不動産屋をあたる。

今回仁志は強気だった。これまでは家賃の条件を満たしていれば構わないと考えてきたが、今回探す部屋はまだ幼い少女二人を住ませる部屋だ。セキュリティや設備など今まで重視してこなかった事

を重点的に見直したのである。

そのために彼は家賃は一旦置いておいて考える事にしたのだ。

相手の挙げるいくつもの部屋の中から現在の動画配信による収入などを考え、またマリア自身にもどこかで働いてもらう事を考えた際の最低賃金を加えた計算をし、無理なく家賃を支払って行けそうな物件を目を皿のようにして探した。

それと並行し彼は二台の連絡用のスマートフォンを購入。その一つを自分用にし、もう一つは翼へと託したのだ。

——翼は基本フリーで動けるだろ？ なら一番連絡が取り易いからさ。

元々仁志が使っていた物をエルフナインが常に所持するため、セレナへの連絡もそちらで取れるからだ。

セレナを、エルフナインを、マリアを預かる事になった仁志はこれまでにない程やる気に満ちていた。

背負うものが出来、男として覚悟を決めたのである。

特に幼い二人の少女の存在が大きかった。彼自身がマリアや翼へ告げた言葉こそ、彼自身の本心でもあったのだから。

そしてそれは少女達への支援だけに留まらなかった。

——本当にいいのかい？

——はい。まずはお試しでお願いします。いきなり俺も責任ある立場やら役職なんてキツイんで、シフトを一日増やす事から始めたいんですよ。

何とコンビニ店長を段階的に目指してみる事にしたのである。

まずシフトを一日増やして週五勤務とし、それで無理が出なければこれで固定。次は勤務内容の拡張で、それも平気ならば合格という言葉で適性試験であった。

オーナーはそんな事をせずとも言ったのだが、仁志は自分が本当に店長が務まるなど思えなかった。それを自他ともに見極めさせて欲しいと申し出たのだ。

夢もなくなただ生きていただけの男の、少し遅い前進であった。

その背を押したのは偶然出会った一人の少女から始まる日々。自

分が住んでいる場所を、国を、世界を守るのだとなった男の、正義感と良心による覚醒だった。

その男の変化を彼を知る者達は一様に喜んだ。ただ一人、始まりの少女を除いては……。

「奏さん、最近只野さん、仕事はどうですか？」

その響の問いかけに奏は食べていたアイスを口に咥えたまま首を傾げた。

季節は皐月の風が迫り始めた四月下旬。もう響達がこの世界で暮らし出して一か月が経過していた。

相変わらずあの六畳間で生活する仁志だったが、その暮らしは多少ではあるが改善の兆しが出ていた。

一番は何と言ってもセレナが手伝いとしてその部屋の掃除をするようになった事だろう。

翼からの話を聞いた仁志が、ならばと仕事として家政婦の真似事を頼んだのである。

そう、現在セレナは MARIA や エルフナイン に ヴェイグ と共に、響達の暮らすアパートと仁志の暮らすアパートの中間点とも言える場所の平屋で生活していた。

家賃は当然これまでよりも高いが、それでも物件自体がそれなりに古い事もあり格安と言えたのだ。

セキュリティと言う面で言えば貧相と言えるが、そこは静かな住宅街。それに極端な話、今の彼女達に仁志以外のこの世界での知り合いなど皆無に等しく、響達以外の訪れる者など基本的に警戒心を抱いておかなければならないと言えた。

「ん〜……特におかしな事はないよ。もっとへばるかと思ったけど、割と元気に仕事してるし」

「そうですか……」

「んだよ。何か気になる事でもあんのか？」

「……うん。只野さん、先週のシフトからお休み少なくなっただしよ？ だから最近一緒にお出かけとか出来てないからさ……」

シフトの日数が増えた事に加えて、これまでよりも発注などでオー

ナーと協議する事も増えたために、仁志は休みはほぼ寝て過ごしていると云つても良かった。

それが響には寂しさを感じる要因となっていたのである。それは、ここへ来て初めて彼女が感じた強い寂しさであった。

「仕方ないだろう。只野さんは今店長となるための試用期間だ。今までやっていた事と大きく変わる訳ではないとはいえ、一日勤務が増えて考えないといけない事も増えた。その疲労は私達では想像出来ない」

「それはそうですけど……一緒にご飯食べる事もなくなっちゃったし」

「代わりに向こうで食ってるからいいだろ。エルフナイン達が喜んでるって聞くぞ?」

「らしいね。マリアも言ってたよ。一人にしておく食事さえも取らずに寝るだろうからって」

セレナが仁志の部屋の掃除などを引き受けている事を利用して、マリアは彼の生活が何とか崩壊しないように気を配っていた。

そんな彼女は仁志の紹介である弁当屋でバイトとして働いている。美人のバイトが入った事もあり、弁当屋の売り上げは多少ではあるが伸びたのだから男と言うのは本当に単純なものである。

「……マリアさんの歓迎会も只野さん来てくれなかったし」
「お前なあ……」

マリアがこちらで生活するための準備を色々としてやってきた次の日、セレナやエルフナインも参加してのカラオケのルームを使った歓迎会が行われたのだが、そこに仁志は来なかったのだ。

いや、正確には来れなかったのだ。勤務明けで疲れていた事とその日もまた仕事だったために。

(最近只野さんと会えるの、お店での数分だけだ。その時は元気そうだけどすぐオーナーと話を始めたりするからゆっくりお喋り出来ないし……)

会いに行こうにも日中は寝ている事が予想され、たまの休みなどセレナさえも夕食に誘いに行くだけであった。

少し前までであった日常がもう遠くなってしまった気がする。そんな風に思い響は表情を曇らせた。

恋心の自覚ないままに來た響だったが、それ故に彼女は何故今自分がここまで落ち込んでいるかが理解出来ないでいた。

勿論響が落ち込んでいるようにクリスや翼も多少の寂しさは覚えている。何せ二人も惚れた男との時間が減っているのだ。

それでも二人が響程沈んでいないのにはちゃんとした理由がある。

(動画投稿に関しての意見などは送ってくれているし、見た感想などもくれる。只野さんは、本当にしつかりしている)

(あいつが今みたいになってから店の空気良くなってるし、あのスケベもより大人しくなりやがった。おっさんみたいな男になろうとしてるってのは嘘じゃねーな)

仁志の成長や変化、あるいは変わらぬ優しさを感じ取る事が二人には出來たのだ。

つまり響だけが二人とは見ている部分が違うのである。彼女は、仁志の男としての部分ではなく人としての部分に惹かれた。

故に見ている部分は男としての成長ではないのだ。響は仁志がただ自分達から離れて行っているような気がして仕方なかったのだから。

寂しいです。その一言が言えない響。あれだけ言葉にしなければ伝わらないと痛感したのに、今の彼女はそれを忘れてしまったかのようだった。

同じ頃、マリア達の暮らす一軒家に仁志の姿があった。

「……旨い」

唐揚げを口に入れてゆっくりと咀嚼してからの呟きには、文字通り噛み締めるような気持ちが入められていた。

「大袈裟よ。まあ、陽子さんの秘伝のタレを教えてもらって作ったからだろうけど」

「本当に美味しいよ姉さん」

「はい、とっても美味しいです!」

「ふふっ、ありがとう。で、ヴェイグはどう?」

満面の笑みを見せるセレナとエルフナインへ女神の如き微笑みを返し、マリアはテーブルの上に直接座って食事をしている家族へと声をかけた。

「むぐ？ ……………初めて食べたが旨いな」

「そう、良かったわ。まだまだあるから遠慮なく食べてね」

「二はい（分かった）」

元気よく返事する二人の少女と一人の異種族。仁志は返事もせず味わうように唐揚げを口に入れながら白米を口へと運んでいる。返事をするよりも食欲を優先しているのだ。

（まったく、本当に疲れ果ててるわね……）

そんな仁志を見てマリアは小さくため息を吐く。こちらに来てから彼女は否応なく仁志と関わる事となった。

何せまずは生活する上で色々とあったためである。本来の世界ではもう金銭面に困る事はないマリアだったが、こちらではそんなはずもなく言わば無一文の状態から生活しなければならなかった。

せめてと本来の世界で自分やセレナ、エルフナイン用の寝具などを購入し、最低限の準備は行った彼女だったがそう何度も世界間を行き来する訳にもいかず、仁志から当座の生活費として渡された金額でやりくりする事となり、彼から鍵と同時に渡された家計簿をつけていく事になったのは言うまでもない。

それだけでなく、仁志が自分の部屋の掃除などをセレナの小遣い稼ぎとして頼んだ時はマリアは真っ先に反対したのだ。一人暮らしの男の部屋へ幼い少女が一人で訪れるなど色々な意味で不味いと。

だが、そこは仁志も分かっていた。故に先に大家へ話を通していたのだ。合鍵を作りたいと申し出て、その理由として近くに越してきた姪っ子にお手伝いとして部屋の掃除をさせたいと。

周囲からの目を意識した根回しまでしてのそれにマリアは渋々折れた。何せセレナへの小遣いを今の自分が渡せるはずがなかった上、今後もそれは少々難しいと思ったからである。

それに何よりもセレナ本人のやる気へ水を差したくはなかったのだ。自分でお金を稼ぐ事の大切さと大変さを学ばせるべきとの仁志

の言葉もあり、マリアは妹の可愛いお手伝いさんを許可したのだ
た。

「只野、唐揚げだけじゃなく野菜も食べなさい。セレナとエルもよ。
ヴェイグを見習いなさい」

唐揚げの第二陣を揚げつつ、しつかり食卓へ目を走らせるマリアは
まさしく母親であった。

名前を挙げられた三人はそれぞれ唐揚げに伸ばしていた箸や
フォークを止め、苦い顔でその手を戻していく。

「セレナ、これも旨いぞ」

「う、うん。じゃあヴェイグさんが全部食べてくれていいですよ？」

そんな三人を不思議そうに眺めながらヴェイグはフォークで野菜
炒めを食べていた。人参、玉ねぎ、ピーマンと言ったいかにもな料理
だが、当然苦手な物が入っていれば手を出したくない料理である。

セレナはピーマンが苦手であり、実は只野もあまり好きではない。
エルフナインは野菜は平気なのだが野菜炒めと言う料理が苦手な
のであった。

理由は若干水っぽくなってしまいうから。食感が好きではないので
ある。

「セレナ？ 今のは私の聞き間違い？ まるでヴェイグへ押し付ける
ように聞こえたけど？」

「っ!? や、やっぱり私も食べますね、ヴェイグさん！」

「あ、ああ……」

「エルもちゃんと食べなさい。野菜は平気なんですよ？」

「は、はいっ！ ちゃんといただきます！」

「……実家の母さんよりこええ」

二人への言葉を聞いて仁志がぼそりと漏らした言葉。それにマリ
アの眉が一瞬だけ動く。

「只野？ 返事は？」

「イエスマムっ！ ちゃんと食べますっ！」

「よろしい」

満足そうに頷き、マリアは視線を鍋へと戻した。その背中を見つ

め、仁志達は顔を突き合わせる。

「何だかき、イヴさんの印象が大分変わったんだけど、元々あんな感じ？」

「いえ、こつちに来てからです。姉さん、毎晩家計簿を見てため息ばかり吐いてますし」

「何でもかつての逃亡生活よりも厳しいかもしれないと言っていました」

「マジか……。にーきゅっぱが御馳走の時よりもかよ……」

「にーきゅっぱって何だ？」

「ん？ ああ、物の値段の略し方なんだよ。298円だから2と9と8でにーきゅっぱ」

仁志の説明に頷くヴェイグとセレナにエルフナイン。そんな彼らへ呆れたような声が聞こえたのはその直後だった。

「くだらない事言っていないで冷めない内に食べなさい」

「「「っ!」」」

弾かれたように野菜炒めへ箸やフォークが伸びる。それを背中越しに見つめ、マリアは小さく微笑んだ。

(こうしてると本当に家族になったみたいね……)

ペットのヴェイグ、次女のエルに長女のセレナ、そして父親の仁志。そう想像してマリアは一瞬にして顔を赤くして首を横に振った。

(何を考えてるのよ、もう！ 百歩譲ってセレナとエルフナインを娘はいいとして、只野を旦那はないでしょ！)

それでも、このままだと自分のような女が嫁げるのは仁志ぐらいかもしれないとマリアは割と真剣に悩み始め、その悶々とする背中を見て四人は再び顔を突き合わせて首を傾げるのだった……。

今の私の朝は早い。午前六時には遅くても起きてまず朝食の支度を始める。野菜は翼が本部から運んで来てくれてる物を使う。

お肉なんかも持つてくるけど、あちらはあまり日持ちしないから使い切れない時は冷凍にして使うようにしてる。でも、これもいつまで出来るか分からない。出来なくなったら、その時からが正念場かしら

？

「今日は……人参がそろそろ危ないわね」

毎日翼があちらとの行き来が出来るか確認も兼ねて野菜を持って来てくれる。なのでちゃんと使い切らないといけないわね。

よし、人参はきんぴらにしましょう。それと……じゃがいもは茹でて漬けてサラダね。

そうなるも他にも何か欲しいわね。そう思って今度は冷蔵庫を開ける。

ハムと……スティックチーズが残ってるからこれを刻んで入れましょ。

「これと玉子焼きでおかずはいいわね。後は汁物かしら」

私もセレナもエルフナインさえも日本人ではないけど、健康のために味噌汁を飲むようにしている。

というのも只野が飲みたがるのよね。自分一人じゃ面倒だとか何とか言ってる。おかげですっかり作り方を覚えたわ。

となると具は何にしようかしら？ と、そこで目に入ったのは陽子さんからもらった乾燥ワカメ。

お店で使ってる物だけど、賞味期限が切れたし少ないので捨てるものとしてたのをもらったのだ。

海藻サラダとかにでも使おうと思ってたけど、ちょうどいいわね。

「うん、ワカメの味噌汁にしましょうか」

これで献立は終わり。お昼ご飯は残るだろう。ご飯でおにぎりを握っておけばいいし、何なら味噌汁を多めに作っておけばお昼も飲むもの。

我が家の食費の半分を只野が出してくれているおかげで家計は何とか回っている。ただ、これも現状本部からの食料支援があつてこそ状態だ。それがなくなればかなり厳しくなる。

「いつそアルバイトの日数、増やそうかしら？」

私の勤務は午前十一時から午後七時までの週四。だけど営業自体は二時で一旦閉めて、夕方四時からまた開けるって感じで夜十一時までやっている。

私はセレナ達の世話があるからと陽子さんへ交渉してそうなっているけど、一日ぐらい閉店までやる日、作るべきかしら？ でもそんな交渉が出来るような人で本当に良かった。こればかりは只野に感謝しなくちゃ。

本当に、有難かった。仕事終わりで晩ご飯を作るのはかなり辛いけど、セレナ達が嬉しそうに食べてくれたり手伝ったりしてくれるだけで疲れが飛ぶしね。

それにセレナがご飯だけは仕掛けてくれるし、後片付けはエルと二人でやってくれて有難いの何のつて。

ヴェイグは私の背中をその体で踏んで疲れを取ろうとしてくれるし、本当に助かってる。

そんな事を考えながら朝食を作り出してしばらくすると、我が家で二番目の早起きがキッチンへやってくる。

「くんくん……みそ、か。この匂いにも慣れたな」

「ヴェイグ？ おはよう、でしょ？」

「ああ、すまん。おはよう」

「ええ、おはよう。セレナとエルは？」

「まだ寝てる。今朝は何だ？」

言いながらテーブルへ登ろうとするヴェイグだけど、そうはさせるものですか。

「ヴェイグ、手を洗ってきなさい。つまみ食いをしてもそこは守ってもらおうわ」

「……分かった」

んもうっ、やっぱりサラダへ手を出そうとしてたわね。と、そこで聞こえてくる玄関の戸を開ける音。

出来るだけ静かに開けてるんでしょうけど、殺し切れないわよね、あの引き戸だと。

そして玄関から真っ直ぐこちらを目指して足音が近付いてくる。

「あく味噌の匂いだあ。イヴさん、ありがとう。これ、毎度おなじみの上納品」

「冷蔵庫に入れておいて」

「へいへい。つと、そうだ。これこれ、見てよイヴさん
「何よ？」

只野がこちらに近付きながら何かを袋から取り出す。これは……
見慣れないスイーツね。

「新商品の廃棄。さくらパフェってやつんだけど、興味ある？」

「まあお洒落で可愛いとは思うわ。味は？」

「残念ながら俺は食べた事ない。でも、逆に考えてくれ。廃棄になる
事が少ないって事は、だ」

「そんな不味くはないって事ね。いいわ。朝食終わりに食べてみる」

「ん。今晚にでも感想よろしく」

「了解。それにしても奏がよく食べなかったわね？ 一緒だったんで
しよ？」

「そうそう、天羽さんも狙ってたみたいなんだけど、俺が世話になって
るイヴさんへ渡したいって言ったら折れてくれたんだよ」

言いながら冷蔵庫へスイーツをしまっていく只野を横目に、私は少
しだけ笑みが浮かんでいた。

奏の欲しかった物を食べられるってだけじゃない。毎日のように
只野はここへ仕事終わりにやってきては、廃棄のスイーツなどを差し
入れてくれる。

それはセレナやエルにとって楽しみの一つであり、私の疲れを癒し
てくれる物でもあるのだ。

そう言っているのに、只野は今のようにはそれは世話になっている礼
だと言つてきかない。

今は世話されているのはこちらだと言うのに。本当に、こうと決め
たら譲らないんだから。

「うし、シユークリームは今回三つ。分かっているとと思うけど」

「私はあのパフェがあるからって事でしよ？」

「そっ」

「タダノ、来てたのか」

そこへ手を洗ってきたヴェイグがやってきた。相変わらず只野に
対して若干嬉しそうにするのね、彼は。

「ヴェイグ、おはよう。そうそう。また冷蔵庫に入れてあるからな」
「ああ、シュークリームか。助かる」

「いいって事さ。セレナちゃんとエルは……寝てるか」

「まあ、いつものようにタダノが帰った後ぐらいで起きるだろう」

「そつか。じゃ、二人にも伝えておいてくれるか？ 一番上段に置いてあるのはイヴさんのだから食べちゃ駄目って」

「分かった」

会話だけ聞いていると父と子ね。そんな事を思いながら私は取り出した茶碗へご飯をよそつていく。

「只野、どれぐらい食べるの?」

「いつもと同じで」

「同じね。分かったわ」

言い終わると同時に炊飯器の蓋を閉め、茶碗をテーブルへと持って行く。

只野は既に定位置に座っていて、ヴェイグもテーブルの上に座っていた。多分只野が持ち上げたんでしようね。何も音しなかったし。

「はい」

「ありがとう」

「タダノ、仕事の方はどうだ?」

「んく……一日増やしただけなら問題なさそう。ただ、これで夕方からってなると厳しいかもなあって感じ」

私がお椀に味噌汁を注いでいると聞こえる会話に思わず苦笑する。

さつきは只野が父でヴェイグが子だったのが逆転してるように聞こえたからだ。

本当にこの二人は不思議だね。でも、きっと友人だからなんだろうね。

そう、あの人間嫌いのヴェイグがセレナ以外で作った友人が只野だった。しかもその申し出はヴェイグから。

——タダノ、俺にさんはいらぬ。これからは呼び捨てでいいぞ。

あれを、友人になりたいと言う申し出と呼ぶのなら、だけど。でも、きっと只野にはそう伝わったはず。

あれ以降二人はこうしてよく話すのを見る。ヴェイグも只野の仕事や体などを心配しているし。

それをこちらが聞くと、今只野に倒れられたら困るからだの一点張り。でもセレナがこっそり教えてくれた事によると、只野はしつこいぐらい言わないと本気で無茶をして痛い目を見るからだそう。

きっと昔の自分と似てると言っていたそうだからその経験からでしょうね。

「人参のきんぴらにポテトサラダと玉子焼き。いいねいいね。これで納豆とかあつたら安い旅館の朝食みたいだ」

「安いは余計よ。はい味噌汁」

「おー、今朝は何？」

「ワカメよ。陽子さんが捨てようとしたのをもらったの。賞味期限は切れてるけどまだ食べる分には大丈夫」

「成程なあ。でもいいね。味噌汁のザ・定番だ」

「そうなの？」

「そうそう。後は豆腐や油揚げに大根とかかなあ」

ふむ、大根……か。うん、いいわね。一本丸ごともらって味噌汁や煮物なんかに使いますよ。

そうと決まれば翼へ連絡しておかないと。今日も本部へ行つて食料をもらつてくるはずだ。エルが起きたらお願いしなきゃ。

「マリア、俺の分はまだだろうか？」

「ああ、ごめんなさい。今用意するわね」

只野のお腕へ顔を近付けてクンクンしてるヴェイグがそんな事を言ってきた。ふふつ、可愛いわね。

多分だけど只野もヴェイグが食べられるようになるまで待つてるつもりだし。

そう思つてヴェイグの分を用意する。私はセレナとエルが起きてから食べるつもりなので椅子に座つて二人を眺めるだけ。

「いただきます」

「召し上がれ」

フォークとスプーンで食べるヴェイグと箸で食べる只野。何とい

うか少し和むのよね、この光景。

二人して美味しそうに食べてくれるのは勿論だけど、見た目が違う二人が同じ物で笑みを見せ合ってるのは心に感じるものがある。

「いやあ、やっぱ旨いなあ。ヴェイグ、ワカメは初めてだっけ?」

「ああ。噛むとヌメヌメしてるな、この草」

「海藻の一種なんだ。海のもの。海って分かる?」

「馬鹿にするな。聞いた事ぐらいある」

「見た事は?」

「……………ない」

「じゃ、近い内に行こう。で、みんなで旨い物食べよう」

「ホントか?」

「海に行くのは別にいいけど、休みに動けるの? 忙しいんでしょ、店長さんは」

私がそう少し嗜めるように告げると只野が少しだけ苦い顔。ほらやっぱり。

「気持ち嬉しいけどぬか喜びになるような事言わないの。ヴェイグだからいいけど、これがセレナやエルなら影で泣くわよ?」

「そう言われると辛いなあ。ヴェイグ、ごめんな」

「いやいい。お前は嘘を吐こうとしてない事ぐらい分かる。ただ、それが嘘になつてしまう事があるんだろう」

「ホントにごめん。何とか二連休作れるようにするよ」

まただ。また父と子だ。本当に知らない内に笑みが零れてくる。この二人を見てると只野が父親になった時が想像しやすいもの。

思えば休みの日の夕食もそんな感じだ。私が仕事から帰ってきて作る食事にセレナが只野を呼んできて、そこで食べている時のエルとの会話なんてまさしく親子だし。この前なんか…………

——あの、聞きたい事があるんですが…………。

——何?

——えっと、夢の国という場所があるって聞きました。どういうところなんですか?

——あ……………簡単に言えばテーマパーク、遊園地かな?

——遊園地？

——やっぱセレナちゃんも興味あるかあ。連れて行ってやりたいけど、ここからじゃ遠いからなあ……。

完全に娘二人を前にして頭を抱える父親だったもの。後で場所とそこの入園料を聞いて絶句。

向こうなら何の問題もないけどこつちじゃ行くだけで出費が酷い。なので二人でしばらく夢の国を話題にしない事で一致したぐらいだ。

そんな事を思い出しながら私は食事をとる只野を見つめた。初めて会った時よりも疲れが見える顔を。

「只野、無理はしないで頂戴。貴方にもしもがあつたら、今の私達は終わりなの」

「分かってるさ。だからこうやってイヴさんが気遣ってくれてる訳だしな。それにちゃんと勤務始まりに野菜ジュース飲んでるし、休憩中の飯も出来るだけ気を遣ってるんだ」

「……ならいいわ。そうそう、運動は続けてる？」

「勿論。この後は腹ごなしの運動としてまた散歩してから寝るよ」

「その前にこつちか向こうで汗だけは流しなさい。いい？」

「了解ですママ」

まったく、これで一応お互いに成人してる男女なんて信じられないわね。私の注意もそうなら、向こうの返しもそうだけど、本当に大人のやり取りじゃないわ。

この後只野は私の作った食事を平らげて満足そうに去って行った。その後片付けをしていると、私の愛しい妹が目を擦りながら起きてくる。

「ねえさん、おはよう……」

「おはようセレナ。ちゃんと顔を洗ってきなさい」

「はい……」

そしてそれと入れ替わるように今や義妹となったエルがやってきた。

「おはようございますマリア姉様」

「おはようエル。顔は洗った？」

「はい。何か手伝う事はありませんか？」

「特にないわ。あつ、自分の分のご飯を茶碗へ注いでくれる？」

「分かりました」

只野のおふぎでエルが始めた姉様呼びだけど、正直何というか悪くないわね。セレナは姉さん呼びをされて嬉しいみたいだし、本当にそこだけは只野の企み通りと言った感じかしら。

それに、心なしかエルも私やセレナを姉として扱う事で日々を楽しんでいるような気がする。考えてみれば本来の世界ではあの子は研究者だ。そこに誰も不満も違和感もなかった。

そう、きつと本人さえも。

でも考えてみればそれは私達も、そしてエルフナイン自身も無意識にそういうフィルターをかけていたのだと今なら分かる。

外見相応の扱いをされ、そうあれるここではエルフナインでさえも子供のように見える。ヴェイグやセレナと遊んだり、只野の持つてる廃棄品を見て質問したりその味に笑ったり驚いたり。

それを見て私もセレナも、そして只野さえも心の栄養をもらえてるのだと分かる。

「……本当に、ここは平和な場所なのね」

振り向けば聞こえる少し離れた洗面所の水音と、視界の隅に映る茶碗にご飯をよそっているエルの姿。それと、きつとヴェイグは居間兼寝室でクッションに座って日の光を浴びて欠伸しているだろう。

つい一か月前なら有り得ない光景が私の日常となつている。それに、ここでは私はただの MARIA・カデンツァ・イヴ。世界を救つた女でもなければ世界の歌姫でもない、ただの女。

そんなもう望んでも手に入らない私でいられる。これは向こうが平和になろうと手に入らない事実。ここは、私をただのやさしい MARIA にしてくれる。

「MARIA 姉様、味噌汁の具は何ですか？」

物思いに耽る私をエルの声が現実へ引き戻す。

「ワカメよ。食べた事はある？」

「はい。サラダに入っていたのなら」

「そう。なら大丈夫ね」

「エル、おはようっ!」

私とエルが話していると顔を洗ったセレナが姿を見せた。あらあら、もうお姉さんモードね。

「おはようございますセレナ姉さん」

「良い匂い。あつ、姉さん。そういえば只野さんは?」

「もう食べて散歩に行ったわ。もしかしたら汗を流しによるかもしれないけどね」

「そっか。ヴェイグさんも?」

「ヴェイグなら居間で日向ぼっこしてるはずよ。ほら、セレナも早くご飯と味噌汁を用意しなさい」

「はい」

セレナは再会してから本当によく笑っている。最初はまだ強がっているのかと思ったけど、そうじゃない。

あの子は、本当にここで強く生きようとしている。いつか来るゲートへの道を切り開ける時を信じて。

それを決意させたのが只野。彼はセレナへ泣いてもいいと言っただけで泣き続けるなども。

彼がセレナへ言った言葉は父性に満ちている言葉だと分かる。寄り添うのではなく相手の自立を願い、助けるものだ。

私が似たような事を言ってもきつと駄目だったと思う。何故ならセレナの悲しみの大本が私にも悲しみとして襲っていたから。

悲しい時は泣いていい。次に泣く時は悲しみじゃなく嬉しさの涙に。それを男性の只野が言うからセレナの胸には響いた気がする。

男が母になれないように女は父になれない。きつと、これはどこでも変わらない真実なんだと思う。

「今日の具は何?」

「ワカメだって姉様は言っていました」

「わかめ? どんなの?」

「海藻の一種のはずです。えっと、たしか」

「エル、解説はいいから食べなさい。セレナもまず食べてみなさい。もし口に合わなかったら私が飲んであげるから」

「はーい」

そう、真面目なこの子達が間延びした返事をするようになっていく。これは本来なら叱るところなんだろうけど、いい意味で気が抜けていると思うとそうしていいものかと思案してしまうのよね。

とにかく今は私も食べましょう。っと、いけない。二人のための玉子焼きを作らないと。

「あれ？ 姉様は食べないんですか？」

「玉子焼きを作るのを忘れてたの。焼き立てを食べてもらいたかったから。二人は先に食べてなさい」

「じゃ、サラダから食べてるね」

「姉様、こつちの人参はなんですか？」

「きんぴらよ。甘辛い味だからご飯が進むと思うわ」

「そうなんだ……あむっ、美味し〜」

「あつ、姉さんズルいです」

「こら、ケンカしないの」

背中から聞こえてくるやり取りに自然と笑みが浮かぶ。チラリと時計を見ればもう七時を過ぎていた。

只野、どつちで汗を流すのかしら？ 最近ほとんどこつちでシャワー借りてるけど、あれって多分こつちは散歩が終わった後は全員起きてるからでしょうね。

向こうは響が絶対寝ているでしょうし、下手をしたらクリスだつて寝ているもの。訓練よりもアルバイトの方が疲れるなんて……分からないでもないけど。

本当に接客って疲れるのよね。それに男ってほとんど言っていない程胸を見るし。分かってはいたけどああまでされるとほん……つきで嫌になるわ。

と、そこで気付いた。只野って、私の胸見ないわね……。女に興味ないのかしら？

もしかして、響達へ手を出さなかったのってそういう事？

「……まさかね」

そう呟きながら私の中でその考えは膨らむばかり。ないとは思う。でも、そうかもしれない。

彼は、異性に興味を抱けないんじゃないかって。

こうやって朝走るのが日課になってもう二週間以上。あたしもすっかりこの生活に慣れてきた。

自分の世界へのゲートが消えた事はショックだったけど、あの子が、セレナがいたから何とか飲み込めた。

寝起きの頭で聞いたのも今思えば良かったのかもしれない。理解するのに時間がかかったしね。

でもあのままあの部屋にいたらヤバいと思って只野と一緒に外へ出た。

で、適当にバイトまで時間を潰そうと思ったけど、翼達が生活してたって言うボロアパートを見てみたくてそのままついて行って、只野の使い古した布団があるのを見て悪いとは思ってたけど利用させてもらう事にした。

只野が目を離れた際にそこへ顔を伏せて泣いたんだ。声を出す事はなかったけど、色んな感情をぶつけるように泣いた。

あいつはあたしが寝てたって思ったみたいだけど、その鈍感さにある時は助けられた。それと、あいつ自身の存在にも。

「あいつが、只野がいる限りあたしらは大丈夫」

噛み締めるように呟く。あいつがいれば、覚えていてくれてれば、あたしの世界は、旦那や子さん達は大丈夫。そう思う事が出来たら、只野には感謝してる。

バイトだってそうだ。店長になろうとしてるみたいだけど、だからってあたしの事を蔑ろにする奴じゃない。むしろ積極的に意見を聞きに来る。主に商品に関して。

まあ夜勤の女なんて珍しい上にあたしみたいな年齢でやる奴はいないもんね。あと、本来は防犯の事もあって店側が難色を示すって聞いた。

「あれ？」

そんな事を思い出していると目の前から歩いてくる見慣れた顔。やれやれ噂をすれば何とやらじゃないけど、考えてるだけでも効果があ
るのかね？

「天羽さん？」

「先輩じゃん。どうしたのさ、こんなところで」

「いや、食後の運動で散歩中。天羽さんはジョギング？」

「そ。何なら一緒にやる？」

「あく……その方がいいかなあ。いや、実はさ、ちよつと前まではあの公園をグルグルウォーキングしてたんだけど、最近景色が変わらない事に飽きちゃってこうしてブラブラしてる感じ」

凄く分かる。だからあたしも走るコースを時々変えてるし。

「ならバイトがあつた日は一緒にやる？ お互い出来る状態にしてあの分かれ道で待ち合わせ」

「いいのか？ 見られたら面倒な事になるかもしれないぞ？」

「いいよ。てか、その時はこう言つてやればいいさ。モーニングを奢ってもらつて条件で付き合ってますって」

「うわっ、妙にリアルな報酬。でも、その理由は使えるな」

言つて只野が笑う。でもその笑顔には以前までの明るさというか活気がない気がした。

「ね、先輩。やっぱ疲れてる？」

「……分かる？」

「あー、うん。仕事中はそうでもないけどね」

こうやつて見ると勤務中はそういうのが出ないようにしてるんだと分かった。つたく、道理で最近オフの時にあたしらと顔を合わせないようにしてるはずだよ。

でも、あまりあたしは大きな声でこいつの事を責められない。週に三日一緒に仕事してて気づかなかつたんだから。

「セレナちゃん達はまだ誤魔化せるんだけど、響達は無理だろうと思つてさ。出来るだけ仕事以外では顔を合わせないようにしてるんだ。自分も疲れてるって分かっているから」

「なら……っ」

シフトを戻してもらえばって、そう言おうと思つて口を閉じた。只野がどんな気持ちでそれを始めたかをあたしは聞いている。こいつは最悪に備えてるんだ。悪意が翼達の世界への行き来を封じた時に。

今はそこの行き来だけは出来ている。だから翼が定期的に報告を兼ねて食料を調達してるけど、正直怖いのは消えない。

実は時間の経過のズレ方が固定されたからだ。こっちで一時間が向こうじゃ一分にさえなつていないみたいなの、そういうので。

今までと違って絶対時間の流れは翼達の世界が遅い。これはマリアがこちらへ来て翼と歌った『不死鳥のフランメ』を上げた後からだ。

只野が言うには、その歌つてのがこっちにあつた『戦姫絶唱シンフォギア』の二期、だっけ。その時の歌だからじゃないかだって。

そんな事を思い出しながら、あたしは目の前の疲れた顔の男に少しでも元氣を出してもらおうと言葉を何とか繋げた。

「あたしが添い寝でもしてやろうか？ 元氣でるだろ？」

今のあたしが出来るのはこうやって茶化してやるぐらいだ。前だったらこう言ったらきつと呆れた感じでふざけ返してきたはずだ。あるいはちよつと真面目に注意とかね。

だって言うのに今のこいつは……

「元氣出過ぎて逆に疲れそうだから遠慮しとくよ」

何でそんな疲れた笑みで返すんだよ。ちよつと前まであたしへふざけてきただろ。いいよ、少しぐらいスケベな事言つてもさ。怒らなからふざけてくれよ。

あー、ダメだ。これ、あたしも結構参る。只野がこんな調子じゃ響じやなくても暗くもなるよ。

「そうかい。ああ、そうだ。響が結構参ってる。あんたと一緒に過ごさせてないって」

「響が？」

意外そうに瞬きする只野を見てあたしは鈍感すぎると思った。

どう見たってあの子があんたの事意識してるのは分かるだろ！
何なら惚れてるよ、あれ！

そう言いたかったけど、さすがにそれは言わずにおいた。これは外野が言う事じゃない。

「難しいかもしれないけど、仕事じゃない時に話をしてやってくれない？ あの明るい奴が暗くなるとこっちまでさ」

「……分かった。何とか時間を作ってみるよ」

「頼むよ。で、どうする？」

「へ？ 何が？」

「こいつは……」。

「ジヨ・ギン・グッ！ あたしと一緒にやるの？ やらないの？」

「ああ、それか。うん、じゃあ天羽さんと一緒にあがった日だけ一緒にやってくれるか？ それなら楽しくやれそうだ」

「ん、約束だからね。細かい事はバイトの時に」

「分かった。じゃあな」

「はいはい」

こうしてあたしは只野と別れて動き出す。少しだけ走って後ろを振り返れば、只野はフラフラとはいかないまでもトボトボに見える感じに歩いていった。

……うん、やつぱり心配だ。仕方ない。あいつを部屋まで送ってやるか。本来なら普通逆だからな？

奏に付き添われマリア達の住む家を目指す仁志。その姿を不気味に見つめる黒いもやのような物があった。

——思ったよりも堪えてない、か。やはりあの男が厄介ね……。

Stand up! Lady!!

「な、何だか久しぶりで緊張します」

そう言っ過ぎてぎこちなく笑う響に俺は申し訳なく思った。

場所はお馴染みと言えばお馴染みの俺の部屋。響にとっては引越以来の来訪となる。

「そうだなあ。ここで響と最初に出会ってもう二か月近くになるし」

「私の感覚だともうちよつと短いですけど、そこまで大差ないですね」
「逆言えば、たったそれだけで変化つてあるもんだよな」

俺の言葉に響も苦笑しながら頷いた。

あの時、俺は週四の夜勤バイトで何となくその日を生きていた。それは響と出会っても変わらず、クリスマスが来ても変わらず、翼が来ても天羽さんが来ても大きく変わる事はなかった。

それがセレナちゃんの来訪で一変した。彼女は帰るべき場所を見失い、姉とも距離を取った。

天羽さんもそうだ。根幹世界以外のゲートが隠され、いつ響達も同じ事になるか分からなくなった。

だから俺は最悪に備える事にしたんだ。装者全員をこの世界で支える事が出来るように。

ホント、人間変わろうと思えば変わるもんだ。

「只野さん、もうすっかり店長って呼ばれますし」

「そうなんだよ。まあ茂部が呼ぶのはいいさ。あいつはそういう奴だし。まさかあの近藤さんまで軽く笑いながら店長って呼んできたからな」

「近藤さん言っていましたよ。最近の只野さん、ちょっとだけカツコ良くなったって」

「それは毎日髭剃ってるからじゃないか？　あるいは髪を結構短く切ったから？」

「両方じゃないですか？　今の只野さんも私、す、好きですよ？」

少し照れくさそうに言う響に俺も若干照れてしまう。そういう意味じゃないと分かっけていてもそうこられると弱いのがDTと言うも

のだ。

「そ、そっか。まあ、弁当屋の頃はこれぐらいにしてたんだ」

「そうなんですか。えっと、どうして?」

「髪の毛が短い方がいい商売だから。もし入っても分かり易いだろう?

俺のか俺以外か」

「ああ……」

納得。そんな顔をする響に小さく微笑む。何というか、懐かしさを感じるな、この時間。

思えば三回目まで俺と響はこんな感じだったっけ。で、あのデートが二人きりだった最後の訳だ。

「さてと、今日来てもらったのは他でもない。響とゆっくり話をしようと思っただけ」

「話を……?」

「うん。翼とは直接話す事は減ったけどスマホのやり取りで意思疎通や意見交換は出来てるし、クリスとは夕勤の事で時々残って話をしてもらってるんだ」

「そういうえばクリスちゃん一人の時は帰りが遅かったような気がする……」

若干響の表情が曇る。ああ、いかんいかん。これじゃ俺が二人だけを特別視してるみたいに思われる。

「響、勘違いしないで欲しいんだ。俺は君とも話をしたくない訳じゃない。でも、響はリーダーとか苦手だろ?」

「それは……はい」

「で、バイト中も常に全力だ。それが響の良いところでもあり時々悪い方へ傾いちゃうけどね」

「あはは……」

「だから響には俺からバイトとして言う事はないんだよ。そのままの君でいて欲しいって思うぐらいだ」

「そのままの……私……」

素直な意見を告げると響が何故か軽く目を見開いた。そんなに驚きかな?

俺としては響のような接客が出来るようになりたいもんだ。夜中に来る人の中にだつて響の事をよく話す人いるぐらいなんだしな。

「明るくて元気で、時々ドジをやっちゃう事もあるけど、俺はそんな響が好きなんだ」

「っ!? そ、そうなんですか……」

好きと言われるだけで真っ赤になつて照れる響。うん、どうやらそういうところはまだ変わらないらしい。

それに安心するような、ちよつと心配なような複雑なおっさん心である。

お願いだから変な男に引つかからないで欲しい。優しい顔で近付いて、信頼させて騙して捨てるなんて男や女は、悲しい事に世の中にそこそこいるのだ。

「さて、何から聞こうかな? じゃ、まずはバイトに関して。何かあるかい?」

「えつと、前まではあつたんですけど今はそんなに」

「え? そうなの?」

「はい。只野さんが店長さんを目指し出して頑張つてるの見て、私も負けてられないなつて思つて」

「あー、うん。響、それは嬉しいけど不平不満は言つてくれ。俺が我慢してるから、苦勞してるから自分もそうしようつてのは違うんだ。ちゃんと言つて欲しい。それを直せるかは分からないけどね」

何というか響つて昔の俺に似てるんだとそこで分かった。

一人でも頑張つたり大変な思いをしてると、自分もこれぐらいつてそう思う性格なんだ。

「え、えつと……いいんですか?」

「勿論。これも店長になるなら避けられない事だ。店を良くしていくにはまずそこで働く人達の協力が必要不可欠だし」

これは俺がこれまで感じてきた事。上が何かあつた時にみんなの待遇や環境を良くしようと動いてくれる人なら下はついてきてくれる。逆になが何があらうと利益優先で自分の事しか考えないと下は確実に離れていく。

下の人達が頑張るには上がその人達のために頑張ってくれ
る人じゃないといけない。俺が長く続けてこれたバイト先はいつも
そうだった。支えたいって、そう思わせる人だった。

俺の言葉を聞いて響はおそろるおそろるんだけどバイトでの不満や愚痴
を言ってくれた。その中には俺が何とか出来ないものもあつたけど、
そこはオーナーや他のバイトの人達と相談するしかない。

それにしても、響は本当に真面目なんだなとよく分かった。真面目
だからこそ気になる事や嫌な事があるのも。

「……うん、ありがとう響。俺で何とか出来る事からまず始めてい
よ。そうじゃないのはもう少し待ってくれ」

「はい」

色々言いたい事を言えたからか響の表情が明るくなっていた。う
ん、まずは第一段階成功、かな？

「えっと次は……」

「あ、あのっ！」

響への次の質問を切り出そうとしたところで彼女が手を上げた。
まるで学校だなどと思いつつ、どうぞと声をかけた。

すると響は何故か言い出しにくそうにモジモジとし始めた。トイ
レ、なはずはないか。じゃあ……何だ？

「どうかした？ 言い辛い事なら無理しなくても」

「い、いえ。あの、えっと、その……」

何だろうか。響が俯いてしまった。そのまま俺は彼女が話し出す
まで気長に待つ事に。

でも本気で察しが見つからない。言い出しにくい事で響が俺へ言いた
い事や聞きたい事？

……………あつ。

「あの、さ。それってもしかしてエロい事、だつたり？」

「っ?!」

ビンゴ。忘れてたけど、そういう俺は翼とクリスにはエロ動画を見
てた事を知られてるんだつた。で、おそらく響もだろうと思つてたけ
ど、当たりのようだ。

「その、ごめんな。気持ち悪いだろうけど、それが男だと思って大目に見て欲しい」

「い、いえっ！ えっと、私が言いたいのはそれじゃないんだけどそれに関係してるって言うか何て言うか……」

はて？ どうやら見損なったとかでは無いらしい。じゃ、一体何を言い辛そうにしているのだろうか？

そう思っただけだと響は勢い良く顔を上げた。

「だ、只野さん！ そういう事は彼女さんを作った方がいいですよっ！」

「……………あ、はい」

「軽いっ!？」

まさかの意見具申だった。いや、うん。響の言う通りだとは思っけど、今の俺に彼女など望めるはずもないと分かってるんだろうか、この子は。

まず今の俺はこの世界で唯一の装者達の支援者。もしそんな俺に彼女が出来たとして、彼女達の事をどう説明する？

次に、説明したとして納得してくれるだろうか。こう言っただけで装者の子達は皆美女美少女である。いくら俺がその彼女を愛していると言ったところで、そんな女性達と親しくし親身になって接していい気分ではられないはずはない。

まあ、そもそも俺に彼女となってくれそうな知り合いもいなければ、いたところで口説けるとも思えないワケだが。

「えっと、響の気持ちは分かるし嬉しいよ。そこまで俺の事を考えてくれてるんだって」

「え、えっと……………」

「でもな、現状俺が彼女なんて作れるはずもないし、もし仮に、何らかの奇跡が起きて、神の力以上の神秘的なモノが作用して作れたとしても」

「すっごく可能性が薄い前提だっ!？」

「だとしても、俺は悪いけど今は彼女なんて存在へ注げる余力はないよ。今は自分と響達の事だけで精一杯だ」

紛れもない本音を告げる。今の俺には彼女なんてものへ割けるだけの余力はない。

そう考えるとそういう相手がいなくて良かった。いたら確実別れてただろうし。

「自分と私達の事で、精一杯、ですか？」

「ああ」

「そ、そっかあ」

安心したのか響があからさまにホツとしていた。そんなに俺が彼女出来そうに見えるんだろうか？

……まあクリスはある事を言ってくれたから、こっちが拝み倒せばワンチャン付き合ってくれそうではあるけど。

「あ、あのお」

「ん？」

そんな事を考えていると響が赤い顔で上目遣いをしてきた。可愛いな、ホントに。

「た、只野さんって、今も私の事、可愛いって、そう思ってくれてますか？」

「それは勿論」

迷うまでもない。即答出来る。

「な、なら、デート、しませんか？ あの時出来なかった、お家デート」

まさかの申し出が来た。そういうえばあの時は帰ってきたらクリスがいて強制的にお開きになったもんなあ。

でも、正直あれで十分だと思っただけ？ というか、今思えばあそこから先が出来たら色々不味かった気がする。

「だ、ダメですか？」

だけど、折角響がこう言ってくれた訳だし、天羽さんからも落ち込んでるみたいだから何とかしてやっつてと言われたし……。

「分かった。じゃ、色々話そう。あの時出来なかった事を」

「はいっ！」

二人で畳んだ布団を座布団代わりにして話を始める。話題は響の希望で俺が好きなものについて。

だからとことん話した。好きな特撮、アニメ、漫画、ゲーム。俺の根底にあるものをこれでもかかってぐらいい。

でもシンフォギアに関しては一切触れないようにした。きっと響もそこは聞きたくないと思っただから。

そうやって俺が話して一息つくともうとつくとくに昼を過ぎていた。まだ話し足りないけど、腹も減ってきたし眠くもなってきた。

「只野さん、どうしますか？ もうこんな時間ですけど……」

「……眠いけど空腹じゃ寝れないから弁当を買いに行こう」

「お弁当？ あっ、マリアさんが働いてるところですねっ！」

無言で頷いて立ち上がる。財布と真新しいスマホを持って振り向いた。

「行こうか。でも、こんな時間に食べて平気？」

現在午後一時四十分を過ぎた辺り。昼と言うには少し遅く晩と言うにはあまりにも早い。

「大丈夫です！ 私、食欲旺盛ですから！」

「ああ、そうだね。好きなものはごはん&ごはんだった」

「あ、あはは……只野さんに言われるとちよくつとだけ恥ずかしいなあ」

「体重も今の俺ならもしかして教えてもらえたり？」

「そ、それは……だ、ダメです！ やっぱりダメっ！」

「それは残念。まだまだ仲良くならないとダメか」

そんな会話をしながら揃って玄関を出る。ただ、響が何かブツブツ言っていたのが気になった。

そういう事じゃないとか、男の人に体重なんてそもそもとか、そんな感じの。

そんな呟きを聞きながらドアの鍵を閉めて、自然な感じで響の手を握ると弾かれたみたいに関がこっちへ顔を向けてきた。

「た、只野さん？」

「ん？ ああ、ごめんごめん。あの時と同じ感覚でいたよ」

俺の人生初デート。響から言われて手を繋いだ時の事を思い出して、勝手に手を繋いだ。

道理で驚く訳だ。駄目だな。眠気でちよつと理性や自制心とかが緩くなってるかもしれない。

「あの時と……。じゃ、じゃあいいです。早く行きましょう！」

「え？ いいの？」

「はいっ！」

そう返す響は初めて見るぐらいの笑顔だ。そんなに嬉しいのか？

ああ、そっか。久しぶりにあの店の弁当を食べるからだろうか。

こうして俺は鼻歌混じりで歩き出す響と手を繋いでかつての職場である弁当屋へと向かう。

それにしても、響のこの鼻歌って……ティガのOPか？ たしかに

渡したベストの中にウルトラマンのもあったけど、それで覚えたの？

「なあ響、それってティガ？」

「はい。ウルトラマンの歌って元気になれるのばかりで、私大好きなんです」

まるで向日葵のような笑顔を向けてそう言ってくれた響は、俺にとっては理想の彼女である。

「そっか。じゃ、その二番とか好きだろ？」

「はいっ！ 僕らが出来る事を続けていくとか、優しくなればいいとか、本当にあつたかくなる歌ですよね」

「平成ウルトラマンはそういう傾向強いからなあ。俺はガイアとか好きなんだ」

「ああっ！ ギリギリまで頑張る歌！」

「そうそう」

あー、何て幸せなんだろう。可愛い女の子と手を繋いで特撮ソングを話題に盛り上がられて、日の光はあつたかいし、風は心地いいし、本当に最高の休みだ。

「ピンチの、ピンチの、ピンチの連続！ そんな時〜」

更には二人で「ウルトラマンガイア！」を歌えるとか、何これ俺死ぬの？

でも手から伝わる温もりが俺に生きろと言ってくれている気がする。隣から聞こえる可愛い歌声が俺に死ぬなど言っている。

「ウルトラマンがつ！ 欲しい〜」

隣へ顔を向ければこっちを見ていたようで目が合った。少しお互いに驚くけど、すぐに笑みを見せ合って声を重ねる。

「ウルトラマンガイア〜」

俺にとつてのウルトラマンは君かもしれないな。なんて言ったら、君はどんな顔をするんだろうな、響。

「すみませーん」

「はい」

お昼のピークを過ぎてもう少しで食事休憩つて言う落ち着ける時間になると思ったら、そういう時こそお客さんはやってくるものなのね。

陽子さんはもう休憩の準備に二階へ行ってるので代わりに私が応対しないと。そう思つて受付へ行けば、そこには見知った顔が二つ。

「只野と響じゃない。どうしたの？」

「飯を買いに来た」

「はいっ！」

「まあそれしかないでしょうね。じゃ、ご注文は？」

「えっと、只野さんスペシャルつて出来ます？」

「はい？」

理解不能な事を言われた。何よ只野スペシャルつて。聞いた事ないんだけど……？

「響、あれは陽子さんしか通じないから」

「そうなんですか。残念……」

「えっと、どういう事？」

「この時間だと陽子さんは二階？」

「ええ」

「ならこの話はまた今夜にでもするよ。もしくは後で陽子さんに聞いてくれ。で、俺はのり弁大盛り」

「はいはいのり弁大盛りね。響は？」

「同じのでー」

「のり弁大盛り二つね。560円よ」

よく分からないけど、どうやら元従業員ならではのサービス弁当つてところかしら？

陽子さんも教えてくれなかったところを見るに、個人的に只野へやってあげてるって事ね。

「じゃ、これで」

「はい、1000円お預かりするわ。……440円のお返し」

「どうも」

「じゃあ、少し待ってて」

裏へ引つ込みながら考える。只野と響、どうして手を繋いでいるの？ 彼、異性に興味が無いわけじゃない？

いや、でも只野からはデートとか付き合ってるみたいな雰囲気はないわね。動揺もしていないし、そもそももしそういう関係ならここへ二人で来るはずないもの。

……要するにあれば只野にとっては妹といえるようなものなんだわ。じゃないとデートでお弁当はない。

「だからあの子も嬉しそうなのね」

白身フライを二つフライヤーへ入れて、更に別のフライヤーへちくわの磯部揚げを二つ入れると同時にタイマー作動。

揚がるまでの間に大盛り用の容器を手に取り、御釜の蓋を開けてご飯をよそっていく。

最初は計りを使っていたけどもう感覚で大盛りの感じは覚えたわ！

二つの大盛りご飯をよそってそこへ昆布の佃煮を散らす。そこに海苔を乗せてバランを敷いてつと。

「沢庵を二切れ乗せて残るは……」

タイマーへ目を向ければもう磯部揚げはOKだ。そちらのフライヤーを上げて油を切るために網の上へ。

「後は白身フライね」

タイマーが鳴った瞬間、フライヤーを上げてフライを網へ。

「これで……よっ」

のり弁当大盛り二つの完成ね！ それに蓋をし、輪ゴムで止めて二膳の箸と共に袋へ入れる。

「はい、お待ちどうさま」

「わあ！ はやーい！」

「ありがとイヴさん。じゃ、仕事頑張つて」

「ええ。ああ、そうだ。只野？ ちゃんと栄養を考えなさいよ？ 何なら野菜ジュースあるけど……どう？」

「遠慮しとくよ。それに売り物だろ、それ」

「セットで付けてあげましょうか？」

「キツチリ金を取るんだろ？」

「当然じゃない」

「うわあ、綺麗だけどむかつく笑顔だ。響、さっさと帰って食事にしよう」

「あつ、はい！ また来ますねマリアさん！」

「嬉しいけど時々でいいわ。可能な限り自炊しなさい」

こつちへ手を振りながら去っていく響とそんなあの子を微笑ましく見つめる只野を見送り、私はカウンターへ突っ伏すように遠くなくていく二つの背中を見つめた。

「……兄妹みたいよねえ」

とてもじゃないけど男女には見えない。兄大好きな妹とそんな妹を優しく見守る兄だわ、あれ。

繋いでる手もそう思うと微笑ましい。あれが指を絡めていたら話は変わってくるんだろうけど……。

「只野は女性に興味なさそうなものね……」

「私はそんな事ないと思うけど？」

「っ?! よ、陽子さん!？」

気付いたら後ろに陽子さんが立っていた。しかも私の事を見てニヤニヤと笑っている。

「何だい、マリアちゃんは仁志君の事が気になるの？ おばちゃんが取り持ってあげようか？」

「ち、違います。たしかに彼には世話になってますけど、恋愛感情なん

「一ミリもありませんから！」

「そう？　じゃあどうして仁志君が女に興味ないとか気にするんだい？」

これはどう答えてもからかわれるパターンだわ。そう瞬時に理解して何とか話題を変える方向で考える。

でも生半可な話題では潰される。ここは潰されず陽子さんも答えなくてはいけないものをぶつけないと……そうだっ！

「あのっ、そういえばさつき只野が特別メニューがあるって」

「ああ、あの子のいつものか。ごめんねえ。マリアちゃんが仁志君の事を好きだって知ってれば教えておいたんだけど」

ああもうっ！　結局駄目だった！　むしろ余計勘違いさせた気がする！

そこですぐ二時になったので一旦お店を閉めて、私は陽子さんと二階へ上がる。

遅めの食事を食べながら陽子さんは昔話を始めた。只野に関する昔話を。

最初はこの客の一人だった只野は、陽子さんが言うにはバイト休みの日は毎回昼と夜にきてのり弁当大盛りを買っていったらしい。

で、そうやって常連になっていくと陽子さんも顔を覚えて話しかけるようになった。只野の方も最初こそあまり会話に乗り気ではなかったらしいけど、段々口数が増えていったみたい。

その店員と客の関係性が変わったのは今から五年前。陽子さんが怪我をして店をしばらく閉めた後。

久しぶりに店を開けた日の夜、閉店近くで只野がやってきたけどどこか雰囲気がい暗い事に気付いた陽子さんは店を閉めて彼を店の中へ入れたそう。

——どうしたの？　何かあったの？

——……ここってバイトとか募集してませんか？

どうも当時勤めていたバイト先で揉め事が起きたらしく、只野はそれでも生活のために続けていたけど限界が来たらしくて、それで陽子さんを頼ったそうだ。

「うちは私一人でやってるから人手はいらないだけだよ。あの時の仁志君を見てたら放っておけなくてね」

「雇ったんですか？」

「時給は最低も最低。ただ、お昼と晩ご飯はタダって条件でね」

苦笑する陽子さんを見て私は思い出す。ここへ只野が私を連れて来た時の事を。

——いいの？　うちは知ってると思うけど稼ぎには向かないよ？

——それでもいいんです。イヴさんはすぐにでも働けないと厳しいもんで。なのでお願いしますっ！

アルバイト募集の張り紙なんてないので、不思議には思ってた。その謎がやっと解けた。そもそもここはアルバイトを必要としてないんだって。

「マリアちゃんを連れて来た時、あの時の仁志君を思い出したんだよ。何か訳ありで、もう頼るものがないって言う感じの、そんな目を」

「そうだったんですか」

只野の特別弁当は陽子さんなりの愛情って事ね。それで全て納得出来た。

これ、日数や勤務時間を増やしたいって言える感じじゃないわ。どうしようかしら？

「さて、おばちゃんの話は終わり。次はマリアちゃんだよ」

「え？」

「話せる範囲で話してごらん。どこで仁志君と知り合ったの？　コン

ビニ？　まさか出会い系とかじゃないよね？」

「え、えつと……彼と出会ったのは知人からの紹介なんです」

「知人？」

「翼って言う日本人で、ネット上なんですけど私と時々一緒に歌を唄ったりする仲なんです。で、こっちに来た時に直接会う事が出来て……」

私の設定は只野が考えたものだ。彼曰く上手い嘘の吐き方は事実の中に嘘を混ぜる事。

陽子さんも私の話を疑う事なく信じてくれた。まあ只野といきな

り知り合うよりも知人を介してって方が信憑性あるものね。

「……仁志君は相変わらずお人よしだね。それで損する事もあるって知ってるのに」

「え？」

話し終わった時、陽子さんがどこか苦笑しながらそう呟いた。

「どういう事？ 相変わらずって事は前からお人よし？ まあそこは疑ってないけど……損する事もあるって、何があったの？」

私の視線でそんな気持ちを察したのか、陽子さんが困ったように頬を掻いて息を吐いた。

「これ、仁志君には内緒だよ？ 彼ね、ここに来る前のバイト辞める事になった理由は同僚のために職場の上司にたてついたんだって」

「……それでクビ？」

「今のご時世そんなんでもクビには出来ないよ。だからこそ余計辛い事になったみたい」

そこから陽子さんは何も言わなかった。食事の後片付けを始めたので私もそれを手伝う。

その間も何も言わず、陽子さんはただ黙って洗い物をしていった。ただ一言私にこう呟いて。

——出来れば仁志君と仲良くしてやって。

その言葉に込められた願いにも似たものを感じて、私が出来たのは無言で頷く事だけだった……。

「あー、食べた」

満足そうにお腹を擦る只野さん。何だかおじさんって感じがするけど、どこか私はそれが嬉しく思えちゃう。

「とっっても美味しかったです！」

「なく」

たったこれだけのやり取りでも幸せになれる。何だろう？ 今日の日時間だけで今までの分以上に只野さんエネルギー補充完了って感じがする。

「でも、何かごめんな。もうテーブルさえないから」

「いえいえ、何て言うかこれはこれで楽しかったですから」

敷かれたペラペラのお布団を座布団にして、二人で隣り合って割り箸とお弁当を持って食べる。お茶が欲しい時はお弁当を置いて紙コップへ手を伸ばす。

まるで引越してきたばかりみたい。あるいは引越し直前みたいな感じ。だからかな。さつきからワクワクが止まらない。

「何だか物が無さ過ぎて夜逃げ前みたいだなあ」

「え〜っ？そこは引越し前とか引越し後とかにしましょうよお」

只野さんの表現に思わず口が尖る。折角同じ事思ったのになって嬉しくなったのに最後で台無しにされた。

「まあ実際引越し前みたいなものなもんだよなあ」

「あ〜……」

そうだった。実際今頃は只野さんもあの部屋で私達と暮らしてたはずだったんだ。

そういう意味じゃここは引越し前であり引越し後でもある。

テーブルは私達の暮らす部屋にあるし、座布団とかもそうだ。何だか私が来た時よりも物が無いから不思議な感じ。

「只野さん、やっぱり引越しはしないんですか？」

「うん。ここが取り壊しか立ち退きになるまで住む事になる、のかな？」

「意外とすぐなったりして」

「否定し切れないのが怖いんだよなあ」

「いつそうなるんですかね？」

「いつだと思う？」

私達がいなくなった後、なんて事は言いたくないし言う気もない。

「せめて来年にして欲しいですよね」

「そうだなあ……」

「いつそ私達の暮らしてる部屋に来ませんか？」

いなくなった後に、なんて言わない。

「さすがに現状を考えると片道二十分は辛いなあ」

軽く笑いながら只野さんが答える。その笑顔がどこか元気がないように見えた。

「でもシャワーはいつでも浴びれますよ?」

「元々二日や三日に一回で良かったからなあ」

「店長さんがそんな不潔じゃ駄目です」

「そう言われると弱いんだよ。実際今も毎日シャワーをイヴさんのところで借りてるからね」

ズキッと胸が痛む。分かっている。マリアさん達の方が近い事は。

でも、それでも、ちよつと前までは私達の部屋へ来てくれたのに……。

——みんなが私から只野さんを奪っていく……。

何か、一瞬間の中に声が過ぎった。私のように私じゃない、と思いたい声が。

それを無視して私は只野さんへ話しかける。

「じゃ、どうです?」

「そうだなあ。この事が解決出来たらそうしようかな?」

また胸が痛む。解決出来た後でも、私はここに来れるのかな? 只

野さんとうちやうって話せるのかな?

私が大人になっても、只野さんと二人でお話しとか出来るかな?

——いつそこで暮らせばいい……。

まただ。また、私の中に声が聞こえる。ここで暮らすって、未来を、お父さんやお母さん達を捨てるって事だよな? そんなの駄目。だってそんな事したら……。

——でも、このままじゃ只野さんが誰かと付き合っちゃうかも……。

誰かって……誰? 只野さんは今は彼女なんて作る余裕がないって言ったし、そんな相手いないもん。

「……解決したら、ですか?」

「そうだね」

どうして、どうして私の事を見てくれないんですか、只野さん。

さつきまでちゃんと私を見ててくれたのに。ちゃんと目を見てく

れたのに。今は顔を向けてくれないのは、どうしてですか？

——只野さんは奏さんやマリアさんみたいな大人の女性が好きなんだ。だから奏さんとは一緒にバイトして、マリアさんとはご飯を食べるんだ。

違う。そんな事ない。でも、どうして？ 何で私はその言葉を否定出来ないんだろう。

「只野さんは、解決して私と会えなくなるってなったらどうしますか？」

お願い只野さん。私の事を見てください。それでこの嫌な気持ちを消して。

「それは……ん？」

只野さんがやっと私を見てくれた。するとその只野さんの顔が不思議そうな顔になっていく。

そして只野さんが私の顔へ手を伸ばしてきた。その顔を困ったものに変えながら。

「悲しくなるぐらいならそんな事聞かないでくれよ……」

「え……？」

「涙、流れてるって。……ほら」

言いながら只野さんの指が優しく私の目元を拭って、その濡れた部分を見せてから小さく笑った。

その時、私は思い出したんだ。あの時の、きっと私が只野さんを強く意識した事に繋がる思い出を。

——立花さん、クリームが口の端についでる。

——え？ どこですか？

——じつとして。……取れたよ。

あの時の優しい表情と今の表情が重なる。胸の歌が騒ぎ出す。心が叫ぶ。

何で気付かなかったんだろう！ どうして分からなかったんだろう！

私……私……っ！

私っ！ この人に恋してるんだっ！

そう思った瞬間、さっきまで私の中に渦巻いてたもやもやしたものが吹き飛んだ気がした。

「響？ おーい、どうした？」

そんな私の事を不思議そうに見つめる只野さん。

……何だろう。さっきまでは平気だったのにもう見つめられてるだけで恥ずかしい。

だからちよつとだけ目を逸らして頬を掻く。だけど、顔は逸らしたくない。ううん、逸らさない。逸らすはずない。

「えっと、一っだけお願いが出来まして」

「お願い？」

「はい。えっと、そんなに難しい事じゃないんです」

心臓が煩いぐらい鳴ってて、顔が燃えるように熱い。だけど、うん、大丈夫。

あの魔法の言葉は必要ない。

今の私は言葉にする事を迷わない勇氣があるから。

「これから……」

只野さんの目をちゃんと見つめる。私の事を不思議そうに見つめる優しい目がそこにはある。

「これから？」

「只野さんの事を……」

そう言った瞬間、只野さんの顔が安心するみたいな表情へ変わった。私のお願いがお金を使うものとか何かするような事じゃないって分かったからだろうな。

「俺の事を？ 何？」

一回深呼吸する。きっとこれはある意味で未来へ伝えた言葉よりも大変だから。

「ひ、仁志さんって、そう呼んでもいいですか？」

言えたっ！

「……………え？」

なのにこの人はあ……。

「だからっ！ 名前で呼んでもいいですか！」

「……俺を？」

「以外に誰がいるんですか！」

仁志さんって本当に鈍い。鈍いにも程があるよっ！

「えっと、何で？」

「理由必要ですか!？」

「いや、周囲に聞かれたら答ええないといけないし……」

むくっ、ここまで来ても分かってくれないの？ 私って女の子としてアピール間違ってるのかな？

つと、そこで閃いた。じゃ、いつそ仁志さんが説明しなくてもいいようにしようって。

「じゃ、二人きりの時だけ呼びます。それならいいですか？」

なのに仁志さんの答えはない。何だか難しい顔してる。

も、もしかして嫌なのかな？ 私に名前で呼ばれるの、嫌だったらどうしよう？

「……彼氏が出来た時の練習、って事？」

と思つたらまさかの返事がきた。ううっ、伝わり切つてない。

でも、ここで違うつて言つたら多分仁志さんは駄目つて言う気がする。そうなる私だけの特別がなくなるし……仕方ない。

「……そういう事です」

「ええ……何で不機嫌なの……」

ふーんだ。折角頑張つて女の子が迫つたのにそんな鈍感さんにはこうです。

でも、これで私だけの特別が出来た。

なので意を決して呼んでみる事に。

「あ、あのっ、仁志さんっ！」

「……何？」

「むくっ、反応が普通過ぎませんか？ もう少し照れるとか恥ずかしがるとか」

「あのな？ こう見えても必死にそれを抑えてるの。というか、良い歳して彼女出来た事ない男をからかうんじゃないっての」

「いいじゃないですか。ここで慣れておけば後々役立つかもしれませ

んよっ。」

「何に役立つって言うんだよ……。ああっ、真面目で優しい響が急に小悪魔系女子高生に変わってしまった……」

からかうように笑うと仁志さんがそう言って俯いた。何だかそれが可愛く見えて、私はちよつとだけ距離を詰めて座り直す。

ちよつと肩が触れ合うぐらい。こんな距離で男の人といえるの、初めてドキドキする。

「ひ、仁志さん、私の事も名前でも呼んでみてくれませんか？」

「いつもみたいに響って？」

「はい。でもいつもとは違う感じがいいです」

ちよつと強めに言った。で、出来る事ならもう少し優しい感じと呼んで欲しいなあ。

「えつと……響〜？」

何だかペットや子供を呼ぶ感じ。そういうのじゃヤダ。

「も、もう少し彼氏みたいに出来ませんか？」

「いや無理言うなって。経験ないんだからさ」

「そこはほら、想像やイメージで」

「同じ意味だぞそれ。うくん……彼氏っぽい言い方、なあ」

腕を組んで考え込む仁志さんの顔を私はドキドキしながら覗き込む。あ、目が合った。で、逸らされた。そして顔が少しだけ赤くなる。

……私も顔が熱いや。

「……響」

「っ!？」

ちよつとぶつきらぼうだけど、照れてる感じの声。うわっ、どうしよう？ 顔が一気に赤くなっていくのが分かる。

「これでいいか？」

「……も、もう一回。今度はこっち見て言って欲しいです」

そうお願いすると仁志さんが息を呑んだ。だ、ダメかな？

「み、見て言うのはさすがに恥ずかしいな」

「い、一度だけ。一度だけでいいですから」

「いや、でもなあ……それにそろそろ眠くなってきたし……」

渋る仁志さんを見て、このままじゃこの時間が終わっちゃうと思っ
た。だから思い切って仁志さんの腕に抱き着いてみた。

「っ?! ひ、響!」

「よ、呼んでくれないとこうですよ? こ、このまま呼んでくれるまで
くつついちゃいますからね? 寝かせませんからね?」

「い、いやいや、こんな事されたら名前呼ぶとか寝るとかじゃないって
! まず俺の理性とか色々どうにかなりそうだからっ! 離れてく
れっっっ!」

仁志さんが凄く焦ってる。でも、嫌そうには見えない。

は、早く言つて欲しい。じゃないと私の方が先にどうにかなりそう
だよお!

「……………ん? 今何時だ?」

そう呟いても何の反応も返ってこない。寝転んだまま視線を動か
せば寝室にもダイニングにも誰もいない。

「翼? クリス? 響?」

同居人の名前を呼んでも反応なし。これは、あれか。全員外出中つ
てやつだ。

仕方なく起き上がってフラフラとテーブルの上へ目を向ける。

「……………そういう事ね」

そこには翼の字で置手紙があった。響は只野から呼び出しを受け、
翼はクリスと一緒に本部へ行って食料を調達してくるって内容の。

つまり今あたしは一人つきり。この気怠い体でうだうだするしか
ないわけだ。

時計を見れば午後二時を少し過ぎたぐらい。寝直すにも微妙な時
間だね。

「……………どうするかな?」

幸い鍵は置いてある。あたしが外出しても問題ない訳だ。ただ、響
がいつ帰ってくるか分からないんだよねえ。

今日はバイトがあるから最低でも五時には帰ってくるだろうけど
……………さて。

「シャワーでも浴びるか」

思い立ったが吉日。あたしはさっさと寝室へ移動し上着の替えと下着を手にシャワーへと向かう。

寝汗で濡れたシャツを脱ぎ、洗濯かごへポイッと投げると見事に入った。我ながら惚れ惚れするね。

「……余分な肉、付いてないよな？」

そっとお腹周りの肉を摘んでみる。掴めない訳じゃないけど掴み易くはない。うん、大丈夫。

「太ったらあいつに笑われるしなあ」

言いながら想像してみる。あたしが分かり易く太ったとして、只野は何て言うかって。

——あ、天羽さん、そのさ……。

——何さ先輩。言いたい事あるならはつきり言っていから。

——じゃあ遠慮なく。太った？

あつ、何だろイラつときた。何となくだけど只野ってこういう時気を遣えない気がする。

もしくはあたしに對してか？ 最近バイト中も天羽さんって呼んではいるけど口調砕けるもんな、あいつ。

「やっぱ一緒に走るようになったのが大きいのかね？」

つい三日前ぐらいから始まったバイト終わりのジョギング。それを考えてお互いバイトにタオルを持参して、勤務終わりに紙パックの安いお茶とかを買ってそっから走る。

二人で走ると不思議ともう見慣れてた場所も違って見える感じがして、多分あれは只野と走ってるからだと思う。

話も動画の事、バイトの事、聞いているCDの事、それに付随しての作品の事とか話題に困らないし。

「ささやかに生きているものがくつと」

好きな歌のフレーズを口ずさみながらシャワーを出す。気付いたらこうやって歌ってるんだよな、あたし。

ホント只野の好きなものの影響力は凄い。気付いたらあたしや響は染められてる。

ま、クリスや翼もそれなりに染まってはいるのはマリアの歓迎会で分かったしね。

ここで流してる歌ばかりだったもんなあ。見事に只野の好きな歌ばかりだ。

でもあたしは他の歌だって覚え始めてる。店で流れてる歌とかで、だけど。

意外だったのはヴェイグがあたしの歌ったやつへ一緒に歌ってきた事か。

“大声で歌えば”なんて一体どこで覚えたんだ？　もしかしてここにいた僅かな期間で覚えたのかね？

そんな事を思い出しながらあたしはぎっと汗を流した。

「ん〜……」

ドライヤーで髪を乾かしながらこの後をどうするか考える。

正直部屋に一人だとする事がCDを聞くぐらいしかない。かと言って出かけるのも行くあてが……あつ。

「あいつの部屋に行くか。響もいるだろうし、もし帰る途中ならすれ違うだろうから鍵を渡せばいいしね」

そうと決まればさっさと行こう。つと、そこで思い出した。

「……さすがに寝る時の格好に近いのは不味いか」

シャツにハーフパンツだもんね。これで外を歩け……なくはないけど只野に会うのは恥ずかしいかな。

なのでジーパンに履き替えて鍵を持って部屋を出る。少しだけ弱くなってる陽射しを浴びながら鍵を閉めて階段を下りる。

時折吹き抜ける風は心地良い。この時間のジョギングも悪くないかも。もう少ししたら夕暮れだし、夕日の中で走るってのもいいな。

あまり出歩かない時間に歩き慣れてきた道を歩く。それだけで見える顔が違うもんだ。

只野と分かれる道へ来てそこで曲がる。そこの道はまだ数える程しか歩いてない。だからか何だか新鮮な感じがまだしてる。

と、見えてくる木造のアパート。完全に昭和って頃の作りだよ、あれ。

「相変わらずボロいよね……」

いつ取り壊しになってもおかしくない外観の二階建て。だけど、何て言うんだろうね。味わいみたいのはある。ま、住みたいとは思わないけど。

ん？ 何か今アパートの上のところに黒い煙みたいなのが流れた気がする。何か燃やしてるのかな……？

「……あれ？ 見間違い？」

瞬きしたらもう消えていた。あたし、まだ疲れてるのかな、やっぱ。そんな風に思いながらあたしはアパートへと到着し、一階の一番奥のドアの前へと向かう。

部屋の前に立つと、そこにはいかにも古そうな木で出来たドアがある。さてと、いるとは思うけど……どうだろうね？

「先ばーい、いる〜？」

ノックしながら声をかけたその瞬間、中からドタンと音がした。慌てて転びでもしたかな？

「先輩？ 大丈夫？」

再びノックしながら声をかける。すると鍵が開く音がしたのでドアから離れるとゆっくりとドアが開いていく。

「先輩、遅いつて……」

開いていくドアにあたしはそう声をかけて、見えた景色に首を傾げる事となる。

「や、やあ天羽さん……」

何故だか気まずそうな只野の後ろに途轍もなく恥ずかしそうな響が見えたからだ。

でも明らかにあたしを軽く恨むような、そんな顔してるけど……何で？

何だか不味い時に来たのかな、あたし。

「な、何か用？」

「え？ あ、ああ……その、部屋にいても暇だったから……さ」

あたしの言葉を聞いて響の顔がどんどん拗ねていくんだけど、どういう事だいこれは。

「そ、そっか。えつと……」

そこで只野が一度だけ後ろを振り返った。で、響を多分見たんだと思う。だって響が拗ねた顔のまま只野へそっぽ向いたし。

「……とりあえず上がって」

「う、うん。邪魔するよ……」

正直帰りたいけどここで帰ったら余計響を不機嫌にしそうで、あたしは結局只野の部屋へ上がる事になった。

……大人しく部屋でCDでも聞いてれば良かったかな、こうなるとさ。

(き、気まずい……)

仁志は室内に流れる言い様の無い空気に言葉を紡ぐ事が出来なかった。

奏が室内に上がってから今まで会話が一言もないのだ。

勿論奏と響の間で挨拶だけは交わされている。

——えつと、まだ話してたんだね。

——……はい。

これだけである。その時の響が仁志には平行世界の響に一瞬ではあるが重なつたぐらい、響の機嫌はナナメであった。

それも当然だ。何せ仁志への恋心を自覚し、一気に二人きりの時限定であるが彼を名前で呼んでいいとなったのだから。

更に距離を縮めようと一気呵成に攻めて攻め切れそうなところで邪魔が入ったのである。それも、理由がただ退屈だったからという、そんな理由で。

(もうちよつと、もうちよつとでキス、出来たかもしれないのに……)

そう、実は奏がノックする少し前、恥ずかしさと緊張のあまり響が何を思ったのか、仁志の反応を引き出そうと彼の腕を引っ張り自分が押し倒される形となったのだ。

当然顔がこの上なく近付き、少しだけ見つめ合った後、響は思い切って目を閉じたのである。その事を受けて仁志は逡巡していたと

ころでのノックと呼びかけだったと言う訳だ。

ちなみにドタンと言う音の正体は、突然のノックと声に慌てた仁志が足をもつれさせて倒れ込んだ音である。

(な、何だよこの空気。重苦しいってもんじゃないね)

奏は奏で自分が間の悪い時に来たという事は察していた。それに、そもそも響と話すように仁志へ言ったのは彼女なのである。

まあ、まさか響がもう少しで仁志へキスをさせていたかもしれないとは夢にも思っていないが、何かあった事だけはヒシヒシと感じ取っていた。

「そ、そういうえば響と話をするように言ってくれたのは天羽さんなんだ」

「……そうなんですか?」

この空気を変えようと考えた仁志は、響の奏への不満のようなものを無くす方向から動き出した。

奏も響の反応が少し良くなった事を感じ取り、ここを逃さぬように会話へ参加するように口を開く。

「そうなんだよ。ほら、最近只野と話せてないって言ってたからさ」

「俺もそう言われて何とか響と話をしようと思ったんだ」

「そうなんだ……」

自分が仁志への想いを自覚出来た切っ掛けが奏発信だったと、そう知って響はやっと冷静になる事が出来た。

そうなれば急に自分の行動が恥ずかしくなってくるのが人と言うもの。響も例に漏れず、やや赤面して俯き気味になったのだ。

「あ、あの、そうとは知らず申し訳ありません……」

「あははっ、いいよいよ。何かあたしが不味いタイミングで来たんだろ?」

「っ!?!」

奏の言葉に揃って顔を赤くする仁志と響。それを見て奏は笑みを浮かべつつ、微かな寂しさや切なさのようなものを覚えていた。

(何だろうね。少し前なら何も思わず笑えたはずなのに……)

響が明るさを取り戻した事は嬉しいし、仁志もどこか元気になった

ような気がするのも喜ばしい。

なのに何故か自分の心は素直にそれを感じてくれない。それに奏は違和感のようなものを感じて少し苦い笑みを浮かべていた。

それでも空気が良くなってきたのは間違いなく、仁志はここを逃してはいけなと思うて話題を変える事にする。

「そういや、俺ってみんなに歌は聞かせた事はあるけど肝心の作品そのものって見せた事ないよな？」

「そうだね……」

「はい、歌とかお話は只野さんから聞いた事はありますけど……」

そう聞いた仁志はならと立ち上がり、ほとんど使っていない押入れを開ける。

そこには実家から持ってきた数少ない荷物が入っており、その一つであるDVDが入ったクリアボックスを抱えて二人の目の前へ置いた。

そこから一枚のDVDを取り出し、彼は少し凛々しい表情で二人へ見せる。

「じゃあこれを是非、見てもらいたい」

「これって……」

「仮面ライダークウガ。平成ライダーシリーズ一作目。俺の母さんまでもハマった珍しい特撮作品」

クリアボックスの中には、二人が初めて見るヒーローのDVDが全巻入っていたのだ。

それらは仁志の金ではなく仁志の母親が買ったものだが、何度も見返すのは彼だったために既に仁志の物となっていたのである。

「でも、見るって言っても……」

「そうだよ。只野のPCはゲートになってるし、テレビもなければそういう物のプレイヤーだってないんだよ？」

仁志の意見を取り入れたため、響達の部屋にはテレビもその周辺機器もない。

だが、そんな事は彼も承知している。

「まあたしかにそうだ。でも、実はイヴさんそこには結構大きなモニ

ターとプレイヤーとしても使えるゲーム機が持ち込まれてる」
「え？」

「あーっ、もしかして切歌ちゃんと調ちゃん用ですか？」

何故と思う奏と違いすぐにその理由を察する事が出来る辺りがあるの二人との付き合いの差なのだろう。

仁志も響の言葉に頷き、教えたのだ。例の集金集団はテレビのアンテナさえなければ気付かない。実際マリアが持ち込んだ物は番組を見る事は出来ず、今は単なるオブジェと化している。

それもあって今まで仁志も意識の外へと追いやっていたのだ。そして、もう一つ。彼が二人と話してこういう話をしようと思った理由があった。

「それと、これ、な〜んだ」

クウガのDVDと共にボックスの中に入っていた内の一枚のDVD。それを見せられた二人は思わず声を漏らしてしまった。

「ゴジラ!?!」

「ピンポーン。正解。これはVSスペゴジだな」

「スペゴジ？」

「スペースゴジラ。ま、詳しい説明はまた今度するとして、見たい？」
「見たい（です）っ！」

当然ではあるが仮面ライダーよりも食いつきは良かった。何せ二人はゴジラと対峙した事がある。

では近い内にマリア達の家で鑑賞会をしようと仁志が提案し、二人は迷う事無く頷いた。

そこには当然ゴジラ映画への興味があつたのも事実だが……

（仁志さんが自分から誘ってくれた！ みんなで一緒に鑑賞会！ 楽しみだなあ！）

（ははっ、やっと只野の奴が元気になったみたいで良かった。これが出会った頃の只野っぽくなったよ）

仁志が以前のような明るさと元気を見せてくれた事が嬉しかったのである。

こうして二人は眠気が限界になっていた仁志を寝かせるため、彼の

部屋を後にし揃って帰宅する。

奏が鍵を開けるとまだ翼とクリスは戻ってきておらず、二人は首を傾げた。

「いつもならもう帰ってきてます、よね？」

「だね」

日常的に報告へ行っている翼。その彼女が出かける時間は決まっている上帰還時間も一定である。

そういった事には几帳面で規律正しい翼にも関わらず、今日に限ってはクリスもいるのに帰還が遅いのだ。

クリスも翼と根底は似ていて真面目である。なら帰還時間が大きくズレるはずはないと、そう考えた二人は何か嫌な予感を感じてギアを纏う。

「行くよ！」

「はいっ！」

様子を見に行くべき。そう判断しゲートへと入る二人。

裂け目から急いで唯一残ったゲートへと到着した二人は本部内へと足を踏み入れる。

普段ならそこでギアを解除するのだが……。

「奏さん、これ……」

「ああ、様子が変だ」

不気味な程静かだった。音や気配と言った生命の息吹のようなのが一切感じられないのである。それだけで二人は異常事態が起きた事を察しギアを纏ったままで動き始めた。

「……慎重に進むよ。傍から離れるな」

「はい」

ゆっくり周囲を警戒しながら歩く二人。やがて職員の姿が見えてくる。

「良かった。人がいます」

「だね」

安堵する二人だったが、近づくにつれてその表情が疑問を浮かべ始める。

自分達が近付いているのに、声もかけているのに一切その場から動かないのだ。反応さえもない。

その理由は、相手へ接近した時に分かった。

「……奏さん、これ」

「止まってる……ね」

まるでマネキンか彫像かと思う程に瞬きさえもしていなかったのだ。心音さえも聞こえず、二人は胸の内側からこみ上げる不安を押し殺してまず発令所を目指す事にした。

本当なら走り出したいところだったが、あまりの異常事態に慌てる事は危険だと直感的に察知したのである。

「……みんな止まってる」

「時間が、停止してるんだよ。只野が予想した通りの事をやったんだろうね」

「でも、何のために？ それに翼さんとクリスちゃんは……」

「分からない。ただ警戒は続けるよ。何であたしらが動けるのか。それはきつと依り代のおかげだろうし」

「つ……じゃ、未来達も動けるはずじゃ？」

「どうだろうね。じゃあどうして翼とクリスがまだ帰ってきてなかったんだ？」

その問いかけに響は返す言葉がなかった。奏はやや険しい表情をしていたのだ。

依り代があれば動けるのであれば、翼達は今どこで何をしているのか。もしやこれを引き起こした相手と対峙しているのか。様々な憶測が響と奏の中へ浮かんでくる。

「まあどっかで無事だと思うよ。だからまず発令所へ行くのさ。もしかしたらここの旦那達は無事かもしれない」

その不安や心配を抑えて奏はそう少しだけ明るい口調で告げて歩き出す。響もその言葉に同意するように頷いて歩き出した。

そうやって慎重に進み二人は発令所のドアへ辿り着く。普段なら開くそこも時が止まったせいしか動かないため、壊して開けようとする響だったが、奏がそれに待ったをかけて手を触れると何とドアがゆっ

くりと開いたのだ。

「これって……」

「依り代がないセレナを翼が触ったら動けたって言ってたからね。もしかしたらって」

「で、でも、職員の人達は動かなかったですっ！」

「そこは戻ってエルフナイン辺りに考えてもらおう。それより今のあたしらは……」

完全に開いたドアの先では弦十郎達がそれぞれ普段のような表情で動かなくなっていた。

「……師匠」

「やっぱりか……」

そこで奏は気付いたのだ。この状況は何か異変が起きたと誰も感じ取る事が出来ずに始まったのだろうか。

何故ならここへくるまで誰一人として慌てたり恐怖したりという表情をしていなかったからだ。

(悪意はこの時間を止めて何をしたいんだ?)

敵の狙いを探ろうと思いを巡らせる奏だったが、それは出来ずに終わる。

「奏さん、とりあえず街に出てみませんか？ 翼さん達もこれを見て

街へ出たかもしれません」

「……そうだね、これがここだけって可能性もある」

今は情報収集が先か。そう判断し奏は響と二人で本部を出る事にした。

「……雲が、止まってる」

「見てみな。海鳥もだよ。この世界そのものが停止してるんだ」

外へ出た二人を待っていたのはより顕著となった異変だった。

何もかもが停止し、まるで世界全体が死んでしまったかのような錯覚を覚える状態だったのだ。

そんな中を二人は歩き、まずは未来がいるであろう学生寮へと向かった。

途中で見かける光景全てが普段の日常が正常に行われていた事を

示すような状態のまま停止しており、響と奏に何とも言えない気分を味わわせる。

やっと到着した学生寮もドアなどが停止していて、二人が触れて何とか動かすような状態だった。

「未来っ!? 未来っ!」

自分達の部屋へと到着した響は鍵を使って中へと入り、そこで雑誌を見たまま動かなくなっている未来を見つけた。

そこで奏は気付いたのだ。この状況で何故自分達が動けるのか。それはギアを展開しているからだ。依り代があってもギアを展開していないと今のこの世界では動けないのだろう。そう読んで奏は響へ近付いた。

「響、多分だけど翼達は本部のどこかだ。そこでこの子みたいになつてるはずだよ」

「そんな……」

「あたしらはギアを纏ってる。だからまだ動けるんだ」

「……そっか。ペンダントのままじゃ依り代の力が弱いんですね?」

「多分ね。とにかくやるだけやってみよう。響、二人でこの子を触りながらフォニックゲインを高めるんだ。ギアの出力を上げてやれば依り代の力も上がるかもしれない」

「分かりましたっ!」

奏の言葉に力強く返事をし響は未来へ凛々しい表情を向ける。

(絶対助けるからね、未来っ!)

そのすぐ後室内に絶唱が流れ始める。S2CAだ。二つのガングニールによる共鳴と依り代の共鳴。それが絶唱による高レベルのフォニックゲインを受け効果を増幅させていく。

二人による絶唱が終わると同時に未来の体が勝手にギアを展開する。注ぎ込まれたフォニックゲインによって神獣鏡のギアが作動したのである。

「あ、あれ……?」

「未来っ!」

「響っ!? えっ?! ど、どういう事っ!」

「良かったっ！ 良かったよお！」

状況が理解出来ない未来と涙さえ流しそうな程喜ぶ響。その二人を見て奏は安堵するように息を吐いていた。

(これ、あたしらしいじゃなかったら不味かったかもね)

絶唱の負荷を受け止められる響と同じギアである自分だからこそ成功したのだと、そう奏はどこかで思っていたのだ。

奏は目の前で困惑し続ける未来と泣きそうな勢いで喜びを告げ続ける響を見つめ、小さく苦笑する。それは、ここへ来て初めての心からの笑みだった……。

「何も思わなかったです。気付いたら響に抱き着かれてて」

「そうか」

落ち着いた響を優しく引き剥がし、奏は未来から情報収集を行っていた。だがやはりというか未来も時間が停止したという感覚はなく、気付く事もなかったと証言したのだ。

とにかく今は他の装者を見つけないといけない。そう判断した奏は未来へギアを纏ったまま長期宿泊の用意をするように告げた。

それが何を意味するのかを響も未来さえも悟り、その表情を真剣なものへと変える。

「未来、ギャラルホルンの前で待ってて。私達も絶対そこへ行くから」
「分かった」

一旦未来と別れ、二人は切歌と調が暮らす部屋へと向かう。そこはさすがに響も鍵などを持っている訳ではなく、仕方ないと奏が判断してベランダの窓を割って侵入する事となった。

ギアを纏っているため容易にベランダまでは跳躍で辿り付けた響と奏は、何と驚きの方法で窓を割る。

「よつと……どうだ？」

「……すごい。綺麗に鍵のところだけ切れています」

奏がアームドギアで鍵近くのガラスを半円状に切ったのである。まるで手慣れた空き巣のような芸当に感心しながら、響は切れたガラスを押して外すとその目を疑う。

押されたガラスは少し動いたところの空中で停止したのだ。それに響もそして奏も思わず息を呑む。時間が停止するとはこういう事なのかと。

鍵を外し、窓を開けて室内へ侵入すると、二人は程なくしてキッチンにいる切歌と調を発見した。

やはり二人も動きが止まっていて、どうやら食事を作ろうとしていたところらしい事が分かった。

調が包丁を探すように止まっていて、切歌は冷蔵庫を開けようとしたところで固まっていたのだ。

「どう？ まだやれそう？」

「はい！ 切歌ちゃんも調ちゃんも助けたいですし！」

「……いい？ 本当にきつくなったら言うんだよ？ ここで無理したらあの子だけじゃなく只野達も悲しむからね？」

「……はいっ！」

こうして再び絶唱が今度はキッチンに響き渡る。まず調が、次に切歌が行動可能となり、二人も未来と同じく自分達に起こった事を察知していなかった。

「響さん、少し休んでくださいデス。どう見てもお疲れデスよ」

「絶唱を三回も使ったなんて絶対体にも良くないです」

「ありがとう。でも、まだ翼さんとクリスちゃんがいるんだ」

明らかに元気を失っている響の声。それに奏は大きいため息を吐いた。

「言ったはずだろ。響、あんたは少し休みな」

「でも……」

こつちへ来ている二人の同居人が心配だ。そんな気持ち表情にアリアリと見せる響を奏は小さく苦笑して見つめる。

「あんたはあの子と一緒に先に戻ってこの事をエルフナインへ伝えてくれ。で、あの子は一先ず今日はあたしらの部屋で預かる」

「えっ？ で、でも寝る場所が……」

「あたしの布団を貸してやっていいよ。で、あたしは只野の部屋行くから」

「ええっ!？」

あまりな提案にさすがの響も納得出来ないとはかりに声を上げる。そのやり取りの意味が理解し切れない切歌と調は首を傾げるばかりだ。

「大体あたしはバイトもあるしあそこからの方が通いやすいからさ」
「で、でも……」

「心配いらなくて。あたしも只野もそういう事出来るような余裕ないから」

「い、いやいや、だからって同居は駄目って言ったのに奏さんですよ！」

「あの部屋で何も起きなかったからあんた達はそう思ったんだろ？」

「私達は最低でも三人でしたっ！ 男女二人きりなんて問題じゃないですっ！ 只野さんだつて最初私にそう言ったんですからっ！」

何とか奏を思いとどまらせようとする響だったが、そんな彼女へ奏は無慈悲な一言を放った。

「じゃ、あの子を只野の部屋へ行かせる？」

「それは絶対無理ですうっ！」

即答。しかも響の表情と声は若干怖がっていた。

「とにかく、あんたはここで少し休む。で、調はここで二人分の荷造りして。ギアを解除するんじゃないよっ！」

「分かりました」

「ならアタシは奏さんと一緒に本部へ、デスか？」

「そ。せめて翼とクリスの居場所だけでも分かっておかないとね。食堂方面だと思うけどさ」

こうして響と調を残し、奏は切歌と共に本部へと向かう。切歌も街の様子や周囲の様子などで一気に異常事態だと認識、本部へ入る頃には警戒レベルMAXとなっていた。

「これも悪意って奴の仕業デスか？」

「だろうね。多分だけどここのゲートは隠せないんだろうさ」

「ナルホド……。隠せないなら使っても意味なくしてやろうって事デスね」

「かもしれないね」

実際奏と響が来なければ装者の半分以上がここで行動不能になっていたのだ。それで悪意が何かしてきたら。そう考えれば今回の事は危ないところだったと奏は思った。

歩きながら食堂を目指す二人。するとその途中で両手に荷物を持った翼とクリスを見つけたのだ。ただ……

「翼さんっ！ クリス先輩っ！」

慌てて駆け寄る切歌とは違い奏はある事に気付いて首を傾げた。

「何で二人は表情が険しいんだ……？」

荷物が重いからという理由だろうかと思う奏だが、その表情は何か驚くような事が起きたものに見えたのだ。

「んっっ！ だ、ダメデス！ まったく動かないデスっ！ てこでも動くつもりがないデスよおっっ！」

何とか二人を動かそうと頑張る切歌であったが、当然ながら少しも二人の体はその場から動かない。

その奮闘を眺め、奏は小さく苦笑すると切歌へと近付いていく。「無理だつて。教えただろ？ あんた達もこうなつてたのをあたしと響が絶唱を使って何とかしたんだ」

「ううっ、こーゆーのは後輩の必死の呼びかけで先輩が奮起覚醒するって流れじゃないんデスか？ 現実はきびしいデス……」

「何だいそりゃ。何かのゲーム？」

「アニメデス！ 響さんのお友達オススメの昔のアニメデスよ！」

楽しげに笑う切歌に奏は内心で微笑む。こんな状況でもこうやって笑える事。それを見て大物かもしれないと思つたのだ。

「……さて、どうしたもんか」

「どうしたもんかデス」

自分と切歌では絶唱を使って動けるように出来るか不安が残る。それが奏の考えだった。切歌はとりあえず奏の真似をしてるだけである。

そうやってしばらく動かない翼とクリスを眺めていると、やがてそこへ両手に大きな目の旅行鞆を持った調が現れた。

「切ちゃん！ 奏さんっ！」

「調くっ！」

嬉しそうに調へと駆け寄る切歌だったが、その抱き締めようとする彼女の動きを軽くかわして調は奏へと駆け寄る。

「およっ!？」

「奏さん、響さんは未来さんと一緒に上位世界へ向かいました」

「分かった。さて、じゃあ試すだけ試そうか」

「試す?」

調の報告に奏は安堵するように頷き視線を翼とクリスへ向けた。その言葉に二人の声が重なる。

「あんた達ってユニゾンってのが出来るぐらい同調するんだろ？ なら、悪いけど翼へ手を触れたまま絶唱を使ってくれないか？ もしかしたらそれで動けるように出来るかもしれない」

「そういう事なら……」

「アタシ達にお任せデース！」

荷物を一旦床へ置いて、調は切歌と手を繋ぐ。そして二人の少女は残る手を翼へと乗せて歌い始めた。

その悲しくも儂い旋律が通路に響く。奏はそれを聞きながらどこかで記憶の中に強く残る絶唱とは違うように感じていた。

（あの時翼が使った絶唱とは何かが違う。何というか、こっちの方が優しいって言うか温かいって言うか……）

思い返せば響との時もそうだったように思え、奏は疑問符を浮かべながら目の前の二人の少女の成功を祈った。

「っ!?! なっ……暁? 月読も? どうしてここに……」

ザババの刃の共鳴と同調による凄まじいフォニックゲインが翼へと注がれ、それによってギアが自動的に展開される事で止まっていた翼の時間が動き出したのだ。

「二成功した(デス)……」

急に動けるようになった翼を見て疲れた顔で喜び合う二人。奏はそんな二人を横目にしながら翼へと近付いた。

「翼、大丈夫かい?」

「奏？ これは一体……っ!? そうだ！ 雪音はっ!?」
「クリスなら後ろだよ」

言われて振り返る翼が見たのは険しい表情のまま動かなくなっているクリスの姿。

「雪音……っ」

「翼、話は後だ。あたしに協力してくれないか」

「協力？」

「そうさ。あたしと一緒にクリスを動けるようにするのさ」

「動けるように……? どうやって？」

そこで奏から告げられた言葉に翼は息を呑む事になる。

「絶唱さ」

ツヴァイウィングによる絶唱も見事な共鳴を起こし、クリスの止まっていた時間を動かす事に成功。

そうして絶唱を使った四人とようやく動けるようになったクリスは、一旦体力を回復させる事にして食堂へとやってきていた。

「一言で言えば依り代なしの状態だ。ただ、あたしと先輩は体がゆっくり動かなくなるのが分かった」

「とはいえほんの一瞬だ。不味いと思った時にはもう声を発する事も出来なかつた」

食堂で体を休めながらの情報整理。そんな様子で奏達は食堂の椅子に座っていた。

ギアを纏ったまま座るといふ慣れない感覚に妙な気分となりながら、調と切歌は目の前の二人へと疑問を投げかける。

「でも、どうして翼さんとクリス先輩だけそんな風に？」

「アタシ達はまったくでしたよ？」

だがそれに対する答えを二人も持っていないなかつた。何せ依り代は同じように欠片として組み込まれている上、彼女達も結局動きを止められてしまっているのだから。

「……とにかく、今はあたしすらも只野の世界へ戻るよ」

「そう、だね。このままここに居ても仕方ない」

「ああ、今のあたしらしらじやおっさん達を戻す事は出来ねーだろうしな」
悔しさを噛み締めるような三人の声を聞いて切歌と調も悔しそうな表情で頷いた。

（今の私達に出来る事は何もない……）

（一番悔しく思ってるのは先輩達デス……）

今まで上位世界で過ごし色々と考えていた年長組。それが抱えた悔しさと無力感。それは今の自分達よりも上だと二人の少女は理解していたのだ。

こうして遂に上位世界へ装者九人が揃う事となる。だがそれは誰もが予想していなかった状況での合流となった。

根幹世界の時間が停止させられたという、ある意味強制的な合流。受け入れ体制を整えられぬまま、未来、調、切歌の三人は上位世界へ滞在する事となったのだ。

未来は奏の言った通り響達のアパートへ一先ず滞在する事となり、調と切歌はマリア達の家へと滞在する事となった。

仁志は何か手を打ちたかったのだが三人が来た時点で夜となっており、もう出来る事がほとんどなくなっていたため翌朝から動く事を余儀なくされるのだった。

そして迎えた翌朝、仁志はマリア達の家へ来てマリアと相談を始めていた。

「正直言う。現状では無理だ」

それは当初彼が考えていた計画の頓挫を意味する言葉だった。

装者達を三つの住居に分けて住んでもらおうという事を仁志は考えていて、そのための準備を始めかけていたところに今回の事態が起きたのである。

「でしようね。それは分かっているわ。幸い切歌と調は元々ここで面倒を見るつもりだったからいいのだけど……。奏、今そつちなんでしょ？」

「ああ。昨夜はもう状況も状況だったから受け入れたが、さすがにずっとは不味い。かと言ってあの部屋に小日向さんを加えた五人では無理だ。エルやセレナちゃんできえギリギリだったし。となると

当初の計画通りに分けるべきだとは思うのだが……」

すぐにも仁志が手配できる部屋はあの六畳間の隣である。あの条件では年頃の少女三人は暮らせないと彼は分かっていた。

だが、そういう意味ではマリアは遅しかった。いや、もう腹が据わっていたのだろう。仁志が口にしらない事を察してため息と共に告げたのだ。

「いいわ。あの部屋の隣で三人を住まわせるのよ。シャワーやお風呂ならここを使えばいい」

「でも……」

「響達ならみんなも喜ぶわ。時々でいいなら泊まらせてもいい。幸いこの居間は結構広いもの。三人を泊まらせる時はセレナとエル、切歌と調をそれぞれ一つの布団で寝かせるわ」

「……分かった。その方向で話をしてみる」

まさしく一種の家族会議である。互いに意識はしていないがその様は夫婦のそれであった。

こうして仁志はすぐさま大家へ隣が空いてるかの確認をした上で契約。翼とも連携して響とクリスの物を引っ越しさせる事になったのだ。

それは、ある意味で一度引っ越した場所へ出戻るようなものであった。ただ、この引っ越しを喜んでいる者が二人いた。響とクリスである。

（ま、まさか仁志さんのお隣さんになれるなんて……。こ、これからお話しし易くなるね！）

（何だか妙な感じだぜ。で、でもこれであの人の食事はこつちが受け持てばいいよな！）

ただ座布団やクッションなどを運び込みながら笑みを絶やさないう二人とは違い、未来は若干気乗りしない表情でアパートを見つめていた。

（凄く古そう……。それにこことってシャワーとかないんだよね？ 何で響もクリスも平気そうなんだろう……）

手にした鞆の重さよりも重たい気分で未来はしばらくの仮住まい

となる予定の部屋へと足を踏み入れる。

「うわあ……」

今までの寮生活とは一転しての前時代的な作りの部屋に未来は思わず嫌そうな声をもらした。

それも仕方ないと響もクリスマスも思った。だが、クリスマスはそんな未来へピシヤリと告げる。

「嫌なら両翼の先輩達と暮らせばいい。正直あたしとこいつさえいなくなればあつちは余裕が出来るからな」

突き放すような声だった。あまりの冷たさに未来が息を呑む程に。

「く、クリスマスちゃん……」

「いいか？ 今あたしらは初めての危機的状況に立たされてる。はっきり言って世界蛇と戦った時以上にやべえ。本部どころか世界そのものが時間停止。他の平行世界とも行き来も連絡も出来ない。で、頼りになるのが全員揃って一部のバイトの稼ぎだ」

暗に贅沢言うなというクリスの言葉に未来は先程とは違った意味で息を呑んだ。

「あの人なりにそつちやこいつの事を考えた人選だ。一つ言つとくけどな、あの人だって本当はもう少しマシな部屋をあたしらにとって考えてたんだ。ただ、そのためには時間がある。探す時間や見て回る時間だ。あと、可能ならそつちもバイトを決めてからって考えてたらしい」

「私も、バイト？」

「そうなんだよ。只野さんは私達の暮らしは私達だけで何とか出来るようにって、そう考えたみたいで」

「こんな部屋しか用意出来なくて申し訳ないって言ったぞ。ま、それはあたしやこいつにだけだ」

それで未来は察した。元々二人はこの環境で暮らしていた。その不便さや辛さを知っていて、そこから解放された暮らしをしていたのだ。

なのにまたその環境へと戻る事になった。その事を仁志は詫びたのだろうと。

（私、やっぱりまだ装者として甘いんだ。響達はもうこの状況を受け止めてるのに……）

過酷な戦いへ身を置く事なく過ごしていたに近い未来。正式に装者として登録されたとはいえ、経験不足もあって彼女は予備戦力扱いとなっていた。

それでもいくつかの平行世界関連の事件では力を振るい、またそうじゃない事件でも新しいギアの力を引き出してみせるなど活躍はしている。

彼女に足りないものがあるとすれば、それは適応力であろう。これまで様々な平行世界関係の事件へ巻き込まれたり首を突っ込んできた響達とは圧倒的にそこが足りなかったのだから。

落ち込む未来を見て響は手を伸ばそうとして、何かを思い出してその手を止める。代わりに小さく息を吐いた。

「未来、悪い事言わない。ここで暮らすのが厳しいって感じるならあの部屋で翼さん達といた方がいいよ」

「響……」

「私とクリスちゃんもここでの暮らしは辛いなあって思う事あった。でもその時はまだ状況に余裕があった頃だったからさ。今みたいにどこかピリピリしてなかったんだ」

「そうだな。どっかで帰れる場所が、家があるって思ってた」

「でも、今はそう言えない。だから無理しないで。私とクリスちゃんは隣に只野さんがいるし、あの頃と違ってマリアさん達のところへ行けばシャワーやお風呂まで借りられるんだもん」

「おう。そう考えると結構気が楽だな」

二人の話を聞いて未来はどうするべきかと鞆を持つ手を握り締める。

（本当に響は強くなったんだね。私と手を離しても大丈夫って、そう分かる。でも、私はまだ無理みたい。だけど……）

生まれてから今まで過ごしてきた住環境と違い過ぎる部屋に未来は迷っていた。

親友である響と自分から離れて暮らすのか否か。これまでと違う

響の態度に未来は以前の話を思い出していた。

「……分かった。私、翼さん達とあの部屋で暮らす」

「……そっか」

未来の何かを決意したような表情に響は安堵するように笑みを浮かべた。

クリスマスも何も言わず、二人に背を向けて小さく安堵するように息を吐いた。

(どうやらあの子もやっと腹括れたみてーだな。ここじや誰かにおんぶにだっこじやダメなんだ。何だって自分の意思と気持ちを伝えられるようにならないとな)

嫌なら嫌と言えるようになって欲しい。それは仁志が店長を目指し出してからクリスマスへ頼んだ事でもあった。

今や仁志とオーナーはクリスマスを夕勤のバイトリーダーとして扱っている。故に仁志は頼んだのだ。何かささいな事でもいいから報告・連絡・相談、所謂“ほうれんそう”をしてくれと。

そしてそれは日常生活でもだ。未来はそういう意味では我慢の間だ。そう知っているクリスマスはここでもし未来が嫌だと言わなかった場合、共同生活の中でそれを吐き出せるようにしようと思っていたのだ。

「じゃ、私戻るね」

「うん」

どこか意を決した表情で告げる未来。それを正面から見つめ、響は頷いた。

悲しみはある。だがそれはこれまでならばきつと耐えられなかったものだった。

今、二人は初めて自分達の意味でその道を分かとうとしていた。それは決別ではなく自立の道。

後の事はいいからお前はあの子を見送ってやれと、そうクリスマスに言われた事もあり、響は一人来た道に戻っていく未来を見送りながら微かな寂しさを感じていた。

「未来……」

以前までならもつと心が痛んだであろう光景にも、今の響はそこま
で狼狽えてはいなかった。

何も未来への想いが弱くなったのではない。彼女への依存にも似
た友情が正しい形へと戻っただけなのだ。

「響、どうした？ 何かあった？」

「只野さん……えつと……」

未来の背中が小さくなり出した辺りで声に振り向いた響が見たの
は仁志だった。

引越しの手伝いをしようと部屋から出て来たのである。

彼は響の見ていた先を見たのだろう。何かを察したように苦笑し
た。

「小日向さんはここじゃ無理だった？」

「はい。その、翼さん達と一緒に暮らすって」

「そっか。うん、自分でそう言えたのなら大丈夫だ。ああ、そうだ。す
ぐにでも暁さんと月読さんにもバイトを始めてもらおうし、小日向さん
にもそうやってお願いしておくから。それが上手くいけば以前と同
じぐらいの部屋を」

「いいんです。私はここでへいき、へっちゃらですから」

優しく微笑み、響はそつと仁志の手を握る。その行動に仁志が驚く
と、響はちよつとだけ照れくさそうに笑って告げた。

「仁志さんがいますし」

「っ!？」

その笑顔は今まで響が仁志に見せた事のない笑顔。女の顔と呼ば
れるものだった。

不意打ちのそれに仁志は慌てるように顔を上へ向けつつ、そつと響
の手を剥がした。

「ひ、響、ダメだって。二人きりの時だけって話だろ？」

「で、でも今は」

「外は駄目だって。どこで誰が見てるか分からないんだぞ？ ただで
さえ今後はご近所さんになるんだからな？」

「あつ、えつと、すみません。つい……」

「つたく、今後は気を付けてくれよ？」

「はーい」

そんなやり取りをして笑みを見せ合う二人をドアの隙間からクリスが黙って見つめていた。

——へえ、二人きりの時だけの……か。あのバカ、そういう事だけは賢いみてーだな……。

良い事を聞いたと言わんばかりの、獰猛な笑みを浮かべて……。

PRACTICE MODE

「アルバイトです（デス）か？」

今、俺の目の前には軽く目を見開く可愛い少女が二人いる。暁切歌さんと月読調さんだ。

寝惚けた頭へ知らされた衝撃の現実からまだ二日しか経過していないが、俺は現状を打破するべくイヴさん達の住む家まで来ていた。

……まあ飯を食うついでみたいになっちゃったけど。

「そう。もうある程度聞いただろうけど、ここじゃ」

「はい、支援してくれる組織はないって」

「で、只野さんはびんぼーさんデス」

暁さんの言葉がざつくりと刺さる。うん、考えてみれば今まではみんな気を遣ってくれていたんだなと分かった。

「切ちゃん、そんな言い方……」

「で、でも事実デスよ？」

「事実でも言っていない事と悪い事があるよ？」

ぐっさりと言読さんの言葉で切り刻まれる。

あれ？　もしかしてこの子達言葉さえもザババの刃なのか？　俺

の魂が少しずつ削られているような気がしてきたよ？

「あの、お二人共少し失礼かと」

「うん、暁さんも月読さんもお兄ちゃんへ謝って」

そこへ現れる二人の天使。ありがとう二人共。ただ、廃棄のシュークリームを持つてるとまるで俺が買収したみたいに見えるから止めて欲しいなあ。

「いや、いいんだ。たしかに俺が貧乏なのは事実だし」

「お兄ちゃん（兄様）……」

少しだけ悲しそうな目でこちらを見るセレナちゃんとエルだけでも、そこであむつとシュークリームを食べないで。悲しくなるから。

ああ、そうそう。エルはあの日から完全に俺の事を兄様呼びになりました。で、セレナちゃんも最近周囲の目を気にしてお兄ちゃんと呼ぶように。

もしかしてザババコンビが俺へ微妙に冷たいのってそれもあるのか？ だとすれば完全に俺のせいだ。言い訳できないな、これ。

「とにかく、悪いけど君達には俺はバイトを斡旋してやれない」

「あっせん？」

「紹介するって意味だよ切ちゃん」

「おー、ナルホド」

「えっと、続けていい？」

難しい言葉は使わない方がいいな。そう思いつつ俺は二人へ説明を続けた。

俺が紹介出来るバイト先はこれまで働いたところばかりだ。で、その中で薦められる場所はもう人手が足りている。

薦められないバイト先ならまだあるけど、当然二人をそんな場所へは紹介しない。

まあ、パチ屋は未成年がそもそも無理だし。

なので現状小日向さんを含めた三人には自力でバイト先を探して決めてもらう必要があるのだ。

ただ、ここで怖いのが彼女達はいずれも正式なバイト経験がないに等しい事。

つまりは何の伝手もなく正規の形で働く事が初めてと言う事だ。

俺がそれを懸念して伝えると、二人は馬鹿にするなどばかりに表情を変えた。

「言われなくても分かってるデスよ」

「私達だって子供じゃありません」

うん、これは不味い。どうやら今まで俺の情報が限定的だった事に加え、ここでいきなりイヴさん達との親しげな距離感を見て二人は俺を敵視しているみたいだ。

だって、俺の知ってる二人はあまり親しくない相手でもここまで露骨に敵対心見せないもの。

これ、もしかしてウエル博士と同等ぐらいの扱い？

「……悪かった。じゃ、履歴書を書いてもらえるかな？」

「二りれきしょ？」

ここはどうやら響やクリスと同じらしい。そう思って内心で安堵する。

「うん、こういうの」

百均で購入した履歴書を取り出して二人へ見せる。おそらく初めて見ただろうそれに、二人はどこか興味津々だった。

「名前に住所、生年月日……」

「写真があるんデスカ？」

「そう。本人確認みたいなもの」

「あの、学歴って……」

「ああ、そこは大丈夫。俺の卒業したところ書いてもらうから」

「リディアンじゃダメデスカ？」

「切ちゃん、ここにはリディアンなんてないからダメだよ」

「おー、そうでした」

こうやって普通にしてる分には可愛くて癒されるんだけどなあ。

仕方ない。事務的な対応を心がけよう。ただし嫌味にならないように気を付けて。

「生年月日はそっちの世界のものは絶対合わないから俺の年齢から逆算したもので書いてくれ。それとバイト先にもよるけど基本夕方の時間で探してくれるか？ 早朝ならいいけど、朝や昼帯は土日限定で頼む」

「分かってます。マリアにも言われました」

「デスよ」

……これ、事前にイヴさんへ根回ししたのも裏目に出てるかも。

そんなこんなでザババコンビへの説明とお願いは何とか終わった。

でもこれ、俺の場合はまず二人からの敵視を何とかするとそこからスタートな気がする。

で、次は運動がてら翼達の部屋を訪問。目的は当然小日向さん。

ダイニングには俺の貸しているCDを聞きながら配信用の歌を覚えてる翼がいるが天羽さんはいない。

一人で外を走っているのだ。昨夜はバイトじゃなかったから、もう単なる日課としてのジョギングだろう。

こちらへ目だけ向ける翼へ軽く手を上げて笑みを向けると少しだけ嬉しそうに微笑んでくれた。可愛いな、やっぱり。

で、俺は小日向さんと寝室で向かい合う形で座る。にしても、相変わらず良い匂いがするよな、この部屋。女性四人だった時もだけど、三人になっても変わらずだ。

……独身男彼女なしにはちよつと毒だな、この匂い。

そんな事を考えながら俺は小日向さんへ履歴書を取り出して渡す。

「履歴書、ですか？」

「うん。えつと、学歴や何やらはこつちで用意したものを書いてくれるかな？」

「分かりました。あの、証明写真は？」

「その代金は今渡す。おつりはとつといてくれていい。俺の金は今はみんなの共有財産だし」

「そうなんですか？」

「この世界を守ってもらうんだ。なら、俺に出来る限りの事はさせてくれ。金の事は気にせず……とは言えないが、だからと言って我慢や溜め込むのは止めて欲しい。まずは言ってくれ。そこで相談しよう」

「……分かりました」

ザババコンビと違い小日向さんは俺へまだ好意的だ。おそろくだけど響からの話が良い方向へ働いてるんだと思う。

……こうなると曉さんだけでも呼んでおくべきだったか？

「あの……」

「ん？」

なんて考えてたら小日向さんが何か聞きたそうな声を出した。

「只野さんは、響とどういう関係なんですか？」

「はい？」

「その、響が只野さんの事話す時、どこか嬉しそうなんです」

何というか、答えに困るなこれ。おそろくだけど響は俺を仮想彼氏にしてくれてる。練習台と言ったらなんだけど、俺が彼女を名前で呼ばせてもらってるのはそういう話だったもんなあ。

ただ、あの時の行動はどういう意味だったんだろうか。キスをして

欲しいみたいに関目を閉じたけど、あれは本気、だったんだろうか？
あるいはそこで俺がどうするか試した、のか？

正直判断が付かない。ああなる前に響はこつちをからかうような
事をしてきたしな。

もしそうなら響にとって俺は彼氏って言うよりは……

「多分、近所のお兄さんって辺りが妥当かと思うよ」

「近所のお兄さん、ですか？」

「うん。俺がまだ響と会って間もない頃、向こうから言われたんだ。
名前で呼んでくれていいですよって。でも俺が彼女がいた事がない
から恥ずかしいって言ったら、じゃあ練習と思っってっね」

「練習……」

響なりに俺と距離を詰めてくれたんだと思う。で、それを俺がやん
わりと拒否したからならっってもう少し詰めてくれたんだよな、あれ。
「うん、分かりました。その、響っってすぐに人と距離を詰めようとする
ところあるんです」

「ああ、よく知ってる。何せ敵対しても手を繋ごうとするぐらいだし」

「はい……。だから不安なんですけど」

「あー、だよねえ。だって、相手は響を下すれば殺すかもしれないの
に」

「そう、そうなんですっ！ なのに響ったら大丈夫の一点張りで……」

そこから俺は小日向さんの愚痴や不満を聞く事になった。何とい
うか、多分だけどこれ、今まで分かってくれる人がいなかったか話せ
る相手がいなかったんだろうな。

実に一時間ぐらい喋っって、小日向さんは幾分すっきりした顔でグラ
スのお茶を飲み干していた。

「ふう……あの、ありがとうございました。私ばっかかり喋っっちゃって」
「いいんだよ。おかげで俺も響や小日向さんの事が分かった。そうい
う愚痴や不満、本人には中々言えないもんな」

「……言えるとしても、こんな風には言えません。ケンカ、しちやうか
もしれないし」

顔を伏せる小日向さんを見て俺は気付いた。小日向さんはまだこ

ここで寄る辺を持つてないって。

響やクリスと言った親しい友人は今回の住居の事で若干疎遠となった。正確には小日向さんの中で壁や溝が出来てしまったんだろう。

かと言つて翼や天羽さんはそこまで親しくないしそもそも年上だ。

ここは今は二人の稼ぎで賄う事になっている。天羽さんのバイト代と二人の動画による広告収入で、だ。

甘えるのが小日向さんは下手そうだし、それもあつてどこか気を遣っているんだろうな。

「……いつそケンカしてみればいい」

「え？」

だからこそ、俺ははつきりと告げる事にした。小日向さんが抱えて
いるものを、ぶつけ合う事を。

「ケンカする程仲が良い。あれはちゃんと互いの思った事を言い合う
事が出来る事を意味してる。ちよつと揉めたら崩壊するような絆な
んて何とか取り繕つてもいつか壊れるさ。なら、早く壊した方がい
い」

「そ、そんな……」

「小日向さんはどこかで分かつてるだろ？ 響はきつと君の抱えてい
る事を感情のままぶつけたって繋がりを断ち切るような子じやな
いってさ」

そう言う和小日向さんは言葉を詰まらせた。

やっぱりそうなんだ。まだ彼女も翼と同じでXVでの件を引き
ずつてる。

あのカラオケでの一件から始まる流れ。大切な親友を最後まで傷
付け苦しめた一因となった事を悔やんでいるのだろうか。

「小日向さん、俺なんかに言われたくないだろうけど、敢えて言うよ。
立花響を甘く見るな」

「っ」

「君が絶交だと言つても、きつとその理由を聞くまで諦めず、そして聞
き出したのなら何とかそれを解決や克服しようとする子だ。そして、

君も逆の事をされたらそうするだろ？ なら、ぶつかればいい。言い争って殴り合いをして、互いにもう二度と顔を見たくないって言い合うぐらいまでやり合ってもいい」

「そ、そんな事……」

「それでも、きつと君達はまた顔を合わせるはずだ。それも偶然じゃない。互いに反省や後悔を持って、自分自身の意思で」

実際、この二人の絆はそういうレベルだ。大ゲンカしたってそれで終わりになるようなそんな脆い絆じゃない。

それでも、そう思っただけでもどこかで疑い、不安になるのが人間だ。だからこそ、ちゃんと伝えないといけないと思うんだよな。

自分が何を思い、どう考えているのか。それを知って欲しい人には。

小日向さんは俺の言葉を聞いて完全に俯いた。でも、その雰囲気は最初とは違う。

そしてゆつくりと顔を上げると、その表情はどこか笑ってた。

「……もしこれで響と仲直り出来なかつたら恨みます」

「いいよ。何だつたら好きなだけ殴ってくれたっていい」

「言いましたね？ 約束ですよ？」

「いいとも。まあ、そんな事にならないと思うけどね」

「クスツ、私が無理やり仲直りしないって方法がありますよ？」

「おっと、それは失念してた。でも、それならいいよ。俺が痛い目見る事で君達もつと互いに気持ち言い合えるようになるなら」

苦笑する小日向さんを俺は笑顔で見つめる。きつと彼女はそんな事はしないだろう。響もそうだ。

この二人は単なる親友じゃない。心の友と書いての“心友”なのだから。

こうして小日向さんとの話も終わり、俺は翼達の部屋を後にした。そのまま仕方なくブラブラ歩こうとして、スマホが振動するので取り出した。

「エル？」

着信画面に表示されたのはエルとの文字。

「もしもし?」

『あつ、兄様! すみませんが家まで来てください! 至急聞きたい事が出来たんですっ!』

「分かった。すぐ行く」

よく分からないが何か起きたらしい。若干エルの雰囲気が本来のものになってた気がするし。

とにかく急ごうと走ってイヴさん達の住む家へ。額に汗しながら到着し中へ入って居間へ向かう。

「あつ! 兄様っ!」

「エル、どうしたんだ一体」

「これを、これを見てくださいっ!」

そう言つてエルが差し出したのは依り代と呼ばれるようになって久しい本来の俺のスマホだった。

「これがどうした?」

「これですっ! ここの部分っ!」

エルが指さすのは至つて普通のスマホ画面。いくつかのアプリなどのショートカットが表示されているだけで……ん?

「……何でこれが今更……」

俺の目が見つけたのは一つのアプリ。そう “戦姫絶唱シンフォギアXD UNLIMITED” だった。

あの日たしかに消えたはずのアプリが何故今頃になって? 疑問は尽きないがまずはエルに聞いてみよう。

「エル、これは一体いつ?」

「兄様に連絡する少し前です。それから音がしたので何かなと思つて見てみたら……」

話によればエルがいつものように居間の掃除をしていた(イヴさんは掃除機があるので)ところ、スマホから通知音がしたらしい。

そんな事があるとすれば俺か翼からの連絡ぐらいしかないため、確認しようと首掛け袋から取り出してみれば、見慣れぬアプリの表示と聞き覚えのある名称が載っていた。

で、急いで俺へ連絡を入れたと、こういう訳だ。

「兄様、これはこの世界にあったと言うゲームですよね？」

「ああ。響と出会った時に消えたはずなのに……」

「もしかして僕らの世界の時間停止と何か関係が？」

「あるとしてもだ。タイミングおかしいと思わないか？」

あの事件からもう二日経過している。これは関係してないとは言い切れないけど密接には言えない気がする。

「……では、あの事件が直接的な要因ではないにせよ、何らかの形で関わっているとしたらどうでしょう？」

「その場合は……何かあるか？」

「一つは装者の皆さんが全員揃った事です。ですがこれも……」

「タイミングとしてはズレてる、よな。となると……」

「まず、何故このタイミングかと言う事を考える方がいいかもしれません。兄様、何か心当たりはありませんか？」

エルからの問いかけに考える。連絡が来る少し前、か。特に何もしてなかったよなあ。

強いて言えば小日向さんと話し終わったぐらいか。でも、それぐらいだし……。

「特にはないなあ。小日向さんとの話し合いが終わったぐらいだし」

「そうですか」

「ごめんな。役に立てなくて」

「いえ。あつ、ならこのゲームをやってみたらどうでしょう？」

言われて思い出す。そうだった。これ、起動出来るんだろうか？

「じゃ、少し貸してもらおうな？」

「どうぞ。元々は兄様のですし」

エルにも見えるようにその場へ座って起動する。と、エルが横から覗きこんできた。

と、そこで既に違和感が。本来流れるはずの製作元の名称やロゴがないのだ。

次は音声。一切流れないのだ。声も音さえも。ただ、画面は見慣れたものと言える。響達九人のエクストライブ姿が表示された、スタート画面だ。

「これは……エクストライブですか？」

「そ。XDってのはエクストライブの略なんだ」

「そういう事なんですね」

俺がエルへ説明していると、おそらく日向ぼっこしながら眠ってたであろうヴェイグがフラフラとやってきた。

「タダノ、何をしてるんだ？」

「ヴェイグさん、実は依り代に変化が起きました」

「依り代に？」

「はい。見てください」

エルが場所を移動して反対側へ来て、代わりにそこへヴェイグが顔を出す。

「……なんだこれ？」

「ゲームだよ。正確には消えたはずのゲーム」

「消えたはずの……？」

「何故か復活したんです。今その謎を解明中で」

「そういう事か。よしタダノ、早く何とかしろ」

「はいはい。まずはタップと……」

何か子供二人が新しいゲームを父親へやってやってとねだってるみたいだな、これ。

ま、俺も久しぶりの事にテンション上がってるけども。

「ん？」

タップして響のシルエットが横切ったかと思うと、表示されたのは俺が見慣れたホーム画面じゃなかった。

クエストもアリーナも何もなく、あるのはミュージックボックスと見慣れぬステータスと言うものだけ。

しかもステータスのアイコンは何故かキャラクタールームの扉なのだ。

「ミュージックボックス？」

「あつ、うん。ゲーム内で使われた歌や曲を聞ける奴なんだけど……」

二人が興味を示したのでそれを選択。するとちゃんとゲーム内で出て来た歌があった。

……いや、待てよ？ 何だか曲数が多い気がする。そう思っ
てフリックしてみれば、ゲームではまだ実装されていない曲が見つ
つたのだ。

そう、XVでの最終局面で流れた歌などがそれである。

「これは……」

「聞き慣れない声が混じってるな」

今は“PERFECT SYMPHONY”を流している。どう
やらここは音が流れるらしい。

で、エルはきつとおぼろげに覚えているんだろうけど、ヴェイグは
初めて聞くキャロルの声に首を傾げている。

というか、何故これが？ 一先ずおいておこう。こうなるとステ
ータスも気になる。

もっと聞いていたそうな二人に断ってから俺はステータスを選
択する。すると、響達装者九人の顔を模したアイコンが表示され、その
横にゲージのようなものが存在していた。

で、響が一番その色が染まっていて、次がクリス。その二人はゲ
ージの半分を超えて色が付いている。

翼は半分は染まってないものそこに近く、イヴさんも翼より若干
下だがそこに近い。天羽さんは三分の一ぐらいでセレナちゃんも同
程度。

そして四分の一程度の小日向さんと真つ黒なザバコンビであ
った。

「これは一体なんだ？」

「分かりません。ステータスと言う事は、この場合は状態を意味して
いるんでしょうが……」

「このゲージが何を意味してるかだよな。正直トップ3を見ればここ
の滞在時間って言えたんだけど……」

それなら翼の次はイヴさんじゃなくて天羽さんだ。なのでこの条
件は一致しない。

「では、収入でしようか？」

「いや、それも違う。それも正直イヴさんよりも天羽さんだ」

「ならタダノとの距離か？」

「ああ、たしかに今の響とクリスは近所だけど、それなら二人に差はないはずだぞ？」

「現状の距離では？」

「いやいや、なら余計におかしいって。多分だけど今の俺に物理的に近いの、響達じゃなくてイヴさんだぞ」

時間を見ればもう響達が翼と合流してランニングをする頃だ。なら、おそろくだが缶や瓶などのゴミを捨てに行っているだろうイヴさんの方が近い。

こうなるとやはり理解出来ないな、これ。あと、何故ステータスの割にアイコンがキャラクタールームの扉なのか。それも気になる。

キャラクタールーム……なあ。もしかして現状の住居への満足度？ だとしたら急に信憑性が増す。特にザババの二人。

「もしかしたらなんだけどさ」

で、思った事をエルとヴェイグへ告げると二人揃って納得するような声を出した。

だよなあ。それしかないよな、これ。

「そうなるよ、皆さんが住む場所に満足する事で何か起こるのかもしれない」

「うん、ゲームとして考えればそうだな」

エルが謎が少し解明できたとはかりに微笑む。なのでその頭を撫でてやりながら頷いた。

あー、嫁さんは無理でも子供が欲しい。出来れば男の子。そうしたら俺がいくらでも怪人や怪獣やって遊んでやるのに。

……待てよ？ エルなら今から教育すればワンチャン……。

「何か妙な事考えてないでしょうね？」

「っ?!」

突然背後から聞こえる声。おそろおそろ振り向けばそこには仁王立ちしているイヴさんの姿。

「マリア姉様、おかえりなさい」

「おかえり」

「お、おかえり……」

「ただいま。で？ エルの掃除の邪魔までして何をやってるの？」

ゴミ捨てから帰ってきたイヴさんが俺の事を若干冷たい目で見てくる。最初に会った時に近いな、この目。

なので説明しつつスマホを見せる。で、俺の見解を述べるとイヴさんは首を傾げた。

「そうかしら？ まあ、切歌と調が今の状況に満足してないのは同意するけど……」

「何か納得出来ない事でも？」

俺がそう聞くとイヴさんは若干言い辛いのか顔を背けた。もしかして、自分の満足度がこんなに高くないと言いたいのだろうか？

……あり得る。

「イヴさん、もしかして自分の満足度が違ってるって？」

「っ?!」

大当たり。一瞬にしてイヴさんの顔が赤くなった。本当に気遣いの人だ。

「そっか。でも、悔しいけど参考程度だなあ」

「ですね。もし仮に満足度としても、数値には出来ません」

「そう、そこだよ。人の心なんて数値化出来ないのが定番だし」

俺の好きなアニメの一つにこういう台詞がある。確率は目安だ。後は勇気で補えばいいって。

つまり人の気持ちで可能性やら確率やらは変えられる。となるとこのステータスも曖昧になってくるなあ。

「なあタダノ。一ついいか？」

「どうした？」

俺がスマホを見つめて唸っているとヴェイグが俺の袖をくいくいと引つ張った。

何となくだけど父親に気付いて欲しい子供みたいだ。そんな事を思いながら俺はヴェイグの言葉を待った。

「単純な疑問なんだが、何故これに俺やエルはいないんだ？」

言われて気付いた。そうだ。どうして装者だけに限定されてるん

だ？　もしかしてそれもヒントなんだろうか？

「エル、今は大事なヒントだと思うんだが……」

「はい、きつとそうです。ここには僕とヴェイグさんもいます。なのに何故かステータスは装者の方達しかない。これは必ず意味があるはずです」

何というかエルが目キラキラさせている。まるで謎解きを楽しむ子供のようだ。

……出来る事ならそういう風にずっと働けたらいいのにな。

「私達だけと言う事は、共通点はギアがある事……。他に何かある？」

「そうだなあ……世界蛇と直接相對した」

「それは言うまでもないじゃない」

「いやいや、装者つて括りなら平行世界にもいるだろ？　ここにいないからってゲームには登場してたんだ。それに今回の事はほぼ間違いないく世界蛇絡みの因縁だ。なら、それも共通点にいれるべきじゃないか？」

俺の意見にイヴさんは腕を組んで手を顎へ当てた。如何にも考えてるって感じだけど、やっぱり美人は何やつても様になるなど実感。

「……そうなるとデュオレリックも当てはまるわね」

「ああ、そっか。ツインドライブ経験者ね」

「二ツインドライブ？」

俺が言った表現に三人揃って疑問符を浮かべた。何というか、本当にここで暮らし出してから家族感凄いな、イヴさん達。

「えつと、俺の好きなアニメから取ってきた言い方。正直デュオレリックだと分かり辛いんだよ。カツコイイのは認めるけどな」

「ツインという事は、二つですね。でもドライブには繋がらないような……？」

「ギアの限界突破がエクストライブつて表現するなら、二つの聖遺物同時使用で変わる姿なんだからツインドライブでもいいじゃないか」

「シンフォギアっ！　ツインドライブっ!!」とか言つて全身から炎やら雷やらを発生させて欲しい。

欲を言えば出力上げると炎の色が赤から青へ変わるとかも欲しい

なあ。

「……まあ分かり易いのは認めないでもない。で、他の共通点はないか?」

おおっと、ヴェイグに軽く流された。ま、今は余談をしている場合じゃないもんな。自重しよう。

「そうね………エル、何かある?」

「さっきの言うのならエクストライブになった事がある装者でしようか?」

「そつか。言われてみればそうかもしれない」

こう考えると意外と共通点多いな。これじゃ結局絞り切れない気がする。

この後も四人で考えたがこれと言った意見が出ず、そうしていると暁さんと月読さんが帰ってきた。

証明写真を撮りに行っていたらしく、帰宅して俺が居間に居るのを見ると露骨に微妙な顔をされたのだ。

正直結構傷付く。俺、ここまで嫌われるような事何かしたかな?

そんなにセレナちゃんやエルと仲が良いのは気に障るんだろうか?

あるいはイヴさんと親しげなのがいけないのか?

とにかく長居は止めておこう。今は色々複雑だろう心境の二人をそつとしてあげたい。

「イヴさん、とりあえず俺は部屋へ帰るよ。やっぱ怠いしさ」

「只野……ごめんなさい」

俺の行動の意図を察したのかイヴさんがどこか申し訳なさそうに目を伏せる。

いや、いいんだよ。今はいきなりこんな状況へ放り出された二人を優先してやって欲しいし。

「エル、これは返しておくよ。掃除、邪魔してごめんな」

「いえ、僕こそ寝る時間を減らしてしまつてごめんなさい」

「寝る?」

履歴書を手にテーブルへ行こうとしていた二人が足を止めてこちらへ顔を向けた。

その表情はどういう事だと言う顔をしていた。彼女達は俺の事を何も聞いてないんだろうか？ もしくは聞いたけど忘れてるのかもしれないな。

……どうか前者でありますように。

「只野はコンビニで夜勤をやってるのよ。覚えてない？」

「お前達が朝食後に食べたシュークリームは廃棄と言ってタダノの持ってきたものだぞ？」

その瞬間二人が何故か複雑な顔をした。あー、これはあれだ。そうだと知ってたら食べなかつたってやつだ。

「別にいいよ。廃棄の品は捨てる物だ。それで喜んでもらえたなら俺が夜勤とか覚えてなくても構わないからさ」

苦笑しながらそう告げて立ち上がる。イヴさんは何故かそんな俺を見て辛そうな顔をするのですぐにザババコンビへ顔を向けた。

「二人共、只野に謝りなさい」

「ちよつ、イヴさん！」

「こつちに来た時から気になっていたの。どうして貴方達はそんなに只野を嫌うの？ 彼は私達を」

「っ！ アタシ達はその人だけが嫌いじゃないデスっ！ 今のマリアも嫌いデスっ！ セレナも！ エルフナインも！ この家で暮らしてる全員が嫌いデスっ！」

暁さんのその言葉に俺だけでなくイヴさん達も言葉を失った。

「マリア、私達はここの事をほとんど知らない。響さん達から聞いたけど、それだって最低限。そこで聞いたのは日々の暮らしが厳しくて、好きな物もろくに買えない。幸せからは程遠いって……」

「なのにいざ来てみたら、何故かマリア達は幸せそうに暮らしてるじゃないデスかっ！」

「私達を向こうに置いて……」

「マリア達はここで幸せで楽しい暮らししてたデスかっ！」

「そ、そんな事は……」

イヴさんがたじろいた。そして俺もやっと分かった。二人は俺を嫌ってるんじゃない。俺を含むこの家の人間を等しく恨んでいるん

だ。

自分達が留守を預かって寂しい想いをしている間、イヴさん達が楽しく暮らしていたと、そう思っているんだ、彼女達は。

それをイヴさんは否定出来ないし、エルやセレナちゃんもそうだろう。どれだけこちらが苦しい生活をしたと言っても駄目だ。

今、この苦しい状況さえも平和であると言う一点でイヴさん達は幸せを感じる事が出来てしまう。それは目の前の二人も同じだ。

「私と切ちゃんはアルバイトが決まってお給料入ったら引越すから」

「っ!？」

「もう決めました。二人でやってく德斯っ!」

頑なな表情でこちらを見つめる二人に俺は言葉がなかった。まさかの発言だ。

「馬鹿言わないのっ! 貴方達、簡単に暮らすって言うけどどうやって部屋を借りるつもりよっ!」

「そ、そうですねよ! ここではお二人は戸籍などもない存在なんです!」

イヴさんとエルが正論で二人を思いとどまらせようとする。だが、それを聞いて二人は表情を苦々しいものへ変えたかと思うと……

「その時は、その時德斯!」

「いざとなったらどこかで男の人をお願いする」

「になっ!？」

俺とイヴさんの声が重なる。セレナちゃんがいなくて良かった。いたらこんな話聞かせられない。

それにしても男の人に、だって? 自分達の体を売るって、そういう事か?

「ふざけないでっ! そんな事してどうなるか分かってるの!？」

「大丈夫。部屋に入ったらギアで気絶させる」

「それに、いざとなったらケーサツを呼ぶって脅せばいいだけ德斯」

おいおいマジかよ。この二人ってこんなに恐ろしい事を考える子だったか?

月読さんはやや物騒なところがあるのはGで知ってるけど、暁さんはまだ常識があつたと思うぞ。

イヴさんもさすがに言葉を失っていた。多分だけど精神的にかなりショックを受けてるはずだ。自分のせいで二人が自棄になつてると思つてゐるだろうし。

「タダノ……」

と、そこで俺の袖をヴェイグが引つ張つてきた。視線を動かせばヴェイグは俺じゃなくてザババコンビを見つめている。

「どうした？」

「……今のあの二人、とても嫌な匂いがする」

どこか信じられないような声で告げられた言葉に俺は息を呑んだ。

まさか、今のあの二人は悪意に操られてる？ もしそうだとすれば遂に直接攻撃に出たか！

だがどうすればいい？ 俺に出来る事はないか？ と、そこで思い出した。

今、この世界にはそういう良くないものを払える存在がいるって事に。

俺はスマホを取り出すと翼の番号をコールする。

頼む……早く出てくれっ！

『もしもし？』

「っ！ 翼か？ 今どこだ？」

俺はザババコンビから目を逸らす事なく小声で話す。

『今ですか？ そろそろアパートですが……』

「すまないが小日向さんを連れてイヴさん家まで来てくれ。出来るだけ早く」

『っ……分かりました！』

そこで通話は終わる。俺の言い方で緊急事態だと伝わったらしい。ならば後は小日向さんを連れて翼が来るまでザババコンビを逃がさないようにするだけだ。

「タダノ、どうするつもりだ？」

「多分だけど今の二人は悪意に操られてる。だからあれだけ攻撃的な

んだ」

「……だがそうだとどうする？」

「今二人を戻せそうな子呼んだ。それまであの二人に逃げられないようにしたい」

「足止め、か。分かった。玄関は俺に任せろ」

ヴェイグはそう言う俺から離れて居間を出て行った。多分だけど玄関の鍵を閉めに行ったんだ。翼達が来るまでは誰も通す必要がないからな。

……後でお礼を言つとかないとな。さて、なら……。

「エル、一つ教えて欲しい事がある」

「……何ですか？」

二人に嫌いと言われた事が堪えたんだろう。若干涙目になってる。あく、慰めてやりたいけど今はそれも出来ない。ごめんな。

「ギアペンダントって神獣鏡の光線浴びたら不味い？」

「……………はい」

「そつか。じゃ、それを何とかするしかないな。エル、そのまま玄関の外へ行ってくれ。で、翼と小日向さんが来るから、到着次第居間へ来る前にギアを展開するように言ってくれ」

「ギアを…………？」

「頼む」

「わ、分かりました」

少しだけ慌て気味にエルが玄関へと移動する。その背中を少しだけ微笑みながら見送った。

にしても、凶払いの攻撃がギアを消滅させるのは知ってたけど、ペンダントでもダメかあ。

さて、じゃあどうするか。ザババコンビはイヴさんへ突き放すような顔をしている。

でも、どこか悲しそうにも見える。まあ、そうだろうな。二人にとつちやイヴさんは姉であり苦楽を共にした仲間だ。そんな相手が悲しみ苦しむ様を見て心が痛まぬはずはない。

まだこれなら何とかなるはずだ。悪意が完全に二人の心を支配し

ていないのなら、きつと。

「とにかく、もう私達のする事に口出ししないで」

「アタシ達はアタシ達の力で幸せになってみせるんデス」

そう言つて二人はイヴさんへ背を向けるとテーブルのある台所へ動き出した。その瞬間イヴさんが崩れ落ちそうだったのでかさず駆け寄る。

「イヴさん、大丈夫か？」

「…………どう、見える？」

そう言つて俺へ顔を向けたイヴさんは、一瞬にして生気を失つたように見えた。

「…………リンカーなしでガリイとやりあつた時よりはマシ」

「ふふつ、そんな事もあつたわね。そう、あの時よりもマシか…………」

力なく笑うイヴさんだけど、少しだけ、ほんの少しだけ生気が戻つた気がする。

「イヴさん、聞いて欲しい。ヴェイグが言うには今の二人からは嫌な匂いがするつて」

「…………何ですつて？」

目に光が戻り、顔に輝きが戻る。凄いな、思つた以上に効果靚面だ。

「静かに聞いてくれ。今、ここへ小日向さんと呼んだ」

「未来を？ ……つ、神獣鏡ね」

「そうだ。それがどれ程効果があるか分からない。でも確実に悪意が苦しむはずだ。そのためにも二人のギアペンダントを何とか守らなといいけない」

「……………考えがあるなら聞かせて」

本当にこういう時の女性つてのは頼りになる。いや、装者かな。理解力と判断力が高すぎるだろ。

「いいか？ まずは…………」

俺の話聞いてイヴさんはどんどんその表情を凛々しくしていく。

「…………て事、出来る？」

「誰に言つてるの？」

何とも頼もしい返事を頂きました。と、そこで俺のスマホが震え

る。

「もしもし?」

『只野さん、今到着しました』

まさかの連絡が入った。さすがはこういう緊急事態に慣れてるだけあるや。

「エルから話は聞いた?」

『はい。ギアを展開して欲しいと』

「そうなんだ。で、可能なら……」

簡単に翼にして欲しい事を告げる。で、小日向さんにもだ。

その説明が終わるか終わらないかでテーブルで履歴書へ写真を貼っていたら二人が動き出すのが見えた。

不味い。悪意にこちらの動きを気付かれたら厄介になる可能性がある!ある!

「とにかく頼む」

返事を待たずに通話を終えて俺は廊下へ顔を出した。

「ヴェイグ!」

「分かった」

傘立てに乗ったヴェイグが玄関の鍵を開ける。成程、あれで鍵までの高さを埋めたのか。

ヴェイグが鍵を開けると同時に引き戸が動いて翼が土足のまま駆け込んでくる。小日向さんはさすがになって、おいおいあの子も同じ事するつもりか?

——Imyuteus amenohabakiri tron
……。

——Reishen shoujingrei zizz
l……。

そしてまさかの土足でイヴさん家へ上がる寸前でのギア展開。
俺は急いで顔を引っ込めると同時にイヴさんへ叫ぶ。

「イヴさんっ!」

——Seilien coffin airgatlamh
tron……。

白銀の輝きが身を包み、一瞬にしてイヴさんは手にした短剣を鞭のようにしならせる。

「ふっ！」

「えっ!?」

「お見事っ！」

で、こちらへ向いた二人から首元のペンダントを弾き飛ばした。

そこへ翼が両手に刃を持って現れた。

「翼っ！」

「分かっているっ！」

イヴさんの呼びかけに短く答え、翼は視線をザババコンビへと向ける。

立ち上がった二人は窓を背にしているおかげで影が手前側だ。

それを見て翼は迷う事無く手にした二刀を投げ放つ。

「はっ！」

影縫いっ！ そんな墨文字が見える気がした。

「っ?!」

「小日向、頼むっ！」

「はいっ！」

影縫いで動けなくなったところを神々しい光が狙う。その光は不思議な事に台所の物を一切壊す事無く二人へと向かって行く。

「ん？」

だが、その光が当たる寸前で二人から黒いもやのような物が逃げ出すように見えるのが見えた、気がした。

何せそのすぐ後で神獣鏡の光線が二人の体を包み込むように貫いたからだ。

あれ、悪意なんだろうな。まあきつと分身か欠片とかのもんだろう。もし本体だとしたら、かなり相手は弱ってる事に違いないし。

「……やったか？」

「翼、それフラグだから口にしちやダメだ」

「はい？」

お約束の台詞を翼が無意識に言うものだから思わずツッコんだ。

俺のツツコミに翼だけでなくイヴさんや小日向さんも首を傾げるけど、ホントにこういうのつてそうなんだって。

「つと、そうだ。ザババの二人は？」

光が消えた後には気を失うように倒れている暁さんと月読さんの姿があった。

「無事みたいね」

「ヴェイグ、匂いはする？」

「も、もうしないそうですっ！」

聞こえてきたエルの声に全員して安堵の息を吐く。どうやら予想通りだったらしい。

「これで一件落着ね」

「そのようだ。やはり悪意絡みか……」

イヴさんが安心したような笑みを浮かべてギアを解除した。翼もそれを受けてギアを解除しようとしたらしい。でも……

「ストップ！ その前に玄関へ戻って。で、靴を脱いできて」

「わ、分かった」

「未来もよ。悪いけどこればっかりはね」

「は、はい」

何というオカン。きつと後で掃除するのが嫌なのだろう。

そう思つて眺めていると俺の方へもイヴさんの鋭い視線が飛んできた。

「な、何？」

「只野、貴方の機転のおかげで助かったわ。でも、ちゃんとその事の責任は取ってくれるわよね？」

そう言つてイヴさんが指さしたのは床に刺さった二つの刃。うん、まあ俺が影縫い使つてつて頼んだからな。

「……メジャーってある？ 後、せめて床板代は折半してくれ」

どうやら今日は出勤前に大工の真似事しないといけないらしい。とほほ……。

「ごめんなさい（デス）……」

意識を取り戻した私と切ちゃんが揃って頭を下げると、どこことなくみんなが笑ったような空気が流れてきた。

それでも頭を上げる事はしなかった。だって許されてないから。それに、本当に少しだけ只野さんへ嫌な気持ちを抱いてたのは事実だし。

「こつちこそ申し訳ない」

「えっ？」

聞こえた言葉で反射的に二人で頭を上げるとそこにはしっかりと頭を下げている只野さんがいた。

「今回ののは、君達の抱えてた闇を悪意が増幅させたんだ。その原因は俺にもある。君達だけが悪い訳じゃないよ」

悔やむような声に私は切ちゃんと顔を見合わせる。そして同時に頷いて只野さんの膝に置かれてる手へ手を乗せた。

「頭を上げてくださいデス」

「私達、只野さんに嫉妬してました。本当なら私達がマリア達とそうしてきたいのにつて」

「切歌……調……」

マリアが少しだけ驚いた顔をする。ごめんなさいマリア。私達はマリア達がここで苦勞してるって分かったけど、それでも楽しそうに家族みたい暮らしてるって分かって嫌な気持ちにもなったんだ。

「そうデスね。でも、だからってアタシ達は只野さんやマリア達に酷い事を……」

「いいのよ。あれも貴方達が本心から言った訳じゃないもの」

「はい。むしろ悪意が言わせたって分かってホツとしました。お二人に嫌われたのかと思っただけ……」

じわつとエルフナインが瞳を潤ませるのを見て私は驚いた。

エルフナインってこんなに涙もろくなかったはずなのに。

「わわっ！ な、泣かないで欲しいデスよ！」

「ご、ごめんなさい。安心したら涙が……」

「ごめんねエルフナイン。もう絶対悪意なんか操られないから」

「デスデス。だから笑って欲しいデスよ」

「……はいっ！」

私と切ちゃんがそう言うのとやつとエルフナインが微笑んでくれた。何だろう、以前までのエルフナインよりも笑顔が可愛い気がする……？

「それにしても、まさか直接行動に出るとはな……」

「そうね。やはり力を取り戻しつつあるのかしら……」

「どう思いますか、只野さん」

「貴方の意見を聞かせてくれる？」

翼さんとマリアが真剣な顔で只野さんを見つめた。どうやらここでの司令は只野さんみたい。

そこでやつと只野さんが頭を上げた。この人は、もしかしたら本当に司令みたいな人なのかもしれない。

もしそうならマリア達がこんな信頼するのが分かる。そして、私達へ頭を下げてくれたのも。

「……おそらくだけど取り戻してはないと思うよ」

「どうしてですか？」

未来さんの言葉に只野さんは私達の首元を指さした。

「ギア？」

「これがどうしたデスか？」

「もし悪意が二人を完全に操れるのならギアを使うはずだ。でも、そうしなかった。出来たのは精々二人の心の闇を増幅させて操る事。様子見なら分かるけど、だとすればお粗末すぎる」

「どうしてだ？」

「簡単だよ。ヴェイグが匂いを感じ取ったから確信が持てただけで、それがなくても俺やイヴさんは違和感を抱いてたんだから」

「そう、ね。たしかに過激な事を言っていたもの」

思い出すと顔が熱くなる。わ、私、知らない男の人へエッチな事をしませんかって誘いをしようと思ってた。

「これ、様子見ならむしろ誤魔化すだろ？」

「そうですね。些か拙速が過ぎると私も思います」

「きつとこつちの状態を監視しているんだ。で、体制を整えられると

不味いから先手先手で潰せそんな事から動いている」

「そうか！ 上位世界との行き来ではなく平行世界との行き来を封じたのと一緒ですね！」

エルフナインが言った言葉に只野さんは笑みを浮かべて頷くとその頭を優しく撫でた。で、エルフナインが嬉しそうに笑ってる。まるでお父さんに褒められたみたい。

「そういう事。相手はその時の自分に出来る事で最大の効果を出せる事を優先してる。ベアトリーチエとは真逆だ」

「こうなると、以前只野さんが立花へ言った事は本当だったのですね……」

「翼、どういう事？」

「以前只野さんが私達三人へ教えてくれたのだ。ベアトリーチエの真実を」

凄く気になる。あの世界蛇の巫女の事を私達の中で一番詳しいのは多分この只野さんって人だ。

マリアだけでなく私や切ちゃん、未来さんやエルフナイン、ヴェイグまで只野さんを見つめてる。

見つめられた只野さんはどこか気まずそうに頭を掻いて息を吐いた。

「……えつとな？」

そこからの話を聞いて私達は言葉がなかった。あの子が悪意と戦っていたなんて思いもしなかった。

それに響さんへの事もあの子が頑張った結果と言われたら今の私は納得するしかない。

だって、私は見事に悪意の意のままにされたから。マリアやセレナ、エルフナインまでも嫌いになっていた。

それに完全に抗うなんて無理。だから只野さんの話は凄く納得出来た。

「あの子、すつごく頑張り屋さんだったデスカ……」

切ちゃんの眩きがみんなの眩きだった。

未来さんもエルフナインもマリアもヴェイグもみんな同じ顔をし

てた。

フィーネの巫女でありながら世界蛇の巫女にもなって、その体を凄まじい悪意に蝕まれても精一杯抗った女の子。それが今の私達の中のベアトリーチエになった。

「とりあえず、今は不平不満を貯め込まないでくれ。どんなささいな事でもいい。いや、ささいな内に吐き出してくれ」

その只野さんの言葉に何故か翼さんとマリアが微笑んだ。だけど私達はそんな表情は出来ない。

「悪意は君達の心の闇を狙ってる。いつもは、抱え込んで耐え切れなくなりそうならとか、自分じゃどうしようもなくなったらとか、そうしてるかもしれない。でも、今回それをすればそれを悪意に利用される」

そう告げる只野さんはどこか司令に重なる。声を荒げる訳じゃない。だけどズンってお腹の底に、心に響く感じがする。

「いきなり今までと違った行動をと言われても難しいとは思う。でも、して欲しいのは不満や文句を、要は嫌な事や気になった事を口に出して教えて欲しいって事だ。俺じゃなくてもいい。イヴさんでも翼でもクリスでも天羽さんでもいい。響、小日向さん、エルやヴェイグ、セレナちゃんだって構わない。とにかく吐き出してくれ。最初は小さな影も、放置すれば大きな闇になる。響が植え付けられた悪意の種類。それと同じだ。芽吹く前に取り除いていこう。みんなで」

そう言って只野さんは笑みを浮かべた。とっても優しい笑みを。

「はいデスっ！」

「はい」

「はいっ！」

「分かった」

「分かっています」

「ええ」

私以外のみんなが返事していく。すると只野さんが私を見て微笑んだ。

「月読さんも、いいかな？」

「っ！ は、はい」

いけないいけない。こんなにも真つ直ぐ目を男の人と合わせた事なかったからビックリしちゃった。

「ありがとう。俺もみんなへ愚痴や不満を言う事があると思う。そんな時はケースバイケースで優しくしたり突き放したりしてくれ」

最後にそう言つて只野さんはその場から立ち上がった。

「じゃ、俺は台所の床板修理を始めるよ。ヴェイグ、手伝ってくれるか？」

「任せろ。そういう事は得意だ」

「頼もしいな。じゃあ頼む」

揃つて台所へ向かう二人を見送る。何て言うか、種族が違うのに全然そんな感じがしない。只野さんとヴェイグって本当に仲が良いんだつて分かる。

「はく……只野さんとヴェイグって仲良ささんなんデスね」

切ちやんがまったく同じ事思つて笑っちゃう。でも、そう思うよね。

「ええ。これから二人もそうなればいいわ。今のヴェイグは私達に好意的よ」

「ホント（デスカ）？」

「ああ。実際今も二人が名前で呼んでも気にしていないだろう？」

「ヴェイグさんは言っていました。今の状況はどこか昔を思い出すつて」

「昔？」

「はい。ヴェイグさんが誰からも名前で呼ばれていて、嫌な匂いがまったくしない頃だそうです」

その言葉だけで分かった。今のこの環境がヴェイグにはとつても嬉しい事なんだつて。

幸せは人それぞれで言うけど、この暮らしてもヴェイグは幸せなんだ……。

ううん、きっとそれは私もだ。だからこそ私は悪意に利用された。こんな幸せな場所でズルいつて、そう思ったから。

「そうだっ！ イヴさん、ちょっと頼みがあるんだけどいいかな！」
「何よ？」

そんな事を考えていると只野さんがこっちへ顔だけ出してマリアへ話しかける。

何というか、このやり取りもどこか家族みたい。

「実はいつになるか未定だけどこのモニターとゲーム機貸して欲しいんだ！ 怪獣映画を響や天羽さんとみる約束をしてさー！」

「怪獣映画？」

「そっ！ ゴジラVSスペースゴジラっ！」

「『ゴジラっ!』」

思わずマリアや切ちゃんの声が重なる。一方翼さんと未来さんは首を傾げる。

無理もない。だってあの世界に行ってたのは私達三人と奏さんに響さんだから。

「ぐ、ゴジラが映画、デスか？」

「そうなんだよ！ こっちじゃ君らと一緒にゴジラも創作物の一つ。グリッドマンとかと一緒にさっ！」

「タダノ、ちゃんと押さえててくれ。寸法がずれる」

「あ、悪い……」

思わず笑う。すると皆笑ってた。ヴェイグの苦い声と只野さんの申し訳なきような声にだ。

でも、本当にここは凄い。上位世界。神様の世界って表現は間違っていない気がしてきた。

「調、調、これは詳しい話を聞かないとデスよ」

「うん、そうだね」

きつと只野さんならモスラの事も知ってるはずだ。私の知らない事も教えてくれると嬉しいな。

そんな事を思いながら私は切ちゃんと一緒に台所へと向かう。ヴェイグの助手として色々と言われて申し訳なきような顔をしてる、不思議な人を見つめながら……。

切歌と調が悪意に操られていた。この事はすぐに響達へも伝わり、同時に仁志の言葉も伝わる事となった。

どんな小さな不満や愚痴でも溜め込まず吐き出して欲しい。その言葉に響達はらしいと思つて微笑んだ。

そして早速愚痴や不満を吐き出した者がいた。誰であろう仁志である。

——オーナー、夕勤から昼勤への不満が、夜勤から夕勤の不満が、朝勤から夜勤への不満が、そして昼勤からは朝勤への不満が出てます。これ、俺が対処してもいいですか？ それともオーナーが大鉈振りますか？

その相手は響達ではなくオーナーだった。

実は夜勤からの不満はないに等しく、実際は他の三つからだけであつた。それでも仁志は敢えて夜勤も不満があるとする事でオーナーの逃げ道を塞いだのだ。

夜勤は我慢してくれてるという、そんな逃げ道を。

勿論仁志はオーナーがそんな事を言うはずがないと分かっていたが、全時間帯から不満が上がるとする事でオーナーの決断を迫つたのである。

結果、オーナーと仁志の話し合いが行われ、仁志が店長としてその不満へ対応する事となった。

要は飴と鞭である。飴をオーナーがこれまで通り担当し、鞭を仁志が受け持つというものだ。

当然仁志のやり方への反発も出たが、それに対して仁志は他の時間帯も不満を持っている以上特別扱いはしないと突っぱねた。

この結果、オーナーが仁志へ文句のある者達と話をし、結局昼勤が一人辞め、朝勤がシフトを減らしたいと申し出てきたのだ。

が、飴と鞭は主な役割分担であるため……

——なら辞めていただいて構わないですよ。こちらとしても嫌な思いのまま仕事させるのは申し訳ないです。

そうオーナーがやんわりと朝勤へ譲歩はしないと告げ、結果朝と昼に欠員が出てしまった。

——オーナー、朝と昼の人員についてですが、ご相談があります。それを受けて仁志はこれ幸いと調と未来を斡旋したのだ。勿論本人達へは相談済みであり、朝勤を調が、昼勤を未来がそれぞれ面接を受ける事となる。

ちなみに今回はクリスが未来を、響が調をそれぞれ誘った形で。それに合わせて調と未来は当初の設定を変更されていた。

調は両親を早くに亡くしたため親戚の響の家へ引き取られた事もあり、高校生になっても小遣いをもらうのが心苦しくバイトを探していた事に。

未来は陸上をやっていた事を利用し、それで怪我をした事で人生の軸としていた陸上を辞める事となったために高校を中退し、とりあえず何か収入をと探していたところを親しいクリスから声をかけられた事にした。

——君が月読調さん、か。よく来てくれたね。

——はい。えっと、よろしくお願ひします。

やや物静かな事もあつてか調の設定はオーナーにはらしく見えたようで、自分の交遊費などは自分で稼ぎたいというしつかりした想いに合格とし……

——そっか。陸上で怪我をね……。

——は、はい。でも、今はそれで良かったって思ってます。記録も伸び悩んだのですっぱり諦める事が出来ました。

実体験を踏まえての言葉は説得力があり、加えて未来の強い意志力が宿った瞳にオーナーは大丈夫だろうと判断。こうして見事二人は仕事を得る事になった。

さて、そうなると残る一人が問題である。只野の伝手は全滅。加えてこれと言った技能はない彼女が選んだバイト先は……

——いらっしやいませデス！ えっと、ポイントカードはお持ちデスか？

駅前の本屋兼CD及びDVDレンタル店であった。

そこそこの大きさのそこで、夕方五時から夜十時の五時間で週三の勤務である。

書店側の勤務となった切歌は勤務中は漫画、休憩中はCDやDVDなどに触れられるため天国だった。

あと、切歌と調がそれぞれの勤務場所を異なる場所にしたのは仁志とマリアによる入れ知恵だった。

——同じ職場だと時間帯が同じだから一緒に休むの難しいぞ。

——常にどちらかがバイトをしないといけなくなってもいい？

こうして知らず切歌と調もその距離感を見つめ直すように促され出したのである。

最初こそ互いに相手を心配した二人も、二人でいない時間があるからこそ二人でいられる時間が楽しく嬉しいのだと気付き出す事となるのだ。

そして三人が仕事を得た事で収入面は安定感を増し、加えて翼達歌姫三人の動画も順調に再生数を稼いで広告収入に貢献。

更に「戦姫絶唱シンフォギアチャンネル」も登録者数が二十五万を超えて三十万へと到達。この頃には広告収入もすずめの涙から脱する事に成功していた。

ただ、仁志が期待した事は起きなかった。三人の歌姫によるドライディーヴァが歌う「RADIAN T FORCE」はその再生数こそ初の三桁を記録したものの、それによる波及効果などは一切なく肩透かしを受けた結果で終わったのだ。

それを仁志は楽曲の問題かもしれないと考えていたが、作詞作曲など出来る訳もない彼が何か手を打てるはずもなく、結局この件は後回しとなってしまふ。

それと並行して仁志の周囲にも小さな、けれど大きな変化が起きる。

——な、なあちよつと相談があるんだけどいいか？

仕事帰りの仁志を待ち伏せてのクリスの訪問。そこで彼女はこう言ったのだ。

——あ、あんたの事、さ。その……二人きりの時だけ只野って、呼んでもいいか？

クリスが名前で誰かを呼ぶなど仁志の中ではフィーネのみ。つま

りはそれだけ特別な扱いだと瞬時に理解する。ただ、彼はある意味では鈍感だったため……

(そっかあ。俺、クリスからフィーネぐらい信頼してるって言われたのかあ)

と、そんな有様である。響が辿った道をクリスも行く。そう思われたのだが、クリスは同じ轍は踏まない女であった。

——で、できや？ バイト終わりは毎朝肩もみさせてくれよ。疲れてる店長さんを慰労したいって訳だ。

そんな事ならむしろ有難くと、仁志が頷いたのを見てクリスは攻勢に出たのである。

まず普通に肩もみをある程度して仁志の警戒心などを薄れさせたクリスは、肩もみを終えた瞬間そつと彼へ抱き着いたのだ。

——く、クリス?!

——だ、ダメか？ その、さ、あたしも不安なんだよ。只野といると、安心出来るっていうかさ。

胸を意図的に押し付けながらの甘え。自分の温もりや匂いを仁志に覚え込ませ、異性として強く意識して欲しいという恐ろしい行動であった。

しかもクリスはそれをほんの数秒で終わらせるとさっさと部屋を出て帰ってしまう。残された仁志は当然ながらその性欲を持ってあます訳で……

——駄目だ……これをやったら俺はもうクリスと顔を合わせられない……っ！

その性欲を昇華するように運動エネルギーへと変えたのである。まず室内で腕立てなどの筋トレをやって汗を掻き、その後タオルを水で濡らして汗を軽く拭き取ってから死んだように眠ったのだ。

これに壁に耳を当てて仁志の行動を把握しようとしていたクリスが勘違いをしてしまった。

(あ、荒い息でしばらく何かやってから水を出して……気持ち良かった……だっ!?)

そこだけで考えれば計画通りではあるのだが、残念ながら真実は彼

女の想像とは真逆である。

この結果、むしろクリスの方がより意識する事となり、仁志への抱きつきを継続する事となって彼の健康へ計らずとも貢献する事となった。

その裏で仁志がやはりクリスは寂しがり屋の甘えん坊なのだなど思い出していると気付かずに。

響は響で少しだけ女としての強かさを身に着け始めた。一番はやはり仁志とシフトが重なり別れの挨拶をする時だろう。

周囲を確認し誰も見ておらず、聞いてもない時を狙って……

——じゃ、お先に失礼しますね仁志さん。

そう照れくさそうに笑って帰るのだ。

まるで本当に彼女となったかのようなそれに仁志も顔をやや熱くしながら対応するも、やはり元々可愛いと思っていた少女が少しだけ大人の女性となり出した色気にあてられ動揺する事が増えていったのだ。

このままでは不味いと判断した仁志は朝のランニングで公園へ向かった響をそこで待ち伏せ、翼やクリスへ彼女を説教したいから二人にして欲しいと頼んだ。

——あ、あの、仁志さん？

——響、俺は言ったよな？ 外では駄目だって。約束を守れないならもう練習には付き合えない。

公園の少し大きな木の下で陽射しを避けながらの会話。その発言に響は自分がやり過ぎたと反省するも、仁志へだとしてもとばかりに口を開こうとしたのだ。

が、それは仁志の両手が後ろの木の幹へ突き出された衝撃で出せずに終わる。

響の視界にはやや凛々しい顔の仁志。それを理解したところで

……

——呼ぶなどは言わない。むしろ呼んで欲しいぐらいに嬉しいが、時と場所を考えてくれ。いいな、響。

——は、はい……。

(どうしようっ?! い、今の仁志さんすっごくカッコイイよお!)

静かにだが強くはつきりと釘を刺された上に少女漫画風の壁ドンまでやられ、響の乙女心はショート寸前となり、より一層ときめいてしまう事となる。

そんなこんながありながら、根幹世界が時間停止されて半月以上が経過したそんなある日から話は始まる……。

「皆様っ! お飲み物はお持ちになりましたでしょうかっ!」

「はい (おう) っ!」

場所はいつものルーム料金で利用する安いカラオケ——ではなく時間辺りで料金を支払いドリンクバー代も含まれるような駅前の学生御用達のそれなりの店。

そのこのパーティールームと呼ばれる部屋に仁志達の姿があった。誰一人欠ける事なく揃い、その手には受け付けで渡されたプラスチックのコップがある。

一人ヴェイグだけがホット用のカップを持っている理由はお察しというものだ。

根幹世界の時間が止まり、全員に少なからず暗い気持ちが漂っているとと思った仁志がマリアと相談した結果、ガス抜きも兼ねて騒ぐ事にしたのだ。

今は気持ちを暗くする方が不味い。そう誰もが思っただけでその集まりへ反対する事なく今日に至ったのだから。

そして仁志の呼びかけに元気よく笑顔で返すのはセレナ、エルフナイン、ヴェイグである。

「まったく、テンションたけーな」

「仕方ないよクリス。只野さん、今みたいになって初めての連休なんでしょ?」

「うん、オーナーへ頼んで何とかしてもらったって」

まだ始まっていないのにハイテンションの仁志を見て話すクリス、未来、響。

「そのためにオーナーが一日だけ深夜やる事になりましたけど」

「正確には必要ないけど心配なんだよ。荷物の少ない日は週一の作業が多いからね。あたしはまだ先輩程信頼されてないって事さ」

「そうなんデスカ……。それにしても深夜のコンビニはホント大変デスね……」

三人の会話を聞いて苦笑する調、奏、切歌。

「よく考えるところの中でアルバイトしてないのって装者だと貴方だけなのね」

「……言うな。地味に気にしてるんだ、これでも」

聞こえてくる話にニヤリと笑うマリアとそれに苦い顔を返す翼。

そう、今日は仁志が店長を目指し出して初めての連休初日であった。それを利用しバイトのある全員が休みを合わせ、延びに延びた未達の歓迎会を行う事になっていたのだ。

「それではっ！ 小日向さん、暁さん、月読さんの就職と！ 戦姫絶唱シンフォギア”チャンネル登録者数三十万人突破、そして俺の連休を祝してっ！」

「そこも含めるのかよ……」

「含めるってのっ！ じゃ、かんぱーいっ！」

「「「「「「「かんぱーい（デース）っ！」「「「「「「」」

仁志のテンションに笑う者、苦笑する者、やや呆れる者。様々に反応は分かれるがそれでも嫌悪感などを抱いている者は皆無だった。

本日は八時間のフリータイムであり、テーブルには既に大皿の菓子盛り合わせや揚げ物の盛り合わせなどが置かれている。

それらは全て仁志が手配したものだ。それだけ彼がこの日を楽しみにしていた事が窺えるが、それは他の者達もなので誰も何か言う事はない。

「で、誰が歌う？」

ウーロン茶を飲み干した仁志が周囲を見回して問いかける。

彼にとってはあの奏の歓迎会以来のカラオケだ。

マリア達の歓迎会は話だけ聞いていたが、彼もいつそ一緒に行くだけ行けば良かったと後悔するぐらい盛り上がった事は聞いていた。

「ここは私としては只野さんをお願いしたいですっ！」

「俺？」

響の言葉に仁志は自分を指さす。

「そうですね。只野さん、ここは暁や月読が喜びそうなものを」

「この子はあんたの趣味が刺さらないからな」

「もしくはノリがいい奴でもいいよ。みんなでサビだけは盛り上げられるやつ」

既に仁志とのカラオケを経験済みの三人からの意見に周囲は首を傾げたりあるいは苦笑したりと反応する。

そうなれば仁志としても考える。単なる趣味に走るのか、それとも場の盛り上げに走るのか。

(うーん……この場合は……両方だなっ！)

そして彼が選ぶ答えは一択である。諦める事無く両方を取るのだ。

流れ始めるのは“Life is SHOW TIME”という曲。誰も知らないそれに首を傾げるも、すぐに画面には一人のヒーローが映し出される。

「な、何デスかあれ!？」

「変わった顔……」

そのヒーローの名は仮面ライダーウィザード。そして仁志が歌い始めると彼女達はその映像と歌詞の世界感に息を呑む事となる。

「まるで月と太陽」

最初の方で調と切歌を連想させるフレーズが入り……

「昨日今日明日未来！ 全ての涙を」

映像はヒーローが似たような力を使う存在に苦戦し、強化体のスタイルの違いの分身まで出現させるも敗北する場面が流れ、更なる強化体への変化でその相手との再戦を勝利したかと思えば、その姿さえ勝てない最後の敵に追い詰められるも諦めず従来の姿で敵から取り戻した希望の力でトドメを刺すという、そんな王道のストーリーが四分程に圧縮されていたのだ。

「宝石に変えてやるぜっ！」

最初は聞いていただけの響や奏も、すぐにサビで入れる場所を理解し歌い始めるとそれにクリスや翼、更には切歌やエルにセレナなども

参加し、ラスサビでは全員での大合唱。

希望溢れる歌詞とノリの良い曲調。それに何より全員で歌うという楽しさに響達は笑みを浮かべたのだった。

「ふ〜っ……どうだった？」

「只野さんっ！ これ、凄い好きです！ ウルトラマンに負けないぐらい好きですっ！」

「只野さんらしい歌ですね。そしてあのラストのサビ前のフレーズは私達舞台上に立つ者は同調するしかありません」

「だけどショーは待ってられない」

「幕が上がればやり切る終わりまで、だものね」

噛み締めるように奏とマリアが告げる。だが、そんな二人と違ってテンションの高い者は可能ならば仁志へぶつかりそうな程身を乗り出していた。

「只野さんっ！ あれっ！ さっきの最後はどういう事デスかっ！」

「兄様っ！ あの緑の怪物が変化したのは一体どうしてですか!？」

「切ちゃん、どーどー」

「エル、落ち着いて。ね？」

元々男の子寄りなモノが好きな傾向にある切歌と、仁志のせいで少しずつ特オタへの道を知らず歩き出しているエルフナイン。

そんな二人をそれぞれの保護者の立場が宥めていた。ただ、彼女達も気になっていない訳ではない。

「詳しい話をしたいけど、それは時間がかかるので端的に。まずエルの質問の答えは劇中で賢者の石と呼ばれる物を吸収したから。暁さんの質問の答えは、その賢者の石をウィザードが取り返してそれが変化した指輪の魔法で最強の必殺技を使えたってとこ」

「本当に端的に説明したわね……」

それは物語の終盤に関わる大事な事じゃないの？ そんな風な表情を見せるマリアだったが、仁志はそれにしたり顔を返した。

「気になるのなら暁さん、いつかレンタルで見てごらん。仮面ライダーウィザードは名前の通り魔法使いのヒーローなんだ」

「仮面ライダーデスね。今度バイトに行ったらチェックしておくデ

ス」

「あと、作品の根幹を表す言葉も教えておく。魔法があるから絶望しないんじゃない。絶望しないから魔法があるんだ」

「おおっ！ 意味が分からないデスが凄くカッコイイデス！」

「切ちゃん……」

瞳をキラキラさせる切歌をやや調が呆れた表情で見つめる。

だがそうなっているのは彼女だけではなく……

「絶望しないから魔法がある、かあ……」

「響……」

「ダメだ。こいつはこういう言葉にバカみてーに弱い」

キラキラではないが感心している響を未来とクリスが呆れた表情で眺めていたのだ。

「うし、じゃあ次は誰？」

「なら俺が歌う」

その瞬間全員がどよめいた。

「ヴェ、ヴェイグさんが？」

「ああ」

「何を歌うんですか？」

「まあ見てろ。セレナ、その機械を貸してくれ」

「あ、はい」

デンモクを手に操作を始めるヴェイグ。そのどこかほっこりするような光景に誰もが笑みを浮かべる。

やがて入力が終わったのが彼は満足そうに息を吐いてマイクを手にした。

「……特捜エクシードラフトっ!? ヴェイグ、何て渋いチョイスをつ
！」

曲名が出た瞬間仁志がテンションを一気に上げる。響達一部の者も知ってはいるため若干の驚きを浮かべていた。まあ、半数以上が知らないため首を傾げてもいたが。

「これで歌われてる事が俺は好きだ。タダノ、良かったら一緒に歌うか？」

「ならサビのエ〜クシ〜ドラア〜フト、だけ」

「分かった」

「ふ、二人が何を言ってるのか全然分らない……」

「セレナ姉さん、僕もです……」

そうして始まる本編映像と曲。ヴェイグが気に入ったという意味はそれからすぐにセレナ達にも分かった。

優しい歌詞に希望や夢、願いと言ったものが込められ、それはヒーロー自身の事だけではなく見ている子供達へ向けられたものもあると分かったのだ。

何よりレスキュー、つまりは救命を歌ったものである。それは戦う事ではなく救う事へ重きを置いたヒーローだと分かったためだった。

「作ってくれよ。優しい未来」

ヴェイグの歌声は朴訥としながらもどこか優しいもの。その歌声に誰もが驚き、そして笑みを浮かべた。

サビのヒーローの名を歌うところだけに仁志が参加していたが、最後には響なども歌いヴェイグはそれに嬉しそうに目を細めて歌は終わった。

「ヴェイグさん、歌上手です」

「うん、驚きました」

「そ、そうか」

一緒に暮らしている少女二人から褒められ照れながらヴェイグはマイクを置いた。

その姿を見て誰もが微笑む。何せここにいる者達はヴェイグがシリウスへ取った態度を知っている。それから考えればかなり丸くなったと分かるためだ。

「ならここらであたしがいくか」

「よっ！ 待ってました！」

囃し立てる仁志の言葉に誰もが苦笑する。何故なら奏は満更でもないように笑みを返していたのだ。

「ヴェイグがそれを歌うならあたしはこれだ！」

流れ出すのは「特警ウインスペクター」という所謂レスキューポ

リスと呼ばれる三部作の一作目OPである。

ちなみにヴェイグの歌った“特捜エクシードラフト”は三作目にあたり、どちらも仁志が貸したメタルヒーローベストに収められていた。

「心を突き刺す必死の悲鳴」

ヴェイグの歌ったものよりもヒーローらしさが強い歌ではあるが、やはりそれにも強いメッセージが込められており、何よりも途中のあの歌詞が装者である女性達の胸を打った。

「戦いの痛み、苦しみは、俺達だけが知ればいい、か。おっさん達がいそいそな言葉だぜ」

クリスの言葉に誰もが共感していたのだ。それは本来自分達の想いではなく弦十郎達大人の想いだろうと。

実際ギアを弦十郎が使えれば彼が自分で戦い人々を、世界を守り抜く事を彼女達は知っていたのだから。

「何だか心に沢山響く歌なのデスよ」

「うん、でもあつたかくて強くなれそうな歌」

「クピツ……それがヒーローソングってものらしい」

噛み締めるような調の言葉へアイスココアを飲みながらヴェイグが告げる言葉。それに響く強く頷いた。

「そうなんだよ。ここには沢山のあつたかい歌があるんだ。私達は只野さんからそれを教えてもらってる」

「教えてるなんて烏漣がましいよ。ただ俺は自分の趣味をそっちに渡しただけ。聞く聞かないは自由だ」

若干照れくさそうにそう言って仁志はデンモクをエルフナインへ手渡した。

「えっとう？」

「エルに是非歌って欲しい歌があるんだ。でも今は無理だろうからガイドボーカルっての流すからそれで覚えてくれ」

「はい、分かりました」

そうして流れるのは“Beat on Dream on”という歌だった。その歌詞にエルフナインは仁志が込めた意味を察した。

(これは、僕とキャロルの事だ……)

同じものを目指していたはずの二人がすれ違う。その内容にエルフナインは瞬きさえ忘れたかのようにモニターへ魅入る。

同じようにその歌詞は装者達にも刺さるものである。特に響達旧二課勢とマリア達旧F・I・S勢はそのファーストコンタクトから始まる出来事がそれに近いものがあつたために。

「只野さあんっ！ これ、ぜっ………ったいウルトラマンですよねっ！」

「ご明察。しかもガイアのEDだ」

「ガイアって言う……あのピンチが何度もくる歌のやつか」

クリスの表現にマリア達が揃って疑問符を浮かべる。ただ知っているのだろう翼と奏は苦笑していた。

「そ。実はガイアには青いウルトラマンのアグルってのが出てくるんだけど、それが地球を守るって目的は一緒なのにガイアと違って人間を守ろうとはしないんだ。それで衝突を何度か繰り返してね」

「おおっ、何だか熱い展開デス！」

「どうして人間を守ろうとしないんですか？」

セレナの当然の質問に仁志は答えようとしてはたと気付く。このままでは絶対長話をするぞ。

「えっと、詳しい事は避けるけど、彼は地球環境を破壊し死へ追いやろうとしているのが人類だと思っっているんだ」

その言葉に誰もが返す言葉に詰まる。

「でもそれは地球を狙う侵略者の策略による扇動だと分かる。で、それで自分のしてきた事を悔いてヤケになったアグルはその光をガイアへ託して姿を消す。それが一つのターニングポイントだ」

「タダノ、話が気になるぞ」

「なら暁さんのバイト先では非ウルトラマンガイアをレンタルしてもらって。かなりの名作だ。人間の優しき、強き、美しき、醜き、弱き、酷き。それらをちゃんと描いて、でも最後には地球に生きる全てが手を取り合っって闇を払う。そんな作品だから」

「そう、教育にも役立つ？」

「あー、どうだろ？ でも下手に人の良さだけを伝えるよりはいいかもな。誰にだって良い顔と悪い顔がある。だけど出来るだけみんな優しく強く生きていこうよって、そういうのが平成以降は基本だからなあ」

暗に昭和のヒーローはそれとは異なると言うような仁志。だがそれを分かる人間は残念ながらここにはいない。

奏の次はマリアが歌う事に。しかもその曲は仁志以外は見た事もない曲名だった

その名も “この星を この街を” である。 “救急戦隊ゴーゴーフাইブ” という作品のEDだ。

「ちよつと待てっ！ 何でイヴさんがこの歌を！」

「貴方が時々家でシャワー浴びながら歌ってるから覚えちゃったのよ。で歌詞検索したら出てきたの。結構聞こえてるんだから気を付けなさい？」

「マジか……」

若干恥ずかしさと驚きを抱く仁志だが、それを聞いていた周囲はこう思ったのだ。

——まるでカップルか夫婦の会話だ、と。

ともあれマリアの歌うそれは明るく元気で希望溢れる歌であった。

「明日の青空、追い駆けながら」

世界の歌姫が歌うヒーローソング。それに仁志は静かな感動を覚えていた。本来男性が歌っているものだが、マリアが歌うと力強さよりも優しさが増すと感じていたからだ。

（何て言うかこれはこれでいいもんだ。原曲はゴーゴーフাইブ自身が歌ってるみたいだけど、これはそれを見守る人達が彼らを歌ってるみたいだし……）

作品に寄せるのならグリーン先輩である女性か、あるいは五人の母だろうかと思いつながら仁志はマリアの歌声を聴き入る。

この辺りになると響達先行居住組は歌う方向で曲を考え始め、セレナ達後行居住組は興味のある歌をガイドボーカルで聞いて覚える方向で曲を考え始めていた。

だが、中にはこんなやり方をする者もいるもので……

「只野さんっ！　これ、歌えますかデス！」

「へ？」

本編映像というものを知った切歌が興味のある歌を片っ端から仁志へ歌わせるという行動に出たのである。

ただ、ここで性質が悪いのは切歌自身も二番のサビなどから歌い始める事だ。もしこれがなければ仁志もさすがにと二回目以降は断つただろうが、こうされると可愛い女の子とヒーローソングをデュエットと言う彼にすれば人生で絶対にはずれなと思っていた状況となる。

故に彼も切歌のお願いを断れなくなり、次々と歌う事となっていく。そうなれば喉で歌っている彼に待っているのは……

「ごめん曉さん、ちよつと休ませて」

「ご、ごめんなさいデス。入れ過ぎたデス」

声が枯れてノックダウンという結果だった。

何せまだまだ響達もこの世界の歌をそこまで多く知っている訳ではない。その選曲速度はゆっくりめであった。

対して切歌は興味のあるものを片っ端からである。だが歌うのは基本仁志。のど飴を舐める暇さえ与えられず、彼は手を抜いて歌う事をせずに付き合った結果カラオケ開始一時間でその歌唱力を使い切らされてしまったのだ。

「切ちゃん、さすがに連続三曲はやり過ぎ」

「ううっ、反省してるデスよお……」

「只野、貴方も貴方よ。全力で声を出すからそうなるんだから」

「イヴさん、男には駄目だと分かっているもやらかなきやいけない時があるんだ」

「はあく……かっこいい事言ってるけど、使い所がカラオケじゃあね」
呆れるように息を吐き、マリアはテーブルの上に置かれたのど飴の袋から飴を一つ取り出して指で掴むと、それをそつと仁志へ差し出した。

「ほら、舐めなさい」

「えつと……なら、ま、遠慮なく。ありがとイヴさん」

そのやり取りを見てもややもやする乙女が二人。

(むくつ、仁志さん、マリアさんとイチヤイチャしてる！)

(気が付けばなあにやってんだあの二人！ てか、何であんなに自然なんだよ！)

仁志への恋心を自覚している響とクリスは、それぞれの手でデンモクを掴んだまま仁志とマリアへ視線を向ける。

「えっと……曲探さないなら貸して欲しいなあ」

そんな二人を見て未来がやや困り顔で声をかけると、二人は一瞬で我に返ってデンモクを差し出した。

「どうぞ」

「あ、ありがとう……」

未来が受け取るや二人はまた揃って視線を動かした。その様子を見て未来はチラリと視線を追った。

「……只野さんとマリアさん、か」

今はマリアが発声法を教えているようで、それをのど飴を舐めながら仁志が聞いている状態だった。

更にそれをセレナとエルフナイン、何とヴェイグまで熱心に聞き入っており、さながら小さなボイストレーニング教室となっていたのだ。

(年齢で考えてもこの中で一番お似合いの二人だよ。ただ、只野さんとは住む世界が……)

文字通り住む世界が違う。それを思い未来は複雑な表情を浮かべた。彼女もここで暮らすようになり、響の言っていた事がよく分かってきたのだ。

ノイズどころか錬金術師さえもない世界。ギアが必要になる事はなく、求められる事もない。呼び出しも訓練もなければ緊急事態さえも有り得ない。

まさしく平和だ。最近正式に装者となった未来でさえそう感じるのなら以前から装者であった響達がどう思うかなど考えるまでもなかった。

そして暮らしは色々と制約もあるが、貧乏なら貧乏ならではの楽し

み方や幸せがある事を今の未来は知っている。

今夜全員でスーパー銭湯へ行く事になっているのもそれだ。広い風呂で気心知れた者達と楽しく過ごす時間。普段はシャワーのみ故の、風呂に入れるという喜びと贅沢感。それはこれまでの暮らしでは感じる事の出来なかったものだったのだから。

そして仁志に言われた通り二人はその想っている事を全て伝え合った。

さすがに取っ組み合いにはならなかったが、あのカラオケを超える程の激しい言い合いにはなり、近所迷惑の可能性を考えて部屋を貸していた仁志がクリスと共に隣の部屋から駆け付けた程であった。

それらを踏まえて未来は思うのだ。ここへ初めて来た時に響が語った話の意味を、その意図を。

(響の言っていた事はきつとこういう事だ。ずっとお風呂やシャワーが当たり前できたけど、それがどれだけ幸せだったかがここで分かった。当たり前が当たり前じゃないんだって、幸せを幸せに思わなくなっていたって、私はここで知る事が出来た)

響と離れて暮らし、たまにアルバイト先のコンビニで会って話す事はあるが基本的にはすれ違い。だけでも、だからその数分が幸せで楽しみになる。

どちらかが休みなら二人で、時にはクリスなども入れた三人で駅前へ行き、服を眺めたり切歌の勤めている店で本を見たり、そんな時間を過ごす事もあった。

それらは本来の世界でも出来た事だろうし実際した事がない訳ではない。だが、普段一緒だった頃は気付けなかった。そう出来る事の喜びは響と距離を取ったからこそ分かる事が出来たのだ。

だが、それは自分達が装者ではない場所だから感じていられると、未来は痛い程分かっていった。

——私も、ここでずっと暮らしたいかもしれない……。

そんな未来の眩きは流れる曲と翼の力強い歌声に掻き消されて誰の耳にも入らなかった……。

カラオケでの熱唱タイムもしばしの休憩となり、昼時となった事もあってか仁志達は冷え切ってた揚げ物の残りなどを食べながら追加注文をどうするかで話し合っていた。

何せこういう店の食べ物は基本冷凍など。それに意外と高い料金を支払わなければならないのである。しかも人数が人数だ。故に当然だがマリアや調の目は厳しく光っていた。

「ピザにすればいいんじゃないか？ それに、今満腹にする必要ないだろ。晚饭を少し早くすればいいだけだっ」

そんな中、奏の出した案に誰もがそれだとばかりに同意し、意外と呆気なく昼食問題は片付く事となる。

四種類あるピザを頼み、それらをシェアし合うように食べ始める仁志達だったが、当然無言で食べ続ける訳もなく……

「結局今も分からないままなんだよなあ」

「ですが、ステータスに変化はあったのですよね？」

話題は依り代に復活したゲームであった。あれからも時々調べてはいるものの、これといった大きな変化はないまま今に至るのだ。

「うん、多少ね。きつとみんなの居住環境かあるいは生活への満足度だと思っただけど……」

「それならどうしてエルフナインちゃんやヴェイグさんがいないか、でももんね」

「そうそう」

「装者しか関係ない理由が……はむっ……もぐもぐ……ごくんっ。いまひとつ分からないんです」

喋りながらピザを齧るエルフナインに誰もが苦笑する。かつての彼女であれば決してしなかっただろうそれにエルフナインの子供らしさを感じ取ったためだ。

「エル、喋っている途中で食べるのは駄目だよ？」

「あつ、ごめんなさいセレナ姉さん」

「そういうセレナもたまにやっているぞ？」

「ヴェ、ヴェイグさんは黙っててくださいっ！」

恥ずかしそうに声を上げるセレナに全員が声を出して笑う。

「でも、たしかに気になります。そもそもどうしてそのゲームが復活したのかも分からないし」

「デスデス。何かないんデスか？」

「それも考えてはいるんだけどなあ……」

「悪意が後輩二人を操ったから、とか？」

「だとしたらゲームでそれが分かるようにするはずだ。あるいはそれらしい事を教えてくれるものでは？」

「翼の言う通りだね。あとクリスの意見が正しいってなると、そのゲームは悪意の与えたものってなりかねないし」

その言葉にクリスは頷き、手にしたピザの残りを全て口へと放り込んだ。

「あの、もう一度情報を整理してみるのはどうかな？」

「うん、小日向さんの言う通りだ。こういう推理ものの定番は、ある程度情報が出たらそれを見直す事だし」

「では、僕が列挙していきます」

依り代にゲームが復活した事を教える通知音がくる。それはタイミング的に仁志が未来との話し合いを終えた頃である。

ゲームには本来あるべきゲーム的要素が排されていて、可能なのは音楽を聞く事とステータスと呼ばれる何かを示したのを見る事のみ。

それは装者九人のものしか表示されておらず、また何を示したものは分からない。しかもそのステータスは日々僅かであるがゲージが変化を起こしている。

「……と、こんなところでしょうか」

「こうなるとやっぱ鍵は通知が来たタイミングだね」

「うん、きつとそう。只野さんが小日向と話し終わった時にゲームは依り代に復活してると考えれば……」

「俺がここへ来た装者全員とちゃんとした話し合いを終えたって事？」

「そうなる筋は通るな。あんたがあたしら全員とちゃんと関わった。それが切っ掛けでゲームが出現した」

「では、まずゲーム出現に関してはその仮説でいいわ。次はこのステータスの意味よ」

「えっと……お兄ちゃんはこれがみんなの住んでいる場所への満足度って思ってるんだっけ？」

「あるいは暮らしそのものへのだな。ただ……」

「それだとエルフナイン達がいなのが引つかかる……」

「デスねえ」

「……あつ！」

そこで急に響が大きな声を出した。当然全員の視線が彼女へ集中する。

「ど、どうしたの響？」

「トイレか？ 出て右手だぞ？」

「違うし知ってるよっ！ えっと、年齢とかどうでしょう！」

「「「「「年齢？」」「」「」「」」」」」

「はい！ そのステータスが関係するのは一定の年齢からって」

「あー、そういう事か。たしかにそれなら分からないでもない」

「でもよ、だとしたら余計分からねーぞ。何で年齢で表示するかしないか決めるんだ？」

「あつ……」

「響らしい突発的な思いつきでした」

「ごめん……」

がつくりと肩を落とす響。それを見てヴェイグは言おうと思っていた事を言うのを止めた。

(俺は年齢だけならここにいる誰よりも上なんだが……まあいいか)

今や響達は友人とは呼ばないが仲間ではある。その心へいらぬダメージを与える必要はないとヴェイグは大人の対応を取った。

「まあまあ、今は何でもいいから考える材料が増えるのは良い事だよ」

「そうね。でも、年齢か。悪くないとは思うわ」

「どういう事だマリア」

「一定年齢以上の女性、という括りよ。それならエルとヴェイグがない理由にもなる」

「おうつ、でも一定年齢ってどれぐらいデスか？」

「そ、それは……何て言えばいいのかしら……」

途端に言い辛そうに顔を赤くするマリアを見て半分の人間が察した。おそらくだがマリアは本当は年齢ではなく別の表現で言いたかったのだろうと。

故に仁志が助け舟を出す事にした。若干言い辛い言葉などを使わずマリアの伝えたい事を表現するために。

「あ……二次性徴期を迎えているかいらないか？」

「つ、そ、そうよそれ！」

「だいにじせいちようき……？」

「切ちゃん……」

「お前な、それぐらいは覚えておけよ」

呆れた目を向ける調と盛大なため息を吐くクリス。さしもの響もその言葉はしつかり理解しているのか若干憐れむような目を切歌へ向けていた。

「切歌ちゃん……それはさすがに……」

「ま、まさかの響さんにバカな子を見る目をされてますデスっ!？」

「第二次性徴期って言うのは、男の子は大人の男の人らしく、女の子は大人の女の人らしく変わり出す時期の事」

「あく、何となく聞いた事がある気がします」

「「何となくかよ……」」

仁志、クリス、奏の呆れたような声が重なる。それに切歌は照れくさそうに後ろ手で頭を掻いて笑うのみ。

「あはは……申し訳ないデス」

「で、それでは言えばセレナはその時期だもの。一応説明はつくわ」

「そっか」

「兄様、どうでしょう？」

「いや、良い線じゃないかと思うよ。少なくともどうして九人かの理由にはなる」

「ですが結局そのゲージの意味は……」

「分かんないよなあ」

言って仁志はソファへ持たれるように倒れた。ボフツと言う音を立てソファから少しだけ埃が舞い、仁志は自分の行動を内心で恥じると同時にピザを食べている周囲へも迷惑になると気付き、気まずそうな表情で申し訳なさそうに手を前へ出して謝罪の意を伝える。

それを見て誰も文句などは言わなかった。ただただ彼らしいと感じて微笑むのみ。それでもすぐに誰もが意識を謎解きへと切り返した。

だが、やはりこれと言った意見は出ず、ピザが全て食べ終わる事で謎解きタイムも終了となる。

そうなればまた熱唱タイムとなるところだが、一旦小休憩を仁志が提案、ならばとトイレへ行く者や飲み物を注ぎに行く者などそれぞれが動き出す。

「タダノ」

「ん？ どうしたヴェイグ」

そんな中、ヴェイグがソファ伝いに仁志の傍まで近付いてきた。

依り代がルームのテーブルに首掛け袋ごと置いてあるために彼はこのカラオケ店全てで行動可能なのである。

「今夜の事だが、本当にいいのか？」

「えつと……ああ、ヴェイグも銭湯に連れてくって話か」

「そうだ。さすがに止められないか？ 俺は普通の人間達にはぬいぐるみとやらにしか見えないんだろう？」

今夜行く事になっているスーパー銭湯。そこへ自分を連れて行くのはさすがに問題になるではないか。そうヴェイグは考えていたのだ。

その考えに仁志は苦笑して己の考えを説明し始めた。たしかにヴェイグは何も知らない人間にはぬいぐるみのようなものだと思うれるだろう。だからこそエルフナインが抱えて持って行けば受付で止められる事もない。

そして脱衣所へ持ち込む事までは可能だ。問題があるとすれば浴室内だろうか……

「結構遅い時間だから男湯はともかく女湯はガラガラなんだよ。それ

は以前から響達の証言で間違いない。万が一見つかったらセレナちゃんの中へ隠れてしまえばいいしさ」

「だが……」

「大丈夫だって。まあ、もしそんなに気になるなら俺と二人でイヴさん家の風呂借りて入るか？」

「タダノ……そうだな。それもいいかもしれない」

その言葉にヴェイグは嬉しそうに仁志へ微笑みかける。男同士の友情。そう呼ぶに相応しいやり取りである。

だが、それを聞いて一人の女性が若干微妙な顔をしていた。

(えっ!? も、もしかして只野はあれなの? ヲエイグみたいなのが好きなの? 同性愛者じゃなくてそっち?)

マリアは横から聞こえた会話に所謂腐女子もビツクリの発想力を発揮していた。

あの仁志同性愛者疑惑を抱いてからと言うもの、マリアはそれとなく彼へ性的アピールにも見える行動を時折取ってきたのだが、その全てを仁志は若干の戸惑いだけで対処し切っていたのである。

だが、だからと言って彼が同性へ熱視線を送る事もないしそんな話を聞いた事もなかったため、おそらく強い意志で自身の欲望を抑えているのだろうと判断しかかっていたところで先程の会話だった。

(ま、まあたしかに、ヴェイグはモフモフしてて可愛いとは思うわ。瞳もつぶらでキュートだし、ぶつきらぼうなところもあるけど優しくって面倒見がいいし……)

最近では仕事終わりで疲れているマリアを、ヴェイグ主導であの家で暮らす五人がマツサージしているのだ。

寝そべったマリアの背中をヴェイグが、両手をセレナとエルフナインが、両足を切歌と調が、それぞれ優しく揉んでやっているのである。

今のマリアにとっての一番の幸せを感じられる一時であり、それがあるからこそ明日も頑張ろうと思える活力の源であった。

うんうんと唸るようなマリアを眺め首を傾げるのは、彼女がもう娘と思う程に大事にしている擬似姉妹二人である。

「マリア姉様、どうしたんでしょっ?」

「さあ？　また家計簿の事でも考えてるのかな？」

マリアが頭を抱える。家計簿。そうなるぐらいにセレナもすっかりここでの生活に染まっていた。

ちなみに彼女は彼女で小遣い帳を仁志からプレゼントされている。何をしていくらもらったか。何に使っていくら減ったか。そういうのをこまめにつけながら、それぞれの出来事の思い出も記しているのだ。

最近使ったのはエルフナインと二人で食べたソフトクリーム220円。仁志達が働いているコンビニとは別系列の駅前店で買った物だ。

——どう？　美味しい？

——はい、とつても美味しいです！　ありがとうございます、セレナ姉さん！

それまでも食べた事のある味だったが、何故かマリアと分け合った時よりも美味しく楽しかった事を鮮明にセレナは覚えている。

今度はもう少しお小遣いを貯めて季節限定味を二人分買おうと決めているお姉ちゃんなセレナであった。

さて、室内から視点を動かしてみれば、ドリンクバーの機械の前で翼と奏が何やら揉めている。

「いいじゃんか。やろうって」

「や、やだよ。どうしてもやりたいなら奏だけでやって！」

実は奏が複数の飲み物を混ぜようと提案しているのだ。翼はそれを拒否しコップを守るように体で隠している。

そんな両翼のやり取りを眺め響と未来は苦笑していた。まるで学生のようにだと思ったのだ。

「あはは、あれって私達が一年生の頃とかにやったやつだよ」

「そうだね。でも、多分だけど翼さんと奏さん、学年が離れてたし二人でこういう事出来なかったんじゃないかな？」

「そっか。それにツヴァイウィングだったしね」

学生の頃から装者としても歌手としても動いていた二人。その学生生活は確実に普通とは大きく異なっているだろうと思ひ、響と未来

は揃って視線を翼と奏へ向けた。

「ほら翼、貸しなつて。美味しいやつ作ってやるからさ」

「いやーだ。ならまず奏が自分で作って飲んでみてよ。それで美味しいって言ったら考えてあげるから」

完全に翼が本来の姿となつているのを見て響と未来は小さく微笑みを向け合う。

「私達もきつとああなんだろうね」

「そうだね。二人でいるときつとそう」

向け合う笑みはこれまでと同じように異なっていた。それは一度手を離して歩いているからこそその輝き。

例えば歩いている道が違っていても心が繋がってあればいつだってこうして笑い合えるのだと、そう互いに思っているからこそその噛み締めるような笑顔だった。

そこから視点を更に移動させよう。女性用の化粧室では切歌と調が洗面台に立っていた。クリスはそんな二人を待つように入付近でドアを背にしている。

「いやあ、何て言えばいいんだスかね。みんなでカラオケなんてあつちじゃ考えた事もなかったから楽しいデスー」

「うん、凄く楽しい。それに、知らないけどみんなで歌ったり映像に盛り上がったたり……」

「デスデスっ！」

「ま、だからって総勢七曲もの歌攻めはどうかと思うけどな」

「はうっ！」

「クリス先輩……それで許してあげてください」

「反省してますデース……」

がつくりと項垂れるように手を洗い終えた切歌はとなりのジェットタオルへと両手を差し込む。

ゴーツと言う音と共に冷風が流れ出して両手の水分を弾き飛ばしていく。それを感じながらゆっくりと切歌は両手を機械から引き抜いた。

「ほら、これ使え」

「おおつ、アリガトデスクリス先輩」

差し出されたハンカチをニコニコ笑顔で受け取り、切歌は残った水を拭き取っていく。

その後ろでは調がジェットタオルからその小さくて綺麗な両手を抜き取っていた。

「よし、完璧」

「ナンデストオ!？」

「切ちゃん、こういうのは両手をしっかり開いてやった方がいいよ」

「ほうほう。今度から意識してみるデス」

「ほら、さっさと部屋戻るぞ」

まるで引率の教師のように切歌と調を引き連れクリスは歩き出す。そんな小休憩であった。

「ガガガツ！ ガガガツ！ ガオガイガーツ！」

小休憩後のスタートは仁志から始まった。ロボットアニメといふこれまでと異なるジャンルからである。

だが、これはある意味で知らない者でも歌える歌の典型であった。最初の繰り返しを聞けば後からくる同じフレーズは歌えるためだ。

「くうくかあくんわあくんきよくくつ！ デイバイディングドライ
バアアアアツ!!」

そして何より必殺技の如く劇中のツール名を叫ぶ場所もあり、それに切歌は目をキラキラとさせた。

更にラスサビ前の間奏部分で仁志が自発的に劇中での必殺技台詞を再現し、そこに全員が疑問符を浮かべる事となる。

「光にい……なれえええええっ！」

一体光になれとはどういう意味だ。響以外はそう思いながらは仁志が歌い終わるのを待った。

「つかあく、やっぱガガガはテンション上がるなあ！」

「タダノ、一っいいいか？」

「ん？ 何？ ヘルアンドヘヴンって何だって？」

「いや、それも気にならないが……」

「光になれってどういう意味ですか？」

ヴェイグとエルの質問にほとんど全員が無言で頷きを見せる。それに仁志は嬉しそうに話し出すのだ。彼のアニメに置いての根底を支える一つである作品に関して。

「って理屈らしい。エル、どう？」

「たしかに理論上はそうです。重力を制御する事で物質へ無限の加速を与えて光に変える。凄いです！」

「ま、これも外宇宙のテクノロジーっていうとんでもがあつての作品だから。実際には中々……な？」

「はい。でも、考え方としては分かります。相手が物質である以上その攻撃に耐えられるものは存在しません」

研究者としての顔が前面に出ているエルフナインだが、周囲は難しい事はともかくシンプルにどんな物でも光に出来るという一点において感心していた。

「決め台詞としてカツコイイデス！ 光になれ〜っ！」

「だよねえ。ノイズも光に出来るのかな？」

「難しいだろうな。ノイズはそもそも位相空間が異なっているようなものだ」

「でもよ。ほとんど効果がねーけど通常攻撃も通るんだ。なら、もしかしたら……」

「いやいや、その前にそのゴルデイオンハンマーってのが炭化するんじゃない？」

「あつ、俺は天羽さんの意見を推すよ。実際ゴルデイオンハンマーは物質昇華って攻撃には負けたんだ」

その発言に全員が同じ疑問を浮かべた。物質昇華って何だ、と。

それを仁志も感じ取ったものの、これはまた別の機会に話すべきと判断しデンモクを手にとってこう締め括った。

「詳しい話はまた今度にでも。気になってる暁さんには俺の持つてるガガガのDVDを貸すよ」

「ホントデスか!？」

「それでTVシリーズとOVAまで見れる。はつきり言っちゃよくお

むしろカツコイイゼ」

「ありがとうございますデスっ！ バイト先でも安くレンタル出来るデスが、それでも出来るだけ節約したいんデスよお」

切実な声であった。何せ彼女のバイト代が入るのはまだ先である。しかも入ってきたとしてもそれは全部自分で使える訳ではない。

そうなれば装者の給料よりも支給額が大幅に下がった現在、彼女が使える金額などたかが知れる。下手をすればセレナ以上に素早くお金を使い切ってしまう可能性さえあるのだ。

そんな切歌の切ない言葉の後は響が歌う事に。

「可能ならみんなで歌って欲しいですー！」

曲名は『ウルトラマンメビウス』。もう響のテーマソングのようであった。

初めて聞く未来達でさえその歌詞には響に通じるものを感じ取り、ラスサビからはいつかの時と同じく大合唱となった。

全員の胸の歌があったかくなる、そんな時間。自然と笑みが浮かび、希望がわき出るような気持ちのまま響の歌唱は終わる。

「立花がそう来るのであれば、私はこれだ」

動画でも歌った『ETERNAL BLAZE』を熱唱する翼。最早完全に自分の物としているかのそれは否応なく周囲のテンションを上げていく。

特に同じアーティスト二人が黙ってはいなかった。スイッチが入ったかのように獰猛な目付きで翼を見つめていたのだ。

「マリア、ここは二人でどう？」

「あら、いいわね」

まさかの組み合わせに響達が驚く中、奏とマリアがひそひそと話し合っって選曲したのは何と仁志が貸したり歌った歌ではないもの。

「愛しさとっ！」

「切なさと……っ？」

「心強さと、だとおっ！」

エルフナインとセレナに仁志の連携で曲紹介となったが、それぞれ互いのバイト先で流れている懐メロの有線からの選曲だった。

歌姫二人によるそれは、仁志からすればまさしく最強タッグが魅せる究極のバトルのようなものだ。それがとある格闘ゲーム原作の映画で使われていた事を知らぬ二人だが、歌姫にとっては大事なものは歌そのものの出来であった。

「うし、あたしも歌うとするか」

元々装者達は歌う事が好きな者達だ。クリスもこの世界での色々で歌う事への抵抗など完全に吹っ切り、幼い頃のように歌う事を楽しめるようになっていた。

勿論そこには学院での同級生達や響達との時間という下地があればこそという事を忘れてはいけない。

「重い荷物を〜」

クリスが歌うのは「青空になる」。仮面ライダークウガのEDだ。初めてクリスはこの歌詞を見た時、何故かその中に両親を見たのだ。

悲しみのない未来や争いのない未来。そこを目指す歌に、世界中の争いや悲しみを歌や音楽で何とかしたいと願っていた両親の在り様を見たのである。

君を連れて行こう。この歌詞がクリスには両親に手を引かれる幼い自分を連想させ、一度聞いただけで一人トイレへ逃げ込み泣いていたのだから。

「クリスちゃん、すつ……ごく良いよ」

「そ、そうか」

「うん、とっても優しくして良い歌だった。秋桜祭の時のクリスを思い出しちゃった」

「や、止めろって。恥ずかしくなるだろ。でも、ま、ありがとな……」
響と未来からの感想に照れながらクリスは少しだけ嬉しそうに笑みを見せた。

「次は私とヴェイグさんで歌います」

「セレナ姉さんとヴェイグさんが、ですか？」

「ああ。俺が主に歌う事になるけどな」

「ふふつ、楽しみね」

二人が歌うのは「心つなぐ愛」。仮面ライダーJの主題歌だ。こ

れは実は依り代である仁志のスマホをヴェイグが操作して動画サイトに聞いたものだった。

勿論仁志がいい歌だと言っていたのを覚えていたヴェイグがエルからスマホを借りて聞いていたのだが、それをセレナも一緒に聞いていたのだ。

「壊さないで。離さないで」

仲良く歌う二人が作り出す雰囲気はまさしくその歌のメッセージを表すかのようだった。

人は誰も傷付けあうために出会ったんじゃない。それをセレナとヴェイグが歌うからこそ歌詞が深く響く。

「ぼ、僕も歌います！」

「という事はあれ？」

「いえ、さっきの歌を」

こうしてエルフナインが “Beat on Dream on” を歌う。その際に本編映像が流れる事となり、全員が仁志の説明を思い出して納得しつつ、エルフナインの歌声に聴き入った。

(キャロル、僕達はきつと同じだったんだ。パパの命題を、願いを果たそうとしていた。でも、すれ違ってしまった。だけど、今の僕らならきつと……)

「きくみと見つけよう」

一度聞いたただけなのに詰まる事なく歌い切った事にエルフナインは軽く息を吐いた。

時々譜割を思い出せなくなったのだが、歌い出す直前で思い出せたのである。

彼女は知らない。それは眠ったはずのキャロルがそれとなく支えてくれたおかげだと。

仁志から教えてもらった平行世界関係の情報。それが眠ったはずのキャロルにも作用し多少ではあるが活力となったのだろう。

——つたく、相変わらず世話の焼ける……。しっかりと覚えてから歌え。

それでもどこか嬉しそうな声なき声は誰に知られる事なく消える。

「それじゃあ、私も歌ってみるね」

「やった！ 未来の歌声大好きなんだよね」

「あまりハードル上げないで。知ってる歌、ほとんどなかったんだから」

そう言つて未来が入れた曲は「卒業写真」。ユーミンこと松任谷由実の名曲であつた。

未来自身は当然その世代ではない。だが彼女の母親達は何度か歌番組や音楽番組で流れていたのを聞いていた世代である。その中で気に入る、ベストなどを持つていたのだろう。

「ひとつみくに流されて」

本来は男女を歌つたものだろうそれも、今の未来が歌えば意味合いが少し変わる。

まるで響と距離が開いてしまい、もう会う事さえも出来なくなつた未来の歌にも聞こえたのだ。

ただ、そう感じていない者がいた。響と仁志である。

（未来はきつとそうなつてもいつか声をかけてくれる。もしくは私が見つけて声をかけに行くから）

（何て言うか、ちゃんと一人で立てるようになるまで待つてって感じだなあ）

しみりとした曲調だから若干室内のテンションが下がる。そうなれば盛り上げるのが彼女と言うもの。

「ここで真打ちの登場デースっ！」

「切ちゃん、それはいいけど何を歌うの？」

「……ツヴァイウィングとかないデスカね？」

「いつそアカペラでもいいじゃん」

あつげらかと笑つて言い放つ奏だが、そんな彼女を翼とマリアがややジト目で見つめる。

「奏……」

「いくら何でもそれはどうなのよ……」

「いいと思うんだけどねえ」

「只野さん、何か良い案をくださいデス！」

「他人頼りかよ……」

切歌のらしい行動に苦笑しつつクリスは視線を仁志へ向けた。

彼はデンモクとにらめっこしながら腕を組んでいる。

「う〜ん……ギアで歌うのとはわけが違うからなあ。あれは君達の心情の発露だけど、これは作られた歌だし……」

「あつ、そういえば只野さんって私達がギアを纏ってる時の歌、知ってるんですよ!」

その響の言葉がある意味で切っ掛けだった。それを聞いてエルフナインとヴェイグが思い出したのである。

そう、それはキャラクターソングなどが今の依り代なら聞けると言う事を。

ならば早速とばかりに室内を静かにしてスマートフォンで歌を聞いてみようとなったのは言うまでもない。

曲を選ぶのは仁志に一任された。そこで彼は気付くのだ。

(……手紙やおきてがみとか流したら、暁さん恥ずかしさで死んじやうかね?)

ここでそれを流さない辺り仁志はやはり優しいのだろう。彼が流したのはこの場にはないサンジェルマン達の歌である。死灯―エイヴィヒカイト―だ。

その歌で奏とセレナにヴェイグ以外は少しだけ切ない表情を見せる。思い出すのだろう。その生命を賭して燃やし尽くして消えていった三人の錬金術師達の最期を。

「彼女達はまだ死んでないよ」

そんな中、ポツリと仁志が呟く。

「人の死は二つある。肉体の死と記憶の死。それを利用して悪意は君達を消滅させようとしたように、人は二度死を迎えるんだ。そういう意味で言えば彼女達の肉体はたしかに滅んだかもしれない。だけど、その魂は、意思是、まだ生きてる」

そう告げて彼はゆっくりと響、翼、クリス、マリア、切歌、調と六人の装者を順々に見てこう言った。

「あるだろう。君達のギアには、彼女達の残したものが、その輝きが。

イグナイトの闇をアマルガムの光に変えて、さ」

最後に微笑み、仁志は歌を変えた。流れ出すのは「永輝―エイヴィ
ガ―ブント―」だ。

「そして平行世界の彼女達はその胸の歌で死を灯すだけじゃない可能性を見出した。だから死んでいないさ。俺達が覚えていけば、例え肉体を失ったとしてもその魂は、意思是、生き続けるんだ」

「はいっ！」

仁志らしい締め括りに響は笑顔で力強く頷く。それに続くように
クリスが、翼が、マリアが、切歌が、調が頷いていく。

それを見て奏は一人そつとギアペンダントを握る。

（翼も、生きてるんだ。そう、あたしの中で生きてる。覚えている限り、生き続ける……っ！）

そんな奏と同じくセレナもまたギアペンダントを握っていた。

（そうだ。私が覚えていればママ達は死なない。絶対、絶対に再会するんだ！）

そして未来も。

（私はみんなと違ってこのギアで何も受け取ってないのかもしれない。でも、だからこそ今度は一緒に並び立つんだ。私も、私も装者だからっ！）

その瞬間、スマートフォンから何かの通知音が流れて歌が止まる。

「あれ？ 何だ？」

画面がミュージックボックスからホーム画面へ戻っている事に首を傾げ、仁志はある事に気付いた。

本来なら運営からのお知らせの有無を示すアイコンが出現しているのだ。どういう事だと思いつつそこをタップすると……

——ステータスが更新されました。

その一文だけが表示され、ホーム画面へと勝手に戻されたのである。理解が追いつかないまま仁志はならばとステータスをタップすると……

「……………どういう事だ？」

画面に表示されたのは相変わらず装者九人のアイコンと何かの

ゲージ。だがそのゲージの後ろに新しく空白の枠が出現していたのだ。

ただし、セレナと奏のだけはそこは埋まっていた。セレナはヴェイグ、奏は櫻井了子のキャラアイコンで。

仁志の言葉に想いを新たにしたら響達装者九人。その直後変化を起こすステータス。

果たしてこれは何を意味するのか。ゲージの意味とは？ 新しく出現したものの意味は一体？

謎を増やしてゲームは沈黙する。後はお前達で解き明かせとばかりに……。

はっぴー すまいる ばけいしよん

「親しい人間、かね？」

新たに出現したステータスについて天羽さんは納得し切っていないみたいな表情で告げる。

その視線の先には元々の俺のスマホがある。そしてそれを隣の翼へ渡して彼女からイヴさん、セレナちゃんへと渡る。

「……私はヴェイグさんなんだ」

「だが、親しいなら俺よりもママだろう」

「そうですね。何故ヴェイグさんだけなのでしょう？」

エルの言葉に俺は考える。そもそも何故今このタイミングでそれが追加もしくは解禁されたのか。

「……セレナちゃんにとつてのヴェイグと天羽さんにとつての櫻井了子さんは同じって事だよな。そのステータスの捉え方は」

「そうなるわね。なら……頭脳面での支え？」

「いや、それなら奏もセレナもそれぞれ別の人物でもいいはずだ。奏の世界の叔父様は知略に優れた存在だし」

「そうなんだよねえ。翼達のとこの旦那だったら領けたんだけどさ」

苦笑する天羽さんだが、セレナちゃんはスマホから顔を上げてこつちを見てきた。

「私もそれならヴェイグさんよりもママです」

「と、なると別の括り、かあ」

「こういうのってさ、普通謎がある程度解けてきたら増えるもんじやないのか？」

「まだほとんど解明されていないのに増えるとかどうなってんだ。これが現実的って事なのかよ。」

「というか、もし今の仮説が正しいならあたしら七人はエルフナインじゃないとおかしいぞ？」

「あ……」

クリスの指摘に思わず声が出る。そうだ、そうだよな。響達七人の頭脳面担当はエルだ。

「じゃ、友人とか親友とか？」

「それならセレナがママじゃないのも納得です」

「デスね。奏さんはどうデス？」

「うーん……了子さんとは親しいけど友人って感じじゃないなあ」

「そしてもしそうなら響や小日向さん、そしてザババの二人はとつくに表示されてると俺は思うよ」

そう言うのと全員が苦笑して頷いた。

何というか、本当に謎解きだけでも焦燥感とか緊迫感がない。この場合合はそれが良い方向に働いてると思う。

正直ゲートを隠されたセレナちゃんぐらい響達も動揺するかと思っただも、意外とそこまで動揺はなかったんだよな。

おそらくだけど響達先行組はもうこつちに半分根を張ってたからだと思う。小日向さん達はそんな先行組に支えられて動揺が少なく済んだんじゃないか。そう俺は考えている。

目に見える形では、かもしれないけど。

「セレナ姉さんと奏さんだけが表示されている事への共通点なら僕に一つあるんですが……」

そんな中、エルがそう呟いた。

「エル、どういう事か教えて？」

「はい。お二人は平行世界の存在と言う事です」

「ああ、そっか。でも翼達もそこには表示されてる訳だしねえ」

「そうなんです。ただ、何故お二人だけが先に新しい要素が表示されたかはここも関係しているかもと」

「むう、ヒントが欲しいデス！ 只野さん、ヒント機能はないデスカ!?」

「あつたらとつくに使ってるよ……」

暁さんはゲーム好きだったな、そういえば。

「切ちゃん、こういうのは意外な会話や発想が解決に繋がるものだよ」

「ふむふむ……」

「だから、探せばどこかにヒント機能があるかもしれない」

「おおっ！」

「否定し切れないから困るんだよなあ」

「只野さん只野さん！ こつちに持って来てくださいデス！ アタシがズバツと解決してみせるデスよ！」

狙ってないんだろうけど、何気に今のは中々の名台詞だった。俺も詳しく知らないけど有名だもんな、快傑ズバツト。

と、そんな事考えてる俺へスマホが差し出された。目を向ければエールが差し出している。きつとセレナちゃんから受け取ったんだろう。

「ありがとな」

「いえ」

なので俺は受け取って立ち上がると暁さんと月読さんの近くへ移動する。

「ちよつと失礼するよ」

「どうぞ（デス）」

二人の間へ座らせてもらおうとあまり嗅ぎ慣れない匂いがした。これがザババコンビの匂いか。

と、そんな事を考えてると不味い事になると思いすぐに思考を切り換える。

「さて、お嬢さん方、どこから探る？」

「えつと……メイン画面に隠しコマンド入力デス」

「むしろ一定時間放置するとか？」

両側から出る意見が実に二人の性格を表してるみたいで面白い。

暁さんは泣かぬなら泣かせてみせようで、月読さんは泣かぬなら泣くまで待つタイプだ。

なら俺は泣かぬなら殺してしまえでいくか？

「いっそ直球に画面に向かってヒント出さなきゃぶっ壊すぞって脅してみる？」

「斬新……。機械を脅すなんて考えた事もなかったです」

「それ、音声認識してくれるデスカね？」

月読さんが驚いたようにこつちを見て目を見開き、暁さんは小首を傾げていた。本当にこの子達も可愛いよな。

なんて事を考えていたら暁さんが息を吸い込むのが見えた。まさ

か……

「ヒント出ないとギザギザに叩き斬るデスよ〜っ！ ……どうデスかね？」

「……出ないね」

「ま、そりゃそうだ」

納得するしかない。ただ暁さんはがっくりと項垂れた。

「とほほ、あんまりデエス……」

「クリス先輩、何か意見ありますか？」

「あ？ そうだな……」

月読さんって時々ドライだよな。暁さんを放置してクリスへ助言を求めているし。

なので俺は元気づけるように暁さんの肩へ手を置いた。

「何デス？」

「元氣出して暁さん。何でも挑戦してみるのには良い事だよ。挑戦しない成功なんてない」

「挑戦しない成功はない、ですか？」

「そう。何だって最初は無理だとか出来るのかって言われるだろ？」

それに向かって行く事で人間は先へ進んできたんだ。たしかに冷静にそれが出来るか考える事も必要かもしれないけど、考えるよりも動くんだって方が向いている人もいる。君はそっちだと俺は思うよ」

「考えるよりも動く……」

完全に顔が上を向いている。良かった良かった。どうやらもう気持ち切り替わったらしい。この辺りがこの子の良いところだろうな。

「分かったデス。アタシは挑戦して成功を掴んでみせるデス」

「うん、その意気だ。じゃ、どんどん意見を出してくれ」

「了解デス！ うーんと、そうデスね……」

腕を組んでうんうんと唸り始める暁さんを見て素直でいい子だと思っただ。

こう見えてその根っこに凄く強い決意や想いを秘めているんだもんな。本当に凄いと思う。

俺なんて真似しようと思っても出来ない。周囲のために明るく陽気で居続けるなんて。

「只野さん、とりあえず全部タップしてみても反応するかどうかを試してみるのはどうかって」

そこへ月読さんからの意見が。おそらく口振りからしてクリスの意見か。

「今アタシも同じ事言おうと思ったデス！」

「よし分かった。やってみよう」

言われるままステータス画面のあちこちをタップしてみる。響達のアイコンは反応なし。ゲージは拡大されただけで特になし。

で、新しく出て来た枠に関しては空白のものは反応なし。ただ、櫻井了子さんのアイコンをタップすると反応あり。

「っ!? これは……」

「水色の敵……(デスカ)?」

表示されたのはベルゲルミル。これって……。

「天羽さん、これを見てくれ。ベルゲルミルじゃないか、これ」

「何だって?」

俺の挙げた名前で天羽さんが少しだけ真剣な顔つきになって立ち上がる。同時に翼もこつちへ向かって動き出した。

俺はスマホを天羽さんへ渡す。そこで翼も天羽さんの隣へ立った。

「……間違いないよ。こいつはベルゲルミルだ」

「うん、見間違えるはずない」

双翼がそう言うなら間違いないだろう。となると……

「天羽さん、ちよつと貸してくれ」

「はいよ」

一度タップすると元の状態に戻る。なら次はヴェイグをタップする。

「……やっぱりか」

そこで表示されたのはあのベアトリーチエの傍付きの変身した姿。それを俺の両脇からザバコンビが覗き込んだらしい。揃って息を呑んでいた。

「こ、こいつは……」

「石屋がカルマ・ノイズの力を使った状態……」

「そう。で、セレナちゃんとヴェイグが協力してツインドライブで撃退した奴だ」

「まだ言ってるのね、それ」

俺の言葉に響達が疑問符を浮かべるとイヴさんが呆れながら突っ込んできた。

いいじゃないか、分かり易いんだからさ。

「でもこれで分かった。これは、君達がデュオレリック、通称ツインドライブを手にした時の相手だ。つまり、この空白にはそれぞれがその力を得る時に一番手を貸してくれた存在が表示されるんじゃないか？」

「成程。それならあたしは了子さんだ」

「はい。私もヴェイグさんです」

「ですが、それなら何故奏とセレナだけ？」

翼の疑問に俺も気付いた。そうだな。別に二人だけがあの姿になれる訳じゃないのに。

ここって監視カメラあつたっけ？ そう思つて室内をそれとなく見回してみる。うっ、あつた。となると無理か。

「もしかしたら今はお二人しかデュオレリック状態になれないからではないでしょうか？」

俺が確かめてもらおうと思つた事をエルが言ってくれた。そう、それしか思いつかない。

「それしかないわ。ここにいる装者でデュオレリックが現状で可能なのは奏とセレナなもの」

「アタシはママへ返したデスし……」

「あたしもフィーネに返してるしな」

そうなんだよな。彼女達が使うデュオレリックはいわば平行世界との絆みたいな側面も……っ!?

「これも狙いかっ!」

「でしょうね。やられたと言わざるを得ないわ。世界蛇と戦えたのは

デュオレリックがあつたから。それを今の私達は封じられた。本当に厄介よ」

「ちよつと待ってよ。その言い方だとまたあいつと戦うかもしれないって？」

天羽さんの言葉に響達が息を呑むのが分かった。そりやそうだ。あの時だって文字通り世界を越えた総力戦で辛うじて掴んだ勝利だったんだ。

「そう考えておいた方がいいと思うわ。相手は世界蛇の巫女にすくつていた悪意。ならその目的は全ての破滅」

「ただ、一つだけ朗報と言うかほぼ確実な事がある。世界蛇は君達にやられて完全に消滅した。そこから復活させるとしてもすぐにはあの状態に出来ないはずだ。何せあれは小さかった世界蛇を沢山の悪意を食わせる事で成長させたものだから」

「それなら俺とセレナで封じ込める事が出来るはずだ」

「はいー」

自信満々なセレナちゃん。両腕をギュツと締めてるけど可愛い。

「そうなると思意の最終目的は世界蛇の復活でしょうか？」

「我々への復讐ではないのか？」

「待ってください。もしかすると世界蛇を復活させても今だと弱いから私達を消滅させようとしてたのかも」

小日向さんの意見はもつともだ。そうか、これも思い込みだったのかもかもしれない。

悪意の本当の目的は世界蛇の復活及び全ての世界の破滅。そのためには装者が邪魔だから存在を抹殺しようとしていた。この方が正しいのかもしれない。

「で、でも待って。私達を消滅させたらその世界だって消滅するんじゃない」

「いえ、おそらくですが戦姫絶唱シンフォギアという作品に大きく関わっていた存在だけが消滅していたと思います。つまり、悪意からすれば邪魔者だけが全て消える事になります」

冷静にだけどこか辛そうなエルの頭をそつと撫でる。ごめん、

嫌な事を言わせて。

「俺もそう思うよ。何せ響達が訪れていた世界にはグリッドマンなんて別作品の存在までいた時がある。ゴジラもそうだ。となると、悪意が戦姫絶唱シンフォギアを狙ったのは世界の消滅じゃなくて邪魔者の一掃って事になる」

「で、でもゴジラとかなら世界蛇を倒しちやいそうデスよ?」

「グリッドマンやその周囲の連中もだ。そこはどうなんだよ?」

「……正直断言はできないけど、これだけは言える。世界蛇だけなら勝ち目はあるかもしれない。でも、今度復活させられるとしたら、それは世界蛇であってあの世界蛇じゃないよ」

「タダノ、どういう意味だ?」

みんなの視線が俺へ集まる。これは色んな作品を見てきたから思う事だ。だけど、だからこそ伝えるべきだろう。

「悪意はいわば人の心の闇だ。その集合体だとすれば、そいつが復活させる世界蛇は姿こそそれと同じでもただの闇の塊さ。ヴェイグ、世界蛇だって元々は一つの生命だったんだよな?」

「ああ。そうか、何もないとところから悪意が生み出すならそれは別物だ」

「そういう事。で、さっきの答えの続きもある。ゴジラはカルマ・ノイズと相性が良すぎるんだよ。あれも作品によつては人の負の念で生まれた存在だったりするから」

「どういう事だよ?」

真つ先に反応したのは天羽さん。そうか、彼女はゴジラと同調した事があったな。

「とある作品のゴジラは第二次大戦の戦没者の怨念って設定なんだ。白目で破壊の限りを尽くすって感じだね。もしそういうゴジラを悪意で出来た世界蛇が取り込んだらどうだ?」

「この上なく厄介な相手の誕生デス……」

「カルマ・ノイズと合体した時だって凄かったのに……」

「あのっ! ゴジラは分かりました! でもグリッドマンなら」

「そう、グリッドマンは光の存在だよ。でも、彼と似ているウルトラマ

ン達でさえ強大な闇に飲み込まれてその身を闇へ落とした事があるんだ」

それに響が絶句する。俺だって辛いさ。でも、そうなんだ。

「それに、おそらくだけどカルマ・ノイズを相手にグリッドマンは立ち回るのが難しい。炭化能力がある。あれは常にバリアが張れるヒーローとかじゃないと太刀打ちできない」

「そうか……その事を失念していた」

「思った以上にノイズの能力ってギア以外には恐ろしいんだ……」

「ヒーロー達でさえ炭化させられるかもしれないとか、厄介にも程があるデスよ……」

そう、そうなんだ。ノイズの持つ基本能力が厄介なんだ。世界蛇相手になら戦えても、カルマ・ノイズ相手だと苦戦もしくは敗北つてのが意外と笑えないぐらい可能性がある。

「勿論ヒーローの中にはノイズだろうと世界蛇だろうと相手に出来る存在もいる。でも、おそらく悪意はそういう相手がいる場所は極力避けるだろう」

「ベアトリーチェだった頃なら面白がって行ったでしょうけどね」

「ああ。悪意は強かだ。一番自分が敵対する中で不利だろう君達を真っ先に無力化しようとした。次にそれが失敗すると平行世界との連携を断った。最後にギャラルホルン自体を封じる事は出来ないからと、その世界の時間を止めてしまった」

「唯一の救いはこの上位世界へは大きく手出しを出来ない事です」

「そういやエルフナイン、何であたし達はあの時間が止まった世界でドアとかは動かせたのに、依り代があるなしに関わらず人間はまったく動かせなかつたんだ？」

その天羽さんの疑問へエルは俺の持つスマホを指さした。

「おそらくですが、一つは依り代がないと物質はともかく生命体は動かせないのでしょうか。もう一つは、依り代があってもその力が弱いと意味がない事です。多分ですが、このスマートフォンサイズなら行動可能に出来るかもしれません」

「待つて欲しい。私と雪音は動けないまでも異変を感じ取る事が出来

た。なのに小日向達は無理だったのは何故だ？」

「それはまだ分かりません。もしかするとこちらに長くいた事で依り代の力が強くなっていた可能性もあります」

「どちらにせよ、今は分からない事だらけって事ね……」

イヴさんの言葉が全てだった。そして同時に室内にどんよりとした空気が流れる。

これは、不味いな。みんなの気持ちが悪くなり込んでしまう。となれば切っ掛けの俺が変わるしかないっ！

スマホをテーブルへ置いてデンモクを手にする。すると何となくみんなが俺へ視線を向けてきた。

それに構う事無く俺はある曲を入れてマイクを持って立ち上がる。表示されるのはJ A M Projectの『鋼のレジスタンス』だ。

今ほどこの歌が必要な時はない。俺の歌声に力は無くとも、この歌には力がある。なら、それがみんなの気持ちを上向かせる事を願うだけだっ！

歌い始めると響達は一度聞いた事があると気付いて俺を見た。初めて聞くだろうイヴさん達はモニターの歌詞を見つめていた。

「お前を信じ全てを託したっ！ ねぐがくいを見捨てるなっ！」

叫ぶ。ひたすら叫ぶ。今必要なのはカッコよく歌う事でも、音程を守って歌い切る事でもない。

この歌に込められた想いを、願いを、力を、みんなに少しでもいいから届ける事っ！

「全てを賭けてっ！ 戦ええええええっ!!」

喉が潰れてもいいと思つて叫んだ。

歌い切つて肩で息をしていると、目の前に手が差し出される。龍角散ののど飴が

乗った、綺麗な手が。

「またそんな歌い方して。喉を大事にしなさい」

「イヴさん……」

「そうだよ。つたく、これだから先輩は」

「天羽さん……」

顔を上げた先には優しく微笑むイヴさんと天羽さん。

「只野さんの想い、伝わりました。たしかに今は沈んでいる時ではありません」

「そうだな。あたしらがこうしているんだ。ならまだ希望は残っている」

「翼……クリス……」

聞こえてくる明るい声に視線を動かせば翼とクリスがこちらへ笑いかけている。

「そうデス！ 退路なき道でも振り向かずに進むんデスっ！」

「切ちゃん、影響され過ぎ。でも、カツコ良かったです」

「暁さん……月読さんも」

俺の両脇に座ってこっちを見上げて暁さんと月読さんが笑顔を見せる。

「きつといつか辿りつける、誰もが夢見る場所へ。私もそう信じたいです」

「絶対そうしてみせます。ママ達ともう一度会うために！」

「小日向さん……セレナちゃん……」

俺へ柔らかい笑みを小日向さんとセレナちゃんが向けてくれる。

「そうだ。俺達がいる以上悪意の好きにさせるか」

「はい！ 僕らはまだ負けていませんっ！」

「ヴェイグ……エル……」

空元気じゃない。本当の元気を見せてくれるようにヴェイグとエルが明るい声を出してくれる。

「さっすが只野さんっ！ 一人で七十億の絶唱を超えましたねっ！」

「響……」

いつかのオマージュのような言葉で響が俺を褒めてくれた。

ああ、そうか。今みたいな想いや強さで君達は歌い続けて戦ってきたんだな。

「何のまだまだっ！ 今みたいな決戦ソングは星の教程ここにはあるんだ！ 俺が知るだけでも両手で足りないぐらいだぞ？」

「それは凄いですね。出来れば聞かせてもらっても？」

「駄目よ。今のも最後はもう声が裏返っていたじゃない」

「ならガイド出そうよ。それならいいじゃん。で、しばらくみんなでテンション上げようって」

「それがイイデスっ！ ゆーうつな空気はバイバイデスっ！」

「うん。今は少しでも前向きになれる歌が聞きたい」

「じゃ、お兄ちゃんに選曲はお願いしましょう」

「そうだな。タダノ、どんどん入れろ」

「でも時々は優しい歌や穏やかな歌もお願いしますね？」

「僕もそうして欲しいです。さっきみたいのばかりだと聞いてるだけで疲れてしまいそうで」

「おーい、のど飴いる奴手え上げろ」

「はーい。それにしても楽しみなあ。どんな歌なんだろう？」

すっかりいつもの、いやいつも以上の明るさだ。無理矢理って感じじゃない。本当にそうなるって。

俺はそんな事を思いながらのど飴を口の中で転がしデンモクを操作する。それにしても、のど飴は二種類あるのは何でなんだ？ やっぱり女の子に龍角散は好まれないからかな？

ちなみにクリスが暁さんやセレナちゃんなどへ渡しているのはフルーツのど飴で、響や翼などが舐めてるのが俺と同じ龍角散。

あ、イヴさんも龍角散舐めてる。エルは……やっぱフルーツだよな。ヴェイグは……俺が舐めてるからと龍角散を選んでいた。

やっぱ龍角散は少数派閥らしい。だって俺以外だと響にクリス、翼と天羽さんでイヴさんとヴェイグだもの。

で、流れ始める一種のJAMタイム。まずは“GONG”でみんなが盛り上がり、次は“未来への咆哮”でその歌詞の悲壮感と熱さを感じ入ってくれて、そこで“DEPARTURE”を流して少しだけ癒しのような時間と明るい気分へリセット。

その後は“SOUL TAKER”で再びノリノリになってもらい、お次の“Crest of Z's”でガツンとテンションMAXまで上がって、若干落ち着いてもらいながら希望を持ってもらうために“Carry on”で絶望なんか否定してやるぜって感じか

らの“SKILL”でメ。

本当はもつとあるんだけどこれぐらいにしておかないと本気でテンションと体力が続かないと思った。

いや、だってサビとか歌いたくなるじゃん。せめてってそう思って歌つてると響とかがノってくれて、気付けば全曲サビだけは歌うって流れになってたんだ。

で、案の定みんな最後のSKILLで大盛り上がり。そして全員終わった時にはぐったり。

「すっごいテンション上がるね、今の……」

「そうね……。ライブならアンコールかしら……」

「全てを出し切るなら……。あれ程向いている歌もないな……」

アーティスト組三人がどこか楽しそうに笑ってる。うん、ライブ終わりって雰囲気だ。

「あれ、本人達のライブだと最後のmotto mottoのこの繰り返し、伸ばしたりするぞ」

「マジデスか……」

「でも、多分ライブだとあれが楽しくてやっちゃいそう……」

「そうですね……。実際、やってる時は楽しかったです……」

肩を寄せ合うようにしている装者年少組三人。微笑ましいな。

「な？ テンション上がって最終決戦感凄いだろ？」

「その言葉の意味は分らんが……。たしかに力や勢いは感じるな……」

「は、はい……。楽しいけど疲れました……」

揃ってソファで寝そべるマスコットコンビ。どうでもいいけど寝ないでくれよ？

「これ、実は大勢のスーパーロボットが協力して地球や全宇宙を守って戦うゲームで使われたやつなんだ」

「成程な……。納得だ……」

「綱って何度か出て来たもんね……」

「あと、壮大な感じだなあって思いました……」

テーブルに突っ伏すクリスと響に背もたれへ全身を預けている小

日向さん。とってもお疲れである。

「でも、君達の戦いだってそうだった。世界を、下手したら宇宙を守り、名も知らぬ、顔も知らぬ人達の未来さえも背負って胸の歌を信じて戦った。だから、ここにいる間は少しぐらいそれから解放されてもいいと思うよ」

俺がそう告げるとみんながこつちを見た。その眼差しはそれぞれ異なっているけど、共通してるのは驚きだろうな。

「戦姫の休憩つてとこかな。ヒーローや戦士だって生きてるんだ。なら、たまには心や体を休めない。まあ、完全な休息とかなないのがお粗末だけだよ」

「ううん、そんな事ないです。私達にはバイトとかだって楽しい事になりますから」

「おう、そうだけ。あつちじゃ、んな事したくても出来ねーんだ」

「うん、そうだったね。訓練もあるし、いつ出勤要請来るか分からなかったもん」

小日向さんの言葉に全員が頷いた。エルもヴェイグも見てきたからだろうな、急に呼び出しを受けるところを、何度も。

やっぱり、この世界は彼女達からすれば平和なんだろうな。特にこの国は、かも。

銃社会じゃないし、ギャングやマフィアがいる訳でもない。政治は腐敗してるだろうけど、それでも最底辺よりはマシ……だと思いたい。

「いつかあたしの世界もここみたいになって欲しいもんさ」

「私もそう思います。ノイズも、アルカ・ノイズだっていない世界に」
天羽さんとセレナちゃんの言葉が胸に刺さる。きつと二人も分かっているんだ。それがどれだけ不可能に近いかを。

「そうだね。いつそれぞれの世界のいいところだけが融合でもしてくれればいいのにな」

俺がそう告げると予想していた反応とは異なる反応が返ってきた。

いや、てつきり怒られるとか嫌がられるかと思っただ。でも、みんな一様にどういう意味だみたいな顔で見てくる。

「えっと、要は響達の世界はもうノイズは出ないだろう？ で、天羽さんの世界では櫻井了子さんが、セレナちゃんの世界ではナスターシャ教授が生存してる」

「……つまりそれぞれの世界が融合して悪影響だけを排した結果になるって事ね」

イヴさんの呆れつつもどこか納得するような声に頷く。有り得ない事だけど、そうならかなり情勢が変わると思うんだよなあ。

櫻井了子さんがいて、ナスターシャ教授がいて、風鳴弦十郎さんが双子みたいになって武勇と知略に特化し、良い人となったアダム率いるパヴァリアと秘密裏に手を組んで動けるんだ。

そして、もしかすると風鳴八紘さんや雪音夫妻なんかも……。

「でも、きつとこれはダメだ。みんなが乗り越えた悲しみや苦しみをなかった事にするかもしれないし」

そう、そうなんだ。これが有り得てはいけないのはそういう意味もある。

「乗り越えた悲しみや苦しみ……」

噛み締めるように天羽さんが呟いた。そうだろうな。彼女は片翼を失って以来一人きりだ。翼は響達という仲間を得たけど、彼女は基本一人なんだ。

「ああ、俺の好きなアニメに復讐ものがあつてさ、こういうやり取りがあるんだ。主人公の結婚相手を殺した敵の親玉が自分を犠牲にしてその星の人間を全員優しい善人にすると言い出す。しかも死んだ人間まで生き返るって。それを聞いて主人公は叫ぶんだ」

「何て言うんだ？」

興味が強そうな雰囲気ヴェイグが問いかけてきた。俺はその台詞を思い出して目を閉じる。

「俺からエレナの死まで奪うつもりかって」

その瞬間みんなが息を呑んだのが分かった。空気でも伝わった。

「主人公は続けて叫ぶ。エレナは死んだ。お前が殺した。死んだ奴は生き返らない。だから俺はお前を殺す。そんな感じだね。俺はさ、それを見て衝撃を受けたんだ。結構そういう展開ってあるんだよ、ア二

メでもゲームでも創作物の世界じゃ死者の蘇生ってやつは。それに対してその作品は真つ向から言い切ったんだ。死まで奪うのかって」「……私がセレナを失った事で受けた悲しみや苦しみ。ママを失った事で受けた悲しみや苦しみ。それらをなかつた事にするのは、私から二人の死を奪う事、か」

「……重い、ね。でも、うん、その人の気持ちは分かる気がするよ。あたしもあたしが失った翼を生き返らせてやるって神様に言われても、きつと受け入れない。そんな事をするぐらいなら最初から死なせないでくれて文句さえ言うだろうね」

「只野さん、先程復讐ものと言いましたが、やはり陰鬱なのですか？」
「その作品は痛快娯楽復讐劇って謳ってた。俺もそう思うよ。復讐つてもものをマイナスなイメージだけじゃない捉え方で描いた作品だ。復讐する事に絶対の正しさはいらないしある訳がない。そして、相手を殺すだけが復讐じゃないとも」

誰かを殺すもしくは相手の夢を殺す。それは良くない事かもしれない。でも、時にはそうしたくなるような感情や状況に陥る事もあ
る。

そうなった時、果たして人は正論で止まるのだろうか。あるいは止めていいのか。

それとも、復讐しない事が実は巡り巡って間違つてるとしたら。色々考える事はあった。結果的に主人公が復讐しようとした事が知らず世界を守った訳だし。

「兄様、その作品は何て言うヒーローものですか？」

「ガンソードはヒーローものじゃないよ。ああ、あれはヒーローじゃない。結果的にヒーローになっただけで、本人はそんなつもりは欠片もない。最初から最後まで結婚式の日に殺された花嫁の仇を討つ。それだけが目的なんだからさ」

そう、ヒーローじゃない。復讐を動機としてヒーローとなっていくのはヒーローものかもしれないが、最後まで復讐だけを目的にするのは絶対にそう呼んではいけない。

彼も、本当にいるとすればきつとそう呼ばれるのを嫌がるだろう

し。

「ガンソード、デスカ。覚えておく物がいっぱいデスよ」

「切ちゃんのパイト代、全部レンタルで消えそうだね」

「ホントデスよお！ それもこれも只野さんが面白そうな話を教えるからデスっ！」

「何ならもつとあるよ。特撮だけじゃなくてアニメやゲーム、漫画まであるから」

「あゝっ！ 聞きたいけど聞いたらお金が足らなくなるデスよっ！」

暁さんは本当に明るくていい子だ。

きつと今の空気がまた良くない感じになりかけたから空気を変えてくれたんだ。

なら、そのお礼も兼ねて俺もお返しをしますか。

「全部は無理だけど、ある程度は俺も見返したりもう一回見たい奴もあるから半分出そう」

「ホントデスカっ!？」

「ホントホント。俺としても身近にそういうの話せる相手がいなくてさびしかったんだ。最近はエルが割と聞いてくれるから嬉しいんだけど」

「はい、兄様との話は時々ギアの改良や考察に役立つ事もあるので面白いです」

「へえ、ちなみにどんなの？」

「この前は心象変化について面白い考察を聞きました。装者の方達が最初にギアの変化を起こしたのは水着じゃなくてエクストライブじゃないかって」

その言葉で全員が疑問符を浮かべ、一瞬の間で何かに気付いたように声を漏らした。

「水着とかのギア変化ってさ、要は状況適応だろ？ なら、フィーネやネフィリム、カルマ・ノイズなんて言うその時のとんでもなく強い相手と戦うってなった時、響達は負けたくないって思ったはずなんだ。で、それを受けてギアが変化したのがエクストライブ。そう考えるとあれも心象変化の一つじゃないかって」

「納得しかないです……」

「言われてみればたしかに……」

響と翼が感心するように言ってくれるけど、他のみんなも同じ心境らしい。

「あと、兄様はエクストライブを経験しないと心象変化は起こせないんじゃないかって」

「「「「「「えっ?」「」「」「」」」」」」

「いや、こうは言いたくないけどエクストライブってギア単体でなれる最強形態だろ? じゃ、おそらくただけどどんな環境や相手にも適応してると思うんだよ。で、水着ギアだのメイドギアだの巫女さんギアだのは局地型ギアだ。でも、その能力はエクストライブより下か多分いいところって同等。つまりさ、最初のエクストライブでギアの能力や性能がかなり解放されたから、その中ならパラメータや特殊能力付与も調整出来るよってしてくれてるんじゃないかなあつと」

そう考えると色々腑に落ちるんだよな。何せ映画を見る事で変化する事だつてあつたんだ。

これが生命の危機に瀕するとか、大量のフォニックゲインがいるとかなら話は別なんだが、現状そういう事じゃないみたいだし。

「……言われて目から鱗だぜ」

「つまり、心象変化って私達の気持ちでギアが能力を調整してるだけ?」

「で、ついでに見た目も本人が望むものへ変えてくれるって感じですか?」

「そうそう。ゲーム的に言うなら条件を満たしたって事。適合者じゃないとギアを起動出来ないように、エクストライブになった事がないとギアの他の形態は使えませんよって感じ」

「そ、そんな風に考えた事なかったです」

「まったくだ。先輩はあたしらの戦いをちゃんと見てるから了子さん達よりも色んな事に気付くのかもな」

「帰ったらママに教えてあげないと」

「あー、これは一つの考え方だよ。正解じゃない」

「はい、分かっています。でもきつとママは喜んでくれると思いますよ」
そう言つて微笑むセレナちゃんはすっかり強い女の子になった。
た。

本当に女の子の成長は早い。特に精神的なものが。そりや男はいつまでもガキつぽいつて言われるよ、これは。

それにしても暁さんの言葉から気付けば話が変わり、空気や雰囲気
がかなり変わった。

俺、幸せだよなあ。なんたつてシンフォギアの話了他ならぬ本人達
と出来ているんだから。

そこからの残り時間はみんなが覚えたい歌を流す時間にした。俺
はその間、暁さんから質問攻め。

でも、熱血系が好きの子だとは思わなかった。嫌いじゃないだろう
とは思つてたけど、まさかGガンまでも食いついてくれるとは。

その流れで一緒に行動を共にする事に。とはいえドリンクバーへ
行くだけだけ。

「只野さん只野さんっ！ じゃんけんで負けたら勝った方にドリンク
混ぜられるつてどうデスかっ！」

……これも可愛いと思つてしまふ辺り、俺も本当におっさんになつ
たんだなと実感する。

ま、いいか。付き合つてあげよう。俺が勝つたら、無難な奴にして
あげればいいしな。

「ううっ、まさか負けてしまふなんて……シヨボーンデス」

がつくりと項垂れると只野さんはアタシを見て笑いました。でも、
それはバカにしたりするようなのじゃなくて、優しくてあったかい笑
顔デス。

「暁さんは真つ直ぐ過ぎるんだよ。俺がグーを出すよつて言つたら
すっごい悩むんだもんなあ」

「あ、あれはズルいデス！ ひきよーデス！ てつきりグーを出すつ
て言うデスからあ……」

そう言えばアタシは勝とうと思つてパーを出すデス。だからそれ

を読んで只野さんはチョコキを出すはずデス！　って、そう読んでグーを出したらパーを出してきたんデスよ、この人はあ。

「暁さん、逆に考えるんだ。負けちゃってもいいさって。そうすれば勝てたんだよ」

「そんな風に考えられないデス！　どんな時も負けちゃダメなんデスよー」

「成程、つまり君は勝てばよかろうなのだあって事か。で、はいどうぞ」

差し出されるのは最低でも二種類以上が混ぜられたジュースデス。色は……

「白と黄色が混ぜとってる感じデスね……」

「さて、じゃ部屋へ戻ろうか」

「ううっ、はいデス……」

あの一件でアタシ達は只野さんをマリア達を奪う人なんて見なくなりました。

調とも話しましたが、只野さんとはとっても普通の人デス。でも、優しい人デス。

バイトがあつた日は必ずシュークリームを差し入れてくれるデスし、たまに新商品のお菓子や菓子パンをおやつにつけてくれたりもしてくれるデス。

でも、そんなにシュークリームって捨てられる事があるんデスね。アタシと調にエルフナインとセレナやヴェイグで五つ。そこにマリアの分があると六つデス。

あつ、そういえばいつ頃からかマリアの分はなくなりましたね。その代わりマリアはパンをもらう事が増えました。

部屋の中へ戻って只野さんの後にソファに座ると調がアタシのコップを見て首を傾げました。やっぱり調は何をしても可愛いデス。

「切ちゃん、それは何？」

「えっと、実は……」

じゃんけんで負けて只野さんにドリンクまぜまぜをされた事を教えると調から冷たい目が。

あうっ、ち、違うんデスよ調。本当ならこれを受けていたのは只野さんだったんデス。アタシへ只野さんがひれつな罍を仕掛けたからこうなっただけで……。

「只野さん、一体何を混ぜたんですか？」

「それは暁さんが一口飲んだら言うよ」

「うっ……ど、どうしても飲まないダメデスか？」

「当然。さあ、ずずいと一口」

「切ちゃん、自分から言い出したんだからせめて一口」

「し、調まで……ええいままよ！ デス！」

クピツと一口。甘いけどしゅわつとした感じが口の中に。あれ？

意外と美味しいデス。

でも、この味はあまり飲んだ事がないやつと飲んだ事がある物が混ぜてる気がするデスね……？

「切ちゃん、普通に飲んで……」

「美味しいかい？」

「……はいデス。一体何を混ぜたデスか？」

「カルピスとリアルゴールド。乳酸飲料と栄養ドリンクってところな」

「お……」

納得デス。だから色が白と黄色が混ぜた感じだったんデスね。

「只野さん、それってあの機械に書いてあった奴ですよね？」

「へ？」

初耳デス。てか、何デスか？ 機械に書いてあったって。

「さすが月読さん、もうそんなとこまで見てるんだ。そう、あのドリンクサーバーに載ってるやつ。だから不味いはずはないってね」

「お、美味しい奴を作ってくれたデスか？」

アタシは適当に混ぜようと思ってたデスののに……。

「俺が学生の頃ならふざけて色々混ぜただろうけどね。さすがに今年で三十になるおっさんが学生のノリでそんな事出来ないよ。しかも相手は可愛い女子高生だ」

「可愛い、デスか？」

男の人に面と向かって言われるのは中々ないデス。

「あれ？ 可愛いが嫌なら可憐でもいいけど？」

「か、可憐っ!？」

「これも駄目？ じゃ、愛らしい？」

「あ、あう……」

な、何デスカこの人は。恥ずかしげもなくどうしてこんなにポンポン褒め言葉が出てくるデスカ？

そ、それに可憐とか愛らしいはアタシよりも調の方が似合ってますデス！

でも顔が熱いからミックスジュースを飲むデス。ん？ ミックスジュースって言っているデスカね？

ま、いいデス。混ぜて作ったジュースならミックスジュースのはずデス。

「あの只野さん、切ちゃんそういう言葉に慣れてないんです」

「え？ でも響達からよく言われてない？」

「えっと、男の人に言われるのは別なんだと……」

アタシがミックスジュースを飲んでると調が只野さんへそんな事を言っていました。

何でそんな恥ずかしい事教えるデスカ！ あ、ほら、また只野さんがごつつち見てるデス。絶対またからかってくるデスよお。

「うん、暁さんも響タイプか」

「響さんタイプ？」

「要は自分の容姿を異性に褒められた事が少なくて耐性が低い事」

「あく……」

納得しかないデス。リディアンは女子校デスし、司令達はそういう事をあまり言わないデスし、そもそも言うような会話をしないデス。

「月読さんは平気？」

「……分からないです」

「そっか。二人は学生になったのがリディアンからだもんな」

「はい (デス)」

そう、アタシ達は最初の学校がリディアンデス。そっか。普通は小

学校とか中学校へ行くんデスよね。そこなら男の子と一緒に勉強したりするはずデス。

「じゃ、あまり同年代の異性との関わりそのものが少ないか。ナスターシヤ教授が怪我する前は幼い子供だもんな」

「怪我する前……」

思い出せるのはやっぱり車椅子に乗った頃のママばかりデス。でも、たしかにそうじゃなかった頃もあった気がします。

「ん？　もしかしてあまり記憶にない？」

「そんな事ないデスけど……」

「どうしても車椅子の頃が印象に残ってます」

「ああ、そうだよな。その頃の方が長いんだもんな」

只野さんと話していると時々不思議な気持ちになります。まるで、アタシ達の事を小さい時から見てきた人とお話してる気分になるんデスよ。

「うーん、今はいいけど卒業してからもそれじゃちよつと怖いな」

「何でデスか？」

「二人共に異性への耐性が低いからだよ。おだてなら見破りそうだけど、幸か不幸か二人は本気で可愛いからね。そうなるとナンパの声掛けが嘘じゃなくなるんだよ。そうなると、二人は悪い気しないだろう？」

言われて想像してみます。えっと、男の人がアタシへ本気で可愛いとか一緒にお茶でもとか言ってくるデスか……。

おごりとか言われて、お茶なんかじゃアタシは行かないデス！　と返して、そうしたらケーキとかご飯もいって言ってくれて……。

……どうすればいいデスか!?　アタシ、意外とついていきそうデスっ！

「あの、あまりイメージ湧かないのでやってもらってもいいですか？」

「俺が？」

「はい」

そう思ってたら調がとんでもない事をお願いしてるデス！

只野さんはそれに困った顔をしてたデスけど、小さくこれも調のた

めって呟いて息を吐きました。

「ちよつといいかな?」

「はい、何ですか?」

「その、もし時間あったら一緒にカフェでも付き合ってくれない?」

「すみません。知らない人とはそういうの行きたくないんです」

「あの、本当にカフェだけでいいんだ。その、君みたいな可愛い子とデートみたいな事させてくれないか? 頼むっ! 連絡先とか聞かないし飲み終わったら先に帰ってくれて構わないからっ!」

「……………カフェだけですよ?」

「調ええええっ!」

あつさりと調が折れたデス! 途中まではちやんと冷たい感じでしたのに、只野さんが必死な感じになってきたら調が辛そうな顔になって、最後に手を合わせて頭下げられた瞬間ため息を吐いてたデス。

「はっ!? 只野さんが途中から可哀想になって、お茶ぐらいならいいかなって思ってた」

「調え…………」

つまりそういう相手だったら弱いって事じゃないデスカあ。

「な、何だか複雑な気分だよ。同情かあ。でも、それで月読さんみたいな子とカフェとか行けるならやる意味はあるなあ」

「只野さんまで何言ってるデスカ」

「いや、生まれてこの方ナンパなんてした事もするつもりもなかったから。どうせ成功しないならやるだけ無駄だって」

「ナルホド…………」

言ってる事は分かります。アタシも勉強はやつても無駄と思うとやりたくなくなるデスから。

「只野? 今の意見は昔の貴方、よね?」

「っ?!」

と、そこハマリアが声をかけてきました。で、只野さんがまるでつまみ食いを見つけたアタシみたいな顔しています。

「ね? だって挑戦しない成功なんてないもの」

「そ、そうなんだよっ！ いやあ、本当に昔の俺はガキだった！ 世の中に無駄な事なんてないんだよ、うんっ！」

「只野さん……」

「明らかにマリアに言わされてるデス……」

只野さんの背中へ突き刺さるマリアの鋭い視線が怖いデス。それと、密かにエルフナインとセレナも怖がってるデスね。

アタシも今のマリアは見慣れてないから怖いデスし。時々晩ご飯時になってるデスけど、その時も大抵只野さんが標的デス。

「そうよ。世の中に無駄な事なんてないの。だから勉強はちゃんとするのよ」

「……やっぱりこっちにきた」

「デスデス」

調と小さな声で話す。きっとマリアは今のを言いたくて只野さんを動かしたんデスね。

「切歌、調、返事っ！」

「二はい（デス）っ！」

「よろしい」

な、何だかマリアが向こうにいた時よりも怖いデス！ も、もしかして悪意に操られてるデスか？

「し、調、もしかしてマリアは……」

「悪意に操られてる？」

「可能性は」

「ないから」

アタシの言葉を遮るようにマリアと只野さんが同時にそう言ったデス。

「き、聞こえてたデスか？」

「うん、見事に」

「切歌、調、今夜のご飯、覚悟しておきなさい」

「デエエエスっ?!」

「ま、マリアアっ！ さすがにご飯はズルい！」

「何とでもいいなさい。いい？ 家では食事を作る者が一番強いのだ。」

それを今夜はしつかり教えてあげるわ」

不敵な顔のマリアに震えしかないデス。こ、こんなにも恐ろしいのはシエム・ハと戦った時以来デス。

「あー、イヴさん？ さすがに許してあげようよ。二人はまだ母親モードの君に慣れてないんだから」

「母親モード？」

「ちよつとっ！ その表現止めてって言ったでしょ！」

「いいじゃないか。あたしもその言い方合ってると思うよ？ なあセレナ」

「はい。今の姉さんはママって感じですよ」

「セレナアアアッ!？」

い、一瞬にしてマリアが追い詰められてるデス。恐るべし只野さん、デス。

でも、母親モード、デスカ。何となく納得デス。このマリアは、お仕事が向こうと違って決まった時間に行って決まった時間に帰ってきます。

しかもお休みも事前に分かってるし、いつ休みたかって言えば休みに出来ます。それと、毎朝毎晩一緒にご飯を食べられます。

エルフナインやセレナ、ヴェイグも一緒デス。時々只野さんもデス。本当に、家族みたいで楽しくってあつたかくって、寝る時もみんなで居間にお布団敷いて寝ます。

……寝る前のみんなでする話、アタシ大好きデス。たまに響さんとクリスマス先輩がお泊りにくるともつと楽しいデス。

本当に、楽しいデス。このままこっちで暮らしていきたいぐらい、楽しいんデスよ。

帰りたいてって思わないでもないデス。司令達を助けたいって思うデス！

だけど、だけど……

その後は、またみんなでこっちで暮らしたい。そんな風に思っちゃ、ダメデスカ？

終了時間までまだ数時間残して仁志達がカラオケから出ると、既に日は落ち始めていた。弱くなった陽射しを浴びながら誰もが心地良い疲労感を覚えていた。

この後は一部を除きスーパーへ行き夕食の買い物をする事になっている。この全員で食べる食事の買い物である。

実はそのための準備として今マリア達の家では炊飯器が三つ稼働していた。マリア達の家には元からある物、クリスが持ってきて仁志用に貸し出した物、翼が上位世界用に新しく購入した物だ。

何故そんなに米を炊いているのかは、この後の夕食準備が始まれば嫌でも分かるので敢えて言わないでおく。

総勢十二人の集団が道を行く。先頭を切歌と調が歩き、そのすぐ後ろを仁志が歩く。彼の両脇近くを響とクリスが陣取り、未来は二人の間を歩く。

そんな彼女の後方をエルフナインがヴェイグを抱えながら片手をセレナと繋いで歩いていく。その二人を後ろから優しく見守るマリア。その隣を翼と奏が歩いていった。

それはどう見えたのだろうか。大家族だろうか。あるいは何かの女子サークルか部活の集まりだろうか。

一つだけ言えるのは、皆揃って笑顔を浮かべている事だ。微笑み、苦笑、いろいろなあれど笑みが絶える事はない。

それを支えるのは一人の男。ただのひとである、この世界の人間だった。

「この後は奏さんを除いたマリア達年長組に調と未来さんが買い物で、それ以外がお家デスよね？」

「そうだよ。酢飯作りとVSシリーズ一番のお祭り映画が待ってる」

「モスラも出るんですよね？」

「正確には小美人コスモスが出る。モスラも出ない訳じゃないけどほんの少し」

「ガイガンが出てるやつはないデスか？」

「昭和の頃とファイナルウォーズだけだからなあ。カッコイイガイガンはファイナルの方だけど、暁さん達が見たのは昭和の奴だからキン

グギドラと一緒に出たやつだなあ」

「キングギドラも出たんですか？」

「というか、むしろだからこそあの二匹はコンビを組まされたんだと思うよ」

会話だけ聞いていればその愛らしい外見に似合わない濃い話をしていると思われた事だろう。

それも仕方ないのだ。彼女達は特撮ではなく現実に宇宙怪獣などを見ている。対して周囲はやはり特撮としか見れないし思えない事なのだ。

「それにキングギドラはゴジラのライバル怪獣な位置づけだ。色んな作品に出てる」

「そうなんですネ！」

「メカゴジラも色んなバリエーションがある。みんなが見たのは三式機龍だ。他に昭和メカゴジラと平成メカゴジラがある」

「どう違うんだよ？」

「簡単に言えば製作者とその背景。昭和は宇宙人の侵略兵器。平成は海に沈んだメカキングギドラの技術でGフォースが創った対ゴジラ兵器。三式機龍は君達も知ってる通り特生自衛隊が初代ゴジラの骨格を利用した対ゴジラ兵器」

「あの、すつごく気になる単語が聞こえたんですけど……」

「メカキングギドラって何デスか!？」

「凄く気になる」

……彼女達は特撮オタクでもゴジラオタクでもない。ただ自分達が知った存在への興味が強いだけである。

「分かった分かった。どうせしようと思ってたけど、見る前に軽く平成ゴジラシリーズについて話すよ。詳しい事を知りたかったら、覗きん、いい?」

「ガッテンデス! バイトの休憩中に借りてみるデスよ!」

楽しげに話す仁志周りの少女達を眺め、マリアは小さく苦笑する。まるで生徒に人気の男子教師に仁志が見えたからだろう。

「何がおかしいんだい?」

「ん？ ああ、只野達よ。まるで学校の一場面みたいじゃない？」

「……そういう事か。たしかにね」

「只野さんは実際立花達にはそういう捉え方をされてるかもしれないな。まあ、授業内容は些かどうかと思わないでもないが」

翼の言葉にマリアと奏は揃って苦笑して頷いた。だが自分達もその授業を楽しみにしている事がない訳ではないと思うからこそ呆れる事はしないのだ。

（只野さんが楽しそうにしている事。それが今の私達に出来る数少ない恩返しだもの）

（ああやって話してる時が一番あいつがイキイキしてるからね。可能な限りそうさせてやりたいよ）

（あれだけ年頃の女性に囲まれても平然とあんなデイーブな話題をしている、か。もしかして只野は女性よりもそういうものの方が好き？）

仁志の表情から読み取る事が大きく異なる歌姫三人。仁志の笑顔や弾む声に笑みを見せる翼と奏。大なり小なり彼へ心惹かれているからなのだが、やはり根底には彼女達の持つ優しさがある。

一方、まだまだ仁志への疑惑というか疑念が晴れないマリアであるが、彼女は気付いているのだろうか？ もうそれだけ気にしている事が既に恋の始まりだと言う事に。

「楽しかったね、エル」

「はい。ヴェイグさんはどうでした？」

「言わなくても分かるだろ」

「楽しかったですよね？」

「……まあな」

セレナとエルフナインの確認に照れくさそうに答えるヴェイグ。最近エルフナインにも甘くなってきたという辺り、ヴェイグも順調にマリア達との共同生活で絆されていると言える。

そしてセレナとエルフナインの関係性もまた、本当の姉妹のようになりつつある。

元々の世界ではそれぞれ年齢に合っているとさえない立場であつ

た二人。それがこの上位世界では年齢相応の暮らしと振る舞いを余儀なくされた。

片や装者としての訓練など出来ず、片や研究なども出来ない。そしてそれを誰に責められる事もなく過ごせるのだ。

それに、上はいても下がいかなかったセレナと、一人っ子のようなものであったエルフナインはその希望する存在が一致していたのも大きい。

人は思い込みの生き物でもある。誰かに姉と呼ばれる事で姉と思い込んでいくように、誰かを姉と呼ぶ事で妹と思いついていくのだ。

彼女達が身の丈に合わぬ役目を背負う必要がない世界、居場所。手に入らないと諦めていた普通の時間、生活。

それらがゆっくりと戦姫やその仲間を癒していく。だがそれはある意味でもっと辛い事を彼女達へ迫る。

ここは、自分達が本来いるべき場所ではない。この一点が遠からず彼女達へ重荷としてのしかかるだろう。

その時、彼女達を支える男はどうするのだろうか。今はまだ誰もその事へ目を向けるはずもなく、ただ平和で穏やかな時間を歩くのみだった……。

この家は結構広いと思っていたが、それでも全員揃うとなると狭い事が分かった。

いつもは余裕がある家の中が、かなり狭い印象だ。だが、それでも全員が楽しそうに笑ってる。

俺も、その中の一人だ。

「て感じがVSシリーズのゴジラの流れと設定」

「モスラに仲間がいたなんて……」

「しかも黒いモスラとか、カッコ良さそうデス」

いつもはテーブルの上に座って食べる俺だが、今夜は居間にあるタダノが元々使っていたテーブル近くに座って食事をしている。今夜は贅沢にと言う事で「すし」と言う食べ物だ。

で、今回ののは「手巻きすし」と言うものらしい。

大量の米にすしずと言ふものを混ぜ、それをうちわで扇いでかき混ぜて作った「すめし」を用意して、それをのりへ乗せて色んな物に乗せて巻いて食べるそうだ。

俺はタダノやセレナにエルと一緒にやった。響は奏や切歌とだ。大変だったがそれに見合うだけの美味さがあると言われたので我慢した。

そして実際俺はそれを使った手巻きすしを食べている。思っていたより美味かった。

買い物から帰ってきたマリアはのりを切ったりさしみを用意したりと色々していた。

セレナやエルも手伝いをしていて、調や未来も手を貸していた。

奏と翼はこのテーブルだけでは置き場所が足りないとなり、自分の部屋からテーブルを持ってきていた。

すめし作りが終わったから響や切歌はタダノの部屋から食後に見ると言う「でいーぶいでいー」とかを取りに行っていたな。

そんな事を思い出している間もタダノは話を続けていた。

「実際黒いモスラ、バトラは結構凶悪な見た目だよ。バトラも正式にはバトルモスラの略だね。本来は地球に危機が訪れた時に目覚める守護神なんだ」

「モスラとは違うんですか？」

「モスラは言うなれば人類の守護神。バトラは地球の守護神ってところかな。だから最初は敵対するんだ。ゴジラとモスラとバトラって感じ」

「三つ巴か」

「それでそれで？」

みんなして手には手巻きすしを持って。中身は好きに変えられるから分らない。

俺はこの赤いやつが気に入った。まぐろ、だったか。これに赤黒い液体のしよーゆを付けてタダノに教えてもらったおおばという葉を入れて巻くと美味い。わさびは少し使ってみたが俺には合わない。

だがそろそろ別の組み合わせもやってみたい。しかしどれが美味

いのかよく分からないな。よし、またタダノに教えてもらおう。

「タダノ」

「横浜つて、ヴェイグどうした？」

むっ、話の腰を折ってしまったか。まあいい。謝っておくか。

「すまん。その、他の組み合わせを知りたい」

「いいよ。ごめん、ちよっと待ってて」

「はーい」

「饗、海苔どーぞ」

「ありがと」

「調、次は何を巻くデスカ？」

「うーん……イカ納豆？」

「渋いのを食べるのだな、月読は。では私はイカキュウでも……」

タダノがのりを手にしてすめしを乗せる間、俺は周囲を見回した。どこも楽しそうだ。タダノの話が始まるまでに食べたりあるいは次の手巻きすしを作ったり、みんなタダノの話を楽しみにしているようだ。

もしくは、話が終わった後に見るという「えいが」かもしれない。どちらにしろ今夜は今までにないぐらい楽しくなるな。

「マリア姉様、上手く巻けません……」

「ご飯が多すぎるのよ。もう少し減らして……これぐらいかしら？」

「クリスさん、わさびは使わないんですか？」

「こ、これは必要な時だけ使えばいいんだって」

「セレナ、クリスはわさびが苦手なんだって。ほら、サーモンとキュウリにマヨネーズだ。どうだい、綺麗だろ？」

「わあ、本当だ」

「良かったら食べてみな。美味いから」

「はい！」

セレナも楽しそうだ。今のこの家は、とても優しい匂いがしてる。それと、すの匂いもだな。ちよっと苦手な匂いかもしれないが、これだけ美味しいなら許してやる。

「と、出来た。エビキュウマヨ巻だ」

「綺麗だな」

「エビの赤、キュウリの緑にマヨの白だ。エビの尻尾は取ってあるから気にせずかぶりついてくれ」

「なら……あむっ」

……うん、俺はやっぱりきゅうりの歯ごたえが好きだ。ボリボリとしてて食い応えがある。

ん？ それと違う歯ごたえがある。甘みを感じるが旨味もある。これが……えびか。

この味はマヨネーズだ。サラダとかに使われているから知ってるぞ。ふんふん、すめしにも合うんだな。

「どう？」

「……美味しい」

「そつか。マヨネーズに少しだけ醤油を垂らすともっと美味しいんだ。次やる時試してみてよ」

「分かった。ありがとうタダノ」

「いいって事さ」

そう言つてタダノは素早くのりへすめしを乗せて伸ばすと、ひよいひよいと具材を選んで巻いてしまう。

あの速さは今の俺には無理だ。そしてその手巻きすしを持ってタダノはまたさっきの位置へ。

それだけで全員がタダノへ目を向けた。みんなタダノの話が気になつてるんだと分かる。

「えつと、それで最終的に三体は横浜みなどみらいで決戦となるんだ。でも、当然ゴジラの力に成虫となったモスラもバトラも歯が立たない。そこでモスラはバトラへ協力しようと思ちかける。今までバトラに痛い目に遭わされたのに手を取り合おうとするモスラの優しさにバトラも折れ、遂に二体がタッグを組んだ」

「おおっ！」

「さしものゴジラもモスラとバトラのコンビには苦戦する。遂には二体の協力攻撃でゴジラはその熱線を封じられてしまい、大地へ倒れ込んだ」

「「「ごくり……」」」

調や切歌だけじゃなくエルやセレナも聴き入ってるな。

「そこで二体はゴジラを海へ封印しようとする。だが、その途中でゴジラが目を覚ましてバトラへと噛み付いた。首から血を流しながらも放すものかと懸命にバトラは耐える。でも、傷口から放射熱線を浴びせられ遂にバトラは力尽きてゴジラと共に海へと落下してしまった」

……想像すると悲しいな。やっと手を取り合えたと思えば死に別れる、か。

「モスラはそこで仲間であるバトラとの別れを悼むように儀式のような行動を取った。そしてそれからモスラはバトラの遺志を継いで宇宙へと飛び立つ」

「宇宙？」

「さっき言っただろ？ バトラは地球の脅威へ対処するんだ。実は、その時地球へは巨大隕石が接近しつつあり、それを感じ取ってバトラは目覚めたんだ。で、力尽きる最後の瞬間、モスラへバトラはそれを教えて使命を託したって訳」

「感動デス……モスラを信じてバトラはゴジラを海へ封じたんデスね」

「モスラ、きつと悲しかったはず。でも、大事なお友達からの願いだから宇宙へ行っただ」

「これがVSモスラのラスト。詳しく知りたいならレンタルして。家族愛や環境問題なんかも取り上げてるし、必ずゴジラが悪とは言えないって分かるよ」

これだ。タダノはごじらと言う存在を悪と言い切らない。聞いていると人間に害しか与えないのにだ。

「タダノ、どうしてごじらを悪と言わない？」

なので聞いてみた。するとタダノは真面目な顔でこう言ったんだ。

——ゴジラは人間が生み出した核被害者だからだよ。

そこからタダノは教えてくれた。ごじらとは核兵器という恐ろしいものの結果誕生した生き物だと。

人間が科学を万能と思い込んで好き勝手した結果、地球の怒りとしてゴジらは生まれたようなものだ。だからゴジらは悪じゃない。悪がいるのならそれは科学を過信する人間だろう。それがタダノの意見だった。

「ゴジラの生みの親である人は暴力を否定し、それがまかり通る事を嫌った。そしてその人はウルトラマンの生みの親でもある」

「ウルトラマンのっ!？」

「そうだよ。ウルトラマンが人間の守護神ならゴジラはその逆。だけど、込められた想いは似てるんだ。どちらも人間への警告なんだよ。科学を過信すれば必ず痛い目を見る。地球は人間だけのものじゃないって。両者は人の善と悪みたいに表示一体だと思うんだよ。人の心の光の象徴がウルトラマンで、人の心の闇の象徴がゴジラかな」

俺はそれを聞いて思った。世界蛇もそうかもしれない。あいつはゴジらなんだ。本当はうるとらまんにもなれたはずなのに、ゴジらにされてしまったんだ。

「さて、話を戻そうか」

その言葉で俺は顔を上げる。タダノはもう明るい顔に戻っていた。「モスラとの戦いで海へ沈んだゴジラだったが、その復活に備え国連はゴジラ対策の組織であるGフォースを設立。その戦力として当時最先端の技術を結集して飛行メカであるガルーダを製作する。でも、それは飛行能力だけは優れていたが攻撃力などでゴジラへの対策となり得ないと判断されてしまった」

「駄目じゃねーか」

「そこでGフォースはゴジラとの戦いで海へ沈んだメカキングギドラの首を回収。二十三世紀の技術をそこから分析しそれを基に対ゴジラ兵器であるメカゴジラを作り上げた」

「出たデスっ!」

「未来の技術……」

「あの世界のドクターが聞いたら絶叫しそうね」

「マリアの言葉に切歌と調が頷いた。それと響と奏もか。」

「物語はアドノア島で恐竜の卵と思われる物が発見され、そこへ調査

生き物。それらを踏まえた上でVSスpegジをどうぞ！」

こうして俺達は初めてこの世界でえいがというものを見る。

居間にみんなで座って見るんだが、そのままじゃ俺は見えないので翼の膝へ乗せてもらう事になった。

「すまん」

「別にいい。気にしないでくれ」

翼からも以前より優しい匂いがする。タダノといるとそうなるのは、何でだ？

とにかく今は楽しもう。タダノが面白いと言ったんだ。きっと色々感じる事があるはずだ。

「わあ……」

僕は目の前の光景に感嘆の声を出した。初めて来たスーパー銭湯は広くて大きいお風呂がありました。あと、ジャグジーだったと思う。泡が出続けているお風呂や寝そべるように入るお風呂も見えます！

「凄いね！」

「はいっ！」

セレナ姉さんも僕みたいにワクワクしてる。他のお客さんもいるようだけど、本当に数えるぐらいだ。

「二人共、まずは体を洗いなさい」

「はーい」

マリア姉様の言葉に返事をして洗い場へ。そこも凄い。大勢の人が体を洗えるようになってる。

でも僕らが来ただけで半分近くが埋まってしまう。入口で兄様が団体ですって言ってたのを思い出した。

それで少しだけ安くなったんだっけ。それを聞いてマリア姉様達も少し相談していたのを見た。

「ヴェイグさん、私と一緒に洗いましょう」

「……仕方ないか」

セレナ姉さんの腕の中でヴェイグさんが少しだけ嫌そうな顔をす

る。お風呂を張る時は僕はいつもセレナ姉さんと入る事になった。だからヴェイグさんも一緒に入るんだけど、お風呂に入るのは嫌がらなくなったのにもいつも体を洗う事は嫌がるんだ。

洗い場の空いている場所へ座る。ひ、一人でこんなに場所を使っていいんでしょうか？ そう思っていると隣の調さんがこっちを向いた。

「エル、どうしたの？」

「え、えっと、僕一人でこんなに場所を取っていいのかなって」

「ふふっ、いいんだよ。早く体を洗ってお風呂入ろ？」

「あ……はいっ！」

僕へ優しく微笑む調さん。基本調さんと切歌さんは僕をエルフナインと呼びます。でも外にいる時はエルって愛称で呼ぶようにしてくれています。周囲に聞かれた時のためらしいです。

でも、今の僕はエルと呼ばれる方が嬉しくなってしまうんです。だって、その方がここでの僕って思えるから。

錬金術も聖遺物も知らない、ただの少女。それがここでの僕、エルなんだって。

「調、髪洗うの手伝うデスよ」

「ありがとう切ちゃん」

隣から聞こえる会話に思わず笑みが浮かぶ。やっぱり調さんと切歌さんは仲良しです。

僕もセレナ姉さんと似た事をします。僕が髪を洗ってもらって、お返しに僕がセレナ姉さんの髪を洗う事を手伝う。長い髪は洗うのが大変ですから。

「いやあ、それにしてもすごかったね、映画」

僕が首へ泡立てたボディソープを塗り始めるとどこからか響さんの声がした。

「だな。最後の盛り上がりはヤバいの何のって」

「モゲラ、カッコ良かったデス！」

「スペースゴジラもちよっと可哀想だったけどね」

「私はリトルが最後放射熱線の練習してるのが可愛かったな」

皆さんで話すのは家で見ていた映画の事。兄様が細かい事は考え

ず見て欲しいと言ったように、あつという間の一時だった。

最後の決戦はとてすごかった。あれがどこかの世界で本当にあった事だと思うと恐ろしい。だけど、同時に人の持つ強さと弱さを再認識出来た。

「何ていつてもゴジラが最後に見せた熱線だろ。すつごい迫力だったしね」

「奏はずつとゴジラを応援してたもんね」

翼さんが苦笑しながら髪を洗い始めてた。実際奏さんは最初から最後までゴジラを応援してた。モゲラに負けるなどか、スペゴジなんてぶっ飛ばせとか言っていましたし。

「お兄ちゃんなんて結末知ってるのに拳を握っていました」

「タダノらしい」

「でも、色々考えさせられるわね。あのゴジラの行動理由を考えると」
「リトルを、自分の仲間を助けるために一度負けた相手へ戦いを挑みに行く。僕、ゴジラを悪と言わない兄様の気持ちが分かりました」

地球を守るとかスペースゴジラが許せないとかじゃない。あの時のゴジラは唯一の仲間であるリトルを助けたいから戦いに赴いた。それは僕ら人間と何ら変わらない心です。

ううん、本能で生きてるはずのゴジラが仲間のために勝てない相手へ挑むのは心があるからだ。ゴジラも心があつて生きてる。だから兄様は悪なんて言わないんだ。

「最後は人間とゴジラの共闘だったしね！」

「何ていうか、あれは熱かったよな。ゴジラを憎んでたはずのおっさんが援護するってのは」

「地球を我が物としようとするスペースゴジラに対抗するには個々では駄目だった。ゴジラは共闘するつもりはなかったが、人間側がゴジラを援護して共闘へ展開していく。あれは、まさに地球に生きる者同士の生存を賭けた連携だった」

「あの、翼さん、手が止まっています」

「っ!? す、すまない」

どうやら翼さんもかなり気に入ったみたいです。

「只野さんは言ってたデス。王道の展開はどれだけやっても廃れる事はない。何故なら、誰もが好きで盛り上がるからこそ王道なんだって。あの映画はまさしく王道でした!」

「全部に見どころがあったもんね。ゴジラにも、モゲラにも、スペースゴジラにも」

「出てくる人達にもです。人の愛、絆、想い。怪獣映画ってお兄ちゃん言ってたけど、人間の映画でもあった気がします」

「そうだな。それに怪獣と言ってもリトルは可愛かった。ゴジラの後ろに隠れた時などは父親の背に隠れる子供にしか」

「翼、手が止まってるよ」

「ご、ごめん」

奏さんがどこか苦笑しながら翼さんを見つめてる。翼さん、リトルを見て可愛いって言ってましたし、ヴェイグさんの事も映画を見ながら時々撫でてたそうだし、もしかして可愛いものが好きなんですか？

「でも、最後にゴジラと人間が手を取り合えたのは良かったなあ」

「響はスペースゴジラとも手を取り合って欲しかったんじゃないの？」

「それは……うん。でも、ゴジラと違ってスペースゴジラは最後まで全てを壊す事しか考えてなかった。ゴジラは心があるように見えたけどスペースゴジラは心はなくて本能しかないように見えた。言葉も通じないし在り方も違う。やっぱり怪獣、なんだよ」

「そうだね。あいつはゴジラじゃない。多分だけど心がなかったんじゃないかな。ただ本能しかない、怪獣。ゴジラは本能と心がある。それがあるからあんな存在なのに愛されてるんだよ、きつとさ」

奏さんの言葉に僕は頷いた。兄様は教えてくれました。ゴジラはこの世界では世界中で愛されてる存在だって。怪獣で人間へ牙を剥くのに愛されるのは、人々の中にゴジラの生い立ちと意味がしっかりと理解されているからだろうって。

「それにしても、只野さんのオススメが気になるデスよお」

「クウガ、だっけ？」

「そうだよ。仮面ライダークウガだって」

「簡単に導入を聞いたが、何というかヒーローらしからぬ感じの人物だったな」

「冒険家で青空が好きな奴、だもんなあ。おっさんの方がよっぽどヒーローっぽいぜ」

「タダノと同じようなものじゃないのか？」

そのヴェイグさんの言葉で皆さんが一瞬黙って、揃って納得するように声を上げました。響さん、翼さん、クリスさん、マリア姉様、切歌さんに調さん、奏さんとセレナ姉さん、そして僕も。

その後は会話が途切れてみんなで洗う事に集中しました。僕はセレナ姉さんの髪を洗う手伝いをしてヴェイグさんと三人で一番大きなお風呂へ入る事に。

「「はあく………」」

思わず声が出てしまう。でも、これが普通だと兄様へ相談した時に言われました。マリア姉様も油断していると声を出してしまうそうですし、きつとこれは条件反射なのだと思います。

「エルちゃくん、セレナちゃくん、私達も入っていい？」

「「どうぞ」」

「一々聞かなくてもいいだろうが」

「響らしいよね」

そこへ響さん達が入ってきました。そういえば響さん達はここへ来るのが二度目だそうです。お風呂上がりには楽しい事があるって言っていました。

「あの、響さん」

「ん？」

「お風呂上がりの楽しい事って何ですか？」

「あー、それはお風呂を出てからのお楽しみだよ」

「未来さんは知ってるんですか？」

「私も知らない。でも、響の雰囲気から何となく予想はついてるけどね」

そう言って笑う未来さんに響さんも笑った。何でしょうか。こち

らに来てから響さんと未来さんは以前よりも以心伝心な感じがします。

「クリスは知ってるのか？」

「ん？ まあな。でも教えねーぞ？」

「タダノも？」

「むしろあの人があたしらへ教えてくれたんだよ。ここにそんな楽しみがあるってな」

「どういう事なんだろう？ 僕は分からないのでセレナ姉さんを見る。すると目が合いました。で、二人で笑ってしまった。こんな事でも今の僕は幸せです。」

思えば、こっちに来てから僕はよく笑うようになりました。

研究するものもなく、家の手伝いを終えたらやる事がないのでヴェイグさんと日向ぼっこをしたり、時には兄様の部屋の掃除を終えたセレナ姉さんと二人で遊んだり、マリア姉様が休みの日は一緒に買い物へ行ったり、向こうでは考えられない時間を過ごしています。

最近では切歌さんとこの街の探検へ出かけたり、調さんとはお昼の散歩をする事もあります。

僕は、もしかしたらこういう生き方をしたかったのかもしれない。そう思うようになってきました。

錬金術の知識を使ってS・O・N・Gの一員として役立ちたい気持ちはある。でも、それと同じぐらい、こんな風に皆さんと、ううんみんなと家族として、子供として生きていたいって。

—— キャロル、もし今の僕を君が見たら何て言うのかな？

休憩スペースで待つ事十五分。そろそろ誰か出てきてもいいんじゃないか？

そうは思うもやはり誰も来ない。エルとヴェイグ辺りはさっさと来てくれると思っただけだなあ。

「眠くはない……とは言い切れないなあ」

やっぱりカラオケではしゃぎ過ぎた。三十近い男が何やってんだか。カラオケではしゃぎ過ぎて眠いとか高校生でも中々ないぞ。

いや、これはあれだな。カラオケだけじゃない。今日一日が楽しすぎたんだ。久々の連休ってだけじゃなく、みんなで一日中過ごせたって事が。

「……原作でも装者七人が平和な時間を一日中過ごすってなかったし」

それぞれ別々の場所で、ならあったかもしれないが、一緒になってなると途端に思い浮かばない。精々がGXの一話で翼とイヴさんがロンドンでライブやってるのをクリスの部屋で響達が見てたぐらいか？

でも、あれも結局平和なままで終わらなかったもんな。当然だよな、一話だし。そこから物語が始まるってのに平和なままで終われるかよ。

「兄様〜」

と、そんな事を思い出していたらこっちへ駆けてくる可愛い子。両腕でヴェイグを抱えてやってきたのは金髪天使のエルフラインことエルであります。

「エル、危ないよ。あまり走らないように」

「あつ、ご、ごめんなさい」

しゅんとしよげるけど、反省をすぐ出来るのがこの子のいいところだ。

「分かってくれればいい。ヴェイグを乾かしてた？」

「はい」

「エルが風の温度を上げ過ぎてビツクリした」

「ヴェ、ヴェイグさん、それは言わないって約束したのに」

「ははっ、そうか。これからは気を付けるんだぞエル」

「はい、気を付けます……」

頭を軽く撫でると、髪はちゃんと乾いてた。そうしているとセレナちゃんとザババコンビが現れる。

「お兄ちゃん、お待たせしました」

「およ？ 只野さん、眠そうな顔してるデスね」

「疲れたんですか？」

「うん、楽しすぎてはしゃぎ疲れ」

力なく笑うと三人が揃って苦笑した。

「実はアタシ達もデス」

「うん。凄く眠い」

「お風呂で揃って寝ちやいそうになって、姉さんに怒られました」

「あらら、元気な君らでそれか」

俺が三人と話している内にエルがいつの間にか膝の上へ移動していた。で、ヴェイグは俺の横でちゃっかり座ってる。

で、何故かセレナちゃんやエルをいいなあって感じで見つめてる。撫でて欲しいのだろうか？ もしくは俺の膝上に来たい？ 前者ならしてあげたいし、後者なら……さすがにごめんなさいだな。

「そういえば残りの女性達は？」

「もう来ると思っています」

「今は翼さんやマリアの髪を乾かすのに時間を取られてますデス」

「姉さんもいつそ髪を切ろうかなって言ってました」

「そういえば似たような事を翼が言ってるって天羽さんから以前聞いたなあ」

その時、翼からもどう思いますかと聞かれたっけ。なのであの平行世界のオレっ子を思い出していいと思うと返した。

でも、結局切ってないところを見るに色々と思う事もあるんだろうな。

「ん……？ 髪の毛……？」

寝惚けた頭がその事に引っ掛かりを覚えた。俺、そういえば響達に散髪代を渡した覚えがないし、彼女達が美容室とかへ行ったの聞いた事がない。

「っ?! 月読さん、頼みがあるんだけど」

「何ですか？」

俺は月読さんに脱衣所へ行つてイヴさんか天羽さん、翼の誰かにここへ来てから一度でも髪を切りに行つたか聞いてくれるよう頼んだ。

月読さんは俺の雰囲気からそれが大事な事だと分かってくれたらしく、すぐに脱衣所へと戻って行った。

つい失念してたけど、女性は何もかのように伸ばして鬱陶しくなったら切るとかじゃない。なら、イヴさんはともかく翼はもう二か月近く経つんだ。一度は散髪に行つてないとおかしい。

「あの、お兄ちゃん、今のは？」

「何か分かつたんデスか？」

「もしかしてってぐらいだ。これが当たつてると、また考えないといけない事が増えるかもしれない」

そう俺が告げるとセレナちゃんと暁さんが揃つて息を呑んだ。つて、さつきからエルもヴェイグも静かだな。

そう思つて視線を動かすとエルは俺にもたれるように寝てるし、ヴェイグも同じくだ。何というか、愛らしい二人である。

俺は起こさないようにそつとエルとヴェイグを一緒の座布団の上へ寝かせた。こうして見てるだけで色んな疲れだのなんだのが飛んでいく気がするな。気分はもう父親だ。

「只野さん」

「月読さん、どうだった？」

「えつと、マリアも奏さんも翼さんもまだ一度も行つてないつて」

「そっか。それに関して三人は何か言つてた？ 伸ばしてるからとか暇がなかったとか……」

「いえ。翼さんと奏さんはそれで息を呑んでました」

「イヴさんは？」

「マリアは……そんな二人を見て息を呑んでました」

成程、どうやら三人には俺の気付いた厄介事が分かつたらしい。でもこれではば間違いない。

俺の予想は外れてないと思う。二か月近く経過しても切らなくていいぐらい伸びない髪。これはきつと……

「先輩っ！」

と、そこへ現れる残りの女性達。つて、そこで気付いた。九人が九人共南国的な髪飾りがあるつて。

つまり九人の女性達はあの水着な訳で、俺はそれを知つてる訳で、湯上り美人と湯上り美少女が隠してる姿を想像出来る訳で……。

その言葉に九つの笑顔の花が咲いて、俺はそれを何があっても守りたいと改めて思うのだった……。

再びマリア達の家へ集まった仁志達。時刻は午後十時を過ぎ、エルやセレナは普段ならそろそろ寝る時間であった。

それでも彼女達はパジャマに着替えて起きていた。仁志が気付いたある事を聞くために。

「多分だけどみんなの体の成長というか経過時間が著しく遅くなつてると思う」

仁志が気付いたのは髪の毛の伸びる速度。響達はこちらに来てもう二か月以上が経過したのに散髪が必要になつていない事を証拠として挙げた。

実際クリスも妙に伸びが遅いと感じており、響などは気付かなかつたと言う程だった。おそらくだがこの上位世界では響達は存在が不安定で、依り代が何とかそれを支えているものの完全に安定されていく訳ではないのだろうと仁志は予想した。

「で、でも、お腹は空きますよ?」

「うん、多分だけど生命活動はちゃんと行ってるからエネルギーは消費してるんだと思う。でも、それは体内の事だから影響を受け辛いんじゃないだろうか?」

「多分ですが……髪の毛の伸び方が遅いとなると……単なる時間の経過速度の違いではなく……」

「エル、もう寝た方がいいわ。また明日聞くから」

「そうします。……皆さん、すみません。おやすみなさい……」

そう言つてエルフナインは自分の布団へと潜り込んだ。その姿に誰もが笑みを浮かべるも、それをすぐに消して少しだけ思案顔をする。

「要は、体の外側程時間の流れが遅くなつてるって事?」

「分からない。エルは多分そうじゃないって言おうとした気がするし」

「体重は変化してますかね?」

「分からない。今は体重計ないから」

「だが、そうか。これで納得がいった。これ程訓練をしていないのに何故筋力などがそこまで衰えないのか疑問には感じていたのだ」

翼の言葉に心当たりがあるためか仁志以外の全員が一斉に納得した。

何せ響とクリスはもう三か月近くこの上位世界で過ごし、訓練などをしなくなっている。

それでも響は体力が落ちていないため、翼の意見は事実なのだろう。

まあ、クリスの体力も増していないので良し悪しではあるだろうが、それは残念ながら彼女しか気付かない話である。

「じゃ、もしかしたらどれだけ食べても太らない?」

「それも分からない。摂取したカロリーの影響が体へ出るのが遅くなってるかもしれないし」

「そうね。というか、そうじゃないと納得出来ないわ。どうしてコンビニの揚げ物とかを食べてる奏と私の体型が大きく変わらないのよっ!」

不満そうに奏を睨むマリアだが、それを聞いて仁志は女性らしい怒り方だなと思っ苦笑していた。

(あれ、俺だったらそこまで思わないなあ。精々羨ましいって言うぐらいか)

体重一つでそこまでムキになるマリアを若干可愛いと思ひ、仁志は彼女を見つめる。

そんな彼の視線に気付き、マリアはやや鋭い眼差しを仁志へ向けた。

「何よ?」

「え? ああ、うん。イヴさんもそういう顔をするんだなあつて」

「そういう顔?」

「ムキになって怒る顔。今のイヴさんは大人の女性じゃなくて可愛い少女だよ」

「っ?! か、からかわないで!」

「そういうつもりじゃないんだけどなあ」

照れくさそうに顔を背けるマリアに仁志は苦笑しながら頬を掻いた。

そんなやり取りをすれば黙っていられないのがこの場にはいる訳で……

「只野さん、今はマリアさんとイチヤイチャしてる場合じゃないですっ—」

「え？ いや、俺は別にいちや」

「そうだぞ。そ、そういう事は、やるんじゃない！」

「あ、はい」

「先輩、マリアってそういうのあまり経験してないんだからさ。そつとしいてやりな」

「わ、分かった」

響、クリス、奏の三人に強く、やや強く、それなりにと、それぞれから注意され、仁志は戸惑いながらも領いてその場を収めた。

それを見て残る女性達は女性達で思う事があった。

（立花はともかく、雪音と奏まで只野さんへ注意を？ 嫉妬、ではないと思うが……）

（やっぱり響は只野さんが好きなんだね。……伝わってない辺りが響らしいかも）

（クリス先輩が家でやれって言わなかった（デス）……）

（姉さん、いつそお兄ちゃんとお付き合えばいいのに……）

首を傾げる翼、疑念が確信に変わる未来、定番が外れて驚く切歌と調、そして最愛の姉と兄と呼んでいる相手の接近を願うセレナ。

そんな中、女性達の中で一番の年長であるマリアはと言えば……

（狼狽えるなっ！ さ、さっきのは只野のいつものやつよ。異性としての意識など欠片もなくただ素直に感想を……素直な感想、なのよね。私を人として見て可愛いとか綺麗だって言ってくれてるのよ、只野は。あちらの男によくある下心を滲ませたような世辞や口説きじゃなくて）

狼狽えはしなくても思い切り揺れ動いてはいた。やはり自分を特

別視しない相手というのはマリアがもつとも求める存在なのだろう。ともあれ場の空気が和んだ事を受け、仁志は時計へ目をやった。「じゃ、今日はこれでお開きにしよう。翼、天羽さん、一応部屋まで送るよ」

「ではお言葉に甘えます。みんな、おやすみ」

「おやすみ。良い夢見ろよ」

「また明日。おやすみ」

「……おやすみ（なさい）（デス）……」

今夜は響とクリスに未来がマリア達の家へ泊まる事となっている。仁志達を見送り、セレナはすやすやと眠るエルフナインと同じ布団へと入るなりすぐに寝息を立て始めた。

ヴェイグは既に隅の定位置でもあるクッションで眠っている。その姿に響達は笑みを浮かべた。

「マリア、今夜はマツサージしなくていい?」

「ええ。今夜は大丈夫」

「じゃおやすみデス」

揃って同じ布団へ潜り込む切歌と調。彼女達も疲れからかすぐに寝息を立てる。

「な、何だか妙な感じだな」

「うん、そうだね。私もクリスとこうやって寝るなんて思わなかった」

何とクリスは未来と一つの布団を使う事に。残った響はと言えば……。

「……若干寂しい」

「ふふっ、いいじゃない。こっちに来てからずっと誰かと寝てたんでしょっ…」

「まあ……」

「どうしてもって言うなら私と寝るっ…」

「そ、それは遠慮しておきます……。おやすみなさい」

「ふふっ、おやすみ」

マリアの隣で一人布団を使う事になっていた。

たった一人で寝る事が久しぶりのためか、響は微かな寂しさを感じ

ていた。

それでも彼女は一人寝を選ぶ、それはひとえに自分のためだ。
(でもたまにはいいかも。将来のためにもなるし)

一人で寝る事も卒業後は当たり前になるかもしれない。そう思い直して響は目を閉じる。聞こえてくる複数の寝息に小さく笑みを浮かべながら。

その頃、仁志は翼と奏を両側に連れて夜道を歩いていた。

「この組み合わせって何気に初めてだな」

「そうですね。それぞれと二人はあるかもしれないませんが」

「両手に花だけど、気分はどう？」

「最高だよ。というか、もう今日が最高だ。人生で最良の日かもしれない」

「それは大袈裟(です)」

「いやいや本気だって。ホント、もうこんな幸せはないかもしれないな……」

噛み締めるように眩き空を見上げる仁志。その横顔を見て翼と奏は息を呑む。

(只野さん、なんて悲しい目を……)

(只野、もしかしてあんたって……)

(こんな時間が長く続いちやいけないんだ。彼女達が一刻も早く自分達の居場所へ帰れるようにしないと。俺だけが幸せになっちゃったって仕方ないんだ)

こんな時間がずっと続けばいいのに。響達が抱いているそれを、誰よりも抱いているのが他ならぬ仁志である。

それを彼は口に出さず、顔にも出さないようにしてきたつもりだった。それでも、この瞬間だけ、この時だけはそれが出してしまった。

男のやせ我慢や強がり。それが消えた一瞬の無防備な心の表情を見て、翼と奏は胸が騒ぐのを覚えていた。

「なんて、あと十年もすると思うんだろうな。若かった頃のみんなを思い出してさ」

「っ……このっ、それはどういう意味だ？」

「十年後の私達では今よりも劣ると言いたいのですね？」

「そうは言わないけど可愛さは……なあ」

「ねえ奏。只野さんに送ってもらったらせめてお茶ぐらい出そうと思
うんだけど、どうかな？」

「いいと思うよ。ちゃんとおもてなししてやろうじゃないか」

「あ、あの、お二人共？ 目が怖いんですけど……」

仁志が場の空気を変えようとした事を受け、奏と翼もそれに乗るよ
うに会話を交わす。

こうして仁志はその両腕を彼女達に絡められ二人の暮らす部屋と
連行される事に。

——只野さん、今夜は立花達が隣にいませんからここへ泊まるべき
です。

——そうそう。あたしと翼がいれば安心だろ？

——あのお、エロい事をされるとは思わないんで？

——出来るものならご自由に。

——というか、そんな事したらあたしか翼は気付くから。後は分か
るよね？

——すみません。謝るので帰してください。二人が傍にいたら今
夜は手を出さない自信がありません。強姦魔やら最低男とみんなに
言われたら心が死にます。

と、そんなやり取りをして仁志は一人夜道を行く。

「やれやれ、翼も天羽さんも胆が据わってきたよ。天羽さんなんてあ
れだけ俺があ部の部屋で響達と寝泊りするの反対したのになあ」

女の成長はやはり早い。そう思いながら仁志は帰路へ就く。

（た、只野さんが私達へ面と向かっていやらしい事をするかもと言っ
た……。なのに、どうして私は嫌がるどころかむしろどこかで期待し
てしまったのだろうか……）

（あたし、もしかして惚れてるのかな？ いや、違うね。前もここで一
緒に寝た事あるから気を許してるだけだ）

女の成長は早い。それはきつとその想いにも……。

V i t a l i z a t i o n

「おはようございます、 店長」

聞こえた声に振り向けばそこにはどこか眠そうな月読さん。そうか、もうそんな時間か。

そう思つて時計へ目をやれば時刻は午前六時まであと七分。オーナーにはもう帰つてもらつた。

まあ、そう言つても帰つたのはほんの十分前だけど。

「おはよう月読さん。ちょっと眠そうだけどどうしたの？」

「えっと、寝る時間が遅かつたんです。それで、今日は何かありました？」

「特には。ああ、そうそう。あのシールのキャンペーンはもう終わったから」

「あ、そうでしたね。じゃ、もうお皿も？」

「それが見本用の展示品が残つてるんだ。で、オーナーが言うには欲しい人によっていいって言われたんだけど月読さ」

「欲しいです」

遮るように即答。だらうなあ。あれを見た時から可愛いって言うてたし。

「剥き出しだけどいいかな？」

「構いません」

「ん。じゃ、ここに袋に入れて置いておくからちやんと持ち帰つてね？」

「はい。ありがとうございます、 店長」

にっこりと微笑む姿はまごう事無く美少女である。月読さんもバイトを始めてもうじき一か月になるか。とつくに研修は終わり、南條さん曰くとても素直で物覚えも良くしつかりしたい子との事。

……息子さんの嫁について言つてたけど、あれ、割とマジだったなあ。

そんな事を思いながら俺はPCからどいた。月読さんはもう制服の上着を着ていて、その名札のバーコードをPCへ読み込ませて出勤処理完了。

「じゃ、ノートの確認をよろしく」

「はい」

頷いてカウンターへと出て行くのを見送り、俺は再びPCの前へ。使用者のIDが消えているので自分の名札のバーコードを読み込ませて売上データなどを表示させる。

「……地味に上がってるんだよなあ」

月読さんと小日向さんが入ってから朝と昼の売り上げが若干ではあるが伸びているのだ。

言うまでもなく男性客、と思いきや女性客が伸びている。おそらくだが良くも悪くも慣れてしまっている主婦のおば様達と違い、月読さんや小日向さんはまだまだ慣れない事もあるし根が真面目で一生懸命だ。そこに好感を抱いてもらえてるんだろう。

夕方相変わらず響やクリスが入っている日は売上が上がってる。これはあの二人に相手してもらおうと思う男性客によるものだと思う。

「オーナーが響やクリスによく差し入れするはずだよ」

このところあの二人は毎週一度はオーナーから何かもらっている。ジュースだったりお菓子だったり様々だが、それをやっているのは二人揃ってのシフトの時だけらしいので間違いなくこれの礼だろう。

……天羽さんも時々コーヒーもらうって言ってたなあ。俺、ここで勤務し出して三年近くになるけど、そんな事数える程なんだけど。

「おはよう店長。ちよっといい？」

「はい？」

そこへ南條さんがやってきた。慣れた感じで上着を羽織りながら出勤処理をしていく。

「ホットスナックなんだけど、アメドあまり売れないじゃない」

「そうですね」

「でも、たまにお昼にかなり売れるんだって」

「らしいですね」

「どうするっ？」

「あー……」

要は売り上げに繋がる時にそれを逃してるけどいいのかと、そういう事か。

正直難しいところではある。ただ、色んな事を考えると……。

「普段通りでいいです。いつあるか分からない時のために廃棄や手間を増やすのは馬鹿馬鹿しいんで」

「そう。じゃ、焼き鳥はどうする?」

「あれ、正直売れませんか」

「そうなのよお。でも、やれってオーナーは言うじゃない?」

「やって欲しい、ですよ」

「ここが難しいんだよなあ。こっちがお願いだと思ってる事もいつの間にか命令に捉えられてる時がある。」

「そう? でも……」

「分かりました。オーナーへは俺から話しておきます。焼き鳥、今よりも在庫減らしていきましようって」

「そうしてくれる? 大体焼き鳥ならうちよりも」

「他系列の方が美味しいです。でも南條さん、それはオーナーには言わないでくださいね」

「分かってるわよ。店長だから言ってるんだから」

「俺にも言わないで欲しいんですけどねえ」

何せそれをどうやって売るかを考えないといけない立場なのだ。

ま、セールになった時だけ力を入れればいいや。通常で売れない物 を売れるようにするにはあの焼き鳥はそもそも力不足だし。

そんな会話をして南條さんはカウンターへと向かった。と、そう だ。俺は発注しないと。

発注用の端末を持って店舗へと移動。レジでは月読さんがこれか ら出勤らしい工場作業員の男性へコーヒーを渡していた。

「はい、どうぞ。熱いので気を付けてください」

「ありがとう」

「ありがとうございます。お仕事、頑張ってください」

そう言われ男性は小さく片手を上げて店を出て行った。成程、売上 が上がる訳だ。

「良い子よねえ調ちやん」

月読さんを眺めていると南條さんが近付いてきた。その顔はまるで親戚のおばさんだ。

「……ですわね」

「あれ、自分で言い出ししてるのよ。良いお嫁さんになるわあ」

「息子さんの嫁に欲しい、でしたっけ」

「そうそう。うちの子、今年で二十歳なんだけどまだ彼女出来た事ないのよ。紹介されたら調ちやん、困るかしら？」

「南條さんが高校生の頃に二十歳の男を職場の先輩に紹介されたらどうですか？」

俺がそう返すと南條さんはうーんと唸って固まってしまったので、俺は今の内にとカウンターから出ておにぎりなどの米飯を眺める。

やはり売れ筋は相変わらず、か。新商品は……いまひとつか。美味いんだけど値段だろうか？ あるいは認知が甘い？

新入荷もそんなに動いてない。やっぱりこの店の客は基本安牌を好むんだよなあ。新しい物へあまり手を出してくれない。

だからって諦める訳にはいかないし……どうしたもんか。そんな事を考えながら発注を始める。

他の発注は既に夜中で終わらせてる。米飯だけは朝の時間でやるようにしているから今やってるけど。

「あの、店長」

「ん？」

聞こえた声に顔を動かせばそこには月読さん。

「もう時間ですよ？」

「ああ、ありがとう。でもこの発注があるからさ」

「……おにぎりとかですか？」

「そう。興味ある？」

「はい」

どこかキラキラした目で端末を見つめる月読さん。ふむ、発注なんかは教えるつもりもないしやらせるつもりもなかったんだが……。

「じゃ、少しやってごらん。まずこれを持って」

「いいんですか？」

「いいよ。俺が言う通りにしてくれればいいから」

「はい」

こうして俺は月読さんにおにぎりを数種類発注してもらおう事に。月読さんはちよつと緊張しながら端末を操作してたけど、それを楽しそうにしていたので良かったと思う。

「もし良かったらカップめんとかの発注、頼む事があるかもしれない」
「え？ 私に？」

「うん。発注は出来れば週四は入ってる人をお願いしたいんだ。でも南條さんはこの後があるからね」

あの人は掛け持ちで働いている。ここが終われば次は駅前のドラッグストアだ。本当に頭が下がる。

「……でも、私ここで一番の新人です」

「関係ないよ。やる気があるならね。無理にとは言わない。それと発注は勤務が終わった後でもいいんだ。その場合も時給は発生するから安心して」

「時給が……考えてみます」

「うん。まあどちらにしろ教えるとしても来月以降だから。ゆっくり考えて」

「はい」

どこか嬉しそうに返事をして月読さんはカウンターへと戻って行く。さて、なら俺もちやっちゃと終わらせませすかね。

そうやって発注を終わらせて退勤した頃には六時半を過ぎていた。月読さんと南條さんへ後を託して俺は店を出る。手にした袋の中にはシュークリームが五つに廃棄の小さなつぶあんぱん。

そう、さすがに四つも五つもシュークリームが廃棄になる訳がない。今では廃棄が二つぐらいいで後は俺が買ってる。

それがある時イヴさんに気付かれたのだ。理由は簡単。彼女は今や母親のような立場だ。で、冷蔵庫内の賞味期限チェックをしてシュークリームにその違いがある事を見つけたらしい。

——只野、気持ちは嬉しいけどこれじゃ意味がないわ。廃棄だから

私達はもらっているの。

——でも、エルもセレナちゃんもヴェイグも楽しみにしてくれている。今じゃ暁さんや月読さんもだ。

——……なら、せめて私の分はいいわ。貴方の財産は共有なのでしょ？

——……分かった。じゃ、代わりに菓子パンを持ってくる。疲れると甘いもの、食べたくなるだろ？

——もう、貴方って人は……。ええ、じゃあお願いするわ。

正直あんなに喜んでもらえるなら2000円や3000円ぐらいの出費痛くもない。

って、これ完全に父親の心境だよなあ。実際エルはもう俺には娘みたいに思えてきてる。

セレナちゃんは姪っ子だ。暁さんと月読さんは……まだ姪っ子かな。ヴェイグは友人。ただ、どうしてもマスコットに近い扱いを受けてるけど。

天羽さんも俺がシュークリームを持っていくのを知ってるから、最近はその以外のスイーツで廃棄が出ると俺が逆に譲ってる。

代わりにシュークリームは絶対俺へ譲ってくれる。それに最近はパンやパスタを持って帰る事が増えている。

——翼と未来が結構羨ましそうに見てくるんだよ。

要するに見せつける訳だ。今の天羽さん達の部屋は朝食を小日向さんが受け持っているらしいが、それだけで足りない天羽さんはその後に持ち帰った廃棄を食べるそう。

で、温めたパスタの香りやパンの香りで二人が苦い顔をするんだそう。いい性格してるよ。

そんな事を考えて歩いていけば見えてくる少々古い作りの平屋。

「お邪魔します」

出来るだけ静かに開けて静かに閉める。イヴさんとヴェイグは起きてるだろうけど、残りはまだ夢の中のはずだからだ。

チラリと居間を覗けば布団の数々と可愛い寝顔の天使たち。で、二組だけ人がいなくなってる。イヴさんと月読さんだ。

そんな事を考えながら漂う味噌の香りに頬が緩む。あく、これだけでテンション上がるなあ。

「あら、おはよう只野」

「おはようイヴさん。あつ、これいつもの」

「冷蔵庫に入れておいて」

俺とイヴさんの声がハモる。で、向こうは呆れ顔。

「……気は済んだ？」

「若干。今日はつぶあんぱんだよ」

「そう。じゃ、おやつ代わりに店へ持って行くわ」

「ん。陽子さんによろしく」

「伝えておくわ。じゃ、手を洗ってきて」

「へーい」

そう返して俺は洗面台へ。と、そこには先客が。

「ん？ タダノか。おはよう」

「おはようヴェイグ。今日はゆつくりなんだな？」

「ああ。切歌達とガオガイガーを見ていたからな。寝るのが遅くなつた」

「そういう事か」

これで月読さんが眠そうだった理由が分かった。どうやら五人揃って本当にガガガに夢中みたいだ。

あの翌日、俺は朝食を御馳走になるついでに早速クウガ全巻とガガガのDVD BOXを貸した。まずはTVシリーズをと思つてそれだけにしたのだ。

で、その日は俺が休みと言う事もあつて何か映画をと思い、部屋からウルトラマンメビウス&ウルトラ兄弟を持って来てたら、天羽さんと翼もエルに呼ばれたらしくならばと朝からみんな鑑賞会となった。

で、結果はウルトラマン好きが大量発生しました。特にウルトラ兄弟の在り様と戦いにみんな感動したらしい。

死ぬかもしれない。それでも目の前で苦しんでいる人がいれば立ち上がり、ボロボロの体でも諦める事無く立ち向かう、そんな姿に。

そうそう、エルはメビウスと少年の關係にうるうるしていたっけ。メビウスが少年との約束を果たそうとザラブ星人を倒した後でピースサインをしようとして邪魔された時なんて……

——ああっ!?

なんて身を乗り出して声を上げてた。おかげでエルの中でガッツ星人とナツクル星人が大嫌いな存在となりました。

……セブンや帰ってきたウルトラマンでの所業を教えたらもつと嫌うかもしれない。特にナツクル星人辺りは。

「で、今はどこまで?」

「毎晩多くて二話までと言う約束だからな。次回は狙われたGGGスリージーだ」

「おおつ、熱い話じゃないか」

マニユアルファイナルフュージョンの回だ。いよいよヘルアンドヘヴンの問題が出てくる辺りだな。

「そうなのか? まあ予告を見た時点でみんな盛り上がり過ぎてマリアに叱られたが」

「あゝ……」

でもそんなイヴさんも、ガガガを見て凱と命の關係を羨ましそうに思っているのを俺は知ってる。

それと、目線が母親なんだよなあ。護少年の事をどこかハラハラした感じで見てるらしいし。

——ね、ねえ只野? あの護って子、途中で怪我したりしない?

まさか死んだりしないわよね?

数日前にそんな事を聞かれた事を思い出す。浄解モードがあるからそんな簡単に怪我はしないし死ぬ事はないからと言っておいた。

……嘘は言っていない。死ぬ事はない。ただ、死んだみたいに見えるシーンは最終回にある。俺は、嘘は言っていない。

そう自分に言い訳をして手を洗うと再び台所へ。テーブルの上にはイヴさんお手製の朝食が。

「お〜」

「いつもそうやって感嘆するのね」

「いや、作ってもらってるからさ。つと、ヴェイグ」
「すまん」

「いいって事……さつと」

テーブルの上にヴェイグを移動させ、俺は椅子へ座る。

今朝はご飯に味噌汁、大根と人参と鶏肉の煮物は昨日の残りか。それと、大根サラダか、これ。

「イヴさん、これって大根サラダ？」

「ええ。煮物に使った残り。もうドレッシングはかかっているから召し上がれ」

「いただきます」

ヴェイグと一緒に手を合わせ飯を食べ始める。そんな俺達をイヴさんが微笑みながら向かいで見つめてくるけど、そうされると本気で嫁さんみたいなので止めて欲しい。

それだけでなくこの時間、俺に擬似結婚感与えてるんだ。たださえ普段から色々勘違いしないようにしているのに、このイヴさんの幸せそうな顔は結構くる。

「何？」

「えつと……」

さすがに食べる相手見ないでと言うのもな。ここは……

「いつも美味しい飯をありがとう」

「っ?! な、何を言ってるのよ急に……」

「いや、改めて礼を言っておこうと思ってさ」

「ひ、必要ないから。さ、さてと、そろそろ洗濯物洗わないと」

そう言っつてイヴさんが慌てて立ち上がってテーブルから離れていく。結果オーライ、なのかな。でも、お礼を言われるだけで照れるなんてイヴさんも可愛いところあるよなあ。

「タダノ」

そう思っつてイヴさんがいなくなった方を見ているとヴェイグから声をかけられた。

「何だ？」

「出来れば毎日礼を言っつてやれ。今のマリアからは優しい匂いがして

る」

「……喜んでくれてる？」

「ああ」

そっか。じゃ、そうしよう。何せ本気で思ってる事なのだ。でも、この暮らしをずっと続けるのは無理だ。

彼女達には彼女達の世界が、暮らしがある。ここは仮住まい。いつか、いつかは帰るんだから……。

「「ごちそうさまでした」」

ご飯を食べ終わって手を合わせる。そしてみんなで、今朝は月読さんを除いた四人でごちそうさまをする。

で、後片付けは姉さんを除いた私達が担当。洗いかごを見るともうお兄ちゃんとヴェイグさんの分が洗われている。

「じゃ、アタシが洗っていくデスよ」

「僕は食器棚へ片付けていきます」

「私が拭けばいいんですね」

「そうデス。じゃ、片付け開始デス」

「はい」

暁さんと月読さんが来て、このお家はとても賑やかになった。その前も賑やかだったけど、やっぱり二人も増えるともっと賑やかだ。

暁さんは私とエル的事を見て自分もお姉ちゃんですって言い出して、エルは時々お姉ちゃんって暁さんと呼ぶべきか迷ってる。

私は、ちよつと抵抗がある。だって暁さんは友達に近いものだと思ってたから。

「あー、早く夜が来ないデスカね。続きが気になるデスよ」

「ヴェイグさんが言うには、次の話は熱い展開だそうです」

「おおつ、只野さん情報デスカ」

「でも、ガオガイガーって私が思ってたよりも厳しいんですね。合体とかしても平気だっと思ってました」

最初はファイナルフュージョンの成功率が低くて、しかも合体すると凄い負担があるからってサイボーグなのに寝込む事になって。

正直そんな事は関係ないって思ってた。モゲラだって合体とか分離とかしても平気そうだったし。

「でも、あれはかなり現実味があります。ファイナルフュージョンはそもそも当初成功率が1%程度です。あれはそれだけ複雑で高度な工程を経ないとガオガイガーにならない事を意味しています。それを成功させたのは凄いです。実戦で試した事のないものだったから、その制御時の凱さんへの負担や合体時の各部ダメージなどが想定を超えていたんでしょう」

「えつと？」

「つまりどういう事デス？」

「簡単に言えば、考えていたよりもガイガー及び各ガオーマシンへファイナルフュージョンの与える影響が大き過ぎたんです。だから最初の成功からデータを得て、各ガオーマシンの進入角度や速度などを調整してプログラムを組み直し、次の出撃までに何とか30%まで成功率を上げられたのかと」

「アタシ達で言うところのイグナイトみたいなものデスか？」

「あれはそういう意味ではデイバイディングドライバーの投入ですね。不安は残りますが使わないとどうしようもないと言うところが似ています」

エルの説明で暁さんは頷いていた。私はよく分からないけど、不安があるけど使わないと駄目って言うのは何となく分かる気がする。

ネフィリムをそういう風に考えて使おうとした人を知ってるから。あの人も、そういう意味では優しい人だったんだと思う。

「そうだ。ファイナルフュージョンは切歌さんに分かるように言えばリビルドです」

「ああっ！ あの土壇場で響さんがやったやつデスか！」

「はい。理論上は可能ですが、その成功率は極めて低いと言えます。それをあの時の皆さんは成功させました」

「言われてみれば、あの時もアタシ達は勇気とガッツで補った気がするデスよ」

「じゃあ、やっぱり皆さんは勇者なんですな」

詳しい話は分からないけど、きっと凄い事をやってのけたのは分かる。

勇気とガッツかあ。私はどうなんだろう？　ないとは思わないけど……。

「セレナ姉さんもです。今、こうしてここで元の世界のために頑張ってるのも勇者です」

「エル……ありがとう」

そつとしゃがんでエルの頭を撫でる。私はここで姉さんの強さの秘密が分かった気がする。

エルが、妹みたいな存在が出来て、私は前よりも強くなれたから。エルが見てるって思うとお手伝いや勉強を頑張ろうって思えるし、エルが笑ってくれると私も元気になれる。

「すつかりセレナとエルフナインは姉妹デスね」

「はい」

「むう、やつぱりサビシーデス！　エルフナイン、アタシもお姉ちゃんでいいデスよ！」

「えつと……じゃ、じゃあ、僕の事をエルって呼んでくれませんか？」

「エル、デスか？」

「はい。その、その方が僕はここでの僕になれるんです」

その言い方で私は分かった。私がエルに姉さんって呼ばれるのと同じ気持ちだつて。

そつか。エルもエルフナインって呼ばれるよりもエルって呼ばれた方が嬉しそうなのはそういう事なんだ。

多分暁さんもそれが分かったんだと思う。だからちよつとだけ黙った後、元気な笑顔を見せて……

「分かったデスよエル」

「ありがとう、切歌お姉ちゃん！」

「っ!?　こ、これは思ったよりも嬉しくなるデスね。ナデナデ、デス」
「えへへ、くすぐったいです」

な、何だかエルが暁さんに取られたみたい。髪の色も似てるからとっても悔しい。こ、こうなったら……っ!

「およっ!？」

「せ、セレナ姉さん!？」

エルを覗さんから抱き寄せて抱き締める。

「あ、覗さん。エルは私の妹です。だって、一緒にお風呂も入るし、一緒のお布団でも寝る事があるんですよ!」

「むっ、それはたしかに負けてるデス。でもでも、エルはアタシの方が付き合いが長いデス。ね?」

「あ、あの……」

「エル? 姉さんの方がいいよね?」

「エルっエルっ、お姉ちゃんデスよね?」

「え、えっと……」

エルが何故か私と覗さんを交互に見て困ってる。むっつ、そんなに迷う事?

「何をしてるの?」

「っ?!」

聞こえてきた声は妙に優しい姉さんの声。ここへ来る前ならこの声は大好きだった。でも、ここに来てからは……

「ま、マリア姉様……」

「……どうしてエルが若干涙目でセレナが抱き締めてるの? 切歌、説明して」

「え、えっと、これにはふかーいワケがあるんデス」

「ええ、それは分かるわ。そのふかーい訳を教えてって言ってるの」

「こ、怖い。姉さんの目が笑ってない。と、そこでエルが腕の中から抜け出して姉さんの前へ。」

「ま、マリア姉様。セレナ姉さんも切歌お姉ちゃんも悪くないんです。二人は僕を可愛がってくれてただけなんです!」

エルの言葉で私は覗さんを見た。覗さんもこっちを見てた。

エルは私達が自分を理由に揉めるのを嫌がったんだ。それでどっちかを言ったら余計揉めるって分かって……。

「エル、貴方は本当に優しくいい子ね」

姉さんが本当に嬉しそうに笑ってエルの頭を撫でた。でも私達へ

目を向けた瞬間怖い顔に。

「それに比べて貴方達は……」

「ご、ごめんなさい (デス) っ!」

「いい? エルを大事にするのは分かるけど、無理強いをしちや駄目。この子の姉を自称するのならつまらない揉め事を起こさないの。いい?」

「はい (デス) !」

そうだった。エルの気持ちを考えてあげないといけなかった。

「エルも、はつきり言っただけ。まだセレナも切歌も姉的な立場は経験値が低い。エルと同じで、どうやって振舞えばいいかの正解が分からないのよ」

「僕と同じ……」

「だから口に出してあげて。嫌がるかもしれないけど、今の貴方達ならそれでケンカをしてもちゃんと仲直り出来るはずだから」

「はい (デス) !!」

姉さんは私達を見て微笑むと台所を出て行った。多分だけお洗濯物を干しに行くんだと思う。

「えっと、ごめんねエル」

「ごめんなさいデスよ」

「いえ、僕も言えば良かったんです。セレナ姉さんも切歌お姉ちゃんも大好きですって」

心がきゅんってなった。エル笑顔はとっても可愛い。でも、きつとこれが私が笑うのを見てた姉さんの気持ちなんだ。

その後はまた三人で洗い物を再開した。エルはすぐ暁さんの事をお姉ちゃんと呼ぶのが普通になって、暁さんもエルって呼ぶのが普通になってた。

髪の色が近いから二人の方が姉妹って感じがするけど、もう嫉妬しない。だって、ウルトラマンだって見た目が違ってても兄弟だ。大事なのは心の絆だもん。

「洗い物が終わったらどうするんですか?」

「そうデスね……」

「私はお兄ちゃんのお部屋の掃除かな」

きつともうすぐここへ来てシャワーを浴びるはず。だからその間にお掃除しないと。

「ならアタシもそれにお付き合いするデスよ」

「いいんですか?」

「とーぜんデス。そうだ。セレナもこの際アタシの事を名前で呼んでください」

「名前で?」

思わぬ提案だった。私はずっと暁さんと月読さんってそう呼んでいたから。

「デスデス。ここでは完全家族デス。さん付けは仕方ないにしてもせめて名前がいいデスよ。きつと調もそう思ってるはずデス」

「……分かりました。じゃあ、一緒にお掃除に行きましょう切歌さん」
「デスよっ!」

何だろう。呼び方を名前にしただけで心があつたかくなる。い、いつそ私もお姉ちゃんって呼んでみようかな?

そんな事を思いながら私は切歌さんと二人でお兄ちゃんの部屋へと向かう。お掃除をして、洗濯物はないか確認して、切歌さんがいるからお布団を持って帰って干してあげよう。

そうと決まればまず姉さんへ相談しないと。お兄ちゃんに私のお布団を貸してあげて居間で寝かせてあげてもいいかって。

「ただいま」

アルバイトが終わって帰ってくると静かだ。エルフナインが居間の掃除が終わってる時間だし当然か。

ふう、少し疲れた。南條さんのお話長いから、気付いたら退勤して十分は経ってて驚いた。

でも、二十歳の息子さんと会ってみる気ないかって言われてビックリした。だって、私はまだ十六だ。四歳年上って……大体翼さんぐらい。そんな人と私を会わせてどうするんだろう?

「あつ、おかえりなさい調お姉ちゃん」

「うん、ただいま」

私が居間の前を通り過ぎるとエルフナインが元気に声をかけてきたので笑顔で返す。

それと居間の奥に布団が一つ出てそこで誰かが寝てる。布団はマリアのだけど……誰だろ？ 切ちゃん？

……ってあれ？ 今何かエルフナインの呼び方がいつもと違った気が……。

「ねえエルフナイン？」

「はい？ 何か？」

「えっと、何かいつもと違った気がしたんだけど」

「あ、はい。実は切歌さんをお姉ちゃんと呼ぶ事にしたんです。なので、調さんもお姉ちゃんと呼んでみようかなと」

「……もう一度ちゃんと呼んでもらっていい？」

ちよつと眠い頭じゃ理解出来ない。でも、切ちゃんが切っ掛けなのは分かった。

「はい。えっと、調お姉ちゃん」

その瞬間、何かで頭をガツンって殴られたみたいになった。でも痛いとか嫌だとかじゃない。これは、嬉しさの衝撃だ。

エルフナインの事は前から可愛いって思ってたけど、本当にここまではそれがもつと上になつてる気がする。

「……………何？」

「あ、あの、呼んでみただけですので」

「そっか。うん、そうだよね」

何だろう？ 何だか嬉しいけど恥ずかしい。お姉ちゃん、か。呼ばれる事なんてないと思ってた。だからかな、嬉しいし恥ずかしいのは。

「あの、それで僕から調お姉ちゃんにお願いが」

「何？」

「その、僕の事をここにいる間はエルって呼んでください」

「エル？」

愛称で呼ばれたいのかな？

「はい。その方がここでの僕って感じがするんです」

「……分かった。エル、ご飯食べ終わったらお散歩行こうね」

「はい」

嬉しそうに返事をするエルを見つめて私も小さく笑みを浮かべた。台所には一人分のご飯の用意。ちよつと寂しいけど仕方ない。その分私は晚ご飯を絶対にみんなと食べてる。切ちゃんは時々食べられないから今の私と一緒に。

そう思えば辛くないしちよつと大人な感じもする。お仕事帰りでご飯の時間がみんなと合わないって大人みたい。

「あら、調。帰ってたのね」

「うん。ただいまマリア」

「ご飯をよそつてるとマリアが顔を出した。多分だけど庭にいたんだ。疲れてたし眠かったから気付かなかったけど、きつとお洗濯物を干してたはず。」

「おかえりなさい、お疲れ様。いつもの冷蔵庫にあるわ。セレナ達が帰ってきたら一緒に食べなさい」

「うん、分かった。そういえば切ちゃんは？」

「切歌ならセレナと一緒に只野の部屋へ行ったわ。掃除と一緒にするんだそうよ。で、セレナはついでに只野の布団を持ってくるって」

「そうなんだ。あれ？ でもそうすると只野さんが寝れないんじゃない？」

只野さんは布団を一組しか持ってないって聞いた。しかも凄く長く使ってるからペラペラだつて。

「そうよ、だから今日はここで寝るのを許可してる。ああ、使ってる布団は私のだから心配いらないわ」

「え？ マリアの布団貸したの？」

ちよつと意外だ。マリア、そういうの嫌がりそうなのに。と言う事はさつき見たのは只野さんなんだ。

「むしろ私以外の布団を貸せないわ。加齢臭もする可能性があるし」

「カレー臭？」

何だろう。スパイシーな匂いつて事？ でも別に只野さんからそ

んな匂いした事ないけど……？

「調、カレーじゃなくて加齢。要するに年齢を重ねた人からする匂いよ」

「成程」

一つ勉強になった。だけどそうなるマリアの布団から加齢臭がするようになったらやうのに。

「ああ、心配しなくても私は明日布団を干すから平気よ。まあ、加齢臭の心配は正直してないけど、念のためにね」

「そっか」

ご飯とお味噌汁を持ってテーブルへ戻る。今日のお味噌汁はワカメとお豆腐。深緑と白が茶色のお味噌汁から時々顔を出してて美味しそう。

「いただきます」

「どうぞ」

私が食べ始めるとマリアが向かいに座る。これもいつもの事。多分だけど食べないでも一人にしないようにしてくれてると思う。

昨日の残りの煮物は味が染みて夜に食べた時とはまた違う美味しさ。鶏肉がほろほろだ。大根は中まで煮汁の色になっててじゅわじゅわって美味しい味が広がるし、人参も煮汁の味に人参自体の甘さが加わっててご飯がすすむ。

「お代わりする？」

「うん」

私がお茶碗を差し出すとマリアがそれを受け取ってご飯をよそってくれる。

「どれくらい？」

「えっと、半分でいい」

「そう……はい」

「ありがとう」

私へお茶碗を差し出すマリアは本当にお母さんみたい。只野さんが言っていた母親モードってこういう事も言うのかな？

さあ、ご飯のお代わりも来た事だし、美味しい食べ方をして朝ごはん

んをぬよう。お味噌汁を少し啜る。うん、いい味。さすがマリア。

次に具を食べていく。お豆腐もワカメも美味しい。私も結構料理は上手だと思ってたけど、ここでマリアが凄いお料理をしているのが分かって負けられないと時々晩ご飯を作るようにしてる。

マリアがお仕事の日の晩と、アルバイトがお休みの日の朝は私が作ってる。

それでも何故かマリアのお料理には勝てない。ううん、美味しいって感じるのはマリアの方だ。

「調? どうしたの?」

気付けばお箸が止まっていた。それでマリアが不思議そうに首を傾げる。

「えっと、どうして私のお料理とマリアのお料理じゃマリアの方が美味しいんだろうって」

そう言ったらマリアは一瞬だけキョトンとすると、すぐに小さく苦笑した。

「ああ、そんな事? それはね、誰かが作ってくれたものだからそう感じるだけよ」

「誰かが作ってくれた?」

「ええ。私だって調の料理の方が美味しいと感じるもの。要するに気持ちよ。特に料理を作る人間はそれがどれだけの手間と時間をかけたか分かるでしょ? それへの感謝もあるんでしょうね」

「……納得」

そっか。だから切ちゃん達はいつも美味しいって言ってくれるんだ。

そう納得出来たところでお味噌汁をご飯へかける。

「し、調?」

「何?」

只野さんがよくやる食べ方のねこまんま。お行儀が悪いけどとっても美味しい。

マリアがお仕事でいない時の晩ご飯だけ只野さんがやってて、みんなで真似して美味しいって……あつ。

「一体どこでそんな事を教わったの？ いえ、間違はなく只野ね」

マリアには秘密だつて言われてたのを今思い出した。疲れててちよつと眠いから忘れてた。ごめんなさい、只野さん。

「さてと、只野を起こすのは気が引けるから明日の朝になるわね。朝食を食べた後にちよつと話をしないと」

ああ、マリアが静かに怒ってる。でも、仕方ない。だつてマリアの作ったお味噌汁でこれをやった事ないんだもん。

「ずっと……美味しい」

「まったく……嬉しいけど複雑だわ」

そう言いながら私を見つめるマリアは笑みを浮かべてた。本当に子供を見つめるお母さんみたいに。

「お掃除完了デース！」

「はいっ！」

二人して片手に掃除用の小型ローラーを持って笑う切歌とセレナ。

仁志の部屋はそれなりに広くローラーで綺麗にするのは面倒なのだが、掃除機を買ってもそんなに頻繁に掃除などしないとって彼は購入を渋っていた。

だがセレナが来てから掃除はほぼ毎日の頻度となり、さすがにそろそろ仁志の良心がセレナのためにも小さな掃除機を買うべきかと思いは始めてはいる。

「それにしても、ホントに物がなないデス」

「そうなんです。冷蔵庫もあんなに可愛いのですし」

「デスねえ。後はレンジぐらいデスカ」

「あれ、響さんの話だと一度翼さん達のお部屋へ移動させたそうです」

「何でデスカ？」

「あの、一度お兄ちゃんはあるのお部屋で暮らす事になったみたいで」

「ああ、そういえばそんな話を聞いたデス。奏さんがお説教してダメってなったんデスよね？」

「はい」

そこで二人して仁志の使っている布団を見つめてやや悲しそうな

顔を見せた。

「お布団があんなになるまで使うとか、只野さん物持ち良過ぎデスよ」

「というか、本当はもう買い換えたいって言ってます」

「そうなんデスか？　じゃ、どうして買い換えないデス？」

「そんな暇がないって言ってます」

「それは嘘デス。だって、只野さんはお休みになると一日中エルと一緒に謎解きしてます」

最近の仁志の休みは、朝マリア達の家で食事をして散歩やジョギングを終えるとシャワーを浴び、そこから時々仮眠を取りながら終日ゲームの謎解きをしていた。

エルやヴェイグ、時には調や切歌も巻き込んだの謎解きは本気半分遊び半分な雰囲気である。

それを思い出して切歌は仁志が布団を買い替えない訳を考えた。

（きつと何か理由があるデスよ。このペラペラお布団には只野さんの秘密が……）

探偵のような目付きで布団を見つめる切歌だったが、そんな彼女へセレナがあっさり仁志の隠している考えへ辿り着く。

「多分、私達のためにお金を使わないようにしてるんじゃないですか？」

「デデッ、せ、セレナあ」

折角推理などをしながら楽しもうと思ったのに。そんな恨めしい目でセレナを見つめる切歌だったが、相手はそんな事が分かるはずもなく小首を傾げるのみ。

「な、何か間違ってますか？」

「いえ、多分そうだとアタシも思うデスよ。只野さん、あのカラオケからお休みの日は絶対謎解きデス」

「ですね。その前は結構お部屋で寝てる事多かったですけど……」

セレナが思い出すのはまだ未来達が来る前の事。仁志からは休みの日は手伝いなどをしなくていいと言われていたが、それでも夕方には訪れて彼を食事に誘うようにマリアに言われていたのだ。

——只野さん、起きてください。もう六時です。姉さんが家でご飯

を食べてって。

「………ありがとうセレナちゃん。じゃ、顔洗ってすぐ行くよ。」

「ならドアの前で待ってます。二度寝しないでくださいね？」

「そう言われ苦笑して眠そうに頷く仁志の顔を思い出すセレナ。」

「まだ体が週五の勤務へ慣れていない頃の、少しだけ前の思い出である。」

「多分お兄ちゃんなりに何とかしたいんだと思います」

「デスね。きつと誰よりもこの異変を何とかしようと思ってるの只野さんデス」

「装者達やエルフナインさえどこかでこのままでもいいかもしれないと思いついている部分がある中、仁志はその気持ちを押し殺すように復活したゲームの謎へ挑んでいたのだ。」

「そこには、響達一部の装者へ男として心惹かれている事への危機感もある。」

「彼はいわば自分のためにも彼女達の世界を何とかしたかった。異変を解決しても会えるのか否か。それだけを知りたくて。」

「切歌さん、私時々思うんです。ここで幸せになつていいのかなつて」

「どうしてデスか？」

「……もしかしたらママは今、とつても大変なのかもしれないのにつて」

「今が幸せであればある程感じる罪悪感。セレナはそれを隠す事無く打ち明けた。」

「その言葉を聞いて切歌はセレナの体をそっと抱きしめる。」

「大丈夫デスよ。むしろそんな風に気持ちを暗くしちゃうダメデス」

「切歌さん……」

「心の強さが大事って、そうウルトラマン達も言ってたデス。どんな時も諦めず、不可能を可能にする。そのためには希望を捨てない事デス。闇に心を飲まれない事デスよ。幸せは心をあつたかく明るくしてくれれます。今、アタシ達が明るくないとママ達だって明るく出来な

いデスし助けられないデス」

装者の中で誰よりも仁志の趣味からの影響を受けているのが切歌であった。

ヒーロー達の生き方や在り方は、周囲のために能天気であろうとしている彼女にとって心の支えになったのだ。

特に仁志から教えられたある名言は切歌の心に非常に強く刻まれた。

——いつでも誰かの笑顔のために頑張れるって、とても素敵な事だと思わないか？

それは仮面ライダークウガの名言の一部。切歌はその全文を聞いて強く頷いたのだ。それこそ自分が思っている事だと。

(調が、マリアが、みんなが悲しくなってる時こそみんなの笑顔のためにアタシは頑張るんデス。そんな人にアタシはなりたいんデスから) その台詞が出てくる話のサブタイトルは「恩師」。そういう意味では仁志は切歌の恩師になるかもしれない可能性を秘めていると言えた。

「……そうですね。今は暗い考えをしない事が大事なんですよね」

「デスデス。悪意に利用されないためにも、アタシ達はハッピーになれるならどんどんなってくデスよ」

「はい！」

笑顔を見せ合う二人。そしてやる事もないので帰ろうとした時だった。

「つと、そうデス。ちよつとだけいいデスか？」

「何かありました？」

「押入れにDVDが入ったクリアBOXがあるんデスよ。前ゴジラの映画取りに行く時に只野さんが気になるのがあればいつでも貸すつて言ってくれたんデス」

「へえ、そうなんですな」

「なので少しだけ物色デス」

「い、いいんですか？」

とたとたと押入れへ近付き、切歌は躊躇なく襖を開ける。

そこには彼女の言う通りクリアBOXがあっただが……

「あつたデス。ん？」

「どうかしました？」

「いや、反対側にゴミ袋があるんデスよ」

「え？」

言われてセレナも切歌と同じように押入れへ顔を入れた。たしかにBOXが置いてあるのと逆側に燃えるゴミの袋が置いてあったのだ。

それも丸めたティッシュだけが入った物が口を軽く縛って。

「何デスカね？」

「捨て忘れたんでしようか？」

「燃えるゴミっていつデス？」

「えっと、この辺りは昨日だったと」

「じゃあ、きつとそうデス。セレナに見られたら恥ずかしかったから隠したんデスカね？」

「そういえばお兄ちゃんもゴミだけは自分でやるって言っていました」

「じゃ、確定デスね」

「そうですね」

こうして二人はBOXの中を見て “大決戦！ 超ウルトラ8兄弟” というDVDを発見する。裏側の簡単なあらすじを見た二人は興奮し、それを近いうちにみんなで見ようと相談するために切歌は隣の響達の部屋へ、セレナは鍵を閉めるとそのまま翼達の部屋へと向かった。

この時、二人は気付かなかつたのだ。そのゴミ袋の裏側に消臭用の炭が置かれていたのを。

全ては響とクリスによる仁志への女性としてのアピールによる結果であった。何とか筋トレなどで昇華させていた仁志も、毎日のように可愛い女性と過ごしているのだ。

それも、一部など自分へ気があるのではと思わせる時もあり、彼も健常な男性である以上どうしてもそういう行為を行いたくなってしまうもの。

その際、彼は決して装者達で邪な欲求を吐き出そうとはしない。しないのだが、その脳内に浮かべる女体は、どこかでよく見ているもしくは見ていた人物達なのであまり意味はないのかもしれない。

そんな彼は、マリア達の家の居間の隅で静かに眠っていた。

「やつぱり疲れてるんですね、兄様……」

その寝顔を眺めてエルフナインはどこか浮かない顔をしていた。

何せあのゲームの謎は解き明かされる事がないまま謎だけが増えたのだ。

デュオレリックを意味する枠の出現。あれが本当にそれが現時点で出来る装者だけに表示されているのか。それがどうしてもエルフナインには引つかかっていたのだ。

（たしかに奏さんとセレナ姉さんは今の時点でデュオレリックが使用可能です。でも、そうなら響さんや翼さん、マリア姉様に調お姉ちゃんとは本部へ行けば使用可能です。手元がないから表示されないのでしょうか？ そんなに簡単な話なのでしょうか？）

何せクリスはフィーネ達の世界に、切歌はセレナの世界にそれぞれ適合した完全聖遺物があるのだ。そこはゲートが消えた今行き来が出来ない。

そこへ行く事が出来るようになると言う事なのか、それともホントはデュオレリックを意味していないのではないのか。

考えれば考えただけ思考が袋小路へと入っていく。それを知るからこそエルフナインは一人で考えるのはある程度で止めるようにしていた。

「二人で考え込んでしまう癖は直していかないと」

三人寄らば文殊の知恵。その言葉の意味をエルフナインはこの暮らして実感していた。仁志やヴェイグと話す時、セレナやマリアと話す時、あるいはクリスや響と話す時など、複数で話す事で自分にはない着眼点や発想を知る事が出来るからだ。

（兄様、兄様の視点と知識が僕は必要です。僕が見れなかった戦いや知る事の出来なかった考え。それを知っている兄様がこの異変を解決するために一番向いているんですから……）

だがその言葉をエルフナインが仁志へ言う事はない。言えば仁志が無理するのが見えているからだ。

だからエルフナインに出来るのは休みの日の謎解きで思った事を全て口にする事だった。

「エル……？ 何故ここにタダノが？」

「ヴェイグさん……」

そこで現れるのは日向ぼっこしながら二度寝をしていたヴェイグだった。

「実は……」

仁志がどうして居間で寝ているかを聞き、ヴェイグは納得すると同時に常々思っていた事を口にした。

「いつそタダノもここで暮らせばいいだろ」

「そ、それは……」

エルフナインは知っているのだ。仁志が全て解決した後、自分だけでも生きていけるように考えている事を。

だからこそ仁志は頑なに一人暮らしを続けている。そこには他人との暮らして得られる温もりへ溺れてしまわぬようにと言う気持ちもあるのだが、そこまではさすがにエルフナインも知りたくない。

「タダノが色々心配してるのは分かる。だが、せめてこの面倒事が解決するまではここで暮らした方がいい」

「僕もそう思います。でも、兄様はやんわりとそれを拒否してますから」

「……もしかしたらタダノは怖いのかもかもしれないな」

「怖い、ですか？」

「ああ。俺は長い間一人だった。一人で長い間いるとな、誰かという事が嬉しいが怖くなるんだ」

「え？」

理解出来ないというような表情のエルフナインへヴェイグは仁志の寝顔を見つめながら語った。

孤独に慣れると孤独から逃れる事を焦がれる反面恐れるようになるのだと。一度孤独を抜け出すと、そこへ今度戻った時により一層

苦しく辛くなってしまうために。

「この異変が解決出来た後、俺達はここへ来る事が出来るのか？ あ
るいは来れたとしても、だ。もうタダノと一緒に暮らす事は出来な
い」

「……そうか。兄様はもう終わった時の事を考えているのですね」

「そういう事だろう。大体ここへのゲートは普通とは違った」

「裂け目、でした。そうか……あれが閉じてしまう事は十分に考えら
れます」

装者ではない二人。だからこそこの世界への想いは装者である女
性達とは少々異なる。

彼女達にはどこまでいっても望む事の出来ない世界が上位世界で
あるが、エルフナインとヴェイグにとってここは親しい者達が心の底
から笑顔になれる場所なのだ。

「……僕、こここのゲートが閉じて欲しくありません」

「俺もだ。セレナが、あいつらがここまで幸せそうなのは見た事がな
い」

「ヴェイグさん、何とか、何とか出来ないでしょうか？」

「………そもそもあの裂け目がどうやって出来たかも分からない。
悪意がやったのか、それともすまほを依り代に変えた力がやったのか
も見当がつかない」

そこで沈黙が二人を包む。これまで誰も触れてこなかったが、そも
そも誰がこの上位世界へのゲートとも言える裂け目を作ったのか。

それが悪意とすれば何故閉じないのかが納得出来ない。それが謎
の力だとすれば解決すれば閉じる可能性が高い。

どちらに転んでもあまり面白くない結末となる。そう考えて二人
は息を吐いた。

「どうしたの？ 二人して」

「調お姉ちゃん……」

「調か。いや、何でもない。二人で只野がどうしてここで暮らしてく
れないのかと話をしていたぐらいだ」

ヴェイグは真実を隠して事実を伝えた。今、装者達に裂け目の事を

考えさせるのは時期尚早だと思ったのである。

「只野さんが、ここに？」

「ああ。正直そうなれば只野は一々部屋とここを行き来する必要がある」

「それはそうだけど……」

仁志と一緒に部屋で寝る。それはまだ調には若干抵抗を覚える状況であった。ただその抵抗感がどこからくるものかは彼女自身にも分からなかった。

「そうだ。ヴェイグさん、一緒に散歩しませんか？ 僕、これから調お姉ちゃんも散歩へ行くんです」

「そうなのか？」

「うん。ヴェイグも来る？」

チラリと仁志を見たヴェイグだが、すぐに視線を調へ戻すと頷いた。

（タダノが静かに寝れるようにしてやろう）

こうしてヴェイグはエルフナインの腕に抱かれて外へ出る。

残ったのは死んだように眠る仁志。そして……

「ふう、やっと干し終わったわ」

洗濯物を全て干し終えたマリアだけであった。

彼女は静かに居間へ足を踏み入れるとそこで眠る仁志へ目を向ける。

「……………こうして見ると変わってないみたいだけど」

静かに仁志のすぐ傍へ移動し、マリアはそこへ正座するように腰を下ろす。

「……………やっぱり顔が疲れてる。奏から聞いたけど、絶対布団が悪いのよ。買い替えを強く勧めるべきかしら」

呟いてマリアはいっそ自分が使ってる布団を仁志へ渡してしまおうかと考え始める。何せ仁志の存在こそが自分達の存在を保っているのだ。

（私の布団が無くなってもエルと一緒に寝れば平気だし……）

実際今も時々マリアの布団へエルフナインがやってくる事はある

のだ。その場合はセレナの布団にはヴェイグがいるのが常である。

「只野、貴方が言ったのよ？ 何でもささいな内に吐き出してって。貴方、私達に何か言ってきた？ 少しでもワガママや文句、言った？」

囁くように、噛み締めるように、マリアは眠る仁志へ問いかける。

彼女は分かっていたのだ。仁志が何も言わない理由を。ああ言っても、やはり愚痴や不満を言う相手へ響達はそれを漏らす事が出来ないと。

それは相手の心や状態を慮ってしまうからだ。今相手は弱っている、疲れていると思われると言いたい事を言えなくなってしまう。

だから仁志は誰にも弱音やワガママを言わないのだ。マリアもそれを分かっているからこそ響達の誰にもそれらしい事を言っていない。

間違いなくこの世界で仁志とマリアは父と母、もしくは兄と姉をやっていたのだ。

意図した訳ではない。狙った訳でもない。自然年長だからそうなってしまったのである。

「私は、貴方だけには弱音も愚痴も言える。あの子達には聞かせられない事もよ。なのに、どうして貴方は私へ吐き出してくれないの？」

気を遣ってる？ かつこつけ？ それとも、貴方の弱さは誰にも見せたくない？」

「……強いて言えば最初と二つ目の合いの子かな」
「っ!!」

聞こえてきた返事にマリアが顔を上げる。そこには目をぼんやりと開けて苦笑する仁志がいた。

「お、起こしちゃったのね。ごめんなさい」

「いや、いいよ。多分だけど俺もこの布団の匂いに緊張してるんだと思う」

「匂いって……」

「良い匂いだけど、だからこそ妙な気分。イヴさんに添い寝されてるみたいでさ」

「添い寝、ね。何ならしてあげましようか？ 一時間程度しか一緒に

「いられないけど」

「余計寝れなくなるよ。嬉しいけど……さ」

言いながら仁志はゆつくりと体を起こすとマリアへ体を向けた。

「あれ？ イヴさんだけ？」

「え、ええ……。エルは調とヴェイグを連れて散歩へ行つたわ。切歌とセレナはまだ帰ってきてない」

「そっか。ん……。じゃあ、少しだけ話を聞いてもらっても？」

「構わないわ」

ゆつくり頷くマリアへ仁志は小さくありがとうと告げて話し始めた。

「何も俺は弱さを見せたくないとかじゃない。そこまで馬鹿な男じゃないよ。弱さを認めて受け入れる事が強さの始まりって俺は教えてもらってるから」

「ヒーロー達に？」

「そう。で、勿論本当に言いたい事は言うようにしてる。ただ、自分で言っておいてなんだけど、悪意に関して俺が抱いてる一つの仮説があるんだ」

「何？」

「確証はない。でも、直感的に真実に近いんじゃないかと思う。それは、悪意は俺にまだ手を出せないって事」

言われた意味にマリアは少し考えて息を呑んだ。仁志が告げた内容はそれだけ重たい意味を持っていたからだ。

「待って。つまり、貴方はこう言いたいのか？ 悪意が力を取り戻したら自分が狙われるって」

「正直ね。だから出来るだけ溜め込まないようにしてるんだ。仕事の不満とかはオーナーへ可能な限り吐き出してる。生活の色々には正直嫌な事なんてない」

「本当に？」

「本当だ。だって、出会えるはずがないと思っていた存在達に会えて、しかもこうやって喋ったり遊んだり、しまいには風呂やら寝床やらを一緒に出来たんだ」

「一緒について、まあ広義ではそうでしょうけど……」

スーパー銭湯ではきつちり仁志だけが男湯だった。彼はヴェイグとさえもいっしょに入浴していないのである。

「イヴさん、今朝も言ったけど、俺は本当に感謝してるんだ。君だけじゃなくみんなに。俺の人生は君達のおかげで大きく変わった。きつと君達と出会わなければ、今も俺は週四の夜勤で満足するように思い込んで、それで限界まで生きてただろうから」

「只野……」

「歌が力になるという、この事実だけは信じて欲しい、だっけ。俺は、それを信じてなかった。あれは所詮物語の中だけだって。でも、違った。子供の頃から色んなヒーローソングに触れて、俺はそれを知ってたはずなのに、君達と出会ってこうして関わり合うまで忘れてた」

そう言つて天井を見上げる仁志。マリアは彼が口にしたかつての自分の発言に複雑な表情を浮かべていた。

「イヴさん、その、若干聞くに堪えない話かもしれないけど、聞いてくれるか？」

「ええ、どうぞ？」

優しい表情で仁志を見つめるマリア。今、彼は自分へ心情を吐露しようとしてくれている。そう分かったからだ。

だから受け止めよう、少しでも癒しになろうと、そう思っていたのである。そんな彼女へ仁志は意を決して深呼吸を一つすると重々しく口を開いた。

「俺、もう性欲が限界なんだ……」

「……は？」

「実はさ、クリスに毎朝のように甘えられてて。嫌じゃないんだ。むしろ嬉しく思うんだけど、彼女は、ほら、胸が大きいだろ？ 肩もみをしてもらった後、数秒だけ背中へ抱き着かれるんだ。そうしてると落ち着くって」

「そ、それで？」

「俺は生殺しだよ。でもクリスで処理なんてしたらもう俺は彼女と顔を合わせられない」

「そ、そうね……」

そこからも仁志はクリスの行動からくる不満を淡々と語った。その内容を聞いてマリアはどう自分が答えたかを覚えていなかった。

気付いた時には仁志は幾分すつきりとした表情をしていて、マリアの事をしつかりと見つめて微笑んでいたのだから。

「ありがとうイヴさん。正直こんな事はイヴさん達年長三人の誰かにしか言えないと思ってたんだ」

「そ、そう。そう、でしょうね……」

「でも、やっぱりイヴさんだな。天羽さんって事も考えたんだけど、彼女も結構そういうところは乙女だと思っただよ」

「……私は乙女じゃないって？」

微かに怒りを滲ませた声だが、それに仁志は慌てなかった。いつものノリと捉えたのである。

「違うよ。イヴさんだって乙女さ。だけど、大人の女をやってくれるだろ？ 俺がエロい事を言い出しても騒がず、ちゃんと最後まで聞いてくれるじゃないか。こんな風にさ」

「……きつとそれは貴方が時々私を大人じゃなくしてくれるからよ」

その言葉に仁志が顔をマリアへ向ける。マリアはどこか苦笑するように笑っていた。

「只野、貴方の小さな影、たしかに取り除いたわ。要するに魅力的な女性が周囲にいて、しかもその中で自分へ性的なアピールをしてくる相手がいると」

「い、いや、あれはクリスとしては寂しいから」

「それでもよ。あの子だってそんな事ぐらい分からないはずないわ。いくら貴方はこれまで性欲を抑えてきたからって限度もあるもの。一度しつかり言うべきよ。自分も男で、何かの拍子に間違っ事もあるって」

「………やっぱりそうだな。正直、仕事終わりだから我慢出来る部分もあるんだ。あれがもしそうじゃない時だったら」

「押し倒す？」

「………多分」

そう答える仁志は苦笑いを浮かべていた。それにマリアはため息を吐いて仁志へ告げる。

「理性が飛んでそうなる前にクリスマスへ忠告。それか、あ、貴方も大人なんだからそういう欲求を溜め込まないようにしなさいよ」

「イヴさん、お言葉はもつともなんですが、一つ忘れてませんか？」

「何を？」

「俺の隣、今誰がいる？ 壁、薄いんだよ、あそこ。あと、意外と男つてそういう欲求毎日吐き出したいもんなんだ」

その瞬間マリアは「あ……」と声を漏らして赤面した。彼女は分かかってしまったのだ。仁志がそういう事の処理をするには二人揃っていない時ぐらいしかない。

そうなると否応なく溜め込むしかない。そこまで考え、マリアは頭を押さえた。このままでは最悪悪意が仁志の性欲絡みの攻撃を行うかもしれないと思って。

(只野が普通の男性と分かったのはいいけどこうなるとそれはそれで問題よね。そういう店などへ行けと言っても彼は私達のために散財は避けてるしかと言ってクリスマスへ手を出しても問題だし……)

真面目に考えているマリアであったが、その顔はずっと赤いままだ。そう、彼女が今仁志の性欲処理について考えているのはある事を考えないようになっているためでもあったからだ。

「まあ、何とか聞いてくれて少しだけ楽になったよ。イヴさん、ありがとう」

「えっ!? ええ……」

「で、悪いんだけどもう少しここで寝かせてもらってもいい？」

「か、構わないわ。夕食まで起きなかつたら起こすから」

「ありがとう。じゃ、申し訳ないけど……」

もぞもぞと布団の中へと戻る仁志。そんな彼へ顔を向ける事をせず、マリアは他所を向いていた。

「おやすみイヴさん」

「……おやすみなさい」

そのやり取りをして五分と経たない内に再び仁志から寝息が聞こ

え始める。それを聞いて本当に疲れているのだらうと思つてマリアは息を吐いた。

そして静かに立ち上がると仁志に近い側のカーテンを閉める。彼へ日の光が当たらないようにだ。が、何故かそのままマリアは動かなくなる。

（ど、どういう事!? 只野はノーマルだったのっ!? で、でも、それならどうして彼は私へ一切性的な目を……………あ）

混乱する頭で考えて思い出した一つの事実。それは仁志がクリスの行動からくる不満を述べていた時に聞いたもの。

「頑張つていやらしい目を向けられないようにしてるのにつて、そう言つてたわね……………」

それは自分にもだと気付き、マリアはそつと仁志へ目を向けた。心なしに最初に見た時よりも疲れが取れているような気がして、マリアは小さく微笑んだ。

「……………貴方の気持ちは分かつたわ。でも、それで貴方の心が濁つたり苦しむなら止めてつて、そういうべきかもしれないわね」

仁志が言わなかつたクリスの発言を知れば、マリアはどう思つただろうか。

即座にクリスが彼へ惚れている事を見抜いて手を打つただろうか。あるいはならば私もと言い出しただろうか。

ただ、眠る仁志を見る目には今までにない優しさが宿っていた。

チラリと時計を見ればもう六時になりそう。本当に働いてると時間が過ぎるのはあつという間だね。

「つて事だから気を付けてね。詳しくはノートに書いてあるから」

「分かつた」

「おう、後で目を通しておく」

響とクリスへ注意事項を教えて少しすると時刻は午後六時になつて退勤しないといけない時間。

まず裏へ下がつて退勤処理をして、オーナーへ挨拶をして上着を脱いでロッカーへとしまふ。事務所からカウンター横へと出ると二人

が見える。

響はノートを読んでクリスマスはカウンターフーズの廃棄時間の確認かな？ 本当にもう慣れてるって感じがする。さすが夕勤のバイトリーダーさんだね、クリスマス。

「響、クリスマス、お先に失礼するね」

「うん、お疲れ様」

「お疲れさん」

「じゃあね」

自動ドアを通ってお店の外へ出る。少し歩いたところで止まって振り返った。

窓越しにはレジをする響やクリスマスが見えた。ちよつと前まで私も同じ格好で同じ事をしていたと思うと不思議な気分。

「……何だかやつぱり変な感じ」

言って小さく笑って歩き出す。今の生活を始めて一月近くが経過としていくけど、未だに慣れない事もある。

それでも日々は順調であり楽しい。何より響と同じ街にいるのに一緒にいない事がいつもとなりつつある事が私には大きい。

なのにその絆は途切れるどころか強くなっていると分かるんだ。それだけじゃない。これまで関わりの浅かった翼さんや奏さんとは互いに知らなかった面や気付かなかった面などを知り合い、女三人の暮らしも悪くないと思っっているぐらい。

「学校がないのはちよつと寂しいけど、こうやってお仕事して一日が終わる日って何だか大人になった気分だなあ……」

微笑みながら思い出す。半月程度分の給料が初めて振り込まれた時、その額は微々たる金額だったけど嬉しく思った事を。

聞けば響やクリスマスもそうだったみたいで、装者としての給料とは額が違うのに何故かそれより下手をすれば重たく思えたって言っただけ。

で、私達はその理由をこう推察している。きっと、装者と違って定期的に働いてるからだろうなって。

装者のお仕事は突発的な事が多いし、やってもコンビニのバイトよ

りも拘束時間短いのがほとんどだもん。だからそれだけ今の方が働いた感じが強いんだね。

あとは対面で実際にお金動く事を見ているのもあるかも。

自分がやっている事が自分達の給料に繋がっているんだと、そう実感出来るし。

もう見慣れた道を歩き、私は今の自分が暮らすアパートを目指す。夕日を浴びながら一人歩く事も慣れて、それからくる寂しさもかなり薄れてきた。

アパートへ到着すると階段を上がって一番手前のドアの前へ。ノックをするとドアの向こうから奏さんの声が聞こえた。

「どちらさまっ。」

「私です」

その瞬間ドアが開いて奏さんが顔を出した。で、につこりと笑った。

「おかえり。おつかれさん」

「ただいまです」

響ではなく奏さんや翼さんに出迎えられる。それも今の私の日常。部屋へ入れば翼さんが夕食の支度をしていて、キャベツを細かく刻んでいた。

何に使うんだろう？ サラダ、かな？

「今日は何ですか？」

「それは後で教えるよ。とりあえず手を洗ってきて」

「はい」

今のこの部屋では私は末っ子扱い。奏さんが長女で翼さんが次女。でも二人は家事は得意じゃないからそこは私が主に受け持つてる。

ただ今日のように私がバイトだと主に翼さんが料理を担当する事になっている。ちなみに奏さんは掃除を受け持つてるけど主にシャワールームや洗面台の清掃ばかりで、他の掃除は翼さんがやる事が多い。

そのせいか、翼さんが自分も何かバイトをしたいって言い出してる。で、それに対しての只野さんの意見は新聞配達っていうもの。

結局部屋にいる時間が長いからお掃除やお洗濯を頑張らないといけないって気付いて、翼さんはちよつとだけふて腐れたっけ。

「洗ってきました」

「よし、じゃあ晩飯を教えるよ。何と今夜は餃子」

「餃子？」

「そ。豚ひき肉にキャベツとニラ。これだけのシンプルなやつ」

「既に皮も購入してある。基本は焼き餃子にするつもりだが、多少は水餃子にするつもりだ」

「ここにさ、餅粉入りつてやつあるだろ？ これは水餃子にしようつて翼がさ」

「わぁ美味しそう」

寮生活ではあまり出来なかつたけど、こうやって誰かと一緒にご飯を作るのつて楽しい。調理実習とは違うけど、それにどこか似たものを感じるから。

餃子の餡を翼さんが作つて、皮で包むのを奏さんと私が担当。翼さんも練り終つた後で皮包みに参加したんだけど、上手くヒダをつくる事が出来ずに断念。

仕方ないので餃子を茹でたり焼いたりする方に専念するそう。包むのは私達に任せたって。

「はい、水餃子分は終わりました」

「分かつた。後は引き受けよう」

「これ、皮足りるかな？」

「ちよつと餡が余りそうですね」

「なら残つた餡は肉団子のようにしてスープにでもしよう」

「ナイスアイディア！」

賑やかに楽しく時間は流れる。今の私達は家族じゃないけどルームメイトとしては十分に仲が良いと言えるね。

「奏さん、それちよつと不格好じゃないですか？」

「いいんだつて。焼いたらみんな同じだから」

「どの口がそれを言うの？ 私が失敗した時は指差して笑つたのに」

「いやいや、翼のはあたしのよりも酷かつたじゃん」

「五十歩百歩だよ。奏のも失敗と言う意味では同じ」

「むっ、そう言われると否定は出来ないけど……」

「ふふっ、いつそ三人で包み方変えてやっても良かったかも」

「それだ」

姦しくも華やかに過ごす時間。本当に、少し前の私なら信じられない事だ。

翼さんや奏さんとうこうやって過ごして、関わって、色々な事が見えてくる。響が言ってくれたように、私も二人の知らなかった事を沢山知った。

そして多分私の事を二人も知ってくれた。時々口論する事もあるし、つまらない事で意見が食い違う事はある。でも、それが余計私達の絆を強くしてくれる。

思い出してみれば響とだってそうだった。最初から今みたいになった訳じゃない。只野さんが言ったように、気を遣って遣い過ぎないと壊れる絆なら早く壊した方がいいんだって、そう開き直ったから私は二人と今のようになれた気がする。

そうして出来上がった焼き餃子と水餃子に肉団子スープ。とても美味しそうなそれを前にしたら三人揃って腹の音が鳴った。

「あははっ、同時って」

「は、恥ずかしい……」

「し、仕方ないですよ。こんなに美味しそうな見た目と匂いですし」

「だね。じゃ、食べようか」

「はい（うん）」

笑顔を見せ合い、手を合わせて食事を始める。で、その味に感想を言い合う。

水餃子の口当たりに喜び、焼き餃子の熱さに驚き、肉団子スープの思わぬ美味しさに笑みを零して。

最初は多いかなって思った餃子も三人で食べ始めればあつと言う間。順調に数を減らして、残り一つとなっちゃった。

「……どうする？」

「あたしはもういいよ。どっちか食べな」

「わ、私もいいです」

「ふむ、私が食べてもいいのだが……」

そこで翼さんは小さく笑みを浮かべて手を出した。

「ここはじゃんけんで負けた者が食べる事にしないか？」

「え？」

罰ゲームのような表現をする翼さんに奏と二人で疑問符を浮かべると、翼さんは立ち上がって冷蔵庫から何を取り出すと悪戯っぽく微笑んだ。

「これをたつぷり乗せて食べてもらうんだ」

「あく……」

翼さんが取り出したのはわさび。しかもスーパーなどで無料でもらえるタイプの物だ。

今日買い物に行った際にお醤油と共に一つもらってきたんだろうな。

実は、この生活を始めてから翼さんは少々貧乏性が身に付きつつあるみたいで、その最たるものがこのわさびやお醤油。

翼さんがわさびを焼き餃子の上に全部乗せていく。うっ、さ、さすがに凄い見た目かも。

「うわあ、見た目が美味しくなさそうになったね」

「これぐらいじゃないと面白くないから」

「っ、翼さんってこういう事嫌いだと思ってました」

「食べ物で遊ぶのは好きではない。だが、これはちゃんと食べるのだ。なら構わない。私が嫌いなのはそれを食べずに使う事だ」

「いいけど翼、これ、自分も食べるかもしれないって分かってるだろうね？」

「当然。さあ、では始めよう。最初は……」

「「グー！」」

「「じゃんけん、ポンッ！」」

結果、見事かつこいいチョコキを出した翼さんが即座に敗北。わさびが山と乗った最後の一個である焼き餃子を苦渋の表情で食べる事となるのでした。

その後、口直しに三つで100円のプリンを三人で食べた。

これもきつと良い思い出になる。そう思いながら私は翼さんと奏さんと笑みを見せ合うのでした……。

「暁さん、休憩行つていいよ」

「はいデス。なら休憩頂きますデス！」

「うん、いつてらっしゃい」

店長さんへ休憩宣言して他の人達へも同じ事を言っていく中で時計を見ればもう八時デスか。一生懸命働いてると時間があつと言う間デスよ。

二階へ上がってレンタルの受付を素通りしてすぐ横のスタッフルームへ入ると、手近な椅子へ座つてだるんとテーブルへ突つ伏しました。

「はあく……結構疲れるデスね」

訓練も大変でしたが本屋さんも大変デス。まだアタシはそんなに出来る事が多くないからマシデスが、返本作業とか大変そうデスよ。

それにしてもここはアタシの知らない漫画がいっぱいデス。調べてたデスがアタシ達の世界にはない漫画が多いデスし、何より当然ながらうたずきんはないからちよつとそれは残念デス。

「うゝ、もう三分経つたデスか」

残りの休憩は十二分デス。つと、そうでした。

「えっと、ウルトラマンウルトラマン……」

スタッフルームを出てフラフラとレンタルDVDコーナーへ。もう既に特撮コーナーは把握済みデス。

「ありましたありました」

只野さんオススメの作品がずらりと並ぶ魅惑のコーナーデス。仮面ライダーも初めて見た時こんなにいっぱいいるんデスかと驚いたものデスが、もう今では見慣れたものデス。

ウィザードも気になるデスが、アタシ的にディケイドが気になるデスよ。だって色んなライダーが出てくるみたいデスし、どうも姿とかまで他のライダーになれるらしいデス。

「つと、目的はライダーじゃないデス」

気付けばパッケージを手にして裏を眺めてる自分に気付く。ううっ、どうしてパッケージ裏のあらすじはあんなに気になるデスカね。おかげで休憩だけじゃ時間が足りないデス！

「えつとえつと……ウルトラマンダイナの辺りにあるはずって只野さんは言ってたデスね」

今探してるのは只野さんオススメの映画デス。今日お掃除した後に見つけたウルトラ8兄弟の事を話したら、それもいいけどって只野さんが教えてくれた映画があるデス。

ウルトラマンもTVシリーズをじっくり見てみたいですが、みんな鑑賞会するには映画が一番だと只野さんが言っていましたし、アタシも同感デス。

あつ、ありました！ ウルトラマンダイナって作品がずらりデス。「……………これデスね！」

見つけたのはウルトラマンティガ&ウルトラマンダイナと光の星の戦士達くって映画デス。

アタシ達はこのウルトラマンティガやダイナってウルトラマンをほとんど知らないデスが、何でも8兄弟より前にこっちを見た方がいいと只野さんが教えてくれたデス。

それともう一本。それがダイナの近くにあったティガのコーナーにありました。

「ザ・ファイナルオデッセイ……これデース」

みんなでウルトラマンの映画を見て、アタシはもう大ファンになりました。遠い星から来たのに地球のために命がけで戦ってくれるウルトラマン。その目的は全宇宙の平和なんてすつごく大きな事デス。色んな超能力を持ってて体の大きさも変えられる。そんな凄いヒーローデスのに、映画の中で言った言葉がアタシの胸を打ちました。

——我々ウルトラマンは決して神ではない。どんなに頑張ろうと救えない命もあれば、届かない想いもある。

あの瞬間、アタシはどうしてウルトラマンがヒーローなのかを知り

ました。あの人達も悔しい想いを、悲しい想いを、涙を、知ってるんデス。

アタシ達が味わった事と同じかそれ以上の苦しみを知っても、それでも自分の出来る事を精一杯やってる。そう思ったら、そして映画でその意味と凄さを知ったから、アタシはウルトラマンが大好きになりました。

「ティガやダイナはちよつと違うらしいデスけど……」

それでも同じウルトラマンデス。それはアタシ達で言うところの平
行世界みたいな感じデスから、きつと大丈夫デス！

パッケージからDVDを抜き取ってレジへ向かいます。で、会員証
をおサイフから取り出して……。

「お願いするデス！」

「はい」

アタシの渡したDVDケースと会員証を受け取って笑顔を見せて
くれるのは愛衣さんデス。年齢はマリアぐらいの可愛い感じのお姉
さんで、何と社員さんなんデス。

「切歌ちゃんって弟さんでもいる？」

「ほえ？ いないデスけどどうしてデスか？」

「ああ、ごめんね。こういうのあまり女の子は借りないから」

まさかの質問に答えたら愛衣さんがそう言って苦笑してました。
そういうえば只野さんもアタシの事を珍しいって言ってたデスね。

「そうなんデスカ。アタシはウルトラマンとか大好きデスから」

「そうなんだ。まあ最近のこういうのって俳優さんもカッコイイ人多
いし、ありって言えばありかな」

「俳優さん？」

「あれ、違うの？ はい、二本一週間で2000円」

「はいデス」

只野さんから半分代金を出してもらえるので安心安全のレンタル
デス。……いつかTVシリーズのウルトラマンに手を出してみたい
デスね。

ああ、でも今はガガガもありますしクウガもあるデス。本当に時

間がいくらあっても足りないデスよお。

上位世界で全ての装者達が暮らし出し、それぞれがその生活を受け入れ、日々に追われるようになりながらも明るく楽しく生きていた。

時折根幹世界へ行き何か異常や変化が起きていないかと探る事も翼主体で行われていたが、一向に悪意の痕跡や何か企んでいるような形跡も見つからなかった。

ただ、本部内で保管していた完全聖遺物は、その嚴重な管理体制のために時間が停止している状態では手に入れる事が出来ず、響達のデュオレリックは出来ないままだった。

未来達もアルバイトに慣れ、まるでそれが本当の日常だったかのような錯覚を起こしそうな程平和で穏やかな時間が流れる。

仁志も唯一マリアへ溜め込みそうな事を吐き出す事によつて精神面の安定が保たれ、マリアはマリアで仁志へ不満や愚痴を吐き出す事で溜め込まないようにしていた。

そして週に一度は必ず全員でマリア達の家へ集まり、食事だったり鑑賞会だったりと行う事で情報交換や交流を途切れさせないようにしていたのだ。

三人の歌姫による動画配信も順調であり、その収入が遂に仁志の収入を大きく超える事になった時には全員で祝勝会のような事を行った。

そして梅雨の時期を迎えたこの日は、もう何度目か数えないといけない程恒例の映画鑑賞会。何とウルトラマンではなく仮面ライダーの映画であった。

「楽しみデース。只野さんがお祭り映画であり情報がない方が楽しいって言ったデスからアタシは裏側のあらすじさえ読まずに借りてきたんデスよ？」

「ごめんごめん。でもこれは仮面ライダー生誕四十周年記念作品だからさ。それだけ気合入ってるんだ」

「四十周年……」

「本当に人気なんですわね！」

聞こえた単語に驚く調とワクワクから笑顔のエルフナイン。もう仁志との触れ合いで見事な特オタ予備軍となった少女に仁志は深く頷いた。

「四十年もやってるのに数は合わねーのは何でだ？」

「多分だけど毎年やってた訳じゃないんじゃないかな？」

「そういう事。ライダーシリーズやウルトラシリーズは何回か休止してた頃がある」

「そうなのね。じゃ、そういうのなく続いている物はない？」

「それがあるんだ。毎年毎年途切れる事無く続くヒーロー物が」

そう言って仁志は切歌へ顔を向けて問いかけた。

「暁さん、その答えをどうぞ」

「ピンポーン！ 正解は、スーパー戦隊デスっ！」

「「「「「スーパー戦隊？」「「「「「」」」」」」」

響と切歌以外が揃って同じ反応を見せた。既に彼から教えてもらっている二人だけがニコニコと笑っている。

「今度はその映画を借りてきてもらおう。とりあえずまずはレッツゴー仮面ライダーを見てもらいたいし」

そうして始まる映画鑑賞会。これまでは最初のゴジラを除いて全てウルトラマンであったため、正しい形で仮面ライダーの動くところを見るのは仁志以外誰もが初めてであった。

物語の始まりはやや唐突に。仮面ライダーオーズと呼ばれるヒーローが謎の怪人を相手に戦っているところから始まったのだ。だが、それらは本来彼が戦うヤミーと呼ばれる存在ではなかった。

その怪人達はイマジンと呼ばれる存在であり、よりにもよって逃げた先にいた少年の記憶を使ってその時代から四十年前へとタイムスリップしてしまう。

途方にくれるオーズの前に別の仮面ライダーであるNEW電王が現れ、時を駆ける列車であるデンライナーでオーズは彼と共にイマジン達を追う事に。

「何だか話が壮大だな……」

「ウィザードとはデザインがかなり異なるな、この二人は」

「時間移動出来るなんて……イマジンは恐ろしい存在です」

「それを倒すためにデンライナーがあるんだろうね」

過去に介入してはいけないというデンライナーオーナーの言葉に従い、オーズである火野映司は大人しくデンライナーの中で待つ事にするが、相棒であるグリードのアंकは腕だけになって密かにデンライナーを抜け出してしまふ。

NEW電王はイマジンをすっかり仕留め役目を果たすものの、自分以外のグリード達が目覚めていない時代でメダルを回収しようとアंकが抜け出していた。だがそのせいでセルメダルと呼ばれる物がその場へ事故により一枚残されてしまふ。

全てが終わったと思つてその場を立ち去るNEW電王達だったが、その落ちていたセルメダルがその時代の悪であるショッカーの手へ渡る事となつてしまったのだ。

元の時代へ戻つた映司とアंकだったが、その様子が明らかに違う事に気付いて疑問符を浮かべる。様々な事を経て四十年前に滅ぶはずだったショッカーが生き残り、歴史が変わつてしまった事を知る映司達。

それでも映司は仮面ライダーとして一人でも戦う事を決意し変身、強大な悪の組織と化したショッカーへと単身戦いを挑むのだった。

「カッコイイなあ、映司さん」

「仮面ライダーという名の意味と重み。それを彼は知っているのだから」

「お人よしだけどいざとなればその身を傷付けるのを厭わない、か。まさしくヒーローだわ」

子供達を守るために一人ショッカーと戦う映司。だがそんな彼の耳にバイクのエンジン音が響き渡る。

現れたのは二人の仮面ライダー。始まりの男達、仮面ライダー1号と2号だった。

最初は味方かと思つたオーズだったが、ダブルライダーはあろう事かオーズを攻撃。その強さの前にオーズは窮地に立たされるもコンボの力で何とかその場から離脱する。

「同じ仮面ライダーが敵だなんて……」

「これじゃオーズが可哀想デスよ」

ダメージを負いながらも二人の少年と共に逃避行を続ける映司。そこへジェネラルシヤドウと名乗る改造魔人が立ちはだかる。

少年達を守るために変身し戦う映司。だが万全の状態でもない彼が幹部怪人を相手に勝てるはずもなく、次第に劣勢へと追い込まれていく。

そこへデンライナーが現れ危ないところを救われる映司達だったが、歴史が何故大きく変わったのかを知る事となった。

ショツカーは独自に作り上げていたショツカーメダルへセルメダルを加える事で強力なショツカーグライドを誕生させ、何とダブルライダーを倒してしまった。その後、彼らを洗脳処理で手先とする事でショツカーは今日までの繁栄を築き上げる、そんな歴史が出来上がったのであったのである。

ダブルライダーが悪となった事で本来続くはずだった歴代ライダーも存在が消えてしまい、映司達の時代も大きく様子が変わる事となったのだった。

「過去が変わって未来が変わる、か……」

「本来いた存在が消えるのは、どこか私達に近いですね……」

映司は一人現代へ残り戦う事を決意し、過去を正しい流れに戻す事をNEW電王である野上幸太郎へ託す。

二人の仮面ライダーによる時代を超えた共同戦線が張られた瞬間であった。

「相手は強大。だけどそこで苦しんでいる人がいるのなら……」

「やっぱりヒーローはそうなんだよ。目の前で助けを求める人を見捨てられない。そんな優しく強い人達なんだっ！」

再び四十年前へやってきた幸太郎達は、セルメダルを手に入れようとするショツカーのブラック將軍や少年仮面ライダー隊を名乗る子供達と知り合い、更に洗脳前のダブルライダーとも合流。争奪戦の結果ブラック將軍に奪われたセルメダルもダブルライダーがすり替えた偽物であり、その発信機の反応を追って三人の仮面ライダーは

ショットカー基地へと向かう。

「いつの間にすり替えたんだよ……」

「クリス、そういうのはこういう特撮ではいいっこなし」

「ライダーキック、カッコイイデス！」

「武器も何も使わないで戦うって響さんみたいですね」

「私も思った。ダブルライダーってどうして素手なんですか？」

「ダブルライダー達昭和ライダーは改造人間、つまり生物兵器だ。その全身が武器なんだよ。まあ、平成ライダーは武器を持つ事多いけど、それはほとんどが君達と同じで強化服を着てるに近い状態だからだし」

物語は中盤の山場を迎える。何とショットカーはセルメダルを既に最初の時点ですり替えており、結局ショットカーグリードは誕生してしまう。

その強さはダブルライダーでさえやはり敵わず、更にはデンライナーもカメバズーカによって破壊されようとしていた。一時撤退を余儀なくされた幸太郎達だったが、その行く手をショットカーグリードが阻む。

それを見てダブルライダーは自分達が囷となる事で幸太郎達を逃がす事に。死ぬかもしれないと分かっているにも、幼い二つの命を守るために二人はショットカーグリードへと挑んでいく。

火の手が上がるデンライナー。その乗車口から遠くなっていく自分達の姿を見つめる幸太郎達へダブルライダーは叫ぶ。

決して正義は負けない。俺達は悪には屈しないと。その言葉を嘲笑うかのようにショットカーグリードがダブルライダーを蹂躪し、足蹴にする。それを見て少年の一人がデンライナーを下りてしまう。

それを助けるため、幸太郎の相棒であるイマジンのテディが後を追い駆けた。もう引き返せないデンライナーは、そのままその時代から離脱する事しか出来なかったのだ。

「……ナオキ君、どうなったんだろう」

「だ、大丈夫デス。テディもいますし、ダブルライダーは絶対死なな
いって言ったデス」

「悪には屈しない。そう言ってた二人を悪の手先にするなんて、シヨツカーは酷い」

現代ではオーズが一人シヨツカーを相手に奮戦を続けていたが、それも多勢に無勢。遂に追い詰められ映司は捕まってしまう。

一方で幸太郎達は現代へ帰還するも、そこであの後起きた事を知り愕然となる。

ダブルライダーは捕えられ、ナオキはテデイと共に少年ライダー隊と抵抗を続けたものの、力及ばずテデイが息絶え、その彼を目印として隊員の証であるバッチと手紙を埋めたのだ。

過去を戻す事も出来ず、むしろ悪化してしまった事に絶望しかける幸太郎をモモタロスがアंकの体へ憑依する事で奮起を促したのも束の間、そこへ現れたシヨツカー怪人達から幸太郎達を逃がすためにモモタロスはアंकと共に殿を務める事に。

だが幸太郎も結局捕えられ、映司達三人が見せしめとして公開処刑される事となる。

「そんな……もう、もうどうしようもないんですか？」

「タダノ、どうなんだ？」

「セレナちゃんもヴェイグも思い出してくれ。ウルトラマンでもゴジラでも、最後まで諦めなきや必ず希望は輝くって見てきただろ？」

大勢の人々が見つめる中、十字架に張り付けられた映司、幸太郎、モモタロスとアंकの姿があった。

シヨツカーへ刃向う者はもう誰もいないと、そう高らかにジエネラルシヤドウが宣言する中、そこへダブルライダーが現れる。

その出現を喜ぶシヨツカーだったが、ダブルライダーはそんなシヨツカーへ毅然とした態度で反論を始めた。

そう、二人はもう洗脳から解き放たれていたのだ。それでも千載一遇の機会を窺い、敢えて悪とのそしりを受けながら虎視眈々と反撃の時を待っていたのである。

更にその隙を突いてオーズドライバーをシヨツカーからミツルが奪い返すもすぐに取り押さえられ、オーズドライバーが地面へと転がってしまう。その時、彼が叫んだ言葉が奇跡への幕開けとなる。

——ライダーに渡してっ！

その声を受け、今まで何も出来なかった人々が一丸となってオーズドライバーをショツカーへ渡すまいと処刑広場へ殺到、戦闘員や怪人を恐れずオーズドライバーを受け渡し合っていく。

最後に白衣の男性がそれを受け取り、無事映司の手へオーズドライバーが戻る。更に幸太郎も助け出され、二人はその場で変身。

オーズとNEW電王がダブルライダーと並び立つ。その姿にショツカー怪人達が驚き、人々から歓声が上がります。

「「やったあ！」」

「やべえな。ちよつとだけウルツときちまった」

「力無き人々の応援と声援。それをもたらしたのは最後まで諦めない心、か」

しかしそれでも戦力差は大きい。四人のライダーだけでは大勢のショツカー怪人達を相手にするには厳しい。

そこへ響き渡る声。力強い叫びと共に現れたのは赤い仮面のV3だった。それに驚くショツカーへ、まだまだいるぞと次々と飛び込んでくるライダー達。

それは、人々の中にあつたライダーへの想いが起こした奇跡。存在は消せても想いまでは消せず、それが消滅させられたはずの歴代ライダー達を復活させたのである。

デンライナーのオーナーによるその説明に人々が賛同するように歓声を上げるのを聞きながら、オーズ達は大反撃へと移っていく。

「存在は消せても想いまでは消せない……。クリスちゃん、これって」「ああ。何であの人があたしらへ見せたか分かった」

「これを、これを只野さんは私達へ伝えたいんだ。悪意がショツカーならば、我々は仮面ライダー。だが、そんな我々を繋ぎ止めてくれたのが只野さん」

「でも、そんな只野が想いを消さなかったのは響がいたから、か」

昭和ライダーだけでなく平成ライダー達さえも姿を見せて戦う。Wなどは変身まで披露しての参戦だ。

こうしてオーズまでの仮面ライダーが勢揃いした。強大な悪に立

ち向かうため、人々の祈りを、想いを受け、人類の自由のために戦うヒーロー達が。

「おおっ……」

「圧巻……」

「敵なしって感じですよ……」

「そうさ。君達が勢揃いした時のように、こうなったらもう負けはない。そう見てる人達に強く思わせてくれる何かがあるんだよ」

次々とショットカー怪人達を蹴散らしていく仮面ライダー達。そんな中、ショットカーグリードと戦うオーズの前にダブルライダーが姿を見せる。

ショットカーグリードは自分達に任せると告げるダブルライダー。それに対して心配するオーズだが、彼へ二人は力強く心配するなど告げる。その声に込められた想いと決意にオーズは後を託してその場を離れる。

始まる因縁の再戦。一度はショットカーグリードに負けたダブルライダーだったが、二度目の敗戦はないとばかりにその連携を以ってショットカーグリードを追い詰めていく。

大きく吹き飛ばされてショットカーグリードが弱つたのを見て、ダブルライダーはここが勝機だと領き合つて大地を蹴った。

——ライダーアアアダブルキイイイクツ!!

必殺のライダーダブルキックがショットカーグリードを大きく蹴り飛ばし、岩山の壁面へ叩き付けるや爆発四散させる。見事に勝利をもぎ取ったのだ。

「今の技、私（アタシ）達みたいです（デス）……」

「実際曉さんと月読さんはダブルライダーに近いかも。技の1号と力の2号って異名があるけど、二人も力と技って感じだし」

「間違いなくアタシが力デスね」

「なら私が技？」

ダブルライダーが勝利した頃、オーズ達はショットカー首領の力の前に苦戦を強いられていた。

そこへショットカーグリードから手に入れたショットカーメダルを

持ってアंकが現れる。そしてモモタロスからイマジンメダルを手し、それを使ったコンボをオーズへ使えと指示した。

見知らぬメダル二枚を使った「タカ」「イマジン」「シヨツカー」の「タマシーコンボ」となったオーズは、その強力な能力を使いシヨツカー首領を大きく吹き飛ばす事に成功する。

だが、戦いはそこで終わりではなかった。シヨツカー首領は本当の姿である岩石大首領となって復活。その巨大な姿と力で仮面ライダー達を窮地へ追い詰めていく。

「う、ウルトラマンデス！　ウルトラマンを呼んでくださいデスよおっ！」

「まさかの巨大化」

「反則もいいところじゃねーかつ！」

「初めて巨大ノイズを見た時の我々と同じだろうか？」

「いや、ただの巨大じゃなくて超がつくやつだよ、これ」

「こ、こんな大きい相手に勝てるんですか？」

「セレナ、きつと大丈夫だ。こいつらもヒーローだ。不可能を可能に変えてみせるだろう」

もうダメかと思ったその時、オーズ達を助けるように更なる仮面ライダー達が姿を見せる。彼らの援護により、体勢を立て直す事が出来たオーズ達は全員での一斉攻撃を仕掛ける事にする。

それぞれがそれぞれの愛機であるバイクへ乗り込み、崖をカタパルトのようにして空中へと駆けて行く。

——オールライダーブレイクっ！！

40の形を取りながら岩石大首領へと突撃していく仮面ライダー達。そのエネルギーと威力に岩石大首領は爆発四散。

戦いが終わった後で少年の前へ現れる白衣の男性。彼こそシヨツカーに捕まっていた少年の父親であり、四十年前に別れたナオキ少年の姿だったのだ。

こうして全ては終わった。歴史が正しく修正された事で間違った未来がなくなり、元々の日々が戻ってきたのであった。

「って、こんな感じ。お祭り映画だから粗は目立つかもしれないけど」

「アタシは面白かったデス！ 仮面ライダーのカッコよさはウルトラマンとは違うってのもよく分かりました！」

「そうだね。仮面ライダーはどこまでも人なんだって分かった。だからこそ、その力を正しい事、みんなのために使う事を選ぶんだって」
仁志の趣味への理解が深い切歌と響がまずそう告げる。二人はすっかり仁志の好きなヒーローものへはまっていたのだ。

「私はあのダブルライダーの在り方に防人の在り方を、守りし者の在り方を見ました。耐えがたきを耐え忍びがたきを忍び、人々のためにその力を振るう事。異形となりながらも人の強く優しい心を持ち続ける事。只野さんが好きなのも納得です」

「あたしはやっとダブルライダーってのがどういのか分かって嬉しかったよ。それに、うん、翼が言うようにカッコイイ生き方だよ」

「子供の味方というのも私は好印象ね」

「イヴさんとしては、終盤のダブルライダーの台詞は少し昔を思い出させられなかった？」

「っ……ええ、若干思い出したわよ。でも私と彼らは違う。彼らは守るべき人達さえも悪として欺かなければならなかった。そのためにしたくもない暴力も使ったのでしよう。私よりも辛いはずよ」

自分へ置き換えて考えれば、あのアルゴスの眼を入られた際の状態に近いと分かる。しかも、力を振るう相手は同じような力を持つ者達ではなく力を持たぬ相手なのだ。

しかもその相手達からある意味で恐れられ、嫌がられる。そう考えればマリアは耐えられるだろうかと思ってしまうのだ。しかも、それを四十年近くもの間に渡って。

「兄様、あの途中で出て来た四人は何ですか？」

「ああ、イナズマン、キカイダー兄弟にズバットだ」

「兄弟？ そっか。だから兄さんって言うってたんだ」

「彼らは仮面ライダーの生みの親が考えたヒーロー達なんだ。お祭り作品でもあるからああいう形で登場って訳」

「成程な。道理で唐突だった訳だ」

ヴェイグが納得するように他の者達も頷いていた。

そして映画を観終わったからこそ仁志への質問が続発する事となり、その結果仮面ライダー講座が開かれる事となった。

「まず、ウルトラ8兄弟でも軽く話をしたけど、仮面ライダーとウルトラマンは昭和と平成で大きく雰囲気異なる。これはいい？」

全員が頷くのを見て仁志はならばと話し始めた。

ウルトラマンの中での違いと言っても、大きな違いは宇宙人か人間かという程度で済む。だがライダーは基本設定そのものから変わってしまう。

元々は改造人間と言って普通に暮らしていた者を捕まえ改造し、人間であつて人間ではない存在となつたのが仮面ライダーだった。

それが平成に入り、人体改造が少々問題視されるようになると考えた製作会社が「古代から存在する謎の輝石の力」や「光の神が与えた進化の力」などの改造ではない手段で変身する事にしてしまった。

そういう設定が進んだ結果、ライダーはアイテムがなければ変身出来ない事となり、しかも場合によっては誰でも変身可能となつてしまったのだ。

「……ま、そんな感じがライダーとウルトラマンの違い。平成ウルトラマンも道具がないと変身出来ないのは一緒だけど、彼らは道具さえあれば誰でもはさすがにやってないから」

「つまり、最近のライダーはそれだけ身近つて事？」

「そういう見方も出来るね。ただ、君達のギアと同じで起動出来るとしても元の持ち主みたいに扱えるとは限らないってところ」

そう表現すると全員から納得するような声が上がつた。やはり分かり易い物で例えられると理解が早いのだろう。

そしていよいよ仁志的には一番大きな違いを説明する事に。

「ライダーには見て分かつたと思うけど変身ポーズつてのがある。これは昭和平成問わず存在するんだが、昭和は道具なしでやってる分、カッコイイ。って、訳で今からざつとやるから見てて」

どこかテンション高く仁志はモニターの前へ立つと、表情を凛々しくして構える。

「ライダーアア……変身っ！」

まずは1号。その単純だが力強い動きに全員がふむふむと頷く。「変身っ！」

続いて2号。力こぶを作るような構えで終わるそれに、誰もが力の2号という異名を思い出ししていた。

「ぬんっ！ 変身……ブイスリヤア！」

そして3号、V3。1号と2号のポーズを融合させたそれに気付いた何人かが感心するような声を上げる。

「と、まあまずはこのトリプルライダーかな。本当はこのポーズをしてからジャンプするんだけど、それは割愛させてもらった」

「飛ぶんですか？」

「うん。この三人のライダーは風力をエネルギーにしてるんだ。ベルトの風車に風を受ける事で力へ変えるんだよ。ライダーキックが必殺技になるのは、あの凄い跳躍で受けた風力エネルギーを攻撃へ転用して叩き込むからなんだ」

「成程ねえ。ただ単に飛んでるんじゃないんだ」

「1号と2号はバツタ。V3はトンボがモチーフらしい」

「バツタとトンボですか？」

「そう。その能力を持つ改造人間。彼らは人間の姿こそが仮の姿で、ライダーの姿が本当の姿になってしまったんだ。ウルトラマンと異なるのはそこもある」

その言葉で誰もが息を呑んだ。ある一定の年齢まで普通に生きていたのに、ある日突然それを奪われ怪物とされてしまう。

それを聞いて響達一部の者が思い出す者達があった。当然仁志もその悲しい者達を思い出さないとはいえない。

「ノーブルレッドの三人に言っただけであげたかったよ。例え体は怪物にされても、魂さえ、魂さえ人間であろうとすれば人間なんだと」

「只野さん……」

「実際、昭和ライダー達はそう思って戦っていたんだ。人でありながら人でない。そんな悲しみは自分達だけでたくさんだった」

「あいつらは、そこまでの強さはなかっただろうな……」

「仕方ない。彼女達の方が辛い部分もある。少なくとも見た目は人間

らしかったが、その命を保つには稀血が必要だったのだから」

「実は、それと同じような設定のライダーもいるんだ。一定期間で体中の血液を入れ替えないと拒絶反応が出ていずれ死んでしまうって感じの」

今度こそ響達は言葉がなかった。それでもその話をして欲しいと促すように強い眼差しを仁志へ向けた。

「彼は惚れた女と認めた男のために組織を裏切り反旗を翻す。結果、その血液を入れ替える事が出来なくなり、ゆっくりと弱っていくんだ。それでもその事を隠して彼は戦い続ける」

「……死んでしまうんですか？」

「俺は死んでないと思いたいけどね。きつと、彼は誰かの飼い犬として生き長らえるなら人として死ぬ事を選んだんだと思うよ」

そしてそれはノーブルレッドの三人もかもしれない。その言葉を飲み込み、仁志は息を吐いた。

気付いたのだ。響達が戦ってきた相手はそういう意味ではヒーローになれなかった者達だと。

与えられた力、技術。それらを闇の方向へ使ってしまった。それが彼らには光だと思ったのだ。

サンジェルマン達もヴァネッサ達も、その心は優しく強いはずだったのに。

「ただ、彼女達は体を元に戻したいというのが願いだ。だから奇跡に縋るしかなかった。神の力なんていう、得体の知れないものに」

「只野さんでも分からないのですか？」

「君達の戦いとかであの力の凄さとかは分かっていたけど、あれが本当はどんなものかは明かされたようで明かされてないからね。Gストーンの方が分かり易いよ」

「デスデス。あれは勇気をエネルギーに変えてくれるデスからね」

「そう。要は生命力だ。強い生命力を持つ者に力を与える。でも神の力は違う。あれは強い心を持っていないと飲み込む力だ。だから神の力じゃない。あれは神にも悪魔にもなる力だと思うよ」

その表現に響達神の力を知る者達が頷いた。実際響でさえ飲み込

まれ破壊を行った事があるのだ。

「あの力があればエルザ達は戻せたと思いますか？」

「難しいね。シエム・ハのやった事から逆算すれば可能だったとは思
うけど、それには完全にあの力を制御出来る事が前提条件だ」

「つまり彼女達があの力を手にしたとしても……」

「願いは叶わなかった、か……」

「だとしてもっ！ 私は、それを夢見て頑張ったヴァネッサさん達を
可哀想なんて思いません！」

「響……」

立ち上がって拳を握る響を未来は見上げて笑みを浮かべていた。

それでこそ立花響と思っただのだ。

「そうデスっ！ エルザ達は最後に見せてくれました！ 自分達は人
間だって！」

「うん、強く優しい人間の心。それをちゃんと私達に見せてくれた」

「人の本質は追い詰められた際や今際の際に出ると言う。そういう意
味で言えば、彼女達はたしかに人間だった。美しく気高い人の魂を持
つ、な」

「ええ、そうね。彼女達がいなければ私達はあの時、間に合わなかつ
た」

「最後の最期にヒーローになったんだよな、あいつらは。世界を、地球
を救う、ヒーローに」

「闇に飲み込まれる事に最後は抗ったんだよ。誰もがみんなヒーロー
になれる。うん、今分かった。ヴァネッサさん達もやっぱ仲間だつ
たんだって！」

その響らしい締め括りに誰もが笑みを浮かべて頷いた。

奏やセレナ、ヴェイグさえもだ。知らない相手だろうと響がそうい
うのならそういう者達だったのだろうと思つて。

と、そこでどこからか音が聞こえて全員が同じ場所を見た。それは
依り代が入った首掛け袋。

「エル、見てくれないか？」

「は、はいっ！」

少し慌て気味に首掛け袋を手にし、エルフナインがその中からスマートフォンを取り出すと、もう慣れた手付きでアプリゲームを起動させて仁志へと差し出した。

「兄様どうぞ」

「ありがとう。えっと、中央に移動するな？」

出来るだけ全員に見えるようにと仁志が居間の中心へ座り、彼の周囲を取り囲むように響達が動いた。

「……まずはメイン画面に変化なし」

「ですね」

相変わらずステータスとミュージックボックスのみの表示。そして前回のような通知のアイコンもなかった。

ならばと仁志はステータスをタップする。すると、一つ地味な変化が起きていたのだ。

「おく、遂に月読さんもゲージの三分の一が色付いた」

「デスデス」

「でも、どうしてそれで通知音が？」

「分からない。でも、きつと何か意味があるんだろう」

「待って。さっきの通知音は本当にそれを伝えるため？」

そのマリアの発言に誰もがたしかにと疑問を抱いた。

「……もしかしてさ、今のはこっちじやなくてゲートの方にあるとか？」

どこか不安そうに仁志が告げた一言で響達が動き出そうとする。

「待ちなさいっ！」

「「「「「「つ?!」」」」」」」

それをマリアの一喝が止めた。彼女は足を止めた八人の装者へ凛々しい表情を見せる。

「相手の狙いが分からない以上戦力を一極集中は出来ないわ。翼と奏、クリスに……響と未来。その五人で行って。残りはここで待機。悪意が只野を狙った場合、私だけじゃ守れないわ」

「分かった。だが、それなら小日向をこちらに」

「悪意が入り込んで何とかするなら同じ場所にいる私達より隙が出来

そんなそちらよ。未来がいざとなったら払えるなら調査班へ組み込むべきだと思う」

「うし、じゃあ行くよ」

「二」「はい（ああ）っ！」「二」

「五人共気を付けて」

こうして響達が急いでゲートがある翼達の部屋を指して走り出す。

それを見送って仁志はマリアと顔を合わせた。

「な、ゲートをここへ移動させないか？」

「奇遇ね。私も今そう言おうと思ってたの」

「……じゃ、翼へ連絡するよ」

「そうして」

この数十分後、響達は再びマリア達の部屋へ戻ってきた。ゲートとなっているノートPCを持って。

ゲートは居間のモニター横が定位置に決まり、その設置を終えたところで響達からの報告が始まった。

ゲート内に大きな変化はなかったものの、とりあえず根幹世界のゲートを見に行こうとなり、五人でそこへ向かうと何とゲートを塞ぐように巨大な生物、カオスビーストが居座っていたのだ。

交戦して撃退しても同じ事の繰り返しになると踏んだ五人は撤退を行った。だが、今度は裂け目を塞ぐ形で別のカオスビーストが配置されていたのだと言う。

それと交戦して何とか撃退しこうして帰ってきた。その話を聞いて仁志は不安そうな表情を浮かべた。

「つまり、罨？」

「いえ、おそらくですがゲートが封鎖された事を教えてくれたと私は思います」

「あるいはあのとんでも共を悪意が支配下に置いたって教えてくれたのかもな」

仁志も失念していたカオスビーストの存在。だが、それが彼に一つの疑問を浮かべた。

「なあ、カオスビーストってたしか世界蛇が生み出した存在だったよな？」

「ええ、そう言っていたわね」

「それがどうしたデス？」

「……なのにどうして今まで悪意は支配下に出来てなかったんだ？」

世界蛇を使役していたはずの悪意がその分身や生み出したものを何故今まで利用しなかったのか。その疑問に誰もが失念していたとばかりに考え込む。

やがてヴェイグが静かに告げた。

「おそらくだが、あれも一度滅んだんじゃないか？」

「滅んだ？」

「そうか。悪意は利用しなかったんじゃないやなく利用出来なかったのか」

奏はそう言つて翼達へ悔しげな顔を見せた。

「そう思えば妙だと思つたんだ。いくらツインドライブだからって手応えないって感じたし、いつそ倒せばよかつたか……」

「ちよ、ちよつと待つて奏。ツインドライブって……」

「言いやすいんだよ、こつちの方がさ」

「デュオレリック……ツインドライブ……たしかに言いやすいデス！」

「切歌まで……」

呆れるようにそう言つてマリアはジト目で仁志を見た。見られた方はその視線から目を逸らして考えている振りをしている。

そんな仁志に小さく苛立つも、そこに彼らしさも感じてマリアはため息を吐くだけで許す事にした。

「それよりもカオスビーストです。今の話が本当なら、倒すなら早い方がいいです！」

「だな。俺もそう思うよ。実際以前の状態は倒せないレベルだったんだ。そこまで成長されたら手に負えない」

「よし、今度は俺もセレナと一緒に行ってやる。それなら一体は仕留められるはずだ」

「マリア、どうするデスカ？」

「只野さんはああ言ってるけど、倒すとなると……」

切歌と調の眼差しにマリアは一度だけ仁志を見た。カオスビーストを倒すとなれば少数精鋭とはいかない。弱体化していても強敵である事には変わりはないのだ。

つまり、総力戦。装者九人をゲートの中へと向かわせる事を意味する。その間仁志やエルを守る者は一人もいない。

「いいのね？」

「エルと二人で待ってる。総力戦でまず一体。戻ってきた時には祝杯を挙げよう」

「……ゲート近くにいなければ即帰還。深追いはしない。失敗したら即退却。いい？」

「……了解（デス）っ！」「……」

こうして九人の戦姫達がゲートへと入っていく。それも今までで初めての事だった。

「凄かったな、さっきの」

「はい……」

残された仁志とエルフナインはゲートを見つめる事しか出来ない。それでも二人は響達の無事を願い、ただただゲートを見つめていた。

そんな二人を見つめるように、黒い雲のようなものがそこから少し離れた位置に浮かんでいた。

—— やつとここまで来たわね……。

どこか不敵な笑みを浮かべるような声なき声を発しながら……。

陽だまりメモリア

装者のみんながゲートへ消えて三十分程経過した辺りでスマホに通知音。慌ててゲームを起動させれば何とメイン画面に変化が。

「アドベントバトルっ!?!」

「な、何なんですか?」

アドベントバトル。それはゲーム内でカオスビーストと戦うものだ。これが出現したって事は、もしかして……。

「エル、これはな」

そうやって説明を開始しようとした時だった。

「つと、戻りましたっ!」

「響(さん)っ!」

ゲートから響を皮切りに翼や天羽さん達がぞくぞくと戻ってきたのだ。

それも全員怪我一つなく帰ってきてくれた。そして何があったのかを教えてくれた。

ゲートへ入った瞬間、カオスビーストと即戦闘になったらしい。だが、やはりその力が今までと違うと響達も感じ取ったそうだ。

九人でカオスビーストと戦うのは初めてだったが、セレナちゃんやツインドライブでその動きを早々に封じ込める事に成功。そこから天羽さんはツインドライブで、響達六人はアマルガムで、最後のトドメに小日向さんが神獣鏡の光を収束させて叩き込むという流れで完封に近い勝利を収めたらしい。

「あの感じなら復活させられたというのも納得よ。正直同じ個体とは思えなかったもの」

「……そうか」

イヴさんが全員を代表してそう告げるとみんなが頷いた。どうやらそこまで弱体化してるみたいだな。

「兄様、皆さんに先程の変化を話しましょう」

「そうだな」

「変化?」

「まさか依り代に、ゲームに何か起きたんですか？」

翼の言葉に頷いて俺はスマホを見せる。そこにやや禍々しいアイコンが表示されているのを見て誰もが俺へ視線を動かした。

「アドベントバトル。これはゲームでカオスビーストと戦うモードだ」

「じゃあ……」

「待ってください。何でそれが今になって？」

「通知音が鳴ったのはついさっきなんだ。みんなが戻ってくる直前と言ってもいい。多分だけど、みんながカオスビーストを倒した瞬間だと思う」

言って俺はアドベントバトルをタップする。すると、そこにはゲームの時と同じような表示の仕方で複数のカオスビーストが表示されていた。

そしてその内の一体がバツ印で消されている。それをみんなに見てもらって確認してもらった。倒したのはそれかと。

「……間違いないよ。あたしらが倒したのはこいつ、プロトスだ」

「そっか。となると、そういう事なんだろう」

ゲームは悪意が与えた物ではないと思う。もしそうならこれをすぐに表示させてこちらの不安や恐怖を煽ったはずだ。

だがそうしなかった。それどころか倒された瞬間にアイコンを出現させてきた。それはある意味でこのゲームが出現した時と似てる。

もしかして、ある条件を満たさないと手を加えられないのかもしれない。あるいは、悪意の力が弱まったかみんなの何かが増した時？

「これで残るカオスビーストは四体。内の一体は根幹世界のゲート前なんだろう？」

「おそろくですが……」

「じゃ、ゲーム的な発想でいくと残りの三体もどこかへ配置されてるはずだ」

「三体……」

「じゃああれデス！ 一体はマムのいる世界のゲートがあつた辺りじゃないデスか？」

「そうか！ あたしらのデュオレリックを警戒してる可能性があるな！」

「ならもう一体はフィーネさん達の世界のゲート付近です！」

「そうだな。では、残りの一体は？」

「多分あたしの世界、だろうね。了子さんや錬金術師達もいる。きつとあたしらの力になりそうな場所を警戒してるはずさ。それで計算は合う」

挙げられた場所はどこも可能性が高い場所だ。その理由も分かり易い。だが、どうして急に……。

「もしかしたら悪意もこのゲームに気付いたのかもしれない」

「マジデスカ!?!」

「でもそれなら納得出来る。だって、このゲームのおかげで私達はデュオレリックになれない事を思い出した」

「こうなるのだったら、せめて本部に置かれていた我々の完全聖遺物だけでも無理矢理にでも確保しておくべきだったか……」

「過ぎた事を悔やんでも仕方ないぜ先輩」

そう、そうなんだよ。俺もそれを強く勧めなかった。何というか、まるでもう本部へ彼女達が来れなくなるみたいで。

きつとそれを翼達も感じてたんだと思う。どこかでいつでも来れる。いつだって帰って来れると、そう思っていたし思ったかったんだろう。

「とにかく、こうなると奴らの位置を把握しないとね。何せあたしらが最初に行った時はギャラルホルン前以外は姿形がなかったんだ」

「そうだけ。それが一旦移動して戻ったらここの裂け目にも一体だと、なるとだ。もしかすると今はまだ他のところにはいない可能性だってある」

「そうね。悪意もカオスビーストを全て出現させる程の力はないかもしれない」

「で、でも、ゲームには表示されてるんですよ？」

セレナちゃんがこつちを見てくるので頷く。ただ、これはもしかすると元のゲームからのフィードバックかもしれない。

何せシンフォギアには神様つてのが本当にいた。それに近い何かが手を貸してくれてるのだとして、その手段にゲームを利用してないとも限らない。

「セレナ、俺はげーむとやらがよく分からないが、それはある意味で元々のものとは異なってるはずだ」

「元々のものと……」

そこでヴェイグは俺を見た。

「タダノ、そうだろう?」

「ああ、俺が元々やってたゲームに似せてはいるがかなり違う。これは、俺達へ何かを伝えようとしている何かがゲームを利用してると思った方がいい」

「何か……か」

「それは一体?」

「分からない。でも、俺から言わせてもらえばエンキやシエム・ハなんて神がいる時点で君達の世界は相当凄い。しかも、その神様だった存在が君達の世界だとまだ存在してるのは確定なんだ」

「はあ!? どういう事だよ!」

「エンキ達カストディアン、あるいはアヌンナキは君達の世界では遙か昔に地球へやってきて、シエム・ハの反乱後に別の星系へ旅立った事が分かってるんだ。つまり、君達の世界にはまだ神の力を使う存在がいるって事」

その言葉に響達が息を呑み、天羽さんとセレナちゃんにヴェイグは理解出来ないまでも絶句していた。

それはそうだろうな。敵対する事はないと思うが、正直心穏やかにはいられないかもしれない。

「で、ここからはこっちの、いやこっちで作られてる創作物の話だ」

「創作物、ですか?」

「ああ。実はな……」

疑問符を浮かべるエル達へ俺は簡単に話をする。地球に限らず宇宙の星々は生きていて、それが助けを求めたりあるいは自分を守ろうと凄まじい力を与えたりする事を。

具体的には『ウルトラマンSTORY0』や『電撃戦隊チェンジマン』とかだ。

「もしかすると、今回のこれもそういう事なのかもしれない。悪意は君達の世界だけじゃなく他の世界まで破滅させようとしている。それを察知した星々や世界そのものがSOSを発した結果が今に繋がってる可能性がある」

「世界が……助けを……」

「あの映画と同じって事ですか!？」

響が言ってるのはきつと超ウルトラ8兄弟だ。ああ、そうだ。あのウルトラマンが番組としてあった世界へ本当の侵略者とウルトラマンがやってくる話。それに今の状況は似てる部分がある。

「そうかもしれない。ここには君達はいなかったけど、シンフォギアがあつた。それを悪意は利用しようとして、それを察知した世界が助けを求めたんだ」

と、そこではたと気付く。響が初めてここへ来た時の話だ。あの時、響はこう言つてた。ギャラルホルンのアラートが鳴つて、そこに来ていた自分達が調査に出たつて。

「なあエル？ たしかギャラルホルンのアラートつてしばらく鳴つた後に止まつて、そこから座標を突き止めないといけなかったよな？」

「は、はい」

「ちよつと待てっ！ でもあの時あたしはすぐに座標を教えられたぞ!？」

「え、エルちゃんどういう事っ!？」

小日向さんが問いかけるとエルは何かを思い出したかのように息を呑んだ。

「そ、そうですっ！ 僕が発令所へ行った時にはもうアラートの座標が判明してましたっ！」

「まさかっ！ ではアラートと同時に座標も送られたのか!？」

「か、可能性はありますっ！ 僕はてっきり友里さんや藤堯さんがやってくれたものだとばかり……」

「……ここに来てとんでもない事になってきたわね」

イヴさんの眩きに同意するしかない。まさか本当に世界そのものがSOSを発信してた可能性があるなんて。

「みんな、これは確かめた方がいいと思うんだが、どうだろう？」

俺がそういうと全員が凜々しく頷いた。こうなるとスマホを持って行ってもらうしかないな。

「じゃあ、これを持って行ってくれ。それで確認して欲しい。これももしそうならゲームの謎解きはこの異変を解決する世界からのヒントって事になる」

「分かったよ。行こう、みんな」

「エル、ごめんね。少しの間動けないけどお兄ちゃんと留守番してて」

「はい。セレナ姉さんも気を付けて」

「只野、エルをお願い」

「ああ、みんなも気を付けて」

「いってらっしゃいっ！」

エルが笑顔でそう告げると響達が笑顔で振り返った。

「……………いってきます (デス)……………」

俺はエルと一緒にみんなを見送った。再び残される形になったけど不安や寂しさはなかった。

それは、みんながいつてきますと行ったからだ。あれが「さよなら」や「またね」とかならきつとこんな気持ちではいられない。

ああ、でも本当に不味い。もし今回の事を世界そのものが防ごうと動いてるとすれば、それはあの世界蛇との戦い以上に他の世界へ波及する事を意味してる。

「エル」

「はいっ。」

だからこの時間も有効活用したい。少しでも今は情報を集めよう。「もし、仮に今回の異変を世界が察知して君達を動かしたとすれば、だ。それはあの世界蛇との一件を超えろと言えないか？」

「……………僕も同じ事を考えてました。世界そのものが危険だと判断する。僕はその判断を出したのはこの上位世界だと仮定しています」
「どうっつー。」

「それは、ここがやはり僕らからしても異常だからです。響さん達が遭遇したグリッドマンやゴジラといった存在。それさえもここでは作品として存在しています。これは、もしかするとこの世界にある創作物は全て平行世界という形で存在しているのかもしれませんが」

告げられた言葉の持つ意味は想像よりも重かった。それは、俺が好きなヒーロー達が実在するという喜びよりも、それらが悪意に狙われ消されるかもしれないという不安が強かったからだ。

「どうして悪意がここへ手を出したのかは明白です。僕らを、戦姫絶唱シンフォギアを消滅させて邪魔者を一掃すると同時に復讐を果たすためでした。なのに、それ以降はここへの悪意の干渉は少ないです。確認出来たのは切歌お姉ちゃんと調お姉ちゃんを操った事。これ以外に現状確認出来る手出しはありません」

「そうなんだよな。だから俺は当分大丈夫だろうと踏んでるんだけど」

「かもしれない。あるいは、大きな干渉を最初にしたから悪意はその力をまた失ったのかもしれない」

そうか。そういう考え方もあるか。初手にして王手は当然だ。悪意はそれで全て終わると思っていたんだ。なのに、世界のSOSによつて響が俺と出会い、それが寸でのところで失敗。

それを悔しく思いながら力の回復に努め、平行世界との行き来を封じ、根幹世界の時間を停止し、じわじわと響達を追い詰めていく方向へシフトしたんだ。

エルは動けないからかいつも以上に思考する事へ意識を割いていた。それは俺が初めて、そして久しぶりに見るエルフナインの姿だった。

エルフナインは語った。悪意は強かではあるがどこかで装者達へ固執している部分もあると。

その根拠はあのザバコンビを操った事。正直言えば、今の響達の危険度は高くない。その間に他の世界へ手を出し、少しでも力を得るなりすればいい。

なのにそれをせず、まだ響達を狙っている。そこに悪意の深い恨み

と憎しみが見えると。

「やり方や行動を見る限り、悪意は一見効率的です。でも、その根底にはやはり感情にも似たものがあるような気がします」

「そうだよな。悪意っていわば人間の負の感情だ。なら、その塊が理智的な行動を取り続けられる訳ないかあ」

「そういう事だと思えます。実際、今回のカオスピーストもそうです。本当に効率を重視するなら装者に負けない状態で復活させられるまで待ちます」

たしかにと思つて頷く。こう考えると悪意の行動は全て感情的だ。出来る事があつてそれでこちらが困るとなればすぐさま行つてゐる気がする。

「エル、悪意は思慮深いと思うか？」

「……正直言えば半分半分です。最初の動きは思慮深いと思います。実際響さんが出会つた相手が兄様以外であつたらその目的が達成される可能性がありました。平行世界のゲートを封鎖し僕らの世界の時間を止めた事もです。特に時間停止に関しては発覚が大きく遅れた可能性もありました」

「そうだった。あれは翼が定期的に決まつた時間で動いていればこそだ」

「はい。そこまで考えれば悪意は思慮深いと思えます。ですが、今回のカオスピーストは完全にそう思えません」

「……装者が九人いて、今はその全員で動けるのに以前よりも弱い状態で戦わせたから？」

「そうです。もしこれにも思慮深い面があるのなら別の目的があると思われるかもしれません」

そのエルの言葉は俺には恐ろしく聞こえた。感情的に見えたはずの相手が本当はその裏で権謀術数を張り巡らせている。そう思うと恐ろしい。

「別の目的……」

「僕にも分かりません。でも、もしかしたらこの行動にも何か狙いがあるかもしれません」

「そう、だな……。深読みし過ぎたくはないが、最悪を想定するに越した事ないもんな」

「はい」

そこで一旦会話が途切れたので俺は息を吐いてゲートを見た。相変わらずゲームで見た事のあるものが映し出されている。

みんなは大丈夫だろうか？ さすがに九人いて九人ともやられるなんて思いたくないが……。どうなんだろう。

「兄様」

そう思つてゲートを見つめているとエルに声をかけられた。視線を戻せばそこにはやや凜々しい顔のエル。

「皆さんはきつと大丈夫です。だから今は信じて待ちましょう」

「……そうだな」

どうやらかなり心境が顔に出てたらしい。エルに励まされるとは年上失格だな。

よし、ならここは気を取り直して再び思索タイムと行こう。

「カオスビースト弱体化状態で悪意が狙うとしたら何だ？」

「そうですね……。装者の皆さんの分断？」

「ああ、そっか。それを餌に惹き付ける」

「あるいは、油断させるためかもしれません」

「油断？」

どういう意味だと首を傾げるとエルは少しだけ不安そうな表情を見せた。

「えつと、皆さんが確認したカオスビーストは二体。一体はギャラルホルンへのゲートを封鎖している個体です」

「ああ」

「残りがここへのゲートを封鎖していたと思われる、プロトス、でしたか？ その個体です」

「そうだな。もうみんなが倒してくれた」

「そこなんです。僕らがカオスビーストは弱体化していると判断したのがプロトスとの交戦結果でした。でも、本部へのゲートを封鎖しているカオスビーストは弱いとは限りません」

「……っ!? 必ず交戦するだろうこちらのゲート前にわざと弱い奴を置いた!？」

「可能性ががあります。それに弱いと言っても皆さんが全員でかかって倒せる相手です。これはあくまで想像ですが、もし奏さん達が五人の状態で本部へのゲート前で戦闘を開始すればその背後からプロトスが襲撃した可能性もあります」

言われて息を呑む。そうだよな。響達はカオスビーストを警戒して一旦退却を選んだ。だから本当なら挟撃させるはずだったプロトスをここのゲート前へ配置した可能性だってあるのか。

「じゃ、もしかしたら今頃……」

「可能性はゼロじゃありません。でも、僕は皆さんを信じています」

迷う事無く即答するエルに俺は笑みが浮かんだ。うん、そうだ。俺に出来るのはみんなを信じる事だけだ。

「そうだな。うん、そうだ。きつとすぐ帰ってくるか」

「はいー!」

そこからは話題を変える事にした。暗くなりそうな気がしたのと、この居間に二人だとやはり寂しい感じがあったからだ。

前向きになれるようにここは明るくエルが好きな方面の話を。という事でロボット関係の話を。

まずはガガガを見てるので勇者シリーズ関連。地球外生命体で機械へ入り込んで体を得ると言うエクスカイザー達の話をしたら目をキラキラとさせた。

「凄いです! しかも強化形態まであるんですか!」

「そう。キングローダー! って呼ぶとトレーラー型のサポートメカがやってくるんだ」

「トレーラー型、ですか」

「うん。それが起き上がるようにして巨大な身体になるんだ。その中へエクスカイザーが収納されて合体完了」

「成程。エクスカイザーはコアシステムも兼ねているんですね」

「そうなんだよ。サイボーグ凱と一緒に」

「ああつ、すごく分かり易いです!」

既にガガガを知ってるから例えに使えばこの通り。そしてついでにグレート合体まで教えるとエルはもう凄いテンションになった。

おそらくけど、これ動けたら身を乗り出してらんじやないだろうかってぐらい。シンフォギア世界も小型のロボットにA-I積んで動かすとかやってるし、鉄腕アトムぐらい作れるかもしれないなあ。

「キングエクスカイザーとドラゴンジェットが合体してグレートエクスカイザー……」

「そう。それがガガガというファイナルフュージョン」

「そうなんです。でも、ガイガーは単機でゾンダーロボを倒した事がありませんよ?」

「そうなんだけど。ガガガの監督はグレート合体があると終盤その形態ばかり使う事になるのが嫌だったんだ。要は1号ロボや2号ロボはかませみたいになる。だから、ならガオガイガーはグレート合体って扱いにしてやろうって感じらしい」

「そうなんです。だからあんなに強いんだ……」

すっかりエルフラインモードからエルモードとなったのを見て俺は微笑む。大人顔負けの賢さや頭の回転を見せるエルもいいけど、俺は今のうちに歳相応な表情を見せるエルも好きだなあ。

この調子でどんどん話そうとそう思っていた時だった。

「つと、戻りましたっ!」

元気で明るい声が室内に響いたのは。俺とエルがその瞬間心からの笑顔になったの言うまでもない

全員無事に戻ってきた響達。そしてある情報がもたらされた。

一つはギャラルホルンへのゲートを塞いでいたカオスビースト。その個体は弱くはなかったが、それでも九人だった事もあり撃退してゲート前からどかす事に成功した事。

そしてもう一つは……

「やっぱリアラートと座標はほぼセットだったんですね!」

「うん。師匠達に聞いたから間違いないよ」

「おっさん達も最初は妙だと思わなかったらしい。あたしらから聞か

れてそういえばってな」

「藤堯さんは友里さんが、友里さんは藤堯さんがそれぞれ座標を調べたのだろうと思っていたそうだ」

スマートフォンサイズの依り代を持って行った響達だったが、それでも本部全体の時間を動かす事は叶わず、出来たのはそれを持たせた時だけ意識を取り戻す事だけだった。

それでもまず弦十郎から情報を得て、確認のために朔也やあおいへも同様の手段で情報を確認。

最終的に弦十郎は、自分達の事はしばらく放置し原因究明や時間停止の解除手段を探して欲しいと願いを託して依り代を響達へ持ち帰るように告げたのだった。

「司令はアタシ達を信じてるって、そう笑ってくれたデス……」

「うん。必ず悪意の野望を食い止めてくれって」

「暁さん……月読さん……」

今までも託されてきた願いや想い。だが、今回は今までよりもその重みが違っていた。

時間停止された本部の中で動ける時を待つ。その間は自分がどうなってるのかの自覚も出来ないのだ。

「只野さんの歌を、みんなで思い出したんです」

「俺の？」

「ええ。お前を信じ全てを託した願いを見捨てるな。まさしくそれよ」

「旦那の想い、願い。それがあたしらの心に重く響いたよ。だけど、それを思い出してみんなで前を向こうってね」

「ヴェイグさんが、きつとお兄ちゃんならそう言うだろうって」

セレナのその言葉に仁志は軽く驚いてヴェイグへ顔を向けた。彼はどこか笑みを浮かべて仁志を見返した。

「何か間違ってるか？」

「……いや、間違ってるないよ。きつと、そう言って俺も顔を上げたと思う」

「とにかくエルフナインの言う通り、あのサイズならばあの状態でも

意識を取り戻せる事が分かった。ただ、身動きは出来ない」

「そうなんですか。では、それだけあの世界への悪意の影響力は強いんですね……」

仁志は考え込むエルフナインを見てから、視線を彼女から響の持つスマートフォンへ向ける。

「響、それ、見せてもらっていい？」

「あ、はい」

「ありがとう」

スマートフォンを受け取ると、仁志はゲームを起動させようとしてある事に気付いて首を傾げる。

（あれ？ もうバッテリー残量が半分を切ってる？）

響達へ託す前はまだ余裕で90%ぐらいはあった。そう思い、仁志はエルへ問いかける。

「エル、スマホって今朝バッテリーどれだけ残ってたか覚えてるかい？」

「え？ はい。毎日充電してますから100%です」

「……そういう事か」

何故バッテリーが急激に消耗しているのか。その理由が今の状態では一つしかなかったのだ。

「エル、これを見てくれ」

「……バッテリー残量が半分を切ってる？」

「そうなんだ。これ、根幹世界で弦十郎さん達を動かしたからじゃないだろうか？」

「そうとしか考えられません……。こうなると皆さんのギアへ欠片を埋め込んだのは正解だったかも……」

「どういう事？」

「ギアへ埋め込んだ欠片は皆さんのフォニックゲインを力に変えて動いていると思われまます。それなら皆さんが意識を失ったり心を折らない限り依り代の力は失われません」

その説明に成程と納得する仁志だったが、ふと何を思ったのかゲームを起動させステータスを確認する。

そこに大きな変化はない。あるのはゲージの色付き具合だけだ。それも、気付けば全員半分近くまでは色が付いているのである。

(これは一体何を意味してるんだ？ 悪意に勝とうとする意思？ もしくは心の中の希望？ 響がトップってのはそういう意味じゃ大抵の条件が合致しそうなんだよなあ)

未だにゲージの色付きは響が一番なのだ。全てに色が付くまでもう残り五分の一あるかないかというところまで染まっている。

「……みんなに聞きたいんだけどさ」

分からない時は本人達に聞いてみよう。そんな感じで仁志は響達へ問いかける。

それは、ゲージの意味について。現在では遂に全員最低でも半分までゲージが染まりそうになっている。そこまできれば何か心当たりはないだろうかと尋ねたのであった。

「私がトップなんですよね？」

「そう。それは変わらない」

「で、次があたしか」

「うん」

「三番目は私ですか？」

「いや、それが今はイヴさんが三番目」

「私？」

マリアが不思議そうに首を傾げると仁志はゲーム画面を彼女へ見せた。

たしかにマリアのゲージは既に七割近く色付いていて、翼は六割程度なので現状三番手である。

「……ごめんなさい。やっぱり心当たりはないわ」

「そっか。まあ、絶対この世界に関係する事だとは思うんだよ」

「只野さん、ちなみにマリアの次は？」

「君だよ翼。で、暁さんで天羽さん、セレナちゃんと月読さんは大体同じぐらいで一番下が小日向さん」

その言葉に装者達がそれぞれ考え始める。が、ここで閃き力が誰よりも高い人間が手を挙げた。

「はいはい、デスっ！」

「はい、暁さん」

「えっと、急激に伸びた人を中心に考えてみるのはドーデス？」

「つまり、イヴさんや暁さん？」

「デスデス。何か共通点が見つかれば答えが分かるかもしれないデスよ」

「マリアと切ちゃんとの共通点？」

「何かあるかな？」

名前が挙がった二人と共に暮らす調とセレナが揃って腕を組むも何か浮かぶ事もなく、それを見てエルはヴェイグへと顔を向けた。

「ヴェイグさんは何かありませんか？」

「……一つだけ俺にはある」

その瞬間全員がヴェイグへ顔を向けた。

「しかも九人全員だ」

「ま、マジデスか？」

「ん？ まじ？」

「ホントかって感じでいいよ。それで、ヴェイグ、どういう事？」

「ああ、今言われた順番に優しい匂いがし易い奴だ」

告げられたのは分かり易いようで分かりにくいヒント。ヴェイグが優しい匂いを感じると言う事は響達は優しい心の持ち主であるという事だ。

ただ、それでは何の手がかりにもならない。そう誰もが思った時だった。

「それもタダノという時にだ」

「」「」「」「え？」「」「」「」

まさかの追加条件に全員の頭上に？マークが浮かぶ。一体どういう意味だと。

それを分かっているのだろう。ヴェイグは解説を始めた。

「優しい匂いと言うのは何もそのままの意味じゃない。要は相手の心が嬉しいとか楽しいとかそういう感情で満たされた時も漂ってくる。セレナは普段から心が優しいから余程の事がなくても優しい匂いが

するって事だ」

「となると、響達は俺という時に嬉しいとか楽しいってなり易い？」

その表現に一部を除いた女性達が心当たりがあるとばかりに息を呑んだ。とはいえそれは片手で足りる程であった。

そしてそれは別の意味で心当たりがある者達は納得とばかりに笑顔を浮かべていた。

「ナルホド！ アタシは只野さんと色んなお話し出来るからデスね！」

「私もお料理漫画とか教えてもらって参考にしてる。クッキングパパ、大好きです」

「お兄ちゃんという嬉しい事や楽しい事多いですからね」

装者年少組はそう言って笑みを見せた。仁志の事を兄のように慕っている三人はヴェイグの言葉に納得するしかなかったのだ。

「私が一番下なのも分かるなあ。私はどうしても只野さんと話が合わないから」

「あー、うん。ごめんね小日向さん」

「あつ、いえ。でも色々と聞いてくれたりするのでそれは助かってます。それに昼勤の事を話せるのは店長ぐらいだし」

そう言って笑う未来に仁志は安堵するように息を吐いて笑みを返した。

実際未来と共に暮らす翼や奏以外で愚痴や不満を話せる相手は仁志だったのだ。

特に昼勤としての色々を相談出来るのは店長である仁志だけであり、話が合わないとしてもそれは仁志が趣味全開となったらである。逆を言えばそうならない時は未来も会話が弾むのだ。

まあ主に一人暮らして気を付けるべき事や覚えておいた方がいい事などの生活の知恵話であったが、未来も響と同じく彼との関わりで生きるための勉強をしているという事だった。

「兄様、こうなるとそのゲージはどういう事でしよう？」

「俺という優しい匂いがし易い人、かあ。じゃ、俺の趣味への理解度？」

「私はそうじゃないと思いますよ?」

「へ?」

未来の言葉に仁志が疑問符を浮かべる。まるで未来は答えが分かっていたかのような顔をしていたのだ。

「じゃあ小日向さん、考えた答え教えてくれないか?」

「それはですね……」

チフリと響を一度だけ見やって未来は小さく微笑んで告げた。

「只野さんの事を好きな度合じゃないかなって」

間違いないその言葉に響やクリスが息を呑んだ。そして言われた仁志はその言葉に……

「……成程なあ」

納得していた。そこで未来は思うのだ。仁志は響の想いに気付いてないのではなく、それを恋愛感情と捉えていないのだろうと。

(多分だけど、肝心なところで怖くなったんだね、響)

その推測だけで響の心の動きを読む未来。場合によっては恐怖であるが、ある意味で響は分かり易い性格の乙女である。付き合いの長い未来からすればその心の動きはある程度読めるというものだ。

「先輩への好感度って事?」

「かもしれない。イヴさんはどう?」

「……若干気恥ずかしさはあるけど認めるわ。私は貴方の事を信頼しているもの」

「では、私達が只野さんへ強い信頼を抱けばそのゲージは色付いていくと?」

「おそらくね。たださ、仮にこれが染まり切ったとして、何が起こるんだ?」

その疑問へ誰も答えを持っていない——はずだった。

「ゲームのタイトル通り、エクストライブがいつでも使えるようになるとかじゃないデスカ?」

切歌の言葉にほとんどが疑問符を浮かべる中、仁志だけが理解を示すように頷く。

「そっか。元のゲームでいう所の極めゲージか」

「『『『『『きわめげーじ？』『』『』『』『』『』』』』」

「うん。えっと、要はゲームでは君達の様々な姿がカード扱いで存在してて、それを使い続けていくと熟練度じゃないけど、極つてもものが上昇していくんだ。全部で4レベルまであって、それが上がり切るとカードが初期状態よりも強くなるんだよ」

その説明に誰もが納得。今までの日々で仁志との関わりを多く持つか、彼と深く関わった者が色付き度合が上なのが理解出来たからだ。

「じゃ、意識したって何か出来ない感じかね？」

「だと思っわ。ただ、これを上げ切る事が新しい何かへ繋がる気はしてきた」

「それに切ちゃんの前想通りならどうしてエルやヴェイグがいらないかは納得出来る」

「エクストライブへなれる、か。なら装者のあたしらしか意味ねーな」
「で、でもでも、ツインドライブを示すアイコンはどうなの？」

響の質問にはエルが答えるように口を開いた。

「おそらくですが、エクストライブが任意で使用出来るようになるのは難しいのだと思います。実際、このゲージもどうすれば上がるかが明確ではありません。そして、今の発想で考えればもしかするとこのアイコンが表示されれば聖遺物がなくてもデュオレリック、ツインドライブは使用可能になるかもしれません」

「そうなるにあたしとセレナが最初から表示されてるのは実際持つてるからって事か」

「多分そうだと思います」

そこで室内に明るい雰囲気の流れ始めた。

「ヴェイグのヒントを切っ掛けに意外と謎が解けた感じがするな」

「そうですね！ ヴェイグさん、ありがとうございます」

「いや、これがまだ正解と決まった訳じゃない」

「そうかもしれない。でも、今はある程度でも正解と思える事が出た事を喜ぶべきよ」

「うんうん。ヴェイグさんのおかげだね！」

響がにつこりと笑顔でそう言うのとヴェイグは少しだけ照れくさそうに顔を下へ向けた。

「そ、そうか……」

「おおつ、ヴェイグが照れてるデス」

「可愛い……」

「っ!? ほ、ほっとけ!」

照れ隠しに大きな声を出すヴェイグを見て未来がクリスへ目を向けた。それに気付いてクリスが不思議そうに未来を見返す。

「何だよ?」

「ん? 昔のクリスもあんな感じだったなって」

「っ! そ、そうだったか? 覚えが」

「えく? クリスちゃん、割とまだあんなあいたあ!」

「オメーは口は災いの門って言葉をそのポンコツなオツムへいい加減叩き込めっ!」

ニヤニヤしていた響へデコピンを放ち、クリスは両手を腰に当ててそう言い放った。

「ううっ……ポンコツじゃないもん。ちよつと抜ける時があるだけだもん」

「それをポンコツって言うんだ!」

「まあまあ、落ち着いてクリス」

「誰のせいだろうなったと思ってやがるっ!」

未来へも食って掛かるクリスだったが、そのやり取りを見て仁志や切歌に調などは気付いたのだ。

クリスが未来へも響と同じような接し方になっている事を。それは未来の事をあの子と呼んで響とは少々異なる扱いをしていたクリスが、今や未来さえも響と同じく気安い相手へと距離感を変えた事を示していた。

「雪音、そこまですておけ。気持ちには分かるがそこで騒げば余計自分の心をささくれ立たせるだけだ」

「……まあ先輩がそう言うなら」

翼の言葉に興奮を抑えてクリスはやや不服そうに告げる。そこで

場の雰囲気は若干変わった事を受け、エルフナインが口を開いた。

「あの、まずはこのゲージの検証をするのはどうでしょう？」

「検証って、何をどうするって言うんだ？」

「このゲージが兄様への好感度なら、それが上がるか下がるかの行動を個別に経験してもらおうんです」

その発言に待つてましたとばかりに未来が手を挙げた。

「じゃ、それぞれとデートしてもらおうのはどうかな？」

次の瞬間、居間内に複数の大声が響き渡った。間違いなく仁志の部屋だったのなら文句が出たレベルの大声である。

「それで増減すれば好感度確定だし、変化なければ別のもの。しかも只野さんに関係ないって分かるんじゃないかな？」

未来はこれを切っ掛けに響と仁志の関係を発展させようと思ったのだ。最後の一押しが出来ていない響の背中を押してやろうと思っていたのである。

だが、世の中そううまくはいかないもの。この提案を聞いて仁志は苦い顔をして腕を組んだのだ。何せ彼は最近の自分の感情を危険視している。響やクリスなどの一部装者へ恋慕にも近い想いを抱き始めていたのだから。

「俺はさすがにそれはどうかと思うなあ」

「どうしてデスか？」

まさかの疑問は切歌から出た。

「いや、その、凄く個人的な話なんだが、俺はつまり九人もの女性ととつかえひつかえデートをする事になるんだよな？ それを知り合いや常連さんに見られたら社会的に抹殺されかねないんだよ」

至極もつともな意見であった。何せ仁志達には資金の余裕がそこまでない。であればデートも自然遠出などは出来ず近場で済ます方向となる。

そうなれば知り合いに見られるあるいは出くわす可能性は極めて高い。しかも響達はバイト先の同僚なのだ。そんな女性達をとつかえひつかえして遊んでいる。そんな店長がいるとなれば店の評判にも関わると言えた。

「じゃ、じゃあお家デートにすればいいと思いますっ！」

そこで諦めないのは響。だとしてもとばかりに意見を出し、仁志の不安を封じ込める方向へ切り替えたのだ。

そこには、彼女なりのこの機会に仁志との距離をもっと縮めたいという乙女心もあった。

「それも結局俺の部屋へとつかえひつかえ」

「今もセレナやらあたしやらが出入りしてんだ。今更だろ」

言外に見苦しいぞとクリスは仁志へ告げる。分かったのだ。彼が何かと理由をつけて自分達とのデートを避けようとしているのを。

以前のクリスであればそれがどういう事かを察したかもしれない。あるいは今も察したのかもしれないが、それでも惚れた男と二人きりで過ごしたいという想いが強くその心を動かしていたのかもしれない。かかった。

「そ、それは……」

「只野さん、アタシ達とデートって言っても二人でお話しとかするだけデスよ？」

「お兄ちゃんは私達とそう過ごすの、嫌ですか？」

純真無垢な二対の眼差しが仁志を突き刺す。さすがの仁志もその眼差しを受けて首を縦には振れなかったらしく、観念するように項垂れて「分かった……」と言うのが精一杯だった。

こうして仁志が休みあるいは空いている時間を使って、装者九人の中から誰かを呼んで自室で過ごす事が決まる。

この時、誰も思わなかったのだ。これがある意味で自分達を大きく変える切っ掛けになるとは。

風を切るように走る。この感覚、久しぶりかも。中学時代はよく感じてた感覚。でもリディアンへ進学したのを機に感じる事がなくなった感覚だ。

「こ、小日向さん……ペ、ペース落として……」

「あっ！ ぐ、ごめんなさいっ！」

後ろから聞こえた声に慌てて速度を落とす。そうして少しすると

私の横へ只野さんがやってくる。

「す、すみません。久しぶりにこういう事やったからつい楽しくなっちゃって」

「そ、それは分かった。俺も少しだけ楽しそうな小日向さんの顔を眺めてたしね……。でも、さすがに元経験者とタメ張るのは無理だったよ……」

そう言っただけ苦笑する只野さんに私は申し訳なく思う事しか出来ない。今、私は只野さんと一緒に走ってる。

時刻は午前六時半を過ぎた辺り。私はTシャツにスパッツで只野さんはTシャツとジャージ姿。これが私と只野さんのデート姿、って言ううちよつと語弊があるかも。

響の提案でお家デートをみんなですてみる事になったけど、只野さんは私へはそれだと退屈で辛いだろうからって、早朝のジョギングデートってなった。

こういうところ、本当に只野さんは優しくして気を遣う人だなあって思う。それに、元々陸上をやってたから走るの嫌いじゃない。

もしかしてそれも知ってるから？ だとしたら、只野さんってその気になったらみんなと簡単にいい仲になれるんじゃないかな？

「ちよ、ちよつとあそこの自販機前で休ませてっ！」

「ふふっ、はい」

見えてきた自販機を指さして只野さんが必死な声を出したのが面白くて笑っちゃった。でも、それを只野さんは怒りもせずむしろ疲れた顔で笑ってくれた。

響が好きになった理由は、きつとこういうところなんだと思う。只野さんは怒らない。ううん、滅多に、かな。一度響が強怒られたって言うってた。

——私が約束を守らなかつたからなんだけどさ……。

どんな約束って聞いてもそれは二人だけの秘密だからって教えてくれなかつた。でも、きつと響にとって凄く大事な約束なんだと思う。

で、それを守らなかつたって言う事から察すると、二人だけって辺

りに答えがあると思ってる。

「こ、小日向さんも何か飲むかい？」

「え？ いいんですか？」

「も、勿論……っむしろ、何か飲んでくれ。っはあ……俺だけ飲んで君は飲んでないなんて、デートらしくないだろ？」

「……そうですね。じゃあいただきます」

デートって言われて気付いた。これ、只野さんにとっては本当にデートなんだって。

そう思うと少しだけ、少しだけドキドキするかも。私はこれをデートって思わないようにしてたから。

自販機を前にして少し悩む振りをしてチラッと只野さんを見る。只野さんは疲れた顔でスポーツドリンクを飲んでいた。で、美味しそうな顔をして息を吐く。あ、目が合った。

「どうしたの？」

「っ……お、美味しそうに飲むなあって」

いけないいけない。私が挙動不審になりそう。でも、私も同じにしようかな。それぐらい只野さんが美味しそうに飲んでたし。

ガタンって音を立てて青い色のペットボトルが出てくる。おつりを出して只野さんへ手渡す。

「御馳走様です」

「どういたしました」

自販機前で二人並んでスポーツドリンクを飲む。まだ時間が早いからか人や車も少なく静かだ。

思えばここはどこなんだろう？ 私ってこの街は決まった場所しか行かないから知らない場所多いなあ。

そのまま飲み切るまで私達はそこにいた。会話はなかったけど、嫌じゃない。何て言うんだろ？ 落ち着く、かな。

「ふう、お待たせ」

「いえ。さっきの事もありますし、次はゆっくり走りますね？」

「……そうしてくれると助かるよ」

「クスッ、はい」

苦い顔をする只野さんへ笑みを見せて私はその場から軽く走り出す。すると只野さんも追い駆けてくる。

そこからはしばらく並走する形で街を駆けた。そうやってどれぐらい走つただろう。最後は住んでるアパート近くの公園へ到着。

そこまでの道は二人であちこち迷いながら辿り着いた。正直ちよつとだけ小さい頃を思い出して楽しかった。

終わってみれば時刻は午前八時近く。途中で休憩を何度か入れたけど、それでも結構走っていたみたい。

「つはあく……天羽さんとやる時よりも疲れたあ」

「ご、ごめんなさい。つい楽しくて」

「え？ あー、小日向さんを責めたい訳じゃないんだ。疲れただけで済むなんて俺も体力付いてきたなあって思うし」

「そうなんですか？」

そこで私は只野さんがある時から体力作りをした事を聞いた。切っ掛けは年齢からくる衰えや太る事を恐れてらしいけど、そんなに言う程只野さんは太ってないと思うなあ。

「お腹とか出て来たんですか？」

「むしろそうならないために始めたんだ。今も何とか中年太りは回避出来てる」

「良かったですね」

「うん。でも油断したらダメだから毎日絶対散歩かジョギングはやってるんだ。天羽さんとバイトが一緒の時はジョギングをしてるんだけど、その時は意外と苦じゃないんだよ。ただ、散歩はどうしても一人だろ？ 退屈ではないけど飽きてくるんだ。景色が劇的に変わる事なんてまずないし」

「そうですね」

コンビニへ行く時や帰り道がそれだからよく分かる。

「でもさすがに天羽さんを毎日付き合わせるのも気が引けるんだ。で、俺の仕事終わりじゃエルやセレナちゃんも寝てるし」

「切歌ちゃんなんて絶対起きてないですもんね」

「そうそう。月読さんは普段バイトがある時間だから休みの日はゆっ

くり寝かせてあげたいしさ」

気持ち分かる。というか、聞いてて分かった。只野さん、あの家のお父さんやお兄さんみたいな気持ちなんだって。

そう考えればエルちゃんやセレナちゃんが懐くのも分かる。この人はあの二人にはそういう存在なんだ。

「マリアさんはお家の事ありますし」

「ヴェイグは起きてるけど、俺が抱えてたら妙だろ？」

「ふふっ、そうですね」

ヴェイグの見た目はとつてもファンシーだ。それを只野さんが抱えて歩いてたらさすがにおかしくて笑っちゃう。

「で、俺は散歩の時は一人でブラブラしてるんだ」

「翼さんを誘ったらどうです？」

「うくん……イヴさん家で飯食べた後だからだね。それに翼だって朝は色々やる事あるんじゃない？」

「って言っても、私を知る限り奏さんを出迎えるぐらいですよ？」

朝早いと洗濯機を動かすのも気を遣うし、そもそもあの部屋もそこまで壁が厚い訳じゃない。只野さんや響達が暮らしてるそこよりは絶対に厚いけど、それだって何をしてもいいって程じゃない。

「……本音を言うとおそこまで呼びに行くのが面倒」

「ぶっ……もうっ、只野さんらしいですけど、正直どうかと思いますよ？」

「仕方ないじゃないか。それに、もし翼と二人で早朝散歩しててさ、そこを知り合いに見られたら……」

「今はどうなんです？」

そう言うのと只野さんは一瞬「あ……」って顔をしたけど、すぐに何か思いついたみたいに笑った。

うん、何かイイ言い訳を思い付いたって感じかな。

「偶然出会ってジョギングしてたって事で通じるよ」

「成程、たしかにそうですね」

まったく接点の無さそうな翼さんより一応同じ勤務先の私の方が言い訳は出来る。でも只野さん、忘れてないかな、これ。

「でも只野さん、私は昼勤ですよ？ 普通に考えたら夜勤の只野さんと会わないんですけど？」

「……ひ、響經由で知り合った？」

「私、クリスに誘われてアルバイトしてる設定ですわね」

「……まあ、俺がナンパしたら同じバイト先だったって事にしてよ」

「その方が問題じゃありません？」

「……………俺が迂闊で抜けてました。なのでもう勘弁してください」

がつくりと項垂れる只野さんを見て私は思わず笑っちゃった。一回り以上離れてるって思えないぐらい今の只野さんは情けなくて、どこか可愛いつて思っちゃった。

私を知ってる只野さんは少年みたいなのにヒーローとかの話をして、なのに時々司令みたいな大人の顔をしてみんなを励まして、そういう意味じゃ不思議な人だ。

だけど、この人の本当は今みたいな顔かもしれない。ホントは情けなくて、でも優しくして大人も出来る、そんな男の人かも。

……響が好きになっちゃう訳だ。大人なのに子供でもあって、こっちが大人でいて欲しい時は絶対大人になってくれるんだもん。

そのまま少しだけ公園のベンチへ座って話をした。話題は卒業後の事。私の不安を聞いた只野さんは自分の事を話してくれた。参考にして、そう言うって。

「二年間バイトして貯金……」

「二人暮らしのためのね。二十歳までは実家にタダで置いてやるって父さんに言われてさ。ならその期限が終わる前に出ていこうって」

「何をしたんです？」

「稼ぎを最優先して引越し屋行って、向いてない事が分かってすぐ辞めて、大人しく近所のスーパーで品出しとかやってた」

その話は何というか笑える事から笑えない事まで色々あった。スーパーの裏側もコンビニと同じで知らない方が良かった事もあるんだって只野さんは笑って話してくれた。

一年間頑張って働いて貯めたお金で今のアパートへ越してきて、ここからはパチンコ屋さんで凄く稼いでみたい。一か月で二十万以上稼いでたって。

「凄いですね」

「ただ時々力仕事もあるんだよ。それも深夜にさ。女の子はもう少し楽だったから羨ましいと思って見てたなあ」

「楽？」

「そ。新台入れ替えてって言って新しい遊技台が来ると、男は20キロ以上もする重たいそれを店の中へ運ぶ作業をさせられるんだけど、女の子はそういうの免除でね。で、女の子は閉店作業も男より楽なものが基本で……」

只野さんは仕事内容を話しながら、時々その仕事のあるあるや経験した面白い事とかを教えてくれる。で、こっちの反応を見ながらそれをしてくるから飽きないし面白い。

「と、俺の話はこれぐらいにしようか。小日向さんの話を聞かせてくれない？」

「あ、はい。私、今は……」

ちよつと話が長くなる事もあるけど、それでもこうやって気付いてくれる。何というか、良い大人って言うよりは大人であろうとしている人って感じ。

私が響と二十歳まで離れて暮らす事を話すと只野さんは驚いたみたいに目を見開いたけど、すぐにどこか嬉しそうに笑みを見せた。

「そっか。君達は二人三脚を一旦止めてみるんだな」

「はい。今も軽くそうなってますけど、おかげで色々分かった事があるんです」

「良かったら教えてくれない？」

「いいですよ。まずは……」

響と離れて、一緒にいる事がそもそも幸せだったって気付けた。今まで当たり前だと思ってた事は全部当たり前じゃないって事も。

それと、一人でいる事の寂しさと気楽さも。何でも良い事と悪い事があるんだって分かった。響と常に二人じゃもしかしたらいつか息

が詰まってたかもしれない。

そうなった時、もしかしたら私達はケンカもせずバイバイしてたかもしれない。そんな悲しいお別れは、いやだ。

ここで響と言い合って、ぶつかり合って、前よりも響の事が好きになれた。

だって、響は本当に私の気持ちを全部受け止めてくれた。受け入れたかは分からないけど、受け止めてくれるんだ。

「……って感じで、響とは今も、ううん今はもっと仲良くやっています」「そっか」

只野さんが言った通り、私と響は気付かない内に遠慮してたのかもしれない。

一緒にいたいから我慢しよう。一緒にいるから受け入れよう。そんな風に知らず知らずの内に押し込めてたものがあっただと思う。

あのカラオケの時には途中で終わった事だけど、あの時は最後まで言い合えた。私の不満、響の不満。私の不安、響の不安。全部、全部出し尽くしてぶつけ合った。

「あの時はありがとうございました。只野さんとクリスが来てくれて、私も響も我に返る事が出来たから」

「ああ、あれね。いや、びっくりしたよ。隣でクリスと仕事の事で話し合ってたら、どんどん声量が大きくなってくからさ」

「わ、私も響も気持ち爆発しちゃったんです。あれ、今だから言いますけど、止める人がいなかったら手を出してたかも」

実際私は響に掴みかかるぐらいの勢いだっただって、響は私が思ってた不安を大丈夫ってだけで押し切ろうとしたんだから。

このノイズも錬金術もない世界で過ごす事。これに慣れちゃったから、これが普通になっちゃったら、これから私達は本当の世界で暮らすのが辛くなるって言ったのに。

「そうだったのか……」

「はい」

「………惜しい事したかな？」

「もうっ！ 只野さんはそう言うかなって思ったけど、本当に言いま

す!？」

「ごめんごめん。でも、それぐらいやり合っても絶交しようとは思わなかったでしょ?」

「……はい。絶対に分かってもらいたいって思いました。けど……」
「けど?」

あの頃の私はまだ響と同じ立場になれなかった。でも今の私は違う。今の私は響と同じ側だ。

この世界での暮らしに慣れて、楽しくて幸せで、これが本当だったらしいのについて思い出してる。

だからこそ、あの時の響の大丈夫がどういう意味か分かっちゃった。

あの大丈夫は、自分へ必死に言い聞かせてた言葉なんだって。大丈夫だって思っていたんだって。

アルカ・ノイズや錬金術師が現れて、緊急招集や緊急出勤になっても憎しみとか恨みとかを抱かないで生きていけるって、そう信じ込みたいんだって。

「……何でもありません。というか、男の人には言えません」

「おっと、かなり気になる言い方するなあ。小日向さんも中々魔性の女になってきたね」

「魔性の女、ですか?」

「言われた事もない。でも、何というか大人の響きかもしれない。妖艶って事ですか?」

「それもあるね。小日向さんは意図せず見せる色気があると思うよ」

「い、色気?」

あるのかな? 正直スタイルにはそこまで自信がない。

「あるある。自信持ってい。君は美人だ。きつと成人する頃には男からひっきりなしに声を」

「それ、出来れば避けたいです……」

私の見た目だけで言い寄ってくる男の人は、ちよつとやだな。

「そうか。じゃ、趣味で選べる大学のサークルとかかなあ。って、そう言えば進学するの?」

「そこもまだ。大学や専門学校かも決まってるじゃないです」

前までは響と一緒に思ってた。でも今は本当に自分のやりた
い事を考えてるから決まらない。

響とは意図的に相談してない。したら、きっとお互いが変に意識す
ると思うから。

だから私からも話さないし響からも話してこない。これも、きつと
変化であり絆の強さ。

進路が変わっただけで関係性なんて変えないよって、そういう意思
表示だから。

「うん、じゃあ沢山悩むといい。どうせどれを選んでも多少の後悔と
反省がついてくる」

「どれを選んで、ですか？」

「それが来る時期がずれるだけでね。でも、これは個人的な意見だか
ら」

言われて考える。私って、そういうばさういいう話を誰かに聞いた事
なかったなつて。

翼さんやクリスに聞いてみるのもいいかもしれない。あるいはお
父さんやお母さんでもいい。

そう、そうだ。私の視界は気付けば狭くなつてた。頼れる相手も頼
れる場所も少ないつて思つてた。

「只野さんはそうだったんですか？」

「実際現状を見てごらん。勉強が嫌で大学進学をせず、親元を離れた
いだけで何の目的もなく一人暮らしを始めて、つい最近まで週四日コ
ンビニで深夜バイトするだけの生活だった男だ」

どこか自虐的な言い方だったが、私には分かる。只野さんは自分
のようにならないでつて私へ言つてくれてるつて。目的もなく夢も
なく生きるつて事がどうなるかを自分を例にして教えてくれてるん
だ。

只野さんも響達と出会つて、今のような状況になつたから変わろ
うつて頑張つてる。その頑張る時を間違えないでつて。

「小日向さん、これだけは言える。絶対人間苦労はしないといけなく

なる。若い内にしろって言うのは若い頃の方がその苦勞がきつくないからなんだ。やってる時は辛いつて思うかもしれない。だけど、それを三十や四十、下手したら五十とかでやるってなったらきついぞまないんだよ」

「……はい」

実際只野さんはその最中だ。店長さんになって色々苦勞もしてるみたい。

「三十になる俺でも思うんだ。だから親達は口を揃えて言うんだよ。勉強をなさい。嫌な事から逃げ続けないように。これは実体験で分かった事からの助言だつてさ」

「そう、ですね。分かりました。私、ここで苦勞します。それで戻ってからも苦勞します。自分のやりたい事、目指したい事、それを見つけて」

「うん、それがいい。叶う叶わないじゃない。夢を持った方がいい。ないよりマシだ」

「今の只野さんは夢、ないんですか？」

私がそう聞くと只野さんは一瞬だけ驚いた顔をして、しばらく黙り込んだ。

その表情は何かを考えてるみたいだった。

「……あるよ。今の俺の夢」

「何ですか？」

どこか軽い気持ちだった。只野さんは夢も目的もなかったつてそう言つてた。だから今はどうなんだろうつて、それぐらいの興味。そんな私へ……

——君達が本来いるべき場所へ一刻も早く帰れるようにしたい。それが、今の俺の夢だ。

凜々しい表情ではつきり言い切ってくれたんだ。

「私達が、本来いるべき場所へ……」

「ああ。だから少しでもあのゲームの謎を解きたい。そして悪意の企みをみんなと一緒に打ち砕きたい」

そう言つて只野さんはゆっくりベンチから立ち上がつて空を見上

げる。

「……それがやつと出来た俺の夢だ。ヒーローに憧れてた小さい頃を思い出すよ。誰も知らない中で世界を、平和を守るってらしくて笑えてくるぐらいさ」

そう言いながら只野さんは笑った。その笑みはどこか悲しそうで、でもカッコ良く見える。

「俺に出来る事なんて本当の戦いになれば何もないだろう。でも、だからこそそこまで俺は全力で立ち向かう。君達が本当にいるべき場所だ笑い合えるようになるために」

「只野さん……」

そこで只野さんはこっちへ振り返って微笑んだ。

「フイーネとの決戦で響達を立ち上がらせて逆転させた時の君のように、俺も最後の最後まで自分の出来る事を精一杯やろうと思う。だから、小日向さんは小日向さんにしか出来ない事をやってほしい」

胸が、疼いた。まだ装者じゃなかった頃の無力な私。なのに、目の前の人はそれを目指すって、目標だつてそう思えるような事を言ってくれた。

私へ笑いかける只野さんは、大人のようにどこか子供にも見える。それに顔が熱くなってくる。だ、ダメっ！ この人は響の想い人なんだもんっ！

——でも、それを響は怒らないよ……。

っ?! い、今のは、私の声? でも、どこか違うような……。

——好きって気持ちは止められない。響だつてそれは分かってくれるから……。

だ、だけど、響は初恋だもん。私は、それを応援したくて……。

——そうやってまた隠すの? それであんなに揉めたのに?

思わず息を呑んだ。そうだ、私は響のためにって思つて自分の気持ちを隠してた。それが結果あんな事に繋がった。

「小日向さん? どうかした?」

「っ!? な、何でもないです!」

「そう? ならいいけど……」

只野さんの声で我に返る。な、何だったんだろう、さっきの。

「時間も時間だし、そろそろお開きにしようか」

そこへ只野さんの声が聞こえた。そっか、只野さんは今日も仕事だもんね。

——あの謎を解くためにも何か距離を詰めないと……。

そっか、そうだよ。この目的は、あのゲージが只野さんへの好感度じゃないかって調べる事だもん。

「あ、あの……」

「ん？」

こつちへ振り返る只野さんへ、私は思い切って切り出す。

「わ、私の事は、未来って呼んでください。もしそれでゲージが色付いたら分かり易いですし」

「いいの？ そんな理由で名前呼びなんて」

「いいんです。その、私も只野さんの夢、応援したいから……」

「……そうか」

そう言つて只野さんは嬉しそうな、でもどこか苦しそうな顔を一瞬した、気がした。

「ありがとう、未来。絶対この夢、叶えてみせるよ」

「っ?!」

凜々しい大人の男性が、そこにはいた。名前で呼び捨てにされただけなのに顔が熱くなる。

「さて、じゃあアパート前まで送って行くよ」

「い、いえ、私はもう少し走りたいからです！」

「そう？ 分かった。じゃ、えつと、またね」

「は、はい。おやすみなさい」

「ははっ、うん、ありがとう」

そう言つて只野さんは私の前から去って行った。その小さくなつていく背中を見送り、私はそつと胸を押さえる。

「……響、ごめん。私も、同じ人、好きになったかも……」

ミイラ取りがミイラにじゃないけど、これじゃ響の事応援出来ないかもしれない。

「で、でも、もしかしたら響とのデートで両想いになるかもしれないね」

そうだったら何の問題もない。うん、問題ない。それにまだこれが恋って決まった訳じゃないし。

きつとそうだ。これはちよつとだけ只野さんがカツコ良かったから、私の事を、何の力もなかった頃の私を褒めてくれたから照れてる熱さだ、うん。

その後部屋に戻った時、翼さんがエルちゃんから連絡があつて、私のゲージが一気に色付いたって教えられた私は顔を真っ赤にするしかなかった……。

未来の結果を受け仁志達はゲージが好感度であるとあたりをつける。ただ、何故それを上げる必要があるのかと言う事に仁志は疑問を抱き続けた。

エルとヴェイグは彼の疑問を聞いて、本来のゲームに似ていると仁志が表現したものから推測するのはどうだと考えた。つまりゲージを上げれば上げる程響達に何かメリツトがあるのだと。

「……もしかして、それが私や切ちゃん、未来さんが時間停止に気付かなかった理由？」

「そうデスっ！ それならドーデス！」

「有り得るな。実際ステータスが初めて見れた時、切歌と調は真っ黒で未来は四分の一ぐらいしか染まってなかった」

「じゃ、これを上げ切ったら依り代の力が最大になるって事ですか？」
マリア達の家の居間。そこに装者の年少組とエルにヴェイグ、そして仁志の姿があった。

今日は仁志の休みであるため、恒例の謎解きタイムとなっていた。ただ、仁志は居間の隅でマリアの布団で睡眠中。しかも百均で購入した耳栓とアイマスクをしての完全装備である。

実はそれを購入したのは仁志ではなくマリアであった。

——これ、使いなさい。

——耳栓とアイマスク？

——休みの日、家で謎解きしてる時に仮眠取ってるでしょ。その時にエル達が気を遣ってカーテンを閉めてひそひそ話してるからよ。表向きは大事な家族のためにと告げたマリアであったが、その本音は当然別である。ただそれを匂わす事もせず、出来ず、彼女は仁志へその二点を手渡すのみだった、

仁志が眠る中、五人はゲーム画面を眺めてうんうんと唸る。真剣かもしれないが、緊張感は欠片としてない。

「もし依り代の力が最大になったらスマホと同じって仮定したら、エル、どう?」

「九人の装者の依り代の欠片が持つ力が依り代本体と同等に……」

「それなら本部ぐらい何とか出来ないデスカね?」

「……正直分かりません。でも、きつとうまくすればそれが可能なはずです」

「こうなったらみんなでお兄ちゃんも仲良くなるしかないですね」

「実際アタシは仲良くなってるんデスけど……」

今やトップ5にランクインする切歌であった。ちなみに未だにトップは響で2位がクリスである。

「わ、私はあまり変化ないです……」

「私も……」

「やっぱりデートするしかないデス。実際あれから未来さんはぐんぐん伸びてるデスし」

最下位であった未来は、あのデートを契機にそのゲージをどんどん色付けていた。今や奏さえも抜いて翼へ迫ろうという勢いである。

「未来さんも兄様と一緒にジョギングをして話をしただけだそうです」

「エル、呼び方を変えてもらったのを忘れてる」

「あつ、そうでした」

「じゃ、アタシ達も呼び方を変えてもらうデスよ。それできつとゲージがぐーんっと上がるはずデス」

「私、もう名前で呼んでもらってます」

セレナが切歌の提案に無理だとばかりに項垂れる。が、それに待つ

たをかける者がいる。

「セレナ、呼び捨てにしてもらうのはどうだ？」

「呼び捨て……」

ヴェイグの意見にセレナは顔を上げて考える。

（セレナってお兄ちゃんに呼ばれる……。うん、姉さん達と同じだし、ちよつとお父さんみたいかも）

呼び捨てにされるとなるとより一層家族になった感じが出ると思い、セレナはどこか嬉しそうに笑みを浮かべた。

それとは正反対なのが調である。彼女は仁志から呼び捨てにされる事へ抵抗感を抱いていたのだ。

（只野さんの事は嫌いじゃない。むしろ好き、な方。でも、呼び捨てにされるのは……。何か嫌）

とはいえ、ゲージが依り代の力の強弱に関わっていると思われる以上上げない訳にもいかない。

そう考え、調はどう呼ばれたらいいかを自分の中でシミュレーションし始める。

（月読……これは微妙。調ちゃん……子供っぽくて嫌だ。調君……今の月読さんとあまり大差ない）

ならばと最後の候補を思い浮かべる。

（調さん……な、何だか年上扱いされてる感じがする）

意外と嫌いじゃない。そう思っただけ調は小さく頷く。呼んでもらうなら「調さん」だと。

「起きたらアタシを切歌って呼んでもらうデス」

「それでゲージが伸びれば切歌お姉ちゃんが一番になるかもしれない」

「おおつ、遂に響さんがトップから脱落デスカ」

「分からないよ切ちゃん。呼び方を変えないでマリアは凄い位置にいるんだから」

「そうですね。一体姉さんは何をしてここまで仲良くなれたんだろう？」

「分からない。ただ、これが『こうかんど』とやらかもなった日か

ら只野といると優しい匂いが余計するようになったぞ」

それはマリアが自分の心と向き合った結果である。ただ、彼女も仁志と同じく大人の女としてそれを押し殺す方向へ動いている事は誰も知らない。

同じ頃、そのマリアは勤務先の弁当屋でため息を吐いていた。

「はあ……」

本日六回目のため息である。その理由は言わずと知れた仁志の事だ。

(只野は、多分だけど響達一部の恋心に気付いてるはず。それなのに態度や対応を大きく変える事はせず、ある程度親しくなったらそこで止めているような気がしている。それは……どうして？ 異性に正しく興味は持つてるでしょうに)

あの二人きりでの話で仁志がクリスのスキンシップに苦しんでいる事を知ったマリア。だからこそ彼女も己の内にあつた想いと向き合い、それが仁志への好意である事を認識したのだ。

だが、そうしたからといってならばと迫れるマリアではない。むしろ逆だった。意識したが最後、今までのような態度が取れなくなったのである。

——い、イヴさん、どうかしたの？ 顔、赤いけど風邪？

——し、心配いらないわ。これは、その、そうっ、暑いのだ。

——暑い？ ああ、まあたしかに若干蒸し暑いね。

これを見聞きしているのがヴェイグだから何も言われなだけで、セレナが見ていればすぐにでも気付いたはずだ。マリアが仁志の事を意識し過ぎている事に。

(未来の結果を受けて、あのゲージが只野との親密度や好感度である事がほぼ決まった。現状あのゲームはこちらへ有利にする世界の意思と考えている以上、そのゲージを上げない訳にはいかない。でも……)

マリアは気付いているのだ。いや、気付いてしまったと言うべきだろう。

自分が仁志へ心惹かれていると自覚した瞬間から、周囲の仲間達の

一部が自分と同じ状態もしくはそれよりも酷い状態だと。

(翼はまだ自覚が薄いようだけど時間の問題でしょうし、クリスと響は言うまでもなく惚れ込んで。でも、それに気付いているのはクリスだけかしら。響がそれに気付いたら今の只野の環境は大問題しかなくなるわ)

今まで自分達は強い結束をもって強敵に当たって来れた。それが厳しい戦いを勝利へと導いてきたのはマリアもよく分かっている。

それが、もしかすれば根底から揺るぎかねないと彼女は心配していた。女の友情は男で壊れる事が往々にしてあると知っているのだ。

「どうしたの、マリアちゃん。最近ため息多いけど」

「……陽子さん」

見てられないとばかりに声をかけてきた陽子へマリアはどう返したものかと言葉が出ない。

まさか親しい仲間達が仁志を理由に揉めるかもしれないとは言えないのだ。

「陽子さんって、もし同性の親友と好きな相手が同じだったらどうします?」

それでも年上の意見を聞きたいとマリアは直球の問いかけをぶつけた。その内容に陽子は一瞬瞬きをするぐらい驚き、すぐに苦笑して全てを察したように息を吐いた。

「成程ね。そういう事か……」

マリアの表情を見て陽子はただ一言こう告げた。

「マリアちゃん、ちよつと自惚れてやしないかい?」

「え?」

どういう意味だとマリアは耳を疑う。そんな彼女へ陽子はさらりと告げるのだ。

「その相手の男がどっちも選ばないって事もあるんだよ?」

「っ!」

「なのにとちらかは絶対選ばれるみたいに思ってた悩んでる。まあ実際マリアちゃんぐらいの美人なら大抵の男は選ぶさ。でも、意外と男って時々女には分からない思考をするんだよ」

「女には分からない?」

「そ。何でも、男と女が心に描いてる幸せの形は、同じじゃないんだって」

「もしかして……」

陽子の言い方で何かを察してマリアは陽子の事を見つめた。今の意見は陽子の意見ではないと分かったからだ。

そして彼女へそんな事を言う人間がいるとして、今のマリアへ陽子が告げるとすればその人物は一人しかいない。

「仁志君はそう言ってたよ。具体的にはって聞いたら、あの子はこう言った。女は好きな男と笑い合っていたと思うけど、男は好きな女が笑っていてくれればそれでいいんだって。例えその横にいるのが自分じゃないとしても、ね」

「……あのバカ」

マリアの中で全てが繋がった瞬間だった。仁志は響やクリスの想いにどこか気付きながらもそれを敢えて見ないふりをしているのだろうと。

住む世界が違う自分とはどうあっても幸せになれない。なら、一時の恋として自分の事を忘れ、本来の世界で別の相手を見つけて欲しいと、そう考えているのではないか。

マリアはそう仁志の考えを読んだのである。

(あの子達は貴方に想いを寄せてるのよ。それを見ないふりしてやり過ぎ) そうなんて、ダメに決まってるじゃない!)

そしてそれはそのまま自分へも当てはまるとマリアは分かっていた。自分も見えて見ぬふりをして終わらせようとしていたのだと。

「マリアちゃん、仁志君に惚れた?」

「……………非常に認めたくないですけど」

「あははっ! 何だいそれ!」

「本心です。何であんなのに……」

「ふふっ、意外とそんなもんだよ。惚れたなんだから理屈じゃないのさ」
「理屈じゃない……か」

その一言が妙にすんなりとマリアの心へ落ちた。それと共にその

顔から影のようなものが消える。

陽子はそれを見て安堵するように頷いた。

（やれやれ、やっとあの子にも春が来たね。それにしても、一体マリアちゃんとおの子を取り合ってるのは誰なんだろうね？　もしかしてマリアちゃんと仁志君と引き合わせたって言う翼って子？　てことは、きっとその子もかなり男を見る目があるようでないねえ）

丁度その頃、翼は買い物から帰宅し冷蔵庫へと買った物をしまい終わったところだった。

「よし、これで……くしゅんっ！」

「風邪ですか？」

「いや、埃でも入ったのだろう。掃除に手抜きがあつたか……」

やや苦い顔でそう告げ翼は寝室へ目を向けた。そこでは寝息を立てて静かに眠る奏の姿がある。

「小日向、最近の奏はバイト終わりに機嫌がいいと思わないか？」

「そうですね。多分ですけど只野さんと走ってくるからじゃないですか？」

「やはりそうか。奏も一時期の立花のようになりつつある気がするな」

「一時期の……」

翼の表現に未来は何かを察して奏へ目を向けた。もしや彼女も仁志に好意を寄せているのかと思つたのだ。

「今はどうか分からないが、ここで共に暮らしていた時は只野さんとバイトで会う日は嬉しそうにしていたし、帰ってきた時もそうだった」

「……そうなんですね」

もう響の恋心を知っているに近い未来にとって、その情報はどこか微笑ましく思いつつも羨むもの。

（そっか、響やクリスは引き継ぎで会うんだよね……）

コンビニで仁志と未来が会う事はないに等しい。それを今までは何とも思わなかつた未来であつたが、あのジョギングデート以来胸に燦る想いが彼女の様々なものへ影響を与えるようになっていた。

「翼さん、そういえば配信の方はどうですか？」

「ん？ ああ、只野さんの助言に従って、私に声が似ている歌手であり声優の方の歌を主に上げている。それと、たまに只野さんの好む歌やギアを纏っての歌なども」

「そうなんです。でも、ギアの歌って……」

「ああ、私としても妙な気分だった。まさかギアをただ歌うためだけに展開し、戦場で歌うはずの歌を平場で歌う事になるとはな」

翼の個人曲はどれも高再生数を記録しているが、中でも群を抜いているのがギアを纏って歌った、本来は戦闘曲であった歌達だ。

奏も個人曲で人気なのはギアを纏って歌った戦闘曲。マリアさえも同様だ。これを知って仁志は三人での歌唱が起す力に期待したのだが、結果は再生数だけは百万を突破したものの、そこから何か起きると言う事はなかった。

あれから一月が経過したが、そこへ仁志の意識は向いていなかった。今はゲームの謎解きへ意識を向けていたからだ。

「そういえば、翼さんはもうデートしたんですか？」

「……まだだ。私はいつでも空いているからな。どうやら只野さんはバイトのある者を優先しているようだ」

どこかがつかりるように告げ、翼はスマートフォンを操作し始める。

すぐに開くのは毎日のように眺めている投稿した動画。そのコメントを眺めるのが今の翼の日課であった。

「また嬉しくなるコメントありました？」

「そうだな。基本的には好意的な意見が多いから……」

翼の隣へクッションを置いて未来が座る。二人で画面を覗き込むようにしてコメントを読んでいく。

と、その時だ。二人の目がまったく同じコメントを見て止まった。

「つ、翼さんっ！ これっ！」

「……ああ。只野さんへ連絡しよう」

二人が見つけたコメント。そこにはこう書かれていた。

——何かこの歌聞いた覚えがあるんだよなあ。

寝惚けた頭が一瞬で覚醒する。寝ていたところを起こされて、エルに見せられた文字の羅列に息を呑む。

「……マジかよ」

それが意味するのは俺の予想が正しいという可能性を上げるもの。まだ確定ではない。ただ、これで一つだけ試してみるべき事が出来た。

「エル、ありがとう。えっと、とりあえず翼には他にも似たコメントがないか探してみたって伝えてくれるか？」

「分かりました！」

いそいそと翼へメッセージを送信しようと操作を始めるエルを見てから、俺はこの場にいる三人の装者へ目を向けた。

「今日は暁さんがバイトだっけ」

「はいデス」

「そっか。今の時刻は……午後一時半ぐらい、か」

暁さんのバイト開始が五時。なら二時間ぐらいは余裕がある。

「ちよつといいかな？ 装者の三人に相談がある」

「相談？ お兄ちゃんが？」

「一体何デスか？」

「うん、ちよつと歌って欲しいんだ。水着ギアかギアインナーでもいい。その上に服を着て、それぞれの戦闘曲というか、戦う時に歌ってる歌を」

そう告げると三人だけでなくエルやヴェイグも驚いていた。

「ど、どういう事ですか？」

「うん、まだ三人には話してなかったかもしれないな。実は……」

俺の考えを教えると既に聞いているエル以外がそういう事かと納得してくれた。なのでみんなでルーム料金の方のカラオケへ行く事に。一時間か二時間だけ三人に可能な限り歌ってもらうためだ。

特にザババの二人はそれぞれで歌った後にユニゾンをやってもらいたい。というのも翼の動画にあったあのコメントは最近のものだった。

これはおそろくだけど依り代の力が強くなってきたからだと思う。未来との短時間でのやり取りで絆ゲージが上昇したから、あれはやはり何故か俺との結びつきが強くなると上がるものだと推測出来た。

ただ、俺は少しそれで困ってる。もしあのゲージが本当に俺との関わりが深くなる事で上がるのだとしたら、響やクリスの関わり方が今以上に凄い事になるかもしれないからだ。

だからあの二人はデートを最後へ回そうと思ってる。いや、正直あの二人と二人きりになるのは若干不安だし。

そんな事を考えながら俺はエル達と一緒に家を出る。鍵は月読さんが閉めポケットへ。

「何だか不思議な気分なのデスよ。お昼からカラオケって言うのは」

「前は朝だったね」

「あの時はみんな一緒だったからもっと賑やかでした」

「それだけじゃありません。カラオケ前で集合でした」

「タダノも一緒に家からというのは初めてだな」

「そうだな」

先頭をセレナちゃんとエルが手を繋ぎ、その後ろをザババコンビが歩く。ヴェイグはいつものようにエルの腕の中だ。俺は最後尾を歩いて親戚のおじさん感を全開。

道中は少女四人が本当の家族みたいに他愛ない事で会話するのを俺は黙って聞くだけだった。

ヴェイグは周囲の目もあるためカラオケの部屋へ入るまでだんまりだ。

「只野さん只野さんっ！」

「どうかした？」

そんな時、暁さんがこちらへ振り向いて笑いかけてきた。

「アタシの順番はまだデスが、先にこれだけは言っておくデス。これからは名前で呼んで欲しいデスよ」

「名前で？」

「デス」

「お兄ちゃん、私も呼び捨てにして欲しいな」

「セレナちゃんも?」

まさかの、つて程でもないか。この二人は無邪気で人懐っこい。俺に名前と呼ばれる事を気にもしないだろう。

だけど、これは誰にだって許す事じゃないと思う。特に異性には。なので有難く受け取ろう。

「ありがとう、切歌ちゃん、セレナ」

「おっつ、ちゃん付けになったデス」

「やりました。お兄ちゃんがもつとお兄ちゃんって感じです」

可愛い反応を見せてくれるよ、本当に。

「あ、あの……」

と、くれば当然そうなるよな。クリスの時の教訓を生かす時は今だ。

「えっと、月読さんも出来れば名前で」

「は、はい。それはいいんですけど、お願いが」

「へ?」

予想外の展開だ。呼び方を名前でいいと言ってくれたのにお願ひがあるらしい。

「私の事は、調さんって呼んでくれませんか?」

「……………え?」

「し、調さん? どういう事デスか?」

「調さんって、私が呼んでるみたい……」

「どうしてそう呼んで欲しいんですか、調お姉ちゃん」

俺以外にも疑問を投げかけられる月読さんならぬ調、さんにしておこう。調さんはそんな疑問へ俺をチラリと見やっしてからこう返した。

「その方が大人みたいだから」

「……………あゝ」

だんまりのヴェイグ以外の声が重なる。うん、言いたい事は分かる。

でも、俺はこの結末が見えたなあ。ただ本人が望む事だ。ならそれに従おう。

「分かったよ調さん。じゃあ、これからそうやって呼ぶよ」

「はい、お願いします」

「エル、カラオケ着いたらまずステータスの確認しようね？」

「はいー」

「大人っぽい、デスかあ。うーん、その発想はなかったデス」

「さてさてどうなるかな？ 願わくばカラオケから帰るまでに何とかなるといいんだけど……」

切ちゃんやセレナは呼び方を変えてもらう事でゲージの色付きが増えていた。なのに私は変わらなかった。

ううん、少しだけ色付いた。でも二人程分かり易くない。呼び方を変えるだけじゃダメなのかな？ やっぱり呼び捨てとか親しげな感じじゃないとダメ？

……分からない。

そんな気持ちでもカラオケは楽しいと言えば楽しい。何よりギアを使って歌う歌をこんな気持ちで歌うのは初めてだ。

戦うためじゃなく、誰かへ届けるように歌う。ううん、見えない悪意と戦うために歌ってるのかもしれない。

切ちゃんとのユニゾンは何となくだけど今までと少し感覚が違った。これまでがユニゾンなら、今回はユニゾン＋って感じ。何かが違う。しかもそれは変わったって言うよりは何かを加えられた感じ。

歌い終わった時、思わず切ちゃんと顔を見合わせたぐらい。

「し、調……何デスカね、今の」

「分からない。でも、えつと……楽しかった」

「おおっ！ そうデスっ！ 楽しかったデス！」

これまでは戦う時に歌ってきたから楽しいなんて思った事ない。でも、こうやって戦いながら歌わないとこんな気持ちで歌えるんだって、そう分かった。

歌ってる事は結構物騒だなんて思うけど、元々はそういう時に歌う歌だから仕方ない。それに、何というか不思議だった。

フロンティアの頃に歌ってた歌でも歌おうと思えば歌えるんだっ

て、そう分かったから。懐かしいって言うには早いかもしれないけど、やっぱりあれから色々あったから思う事も多い。

「よし、これでユニゾンも全曲だな」

「お姉ちゃん達、喉は大丈夫ですか？」

「勿論デス！」

「うん、まだまだいける」

ギアで歌ってる時は喉が辛いなんてなった事ない。やっぱりフォニックゲインのおかげなのかな？

「欲を言えばイグナイトアレンジメントも欲しいが、仕方ないか……」

只野さんはどこか悔しそうにそう言って撮影した動画をアップしていく。これで私達も歌い手系配信者の仲間入りだ。

「……よし、とりあえず帰ろう。長居は無用だ」

「ええっ!?! まだ時間あるデスよ!?!」

「いや、でもバイトがあるだろ？ それに準備や食事だつて」

「そんな事よりもつと歌つて」

「途中にあつたケンタでチキンを買ってあげるから」

「さあみんな帰る準備をするデスよ。ここでの用事は終わったデス」

分かり易いぐらい目がチキンになつてるよ切ちゃん。ほら、後ろで只野さんが笑ってる。

「切ちゃん……」

「切歌お姉ちゃんらしいです……」

「うん、私もそう思う」

「『ふらいどちきん』か。美味そうな匂いがしてたからな。ワクワクするぞ」

悔しいけどヴェイグの言葉には同意。チキンなんて久しぶりに食べる。でも、あまり食べすぎると晩ご飯に差し障る。きっと只野さんもそこを考えてくれるとは思うけど……。

「じゃ、帰ろうか。エル」

「はいー!」

「セレナ」

「うんっ!」

「切歌ちゃん」

「デスっ！」

「ヴェイグ」

「おう」

「調さん」

「はい」

あれ、何だろう？ 望んだはずなのに、これがいいって思ったはずなのに、こうやって呼ばれると何だか寂しい。

自分でも何故か分からないままお店を出て歩き出す。先頭は切ちゃんとエルにセレナ。私は少しだけ後ろだ。

「調さん、ちよつといいかな？」

「何ですか？」

また少しだけ寂しい感じがする。大人扱いって寂しいのかな。

「呼び方なんだけど、本当にこれでいい？」

思わずドキッとした。そう問いかける只野さんはどこか苦笑した。

「……どうしてそう聞くんですか？」

「いや、一人の時はいいかもしれないけどさ。こうやって大勢いる時に、しかも自分と近い年齢という時に自分だけ敬称で呼ばれるのって疎外感感じないかなって」

何となく私が抱いてる事を見抜かれた気がして、私は只野さんを軽く睨む。

「分かってて呼んでたんですか？」

「うん、まあ」

むくっ、優しい人だと思ってたけど、若干修正が必要。只野さんは優しいけど時々意地悪だ。

「だからさ、調さんってのは二人の時だけ呼ぶな」

「え……？」

「普段は……そうだなあ……馴れ馴れしいのが嫌なんだよね？」

「え、えっと……」

そうだったはずだけど、こう言われると急に恥ずかしくなってきた。

た。いつそ、呼んでみてもらおう。

「あの、調君って呼んでみてくれませんか？」

「……調君」

「次は呼び捨てで」

「……調。どう？ どっちがマシ？」

やっぱり君付けされると司令みたい。うん、じゃあ君付けでお願いしよう。

「君付けで」

「よし分かった。なら普段は君付けで呼ばせてもらおう。それでいいだろうか、調君」

「ふふっ、はい、それでいいです、店長」

「むっ、そうくるか」
「はい、そうきます」

お互いに笑顔を見せ合う。只野さんは、やっぱり大人だっと思ってた。そしてそれが間違っていないって私はこのすぐ後実感する事になる。

切ちゃん達がこっちを見ずに見えてきたお店へ意識を取られてるのを見て、只野さんが私の耳元へこう言ってきたからだ。

——切歌ちゃん達の手綱は任せたよ、調さん。

大人扱いされて私は知らず笑顔になってた。うん、只野さんはやっぱり時々意地悪だ。こんな事されたら私が喜ぶって分かってやるんだから。

結局チキンは基本一人一本だけで、切ちゃんだけハンバーガーを単品で購入してもらった。でも、八本入りのバケツサイズがお得だったからそうしちやっただけ。

お家に帰って切ちゃんは結構早い夕飯。私達は少し早いおやつとしてチキンを食べるんだけど、切ちゃんの食べてる和風チキンカツサンドから凄く良い匂いができてみんなの視線がそっちへ吸い寄せられる。

「美味しいデスっ！ サイコーデス！ ソースの味が堪らないデスよお！」

「切歌さん、一口だけください！」

「ぼ、僕も欲しいです、切歌お姉ちゃん！」

「俺にもくれ！」

「ふっふっふ、仕方ないデスね。ありがたく食べるといいデース！」

切ちゃんが調子に乗ってるので冷たい視線を送る。じー……。

「うっ!? し、調?」

「じー……」

「切ちゃん、そのお金は誰のお金? そう調君は言いたいようだ」

「そ、それは……で、でも只野さんのお金はみんなのお金で」

「じー……」

「じゃあどうしてそれを自分の物のように振舞ってるの。そう調君は言いたいようだ」

「ううっ! た、只野さんの言葉に調が黙って頷いてるデス。い、いつの間に調の気持ちを読めるように!」

そう、実は只野さんが私の代わりに切ちゃんへ伝える気持ちは結構合ってるから頷いてる。

なのでチラッと只野さんへ目を向けた。すると向こうもこっちを見てるみたいで目が合う。

「読めてるかは分からないけど、出来るだけ分かろうとはしてるから、かな?」

「……そういう事」

こっちへ微笑みかけてくれた只野さんに私も自然と笑みを返す。

只野さんは私達の事を知ってる。でも、心や考えまでは読めない。だから読み取ろうとしてくれてるって分かった。

うん、そっか。私は呼び捨てにされる事が嫌だった訳じゃない。この人に距離を詰められるのがちよっただけ怖かったんだ。

「只野さん」

「ん?」

だから言っておこう。

「やっぱり調でいいです」

「いいのか?」

「はい。だって、そうしないと只野さんがずっと司令の真似で遊ぶから」

「おっと、気付かれた」

そう言っただけに笑う只野さんに私は苦笑する。うん、もうこの人への怖さはない。私達の事を知ってるけどこの人はそれを悪用出来ないしするつもりもない人だ。

「とにかく切ちゃん、みんなへは一口だからね。エル達は晩ご飯もあるんだし」

「りょーかいデスよ」

「みんなも食べ過ぎないでね」

「二はーい（分かった）」

「さすが調ちゃん、イヴさんがいない時は見事なお母さん代理だ」

「ありがとうございます。でも只野さんもいつも立派なお兄ちゃんしてますよ」

そう言うと只野さんは少しだけ照れくさそうに頭を掻いた。その姿は大人のようにどこか少年みたいに私には見えた……。

番外編 仮面ライダー編（BLACK・クウガ）

「只野さんはどのライダーが一番好きなんデスカ？」

ある日の事。俺が謎解きをしようとしてヴェイグと二人でスマホとにらめっこしようとしたところで切歌ちゃんがそう問いかけてきた。

「切歌ちゃん、それは一種戦争になりかねない質問だよ？」

「デデ?! ぶ、物騒デス……」

「分かり易く例えるなら、エルに誰のギアが一番好き？ って聞くよ
うなもの」

そう告げた瞬間納得するかのように食事中の全員が頷いた。

「兄様、それでもきつといるんですよね？ 一番好きなライダー」

「まあ、そりゃあ……」

ただ、正直一番好きなど言いつつ同率一位で二人いるんだよなあ。

「もしかしてさ、それってRXって奴？」

「ああ、只野さんが奏の歓迎会で歌ったね」

「そーいや、あれ、あたしらと行った時にも歌ってたな」

「只野さん、どうなんですか？」

ま、聞いての通り今朝は天羽さん達もいたりする。何故って？ 今

日は久々の全員揃つての休みなんだ。

俺が二連休を取つたので、今回はその初日ではなく二日目に合わせ
てくれたらしい。

「半分当たり」

「半分？」

そう言つて箸を口に咥えたまま首を傾げるセレナ。イヴさんに見
つからない内に止めた方がいいと思うよ。

「正解は、BLACKとBLACK RXだ」

「二人じゃないデスカ！」

「切歌ちゃん、世の中には同率一位という言葉があつてね」

「その二人、名前が似てますけど別人なんですか？」

そこでそういう事に気付いてくれる辺りが調ちゃんの賢いところ。

「実は、このライダーは少々特殊なんだ」

さて、では話そうか。中々ライダーの中でも重たい設定と物語の存在を。

「仮面ライダーBLACK、南光太郎は十九歳を迎えた日、同じ日に生まれた幼馴染であり親友の秋月信彦と共に誕生パーティーを行っていた。その最中、突如として大量の蝗が出現しパーティー会場を襲う。光太郎が気付いた時にはどこか分からぬ場所に裸で寝かされていて、隣には同じような状態の信彦の姿があった」

「い、いきなり凄い展開デス……」

「幼馴染で親友……」

「しかも誕生日まで一緒なんて……」

早速響と未来が予想通りの場所に食い付いた。ならもう一つ追加情報を。

「実は二人が生まれたのは皆既日食の日だったんだ。それもあって、二人はある組織に生まれた時から狙われていた」

「ある組織？」

「その名も、暗黒結社ゴルゴム」

「あ、怪しいなんてもんじゃねえぞ！」

「いかにも悪の組織って感じだね、暗黒結社って」

「パヴァリアって、凄くマシな名前だってよく分かった」

みんな好き勝手言うけど実際そういう目的で組織名は付けられているんだから仕方ない。

でもいつまでそんな空気ですられるか。チラリとみんなの食事の進行度を見ればもう食べ終わるぐらいかな。

「光太郎と信彦はゴルゴムによって世紀王と言う存在に選ばれた。それは五万年に一度の皆既日食の日に生まれた者へキングストーンと呼ばれる石を埋め込み、改造する事で誕生する怪人だ」

「怪人……」

「や、やっぱりそうなるデスカっ！」

「でもさ、二人いるんだろ？　じゃ、その二人はダブルライダーになるんじゃない？」

天羽さん、その読みはある意味でアタリだよ。ただし、悲しい方向

に、だけで。

「光太郎と信彦の体が改造され、更に脳改造まで行われようとしたその時だ。信彦の父がその場へ現れた。脳改造とは記憶を持ったままゴルゴムの世紀王に相応しい思考を持たせる事。言うなれば人格改造だ。人としての良心や優しさと言ったものを捨てさせる事を意味する」

「そんな……」

「もしかして、仮面ライダーってみんな？」

「一部は違うけど、概ね組織によって改造された場合はそう。みんな脳改造前に色々事情があって間髪脱出出来ているんだ」

そう告げるとみんなが同じような顔をした。これは、あれだな。気付いたかな？

「あ、あの、以前の映画でダブルライダーは洗脳されてました。でも、もしかしてあれって」

「きつとその方がショッカーとしては面白かったからだろうな。脳改造じゃ単なる怪人バツ男だ。洗脳という手段にする事で仮面ライダーのまま、自分達が守ろうとしていたものを自分達の意味で破壊し蹂躪させるって事だろうさ」

「最低ね……」

「創作物とはいえ、悪逆非道の極みだ。ショッカー、何と恐ろしく怒りを感じる組織だろうか」

「おーおー、全員から強い弱い之差こそあれ怒気が漂ってきた。なら、一旦ここで話を止めようか。」

「話が逸れたし、一旦ここで止めておこう。みんな食べ終わって後片付け終わったら続きを話すよ。BLACKの悲しく辛く、重たい戦いの物語を」

「タダノは本当に気になるところで話を止めるな。俺にだけ教えてくれ」

「ヴェイグさんズルいです。僕だって気になります」

「デスデス！」

すっかり特撮ファンのエル&切歌ちゃんである。でもチラリと視

線を向ければ響は俺を見て小さく苦笑してきた。

まあ、響は以前聞いてるもんな。ただし、俺が好きで好きな事だけで詳しい話はしていない。BLACKとRXが大好きなライダーで必殺技がカッコ良くてさ、ぐらいである。

俺はエルと切歌ちゃんに慌てないでいいからと告げ、ヴェイグにはBLACKの話の代わりに変身ポーズを教える事に。

「まずこうやって構える」

「……こうか？」

「そして……こうっ！」

「……ぐぐっ！」

「眼差しは敵を睨むようにしながらっ！ 変……身っ！」

「しんっ！」

「それによりベルトのキングストーンが光を放ち、体が一瞬バツタ怪人へ変わるもすぐにキングストーンのエネルギーにより体が強化変身しリプラスフォームという強化皮膚へと変わっていく。左胸にはゴルゴムを意味するマークが出現し、その場から跳び上がる」

「ふんふん」

「着地し振り返るように立ち上がる。全身の関節部から変身による余剰エネルギーが煙のように噴き出す中、怪人へ対してこう構えながら告げる。仮面ライダー、BLACKっ！」

「お……」

パチパチと拍手をしてくれるヴェイグを見て、俺は何というか男の子が出来た父親な気分だった。

「というか途中までヴェイグもやってたから可愛いなの。あ、ほら、翼とイヴさんが悶えてる。」

「で、セレナや調ちゃんも可愛いと言っていたし、未来や響も同じ事を言いながら笑顔だ。」

「ヴェイグ、もう一回やってみてくれ」

「よし、見てろ」

「そうして始まるヴェイグの変身ポーズ。体の大きさもあってかメチャクチャキュートである。見ているみんながキュンキュンしてい

るのが見てるだけで伝わってくるのだ。

そうしていると後片付けを始めるのは何と未来とクリスに響く。だからエルや切歌ちゃんがワクワクした顔でやってくる。

成程、二人のために片付けを引き受けたのか。優しい先輩達だ。だが申し訳ないが俺は全員に聞かせたいモードなので話すつもりはない。

「兄様、キングストーンとはどういう物なのですか？」

「さつき変身する時に一瞬怪人になるって言ってたデスけど……？」

「それと、ブラックは名乗るんですね」

「そうなんだよ。RXなんか名乗り口上が付くんだ」

「……どうしよう？」

揃って疑問符を浮かべる年少四人へ、俺はならばと足を軽く開いて構えを取る。

「変身っ！」

「……おおっ！……」

ヴェイグまで目をキラキラさせてこちらを見てくるので、俺はもう気分は南光太郎な感じで動く。

RXの変身ポーズは簡単なようで難しい。しっかり要所要所でピタッと止める事を意識しないとカツコ良くならないのだ。

それを終えて俺は片腕を腰に、もう片腕をピンツと伸ばすようにして手を空へ向ける。

イメージは全身から光を放つ時のように。

「俺は、太陽の子っ！」

腕を下ろして告げる。気分はクライシス怪人を前にしたRXだ。で、ここからが難しい。BLACKの時よりも複雑でカツコよくなつた動きで腕を動かしていく。

「仮面ライダー、BLACKっ！ RXっ!!」

「……おく……」

……この腕の動きは本気で難しい。だからこそ決まるとこの上なくカツコイイのだ。

「子供達の夢を奪い、踏み躪るクライシスっ！ この俺がいる限り、お

前達の好きにはさせないっ！」

で、ついノリ過ぎてそれっぽい台詞まで言った辺りで洗い物終了のお知らせである。年少組以外のやや苦笑した眼差しが痛い……。

「クライシス、デスか？」

「それがアールエックスの敵組織なんですね」

「うん、そう。クライシス帝国って言うんだ」

「あの、只野さん。今のポーズとさっきのポーズ、かなり似てましたけど」

「タダノ、もう一度腕の動きをやってくれ。速過ぎて分からなかった」
「気持ちは嬉しいけどそろそろ話の続きをしようか」

そう告げると切歌ちゃんとエル、それにヴェイグが大人しくなる。それにセレナと調ちゃんも苦笑する。本当にこの五人は良いチームだ。

残りの先輩達も聞く体勢だし、なら始めますかね。えっと、脳改造云々までは話したか。

「信彦の父の乱入により改造手術は中断され、光太郎は養父でもある彼に言われるままその場から逃げ出す事となる。訳も分からず逃げ、彼はそこで一台の奇妙なバイクを見つける。それはバトルホッパーと言う名の意思を持つ生体メカであり世紀王専用マシンだった。それに導かれるまま無我夢中でゴルゴムのアジトを脱出した光太郎だったが、そんな彼をゴルゴムの三神官という幹部達が執拗に追い駆ける」

視線をエルや切歌ちゃんなどへ合わせながら語る。二人は目を真剣なものにしてこちらを見つめていた。

「脱出したままの姿で夜の街を走る光太郎。そんな彼へ三神官の一人であるダロムがサイコキネシスで攻撃を加える。強力な念動力で光太郎の体が宙を舞い、巨大なネオンサインへと叩きつけられる。その常人なら死んでいるはずの電流に光太郎の体は傷一つ負わない。更にサイコキネシスで光太郎の体は大きく投げ飛ばされるように壁へと激突。その開いた穴の前へ三神官が近付くと、中からゆっくりと表れたのはバツタ怪人。それが瞬時に黒い体と赤い目を持つ存在へと

変わった」

「それが……」

「仮面ライダーブラック……」

「無意識に変身した光太郎は、訳も分からずその体に溢れる力を使って三神官と戦い始める。その力を使い、BLACKは何とか三神官を撤退させる事に成功。更にそこへ現れたバトルホッパーに跨り、彼はどこかへと消えた」

つと、とりあえず導入までは話した。こうなると映像を見せるのが一番いいんだが、如何せんBLACKの映画は昔のもので短い時間の映画が二つだけ。TVシリーズとなると一年もあるのだから長い長い。

仕方ないから言葉だけでおおまかな話をする事に。改造されたせいで力がこれまでと変わってしまったてしている事を知り、今までと同じような生活を送るには力の調整が必要になった事を告げるとみんなが悲痛な顔をした。

「力の制御……ですか」

「うん。改造された事で普段の姿でも凄い力が出るようになったんだ。それに光太郎は最初気付かなかった」

「……兄様が教えてくれた漫画の言葉でしたね。人の振りぐらいは出来る」

「そう。昭和ライダー達はその力を普段抑える事で人間らしく振舞っている。これもまた改造人間の悲哀だ」

SPIRITSを少しだけ教えたエルが言ってくれた言葉に響達
が絶句するのを見て、俺はそう告げた。

次に光太郎の両親がゴルゴムに殺された理由を話せば……

「事故に見せかけて飛行機ごと……」

「しかも理由が自分の子供を世紀王にしたいと反対したから？
親として当然じゃない！」

クリスが自分に重ねて静かに怒れば、イヴさんは今にも拳を握り締め
めそうなテンションで怒る。

「それがあつたから秋月さんは息子を改造人間にする事を反対しな

「かつたんだ……」

「でも、やっぱり本心では嫌だったから最後の最後で邪魔を……」

響と未来は怒りではなく理解と悲しみを。本当にこの子達は凄いやなあ。多分だけど自分達の事もあるから南光太郎もどこかの世界にいるって思っているんだろう。

「その養父をゴルゴムは捕まえ、光太郎への見せしめとして殺してしまうんだ。ゴルゴムに逆らう事がどういう意味かって」

「非道な……」

「それで、当然光太郎は戦うんだよな？」

「そう。養父の亡骸をそつと下ろし、その悲しみと怒りを爆発させるように初めて彼は自分の意思で変身するんだ。そこで名乗る名は、世紀王ブラックサンではなく人類の守護者たる仮面ライダーだった」

「そっか。ブラックってそこからもきてるんだ」

「ちなみに当時の流行色が黒だったからってのもある」

そう言うのと納得する声がちよこちよこ上がる。ついでに原作者のライダーに關係した名言を教える事にした。

「時代が望む時、仮面ライダーは必ず甦る……かあ」

「何か、凄い言葉だよな。時代が望むってよ」

「でも、実際あの映画を見た後だとそう思うわ。時代、つまりその時に生きる人々でしょ？」

「そうだろうね。人々の思いがライダーを望めばいつでもライダーは甦る。ああ、あの映画まんまじゃないか」

天羽さんの言葉に俺は頷く。そう、あの映画はその言葉を知っていれば納得しかないんだ。

というか、思った以上にライダーがみんなに刺さってるようで嬉しい。まあ、ライダーの在り方って人の影になってその暮らしを守るだもんな。装者のやっっている事にかなり近いからそりや親近感も湧くか。

「じゃ、ここからは本当に短くいくよ？ 一人ゴルゴムと戦う事に決めた光太郎は、信彦を助け出すためにその妹である杏子や信彦の婚約者の克美に心を支えられながら孤独な戦いを繰り返す。そんな中、世

紀王になれなかったビルゲニアという強敵が現れる。これまでのゴルゴム怪人と違い、BLACKを追い詰める事もある実力者だったんだけど、それでもBLACKを倒す事は出来なかった。そんなビルゲニアへ創世王はサタンサーベルという次期創世王の証とも言える物を渡す」

「何かとんでもなさそうなのが出て来たな」

「名前からしてヤバそうデス……」

「サタンサーベル、だもんね」

そうだろうな。実際これが出てきて一気にビルゲニアの恐ろしさは増すんだ。

「その力は凄まじく、BLACKも何度も窮地に追い込まれる。それでも何とか切り抜け続けるBLACKへ更なる試練が訪れる」

「試練……」

「ビルゲニアの台頭を快く思わない三神官は、遂に自分達の胸にある天の石、海かいの石、地の石のエネルギーを使ってシャドームーンを目覚めさせる事を決める」

「『『『『『しやどーむーん？』』』』』』』」

「改造された信彦の事だよ。光太郎のキングストーンは太陽の石で信彦のキングストーンは月の石。だから黒い太陽と影の月って名前なのさ」

「か、カツコイイデス……」

「太陽と月とは、暁と月読を連想するな」

「まあある意味でよくあるモチーフや対比だからな。仕方ねーか」

何と言うか、この状況でそう言うところ後の話が少々辛い。まあそれがなくても辛いので今更ではあるんだが……。

「石の力を使い過ぎれば三神官の命もない。それでも三人はシャドームーンへエネルギーを注ぎ続ける。その頃、ビルゲニアはBLACKと戦闘しており、いよいよBLACKを追い詰めようとしていた」

「ドキドキ……」

「ハラハラデス……」

「が、トドメとばかりにサタンサーベルを振り下ろそうとした瞬間、サ

タンサーベルがどこかへと飛んでいってしまう。それに動揺するビルゲニアへBLACKは反撃し痛手を負わせる事に成功するも、トドメを刺す事が出来ず逃げられてしまった」

「飛んでいったって……一体どうして？」

「も、もしかしてシャドームーンが目覚めたから、とか？」

「セレナ正解。そう、世紀王であるシャドームーンがサタンサーベルを呼び寄せたんだ。アジトへ戻ったビルゲニアが見たのは、銀色の体と緑の目を持つ仮面ライダー然とした存在だった」

「銀色の体に緑の目……」

「ぶ、ブラックと全然違うデスね」

そこで俺は自分のスマホを使って画像検索。あつたあつた。

「はい、これがシャドームーン。ライバルキャラとしてこれ以上ないぐらいカッコイイよ」

まずヴェイグへ見せる。

「……たしかに強そうだ。それにあのえいがに出て来たな」

「そうそう」

「ヴェ、ヴェイグさん、僕にも見せてください」

「ああ」

で、ヴェイグからエルへ。って、すぐに切歌ちゃんとセレナが傍へ行く。それにイヴさん達が苦笑。

「「おっ……」」

「しかも歩く度にカシヤツカシヤツ、って独特の音がするんだ。映画でも再現されていたけど、BLACKではよりそれがカッコ良くてね」

「ほうほう。あつ、調どうぞデス」

「うん」

今度は調ちゃんへ渡り、残りの面々が覗き込む。そして上がる感嘆符。だろうなあ。正直シャドームーンのデザインは神がかつてるレベルだし、みんなあの映画でちゃんと覚えていたんだろう。

そう思っていると少ししてスマホが帰ってきた。さて、ならいよいよ重たく辛く苦しい展開へ突入だ。

「ビルゲニアをサタンサーベルで一刀両断し、シャドームーンは宣言するんだ。これよりゴルゴムの指揮は私が執ると。そして光太郎の前に姿を見せてビルゲニアが死んだ事を告げ、宣戦布告を行う。それを受け、光太郎は呟く。甦ったんだな、信彦……と」

「も、もしかしなくてもこれからは幼馴染で戦うデスカっ!?」

「に、兄様っ！ 信彦さんはちゃんと光太郎さんのようになれるんですよね!？」

「……シャドームーンは脳改造までされてしまい、信彦としての記憶を持ちながらもその思考はゴルゴムの世紀王に相応しいものへなっていた。何とかしてそれを元に戻そうと奮闘するBLACKだったが、本来の大怪人へ戻った三神官との戦いは熾烈を極める。それでもクジラ怪人という理解者を得て、ビシユム、バラオムといった二体の大怪人を倒す事に成功する」

敢えて二人の質問へ答えないようにして話を進める。それで気付く子も出るかもしれないが、構わない。それも含めて俺はBLACKが好きなんだ。

「二方ゴルゴムでは寿命が尽きようとしていた創世王がシャドームーンへBLACKとの直接対決を望み、それにシャドームーンは応じる事となる。こうして遂に二人の世紀王が直接対決する事となった。元の優しい信彦に戻ってくれと叫ぶBLACKと自分は次期創世王だと返すシャドームーン。その戦いは互角に思われた。だが、これまでの戦いで経験を積んだ分BLACKが僅かに優勢を作る。ライダーパンチがシャドームーンへ炸裂し、それを見て助けに入ろうとするダロム達へ手出しするなど一喝するシャドームーンへBLACKはライダーキックを放ち、遂にシャドームーンが敗北する……かに思われた」

「「「「えっ?」「」」」」

年少組に加えてヴェイグと響が疑問符を浮かべる。でも残りは何かを察して苦い顔。

「このままではシャドームーンが負けると思った創世王は、何と一時的にシャドームーンの姿を信彦へ戻す」

「それって……」

「まさか……」

響と未来が嫌そうな顔をする。ああ、そうか。君達は似たような事を互いに経験してるか。

「動揺するBLACKへ信彦は手を伸ばして光太郎の名を呼ぶ。その瞬間、弾かれたようにBLACKは信彦へ駆け寄りその手を掴む。その次の瞬間、信彦の体はシャドームーンへ戻り、BLACKは無防備なところへ一撃を加えられる。一転してピンチとなったBLACKへ遂にサタンサーベルがその体を斬り裂く様に振り下ろされた」

「……何とも後味の悪い結末だ」

「酷過ぎるだろ……。一瞬だけ戻ったように見せるとか……」

「でも、それが凄く効果的なんだよ。私には、それがよく分かる」

「響……」

未来が心配そうに響の事を見つめる。実際シエム・ハがそれをやり、響達の優勢を一気に崩したからな。

「先程とは逆にBLACKが地に倒れ、シャドームーンがその腹部へサタンサーベルを突き立ててキングストーンを奪おうとする。その時、BLACKの体が光太郎へと戻った。それを見て何故かシャドームーンの動きが止まる。しばしの間の後、シャドームーンはサタンサーベルを下ろして眩くんだ。出来ない」と

その瞬間みんなの息を呑む音が聞こえた。

「創世王にどれだけ促されてもシャドームーンは決して光太郎の腹部を裂こうとはしなかった。それは、まるで信彦としての記憶が、想いが、植え付けられた人格へ抗っているようにも見えた。最後にシャドームーンは、自分は二つのキングストーンがなくても創世王になつてみせると叫びその場から撤退するんだ。そして誰もいなくなったその場へ二人の戦いを見守っていた杏子と克美が姿を見せてBLACKへと駆け寄る。何とかまだ息があったBLACKは二人へ日本を出るように告げる。自分が死ねばゴルゴムを止める者はいなくなる。そうなったら日本は危険だと」

「そ、そんな……」

「嘘デス……ライダーが、ヒーローが死ぬなんて嘘デスよお」

「ちなみにその話のサブタイトルはライダー死す。本当にその通りになっちゃおうんだ」

「マジ……かよ……」

クリスの声が全てと言っていていいだろう。本気で俺も見た時は言葉を失ったんだ。それぐらい、あの絶望感は凄かった。

「その後、BLACKが横たわる場所は戦いの影響なのか崩れ落ち、二人の目の前からライダーは消えてしまう。そして二人はBLACKの言葉通り、何とか命からがら日本を離れる。その際、色々なものへ別れを告げるように海へ花束を投げ入れて」

「ほ、本当にそんな終わりなんデスか？ 希望は、救いはないんデスか？」

「……その花束は海へ沈んでいく。するとそれを受け止めるものがないた」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「クジラ怪人。彼はゴルゴムを離れ愛する海の中で静かに暮らしていたんだ。そして彼は実は密かにBLACKの体を自分達の一族に伝わる洞窟へ運んでいた」

「す、凄いデス。なら、やっぱりライダーは死んでないんデスね」

「いや、本当に死んではいたんだ。ただ、おそらく仮死状態に近いと思うよ。そんなBLACKへクジラ怪人は命のエキスと呼ばれるものを与える。その力でBLACKは復活するんだ。しかも前よりも力を増して」

「「「「やったあ！（デスっ！）」」」

喜び合う切歌ちゃんとエル。そしてセレナ。本当にこの子達は可愛い。女の子なのにここまで男の子向けで喜んでくれるのは、やはりどこかでそれを現実と捉えてくれるからなんだろう。

響と未来だけは複雑な顔をしてる。うん、すまないがきつと二人の想像通りの結末だ。でも、それがないとRXのあの話へ続かない。

「復活したBLACKはダロムを撃破し、ゴルゴムに支配された日本を解放するためにゴルゴムの本拠地へクジラ怪人に案内されながら

向かう。その最中、創世王によって強制転移させられたBLACKはシャドームーンとの決戦を強いられてしまう。それでも、以前の敗北を糧に心を強く持って、BLACKはシャドームーンと戦いを始めた。もう迷わない。自分が負ければこの世界は闇の手に落ちる。その想いを胸に、BLACKはシャドームーンと激闘を繰り広げた。その結果、本気で倒そうと渾身のライダーキックを放つ。それを庇って最後のゴルゴム怪人でありクジラ怪人を殺したトゲウオ怪人が犠牲となり、シャドームーンは何とか生き延びる」

「クジラ怪人、死んじゃったデスか……」

「ああ。それを助けようと変身したところを創世王に転移させられたんだよ」

「クジラ怪人さん……」

「海を守ってくれ。それがクジラ怪人の最後の言葉だ。彼は誰よりも海を、自然を愛していた。それを守って欲しいとBLACKへ頼んでいたんだ。ゴルゴムからも、人類からも」

「……怪人さえも自然破壊へ想いを馳せるのに」

「耳の痛い話だ。そういう意味では我々もゴルゴムに近い事をしていくか……」

調ちゃんも翼が悲痛な表情を見せた。実際俺も思う時はある。本当にいつまでも人類は変わらないって。

初代ゴジラの頃から半世紀以上。なのに未だに核開発は終わる事無く、人間は科学を悪用している部分がある。

それはきつと彼女達の世界でもだろう。いや、むしろ聖遺物なんてものがあるだけ向こうの方が酷いかもしれない。

「追い詰められたシャドームーンは、あろう事かBLACKの相棒とも言えるバトルホッパーを呼び出す」

「ナンデストオ!?!」

「ど、どうしてそんな事が出来るんですか!?!」

「ま、待ってください！　そういうえば世紀王専用バイクって言ってきました！　だからですよね！」

「エル、正解。そう、バトルホッパーはサタンサーベルと同じで本来世

紀王の物。だから世紀王であるシャドームーンもバトルホッパーを呼べる」

これがBLACKの悲壮な結末の大きな要素でもあるんだよなあ。何せ長きに渡り共に支え合ってきた存在であるバトルホッパーまで……。

「バトルホッパーでBLACKを痛めつけるシャドームーンだったが、BLACKはバトルホッパーが望まず動かされてる事に気付く。生体メカであるバトルホッパーには意思があるんだ。その目が涙を流していると知ったBLACKはキングストーンの光でシャドームーンの支配からバトルホッパーを解き放った。自由を取り戻したんだ」

それに安堵するような表情を見せるみんなを見て心を痛めながら俺は続きを話す。

「今までのお返しとばかりにBLACKを守るように戦うバトルホッパー。それに対してシャドームーンがサタンサーベルで斬りかかる。ボディを傷付けられ、目を貫かれ、それでもバトルホッパーは戦う事を止めなかった。最後にはシャドームーンへ体当たりしての自爆攻撃まで行い、BLACKを守った」

「そんな……」

「……守りたい者があって、そのために己の命さえも賭けるとは……」
「バイクじゃないね、それは。もう、一つの命だよ。言葉を喋らないだけで、あたしらと変わらないさ」

天羽さんの言葉に俺は何とも言えない気分となった。いや、だって、このタイミングでそう言われたら逆に言い辛いだろ。何せ最後の最期にバトルホッパーは喋るんだ。

「……BLACKが慌ててバトルホッパーへ駆け寄ると、まだ辛うじてバトルホッパーは意識を保っていた。そしてこう発したんだ。アリガトウ、ライダーって」

しんと室内が静まり返った。俺はだよなあと思いつつどうしたものかと悩んだが、やはりここまで来たら話を最後までしようと思つて口を開こうとした時だった。

「……ぐすっ」

何とエルが泣いていたのである。いや、エルだけじゃない切歌ちゃんやヴェイグ、セレナまで泣いている。って、おいおい調ちゃんまで？
「それが……初めて喋った言葉とか、泣けるデスよお」

「さよならじゃなくてありがとう、なんですね。バトルホッパー、嬉しかったんだ。ブラックが自分を助けてくれて」

「う、うん。そうだね」

まさかここまで刺さるとは。いや、まあ、本編でも屈指の名シーンだけ。その後、バトルホッパーの亡骸を背にサタンサーベルを手にして歩き出すBLACKはとても覚悟や悲壮感が伝わってきて、何とも言えないぐらいカツコイイけども。

そういえば切歌ちゃんと調ちゃんもメカ絡みで色々あった子達だ。じゃ、泣くのも納得だ。

「最後の最期に自分の気持ちを言葉で伝えられたのなら、そいつも満足だっただろう」

「きつとそうです。バトルホッパーさんは、絶対笑顔で眠ったはずですよ！　ぐすんっ」

セレナの言葉に別の意味で胸が痛い。ああ、RXの話するの止めようかな。この感動をある意味でぶち壊すような気がしてきたんだけど……。

「只野、続きをお願いしている？　このままじゃセレナ達が泣き続けるわ」

「そ、そうだね。じゃあ……」

イヴさんの言葉に促され、俺は気を取り直して話を再開する。

「そして遂に世紀王二人の決着の時もくる。シャドームーンがバトルホッパーの自爆でサタンサーベルを落としたまま撤退し、BLACKはそのサタンサーベルを拾ってバトルホッパーの亡骸を背に歩き出す。向かうはゴルゴムの本拠地。最早誰も守る者がいなくなった。この中枢でBLACKとシャドームーンが対峙する。先程のダメージが癒えてないまま、シャドームーンはシャドーキックを放とうとするが、それを見てBLACKは止めるんだ。その状態でシャドーキッ

クを使えば命にかかわると」

「ど、どうしてデスか？」

「切ちゃん、私達がリンカーなしでギアを限界まで使おうとするのと同じじゃない？」

「……納得しかないデス」

「そこまでできても、やっぱりブラックはシャドームーンを思うんですね」

「割り切ったつもりでも、ふとした時に本音が出る、か。今の私には分からないでもない」

若干ではあるが空気が重くなってるな。でも、それでいいんだ。これは、ヒーローの物語だけど辛く苦しい。それは今まで彼女達が触れてこなかった一種のヒーローものの側面でもあるんだから。

「BLACKの制止を振り切り、シャドームーンはシャドーキックを放とうとする。それに合わせてBLACKも飛んで叫ぶ。信彦の名を。その繰り出したサタンサーベルの一撃がシャドームーンのベルトを斬り付け、二人は着地する」

誰も何も言わない。きつとその脳内にはその構図が浮かんでいるんだろう。

「ぐらりと体を揺らし倒れるシャドームーン。BLACKが駆け寄り抱き抱えると、シャドームーンは今にも息絶えそうな声でこう告げる。サタンサーベルを持たせてくれ。それが無ければ心細くて地獄にも行けない、と」

「だ、ダメデスっ！ そんなの嘘デスっ！」

「で、でも、もしかしたら本当に死にかけてるのかもしれない」

「弱々しい声でシャドームーンは続ける。頼む、ブラックサン」

「き、切歌お姉ちゃん！」

「だ、ダメデス……きつと、渡したらそれでブラックを殺そうとするに決まっています……」

「切ちゃん、シャドームーンは親友の信彦さんでもあるんだよ？ もしかした最後にその心を取り戻してくれたかもしれない」

「ううっ、そ、そうなんデスカね？」

うわあ、何というピュア。映像があつたらもう答えは出てるけど、話だからこの子達はじっくり考える事が出来るんだろうな。

切歌ちゃんはさすがそろそろヒーロー物のお約束が分かりつつある。対してエルはまだ純粹に考え、光を信じている。調ちゃんは……半々だろうか？

で、さすがに年長組は分かっているのか苦い顔だ。ただ、これはその少しだけ上を行って突き落としてくるんだ。

「BLACKはその言葉を聞き、シャドームーンの手へサタンサーベルを握らせる。すると次の瞬間それをBLACKの喉元へ突きつけたっ！」

「やっぱりデスっ！」

「そんな……」

「静寂が二人を包む。身動き出来ないBLACKだったが、シャドームーンの手が下がった」

「「ほっ……」」

「限界、だったのだろうな」

「それでも最後にヒヤリとさせるとか、マジで厄介だな」

年少組が揃って安堵し、年長組が予想通りという反応だ。

「もう手に力が入らない。そう力なく告げるシャドームーンを寝かせたBLACKへ、どこからともなく創世王の声が響く。シャドームーンのキングストーンを奪い自分の下へ来いと。声の後に出現した穴へBLACKが向かうとそこには巨大な心臓のような存在がいた」

「きよ、巨大な心臓、デスか？」

「創世王とは体を失った存在なのですね？」

「っ?! まさか、二人の世紀王を戦わせて残った方が創世王になるって、その心臓がその体に乗っ取るからじゃないでしょうね？」

I. Cでやったんだよなあ。そう、実際それに近い事をS.

「そう考える事も出来るって言われてる。とにかくBLACKは全ての悲劇の原因である創世王を倒そうとするも、その前には強力なバリアが張られていた。ならばとBLACKはバトルホッパと同じよう

に自分を支えてくれたもう一台の愛機であるロードセクターを呼ぶ」
「そんなのがあるんですね」

「詳しい話はレンタルデスカ……」

「切ちゃん、フアイト」

「す、少しなら私もお金出しますよ?」

「セレナのお小遣いは大丈夫デス。只野さんにおねだりするからへいき、へっちゃんデス」

「それ私の?!」

「響の言葉、取られちゃったね」

うーん、切歌ちゃんの場合を明るくしよう精神は凄い。今ので少しだけ空気が変わった。本当にいい子だよ。

……その行為を無に帰すような事言うけど。

「ロードセクターでバリアを破ったBLACKだったけど、そこで創世王は自分がいる場所の下は地球の中心へ繋がっていると言い出す。もしBLACKがそこから動けば自分は残ったエネルギーを中心に開放し地球を破壊すると告げた。それを阻止したければ大人しくシャドームーンからキングストーンを取り出して創世王になれと迫って」

「こ、ここまで来て親玉の癖にこすい手え使いやがって……」

「往生際の悪い奴だね」

「只野、そこからどう逆転するのよ?」

「シャドームーンがやった事を覚えているかい? 世紀王だから彼はバトルホッパーを呼べた。それをBLACKは思い出してある物を呼び寄せるんだ」

そこで年少組が揃って唸り出し、同時に気付いた顔でこちらを見た。

「二「サタンサーベルっ!」」

「そう、BLACKがそう叫んだ瞬間、シャドームーンが握っていたサタンサーベルから手を離す。ブラックサン、南光太郎と呟いて」

「信彦さん……」

「やっぱり……二人は親友なんですね……」

本気で切歌ちやんとエルは俺のせいで道を歪めた気がするなあ。でも、ごめん。可愛い女の子と特撮トークなんて楽しくて仕方ないんだ。許してくれ。

「最期だ、創世王っ！ その言葉と共にサタンサーベルが創世王を貫き、恐ろしい行動を阻止させた。だが創世王は自分がいつか復活する事を言い残してその場から息絶えるようにマグマの中へ落下する。そして創世王の力を失い崩れ始めるゴルゴムの本拠地。BLACKはロードセクターで脱出しようとするが、途中でシャドームーンを助けようとした。しかし彼はそれを拒否しこう言い残す。忘れるな。お前はこの私を、親友である秋月信彦を殺したんだと」

間違いなく空気が凍った。特に響と未来、切歌ちやんと調ちやんの表情が強張ってる。

「崩れ落ちる本拠地にシャドームーンの私こそ次期創世王だとの叫び声が虚しく響く。戦いが終わり、まるでゴルゴムやそれに関連する全てを洗い流すように雨が降り続け、光太郎はその雨の中、信彦の名を悲しげに叫びながらサタンサーベルを投げるとそれは音もなく消滅する。やがて雨が止み、光太郎は杏子や克美と共に過ごしていた喫茶店キャピトラへ足を踏み入れる。最早誰もいないそこで在りし日の平和な時を写した写真を見つめた後、彼は一人バイクに乗ってあてもない旅へ出る。世界は救われた。ゴルゴムは滅び、再び世界には平和が訪れた。その影に、誰に知られる事なく親しい存在を全て失い、もつとも助けたかった相手さえ自らの手で殺す事しか出来なかった男の存在を隠して」

さすがの切歌ちやんでさえも何も言えないのか黙ってしまった。でも、これが昭和のヒーローの中でもかなり重たい部類になる存在だ。

「あ、あの、本当にそれで終わりなんですか？」

「そうだよ。みんながこれまで見てきたヒーローは明るい結末ばかりだったかもしれない。でも、こういう存在もいるんだ。俺がBLACKを好きな理由はこの苦い結末とそれが意味する事にある」

「意味する事、デスか？」

「仮面ライダーは基本的に人知れず戦う。つまり影の戦いだ。人々の賞賛を浴びる事のない戦い。自分が倒ればもう人々を、暮らしを、自由を守る者はない。支えてくれる者はほとんどおらず、人ならざる体で明日をも知れぬ死闘へ身を投げ入れる。その結末に希望など、光などないとしても、みんなが平和で笑顔で暮らせるならそれでいい。そんな古いヒーロー像が、このBLACKには流れてるんだよ」

きつと装者の彼女達にはこのBLACKの、南光太郎の気持ちが少し分かるんだろう。彼女達は支える組織があるとはいえ、やっている事はどこか似ているから。

だからこそ俺は彼女達にはこうなって欲しくない。ならないとは思ってる。だけど、決して自分を犠牲にしてまでも平和をなんて止めて欲しい。

だからこそ、RXの話をしなさいといけないか。あの終わりを迎えた南光太郎が最後に笑顔で光の中へ向かって行く物語を。

「心身ともに疲れ果てた光太郎は、遠い親戚を頼り平和な生活を始める。ヘリパイロットの資格を取り、彼はかつての暗い影を忘れたかのように平和を謳歌していた」

「タダノ、どういう事だ？ さつきブラックの戦いは終わったと言っただぞ？」

ヴェイグの問いかけを無視する形で俺は話を続ける事にした。すまんヴェイグ。でも、このままだとエルが真っ赤な目でセレナに抱き着いたままになっちゃうんだよ。

「ゴルゴムとの戦いが終わり、一人の若者として生きていた光太郎は世話になってる佐原家の長男であるしげる君から妙な話を聞く。がいこつの顔をした奴らに自転車を奪われ、追い駆けた先で三つの光る棘に何かやっていたと」

「まさか……さつき言ってたクライシス帝国という存在？」

「そんなんっ!? もう光太郎さんは平和に暮らしてるんデスよ!」

「新しい敵、新しい戦い。そんなのってない……」

切歌ちゃんと調ちゃんの言葉が痛い程分かる。小さい頃は何とも思わなかったけど、ある程度するとこんなに酷い事はないと思ったも

んだ。

それでも俺は話を続ける。RXはBLACKと違って明るさが溢れている。それを感じて欲しい。あの結末だけで終わらない南光太郎の、仮面ライダーBLACKの物語の続きを。

時刻は十時過ぎと言ったところかしら。只野は長話を終えてどこかやり切った顔をしていた。

一時はどうなるかと思っただ話だったけど、今は不思議と泣き笑いだ。

作り物だとしても、私達にとってはそれはどこかに本当にある物語だと思っっている。世界を、地球を守ったヒーローがいると。

「シャドームーンの最後、泣きそうでした」

「響、感情移入してたもんね」

「うん。だって、親友で幼馴染なんだよ？ それが何度も戦って、最後には少しだけ、少しだけ想いが届いたんじゃないかって……ぐすっ」

「うんうん、良かったよなホントに」

「奏さあん……」

響が奏へ抱き着き、それを見て未来とクリスが苦笑してる。でも、知ってるのよ？ 貴方達もその話には瞳を潤ませていたじゃない。

「マリア、どう思う？」

「どうって？」

「只野さんが何故ここまで詳しく話してくれたかだ。私は、あれをこちらへのメッセージに受け取った。決して一人で抱え込むなど」

「私は違うわ。ヒーローとは本来孤独。その在り方や生き方を安易に追い駆けるな。そう言いたいんじゃない？」

「……そういう考え方もあるか」

「私も翼の意見は分かる。要はこれこそが只野の狙いでしょうね」

「そうか。私達自身に考えさせる事……」

「もしくは、自分の好きなものを知ってもらって一緒に盛り上がりたい、かしらね」

言ってチラリと只野の方を見れば、切歌やエルが今度はもっと明るくなる話をとねだっている。きつと今日は謎解きどころじゃないでしょうね。

現にならばと只野がDVDへ手を伸ばしている。あれは……クウガ、だったかしら？

「先輩、何流すつもり？」

「クウガ。同じライダーでも背負うものと背負い方が違うって事を知るいい機会かなって」

「でも、ブラックほど暗くないそうです」

「それと、心に響く言葉がいっぱいらしいデスよ！」

ふふっ、もうエルと切歌は調子が戻りつつある。それにしても、本当に只野はヒーローが好きなのね。

……いえ、好きだからこそ一度死のうと思ったのかもしれない。自分が憧れていた存在との乖離が大き過ぎて。

そしてそれだから今、只野は私達を支える事に懸命になってくれる。少しでも夢見た存在へ、生き方へ近付けるようにと。

でも、こうして見ると本当に只野は今の切歌たちにとって父親か兄だと分かる。向ける笑みがどこか優しいもの。

私へ向ける笑みはあれと少し違う。特に朝、食事をしている時に感謝を述べてくる時は……。

そこで私はそれとなく椅子から立ち上がり流しへと向かう。飲み物を用意しながら顔の熱を冷ますために。

「……不味いわね」

あの陽子さんと話した日から、私はもう只野を男性として意識している。なのにこっちの気も知らず、只野は毎朝毎朝私へ、美味しいよだのありがとうだの言ってくる。

本当に止めて欲しい。あれが私へのからかいならとつくに怒っている。でも、只野は本気で言っているのが伝わるから口に出せない。

美味しいよ、イヴさん。ありがとう。この言葉を只野から言われる事で、私はセレナ達から同じ事を言われるよりも喜び始めているのだから。

「イヴさん」

「っ?!」

後ろから聞こえた声に慌てて振り向けば、そこにはこちらを不思議そうに見つめる只野がいた。

「な、何?」

「あ、いや、今日なんだけどき。みんないるしおそらく夜まで鑑賞会になるだろうから、昼前に買い物行って夜の買い物まで済ませた方がいいんじゃないかなって」

「……そうね」

チラリと居間を見れば切歌達が楽しそうにモニターを見つめている。

「で、昼と夜だけど何か案はある?」

「案、か……」

朝は普通に和食にしたからお昼は少し華やかな感じがいいわね。でも人数が多いし、出来るだけテーブルが無くて食べられる方がいいかもしれない。

そうなる……

「ちなみに貴方の案は?」

「ピザとカレー」

「……成程ね。たしかにみんなが喜びそうだわ」

「だろ? 俺としては昼をピザにして夜をカレーがいいと思うんだよ。それにピザは持ち帰りにすれば安く買えるチェーンがあつてさ」

そう言つて只野が私の横へ立ってスマートフォンを操作し始める。やがて画面にはとある宅配ピザチェーンのHPが表示された。

「……ほら、一部のピザはテイクアウト限定で半額」

「あら、いいじゃない。でもこの店近いの?」

「近くはないけど歩いていけない距離じゃない。ほら、イヴさん達の歓迎会やったカラオケ店あるだろ? あの近くにあるんだ」

「……言われて見ればあの途中にそういう飲食店が何件も並んでる場所を見たわね」

ただ、あそこへはここから歩いて十五分はかかる。行って帰ってく

るので三十分程だ。

「予約して受け取りに行けば問題ないし、イヴさんはカレーとサラダぐらい、かな？ その買い物をしてきてくれればいいから」

「ちよつと待って。切歌達は貴方と見るのを」

「大丈夫。取りに行くのは今すぐじゃないよ。今朝は散歩してないだろ？ だからイヴさんが出るのに合わせて俺も運動がてらゆつくり散歩してくるって言えばいいし」

「……ついて行くって言うかもしれないのに？」

「その時はその時でいいじゃないか。一日中モニターを眺めているだけじゃ体に悪いしね」

「ふふっ、それもそうね」

話しながら私は笑みが浮かぶのを止められなかった。只野と話していると本当に彼と二人でセレナ達の親をしている気分になる。

ええ、今なら認めるわ。私は只野なら、彼ならそういう相手でもいいと思ってる。むしろセレナ達の懐き方や接し方を見てると申し分ない旦那かもしれない。

いつそ、買い物も彼と一緒に行きたい。思えばそういう風に過ごした事、なかったわね。デートが食料品の買い物じゃ悲しいけど、きつと彼の行動を察するにそういう方が意外と受けてくれるかもしれないわ。

「只野」

「ん？」

話は終わったとばかりにピザの予約を始める彼の耳元へ、私はそつと顔を寄せて囁いた。

——私とのデート、買い出しの付き合いでもいいわよ？

「……こんな奴らのために誰かの涙は見たくない、か」

聞こえてくる言葉を小声で反芻する。見た目、人が良さそうなのに男。それが奥底に持つ熱い想い。それが拳を握って振りかざす事なんか嫌いな奴が戦いなんてものへ足を踏み入れる切っ掛け、か。

それも父親を殺されて泣く少女を見たから。自分の気持ちも中途半端じゃそういう人が増えていく。そう思ってた戦います、だもんなあ。

「奏、大丈夫？」

「ん？ ああ、うん。平気だよ。たしかに色々似てるところはあったけどさ」

遺跡発掘。そこに現れた存在に殺される家族。あの泣いてた女の子はある意味あたしだ。ギアなんてない世界だった場合の、あたしなんだ。

きつと翼はそれを思ってた。でもいいのさ。そんな涙を見てヒーローが立ち上がったんだから。

「五代さん、私、好きだなあ」

「響にどこか近いよね。みんなに笑顔でいて欲しいって」

「うん。変身って言葉が、こんなに重いつて思わなかった。あの言葉に、五代さんの色んな想いが詰まってるって思うと、胸が苦しくなる」
「でもよ、そんな奴だからあのベルトは選んだんじゃないか？ クウガの力を自分のためじゃなく誰かのために使える奴だから」

モニターから目を逸らす事無くクリスがそう言った。その目はどこか眩しいものを見るみたいだ。

「あの人が話してくれたブラツクは、もう改造されたからこそその覚悟と決意だ。でも、クウガはそれとは違う。ホントはしたくない、やりたくない事。でも、それから逃げれば、流れる血が、涙がある。それを知ったから普通の人間からクウガになる道を選んだんだ」

「……守りし者か。思えば、ヒーローとは全てそういう存在なのだろう。持ち得た力を自らのためではなく誰かのためにと使える。……そうか、以前只野さんが復讐ものの主人公をヒーローではないと言ったのはそういう事か」

翼の呟きにあたしは納得しかなかった。以前までのあたしもそうだった。翼を失い、ノイズへの恨み憎しみだけで戦っていた。

あれはギアを自分のために使ってた。そんなあたしだから響のギアは応えなかった。ギアはきつと単なる道具じゃない。多分心に似

たものがあるんだろうね。

それで適合者を選んで。そいつがギアを誰かを傷付ける事に使わないか。欲望のままに振るわないかって。

「おおっ！」

聞こえた声に意識を向ければモニターの中で蜘蛛の怪人が胸を押さえていた。で、そこに文字らしきものが浮かび上がってる。

「何が起きたのさ？」

「クウガが怪人を蹴ったんです！」

「ライダーキックってやつ？」

「分からねーが、多分そういう事だろ」

「あっ、爆発した」

未来の言葉通り怪人は爆発して消えて、クウガが青空の下で佇んでいた。

……カッコイイね、こう見ると。あの映画で出て来た時はそこまで思わなかったけど、改めてじっくり見ると赤い体に赤い目で情熱の戦士って感じ。

まあ、変身する奴はそんなのとは縁遠そうな性格みたいだけど。

「それにしても、クリスの歌ったのってこれのEDだったんだね」

「ああ。つつても、あたしもCDで聞いただけだ」

「癒されるよねえ。あと、この映像も平和って感じで好きだなあ」

「それにしても、何というか斬新だったな。まさか本当の姿への変身を一話ではなく二話でやるとは」

「ああ、それはあたしも思った。だからこそ、余計変身って言葉の意味が出る気もするね」

優しい曲調と歌声のEDを聞きながら話す。もうすっかり切歌達は次回予告が気になってるみたいだ。

「……あの台詞さ。まんまあたしらに当てはまるよね」

そうあたしが言うと言葉が頷いた。

「こんな奴らのために誰かの涙は見たくない」

「みんなに笑顔でいて欲しいんです」

「だから見ててください。私の……いや私達の変身、か」

「ノリとしてはそれでエクストライブだな」

クリスの言葉に揃って苦笑する。ああ、うん。でもいいね、それ。ギアがあたしらの胸の歌に応えるって言うなら、そういうのがあってもいいはずだ。

「じ、次回はどうなるデスか!? 何かクウガがおまわりさんに銃を向けられてたデスけど!」

「今の時点ではクウガは未確認生命体第四号。要は怪人なんだ。だから警察からすれば排除すべき存在」

「そんな……」

「い、一条さんデス! 一条さんならクウガが五代さんだって知ってます!」

「うん、だからこそ一条さんもクウガは射殺対象から除外するべきって言ってくれるよ。ただ……」

「ただ?」

言い辛そうに只野が言葉を止めるから切歌とエルが不思議そうに問いかける。でも、あたしには何となく分かった。敵じゃないと証明出来るかってやつだろうな。

「そこも今後描かれる。それと、四話はライダーでもトップクラスのバイクシーン回になるから楽しみにしてて」

その言葉に翼の目が光った気がした。そっか。翼はバイクが趣味だもんな。

「もしかしたら翼、これで好きなライダーがクウガになるんじゃない?」

「……正直に言えば五代雄介という人物に多少の尊敬の念を持つてる」

「響はとつくに憧れになってるか?」

「いやあ、夢を追う男ってカッコイイし、私も夢を追う女って名乗ってみたいなあって」

「名乗れよ。あと名刺も作れ」

「その場合は、響の技はいくつ?」

「ええっ?! そ、そうだなあ……」

「っと、始まったよ」

……ま、あたしも人の事は言えないか。どこかの平行世界でこういう人らがいて頑張ってるって思えばあたしもやってやろうじゃないかって思える。

一人で二度も世界を、地球を守った黒いヒーローだっているんだしね。あたしもやってやろうじゃないか。

時刻は正午を少し過ぎた辺りで一旦休憩となった。私は気付けば先程の話に魅入っていた、

まさかバイクをあれ程見事に操るとは、ライダーとの名に偽りなしだ。私もあれだけのテクニックを身に着けたい。

まあそのためにはバイクのタイプを変える必要があるな。モトクロスに向いているバイクでなければあれだけのアクションは無理だ。

「カッコ良かったデス！ クウガのキックはオーズやダブルライダーと違って飛ばないんデスね？」

「うん、そうだね……」

暁の疑問へ答える只野さんだが、何となく雰囲気に分かる。あれは軽く誤魔化してる時だ。もしくは何かを隠している時だろうか。

只野さんは嘘や誤魔化す時に少しだけ視線を逸らす癖がある。もしくは声に若干力がなくなる。と言う事はいずれ飛ぶのだろうか？

「さてと、じゃあ俺は運動がてらゆっくり散歩に行ってくるよ」

「私は買い物に行くわ」

只野さんとマリアがほぼ同時に立ち上がって外出すると言い出した。なので私もついて行くこうと思う。

「只野さん、私も同行していいですか？」

「翼？ いいよ」

「只野さんっ！ 私もいいですか！」

「どうぞ」

「な、ならあたしも行くかな。丁度動きたいって思ったとこだ」

私が同行を申し出ると立花と雪音が名乗り出た。まあこの二人は只野さんを慕っているしな。

「響とクリスが行くなら私も行くかな」

「なら僕はマリア姉様と一緒にいきます」

「そう、ありがとう」

「アタシは留守番してるデスよ。調、どうするデスカ？」

「なら私も留守番する。お掃除したいし」

「あつ、じゃあ私はお兄ちゃんの部屋を掃除してきますよ！」

「おおつ、じゃアタシはそのお手伝いをするデスよ」

「あたしはマリア達と一緒に行くかな。ヴェイグは？」

「ここで日を浴びてる」

「じゃ、一旦散会って事で」

こうして私は只野さん達と外へ行く事に。それにしても只野さんの両隣はすぐ立花と雪音が取るな。何故かそれに少しだけ寂しさを覚える。

立花達は知っているのだろうか。只野さんが抱えている悲しみと苦しさを。きっとそれを只野さんがこちらへ打ち明ける事はないのだろう。

それでも、私は打ち明けて欲しかった。この人は私の心を軽くしてくれた人だ。お父様を失った辛さを、少しでも楽にしようとしてくれた。

私の名に込められた願いを、想いを、思い出させてくれた。あの日、私はこの人の事を強く意識した。人として、そしてきっと異性としても。

「只野さん」

「ん？」

そんな事を思っていたら勝手に口が動いていた。こちらへ顔を向ける只野さんへ、私はついこう尋ねてしまった。

「少しは私達を頼ってくれませんか？」

言った後、只野さんが少し驚いた顔をしていたのが印象的だった。立花や雪音、小日向も私を見て軽く驚いた顔をしていた。

それでも私は言いたかったのだ。あの時只野さんが私に胸を貸してくれたように、私も只野さんに胸を貸すぐらい出来ますと。

「……頼ってるつもりだけど?」

「経済的にはありません。精神的にです。そんなに私は弱音を聞いて駄目になりそうですか?」

私がそう告げると只野さんは複雑そうな顔をする。それはまるで言えない訳ではないが言いたくないように見えた。あの時の雪音が見せた反応に近い。

「只野さん、私も翼さんと同じです。いつも只野さんは私達の事を聞いてくれてますけど、たまには逆でもいいと思うんです」

「響……」

「そうだな。あんたがあたしら年下の、しかも女に弱音やら愚痴やら言えねーのは分かるけどさ。少しぐらいは頼ってくれよ」

「クリス……」

「私達じゃ頼りないかもしれないかもしれませんが、少しぐらい頼ってくれてもいいじゃないですか」

「未来まで……」

気付けば立花達も只野さんへ頼って欲しいと言いついで出していた。どうやら只野さんは小日向とも信頼関係を結んだようだ。伊達に名前呼びを許された訳ではないと言う事だろう。

私達四人にそう言われ、只野さんは少しだけ逡巡したようだが、観念するようにため息を吐いた。だが、何故か雪音へ視線を向けると困り顔を見せた。

「えっと、じゃあまずクリス」

「おう」

「寂しいの分かるけどさ、もう密着は止めてくれないか? 俺、もう次されたら押し倒すと思うから」

「んなつ?!」

「「ええっ?!」」

そ、想像だにしない内容に思わず大きな声を上げてしまった。ゆ、雪音が只野さんへ密着しているだど? しかも只野さんも押し倒すとは……密室で二人きりと言う事か!

「で、次は響」

「な、何かあります?」

「……迂闊な接近やスキンシップ避けて。理由はさつきと一緒」

「ふえっ!」

「「なっ!」」

ま、まさかの立花もだど? しかも立花の顔が赤いところを見るに心当たりがあるらしい。し、知らなかった。既に立花がそこまで只野さんと関係を進めようとしていたとは。

「翼と未来には特にならない。これから今までのようによろしくお願いするな」

「あ、はい」

「わ、分かりました」

そして私と小日向へは照れくさそうに笑みを見せてくれた。これは、あれだな。私と小日向を証人にして立花と雪音の暴走へ楔を打つたのだ。

……只野さんへ密着し、あるいは接触し、か。女、を使っているとそういう事だな。間違はなく立花も雪音も惚れているのだ、只野さんに。

だがどうやらそれを正しく認識していたのは雪音だけらしい。立花は今雪音を見て驚きの表情を見せていたからだ。

「く、クリスちゃん、密着ってどういう事?」

「……答えてやるからちよっと待て」

そう言うとき雪音は只野さんへ顔を向けた。

「悪いけど、ちよっとだけ二人にさせてくれ」

「……大丈夫?」

「つたり前だ。このバカにちゃんと事実を突き付けるだけだったの」

「そっか」

「おう。それと、あんたにも、だ」

そう雪音が赤い顔で告げると只野さんが見事なまでに沈黙する。それでも狼狽える事無く深呼吸を二度程し、雪音へ顔を向けると頷いた。

「分かった。ありがとう、クリス」

「っ?! ず、ずりいぞ。そういう不意打ちは止めろよな」

私からはよく見えないが、多分凜々しい表情をしたのだろう。そのまま只野さんは歩き出したので私も小日向とその後を追おうとしたのだが、何故か小日向はその場を動こうとしない。

「小日向、どうした?」

「……その、心配なんで」

その言葉に私は一瞬の間後に意味を理解し頷いた。たしかに色恋は古から人が揉める理由の上位だ。立花と雪音なら大丈夫だとは思うが、それでも念には念を入れるべきか。

「分かった。何かあったら止められるようにこの辺りで隠れていよう」

「はい」

二人から見えないよう、電柱の裏へ身を潜めて様子を窺う。立花と雪音は互いに向き合っているようだ。

「クリスマスちゃん、さっきの事だけど」

「言っただままの意味だ」

「そ、そんな事しちゃダメだよ! クリスちゃん、最初の頃言ってたじゃん。私達が信頼してるって気を抜いたらそれは只野さんを誘ってる事になるって」

「だからやってんだよ」

「っ?!」

ゆ、雪音の奴、何と言った? 只野さんを誘っていると、そう言ったのか?

「あたしは、あの人が好きだ。悪いが誰にも渡すつもりはねえ」

「クリスマスちゃん……」

「お前が相手だから言っておく。譲るつもりはねーし、同情もいらねえ」

「ど、同情なんて……」

「ならいいな。いいか? あの人はこのままだと誰も選ばないで有耶無耶にするぞ」

その一言が何故か胸に突き刺さった。確証はない。なのに、私には

その雪音の意見は絶対の真理のように聞こえた。

「ど、どういう事？」

「あたしがくつついてる事やお前がそれなりにアピールしてるんだ。いくらあの人でも気付くつての。それを、あの方は気付かない振りをしてるかさつきみたいに無理矢理色恋じやないって処理してんだ。あたしらのどつちかが好きだって言っても、それを人間としてとかで捉えて処理すんぞきつと」

雪音の断言に立花が息を呑んでいた。もしや心当たりがあるのか？

「……あたしだってこんな事はしたくねえ。でも、初恋、なんだ。ならどういう形でも決着つけたいって思うもんだろ」

「……………うん、そうだね」

「だから、あたしはもう決めた。お互いに辛い事になるとしても、答えを出してもらおう。でも、もしあたしをあの方が彼女にしたいって言うってくれたら」

「くれたら？」

「……あたしは、留学が終わった後でここであの人と暮らす。もしくはあの人をあたしが養ってやる」

言葉が、なかった。雪音の言葉はある意味で私がどこかで思い描いていたものと似ていたからだ。

私も、向こうでの需要がなくなるか減少すれば、こちらで暮らすのも悪くないかと思っていた。只野さんが言ったように小さな店を開き、あの人と二人慎ましく暮らしていけたらと。

ああ、そうか。そうだったのか。何の事はない。私も同じだったのだ。あの日、お父様の喪失に泣く私を受け止め、気の済むまで泣かせてくれたあの胸に、私は恋していたのだ。

「そっか。じゃ、私も負けない。只野さんの答えがどうなるか分からないけど、選択肢の中には入ってみせる」

「おう、そうしろ」

立花と雪音の雰囲気は険悪ではない。むしろ、どこか今まで以上に関係性が深まっている気さえする。

「翼さん、行きましよう」

「あ、ああ……」

小日向の声で私達はその場から静かに離れた。だが、それにしてもだ。こ、これは非常に不味い。

立花と雪音が只野さんへ想いを寄せ、女性としてアプローチを開始している。私はあの二人程そういう事が出来ない。スタイルは雪音に勝てるはずもなく、気安さでは立花の右に出る者はない。

私に出来る女性としてのアプローチは、何かないだろうか？ このまま初恋が何も出来ぬまま破れるなど悔しい。

そう思いながら歩いていると少し先で只野さんが待っていた。

「どう？ 問題ない？」

「はい」

「そっか。良かった」

安堵するように息を吐く只野さんだが、この人は雪音の言う通りなのだろうか？ 気付いていて見ぬ振りをしているのか。気付いているが勘違いしているのか。

「あの、只野さん」

「ん？」

だが、今の私にはどちらでもいい。正々堂々正面から斬り伏せるのみ！

「た、立花と雪音が両隣ではもし知り合いなどに見られた場合色々面倒でしょうから、私と小日向がそこに位置取ろうと思いますが、いかがでしょうか？」

「え？ 俺は別に構わないけど……未来はどう思う？」

「わ、私も翼さんの意見に賛成です。ほ、ほら、響とクリスは顔見知りじゃないですか。でも私と翼さんなら接点がそこまでないから変な勘ぐりされませんか？」

「……それもそっか。じゃ、頼むよ」

「はい」

こうして私と小日向が只野さんの両隣を陣取っているのを見た立花と雪音は、一瞬驚いた後で立花が小日向、雪音が私の背後にそれぞれ

れ位置付けた。

「なあ先輩？ どうして先輩とあの子があの人との両隣にいるんだよ？ さつきまであたしらに譲ってくれてただろ？」

小声で問いかけてくる雪音へ私は真剣な表情を向けて同じく小声で告げる。

「雪音、状況は刻一刻と変化しているのだ。昨日の友が今日の敵となる事もある」

私がそう告げただけで雪音の表情が驚きから好戦的なものへと変わった。

「そういう事かよ。やっぱ先輩もそういう事か」

「……ああ、出遅れた分、その差を埋めさせてもらう」

「上等だ。先輩相手でも手加減しねえ」

「ふふっ、そうこなくてはな。言っておくが雪音、こと戦となれば私は負けるつもりはない」

「知ってるっての」

互いに笑みを向け合い、私と雪音は話を終える。ふと気付けば立花と小日向も何か話したらしく笑みを見せ合っていた。

一人只野さんだけがそんな私達を見て不思議そうに首を傾げている。本当に、貴方と言う人は……。

「なあ、一体女性陣だけで何を分かり合ってるの？」

「……自分で考えろ（てください）」

揃った言葉は言い方も表情までも揃っていた。ふふっ、どうやら小日向もそうらしい。

只野さんはそれで何かを察したのか「マジか……」と嬉しそうで辛そうな顔をしていた。

そんな只野さんに私達は笑い声を上げる。ああ、何だろうなこの感じは。同じ男性を取り合うなんて揉めるとしか思えないのに、私はそうは思わない。

きっと、それは分かっているからだ。立花も雪音も小日向も、きっと分かっている。只野さんを独り占めしたいのではなく、この想いを知って欲しいのだと。

「そういえば只野さん、どこまで散歩するんです?」

「こつちだとその内あのカラオケまで行っちゃまうぞ?」

「ああ、実は昼飯にピザを頼んでるんだ。それを取りに行くんだよ」

「二「ピザ?」三」

意外だ。まさか内外食とは。

「そ。テイクアウトに限り半額のピザをね。つと、そうだ。エルへ連絡してコーラとか買っておいでもらおうか」

「はいっ! 私ハスプライトがいいです!」

「バツカ。こういう時は黒ウーロンとかだろ」

「私もクリスに賛成かな? 翼さんはどうです?」

「私は……セレナやエル用にオレンジかアップルでも」

「了解。じゃ、そういう風に送っておく。天羽さんがいるから多少重くても平気だろ」

そう言っつて只野さんはおそらくメッセージを送った。さて、ならば

……

「只野さん、この四人の中で誰が一番魅力的ですか?」

「いつ!」

選ばないと言うのなら選ぶように仕向けるまで。例え私でなくてもいい。可愛い後輩達に負けるのならば理解もしよう。

だが、それが私の知らない相手というのは無理です、只野さん。

「クストツ、只野さん? 四人が四人共つてのはなしですからね?」

「み、未来さん? それは勘弁してもらえないですかね?」

「駄目ですよ。ほら、響もクリスも期待してますし」

「たぐだぐのくさんっ!」

「お、男らしく選べってんだ。あ、あたしじゃなくても気にしねーし」

「クリスは気にはしなくても響達はするんだよ、多分」

「では、気にしないと云えば選べるんですね?」

私の狙い通りの発言をしてくれたのですかさず逃げ道を塞ぐ。

「い、いや、そういう」

「只野さん、いいじゃないですか。これはほんの遊びみたいなものですし。ね、響」

「うんうん。気軽に選んでくださいよ」

「そ、そうは言うけどな？」

「し、仕方ねえな。じゃ、可愛い部門、綺麗部門、彼女にしたい部門に嫁にしたい部門の四つにしてやる」

「結果もつと厳しくなってるんだけどっ!？」

雪音め、自分を望むものへ当てはめるように誘導とはやってくれる。

「只野さん、最近の私はあの頃よりも家事が上達しました。それは小日向が証明してくれます」

「まあ、たしかに最近の翼さんは聞いた事がある程酷くはないです」

「そうだろうそうだろう。私もいつまでも失敗ばかりの人間では……ん？ 何故只野さんだけでなく立花や雪音も微妙な顔で私を見ているのだ？」

「……翼は可愛い部門で」

「え？」

「「異議なし」」

「なっ……」

ど、どうしてだ？ いや、嬉しくない訳ではないが、何か納得がいかない。

「で、綺麗部門は響」

「えっ!?! わ、私？」

「うん、最近綺麗になってきてるよ。少なくとも俺はそう思う」

「そ、そうですねか……あはは、なくんか照れちやうかも」

嬉しそうな立花だが、気付け。それは只野さんなりの誤魔化しだと。

「彼女にしたい部門はクリスマスで」

「……そうかよ」

さすがに雪音は分かっているようだ。それでもどこか満更でもなさそうではあるが。

「お嫁さんにしたい部門は文句なしで未来です」

「「異議なし」」

「あ、あはは……ありがとうございます」

やはりこういう結末、か。だが、まあ消極的な方向でも選んでくれたのだ。それだけは嬉しく思う。

「……その、こんな事言っちゃダメだとは思うんだ。でも言わせて欲しい。もし、もし仮に君達が元々この世界の住人だったのなら、俺はきっと玉碎覚悟で答えを出せた。今のような状況になつてたとしても、だ」

その言葉がどう続くかなど考えずとも分かった。だからだろう。小日向が何と只野さんの口をその手で塞いだのだ。

「そこまでです。今は、それだけで十分ですから。ね?」

「うん、私も只野さんの本音が聞けて嬉しかった」

「住む世界が違うからなんだよ。あたしらは同じ人間だ。なら、それでいいじゃねーか」

「この出会いは無駄にはしませんしするつもりもありません。そして、この想いもです」

恋など、しないと思っていた。恋など、出来ないと思っていた。装者という、防人である私には。

それを、この世界は、貴方は優しく変えてくれた。ここでは装者でも防人でもなくていいのだと。ただ歌が好きでいいのだと、そう言うて。

「只野さん、貴方の答えは今では出せずともいいです。ですが、全てが終わった時には……」

「……分かった。その時には、俺なりに答えを出すよ。いや、出させてもらうな」

そう私達に告げる只野さんは、凜々しい男性の表情をしていた。

その顔と言葉に、私は胸が高鳴るのを覚えた……。

ピザがテーブルの上と居間の畳の上へ置かれ、各々でそれを手にしながらモニターを眺める。そこに映し出されるドラマに誰も口を利かなくなっていた。

何も食事中だからだけではない。その内容に、映像に魅入っている

のだ。クウガの持つ秘密や能力。それに振り回されながらも周囲の助けなどを借りつつ五代雄介は戦い続ける。

それは、さながらシンフォギア装者に近いものがある。誰も全ての能力を知らない中で戦う事。その戦いの中で気付き、あるいは解明して強くなっていくのだから。

「……クウガって、自分の事も知らないんですか？」

「うん。超古代の戦士クウガ。その能力などは碑文として残ってるんだけど、どこにどういう内容があるなんて分からないからね。桜子さんが出来るだけクウガ関連と思われるものをピックアップしてるけど、すぐに解読できる訳じゃないから」

「青がジャンプ力が凄くなって、でもパンチ力が低下」

「でもでも、長い物を持つとそれを武器に変えてくれるデス。あれ、すっごいカツコイイデスよ！」

「お兄ちゃん、あの怪人が倒れる時に浮かぶ文字はどういう意味？」

「鎮める。そういう意味合いなんだ」

「二」「鎮める……」「三」

年少組四人にヴェイグが仁志の発言を反芻する。それを聞いて仁志は更に言葉を続けた。

「古代のクウガは怪人を倒すではなく封印していた。なのに何故現代のクウガはそう出来ないのか。それも追々分かる人は分かるし、劇中で薔薇のタトウの女が発言するから」

「バラのタトウの女……」

「B1号デスね！」

「切ちゃん、もう識別名を覚えてる……」

「その記憶力を別のとこに活かせよ」

呆れたようなクリスの発言に響達は苦笑し切歌は恥ずかしそうに笑う。そんな和やかな雰囲気のままクウガのドラマは流れていく。

各フオームの紹介としての側面を持つ前半が終わり、クウガがライダーキックを本格的に習得する話で切歌やエルが興奮する中、神崎先生の言葉にマリア達を感じ入る。

未確認に憧れる蝶野の存在は見ている者達に複雑な想いを抱かせ

るも、五代の告げる「蝶野さん、生きてますか？」から始まる言葉に響が思わず頷く場面もあった。

ゴウラムの登場などのクウガ回りの強化が進む中、未確認達の強化も進んでいく。その展開や内容は、どうしてもこれまでの中でもっともリアルなものとして装者達には映る。

現実にヒーローが、それも人外の力や姿で現れればどうなるのか。人でありながらどんどん人でないものへと変わっていく恐怖と不安。それらを隠しながら笑みを絶やさない五代の在り方に、彼女達は自然と自分達を重ね始めていたのだ。

「……強さは愛だ。そう歌ってるのが先輩のCDにあったけど、こういう事なんだろうね」

奏のその呟きは全員の耳に届いた。

「悲しみに微笑んで、喜びに頷いて。そんな歌詞があるんだけどさ、まさしくこのクウガの事だよ」

「……そうね。強さは愛、か」

噛み締めるように呟きマリアはモニターを見つめる。と、そこで仁志が丁度ディスクが終わったのを見計らってモニターを消す。

「さて、時間も時間だ。一旦休憩兼夕食準備と行こう。イヴさん、メニューの発表を」

「クスツ、そんな大げさなものじゃないけど、今夜はカレーよ」

その言葉に響や切歌など一部が嬉しそうな声を出す。

「やったあ！（デスっ！）」

「姉さん、何カレー？ ポーク？ チキン？」

「エル、教えてあげて」

「はい！ 肉団子カレーです！」

「……………」

「と、言う訳で肉団子を作るのをエルとセレナ、それとヴェイグにお願いするわ。こねるのは只野、任せるから」

「あいよ」

「で、サラダを誰かにお願いしたいんだけど……」

マリアがそう言って目を動かすと上がる手が二つ。

「なら私達が」

「引き受けますデスよ」

「そう。お願いするわ」

こうしてマリア達の家の者達全員でのカレー作りとなり、それ以外の者達はならばと風呂掃除や洗濯物の取り込みなどを始める。

ある意味での大家族のようであった。マリアを長女、仁志を長男とした、大家族。誰も口にはしないがそれに似た何かを感じてはいた。いつか終わるし終わらせなければならぬ時間。だが、誰もがどこかで思うのだ。時よ止まれと。

あるいはこれが自分達の本当の暮らしになればいいのにと。

米を仕掛け、サラダを作り、カレーが出来上がるのを待つ間は次の集会の打ち合わせ。

どうする。何をやる。いつから集まる。まるでサークルだ。今の彼女達には任務も役目も訓練もない。

バイトではあるが仕事があり、それが無い日は自由なのだ。ただ、家事という日課にも似た仕事があるのでそちらへある程度時間を使わねばならないが。

「七月になったら海へ行かないか？」

そんな中、仁志が提案したのはいつかのヴェイグとの話に通じるものだった。

「「「「「海?」」」」」」」

「そう。また何とか七月中に連休取る。しかも平日。それならみんなも休みの申請通り易いだろ？」

「それはいいけど、海つてここからだと遠くないか？」

「そうでもないよ。電車を使って一時間以内で行ける。ヴェイグに海を見せたいんだ」

その最後の一言に誰もが笑みを浮かべた。そういう事ならと誰も反対はしなかったのだ。

こうして海へ行く事が決まる。カレーを食べながら海で何をするかを話題に盛り上がる中、誰もが思うのだ。

いつまでも、こうしていられたらな……と。

番外編 スーパー戦隊編（スーパー戦隊199ヒーロー大決戦）

週に一度の集会。とはいえ、今回はやや特殊である。週の終わりの土曜日、時刻は既に午後七時になろうとしていた。

「兄様、今回は一体何ですか？」

「切歌さんが早く見たい早く見たいってずっと言ってたんです」

今回の集まりは休みを合わせたものではなく、夕勤をしている者達が休みで仁志と奏は勤務という状況でのものだったのだ。

つまり調や未来はバイトがあった訳であり、仁志と奏はこの後コンビニへ行かねばならない。そんな中でもこういう集まりを無くすつもりはないと仁志は考えていた。

「詳しい説明は敢えてしない。一つだけ言うのなら、ライダーやウルトラマンとは違うヒーロー像を見て欲しい。て訳で切歌ちゃん！」

「再生、デース！」

最早仁志の助手のような切歌に誰もが苦笑する中、モニターに映像が映し出され始める。

切歌はエルと調の間へ座り、仁志は年少組から少し離れた場所へ座るも、すぐにその周囲を響やクリスなどの彼へ想いを寄せる者達が取り囲むように座った。

「……素早過ぎやしないか？」

「そんな事ないです」

「そうですよ」

「たまたまここへ座ろうと思っていたところに只野さんがいただけです」

「それとも何か？ あ、あたしらが近くは嫌かよ？」

クリスにそう言われてしまえば仁志に反論などあるはずもなく、彼は照れくさそうに後ろ手で頭を掻くのみだった。

その様子を眺め複雑な表情をするのは奏とマリアである。響達先行居住組は以前から仁志への信頼感が分かっていたから違和感もな

い。

だが未来は別だ。密着とはいかないでも接近している響に負けな
いぐらいの距離感で仁志の傍にいるのだから。

(何か気付けば未来が只野の傍にいるようになってる気がする……)

(あの子、只野に惚れる要素あった？ ……いえ、それを言ったら私
だってそうだったはずよ。なら……)

未だ自分の想いに気付けない奏。想いを自覚しても響達程積極的
になれないマリア。そのもやもやとした気持ちを抱えたまま二人も
モニターへ目を向ける。

出だしから全員が息を呑んだ。何せヒーロー達が苦戦するところ
から開始なのだ。状況が理解出来ないまま、それでもそれが危機的状
況である事だけは理解した頃には切歌やエルフナインは映画に夢中
となっていた。

「……凄い」

ポツリと調が呟いた一言。それはズラリと並ぶスーパー戦隊を見
たからだ。

地球を守り抜いてきた色取り取りの戦士達。それが地球の危機に
集結し絶望的な状況へと立ち向かう。

流れる「天装戦隊ゴセイジャー」も相まって否応なく見ている者
の気分を高揚させる。まったく知らない響達もその歌と戦いに無言
でモニターを見つめ続けた。

「これは……どういう事なんだ？」

「ザンギヤックっていう全宇宙を支配下に収めるような大組織が地球
へ攻めてきた。それを全てのスーパー戦隊が迎撃してるんだよ。通
称レジェンド大戦って劇中じゃ呼ばれる戦いさ」

「レジェンド大戦……」

「これだけの人達が……地球を……」

「そう。みんなこの星を、この街を守るために命を賭けて戦い続けて
きた戦士達だ。望む望まぬに関わらず手にした力で、ね」

乱戦。そう表現するのが相応しい状況でも、スーパー戦隊はまるで
ずっと戦ってきたかのように息を合わせて戦う。

同じモチーフの戦隊同士が連携を見せたり、背中を預け合うのはそれを知る者達が密かに興奮する姿だろう。

「に、忍者デスかつ!? 忍者のヒーローもいるデスよっ!」

「空を飛んでいたのは、あれはどういう事なんでしょう!? 翼のようなものを広げていたようにも見えました!」

知らなくても興奮している者達がいるが、それはまさしく仁志の教育の賜物である。

特に忍者戦隊と忍風戦隊の協力攻撃は忍者を知っている装者達には目を惹くモノがあつた。

「これだけいるのに、少し見ただけで個性が分かるのが凄いです」

「このままなら勝てるんじゃないか?」

ヴェイグの眩きは見ている者の半数が思っていた事だった。だが、それを嘲笑うかのように状況は悪化する。

空から現れた戦艦による砲撃がスーパー戦隊を襲つたのだ。それも、その数は空を覆わんばかりのもの。

「こ、こんなに沢山……」

「一体どうやって戦えつてんだよ?」

そのクリスの疑問へはすぐに答えが見せられる事となる。アカレんジャーを中心とし、全てのスーパー戦隊がその力を結集し解き放つたのだ。

「「「「おく……」」」」」

「響まで……」

「あたしらで言うところのG3FAか?」

「いや、違うだろう。こちらは集束させた後に拡散させているようなものだ」

「人数が違うのもあるけど、圧巻ね……」

「でも、これが原因でスーパー戦隊は変身能力を失ってしまうんだ」
「……あのウルトラマンの映画のウルトラ兄弟と一緒にわけか」

奏の言葉に全員が複雑そうな表情を浮かべた。自分達に置き換えればギアを失う事だ。しかも今回はその倒すべき相手の先遣隊であつた事を仁志が告げると全員が絶句する。

それでも例え変身能力を失っても地球を、人々を守るといふ姿はヒーローらしいもの。そして響達を感じ入ったのは能力を失った後の彼らの会話と表情にあった。

後悔などないとはかりに笑みを浮かべていたのだ。守りたいものを守れた。その事への安堵が漂うその会話はまさしくヒーローであった。

「……この人たちは、さっきの相手がまだ本隊じゃないって知らないんですよね?」

「多分ね」

「晴れ晴れとした笑顔だ。やはり彼らも守りし者、か……」

そつと胸を押さえる翼。切歌やエルとは違った意味で彼女はヒーローものにはまっている。防人たらんとする彼女にとって、ヒーロー達はその手本とも言える者達だったのだ。

そして舞台は劇中での現代。地球へザンギャックの再侵攻が押し寄せている中、35番目のスーパー戦隊である海賊戦隊ゴーカイジャーがそれを阻むように戦っていた。

その様子を観察というか監視している者達がいる中、ゴーカイジャーはその手にしたレンジャーキーを使い姿を変える。

「デデッ!? ど、どうなってるデスか!?!」

「超変身っ!?!」

「うっそだろ? 別のヒーローになりやがったぞ」

「ゴーカイチェンジって言ってましたけど……」

「も、もしかしてさっきの戦いで失われた力がさっきの鍵みたいな奴ですか!?!」

「響正解。ちなみに海賊版って表現にもかけてるらしい」

「成程っ!」

仁志の説明を聞きながらも目はモニターから逸らさない響達。物語はようやく動き出したと言うところであった。

ゴーカイジャーからゴセイジャーが自分達のレンジャーキーを奪ったのである。それがゴセイジャー五人へ天装能力を取り戻させて再び天装戦隊がその姿を地上に表した。

「あ、あれ？ 何で戦うんですか？」

「ゴセイナイトのレンジャーキーとか言ってますけど……」

「タダノ、ごーかいじやーは持ってないのか？」

「うん。この時のゴーカイジャーは追加戦士達のレンジャーキーは持ってないんだ」

仁志の言った追加戦士との単語に全員が首を傾げるも、物語はいよいよ起から承へと向かっていく。

互いの思い込みや元々の考え方の違いで同じスーパー戦隊でありながらぶつかり合うゴーカイジャーとゴセイジャー。

それはさながら同じ装者でありながらぶつかり合ったかつての響達を彷彿とさせた。

「……どうして戦う事しか出来ないかな？」

「響……」

「同じスーパー戦隊なんだよ？ なのに……」

「ゴセイジャーは名前の通り星を護る事を使命としてる。それに対しゴーカイジャーは海賊であり地球を守るために戦ってる訳じゃない。彼らはザンギヤックと戦ってるだけでゴセイジャー達程地球を守りたいとは強く思っていないのも一つの要因だ」

「立ち位置がそこまで違うのね。だから想いがすれ違う」

「そっか。ゴセイジャーは本当にスーパー戦隊なんだ。でもゴーカイジャーはまだその在り方がスーパー戦隊になりきってないって感じ？」

「俺も天羽さんのように考えてる。ゴーカイジャーは一年間の時間をかけて、地球と縁もゆかりもない者達が歴代のスーパー戦隊のような存在になっていく、そういう物語だ」

その言葉に切歌が無言で頷き、頭の中のメモヘゴーカイジャーの名前をレンタルリストに書き入れたのは言うまでもない。

「切歌お姉ちゃん……」

「分かってるデスよエル。一緒に見ようデス」

「はいー」

そして特オタとなりつつある擬似姉妹はしっかりと意思疎通が取

れているのだ。

その様子を横目で見てセレナや調は苦笑。本当に姉妹のように見えたからではない。エルの膝上にいるヴェイグも頷いていたからである。

(ヴェイグさん、声も出さなかつた)

(それだけ映画に集中してるんだね、ヴェイグも)

海賊と天使の激突の最中、遂に敵が動き出す。ザンギヤックへ手を貸すと言って出現した黒十字総統は、その闇の力でスーパー戦隊に恨みを持つ存在を甦らせたのだ。

「……やはり闇つてもものは同じような事をやるのね」

「だね」

マリアと奏は呆れるようでどこか嫌そうな顔を見せる。仁志の見せるものは基本的にどこか自分達に重なる部分があるためだ。

だからこそ彼女達も仁志の薦めるものをちゃんと見ている。勿論面白いのもあるが、根底にはそれが現状の打破に繋がるかもしれないという考えがあつてのものでもある。

そして海賊と天使はそれぞれ散り散りに異空間へと飛ばされてしまう。互いを敵視している者同士のまま、二つの戦隊は敵へと立ち向かうのだが……

「駄目だよ……手を取り合わないと……」

「こ、これは身をつまされる思いだ……」

響の祈るような言葉に翼が若干の居心地の悪さを持つて呟く。かつて響の事を気に入らないと思つて対峙した事を思い出しているのだ。

敵が目の前にいるのにまだ互いに手を取り合えない海賊と天使。それでもゆつくりとではあるがその間にあつた溝が埋まっていく。

特に全員が思わず気持ちを一緒にした瞬間があつた。それはゴーカイレッドが我が身を呈して動けない家族を守つた事を見たゴセイレッドと同じ反応だ。

「……ゴーカイジャーも、やっぱりヒーローなんですな」

エルの呟きこそが全てだった。自分達の事しか考えていないよう

に見えるが、ゴーカイジャーにも優しく強い心がある。それを一番如実に示す演出がそのシーンだったのだ。

これを切っ掛けに二人のレッドは協力を開始。まさしく互いの根底にある想いが同じであると気付いたシーンであった。

「地球の人間ではない。なのにそこにいる力無き者を守ろうとする、か……」

「関係ないんデス！ ヒーローには、どこの人とかどんな人とか関係ないんデスよっ！ そこに助けられる命があるなら、手が届くのなら、いつだってどんな時だって体を動かしちゃうんデスっ！」

「切ちゃん……」

「ゴセイジャーだって天使デス！なのに地球を、みんなを守ってくれます！ 種族も生まれも関係ないんデスよお！」

「うん、そうだね。切ちゃんの言う通りだと私も思う。はい、ティッシュ」

「調べ……ぐすつ、ありがとデス」

感極まった切歌の言葉にエルが無言で力強く何度も頷き、仁志さえも深く頷いていた。

そしてそれは響達の胸も打つ。目指しているものは、理想としているものはそこにあるのだと思う事で。

手を取り合った海賊と天使は甦った悪を打ち破り元の空間へと帰還する。だがそんな彼らを黒十字総統は卑劣な戦法で攻撃した。

何とレンジャーキーを実体化させて襲わせたのである。ある意味で先輩であるスーパー戦隊達を相手に戦う事に嫌悪感を抱くゴセイジャーだったが、それでもここで戦わなければその力を悪に利用されてしまうと思つて覚悟を決める。

「ライダーでもそうだったけど、同じ存在同士で戦わせるのって嫌です……」

「セレナの気持ちは分かるよ。でも、だからこそ悪は、闇はそれを狙うんだ。いつでも闇はヒーローの、みんなの心が嫌がる事を仕掛けてくる。それに惑わされて優しさや勇気を見失っちゃダメなんだ」

「……はい」

仁志の言葉にセレナは凜々しく頷いた。マリアはそのやり取りに無意識に微笑んだ。

(本当に只野が父親みたいになってるのね、セレナには)

セレナの精神的支柱となっっているだろう仁志。その事に気付き、マリアはそつと目を閉じる。

(男女が惚れるのは理屈じゃない、か。でもきつと切っ掛けがあるとすれば、私は只野のセレナ達への接し方だったのかもしれないわね……)

まだ幼いセレナ。それをちゃんと歳相応の存在として扱いながらも、時には装者として厳しい事も突き付ける。

ナスターシヤがやっていた事にどこか近いが、仁志は無理矢理立たせるのではなく倒れてもいのように密かに支えられるように備えている印象だろうか。

「おおっ！」

聞こえた声にマリアが目を開けると、モニター内では天使と海賊による大立ち回りが展開されていた。

歴代のスーパージョーを相手に一歩も引く事無く立ち向かい、それに勝利していくゴージャーとゴセイジャー。

それを見ながら仁志は告げる。あれは本物ではないから弱いのだと。本物達には魂が、心がある。それがなく力だけの存在が心を持つヒーローに勝てるはずがないと断言したのだ。

「魂……心……。そっか。諦めない気持ちが可能にする」

「なら、気持ちがない存在はどれだけ力があってもヒーローには勝てませんっ！」

調とセレナの言葉に仁志は微笑みながら頷いた。

「そういう事だ。現に、心のないカルマ・ノイズは君達に勝てなかった。世界蛇もそうだ。優しさを弱さだ甘さだと罵る相手こそ、その気持ちに負ける。優しさは強さなんだ。手を差し伸べるだけじゃない。時には相手を想って敢えて突き放す事だってある。強さは愛で、優しさだ。だから強い奴ほど笑顔は優しいんだよ」

「先輩……それって……」

「歌の歌詞、だったな」

ヴェイグの指摘に仁志は照れくさそうに頬を掻いた。

「好きな歌なんだよ。影響されてるのは見逃してくれ」

そこで全員が小さく笑う。そして映画もいよいよ終盤へと向かう。レンジャーキーを全て元へ戻したゴーカイジャーとゴセイジャー。そこへ黒十字総統が襲いかかる。

その力の前に窮地へと追い詰められるものの、諦めない気持ちが奇跡を起こす。何とレンジャーキーが光り輝きゴーカイジャーとゴセイジャーを不思議な空間へと導いたのだ。

そこで告げられる歴代戦隊のレジェンド達からの想いと願い。それに領き返すゴセイジャーと神妙な表情を見せるゴーカイジャー。

「……託される想いと願い、そして力、か……」

「大いなる力って何ですか？」

「ゴーカイジャー以外の戦隊が有している力。いわばゴーカイジャーを認めた証みたいな感じかな」

響の問いかけにそう返して仁志は画面を見ながら告げる。

「長期シリーズだからこそ出来る話だよ。地球の未来を、初めてそこと関わりのない者達へ託す。それしか出来ない無力さを秘めてレジェンド達はもつとも新しい戦隊へ力を託すんだ。想いや願いと一緒に」

「それを受け取るんですね、ゴーカイジャーは」

「こいつらはこいつらなりに正義を貫くんだろうな。そして、それは誰かを傷付けるもんじゃやない。それを分かったからこそその大いなる力って事か」

丁度モニターには全てのスーパー戦隊が勢揃いして並び立つシーンが流れていた。

「圧巻デェス……」

「うん、カラフルで綺麗……」

「これだけの数の戦隊がいて、その想いがゴーカイジャーに受け継がれるんですね」

「我らスーパー戦隊、か……。ライダーもそうだったが、こういう名前

が称号みたいに聞こえるのは胸が熱くなるな」

「そうですね。名乗る事で自分だけじゃないって、そう思えそう……」
「なら、名乗ればいいじゃないか」

その言葉に全員の視線が動く。見つめられる事になった仁志はどこか優しい笑顔でセレナを見つめていた。

「ヒーローの名乗りは一種の鼓舞、つまり自分を奮い立たせてる意味合いもある。セレナは戦いが苦手で嫌いだろ？ だからこそ戦わないといけない時は自分へ言い聞かせるように言えばいい。私はアガートラームの装者、セレナって」

「……………何かカッコイイです」

言っているところを考えたのだろう。セレナはどこか照れながら嬉しそうに呟いた。

「名乗り、デスカ。ちよつといいかもしれません」

「切ちゃんってば…………」

「なら口上も入れましょう！ 魂を刈り取る深緑の鎌、なんてどうですか？」

「おおっ！ エル、それイタダキデスっ！」

盛り上がる切歌とエルを見つめ、マリアが小さく苦笑しながら仁志へ呟く。

「どうしてくれるの？ あれ、本気でやるわよ？」

「あ、アルカ・ノイズ相手なら問題ないんじゃない？」

「あのおく、マリアさんが問題にしたいのはそれを言う間に攻撃されるかもって事じゃ…………」

「と言いつつ響も言ってみたかったり？」

「うえっ!? い、いや、それはないと言いたいと言いか言えないと言いか…………」

今度は響の反応に笑いが起きる。ならばと仁志が映画を一時停止させた。

「じゃ、やってもらおう。繋ぐこの手がアームドギア、ガングニールの装者、響って」

その言葉に響は心を鷲掴みにされた。仁志が端的に自分の信念を

汲み取った名乗り口上を作ってくれた事で。

「……お、お手本をお願いしてもいいですか？」

おずおずと告げた言葉に仁志は一瞬面食らうもならばと頷き、その場で立つと右腕を高々と掲げて拳を握る。

「繋ぐこの手がっ！ アームドギアっ！」

それはまるで本当にヒーローの名乗りのようであった。言い終わると右腕をゆっくりと下ろしながら握っていた手を開き、さし伸ばすように見せてから微かな悲しみを宿すように柔らかく握る。まるで本当は握り締めたくないと伝えるように。

「ガングニールの装者……響っ！ ……こんなんでどう？」

「「「カッコイイ（デス） ……」」」

「さすがタダノだな。それらしいぞ」

年少組が揃って感想を述べ、ヴェイグは楽しそうに頷いていた。仁志は若干照れくさそうにしながら響へ目を向ける。

「……やってみます！」

凛々しく表情を変えて響は仁志の動きを見よう見まねでトレースする。

「繋ぐこの手がっ！ アームドギアっ！」

「そこでゆっくりと右腕をおろして……拳を開いて見せて……優しく握っての台詞っ」

「ガングニールの装者……響っ！」

「「「おおっ ……」」」

仁志や年少組から拍手が起きる。翼達などは苦笑しながらどこかでこう思っていた。自分を鼓舞する意味では最適かもしれないと。

「こ、こんな感じですか？」

「うん、様になってたよ響。ガオレンやゲキレン感がある」

「が、ガオレン？ ゲキレン？」

初めて聞く名称に響が疑問符を頭上に浮かべる。だが、説明はまた今度とばかりに仁志は向き直ってモニターへと目を向けた。

「詳しい事は後で。今は映画の続きを見よう」

「あ、はい」

全スーパー戦隊のパワーを浴びた黒十字総統だったが、何とまだ死なぬとばかりに巨大化し黒十字城となって暴れ始めたのだ。

街を守るために戦うゴーカイオーとゴセイグレート。だが、黒十字城の前に劣勢を強いられ、終いには敗北寸前まで追い詰められてしまう。

それを見ていた人々にも絶望が漂い始める中、ゴセイジャーの友人である望少年が諦めない事を説き、それを受けて人々の想いが地球最大の大いなる力を発動させたのだ。

「こ、これって……」

「やはりいつもヒーローを支え助けるのは守られている人々の想いなのか……」

「そう、ヒーローは一見孤独に戦っているように見えるけど、いつだってその背中には多くの人達の祈りや想いがあるんだ。ゴーカイジャーの時代にはもうこれまでのスーパー戦隊は人々に知られている設定だから、こういう風に光が集まり易いという側面もある」

「人の心の光……」

エルが小さく呟いたのを合図にしたかのように歴代戦隊の巨大メカが出現すると、秘密戦隊ゴレンジャーが流れる中、地球を挙げての大反撃が開始された。

「す、凄いデス……感動デス！」

「これ、みんな誰かが持ってたオモチャなんだ……」

「それがこうして本物になって戦う……。奇跡って言うしかありませんっ！」

「ティガの人形もみんなの心の光で本物になりました！ 人の心は、想いは無力じゃないんです！」

年少組がヒーロー達の反撃に感動と興奮に包まれる中、マリア達は違う意味で感動を覚えていた。

「……こういう事を小さな頃から教えるのは、大事ね」

「そうだね……。諦めなければ、必ず最後に正義は勝つ」

「正義なんて本当は凄く曖昧なのに、ヒーロー達はそれを分かり易く子供達に見せてくれるからね」

「悪い事は許さない。誰かを傷付けたりしない。そして、力は誰かを
守るために使おう、ですもん」

「それだけじゃねえ。戦う力つてのは何も相手を倒せる事だけじゃな
いって事だ。諦めない気持ちを持つ事。希望を信じ続ける事。それ
だって立派な戦いだつて、小さな頃にこうやって見せられれば……」
「二人一人は小さな力でも、それが集まれば大きな力になる。私達が
響達へ歌を届けた時みたい……」

その胸の歌をあつたかくしながら響達も映像へ魅入る。

「知ってるかい？ スーパー戦隊の始まりは複数の仮面ライダーが手
を取り合う展開が人気だった事なんだ。そういう意味では、君達は
スーパー戦隊でもあるって言えるな」

「そうなんですか？」

「うん、そうなんだ。ライダーと戦隊は製作会社が一緒でね。もつと
言えば、戦隊の始まりであるゴレンジャーの原作者はライダーと同じ
人なんだ」

「へえ、じゃあライダーとスーパー戦隊は同じ人が考えたんだね」

「そうなる。ちなみに製作会社で言ったらメタルヒーローも同じだ
よ」

「そういえば思い出しましたっ！ 只野さんっ！ ゴーカイジャーV
S 宇宙刑事ギャバンなんてものがあつたデスけど、あれって何デスカ
！」

その切歌の言葉へ待ってましたとばかりに笑うと、仁志は一言だけ
告げた。

「この映画を返却したら借りてきてくれる？」

「了解デスっ！」

「切ちゃん、決めるみたいだよ」

「おおっ！」

ゴレンジャーの大きい力でゴーカイオーへバリブルーンが合体
しゴレンゴーカイオーとなる。そして、黒十字總統の弱点であるカシ
オペアの力を込めた「ゴーカイハリケンカシオペア」が炸裂。

その一撃に無敵を誇っていた黒十字城も遂に滅びた。闇が消えた

青空の下、歴代戦隊の巨大メカ達は消えていき元の持ち主達の手へと戻る。

ゴセイジャーも自分達の力を再度レンジャーキーとしてゴークイジャーへ託した。今は全てのスーパー戦隊の力を一つに集めておくべきと考えて。

そこにはゴークイジャーへの信頼もあつた。自分達の分まで星を、人々を護ってくれる。護星の使命は彼らにも受け継がれていると感じ取ったのだ。

「タダノ、俺はこのゴークイジャーが気になる。どうなるんだ?」

「あー、正直ゴークイジャーは全部通して見て欲しいんだ。仮面ライダージオウとゴークイジャーにウルトラマンメビウスは、それぞれのシリーズでの記念作品だけあつて過去作品を知らない人がそれへ興味を抱ける作りになってるからさ」

「だって切ちゃん」

「ジオウ、デスか? デイクイドじゃないんデスか?」

「……デイクイドはデイクイドでいいんだけど、あれは悲しい事に賛否両論あつて若干否の方が多いい作品になってしまったからね。まあ、BLACKとRXの同時変身とか見どころも多いいんだけど……」

「……」「……」「同時変身?!」「……」「……」

既にBLACKとRXの関係性を知っているため、響達は仁志の言葉に大きく反応する。

予想通りの反応に仁志は満足そうに笑い、切歌を見つめて頷く。それが何を意味するかを瞬時に悟り、切歌は満面の笑みで頷き返した。「切歌ちゃん、その話が入ってる巻だけでいいからね」

「マジデスか? 通しで見ないと分からないと思うデスけど……」

「大丈夫。デイクイドのあの話はそういう意味ではBLACKとRXさえ好きなら楽しめる」

こうして鑑賞会は終わり、時刻は九時近くになろうとしていた。

仁志は奏は後三十分程でコンビニへ向かわねばならないのだが、そんな中で仁志は切歌と響を中心にある事を考えていた。

「蒼の一閃! 全てを斬り裂くっ! でどう?」

「じゃあじゃあ、真紅の弾丸、闇を撃つ！ とか？」

「おおっ、それじゃ……絶望を薙ぎ払う……ノコギリってどう言ったらカツコイイデスカね？」

「そうだなあ……回転刃とかは？」

「イタダキデス！ 絶望を薙ぎ払う回転刃っ！ 調はこれで決まりデスっ！」

三人が考えているのはそれぞれの名乗り口上だった。さながら新番組の会議のようである。

それを聞きながらエルフナインやヴェイグも腕を組んでいた。二人も二人で考えていたのだ。

「はい、思いつきました」

「じゃ、エル。どうぞ」

「はい。えっと、マリア姉様です。全てを守る慈愛の白銀っ！」

「二「おおっ」」

「だってさ、マリア。どうだい？」

「ど、どうだって……」

エルフナインの告げた口上に仁志達が感心するような声を出す横で奏がマリアへ感想を求めていた。

今や可愛い義妹にも等しいエルフナインの考えた文章は嬉し恥ずかしなもの。それでもマリアは顔を若干赤くしながらエルフナインへ声をかけた。

「エル、その、ありがとう」

「えへへっ、喜んでもらえたようで嬉しいです」

天使の笑顔を見せるエルフナインにマリアは胸を軽く押さえて微笑み返す。

「よし、俺も思い付いたぞ」

「おおっ、よしいけヴェイグ」

「分かった。セレナのだ。優しく包む癒しの白銀、でどうだ？」

「二「おおっ」」

「セレナ、聞こえた？」

「はい、聞こえました。ヴェイグさん、嬉しいです」

「エルが言った言葉から考えた。姉妹ならどこか似てる方がいいと思っただけだな」

そうヴェイグが告げるとセレナは嬉しそうに頷いてマリアへ視線を向ける。

「姉さん、いつか一緒にやろうね」

「えっ!? え、ええ……いつかね」

まさかの申し出に驚くも、マリアがセレナの嬉しそうな顔を見て断る事が出来るはずもなく若干微妙な表情でそう返すしかなかった。

「残りは奏と小日向に暁か」

「でもよ、後輩の方は軽く言われてなかったか？」

「えっと、たしか魂を刈り取る……深緑の鎌だったかな？」

「未来さん、正解です。よく覚えてますね」

「う、うん。結構物騒な言葉だなあって思ったから……」

エルの賛辞に未来は若干苦い顔で答える。イガリマの能力を考えればエルの表現は間違っていないのだが、やはり少女が名乗るには少々恐ろしいと言えたのだ。

「先輩、あたしの早く考えてよ」

「天羽さんなあ……。イメージカラーはオレンジ……」

「未来……未来……黒？ 紫？」

「お好きな方でどうぞ」

「調っ調っ、決めポーズとかどうするデスカね？」

「うーん……只野さんに教えてもらおう方がいいと思う。私達はそういうのあまり知らないし」

「私もそれがいいと思いますよ」

「デスカあ」

居間の様子を眺め、マリアは一人全員分の飲み物を用意しながら笑みを浮かべていた。

(本当に仲が良いわね、みんな。只野がこの時間を無くさないようにしている理由が分かるわ)

そう思うも、その笑みが少し曇る。

(だからこそ……只野の事で私達は崩れるかもしれない)

年少の者達からは兄のようにも父のようにも思われ、響達からは異性として意識されている仁志。

もし今彼が誰かと特別な関係になれば、あるいは倒れたり病気にでもなつたら。元々あつた不安材料に今は追加されているのだ。

以前は仁志が死んだり記憶を失つたら。今はそれに彼が誰か一人を異性として強く意識したらという、防ぎようなないものが加わっている。

(私はいい。例え響達の誰かが選ばれても受け入れられる。でも、それを他の子達にもしろと言うのは……違う)

そう思つてマリアは息を吐くとお茶を注いでいた手を止める。

「みんな、お茶でもどう？」

「……………飲む(っ!)……………」

即座に返つてきた声にマリアは一瞬だけ呆氣に取られ、すぐに楽しそうに笑うのだった。

荷物が一番少ない土曜はドリップマシンの本格清掃がある。そのやり方はもう教わつてるから平気なんだけど、只野は本当にあたしがもう大丈夫と言つた日から一切見に来る事もしない。

逆にあたしの方が不安になるぐらい信頼してくれてる。で、ある時あたしが心配にならないのつて聞いたたら……

——ならないと言つたら嘘になるけど、天羽さんが大丈夫って言つただろ？ なら俺はそれを信じるだけ。そこで心配して一々口出しやら何やらされた方が嫌じゃない？

なんて返してきて、あたしとしては納得するしかなかった。只野は信じて任せる事が信頼だと考えてる。それでもあたしが確認を頼めば何も言う事無く見に来てくれるし、不安な部分を聞けば何度でも嫌な顔せず答えてくれる。

あたしはそれに風鳴の旦那を思い出した。何て言うか、もしかして只野の中での理想の大人つて旦那？

「ねっ、先輩」

無人の店内。やる事も粗方終わり、荷物も今日は終了。客足もない

に等しい時間帯だ。あたしの声に只野は不思議そうに顔を向ける。

「どうかした?」

「先輩の目指す男ってさ、風鳴の旦那?」

「……目指すのは、ね。なりたいのは違うけど」

その答えにあたしは首を傾げる。

「どういう事?」

「……笑わないでくれよ?」

そう言うとき只野は真面目な顔でこう言ったんだ。

——なれるのなら、滝和也になりたい。

それがあたしにはどういう意味か分からなかった。でも、これだけは分かったんだ。きっと戦う人なんだって。

ギアが無くて、あたし達と肩を並べて戦えるそんな存在。それに只野はなりたいたって、伝わった。

「って、天羽さんに言っても分からないよな。えっと、滝和也ってのは」

「ヒーロー、なんだろう?」

「え?」

こっちを不思議そうに見つめる只野を見てあたしは微笑む。

「先輩の顔見れば分かるよ。男、だもんな、先輩はさ。風鳴の旦那とどこか似た顔してたよ。女のあたしに戦わせて申し訳ないって感じの、さ」

「……そっか。顔に出てたか」

「出てた出てた。でも、うん、ありがと。そうやってもっと先輩の恥ずかしいところを見せてくれていいから」

「どういう事だよ、それ。というからお礼言う事か、今の」

呆れながらもどこか楽しそうに見える。良かった。どうやら沈んだ感じは消えたらしい。

やっぱり、只野には神妙な顔じゃなくて間抜けた感じの顔をしていて欲しいんだよね。てか、そういう顔してくれないとこっちが妙な感じになるし。

で、そこであたしが休憩になって、只野はその間に発注を始めた。

でも売り場に行つてじゃなく裏で。何せ用度品の発注だからだ。

割り箸とかスプーンみたいなものから始まり、中華まんの包み紙やらストローなんかもそれになる。実はそれを近々あたしが発注する事になりそうなんだよね。いや、押し付けられる訳じゃなく、あたしもそろそろやれる事を増やそうと思つてるんだよね。

「ねっ先輩」

「ん？」

「それ、あたしがやりたいって言つたら教えてくれる？」

「……オーナーから天羽さんが用度品の発注を覚えたいって言つてるとは聞いてたけど、本当だったの？」

「そ。ダメ？」

そう聞くと只野は手にした端末を置いてあたしへ向き直つた。

「いいけど、用度品は簡単なようで面倒だよ？ 多すぎると場所に困るし少ないと営業に関わる」

「うん、知つてる。だけどさ、先輩の仕事を減らしたいんだって」

もう慣れてるみたいだけど、先月ぐらいは時々疲れたような顔見せる時もあった。て言つても、あの朝に会話してから注意深く見て気付いたぐらいだけど。

今はそうでもないみたい。多分だけど発注の一部を調に託したからだろうね。だからあたしも少しだけ只野の荷物を背負いたい。

「……休憩終わったら教えるよ。で、ついでにそのまま発注してもらうから」

「了解。よろしくお願いするよ先輩」

「こちらこそだよ。……ありがとう天羽さん」

噛み締めるように感謝を告げてくる只野に顔が熱くなる。やめてよとは言えない。優しい表情でこつちを見てくる只野の気持ちから分らないでもないからだ、

只野はそう言った後立ち上がった。どうしたのかと思つて見つめてると商品整理してくると言つて売り場へ出て行った。

「……あく、これつてそういう事なのかな？」

誰もいない事務所で呟く。最近気が付くと只野の事を考えてる自

分がいる。勤務中もあいつの事を目で追ってるし、さつきみたいなやり取りで顔が熱くなるし。

「惚れた……かな」

好意を抱いてるのは否定しない。こうやって一緒に仕事をしてると嫌でも関わるから余計それが強くなってる。

こつちが大丈夫と言うと本気で任せてくれるし、なのに何かあるとすぐ手伝ったりフォローしてくれる。一度聞いたら自分がされたい事をしてるだけって返すだけで「お礼はいらない。俺も天羽さんには助けてもらってるから。お互い様だよ」って。

……ダメだ。思い出すのがそもそもそういう事な気がしてきた。あ、あたしが只野に惚れたとして、どこで？ いつ？

「分かる訳ないか……」

明確に惚れたなんて分かり易い時があればあたしはちゃんと自覚出来てたはずだ。つまり、気が付いたらそうだった、だろうね、これ。

多分だけど一番大きなのはバイト終わりに一緒に走るようになってたからかも。あそこであたしは普段でも仕事中でもない只野を見た。

あたしと何て事ない話をしながら笑うあいつを見て、その時間が最初は悪くないって思っ、段々楽しくなって……。

「ああ、なんだ。そう言う事か」

スツと納得出来た。あたしはあのジョギングでみんなが過ごしてない時間を只野と二人きりで過ごしてた。それも定期的に。

その時間がいつの間にか楽しみになってたってのは、そういう事なんだろうな。ははっ、そっか。あたし、意外と簡単な女なんだ。

優しくて頼りない感じもあるけど、時々頼もしくって一緒にいると笑顔になれる。そんな奴だからな、只野って。

「……………先輩って呼ぶようにしてて良かったかも」

今のあたしだときつと只野って呼べない。ああ、うん。認めよう。只野さん、だね。

でもどうしようかね？ 響や翼達がどう見ても只野さんに惚れてる。いや、もうあれはアプローチかけてる真っ最中だ。

「天羽さん」

「っ!? な、何?」

どうしたものかと考えようとしてたら只野さんが顔を出してきた。

「ドリップマシン、全部お願いしてもいい?」

「う、うん。戻しておく。豆の補充も必要ならしておくから」

「お願い」

そう言っただけでまた只野さんは店内へと戻っていった。

「……うん、考えたって仕方ないか。あたしはあたしそのままで動こう」

翼達には悪いけど、折角同じ時間帯に仕事してんだ。その利点を使わせてもらおうとしますかね。

そう思っただけで椅子から立ち上がって店内へ。すると只野さんが真面目な顔でお菓子の棚を見つめてた。

「先輩」

「ん? 天羽さん?」

只野さんの隣へ立って棚を見る。特に何か問題とかあるようには見えない。

「棚をそんな真剣な顔で見つめてどうしたのさ?」

「ああ、そろそろ棚替えをするべきかなって。要は商品の配置とかを变える事」

「そんな事してどうするの?」

「えっと、要は見栄えを变える事でお客さんに新鮮味を与えるって感じ。ただ、これには一つ重大な欠点もあるんだ」

「欠点?」

何だろうか? あっ!

「新商品がないから本当の新鮮味はない?」

「頓智じゃないんだよ? まあ嫌いじゃないけどさ、そういう答え」

軽く苦笑して只野さんは答えを教えてくれた。それは配置が変わる事でお客さん達が混乱する事。

「常連とかちよくちよく来る人もそうだけど、どこのどの辺に何があるって覚えてる事が多いだろ? それが狂ってしまうから、今まで見つけられた物が見つけられなくなっただけで来なくなるって事もあるんだ」

「あー……」

あたしも経験がある。ただ、そういう時って店員に聞けばいいんだけどって、そういうのを嫌がる人が結構多いんだっけ、そういうえば。「だからあまり大きく変えるのは抵抗がある。だけど少しだけだと意味がない。このさじ加減が難しくくてね」

「成程ね」

「天羽さん、何か案はない？　ここを変えた方がいいんじゃないとか、逆にここは変えないで欲しいとか」

「そうだね……」

そこからあたしと只野さんはああでもないこうでもないと言いなから棚替えの相談をした。で、変える事にしたのはカップ麺とスープの棚。

売れ筋ランキングみたいにして置いたらとあたしが言ったら、只野さんはそれは面白いけど継続していくのが難しいって返された。

今はカップ麺の仕入れが調になってるから、そこと相談だつて。なら丁度いいから今朝する事に決めた。なのでまずは候補とやり方だけ決めて、次は只野さんに教えてもらいながら用度品の発注を覚える事に。

「……これで大丈夫かな？」

「いいと思うよ。不安な物は少し多めに。それぐらいいい。無くなったら困るけど、早々無くならない物もあるし、それが何かは天羽さんも大体分かると思う。金、土と入るだろ？　そこでの減り方が一日の消費量だと仮定すれば大体発注量も分かるようになるさ」

「そっか。ん、了解。今度から気を付けてみる」

金曜と土曜の夜勤は朝にホットスナックをやる必要がないので楽。何でも朝から売れる事が稀だから、らしい。

タバコの補充を二人でしながら話す。たまに來客があつてもすぐに終わる。何て言うか、本当に店番つて感じ。

「おはようございます、店長、奏さん」

「おはよう」

で、そうしていたら気付けば調が来る時間になってた。只野さんと

二人でカウンターで棚替えをいつやるかの打ち合わせとかしてたらこれだ。

それにしても、気付けば調も只野さんへ柔らかい表情を見せるようになったね。てか、そろそろあがりの時間か。

「天羽さん、ちよつとだけレジ任せていい？ 俺、月読さんに棚替えの事とか相談してくるから」

「あいよ」

スタッフルームへ入つてくの見送り、あたしはぼんやりと店内を見回す。

店内ゼロ名。やらないといけない事はない。そう思つてたら自動ドアが動いた。

「いらつしやいませ……なんだ、高山さんか。おはようございます」

「おはようかなちゃん。それと、なんだはないでしょ、なんだは」

そう言つて笑うのは朝勤の一人の高山さん。一年前ぐらいに入つたらしくて、只野さん曰く南條さんの紹介だそう。

つまり、おばさんだ。南條さんと二人だとお喋りに花が咲きすぎるらしい。あと只野さんを南條さんと一緒に店長と前から時々呼んだ人だ。

「もうしらちゃん来てる？」

「来てますよ。先輩から棚替えについて相談されてます」

「棚替え？ へえ、店長も本当に精力的になったね。かなちゃんが来た辺りは売上とか赤字にならなきゃそれでいいみたいな考えだったのに」

「店長になったし、何かあったのかもしれないよ」

「だろうねえ。……女でも出来たかな？」

正解。ただ、高山さんが考えてる意味じゃないけどね。で、スタッフルームにいた只野さんへ直球に彼女でも出来たと高山さんが問いかけるのが聞こえてドアが閉まると、それを合図にしたかのように調がカウンターへ姿を見せた。

「奏さん、棚替えつてどういう事が聞きました？」

「まあね。で、どうする？ やるの？」

「やりたいです。今後は売り場をいじっていいって言われましたし。なのでちよつと見てきます」

どこか嬉しそうな顔で調はそう言って担当の売り場を見に行った。その背中が新しい事を任された事への嬉しさや楽しさで満ちてる感じだ。

あたしも気持ちは分かる。新しい仕事を任されると成長したって感じ、するもんな。

「かなちゃん、ありがと。もういいよ」

調が棚の商品を動かして首を傾げたりするのを眺めていたら声をかけられた。時間を見ればまだあがりまで三分ある。

「まだ三分ぐらいあるんで」

「いいよいよ。まあ、とりあえずレジはあたしに任せておきな。しらちゃんもいるしさ」

ま、そういう事ならとあたしはカウンターを出て調の傍へ。

「あつ、奏さん。やつぱりアイラインは定番がいいと思いませんか？」

「どつちかだよね。先輩とも話したけどさ、定番は見やすい位置になくても売れるから、アイラインは新商品とか売り切りたい物にするべきじゃないかって」

「……そういう考えもありですね。そっか……」

うーんと悩むように棚を見つめる調に思わず笑みが零れる。ホント、こんな一面もあるんだね、この子。

「あ、先輩から聞いた？ あたしがさ、いつそ売上順に並べてみたらって言ったんだけど」

「そうなんですか？ あつ、そういえば店長が奏さんにアイディアがあるから聞いてごらんって言ってました」

……どうやらあたしの口から直接説明させるべきと思ったみたいだ。こういうところしつかりしてるよ只野さん。

なのでそこで軽く調と相談。アイラインは新商品とかの売りたい物を並べてランキングはいつそ一番上段で展開するってのがいいかもとか、いつそ逆にしてみるとか色々と話した。

「天羽さん、そろそろ上がってくれないと残業代付いちゃうんでその

辺に」

そうしたら只野さんが若干苦笑して話しかけてきた。見ればもう上着を脱いでる。

「つと、ホントだ。ごめん先輩。すぐ退勤してくる」

「お願い」

ちよつとだけ慌ててスタッフルームへと向かう。入る寸前に店内へ目を向ければ只野さんが調と何か話してるのが見えた。その笑顔の横顔にあたしは小さく笑みを浮かべてドアを閉めた。

「……うし、お茶買って走るとしますか」

まだ只野さんとの時間は終わらない。そう思うと頬が緩むのを感じて、あたしは確信する。

——やっぱり惚れてるんだ、あたし。

「じゃ、後お願いします」

「お先に失礼しまーす」

仁志と奏が揃って店を出て行くのを見送った後も調はその目で二人の姿を追っていた。

並んで歩きながら話している姿は、知らぬ者が見ればただの同僚とは思わない雰囲気だ。

「そんなに気になる？」

「っ」

かけられた声に調が振り返るとそこには楽しげに微笑む高山の姿があった。

「べ、別にはしてないです」

「そう？ 最近のしらちゃん、店長と仲が良いからってつきり」

「奏さんとも仲良しです」

「そうだね。あとはみくちゃんか」

みくちゃんとは当然未来の事である。高山は自分よりも後輩の同僚を名前に「ちゃん」か「くん」を付けて呼ぶのだ。

「はい。未来さんとも仲良しです」

「同じ高校出身なんだよね。で、そこは店長も卒業、と」

「そうですね。何か？」

真剣な表情で調を見つめる高山。その雰囲気から調は自分達の学歴詐称がバレたのかと内心で息を呑む。

「……やっぱ同じ高校ってだけで仲良くなるもんなの？ おばさんはそういうのあまり経験なくてさ」

告げられたのは調の心配の斜め下。それに調は小さく苦笑してこう返した。

「会話のとっかかりにはなりました」

「ああ、そういう事ね」

納得したとばかりに高山が頷くと背を向けたので調は安堵するよう息を吐いた。

（良かった……。てっきりいくら何でも同じ学校が集中し過ぎって言われるかと思った）

実際そう思う者もいたが、彼女達は年齢がバラバラだった事やその来た経緯が紹介にも近いために疑問視される事はなかったのだ。

仁志が紹介したのは響とクリス。ただ、彼女達とは関わり合いがまったく見えなかったのも大きい。年齢差が一回り以上ある上性別も異なるとくれば、まさか彼らが水面下で繋がりを持っているなど普通は勘ぐらないもの。

「しらちゃん」

「はー。」

だが、恐ろしきは女の勘だろうか。

「店長なら大丈夫だと思うけど、それでも一回り以上離れてるってのは思ってる以上に色々問題だから気をつけるんだよ？」

「えっ？」

「恋愛で止めるならいいかもしれないけど、結婚ってなったら結構大変だよって事」

「……………っ?!」

あっさりと調の中に芽生え出している淡い恋心は見抜いてみせたのだから。

調が高山の指摘にアワアワしながら否定して、その様子を彼女に微

笑ましく思われている頃、仁志は奏と二人で MARIA 達の家の前に到着していた。

仁志が毎度のように廃棄の菓子パンやシュークリームなどを冷蔵庫庫に入れてきて戻ってくると、その後ろからヴェイグが付いてきて玄関で止まった。そこから二人を見送ろうというのである。

ちなみに仁志は朝食を走って戻ってきてからと MARIA へ告げている。それを聞いてヴェイグも仁志合わせにしようとしていた。

「今日はどう行くの？」

「そうだねえ……久々に遠くの公園までどう？」

「了解。じゃ、行こう。また後でなヴェイグ」

「じゃあな」

「ああ。気を付けて行ってこい」

走り出す二人を見送り、ヴェイグは小さく笑う。

(最近の奏もよく優しい匂いがするな。やっぱりタダノはみんなを優しい心にするらしい)

色恋の感情を知らないヴェイグは周囲の女性達の変化を良い事としか受け取れない。笑顔のままヴェイグは家の中へと戻ると、事前に用意しておいた足拭き用の濡れタオルを手に取った。

「……こうなると俺の足に合った靴が欲しいな」

ヴェイグは基本外へ出ない。当然彼が一人で行動するには依り代が必要であるからなのだが、もう一つ大きな理由がある。その一つが靴であった。

基本素足のヴェイグが一人で動くとき当然その足は土などで汚れる。そうなれば家の中へは上がれない。

今回のように事前に足拭き用の何かを用意していればいいのだが、それがなければ彼は自分で足を風呂場で洗った後で掃除をしなければならぬのだ。

足を綺麗に拭き終え、ヴェイグは台所へと向かう。

「MARIA、タダノ達が走り出したぞ」

「そう。で、どうする？ 只野が帰ってくるまで食べるのを待つ？」

「ああ、そうする。MARIAはどうする？」

「私も待つわ。久しぶりにエルやセレナも只野と朝食を食べたいって言うだろうしね」

笑みを浮かべるマリアだが、それを見てヴェイグは小さく鼻を動かして微笑む。

（やっぱりマリアもだ。最近みんな優しい匂いをさせる事が多くなってるぞ）

嬉しそうに笑みを浮かべてヴェイグはマリアの傍へと近付いた。

「それで、今朝は何を作るんだ？」

「今朝は質素よ。なめことワカメの味噌汁にベーコンエッグと昨日の残りの肉じゃが」

「なめこ？ まあいいか。なら俺はタダノが帰ってくるまで日を浴びてる」

「ふふっ、寝ないようにね？」

「……その場合は起こしてくれ」

そう言い残してヴェイグは居間へと向かう。その背中を見送りながらマリアは小さく笑い、すぐにある事に気付いて顔を赤くする。

（何さらりと帰ってくるって表現を使ってるのよ、私もヴェイグも……）

既に仁志がこの家の住人のように思い出している自分に気付き、マリアは頭を抱えた。実は最近ヴェイグを中心に仁志をこの家で住まわせるべきと言う意見が上がっているのだ。

同調者は切歌とセレナ。反対しているのはマリアとエル。調は中立を保っている。エルが反対している理由は以前ヴェイグが告げた仁志の潜在的な不安を聞いたためであった。

切歌とセレナは兄のように慕っている仁志と一緒に暮らしてくれた方が色々嬉しく楽しいと言って譲らず、マリアは周囲の目を意識してとそれを何とか宥めている。

エルは仁志本人がその考えをやんわりと拒否した事を理由に無理強いはいしたくないとセレナと切歌へ告げていて、調は女だらけの家で暮らすのは仁志も自分達も大変な事が多いのではと、受け入れても入れなくても互いに良い事と悪い事があると思いを述べていた。

「……あのゲージも既に私の上がる速度は停滞気味だし、響でさえもう動かなくなってるに等しい。もしあれが本当に好感度なんてものだとしたら、そもそも数値化出来るの?」

愛情が数値化されるとしたら、これ程酷い話はないだろう。そう思つてマリアは息を吐くと一人考え始める。

(あれは只野に関係しているのは間違いないとして、それは本当に好感度なの? それだと下がる事もないとおかしいのにそれは今のところ発生していない。なら増減ではなく増加するのみと考えた方がいい。そうなった場合好感度では下がる事もあり得る。では絶対下がらず上がるのみの只野に関係する要素は何?)

浮かんでくるものは共に過ぎた時間だったが、それでは未来の急上昇は説明出来ても呼び方を変えただけで上がった切歌やセレナの説明がつかない。

結局マリアは現実逃避にも近い思考へ没頭する事になる。その裏で居間では目を覚ましたエルとセレナが布団から出る事無くもぞもぞとしていた。

「ヴェイグさんがここにいるって事は、お兄ちゃんは奏さんとジョギングかな?」

「だと思えます」

「じゃ、今日はお兄ちゃんと一緒に朝ごはんかな?」

「僕らが待つてればそうなると思えますよ?」

布団から顔を出しての小声の会話。切歌はまだすやすやと眠っているからだ。

「どれくらいで帰ってくるかな?」

「多分遅くても七時半には帰ってくると思います」

「……じゃ、顔だけ洗いに行こっか?」

「はい」

揃つて布団から出ると二人はそのまま揃つて洗面所へ。唯一眠つたままの切歌を見てヴェイグは呟いた。

「タダノがここで暮らすとなつたら切歌の起床時間が早くなりそうだな」

どこか面白そうにそう眩き、ヴェイグはクッションへ仰向けで寝るべると目を閉じる。やがて寝息が二つになった。そんな平和な居間の光景である。

その頃翼達の部屋では未来が着替えを終えて翼と二人で朝食をどうするかと相談を始めていた。

「今何が残っている？」

「えっと……」

冷蔵庫の中を眺め、未来は見えそうな物を記憶したのか頷いて扉を閉じた。

「見えそうなのは卵にハムとチーズ、野菜はジャガイモが二つと玉ねぎが一つです」

「……ハムエッグとジャガイモに玉ねぎのコンソメスープ、それとパンがあるからチーズトーストでどうだ？」

「うん、いいと思います。じゃ、私はスープの準備しますから野菜切ってもらっても？」

「引き受けた」

こうして始まる朝食準備。もう翼も未来も互いがこうしている事が日常となって久しい。

一人暮らしで朝から誰かがいるというのに慣れていなかった翼も今や昔。今など奏を出迎え、未来を見送る立場であり、買い物などの家事を受け持つ事で、未だ不安は残るもののようにやく一人暮らしをしても大丈夫と思われるぐらいには成長していた。

未来は未来で響以外とこんな暮らしをする事になるなど思ってもいなかったが、翼や奏は響とは違い規則正しい面を持っているためこうして家事を共にする事も多く、それが未来には共同生活の良さを再確認出来ていた。

「トーストはどうします？」

「冷めてしまつては美味しくないからな。奏が帰ってきたら焼き始めるでいいだろう」

「そうですね。あゝ、どうせならトマトソース欲しいかも」

「……ピザトーストか。よし、今後のために今日買って来よう」

「わあ、お願いします。ついでにチーズは板じゃない奴を」

「分かっている。サラミなども欲しいところだな」

「ピーマンもですか?」

「ふふっ、そうだな。ならついでに今夜はピーマンを使った……青椒肉絲にでもするか」

会話だけ聞けば立派な女性同士の生活だろうか。それぞれ作業の手を止める事無く会話を続ける中で笑みを浮かべ続けた。

話題は尽きない。今夜の献立から日用品の必要な物の話へ変わり、そこから派生して自分達が使っていたシャンプーやリンスがこちらではないのが困るなどの話題となっていく。

「あつ、そういうえば駅前のドラッグストアで働いてる人が朝勤にいますんですけど……」

雑談とは気付いた時にはどうしてその話をしていたかを忘れる程に話題が変化していくもの。朝食の支度を終えて、後は食パンを焼いてチーズを乗せるだけとなった頃には、二人の話題は昨夜の名乗り口上となっていたのだ。

「只野さんと奏さんが仕事に行った後も響達がうんうん唸ってましたね」

「中々小日向の口上が思いつかないと言ってな」

揃って苦笑する二人。参考資料として響達は仁志の言っていた「ガオレン」と「ゲキレン」で検索をかけ、その名乗りを見る事になり

……

「何と言うか、凄かったですよね、あれ」

「ああ。一種の様式美と只野さんが言っていたが、それがよく分かるものだった」

「でも、切歌ちゃんにはすっごく刺さってました」

「そうだったな。命あるところ、正義の雄叫びあり、だったか?」

「そんな感じでしたね」

「そこからは小日向の口上よりも全員で言う言葉の方へ意識を取られていたな」

その時の事を思い出して翼は笑う。参考に見た二つの戦隊は個人

の名乗りの後、全員での言葉があった。それを見て切歌が九人全員で言う言葉をと考え始め、響もそれに賛同して二人が中心となつてああでもないこうでもないと言ひ出したのだ。

それを聞いてクリスや調なども修正案やアイディアを出し始め、結局十一時までマリア達の家に残つてしまつたのである。

「本当は十一時前に帰るつもりだつたのだがな」

「ちよつと物騒な時間になつちやいましたね」

慌てて響達はマリア達に就寝の挨拶をしてそれぞれの部屋へと帰つた。十一時を過ぎていた事もあり、部屋に帰つた翼と未来は寝間着へと着替えてすぐに床へ就いたのだ。

「いざとなればギアを展開出来るとはいえ、あまり深夜に出歩くものではないし……」

「女二人、ですから」

「つと、そろそろスープは出来たか？」

「はい、とつくに。もう火を止めてます」

話をしていれば十分二十分などあつという間。気付けば時刻は七時半になろうとしていた。

普段であれば奏が帰ってくる時間である。それに気付いて二人は小首を傾げた。

「何かあつたのだろうか？」

「さあ？　もしかして、今日は遠出してる、とか？」

「……………かもしれないが、心配だな」

「もし何かあれば只野さんがエルちゃんか翼さんへ連絡しますよ」

心配いらないと暗に告げる未来に翼はそうかと納得するように頷き、二人は奏の帰りを待つのだつた。

その奏は今まさにアパート前へ姿を見せようとしていた。

（へへっ、只野さん、驚いてたな……）

ジョギング終わりの別れ際、奏は仁志へ若干の照れを乗せて「只野さん」と呼んだのだ。

初めて会つた時に少し呼ばれて以来久々の呼び方に奏だけでなく仁志も気恥ずかしさを覚え、二人して僅かな間固まつてしまつた程で

ある。

——あ、天羽さん？ 今の……

——なくんてさ。どう？ ちよつとドキつとした？ 先輩はからかい甲斐があるよ。じゃあねっ！

それでも戸惑う仁志へ茶化すようにそう告げて、逃げるように奏はここまで走ってきたのだ。

自覚さえしてしまえば奏は誰よりも積極的ではある。響やクリスとは違い、普段とどこか異なる可愛さを見せる事で仁志の心を大いに乱す事になっていた。

ただ、幸か不幸か奏自身はそれを知りようがないのだが……。

驚きながらもどこか嬉しそうな風にも見えた仁志の顔を思い出し、奏は上機嫌なままでアパートの階段を上っていく。

「つと」

ドアをノックし奏は反応を待った。

「はい、どちら様ですか？」

「未来？ あたしだよ」

そう声をかけるとドアがゆつくりと開いた。

「おかえりなさい奏さん」

「ただいま」

「朝ご飯すぐ用意しますから汗流してきてください」

「了解。ありがと」

奏が帰宅したのを受け、翼がハムを三枚焼き始めて卵を三つ割り始める。その食欲を刺激する音と匂いに笑みを浮かべながら奏はシャワーへと消える。

「わあ……」

器用に卵を片手で割る翼を見て未来が小さく感心するような声を出す。そんな事は彼女も出来ないからだ。

「ん？ どうした？」

「いえ、翼さんって卵片手で割れるんですね」

「ああ、そういう事か。まあこれも最初は出来なかったが、その、味付けなどと違って体調や気温などに左右されない事なのでいつの間に

か……な」

「ふふっ、そういう事ですか。納得です」

要は積み重ねとコツさえ掴めば出来る事なら自分も上達が速いのだ、と、そう翼は言っていた。

未来はそこに翼ならではの不器用さを感じ取り笑みを浮かべるのだった。

翼がハムエッグを作り、未来がチーズトーストの準備を始めた頃、クリスと響は布団を畳み朝食をどうするかと相談をしていた。

「冷蔵庫は空っぽ。スープはまだ開かない」

「となると……食へに行く？」

「ま、それが一番いいだろ。問題は、だ」

「どこで食べるか、だね」

「駅前のファストフードは確定だが、選択肢は二つ」

「ハンバーガーショップか牛丼屋さん……」

「どっちだ？」

正直に本音を言えば二人はハンバーガーがいい。ただ、料金と内容量を考えて牛丼や定食の方がいいと言えるのだ。

この辺りも二人がこの暮らしを始めて身に着けてしまった発想であった。その根底には仁志との暮らしがある意味で息づいているとも言える。

「……ちゃんと食べるなら牛丼屋さんで定食じゃない？」

「だな。で、安く済ませるならハンバーガーか」

「じゃ、その場合はお昼をしっかりと食べよう」

「……その方がいつか」

「決まり、だね！」

「おう。着替えて持ち帰りだ」

仁志への想いを知り合った二人であったが、それで揉める事などはなかった。

そもそも腹芸が出来ない響と苦手なクリスである。それにこの世界での暮らしでその関係性は以前とは大きく変化していた。故に同じ男を好きになったからと言って今更険悪になるような絆ではな

かったのだ。

着替え終えて二人は部屋を出てドアを施錠すると、一瞬だけ仁志の部屋へ目を向ける。

(まだ帰ってきてない……かあ)

(こりや今日はあつちで仮眠してくるな……)

仁志から過度なスキンシップを禁止された二人ではあったが、それでも彼へのアプローチを止めるつもりはなかった。

今は触るのではなく仁志へ女性としての魅力を見せる方向へ切り替えていたのだ。つまりは色仕掛けである。

響もクリスも仁志と会う時だけ若干ではあるがセクシーを意識した服装を心がけているのだ。

響はヒップラインが出るパンツスタイルを好んでするようにし、クリスは胸元が緩めのシャツを好んで着ている。

そもそも仁志に会う時というのは基本仲間内の集まりだ。故に二人も少々大胆な事が出来るという訳だった。

だからこそ今の格好は言うなればガード最大である。惚れた男以外に少しでも好意など見せるものかと言う雰囲気さえ漂っていた。

「クリスちゃん」

「ん？」

「もうすぐ七月だね」

「……だな。まさかお前とこうして夏を迎えるなんて思いもしなかったぜ」

本来であれば留学しているクリスは、今年の夏は長期休暇にならない限り響達と会う事はないだろうと思っていた。

それがまさかの事態によって一種の学生時代の延長戦である。しかもバイトしながらの共同生活というおまけ付きで。

「だよねえ。私も予想さえしてなかったよ」

「てか出来る訳ないだろ。こんな展開をな」

「あく……うん。そうだよね」

「ま、でも、おかげで本当なら出来ない経験も出来てる。悪い事ばかりじゃないって事だ」

「クリスちゃん……うんっ!」

出会いは敵として。それが仲間となつて、友人となつた。そして今やルームメイトである。その変遷だけ抜き取れば、クリスは響がもつとも理想とする関係性の変化と言えるだろう。

以前であれば未来がいた場所にクリスがいる。だがそれは未来とは違い全てを優しく包む訳ではない相手だ。

時には突き放され、あるいは叩かれる事もある。しかしそれが優しくさだと響は知っている。

響が抱き締めて欲しいと思つていても、それがためにならないと分かる。クリスは決してそれをしようとしなのだから。それが以前までの未来には出来ない事だろうか。

「今日はクリスちゃんだけバイトか。晩ご飯どうしょ?」

「あたしはバイトの休憩中に廃棄で何とかするつもりだ。ま、出来るならおにぎりでも握つといてくれ」

「いいよ。塩むすびでいい?」

「おう」

「分かった。じゃ、夜はご飯炊くとしてえ……」

このある意味平和な世界で暮らし、慣れてしまった響とクリス。その思考は最早かつてのようなものではなく、本当にバイトで生計を立てながら生きるフリーターとなりつつある。

だがそれは彼女達だけではない。翼達やエルフナインにヴェイグでさえ元々の暮らしの事を忘れ始める程に、この上位世界は平和で幸せだった。

緊急招集や訓練もなければ任務もない。アルバイトに追われる事はあるが、それも命のやり取りをするかもしれない事に比べれば幸せだ。

それに、それぞれの帰る場所には常に誰かがいる。時には仲間全員で集まり、楽しく騒ぐ事も出来る。世界の壁も何も考えず、まるで最初からそうだったかのように過ごせる時間。

優しく甘い毒。そう分かつていてもそこに浸かるしかない以上どうしようもないと言えた。

そしてその毒は響達だけを蝕んでいる訳ではない。

「お待たせ」

バスタオルで頭を拭きながら仁志は台所へ現れる。それを見てマリアは内心で複雑な思いを抱いていた。

(完全に父親だわ……)

汗を流したただけで現れた仁志を誰もが笑顔で出迎えていたのだ。それはもう父親が席に着くまで食事をしないという古い家のようにも思える。

「兄様、早く座ってください」

「もうお腹ペコペコです」

「只野さん早く早くデス」

「はいはい」

三人の少女に急かさされ、仁志はどこか苦笑しながら椅子へ座る。それを見てヴェイグが満足そうに頷いた。

「じゃあ、手を合わせて……」

「二二二二いただきます(デス)二二二二」

最早家族と言っていていいだろう雰囲気。それにマリアは思わず笑みを浮かべてしまう。視界に映る顔は誰もが笑っていたからだ。

「ずっと……あく、旨い。イヴさん、本当にありがとう」

「どういたしまして」

「今朝のお味噌汁は……きのこ？」

「なめこだよ。セレナは初めてじゃないかな？」

「ヌルヌルしてて掴み辛いです」

「でもそのヌルヌルが体にいいのよ」

「ワカメとなめこでダブルヌルヌルデス。二倍体にいいデスよ」

「俺はこれよりもえのきの方が好きだな。まあ、美味いからいいが」

楽しく賑やかな食卓。それはいつもの事なのだが、やはり仁志とヴェイグも一緒の方が切歌達の笑顔も増えるとマリアは感じていた。(そしてそれはきつと私もね……)

仁志が夫で、切歌とセレナが妹、エルフナインが娘でヴェイグはペットだろう。そう思えばこの光景は自分の一種の理想になる。

装者や研究者などと言う外見に合わない仕事から離れ、家の手伝いをするだけのエルフナインとセレナ、切歌は学業やアルバイトに精を出し義兄の仁志と趣味で盛り上がる。

調もきつと仁志を義兄として慕い、アルバイト先では上司と部下として上手くやるだろう。そこまで考え、マリアは自分が昨夜思った言葉を撤回しようとしていた。

(きつと、私はこれを失うと言われたら受け入れられないでしょうね。本当に、厄介な存在だわ、貴方って)

見つめる先では仁志が切歌達から全員での決め台詞についての意見を求められ、嬉しそうに話している。

その光景を眺め、マリアは一人微笑むのだ。笑顔の中心となっている仁志の事を見つめながら……。

花咲く勇氣

俺の暮らす街から電車で移動する事数駅の総合駅。そこにある百貨店に俺は来ていた。正直眠い。夜勤明けで日中出かけるのは割と辛い。

でもそんな眠気を吹き飛ばす光景が見られると思えばまだ頑張れる。戦える。そう、ここに来ているのは俺だけではない。響達装者全員にエルとヴェイグも来ていたのだ。

「なあタダノ」

フロアに用意されている椅子に座り、ぼんやりとしている俺の腕の中でぼそりとヴェイグが声を出す。

軽く周囲を確認し誰もいない事を確かめた上で俺は俯いて会話開始。

「どうした？」

「一体セレナ達は何を選んでいるんだ？」

その言葉に俺は顔を上げて目の前の光景を眺めた。

「……水着だよ」

「みずぎ？ ああ、あれか。ギアじゃダメなのか？」

そう、今俺がいるのは水着フェアの会場となっているフロア。そこにはまあ平日にも関わらずちらほらと女性の姿が見える。

その中でも一際目を惹くのが俺と共にここへ来た女性達であった。特にイヴさんと天羽さんは凄い。背も高いしスタイルもいいから目立つ目立つ。

クリスや翼は別の意味で目を惹くし、響や切歌ちゃんはその陽気さで目を惹く。だからといって未来や調ちゃんも惹かないかと言えばそんな事もない。

セレナとエルは二人で可愛らしいワンピースタイプを眺めている。微笑ましくて癒されるなあ。

「俺もそう言おうかと思ったんだけどさ、女性には女性の考えがあるからな」

「……よく分からないがそういうものか」

説明すると長くなると思ってた端的に告げた言葉にヴェイグも何かを察したのかそう言って黙った。

それにしても、俺がまさか十人も美女美少女を連れて水着売り場に来る日がこようとは。

これもひとえに動画投稿による収益が増えた事が大きい。これまでの翼達アーティスト組に加え、切歌ちゃん達年少組の動画も思った以上に再生数を稼いでいるのだ。

近々残る響達にもやってもらい、戦姫絶唱シンフォギアの認知度を上げてもらおうと考えている。

それにしても、あのコメントのようなコメント、増えないなあ。てつきりあれを切っ掛けにポツポツと増えていくと思ってたんだが……うーん。

「そう簡単に上手くはいかないか……」

そもそもあのコメントも本当に「戦姫絶唱シンフォギア」を知ってる人だったかも分からない。何かを勘違いして聞き覚えがあると思っただけの可能性もない訳じゃないんだ。

それでもやらないよりはマシと思っただけでもない訳だけど。

「兄様〜」

そんな事を考えてると俺を呼ぶエルの声。視線を動かせばエルとセレナが揃って手を振っている。来てって事かね？

「はいはい。どうしたんだ？」

ヴェイグを抱えたまま答えながら近付くと、二人からそれぞれ水着を見せられた。

「これでどうでしょう？」

「可愛いって思うんですけど……」

エルの持つてるのは黄色の可愛い水着でセレナは白が眩しい水着。

ただ、セレナの兄ちゃん分の俺としては白はちよつとオススメ出来ない。濡れると透けやすいからなあ。

でも、今はそうでもないのか？ ……分からないから深く考えるのは止めよう。とりあえずはっど。

「そうだなあ……セレナは少し大人の水着にしたらどうかな？」

「大人？」

「そう。セパレートタイプ。上下に分かれてる奴だよ」

駄目と言うのではなく別の方向を提示する。しかもセレナぐらいの年齢は大人つてもものに憧れるだろうから効果はあると思うんだ。

「エルのはそれでいいと思うよ。セレナは少しだけ大人になってみようか」

「少し大人に……」

うん、自分で言っておいてなんだけど今のかなりヤバい台詞だな。ここにいるのがエルやセレナで良かった。

「じゃあ、ちよつとだけ向こうを見てきます」

「うん。エルはそれをイヴさんへ渡しておいで」

「はい！」

「じゃ、俺はまたさっきのところに座ってるから」

妹分二人と分かれて再び椅子へと戻ろうとすると、今度は響達から呼びかけられる。

「こ、これとかどうですか？」

「あ、あんたの意見を聞かせてくれ」

「デス」

少し照れが見える響とクリス。切歌ちゃんは恥じらいもなくニコニコしている。

色はイメージカラーに合わせたんだろう。響が黄色でクリスが赤、切歌ちゃんが緑だ。

響がオレンジじゃないのは天羽さんとかぶるのを避けたのか？

「そ、そうだな……」

響もクリスも中々大胆な感じがする。これ、もしかしなくてもそういう事、か？

で、切歌ちゃんはそんな二人とは違い無難な感じ。ただ、着てるとこを想像すると不味い事になりそうなので自重する。

本当に、ある種の告白を受けたからか響とクリスを見る目が明らかに不味い。そして向こうのこつちを見る目はより熱を帯びてる。

俺が二人へ密着や過度な接近禁止を告げた事。そこで明らかにさ

れたこちらへの異性としての好意。

今は答えを出せない俺だけど、この事件が解決したその時には必ず答えを出すと決めた。

それを響、クリス、翼、未来は受け入れてくれたのだ。今は自分達が恋してる事を知ってくれただけでいいと、そう言っ

「えっと、うん、いいと思う、よ？」

「そ、それだけ、ですか？」

「も、もう少し何かないのかよ？」

俺の感想に明らかかな不満を見せる二人。くっ、上目でこっちを見上げるなんてズルいぞ。

「只野さん、顔赤いデスけどどうしたデスか？」

「あー、うん。こんな経験なかったしあるとも思っ

「なあ、や、やっぱ男ってのはああいうのが好みだったりすんのかよ？」

「ああいうの……？」

クリスの質問に顔を戻してみると彼女は顔を別の場所へ向ける。そこへ俺も視線を動かして……っ！

「あ、あれは好みとかじゃないって。その、えっと、少なくとも大勢に見られる場所であれを着てくれて言う男は、よっぽどの馬鹿かその相手を大事に思っ

「クリスが見たのは所謂スリングショットだ。その近くにはマイクロビキニまである。あんなもん、俺だってエロ系の物でしか見た事ない。」

「そ、そっか」

「で、でも、逆に言えばそうじゃないなら着て欲しい、ですか？」

「……………ノーコメント」

「あ、あんな紐みたいな水着があるんデスね。初めて知ったデスよ」

「切歌ちゃん、お願いだから見に行かないでくれよ？」

「へ？ は、はいデス」

俺の願いに頷く切歌ちゃん。良かった。これ、多分言わなかったら見に行つてたぞ。

「只野さん」

「こ、こつちにも意見ください」

後ろから聞こえた声に振り向けば翼と未来が試着室から顔だけ出している。

……とても嬉しくて嫌な予感がしている。実際響やクリスから恨めしい視線を感じる。

「わ、分かった」

進むも地獄戻るも地獄。なら進んでやろうじゃないか。死ぬ時は前のめりでいたいもんだ。

試着室前に到着するとまず翼がカーテンを開けた。

「ど、どうでしょう？」

イメージカラーの青い水着だが、夏らしい感じがしてとてもいいと思う。

あと、や、やっぱりこうやって目の前で見せられると綺麗だと改めて感じる。俺、こんな女性と短期間とは言え同居してたのか。

「え、えつと、只野さん？ 出来れば感想を頂きたいのですが……」

「あつ！ ご、ごめん。その、とってもいいと思う。翼によく似合ってるよ」

「そ、そうですか……。なら、これにします」

最後に照れくさそうに微笑んで翼はカーテンを閉める。

うん、最後の笑顔は反則だろ。というか、翼はあの俺へ好意を隠さなくなった瞬間から不器用ながらの素直なアプローチが凄い。

——この出会いは無駄にはしませんしするつもりもありません。そして、この想いもです。

あのクウガを初めて見せた鑑賞会。あの時から翼は年長組とは思えない程可愛くアプローチをしてくる。

今のはそういう意味じゃかなり攻めてきた。そして効果は抜群だ。

急所に当たってはいいないがもう一気に精神力が減ったし。

「た、只野さん、いいですか？」

「え？ あ、うん」

で、俺はこの状態で未来の水着姿を拝める訳だ。カーテンが開いて視界に見えた景色は……綺麗な紫色でした。

「す、少し迷ったんですけど……」

正直言つて、そこはかとなくエロい。デザインがとかじゃなく、単純に紫色の水着を着てる未来からエロさみたいのが出ている気がする。

「……いい。その、それしか言えないけど、いいと思う」

「ほ、本当ですか？」

「うん。褒め言葉に受け取られないかもしれないけど、少しエッチな感じもするし」

「っ!? そ、そうですか。じゃ、これにします」

シャツと言う音でカーテンが閉められる。

「タダノ、今は言つていい言葉なのか？」

小さく問いかけられた言葉で俺は我に返る。言うに事欠いて女の子にエロくていいって何だよ……。

「……誰にも言わないでくれ」

「……分かった」

密かに交わされる男と男の約束。いかな。寝不足なのが駄目な方へ出た気がする。そう思って試着室から離れると今度は天羽さんとイヴさんに出くわす。

「おつ、丁度いいところに。先輩、どっちがいいと思う？」

見せられたのはオレンジと黒のビキニタイプ。きつと詳しい名前があるんだろうけど俺には残念ながら分からない。

「……どっちも見たい」

「貴方ねえ……」

「あははっ、今の先輩は素直だね」

呆れるようにこちらを見るイヴさんの手にも黒のビキニタイプがあった。

天羽さんのと違って交差するような形だ。

「な、何？ これ、何か変？」

「……いや、イヴさんが黒とかエロいなあって」

「っ!? た、只野？ 本当に大丈夫？」

「あー、こりやもう大分眠気と疲れで思考能力落ちてるね」

俺を心配そうに見つめるイヴさんとどこか苦笑している天羽さん。そこでやっと俺も自分が何を言ったか理解して申し訳なく思った。

「ごめん。その、どこかで俺もこの状況に理性のたがが緩んでるんだと思う」

「まあ仕方ないって。先輩、女っ気ゼロだったもんね」

「お恥ずかしながら……」

「そ、それは分かかってるけど、ま、まあいいわ。只野、貴方は椅子に座って休んでなさい」

「そうする。すまない二人共。でも二人はスタイルも顔立ちも整ってるから何を着ても似合うよ。だから当日を楽しみにさせてもらう」

そう告げて俺はその場からフラフラと離れたところで調ちゃんとセレナに捕まった。

「お揃いにしようと思ったんですけど、どうですか？」

「似合うかな、お兄ちゃん」

天使ですかね。ピンクとホワイトの水着天使だ。色気よりも可愛さ重視なところもいい。今のダメな俺が浄化される感じがする。

「うん、とってもいいと思うよ。可愛いし似合うんじゃないかな」

「じゃあこれにしよう」

「うん、ありがとうお兄ちゃん」

最後の最後に癒しをもらい俺は元居た椅子へと帰還。

「あ……幸せだけど辛かったあ」

「……矛盾してるな。でもみんな優しい匂いをさせてたぞ」

「その一言でかなり救われるよ」

ヴェイグの匂い判定だときっきの俺はセーフではあったらしい。元気がなかったのが良かったのかもしれないな。

ただ、間違いなくこれは帰ってから俺は……なあ。翼と未来のは実

物を着てるところを見せられた訳だし、イヴさんと天羽さんのは体に当てた所を想像出来る訳で、もつと言えば響やクリス、切歌ちゃんなどは体へ当てて見せてきた。

……うん、これは仕方ないよな。ある意味で早く帰りたい。そう思いながら俺は女性陣が会計を終えて戻るのを待つのだった……。

こつちに来て初めての都会。兄様は元気がないようですけど、それでも今日は休みだからと姉様達に付き合っています。

動画配信で少しは収入に余裕が出来たと言って、兄様はそれを僕らへ還元したいと言ってくれました。勿論僕らはそんな事をしなくてもいいと言ったんですが、兄様は自分が稼いだお金じゃないからと言って現在に至ります。

今は兄様は僕やヴェイグさんと一緒に姉様達が買い物終わるまで待機中です。えっと、下着の買い物なので兄様は必要ありませんし僕も買う必要がないから、ヴェイグさんと三人で自販機のある場所で飲み物を買ってゆったり待ちぼうけしています。

「凄い人だなあ……」

「これでも平日だから少ない方だよ。休日をもっと凄い人が来るんだ」

椅子に座って眺めている景色へ僕がそう呟くと兄様がそう言っただけで遠い目をしました。

「そうなんですか？」

「うん。まあ、俺がよく知ってるのは地下の方だけだよ」

「地下？ 何を扱ってるんですか？」

「一番下はスーパーみたいな感じ。その一つ上は土産物とかお惣菜とか。で、俺はその土産物とかのフロアで働いてた事がある」

そう告げる兄様はさつきよりも疲れた顔をしていた。

「えっと……」

だから詳しく聞いていいのか判断がつかない。そうしていると兄様がそんな僕に苦笑して頭を撫でてくれた。

「ははっ、気を遣わせたかな。まあ、あまり良い思い出じゃないんだ

よ」

「そうなんですネ……」

「うん。時給は良かったし社食……って言っても伝わらないか。社員食堂なら分かるかな？」

「あつ、はい。似たようなものが本部にもありましたから」

食堂なら僕も使っていたので分かる。

「ああ、そっか。じゃ、そういう物がここにもあってさ。安く飯が食えたから重宝してたんだよ」

「やっぱりそういう施設はそうなんですネ」

「会社って言うか、まあ組織から補助が出てるからね」

兄様はずっと僕の事を撫でてくれた。まるで詳しい話を聞かない僕へ感謝するように。

「あの、一ついいですか？」

「ん？」

だから、僕は敢えて違う事を聞こうと思った。

「この地下のおそうぎいはスーパーのものどう違うんですか？」

「あく、それは実際見せた方がいいなあ。よし、じゃあ今日はデパ地下でお昼を買って帰ろう」

「でぱちか？」

初めて聞く言葉です。でぱちか……地下を意味する事は分かりませんが、でぱって何だろう？

その後は兄様から寝ないように話をして欲しいと頼まれたので、色々お喋りした。

今日のお出かけを姉様達みんなで楽しみにしていた事。海かプールに行けるのを楽しみにしてる事。

そうそう、セレナ姉さんと二人でまたソフトクリームを食べた事も話した。季節限定のパイソフソフトはとっても美味しかったです！

兄様は僕の話聞いて嬉しそうに笑っていた。気付けば僕がずっと喋ってて、兄様は聞いてるだけになってたけど、それでも笑顔のままだった。

「お待たせ」

そこへ姉様の声が出て僕が振り向くと皆さんが笑顔で立っていた。何だかそれが嬉しくて、僕も笑顔を返した。

「じゃ、帰りましょう」

「あー、ちよつと待って。エルにデパ地下を見せてやりたいんだ。で、ついでにそこで昼ごはんを買おう。ちよつとリッチな感じに、さ」

「「おおっ……」」

響さんと切歌お姉ちゃんに調お姉ちゃんが驚くような声を出した。どうやら三人は地下を知っているみたいです。

「マジかよ。結構値が張るだろ、こういうところは」

「先輩、本当に大丈夫？」

「任せてよ。今の俺、ちよつとした小金持ちだから」

「ふふっ、そこで小金つて言うところが只野さんらしいなあ」

「まったく。では行きましょう」

翼さんの言葉で動き出そうとした時、セレナ姉さんが小首を傾げた。

「お兄ちゃん、でぱちかかって何？」

「デパートの地下の略。大抵はそこで惣菜や美味しいお菓子とかの食品を扱ってるんだ」

「「そうなんだ……」」

僕とセレナ姉さんの声が重なり何故か兄様が小さく笑った。いえ、皆さんが笑った。それが嬉しくて僕もセレナ姉さんもヴェイグさんも笑う。

「よし、じゃあ行こう。ただこれだけの集団で動くときさすがに迷惑になるだろうから、三つか四つぐらいのグループに分かれてくれる？」

兄様がそう言うのと僕らは顔を見合わせる。

「じゃあ、エルとセレナは私と一緒にね」

「はい」

「うん」

でもすぐに僕とセレナ姉さんは姉様と一緒に決まりました。

「私は……未来とかな？」

「ならクリスもだね」

「ま、そうなるか」

「じゃあアタシ達二人デスね」

「うん」

「じゃ……」

「私達も二人だね」

「え？ 俺は？」

その瞬間僕も含めた皆さんが同じ反応をした。

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「いや、俺は何？ 一人で待つてろって事？」

兄様が若干悲しそうな顔をした次の瞬間、切歌お姉ちゃんが手を挙げた。

「はいはい。ならアタシ達と一緒にお願いしたいデス」

「うん、私達は大人がいないから只野さんがいてくれた方が助かります」

「だそうよ？」

「了解。なら俺は切歌ちゃんと調ちゃんの保護者をさせてもらうよ」

こうしてグループ分けが決まり、僕達はデパ地下へと向かう事になりました。

初めてのデパ地下、楽しみです！

大勢の人で賑わうフロア。土産物販売の場所と和菓子や洋菓子の場所で構成されたエリアと、惣菜や米飯などの飲食物を販売するエリアの二つがフロアを形成していた。

仁志は各グループに5000円を支給。大金ではないが、各々の元々の所持金などを合わせれば十分買い物を楽しめるだろうと判断したのだ。

ただ、翼、エルフナイン、セレナに関しては配慮し、翼へは別途5000円。エルフナインとセレナに関してはマリアへ密かに追加で5000円を渡す事で対処した。

半年前なら考えられない散財であるが、それが可能な程動画による収入が仁志の財政を潤している証拠でもある。

「じゃ、待ち合わせは入ってきた時に見た金時計で」

その言葉を合図に響達はグループに分かれて動き出す。初めて見る物や店など、まさしく百貨店らしい光景に心を弾ませながら。

さて、花より団子な響を中心としたクリスマスと未来は早々に惣菜コーナーから見始めていた。

「うわあ、見て見て。ローストビーフだって」

「おおっ、美味そうな見た目じゃねーか」

「結構な値段だね」

グラム辺りの値段を見て未来が若干苦い顔をする。それでも今日は臨時収入があったようなものなので、彼女も買うのを止めようとは言わなかった。

「あつ、こつちには和牛を使ったメンチカツだって！」

「くそっ、こつちもいいな」

「ねっ、向こうはサラダとか扱ってるよ」

どこを見ても目を惹く物が並んでいる。男も女も関係なくデパ地下は楽しいものなのだ。

ならばと一通り見て回り、印象に残った物を買って行こうと決めて三人は動き出す。

それは、傍から見れば仲良し女学生にしか見えなかっただろう。誰も思うまい。彼女達がその歳にして並の者が体験しないだろう苦労や不幸を味わっているとは。

「中華だ！ 肉まん美味しそう……」

「あつちは串揚げだって。何があるのかな？」

「おいおい、いくら金があっても足らねーぞ。てか、あれは何だ？ 大判焼き？」

女三人寄れば姦しい。更に今や彼女達三人の仲は以前よりも親密になつていけると言える。会話を弾ませながら一周した後は、結局もう一度逆に回って最低一品は購入していく事となるのだった。

響達が一週した後、どうしようかと考え出した頃、マリアはセレナとエルフナインにヴェイグを連れて洋菓子店の並びを歩いていた。

「うわあ……」

見た目も華やかなケーキやパフエ。ゼリーやプリン、カステラやバームクーヘンなど様々な洋菓子がそれに相応しい値段で売られている。

可愛らしい二人は知らぬ者が見れば普通に姉妹と思う程の仲の良さ。ケースを眺める間も手を繋いだままというそんな二人を見れば店員も笑みが自然と零れると言うものだ。

「欲しい物があるなら言いなさい。ただし、沢山は買えないから考えて選ぶのよ?」

「はい」

返事はすれど意識はケースの中。それにマリアは小さく苦笑した。「まったく……。まあ、気持ちは分かるけどね」

マリアとて一人で見えて回っていればきつと目移りしただろう場所だった。最初に見た和菓子店の並びもついつい足を止め、三人で分け合って食べようと言っていくつも購入してしまったのだから。

密かにヴェイグの希望も聞きつつ、満を持しての洋菓子店通りだったのだ。

結局ここでも三人で分け合うという事であれもこれもこれもと買ってしまふ事になるのだが、それもまたいい思い出となる。

さて、仲の良い三人組や三姉妹といった様子の二組とは違い、いかにも女友達と言った雰囲気では歩いているのが翼と奏であった。

「おっ、おこわだってさ」

「へえ、珍しいね」

「山菜、五目……。どれも美味しそうだね」

「買ってく?」

「うーん……」

腕を組み考え込む奏。それに小さく笑みを浮かべ、翼は視線を動かしてある店を見つけて奏の服の袖を軽く引つ張った。

「ねえねえ奏。あれ見て」

「ん? ……鰻、か」

「土用の丑の日にはまだ早いけど、買っていこうよ。鰻なんてこっちに來てから食べてないでしょ?」

ある意味では意味合いが周囲と本人で異なる言葉だった。こつちに来てからが周囲にはこの地方に来てと捉える事が出来たためである。

誰も思わないだろう。それがこの世界に来てと言う意味などは。

「……そうだね。うし、じゃあ今日の昼は鰻だ」

「うんっ！」

足取り軽く二人が地元の鰻の名店へ向かう中、仁志達とは言えば

……

「「うーん……」」

揃って和菓子店の生菓子のディスプレイを眺めて唸っていた。

そこには見た目も綺麗な練り切りや羽二重などの和菓子が並べられている。

「どれも綺麗デス……美味しそうデス……」

「そうだね。でも……」

「一個300円ぐらいするもんなあ」

「「うーん……」」

見た目にはとてもではないが家族などに見えない三人ではあるが、幸いにも仁志と調は同じ黒髪だったため、二人が兄妹と思われる、切歌は調の友人だろうと推察されていた。

人間、分からない事は自分の都合のいい様に勝手な解釈をしてしまうものである。

「……よし、ここは五種類三人分買おう」

「ま、マジデスか？」

「太っ腹……」

「普段我慢してる分、こういう時に散財しないとな。て訳で……すみません」

こうして仁志達はまず昼食よりも先にデザートを購入。その次に彼らが向かったのは……

「「牛まぶし？」」

「そう。美味いんだよ、これ。結構な値段するけどね」

かつて働いていた事もあり、仁志の案内に導かれるまま切歌と調も

弁当を購入。先程の和菓子も仁志のオススメであった。

こうしてそれぞれにデパ地下を楽しんだ彼らは電車に揺られて暮らしている街へと戻り、マリア達の家に着いた時にはもう既に午後一時を過ぎていた。

「さて、ではそれぞれに買った物を見ていこうか」

テーブル狭しと並べられていく様々な食べ物。それらを見て「やっぱり気になるよね!」と言う声が上がったり「あー、迷ったんだよそれ」などの意見が上がる。

まずは甘い物以外の物が並べられる中、やはり注目を集めたのは翼と奏の買った鰻弁当であった。

「じゃーん」

揃って笑みを浮かべて蓋を外す二人。その見た目と匂いに全員が唾を飲む。

「いいないいな。鰻いいな」

「さすがツヴァイウイング、選んだご飯が豪勢……」

「二人して中々高い物いったなあ」

「まあね。たまの贅沢って思ってたさ」

値段を知っているのか仁志が若干感心したような反応を見せる。奏はそれに楽しげな笑みを返しながら視線をある物へ向けた。

「で、先輩達を買ったそれは何?」

「切歌ちゃん、調ちゃん、教えてやって」

「はいデス。これは何とっ!」

「牛まぶし弁当です」

蓋を開ければそこには食べやすい大きさに切られた火を通した牛肉がご飯の上に並べられていた。

「只野さんオススメのご飯デス」

「とっても美味しいって言われました」

「そうなんだよ。これに備え付けのたれを」

意気揚々と仁志が説明しようとした時だった。可愛らしい音がその場に響き渡り、誰もがその音の出所へ目を向けた。

「に、兄様……そろそろ僕は限界です」

恥ずかしそうに俯いてエルがそう告げた瞬間、仁志だけでなくその場の全員が意見を一致させたように頷き合った。

早く食事にしよう。ご飯を食べよう。この可愛い天使の恥じらいを早く消してやりたいと。

「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」

仁志達は全員が全員メインとなる食べ物個人用に買って、後は分け合って食べようとしていた。

結果、多少かぶる事はあったもののほとんどが重なる事はなかった。しかもかぶったものも串揚げというかぶっても問題ないという偶然もあって、少し遅めの昼食は大いに盛り上がる事となる。

「この煮っ転がし美味っ！ 翼も食べなって！」

「うん。あつ、このパリパリサラダも美味しいからどうぞ？」

「はあく……この角煮、トロットロデス」

「響、チーズの串揚げ美味しいよ。食べる？」

「食べる食べる！ じゃ、未来にはこのエビ焼売あげるっ！」

「ローストビーフ……禁断の味……」

「美味しいです……」

「エル、俺にも一口くれ」

「んだよ、どれ食べても美味いとか凄すぎんだろデパ地下」

「その分いい値段してたもの。って、ちよつと只野？ 貴方自分のご飯があるでしょ？」

「いいじゃないか。イヴさんだって俺からがつり持っていったろ？」

楽しく、賑やかに、時間は過ぎる。食事が終わると仁志がマリアへある物を渡した。

「これは？」

「食後の甘味。羊羹だよ」

「羊羹……じゃあ緑茶がいいかしら？」

「あー、そうだなあ。ちよつと濃いめにした方がいいかも」

「濃いめ、ね。ティーパックだけでもいいかしら？」

「十分だよ。じゃ、俺が羊羹切っておくからお茶をお願いしても？」

「分かったわ」

まるで夫婦のように会話する二人を見つめ、若干不満げな顔をするのが奏であった。

(何だよマリアの奴。すっかり只野さんの嫁さんみたいじゃないか……)

台所で仲良く会話する姿はもう夫婦にしか奏には見えなかった。ある時を切つ掛けに自身の中にあつた仁志への恋心を自覚した今、マリアの存在は奏にとって無視できないものである。

何せ自分がただのバイト仲間として過ごしている間も、無自覚に夫婦の真似事をしていたのだ。エルやセレナという妹分であり娘のような存在もあつて、マリアの奥さん感は中々のものであつた。

そしてそれはその当の本人も自覚している事である。

(ふふっ、何だか信じられないわね。こうして私がお茶くみをしてるなんて……)

チラリと視線を動かせば、そこには羊羹を出来るだけ等分に切り分けようとしている仁志の姿。

それに無意識に笑みを零し、マリアは人数分の入れ物を用意している。

こうして食後のお茶とお茶請けに羊羹が出され、響達はならばと同時に口に入れて……

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

仁志と翼以外が目を見開いたのだ。

「た、只野さんっ！ な、何ですかこれ!?!」

「何って羊羹だけど?」

「い、いやいや……私の知ってる水ようかんじゃない口当たりなんですけど……」

「美味いだろ? 昔一回だけ食べた事があつてさ。いやあ、その時は俺もみんなみたいなの反応になつたっけ」

「美味しいデス……口の中でとろけたデスよお」

「甘さもすごく上品……美味しい……」

幸せそうな表情で頬を押さえる切歌と調。

「俺は初めて食べたが、よーかんはこういう物なのか？」

「みずようかんだそうです。僕も初めてですけど……みずようかん、美味しいなあ」

「私も初めて。プリンと同じぐらい好きになりそう……」

羊羹初体験が水羊羹となったヴェイグ、エルフナイン、セレナの三人。その表情は初めて故に若干驚きが残っていた。

「なんつーもん食わせてくれるんだよ……。こんなん食ったら、普通の羊羹食えなくなるぞ……」

「分かるよクリス。一体いくらするんだよ、これ……」

食べた後のつまようじを恨めしそうに見つめるクリスと奏。何故ならこれを買った店が自分達の世界にないと知っているからだ。

いや、あつたとしても買うのが難しいと知っていた。今彼女達が暮らしている場所は本来住んでいる場所から遠く離れているためだ。

「つ、翼さんはそんなに驚いてないんですね？」

「ん？ ああ、そうだな。美味だとは思うが……」

「つ、翼？ もしかしてこれに近い物を食べた事があるの？」

「……だ、ダメだろうか？」

和風のお嬢様であった翼だけはこの羊羹を平然と食べていた。そしてその言葉を聞いて仁志が納得するように頷く。

「まあそうだろうなあ。古風な家のお嬢様だった翼はそこまで驚かないか。これ、言っても一本1600円程度だし」

「『『『『『1600円っ!』『』『』『』』』』』」

「それでこれですか。ではその店は相当の名店ですね」

値段に驚く周囲と違い微笑みながらお茶を啜る翼。その構図は仁志には庶民とお嬢様という風にしか見えなかった。

(何というか、育ちの差と言えはそこまでなんだけどなあ……)

生まれながらにして旧家の一人娘として育てられた事。そこにおそらくは八紘の見えない愛情があるのだらうと思ひ、仁志は小さく笑みを浮かべながら羊羹を口へ運ぶ。

いつか教えてあげよう。その体に身に着いた様々な事に風鳴八紘の愛情が生きているのだと、そう思つて。

「……幸せだなあ」

視界に映るのは二つ目の羊羹を口へ運び微笑む十一人の姿。その、本当なら有り得ない光景に仁志は笑みを深くしそう呟くのだった……。

穏やかな午後の陽射し。夕日とまではいかないけど、正午に比べれば勢いは十分落ちていけると言えるわね。

七月になったしその眩しさや熱量は先月よりは増している。それでも真夏程の強さはまだない。

それを浴びながら只野がやや挙動不審気味に周囲を見回していた。まったく……こういう時は情けないんだから。

「何してるのよ？ 止めなさいよみつともない」

私がそう言うのと只野がやっと視線を動かし続けるのを止める。でもどこか怯えているようにも見えた。

「いや、だってさ」

「見られても平気よ。いつかの貴方の言葉じゃないけど、これを見てデートだって思う人間は想像力に欠けてるわ。スーパーでいかにもな食料品の買い物。これのどこに甘い空気があるとでも？」

そう私がジト目で言ってるやるとやっと受け入れる気になったのか只野も無言で頭を掻いた。

まあ、実際私の中でも半分デートじゃない気持ちだ。自分で言った事だけど、やっぱり考え直すべきだったかもしれない。

「イヴさん、いつもこの時間に買い物？」

「まさか。バイトがある時はそもそも来れないでしょ？」

「……そっか」

「そうよ。だから今はそういう日は調にお願いしてるわ」

調がない頃は開店と同時に入って素早く献立を考えて帰宅すると、後の事をエルやセレナにお願いしてバイトへ行っていた。

あの頃に比べると今はかなり楽になったわ。人手があるって良い事よね。

「あー、成程なあ。彼女も家事は得意だからうってつけだ」

「ええ。助かってるわ」

只野が呼び方を変えた日から調もより家事へ身を入れるようになった。多分だけど只野にすっかり者扱いされたのが嬉しかったんでしょね。

セレナは呼び捨てにされてから只野を本当に兄として想うようになってるみたいで、わ、私に時々聞いてくるのよ……。

——ねえ、お兄ちゃんってどうしたら本当のお兄ちゃんになってくれるかな？

あれ、つまりそういう事よね？ 私に只野と結婚してって、そう言ってるのよね？

返事が怖くて聞いてないけど、多分そういう事だと思う。も、もしかして私の気持ちが大バレてる？

「イヴさん、どうしたの？ そんなに茄子が気になる？」
「え……？ つええ、麻婆茄子とかどうかしら？」

「あー、いいと思うよ。夏野菜だしさ。じゃ、あとはどうする？」
「そうね……いつそかに玉？」

「中華で統一かあ。いいねいいね」

何とか誤魔化した。今日はお昼があれだけ豪華だったから質素に思っていたけど……。

「他にも何か案はある？」

「ん？ ないない。イヴさんの作る料理は何でも美味しいので、こちらとしては文句も注文もないよ」

「そ、そう……」

不自然じゃない動かし方で顔を背ける。ああ、もう本当に駄目ね。今の何て事のない言葉でさえ嬉しくなってしまうなんて。

本当に、私って弱い女だわ。いえ、元々強くなかなかった。強くあろうとしていただけ。実際、そうじゃなくてもいいとなったら、私はここまで弱く情けない女になってしまうもの。

「それにしても、これで本当にゲージ上がるかね？」

そんな時、只野がぼそつと呟いた言葉に私は思わず息を呑んだ。

そうだ。これの本来の目的はその検証。今はあのゲージを上げ

る事になっている。

只野はあのゲージの上がり方が最近停滞している響などに関しては、好感度と仮定した場合、熱量みたいなものが最後へ向かうにつれて必要量が多くなっているのではと推察していた。

そこで私が懸念していた増減する事ではなく増加のみしかないと素なのではと告げると、只野は割と真剣に悩んでくれた。

——俺もイヴさんの意見に賛成するよ。好感度よりもそっちの考えの方がしつくりくる。

そう言った只野は時々見せる凜々しい顔をしていた。

「ねえ只野。思うんだけど、あのゲージって貴方と過ごした時間の長さや濃さなんじゃないかしら？」

そう、濃度。それを要素として組み込めば呼び方を変えたり、只野との距離感を縮める事で上がる理由も説明がつく。

「……そうかもしれない。時間なら減る事はないし、濃度が関係するならば何か強く思い出に残る事とかあれば大きく上昇するのも納得だ。うん、さすがイヴさん」

「それほどでもないわ。で、そうだとしたら、よ？」
「うん」

「ここからよ。こ、ここからが勝負。」

「いい加減、私をイヴって呼ぶの止めてみない？ マリアって、そう呼んでくれていいから」

まずは一步。この流れなら只野は私の想いに気付かないはず。

「いいの？」

「ええ。ゲージを上げないといけないし、妹達が名前で呼ばれてるのに私だけそうじゃないって、距離があるじゃない」

「……まあそうだけど」

何か煮え切らない態度ね。もしかして気付いてる？

「はつきりしなさいよ。何？ 私を名前で呼べない理由でもある？」

「いや、何て言えばいいのかな？ その、天羽さんが気にしないかなって」

言われて思い出した。そう、そういう事。奏へ気を遣ってるわけ

ね。

「ならこれを機に奏へ貴方から切り出して見たら？　意外とあつさり受け入れると思うけど？」

「そうかなあ？　まあ、じゃあ駄目元で言ってみる。ありがと、マリアさん」

「……さん？」

「え？　いけなかった？」

まったく、本当にどこまでも鈍いというかずれてるわね。でも、ここで下手に迫り過ぎると只野が逃げるかもしれないし、ここはこれで我慢、か。

「いえ、それでいいわ」

今は、ね。いずれ、いずれマリアと呼ばせてみせる。それも、私からじゃなく向こうからそう自発的に、かしら。

買い物を終えて荷物を只野が持つ。私は手ぶらだ。ふふっ、これも何だか不思議だわ。いつもなら絶対有り得ないもの。

「上機嫌だね、マリアさん」

「そう？」

「自覚ない？　基本ずっと笑ってるよ」

「えっ？　嘘？」

「ホントホント。綺麗で可愛いから黙ってたけどさ」

思わず顔を両手で隠す。一瞬で顔が熱を持つのが分かる。

これは今言われた言葉も影響してる。本当に貴方って人は……。

「ち、ちなみにいつから？」

「……買い物を始めてからずっとですが？」

「っ?!」

や、やだっ！　自分ではそんなつもりなかったのに……。

「まあ俺もあまりマリアさんの事言えないけどね」

「え……？」

私が見つめると只野はどこか照れくさそうに顔を下へ向ける。

「その、女性と二人きりでスーパーで買い物なんて実家の母さん以外と経験ないからさ。これだけの事なのに年甲斐もなく緊張と感動を」

「そ、そう……」

ああっ！ もうっ！ 余計顔が熱くなるじゃないっ！ 私と同じような感覚でいたって事でしょ、それっ！

「と、ともあれ帰ってステータスを確認してみよう、うん。それでマリアさんのゲージが大きく変化してたらさっきの仮定は間違ってるってないと言える」

「そ、そうね」

そこからしばらく私達に会話はなかった。でも、それでも良かった。家へ着くまでのほんの数分。だけどその間、只野は「これも検証だから」と言っ手て手を繋いでくれたのだから。

……本当に、ズルいわよ貴方。こんな事されたら、私だって本気になるしかないじゃない。

そのおかげもあつてか、私のゲージは一気に響やクリスに迫るぐらゐまで染まった。

ただ、それを聞いて私と只野は何とも言えない表情で互いを見合わせ、赤面して沈黙した……。

「ふ………どう？ 俺も結構体力ついたと思わないか？」

バイト上がりのジヨギング終わり。そう言って只野さんはあたしへ笑みを見せる。

「まあね。最初の頃は喋る事さえ出来ないぐらいになってた時もあったし」

「あれは奏が俺を無視するようなペースで走ったからだろ？」

「っあ、あれについては謝ったじゃん。それに、なんだかんだで先輩もついてきたし」

名前で呼ばれる度にドキツとする。何でも昨日からマリアの事を名前で呼ぶ事になったらしく、あたしの事も名前で呼んでもいいかって今日のバイトで聞かれたのでOKを出した。

で、バイト中は天羽さん呼びだったから何とも思わなかったけど、こうして勤務が終わった後から名前で呼び捨てになって正直ドキドキしてる自分がある。

何でも理由はあたしは先輩って呼んでるから後輩扱いで呼び捨てなんだって。

……あの時のあたし、ナイスっ！ からかってやろうとして正解だよっ！

今、おかげでドキドキして死になっただけだよ！

「かなりしんどかったけどね。でも、それが今やこれだよ。終わった後でも平気で会話出来る」

「むしろそうじゃないと困るよ。今だから言うけど、あたしが本気でやったら絶対先輩倒れてるから」

「ああ、うん。それは何となく分かっている。未来と走った時にも感じたから」

「ならいいけど……」

そういえば未来はデートがジョギングだったっけ。最初に本気で走って只野さんをバテバテにさせたって聞いた。

「っと、そうだ。奏」

「な、何？」

やばっ、今の本気で息が止まるかと思った。好きな男に結構真剣な感じで名前を呼び捨てにされるの、こんなにドキツとするもんなんだ。

「今度、バイト終わりに二人で朝食食べないか？ その、さすがに奏と二人で部屋は……さ」

「あ、ああ、そういう事。いいよ」

なんてことはない。ただのデート内容の変更だ。ま、あたしと二人きりって今の只野さんにとっては毒にしかならないだろうからね。

……もしそうだったら今のあたしはどうするんだろう。

「何かごめん。その代わりになるか分からないけど、当日の朝食はファストフードじゃない事だけ約束する」

「ははっ、何だいそれ。そんな当然の事約束されても困るよ先輩」

「……やっぱし？」

「当たり前。どうせファミレスとかだろ？」

そう言うのと只野さんが露骨に表情を歪めた。やっぱりね。駅前の

ファミレスじゃないかと思ったんだ。どうせならもつと落ち着いた場所か洒落た感じの店がいいな。

「……………分かった。なら、もつとマシなところにする」

「ホント？ 期待していい？」

「少なくとも失望だけはさせないと約束するよ」

苦笑する只野さんにあたしは笑みを返す。さてさて、なら期待させてもらいましょうか。

「そういえば、最近先輩ってどこを散歩してるの？」

このままだと解散の流れになると思ってた話題を振った。正直そこまで興味はないけど、もう少しだけ只野さんと一緒にいたかったから。

「あれ？ 聞いてない？」

「へ？」

と思っただら返ってきたのは予想外の一言。聞くって、何を誰に？

「今は俺、奏がバイトじゃない日は未来と走ってるんだよ。俺が一人の散歩に飽き始めてるって話したのを覚えててくれてさ。じゃあ一緒に走りますかってね」

「……………へえ」

そんな事一言も聞いた事ない。翼は未来が運動不足解消に走り始めたって教えてくれたけど、只野さんと一緒なんて一言も言っていなかった。

つまり未来が隠してた。それはどうして？ 考えるまでもない。

あの子、大人しい顔して結構強かだね。

——このままだと只野さんが未来へ傾くかもしれない…………。

な、何だ？ 今の、あたしの声…………？ だとしても只野さんが未来を選ぶと決まった訳じゃ…………。

——バイト終わりの只野さんはどこか危ない時もあるし、そもそも未来は二人で走ってる事を隠してた。つまり完全に狙ってる…………。

それは…………否定出来ない。あの子がまさかそんな事をするなんて思わなかった。

——いくらゲージ上げなんて理由があっても、それはやり過ぎだ。

あたしがキツク言っておかないと……。

……そう、だね。只野さんはきつと未来があたしや翼に黙ってジヨギングしてるなんて知らないはずだ。なら、知らないままでもいいからおう。あたしが未来に言っておけばいい。

こそこそとズルい事するんじゃないって。

「奏？　どうかした？」

只野さんの声で我に返る。何だろ？　何か胸の奥がもよもよする。「何でもない。ちよつと驚いただけ。先輩が毎日走ってるって聞いてさ」

「おいおい、前も散歩してたんだ。その延長線上みたいなもんだろ？」

「散歩でも結構疲れるって言ってた人が言ってもねえ」

「このっ、それが年上に向かって言う事か」

「つと、逃っげろ」

「このっ、待てっ！」

逃げるあたしを只野さんが追い駆ける。そうやってしばらく公園の中を走り回った。何て言うか、子供の頃に戻ったみたいだった。

最初こそ只野さんも怒り顔だったけど、すぐに笑顔に変わったのも大きいと思う。他愛のない追い駆けっこだったけど、今のあたしには軽く恋人みたいなやり取りに思えたし。

最後には二人して疲れ果てて芝生でぐったり。それが何だかおかしなくて二人で笑った。

「ねっ、先輩」

「ん？」

「キスしてあげよっか？」

「はあっ!?　な、何だよそれっ！　き、キスって」

「頬っぺたに」

そう言っつてニヤツと笑うと見事に只野さんが何かを察したみたい。頬に頬垂れた。

「あつれれ〜？　どーしたの先輩？　そんな風に落ち込んだりしてさ」

「してやられたよ。見事に掌の上で踊らされた」

「口にしてもらえるって思った？」

「……ちよつとだけ」

「ちよつと？」

「……………かなり」

その瞬間、あたしは只野さんが愛おしくなった。だから素早く頬へキスしてやった。

「っ?! か、奏っ!?!」

「頬ぐらいなら子供だつてするよ。先輩、動揺し過ぎ」

言いながらあたしも心臓がバクバクしてる。あー、お願いだからバレないでくれよ？

「そ、それはそうかもしれないけど、子供は子供であつてな？」

「嫌だつた？」

内心のドキドキを隠して問いかける。まだだ……まだ顔に出すな……。

「……嫌なもんか。君みたいな女性から頬だろうがキスされれば、浮かれて馬鹿やりそうなのが俺だぞ？」

「何それ。自慢になってないよ」

そう言いながら何となく初めて会った時の会話を思い出す。あの時もこんなようなやり取りしたな。

でも、あの時と只野さんの顔が違う。あの時は微妙な顔だった。今は、赤くてどこか嬉しそう。

そんな顔、するんだ。そう言ったら、照れくさそうにどんな情けない顔してるって聞かれたから、デレデレになつてるって言ったら苦笑した。

なので反対の頬にもしたらどうなるかなつて言ったら、心臓が止まるだろうから止めてくれって割と本気めに言われた。

「そんな事じゃ、女と付き合えないよ？」

「それでもいいさ。今のキスだけで一生の思い出になつたから」

……ホント、普段抜けてる感じなのに、こういう時にふと心を感じる言葉を投げかけてくるんだからさ。困っちゃうよね、ホントに。

もつと、好きになるしかないじゃん。いつか、本当のお望みのキス、してあげるよ、只野さん……。

「そんな事を奏さんに言われる筋合い、ないと思います」

その未来の冷たい声に翼は思わず耳を疑って後ろを振り返る。

時刻は朝八時過ぎ。朝食を終えて後片付けを翼が行っている時にそれは寝室で始まった。

「あのね未来。あたしは何も恋愛するなって言ってる訳じゃないんだよ。ただ、あたしや翼に黙ってこそこそしてるのが」

「別に言う必要ないですよね？ だって、朝のジョギングです。ただ、それに只野さんが並走してくれるってだけですよ？」

「っ……ならどうしてそれを翼に黙ってたのさ？」

「だから、どうしてそこまで細かく言う必要があります？」

そこまで聞いて翼が何かを察したのか、水を止めて洗い物を放置するように慌てて寝室へと向かう。

「奏っ！ ダメっ！」

奏が未来の事を睨み今にも掴みかかろうとしているように見えたからだった。

幸い翼の制止する声に奏も息を吐いて動きを止める。それを見て未来はどこか苦い顔をしていた。

「奏、落ち着いて。小日向、お前も言い方が過ぎるぞ」

「ごめん……」

「ごめんなさい……」

気まずい空気が漂う室内。翼は俯いた二人を見てため息を吐くとスマートフォンを手に取った。

原因は仁志にある。奏はあの仁志の決意のようなものを知らないから未来を叱っているんだと、そう考えたのだ。

「……あっ、只野さんですか？」

「っ」

聞こえた名前に俯いた二人が小さく息を呑む。

「少しご相談したい事が出来ました。……いえ、そういう事ではあり

ません。奏へ以前只野さんが私や小日向達へ言ってくれた言葉を教えてもいいでしょうか？」

(只野さんが翼達に言った言葉?)

聞こえてくる言葉に奏がどういう事だとばかりに顔を上げる。すると視線が翼と合った。

「……分かりました。では、失礼します」

通話終了とばかりにスマートフォンを耳から離して翼はため息を吐いた。

「奏、よく聞いて欲しい。私や小日向は只野さんへ恋愛感情を抱いている」

「っ!？」

「それを、もう私達はあの人へ伝えている。そして、それを受け只野さんはこう言ってくれた。今は答えを出せないけど、この問題が片付いた時には必ず答えを出すからと」

「そんな……」

「本当です。だから私は……」

そこで未来が黙ったので翼がどこか苦い顔でその後を受けた。

「只野さんともっと親密になろうとしたのだろうか？ やり方は否定しないし分らないでもないが、奏への言い方は棘があり過ぎたぞ」

「……ごめんなさい。その、ついカツとなって……」

「だろうな。奏も、そこまで怒らなくてもいいと思う。小日向の言う通り、人の恋路は関わらない方がいい」

「でもさ、先輩は周囲の目を気にしてるだろ？ だから」

食い下がる奏を見て未来は気付く。目の前の相手も自分と同じなのではないかと。

「……そういう事ですか？」

「っ?!」

「ん？ 何がだ？」

「翼さん。多分奏さんは、只野さんの事、男の人として意識してます」

その一言で奏が真っ赤になって俯き、翼が驚いたように大きく目を見開いた。

「つまり嫉妬だったんですね？　自分が元々一緒にやってた事を、後から来た私がやってるって聞いて嫉妬したんです」

「っ……そうだよ、悪い？　大体ね、先輩と知り合ったのはあたしの方が先なんだ。それにジョギングだって誘ったのはあたし。それを……」

「なら自分でこれから毎日やろうって言えばいいだけじゃないですか。それを……」

「小日向止めろ！　奏もだよっ！　どうしてそう相手を煽るのっ！」

悲しそうな表情で二人の間に割って入る翼だが、そんな彼女へ未来と奏のやや鋭い視線が向く。

「そう言うけどさ、翼も結構強かだよね」

「え？」

「そうですね。今だっすぐに只野さんへ連絡してましたし」

「そ、それは……っ!?　すまないっ！　少し外の空気を吸って来るっ！」

何か様子がおかしい。そう思っ翼はある可能性に気付いてエプロンをつけたまま部屋を出た。

（話に聞いた悪意に操られた暁や月詠に似ている気がする！　まさか、まさか悪意が二人の恋心を利用していいのか!?　愛憎というように、強い好意は強い嫉妬と表裏一体!?　だとしたら、だとしたら今の私達は……っ!）

翼が向かったのは MARIA 達の家だった。すると丁度その玄関先に朝食を食べ終えただろう仁志が立っていたのだ。

「あれ？　翼……?」

「っ!　只野さんっ!」

エプロン姿の翼に目を瞬きさせる仁志だったが、彼女の様子からただ事ではないと察したのかすぐに表情を険しくする。

「どうかしたのか？」

「こ、小日向と奏が、二人が悪意に操られているかもしれないんです!」

「っ!?　何だっ!?」

「どうしたのよ？ 家の前で大声出さないで頂戴」

そこへマリアが姿を見せて仁志と同じく翼の格好を見て不思議そうに小首を傾げた。

「翼？ どうしてエプロンなんか……」

「マリアさん、非常事態だ。鏡と槍が以前のザババ状態になった可能性がある」

周囲に聞かれている事も考慮したのか仁志は奏と未来の名前を伏せた。その言葉に翼も真剣な表情で頷いた事でマリアも表情を険しくする。

「……どうするの？」

「とりあえずまずは確認だ。ヴェイグを連れてきてくれないか？」

「分かったわ」

「あと、セレナにも来てもらって」

「セレナ？」

思わぬ人選にマリアと翼の声が重なる。だが仁志にはちゃんと理由があった。

「彼女は、ゲームだと初めてステータス異常の全回復が実装された子なんだ。もしかしたら、悪意にも効果を出せるかもしれない」

そう言いつつ、仁志は内心で不安も抱いていた。何故ならセレナのその能力はゲーム上エクストライブでのものだったのだ。

普通の状態で果たしてそんな事が可能なのか。そう思いつつも、神獣鏡が使えない今、可能性があるのはセレナのアガートラムだけだと信じて仁志は息を吐く。

マリアが家の中へ戻って少しするとセレナがヴェイグを抱えて現れた。その後ろにはマリアもいる。

「翼、二人は部屋にいるんだな？」

「た、多分ですが……」

「外出していない事を願いましょう」

「セレナ、無茶な事を言ってるとは思うけど、よろしく頼むな」

「は、はい」

こうして仁志達は急いで翼達の部屋へと向かった。幸いにして二

人はまだ部屋にいた。何故それが分かったかと言うと……

「な、何だこの嫌な匂いは?! こんなの、久しぶりだ!」

ヴェイグがアパート前で露骨に嫌な顔をしたのだ。その声と言い方で全員が確信する。二人は悪意に操られているのだと。

「マリアさんはここで待機してくれ。で、俺達に何かあったらこれでエルに連絡を。その場合は切歌ちゃんに響とクリスを呼びに行ってくれって頼んでくれ」

「……分かったわ」

「ヴェイグさん、お願いします」

「ああ」

持っていたスマートフォンをマリアへ託し、仁志は翼とセレナを連れて部屋へと向かう。

ヴェイグは久しぶりにセレナの中へと戻り、有事に備えていた。

階段を上がり、慎重にドアを翼が開けた。中は、何故かカーテンが閉められていて暗くなっていた。

翼に続いて仁志とセレナが入り、三人は寝室を見つめた。そこに奏と未来がいたのだ。ただ……

「……奏さん? 未来さん?」

暗い寝室で奏と未来が体を縮こませるように三角座りをしているのを見て、セレナがどこか怖そうに二人の名を呼んだ。

すると、二人はゆっくりと顔を上げる。その顔を見て思わず仁志とセレナは息を呑んだ。

「わあ、只野さんだあ。私に会いに来てくれたんですね?」

「あははっ、先輩だあ。何? また一緒に寝たいの?」

二人の顔は血の気が失せていて、まるで死人のように見えた。なのに不気味に笑っているのだ。

それに仁志は翼へ目を向けると小さく頷く。それに翼も頷き返し、二人は同時に動いた。

仁志が奏を、翼が未来を押しさえつけるように組み伏せ、すぐにセレナへ顔を向ける。

「セレナっ!」

——Seilien coffin airgatl—lamh
tron……。

ギアを纏い、即座にデュオレリック状態となったセレナは、そのまま自分達をミレニアムパズル内へと閉じ込めた。

以前悪意が切歌と調を操った際、最後に逃げ出した事を思い出して仁志が逃走できないようにと考えたためである。

「こ、これならもう逃げられません！」

「翼、ギアを！」

——Imyuteus amenohabakiritron
……。

翼がギアを纏ったのを見て仁志は奏から離れる。翼もそれとほぼ同時に未来から離れてすかさず刃を二つ出現させるや二人の影目掛けて投げ放った。

「はっ！」

最早定番となっている足止めの影縫い。しかもミレニアムパズル内は陰る事がないため余程がない限りその束縛を破る事は出来ない。

「それで、これからどうすればいいんでしょうか？」

「そうだな……とりあえずセレナ、歌ってくれないか？ 二人の中の悪意よ出て行けって気持ちで」

「歌、ですか？ わ、分かりました」

言われるままにセレナが初めての気持ちで “誰かのためのヒカリ” を歌う。その勇ましくも凛々しくもない、優しく祈るような歌声がミレニアムパズル内に響く。

それを聞いて翼は自身の内側から力が込み上げてくるのと同時に、心が穏やかになっていくのを感じていた。

「これは……」

「ううっ……あ、頭が……」

「胸が……苦しい……」

セレナの優しさが宿った歌声が、フォニックゲインが悪意に支配された二人の体を浄化するように注ぎ込まれていく。

「効いてる……」

それに驚いているのは仁志であった。そんな彼の目の前で二人の体から黒いもやのようなものが滲み出るように出現する。

「あれは……」

「悪意、だろうね」

「……攻撃が通じるでしょうか？」

「実体がないだろうから難しいかもしれない。翼がグリッター化出来るならいけるとは思うけど」

「グリッター化……あの金色に輝く姿ですか？」

以前見た映画を思い出している翼の言葉に仁志は頷く。人の心の闇とも言える悪意を払うには光をぶつけるしかないと思っていたのだ。「神獣鏡が使えない今、悪意の弱点は強い心の光しかないと思うんだ。ただ、それは言う程簡単じゃないだろう？」

「そうですね……。では、どうすれば？」

「ヒーロー物のお約束が通じるなら……本人の心の光」

「本人の……心の光……」

セレナの歌によって悪意は二人の体から分離しつつある。それでも完全には分離出来ていない。それを見て翼は意を決してセレナの隣へと移動した。

「セレナ、手を繋いでくれ」

「え？」

「私も、一緒に歌おう。そして奏と小日向の心に訴えかけるんだ。心を強くもって悪意に負けないでと」

「……はい。でも、何を歌えば？」

「マリアと君の思い出の歌でどうだ？ あれなら私も歌える」

「分かりました」

そうして二人が紡ぐ“Apple”が奏と未来の心へ響き渡る。負けないで。悪意を追い出して。そんな想いが歌声を通じて二人へと届く。

「ううっ……ああっ！」

「嫌あ……こんな気持ち、嫌あ……」

「奏……未来……」

苦しむ二人を見て仁志は意を決してその場から動く、二人の影を隠さぬように大回りで彼女達の背後へ回り込み、その手を握った。

「頑張れっ！ 悪意なんかの好きにさせるなっ！」

「せ、先輩……っ！」

「只野さん……っ！」

「翼もセレナもヴェイグもいる。悪意なんかに負けるなっ！ 自分達の心を勝手に踏み躪られて、自由にさせて平気かっ！ 俺もこうして一緒に戦うからっ！ だからいつもの二人に戻ってくれっ！」

強く、だけど痛く感じないぐらゐに加減して奏と未来の手を握る仁志。それに二人は彼らしい優しさを感じ取り笑みを浮かべる。

——セレナっ！ タダノに伝えてくれ！ 二人の嫌な匂いがかかり薄れてきた！

「お兄ちゃんっ！ お二人の嫌な匂いがかかり薄れたってヴェイグさんがっ！」

「もう一押しか。だが、その一押しが……分からない」

悔しげに顔を伏せる翼。だが、そこで仁志は彼女へ問いかけたのだ。

「翼っ！ そもそも二人は何が原因でこうなったか分からないか！ もし原因の一つでも分かればそこをとっかかりに何とか出来るかもしれないんだっ！」

その言葉に翼が顔を赤くする。原因は一つしかない。それを言えば仁志はどうするのかと思っただのだ。

そしてそれを他者の口から伝えられてしまう奏の気持ちを考え、翼は言葉に詰まる。

「翼さん？」

「……只野さん、小日向も奏も同じ気持ちを悪意に利用されています」

「同じ？」

「はい。それを言う前に一つだけ言わせてください」

「何？」

「……奏っ！ ごめんっ！」

その大声の謝罪に仁志とセレナは疑問符を浮かべるしかない。が、

それが思わぬ効果を生んだ。

「っ、翼……それ、必要ないから……っ！」

「っ?! 奏っ!?!」

「せ、先輩も気にしなくていいよ……っ! あたしの体だ。あたし自身の手で取り返すっのっ!」

「奏……」

顔を凛々しくし、奏は隣の未来へと視線を向ける。

「未来っ! あんたもだよっ! 女の底力、見せてやろうじゃないかっ!」

「……はいっ!」

そこで二人は一瞬だけ仁志と繋がれた自分の手を見る。その瞬間笑みを浮かべ、二人は目を閉じて聖詠を唱えた。

(あたしの恋心を利用するとか……)

(人を好きになる気持ちにつけ込むなんて……)

(絶対許せないっ!!)

二人のギアが展開されると合わせて完全に悪意が二人の体から分離する。ギアに埋め込まれた依り代の力が増したからだ。

「翼っ!」

「分かったっ!」

奏の声が本来のものに戻った事へ気付き、翼は弾かれるように二人の影を貫いている刃を抜き取った。

「未来さんっ! 悪意が逃げますっ!」

「逃がすもんかっ!」

体の自由を取り戻した未来が神獣鏡の光で逃げようとする悪意を見事に撃ち貫いてみせる。

「セレナ、ヴェイグは何だっ?」

「……もう大丈夫だそうです!」

笑顔でそう告げてセレナがギアを解除する。それに合わせて周囲の風景も戻り、薄暗い室内へと変わった。

「……やれやれ、一時はどうなるかと思ったよ」

そう告げて仁志は二人から手を離して座り込む。

「あ……」

「へ？」

その手の温もりが消えた事に思わず奏と未来が声を出すも、仁志はそれがどうしてかを気付けないように不思議そうに二人を見上げるのみ。

と、そこで翼のスマートフォンが鳴る。

「もしもし？」

『翼さんっ！ 兄様に伝えてください！ ステータスに変化がありました！』

「ステータスに？」

その言葉で仁志は気だるげに立ち上がると疲れた顔でこう言うしかなかった。

「一旦マリアさん達の家へ行こうか」

「一体何なんだろうね？ 全員集合って」

「知るか。呼びに来たこいつさえも知らないって言うんだからよっぽどだろ」

「アタシも教えてもらってないんデスよ。エルがスマホを見つめて一人で驚いたり首を傾げたりと忙しかった事は知ってるデスけど」

話しながら歩く響達。向かうは当然集会所のようになってきているマリア達の暮らす家だ。

まだ三人は知らないのだ。未来と奏が悪意に操られていた事を。

切歌はマリアに言われて留守番しながらエルフナインの指示があるまで待機と告げられていたのだから。

「また何かゲームに変化でもあったのかな？」

「現状それが一番有力だろうな」

「楽しみデスねえ」

どこか気楽な雰囲気のまま目的地へ到着し靴を脱ぐ三人。向かった居間では疲弊したような奏と未来がおり、スマートフォンの画面を真剣な面持ちで見つめる仁志とその両隣にエルフナインとヴェイグがいた。セレナはやや疲れた顔で畳の上に横になっている。

視線を動かせば翼とマリアが深刻な表情で何事かを交わっていて、とてもではないが三人が想像していたような良い雰囲気ではなかったのだ。

「タダノ、切歌が戻ってきたぞ」

その声にその場の全員が反応した。翼とマリアは椅子から立ち上がり居間へと移動し、仁志とエルはスマートフォンから顔を上げた。

「え、えっと……」

「一体何があつたつてんだ？」

「その説明をするのはもう少しだけ待ってくれ。もうじき調ちゃん
が」

「ただいま」

「……帰ってきたね。じゃ、全員揃ったら話を始めるよ」

そう告げた仁志の複雑な表情に、響達はただ事ではない事があつたのだとおぼろげに察して息を呑む。

そこへ調がやってきて居間にいる顔ぶれに小首を傾げた。

「どうしてみんな揃ってるんですか？」

「実は奏と未来が悪意に操られたんだ」

「「「奏っ!?!」」」

「あつ、まず驚くのそこなんだ……」

仁志の口から出た奏という呼び方に響達四人が驚く。その反応に仁志だけでなく他の者達も若干苦笑した。

「えっと、まあおかげで少し重たい空気が軽くなったかな？ えっと、

俺がマリアさんって呼ぶようになったから、一人だけ天羽さんってのもどうかと思つてさ。だから奏って呼んでもいいかって勤務中にね」
「そういう事。だから、ま、あんまり気にしなくていいよ」

仁志と奏の言葉に理解したとばかりに頷く響達。となると今度は

……

「「「操られたっ!?!」」」

「時間差かぁ……」

「まるでコントか漫才だよ、これじゃ」

「ふふっ、本当ですね」

呆れる奏と苦笑する未来。翼とマリアも小さく笑みを零すが、それもすぐ消える。

「とりあえず、セレナと翼の歌の力と奏と未来自身の心の強さで悪意は排除出来た。ただ、どうも翼曰く不安が残るらしいんだ」

「そのために、立花と雪音にはこちらへ来て欲しい」

「切歌と調は私の方へいらっしやい」

そして翼から響とクリスが告げられるのは予想外の言葉だった。

「悪意は、小日向と奏の恋心を利用して操ってきた。今後、似たような方向で私達へも忍び込んでくる可能性がある」

それは、防ぎようがない事だった。もし防げるとすれば恋を捨てる事。想いを、気持ちを捨てる事だ。

「そ、そんな……」

「先輩、どういう事でそう分かったんだ？」

「……小日向は密かに只野さんとジョギングをしていたらしい。それを只野さんから聞いた奏が小日向に詰め寄ったのだ」

それだけでも響とクリスは理解した。理解出来てしまったのだ。奏が仁志へ特別な感情を抱いていなければ詰め寄る必要などない。ただ、周囲の目に気を付けるようにと助言や注意するだけで終わるのだ。

「悪意は、私達の中にある嫉妬や憎悪をいとも容易く増大させる。それが、今回の事でよく分かった。あの小日向が最初から棘のある言葉を奏へ返した。奏も、すぐに小日向への怒りを抱き手を上げようとしていた。最後には止めに入った私を二人して恨めしそうに見てきたのだ。すぐに只野さんと連絡が取れるからと」

もう言葉がなかった。響とクリスはそれだけで十分異常さが伝わったのだ。

同様に切歌と調はマリアからこんな注意を受けていた。

「只野さんと……」

「仲良くなりすぎるなって、どういう事デス？」

「悪意は今回奏と未来の只野への好意を利用したの。もっと一緒にいたい。もっと仲良くなりたい。そんな気持ちをね」

マリアの説明に切歌と調は成程と頷くも、すぐにその表情を困ったものへと変えた。

「でも、そうは言ってもデスね……」

「難しい……」

切歌は仁志の趣味にハマリ、色々教えてもらったりそれを話題に盛り上がる関係。調はそもそもコンビニでの上司であり、色々教えてくれて自分を大人として扱ってもらっている関係。どちらも仁志への好意は弱くはない。

「別に嫌いになれって事じゃないの。ただ、只野と強く一緒にいたいとか思わないようにして」

「……頑張ってみる(デス)」

実際切歌も調もそんな事を思った事はない。ただ、この事で二人は自分へ問いかける事となる。

(アタシは只野さんと一緒にいたいってそんなに強く思ってるデスかね? まあいれたらとつても楽しいデスけどー)

(只野さんと……強く一緒にいたい? ……私には分からない。でも、店長さんの時の只野さんという時は楽しいかも。売り場の事相談していると時間が早いし)

浮かぶのは恋愛とは程遠い想い。

当然だ。仁志は彼女達へは兄や親類のような気持ちで接しているのだから。

それでも、彼女達も十六を迎えて所謂お年頃という時期に入っている。

特に今までろくに異性と接点を持たなかった二人だ。そこへ仁志という、これまで見た中でもっとも一般人であり頼りなささと頼もしさが同居する存在と出会った。

子供のようで大人でもある。そんな身近にいなかった異性に、それまで異性耐性のなかった二人の乙女が平気であるはずもなく……

(一緒にいたいって、強く思わないならいいんだよ(デスカ)ね?)
男女関係で一番大事な事はなんだろうと言われると色々あるだろうが、仮に人生を共に歩む際に必要な要素と言えば金銭面を除けばや

はり性格などの人格面だろう。

そういう意味で言えば仁志はもう響達装者全員のそれをある程度知っている。そして彼女達もその異変への対処や上位世界での暮らしで仁志の人となりがある程度知ってきている。

そういう意味では仁志は彼女達装者にとつて一種の理想と言えた。何せ隠さねばならない色々を既に知っている。その上で自分達へ好意を寄せているのだから。

「それにしても、これはどういう事なんでしょうか？」

一方で仁志はエルフナインやヴェイグなどとゲームに起きた変化について、正確にはステータスの変化について考えていた。

ただ、画面上は大きく変化はしていない。そう、実はエルが見た変化とはセレナがデュオリック使用中に出現していたのだ。

——こ、これは……っ!？」

マリアの言い付け通り方が一のための連絡員として待機していたエルフナインだったが、ふとステータス画面を見れば悪意が操っているか分かるかもしれないとゲームを起動させたのである。

残念ながら悪意が操っている事を示すような事はなかったが、セレナのアイコンが変化している事に気付いたのだ。

しかもそれに加えてデュオリックを示すと思われるヴェイグのアイコンの周囲が点滅するというおまけ付き。

「……ツインドライブ状態の時にアイコン周囲が点滅してたんなら……」

仁志はぼんやりと頭に浮かんだ仮説を確かめるべく視線を奏へと向けた。

「奏、ギアを展開してくれないか？」

「へ？ 別にいいけど……」

「お願い」

言われるままにギアを展開する奏。すると当然周囲がそれに気付いて視線を向ける。

「これでいい？」

「ああ。……俺の予想が正しければこれで……」

ステータス画面の奏のアイコンがギアを纏ったのを確認し、仁志はある種の確信を抱いて頷くと櫻井了子のアイコンをタップする。

「奏っ！ ツインドライブ、起動っ！」

「へ？ っ!？」

その瞬間、奏のギアがデュオレリック状態へ変化したのである。それを見て全員が呆気に取られていた。

「……凄い。本当に、本当にそうなんです。これは、デュオレリックを、ツインドライブを可能にするんだっ！」

エルフナインが感動するように告げた言葉に全員が我に返る。

「じゃ、もう一度押せば……」

「っ!？ も、戻った？」

「みたいだな。やっぱり予想は間違っつてなさそう。これが出現すればツインドライブがいつでも可能になるらしい」

「はい！ ゲージを上げれば依り代の力が上がり、もしかすると今のように聖遺物なしでのツインドライブを可能にするかもしれないっ！」

「エル、もうデュオレリックじゃなくてツインドライブって言い始めてる……」

「デスね……」

見事に仁志から誘導されているエルフナインに驚きと感心を覚え、調と切歌は小さく頷く。

翼とマリアはゲージが本当に自分達の利点になる事を確認し、そこで悪意が何を狙って動いているかを察して息を呑んだ。

「……マリア、もしかすると」

「ええ、多分同じ事を考えているわ」

「以前エルは言った。悪意もこのゲームを知ったかもしれない」

「あれは、きつと正しくはこうね。私達の誰かを経由して知った」

「ああ。となれば、やはりあのゲージを上げられると悪意は困ると言う事だ」

現に今回悪意は遂に仲間内での内輪もめをやろうとしてきた。それも女特有の嫉妬と言う感情を利用して。

これまで恋愛経験のない自分達には効果的と言わざるを得ない。何せ誰もが初恋なのだ。それも同じ男を見つめている。これ程までに付け込み易い状況はない。

だがそれも仕方ないのだ。何故か依り代の力を増すには仁志と関わらなければならぬ。その根本の理由は分からないが、彼だけが「戦姫絶唱シンフォギア」を覚えている事に関わっているのは言うまでもないだろう。

結局悪意が狙っているとしても、自分達は仁志と距離を取るのとは不可能だ。そう翼もマリアも理解した上で息を吐いた。

「……早くゲージを最大まで上げましょう」

「だがどうやって?」

当然の翼の疑問へマリアは若干の躊躇いを見せるも、すぐに意を決した表情で告げる。

「只野に、彼に一度嘘でもいい。私達を好きだと、そう言ってもらおうの」

「っ!?!」

(な、何だっ?! 私達と言う事は……マリアもなのかつ!?)

マリアの言葉が意味する事に翼は驚きを隠せなかった。何故ならマリアも仁志へ強く心を惹かれてっていると告げたようなものだからだ。

驚きから抜け出せない翼を見てマリアはそれに構う事なく話を続ける事にした。今は勢いそのまま喋らないと自分も様々な感情で黙ってしまいそうだと思っただのである。

「おそらく、あれは只野と過ごした時間の長さや濃度で出来ている。なら、嘘でもいい。惚れた男にそう言ってもらえれば私達の心は動くでしょう。それなら」

「ま、待て。マリア、本当にそれでいいと」

「いいわけない。いいわけないでしょ。だけど、今はそんな余裕はないの。少しでも早くゲージを上げ切り、悪意の干渉を抑えないといけない。違う?」

その静かな、だけど無念や悔しさを押し殺すような声に翼は何も言えなかった。

「……………いや、マリアの言う通りだ。私達は、装者だ。個人よりも優先しなければならぬ事など、当たり前のように存在するのだから」
一瞬だけ仁志から出会った日に言われた言葉が頭をよぎり、翼の心を小さく締め付ける。ここではただの歌が好きな女性でいいという、あの言葉が。

「なら、試してみましよう」

「そう、だな」

互いに真剣な面持ちで立ち上がり、二人は仁志の前へと向かう。彼は大きく欠伸をしていた。緊張などが解け眠気が襲ってきたのである。

「ふわあ〜……………ん？ マリアさんに翼？ どうしたの？」

眠そうな顔で柔らかく笑う仁志に二人は思わず赤面する。

（な、何て優しい顔するのよ……。お願いだからこのタイミングでそれは止めて！）

（只野さんらしいが、い、今の心境的には若干止めて欲しいものだ。決意や覚悟が鈍る……………っ！）

何故か黙ったまま立ち尽くす二人に仁志は疑問符を浮かべるも、何か用があるのだろうかと思っただけでその言葉を待った。

「……………あの、只野さんにご相談があります」

「俺に？」

「ええ。その、検証の一環よ」

「検証の……………？」

「ゲージの上げ方がある程度判明した今、それを利用してゲージを上げ切りたいと思いました」

「はあ……………」

「だから、嘘でいい。私か翼に好きだと言ってくれる？」

間違いないその瞬間、一部の者達が息を呑む。そうならなかったのはエルフナイン達少数だった。

「……………えっと、それはさすがに」

「只野、よく聞いて。悪意はそのゲージを上げられる事を恐れている。だから奏と未来を使って内輪揉めを企てたのよ」

「私まで巻き込もうとした辺りにもそれが見えます。もっと言えば、今回は私達三人の部屋です。半数が悪意によって操られれば、崩壊するのは当然と言えます」

「最大まで行かなくてもいい。もし本当にそれが上がる事でデュオレリックが使用出来るのなら、それだけでも確保したいの。そうすれば、カオスビーストとの戦いをもっと楽になる」

「只野さん、お願いします。事態は一刻を争うんです」

真剣な表情で迫る二人に仁志は表情を大きく歪める。嫌だったのだ。例えどんな理由があろうと嘘を、しかも愛を告げる言葉で吐く形になるのが。

だが二人の考えと言っている事も分かる。しかしそれでも譲れない事があるとばかりに仁志は静かに立ち上がると首を横に振った。

「駄目だ。例えどんな状況だろうと想いを伝える時に嘘を混ぜちゃいけない」

「二つ」

凜々しくも悲しそうな表情でそう告げ、仁志は手にしていたスマートフォンへ目を落とす。

「世界を、平和を守るためには時に心を欺いて、人を欺かないといけない時もあるんだろう。でも、ごめん。俺はそんな大人にはなれないらしい……」

「只野さん……」

仁志の言葉に響がそつと胸を抑える。仁志はスマートフォンをエルフナインへと手渡していた。

「だから、今から言うのは本当だ。ただしそつちの望むものじゃないと思う。けど、これが今の俺の精一杯だ」

「え？」

理解出来ないという顔をするマリアへ仁志はしつかり目を合わせると深呼吸を一つする。

「マリアさん、俺は君へ強い感謝の念を抱いてる。毎日のように朝飯を作ってもらっていたし、今だって晩飯を用意してもらおう事が多い。本当に、ありがとう。いつも美味しい飯と笑顔で俺は今日を生きる活力

をもらえてる」

「っ!？」

それは、ある意味で愛の告白よりも強い言葉だった。嘘偽りない気持ち。異性愛とは言い切れないが深い愛情にも近い想いがこもっていたのだから。

マリアが赤面するのを見て仁志は翼へと顔を向けた。翼はマリアが言われた言葉に若干驚きと恥ずかしさを感じていたのか少しだけ頬に朱が混ざっていた。

「翼、俺は君の歌が好きだ。歌っている時の君は本当に綺麗だし凛々しい。だけど歌っていない時は不器用で可愛い。そんな二面性を持つてる事も魅力的だと思ってる。君の持つ歌手としての顔と個人としての顔を知れた事は、俺の中での自慢の一つだよ」

「只野さん……」

そこまで言って仁志は照れくさそうに頭を掻いて俯いた。

「こ、これで勘弁してくれないか？ 少なくとも嘘は言っていない」

本音を言えば今すぐにも叫び出すか転がりたい程の恥ずかしさを感じている仁志であったが、さすがにここでそう出来る程彼は良くも悪くも強くなかった。

「……っ!？ ね、姉様のゲージと翼さんのゲージが上がりました!」

「……おおっ! 二人の後ろに何か出たぞ!」

「っ!？」

そのヴェイグの言葉にマリアと翼がすぐさまエルフナインの傍へと駆け寄った。

見事にマリアと翼も空白だった部分にメルと緒川慎次のアイコンが表示されていた。

「……本当に、これで使えるのかしら?」

「試して、みるか。エル、頼む」

「は、はい」

マリアと翼がギアを纏うのを確認し、エルフナインはまずメルのアイコンをタップする。

「……あれ?」

だが何故か変化が起きなかった。エルは何度もメルや緒川のアイコンをタップするも、マリアも翼も変化が起きなかったのだ。

「ど、どういう事だ？ やはり完全聖遺物がなければダメだど？」

「そんな……じゃあこのアイコンは何のために？」

「ど、どうしてでしょう？ 反応はしてるようなのですが……」

「エル、ちよつと貸してくれ」

「え？ は、はい」

困惑する三人を見つめ、ヴェイグがエルの手からスマートフォンを優しく奪うと仁志へとそれを差し出した。

「タダノ、これは元々お前のだ。もしかしたらお前じゃないと変身させられないんじゃないか？」

「……………そう、なのか？」

「実際あたしは先輩がやって成功したしね。やってみたら？」

その言葉に仁志はならばとスマートフォンを見つめ、小さく頷く。

「マリアさん、行くよ？」

「え、ええ……」

「ツインドライブ、起動っ！」

仁志がメルのアイコンをタップした次の瞬間、マリアのギアがデュオレリック状態へと変化した。

その光景に誰もが驚き、そして確信する。本当にステータス画面にアイコンが表示されればデュオレリックが使用可能になるのだと。

「ほ、本当になった。しかも、体への負担が恐ろしく軽い……」

「ほ、本当か？」

「ええ。只野、翼の方も試してみても」

「分かった！ ドライブチェンジっ！ ゴーツ！」

眠気が強くなりすぎたのか、はたまた先程の告白もどきで何かが壊れたのか。もうテンションがおかしい事になっている仁志はどこか自棄になっていた。

「……………本当だ。デュオレリックなのに体が思いの外楽だ」

「お、おそらくですが、完全聖遺物を制御している訳ではないからでしょう。その制御をしなくていい分、体への負担が軽くなっているん

だと思われれます」

「では、能力も落ちてきているのか？」

「分かりません。ですが、もしその姿が完全コピーだとすれば、負荷だけが下がって能力はそのままの可能性も十分あり得ます」

「マジかよ……」

「それって、凄く戦力アップなんじゃ……」

エルフナインの推察にクリスと響が信じられないとばかりにマリアと翼を見る。

二人は軽くその場でギアの調子を確認するように動き、やがて頷き合ってセレナへと顔を向けた。

「え？」

「セレナ、申し訳ないのだけどミレニウムパズルを展開してもらえます？」

「そこでなら今の状態の全力を確認められる」

「わ、分かりました」

「あつ、なら姉さんも兄様の方でツインドライブを」

「そうだな。俺がどういう風にされるか見てみたい」

「よし」

その結果、セレナの場合ヴェイグは分離したままでデュオレリック成功となった。そして奏も再度デュオレリック状態となり、四人はミレニウムパズルの中でそのギア性能を確認する事に。

そこから戻った時には全員が笑みを浮かべていた。性能差はないと言えたのである。つまり実際のデュオレリックよりも使用時間などが大幅に伸びた事を意味していた。

そうなれば色々な意味で響やクリス、未来もと思うところであったが、仁志が遂に疲労と眠気のピークを迎えダウンしてしまう。

「ごめん……もう、寝かせてくれ」

もう半分彼の布団となりつつあるマリアの布団を使い、アイマスクと耳栓を使って眠る仁志。

そして少ししてマリアがアルバイトへと出かけ、奏も眠るために帰る事にし翼と未来と共に部屋へ戻っていく。

響とクリスもこれ以上いる理由はないと退出し、残されたのは年少組とヴェイグとなった。

「それにしてもさっきの只野さんの告白は凄かったデスねえ」

「うん、ドラマとかみたいだった」

「姉さんも翼さんも本当に嬉しそうでした」

「ゲージもお二人して九割を超えました。これはゲージ最大も間近かもしれません」

明るい雰囲気です話す四人だが、それを聞きながらヴェイグは声に出さず仁志へと目を向ける。

（タダノしかあのげーむの力は使えない。つまりタダノが依り代を持っていないといざとなった時困るかもしれないのか……）

そう考えてヴェイグはある事を思い出して小さく呟く。

——もし悪意がタダノを操ったら、俺でもきつと分からない……。

番外編 ウルトラマン編（メビウス&ウルトラ兄弟・
ティガ&ダイナ）

遂にこの時がきたか。みんなと一緒にヒーロー物を、それもウルトラマンを見る時が。

暁さんはワクワクしてるし響も同様だ。残りのみんなは大なり小なり興味薄。いや、エルだけは高そう。

「さて、カラオケで響が歌ってくれたウルトラマンメビウスが主役の映画だが、タイトルにある通りこれはそれ以外のウルトラマン、通称ウルトラ兄弟も出てくる」

「兄弟って事は家族なんですか？」

「えっと、厳密には違う。彼らは血縁じゃない。ただ、みんなそれぞれ地球へやってきて多くの侵略者や怪獣と戦い平和を守った事があるんだ。ウルトラ兄弟ってのは地球の人々が付けた愛称みたいなもの」
その説明にみんなが理解したとばかりに頷いた。さて、ならばメビウス自身の事を軽く説明して映画を流そう。

「主役のメビウスはウルトラマン達の故郷、M78星雲にある光の国の新人宇宙警備隊員だ。いわばルーキー。彼はそのウルトラ兄弟に憧れて彼らが守った星である地球への赴任を希望し、地球へとやってきた」

「新人、デスか？」

「そう。翼がいるって事でリディアンへ入学してきた響みたいな感じかな？」

「凄く分かり易いです！」

「響……」

「お前なあ……」

呆れる小日向さんとクリス。ただ、翼はどこか苦笑していた。

「憧れられる側としては悪くない気分だな」

「だろうね」

「この映画では、メビウスが一体どうしてウルトラ兄弟へ憧れたのか。

何故地球への赴任を希望したのか。そしてウルトラ兄弟は今どうしているのが描かれる。言うなればかつてのヒーロー達と新しい時代のヒーローの交流だ。そこで見えてくる事でウルトラマンの本質を感じ取ってくれると嬉しい」

前置きはここまでにして映画を流そう。さあ、俺が劇場で見て購入を決意した最初からクライマックスな展開に震えてくれ！

「……おおっ！ いきなりデスカー！」

「これが、ウルトラマン……」

「光の巨人とも呼ばれてるよ」

「銀色の体や赤い体。でも、カツコイイデス」

冒頭からいきなりUキラーザウルスとの決戦だ。そこで描かれる相手の強さとそれを越えるウルトラ4兄弟の強さと絆。

知らないだろうみんなへ簡単に四人の説明をする。

ゾフィーよりも長男的な描かれ方が多いウルトラマンと兄弟の中でも一二を争う切れ者的存在のセブン。本来であればしっかり者である新マンことジャックにこの面子では末っ子として未熟な部分を見せるエース。

彼らそれぞれに短い時間ながらも見せ場を与えられ、四人が歴戦の勇士である事を初見でも伝えさせる内容になっている。

「なっ!? ず、ズルいデス！」

「地球を背にして攻撃を封じるなんて！」

Uキラーザウルスが4兄弟の光線技を封じるべく地球を背にするのと曉さんとエルが怒りを露わにした。

声には出さないがみんな多かれ少なかれ怒ってるようだ。怒気が漂ってくるのが分かる。

しかも何も出来ないのを良い事にUキラーザウルスが四人へ攻撃を仕掛けたのだ。

このままでは全滅してしまう。が、ならばと状況を打破してみせるのが歴戦の勇士。

ジャックとエースが協力してUキラーザウルスの注意を惹きつけ、その間に体勢を立て直したウルトラマンとセブンが二人を救出する

と同時にUキラーザウルスへ痛手を負わせていく。

それに怯んだ隙を逃さずジャックとエースの合体光線がUキラーザウルスを直撃、地球へと落下させた！

「おおっ！」

「見事なもんだ」

「全滅を避けるために時間稼ぎに徹した二人も見事だが、それを理解した上で挟撃の形を取る残りの二人も見事だ」

「まさしく信頼していればこそその行動ね」

どうやらイヴさん達にも少しではあるが刺さり出したらしい。

だが、ここからなんだ。ウルトラマンの心の在り方と願いや想い。それが如実に示されるシーンだ。

未だ衰える事のないヤプールの怨念。そのマイナスパワーを封じるため、4兄弟はそのエネルギーのほとんどを使ってファイナルクロスシールドを使用する。

その時の四人のやり取りにみんなが黙った。それもそうだろう。何せ自分達がいなくても地球人は自分達だけで立派に戦い抜くと言いつつ切ったのだ。

「愛する地球のために……デスカ」

「そんな、自分達の星じゃないのに……」

「詳しい事は省くけど、実はウルトラマン達もかつては地球人と同じ姿だったんだ。それもあって、彼らは地球を第二の故郷のように思っているんだ」

そう告げると同時にミライの独白が重なる。みんなが抱いてるだろう疑問をミライが代弁しているように俺には聞こえた。

そして場面は現在の神戸に移った。そこで描かれる日常。その中に現れるかつてのウルトラ兄弟達に気付いてみんなが息を呑んだ。

そう、彼らは人間として地球人の中で生きている。それにきつと驚いたんだろう。

「た、只野さん、あれってウルトラマンデスカ？」

「そう。彼らは地球での仮の姿を持っているんだ。そうやって人々の中で生きているんだよ」

「みんなおじさんなんですな……」

「最初に出たようにウルトラシリーズが始まって四十年だ。つまり、最初は仮の姿も若かったんだよ。それがそれだけの歳月を経て今の姿になった。つまり演じた役者さん達の実年齢だ」

でもそれが良い意味で重みを与えてくれるんだ。旧作を知っていれば勿論、知らなくても本当にウルトラマン達が人間のように暮らしていたんだなと思えるから。

そしてミライが遂にこの映画の一つの要である二人と出会う。この関係がミライを、メビウスを成長させる事に繋がるんだよな。

「何か、防衛組織なのに緩い感じだね」

「GUY Sはさっきミライが言ったようにライセンスが必要なんだけど、取ったからと言って絶対にGUY Sになる訳じゃないんだ。いわば数あるうちの資格の一つ。で、メビウス一話で二十五年ぶりに出現した怪獣によって正規のGUY Sクルーはほとんど失われてしまったんだ」

「マジかよ……」

「じゃ、じゃあさっきの人達は？」

「隊長とミライへ話しかけてた男性以外は元々別の仕事してた。それをミライとさっきの男性、リュウの二人でスカウトしてGUY Sクルーになつてもらってる」

「元一般人、か……」

「そう考えると立花や小日向に近いかもしれないな」

軽くメビウスの説明をしている内に場面は三か月前の回想へ。そこで描かれるタカト君の過去の内容にみんな黙り込んだ。

それはきつとみんなにも思い当たる事かあるいは想像出来る事だからだろう。自分達が解決した事件。その裏に記されなかった犠牲や傷があつたとしたら、と。

だがエルだけは違った。彼女はミライではなくタカト君の方へ感情移入しているようだった。

多分だけど守られる側だからだろう。何も出来ない。その気持ち
はエルがこれまで一番感じてきたものだ。

「僕は、彼の気持ちが分かります」

「エル……」

「きつと、僕も同じ状況なら立ちすくみます。動きたくても動けない」
「……そんな事はないよ」

「え？」

俺は、この中で俺だけが知っている。見ているんだ。

「君は、友里あおいさんを必死で庇った。危険を顧みず、その小さな体で」

「兄様……」

「だけど、誰もがエルみたいに来る訳じゃない。タカト君のような方が普通なんだ。だからと言って彼が酷い訳じゃない。弱い訳じゃない。本当の弱さは、恐怖におびえ竦む事を非難する事だ。誰もが持つ弱さを認めないのは、また別の意味で弱さだと俺は思うから」

そう言ってる間にも物語は進む。テンペラー星人の襲来。そこで見せられるメビウスの戦い。最初こそ街中での戦闘だったが、途中からメビウスが飛行して戦場を海上へと移動させた。

「街への被害を抑えるために……」

「冷静だな」

「ああ。これでルーキーか……」

「さすがは地球を守るために来ただけはあるわね」

年長者達が感心したような声を出す中で年少組は……

「凄いデス！ あそこで必殺技を撃つかと思いました！」

「でも冷静にバリアを張って相手の隙を待った」

「そこをすかさず必殺技ですぬ！」

「お見事です！ とても冷静な戦い方です！」

と、メビウスの戦いに笑顔だ。うん、実に和むなあ。

「タダノ、本当にこれで新人なのか？」

「とは言ってもメビウスは光の国で訓練を積んだ存在だ。その戦術の師はウルトラ兄弟最強のウルトラマンタロウだし」

「」「ウルトラ兄弟最強？」「」

「それはまた別の機会に話そう。まずは映画を見て」

いよいよこの映画の見所の一つ、ウルトラ兄弟とメビウスの邂逅だ。

そこでのやり取りに曉さんが瞳をキラキラさせていた。エルもどこか同じような顔をしてる。

そしてそこでの会話で告げられるウルトラマンの、ハヤタの台詞で誰かが息を呑んだ。

——ミライ、我々ウルトラマンは、決して神ではない。どんなに頑張ろうと、救えない命もあれば、届かない想いもある。

そこから続くセブンの、ダンの言葉にもみんなは押し黙った。おそらくみんなはこの言葉の意味と重さを知っている。

ノイズやアルカ・ノイズ、それらと戦いながら何度となく味わった事だろう。届かない想い。間に合わなかった手。目の前で失われる、命。

だからこそ、この言葉が刺さるんだ。ウルトラマンであつてもそうなんだと。そして、神ではないと言う表現にも。

「……ウルトラマンって、もつと凄いヒーローだと思つてました。何でも出来て、全て助けられて」

「セレナちゃん……」

「でも、違うんですね。ウルトラマンだつて、悔しくて、苦しくて、辛い時もあったんですね?」

「ああ、そうだよ。時には自分達が原因で死なせてしまった人達だつている」

「自分達が原因で……」

「ほ、本当デスか?」

「ウルトラマン達を邪魔だと思ふ侵略者は、彼らではなくその周囲の人間を狙うんだ。時には人質として、時には殺す事で彼らの精神をかき乱して」

「最低だね……」

「そうね。でも、だからこそ効果がある……」

噛み締める声に俺は何も言えない。俺と違って彼女達はヒーローのような生き方と時間を過ごしてきたんだ。

そこで感じた事や思った事を俺は知ってるだけだ。分かる訳じゃない。なら、安易な共感はむしろ彼女達をバカにするのと同じだ。

物語はここから大きく動き始める。メビウスのデータを得た事で変身能力を持つザラブ星人が暗躍を始め、その罠にかかりミライは体の自由を失ってしまう。

いや、何て言うか年長者組のミライへの言葉が辛辣だった。やれ先輩達に注意されたばかりだろだの、見た目が一緒でも雰囲気が違うの分かるでしょだのと。

俺がミライなら凹んですみませんと言ってるレベルだ。でも、弁護するなら相手は知り合って間もない女性で、まだミライは人間に対しての理解が深くなかった。そんな状態で相手の変身を見破れつても無理な話だ。

あの悪意に操られた暁さんや月読さんぐらい分かり易ければなあ。

「偽物デス！ それは偽物なんデスよお！」

「タカト君、よく見て！ 本物と違って黒い線が入ってるから！」

「本物のメビウスは街を攻撃なんてしませんっ！」

「ちゃんと見てください！ タカト君！」

年少組の言葉はまるでヒーローショーを見てる子供達のようにだ。だから俺は何も言わず偽ウルトラマンメビウスを眺める。

「タダノ、あれはどういう事だ？」

「ザラブ星人は見ての通り変身能力を持つてるんだけど、完全に変身する事は出来ない。ただ、それは俺達から見ればだ。例えば、もしこの場に若干目付きが怖い翼が出て来たとして、それだけで偽物だつて言える？」

「……無理だな」

「それと似たようなものだと思うよ。だって、まさかメビウスが二人いるとか誰かが偽物に化けるとかすぐに思わないって」

そういう意味でサコミズ隊長が凄いつて描写でもあるんだよなあ。

まあ、何せ彼の正体は……。

「ちよつとちよつと、まさかあいつ電車を攻撃しようつて言うんじゃないだろうね？」

「不味いわ。この感じだとブレーキが間に合わない」

「間に合ったとしても殴られて終わりだろ！」

「いや、この感じは……」

「はい、多分そうです。ね、響？」

「うん、間に合うよ！ だって、メビウスはウルトラマンだからっ！」

何だかんだで響達も楽しんでくれているようだ。で、画面では間一髪メビウスが間に合い偽物と対決開始。

ところがこれが壮大な罠だった。メビウスの攻撃で変身が解けて正体を現したザラブ星人。それを相手にメビウスは騙された事や自分の姿で悪事を働かれた事などで冷静さを欠いていた。

それを見てクリスや翼、天羽さんもか。彼女達が苦い顔をしてたのが印象的だ。きつと似たような経験が……うん、あつたね。

「落ち着いてメビウス！ 光線技に頼っちゃダメ！」

「回避をしつかりするんデスよ！」

「ああ……空振りも多いです……」

「何としても倒したいという気持ちだけが前に出ています。これじゃあ……」

「胸の部分が点滅を始めたぞ」

「あれはカラータイマー。青から赤へ変わるとエネルギーが少ない事を示す。あれが消えるとウルトラマン達は死んでしまうんだ」

「！！！！」

うわあ、年少組とヴェイグが揃って息を呑んだ。そして拳を握って画面へ声援を送り始める。これが噂の応援上映ですか？ もう可愛いんですけど、この五人。

「倒した、か……」

「何とかって感じだね」

苦い声のイヴさんと天羽さん。うん、さすが年長者。物語の作りをよく分かってらっしゃる。これで終わったと微塵も思っていないって顔してる。

「そもそもさらわれた女はどこにいるんだよ？」

「そうだよね。それも分かってないし……」

「まだ侵略者は二人いるはずだよ。それは一体いつ襲ってくるのかな？」

クリス達三人の会話を聞きながら俺はエル達を見つめていた。おつ、エルが嬉しそうに画面を見ている。メビウスがタカト君へピースサインをやるうとして……

「ああっ!？」

横からの攻撃で大きく吹き飛ばされた。やったのは暗殺宇宙人ガッツ星人。

「不意打ちとはひきよーデス！ 最低デスっ！」

「メビウスが消耗するのを待ってたんだ……」

「そのために仲間を犠牲にしたんですか？」

「そういう事だろう。嫌な奴らだ」

「メビウス……タカト君……」

何気にエルが誰かを君呼びしてるのってレアだな。もしかしてエルも明確に自分より年下が出来ればお姉ちゃんするのかな？

なんて俺がくだらない事を考えてる間に場面は4兄弟のシーンへ。静かに熱い場面だ。

「見てるだけは出来ない、ね……」

「気持ち分かるや。私も、きつと同じ事言ってる」

「エネルギーは残り少ない。変身すれば死ぬかもしれない。それなのに……」

エースの、北斗星司の言葉にガングニール三人が……

「勝てばいい、か。いいな、この言い方」

「ああ、まったくだ。絶望の中でも希望を捨てないとはこういう事だ」
ジャックの、郷秀樹の言葉にクリスと翼が……

「これが最後の戦い……」

「そうしたいんですね、ウルトラ兄弟は」

「きつとそう」

セブンの、モロボシ・ダンの言葉に小日向さん、セレナちゃん、月読さんが……

「行こう、デスカ。この一言がとっても重いデス」

「はい、全ての想いがこもってます」

「負けは許されない。しかもその場合は死んでしまうのに、だからな」
マンの、ハヤタ・シンの言葉に暁さん、エル、ヴェイグが……

だから俺はこう告げる。

「彼らは何度も死地を切り抜けてきた。だからメビウスに見せるんだ。彼がタカト君に見せようとしていたように、その彼へ信じる強さと諦めない心を」

そして画面の中では四人が同時変身。並び立つウルトラ4兄弟に画面の中と外で声が上がった。

そこから始まるガッツ・ナックルコンビ対ウルトラ4兄弟戦。開始早々に光線技を撃つ四人。

それをあつさりと避けられ、まずエースがナックルによって被弾。すかさずジャックがナックルの追撃をカットするように場所を移動させた。

マンとセブンはガッツを相手にするも、分身攻撃でいきなりピンチ。カラータイマーも即座に点滅を開始。

「ああつ……もう四人のカラータイマーが……」

「やっぱりもう戦えるだけのエネルギーがないんだ……」

「だとしても、それでも諦めないよ。それがウルトラマンであり、ヒーローだ」

俺がそう言うのと暁さんが大きく頷いた。

「德斯ね。アタシ達だって何度も諦めそうな時がありました。それでも、自分を信じて頑張った結果ここにいます！」

「うん、そうだね。私達でもそうだったならウルトラマン達がそうじゃない訳ない」

「応援しましょう。きっと、きっと想いは届くはずですよ！　ね、エル！」

「はいっ！」

「「がんばれっ！」」

……ここまでピユアだと心が痛い。それとさり気無くヴェイグも拳を握ってる。気持ちは送ってるんだろうな、これ。

そして状況はその声援が届いたかのように四人が反撃を開始。それに曉さんやエルは大興奮。セレナちゃんと月読さんは大喜び。で、密かにヴェイグが「よしっ」と言っているのが聞こえた。

年少組にヴェイグと響が固唾を飲んで見守る中、遂に四人の光線が星人に命中。それによりズズンと音を立てて倒れるガッツ星人とナツクル星人。

それを確かめ四人は空へと飛び上がる。囚われたメビウスを助け出して、即座にジャックとエースが彼を支えるように降下していき、セブンとマンはそれを誘導するように降下していく。

「優しくも厳しいお兄ちゃん達デス」

「でも、だからこそ頼もしい」

「立てって言うところがメビウスを信じてる感じがします」

「そうですね。立てると信じているんです、きつと」

もうすっかり夢中な年少組。ピュアな心故の反応だろうな。

……しかし、残念ながらここから急展開なんだよなあ。

「「「「あっ!?!」」」」」

生きていたガッツ星人とナツクル星人により4兄弟が捕えられ、さつきまでのメビウスと同じ状態となる。

そう、侵略者の目的は最初からメビウスではなく4兄弟。そのエネルギーをマイナスへ変換してシールドを破る事だった。

「なんて奴らだ……っ!」

「卑劣な……っ!」

「新人を見捨てられない心を利用しやがるなあ、こいつら、本気で腹が立つぜっ!」

「優しさを利用し、踏み躪り、嘲笑う。この上ない外道ね!」

年長者組が怒り心頭である。何せ彼女達は立場で言ったら4兄弟だ。そりゃ怒りもするだろう。

「メビウスが……」

「やられちゃった……」

響と小日向さんの言葉で年少組が落胆する。何せメビウスもエネルギーは残ってないに等しかったんだ。

絶望が画面の内外で漂う。それでもエルが真つ先に顔を上げた。そう、ここからはタカト君のターン。諦めずに立ち向かった4兄弟の姿に勇気をもらい、少年が動き出したんだ。

「タカト君……」

「エル、覚えておいて。例え戦う力はなくても、心の中に希望を持ち続ける事や勇気を持ち続ける事でヒーローを助けたり、あるいはヒーローになれる時があるって」

「……はいー」

間違いなく今のタカト君はヒーローだ。その心は誰にも負けない強さを持つてる。

怯えて怖がっていたタカト君はもういない。勇気を、怖さに負けないうって気持ちを、今の彼は持ったから。

「凄いです……。こんな近くに侵略者がいるのに……」

「分かるかい？ これはあの三か月前のオマーージュなんだ」

「「「……あつ！」「」」」

「あの時は震えて隠れるしか出来なかった。それを今回は助けるために一步を踏み出せる。それがヒーローの復活に繋がるんだ。無力な存在なんていないんだよ」

年少組に響く声が聞こえた。それに構わず俺はエルの頭をそつと撫でて言葉を続ける。君の事でもあるんだよって、そう伝えるように。

それが伝わったのかエルは嬉しそうに頷いてくれた。

丁度その瞬間ミライが再び立ち上がった。タカト君へ何故こんな危ない事をと尋ね、そこでミライは教える側から教わる側へ変わる。「ウルトラ兄弟の姿が……タカト君に勇気を、諦めない気持ちを教えたんデスね……」

「メビウスが教えたかった事。知って欲しかった事。それを逆にメビウスが教えてもらってる……」

「遠くの星から来た男が地球人に愛と勇気を教えてくれたのとは逆に、ミライは地球で少年から愛と勇気を教えてもらうんだ。それがウルトラマンメビウスをまた一步ヒーローへ近付ける」

「愛と勇気……」

今度は自分が約束を果たす。そう言ってミライはタカト君と別れる。そのすぐ後、メビウスがガッツ星人へ攻撃しながら大地へ降り立つ。その胸に青い輝きを宿して。

「「「カラータイマーが青い（デス）っ！」「」」」

もうカラータイマーという単語を覚えた年少組と響である。ここからは主役のターンだ。

新人で未熟なところがあるメビウスだけど、その成長をこうして描ける事で感情移入がし易い。

人間ウルトラマンとは異なるけれど、それにどこか近いメビウスはある意味で最高のヒーロー像かもしれない。

「凄い……凄いデスっ！」

「二人相手に負けてない……」

「当然です！今のメビウスはタカト君の勇気をもらったんですから！一人でも二人分ですっ！」

セレナちゃんの表現に心がぐつときた。そうか、そういう考え方もありか。

「頑張れっ！メビウスっっ！」

そして、きつとエルの声援も力になってるんだろうな。そう思えるぐらい、エルはタカト君と気持ちと同じくしてる。

「カラータイマーも、もしかしたら胸の歌なのかもしれない」

そんな中で聞こえた響の呟きは俺には納得出来る部分もあるものだった。

実際、ティガ達はカラータイマーの制限時間があるようでない。まあそもそも正確にはカラータイマーって名称じゃないガイアみたいな場合もある。

だから胸の歌のようにその気になったら無限となってもおかしくない。ティガのグリッター化がそれだと思うし。

「う、ウルトラ兄弟の若い時が……」

「凄い古そうだね……」

「俺から一言言わせてもらえるなら、それでも話の内容は十分現代で

も通じてしまうレベルだよ」

「内容？」

「特にマン、セブン、帰りマンことジャックはね」

「か、かえりまん？ た、只野さん？ たしか最初は新マンと言っていないでしたか？」

「ん？ ウルトラマン二世ことジャックの事？」

「んだよさつきから。名前がいくつもあるのか、ジャックって」

「まあね」

「いかんいかん。ちよつと面白くてオタク的なからかいをしてもまった。反省しよう。」

さて気付けばメビウスがガッツ星人を倒しナツクル星人さえもダウンさせ、拘束されていた4兄弟を助け出してそろそろ物語は終盤へ。

シールドによる封印は既に解かれてしまい、Uキラーザウルスが復活を遂げた。だが、そこで自慢げに喋っていたナツクル星人はあろう事かUキラーザウルスに殺されてしまう。

「仲間を……」

「メビウスと同じ事を言ってたよ、響」

「捨て駒ってここまでではつきり言うとはね」

「エースの言葉がしっくりくるわ。本物の悪魔よ」

ヤプールの残虐非道っぷりにみんなの怒りゲージが上昇する。

これは、エース本編の最終回を見たらもつと怒るだろうな。ただ、その後の名言で感動する事も読めるけど。

「悪意もきつとこんな感じデス！」

「うん、ベアトリーチェを歪めた原因」

「みんなの不幸を、滅びを望むなんて許せませんっ！」

「ウルトラマン達は光の存在だからこそ、ヤプールのような闇が付け狙うんですね」

「闇はいつでも光を狙う。それでも、決して負けないからヒーローなんだだろうな」

すっかりヴェイグもヒーロー好きになってくれたらしい。うんう

ん、嬉しい事だ。

だが、残念ながらメビウス達の苦戦は続く。数の差をもともしないUキラーザウルスの能力に五人のウルトラマンはダメージを重ね、敗北間際まで追い込まれてしまう。

それでも諦める事無く応援を続けるタカト君の願いが天に届いたかのように二筋の光が戦場へと降り注ぐ。

「「ウルトラマンが増えた（デス）っ！」「」」

「あれがタロウとゾフィーか」

「そう。ウルトラマンに似たのが長兄扱いをされるゾフィー。立派な角が二本ある方が兄弟最強と言われているタロウだ」

「エネルギーを分け与えるって……今更？」

「天羽さん、二人は人間として暮らそうと決めた兄弟達の意味を尊重したんだと思うよ。だから今までウルトラマンとしての生き方をさせなかったんだ。エネルギーを与えたら、それはまた再び戦士として宇宙のあちこちで戦う事になる」

「……だが、ヤプールが復活した今、彼らがまた戦士として戦っている。だからこそエネルギーを……か」

「やりきれないわね。ある意味で戦いから身を引いて平和に暮らしていたはずなのに」

イヴさんの噛み締めるような言葉が胸に刺さる。今、彼女達はある意味でその状態だからだ。

無理かもしれない。だけど願わずにはいられない。彼女達が戦士なんてせず、一人の女性として生きていける世界になつてくれる事を。

ノイズも錬金術師も現れる事無く、人間同士が多少いがみ合い揉めるぐらいな、装者が必要ない世界になつてくれる事を、切に願う。

タロウとゾフィーが五人へエネルギーを分け与え、遂に完全復活を遂げたウルトラマン達。七人の戦士がUキラーザウルスへ立ち向かい始めると、エル達が目に見えてテンションを上げた。

動きが違うもんなあ。それにエネルギーが回復したおかげかそれぞれの能力や技も使つての大反撃だ。

で、響がレオで翼がマンか。小日向さんは……いつそアストラ？

暁さんはダイナで月読さんはティガ、かね。セレナちゃんはコスモスで決まりだ。俺は……その面子なら80辺りがいいかなあ。あるいはエースでもいい。

そして物語はクライマックスへ。勝利目前からの危機的状況へ陥るメビウス。それを見てウルトラ6兄弟が自分達の光エネルギーをメビウスへと注ぐ。

これは完全にウルトラマン物語のオマージュだよなあ。だってタロウの教え子のメビウスにそれをやるんだもの。

「ウルトラマン達が……」

「消えていく……？」

「ウルトラマン達は一種光の化身だ。自分達の肉体までエネルギー化してメビウスと一体化しているんだよ」

「す、凄い……」

「そんな事が出来るんですね……」

「ただどのウルトラマンでもとはいかない。こういう事が出来るのは理由や条件もあるからね」

コスモスとジャスティスは宇宙の秩序と正義を守る存在故にレジェンドへなれたし、ゼロとダイナとコスモスはゼロが持つてるだろ。うノアの力が作用したと思われるし、タロウはウルトラホーンで、メビウスは父から託されたメビウムブレスの力だ。

だがその一体化が完了する前にメビウスへUキラーザウルスが凄まじい攻撃を放つ。それによりメビウスの体も消えたように見えた。

「……ああっ!?!」

年少組とヴェイグに響の声が聞こえる。大丈夫だよ、どんな時も諦めない心が今のメビウスにはあるんだ。

「っ！ 上か！」

「光が……集まってる……」

小日向さんの言う通り、上空に光が集束していき一つの形を作り出す。それがウルトラマンメビウスインフィニティーだ。

「……変わった……」

「今のメビウスはウルトラ6兄弟のエネルギーも得ている。その名前のメビウスの輪。それになぞらえて無限大を意味するインフイニティーの名を与えられてる」

「メビウスインフイニティー、か。強そうじゃん」

「無限大に始まりと終わりが無い現象。ふふっ、同じような意味を掛け合わせるとか、単純だけど凄いわね」

「さあ、もう物語も終わりが近い。あれだけの強さを誇ったUキラーザウルス相手にメビウスインフイニティーはその身一つで向かっていく。」

光線どころか攻撃一つせず、ただ捕まっている女性を助けるために手を伸ばして。それに響が息を呑んだのが分かった。彼女は分かったんだろう。今、メビウスがしたいのはUキラーザウルスを倒す事じゃなく女性を助けたいだけだった。

「体当たり?」

「違うぜ先輩。あれはそんなんじゃない」

「うん、捕まってるアヤさんを助けたい。それだけです」

そしてそのままメビウスインフイニティーはUキラーザウルスの体を貫くように姿を見せて、その手にバリアで守るようにした女性を弟であるタカト君の近くへと優しく移動させた。

「良かったデス」

「うん、良かった」

「あっ、見てください! メビウスがピースしましたっ!」

「タカト君、驚き方が可愛いです」

そして並び立つメビウスとウルトラ6兄弟。そこへGUY Sのメンバーもやっつと合流。

「あっ、リュウさんが笑った!」

「んだよ、こいつもウルトラマン好きか?」

「女の人の気持ち、分かるかも。私もこんなの本当に見たら感動しちゃう……」

「この男性は外国人なのか? グラシアスとは……スペイン語だったはずだ」

「彼はG U Y Sに入る前はサッカー選手だったんだ。それが関係してるんだよ」

「そうなんですね」

こうして最後は目標や夢を取り戻したタカト君と姉のアヤに見送られ、ミライは帰路へと就く。この時点でこの姉弟にはメビウスⅡミライが露見してるんだよなあ。

「何だかいいデスね。みくんな笑顔デス」

「でも、ヤプールは完全に倒せなかったんだ……」

「大丈夫です。みんなが最後まで希望を捨てなければ、いつだって光は闇に打ち勝ちます」

「ウルトラマン達も僕ら人間を信じてくれました。だからきつと負けません！」

すっかりウルトラファンのセレナちゃんとエルである。やっぱりこれを最初に見せて良かったな。女の子でもウルトラマンなら怖くないし、何より分かり易く希望を描いてくれてるもの。

ライダーだと人ならざる悲しみとかが描かれる場合もあるし、ヒーロー物の導入としてはウルトラマンの方がいいかもしれないな、こうなると。

「只野さんっ！ ウルトラマンの映画ってこれだけデスか？」

「いや、沢山あるよ。何せ日本を代表するヒーローだからね」

「兄様、もう少し詳しい話を聞かせてください。ウルトラマンの事やその生まれ故郷の話を」

「いいよ。じゃ、俺が知ってる限りで話すな」

暁さんとエルがキラキラした目でこつちを見てくるのを嬉しく思いつながら俺は話し始める。偶然地球へやってきた銀色の宇宙人から始まる、ヒーローサーガを……。

その日、切歌達はワクワクしながら居間に座っていた。何せ今日は待ちに待った映画鑑賞会。まず上映するのはウルトラマンティガ&ウルトラマンダイナと光の星の戦士達だ。

「あー、楽しみデスよ。初めて見るウルトラマン達の映画デス」

「ティガとダイナはどんなウルトラマンなんですか？」

「そうだなあ。簡単に言えば、人間が変身するウルトラマン。そしてその本質は光ってとこ」

「宇宙人じゃないんだ……」

「本質は光……どういう意味でしょう？」

仁志の薫陶の賜物か、すっかり特撮好きになり始めている年少組。やはり最初に見せられたゴジラが大きいのだろう。

切歌や調にとってはそれが実際見た存在の映画だった。故にウルトラマンも実在するのだと思う事が出来たのだ。

同じ事が響達にも言える。彼女達はグリッドマンを見た。光の存在である彼を知ったからこそ、それに似ているウルトラマン達も存在するはずだと思えたために。

「ダイナの世界はティガの世界の未来だ。と言ってもメビウスの時みたいは何十年も経過した訳じゃない。だからこの映画の人達はティガというウルトラマンがいて、闇から世界を守った事を知ってる。そして、そのティガは最後の最後で地球に居る多くの子供達と一体化して恐ろしい邪神を、闇を倒してるんだ」

「子供達と？」

「一体化、デスか？」

「そう。これを覚えていて。ティガのいた時代に幼い子供だった少年少女が七年後のダイナでは成長してるんだ」

仁志の説明で一部の者達は気付いた。それがこの映画を見る上で重要な要素となるのだろうと。

「じゃあ再生するよ。生まれながらのウルトラマンとはまた違う、人間ウルトラマンの戦いを」

物語は地球ではなく宇宙で始まる。ウルトラマンダイナと戦う怪獣は手強く、必殺のはずのソルジェント光線さえ通じない。どうすればと、そうなった時宇宙怪獣を貫くように巨大な光線が宇宙空間を走る。

それはTPCが極秘開発した戦艦「プロメテウス」によるものだった。スーパーGUTSだけでなくダイナもどこか危険視する程

にプロメテウスは恐ろしい攻撃力を有していた。

「ま、まさかウルトラマンの光線よりも強いなんて……」

「こんな物を作って大丈夫なんでしょうか？」

「エル、どういう事？」

「その、人は残念ながら強大な力を持つと道を踏み外してしまう事があります。現に聖遺物を巡って争う事さえしました」

「この戦艦を持った事で人間が過ちを犯す、か。ない話じゃないぞ」

「ヴェイグさん……」

後日地球にあるクリオモス島でプロメテウスの説明を聞くスーパーGUTSの隊員達。その中にはウルトラマンダイナことアスカの姿もあった。

人間の思考を読み取りその動きを忠実に再現するために無人であるプロメテウス。だが、その完全な運用のためにはデータが不足しているため、豊富な戦闘経験を持つスーパーGUTSの隊員にデータ収集に協力して欲しいと言うのが説明会の狙いだった。

その最中、プロメテウスの開発者であるキサラギ博士は暗にダイナよりもプロメテウスの方が強いと発言。

それを聞いたアスカが腹を立て、自分がプロメテウスの事を否定してやるとばかりにデータ収集をやってやると意気込んでしまう。

「な、何かこの博士怪しいデス！」

「これ、もしかしてダイナのデータを取られちゃうんじゃ……」

「月読さん、正解。相手の目的は最初からウルトラマンダイナだ」

「じゃ、この博士はもしかして……」

「『侵略者っ!?!』」

その言葉を肯定するようにアスカへウルトラマンダイナと呟くキサラギ博士。そしてアスカはダイナとして戦った記憶を思い出していく。その最後にはプロメテウスの砲撃でダイナとなった自分が消滅する映像を見せられて、アスカは意識を手放す事となってしまうのだ。

「……完全に相手にしてやられたわね」

「だね。動きや能力を知られた上で恐怖心まで植え付けやがった」

「これまでにない程用意周到な侵略者だ。ダイナは、これで勝てるのだろうか？」

目覚めたアスカだったが、それと時を同じくして謎の円盤がクリオモス島を襲撃する。迎撃に出たスーパーGUTSの隊員達だったが、配備されていたガッツイーグルはマシントラブルで海面へ不時着する羽目になってしまう。

同僚であるマイと共に地上戦を行おうとするアスカだったが、データ収集が原因で苛立っていた彼は彼女を足手まといだとして突き放し、単身ダイナとなろうとする。

「何で一緒に戦えないの？　マイさんの気持ちも考えてあげなきゃ……」

「未来……」

「やべえな。こんな精神状態じゃ、勝てる相手も勝てねーぞ」

ダイナとなって円盤へ挑もうとするアスカの前に、何故かプロメテウスが出現。そのプロメテウスへ謎の円盤が光線を浴びせると変形が開始される。

現れたのはデスフェイサーと呼ばれる電腦魔神。收拾したダイナのデータを利用し、デスフェイサーはダイナを完封に近い形で攻め立てた。

「だ、ダメデス。ダイナの動きが全部読まれてるデスよ……」

「攻撃も通じない……」

ならばと必殺技を放とうとするダイナへデスフェイサーはネオマキシマ砲で対抗。その光景に植え付けられた恐怖心が甦ったダイナは、撃ち合う事を避けて逃げ出してしまう。

結果、ネオマキシマ砲は島を直撃。甚大な被害を生んでしまったのだ。当然、その被害者の中にはマイの姿もあった。

「……ダイナ」

「逃げちゃった……」

「兄様、これが人間ウルトラマンって事ですか？」

「そうだ。ダイナはアスカって人間が得た力でしかない。メビウス達は生まれながらのウルトラマンだった。正義を、平和を守るためにそ

の力を磨いていた存在だ。それとは違ってティガやダイナはあくまで力であり、それを使うのは人間であるダイゴやアスカなんだ。怯える事もあれば調子に乗る事もある。それらを含めて、ティガ・ダイナ・ガイアは平成三部作と呼ばれて人気が高いんだ」

キサラギ博士を操っていたのはモネラ星人だった。彼らは人類へ滅べと迫る。交渉も何もなく、ダイナの逃走を見た事で絶望している地球人類へ死ねと告げたのだ。

更にモネラ星人は攻撃予定日時まで発表。防げるものなら防いでみろと人類を挑発したのである。それは人類の守護者たるウルトラマンダイナを恐れていないという事でもあった。

「くそつ、腹が立つねこいつ」

「人類に自分達と対等に会話する資格はないですつて。何様のつもりよ」

「ダイナと正面切って戦えば自分達の危険度が上がると思って策を弄した癖に……」

「響、こういう相手でも手を繋ごうって思える？」

「さ、さすがにこれは無理かなあ。それに、手を繋ごうって思えるのは、相手にも何か理由があって手を繋げないって言う時だよ。こういう、最初から手を繋ぐどころかこつちを命って認識してないような相手とは、私も最初から拳を握る、かなあ……」

「でも、改心して考え直すつてなれば繋ごうと出来る。そこが君の強さだと俺は思うよ」

デスフェイサーとの戦いで心理的に敗北感を味わっていたアスカは、隊長であるヒビキヤ街で出会ったススム少年との触れ合いで自分の中の弱さと向き合っていく。

そしてススム少年の持っていたティガという名のウルトラマンを知り、彼はその関係者と思われるGUTSの隊長であり今もTPCに残っているイルマという女性と面会する。

——ティガはもういないの。

ティガと会いたいというアスカへイルマは告げる。強大な闇と戦い、ティガはそれを払って消えてしまった事を。

その会話の中でアスカは大事な事に気付く。ウルトラマンとは、光とは何か。そして自分が何をし、どうしたいかを。

「光……」

「ティガは、ウルトラマンティガは光、なんだ……」

「ここはティガ本編を見てた人達へのサービスでもある。ティガの最終回は、それまでのウルトラマン達とは一線を画したものだっただけだ」

「最初に言っていた事ですね。子供達と一体化したって」

「そこからこの映画では、ティガは人の心の光の象徴だったんじゃないかってところまでいってる。そして、多分この世界ではウルトラマンとは本当に光の化身なんだと思うよ」

「人の心の光が、希望が力となって形を持った。それが、ウルトラマンティガ……」

そしていよいよモネラ星人が告げていた攻撃予定時刻となる。誰もが緊張する中、それは地下から現れた。

電脳魔神デスフェイサーが地面を突き破るよう出現。警戒していたTPCの戦力を攻撃し始めたのだ。その圧倒的な力の前に為す術無く散っていく防衛兵器達。

その中でスーパーGUTSは必死に応戦するが、やはりデスフェイサーへ大きなダメージを与える事は出来ない。

「強すぎるデス……」

「一方的……」

「だ、大丈夫です。まだ、まだダイナがいます」

自分の中の怯えや不安。それらを全て受け入れ、飲み込み、アスカは意を決してリーフラッシュャーを掲げてダイナへと変身。仲間や街を、地球を守るために自分の出来る事をするべくデスフェイサーへ挑んだ。

これまでと違い、ダイナは逃げるような動きは見せない。むしろダメージを恐れる事無く向かっていくようにも見える。その戦いに誰もが奮起し諦めるものかとダイナを援護する。

ストロングタイプへ変わり、ダイナはそのパワーを活かして正面か

らデスフェイサーへ挑み続ける。そんな中、遂にその時が来た。

「あ、あれはっ!?!」

「ネオマキシマ砲……っ!」

「だ、ダイナっ!」

「タダノっ、どうなるんだ!?!」

「ヴェイグ、目を逸らさず見るんだ。見てる事しか出来ないからこそ、最後まで見届けるんだ」

デスフェイサーがネオマキシマ砲を発射しようとするのを見て、ダイナは何と逃げるのではなくむしろ自分から飛び込んでいったのだ。

そしてその拳がデスフェイサーの胸をネオマキシマ砲ごと貫く。まさしく恐怖心への勝利。ダイナは、アスカは自分の中に植え付けられた恐怖を乗り越えてみせたのである。

「「「「やったあ!」」」」

「見事だ。死への恐怖を正面から受け止めた拳の一撃とは」

「ああ、痺れるぜ」

「光線も何もなく、自分の体一つであの強敵を倒してみせる、かあ。カッコ良くて心が震えるよ」

「初戦での逃走がここへ繋がるのね。そうか。人間だから過去の経験を糧に成長していく……」

デスフェイサーを打ち倒したダイナの勝利に誰もが沸く中、モネラ星人の恐ろしい企みが発動する。

何とその場から去ろうとしたダイナをモネラ星人の円盤が触手で捕えてしまったのだ。更に円盤は形を変えて巨大な化物、クイーンモネラへと変貌する。

「そんなんっ!?!」

「ズルいっ! ダイナが帰ろうとしたところを狙うなんてっ!」

「ひきよーデス! 最低デスっ!」

そのままダイナはクイーンモネラの下部にある場所へ閉じ込められてしまう。そこでダイナを電撃が襲い、そのエネルギーを枯渇させようとした。

「ああっ……ま、不味いデス……」

「ダイナが、ダイナが死んじゃう……」

「か、カラータイマーの点滅が早くなつていきますっ!」

「た、タダノっ!」

「……目を逸らしちゃダメだ。最後まで、見届けるんだよ、何があつても」

トドメとばかりに強烈な電撃が流れた瞬間、ダイナが大きく震え、点滅が止まり、その目から光が失われていく。

「そ、そんな……嘘デス……」

「ま、まだ大丈夫ですよ？ ダイナが、ウルトラマンが死ぬはずないですよ？ ね、お兄ちゃん。メビウスだつてタカト君の勇気で元気になつたもん」

「いや、この時のダイナは死んだのと同じだよ。メビウスが映画でやられた時とは違う」

「「「っ?!」」」

「これが、これがモネラ星人の狙いかつ」

「ダイナを人類が見ている前で敗北させ、心をへし折る。何て効率的で最高の侵略方法かしら。反吐が出る程有効だわ……っ!」

「デスフェイサーさえ捨て駒か。いや、違うね。あれを強い敵だつて、自分達の最大戦力だつて思わせたのがそもそもの作戦か。ホントいい性格してるよっ!」

「狙いは、最初からウルトラマンダイナの抹殺とそれを人類に見せての無気力化……かよ」

「酷い……酷過ぎるよ……」

「響……」

映像で見えていた避難者達も口々に絶望を呟いていく。ダイナが負けた。この意味する事は重い。

それでも諦める事無く抗い続ける者がいた。イルマである。彼女は昔取った杵柄とばかりにガッツウイングゼロを駆ってクイーンモネラへ攻撃し続けていた。

彼女は信じていたのだ。ティガと同じくウルトラマンであるダイナの事を。光の化身であるダイナへ届けと、イルマは必死に抵抗を続

ける。

そして、諦めていなかった者は避難者達の中にも。

かつて兄がティガと一体化した話を聞いていたススム少年が叫んだのだ。諦めなければ人は光になれると。

それを馬鹿馬鹿しいと取り合わない周囲の人々の中で、モネラ星人から解放されていたキラサキ博士だけがススム少年へ問いかける。

——私もなれるかな？ 私も、光になれるかな？

——きつとなれるよ。

その問いかけにススム少年が笑顔で答え、それに感化されてキサラギ博士がその場の人々へ叫ぶのだ。こんな小さな子供でさえもまだ勝利を信じているのに、自分達が諦めてどうするのだと。

「ぐすつ……博士……」

「熱い人なんだ……本当の博士は」

「何もせず終わっていいはずがない。うん、そうです。人間は無意味なんかじゃない」

すると博士の言葉に鼓舞されたように避難者達の中から声が上がり始める。

それは若者達だった。かつてティガと一体化した子供達やそうじゃない者達も一緒になって立ち上がり、強い心で想いを述べ始めたのだ。

その声がススム少年の持っているティガの人形へ宿るように光を放ち、満を持してススム少年が告げる。

——もう一度立って！ ウルトラマン！

それを切っ掛けにススム少年から光が生まれ、その場の避難者達からも光が生まれていく。それらがどんどん伝播していき、やがてその場全体が光に包まれていった。

「これが……人の心の光……」

「ティガと小さい頃一緒に戦った子達が本当にいるんだ……」

「すごい……綺麗……」

「タダノの言った事はここに繋がっていたのか……」

その願いを受け、遂に人の光が姿を持った。ダイナを助けたい。諦

めたくない。そんな強い思いが形を成して再び光の巨人を復活させたのだ。

「」「ウルトラマン……」「」

「」「ティガ（デス）っ！」「」

イルマがティガの登場を見て噛み締めるように名前を呼ぶ。ティガはまずダイナを助け出すべくその体を覆っている部分を攻撃し崩していく。

そして自分の光をダイナへと分け与えたのだ。その人々の心の光がダイナの目に光を灯し、胸に希望の青を戻した。

「」「やったあ！」「」

「奇跡だ……」

「でも、それを起こしたのは一人の少年の想いなよね」

「あー、何だろ？ あたし、何か泣きそう……」

「へっ、意外と涙脆いな、片翼の先輩は」

「クリスちゃんがそれ言う……？」

「黙っててあげよ？ それに、響だって潤んでるし」

「……俺は、いつの間にか人間の闇ばかり見てたのかもしれない」

「ヴェイグ……」

「そうだ。人間にだって良い奴はいた。優しい匂いをさせる奴だっていっぱいいた。俺は、光になれる人間を見てきたはずなのに、知っていたはずなのに……」

ティガとダイナは力を合わせクイーンモネラと戦う。終始優勢に戦いを運ぶ二人のウルトラマン。だが、そんな二人を触手が襲い、身動きを封じる。

「ああっ!？」

「大丈夫だよ切ちゃん。ほら！」

それを助けるべくスーパーGUTSが動いた。全てのメカを失つても諦める事無く自らの足で戦い続けていた彼らの行動がウルトラマンを助ける。

——ビームをクロスさせろおおおっ！

——ラジャアアアツ！

射撃を交差させる事で威力を増させて触手を貫くファインプレーに助けられ、ティガとダイナは再度クイーンモネラへ攻撃を仕掛ける。

その時、クイーンモネラの最大の攻撃が放たれようとした。それが最大の好機。ヒビキ隊長が叫ぶ中、二人のウルトラマンはその必殺の輝きを放つために光を集束させていく。

「「「「「「今だっ!」「」「」「」」」」」

放たれるゼペリオン光線とソルジェント光線。それをクロスさせてクイーンモネラへ直撃させたのだ。

その強力な威力でクイーンモネラが消滅していく。跡形もなく消え、二人のウルトラマンと人類が勝利を掴んだのである。

「さ、さつきみんなで声を出してたデスっ!」

「う、うん。ちよつとビックリした」

「何だか楽しかったです!」

「うん、ヴェイグさんやお兄ちゃんも出してたもんね」

「いや、その……」

「いやあ、完全にここだって感じだったからな?」

「いやいやっ! 只野さんは知ってますよね!」

「そうだぞ。あんたは知ってるんだから感じも何もねーだろ」

「き、気が付いたら夢中になっていた……」

「な、何だか恥ずかしいわね……」

「あたしはむしろ嬉しいけどね。何も言わないでも心が繋がったって感じしたじゃん」

「それはそうなんですけど……やっぱり恥ずかしいですよ」

エピソードが流れる間、仁志達はそれぞれに笑い、恥じらい、喜びを見せる。それはさながら映画と同じだった。

そう、彼女達は映画を見ながらいつしかそこと同調していたのだ。故に最後の場面でウルトラマン達に合図を出してしまったのだから。

この映画を見て、切歌は仁志から人間ウルトラマンの事を詳しく聞く事となり、続いて見たTHE FINAL ODYSSEYでは色々と大人向けな部分もあって大小の赤い花が少女達の顔に咲く事

となる。

そして仁志は後から思うのだ。この頃に見ておいてある意味良かった、と……。

二本の映画を見終えた後、仁志は少々自分の選択と時期を誤ったと思っていた。

(そうだった。すっかりグリッターティガやティガが闇から光へ戻るとかで忘れてたけど、あれって若干大人向けだった……)

どうしても視点や考え方が特撮オタクである仁志にとつて、ダイゴとレナにカミーラの話はそこまで強く印象に残っていなかったのだ。

いや、正確には恋愛描写関連だろうか。嫌いではないが、彼にとつて重要なのはそこではない。仁志が一番重要視しているのはヒーローの在り方であり生き方なのだから。

「兄様、少しいいですか?」

「ん?」

声に振り向いた仁志が見たのは何か不思議そうに小首を傾げるエルフナインだった。

「何かあったかい?」

「あの、カミーラは何故ダイゴさんにティガとなって欲しかったんでしょう? ダイゴさんはティガになれますがカミーラが好きだったティガではありません」

「ああ、そういう事か。えっと、これは難しいところだけど、例えば中身が別人だとしても見た目が愛する相手と同じって事がカミーラには重要だったんだと思うよ」

「見た目が同じ事が……」

「要はカミーラはティガダークの人格じゃなく強さや見た目に惚れ込んでたんだらうね。だからダイゴが中身でも構わなかったんじゃないかな?」

その仁志の意見にエルが納得するように頷く中、平行世界というもので見た目が同じでも中身が違うを経験している者達は一様に微妙な表情を浮かべていた。

いや、それは厳密には中身が違うと言うよりは成長方向が異なると言えるのかもしれない。例えば立花響が内包していた可能性の一つがあつたやさぐれてしまった響であり、風鳴翼の内包していた可能性の一つがあつたオレを自称する翼なのだから。

そんな事はお構いなしに仁志はエルの質問へ答えていた。最初の質問から派生したそれは、ある意味で思わぬ回答を仁志から引き出す事となる。

「では、兄様が女性に求める事は何ですか？」

「……どうしてこんな質問になつたんだっけ？」

スタートが異性愛に関する事だつたからとしか言いようがないのだが、仁志は事ここに至つて自分がとても恥ずかしい事を答えなければならなくなつている事に気付いた。

「どうかしましたか？」

「あー、いや、女性に求める事、ねえ」

「はい。マリア姉様の参考にもなります」

「え、エルっ!？」

まさかの巻き込みにマリアが狼狽えるも、無邪気なエルは不思議そうに小首を傾げた。

「何かいけませんでしたか？ 姉様は初めてここへ来た時も兄様へそういう事を尋ねていましたから」

「そ、それは……」

「何だ何だ？ マリア、あんた結婚したいの？」

「っ……そうよ。何か悪い？」

「悪くないよ。ただ、色々難しいだろ？」

「それもあるから只野に意見を聞いたのよ。ほら、私達の周囲で一般人目線の男性っていないでしょ？」

その質問に奏だけではなく響達まで考え込む。そして結論は同じだつた。

「そう言われると……まあ」

「そもそも私達の知り合いと言う時点で大抵が一般人離れた状況にいるからな」

翼の言葉に響達が無言で頷く。悲しいかなそれが現実と言うものだった。

「大丈夫だよ。みんなだつてその気になれば結婚は出来るさ。もし出来なかったとしても」

「何なら俺がもらつてやるつて?」

仁志の言葉へ割つて入るように告げられる、軽く冗談めかした奏の言葉。それに仁志は一瞬絶句するや俯いて、どこか力ない声でこう返した。

「俺は一人しかいないから全員は物理的に無理だよ……」

その情けない声に響達が苦笑する中、一人ヴェイグだけが見えていたのだ。

(タダノが……辛そうな顔をしてる……)

俯いたままで目を閉じて、仁志は何かを耐えるように表情を歪めていた。出会った頃から分かっていた事である。響達はこの世界の住人ではない”という事実。

それ故に仁志は自分の想いを押し殺した。出来るものなら妻として迎え、出来る限り幸せにしてやりたいと、心の底で強く思いながら。

「つと、俺が甲斐性なしな事はどうでもいいとして」

「ちよつと、そんな事言つてないわよ」

「そうそう。先輩、少し自分を卑下し過ぎだつて」

「どうせ俺は卑屈だつての。それでエルの質問に答えるよ。えつと、俺が女性に求めるものだろ?」

「はい」

話題や空気を変えようと仁志は顔を上げて明るく、そして軽く茶化すように喋り始める。

「そうだなあ。ま、ありきたりだけど簡単だ。子供が出来るまでは俺の事を一番好きでいてくれる事」

「そ、それだけですか?」

仁志へ想いを寄せる響としては若干拍子抜けな条件である。ただ、それは仁志からすれば難しいものという認識で……

「それだけって言うけど、この歳になるまで彼女いた事のない男だよ

？　まず俺を一番好きだって言ってくれる女性と出会うのが天文学的な数字だって」

「そ、そこまでいかねーとあたしは思うけどな」

自分がいるとは言えないクリスマスである。

「そう、ね。私も出会うだけなら可能性は十分あると思うわ」

ここにいないと言わないマリアである。

「そうデスね。出会うだけならもう会ってますっ！」

笑顔で断言する切歌に全員の視線が色々な意味で集まる。

(き、切歌ちゃん一体どういうつもり？　も、もしかして私の事……バレてる!?)

(ま、マジか？　まさか後輩もあのバカやあたしと一緒にだとか言わねーよな?)

(切歌は只野と仲が良いと思っていたけど、まさかそれは好意だけじゃなくて恋愛感情もあったのっ!?)

一部仁志への恋心を自覚している者達はそれはそれは気が気でない。ただ、切歌を見つめて調はやや呆れるように息を吐くところ言い放った。

「切ちゃん、この場合は只野さんのお嫁さんになりたいぐらいって事だよ?」

「およ?　そ、そうなんデスか?」

「うん。ですよね?」

「あー、うん」

「そ、そうでしたか。アタシはてっきり只野さんを男の人の中で一番好きならいいのかと思いました」

その瞬間、切歌らしいと感じて笑う者達とどこか安堵するように息を吐く者とに分かれた。

仁志は笑っていた。響とクリス、マリアは息を吐いていた。そしてそんな三人の様子を見て翼と奏は小さく首を傾げていた。

「でも、お嫁さんかあ。ちよつと憧れます」

「セレナちゃんはウエディングドレス似合そうだね」

「そ、そうですか?」

「うん。イメージカラーが白だから余計かな。もし可能なら新郎横までバージンロードは俺が歩いていきたいぐらいだよ」

「セレナの父親代わりになって事？ まあ私はいいと思うわ」

「姉さんが許可してくれるなら是非そうして欲しいです」

「その前に、俺は自分が花嫁さんを連れてきてもらえるようにならないといけないけどね」

自分になってもいい。そう言い出せない響達。そんな時……

「じゃあ、僕もそういう事があつたら兄様にお願ひしたいです」

「エルもか。よし分かった。そんな機会があればな」

「はいー」

嬉しそうに返事をするエルフナインの頭を仁志は優しく微笑んで撫でる。それはさながら父と娘に見えなくもない。

「お兄ちゃん、エルばかりズルいです。わ、私も撫でてください」

「え？ あ、うん。それなら遠慮なく」

「ふふっ」

擬似姉妹が揃って撫でられ笑みを零す。そんな光景に誰もが笑顔になった。

願わくばこんな時間が続くようにと心から願いつつ時は過ぎる。

燃えるような夕日を浴びながら誰もが笑っていた、そんなある日のまだ夏が来る前の一幕だった……。

ダイスキスキスギ

「はあ……」

店内に誰もいない事を確認してため息を吐く。時刻は午前五時半を過ぎたところ。最後の荷物も何とか片付け終わって落ち着いている。

正直まだ体がだるい。それと心も、だろうか。

あの奏と未来の悪意乗っ取り事件からマリアさんと翼への恥ずかしい告白もどき。そしてそれに関連するだろう引き継ぎの際の響とクリスからの恨めしい視線と言葉。それらのおかげで。

——只野さん、私達もああいうの、聞きたいです。

——せ、先輩達だけつてのは厄介事になると思うぞ。

あれ、そういう事だよな。うん、俺にだってそれぐらい分かる。マリアさんと翼への言葉は、どこにも愛してるなんて入ってなかったけど十分そういうのに近いもんだって。

響やクリス、未来もかな。俺に似たような事を言っただけ欲しいのかもしれない。

ただ、悪意がまさかの未来と奏へ手を出した。その原因が俺にはつきりとは分からないけど、翼達にはちゃんと分かっているらしい。

しかも以前のザババコンビの比じゃないぐらい深く悪意が根付いてたんだと思う。ヴェイグの反応から察するとそういう事だろう。

「……俺がそうなってもヴェイグには分からない、か」

夕飯だと起こされた時、ヴェイグから言われた一言が頭の中に響く。

そう、この世界の人間相手じゃヴェイグは匂いで善人か悪人か判断出来ない。つまり俺もそうなる。

もし仮に悪意が俺へ入り込み操ったとしたら、それを判断するのは難しいかもしれない。少なくとも確信を早々に抱く事は出来ないだろう。

「俺も用心しないとな」

そうは言ってもどう用心すればいいのか。悪意は人の心の闇を利用する。つまり嫉妬や恨み、憎しみと言った負の感情だ。

それを抱かぬように生きるのは難しい。特に今の俺は常にどこかで負の念を抱いてると言える。

響達からの異性としての好意。それに向き合う事で生まれる葛藤と不安。好きです。その一言を言えない言い出せないもどかしさもある種の安心感。

きつと今の俺は人生で最大の精神不安定さを見せているだろう。そんな訳のわからない自信が溢れている。

というか、あれだ。モテ期が来たと思ったら一気に来すぎだ。どうしてこれを分割してくれないのか。ああ、でももしそうやってたら俺はこうなれてないわ。

「只野君、ちよつといいかい?」

「はい? 何かありました?」

またため息を吐きそうになってるとオーナーから声をかけられた。特に話す事はないと思うんだが?

「いや、発注を月読さんと天羽さんに一部任せたじゃないか。それを知ってね、雪音さんが自分も何か引き受けたいって」

「……そうですか」

クリスマスも俺の負担を減らそうとしてくれてる。でも、今後の事を考えるとどうしたものかと迷う。いずれみんなは帰る。その時、減らした負担はまた俺へ戻ってくるんだ。

それだけじゃない。店で言えば一気に五人もの人間がいなくなる。勿論そうなってもいいように求人募集はかけるし、その時が見え始めたら少しずつ辞めてもらうつもりではあるけど。

何せ翼とマリアさんがツインドライブが可能となり、しかも奏とセレナも負担を減らした状態でツインドライブが可能。これで力オスビーストとの戦いはかなり楽になる。

で、そうなれば当然残りの装者もってなる。そうなればどうなるかは分かっているんだ、頭では。

「でもオーナー、残ってる発注で雪音さんへ任せてもいいやつ、ありま

す?」

「うーん、そうなんだよねえ。でもやる気を出してくれてるし、雪音さんはしっかりしてるから任せたい気持ちもあるんだ」

「……なら冷凍任せます? あれなら余程がない限り切らす事はないでしょうし」

「あー、それがいいかもしれないね」

「ならオーナーから話をお願い出来ますか? 俺だと居残りになりま
すから」

「そうだね。分かった」

そう言ってオーナーは嬉しそうに裏へと戻っていく。多分だが安心出来るからだ。

装者のみんなは、はつきり言って普通のフリーターよりも仕事へのモチベーションが高いし真面目だ。

そもそも彼女達はバイトなんてやりたくても出来ない立場だった。だからかバイトをどこか楽しんでる。

俺は、そんな彼女達に支えられている。朝、昼、夕と俺へ情報をくれる存在がいるおかげで色々考える事や手を打てるからだ。

「……悪意の狙いはみんなへの復讐を含めた世界の滅び。それを阻めるとしたら現状はあのゲージを上げる事、か」

みんなのギアに埋め込まれた依り代の欠片。それが持つ力があのゲージと共に上がっているのはほぼ確定。

なら、九人全員がゲージを上げ切れば本部ぐらいいは何とか出来るかもしれない。それがエルの予想だ。

そして、もしかすればゲージが最大まで上がれば切歌ちゃんの言ったようにエクストライブさえも使用出来る可能性がある。そうなったら世界蛇相手でも有利に戦える。

……別れも、早く出来る。俺がするべきは、それを少しでも早く迎えられるようにする事なんだ。

落ち込みそうな気分を振り払うように顔を左右に振り、そこからは仕事へ打ち込んだ。

「じゃ、後はお願ひします」

「お疲れ様〜」

朝勤の南條さんと高山さんに後を任せて店を出た頃にはもう六時半を過ぎていた。

いつものようにマリアさん達の家へ向かう。その足が不意に止まった。

「……いつか、この日常もなくなるんだよな」

考えないようにしてきた事。それが昨日の出来事から強く頭に浮かぶようになってきた。

理由は簡単だ。悪意がみんなへ深く根差した。それはこの世界での日々が原因に他ならない。みんなにはここは平和過ぎる。訓練も事件もない。ギアが、必要とされる事がない。

心を強く持つ必要がない。だからきつと悪意はみんなの中へ入り込む事が出来るんだろう。

酷い話だと思う。心の底で待ち望んだ平和を経験したら、それが彼女達を苦しめる事になるとか。

一生戦い続けると、ずっと戦士の心でいろと、そう言っているに等しいじゃないか、これじゃ。それじゃ、本当にライダーだ。

悪を倒して、倒して、倒し続けて、それでも終わる事のない戦い。変わらない世界。それでもいつか変わると信じて戦い続けると、そういう事かよ。

「……お邪魔します」

やり場のない怒りと悲しみを抱えたまま引き戸を開ける。

静かに廊下を歩いて居間をチラッと除けばそこには四つの可愛い寝顔。思わず笑みが浮かぶ。

そのまま台所へ行けば漂う味噌の匂い。もういつものとなった、匂い。

「おはよう只野」

「……おはようマリアさん」

こつちへ微笑みを見せるマリアさんは、昨日の事があったからか余計綺麗に見える。

「えっと、これいつもの」

「ありがとう。今日は私には何？」

「あ、その……」

袋から新商品のお菓子をとり出す。

「これ、新商品なんだ。感想、聞かせてくれる？」

「あら、いいの？　ありがとう。じゃあ、陽子さんとお昼休みにいただくわ」

心なしかマリアさんの笑顔が幸せそうだ。それが俺の心を騒がせる。止めてくれとは言えないし言いたくない。でも苦しい。

この笑顔がこの世界でしか出来ないのかもしれないと思うと、俺の中に何とも言えない気持ちが入み上げる。

「タダノ、おはよう」

「ヴェイグか。おはよう」

後ろから聞こえた声に振り返ればヴェイグが立っていた。で、その目が俺の持つてる袋へ。

「いつものか？」

「そう。それと五人で分け合って食べて欲しいんだけど……ほい」

ヴェイグにもマリアさんへ渡した新商品のお菓子をさせる。

「何だこれ？　初めて見るな」

「新商品。みんなの感想を聞かせて欲しい」

「おお、そうか。分かった。おやつに食べる事にする」

「ふふっ、ケンカしないようにね」

「分かってる」

マリアさんとヴェイグの会話はまるで親子だ。つい笑みが浮かぶけど、これもいつか終わるのだと思うと顔が曇る。

とりあえずシュークリームを冷蔵庫へしまい、俺は洗面台へ向かう。

手を洗いながらぼんやり考える。いつまでこうしていられるのかと。

ゲージが上がり切ればみんなは確実に悪意との決戦を迎えるだろう。おそらく悪意はカオスビーストを全滅させてやれば、次の手があればそれを、なければ直接姿を見せるはずだ。

……みんながそれに負ける事はない。何せ世界蛇を倒した時よりも強くなっているんだ。つまり、ゲージが上がり切った時が別れの時。

「俺が、俺がその気になって頑張れば、秋が来る前にすべてが終わるかもしれない」

夏の間が終わらせられるならそうしよう。寂しくなっていく秋や冬に別れなんて迎えたなら俺の心が持たない。

そうだ、それがいい。俺が素直にみんなへの好意を、気持ちを伝えればゲージが大きく増えてくれるならそうしよう。

「……俺の夢、やっと出来た俺の夢を叶えてみせるんだ。それがどれだけ辛い結末になるとしても」

夢がなくても夢を守る事は出来ると言ったヒーローがいた。そしてこんなような事も彼は言っていた。夢があると時々切なくなるけど、同じだけ時々熱くもなれるのだと。

俺がまさにそれだ。切なくもあるけど熱くもある。叶えたくないけど叶えなきゃいけない夢。だからこそ俺は叶えてみせるんだ。

手を洗い終えて洗面所を出るとそこでエルと出くわした。

「お、おはようございます兄様……」

「？ おはようエル。今朝は早起きだね」

「は、はい」

「つと、顔を洗うんだよな。どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

何だか様子がおかしいけど寝起きだからだろうか。そういえばエルとこの時間に喋るなんて初めてかもしれない。

そんな事を思いながら台所へ。そこでは鼻歌混じりで食事の支度をするマリアさんと、よじよじと椅子を伝ってテーブルへ登ろうとしているヴェイグの姿。思わず和む。

「マリアさん、エルが起きたよ」

「え？ 珍しいわね」

「何か心当たりある？」

「そうね……一つあるとすれば」

「すれば？」

「えっと、多分貴方にはこう言った方が分かり易いかもしれないわね。昨夜、勇気ある者を見たわ」

「おうっ、ガガガ後半の名エピソードじゃないか。そうかあ……遂にそこまで来たかあ。」

「勇者、暁に死す」の翌日は、調ちちゃんが俺にゾンダーは倒したのに戦いは続くんですか？って聞いてきたぐらい、マリアさん達はガガガを好きになってくれている。

丁度BLACKの話をした頃だったから調ちちゃんが悲しそうなと言ったらなかった。で、RXの光太郎と同じように、サイボーグ凱にもその戦いを切り抜けた先に希望があるからと言って納得してもらったっけ。

「そっか。熱かっただろ？」

「……あれは、私達には涙なくして見れない話だったわよ。死んだと思っていた両親が生きてる、のよね？」

「うん、ザ・パワーの力で精神生命体って形で」

「それだけでも泣きそうなのに、その前には護のお父さんよ？ もうエルがボロボロ泣いちゃって」

「あー……」

そうだった。あそこは怒涛の親の愛のターンだ。護の父であるカインと凱の両親である麗雄と絆。その三人の想いと言葉を受け取って大反撃の切っ掛けを作るんだ。

貴方達の子供の戦いを見守っていてください。あの台詞で前半が終わるのが泣けるんだよなあ。

「前半で泣いて、後半で興奮して、もうエル達は大変だったんだから」

「マリアさんは？」

「……察しなさい」

どこか照れくさそうにそう告げてマリアさんは俺へ背を向けた。ホント、可愛い人だ。

「ん？」

そう思っただけ椅子へ座ると俺の事をヴェイグがつんつんと突いてく

る。顔を向ければ、ヴェイグがこそこそと近寄ってきた。

「タダノ、マリアもかなり泣いてたぞ」

「……そっか」

今や気分は母親なマリアさんだ。親である三人の気持ちへ感情移入したんだろう。

そして子でもある訳だから凱や護の気持ちへも、か。うん、そりや泣くわ。

「なあ、あそこからどう戦うんだ？」

「ふっふっふ、ヴェイグ、それは機界昇華終結を見れば分かる」

「……今夜を待つしかないか」

「そういう事」

すっかりガガファンのヴェイグである。こうなるとそろそろFINALも貸すか。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

「こっちはヴェイグね」

「すまん」

本当にマリアさんの奥さん感は凄い。これ、もしかしくても昨日のあれが影響してるよな？

「えっと、マリアさん」

「何？」

不思議そうにこちらを見て動きを止めるマリアさん。何というか、本気で嫁さんのような気がしてくる。

だからか、いつものように食事の礼を言おうと思った口が動かなくなった。それでも何か言おうとして出て来たのは……

「……何でもない」

「何よそれ。子供じゃないんだから止めてよね、そういうの」

そう言いながらも表情は笑顔なのだから分からない。でも、うん、それに俺もつられるように笑顔になる。

今は先の事を考え過ぎても仕方ない。出来る事を懸命に頑張るしかないんだ。そう思っていこう。

「マリアさん」

「今度は何よ？」

そう言いながらも笑顔は崩さない。ああ、うん。そういう事だと思おう。きつと彼女も響達と同じ想いを俺へ寄せてくれているんだ。

だつたら……俺も……

「マリアって、そう呼んでもいいかな？」

夢を叶えるために、俺の心のために、少しだけ、少しだけ踏み込んでみよう。

そう思つての問いかけへの返事は、真つ赤な顔で俯いて小さく頷く可愛い反応でした……。

「いらつしやいませ。二名様ですか？」

「はい」

「かしこまりました。では、御席へご案内します」

静かな店内。洒落た内装と雰囲気。かかつてるのは……ジャズだね。

今、あたしは只野さんと一緒に初めて見た喫茶店に來ていた。

バイト終わりの早朝から開いてて食事も出来るところつてなると限られる。で、あたしがおそらく只野さん御用達の店を軒並み禁止したからここになつたと思う。

何だが大人の雰囲気がいい。テーブルとかが安っぽくないし、何より微かにコーヒー豆の匂いがするのが新鮮だよ。

店員のお姉さんは案内すると一礼して去つて行つた。で、只野さんは早速メニューを……見ない？

「奏、どうぞ。好きな物を頼んでくれ」

「う、うん」

レディーファーストつてやつ？ 何だか少し照れくさい。でも、うん、悪くないかも。

「……モーニングで十分かなあ」

六種類あるモーニング。あたしも初めて知つたけど、この辺りつてどうかこの地方はモーニングつて言う形でコーヒー一杯ぐらいの値

段で簡単な朝ごはんが食べられる。

ただここはちよつと違うみたいで、値段で選べるみたいだ。普通に厚切りトーストの奴もいいけど、フレンチトーストも惹かれる。こっちのミニパンケーキも捨てがたいな。でもこの休日限定のもいい。

「先輩は？」

「奏は決まったか？」

「正直迷ってる」

そう言うとき只野さんは小さく微笑んだ。

「なら、一つは俺が頼むよ。何で迷ってるんだ？」

なんて言ってきた。ヤバっ、こんな事で嬉しくなるとかあたし単純過ぎ。

「えつと、こつちとこつちで迷ってる」

メニューで指差す。フレンチトーストか休日限定。それを見て只野さんはどこか苦笑した。

「そっか。じゃ、俺がホリデーを頼むからフレンチトーストを頼めばいいよ」

「……分かった。ありがと先輩」

「どういたしまして。って言っても、分け合うようなもんだけどさ」

言われて気付く。これ、只野さんには本当にデートなんだって。だからそれらしい事してくれてる。

店員さんが水を持って来てくれた時に只野さんが注文をしてくれて、それが来るまであたし達は雑談する事に。

話題はやっぱり仕事——かと思っただけ……

「あたしの事？」

「うん、奏の事を知りたいと思って」

何でもいいからあたしの話を聞かせて欲しいって、そう只野さんは言ってきた。何か、ちよつとだけ恥ずかしい。だけど、同時に嬉しくもある。この人はあたしの事を知りたがってる。興味があるんだって、そう思うと、さ。

「じゃ、何から話そうかな？ 何でもいいんだよね？」

「ああ。好きな音楽、好きな場所、嫌いな食べ物や苦手な人とか何でも

いい。奏の、君の事を教えてくれ」

真つ直ぐな目でそう言ってくる只野さんはたまに見せる大人の男の顔をした。

「……じゃ、あたしの好きな人の話をするよ」

だからあたしも女の顔で返す事にした。そこからの話は、まあ詳しく言う必要もなく只野さんの事を話した。

多分向こうもすぐにそれが分かったと思う。それでも止める事無く、ただ照れくさそうな、恥ずかしそうな、そんな感じの複雑な表情で聞いてくれた。

あたしが、好きだつてそう言ってるの分かってるんだよね？ 女として好意寄せてるって伝わってるよね？

あんたに惚れたつて、察してくれてるんだよね？

「お待たせしました」

そんな事を思ってたなら注文の品が届いた。美味しそうな匂いをさせる皿が目の前に置かれていく。

「奏、とりあえず一旦食事にしよう」

「ん、そうだね」

「ではごゆっくり」

店員さんが下がったのを確認して、あたしと只野さんは手を合わせた。

「いただきます」

その瞬間、何だかちよつとだけおかしくて笑った。だってさ、まるで二人で生活してるみたいなきもちがしたから。そう思ってたら向かいからも笑う声。

「何で笑ってるのさ？」

「ごめんごめん。その、何だか喫茶店に来てるって感覚が一瞬消えてさ」

……ホント、こういうとこだよ。あたしが只野さんに惚れてったの、こういうところなんじゃないかなって思う。

この人は普段は大人じゃない。どっちかっていうと少年だ。でも、大人にならないといけないってなるとそれらしく出来る。この差に

きつとあたしは、ううんみんなやられてる。

「先輩、そっちのパンケーキとこっちのフレンチトースト、交換していい？」

「はいはい、ご自由に。何ならソーセージかベーコンも食べるか？」

「いいの？　じゃ遠慮なく」

「ん。どっち？」

「ん〜……ソーセージ」

「了解。っと、ほいパンケーキ」

「ありがと。じゃあお礼」

「どうも」

洒落たジャズを聞きながら静かな時間を好きな人と美味しい飯を食べて楽しく過ごす。うん、最高かも。

これがあたしの初デート、か。ヤバイよね、これ。何て言うか、次のデートいつにするって、そう言いたいぐらい。

食べ終わった後もあたし達は少しだけその場に残ってそれぞれのドリンクをゆつくり飲んだ。

話もせず、ただ二人でいる時間を噛み締めるみたいに。

「なあ奏」

「何？」

そんな時、只野さんが不意に声をかけてきた。何だろうと思って応じるとあの人はあたしを見つめてこう言ってきた。

「これからは毎日一緒に走ってくれないか？　出来ればみんなと一緒にさ」

惜しいよ只野さん。最後のさえなかったらあたしはときめいてたのに。でも、それが貴方だってあたしはもう知ってる。だから、少しだけ残念だけど嬉しく思っただけと頷くとするよ。

だからせめて……

——ねっ、また二人でここに来ようよ。

これぐらいは、言わせて欲しい。そんなあたしへ、只野さんはどこか嬉しそうに頷いてくれた……。

「何だか新鮮ですね」

そう私が言うとその場にいる全員が頷いた。普段なら翼さんとクリスちゃんしかいないトレーニング。それが今日は奏さんだけじゃなく切歌ちゃんや調ちゃん、セレナちゃんまでいて……

「どうせなら大勢でやった方がいいと思つてさ。これだけいければ妙な勘ぐりしたくても出来ないし」

仁志さんもいるんだ。何でも二人きりとかでやるから見られた時が面倒なんだって。で、これだけいければ見られても逆に何とも思われないみたい。

「でもどうして急にこんな事を？」

「デスデス」

「えつと、ゲージが俺と過ごす時間で色が付くなら出来るだけ一緒にいる時間を増やそうと思つたのと、単純に俺がハーレムみたいな気分を味わいたいだけ」

「何だよそれ……」

「先輩らしいような、らしくないような」

呆れるようなクリスちゃんと奏さんだけど、どこか笑ってる。嬉しい、んだよね。

だって私も嬉しい。仁志さんが、珍しく自分から私達を誘ってくれたから。

きつと未来やマリアさんもバイトがなかったら参加してた。うん、多分そうだ。

「いいだろ。少しぐらい馬鹿な男の夢の一つを見させてくれ」

「ふふっ、お兄ちゃんの夢ってこういうのなの？」

セレナちゃんがそう問いかけると仁志さんは軽く苦い顔をした。

「セレナ、さつき言つたら？ 馬鹿な男の夢の一つって」

「つて事はもつとエロいのあるんだろ、先輩？」

「か、奏っ！」

「いいよ。否定しない。っーかな？ 三十も過ぎた男がエロに興味ない方が怖いっての」

その瞬間みんなが軽く苦笑してある事に気付いてすぐに黙った。

そしてちよつと間を開けて大きな声を出した。勿論私も。

「「「「えっ!?!」」」」」

「な、何? ど、どうした?」

こつちを見て戸惑う仁志さんだけど、むしろこつちがそうなりたいぐらいですからねっ!

だって、今、私の聞き間違いじゃなきや、仁志さんはとんでもない事を言ったもんっ!

「た、只野さんっ! 今、何て言いましたっ!?!」

「エロに興味が」

「その前だったのっ!」

「さ、三十も過ぎた?」

「もう誕生日を迎えていたんですかっ!?!」

「う、うん……」

「お兄ちゃん、いつ!?!」

「えっと、六月の」

「先月デスか!?!」

「一日……」

「しかも初日……」

「先輩、それはないよ……。うん、ない……」

「ええ……」

もう仁志さんが誕生日を迎えてたなんて……。しかも一か月以上前だよ……。

「こうなったらお出かけ後の集まりは只野さんのお誕生会をやるデスよっ!」

と、切歌ちゃんからそんな提案がっ!

「異議なしっ! 私もそれがいいと思うっ!」

だって仁志さんの誕生日だもん。祝いたかったし、おめでとうつて言いたかった。

ど、どうせならプレゼントも渡したいけど……。ば、バイト代の残りどれだけあったっけ?

「いや、もう一か月以上前だし」

「意図して黙ってたろ」

「そうですね。そんな気がします」

「一か月以上経てば誕生日会なんてやろうなんて普通言わないもんな」

「お兄ちゃん……」

「いや、あのね？」

「只野さん、諦めた方がいいです。マリアや小日向も、それにエルやヴェイグもここにいれば暁や立花のような事を言っています」

その翼さんの言葉に仁志さんが項垂れた。

「そうかもしれないけどな？ 聞いてくれよ。俺はさ、みんなの特撮やらアニメやらを見るのが幸せなんだ。ところがだ。誕生日会ってなると、そういう訳にもいかないだろ？ プレゼントを用意させる事にもなる。でも、俺にとっては君達との時間そのものがプレゼントなんだ」

その言葉に私は胸がキュンってなった。ど、どうしょ？ 顔が凄く熱い。い、今のを二人きりで真剣な感じで言われたら絶対に私、仁志さんに抱き着いてた。

そう思っただけで周囲を見渡すとセレナちゃんと切歌ちゃん以外は何となく私に近い感じ。

ん？ あれ？ 調ちゃんって仁志さんの事そういう目で見てるのかな？

「只野さんの気持ちすっごく分かるデス。アタシもみんなと過ごす時間が幸せで大好きデスから」

「はい、私もです。でも、だからってお誕生日を黙ってたのは許せません！」

「はい……反省してます」

セレナちゃんがちよつとだけ怒ったように言うと仁志さんが申し訳なさそうにその場で正座した。

「なので、おでかけ後のみんなが集まる時はお誕生日会だからね？」
「デス」

「あ、あのお……名目だけで実態はクウガの鑑賞会とかになりません

かね？ あの続きから一気に面白くなるんだよ。まずグロイーニングでグロンギ怪人を倒す話だろ？ 次は謎の放電現象にクウガの強化フォームの登場、クウガを意味する古代文字があるとある碑文だけ四本角になってるとか、アマダムが警告として見せる黒いクウガとか」

「……ダメです（デス）！」

あつ、ちよつと迷った。それが面白くて笑っちゃう。仁志さんまでそうだ。

「只野さん、そうやって切ちゃんたちの興味をそそる事を言っただけようとしなくてください」

「そうだぜ。大人しく祝われやがれ」

「先輩、諦めなつて」

「今エルへ連絡しました。おそらくすぐにも返信が……きましたね」

翼さんがスマホを手にして、そして小さく笑って画面を仁志さんへ向けた。

「……兄様の誕生日を祝いたかったです、か。うん、これはくるなあ。しかもちやつかり顔文字まで使ってるし」

「私にも見せてくださいーい」

「はい」

差し出された画面には仁志さんが言った文章と、その終わりに泣いている顔があった。エルちゃんもすっかりこういうのに慣れてきたなあ。

そうして一先ず仁志さんのお誕生会をプールに行った後の集まりでやる事は決まった。で、プレゼントに関してには仁志さんの希望で、みんなからつて形で漫画を全巻買ってきて欲しいとなった。

そのタイトルを聞いてみんなで納得。仮面ライダースピリッツだって。何でも昔は持ってたんだけど、収入が下がってきたから集めるのを諦めて売っちゃったみたい。

「新つてついでない方をお願い」

「分かりました！」

話し合いは終了。でも、プレゼントで希望を言われるのつて楽だけ

どちよつとだけ寂しいかも。

ただ、その理由や仁志さんの気持ち分かるから何も言わない。こつちじや、翼さんやマリアさんさえもお金の余裕はそんなにないから。

私は……向こうでもこつちでも変わらず、かな？

「うし、じゃあ走ろうか。辛くなったらいつでも言いなよ」

「特にセレナはこういう事は初めてだろう？ だから無理せず、何かある前に教えてくれ」

「うんっ！」

こうして私達は走り出した。先頭は奏さんと私に切歌ちゃん、その後ろに調ちゃんや翼さん、一番後ろにセレナちゃんとクリスちゃんに仁志さんだ。

何だろうか？ こうやって全員じゃないけどみんなで走ると前よりもっと部活みたい。心が自然と弾んでくる。笑みが零れる。

「こうやって走るの初めてじゃないデスが、大人数でやると楽しいデスっ！」

「そうだね。一人と複数だと楽しみ方とかも違うしさ」

「そうですねっ！」

一人で走ってる時は周囲の景色とかを楽しんで、誰かと走る時は会話を楽しむ。

それに、走り終わった後の時間も全然違う。私は一人よりも誰かと走る方が好き、かな。

でももう七月、かあ。仁志さん、今月中に連休取れるのか心配になつてくる。

ただもうじき夏休みだ。そうなれば夕勤の時間帯は客数が地味に落ちるって聞いた。

何でも学生さん達がいなくなるかららしい。言われてみれば当然だよ。夕方まで学校にいる必要ないし。

「でも、こうやって複数で走っていると持久走を思い出すよ」

「じきゆうそうっ？」

「っと、セレナは知らないか。要するに距離の短いマラソン」

「どれくらい走るの？」

「男子は1500で女子は1000メートルだったかな？」

「け、結構ある気がする……」

「早く走るんじゃないかって持久力、つまり体力を計るものだから同じ速度で走り続ける事が重要なんだ。クリスはこういうの苦手だろ？」

「……まあ」

そのクリスちゃんの小さな苦い声に思わず笑っちゃった。私だけじゃない。みんな笑ってた。

「わ、笑うんじゃないやねえ！ 誰にだって苦手な事の一つや二つあるだろうっ！」

「そ、その通りなんだけどさ。今のはクリスの言い方もあるよ。だって、凄まじく小さな声だったじゃないか」

「そ、それは……」

「気持ち分かるぞ雪音。私もかつては家事がそれだった」

「先輩は苦手じゃなくて出来ないレベルだったろっ！」

そこでまたみんなまで笑う。翼さんさえも笑ってた。クリスちゃんもそんな周囲に影響されて笑った。

ホント、楽しい。ここでの時間は、辛い事や苦しい事もあるけど、それだって訓練や出勤に比べたら全然だ。

……いつか未来に言われた言葉が頭をよぎる。こっちで長く暮らしてたら、戻った時に辛くなるよって、あの言葉が。

分かってる。ホントは誰よりも分かってるんだ、そんな事。

大丈夫ってあの時未来へ言ったけど、あれは全然そうじゃない。そう言っただけだとダメになるって思ってた言い続けたんだ。

未来が大丈夫じゃないよって言うてくるのがまるでもう一人の私みたいに見える、意地を張って大丈夫って言い続けた。

あの時でもそうだったのに、今なんてもつとダメかもしれない。

勿論師匠達は助けたいし友達やお父さん達だってそう。止まった世界を、時間を動かさないとはいけないんだ。

でも、でも、助けたら私はここを離れないといけない。普通の暮らしと、お別れしなきゃいけない。

そして、もしかしたら仁志さんとも……。

「……そんなの、やだ」

呟く。私の初めて好きになった男の人。優しくてあったかくて、時々頼りなくて、たまにカツコ良くて、とつても、とつても大好きな人。

だから絶対お別れなんてしたくない！　するもんかつ！

——もしそうなるぐらいならこっちに残ってやる……。

っ!?　そ、それはさすがに出来ない。で、でも、学院を卒業したら……。

——その時にはここへ来れなくなってるかも……。

っ?!　そ、そうだ……。その可能性があるんだ……。

——そうだ。向こうの時間は止まってるし、私達の経過時間もゆっくりになってるなら、こっちで一年とか過ごしても大丈夫だよ。その間に仁志さんと特別な関係になれるようにすれば……。

そう、すれば……私、只野響になれる、かな？　仁志さんのお嫁さんに、なれるかな？

「響さん、どうしたデスか？　何だか暗いデスよ？」

「っ!?　ご、ごめんっ！　ちよつと考え事してて！」

「デスか。でもそんな顔になるぐらいなら誰かに相談した方がいいかもデスよ」

「う、うん。そうだね」

切歌ちゃんの声で我に返る。いけないいけない。ついマイナスな事ばかり考えてた。

「そ、そろそろ休憩にしようぜ」

「セレナ、どう？」

「わ、私もそろそろ……」

「よし、じゃ休憩しよう。セレナ、速度をゆっくり落としていくんだ」「う、うん」

セレナちゃんはすっかり仁志さんをお兄ちゃんとして扱ってる。最近言葉遣いが砕けてるのがその証拠。

それだけじゃない。エルちゃんなんてもう“エルちゃん”になっ

てる。エルフナインちゃんって私もいつの間にか呼ばなくなってた。こっちの自分はエルフナインじゃなくてエルなんです。そう言うてるから翼さんでさえもエルって呼んでるぐらいだ。

こっちの、かあ。私は、何だろう？ 無理矢理考えるなら……ガングニールの響、とか？ 何だかスーパー戦隊の名乗りみたいだ。

……あの名乗りは、嬉しかった。仁志さんは本当に私の事を分かってくれてるって、そう思ったもん。

みんなで軽く歩いて見慣れない看板のコンビニへ到着。これって、たしか一番大きな系列のコンビニだ。

「ちようどいいか。敵情視察じゃないけど飲み物でも買おう」

そう言って仁志さんはセレナちゃんへ顔を向けた。

「セレナの分は俺が出すよ。どれでも好きなもの一つだけ選んでくれ」「いいの？」

「飲み物代ぐらいなら兄ちゃんだって余裕で出せるって。ほらほら行くぞ」

「うんっ！」

仁志さんに背中を押される形でセレナちゃんがコンビニの中へ向かってく。その後ろ姿は仲良し兄妹に見えなくもない。

「はっ！ しまったデス！ 調、アタシ達も妹分としておごってもらうデスよ！」

「切ちゃん、ちよつとせこい」

「いいじゃないデスカ。只野さんはアタシ達にはお兄ちゃんみたいなものデス。と、言う訳で……待ってくださいデース！」

「もう……仕方ないな」

急いで仁志さん達を追い駆ける切歌ちゃんとそれに苦笑しながらついていく調ちゃん。仲良しだなあ。

「雪音はこのコンビニを知っているのか？」

「名前ぐらいはな。来た事はねーよ」

「あたしも名前ぐらいかな。こっちまで来る事はあっても入る事はないしね」

「立花もか？」

「はい。そういえば、この系列が業界最大手、らしいです」

仁志さんやオーナーが言っていた言葉を思い出してそう言うと、翼さんはそういうものかって感じで頷いた。

そして私達も切歌ちゃん達に遅れる事少しで店内へ入ると、いきなりうちと違うところを発見。

「クリスちゃん、このお店、ゴミ箱がレジと一緒にだよ……」

「ああ。レジ下に設置されてるな」

「いいね、これ。色々と面倒な事減るよ」

私がクリスちゃんと話しているとすかさず奏さんも会話に参加。やっぱり目線が店員のそれになってるよね、今の私達。

見れば調ちゃんもそこを見て羨ましそうな顔してる。うん、分かる。こういう感じならとんでもない量のゴミを捨てられないよね。

そう思いながらもまずはお菓子コーナーへ。で、そこで発見。

「こんなの見た事ないよ」

「だな。ここの系列限定のやつだろ」

「美味そうだね、これ。一つ買つてく？」

「か、奏？ 雪音に立花も雰囲気がいいつもと違うぞ？」

で、そんな私達を見て翼さんが困惑してる。あー、やっぱりそうなってるか。

「すみません。どうしてもバイト目線になっちゃって」

「そういう事か。まあ無理もない。私もそういう経験がない訳じゃないからな」

「え？」

翼さん、バイトした事ないと思うんだけど、違うのかな？

「あのな、先輩が言ってるのは職業病の事だ。要は、他の歌手の歌とかが気になるとかって事だろ。ですよね先輩」

「ああ」

「なるほど」

「つと、そうだ。あたしらは飲み物買いに来たんだった」

そう言つて奏さんがチルド飲料の方へ。そこでまずそちつて辺りが夜勤やつてる人つて感じ。

「うーん……悩むデス」

そこには切歌ちゃんの姿があった。調ちゃんは……カップ麺のコーナー見てる。仕事熱心だなあ。

「スイカかあ。美味しいのかね？」

「そうなんデスよお。さつきから気になって仕方ないデス」

「変わりモンは覚悟して手え出せよ？ あたしは普通に向こうのペツトボトルにする」

「じゃ、私もそっちにしようかな」

「奏はこつち？」

「どうしようかな？」

悩む切歌ちゃんと奏さんを置いて私はクリスマスちゃんとガラスケースの方へ。

うん、きつちり補充されてる。プライスカードも……全部入ってる。

「さすが最大手だな。抜けがねえ」

「うん。こつちも最近はなくなつたけど……」

「あの人が店長になる前はちよこちよこ抜けがあつたもんなあ」

「しかもそういうのに限ってバーコードが通らない奴で」

「マジあれは殺意湧くよな」

「うんうん。で、よりもよつて沢山買う人だったりしてさ」

あるあるトークをしながら物色する。ちなみに今だと未来がいてもこうなる。三人でお店での不満や文句を言いながら服を見たり本を選んだりして、何て言うかちよつとだけ大人の仲間入りした感じで。

結局選んだのは私がミルクティーでクリスマスちゃんがストレートティー。

「んじゃ、会計すつか」

「そうだね」

二人でレジへ向かうともう仁志さんがセレナちゃんとお会計してた。

「30円のお返しです」

「どうも。セレナ、落とさないようにな」
「うん」

シールだけ貼ってもらったんだ。まあその方がいいよね。正直袋があると邪魔になるし。

「お願いしまーす」

「いらっしやいませ。一緒でもいいですか？」

「ああ、構わない」

お財布から小銭を出そうとしてみると、ふとお店の外でセレナちゃんが仁志さんと何か話してるのが見えた。

楽しそうに笑うセレナちゃんとそれに苦笑する仁志さん。何となくだけど、親子に見えない事もないかも。

仁志さん、いいお父さんになるだろうな。男の子が出来たらそれこそヴェイグさんとみたいと一緒に遊んでくれるだろうし、女の子ならエルちゃん……は、ちよつと特殊かも。とにかく子供と同じ目線で遊んでくれるはず。

「おい、お前も自分の代金出せつて」

「あつ、ごめん！」

クリスマスちゃんに言われて慌ててお金を出す。あー、これ自分がレジだったらちよつと困るやつだよ。

ちゃんと代金を払って私とクリスマスちゃんはそれぞれの手に飲み物を持ってお店を出た。

「ぼけつとすんなよ」

「ごめん」

「つたく。で、何を考えてやがった？ ん？」

「あ、あはは……内緒」

言えるはずがない。仁志さんと結婚した後の事を考えたなんて……ね。

「じゃ、Jさん達は生きてるんですね？」

「うん。ちゃんと生きてるから。ただ、今は再会出来ないけどね」

そう思いながらチラリと見た仁志さんはセレナちゃんと何かを話題にしてた。よく分からないけど多分ガオガイガー、だっけ。それだ

と思う。

仁志さんが大好きなアニメで、ファンの人達はガガガって呼ぶって教えてもらった。

そう、私だけが仁志さんの好きな物を全部知ってる。教えてもらったから。聞いたから。

——これだけは誰にも負けない私だけの強み。仁志さんの事、一番知ってるのは私だから……。

「お邪魔するデス」

「いらつしやい。何もないとこだけどって、もう切歌ちゃんは知ってるか」

「はいデス！」

今日は只野さんのお部屋でデートデス。

生まれて初めてのデートが年上の男の人の部屋とかドキドキデスよ。

そう思うと見慣れたはずの部屋も少し変わって……あれ？

「ホントに見慣れない物があるデスね？」

「ん？ 何が？」

「あ、いえいえこつちの話デス」

「そう？ ああ、そのクッションを使つて。お客様用だ」

「了解デス」

見慣れない物の正体はまさかのお客さん用の物でしたか。言われるままに座るとまるで沈むような感覚。こ、これは凄いデス。

「はく……これ凄いデスねえ」

「人呼んで人をダメにするクッションだそうだ」

「ダメにするデスか……納得しかないデスよお……」

もっと大きかったら本気でダメになってたデス。

「本当はもっとでかいの買おうかなって思ったんだけどさ。残念ながらとっても高いので止めたんだ」

「高い、デスか。いくらぐらいデス？」

「10000円オーバー」

「贅沢クッションデスっ!？」

い、10000円なんてアタシがどれだけ働けばいいデスカ。装者としてのお給料ならすぐかもしれないませんが、へーぼんなバイト店員じゃ50000円だって稼ぐの大変なんデスよ？

「しかも20000円を超える物もあってね」

「トンデモデス!」

「だからそのサイズ。それなら20000円もしない」

「ナルホド」

それならアタシもバイト代で買えそうデス。ヴェイグなら喜んでくれそうデスね。

「只野さん只野さん。これ、アタシも欲しいデス」

「じゃ、ネットで注文しておくよ。同じのいい?」

「デスっ!」

でヴェイグにあげるんデス。はっ! そうなったらこれは人をダメにするクッションからヴェイグをダメにするベッドになっちゃうデスカね?」

……ちよつとだけ羨ましいデス。こんなベッドで寝てみたいデスよお。

そこから只野さんはアタシのための注文をスマホでちよちよいとやってくれました。

それが終わると只野さんは畳んである布団へ座りました。

「まだそれ使ってるデスカ?」

「いまじゃでかい座布団だけどね」

そう、実はもう只野さんは新しい布団を買ってます。そういえば、それがこの部屋に来たの、六月になってからでした。まさか……。

「只野さん、あの新しいお布団って自分への誕生日プレゼントじゃないデスよね?」

「……偶然そうなってしまっただけで買い替えるつもりは前からあったから」

やっぱり真つ黒デスっ! 真つ黒過ぎてまっくろくろすけが出てくるレベルデスよっ!

「ギルティデスっ！ これはお誕生日会でみんなと一緒にお仕置きデス！」

「ええ……俺、誕生日会の主役なのにお仕置きされるのかよお……」

がつくりと項垂れる只野さんデスが、仕方ないのデス。こっさり自分だけでお誕生日を祝ってたなんてダメのダメでダメダメデス。

アタシは本当の誕生日が分かりません。だから人のお誕生日は盛大にお祝いしたいんデス。それを知ってるはずデスのに……。

と、そこで気付きました。もしかしてそれを知ってるからこそ黙ってたんじゃないかって。

「只野さん、お誕生日黙ってたのってアタシも関係してるデスか？」

「あー……なかったと言えば嘘になるけど、本音はこの前のジョギングで言った通りだよ。俺は誕生日を祝われるよりもみんなと特撮とかを」

「それは分かるデス。でも、みんな只野さんを誕生日当日にお祝いたかったんデスよ。もし只野さんが逆の立場ならどうデスか？」

アタシがそう言うのと只野さんが一気に申し訳なさそうな顔になりました。どうやら分かってくれたらしいデス。

「……そう、だよな。ごめん。俺、やっぱこういうところガキだなあ」

「ガキ、デスか？ 只野さんは大人だと思うデスけど？」

実際アタシから見れば只野さんは立派な大人デス。ずっと一人で暮らしてるデスし、色んな仕事をやってきてます。アタシと違って支えてくれる人が傍にいないのに、ちゃんと生きてます。

「えっと、切歌ちゃん？ これから言うのは俺の個人的な考えだから正解と思わないで欲しいんだけど」

「はいデス」

「世の中に、本当の意味での大人なんて一人もいないと俺は思ってるんだ」

「……デス？」

「大人って言うのはさ、いつでも正しくて、立派で、強くて、賢くて、そんな完璧な存在だと思うんだよ」

言われてアタシが思い出すのは司令やママデス。今只野さんが

言った言葉にピッタリデス。

「只野さん、ママや司令は」

「えっと、それは切歌ちゃんが見てる時や見えているところでは大人をしているだけだと思う。実際、ナスターシヤ教授は君達に見えないところで決起を後悔してたし」

言われた言葉に息を呑む。ママが、決起を後悔してた、デスカ？

でもきつとそうなんデス。只野さんはアタシ達の知らないはずのところまでアニメとして見てた人デスから。

「弦十郎さんだつて、常に君達のような年若い少女達を戦地へ送り出す事に悔しさや無念を抱いてた。俺の言いたい事、分かってくれるかな？」

「……はいデス。司令もママも大人をやるうとしてる時だけをアタシ達に見せてるって事デスね？」

「そう言う事。だから世の中に本当の意味での大人なんていないって俺は思ってる」

そこで只野さんは一旦深呼吸をしました。で、どこか優しい目でアタシを見てきます。

「で、ここからが肝心なんだけど、ガキつてのは大人でも子供でもない状態って事」

「大人でも子供でも？」

「うん。大人みたいに強く賢くあろうともせず、かと言って子供みたいに素直で無垢にもなれない。そんな中途半端がガキつて俺は思ってる」

言われて考えます。えっと……何で真つ先にクリスマス先輩が浮かんでくるんデスカね？ 多分デスけど素直になれないって事が引っかかるからデスね……。

「それと、ガキは俺の中じゃ自覚してない場合。クリスマスは自分が素直じゃないって自覚してるから対象外だよ」

「おおっ！ どうしてアタシがクリスマス先輩の事を考えてるって分かったデスカ！」

「いや、切歌ちゃんは素直だからそうじゃない相手って考えるだろう

なつて」

お見事デス。やっぱり只野さんは凄いデスよ。

「そうだ。切歌ちゃん、ガガガはどうだった？ もう最終回近いだろ？」

そう言われて思い出しました。只野さんに貸してもらってたガガガのDVDはもう終わりが見えています。

「最高デス！ 熱くて、優しくて、あったかくて、時々泣けるデス」

「そっか。後は最終回だけって聞いているけど、何でまだ見てないの？」

「そ、その、あまりにも絶望が凄くてデスね。あと、これを見たら終わっちゃうって思うと辛いんデスよお」

Zマスターとの決戦はすっごく燃えたデス！ E1-01との決

戦も良かったデスが、もうあれはそれとは別の意味で凄かったデス！

特にZマスターへ凱さんが言った言葉は胸にきました。勇気や愛をマイナス思念って呼ぶのなら、滅ぶべきはZマスター達の方だって言葉はホントに思わず頷いちやっただデス。

なのに、全部終わったと思っただデスのに、まさか命さんがゾンダーみたいになっちゃうとか酷いデス……。

「そっか。でも大丈夫。GGG憲章、^{スリージー}第五条、百二十五項！」

その言葉にアタシはハツとしました。只野さんを見ればこつちを見て小さく頷きます。そうデス。アタシは、すっかり忘れてました！ 「GGG隊員は、いかに困難な状況に陥ろう（おちいろう）とも、決して諦めてはならないっ！」

この勇気ある誓いが、GGGのみんなにはあるんデス。アタシも、それを思い出して決めました。今夜、みんなで最終回を見る事を！

「これで切歌ちゃんの勇気も復活したかな」

「はいデス！ ちゃんと最終回をみんなで見ると見るデスよ！」

「そっか。じゃ、そんな勇気ある者な切歌ちゃんに俺からプレゼントだ」

「へ？」

そう言っただけで只野さんは立ち上がると押入れへと近付いていきます。で、そこからクリアケースを取り出して金色の何かを渡してきますし

た。

「こ、これは……」

「ガガガFINALを再編集したやつなんだ。勇者王ガオガイガーFINAL GRAND GLORIOUS GATHERING。通称GGGって感じ」

「おおっ！ ガガガGGGデスカ！」

何という覚えやすい名前デスカ。それにしても、あの後ってもう敵はいない気がするデスのに……。

「舞台は最初こそ地球だけど、最後は三重連太陽系に移動する」

「さんじゅうれんたいようけい……」

「護君の生まれ故郷だよ。ゾンダーによって機界昇華された」

「えっ!? な、何でそこへ行くんデスカ?」

「そうだね。TVシリーズはいわば護の物語だとすれば、FINALは凱の物語かもしれない」

「よ、余計分らないデス！」

でもTVが護の物語って事には同感デス。お父さんとお母さんが二人いて、どっちからも愛情を注がれて育った護。アタシ達施設育ちにとってはどこか似てる境遇でした。

だから護のお父さんとお母さんのやり取りに涙が出て来たんデスよねえ。護が自分は本当は二人の子じやないって言った時のシーンは、マリアまでボロボロ泣いてたデスし。

——護ちゃんは間違いなくママとパパの子よっ！

——そうとも。ただ、授かり方が他の子と違っただけさ。

あの台詞にアタシ達はみんなでボロボロ泣いたんデス。ママは、マムはきつとこういう気持ちだったんだって、そう思ったら涙が止まらなくなっただんデスよ。

「き、切歌ちゃん? ど、どうしたの?」

「ふえ?」

「いや、急に涙を浮かべたからさ」

言われて気付きました。アタシ、視界がぼやけてます。

「大丈夫? どこか痛い?」

「ち、違います。こ、これは……」

な、何だか恥ずかしいデスよ。泣いてるところで只野さんに見られちゃったデス。

と、そこで只野さんがそつとティッシュで優しく涙を拭ってくれました。

「これでよしと」

そう言つてニッコリ笑う只野さん。そんな只野さんがアタシには顔も知らないお父さんに見えました。

「切歌ちゃん、もう平気？」

「……はいデス」

やっぱり只野さんが本当にアタシのお兄ちゃんだったらしいデスのに。そうしたら二人で特撮とかロボットアニメとか、色んなものをいっぱいいっっぱいお話しできるデス。

一緒に映画を見に行ったり、時々美味しいご飯を御馳走してもらったり、学院祭にも来てもらつてみんなにアタシのお兄ちゃんデスって自慢したり。

「そつか。よし、じゃあ何を話そうかな？ 切歌ちゃんが好みそうなのって言う……」

「え、えつと、出来れば前カラオケで話してくれたじーがん？ その話が聞きたいデス」

「Gガン？ よし、なら切歌ちゃんが好きそうなところから教えてあげよう」

そう言つて只野さんは笑つて話してくれました。まずカラオケで軽く聞いた事のおさらいデス。

ほとんどの人間が宇宙にあるコロニーで暮らすようになった世界。そこで戦争を避けるために始まった四年に一度の代理戦争つていう扱いの「ガンダムファイト」。

戦つて、戦つて、戦い抜いて、最後に残ったガンダムがガンダム・ザ・ガンダムの称号を掴み取れる。で、そのガンダムが所属する国が四年間全部の国のトップになれるんデス。

「物語はガンダムファイト第13回大会にドモン・カッシュがネオ

「ジャパン代表として出場する事で幕を上げる」

「ふんふん」

「ドモンはコロニー格闘技界の覇者たる称号、キングオブハートを有している実力者だ」

「き、キングオブハート……強そうデス」

「彼の乗るガンダムはシャイニングガンダム。必殺技は右手へエネルギーを集束させて相手へ叩き込むシャイニングフィンガー」

「おおっ！」

「俺のこの手が光って唸る！ お前を倒せと輝き叫ぶっ！ 砕け！

必殺っ！ シャアアアアアイニングウ！ フィンガアアアアアアッ
!!」

「か、カツコイイデスっ！」

「つて、こんな感じの決め口上があるんだ。これにも色々パターンがあつてね。全部教えてあげようか？」

「是非お願いするデスっ！」

やっぱり只野さんとの時間は楽しいデス。アタシの好きな事は調とちよつとずれてるデスから、こういうお話出来る人って響さんのお友達さんぐらいなんデスよ。

そこからアタシは只野さんと二人で決め口上の練習デス。ホントに沢山の言い方があつてビックリしました。でも、全部カツコイイデス。

特にアタシは途中でキングオブハートって言うやつが気に入りました。そう言ったら只野さんがニヤリと笑って……

「実は、ドモンは決勝大会用に機体を途中で乗り換えるんだ。その機体も決め口上があつてね」

なんてとんでもなく気になる事を言ってきたんデスよっ！ しかもそれだけじゃなくて、シャイニングガンダムにはシャイニングフィンガー以外の必殺技もあるなんて言い出したんデス！

もうっ！ ホントに只野さんは最高デス！

そこからまた決め口上の練習デス！ シャイニングフィンガーソードはテンション上がりまくりデスし、ゴッドフィンガーなんて決

め台詞まであつて燃えるしかないデスっ！

それとドモンさんの流派同士でのやり取りも教えてもらいました。難しい言葉ばかりでしたが、何度もやってく内に覚える事は出来ました。本当に楽しいデス。

「で、最後に流派東方不敗最終奥義つてのがあつて」

「さ、最終奥義……デスカ……」

ゴクリと喉が鳴ります。きつと絶唱ぐらい凄いのがくるデス。

「その名も、石破天驚拳」

「せ、せきはてんきようけん……デスカ」

な、何だか凄そうデス……。

「まず、今までと違つて俺の……から始まらない」

「ふんふん」

「いい？ まずは……いくぞっ！ 流派っ！ 東方不敗の名の下につ

っ！

「おおっ！」

「ここからはゴッドフィンガーと一緒に。俺のこの手が真っ赤に燃える！ 勝利を掴めと轟き叫ぶっ！」

「ぶあああああくねっっ！」

「ば〴〵じゃなくて 〴〵あ〴〵 っつて言うのがいいって教えてもらったデス。

「ここまではいいっ？」

「はいデスししよっ！」

いや、只野さんが今だけはそう呼んで欲しいって言ったデスから。何でもドモンさんのおししよー様がいるらしいんデスけど、その人が司令と同じぐらいかそれ以上に強い人らしいんデス。

生身で巨大ロボットを砕けるとか、その銃撃を布で受け止めて跳ね返すとか人間業じゃないデス。是非一度司令と戦つてみて欲しいデスね。

で、気分だけでもその人みたいになって事らしいデス。

「この石破天驚拳の場合はゴッドフィンガーの言い方が少し違う。今からそれをやるからちやんと覚えてくれ」

「はい德斯っ！」

「ゴッドフィンガアアア……」

おおつ、語尾が下がるん德斯ね。

「石破っ！ 天きよおおおおけええええんっ!!」

「ふあく……か、カツコイイ德斯……」

只野さんがポーズまでやってくれたおかげでどんな感じの技か分かりました。

「じゃ、一度一緒にやってみよう」

「はい德斯！」

「じゃあ、切歌ちゃん、俺の横に立って」

「横に、德斯か？ 分かった德斯」

只野さんの横へ移動して同じように足を肩幅に開きます。そして二人で頷き合って両腕を腰につけます。

「行くぞっ！ 流派っ！ 東方不敗の名の下につっ！」

不思議德斯。こうしていると本当に出来る気がしてくる德斯よ。

「俺（アタシ）のこの手が真っ赤に燃えるっ！ 勝利を掴めと轟き叫ぶっ！」

心なしかアタシの右手にキングオブハートの紋章が浮かんでくる気がします。

「ぶあああああくねつつ！ ゴッドフィンガアアア……」

チラツと横へ目を向ければ只野さんと目が合いました。そして同時に頷き合います。

「石破（せきは）っ！ 天（てん）きよおおおおけええええんっ!!」

最後に両手を前へ押し出すように動かしてフィニッシュ德斯っ！

「……うん、見事だ切歌ちゃん。もう君に教える事は何も無い」

「そんな……しししょー、まだアタシは未熟德斯！ もっとしししょーに教えて欲しい德斯！」

「切歌ちゃん……」

「一緒にGガン見たい德斯！ もっと一緒に決め台詞とか決めポーズとかやりたい德斯っ！ これでお別れとか嫌德斯っ！」

「でも……」

「ししよーっ！ アタシは、アタシはもつとししよーと一緒に遊んで
いたいデスっ！」

言っただけならまた涙が出て来ました。多分デスけど、これで本当に只
野さんとお別れみたいな気持ちになっただけからデス。

「切歌ちゃん、そこまでか……」

「はいデスっ！」

「分かった。ならば……答えよ切歌っ！ 流派っ！ 東方不敗はっ
！」

「王者の風よっ！」

「全新っ！」

「けーれっっ！」

「天破侠乱（てんぱきようらん）っ！」

そこでアタシは只野さんと、いえししよーと拳を合わせますっ！

「見よっ！ 東方はあ、紅く（あかく）燃えているううううっ！！」

「うるせえぞっ！ いい加減にしやがれっ！」

見事に決まった瞬間クリス先輩がドアを開けて怒鳴ってきたデス。
で、よく見れば後ろには響さんもいます。

「ご、ごめん。つい盛り上がって……」

「ご、ごめんなさいデスっ！」

「ったく……少しは周囲の事も考えろよな」

「た、只野さんっ!! 何で切歌ちゃんが師匠って呼んでるんですかっ
!？」

「おめえはそこかっ!？」

「あいたあ！」

「お……」

クリス先輩の見事なツツコミが響さんへさくれつデス。あまりの
見事さに思わずししよーと一緒に声を上げました。

で、ししよーが響さんへアタシのししよー呼びについて説明して、
何故か若干響さんがアタシを羨ましそうに見て来ました。

……ししよーって呼びたいんデスカね？

とりあえずそこで一旦落ち着く事になって、アタシはししよーと一

つの約束をしました。

「じゃ、約束デスよ?」

「ああ、いいよ」

それは、今度カラオケに行った時に一緒にGガンのOPを歌う事デス。そのためにアタシはししよーから二枚のCDと、ついでのってさんとら、デスカ。そんな物まで借りました。五枚もあつて中々のボリリュームデス。

「燃え上がれ闘志く忌まわしき宿命を越えてくって曲と、我が心明鏡止水くされどこの掌は烈火の如くくって曲がそれぞれシャイニングフィンガーとゴッドフィンガーの専用BGMなんだ」

「そうなんデスカ」

「どっちも燃える曲だから是非聞いてみて。つと、そうだ。もし良かったらガガガのサントラもあるよ?」

「あつ! ならそっちも貸して欲しいデス!」

「分かった。ついでにガ王も貸しておくよ」

「がおう?」

「端的に言えば全ての勇者王誕生!が収められたCD。ただしFIN ALで使われるやつもあるから聞く場合は注意して」

「分かりましたデスししよー!」

こうしてアタシのデート……でいいんデスよね? デートは終わりました。ししよーから借りたCDを早速お家で聞いてたら、調達が「二」ガガガだつ!」二」って反応したりして楽しかったデス。

はく、早くGガンも借りて見たいデスよ。出来ればししよーも一緒にがいいデスね。うん、そうデス。きつとししよーも見返したいって言ってくれるはずデスし、お願いしてみるデス!

静かに部屋を出て鍵を閉める。あのバカは何もなけりや七時過ぎまでぐっすりだ。

「……行くか」

ちよつとだけ恥ずかしいけど仕方ねえ。この時間に出歩してる奴はあまりいないから大丈夫のはずだ。

今、あたしは上だけ下着を着けてない。何も洗濯中って訳じゃない、敢えてそうしてる。

あたしの一番の性的魅力はこのでかい胸だ。只野だって見ないようにしてるって事は、そういう事なんだし。

店へ向かう道歩く。そこを歩く人はそこまで多くねえし、そもそも駅へ向かってるからあたしの方を見てる奴はいない。なのにちよつとだけ挙動不審になる。

く、くそ、やっぱ止めておくべきだったか？ でもこれぐらいしないとあの人は、只野はあたしの気持ちをすっかり受け止めてくれないんだ。

抱き着く事が駄目になって、あたしは意識して胸を強調したりアピールするようにした。それでも只野はあたしの胸を見ようとしな。それが、まるであたしの気持ちを受け取りたくないみたいに思えて、辛くて寂しい。

「いた……」

こつちへ向かって歩いてくる只野を見つけ、あたしは少しだけ小走りで近付いた。

「あれ？・クリス？」

「よ、よお……」

当然だけど向こうはあたしの目を見てる。いつもはここで動きやら何やらで注意を引こうとしてたけど、今朝は違うんだ。あ、あたし様の本気を見せてやる！

……ま、周りには誰もいねえな？ よ、よし……

「あ、あのさ、ちよつと耳貸してくれねーか？」

「耳？ いいけど……？」

少しだけ身をかがめてこつちへ耳を向ける只野へ、あたしは顔を近づけて囁いた。

「今、ノーブラだ」

その次の瞬間、只野が弾かれたように離れて、一瞬だけあたしの胸を見た。で、真っ赤になって背を向ける。

「な、何考えてるんだよ？」

「わ、分からねーか？」

「……………嬉しいけど止めてくれ。その、他の男がもし見たら俺は人生を棒に振る」

「っ!？」

な、何つー事をさらつと言うんだよ、この人は。でも、嬉しい。あたしの事を、それだけ思ってくれるんだな、やっぱ。

「な、なら、部屋まで送ってくれねーか？ それと、その間は背中に隠れる事を許してくれよ。その、少しくつつくかもしれないけどさ」

「……………アパート前までなら」

「ん。それでもいい。その、ありがと」

こうしてあたしは只野に徐々に甘える事が出来た。何だろいな。スケベな事してるはずなのに心があつたかくなる。この頼もしさを増した背中に、あたしは安心してゐるんだ。

ずっとこうしていたい。この人に守ってもらいたい。もっとあたしの事を女として見て欲しい。

——いつそあのバカだけバイトの時に相談があるって持ちかけてやるか…………。

そ、そうしたら、あたしの事、もっと見てくれるかな？ す、スケベな目で見てくれるかな？

——少しぐらい見せてやってもいいかもな。何なら触らせたって…………。

さ、触らせる…………。で、でも、そこまですりや只野だってあたしの気持ちの本気だつて確実に分かるはずだ。

——前準備に只野がバイトしてる時に店行って、あれを買ってみるか？

あ、あれって…………やっぱ、アレ、だよな。初めて見た時は赤面するかと思つたけど。そ、そうだな。それぐらいすれば只野だって…………。

「クリスマス、着いたよ」

「あ…………あ、ああ」

「ごめんな。俺、セレナ達へのシユークリームとかあるから」

「わ、分かつてる。その、もうこんな事しねーから」

「そうしてくれ。その、俺のためにつてやったのは分かるけど、もっと自分を大切にしたい」

そう言つて只野は来た道に戻つてく。その背中を見送つてあたしは思わず笑みを浮かべた。だつてさ、あたしの事を大切にしてくれだつて。

へへつ、そつか。嬉しかったんだな。喜んでくれたんだな。なら、今度からはちゃんと気をつけて只野にしか見えないし見せない時にやるからな？

——どつかの誰かさんが嫁さん気取りでいるみたいだけど、只野が最初に食つた女の手料理はあたし様のなんだから……。

仁志が覚悟と決意を持つて踏み込んだ結果、マリアのゲージが最初に最大値まで到達。ただ、予想されていたエクストライブは出来ず、全員が落胆する事となった。

だがゲージが最大になった事の恩恵はもう一つ予想されていた。依り代の欠片の効果増大である。それを実証するべくマリア以外の全員がギアペンダントを外し、それと依り代であるスマートフォンを持ってエルが仁志と共に彼の部屋まで移動したのだ。

「兄様っ！ 姉様達全員が動けるそうです！」

「そつか」

それでも見事にマリアのギアペンダントだけで依り代と同等の効果を発揮した。

これを受け、ゲージを最大まで上げる事が急務となる。

それと並行しゲート内のカオスビースト探索及び討伐も開始。切歌も遂にデュオレリックが可能となり、戦力は増強の一途を辿つていたのだが……

「どうして私やクリスちゃんはツインドライブが出来ないんだろ……」

「……知らねーよ。こっちが聞きたいぐらいだ」

ゲージがようやく九割を突破した響とクリスであったが、何故か二人はデュオレリック使用可能を示すはずのアイコンが効果を発揮し

なかったのだ。

その理由が分からず、仁志達が首を傾げるしかない中でも二体目のカオスビーストであるテタルトスの撃破に成功する。

それを倒した場所は、フィーネ達先覚の協力者達がいる世界へのゲート付近。何故分かったかと言えば撃破と同時にゲートが出現したからだ。

ただ、中は根幹世界と同じく時間が停止した状態となっており、結果的に得るものはなかった。それでも予想が一つ当たった事は大きく、特に奏とセレナは自分達の世界へのゲートを自らの手で取り戻してみせると意気込む事となる。

そんな中で遂に仁志が連休を取得した。既に全員が休みを取っていた日へ初日を合わせ、いよいよ全員での夏のイベントへ出かける事が決まる。

彼女達は知らない。それに男が密かな想いを抱いているとは。いつか訪れるだろう別れ。その前の最後の大きなイベントにしようと、そう考えている事を……。

それを知るはずもなく、いよいよ翌日に迫った夏の一大イベントへそれぞれが胸を期待で膨らませていた。

「楽しみデスなあ」

「ホントです。海じゃないけどおっきなプールに遊園地ですから！」

「兄様が夢の国は無理だけって、そう思って考えてくれたみたいですよ、あつ、でも途中で海は見えるそうですよ」

「切ちゃん、明日はいつもみたいにゆっくり寝てちゃダメだからね？」

「分かってるデスよ。だから泣く泣くガガガを諦めたんデス」

「キングジェイダー対最強勇者ロボ軍団、だったのにな」

年少組とヴェイグがそれぞれ布団の中へ入りながら会話を交わす。話題は当然翌日に迫った外出だ。

それを聞きながらマリアは小さく苦笑するとガスの元栓などを確認して居間へと向かう。そして何も言わずに明かりを消したのだ。

「」「あつ……」「」

「楽しみなのは分かるけど、だからこそ早く寝なさい。じゃないと肝

心の時間に寝不足で遊べなくなるわよ?」

「「「おやすみなさい(グース)っ!」」」」

「はい、おやすみ。……ふふっ」

子供らしい反応につい笑みを零し、マリアも布団へと入る。ただ……

(……やっぱり只野の匂いが残ってる気がするわね)

定期的に干しているが、それと同じぐらい定期的に仁志も使用して寝ているためにマリアの布団は若干ではあるが彼の匂いが染み付いてしまったのだろう。

かつて仁志がマリアの布団を初めて使った時に感じた、マリアと一緒にいるような気がするを、今は彼女自身が体験していたのだ。

それでも嫌な顔せず、むしろどこか嬉しそうに微笑んでマリアは眠りにつく。

同じ頃翼達の部屋でも……

「いよいよですね」

「そうだな。年甲斐もなく心が弾んでいる」

布団に入って未来と翼が暗い部屋の中で言葉を交わしていた。奏はいない。彼女は仁志と共に勤務しているのである。

「それにしても、只野さんも奏さんも凄いですね」

「そうだな。夜勤をやつてその状態で遊びに行こうと言うのだから」

「奏さんは自分は若いから平気って言ってましたけど……」

「只野さんはすぐ帰って二時間程眠って、更に行きのバスの中でも仮眠を取ると言っていたな」

言われて未来は事前に聞いた情報を思い出し……

「前に行った駅にあるバスセンターから一時間弱、ですっけ」

「たしかそう記憶しているが……」

「それで大体三時間弱、かあ。足りるんでしょうか?」

「だからこそ連休の初日なのだろう。明後日は久々に寝て過ごすのではないか?」

「ふふっ、そうかもしれませんね」

一日中布団の住人となるだろう仁志の姿を想像し未来は笑う。翼

も同じ姿を想像いや彼女の場合は思い出しただろうか。とにかく二人は苦笑し目を閉じる。

「では、また明日。おやすみ小日向」

「はい、おやすみなさい、翼さん」

そんな二人とは逆にむしろ目をギラギラとさせるように動いている者達もいる。仁志と奏であった。

「今日は冷凍がないからパンが終わったら休憩取ってくれ」

「了解。でも、本当に良かったの？」

「何が？」

「出かける日。いつそ今日明日の連休にすれば」

「それだと天羽さんだけ夜勤明けになるだろ？ それなら俺と二人で同じ状態の方が疎外感ないだろうなって思ってる」

「ははっ、何それ？ そういうところ、先輩らしいよ」

楽しそうに笑う奏。それを見て仁志は一瞬だけ遠い目をしてすぐに苦い顔をした。

「笑う事はないだろ。そつちを仲間外れしないように考えたつてのに」

「あははっ、うん、ありがと先輩。感謝してます」

「うむ、それならよし」

「ぷっ、何それ。先輩には偉ぶるの似合わないって」

「一言余計だな、天羽さん」

「大丈夫。こういう態度は先輩にだけだから」

「全然大丈夫じゃないね、それ」

レジに客が来ないかどうかを見ながらの仁志と洗い物を片付ける奏。その声量は客を考えて小さいものの、互いの事を考えれば十分な大きさだった。

そうやって仁志と奏が夜勤として本格的に動き始める頃、響とクリスはと言えば……

「なあ、一ついいか？」

「何？」

「……明後日、きっとあの人は死んだように眠ると思う」

「うん、だろうね」

「で、その翌日はまた仕事だ」

「そうだね。それで？」

そこでクリスは小さく笑みを浮かべた。どこか邪悪な感じのする、笑みを。

「あたしら、その日は休みだろ？ だから、ギリギリまで寝てられるように晩飯をこっちで引き受けるのはどうだ？」

「……そう、だね。うん、それがいいと思う。只野さんの疲れ、少しでもなくしてあげたいし」

「おう。で、だ。いっそ……」

クリスの企てを聞いて響は顔を少しだけ赤くするも、そこで告げられた。『最初にあの人と一緒に暮らし出したのはあたしらだ』との言葉に頷き、それを受け入れる事にした。

——クリスちゃん、二人で頑張ろうね？

——ああ、頑張ろうな。

そこで二人は同じ言葉を呟く。

——あの人を、手に入れるんだ……。

重なる声は二人のものであって二人のものではない。そう、響もクリスと同じ笑みを浮かべていたのだ。

そんな二人を見下ろすように黒い雲のようなものが闇夜に不気味に存在していた。

——やっと根付けるようになってきたわね……。それに、この分ならあっちも……あははははっ。

見えない悪意の糸が、緩やかに仁志へと迫りつつあった……。

裸になつて…夏

「あつ、ししよー、バスが来たデスっ！」

切歌の声に眠い目を動かす。あのデート以降俺の事を師匠と呼ぶようになった切歌ちゃん。なので、ならばと俺は彼女の呼び方を変えたのだ。で、調ちゃんからも許可を得て、目出度く俺は全員を呼び捨てで呼べる存在となりましたとき。

あー、それにしても気怠い。やっぱ一時間弱だけど軽く寝ておこう。アラームで起きた時は大丈夫と思つたんだけどな。

場所は前回も来た総合駅にあるバスセンター。そこからバスに乗って目的地であるレジャーランドまで移動するのだ。

年少組は言うに及ばず、マリアや奏さえもどこか楽しみにしているのが見て取れる。響は言うまでもない。未来やクリスも若干浮かれていまする感じだし。

そうやって周囲を見ていたら軽く袖を引つ張られた。視線を動かせばそこにはヴェイグを抱えたエルと手を繋いでるセレナがいた。

「兄様、到着したら起こしますから安心してください」

「うん、私とエルで起こしてあげる」

「ああ、頼むな」

可愛い妹分二人へ礼を述べ、俺はバスへと乗り込んだ。平日ともあり利用客は俺達を抜けばそこまで多くない。なのできつと比較的静かな車内となるだろう。

とりあえず奥へと進み一番後方の席近くで一旦ストップ。先にエルやセレナを乗せるべきだったと思ひながら俺は通路を開ける。

後ろから来たエルとセレナを先に座らせ、俺は真ん中より若干右側へ座る。エルとセレナが小柄だから二人で1.5人分だからだ。

「ししよー、こっちの窓側座っていいデスか？」

「どーぞ」

嬉しそうなエルがヴェイグを抱えて窓から外を見ているのを眺めていると切歌がそんな事を聞いてきた。見れば俺の真横にマリア、窓側切歌の隣に調が座っていた。

年少組が小柄だから六人でも座る事が出来るんだなあ。そんな風に思いながら俺は欠伸をかみ殺す。

「……タダノ、本当に海が見えるのか？」

「目的地近くになってくれば見えるよ。ああ、そうだ。エル、セレナ。起こすのは海が見えてきたらでいいから。俺も頭をある程度覚まして動きたいしな」

「分かりました」

「うん」

そうやって頼んで俺は持ってきた荷物から使い慣れたアイマスクと耳栓を取り出して装着する。

バスが動き出すまでまだ若干の時間があるけど、その数分でさえ俺には貴重な時間だ。

本当ならバスの中でもみんなと会話を楽しんでいたけれど、それは帰りにしよう。まあ下手したらその時は逆にみんなの方が疲れで寝てるかもしれないな。

そんな取り留めもない事を考えていると自然と意識が薄れて行って……

「ちゃん……お兄ちゃん……」

聞こえてきた声にゆっくりと目が開き意識が覚醒していく。聞こえてくるのは可愛い女の子の声と……

「タダノっ！ 海だっ！」

結構珍しいヴェイグの興奮した声だった。

アイマスクを外して声のする方を見れば、眩しさを感じるけれど綺麗な海原が視界一杯に広がる。

「……お〜」

「凄いな！ これが海か！」

「あー、うん。これは……伊勢湾だよ」

「「いせわん？」」

聞こえた声に顔を動かせばエルもこっちを見ていた。軽く後ろを振り返ればマリアやザバコンビがトランプを持っている。三人はトランプで遊んでいたのか。

そう思つて顔を戻すと、よく見ればセレナの手にも握られているので俺を挟んで四人でやっていたようだ。

いや、意外とセレナはエルと共同かもしれないな。切歌や調がエルだけ仲間外れなんてしないだろうし。

「この辺りの名前だよ。どれぐらい寝てた？」

「三十分は経つてゐるわよ」

「そっか。なら仮眠には十分だ」

そう言つてアイマスクを片付けようとする時セレナがこっちへ手を差し出してきた。

「お兄ちゃん、これも」

その手の上には耳栓が二つ。そうか。それを取らないと起こせないか。

「ありがとう」

耳栓とアイマスクを一緒にして荷物の中へしまふ。で、気付けば俺の前に補助席が展開されていてクリスが座つてた。目が合うなり若干照れくさそうに顔を前へ戻したけど、一体何を見てたんだ？

「凄いな……想像してたよりも広いぞ……」

聞こえてきたヴェイグの声に知つてゐる範囲の知識を教えようと口を開く。

「ここは真珠の養殖が有名だ。それと伊勢海老つて言う名前のでかい海老が捕れる場所でもある」

「「いせえび？」」

「えつと……」

百聞は一見にしかず。スマホで検索し画像を表示させて三人へ見せる。

「「お〜……」」

「見た目が豪勢だからお祝い事とかに使われる事も多いんだ。見た目と違って大味じゃなくてね。活け造りとかも美味しいんだ」

「「いけづくり？」」

何だろいな、この可愛い子達は。これが、あれか。保護欲つてやつかな？

「生きたまま刺身にするって事なんだけど」

「『「生きたままっ!?!」』」

いきなり切歌と調が反応を見せた。どうやら二人が興味を示す事だったらしい。

ただ視線を動かせばマリアが苦い顔をしてる。うん、なら俺も言うべき事を言わないとな。

「周りの迷惑になるから声を抑えて」

「『「ごめんなさい（デス）……………」』」

「すまん…………」

申し訳なさそうにする五人を見て俺とマリアは揃って笑みを零す。

と、そこで左右の一つ前の座席からこちらを見つめるように顔を出す者達が…………。

「只野さーん、ホント気を付けてくださいよ?」

「私達もうっかりしてましたけど、ヴェイグの声、他のお客さんに聞かれたら面倒ですから」

「ご、ごめん。俺もまだ頭が寝てたみたいだ」

響と未来から苦笑混じりの声で注意を受ける。ホントだよ。どうやらヴェイグも興奮して我を忘れていたんだなと分かった。

「私が言えた事ではないが、マリアも注意しないでどうする?」

「そうだよ。そこまで混んでないって言っても他のお客さんいるんだからさ」

「ご、ごめんなさい。その、つい気が緩んでいたの」

マリアの言葉に俺は頷くしかない。何て言うか、この顔ぶれだとあの家の感じになっちゃうんだよなあ。

「まあ、もういいじゃねーか。幸い周囲には気付かれてないみたいだしよ」

そこで補助席に座ってるクリスが軽く呆れたようにそう言った事でこの件は終わりとなった。

そして俺の方の窓から小さく目的地が見え始める。それに響達も気付いたのか軽く感嘆するような声が聞こえてきた。

「エル、そろそろ目的地が見えてこないか?」

「目的地、ですか？」

「ああ。ほら観覧車やジェットコースターが見えたら、そこが目的地だよ」

そう言うのとエルが窓へ顔をくつつけるようにして外を見つめる。

「わあ……あそこなんですね」

「エル、私も見たい」

「エル、セレナにも見せてあげて」

「はい。姉さん、どうぞ」

「ありがとう」

窓に張り付きそうな感じで景色を眺めるエルとセレナ。本当に微笑ましい。これで本当の姉妹じゃないんだから驚きだ。

そう思っただけ視線を動かすとマリアと目が合った。なので俺が若干苦笑いをするのと彼女が無言で小さく苦笑して頷く。どうやら俺の考えが伝わったらしい。

「エル、セレナ、靴を脱いで座席に座った方がいいよ」

「はい」

揃って返事して嬉しそうに二人が靴を脱いで座席へ上がる。本当に愛らしい二人だ。

「ししよー、一緒にトランプやるデスよ」

「でも切ちゃん、六人でやるにはトランプは不向きだよ？」

調の言う通りさすがに六人は厳しい。ふむ、大人数で出来る車内遊び、か……。

「なら数取り団でもやる？」

「「「「「「かずとりだん？」」」」」」」

その瞬間、俺はみんなに伝わる訳ないと思いついて頭を掻いた。そうだよな。あれはこっちでも放送終了した番組の昔のコーナーだし。「えつと……」

でも罰ゲームなしでやるなら十分ゲームとしても楽しいだろうと思っただけで説明開始。

それを聞いて苦い顔をするのが響や切歌だった。うん、分かり易い。これって知識量と頭の回転が必要だからな。

「つて、こんな感じ。どう？」

「面白そうだとは思わ。瞬発力と判断力と知識力が問われるのね」

「中々いいじゃねーか。一度やってみようぜ」

「マリアとクリスは乗り気だ。」

「そうだね。折角だしこういうのやるところか。修学旅行とかみたいじゃん」

「修学旅行か……。うん、そうかもしれない」

「奏と翼も満更でもないようだ。」

「僕もやってみたいです」

「うん、みんなで遊ぶなんて初めてだし」

「俺はみんなのを聞いて楽しむとする」

「エルにセレナ、ヴェイグも反対ではない。」

「切ちゃん、どうする？」

「響、みんなはやるみたいだよ？」

「あ、アタシは何か始まる前から負けが見えてる気がするデスよ……」
「私も……」

「で、知力不安組だけが若干渋るといふ普段とは逆の現象。いつもなら全員でのゲームなんて真っ先に参加しそうなのに。」

「まあまあ、そんなに難しい御題をポンポン出せる訳じゃないから。それに大事なものは分からなくても一応単位を言ってみる事だ。合ってる可能性がゼロじゃないからね」

「そ、それはそうデスけどお……」

「せ、せめて私は切歌ちゃんの後の順番に……」

「よし、じゃあやってみよう。時計回りでいこうか」

「ここで俺の無情な判断を下す。切歌と響から「えくっ!!」「と言う声上がるも即座に横の親友兼相方に窘められていた。」

「こうして始まった数取り団は、何と意外と盛り上がったのだ。やはり答えて御題を振る事が中々出来ず、誰かがブツコムつまり難しい御題を振ると呆気なく間違える事が多発。」

「もしかは何とかそれに答えても御題を振る事を忘れるなど、響達が下手な訓練より難しいと言ってきた。」

そうこうしている内にバスは目的地に到着。外へ出ると一気に微かに潮を含んだ風が吹き抜ける。

「わあ、良い風〜」

「やっぱり大きいよね、あのジェットコースター」

「デスね。凄そうデス」

伸びをしていると聞こえる声に視線を動かす。響と未来に切歌が「スチールドラゴン」と呼ばれる物を見つめていた。

俺は絶叫系苦手だから遠慮したいが、女性はああいうの好きな事多いもんなあ。

「只野、入場券は？」

「ご心配なく。俺が一括して買ってくる。大人十人の小学生一人でいいよな？」

「エルが小学生？」

「中学生には見えないだろ？」

「……何とか園児で通らない？」

意外とせこいなマリア。いや、これは俺の財布を心配してるんだろう。

「大丈夫だよ。貯金は君へあの封筒を差し出した時から減ってはないから」

「……安心すればいいのか不安になればいいのか分からないわよ、それだと」

そう言って苦笑するマリアは本気で綺麗だ。でもこれ以上見ると不味いので顔を動かしてチケット売り場へ向かう事に。

遊園地側の入場券とプール側の入場券にアトラクション乗り放題をセットにした物を購入する。正直人生でこんな額をこういう場所で使うとはって思いながら支払いを済ませてみんなの下へ。

「お待たせ。で、先に遊園地からでいいか？」

「そうね……どうする？」

「はいっ！」

マリアがそうみんなへ声をかけると勢い良く響が手を挙げた。

「はい、響」

「あのっ！ プールが先が良いと思えますっ！」

「理由はあるの？」

「えっと、先にプールで遊んで、ご飯食べがてら休憩して、午後は遊園地の方がいいかなって」

「そうだな。後にプールじゃ時間の使い方も難しいぞ」

クリスの言い方にそれもそうかと納得。なら、先にプールとしますか。

「分かった。言われてみればそうだな。みんなもそれでいい？」

「「「「「「はい（ええ）（おう）」」」」」」」

「なら行こうか」

遂に、遂にみんなの水着姿を見る事になる訳か。期待で色々膨らみそうで怖い。

……きつと大丈夫だ、うん。それにいざとなったらエルやセレナと遊んで過ごせばいいし。

平日とはいえ夏も本格化してきている時期ともあり、プールの人手は中々のものがあつた。

そんな中、仁志は若干落ち着きなくプールの方を向いている。何も水着姿の女性を眺めているのではない。響達が来るのを待っているのである。

ただ、いきなり彼女達の水着姿をまじまじと見て少々不味い反応を起こさないようにと、そんなどこかおかしい発想で利用客の女性達の姿を見て耐性をつけようとしていたのだ。

「兄様っっ！」

「お兄ちゃんっ！」

そこへ聞こえた声に仁志は振り向いた。すると、可愛らしいレモンイエローの水着を着たエルフナインと白が眩しいセパレートの水着を着たセレナが彼へ手を振りながら小走りで向かってきたのだ。

ヴェイグはセレナが抱えている。彼はその視線をウォータースライダーへ向きたいようで、何とか不自然でない程度に顔を動かしているのが見え、仁志は小さく苦笑した。

「どうですか？」

「似合ってるかな？」

「ああ、とつても。二人共可愛いよ」

そう言つて二人の頭を優しく撫でる仁志はもう完全に父親の表情であつた。

周囲で彼らを少し訝しむように見る者もいたが、納得は出来ずともそういう事もあるかと自分で自分を納得させていた。

「他のみんなは？」

「もうすぐ来ます」

「はい。ただ、姉様がなんぱが怖いって」

「ああ、そういう事ね」

言われて仁志は軽くプールを見回す。当然ながら全員が全員男女のペアという訳でもなく、中には男性だけの者達もいる。

彼らの全てがそうとは思わないが、マリア達のような美女を見て声をかけるだろう者もいるはずと、そう仁志も思つて若干表情を曇らせた。

(俺が傍にいれば早々声をかけられる事はないと思うが……)

常に集団行動とはいかない。そう思つて仁志はどうしたものかと考える。

基本的に単独行動を避けてもらう事。最低でも二人か三人で行動してもらふ事。そんな風に仁志が考えている間、エルフナインとセレナはヴェイグと一緒に初めて見る流れるプールなどへキラキラした目を向けていた。

「姉さんっ！ 向こうのプールは波が出てます！」

「うん！ プールなのに凄いなっ！」

「あつちのは……何でしょうか？」

「滑り台みたい……」

「ん？ ああ、あれはウォータースライダーって言うものだよ。今セレナが言った通り、水を使った滑り台みたいなものさ」

「成程。流しそうめんみたいなものですね」

「ながしそうめん？」

エルフナインの口から出た単語に首を傾げるセレナだったが、仁志はそれに思わず笑った。

「え、エル、ある意味で間違っていないけどな？ あれはそんな風流なものじゃないぞ？」

「ですが水の流れを利用する点は一緒だと」

「おつまたせくつ！」

そこへ聞こえる声に仁志達の顔が動く。そして、仁志は思わず放心する事となる。

「思ったよりも人がいるな。さすがは夏場のプールといったところか」

「だね。てか、若い奴多いな」

「こういうところに来るんだもの。基本は若者でしょ」

翼、奏、マリアの歌姫三人は、まるで美の女神の寵愛を受けたかのような色気を……

「見て見て未来、クリスちゃん。あのスライダー凄そうだよ！」

「ふふつ、響ったら。もう目の色が変わってる」

「まったくだ。バスを降りた時は自分の情けなさに項垂れてたつてのに」

響、未来、クリスの仲良し三人は、それぞれに異なった可愛さを……

「おおっ！ これはいつかのアダムが造った場所を思い出すデスよ！」

「あの時と違って暴走する事はないから安心だね、切ちゃん」

切歌と調の二人は未成熟な魅力を見せるような水着姿だったのだ。

（や、ヤバいなこれ。思った以上にエロく感じる……）

そういう目で見ないようにしようとしても、こんな姿を見られるのは今だけという邪念も生まれ、また普段は見えていない部分が露わになつていくというのは心理的に大きな要素である。

更に言えば、仁志は三十歳。まだまだ性欲は減退するはずもなく、むしろ働き盛りの肉体であった。

しかも普段はしっかりと理性を保つ事が出来ても、現在の彼は夜勤明けの状態では万全ではない。

結果、その男としての本能を抑え切る事が難しかったのだ。

「さ、さて、じゃあ準備運動をしてプールへ入るんだぞみんな。それと、面倒事を避けるために最低でも二人か三人で行動してくれ。で、俺はまだ体力が全快じゃないから休んでるよ」

「「「「「「え？」「「「「「「」」」」」」」」」

女性達へ背を向け、仁志はややぎこちない動きでそそくさと移動開始。首を傾げる切歌達年少組であったが、残りの者達は何となくその理由を察して頬を赤めた。

（あ、あれって仁志さん、私達の事をエッチな目で見たって事、だよね？）

（いやらしい目で見てしまうから背を向ける、か。貴方らしくない反応ですが、今の私は嬉しく思っています）

（や、やっぱギアに似てない水着にして正解だったな。見慣れてない方が効果は高いと思ってたぜ）

（も、もうっ……あんな態度したらどういう事か分かるに決まってるでしょー！）

（あー、顔が若干熱いね。それと、笑みが止まんないかも……）

（い、一度試着で見せたのにダメなんだ？ ふふっ、ちよっと自信付いちやうなあ）

もう思考を女にしている六人は仁志の反応に照れながらも喜びを感じていた。

「ししよー、どうしたデスカね？」

「やっぱりバスの中で少し寝ただけじゃ泳ぐだけの元気、ないのかも」

「で、でもきつとその内遊んでくれるはずです」

「そうだね。それまでは私達だけで遊ぼう」

「「「はい（デスね）っ！」「」」」

それに対して年少組は仁志の事を心配しつつもまずは目の前の楽しい事を優先した。

ここでは大人数でも基本問題ないのでまずは全員で行動する事に。

なんだかんだで真面目な彼女達はちゃんと準備運動を行い、まずは流水プールへと入ったのだが……

「うひゃあつ！ 気持ちいいねっ！」

「暑さを忘れられるデスよっ！」

「さいっこうだね！」

響、切歌、奏のムードメーカー達が真っ先にプールへと入るや笑顔を浮かべる。夏の日差しを浴びながらのプールなど気分が良いに決まっているとはかりの笑顔を。

「ねえ！ 超激流プールって言うのがあるみたいだよ！」

「他にはアトラクションみたいな物もあるそうです！」

「スライダーも凄い数あるって書いてあったな！」

「ふふっ、はしゃぐのはいいが、昼食後の遊園地分の体力は残して置けよ？」

珍しく未来や調にクリスマスまではしゃぎ、それを見て翼が笑う。以前であればその頭の片隅にあったはずの“いつ呼び出しがあるか分からない”という認識が消えているからだ。

「ものによってはエルやセレナが駄目な物もあるかもしれないから、その場合は別行動かしら」

「仕方ないですが、そうするしかありません……」

「ううっ、もっと身長が伸びてたら安心なのに……」

全員の母親的立場のマリアは愛しい妹達を思っ若干の苦い顔をする。エルフナインとセレナも少しだけ寂しそうな顔をするも、そんな二人へヴェイグがこう言って慰める。

「気にするな。そうなったら、きつとタダノは二人と一緒に動いてくれる」

「二兄様（お兄ちゃん）が？」

「そうでしょうね。この中で一番只野が心配するのはエルとセレナでしょうから」

マリアがヴェイグの意見を肯定すると沈んでいた二人の表情が一気に明るくなった。

大好きな仁志が自分達を優先してくれるならと、そう思ったのだ。さすがの響達もエルフナインとセレナ相手に嫉妬などするはずもなく、むしろ微笑ましいと思って笑みを浮かべた。

そして数分後、彼女達は三つのグループに分かれて動き出す事にした。

マリアはエルフナインやヴェイグと共に仁志の下へ一旦向かい、翼と奏は超激流プールへ、残りの響達は一先ず各種スライダーを楽しむ事にしたのだ。

「それじゃあ、一時までにここに集合ね」

待ち合わせ場所と時刻を設定し、響達はそれぞれで動き出した。

「多分スライダーも凄いのじゃない限りセレナちゃんも出来るはずだから」

「だな。まあ、さすがにエルの身長だと引つかかるかもしれないけど」

「それだけが残念デスよ。エルも一緒に遊びたいデス」

「でも、中にはエルも出来るやつがあるかもしれない。もしあったら誘ってあげよ？」

「それがいいね。きつと小さな子でも出来るものはあるはずだから」

「はい。ちゃんと見つけてエルを誘ってあげなくちゃ！」

肉感的なエロスのクリスを筆頭に健康的なエロスを見せる響に切歌、潜在的なエロスを醸し出す未来と調、そして純真無垢故にある種の劣情を掻きたてるセレナと、男が声をかけてもおかしくない響達であったが、やはりその人数がそれを阻んでいた。

しかもその集団構成もクリスが指示して中心をセレナと調に未来とし、その周囲を響や切歌に自分と言ういざとなれば強く出られる者を配していたのだ。

「ねえ、ちよつといいかな？」

それでも完全にガード出来る訳ではない。一人では気おくれするだろう数でも、声をかける側も複数であれば障害とはなり得ないためだ。ただ……

「あ？ 何の用だよ？」

「ナンパならお断りですっ！」

「デスデスっ！」

既に想い人がいる上に口調の荒いクリスが先制で睨みを効かせ、それで相手が若干怯んだり戸惑った瞬間には響が相手の思惑を断固拒

否し、切歌がそれを強く肯定する事で撃退するのである。

もしそこで力付くなどに出る者がいれば、躊躇う事無く響が弦十郎仕込みの護身術を披露する事になるだろう。

まあ、その前に……

「金髪の日本人男性って、軽薄そうで嫌いです」

「何だか遊んでそう……」

「お兄ちゃんとは真逆で……感じ悪いです」

調、未来、セレナの言葉の刃でも十分な威力を發揮しているので問題は無い。

まさかの総攻撃に金色に染めた長髪男がすごごと引き下がり、それを仲間だろう男達が茶化したり冷やかしたりするのを一瞥する事もなくクリス達は歩き出した。

一方、数が二人と一番誘いやすい上に揃って美人の翼と奏と言えば……

「これは……凄いね」

「だね。楽しそうじゃん」

相手にするから面倒になると思ひ、男性からの声掛けを基本無視してここまで来ていた。

それでもしつこく声をかけてくる者へは二人揃って冷たい眼差しを向けてこう一言。

——しつこい男は嫌いだよ（です）。

こちらの二人はそれぞれに護身術が出来るため、男が力付くでどうにかしようとしてもかなり酷い目に遭うのは間違いない。まあ幸いにして、ここへ来ている男性は未だ誰も二人の腕前を知る事なくいられている。

「見て。ライフジャケットを着てる……」

「嘘……そこまで凄いのか、これ」

「……楽しみになってきた」

「あたしも。よし、行こうっ！」

「うんっ！」

意気揚々と歩き出す二人。心はもうリゾートへと奪われていた。

一方、仁志はマリアとエル、ヴェイグと共に温泉プールと言う場所へ来ていた。その名の通り「温水」ではなく「温泉」のプールである。

その温かい場所に入浴するように体を沈めて仁志達は寛いでいた。

「兄様、大丈夫ですか？」

「ああ、もう大丈夫。心配させてごめん？」

「あつ……えへへ」

頭を撫でられて微笑むエルフナイン。その腕の中でヴェイグは密かに笑みを浮かべた。

（エルもセレナに負けないぐらい優しい匂いがするようになった。最初に会った時は匂いがあまりなかったが、こっちに來てからどんどん匂いがするようになったし、良い事だ）

それはエルフナインが以前よりも心を弾ませている事を意味している。どうしても研究員としていた時の彼女は何か心動かす事はあっても、優しい想いや嬉しい想いなどを抱く事は少ない。

それがここでは子供らしくいる。仕事などは家事の手伝いだけであり、姉と慕うようになったセレナと可愛いヴェイグ、そして姉的存在となった切歌や調と触れ合う事でその心はよく弾むようになったのだ。

「それにしても、ここだけで時間がかなり潰されそうね」

仁志の横でエルフナインを見つめて微笑みながらマリアはそう呟いた。

実際、今仁志達がいる場所は単なるプールではなくウォーターパークと呼ばれる大型施設だ。そこを簡単に回るだけでも一時間では足りない程の作りだった。

「実際そうだと思うよ。俺も詳しく知らなかったけど、ここまでの規模だったとはなあ」

「来た事ないの？」

「あるけど、それはプールじゃなくて遊園地側なんだよ。しかも来たのは十年以上前」

「そう。一人で？」

「ある意味一人。高校の時の遠足みたいなもんさ」

エルフナインを撫でながらマリアと話す仁志。エルフナインを間に挟んでのその光景は、周囲からはおそらく親子にしか見えなかっただろう。

ただ、エルフナインの外見から考えるとマリアの容姿はとても若く見られて驚かれそうではあるが。

「さて、とりあえず程々にエルと遊ぶか。マリア、君はどうする？」

「あら？　ここで私がいなくなったら貴方は不審な目で見られない？」

「……いてくれると助かる。もしくはいなくなるならエルとヴェイグも連れて行ってくれ」

「ふふっ、冗談よ。こんな機会を逃してなるものですか」

「機会？　ああ、そういう事か」

マリアがかつて夏のバカンスを楽しみにしていた事を知っている仁志は、彼女が現状を楽しもうとしていると捉えた。

だが、本当は違う。マリアは仁志とプールにいると言う事を好機と捉えていたのだから。

（エルとヴェイグがいるけど、むしろこの場合は好都合だね。おかげで只野が変な意識をし過ぎないで済んでるし）

黒の水着はその豊かな胸元を強調するようにも見え、仁志が先程から決してそこを見ないように目を見て話している事は、マリアには好ましくもあり悩ましくもある事だった。

だからマリアは仁志の耳元へ顔を寄せて囁くのだ。

「今日ぐらいいは私をそういう目で見ても許してあげる」

その一言に仁志が動揺するように顔をマリアへ向けると、彼女は少しだけ頬を赤くしながら微笑んでみせるのだった。

「「「きゃああああっ！」「」」」

私達六人で乗ったゴムボートが凄い勢いで水の上へと滑り落ちる。

その瞬間大量の水しぶきが上がって私達の体へと雨のように降ってきた。

それを浴びながら誰もが笑みを浮かべていた。楽しいって、そう心から叫ぶような笑顔だ。

「すっごいデス！ サイコーデスっ！」

「うん、楽しかった！」

「人数も丁度良かったですねっ！」

ボートから降りて一息吐くと切歌ちゃん達が楽しそうに感想を言い始めた。私も同じ事を思った。何て言うか、あのアダムさんが造った場所にも似たようなものはあったけど、あの時は途中から楽しむって感じじゃなくなっただしなあ。

「次は何やる？」

「トルネードってやつ行こうぜ」

「賛成っ！ どうせなら全種類制覇したいよねっ！」

私がそう言うとなんが笑顔で頷いた。ああ、本当に幸せ。みんなで何の心配もなく遊べるって、こんなに幸せだったんだ。

切歌ちゃんとクリスちゃんを先頭に歩く。私は一番後ろ。でも寂しくない。だってすぐ近くに未来がいるから。

「未来」

「何？」

「幸せってさ、意外と近くにあるんだね」

「……うん、そうなんだよね。私も、こっちにきてそう思えるようになった」

笑顔を向け合う。未来と離れてみて、こうして時々近付いて、私は手を繋ぐ事の本質を思い出した。

常に繋ぐ必要はない。だけど、繋げる時はしっかり繋ぐ。繋いでない時は心を繋ぐ。繋がらないって事は手だけじゃない。心まで離しちゃう事なんだって。

「でも、只野さんと一緒に遊びたかったなあ」

その未来の一言に胸が騒いだ。何で？ 何でそこで未来が仁志さんの事を言うの？

——仁志さんは私が最初に出会ったのに……。

そうだよ。みんな、みんなあの時仁志さんと会うのを嫌がった。

そうだ……。私だけ、私だけが最初から仁志さんを見つめてた。なのに……。

「仕方ないデス。ししよーはお疲れデスから」

「うん。でもお昼ご飯の後はきつと元気になってる」

「そういえばお昼はどこで食べるんでしよう?」

「そういえばその辺は何も話してねーな」

「えっと、今は十時半だから集合まで二時間以上あるけど……響、どうする?」

そこで未来が私へ問いかけてきた。その瞬間意識が切り替わる。わ、私、今未来達の事を嫌おうとしてた!?

「い、今はまだ遊んでいようよ! せめて十二時過ぎてからどうするか考えない?」

「そうデスね。お昼までは遊んでたいデス」

「まっ、それがいいか。うし、そうと決まれば次だ次」

上機嫌のクリスちゃん達を見つめて私も笑みが零れる。でも、何だろうな? 何だか胸の奥が重たい。

「……もう疲れたのかな?」

そんなはずないと思いついて私は歩く。でも、心はちよつと疲れたかもしれない。何で私、未来達を嫌おうとしてたんだろ? きつとそんな事したら仁志さんは悲しむ。

——そうだよ……。今だと仁志さんが悲しんじゃう。だから悲しまないようにしないと。未来達よりも私が大事って、そう思ってくれるようにすればいいんだもんね……。

濡れて冷えた体に夏の日差しが心地良いね。いつもなら暑い日差しも今だけは嬉しく思える。

「凄かったね、奏」

「ああ。これ、響や切歌は大好きだろうね」

浮き輪から手を離すなってそう書いてあったからどんなもんだろうと思えば、いやあ、正直舐めてた。

もう何度も水が襲ってきて、あれじゃ離したくても離せないって

の。

「名前に偽りなし。超激流の名の通り、一瞬たりとも気が抜けなかった」

「ホントホント。でも楽しかったよ。もう一回やってもいいかな」

「ふふっ、奏らしい。でも、私ももう一回やってもいいよ」

「じゃ、行く?」

「……行っちゃおうか?」

そこで二人して笑顔を見せ合って頷いた。ああ、何だろう。本当に幸せだ。翼とこうやって遊んでいられるなんて、あっちじゃ考えられなかった。

勿論遊んだ事がない訳じゃない。だけど、あの頃はいつ出勤がかかるか分からなかった。二人して無邪気に遊ぶなんて出来なかった。

「奏、早く早く」

「分かってるって」

こんな笑顔の翼も、見る事はなかった気がする。これがあたしの世界の翼じゃないからなのか、こつちの世界だからなのかは分からない。い。……ううん、分かりたくないんだ。分かったら、あたしはきつと戻れない。いや違うね。もう分かってるんだ、どっかで。

だからこそ明確に分かりたくない。それだって翼に言われたら、あたしも翼も、きつとここから離れられなくなるから。

「これやったら次はどうするの?」

「そうだね……スライダーの方へ行こうか。響達と上手くしたら合流するかもしれないし」

「分かった。じゃ、今はとりあえず……」

「目の前の激流へ再挑戦だっ!」

「うんっ!」

そうしてまた激流に揉まれたあたしと翼は、心地良い疲労感を感じながら場所を移動した。

向かう先には見るからに楽しそうなくつものスライダーがある。目ぼしい物を回るだけで時間がなくなりそうだね、こりや。

「どれから行く?」

「やっぱ凄そうな奴じゃない?」

「じゃあ……」

二人で案内図を眺めて振り返る。目に飛び込んでくる中で凄そうな奴はそこまで多くない。

「……トルネード?」

「か、フリーフォールじゃない?」

「もしくは……」

「ブーメラントツイスト……」

迷うね。どれもそれぞれに楽しいだろうし。でも、ここは見た目的に一番複雑そうなやつにしよう。

「翼、トルネードにしようよ。あれが一番複雑そうだし」

「うん、いいよ。その後はフリーフォールだね」

「あれは最後のお楽しみ?」

「そういう事」

そう思っただけでわたし達は歩き出す。それにしても、欲を言えばここに只野さんがいて欲しい。あたしと翼の二人はあの人を抱えてる苦しみや悲しみを何となくだけ知っている。

あの人は、いつか別れがくるからこっちへ必要以上の想いを向けようとしないうようにしてるって。例えここの繋がりが切れなくても、こんな風な時間を過ごす事は出来ないんだって。

あの夜見せた悲しそうな横顔。あれはきつとそういう事だ。

多分だけど、あの人は響と出会った時から何となくこうなるかもしれないって思ったんだろうね。

それなのに、最近はこちらへ歩み寄ってくれてる。きつとそれはゲージを上げるためなんだと、分かる。分かっているけど、喜んでるあたしがいる。

「ねえ翼」

「何?」

だから、あたしも躊躇わない。あの人が決して一歩前へ足を踏み出したならあたしも踏み出そうって。

「あたしも、先輩に、只野さんに言うよ。好きだった」

「……そう。うん、いいと思う。良い顔してるよ、今の奏」

それがいつかのカラオケでの意趣返しだと察してあたしは笑う。

「そういう翼も良い顔してるよ。若干憎たらしいぐらい」

「クスツ、そうだよ？ 私は奏より先に告白してるんだもん」

そう言つて笑う翼は女のあたしから見ても可愛くて綺麗だった。成程ね、どうやら女としては幾分先を歩かれてる。でもいいよ。すぐに追いついて追い抜いてみせるさ。

ツヴァイウィングだからこそ両翼じゃなく双翼でありたいしね。二人でしか飛べないんじゃない。二人それぞれで飛べるからこそ、二人になった時にもっと高く遠くまで飛べるって！

「これで一種夢が叶ったなあ」

温泉のプールに浸かつて何をすることもなく目の前の景色を眺めていると、ふと横から聞こえた声に顔を動かす。

そこには幸せそうな表情で笑みを浮かべる只野がいた。いつの間にかエルはそんな彼の膝上に座っている。ヴェイグは温泉の温かさに緩んだ顔をしていた。

「夢？」

「そう。美人と一緒に風呂に入る」

「……そう」

水着着用だけど、たしかにそう言われればこれは温泉だもの。なら入浴と言えなくもないか。

「兄様、そろそろ出ませんか？ 僕、別の場所も行きたいです」

「そっか。よし、なら次はエルの希望を叶えよう。マリア、いい？」

エルが自分の願望を優先させるような事を言った事に軽く驚いていると、只野がそう言いながら私へ問いかけてきた。呼び捨てなのもあって、何となく夫のように思えてしまう。

「え、ええ」

「お許しが出たぞエル。さっ、どこへ行きたい？」

「あ、あのっ、大きなバケツがあったあれに行きたいです！」

大きなバケツ？ ……ああ、そう言われればあったわね。只野はエルの言葉に嬉しそうに笑ってその体を持ち上げた。

「えっ？」

「そこまで肩車してあげるよ。きつとあれはアスレチックを兼ねてるから疲れるだろうし」

「い、いいんですか？」

「勿論。ただ、念のためヴェイグはマリアへ預けてくれ」
「分かりました」

そう言つてエルはヴェイグへ顔を近付けて小声で何かを囁いていた。きつと本人と何か話してるんでしょう。我が家だと今やセレナよりエルの方がヴェイグと仲良しなもの。

「姉様、お願いします」

「分かったわ」

ヴェイグを受け取ると当然だけど濡れている。

「なあ、乾かさないでいいのか？」

「まだいいわ。お昼ご飯の前には乾かしてもらうけどね」

「……分かった」

若干苦い顔のヴェイグに苦笑しながら私は只野を見る。

「うわあ……高いです」

「ちゃんと掴まってくれよっ」

「はいっ！」

完全に親子だわ。だけど、それが私には微笑ましくて堪らない。

「マリア、行こう」

「ええ」

隣り合つて歩き出す。今の私達は、やっぱり周囲には家族に見えてるのかしら？

実際にはまったく血の繋がりになんてない他人の集まりなのに。結婚どころか付き合つてさえいないのに。

——でも、している生活が一番夫婦らしいわ……。

そう、ね。私が一番只野の妻みたいな事をしている。

——年齢だつて私が一番近い。エルやセレナだつて只野を兄とい

うより父のように慕ってる。私の理想は、彼しかない……。理想……。

——私を世界の歌姫でも救世主でもない、ただの MARIA として見てくれる男性だもの。あの時の告白だって、そんな事へ一度も触れなかった……。

ああ、そうだったわ。只野はここに来てからの私を見てくれた。あの言葉は、そういう意味だ。

——だから、私には只野しかない。翼達は他の出会いがある。でも、私には、血塗られた道を歩くしかない私には、只野しかない……。

そう、そうよ……。私をただの優しい MARIA として受け止め、また見てくれる男なんて只野しかない。

——渡せない……。渡したくない……。他の誰にも、彼は渡したくない……。渡せば、この時間が、あの時間が、全部失われてしまう。エルも、セレナも、切歌や調にヴェイグまで、笑顔を失ってしまうのだから……。

いや……。そんなのは絶対嫌っ！ 私の家族を、団欒を、幸せを、壊させてなるものですかっ！

「MARIA、どうかした？」
「え？」

気付けば私より少し前に只野がいる。エルと揃ってこちらへ振り向いて不思議そうな顔を向けていた。

「ご、ごめんなさい。考え事をしていました」

「そっか。気付けずにごめん」

「ううん、いいのよ」

「姉様、一体何を考えていたんですか？」

少しだけ急いで歩いて只野の横にいくとエルがそう聞いてきた。でも答える訳にはいかない。

「お昼ご飯の出費よ。一体どれだけかかるのかしらって」

「気持ちには分からないでもないけど止めようよ。行楽地の食事なんて高くつくのが基本だからさ」

「そうは言うけど、どうしても色々考えるのよ」

上手く誤魔化せた。そう思つて私は歩く。只野やエルとお昼の事を相談しながら歩く。ふふつ、本当に幸せだわ。もういつそのまま彼の妻になり、エルの姉かあるいは母になつてもいいぐらいに。

「ね、只野」

「ん？ 何？」

だからか、無性に彼へキスしたくなつた。私の想いを彼へ流し込みたいって。

——彼へ私の想いを、不安も恐怖も何もかもを受け取らせるのよ……。

そう思つて只野へ密着して顔を近付けたところで彼が私のしようとした事に気付いて顔を動かした。

「……どうして避けたのよ？」

「い、いやいや、場所と状況考えてくれよマリア」

「え？」

只野の照れくさそうな顔と目の動きで私は一瞬にして我に返る。

こ、ここっ！ プールサイドだったわ！

「……気付いてくれた？ その、嬉しくない訳じゃないけどさ」

「ご、ごめんなさいっ！ どうかしてたわ！」

「あく、からかいじゃやないんだ？ てつきりそういうのかと」

「か、からかいでキスなんて出来る訳ないでしょ？」

そう言つと只野が何故か大きく驚いた顔をして、それから複雑そうに笑つた。

「そうか。そりやそうだよな」

「な、何よ？」

「ん？ いや、言われてみればもつともだと思つたんだ。で、何故衆人観衆の前でキスを？」

「っ?! 知らないわよっ！」

ニヤニヤしながら問いかけてくる只野に何とも言えない憎らしさと恥ずかしさを覚え、私はそう吐き捨てて歩き出すしか出来なかつた。

ただ、私の腕の中のヴェイグがずっと静かだったのが気になった。人目を気にしてるのでしようけど、それがなくても黙り込んでいたから。

かと思えば私がトイレへ行って戻ってきた時には只野と話をしていたし。男同士の話でもあったのかしら？

「せー……のっー！」

「「「「「「ゴッツ！」「「「「「「」」」」」」」」

響の合図で一齐にスライダーへ体を滑らせる女性達。装者達だけでなくエルまでも同時に滑る事が出来るそれを見つけた響達は偶然合流出来た翼と奏と共に仁志達を搜索。

すると丁度響達と合流しようとして動いていた彼らと合流、現状へと至っていた。ちなみに仁志は合流するや未来やセレナへ何事かを頼んでいる。

「楽しそうだなあ」

「ああ……」

十人が楽しげにスライダーを滑り降りるのを眺め、仁志とヴェイグは周囲の人がいない事を把握して呟く。

実際の十人からは優しい匂いがしている。だが、ヴェイグは感じ取っていた。その中に紛れる微かな嫌な匂いを。

しかしそれははっきりと感じ取れるものではない。ヴェイグできえも意識していなければ感じ取れない程度の、微かな匂いだった。

「……やっぱりする？」

「……ああ」

二人の視線の先には笑顔を向け合う響達がいる。その中に嫌な匂いを微かにさせている者がいると、そうヴェイグは言うのである。

しかもそれが誰かを既に彼は仁志へ告げていた。だがヴェイグはまだ確証が持てないでいたのだ。それが悪意によるものか、それともその者が何か嫌な感情を抱いているだけなのか。

「そっか。最悪の可能性じゃないといいんだけど……」

「まったくだ」

「兄様〜っ！」

「お兄ちゃ〜んっ！」

呼びかける二人の少女へ手を挙げて仁志はその場からゆっくりと歩き出す。

「一応最悪の場合への手は打った。昼飯前に念のための行動をしてもらう」

「そうか……」

それだけ交わして仁志とヴェイグの会話は終わった。ヴェイグはエルの腕へと戻り、仁志はセレナとエルと手を繋いで歩き出す。

「みんな、まだ遊びたいかもしれないけどちよつと相談したい。昼飯なんだけど、こつちで食べてから移動する？ それとも遊園地へ移動してから食べる？」

「えつと、どつちがいいんですか？」

「デスカ？」

「ええつと、一応どちらにもレストランがあるけど、遊園地側には中華料理の店がある、ぐらいだったかな？」

仁志のパンフレットを思い出しながらの説明に調と切歌が頷き、視線をマリアへ向けた。

「何？」

「マリアがこの中でお財布握ってるから」

「判断を聞こうと思ったデス」

「ははっ、完全母親じゃん」

「うるさいわね。否定し辛いから止めてくれる？」

「今の姉さんはみんなのママみたいだもんね」

「うふふっ、セレナ？ 私も怒る時は怒るわよ？」

「っ!？」

「「「「「怖っ!?!」「「「「「」」」」」」」

「ね、姉様落ち着いてください！」

にっこり笑顔で凄むマリアにセレナが息を呑み、仁志達が恐怖し、エルだけが何とか怒りを宥めようと声を出す。そんなこれまでと変わらないような時間。その中でヴェイグはずつと微妙な表情を浮か

べていた。

(優しい匂いばかりなのに、やっぱり嫌な匂いが微かにする。それも……)

チラリとエル腕の中でヴェイグは視線を動かす。

(……マリアから、するな)

マリアが仁志へキスしようとした時、ヴェイグは感じ取ったのだ。こちらへ来てから嗅ぐ事のあまりなかった嫌な匂いをマリアが発している事を。

それを仁志へ伝えて万が一に備えてもらったと言う訳である。ただどこかでヴェイグも仁志と同じく考え過ぎで終わって欲しいと思っていた。

結局話し合いの結果昼食は遊園地側へ移動して食べる事となり、そのためにここからは全員で行動する事になる。

「うわああああ………」

そしてそれまで保護者として見ていただけだった仁志が強制的に遊びへと駆り出される事に。

彼がやらされたのはフリーフォールスライダーというもの。名前の通りな代物だ。その情けない姿と声に見ている響達全員が笑い、それに仁志は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ししよー、次はあれとかドーデス?」

「只野さん、一緒にやりましょうよ!」

「よ、四人乗りだからいつそ未来や調とやったら?」

「そうですね。じゃあ、私と響とクリスで一回で?」

「私と切ちゃんとセレナで一回……?」

「ならあたしと翼とマリアで一回だね」

「えっ!?!」

「あ、あの、僕も乗りたいです」

「じゃ、じゃあエルをどこかに……」

「なら、エルと私にヴェイグで一回ね」

「デスヨネ〜」

こうして計四回ものスライダーを経験し、仁志がヘトヘトになった

のを見て誰もが苦笑する。

一生分スライダーを楽しんだ気がすると、そう言つて仁志は疲れながらも嬉しそうに笑つた。

その笑顔に響達も微笑む。

途中で利用客に頼んでの記念撮影も行つた。仁志のスマートフォンで撮影されたそれは、翼やエルフナインのスマートフォンへも転送される事となる。

そして最後は仁志たつての希望で全員で温泉プールへ。

「あつたか〜い」

「はう〜……癒されるデスよお〜」

響・切歌コンビが温泉に手足を伸ばせば……

「何だか不思議ですね。水着でお風呂に入つてる気分です」

「まったくだな」

翼・調コンビは苦笑し……

「まったく、只野らしいわ。これで全員と混浴したつて思うつもりね」

「そういう事かよ。まったく、あの人らしいな」

マリア・クリスコンビなどは呆れ……

「お兄ちゃんとお風呂入るなんて不思議な感じ」

「ですよ。僕も最初はそうでした」

「何だかみんな温泉に入りに来たみたいですけど？」

「先輩、これで満足かい？」

「うん、死んでもいいぐらいだ。ここが天国かあ」

「タダノ、今の一言でみんなが一瞬間な匂いを出したぞ。気を付けろ」

仁志の両側をエルフナインとセレナが占拠し、それを見て未来と奏が微笑みながら彼を見つめていた。

そんな中で仁志が放つた一言にその場の全員が悲しみを抱くも

……

「え？ ああつ！ その、今のは言葉の綾で、天にも昇る気持ちって言いかえた方がいいかなー！」

「分かっていますよ、只野さん。みんな、分かっていますから」

慌てて立ち上がつて仁志が言った言葉にすぐに笑みが戻る。が、そ

ここで安堵して下を向いたのがいけなかった。

「……………」

温泉は無色透明である。そのためしっかりと彼の視界には響達の体が見えた。しかも、自然その見えているのは全身であって、つい無意識に仁志は八つの女体を見回してしまい……

「っ?! ちょ、ちよつとトイレ行ってくるっ!」

体の異変に気付いた仁志はその場から逃げ出した。ただ、彼の両側以外の者達は、つまりエルフナインとセレナにヴェイグ以外は見てしまったのだ。

「姉さん達、どうしたの?」

「皆さん、顔が赤いですけど……………」

「のぼせたのか?」

「そ、そんな事ないから……………」

「そ、そうそう。心配しなくてもいいよ!」

年長であるマリアと奏が三人の心配を無くすように言葉を返し、響達へ顔を向けた。

「二ね(な)?」

その確認に六人は無言で頷いた。ただその脳内は先程見た映像で埋め尽くされていたが……………。

(おつきくなつてたおつきくなつてたおつきくなつてたっ!)

(い、以前見た時よりも大きくなっていった気が……………と言う事はやはり……………ああっ! 忘れろ! 忘れるんだっ!)

(は、反応させてやがった……………。あ、あの人も、やっぱり男なんだ……………)
(……………気が緩んだんでしようね。それにしてもこのタイミングで?もうっ! 間が悪いにも程があるでしょ!?)

(さ、さっきのはえつと、ししよーがエツチな事考えたって事デスよね? あ、アタシ達で、デスよね? あう……………)

(わ、私も只野さんから見れば魅力的、なんだ。大人の女性って、そう見てくれるのかな?)

(ど、どうしよっ!?! は、はっきり見ちやっ!)

(め、珍しいよね只野さんがあんな風になるとか、さ。……………さっきの、

しばらく忘れられそうにないなあ)

(どうして姉さん(姉様)達は俯いてるんだろう?)

(何だ? 珍しくあの八人がまったく同じ匂いをさせてるぞ?)

結局仁志がその場へ戻ってきたのはたっぷり十分は経過してからだった。

その手にお詫びを兼ねた飲み物が入った袋を持ち、申し訳なさそうな顔で「お見苦しいものを見せて大変申し訳ない」と響達八人へ告げて好きな物を飲んでくれと差し出したのだ。

エルフナインとセレナにも水分補給をした方がいいと声をかけて。

「ヴェイグにはこれな」

「おおつ、コーヒーか。ありがとうタダノ」

ヴェイグには紙パックのコーヒー飲料が手渡された。あの初めてコンビニへ来たヴェイグが選んだコーヒー。あの味をヴェイグは気に入った事を仁志はセレナ経由で知っていたのである。

こうして仁志はエルとセレナへ向かい合うように位置を変え、ヴェイグを周囲から隠すと同時に響達から顔を隠す事に成功する。

ただ、何故彼がそうしているかを理解している八人は揃って苦笑していたが。

その後は男女で分かれて外で待ち合わせる事になり、仁志は先に一人出入口付近で佇んでいた。

「はあく……」

ただし、その雰囲気はどこか暗い。

(やつちまったよなあ。まさかよりもよって響達の見てる前で……なあ)

これまで気を付けて気を付けて誤魔化してきた事。注意に注意を重ねて見ないようにしてきたもの。それらが最悪のタイミングで重なった。

不幸中の幸いはエルフナインとセレナに見られなかった事ぐらいであり、後は精神的には自殺したも同然の状態である。

それでも響達のために強く生きなければならぬ。何せ彼がいなくなれば下手をすれば彼女達は消滅してしまうかもしれないからだ。

(……ホント、あの光景は忘れられないな、ある意味)

目に入ってきた八人の戦姫の姿。その水着姿を自然と脳裏に焼き付けてしまった仁志は、複雑な気持ちになりながらも顔を上げて空を見つめた。

「大人、出来なくなっただんなあ」

ゲージを上げるためにと、仁志は響達へ踏み込む事を決めた。それはあの響とのデートの際に心に誓った、踏み込む時は大人を演じる“を破る事である”。

今の仁志は男として彼女達へ接していた。そのせいで先程のような事態を招いたのだと彼は思っていたのだ。

実際には、彼が自分に素直になっただけであり、男としてだけではなく人としての反応でもあった。

「兄様っっ！」

「お兄ちゃんっっ！」

そこへ聞こえてきたのは可愛い妹分二人の声。仁志がゆっくりと声のする方へ顔を向けると、そこには当然ながら服を着た女性達。

ただ、どこか艶めいている気がして仁志は思わず唾を飲んだ。そしてその理由にすぐ気が付いて人知れず息を吐く。

(あれだな。水着姿を覚えてるからだ)

いつかもスーパー銭湯で起こった事だ。その服の下を想像出来てしまうために興奮してしまっている。そう理解し仁志は諦めるように頭を掻いた。

(これは、長い戦いになるなあ……)

少なくとも今日一日は続くだろうと判断し、仁志は気を取り直して歩き出した。

「エル、ヴェイグは？」

「ちゃんと乾いてます」

「うん、私も一緒になって乾かしたから大丈夫だよ」

「……放っておけば乾くと言っただが」

「ダメです」

周囲に人がいない事を確認しての眩きにエルフナインとセレナが

揃ってダメ出しを行う。それに楽しげに笑ってから仁志は顔を上げた。

「じゃ、その、行こうか」

そこにいる八人の女性達へ少しだけ照れを見せながら……。

「姉さん、ちよつといい?」

「え?」

こつちへ振り向く姉さんはいつもと何も変わらないように見える。でも、お兄ちゃんやヴェイグさんが言うには悪意に操られてる可能性があるらしい。

「お手洗いにいきたいんだけど一人だと……」

「ああ、そういう事。分かったわ。ちよつと待ってね。只野……」

よし、姉さんがこつちから目を離れた。なのですぐに未来さんへ近付いた。

「未来さん、作戦開始します」

「分かった。後で追うから」

その言葉に頷いて私は元居た場所へ戻る。丁度姉さんがお兄ちゃんへ離れる事を言ったみたいでこつちへ振り向いた。

「じゃ、行きましよう」

「うん」

姉さんと隣り合って歩き出す。一度だけチラツと後ろを振り向けば未来さんが小さく手を振ってくれた。よし、大丈夫。

お兄ちゃんから頼まれたのは、私と未来さんで姉さんへ神獣鏡の光線を浴びせる事。もし悪意が操っているならそれで解決だし、そうじゃないならそれでいいから。

私が姉さんをみんなから引き離す役を任されたのは、妹だからだけじゃなくミレニウムパズルで周囲から見えなく出来るからつてもあるみたい。

——対悪意に関しては現状セレナが一番向いてるんだ。

お兄ちゃんからそう言われて私は嬉しかった。戦う事は嫌いだけど、悪意をみんなから守る事はそうじゃない。それに戦いは、何も誰

かを傷付けるだけじゃないって私は知った。

大切な人が笑っていられるように働く事も戦いなんだって。そして時に誰かを傷付けるとしても、そうしないと流れる血が、失われる命や笑顔があるからなんだ。

みんなの笑顔のために。五代さんはその想いで戦う事を選んだ。私も一緒だ。嫌だけど、それをやれるのが私しかないならやるしかない。

「ここで待ってるわ」

気付いたらトイレの前まで来てた。周囲をそれとなく確認。うん、人はいるけどこつちを向いている人はいない。

「マリアさん」

「え？ あら、未来。貴方もトイレ？」

よし、姉さんの注意が未来さんへ向いた。なのでギアを纏う。すると当然姉さんがこつちを向いた。その瞬間ギアがツインドライブ状態になる。お兄ちゃんが依り代でステータスをずっと確認しててくれているからだ。

「せ、セレナ？」

戸惑う姉さんに構わずミレニアムパズル展開っ！ 一瞬で周囲の光景が変わる。これでもう見られる事はありません。

「未来さん、お願いします」

「うん。マリアさん、ちよつとじつとしてくださいね」

未来さんもギアを纏って姉さんの目の前に立った。

「ど、どういう事？」

まだ状況が分からない姉さん。これ、やっぱり悪意は操ってないんじゃないかな？

でも油断は禁物。お兄ちゃんからも言われた。悪意は、闇はこつちの心が嫌がる事をするって。なら姉さんらしく振舞って私達を騙す事だつてやるかもしれない。

「姉さんごめんねっ！ えいっ！」

「え？ ちよ、ちよつと？ 何で私の周囲をブロックで？」

姉さんが身動き出来ないようにして未来さんを見る。未来さんは

小さく頷いて姉さんの背中へ回ってペンダントを外した。

「セレナちゃん、お願いっ」

「っと、はい」

未来さんから投げられたペンダントを預かり、これで準備は完了。

「行きますー！」

「ちよ、ちよっと待ちなさいっ！ 何で私へ攻撃を!？」

「姉さんから嫌な匂いがするってヴェイグさんが言ってたんです」

「私から？」

「はい。なので只野さんが念には念をとって」

「……………そう。分かったわ。じゃあやって頂戴」

そう言っつて姉さんが大人しくなった。そして目を閉じて俯いて大きくため息を吐く。

「……………悲しいわね。まさか少し負の感情を抱き続けただけでここまでされるなんて。セレナ、私はそれほどまでに弱い姉と思っていたのね？」

「そ、そういう訳じゃ……………」

姉さんの悲しそうな声に胸が痛む。だけど未来さんはそんな姉さんに鋭い目を向けた。

「騙されないでセレナちゃん。マリアさんはそんな事を妹のセレナちゃんへ言う人じゃないからっ！」

そう言っつて未来さんは迷う事無くアームドギアを展開した。

「これで確信出来ましたっ！ 悪意よ、マリアさんから出て行けっ！」

放たれた閃光は姉さんを包むように貫いた。

「み、未来さん……………」

「セレナちゃん、マリアさんがああいふ事を言うとしたら、それはセレナちゃんじゃなくて只野さんに言うはずだよ。この事を考えて実行して欲しいっつて頼んだ人へ、ね」

「……………はい」

未来さんの見てる先には気を失っている姉さんがいた。もし悪意がいなければこうはなつてない。

やっぱり、悪意は姉さんを操ろうとしてた。でも、これで分かった。

何で今まで悪意が切歌さんや調さん達を操っても簡単に気付かれなかったか。

多分だけど、悪意が強くみんなを操らないとヴェイグさんにも匂いが分かりにくいんだ。そして、そうなるまでは私達にも分からないように眠ってるんじゃないかな？

「未来さん、私、怖いです」

「セレナちゃん……」

「姉さんは、心の強い人です。なのに、悪意は姉さんさえも操ろうとしてました。それだけじゃないです。私からしたら奏さんだってそう。でも……」

「うん、私も操られたから分かるよ。悪意はね、私の中の嫌な部分を上手に大きくしてくるの。好きな人への気持ちを利用して、それ以外の人を嫌うように」

「好きな人への気持ち……」

私だったら姉さんやエルかな？ あるいはヴェイグさんやママ？

「とにかく、今はマリアさんを起こそう」

「あつ、はいー！」

ブロックを消して姉さんのペンダントを付け直す。そして未来さんと二人で姉さんを揺さぶった。

「姉さん。起きて姉さん」

「マリアさん、起きてください」

「ん……」

ぼんやりと目を開けて姉さんは私と未来さんを交互に見た。

「……そう、どうやら本当にそうだったのね」

どこか辛そうな声で姉さんはそう言うどゆっくり体を起こした。

「自覚は……正直なかつたわ。未来、貴方もそうだったの？」

「はい。でも、よくよく考え直してみると妙だなんて思う事はありました」

「……そう、ね。私も、あるわ」

そこで姉さんは少しだけ顔を赤くした。一体何があつたんだろう？

「とにかく、ありがとう。未来、ギアを解除した方がいいわ。それを確認してからセレナがギアを解除して。周囲の状況が元に戻った時に面倒な事にならないように」

その指示の出し方で私は姉さんが元に戻ったって確信出来た。優しく微笑みながら私や未来さんを見ていたからだ。

言われた通り未来さんがギアを解除したのを見てから私もギアを解除した。周囲の光景が戻ってさっきまではなかった音や声が聞こえてきた。

「どうやら運良く人はいなかったみたいね。じゃあセレナ、早くトイレをすませてきなさい」

「え？ あ、うん」

ホントは必要ないけど済ませておいた方がいいかなって思ってたイレへ向かう。

それにしても本当に悪意は怖い。姉さんはペンダントがスマホと同じ状態になったのに関係なく入り込んだ。それって、依り代があっても悪意は防げないって事だ。

でも、あの時、奏さんと未来さんはギアを展開する事で悪意を追い出した。そこで思った。もしかしたら、ギアを展開してる時は悪意は操れないか入り込めないんじゃないかって。

「……後でエルやお兄ちゃん達へ言ってみよう」

きっと私一人で考えるよりもその方がいい。エルは私の可愛い妹だけど頭の良い賢い子だから。

セレナからの指摘に仁志は切歌と調が操られた時の事を思い出して息を呑んだ。

「そうか……あの時悪意はギアを使わなかったんじゃない。使えなかったんだ。展開させたら影響力が下がるって」

「そうか……あの本部で私や奏さんが動けたみたい」

「成程ね……。じゃ、セレナの言う通りギアを常に展開していれば悪意はあたしらへ手を出せない？」

「いえ、分かりません。依り代の力はギアとして展開すると強くなる

のはもうはつきりしています。ただ、依り代の力を風船に例えますが、普段は萎んだ状態の依り代の力がギアを展開すると一気に膨れ上がるみたいなものだと思うんです。で、悪意はその勢いで弾き飛ばされてるのではと」

「……そうだと仮定すればギアを展開し続けていて入り込まれると面倒ね」

「ああ。しかも、だ。その場合は神獣鏡が使えねーぞ」

ギアを展開している以上、神獣鏡の攻撃を受ける事はギアを消滅させるに等しい。そうなれば依り代の力を失う事でもある。

「どちらにせよ、ギアの常時展開は避けるべき、か」

「そうなりますね。でも、簡易的な悪意対策にはなりませんか？」

「そうデスね。定期的にギアを展開してみればいいんデスよ」

「出来れば全員いる時が望ましいわね」

「ヴェイグでも本格的に悪意が動き出さないと判断がし辛いみたいだし、それがいいかもしれないな」

「じゃあ、週に一度全員で集まる時にそれをやるって事で」

こうして今後の全員での定例行事が増える事となった。当面の問題は片付いたと思って仁志達は昼食を食べるべく歩き出す。

だが、まだ悪意の魔の手は忍び寄っていた。ヴェイグにも気付かれず、密かに仁志を狙うように拳と銃の中に身を潜めて……。

番外編 戦姫にラブソングを

「今日は特撮・アニメ縛りデース！」

それなりの広さのカラオケルームに切歌の音が響く。それを聞いて小首を傾げる可愛らしい者達がいた。

「「しばり?」」

「タダノ、縛りとはどういう意味だ?」

「簡単に言うと、この場合は特撮やアニメの歌しか歌っちゃダメって決まり」

その説明に切歌を除いた全員が頷いた。とはいえここにいるのはマリア以外のあの平屋の者達だ。

時刻は午後一時を過ぎた辺り。場所は駅前のカラオケである。マリアは仕事があり、響達の中には暇がある者達もいるのだが、仁志は切歌との約束を果たすためにと彼女だけを誘うつもりだった。

だがしかし、切歌だけでは調達に悪いと思っただけは以前のようにあの子の者達全員とカラオケへやってきたのだ。

「じゃ、まずはししよー、約束を果たすデスよ」

「ちよつと待ってくれ。まずはみんなで歌おう」

「デス?」

「勇者王誕生!〜完璧絶叫ヴァージョン〜を、さ」

それは仁志が切歌へ貸した『ガ王』と呼ばれたCDに入っているものだった。

だからこそ仁志の言葉に切歌だけでなく調達も嬉しそうな顔を見せる。

「台詞を振り分けよう」

そこから少しだけ打ち合わせのような事を行い、六人は頷き合っぴて一曲目が流れ出す。

「ファイナルフュージョン……承認っ!」

「了解っ! ファイナルフュージョン! プログラム! ふ〜……ド
ラ〜イブっ!」

「よっしやあっ!」

ヴェイグ、エルフナイン、仁志の台詞から始まる八分にも渡る二曲の“勇者王誕生!”を合わせたそれを歌い終わった時には既に全員がテンションが最高潮まで上がっていた。

「「「「勇者なら歌え〜っ!」」」」

仁志から渡されたDVDやCDにより、切歌だけでなくセレナやヴェイグまでもすつかりガオガイガーへ染められてしまっていた。

やはり分かり易い熱血系のノリは装者やそれを支える者達には刺さるのだろう。

全員で笑顔を見せての絶叫。もうウォーミングアップは終わったとばかりに仁志は頷いて満を持して次の曲を入力する。

「切歌、戦闘男児も聞いた?」

「はいデス! ししよーとやった奴の本物が入ってたやつデスよね?」

「うん。じゃ、それもあとで歌うよ」

「了解デスよ! 掛け合いはお任せデス!」

こうして流れる“FLYING IN THE SKY”を仁志と切歌が歌い始めると、そこで流れる本編映像で切歌達は機動武闘伝Gガンダムへ初めて触れる事となる。

「似たようなロボットがいっぱい……」

「これがガンダム、なんでしょうか?」

「この赤いマントの人がドモンさん?」

「じゃないか?」

調達が映像を眺めて喋る中、切歌は楽しそうに仁志と歌っていた。

「この手が叫んでいる! 明日へと走れ〜っ!」

そしてラストのサビへ行く前の間奏では……

「俺のこの手が光って唸るっ!」

「お前を倒せと輝き叫ぶっ!」

「必殺っ!」

「キングオブハートっ!」

「シャアアアイニングッ! フィンガアアアアアアっ!!」

と、ノリノリで決め口上を叫びその勢いままに最後のサビへと雪崩

れ込んだのである。

歌い終わった時、切歌は思わず仁志へハイタッチを要求する程のハイテンションで喜びを表した。

「最高デス、ししよーっ！」

「俺も嬉しいよ。ありがとう切歌」

「えへへ……」

満面の笑みを向けられて切歌は照れくさそうに笑う。その心を弾ませ、彼女は上機嫌でマイクを置いた。

「只野さん、次は私と歌って欲しいです」

「え？ 調と？ いいけど……何を？」

疑問符を浮かべる仁志への答えとばかりに調が入力したのは、いつか星の海で”だった。

勇者王ガオガイガーのEDであるそれに仁志だけでなくエルフナインやセレナまでも嬉しそうな顔をした。

「でも調、これはデュエット曲じゃ」

「一番は私が歌います。二番をお願い出来ますか？」

「ああ、そういう事か。了解」

「最後はみんなで歌おう？」

「二」はい（ああ）（いいデスよ）「三」

そんな中で始まった歌唱。調の優しい歌声が歌詞に合わせり聞いている仁志達が思わず声を上げる程だった。

「いつか星のうぐみで〜」

ならばと仁志も優しい表情で二番を歌い出す。それもこれまで聞いてこなかった仁志の歌声。調はその表情と歌声に無意識に胸を押さえた。

「あの日の旅立ちが、きつと絆強くする……」

まるでどこか今後の事を匂わせるような歌詞と雰囲気。ただそれと気付いているのは仁志とエルフナイン、ヴェイグの三人だけ。

「この宇宙を駆け巡りたいね〜」

最後のサビ前を仁志と調が歌い、そこからは全員で歌う。それが余計希望と温もりを強くさせ、終わった後全員して瞳を潤ませていた。

だが、それも無理はない。何故なら歌い終わったところで後奏が流れる中、仁志が最終回のナレーションを再現したのである。

「そして、我々一人一人が、誇りある勇者である事を、忘れてはならない……」

「グスツ……いい最終回だったデス……」

「華ちゃん、幸せそうだったからね……」

「はい、ウエディングドレス、綺麗でした」

「姉さんも着たいって言ってたっけ」

「そうだな」

さらりと明かされるマリアの本音。仁志はそれを聞いてマリアらしいと思つて苦笑する。

ただ、彼女にはゲームでウエディングギアが実装された事を知っているのも、姿だけなら仁志は知ってはいた。

(ただ、あれはガチャだけのものだからなあ)

響や未来などもあつたウエディングギア。ただ、それは何かシナリオがあつた訳ではないので彼女達が纏う事が出来る訳ではない。

もしそれを聞けばマリアはどう思うだろうと考えつつ、仁志はしばらく歌うのを休もうとマイクを置いて椅子へ座る。

それを見てならばと切歌達はデンモクを操作し曲を入れ始める。

「よし、俺がいくぞ」

「お〜」

まずヴェイグが“特救指令ソルブレイン”を入れた。それを見て仁志だけが感動するように声を上げる。

「新しい夢がく光るまでは〜」

相変わらずレスキューポリスが好きなヴェイグ。その愛らしい外見でマイクを持つて歌う姿に誰もが笑みを浮かべる。

今は切歌がアルバイト先で借りてくるヒーローソングを聞いて覚えていたのだが、それでも最初に聞いたメタルヒーローが印象に残っていたのだ。

「つ、次は僕がいきます。兄様、男性パートをお願い出来ますか？」

「ああ、いいよ」

その次はエルフナインが“W—B—X”を入れる。その曲名が表示された瞬間、仁志が嬉しそうに笑みを浮かべた。

「僕らを繋いだ風を止めたくない〜」

仁志から密かにヒーローについて教わっているためか、エルフナインの選曲はかなり特撮に寄っている。

何せ仁志から聞かされた“Beat on Dream on”

があまりにもエルフナインの心を掴んでしまった。

そこから仁志に自分やキャロルをイメージ出来る歌を教えてくださいと、そうねだるようになったのだ。

「私はこれを歌います」

そう言ってセレナが入れたのは“Spirit”だ。

切歌が借りてきたウルトラマンベストに入っていた中でセレナがもつとも気に入った歌詞だったのである。

「本当は敵なんかいない。ウ〜ル〜ト〜ラの誓い〜」

戦いに関して肯定的な歌詞が一切なく、むしろそれに対して疑問を抱くようなものだった。

ウルトラマンは侵略者や怪獣と戦い倒すと思っていたセレナ。それなのに平和的で優しい内容の歌詞にセレナは目と耳を疑い、感銘を受けたのだ。

「ならアタシはこれデース！」

意気揚々と切歌は“海賊戦隊ゴーカイジャー”を入れる。

あの映画で強く知ったスーパー戦隊。その主題歌ベストを早速借りて、真っ先に聞いたのがこれだったのだ。

「でっかい夢は無量大！」

明るい曲調と前向きな歌詞。何より切歌が気に入ったのはサビにある歌詞だった。

頑張る君のがむしやらが今この世界を変えるぜ。この部分があのカラオケで仁志から言われた“挑戦しない成功なんてない”を思い出させ、自分のテーマソングとばかりに聞き込んだのである。

「じゃあ……私はこれを」

切歌の後を受けて調が入れたのは“Brave Love, TIG

A”だった。

あの映画で見たティガ。片方は大勢の心の光としての、もう片方はダイゴの光の力としての、それぞれで異なる姿を見せたウルトラマン。

故にそのEDをベストで知って調はティガもやはりウルトラマンなのだと思ったのだ。人々を見守る大きな存在としてのティガをその歌から感じ取ったのである。

「ひとりくきりじゃ、届かない」

一人では戦えないし届かない。どんな闇の中でも夢を求めて小さな星達は輝く。

そんな歌詞を見て聞いて、調は余計ティガを好きになったのだ。それがまるでティガから人類へのメッセージに思えたのである。

「うし、ならそろそろ俺も」

仁志が入れたのは「ウルトラマンゼアス」という珍しい歌だった。切歌達全員が首を傾げる中、流れてきた歌詞と映像に驚きと感銘を受ける事となる。

「みんなの思い一つになったら」

光の国とは違う星からやってきた真つ赤で未熟なウルトラマン。その在り方や心持ちを歌うそれは、力強くもカッコよくもない。

それでも、優しさや勇気という強さが歌われていたのだ。地球の事を嘆きながらもその秘めた力や持っている可能性を信じている歌詞、分かり易いサビのメッセージなどもそれを後押しして。

「ウルトラマン！ ゼー！ アー！ スーっ！」

何よりも覚えやすいサビとメロディー。最後には全員で歌っていたのだ。

「ししよー、何デスか今のウルトラマン！」

「顔が真つ赤でした！」

「目は黄色だし、凄く変わってました」

「でも歌はとっても良かった」

「ああ、優しい歌だ。ウルトラマンらしい」

「ゼアスは実は別の星のウルトラマンなんだ。で、ウルトラマンに憧

れてるっていう設定のヒーローなんだよ。詳しく知りたいならゼアスは映画が二本あるから借りてごらん」

「に、二本もあるんデスか?」

まさかの発言に驚く切歌だが、そこで仁志は誤解を招いてると判断して苦笑した。

「ああ、ごめんごめん。ゼアスは映画だけのウルトラマンなんだよ。だから二本もあるじゃなく二本しかないが正しいかな?」

「映画だけ、デスか」

「ティガやダイナみたいなんですか?」

「うーん……メビウスよりもある意味頼りないウルトラマンかな。分かり易く言えば、メビウスは優等生ルーキー。ゼアスは落ちこぼれルーキー」

「」「落ちこぼれ……」「」

仁志の説明は端的故に興味を引く。切歌達は落ちこぼれウルトラマンが想像出来ず、揃って気になってきたのだ。

何せ最初に触れたメビウスと正反対の表現をされた上、落ちこぼれというマイナスな例えがヒーローにするべきものではないように感じただけのために。

その後も六人は歌い続けた。ただ、雰囲気が変わった瞬間があった。

それはセレナが「海よりも深く」という機動武闘伝Gガンダムの前期EDを歌った後に切歌が仁志へある歌を頼んだ事が始まりだった。

「君の中の永遠を?」

「デス。ししよーにあれを歌ってもらいたいんデスよ」

「切ちゃん、その歌ってあれ?」

「姉様が聞いてため息を吐いてた歌ですか?」

その言葉に仁志は何かを悟ったように複雑な表情を浮かべた。

「只野さん、どうしたんですか?」

「え? あゝ、うん。マリアがため息かあ……って思ってたね」

調の問いかけに仁志は返答を濁した。彼は分かっている。マリア

が何故ため息を吐いたかを。

(あれ、マリアのような女性は言って欲しい言葉や想いだろうからなあ)

ただし、それがどういう事かは若干ずれてはいた。

マリアは仁志にそう言っただけ。あるいはそう思っただけで行動して欲しいと考えているのだから。

ともあれこの場にいるのは仁志からすれば妹分や娘分に親しい友人。

ならばラブソングを歌ってもそこまで恥ずかしくはないかと、そう思っただけは可愛い弟子に頼まれたままに曲を入れる。

これが、後々自分の首を絞める事になると思わずに。

「きくみくだけをくいつも見つめてる」

優しさだけでは愛は守り切れない。それは、愛する女性をものにするには、時に誰かを傷付けるぐらいの覚悟や決意も必要なのだという、一種の恋愛真理だった。

生まれて初めて聞く異性が歌うラブソングに、エルフナインは手にしていたスマートフォンを置いてから拍手を送り、セレナは憧れるように両手で頬を押さえる。

ヴェイグはやつと恋愛というものがどういふものかをぼんやりと理解し——たように見えたが結局首を捻っていた。

(な、何デスカね？ 今のししよーの歌を聞いてると顔が熱くなるデスよ……)

(な、何だか大人な雰囲気……。一緒にベッドで朝をつて事かな？)

……エッチ、かも……)

少女から乙女となつて二人には、仁志の歌はその淡い恋心を刺激するに十分なものだった。

訳も分からないまま胸をときめかせる切歌と、歌詞の世界観を想像し赤面する調。

けどその眼差しの質は同じであり、同じ男を見つめていた。

「……切歌、これでいいか？」

「ふえ？ ……っ!? は、はいデス！ さすがししよーデス！」

「流石も何も無いけどなあ。てか、これを女性の前で歌う日が来るとは」

「恥ずかしいんですか？」

仁志の表情と声で心情を察した調が確認するように問いかける。その質問に仁志は小さく苦笑して頷いた。

「そりゃあね。もしここに歌姫が一人でもいたら、とてもじゃないけど歌えないし歌わなかったよ」

本当は別の理由もあるのだが、それを切歌達に明かす程仁志は愚かではない。

その次は切歌が妙に熱い顔のままダイナの後期EDであった“ULTRA HIGH”を歌う。

「ウルトラ〜ッ！」

仁志がそれに合いの手を入れる事でエルフナイン達もノる事が出来、盛り上がりを見せる。

「これはホントに後半の雰囲気だよなあ。だからこそ君だけを守りたいが流れるシーンがいいんだよ」

「二「君だけを守りたい？」二」

「あれ？知らない？」

仁志の確認に全員が頷きを見せる。というのも仁志が持っていたのはOPだけのベストであり、切歌が借りたのはEDは後期のものしか入っていないかったのだ。

話題に出した以上説明を求められ、した後は歌う事になるのは自明の理であった。

「いつまでも〜どこまでも、きみ〜だけを守りたい」

一聴するとヒーローらしからぬ歌。何せ世界でも宇宙でも平和でもなく、君だけを守りたいと歌うのだ。

歌い終わった後、エルフナインが仁志へその点を問いかけたのは当然と言えた。

「あー、ダイナはアスカであるって事は覚えてる？」

「はい」

「つまり、ダイナはアスカなんだ。で、アスカは正義感はあるけど人間

なんだ。時には正義や平和よりも誰かを守りたいと思う事があるって事さ」

「ウルトラマンなのにな？」

セレナの問いかけはその場の全員のものだった。だから仁志もそれを理解してどこか優しく微笑んで頷く。

「そうだよ。人間ウルトラマンが従来のウルトラマンと違う点があるところにも出てる。感情で動いているって事だな」

「感情、ですか……」

「あとはこうも言えるかもしれない。好きな女性一人守れず世界や平和を守れるものか……って」

「成程……」

仁志の言葉に深く頷くエルフナイン。彼女には分かったのだ。一人の命さえ助けられずに多くの命を助けられるはずはないと思ってる。

もしここで言われているのが女性を意味していると知れば、エルフナインは別の感想を抱いただろう。

それを仁志は意図して説明しなかった。何せそれはある意味でウルトラマンダイナの終盤に関わるネタバレにも近いためだ。

その後は仁志と切歌による「戦闘男児く鍛えよ勝つために」で途中の掛け合いに四人が感心したり、エルフナインによる「風の未来」という伝説の勇者ダ・ガーンのプロでは仁志主導でサビだけを合唱して笑い合う。

ヴェイグが歌う「炎神戦隊ゴーオンジャー」には合いの手の手本を仁志がやり、それを真似て切歌達も参加しヴェイグを喜ばせる。

それを受けてセレナがノリノリで歌った「轟轟戦隊ボウケンジャー」は仁志が主体となって合いの手を入れて盛り上げた。

調もその場の雰囲気になされるように「天装戦隊ゴセイジャー」を歌い、あの映画を思い出して全員で合いの手に全力投球。

「あー、疲れたあ」

「でも、みんなだ「天装っ！」って言うの楽しいデス」

「はいー」

「あの映画の最初のシーンを思い出したな」

「ですね。調さんもそれを意識したんですか？」

「そんな事はないよって言いたいけど、少しは意識した」

全員で疲れながらも笑みを浮かべる。時間もそろそろ終わりとなるため、あと一曲ぐらい歌って終ろうとなった。

そうなれば白羽の矢が立つのは仁志である。最後に相応しいものと言われ、仁志は全員で盛り上がって歌えるものを選んだ。

「サビだけは歌えると思うから。もし歌えるのなら最初から一緒に歌おう」

流れるのは“SHININ'ON LOVE”。ウルトラマンティガ&ウルトラマンダイナ×光の星の戦士達への主題歌だ。

やはり印象に残っていたのか切歌とエルフナインが最初から合いの手を入れ、一番が終わる頃には調達もサビを一緒に歌っていた。

「とつても明るい歌だね、お兄ちゃんっ！」
「だろ？」

「あの映画の内容にピッタリです！」

「心があつたかくなる」

「そうだろそうだろ」

「光、絆、そういうものが歌われてるんだな」

「ティガとダイナらしい歌デスっ！」

「そういう事だ。よし、じゃあ出ようか」

こうして切歌との約束を果たした仁志は、素直に安堵と喜びを噛み締めて彼女達と共にあの家へと向かう。

そしてそこで切歌がバイト中に見つけた作品について説明や解説を行い、夕食までの時間を過ごす事に。

「ガイアの映画は凄いいえね……」

「うん、見たい」

「僕らの状況に似てます」

「お兄ちゃん、コスモスは？」

「コスモスもいいよ。ファーストコンタクトっていう映画があつてTVへ続いていくんだ。セレナは好きかもしれないなあ」

「タダノ、ゴーカイジャーの映画を切歌が早く見たらしい」

「ああ、ギャバンのやつか。じゃ、明日の集まりはそれの鑑賞会だな」
「やったデス！ でももししよーのせいでクウガも気になってるデスよお」

仁志へくつついて膨れ顔をする切歌。その距離感に少しだけ驚く仁志だったが、切歌の性格を考えるとおかしくはないと思い、むしろ微笑ましいと思って頭を撫でたのだ。

「あ……えへへっ、ししよー！ もっと色んなものを教えて欲しいデースー！」

「色んなもの、かあ。でもその前に……」

まるでじゃれつく動物のように仁志へ抱き着く切歌。が、さすがにそれはと仁志も思ったのだろう。切歌の頭を撫でていた手を握り拳へ変えて軽く小突くように落とした。

「あうっ」

「切歌、君も女性なんだから男へあまり密着しない」

「ご、ごめんなさいデス。でも、ししよーならアタシは平気デスよ？」

「俺が平気じゃないの」

「切ちゃん、もう私達は体が大人へ向かってるんだからダメだよ」

調がややムツとした表情で切歌へ迫る。だがそれは以前までと秘めた感情が異なっていた。

切歌への注意ではなくどこか嫉妬の色が混じっているそれに仁志は同意するように頷く。

「そうだぞ切歌。もう女性としての自覚を持ちなさい」

「じよ、女性としての自覚、デスカ……？」

「昔の人は十五で結婚するぐらいだったんだ。そう考えるともう十分切歌は大人の女性なんだよ」

「な、ナント!? 驚きデスー！」

仁志の挙げた例えに切歌は目を見開いた。そう考えるとマリアにエルフナインぐらいの子供がいるのがおかしくなかったのだ。

「たしか元服、でしたっけ？」

「そうそう。調、正解。まあそれは男の子の成人の儀だけどね。女の子は……別の言い方があったはず」

「ええと……裳着……？　と言うそうですっ！」

スマートフォンで検索をかけたエルフナインが笑顔で告げた単語に、仁志達がそういうのかと感心するように頷く。

そこから話題は切歌の要望に応える形で仁志がある映画の話始めた。それはゴジラと同じく三文字の怪獣が主役のもの。

「「「がめら？」「」」」

「名前の通り亀がモチーフなんだ。火を吐いて空を飛ぶんだけど」

「か、亀なのに空を飛ぶデスか？」

「火を吐く……ゴジラみたい……」

「でも昭和ガメラは子供の味方。平成三部ガメラは地球の守護神で人類の味方なんだ」

「「「味方？」「」」」

まさかの表現に切歌達が疑問符を浮かべる。怪獣と言えば人間と敵対するものと思いついてきている事がそこから窺え、仁志は自分が知らぬ間に彼女達へ偏見を植え付けていた事に気付いた。

そこから仁志は特撮で描かれる人類の味方となる怪獣や宇宙人の話を始める。

それは今まで彼女達の中にあつた怪獣などのイメージを変えていく。それと同時に代表格として教えられたガメラへの興味も強くなつ

ていった。

「切歌お姉ちゃん、ガメラ、見てみたいです」

「分かっているデスよエル。でえ……ししよー！　オススメを教えてくださいデス！」

「ガメラなら大怪獣空中決戦から始まる三部作かなあ。特にみんなは一作目と二作目が気に入ると思う」

「三つ目は違うの？」

「うーん、イリス覚醒も嫌いにはならないだろうけど……」

そこで仁志が言葉を濁すとセレナはおぼろげながらある事を察した。

(きつと私達が悲しむ事があるんだろうな……)

詳しい話をとせがむ切歌だったが、借りて見た時に楽しめないかもしれないと調に言われて渋々引き下がった。

そして調がセレナやエルフナインを伴って買い物へ出かけ、ヴェイグは切歌からもらった新しい寝床であるビーズクッションへ寝転がって仮眠を取り、仁志は切歌と二人でオタトークを繰り広げ始めたのだ。

「ししよー、Gガン以外にもガンダムいっぱいあったデスけど、あれはどういう感じデス？」

「あー、ガンダムシリーズは深い沼だからなあ。ライダーやウルトラマンと同じかそれ以上に複雑なんだよ」

「面白いデスか？」

「人による、としか言えないなあ。Gガンはシリーズの中でも異色作だし」

「必殺技とかない感じデス？」

「必殺技、なあ。必殺武器みたいなのなら持つてる機体はいるけど……あつー！」

「ど、どうしたデスか？」

良い事に気付いたとばかりに目を輝かせた仁志に切歌は不思議そうに小首を傾げる。

そんな彼女へ仁志はある作品を教える。それは熱血系の作品が好きな切歌にオススメのタイトルだ。

「ビルドファイターズ、デスか？」

「ああ。あれならきつと切歌は難しい事を考えず楽しめると思うよ」

そこから話題はプラモデルの話へ変わり、そこから派生してベルトなどのオモチャへと移っていった。

「おおっ！ これは凄いデス……」

「大人用なので、値段も高めだから実際の撮影に使われた物に近いんだよ」

今はスマートフォンで某オモチャ会社のとあるブランドのHPを見ていた。

「こ、こんな物見せられたら欲しくなっちゃうデスよお」

「だろ？俺も見るだけ見ては欲しいなあって眩くだけなんだけどさ」

「気持ち分かるデスよ。アタシも今似た気持ちデス……」

二人して表示されている金額を眺め、悲しそうな表情を浮かべる仁志と切歌。それは最早兄妹である。

ただし、それは本人達の間だけで。切歌は仁志のすぐ後ろから負ぶさるようにしてスマートフォン画面を見ている。それは下手をすれば恋人のそれだ。

実際切歌は仁志へ密着し過ぎないようにしつつ、彼の両肩へ手を乗せて頬に朱を入れながら嬉しそうに笑みを浮かべていた。

（ししよーの背中、おっきいデス。男の人って感じデスね。頼もしいデス！）

飾らない表情でスマートフォンを切歌へ見せて意見を求める仁志。そのやり取りに切歌は笑みを深くして感想を述べる。

時には一緒にお金を出し合って買うかなどを話し合ったりと、まさしく仲良し兄妹のような時間を過ごす二人。

やがて買い物から調達が帰ってくると、仁志と切歌の会話にエルフナインも参加する事に。

セレナは調と一緒に買ってきた物を冷蔵庫などへしまい始めた。

「わあ、これがリボルケインなんですね」

「そう。かつこいいだろ？」

「はい。これに惑星を破壊する程のエネルギーが秘められてるんだ……」

「エル！ エルっ！ これを見てほしいデスよ！」

「え？ ……ヴェイグさん！ こっち、こっち来てください！」

「何だ何だ？」

切歌がエルフナインに見せたのはRXのスーツアクターによる名乗りポーズの見本動画。それをヴェイグも一緒になって見て目を輝かせた。

「おおっ、凄いな。タダノがやってたやつだ」

「カッコイイですね！」

「ししよーが言うには、この人がRXをやった人らしいデス。で、こっちの人が南光太郎さんらしいデスよ！」

「これが南光太郎……」

初めて見る南光太郎役の役者に二人は神妙な表情を浮かべる。彼は画面の中で幸せそうに見えたからだ。

二人にとっては南光太郎のイメージは仁志の話で聞いたままで止まっている。役者と役は一緒ではないのだが、二人はその辺りが曖昧なために彼の姿そのものが現在の南光太郎と思ってしまったのだろう。

「あつ、そうだ。切歌、仮面ライダー3号を借りてきて欲しい」

「仮面ライダー3号？」

「そう。ドライブが主役なんだけど、それにはオリジナルのBLACKが出てくるんだ。その時の最新技術でその変身プロセスを再現してて、メチャクチャカッコイんだよ」

「ししよー！ もう一回タイトルをお願いするデスっ！」

「えっと、正確にはスーパーヒーローGPがあつてからの仮面ライダー3号だったかな？ ドライブの棚を探せばあると思うよ」

「仮面ライダードライブの棚……仮面ライダー3号……覚えたデス！」

「切ちゃん、そういう事ばかり覚えるの早いんだから」

「ふふっ、切歌さんらしいです」

片付け終わった調とセレナが居間へやってきて、仁志を中心に畳の上へ座る。

「調、今夜は何？」

「えっと、カジキが安かったから照り焼きにするつもりです。あとは鶏肉と野菜の煮物とえのきと油揚げのお味噌汁かな」

「おっ」

告げられたメニューに仁志と切歌にヴェイグが嬉しそうな声を出す。

すっかり日本食に慣れたヴェイグ達である。

その後は調を中心に夕食の支度を始め、仁志は仮眠を取り、ヴェイ

グはアラムで起きない場合に仁志を起こす役目を担って居間でスマートフォンとにらめっこする事となる。

こうしてマリアが帰ってきた頃には、食欲をそそる匂いが台所から漂うようになっていた。

「ただいま〜」

「「「おかえり（なさい）（デス）」」」

「ふふっ、ただいま」

帰宅を告げる声で居間から仁志達が揃って顔を出してマリアを迎える。

それに笑みを返してマリアはまず台所へと向かった。

そこで一人料理している調の背中を見て微笑み、マリアは小さく鼻を動かして嬉しそうな表情を見せる。

「調、ありがとう。今夜は何？」

「カジキの照り焼きに鶏肉と野菜の煮物。そしてえのきと油揚げのお味噌汁」

「成程ね。美味しそうな匂いがする訳だわ」

「勿論美味しい」

「あら、自信ありって感じね」

「当然。マリア、手を洗ってきて」

「分かったわ」

調の言葉に笑みを浮かべてマリアは洗面所へと向かう。それと入れ替わりに仁志達が台所へ入ってくる。

そしてそれぞれが料理を運んだりご飯をよそったりと準備を終え、仁志がヴェイグをテーブルの上へ移動させる頃にはマリアも定位置へ座り、この家での珍しい夕食風景が出来上がった。

「じゃ、手を合わせて……」

「「「いただきます」」」

総勢七名での食事。今やマリアの密かな最大の幸せとなった時間である。

「調っ！ この照り焼き最高デスよっ！」

「はい、とつても美味しいです！」

「さすが調お姉ちゃんです！」

「ありがとう」

「煮物もいい具合の味だなあ」

「本当に。味がちゃんと染みてる」

「帰ってきてから煮物だけはやってたぞ」

「うん。で、マリアが帰ってくる少し前に温め直した」

「そういう事ね」

まずは料理の味で会話を交わし……

「そう、カラオケに行ってたの」

「はい。兄様と切歌お姉ちゃんが約束してたとかで」

「初めて聞く歌をいくつかお兄ちゃんが歌ってたんだ」

「へえ、どんなの？」

「いつもの通りの特撮やアニメのやつだよ」

今日あった事を話題にした事でちよつとした出来事へと繋がる。

「エルがスマホでタダノを動画に撮ってたから見てみるか？」

「は？」

「あら、面白そうね。じゃあご飯の後に見せてもらえる？」

「分かりました！」

「ええ……」

仁志が聞いてないぞとばかりに表情を変える中、マリアへ彼が歌っているところを見られる事が決まる。

(まあ、多分最後のあれだろうな)

若干気恥ずかしいところはあるが、まあいいだろうと、そう思って仁志はそこで強く止める事をしなかった。

そんな感じで楽しく食事は終わり、後片付けを仁志が主体となって引き受け、マリアは居間へと移動しエルフナインからスマートフォンに記録されたカラオケの一場面を眺める事に。

「姉様が好きな歌です」

「私が？」

そんなものを仁志が歌うのだろうか。そう思いながら画面をマリアが見つめると、流れてくるのは「君の中の永遠」だった。

「っ?!」

(えっ?! た、只野が、あれを歌ったの? 嘘っ!?)

初めて聞く仁志の甘い歌声。それに知らなかった一面を見せられ、マリアは思わず胸を押さえる。

一言も発する事なく動画を見つめ続け、マリアは終わると同時に顔を押しえて立ち上がった。

「姉様?」

「お、お風呂の支度をしてくるわ!」

「あ、それなら僕が」

「いいの。ついでにお手洗いにも行きたいから」

冷静に考えれば何を言ってるのだろうと思う言葉だが、この時のマリアは一刻も早くその場を離れたかった。

やや早足で去っていくマリアを見送り、エルフナインは小首を傾げた。

「どうしたんだろう?」

「さあな。女の心はよく分からん……」

ベッドでもあるクッションに身を沈めてヴェイグは理解出来んとはかりに呟いた。

が、更にここでヴェイグが事を大きくしてしまう発言をする。

「そうだ。どうせなら奏達にも見てもらえ。動画も送れるんだろう?」

「あつ、そうですね。なら翼さんへ送信してみます」

こうして仁志がラブソングを歌った姿が翼達へと送られる事に。

その頃、三人はツヴァイウイングとしての投稿楽曲をどうするか話し合っていた。

「出来るだけツヴァイウイングはオリジナルでって、そう言われてるんだよねえ」

「そう。だからギアを纏って歌うしかないんだけど……」

「こう言ったらなんですけど、難しいですよね」

ギアで歌う歌は胸の歌。いわば彼女達の心情や感情だ。戦闘中という極限状態ならば生み出せる歌も、平和な状態で出てくるかと言え

ば中々難しいと言えた。

出てこない事もないだろうが、無理矢理絞り出す形になるとしたらそれは二人のプロ意識が拒否するために。

「ん？ エルからメール？」

「何かあったのか？」

「ううん、そういう事じゃないみたい。動画付き？ 珍しいな。見て感想を聞かせて欲しいとある」

「エルちゃんからかあ。何だろう？ ヴエイグの寝顔？」

「あゝ、可愛いだろうねそりゃ」

「ふふっ、そうだね。あつ、始まった」

そこで再生されるのは仁志の歌う姿。何の前準備もなくいきなり見せられたそれにまずは軽く驚き、そして彼が歌う歌に三人は思わず息を呑んだ。

(た、只野さんが……愛してるって、これラブソング？ ……甘い歌声、出せるんだね)

(こんな、こんな歌声を出すんですね……。顔が熱くなる……)

(な、何だか恥ずかしい。私に対して歌ってる訳じゃないのに……)

モニターを見つめて歌う仁志を横から撮っているそれに三人の乙女は黙って魅入った。

やがて歌が終わり動画が停止する。すると無言で翼が再度再生したのだ。

それに奏も未来も何も言わなかった。

エルフナインのスマートフォンに感想のメールが来たのは、それから実に十分は経過してからだった……。

「ズルいつ！」

ひよんな事から発覚した仁志のラブソング動画。それを今まで聞く事が出来なかった響とクリスが翼のスマートフォンで見て、見終わってすぐの言葉がそれだった。

「す、すみません。まさかここまで兄様の動画が人気だと思わなかったもので……」

「ううん、エルちゃんを責めてる訳じゃないんだ。翼さくくん……」

「い、いや、見せようにも立花達にはその手段がな？」

「みくくく？」

「し、仕方ないじゃん。只野さんへ頼もうにもきつと嫌がると思ったから」

「むく……」

未来の言葉には響も納得するしかなかった。仁志がこの動画の存在を知れば確実に消去を迫っただろうと思ったのである。

そうやって響が膨れ顔を見せている中、クリスは動画を一人で見つめていた。

「……優しさだけじゃ愛は奪い切れない、か」

その眩きに込められたのはある種の決意にも似たもの。それは誰に聞かれる事なく消える。

「ねえエルちゃん、只野さんって他にこういう感じの歌、歌わなかった？」

「え？ えっと、はい」

間違いなくその瞬間、響達カラオケに行っていない者達がざわついた。

「え、エル？ どういう歌？」

「たしか……君だけを守りたいって歌だったかと」

「うん、そうだよ。ダイナのEDだって」

「翼、検索して」

「分かった」

そして歌詞を検索した翼がそれを読み上げて行く。

それを聞いてエルフラインやセレナが肯定するように頷く中、ヴェイグはまだかまだかと海を求めてずっと窓の外を眺め続けた。

切歌と調は歌っていた仁志を思い出して少しだけ赤い顔になっていたが、響達はそれを歌う仁志を想像し全員が眠っている彼を見つめていた。

「……これで終わりだ」

「そう。ウルトラマンの歌とは思えない歌詞ね」

マリアの感想は響達全員のものだった。なので同じ事を聞いたエルフナインが仁志の告げた答えを述べたのだ。

だが、同じ言葉でも受け手が変われば感じ方が変わるもの。仁志が言わなかった事を恋心を持つ彼女達は察したのである。

(世界を天秤にかけても守りたい相手がいるって事じゃない。なんて、なんて熱いラブソングよ……)

(ヒーローではなく一人の人に戻ってしまう程の、そんな愛。私へ、貴方は向けてくれるでしょうか？ あの胸の中に、また顔を埋めさせてくれるでしょうか?)

(世界は終わらない、か。今のあたしにとってはそこだけでも一種の応援歌でありラブソングだよ、只野さん……)

(君だけを、なんて言われたら顔が熱くなるだろうな。でも、もう只野さんはこういう歌を私達には歌ってくれない気がする……)

(ううっ、エルちゃん達が羨ましい。きつと私達だと本気で聴き入るかもって思っただらうなあ。……私と二人きりなら、歌ってくれるかな？ お願いしたら歌ってくれないかな?)

(……もし、もしもこの歌が只野の本音だとすれば、君ってのはあたしら全員か？ 世界よりもあたしらを取るって、そういう事だよな?)
それぞれに想いを抱き、仁志を見つめる六人の女性。と、そこで

……

「エルっ！ あれが海か!？」

「え？ ……はい、そうです」

「お兄ちゃん起こさないよ」と

ヴェイグの声でほとんどの者が窓の外の景色へと意識を向ける中、クリスマスだけは仁志を見つめ続けていた。

「……あたしも、一緒に気持ちだぜ、只野」

もし世界か仁志かと問われれば仁志を選ぶ。そうクリスマスは眩きながらセレナに揺り起こされる仁志を見つめ続けるのだった……。

エンドレス☆サマータイム

「ごめん、みんな。俺は、ここに残るよ……」

心の底から俺は申し訳なく思っただけで、響が悲しそうな顔を見せるけれど、これだけは、これだけは駄目なんだ。

俺は、君達と一緒に歩く事は出来ない。こればかりはどれだけ君達に泣かれ、叫ばれ、縋られても譲る訳にはいかないんだっ！

「先輩……そこまで？」

「ああ。その、すまない。そっちの気持ちは嬉しいし、俺だつて出来る事なら一緒に行きたいよ。でも、駄目なんだ。分かってくれ」

「ししよー……どうしてもデスか？」

「どうしてもだ。切歌、情けない男と笑ってくれていい。それでも、俺はここに残る」

「兄様……」

「お兄ちゃん……」

「エル、そんな顔をしないでくれ。セレナもだ。俺の事は気にせず、二人は自分の行きたい道を歩くんだ」

そつと二人の頭を撫でる。寂しそうな、悲しそうな顔で二人はこちらを見つめてくるけど、それでも俺は彼女達と行動を共にする事は出来ない。

そんな俺を見て、マリアとクリスが大きいため息を吐いて後ろを見上げた。

「大袈裟ね……」

「まったくだ。ただのジェットコースターだろ？」

「だからっ！俺はこういうの苦手で大っ嫌いなんだよっ！」

そう、そこにあるのはこの園内で一番の存在感を放っている人気アトラクションだった。

響達全員がそれに乗る事を決めたのはいいのだが、俺は子供用の小さなコースターでさえ嫌な人間だ。よってここにあるベンチで待っていると言っているんだが、それをみんなして一緒に乗ろうとしていいのだ。

ただ、響や切歌みたいに俺と一緒にがいいからっていう理由はともかく、明らかに俺が苦手で嫌いなものを知ってからニヤニヤしながら誘う奏みたいなのはどうかと思うぞ。

「みな、諦めよう。只野さんはここでヴェイグと待機してもらおうべきだ」

「そうね。それにいつまでも只野に構っていると時間がどんどんなくなるわよ?」

「うゝつ、仕方ないデス。ししよー、他の奴は平気デスカ?」

「絶叫系は基本ダメ!」

「た、只野さんが子供になってる……」

未来と調が揃って驚きを見せるけど、俺だって嫌いなものを強要されればこうもなる。

「ゴーカートやコーヒーカップ、メリーゴーランドなんかはいいけど、コースター系やバイキングやフリーフォールみたいな奴は一切乗らないっ!」

「そ、そこまで力を入れて拒否するんだ……」

「セレナ、今のタダノからは、匂いが無くても嫌な匂いを出してると思うぐらい顔に心が出てるぞ」

遊園地で絶叫系乗らないなんて楽しくないと言われようが俺は絶対に乗らん。

それに、今の俺からすれば響達が楽しく過ごしているのを眺めるだけで十分幸せで楽しいからいいんだ。

「だな。じゃ、先輩? ここで待っててくれよ?」

「分かってるって。その、楽しんできて」

「ヴェイグさん、只野さんの事お願いします」

「ああ」

何となくだが俺の方が今は子供らしい。まあ否定は出来ないか。だけど、それだけ嫌なんだよ。

こうして俺はヴェイグを抱えてベンチへ座った。

頭上からはジェットコースターに乗ってる人達の声が聞こえてくる。それを聞きながら俺はぼんやりと空を眺めていた。

「タダノ」

そんな中でヴェイグが話しかけてきた。周囲をそれとなく確認し、大丈夫と判断してから口を開く。

「どうした？」

「このままでいいのか？」

その問いかけの意味を俺は分かりたくなかった。一体何を聞かれているのかを、俺は分かりたくなかった。

「えつと……？」

「……あの時、マリアと翼へお前が言った言葉で二人のゲージは一気に染まった。同じ事をみんなにしなくていいのか？」

「ああ、そういう事か」

言って安堵してる自分がいる事に気付いて複雑な心境になる。ホント、矛盾してるよな。踏み込むって決めたじゃないか。で、その結果どうなっても構わないとも。

みんなが、彼女達が本来いるべき場所へ一刻も早く帰れるようにする。そのために、俺は出来る事を精一杯やろうって。

なら、ヴェイグが言う通り響達全員に俺の嘘偽りない想いを伝えるべきだ。

ただし、愛してるなんて言葉は一切使わないで。

頭上から聞こえる声や周囲の音が遠くなった気がする。どうしてこのタイミングでヴェイグが俺へ問いかけてくれたのかと、そう考えたからだろうか。

ヴェイグは、多分だけど俺がみんなへ抱いてる想いを何となく感じ取ってくれてるんだと思う。

それが言い出せないし言っちゃいけない事だったのも、多分感じ取ってくれてる。

「タダノ、俺には “こい” というのがよく分からない。だが、それをすると優しい匂いがするようになる事は何となく分かった」

俺が黙っているとヴェイグが話し始める。周囲はこちらを見る事もなく、また見たとしてもヴェイグが喋っているとまで分かる程の興味を示していないらしい。

当然だろうな。俺だって遊園地のベンチでおっさんがぬいぐるみ抱えててもチラ見はするけど凝視はしないし。

「だが、タダノはそれをするそうじゃない、んだろ？　それでも、お前はみんなのためにこいを」

「違う。違うんだよヴェイグ。俺は、みんなのためと言いつつ自分のために動いてるんだ」

やんわりと否定する。たしかに俺は恋を、もつと言えば惚れ込む事を恐れてた。ああ、そうだ。恐れてた。

でも今ヴェイグの話の話を聞いてる内に思い出した。気付いた。俺、そういう意味で言えばとつくに響達に惚れてるんだって。

「みんなが実在しないとと思ってた頃から、俺はある意味恋してた。それも一途じゃなく複数だ。もつと言えば響達以外にだつて邪な感情を抱いてた。節操なく色んな女性キャラへ欲情やら恋慕やらをしてたんだよ」

「……そうか」

「でも、現金なもんだよな男つて。目の前に実際現れた瞬間、それまでの事をすっかりなかった事にしてた。いやらしい目で見た事もいかわかしい事を考えた事も、なかった事にしてさ」

かっこつけ、だよなあ。本当に俺つて単純だ。

「選べないのは当然だ。何せ最初から選ぶ必要のない状況で響達を見て、思っていたんだ。そういう意味では俺は最初からハーレムを、全員を選んでるんだ」

「全員、か」

「そう。だけど、それは彼女達が存在しないと、意思などない存在だと思つてたから許される話だ。実際に会つて、話をして、触れ合つて、それでも全員俺の嫁なんて言えるわけがない」

「そうだ、言えるはずもない。していいはずもない。彼女達は誰かの唯一になりたいのであつて、俺の中の一になりたい訳じゃない。」

「……どうしてダメだ？」

と、そこでヴェイグから本気で分からないとばかりに尋ねられた。

「いや、どうしても何も、現実問題そういうのを女性は嫌うんだ」

「？ みんながそう言ったのか？」

「えつとな？ 言わなくても常識って言うか、それが現実って言うか」「どうして聞きもしないでみんなの気持ちや考えが分かる？」

「ええと……」

何だか子供に聞かれてる親みたいない気分だ。二十歳になったら大人なの？ みたいに大人がそうだからってだけで思考停止してる事を問い質すような、そんなヴェイグに俺はどう答えたら納得してもらえらるだろうと考える。

ハーレムが駄目な理由は、大体この一言に尽きる。女性がそれを望んでないから。

男は所詮雄猿だ。だから群れを作りたがるしボスになりたがる。

だけど女は違う。女性は猿にはならないのだ。

「人間の増え方ってさ、女性が子を産むんだけど、その間女性は他の男性と子を作る事は出来ないんだ」

「ふんふん」

「でも男は違う。極論言えばどれだけでも子を作れるんだ」

「そうなのか……」

「だから男はどれだけでも女へ性欲を抱き子を成そうとする。逆に女は一人しか子を宿せないから男に自分以外の女へ目を向けないで欲しいと思う訳だ。守ってくれる存在でもあるから、そういう意味でも不安を覚えるしな」

「……そういう事か」

どうやらヴェイグも理解してくれたらしい。ただ、がっくりと肩を落としたように見える。

「ヴェイグ？ どうしたんだよ？」

「………タダノが全員と一緒にいるって出来れば、悪意がみんなへ手を出す事は出来なくなるんじゃないかと思っただ」

「それは……」

ある意味否定出来ない。きっと響達一部の心を不安定にしているのは俺の存在があるからだ。

マリアが今回悪意につけ込まれたのもそこにあるんじゃないかと

思う。あのキスはそういう流れからの行動だと思うし。

でも、ふと思った。

あれが悪意がさせた行動だとして、何でキスをする必要があったんだ？

マリアをより自分の意のままにするためだろうか？

でもマリアが俺にキスをしたと思うとしてもあの状況ではないと思う。ただ、これをマリアに聞いても答えてはくれないだろうし、そもそも本人の自覚があるかも怪しい。

「……ヴェイグ、マリアから嫌な匂いを感じたのは俺へキスしようとした時だったよな？」

「ん？ ああ、マリアがタダノへ顔を近付けた時だ」

つまり、あの瞬間はマリアはかなり悪意の支配下にあった。それで……キス？

妙だよな。もし俺の抹殺とかが狙いならキスじゃなくて首を絞めればいい。それに、そういう事を狙うならあんなに人が多くいる時を狙わないはずだ。

じゃあ、俺を殺そうとはしてない？ と、そこで昔読んだ漫画のワンシーンが甦る。

あるキャラクターが見張りをしてる時、そこへ別れたはずの仲間が姿を見せる。見張りをしているキャラはその仲間が好きで、普段よりも判断力や集中力が落ちていた。

で、実はそれは敵が化けた偽物で、キスをしようとしたところを狙って毒を流し込んできたんだ。

まさか、悪意はマリアを通じて俺へ手を出そうとしてた？ だから粘膜接触をしようとした？

……可能性はある。悪意が何故俺へ手を出してこないか。その理由は未だにはつきりしないけどヒントならある。

ここをエル達は度々こう言っていた。神の世界だと。それが悪意にとってもそうだとすればどうだろうか。

実は俺は悪意が力をどれだけ持っても直接は手を出せない存在なのかもしれない。だからみんなを通じて俺へ手を出そうとしている

……のか？

「ヴェイグ、マリアから嫌な匂いをはっきり感じたのはその時だけか？」

「……そうだな。はっきりはその時だけだ」

となると、悪意は行動を起こす時だけ活性化するのもかもしれない。あるいは、切歌や調、奏や未来の時の経験から気配を、匂いを消す事を覚えたのかもしれないな。

これはみんなと相談する必要がある。悪意がみんなを使つて俺へ手を出そうとしているかもしれないって。

「お化け屋敷、ねえ」

仁志さんがそう言つて目の前の建物を見上げた。正直もつと絶叫系に挑戦していたかったけど、エルちゃんやセレナちゃんは一つだけで疲れちゃつたので計画変更。

仁志さんはまたバラバラで動けばいいって言ったけど、私は仁志さんと一緒にいたいんだもん。

「あ、アタシはえんりよしておくデスよ。少し疲れたデスし」

「そ、そうだな。あたしもちよつと休んでおくか」

切歌ちゃんとクリスちゃんは見学というか待機するみたい。

「なら一緒に行こうよ先輩。ね？」

「お化け屋敷を男女二人で、なあ。ギャルゲーの定番イベントみたいだ」

あつ、意外と仁志さんがノリノリだ。でもこのままじゃ奏さんとイチヤイチャされる。

「只野さくん、私も一緒に行きたいです」

「僕も兄様と一緒にいいです」

「私は……待つてようかな？」

私が手を挙げるとエルちゃんも手を挙げた。で、セレナちゃんは怖いみたい。

「だつて？」

「いいじゃん、先輩だけ何度も行けば」

その言葉に仁志さんが目を見開いた。私も驚きだ。でも、それならデートみたいな事が出来る！

「私は奏の案がいいと思います。今の只野さんからは私達と遊ぶつもりがないように感じられますし」

「そ、それは……」

「そうね。ここはみんなに付き合っただけなら？」

「……まあお化け屋敷ぐらいなら」

翼さんとマリアさんの言葉で仁志さんが渋々引き受けた。よし、これで後は順番を決めるだけだね。

「なら一番最初は誰と行きますか？」

そう思ってたなら未来が切り出した。それと気付いた。もう仁志さんが誰かと行くだけの流れになってるって。

「え？ 最初はって……」

「さつき奏さんが言ったじゃないですか。只野さんは何度も周回するんですよ？ だって、響もエルちゃんも行きたいって言ってますし」

「いやいや、それならいつぺんに」

「先輩、あの時自分で言ったじゃん。絶叫系は絶対乗らない。それ以外はいいけどって」

「それは……言っただけど……」

「うし、言質取った。じゃ、最初はあたしと行くかうか」

「ちよ、マジ？ てか何で腕組んでんだって！」

「ほらほら時間が限られてるんだ。さっさと行くよ」

「横暴だあああああつ！」

あつという間に奏さんに引きずられるようにお化け屋敷へと消えていく仁志さん。

何というか、あまりにも電撃的で嫉妬とかそういう感情も起きないや。

それよりも今は次は誰が行くか、だね。

「よし、これで只野さんは中の配置とか覚えてくれるだろうからビツクリする事が減るはずだよ」

「未来さん、若干怖いです」

「だってエルちゃんと一緒に行く時に只野さんまでビックリしてたら頼りないでしょ?」

「小日向……」

「言ってる事は分かるけど……」

「それに……」

そこで未来は切歌ちゃんやクリスちゃん達見学組へ目を向けた。

「それに、最後の方になればビックリどころか慣れて飽きてさえくるだろうから安心ですし」

「……そういう事ね」

マリアさんがそう言って苦笑する。要するに怖がつてるクリスちゃん達のためでもあるんだ。

私は、いつにしよう? 最後よりも最初の方がいいかな? 一緒に怖がつたり驚いたりしてもいいかも。

そう思いながら私はふと気付いた。仁志さん、お化け屋敷って苦手じゃないのかな? 絶叫系が苦手って事はビックリする事とか嫌がりそうなんだけど……?」

薄暗い中をゆっくりと歩く一組の男女。男の方は既に疲れが見え、女の方はどこか緊張していた。

その理由の一つが腕を組んでいる事だろうか。男はそれに気疲れし女はそれに気を張っているのだ。

と、突然井戸から生首を模した模型が出現する。

「……キヤアッ! って、言うところ?」

「じゃないか?」

冷めている奏とやや苦い顔の仁志。これをカップルと思う者はおそらくいないだろう空気である。

それでも奏は今しかないと思っただけと仁志を見やる。彼はやや疲れた眼差しで上を向いていた。

響の懸念通り仁志はこういうものも苦手である。それなのに奏と、女性と一緒にいるためにあまり騒ぐ訳にはいかないと気を強く持とうとしていた。

その気疲れがもう出始めていたのである。ただ奏はそうとは思わず、仁志がこの後の事を考えて疲れているのだらうと捉えていたが。

「あのさ只野さん」

「何だ？」

呼び方が普段と違う事に気付かない程、今の仁志は疲れていた。

「聞いて欲しい事があるんだ」

「聞いて欲しい事？」

そこで仁志は足を止めて奏を見た。そこには照れくさそうに笑う奏がいた。

「うん。その、さ。あたし、只野さんの事が好きなんだ」

あつさりと告げる。だがそれに反して奏の顔は真っ赤だった。

「返事は、翼達と同じでいいよ。だから、絶対」

「分かってる。必ず、必ず出すよ。それと、俺からもいいか？」

「え？ う、うん……」

一体何だらう。そう思っただけは小首を傾げる。

だが、そのすぐ後、彼女は思わずその場から走り去りたくなるような事を仁志から言われるのだ。

「奏、その、俺をさり気無く励ましたりしてくれてありがとう。ジョギングの事も、廃棄の事も、バイトの事もそうだ。君はそうとは見せないように俺の事を気遣ってくれた。その優しさが今も俺を支えてくれてるよ。本当に、感謝してる」

「っ!!」

「つと、そろそろ歩こうか。他の利用客の迷惑になるし」

「え？ あ、ああ……うん」

しかし奏が歩き出そうとした瞬間、組んでいた手へ仁志が自分の手を絡めるように繋いだのだ。

「行こう」

「っ……うんっ!」

最初よりも深く繋がった形で奏は仁志と歩く。そこからの事は彼女も覚えていない。

ただ、繋がれた手の温もりと力強さに胸をときめかせ、微笑み続け

ていたのだ。

そうやって上機嫌で奏が出て来た後は翼が続く。

再度お化け屋敷へ逆戻りとなった仁志はどうしたものかと思うも、翼が自分から握ってきた手に軽く驚く事に。

「翼？」

「い、いけませんか？」

「い、いや、そんな事ないけど……」

「私だって、女です。初恋の男性とのデートを夢見た事がない訳じゃありません」

その口調で仁志は悟る。今、翼が自分の前で素を見せてくれていると。

そんな二人を見て受付が若干訝しむ表情を見せる。ついさつき来たはずの仁志が別の女性と再度入場するからだ。

その受付の視線に気付かぬ振りをして仁志は翼と共にお化け屋敷へと入っていく。

その中で唐突に出現する脅かしに動揺する事もなく、ただ無言で自分の手を握り締める翼に仁志は小さく苦笑した。

「翼って、もしかして若干怖がり？」

「ち、違います。これは、その……」

「その？」

「……ど、どうやって甘えたらいいのかわからないだけです」

その言葉に仁志は思わず顔を赤くし、こう言うのが精一杯だった。

「し、したいようにすればいいよ」

するとその言葉に翼は大きく目を見開いて、そしてどこかほにかむように笑みを零すと「後悔しないでください」と告げて仁志と繋いでいた手を離すと、指を絡ませるようにして繋ぎ直したのだ。

「……どう、ですか？」

「あー……やっぱり翼は可愛いなって」

「ふふっ、そうですか。でも、こんな私は貴方しか、ううん、貴方だけにしか見せませんから」

顔を赤くしながら告げる本音。その言葉の威力に仁志は見事心を

射抜かれるも、抱きしめたくなくなる気持ちをぐつと堪えて歩き出すのだった。

ただ、その握られた手をそつと握り返すようにして。

翼の次はエルフナインとセレナ。というのも、エルが行こうとしているのに姉である自分が行かない訳にはとセレナが立候補したのである。

「暗くてひんやりしています」

「そ、そうだね……」

揃って仁志と手を繋いでいる二人。仁志はそんな中で怯えるセレナを見て心を和ませていた。

何せ奏も翼も欠片として怯えも怖がりもしていなかったためだ。そこへ来てのセレナの反応である。その初々しさと愛らしさに仁志はやつとお化け屋敷に來ている感覚を味わっていた。

「セレナ、勇気の始まりは怖い事を認める事だよ」

「怖い事を、認める……」

「そう。恐怖を認めて、その上でそれを乗り越えていく。それが勇気だ」

某有名人間賛歌漫画のような事を言い、仁志はセレナを励ました。エルフナインもその言葉に成程とばかりに頷いている。

そしてセレナは言われた通り恐怖を認めて仁志へと抱き着いた。

「お兄ちゃん、ここからどうすればいいかな？」

「大丈夫。心を強く持つんだ。相手はこつちを驚かす事しか出来ないって。ノイズみたいに炭化させる事とかは出来ないって」

そう言われればもうセレナは平気だった。ノイズと違って触つてもこないし驚かせるしか出来ない相手を恐れる必要などない。

そこからはセレナは多少ビックリする事はあっても、怯える事はなくなつた。エルフナインと二人で大きな声を出すけど、すぐに二人で楽しげに笑う事が出来るようになったのである。

出口の外へ出ると、一気に暑さが戻ってきてセレナとエルフナインは嫌そうな表情を浮かべた。

「暑い……」

「ははっ、そうだな。じゃ、あそこの自販機で何か買っておいで」
「え?」

「いいんですか?」

小首を傾げる二人へ仁志は財布を取り出すと小銭をそれぞれの手へ握らせる。

「いいよ。つと、その前にいいか?」

「えっ?」

その場でしゃがみ込むと仁志はエルフナインとセレナの頭へそつと手を置いた。

「セレナ、エル、いつも明るく元気でいてくれてありがとう。そして俺の趣味を受け入れてくれて、楽しんでくれてとても嬉しいよ」

「お兄ちゃん……」

「兄様……」

「これからも悪意なんかには負けないでいられるように俺を支えて欲しい。俺も二人が苦しい時や辛い時に助けられるように頑張るから」

「うんっ!」

輝くばかりの笑顔を返し、セレナとエルフナインは力強く頷いた。その頷きに仁志も優しく笑みを返して頷いて二人を自販機へと送り出す。

そんな二人の後は何と切歌。セレナが行き、しかも笑顔で戻ってきたのを見て妙な負けん気を見せたのである。

「し、ししよー、絶対手を離さないでくださいデス……」

「はいはい」

下手をすればセレナ以上に怯えているなど思いながら仁志はもう見慣れてしまった道を歩く。

「ひいつ!? だ、誰デスか?!」

「切歌の足音だよ」

「ひよわあああっ!? お、オバケデスっ! じよーぶつして欲しいデスよおー!」

「よく見てごらん。人魂じゃないから。ちゃんと釣り糸見えるから」
「にやあああっ!? く、く、首デスっ! 人の首デスよおっ!」

「うん、よく出来てるな。てか本物だったら大問題だからな？」

自分の足音に怯え、見え見えの之魂に驚き、定番の井戸関係で飛び上がり、まさしく向こうの思うつぼな反応を続けた切歌は、繋がれた手のおかげもあってか何とか逃げ出す事なく出口を目指して歩き続ける事が出来ていた。

「し、ししよお、アタシはもう限界デエス……」

「まあまあ、もうすぐ出口だから」

「ううっ、何でセレナはあんなに余裕だったんデスカね？」

入口では手を繋ぐだけだったのが、もう既に仁志へ密着する形となっている切歌である。

それに仁志は苦笑しながら最後の仕掛けを思い出して切歌をチラと見た。彼女はもう終わりだと思っただけで完全に油断している。

そしてもう出口まで5メートルもなくなった時、切歌は早くその場から脱出したい一心で仁志から離れ小走りを外を目指した。

「あっ、切歌ダメだっつて」

「やっつとゴールデースっ！」

が、それを狙って最後の仕掛けは用意されていた。出口まで3メートルを切った辺りで逆さまの落ち武者が出現したのである。

「~~~~~?!」

声さえ上げられず、切歌はその場で急停止するや仁志へと飛び付いたのだ。

が、そんな事をすれば当然仁志は尻もちをつく。さすがに切歌が全力で飛び付いて支えられる程の筋力は彼にはないからだ。

それでも仁志は慌てるでもなく涙を浮かべる切歌に小さく微笑み、優しく宥めるように頭へ手を乗せる。

「だからダメって言ったろ？」

「ぐすっ、ししよーはイジワルデス。あそこにあんなのがあると知ってて黙ってたデスっ！」

「黙ってはいないぞ。まあはつきり言う事もしなかったのは事実だけさ。それにしても……ホントに向こうからすると最高のお客さんだと思うよ、切歌は」

「嬉しくないデスっ！今のでもう立てなくなったデスよっ！どーしてくれるデスかあ！」

涙目で抱き着きながら睨む切歌を可愛いと思い、仁志はならばとその体を両腕で抱え上げた。

「ふえ？」

「じゃ、これで外まで運ぶよ」

俗に言うお姫様抱っこをされ、切歌は外へと到着する。

照り付ける太陽が眩しく思えたが、それとは違う熱を切歌は顔から感じていた。

「切歌、もう立てそうか？」

「え？っ?! は、はいデスっ！」

赤い顔で返事をする切歌を見て、仁志は微笑ましいものを見るような目で頷いてそつと彼女の体を下ろす。

「切歌、一つだけ聞いて欲しい事があるんだ」

「な、何デスか？」

「その、俺の趣味に理解を示してくれて、好きになってくれてありがとう。君みたいな可愛い子と特撮やアニメの話を出来る日が来るなんて思ってもいなかった。それに、俺がお願いしたとはいえ師匠なんて呼んでくれてさ。本気で嬉しいよ。本当に、ありがとう」

「ししよー……」

「もし良かったら、これからも俺と今までみたいな話題で盛り上がってくれるか？」

「モチロンデスっ！アタシはししよーの弟子デスからっ！」

心からの笑顔と、不思議にときめいた心で切歌は仁志へそう返した。

その返事に仁志が心から嬉しそうに笑顔を見せて、余計切歌の笑顔が熱を帯びるのだった。

切歌が暑い暑いと言いながら戻ってくるのと入れ替わりに調が挑戦する事に。

薄暗い中を隣り合って歩きながら仁志は調へとある事件を話題に挙げる。

「ツタンカーメンの事件、ですか？」

「うん。あれって君達の中では珍しく若干ホラーじみてただろ？」

「……そうですね」

懐かしい。そんな風に聞こえる答えに仁志はさらりとある事実を告げた。

「実は、あの時にサンジェルマン達がティキの動力である歯車みたいな聖遺物を手に入れたんだ」

「あの時に？」

「積み荷の中にあつたんだ。これもゲームからの情報」

「……でも納得です。全ては私達の目を逸らすためだったんだ」

こうして会話している間にも様々な仕掛けが作動し脅かし役が現れているが、それらを意に介さないように仁志も調も歩いていった。

ただ、調も仁志と手だけは繋いでいた。それも彼女の提案である。ゲージを少しでも上げるためにと、そういう理由で。

「そういえば、切ちゃん顔赤かったですけど何があつたんですか？」

「あー、うん。出口の外で教えるよ」

結局最後まで調は大きく怖がる事も驚く事もなく出口まで到着。そこで彼女は切歌が赤くなっていた理由を体験する事となる。

「調、君には色々負担をかけてしまったって申し訳ない。早起き、発注、マリアがいない時の食事の世話まで多岐に渡ってる。だからこそ、俺はマリアと同じぐらい君に感謝してるんだ。美味しい飯や丁寧な仕事、ありがとう」

「只野さん……」

「もうしばらく君の力を貸して欲しい。仕事だけじゃなく、心の支えとしても」

「……はい」

真剣な眼差し。温かい言葉。何よりも最後に見せられた優しい笑顔に調は心が騒ぐのを覚えていた。

それは仁志が意図せず植えて芽吹かせた恋の種。それが今しっかりと蕾を付けたのだ。

少しだけ嬉しそうに笑みを浮かべて戻った調の次は未来。

もうこの頃になると仁志も感覚が麻痺してきたのか中々大胆というか思考が開き直ったため……

「嫌だったら言ってくれよ?」

そう言って未来と腕を絡めて恋人繋ぎという事をあつさりとやってのけたのだ。

「こ、これって……」

「うん、まあ未来は俺に想いを告げてくれただろ? で、響達程時間を過ごした訳じゃないし。だから、その、実益を兼ねたゲージ上げ?」

「クスツ、なら抱き着いてもいいんですか?」

「……中にいる間なら好きなだけどうぞ?」

「っ?!」

一度でも腹を括れば男らしくあれど仁志である。未来も動揺を見せず、むしろどこか不敵な笑みさえ見せる仁志に軽く胸を騒がせる程だ。

そうして歩き出した二人だったが……

「あつ、そこにはドクロがあるよ」

「っ?!」

「つと、そこは後方注意」

「え? きゃあっ!?!」

「井戸から生首が出てくるけど、本命はその少し後の草むら」

「いやあああっ!」

未来が気付かぬものや見落とす事へ意識を向けさせ、仁志は彼女をどことん驚かせたのだ。平時であれば平気な未来も若干気を抜いた時に気付けば驚くと言うもの。

出口へ到着する頃には未来はやや目を吊り上げて仁志を睨んでいた。それさえも仁志には可愛いと思ってしまうものではあったが。

「もうっ! 只野さんってホントにこういう時子供みたいですねっ!」

「ごめんごめん。怯える未来が可愛くってついね」

「っ……そ、そうやって言えば誤魔化せるとか思ってますん?」

「そんな事ない……とは言い切れないけど」

「むっ」

どこからどう見てもカップルのそれだろうやり取り。そして未来は気付いていた。仁志は本当に今だけはそういう気分にいるのだろうと。

「未来、一つだけ聞いて欲しい事がある」

「え？」

そんな事を思っただけで内心喜んでる未来へ、仁志は少しだけ表情を凛々しくして話し出す。

「俺の言った事を覚えてくれてジョギングに誘ってくれた事、嬉しかった。響との関係へ口出した事もあったけど、それさえも君は持ち前の優しさや慈愛で受け入れてくれた。本当に未来の献身さには助けられてる」

「そんな事……」

「きつと今後も仕事では君と直接関わる事はないと思うけど、それでもいつでも頼ってくれていいから。だから俺も、未来を頼らせてもらっていいか？」

「……はい」

プロポーズのようだと、そう思いながら未来は笑みを返した。愛してるという言葉を使わず、それに近い事を伝えたい。そんなような感じさえ受け、未来は少しだけ大胆な行動に出た。

「み、未来？」

仁志の体へ抱き着いたのである。

「少しだけ、少しだけこうさせてください。初めての、好きな男の人とのデートなんです」

そう言われてしまえば仁志も何も出来ない。ただ、照れくさそうに上を見上げ頬を掻くのが精一杯だった。

そんな彼の様子を見やり、未来は密かに笑みを零す。好きになつて良かった。そう心から思っただけ。

未来の次はやはり響。ただ、彼女は中に入る前から仁志と腕を組み、指を絡めて体をやや密着させるようにしていた。

「早く行きましょっ！」

「わ、分かったから急かさないでくれよ」

最早受付も仁志の事を見て何とも思わなくなっていた。とつかえひっつかえ美人や美少女を連れてきてお化け屋敷を楽しむなど普通有り得ないためだ。

つまり、受付の人間はもうこう思い出している。これは何かの撮影で、仁志は撮影役兼相手のダミーなのだろうと。

中に入るや響は仁志へ少しだけ女の顔を見せるところ告げた。

「ここから出るまでは仁志さんって呼んでいいですか？」

ここは住んでいる場所から遠く離れているしアトラクションの中だ。それでもダメなのかと、そう思っただけの響の問いかけに仁志は迷う事なく苦笑して頷いた。

「ああ、いいよ。じゃ、ゆっくり歩こうか？」

「はい、ゆっくりがいいです」

「ん。えっと、それじゃ……行くぞ、響」

「っ!? はい、仁志さんっ！」

いつかねだった事。自分を見て恋人らしく名前を呼ぶ。それを今仁志がやってくれた事に響は胸をときめかせて歩き出す。

要所所で驚かせにくる仕掛けやスタッフに怯えたりはしやいだりしながら、響は仁志との恋人らしくいられる時間を愛おしく思っていた。

このまま時間が止まればいいのに。そう思いながら両腕から感じる温もりを大事そうに噛み締めて歩く。

「もう終わりだな」

そう聞こえた声に響が目を開ければ、出口はすぐそこまで迫っていた。

「……仁志さん」

「ん？」

「あの、お願いが一つあるんです」

出口ギリギリで足を止め、響は仁志を見上げる。その目はそこはかとない決意を宿して潤んでいた。

「キス、してくれませんか？」

告げられた言葉に微かに込められた色香。それが仁志には驚きだった。

まさか響にそんな色気があるとは思っていなかったのである。女性の成長は本当に凄いと思いつつも、仁志はさすがにキスはと、そう思ったのだがある事を思い出して息を吐いた。

「……分かった。目を閉じて?」

まさか了承を得られると思っていなかったのか、響は大きく目を見開くもすぐに嬉しそうに微笑んで目を閉じた。

一瞬にも永遠にも感じられる沈黙。ふと、そこで響は自分へ近付いてくる気配に気付いた。仁志が本当に顔を近付けてきている。そう思っ胸の鼓動が早鐘のように響く中、これまで感じた事のない温もりがそつと額へ触れた。

「……え?」

目を開けた響が見たのは気恥ずかしそうに俯く仁志の姿。

「ひ、額で勘弁してくれないか? これが答えを出してない俺の精一杯だ」

この時、仁志も響も知らなかった。額へのキスが何を意味するのか。それは、無償の愛。

それを知らぬでも、響にとっては初めて仁志からしてくれた明確な好意を示す行動。

だからだろう。今にも走り出しそうな程に喜び、満面の笑顔を彼へ向けたのだ。

響への想いの吐露はこれもあつたためになくなった。仁志もやはりどこかで舞い上がっていたのだろう。

目に見えて上機嫌となつて戻ってきた響を見て、ならばとクリスが動き出す。

「なあ、只野」

「何?」

中へ入るなりクリスは仁志の事をそう呼んで、そして真っ赤な顔でこう告げたのだ。

「ひ、仁志って、そう呼ばれるの、嫌か?」

クリスとしては、ある意味でキスするよりもハードルの高い内容である。何せキスは一度すればそこで終わりだが、名前で呼ぶ事はその状況がくれば何度も起きる事だからだ。

「嫌じゃ、ないけど……?」

「そ、そうか。じゃ、こ、これから二人きりはそう呼ぶ」

「え? あ、うん」

話は終わったとばかりに歩き出すクリス。その背中を見つめ、仁志は何か気付いて慌てて後を追いつめた。

「クリス、ちよつと待って」

「あ?」

「こ、お化け屋敷なんだよ? 一人で先に行ったら君の場合……」

かつての豪華客船での一件で発覚しているクリスのホラー嫌い。それを心配しての呼び止めだったが、今回はそれが悪手となった。

仁志へ顔を向ける事を避けている最中のクリスが呼びとめられて振り返るはずもなく、むしろ照れや恥ずかしさで閉じていた目を開けたのだ。

「んひゃあつ?!」

そこへ出現するのは他愛のない提灯お化けの仕掛け。それにクリスは大きく驚きバランスを崩して後ろ向きに倒れそうになった。

「やばつ!」

「クリスっ!」

間一髪仁志がその体を受け止めるように支え、二人の目が合う。

「っ?!」

目の前に見える惚れた男の真剣な表情。それが自分の無事を確かめて柔らかな笑みへと変わる瞬間を見て、クリスは思わず口を動かした。

「仁志……」

無意識の一言。ただ愛しい相手の名を呼ぶと言う、それだけの行為。そこへクリスが込めたのは紛れもない愛情だった。

「……何だい?」

だから仁志も同じように親愛の情を込めて言葉を返す。

「あたし、やっぱもうダメかもしれないねえ」

「ダメって、何が？」

「……仁志に捨てられたら、生きていけない気がするんだ」

「大袈裟、でもないのかもしれないな」

実際クリスの気持ちは仁志と同じなのだ。ただし、彼の場合は選ぶうが選ばなからうが心が死んでしまう可能性が高い。

何せどうあっても彼女達と同じ世界で生きてはいけないのだ。住む世界が文字通り違う以上、例え想いを通じ合わせたとしても共に歩む事は出来ないのだから。

「なあ、もう知ってるだろうけどさ。あたしは、パパやママを失って一人になった」

「うん、知ってる。色々あって日本へ戻った後でフィーネに拾われた」
「ああ、だからかな？　あたしは、一人になるのがどこかで怖い。ううん、今のあたしは仁志に捨てられる方が怖いかも、しれないな」

そう言っただけクリスはゆっくりと体勢を立て直す。そして仁志の手を掴むと軽く引つ張った。

「とりあえず歩こうぜ。その、このままじゃ迷惑になるかもしれないんだろ？」

「……そうだな」

「あつ……」

素早くクリスの隣へ並ぶと仁志はそのまま少しだけ前へ出る。そしてそこで振り返ったのだ。

「クリス、これだけは約束するよ。その、何があろうと俺からは絶対にこの手を離す事はしないって」

「……まったく、あのバカみてえな事言いやがって」

「そうじゃないと君と手は繋げないだろ？」

その即答にクリスは一瞬呆気に取られ、すぐに嬉しそうに微笑んで頷いた。

ただ、その後はお化け屋敷の洗礼をこれでもかこれでもかと浴び、出口に到着した時には疲れ切つてぐったりとしていた。

「クリス」

「……んだよう？」

仁志にもたれるようになりながら顔を上げたクリスが見たのは、自分を優しく見つめる男の顔。

「これからはもう、一步引いたりしないから。君の手を、ちゃんと引いて歩けるような男であるよ」

その瞬間、クリスは二度目の恋をした。

さて、そうなれば残るはただ一人。最後のトリを飾るのはマリリアであつた。

「大丈夫？」

「うん、まあ何とか」

何せ十回近くもお化け屋敷を往復しているのだ。これは意外とバカにならない運動量である。

ただある時期から欠かさず続けていた運動によつて仁志の体力は上向いていた事もあり、彼はそれを何とかこなせていた。

受付のどこか憐れむような視線を受けつつ、仁志はマリリアと共にお化け屋敷の中へと入っていく。

「で、どうなの？」

「どうって？」

「ゲージ上げ。意識してるんでしょ？」

その言葉に仁志は足を止めて俯いた。

「正直言えば、そんな理由で動いてる自分が少し嫌だ」

「でも、それでもみんなは喜んでるわ。只野、これだけは言わせて。私達はたしかにこれまで異性との関わりは少なかつたと思う。だけど、それだけで貴方へ」

「分かってるよ。うん、分かってる。君達がそんな簡単な女性じゃないって事は」

「だったら」

「だからこそ、だからこそ俺は君達に申し訳なきを抱えてるんだよ。俺が傍にずっといられるのなら迷う事なく動いたさ。その結果どちらかの心が、あるいは両方の心が傷だらけになるとしても」

それは、仁志がこれまで胸に秘めていた本音。男としての本心で

あった。

「スケベな事だつてしたいさ。イチヤイチャだつてしたい。だけど、それを望むままにしたら後で苦しむだけになるんだ。この問題を解決しても、上手くすればいつでも会えるかもしれない。でも、同じ家では暮らせないから」

「それは……」

「単身赴任とかじゃないんだ。自分のいる世界に、愛する人がいない。お互いそれを自覚しながら生きるんだ。しかも、選んだら、選ばれたら、他の相手へ、同じ世界にいる別の相手へ想いを寄せる事なんて出来ないままに」

良心の呵責に耐えられないからだ。あるいは、もし想いを寄せてしまえば、それが逆に自分の心を責め続ける。遠距離恋愛なんて生ぬるい。異世界恋愛だ。会うどころか連絡さえも取れないのだから。

「マリア、君にだけは言っておく。俺は答えを出すと響達へ約束した。だけど、それは絶対に彼女達の望むものじゃない」

「只野……貴方……」

「出しちゃいけないんだ。彼女達の望む答えは、予想している答えは。いっそ嫌われてもいいから、俺は自分の馬鹿を貫く。俺は、俺の心を守る事を優先する」

「……………それでも、いいわ」

告げられた声には、一種の安心感があった。ある意味での、感謝が宿っていた。

仁志が見たのは、優しくだけど微かな悲しみを湛える微笑み。

「答えを出さずに終わらせる訳じゃないのなら、それでもいいと思う。只野、貴方が自分の心を守るように動いても、私も、きつとみんなも怒らないわ」

「マリア……」

「ただ、ないと思うけど嫌われるような事を意図してやるのは止めて。だって、そんな事しなくてもここまでできて全員選ばないなんてやれば嫌でも嫌われるわよ」

最後にはそう正論を告げ、マリアは小さく苦笑する。だがすぐにこ

う続けた。

「でも、私だけは嫌わなないであげる。只野の、貴方の決断を尊重するわ」

「マリア……」

優しい声と微笑みに仁志は感謝するように彼女の名を呼ぶ。それにマリアは少しだけ照れたように笑って歩き出す。

「っと、ちよつと待ってくれよ」

「何？」

「一人で行かないでくれよ。その、一種デートの延長だろ？」

そう言いながら仁志はマリアの手をそつと掴む。感じる温もりにあの買い物帰りを思い出してマリアは顔を赤めた。

「べ、別にいいじゃない。もう私はゲージを上げる必要がない」

「俺がしたいんだ」

言葉を遮つての仁志の台詞にマリアは思わず息を呑んだ。

「ゲージとか関係ない。みんなこのこれは、俺がしたくてやってる事でもあるから。それにマリアには相談したい事もある」

「相談？ 一体何を？」

先程の事がそれではないのか。そう思ったマリアだったが、仁志は意を決して真剣な表情で彼女へ告げるのだ。

——悪意は、もしかすると君達を使って俺へ手を出そうとしてるかもしれない。

只野の推理は否定出来ないものだった。私は何故かキスしようとした事。あの時、たしかに私は只野と唇を重ねようとしていた。

その根底には、たしかに彼への気持ちがあつたのは認める。でもいきなりキスはない。なのに、あの時の私はそんな風に思わず、ただ只野へ想いを、何かを届けたらってそんな考えになっていた。

「マリア、俺が以前言った事覚えてるか？ 悪意は俺へ手出し出来ないんじゃないかって」

「ええ」

「今は、それに修正を加えたい。悪意は基本俺やこの世界の住人へ手

を出せない。だから君達を使つて虎視眈々と手を出せる機会を狙つてるんじゃないかって」

「……まさか、あの時の調と切歌の言動つて」

二人で暮らす。部屋などは道行く男性を誘つて何とかする。もしあれを実行していたら、二人の悪意はその相手へ入り込んでいた可能性もあるつて事？

「可能性があるつてだけだ。そして、今は幸いみんなの心が比較的落ち着いていて、しかもこの世界の住人で感情を向けるのは主に俺だ」「そうか。もう不特定多数へ入り込む事は出来ない」

「だからみんなの俺への好意を利用する方へ切り替えた。切歌達には俺への敵意を煽つたけど、奏と未来には俺への好意を使つて嫉妬を煽つてた。そういう風に、まず内輪揉めをさせて内部から君達の絆を引き裂こうとしてるんじゃないか？」

未来と奏がいがみ合い、そこで翼まで巻き込まれていたらと考えれば笑えない話ね。三人揃つて悪意の支配下になれば私達へも波及する。

未来は調やクリスに響とコンビニで会う事があるし、奏は只野と同じ時間帯だ。翼は基本フリー故にエル達への接触が容易。

……改めて考えるとんでもなく恐ろしいわね。翼の機転と只野の知識と勘がなかつたら全滅させられていた。

只野と手を繋ぎながら歩いていると、途中で当然だけどこちらを驚かすようなギミックなどが出現する。

それを歯牙にもかけないで私と只野は歩き続けた。きつとスタツフからすれば何で来たんだつて思うぐらいに。

「ねえ只野？もし悪意の狙いが私達を利用した貴方への手出しだとして、それが叶つたらどう思う？」

そう、これが私には分からない。だつて私達を消すつもりなら只野を支配下に置く必要なんてない。極論言えば私達の手で彼を〇〇すればいいだけなもの。

だけど、そんな私の問いかけに只野は黙り込んだまま歩き続けた。その横顔は見た事がない程に険しい。

私は何も言わず彼が口を開くのを待った。やがて出口が見えてきて外へと出る。

眩しい太陽の光が照り付け、夏らしさを一瞬で思い出させてくれた。

「あの映画のシヨッカーと同じだと思うよ」

そんな中、只野がそうたしかに告げた。

「映画ってライダーの？　そのシヨッカーって……」

「俺を操って君達全員へ手を出す。そして、君達を装者のままで操ってそれぞれの世界を破滅へと追い込む」

そこまで言って只野は私へゆっくりと顔を向けた。

「ただ消滅させるだけじゃ気が済まない。どうせならその手を守るべき者達の鮮血で染めさせてやれ。そんな風に考え直したのかもしれない」

どこか嫌そうにそう告げて只野は息を吐いた。私も息を吐く。重たくなった気持ちを吐き出すように。

「嫌になるよ。まさか本当にここまでヒーロー物みたいな状況になってくるなんて」

「そう、ね。でも、希望は常にそこにある。私達が諦めない限り……でしよ？」

彼の好きなヒーロー物らしさを意識して言っていると、只野が少しだけ嬉しそうに笑みを見せてくれた。

そう、それでいいのよ。貴方は誰よりも笑っていて。今私達の共通の支えは貴方なんだから。

「ああ、そうだな。泣いてもいいよ。また笑えればいい。ただそれだけ出来れば英雄さ」

「良い言葉ね。何の歌？」

「ここですごくこう思うのは貴方の影響よ？」

「ウルトラマンネクサスってヒーローのOP」

「ネクサス……。絆……？」

「そう、絆の名を冠したウルトラマンさ。光は絆だ。誰かに受け継がれ、再び輝く。これもまたウルトラマンの持つ一つの形」

「……気になるわね。それ、みんなで見ないの？」

そう言うのと只野が複雑そうな顔をした。珍しいわね。この手の話題はいつも嬉しそうにするのに。

「これ、基本的に暗いんだ。エルやセレナ辺りは途中で見れなくなるかもしれないくらいむごいシーンや辛い話が多くて」

「そ、そう。それはたしかに厳しいわね」

「そっちに分かるような例えにするなら、ウルトラマンになれる人間は変身していくと融合症例状態が酷くなっていく。で、もう戦えなくなったら別の人間へその光を受け継いでもらう」

「分かり易い例えをありがとう。絶対にあの子達には見せられないわ」

変身するだけで死へと近付いていくって事でしょ、それ。

しかも融合症例って事は解決策は普通はないって事じゃない。

と、そこで私は思い出す。只野が以前BLACKというライダーの話をした時に言っていた事を。

——その結末に希望など、光などないとしても、みんなが平和で笑顔で暮らせるならそれでいい。そんな古いヒーロー像が、このBLACKには流れてるんだよ。

もしかして、そのネクサスと言うウルトラマンもそういう存在なのかもしれない。それ故に只野は今まで黙っていたのかも。

「とにかく、みんなのところへ戻ろう」

「そうね」

繋いでいた手をそつと離す。寂しいけれど仕方がない。それでも、私は構わない。だって、もう私はもらっているもの。

彼からの信頼という、強い絆を。唯一愚痴や弱音を吐ける相手という、繋がり。だから、これぐらいで心を乱したりしないわ。

——そう、私だけが只野から甘えられる。彼を、受け止めてあげられるの……。

あの後も響達は遊び回った。時間よ止まれと思いながら様々なアトラクションへ乗り、騒ぎ、楽しんだのだ。

途中で今度は園内のスタッフに頼み、全員での記念撮影を行った。それは早速仁志のスマートフォンから翼やエルフナインのスマートフォンへと送られる事となる。

最後は三つのグループに分かれて観覧車へ乗り、楽しい時間の終わりを惜しむように過ごした。

「うわぁ……」

「海が一望できるな……」

「これで夕日が見えたら最高ね」

「だろうね」

一つは、マリアにセレナ、エルフナインやヴェイグと仁志の疑似家族組。

「あぁっ、もうすぐこの時間が終わっちゃうデス。帰りたくないデス」

「もっと遊んでたかったなぁ」

「切ちゃん……」

「響ったら……」

「まっ、気持ちは分かるけどな」

一つは、クリス、響、未来、切歌、調の学生組（去年までも含む）。

「いっそさ、只野さんはここで良かったんじゃない？」

「そしたら絶対立花達が自分達もって言い出してたと思うよ？」

一つは、奏と翼のツヴァイウィングだった。

観覧車を降りて仁志達はバス停へと向かう。この時点でエルフナインが舟を漕ぎ始め、セレナも眠そうに目を擦り始めていた。切歌と調も疲れが出て来たらしく、その目は半分閉じかかっていたぐらいである。

こうして乗り込んだ帰りのバスの中でセレナとエルフナインにヴェイグは早々に眠り、切歌や調さえも動き出して十分としない内に目を閉じて寝息を立てる。

響や未来はさすがに眠る事はなかったものの行きと違って静かに体を休め、クリスさえも静かに外の景色を眺めていた。

奏と翼は動画のコメントをチェックし、マリアは仁志と二人で可愛い寝顔を見せる左右に笑みを浮かべていた。

「……セレナは俺が背負うからエルを頼める？」

「ええ。ヴェイグは？」

「……翼にでもお願いしよう」

「ふふっ、それがいいわね」

交わした会話はそれで終わり。後はバスセンターへ着くまで黙り続けた。

バスから降りて、寝惚けた顔の切歌と調をクリスや未来が面倒を見る中、仁志とマリアはその背にセレナとエルフナインを乗せて歩き出す。

翼はヴェイグを抱えてどこか嬉しそうに歩き、奏と響はそんな彼女を見て苦笑しながら歩き出した。

電車に揺られてまた切歌と調が寝落ちするのを見て仁志達が苦笑する。そんな事もありつつ、住んでいる街の最寄駅へ着いた時にはすっかり陽射しが夕日のそれへ変わっていた。

「やっと着いたあ」

「響、まだだよ」

「そうだぞ。晩飯どうするって言ってたろ？」

その瞬間響がお腹を押さえた。鳴ったのだ、盛大に。

「あ、あはは……恥ずかしい」

「晩飯の一言で胃袋が反応するとか、さすがだな」

「ううっ、褒めてないよクリスちゃん」

「もう今夜は外食しかないだろうね」

「あるいは持ち帰ってそれぞれの家で、でしょうか」

「私は翼の案に賛成よ。エルにセレナは、起こしてもすぐにはメニューを決められないでしょうし」

言ってマリアは背中ofエルフナインへ目を向けた。そこでは静かに寝息を立てる可愛い天使がいた。

「だよな。あるいは簡単にぎるうどんとか」

「それならあたしはスーパーで天麩羅買いたいね」

「だって。どうする？」

仁志の問いかけに寝惚けたままの切歌が手を挙げた。

「アタシは……エビフライがいいデス……」

「切ちゃん……エビフライよりコロツケの方がいいと思うよ……」

「寝惚けてんな、こいつら……」

「クスツ、ズレてるよね……」

クリスと未来が呆れるように苦笑するが、仁志はそんな切歌と調を見てとりあえず今は体を休める場所へ行く事だろうと判断した。

「よし、立ち話も今は無理だと思うから悪いけどここで解散しよう。で、それぞれで飯は考えるって事で」

「そうね。エルとセレナを布団で寝かせてあげたいし」

「それに切歌と調もな。っと、ヴェイグどうする?」

そこでヴェイグを抱えていた翼が苦笑した。

「なら、私が暁や月読を見ながら家まで届けます」

「助かるわ。じゃあみんな、また明日」

「切歌、調も、みんなへ挨拶した方がいいよ」

「また明日……」

「バイバイデース……」

「奏、小日向、そういう事だから私は一先ず MARIA 達と一緒に行く」

「分かった。じゃ、あたしらはスーパーに行ってるよ」

「はい。そこで待ってます」

「了解した。ならそこで合流する」

こうして翼を連れて仁志は MARIA 達と共にその場から去っていく。

その背中を見送り、クリスは響へ顔を向けた。

「あたしらはどうする?」

「そうだねえ……お弁当にする?」

「……そうだな。たまにはそれでもいいか」

話は決まったとばかりに二人は頷き合い、奏と未来へ別れを告げて歩き出した。

残される形となった奏と未来は若干の寂しさを感じつつ顔を合合わせた。

「あたし達も行くこうか?」

「そう、ですね」

最後に二人もその場を離れて夏のイベントと呼ぶべき外出は終わりを迎える。

祭りの後の寂しさにも似たものを感じながら……。

居間へ目を向けて笑みを浮かべる。エルとセレナだけじゃなく切歌や調までも布団の中で眠っているからだ。

ヴェイグはさすがにもう眠気がなくなったのかクッションに座って夕焼け空を眺めてる。

夕飯は日が落ちるまでお預けになった。何せ食べ盛りの四人が眠っているんだ。せめて四人の内半分が起きるかしないと用意する訳にはいかないとマリアと二人で結論付けた。

「何だかき、本気で父親になった気分だよ」

そう素直に思った事を告げると向かいに座ったマリアが顔を赤くした。

「そ、そう……。じゃ、私はとつくに母親の気分よ」

「おいおい、エルは妹分だろ?」

セレナは実妹だしエルは義妹のはずだ。どうしてそれで母親に。

「でも、ここでのあの子はもう子供じゃない?」

その笑みと共に告げられた言葉に俺は頷くしかない。たしかにエルはもう見た目相応の子供だ。

元々好奇心の塊だった子だし、こっちでは研究も思い出見学も出来ないからその興味が色んな事へ向いている。

まあその結果が俺の影響を受けての特オタでロボアニメオタ予備軍な訳だが……。

「だから私は姉でもあり母でもあるのよ」

「じゃあエルが俺との子って?」

言って若干後悔した。だって……

「そうだと言ったら?」

まるで、そう言っただけで欲しかったみたいで顔でマリアが俺を見てきたから。

「……止めよう。この話題はお互いに心に傷を作る」

「構わないわ。いえ、むしろ作ってくれていい」

「えっ?」

「ふふっ……貴方になら、傷付けられてもいいの。他の誰でもない、貴方になら」

こちらを見つめて妖艶に微笑むマリアに息を呑む。初めて見る表情だった。これが、マリアの女としての顔、なんだろうか?

マリアは俺が何も言えないと分かるや静かに席を立てて俺の隣へ座る。

「只野、私は選ばれなくてもいい。ただ、ただ貴方の子が欲しいと、そう言ったらどうする?」

「こ、子が欲しいって……」

「分かってるんでしょ? 私も貴方も成人してるんだもの。ね?」

そう言つてマリアの細くて綺麗な指が俺の胸を触る。

「あ、あのな? それはさすがに」

「したくない?」

反論に詰まる。正直言つてマリアとエッチなんて考えた事がないなんて嘘になる。しかもあの頃は単なる妄想でしかなかったものが、今は現実として触感からも訴えてくるのだ。

「ま、マリア、俺に選ばれないのに子供つて、父無し子にするつもりかよ?」

「以外にある?」

俺の胸を触っていた指がゆっくりと下がっていく。腹を触り、そのままズボンへと届こうとして……

「……どうして止めるの?」

俺の手がその動きを止めた。

「ヴェイグ、起きてるか? 起きてるならちよつと来てくれ」

その問いかけに答えず俺は居間へと声をかける。するとヴェイグがこつちへ歩いてきてくれた。

「どうした?」

「悪いがセレナ達を起こして欲しい」

「只野? 寝てるあの子達を起こすのはどうかと思うわ」

「タダノ、俺もマリアと同じ意見だ」

「それでも頼む。それと、今のマリアの意見に従う必要はない」

「え？」

揃ってこちらへ疑問符を浮かべる二人だが、俺は目の前の女性を若干睨み付けるように眼差しを強くする。

「それはこいつがマリアであってマリアじゃないからだ」

「何を言っているの？」

どこか苦笑するマリアだが、俺には分かる。彼女がもし俺との子供が欲しいと思ってくれているとして、それを求める状況は今じゃない。

そして、もしそうなら絶対口が裂けても父無し子でもいいなんて言うはずがないっ！

「マリアは幼い頃に両親を失ってる。そして妹のセレナまでも目の前で失った。そんな彼女が父親がいない子供の気持ちを考えないはずがない」

マリアの目が細くなる。いや、マリアを操る奴が目を細めた。

「どうやったのか知らないが、お前は所詮みんなの上辺を真似るだけが精一杯なんだよっ！」

「ふふっ……あははっ……あははははっ！」

高笑いを始めるマリアを見て俺は自分の直感が間違ってたなと確信した。

「な、何だこの匂いっ!」

「ヴェイグっ! 頼むっ!」

「っ!? 分かったっ!」

「くくっ、やっど簡単に入り込める体を手に入れたと思えば、まさかこんな事で気付かれるなんてね。人間の男なんて性欲の塊だとばかり思っていたのだけだ」

「生憎だったな。童貞はそういう方面に臆病で疑り深いんだよっ!」

自分なんか女性が好かれるはずがないとどこかで思うから自信が無い。自信が無いから魅力がない。魅力がないから好かれない。その無限ループを思春期から経験してる俺を舐めるなっ!

「まあいい。なら無理矢理にでもお前に入り込んでこいつら装者をメチャクチャにしてやるっ！」

「そうは……いくかつ！」
「っ?!」

ガタンと大きな音を立てて椅子と共に俺は後ろへ倒れる。その勢いでマリアの体も倒れ込んでくるので腕を引っ張って受け身を取れないようにする。

「がっ!？」

「ぐっ! ヴエイグっ! みんなはっ!」

「とりあえず調は起きたっ! 他もすぐ起こすっ!」

「只野さんっ!」

目を向ければ寝癖で髪が跳ねている調の姿。丁度いい。ならここは調に頼もうっ!

「調っ! 邪悪を払うギアをっ!」

「っ!? 分かりましたっ!」

そう、彼女には巫女ギアがある。しかもちゃんと神楽を習い、それを習得した本物にも近い存在だ。

調がギアを展開する間に、何とか起き上がった俺は彼女の邪魔をしようとするマリアの体を背後から羽交い絞めにする。

「くっ、放せえ!」

「やなこったっ!」

直感的にキスされると不味いと察して背後からにして正解だな。そうこうしている内に調が巫女ギアを展開完了。

「マリアを操る悪意、払ってみせるっ!」

「ぐっ……これは……っ!」

厳かな雰囲気で動く調。俺も初めて見るけどこれが神楽か。

その神聖な踊りが俺の腕の中でもがくマリアを、正確にはその中の悪意を弱らせていく。

それにしても見事なもんだ。ここまで見事だと、やっぱりあの神主さんは調のお祖父さんなのかもしれないって思えてくる。

ただ、これは言う訳にはいかない。

あの神主さんは何となくそれらしく見えるだけで名乗り出てはいないし、探りを入れる事さえもしていないんだ。それを俺が勝手な解釈や考えで口出しするのは間違ってる。確証の無い事は極力言わない方がいい。

特に、調みたくない境遇の子には。

「ううっ……胸が……苦しい……」

「マリアっ！… 意思をしっかり持てっ！」

マリアの体から黒いものが滲み出してきた。以前の奏や未来と同じだ。なら、マリアもギアを展開させる事が出来れば……っ！

「マリアっ！ 聖詠を！ ギアを展開するんだ！ 自分の中の悪意を追い出せっ！」

「た、只野……っ！」

「マリアっ！ 君なら出来るはずだ！ 優しい君なら、悪意なんか到最后まで乗っ取られたりしないだろう！ 優しさは強さだ！ 強さは、愛だっ！」

「強さは……愛……っ！」

そう言ってマリアが目を閉じる。そして聞こえ始めるアガートラームの聖詠。

眩しい光が目の前で起きると同時に俺は手を離す。次の瞬間には白銀を纏う聖母と同じ名を持つ女性がいた。

「マリア……」

「心配かけたわね。もう大丈夫よ。あとは……っ！」

「姉さんっ！ お兄ちゃん！ 大丈夫!?!」

「ええ。それよりセレナ、ギアを！」

「兄様っ！ これをっ！」

「よしっ！」

エルが投げ渡したスマホを受け取り、即座に俺はゲームを起動。ステータスを表示させ、セレナの後ろにあるヴェイグをタップする。

「セレナ、ミレニウムパズルだっ！」

「うんっ！ ミレニウムパズル、展開っ！」

瞬時に視界が変わる。そして逃げようとしていた悪意が逃げ場を

失って動揺するように動きを止めた。

「な、何がどうなってるデスカっ!？」

で、どうやら今頃起きたらしい切歌が寝癖全開の頭で叫ぶ。何と
うか、やっぱり大物かもしれないな、あの子。

「マリア、君も巫女ギアを展開してくれ」

「分かったわ」

可能ならセレナにも展開して欲しいところだけど、あれはガチャだ
けのものだと思っしなあ。

そう思いながら俺はステータスを見る。ちゃんと調とマリアのア
イコンが巫女ギアへ変わっていた。

芸が細かい。そう普段なら思うところだけど、これはゲームのよう
でゲームじゃないからな。

にしても、気付けばみんなのゲージがかなり色付いてる。てか、全
員ツインドライブアイコンが出てるぞ！

「……待てよう？」

エルが以前発見して発覚したステータスの秘密。それはギアを展
開してる時にヴェイグなどのアイコンをタップするとツインドライ
ブが可能だと言う事。

そして今明らかになったように、ギアに応じてみんなのアイコンも
変化する事だ。なら、もしかして今の状態でみんなのアイコンをタッ
プしたら……っ!?

「マジかよ……」

セレナのアイコンをタップしたら、そこにはゲーム内で彼女の姿と
して実装されたギアが全て存在していた。

なった事のないはずのものまで、だ。これは……もしかするか？

確認のため次はマリアをタップ。そこにもライダーや晴着などの
心象変化ギアが表示される。ただウエディングギアはない。

だけど、メカゴジラギアはある、か。これはひよつとするとひよつ
とするかもしれない。

「これなら……切歌っ!」

「な、何デスカ!？」

「ギアを！ 君も巫女ギアを展開するんだ！」

「りよ、了解デス、ししよーっ！」

切歌が巫女ギアを展開するのを見て、俺はここだとばかりにセレナのアイコンを選択。

「セレナ、今からギアが変わるかもしれないけど、気にせず四人で力を合わせて悪意を祓い清めてくれっ！」

「え？」

セレナのアイコンを巫女ギアへ変える。するとセレナのギアが瞬時に変化した。

「えっ!？」

「「セレナも巫女ギアに（デスカ）っ?!」」

驚くマリア達だけど俺も驚きだ。何故ならそれは俺の知ってる巫女ギアのセレナじゃない。

いや、面影はある。だけど異なってるんだ。それに何故かミレニアムパズルも展開されたままだ。

……もしかしてこれ、ツインドライブ状態の巫女ギア!?

「姉様達、今はそれよりもっ！」

「っ！ そうね！」

「悪意を祓い清める時っ！」

「デスデス！」

「みんなでお揃いのギアなら、やれますっ！」

そう言っって四人は手を繋いだ。何をするつもりなんだろうか？

と、そこで聞こえてくるのは何と絶唱。マジか……。どうやら本気で怒ってるらしい。

厳かにも聞こえる絶唱の旋律。それを聞き悪意が怯えているような気がした。

だけど、あの悪意、前に見た時よりも大きくなって。どうやら着実に悪意も力を増しているようだ。

マリアを操るだけじゃなく乗っ取ったのも多分それが関係しているんだろう。

「「今です（だ）っ！」」

エルとヴェイグの声と共に解き放たれる絶唱のフォニックゲイン。その奔流が悪意を飲み込み、見事に消し去ってみせた。

巫女ギア四つによる絶唱だ。神獣鏡とは違った意味で魔を払う力に満ちていた事だろう。それにしても、悪意が遂に操るだけじゃなく乗っ取りまで可能になったとか怖すぎる。

「お兄ちゃんっ！」

俺が悪意の成長に恐怖や不安を覚えているとセレナが巫女ギア（ツインドライブモード）で駆け寄ってくる。で、その後ろからマリア達も近付いてきた。

「これ、どういう事なの？」

「只野、説明して。セレナは巫女ギアを展開出来るはずなのに」

「まさかの事にビックリデスよ」

「もしかして、これもそのゲームで？」

「うん、そういう事」

「じゃあ、もしかしてミレニアムパズルが展開されたままなのは……」

「ツインドライブのままギアを変化させたのか？」

「あー、うん。みたい」

「」「ええっ!？」」

ヴェイグの質問へ答えると五人が揃って驚きを見せた。驚きたいのはこつちも同じだけど仕方ない。まずは話をしようかな。とはいえ、俺が言えるのは以前エルが気付いた事から推理しての思いつきだっただけなんだが、なあ。

その後、少しだけエルやヴェイグと共に仁志が検証した結果、デュオレリック状態での心象変化ギアはステータスからしか実行出来ず、例えばマリアが自分の意思で特殊ギアを展開してもデュオレリックへ変化させるアイコンをタップされると強制的にギアが従来のそれへ変わってしまうのだ。

「……文字通りツインドライブって事かよ」

「そうなります。そうになると、これで展開した場合はデュオレリックではないと言う事です」

「エル、何を言ってるデスカ？」

「うん、意味が分からない」

「えっと、つまりですね？ 本来デュオレリックとは二つの聖遺物を制御する事を意味します」

「「ふんふん」」

「何で只野まで頷いてるのよ……」

年少組と共に首を動かす仁志に苦笑するマリア。それに構う事無くエルフナインの説明は続いた。

「ですが、このステータスからのデュオレリック状態は聖遺物が二つありません。本当のデュオレリックではないという事です」

「やっぱそういう事か」

仁志はさすがに成人だけあり、それでエルフナインの言いたい事に気付いた。

「どういう事デスカししょー」

「お兄ちゃん、教えて？」

「エル、答え合わせをして欲しいんだが」

「はい、構いません。僕もまだ仮説段階ですし」

「えっと、俺が冗談で言ってたツインドライブ。それがこの場合は本当に当たってたって事でいいんだよな？」

「僕はそう考えてます」

「そうか。切歌、調やセレナもよく聞いてくれ。要するに、このツインドライブアイコンはデュオレリックを再現すると同時に、その力を持ったまま別のギア能力を使用出来るって事なんだと思う」

「「えっ!?!」」

「……そう、そういう事。二つのギアを両立出来る。たしかにツインドライブだわ」

マリアはそう言って何故悪意がここまで仁志を狙うかを理解した。悪意はこの事をどこかで感じ取っていたのだ。仁志が自分達と絆を深める事で様々な力を使用出来るようになる事を。

「巫女ギアが今回の事で悪意へも有効だと分かった。こうなってくる」と、だ。悪意は神獣鏡だけでなく巫女ギアまでも警戒する必要が出て

くる。これで少しはこちらへの手出しを控えてくれるといいんだが……」

「そうですね。ただ、部屋だと神楽をやるには狭いです」

「デスよねえ。でもでも、巫女ギアでツインドライブが出来るなら悪意も怖くないデス！」

「じゃ、未来さんはどれも凄い事になりそう……」

「いやいや、多分だけど君達も凄い事になるよ。心象変化ギアが単純に強化出来るんだ。下手したらデュオレリックの力を乗せたままで」

その言葉に MARIA がふと思いついたように仁志へ尋ねた。

「ねえ、もしかして私は gangs ニールにもなれるのかしら？」

「いや、それは無理だった。多分、響のギアを貸してもらえば似た事が可能かもしれないけど」

「もしそうならその場合はツインドライブはどうなるデスかね？」

「おそらくですが使用出来ないでしょう。姉様は gangs ニールギアでデュオレリックを使用した事はありませんから」

「お兄ちゃん、ゲームでもないの？」

「さすがにそれはなかったなあ。でも、さっきの巫女ギアツインドライブみたいな事を可能にするなら、可能性はゼロじゃない」

「とにかく話はここまでにしましょう。興味深い話だけど、そろそろ食事を済ませて、早く汗を流して寝るべきよ」

このままだと仁志達がスマートフォンを囲んで話し込むと思つての MARIA の発言に、仁志はおろかエルフラインさえも反論する事無く従つた。

彼らも MARIA と同じ想像をしたのである。そして、そうなれば翌日自分達がどうなるかも。それに年少組全員が揃つて空腹を訴える体の声を発したのだ。

それを聞いて仁志と MARIA にヴェイグが笑い、すぐ後にセレナ達も笑い出す。

それはまさしく家族のようであつた……。

Dark Oblivion

「みんな異常なしデスね！」

切歌の言葉通り、未来を除いたその場の全員がギアを展開出来ていた。

まさかの一日二回マリアが悪意に襲われ、しかも二回目など演技さえしてこちらへ迫ってきた日の翌日、俺達は一人を除いて全員で集まっていた。

実は既に時刻は十時を過ぎていて、昼勤の未来はバイトへと出かけているためにこの場にはいないのである。

なら夕方にと考えたのだが、そうすると今度は響とクリスに切歌がバイト。故に一番人数が多いこの時間を選んだと言う訳だ。

「ヴェイグさん、どうですか？」

「……問題ないと思う。少なくとも嫌な匂いはない」

「良かったあ」

セレナが心から安心するようにそう言ってギアを解除する。そしてみんなも一斉にギアを解除した。

ちなみに未来はバイトに行く前にギアを展開したそうで、翼と奏日く雰囲気なども普段と変わらなかつたらしい。

「それにしても凄いやなあ」

俺は手に持ったスマホへ目を向けて呟く。

昨夜の悪意戦で発見した特殊ギアへの強制変化とツインドライブの能力。それを俺はみんながギア展開している間確認していた。

結果、やはりみんなのアイコンをタッチするとそれぞれの特特殊ギアが全て表示されていた。

ただやはりウェディングギアはなかった。グリッドマンギアやゴジラギアなどはあるのに、だ。

そして何故か響とクリスは未だにツインドライブが発動しない。アイコンは表示されているのに何故だろうか？

調は何の問題もなく発動したし、その状態で巫女ギアまで使用出来たって言うのに……。

「まさか只野さんが言っていたツインドライブという言葉が正鵠を射ているとは思いませんでした」

「ホントだよ。あたしもまさかバーニングゴジラになるとか思いもしなかったし」

そう、奏のゴジラギアツインドライブバージョンは、何と真紅のバーニングゴジラギアとなったのだ。多分だけどかなりの攻撃力を有していると思う。

翼はグリッドナイトギアツインドライブバージョンを展開。すると何と若干の禍々しさと共に装甲が増えてより重厚感溢れる姿となったのだ。

「私もツインドライブモスラギアがより強そうな感じになってビックリです」

「デスね。ししよー曰く調は鎧モスラっていう戦闘向きの姿らしいデスし、アタシのガイガンギアは最新作仕様らしいデスよ」

調と切歌は本人達も言うようにそれぞれより戦闘向きな感じへギアが変化した。

いや、本当に不思議だ。心象変化じゃないんだもんなあ。

「こうなると未来はどうなるのかしら?」

「未来さんの心象変化ギアってどういふのがあるんだろう?」

マリアは怪盗ギアツインドライブバージョン。で、まさかの神風怪盗みみたいな姿になった。

セレナも同じく怪盗ギアツインドライブバージョンが似たような姿になってビックリ。

そこで俺はぼんやりと察した。ツインドライブギアは俺のイメージがかなり影響しているんじゃないかって。

「何で私達は出来ないんだろう……」

「アイコンは出てる。なのに反応がないってのが気になるよな」

そして未だにツインドライブ不可な響とクリス。それどころか彼女達に関しては心象変化ギアへのステータス画面からの切り替えも出来なかったのだ。

ただ、何故か二人にだけイグナイトギアの表示があるんだよなあ。

マリア達には出てこないのに。

これにも何か意味はあるんだろうか？ 失われたはずのイグナイト。それが響とクリスにだけ他の心象変化ギアと共に表示される事に。

「でもまずは……なあ」

どこことなく沈む響と推理する事で少しでも気分を切り換えようとしているクリスを見て、俺はどう声をかけるべきかと考える。

実際俺もそこは気になってるんだ。何で響とクリスだけがツインドライブのアイコンが反応しないのか。

まるで依り代が二人に強い力を使わせたくないみたいにも思える。もしかして悪意が二人を重点的に狙ってるのか？

あるいは、実はもう悪意が二人に扮してる？ いや、ならギアを展開出来ないはずだ。

そもそも聖詠は本人の心で歌うものだったな。GXで戦いたくないって心がぶれた響は聖詠が歌えなくなったし。

「兄様、どうかしましたか？」

考え事をしてるとエルから声をかけられた。どうやらかなり物思いに耽っていたらしい。

「ああ、ちよつとな。響とクリスだけツインドライブが出来ない理由について考えてたんだ」

「そうですね。たしかに僕もそこは気になっています。出現したのに機能しないというのは妙だと思うんです」

エルの言葉に俺も頷く。使わせたくないなら表示させなければいいはずだ。なのに表示はさせた。そこに何か意味があるんじゃないだろうか？

そもそもだ。何故ゲージが上がると依り代の欠片の力が上がるんだ？

欠片は元々俺の使っていたスマホだ。その一部を砕いた物がみんなのギアへ組み込まれている。それがゲージの上昇で本体と同等の効力を持つ、らしい。

「なあエル。その、凄く身もふたもない事を言うんだけどさ」

「はい」

「何でそもそも俺のスマホが依り代になったんだろう？　というか、俺が勝手に依り代って言うってたけど、どうしてそんな力を与えられたんだろう？」

俺がそう告げるとエルは意表を突かれた顔をした。そんなに意外だったのか？

「そうでした。そもそもどうしてこれが依り代と呼ばれていたのか気にしていませんでしたけど、兄様が呼び始めたんですね？」

「ああ、うん。響が初めてこつちに来た時に部屋から出られなくなつててさ」

俺が夜勤明けで眠るから一人で調査へ行つてと冷たい対応をした後、響が玄関のドアを開けて外へ出ようと足を上げたところで動きを止めたんだ。

……ん？　足を上げたところで？

「ああっ!？」

「ど、どうしたんですか!？」

「ひ、響！　君が初めて来た時、動きが止まったタイミング、覚えてるか!？」

「え!?!　ええつと……アパートの玄関を出ようとして足を上げたところで……」

「ちよつと待ちなさい。おかしいでしょ、それ。どうして足を上げたところで止まるの?」

「デスデス。たしかスマホがある場所は動けるんじゃないんデスか?」

「どうやらマリア達は気付いたらしい。俺も今の今まで見落としてた。」

あの日、響は部屋を出ようとドアを開けて外へ出ようとした瞬間動けなくなった。

つまり、片足が部屋の外へ出た瞬間動けなくなった訳だ。体のほとんどを依り代のある部屋の中に入れてるのに、だ。

「片足を部屋の外へ出したから、ではないだろうか?」

「そういえば依り代なしの状態をあたしら三人とセレナ以外は経験してなかったか」

クリスの言葉にセレナが懐かしそうな顔をする。俺は知らないけど彼女が初めて来た時は翼が抱き抱えて運んだ事もあったらしい。

そこから切歌が一度経験してみたいと言い出したので、ならばと調とマリアも経験してみる事に。

三人がギアペンダントを外して家の外へ出ようとするのを俺は後ろから眺めていた。

「あつ、そうデス。勢いを付けてジャンプして出たらどうなるデスかね?」

「えっと、普通に考えたら着地した先で動けなくなると思うよ?」

「そうね」

「ふむふむ。ししよ〜」

「何となく予想してたよ。向こうで受け止めればいいんだろ?」

「デスっ!」

ニコニコ嬉しそうな切歌に苦笑しつつ、俺は靴を履いて先に外へ出る。

玄関のドアを全開に開けて、切歌はその場から思いつきり飛んで家から出ようとする。

「トオっ!」

両腕を振って勢い良く玄関から飛んだ切歌は、そのまま俺の方へ普通に向かってきた。

だが、俺はそこで気付いた。切歌の体が明らかに動いてないって。何せこのままじゃその伸びきったままで落下するからだ。

きつと切歌もそれを感じ取ったのだろう。不安そうな顔でこっちを見てきた。

「し、ししよー!」

「やってみるさっ!」

大きなグラサンをかけた赤い人のような事を言ってから、俺は中腰になって切歌の体を受け止めるようにして、そのまま後ろへ尻もちをつく形で座って勢いを殺す。

何とか受け止める事に成功したけど、これ体力作りする前だったらきつともつとヤバい事になってた気がする。

「し、ししよー、ありがとデス……」

「どういたしまして。で、どう？」

「えっと……動けないデス」

「そっか」

申し訳なさそうにする切歌に微笑み、俺はならばと調やマリアへ視線を向けた。

「二人共、足を玄関から出してみて？」

「は、はい」

「分かったわ」

恐る恐るな調と平然としているマリア。二人は片足を玄関から外へ出そうとして……

「う、動けない……」

「こ、こうなるのね……」

見事に片足を少し上げたまま動かなくなる二人を見て、俺はスマホを取り出してエルのスマホへ懐かしのワン切りをした。

すると少ししてマリアと調が足を動かして外へと踏み出す。そしてその後ろからエルが姿を見せた。

「っ!?! 動けるデス！」

「おっと……」

で、嬉しそうに抱き着いてくる切歌に思わず笑みが浮かぶ。ホントに人懐っこい子だよ。

「切ちゃん、そこまで。只野さんから離れて」

「ふえ?」

「切歌、貴方も子供じゃないのよ? 只野が困るでしょ」

「あつ……」

マリアの言葉に何かを思い出したかのように切歌が顔を赤くして俺から慌てて離れる。

ちよつとだけ傷付くけれど、切歌の恥ずかしそうな表情を見たら何とも言えなくなつた。

いや、その、可愛いからね。美少女が恥らう様はホントに絵になるな。

「兄様、やはり依り代の効果は建物内の場合その中へ限定されるようです」

「みたいだな。で、その依り代が近くにあるとその効果が建物限定じゃなくなるみたいだ」

「はい。こうなると効果の強弱が距離によってあるかもしれません」

「だな。でも重複はちよつと未知数か」

「ですね。まだデータが少ないのではつきりとした事は分かりませんが」

エルの言葉に頷く。マリアのギアペンダントは今やスマホと同じ効果だ。なのにそれが二つあつても効果範囲に変化はない。

もしかすればその数が増えれば別かもしれないが、ゲームのアイテムみたいなのだとすればその効果範囲を変える事は難しいかもしれないな。

でも最初の謎は解けてない。何故あのスマホが依り代になったのか。

響達異世界の住人にとってここが特異点なのは分かった。でも、どうしてそこでは自由に動けないんだろうか？

やはりこちらでは彼女達は二次元として描かれていたのが原因なのかもしれない。

いや、そうか。そう考えれば理解出来る。

二次元が三次元へやってきた。そうなれば当然次元が違う事で異変が起きる。昔ゲームで見た場合は、三次元から二次元へ行って奥行きを失うというものだった。

では、二次元が三次元へ来た場合はどうだろうか？ 元々ない要素が増える。そうなればその存在は不安定になるだろう。

「……それが行動不能って形になるんだろうな」

要するにその次元では存在出来ないか有り得ないとされるんだ。

これで以前の話と繋がってきた。どうしてみんなの外見が変化しないのか。きつと依り代が出来るのはこの世界でみんなが行動出来

るようにするぐらいが精一杯なんだ。

時間が停止した根幹世界などの響達が本来関わる場所。響達にとっては、そのこと似た状態にここは元からなっているんだ。

「エル、聞いて欲しい事が出来た」

「僕も兄様や皆さんの意見を聞きたい事があります」

「そっか。じゃ、一旦中へ戻ろう」

「はい」

灯台下暗しじゃないけど、俺は色々な事をおざなりにしてきた気がする。

足をしっかりと固めるべきだと、思う。悪意がその恐ろしさを増している今、俺達はせめて自分達の味方である事や物をしっかりと理解するべきなんだ。

「……って俺は思うんだけど、どうかな？」

「十分理解出来ません。こちらでは僕らは二次元だった。だからこちらへ来ると行動が出来ない。僕はそれにもう一つ考えを付け加えさせてもらいます」

「考え？」

ヴェイグさんが僕を見て首を傾げた。兄様の意見を聞いて思い出した事があつたからだ。

「はい。哲学兵装を御存じですか？」

「タダノ、知っているか？」

「えっと、たしか人の概念が力を持つみたいなのやつだよな？」

「はい、そういう認識で構いません。それがこの世界には働いているんだと思います」

そう、そう考えれば納得出来るんだ。

何故僕らがこちらへ来ても行動不能だけで済んでいるか。何故兄様のスマートフォンが依り代のような効果を持つに至ったか。

「悪意はこの世界から僕らに深く関わる『戦姫絶唱シンフォギア』を消去しました。ですが、それは響さんと兄様が出会った事で完全消滅とはなりませんでした。ここまではいいですか？」

皆さんが頷くのを見て僕はある仮説を語った。

それは、ここでは僕らは二次元の存在。つまり異次元人という概念が出来上がっていた事。

それが兄様との触れ合いの中で、唯一僕らの概念を支えている兄様の考えが変化し、僕らを実在の存在と捉えてくれるようになった。

あのゲージで依り代の力が上がるのはそれを意味しているんじゃないかと、そう思った。

兄様と時間を過ごせば過ごすだけ、その密度や濃度があればあるだけゲージが上がる。即ち実在性を得ていると考えればいい。

「考えてもみてください。僕らの世界でもそこで作られた創作物が目の前に現れたら、一瞬でそれを心の底から実在するって思えるでしょうか？」

「無理ね。そういう意味で言えば私達はここでゴジラやグリッドマンを見せられた。それで彼らがここでは創作物だったと知って驚いたもの」

「マリアの言う通りだ。そう考えれば、ゲージの意味はよく分かる。だが、何故それが上がると私達の力となるんだ？」

「それは、きつとこの依り代に元々あったゲームが理由ではないかと」「ゲーム、か……」

ヴェイグさんが腕を組んで兄様を見る。兄様は僕の話聞いて考え込んでいるみたいでさつきから黙りこんでいた。

「タダノ、何か気になる事でもあるのか？」

「え？ ああ、うん。今思い出してるんだけどさ、ゲームがスマホに復活したのって、悪意が君達へ深く忍び込んだからって線、ないか？」

その言葉に僕や姉様は息を呑んだ。そうだ。たしかにあの日、切歌お姉ちゃんと調お姉ちゃんが悪意に操られた。

「もしかして、あの瞬間に切歌と調は悪意に操られ始めていたの!？」

「可能性があると思う」

「ど、どうなんですか？」

「そ、そう言われてもデスねえ……」

「はつきりとは覚えてないし分からない。でも、私もその可能性があ

ると思う」

「ここにきて一気に色々な事が動いてきたね」

奏さんの言葉に僕は頷いた。もしゲームの復活が悪意の行動とリンクされているとすれば、やはりあのゲームは悪意の行動を阻止しようとする何かの贈り物と考えてもいい。

「待てよ？　なあ、悪意がこつちへ手を明確に出し始めたのって、あのゲームが出てきてからだよな？」

クリスさんの言葉に僕は思わず頷いた。そうだ！　そういう事なのかもしれない！

「兄様っ！　姉様は操られるじゃなくて乗っ取られていたんですよ！？」

「あ、ああ……」

「ゲージが上がり切ると、ここでの存在が完全なものになるんじゃないでしょうか？　でもこの世界の住人ではないから悪意は容易に入り込めるようになる。こう考えれば、姉様を乗っ取った悪意の言葉の意味が通りますっ！」

やっと簡単に入り込める体を手に入れたと思えば。それはそういう意味だったんだ。

「って事は何？　あたし達もゲージを上げ切ると悪意の好きないようにされ易くなる？」

「可能性は高いかもしれないわ。実際私はそうだったもの」

「もしそうだとすると……」

「依り代がなかった時の私やクリスちゃんが何もされなかったの、納得出来ます」

「だな」

その言葉を聞いて気付いた。もしかして、依り代の欠片をギアへ埋め込んだのは悪手だったのではないかと。

だって、それがなければおそらく悪意は皆さんへ手を出せなかったはずだ。

「で、でもアタシ達はゲージがないに等しい時に操られたって聞きました！」

「そうです。それはどう説明するんですか？」

「簡単だよ。ギアペンダントに依り代の欠片が組み込まれた瞬間から、君達の存在はこの世界で不安定ながらも実在する事になった。スマホの依り代じゃ安定性がないけど、肌身離さず着けているギアペンダントなら安定性もある」

「もしくは、欠片だから依り代としての安定性が弱くて付け込まれているかもしれない」

「難しいところだが、俺はこう思うぞ。欠片を組み込んだ事は悪い事よりも良い事が多いと」

ヴェイグさんがそう言って僕を見つめて笑みを浮かべた。

「悪意はきつと欠片がなくてもどうにかして俺達へ手を出してきたはずだ。エル、だから気にするな。お前のした事はツインドライブや悪意の企みを阻止する事に繋がってるんだ」

「ヴェイグさん……」

僕の膝へ手を置いて優しく笑いかけてくれるヴェイグさんは、とてもあつたかい。

「そうだな。ヴェイグの言う通りだよエル。それに、だ。これはまだ確証がない事だし、そこまで重く受け止める事はないさ」

「ええ、そうね。エル、今はつきりしてるのは貴方がやってくれた事が良い事へ繋がっている事よ。ツインドライブもこの世界で私達が独自に動ける事もね」

「兄様……姉様……」

二つの手がそれぞれ優しく僕の頭を撫でてくれる。その温もりで視界が滲む。

それに皆さんが驚くけど、すぐに優しく微笑んでくれる。

「マリア、今後はあんたが一番気を付けないといけないね」

「……そうなるわね。でも、もしゲージの染まり方が高い程悪意につけ込まれるとすれば、よ？　もう全員似たような危険度と言えるわ」
「そうだね。私も気を付けないと」

姉さんがそう言って僕の手を握る。

「エル、私、悪意に負けないように頑張るから。だから今までみたいに

支えてね？」

「姉さん……はいっ！」

もう涙は止まっていた。エルである僕にとって兄様達は家族になつてゐるからかもしれない。

「そうだ。あの、只野さん。ちよつといいですか？」

「ん？」

「明日、あんた勤務だろ？　で、あたしらは揃つて休みだ。だから明日のあんたの晩飯はこつちで引き受けてやるよ」

「なので明日はゆつくりお昼寝してください！」

響さんとクリスさんがそう言うのと兄様は若干迷つてゐた。みた。みた。みた。

その視線を姉さんや僕へ少しだけ向けて、最後にチラつとだけ姉様へ向けた。

「いいんじゃない？　実際疲れてるように見えるわよ」

「……そっか。じゃ、明日は晩飯をクリス達に甘えさせてもらうよ」

「おう」

「はい」

兄様がそう言った時のお二人はとても嬉しそうに見えた。

そこで僕は気付いた。僕らが兄様と一緒にご飯を食べるのが楽しいように、響さんとクリスさんもそれを楽しんでたんだって。

僕が姉様達とここで暮らす前、兄様は翼さん達が暮らしている部屋で夕食を共にしていたし。

「響さん達も今度から一緒に食べられたらいいのに……」

僕が思つた事を姉さんがぼそつと呟いた。それに僕が顔を動かすと姉さんと目が合つて二人で困り顔をする。

テーブルに座れる人数は限度があるし、そもそも響さん達は切歌お姉ちゃんと同じような時間帯に働いているから。

それに調お姉ちゃんや姉様がしているご飯の支度風景を思い出すと、二人分増えるとなると大変さが増す事もある。

「もつと大きな家が必要ですね」

「そうだね」

いつそみんなで暮らせるような広い家なら。

そんな風に思つて僕が姉さんと話し始める中、ヴェイグさんは欠伸をして切歌お姉ちゃんからもらったベッド専用クッションへと横になつていた。

「ヴェイグ、昼寝かい？」

「ああ、切歌がくれたこれはとても寝心地がいい」

「奏、私も調べたけど大きい物は中々の値段がするんだよ、それ」

「へえ、これぐらいなら安いのか？」

「2千円しないデスよ」

そこから切歌お姉ちゃんが翼さんと奏さんと話を始めて、ヴェイグさんはそれを聞きながら目を閉じる。

姉様は買い物へ行こうとしていて、調お姉ちゃんがそれについて行こうとした。

それを見た姉さんが兄様の部屋の掃除に行こうと準備して、響さんとクリスさんと一緒に出て行こうとしてるみたいだ。

つて、あれ？

「兄様も部屋へ帰るんですか？」

「ん？ いや、セレナが部屋の掃除をしてくれるからそれが終わるまでは寝れないだろ？ で、考えたい事もあるから散歩でもしようかなつてね」

「僕も一緒に行つてもいいですか？」

何となくもつと兄様と話をした。色々聞きたい事もある。

「うーん……気持ちには嬉しいけどエルと二人で歩いてるとなあ」

「ならあたしや翼も同行するよ」

「そうですね。それなら問題ないかと」

「じゃあお願いするか。切歌も来るか？」

「モチのロンデスよっ！」

こうして僕は兄様達と散歩に行く事に。ヴェイグさんは既に寝ていたので姉様達が鍵を持ってみんな揃つて外へ出た。

僕は兄様に肩車してもらかう事になり、あのプールでもらった事を思い出して嬉しくなった。

あの時、一瞬だけど頭の中に思い出が浮かんだんだ。キャロルがパに肩車されてるような、そんな光景が。

「それで、何か俺に聞きたい事があるんじゃないか？」

歩き始めてすぐに兄様がそう言ってきた。本当に兄様は優しい。だからその優しさに甘えようと思う。

「えつと……悪意は何故時間を止めたのでしょうか？ 不安や恐怖を煽るならそうしない方がいいはずですよ」

そう、ここが僕には気になってる。キャロル達はそうじゃないかもしれないけど、普通の人々なら悪意がノイズを出現させたりするだけでかなりの恐怖や不安を感じるはずだ。

「ああ、それか。根幹世界はゲートの関係で納得出来るけどって事だな？」

「はい」

「多分だけど、自分の力を増す事よりもこちらへの協力を容易にさせない事を重視してると思うよ」

「有り得ますね。何せ世界蛇を倒す切っ掛けは奏の世界のブースターでした」

「そっか。あいつ、あたし達の連携をそこまで警戒してるんだ」

そうか。悪意は優先順位の第一に僕らへの妨害及び孤立があるのか。

「じゃあじゃあ、何でゲートを隠したんデスか？ 時間を止められるならそれを隠す必要はない気がします」

「それはこっちへの心理的影響を考えたんじゃないか？ 実際セレナも君達もナスターシャ教授の事を考えて気持ちいを乱しただろ？」

「あうっ、そ、そう言われればそうデス」

「で、カオスビーストを倒してゲートを復活させたと思えば……」

「そこは時間が停止されていてぬか喜び、か。本当に底意地の悪い相手です」

翼さんの言葉に僕は頷いた。本当に悪意はその名の通り皆さんの心を狙ってくる。

兄様がヤプールと同じだと言ってたけど、本当にそうだと思う。悪

意は本物の悪魔だ。こちらの心を弄び、踏み躪り、嘲笑ってくる。

「それにしても、どうやって悪意は時間を止めてるんデスかね？ そんな力使ってたらアタシならヘトヘトになりそうデスよ」

「あ……」

その切歌お姉ちゃんの言葉に兄様が足を止めた。僕も思わず声を漏らしてしまった。

「に、兄様っ！」

「ああ、すっかり失念してたよ。悪意がどうして大きな動きを見せないか。それは現状の維持コストが高いからかもしれない」

「はい！ 僕らと関わりのある平行世界全ての時間停止とゲートの封鎖。これに相当な力を注いでるはずですよ」

そして、それから逆算すると……

「待つてよ。じゃあ何？ あたし達がゲートを解放していけばいください、悪意はその力を使う部分が減るって事？」

「何と言う厄介さだ……」

「アタシ達が頑張ったら悪意にも有利になるって事デスか？」

「そうなるかもしれないって事だ。思えば俺が響と出会った頃から既に互いの世界は時間の流れがおかしかった。あれも、もしかしたら悪意がゆっくりと今のようになる準備をしていたのかもしれない」

言われてハツとした。そうだ。いきなり時間を停止するなんて難しいはずだ。

悪意はもう響さんが兄様と出会った時には動き出していた。いや、もしかすると出会った事を知って時間停止へと動き出したのかもしれない。

本来であれば消滅させられたはずの僕らがそうできなかった事を知り、早々に次の手を打ったとすれば納得出来る。

「こうなると次の悪意が打つ手を考える必要がありますね」

翼さんのその一言に僕は思考を巡らせる。悪意が狙う事は僕らへの復讐。そうなると一番適切なのは兄様をどうにかして排除ないし記憶を消去しての僕らの消滅。

と、そこで思い直す。僕は効率ばかり考えてる。悪意は負の感情の

塊だ。その行動指針は効率ばかりじゃない。

あのヤプールは自分が復活するために侵略者の心を利用した。モネラ星人は地球人の技術を利用して絶望や恐怖を見せつけた。

なら、悪意もそれと似たような事をするはずだ。僕らの心を折ったり、あるいは希望を目の前で奪ってしまうような、そんな事を。

「次の手、ねえ」

「あ、あのっ！」

僕が声を出すと皆さんが顔を向けてくれた。

「おそらくですが、悪意は僕らの心を折るような事をするのではないのでしょうか？」

「心を、折る……」

「ダイナが死ぬところを見せたみたいにな、デスカ？」

「はい。悪意は一見効率的にも見えますが、その根底にはおぞましい怨念が息づいています。なら、あっさり僕らを消滅させて満足するとは思えないんです」

「今は特にそうだろうな。何せここまで抗ってるんだ。忌々しく思ってるに違いないよ」

兄様の意見に切歌お姉ちゃん達が納得するように頷いて考え込み始めた。

「今は歩こう。で、翼達の部屋近くの公園で話そうか」

その言葉で兄様が歩き出して切歌お姉ちゃん達も動き出す。

僕は普段とは違う視点で前を向きながら考える。悪意が狙う僕らの心を折る方法。きつと一人一人へ手を出してなんてしない。一気に全員が絶望したりあるいは心を折る事をやろうとするはずだ。

そう考えると昨夜の姉様の一件はそれに近いかもしれない。一番の年長者である姉様は悪意に乗っ取られた。これが持つ意味は重い。

もし悪意が姉様の振りをして僕らと接し続けたら、今頃どうなっていたか分からない。

見破れたのは兄様の機転によるものだってヴェイグさんから聞いた。

その話だと兄様が機転を利かせて姉様らしからぬ言葉を引き出し

たみたいだけど、それが出来たのも僕らの事がある程度深く知る兄様だからだと思う。

そう考えると例え悪意が皆さんを乗っ取ったとしても互いの事を深く知り合っている相手がいるなら何とか見破れるかもしれない。

でも、そこでふと思った。もし、もしも悪意が兄様へ入り込んだとして、それを見抜く事が僕らに出来るだろうか。

「兄様」

「おっ、何か思いついた？」

どこか軽い感じの言い方の兄様だけど、これはきつと僕らの雰囲気为重くならないようにとしてるんだと思う。

「はい。その、兄様の事を教えてください」

「俺の事？ どうして？」

「その、ないと思いたいですしさせるつもりもありませんが、もし悪意が兄様を操った時に見破るために」

「……成程なあ」

そう言つて兄様はどこか複雑な表情をした、と思う。僕からは残念ながら見えなかった。

「……………とりあえず、今は公園へ行こう。あと、エルの質問への答えはみんないる時にするよ」

どこか明るさが減った声で兄様はそう言った。そこからしばらく僕らに会話はなかった……。

公園へ到着し、ベンチにエルフナインと切歌に挟まれる形で仁志が座り、その近くに奏と翼が立って会話は始まった。

「悪意は俺を利用してみんなを操るか言う事を聞かせる気かもしれない」

仁志が語つた悪意のやりそうな手口。その内容こそ詳しく語る事をしなかったか、四人はそれぞれに察しを付けていた。

（只野さんを殺されたくなければ……って感じか）

（防人である私の手で守りたい者を斬ってみると、そう迫るのだろうか）

(あの映画のダブルライダーと同じデス。したくない事を無理矢理させられるデスよ……)

(意識を残したまま、体だけ操るかもしれない。あるいは、一時的に思考さえも操作してから戻すかもしれない)

浮かぶ気持ちは揃って嫌悪。悪意のやり口はこれまでの事で分かっていてからこそ予想も出来るし気分も悪くなる。

仁志がそれを表現したのなら吐き気を催す程の邪悪と言っただろう。それほどまでに悪意のやり方は怒りを覚えるものだった。

「で、これは俺の推測なんだけど……」

そこで一旦仁志は言葉を切った。迷ったのだ。これを言う事がどういう意味を奏達へ与えるかと。

(自惚れじゃなければ奏と翼は俺へ異性としての好意を持ってくれる。特に奏は頬にだけどキスをしてくれた。マリアの言葉を借りるならふざけてやる事じゃない。なら……)

悪意に操られたはずのマリアが正気に戻っての言葉を思い出して、仁志は奏を見ないようにこう告げた。

「悪意はみんなの体を操るか乗っ取るかして俺へ侵入しようとしてる。おそらくキスという形で」

「っ!?!」

奏と翼が息を呑む。それは自分がそうしたいと思う気持ちさえも、下手をすれば悪意の仕業かもしれないと言う可能性が生まれた瞬間だったからだ。

「き、キス、デスか?」

「ああ」

「粘膜的接触、ですか。有り得ます」

「実際悪意が乗っ取ったマリアは俺へそれらしい事を迫ってきた。だから間違いないと思う」

「デスか……」

一方切歌はやや顔を赤くし、エルフナインは平然とそれぞれに納得していた。

「じゃ、じゃああアタシがここでししよーにキスしたいって思ったら、そ

れは悪意の仕業って事デスか？」

どこかドキドキしながらの切歌の疑問は奏や翼が聞きたくても聞けないものだった。

だからか二人はそれを聞いた仁志の表情へ目を向ける。彼は、どこか苦しそうな顔をしていた。

「難しいけど、ないと言い切れないのが厄介なところだよ。実は奏達には黙ってたんだけど、一度マリアは遊園地へ入る前に神獣鏡で浄化されてるんだ」

「「えっ!?!」」

「なのに帰宅して少ししたらまた悪意に操られた。しかも今度は完全に乗っ取られるレベルで。要は悪意は少しでも入り込める隙を見つけたらすぐにでも忍び込んでくるって事だ」

そのまとめに四人は沈黙するしかなかった。どこかで分かっていた事ではある。それでも、同じ日に二度も悪意が動いた事は衝撃だった。

しかもそれがゲージを最大値まで上げたマリアである事。そこから居間での会話を思い出せばマリアの不安は現実味を増した。

「だから、そうだな……。エルの質問の答えの一つは、俺がキスをねだったら悪意に操られてるんじゃないか？」

どこか遠い目をしてのその言葉に四人は返す言葉を失った。

理解したのだ。それがどういう想いから告げられたものか。彼は、仁志は自分から響達へキスを迫る事は決してしないと言外に言い放ったのだ。

「し、ししよー……」

「何だい?」

「そんな、そんな悲しい顔しないで欲しいデス。ししよーが何を思っ
てそう言ったのかはアタシには分からないデスけど、絶対良くない考
えからだって分かります」

「切歌……」

今にも泣きそうな顔で切歌は仁志の顔を見つめる。その悲しそうな表情に仁志は申し訳なきように笑みを返してそっと切歌の髪を撫

でた。

「アタシ、ししよーがそんな顔するの嫌デス。ししよーがニコニコ笑ってるのがアタシは大好きなんデス」

「……そっか。俺もそうだよ。切歌がニコニコしてくれているのが好きだ」

「なら、一緒にニコニコするデスよ。アタシはここに来てししよーから色々な事を教えてもらいました。そのおかげでアタシは前よりも明るく元気になりました。だから今度はアタシがししよーの笑顔を増やす番デス」

「笑顔を増やす、か」

「デス。なので……」

キヨロキヨロと周囲を見回して人がいない事を確かめるや切歌はベンチから立ち上がり、トタトタとその場から少しだけ離れる。

そして仁志達の前へ移動すると深呼吸を一つして……歌い始めたのだ。アカペラで歌われるのは「ウルトラマンゼアス」だった。

「元気だったらきつとあるはず！」

エルフナインもコールを入れて切歌の歌を盛り上げる。それを見て仁志も途中からコールに参加、翼と奏はそんな三人を微笑ましく見守る中切歌は歌い終えた。

「どうデスカししよー。勇気と元気、出て来たデスカ？」

「ああ、ありがとう切歌。そうだな。愛の力が今はいまいち弱いかもしれないけど、信じてみる事にするよ」

「デスっ！」

満面の笑みを浮かべる切歌に仁志も同じように笑顔を返した。実はこの時仁志の中で一つの自問が浮かび上がっていた。

（俺は自分のためにとゲージ上げを考えていたけど、それは間違ってるんじゃないだろうか？ 本当にするべきは、考えるべきは、逃げる事じゃなく立ち向かう事じゃないのか？）

切歌の歌ってくれた歌の力。それが仁志の中の焦りや弱さへ訴えかけたのだ。今のままでいいのか、と。

いくら好意を寄せてくれているからと、それを望んでいるからと自

分の気持ちを誤魔化して動くのは駄目なのではないか。そう仁志は思い始めていたのである。

「今の歌もウルトラマン?」

「え? ああ、うん」

「ゼアスって言うんデスよ。で、真っ赤な顔の駄目駄目ウルトラマンなんデス」

「駄目駄目ウルトラマン?」

そこから話はゼアスの事へと変わり、仁志が簡単にあらずじを語る
と奏と翼も興味を惹かれた。

何せこれまで見てきたウルトラマンは誰もが立派なヒーローをしていた。そこへきての潔癖で光線技さえも満足に撃てないとくれば逆に興味がわくと言うもの。

「じゃあ切歌、お金は出すから1と2、借りてきて」

「りょーかいデスっ!」

「でも切歌お姉ちゃん。今度の集まりは兄様のお誕生日会じゃ?」

「あっ!」

その瞬間しまったと言う顔をする切歌と違う意味でしまったと言う顔をする仁志。そしてその反応をすっかり奏と翼が見ていた。

「成程……暁だけでなく私達まで使って会の内容を変えようとするとは……」

「考えたね先輩。危うく乗せられるとこだったよ」

「い、いや、別に俺はそんなつもりは……」

「しかもアタシの場合は延滞料が倍額デス! 返却を理由にごーいんに誕生日会をゼアス鑑賞会に変えるつもりでした!」

「な、何の事かな?」

「兄様あ……」

恨めしそうなエルフナインの顔を見て仁志は顔を背ける。

だが誰もがどこかで気付いていた。これは仁志なりの場の空気の変え方なのだ。

(一気に場の雰囲気がいっつも感じになったね。つたく、只野さんは……)

（ふふっ、やはり今の私達にとっては只野さんが一番のムードメーカーだね）

（ししょーはホントに仕方ないデス。こうなったら盛大にお誕生日会を盛り上げるデスよっ！）

（兄様が笑うと皆さんが笑う気がする。逆に兄様が沈むと皆さんが沈む。そうか。響さんと同じだ。その場の空気を作る存在なんだ）

内心では微笑みを浮かべつつ、表情は文句を言いたそうなものへと変えて仁志へ迫る四人。

そんな四人に囲まれて仁志は困ったような、でもどこかで嬉しそうな顔を浮かべるのだった。

「それじゃ、これ預けますね」

「うん、明日返しに来るから」

そう言ってセレナちゃんから私は仁志さんの部屋の鍵を受け取る。

今日はセレナちゃんのお手伝いはお休み。仁志さんはもう部屋で寝ている。そして私とクリスちゃんはお休みだ。

セレナちゃんへ手を振って私は来た道に戻る。心なしか心が弾む。

だって、いよいよだからだ。私とクリスちゃんが、あの時仁志さんと初めて生活した状態に戻る日。それが今日だから。

——今日、仁志さんと結ばれるんだ。告白して、抱き締めてもらって、キスをして……。

そう、そうだ。今夜私のもやもやを無くす。仁志さんへハートの全部でぶつかってみせるんだ。

——きつと仁志さんは困るだろうけど、嫌なはずはないもん。だって男の人、だし……。

うん、あのプールで見た。仁志さん、私達を男の人の目で見てた。見て、くれた。

——エッチな事も許してあげないと。だって、仁志さんへそういう事は彼女を作ってしてくださって言ったの、私だし……。

思い出す。あの日、仁志さんは言ってくれた。今は私達の事で精一杯で彼女なんか作る暇なんてないって。

だから私になってあげればいいんだ。そうすれば仁志さんの心配も不安もなくせる。

エツチな事だつて、してあげる。彼女になるんだもん。だったらそういう事もしてあげないと。

「そ、そうなつたら場所は仁志さんの部屋かな？ クリスちゃんがバイトの時に、とか」

考えると顔が熱くなる。あー、早く夜にならないかな？

そんな風に考えてるともうアパートが見えてきた。もう慣れた場所になつたんだなあつて、そう思いながら私はクリスちゃんが待てる部屋へと向かう。

「ただいま〜」

「おう、帰ってきたか」

「うん」

「で、もらってきたか？」

「当然。ほら」

私が合鍵を見せるとクリスちゃんが小さく頷いた。これで準備はバッチリだ。

「うし、じゃ買い物行くぞ。あの人に美味しいもん食わせてやりたいしな」

「うん！」

そう、今夜は私達二人でご飯を作る。メインはクリスちゃんだけけど私も一品は作るんだ。

仁志さんへ手料理食べてもらいたいし、美味しいって言って欲しい。

二人揃って外へ出て向かうのは近くのスーパー。こうやって二人で行くのは結構珍しい。

いつもはクリスちゃんが一人で行くからなあ。たまに私も行くけど一人でだし。

何故なら私達は同じお店の同じ時間帯で働いてる。だからお休みが重ならない時の方が多い。まあ買い物に行くのは朝やお昼だから二人で行く事が出来ない訳じゃないんだけど、お掃除とかもあるから

それを分担するとどうしても買い物は一人で行く事になる。

「今夜はどうするの?」

「匂いのキツイもんは使えねーからなあ。そういや、あの人ってレバーはどうだ?」

「ん〜……どうだろう? そういえば只野さんのそういう話あまり聞かないなあ。あつ、でも好きな物なら知ってるよ」

あのお家デートで話した事の中で聞いたもん。

「そりゃいい。何だ?」

「えつと、海老でしょ。カニと」

「待て待て。材料じゃなくて料理とかはねーのかよ?」

「料理だと……カレーにハンバーグって言ってた。作るの簡単だからって」

「かあ〜……つんとあの人は」

クリスマスちゃんが呆れた顔で下を向いた。私も初めて聞いた時は同じ事思った。

仁志さん、味が好きとかじゃなくて自分で作れてしかも簡単かどうかが理由だったもんなあ。

「まあいい。なら海老と一緒に適当な野菜をカレー粉で炒めてやるか」

「おおつ、美味しそう!」

「で、お前は どうする?」

「そうだなあ……ならハンバーグ?」

「ん。決まりだな。どうせなら山芋も買って短冊に切って食わせてやるか」

「うん」

私達は今夜仁志さんに精の付く物を食べてもらう。それで性欲を刺激して、二人で迫るんだ。

——私達じゃダメですか?

きつと普段の仁志さんならダメって言うかもしれないけど、エッチな気持ちが強くなってたらいけるはず。

そのためにご飯を仁志さんの部屋で作って食べてもらうんだから。

そう、それなら隣の部屋は空っぽだ。

あの日、クリスちゃんに教えてくれた計画。最近仁志さんの時間が減ってる私達。それを少しだけ前みたいに戻そう。それがクリスちゃんの言い分だった。

実際私も思った。特にマリアさんと奏さんが仁志さんと時間を共有してるって。

最初に仁志さんと生活を始めたの、私達なのに。一緒にご飯食べて、笑い合ってたの、私達なのに。

——だから取り戻すんだ。あの時間を、笑顔を、あの人を……。

合鍵を使って久しぶりのあの部屋へと足を踏み入れる。ああ、ホント久しぶりだぜ。

「まだ寝てる、ね」

「ああ。耳栓をしてるだろうし、こっちが起こすまで寝てるだろう」
見慣れない布団で眠る仁志を見てあたしはイラツとするのが分かった。

それだけじゃねえ。あたしの知らないものが色々増えてやがる。あの二つのクッションは何だ？ その布団は何だ？

そもそもそのアイマスクと耳栓は「誰」からもらった？

——気に入らねえ。すっかり妻気取りだ。あたしの仁志だったのに……。

ホント胸糞悪いぜ。でもあたしも悪い。もっと早く気付いてやるべきだった。

アイツが仁志へ渡す前にあたしが贈ってやるべきだったんだ。世話になってる礼だって、そんな感じで。

——まあいいさ。どうせ今夜で仁志は誰が一番嫁さんに相応しいかを気付くんだ。アイツでも、あのバカでもなく、あたし様だったな……。

へへっ、あのバカは何も疑う事無く信じてるみてえだけど、最後に仁志に選んでもらうのはあたしだ。

あのプールで確信した。仁志はスケベな心を必死に抑えてる。で

もそれがそろそろ限界だ。

そんな調子じゃ悪意にそれを利用されかねない。だからあたしがしつかり、その、処理してやるんだ。

「じゃ、飯は頼むな」

「うん」

この部屋にある炊飯器はあたしが元々使ってたやつのままだった。それがあたしを忘れてないって感じで妙に嬉しくなっちゃう。

さて、じゃあ始めるとすつか。今夜の目的は仁志があたしにスケベな事をされる事。そうすれば今後そういう気分になった時、あたしからへ甘えるか思い出す。

そうなれば自然と仁志はあたしらを意識する。そこまできれば後は、その、本番までさせりやいいだけだ。

「クリスちゃん、一ついい？」

「あ？」

「いや、シャワーとか浴びなくて良かったかな？」

あたしが海老の殻を向いてると米を研いでたあいつがんなバカな事を言ってきた。

「ひ、必要ねえつての。こ、今夜はそこまで絶対ならねーから」

「そ、そっか。うん、そうだよね」

まったく、普段バカな癖にこういう時だけは妙に聡いな。

と、そこで思い出した。そういうやこいつはこっさり自分だけ二人きりの時の呼び方をやってたやつだった。

「……なら、あたしのやる事もいいよな」

小さく呟く。そうだ。最初に仁志との二人だけの秘密をやったのはこいつだ。ならあたしが似た事をやっても文句は言えないはずだ。

——最低でもキスだけはしてやるんだ。あたし様の想いのこもったキスを……。

そうだ。絶対それだけは済ませてやる。それでしつかりと意識してもらおうんだ、仁志に。

背に切れ目を入れて、背ワタを取って、塩水でちゃっちゃと洗って水気を拭けば海老の支度はほぼ完了。

野菜の支度へ取り掛かるとすつか。つと、その前に一応あのバカの確認をしとく。

「よし、これでお米はOKだね」

どうやらさすがに米研ぎは出来るらしい。んじゃ、続きをやると思いますか。

用意したブロッコリーやしめじにしいたけをそれぞれに合わせて下準備。茹でたり、切ったりとしている間に気付けばあいつはハンバーグの準備を始めてた。

この分なら大丈夫か。そう思ってあたしは自分の事へ集中する。

また美味いって言ってくれっかな？ 笑ってくれっかな？

——アイツの飯よりも美味いって言ってくれねーかな？ いや、言わせてみせる……。

一瞬マリアの顔が思い浮かんだ。どこか勝ち誇るような、そんな顔をしたアイツが。

ああ、ムカつく。こんなに胸の中がムカムカするのはあの時以来だ。

仁志が先輩を名前で呼んで、あたし以外の二人と仲良くしてやがった時と同じぐらい気分が悪い。

いや、下手したらあの時以上だ。それにあの時は仁志にイラついてたけど、今はマリアの奴にイラついてるし。

——本気で腹立つぜ。あいつらはあたしがあのバカと一緒になんて話をしても、どこか疑うような目をしてたってのに。それがどうだ？ 今じゃ仲良くして、そんな事はなかったみたいに振舞ってやがる……。

ホントだ。本気で苛立つ。あたしだって最初はそうだった。けどあいつにだけ面倒事を押し付けるみたいで気が引けて、仁志と出会った。

そこで仁志が思ったたような奴じゃないって分かって、あたしとバカの二人でバイトをして暮らしを助ける事になって……。

「なあ」

「ん？ どうしたの？」

「三人でき、初めてここで食った飯、覚えてるか？」

あの初めてのバイト終わりで買った弁当。三人で同じもんを囲んで食べた記憶。あつたけえ時間。

それを思い出しているあたしの言葉にあいつはすぐに笑顔で頷いた。

「勿論。美味しかったよね、只野さんスペシャル」

「おう。あの頃はさ、今よりもキツイ状況だったし辛い事や面倒な事もあつたけど、楽しかった」

「……そうだね。あの頃は私とクリスちゃんに只野さんの三人で支え合ってた」

そこであたしとあいつは手を止めた。

——なのに、今じゃそのあたし(私)達が一番遠ざけられてる……。

苛立ちが生まれる。憎しみや怒りが沸いてくる。くそつ、なんだつてんだよこの感覚は。

「でも、それも今日までだ。今夜、あたしらは取り戻す」

「そうだよ。今夜で取り戻すんだ」

「あの頃の時間を、あつたかさを、もう一度」

そこであたしらは笑った。声もなく笑った。ああ、そうか。やつぱあたしとこいつは同じだ。同じ気持ちなんだ。

後からやってきた癖に、最初は拒絶してた癖に、今じゃそんな事はなかったみたいにしてる奴が一番でかい顔してるのが気に入らねーんだ。

何がゲージMAXだ。てめえがエル達と一緒にいなきやあたしかこいつが真つ先にそうなつてたつての。

——ここらで見せてやるんだ。本当に仁志と深い絆を作つてたのが誰かを……。

「ん……う？」

仁志が目を覚ましたのはスパイシーなカレーの香りがしてきた時だった。

耳栓のためにぼんやりとしか音が聞こえない事に気付き、彼は耳栓を取ってアイマスクを外す。

「お〜……」

まだ若干寝惚けている目が見たのは、エプロンを付けて台所で料理をしている二つの背中。

まるで若妻か新妻のようなその背中に何とも言えない気分となりながら仁志は大きく体を伸ばす。

「ん〜……っはあ」

まだ気怠さが残っていない訳ではないが、それでも自然と起きたに近しい事に仁志は満足そうに笑みを浮かべるとスマートフォンを手にとった。

「……七時過ぎか」

普段であればまだ食事とはなっていない時間であった。ただ昨日のこの時刻はマリア達と食事をしていたが。

「この匂いがするって事はカレー、か？」

ポツリとそう呟いて仁志は布団から出るとフラフラと二つの背中へ近付いていく。

するとその気配に気付いたのか二人が揃って振り返った。

「起きたんですね（のかよ）」

「あ、うん。おはよう」

「おはよう（ございます）」

にこりと微笑む二人の反応に、仁志は一瞬ではあるがまるで夫婦のようだなと感じて頬を掻いた。

マリアとのやり取りに似ているがやはりどこか違うそれは、言うなれば夫婦よりは同棲カップルという雰囲気だろう。

ただ仁志はそこまで思わず、ただただ愛らしい美少女二人が自分のために食事を作っているという事実喜びを覚えていた。

（響まで料理してる……。おいおい、遂に四人目の手料理だぞ。九人の装者の内半分から飯作ってもらえたとか、本当に俺死ぬんじゃないの？）

縁起でもないで口には出さないが、仁志はそれぐらい感動していた。何せ三十年生きてきて肉親以外の女性に料理を作ってもらったのがこの半年に集中しているのだ。

それも、クリスを筆頭にマリア、調、響である。自分のためだけに女性から食事を作ってもらえるなど、一年前には信じられなかったと言っているのだから。

「で、今夜はカレー？」

「いや、違うぜ」

「もうすぐ出来ますから待っていてください」

「分かった」

そこで仁志は後ろを振り返って見慣れぬ物に気付いた。それは折り畳み式のテーブル。かつて彼が使っていた物に似ている物だった。

「これは？」

「あたしらの部屋から持ってきたんだよ」

「さすがに今日はちゃんとした状態で食べてもらおうと思ったんで」

「そういう事か。色々すまないな。ありがとう」

仁志は気付かなかった。それが二人の根底にある「あの頃」への強い思いから選ばれた事を。

ただ、偶然それを選んだのではないだろうぐらいには思っていない。

(普通のテーブルよりもこっちの方が色々都合がいいからなあ)

そんな風に思いつつ、仁志は布団を静かに畳むとまずテーブルを移動させる。

それから来客用のクッション二つを配置し、自分は大きな座布団代わりに使っている古布団を移動させて座った。

やがて良い匂いと共にテーブルの上に皿が三つ置かれる。

「おおっ！」

一つは響お手製ハンバーグ。かかっているソースも焼いた後のフライパンへケチャップなどを入れて作ったものなので全て響によるものだ。

もう一つはクリスマス製作の海老と野菜のカレー炒め。シンプル故に香りなどが食欲をそそる一品となっている。

最後の一つは山芋を短冊切りにした物へ醤油がかけられた物だった。刻み海苔が乗せられていて、白と黒のコントラストが仁志の食欲

をそそった。

「ハンバーグは私が作って……」

「こっちの炒め物はあたしだ」

「で、山芋は二人で、かな？」

「ま、それでいいだろ」

「感激だよ二人共。まさか美少女二人のお手製飯とか……」

「二び、美少女って……」

言いながら嬉しそうにする響と照れくさそうなクリスマスであったが、二人が喜んでいる事は間違いなく、それを見て仁志は小さく微笑む。

白飯とキャベツ・人参・ベーコンが入ったコンソメスープも三人分並べられ、響とクリスマスがクッションへ座ると部屋から持ってきた箸を手にした。

「あれ？ それって……」

二人が持っている箸は百均で仁志と一緒に買った物だった。それに気付いたと察して二人は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「気付きました？ これ、あの時只野さんと買ったやつです」

「やつぱりそうか。まだ使ってるんだ」

「当たり前だろ。ここでのあたしらの生活はここから始まったんだからな」

「ここから……？ ああ、そういう事か」

そこまで言われれば仁志も気付く。今の状況がもつとも初期の自分達の状態を再現していると。

「じゃ、食べましよう」

「冷めたら不味いしな」

「そうだな。じゃ、手を合わせて……」

そこで三人は互いの顔を見合わせて笑みを浮かべる。

「いただきます」

その瞬間、三人が思い出す事があった。あの夜、初めての三人での食事だ。

それでも仁志は何も言う事なくまずは炒め物へと箸を伸ばした。

「……………どうだ？」

やや緊張の面持ちでクリスが問いかける。すると……

「うん、美味しいよクリス。カレー味にするだけで印象って変わるもんだな」

「そ、そっか。美味しいか」

「只野さーん、私のハンバーグも食べてくださーい」

「分かってるって。というか、こっちは食べなくても美味しいのが確定してると思ったから後にしたんだよ」

その言葉に響は心から嬉しそうな笑顔を見せた。

「そ、そうなんだあ！ も、もうっ、そうならそう言ってくださいよお！」

「……別に羨ましくなんかねえぞ。あたしの方を先に食べたかったって事だからな」

多少拗ねるようなクリスの言葉に仁志は苦笑しながら響の作ったハンバーグを一口分に箸で切り分ける。

食べるのを今か今かと待ちわびる響に微笑ましいものを感じながら仁志はハンバーグを口へ運び……

「……………」

「ど、どうですか？」

沈黙する。その反応に先程までと打って変わって不安を覗かせる表情で響が尋ねた。

「美味いっ！」

「良かったあ〜……」

「無意味に溜めるんじゃないよ。ったく」

「あはは、ごめんごめん。いや、でも本当に美味しいよ二人共。その、俺のためにわざわざありがとう。俺、きつとこの飯の味忘れないよ」

噛み締めるようにそう告げる仁志に響とクリスは胸をときめかせて笑みを返す。

「どういたしました。でも、そこまで言われると照れちゃいます」

「だな。でも、ま、悪い気はしねえ」

「うん。只野さん、どんどん食べてください」

「あたしらへの遠慮はなしでいいぞ。こっちはあんたが美味そうに食

べるのが一番見たいんだ」

「そっか。じゃあ遠慮なく」

二人の言葉に嬉しそうに答え、仁志は食事を進めていく。勿論響とクリスマスもまったく食べない訳ではないが、惚れた男が自分の作った物を美味しそうに、嬉しそうに、喜びを噛み締めるように食べる姿に胸がいつぱいになるのを覚えていたのだ。

そして響がこんな動きを見せた。

「た、只野さん、あーん……」

「えっ!？」

「んなっ! い、いい度胸じゃねーか。ならあたしだって……」

「ちよ、ちよつとクリスマス?」

「ほ、ほら、あーん……」

顔を赤くして二人の乙女から箸を差し出されるといいう状況に仁志はさすがに慌てた。

それでも止めるとは言えない。何故なら二人が自分へどういう想いを寄せてくれているかを知っているからだ。

(……俺が逆だったらどうされたい?)

答えは一つ。受け入れて欲しい。そう考えた仁志は迷う事なく二つの箸へ口を開けた。

「あー……」

「あ……」

顔は赤いがどこか嬉しそうな雰囲気仁志を見て、響とクリスマスが笑みを零して箸で掴んでいた自分達の料理をそつと差し入れる。

二つの異なる味を咀嚼しながら仁志は思った。あの外出時の自分は受け入れたようで受け入れていなかったと。

自分の事ばかり考え、それが響達のためになると思い込もうとしていた。そう気付いて仁志は考え直した。

(受け入れて、受け止めて、向き合うんだ。俺は、みんなの想いから逃げない。目を逸らさない)

カレー味のハンバーグを食べたような気分になりながら、それはそれで美味しいと思つて仁志は笑みを見せる。

だが、そこで思い出すのだ。今、二人には知っておいて欲しい事を。
「響、クリス、その、聞いて欲しい事がある」

「え？ 聞いた欲しい事、ですか？」

「一体何だよ？」

真剣な仁志の様子に二人は不思議そうに小首を傾げる。

「実は……」

仁志が語った悪意がキスという形で自分へ侵入しようとしているという事に、当然ではあるが響もクリスも言葉を失った。

何せ今夜最低でもそれをしようと思っていたのだ。それが下手をすれば悪意の影響かもしれないと言われてしまったのである。

（そんな……私の気持ちだが、想いが、悪意に操られてるかもしれないの？）

（そんな事って、そんな事ってあるかよ！ あたし様の気持ちは、想いは、んなもんに操られる程やわじゃねえっ！）

沈む響と憤るクリス。それがその後の行動を決めた。

微妙な雰囲気となった後、三人はとりあえず食事を終えると後片付けを響とクリスが始めた。

時刻は午後七時半を過ぎた辺り。まだ出勤まで二時間近く余裕があるため、仁志はどうしたものかと思っただけで考えた。

（これで俺へ想いを抱いてくれる女性達の半数以上にキスの危険性は伝えた。あとは未来だけか）

マリア、奏、翼に続いて響とクリスにも伝え、残る悪意が利用しそうな相手は未来のみ。そう仁志は考えていた。

と、そこへ洗い物を終えたクリスと響が戻ってくる。そしてエプロンを外してそれを無造作に置くと、二人は仁志の両脇へと移動して密着したのだ。

「え？」

「仁志さん……」

「仁志……」

「ひ、響？ クリスもどうしたんだよ？ というか、その呼び方は……」

「仁志さんが、仁志さんがいけないんですよ？ 私達の気持ちを、想いを、覚悟を悪意のせいかもしれないなんて言うから」

「そうだぞ。どれだけあたしらが考えたと思ってやがる。どれだけ待ったと思ってるんだよ」

「待ったって……」

話が見えない。そう思うも両側から感じる女性らしい柔らかな感触と温もり、そして匂いに仁志は理性がぐらついているのが分かった。

(ま、不味いつ!? クリスだけじゃなく響も結構あるから……っ！)

引き離そうとするも意外と力がある響は仁志では振りほどののが難しく、またクリスはクリスで必死にしがみつく形になっているためこちらにも難しいと言えた。

結果、仁志は両腕を完全に押さえられてしまったのである。

「仁志さん、私の気持ち、信じてくれませんか？」

「仁志、あたしの想い、信じてくれねーのか？」

「い、いや、そういう訳じゃないんだ。ただ、今は色々不味い要素が多すぎるんだよ。俺だって悪意さえ関係なければこんな機会を逃すもんか」

その言葉に二人の目が妖しく光る。そして同時にその手を動かした。

「なっ!?!」

触ったのは仁志の胸。優しく触り、二人はより体を仁志へと密着させる。

「仁志さあん、私、本当の本当に好きなんです。初恋なんです。こんな気持ちになったのは、仁志さんだけなんですよ?」

「響……」

「仁志い、あたしもだ。もうあたしには仁志しかいないんだっての。ここで拒絶されたら、あたしはまた一人ぼっちになっちゃう。あつたけえ場所を、失うんだ」

「クリス……」

泣きそうな顔で仁志を見上げる二人の乙女。その吸い込まれそう

な瞳に仁志は意を決して息を吐いた。

「二人共、一旦離れてくれ。その、このままじゃ抱き締める事も出来ない」

そう言われたら恋する乙女としては心を動かしてつい拘束を緩めてしまうもの。

響とクリスは言われるままに仁志の腕を一旦解放して彼の動きを待った。

仁志は動かせるようになった腕を動かしてスマートフォンを取り出す。

「その、邪魔が入らないようにマナーモードにして遠くに置いておくよ。ほら、クウガの時の一条さんみたいになるかもしれないし」

やや苦笑気味に告げられた言葉に二人も小さく苦笑して仁志の行動を止める事はしなかった。

少しの間した後、仁志はスマートフォンを玄関近くへ置くと布団を敷き直したのだ。

「えっと、こっちに来てくれるか？ 毎日のようにセレナが掃除してくれてるけど、カーペット自体が古いからさ」

思わぬ展開に響とクリスの鼓動が早くなる。布団の上に座って抱き締められるなど想像もしていなかったからだ。

（も、もしかして仁志さん、え、エッチな事までしようと思ってる……？）

（き、気が早すぎるだろ。でも、あ、あたしは構わねーけど……な）
まだそこまでの覚悟が出来上がり切っていない響と、もうそこまでの覚悟が出来上がり切っているクリス。

それでも仁志の招きに応じて、二人はその広げられた腕の中へと吸い寄せられるように近付いていく。

「痛かったら言ってくれ」

そう告げて仁志は二人の華奢な身体をそつと抱き寄せた。

「あっ……」

生まれて初めての肉親以外の異性との抱擁。その不思議な感覚に響もクリスも目を閉じて浸るように甘えた。

(あつたかい……。仁志さんって、こんなにあつたかいんだ……)

(思ってた以上に、これはやべえ……。こんなあつたけえの知ったら、あたしはもう離れられないぞ……)

頭のどこかで囁く淫らな誘いが聞こえなくなる程の優しくあつたかい温もり。

その幸福感に包まれ、響とクリスは微笑みを浮かべながら仁志の胸に顔を埋める。

まだ色欲よりも愛情が強い二人には、仁志の向かい合おうとする行動が功を奏したのだ。

——こんなはずじゃ、こんなはずじゃなかったのに……。

悔しげに蠢く悪意はアパートの上空から忌々しげに仁志の事を見下ろしていた。

じつくりと育ててきたはずの負の感情。それを何かが沈静化していると察し、悪意は理解出来ないとばかりに眩く。

——一体何だっていうのよ？ 何が私の邪魔をするの？

それを誰かが聞けばこう断言しただろう。『愛』だと。

奪うのが恋なら与え続けるのが愛。そう、仁志は開き直つたのだ。恋は欲から生まれるが、愛は情から生まれる。

情ならば悪意につけ込まれる事はない。情は情けとも言うからだ。

(俺は、みんなの想いに応えよう。応え続けよう。例えそれで嫌われるとしても構わない。誰かを選べないなら全員だ。馬鹿な事を選ぶ大馬鹿野郎の誕生だな。けどそれでいい。嫌われたくないけど、嫌われるよりも嫌なのは自分の気持ちに嘘を吐く事だから)

最後には全員から平手打ちを喰らつてもいい。最低と罵られても構わない。それに全員と思いながらも誰か一人を特別な存在と思う時が来るかもしれないのだ。

だからその時まで自分は全てを受け止めて、せめてこの有り得ないような日々が終わりを迎えるまでは馬鹿な男の夢を目指してみようと、そう思つて仁志は口を開く。

「響、クリス、もしも悪意が二人を操つてキスを迫る事があつたら、俺はそれを逆に使つて二人を元に戻してみせるよ。それぐらいの気持

ちでいるようにする」

「仁志（さん）……」

「もう逃げないって、今決めた。もう逸らさないって、今決めた。ちゃんと君達の方を見て、そして生きていくよ。例えそれがどんなに厳しい結末や辛い結末になるとしても、俺はもう振り向かないから」

そう優しく笑って告げると、仁志は二人の額へキスをした。

「これが、その、証みたいなものだ。愛想尽かして別の男を探すなら今だからな？」

真顔でそう告げ、仁志は二人の反応を待った。

一瞬とも、永遠とも感じられる静寂が室内を包む。その間仁志は少しも目を逸らす事無く響とクリスを見つめた。

「仁志さんって、みんなの前で呼んでもいいんですか？」

その静寂を破ったのは、どこか弱々しい響の声。

「仁志って、これから呼んでもいいのかよ？」

続くのもどこか弱々しいクリスの声。

「ああ」

その声へ返されたのは優しくも力強い肯定。その瞬間二つの笑顔が花咲いた。

「仁志（さん）っ！」

「っ……」

強く抱き着く二人を受け止め、仁志は笑みを零してその体をそっと抱きしめる。

「ただ、店では止めてくれよ？ 最悪店へ迷惑をかける事になるかもしれないから」

「はいー」

「分かってるってのー！」

喜色満面と言った表情で答える二人。ここで二人は仁志の宣言を勘違いしていた。

仁志は君達に響達全員という意味を込めていたが、二人は文字通り自分達だと思ったのだ。

（仁志さんは私とクリスちゃんを選んだんだ！ ならばここからク

リスちゃんとの勝負だね！)

(へへっ、あたしかこのバカって事か。仁志もやっと男らしく答えをだしやがったぜ！)

恋は盲目と誰かが言った。まさしくその通りに恋をしている二人の心は曇っていた。

よく考えればそんな事を言うはずがないと分かるのに。こんなにも大事な事を簡単に決めるような相手であれば自分達が惚れるはずはないのに。

この時の二人は、仁志の言葉を自分の都合よく受け取っていた。いや、受け取りたかったのだろう。

初めての恋。初めての抱擁。そして額とはいえ異性からの想いのこもったキスに舞い上がって。

「あ、あの、仁志さん」

「ん？」

だから愛が薄れる。恋が、欲が戻る。

「しよ、正直言っただけだよ」

「何だ？」

悪意が、笑い出す。

——エッチな事、したくない(です)か？

そう問いかける声には、仁志が初めて聞く程の妖艶な色気が宿っていた……。

花咲く勇氣 Ver. Amalgam

「え、エッチな事って……」

思わぬ言葉に耳を疑う。だけどこつちを見つめる二人はふざけるようには見えない。

「だって、仁志さん、プールでえつと、お、おつきくしたじゃないですか」

「あ、あれは」

「何だよ？ あ、あたしらに興奮したんだろ？」

否定はできない。実際あの時俺はみんなの体を見てエロい気分になった。

でも、だからっていきなりそういう事はどうかと思う。したくない訳じゃないけど、響もクリスマスも若干気が急いでるような感じがするし。

「そうだけど、聞いてくれ。えつと、さすがにそういう事はちゃんとした関係になってからじゃないと」

「い、いいじゃないですか。私は、仁志さんならいいですよ？」

「あ、あたしも仁志ならいい。てか、それ以外とは嫌だ」

「響……クリスマスも……」

恥ずかしそうに、だけど本気で俺へ想いをぶつけてくれる二人に言葉がない。

男にとっては夢のような状況だけど、だからってさすがに今は色々不味い。

「二人共、その、ありがとう、でいいのかな？ 二人の気持ちは嬉しいよ。でもさ、せめて本当に悪意との一件が片付くまでは」

そういう事は止めておこう。そう言おうとした俺へある意味一番聞きたくなかった言葉が聞こえてきた。

「でもっ！ この事件が終わったらもう仁志さんと一緒にいられないかもしれないじゃないですかっ！」

「っ!？」

目を背けていた考え。ある意味で一番可能性の高い、ほとんど確定

に近い、結末。

それを響から告げられ、俺は言葉に詰まる。

「そうだけ。下手すりゃ悪意を倒した瞬間にさよならだ。あたしは、そんなのやだ」

「クリス……」

「お願いです仁志さん。せめて、せめて少しでも思い出をください」
「あたしらに、仁志を刻んでくれよ」

体を密着させながら潤んだ瞳でこちらを見上げる二人の女の子。その、柔らかい感触と温もりに否応なく俺の男の部分が反応する。

「仁志さん、その、エッチが駄目なら本物のキス、どうですか？」

「さっきの言葉、嬉しかったんだ。あたしらの事、受け止めるって」

「それは、まあ」

完全に胸を押し付けるようにこっちへ抱き着く二人を俺はどうすればいいか迷っていた。

ここまで言ってくれているのを撥ね退けるのもどうかと思うし、だからといってこんな状況や雰囲気の流れされてキスするのも響もクリスも本当は嫌だろう。

こうなると腹を括って二人とのそれぞれのデートでキス、するべきか。

それならきつと二人も納得してくれるだろう。何せ二人はまだ少女だもんな。

「えっと、響」

「はい？」

「クリス」

「何だ？」

「キスは、今は待つて欲しい。その、ちゃんとそれに相応しい場と状況を、俺なりに、えっと、用意する、から……」

言いながら恥ずかしくなってきたが、それでも何とか言う事が出来た。

さて、二人の反応は……？

「い、今じゃダメ、ですか？」

「ひ、仁志の気持ちは嬉しいけどさ、あたしらは別に今でもいいんだぜ？」

嬉しいけど今して欲しいってそんな感じだ。

「そ、そんなに？」

「そんなに」

潤んだ瞳と熱っぽい眼差し。正直言ってかなりぐらついている。

悪意に操られてる、訳じやなさそうだ。だ、だけどさすがにいきなり二人の女の子とキスって、それはさすがにどうかと思う。

これが響だけとかクリスだけなら俺もした。いや、してる。ただ二人の女の子を相手にして、しかもファーストキスを奪える程俺はプレイボーイじゃない。

「あの、さ、笑われるかもしれないけど」

「笑わない（です）から」

「……ありがと。えっと、男にも憧れとかあるんだ。そういう意味では、この状況はキスとかするにはちよつとずれてる」

ある意味では憧れではあるけど、な。両手に花なんて夢でしかなかったし。そう思って二人を抱き締める。

「あっ……」

上がる声が嬉しそうなのが本気でヤバいぐらいテンション上がる。「だから、もう少しだけ待ってくれないか？ 二人それぞれとデートをするだろ？ えっと、こんな言い方はどうかと思うけど、その時は……さ」

客観的に見ると最低な男だと思う。遊び人以外の何物でもないぞ、これ。

だけど仕方ないじゃないか。ここで「響を！」とか「クリスで！」とか言える程はつきりとした区別が俺の中にないんだ。

俺だって男だ。可愛い女の子達から言い寄られて悪い気はしない。それどころかむしろ嬉しすぎて舞い上がりそうさ。

「デート……」

「そう。今から言っておくと、二人は最後の方にしようと思ってたんだ」

理由はその時と今じゃ違うけど。

「最後……っ？」

「それって……とっておき？」

「あー、うん。そういう意味になる、かな？」

どこことなく嬉しそうな二人へ若干だけ言葉が濁す。まあ間違つてない。今は、つて注釈がつくけど。

「仁志(さん)っ！」

「おっとっ!？」

ムニユつと聞こえそうなぐらいの勢いで二人が強く抱き着いてくれる。

あー、今日仕事で良かったあ。これで休みだったら理性だのなんだのまで休みになってた自信がある。

ホント、良かった。何せ最悪で最高の事態になった場合、俺の部屋にはアレがないし。

こ、今夜、店で買う？ いやいやっ！ オーナーに勘ぐられるに決まってるし噂になる。

……… 駅前のドラッグストアだな。

「それにしても、本当にいいのか？ 俺の発言って、客観的に見れば女の敵みたくないものなのに」

「……え？」

俺の問いかけに何故か二人は「何を言ってるんだ？」みたいな顔をした。

「いや、だって俺は君達全員の想いへ向き合うつて言ったんだよ？」

翼や未来、あとは奏やマリアも」

その瞬間、二人の表情が消えた。それまでは幸福感を表情に乗せていたのに、それが一切消えたのだ。

正直怖かった。それと嫌でも分かった。今、俺は踏んではいけない地雷を踏み抜いたのだと。

「未来達も……っ？」

「先輩達も……っ？」

「え、えっと、俺は誰も選べないと思ってたし選ぶ事も出来ないって

思った。だけど、それはある意味で俺の気持ちに嘘を吐くって思い直したんだ。だから素直に」

「私（あたし）達で十分じゃないですか（だろ）っ！」

「っ?!」

二人から初めて聞く怒声に息を呑む。こちらを睨むような二人に俺は当然の反応だと思つて何も言えない。

そう、だよな。両手に花だつてどうかと思われるんだ。それをよりにもよつて花束がいいなんて何考えてんだつて話ではある。

それでも、俺は選ぶとしたらそれだ。それに呆れられ、怒鳴られ、見捨てられてもいいと、そう決めた。

だから、俺はこちらを睨む二人へはつきり告げる事にする。嫌われでもいいと、そう思つて。

「今言つた通り、俺は誰かを選ぶ事はしないし出来ない。選ぶなら全員だ。それが、俺だよ」

「っ……っ」

「ダメな男だと罵つてくれていい。馬鹿な男だと笑つてくれて構わない。それでも、俺は君達に対してはこの選択肢以外選ぶつもりはもうない」

マリアが言つてくれた言葉を胸に俺はそう言い切つた。

そうだ。どうせ一緒にいられないなら、俺は俺に素直に生きよう。ゲージが好感度じゃないと分かつた今、例え響達に嫌われても彼女達が本当の日常へ戻る事に俺との関係性は意味を成さない。

俺だけが彼女達へ想いを寄せ続けられればいい。あのゲームの力を使い、みんなのサポートへ徹して悪意を倒す。そこに、みんなからの好意は必要ない。

俺だけが想い続けていればいい。そして全てが終わつたら彼女達は帰る。ここには俺だけが残る。何も問題ないしおかしくない。

元々この世界は彼女達にとっては別世界なんだ。

「響、クリス、俺に恋してくれてありがとう。こんな事を言い出す奴とは思わなかつたかもしれないけど、これが俺だよ」

「仁志さん……」

「仁志……」

心なしかこちらを見る二人が苦しそうに見える。本当に優しいんだな、君達は。

「さてと、まだ仕事には早いけど、マリア達のところに汗を流しに行ってくるか。そのまま勤務時間近くまで過ごすだろうから鍵だけ、お願いするよ」

そつと二人の体を押しやって俺は立ち上がろうとして、二人に押し倒された。

「ふ、二人共？」

「ダメですよ仁志さん。マリアさんのところになんか行かせません」

「そうだぜ。アイツのどこなんかに行かせるか」

こちらを見つめながらどこか不気味な印象の二人。どことなくだけどマリアへの怒りや憎しみみたいなものを感じる。

「い、行かせないって……」

「仁志さんは私達が大好きなんですよね？　ならキスしてください」

「ひ、響？」

どこか怖い印象さえ受ける笑顔の響。こんな風に響が笑うなんて……。

「仁志はあたしの事、好きなんだよな？　だったらキスしてくれよ」

「クリスまで……」

響と似た表情で笑うクリスに背筋が凍る。これは、あれだ。奏と未来が悪意に操られた時に似てる気がする。

「ごめんっ！」

「っ?!」

そう思った時には全力で二人を払いのけた。違ったら後で謝ればいい。けどもしそうじゃなかったらあの体勢は不味い。

それに、人数も問題だ。いくら男だからつてろくに鍛えてない俺じゃ、響とクリスの二人を相手に出来るはずがない。さつきみたいな状態にされたらキスされてしまう。

「まさかこんな日が来るなんてなっ！」

可愛い女の子二人からキスを迫られて、それから逃げる事になると

か現実味が無さ過ぎるだろ。

でも一つだけ分かった事がある。それはゲージが最大にならないと乗っ取りは出来ないだろうって事だ。

慌てて玄関へ向かいながら途中でスマホを手にする。そしてもしもを考えて予め表示させておいた連絡先をタップして、エルへ電話しながら外へ出た。

『兄様？ どうしたんですか？』

「エルっ！ セレナとヴェイグを俺の部屋まで呼んでくれっ！ それと出来れば調もだっ！」

『わ、分かりましたっ！ 姉さんっ！』

そこで通話を終え、俺は部屋へのドアの前で座り込んで二人が外へ出ないように重石替わりになった。

だが、一向に二人が玄関へ近付く気配がない。妙だなぁと思いつつ、俺は気を抜かずにドアを背中で押さえ続けた。

どれぐらいそうしていたか分からない。だが多分十分ぐらいは経ったと思う。

「お兄ちゃんっ！」

「只野さん、お待たせしましたっ！」

「セレナ、調も……ありがとう」

そんなところへヴェイグを抱えたセレナが調と一緒に姿を見せてくれた。

しかも調の手にはスマホがある。

「それは……」

「エルが、必要だろうからって」

「どうぞ」

「助かる。それと、セレナには分かるかもしれないが」

「うん。ヴェイグさんが以前の奏さん達よりも酷いって」

「マジか？」

同じぐらいだと思ってたらそれ以上って……。でもそこまで変わった事はなかった気がする。

「とにかく、油断しないでくれ。セレナ、入ったら……分かってるよな

「？」

「うん。響さんとクリスマスさんを隔離する」

「調も、いい？」

「はい。二人の悪意を払ってみせます」

「頼む。それとヴェイグは俺が」

「あ、うん。お願い」

セレナからヴェイグを受け取り、俺の腕へヴェイグが掴まるのを見て頷く。

「じゃ……いくぞ」

意を決してドアを開けて中へと入ると、俺は思わずその場で動きを止めてしまった。

「仁志さん……仁志さん……っ！」

「仁志い……切ないんだよお……」

あろう事か響とクリスマスが、その、俺の使ってる布団や枕へ顔を埋めていたのだ。

「ど、どうしたのお兄ちゃん？　って、え？」

「響さん……クリスマス先輩……」

背後から聞こえる声で我に返る。だけでももう遅かった。

「な、何で二人はお兄ちゃんのお布団や枕の匂いを嗅いでるの？」

「せ、セレナ、見ちゃダメ！」

「えっ!?　し、調さん？」

調の行動は理解出来る。でも今はそれどころじゃない。

「調、セレナ、悪いけど今はギアを！」

「は、はい！」

「うん！」

二人がギアを纏うのと同時にヴェイグがスマホを俺へ差し出した。きた。

「タダノ、あとは任せた」

「助かるー！」

既にゲームは起動済み。ステータスをタップし、すぐさま二人をツインドライブへ。

「そして……っ！ 巫女ギア！ ツインドライブっ！」

「ミレニウムパズル、展開っ！」

「このまま二人を浄化しますっ！」

これで何とかなると、そう思った時だった。

——Balwisyal nescell gungnir
tron……。

——Killter Ichai val tron……。

有り得ないはずの歌が、聞こえた。思わず調が動きを止めて、セレナが目を見開く程の、衝撃と共に。

「嘘、だろ……？」

「黒い……ギア……？」

「イグナイト……そんな……」

調の言う通り、目の前には黒いギアを、イグナイトモジュール状態のガングニールとイチイバルを纏った響とクリスがいた。

「邪魔、させない……」

「あたし達は、仁志と一緒にいるんだ……」

「っ!?」

低く放たれた声はたしかに二人の声だった。だけど、何かが違う。言うなれば、敵意みたいなものが宿っていた。

「タダノっ！ あの時のマリアと同じだっ！」

「っ!? 乗っ取られてるのかっ!?」

「でも、その割には動きが鈍いよ？」

「とにかく、今は浄化しないと。セレナは歌って。私は神楽へ集中するから」

「はいっ！」

改めて神楽をやろうとした調だったけどそれは出来ずに終わる。

「っ!?」

「調っ！」

彼女を狙う銃撃が放たれたからだ。やったのは当然クリス。

「目障りだ……失せろ……っ！」

「クリス先輩……」

「なら私の歌で……」

奏と未来を鎮静化した際に効果があったセレナの歌。だが……

「セレナっ！ 動くんだっ！」

「っ!? 響さんっ!?!」

そうはさせじと響がセレナへと迫ったのだ。結果、完全に響対セレナ、クリス対調の構図が出来上がった。

これは、不味い。かと言って助けを呼ぼうにもミレニウムパズルを展開してる今、連絡するのは難しい。

「……まさか」

嫌な予感がした。

何故二人が部屋から出てこなかったのか。

どうして俺達の中へ入ってもすぐ行動を開始しなかったのか。

それは、全て現状を作り出すためだとしたら？ 他の装者を容易に呼べず、しかも身動きを封じる事が出来ない事を見越していたのかも知らない。

そう、これまでの悪意との戦いで見せてきた戦術はよく影縫いとミレニウムパズルを使っていた。

だが翼は俺の部屋からは遠く、緊急時にすぐ呼び出せないと悪意も知っているんだ。逆にセレナはまだ近い。なら、俺の部屋で問題が起きた時、すぐに呼び出されるのはどっちか分かるだろう。

「してやられた……っ！」

ここに切歌やマリアがいれば少しは違ったんだろうが二人はバイトだ。それに、依り代であるスマホを俺へ託せばマリアがエルの傍を離れる事は出来ない。

俺達の事を観察してきての今回の一件だとすれば用意周到過ぎて感心したくなる程だ。

「クリス先輩っ！ 正気に戻ってくださいっ！」

「黙れ……。あたしから、あたしから仁志を奪った癖につ！」

「響さんっ！ 私です！ セレナですっ！ 悪意になんかに負けないでっ！」

「知ってるよ……。仁志さんを奪った悪い子だ……っ！」

俺の目の前で展開される装者同士の戦い。いや、調もセレナも攻撃していないから戦いとは言えないかもしれない。

調もセレナも二人の様子に躊躇いや困惑が見える。無理もないよ。俺の事を名前で呼んでるし、初めて二人へ見せるぐらいの憎しみの色に染まった表情をしてる。

「タダノ、どうするんだ!? このままじゃセレナと調が……」
「くっ……」

ステータスでの強制変化はやっぱり不可能だ。

と、そこで察した。ツインドライブアイコンが作動しなかった時から、もう二人は悪意の手の中だったんじゃないかって。

そして何故二人だけイグナイトギアが表示されていたのかも分かった。

一応警告してくれていたんだ。このゲームは、響とクリスが悪意に魅入られている事をこっちへ教えてくれていたんだ。

だが今それに気付いたところで意味はない。今後に活かせるかもしれないが、その今後を迎えるためにも今、二人をどうにかして助けないと。

しかしその方法がない。調もセレナも二人の攻撃を回避する事に専念していて、とてもじゃないけど神楽を舞う事も歌う事も出来る状態じゃないんだ。

「せめて何とか二人の動きを封じる事が出来れば……」

影縫いは無理だし、俺が押さえつけようにもギアを纏った二人なんてとてもじゃないが無理だ。

残る手段は二人を攻撃してダメージを与えるしかないけど、それが出来るかと言えば難しい。

「ちよこまかと、ちよせえんだよおおっ!」

「邪魔だああああっ!」

悪意に操られた二人の攻撃は本気だ。下手をすれば普段以上の迫力かもしれない。

あれを相手に戦えば調もセレナもただじゃ済まないだろう。そして、響とクリスもだ。

「タダノっ！」

「分かってるよっ！ 今必死に考えてるんだっ！」

戦闘になれば俺に出来る事なんてないと分かっていたのに、いざこうなると本気で自分のふがいなさに嫌気が差す。

だからって諦めるものか。何かを捻り出すんだ。少しでもいい。調やセレナを助けるためにも、悪意の好きにさせないためにも、そして何より……

響とクリスを助けるためにもっ！

「タダノっ！ 何か鳴ったぞ！」

「っ!？」

通知音が聞こえたらしいヴェイグが上げた声で慌てて俺はスマホを見る。

画面がステータスからメイン画面に切り替わっていて、久しぶりのお知らせアイコンが表示されていた。

急いでタップすると画面に表示されたのはたった一文。

——ミュージックボックスが更新されました。

一体どういう事だと思いつながら俺はミュージックボックスをタップして表示させる。

何も見た目が変わっていない事に内心訝しむけど、今はこれに賭けるしかない。そんな気持ちで俺はミュージックボックスを探る。

「……何も変わってないじゃないか」

曲数が増えた訳でもなければ、何か表示が変わった訳でもない。ただただ歌が流れるだけだ。

「タダノっ！ どうだ！」

「ダメだ。何も変化してない」

「だがたしかに音が出たぞ!？」

「ああ。こうなると手当たり次第試してみるしかないか……」

が、そこではたと思った。これまで俺達はギアの変化ばかりに気を取られたけど、ミュージックボックスの事はほとんど気にも留めてなかった。

だがステータスが俺達の力になるのなら、これだって何らかの力に

なるはずだ。何故なら、これも最初からこのゲームに搭載されていたんだ！

「じゃあもしかして……っ！」

今いるのはセレナと調。その中で悪意へ効果があるとすればセレナの歌だ。

なので俺は表示条件をセレナに絞った。表示された楽曲はたった三曲。

「これで……何か起きてくれっ！」

“此の今を生きて”を選択し俺は目の前を見つめた。
すると……

「えっ!？」

セレナのギアから間違いなくセレナの歌声が流れ始めたのだ。突然の事に驚くセレナだが、もつと驚くべき事が起きた。

「ううっ……」

拳を握りしめて襲いかかろうとしていた響がその歌を聞いて動きを止めたのだ。

間違いない。みんながギアを展開中にミュージックボックスの曲を選択すれば、それに適応するギアが歌ってくれるんだ。

いや、多分このミュージックボックスの歌を発してくれている。そしてそれには多少なりとも悪意を弱らせる、あるいは苦しめる効果があるんじゃないだろうか？

「セレナっ！ その歌に合わせて歌ってみるんだっ！」

「この歌に……うんっ！」

流れる歌へセレナの歌声が重なる。まるで二人のセレナが歌っているかのようだ。

「ぐっ……ああっ！」

「効いたっ！」

俺とヴェイグの声が重なる。これならいけるか？

「あたしの仲間は何しやがるっ！」

「不味いっ！」

完全に歌へ集中しているセレナへ迫るクリスの攻撃。だが、それを

突如出現したブロックが阻んだ。

「セレナは、友達は俺が守るっ！」

「ヴェイグ……」

「元々ミレニアムパズルは俺の力だ。だけど今はセレナが自分だけで使用してるからな。なら俺ももしかして使えるんじゃないかと思っただ」

「そういう事か……」

ツインドライブの利点があんなところにもあった。セレナが一人でミレニアムパズルを展開出来るって事は、ヴェイグがいれば彼女とは別にミレニアムパズルへ手を出せるかもしれないな。

……っ!? 手を、出せるっ！

「ヴェイグっ！ ブロックでクリスの動きを封じてくれないか！」

「……そういう事かっ！ 任せろっ！」

「調っ！ クリスの動きをヴェイグが封じてくれる！ そうなったら神楽を！」

「分かりましたっ！」

そう言ってる間にクリスの周囲を色取り取りのブロックが取り囲んでいく。

抜け出そうにもここはセレナとヴェイグの領域だ。しかもクリスはアームドギアで戦うタイプ。なら、その手の動きを封じられてしまえば……

「くそっ……ここから出せっ！ 出しやがれええええっ！」

ミサイルを展開するどころか引き鉄を引く事も出来なくなったクリスの目の前へ調が降り立つ。

「クリス先輩……今助けますっ！」

凜とした表情で神楽を舞い始める調。そして響き渡るセレナの優しい歌声。

それらが合わさって、何とも言えない不思議な雰囲気が出来上がる。だけど共通しているのは邪悪を払い清めようとする心だろう。

「いやあ……また、また大好きな人が私から去って……。一人に、一人にしないでえ……」

「いやだ……いやだあ……。もう一人ぼっちは、大好きな人を失うの

は、やだあ……」

「響……クリス……」

聞こえてくる言葉に心が痛い。そしてそれではつきりと分かった。悪意がどうやって二人へ忍び込んだか。どうやってその心を支配したか。

よりにもよって悪意は、二人の根底にある心の傷を俺を使って広げたんだ。

二人はそれぞれ人の悪意へ晒されて辛い目に遭っている。それに付随して大切な人との別れを匂わせたんだ。

しかも、その切っ掛けは俺が二人を押しつけて逃げ出した事だろう……っ！

「タダノ、どうした？」

「今日程悪意を憎んだ事はないよ。あいつ、俺の行動さえも織り込み済みで策を練ってたんだ」

「どういう事だ？」

「……二人が俺へ迫って、それでキス出来ればよし。出来なかったら出来なかったで、そこから俺が逃げた事を利用して二人の心の弱いところを刺激する。大切な人に捨てられたとか思わせて、な」

響は父を、クリスはフィーネをそれぞれ思い出させられたんだ。

強い怒りを拳に宿して俺は黙って目の前の出来事を見守る。セレナの歌と調の神楽のおかげか二人の動きは大人しくなっていた。ただ、未だにその体から悪意が滲み出てこない。

「……妙だな」

「そうだな。マリアの時は悪意らしいものが出てきてたぞ」

俺の呟きにヴェイグが答えてくれた。そう、そうなんだ。なのに何故操られてるだけの二人はそれよりも時間がかかっているんだ？

つと、そこで俺は慌ててステータスを表示させる。

「もしかするとそういう事なのか？」

未だに響とクリスのアイコンはイグナイトのまま。もしかするとあれはイグナイトに見えるだけで二人の中に根付いた悪意がギアの形を取っているのかもしれない。

「こうなると……」

もし、もしも俺の推測が当たっているなら今回はギアを解除させないと悪意を追い出せないはずだ。ギアという物へ固着して悪意は自分を守っているようなものだからな。

いくらセレナの歌や調の神楽で分離させようとしても、二人がギアを纏い続ける限りそれは物理的に防がれてる。

「イグナイトは闇だ。だから悪意もそれを模したとしたら……」

「タダノ、それなら光を浴びせるのはどうだ？ たしかカラオケで言ってただろ。イグナイトが闇なら……」

「っ！ アマルガムっ！」

急いで調のアイコンをタップする。あったっ！

「調っ！ アマルガムのツインドライブを試そうっ！」

「え？」

「悪意の闇をアマルガムの光で消し飛ばすんだ！ 奴は今回ギアへ宿ってる可能性が高い！」

「ギアに……分かりましたっ！」

「よし、行くぞ調っ！ ドライブチェンジっ！ ゴーっ！」

一縷の望みを賭けてアマルガムギアをタップする。するとグリッター化したかのように黄金色のアマルガムギアへと調の姿が変わる。

「一気に……ラピスの輝きをぶつけてみせる！」

瞬時に調はクリスへと接近していく。攻撃ではなく、その黄金の輝きをその身へ照射するために。

「クリス先輩……私達の心の光、受け取ってくださいっ！」

「うっ……ああ……あつたけえ……」

これならいけるかもしれない。そう思っているとヴェイグが俺の腕を叩く。

「タダノ、朗報だ！ 翼と未来が来てくれた！ パズルの前にいるっ！」

「マジかっ!?!」

「ああ、まじだ！ パズルの中へ入れるぞっ！」

「頼むっ！」

きっとエルかマリアが念のために呼んでくれたんだ。

そして姿を見せる翼と未来。その表情が響とクリスを見て驚愕に変わる。

「なっ……イグナイト、だと?」

「そんな……」

「翼、君もアマルガムでツインドライブを! 未来はセレナと一緒に
なって歌ってやってくれないか? 手を繋いでみれば心の歌が共有
出来るかもしれない」

「二分かりました」

二つとなったアマルガムツインドライブバージョンの輝きはクリ
スを優しく包み込み、その黒いギアが苦しむように軋み始める。

一方でセレナと未来は二人でAppleを歌い始めた。多分だけ
ど、あれは統一言語の一部だったから呪詛のなくなった未来は歌う事
が出来るんだろう。

「タダノ、二人の嫌な匂いが少しずつ弱くなってきたぞ」

「そうか……なら、ヴェイグ、ここで待っていてくれ」

「……分かった。気を付ける」

その言葉に俺は頷いて、ヴェイグをそっと下ろすと意を決して歩き
出す。まずは響の傍へ向かった。

「ううっ……ああっ……」

「響……」

「ひ、仁志さん……?」

こつちに気付いて顔を向けた響はどこか辛くて悲しそうに見えた。
悪意の影響力が弱くなってきたとはいえ、まだその力が消えた訳
じゃない。それと彼女の優しい心が戦っているんだ。

「響、ごめん。俺がもつとちゃんと気付くべきだった。君達の寂し
さや、抱えてるものへ」

「仁志さん……」

「今更かもしれないけど、言わせて欲しい。その、俺は立花響が大好き
だ」

「っ!?!」

こつちを見て目を見開く響。そうだった。俺はこの言葉を言い忘れてた。

「あの初めて会った日の事を、俺は絶対に忘れないよ。俺の初デートは、他ならぬ君なんだから」

言いながら響の手を握る。そしてそのままこちらへ引き寄せて優しく抱き締めた。

「ごめん。君の心へ新しい傷を作って。ありがとう。俺の心へ新しい強さをくれて」

「あ……ああつー！」

次の瞬間俺の体を響が強く抱き締めてきた。若干痛い、けど耐える。きつと彼女が悪意に心を弄られた痛みはこんなもんじゃない。

「仁志さんっ！ 私も貴方の事が大好きですっ！」

その瞬間響から光が放たれた。気付いた時には俺の目の前にギアインナーの響がいて、周囲を光の粒子みたいなのが漂っている。

「これって……アマルガムの？」

「はい。多分ですけど、仁志さんの言葉で私の胸の歌が勝手に展開してくれたんだと、思います……」

で、何故か照れくさそうに俯く響。ああ、うん。そうだよな。何せ俺の後ろにはセレナと未来がいる。きつと目が合ったんだろう。

「えつと、これって俺がいると邪魔じゃないか？」

「え、ええつと、多分ですけどステータスから操作してくれば大丈夫じゃないかなっつて」

「あー……うん、良かった。いつもの響だ」

「どういう意味ですかあ！」

こつちの軽口に乗ってくれる辺りもう心配なさそうだ。なので早速とばかりにスマホを操作し、響のゲージ後ろにあるミーナのアイコンをタップする。

「……やつと、やつとなれた」

「ごめんな響。待たせちゃって」

「ううん、いいんです。私も、もつと仁志さんを信じるべきでした。ちやんと言葉にするべきでした。言葉にしなきゃ、伝わらないってあ

の時分かったはずなのに……」

「響……」

少しだけ悲しそうな笑みを見せる響だけど、それもすぐに消える。凛々しく表情を変えて見つめるは未だイグナイト状態のクリス。

「仁志さん、クリスちゃんをお願いしますっ！」

「ああっ！」

「未来、セレナちゃん、ありがとう。それと、ごめんねセレナちゃん。私、本気でセレナちゃんを……」

「いいんです。悪いのは響さんじゃなくて……」

そこでセレナは顔を上へ向ける。そこには響から追い出された悪意が浮かんでいた。

「悪意ですっ！」

「未来っ！ 一緒にやろうっ！」

「分かったっ！」

「じゃあ行きますっ！」

「仁志さん、お願いしますっ！」

「よし、アマルガムギア、ツインドライブっ！」

響の姿がまるであのアダムを倒した時のような姿へ変わる。あれにアマルガムギアの腕が付いたような感じだ。

「行っちゃえ響っ！」

「ハートの全部でえええええっ！」

セレナがブロックを出現させて悪意を阻み、そこへ神獣鏡の光線を引き連れてアマルガムギアの響がその大きな拳で悪意を貫いてみせた。

それを見届け、俺はクリスの傍へと急ぐ。彼女は翼と調の輝きを受けて少しではあるがその雰囲気や和らいでいた。

「クリスっ！」

「……仁志」

「すまないっ！ 俺が父親気分で調子に乗ってたせいで君の心へ隙を作らせた！ 俺を最初から支えてくれていたのは君と響だったのに！」

「いいんだ……。あたしが、あたしが悪いんだよ。素直になれなかった。口で言えばはえーのに、それを嫌がって結局このザマだ」

「それなら俺も同罪だっ！俺も、君の気持ちを聞いたのに、それに甘えて答えを先延ばしにしてやきもきさせた。さっきだって、期待させるような事を言っつて失望させた」

「仁志……」

「こう言えば良かったんだ。最初から、あんな回りくどい言い方じゃなく、俺は君が、雪音クリスが大好きなんだって！」

そう叫び、俺はクリスへと手を伸ばす。するとクリスを封じていたブロックが消える。

ヴェイグ、ありがとう。明日の朝、シユークリームだけじゃなくコーヒーも持ってくからなっ！

「仁志っ！ 仁志い！」

飛び込んできたクリスを抱き締め、俺は思いの丈を告げる。

「もう離さないからっ！ 絶対にクリスを一人にさせないからっ！」

「ホントだな？ 嘘じゃねえな？」

「ああっ！ だからそんなイグナイトを真似した邪悪なギアは脱いでくれ！」

「……………ああっ！」

その直後目の前が光り輝き、クリスがギアインナー姿へと変わる。

そして俺と目を合わせると彼女は小さく頷いた。

すかさず俺はクリスのゲージの後ろにあるフィーネのアイコンをタップする。

「……………この姿になるのも久々だな」

「雪音、大丈夫か？」

「クリス先輩、無事で良かった……」

「先輩、心配かけてすまねえ。それと、悪い。あたしはお前を……」

「いいんです。悪いのは全部悪意。クリス先輩は悪くありません」

「……………ありがとな」

クリスと調のやり取りに翼が小さく微笑むのを見つめながら俺はアマルガムギアをタップする。

「クリス、後は頼んだ！」

「おう、そこでしつかり見とけっ！」

こちらもグリッター化のように全身を金色に染め上げて、クリスはその手にした弓を引く。

「月読、やるぞー！」

「はいっ！」

そして翼と調は何とアマルガムでのユニゾンを成し遂げて空へと駆けて行く。

そういえば二人は風月コンビだった。というかアマルガムの上にツインドライブ状態のユニゾンとか……悪意終了のお知らせ以外の何物でもない。

「逃げられると思うなっ！」

「……ここだっ！」

金色の翼が駆け抜けて三日月のような軌跡を描いて悪意の動きを止め、そこをすかさずクリスが射抜いてみせた。

光の矢が邪な闇を貫き、消し飛ばしたのだ。見事としか言いようがないそれに俺は無意識で拍手を送っていた。

「タダノ」

「ヴェイグか。さっきはありがとう。おかげで助かった」

「それはいいんだが、時間はいいのか？」

「へ？」

言われてスマホの画面を切り換える。時刻は……九時十分前!?

どうやら思った以上に調とセレナが苦戦していたらしい。道理で翼と未来がここへ派遣されるはずだよ。

普通なら余裕だけど、連休明けの今日は髭を剃ったりしないといけないので時間が割とギリギリだ。

「悪いみんな！俺、急いで支度しないといけないからこれでっ！」

ゲームを終了すると一瞬にして目の前が元の部屋へ戻った。

鍵と財布だけ忘れず持つと俺はそのまま慌てて靴を履いてドアを

開け……

「そうだ！翼、未来、助けに来てくれてありがとうっ！送っていけ

ないけど気を付けて帰って！」

「はい、分かっています」

「只野さん、明日お話ししたい事がありますから」

「ああ、分かっている。じゃあ、また明日っ！」

そう言つて俺は部屋を出た。向かうはマリア達の家だ。急いで行けば間に合うはず。

「エルやマリアにも礼を言わないとな……」

走りながら最大の危機を乗り越える事が出来た影の功労者二人の事を思い浮かべる。

とにかく、悪意はどんどん卑劣さや厄介さを増してる。前とは違った意味で早く決着を着けるべきだと思う。

——今は自分に正直に生きよう。そしてみんなへちやんと向き合おう。この世界のためにも、みんなの世界のためにも……。

只野さんが出て行った後、私は息を吐いて立花達へ向き直る。

「それで、一体どうしてあんなつた？」

ある程度は分からないでもない。大方立花と雪音の恋心へ悪意が付け込んだのだろう。

だが、それでイグナイトギアを模してみせるのが理解出来ない。

あれはいわば暴走状態の力を御したものだ。そうであるならあれは悪意を御してみせた姿でなければならぬはずだ。

「その、実は私とクリスちゃんは……」

そこで立花がチラリとセレナを見た。どうやらセレナには聞かせられない話らしいな。

「まずは一旦ここを出ませんか？　只野さんがいない状態で長居するもの」

小日向の指摘に私だけでなく全員が頷き、静かに部屋を後にする事にした。

最後にセレナが鍵を閉め、私達は一先ずマリア達の家を目指す事に。

ただ、私の心が若干乱れていた。理由は一つ、只野さんだ。

立花と雪音への言葉。愛の告白にも等しいあれを聞いて、何故落ち着いていられようか。

只野さん、貴方はあの時こう言ってくれたじゃないですか、答えは必ず出すと。

ならば何故立花と雪音だけなのですか？ 何故私や小日向には、奏やマリアには何も言ってくれないのです？

——いや、もうマリアは聞いているかもしれない……。

……そうだ。マリアは私達の中でもっとも只野さんに近い場所にいる。

その証拠がゲージの上がり方であり、日々の過ごし方だ。

——下手をすれば奏も聞いている可能性がある。深夜業務は人気がなく二人は同じシフトだ。二人きりで定期的に過ごしている……。

そう、そうだった。奏も、マリアと同じだ。

ああ、どうして気付かなかったんだろう。私と共に歌う二人は密かに只野さんと時間を共有していた。

「でも、さつきのお兄ちゃんには驚きました」

ふと聞こえてきたセレナの言葉に視線を動かす。セレナはヴェイグを抱えて少しだけ頬を赤めていた。

「響さんとクリスさんを好きだって、大人の男の人らしくなかったですけど、とつてもお兄ちゃんらしい告白でした」

「あ、あれは……えっと……」

「否定はしねえよ。意識して愛してるなんて言い方は避けたんだろうしな」

「どういう事ですか？」

雪音の言葉に月読が小首を傾げた。見れば小日向も同じ気持ちらしい。

私は、何となく分かる気がする。愛してるでは意味合いが重たく、また受け取り方が一つでしかない。

これが大好きとなれば、ズルい言い方だが男女愛とは言い切れないとする事も出来る。

「多分、仁志はあたしやこいつの事を恋人にするつもりはないって事

だと、思う」

「やっぱり……そうだよね」

雪音の答えに立花もやや悲しそうに呟いた。分かっていた、のか。けれど、あたしは諦めねえ。恋人が駄目なら一足飛びにその先だ」

「その先って……お嫁さん!？」

「小日向、声が大きいぞ。気を付けろ」

「あつ、す、すみません……」

気持ちちは分かるが既に時刻は九時になろうとしている。

この辺りは住宅街故に静かだ。いくら往来とは言え大声を出せば迷惑となってしまう。

「く、クリス先輩、さすがにそれは」

「あたしは本気だ。仁志さえ良ければあたしの世界へ連れてって、そこで面倒を見る」

「っ!？」

その言葉にセレナと月読が息を呑んだ。私と小日向は既に知っていたため反応が出来なかった。

だからだろう。不味いと思った時には雪音の視線が私と小日向を貫いていた。

「……やっぱりか。あの時、あたし達二人の話聞いてたんだな、先輩達は」

「え? ど、どういう事?」

「あたしとお前が仁志の事でお互いの気持ちを言い合った時だったの。ピザを取りに行った時の事だ」

怒りではなく呆れを含んだ雪音の視線に私と小日向は何とも言えない心境となるしかない。

「まあもういいけどな。あの後四人して仁志に半分告白したようなもんだし」

「あー、うん。そうだね」

「そ、そうなんですか?」

セレナが驚きの表情で私達を見てくる。気恥ずかしいな、こう見られると。

「ああ、そうだ。私達の想いを聞き、只野さんは必ず答えを出すと云ってくれた」

「で、答えが出たわけだ」

その雪音の声は苦笑混じりだった。

「響とクリスが大好きって言う、あれ？」

「そうだけどそれだけじゃねえ。仁志は誰かを選べないし選ぶ気はないらしい。だから最初は選ばないって、そう決めてたんだと」

あの人らしい。そう思うも、ならば何故と思ひ直す。

「仁志さんはこう言ったんだ。誰かを選べないなら全員だつて。そんな馬鹿な男なんだよつて」

言葉が、なかつた。只野さんは大奥でも作るつもりか？ いや、違うな。あの人はおそらく下心ではない気持ちでそう言ったはずだ。

もしそうならきつとそんな言葉を秘めて立花や雪音へ接するはず。あの人はそういう意味では素直な人だ。あるいは誠実であろうとする人、だろうか。

「お兄ちゃん結婚しないって事ですか？」

「セレナ、この場合は結婚とかじゃないよ。只野さんは響さん達の中から誰か一人を選んでお嫁さんにしないって事」

「えつと……？」

「月読、セレナにはまだ分かりにくい話だ。今は詳しい説明はいい」

普通の恋愛でさえも憧れの世界だろうセレナに、自分へ想いを寄せる相手を全て受け止めるという只野さんの答えはその真意まで理解出来ないだろう。

「セレナ、今はただ只野さんは男性としては正しく、大人としては間違っている選択肢を選んだぐらいに思ってくれ」

「男の人としては正しくて、大人としては間違ってる……」

「翼さん、それはちよつと」

「立花、今はこれでいい。それよりも私達が考えないといけない事があるだろう」

悪意が遂にギアを纏つても撥ね退けられないように対応してきた。あるいは、こちらを支配下に置き、ギアを纏わせる事に成功した、だ

ろうか。

どちらにせよこれは由々しき事態だ。

最初の月読と暁はギアを展開せず神獣鏡の凶祓いによって対処し、二度目の小日向と奏は二人がギアを展開する事で対処出来、三度目のマリアは密かに神獣鏡で対処された後、今度はギアを展開する事で何とかした。

そこへ来ての今回だ。立花と雪音へ入り込んだ悪意は二人を支配下に置いてギアを展開。しかもそれが今は失われたイグナイトだった。

只野さんはイグナイトを闇と評した事を思い出す。だからこそ私や月読へ光であるアマルガムを使わせたのだろう。

「そうですね。悪意が、ギアを使いました」

「ああ、しかもそれであたしらはイグナイトギアを纏った」

「そういう事だ。私達の中で確立されつつあった悪意への対処法が崩れたとも言える」

これは厄介と言わざるを得ない。ただどうして立花と雪音がそうなったのが肝心だ。

何せ操りではなく乗っ取られたマリアでさえギアを展開する事は出来なかつたのだから。

——こうなると二人の心の弱さが原因ではないだろうか？ マリアは年長故の責任感があつたが、立花と雪音は少々色恋へ入れ込み過ぎて見るように見える……。

有り得る。先程から二人は悪意に操られていたのに楽観が過ぎる気もしているし。

——それに先程から聞いていれば事ある毎に只野さんを名前で呼んでいる。傲慢しているようにしか聞こえない……。

まったくだ。私だって、私だって呼んでみたいのに。あの人と翼、仁志さんと、親しげに呼び合ってみたい。

——私も以前心を乱し刻印という呪縛をかけられた。ならば只野さんの呼び方を変えて色恋へ現を抜かしている二人なら、悪意をギアとして纏ってもおかしくはない……。

……そうだ。私でさえ心を乱されて付け入られたのだ。ならば立花と雪音がそうならないはずがない。

「とにかく、今はマリア達と話し合おう。話はそれからだ」

私の言葉にみなが頷いてそこからは会話はなくなった。

それにしても立花と雪音は油断ならない。気付かぬ内に只野さんの呼び方を変えていた。

私も、負けていられない。只野さんが殿方らしい夢を見るといふのなら、私がそれを正してあげなければ。

——そして、教えてあげるんだ。風鳴翼は、貴方の前だけ歌の好きな女でいられるんだって……。

「ただいまデース……」

時刻は午後十時二十分を過ぎた辺り。可能な限り静かに引き戸を開け、切歌は疲れた声で帰宅した。

たった五時間とはいえ接客に商品整理などをしていればそれは下手な訓練よりも疲れるというものだ。

この日もクタクタになりながらも彼女はかなり遅い夕食のため洗面所へと向かっていた。

そこで居間を素通りしようとして……

「おかえり切ちゃん」

「ただいまデースよ……」

「おかえり切歌ちゃん」

「ただいまデースよ響さん……」

「暁、お疲れ様」

「ホントにお疲れデース……ん？」

かけられた声でようやく切歌は普段と違う事に気付き玄関へ戻って靴を見た。

そこには普段よりも多い数の靴が並んでいた。そしてそれらは彼女が見た事のある物ばかりである。

それを確認した切歌は慌てて居間へと顔を出した。

「な、何でししよー以外勢揃いデースか？」

そこには仁志を除いた全員がいたのである。ただしセレナは既に寝ていて、響とクリスはかなり色濃く疲労が顔に出ていた。

「それを説明するからまず手を洗ってきなさい」

「わ、分かったデス」

マリアの言葉に頷き切歌は洗面所へと向かい手を洗い始めた。

その間も脳内では？マークが浮かび続けていた。今夜は集まる用事などないと切歌は記憶している。

しかも仁志のいない時に全員が集まるなど初めてだったのだ。

(きつと何か問題が起こったんデス。それも、急にみんなが集まらないといけないやつデス！)

手をタオルで拭きながら切歌は疲れた体に鞭打って表情を凛々しく居間へと向かった。

「お待ちせデス」

「じゃあ、調？ もう一度お願い」

「うん。実はね……」

調の口から語られた仁志の部屋での一部始終。それを聞いて切歌は言葉を失った。

「……悪意が、ギアになった、デスか？」

「タダノはそう言ってたな」

「正しくは悪意がギアに宿った、だったらしいわ。詳しくは聞けなかったけど少し前から響とクリスだけイグナイトギアの表示があったらしいし」

「つまり、ステータスで今後は悪意が潜んでいるかどうか分かるって事か」

「でも、それが出来るのは現状仁志さんだけです」

その響の言葉に切歌が頷いて……はたと何かに気付いて慌てて立ち上がった。

「なななっ！ 何で響さんがししよーを名前で呼んでるデスかつ!？」

「まあそうなるでしょうね」

切歌の反応は既にマリア達がもうやったもの。ただ言われた響はどこか照れくさそうにはにかんでいた。

「え、えっと……実はそう呼んでもいいって仁志さんに許してもらったんだ」

「な、ナンデストお……」

「ま、今だから言うけどな。あたしとこいつは仁志と二人きりの時だけ呼び方を変えてたんだよ。それをこれからは隠す必要はないって言ってくれて」

「ひ、仁志って……クリス先輩もデスか……」

驚き過ぎて言葉がない切歌。実はこの呼び方問題、地味にマリアと奏の二人に焦りを与えていた。

（私が妻みたいって思ってたのが可愛く思えるぐらい、響とクリスは女をしてたのね。只野も只野よ。二人きりの時だけの呼び方なんてどう考えてもそういう意味でしょうに！）

（やつとあたしが只野さんって呼び始めたつのに、とつくに響とクリスは名前呼び、ね。……いっそ、あたしも仁志先輩って呼んでやろうか？）

年長なのに女としては響とクリスに先を越されていた事実。仁志と定期的に過ごせる時間があつたにも関わらず、そこでの変化を起さず事もなくいた事に気付いたのだ。

そしてそうでなかった二人は関わりさえ少なくなった故に、ならばと共有の秘密を作つて関係性を縮めていた。

その結果が今の状態だ。そう、それは……

「クリス、響もだけど、それってお店でも？」

「さすがにそれはやらねーよ。仁志が店じゃ店長って呼んでくれて言つてたしな」

「うん。たしかに仁志さんはそう言つてた」

「ま、あたしも仁志に迷惑をかけたくないし、面倒事になつてもなんだ。ちゃんとその辺はきつちりするさ」

「そうそう。仁志さんだけじゃなくお店にも迷惑かけるかもしれないからね」

二人は、気付いているのだろうか。先程から仁志の名を意図的に連呼している事に。その度に表情を幸せそうにしている事に。

二人を操っていた悪意はたしかに取り除かれた。それは間違いない。だが、その根はまだ残っているのだ。

何故なら二人は神獣鏡の光を浴びた訳でもなければ、巫女ギアでその身を祓い清められた訳でもないのだから。

——そうよ。もつと、もつと煽りなさい。発する言葉が負の感情ではなく正の感情によるものでも、相手や状況によっては負の感情となるのよ。今のお前達の幸せは、他の装者への煽りになるんだから。ふふ……。

悪意がほくそ笑む。根付いたというのはそういう事だ。見えている部分を取り除いたとしても、見えない部分にまだその根が残っている。

根が残っていれば、またいずれ芽吹く事は可能だ。故に悪意は敗北を装った。仁志達に次なる手への警戒をさせぬために。

「立花、雪音もそこまでにしろ。お前達が只野さんと親しくなり関係性を変えたのは分かるが、だからと言って浮かれすぎだ。只野さんだけでなく私達の世界全てが危機に瀕していた事を忘れたのか」

翼のやや鋭い声に名前を挙げられた二人以外も思わず息を呑んだ。

「っ、翼、何もそこまで言わなくても……」

「マリア、そちらもだ。只野さんと家族のように接しているからとはいえ、最近心構えが緩んでいるんじゃないか？」

「そんな事は……」

「では、何故一日に二回も悪意につけ込まれる？ しかも、二度目などを望む発言をしたと聞く。それは、マリアの中にある願望を悪意が汲み取ったからではないのか？」

「っ!？」

思わぬ発言にマリアが言葉に詰まり顔を赤める。そして、それが今の翼には何よりの答えであった。

「凶星か。どうやら今のマリアと只野さんは互いにいい影響を与えないようだ」

「翼、どうしたのさ？ 何か急にカリカリしてない？」

「奏、よく考えてみて。悪意が明確にこちらへ手を出した事はこれま

で分かっているだけで五回になった。最初は暁と月読。この時は悪意は二人の中にある寂しさや疎外感などを刺激して只野さん達への敵意を増幅させた。でも、その際の攻撃対象は一人じゃない」

それだけで翼が何を言いたいのかを奏は悟る。今や明確に悪意が狙っている相手は一人なのだ。

「二度目は奏と小日向。この時もまだ狙いは私達と言えた。只野さんだけを狙ってはいない」

「翼、つまりこう言いたいの？ 今の私では只野といると危険だと」

「ああ。あまり言いたくはないが、只野さんはマリアだけに甘えている。私や奏へ不満や悩みなど言う事はない」

「……そういう事か。分かったよ。だからマリアが二回も狙われたのか」

一番仁志が頼っているマリアならば不意を突く事も出来る。奏はそう考えてやや苦い顔でマリアを見た。

「マリア、言い方はちよつとあれだけど翼の懸念はもつともだよ。少し、只野さんと距離を取りな」

「……そう、ね。私も、彼へ甘えていたもの。お互いに依存し始めてたと、思う」

「朝食や夕食を共にするぐらいはいい。だが、しばらくは只野さんの相談相手は控えるべきだ。代わりに私や奏が受け持つ」

「ん。じゃ、あたしはちよつと店へ顔出してくる。只野さんへも軽く今の話をしておきたいし」

「お願いするね。それと、立花と雪音も気を引き締めてくれ。悪意は思った以上に狡猾に私達の心を狙っている。幸せに浸り過ぎて足元をすくわれないようにな」

「分かってますっ」

「ああ、もう仁志を苦しめる事はしたくねーしな」

ややムツとした声で言い返す響とクリス。それに翼も微かに無然とした表情を返し、場の空気が悪くなった。

（何だろ？ 今の翼さんの感じ、どこかで覚えが……）

（ううっ、何だか空気が悪いデスよお……）

(翼さん、何かイラついてる？ 焦ってるのかな？)

妙に棘があるような翼の態度に内心小首を傾げる調。

切歌はあまり好ましくない雰囲気疲れが増していく感じを受け
苦い顔を見せる。

未来はある意味で同じ立場故に翼の根底にある気持ちへ察しを付
けていた。

(嫌な感じだわ。悪意の攻勢が短期間に集中したせいでみんなの心が
荒れ始めている。只野がいない時に集まったのは失敗だったかもし
れないわね……)

(翼の言う事も分からないでもないけど、何だか刺々しいな。これ、
やっぱ嫉妬してるよね、あの二人にさ)

全員の支えでありムードメーカーでもある仁志を欠いた状態での
話し合いは早計だったと、そうマリアが思つて後悔する中、奏は翼が
その恋心故にやや攻撃的になっていると看破していた。

「あ、あのっ」

そんな中、空気を変えるようにエルフナインが声を発した。

「どうした？」

「き、切歌お姉ちゃんはバイトで疲れてお腹も減っていますし、姉さん
はもう寝ています。今夜のところはこれで解散にしてください」

エルフナインがはつきりと願い出た事に翼は自分の引き起こした
場の乱れを察して俯いた。

「す、すまない。そうだな。今夜はこれで終わりにしよう。暁、我慢を
強いてすまなかつた。その、ゆっくり休んで疲れを癒してくれ」

「へ？ あ、はいデス」

「小日向、部屋へ帰ろう」

「は、はい。みんなおやすみ」

「「「「「おやすみ(なさい)「「「「」」」」」」」

未来へ奏を除いた全員が声をかけ、その背中を見送った。残された
形の奏はその場で伸びをしてゆっくりと立ち上がると残った全員へ
苦笑を見せる。

「まあ、後であたしから翼には言っておくよ。さすがにちよつとイラ

イラし過ぎってね」

「お願いするわ。何となくだけど、凱旋ライブ後の状態に似ていたし」
「そっか。どこかで覚えがあると思っただらそれだ」

「マリアの言葉で調がやっと思いついたとばかりに声を出す。

「あの、奏さん。只野さんに会ったらこう伝えてもらえますか？」

「何だい？」

「この時の調の伝言が悪意の妨害へと繋がる事となる。

——ノールレッドと戦っていた時、翼さんの様子がおかしくなつたのって何が原因なんですかって。

一夜明けて早朝、仁志は店を出ていつものようにマリア達の暮らす家へと向かって歩いていった。

ただ、その足取りはいつになく重い。その原因は昨夜勤務中に顔を出した奏からの伝言にある。

「しばらくマリアへ甘えるな、かあ……」

言われた時に反論出来なかった程、奏の言葉は仁志にも身に覚えがあつたのだ。

（そう、だよな。俺がマリアへ悩みや不満を打ち明けていたから悪意に執拗に狙われたつてのは納得しかない）

今後はマリアだけに寄りかからないようにと、そう奏から言われて仁志は頷くしかなかったのだ。

「……まあ奏と翼ならマリアと似たような立場だし年齢も大人と言えるか。うん、それにあの時翼には精神的に頼って欲しいって言われたしな」

そこで少しだけ足取りを軽くし仁志は歩き続ける。

これまでマリアにだけ寄りかかっていたのを奏と翼へも分ける事で彼女への負担を減らそう。そう思つて仁志は別の事を考え始めた。

（それにしても、XVでの翼の異変の原因かあ……）

調からの伝言を聞いた仁志は、何を彼女が不安に思っているかを悟っていた。

ミラアルクによって刻まれた刻印と呼ばれる呪縛。それを使つて

訃堂に操られてしまった翼。それと似たような事を悪意がやっているのではないかと、そう調は心配したのである。

(悪意が翼を操っているとは思いたくないけど……)

聞いた話だけでは翼の厳しい面が久々に出ただけのように思える。それが今の段階での仁志の感想だった。

やがて仁志の視界に見慣れた家が見えてくる。早朝とは言え陽射しは強く、八月が近い事もあってそろそろ冷房が必要になる時期だ。

「……金に余裕もあるし、今月中に扇風機も用意するか。多分居間だけだもんな、空調が利くの」

マリア達の家には空調しかない。当然と言えば当然なのだが、これまで彼女達からそれだけでは辛いと言われた事がないため失念していたのだ。

「お邪魔しまーす……」

可能な限り音を殺すように引き戸を開け、また閉める。靴を脱いで廊下を歩きながらチラツツと居間を覗く。

そこには静かに眠る四人の寝顔がある。それに癒されながら仁志は台所へ顔を出した。

「マリア、おはよう」

「おはよう。えっと、聞いたとは思うけど」

「ああ、うん。今後は君へ甘えるのを自重する」

「……そう。えっと、でも、絶対にとは言わないから。私も、どうしても貴方に聞いて欲しい事が出来たら」

「うん、いいよ。俺にしか言えない事なら甘えじやないさ。今まで俺達は他の誰かでもいい事をお互いだけに言い過ぎたんだ。それが、何だか心地良かったから」

「只野……ええ、そうね。私も、心地良かった」

マリアの近くへ立ち、仁志は手にしていた袋から廃棄の菓子パンを取り出した。

「これ、君のだ」

「ありがとう。あの、ね？　一つだけ、貴方に聞きたいんだけど」

「俺に？」

少しだけ頬を赤めてマリアは一旦火を止めてから仁志へ向き直った。

「仁志って、呼んでもいいかしら？」

それは仁志にとつて三人目となる呼び方変更の申し出だった。最初は響、次がクリス。しかもその二人以外はこれまで言い出してくる者がいなかった事だ。

「……構わない。むしろ嬉しいよ」

「そ、そう……」

もう恋ではなく愛になった仁志は動揺する事なく受け入れ、まだ恋を抜けきらないマリアはやや動揺を見せる。

「タダノ、おはよう」

そこへ姿を見せるのはヴェイグだった。彼なりにマリアと仁志のやり取りを聞いて終わるのを待っていたのである。

「おはようヴェイグ。いつもの、入れておくからな。それと、これも」

「おおつ、コーヒーじゃないか。どうした？」

「昨夜のお礼みたいなもんだ。クリスの拘束をここぞつて時に解いてくれただろ？」

「ああ、あの事か。つと、そうだ。調の質問の答えは何なんだ？」

「ん……翼がどうして訃堂の言いなりになったか、だよな……つと」

冷蔵庫へシユークリームとコーヒーをしまい、仁志は扉を閉めるとヴェイグへ顔を向ける。

「ミラアルクつて子がいるんだけど、その子の持つ能力にやられたんだ」

「能力？」

「簡単に言うると一種の暗示をかける事。ただその頃は、心が弱つていたり乱れていないと通用しない程度のものだけど」

「そう、そういう事だったのね。あの行為にはそういう意味もあったのか……」

やっと合点がいったとばかりにマリアが呟く。翼の目の前で殺された少女。あれは翼の心を乱すための意味合いがあったのだとここで知ったのだ。

「で、そこからその暗示の主導権をミラアルクから訃堂が受け取り、電話を通じて翼の意識を制御下に置いたって感じだったかな？　で、響達への不信感や自分へのふがいなさを煽って機を見て完全掌握」

「全てが繋がって納得出来たわ。何て男よ……」

「あの人は護国つてもものに囚われた可哀想な人だからなあ。国つてもこの成り立ちを思い出せば、どれだけ自分が間違った事を言ってるか分かるはずなんだが……」

「国の成り立ち？」

そういう事に縁遠いヴェイグが首を傾げた。彼には国などという枠組みは一度として関わった事のないものだったので仕方ない。

仁志はそんなヴェイグの体を持ち上げるとテーブルへと静かに置いて椅子へと座る。

「国は人が集まって出来るんだ。つまり人がいてこそその国だ。その訃堂って男は国つてもものを守るために人を犠牲にするのを最初から受け入れてるんだ」

「……そうか。人が集まって国になるなら、守るべきは国じゃなくて人か」

「そういう事」

マリアはそのやり取りを聞いて笑みを浮かべていた。そして理解したのだ。翼がどうして仁志へ心惹かれたのかを。

(どこか似てるのね、仁志は翼のパパさんに……)

国という大きな括りではなく人というそれを作るものへ目を向けている。力で物事へあたるのではなく、出来る限り話し合いや知恵で何とかしようとする。

それらはマリアが知る風鳴八紘に近いと言えたのだ。そして、そんな仁志を作ったのが彼が大好きなヒーロー作品なのだと彼女は察して小さく微笑む。

「あの頑固お祖父ちゃんにも、ヒーロー物を見せてあげた方がいいかもしれないわね」

そんな事を呟きながらマリアは仁志とヴェイグの分を用意している。そして、今までと違い彼女は自分の分も用意したのだ。

「あれ？ マリアも食べるの？」

「ええ。駄目？」

「そんな事ないけど……」

「エル達と一緒に食べないのか？」

「……これからは、そうしようと思うの」

真つ直ぐ仁志を見つめての言葉に込められた想い。それを彼は感じとり、優しく微笑むと頷いた。

「ヴェイグ、いいじゃないか。エル達はいつも最低三人で食べるんだし、マリアが食べなくても寂しくはないよ」

「……そうか。そうだな」

「じゃあ、食べましょう？」

「よし、手を合わせて……」

仁志がヴェイグとマリアへ目を向けてその動きを確認し……

「……いただきます」

この日、仁志とマリアの間に一つの決め事が出来た。今後は仁志が食べる時にマリアと一緒に食べると言う事。

それがどうしてかを知るのはヴェイグのみ。彼はそれを誰かに言う事はせず、セレナやエルフナインに尋ねられても「そういう気分になったんだろう」と返すのみだった。

ちよつとだけ緊張する。目の前の古い感じのするドアはそんなに見慣れてはいない。

でもこのまま立ち尽くすのも問題になる。そう思って私は意を決してドアをノックした。

「っは……い……」

聞こえてきた声に小さく笑う。今の只野さんの声、少し寝惚けてた。多分だけど軽くお昼寝してたんだと思う。

「只野さん、私です。調です」

「ああつ、ごめんごめん。すぐ開けるよ」

軽く笑いながら声をかけると、ちよつとだけ慌てた感じでこつちへ近付いてくる足音が聞こえた。

ですぐにドアが開いて只野さんの姿が見える。心なしかいつもよりも服装から気が抜けてる感じがする。

「いらっしやい」

「お邪魔します」

そう、今日は私のお部屋デート。朝はアルバイトがあつたからお昼からのデートだ。

部屋の中に入ると風が通り抜ける。見れば窓が開いていた。

「只野さん」

「ん？」

「いつも窓って開けてるんですか？」

多分私用に用意しているんだろうお茶をコップに注ぎながら、只野さんは私の疑問で顔を窓へ向けた。

「ああ、さすがにもう暑くなってきたからね。日中は窓を開けて涼いでるんだよ。それと扇風機」

只野さんが指さした方を見るとそこには真新しい扇風機が首を振って動いてる。

「エアコンは使わないんですか？」

「うん、可能な限り使わないようにしてるんだ。今月は色々出費があつたしね。まあ今後の広告収入は上がりそうだからいいんだけどさ」

若干苦笑する只野さんを見て私は思い出した。

八月になる前につて、そう言つて只野さんは私達の家へ扇風機を買つてくれて、その代金は動画配信からの収入だつて言つてたつて。

実は遂に響さん達もギアの歌を動画として上げたらしくて、それもあつてまたチャンネル登録者が増えたつて只野さんが嬉しそうに言つてたのを思い出す。

「あの、只野さん」

「どうかした？ はい、店で売ってる安い緑茶」

「ありがとうございます。あと、そうやって言わないでください。何だかちよつと嫌です」

差し出されたコップを受け取ると、そこに描かれたのは可愛いクマ

の絵。何となく只野さんが選ぶ気がしない。

「これって……」

「ん？ ああ、それはセレナが自分用について選んだんだよ。どこことなくヴェイグに似てるからって」

「納得です」

セレナらしいと思った。言われて見ればたしかにちよつとヴェイグみたいに見える。

そのまま私は只野さんと一緒にクッションが置かれてる場所まで移動する。

座ると沈むような感じ。これ、あれだ。切ちゃんがヴェイグへ上げた奴だ。

「それで、俺に何を聞きたかったの？」

「あ、えっと、あれからああいうコメント増えてないんですか？」

翼さんが未来さんと一緒に見つけたコメント。それは翼さんのギアを使った歌を聞いた事がある気がするって言うものだった。

だから只野さんは私達のギアの歌も動画として配信した。それでもっとシンフォギアの事を覚えていた人達が思い出してくれるようになって。

「残念ながら。こうなると、やっぱりあれは勘違いをした人のものだったんだろうなあ」

「そうですね。残念……」

只野さんの予想じゃ、シンフォギアの事を元々知ってた人達が思い出してくれば悪意のやろうとしてる事は不可能になるみたい。

その理由は一度忘れたものを思い出させる事でその反動みたいなものが起きるんじゃないかって事みたい。

「でも、もしかしてがある。ならそれを信じて頑張るだけさ」

そう言って笑みを見せる只野さんは、少しだけカッコよく見える。あの響さんとクリス先輩が操られた後から只野さんは、何となくだけど前よりも頼もしくなった。

多分だけど響さん達の気持ち全部受け止めるって決めたからだ。誰か一人を選べないから全員選ぶって、そういう風に。

それを聞いて私は正直驚いた。だって普通は言わない。一人に決められないから全員なんて。そんな事を言えば嫌われる。

でも、だからこそ只野さんは言ったんだと思った。思えば只野さんは絶対に週に一回はみんなが集まる時間を作ってた。

自分が勤務だったたり、あるいは勤務明けでも必ず。例え一時間や二時間でもみんなが集まって話す時間を。

「さて、じゃあ調とは何を話そうかな？」

手にしたコップを置いて只野さんがそう言って腕を組んだ。思えば私と只野さんの二人でちゃんと話すのはお店以外じゃ初めてに近いかも。

「なら、教えて欲しい事があります」

「教えて欲しい事？」

そう、ある時から私がずっと思ってきた事。これを教えてくれるとしたら只野さんしかない。

「何で切ちゃんが師匠って呼んでるんですか？」

「あー……切歌は何も言っていないの？」

「聞いたんですけど、師匠は師匠だからってだけしか」

「うわあ、切歌らしいなあ」

苦笑する只野さんに私も同意するように頷く。全然説明にならないよ切ちゃんって言うてるのに、その一点張りなんだもん。

「えっと、じゃあ説明するよ。その……」

そこからの話は要約するとこれで終わる。

只野さんがそう呼んで欲しいって言ったから。これにつきる。

「只野さんって、そう呼ばれた方が嬉しいんですか？」

「いや、あれはその場のノリと言うかテンションと言うか……」

照れくさそうな只野さんに笑みが零れる。こういうところが切ちゃんが只野さんを大好きな理由なんだと思う。

大人なのに子供みたい。子供みたいなのに大人を出来る。そんな只野さんだからみんな好きなんだ。

……そして、きつと私も。

「じゃ、他に呼ばれたい呼ばれ方ありますか？」

「え？ 他？」

「はい」

だって気付けばほとんどみんな只野さんの呼び方を変えてる。マリアは仁志って呼び捨てに、奏さんは仁志先輩だ。未来さんはまだ変えてないけどきつと時間の問題だと思おうし、翼さんもきつとそう。

そもそもあの家だと私だけが只野さんって他人行儀な呼び方だ。セレナはお兄ちゃん、エルは兄様で、切ちゃんは師匠だもん。

だからちよつとだけ聞いてみようと思った。只野さんがどう呼ばれたいかを。

「そ、そうだなあ……切歌が師匠だから……」

言いながらどこか嬉しそうな只野さん。本当に年上に思えない。

でも、お店で会う時の只野さんは立派な大人。私が質問すると分かり易く教えてくれるし、仕事に関する提案とかは時々データをを見せてくれたりして一緒に考えてくれる。

カップ麺の売り上げが上がったよって教えてくれた時、私は凄く嬉しかった。だからか、只野さんが私の権限を少しだけ上げてくれて売上の数字を見る事は出来るようにしてくれた。

——月読さんのモチベーションに繋がったり、今後の売り場作りに活かして欲しい。

毎日来た時と帰る時にチェックして、退勤した後少しだけ残って売り場とにらめっこ。

それが最近の私の日課。少しでもやった事の結果が出ると嬉しいし、もつと頑張ろうって思える。他のコンビニへ行くとまず見るのはカップ麺の売り場だ。

「じゃ、先生とか？」

「分かりました。じゃあ、先生？ こんな感じでどうですか？」

「うわつ、何か背徳感があるな……」

はいとくかん？ ああ、背徳感かな。えつと、あまり良くない事、だよね？

「ふふつ、どうしたんですか先生？ こう呼べって言ったの、先生じゃないですか」

「し、調？ 何か変なスイッチ入った？」

「かもしれない。それで、どうするんですか先生。これでいきますか？」

言つてて楽しくなってきた。気分的には眼鏡が欲しい。

「うーん……いいかもしれない。調は何となく出来る女つて外見イメージがあるんだよ。だからそう呼んでると敏腕秘書みたいだ」

「出来る女？ 敏腕秘書、ですか？」

出来る女なんて初めて言われた。でもちよつと嬉しい。大人つて事だから。

「そうそう。眼鏡をクイツと上げて、今日の予定はとか言いながらスケジュールを読み上げて欲しい」

思わず顔が熱くなつた。只野さんと私の中のイメージが一致しちゃつた。でも眼鏡は今手元がない。

なら気分だけでもそうしてみよう。そう思つて片手を眼鏡を直すみたいに動かした。

「それでは先生？ 今日の予定ですが……」

「お……」

「むっ、先生？」

私がせっかく秘書やつてるんだからちゃんと只野さんも先生になつてもらわないと。

「えつと……ああつ！ すまんすまん。調君が今日も綺麗で見惚れてしまつたよ」

「そ、そういうお世辞は結構です」

何となくだけど只野さんが肥つたおじさんみたいなイメージになつた。あれかな？ 政治家？

「あははつ、うん、凄くらしいよ。調、ありがとう」

「い、いえ、私もちよつとだけ楽しかったです」

少し恥ずかしいけど、嬉しい事もあつた。只野さんが私を可愛いじゃなくて綺麗つて言つてくれた事。

可愛いだと子供っぽいけど綺麗は大人だ。私、今でも只野さんには大人に見えてるのかな？

「あの、只野さん」

「何だい？」

「私、大人に見えますか？」

そう聞くと只野さんは少しだけ苦笑した。

「調、君にとつて大人ってどういう存在？」

「え？」

思ってもみなかった返しが来た。大人ってどういう存在、か……。

「ママや司令、あとはマリアみたいな感じですよ」

「それじゃまだ足りない。もつと細かく考えてごらん」

「細かく？」

「そう。例えば何があっても狼狽えないとか、あるいは誰よりも率先して嫌がる事が出来るとか」

挙げられた例えに浮かぶのは司令やマリア、翼さん。でも、私が思う大人ってそういう事なんだろうか？

やっぱり司令が大人の代表格みたいな気がする。

「司令、みたいな人かもしれません」

「成程、風鳴弦十郎さんか。たしかに大人だと思う。でも、それは男性としての大人じゃないか？ 女性としての大人の目標が弦十郎さんでいい？」

そう言われるとちよつと迷う。私には司令みたいになれる要素が少ない。そもそもギアもなくてどうやって私達と戦って勝てるのか分からないし。

「なら、ママですよ」

「ああ、成程ね。物静かで厳しくも優しい女性かあ」

「はい。私の理想の大人はママですよ」

言われて凄くしっくりきた。物静かで厳しくも優しい。私の中の大人のイメージピッタリだ。

「じゃ、調はそれを自分なりに目指すんだな？」

「自分なりに？」

ママみたいになろうとするのは駄目って事なんだろうか？

「えつと、物静かで厳しさも優しさもある女性を調らしく目指して欲

しいって事。ナスターシヤ教授の真似じゃなくてね」

「真似じゃなくて……私らしく……」

「うん。君のまままで変わればいい」

そう言っただけで只野さんはちよつとだけ照れくさそうに笑う。これは、多分そういう事だ。

「只野さん、今の、何のヒーローですか？」

「……やっぱり分かる？」

「はい、分かります」

だって只野さんって何か元ネタ？がある時は今みたいな顔する事が多いから。

「仮面ライダーアギト。クウガが未確認との戦いを終えた後の時代の仮面ライダーのOPにある歌詞」

「アギト……」

「そつちもある意味でヒーロー物らしいかもしれない。最終的には人对神なんだ」

「神様？」

「そう。文字通り人類を生み出した存在が最後に立ちはだかるんだ」

凄く気になる。只野さんのこういう話は本当に興味を引く。

そこから私は只野さんからアギトの話を教えてもらう事に。クウガは只野さんが持つてる物だからゆつくり見れるけど、切ちゃんがレンタルってなるとお金と時間の融通が利かないから毎晩見る事になる。

そうなると思朝のバイトがちよつと大変。早起き、辛い。ガガガを見る時がそうだった。特に四天王戦は次が気になって仕方なかった。

「ライダーが三人もいて、人間みんなにアギトになる可能性がある……」

「そう。そう考えるとアギトの世界は誰もがみなヒーローになれるを地でいつてるんだなあ」

「でも、突然変身能力が手に入ったら困ります」

「それだけじゃなくて周囲との軋轢なんかもあるからね。実際終盤そ

の辺りを描くんだよ」

「重たい感じがします……」

「ライダーはどうしてもそういう面を描く事になるからなあ」

只野さんはそう言いながらどこか楽しそうだ。やっぱりこういう話をしてる時の只野さんはイキイキしてる。それがどこか可愛い。

「そういうえば調は料理漫画に興味があつたよね？」

「え？ はい」

急に聞かれた事に反射的に頷いた。実際只野さんに教えてもらったお料理漫画は読んで楽しいし参考になる。

一度試しについてお休みの日に作った時はみんなして美味しいって喜んでくれたっけ。もし可能なら将来はお料理を専門に勉強してみたいかも。

「じゃ、古いものだけでも面白い漫画を教えるよ。今から出かけよう」

「出かけるんですか？」

「そ。ネカフェへ行こう」

思わぬ展開にビックリ。でも、デートみたいな事を見られたら問題って言ってた只野さんから誘ってくれたのが嬉しくて気が付いたら私は頷いてた。

「はいー」

駅前を目指して二人で歩く。何度か見た事はあるけど入った事はないそこへ只野さんと二人で入る。

「えっと、調、二時間ぐらいでいいか？」

「うん」

只野さんの問いかけに頷く。只野さんがとりあえずここでは敬語なしでと言ってくれたからだ。

多分だけど何も知らない人が見たら兄妹に見えるからかもしれない。髪色一緒ってこういう時便利。

「こっちだ」

「うん」

何だか新鮮。只野さん相手に敬語なしもそうだけど、初めてネットカフェなんて来た。

思わずキョロキョロしていると只野さんに見られて小さく笑われた。ちよつとだけ恥ずかしい。

「さて、ここはまあ見ての通り大きなソファやモニターにPCがあるだけなんだけど」

「うん」

「ネットゲームとか時間内ならやり放題。で、ついでに漫画も読み放題。更にソフトドリンクも飲み放題」

「凄い……」

切ちゃんを知ったら通うかも。今だとエルやセレナもかな？ 三人で漫画を読み漁ると思う。

「と言う訳で、目当ての漫画を探しに行こうか」

「あ、うん！」

まるで只野さんがお兄さんになったみたい。ううん、お兄さんだ。今の私にとって、只野さんは色んな事を教えてくれて、大人扱いしてくれる親戚のお兄さん。

二人でしばらく本棚を見て回る。と、只野さんが嬉しそうな顔をして一冊の漫画を手を取った。

「これこれ。はい、どうぞ」

差し出されたのは……ミスター味っ子？

「俺もリアルタイムで見た事はないんだけど、アニメ化もされたやつだ。とりあえず五巻まで持って戻ろうか」

「えつと……これで五巻までかな？」

「よし、なら六巻から十巻までは俺が」

「え？」

五巻までってそう言ったのに。そう思って只野さんを見上げると、只野さんは私を見て楽しそうに笑ってこう言った。

「俺も読みたいんだよ。調と同じ漫画をさ」

その言葉と笑顔にちよつとだけ顔が熱くなる。だから顔を見られないように先に歩き出した。

「お、おい、どうしたんだ？」

「は、早く読みたいんです」

そう言つて誤魔化すと只野さんは納得したみたいで何も言わなくなつた。でも、少しでも早足で歩いて隣へと並ぶ。

「また漫画飯、作つてくれるか？」

「機会があれば、やってみます」

「頼むよ。いやあ、まさか本当に漫画のレシピを見て作っちゃうとか驚いたもんな」

「マリアに負けないようにお料理頑張りたいんです」

「成程ね。じゃ、将来はコックさん？」

まさかの言葉に私は足を止める。すると只野さんも足を止めてくれた。

「……そうなつたら、只野さん、私のお料理食べに来てくれますか？」
「勿論。というか、可能なら試食役に立候補したいぐらいだ」

「じゃあ、お願いします。切ちゃんだと余程じゃない限り美味しいつて言つてくれそうだし」

「どうだろ？ 俺も似たようなもんかもしれないぞ。それに調の料理は美味しいからな」

「っ!？」

そう言つて只野さんはゆっくりと歩き出した。私はその背中を少しだけ見つめて、ハツとなつて追い駆ける。

何だろう？ 今の言葉、とつても嬉しかった。それに、何となくだけど旦那さんみたい。

もしかしてマリアがお料理頑張るようになったのつて、こういう事なのかな？ 只野さんやエル達にこうやって褒められて嬉しくなつたのかもしれない。

だって、今の私はそうだから。只野さんにもっと美味しいつて言つてもらいたい。驚いたり喜んだりする顔が見たい。

二人で部屋へ戻つて漫画を一旦置いて飲み物を取りに行く。お味噌汁なんかもあつてビックリしていると、まさかのソフトクリームまで食べ放題。

ここは天国かもしれない。でも切ちゃんには教えるかどうか迷う。切ちゃん、こつちでもお金がお金がつてよく言つてるし。

「つと、じゃあしばらく読書タイムだ」

「はい」

隣り合ってソファに座って漫画を読み始める。

ミスター味っ子こと主人公の陽一君はお父さんの跡を継いで食堂を切り盛りしてる男の子。お母さんと二人でやってる小さな食堂へ、味王つてお爺さんが来た事で物語は始まった。

「……美味しそう」

二度揚げのカツ丼、思わず唾を飲んじゃう。色がないけどきつと綺麗なキツネ色だ。

カツ丼、か。お家じゃ中々難しいけど、出来ない事もない、かな？

うん、今度のお休みにやってみよう。

そんな事を思いながら読んでるとあつという間に五巻を読み終わる。

「只野さん」

「ん？」

「六巻、貸してください」

「いいよ。それ以降の読み終わった奴もテーブルの上に置いていくから勝手に読んで」

「はい」

何だか本当に兄妹になったみたい。お兄さんの部屋へ来て漫画を讀んでる気分。

そこでふと只野さんの読んでる時の顔が気になった。チラリと見てみると意外と真剣な顔で漫画を讀んでる。

で、チラリとこつちを見た。

「どうかした？」

不思議そうに問いかけられるけど、私は小さく笑ってこう返した。「何でもありません」

「そう？ まあならいいけどさ、これ、読んでるとお腹空いてこないか？」

「ですね。お昼食べたのに食べたくなくなります」

「おつ、調も？ じゃ、二人で何か一緒に食べて帰ろう」

「じゃあカツ丼がいいです」

そう言うのと只野さんは一瞬驚いた顔をしてから何かに気付いて苦笑した。

「いいけど多分二度揚げじゃないと思うぞ」

「いいんです。お腹がカツ丼になってるんですから」

「そう？ カレーも惹かれてない？」

「……パイナップルで出来たお皿のカレーなら」

「ははっ、そりゃ俺も食べたい。うん、じゃあカツ丼だな？」

「はい」

その後は会話はなかった。二人で無言で漫画を読み続けたから。

一度続きを取りに行くのと只野さんはそこから違う漫画を読むって言うって別行動。私は鍵を受け取って続きを持って部屋へ戻る。

先に戻って読んでいると只野さんが嬉しそうな顔で戻ってきた。チラッと見たら、仮面ライダーの文字。

「只野さん、それって」

「ん？ ああ、これ？ これはみんなへ誕生日プレゼントはこれにしてって頼んだ漫画の続き。その読んでなかった巻から読もうと思ってるよ」

表紙には新・仮面ライダーSPIRITSって書いてある。そういえば新がない方って言った。

「誕生日会、いよいよ明日ですね」

「嬉しいやら怖いやら複雑だよ。まさか約二か月遅れで祝われる事になるとは」

「誰のせいですか？」

「ゴルゴムの仕業だ」

「違います」

すぐに否定すると只野さんが小さく苦笑した。

「ごめんごめん。今のは良くある特オタネタなんだ。つい言えると思っただけだった」

「そういう事ですか。只野さん、気を付けてくださいね。これ、切っちゃエールならどういいう事かって聞いてきますから」

「むしろそれならこれ以外の定型文も教えて覚えてもらって」

「只野さん？」

ちよつとだけ目を細めて見つめる。切ちゃんとエルへの只野さんの影響力は凄いからだ。

ううん、それだけじゃない。只野さんの薦めるものは私達の心に響く。あつたかくなるメッセージや想い。共感出来る考えや叫び。それが沢山詰まってるから私達までもそれに影響されちゃう。

嫌じゃないけど。

「じよ、冗談だよ。下手に切歌やエルを特撮に染めすぎるのもどうかと思わないでもないしね」

「もう手遅れな気がしますけど？」

「……………本当に申し訳ない」

がつくりと肩を落とす只野さんを見て思わず笑う。だって、まるで MARIA に叱られた時の切ちゃんみたいだったから。

そんな風に笑う私を見て只野さんが優しく笑みを見せた。その笑顔に思わず息を呑む。

「調がそこまで笑うなんて珍しいな。そんなにさっきの俺は情けなかった？」

「つ……………は、はい。でも、只野さんらしいです」

「俺らしい、かあ。否定し辛いのが何とも……………」

「クスッ、そんな只野さんでも私は好きですよ？」

「それはありがとう。俺も調の事は好きだから一緒だな」

さらりと告げられた言葉に私は只野さんを見つめた。只野さんは笑顔で私を見つめてた。

「だから特別な呼び方とかしなくてもいいよ」

「え……………？」

言われた言葉に私は耳を疑った。只野さんはそんな私へ笑みを浮かべたまま漫画を膝へ置いた。

「切歌が師匠って呼んでるし、エルは兄様、セレナはお兄ちゃん。そこへ来ての MARIA が仁志だ。自分も呼び方を変えた方がいいんじゃないかって、そう思ってくれたんだよな？」

その問いかけに小さく頷くと、只野さんが苦笑して頭へそつと手を乗せた。

「ありがとう。でも、別にいいんだ。俺は呼び方を変えられても変えられなくても気にしないよ。調が呼びたいように呼んでくれればいいから」

「只野さん……」

私を優しく見つめる人の手は、思っていたよりも大きくて、そして少しだけごつごつしてた。

それが只野さんも男の人なんだって強く思い出させてくれて、同時にあのプールでの出来事を思い出す。

「……じゃあ、仁志さんって呼んでもいいですか？」

私の問いかけに只野さんは少し驚いてから苦笑して……

「自由」

って、そう言った。うん、ならそう呼ぼう。私の好きな、子供のようで大人なお兄さん。一緒にいると楽しい親戚のお兄さんってそういう親しみを込めて。

「じゃあそう呼ぶね仁志さん」

「おっ、完全に敬語を取る感じ？」

「当然。親戚みたいな仁志さんへ敬語なんて使うのは変」

「おつといきなりの変わり様だな。じゃ、店では切り換え？」

「うん。店長さんだから」

「それならいいよ。公私のけじめはちゃんとつけないとな」

そう言つて二人で笑顔を見せ合う。切ちゃんが師匠つて呼び方を変えてから只野さんとどんどん親しくなったの、分かる気がする。

だって今、私はさつきよりも只野さんと、ううん仁志さんと仲良くなった気がしてるから。

その後は二人で漫画を時間まで読んで、そこからファミレスへ入つてカツ丼とホットケーキを頼んで二人で分け合った。

——あつ、仁志さんズルい。カツ一切れ多く食べた。

——そういう調もバナライス全部食べてるじゃないか。はい、交換。

何だか本当に兄妹みたいで楽しかった。食べ終わった後は家まで仁志さんに送ってもらって一旦お別れ。

——腹ごなしを兼ねてちよつと散歩してくるよ。また後でな。そう言つてふらふつと仁志さんは私の前から去つた。

心なしか仁志さんの口調が私に対しても砕けた気がする。何だろう？　それが嬉しく思えた。

家へ入つて手を洗つてから居間へ行くとエル達が誕生日会の打ち合わせをしてた。だから私も参加する事に。

——仁志さんのためにケーキ、作らないといけないね。甘いのが好きなのは今日の事で分かつたし……。

スポンジは市販で何とかするとして、飾り付けぐらいは自力でやろう。みんなで集まつてお祝いするんだ。マリアにも言つてフルーツ、奮発しないとね。

「何か、俺の呼び方を変えるのが流行つてるみたいでくすぐつたいなあ」

翌日に迫つた自身の誕生日会。生まれて初めての事にどうすればいいか分からず、それでも今はその事で切歌達が打ち合わせ中だろうと踏んだ仁志は散歩と称して時間つぶしをしていた。

部屋に一旦帰る事も考えたのだが、どうせまた出なければならぬのならと、そう考え直してこうしてフラフラしているのである。

「ん？　あれは……」

そんな時、前方から向かつて来る相手に気付いて仁志は足を止めた。

「翼？」

「只野さん……？」

それはやや物鬱げな表情で歩く翼だった。

翼も仁志の存在にそこで気付いたらしくどこかぼんやりとした顔を彼へ向けた。

「どうしたんだ？　散歩？」

「……そんなようなものです」

どことなく声に力が無い。そう感じた仁志はどうしたんだろうと翼へと歩み寄る。

「何かあったのか？ 元気がないみたいだけど……」

「その、奏とケンカをしてしまって……」

そこから翼が語ったのは、ある意味でよくあるケンカの一部始終だった。切っ掛けは奏が翼の買ったアイスを食べってしまったという可愛いもの。だが当然それに気付いた翼が文句を言くと、奏がいつもの調子で軽く謝った。

普段であればそこで翼がため息を吐いて終わる話だった。しかしどうしても翼にはその態度が気に入らなかったのだ。

——私のものを勝手に盗ってその態度は何？

気付けばそう口から出ていたのである。そこからは少しずつではあるが揉め始め、未来がアルバイトでいなかった事もあってかヒートアップ。

結果、翼は奏へ「もういいっ！ 自分で買ってくるっ！ 奏のバカっ！」と言い放つて部屋を出て来たと、そういう訳だった。

「あー、成程なあ。共同生活あるあるだ」

「はい……」

沈んでいる翼の様子を見て仁志は苦笑すると彼女の手を握った。

「え？」

「俺、今散歩中なんだ。もし良かったら付き合ってくれないか？」

握られた手を少し見て、翼は儂げな感じに笑みを浮かべて頷いた。

手を引つ張られる形で仁志が翼を連れて来たのはいつか未来と立ち寄った飲み物の自動販売機だった。

「とりあえず何か飲む？ 俺の奢りだ」

「じゃあ……スポーツドリンクを」

「ん」

ガタンと音がして青い色のラベルが貼られたペットボトルが取り出し口へ転がり落ちる。それを取り出して仁志は翼へ差し出した。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

「どういたしました。それにしても、思い出すよなあ」
「何を、ですか？」

仁志の言葉に疑問符を浮かべつつ翼はペットボトルのキャップを開ける。小さく外れる音がして、そのまま翼はキャップを取った。「ほら、俺達も少しだけ四人暮らししてたじゃないか。その時にあっただろ？ シュークリームで」

「……ああ」

翼の脳裏に甦るもう数か月前となった思い出。

クリスが取っておいたシュークリームを響が廃棄でもってきた物と勘違いして食べてしまった事があったのだ。

——お前っ！ あれはあたしんだぞ！

——ご、ごめん！ てつきり只野さんが廃棄でもらってきた残りかなって……。

——まあまあ。よし、じゃあこれからは名前を書こう。それならこういう事は防げるだろ？

そこから冷蔵庫上に黒のサインペンが置かれる事になったのだ。

「……結局あまり使われませんでしたね」

「まあ用意したのが引越しの三日前だからなあ」

「今思えば、あれも立花だからやってしまった気がします」

「だろうね。クリスや翼はそこまで食い意地張ってないし」

その言い方に翼は小さく笑った。響の事を食いしん坊と知っているのは分らないでもないが、それを食い意地が張っていると評すると印象が悪いと思ったのだ。

「ふふっ、それでは立花が餓鬼みたいです」

「いやいや、食べ物絡みの響はその傾向あると思うよ。クリスマスも結構食べ物にはうるさいしさ」

「そういえば栄養バランスや彩などをよく考えていました。本当に……」

懐かしいと、そう言いそうになって翼は口を閉じた。

まだ響とクリスが自分達と離れて三か月も経っていない。それなのに懐かしいはないだろうと思って。

「翼、多分だけど焦らない方がいい」

そこへ告げられた仁志の言葉に翼はハツとなった。視線の先に見える仁志の顔は優しく微笑んでいる。

「焦りも悪意につけ込まれる要因になる。その、あまり言いたくないけど君は一度それを利用して訃堂さんの人形にされてしまっただろう?」

「……はい」

「だから焦っちゃダメだ。特に君は年長にあたる。なら焦るのは響達後輩組じゃないと。君はむしろ焦らないといけない時程落ち着いて、冷静にみんなを導くんのだ」

「焦らなければならぬ時ほど……冷静に」

「えっと、俺の好きなゲームの言葉なんだけど、ピンチの時ほどふてぶてしく笑うんだ。相手に余裕がないと思わせちゃいけないよ」

「ピンチの時ほどふてぶてしく笑う、ですか……」

翼の中にあつた焦りや不安、そして何より怒りが和らいでいく。過去の失態と同じ愚を繰り返すのかと自問したためだ。

（私は、何と成長のない事をしようとしていたのだ。お父様を失った遠因がそこにあると言うのに……）

今もまだ胸を締め付ける記憶。だけど、それを辛いだけのものにはもうしないと翼は決めたのだ。

「只野さん、ありがとうございます。私は、どうやらまた呪縛にかかけられていたようです」

「そっか」

「はい。悪意を警戒するあまり、周囲や自分を信じる気持ちを忘れてきていました」

二度とあんな思いはしたくない。最愛の人を失う悲しみと苦しみは、繰り返し返したくない。そう強く思つて翼は笑みを浮かべた。

「やはり私は貴方の前だと素直になれるのかもかもしれません。ただの歌が好きで女に、ただの翼に戻れるんです」

「そ、そっか……」

翼が微笑みながら告げた言葉に何故か狼狽える仁志。その理由が

分からず小首を傾げる翼へ、彼はやや苦笑しながら答えた。

「いや、今、ただの翼って言っただろ？　まるで俺の奥さんみたいな名乗りだなんてさ」

「っ?!」

その瞬間翼の顔が真っ赤に変わる。

(た、ただの翼……。な、成程、只野翼、か……。ああっ、そう考えると急に恥ずかしくなってきた……。っ！)

顔の熱を冷やすように手にしていたペットボトルを頬へ当てる翼。その姿を見て仁志が小さく笑みを浮かべた。

もう大丈夫だと思ったのだ。何故なら今の翼の顔には暗い影のようなものがない。欠片として見えなかったのだから。

「じゃ、スーパーにでも行こうか」

「え？」

「アイス、買うって言って出て来たんだろ？　ついでに奏にも何か買って仲直りだ。きっと今頃奏も部屋で反省してる頃だよ」

「……はいっ！」

ペットボトルのキャップを閉め、翼は仁志と並んで歩き出す。

その姿を上空から見つめる不気味な影のようなものがあった。

——忌々しいっ！　根付く前に取り除かれたか……。まあいいわ。今の装者達には付け込む隙なんていくらでも作れるもの。あははっ……あはははははっ！

はっぴーばーすデーのうた

聞こえてくる誕生日の定番ソング。総勢十一名によるそれは、何とか幸せで、少しくすぐったくて、だけど笑顔になってしまうそんな力を持っていた。

それにしても、まさか三十にもなって誕生日会なんてものを経験するとは思わなかったなあ。

子供の頃両親としていたぐらいで、誰かとやった記憶など欠片もないので新鮮だ。しかも男女比が1:5である。ホント、どうなってんだか。

そうこう考えている内に歌が終わったので俺はケーキの上で揺らめく火を吹き消した。

大きな蠟燭が三本あるので、一本で十歳計算なのだろう。ちなみにケーキは調とマリアの合作らしい。っと、セレナとエルも手伝ったそうだ。

切歌とヴェイグはその際に出たあまりの材料の片付け。つまり果物だのクリームだのスポンジだのを食べて協力したらしい。うん、実に適材適所だ。

火が消えると同時にみんなが拍手をしてくれる。

「おめでとうございますー！」

「おめでとうー！」

「おめでとうデスっ！」

「おめでとうっ！」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとうー！」

「おめでとうございます」

「おめでとうございますー！」

「おめでとうございますっ！」

総勢十一名からおめでとうを連呼されると某アニメのTV版最終

回みたいだな。

まあ、俺は父にも母にも感謝しているし別れを告げるつもりもないけど。

「えっと、みんな、ありがとう」

少々照れくさいが素直に感謝を述べる。それだけでみんなが笑顔になるのだから易いものだ。

そこから料理を食べ始める。ただしケーキは最後の最後。とっておきたいとっておき扱いなのだ。

食べる時はみんな立ち上がったの一種立食パーティー形式。いや、さすがに女性達を立たせておいて自分は座って食べるなんてしたくない。

そうして料理を平らげて残すはケーキのみとなった辺りで切歌が手を挙げた。

「はい！ ししよー、そろそろ肝心な物を渡していいデスか？」

「えっと、ああ、そういう事か。うん、お願いするよ」

「では、エルとセレナからプレゼントぞーてーデス！」

「はい」

「分かりました」

そう言って二人が居間の方へ移動する。で、少ししてこちらへリボンをかけられた全巻セットの漫画を持ってくる。多分だけど押入れ辺りに隠してたんだらうな。

きつとりボンは後で買ったんだらう。地味に手が込んでるけど切歌辺りの発案かね？ もしくはマリアか調かな？

「二はい、どうぞ」

「ありがとう」

以前持っていた物がこうやって戻ってくるのは不思議な感じだけど、嫌じゃない。何て言うか、うん、悪くない。

「只野さん、本当にそれで良かったのですか？ 言われた通り古本で探したのですが……」

「新品の方がいいんじゃないの？」

「いや、いいんだよ。ほんの三年前まで俺の手元にあったんだ。なら、

それを買戻したと思えばいい」

でもさすがに全十六巻は重いな。とりあえずこれは足元に置かせてもらおうとしよう。

ちなみに俺は主役という事で椅子に座らせてもらっているけど、響達の一部は立っている。座っているのはエル、セレナ、切歌に調。

ああ、そうそう。今日だけヴェイグもか。テーブルにはケーキ以外にも様々な食べ物が用意されていたので座る場所がなかったためだ。

全て調とマリアが中心となって作ってくれた物。それとクリスマスや未来が作って持ってきてくれた物だった。

「で、これからどうするの?」

響の問いかけに俺も顔を上げて切歌を見つめた。やはりというか何というか、ほとんど全員が切歌へ顔を向けていた。

「えっとデスね。ししよーはプレゼントはマンガでいいって言ってくれたデスけど、それだけじゃあまりにもサビシイじゃないデスかあ」「うんうん」

「なので、みんなそれぞれで歌をプレゼントって言うのはどうデスカ?」

「〇〇〇歌をプレゼント(だあ)?」「〇〇〇〇」

切歌の提案に俺を含めたこの家の住人以外が疑問符を浮かべた。

対するマリア達は笑っているのだからやはりもう話し合った後なのだろう。

「そう、ギアを使って歌うんです」

「僕とヴェイグさんは姉さんと一緒に歌える歌を歌うつもりです」

「そうなんです。エルとヴェイグさんがゲームの機能で聴いて覚えてくれたから」

「と、言う訳なの。どう?」

「返事をするまでもないよ。世界で俺だけがもらえるプレゼントだ。喜んで受け取らせてもらおうや」

どうも何も俺に拒否する気持ちはない。もらえるなら有難く受け取るだけだ。

「私はいいですよ」

「うん、私も」

「ま、この世界じゃギアの役目はそういうものでいいしな」

「あたしもクリスに賛成。平和的なギアの使い方でもいいじゃん」

「そうだね。なら、この気持ちをそのまま歌に乗せてみよう。もしかしたら、新しい歌が生まれるかもしれない」

その翼の言葉に俺はテンションが上がる。いや、誰も聞いた事のない、しかも誰かが作詞作曲した訳じゃない“本物”の胸の歌が聴けるかもしれないんだ。

これ、地味に凄いぞ。と、そこで俺は思い出した。以前のドライディーヴァで感じた事は、これの結果次第で何とか出来るんじゃないか？

俺に作詞作曲出来なくても、みんなのギアがそれを可能にしてくれる。

今までは戦うための歌が多かった胸の歌でも、この平和な世界で暮らし、戦いから遠ざかった今のみんなならこれまでになかった歌が生まれ出るんじゃないだろうか。

「じゃあ期待させてもらおうよ。みんなの歌を。俺だけのためのスペシャルライブを、さ」

そう俺が告げるとみんなが笑顔で頷いてくれた。こうして小さな、けれど世界一贅沢なライブが始まった。

「一番手はアタシが行くデスよ」

そう言って切歌がギアを纏う。と、そこで彼女が纏ったギアは普段のギア。すると切歌が若干不満そうな表情を見せた。

「むく……分かつてはいたデスけど、これじゃライブって感じじゃないデスよ」

「まあ、そりゃ戦闘用の姿だからなあ」

「デス。ししよー、何かライブ向きな心象変化ギアってないデスか？

もしくは見たいギアでもいいデス」

「ふむ……」

言われてエルへ視線を向けると首から下げた袋からスマホを取り出してくれた。

「どうぞ兄様」

「ありがとな」

受け取ってゲームを起動。そしてステータスを選択して切歌のアイコンをタップ。

「……………うーん」

悩むと言うよりはどれもどれだんつてのが素直な感想。いや、結局は戦うための姿なわけだ。ならライブに向いている方がどうかと思う。

「いつそアイドルギアとかあればなあ」

「アイドル、デスカ」

「そうそう」

いつそツインドライブギアで色々なパターンを試してみるか？
カンフーギア辺りは百烈脚を使えそうな姿とかになってくれそうなんだが…………。

あと、多分その場合奏はクンフーが足りない系の姿になると思う。きつと声繋がりだ。

「ん？」

とかくだらない事を考えていると何故か切歌の表示ギアの数が変わった。一つ増えたのである。

どういう事だと思って見てみれば、そこには見慣れぬ白い感じのギアがあった。

試しにとタップすると…………

「およう？ ギアが変わったデス。って、これはどういう事デスカ!？」

切歌の姿が見た事もないギアになっていたのだ。強いて言うなら…………アイドルっぽい。

ただ、俺はどこかで見た気がするんだよな、あれ。

「切歌、それに見覚えはない？」

「えっ？ ……あっ！」

どうやらあるらしい。

「多分デスけど、これ、ししよーに聞いてみようと思ってたアニメの奴デス」

「何てタイトル？」

「あいますつて言うやつデス。バイト先の社員さんがオススメしてくれたんデスよ」

「ああつ、アイマスかあ」

言われて思い出した。これ、たしか765プロのアイドル達が映画ポスターで着てたやつだ。と言う事は、切歌が薦められたのは劇場版？

「えつと、もしかして輝きの向こう側ってやつ？」

「おおつ、そうデス。そんなタイトルでした」

「そっかあ」

切歌の記憶とアイドルと言う単語、そしてライブという状況。それらが合わさった結果出現したのかもしれないな、これ。

「えつと……ありました」

と、その間にエルが俺のスマホで検索をかけたらしい。今やエルは分からない事があるとすぐにスマホで検索をかける子になっている。

お願いだからググレカスなんて言葉を知らないままでいて欲しい。ネットスラングとかの意味を聞かれたら俺は本気で頭を抱えそうだ。

「わあ可愛い」

「ライブ衣装って感じだね」

「アイドルマスター……か。成程、だからアイマスなのね」

「もしかして、仁志さんがライブって言ったから切ちゃんはその意識してこれ思い出した？」

「可能性はあります。切歌お姉ちゃんは素直で思い込みが強いですから」

「えへへ、たしかにぼんやりとアイドルらしい格好がいいとは思ったデス」

エルの言葉に本人が照れくさそうにしているけど、これ、言ったのがエルじゃなきゃちよつと馬鹿にしてるやつだぞ？

そう思っている内に響達全員がアイマスの衣装を見ていく。

で、俺はと言えばこれでツインドライブにした場合はどうなるのかと思つて試していた。すると何故か発動しないという事に一瞬恐怖

を感じたものの、そこへ表示されたメッセージに苦笑した。

——このギアは対応していません。

どうやらアイドルギアは戦うギアではないらしい。本気でただただギアが切歌の願いへ応えただけなんだろう。

「切歌、アイドルギアがステータスにも反映されてるよ」

「ホントデスか？　じゃあじゃあ、ツインドライブ出来るデスかね？」

「いや、対応してないみたいだ。そうやってメッセージが出た」

「ナント、驚きデス」

「という訳で歌ってもらえるかい？　楽しみなんだよ、これでも」

「ししよーがそこまで言うのなら後はお任せデース！　こほんこほん

……あゝ」

まるで歌手のような事をやって場を和ませる切歌に俺は心の中で拍手を送った。

本当にみんなを明るくする子だよ。そういう意味じゃ、アイドルの資質は十分だな。

「じゃ、歌うデスよ」

そうして切歌が歌い始めた瞬間、誰もが息を呑んだ。

それは、初めて聞く音だった。それは、初めて聞く詞だった。

それは、初めて聞く歌だった。

楽しげに明るく、いかにも切歌らしいそれは、俺と出会えた奇跡に感謝し、笑い合える時間を大事に思っている、そんな歌だった。

「一緒にいるとワクワクするデス。一緒にいるとドキドキするデス。でも、このワクワクも、このドキドキも、きつと貴方と一緒にいる時だけの特別デス！」

惜しむべきはフルサイズ程の長さが無い事だろうか。あるいは、それでこの歌は全部なのかもしれない。

歌い終わった切歌はどこか照れくさそうにこちらを見つめて頬を掻いた。

「ど、どうでしたかね？　ししよーの事を思っ歌ってみたデスよ」

「とても良かったよ。その、切歌の気持ち伝わってきた。ありがとな、切歌。君は俺の最愛の弟子だよ」

「さ、最愛……あう」

「あつ、ごめんごめん。最高のだった」

一文字違うだけで大分違う。まあ切歌が嫌じゃないようなのでよしとしよう。

「じゃあ、次は私がいくから。仁志さん、切ちゃんと同じギア出来ないか見てみて」

切歌とタッチ交代で居間に立つのは調である。で、その言葉に頷き、俺は彼女がギアを纏うの待つ。

それから調のアイコンをタップすると……おいおいマジか。

「いくぞ?」

「うん」

切歌に続いてのアイドルギア。でも、これもある意味でこの世界だから出来るギアかもしれない。

だって、どう見ても特殊能力なさそうだし。出来てもサイリウムの光が勝手に出現するのかな気がする。あと、コールを入れてくれるとか?

「凄いです。こんなに簡単に心象変化ギアを成し遂げるなんて……」

「お兄ちゃん、ステータスでやってるんだよね」

「え? あ、うん」

セレナの言葉に頷く。もしそうじゃないとすれば色々腑に落ちない事が多いし。

だってシンフォギア装者のアイマス衣装だぞ? バンドリ以上の

コラボだろ、それは。

「……あたしからも出来るか?」

「分からないけど、多分これがライブだって強く思えば出来るんじゃないかな?」

「よし、クリスちゃん、未来、私達も頑張つてあのギアになろう。仁志さん、喜んでくれてるみたいだし」

「あー、うん。それは否定しない」

こうして見ると調のギアは……双子のアイドル風だな。だけど……多分真美? で切歌が亜美だと思う。

「それじゃ仁志さん、ちゃんと聞いてて。絶対、初めて歌う歌だから」
そう言って調のギアが演奏し始めたのも初めて聞くものだった。
当然歌われる内容も初めてだ。

切歌が元気系なら調は、ちよつと大人に憧れる系だろうか？ 子供を脱したいと思う少女らしさが感じられる歌詞に調の歌声が乗って微かな色気がある。

「これが恋なのかな？ それとも憧れ？ 私には分からない。だけど、きつとこれは大人の始まり。貴方がくれた、大人への鍵だと思うから」

何というか調の眼差しが若干艶っぽい。こうして見ると色気があるんだよな、この子は。

こちららも切歌と同じで三分もない歌だ。それでもこれが調の胸の歌。今、俺へ向けて歌う歌、なんだろうな。

「どう、かな？」

「とても素敵でどことなく色気のある歌だった。ありがとう調。きつと君は立派な大人の女性になれるよ」

「大人の女性……ふふっ、ありがとう、仁志さん」

少しだけ照れながらも嬉しそうに微笑んで調が居間から動く。

「じゃ、私が行きます。マリアさん達が歌った後はさすがに気が引けるので……」

「頑張れ未来〜」

まるで響が未来のフアンのようだ。まあ実際二人はそういう間柄って言ってもおかしくないけど。

そしてさらりと出現するアイドルギアアイコン。うん、もう驚かない。というか、これは多分あれだ。切歌が実際に見せた事と実物を画像で見たのも影響してる。

トドメに俺が言ったライブって表現だろうな。まあ、みんななら歌手と言うよりアイドルだろうし。

「えっと、聞いてください、でいいのかな？ 只野さんへのプレゼント、です」

未来のギアは……雪歩、だろうか。もしそうなら響がどうなるかは

読めてくるな、これ。

「言いたい事さえ言えなかった。そんな私へ貴方は言ってくれた。誤魔化さないとダメな絆なんて壊してしまえって」

その歌い出しで俺は息を呑んだ。いや、歌詞にじゃない。未来がこつちを見つめて優しく微笑んできたからだ。

切歌や調と違って俺だけを見て歌われる胸の歌はかなり強烈だった。隠す気もない直球の告白じゃないか。

「……みくく」

「こりやあたしらへの挑戦だな」

恨み節にも近い感じで眩く響とクリスに乾いた笑いが漏れる。

まあ、もうこの二人が俺へどう思ってくれてるのは分かっているし、その、悪意に操られていたとは言え、多分ああいう事をさせてもいいと思ってくれているはずだ。

……もったいない事をしたと思えるのはあの危機を脱したからだと思おう。何事も命あつての物種だ。

「……いい、以上です」

歌い終わって恥ずかしくなったのか、未来はそう言うところこそと俺の視界から外れる。

で、入れ替わるように出て来たのは予想通りの少女だった。

「はい、次は私がいきまーす」

元気いっぱい出て来た響がその雰囲気のままにギアを纏う。そしてやはりアイドルギアアイコン出現。それもパンツタイプできっと真、だなこれ。

「響、ちよつとお願いがあるんだけど」

「へ?」

「へへっ、やーりいって言ってもらえる?」

「えつと……」

声は違つてもどこかノリは近い風になるんじゃないか。そう思つて俺が言ったキャラの口調を聞いた響は少し考える感じで黙つて……

「へへっ、やーりい! ……こんな感じ、ですかね?」

「うん、ありがとう。今のだけで十分なプレゼントだよ」

僕っ子ではないけど意外と悪くない。というか、響の優しさで胸がいっぱいになる。

「こ、これで喜んでもらえるならいくらでも言いますからね?」

「あ、ありがとうな。でも、一度でいいよ。その、マジでありがとう」

「あ、あはは……じゃ、じゃあ歌いますね?」

照れていた響だけど、気を取り直すようにそう言って目を閉じた。流れ始める音楽。これも、知らないな。静かな始まり方だけどうなるんだろう?」

「……初めて出会ったその人はどこか眠そうな顔をして、驚き戸惑う私に優しく言葉をかけてくれた」

……まさかの未来スタイル。俺の目をしっかりと見つめて歌われる静かな出だし。

何て言うんだろうな。これをラブソングと言わないで何をそう言うんだと言うぐらいの雰囲気だ。

そこから曲調が変わって明るく元気なものへなる。いかにも響らしいそれに安堵しつつ、だけどドキドキは止まらない。

「ずっと! (ずっと) 傍にいたい! もっと! (もっと) 傍にいたい! この気持ち貴方に届きますようにっ!」

脳内で勝手に「ずっと」と「もっと」コールが入った。いや、うん、響らしい。

ただ、若干愛が重い。俺、今まで未来がそういう傾向だと思ってたけど、響も意外とそっちらしい。

そんな風に思う歌はそこから一分かからず終わりを迎える。

うん、何というか分かった事がある。本当の胸の歌って、やっぱり商品にするとか度外視だから譜割もメチャクチャで韻とか関係ないんだって。

「……ふう、どうですか?」

「あー、うん。俺の感想はセレナの反応に近いよ」

「へ?」

顔を赤くして両手で頬を押さえているセレナを見て響が何か納得

するような顔をした。

隠す気のないラブソングだよ。愛してるとかは入ってないけど、そうだって全身で叫んでるような歌でした。

「んじゃ、次はあたしな」

「う、うん、どうぞ」

響と交代で居間の中央へ立つクリス。そしてギアを展開すると俺の手でアイドルギアへって……おおっ。

「へえ、あたしはこんな感じか」

あれは……多分伊織、だな。同じツンデレって事だろうか？ ああ、お嬢様って共通点もあるな。

ただ、クリスの場合は元がついてしまうけど。ご両親が生きていれば良家のお嬢さんだったろうからなあ。

「じゃ、しっかりとその耳で聞きやがれ。その、仁志のために歌うんだからな？」

「ああ」

クリスのギアが流し始めた音楽は予想に反して穏やかなものだった。アップテンポかあるいは激しいのがくると思ってたんだが……。

でも歌い始めて気付いた。クリスの素直な思いが出せる一番のものって歌なんだ。だからこそ、俺への気持ちを伝えるのに激しい歌やノリノリな歌にならないんだろうって。

「最初はこつちが引っ張ってたのに気付けばそつちが引っ張ってる。それがとても不思議ですっげえ嬉しい」

照れくさそうに、嬉しそうに、俺を見つめながら歌うクリス。Gで見た放課後モノクロームをどこか思い出す。

ああ、そうか。あのクリスが心から歌を楽しんでるからか。しかも、自分の想いを俺だけじゃなく響達仲間へも包み隠さず吐露してるんだ。

「あたしに恋を教えてください。あたしに、愛を教えてください。ありがとうございます……」

な、何というか響の時以上に照れくさい。あ、愛を教えた事はないんだがなあ。

「じゃあ、次は私達がいくね」

「うん、お願い」

「ヴェイグさん、大丈夫ですか？」

「ああ、歌詞は覚えたからな」

セレナがヴェイグを抱えてエルと手を繋いだまま居間の中央へ立つ。そしてギアを纏ったので、俺は試しにアイドルギアがあるか探す。

で、結果はありました。セレナの姿もアイドルギアへと変わり、エルとヴェイグがどこか驚いていたのが印象的だ。

多分だけどセレナなのにパンツスタイルだからだろう。きっとあれはやよいだろうな。やっぱりこれ、俺のイメージをどこか反映してるんだ。

「じゃあ行くよ？」

「はい」

「ああ」

そして始まる三人での「誰かのためのヒカリ」は、何とか胸にくるものがあった。

温かいとでも言えればいいんだろうか。こう、知らず笑顔になっていくというか、表情が緩むというか。そんな不思議な力に満ちている歌だった。

歌い終わるとみんなから拍手が出たのも納得の優しい時間だった。その拍手を浴びながら三人は恥ずかしそうに、でも嬉しそうに笑みを浮かべた。

「それじゃあ、私がいかせてもらおうわね」

セレナと交代で出て来たのはマリア。ギアを展開してこちらを見つめてくる。これ、アイドルギアは出来ないかって事か。

なのでマリアのアイコンをタップすれば見事アイドルギアがある。ホント、どうなってるんだよ、これ。

「……………」、こういう衣装は初めてだから少し恥ずかしいわね」

マリアのは……律子、か。もしかして俺、マリアからダーリンって呼ばれたいのだろうか？

……否定出来ない。というか、ダーリン呼びのマリアとか新鮮過ぎる。何となくだけど恥ずかしそうに顔を背けながら言つて欲しいもんだ。

「マリアはアイドルつて言うよりアーティストだからねえ」

「だが似合っているぞ」

「そ、そう？　なら、ありがとう。じゃあ、仁志、聞いていて。私の歌を」

スツと空気が変わる。マリアが両手を胸に当てた瞬間雰囲気が変わるのが分かった。

やがてギアから知らない曲が流れ出す。穏やかに、だけどどこか力強いその音色はマリアにぴったりだと思った。

「恋なんて出来ないはどこか諦めていた。私には遠い世界の話だとさえ思っていた……」

聞こえてくるのはマリアの心情。そこで思い出す。あの初めて出会った日のやり取りを。彼女は結婚出来ないと思つていふような風に喋つていた事を。

マリアの歌は続く。俺と出会つて共に過ごす内に夫婦生活をしていふような気持ちになつたと、そう彼女は歌う。

愛らしい妹達と支え合つて生きる中で、俺との時間がいつしか愛おしくなつていた。そう、マリアは歌う。

「この日々を、この時間を、私は大事にしたい。貴方がくれた居場所と温もりを、いつまでも優しく抱き締めていたいから」

マリアも、最後まで俺の目を見つめて歌い切つた。ああ、うん、分かつてるよ。君が俺へどう思つて、どう心を寄せてくれていたか。

俺達は、ここで夫婦をした。セレナとエルという子供を相手に悪戦苦闘しながら父と母をやっていたんだ。

それを、君は幸せと感じてくれた。俺も、それを幸せと思つていた。そして君はそれを現実にしたと思つてくれているんだろう。

あの時の悪意の演技は、やはり根底にマリアの願望があったんだ。俺の子が欲しい。それは、きっとそういう事なんだと思うから。

「……感想、もらえる？」

「えつと……伝わった」

「伝わった、か……。そう、分かったわ」

噛み締めるようにそう言つてマリアは小さく微笑んでその場から歩き出す。

「次は私が。只野さん、もし出来るなら」

「うん、見てみるよ」

「お願いします」

そう言つたと翼はギアを展開して少し待つ。俺は翼のアイコンをタップして……。うん、あるね。

そして変わった姿は……。予想通りの千早スタイル。髪色、歌への情熱、人付き合いの不器用さ。どれをとつても似てるもんなあ。

「……な、何故か分かりませんが妙な緊張感があります。い、違和感はないですか?」

「翼さん、可愛いですよ」

「似合ってますから大丈夫です」

セレナとエルが翼へ安心させるように声をかける。俺もその意味合いで大きく頷くと、翼が安堵するように笑みを浮かべた。

「では、聞いてください。ただの翼の歌を」

「っ……」

小さく笑みを浮かべての言い方に少しだけドキツとする。意図しつて言つてると、今は分かるからだ。

流れてくるのはまるでどこまでも続く青空をイメージさせるような、そんな音楽。

「この身は剣。そう思っていた私へ、女でいていいのだと貴方は言ってくれた。この身は女。そう言ってくれた貴方へ、私は恋したのだとそう分かつてしまった」

真つ直ぐな眼差しと少しだけ照れるような笑み。ここにいるのは防人でも、ましてやアーティストでもない風鳴翼だった。

きつと、彼女の言い方を借りれば「ただの翼」なんだろう。歌が好き、ただの女性だ。

歌詞はそこからここでの暮らしへと移り、今まで気付かなかった事

や知らなかった事への感動や喜びを歌う。

「私はただの翼でありたい。私はただの翼でいたい。貴方の傍で微笑みながら歌っていられる、ただの翼で居続けたい」

マリアとは違った意味で翼はこの日々を愛おしく思っているんだと伝わった。痛いぐらいに、伝わった。

本当に翼にとってここはただの翼でいられる場所なんだと、そう分かった。

「どうでしたか？」

「うん、嬉しかったよ。翼が、ただの翼として歌うところを間近で観れて」

「そう、ですか。その、私は只野さんさえ望むのならいつでも只野翼になれますからね」

「っ!？」

それはズルいだろ。そう思うも口には出さない。周囲は、多分気付いてない。今の翼の言葉がどういう意味かを。

ああ、もう。可愛すぎるだろ、今の。少しだけにはかみながらそんな事言われたら……なあ。ある意味みんながいるところで良かった。じゃなかったら確実抱き締めるぐらいしてたぞ。

「じゃ、最後はあたしか。仁志先輩、ちゃんと聞いててよ?」

「勿論。心に刻むぐらい耳を澄ませるよ」

そう返すと奏は嬉しそうにギアを展開する。そして俺の手でその姿がアイドルギアへ変わる。うん、予想通りあずささんか。翼は千早だったから正直予想はしてた。

それにしても、響達だとフェアリーと春香はいないのか。まあ、フェアリーはあの三人娘かもしれない。春香は……ある意味シンフォギアの始まりであるフィーネ、なんだろうか？

そんな事を考えながら俺は奏の歌を聞く。勿論初めて聞くメロデーだ。

「頼りなくて冴えなくて、なのに気付けば目が追ってる。そんな自分が理解出来なくて、けれどいつも見つめてた」

……正直、以前までの俺だったら逃げ出したぐらいの歌だった。

というか、俺へ想いを告げてくれた女性達の胸の歌、反則だろ。

俺が全員だつて決意し全部受け止めるんだつて思つてなかつたら、これだけで思い悩んで苦しんでたレベルだぞ。

それに奏は顔を赤くしながら歌つてる。あのカラオケでは激しく情熱的な彼女が、恥じらいなどを感じながら想いを俺へ届けようとしてくれているんだ。

「ヒーローの話をする貴方が好き。子供みたいに笑う貴方が好き。不意に見せる大人の貴方が、好き……」

許されるなら今すぐにテーブルに突っ伏して顔を隠したい。だけど出来ない。奏が全てを俺へぶつけてくれるのなら、俺もそれを全身で受け止めたいから。

歌い終わると奏は深呼吸を一つした。

「どう？」

「……何か嫌な事があつたら思い出すぐらいには胸へ刻み込んだよ」

「そ」

ならいいよ。そんな風に聞こえるような顔で返事をし、奏も居間から動いた。さてこれである種終わりなのだろうが、まだ歌い手は残つてる。

そう思つて俺は席を立つと疑問符を浮かべるみんなを後目に居間へと向かう。そしてみんなが立つた位置へ到着するとテーブルへと向き直る。

「じゃあ、俺からみんなへのお礼だ。その、アカペラだけど許してくれ」

俺に胸の歌なんて気の利いたものは出来ない。だけど、今の俺の心情に近い歌なら知っている。いや、この時間が終わった後の、だろうか。

歌い始めるとみんなが初めて聞く歌に首を傾げる。それでも歌詞を聞いていく内に表情が変わつていく。驚き、喜び、嬉しき。そういうものが宿つたものへと。

「ゆ〜め〜でお〜わらせないっ」

知る人ぞ知る名曲だ。ただ、使われたゲームの雰囲気には合わない

と思われたのか移植版ではなくなってしまったED曲だけだ。

俺は動画で見たんだけど、明るい未来へ繋がっていくような感じが好きなんだけどな。まあきつとあれは長期シリーズ化されると思ってたんだと思う。

バイオハザード、今じゃロングタイトルだもんなあ。

「レールの上、歩いていこうっつー！」

ふ、フルサイズ歌い切ってしまった。前奏や間奏なんかがないとしても、しっかり歌い切る自分に驚きだ。

「……………静聴、ありがとう」

最後に恥ずかしさを隠す意味合いも込めて頭を下げる。いや、いつそカラオケにでも行けば良かったと思う程の内容だな、この誕生日会。

「兄様、今のはなんて歌ですか？」

聞こえてきたエルの声に顔を上げる。そこには優しく微笑む俺の守りたい人達がいた。

「夢で終わらせないって歌だよ。結構古いゲームのトゥルーエンド限定の曲なんだ」

「へえ、じゃあ人によっては聞けないんだね」

「そうだね」

そう俺が答えた時だった。ある意味で当然の質問が切歌から出た。

「ししよー、それってどんなゲームデスカ？」

「バイオハザード。生物災害って意味の和製英語、かな？ 要はとあるウイルスが切っ掛けで生物が化物になっちゃうやつだ。そんな化物だらけの建物や街を舞台に生き残るサバイバルホラー……………」

「ほ、ホラーデスカ」

「だった」

「へ？」

怯えが一転して「どういう事？」みたいな顔をする切歌。うん、本当にこっちの予想通りのリアクションをしてくれるな、切歌は。

「VRって言うものを使った最新作はともかく、今じゃホラー要素は薄れに薄れて初期の頃の怖さは失せてる。敵の化物の怖さ自体は増

してるけどね」

「えつと……?」

「つまり、こちらを不意打ちで怯えさせる要素は薄れている?」

「そんな感じでいいよ。最早ほとんどが単なるウイルスで狂暴化した凶悪化した生物兵器と戦うだけのゲームだから」

嫌いではないけど、俺が見たあのゲームの怖さみたいなのは操作性を一新した辺りで完全に消えた気がする。

まあそこまでファンじゃないのでいいんだけど、1や2が好きだった人は5や6をどう見てたんだろう?

俺は最初別ゲームだと思ったぐらいだ。内容も弾を買えたりするって聞いた瞬間耳を疑ったし。

「それにしても、お兄ちゃん之歌、いい歌だったよ」

「そうか。それなら良かったよ」

「夢で終わらせない。僕も同じ気持ちです、兄様。この時間を、出会いを夢になんてさせません」

「エル……ああ、そうだな」

割とラブソングっぽいけど、どうやら二人にはそれよりも夢で終わらせないという部分が強く刺さったらしい。

それに内心安堵する。まあこの二人にはそういう風に受け取ってもらいたいと思っていたので良かった。

問題は……

「仁志先輩、今のって……」

「そう言う事、でいいのよね?」

奏とマリアの言葉に深く頷く。響とクリスには直接伝えたけど、まだ彼女達には言っていない事を言うために。

「ああ。俺は、俺にはこの時間を終わらせるつもりはないよ。君達に手酷く別れを告げられていなければね。まあそうじゃなかったとしても、全てが片付いた後どうなるか分からないからな。でも例えゲーが閉じるとしても、俺は諦めないで迎えに……いや、会いに行くよ」
少なくとも気持ちだけはそのつもりだ。世界が俺と彼女達を阻むとしても諦める事はしたくない。

まあ、全員に平手打ちされていたら話は別だけでも。

「マリア、奏、翼と未来も聞いて欲しい。俺へ好意を抱いてくれてありがとう。だけど、俺は君達の中から誰か一人を選ぶ事はしない。いや、出来ない。それをふざけるなと思うなら思ってくれていいし、今後事務的な事以外では接したくないと思っても構わない。俺は君達全員の想いを受け止めたいし受け入れたいんだ。この一件が片付いて君達がそれぞれの世界へ帰るまで、俺は馬鹿な男の夢を目指したいから」

そう告げると四人が小さく苦笑した。

「ったく、聞いてはいたけどここまでとはね。仁志先輩、それってさ、普通口に出さないもんだよ」

「そうね。しかもよりにもよってその当事者が揃っている場所でなんて、ね」

「だからこそ、只野さんらしいと思います。隠し事、苦手だし」

「どちらかと言えば、私達にそういう事をしたくない、だろうな。違いますか?」

「違わない。出来る限り君達には誠実でありたいと思ってるから。まあだからってハーレムを目指すってのは違うとは分かってはいるんだけどな」

本当の誠実とは周囲からの目を考え、世間体を考え、悩みに悩んで、苦しみに苦しんで誰か一人に決める事なんだろう。

だから俺はそういう意味では不誠実だ。でも、それ故に隠す事なく打ち明けたんだ。

「あたしがこつちに初めて来た時、仁志先輩は自分や周囲をちゃんと見れてなかった。でも、今回はそうじゃなくてそう言ってるんだよね?」

「ああ」

懐かしいな。奏と初めて会った日の事は今でもはっきり覚えてる。何せ最初は俺をさん付けで呼んでたのに、気付けば只野と呼び捨てになっっていたんだから。

「……覚悟の上か。あの時は説教だったけど、今回はどうしてやろう

か」

「好きにしてくれていい。引つ叩くなり罵るなり怒鳴るなり、さ」
「……………やめとく。だって、どうしたってあたしだけをなんて言っ
てくれないって分かるから」

どこか悲しげで、でも嬉しそうな顔で微笑む奏に胸が痛む。

すまない。口には出さないけど君しかここに来ていなければって、
これは全員に言えるか。

「でも、さ。仁志先輩の事だから全員って言いつつ一人に決めない
とってどこかで思ってるだろ？」

「否定はしないよ。まあ、決められる気はしてないけどな」

もうそうなら最初から全員なんて言うものか。

「あのね、そういう事を平然と言わないの」

「良くも悪くも開き直ったんだ。マリア、前に君は聞いてただろ？」

例え世間から見れば間違いでも、俺の中で正解なら正解だって」

「誰かに迷惑をかけないならという注釈が付くんじやないの？」

「だから迷惑かけないように口に出して表明したよ。俺はこういう考
えを出しました。それを聞いて呆れるなり嫌うなり離れるなり好き
にしてくれて」

「……………つまり、もうこの答えは変わらない？」

「変えるぐらいなら口に出してない」

はつきりと言い切る。ただ力み過ぎないように心掛けた。

するとマリアがこれみよがしにため息を吐いてこちらを見つめる。

「この日々が終わるまでは？」

「最低でもね」

「只野さんはもうあのゲージが好感度とは思っていないんですね？」

翼の確認に深く頷く。エルの仮説を俺も信じる。あれは俺がみん
なを実在の存在だと思っっていくと増えるんだと。

なら彼女達の想いは影響しない。いや、多少はするかもしれないが
マイナスに働く事はないだろう。

「というか、もし好感度だとすればだ。俺はこれも悪意のプレゼント
だと思うぞ。これだけの女性達を相手に俺みたいな奴が事務的な付

き合いを出来るか」

間違いなく誰かへ惚れるっての。いや、惚れ込むっての。実際そう
なってるし。

「そういえばタダノ、一つ聞いてもいいか？」

「ん？ どうした？」

エルやセレナと一緒にあってケーキを見つめていたヴェイグが突
然思い出したようにこっちへ声をかけてきた。

というか、あれだ。まずはケーキを切り分けるべきか。正直切歌や
響もチラチラと気にしてるからなあ。

そう思っただけを切り分けてもらおうとマリアへ声をかけよう
とした時だった。

「どうていとは一体なんだ？」

間違いなく、一部の人間の空気が凍った。平然としているというか
小首を傾げているのはエルとセレナに切歌と調に響。

残りは見事に顔を赤くしていた。俺？ 俺はむしろ青いと思う。
いや、何せヴェイグがそんな言葉を知るとしたら俺からしかない訳
で、でもそうなるや普通説明しているはずなのだ。

では、どうしてヴェイグが言葉は知っていて意味を知らないのか。
それは俺が一方的に発言したからだ。それもヴェイグが説明を求め
られない時に。

それは一つしかない。あのマリアが乗っ取られた時だ。そういえ
ばヴェイグはあの時俺と悪意のやり取りを聞いていたっけ。完全に
失念していた。

「ヴェ、ヴェイグ、道程ってのは道のりって事で」

「ぜってえ違うだろ！」

「ひ、仁志？ 貴方、いつそんな言葉を使ったのよ？」

クリスのツツコミに顔を背け、マリアの疑問にだんまりを決め込
む。だが、そんな事をしてもすぐ分かる人には分かるもので……

「多分例のマリアが乗っ取られた時だね」

「うん、その時しかないと思う。只野さん、どうしてそんな表現を
……」

「多分ですけど勢いで言ったんだと思います……」

赤い顔で俺を見てくる未来。うん、その通りだけど仕方ないじゃないか。俺もあのマリアの行動に動揺してなかった訳じゃないんだから。

「あの、兄様、どうていとはどういう」

「マリア、これ、教えた方がいい？ 正直今の俺には判断出来ない」

知的好奇心の塊なエルが案の定僕も教えて欲しいみたいな感じで尋ねてきた。なのでマリアへパス。

「ええっ?! え、えっと……」

「もしかして、あまり知らない方がいい言葉デスカね?」

「雰囲気的には知らない方がいいって言うよりは知らなくてもいい感じだよ、切ちゃん」

「仁志さーん、どーてーってエツちな言葉ですか?」

言いよどむマリアを見て切歌と調が察しを付け始め、響はズバリな聞き方をしてくる。

「エロい言葉ではないよ。むしろそういうものとは遠い存在って意味だし」

「クスツ、只野さんらしい……」

翼がやや苦笑するように俺を見る。間違っていないだろ? エロから遠い場所にいるからこそその童貞だ。

「まっ、えっと、簡単に言えば女と深い仲になった事のない男って事」

俺とマリアが何も言えないし言わないと見た奏が何とも見事な表現で説明してみせる。嘘は言っていないな、うん。

「そうなんだ。でも、今のお兄ちゃんは姉さん達と凄く仲良くなってると思いますよ?」

「うん、それではダメなのかな?」

「お付き合いしてないからじゃないデスカね?」

「それが有力じゃないかな?」

「ねえ未来、知ってるなら教えてよ」

「えっ?! え、ええっと……」

あー、未来が言い辛そうな反応を見せた瞬間に響達年上三人が何と

なく察した顔をした。

セレナとエルは小首を傾げて不思議顔。癒されるなあ、あの二人。「えっと、マリア、申し訳ないけどケーキ切り分けてくれるか？ エル達がそろそろ食べたいみたいだし」

「そ、そうね。今切るわ」

「タダノ」

「ん？」

で、気付けば俺の近くにヴェイグがいた。

「もしかして、俺は聞いてはいけない事を聞いたのか？」

「あー、そんな事はないよ。えっとな……」

こっそりとヴェイグにだけ意味を教えると、理解出来ないとはばかりに首を傾げられた。

「どうしてそんな事を意味する言葉がある？」

「え？ そう言われると……どうしてだろうな？」

言われて思う。たしかに必要な気がする。未経験って言い方で済ませればいい話だ。

「……人間の考える事は分からない事が多い」

「返す言葉がないよ」

「別にそれが悪い事ではないんだろう？」

「うん、まあそうだな」

童貞や処女が悪いなんて事はどこにもない。だって、ある意味じゃ穢れてない状態って事だし。

「なら、きつとそれはそうじゃなくなった者達が考えた言葉なんだろう」

「へ？」

どういう意味だと、そう思っつてヴェイグを見つめる。

「多分だが、そうじゃなくなつた者達を指し示す言葉はないんじゃないか？ もしそうならおかしいだろ。子供と大人と変化前と変化後に別々の名称があるなら、それにも変化前と変化後それぞれに言葉を作るべきだ。だがそれがないとすればだ。変化した者達が自分達の方が正しいとするために考えた言葉じゃないか？」

「……………まあ童貞に関してはそうかも」

自慢するために生み出された言葉かもしれないと、言われて思った。

ただ、今はともかく昔は貞操に関して厳しい面もあったからなあ。なので何とも言えない。

まあ、現代では童貞は確実差別用語な一面を持つてるけど。

でも、童貞の変化後の名称かあ。考えてみるのも面白そうだ。

未経験が童つて付くから、経験後は童に非ずって事で非童だな。

うん、いいんじゃないか？ 童貞をバカにする奴にはこの非童者つて言い返してやると響き的に非道と似てて割と良くないイメージになるし。

「只野さん」

「ん？ 翼？」

そんなくだらない事を考えていると、いつの間にか近くにいた翼に声をかけられた。

「少し耳を貸してください」

「いいよ。何？」

言われるままに翼へ耳を寄せると小さな、だけどたしかかな声でこう言われた。

——私ならいつでも構いませんよ。

弾かれるように顔を動かすと、そこには少しだけ赤い顔で俯く翼の姿。

「つ、翼、今の……」

「わ、私のデートはそういう事でも構いませんからっ」

「あっ……………」

とんでもない事を言って翼はその場から立ち去る。向かう先は……洗面所かトイレだろうな。

「タダノ、翼はどうしたんだ？ さっき、一瞬だが以前のぷーるで出した不思議な匂いをさせていたぞ？」

「不思議、か……………」

どうやら悪意に操られてって事じゃないらしい。いや、演技してい

る？

「……嫌なもんだな、こういうの」

みんなからの好意をどこかで疑わないといけないうってのは、思った以上に心にくる。

本当に嫌なもんだよ、悪意のおかげで色々疑わないといけなくなるしつつあるし。

いや、だからこそ俺は疑心に囚われないようにしないと。悪意がなんだ。怯えてるだけじゃ始まらないんだ。

これが正しいって言える勇気があればいい。俺は、みんなのために強くありたいし強くなりたいたいんだから。

「仁志、ケーキ切り分けたわよ。主役の貴方が食べないとエル達が食べられないから早く来て」

「分かった」

とりあえず、今はこの時間を楽しむとしよう。そう思って苦笑しつつテーブルへ近付く。

「兄様、早く早く」

「切歌さんが限界です」

「ししよお……」

「はいはい、今食べるから」

「はい、どうぞ」

ケーキの乗った紙皿を手にして俺が食べるのを待つエル達。その急かすような顔を見ながら俺は差し出された紙皿を受け取る。

「ありがとう。じゃ、食べようか」

調が中心となって作ってくれた合作ケーキは美味しかった。店のケーキにも負けてないと言うと調は嬉しそうに笑ってくれ、エルとセレナに切歌は胸を張っていた。

「切歌は余った材料を俺と食べただけだろう」

「い、いいじゃないデスカ。それも立派な手伝いデス」

そんな切歌にみんなが笑う。その笑い声を聞きながら、俺は一人密かに思うのだ。

可能なら来年はちゃんと誕生日当日にこうして過ごしたいと。せ

めて、一緒の時間を生きられないとしても、そういう時ぐらいは共に過ごしたいな。

そう心から願いながら俺はケーキを頬張る。甘くて優しい味なのに、時々微かな酸味が走る。それがまるで自分の気持ちのよう思えて、俺は少しだけ複雑な心境のままケーキを食べるのだった……。

ケーキを食べ終えテーブルの上にあった大皿なども片付いた後、誕生日会を仁志は閉めるべきだろうと思つて周囲を見回した。

「みんな、今日はありがとう。初めて誕生日を家族以外にこうして祝つてもらつたよ。本当に、嬉しかった」

そう告げて仁志は切歌とセレナへ顔を向ける。

「切歌、セレナ、本当にありがとう。俺の独断で誕生日をスルーさせたのに、こうしてみんなを動かしてくれて……感謝してる」

「ししよー……」

「お兄ちゃん……」

「響達も、そのありがとう。三十男の馬鹿なワガママをこうして笑顔で許してくれて」

「これに懲りたら来年はちゃんと当日かその周辺で祝われなさい」

「そうですよ仁志さん」

「反省してくださいね、兄様」

「ああ、分かった」

和やかな空気が流れる中、仁志が会の終わりを告げようとした瞬間だった。

「えっ!？」

エルフナインの首掛け袋が大きく振動したのである。スマートフォンが原因である事は明らかなので慌てて取り出すエルフナインだが、それと同時に居間に置いてあるゲートから何かが出現しようとしていた。

最初は実体を持たない影のようなそれは、ほんの数秒で形を持った力ある存在へと変化する。

「っ!?! ノイズっ!」

それはアルカ・ノイズではなく普通のノイズ。仁志が初めて肉眼で見るとノイズであり、響達にとっては久しぶりの遭遇であった。

そのノイズは迷う事なく仁志——ではなくヴェイグを狙って動き出す。

「こいつ、俺を狙ってるのか!？」

「ヴェイグっ!」

「仁志さんっ! ダメっ!」

ヴェイグの一番近くにいる仁志が彼を庇うようにノイズの前へと立ちはだかる。それにノイズの動きが一瞬止まりかけるも、若干速度を落としながら動き続けた。

響達がそれぞれギアを展開しようとするも間に合いそうにない距離。

——ギアが間に合わない……っ!

九人の心が最悪を想像して微かに軋む。そしてそんな彼女達目の前でノイズの手が仁志へ向けて放たれようとした。

「兄様あっ!」

依り代を首掛け袋から取り出したエルフナインの悲痛な叫びが室内に響き渡る。

果たして仁志はどうなってしまうのか。依り代が震えた理由とは。

答えを告げられる者はなく、無情にも悪意の牙が仁志を貫こうとしていた……。

ならばと次は振動した事から着信していたのではと履歴を探る。だが着信履歴には非通知としか残っておらず、誰からなのかまたはどこからかの手がかりを得る事は出来なかった。

「仁志さんっ！」

「仁志っ！」

「っ」と

一人で首を傾げていると響とクリスに抱き着かれる。

おうっ、柔らかくていい匂いがしてくる。これは不味い。でも幸せ。

「ふ、二人共嬉しいけど離れてくれ。その、あたってるから……」

「っ!?!」

弾かれるように離れる二人を見て、やっぱりあの時の二人は悪意に操られていたと分かった。

でも、正直言えば今のようには恥じらいが強い方が可愛くて色々不味いんだよなあ。

「兄様あー！」

「お兄ちゃんっ！」

で、今度はエルとセレナ。二人を抱き止めて感謝を伝えるようにそっと背中を叩く。

「ごめんな、心配させて。この通り俺もヴェイグも無事だから」

「まったく……貴方らしいと言えばらしいけど……」

「こっちの気持ちも考えてくれよ、仁志先輩」

マリアと奏の言葉には反論もない。でも、二人も安堵するように笑みを浮かべてくれていて、それがこっちの心を軽くしてくれた。

「只野さん、生きた心地がしませんでした。以後気を付けてください」

「同じ事が起きてもいいように私達も気を付けますから」

「ああ、分かっている。その、ごめんな」

翼と未来も若干泣きそうな顔をしていた。

多分だけ最悪を想像してしまったんだろう。

無理もない。俺も正直死を覚悟した。

「ししよお、本気で怖かったデスよお……」

「仁志さん、お願いですからもつと自分を大事にしてください」
「切歌、ごめん。調もすまない。でも、あの時はああするしかなかったんだ」

涙ぐんでる切歌と心から安堵している調へ言葉をかける。

本当に、さつきはヤバかった。ノイズが躊躇したような反応を見せ
たし、最後なんて何故か停止したけど、あれはどのような事なんだ？

……俺を殺すか否かを迷ったんだろうか。

だとすれば、それはやっぱり俺を使ってみんなへ復讐しようとして
いるからだろう。

でも最終的に狙っていたのはやっぱりヴェイグだった。それなの
に何故停止したんだろうか？ 何が狙いなんだ、悪意は。

「タダノ、さつきは助かった」

そして後ろから聞こえてきた声を顔を動かす。そこには怪我一つ
ないヴェイグがいた。

「良かったよ。お互い生き延びられて」

「……ああ」

ヴェイグが頷いてくれたと同じぐらいでエルとセレナが俺から離
れる。

そして俺はゲートへと目を向けた。

「……みんな、聞いて欲しい事がある。さつきのスマホの振動は非通
知からの着信だった。これをどう思う？」

「間違いなく依り代をこちらへ与えてくれた存在からのアラートで
しょう。通知音では緊急性が伝わらないと思っただんじやないかしら
？」

「あたしもその意見に賛成。実際、それがなかったらヤバかったよ、今
の」

「まさか悪意がゲートを使ってノイズを送り込んでくるとは……」

気付けば響達はギアを纏ってゲート付近を警戒するように位置
取っていた。

俺はエルとヴェイグと共に響と翼に守られるような感じになっ
ている。

「兄様、このバッテリーの消耗は……」

「多分だけどきっきの現象のせいだろうな。ノイズの消去ってところか……」

「平行世界も渡れるし、こいつは凄いな」

「戦闘能力がないに等しい俺達はスマホを見つめて話し合いを始めていた。」

「力が無いなら知恵で対応だ。というか、今は少しでもいいから話していたい。」

「……なあエル。この依り代ってさ」

「はい」

「様々な厄介事への対処能力を持つてる。つまりトラブルキャンセラーって感じじゃないだろうか？」

「……有り得ます。ただ、そのためにはかなりのエネルギーを消費するみたいです」

「ああ、ノイズへの発動や止められた時間の中で弦十郎さん達の意識を動かすみたいなのは、な」

「逆を言えばバッテリーさえあればそれらの事も容易に可能とする事でもある。」

「そう考えていると、エルが意を決したように頷いてスマホを手にするところっちへ差し出してきた。」

「エル？」

「これは、もう兄様が持っていてください。僕はこの家に基本います。なら、姉様のギアペンダントで行動可能です」

「でも……」

「それに姉さん達もいます。僕が一人で出歩く事はありませんから」

「その優しい笑顔に込められた想いを感じ取り、俺は深く頷くとスマホを手に取った。」

「心なしかスマホが以前よりも重く感じる。エルの想いと信頼が込められたからだろうか。」

「ありがとうエル。じゃあ、たしかにこれ、返してもらいな」

「はい」

「で、明日にもエル用のスマホ、契約してくるよ」
「え？」

どうしてと不思議そうな顔をするエルへ俺は優しく微笑むとその頭をそつと撫でる。

「この家との連絡手段がなくなるのは困るだろ？ いつもここにいるのがエルなら、マリア達との通信役、してもらわないとな」

「……はいっ！」

今のエルにはちゃんとした仕事があるんだ。そう思つての言葉にエルは嬉しそうに頷いてくれた。

それを見て響達が優しく微笑む。良かった。やっと空気があの恐ろしい出来事の影響から脱したな。

「でもいいの？ お金、かかるでしょ？」

「幸いみんなのおかげである種の不労所得は得られているからね。スマホの一台ぐらい平気だよ」

「ですが、そろそろ各個人へ連絡手段が欲しいところではありますね」
「だね。バイトとかの居場所が分かつてる時はいいけど……」

「私や未来は二人で出かけたとか、クリスちゃんも一緒にとかありますからね」

「そうだな。なあ仁志、あたしらどっちかも連絡手段欲しいぞ」

「あー……じゃあ二台追加で契約か」

新しく購入した物を店や両親との連絡先に設定し直しているため、それを響かクリスへ譲渡する訳にはいかない。

エルから返してもらったスマホを再度そういう用途へ設定してもいいんだけど、もしステータス画面を操作しなければならぬ時にそれらから連絡が入った場合を考えると不味いと思うし。

「いっそあたしは自分のバイト代で支払うよ？」

「いや、それには及ばないよ。奏には動画で収益を上げてもらっているから」

と、そこであの事を思い出す。

「そうだ。ドライディーヴァにお願いがある。ギアを纏って三人の胸の歌を生み出してくれないか？ もしかしたらそれで今度こそ変化

が起こせるかもしれない」

あの胸の歌のプレゼントを聞いていた時に思ったアイデアをマリア達へ打ち明けた。

「ギアを纏って……」

「三人で、か……」

「やってみてもいいと思う。只野さん、いつその事以前のRADIO ANT FORCEも私が立花と雪音の三人で歌い直しましょうか？」

「それはいい。そうしてくれると助かるよ。収益的な面でも」

「仁志さあん……」

「まったく、仕方ねーけど口に出すなよな」

「ふふっ、只野さんらしいよね」

未来の言葉にやや苦い顔で頭を掻く。それでも俺にとっては重要な事なのだ。

「お金の事を考えるのは勘弁してくれよ。後、全員に連絡手段なんて、組織ならともかく一個人で出来る範疇を越えてるんだ。俺が大財閥の御曹司とかなら話は別なんだけどね」

「えっと、その場合は兄様がAIで動くロボットと一緒に戦うんですか？」

そのエルの言葉にみんなが首を傾げた。

まあ分からないだろうから仕方ない。マイトガインはエルとしか話をした事ないし。

「それはいいなあ。あの決め台詞を言えるとかテンション上がるよ」

「決め台詞？ ししよー、何の話デス？」

「えっと、マイトガインって言う勇者シリーズの事」

「「「「「「勇者シリーズ？」」「」「」「」」

また謎の単語が出て来たとそう響きは思ったんだろうけど、その後の反応はもう慣れたものだ。すぐに俺の趣味のヒーロー物だと察したのである。

そうと決まれば切歌が話を聞ききたがるのも定番の流れと言えた。ホント、可愛い弟子を持ちました。

「ししよーししよー、早く早くデス！」

「はいはい。つと、そうだ。奏、ノーパソを閉じてくれるか？ 多分だけれどそれで悪意がやっつてる事と同じ事が出来ると思う」

「そっか。よし」

言われて奏がノートPCを閉じる。するとみんなが一様に妙な反応を見せた。

「何？ 急に空気が……」

「何だか澄んだ感じがするよ、姉さん」

「うん、とても心地いい」

「デスデス」

「へ？」

何を言ってるんだ？ そう思うけどマリア達の雰囲気からすると冗談ではないらしい。

「たしかにそんな気がするな」

「ああ。何だろね、これ」

「ゲートを閉じたから、ですかね？」

「だとすると、ゲートから悪意の力が流れてた、とか？」

「あり得るな。あの厄介さだ。その力でこの世界の空気を淀ませてたんじゃないか？」

翼達までマリア達の意見を後押しする程だった。つまり、本当に空気が変わったって事か。

今一つ理解出来ないから近くのエルとヴェイグへ目を向けた。

「二人も同意見？」

「ああ、そうだな。今は少しだけこの世界の匂い分かる」

「はい。僕も心なしが空気が変わったと思います」

「そうか……」

なんで俺だけ分からないんだろうか。だがみんなの意見を聞いて、クリスの言葉の通りなのではないかと考えた。

ゲートは平行世界と繋がってる。そこからの空気みたいなのが流れてきてもおかしくない。

ん？ 待てよ？ もしそうだとするなら空気を淀ませていたのは何だ？ 間違いなく悪意だ。正確にはその波動や影響力かもしれない

い。

じゃあ、響達に敗れた悪意が再び動き出した時、まずどこでその復活は遂げられたのか。次はそれを考えよう。

もしそれがギャラルホルン内だと仮定すれば、ゲートが常に開き続けていた事で世界の空気が悪くなっていた事の説明はつく。

そしてそこから考えて行けば、平行世界の時間が停止した事が別の意味を持つてくるな。

「エル、意見を聞かせてくれ」

「はい。何ですか？」

これ、もしかしてまた新しい発想の切っ掛けになるかもしれない。

「ゲートから悪意の力の余波のようなものが流れていたとして、それが他の世界にも起きていたとすればだ。あの時間停止は悪意の仕業じゃないかもしれないと思うんだが、どうだ？」

「ど、どういう意味でしょうか？」

「悪意の力の余波で空気が淀んでいたとする。でもそれに俺は気付いていなかったし、今も分からない。これがその世界の住人には分からないようになってると仮定すると、あの時間停止はその余波から世界を守るためと言えないか？」

「……………そういう事ですか」

理解出来たと言うようにエルは小さく頷いてくれた。

そして響達へ分かり易いように説明を始めたのだ。

それを聞きながら俺は思う。また一度状況を整理して考えてみる必要があるのかもしれない、と……。

悪意は復活すると同時に各世界のゲートを通じて力を集め、それがある程度叶ったところで持てる力のほとんどを使って上位世界へのゲートを無理矢理創り出した。

その裂け目から自分の力をゆっくりと流していき、それを利用して戦姫絶唱シンフォギアを消去していったのではないか。

更に悪意はそれが不完全に終わると見るや今度は力を各平行世界へ流していった。この目的は不明だが、おそらく自分達根幹世界に関

する記憶の消去だろうとエルフナインは予想した。

「そして、それを察した星の声が悪意の手出しを封じるために時間停止をしたのではないでしょうか？」

仁志の考えを聞き、エルフナインはそこまで考えを飛躍させたのである。

「ちよ、ちよと待ってよ。でも仁志先輩が前言ってた話だとゆつくりと時間の流れがおかしくなっていたって」

「はい。ですが、それは悪意だけでなく星の声だとしても通じる話です。思い出して欲しいのですが、あの時間の流れのおかしさは、一定ではありませんでした」

「っ!? そうだ! あたしとこいつがスマホを持って本部へ戻った時、こっちは一日も経過してなかった」

「でも私が初めて仁志さんと会った時、ここでの数時間が裂け目のクリスちゃん達には五分にもなっていない……」

「そうなんです。時間経過のずれは基本僕らへ都合よく起きています」

そのエルフナインの結論に誰もが分かり始めていた。時間停止などの現象は悪意ではなくスマートフォンを依り代とした謎の力のやっっている事で、その目的は悪意の侵攻や策略から世界を守る事だと。

「成程。もしそうだとすれば何故依り代で意識だけしか戻せないかも分かるな」

「ああ。悪意がおっさん達へ忍び込んだとしても、だ。身動き出来ないきや何も出来ないようなもんだ」

「じゃ、じゃあ、悪意は今すっごく力を持つてる状態って事アスか?」

「さっきのノイズはそれかもしれないわね……」

「しかも狙いはヴェイグさんだった! 絶対ここで悪意がみんなへ入り込むとヴェイグさんが気付いてるからだよっ!」

大事な友人を狙った悪意のやり口に普段大人しいセレナが珍しく怒りを露わにしていた。

そこにはヴェイグを狙った事で仁志がそれを守ろうと動いた事も

関係している。

（あの時、エルが依り代をお兄ちゃんへ渡そうとしなかったら……っ）
スマートフォンは仁志の近くへ引き寄せられる事はなく、自分達の目の前で彼は炭化していただろう。

黒く炭と化していく仁志を想像し、セレナはきつく目を閉じる。

「絶対、絶対許せないっ！ 許せないよ、悪意のやろうとした事はっ！」

「セレナ……」

初めて見るセレナの姿にマリアでさえ戸惑いが隠せない。

そんなセレナの肩へそっと乗せられる手があった。

「セレナ、気持ちちは分かるデスよ」

「うん。でも、それぐらいに怒りを押さえて。強すぎる怒りは憎しみになって悪意に利用されちゃうから」

「切歌さん……調さん……」

この世界で今まで以上に仲良くなった二人の友人。その言葉と声がセレナの心を落ち着かせる。

「そうだぞセレナ。俺やタダノの事を思って怒ってくれるのは嬉しいが、少し嫌な匂いが出そうになってた。そんなセレナは、見たくない」
「ヴェイグさん……」

「ごめんなセレナ。俺がやった行動の最悪でも想像したんだよな」
「お兄ちゃん……」

悲しそうな顔のヴェイグと申し訳なきような仁志を見てセレナは少しだけ俯き、すぐに顔を上げると優しい笑みを見せる。

「ううん、私こそごめんなさい。どんな時でもみんなの笑顔のために。そう思っておかないと悪意の好きにされちゃうもん」

「……強くなつたわね、セレナ。きつと今の貴方をママが見れば同じ事を言ってくれるはずよ」

妹の言葉と表情にマリアは噛み締めるようにそう告げて優しくその体を抱く。その小さな体にこの数か月で逞しく育った心と意思を感じ、マリアは静かに後ろを振り返った。

（仁志がエルをセレナの支えにとそう考えて始まったこの生活。私達

姉妹の妹としてエルが振舞ってくれたおかげで、どこか甘えがあったセレナはもう立派な姉のように振舞えるようになった)

自分達を優しく見守る仁志を見つめ、マリアはそつと微笑みかける。

するとそれに気付いて仁志が照れたように頬を掻いて微笑み返す。その反応にマリアが逆に照れくさくなり顔を逸らした。

それを見て仁志は静かに苦笑する。マリアの少女のような部分を見たからだ。

(マリアも本当に可愛いところあるよ。願わくばずっとそういう部分を持つていて欲しいもんだ)

まるで兄か父のような事を思いながら仁志は意識を別の事へ向ける。

「エル、さっきのノイズは悪意の仕業と見て間違いないけど、何故このタイミングなんだろうか?」

「そうですね。たしかに妙です。もしヴェイグさんを狙っているのなら就寝した後や一人で昼寝をしている時を狙えばいいはずですから」「ああ。いくら悪意が感情で動いているとして、だ。いくらなんでも全員揃ってる時を狙うか?」

「むしろ全員いるから狙ったのかもしれない」

そこへ聞こえてくる言葉に仁志とエルの顔が動く。そこには凜々しい表情の翼がいた。

「以前エルはこう言いました。悪意はこちらの心を折る事をするだろうと。もし今ヴェイグがノイズによつて炭化させられていたら、私達は全員己を責め、悪意への憎しみや怒りを爆発させていたでしょう」「そうですね。セレナちゃんできえさつきみたいになつちやうぐらいでしたし」

「そういう事かよ。マジでムカつく奴だぜ」

ヴェイグを消せればそれでよし。出来なくてもやろうとした事の意味図を知り、心に怒りを抱き続けければよし。

そう察したクリスは悪意へこのまま何もしないでいるのは嫌だった。せめて何か悪意へ打撃を与えたいと思つて仁志へ顔を向けた。

「仁志、提案がある」

「何だ？」

「今からゲートの中へ行ってカオスビーストを倒してくんだ。全員がツインドライブを出来る今なら、前よりも早く倒せる。悪意の奴がこつちへあんな真似してきたんだ。なら、こつちも黙ってられねえ」

「クリス、でもそれじゃさつきみたいなのが起きたら」

「いえ、依り代の力があります。兄様、充電器を」

「ああ、そうだな。常に充電状態なら割と安心か」

ギアはなくてもノイズを撃退出来る術がある。期せずして得た防衛手段に仁志は内心で安堵していた。

（これで俺が人質とかになる危険性が減った。万が一の際の足手まといにはならず済むか）

状況に応じてツインドライブさせるギアを変えたりする必要もあるかもしれない。そう考えれば今後あるだろう悪意との決戦には自分も参戦する必要がある。そう仁志は思っていたのだ。

「みんな、これだけは覚えて欲しい。強大な力はちよつとした事で人の道を踏み外させる。そんな力を使う時は、少し臆病なぐらいで丁度いい」

「少し臆病なぐらいで、か。仁志らしいぜ」

「ああ。だが、一理ある。一度しか使っていないが、ツインドライブのアマルガムは凄まじい能力だった」

「はい。あの時は無我夢中でしたけど、よく考えると凄い力でした」

「過信し過ぎる事は危険って事ね。仁志、エルとヴェイグをお願い」

「分かってる。それと、多分今日はノイズの追加派遣はないと思うよ。悪意もみんながいなくて、多分今日は俺達へ手を出してもって考えるだろうし、無駄な力を使う事になるからな」

その意見に響達は苦笑しながら納得するように頷く。

そしてセレナは巫女ギアツインドライブを、奏はゴジラギアツインドライブを、未来はミラーリングギアツインドライブを、響達六人はアマルガムギアツインドライブとなってゲートへと入っていった。

それを見送った後、仁志はエルフナインとヴェイグへ今後の事を話

題に話し合いを開始する。

悪意が遂にノイズという分かり易い行動を取ったためだ。これが一時的なものか、あるいはもうそれが可能になったという事なのか。それを考えるために。

だが、これに関してはエルフナインもヴェイグも意見が一致していた。

「あれはきつと突発的な行動だと思います。今後継続するかは分かりませんが、悪意の目的から推測するに日常化はしないはずです」

「ああ、俺もそう思う。あいつはセレナ達の心を傷付けたいはずだ。なら、さっきのはそのための行動だろう。で、効果が出せないとなったらこたわる気はしない」

「なるほどなあ」

あれは悪意が試した手の一つ。そう言われてしまえば納得するしかないと思い、仁志は腕を組んだ。

(こうなるとみんなが集まるのは悪意に狙われる可能性があるのか？ いや、だからといってみんなが集まる時間を無くすのは駄目だ。それこそ悪意の思うつぼだろう)

何せステータスでの悪意の侵入有無の確認をするのにも全員が揃っていた方が都合はいい。

それに何より、彼女達が一緒にいる時の楽しそうな顔を知っている以上、それを無くす事はしたくない。

そう思って仁志は小さく頷いて二人へ別の話題を振った。

「じゃ、次はカオスピーストを全て倒した後の事を聞きたいんだ」

「全部倒した後、か……」

「難しいですが、おそらく次の手を打つはずです」

「次の手？」

「悪意は僕らへの復讐を考えて様々な手を打ってきました。でもよく考えるとある共通点があります」

「共通点？」

一体何だと仁志とヴェイグがエルフナインを見つめる。彼女はその眼差しを正面から受け止め、意を決して告げた。

「もつとも簡単な兄様を殺すまたはその記憶の消去などの手段を講じていない事です」

そう、それは当初からエルフナインが考慮していたもつとも簡単で確実な悪意の勝ち方。

「切歌お姉ちゃんや調お姉ちゃんを操った時も、奏さんや未来さんを操った時も、姉様を乗っ取った時でさえ悪意は兄様への直接攻撃をしませんでした。それどころか遂には兄様を利用する方向へ舵を切りました。これは、以前兄様が懸念した事が理由だと思えます。兄様を使い、響さん達へ望まぬ事をさせるかあるいは……」

「あるいは、何だ？」

「エル、俺に気にせず言ってくれ。今は少しでも悪意の考えを想定して備えておくべきだと思う」

言い難そうな雰囲気を漂わせたエルフナインへ仁志はそう言つて続きを促した。

その想いを酌んでエルフナインは息を吐いて頷いた。

「分かりました。では、僕の考えを言います」

「ああ」

「悪意は、兄様を操れた場合、皆さんの目の前で……殺すかもしれません」

最後には顔を伏せて告げられた言葉に仁志は動揺する事もなく、ただ一言「そうか」と返すのみだった。

ただ、ヴェイグは見た。仁志がエルフナインの言葉を聞いて何かを決意するかのような表情を見せていたのを。

(タダノは、戦う気だ。悪意の企みから逃げずに戦うつもりなんだ……)

(俺を利用するけど出来ないなら殺す、か。実に効率的だけどやっぱりどこか一貫してないよな。だからこそこっちにもチャンスがある。悪意が思っているよりもみんなは強いって事を俺は知ってるんだ。なら俺が心強くあればあとはどうにかなる)

マリア、響、クリスで悪意が狙った事。それらは全て仁志の心へ迫るものだった。

彼女達の恋心を利用し、踏み躪るようなやり方。それに対して仁志は決して負けない事を決意する。

と、そこで仁志はスマートフォン画面を見た。ステータスは変化する。ならばと彼は画面を切り換えてアドベントバトルを選択。

「エル、ヴェイグ、朗報だ。どうやらまた一体倒したらしい」

そう嬉しそうに言っただけで仁志はスマートフォン画面を二人に見えるように置いた。

二人が画面を覗き込むと、ゼフトロスと言う名のカオスビーストにバツ印が打たれていた。

「これで三体目」

「残るは二体、か」

「ああ。きつとそろそろ……」

言いながら仁志が顔をゲートへと向ける。エルフナインとヴェイグも同じように顔を向けた。

もう帰ってくると思って三人はゲートを見つめ続ける。だがしばらく待つても響達は帰還しなかった。

「あれ？」

「おかしいな。もう倒してから十分は経過したと思うぞ」

「ですね。何かあったのでしょうか？」

三人でゲートを見つめる仁志達。それでも一向に変化はない。

「もしかして、帰還途中で別のカオスビーストと接敵したとか？」

「ないとは言いませんね……」

「タダノ、もう一度確認してみたらどうだ？」

「そうだな」

ヴェイグの意見に仁志は再度アドベントバトルをタップし画面を眺める。しかし変化はない。

どういう事だと三人で首を傾げる事更に五分後、そこからアマルガムの輝きと共に響が姿を見せた。

「ただいまっ！」

それを皮切りに続々と帰還する装者達を見て、仁志達は一度だけ顔を見合わせて頷くと揃って声を出した。

「「おかえりっ！」」

そして何故帰りが遅かったかのかを仁志が尋ねると、その理由はマリアの手にあった。

「これを回収しに行ってたのよ」

「ギアペンダント……？　もしかしてっ！」

「奏の世界から預かったガングニール。保管庫になかったから、もしかしてと思ってエルの研究室を探したら見つけたの。エル、これも定期的にメンテナンスしてくれていたのね」

「は、はい。でも、褒めないでください。その、実はそれをメンテナンスしようとしていたのを忘れていたんです。今言われて思い出ししました」

その言い方に全員が一瞬呆気にとられ、すぐに笑い出した。

「え、エルちゃんもそういう事あるんだね」

「ああ、しかも今まで忘れてるとかな」

「仕事のし過ぎだったのだろう。疲れていたんじゃないか？」

「はい。その、今なら分かります。あの頃の僕はどうかしてたんです。仕事をする事が半分趣味になっていたもので」

仕事と研究。それだけがかつてのエルフナインの全てだった。

それが、この上位世界へ来て一変した。何せその両方を失ったのである。

代わりに、家事手伝いというそれまで無縁だったものをやるようになり、それまで触れる事のなかった特撮やアニメへ触れ、何より家族のような関係をマリアやセレナと築く事となった。

その結果、エルフナインも十分な睡眠をとり、よく遊んでよく学ぶという生活を送るようになったのだ。

「じゃ、軽く試してみようか。マリア、ギアペンダントを変えてくれ」「ええ」

この後分かったのは、ギアを変えてもゲージは共通である事と、ツインドライブアイコンは表示されなかった事。そして……

「ソルブライトギア、か。そういうえば忘れてたよ、こいつの存在」

響達ガングニール三人が悪意の種の一件で発現した心象変化ギア、

ソルブライトギアが使用出来るようになる事だった。

「どういう事かしら？」

「多分だけど、これは三つの GANG ニールが揃ってないと使えないって事なんじゃない？」

「でも、私は一人でも使えましたけど？」

「あるいは、こいつで再現する場合は、なのかもしれない。その、このギアを得た時の一件はゲームではこう呼ばれていたんだ。太陽の三撃槍って」

その言葉に響達は納得するように頷き、そして同時にある事へ気付いた。

「『もしかして……』」

「どうかした？」

「ええ。響はこのギアを使って悪意の侵攻を阻止して撥ね退けた」

「じゃあさ、意外とこのギア、悪意へ効果あるんじゃないかってね」

「だから GANG ニールが三つ揃った今しか表示されないんじゃないですか？」

「そうか！ 哲学兵装だ！」

仁志の言葉にエルフラインだけじゃなく誰もが思わず声を漏らした。

「一度響はこれで取り除けないはずの悪意の種を打ち砕いた。それを俺は知ってる。そして君達も」

「……つまりこれがあれば奏が悪意へ対抗出来るギアを持ってるって事ね」

「そりゃ助かるよ。現状悪意へ効果あるギアがないのあたしだけだし」

「でも、それだけで哲学兵装になるんですか？」

響の疑問は当然と言えた。哲学兵装とは多くの人々の概念が蓄積されて至るもの。それがたった数人で可能なのかと、そう思ったからだ。

「……もしかしたら、この世界そのものは僕らを、戦姫絶唱シンフォギアを覚えているのかもしれない」

エルフナインの言葉を真つ先に理解したのはやはり仁志だった。

「そうか。星の声」

「はい。兄様が教えてくれた考え方が真実とすれば、この上位世界そのものは僕らの事を覚えています。だから哲学兵装の要素を満たす事が可能かもしれないんです」

「この世界がアタシ達の事を覚えてる、デスカ」

「そっか。だからそもそもアラートを出してくれた訳だもんね」

調の言う通り、もう彼女達がこの世界へ来る切っ掛けは世界そのものからのSOSだった事が明らかになっている。

であれば彼女達装者の事を世界が知らないはずはない。星の想いがどれ程の重さを持つかわからないが、人よりも軽いという事はないだろう。

故に世界と仁志の概念が哲学兵装の条件を満たしているとしてもおかしくはない。そうエルフナインは考えていたのだ。

「ん？ 待ってください。仁志さん、立花と奏はツインドライブ出来るはずです。なら、そのギアも二人は強化できるのでは？」

「あつ、そっか。よし、じゃあ試しに……」

ここで思いがけない現象が起きる。響と奏のソルブライトギアツインドライブは無事成功。その形状こそ変化しなかったが差色に金色が入った。

そして問題はここからだ。二人が変化すると同時にマリアのソルブライトギアまでも変化したのである。

「これって……」

「ど、どうなってるんですかね？」

「仁志先輩、何か分かる？」

「えっと……もしかしたらって程度なんだけど……」

ゲームでマリアのソルブライトギアは響と奏へ影響を与えるパッシブスキルを持っていた。

それから派生して響と奏の変化の影響をマリアも受ける形になったのでは。それが仁志の出した結論だった。

「じゃあ、私は普段こちらも見に着けておくべきかしら？」

「その方がいいかもしれない。奏が悪意へ対抗できるギアになれるなら、これで一応全員もしもの時に何とか手を打てる」

「じゃ、マリアはギアを二つ持つデスね」

「でも、それでどっちを展開するか決められるかな？」

「そうね……」

どうすべきかと、そう思って考えるマリアだったが、その視線がすぐ仁志へと向けられた。

「どう？」

「あー……多分だけど、マリアが使いたいギアを思い浮かべればそっちの聖詠が出てくると思う」

「あるいはツインドライブならぬダブルドライブが出来るかもしれないませんっ！」

エルフナインの目がキラキラと輝くようにマリアを見つめる。今、彼女の中には仁志から教えてもらった二人で一人のライダーが浮かんでいた。

「だ、ダブルドライブ？」

「あく、完全聖遺物じゃなくギアを同時展開したらどうなるんだろうなあ」

困惑するマリアとワクワクしている仁志。そんな二人を見つめる笑顔のエルフナイン。そこだけ抜き取れば仲良し親子だろう。

「ガングニールとアガートラームの同時展開？ 出来るのだろうか？」

「ギアを展開した後で別のギアって展開出来る気がしないんですけど……」

「そもそも複数のギアと適合できるってのが珍しいんだけどね」

翼と未来の言葉に奏が苦笑する。

こうしてマリアは二つのギアペンダントを身に着ける事にし、どちらを展開するかはその都度判断する事でこの件は終わりを迎える。

ちなみにギアの同時展開はやはり不可能だった事を追記する。それを知った時、仁志とエルに切歌は落胆の色を隠せなかったとか……。

「つと、これでよし」

またゲートを閉じてあたしはギアを解除する。それにしても、凄かったね、バーニングゴジラギア。

まあ怪獣王の力を更に強化してるんだ。強いのは分かってたけど、まさかカオスビーストが怯えるとはね。

「それでデスね、アタシと調がユニゾンしようとしたら」

「アマルガムを纏っている私達六人でユニゾン出来て……」

「まるであの映画のラストのウルトラマン達みたいでしたっ！」

「デスっ！」

響の言葉に切歌が興奮気味に頷く。そう、カオスビーストへトドメを刺したのは響達だ。

あたしと未来でカオスビーストを足止めしてセレナがギアの力でその邪悪な力を弱めていき、そこへ六人が歌いながらまるで一つの光みたいになって突っ込んできて……トドメ。

あれは圧巻だった。相手のカオスビーストつてのも前より手強くなってたはずなのに、あたし達はそれを感じないくらい強くなってた。

「今までも似たような事は経験してきましたが、あれ程の力強さは初めてでした」

「そうね。ネフィリムとの戦いやシエム・ハとの戦いとは比べられない程、あの時の頼もしさは桁違いだったわ」

「正直言つて、G3FA並の威力を個人個人で出してる感じだったよな」

「そこまでか……凄いな……」

仁志先輩の言い方でそのG3FAつてのがとんでもないってのが分かる。

実際見たあたしもあの光景には息を呑んだし。

「これで残るは二体か。で、今回はどこのゲートを？」

「それが……」

「シャロンちゃん達の世界です」

その言葉を聞いて仁志先輩は一瞬表情を訝しむようにしてから、すぐに何か気付いたように頷いた。

「そういう事か……。悪意はよっぽどみんなとの所縁が深い世界を解放したくないらしいな」

「やはり貴方もそう思う？」

「ああ」

マリアの言葉に仁志先輩は即答した。成程ね、やっぱそういう事なのか。

悪意は本気であたし達の連携を、支援してくれる存在を警戒してるんだ。

「で、でもシャロンちゃんの世界には」

「分かってるよ。でも、あそこにいる風鳴さんと雪音さんには依り代が組み込めないし、そもそも彼女達まで来ると色々ややこしい事になる。で、シャロンちゃんの力は使わせる訳にはいかないものだ。融合症例をどうにかするには神獣鏡の光を浴びせる以外に解決策がないからね。あるいは……」

「あるいは？ 何か心当たりあるんですか？」

「えっと、こっちの世界にある錬金術師を題材にした漫画やアニメがあつてね。それだと錬金術つてのがエル達のものとは大きく違ってるんだ。基本は等価交換つて言われていて、その中で人体錬成という禁忌があつてさ」

「「「「「「人体錬成……」「」「」「」」」」」」

とんでもない単語だね、これ。

「もしそれに近い事がそっちの錬金術でも可能なら、アダムぐらいの魔力があればシャロンちゃんの体からえっと……ヤン何とかって言う聖遺物を取り出してみせる事が出来るかもしれない」

「そっか！ 依り代でシャロンちゃんとアダムさんを会わせてあげれば……」

「ああ、可能かもしれない。あちらのお父様も賛同してくれるだろう」「そのためにもこの厄介事を終わらせないと。悪意の奴をぶっ倒してな」

クリスの言葉にみんなで頷く。そうさ、悪意を倒して面倒事を片付けないと。

——でも、そうなったらもう仁志先輩と一緒にバイトは出来ない……。

つ……分かったた事さ。この時間は皮肉な事だけど悪意がいるから続けていられるんだ。

——それだけじゃない。下手したらもう二度と来れない……。それでも……あたしは……

——あたしの世界に仁志先輩はいない。連れて行く事も出来ない。だって、あの世界じゃあたししか装者はいない……。

そう、なんだ。あたし以外に装者はいない。アダム達錬金術師はいるけど、それだってあてにしている相手じゃない。

あたしは、一人で戦い続けるしかないんだ。

——だったらせめて仁志先輩と、あたしの日常を明るく楽しくしてくれる人と一緒にいたいって思っちゃダメかな……。

連れて行けないのに……ううん、連れて行っちゃいけないって思ってるからだ。

——もし、もしも仁志先輩があたしの世界へ来てくれるって言うてくれたら……。

そう、なつたら嬉しい。あたしの旦那さんになつてもらって、只野奏って名乗って……

——子供が出来る頃には、あたしの世界もここみたいにノイズとかが出てこない世界になつてくれるかな？ あたしが装者しなくてもいい世界にならないかな？

無理だ……。アルカ・ノイズなんてもんまで出てくるようになったんだ。

もうあたしには本来の場所でこの世界のような時間は過ぎせない。

「奏さん、どうしたんですか？」

「っ!？」

気付いたら俯いてた。セレナの声に弾かれるように顔を上げた。

しかも見れば全員あたしを見てる。

「ご、ごめん。何かあった？」

「これからどうするかって。ここで解散してもいいけど、どうせなら夕食までみんなで過ごさないかってお兄ちゃんが」

「奏、何か悩み事か？ 俯いてたみたいだけど」

「え？ あ、えつと……」

「言えない。言えば絶対みんなも似た事で思い悩む。なら……」

「バイトの事でちよつとね。だから店長、今夜いい？」

「あー、はいはい。天羽さんからの相談ね。いいよ」

「こうするのが一番だ。仁志先輩になら、甘えられる。そしてあの人も今ならあたしへ甘えてくれる。」

「で、夕食までここでみんなで過ごすのはいいけど、何して過ごすのさ？」

「それな。えつと、今だと選択肢はクウガの続きぐらいじゃない？」

「デスデス。ししよーが与えた情報が気になりまくりんぐなんデスよお」

切歌の言葉にみんなが苦笑する。あたしも笑った。でも、たしかに気になるな。

「今回は見るとすると、見れてライジングフォーム登場ぐらいまでかな？」

「「らいじんぐふおーむ？」」

切歌とエルにヴェイグが揃って首を傾げたもんだから思わず笑った。

「てか、ホント可愛いよね、ここに来てからのヴェイグとエル。見ると癒されるぐらいだ。」

「そりゃ、マリアも母親みたいになるよ。あたしだって今のエルやヴェイグといたらそうなるって。」

「——むしろ、なりたいたいぐらいさ。あの人の奥さんみたいな気分になって、一緒にご飯食べたりに……。」

「幸せ、だろうな。」

「詳しい話をすると面白くないからまだ内緒。と、その前に夕飯の買い物を買わせておこう。で、何がいいかな？」

「素麺とかどうですか？」

「夏らしくていいね」

「でもよ、この人数じゃ大きな器を三つぐらいいるぞ」

「そっかあ」

「それに、それだけあつて全部素麺つてのも飽きるだろ」

クリスはいつも冷静だね。あたしも同感だけどさ。

「夏っぽさがあつて、大勢で食べても飽き難いメニューかあ……」

「そう考えると意外と難しい……」

「そうね……」

未来に調、マリアが揃つて考え込み始める。やっぱりそうになると難しいよな。

「じゃ、いつそ素麺、ひやむぎ、ざるうどん、ざるきしめんと用意してみるか？ 原料は同じなのに形や太さが違うと味が変わる不思議を体験出来るよ」

で、仁志先輩の意見で全員が感嘆符を出す。うん、ホントにあたし達のまとめ役だよ、仁志先輩つて。

そこから買い物部隊が編成される。マリアをリーダーに調や未来が夕飯の買い物。

続いてはクリスと響に翼がこの後の鑑賞会用に百貨へ行って飲み物やお菓子の買い出し。

「それでは、行ってくるデス」

「行ってきます」

「気を付けてな。セレナ、エルを頼むよ」

「うん」

そして切歌は何とバイト先へ行って……ゼアスだっけ。それを借りてくる事に。

時間を考えるとクウガよりも映画二本の方が丁度いいらしい。

エルとセレナは一度切歌のバイト先へ行ってみたいらしくついて行くつてさ。

可愛いもんじゃないか、本当に姉妹みたいだ。

「」「」「」「行ってきます」「」「」「」

「行ってらっしゃい」

あたしと仁志先輩にヴェイグが留守番。あれ、これって……。

「さて、なら俺は軽く眠る。みんなが帰ってきたら起こしてくれ」
「分かった」

そう言つてヴェイグはクッションへ背を預けて目を閉じた。と、仁志先輩が台所へ向いてた扇風機を持ち上げてヴェイグへ向け直す。

「風量を弱にしようと。どうだ？」

「ああ、丁度いい。ありがとうタダノ」

「何の何の」

ははっ、何だか友人つて言うより父と子だね。

それから少しするとヴェイグから小さな寝息が聞こえ始めた。可愛いじゃんか、やっぱり。

「さてと……」

ヴェイグが寝たのを見て仁志先輩はあたしへ顔を向けた。

「それで、一体何を悩んでたんだ？ バイトの事、じゃないんだろ？」

「……やっぱ分かってたか」

「そりゃあね。今更奏がバイトの事で悩む事はないって知ってるさ。君とずっと一緒に勤務してきたんだぞ？」

その一言に胸がキュンつてなった。軽く茶化してるけど、その言葉の裏にはあたしへの信頼と過ぎしてきた時間がある。

嬉しい。これだけで嬉しくなるんだね、あたしって。あははっ、恋って凄いもんだ。

「あの、さ」

「うん」

「この時間が終わったら、あたしは自分の世界へ帰らなきゃいけない」
「……ああ」

そこで仁志先輩の声が真剣なものへ変わる。それが、何故か嬉しい。

「でも、そこにはあたし以外装者は誰もいない。あたしが、全てを打ち明けて寄り添える男も、多分いない」

「……かもしれないな」

「そうだったら、あたしは耐え切れない。うん、もう耐えられないんだよ。こんな平和で幸せな時間を、あつたかい居場所を知った今じゃ」
「奏……」

目が潤んでくる。あたしが見つめるあの人は、そんなあたしを見て辛そうな顔をした。

「こんな事を年長のあたしが言うのはどうかと思う。こんな弱音を、本音を言うのは」

「いいよ。俺にだけは言ってくれていい。俺は装者でもなければ君の世界の住人でもない。君の事を一人の女性である天羽奏としか見ない人間だから」

「っ……仁志先輩……っ！」

優しく、はつきりとそう言われてあたしは我慢出来なかった。

仁志先輩の胸へ飛び込む。すると優しくもしっかりと抱きしめてくれた。

ああっ、あつたかい。それに頼もしくて少しだけ、少しだけ嬉しい気もする。

「奏、辛いと思う。苦しくて寂しくて堪らないと思う。俺も、少しだけ分かるよ。俺も、この十年近い一人暮らしで似た気持ちになった事がある。君とは比べ物にならない境遇だろうけど、それでも死にたいって思った事があるんだ」

初めて聞く話に思わず顔を上げた。そこにはこつちを優しい表情で見つめる仁志先輩がいた。

「意外か？」

「……ちよつと」

「そっか。生きている事が辛いつて、そう思った頃があつたんだよ」

「そうなんだ……」

何だろう。こうやって抱き締められながら過去を聞くと、何だかすっごく恋人っぽい。

「奏、どうすれば君の世界が平和に出来るかは俺には分からないし手助けも出来ないと思う。だからせめて、君が自分の世界で心強くあれようにはしたい」

「あたしが……心強く……」

仁志先輩の温もりがあたしの心を温めてくれていている気がした。背中に感じる腕の感触が、腕に感じる背中の感触が、あたしが一人じゃないって言ってくれてる気がした。

「これがその一助になってくれる事を願うよ」

「え……？」

あたしへ顔を近付ける仁志先輩。う、嘘？ き、キス、するの？

自分からはしないって言ったのに？

まさか、悪意に操られて？

「……へ？」

あたしが突き飛ばすかどうか迷ってる間に仁志先輩はこっちの額へキスをした。

何て言うか、ホツとしたようなガツカリしたような複雑な気分だ。

「どう、だ？ これじゃやっぱり大人の君には不満か？」

「……そうだって言ったらどうしてくれるのさ？」

「ギアを、纏ってみるか？」

っ!？ そ、それってつまり……悪意があたしに入り込んでないか確認するかって事、だよな。

「……うん」

正直胸がドキドキしてる。でもこの機会を逃したらもうきつとキスなんて出来ない。

そう思っつてギアを展開する。それを見て仁志先輩はスマホを操作してしばらく黙った。

「ど、どう？」

「……イグナイトギアの表示はない。でも、考えてみれば奏は元々イグナイトギアがなかったな」

「じゃ、じゃあツインドライブは？」

どうしてもキスして欲しい。そう思っつてあたしは食い下がった。ただ、仁志先輩はそんなあたしに小さく苦笑した。

「奏、その、気持ちは嬉しいけど、普通男女逆のリアクションだと思うぞ」

「っ……いい、いいじゃん。あたしだって、女、なんだよ？　惚れた男とキスしたいって、そう思うのは、駄目？」

かなり恥ずかしいけど本音だ。でも、その甲斐はあったみたい。

「……タツプした」

「ん。どう、かな？」

「……変わってる、な」

「……みたい、だね」

ドキドキしてくる。仁志先輩はあたしを見て、軽く俯くなり小さく息を吐いてからゆつくりと顔を上げた。

「奏、まずこれだけは伝えておくよ。俺は、君の事が大好きだ」

「っ!!」

その瞬間、あたしの胸の奥で何かが弾けた、気がした。

「選べないのは、俺にとつて君達全員が等しく大切に好きだからだ。こんな優柔不断な男で良ければもう一度この腕の中に来てくれるか？」

「っ……うんっ！」

ギアを解除しながらあたしは仁志さんの腕の中へと戻る。ああ、幸せ。

あたしを抱き締めてくれる温もりが、頼もしさが、温かさになって包んでくれる。

だからあたしは顔を上げた。仁志先輩にキスをしてもらうために。

「目を、閉じてくれ」

声に出さず笑顔だけ返して目を閉じる。すると、ゆつくりと気配が近付いてきて……あれ？

「……何で頬？」

そう、仁志先輩はあたしの頬へキスをした。こういう時は普通口にするもんだろ？

そういう不満を滲ませて小さく問いかけると……

「……じゃ、背徳感が凄いだろ」

なんて困った顔で返された。成程、たしかにここはマリア達の家だ。なら、あたしとキスなんてまるで浮気か不倫みたいだね。

「でもさ、だからしたくない？」

「急に女全開にならないでくれよ。昼ドラみたいじゃないか」

「ひるどら？」

「あつ、知らない？ 平日昼にやってるドラマって、基本ドロドロしてる傾向があつてさ」

もうその瞬間にあたしの中の熱が冷めてくのが分かった。

だけど、いいんだ。これがあたしの惚れた男で、仁志先輩なんだから。

でも、少しだけ変わったなつて思う瞬間があつた。それは切歌達が帰ってきた時の事。

三人のただいまって声がして、あたしがおかえりって返した直後……

——続きは別の機会に、頑張つてするから。

つて、そうあたしの耳元へ告げてくれたんだ。

慌てて顔を動かしたけど、その時にはもう仁志先輩は切歌達と接し始めてて、いつもの兄貴モード。

「……ヤバいなあ」

その姿さえも、今のあたしには胸が騒ぐポイントだよ仁志先輩。

何であんな事言った直後からそんな顔出来るのさ？ それってさ、さっきのに照れや躊躇いがなかったつて事だろ？

「エルとセレナが特撮コーナーやアニメコーナーをじっくり見たいつて言うのでちよつと遅くなったデスよ」

「そつか。何か気になるものでもあつたかい？」

「はい。兄様が言っていた作品を見つけたので」

「うん。えつと、鋼の錬金術師？」

「おー、よく見つけられたね」

「アタシが検索してもらつたデスよ。まあ、話をしただけでハガレンだねつて言われたデスけど」

本当にあの三人は仁志先輩の事が好きだね。見てると本当に親戚の兄ちゃんか、あるいは父親つて感じがする。

「……マリアの気持ち、分かるよ。こんなの毎日のように見せられた

ら……ね」

これを見てたら、あの人との子供を欲しいって思うさ。
あたしを奥さんにして、母さんにしてくれて、絶対幸せにしようと
頑張ってくれる人だから。

子供とも全力で向き合って、寄り添って、一緒に成長してくれるつ
て、そう思えるから。

あの時、いつかお望みのキスをしてやろうってあたしは思った。
だけど、それを向こうがしてくれてくれるって言うてくれた。

ホント、あの時もそうだったけど、改めて思うよ。

——こんなの、もっと好きになるしかないじゃん。

そう小さく心の中で呟いてあたしは初めて恋した男を見つめる。

切歌達相手にまるで少年みたいに笑う、大好きな人を……。

「……とりあえず今のがゼアスの一作目。どうだった？」

只野さんの問いかけに私は素直な感想を口にする事にした。

「以前暁が駄目駄目ウルトラマンと言っていた意味が分かりました。
ですが、だからこそ今までで一番身近に感じられるウルトラマンで
す」

「デスデス。弱くて、情けなくて、頼りないのに、やっぱりウルトラマ
ンなんデスよねえ」

「切ちゃん、多分だけど勇気や優しさは持つてるからだと思うよ？」

「はい、僕もそうだと思います。兄様が教えてくれました。ヒーロー
とは特別な力があるからヒーローじゃないんです。誰かのために勇
気を出せる人だからこそ、ヒーローとして力を与えられたり、身に着
ける事が出来るんだって」

エルの言葉が胸に響く。防人も、そうかもしれない。力があるから
なるのではない。

誰かを、国を守りたいと勇気を出せるからこそ戦えるのだ。

お父様はそういう意味では力があつた。知恵を巡らせ、見聞を広め
て人脈を築いて力としていた。

「私はそれよりもゼアスが地球の女の子の人を好きになつてる事が嬉し

かったなあ」

「ああ、恋愛感情を持つてるんだって思ったよな」

「しかも最後はその人のフルートで復活するんだから、凄いやね」

「でも、それはあの女性はゼアスの正体を知ってるって事だけど……」

「いいんじゃない？ 種族は関係なく、互いを思い合う事は出来るって事だしさ」

「セレナとヴェイグみたいにな」

「そうだな」

「うんっ！」

揃って笑みを見せる二人に私を含めた全員が笑顔になる。

種族の違いを越えて、か。生まれた星さえも乗り越えられるのに、どうして世界が越えられないのだろうか？

同じ世界ではない事は、やはり越えられない壁なのだろうか……。

「只野さん」

「ん？」

だから、私は継った。只野さんなら異なる世界同士で思い合った物語を知っているのではないかと。

「異なる世界の者達が出会い、共に過ごした物語はこちらにないのでしょうか？」

私のその問いかけに誰もが息を呑んだ。ただ私の見ている人だけが優しい笑みを浮かべていた。

「あるよ。他にも現代人と未来人で思い合って恋をしたものだってある」

「異なる時代で、恋を……」

「ああ。沢山あるんだ、世界を隔てた恋愛や時間や空間さえも超えた愛は。中には勿論悲しい結末もあるけれど、それを越えて結ばれる想いや絆だってある」

「ひ、仁志さん、私それが見たいです！」

「あ、あたしもだ」

立花と雪音が身を乗り出しそうな勢いで只野さんへ迫る。それに只野さんは苦笑した。

「見ても意味がないよ。だって、俺達は誰かに作られた台本で動いてないんだ。誰かに演出され、誰かに指導されてる訳じゃない。そして、俺達の結末は、未来は、誰にだって、神様にだって分かるものか」
静かに、だが力強く告げられた言葉に誰もが黙る。

ああ、人はこんなにも短期間で変わるものなのか？　こんなにも強くなるものなのか？

私が初めて出会った日、どこか冴えないだけだったはずの人は、もうこんなにも心強いようとしている。

「宿命は変えられないけど、運命は変えられる。何故なら運命は運ばれてくるものだ。宿命は宿るもの。だから、宿命に立ち向かい、運命を変えてみせればいい。悪意が甦るのが宿命なら、その行動の結果は運命だ。俺達の未来は、悪意の好きにはさせない。どんな卑劣で狡猾な手を打とうと、俺達はそれを乗り越え、最後にはみんなで笑うんだ。それ以外の結末なんていらぬ。だから、その運命を掴み取ろう、みんなまで」

「タダノ……ああつ！」

「はいっ！　僕らの未来は僕らの手の中です！」

「うんっ！　いつかみんな笑顔になれるように、私も頑張るっ！」

真っ先に只野さんの言葉に応じるのは、やはりお前達なのだな。

「アタシもししよーの意見に賛成デスっ！　最後はみんなで笑いたいデス！」

「うん、私も。悪意との戦いが宿命なら、その結末は運命だから。なら、私達で最高の運命を掴み取りたい！」

暁と月読の言葉に私は小さく頷く。そうだ、その通りだ。

「心を強く、優しく持つ事が悪意へ対抗する一番の方法なら、只野さんの言う通り笑顔の未来以外考えないようにしないと」

「だね。あたし達しか悪意と戦えない以上、希望って光を常に心に宿してないといけないし」

「ええ。相手が力を増しているけど、こちらだってそれは同じ事。それにツインドライブという新しい力はまだ私達さえも知らない力を秘めてる可能性だってある」

小日向達は自分へ言い聞かせるように、だけど周囲へも聞かせるように考えを述べる。

そう、今の私達には自分達でさえ未知数の力がある。只野さんとの絆とも言える、ツインドライブが。

「ま、何にせよだ。悪意が狙ってるのは仁志だろ？ で、ゲートを今みたいに関じてれば悪意は直接何も出来ない訳だ」

「心配し過ぎは駄目って事だね。ですよね、仁志さん」

「ああ」

雪音と立花はどこか気楽な感じがする。だが、今はそれでいいのだろう。

私も肩の力を抜くべきだ。もしそれが自分で出来なければ、以前のように只野さんへ甘えよう。

……誰かに甘える、か。こう思えるようになった事を強さと捉えられる今の私は、やはり変わったのだろうか。

「あの、只野さん」

「どうした？」

だから、今までの私と別れを告げる。いや、今から私はここでの私に完全になろうと思う。

「仁志さんと、呼ばせてください」

ただのつばさであり『只野翼』と勝手に思い込むために。

「どうぞ。っと、未来？」

「は、はい」

「別に呼び方変えなくていいからな。それにもう俺の事を只野さんって呼ぶ女性いないし」

「……じゃあ、そうします」

仁志さんの言葉に雪音や月詠が小さく苦笑し、小日向は微笑んだ。そ、そうか。私が呼び方を変える事で小日向は労せずして特別な呼び方の方のようになったのか。

で、でも、仁志さんと呼んだ方が、その、夫婦のような感じは出易いはずだ！

「よし、じゃあ休憩として2の上映まで十五分程時間を取りまーす。

その間に飲み物の補充や手洗いなどを済ませておいてくださーい」

「し、ししよーが先生みたいになったデスよ」

「うん、まるで引率してるみたい」

「だろ？ イメージは学生時代の野外学習やバス移動の時の教師だ」

「凄くそれらしいです」

「うん、そんな感じ」

立花と小日向が懐かしむように告げる中、エルとセレナは感心する
ように頷いていたのが印象的だ。

おそらくだが二人は学校というものを知らない。だから仁志さん
達の話聞いてそういうのが学校というものの一部なのだと思うた
のだろう。

「エル、セレナ、言つとくけど必ずしも先生つてのはこうじゃないぞ」

「え？ 違うの（んですか）？」

「勿論。さっきの言葉を弦十郎さんやナスターシャさんが言う俺と
同じ言い方すると思うか？」

その例えに私は小さく笑ってしまった。叔父様やナスターシャ教
授が引率の教師か。ふふつ、きつとその学校は装者育成の機関だろ
うな。

「多分語尾は伸ばさないとと思う（います）」

「な？ 俺のはよくある一般的なイメージってやつさ」

そう言う仁志さんはエルとセレナの頭を優しく撫でた。

それにくすぐったそうに笑う二人を見ていると心が温かくなると
同時に、その、若干気持ちが騒ぐ。

——仁志さんの子が、欲しい。あの人との子を抱いて、お父様へ孫
を見せてあげたい……。

ああ、本当に。お父様へ孫を見せてあげたい。抱かせる事は叶わな
くても、せめて、せめて見せるぐらいは……。

——もし、全てを終わらせた時に仁志さんと別れる事になっても、
あの人の子だけでもいれば……。

そ、それは……で、でも、私も仁志さんとなら……。

——今の私はもしかすると子を宿せないかもしれない。ならば、せ

めて心を、想いを通じ合わせた思い出だけでもいい。あの人を、仁志さんを刻んでももらいたい……。

思い出だけでも……。そう、だね。仁志さんに私の初めてを捧げよう。どうせ、本来の居場所では剣の私だ。

なら、女であるここで女としての全てを仁志さんへ捧げよう。少しでも、あの人の記憶の中に残れるように……。

そうだ。私はデートがまだだった。なら、その時に、その時に思い切って仁志さんへ……。

「二二シュワツチっ！ シュワツチっ！ 頑張れゼアスっ！」

エルやヴェイグさん、切歌さんと一緒になって画面の中のゼアスへ声援を送る。

一度負けた相手。受けた痛みや恐怖。それを心を鍛えて乗り越えて、新しい技まで覚えてゼアスは自分から戦いへ戻ってきた。

私は、それを見て分かった事がある。戦う事はヒーローだって怖い嫌なんだ。だけど、それから逃げたらもつと嫌な事や怖い事になる。だから勇気を振り絞って戦うんだって。

「……あの戦いを乗り越えたのにたった一度の敗北で情けない。そう思った自分が嫌になるわ」

その姉さんの言葉に私は少しだけ後ろを振り返った。姉さんは今までと違ってテーブルじゃなくお兄ちゃんの近くに座ってる。

「いや、そういう意見があってもいいんだよ。全員が全員同じ意見じゃ意味がない。いや、こう言うべきかもな。物事への感じ方は人それぞれだ。どれが正しいかなんて人によりけりさ」

「……そう、ね。うん、そうだよ」

あつ、そつと姉さんがお兄ちゃんの手へ自分の手を重ねてる。も、もしかして姉さんはお兄ちゃんと結婚したいのかな？

もしそうになったら、お兄ちゃんは私の兄さん？ あれ？ でもそれって何が今と変わるんだろう？

——ちよつと待って。そうなった場合、姉さんはお兄ちゃんの傍にずつというよね？ じゃあ、私は？ 一人ぼっちになっちゃう、かな

……？

「っ?!」

急に胸が苦しくなった。そうだ。姉さんがお兄ちゃんと結婚したら、ずっと傍にいたいって思うはず。

そうなたら、私はもう姉さんと一緒に過ごせない？ お兄ちゃんとも、遊んだり出来ない？

——それを避けるには、ママと離れるしかない。だけどそんな事は出来ない……。

うん、無理だ。私しかあの世界には装者がいない。ママを、一人には出来ない。

——何とか出来ないかな？ いっそお兄ちゃんが私の世界へ来てくれれば、姉さんも一緒に暮らせないかな？ それなら、三人で一緒に暮らしていけるのに……。

お兄ちゃんを……私の世界へ……。

——ママもきつと依り代を調べたり出来て喜んでくれるだろうし、お兄ちゃんの知ってる事を聞いて色々お仕事が進むんじゃないかな？ 姉さんも来てくれれば装者が二人で安心感も増すし……。

そう、だね。うん、そうだよ。姉さん達の世界には装者が七人もいるんだもん。姉さん一人ぐらい、こっちに来てもいいよね。

「……マリア？」

「っご、ごめんなさい」

そう思ってたらお兄ちゃんがちよつと困った顔で姉さんの名前を呼んだ。それだけで姉さんが手をどける。

「その、嫌じゃないんだ。でも、分かってくれ」

「ええ、その、気を付けるわ」

「頼む」

何だか今の二人は大人って感じがする。もし、本当にお兄ちゃんと姉さんが結婚するなら、いつかエルみたいな可愛い子供が生まれてくるんだよね。

その頃には、私はいくつになってるだろう？ 大人に、なってるのかな？ それとも、まだちよつと子供？

——そうだ。私のお家デートの時、お兄ちゃんにお願いしてみよう。姉さんと一緒に私の世界へ来てって……。

二本の映画を見終えた仁志達は夕食までまだ時間があるため、次はどうやって時間を過ごすかと悩み始める——はずだった。

「あ、そうだ。じゃあ、これを見んなに読んでもらおう」

そう言っただけで仁志は立ち上がると、誕生会の時に座っていた椅子近くへ置いていたプレゼントを手にした。

「これの一巻から三巻まではオムニバス形式の1号からスーパー1までの本編後のストーリーなんだ。それを読んでもらえば、9人ライダーの基本的な事は分かってもらえるかな」

「本編後なのに、いいんデスか？」

「いいよ。切歌とエルにセレナ、調には……一巻を」

差し出された漫画を受け取り、切歌は名前を上げられた者達へ視線を向けた。

「えつと、どうするデスか？」

「勿論読みます！」

「うん、興味ある」

「はい。それにしても、表紙のライダーがカッコイイですね」

年少組はすぐに集まって一冊の漫画を前にし始める。

「で、響に未来とクリスへは三巻を」

「はーいって、三巻？」

「二巻じゃないんですね」

「へえ、ライダーキックが表紙か。迫力あるな」

仲良し三人組は響を中心に漫画を読み始め……

「で、ドライディーヴァには二巻を」

「意味があるんでしょうね、これ」

「だろうね。おっ、バイクに乗ってる」

「専用マシンか。バイク乗りとしては憧れる響きだ」

年長者達はマリアが漫画を持つ形で読み始める。

「タダノ、俺は？」

「ヴェイグは四巻から読んでみてくれ。俺はその間にちよつと部屋へ戻って取って来たい物があるから」

「分かった。ん？ このライダーは赤い顔なんだな。ゼアスみたいだ」

「ああ、色合いは似てるかもな。赤と銀だし。まあ目の色は違うけど」
「おおつ、そうだな。こっちは緑色だ」

漫画を手に取り一人読み始めるヴェイグだったが、首を傾げながらページをめくるのを見て仁志は疑問符を浮かべた。

(一体何が気になってるんだ?)

落丁本なのか。そう思つて彼はヴェイグへ問いかけた。

「何か気になる事でもあったか？ 話が繋がらないとか」

「いや、文字が読めない」

「……………あゝ」

ここにきて仁志は自分がうっかりしていた事に気付いた。ヴェイグは日本語が読める訳ではない事に。

なので、ならばと計画を変更して彼はヴェイグを膝の上に乗せて漫画を音読してやる事にした。

最初こそただ読んでいただけだったが、ヴェイグが絵と合わない気がすると言つた事から仁志は少しだけ感情を込めるようになった。

「なんだつて……………やつてやるさ。俺に記憶メモリーをくれるのならばな」

「こいつは、記憶がないのか…………」

「正確には奪われてしまったんだよ。バダンによつて」

「そうか。なのにそいつらの手先となるしかないとは…………酷い話だ」

いつしかそれは仁志なりに感情を込めての朗読に近いものとなった。

そのせいか声量も大きくなり、そうなれば否応なく周囲の耳へも入ってくる。

結果、響達がそちらへ意識を向けるのも無理はなく…………

「痛みとはなんだ!? キサマの痛みを見せてみろ!!」

「そうか。痛みさえ、ZXには欲しいものなんだな」

ZX、村雨良への同情を抱くヴェイグ。既に彼の中では1号とZX

が仁志の光と闇になりつつあった。

そして、仁志は気付いていなかった。既に女性陣が漫画を読むのではなく彼の朗読へ聴き入っている事に。

「苦しいか……。お前はまるで……。俺だ」

1号の台詞を読む仁志。ヴェイグはその目で漫画の絵を見て表情を悲しそうに歪めている。

「もし脳改造を施されていたなら……。俺も……。お前のように……。」
その台詞でヴェイグが顔を上げる。仁志の表情は、辛そうに歪んでいた。

何故なら彼は知っているのだ。脳改造まで施された1号ライダーを、『仮面ライダー THE FIRST』という作品を。

故にその台詞が意味する光景を脳裏に浮かべながら、仁志は目を閉じて少しだけ息を吐くと意を決したようにその目を開く。

「だから、お前のその掻きむしるような苦しみ……。っ！俺が止めてやろう!!」

「「おおっー!」」
「ん?」

明らかにヴェイグ以外の声が聞こえ、仁志はそこで我に返って顔を動かす。

すると、響達が揃って自分を見ていたのだ。先程の声はヴェイグだけではなく切歌と響の出したのももあった。

「…………えっと、どこから聞いてた?」

「「「「「「「最初から(デス)(です)」」」」」」」」

「あく……。ナルホド……」

そして響達の返答を聞いて仁志は静かにヴェイグをテーブルへと乗せてその手に漫画を持たせるや……

「っー!」

「「「「「「「あっ……。」「」」」」」」」

その場から全力で逃げ出したのである。そのあまりの早さに誰もが追い駆ける事も呼びとめる事も出来ず、ただ茫然とその場に座っていた。

やがて引き戸をやや乱暴に閉める音が聞こえて、そこで慌てて切歌とエルフナインが廊下へ顔を出したものの、既に仁志はそこらになくなっていたのであった。

「ししよー……」

「兄様……」

シユンと肩を落として居間へと顔を引っ込める二人へ、マリアと奏が苦笑を向ける。

「大丈夫よ。きつと恥ずかしかっただけだから」

「そうそう。また戻ってくるって」

「……デスカね？」

「だとしても、兄様があんな反応を見せるなんて思いませんでした……」

「うん、そうだね。私もビツクリしちゃった」

そつとエルフナインの肩へ手を置いてセレナは笑いかける。

「エル、お兄ちゃんはきつと照れてるだけだよ。もし怒ってたら一緒にごめんなさいしよ？」

「……それなら許してくれますか？」

「うん、大丈夫。お兄ちゃんがちゃんと謝って許してくれなかった事、ある？」

その問いかけにエルフナインは首を左右に振った。仁志が謝罪されて許さなかった事などなかったのである。

エルフナインの反応にセレナは微笑んでその体をそつと抱きしめた。

「ね？ だから大丈夫だよ」

「エル、タダノは元々俺にまんがを渡して何かを取りに行きたいと言っていた。今頃それを取りに行ってるんじゃないか？」

「ホントです（デス）か？」

ヴェイグの言葉にエルフナインの表情が一気に明るさを増す。同じように切歌もだ。

そんな二人へヴェイグは笑顔で頷いた。

「ああ。俺が文字が読めないからタダノが声に出して読んでくれてい

「たんだ」

「そういう事だったのね」

「成程ねえ……。ただ、ヴェイグを膝に乗せて声に出して何かを読むつてき、正直親の読み聞かせに見えたよ」

その奏の表現に全員が小さく微笑んだ。それもあつて彼女達はどこか笑顔で仁志とヴェイグを眺めていたのだから。

（仁志さん、お父さんになつたらあんな感じなんだろうなあ。私のお父さんにどこか近いかも……。でも、きつと今の仁志さんならあんなつても逃げない、かな？ きつとあ頃のお父さんと以前の仁志さんは似てたと思うし）

（私には覚えのない事だけど、仁志さんが父親になつた時が容易に想像出来た。本当に、私の女を刺激する方ですね、貴方は……）

（くそ、あんなもん見せられたらあたしは絶対仁志を諦めないぞ。……あんな風に、パパにされたら子供がどう思うかなんて容易に想像出来るんだよ、あたしは）

（覚悟を決めたからかしら。以前よりも仁志の父性が増してる気がする。もう、駄目みたいね。私は、本気で彼と家族を作りたいもの）

（ししよーつて、エルやヴェイグといるとお父さんつて感じが凄いデスよ。あ、あんなお父さんだつたら子供も嬉しいデスよね。アタシも、あんなお父さん欲しいデス）

（私にはお父さんの記憶なんてない……。だからかな？ さっきの仁志さん、理想のお父さんつて感じだった。あんな風に子供の世話してくれる旦那さん、いいかも）

（前から思つてたけど、只野さんつて子供みたいなところがあるから男の子相手ならすぐくいいお父さんになつてくれそう。女の子だと……気を付けないとエルちゃんみたいにされそうでちよつとだけ困るけどね）

（あーあ、どうすんだよ仁志先輩。あたしも含めて貴方に惚れてる奴がみんな女の顔してるよ。……本気で迫つてやろうかな？）

（お兄ちゃんとヴェイグさんつて、お友達なのに時々親子みたいで不思議だな。私は……。どうなんだろう？ 妹だつて思つてるけど、子供

に見えてる時、あるのかな?)

女となつている者達とまだそうなつていない者達。そして……

(兄様が戻ってきたら、ちゃんと謝ろう。それにしても……)

エルフナインの視線がある物へ動く。それは仁志から渡された漫画。

(……仮面ライダーの話は以前の映画で知つたと思つてたけど、こうやってクローズアップされるとまだ全然知らなかつたと分かつた。改造人間というものがとても非道な行為である事も)

ノーブルレッドがされた事に匹敵あるいは凌駕する非人道的行為。命を命とも思わぬ所業。エルフナインはあの映画で緩めに表現されていた部分を漫画で知つたのだ。

そして思い出すのである。仁志から教えてもらったあの言葉を。

(人の振りぐらいは出来る。この言葉の意味がやっと分かつた。ノーブルレッドの三人は人間に戻れるかもしれないと思つて動いていたけど、ライダー達は戻れないと、いえ戻つてはいけないと考えたんだ。この異形の姿と力。それがなくては倒せない悪が、闇がある。その魔の手を阻むために、人の影になろうとしたから)

それこそが人の優しく強い気高い魂なのだ。そう思つてエルフナインは漫画を手にとつて抱き締めた。

(どこかの平行世界では、今もきつとライダー達が戦つてくれている。僕らの世界へアラートが鳴らないように、そうとは知らず、命がけで……)

仁志から教えてもらった多くのヒーロー達。それらが実在するとすれば、彼らがいなければもつとギャラルホルンはアラートを発していただろうとエルフナインは考えたのだ。

「エル、どうしたデスか? 漫画を抱き締めたりして?」

「何かあつた?」

そんなエルフナインに切歌とセレナが気付いて声をかける。そんな二人へエルフナインは思つた事を打ち明けた。

幾多ものヒーロー達がこれまでも、これからもどこかで戦つている。それへ想いを馳せて感謝するようにしていたのだと。

「兄様の話では、平行世界を歩き来して多次元宇宙の平和を守っているウルトラマンがいるそうです。もしかすれば、いつか皆さんはそのウルトラマンと出会うかもしれません」

「う、ウルトラマンとデスカ……」

「もし会えたら驚きですね」

「私は、どうせ会えるならエースがいい。メビウスの映画でホテルのコックさんやってたから、お料理の事を教えて欲しい」

以前にも増して料理へ力を入れる調らしい言葉だった。

「ならアタシはセブندスカね？ お馬さんの乗り方を教えてもらって、ついでにあのカッコイイ帽子をかぶらせてもらいたいデスよ。乗馬、憧れデス」

「私はコスモスに会いたいなあ。怪獣と仲良くなる方法を教えて欲しい」

切歌とセレナもそれぞれらしい理由で会いたいウルトラマンを挙げる。

「俺は……ダイナだな。人の光に触れた時の事を聞きたい」

「あたしはティガかな。闇と光を行ったり来たりした経験から闇への対処法を聞きたいかも」

「なら私はウルトラマンね。初めて地球へ来た時どう思ったのか。どうしてそこまで地球のために戦ってくれるようになったのか。それを知りたいわ」

ヴェイグや奏は今回の事へ活かせるような意見を求め、マリアは純粹に宇宙人が地球へ抱いた感情を知りたがった。

「私はやっぱりメビウスです。どういう訓練を受けるのか聞いてみたいし、可能なら手合せとかして欲しい」

「あたしはタロウだな。教官やってるけど、昔は何でも兄弟の末っ子だったらしいじゃねーか。色んな立場での意見を聞けそうだ。あたしもそういう意味じゃ中間だしな」

「ならば私はジャックだろうか。何でもあのブレスレットは槍にも盾にもなるそうだ。私も剣を時に盾代わりに使う事もある。そういう状況に応じた判断の下し方を御教授願いたい」

響達の意見を聞いて未来は一人苦笑する。

「いつそ光の国、だっけ。そこへ行ってみたいかも」

「僕もです。ウルトラマン達の命を支えるプラズマスパークにも興味がありますし」

エルが未来の意見に賛同したその時だった。玄関の方で引き戸が開いた音がしたのだ。

「兄様（ししよー）（お兄ちゃん）だ（デス）っー」

弾かれるように動き出す三人を見て響達が苦笑した。まさに父親が帰ってきた時の子供の反応だったからだ。

「ちよちよちよ、どうしたんだよ三人して。あー、もしかしてさっきの事か？ あれはまあ気恥ずかしさでな？」

聞こえてくる仁志の言葉もそれに拍車をかける。そして誰もが理解するのだ。

今仁志は、気分だけはエルフナイン達の父親なのだろう、と……。

——なあ、何か俺、ここまですつつかれる事やった？

そうして居間へ現れるのは足元をエルフナイン、両腕を切歌とセレナにくつつかれて困り顔の仁志だった。

それに誰もが笑い、仁志も笑った。家中に笑い声が響き渡り、あつたかく幸せな雰囲気全員を包んだ。

そんな光景を見つめ、吐き捨てるように黒い雲のようなものが眩く。

——ふんっ、ノイズは無意味か。しかもゲートを閉じられてしまうなんて、ね。まあいい。攻撃だけが攻め方じゃないわ。お前達の大好きな絆とやらを利用させてもらおうじゃない。果たしてお前達にそれを防げるかしら？ ふふっ、あはは……。

恋の桶狭間

「仁志さーん、あとデートしてないのって私とクリスちゃん以外だと誰ですか？」

久しぶりのぎるきしを味わっていると響からそんな事を聞かれた。残ってる相手かあ。と、そこで気付く。俺、なんだかんだで装者のみんなとデートをほとんど経験してきたんだって。

「……翼とセレナかな」

逆言うともうそれ以外とは一度デートした訳で。

それも未来とはジョギングだったし、マリアとは買い物付添、奏とは朝食を一緒しただけだったりするので、実質部屋デートだったのは切歌と調だけだなあ。

「お兄ちゃん、私は明日でもいいよ？」

「私もいつでも構いませんが……」

そう、この二人はフリーなので予定を組むのが楽だからと後回しにしていたのだ。

「じゃあ、セレナは明日ここで朝ごはん食べたら一緒に部屋へ行こう」「うんー！」

笑顔で頷くセレナにこっちも笑みが浮かぶ。

思えば、初めて出会った時はもう少し笑顔に力が無かった気がする。

それがいつの間にかこんなにも力強く笑う子になったんだな。

「あの、仁志さん。私は出来れば仁志さんの休日でお願いしたいのですが……」

「俺が休みの日？ 明けでもいいって事？」

「はい」

「知ってると思うけど、明けの俺、結構頭の回転鈍いよ？」

「か、構いません……」

正直明けてデートは頭が鈍いのであまりどうかと思ってるんだが、翼がそれでもいいと言ってくれるなら問題ないか。

「じゃ、三日後の月曜だな。えっと、何時頃にするかはこっちが決めて

も?」

「ええ、そこはお願いします」

ふむ、となると昼寝をしてからがいいか。どうせ休みだし、いつそ翼と二人で夕飯食べるのも悪くないかもなあ。

「それにしても、あのマンガおもしろすぎるデスよ。ししよー、教えて欲しい事がいっぱい出来ました!」

「九人ライダーの本編での話だろ?」

「デス!」

「簡単に話してあげられなくもないけど、それはまた別の機会にしよう。で、切歌、あつちはどうだった?」

そう言っただけ俺は視線を誕生日プレゼントの十六巻セットの傍に置かれた漫画へ向ける。

それは「仮面ライダーをつくった男たち」という漫画だ。俺が売らずにとっとおいた漫画の内の一冊である。

気付かず本気で朗読してたのを見られた後、部屋へ戻って取りに行ってきた物だ。

みんなへSPIRITSを渡した時に思い出して、元々取りに行こうとしていたのはこれだった。

「あれはあれで思う事が多かったデス。作り物のヒーローだけど、その裏では沢山の人が本気でヒーローみたいな事をしてたんデスね」

「そう。大人達が本気で子供のために作ったのがウルトラマンやライダーなどのヒーロー達なんだよ」

「私、あの台詞が好きです。ここにガキ共のための千年王国を造ろうと思うって、あの言葉」

調の言葉は俺も感じ入った言葉だ。あの頃、本気で大人達が子供のために動いた事が今に繋がってる。

「あたしは、あのプロデューサーの方がヤバかったな」

「ああ、うん。私もだよクリスちゃん。あれ、泣きそうになるよね」

「私達も歴史で習っただけだけど、本当にああいう事があったんだって思うと……」

未来の言葉で俺は思い出す。彼女達の生きる時代は俺よりももっ

と未来だったと。

「そつか。俺でさえ親世代が戦後生まれだもんな。なら響達は下手すりゃ祖父母でも二次大戦後の生まれか」

「兄様、第二次大戦はやはりそんなに酷かったですか？」

「……あの戦争は唯一核兵器が使われたものになったからね。特にそう思う人が多くても当然だと思うよ。あれはまだ戦争を経験した人達が珍しくない時代だ。あの漫画で描かれたような事が、本当にあったんだよ」

俺だつて想像も出来ない。死体がそれこそ山のようにある光景なんて。

いや、昨日までであったものが一瞬にして失われる事も、だろうか。

「だからこそあの台詞が胸に迫る。ヒーローは、風のように現れて……」

「嵐のように戦って……」

「朝日と共に帰ってくる……ね」

ドライディーヴァの言葉に俺は頷く。

どうしようもない、誰もが絶望し諦める中、たった一人でもそれへ挑む者。

人はそれを勇者と呼び、英雄と呼び、ヒーローと呼ぶ。

だけどそれは、誰にでも出来る事だ。ほんの少し、ほんの少しの勇気を出す事が出来ればいい。

「ししよーがヒーローが大好きな理由が今日はとつてもよく分かったデスよ。アタシも、今まで以上にヒーロー達が大好きに、そして目指す存在になりました」

「私が頑張る事が、諦めない事が誰かの勇気や希望になるかもしれない。ううん、それさえも関係ないかも。えっと……」

そこで調が俺を見てくる。ああ、多分あの台詞か。少しだけ教えただ、新・仮面ライダーSPIRITSの名台詞、だと俺が思ってるやつだ。

「例え未来を変えられなくても、見過ごせない今を救えるなら？」

「それを、私も思つてギアを使つていきたい。今を救つていけば、変え

ていけば、もしかしたら明日が、未来が変わるかもしれないから」
調の言葉に胸が熱くなる。ああ、本当に彼女達はヒーローだ。守られるヒロインじゃない。

その手にしたギアという力を、みんなの笑顔のために使える心の持ち主なんだ。

「調もすっかり仁志に影響され切ったわね」

「うん、だって切ちゃん達も仁志さんみたいだし」

「アタシはししよーの弟子デスからね。とーぜんデス」

「えっと、切歌？ 俺から一つだけ忠告しておくよ、世間はそんな女の子を少々奇異の目で見るから気を付けて」

「きいのめ？」

「簡単に言えば変な目で見られるって事だよ。変わり者って思われるとか」

未来の言葉に切歌はふむふむとばかりに頷いた。まあ、例え何があっても素直で純真に生きていけるのが切歌の強さだと俺は思うので、言葉でそれとなく注意を促すだけしておく。

それにしても、だ。こうしてゲートを閉じて思うのは、どれが悪意の仕業でどれが星の声の仕業か分かり辛いつて事だ。

まず、時間停止。これはどちらにも益があるので判断付きかねる。若干星の声かもしれないと思えるのは弦十郎さん達が悪意に操られる危険性を考慮した場合だ。

だけど悪意がみんなの連携を危険視している可能性もあるので本当に分からない。なので保留。

次はゲートの隠蔽。これは間違いなく悪意だ。何故なら星の声がある意味がない。

そしてカオスビーストを倒したら出現した事もあるし、ほぼ確定だろう。

と、そこで思う。悪意の最終目的は、本当にみんなへの復讐と世界蛇の復活そして世界の破滅、でいいのだろうか、と。

それを使って世界全てを滅ぼすのだとすれば、正直シンフォギアをどうにかしたぐらいじゃ止められないヒーロー達がいるんだが？

例えば、ウルトラマンゼロ。彼はイージスの力で様々な世界を移動出来る上あのウルトラマンノアに認められた戦士だ。

世界蛇やカルマ・ノイズ相手でも負けるビジョンが浮かばないヒーロー筆頭である。

次にそのウルトラマンノア。何せ彼は神だ。それこそどうやつても悪意が勝てないだろう。

ただ、彼はよく弱体化した姿であるネクサスでいる事があるからなあ。その場合は不安が残る。

それと仮面ライダーBLACK RX。どれだけ強力な敵を相手にしても勝利してきたヒーローだ。

キングストーンの神秘の力と光さえあれば必ず甦る不死性は悪意の天敵だろう。

……その時不思議な事が起こったで大抵の事を無効化ないし無力化してしまうし。

そうなると仮面ライダージオウもか。何せ魔王と呼ばれる程のこともでもだ。

最終回などまさしく最強議論を混乱させるに相応しい強さを見せてつけてくれた。

それだけじゃない。クウガやアギトだってカルマ・ノイズに負けな能力持ちだし、世界蛇のような巨大な相手でも戦える最強フォームがある。

そう、そうなんだ。こう考えると悪意は一度自分を負かしたシンフォギアへこだわってるように思える。

「……だからこそ簡単に倒す事はもう考えてないのか」
「何の話ですか？」

隣から聞こえた声に顔を動かせばこっちを不思議そうに覗き込むエルがいた。

「えっと、悪意の事を考えてたんだ。あいつは、もしかしたらみんなへの復讐へ固執して目的と手段が入れ替わってるかもしれないって」

「……有り得ないとは言えません。実際、こちらで色んなヒーローを兄様から教えてもらい、悪意が本当に恐れるべきは他にいると感じて

います」

「ああ。こうなると、だ。あいつは一度自分を倒したみんなへの復讐を考えているんじゃないだろうか？　世界蛇の復活とか世界を破滅させるとか、そういうのは度外視で」

「あたしはその方が納得出来るよ」

その声に俺とエルが揃って顔を動かす。奏は平然とした顔で素麺を啜った。

「……悪意は目先の事しか考えてない。負けた悔しさを晴らす事しか考えてない。その方が負の感情の塊つてもんらしいじゃないか」

「そうね。私達はどうしても過去の悪意の行動に囚われているのかもしれない。世界を破滅させようとしていた、かつての姿に」

「うん、もう悪意はベアトリーチェさんじゃない。なら、その目的が違ってもおかしくないよ」

セレナの言葉にふと思う。悪意の目的が本当にみんなへの復讐となっているとすれば、それをもし果たした場合悪意は次に何をやるだろうと。

やはり初心に戻って世界を滅ぼす？　だが、それを行おうにもさつき挙げたヒーロー達がいるなら阻止されるだろう。

特にノア辺りは本当の意味で神様だ。悪意がどれ程の力を持つとと太刀打ちできないだろう。

が、そこで俺は思い出す。そもそも悪意はどうして世界に、星の声にアラートを出させた？　どうして俺に手を出す事にシフトした？

悪意は、この世界へやってきて知ったのかもしれない。シンフォギアと同等かそれ以上に厄介なヒーロー達が存在する事を。

だから俺やこの世界の住人へ入り込み、それらさえも消滅させようとしているのかもしれない。

「エル、ヴェイグ、みんなも意見を聞かせて欲しいんだが」

俺が真顔でそう切り出すと全員が真剣な面持ちを向けてくれる。

……ホント、凄いや。やっぱりその切り換えの早さは俺と経験してきたものが違うって思う。

「もしかしたら、なんだけど……」

俺を使って全てのヒーロー達を、それどころか今後生み出されるかもしれないヒーロー達でさえも消滅させようとしているのではないか。

俺のそんな意見を聞いて誰もが笑う事はしなかった。むしろ全員して深刻な表情を見せたのだ。在り得ると、そう思ったんだろう。

「もし、もしも悪意の目的が全ての平行世界の滅びだとすれば、兄様の意見はかなり核心を突いていると思います」

「ああ、カルマ・ノイズや世界蛇さえあたしらは倒せるような存在をここで知った」

「それらと正面切って戦えば勝ち目は薄い。なら、正面から戦わなければいい」

「あのダイナを毘にかけてモネラ星人と一緒にね。戦わずして勝つ……」

「兵法としては間違っていない。むしろそれが上策だ。だが……っ！」

「ああ、虫唾が走るね！ あたし達の世界さえも知らず守ってくれたに近いヒーロー達を、人知れず葬り去ろうなんてさー」

「許せない……。みんなの笑顔のためにつて、そう思っで戦い続てきたヒーロー達を、よりにもよってそれを大好きな人達を使っで消そうとするなんて」

「響……」

「ししよー、もしかしてヒーロー達だけじゃないんじやないデスカ？」

例えば、悪意に対抗するような人達だっで消されちゃうんじやないデスカ？」

切歌の言葉で俺は息を呑んだ。そうだ。悪意の弱点が人の心の光だとすれば、例えば人々に希望や夢を見せるアイドルだっで狙われる理由にはなる。

「かもしれない。アイマスなどのアニメだっで、下手したらこの世界にある全ての創作物は悪意の消去対象だ」

「それじゃあ、悪意がどうしてここばかり狙うのかは……ここに全部の作品を消すため？」

「それだけじゃないぞセレナ。多分だがここに留まり続けて新しい平行世界を、新しいヒーローとかを生み出す度に消していくはずだ。それを世界蛇の餌にして」

無意識に拳を握りしめていた。見ればみんなもだ。誰もが、怒りを抱いていた。

これを笑い話に出来る状況じゃない。実際悪意は「戦姫絶唱シンフォギア」を消してみせたんだ。

だが、多分同じ事を今は出来ないんだ。力が足りないのか、あるいはそれを行えば一気に消耗してみんなに倒されてしまうからか。

「そういえば兄様、皆さんのゲージはどうなんですか？ まだ姉様以外は上限へ到達しないのでしょうか？」

「ああ、そうだな。ちゃんと見てみるよ」

言われて思い出す。そういえば俺、あのプールから今までしつかりゲージを確認してなかった。

すぐにゲームを起動してステータスをタップ。で、一人ずつゲージをタップして確認していく。

「……あれ？」

とつくに全員MAXなんだが……どういう事だ？

「どうかしましたか？」

「いや、全員最大値っていうかMAXなんだよ。なのに何も起きてないのかって」

「えっ!? な、何か変化はないんですか？」

驚くエルだけど、俺も声にこそ出さないが同じ事を聞きたい。てつきり全員MAXになれば何か起きると思ってたのになあ。

「……待って。そういえば私のゲージが最大になった時も何も通知や変化はなかったわ」

「そういわれればそうだな。仁志さん、もしかするとそれは最大になった場合依り代の欠片の効果が本体と同一になるだけなのでは？」

「え、エクストライブ解禁じゃないんデスか？」

「切ちゃん、正直ツインドライブがエクストライブの代わりかもしれないよ」

「あー、それは否定出来ないよね。アマルガムギアのツインドライブ、凄いいもん」

俺も少し見たけど同意するしかない。実際劇中でもアマルガムは強かったのにそれヘデユオレリックの力を上乘せた。

しかも全てのギアへ適応可能。多分だけど特殊能力特化のギアならその長所をより顕著に伸ばしてくれるはずだ。

ミラーリングギアなんて、ツインドライブにするとアマルガム状態のガングニールそっくりになるし。

ま、あれは未来の響への気持ちも影響してる気はするけどな。

「ね、仁志先輩。もしかしてこれもあって今あたし達はここの空気が澄んでるって感じてる?」

「かもしれない。うん、可能性はある」

奏の意見に俺は一理あると思って頷いた。依り代があらゆる厄介事を無力化する力を持っているとすれば、だ。今のみんなのギアペンダントはそれと同等の効果を発揮しているはず。

しかもそれが九つ。これはかなりの悪意の影響力を除去出来るんじゃないだろうか?

「じゃあ、今私達全員で本部に行けば……」

「時間停止を解除出来る可能性がある、か。どうする?」

「そう、ね……。正直迷うわ。もし時間停止が悪意による司令達乗っ取りを阻止しようとする行為なら、それを解いてもいいのか判断し辛い」

「仁志、どうだ?」

「えっと、昼間は全員で本部へ入らなかったのか?」

「ええ。カオスビーストがゲートを塞いでしまうと出れなくなると思っ、私とクリスの二人で入ったの」

「そっか……」

ならばと、最悪の場合はどうだろうかと考え。もし時間停止が悪意の本部乗っ取りを阻止するためなら、それを解除してしまうと恐ろしい事になる。

響達が帰る場所をなくしてしまうからだ。ギャラルホルンに異常

が起きればそれこそ不味い。なら、全員で向かうだけ向かって、本部へ入るのは半分にして様子を見るのがいいか。

「九人で向かって、ギャラルホルン前を塞いでいるかもしれないカオスビーストを撃破。その後、半数をその場に残して本部へと帰還。時間停止がどうなるかを探りつつ、発令所まで行って何もなければ撤収。こんなところでどう?」

「いいと思うわ」

「うし、じゃあ早速」

「待った」

今にもゲートを開けて出撃しそうな奏へ俺は待ったをかける。それだけでマリアと調は小さく微笑んだのでどうやら俺の言いたい事を察してくれたらしい。

「何?」

「まずはこれを全部食べてからだ。っと、ゴマや生姜入れるか? 結構味が変わって箸が進むよ」

「あつ、じゃあ私ゴマくださいーい」

「私ももらえます?」

「あたしは生姜をくれ」

「じゃ、あたしは両方入れるか」

「タダノ、しようがは辛くないか?」

「わさびとは違うから大丈夫だよ。てか、ヴェイグ、豚の生姜焼きは好きだろ? あの生姜だよ」

そう言いながら俺は生姜のチューブをクリスへ渡す。煎りゴマの袋はマリアから響の手へと渡った。

「おおつ、あれか。よし、なら俺もしようがを少し入れてみる」

「んじゃ、使えよ。ほら」

「ありがとう」

クリスから手渡されて生姜のチューブを受け取るヴェイグ。で、蓋を外してチューブを少し押し出して生姜を出して……首を傾げた。

「タダノ、落ちないぞ?」

「ああ、そういう時はこうして器の縁へっつと」

「お、成程な」

こうやって世話を焼いてる時はヴェイグは子供みたいだ。その愛らしさと無邪気さに心を撃ち抜かれてる女性達がいる。

主にマリアと翼。いっそ世話になってる礼だと言って、可愛いぬいぐるみでも贈ってあげようかね？

「それにしても、きしめんって初めて見ましたけど、こんな感じなんですわね」

「独特だろ？ まあ、俺もそこまで頻繁に食べる事はないけど」

「僕は好きです。本当に同じ小麦粉でこんなにも変化を出せるんだ……」

「パスタもそうだからなあ。形状って意外と味に影響するって分かるよ」

「ですね」

お椀と箸を持って笑顔を見せるエル。口の端についてる薬味ネギが可愛い。

「エル、ねぎが付いてるよ」

「え？ どこですか？」

「取ってあげるね。じつとして」

セレナとのやり取りはもう完全に姉妹だ。見ていると癒されるなあ。

いや、俺だけじゃないらしい。気付けばみんな二人を見て笑みを浮かべている。

今の俺達共通の癒しはエルとセレナなんだな。後はヴェイグだろうか。マスコットと言ったら何だが、本当にエル達は悪意が厄介さを増していくにつれて癒しの効果を高くしてくれている。

「はい、取れた」

「ありがとう姉さん」

「どういたしまして」

笑みを向け合う二人を見て、俺は改めて誓う。絶対この二人の笑顔を壊させてなるものかと。

二人の父親的立場をさせてもらっているからこそ、本当に強く思う

のだ。

エルとセレナが叶うならばこれからも支え合って笑い合っているように、と……。

昼間に続いて本部へと足を踏み入れたマリア達は発令所まで足を運び、四人ではその時間停止を解除出来ない事を確認するや即座に撤収、無事に上位世界へと帰還を果たした。

ただ、変化はあった。四人ならば、これまで触れなければ動かせなかったドアなどが自動で動くようになったのだ。

つまり電力などの生命活動とは関係ない部分は時間が流れるようになって来た。この事から九人で乗り込めば本部内の時間を動かす事は可能だろうとエルフナインは結論付けた。

ゲートであるノートPCを普段は閉じる事で悪意の影響を遮断出来るようになり、響達は今まで以上に気持ちを楽にして眠る事が出来るようにもなった。

ヴェイグは上位世界そのものの匂いは分かるようになったものの、やはり仁志の匂いは分からないためにやや残念そうな反応を見せた。

——きつとタダノは優しい匂いのはずだ。今のみんなのように。

ただ、仁志達が帰る前にそう告げて全員を笑顔にしたが。

そして翌日、仁志はマリア達の家を訪れて朝食を共にした後、約束通りセレナを連れて部屋へと戻った。

ただ、セレナはどこか決意を固めた顔をしていたのだ。仁志とマリアに自分の世界へ来てもらいたいという、願いを告げるために……。

毎日のように来ているお部屋だけど、何だかちよつとだけドキドキする。

生まれて初めてのデート。お兄ちゃんみたいな大人の男の人とデートするなんて思わなかったなあ。

「じゃ、好きに座って」

「うん」

お兄ちゃんが私用について買ったクッションを手にして座る。最初

は一つだったけど、私が切歌さんと二人でお掃除する事もあるって知ってすぐにもう一つ増えたクツション。

こういうところがお兄ちゃんらしい。私達に優しくして、すぐに色々してくれるのはお父さんみたいだねってエルとよく話してる。

「さて、じゃあ何を話そうか」

「あ、あのね、お兄ちゃんにお願いがあるの」

早速お兄ちゃんへお願いをしようと思った。こういう事は後にすると言えなくなるって、そう思ったから。

「お願い？」

「う、うん。えっと、この事件を解決した後の事」

「解決した後？」

「その、お、お兄ちゃん、姉さんと結婚して一緒に私の世界へ来て欲しいのっ！」

言えたっ！

「……………セレナ、悪いけどそれは色んな理由で無理だよ」

なのに、お兄ちゃんはどこか悲しそうな顔でそう言った。そして私の頭を優しく撫でてくれる。

「どうして？ 姉さんの事、嫌い？」

「大好きだよ。でもな、大好きだけで結婚出来る程、そして一緒に居たって思ってるだけでいられる程、俺やマリア、セレナの状況は簡単じゃないだろ？」

私へそう話しかけてくれるお兄ちゃんはいつもの優しいお兄ちゃんなのに、その表情は全然いつものお兄ちゃんじゃない。

辛そうで、苦しそうで、だけどそれを全部飲み込んでるような顔をしてる。

「まず、三人それぞれが住む世界が違う。これはいいか？」

「うん」

「次に、俺と二人の住む世界は本当なら繋がるはずのない世界。これもいいかい？」

「うん」

「で、次だ。えっと、俺が例えばセレナの世界で暮らすとする。でも

な、俺とマリアがずっと夫婦でいられる保証はどこにもない。もし俺とマリアが別れて夫婦じゃなくなったら、俺はどうすればいい？ セレナの世界で暮らす理由はなくなるだろ？」

そのお兄ちゃんの言葉に私は言葉がなかった。結婚したらずっと一緒だって、勝手に思ってたってそこで気付いたからだ。

姉さんやお兄ちゃんだって怒る事はあるだろうし、もしかしたらお互い許せない事をしてしまうかもしれない。そうなったら、仲直り出来なかったら、一緒に暮らすのは無理だ。

——でも、私がいる。私が、姉さんの代わりにお兄ちゃんのお嫁さんになればいい……。

わ、私が、お兄ちゃんのお嫁さん？ お兄ちゃんの……お嫁さん……。

——エルミみたいな可愛い子供を産んで、家族みんなで楽しく過ごせるかも。ママもお祖母ちゃんになってくれて、みんなで仲良く……。ほんやりと浮かぶママやお兄ちゃんの笑顔。でも、でも何だろう？ それは姉さんの悲しむ顔が必要だ。

お兄ちゃんのさつきみたいな顔が、必要だ。なら、なら……

「そんなの、そんなの違う」

そう呟いた瞬間、何か胸の奥が軽くなった、気がする。

「セレナ？ 何が違うんだ？」

「え？ あ、その、自分の事なの。えっと、お兄ちゃんの心配事は分かったから」

「そうか。だからな？」

「うん、ごめんさい。今の、忘れて欲しい。姉さんもお兄ちゃんも大人だもん。その、私のわがままは忘れて？」

ダメなんだ。姉さんには姉さんの、お兄ちゃんにはお兄ちゃんの世界がある。そこを捨てて来て欲しいなんて、ダメに決まってるもん。……そっか。でも、嬉しいよセレナ」

「え？」

何が嬉しいんだろ？ わがままを忘れてって言った事かな？

「自分の思ってた事をちゃんと saying てくれた事だよ。こっちに来たば

かりのセレナなら、今の事は言わなかっただろ？　それが嬉しいんだ。セレナがちゃんと溜め込まずに心の声を言ってくれたってさ」

「お兄ちゃん……」

私を見て笑うお兄ちゃんは、とつても大人の人って感じがした。優しくてちよつとだけごつごつした手が私の頭を撫でる。

父さんの記憶はあまりないけど、きつとこんな感じだったと思う。本当に、お兄ちゃんになつて欲しい。姉さんと結婚しなくてもいい。私のお兄ちゃんできて欲しいな。

「ねえお兄ちゃん」

「ん？」

前なら黙ってた。言っちゃダメだって思ってた。だけど、今の私は言える。だって、怒られたら謝ればいい。言わないと、それが本当にダメかどうか分からない事もあるって、今の私は教えてもらったから。

「ずっと、私のお兄ちゃんできて欲しいんだけど、ダメかな？」

お兄ちゃんの事を見上げて聞いた。するとお兄ちゃんはとつても優しく嬉しそうに笑って頷いてくれた。

その瞬間、胸の奥があつたかくなる。お兄ちゃんはお兄ちゃんなんだ。いつでも、私のお兄ちゃんできてくれるんだ。

「お兄ちゃんっ！」

「おっと……つたく、急に甘えん坊になるなあ」

嬉しくて抱き着くと、お兄ちゃんがそつと抱きしめてくれた。

「甘えん坊にもなるよ。だって、普段はお姉ちゃんだもん」

「そうだった。今のセレナは立派なお姉ちゃんだった」

そう、普段の私はお姉ちゃん。エルって言う可愛い妹がいるんだもん。

血の繋がりなんて関係ない。もうエルは私の妹だ。きつとエルも私をお姉ちゃんだって思ってくれてるはずだし。

「ねえお兄ちゃん」

「ん？」

「はーれむってどういう意味？」

「あー……本来の意味は中東の方の文化と言うか仕組みなんだけど、一般的には一人の男が複数の奥さんをもろう事って感じでいいよ」
言われて納得した。お兄ちゃんは姉さん達を全員お嫁さんにした
いんだ。

翼さんが言ってた男の人としては正しいって、そういう事なんだ。
だって、響さんもクリスさんも可愛くて素敵だ。未来さんも翼さん
も奏さんだってそう。

「お兄ちゃんは欲張りなんだ？」

「……そうだね。まあ、今まで欲張れなかったから今ぐらいは大目に
見て欲しいけどなあ」

そう言ってお兄ちゃんは小さく笑った。でも、気持ちは分かる。
だって、今の生活はとつても楽しくて幸せだから。

悪意さえいなかったらつてそう思うけど、悪意がいるから今の生活
はある。

戻り、たくない……な。ママともここで今みたいに暮らしたい。

姉さんがいて、エルがいて、切歌さんと調さんがいて、ヴェイグさ
んがいて、お兄ちゃんがいて、時々響さん達が遊びに来てくれて……。

——そうだ。もしかしたら悪意も一回やつついたらこつちの話を
聞いてくれるかもしれない……。

そう、かな？ 悪意はみんなを苦しめて困らせる悪い相手なのに。

——でも、お兄ちゃんは言ってた。最初は悪い奴でもヒーローに負
けたり話し合う事で改心した事もあるつて。悪意も、それが出来ない
かな？ やってみる気持ち、最初から捨てていいのかな……。

悪いから全部やつつける。それは、ダメ、だよ。悪い事をやめさ
せて、反省してくれるなら、もうしないつて約束してくれるなら、許
してあげてやり直しをさせてあげないと。

「セレナ」

「っ……何？」

気付いたら俯いてた。お兄ちゃんの呼びかけで顔を上げると、そこ
にはこつちを見つめる不思議そうなお兄ちゃんの顔がある。

「どうかした？ また悩み事？」

「あ、うん。悪意って、改心してくれないかな？」

そう問いかけるとお兄ちゃんは難しい顔をした。眉が動いて額に皺が出来てる。

「不可能、だと思う。それが出来るとすればベアトリーチエの中にいた頃だ。今は、もう人の心でさえなくなってしまうって、負の念の塊と化してる。残念だけど出来るとすれば改心じゃなくて浄化だよ」

「浄化……」

「そう。みんなの心の光を浴びせて綺麗にしてあげるんだ。それが、きつと悪意にしてやれる唯一の救いだよ」

お兄ちゃんの言葉に私は頷く。そうだ、悪意は人間の悪い気持ちの塊だもんね。それがごめんなさいって言えるはずない。

どうして私、そんな事を思っちゃったんだろう？ やっぱり、私はまだ装者としてみじゆくのかな？

「それにしても、セレナは本当に優しいな。悪意に対しても何とか共生の道を考えてるか。本当にコスモスみたいだ」

「え？ 私、ウルトラマンみたい？」

「ああ。それも、とっても優しく強いウルトラマンだ。セレナ、お願いだからその優しさを失わないでくれ。弱い人を労わり、互いに助け合い、どこの国の人達とも友達になろうとする気持ちを失わないでくれ。例えばその気持ちだが、何百回裏切られようとも」

そう言ってお兄ちゃんは少しだけ照れくさそうに笑った。そこで分かった。これ、きつとヒーローの言葉だって。

「お兄ちゃん、今のはどんなヒーローの言葉？」

「……分かる？」

「うん」

そう言うとお兄ちゃんはまた照れくさそうに笑った。ふふっ、こういう時のお兄ちゃんは子供みたいだ。

「ウルトラマンエースの言葉なんだ。これを最後に告げてエースは地球を去る。子供達へ願いを託して」

「そうなんだ……」

映画で見たエースを思い出す。真っ先にメビウスを助けようとし

た事や、女の子の落としたグラスを見事に掴んで笑いかけた事を。

そっか。優しさを失わないでっってお願いは、エースが自分にも言い聞かせたのかもしれない。だから誰よりも先にメビウスを助けようと動いたんだ。

「さっ、これからどうしようかな？ セレナ、他に何か聞きたい事はある？」

「え？ そうだなあ……」

言われて考える。今日はお兄ちゃんと姉さんに私の世界へ来てっと言う事しか考えてなかった。

「じゃあお兄ちゃんの事を聞かせて」

「俺の？」

「うん。お兄ちゃんの事、私あまり知らないから」

「……じゃあ、まずは家族構成とかから話そうか」

そこからお兄ちゃんは色んな事を話してくれた。お父さんの事、お母さんの事、住んでた家の事や小さい頃の思い出。沢山私に話してくれた。

小さい頃のお兄ちゃんの夢はウルトラマンになるとかライダーになるとかだったって聞いて、お兄ちゃんらしいと思った。

少し大きくなってぎむきよういくつていうものが終わっても、お兄ちゃんはヒーローが大好きなままでいた。

でも周りはそういうものを子供っぽいとか変なのって思うから言わないで過ごしてたみたい。友達も作らないで、お兄ちゃんは一人でヒーロー達に夢中だったんだ。

「そして一人暮らしを始めて、バイトしながら色々見たんだ。レンタルで借りてきたり、映画を見に行ったり、色々な形で俺は好きな物を追い駆け続けた」

「そうなんだ」

「……で、一時期それから遠ざかった」

「え？」

少しだけ、少しだけお兄ちゃんが天井を見上げた。その眼差しはとても寂しそうで辛そうに見える。

「何もかもが嫌になつてさ。生きるのが辛くなつたんだよ」

「どうして？」

「……………その時に働いてたバイト先でちよつと揉め事を起こしちゃつたんだ。一緒に働いてた女の子が軽くミスをしてね。お客さんと揉めたんだけど、そもそもの原因はそのお客さんにあつたんだ。でも、相手は自分の事を棚に上げてその子が悪いみたいに責め立てて、よりにもよつて店長はその子を守るどころか謝らせた」

「酷い…………」

「で、俺はその後裏で泣くその子を見て、店長へ突つかかった。分かつてたさ。店長はその場をさっさと収めるためにそうしたのは。でも、だからつてそれはない。そう思つて俺は店長にその子へ謝つてくたさいと詰め寄つた」

「お兄ちゃん…………」

何となく分かつた。きつとお兄ちゃんの意見を店長さんは聞かなかつた。それどころか、そんな風に言つてきたお兄ちゃんを嫌がつたはずだ。

「若かつた、んだろいなあ。今の俺なら、きつと別の言い方をしたよ。店長、あの子がさっきの事で泣いてるんでフォロォお願いしますつてさ」

そう言つてお兄ちゃんは悲しそうに笑つた。何でそう言えなかつたんだろつて、そう呟いて。

「それでそこで働くのが嫌になつてね。嫌がらせを受けた訳じゃないけど、店の長へ食つてかかつた派遣なんて居場所がないようなもんなさ。だから辞めた。向こうは人手がないからと引きとめてきたけど、断つた。俺の代わりはいるつてたまに言つてたしさ」

「それで……………生きるのが嫌になつちやつたの？」

「…………俺じゃヒーローみたいな事は出来ない。ヒーローには逆立ちしたつてなれつこない。心を強く持つて誰かのためにつてやつた結果が、ただの勢いだけの独りよがりな言い方で互いの心を傷付けるだけになつた。そんな俺に生きてる価値なんてあるのかなつて」

「だけど、そう言つてお兄ちゃんは私の事をそつと撫でた。」

「それでも、生きるのを諦めるなって思い直した。でも、もうよく知らない場所での人付き合いに疲れてたから、陽子さんを、行きつけにしてた弁当屋の人の良さそうな人を頼ったんだ」

そっか。それで姉さんもあのお弁当屋さんへ連れていったんだ。姉さんはすぐに働いてお金を稼がないといけなかった。

だけどお兄ちゃんのお店はもう人が足りてて無理だったから陽子さんに助けてもらったんだね。

「コンビ二へはいつ行くようになったの？」

「今から大体三年ぐらい前かな。弁当屋で働くのが辛くなつてさ」

「そうなんだ……」

「マリアは昼前から七時だろ？ 俺は、開店から閉店までだったんだ。だからヘトヘトでね。しかも夏場なんて暑いんだよ、調理場」

「あつ、うん。姉さんも言ってた。軽いサウナだつて」

六月になった辺りから姉さんは帰ってくる時々居間へ倒れるようになった。涼しいそこで五分ぐらい横になってから、手を洗ってご飯の支度をする事が増えたんだ。

「あれがもう無理になって、歳を取ったなあって思ったもんだよ」

「おじさんみたいだよ、お兄ちゃん」

「実際おじさんだよ。三十になったらそれぐらいの気持ちでいた方がいい。まだ若いって無茶をするぐらいなら、もう歳だつて思つて動く方が賢いってもんだ」

何となくだけど、今のお兄ちゃんの言葉を姉さん達が聞いたら叱りそう。もしくは苦笑するかな？

でも、これだけは言つておこう。

「でもね、私にとってはお兄ちゃんはお兄ちゃんだからね？」

「……そっか」

おじさんじゃない。お兄ちゃんはお兄ちゃんだ。お父さんみたいな、お兄ちゃんだもん。

「よし、じゃあここからはデートらしい事でもするか」

「デートらしい事？」

「調ともちよつと外出したんだ。だからセレナとも外へ行こう。た

だ、髪色が違うからちよつとだけ俺は前を歩く事になるけどな。それでもいいか?」

「うんっ!」

お兄ちゃんと二人でお出かけ。凄く楽しみ。デートらしいって言うってたけど、二人でお出かけって本当にそう思う。

そこから一緒にお外へ出て歩き出す。私の少し前をお兄ちゃんが歩く。目指すのは多分カラオケ、かな?」

そういえば、昨日行った切歌さんの働いてるお店の二階は凄かった。見た事のない作品がいっぱいあって、エルと二人で少しだけはしゃいだぐらい。

「お兄ちゃん、どこへ行くの?」

「ほら、前に動画撮影をしたカラオケを覚えてるか? あっちの方に色んな店が集中してる場所があっただろ?」

言われて思い出す。えっと、たしかチキンを買ったところだ。うん、たしかに色んなお店があった気がする。

「うん。そこに行くの?」

「そう。お昼をそこで食べよう」

「チキン?」

「ははっ、それでもいいけど、出来ればもう少しセレナには驚いてもらいたいから別の店」

「驚く?」

一体何だろう? あそこにあつたお店で食べ物屋さん……チキンとピザに……カレーだったかな?」

じゃあ……カレー? でもそれなら驚く事ないけど……。

そう思いながらお兄ちゃんと歩く。歩きながら話すのはクウガの事。

昨日の集まりは結局ゼアスを見て終わったけど、クウガの続きは今の集まりで見える事になったから。

やっぱり響さん達も気になってるみたい。だってクウガが強くなるんだもん。

ただ、私はちよつとだけ嫌だなんて思う。クウガが強くなるって事

は、それだけ怪人も強くなるって事だ。

五代さん、きつとそんな力を持つ事を嫌がるはずだから心配。お兄ちゃんが見せてくれたマンガで分かった仮面ライダーの心。それは、クウガも同じだった。

戦いたくない。傷付けたくない。だけど、それをしないと誰かが傷付いて、血を流して、死んでしまうかもしれない。それをお兄ちゃんはどう言ってた。

——争う悲しみを仮面に隠して戦う。だから1号の顔には涙のようなデザインがあるんだ。

言われてみんなで改めてライダーの顔を見て黙ったのをよく覚えている。あの仮面の下でみんな泣いてるんだって、そう思うと心が痛い。

だけど、それでも拳を握る。他の誰かにそれをさせたくないからだ。戦う痛み、苦しみを自分だけで終わらせるために。

「……ライダーはウルトラマンとは違った意味で辛いんだね」

「そうだなあ。こういう言い方はなんだけど、ウルトラマンには帰れる場所と本来の姿でいられる居場所がある。でも、ライダーにはそれがないんだ」

「本来の姿でいられない……」

そうだ。クウガ達よりも前のライダーはみんな変身した姿が本当の姿になっちゃった。でも、それでいい場所なんて世界のどこにもない。

ああ、本当だ。ウルトラマンよりも辛いよ。光の国みたいな場所が、ライダーにはない。みんなと同じ姿がある意味で嘘の姿だからだ。

「人間であって人間ではない。そんな苦しみは自分達だけでたくさんだ。これがダブルライダーが風見志郎へ、後の仮面ライダーV3へ言った言葉だよ」

「人間であって人間ではない……」

「悲哀って言って分かるかな？ ウルトラマンになくてライダーにあるものがそれだと思う。人ならざる悲しみと苦しみ。同じ地球人な

のに、もうその枠組みからは外れてしまった。戻りたくても戻れないってね」

軽く言ってるけど、お兄ちゃんがどう思ってるかは分かる気がする。

お兄ちゃんが好きなライダーは、ブラックはとっても悲しい事を経験した。最後には仲間が来て、先輩ライダー達を知って笑顔になれたけど、それがなかったら凄く辛い。

でも、そんな辛く悲しい事を経験して乗り越えて、それでも笑顔をみせる事が出来るからお兄ちゃんはヒーローが好きなんだ。

「平成ライダーはそれとは違った悲哀を背負う。言うならば、人間なのに人間でなくなっていく、かな。あるいは人間なのに人間でなくなった悲しみかもしれない」

「どういう事？」

「クウガも軽く言われてただろ？ ベルトが体へ神経系を伸ばしてるって。一種五代雄介も怪人になっているんだよ」

「……そういう事なんだ」

段々怪人になっていく。それって逆に怖い。なのにそれでもみんなの笑顔のために戦うんだ。凄い……。

最初五代さんは優しいだけの人だって奏さんは言ってた。でも、あの変身する回後はそんな事言わなくなってた。

むしろあの話でみんな五代さんの覚悟が分かった。お兄ちゃんが教えてくれた白いクウガ、グローイングフォームの説明で余計それが分かった。

——あれは戦士の覚悟が弱い時や力が落ちてる時になる姿なんだ。だから覚悟を決めた五代さんは赤いクウガになった。響さんは特に共感してた。

「時間があればファイズやブレイドなんかも見たいんだけどなあ。主人公が両方に熱いんだ。ヒーローになんかなるつもりはない青年が、段々そうになっていくんだよ。多くの戦いと出会いや別れを経験しながら」

「ヒーローになっていく……」

私からすればお兄ちゃんがそれだった。最初会った時は優しい男の人って思うぐらいだった。でもゲートを隠された私へかけてくれた言葉でそれだけじゃないって思った。

お兄ちゃんは優しいけど強い人だって。私へ泣くなつて言わなかった。代わりに泣くのは今日だけって言った。あれは、今思うと厳しい。

だって、ママの事で泣いていいのは今日だけだよって事だから。だけど、その厳しくて優しい言葉に私は立ち直るきっかけをもらったんだ。

「おっ、見えてきた」

「本当だ」

「よし、じゃああの黄色の看板の店、分かるか？　そこまで競争だ」

「うんっ！」

「じゃ、よーい……どんっ！」

そうやって二人で走ってお店の前まで行ったら揃って汗がダラダラ出てきて大変だった。

だけどお店の中は涼しくて、汗を掻いた場所がひんやりして気持ちいい。

そして私はメニューを見て驚いた。カレーしかメニューがないけど、色んなカレーがあつて、しかも辛さを変えられるんだって教えてもらって、色んな物を乗せて食べる事も出来るんだって。

「俺はチーズカレーにパリパリチキン乗せるか。セレナはどうする？」

「えつとねえつとね……」

色々あつて迷っちゃう。カレーでこんなに迷うなんて思わなかった。

メニューとにらめっこしてる間、お兄ちゃんはニコニコして私を待っていてくれた。

だからお兄ちゃんへお願いする事に。

「あのね、お兄ちゃんにお願いがあるんだけど」

「よしきた。何を追加で乗せればいいんだ？」

「お兄ちゃん大好きっ！ えっとね」

言わなくても分かってくれた！ こういう時のお兄ちゃんは本当に凄いなと思う。

そして私は甘口にしてハンバーグとほうれん草を乗せてもらう事にした。

で、お兄ちゃんにはチキンカツをお願いした。

「セレナは辛いのがダメだっけ？」

「えっと、食べられない事ないけど苦手」

だからお家でカレーを食べる時は私とエルにヴェイグさんが甘口で姉さん達が中辛。

早く辛いのが平気になりたいなって思うんだけど、エルが僕を一人にしないでくださいって言うからいまのままでもいいかなって思ってもいる。

どうせなら一緒に辛いのが平気になりたい。ヴェイグさんも一緒に中辛へ挑戦できるように。

そんな風にお兄ちゃんとお話ししてたらカレーが到着。凄く見た目で美味しそうなのがお兄ちゃん。二種類のチキンにチーズがかかって美味しそう。

私のも二つのハンバーグにほうれん草の緑がキレイ。そう思っで見つめると私のお皿へ二種類のチキンが少しだけお引越し。

「これ、セレナの分な」

「ありがとう。じゃ、ハンバーグを一つどぞ」

「おお、ありがとう。じゃ、遠慮なく」

こうして食べたカレーはとっても美味しかった。これからお家でカレー食べる時に色々乗せなくなっちゃうかもって言ったら、お兄ちゃんがスーパードンカツを買ってカツカレーにすればいいって言ってくれた。

その時はカツを半分こしようってお兄ちゃんに言ったら、エルとしてあげたってそう言ってくれた。

うん、そうだ。エルにも教えてあげよう。カツカレーって凄く美味しいって。

私のデートはそこからお家に帰って汗を流した事で終わった。お兄ちゃんと一緒に入ろうかと思って思ったけど、さすがにもうそこまで子供じやないから言えなかった。

——でもお兄ちゃんならいいかな？　だって、お父さんみたいなのだもん。

お兄ちゃんが出て来た時にそう言ったら、お兄ちゃんだけじゃなく調さんや切歌さんからもダメって言われちゃった。

それが何だか残念で、でも少しだけ大人だよって言われたみたいで嬉しかった。そんな私の初デートでした。

——そうだ。姉さんとじゃなくて私と結婚ならいいんじゃないかな？　私はお兄ちゃんを何があってもずっと大好きでいられるから……。

真夏の日差しがジリジリとアスファルトを照り付ける中、私は一時期暮らしていた部屋の前に立っていた。

「……時刻は……午後四時、か」

約束の時刻になったのを確認し、私はドアをノックする。

「はい」

「仁志さん、私です。翼です」

「ああ、はいはい」

このやり取りは初めてだな。な、何とか恋人の部屋を訪問しようだ。

と、そう考えて思い直す。ある意味でその通りなのだ。

仁志さんは私達全員の想いを受け止めたいと言った。なら、もう私は仁志さんの彼女と言えなくもない。

「時間ピッタリだね」

「は、はい。その、五分前にはここへ来ていましたから」

そう言った瞬間、仁志さんが苦い顔をする。

「翼？　気持ち嬉しいけど、ならそこでノックしてくれていいからな？　この時期だ。ないと思うけど熱中症や日射病になるかもしれないから」

「あつ、す、すみません」

心配されてしまった。たしかに私が今回は抜けていた。仁志さんとのデートだと思つて落ち着きを失っているようだ。

「まあ、とりあえずどうぞ?」

「お邪魔します」

こうして訪れるのはどれぐらい振りだろうか。ちゃんとした訪問はそれこそあの……卑猥な動画を仁志さんが見ていた日以来かもしれない。

「あそこのクッションを好きなように」

「仁志さん」

「え?」

仁志さんの言葉を遮り、私は思い切つてその体へ抱き着いた。

「……つ、翼?」

「あの時、私は言いました。その、そういう事でも構いませんと」

「そ、それはたしかに聞いたけど……」

「私では、この体では貴方の劣情を誘えませんか?」

奏やマリアなど言うに及ばず、立花にさえ女性としての象徴は負けている私だ。思い返せば仁志さんが見ていた動画の女性も胸は大きかった気がする。

そう思っていると私の体を優しく抱き締めてくれる腕がある。顔を上げればそこには困つたような、でも嬉しそうな仁志さんの顔。

「そんな事ない、でいいのかな? とにかく、翼は魅力的だよ。多分胸の事を言ってるんだと思うけど、関係ないから。君は、その、十二分に美しいんだ」

「仁志さん……」

ああ、やはりこの人しかない。私が結ばれ、妻に、母になれるとしたら、この人しかないっ!

——お父様もきつと生きてらしたら仁志さんを認めてくれたに違いない……。

そうだ。そうに決まっている。私を色眼鏡で見ない人なんだ。一人の、ただの女として見て受け止めてくれる方なんだ。

「だからこそ、そういう事はさすがに無理だよ。ここ、隣が……さ」
「あ……」

そうだった。この隣の今は立花と雪音がいる。事を致せば確実に気付かれて邪魔をされてしまう。

な、ならば連れ込み宿しかないか？ で、でもさすがにそこへ私から誘うのは品が無いと思われまいだろうか？

——ならば、せめてキスだけでも……。

キス、か。だが、悪意の事もある。仁志さんはきつと拒否するだろう……。

そう思うと急に寂しさと悲しさが押し寄せてくる。どれだけ私が求めても、きつと仁志さんはこの事が終わるまではと受け入れてくれないのだと思うと。

「翼？ どうした？」

「え……？」

「涙が浮かんでるけど……痛かったか？」

「い、いえ、これは、その……」

言ってもいいのだろうか。言えば、この人を苦しめてしまうのに。

——だが、そうやって今まで言わずにきて、どれだけ後悔した？

お父様へ言いたい事、伝えたい事、山ほどあったのに……。

「っ!？」

「翼?？」

思い出すあの記憶。目の前で失われていく命の鼓動、その温もり。

私を影ながら支え、包んでくれていた温かさが消えていく瞬間を。

「仁志さん、お願いがあります」

「何?？」

「キス、して頂けませんか？ 深く繋がる事は無理でも、貴方と、好きな方と想いを通じ合わせたという実感が欲しいのです」

真っ直ぐ仁志さんを見つめて言い切る。

「実感、か……」

「はい。その、ダメ、でしょうか?？」

不安が口から漏れる。今の私は、貴方と二人だどこまで弱くなれ

るんです。

昔であれば自分を叱咤したところでしよう。でも今は違う。それをどこかで喜んでいる自分がいる。

これも、仁志さんが私をただの翼にしてくれているからですよ？

私は、貴方の前でだけ弱くいられる。作られた強さを捨てて、本当の強さを、弱さを見せる事が出来る。

「……分かった。じゃあ」

「あつ……」

仁志さんが少しだけ私の体を離す。だけどその眼差しは真剣だ。

「翼、大好きだ」

「つ……私も、私もお慕いしています」

目を閉じて少しだけ顔を上げる。鼓動が高鳴る。頬が熱くなる。

ああつ、何という心境だろうか。こんな気持ちになったのは初めてかもしれない。

ふと、温もりが頬へ触れた。軽く荒れているような、そんな感触だった。

「……仁志さん？」

目を開ければそこには少しだけ申し訳なさそうな仁志さんがいる。

「すまない。今は、そこが精一杯なんだ。いや、違うな。まだ覚悟が足りないんだと思う」

そう言って仁志さんは一度深呼吸をした。

「……翼、やつぱりそこじゃダメか？」

「……正直に言えば」

でも、嬉しかった。頬へのキスでも、嬉しかった。それに、今の言葉でも嬉しさを覚えた。仁志さんは、私とキスをしたいと思っはくれているのだから。

「だよな……」

「ふふっ、何ですかその反応は」

「いや、俺が逆でもそう思うからさ。男らしくないなあ、俺」

「そんな事ありません。普通の男性は複数の女性を選べないからと言って全員選ぶと直接言えませんかから」

「……それって、男らしいって事でいいのかわ？」

「少なくとも普通の男性よりは度胸があるかと」

そう笑いながら言うのと仁志さんは苦笑した。

「そうとも言えるか。さてと、じゃあせめて少しはらしい事するか」
「らしい事？」

不思議そうに首を傾げる私へ。仁志さんは悪戯っぽく笑みを見せると、私の手を引いて部屋の奥へと向かう。

そして私の手を離すと二つのクッションをそこへ置いた。何をするのだろうかと思っていると、仁志さんは手前側のクッションへ私を座らせようとしてきた。

「あ、あの……これは？」

「いいからいいから」

戸惑いながらクッションへと腰を下ろす。沈むような感触だ。

「よつと、じゃあ失礼するよ」

「え？ つ!？」

背後に座った仁志さんが私の体を後ろから抱き締めてきたのだ。

こ、これって、ドラマなどである行為だよ！ 恋人同士がやる事だっ！

「ひ、仁志さん？」

「嫌？」

その聞き方はズルいです。だって、仁志さんの声もどこか照れてるんだもの。

「……いつまでこうしてくれるんですか？」

「せめて六時ぐらいには止めたいかな。今夜、俺はマリア達と食事しないからさ」

思わず顔が熱くなった。この人はこういう事をするから性質が悪い。

要は、私と二人で食事したいからと断ったという事だ。本当に、貴方と言う人は……。

「外食ですか？」

「それでもいいよ」

「作るのなら、買い物しないといけません」

「そうなるな」

と、そこで思い出す。六時になれば立花と雪音はバイトの時間だ。もしや、今日あの二人は勤務ではないだろうか？

「立花と雪音は本日勤務ですか？」

「どうだったかな？ ちょっと待ってくれよ」

すつと腕が離れる。若干の寂しさを感じるが、すぐに戻ってくると思って我慢する。

「……あー、うん。今日は二人勤務だね」

「そ、そうですか」

なら、その、ああいう事が可能とも言えるな。またそつと抱きしめる温もりを感じながら、私はその腕へ自分の手を置いた。

「ひ、仁志さん」

「ん？」

慎みがないと言われてもいい。それでも、私の気持ちをもう一度はつきりと言っておこうと思う。

「わ、私を食べる事も可能……です……よっ？」

言っちゃったっ！

「……とても魅力的な提案だけど、そうなたら奏や未来が気付いてここへ来るまで食べるだろうから止めておく」
「っ!？」

返されたのはとても恥ずかしく、嬉しい本音。奏や小日向に気付かれる。それはつまり部屋へ帰してもらえない事だ。

だからと言って外泊するなど言えるはずもない。それに、十時を過ぎれば立花と雪音も帰宅する。どちらにせよ時間の問題になる。

——何か、何か方法はないだろうか？ 少しでもいい。仁志さんを女として慰める事は出来ないだろうか……。

女として……。

「仁志さん」

「何だ？」

「その、私に何か出来ませんか？ 何でもいいんです。何か貴方の

溜め込んでいるものを受け止めたんです」

そう言った瞬間、仁志さんが息を呑むのが分かった。

「……押し倒せって言ってるのと同義だぞ、それ」

初めて聞く、仁志さんの男としての声。少しだけ低くて、思わず胸が高鳴る。

「……そうだと言ったら？」

だから気付けばそう返していた。

「胸とか触るぞ？」

「どうぞ」

「服の上からじゃなくじ、直だぞ？」

「お好きなように」

「ぶ、ブラを……ずらす、ぞ？」

「クスツ……ご自由に？」

自然と笑みが浮かんでくる。仁志さんの声が段々いつものものへ戻っていくからだ。

「何で笑ってるんだよ？」

「仁志さんもご自分で分かっているでしょう？」

「……………まあ」

「ぷっ……ふふっ、あははははっ」

限界だった。仁志さんがガクツと肩を落とした感じが声で分かったから。

本当に、不思議な人だ。大人かと思えば子供でもあり、子供だと思えば大人にもなる。

お父様とは違うのに、どこか近いものを感じる事も不思議だ。だからこそ、どんどん好きになってしまう。

そこから二人でしばらく笑い合った。それが恋人みたいで嬉しかった。誰かの温もりを感じながら笑い合っていてこんなにも温かく幸せな事なんだって初めて知った。

「……………ふう、疲れました」

「かなり笑ってたからな、お互い」

笑い疲れて仁志さんへもたれるように身を預けると、頭上から少し

疲れた声が聞こえてまた笑みが浮かぶ。

「仁志さん」

「何だ？」

「触らないんですか？」

「勘弁してくれよ。触ったが最後、俺は翼に溺れる自信がある」

「クスツ、何ですかその自信は」

「絶対をつけてもいいぐらいだ」

「ですから、意味が分かりません」

「分かってるくせに」

「いえ、分かりません」

「こんなやり取りが堪らなく幸せだ。もっとうこうしていたい。もつと触れ合っていたい。」

——もつと仁志さんを感じていたい……。

「仁志さん……」

「今度は何だ？」

そつと仁志さんの手を取って私はそれを胸へ当てる。

「っ!! つ、翼っ!!」

「お嫌、ですか？」

小ぶりではあるが、それでも動揺してくれるのだと思って嬉しくなる。

私の体でも、貴方には女として意識してもらえるのだと喜びが込み上げる。

「あ、あのな？ さっきのは」

「冗談半分本気半分、ですよね？」

勝手に口が動く。意識が、少しだけ遠くなっていく。

「いや、それは……」

「いいんです。言ったはずですよ？ 私は、構いませんと」

仁志さんが唾を飲んだ……。そして私はもう片方の手を仁志さんの下半身へと伸ばした。

「ああ、こんなに硬く」

「つつつ翼っ!!」

自分が何を言っているのか分からない……。仁志さんの声も……遠く聞こえる……。

——仁志さんが私で喜んでくれている。興奮してくれている。もっと、もっとそうしてあげたい。私に夢中にさせたい……。

ホント？ 本当にそうなの？ そうなら、そうしたい……。仁志さんを、私の、私だけの仁志さんに……。

「さすがにこれ以上は不味いからっ。翼、気持ちは分かったからっ」
「ダメです。それに、仁志さんは言ってくれたじゃないですか。私達の想いを受け止める。誰かじゃなくて全員だと。なら私の想いを受け止めてください」

「翼……」

耳にかかる仁志さんの吐息が熱い……。それがまるで私の何かを溶かしていくようだ。

片手に感じる熱を持った硬さも、胸から伝わる温もりも、全て私を溶かしていく……。

なのに、ふとその温もりが離れた。私から全て離れていった。

思わず振り返れば、そこには辛そうな仁志さん。

「言っただよ翼。焦らない方がいいって。今の君は、焦ってる。その、嬉しい事に俺の事で」

「仁志さん……」

「心配しなくても、この一件が終わるまでは俺は誰かに決めないから。というか、終わった後でも決められないだろうから。だから、焦るならその時にお願ひするよ」

そう言っただ仁志さんは深呼吸を一つすると素早く先程キスしなかった方の頬へキスをした。

「今は、これで許して欲しい。それと、君の心を焦らせてごめん。えっと、エロい事は俺もしたいけどもう少し待ってくれ。悪意がいる以上、翼を乗っ取る可能性がある。俺は君をもう誰かの人形にさせたくないんだ」

「っ!？」

その言葉に私は目が覚めた。この人が私とキスしたくないのは、そ

ういう意味でもあつたんだと気付いて。

「仁志さんっ！」

「っつと!?!」

「ごめんなさいっ！ 私は、私はまた同じ事を繰り返しそうでした！
貴方の想いを、優しさを、酌む事が出来ませんでしたっ！」

ああっ！ 本当に私は成長していない！ この人は一度教えてくれたのに、焦ってはいけないと言ってくれたのに……。

「そんな事ないよ。翼は俺の気持ちを酌んでくれたさ。ただ、それがちよつと間違っただけだっつて」

なのに、この人は私を撥ね退ける事もせず、こうして優しく受け止めてくれる。

その強さに、温もりに甘えてしまう。

ああ、そうか。あの時、この人の胸に甘えた時から、もう私はそうなっていたんだ。

「だからそんなに気にしないでくれ。こう言ったらなんだけど、嬉しくもあつたんだから」

「仁志さん……」

「悪意の事が片付いても、まだ翼が俺とそういう事を望んでくれるなら、その時に今日の続きは考えよう。な？」

「……はい。私が自分の気持ちで、周囲や状況に流される事なく決めて」

「ああ、そうして欲しい」

そう言い終えると仁志さんは今度は額にキスをした。

「俺の気持ちは変わらないと思うよ。まあ、この場合は変わった方がいいのかもしれないけどさ」

「ふふっ、そうですね。出来れば、私だけを見つめてくれる人になってくれると嬉しいです」

私の言葉に仁志さんは困ったように笑って頬を搔く。それがとても可愛らしく見え、私は笑った。

——いつか、きつといつか私だけを見てくれるようにしてみせる……。

ゲートを閉じるようになってから、些細な変化が仁志の世界に起き始めた。

それはずばり動画のコメント欄だ。そこへ書き込まれる内容の中に、かつてあつた覚えがあるというような内容のコメントが散見されるようになったのである。

それを受け、仁志は翼達ドライディーヴァと名付けた三人にアイドルギアを使つての三人曲を頼む事にした。

そこで三人へ与えた指示はたった一つ。好きに歌つてというものだ。だがその言葉に歌姫達は笑みを返して頷いたのだ。

仁志を、惚れた男を驚かせるような歌を歌つてやろうと心を一つにして。

——楽しんで歌を歌おうか。それできつと仁志先輩の顔を驚きに染められるだろうし。

——そうね。これは仕事でもなければ強制でもないもの。誰かが作つた歌じゃなく、私達で作る歌だから。

——ああ。きつとこの世界でしか歌えない歌だ。だからこそ、今を思いつきり楽しんで歌おう。

そうして歌われた歌を聞いた仁志へ三人は曲名を決めて欲しいと告げる。

その結果、仁志は悩みに悩んで絞り出すようにして「天鳴ノ協奏曲^{カデンツァ}」と名付けた。

そこに込められた意味を感じ取り、ドライディーヴァは全員一致でその名を承認する。

「天鳴ノ協奏曲^{カデンツァ}」は何と初日で百万を超える再生数を叩き出し、仁志だけでなくマリア達をも驚かせる事となる。

チャンネル登録者数も更に増え、仁志はある種の手応えを感じていた。ただし、それは動画に関係する事ではなくゲートを閉じた事へのある確信だった。

「ゲートから悪意はその影響力を行使してたと見て間違いない」

その言葉にエルフナインとヴェイグは小さく頷く。あの誕生日会

以降ゲートは閉じられたままになっている。やはりあのノイズ襲撃は仁志達にとって大きな出来事であったためだ。

ないと思うが就寝時に差し向けられては対応が間に合わない事もあり、ゲートはあの日以降はカオスビーストと戦うため以外には解放しない事に決まったのである。

「と言う事は、ゲートを通じて悪意はこの世界へ影響を与えていたと見て間違いなさそうです」

「だろうな。タダノ、動画のコメントはどうだ？」

「そうそう、みんなのギアを使った個人曲へ聞いた覚えがあるって感じのコメントが増え始めてるんだ。これもゲートを閉じた影響かもしれない」

「なら、このままいけば兄様の考えた事も実現するかもしれないね」嬉しそうに笑みを見せるエルフナイン。その格好はここへ来た頃とは変わり、涼しげな黄色のワンピースとなっている。

マリアやセレナの影響もあり、女の子らしく服装へも気を遣うようになった結果であった。ちなみに衣服代は仁志とマリアで出し合っている。

「でもお、ししよーの考えてる通りにみんなが思い出してくれたら、アタシ達、ここで暮らす事が難しくなっちゃわないデスかあ？」

「それは私も思った。だって、そうなったら私達は一部の人間に有名な人……」

「姉さん達みたいになっちゃいますね〜」

「あー、そこは正直分らないなあ。あと、三人共少しだらしがないぞ。胸元が見えそうになってる。女の子なんだから気を付けなさい」

「二はーい（デス）」

扇風機の周囲でクッションを枕にするように寝転がりながら仮面ライダーSPIRITSやウルトラマンSTORYOを読む三人。共に仁志の私物である。

そして、だらしないと仁志が言ったのには訳がある。仁志からはTシャツ姿の三人の胸元が若干覗いているのだ。

それを注意する仁志への三人の返事は生返事。そんな夏休みの学

生らしい三人に苦笑し仁志は顔を前へ戻す。

「あの、兄様。僕も姉さん達の疑問は気になります」

「えっと、エル、例えばなんだがな？ 創作物だと思ってた作品の存在とよく似た、それこそ本人じゃないかと思うような相手がいたとする」

「はい」

「でも、果たしてそれだけで人はそれをその作品の存在と断言出来ると思う？」

仁志の頭の中に浮かんでいたのはウルトラマンガイアの映画の描写だった。あれは、ガイアである我夢が隊員服で現れたからこそみんなが本物だと思ったのだ。

だが、残念ながら響達はギア姿でもない限り本物と断言出来る要素がない。私服姿では、良く似た別人と思うのが普通なのである。

「……皆さんしか有り得ない何かがあれば無理です」

「そう。そのためには話をするとの接触を図るしかない訳だけど……」

「姉様もそうですが、基本皆さんこの世界の人と知り合いません。そして見も知らぬ人へは警戒しています」

「そういう事。まあ、多分そこまで心配する必要はないと思う。エルには話したと思うけど、悪意は戦姫絶唱シンフォギアをこの世界から消そうとした。それをほぼほ成し遂げた中で思い出させるんだ。その反動というか無理矢理なかつた事にした報いは確実にあると思うよ」

「そうだな。上位世界のほぼ全てからセレナ達を消したんだ。その使った分以上の力が跳ね返るはずだ」

ヴェイグの言葉に仁志とエルフナインが同時に頷く。それ程悪意のした行為は凄まじい力を必要としていると思われた。

何せ世界に存在していた全ての“戦姫絶唱シンフォギア”に関する情報を消去してみせたのだ。それはアカシックレコードと呼ばれるものへ干渉したのではないかと思われる程の、とんでもない行為だろう。

以前話した悪意の力の使い方。それは時間停止ではなくそちらへ注がれているのではというのが最近のエルフナインの出した考えであった。

「あつ、そういえば兄様に聞きたい事があったんです」

「おつ、何だ何だ?」

首掛け袋から真新しいライトグリーンスマートフォンを取り出してエルフナインは何か操作をすると、それを仁志へと差し出した。

「これについて教えて欲しいんです」

「どれどれ……あー……これかあ」

画面に表示されていたのは「ガンダムビルドファイターズトライ」で出てくる「すーぱーふみな」と呼ばれるプラモデルであった。

「切歌お姉ちゃんからガンダムというものを聞いて、兄様オススメのビルドファイターズで検索をかけたらそんな物が出て来たんですが、これはアンドロイドという事でしようか?」

「えーと、何て言えばいいのかなあ」

「切歌お姉ちゃんはギアを纏っているようなものだと言うんですが」「あ……」

ガンプラは自由だ。そう言っても分からないどころか変な誤解を招きそうだと判断し、仁志は仕方なくしつかりと説明をする事にした。

その説明はビルドファイターズトライの登場人物にも触れる事となり、気付けば切歌達もテーブル近くへ集まっていた。

今やこの家では仁志は家長と言えた。本人にそんな気はないが、マリアが夫のように思い、セレナやエルフナインが兄や父のように慕い、切歌と調も頼りになる存在として考えているためだ。

これまで彼女達はどうしても家族という枠組みから外れた世界で生きていた。

親しい友人や仲間はいても、それはあくまで点の繋がりであり、部屋へ戻れば狭い関係性でしか支え合う事はなかった。

それを意図せずして仁志は壊したのだ。三つの住家でそれぞれ支え合い、助け合い、関わっていくように。

更には定期的に全員で集まり、これまでよりも濃密な関わりを持たせ、築かせ、その絆をより一層強くさせたのだ。

その中で仁志は、父の、兄の、男の役割を果たして彼女達を支えた。これまでの平行世界と違い、寄る辺のない自分達を必死に支える彼の姿に好感を抱かぬ女性達ではない。

結果、彼らは互いに影響し合い、成長を遂げる事となったのだ。

「ししよー、今度の集まりはクウガデスよね？」

「そうなるな」

「クウガを見終わったら何がいいかな、お兄ちゃん」

「うーん……アイマスでも見る？」

「あつ、私興味ある。切ちゃんバイト先でCDを見てその量に驚いたって聞いたし」

「あれはホントに圧巻デス……」

「まあ歴史が長いからねえ。十年以上経ったんじゃないかな？」

「……十年っ!?!」

最早家族と言ってもおかしくない程に仁志はエルフナイン達から慕われていた。

かつてはこの家での同居を反対していたマリアやエルフナイン、中だだった調でさえも容認へと傾きつつあるぐらい、仁志という時間は楽しく幸せなのだから。

「そうなんだよ。アイドルものとしては結構な古典作品であり先頭を走り続けるコンテンツでもある。俺もそこまで熱心なプロデューサーじゃないけどそれぐらいは知ってるし」

「……ふろでゅーさー?」

そしてまた、仁志にとっても彼女達との時間は安らぎ癒される至福の時間だった。

装者達の中でも年少組は特に素直だ。彼の趣味への偏見などもなく、純粋に受け止め考えてくれる。

更にエルフナインやヴェイグという彼にとって擬似子育てを経験させる存在も大きかった。

結婚など無理と諦めていた仁志の中で、せめて子供だけでもと思わ

せるには二人の存在は十分過ぎる程の影響力を持っていたのだ。

仁志の話を興味津々と言った顔で聞く切歌達五人。ここにマリアがいればきつとその様子を見て苦笑した事だろう。

それほどに彼らの関係性は他人という線引きを越えているのだ。血は繋がらぬでも家族である。そう言うのがもつとも適していると
言えたのだから。

「よし、じゃあ今からみんなで切歌のバイト先、行くかつ！」

「二二はい（うん）（ああ）（デス）っ！」「二二」

セレナがヴェイグを抱え、切歌と調が仁志の両側を陣取り、エルフナインは肩車されて笑みを浮かべる。

見た目はとても家族とは思えない一行であるが、その雰囲気や距離感はそのうとしか言えないものだ。

「そういえば調お姉ちゃん、今日の晩御飯は何ですか？」

「今夜は仁志さんのリクエストで少し辛めのシーフードカレー」

「か、辛いんですか？」

「大丈夫。中辛と甘口を半分ずつ入れる」

「ほっ……」

「シーフードカレーデスカ。楽しみデスよお」

「エビ、イカ、ホタテ？」

「うん。足りなかった？」

「十分だよ。ルーは言った奴、買ってくれたか？」

「勿論抜かりない」

「さすが調だ」

「それほどでも」

気付いているのだろうか。切歌も調も、その位置取りは以前と大きく異なっている事を。

前回のカラオケでは、仁志は一人後方を歩き、その前を彼女達が歩いていた。

それが、今回は仁志の両側を切歌と調が歩いているのだ。そこには、乙女らしい無自覚な恋心がある。

かつて翼と未来が響とクリスの想いを聞いて動いたのと同じ行動

を二人は取っているのだから。

(手、繋いでみたい(デス)けど、エルを肩車してるから無理だ(デス)ね……)

チラリと仁志の方へ目をやり、本来あるはずの物が無い事に小さくため息を吐く二人。

そんな二人に気付く事なく、セレナはヴェイグへ微笑みかけていた。

「カレー、楽しみですね」

「ああっ！」

返す声には隠しきれない喜びが宿っている。実は、ヴェイグの好物の一つがカレーなのだ。

初めて食べた時、その味に驚き、汗を掻きながらハフハフと食べて以来、ヴェイグはマリアアへこうねだっていた。

——なあ、次にカレーはいつ出てくる？

——一週間の間に同じメニューは出さないから。大人しく来週まで待ちなさい。

と、このような返しを受けるといふ、まさしくよくある家庭のページ。そう、この世界へ来てすっかりカレーが好物となったヴェイグであった。

そんな風に幸せそうに歩く仁志達を見下ろす黒いもやのようなものがある。

——種まきは今のところ順調。残る奴らにも種をまいて、根付いてくれるのを待っただけね……。

番外編 男はつらいよ……

「みんなで遊びに行きたい？」

俺の言葉に切歌と響が力強く頷いた。

場所は俺の部屋。時刻は午後二時を過ぎた辺りで、夏の暑さのため窓を開けていても風がなく、扇風機程度では汗が流れるのを止める事は出来ないレベルである。

それでも俺はまだ空調を使うつもりはない。いや、正確には使えないんだ。実は、今この部屋のエアコンは壊れている。つい最近使おうと思ったら動かず、リモコンの電池を変えても反応なしという有様。何せ一人暮らしを始めた頃からの付き合いだ。もう寿命を迎えてもおかしくない。金に余裕も出来たし買い替えるべきかと、そう思っていた矢先にお亡くなりになったのである。

そんな中でも俺と過ごせるならばとやってくる辺り、この必愛コンビは似た者同士なのだろう。

あのノイズ出現を受けて、二人は表向き方が一の際の護衛としてここへ来ては漫画を読んだり、俺の話を聞きたがったりと忙しい。

心配してくれているんだと思う。何せあの一件まではこんな事しなかったのだから。

「八月ももう半ば。なのに結局海水浴は行ってないじゃないですか！」

「デスデスっ！ これじゃ水着がカワイソウデス！」

「とは言ってもなあ」

一応ここから海水浴が出来る場所へ行けない事もない。電車で一時間程度かかるが、知多の方へ行けばいいからなあ。

それにしても、水着ねえ。正直プールでも思ったが、今の俺はあれを心穏やかに見る事が出来るのだろうか？

あと、地味に他の男達に見せたくないと思っっているんだが、それは言った方がいいかね？

「ししよお、うゝみゝ、行きたいデスうゝ」

「仁志さあん、うゝみゝ、行きましようよおゝ」

両側から元気つ子二人に引つ張られる。暑いんだけど、若干幸せ。

「あ、あのな？ 一っだけ知っておいて欲しいんだけど」

「?」

揃って小首を傾げる二人を見てると、時々姉妹なんじゃないかと思う。

響と切歌って色々と似てるので親戚なんじゃないかと本気で思う時あるんだよなあ。

「俺、正直さ、みんなの水着姿を他の男に見せたくない」

そう本音を告げると二人が揃って顔を赤くした。

「そ、それって、独占欲、ですよな?」

「まあ」

「し、ししよーはアタシや調さえも見せたくないデスか?」

「そりゃあね」

「……あう」

何故に君達は揃って顔を赤くするんですかね。もしかして暑さで?

やっぱ早く新しいエアコン買おう。こんな中でセレナに掃除なんてさせられないし。

「よし、ちよつと出かけてくる」

「どこへ(デス)?」

「エアコンを買いに近所の電気屋まで。修理じゃ時間かかるけど、買い替えなら早いはずだし。っと、その前に銀行寄って金下ろしておくか」

「私(アタシ)も一緒に行きます(デス)っ」

ま、そうなるとは思ってた。じゃあ、両手に花で出かけるとしますか。

鍵に財布とスマホを二つ持って靴を履く。それに続いて響と切歌が靴を履くんだけども……

「? どうかしたんです(デス)か?」

「……何でもない」

Tシャツだもんだから胸元がチラリと見えた。あー、何でこうチ

ラツと見えるエロスって破壊力高いんだろうな？

それに響も切歌もある方だから結構な威力だった。いかんいかん。熱で理性が息絶えそうだ。

二人が出るのを待って鍵を閉める。で、この暑いのに二人してすぐに腕を組むのは何でデス？

「さっ、行きましよう仁志さん！」

「ゴーゴーデス！」

「はいはい」

ま、響は女性として、切歌は弟子として俺に接してくれてるんだ。それに、こうやって二人の可愛い女の子と腕組んでると、周囲も仲良し姉妹と親戚のおじさんぐらいにしか見えないだろう。

「それで、どんなの買うんですか？」

「デスか？」

「どうせなら最新型がいいなあ。電気代安いらしいし」

マリア達の家のはそういうのだ。女性五人にヴェイグがいる事もあって、結構奮発したんだよな、あの居間の空調は。

「おおっ、お家のやつと同じのデスね。あれのおかげで夜寝る時が快適デスよ」

「私達の部屋のはダメですか？」

「響達の部屋のもいいんだよ。サイズとしては十分だしさ」

二人の部屋のも比較的新しい物だ。俺としては値段としても手ごろなので迷うところではある。

両腕の暑さと熱さに何とも言えない気分となりながら、俺達は銀行のATMコーナーへと入った。

「涼しく」

別世界のようなそこでずっと過ごしていたい気分には駆られるが、今は金を下ろす方が先だ。

「じゃ、ここで待っていてくれ」

「はい」

素直な二人に苦笑しつつ、俺は財布からキャッシュカードを取り出してふと思いつく。

「こっちから大金を引き出すのはマリアが初めて来た時以来かもしれないな」

現在、俺は二枚のキャッシュカードを持っている。一枚は俺が昔から使っている口座のカード。もう一枚は動画配信で得られる収入を入れている口座のカードだ。

あのみんなで初めての遠出の資金はそこから調達した。そう、その口座のお金はみんなに関係する事にしか使わないと決めているからだ。

「……残高が増えてるんだなあ」

みんなのおかげで地味に貯金出来ている。たしかに出て行ってる分もあるんだが、それよりも入ってくる分があるので正直俺自身の金を使う必要はあまりない。

それぞれの生活費はみんなのバイト代や動画の収益で賄っているからだ。というか、家賃だけならまとめて動画の収益だけで支払える。

二十万ぐらい引き出してATMでの作業終了。そこに置いてある封筒を一枚もらって札をそこへしまつて二人が待っている入口近くへ戻る。

「お待たせ」

「いえいえ」

「涼む事が出来たのでむしろありがたいです」

「そっか。じゃ、また炎天下へ戻るとするか」

「うへえ」

自動ドアを開けた途端流れてくる熱風。それに響と切歌が表情を歪める。

まったく、こういうところは本当に変わらないな、この子達は。

「電気屋さん行ったら私と切歌ちゃんは外で待ってた方がいいですか？」

「別に中で待ってればいいよ。色々家電を見てればいいんじゃない？」

「じゃあそうするですよ」

「だね。色々ゆっくり見てよう」

俺を挟んで会話する響と切歌は本当に仲良し姉妹のようだ。

ただ、気のせいか響は腕へ胸を軽く押しつけてる気がする。それを指摘し辛いので黙っているが、これ、割とキツイ。

性欲の方は、まあ定期的に色んな方向で処理してるけど、だからってこれは色々ヤバイ。

「えっと、響？」

それでもそれとなく注意をしておこう。

「何ですか？」

「あのな、ちよつとくつつき過ぎたと思うぞ」

「えっと……ダメ、ですか？」

ムニユつと押し付けられる柔らかな感触。こ、これはやはり意図的か。

「ししよー？ 大丈夫デスか？ 顔、ちよつと赤いデスよ？」

「ホントだ。仁志さん、軽く水分補給した方がいいですよ。あつ、スパー寄りましょう。ねっねっ」

「デスね。ししよー、何事も用心するべきデス」

「……じゃあ、まあ」

嫌だとは言えず、はつきりと言う事も出来ず、情けないおっさんは両腕に女子高生をくつつけたままスパーへと立ち寄る事にした。

「飲み物飲み物っ」

「デスデース」

「おいおい、あまり引つ張らないでくれって」

気分はもう親戚のおじさんか歳の離れた兄貴である。正直嬉しいけれど、さつきから腕へ柔らかな感触が当たってるので下手に腕を動かせない。

響は意図的に、切歌は無意識に、それぞれ女を使っている。以前だったらこれをそれとなく振り払うか窘めていた。

それが、もう出来ない。したくないってのもある。

「どれがいいかな？」

「ししよーはどれにするデスか？」

「そりや水分補給なのでスポーツドリンク系」

「えく、違うのにしましょう（した方がいいデス）よお」

やれやれ、この魂の姉妹は……。

「もしかして飲みたい物が複数ある？」

「デス（はい）っ」

「……で、俺はどれを選べばいいの？」

そう聞くと二人が嬉しそうに飲み物を前にあれこれと話し始める。それを聞きながら俺は両腕から感じる感触に必死に自分の心を落ち着ける事になった。

俺は大人俺は大人俺は大人。そう自分へ言い聞かせながら俺は響と切歌の誘惑へ抗い続けるのだった……。

「兄様、海に行くって本当ですか？」

エアコンの購入とその納期などを決めた翌日の昼過ぎ、俺がマリア達の家の居間で涼んでいるとエルがそう聞いてきた。

おそらく切歌が話したのだろう。そう思つて視線を向けるとてへへって感じで笑われた。可愛いので許す。

「まだいつになるかは分からないけど、今月中には」

「電車ですか？」

「それなんだけど、今回はレンタカーでワゴンタイプを借りて行こうかなと」

「……レンタカー？」「……」

俺の言葉にマリア達まで反応した。そう、今日はマリアのバイトは休み。なのでこの昼間の時間はこの家の全員が揃っているのだ。

……エアコン来るまでセレナに俺の部屋の掃除はさせられないからなあ。代わりに肩たたきや軽いおつかいを頼んでお小遣いを渡している。気分は本当に父親だ。

「そう。俺だって免許は持つてるよ。しかも中型だ」

引っ越しのバイトをやった時にその先輩から聞いたんだよなあ。中型だと車使う系の仕事の時便利だから採用されやすいぞって。

それを覚えてて、パチンコ屋時代に取ったんだよな。いやあ、あの

頃はいざとなったらスクールバスとかの運転手とか楽しそうだしなんて考えて取った免許だけど、ちゃんとこういう時に活かされるんだからホント人生って分からもんだ。

「で、十四人乗りの車なら余裕で全員乗れるだろ？」

「まあ、私か奏が助手席に乗れるし、エルやヴェイグを一人と数えても十二人だし……」

「荷物も平気でおけるね、姉さん」

「車で移動デスかあ。楽しそうデス」

「でも、仁志さん、運転大丈夫？」

「まあほとんどしてないけど……」

免許を取ってから二年弱は結構乗る事があつた。ま、実家の普通車なのでワゴンタイプではないのが難点かもしれないけど何とかなるさ。

それに、頑張つて中型の時の教習を思い出せば何とかなる、はず。まあ超が付く程の安全運転で行こう。

いや、その前に軽く練習も兼ねて今から運転するべきか？ 幸い今日は休みだし、マリア達を乗せて予行練習させてもらおうかな。

「マリア、頼みがあるんだけど」

「何？ 運転の教官役？」

小さく苦笑しての言葉に俺は思わず頬を掻いて頷いた。いや、お見事だ。読心術でも使えるんじゃないかね、彼女。

「さて、これからレンタカー会社へ連絡して、ワゴンタイプ借りれるか聞こうと思うんだ。で、良ければみんなで軽く買い物がたらドライブとしやれ込まない？」

「だそうよ？ どうする？」

「」「行くっ！」「」

「……だつて」

「じゃ、ちょっと待っててくれ。まずは連絡をと……」

で、その結果大人数乗りのワゴンタイプが空いていたので予約を取り、全員で出かける事になった。

本音を言えばマリアが運転できると楽なんだが、ここじゃ彼女に免

許はない。運転自体は可能だけど、万が一を考えると非常に不味いでほぼ不可能だし。

「マリア、悪いけど横から指導をお願い」

「いいわよ。でもそんなに不安なら、以前と同じで公共交通機関を使う方がいいんじゃない?」

「ヴェイグの事を考えると、さ」

その言葉だけでマリアは小さく微笑んで頷いてくれた。そう、電車やバスじゃヴェイグがみんなと喋れない。

「貴方らしいわ。ふふっ、本当にらしく嬉しくなるぐらいよ」

「それは良かった」

「お兄ちゃん、お買い物ってどこへ行くの?」

マリアと話していると前を歩いているセレナがこっちへ振り返ってそう聞いてきた。

「ああ、ここからだと車で大体二十分ぐらいの大きなショッピングモールだよ。映画館も併設されてるようなところだ」

「映画館デスか……」

「凄く大きいんだね、きつと」

「楽しみです!」

エルの嬉しそうな声に笑みが浮かぶ。と、隣のマリアも同じように笑っていた。

「何?」

「いや、相変わらず笑顔が素敵だなってね」

「つ……も、もう、そういう事言わないの。今の貴方だと、本気の口説きよっ。」

「嫌ならやめるよ」

どこか答えを予想しながらそう言うと、マリアが若干呆れた顔でため息を吐いた。

そしてこちらへジト目を向けてくる。それがあ意味可愛くて思わず笑みが零れた。

「どうして笑ってるのかしら?」

「マリアが俺へ意識を向けてくれてるからかな」

「……本当に、貴方って人は……」

最後には軽く嬉しそうに笑うマリアを見て俺は笑みを返す。と、そんな俺へ切歌が近付いてきた。

「ししよー、買い物って食料品だけデスか？」

「そんな事は言わないよ。本とか服とか見てくれていいから」

「調、だそうデスよ」

「うん、聞いてた。じゃあ服見たいね」

「エル、何か見たい物ある？」

「えつと、靴が見たいです。サンダルが欲しいなつて」

切歌達の会話を聞いていると本当に父親の気分になってくる。チラリとマリアを見れば彼女も微笑んでいた。

同じような事を思っているんだろうなと思いつつ視線を前へ戻す。もし本当にこういう家庭を築けたらどんなに幸せだろうか。

マリアが妻で、可愛い娘のエルとセレナ、切歌と調はマリアと俺の妹ってとこかな。

この平屋で慎ましく楽しく暮らす。そんな有り得ない未来を想像して息を吐く。

「ビーチサンダルはあった方がいいかもしれないな。砂浜の砂はほんでもなく熱いから」

「はいはい。ししよー、ビーチボールはダメですか？」

「買う必要なし。レンタルで十分」

「そうね。私も仁志の意見に賛成よ」

「切ちゃん、お財布を持つてる二人がこう言ってる以上は諦めた方がいいよ」

「ううっ、そうデスね……」

肩を落とす弟子の姿に苦笑が漏れる。何というか、下手をしたらこの中で一番子供かもしれないな、切歌は。

そうやって歩く事十数分後、俺達はあの切歌達の動画を撮ったカラオケ店に来ていた。実はここの本業はカラオケではなくレンタルカーなのだ。

受け付けで名前を告げ、書類への記入や免許証などを出して手続き

を済ませたら、そこからは店員さんに案内されるままマリア達と一緒に希望した車まで移動。

「ではこちらがキーになります」

「どうも」

「お気を付けて行ってらっしゃいませ」

俺が店員さんと話している間に後部座席へ切歌達が乗りこんでいく。で、当然ながらマリアは助手席へ。

俺が運転席へ乗り込むと、既に後ろはテンション高くなっていた。

「ししよーししよーっ！ 座席全部倒してもデスか？」

「お兄ちゃん、もうヴェイグさん喋ってもいい？」

「いいよ。それと切歌、多分だけど座席全部倒すなら誰も乗ってない時じゃないと無理だから後にした方がいい」

「了解デスししよー」

「ヴェイグさん、もう喋っていいですよ」

「そうか。それにしても、ここはくるまを貸す店だったのか。てつきりカラオケだと思ってたぞ」

「どうもそれは副業みたいなものらしいです」

後ろの会話を聞きながらミラー位置を確認。シート位置の調整を終わらせてシートベルトを装着すれば準備完了。

「じゃ、エンジンかけるぞ。みんなシートベルトしたか？」

「二二「はーい（ああ）」二二」

隣のマリアから返事が無いので視線を向けると後ろの確認をしていた。

「……大丈夫みたいよ」

「よし」

イグニッションを押してエンジンをかける。正直この方式の車に乗るのは初めてだ。

バックモニターとか色々付いてて戸惑うけど、まあ問題ない。一応ナビで目的地を検索して設定する。

「マリア、悪いけど教官役よろしく」

「了解。くれぐれも安全運転でお願いね」

「分かっているって」

ゆつくりとアクセルを踏んで動かし始める。久しぶりで若干の緊張はあるものの、それでも教習初日程の怖さはない。

それでも気は抜けない。錆びついた感覚を取り戻していかないとな。そう思つて慎重に運転していく。

「思ったよりも上手いじゃない。久しぶりとは思えないわ」

「結構内心はドキドキもんだぞ。昔よく乗つてたのは普通の乗用車だったしな」

その証拠に隣のマリアを見る事が出来ない。まだそこまでの余裕がないんだ。

何せ乗せているのがマリア達である。俺一人なら気楽に動かせる車も、乗せているのが大事な家族にも似た人達と思うと普段以上に慎重になるつてもんさ。

「ヴェイグ、可愛いデスね」

「うん、シートベルトしてるととっても可愛い」

「そ、そうか？」

「きつくないですか？」

「ああ、平気だ」

「むしろ緩いかもしれません。本番では何か対策を取った方がいいかも」

聞こえてくる声に笑みを浮かべつつ、俺は運転へ集中する。と、しばらくして信号で止まった時だった。

——何だか本当に家族になったみたいね。

耳元で囁かれた声に顔を動かす。そこにはこちらを見て微笑むマリアがいた。

「……………頑張ればこういう車、買えなくもないぞ」

「そう？ あの辺りだと駐車場代、いくらなのかしら？」

「帰ったら調べてみるか？ 空きがあるかも含めて」

「ふふっ、そうね。それもいいかもしれない」

交わす会話は夫婦のようだ。なのに向けられる眼差しは女のそれだ。本当に、世界を相手に大見得切れた女性は凄い。

その魅力的な顔を見つめていると向こうも少しだけ艶っぽい表情になるところなんて、もう役者が違うとまぎまぎと思わされた。

「信号、変わるわよ」
「っ」

そこで弾かれるように顔を前へ向け、俺は深呼吸一つしてからアクセルをゆつくりと踏んでいく。

加速し始める車体がまるで俺の気持ちと連動しているようで複雑な気分となる。

「そう、加速はゆつくりでいいわ。そういう事を言われなくてもちゃんと出来てるから私の言うべき事はないのよ」

心持ちその声は大きく出された、気がした。すぐに後部座席のエル達へ聞かせているのだと分かった。

さっきの自分の行動を怪しまれないように、かもしれない。

そうやって走らせてまた信号で止まった時、俺は横の MARIA にしか聞こえないように話しかけた。

「MARIA」

「何？」

「俺は、少しだけ君が、女性が怖いよ」

そう告げると、MARIA は一瞬瞬きをしてすぐに小さく苦笑するとまたこちらへ顔を寄せてきて……

——それでも貴方は私を嫌いにならないでくれるでしょ？ だから私も女の顔を見せられるの。

なんて言って頬へキスマスまでしてきたのだ。おかげでそこから駐車場まで俺は無言で色んなものと戦う羽目になった。

思った以上に気疲れしたと思いつながら運転席から降りると、そこで待っていた MARIA に軽く笑みを向けられた。

「本気で怖いって」

「あら、これぐらいで怖がってたら馬鹿な夢は見れないわよ？」

あっさりそう返されて、俺は反論出来ずに頭を掻くしかなかった。

ハーレムなんてもんは空想の中で留めておくべきだ。特に、俺みたいな一般人には。

そう心の底から思っ、それでもと思い直して歩き出す。

「ししよー、早くお店を見て回るデスよ！」

「兄様っ！」

「分かったからちよつと待っててくれ」

既に店内へ通じる入口近くで俺を待つ切歌とエルを苦笑混じりに落ち着ける。

「ヴェイグさん、気になる物があつたら教えてくださいね？」

「分かった。それとなく服を引っ張る」

「マリア、帰りは私が助手席でもいい？」

「構わないわ。見た所仁志の運転はなさそうだしね」

本当に、家族みたいだ。だからこそマリアは俺の妻になってもいいと思っ、てくれているんだろうな。

子供も、望んでくれている。悪意が言つた言葉の父無し子でもいいさえ抜けば、あれはきつとマリアの本音なんだろう。

「お待たせ」

「じゃ、レッツゴーデスっ！」

「はいっ！」

先陣を切つて歩き出すのは切歌とエル。その後を調とヴェイグを抱えたセレナが続く。俺はマリアとそんな五人の背中を見ながら歩く。

「ねえ仁志」

「ん？」

「貴方、男の子が欲しいと思っ、てるでしょ？」

「……ああ」

「私も、同じ気持ちよ。ヴェイグは息子と言うよりは歳の離れた弟に近いし」

マリアの手が俺の手へ触れる。視線を向ければマリアの視線とかち合う。

「……今は、無理だ」

「その言い方だと、今じゃなければいいみたいに聞こえるわ」

「……さすがにまだ親になれる自信は」

「そんなもの誰にも最初はないわよ」

ピシヤリと言い切られてしまう。エスカレーターに足を乗せて俺はマリアへ視線を向ける。

「今だけ、今だけでもいいから私を妻の気持ちにさせて。貴方も、夫の気持ちでいてくれていいから」

「……分かった」

言われて気付いた。俺、また軽く逃げ腰になってたって。なので小さく息を吐いてマリアと手を繋ぐ。

するとマリアが嬉しそうに微笑んでくれた。それでいいと言うように。

「エル、後で俺とマリアと手を繋いでくれ。ないと思うけど人が多いし、はぐれないように」

「分かりました」

これなら周囲も親子連れに思ってくれるだろう。そう思ってマリアへ視線を向けると、何故か若干不満そうな表情。

「どうした?」

「もう終わり?」

「いや、続くだろ。エルを」

「親子じゃなくて夫婦が良かったのよ」

その言葉に思わず赤面する。少し拗ねたマリアが、その、思った以上に可愛かったからだ。

「なら、それはまた別の機会に」

「絶対よ」

そこで会話終了。ついでにエスカレーターも三階へと到着。

エルと手を繋ぐと、そこで思い出すのは初めて二人と出会った日。

で、どうやらマリアとエルもらしい。二人して懐かしむように笑みを浮かべていたから。

そこからしばらく全員で三階の専門店街を見て回り、二階へと降りるエスカレーター近くの広場で一旦停止。

俺とマリアがエルを連れて、切歌達はヴェイグと共にそれぞれで動く事にしたんだ。

「それじゃ、今から三十分後にこの真下に集合って事で。調、切歌とセレナの監督役をよろしく」

「うん、任せて」

「エル、また後でね」

「はい。ヴェイグさんもまた後で」

「じゃあ、早速移動開始デース！」

歩き出す切歌達を見送り、俺はマリアとエルと共にまずは靴屋へと向かう事にした。

そこでエルのサンダルを選んでいたのだが、俺はどうせワンシーズンしか使わないのだからと安い物を選び、マリアは足元にも気を遣うべきと可愛い物を選んだ。

「以前はここで揉めたけど……」

「分かってるって。ここは当人に決めてもらおう」

で、初めての時の事を思い出してエルに選んでもらおうとなったのだが、そこでこう言われてしまったのである。

「今の兄様と姉様は、まるでパパとママみたいですよ」

その瞬間二人して天井を見上げるように顔を背けた。何て言うか、エルから笑顔でのパパ・ママ呼びはこう、くるものがあつたのだ。

なら、少しだけ、少しだけ調子に乗るか。マリアの想いをちやんと酌んでやれなかった代わりに。

「じゃ、今だけそう呼んでくれていいぞ」

顔をエルへ向け、さっきのお詫びじゃないけどマリアにも聞こえるように意を決して告げる。マリアが驚くようにこつちを見てきたけど、俺はエルへ視線を向け続けた。

「今だけ、ですか？」

「ああ。セレナ達と合流するまでは、かな」

「姉様も構わないんですか？」

「っ……ええ。エルがそれでもいいのなら」

マリアがそう言うのとエルが嬉しそうに表情を輝かせて笑みを見せた。それにこちらもつられて笑顔になる。

「じゃあ、僕はママの選んだ物がいいです」

「ですって?」

「分かったよ。まあ可愛い娘のためだ。多少の散財は何て事ないさ」
そう言うのとエルとマリアが楽しそうに笑った。それを見て俺も笑う。

あの時はエルはほとんど笑ってなかった。マリアも笑う事はなかった。

それが今じゃこうなってる。それに経過した時間と築いた絆を感じ、幸福感を噛み締めた。

「パパ、次は服が見たいです」

「よしきた。じゃ、アドバイザーはママに頼もうか」

「ならパパにはスポンサーをお願いするわ」

どこか三人で笑いながら呼び合う。遊びだよって、そう自分へ言い聞かせているんだと、思う。

じゃないと、俺達は本当にそうなるうとしてしまうから。それでも、それでもそうなりたいと思っっているんだと伝え合っているんだ。たった三十分間の親子ごっこ。だけど、俺達三人にとってはきつと忘れる事の出来ない思い出だろう時間だな。

最後に食料品をみんなで見回って購入し、たい焼きとか団子などのおやつを買って帰路に就く。

帰り道の途中でガソリンスタンドへ立ち寄って給油し、車を店へ返して買い物袋を片手に提げて歩きだそうとした俺へ、マリアがそつと耳打ちしてきた。

——今度は二人きりでドライブしたいわね、パ・パ?

視線を横へ向ければ、そこには照れを宿しながらも妖艶に微笑むマリアがいる。

本当に女性は魔物だ。でも、そんなマリアも悪くないと、そう強く思った外出だった……。

夏の深夜は厄介だ。この店はそうでもないが、それでもやはり客の動きが活発化してる気がするんだよな。

普段なら静かになる時間になってきても、ちらほらと客が入ってくる

るので気が抜けない。

「店長、洗い物終わったよ」

「ありがとう天羽さん。じゃ、レジ見ながら廃棄やろう」

「ん、了解。あたしはパンやってる」

「お願いするよ。こっちは米飯をやってるから」

奏が売り場へと出てくのに続いて俺もカウンターから出る。店内の客数は……二人か。時刻は十二時近くなので別に珍しいとは思わない。

雰囲気的におそらくこの辺の人間じゃない。多分だけど、駅前にあるカラオケの深夜フリータイム受付待ちだろう。

おにぎりを手にして一個ずつ裏を見ていく。廃棄があると複雑な気分になりながら買い物カゴへそれを入れて行く。

「店長、ちよつといい？」

「ん？」

「今日は荷物三時前に終わりでしょ。ちよつと話があるんだ」
「分かった」

多分仕事関係の事じゃない。なら個人的な相談か？

そんな事を思いながら業務をこなす。時々レジをやりながら荷物を片付け、補充や廃棄を片付け、清掃などを終わらせた頃には店内が静かになっていた。

二人で一旦事務所兼休憩室へ下がり、互いに椅子へと腰を下ろす。

「で、話って？」

「海に行くって話の事」

「ああ、誰から聞いた？ 切歌？」

「翼から。正確にはエルからになるのかな？ しかも車だって？」

「そう。日帰りだけど、前行った場所よりは近いから」

「ここから車で二時間もあれば余裕で着く。ただ、多分以前のプールより人は多いだろうから駐車場だけが問題か。」

「ホントに大丈夫なの、それ。行きも帰りも運転するの仁志先輩でしよっ。」

「まあ、こっちで免許持ってるの俺だけだし」

「泊まりにした方が良くない？ 海で遊んで運転出来る？」

「大丈夫だと思うけど……」

奏の心配も分からないでもない。前はバスに電車と自分は乗るだけで良かった。だが車移動となるとそうはいかない。

ただ、そういう事なら行きは助手席にマリア、帰りは奏と座つてもらつて話し相手になつてもらえば何とかかなると思うんだよな。

そう思つて考えを話すと意外と奏が嬉しそうにした。何か喜ぶべきポイントあつたか？

「えっと、どうして嬉しそうなんだ？」

「それ聞く？」

あ、ちよつと不機嫌だ。つまり聞かないで分かれつて事か。となる
と……

「もしかして、俺が奏を指名したから？」

「ビンゴ。しかも帰りなんてね」

「いや、奏の方がマリアよりも体力もあるだろうし若いからつて事なんだけど」

「それでもいいのさ。肝心なのはマリアに勝つたつて事なんだから」

「勝つたつて……」

ちよつとそれは聞き捨てならない。そう思つて注意をしようとした時だった。

——黙らせたいならキスしてよ。

そうどこか挑発するように言われてしまったのだ。

ただし、若干照れがあるので奏も平気ではないらしい。

「天羽さん、今、勤務中」

だから若干キツイ口調でそう言った。さて、これで頭を冷やしてくれるかね？

「勤務中にキスつて、ちよつとドキドキしない？」

効果なし!! むしろ少し興奮してる感じがするんですけど!!

「天羽さん？」

それでも負けないとばかりに冷たい声をぶつける。

「っ」

さすがにこれは奏も表情を変えた。やれやれ。

「……今の仁志先輩も、あたし好きかも」

あつれれく？ おかしいぞお？ 奏が何かMっ気出してないか、これ。

つと、店内に来店あり。なので俺は椅子から立ち上がってカウンターへと向かう。

「天羽さんは休憩してていいよ。で、それが終わったらドリップマシンをよろしく」

「あつ……」

このままだと不味いと思ったので、ある意味で渡りに船だ。

店内を見れば来店したのはいかにも学生だろう感じの男性。まあ高校生ぐらいだろうか。アイスのコーナーを眺めている。

で、何か決めたんだろう。そこから一つアイスを手に取ってこっちへ来る。

「いらっしやいませ」

無言、か。ま、この時間帯なら珍しくもないし、若いのなら余計だな。

「128円です」

「あの、赤髪の女の人って休みですか？」

代金を出しながら聞かれたのは奏の事だった。まあ土曜の深夜は絶対いるからな奏。

「休憩中ですが、何か御用ですか？」

だんまり。ま、こうなれば理由は一つだ。クリスマスもあつたらしいが、惚れたつてやつだろ。

ただ、奏はここではつきり言えない男は好みじゃないと思うぞ。

「130円お預かりします」

出された金を受け取り会計を済ませる。

「2円のお返しです。ありがとうございます」

袋を受け取って無言のまま帰る少年を見送り、俺は自分があれぐらいの頃を思い出す。

多分だけど、俺なら聞かないな。というか、聞くぐらいならいつそ

呼び出してもらうぞ。

……極端だな、俺。

「店長」

聞こえた声に振り向けば奏が立っていた。

「天羽さん？　どうかした？」

「いや、さっきの子さ、よく来る常連なんだよ。何でも浪人してるらしくて」

ああ、そういう事か。もうこれだけで分かる。彼は彼なりに奏と関係を深めようとしてたのか。

「一浪？」

「多分ね。ただ、さ」

そこで奏の表情が曇る。

「何かあったのか？」

「……年頃のに当然だと思っただけ、割と見られるんだよね」

これは、あれだ。男なら見てしまう、万有引力ならぬ万乳引力の法則か。

「それは、まあ、嫌かもしれないけどそれが男って事で一つ」

「あー、うん。分かってるんだけど、ぎらついた目で見られるとさすがにさ」

「は？」

何だろう。今、凄く怒りが沸いた。何？　あの少年というか青年一歩手前は奏の胸を所謂おかずにするために見てるのか？

あー、何だろうか。俺、やっぱり独占欲あるんだな。そういう風に思った事なかったけど、うん、今ので分かった。俺、嫉妬深いわ。

「奏、もしまたそういう目に遭ったら教えてくれ。あいつの顔は覚えた。今の時代、セクハラってのは致命傷になりかねない。それをあの浪人生に教えてやるから」

「ちよ、仁志先輩？」

「何だ？」

「えつと……」

こつちを困惑するようにつめる奏だけど、それがふつと緩んで笑

顔に変わった。

「ううん、ごめん。何でもないよ。休憩してる」

「? ああ、ごゆっくり」

心なしか嬉しそうに裏へ戻っていく奏を見送り、俺も今の内に発注をやっておこうと思いい直して裏へ戻る。

事務所から端末を持ち出そうと戻ると、奏が笑顔で廃棄のパスタを持ってカウンターのレンジへ向かおうとしていた。

「今日はパスタ?」

「そ。しかも珍しくボロネーゼ」

「ああ、それ美味しいよな」

「ねっ! だからテンション上がってるんだあ」

「そっか。俺はどうしようかな?」

「何ならシェアする? クロワツサンがあつたからさ。それを軽く温めて残ったソースつけて食べるとか」

「よし、そうしよう。それと俺はおにぎりにする。梅とツナマヨを一つずつだ」

発注は飯を食ってからにしよう。そう思つて俺は廃棄の品が入つたカゴを漁る。そこからおにぎり二つと低カロリークロワツサンを二つ取り出してカウンターへ。

2レジ後ろのレンジへまずおにぎりを入れて十秒加熱。次にクロワツサンの袋を少しだけ開けてからレンジへ入れて、こちらは二十秒設定で十五秒加熱。

それらを持って事務所へ戻る。奏の方は多少長く時間がかかるので先におにぎりを食べ始める。

と、そうだ。ついでに売上データとか見ておくか。

「あちちっ、お待たせ仁志先輩」

聞こえた声に振り返ればそこには嬉しそうな顔でパスタを持った奏の姿。

「お、相変わらず美味そうな匂いだな」

「だよねだよね。じゃ、お先に」

「どうぞ。つと、これクロワツサン」

「サンキュ。って、こっちもあつたかいじゃん。さすが仁志先輩。氣を利いてるね」

プラスチックで出来たフォークでパスタを美味そうに食べ始める奏。その姿に自然と笑みが零れる。

そして、こうして彼女と過ごせるのもあとどれくらいかとぼんやり思うのだ。

残すカオスビーストは二体。今のみんななら上手くすれば来月までには全滅させられる。そう、実はもう深夜と夕方は求人掛け始めている。

オーナーへは、夜勤はもう一人入れて層を厚くしたいと言ってあるし、夕勤はそろそろクリスと響が受験も近いので学業へ力を入れ始めたいとして納得してもらっている。

とはいえ、まだ店内募集だけだ。求人サイトなどを利用するのは二週間後、九月になってからと決めていた。

そして、ゆつくりとみんなのシフトを減らし、最終的には十月かその前で辞めてもらおうと考えている。

最初に未来、次に響だ。多分ギリギリになるのがクリスと調かな。奏はそれこそもう一人の夜勤が決まればいつでも辞めてもらえるし。

……そう、辞めてもらわないといけない。彼女達の居場所は、ここじゃないから。

「仁志先輩」

「ん？」

顔を上げればそこにはこっちへパスタを差し出す奏の姿。

「はい、残りは食べてよ」

「あ、ああ……ありがとう」

「どういたしまして。さてと、食後のデザートに何かなかったっけ？」

「えっと、プチエクレアがあつたはず」

「おっ、いいじゃん。じゃ、それもーらい」

明るく楽しいな奏を見ていて思う。あんな風に彼女が本来の世界でも生きていけるようにと。

願わくば装者としての時間が、少しでも、一瞬でも減っていきます

ようにと、心から願う。

「……美味しいなあ」

少し冷めてきているけど、それでも十分温かいポロネーゼを食べながら俺は奏を見つめる。

プチエクレアを冷蔵庫から出してその場で一つ摘んで笑みを見せる、そんな可愛い彼女を。

その後で間接キスしていた事を指摘されて若干自分の迂闊さと奏の強かさに頭を抱えるのだが、それはまた別の話。

ちなみにどこでそれを言われたかと言えば……

——仁志先輩も一つ食べる？

——くれるのならもう。

この会話の後、プチエクレアを「あーん」されたところで言われたのでした。

そこからしばらく奏が幸せそうにしていたのが尚の事印象に残った。

ホント、幸せだけど色々辛いな、我ながら……さ。

今、俺は中々珍しい光景を見つめていた。

「先輩、そっちはどうだ？」

「もう出来上がる。そちらは？」

「準備万端だったの」

場所は俺の部屋。時刻は午後一時を過ぎた辺り。クリスと翼が俺の部屋にいて、並んで飯を作ってくれているという、レアな光景だ。

響は未来と外出中らしく、奏は夜勤明けなので部屋でぐっすり。かくいう俺もついさつきまで眠っていたのだ。

それを翼からの着信で起こされた。で、寝惚けた頭で言われるままにドアを開けたらそこにはクリスと翼が揃って立っていたと、そういう訳だった。

——昼食を作りに来ました。

——あのバカがあの子とでかけるついでに飯も食ってくるらしいからさ。先輩と相談して仁志の飯を作ってやろうってな。

そう言いながら揃って買い物袋を見せてきた時、俺は夢を見てるのかと思っただぐらいだ。

「あの翼が……飯を……か」

しみじみ呟く。ここで四人で生活していた時、俺達は決して翼に炊事をさせなかった。

いや、正確には一人でさせなかったのだ。

必ず誰かが翼へ目を光らせるか、味付けなどをさせない助手レベルで動いてもらっていたのだから。

「私とてあの頃のままでありません」

と、俺の呟きを聞いていたのかやや憮然とした口調で翼がこっちへそう言ってきた。

「つつても、そこまで難しいもんじゃないけどな。何せ炒飯だし」

「そ、それでも進歩は進歩だ」

「そうだな。俺も最初はそんなもんだったよ。出来る事から始めればいいさ。それを続けていけばその内上手くなる」

「仁志さん……」

「ったく、仁志は先輩に甘いんだっての。ほら、テーブル出してくれよ。皿が置けないからさ」

「あつ、ごめん」

慌ててクリス達の部屋から運んできたテーブルを組み立てる。やっぱ俺も買うか、新しいテーブル。

そんな事を思っている俺の目の前へ置かれるのは大きな天津飯？

いや、よく見れば乗ってるのはかに玉だ。って事は……

「かに玉炒飯？」

「おう、そういうこった」

「私と雪音の合作、というところでしょうか」

成程、これは中々美味そうだ。

「これ一品だけで勝負ってどこに翼とクリスらしい潔さを感じるよ」

「ま、あれこれ作るよりも、な」

「何かを分け合って食べる方がよいかと思いました」

「……そっか」

地味に心に響く考えだ。同じ釜の飯を食うじゃないが、やつぱりこ
うやって同じ物を分け合うってのは、自然と連帯感を強くするしな。
俺も、響達やマリア達と食事するようになって思い出した。誰かと
一緒に食べる飯って、あったかくて美味いって事を。

それぞれに片手に取り皿を持ちながら、もう片手にはレンゲやらス
プーンやらとまとまりがないけど、それがかえって俺達らしい気がし
て笑みが浮かぶ。

「じゃ、手を合わせて……」

「いただきます」

一斉にかに玉炒飯へ手が伸びる。三方から山を切り崩していくも、
まだまだ山はびくともしない。

「おっ、炒飯には卵を使ってないんだ」

「ええ。かに玉を乗せるので構わないかと思いましたが」

「代わりにネギを追加してあるのか。先輩、これ悪くないと思うぜ」

「ふふっ、そうか。さて、なら味はつと……」

「はむっ」

期せずして全員同時に口へ入れる。おおっ、これは……かに玉のあ
んかけが天津飯に近い味で、中のご飯が炒飯だからか店で食うような
感じだ。

追加で入れたネギの歯ごたえもいい感じだし、ごま油で炒めたのだ
ろう香りが堪らない。卵の優しい味の中にあるタケノコやきくらげ
の触感もあって、普通の天津飯よりも歯ごたえや味の変化が楽しめる
これはこれでいい。

「美味いっ！」

感想も同時とか。もう本当に狙ってるんだとしたら可愛いし、そう
じゃないとしたら嬉しくなってしまうな。

「先輩、もしかしてこのネギ最初に油で炒めて使ったのか？」

「い、いけなかったか？ その方がごま油の香りがネギに移ってよい
かと」

「大正解だったの。な、仁志もそう思うだろ？」

「ああ。翼、これ多分炒飯だけでも美味しいよ」

「そ、そうですね。なら、今度はそれだけで食べさせてあげますね？」
につこりと微笑む姿はまるで新妻のようだ。というか、そこで気付いた。翼もクリスもエプロン付けたままだつて。

「で？ 仁志、それだけか？」

「勿論クリスの作つてくれたかに玉だつて美味しいよ。天津飯つぼくするのために卵を若干柔らかくなるように焼き時間変えたんだろ？」

「ま、まあな」

「俺、天津飯好きなんだよ。作るのは無理だからもっぱら王将で食べるぐらいだけど」

「王将？」

揃つて首を傾げる新妻スタイルな二人に笑みを返して俺は話を始める。

中華っぽい飯を食いながら中華料理の店の話をするつても妙な感じだな。そう思いながら俺は二人へ王将、つまり『餃子の王将』の話をする。

でもこうして聞いて分かるのは、みんなの世界には俺がよく利用しているファストフードの店やファミレス、コンビニなんかもないって事だ。

多分似たような店はあるんだろうが、俺が利用しているものとまったく同じではないはずだし。

「餃子と言えば、私も小日向や奏と作りました」

「へえ、それは楽しそうだ」

「実際、楽しくもありました。私は包むのが上手く出来ず、奏と小日向に任せてましたが」

「くくっ、先輩らしいな」

「言うな。それで、最後に一つだけ残ったのでわさびを乗せてじゃんけんで負けた者が食べる事にして」

「え？」

「奏も小日向も私へ譲るので、ならばとスーパーでもらってきた無料のわさびを使おうと思って」

「いやいや、どうしてそれで罰ゲームを始めるんだよ？」

クリスマスと言葉が重なる。翼はそんな俺達へ小さく苦笑するところ
言った。

「私も、こちらで変わり、小日向へもそういう事を言い出せるようにな
ったと言う事です」

そのはにかむような笑顔に俺は瞬きをしてからゆつくりと笑みを
返した。

翼が、未来にも既に本来の自分を見せられるようになってい
ると分かって。

「そうかよ。で、それは誰が食べたんだ？」

「そ、それは……」

言いよどむ翼に俺も、きつとクリスマスも瞬時に察した。目の前の女性
が食べたんだろうと。

「ああ、もういいぜ先輩。よく分かった」

「な、何故か一瞬で片が付いてしまったんだ。まさか一撃とは……」

「ちなみに何で負けたんだ？」

「チョコキです」

「あー……」

想像出来た。あの翼命名「かつこいいチョコキ」だろう。彼女はG
Xの時の買い出しじゃんけんを覚えていなかったのか？ たしかあ
そこでもそれで負けただろうに。

「な、何ですかその反応は。雪音もだ」

「いや、なあ」

「ああ。ホント先輩は先輩なんだなって」

「……」応褒め言葉として受け取っておく

無然とした顔のままレングを動かす翼。そんな彼女に俺とクリス
は顔を見合わせて苦笑し合う。

そこからは話題を変える事に。まあ俺が変えた訳ではなく翼から
例の事へ話が出たのだ。

「エルから聞きましたが海へ行くつもりとか？」

「ん？ んっ」

頷きながら口の中の物を咀嚼して嚙下する。正直飲み込むのが

もつたいないぐらい贅沢な飯なんだよな、これ。

クリスと翼の合作だし、何気にこれで翼の手料理までも食べてしまった。残すは切歌、未来、奏、セレナの四人だ。

……コンプまで半分切ったぞ、おい。

「海かあ。ま、せっかく買った水着をたった一度でダンスの肥やしにするのは気が引けるしな」

「しかも、だ。車で移動するそうだ」

「バス？」

「レンタカーだよ。俺が運転する」

「はあ？ 総勢十二人だぞ？ まあヴェイグの奴は外すとしても十一人だ。仁志が運転手として、だ。助手席に一人だろ？ 普通免許じゃ」

「実は中型免許持ちなんだよ。それに久しぶりの運転だからさ、練習も兼ねてマリア達を乗せて慣らし運転済み。ある程度感覚を取り戻したし、教習の時の事も思い出したから心配ない」

そう告げるとちよつとだけ翼とクリスの目がつり上がった。あつ、これはそういう事か。

「マリア達と……」

「その、丁度その日マリアがバイト休みでさ。そうなるとあの家が一番人数多いだろ？ それと、運転が久しぶりなのもあつて指導出来る人間も必要だったんだ」

紛れもない本音と考えを述べると二人は渋々理解してくれたように頷き、揃って口へかに玉炒飯を運ぶ。

「えつと、それでさ、可能なら車の購入も考えてるんだ。いつまでこうしていられるか分からないけど、その、たまには大きな場所で買い物とかもしたいだろ？ 集まりも鑑賞会やカラオケだけじゃ何だしさ。幸い資金の方もみんなのおかげで増えてるし」

「仁志さん……ですがそれは……」

「いい、のかよ？ 全部解決した後は、その……」

二人が言わんとしてる事は分かる。そして同時に、それ故に言いたくない事も。

「この世界はみんなが何も考えずにバカンスを過ごすには最高だろ？
なら、車はあった方がいいさ。電車やバスじゃヴェイグが黙ったま
まじゃないといけないしさ」

明るく告げる。俺は、もう君達と会えないとしてもそんな未来を認
めるつもりはないんだ。

その気持ちを込めて、乗せて、二人へ告げた。無駄になんてならな
いと、無駄になんてさせないと。

「だから、無事解決した後ここへ来る時は、ガソリン代ぐらいは出し
てくれると助かるよ。維持費やら税金やらは自分でも使わせてもら
うから出しておく」

「……はい、分かりました。その時は、是非」

「ああ、何ならこっちへ引越しさせてやるよ」

「引越し、か……」

クリスの言葉にぼんやりとセレナや奏の話を思い出す。

セレナは俺にマリアと一緒に自分の世界へ来て欲しいと言ってく
れた。奏は俺に自分の世界へ来て欲しいと言ってくれた。

どちらも根底にあるのはここでの時間だと思う。この温かな時間
を、安らぎ癒される日々を、少しでも本来の場所で味わいたいんだろ
う。

もし、もし俺が天涯孤独の状態で、ここで世話になった人達がいな
いのなら、喜んで彼女達の誘いを受けただろう。

でも、俺には世話になったオーナーや陽子さんが、何より両親がい
る。それを捨てるように自分の生まれ故郷を離れる事は、出来ない。

「気持ち嬉しいけど、俺はこの世界を離れるつもりはないよ。少な
くても、両親が健在な今のところは」

「つ……そ、そっか」

「ああ。クリスの気持ちは嬉しいけどね」

軽く俯くクリスの肩へそっと手を置くと彼女の顔が驚くように上
がった。

「多分だけど俺の生活を心配してくれたんだよな？　ありがとう。で
も、大丈夫。俺は、ここでちゃんと生きていくから。君達との時間を、

思い出を、想いを支えに、何があっても生き抜いていくよ」

「仁志……」

微笑みと共に言い切る。クリスを安心させるように、自分へ言い聞かせるように。

例えもう二度と会えなくなるとしても、ここで生きていくんだと。

「なら、私がこちらへ移住するのはどうですか？」

「なっ!? せ、先輩っ!?!」

聞こえた言葉に顔を動かせば、翼の真っ直ぐな眼差しが俺を貫く。それを逸らす事なく受け止め、俺はクリスから手を離す。

「いつ戻れなくなるかも分からない。俺が事故や病気などで死んだ場合、君は寄る辺を失う。それでもいいのか?」

「はい。元より連れ添うとはそういう事です」

思わず息を呑む。翼は優しく微笑みながらそう断言したのだ。それはつまり防人やアーティストの風鳴翼ではなく、ただの風鳴翼”としての言葉だ。

「ここで、私は可能なら仁志さんといつか話した夢を実現させたいのです」

「……そっか」

「ええ。その時までには、着物が割烹着を決めておいてくださいいね?」

見事なまでの強さだ。それも、刀のような鋭い強さじゃない。これは、まさしく羽毛のような強さだ。力に抗うのではなく受け流して時には自分の力に変えて浮かび上がる、そんな強さだ。

「ま、待てよっ! それならあたしもこっちに来るってのっ!」

「雪音、それはいいが、お前にここでの目標や夢はあるのか?」

「……いつそのままあの店の要になってもいい」

「ちよ、ちよっと待ったっ!」

さすがにそれはどうかと思う。正直言えば翼の話もどうかと思うけど、クリスのはそれよりも性質が悪い。

「な、何だよ?」

「クリス、君はご両親の意思と夢を継いで叶えるんだろ? それを捨ててまでやるのがコンビニ二店員じゃご両親が浮かばれないって」

「だからって仁志の事を諦めろって言うのかよ！ あたしの初恋を、想いを、捨てろって言うのかよっ！」

「っ?!」

放たれた言葉の矢は思った以上に深く俺の心を貫いた。

両親の夢と自分の恋心。どちらも天秤にかけて答えを出せるものじゃないんだと、そこで気付いた。

「……ごめん。でも、俺は俺自身の事で 크리스 がやっとなんか自分で見つけて叶えたいと思った事を捨てさせたくないんだ」

「仁志……」

「もし、もしも君が夢よりも俺を取るとなったら、俺はきつとその重さに自分で自分を潰してしまうよ。だから、その……もし、もしこっちは来るとしても、ご両親の夢を叶える方へ動いてくれるならまだ何とかなる」

「え?」

こっちでもクリスの両親が何とかしたいと思った内戦や紛争は続いている。バルベルデなんてないけど、似たような場所は残念ながら、ある。

「俺には楽器を弾く才能も、歌を作る才能もないけど、何かでクリスの夢の手助けは出来ると思う。ただ、俺は紛争地帯に君を行かせるなんてしたくない。だから、動画配信とかの歌う事で寄付を募って支援するってのは、ダメか?」

「っ……ダメじゃねえ。ううん、ダメじゃない。その、ありがとな、仁志」

そう言っただけクリスは嬉しそうに微笑んでくれた。初めて見るその天使の微笑みに俺は魅入った。そんな風に笑ってくれるのかと、そう思っただけ。

「なら、いつそ私と雪音の二人でこちらへ居を構えるか?」

「え?」

「そう、だな。それもありか」

「へ?」

な、何だろうか。急に場の空気が変わったような……。

「仁志さん、どうですか？」

「あたしと先輩なら、文句ないだろ？」

「ま、まあ最初からみんなに文句も不満もないけど……」

悪意に操られてる……とかじゃない。何せ二人してからかうように笑ってるんだ。

でも、きっとその想いは本物だ。それを俺が重く受け止め過ぎないようにしてくれてる。

「住む場所はどうでしょうか？　最初は借家だとして……」

「いつそマリア達が暮らしてるところでいいだろ」

「しかしあそこでは個人の部屋が……」

「今だって似たようなもんだ」

「それはそうだが……」

「よし、なら3LDKで探そうぜ。出来ればこの辺りだけど、無理なら一駅離れたっていいし」

「ちよつと待って欲しい。その場合、寝室は別々？」

冗談めいた話なので、俺も参加する事にした。いや、もし本気だとしても構わない。今は、今だけは二人の気持ちに寄り添おう。

「い、一緒がいいのか？」

「出来れば」

「ふふっ、その場合は仁志さんの部屋に最低でもクイーンサイズのベッドが必要ですね」

「いやいや、布団三組でいいだろ。で、リビングで川の字に寝ようじゃないか」

「んじや、仁志が中央だな」

「そうなるな。あつ、だが雪音、可能なら部屋はもう一つは欲しくないか？」

そう翼が尋ねた瞬間、クリスは俺と同じく疑問符を浮かべたのだが、すぐに何かを察して顔を赤めて頷いた。

「えっと、何のために？」

「子供部屋です（だ）」

言って失敗。聞いて後悔。だけど反省はない。今はこれでいいの

だ。

その後、食べ終わった後の皿とかを俺が洗う後ろで、翼とクリスは笑みを浮かべながら冗談半分に話を続けていた。

そして俺が洗い物を終えて戻ると、二人してこっちへ顔を向けて笑いかけてきた。それも、どこか照れを宿して。

「子供は何人欲しいんだ（ですか）？」

答えられる訳ないだろ。いや、だって言えば確実に流れがピンク色な感じになると思ったから。

でも、黙っているのも嫌だった。だから仕方なくこう返す事にした。

「そっちはどうなの？」

「産めるだけ何人でも」

で、見事なカウンターを喰らって赤面。ただし、どうやら向こうもそれが精一杯だったらしくて耳まで赤くして俯いてしまったけど。

ま、その、何だ？ 今だけは、こんなやり取りをしてもいいだろう。

ただ、そこから俺は翼とクリスに抱き着かれる事となった。多分だけど、俺が離れている間に何らかの話し合いがあったんだと思う。

——今日の事は、嘘にしたくないから。

ただ、そう揃って告げてくれた二人へ俺は感謝を言葉ではなく、腕で軽く抱き締める形で伝えた。

それにどこか嬉しそうに笑みを見せてくれる二人だったが、俺はそこからしばらく困り続ける事となる。

「あの、二人共？ 何でそこまで密着するの？」

「いえ、この部屋の冷房が効き過ぎて少し寒いので」

「ああ、だからこうしてる」

「じゃあ、設定温度を上げるから」

「そうすると今度は暑いのです」

「そうそう。これが一番だったの」

左右から感じる温もりと柔らかさ。それと良い匂い。理性を総動員して本能を抑えつつ、俺はただただ時間が過ぎるのを待った。

それでも、決して腕の中の温もりを手放す事だけはしないと心に

誓って。

そんな俺の腕の中で二輪の可憐な笑顔が咲いた……。

「わあ、本当に凄い漫画の数だね」

「少年漫画から少女漫画、ちよつとエッチな漫画まであるみたいです」
「そ、そうなんだ……」

今、俺は駅前のネカフェに来ている。メンバーはいつかと同じく調……だけではなくもう一人いる。

そう、未来である。何でも動画配信のために音楽を聞いたり覚えたりがある翼や奏と違い、未来はバイトとジョギング以外やる事がないため、料理の腕を磨こうと思って調と相談したらしい。

そこで、最近漫画飯を作る事にハマっている調が未来を同士にしようとネカフェへ誘った。ここまではいい。

問題はここからだ。で、何故か調が俺にも付いて来て欲しいと頼んできたのである。理由は、ネカフェでナンパされたら面倒だという、まあ分からなくもないものだった。

「飲み物はいいか？ 一旦部屋に戻るぞ？」

「あ、はい」

「分かった」

三人揃って黒髪という事もあり、今の気分はさながら妹二人という兄貴である。

前回よりも広い部屋のドアの鍵を開け、俺は靴を脱いで靴箱へ入れてそこへ上がると調と未来も同じようにして部屋へと上がった。

「何だか普通にお部屋みたいでびっくり」

「だね。只野さん、これが普通なんですか？」

「違うよ。今回は未来もいるから広い方がいいかと思ってこういう感じ。座布団もあるからどうぞ使ってくれ」

「うん」

「ありがとうございます」

そう言って二人は座布団へ座ってテーブルへ飲み物が入ったコップを置く。

「それで、二人で漫画飯に挑戦するの？」

「そう思ってたんだけど……」

「聞いた感じだと、対決とか特別な時のご飯って雰囲気が強いです。だからもつと家庭的な感じがいいかなって。なので只野さん、何かありません？」

「そうだなあ」

要するに凝った料理じゃなく、お手軽かあるいはちよつと工夫するだけで美味しく出来るレシピってどこか。

それも、多分男の料理じゃなく冷蔵庫に残った物とかを使える系。そうなると料理漫画は基本相性が……ん？

「あれなら、いけるか？」

昔母さんが読むだけで実践した事はない料理漫画。あれの主人公は新婚の奥さんで、料理が苦手なキャラだった。よくあるお母さんが料理上手ってやつだ。

たしかタイトルはキッチンの達人、だったかな？ とりあえず探してみよう、その前に折角PCがあるので出版社や掲載されていた雑誌や作者名などを検索しておく。

「あったあった」

「何があったの？」

「えつと……キッチンの達人？」

俺が検索を始めたから二人が後ろから覗きこんでくる。何というか、本当に兄貴になったような気分だ。

こんな妹いたら嫁に行かせたくないと言い出すのも分からんでもないな、うん。

「そう。主役が新婚の奥さんで料理下手なんだ。だからある意味参考に……」

「探してきます」

何故か俺の説明を少し聞いただけで未来と調がそう言っただけでフロアへと出て行った。残された俺はと言うと、仕方ないのでそのままPCで読み始める。いや、無料で読めるってあるから、ね。

そうして読み始めると記憶がよみがえってくる。あー、そうだった

そうだった。この旦那さんが結構な子供舌で、魚が苦手だわ人參が嫌いだわと大変なんだよなあ。

漫画の記憶と一緒に両親の事を思い出す。うちは共働きで、父さんは町工場で働き、母さんは看護師という、まあありきたりではないけど珍しくはない家庭だった。

見合い結婚だった両親は、まあ何というか子供の目から見てもよく結婚したなと思う程言い争う事が多かった。

けれど、今にして思えばだからこそ夫婦を続けられたんだろうと思う。見合いだったのも良かったんだろう。いつだったか母さんから聞いた事がある。

——本当は結婚するつもりなんてなかったけど、一度でいいから見合いぐらいしてって言われてね。恋愛だったらお父さんは対象外だったんだから。

それでも結婚するんだから人生分からもんだ。俺も、それがなかったらこの世にいない。

結婚、かあ。まさか縁のないものと思っていたものが、ある意味目の前まで迫ってるとか、一年前の俺に教えてやりたい。

「ただ、その葡萄は届いて甘いけど、取ってはいけないやつなんだよな」

誰もいないからこそ本音を呟く。響達は俺に惚れてくれてるけど、その要因の半分ぐらいはこの現状もあると思う。

誰だって自分のために必死になってくれる相手に好感を抱かないはずはない。それに、吊り橋効果とは違うけど、ここじゃ俺以外に頼れる相手もないって大きいはずだ。

そう、俺がみんなに惚れられているのは状況なども作用しての事。俺自身の魅力などでは決してない。

「って、きつとみんなに言うのと怒られるんだろうなあ」
特にマリアと奏辺り。うん、きつとそうだ。なので多少くすぐったいけど修正する。

俺がみんなに惚れられているのは状況なども作用しての事で、俺自身の魅力だけでは決してない。

うん、これなら怒られない。多分怒られないと思う。怒られないんじゃないかな？ ……まあちよつと覚悟はしておく。

「ただいま〜」

「おかえり〜」

聞こえた声に反射的に声を返して、はたと気付く。ここ、家じゃないんだよなあ。

で、振り向けばそこには俺と同じような事を思っただけで恥ぢずかしそうにしている二人の女の子がいる。

「いやあ、こういうの気を抜いてるとつい言っちゃうよな」

「うん、ついつい言っちゃう」

「靴脱ぐのも大きい気がします。あれで一気にお家感出るし」

「ああ、そうだな。で、見つかった？」

そう尋ねると二人は顔を見合わせて笑みを見せ合ってからこつちへ顔を向けた。

「じゃーん」

「おー、あつたんだ」

でも、さすがに二人で読むのもと、そう思ったので俺は未来へ声をかける事に。

「未来、こつちに来てくれ。PCでも読めるんだ。漫画は調に渡してこつちで君は読むといいよ」

「えっ、そんな事出来るんですか？」

「ああ。読むだけなら無料で出来るらしい」

「未来さん、そうしてください。それとも私がPCでもいいですよ？」

「あつ、ううん。私がこつちで読むから。只野さん、やり方教えてくださいませんか？」

「え？ ああ、いいよ」

とはいえ、やり方も何もただクリックし続けるだけなんだが……まあいいか。

未来をモニターの正面に座らせ、俺はその横で操作を教えるだけの形で変則的な読書タイムは始まった。

「……何だか、可愛いなあ」

「可愛い？」

「えっと、この奥さんと旦那さんです。二十六、かあ。八年後には私も奥さんに、なれてるかな？」

チラリとこちらを見てくる未来にそこはかとなない色気と強い可愛さを覚える。

「……俺は既にこの旦那さんの年齢越えてるからなあ」

「む〜……」

軽く膨れ顔をする未来。正直メチャクチャ可愛いです。

そこから未来は無言で漫画を読み始めた。やっぱり掲載誌が女性誌だったからか、内容や雰囲気柔らかいな。

「……………」

未来が無言で読み進んでいるのもそういう事なんだと思う。軽く笑みを浮かべているので、当たりの漫画って感触かね。

「ふふっ」

そしてたまに笑う。うん、何かいいな、こういうの。やっぱり可愛い女の子は何しても絵になるよ。

そう思っただけは未来の横顔を眺め続ける。すると、不意に未来がこっちへ目を向けた。

「何ですか？」

「え？ あ、えっと、未来の顔を見てた」

「……………どうしてです？」

「その、コロコロ表情が動いて可愛いなって」

「っ!？」

ボンッと聞こえそうなくらい未来が顔を赤くした。で、俯いた——と思っただけで顔を上げる。

「そ、そう思うならずっと見ててくれていいですよ？」

と、そう言っただけは未来は少しだけ赤い顔でこっちをずっと見つめてきた。

「……………分かった。じゃあ、遠慮なく君を、未来を見つめさせてもらおうよ」

「……………はいっ！」

嬉しそうに笑う未来にこっちも思わず笑顔になる。陽だまりと、その響が評してるのが分かるな、本当に。

未来の笑顔は誰かに安心を与える笑みだ。響の笑顔は誰かを元気にする笑みだ。だからこそ二人は互いを支え合っていたんだろう。

お日様と陽だまり、か。その関係性がここで大きく崩れる事が無くても良かった。むしろ以前よりも強く結びついたかもしれない。

今の二人を見てるとそんな感じだ。一人でもへいき、へっちゃらで生きていけるけど、二人になるとその力強さが増す感じだしな。

「只野さんは嫌いな物ありますか？」

「ピーマン」

「クスツ、即答ですね」

「食べられない事もないけど嫌いだ。あとセロリ」

「あー、セロリは分かるかも。匂いと味が強烈ですし」

「そうなんだよなあ。噛むとあの独特の味の水がさ」

「分かります分かります」

話しながらも未来の目は漫画へ向けられている。ただ、どこことなくその表情はさつきよりも柔らかい笑みだ。

漫画が面白くなってきたんだろうか？ まあ、話が進むにつれて主

人公の奥さんの料理スキルも上がってるのが分かるし、旦那さんとの関係性もどんどん夫婦らしくなってくからな。

そんな事を思いながら未来と喋る。時々漫画に出てくる料理の感想を求められ、食べてみたいだの俺でも出来そうだのと言いかう。

何というか、幸せな時間だなあ。

「何だか仁志さんと未来さん、イチャイチャしてる」

「っ!？」

そこへ放り込まれる調の言葉による爆弾。それが思いの外激しく炸裂した。

恐る恐る振り向けば、そこにはジト目の調がいらっしやいました。

「あ、あのかな調。俺と未来は」

「想い合ってるから問題ないと思うんだけど、ダメ？」

俺の言葉を遮るように未来がそう調へ問いかけた。まるで母親が

娘へ諭すような感じだ。

調もその言葉の意味する事を察して気まずそうに口ごもる。うん、母娘と言うよりは姉妹だな。

と、そこで気付いた。未来とばかり喋ってて調を一人きりにしてたつて。以前は俺と二人だったけど互いに無言で漫画を読んでいた。でも、今回は俺が未来と話してた。だから調は孤独感を覚えたんじゃないかって。

「調、もしかして寂しかったか？ だとしたら、ごめん」

「あつ……」

俺の言葉で未来も気付いてくれたらしい。その表情が一気に申し訳なさそうなものへと変わっていく。

で、それを見た調が小さな動きで首を縦に振る。やはり寂しかったらしい。

「ごめんね調ちゃん。私ばかり只野さんと話して」

「いえ、私も言えば良かったんです。仁志さんにこっちとも話して欲しいって」

「いつそ、三人でPCのモニターで見るか？ そこまで小さくないし、未来と調なら並んで座っても余裕で読めるだろ？」

俺の意見に二人はしばし無言で見つめ合う。

「……そうしよつか？」

「はい」

「よし、じゃあ漫画を三人で返しに行こう。で、そこからはPCのモニターで読もうか」

「はい（うん）」

そうして三人で漫画を運んで棚へ戻して部屋へ戻って、今度は飲み物のお代わりを注いでから三度戻る。

モニター前に調と未来が並んで座り、俺は後方でその間の位置取りに座った。

「調ちゃんはどこまで読んだの？」

「未来さんよりも少しだけ先です。なのでここから一緒に読み直します」

「いいの？」

「はい。その代わり仁志さんの意見を聞いていきますから」
「つっても美味そうだなとかぐらいしかないぞ？」

何せ俺は作るよりも食う方がいい。実際自炊してた時も凝ったものなど作らず、パスタだカレーだハンバーグだ炒飯だと、もう男の手料理全開だったのだから。

なのでクリスマスやマリア、調の料理がどれ程嬉しかったか。実家で暮らしてた時や陽子さんの賄い飯を思い出したぐらい、金を取る為じゃない手料理は美味かった。

「むっ、さつきは未来さんに嫌いな物とか教えてたのに」

「あれは……」

あれ？　もしかしてこれって調なりに俺の食の好みを探ってくれてる？

だとしたら、何て可愛いんだらうか。よし、じゃあ教えましょう。いや、知ってもらって覚えてもらおう。心の底で感謝しながら、な。

「ピーマンとセロリが苦手で、ししとうも好きじゃない。レバーは嫌いで……」

嫌いな物を話しながらふと思う。そう言えば俺、こういう話をマリアにした事ないぞ。なのにどうして今まで俺の食べられない程嫌いな物が一度たりとも出てこなかったのだろうか？

……陽子さんだ。あの人は俺の好みを知っている。だからこそその「いつもの弁当」であり、俺のもう一人の母なのだ。

そうやって思いながら話していると、不意に未来が小さく笑うのが聞こえて話を中断する。

「何か面白い事でもあった？」

「あ、その、何だか今日の只野さん、自分の事なのに饒舌だなんて。普段自分の事こんなに話す事ないじゃないですか」

「そうですね。私も何か珍しいなって思っていました」

「あー、まあする必要もないと思ってたし」

俺の好き嫌いなどみんなは知りたいと思っただけだからな。そういう話を唯一したのは響ぐらい、か？

「もつと、こういう話、聞きたいな。調ちゃんは?」

「そう、ですね。ご飯作る時の参考になりますし、したいです」
「だそうですよ?」

「分かった。でも、今はとりあえず漫画を読んでレシピなどを覚えてくれ。ルームの利用時間があるんだ。俺自身の話は制限時間ないからさ。いつでも出来るって」

そこからは何というかこう、妙な時間だった。漫画がどうしても新婚夫婦を描いてるもんだからか、未来や調が思い出したかのように「いいなあ……」とか「こんな生活、憧れる……」と呟くのである。

俺としてはどうしたものかと。ただ、未来は俺へ想いを寄せてくれているのでまだ対処は可能だ。

「えつと、俺、まだ未来の手料理食べた事ないからさ。いつか、食べさせてくれると嬉しいな」

「え? 何度か作ってますよ? みんなで」

「その、俺だけのためにつて感じの」

「あ……ふふつ、分かりました。近い内に作りますね」

よし、これで未来は大丈夫。もう上機嫌で漫画を読み始めてる。さて、そうなるか……。

「じー……」

こちらはないのかとばかりにジト目を向ける調さんをどうするか。とはいえ、俺も伊達に数か月彼女と接していない。

「調、俺、調との約束忘れてないから。いつでも呼んでくれよ? 何があっても試食役、果たすからさ」

「……それで今は許してあげる」

ふう、どうやらお許しが出たようだ。本当に可愛い妹分である。

「何て言うか、この旦那さん……」

「はい。味の好みとか容姿は違ってますが……」

「ん?」

何で二人して俺を見てるんです? もしかして、この旦那さんが俺に似てると思うんだろうか?

うーん、俺は別に一般企業勤めじゃないし、子供っぽい味が大好

きつて訳じゃないし、魚はむしろ好きな方だし、野菜だってそこまで嫌いな物がある訳でもないぞ。

「只野（仁志）さんそっくり」

「あれ？」

なのにどうして二人の意見が一致するんでしょうか？ まあ二人の顔がどこか笑ってるので良しとする。これぐらいで良い大人は怒らないし苛立たないのだ。

……でも言う程ホントに似てるか？

「あー、こういう事あるよね」

「あります。切ちゃんともケンカした後、中々お互い謝れなかったり」
「不和の林檎の一件もそんな感じだったなあ」

「うん、あの時は本当に迂闊だった。よく考えれば切ちゃんらしくない事がちらほらあったのに」

「仕方ないよ。分かり易い違和感ならともかく、本当に気を付けてないと分からない事だったんでしょ？」

「はい」

「思い出してみれば、あれと悪意のやろうとしてる事は似てたな」

「あっ……」

三人して沈黙。あー、本当に俺もまだまだだなあ。過去のイベントからも悪意のやってる事へのヒントがあるじゃないか。

ソルブライトギアもそうだし、ホント、うっかりしてるなあ。特にあのイベントは好きなもの一つだったのに……。

ん？ ちよつと待て？ そういえば俺って、前にもこうやって大事な事を忘れてる事あったよな。

えつと……そう、あれはたしかまだ響達がやってきた理由が分からなかった頃だ。

ノイズが発生するとか錬金術師が実はいるとか考えてた時、俺はベアトリーチェの中に巣くっていた悪意の仕業じゃないかって思って、それを響達へ言うのを忘れてたんだよなあ。

思えばあの時か。ベアトリーチェの傍付きの石屋の名前を忘れたのも。

……これ、何となく引つかかるな。あの時は年齢からくる衰えかと思っただけど、ゲートから悪意の影響があった事が分かった今、考え直してみる必要、ないか、これ。

忘れないようにスマホのメモへ書いておいて、ついでにエルと翼、クリスのスマホへも相談したい事があるってメールを送信しておく。

よし、これで最悪俺が忘れても誰かが覚えていてくれるはずだ。さて、なら後はつと……ん？ 何やら視線を感じる。それも二つも。

「じー……」

こちらをジト目で見上げる二人の美少女。可愛い、けど怖い。

「す、すみません。ちよつと悪意に関する事で思った事があったのでエル達へメールを送っていました」

「じー……」

「えつと、えつと……駅前の洋菓子店で何か甘い物でもどうですか？」

「……じー」

どうやら今のは効果ありらしい。でもダメなのか。

いや、ちよつと待てよ？ 俺がケーキとかを買っても二人が部屋に戻ればそこには同居人達がいる訳で、そうなるとそれはむしろ悪手な訳で……そういう事か。

「たしかあの店、店内に喫茶スペースもあったから、ちよつと早めのおやつって事で」

「仕方ないからそれで手を打ってあげます（る）」

よく出来ました。そんな感じで笑みを見せる二人に安堵するように息を吐いた。どうやら読みは間違ってたらしい。

ま、ケーキ二つに飲み物二つで二人の怒りが解けるのなら安いものだ。そう思って俺はモニターの漫画へと意識を向ける。

時間までに読み終わる事は出来なかったものの、二人はすっかり「キッチンの達人」が気に入ったらしく、俺に代金は払うのでネット上で注文して欲しいと言ってきたのだ。

「分かった。俺の部屋に届く形にしておくけどいいよな？」

「はい（うん）」

「でも、その後はどうするんだ？ 二人の住む場所はバラバラだし」

「只野さんの部屋に、置いてもらっていいですか？」

「俺の部屋に？」

「うん。その、読みに行くから」

「あー……その方がいいか」

洋菓子店への道すがらの何気ない会話。俺の両隣りを黒髪美少女二人が陣取る幸せ陣形。

ここに響と切歌がいればインペリアルクロスが出来たな。その場合は俺がレオンの位置からジェラルルの位置になりそうだけど。

「響、結構入り浸ってるって聞きますし」

「切ちゃん、よく顔出しに行ってるから」

「……よく御存じで」

そう、エアコンを買い替える前から二人はちよくちよく部屋へ来るようになってる。ノイズの襲撃に、悪意の手出しに備える形で。

にしてもどうやら二人は、特に調は切歌の監視も兼ねるんだろうか……？

「つと、そろそろだな」

洋菓子店が見えてきた。こうやってこの店の前に来るのも久しぶりだ。最後はたしか響と二人で歩いた時だった。

あれから、もう半年近く経とうとしてるのか。あつという間の数か月だったな。

「いらっしやいませ」

店の中へ入ると程よく効いた空調の涼しい風とどことなく漂う甘い香りがお出迎え。

「じゃ、お嬢様方、好きな物を御一つお選びください」

「調ちゃん、どうする？」

「そうですね……」

ショーケースの中を楽しげに見つめる二人に笑みを浮かべながら、俺はぼんやりと思う。

彼女達が元の世界へ戻っても、こういう風に過ごすだけの日々になりますように。一般人として生き、過ごしていられますようにと。

「二只野（仁志）さんはどうします（するの）？」

「そうだなあ……じゃ、スフレチーズケーキ」

「はい、スフレチーズケーキですね」

「じゃあ……私はシヨートケーキで」

「私は……モンブラン」

「シヨートケーキとモンブランですね。あとはよろしいですか?」

「んじゃ、アップルパイも一つ」

「はい、アップルパイですね」

「こちらを振り返る二人へ財布を出しながら笑みを一つ。

「分け合って食べよう。嫌いなら無理にとは」

「食べます」

「ん。あの、店内で食べていきたくいんですけど」

「かしこまりました。では、御飲物をお選びください」

「どうする?」

「アイスマルクティーで」

「私はアイスのレモンティーがいい」

「すみません。ミルクティーとレモンティーをアイスで一つずつ。それとストレートもアイスで一つ」

こうして俺達は少しだけ贅沢な時間を過ごす。ただ、予想はしていたが俺のチーズケーキを二人がねだり、一口ずつ食べてもらったのはいいのだが……

——た、只野さん、お返しにこっちも一口どうぞ?」

——仁志さん、チーズケーキのお礼。あーん。

周囲に客がいなかったのがせめての救いだ。まあ店員さんにはすっかり見られたと思うけど。

ちなみにアップルパイも美味かったです。で、何となく心苦しく思っ、全員分の店の名前が付いたスポンジと生クリームのお菓子を買っ、店を後にした。

割となら出費となったが、未来に調とのデート代と思えば安い安い。

「只野さん」

「仁志さん」

「ん?」

「次、いつデートしてくれますか？」

「……どうやら向こうもデートと思ってくれたらしい。本当に、女の子ってやつは凄いな。」

肉体の年齢差は埋められないけど精神の年齢差なんてとつくに埋められてる。いや、下手すりゃこっちが下かもしれない。

「……考えとくよ」

こんな一言で笑みを返してくれるんだから、本当に、ヤバいぐらい幸せだ。

これを、俺は本当に手放せるのだろうか？ いや、そうなる事を恐れちゃダメだ。そうだ。手放したつてもう一度掴みに行けばいい。

俺はあるがままを受け入れた上で、気に入らない事には抗ってみせる。せめて気持ちだけでも、俺はヒーローのようでありたいから。

「奏さん、もう起きたかな？」

「さすがに起きてるんじゃないですか？ こっちはヴェイグが寝てるかも」

「ヴェイグってそんなに寝てるの？」

「暇さえあれば寝てます。切ちゃんのあげたクッションが寝心地いいって」

そう思いながら俺は歩く。両隣にいる、愛しい少女達の会話に笑みを浮かべながら……。

「これ、これがいいんじゃないかな？」

「いや、俺はこっちの色がいいと思うぞ」

「フレッシュグリーンがいいんじゃないでしょうか？」

車のカタログを前に意見を出し合うエル、セレナ、ヴェイグ。俺はそんな三人を眺めてマリアの布団でゴロゴロしていた。

調は切歌と一緒に昼飯であるピザを受け取りに行き、マリアはバイト。で、俺はつい二十分前まで眠っていたのである。

ちなみにあのカタログは俺がもらってきた物だ。とりあえずこの地方に本拠地がある国内最大手のメーカーである。

「なー、ちなみに車種はどれで見てるんだ？」

「……………これ!」

セレナがカタログを持ってこつちへ向けると、エルとヴェイグがカタログに描かれた車を指さした。言うよりも見せる方が早いって事だな。

「……………ノア、ね」

ウルトラマンと同じ名のやつか。まあノアって名前自体が有名だから仕方ない。

値段は……………2百万オーバー……………か。まあそうだろうな。

……………中古じゃダメだろうか。でも、それでも百万は超えるだろうし……………。

そもそも十人以上が乗れるってなると限られてるんだよなあ。そういう意味では残念ながらノアは対象外。

この家の人間だけなら余裕だけど、こればかりは仕方ない。せめてマリアの免許がこつちでも使えればな……………。

「やっぱ高い?」

「あー、まあ安い買い物ではないよ。買えない、って程でもないけどな」

セレナが小首を傾げて告げた言葉に苦笑混じりにそう返す。これも、半年前なら考えられなかった事だ。

車もなくっていい生活をずっと続けていたからなあ。それに収入面もだ。車って持つてるだけで金食い虫だし。

今の問題は全員が乗れる車ってなると車種が限られるって事。実際、試しに聞いてみたらあの店でも十一人乗り可能となるとそんなに数はないと言われてしまったし。

「タダノ、本当に買うのか? この前のように借りるので十分だろ?」

「でも、レンタカーは行きたい時に乗りたい車が絶対ある訳じゃないからな。それに、今だとみんなで遊びに行くってなると基本電車やバスを使うしかないだろ? それじゃ、色々面倒もあるしさ」

ヴェイグが気にしないように本人の事は伏せて車を買う事の理由を話す。まあヴェイグは賢いから言わなくても自分の事が理由の一つだって気付いてるだろうけど、それでもだ。

「兄様、そういえば駐車場は見つかったんですか？」

「ああ、それね。一応見つかったよ。まだ契約はしてないけど」

場所はこのマリア達の家から歩いて三分ぐらいのところ。実際見てきたけど、ワゴンタイプでも平気そうな作りと場所ではあった。

なのである意味理想的、ではあるんだが……いつ買うか決めてからじゃないと契約はしたくない。意外とバカにならないんだよ、駐車場代。

それだけじゃない。調べてみれば、車検に保険、車を買うだけで月々の出費がどれくらい事になる。それを知って、だから若者が車を買わなくなる訳だと理解した次第だ。

とまあ、こういうところがまだまだだけち臭い俺である。仕方ないのだ。所詮はしがない雇われコンビニ店長だし。

「見つかったの？ どこ？」

「ここから近い場所だよ。何なら見に行くかい？」

「うん！」

「でも姉さん、切歌お姉ちゃんと調お姉ちゃんがピザを取りに行ってるから……」

「あっ……」

エルの指摘にしよぼんとするセレナ。ふむ、時計を見て二人の行動パターンを予測し、駐車場の場所を考えると……多分大丈夫だろう。

「いや、いいよ。今から見に行こう」

「「えっ？」」

「そこ、あそこからの帰り道に近いから。上手くすれば見に行つて帰ってくる時に合流するかもしれない」

そう言つてあげるとセレナが嬉しそうに笑う。さて、なら俺が言うべきは一つだ。

「エル、セレナ、帽子をかぶつて玄関前で待機」

「「はーい」」

「ヴェイグにも帽子な」

「すまん」

三人の帽子は俺とマリアで買った麦わら帽子だ。海に行く事を決

めたので、なら幼いエル達には確実に日射病対策が必要だとして用意したのだ。

元々夏になって陽射しも強くなってきたし、セレナは俺の部屋へ掃除に来るからその行き帰りで熱射病になったらと不安に思っていたから丁度良かった。

で、エルとヴェイグもたまの外出時に真夏の直射日光を浴びさせるのもどうかと思ったのだ。

そうなるのと別々よりはお揃いの方がいいかと思いきさ違いで買ったなら、なら色違いのリボン巻いてより見分けが付き易いようにマリアがアイディアを出してくれて現状となっている。

本当に気分は親である。

「暑い……」

外へ出ると真夏の暑さが体を包む感じ。で、見事に表情を歪める仲良しトリオ。

ホントに癒される。世のお父さんお母さんが頑張れる理由が分かる気がするよ。子供の喜ぶ顔を、笑顔を見るためなら意外と人って頑張れるんだって、俺はこの子達から教えてもらったから。

「じゃ、行こうか」

「うん（はい）（ああ）」

大中小の麦わらが視界の中で動く。何て言うか、幸せだ。

「お兄ちゃん、どっち？」

「まずは駅前と逆方向」

「って事は……」

「こっちです！」

元氣よく歩き出すエルにヴェイグを抱えたセレナが続く。本当に気分は休日のお父さんだ。

夏の陽射しを浴びながらもう見慣れた道を歩く。こっちの方も響達が来なけりや歩く事はなかったなあ。

ほんの小さな事で世界は変わる。そういやあのライダーが言っていたな。自分が変われば世界が変わる。成程、道理だ。

「今日の晩御飯は何でしょう？」

「調さんに聞いてみないと分からないけど、お買い物まだだしお願いしたらそれを作ってくれるかも」

そして子供は宝物とも。エルやセレナを見てると本当にそう思う。だからこそ、二人がこうして歳相応のやり取りをしているのが、堪らなく愛しくて、そして切ない。

「兄様」

そう思っただけ俯いてるとエルの声。顔を上げれば分かれ道。

「このまま真っ直ぐでいい？」

「それとも曲がるんですか？」

「あ、ここで曲がるんだ」

いかんいかん。響と出会った時から分かった事だろ。今更悔やむな。悩むな。みんなの居場所はここじゃない。

それに何より、こんな気持ちでいたら悪意につけ込まれる。みんなを本来いるべき世界へ返したくないなんてのは、それは俺のエゴだしわがままで。

どんなに辛くたって、苦しくたって、彼女達はそれぞれの世界で強く生きていける。そう俺は信じてるし知っている。

……悪意が最後に突いてくるとすればここだろうしな。絶対にそんな言葉に俺は負けない。

そもそもだ。俺がどれだけのヒーロー物を見てきたと思っただ。お前ら闇がやる手段なんて知り尽くしてると言ってもいいんだぞ。

「つと、二人共バックバック」

気付いたら目的の場所へ着いていた。俺が呼びかけるとセレナとエルが戻ってくる。

「(´▽｀)」

「どこが空いているんですか？」

「えっと、奥から二番目の場所」

駐車場の中へ入って二人へ教える。まだ何も無い場所を見つめて二人は少しだけ黙った。

俺も黙ってそこを見つめた。何て言うんだろうか、まだ実感が無い。俺が車を買おうとしてるなんて、なあ。

でも思い出してみれば、響と出会ってからには実感のない事の連続だった。

創作の存在が実在して、俺の知らないところで本当に世界や宇宙の今日を賭けた戦いがあったて、更には恐ろしい敵までいると言われて……。

って、それだけじゃない。俺の生活だって大きく様変わりしたただろ。

その契機はセレナとエルの来訪だ。それとマリアだな。あの三人の暮らしを守るために、そして響達の暮らしを支えるためにと俺は現状を変えようと決意したんだ。

店長を目指して動き出して、それをみんなに支えられてここまでできた。まあ、悲しい事に収入と言う面ではみんなの動画に凄まじく助けられているけど。

「まさか車とはなあ……」

空を見上げて呟く。夏らしい入道雲と青空の白と青のコントラストが目にも優しい気がする。

「お兄ちゃん、車買ったらここにとめるんだよね？」

「ん？ ああ、そうなるな」

視線を動かしてセレナを見る。麦わら帽子のつばを片手で持って見上げる姿は、まさしく夏の美少女って感じた。

「じゃ、ここまでの道覚えておかないと。ね、エル」

「はいー」

おうっ、何とも無邪気で強烈な一撃を。これで今更車買うのが怖くなってきたとは言えない。

でも、そう、だよな。もう翼達にだって言ってるし、男は度胸だ！

今の収入なら節約すればローンだって払えるし！

「うし、じゃ帰ろう」

「うん（はい）っ！」

幸せってなんだっけ。そう問いかけられたら今の俺ならこう答えるだろう。そう考えられる事がある意味で幸せなんだと。

あの頃の俺はそんな事さえ考えられなかった。その日その日を生

きるので精一杯だったからだ。

——つと……あれ？

それが変わり出したのはあの日の出会い。たったそれだけ。けど大きな人生の転機。

ありもしないどこかで思っていたような人達との関わり。思いもよらなかった事態との遭遇。平凡でさえなかった俺の人生が、誰に知られる事無く波乱に満ちたものとなっている。

誰かは誰かのヒーローだと聞いた事があるけど、俺はその言葉を今噛み締めている。かつての俺のヒーローのような事を、今の俺はやっているんだ。

響達にとつて、俺はある意味ヒーローなんだろう。だけどそんな彼女達こそが俺にとつてはヒーローだ。

「およ？ ししよー達じゃないデスカ」

「何で外にいるの？」

「調さんに切歌さん」

「実は……」

戻る途中で運良くピザの箱を抱えた二人と遭遇。何で外にいるのかと疑問顔の二人へエルが説明しながら歩き出す。

俺はそんな四人を視界に入れながらゆっくりと歩く。もう見慣れた光景だ。それが、今の俺の日常だ。

「……何でもないような事が、幸せだったと思う、か……」

色褪せる事のない名曲のフレーズがやけに胸を打つ。

俺も、あの歌のように一年後、今の景色を思い出してしんみりするのだろうか？

それとも、懐かしみながら新しい思い出を作っているのだろうか？ 答えの出ないままに俺の足は動く。止まっている暇はないとばかりに進み続ける。

そうだ。もうある種の終わりは見えてきている。残るカオスピーストは二体。それを倒せばきつと悪意が何かしてくる。それを何とかすればこの事件は終わるんだ。

終わった後こそが俺の本当の戦いの始まりだろう。それが寂しさ

に耐えながらなのか、それとも嬉しくも苦しい女性達との時間なのかは分からない。

……可能なら、どちらに転んでもみんなが笑ってくれたらいいな。俺は、この際どっちでもいい。

俺が辛く苦しくても、みんなが笑っていられるのならそれでもいいんだ。

男のやせ我慢だと笑われたっていい。見栄張りだのカッコつけだの言われたって構わない。それでも、俺はみんなが幸せに笑っていてくれれば、幸せだ。それが俺の幸せなんだ。

「「「ただいま」」」

揃って声を出す。俺も、お邪魔しますとは言わなくなった。いや、朝はそう言ってるんだけど、エル達が起きてる時はそう言わないようにしているのだ。

兄さんって、そう呼んでもらってるからな。家族として捉えてくれるのに他人行儀なのはどうかと思うんだよ。

「はあく……居間が天国デスよお」

「外、暑いからね」

「二人も帽子かぶった方がいいですよ」

「はい、僕もそう思います」

「タダノ、どうだ？」

「そうだなあ。時にお二人さん、懐事情はどうだい？」

そう尋ねるとあからさまに一名がギクリとばかりに反応する。

「あまり高いのじゃなければ買えるだけのお金は残ってる」

「さすが調。さて、切歌？」

「じ、実はデスね？ アイマスのCDをレンタルしちゃいました……」

「は？」

「あつ、うん。切ちゃん少し前に沢山CDを持って帰ってきた事があった」

「どれもいい曲で、私とエルも少しだけ覚えたんだよ」

「えつと……『READY!!』と『CHANGE!!!』は歌えます」

「マジ？」

俺の問いかけに笑顔で頷くセレナとエル。こ、これはヤバイ。正直
言って聞いてみたい。エルとセレナのアイマス曲とか、可愛いに決
まってるじゃないか。

「え、えっと『Star!!』とか『Shine!!』とかは？」

「それは知らないなあ」

「そうか。じゃあ、765アイドルの曲ばかりなんだな」

「? よく分からないデスが、とりあえず代表的な物をつて、そうオス
スメされた物を片っ端から借りてきたんデスよ」

えへんつと胸を張る切歌だが、それで財布を空っぽ近くしてしまっ
たのだろう。

と、なれば、だ。これはあの台詞を言うしかあるまい。言いたくて
も中々言う機会がなかった、あの名台詞を！

「この馬鹿弟子がつ。自分の財政も考えずに散財しよつて……だあか
らお前は阿呆なのだつ」

「あうつ、ご、ごめんなさいデスししよー……」

「まったく……それじゃ海に行った時に何も買えないだろ？」

「はっ!? そ、そう言えばそうでした!」

言われて気付く辺り本当にその時その時を生きてるな、切歌は。

仕方ない。可愛い弟子のためだ。

「切歌、そんなお前に特別ボーナスをやらんでもない」

「ほ、ホントデスかつ! さすがししよー!」

「あの、仁志さん。あまり切ちゃんを甘やかさないでもらえますか?」

「し、調べ……」

俺の言葉にジト目の調からストップがかかる。大丈夫だよ調。俺
だってただ金を渡すだけじゃないさ。

「まあまあ、何も無条件で金を出す訳じゃない。切歌、バイトが休みの
日でいい。君一人で昼でも夜でもいいから飯を作ってくれ。その報
酬としてボーナスをやろう」

「あ、アタシ一人で、デスか?」

「そう。美味しく出来たら7千円。上手に出来たら5千円。失敗した
ら3千円で、誰かに手伝ってもらったら出来の如何を問わずボーナス

なし」

「なっ!? やる德斯やる德斯やらないでか、德斯っ! 一人でやれば最低3千円なら十分德斯っ!」

分かり易いぐらい目の色が変わった。まあ、こうでもしないと切歌は料理なんてしてくれないだろう。

それに、一人でとは言ったけど助言などは禁止してない。多分調はそういうところに気付く子だから心配もしてない。

……あと、正直禁じたところで泣き付いて縋るのが目に見えてるんだよなあ。

そんな風に思っていると調がこそつと近寄ってきた。

「仁志さん、あれって私は手伝っちゃダメなんですよね?」

「うん、手を出すのはダメ」

「……口出しは?」

「OK。ただし、君からするのはダメ。あくまで切歌が主体」

「ふふっ、分かりました」

この通りだ。本当に調はいい奥さんやお母さんになると思う。

この後はピザを食べながら海の話に終始した。やはりと言うか、当然と言うか、エルや切歌だけでなく調も楽しみにしてるようだ。

とりあえず今回の海水浴はレンタカーで行く事に決まっているし、既に休みも取ってあるので予約も完了。

個人的には少々不安が残ってはいるんだが、それでも今はそれよりも期待感の方が強い。

何せ、あの時は夜勤明けで色々と……。

「……もう、あれが一月近く前かあ」

ポツリと呟く。そして理解した。そりゃ響と切歌が催促するはずだよ。

以前までなら任務や訓練、更にそれぞれの予定が合わないなんてざらだった。だから夏のイベントもある程度妥協や我慢が出来た。

それが、こつちではない。なのに、肝心要の俺が一向に動かないし計画しないときたもんだ。

あれ? これって完全父親のポジションじゃないか?

そういえば、家の父さんは旅行が好きだったなあ。ま、正確には乗り物好きで車の運転も列車や飛行機、船などに乗ったり見たりが好きだな人なんだけど。

子供の頃は、毎年夏と冬に旅行へ行つて、地図だけで見れば日本全国を制覇したつけ。全てを覚えてる訳じゃないけど、今でも思い出せる記憶が沢山ある。

……俺、何やってんだ。いくら盆休みとかがないからって、エルやセレナの夏の思い出がプールと遊園地だけで終わりでもいい訳ないだろ。

泊まりの旅行は無理でも、日帰りでもいいから、もっと楽しい時間を作ってやらないと。

よし、今決めた。夏、はもう無理だけど、残暑が終わるまでに夢の国へ連れて行ってやろうっ！

「兄様、どうしました？」

「ん？ ああ、来月の事を考えてたんだ」

「『来月？』」

揃ってこつちを見つめる可愛い眼差しに笑みを返す。

「エル、セレナ、覚えてるかい？ 夢の国の事」

「はい」

「うん」

「そこへ、九月中に連れて行ってやろう」

「『ホント（ですか）っ!』」

弾けんばかりの笑顔に俺は力強く頷いた。もう決めた。オーナーに行つて来月も連休をもらおう。

いくらかかるか知らないが可愛い二人の天使のためだ。この際に糸目は付けん。マリアにもそう伝えて了解してもらおう。

「ししよー、夢の国って何デス？」

「雰囲気から考えると……遊園地？」

「似たようなものだよ。テーマパークってやつだ。この前のところは雰囲気なんかも違うし規模も違うから楽しみにしてて」

「うん（はいデス）」

ザババコンビも笑顔になってくれたし、これでもう後には退けなくなつた。これでいい。

以前ヴェイグに海を見せてやると言った時、俺にはこれだけの意志力がなかった。

でも、今の俺は違う。何があつても言った事は曲げずに貫き通すんだって、そう思えるだけの何かが出来たんだ。

「タダノ」

「ん？」

そう思っていたらヴェイグが近くにいた。その表情はどこか不安そう。

「いいのか？ その、これが嘘になったら」

「しないよ。嘘にはしないしさせない。だからヴェイグ、楽しみにしててくれ。行き先は夢の国だけど、それだけじゃないように考えるから」

「……分かった」

ニコリと笑って頷くヴェイグに俺も笑みを返す。

追い込むのとはちよつと違う。今の俺は自分の意思で動いている。

流されて、フラフラして、その場その場さえ何とかなればいい。

そんな俺はもう終わりだ。ちゃんと今日を生きて、明日を見つめて歩いていかないと。

「よし、ちよつとごめん。俺、今から店へ行ってくる」

「」「」「いってらっしやい」「」

善は急げだ。オーナーへ連休の相談だけしておこう。九月の平日で可能なら明けじやなくて二日目に出発して泊まって、翌日帰ってきてから勤務。

そうなると負担が少ないのは月・火休みの水曜勤務か。奏へも相談だな。うん、まずはオーナーからだ。

「うひゝ、暑いなあ」

廊下はまだマシだったけど、玄関開けたらこれだ。だけど、気にしてられない。今はこの動き出してる気持ちのままに動いていたいんだ。

それに、俺は考えるよりも動く方が上手くいく方だ。下手の考え休むに似たりとはよく言ったもんだよ。

「よし、悪意なんてやつつけてみんなで笑うためにも、まずは目の前の事をしっかりと片付けていくか」

自分へ言い聞かせるようにそう告げて俺は店へと向かう。

いずれ来る別れの時。だけど、その時に俺は泣くつもりはないし、みんなを泣かせたくもない。

どうなろうと俺だけは笑って、笑顔で見送りたいんだ。

「もう二度とく会えないとしてもくステイアラ〜イブ」

あの歌のように、俺はここで、この世界で生きていく。何があっても、どうなろうとも、笑顔を忘れずに……。

キミだけに

野菜を刻む包丁の音。沸々と聞こえてくる鍋の音。今まではそれらを見ているだけだった俺だが、今回は少々違っていた。

「未来、そろそろ茹で上がるけど？」

「分かりました。じゃあ、ざるに出してくれますか？」

「了解」

時刻は午後六時半近くつてどこか。

今、俺の部屋には未来がいる。以前約束した事を果たしに来てくれたのだ。

まあ仕方ないと言えば仕方ないのだが、普通だと連絡を取るのが翼経由となるため、未来はそれを嫌って直接訪問してくれたのである。

——こ、こんばんは。夕食、作りにきました。

買い物袋を提げて現れた未来に俺は驚きながらもある事を思い出して納得していた。

——仁志さん、今夜は部屋でご飯を食べてくださいね。

今朝の勤務終わり近くに調からそう耳打ちされた時はどういう事かと思ったが、未来がやってきて理解したのだ。

要するに未来は前日から調へ今日の事を相談していたと言う事で、そこはやはりあの洋菓子店での時間が影響しているのだろう。

さて、そうして未来は食事の支度を始めてくれたのだが、ここで彼女からある提案が出たのだ。

——あの、出来れば一緒に作りませんか？

この提案に俺が首を横に振るはずもなく、ある意味で恋人らしいと思いつながら今に至る。

ちなみにメニューはほうれん草とベーコンのパスタとポパイエツグというシンプルなもの。

パスタの作業分担は未来がパスタソースを作り、俺が麺を茹でる。

ポパイエツグは俺がほうれん草を切つて、未来が目玉焼きを作つてほうれん草を炒めて仕上げをするという、これだけの内容だ。

で、既にポパイエツグは完成してテーブルの上。そう、テーブルの

上なのだ。

あの翼とクリスに飯を作ってもらった事でやはり俺ももう一度テーブルをと、そう思ってた買って来たのである。

……折り畳み式のやつを。

ちなみにそれを見た未来の第一声が「よっほど好きなんですね、それ」だった。

そんな事を思い出している間に俺がざるに出したパスタが未来の手でフライパンへと移動していく。

そこで醤油などで味付けされたほうれん草やベーコンと一緒に炒められていくのだ。

あー、微かに香るこしょうの匂いと未だ残る醤油の焦げた匂い。空腹に堪えるなあ、この美味そうな匂いは。

「お皿お願い出来ます?」

「よしきた」

言われて大き目の皿を出す。そこへ未来がフライパンの中身を移していくのを見て、取り皿を二枚用意する。

何というか、これはこれで幸せだよな。チラッと振り向けば未来が満足そうに山盛りのパスタを見つめていた。可愛い。

「うし、じゃあ食べよう」

「はい」

パスタの乗った大皿をテーブルの中央へ。ちなみに今日のメニューはほうれん草が安かったから、らしい。その理由に未来が将来いい奥さんになると確信しました。

「未来、どれくらい食べる?」

フォークを二つ使ってパスタを取り皿へと盛っていく。それを見つめて未来はどこで止めようかと思案中のようだ。

「えっと……それくらいで」

「ん。じゃ、残りが俺ね」

大体6:4だろうか。俺が6で未来が4って感じた。

「じゃ……」

「いただきます」

言ってから二人で軽く笑う。いや、何て言うか不思議な感じがするからさ。

俺と未来が二人きりで食事なんて初めてだ。しかも、場所が俺の部屋とか。

色々と湧き起こる感情を噛み締めるように俺はパスタを口へ入れる。

「ど、どうですか？」

「美味しい……美味しいよ未来。あー、マジで幸せだあ」

不安そうな未来へ心からそう告げ、俺は幸せの味を噛み締める。

そんな俺を見て未来が安堵するように息を吐き、そして嬉しそうに微笑んだ。

うん、やっぱり女の子は笑顔が一番だ。特に未来の笑顔は心があつたかくなるし。

「ふふっ、そこまで言ってもらえると作った甲斐がありました」

「もう本当にありがとな。また少しこれで小さな目標が達成に近付いた」

「目標？」

「うん、装者みんなから手料理を御馳走になるってやつ」

「只野さんらしい……。あつ、それって切歌ちゃんに言いました？」

「え？ いや、この事は話してないけど、飯を作ってくれるように頼みはした」

「あー、それでか。一昨日、切歌ちゃんが私へ簡単に作れる美味しいご飯を聞きにきたんです」

おおっ、切歌も中々かしこいな。まずは調やマリアじゃなくて未来を頼るとは。

ま、俺が言った言葉を意識してるんだろう。それでクリスじゃなくて未来って辺りもおそらく手軽で美味しいってコンセプトを重視した結果かもな。

「教えてあげたの？」

「はい。とは言っても、私もそこまで料理が得意って訳じゃないんですけど」

「いやいや、俺からすれば十分だ。切歌もそう思ったんだと思うよ」
「そ、そうですか？　なら嬉しいな」

　少しだけ頬を朱に染めて笑う未来に俺は思わず笑みが浮かぶ。

「でも、装者全員って……セレナちゃんもですか？」

「可能なら、かな。現状話をしてないのはセレナを除けば奏ぐらい」

「え？　響も作ったんですか？」

「あー、うん。美味かったよ」

　ただ、あの思い出には色々複雑になる思い出もくっついてくるので厄介だ。

　主におっぱいとかおっぱいとかおっぱいとか。

「只野さん？　何思い出してるんですか？　顔、赤いですけど？」

「っ……うん、ちよつとね。その日に例のイグナイトもどきの一件が」

「あつ、そうなんですか。じゃあ、あの日なんだ。ふーん」

　あれ、若干未来の表情が不機嫌な感じに。どうしたんだ？

「未来？　どうした？」

「……あの日の事、響やクリスに聞くと妙な事言うんですよね。只野さんが自分からキスしてくれたって」

　うおっ！　未来のジト目が飛んできた！

「えっと、それはだな？」

「たしか只野さんってみんなの想いを受け止めるし、選ぶなら全員なんですよね？　じゃあ、響とクリスだけズルくないですか？」

　うわあ、開き直った女の子って、いや女性って強い。

　と、なるとだ。俺もそれにちやんと応えないといけない。

「一つだけ言わせてもらっていいか？」

「何ですか？」

「多分そっちの想像してるのとはちよつと違うぞ」

「ちよつと違う？」

「そう。少し耳を貸してくれる？」

　その言葉に未来は体を乗り出して耳をこっちへ向けてくれた。よし、チャンス。

「……え？」

頬へ軽くキスをして離れると、視界の中にはこっちへ顔を向けて左頬を片手で押さえて赤面する未来がいる。

「そこにしたんだよ。あとは額」

「……………そう、ですか」

プシューと聞こえそうなくらい真っ赤になってから、未来は小さな声でそう言うのと黙り込んだ。

うーん、頬へのキスでも未来には刺激が強いんだな。

俺は……………割と慣れてきた。平気ではないけど、慣れはある。

「やっぱり子供騙しに感じる?」

「ふえっ?! そ、そんな事ないでしゅ!」

でしゅ? そう思った瞬間未来がより一層真っ赤になって俯いてしまう。

あく、可愛いなあ。許されるなら抱き締めたいぐらいだ。

「えっと、自分ででかしておいて何だけど、とりあえず冷めない内に食べようか?」

「は、はい…………」

そこからしばらく黙ってパスタやパイエッグを食べ進めていく——のだが、やはり無言のまま美味い物を食べるのは何か嫌だった。

なので未来へ得意料理とかの話題を振る。するとすかさずこっちの話をと返されてしまった。

まあ、構わないか。そう思って料理関連の事を話す。最初に来るようになったのは炒飯。何せ卵とご飯さえあれば後は素を使って簡単に出来る。

その後は麻婆豆腐や生姜焼きなどの焼くだけ煮るだけ炒めるだけの物を作るように。そう話していると未来が笑ったり呆れたり表情をコロコロ変えてくれた。

それが何となくだけ嬉しかった。俺の趣味の話じゃここまで表情は変えてくれないからなあ。未来は中々ヒーロー物に染まる余地がないらしい。

でも、こういう話題だと未来もみんなと同じぐらい反応が大きい。

多分だけど、俺の経験を聞くのが楽しいのだ。

俺も似たような事をこれまでのバイト先で経験したから分かる。面白いのだ、単純に。他業種やその仕事でのあるあるを聞くのは。あとはその人の性格や思考も分かってくるからかもしれない。

食べ終わる頃には話し手が俺から未来へスイッチしていた。

未来の話も多岐に渡る。日々の愚痴や起きた出来事に始まり、響やクリスとの買い物の話やバイトでの色々と、平和な時間でも大小様々なイベントが未来にも起きていているらしい。

「それで、奏さんがネギと間違えてニラを買ってきちゃって」

「あらら」

今は揃って洗い物を片付けながら会話中。俺が洗って未来が拭いて戻す。こうしていると夫婦のようだ。

あるいは、歳の離れた兄妹、だろうか。まあ現実的なのは後者だろう。

「翼さんがどうするのって聞いたたら、ラーメンなんだからニラでも合うって言って食べやすい大きさに切って鍋の中へドボンと」

「奏らしい。それで？」

「まあ美味しかったは美味しかったんですけど、思ったよりもニラが多くて、三人して半分残してニラ玉でも作れば良かったねって」

「あ〜……」

何とも楽しげな光景じゃないか。すっかり未来達三人の暮らしも馴染んでいるよなあ。

その後、洗い物を片付け終わってきてどうしようとなった時、未来がこつちへ詰め寄ってきた。

その瞳に、強い決意を宿したような輝きを秘めて。

「あ、あのっ、只野さん」

「何？」

「えっと、ですね？ 何か、私にしないといけない事、忘れてませんか？」

赤い頬と潤んだ瞳でそう言われれば嫌でも分かる。そういう事、だよな。

「ああ、うん。ごめんな。俺ってこういう事に気付かないから」
「あ……」

未来の体を少しだけ抱き寄せる。そしてそっと頬へ口付けた。

「只野さん……」

「未来、まだだよ」

「え？ あっ……」

反対側の頬へも口付ける。更にとどめとばかりに額へも。

「ははっ、とんだプレイボーイだな」

「……ホントです。でも、本気、なんですすよね？」

「うん、それは間違いない。遊びでこういう事が出来るなら、とつくに誰かと付き合った経験ぐらいしてたよ」

変なところで生真面目と言うか、妙に重く考えてしまうんだよな、俺。軽い感じで付き合うとか、理解に苦しむような思考してるし。

「……いつか、誰かを選ぶ時も来ますか？」

「……可能性がないとは言わないよ。どんな事にも、さ」

世の中に良くも悪くも絶対はないと、そう思ってるし思いたいから。

「分かりました。でも、一つだけいいですか？」

「何？」

そう言う俺に未来は微笑んだ表情でこう言った。

——もしこのままの状態を望むなら、私、協力しますから。

予想外の宣言に呆気にとられていると、未来がそのまま俺へ顔を近づけて頬へキスしてきた。

ふわりと香る良い匂い。これが未来の匂い、か……。

「……只野さんは私にこう言ってくれました。誤魔化さないと壊れる絆なら壊してしまえって。でも、私思うんです。誤魔化したっていつか壊れる絆もあれば、誤魔化せば壊れない絆もあるんじゃないかって」

「未来……」

「私達の絆って、男女の絆で、もしかしたら壊れやすいのかもしれない。でも、みんな支え合えば、思いやれば、壊れないでむしろゆっ

くりと丈夫になってくんじやないかなって」

それは、何とも甘く儂く、そして淡い願い。だけど、今の俺にはとても有難い想い。

「只野さんの願いは、みんな笑顔で居続けたい事、なんですよね？　なら、私だって同じです。ううん、きつとみんな同じだと思います」

「そう、だな。それはきつとそうだ」

「今はみんな只野さんを男の人として好きですけど、これが来年には変わってるかもしれない。だけど、きつとそれを只野さんは止めない。ただ、みんなが笑ってくればって、そう思ってくれるだろうなって、私は勝手に思ってます」

「いや、間違ってるよ。俺は何があってもみんなが笑っていてくれればそれでいい」

優しく、けどとはつきりと言い切る。未来には俺の気持ち伝わってると思ってる。

その証拠に未来は嬉しそうに笑ってくれた。が、それだけじゃなくて……

「えつと……未来？」

「はい、何ですか？」

「その、いつまでこうしてるのかな？」

何故か未来に抱き着かれるという状況に。いや、嬉しいんだけど色々と……なあ。

「そうですね……いつそ日付が変わるまで？」

「ダメ。それはダメ。というか、おそらく九時過ぎ辺りで翼から連絡くるって」

「そっかあ。でも、逆に言えばそこまでこうしていられますよね？」

「……………九時まで。九時になったら部屋まで送るから」

「ふふつ、はあ〜い」

若干小悪魔な未来に内心ドキドキさせられながら、俺は人生で初めて女性と長時間抱き合うだけという稀有な時間を過ごす事となる。

その後時間となり、アパート前まで未来を送った別れ際に彼女から手招きされて耳を貸すと……

——エッチな事、あまり知らないので教えてくださいね。

というとんでもない爆弾を投下されました。慌てて顔を動かすと未来がしてやったりの表情で笑みを浮かべて小さく手を振って階段を上がっていった。

その後ろ姿を見送りながら俺は大きいため息を吐いた。いや、本当に女は怖い。ほんの少し前まで少女だったのに、ちよつとした事でも立派な女性になっているんだからさ。

「……敵わないなあ」

階段を上がり切ったところで、こつちへ軽く手を振る未来へ苦笑しながら手を振り返す。

そして部屋の中へ未来が消えるのを見届けて俺は帰路へ就いた。

歩きながら頭の中では最後の未来の言葉がリピートされ続ける。エッチな事、なあ。あまり知らないって言ってたけど、逆に言えばどこまで知ってるんだらうか？

そこを詳しく聞きたい。って、いかんいかん。完全に未来の術中じゃないか。

翼といい未来といい、普段そういうのを感じさせない女性がエロへ興味や関心を見せると何でこうも男は興奮してしまうのだろう。

そんな事を考えつつ、俺は店へと向かう。とりあえずは仕事で頭の中からスケベな事を追い出そうと、そう強く思いながら……。

暑い道のりを歩いてやっと到着しましたスーパーデス！

「あゝ、生き返るデスよ」

中へ入れば涼しい空間がお出迎えデス。さてさて、まずはお野菜からデスね。

「メモメモ……」

事前に書いてきた買い物メモを取り出して確認。ふむふむ、まずは玉ねぎとキャベツデスカ。

「買い物スタート、デス」

今日の晩御飯はアタシが作る事になってます。ししよーからのポーナスをかけた試練。それを何としてもクリアして、見事7千円を

ゲットするんデスよ。

未来さんへ相談した結果、男の人が好きそうな物で簡単に出来る物がいいと言われ、そこで聞きたいいくつかの候補を調に相談した結果、豚の生姜焼きが最適だと言われました。

考えてみればヴェイグも大好きデスし、アタシやエルだつて大好きデス。暑い時期に食べるには最適デスし、何よりご飯が進むデス！
「キャベツを一玉と……玉ねぎは……三つ買うとお得デスか。なら三つデスね」

買い物代としてししよーがくれた金額は3千円。ちゃんとレシートとおつりは渡す事になってるので余分な買い物は出来ないのデス。しくしく……。

「次は……豚肉デス」

今回のメインデス！ 生姜焼き用のお肉があるらしいのでそれを買います。

スーパーの配置はある程度覚えてますからさくつとお肉売り場へ到着デス。

むむつ、発見しました。でも、こうして見ると意外と高いデスね。「ん？ おおつ、こっちはお買い得な値段デス」

量が多いのに値段はそこまで変わらない豚肉さんを発見デスよ。もしかしてアタシ、買い物上手デスかね？

と、よく見れば国産とアメリカ産と違う部分発見デス。その違いだけどこまで値段が変わるんデスか。驚きデス。

アメリカの方が大きな国だし豚さんもいっぱいいるから安いんデスかね？

「とにかく生姜焼きの準備はこれでOKデス。あと何か買わないといけない物はあ……」

一応メモを確認。つと、そこでふと冷蔵庫の中を思い出す。

えっと、たしか生姜焼きのタレがなかった気がしました。いえ、正確にはあるんデスけど残り少ないとかマリアが言ってた気がするんデスよねえ。

なので生姜焼きのタレを買うデス。場所がいまいち分からないの

で店員さんへ尋ねますか。

「すみませーん。生姜焼きのタレってどこデスか？」

「生姜焼きのタレです。それならこちらです」

親切なおじさんに案内されて到着デス。

「ありがとうございますデス」

「いえ、では失礼します」

アタシもバイトするようになったから分かるデスが、こういう時の何気ない一言がすつごく嬉しいんデスよねえ。

だから今のアタシは前よりもお礼を言う事が多いデス。自分がされて嬉しい事をみんなにすれば笑顔の輪が広がるはずデス。

「タレもゲットしたし、後はレジへ行っておしまいデスね」

こうして無事お買い物終了デス。ミッションコンプリート

レシートとおつりは今夜ししよーが食べに来た時に渡せばいいデスし、後はご飯をしかけてキャベツを半分使ってお味噌汁を作るだけデスね。

まあどうなっても最低5千円は確実なはずデス。ふふふ、高額特別ボーナスはもらったもどーぜんデス！

そんな風にウキウキ気分でお家へ向かっていると、向こうから響さん発見デス。

「あれ？ 切歌ちゃんだ」

「こんにちはデス。響さんはこれからお買い物デス？」

「うん。クリスマスちゃんがお洗濯物をしてくれるからね。切歌ちゃんはこちらから帰り？」

「デス！ 今夜はアタシが腕を振るうんデスよ」

そう言ったら響さんは目を見開いて驚いた。

「えっ!? き、切歌ちゃんが作るの？」

「むっ、失礼デスよ響さん。アタシだってやれば出来るんデス」

ただ、今回は調やマリアの手は借りれないのデス。口だけは貸してくれるデスけど、それが精一杯なのデスよお。

「そ、それはそうかもしれないけど……」

「フンスっ！ そういう響さんはどうなんデスか？ ちゃんとお料理

出来るんデスカ？」

「え？ あく……こつちに来てから少しずつやるようになってるからマシにはなってるよ。ま、前にもクリスマスちゃんと一緒に仁志さんへご飯作ってあげたし」

そ、そういえばそんな事もありました。それが例のイグナイトギア事件の時デス。

「し、ししよーは何て言ってたデス？」

「美味しいって言ってくれたよ？ そうだなあ。もう少し頑張って料理上手くなつて、また仁志さんに喜んでもらいたいなあ」

その言葉にアタシはハツとなりました。そうデス……お金のためにご飯を作るなんてダメダメデス。

調もマリアもアタシ達のためにご飯を作ってくれています。アタシは、そんな事も忘れてたデス。

ハツ!? も、もしかしてこれもししよーの試練だったデスカ!? アタシがちゃんとお金に目をくらませる事なくご飯を作れるかを、ししよーは試したのかもしれないっ！

「響さん、ありがとうございます。おかげでアタシは大事な事に気付けたデス」

「え？ う、うん。どういたしまして？」

不思議そうに首を傾げる響さんへバイバイしてアタシは急いでお家へ帰ります。

「ただいまデス！」

「おかえりなさい」

出迎えてくれたエルと調へ頷いてアタシは台所へ向かいます。買ってきた物の中から豚肉をまずはしまい、次に玉ねぎとキャベツをしまいます。

「大事なものは食べてくれる人の笑顔、デス」

冷蔵庫の扉を閉めて自分へ言い聞かせるように呟きます。うん、大丈夫デス。今のアタシならきつとししよーに喜んでもらえるご飯が作れるはずデス。

そうとなればあとはお米を研がないといけないデスね。えっと、普

段は七合デスけど今日は何合にしておく方がいいデスカね？

「調く、ご飯は六合デスカ？ 七合デスカ？」

居間へ向かって尋ねると調がこつちへフラフラと歩いてきます。で、若干嫌そうな顔をしました。分かりますよ調。居間に比べると暑いデスよね、こつち。

「六合でいいと思うよ？ とうか、切ちゃん、七合炊いてもいいけど食べ切ってもらえるの？」

「なっ……調、それは酷いデスよ。アタシのお料理だってオイシイって言ってもらえるはずデス」

「……メニュー、生姜焼きだけなんでしょ？ 多分それじゃあ足りないよ？」

「きや、キャベツのお味噌汁が付きますよ？」

「……寂しくない？」

うっ！ そ、それはアタシも若干思ってた事デス。で、でも、アタシの腕じゃ他のメニューなんて思いつかないし作れないデスから……。

そう思つて肩を落としてると、調がため息を吐くのが聞こえました。そしてアタシの視界に調の足が入ってきます。

「切ちゃん、顔上げて」

言われるままに顔を上げればそこには苦笑する調。

「もしやる気があるなら、アドバイスをあげる」

「ほ、ホントデスカ？」

「ホントもホント。メインは生姜焼きでしょ？ で、汁物はキャベツのお味噌汁。あと一つおかずが欲しいんだよね？」

「は、はいデス」

「でも生姜焼きでお肉使ってるから、もう一つは別の物がいいかな？」

「デス、ね。出来れば別がいいデス」

「そっか」

そこで調は口を閉じてアタシを見つめてきます。えっと、これは……？

「し、調？ どうしたデスカ？」

「……私は切ちゃんへアドバイスをあげるけど、それは切ちゃんからの質問や疑問に答えるだけ。自発的にする事は禁止されてる」

小さく笑って調が告げたのは、きつとししよーから言われた条件デス。

「えつと、じゃあ、何かないデスカね？ お野菜かお魚を使ったアタシでも出来そうな料理」

「そうだね。じゃ、一緒にもう一度お買い物行こう。エル、お留守番お願い出来る？」

「はい」

「で、でも調。アタシ達がいないとエルはトイレにも行けなくなっちゃうデスよ？」

アタシ達のギアペンダントがないとエルは今の位置から動けなくなります。今の時期だともまめに水分を取ってますからトイレが大問題になっちゃうデス。

「でも、セレナがもうすぐ帰ってくるから問題ないと思うんだけど……」

そう、セレナは今ししよーのお部屋掃除をしています。で、ししよーはそんなセレナを眺めてごろごろしてるはずデス。

今日はアタシがご飯を作るので気にしないようにって事らしいデス。こういうところがししよーの優しさデスね。

「あの、多分ですが姉さんはこのまま兄様の部屋にいますか。一緒にお昼寝したいって言ってましたし」

「えっ？」

それは初耳デス。というか、あのデート以来セレナがししよーにベタベタする事が増えたんデスよねえ。

何だかそれを見てマリアが複雑そうな顔してますし、調も微妙な顔が多いデス。

アタシも、何だかもやもやするデスし、どうしたんデスカね？

「……切ちゃん、お買い物前に仁志さんのお部屋に寄ってもいい？」

「OKデスよ。むしろアタシも行こうと思ってました」

いくらセレナがまだ子供っぽいからって、女の子デス。ししよーが

困って寝れなくなったら問題デスし、ここはちゃんと注意が必要デス。

「エル、一緒にお出かけしよう。準備して」

「いいんですか？」

「うん。ヴェイグは寝てるからいいけど、エルはこのままだと動けなくなるでしょ？」

「それは……」

「エル、一緒にお買い物行くデスよ。さっ、帽子をかぶって準備するデス」

「……はいっ！」

嬉しそうに笑ってエルが居間の奥へ、押入れ近くへと向かったデス。

「むく、エルは心なしか切ちゃんへ懐いてる気がする」

「まあアタシとエルはししよーから色々教わってる仲デスから」

「むう……」

膨れ顔の調も可愛いデスね。なのでほっぺをつんつんするデス。

「むくっ」

「おおっ、調がより膨れたデス。そんなにアタシとエルの仲が羨ましいデスか？」

「あの、切歌お姉ちゃん。調お姉ちゃんは多分突っつかれた事に怒ってるんだと……」

そのエルの言葉に無言で頷く調を見て、アタシはいつかのチキンを食べてた時の事を思い出しました。

「ご、ごめんなさいデス。膨れる調が可愛くてつい……」

「……そんな事だろうと思った。切ちゃんらしい」

「ゆ、許してくれますか？」

「いいよ。エル、準備出来た？」

「はい、この通り帽子もかぶりましたし鍵も持ちました」

「うん、じゃあ行こう」

そう言っつてエルへ調が手を差し出すとそれを嬉しそうにエルが握ります。むう、こういうところは調の方が仲が良いと思うデスよ。

と、いけないいけない。お財布と買い物袋を持って後を追わないといけないデスね。

「切ちゃん、早く」

「切歌お姉ちゃん、急いでください。冷気が逃げてヴェイグさんが起きてしまいます」

「今行くデスよ」

玄関前で待つてる二人へ慌てて合流デス。エルが鍵を閉めて三人で目指すはししよーのお部屋デス。

ししよー、まだ起きてるデスカね？　もし寝てたら……その時はどうすれば……。

まつ、いいデス！　その時になってから考えるデスよ！

「ねえ、本当にダメ？」

「そうだなあ。セレナがエルぐらい子供なら問題なかったんだけどね」

「むくつ」

布団へ入って横になる仁志を見つめ、セレナはどこか不満そうに口を尖らせた。

掃除も終わり、後は寝るだけとなった仁志へセレナと一緒に昼寝をしないと持ちかけたのである。

それを当然仁志はやんわりと却下した。もうセレナは大人への成長を始めた年頃だ。それが実兄でもない男と同じ布団で寝るなどどうかと思っただのだ。

「それにこの布団は男くさいと思うしな。申し出は嬉しいけど勘弁してくれ」

「……それって、私がお兄ちゃんにとって立派なレディって事？」

その問いかけは、普段であれば何の問題もないもの。

これまでのセレナであれば、深い意味を持つ事のないもの。

仁志もそう考えて素直に頷き笑みを返した。

「そうだな。もうセレナは立派なレディだよ」

「……そうなんだ。うん、じゃあ仕方ないね。結婚するまでそういう

事はしちやいけないもん」

嬉しそうに笑顔を見せて素直にその場から立ち上がるセレナを見て、仁志は微かに内心引つかかるものを覚えていた。

（一体何だ？ 何が俺は気になってるんだろう？）

少し前まで純真無垢だったはずの白いキャンバスに小さな、けれどたしかな汚れがある。

それを仁志は感覚的に察知したのだが、残念ながらそれは本当に些細なサイン。

結局彼はそれを理解する事なくセレナを見送って眠りに就く事となる。

「ふふっ、立派なレディだっつて」

（うん、頑張ってお料理とか姉さん達から教えてもらおう。そしてお兄ちゃんのご飯を作ってあげられるようになるんだ。それが奥さんのお仕事だもんね）

仁志とマリアの関係性がセレナの中での夫婦だったため、どうしてもどこか古い形の夫婦像が出来上がってしまう。

だが仁志はマリアや調へ事ある毎に感謝を告げ、労をねぎらっている。それにマリアや調は笑みを返し、時折彼からもらう有形無形の様々なものに癒されているのだ。故にその関係性は古臭くも真つ当な夫婦の形であった。

——待っててね、お兄ちゃん。私、出来るだけ早く大人になるね……。

呟く言葉はある意味で微笑ましいもの。だが、そこに宿った想いにはかつてなかった淀みがあった。

イノセントの名を与えられていた少女。そんな彼女へ闇が打ち込んだ楔の切っ掛けは、ノイズ襲来という試しにやった企みだった。

あれで狙われたのがヴェイグであり、それを庇って仁志が動いた結果、それまで心を大きく乱す事のなかったセレナが強い怒りで心を動かしたのだ。

それを好機と捉えた悪意が執拗にセレナを狙っていた結果、マリアと仁志の仲を取り持とうとする気持ちを利用し付け込んだ。

そして、現在に至る。無垢な心に悪意の種はしっかりと根付き、その感情を栄養として成長を続けていた。

「あつ、姉さん！」

「エル？ それに調さんと切歌さんも……」

笑顔でセレナへ駆け寄るエルフナイン。それに不思議そうな顔を見せるセレナの視線の先には調と切歌が立っていた。

「セレナ、エルから聞いたよ。仁志さんと一緒にお昼寝しようとしてたって」

「ダメデスよセレナ。前も言ったデスけど、もうセレナも」

「うん、分かってる。私も立派なレディなんだってお兄ちゃんが言ってくれたから」

嬉しそうに笑みを浮かべてセレナはエルの手を握った。その笑顔を仁志が見れば息を呑んだに違いないだろう。それはあの奏や未来、響やクリスマスまでも浮かべた笑みに近かったのだから。

だがしかし、その笑顔を見た者はいない。セレナ自身はそれを浮かべていて、切歌と調はセレナの顔が麦わら帽子で隠れて見えなかったし、エルフナインもセレナではなく切歌と調を見ていたからだ。

純真無垢だからこそ毒も、闇も早く回る。強く素直な想い故に、それは深く根付く。

光と闇は表裏一体。素直だからこそ悪意さえも浸透するのが速いのだ。

「それで、迎えに来てくれたの？」

「はい。それと、買い物にも行くんです」

「え？」

「切ちゃんももう一品増やしたいからって」

「調のアドバイスを受けながら考えるんデス」

「そっか。じゃ、私とエルは先に帰った方がいいかな？」

「好きにしてくれていいよ。鍵はエルが持つてるし」

そう言われてセレナはエルフナインへ顔を向ける。

「どうする？」

「じゃあ、帰りたいです。ヴェイグさんが起きた時、誰もいないと寂し

いと思うので」

「そうだね。じゃあ、私とエルは先に帰ってます。お二人共、気を付けて行って来てください」

「分かった。そっちも大丈夫だと思うけど気を付けて帰ってね」

「行ってくるデース」

こうして別れて動き出す四人。仲良し姉妹のように手を繋いで歩くセレナとエルフナイン。その背を少しだけ見送り、切歌と調は揃ってため息を吐いた。

(立派なレディ……か。多分セレナを丸め込むための言葉だろうけど……)

(完全な嘘でもないはずデス。ししよー、アタシの事もそう思っれてるデスカね?)

(何だか……もやもやする(デス)……)

どうして自分へは言ってくれないのか。そう思って二人は視線を後方へと向ける。

もう見えない古びたアパート。そこで眠る一人の男性へ想いを飛ばすような眼差しを。

「……切ちゃん、行こう」

「……デスね」

やや沈んだ声で言葉を交わして歩き出す二人。だがそんな雰囲気もスーパ―へ近付く頃には消えていた。

切歌が自分のテンションを上げるべく調へ色々な事を聞いていたからだ。

野菜を使った料理なら何がオススメで、魚なら何だろうとそういう事を話題にして。

「あつ、見えてきたデス」

「切ちゃん、とりあえずは安い物を見て考えるんだよ? それが賢い奥さんの条件」

「べ、別にアタシは奥さんになりたい訳じゃないんデスが……分かったデス」

調の言葉にそう返す切歌であったが、その内心ではぼんやりとある

想像が始まっていた。

(ししよー、アタシがかしこく買い物して、お料理したら褒めてくれるデスカね……?)

切歌の脳内に浮かぶのは見事なフルコースのような料理の数々が並んだテーブルと、それを前にとびきりの笑顔を自分へ向けてくれる仁志の姿。

——どうデスカししよー。アタシだってやればこれぐらい出来るんデスよっ!

——ああ、見事だよ切歌! やっぱりお前は俺の最愛の弟子だっ! あの誕生日会の時に仁志が間違っって言ってしまった言葉。それが今も切歌の心に強く残っていた。

最愛という言葉。間違えたと仁志は思っって言い直したが、あながち間違ってもいないのではと切歌は直感で感じ取っていたのだ。

緩んだ顔のままスーパーへと入る切歌とは違い、やや険しい表情を浮かべるのは調である。

(仁志さん、セレナの事をまだ子供って思ってるみたいだけど、それはちよつと甘いと思う……)

何となくだが調は感じ取ったのだ。今のセレナからは若干ではあるが乙女の気配が漂っている事を。

(もしかして、セレナは仁志さんに恋してる? 有り得ないけど……でも……)

あの時セレナが口にした“立派なレディ”という表現。それにどこか含まれた、女としての自覚のようなものを調は察していた。

「さっ、調。とりあえず今日のお買い物得品はここに乗ってますよ」
「え? あ、うん」

入口に掲示されたチラシを指さす切歌。調もそれに頷いて視線を向ける。

(……切ちゃんへのアドバイスはあくまで頼られた時だけ。でも、切ちゃんが私へ意見を聞いた事は仁志さんに伝わるはず。なら、切ちゃんの出来はある意味で私の結果にもなる)

よしと頷くように首を動かし、調はチラシをじつと一分は見つめた

後、脇目も振らずに店内のお買い得品から厳選して野菜などを選び始める。

「し、調、待つて欲しいデスよー!」

切歌がその後を必死に追いかける中、調は手にした物をかごの中へと入れていく。

「うん、これでよし。切ちゃん、お会計してきて」

「わ、分かったデス……」

トテトテとレジへ向かう切歌を見つめ、調は静かに燃えていた。

「セレナ、本当に立派なレディはお買い物上手のお料理上手だつて言う事を教えてあげる」

マリアと同じく家事を預かる者としての矜持にかけて。そんな言葉が聞こえそうな程、今の調は闘志に満ちていた。

ただ、それを浴びるといふか受けるのは未だ事態がよく分かっていない切歌なのだが……。

(調、どうしちゃったんデスかね? ま、まあおかげである意味助かったデス)

彼女は知らない。これから仁志がやってくるまで、ある意味気の抜けない時間が始まるとは……。

「疲れたデス……」

「お疲れ様」

時刻は午後七時四十分を過ぎた辺り。切歌は洗い物を終えて居間へ大の字に転がった。

マリアの労いに切歌は疲れた笑みを返すのみ。そんな姿に仁志は感謝を噛み締めるように切歌の傍へ腰を下ろした。

「切歌、今日の飯は美味かったよ。本当に、美味かった。ありがとう」

「えへへっ、いいつて事デスよ。ししよー達が喜んでくれて、アタシは嬉しかったんデス。やつと、やつと調やマリアの気持ちちが本当に分かりました」

「切歌……」

「切ちゃん……」

これまで食事を担当していた二人に笑みが浮かぶ。それは自分達の苦勞を切歌が分かったという事ではない。彼女が食事を作った際の喜びを理解してくれた事への笑みだ。

「切歌、立派だよ。じゃあ、これは約束の」

財布から金を取り出そうとした仁志の手を、そっと切歌の手が止める。どうしたんだと思つた仁志へ、切歌は優しく微笑みながら口を開いた。

「ししよー、アタシ、ダメダメでした。お金のためにご飯を作ろうとしてました。でも、それじゃダメって気付いたんデス。調やマリアはお金のためにご飯作ってないデス。アタシ達の笑顔のために作ってくれました。だから、これはいらないデス。今日のお代は、ししよーがオイシイって笑顔で言ってくれただけでじゅーぶんデスよ」

「切歌……」

その言葉が仁志の心を貫いた。彼こそ切歌の手料理食べたさに金の力を使つてしまったと気付いたのである。

「それを言うなら俺もだ。正直に切歌の手料理が食べたいと言えば良かったのに、君がやりたくなるような流れを作ってしまった。ごめんな切歌。こんな汚い大人のやり方へ、君は純粋な想いで応えてくれたつて言うのにさ」

「あ、アタシの手料理が食べたかったデスか？」

「そうなんだよ。でも、目が覚めた。よし、ご飯代としてはお金が受け取れないなら、こうしよう。切歌、このお金は試練だ」

「試練、デスか？」

「ああ。これを使つて、出来るだけ多くの楽しい思い出を作るんだ。勿論無駄遣いはしないように、な」

「ししよー……」

取り出した7千円を切歌の手へそつと握らせ、仁志は微笑みかける。その笑みを切歌はしばし見つめた後、手の中の紙幣へ目を向けて再び仁志へと顔を向けて頷いた。

「分かりました。これでみんなと笑顔になるデスよ」

「うん、頑張つてくれ。それと、師匠としては切歌が自分の帽子を買つ

てくれる事を始まりにして欲しいかな。切歌が熱射病対策をしてくれる事は師匠の思い出にも繋がるからさ」

「っ！ ししょっ！」

告げられた言葉に切歌が弾かれるように体を起こすと嬉しそうに仁志へ抱き着いた。

そんな彼女に驚きつつ、仁志は優しく笑みを浮かべてその頭を撫でる。

「……むう」

その光景を眺め、調はやや無然とした表情を浮かべていた。

(仁志さん、いつもなら切ちゃんがああするとダメだつて注意するのに……)

エルフナインやセレナならまだ分かる事でも、切歌がするとなると仁志は厳しく注意をしていた。

それは切歌がもう子供とは言えない体であるのと同時に彼の理性を守るための事でもあったからだ。

だが今は仁志が兄や父のような気持ちで切歌と接しているため、彼が邪な気持ちを抱く事がなかった。それ故に切歌の密着も微笑ましく思っただけで対処していたのだ。

「切ちゃん、抱き付くのはそれぐらいにしないとダメだよ。仁志さんが困るから」

「ほえ？ ししょー、困るデスか？」

「あー、今はそうでもないけどたしかにそろそろ離れておこうか。切歌も一人前の女性だしね」

その言葉に切歌と調が対照的な反応を見せた。

(一人前の女性……っ！)

切歌は嬉しそうに、調は苛立つように表情を変えたのである。

結果、切歌は上機嫌で仁志から離れて手にした紙幣をそそくさと財布へとしまい、代わりに調が仁志へと接近する事に。

「仁志さん、今の、切ちゃんだけですか？」

「へ？」

「じー……」

ふて腐れるような表情と声でジト目を仁志へ向ける調。その眼差しに仁志は自身の言動を思い返し、すぐに理解したのか苦笑して調の肩へ手を置いた。

「ごめんごめん。調も立派な女性だよ。思っても言わないと伝わらないもんな。許してくれ」

まさしく調が欲しかった言葉であった。そして、これはそれだけではない意味を調へ与える事となる。

（私の言って欲しい事、気付いてくれた……。やっぱり仁志さんは凄い……）

考えを読める訳じゃないが分かるうとしている。以前呼び捨てにしてもらおうと思った際の言葉を思い出し、調はその胸をときめかせていたのだ。

仁志は自分の考えを読み取ろうとしてくれる。想いを酌み取ろうとしてくれている。そう思っただけで調の恋心は強く反応していた。

「仁志さん、明日の晩ご飯は何が食べたいですか？ 私、頑張って作ります」

「え？ そうだなあ……」

「言うだけ言ってください。出来るか出来ないかはそれを聞いて考えますから」

「そう？ じゃあ……」

心持ち仁志へくっつくように調は彼の腕へ抱き着いた。ただし切歌のような強い密着ではなく控えめなものではあったが。

当然それに仁志は動揺する事なく、調の問いかけに答えようと思考を巡らせる。そんな彼を見て調は少しだけ微笑んでいた。

「むう」

今度はそれを見て切歌とセレナが膨れ顔。良い雰囲気だと感じ取ったのである。ただエルフナインとヴェイグはそんな二人に小首を傾げ、揃ってマリアへ顔を向けていた。

「姉様、どうして姉さん達は膨れているんですか？」

「ふふっ、仁志と調が仲良しだからでしょうね」

「どうして仲が良いと膨れるんだ？」

「切歌もセレナも子供じゃないから、かしら」

「……分かりません（分からん）」

「クスツ、エルもいつか分かる日が来るわ。ヴェイグは……どうかしら？ 分からないわね」

楽しそうに笑いマリアはエルフナインの頭を優しく撫でる。それにエルフナインは笑みを返し、ヴェイグはそんな光景に笑みを見せる。

平和で穏やかな家族の時間。仁志という父でもあり兄でもある相手を男として見つめている三人の少女を、妻として振舞う女はまだ微笑ましく見つめていた。

（セレナも、そういう気持ちで仁志へ抱き始めた、か……。切っ掛けは……やっぱりデートでしょうね）

ある意味で当たっている読みではあるが、そこに悪意の干渉があったとまではさすがにマリアも読む事は出来なかった。

「調。調もそろそろ離れるべきデス」

「そうですよ。お兄ちゃんが困っちゃう」

「困ります？」

「え？ あー、困った方がいいか。うん、困る困る」

「そうですか。じゃ、切ちゃん、セレナ、もつと困らせよう。こんな言い方出来ないぐらいに」

「了解デス（分かりました）！」

「えっ?! ちよ、ちよっとっ?!」

調の反対側の腕へ切歌が、セレナは正面から仁志へ抱き着いた。そのまさかの展開に仁志は軽く慌て始め、それを見てマリア達が苦笑する。

やがてその苦笑は楽しげなものへと変わり、ならばとエルフナインやヴェイグも仁志へくつき始め、最後にはやや照れながらもマリアさえ背中へ抱き着いたところで仁志が観念するように項垂れた。

そこで大きな笑い声上がり、仁志もそれに合流するように笑い出した。

誰かがその光景を見れば、仲の良い家族としか思えない風景だろ

う。だが彼らはそうではない。そうなるかもしれない可能性は秘めているが、今はまだ他人の集まりである。

それでも、その心の距離感は家族に近いのかもしれない。一番年長の女が男を夫のように想い、一番年少である少女が男を父のようにも慕う事で。

「兄様、もしよければ何か話をしてください」

「あつ、じゃあアイマスがいいな。お兄ちゃん、教えて」

「アイマスかあ。えっと、そうは言ってもあれの始まりはストーリーがあるようでないゲームだし」

「そうなん德斯か？」

「意外……」

「いや、共通ストーリーみたいなのがないんだよ。元々のゲームは……」

「……語り始めたな」

「いいじゃない。これが仁志よ」

自分を見つめる四対の瞳へ話しかける仁志を、背中側の二人が好ましく思っで見つめる。

そんなある日の夜の事。彼らだけの思い出が、また一ページ……。

「バーベキュウ、ねえ」

「いいとは思いますが、いつ行くのですか？」

「問題はやっぱりそこだよなあ」

「あとは場所ですよ。山なのか海なのもありますし」

1DKのアパートの一室。そこに珍しく仁志の姿があった。

時刻は午後六時半。かつて仁志の物だった折り畳みテーブルも既にこの部屋の家具となつて久しい。

その上には、マリアが作った通称“いつもの弁当”が入っていた弁当箱が四つ置かれている。仁志が持参したもので、一度もあの店の弁当を食べた事のない三人へも食べてもらおうと彼が考えたのだ。

つい先程までその味に彼女達も舌鼓を打ち、心も胃袋も幸せで満たされていた。

「海水浴は来週だろ？　じゃ、バーベキューは来月？」

「どうかな？　海水浴とは違ってバーベキューならそこまで疲れ果てる事もないはずだし、仁志さんが休みの日なら可能だと思うよ？」

「どうです？」

「俺も翼のように考えてる。場所は正直そういう事が出来る店へ行こうと思っただけだよ」

「そんなお店、あるんですか？」

「えっと、何て言ったらいいのかな？　スーパーの屋上でビアガーデンみたい……って言っても分からないか。まあ、とにかく建物の屋上で営業してる店があるんだ。そこがバーベキューを出来る場所を提供してくれるんだよ」

「へえ」

どうしてもバーベキューという野外でと、そういう風に思っていた三人にとって建物の屋上という発想は中々新鮮に感じられたのだろう。

そこからはやる場合の食材の買い出しはどうするという話になっていく。何せ総勢十人を超える団体だ。しかも食欲旺盛な人間も数人いる。普通の量では全員が胃袋を満たす事は不可能と言えた。

が、そんな事は仁志も既に理解している。

「で、食材の買い出しなんだが、車を借りて業務用スーパーに行かないか？」

「業務用スーパー……」

「まずそこを見て、足りない物やその物じゃ嫌な物をその後大き目のスーパーへ行行って買い足すんだ。海水浴の週の土曜なら全員揃うだろ？　そこで行こうと思うんだ」

「私と小日向は構いませんが……」

「奏さん、明けですよ？」

翼と未来の視線が奏へ向くも、向けられた本人は平然と笑った。

「別にいいさ。あたしよりも仁志先輩の方が心配だよ」

「大丈夫。その日はマリア達の家で仮眠を取らせてもらうから」

「では、出発は何時頃になりますか？」

「そうだなあ……じゃあ、みんなはマリア達の家へ一時半集合でどう？俺は一人でレンタカーを借りに行つて、あの家の前まで行くから」

「ん。翼、クリスとエルへ連絡」

「もうやってる」

「早いですね」

「聞きながら文面を作っていたからな」

自慢げに返す翼に仁志達は苦笑する。この世界へ来て翼はメールなどで文字を打つ速度が飛躍的に向上していた。

それは彼女が初期から連絡役を担っていた事もあるのだが、一番は動画のコメント返しを最初の頃は日課にしていたからだろう。

さすがに今はもうしていないが、本当に初期の頃は生真面目な翼らしく全てのコメントへ丁寧にコメントを返していたのだから。

奏も最初だけはやっていたのだが翼程長続きせず、早々に概要欄にコメントが増えたので返す事は無理と書き込んだのだ。

マリアは最初からコメント返しをしないスタンスを取り、翼もマリアが動画を投稿するタイミングで寂しく思いながら奏と同じコメントを概要欄に書き込んで現在に至る。

そしてクリスとエルフナインからの返信を受け、土曜の昼に海水浴後のイベントのための外出が決まった。

「こうなるとその日も待ち遠しいなあ」

「未来、今のあんたの言葉、絶対響が言ってる」

「うん、間違いない」

「というか、おそらく今のタイミングで言つてたと思うぞ、俺は」

「ふふっ、実は私もそう思いました」

この後、仁志は自分の部屋へ戻る事にして三人へ別れを告げて出て行つた。さて、普段の状態へ戻つた翼達は当然先程の事を話題に会話を——しなかった。

「ホントに仁志先輩があたしの手料理食べたがってるの？」

「はい。だって、本人が私に言つたんですよ？あと言つてないのはセレナちゃんを除けば奏さんだけって」

「でもさ、ならどうしてさつき言わなかったのさ？」

「多分だけど、仁志さんの事だから勤務中に言おうと思ってるかも」

「あつ、それありそうですね」

「勤務中に、かあ……」

ぼんやりと奏の中には休憩中に話題として振られるのが浮かんでいた。

「きつとそうですね。もう切歌ちゃんも作ったみたいだし」

「切歌も？ そっか。こりやあたしもやってあげないといけないね。てか、いつそ言われる前に作ってやるか」

「ふふつ、仁志さんの事だからきつとそうされたら驚くだろうね」

「うし、早速明日作ってやろうかな。翼、そういう訳だから」

「うん、了解。明日の朝食は小日向と二人で食べる」

「よろしく」

そんな会話が展開されたとは知らず、仁志は自室にて思いもよらぬ訪問を受けていた。

「何か悪いな。勤務前だったのに」

「いいよ。それで、相談って？」

クリスから今後の事で相談があると言われたのである。既に仁志は夕勤の要であるクリスには、少しでも事件解決後の事を見据えた動きを話していたのだ。

「ああ。その、店の事だ。今募集をかけてるのが夕方と深夜。で、どちらか採用になったらあいつか片翼の先輩が辞める方向」

「そうなる」

「で、だ。そうなった後はあいつや片翼の先輩はどうすんだ？」

「そこなんだけど、今、広めの部屋を探してるんだ。最低でも3LDKの」

それだけでクリスは何かを察した。

「……あたしらと先輩達を合流させるって？」

「そう出来たらなと」

長きに渡り施設暮らしをしていたマリア達や自室へのこだわりが薄いセレナとエルフナインと違い、一般家庭で育った響や未来はやは

りどこか個室が欲しいと思っている。

翼や奏、クリスとて恵まれた環境での暮らしは短くないため、可能ならば自室が、あるいはプライベート空間が欲しいと思っているのだ。

「響と未来は寮生活で同じ部屋だったろ？ だから一室でも平気だと思うんだ。で、翼と奏もきつと割り切ってくれる」

「あたしが一人で部屋を使っているって？」

「もしくは翼とかな。奏が夜勤を辞められない場合は、さ」

「成程な」

理解出来たとばかりに頷き、クリスは腕を組んだ。その豊かな胸を持ち上げるような形となり、仁志は一瞬だけそこへ目を向けてしまつてから慌てて逸らす。

それをクリスがそれとなく見ていると知らずに。

(あー、ヤバかった。どうしてもああされると一瞬見ちゃうよなあ)

(見てた、な。そ、そうか。正面でこうされると見ちまうのか。覚えておこう……)

それぞれ異なる意味合いで顔を赤くする二人。さて、普通であればここで響がやってきてとなるのだが、生憎彼女は今……

「はい、24円のお返しです。ありがとうございます」

絶賛バイト中なのである。いつものように太陽の如き笑顔で店内に愛想と活気を振りまいていたのだ。

そう、クリスは響がバイトである時間を狙って仁志の部屋を訪ねていた。テレビなどもない隣の部屋にいれば、嫌でも仁志の帰宅は察知できるもの。

帰ってきたのを見計らって訪問すれば確実に仁志と話せる。しかも今回は邪魔も入らない二人きりでだ。

「で、相談ってその事だけ？」

「いや、もう一つある。その、こっちは仕事とは関係ないんだけどな」「そうなのか？ えっと、じゃあ」

どういう事だと、そう聞こうとした仁志へクリスの小柄な体が飛びこんできた。反射的に受け止めた仁志の背中へクリスの華奢な細腕

が回される。

「く、クリス？」

「あたしは言ったぞ。留学が終わったら、お前と、仁志と一緒に暮らすって」

「そ、それは聞いたけど……」

仁志の胸板へ押し付けられるクリスの豊かな乳房。その感触に仁志は気付いていた。

(こ、この感じ……まさかノーブラっ!?)

動揺する仁志へクリスは顔を上げて告げる。己の紛れもない想いと覚悟を。

「あ、あたしは仁志とならそういう事だって出来る。ううん、したい。それを、分かってくれたいんだ。その、悪意とか関係なく、あたしは本気で仁志を、その、す、好き、だから……」

「クリス……」

素直じゃないクリスがどもりながらも告げた本音。その意味に、その重さに、その温かさに、仁志は動揺を沈めて凛々しくクリスの頬へ手を添えた。

「ありがとう。それと、分かっているよ。クリスが、そこまで思ってくれてたって。悪意は君の気持ちを利用して俺へ迫った事も」

「仁志……」

「そして今の言葉が君にとってどれだけ勇気と覚悟が必要だったかも、分かっているつもりだ。本当に、ありがとう」

そう告げて仁志は顔を上へ向けて息を吐くと、もう一度クリスへ顔を向けた。

「クリス、目を閉じて」

「え？ あ、ああ……」

また以前のように頬へキスをしてくれるのか。そう思ってたクリスはどこか嬉しそうに目を閉じる。

だが、今の仁志はやつとある意味での覚悟が完了した。悪意など恐れて大事な女性達の心へ傷を作る事は出来ない、そう思ってた。

(来るなら来てみる。俺は、お前なんかには操られるものかっ！俺は、

クリスの想いに応えたいんだよっ！」

そんな強い気持ちと共にクリスへの想いを込めて仁志はそつと彼女の唇へ自分の唇を重ねた。

それは、一瞬であり、だけど永遠のようにも感じられた刹那の間。自分がされた事に気付いてクリスが目を開けた時には、もう触れ合っていた温もりは失せていた。

ただ、微かな名残をその唇に残して。

「仁志……い、今の……」

「言ったはずだよ。俺だっと思ってしたくない訳じゃないって」

「そ、そうだけどさ」

「悪意が君達を通じて俺へ入り込もうとしてる。だけど、それを恐れて君達の心を傷付けるのは嫌なんだ。信じられないと誰かを傷付けるよりも、誰かを信じて自分が傷付く方がマシだっつて、そう思うから」
告げられた言葉にクリスはゆっくりと表情を微笑みへと変えていく。

（ああ……やっぱあたしの目に間違いはねえ。この人は、仁志は、あたしが惚れた男は強い人だ……）

潤んだ瞳へ見つめる仁志に心を温かくし、クリスはその気持ちのまま口を動かした。

「なあ、もう一度、してくれよ」

「……分かった」

「んっ……」

今度は躊躇なく言えた言葉への仁志の答えも躊躇いがなかった。目を閉じてとの言葉もなく、ほぼノータイムでされるキスにクリスは嬉しそうに静かに涙を流しながら目を閉じる。

抱き締める腕に合わせるように背中へ回った腕へも力が入り、それさえも喜びに変えてクリスは思うのだ。

好きになって良かった。想いを伝えて良かった。この人に出会えて良かった、と。

——あたしは、この人と一緒に生きたい。仁志の傍で歌って、パパとママのような関係になりたい。二人で、パパとママの夢を叶えてい

きたいっ!

クリスがそう心から思った瞬間、依り代から通知音が鳴る。それに反応して二人はキスを切り上げて顔を依り代へと向けた。

「……今、鳴ったよな?」

「ああ、鳴ったな」

「確かめて、みるか」

「そう、だな。そうした方がいいと思うぞ」

仁志が依り代を手に取り、クリスはそのすぐ横から覗きこむ。ゲームを起動すると、久々となる通知が表示されていた。

「タップするぞ」

「ああ」

そうして表示されたのは「ステータスが更新されました」との文字。ならばとステータスを表示させると特に変化なし。

「これは……?」

「どういうこった?」

「分からない。念のため一旦ギアを展開してもらえる?」

「分かった」

聖詠を唱え、クリスの身を赤いイチイバルのギアが包む。

「……特に変化はないな」

「よし、じゃあちよつとアイコンを……」

クリスのアイコンをタップし、ギア一覧とも言うべき画面を表示させる仁志。

すると、そこに見慣れぬ表示が増えていたのだ。そのアイコンをタップすると……

「これは……」

「リビルド、だな」

「じゃあ一種のエクストライブ解禁だ。それ、見かけは通常ギアでも出力がエクストライブ近いつてギアだし」

「そうか。って、これって、その、も、もしかしてキスしたから、か?」

「……正直それしか理由が思いつかないよな」

そこで揃って赤面して俯く仁志とクリス。今頃恥ずかしさが出て

来たのだ。あの二度目のキスは互いに雰囲気にならされていたという証拠である。

そしてそこで二人は軽く相談する事に。何せリビルドという疑似エクストライブが可能となったのだ。

これは全員へ報告する必要がある。だが、当然そこでどうしてそうなったかを言う事になる。それをどうしようかと話し合ったのだ。

「やっぱり正直に言うべきだと思うんだけど……」

「あ、あのなあ、んな事してみろ。その、あいつがあたしへ何て言うか……」

「ま、まあそれは……」

「それに、だ。あいつや先輩だってきつと迫るぞ。その、実験とか実証とか理由をつけて。そ、そんな理由でキスさせていいのかよ？」

「……それはたしかに」

したくないとかではなく、ステータスの変化理由を確かめるという理由でキスを迫らせるなどダメだ。

仁志はそう思い、ならばと彼なりの妥協点を考え始める。どういう事情があれば、嘘は吐きたくないという仁志なりのこだわりであった。(本当にキスをしたからじゃ、きつとクリスの言った通りになる。まずは全員へ話すんじゃないかと個別に話す事にしよう。で、そこで俺が響達へはクリスの時と同じ事を再現しよう。その、ちゃんと彼女達に向き合って。切歌達へは……強く想いをぶつけ合ったとかでいいかな?)

少なくとも嘘は言っていない。そう結論付け、仁志はクリスへその方針を伝えた。

「……ま、後輩達にはそんな言い方でいいだろ。でも、嘘を吐かないようにって苦労するぐらいなら」

「クリス、君達は俺へ女性としての想いを告げてくれた。明確な異性としての好意を。ただ、切歌や調、セレナはそうじゃないだろ？ 三人は俺を兄とかの兄妹愛やそれに似てる感情で見てると思うんだ」

それに関しては若干の疑問を浮かべるクリスであったが、自分がそこへ口出しするのともうかと思っただけ飲み込んだ。

そうしてもう既に先程までの甘い男女の雰囲気は霧散してしまい、クリスマスは若干の寂しさを覚えながら部屋を出ようと動き出す。

「じゃ、またな」

「あつ、クリスマス。ちよつと待って」

「ん？ なんつ……」

仁志へ背を向けて靴を履いたところで呼び止められ、クリスマスはその場で振り向いたところでキスされた。

「……お休み。良い夢を」

「……………バカ」

優しく微笑む仁志へクリスマスは顔を背けてそう呟くと部屋を出て行った。

そしてすぐ隣の部屋のドアの鍵を開け、静かに靴を脱いで部屋の奥にある布団を敷くとそこへ倒れ込んだ。

（何だよっ！ なんのズルいだろうっ！？ 不意打ちであたし様の思考をハイジャックたあい度胸じゃねーかつ！ おかげでもう頭ん中仁志の事でいっぱいだったのっ！）

枕へ顔を埋めて両足をバタバタさせるクリスマスだったが、その動きがやがて止まる。

「……………やっぱ、もうあたしダメかもしれねえ」

このままここで暮らしていききたい。仁志と二人で支え合い、求め合って生きて行きたい。

そうクリスマスは思っつて仰向けに寝転んだ。

最早見慣れた天井を見つめ、クリスマスは心の底から呟く。

——仁志と……ずっと一緒にいたい……。

するとその呟きに呼応するようにクリスマスへ聞こえる声がある。

——なら、いれればいい。どうせ本部の時間は止まつてる。あたしの時間も止まつてるようなもんなら、いつまでだつて一緒にいれるじゃねえか……。

——でも、おっさん達を助けて悪意をぶちのめさねーと気が済まねえ。

——ばーか、考えてもみろつて。こんなあつたけえ場所と時間、な

くしてもいいのかよ？ 下手したら、いや、まず間違いなく二度と来れなくなるぞ？ それでもいいのか？

——やだ……。それは、それだけはやだ……。

——じゃあ迷う事はねえ。悪意なんかどうせ何も出来ないんだ。ゲートを閉じてこつちにあたしらがいる時点であいつに打てる手はねえ。それに、まだゲームの謎も解き切つてねーだろ。それを解いてからでもおっさん達を助けるのは遅くはねえ……。

——そう、かな？ ホントにそれでいいのか……？

——いいに決まつてんだろ。それに、元に戻せても、だ。あたしは留学しないとイケねえ。外国で一人ぼっちだ。仁志に会えず、あいつらとも別れて、今のあたしは本当に平気か？

——っ!?

クリスの中を恐ろしい程の孤独感が駆け巡る。愛する男と別れ、あつたかい人達と離れ、たった一人となる自分を想像して。

さつきまでのあつたかさが一転、凍えるような寒さへ変わる。心の光が失せ、闇が包む。悪意が、笑みを浮かべた。

——ここでみんなだ暮らそうぜ。何もずつとつて訳じゃねえ。せめて一年だ。それなら、きつとおっさん達も許してくれるさ。今までのところからの装者として過ごせなくなる平和な時間を、ここで少しばかり過ごさせてもらおうつてだけさ……。

——……そうだな。少しだけ、少しだけなら……大丈夫だ……。

そう呟いてクリスはゆっくりと目を閉じて眠りへと落ちる。夢も見ず、クリスは眠る。意識を深い闇の中へ沈ませるように。

やがて時間は過ぎ、部屋へ響が帰ってくる。その手には店で買ったのだろう商品を入れた袋を下げて。

「ただいま。クリスちゃん、お土産買って……あれ？」

普段であれば明るい室内が暗いままで、しかも既に布団が一組敷かかれている。更にそこで横になっているクリスの姿を見て響は珍しい事もあるなと思つて首を傾げた。

(どうしたんだろ？ クリスちゃん、絶対私がバイトの時は出迎えるまで寝ないのに……)

余程疲れたのだろうか。そう思いながら響は静かにドアを閉め、靴を脱いだ。

そして明かりを点けようか迷ったが、起こすのもどうかと判断して暗いまま響はゆっくりと布団へと近付いた。

「……パジャマじゃない?」

部屋着のまままで寝ているのを見て、響はおぼろげに状況を理解していた。

「きつと寝るつもりはなかったんだ。でも、横になって寝ちゃったんだね」

ある意味で正解ではあるのだが、生憎響へ真実を告げられる存在はそこにいない。

とにかく響はならばとクリスを揺さぶった。

「クリスちゃん。起きてクリスちゃん。せめて着替えて寝た方がいいよ」

「んっ……んんっ」

「あと、汗流しに行かなくていいの? 汗の匂いさせたままだと仁志さんに……意外と仁志さんなら気にしないって言うかな?」

「あたしが気にするってんだよ……」

低く呻くような声が聞こえ、響は視線を下へ向ける。そこには眠そうな顔で自分を見つめるクリスがいた。

「あっ、起きた」

「起きた、じゃねえ……。起こしておいて何言ってやがる……」

「でもさ、この季節は毎日汗を流した方がいいよ。私もこれからマリアさん達のお家へ行くつもりだし」

「……わりい、あと三分だけ待ってくれ。軽く顔を洗う」

「はぁ〜い」

フラフラと流しへ向かうクリスの背中を見つめ、響は小さく苦笑する。

この後、二人揃って部屋を出てマリア達の家へと向かう。

「どうして寝てたの? 疲れた?」

「……気が付いたら寝てたんだよ」

「珍しいね。待ち疲れた？」

「そういう訳じゃねーよ。その、ちよつと店の事で仁志と相談してたからな。色々考える事があつてそうしてたらって感じだ」

向かう途中の会話は、これまでもあつたような他愛ないもの。屈託なく笑う響と素っ気無いようでちゃんと相手をするクリスという、何ら変化のない二人。

だが、クリスに根付いていた悪意は再び芽吹いて蓄を付けている。しかしまだ花咲くつもりはなかった。

——まずは一人。乗っ取るのは容易いけれど、それはまだ待ちましよう。装者達全員が咲ける時まで、ね。あはは、あははははっ！

番外編 明けバカ日誌

「じゃ、上がってよ」

「お邪魔しまーすつと。うわっ、あつっ」

勤務明けの朝、俺は奏と共に部屋へと戻ってきた。

理由は一つ。勤務中に奏から言われたのだ。

—— 仁志先輩、今日の朝ごはんはあたしが作ってあげるよ。

さすがにそれは作ってくれるだろうマリアに悪いと断ろうとしたら、既に翼を通じてエルからマリアへ連絡が入ってるとの事。

つまり既に手は打ってあり、あとは俺が頷くだけとなっていたのである。

なら俺が頷かぬはずはなく、こうして奏を連れて珍しく部屋までストレートに帰ってきたと言う訳だ。

「で、食材は？」

「昨日仁志先輩が帰った後、未来から話を聞いてね。スーパーへ急いで行って買ってきたのさ。簡単な物ならあたしも出来るからさ」

そう言って奏が見せるのは未来も持って来ていた買い物袋。成程なあ。リーチに物を置かせて欲しいって言われた時は何かと思ったけど、冷蔵品が入ってたって訳か。

エアコンの電源を入れながらチラリと視線を動かせば、奏は買い物袋から食材を取り出していた。

卵にチーズ、レタスやトマトといかにも朝食向きという感じの物が流しに並べられていく。

で、最後に出て来たのは……エプロン？

「よつと……ん？ どうしたの？」

「い、いや、まさかエプロンまで持参とは思わなかったから」

「この方が感じ出るかと思つてさ。どう？ 新妻っぽい？」

からかうようにそう聞いてくる奏へ、俺は躊躇う事無く頷いた。

「ああ、本気で新婚になったみたいだ。可愛いよ、奏」

「っ?! ちょ、ちよつと止めてよ。あー、そういうカウンターしてくるとは思わなかった」

照れるように顔を背ける奏がとても愛しい。やっぱり、昨夜のクリ
スとのキスが影響してるのかね？

「さて、じゃあ仁志先輩は皿とかお願いね。あつ、そうだ。トースター
とかって……ないか」

「申し訳ない。つと、待てよ？ レンジでオーブントースターの機能
があるから焼く事は可能だ」

「じゃ、パンよろしく。あたし二枚食べたい」

「はいはい。じゃ、俺の分入れて四枚だな」

こんなやり取りさえも新婚さんな感じがしてくる。

ヤバいなあ。奏と結婚したらなんて、そんな事を考えてしまう。

チラリと見れば上機嫌で野菜を水洗いしている奏の背中。

「……美人だよなあ、やっぱ」

「ありがとう」

と、まさかの返事が。少し照れくさそうにだが嬉しそうに笑みを浮
かべてこつちへ顔を向けている。

「何かさ、昨日店に来るまでにあつた？」

その問いかけに俺はすぐ答える事が出来なかった。ただ、俺のそん
な反応で奏は何かを察したように苦笑する。

「仁志先輩、分かりやす過ぎ」

「……隠し事は苦手なんだよ。俺、単純だからさ」

「ははっ、単純か。でも、うん、そんな貴方だからみんな惚れちゃうん
だろうね」

最後の一言がとても嬉しく、照れくさく、誇らしく思えた。

「本音と建て前が使い分けられないから？」

「裏がないからだよ。分かってないで言ってるなら許すけど、もし分
かってるならちよっとお説教かな？」

即答。しかもこちらに不敵な笑みを見せての追撃もあつた。

なのでごめんなさいと頭を下げる。するとあっさりとは許してくれ
た。

「いいよ。ま、あまり自分を卑下しないでつて事。あたしの惚れた男
を侮辱するのは仁志先輩だつて許さないつてね」

「奏……」

「何？ 惚れ直した？ ならだんどん惚れ直してよ。そしてあたしだけが一番って思ってくれてさ、あたしを離したくないって抱き締めて……っ」

奏が息を呑む。当然だ。俺が後ろから抱き締めたのだから。

「ひ、仁志先輩？ えっと、どうしたのさ？」

「今奏が言ったんだぞ？ 離したくないって抱き締めろって」

「そ、それは……言った、けど……」

普段と違ってしおらしい奏に内心興奮してる自分がある。

もう少しだけ、いじめてみようか？

「ん？ 何だって？ 聞こえないぞ奏」

「ひゃっ、み、耳元で囁かないでよ……」

ヤバい。可愛い。普段勝気な子が二人きりで特定の状況になると気弱になるとか、本当にヤバいぐらいギャップで可愛い。

というか、もしかして奏って押せ押せ系が好き？ あるいはここぞと言う時に引っ張ってくれる感じが好きなのか？

「じゃ、どこならいいんだ？ 教えてくれ」

「そ、そんなの決まってるじゃん。普通にさ……顔を少し離して」

「嫌だと言ったら？」

「い、嫌って……」

「ここか。そう思って奏の耳元へ口を寄せる。」

「奏を離したくない」

「っ?!」

紛れもない本音だ。今の俺は、今だけは俺は奏の旦那や彼氏だと思つて接する。

マリアでさえそういう気持ちになる時があったんだ。なら、奏だつてそうだ。

「好きなんだ。本当に、心から。今だけは、奏が一番だと言える」

「今だけ……か。うん、やっぱり仁志先輩だよ。でも、それだけでもあたしは嬉しい。今だけでも、貴方の一番になれるなら」

俺の背に体を預けて奏は笑みを浮かべてくれた。その瞬間、俺は自

然とその唇へ自分のそれを重ねた。

「……………仁志先輩」

「ごめん。嫌だったか？」

「ううん、むしろ……………」

潤んだ瞳でこつちを見つめる奏。もうそれだけで十分だった。

何も言わずにもう一度同じ事をする。今度は少しだけそのままの時間を多めに取って。

ゆつくりと奏から顔を離すととても色っぽい表情の美人がこちらを見つめていた。

「仁志先輩、いつそのまま……………」

「ダメだよ奏。それは、ダメだ」

「もう料理作るなんて気分じゃないよ。このまま、あたしを料理して？」

「……………」

正直押し倒したい気持ちに駆られそうになる。だけど、踏み止まった。

朝で良かった。これが夜だったら、夜勤明けじゃなかったら、踏み止まれなかっただろう。

「奏、それは無理だつて。隣、誰が寝てると思ってる？」

「……………いつそ聞かせてやろうよ。その方が仁志先輩の夢の光景に近い事になるんじゃない？」

「このっ」

「いたっ」

デコピンを喰らわせる。よし、これで朝っぱらからピンクな空気を出して俺を惑わせる淫魔を退散させたぞ。

「奏、分かってくれ。そういう事は」

「そうだね。ホテルとかに行かないと無理か」

「ていつ」

「あうっ」

今度はチョップ。だけどデコピンと違って軽い。奏も笑っているのでわざと言ってるな。

何せニヤニヤ笑いながら言ってきたのだ。ホテルって、まったく……。
そこからは再び朝食準備。奏はサラダを、俺はレンジでトーストをそれぞれ作る。

それにしても、奏はやっぱクリスマスよりも大人の女、なんだな。
クリスマスはホテルとは口に出さなかったし、誘い方もストレートでどこか可愛らしいものだった。

奏は、あたしを料理して、だもんなあ。

「ね、仁志」

「……え？」

聞こえた呼び方に違和感を覚えて振り返ると、そこには少しだけ顔を赤くしている、綺麗だけどどこか可愛らしい美女がいた。

「仁志って、そう呼んだんだけど、ダメ？」

「えっと……」

「二人きりの時だけ、こう呼びたいんだけど……ダメ、かな？」

本当に、可愛いよな。ああ、本当に可愛い。

「いいよ。奏の好きにしてくれ。俺は、どう呼ばれても嬉しいから」

「……分かったよ仁志。それと、愛してる」

そこで俺もだよと、即答出来ない俺はまだだだだだと思っただ。そしてそう思っただけで、即答出来ない俺は苦笑してくれた。

なのでお詫びも兼ねて食べ終わった後の洗い物は俺が引き受ける事にした。奏としてはそんな事より別の方法で詫びを欲しかったらしいが、これが一番だと押し切る事に。

こうして出来上がったのは、オーブントースター機能を使って焼いたトーストが四枚とトマトとレタスのサラダ。そしてスクランブルエッグとカリカリベーコンという洋風朝食だった。

「こんなもんだけど、召し上がれ」

「こんなもんなんて言えるか。美味そうだよ。ありがとう奏」

「こ、こんなんで良ければ毎朝作ってもいいよ？」

「じゃ、それはこの一件が片付いた時にでも考えてくれ」

「……うん、そうだね。そうする」

俺の言い方に小さく笑みを見せて、奏はそれ以上何も言わなかった。

そうして食べていると、不意に奏が呟いた。

「ね、次はいつ行く？」

その問いかけが以前のデートとして使った喫茶店の事を言っていると踏んで、俺はトーストを持ったままあっさりと返した。

「そっちが早起きする気持ちがあるなら明日でもいいぞ」

「じゃ、毎朝って言ったら？」

こつちをじつと見つめて告げられた言葉に俺は齧ろうとしていたトーストを下げる。

「それは、悪い。諦めてくれ」

「どうして？」

「マリアとヴェイグに悪い」

「マリアとヴェイグ、ね。仁志、本音を言つてよ。マリア、だろ？」

どこか寂しそうな表情の奏に俺は真剣な表情で告げる。

「本音を言うなら、みんなに俺を理由に揉めて欲しくない。虫の良い事を言ってる自覚はあるけど、俺との付き合いよりもみんなの付き合いは長いし」

「関係ないよ。女、なんだよ、あたし達。惚れた男を取り合うのは、普通さ」

「悪意につけ込まれるって分かっていても？」

「勘違いしないでよ。あたし達が取り合うとすればこの面倒事が終わった後。仁志だってあたし達の中から選んでくれるんだろ？」

「それは……そうしないといけないとは思うけど」

ただ、未来の言葉が頭を過ぎる。俺が現状を望むのなら手を貸しますという、あれを。

分かっている。ハーレムなんて現実には不可能だつて。

大体、俺達は良くても子供が出来た場合、その子達はどうなる？

周囲の目はきつと好意的には見ないだろう。

と、そこで思った。風鳴訃堂はある意味でそういう事をやっていたんじゃないかと。

八紘さんや弦十郎さんだけならまだ分かるが、十人もの子供を一人の女性に産ませるなんて難しい。

なら、おそらくだが複数の女性に子を産ませていたはずだ。それを、彼は自身の強力な力を背景に暗に認めさせていた。

それどころか自分の息子の妻に子を産ませるなんて非道な事までやってのけたんだ。

俺には、そこまで太い神経はない。期間限定ハーレムでさえ無理だろうなと思うぐらいなんだ。

「でも、可能なら今のような時間を過ごしていたい」

それでもと、そう言い続けよう。だとしてもと、叫び続けよう。

俺が願うのはみんなの笑顔だ。俺が戸惑い、怖気づいたら、それが壊れてしまうのなら、迷う事はあっても恐れず進もう。

「今のような、ね」

「ああ。別に俺がみんなから異性として想われてなくてもいい。みんなと時に集まって、騒いだりはしゃいだりしていたいんだ」

俺の本心はそこだ。俺が惚れられてる事はどうでもいい。みんなと、今のように笑っていられる時間が、思い出が欲しいんだ。

「……それは、仁志が誰かを選んだら崩壊すると思う?」

「ずつとはないだろうけど、現状だと一時的にはそうなると思う」

「でも、選ばないなら選ばないでギスギスするって思わないの?」

「水面下で、か。たしかにそれは否定出来ないけど……」

想像が出来ないんだよな。響達がドロドロの女の戦いをやるなんて。

「仁志の考えてる事、当ててやろうか。響や翼がそんな事出来る気がしない」

「……ご明察」

「甘いね。あたしの感覚じゃ、女はみんなその気になったら平気でにつこり笑って敵を刺すよ。それも男には気付かれないように」

「怖い事言わないでくれよ」

「ははっ、冗談だよ。あたしも響や翼はそんな事出来ないと思う。クリスや未来なんかもね」

悪戯を成功させたように楽しげに笑う奏を見ながら、俺は手にしたトーストを齧る。

本当に、勘弁して欲しい。正直修羅場なんて耐えられないんだ。まあ原因を作ろうとしてる奴が何を言うって話かもしれないけど。

こうして食べ終わり、後片付けを終えるまで奏は部屋にいた。

送ろうかと言ったんだが、今日はいいと言われたので玄関先でお別れ。

「あ、そうそう」

「ん？」

ドアを開けて外へ出ようとしたところで奏がこっちへ振り返ってニヤつと笑った。

「あたしとマリアは出来るかもね」

そう言い残して奏は部屋を出て行った。まったく、最後の最後にとんでもない爆弾を落とさないでくれよ。

しかも、俺の脳裏で奏とマリアの水面下でのバチバチが想像出来てしまったのだ。

「……マリアと奏が、もしかしたら一番奥さんしてるって思ってるかもしれないな」

マリアは家庭で夫を支える妻として、奏は職場で夫を支える妻として。

意外と笑えない想像に自分で首を大きく横へ振り、意識を切り換える事にする。

さて、今朝は久しぶりにのんびりと散歩でもしますかね。で、マリア達の家でシャワーを借りて昼寝といこう。

それにしても、奏とキスをしたのに通知音が鳴らなかった。あれは一体どういう事なんだろうか？

キスだけじゃ、ないって事か？ だとすると、足りないものは……俺の言葉だろうな。

「……今度は、ちゃんと想いを伝えよう。言葉にしないと、伝わらないもんな」

蝉が元気よく鳴いている中を歩く。それだけで汗が滝のように流れてきそうだ。

それでも俺と手を繋いでるエルは元気いっぱいだ。その横にいるマリアは多少辛そうに見えるけど。

自室で昼寝をしていた俺だったが、スマホの振動で目が覚めたのは今から大体十五分前ぐらい。

寝惚けた頭でスマホを見ればそこにエルの文字。何かあったのかと慌てて出てみれば、聞こえてきたのはエルではなくマリアの声だった。

——あのね、落ち着いて聞いて。エルが着てみたい服があるって言うてるの。それで出来れば以前行った繁華街に行きたいんだけど、私じゃ土地勘がないじゃない？ それに私だけじゃ、その、お金の方も心もとないでしょ？ 悪いとは思うんだけど、一緒についてきてくれない？

ちなみにセレナは珍しくヴェイグと一緒に昼寝してて、調と切歌は料理の練習をするそうだ。

切歌はあの日俺達へ食事を作った事が切っ掛けでもっと料理を学びたいと思っただけで、調から色々教わるようになったとの事。

——ししよーにまた美味しいご飯を作ってあげるデスよ！

そう自信満々に言っていたのをよく覚えてる。はてさて一体いつになるやら？

「すみません兄様。僕のせいで」

「いいんだよ。エルが自分から着てみたい服があるなんて珍しいしな。なあマリア」

「ええ。本当に耳を疑ったもの。しかも見せてもらったのだけど、中々お洒落なのよ。ようやくエルもファッションに目覚めてくれたのね」

嬉しそうに笑うマリアだが、俺はそれに内心首を捻る。

たしかに出会った当初よりもエルは服装に気を配るようになったと思う。

あの日俺やマリアの意見を聞いて選んでいた事を皮切りに、夏に

なってからよく着ているのはセレナと調の意見を参考に決めたらしいスカイブルーのワンピースだ。

そうそう、エルは基本赤・青・緑・黄の四色から選ぶ。言わずと知れたオートスコアラー達の配色だ。

それと同じぐらい好きなのがライトグリーンとパステルイエローか。前者がエルを、後者がキャロルをイメージすると俺が言ったかららしい。

「エル、マリアに見せたのを俺にも見せてくれない？」

「はい、構いません。ですが、兄様は見る必要もなく分かってくれるかと」

「へ？」

どういう事だと思っていると、マリアが前方を見て笑みを浮かべた。

「駅が見えてきたわ。仁志、私は先に切符を買ってくるからエルをお願い」

「了解」

先んじて駅へと向かうマリア。どうやらエルが自発的に服を欲しいと言った事が余程嬉しいらしい。

セレナもそうらしいが、マリアは抑圧された少女時代を送った反動かやたらと買い物が好きなんだよなあ。

特に服や装飾品といった物。ただこちらでは時間は出来ても金がないので泣く泣く諦めているようだが。

「兄様、先程の話ですが」

「ああ、うん」

「僕、フィリップの格好をしたいんです」

その瞬間、俺は全てを理解しマリアに心の中で詫びた。

だって、これようするにコスプレしたいって事だもの。少なくともエルがファッションに目覚めたとかではない、はずだ。

「え、えっと、フィリップってWの？」

「はい！ スマートフォンで検索して格好を見たら、僕でもおかしくない物だったので」

嬉々として話すエルを見て、俺は最後までマリアにはこの事を黙っておこうと決意した。

それと、今後エルに話す時は出来るだけ女の子という事を意識しようとも。可愛い格好のヒロインとか、出てくる作品の話でもしようかな。

そうなるとアイマスがいいかもしれない。アニマスは話しごとに格好変えたりしてたはずだし。

「お待たせ。えっと、名駅で良かったわよね？」

「そうそう。っと、代金は後で出すよ」

「これぐらいはいいわ。私だって自分で稼いでるのよ？」

ウインクと共にそう言われてはこちらも無理に食いつく必要もない。

まあ代わりにエルのために買う服の代金は俺持ちなのだ。なら、いか。

改札を通り、乗り場へ向かう。エルを間に入れて歩く俺とマリアは、果たしてどう見えているのだろうか？

やはり夫婦なのだろうか？ それとも兄妹？ あるいは、彼氏と彼女？

あの日、俺はマリアと自分を夫婦と見るのは想像力が足りないと言ったが、逆に言えば今の俺達を見ただけで関係性が分かる奴は想像力があり過ぎて怖い。

「まずはどこへ行くんですか？」

「そうね……仁志、どうする？」

「じゃあ、まずは前回と同じである百貨店の店を回ろう。そこで集まらなかつたら、次は別の百貨店を回ればいい。あの一帯に三つぐらいあるんだ」

「へえ、そうなの（なんですすね）」

思わぬところで姉妹らしい感じを出す二人に笑みが零れた。

言った二人も互いを見合って笑っている。

本当に、変わったな。エルもマリアも笑顔が増えた。

「それにしても、一体どこである格好を見つけたの？」

と、そんな質問がマリアからエルへされた。このままでは不味いかもしれんと思つてすかさず割つて入る。

「あの」

「俺が話してた作品で検索したそうさ。で、その中の登場人物がしてた格好なんだよ」

「そうなの？」

「はい」

「エルも変わったよなあ。ファッションに欠片も興味がなかったのにさ」

「そうね。切っ掛けはどうであれ、この人と同じ格好がしたいと思うようになったのは大きいわ」

内心安堵する。まさかただのコスプレですとは言えないし知られたくない。

マリアはきつとエルがこれを切っ掛けに色々とファッションへ興味を示すだろうと思つてる。

だけど、事實は違う。エルは、大好きな作品のキャラだからしてみたいだけなのだ。

なので嬉しそうに笑みを浮かべているマリアに気付かれないようにエルへ耳打ち。

「エル、ちなみにフィリップ以外の格好をしてみるつもりは？」

「特にありませんが？」

「……今日、目当ての格好を探すついでにマリアにも数点服を見てもらおうか、中々服屋を沢山回る事も出来ないしさ」

「あ、そうですね。そうします」

「ちよつと、何をこそこそ話してるのよ？」

おつと、少し長く話し込み過ぎたか。

「ああ、丁度いいからマリアにも服を選んでもらいなつてね」

「はい。沢山の服屋さんを回る事も珍しいので」

「そう。分かつたわ。しっかりエルに似合う物を探してあげる」

「あつと、じゃあ悪いけど向こうに到着したら少しATM寄つていいか？ 軍資金を調達しておきたい」

「ええ、構わないわ」

こうして俺達は水着を買いに来た時以来に総合駅へやってきた。まずATMコーナーで動画収入の方から軍資金を調達し、向かったのは俺が本来足を運ぶ事のないファッション関連のフロア。

そこをゆつくりと見て回りながら、マリアがああでもないこうでもないで難しい顔をする横で俺とエルはフィリップらしい格好を探した。

だが、これが中々難しく、仕方ないので店員へフィリップの格好を見せて、これに似たような格好でエルが着れる物はないかと尋ねる事に。

すると、流石は一流百貨店。これは何階のどこどこにという風に調べてくれたのだ。

なのでまずはエルが希望している服を手に入れる事にして店を回る事に。

その結果、エルが納得出来る服が揃ったのだが、当然のように合計金額が1万では収まらないレベルになった。

「思ったよりも結構な値段になったわね」

「だなあ」

「す、すみません兄様」

「いいよいいよ。エルはみんなの中でも一番お金を使わないからな。たまの事だし、散財したっていいさ」

「そうよ。エルは少しお金を気にし過ぎ。だからこういう時ぐらい金額なんて考えないでいいわ。それは私や仁志が考えるの」

「そういう事」

「はい、分かりました。ありがとうございます、兄様、姉様」

その後はマリアの買い物へとシフト。というのもエルが彼女へこう言ったのだ。

——たまには姉様自身の服を選んでください。

実はマリアはこっちに来た時に持ってきた数点の服を着回していたのだ。勿論こちらで買った物も少しはあるが、それらは言うなれば安物であり部屋着レベル。

俺の財政が厳しい事を受けての、マリアらしい気の遣い方だった訳だ。エルやセレナ、切歌に調へ可愛い服をと、そう思っていたのである。

俺もそう言われるまで思い至らなかつた。なので俺が代金は持つからとマリアの背中を後押ししたのだから。

「仁志、エル、これなんてどう？」

片手に秋物らしい服を持ってこちらへ問いかけてくるマリア。ただ、それを見ても俺の感想は一つしかない。

「うーん……」

「姉様は綺麗ですから何を着ても似合います」

「そうなんだよなあ。正直マリアは何を着ても似合うんだよ」

そう本音を告げるとマリアが嬉しそうに笑う。美人は何を着ても美人なのだと思ふのだ。

だからと言って、それだけでは満足しないのが女性というもの。それを漫画やアニメで学んだ俺は、マリアが手にしている服へ目を向けてそれを着ている彼女を想像してみた。

似合っていると思うが、やっぱりここはこう言うべきか。

「でも、俺はそれを着たマリアが見てみたいかな」

「そ、そう。じゃあ、ちよつと試してみるわね」

上機嫌で試着室へと向かうマリアを見送り、俺は隣のエルへ顔を向けた。

「正解？」

「おそらくですが」

俺の問いかけにエルが苦笑する。その顔も可愛いと思うのは、親バカならぬ兄バカなのだろうか。

そこからはマリアのファッションショーのような展開となった。

俺とエルはそれにただただ感嘆するばかり。いや、本当に何を着ても似合うし綺麗だし時々可愛いしで文句も不満もなかったのだ。

「これとこれ、どちらがいい？」

「両方買えばいいじゃないか」

「気持ち嬉しいけど選んで欲しいの。一着ぐらい仁志の選んだ物が

欲しいから」

その言葉通り、マリアは結局その一着しか服を買わなかった。俺が別にいいと言ってもキリが無いからと、そう小さく苦笑して。

ならばと、俺は荷物を持つている事を利用して、トイレに行くと言ってマリアとエルに先に下の階へ行ってもらい、その間に最後手にして買って買わなかった方を購入した。

俺が選んだ物が欲しいのなら、俺が着て欲しい物も受け取ってくれるはずだろうと、そう思つて。

そうして二人へ合流し帰路へ就く事に。電車の座席に座り、外の景色を眺めるエルを俺とマリアが揃つて笑顔で見つめる。

「兄様、あれが新幹線ですよね？」

「そうだな。かつてののぞみで今のひかりだ」

「名前が変わつたの？」

「最初の新幹線はこだまで次がひかり。その次に出て来たのがのぞみ。その三つの名称で新幹線は運用されてたんだけど、のぞみ以降は500系とか700系と言う感じで名称が新しく作られなくてさ。で、最初のこだまが引退して、初代ひかりがこだまとなり、初代のぞみがひかりとなり……って感じで名前を譲つていつてるんだよ」

初耳なのか、あるいはマリア達の世界では新幹線の歴史が異なるのか、とにかく二人は俺が父親から聞いた話に感心しているようだった。

そこで俺は期せずして父親の事を話す事になった。乗り物好きな少年みたいなどがあると言うと、二人して苦笑するなり俺は父親似だと言つてきた。

……強く否定はしない。実際俺の趣味も父さんの趣味と同じく子供っぽいと言われてもおかしくないし。

「模型、ですか？」

「うん、父さんの小さい頃は家が貧しくて、それなのに子供が父さん入られて四人もいたから大変でさ。欲しい物がほとんど買えず、父さんは小さい頃から家の手伝いとして新聞配達とかしてたつて聞いた」

「苦労したのね……」

「だから、その反動だと思うけど大人になって自分で稼ぐようになってたら趣味へ全力投入だったらいい。一つ笑い話があつてさ。初めて車を買った時なんか、ホイールなんだと色々と手を加えてたら金がなくなつて、その時にガソリンを買う金を残してない事に気付いたらしい」

そう言つたら二人して大笑い。電車の中なのですぐに手で口を押さえたけど、顔は笑つたままだつた。

俺もこの話を聞いた時は本当にそんな事つてあるんだなと思つたぐらいだ。

さすがの俺でもそんな事はしてない。まあ、逆に言えばそれだけ夢中になつてたんだと思う。

そういう意味では、俺は父さんの子なんだなあ。今も相変わらずヒーロー達を目指して、追つ駆けて、夢中になつてる。

「エル、今度一緒に模型を、プラモを見よう。今だとライダーのプラモがあるんだ」

「ぶらも?」

「プラモデルの略称。で、そのラインナップにはWもある」

「ホントですか?」

「ああ。エルは細かい作業とか得意だし、フィギュアよりも自作するプラモの方が愛着も余計強くなると思うからさ」

「ちよつと、エルにまた妙な趣味を作るつもり?」

「マリアのこつちを見る目が苦笑している。いいじゃないか。今だつて家の手伝いが終わると時間の過ごし方に若干困つてみたいだし。」

そう思うも口にはしない。ただエルの頭を撫でながらこう言つた。

「趣味になるかどうかはエル次第だよ。俺は、エルが自分では触れない事を教えてみるだけだ」

「それでエルがのめり込んでいきそうだから言つてるのよ」

「兄様の教えてくれる事はどれも興味深いです」

「ほら」

小さく笑みを浮かべながらマリアがそう告げると、エルは嬉しそう

にこつちを見上げ、本当に親子になったかのような気分させる。

ああ、本当にそうなれたらどれだけ幸せか。こんな美人の嫁さんに可愛い娘を持てば、俺はきつと生きるのを諦めるなんて言葉を思い出す事さえないだろう。

でも、それはマリアじゃなくてもそうなる。響でも、クリスマスでも、翼でも、奏でも、未来でもそうだ。

「じゃ、いつそエルの趣味を男の子じみたものばかりにしてやるか」

「止めて。そうでなくても今だって女の子らしくないんだから」

「マリアも自分の趣味をエルに教えていけばいいじゃないか」

「わ、私の趣味？　そ、そう言われても……」

「姉様は体を動かすのがそれだと思います。ジムに行きたいとよく呟いていますし」

「え、エル!?!」

「あー、そっか。そういうえば緒川さんとミット打ちしてたもんなあ」

OPで、だけど。

「そ、そんな事まで知ってるの?」

「まあ。ヨガとかもクリスマスとダイエツトの一環でやってたのもな」

「っ?!　わ、忘れなさい」

「無理言うなよ。あのメモリアイベント、中々女性らしいと思って好きなんだから」

「「めもりあいイベント?」」

そこから俺はメモリアイベントについて説明を始めた。

エルとマリアはその間似たような表情で俺の話聞き、本当に姉妹かと錯覚するぐらいだった。

やがて最寄駅へ到着し、俺達はまた手を繋いで歩き出す。愛らしいエルと綺麗なマリアと共に歩く俺は、周囲には親子と見られているだろうか。

そう見えていて欲しいと思いつつ、俺はマリア達の暮らす平屋へと向かう。

そして玄関へエルが先んじて入っていく中、俺はマリアへ彼女の服が入った袋を渡しながらあの事を告げる事にした。

「マリア、これ」

「ええ、ありがとう。大事に着るわ」

「そうしてくれると嬉しいよ。それと、中を見てくれ」
「え？」

不思議そうに袋の中を見て、マリアが何かに気付いたらしく顔を弾かれたようにこっちへ動かした。

「ひ、仁志、これ……」

「俺が着て欲しい服だ。選んだ服はマリアに似合うだろうと思った物。そっちは、俺が見てみたい物だ。これなら、受け取ってもらえるか？」

「……………もうっ、本当に貴方って人は」

嬉しそうに袋を抱き締めて微笑むマリアに俺も笑みを返す。どうやら喜んでもらえたようだ。

「兄様、姉様、早く中へ。冷気が逃げます」

「今行く（わ）」

互いに見つめ合ったままそう返して、俺はそっとマリアへ近付き頬へキスをする。

「……………仁志」

「今はそこで勘弁してくれ。場所も場所だし」

「そう、ね。でも、だからこそ、こゝこ、でも良かったのよ？」

唇を指さしてマリアは妖艶に微笑んだ。本当に奏といいマリアといい、年長の女性は本気で怖い。

「今そこへしたら押し倒すから」

「つ……なら、別の機会にしないとイケないわね。それとも、今夜？」

「よし、早く中へ入ろうか。お互い熱で思考がおかしくなってきた」

マリアの手を掴んで玄関へと向かう。すると後ろからクスクスと笑う声が聞こえてきた。

仕方ないじゃないか。このままだと本気で不味い気がするんだ。

若干寝不足もあって、さっきのマリアの言葉で本気で色々考えそうになったし。

この後、エルが買ってきた服へ着替えると、マリアがやっとエルが

お洒落に目覚めてくれて嬉しいとばかりに笑顔を浮かべる中、切歌達はおそらくエル本人から聞いていたのだろう、全員揃ってフィリップのコスプレだと理解してるようで微妙な顔をしていた。

俺はそんなみんなを眺め、すっかり家族のようになったんだなあと改めてしみじみ感じる事となる。

夕方近くとなっても、この時期はまだまだ暑い。そんな中でも俺はぶらぶらと散歩していた。

何もする事がない訳ではない。運動しようと思つて散歩していたのだ。

しかも、俺の隣には美女が同伴しているのである。

「やっぱりまだ暑いですね」

「だなあ」

翼の言葉に同意を返す。エルとマリアのファッションショーを見た後、俺は自室へ戻りまた軽く寝たのだが、ほんの一時程度で目が覚めてしまい、それならとこうして散歩を始めた。

で、一人では何なので翼達のアパートまで行き、奏でも散歩へ誘おうと思ったら彼女はまだ寝ていたらしく、翼が代わりについてきてくれる事になったのだ。

「翼は、朝走る以外に何か運動してるのか？」

「それが特には。多少トレーニングらしい事はしていますが……」

「ああ、部屋じゃ限界があるか」

「はい。マリアや奏とジムへ行きたいと時々話しているぐらいで」

「ふむ、現状なら不可能じゃないけど……」

みんなの協力により動画からの収益は右肩上がりだ。

更に翼提案の響とクリスでの歌い直した“RADIIANT FORTUNE”もかなりの再生数を稼いでくれているし、“激唱インフィニティ”もそれに負けず劣らずの勢い。

気付けばチャンネル登録者数も50万へ届きそうなところまできている。多分だが、本来はアニメって事がフィルターとなり見向きもしなかった人達が、そういうフィルターを無くした事でシンフォギア

の、みんなの歌の魅力を知ってファンになつてくれているのだと思う。

「どうする？　ここから一番近いジムを探して会員になる？」

「いえ、そこまでは。それに後々の事を考えると……」

そう言つて翼は表情を曇らせる。そうか、彼女達がここからいなくなるまで退会手続きなんかも出来ない。

「そう、だな。金をかけずでも出来る事ならそれでいいか」

「はい。それに、その、こうして仁志さんが運動に誘ってくれるのなら、ジムなんかよりも私は継続出来るのですが？」

「……これから夕食前にも軽く散歩しようかな？」

「あ……はい、それがいいかと思ひます」

嬉しそうに微笑む翼にドキツとする。本当に綺麗と可愛いが共存している女性だよな。

そういえば、翼達も服はどうしているんだろうか。ふと気になったので聞いてみる事に。

すると、思いがけない答えが返ってきた。

「あつちから持ち込んでた？」

「はい。以前から私は時間が自由に使えるので、悪意の動向を探る際についてのこと」

「は、気付かなかつた」

「現在ではカオスビーストの事もありますが、そもそもゲートも閉じていますから出来ていませんが」

そうか。だから響達も服に困る事がなかつたのか。

こうして考えると俺は本当に色々と抜けているんだなと実感する。服の事も髪の毛の事もだ。

「もう必要ない？」

「そうですね。当分は構わないかと。ですが……」

そう言つて翼が少し悪戯っぽく笑う。

「貴方に見せたい服が欲しくなつたら、別かもしれませんね」

反則だろ。小悪魔な雰囲気翼なんて、本気で反則だ。

「……スケベな下着とかでも？」

「あ、貴方が望むのでしたら」

そこで二人して赤面して顔を背ける。何というか、きつとあれだ。今の俺達は俗に言うバカップルだ。

「な、何か悪い」

「い、いえ、私も同じようなものですから」

何というか、これはこれで幸せだ。と、そこで思った。翼って、もう感覚的には成人してるんじゃないかって。

「なあ翼。翼ってもう感覚的には成人だよな？」

「え？ え、ええ、そうですね。こちらで過ごした時間を加味すれば成人です」

「……今夜、俺の部屋で飲まないか？ マリアと奏も一緒に」

最初は二人きりだと思ったが、そうなった場合確実に事へ及ぶ気がして急遽ドライデーヴァとの飲み会へと変更する。

「飲み会、ですか。そう、ですね。いいかもしれません」

「興味はあるんだ？」

「ないと言えば嘘になります。ふふつ、いよいよ私も本格的に大人の仲間入りを果たす訳ですね」

楽しそうに笑う翼を見て、俺も小さく笑みを浮かべた。こうして見ると翼は可愛さが分かり易いなあ。

飲み会は夕食後にする事とし、集合時間は午後七時にスーパーとした。酒やつまみの買い出しのためである。

マリアへは俺が、奏へは翼から話をする事となり、そこからは別の話をする事に。

話題は、翼が以前話した店の事。小料理屋を開いて云々のあれである。

翼は、本気でこっちか本来の世界で店を出そうと思っっているらしく、俺をその板前もどきにしたかったようだった。

「私一人よりも仁志さんがいた方がいいと思うんです」

「まあ、それはね」

翼一人では酒に酔った勢いで変な事をする奴らが出た場合面倒になる。

「自宅兼店舗で、二階が私達の住まいですね」

「そう、なるかなあ」

「あるいは近くに家が別に？」

「その方がいいとは思うよ」

話しているとおぼんやり浮かぶその生活。

昼近くに目覚め、二人で朝昼兼用の食事を食べ、二人で買い出しに出かける。

お買い得品などを見ながらその日のメニューを考えつつ買い物を終えて店へ行く。

二人で仕込みを始め、夕方の開店前に軽く食事をして翼が暖簾を出しにいったら開店。

「……割烹着、だなあ」

「ふふっ、奇遇ですね。私も今想像していたのだと割烹着です」

「着物は歌う時？」

「いいかもしれませんね。もしくは休日の営業？」

「いつそランダムでいいんじゃない？ その方が特別感とそれ見たさで通ってくれる人が出来そう」

「そ、そうでしょうか？ なら、その、着物の日はそ、そういう事をしてもいいと言う合図に」

その言葉の途中から腕に抱き着かれて、最後にそれだ。はつきり言っただキドキしない方がおかしい。

だけど、その、着物姿で布団の上にいる翼を想像すると、正直興奮する事必至だろうと思った。

「……翼って以外とスケベ？」

「……………仁志さんを思うようになってから自分でもそうかもしれないと思ひ出しました」

真つ赤な顔でそう言っ翼は上目遣いでこっちを見つめる。

「そ、そんなはしたない女はお嫌いですか？」

「むしろ好きだ」

反射的に答えてしまい、俺は思わず足を止める。すると翼はそんな俺に驚き、すぐに恥ずかしそうに俯くと……

「そ、それなら良かったです。私は、仁志さんの前でだけそういう女となりますね？」

と、そんな衝撃で強烈で刺激的な発言をしてくれたのである。

もう散歩って気分じゃなくなつた。許されるのならどこかで連れ込んで、そんな事を言つたのを後悔させたいぐらいだ。

でも、それは出来ない。なのでせめてと翼の体を引き寄せて近くの塀へ背中を向けさせ、両手を顔の横へと勢い良く置いた。

「っ……ひ、仁志さん？」

「翼、俺だつて男なんだぞ？ そんな事を、今の互いの想いを知つてる状態で言えばどうなるか分からないか？」

意識して低い声を出す。目付きも少しだけ鋭くした。

翼が、息を呑むのが分かつた。

「……それが、望みだとしたら？」

「………まだ時期が悪い」

「時期が良くなると時機が悪いのです」

「っ……それは」

翼の言いたい事は分かる。悪意の脅威が消えた時、俺達がこうして過ごせるかは分からないからだ。

そうなら、今は状況は悪いけれど時機としては間違つていない。でも……

「翼、君は俺に君を操り人形にさせるかもしれない事をやれつて言うのか？」

「……仁志さんと結ばれるのならそれでも構いません」

「翼……君はそこまで……」

凜々しく、ではなく微笑みと共に告げられた言葉に、俺はそこへ込められた想いを感じ取つて返す言葉がなかつた。

「せめて心から好いた方と。きつと、これも女の本質なのでしょう。一夜だけでもいい。貴方の女だと、そう強く思えたら、と」

「翼……」

「きつと、これは私以外も同じはずです。マリアや奏は言うまでもなく、雪音も立花も小日向とてそうです。みな、仁志さんと出会い、関

わり、心は女となりました。あとは、この身のみ」

そこで悲しそうに微笑み、翼はそつと俺の頬へ手を当てた。

「貴方は悪意に私達が操られる事を恐れ、選べないと言ってくれた。選べば、今の私達は心に大きな傷か影を作るから。闇を、抱えてしま
うから」

ゆつくりと翼は俺へ顔を近づけてそつと頬へキスをした。

偶然にも、以前奏がしたのとは逆の場所へ。

「なら、いつそ傷付けてください。私達に貴方のものだという証を。
私達は、貴方になら傷付けられてもいいのです」

「っ?!」

その言葉に、俺はあの夜の事を思い出す。悪意に乗っ取られたマリ
アが告げた、あの言葉もそうだった。

俺になら傷付けられてもいい。あれは、やっぱりそういう意味なの
か。

俺がそんな事を考えていると翼の手は頬から離れ、俺の背中へと回
された。

「なんて、そんな事を言えば貴方が困ってしまう。だけど、それでも言
いたくなるのです。少しでも貴方の気を、心を、自分へ向けていたく
て」

「そつか……」

やっと分かった。どうして最近のみんなが少しエッチな方向なの
か。

俺の関心を少しでも惹きたいからなんだ。例え一瞬でも自分の事
だけを考えて欲しいという、そんな女心なんだ。

「分かったよ翼。その、ありがとう。だけど、やっぱりそういう事はま
だ、さ」

「ええ、分かっています。ですが、それぐらいの想いはあるとだけ分
かってください」

その言葉であのクリスの言葉が甦る。そう、だな。それぐらい、み
んな俺へ想いを抱いてくれるんだ。

なら、それに対して俺も真摯に向き合わないとな。せめて、彼女達

が好きになって良かったと、そう思ってくれるような男であるために。

「翼、ちょっといいか？」

「はい？ っ?!」

壁ドン体勢のまま翼へキスをした。そつと顔を離すと翼が潤んだ瞳を向けてくる。

「仁志さん……」

「今だけは君だけを、翼だけを見てる。なら、これぐらいは俺だつてしたくなるさ」

勿論それ以上も。そう言いたかったけど、言わずにおいた。きつと言えば、俺も翼も自分を止められなくなると思って。

だけど、翼はそれを察したのか嬉しそうに微笑んで俺の腕へと自分の腕を絡めてきた。

「仁志さんって、本当に今まで交際経験ないんですか？」

「そうだよ。いや、本当に環境が人を作るんだな」

「だとすれば、私は立花や雪音に感謝しなければなりませんね。おかげで、女としてまた一つ成長出来ました」

「それは良かったよ。ところで翼？」

「はい？」

「いつまで、その、当ててるつもりだ？」

俺の腕に感じる柔らかな感触。それを阻む何かの感触も含めて、これは意図的だろう。

「そ、その、せめてこの時間が終わるまでは、貴方の意識を私の事だけでいっぱいにしたくて」

……反則だろ、こんなの。あの風鳴翼だぞ？

それが真っ赤な顔で可愛らしい気持ちと声でそんな事を言ってきたら、もう何も言う事が出来ないに決まってる。

結局この後十分以上はあてもなく二人で歩き続けた。アパートまで翼を送り、俺は急いで部屋へ帰って邪念を吐き出す事にした。

そうじゃないと不味いと思ったのだ。酒が入って暴走しないためにもと、そう思つて。

まさか、それが後であんな事に繋がるなんてこの時の俺は思わなかった……。

「結構買ったなあ」

俺達の目の前にあるテーブルには、アルコールの類がごろごろしている。

カクテル系が多いのは女性ならではだろうか。それとハイボール系もある。こちらは俺が選んだものだ。

「いいじゃん。翼の初めてのお酒だしさ」

「でも本当に少し買い過ぎじゃない？ 私もあまり言えないけど」

「私はそれよりもこちらの方が驚きだ」

そう言つて翼が手にしたのは生パスタ。俺が買った物である。それとミニトマトと生ハム、海老に鷹の爪、そしてオリーブオイルにガーリックチップもだ。

「本当に貴方が作るの？」

「そうだよ。たまには男の手料理つてのでもいいだろ？ それに、こう言うのはズルいかもしれないけど、俺が女性に料理をふるまうのは初めてだぞ？」

その言葉だけで三人が黙って、そして嬉しそうに微笑んだ。

「ま、軽く飲んで待つてくれよ。あつ、乾杯だけしとくか」

「そうね。翼、どれから飲む？」

「そ、そうだな……。じゃあ……。これを」

翼が手にしたのはホワイトサワー。

「じゃあたしはこれ」

奏のは、定番と言えるかもしれない梅酒系。

「なら私はこれにするわ」

マリアは王道の缶ビール。

「俺はハイボールを。じゃ、翼の大人の仲間入りを祝してえ」

「」「乾杯」「」

缶を軽く重ねてプルタブを開けると、その音がほぼほぼ同時に聞こえる。

ちよつとだけ缶を呷り、久々の味に表情を歪める。何だろうか。今までで飲んだ酒で一番美味しい気がする。

「あくつ、最高!」

「大袈裟、とは言えないかしら。翼、どう?」

「美味しい、な。その、ジュースみたいだ」

「カクテル系は飲み易いけど、意外と度数高いから飲み過ぎないように。さて、なら俺は作り始めるか」

「期待してるよ仁志先輩」

奏はそう言つて手にした缶チューハイをごくごくと飲んでいく。おーおー、凄いな。

「か、奏? そんな速度で飲んで大丈夫?」

「つかあく……平気平気。あたし、意外と強いんだ」

「誰も弱いなんて思つてないけど、ペース考えなさいよ? 酔い潰れたら面倒だし」

「分かつてるつて。でも、どうせならここで泊まっていきたいなあ。

ねつ、仁志先輩。ダメ?」

「ダメ」

見事に俺達の意見が一致した。一度泊めた事はあるけど、あれは事情が事情だったからだ。

それに、今の奏だと酔つた状態で泊めるなんてある意味怖くて出来ない。

「チエツ、何だよ。仁志先輩だけじゃなくて翼とマリアまでさ」

「当然でしょ?」

「奏、何があつても私が連れて帰るから」

「せんぱい、ダメえ?」

「……ダメ」

可愛いと思つてしまった俺はダメかもしれない。てか、もう軽く酔つてないか?

「ケチ。あつ、ならこの三人で泊まるのは?」

「もつとダメだつての。響達と同居してた時だつて、仕方なくだったんだ。現状では絶対に許可出来ません」

酔っ払いの相手はこれぐらいにして、そろそろやりますか。

そう、ある漫画で読んで美味そうだなと思つて試しにやつてみたら、本当に簡単だったので一時期バカみたいに食べてた料理を。

その名も、生ハムと海老にミニトマトのペペロンチーノもどき。

酒のつまみにはちよつと豪勢だけど、ドライデーヴァと飲むならこれぐらいなんてことない。

どれぐらい振りかにフライパンを手に取つて見て、微かに苦笑してからパスタ作りの準備開始。

まずはミニトマトのヘタを取つて洗い、それが終わつたら次は海老の殻むき。

「何かさ、ここのうのいいよね」

「何が？」

後ろから聞こえてくる会話へ耳を傾けつつ、俺は下準備を進めていく。

どうやらもう泊まるのは諦めたらしい。良かった良かった。

つと、背ワタ取るための串とかないな。仕方ない。包丁で少し切れ目作つて洗い流そう。

「ん？ 何か旦那が自分のために作つてくれてるみたいじゃん？」

その瞬間、間違いなく空気が変わった。何というか、ここのう、若干張り詰めるような何かがあった、気がした。

「そうね。たしかにわ・た・しのために作つてくれてる感じがあるわ」
「ははっ、もしかしてマリア、もう酔ってる？ あたし、自分のため

にうて言つたよね？」

「聞こえてたわ。だから、私自身のためについて思つただけけど？」

ちよつと待つてくさいよお！ 何でもう酔ってるんですか!?

ていうか、奏、自分でさつき言つたよね？ あたし、意外と強いって。

「ひ、仁志さん」

気付けば翼が俺の後ろにいた。怯えるような表情とその手に握られた缶チューハイのギャップがちよつと可愛い。

「奏とマリアを、止めるべきでしようか？」

チラリと後ろを見やれば、それぞれ不敵に笑みを浮かべながら酒を口にかけている二人の美女。

うん、怖い。酔ってても酔ってなくても、怖い。

「……翼、手伝ってくれる？」

「あ……はいっ！」

止めるのは本当にヤバくなったらにしよう。それまでは翼をこっちで保護するべきだ。

なので翼には切れ目を入れた海老から背ワタを取ってもらう事に。その間に俺は鷹の爪を処理する。種を取って小さく輪切りにしていく。それが終われば次は生ハムへ取り掛かろうとして、それは翼に任せようと考え直す。

「翼、それが終わったら生ハムを食べやすい大きさに切ってくれるか？ でもあまり小さくし過ぎないでくれ」

「分かりました」

さて、ではフライパンを温めますか。それと、二人はどうだ？

「前々から思ってたけど、奏、貴方ちよつと仁志に近過ぎない？」

「何言ってるのさ。それを言うならマリアだろ？ 食事を作ってるからか、奥さん気取りじゃん」

「なら貴方が代わってくれてもいいのよ？ あっ、ごめんなさい。貴方は一緒に勤務があるものね。それじゃあ仁志がお腹を空かせてしまおうわ」

「……いい度胸じゃん。なら、そっちも弁当屋辞めて夜勤やる？」

あつと、ごめんごめん。そっちは妹達の食事の支度あるもん。それじゃセレナ達が困るか」

……バチバチにも程がある。やっぱり止めに入るべきか。

「仁志さん、切り終わりました。次は何をすれば？」

そこへ聞こえる翼の声。心なしか普段よりも笑顔が明るい。そう思っていると、翼は傍に置いていた缶チューハイを手にして一口クピツと呷る。

「ふう……美味しい」

何だろうか。もしかして翼も少し酔ってきてる？

「っ、翼？」

「何ですか？」

「その、体の方はどう？ 動悸が激しいとかない？」

「はい、ありません。強いて言えば体が多少熱いぐらいです」

「ああ、そう」

「どうやら翼は酒に弱い訳ではないようだ。楽しそうに缶チューハイを呑む姿はとても可愛らしい。」

「……て、あれ？ よく考えるとさっきまで怯えてたはずなのにもう笑ってる？」

「仁志さん、仁志さんの飲んでた物も飲んでみてもいいですか？」

「俺が考え事をしてしていると翼からそんな事を言われた。」

「えっと、もうそれは飲んだの？」

「はい。とても飲み易かったの。」

「これ、止めといった方がいい気がする。でも、ここで止めて泣き出したりとかしないだろうか？」

「翼、その……」

「ダメですか？ 仁志さんの飲んでる味を、知りたいんです」

「にっこりと笑ってこう言われてしまっっては弱い。」

「ゆっくり飲むんだぞ？」

「分かりました。ありがとうございます」

「ルンルン気分でテーブルへと向かう翼を見送り、俺は確信した。うん、あれは酔ってる。」

「じゃなければ奏とマリアが視線でバチバチ火花散らしてるところへ平然と戻っていけない。」

「……とりあえず作って強制的に空気を変えるか」

「そう呟いて俺は飲んでたハイボールを飲もうと思って、テーブルに置いてきた事を思い出す。」

「酒でも飲んでなきゃやってられないと思っただらこれだ。やれやれ、仕方ないから取りに行こう。」

「あつ、仁志さん。これも中々美味しいですね」

「そっか。それは良かったよ」

ニコニコ笑顔でハイボールを飲む翼に若干癒される。いや、だって奏とマリアは無言で睨み合うようにしながら缶を叩ってるもの。

「……あれ？」

恐ろしい光景から目を背けるようにテーブルを眺めれば、そこにあるはずの俺の飲みかけハイボールが見当たらない。

たしかに置いたはずなんだが……？　もしかして流しに置いたか？

そう思っただけで流しへ目をやっても、そこにはそれらしい物は見当たらない。

「つかしいなあ」

どこに置いたと、そう思っただけでテーブルを再度探しても未開封の物しかない。

「……ん？　未開封？」

俺が買ったハイボールは三つ。一つは翼が飲んでる。では、未開封はあっても一つでなければおかしい。

「………翼、それって俺の飲みかけ？」

「はいっ！　新しく開けるのもどうかと思って！」

あー、完全に酔ってる。だって気付いたらこの子、声大きくなってるもの。

陽気に笑う翼って新鮮だけど、どうやら笑い上戸の気があるようだ。

「ちよつと翼、それはズルいよ。あたしにもちよーだい」

「あら、それなら私も欲しいわ」

で、俺の飲みかけと聞いた瞬間意識をこっちへ向ける歌姫二人。

「いいよ！　じゃあ、まず奏！」

「ありがと」

「飲み干したら怒るわよ」

うん、もうこれはダメだ。大人しくパスタ作ってこよう。で、それを食べさせて少し落ち着かせよう。

決して目の前の事から逃げた訳じゃない。うん、逃げてない。これは、あれだ。戦略的撤退ってやつだ。

「仁志先輩の味がする」

「そんな訳ないだろ」

「嘘？　ちよつと貸しなさい。私が確かめるから」

「いや、だからさ？」

「えっ!?　あれ、仁志さんの味なの!？」

「翼、声押さえて」

「あははっ、翼酔ってるね」

「うん、それ君が言う？」

「これが仁志の味？　でも、そう言われると普通のお酒と味が違うわね……」

「ハイボールだからだろ。てか、もしかしてマリア、君も酔ってるの!？」

気付いたら俺以外酔っ払いと化していたでござるの巻。

というか、これどうしよう？　酔っ払い二人を未来の待つ部屋へ返すのすっごい忍びないんだけど？

あと、まさか缶チューハイ一本で三人して酔うとかどうなってるの。俺もそこまで強い方じゃないけど、さすがにそれじゃ酔わないぞ？

「仁志先輩、そんな事どうでもいいからさ。早くパスタ作ってよ」

「あつ、私手伝いますよっ!」

「翼はもういいから。とりあえずゆっくり飲みなさい。奏は今飲んでるので終わりな」

「え〜?」

「仁志、これ美味しかったわ。ごちそうさま」

「あ、うん……」

俺の飲みかけはマリアによって飲み干されました。一口しか飲んでなかったんだけどなあ。

そう思っしてしよぼんとした気持ちで空き缶を眺め、俺は仕方ないので未開封の一つを手にして流しへと戻る。

とりあえずパスタを作ろう。で、早くあの混沌とした場所を制御しなくては。

後にして思えば、ここで馬鹿正直にパスタを作ろうとしていた俺もどうかしてたんだと分かる。

でも、この時はそうするべきだと思ったんだ。多分だけど俺は俺で予想外の状況にテンパってたんだと思う。

で、パスタを作って大皿に盛ってテーブルへ戻ると、三人が一斉にこっちへ顔を向けて嬉しそうな顔をした。

「おー……」

「凄いじゃない」

「美味しそう……」

「普段なら均等に取り分けるところだけど、今日は飲み席だしそれで好きなように食べていってくれ。はい、フォーク」

「二「ありがとうございます」」

多少落ち着いたのか翼の音量が落ちていた。だけど笑顔はそのまま。何とか可愛い。

で、奏も普段の調子に戻ってる感じがあるし、マリアもそんな雰囲気だ。酒が抜けた、なんて事はこんな短時間じゃないから、おそらく少しだけ落ち着いたのだろう。

そして、俺が作った贅沢ペペロンチーノを食べた三人の感想は……

「二「美味しいっ！」」

「そっか。良かった」

「これ、お酒に合うわね。ガーリックがいい感じよ」

「海老がプリップリで、トマトは熱入ったからか甘酸っぱくて、もう最高だよっ！　酒に合う」

「この辛味が……んくっ……はあく。ふふっ、お酒が進んでしまますね」

「そうだろ？　今日はいつもより心持ち鷹の爪を、唐辛子を増やしたんだ」

「仁志、後で作り方教えて。唐辛子を減らせばエルやセレナも食べられるだろうし」

「あたしも教えて欲しいな。これ、普通に食べたい」

「私も知りたいです。小日向も気に入ると思うので」

「いいよ。じゃ、後で教えるな」

良かった。やっと俺が思い描いた飲み会になった。一時はどうなるかと思った。

パスタがなくなると、次は買ってきたチーズやピーナッツをツマミに飲む。

その間の話題はドライディーヴァの今後だった。

出来るだけドライディーヴァにはオリジナルをと、そう言っているために動画配信の速度が犠牲になっている現状を三人はどうにかしたいらしい。

何せ現状ではRADIANT FORCEと天鳴ノ協奏曲だけだ。次はいつやるかと、そう三人は俺へ聞いてきた。

というのも、どうも俺が聞いてくれると思わないと歌えないんだぞうだ。ドライディーヴァは俺のためのユニットだと、そう三人は暗に言ってくれたのである。

嬉しかった。同時に多少の申し訳なきもあった。本当なら俺だけのためじゃなく、大勢のファンのためにあつて欲しいから。

「じゃ、また近い内にこの四人でカラオケか」

「何ならここで歌ってもいいよ?」

「近所迷惑よ」

「そうだよ奏。仁志さんが追い出されちゃう」

「いいじゃん。そうならあたし達の部屋においでよ」

「おい」

一体どこの誰だ? 似たような状況で俺達をお説教したのは?

そんな気持ちで見つめると奏が拗ねたように口を尖らせた。

「だってえ、あの時の仁志先輩も翼達もお互いをそういう相手って見てなかったじゃん。でも、今のあたし達は三人共仁志先輩なら手を出されてもいいって」

「ストップっ! そこまでよ。そんな事、私が許さないわ」

「何でマリアに許されないとイケないのさ?」

「そ、そうだよ。これは私達の問題だよ、マリア」

「翼、君まで……」

酒が入ってるせいとか、全体的にヒートアップし易い。これ、どうするべきか。

あと、地味に翼が口調を使い分けられなくなってきてる。酔ってるって事だろうな。

「仁志、貴方はどうなの？　ここを出て行く事になったら奏達の方へ行くの？　それとも私達のところへ来るの？　どっち？」

「ええ……」

何故か選択肢にさらりとマリア達の家が追加されてる。もしかして、マリアも俺と一緒に暮らしたいんだらうか？

……有り得る。最近エルやセレナからも一緒に暮らそうと言われてるし、ヴェイグや切歌など前からそういう事を言ってくれていた。

「私達の家ならセックスなんかも出来ないわ。どう？　安全でしょ？」

「どーだか？　みんなが寝付いた後にこっそり風呂場でとかさ」

「……いやらしい」

「そ、そんな事する訳ないじゃないっ！」

すみません。若干想像して、それもいいなと思ってしまった馬鹿野郎がここにいます。

あとさらつとマリアがセックスって言ったのはヤバイ。おかげで半分立ち上がったぞ。どこがとは言わないけど。

「それで言ったらあたし達は三人して牽制し合うから逆に安全だよ。な、翼」

「うん」

「何を言ってるのかしら？　だからこそ三人結託してしまうんでしよう。女三人を好きに出来るなんて男にとっては猛毒よ」

仰る通りです。メチャクチャ頭の中で想像して、今俺は立ち上がれません。完全に立ち上がっちゃったんだよ。

「あ、あのさ？　そもそも俺がここを出て行く前提なのはおかしいだろ」

正論を告げたのだが、何故かそれには三人揃ってスルー。

「そもそも私達の家は仁志にとってもっともいい条件が揃ってるの。職場は近いしシャワーもお風呂もある。居間には最新型のエアコンもあるし、エルやヴェイグが常にいるから寂しくないわ」

「それならこっちだって似たようなものだよ。私が常にいる。私が仁志さんを癒してあげるんだから」

「どうだか？ 癒しじゃなくていやらしじゃないの？ いかかわしい……」

「そ、そんな事する訳ないでしょっ！」

何だろうか。デジャブかね？ さつき似たようなやり取りを聞いた気がするんだけど……。

「大体マリアは前も言ったけど仁志さんとの距離感を見直すべきだよ。夫婦みたいに過ごす事多いし」

「あら、ちゃんと見直したわよ？ それでも仁志が私にしか言えない事があるの。そして私も仁志にしか言えない事がある。これは甘えじゃないわ」

「仁志さん、そんな事を言っただんですか？」

「仁志、言ってくれたわよね？」

「ええ……」

やだ、めんどくさいこの酔っ払い二人。どう返しても厄介な事になるの見えるもんな。

と、そこで気付いた。奏が静かだって。視線を動かせばいたはずの場所に奏がいない。トイレかと思ったけどそれなら視界の隅を横切るはずだ。

「翼く、マリアく、ちよつとこれ見てよ」

そんな時間こえた声に視線を上げれば奏が押入れに顔を突っ込んで手招きしてた。

瞬間、一気に酔いが醒める。いや、そもそもそんなに酔ってなかったけどそれでもだ。

全身の血の気が引いていくのが分かった。そう、実は三人を招くにあたり俺はゴミ箱を空にした。理由はお察しだが、当然ゴミの回収などどつくに終わっている。

なのでそれは以前のように消臭剤を置いてある押入れの隅へ隠したのだが、それをどうやら奏に見つけられたらしい。

「どうしたの?」

「何よ?」

二人がそう言った瞬間、赤ら顔の奏がニヤニヤ笑ってゴミ袋を手にして振り返った。

「ゴミ袋?」

「そつ。しかも、丸めたティッシュだけの」

終わった。色々と終わったあ……。

なので開き直るように俺はハイボールを呷る。今は何でもいいから現実逃避したい。

あく、生きるの諦めようかな。だって、今、俺殺されたもの。よりもよってこの三人にとんでもない物見られましたもの。

もう何も怖くない。あつ、これ死亡フラグだ。まあいいや。だってもう死んだようなもんだし。

気付けば翼とマリアが奏の傍へ移動していた。で、三人揃ってゴミ袋を見ながらひそひそ話してる。

公開処刑だよね、これ。酒でも飲んでないとやってられない。

と、そこで何故か三人がこっちへ振り返って赤い顔を見せる。でも、それはどことなく酔ってるとかじゃない感じがした。

「仁志、えつと……」

「や、やはりそういう欲求は増していく一方ですか?」

「そんな事聞いてどうすんだよお……」

もう死にたい気分だったのに、死体蹴りまでするのかよお。

「その、さ。もしそうなら、責任取ろうかなって」

「……………はい?」

奏の言葉に思考が止まる。えつと、どういう意味だ?

俺が責任取れとか言われるなら分かるけど、向こうが責任を取るってどういう事?」

そんな風に考えているといつの間にか三人が俺の傍へ戻ってきていた。いや、俺の周囲に侍るように陣取っている。

「ごめんなさい。そう、よね。あの時だって貴方は性欲が限界と言っ
てたもの」

「ま、マリア?」

「思えば、ここへ私が来たばかりの頃、貴方は下着を片付けてもいいと
言っていました」

「えっと、翼?」

「そうだよ。だって、貴方は働き盛りの男だし。あたし達を、そうい
う風に見てるのはあのプールで分かったしさ」

「奏?」

状況が今一つ理解出来ない。ただ、何となくヤバいような、けれど
嬉しいような感覚がする。

すると三人揃って俺へ体を寄せてきた。ふわりと香るそれぞれの
匂いに紛れて微かに漂うアルコール。

「少しだけ、大人の時間を過ごしましょ?」

「交わる事は出来なくても触れ合うぐらいなら」

「もし望むなら、もう少しだけエッチな事も出来るけど?」

「そ、それはさすがにダメだって。というか、三人共酔ってないだろ
?」

潤んだ瞳でこつちへ迫る表情と声にはさつきまでの雰囲気は微塵
も感じられない。

だが、俺がそう尋ねると……

「酔ってるって、そういう事にして?」

と返ってきて、俺の記憶はそこで途切れた。

……そういう事にした。ただ、酒は怖いと思った。悪意とは違った
意味で人の本心を引き出すんだなど、改めて痛感した。

そんな俺の休日だった。クリスの事といい、ホント一晩で色々起こ
り過ぎだよ。

デンジャラス・サンシャイン

「よし、みんな乗ったな？ シートベルトを忘れずしてくれよ？」

「「「「「はーい（分かった）」」」」」」

「クスツ、奏まで立花達と一緒に言わなくても……」

「ったく、悪乗りしてんな」

「ホントね。まあ、仕方ないわ。完全に旅行だもの」

「いいじゃん。乗り物まで若干バスっぽいし、何だか慰安旅行とか修学旅行みたいでワクワクするよ」

「ですよね！ 私も楽しみで楽しみでっ！」

「デスデスっ！ 早起きも今日は辛くなかったデスよ！」

「へー、じゃあ目覚ましでちゃんと起きたエルやセレナに何度も揺すられて起きたのは誰だったんだろう？」

「切歌お姉ちゃん、嘘は良くないと思います」

「うん。切歌さん、何度ももう少しもう少しって」

「たしか調がこのまま置いていくと言ったら飛び起きたな」

「そ、それは言わない約束デスよお！」

切歌の言葉にみんなが笑うのを聞きながら、俺は一人運転席周りの微調整。今日はいよいよ海水浴へ行く日である。

天気は雲一つない快晴、とはいかないが夏らしい入道雲が見えるいい天気だ。

時刻は午前七時半になるかならないか。おかげでまだ暑さが辛くない。

実は今から海水浴場へ向かう前に買い物へ行くのである。朝七時から開いてるスーパーがあるのでそこへ寄って飲み物やお菓子を買っていくのだ。

そのために俺は朝からこの車を借りに行った。ちよつと大変だったけど、みんなのためなら早起きぐらいへいき、へっちゃらだったりする。

前回は事前の準備も何もなく、ただ遊びに行っただけ。今回は海水浴だけじゃなく、その前からイベントにしたかった。

そのためにマリアと調は唐揚げなどのおかずを、未来はサンドイッチ、クリスはおにぎりを作ってきてくれている。お昼ご飯という訳だ。

まあ、腐ったりしないように保冷剤入りの保冷バッグも用意している。クーラーボックスには沢山の氷と、俺は俺なりに準備してきた。重かったけどね、クーラーボックス。ただ、帰りは軽くなってるのでよしとする。駐車場に着いたら海までは奏に頼もう。

「うし、じゃあしゅっぱーっ！」

ブレーキ踏みながらエンジンをかけて、ギアをドライブへ入れてからサイドブレーキを下ろす。

こうして夏最後の大イベントは始まった。

で、今回は早々に寝ていたので知らなかったが、どうやらみんな俺の歌ってる動画を見たらしい。

それを響とクリスだけがあのバスの中で知って翼達へ不満を述べた事を話題に、エルとヴェイグがどうしてという疑問を問いかけていたのだ。

というか、声に出す事はしないがヴェイグ、やってくれたな。まさかマリアだけじゃなく翼達にまで見せるとは。いくら何でも恥ずかしいっての。

「なあ、それってやっぱ最後に歌ったやつか？」

ただ肝心の歌ったものが分からない。多分ラストだと思っただが、違うのかね？

「え？ あ、えっと」

「君の中の永遠デスっ！」

思わずブレーキを踏みそうになった。それでも何とか落ち着いて信号で停止。

「な、ナンデソレヲ？」

「あ、あの、姉様が好きな歌だったのでつい。いけなかったでしょうか？」

バックミラー越しのエルの申し訳なさそうな声と表情に何か言う気が失せた。

えっと、何？　つまりみんなして俺がラブソングを歌うところを見た訳で、しかもそれを響やクリスが知らなかった事を不満に思うって事は……。

「ま、いいよ」

あつさり言い放ってゆっくりとアクセルを踏む。車体が静かに加速を始めて動き出す。俺の心と同じように。

もう今の俺にとっては今更な事だ。あの頃は、響達の好意へ向き合うのを恐れていた。素直に俺の気持ちを伝えるのを怖がっていた。

だけど、もうそんな俺は過去になった。今の俺はちゃんと好きだと伝えられるんだ。

何故かざわつとする後ろと横に小さく笑みを浮かべて俺は告げる。

「そんなに聞きたいのなら今度聞かせてやるよ。ある意味とっておきのラブソングを、さ」

「「「「「ええっ!?!」「」」」」」

聞こえてくるのは見事に女子高生以上の女性達の声。チラツとバックミラーを見れば不思議そうに小首を傾げるエルとセレナにヴェイグが見えた。

「ち、ちなみに何て曲名か教えてもらっても？」

「いいぞ。神魂合体ゴードンナーだ」

その瞬間、間違いなく肩透かしを食らったような空気が流れた。

まあ、どう考えてもまともなラブソングではないと思うよな。

ところがぎつちよん。これが割と熱くて燃える、聞き様によってはラブソングなんだよ。

と、まあこれはある意味でブラフ。今の俺なら、みんなの前でラブソングを歌う事が出来る。

本当の本当に、それらしいのを歌ってやろうじゃないか。だけど、俺らしい感じの歌で、さ。

「おおっ、中々カッコイイデス」

「切歌さん、見せてください」

どうやら後ろではエルのスマホで早速ゴードンナーが検索されたようだ。

「つと、ここだここだ」

一旦右折する。危うく目的のスーパーを通り過ぎるところだった。「ちよつと、大丈夫なんでしょうね？」

「心配いらないよ。この辺は一人暮らしするまでは活動範囲だったんだ」

家から車で十分圏内だったからな、ここ。よく母さんの夜勤の買い物のために来たもんだ。

「じゃ、仁志さんのお家、この辺りなんですか？」

「いや、家自体はここから車で十分ぐらい行ったところにある……マンションのような外観のアパートだ」

「一軒家じゃないの？」

「違うよ。もつと言えば持家でさえない。借家だよ」

そうやって話しながらふと父さんと母さんはどうしてるのかと思う。

一人暮らしを始めて一年ぐらいは連絡を取ってた。というか、向こうから取ってくれていた。

だけど、段々年月が経つ内に連絡が減り、もうここ五年ぐらいなんて声さえも聞いてない。

それでも毎年正月と誕生日にメールぐらいは来る。逆に言えばそれだけだ。

で、何故これをみんなに言わないのかは、言うまでもなくどう反応されるか分かっているから。そう、確実に俺が責め立てられる。

ま、分かっているはいるんだ。悪いのは自分だって。だけど、それも今のようになったからであってなあ。

「お兄ちゃんのお母さんは看護師さんなんだよね」

「ああ、そうだよ。よく覚えてたな」

「えへへ」

早い時間だけあって駐車場はガラガラ。ただし、食料品売り場に近しいところはちらほらと埋まっている。

なので若干離れたところへ駐車する。バックモニターに頼る事無く慣れている、というか教わったアナログ方式でゆっくりとバック。

「……よし」

「みんな、降りていいわよ」

「響さん、入口まで競争デス！」

「いいよ！」

「僕も参加します」

「私も！」

マリアの声で弾かれるようにシートベルトを外して動き出す切歌に響。今ではそこにエルとセレナも仲間入りだ。本当に年頃っぽくなつたな。

だが、駐車場でそんな事をしようとするれば……

「「ダメ（だつての）」」

「「っ」」

マリアを始めとするそれぞれの頭の上がない人間からの制止が飛んでくると、こういう訳だ。

「切ちゃん、車が少ないとはいえ駐車場だよ？　もし何かあったらどうするの？」

「あうっ、ご、ごめんなさいデス……」

「おめーもだ。年上のくせして何乗っかってやがる。ちゃんと注意しろって」

「ううっ、ごめんなさい……」

「セレナちゃんもダメだよ。お姉ちゃんならエルちゃんを止めないと」

「は、はい。ごめんなさい」

「エル、今の貴方はヴェイグを抱えてるでしょ？　なら余計いつもよりも気を付けないと」

「はい……ごめんなさい姉様」

「あくあ、やっぱりこうなるか」

「だね」

奏と翼はそんな光景を見て苦笑している。まあ俺も似たようなものだ。

ただ、何というか、切歌が調に注意されてるのは分かるんだが、響

を注意してるのがクリスで、セレナを注意してるのが未来な辺りに小さな感動を覚える。

で、チラリと切歌が俺の方を見てくるのは助けてくれて事か。仕方ない。可愛い弟子を助けてやりましょう。

このままじゃ長引きそうだし、イベントの始まりからケチが付くのは避けたい。

「あー、マリア達もそれぐらいにしてやってよ。ほら、こんな状況は初めてだろ？ みんなテンションが上がってるんだ。たしかにちよつと短慮だったかもしれないけど、ここは一つ穩便に。ほら、切歌達ももう一度謝って」

「二二ごめんなさい（デス）二二」

「な？ 四人も反省してる事だし、まだ始まったばかりなんだからさ」
そう言うマリア達も表情を緩めた。多分だけど四人もここが退き時と思ったのだろう。

我が家だと、こういう役割は必要なかったなあ。母さんは父さんが俺を叱ってる時は基本ノータッチで逆もまたしかりだし。

ただ、それは俺が完全に悪い時である。そうじゃない場合は程々で切り上げてくれるものだが……

と、そこで思い出した。みんなはそこまで親に叱られた経験が多くないんだと。

未来と響は一般家庭だけど、響は例の一件で家では迷惑をかけないように良い子をしていたはずだし、それ以前からもそこまでお転婆ではなかったと、思う。

未来は未来で雰囲気的に家庭で激しく叱られる事をしなさそう。うん、両者共に親から叱られた回数が俺より少ないと見た。

マリア達は言うまでもない。彼女達はそもそも親に叱られる経験自体が少なかったはずだ。

もしくは、そうと思わず過ごしていた、かもな。特にナスターシャ教授はおっかなかっただろうし、叱るのが躰けではなく教育に近かっただろう。

俺は自信がある訳じゃないが、これでも優等生ではなかったから叱

られた経験なら星の数程ある。

だから今の切歌達の気持ちもマリア達の気持ちも何となく分かったし。

にしても、久しぶりに自信がある事があつたと思えば叱られた経験とか、本当に何の自慢にもなりやしないな、我ながら。

「とりあえず、今はみんなで購入物だ。で、代金は俺が支払うので制限を設けまーす。飲み物は車内用と海用で一本ずつ。お菓子は一人一つまで。ただし、大きな袋菓子は数が多いと邪魔になるので五つまで。それ以上あつた場合、最終チェックで撥ねてマリアに戻してもらいますのでそのつもりで」

「何で私？」

「この中で一番年長でお母さん感強いから」

「……否定出来ないわ」

以前であればどこかに嫌がる感じがあつたのに、今はそれがまったくない。しかも、こちらを一瞬ではあるが見て笑みを見せる、か。

……これ、我ながら言葉の選択をミスした気がする。

「あの、少しいいでしょうか？」

「はい、翼」

「車内用は分かるのですが、海での飲み物が一本とは少々心もとない気が」

「ああ、そこは分かってるよ。俺はみんなで飲めるように大きなペットボトルでお茶だの水だのを選んでおくから」

「そういう事ですか。なら納得です」

「うし、じゃあ早速行くか。でかいお菓子はあたしの方で選ぶとするよ」

「あつ、奏さんズルい」

「そうデスそうデス。おーぼーデス」

言いながらみんなが車を降りて行くのを見送り、俺はやっと運転席から降りた。

鍵を閉めて歩き出すと車のすぐ傍で待っていてくれたのか翼が立っていた。

「翼、みんなと一緒に行かなかったのか？」

「仁志さんを一人にするのは忍びなかったもので」

「気を遣わなくてもいいのに。でも、うん、ありがとな」

「い、いえ、これぐらい感謝される程の事でもありませんから」

隣り合って歩くと気分は恋人と言うか何というか。

彼女も、俺と一線越えてもいいと思ってくれている。そう思うと嬉しくもあり苦しくもある。

「そういえば、先程セレナが仁志さんの母君は看護師をしていると」

「ああ、うん。準看だけどね」

「じゅんかん？」

「多分準看護師って事だと思うよ。正看、正看護師ってのがあから」

「そういう事ですか。仁志さんの父君はどういう仕事を？」

「もうそろそろ定年を迎えるけど、町工場で加工業をやってる。タバ

コぐらいしか金の使い道がない、しがない作業員だよ」

「御自分の父親への当たりが強いですね」

「ま、男同士なんてそんなもんだよ」

と、そう言ってからふと翼へ顔を向ける。すると目が合った。

「何ですか？」

「いや、えつと……こう考えると男ってやっぱり多かれ少なかれ不器用なんじゃないかなってさ」

「……そう、かもしれないですね。でも、だからこそ今の私があります。お父様の注いでくれたものは、この身にしかと宿っていますから」

「そうだな。君の味覚の鋭さも、知識や性格も、どこかに八紘さんが宿ってる。風鳴翼の中には、ちゃんと風鳴八紘が残ってるんだ」

「……はい」

少しだけ触れてくる手が翼の想いと気遣いを表してて若干くすぐったい。だから俺も手の甲を合わせる。

握りたいけど今はダメと、そう互いを律してるんだと伝え合うように。

「仁志さん」

「ん？」

「私は、いつでも只野翼になりますからね？」

そう言つて翼はこつちへ妖艶に微笑んでみせた。

その威力は思わず足を止めてしまふ程凄かった。

店の中へ入つていく翼の背中を見つめながら、俺は頭を搔く事しか出来ない。

「強いよなあ、女の人つて」

マリアもそうだし奏もそうだ。そしてここに来て翼も覚悟というか、はつきりと女を見せてきた。

俺が全員と言つたのなら、それを貫いてみせろとばかりに迫つてきた。

俺の迷つて悩んで何とか出した覚悟なんて、彼女達のような命懸けの状況などを経験した人からすればあつさりと出せるのかもしれない。

「だけど、俺は俺だ。誰かと比べたって仕方ない。比べるなら過去の俺と比べよう」

自分に言い聞かせて歩き出す。とつくにみんなは買い物始めているだろうから少し駆け足。

すると買い物カゴが置いてある場所にクリスとマリアが立っていた。

「遅いつての」

「もうみんな動いてるわよ？」

「ごめんごめん。その、待つててくれてありがとう」

感謝を告げると二人揃つて小さく微笑む。やっぱりこんな事でも感謝を告げるのは大事だな。

カゴを俺が持つて三人でまずは飲み物確保へ動く。目指す先は2リッターのペットボトルがずらりと並ぶ飲料コーナーだ。

到着すると色取り取りのラベルを纏つた飲料がお出迎え。さて、まずは何から選ぶか。

「とりあえず基本的なのを買つておこう」

「お茶は……緑茶がいいわね」

「スポーツドリンクは……メーカー品だな」

「いつそお茶は紅茶も買っておくか？ 砂糖の入ってない奴なら食事の時には飲めるだろ？」

「そうね」

「だな」

こうしていると本当に家族みたいだ。あるいは仲良しサークルか何かかも。

そしてどんどん重くなる買い物カゴ。カートにすればよかったとここで後悔。

いや、筋トレだと思えば……。

「ちよつと仁志、大丈夫なの？」

「腕、震えてきてんぞ」

「あー、クリス、カート頼んでもいい？」

残念ながら俺の腕力では10キロ以上を片手で支えるのは不可能らしい。

両手で持てば平気だけど、出来れば楽しみたいのであっさりと掌返し。

仕方ねえなと苦笑してクリスがカートを取りに行ってくれ、俺は邪魔にならない場所へカゴを置いて一休み。

「ふふつ、完全にお父さんね」

「まあ、年齢的にはなくはない呼ばれ方だしな」

中学時代の友人が結婚したと聞いたのは二十五歳ぐらいの時だったか。しかも姉さん女房。職場の同僚とか言ってた。

まあすっかりした奴だったし、頭良かったけど進学校じゃなく工業高校へ行つて資格だのなんだのを取ったぐらい現実的な奴だったからそこまで驚かなかった。

たしかもう子供が二人いるんだっけか。しかも男の子だったと記憶している。会わないし年賀状のやり取りなどないが、未だに時々向こうからメールが来る。

……今にして思えばそういうところが結婚出来るか出来ないかの差なんだろうと分かる。俺は人間的に子供もいいところだったしな。

「いてっ！」

急に額に痛みが走る。視線を動かせばそこには呆れ顔のマリア。「なくに沈んだ顔してるの？ さっきの切歌達よりも酷いわよ？」

「……過去の自分の未熟さを噛み締めてただけさ」

おそろくだがデコピンされたんだと思う。てか、この流れてXVでの翼とのやり取りに似てるな。

「そう。ならいいけど、そんな顔、みんなの前では見せないように」

「ああ、分かってるよ。これから楽しい時間を過ごすんだからな」

「そういう事。いつもの貴方に戻ってくれて良かったわ」

「っ」

思わずドキツとする。何気ない言葉だけど、その、心にくるやつだ。

「ま、マリア、今の」

「カート持ってきたぞ」

「ありがとう。仁志、カゴ、乗せてくれる？」

「あ、ああ……」

運良くなのか運悪くなのかカートと共にクリスマス登場。ま、いいか。今のは甘えた訳でも何でも無い。

「……よな？」

「あつ、ししよー達発見デス！」

「兄様、お菓子選んできました」

そこへ現れるは切歌達年少組。その手のカゴにはお菓子を沢山……って程でもないな。むしろ少ないくらいだ。

ただ、何故か調の表情が険しい。切歌へ軽くジト目を向けているし、これは何かあったな。

「えつと、これだけ？」

「えへへ、実はデスね」

「……切ちゃん達は海に行つてかき氷を食べようって思ってるんです。仁志さんからもらった特別ボーナスがあるからって」

「アタシの頑張りに対してししよーがくれたゴホウビデスし、ここはエルやセレナの笑顔のためって感じデスよ」

「兄様、海の家のかき氷は美味しいんですよね？」

「ね？」

エルとセレナの確認にどう答えたものと頭を悩ます。ただ、ここは言うべき事は言っておこう。

「切歌」

「？ 何デスカししよー」

「そのかき氷は、お昼を食べる前か？ それとも後か？」

その瞬間切歌の笑顔が固まった。うん、やっぱり忘れてたな。だから調が若干不機嫌なんだ。

「え、えっと……それは当然」

「後、よね？ 私や調が頑張って早起きして作ったおかずもあるし」

「で、デスデス……」

「でも切ちゃん、さつきは少し泳いだらって言ってなかった？」

「いつ！ あ、あれはデスね？」

調のジト目に切歌がしどろもどろになっていくのを横目に、俺はエルとセレナへ視線を合わせるようにしやがんだ。

「いいか？ たしかに海で食べるかき氷は美味しいかもしれないが、それがマリア達の作ったご飯に勝てると思うかい？」

「ううん」

フルフルと首を横に振る二人に俺だけじゃなくマリアやクリスにも笑みが浮かぶ。それと、こっそりとヴェイグも首を横に振っていた。

本当に可愛いな、この三人は。心が癒されるよ。

「それが分かっているならいいよ。お昼前にかき氷を俺が買ってあげるから。ただし、二人で一つを分け合うんだ。マリア達のご飯を美味しく食べるためにね。いいか？」

「うん（はい）っ！」

これが一番だろう。ダメと言うよりは折り合いをつける。そして、ご飯を作ってくれた人への感謝を持って食べる事だ。

「こんな感じなら許可出せる？」

「ええ。本当に父親ね」

「おう、見事なもんだ」

装者の中でも母性の強い二人に太鼓判を押されるとは、中々嬉しい

じゃないか。

で視線を切歌へ向ければ調も同じ条件ならと許しを出していた。切歌の場合は調と半分にするんだろうな。

「あつ、いたいた。只野さん」

「お菓子、選んできましたよ」

未来と響、奏と翼も合流した。さすがにそちらはちゃんとお菓子が人数分入ってる。

「マリアとクリスはいいのか？」

「ええ。それに、あまりお菓子ばかりあってもね」

「きつと残っちゃうだろ？ そうなったら後が面倒だ」

「成程ね」

この辺りに母親適性が出ている気がする。いや、もう帰りの事などを考えているからなあ。

「じゃ、後は個人の飲み物か。じゃあ、切歌達のお菓子を響達のカゴへ移してくれ。で、空になったカゴへ飲み物をまとめてくれるか？」

「了解だよ仁志先輩」

「えつと、緑茶にスポーツドリンク、それに紅茶？」

「無糖なんだ。これなら食事にも使えると思ってね」

「成程。いいかもしれませんね」

カートの上に置かれているカゴの中身を見て翼が頷く。とはいえ、これだけでは少々心もとないのも事実。

となると追加を選ぶべきか。それも甘いものだな。炭酸系もいるだろう。そうなるが残った後の事を考えるなら……サイダーか。それとジュース類もいるな。

「エル、セレナ、オレンジとアップルならどっちがいい？」

「オレンジ（アップル）」

ありやりや。まさかの不一致。仕方ない。ここは大人しく両方買うか。

「分かった。じゃ、両方な」

「はい（うん）っ！」

これで五本。そこへサイダーを一本の計六本。総量は12リッ

ター。だけど、正直夏の海ならまだ足りない。

なのでもう一本水分補給にもってこいの物を。スポーツ飲料とも言えなくはないが、最初のよりもこれは風邪などの時に向いてる奴。

「こんなもんかな?」

「いいと思うよ」

聞こえた声に顔を動かせば笑っている奏がいた。

「そう?」

「十分じゃん。足りなければ向こうでも買えるし」

「高いからここで買ってるって分かってるか?」

けち臭いかもしれないがこれが俺なのだ。

いくら収入が増えたところで急に金遣いを変える程俺は気楽にはなれないからなあ。

そんな俺を見て奏は苦笑する。そんな姿さえも可愛いんだから美人は得だよ。

「分かってるって。でもさ、ここで買い過ぎたら邪魔になるし、程々にしとくべきだと思うよ?」

「むう……」

一理ある。クーラーボックスだって四次元ポケットじゃない。

「仁志さん、私も奏と同意見です。備える事は大切ですが、何事も適度がいいかと。あのクーラーボックスならそれぐらいがいいのでは?」

「……だな」

翼にまでこう言われてしまっっては仕方ない。これで十分だと折り合いをつけ、俺は飲み物の選択を終える事に。

「ししよー、ししよーの飲み物はどうするデスか?」

「おっと、そうだった。自分の分を忘れてた」

「仁志さんらしいですね」

「いつてきなよ仁志先輩。カートはあたしと翼で見てるから」

「ありがとう」

切歌達がいる辺りへ移動すると既に響が持っているカゴには沢山のペットボトルが。

それでも響は顔色一つ変えず、両手ではあるがカゴを持っている。

俺でも似た事は出来るだろうが笑顔は浮かべてないだろうな。

「あとは兄様だけです」

「お兄ちゃんは何にするの?」

「そうだなあ……」

正直お茶か水にしようと思ってたが、ここは一本ぐらい甘い物にしておくか。

そう思ってたレモンティーを手に取り、もう一本はほうじ茶でもと思ったところである物が目に入った。

「ソルティライチ、ね」

海で飲むにはある意味で丁度いいか。そう思ってそれを手に取って俺も二本選び終わった。

「響、重いだろう? 俺が持つから」

「あはは……じゃあお願いします」

「うおっ……け、結構な重量だな、やっぱ」

両手で支えながらカートまで運ぶと、翼が下段にあったお菓子の入ったカゴをどかしてくれた。

「ありがとう」

「いえ」

「仁志先輩、それぞれくらい重いのか?」

「そうだな……健ドリが満載のオリコンより重い」

「おっと、そりゃ結構な重さだ」

夜勤を経験した人間しか分からない例えに奏が楽しそうに笑う。対するマリア達は小首を傾げていた。

ただ調や未来は補充で触った事があるのか納得するように苦笑していたけど。

カートを押してレジへと向かう。まず上のカゴを下ろし、次に下段のカゴをレジへと乗せる。最後にお菓子の入ったカゴを受け取るとカートを奏が押してレジを通過——しようとするのを俺が止める。

「何?」

「そこにカートを合わせてくれ。カゴを乗せてくれるから」

「ああそういう事ね」

納得という顔で奏がカートを停止すると、やがてレジを通過した2
リッターペットボトルの入ったカゴがそこへ乗せられる。

「もう持つて行っていいよ」
「ん」

さて、一体いくらになるんだろうか。諭吉先生でおつりはくると思
うが、一葉さんで足りると助かるなあ。

そんな事を思いながら俺は徐々に増えて行く金額を眺めるのだっ
た……。

「ししよー、まだデスカ？」

「切ちゃん、それ五分ぐらい前にも聞いたよ」

最大十四人乗りの車内は広さこそあるものの大人数で遊ぶには不
向きな作りであり、トランプなどで遊べるのも五人程度が限度だっ
た。

なので遊ぶために持つて来ていたトランプなどでは全員が遊べず、
切歌としては若干不満が残る結果となっていた。

それもあつて、早く海で遊びたいという気持ちへシフトしていたの
である。運転手である仁志へ思い出したようにまだかまだかと催促
しているのはそういう事だ。

「いいんだよ調。切歌は早くみんなで遊びたいんだ」

「デスデス。さすがししよーは分かつてるデスよ」

「でも切歌さん、少し落ち着いた方がいいですよ？」

「はい、僕もそう思います。海で遊ぶ前に疲れちゃいます」

「切歌も外の景色を見たらどうだ。中々楽しいぞ」

テンションが高い切歌へセレナとエルフナインがやんわりと落ち
着くように声をかける。

ヴェイグは窓際の席に座る翼の膝上から外の景色を眺めていた。
見慣れない街並みや風景などを見て彼はその表情を緩ませていた。

「うく……じゃあじゃあししよーの話を」

「運転中だよ切ちゃん」

「ししよお……」

「あはは……すっかり切歌ちゃんは仁志さんに甘えるようになってしまったね」

「師弟の関係だから、じゃない？」

「いや、それだけじゃなくて仁志先輩が切歌に甘いのも関係してると見た」

「あたしも同意見だ。仁志は後輩達に甘いからな」

「どうしてそこで俺が悪いみたいな流れになるんですかね!？」

さすがに黙ってられなくなったのか声を張り上げる仁志。だが……

「ちよつと、ちゃんと意識を運転へ向けて頂戴。今、貴方の操作に全世界の命運が握られているのよ？」

というマリアの軽く嗜める言葉が放たれ、仁志はそこで押し黙るしかなくなるのであった。

「暁、菓子でも食べて落ち着け。もしくは何か歌ってくれないか？」

「歌、デスカ？」

「ああ、エルから聞いたぞ。例のアイドルマスターという物のCDを沢山借りて聞いたのだろう？ 私達にも教えてくれ」

「そういう事デスカ。お任せデス」

そこから切歌が歌い始めたのは「READY!!」だった。

すると、それを既に歌えるようになっていたエルフナインとセレナも一緒になって歌い始め、調も途中から参加しての合唱となった。

そうなってくると二番のサビを歌う頃にはサビの一部は響達も覚え、最後には彼女達も参加してのまさしく「アイマスらしさ」が溢れる雰囲気となる。

それを聞いて密かに仁志が感動しながらハンドルを握っていた。

(うわあ、装者にエルを加えてのREADY!!とかすげえ……)

人数だけで考えればフェアリーと呼ばれる美希・響・貴音を抜いた765プロ勢揃いである。

その事に気付き、仁志は歌が終わると同時に口を開く。

「ブラボーっ！ 出来ればそのままCHANGEE!!!もお願いしたい！」

「了解デスししよーっ！」

仁志が喜んでくれている。それに笑顔をより明るくして切歌は視線をエルフナインやセレナへ向けた。

それがどういう意味かを理解し、二人は頷いてみせる。そして切歌は調へも顔を向けた。

「調もいいデスカ？」

「うん、任せて」

こうして始まる “CHANGE!!!” に仁志は笑みを浮かべながら運転する。

車内に流れる歌声と溢れる笑顔。それにヴェイグは一人笑みを深くしていた。

(とても優しい匂いだ。いつかの時よりも匂いが強い。こんな初めでだ)

そう思っつてヴェイグは顔を上へ向ける。そこにはサビだけでも覚えて歌う翼の笑顔があった。

「翼」

「ん？ どうかした？」

「いや、とてもいい笑顔だと思ったんだ。今の翼の歌も俺は好きだ」
「ふふっ、そう。ありがとう」

最近ヴェイグにも素の自分を出せるようになった翼である。というのも、この世界で過ごしている内に彼女が防人足らんと強く思う事が減った事が大きい。

結果、彼女は防人でも歌手でもない状態が常となった。更に仁志への恋が彼女の中での変化を促したのだ。

ただの翼。その言葉通り、今の翼は柔らかく笑い、弱い自分を認めて抱き締める事が出来るようになっていたのだから。

仁志の希望で歌われた “CHANGE!!!” も終わったところで丁度目の前の信号が赤へ変わり、車がゆっくりと減速して停止する。

「最高だったよ！ もう、本気で金を出したいぐらいだっ！」

「大袈裟よ」

「えへへっ！ ししよーにそこまで言ってもらえると歌った甲斐があ

るってものデスよ」

「仁志さん、他には何かありますか？」

「え？ そうだなあ……ジブリ、自分REST@RTは歌える？」

「あうっ、それはまだうる覚えデスよお……」

「そっかあ。じゃ、逆になんなら歌える？」

「えつと……」

切歌達が覚えている楽曲名を挙げていき、それを聞いて仁志がならばと考え込み、ある曲名を告げる。

それを聞いて切歌達は任せるとばかりに笑顔を浮かべ、仁志は期待感と喜びに胸を膨らませた。

と、そこで信号が青へ変わりゆつくりと前の車が動き出して、仁志はアクセルを軽く踏み込み始めた。

静かに動き出す車体。同時に始まる再度のライブ。

「もう伏し目がちな昨日なんていらないっ」

「今日これから始まる私の伝説っ」

切歌と調が歌い始めるのは“THE IDOL M@STER”という曲。まさしくアイドルらしい歌であり、歌っている二人の表情をバックミラーで見て仁志は微笑んでいた。

(……じゃみんなは戦姫じゃなくてアイドルなんだなあ。それも、あの意味俺だけの、か……)

忘れ去られてしまった“戦姫絶唱シンフォギア”。その中の登場人物であった彼女達の事をしっかりと覚えているのは現状では自分だけ。

そう思つて仁志は小さな満足感と微かな苦しさを覚えていた。自分だけしか彼女達の事を覚えてないという意味を噛み締めたのだ。

僅かな苦みを感じながら聞こえてくる愛らしい歌声へ耳を傾けつつ仁志はアクセルを踏み続ける。

そうしている内に周囲の風景が変化していく。家々だけではなく水平線が見えてくるようになったのだ。

「みんな、海が見えてきたぞ」

仁志の声で全員が一斉に運転席側の窓へ顔を向けた。

——おお〜つ……。

年少組とヴェイグの声が重なり、響と奏もそれへ声を重ねる。

以前と違い遠くに見えるのではなく、これからそこへ向かっているためにゆっくりとではあるが近付いてくる海原に誰もが気分を高揚させていく。

「向こうに着いたらまず俺はパラソルとか借りに行ってくるからさ。個人の荷物はそれぞれでお願い出来るか？」

「了解デスよっ！」

「分かりましたっ！」

「つたく、相変わらずこういう時の反応は早えよな」

「ふふっ、響と切歌ちゃんらしいよね」

呆れ顔のクリスに苦笑する未来。そんな二人も視線は眩しく光を反射している海原へと向けられている。

「こうして海が近付くと否応なくテンション上がってくるね」

「そうだね。ヴェイグ、今回はちゃんと海岸や砂浜をその目で見れるから」

「ああ、楽しみだ！」

「あっ！ 見て見て！ 鳥が飛んでる！ カモメさんかな？」

「海鳥だとは思いますがどこからじゃ分かりませんね」

窓へ張り付かんばかりに外を見つめるセレナとエルフナイン。そんな二人を見てマリアは助手席で小さく苦笑した。

「エル、セレナ、危ないからちゃんと座ってなさい」

「はーい」

「もう、返事だけなんだから」

気の抜けた声で返事をし、そのまま外へ視線を向け続ける二人にマリアは苦笑を深くして視線を隣の仁志へ向けた。

彼は時折ナビへ目を向け、道が間違っていないかを確認しながらハンドルを握り続けていた。その姿にマリアは微笑みを浮かべる。

（本当に父親みたいね。今の貴方も私は好きよ？）

声に出さず愛を送るように仁志へ向けて笑みを見せるマリア。

一方の仁志はそれに気付く事もなく、前方へ意識を向け運転へと集

中していた。

(気を抜き過ぎないようにしないと。自分の手に十人以上の命がかかってるんだって、そう思っていないといけないしな)

先程までの雰囲気で幾分精神的疲労は抜けた。そう思って仁志は目的地に着くまで集中力を途切れさせないように意識を切り換えた。

こうして目的地までの間仁志は黙々と運転を続け、時折信号待ちの時に水分を口に含むだけとなる。

そしてようやく響達を乗せた車は海水浴場近くの駐車場へと到着し、荷物をそれぞれ持って一路海水浴場へと向かう事になる——はずだったのだが……

「じゃ、俺は先に行って場所とか確保しとくよ」

「ええ、気を付けて」

「頼んだよ、仁志先輩」

「すぐに合流しますからね」

「ああ、待ってる」

先んじて仁志がレジヤシートなどが入った荷物を持って出発。マリア達は車へ残る事に。

というのも、更衣室は混雑が予想されるため車の中で水着へ着替えの方がいいと仁志が判断したのだ。

なのでまずは年少組と学生組が着替え、マリア達年長組が車の外で見張りをする事になった。

「マリア、帰りはあたしが助手席だからよろしく」

「分かってるわよ。それにしても……」

「ん？ 私の顔に何か付いているか？」

自分の顔を見つめ、小さく息を吐いたマリアへ翼は不思議そうな表情を浮かべる。

「翼、随分仁志に気安いい口調をするようになったのね？」

「いけないか？」

「そうは言わないけど……」

「私は、可能ならこちらで仁志さんと暮らしたいと言った。例え生まれれた世界を捨てる事になっても構わないとな」

「っ?!」

さらりと告げられた言葉にマリアと奏が揃って息を呑んだ。翼は笑みさえ浮かべて青空を見上げていた。

「ほ、本気なのか翼？」

「うん、本気。向こうでアーティストとしての私が必要とされなくなったら、ギアを受け継げる者が出てきたら、防人としても歌手としても私が求められなくなったら、その時はここで、仁志さんの傍で暮らしたい」

「そんな日が来ると思ってるの？ 貴方は大人気のアーティストで、天羽々斬の装者なのよ？」

「私は、来ると信じているしそれを掴むつもりだ。それにマリア、その言い方ではまるで私の願いは叶わないと言いたいように聞こえるぞ」
「そ、そんな事はないわ」

無意識に翼の発言を羨ましいと思った故の反応だと理解し、マリアは気まずそうに顔を背ける。

そうなると今度は奏が口を開いた。

「あのさ翼。ギアがなければ平行世界を渡る事は」

「依り代があるよ。仁志さんに迎えに来てもらえばいい。あの人は、私の夢を聞いて覚悟を尋ねてきたんだ。自分が死んだら、もうこっちで私に寄る辺はないぞって。それでもいいと私は返した。それが寄り添うという事だからって」

嬉しそうに笑みを浮かべて告げる翼に奏は羨ましいとばかりに表情を歪める。

何人も装者がいる根幹世界とは違い、奏の世界は装者が一人だけ。しかもアダム達との協力は秘密裏であるために表向き頼りにする訳にはいかない。

つまり、翼のような事を奏が出来る可能性はもつと低いと言えた。そして仁志を自分の世界へ招く事も同様に。

(仁志先輩は、きつとこの世界を捨てない。だから翼はこっちへ来る事を選んだんだ。あたしも、あたしだって出来る事ならそうしたい……)

(羨ましい……。上手くいけば世界を越えて生きていこうと出来る翼が。私には、私にはそんな事は絶対に無理なもの……)

ズキリと心が痛む。想いだけなら翼と同じだけの熱量を持つているのに、そう言えない、そう出来ない自分の立場へ苛立ちと悔しさを噛み締めて、マリアと奏はそれぞれ顔を背けて表情を歪めた。

そこへ後部座席のドアが開いて水着となった響達が荷物を持って姿を見せる。

「おつまたせデース！」

「マリア、翼さん、奏さんもお待たせしました」

「もう結構暑くなってきてるんで覚悟してくださいね」

「え、ええ」

「分かったよ」

未来の言葉にやや暗い顔で返事をしてマリアと奏は車内へと入っていく。

それに小首を傾げる切歌達だったが理由までは分からず、おそらく外で日の光を浴びていたからではないかと自己解決させた。

「翼さん、切歌ちゃんや調ちゃんと一緒ならエルちゃん達は仁志さんを追い駆けてもいいと思うんですけど……」

「ああ、構わない。暁、月読、二人を頼むぞ」

「はいデース！」

「分かりました」

「エルとセレナはヴェイグの事を頼む」

「はいっ！」

「ヴェイグ、難しいかもしれないが出来るだけ声を出さないようにな」
「ああ」

そう指示を出して翼は微笑みと共に車内へと入り、そこでドアが閉められる。

「うし、あたしらが見張ってるから、お前らは慌てずに海水浴場へ向かえ」

「車とかに気を付けてね」

「走っちゃダメだよ？」

「はい(デス)っ!」

こうして帽子をかぶった年少組は上機嫌で歩き出す。その背中を見送りながら響達三人は笑みを浮かべていた。

「いやあ、何だか不思議だね」

「何がだよ?」

「ほら、去年の夏も似たような事があったけど、あの時は任務のついでの海だったから」

「ああ、魔法少女事変の頃な」

「要石があつた神社の近くの保養施設だね」

懐かしむように話す響達。まだあの頃から一年しか経過していないのかと思う反面、もう一年経つたのかも思うのだ。

そしてその一年で大きく自分達の状況が変化している事も思い、三人は小さくなった四人の背中を見つめて遠い目をした。

「……あの時は、まだセレナちゃんと出会う前だった」

「そうだな。神の力なんてもんも知らない頃だ」

「ギャラルホルンだって知らない頃だもんね」

「それに、エルちゃんがエルフナインちゃんだった」

その響の言葉にクリスと未来が無言で頷く。

今のエルフナインはかつてと違い、感情を大きく動かし、楽しそうに笑う少女となっている。

錬金術師でもなければ研究者でさええない。一人の無邪気な少女なのだ。それが、響達にはとても嬉しく心があつたかくなる事なのだから。

「このまま、あいつは見かけ相応に生きていければいいよな……」

「うん……そうだね。ね、響」

「……エルちゃんは、そうであつて欲しいかな。でも、エルフナインちゃんは……分からないや」

エルフナインがここで告げた“ここでの自分はエル”という発言を響は覚えていた。だからこそ、エルには外見相応の生き方を続けて欲しいと言えたのだ。

車の影に身を隠すように三人はしやがむ。地面は灼熱となつてい

るので完全に腰を下ろす事はしなかったのだ。

ジリジリと輻射熱が立ち上るコンクリート。その熱を感じながら三人は無言で空を見上げた。

大きな入道雲と青空の風景は典型的な夏の景色。その青と白の色合いに彼女達は小さく笑みを浮かべた。

「お待たせ」

「うわあ、車の中と外だと外の方が若干マシだね」

「本当だね。今ならサウナだよ」

そこへ現れるは水着姿となったマリア達年長組の三人。その三者三様の魅力に響くと未来は無意識に自分の体へ目を落とした。

(……もう少し欲しいな、胸。それか、細い脚)

そんな事を思ってたため息を吐く二人とは違い、クリスはやれやれとばかりに息を吐いて立ち上がった。

「じゃあ行こうぜ。ねえと思うが、後輩達がナンパされてないとも限らねーし」

「そうだな。その事を忘れていた」

「エルとセレナがいるから大丈夫だと思うけど……」

「分からないよマリア。性質の悪い奴がむしろあの二人がいるから声をかけてるかも。簡単に逃げられないからってね」

「奏さん、やめてくださいいよお」

「そうですよ。心配になりますから」

「私だけ先に行こうかしら……」

「なら奏も一緒に連れていくといい。二人がいればその手の男達の手はそちらへ向くだろう」

翼の言葉に頷き、マリアは早足で歩き出す。それを見て奏は小さく苦笑すると同じように歩く速度を速めた。

まるで徒競走のような二人を見つめ、響達は苦笑する。何せ二人の手には片や大きい目のバスケットと保冷バッグが、片やクーラーボックスと紙コップなどが入ったビニール袋がそれぞれ下げられているのだ。

まさにレジャーらしい荷物を持って急ぐ姿は母親そのもの。二人

のタイプの異なる母親像に響達は笑ってしまったのである。

「で、あんな事を言っていたが、雪音は正直どう思う?」

「後輩二人だけなら有り得るってとこだ」

「あー、うん。切歌ちゃんとか調ちゃんなら絶対声をかけられるよね」

「そこを只野さんが見つけて割って入る?」

「ふふつ、俺の妹とその友人に何か? と、こんなところだろうな」

翼のいかにもな台詞にその光景が想像出来、響達は納得するように頷いた。

そうして彼女達も海水浴場を目指して歩き始める。真夏の太陽を浴びながら誰もが楽しげに笑みを浮かべていた。

響達が道路から砂浜へと続く階段を降り始めた頃、仁志はと言えば

……

「こんなもんかな?」

夏も終わりがけで平日ともあり、何とか悪くない場所へレジャーシートとレンタルしたパラソルを立てて拠点を設定する事に成功していた。

その日陰となったシートに座る形で仁志を見上げている者がいる。ヴェイグであった。その格好はいつかのプールの時と同じように白と青のストライプカラーの水着を着ている。

既に切歌は準備運動もそこに泳ぎ始め、調はそんな彼女へジト目を向けつつエルフナインやセレナと共に準備運動中だった。

「タダノ」

「ん?」

若干人気がないため、周囲には今の所仁志達以外のパラソルはまばらであり、ヴェイグが軽く声をかけるには十分な条件と言えた。

それでも一応二人は周囲を警戒しながら会話を始める。

「あのプールとやらへ行つた時よりも独特な匂いがするぞ」

「ああ、潮風ってやつだよ。海の匂いだ」

「……何とも言えない匂いだな。だが、嫌いじゃない」

「そっか」

「タダノは泳がないのか?」

「今はな。みんながここへ来て場所を把握したら俺も切歌達みたいに準備運動して軽く」

「ししよ〜っ！ ちょっと沖の方まで泳いでくるデ〜スっ！」

聞こえてきた大声に仁志とヴェイグの顔が動く。海に入って大きく手を振っている切歌を見て、仁志とヴェイグは笑みを浮かべて手を動かした。

それを見て嬉しそうに切歌は素早く手を振って沖へと向かっていく。調はそれを追う形で海へと入っていき、代わりにセレナとエルフナインがパラソルへ戻ってきた。

「ヴェイグさん、一緒に波打ち際へ行きましょう」

「なみうちぎわ？」

「はい、海の水が押し寄せている場所です」

「ああ、あその事か。分かった」

セレナに抱えられ、ヴェイグは日陰から日差しの中へと出て行く。二人の頭にある麦わら帽子もあつてか、仁志にはまるでアニメのワンシーンのように見えていた。

「エルも行っておいで」

「はい。兄様、荷物をお願いします」

「ああ。怪我しないようにな。楽しんでおいで」

「はいっ！ 姉さん待つてくださいーいっ！」

「あつ、ごめんねエル。一緒に行こ？」

「はいー」

手を繋ぎ合って波打ち際へと向かう二人を見つめ、仁志は淡く笑みを浮かべる。

揃って麦わら帽子をかぶって手を繋ぐ擬似姉妹。それがもう既に本当の姉妹のようになしか見えなくなっていたからだ。

優しく打ち寄せる波を足に受け、セレナとエルはその冷たさに笑みを浮かべつつそつとヴェイグを砂浜へと下ろした。

と、そこで波が打ち寄せヴェイグの足元を通り過ぎる。その感覚にヴェイグは目を大きく見開いた。

「……………これが、海か」

「はい。そして今のが波です」

「なみ……おおっ、また来たぞ」

「気持ちいいですよね」

「ああ。地面も……不思議な感触だな」

興味津々な様子で動き始めるヴェイグ。それを周囲から隠すようにセレナはその場へしやがみ、エルフナインはヴェイグの体をまるで操っているようにそっと触った。

まさしく初めて海へ来た子供のようなヴェイグ。それにセレナやエルフナインも一緒になつて波打ち際で遊び出した。

さてその頃切歌は久々の海に笑顔を弾けさせていた。沖を示すブイへ掴まり、ご満悦である。

「あゝっ！ 最高デスよゝっ！ 空は青いし雲は白いし海は冷たくて気持ちいいデスし、言う事ないデスっ！」

誰に言うでもなく高いテンションのまま叫ぶ切歌。するとそこへ近付く一つの影があった。

それはブイ近くで浮上すると同時にそこへと掴まる。

「ふう……切ちゃん、ちゃんと準備運動しないとダメだよ」

「大丈夫デスよ。まったくやらなかった訳じゃないデスし」

「そうだけど……」

「それよりも、暑い中の海は気持ちいいデスね、調」

「それは同感。マリア達、まだ来ないかな？」

「うーん……まだみたいデスね」

沖から海岸の方を見つめる切歌。調も同じように顔を動かして仁志がいるパラソル付近へ目を向ける。

「……それらしい人はいないね」

「デスね。つと、あれマリア達じゃないデスか？」

嬉しそうにある方向を指さす切歌。その方向へ調も視線を動かして確認する。

「……うん、ホントだ。あれマリアと奏さんだ」

「じゃあ、ちよつと戻ってみるデスか？」

「そう、だね。一旦戻ろう」

「じゃ、競争デース！」

「あつ、ズルいよ切ちゃん！」

そうやって泳ぎ出す切歌と調。それと時同じくして、パラソル下で荷物番をしていた仁志の下へマリアと奏が合流していた。

仁志の足元にはパラソルと一緒にレンタルしたビーチボールが転がっている。切歌達がきつと使うだろうと思い、しっかりとレンタルしてきたのだ。

「へえ、割といい場所じゃん。人もそこまでいないし、シャワーへもそんなに遠くないし」

「そうね。これぐらいなら許容範囲だわ」

「あと、思ったよりも家族連れが少ないね」

「多分だけでもう家族連れは大抵来た後だと思うよ。八月も終わりに近いだろ？ 海水浴に来るような家族連れは、親は仕事で子供は宿題の追い込みさ」

「あははっ、そうかも」

「と言う事は奏も仁志もそうだったの？」

マリアの問いかけに名前を挙げられた二人は小さく苦笑して頷いた。それがまるで兄妹のようにも見え、マリアも笑った。

「さてと、じゃあ俺も軽く準備運動だけしておくか。ないと思うけど足がつつたりとかで溺れたらカツコ悪いじゃ済まないし。そっちもちゃんとやっておいてくれよ？」

「とか言って、仁志先輩がそうだったりして」

「うわあ、笑えないし現実的な懸念をどうも」

「ふふっ、入念にしておきなさい」

「へいへい。そうするよ」

パラソルから出て日差しを浴びながら準備運動を始める仁志。その途中、その目がふと何かに気付いて細められる。

「……何だ？ エルとセレナが海へ向かって叫んでる……？」

運動を続けながら二人が見ている方へ目を向け、仁志は瞬時に彼女達の行動の意味を理解するやその場から弾かれるように駆け出そうとして、慌てて足を止めて一旦パラソルの下へと戻るとビーチボール

を手にした。

「ちよ、どうしたのさ?」

「仁志?」

「切歌が溺れてるっ!」

「っ?!」

突然の行動に疑問符を浮かべる二人へそう返すと仁志は再び駆け出した。

その眼差しは沖を示すブイと波打ち際の間点へ注がれていて、そこで切歌が慌てるように動いていたのだ。

調はそんな彼女へ近付きたくても近付けないような雰囲気のまま、焦りを表情に浮かべている。下手に自分が近付いては一緒に溺れてしまう危険性があると理解しているのだ。

「兄様っ!」

「お兄ちゃんっ! 切歌さんがっ!」

「分かってる! 後は任せろっ!」

言いながら海へと入っていく仁志。そのままビーチボールを持って急いで切歌へと向かって泳いでいく。

「切歌っ!」

「し、ししよーっ! 助けて欲しいデスっ! あ、足がっ!」

「大丈夫だ。落ち着いてこれに掴まれ。これを掴んでいれば絶対沈まないから」

「は、はいデスっ!」

ビーチボールへ掴まり浮き輪代わりにした切歌は、泣きそうな顔で仁志を見つめた。

「ししよお……怖かったデス……」

「俺も肝を冷やしたよ。でも、一体どうして?」

「そ、それは……」

「切ちゃん、準備運動途中で切り上げたんです」

俯く切歌が変わって調がその場で立ち泳ぎしながら原因を告げると、仁志の表情が見る見る険しくなっていた。

「……切歌」

「っ」

「色々言いたい事があるけど、今の君を見ればちゃんと分かっていると
思う。だから一言だけ」

「な、何デスカ……？」

戦々恐々と問いかける切歌。叱られると、そう思っただけでその体もどこ
か縮こまっている。それを見た仁志はゆっくりと手を切歌へと動か
していく。

(叩かれるデスっ！)

幼い頃の記憶から目を閉じる切歌。するとその頭へ優しく手が乗
せられた。

「……へ？」

「切歌が無事で良かった。助けられて良かったよ」

「ししよー……」

恐る恐る目を開けた切歌が見たのは、心の底から嬉しそうに微笑む
仁志の顔だった。

その安堵を宿した表情と言葉に切歌が視界が滲んでいくのを感じ
ていた。

「あ、あれ？ おかしいデスね。涙が出て来たデス……」

「ああ、拭わないように。塩水が目に入ったら凄く痛いからな。調、君
は大丈夫？」

「うん、私は平気だから。仁志さん、切ちゃんをお願いします」

「分かった。切歌、こっちにおいで？ で、首へ腕を回して脱力してく
れ」

「グスっ……はいデス」

仁志の伸ばした手を掴み、切歌はそのまま抱き寄せられるように彼
の胸へと収まる。それを確認し、仁志はボールを利用しその場から
ゆっくりと砂浜を目指した。

調はそんな仁志の動きに合わせて泳ぎ出す。そうして三人は無事
砂浜へと戻ってくる事が出来た。足が付く様になったところで仁志
は大事を取って切歌をそつと抱き抱えて歩き、ビーチボールは調が運
ぶ形となった。

「切歌さんっ！」

「切歌お姉ちゃんっ！」

「セレナ、エルも心配かけてごめんなさいデス。もう大丈夫デスから」
駆け寄ってきた二人へ力ない笑顔で声をかける切歌。その目は泣いたために赤くなっている。

「切歌っ！」

「マリア……」

血相を変えて駆け寄ってきたマリアへ切歌は申し訳なさそうな表情を返すしか出来なかった。ただ、絞り出すように一言だけ告げる。

「ごめん、なさいデス……」

「マリア、切歌も今回の事は深く反省してる。俺達が叱る必要はないよ。彼女は、この結果と現状だけで俺達の説教なんかよりも強いメツセージを受け取ってくれているから」

「……そうみたいね。でも、良かったわ。切歌が無事で」

優しく切歌の頬へ手を当てて微笑むマリア。その温もりに切歌はまた涙が出てくるのを感じるも、目を閉じる事無く笑みを浮かべてみせた。

その笑顔と流れる涙が何よりのマリアへの返事であり感謝の伝え方だと感じたのだろう。現にマリアもその切歌の反応に一瞬驚いたものの、すぐに笑みを浮かべて頷いてみせたのだから。

その後、合流した響達へも切歌の事が伝えられ、準備運動の大事さを痛感させる事となる。

切歌は大事を取ってしばらく日陰へ寝かされ傍に仁志と調が付き添う事となり、響達は少し休んだら一緒に遊ぼうと切歌へ告げてそれぞれに海を楽しむべく動き出すのだった……。

「別に大丈夫デスよ調。ししよーがいてくれますから」

「いいの。私がかつと強く切ちゃんを止めれば防げた事故だし」

「切歌、今は調の好きにさせてあげよう。調は調で、今の切歌と同じで自分を責めてるんだ」

「あ……」

その仁志さんの言葉に異なる意味合いの同じ声が漏れた。

切ちやんはきつと私の気持ちを察して、私は自分の気持ちを仁志さんが正しく察している事への驚きと嬉しきを感じて、かな。

「あの時自分が……って、その気持ちは分かるよ。痛い程、よく分かる。だからこそ、俺はこう言わせて欲しい。もう同じ事は繰り返すもんなかって、そう思ってくれ」

「もう同じ事は……」

「繰り返すもんか……デスか」

「ああ。過ぎた事を悔やんでも仕方ないんだ。反省は大事だけど後悔はいらない。覆水盆に返らずとも言う。一度起きてしまった事はもうなかった事には出来ない」

そつと仁志さんの手が横になっていいる切ちやんと座ってる私の手へ重ねられる。あつたかい……。

「二人が自分を責めているように俺も自分を責めてるんだ。ちゃんと監督するべきだったとね」

「ししよー……」

「仁志さん……」

「だから、この事はこれで終わりにしよう。そしてもう少ししたらみんなまでビーチバレーをやるうじやないか。そして、海の家へ行つてかき氷を買つて、みんなで分け合つて食べて、海岸を散歩するのもいい泳ぐのもいい。切歌、難しいかもしれないが、君が一番気持ちを明るく持つて欲しい。調もだ。今夜寝る時に、さつきの事を笑い話に出来るぐらい、あるいは思い出せないぐらい楽しい時間を作ろう。みんなまで」

そう告げて仁志さんは私達の手を優しく握った。その温もりに私も切ちやんもゆつくりと表情が緩んでいく。

さつきの事で冷えてしまった心が静かに温められていくような、そんな感覚に包まれて。

仁志さんはやっぱりあつたかい。今だって私や切ちやんだけじゃなく自分も悪かつたって、そう言つて励ましてくれてる……。

やっぱり、私は仁志さんの事が大好きだ。でもそれは切ちやんやマ

リアへの大好きとは違う大好き。

だって、切ちゃんに手を握られてもこんな風にドキドキしない。マリアに手を握られても顔が熱くならない。

うん、そうなんだ。私も、マリア達と同じだった。仁志さんを、この人を、男の人として見てるんだ。

なら、こうしちゃいられないね。私は響さん達に置いていかれる。急いで追い付かないと。ううん、追い越すぐらいじゃないと。

「あの、仁志さん、お願いがあるんですけど」

「お願い？」

「はい。その、日焼け止めを塗って欲しいんです。私、今まで忘れて」

「ああ、そっか。でも、それなら同性のセレナやマリアの方がいいんじゃない？」

「……遊んでるところを邪魔するのも悪いから」

もってもらいたい理由で仁志さんにボディータッチをしてもらおう。少し恥ずかしいけど、背中を触られるぐらいは平気。

水着の上を脱いで胸を腕で隠しながらシートへとうつ伏せになる。み、見えてないのに凄く顔が熱くなるのが分かった。

だって、仁志さんの視線が私の背中に注がれてるのが分かるから。

「ししよー、アタシもお願いしたいデス」

そこへ聞こえる切ちゃんの声。顔を動かせば切ちゃんもうつぶせになって水着の上の紐を解いてた。

と、そこで切ちゃんがこつちへ顔を向けて少しだけ赤い顔になる。

「な、何だか恥ずかしいデスね」

「うん」

私が切ちゃんと話してる間、仁志さんは「えく……」とか「いやでもなあ……」とか呟いてた。

で、そんな事を少しした後で……

「わ、分かった。じゃ、二人いっぺんにやるから」

どこか困った声でそう言って仁志さんは日焼け止めを手を取った。多分だけど、妹みたいに思ってる私や切ちゃんでも女子高生の体を

入念に触ると妙な意識をするってそう思ってるんだ。

だから仁志さんは、二人いつペンなら強く意識する事もなく出来るだろうと判断したんじゃないかな？

「前は自分で塗れるだろうから背中だけ塗るぞ」

「お、お願いするデス……」

「うん、お願い」

シートの上に向つ伏せとなって寝そべる私と切ちゃん。どこか緊張している切ちゃんに笑みが浮かぶ。

「じゃ、塗るぞ」

聞こえてきた声に少しだけ緊張する。その後でたまに頭を撫でてくれる大きくて優しい手が背中へ乗せられたのが分かった。

丁寧というよりは優しく塗り込む感じの手付きに仁志さんらしさを感じて嬉しくなる。

エルやセレナを撫でる時と私や切ちゃんを撫でる時、その撫で方が違う事に気付いたのはいつだったろう？

エルやセレナは少しだけ強めに撫でて、私や切ちゃんは髪を乱さないように優しく撫でてくれる。

あれは、きつとエル達は子供だから大好きだよって気持ちを強く込めて撫でてるんだ。

だけど私達はもう子供じゃないから髪型を崩さないようにって気遣ってくれてる。

「ふわあ……ししよーの手、あったかくて安心するデスよお……」

「うん、本当にあったかい。お日様みたいな手……」

切ちゃんのどこか眠そうな声に私も同意する。こっちで私達を守ろうと頑張ってくくれる人の手。私達の笑顔を、暮らしを支えてくれる手だから。

「あまりおだてないでくれ。こっちは生まれて初めての事に妙な緊張をしてるんだからさ」

声だけで分かる。今、仁志さんは困った顔で笑ってる。

「仁志さん、大丈夫。とつても気持ちいい」

「デスよお。ししよーの、とつても気持ちいいデス……」

「ふ、二人共？ その、感想は嬉しいけど表現が違うって。これはマツサージじゃなくて日焼け止めを塗ってるだけで」

……何となくだけど仁志さんの言いたい事が分かった。多分私と切ちゃんが気持ちいいって言うのが恥ずかしい、のかな？

「でも気持ちいいのは事実」

「そうデスね……」

「あ、ありがとな」

「だから、仁志さん。もっと気持ち良くして？」

「し、調っ!？」

「ししよお、アタシもデスよお。もっと気持ち良くして欲しいデス……」

「き、切歌まで……」

多分、今の仁志さんは顔が赤い気がする。切ちゃんは無意識だろうけど、私はちよつとだけエッチな感じを意識したし。

それでも止めないでちゃんと背中全体へ塗ってくれるのが仁志さんの優しさと責任感を示してる。

本当に、大好きになっちゃう人だ。

「よし、これで終わり」

「あ……」

あつたかいのが離れて、急に寂しさがやってきた。

——もつと触って欲しい。もつとあつたかくして欲しい……。

でも、もう塗る場所ない。さすがに前は恥ずかしい……。

——それ以外にもまだある……。

それ以外の場所……？ つ?! お、お尻はどうかと思う。

——大好きな人なら平気。だって、恋人とかならやる事だし……。

恋人……。

——告白する前に行動で私の気持ちを仁志さんに分かってもらうんだ。もう私は仁志さんを恋人みたいにしてますよ……。

それなら、いいかな？ 水着の上からなら、直接じゃなければ、構わない。

——もしそれで出来ないって言われたら、私を大人の女って見てく

れてるって事だ。それならそれで嬉しい……。

そう、だね。うん、言うだけ言ってみよう。もしこれで塗ってくれるってなったら本当は子供扱いだって事だし。

その時は私の事をちゃんと大人の女だって意識させないといけない。胸は小さいけど、気持ちだけはもう大人だから。

「あの、仁志さん」

「何だい？」

「出来れば、その、お尻も……」

「いつ?! い、いやいや、さすがにそこは」

「ダメ? 私、仁志さんなら構わないから。水着の上からでいいので塗って欲しい」

言いながら私は笑ってた。だって仁志さんが思い切り動揺してる。私を、女って意識してくれてる。

嬉しい……。うん、嬉しい。もっと意識して欲しい。もっと私を大人って見て欲しい。

「えっと、調? 何て言うか、気持ちは嬉しいけどそれはさすがに」「私、仁志さんの事、好きです。男の人として、見えます。女として、想ってます。これでも、ダメですか?」

胸を隠しながら体を起こしてそう告げる。仁志さんは顔を背けようとして、しないでくれた。

赤い顔だけど、真剣な眼差しで私の目を見つめてくれた。

「……本当に?」

「こんな嘔吐きたくないです」

「そっか。うん、そうだよな。君は言い辛い事もはっきり言える女性だった」

そう言って仁志さんは私へバスタオルをかけてくれた。胸が隠せるように。

「その、気持ちは分かった。でもさすがにお尻とかは塗れないよ。悪いけど勘弁してくれ」

「……分かりました」

「助かる。じゃ、俺はちよつとみんなの様子を見てくるよ」

ちよつとだけ急ぎ気味にパラソルの下から出て行く仁志さんを見送って、私は胸を隠してた手をどけてかけられたバスタオルを抱き締める。

それが仁志さんからの私への気持ちだからって、そう思っ

「し、調？ 今の、ししよーを」

「うん、そうだよ。私もマリア達と一緒に。仁志さんを、旦那さんにしたい」

言っ

私

切ちゃんへ言っ

切ちゃん

私

切ちゃん

私

私

私

私

私

私

私

しよーの姿を探します。

今はししよーに会いたいデス。会って、アタシの中のもやもやをどうにかして欲しいデス。

「嫌デス……。ししよーを取られるなんて嫌デス……」

さっきの調の言葉がずっと頭の中でグルグルしてます。アタシは、アタシはみんなで幸せになりたいデス。

でも、このままじゃ調やマリア達がししよーをダンナさんにして、アタシはのけ者にされちゃうかもしれません。

そんなの、そんなの嫌デス。絶対嫌デスっ！

——こうなったらアタシも師匠のお嫁さんになるしかないデス……。

思わず足が止まりました。アタシが、ししよーのお嫁さん、デスカ？　してくれるデスカね？

——この前のお料理、とつても喜んでくれました。アタシが作ったご飯、美味しそうに食べてくれたデス……。

そうでした。ししよーはアタシの作ったご飯をマリアや調に負けてないって言ってくれたデス。

——このままじゃみんなバラバラになっちゃうデス。そうならないためにもアタシも師匠のお嫁さんに立候補して、またみんなで笑うデスよ……。

そう、デスカね？　それで本当に笑えるデスカね？　ししよー、困ってるデスのに。時々ししよーが響さん達といる時に困った顔、してるデスのに。

——あれはきつとアタシの事を気遣ってくれてたんデスよ。アタシを一人にしないようにって思ってた師匠は困ってたんデス……。

ありえるデス。ししよーは優しいデス。アタシがししよーって呼ぶようになってから、扱い方がそれまでよりもっと優しくなりました。

弟子だってそう思ってくれて、色々な事を前よりも話してくれるようになった。アタシも、気付いたら調よりもししよーという時間の方が多くなっています。

「あれ？ 切歌？ どうしたんだこんなところで？」

聞こえた声に顔を上げると、そこには不思議そうな顔をしたししよーがいました。

「あ、えっと……」

言えないデス。調からししよーを取っちゃうぞって言われたなんて。

「何だ何だ？ 俺がいなくて寂しくなったか？」

「っ」

その言葉が、思ってたよりもズキンと心に響いたデス。

「ししよー……」

「ん？」

「ししよーは、アタシを置いてどこか行かないデスよね？ アタシだけ置き去りにしないデスよね？」

「切歌……」

こつちを見てししよーが驚いた顔をしました。だって、このままじゃししよーはアタシの傍からいなくなります。

調は可愛くて気が利いて、お料理もお掃除もしっかり出来るお嫁さん向きの女の子デス。

マリアは言うまでもありません。お母さんにもお嫁さんにも最高の女性デス。

響さんだって、クリス先輩だって、未来さんや翼さん、奏さんだってそうデス。みんな、みんなお嫁さんになれる人達デス。

セレナやエルはししよーが子供みたいに可愛がってます。

アタシだけ、アタシだけが違うんデス。アタシだけが弟子だから、お嫁さんに向かないデスから……。

そう思ったら頭にあったかい物が置かれました。時々そうやってアタシを笑顔にしてくれる、ししよーの手デス。

「ししよー……？」

「何があったか知らないけど、そんな顔しないでくれ。切歌が笑顔じゃなくなると俺だけじゃなくてみんな心配するんだぞ？」

そこで思い出します。足がつつちやった後、ししよーにだっこされ

て運ばれてる時のマリア達を。パラソルの下で横になつてた時の響さん達の顔を。

「まださっきの事を引きずってるのかもしれないけど、心配するな。俺は、何があつても切歌の師匠だから。それに、切歌は弟子つて言つても俺からすればかけがえのない趣味仲間でもあるんだ。置き去りなんてしないよ。むしろ俺がそうしないでくれつて頼む方だ」

「ししよー……」

アタシへ安心させるように笑うししよーに胸があつたかくなるデス。

「あの、ししよー、一つ聞かせて欲しいデス」

「何だ？」

今なら、聞ける気がします。ジョーダンっぽく聞けばきつとししよーも返事をしやすいはずデスし。

「アタシも、ししよーのお嫁さんになりたいって、そう言ったらダメデスか？」

なのに、アタシはジョーダンっぽく言えなかつたデス。普段のアタシらしくない、どこか気弱なそんな声。

でもししよーはそれに困つた顔じゃなくて照れた顔を見せてくれました。嫌がる顔じゃなく、嬉しそうな顔をしてくれました。

「ダメじゃないよ。ありがとな切歌。その、本当に嬉しいよ」

「ほ、ホントデスか？ 嬉しいデスか？ 困らないデスか？」

「……困らない訳じゃないよ。だけど、それ以上に嬉しいんだ。可能なら今すぐに大声で叫びたいぐらいだよ。切歌が奥さんになつてくれるつて言つてくれたつてさ」

優しい笑顔でそう言つてししよーはアタシの事をそつと抱きしめてくれました。

あつたかいデス……。トクントクンつてししよーの心臓の音が聞こえてきます。

「だから切歌、いつもの切歌に戻ってくれないか？ 今みたいな素晴らしい切歌もいいけど、俺はやっぱり普段の明るくて元気な切歌が好きだ」

その言葉にアタシは胸のもやもやがキレイに消えるのを感じました。

そしてさっきまでの気分が嘘みたいに一気に楽しくて嬉しくなってきたんデスっ！

「ししよっ！」

「つと！ いきなりだな」

「えへへっ！ アタシの元気はいきなりデスよっ！」

「やれやれ、困ったもんだ。やっぱりしおらしい方が良かったかな？」

「あつ、そういう事言うデスか。じゃあこうデス！」

思いつきりししよーに抱き着きます。お、おっぱいも当たるデスけどししよーなら問題ないデスー！

「き、切歌っ?! さ、さすがにそれは」

「ダメデス！ 許してあげませんっ！ 許して欲しかったら焼きそばとかき氷のメロン味をよーきゅーするデスっ！」

「な、なんて即物的な要求の犯人だ。なら、こうしてやるっ！」

「ふえっ!？」

視界がグルンって変わって、気付いたらししよーの顔が目の前デス。

つて、またお姫様だっこされてるデスっ!？

「よし、食い意地の張った犯人確保。このまま署まで連行する」

「は、放せ放せ、デス」

「ダメだ。話はきっちり署で聞かせてもらおうからな」

「と、取り調べてやっデスか？ じゃあカツ丼食べれるデスか？」

顔が熱いデスけどそれをししよーに気付かれないようにごまかします。

「いいけど、あれって出前だから代金はその人持ちらしいぞ」

「夢がないデスっ！」

衝撃の事実デス。と、というか、やっぱり恥ずかしいデスよお。

「そもそも取り調べに夢も何もないと思うんだがなあ……」

「けど、ししよーの腕の中って安心するデス。えへへ、気分はお姫様デスね。最高デス。」

そのままアタシはししよーにお姫様だっこされてパラソルの下へと戻る事に。

そこで待っていた調がアタシの事を見て若干羨ましそうな顔をしたのが印象的でした。

「よつと、やっぱり切歌は軽いな」

優しくシートへ下ろしてもらって、アタシはししよーへ向き直ります。

「ししよー、ちよつと耳貸してくださいデス」

「耳を？ はいはい」

よし、ここデス！

「……き、切歌？」

ししよーが目をパチクリさせてます。ほっぺたにキスしてあげたデスよ。

調も目を見開いて驚いてますね。どうデスカ、調。お嫁さんになるならこれぐらいは出来ないとダメデスよ？

「あ、アタシはししよーの弟子を今ここでやめさせてもらおうデス。代わりに、今からアタシはししよーのお嫁さん修行を始めます」

「はい？」

「ししよー、色々教えて欲しいデス。お嫁さんになるために」

「むっ、切ちゃんズルい」

「ズルいつて調？ お嫁さん修行つて普通母親が」

「それなら私も仁志さんの弟子になる。お嫁さん修行を仁志さんにつけてもらうから」

「ええ……無視なお……」

ししよーが困った顔をするデスが、今のアタシには調の言葉の方が問題デス。

「し、調は十分お嫁さん修行出来てますからししよーは必要ないデス」
「ううん、必要だよ。私、家事はそれなりだけどエッチな勉強はまつ」
「はいそこまでっ！ そこまでそこまでっ！ これ以上この話題で話すというなら二人は車へ戻ってもらいまーす！」

調の言葉をししよーがさえぎるように大きな声を出しました。

でもちやんと聞えました。エツちな勉強、デスカ。そ、それはたしかにししよーから教えてもらわないと無理デスね。

なのでししよーの傍へ駆け寄って見上げます。

「ししよー、エツちな勉強も教えて欲しいデス」

「んなっ!？」

「私もお願いしたいです」

「調っ!？」

「だって、このままじゃ私達、そういう事を知らないままで社会に出ます」

「それだと、エツちな言葉だって知らないでそういう言葉を使っちゃうかもデスよ」

実際、どーてもそうだと思うデス。だからししよーへお願いしないとダメデス。

他の男の人じゃ、アタシや調べエツちな事をするに決まっています。でも、ししよーはそういう事はちやんとそういう関係になった時だけって言える人デス！

「ねえ、お願い（デス）。教えてししよー（師匠）」

アタシと調が両脇へしっかりと抱き着いてししよーへおねだりデス。

するとししよーが大きくため息を吐いたかと思うと……

「っ!？」

頭に強い痛みが走りました。見上げればししよーのゲンコツが調の頭に落ちてます。つまりアタシも、デスね。

「二人共、少し海で頭を冷やしてくるんだ。もう立派な女性だという自覚を持って」

「……持つてるからお願ひしたんですけど……」

「デスデス」

「そ、そういう事は家でやれ、ってのものないな。とにかく軽く海で遊んでおいで。ついでにこれを持って響達と合流するといい」

そう言っしてししよーはアタシへビーチボールを渡しました。これならビーチバレー出来るデスね。

「……行くデスカ」

「そう、だね」

調と顔を見合わせて頷き合う。これ以上はししよーを本当に怒らせちゃうデスし、そろそろアタシも遊びたいデス。

だけど、パラソルを出る前にししよーへ一言だけ言っておきます。

「ししよー、アタシ、本気デスっ！」

「私も本気。だから師匠」

「いつか修行、つけてください（デス）」

「……………怪我しないように気を付けてな」

こつちへ背中を向けてししよーはそう言いながら座りました。

何となくデスけど、今のししよーはプールの時と同じ状態な気がします。

多分男の人としての反応しちゃうたんでスね。えへっ、嬉しいって思っちゃうのは何でデスカね？

そう思っただけ目を向けると目が合いました。で、同時に笑っちゃいました。

「行こうか切ちゃん」

「デスね」

今のアタシはししよーから見れば立派な大人の女デス。その事に自信を持って調と一緒に海へ向かいます。

さあ、海はこれからデス！ 楽しい時間を作るデスよっ！

「はい、どうぞ」

兄様の手から姉さんの手へ黄色い山頂の氷の山が渡る。とっても美味しそうです。

「ありがとうお兄ちゃん。エル、先に食べていいよ」

「ありがとうございます」

ストローのようになっていた変わったスプーンを手にまずは山頂付近を一口。

「んっっ！」

冷たくて甘くて少し酸っぱい味が口の中に広がる。レモンの香り

と味がして、僕の口の中で消えていく。

「美味しい？」

「はい！ とつてもっ！ 姉さんもどうぞ！」

「じゃあ遠慮なく」

「はい、あーん」

「あー……むっ。んっ」

僕のすくったかき氷を食べて姉さんが嬉しそうに目を閉じる。良かった。姉さんもこの味が好きみたいです。

「エル、俺にもくれ」

「分かりました」

今度はヴェイグさんにかき氷を食べてもらいます。これがヴェイグさんの初かき氷です。

「どうぞ」

「あー……っ?!」

口に入れた瞬間、ヴェイグさんの全身の毛が逆立ちました。

「あつ、ヴェイグさん、少し酸っぱいから気を付けてね」

「姉さん、す、少し遅かったかもしれません」

忘れていました。ヴェイグさんは知らない事が意外と多い事を。

レモンが酸味を持っている事もその中の一つだったようです。

「……エルの言う通りだ。その、もっと早く言っただけ良かったぞ」

「ご、ごめんなさい」

若干怒り眉なヴェイグさんへ二人で頭を下げる。そんな僕らを見て兄様達が笑った。

「まあまあ、ヴェイグも勘弁してあげてくれ。どうしてもさ、こういう時って自分の知ってる事はみんな知ってるって思いがちになるんだよ」

「……そうだな。ああ、それと味自体は嫌いじゃないぞ。ちよつとビックリしただけだ」

「ホッ……」

その言葉に姉さんと二人で安堵した。そのままヴェイグさんはクリスさんが響さん達と分け合っている赤いシロップのかかったかき

氷をもらっていた。

イチゴ味のそちらは驚く事もなく頷いていたので気に入ったみたいだ。で、次はメロン味の切歌お姉ちゃん達へと。

「ヴェイグさん、全部の味を食べてみるつもりだね」

「ですね」

ちよつと気持ちは分かる。見れば皆さん笑ってる。きつとヴェイグさんのしてる事は皆さんどこかでしたい事かした事がある事なんだろう。

僕も、許されるかな？ そう思つて兄様の近くへ移動する。兄様は僕の動きに気が付いて不思議そうに顔を向けてくれた。

「エル？ どうした？」

「あ、あの、一口ください」

兄様の持つてるかき氷は白い山頂。何でもカルピスをかけてもらつたらしい。

「いいけど……お腹壊さないようにな？」

「はい！」

「お兄ちゃん、私もいい？」

僕が兄様からかき氷を受け取ると後ろから姉さんの声が聞こえた。

「勿論どうぞ。ただし、一口だ。自分達の分もあるんだからね」

「そうよ。エルもセレナも程々にしなさい。ヴェイグ、貴方もよ」

「はーい（分かった）」

姉様の言葉に返事をして僕と姉さんは兄様のかき氷を食べる。甘くて爽やかな味です。

僕、レモンもいいけどこつちも好きだなあ。いつそ両方を混ぜたら美味しいかもしれせんっ！

見れば姉さんもそう思ったみたいで持つてるレモンのかき氷を見つめていた。

「姉さん、混ぜたいんですか？」

「え？ エルも？」

その瞬間、僕らの視界からかき氷が消えた。

「ダクメ」

「あ……」

僕らの考えは兄様と姉様によって阻止されました。仕方ありません。レモン味だけで楽しめます。

そう姉様へ言ったら苦笑してかき氷を返してもらえました。

そんな僕らとは対照的に、ヴェイグさんは遂に皆さんから一口ずつもらつての全種類コンプリートです。

「どれも美味しいな。この暑い時にはピッタリだ」

「うんうん。私もそう思うよヴェイグさん」

「デスデス」

響さんと切歌お姉ちゃんが深く頷きます。ただ、今一瞬見えた二人の舌が凄い色になっていた気が……。

で、それを見ただろうヴェイグさんが驚いた顔をお二人へ向けています。

「き、切歌？ 響もどうした？ 舌が変な色になってるぞ」

「あー、シロップの色素だよ。着色料を使ってるからそれで舌がその色に染まるんだ」

その言葉と同時に響さんが笑って舌を出してくれた。見事に真っ赤になって、言われてなかったら怪我でもしたのかなって思う程だった。

「だから姉様は食べないんですか？」

「そんな事ないわよ。エルやセレナから分けてもらおうと思つたわ」

「おっ、もうエルも舌が黄色になってるぞ」

「ほ、本当ですか？」

僕の問いかけに笑って頷く兄様と姉様。なので確認のために姉さんに見てもらおう事に。

「ど、どうでふふあ？」

「……うん、黄色い。エル、私はどう？ ベー」

そう言つて見せられた姉さんの舌も黄色になっていた。凄い……。

「なってます。姉さんの舌も黄色です」

「そっかあ。じゃ、切歌さん達は緑？」

「ん？ れー……」

「わあ……」

切歌お姉ちゃんの舌は見事なまでに緑色です。で、調お姉ちゃんも笑いながら舌を見せてくれて、そっちも緑色。

なので対抗するように僕と姉さんも舌を見せました。そうしてたら兄様達が笑い出しました。

「はははっ、妙な張り合いをするんじゃないって」

「もう、本当に貴方達は……」

「仲良しだよ、エルちゃん達」

「本当だね。完全に姉妹だよ」

未来さんの言葉に僕は笑顔になった。そうです。今の僕らは姉妹です！

「さて、これ食べたら次はどうする？」

「今度はバレーじゃなくて全員でどれだけパス回せるかでもやろうぜ」

「それはいいな。仁志さんもそれなら参加出来ますよね？」

そう、さっきまでのビーチバレーは兄様は僕やヴェイグさんと一緒に見学してました。

何でも年齢もあつて怪我するかもしれないからと、そう言つて。

「ししよー、それなら大丈夫デス？」

「今度はみんな一緒に遊びましょう」

「分かったよ。ヴェイグとエルも参加な？」

「それはいいですけど……」

「俺はどうすればいいんだ？」

すると僕とヴェイグさんを見て兄様は笑みを浮かべた。

「まあ、まずはかき氷を食べ終わってからだ。あー、でも慌てて食べちゃダメだぞ。じゃないと」

「くくくくっ!?!」

響さんと切歌お姉ちゃんが揃って頭を押さえて俯いた。一体何が？

「ああなる。急激に冷たい物を摂取すると頭痛が起きるんだ」

「そうなんですか……」

「切歌さん、響さんも大丈夫ですか？」

「へ、平気デス……」

「こ、これぐらいへいき、へっちやら……」

お二人の表情はそうは見えないけど、調お姉ちゃんも未来さんも呆れた顔をしてるので本当にそうなんだろう。

「……かきごおりとは中々怖い食べ物なんだな」

そんなお二人を見てのヴェイグさんの噛み締めるような言葉に、兄様達が大きく笑った。

ヴェイグとエルフナインを参加させてのボール遊び。それは当初のパス回しではなくボールを爆弾に見立てたしりとりとなった。

十秒以内に答えなければ終わりというルールで行われたそれで、ヴェイグはエルフナインの膝上に座って回されてきたボールを懸命に保持して隣へ渡し、エルフナインはエルフナインでしりどりの答えを考えるとという共同作業を行った。

これが中々に続いて行き、一回目が終わった頃には既に昼時となっていた。

照り付ける太陽はその勢いを増し、パラソルの外は灼熱と呼んでもいいような雰囲気である。

「じゃ、そろそろお昼といきますか」

「そうね。調、未来、クリスも広げるの手伝って」

「二待ってました（デス）っ！二」

響、切歌、奏の声に周囲が苦笑する。食べたのがかき氷だけとはいえあれから一時間も経っていないのだ。

それだけ燃費が悪いという事だろうと思うも、内の二名は元々色気よりも食い気だった事もあり単に食い意地の問題かとも思われていた。

やがてシートの上に今朝作られた食べ物が並べられていく。それを見て仁志達は感嘆の声を上げた。

それに作った者達が嬉しそうに笑みを作り、全て並べ終えて飲み物

なども行き渡ったのを見てマリアが共に並べていた者達へ目配せをする。

「さっ、召し上がれ」

作った者達が声を揃えて食事の開始を告げれば……

「いただきます(デス)」

それ以外の者達が感謝を告げるように手を合わせて声を揃える。

十二本の手がそれぞれで動いて料理へと伸びていく。思い思いの料理を手に取り、口へ運ぶ仁志達。

そして全員の顔に笑顔が咲いた。最高の食事とは何だと言われれば、きつと彼らはこう答えるだろう。

親しい者達と食べる事、だと。

笑顔を浮かべる事で誰かが笑顔になり、それを向け合う事でそれより強く輝きを得ていく。

時には苦い顔や渋い顔を見せても、それさえもすぐに笑顔へと変えてしまう時間が今たしかにここにある。

誰もがどこかで分かっているのだ。この時間がどれだけ得難く、また儂いものかを。

この日常は本来非日常である事を。そうでなければならぬ事を。それを知らぬ振りをするかのように誰もが笑顔を見せ合う。

この時間が日常であり続けて欲しいと願いながら、祈りながら、そして……

それが叶わぬものと、どこかで分かっているが……。

「奏さん、お昼を食べて少し休んだら沖までどっちが早く行けるか勝負しません？」

「おっ、いいね。マリアも参加しなよ。 GANG ニールで競争といこうじゃないか」

「別にいいわよ。私も思いつきり泳いでみたかったし」

光槍トリオは競争を……

「エル、後でボート借りてくるデスから、それでヴェイグやセレナと一緒に乗るといいデス」

「ありがとうございますー」

「ヴェイグさん、今度は海の上へ行けますよ」

「おおつ、そうか!」

「ふふつ、はしゃいで落ちないようにね」

年少組はボートを使つての楽しい一時を……

「雪音と小日向はどうする?」

「そうだなあ……いつそ焼いてみるか?」

「や、焼けるのかな?」

「やるだけやってみればいいじゃないか。それもまた夏の思い出だよ」

残つた翼達へ仁志がそう声をかける。ただ、その瞬間三人は若干恥ずかしそうに仁志へ視線を向けて……

「じゃあ、オイル塗つてくれよ(ますか)?」

「っ!」

上目遣いでそう言われ、仁志は思わず息を呑んだ。以前までの彼なら赤面してそこで背を向けただろう。

だが、今の彼は何とかその場に踏み止まつて深呼吸一つすると……

「喜んで」

「っ!」

逆に翼達の顔を赤面させるようになっていた。そこに昼前にあつた切歌と調への日焼け止め塗りが大きく影響している事は言うまでもない。

こうして再びそれぞれに散つて動き出す仁志達。そんな彼らに悪意の魔の手は着実に伸びていた。

既に蕾を付けられたクリス。根付いてしまったセレナと翼。それと種が植え付けられた調。そして根を残したままの響。

装者の半数以上が悪意の影響を受けてしまつているのだ。残るマリア達でさえも悪意の影響下になつた事がある者達ばかり。

そう、ゆつくりとではあるが着実に悪意の企みは進行している。闇は静かに、深く、装者達の心へ入り込んでいた。

そしてそれは、既に影響下に置いた装者を使つてよりその企みを成功させようと動いている。

「つぶはっ！ あたしの勝ちい！」

「つぶく……惜しかったなあ！ もうちよつとだったのに！」

「本当よ。僅差も僅差じゃない」

「僅差だろうと勝ちは勝ちだつて」

明るく笑う奏を見てマリアが軽く呆れつつも苦笑する中、響はブイへ掴まりながらポツリと呟いた。

「まあいいか。一番勝ちたい勝負は負けなければいいんだし」
「っ」

それが何を意味するのか分からぬ奏とマリアではない。翼が言っていたように、響もまた仁志の世界で一緒に暮らそうと思っ
ているのかと、そう思つて二人は視線を彼女へ向ける。

「響、あんた……」

「もしかして、この世界で仁志と一緒に暮らそうとか考えるの？」

「へ？ いや、さすがにそれはないですよ」

困った表情で二人へ答える響だったが、その眼差しが少しだけ遠いものへと変わる。

「でも、出来たらいいなつて思つてはいます。それか、仁志さんを私達の世界につて」

「仁志を……」

「連れてくつて言うの？」

「可能なら、です。クリスちゃんはその考えでるみたいですよ。自分が養つてもいいつて、そう言つてました」

さらりと告げられるクリスの考えに奏とマリアは息を呑んだ。

（仁志先輩を……養う？ でも、あたしだつて自分の世界なら可能だ。あの一人一人ぐらい、余裕で養える……）

（仁志に来てもらつて、家の事を基本やつてもらおう……。エルも私の部屋で同居してもらつて、たまに私が家事を代わつてあげて……）

頭の中に浮かぶ幸せな未来想像図。そんな二人へ響は更なる爆弾を投下する。

——私、この世界とお別れする前に絶対仁志さんとの思い出作ろうと決めてます。仁志さん言つてくれたんです。悪意が私達を操つて

キスさせるなら、それを逆に利用して元に戻すぐらいしてやるって……。

——っ!?

年長らしく心を強く持とうとしていた奏とマリアの決意に、小さな、けれど確かなヒビが入った。

その音を聞いたのか、悪意はニヤリと笑って響の口を動かしている。

——私とクリスちゃんがキスして欲しいって言ったら、仁志さんはちゃんとした状況とかを作つてするからって、そう約束してくれました。私とクリスちゃんのデートは、そういう事になつてるんですよ……。

——そう、なんだ。

——デートで、キス、ね。

ピシピシとヒビが大きくなっていく。既にキスは済ませた奏とマリアであるが、デートをしてその中でのというのは未経験。

それを仁志が自分から響やクリスへすると言つた事は、二人の心を大きく動かすには十分過ぎる威力を持つていた。

——そういえば、未来と調ちゃん、こつそり二度目のデートしたみたいだし、マリアさんや奏さんも仁志さんへ言つたらどうですか？

私もこつちに来たばかりの頃に二人きりでデートしてますし……。

——……そうするか。

——ええ、不公平は不味いものね。

年長としての覚悟や決意は崩れ去り、女としての想いが強く奏とマリアを動かす始める。

装者ではなく女性としてのその心は、悪意から見れば穴だらけにも等しい状態だった。

——これでこの二人にも……ふふっ……。

同時刻、ボートをレンタルした切歌は調と二人でボートを押すように足を動かして泳いでいた。

「ヴェイグさん、どうですか？」

「ああ、海は凄いな。広くて大きいぞ」

「ふふっ、落ちないでくださいね、ヴェイグさん」

「分かってる」

ボートから海を覗き込むヴェイグにセレナが苦笑しエルが笑顔を見せる。

それを見つめて切歌は笑顔を浮かべていた。

(うんうん、ししよーからの試練は今の所成功デスね)

出来るだけ楽しい笑顔の思い出を多く作る。そのために仁志からもらった資金を使っている切歌。

そんな彼女へ調がそれとなく声をかけた。

「ねえ切ちゃん」

「ん？ 何デス？」

「いつ、お嫁さん修行、始める？」

それは昼前に二人で仁志へ迫ったものだ。あの時は恋心の自覚もあつて言えた事も、冷たい海水に浸かって楽しげなセレナ達を見ている今は答える事が出来ない内容と言えた。

「あ、あれは……そのデスね？」

「早めに動かないと私と切ちゃん、 크리스先輩達に置いてかれちゃう」

置いていかれる。その言葉が切歌の心を掴んだ。

「ど、どういう意味デスか？」

「考えてみて切ちゃん。私達はどーのーの意味が分からなかった。なのに 크리스先輩達はみんな分かった。つまり、私達じゃ大人の女として師匠の喜ぶ事をしてあげられない」

「な、ナルホド……」

この手の話では普段から主導権を握るのは調だった。

切歌は気付けば足を止め、完全に聞き入る体勢となっている。

それを察して調はボートの上にいるセレナ達へ声をかけた。

「セレナ、エル、しばらく二人でボートを漕いで動かしてもらっていい？」

「分かりました」

「任せてくださいー！」

「でも沖に行っちゃダメだよ。そこだけはお願い」

「はーい」

ボートの左右にある小さなオールを使ってセレナとエルフナインは自分達で動かし始めた。

ヴェイグはそれに興奮し、エルフナインと共にオールを動かしている。

ボートに掴まったまま、その光景を横目にしつつ調と切歌は話を続けた。

「切ちゃん、師匠はきつと私達が真剣にお願いすれば教えてくれるよ。だってあの時ダメだって言わなかった」

「おおつ、そうデスね」

「あれは、多分私達の真剣さを試してる。本気でお嫁さん修行を、エツチな勉強が出来るのかつて。その覚悟はあるのかつて」

「あ、アタシはししよーとなら……」

赤い顔で少しだけ照れくさそうに俯く切歌を見て、悪意は不気味に笑って調の口を動かした。

——そんな消極的なら私一人で師匠へお願いしに行くよ。それでもいいの、切ちゃん。一人だけ置き去りにされても……。

——っ!?

弾かれるように顔を上げた切歌へ調はそつと手を差し出した。

——一緒に色々教えてもらおう？ 同じお嫁さん修行の弟子として……。

——調と……一緒に……。

——そう、それで二人で師匠に教えてもらうんだよ。立派なお嫁さんになれるように……。

——二人でししよーに……。立派なお嫁さん、デスカ……。

——うん、頑張ろう切ちゃん。だから手を取って……。

——……分かったデス。調と一緒になら何も怖くないデス。

差し出された手を取った切歌へ調は優しく微笑む。

同じく悪意もほくそ笑む。種は植え付けられていないでも、もう手の内と言ってもいい切歌を見つめて。

そんな二人にエルフナインもヴェイグも気付けない。何故なら二

人はセレナと共にボートの先頭部分で海の中を眺めていたのだ。

「どこだ？ どこにくらげがいるんだ？」

「さつきあの辺りを泳いでたと思っただけだ……見間違いかな？」

「分かりません。もしかしたらボートが近付いたから逃げたのかもしれませんね」

セレナにくらげがいたと思わせてボートを停止させ、エルフナインとヴェイグをそこへ誘導させていたのだ。

それも悪意による行動。調を軽く操り、切歌へ種を植え付けられるように準備するための動きだった。

——これでいい。残るは……。

丁度その頃仁志は多大な精神疲労とそれを上回る幸福感から脱しようとしていた。

「お、終わった……」

翼、クリス、未来のサンオイルを塗り終ったのである。

昼前の切歌や調が可愛くなる程の破壊力を仁志へ与える無防備な三人の背中と外されている水着のブラ部分。

それが仁志の理性をガリガリと削り、性欲をガンガン刺激していたのだ。それを何とか制御し切り、彼は三人の女性達から苦笑されるという結末を掴み取った。

「お疲れ様です、仁志さん」

「でも、鼻の下が伸びてたぞ」

「嬉しくはありますからいいですけどね」

「そう言ってくれると助かるよ」

疲れたような笑みを浮かべる仁志へ三人が笑う。ただし、まだその水着の上は外れたままであり、仁志の視界にはそれぞれの潰れる形になっている乳房が僅かに見えていた。

「あー、さて俺はちよつとエル達の様子を見てくるよ」

「いい、いつてらっしやい……」

反応しそうな男としての部分を抑える意味も兼ねてその場から動き出す仁志。

その理由を察して三人はやや赤い顔をして送り出した。

そうして仁志がいなくなったところで三人はそれぞれに水着を着け直すとシートから体を起こす。

「あとは日を浴びるだけだね」

「だな。パラソル、ちよつと動かすか」

「なら私も手伝おう」

荷物やクーラーボックスなどに日が当たらぬよう考えながらパラソルの位置を変える翼とクリス。

未来は差し込んできた太陽の光に手を動かして日よけを作った。

「眩しい……」

「こんなんでもいいだろ」

「そうだな」

そうして再びシートへと横たわるクリスと翼。それに倣う様に未来もまたシートへうつ伏せとなった。

「そういえば先輩。この前の話だけだよ」

「ああ」

その会話の切り出し方に未来が不思議そうに顔を動かして翼の方を向いた。

「いつそさ、先輩やあたしの持つてる金を貴金属のアクセサリーとかに換金しちゃって、こっちへ持ち込むってのはどうだ？」

「え？」

「それはいいかもしれないな。さすがに金塊などでは怪しまれるだろうが、宝石やそれらを使ったアクセサリーなら私達が売り払っても怪しまれる事もないし」

「ちよ、ちよつと待ってください。ど、どういう意味ですか？」

クリスと翼の会話に未来は狼狽えた。何せどう聞いても冗談に聞こえない内容だったからだ。

自分達の世界を捨てて仁志の世界へ来る。そうとしか聞こえないものだったために。

「どういうと言われてもな」

「そのままだ。あたしと先輩は、最悪この世界で仁志と生きる」
「っ?!」

おぼろげに思っていた以上の答えだった。そこまでかと、そう思いながらも、未来は未来で納得し共感する部分があったのだ。

「あたしや先輩は人に言えねえ事が多すぎる」

「それをあの人は知っている。知った上で受け入れてくれた。包んでくれた」

「そんな相手を、あっちで探すのは難しいんだよ。それに、打ち明けるのも辛い」

「そういう事だ」

「で、でも二人は装者で」

最後の砦である「シンフォギア装者」という事実。それを未来が口にした時、翼とクリスは同時に同じ答えを返した。

——装者である前に人間だ。

その答えに未来は二の句が継げなくなった。そう言い放った二人は辛そうな顔をしていたからだ。

言いたくなかった。言うつもりはなかった。そんな心情が表情に出ていた。

「すまん小日向。今のは忘れてくれ……」

「ああ、聞かなかった事にしてくれると助かる……」

「そ、それは……」

顔を未来から背け、翼とクリスは小さな声でそう告げて黙り込んだ。

それが未来には衝撃だった。あの翼とクリスが、責任感の強い頼られる二人が、揃ってそれらを投げ捨てるような事を言ったからである。

（でも、考えてみればそうかもしれない。みんな、翼さんやクリスのそういう面に知らない内に甘えていたのかも。二人だって女性だもの。好きな人が出来て、その人とずっと一緒にいたい。普通に暮らしたいって、そう思ってもおかしくないよ）

実際未来も昔はどうして響が傷付き戦わないといけないのかと悩んでいた頃がある。

その結果、その想いを利用される形で神獣鏡のギアを纏い、響と

戦ってしまったのだから。

「小日向、お前は どう思っている?」

そんな中、ポツリと問いかけられた言葉に未来は意識を切り換えた。

「どう思っているって……」

「やはり、私達は間違っていると思うか?」

「そこまでは……」

「でも間違っていないとも言えないんだろ?」

「クリス……」

どこか諦めたような表情と声。そこで未来は察するのだ。翼とクリスは先程の話を本気で話しつつも、どこかで不可能だと思っている事を。

「分かっているんだ。これが、夢物語だと」

「悪意を倒して全てを終わらせれば、きつとこここの行き来は出来なくなる」

「それでも、人は夢を見てしまう」

「それでも、人は希望を欲しがる」

「叶わないと言われても」

「ありはしないと知っていても」

照り付ける日の光は眩しく、生命の波動に満ち溢れている。なのにも関わらず、それを浴びている翼とクリスの表情は冴えない。

「翼さん……クリス……」

未来は視界に移る二人の沈んだ顔に心を痛めていた。仁志へは、みんな笑顔になりたいと思いつけるのなら協力すると言ったが、それはあくまで現状の中である。

全てを終えた後、この世界との行き来が不可能となった後は彼女も想像していなかった。いや、想像するつもりはなかったのだ。

そこから、未来もまた目を背けていたのだから。

そんな想いから俯く未来。今の幸せは本来の居場所では望めない。それがどれ程辛く苦しいかを想像し、彼女は自分ではなく響達自身以外の装者達へ想いを寄せた。

（こんなものってないよ。好きな人が出来たのに、望んでた時間を得たのに、本当にいるべき場所へ戻ったらそのどちらも失わないといけな
いなんて……）

それは根幹世界の響達だけではない。奏もセレナもそうなのだ。
かつて未来が不安視した事が現実となっていた。この上位世界で
半年近くも過ごしてしまった事で、すっかり全員が本来の状況へ戻る
事に拒否感を覚えてしまったのである。

——いつそ、このままここでみんなで生きていけばいいんじゃない
かな？ だって、私達の世界は時間が止まったただけだもん。なら、
こっちでもう少し過ごしたって構わないはずだよ……。

そこへ悪意が忍び寄る。一度入り込んだ事もあってか、未来の弱い
事も熟知していた。

——でも、そんな事はダメだよ。一刻も早く悪意を倒して全ての世
界を元に戻さないと。

——響達の幸せを、只野さんの幸せを犠牲にして？

——っ?!

——世界のために、響達の幸せを犠牲にして日常って名前の辛く苦
しい日々を送らせるんだ？ ほとんどの人達が平和や幸せを受け取
る中で、響達だけが傷付き苦しみ悲しんでるそんな日々を……。

——あ……。

優しく愛が重たい傾向のある未来。そんな彼女にとって、響達と、
そして仁志が味わう痛み苦しみは見過ごせるはずがないもの。

しかも悪意は未来の大事な人達ばかりが傷を受ける中で、見も知ら
ぬ名も知らぬ者達が幸せになっていると吹き込んだのだ。

残念な事に今の未来にとってその悪魔のささやきはあまりにも強
く、あまりにもあつさりと心へ落ちてしまった。

「……ねえ、クリス。翼さんも、聞いて欲しい提案があるんですけど
……」

ふふつと楽しげな雰囲気さえ漂わせるような笑みを浮かべ、未来は
沈む二人へ告げるのだ。

——みんなで幸せになりませんか？

闇は嗤う。愛も所詮は欲に過ぎないと。光など、希望など、容易く邪へと染まるのだと。

——あははっ！ お前達の弱点はずばり平和。お前達が望んでも手に入らぬとどこかで諦めている。『普通』こそがお前達の弱点よ。あははっ、あはははは……。

KNOCK OUTツ!

「荷物はこれで全部?」

そう尋ねると最終確認をしていたマリアがこっちへ顔を向けた。

「ええ。忘れ物もないわ」

「レンタルした物も全部返却完了デス!」

「ゴミもちゃんと分別してある」

「ヴェイグさんのシャワーも完了しています!」

「はいっ!」

「……どうにも慣れないな、あれには」

そのヴェイグの言葉にみんなして笑った。まだ日は高いけど夕食の事を考えるならそろそろ帰らないと不味いのだ。

時刻は午後三時ちよい前。道もそこまで混んでないだろうし、帰るには丁度いい頃合いだろう。買い物時間を考えても、な。

「よし、じゃあ総員駐車場まで移動開始!」

「「「「「「了解(デス)っ!」」」」」」」

笑顔で動き出す俺達。ただ、何となく気になってる事はある。

一つはふとした時にマリアや奏が思い悩んでいるような顔をするようになった事。

もう一つは調と切歌がちよくちよく密着するようになった事。

そして最後にセレナ、だろうか。

「ねえお兄ちゃん、今度の土曜日にも車でお出かけするんだよね?」

「ああ」

「楽しみだな。エルはぎょうむようスーパーってどういうところか知ってる?」

「いえ、詳しくは知りません。でも、聞いたところによると名前の通り業務用、つまりお店などで使うような大容量の調味料などを置いているそうです」

「お店用?」

「はい。他にも珍しい材料などもあるとか」

「へえ」

俺の隣を歩くセレナは何も変わったところはない。でも、俺からすると今の位置取りが少々気になる。

少し前までセレナは大抵前の方をエルと手を繋いで歩いていた。少なくとも俺の隣を歩く事はなかったように思う。

それがあのデートをした翌日ぐらいからスキンシップが増えて、今など俺が荷物を両手で持つていなかったらきつと繋いでるだろう雰囲気だ。

嬉しくない訳じゃないし微笑ましいと思わないでもない。だけど、いきなり過ぎる気がしていた。

もしかして、あのデートでセレナも年頃の女の子らしい気持ちを俺へ抱いてくれたのだろうか？

「なあセレナ」

「何？」

かと言って直接そんな事を聞く程俺も馬鹿じゃない。なので軽く探りを入れるために多少会話をしてみる。

「海、楽しかったか？」

「うんっ！ ボートでヴェイグさんに海の上へ連れていけたし、切歌さんには感謝しかないもん」

「セレナ達が喜んでくれたのならアタシも嬉しいデス。ししよーの試練、合格出来そうデスカね？」

「大丈夫だよ切歌。今日の君を見てるとお姉ちゃんらしくて、そしてとても良いお金の使い方をした」

「そ、そうデスカ。照れちやうデスね」

「ただ、もう少し物欲を抑える事も覚えよう。あと君は食欲が少し強すぎる」

「あうっ！ それを言われるとぐーのねも出ないデス……」

「そうだね。さつきだつて帰るって言ってるのに焼きそば買おうとしてたし」

「お前なあ……」

「だから返却から戻ってくるの遅かったんだ」

何というか思いがけない方向に会話が盛り上がってしまった。

まあそれも仕方ないか。

俺の知る限り彼女達が揃って海水浴なんてなかったし、それが平和に終わる事もなかったように記憶してる。

平和に終わる、か。考えてみればみんなにとってはそれがイベントで一番珍しい流れなのかもしれない。

「これで夏も終わりなんですネ」

そんな時、エルが呟いた一言がやけに耳に残った。寂しそうな声だったからだ。

「エル、まだまだぞ。ギリギリ夏の間にもう一つイベントをねじ込むから」

「そうだよエルちゃん。バーベキューがあるんだから」

響の言葉にエルの表情が明るくなった。よしよし、隠れたみんなのムードメーカーに笑顔が戻ったぞ。

「そうでした！ まだお楽しみがありましたっ！」

「おう、今週の土曜はそのための買い物も兼ねてるんだからな？」

「行く機会もなかったようなお店だから楽しみだね」

「未来さんですか？ 私もです。どんな物置いてるんだらう？」

「ふふっ、家でも使える物があるといいわね」

おそらくこのメンバーで一番料理をしている二人が業務用スーパーに関心を持つてる気がする。

そんな風に業務用スーパー関連の会話をしている内に俺達は車まで到着。

で、俺がロックを外すと年少組が着替えようと中へ入って行こうとするので待ったをかける。

「少し待ってくれ。エンジンかけて空調を動かすよ。多少はマシになるはずだ。それと、助手席と後部座席のドアを開けてくれ。それで中の熱気を少しでも早く逃がすから」

荷物を置いて運転席へ入る。ドアを開けたままエンジンをかけて空調を作動させるとすぐに風が急激な勢いで出て来た。

そうして待つ事数分、中の温度が心持ち下がった気がしたのでエンジンをかけたまま運転席を出てドアを閉める。

「よし、これで少しはいいはずだ。可能なら女性陣全員いつぺんに替えてくれないか？ 無理ならいいんだけど」

「可能と言えば可能だけど、どうして？」

「いや、あまり空ぶかしはしたくないんだ。ガソリンの消耗が激しいし」

「けち臭いね仁志先輩は。ま、らしいけどさ」

「へいへい、自覚してますよ。でも、必要となれば俺は金を本気で散財するから。なのでけちではなく儉約家と言ってくれ」

「はいはい。けんやくかけんやくか」

楽しげにそう言っただけは助手席のドアを閉めるとこっちへ顔を向ける。

「んじや、着替えるか」

「そうね。仁志、分かってると思うけど」

「分かってるよ。ほんの少しの絶景のために人生を終わらせるつもりはない」

「ふふつ、よろしい」

俺の言葉に楽しげに笑ってマリアは車の中へ入っていく。それに続く形でみんなが笑みを浮かべながら、でもどこか恥ずかしそうに車の中へ。

で、最後の奏が俺へ顔を近付けて……

——あたしだけでよければ見せてあげなくもないよ。

なんて言っただけで素早く車内へ入ってドアを閉めた。

それが俺には照れ隠しのように思えた。

「……最近のみんなの攻勢は凄いいよなあ」

特にマリアや奏、翼の歌姫組。ある意味で年長組でもあるから当然なのかもしれないけど。

思えば今日はその三人からそれとなくナンパされたと聞いたなあ。あれ、今思えばアピールの一つなんだろう。

特に奏はそうだ。俺が意外と独占欲強い事を知ったはずだし。

「独占欲、か」

夏の空を見上げて呟く。そんなものが強い癖に世界中にみんなの

事を思い出させようとはするんだからおかしな話だ。

世界中から消えた『戦姫絶唱シンフォギア』を思い出させようとするのはある意味で独占欲とは正反対な気がする。

「いや、待てよ？ そうとも言い切れないのか」

適合者と呼ばれたファン達が思い出したとしても、俺はその彼らが絶対手に入らないものを持つてると自慢出来る。あるいは思い上がれる訳だ。

本物の装者達と出会い、過ごし、想いを寄せられたという一点で。これはある意味で独占欲にも似ている感情かもしれない。

要は、口には出さないが優越感を覚える事が出来る訳だ。コアなファンでもない俺が、全てのシンフォギアのファン達へ。

「……………小さい人間だなあ、俺」

それを否定出来ない事に自己嫌悪。人間らしいと言えば聞こえはいいが、何とも醜いもんだ。

ホントヴェイグが俺の匂いを分からなくて良かったと今程思う事はない。きつと今の俺からはとんでもなく嫌な匂いが出ている事だろう。

と、そこで後ろからドアの開く音がした。

「仁志さん、もう大丈夫ですよ。荷物は私が中へ入れておきますから」

「つと、そういう事。さっ、運転席へ行ったら行った」

「はいはい」

振り向けば笑顔の響と奏。そしてその奏から押しやられるように俺はその場から歩き出す。

俺の着替えはとうに終わっている。いや、女性と違って男の着替えは早いから更衣室で着替えたのだ。

助手席へ乗り込む奏と別れて俺は運転席のドアを開ける。すると割と涼しい風が流れてきた。

「つと。じゃ、みんなシートベルトはしてるか？」

「「「「「はい（うん）（おう）（ああ）（德斯）っ！」「」「」「」」」」」」

「ええ、大丈夫よ」

「奏は？」

「見ての通り」

「よし、じゃあ出発っ！」

行きよりも注意して運転しようと思いつながらブレーキを踏んだままギアをドライブへ入れて、サイドブレーキを外してアクセルをゆつくりと踏み込む。

「あつと、奏、悪いけど停止したところでナビを操作してくれ。自宅ってところがこの車を借りた店に設定されてるから」

「了解。そこへの案内をするようにすればいい？」

「そういう事。頼める？」

「任せてよ」

「仁志さん、このまま帰るだけですか？」

奏と話していると響からそんな問いかけが。

ふむ、どうしようかと迷っている事ではある。このまま順調に行けば車を返した時に五時いくかいかないかだ。そこから買い物して料理してとなると面倒と言えば面倒だ。

しかも下手したらスーパーが混雑している可能性が高い。タイムセールの日だもんな、五時から六時辺りって。

「どこかへ寄って結構早めの夕食を食べるか？」

「でも、そうすると寝る前にお腹空いちやうデスよ」

「お夜食？」

「太るからダメよ」

すかさずオカンマリアがカットイン。ま、女性はそういうところを気を付けないといけないもんな。

「じゃ、こうしよう。明日の朝ごはんの買い物してあるグループは？」

静寂。どうやら三組全てが今日買い物しないと明日の朝の食事に困るようだ。

「行きに寄った場所、覚えてるか？ あそこのレストラン街で夕食を食べてから明日の朝ごはんの買い物をするって事でどう？ 何なら夕食前に本やCDとかを見てきてもいいし、フードコートにも美味しい物を食べさせる店はあるしさ」

「うし、賛成の人間は挙手」

「「「「はーい」」」」」

聞こえてくるのは響達一部の声。多分だけど翼やマリアなどは苦笑しながら挙げているだろう。

いや、下手したら愛らしく手を挙げているヴェイグを見てほっこりしてるかもしれない。

「仁志先輩、満場一致で賛成だよ」

「よし、なら進路変更。目的地をジャパレンからイオンモールへ」

「あいあいさー」

俺のノリに奏が合わせてふざけてくれる。こういうところはマリアよりも奏の方がノリが良いよなあ。

「まるで海賊ね」

「あー、そうデス。どつかで聞いたと思ったら海賊デスよ」

「思い出すな、あの時の出来事を」

「ああ、苦労したもんな、あん時は」

聞こえてくる声に俺も思い出す。たしか海賊ギアの事件か。

あの船長、メチャクチャ強かったっけ。ただ悲しいかなゲームで戦う時はそこまででもないんだけど。

まあ、当然だよな。ゲームはゲームで本編は本当の戦いなんだから。

「仁志さんも知ってるですよね、あの事件」

「知ってるよ。海賊ギアの一件だろ？ 切歌と翼が船長へ挑んで負けちゃうやつ」

「そ、そんな事まで知ってるデスか!？」

「ゲームのイベント、でしたか？」

「そう。クリスの海賊ギアが地味に強くて欲しかったんだけど、生憎歌唱石がなくて泣く泣く諦めたんだよ」

巧属性、強いのがなかったからなあ。完凸させたかったけど、ゲームに課金出来る程の余裕がないので諦めたのだ。

「「「「「かしようせき？」」」」」」」

で、当然のようにみんなから疑問符が出てくる。ま、そうだろうな。だってゲーム内の一種の課金要素筆頭だし。

「簡単に言うけどゲーム内でキャラクターカードを手に入れるためのアイテム。ゲーム内でも手に入るんだけど、沢山欲しければお金を払って買うしかない」

「成程ね。以前の仁志じゃそんな事へお金を使えなかった？」

「そういう事。なのでみんなの強いカードはほとんど最強に出来ずじまい。デュオレリックなんてないのもあるぐらい」

「ちなみに誰がないんです？」

「調と奏。そもそもこの二人に関しては手に入れる事さえ考えてなかった」

「何でさ？」

すかさず隣の奏から少しだけムツとした声上がる。

「悲しい事にカードを入手するには最低でも歌唱石が20はいる。で、君達の特別ギアを確定で手に入れるには200必要。あとは分かる？」

「200なかったから手に入れる事を考えなかった？」

「そっ」

調の言葉に俺は苦笑して答えた。

「ちなみに他のみんなのは持つてはいたけど手に入れようとした訳じゃない。他の目当てがあった時にそれが出て来たっただけ。基本イベント特効としてデュオレリックは出て来たんだけど、なくてもクリアは可能だったし」

無課金の限界というやつだ。なのでコラボギアも基本ない。あっても完凸など夢のまた夢。

結局残されたのは中途半端に限界突破させたカードばかり。イベントアイテムで交換出来るやつぐらいは完凸出来るけどな。

と、そんな事を思っていると何となく気まずい空気。

「仁志さん、何となく悲しいです」

「デスデス。アタシ達のカードで頑張って手に入れたのとかないデスか？」

「頑張っつて、かあ……」

信号が変わりそうなのでブレーキを踏んでゆっくり減速していく。

さて、頑張つて手に入れたとなると、やはり俺にはあれしかないか。
「キャロルのラピス姿。あれだけは何とかギリギリ完凸まで出来た」
「キャロルの……ラピス姿？」

聞こえてきた声はエルの声だ。と、そこで思い出す。メモには書いてけど、どういう姿かは当然書いてない。エルにはイメージ出来ないよな。

「周囲にガリイ達をイメージした色合いの四つのクリスタルが浮遊しててね。纏ってるファウストローブは白を基調としてるんだ。平行世界のサンジエルマン達もキャロル用にと渡した物なんだよ」

「そうなんですか。見てみたいなあ」

「見せてもらうといいよ。依り代で会いに行つた時にな」

「はいっ！」

エルの元気な声と共に信号が青に変わる。ゆつくりとアクセルを踏んで車体を加速させていくと、ふと気付く。空気が少しだけ変わった事に。

多分だけど俺が言った言葉が重い感じじゃなかったからだろう。依り代をエルが使える。それは裏を返せば俺の世界との行き来が出来る事を意味してるか。

……俺もやっぱり根底ではそうであつて欲しいと思つてるって事だな。

それにしても、思い返せばあのイベントのキャロルは、以前の俺の考えで言うのなら善の心だったんだろうな。

対するノインこそがキャロルの悪の心。そう思えば納得しかない展開と結末だった。

そして窮地のキャロルを助けるのがエル。出来過ぎなぐらいの展開だった。あの時は届き切らなかった手が、世界を越えてちゃんと届いて繋がれるという、心に響く演出もあつたし。

「ししよーはエルが好き過ぎデスよお」

「はいっ？」

聞こえてきた拗ねるような声に疑問符を返す。

「だって、キャロルはエルも同然デス。もしここにキャロルがいたら

絶対ししょーは可愛がってるはずデスし」

「いやいや、きつと彼女は俺を鬱陶しいって言って避けるはずだよ。俺と接点を持つのは決まった時ぐらいじゃないかな？　錬金術絡みとか、お父さんの、イザークさんの事を聞く時とかさ」

「キャロルちゃんのパパってイザークって名前なんですか？」

「そうだよ。眼鏡の優しそうな顔をした男の人だ。料理が下手でキャロルが代わりに家事をやるぐらいの、そういう意味では不器用な人だった」

俺がするキャロルの話にみんな聴き入っていた。正確には故人であるキャロルのパパさんの、だろうか。

「どうもイザークさんは自分のしてる事が当時の世相から危険視される事は薄々気付いていたみたいだね。それでも助けられる人達がいるなら錬金術の知識を使い続けるとアダムに言い切ったんだ。要するに優しく強い人だったんだよ」

「パパ……」

「アダムは忠告したんだけどね。それでもって、イザークさんは自分を曲げなかった。そして、その結果が当時の魔女狩りお決まりの火あぶりだ。おそらくだけど、それを知った時のアダムは自分を責めたと思うよ。何せ忠告したのに助けられなかったんだ。もつと強く言っていたら、いつそ無理矢理にでも協会へ連れてこればつてね。その自責の念がキャロルへの支援だったんだと思う。友人の忘れ形見に、せめて好きな事をさせてやろうと」

「信じられないデスけど、あのアダムなら納得出来ます」

「うん。良い人だったもんね」

そう、平行世界のアダムは良い人なのだ。色々と抜けていたりやかす事はあるけど、それが完璧じゃないと思えるからこそ、あのアダムは良い人なんだと思う。

人間を見下す事もないのは、あのアダムは自分を完璧な存在と思っていないからじゃないかな？

「しかし、こうして改めて聞いていると仁志先輩はある意味機密の塊だね」

そんな奏の言葉にみんなが同意するように苦笑した。俺は、まあそうだろうと思うので何も言わない。

「そうね。仁志を尋問したら思いもよらない事が聞けそうだね」

「例えば何か聞きたい事でもあるのか？」

「マリアの言葉へそう尋ねると少しの間があいた後……」

「マムの食の好み？」

「あの人、ああ見えて偏食なんだっけ？ たしか野菜をほとんど食べないとか」

「やつぱり知ってるのね」

「デスデス。マム、かなり好き嫌い激しかったデス」

「今にして思うと、だから病気になった気がする。セレナ、戻ったらマムに注意しておいて。ちゃんと野菜も食べてって」

「は、はい。あつそうだ。なら美味しい野菜の料理を教えてください。私が作ってあげればマムも食べてくれるかも」

「そりゃいい。そうすればきつとナスターシャさんの事だ。逃げる事も出来ずに食べてくれるだろう」

何せ娘のように思ってるセレナの手料理だ。しかも自分の事を考えての物。これを食べずに逃げるナスターシャさんじゃない。

きつと表情には出さず、内心で汗をだらだら流しながら食べてくれる事だろう。で、そこで美味しければセレナにとって一番の結果となる。

「ちよつと仁志。それじゃあマムを苦しめるみたいじゃない」

「実際食べる前はそういう気分のはずだよ。でも、きつと今のセレナならナスターシャさんが思わず驚くような美味しい野菜料理を作れるようになるさ」

「うん！ 私、頑張ってお料理覚えて、お兄ちゃんやマムに食べてもらうから！」

明るく元気な声が聞こえてきて、俺は小さく笑みを浮かべる。というか、俺も食べるのかあ。物にもよるけど、そこまで俺も野菜好きって訳じゃないんだが……。

「肉が好きだからそれと一緒に食べれる物が最初はいいかもしれない

な。焼肉をサニーレタスやチシヤなんかで巻いて食べる奴とかさ」

「それはいいわね。それならセレナでも簡単に出来るわ」

「辛いのが平気ならナムルとかも用意してやるといい。まずは好きな物と一緒に食べさせて苦手意識を減らす。次に、野菜自体の美味しさが分かるような料理を食べさせる。こういう方がいいかもしれない」

「うん、そうする。姉さん、調さん、今度からお料理する時はもつと手伝うね」

「ええ、頼りにするわ」

「うん、一緒に頑張ろう」

聞こえてくるやり取りに笑みが浮かぶ。きつとセレナがナスターシャさんと再会した時、あの人は大きく驚く事だらけだろう。

小さな少女だと思っていた相手が、いつの間にか自分一人で生きていけるようになってしまっているのだ。

その精神的な成長と技術的な成長を喜ばない女性じゃない。必ずセレナの事をそれとなく褒めてくれるだろう。

それが、セレナにとって何よりのご褒美であり報酬だ。

「ししよー、他にも何か教えて欲しいデス。あつ、でもでも運転の邪魔にならない程度で構わないデスよ」

「分かった。じゃあ……」

そこからは教えるのではなくちよつとした疑問をぶつけてみた。

ズバリ、風鳴訃堂の子供はやっぱり十人いるんですか、だ。

「翼、どう？」

「そうですね。たしかにお爺様の子供は沢山いると聞いています」

「何で十人って思うんですか？」

「えつと、弦十郎さんで十。翼のお父さんの八紘さんで八。で、平行世界の弦十郎さんが作った組織を現在束ねているのが九臯さんで九つて必ず名前に数字が入ってて、その人は弦十郎さんの兄らしい」

そう言う翼以外の全員が感嘆するような声を出した。気付かなかったと言う事だろう。

俺も九臯さんが出てこなければ思わなかった。まあXVで弦十郎さんが言った、八紘兄貴が一番怖いって言葉もヒントだったのかもし

れないけど。

「実際、後継者問題で色々と考えた結果、最終的にお父様と叔父様が有力とされました。ですが……」

「ああ、うん。もういいよ翼。そこからはこの話に関係ない事だ。その、ありがとう。それとごめんな」

失敗したとそこで気付いた。風鳴家の話は翼には嫌な事の方が多いのに。

「いえ、いいのです。今で仁志さんが私の事を本当に知っているとよく分かりました。やはり、私には貴方しか伴侶に出来る相手はいないようです」

「そ、それは言い過ぎだよ」

「いえ、これが言い過ぎではないのは仁志さんはお分かりのはずですよ。」

おそらくにつこりと笑っているだろう翼に俺は返す言葉がない。

実際、翼の出生を知っていれば大抵の人は色々思うだろう。俺だつて知った時は嘘だろと思つたもんだ。

でも、その時の俺には翼は作られた存在だった。だからそういう設定かあ、と、これぐらいで飲み込めたのだ。

そういうのがあつてこそ、今である。一度受け入れて受け止めた事だからこそ、俺は翼の出生に関して思う事はないのだから。

もしあの事を知らず、こうして出会い、出生の事を知れば絶句して狼狽えたらろう。

「……一つだけ言わせてくれ。俺も、最初は耳を疑つた」

「それでも、私にとって大事なのは今ですから」

即応。さすがは翼だ。こうも見事に言い切られてはもう俺が言うべき事はない。

「そつか。まあ、そうだろうな。でも良かったよ。君が父親に似ず美人で。お母さんの美貌とお父さんの愛情に感謝だ」

「ええ、本当に。容姿が父親に似なかったのは良かったと思います」

俺の言いたい事を察してくれたのか、翼の声は苦笑していた。

彼女の本当の父親は訃堂。だから俺は敢えて父親とお父さんと二

つの表現を使った。その意味が翼にはちゃんと伝わったんだ。

「なくんか翼と二人だけの会話って感じだね」

で、何で隣の女性は拗ねてるんですかね。これはあれか。自分がいるんだから話し相手はこっちにしろって事か。

「悔しかつたら奏も何か話題を振ったら?」

「おっ、言ってくれるじゃないか翼。いいよ。じゃあ、問題。96・64・93、これなくんだ?」

「ナゾナゾ? しかも数字で?」

一体なんだ? 足すと……253? ダメだ、分からん。

「ちよつと奏つ!? 貴方、それって!」

「マリア、答えが分かかったなら言ってみなよ。当たってたら正解って言ってあげるからさ」

チラリと奏を見るとこっちを見て少しだけ恥ずかしそうに笑った。

何だろうか。若干嫌な予感がする。いや、この場合はこの問いかけの正解ではなくそれによって起きる事へ、かもしれない。

マリアの慌て方と三つの数字に、奏の表情と雰囲気。おそらくだけど、あまり良い事ではないんだろうな。

はて……三つの、数字? まさか……。

「ふふん、その顔は仁志先輩も答えの察しがついたんじゃない? 言ってみなよ」

「いや、奏? もし俺の予想通りなら何て事を君は言ってるんだよ」

「あたしが自発的にこれを教えるのは仁志先輩が最初で最後じゃないかな?」

「も、もしかしてスリーサイズ!?!」

はい、翼が言った瞬間に奏が俺に向かってウインクしてきたよ。これ、確定だね。

………きゅ、96か。大きいだろうと思ってたけど、まさかそこまでとは……。

「奏っ! 貴方ね!」

「何? 別に言っちゃダメな事じゃないだろ?」

「それはそうかもしれないけど、仁志がいるでしょう!」

「あたしは仁志先輩なら知られてもいいよ。むしろ、知ってくれた方があたしの事、もっと魅力的に思ってくれるかなって思うし」

実際その通りなので何とも言えない。でも、良かった。これでカット数まで言われてたらヤバかった。

数字だけじゃ凄いなあぐらいにしか思えないからな。

「そ、そうなんですか!？」

「答えに困る事を聞かないでくれ」

響の声に即座に返す。頷いても頷かないでも意味がないからだ。

だって、説得力無いもの。さっきの奏の言葉に何も言わなかった時点でこの件に関して俺の言葉は無力となりました。

「あの、前々から思っていたんですが、何故皆さんはその胸周りなどの数字を言ったり聞いたりして反応するのでしょうか？ 僕には理解出来ないのですが……」

「え、エルちゃんらしい……」

「そ、そうだね」

ただ、そう言われると俺も同意出来ない訳じゃない。言われてみればただの数字の羅列だ。

カット数を言われると色々思うが、数字だけではいまいちピンとこないのは事実だし。

「兄様はその数字を知って嬉しいんですか？」

まさかのエルからのキラーパス。そしてこういう時に限って信号が変わって赤になる。

「……正直嬉しいというよりは自信がつく、かな。ああ、そんな事まで教えてもいいぐらいの存在に俺はなれたんだって」

「成程。誰にでも教える事ではないからこそその感情と言う訳ですね」

我ながら上手い逃げ方をしたと思う。いや、まあ嘘ではないんだけど。

で、何で奏はどこか嬉しそうに俺を見ているんですかね？ いや、今奏を見るつもりはない。正確にはしっかりと見る事はしない。

したら、絶対胸を見る。これは絶対だ。なので、俺は奏を見ないし見れない。

その後、しばらくマリアと奏が言い合い、翼がそれを宥める事となる。

ちなみに話題は惚れた男にどこまで言えるか。おかげで俺は運転に否応なく集中せざるを得なかった。

だって、間違いなくそつちへ意識を向けたら運転がおろそかになると分かったから。

すつごく聞きたかったけど、断腸の思いでそちらの会話には耳を塞いだ。おかげで眠くなる事もなかったし、集中力が途切れる事もなかった。

でも、俺が奏に期待したの、こういう事じゃなかったんだけどなあ……。

大勢の人で賑わうモール内。そこを仁志達は歩いていった。目指すは三階のフードコート。まずはそこを見てからレストラン街へ行くか決めようとなったのだ。

何せそこならば全員が同じ店で食べなくても一緒に過ごせる。自由度は格段にフードコートの方が上だったからだ。

そして遂に仁志達が三階にあるフードコートへと到着。そこも平日の夕方前にしては中々の人数が食事や会話を楽しんでいた。

「さて、じゃ、まずは席を確保しようか。中央ぐらいがいいと思うので動きの速い数人が悪いけどテーブルを三つ確保してくれ」

「切歌ちゃん、行くよー」

「了解デス！」

「あたしも行くか」

響、切歌、奏が早足で中央当たりの空きテーブルを確保しに行く。それを見ながら仁志はウォーターサーバーが置いてある場所を指さした。

「で、俺達はそこで水を汲んでもっていいこうか。エルは持たなくていいから。その分ヴェイグを頼む」

「はい」

「セレナ、自分とヴェイグの分をお願い。私はエルの分を持つから」

「うん、分かった」

「じゃ、切ちゃんの分は私が」

「響は私だね」

「奏の分は私が持って行こう」

「ま、妥当なところだな」

そうして全員分の水を紙コップへ注いで運び、一先ず仁志達は周囲を見渡した。

うどんやラーメンなどの麺類だけでなくドーナツやハンバーガーなどのファストフードに、ステーキやピザ・パスタ、更にはクレープなどの店があちこちに存在している。

どれも目を惹き、丁度空腹を覚え始めた状態には堪らないラインナップではあった。とはいえ、全員が全員同じ物へ心惹かれている訳ではない。

「それで、どうする？ 何かもう流れとしてはここで決まりみたいにしちゃったけど」

「いや、あたしはここでいいよ。あのローストビーフ丼とかいいじゃん」

「あく、すつごく分かるデスよ。あのお店、お肉のお店デスから」

「その分値段も中々凄いけどね。私はあの親子丼とかいいかなって」

「響も？ 私もそこが気になってるんだ。美味しそうだよね、あの親子丼」

「私はあのお魚を使った丼のお店が気になってます。どれも美味しそう……」

「おつ、調もか？ なら俺もそうしようかな。あそこの味噌汁、ノリの味噌汁なんだけど結構濃いからそこだけ注意してくれ」

「あたしは……ちゃんぽんってどうなんだ？」

「麺類のようだ。たしか長崎の郷土料理だったはずだが……」

「見た目は美味しそうね。ちよつと興味あるわ。セレナは？」

「えつと、ヴェイグさんが奏さん達が見てるお店が気になるみたい」

「文字が読めないが、あの左から二番目の写真のやつは何だ？」

「えつと……牛肉しぐれ煮丼と書いてあります」

あちこちへ目を向けては食欲の赴くままに言葉を発する仁志達。

結局それぞれに店を見て注文しようという事となり、それぞれで動き始めた。

「見て見て未来。鶏肉も選べるみたい」

「ホントだ。えつと……名古屋コーチンって方が高いんだね」

「美味しいのかな？」

「高いって事は美味しいんじゃない？」

親子丼の店の前で代表的なメニューの写真を眺め笑顔の響。そんな彼女にらしさを感じて苦笑する未来。

そうやって少しの間二人はメニューを眺め、半分ずつ分け合う事にして別々の鶏肉での親子丼を注文する。

「じゃ、テーブルに戻ろうか」

「ちよつと待って未来。あれっ！あれ見て！」

そうやって響が指さしたのはクレープの店。

もうそれだけで未来は響が何を言おうとしているかを察した。

「ご飯頼んだでしょ？」

「大丈夫だって。二人で食べればへいき、へっちゃらだよ」

「んもうつ」

そう言いながらも止める事はしない辺りに未来の本音も見えてくる。

そうして二人は親子丼の店よりも長い時間クレープ屋の前で悩む事となるのだった。

一方、奏は切歌、セレナ、エルフナイン、ヴェイグと共に肉料理専門店の前に立っていた。

「お……」

そこでは実際の調理風景も見られ、彼女達はその手際と料理に感嘆し、そして匂いと見た目に食欲を刺激されていた。

「うし、あたしはローストビーフ丼にする。あんた達は？」

「アタシはアタシは……牛すき焼き丼にするデス！」

「私はヴェイグさんと一緒に食べるので、牛肉しぐれ煮丼にしようか

な」

「じゃあ、僕はハンバーグと牛カツ丼にします。姉さん、切歌お姉ちゃん、分け合いましょう」

「うん！」

「デスね！」

仲良し三姉妹のやり取りを聞いて奏はどこか遠い目をした。彼女の小さかった妹を思い出したのである。

だからだろうか。奏はそつとエルフナインの頭を撫でながら切歌とセレナへ顔を向けた。

「その話、あたしも混ぜてくれよ。こっちも一枚ずつ肉をあげるからさ」

「二はい（デス）っ！二」

それは、マリアと同じく妹を失った姉だった奏が久しぶりに見せた、お姉ちゃんの顔だった。

「奏さん、後で少しだけドーナツを見てもいいですか？」

「いいですか？」

「いいよ。切歌、あんたもいいよね？」

「モチロンデスよっ！ どうせならチキンも見たいデスね」

「こいつめ。買い過ぎるんじゃないよ？」

「えへへ、気を付けるデス」

マリアとは異なる姉気質の奏に切歌が嬉しそうに笑みを浮かべる。その裏でエルフナインとセレナはこっそりとヴェイグからある事を言われていた。

「二匂いが溢れてて大変？」

「ああ。おかげでさつきから腹が鳴って仕方ない」

言いながら腹部を軽く押さえるヴェイグにエルフナインとセレナが小さく笑う。

そんな微笑ましいやり取りの前で奏と切歌が代金を出し合っている頃、仁志は調と二人で水産会社が営業する丼屋にやってきていた。

「さて、調？ どうする？」

「迷う……。どれも美味しそうだし気になる」

その豊富なメニューを眺め、調は困った表情を浮かべていた。

「どれが気になってるんだ？」

「……地魚天井と魚屋の海鮮丼」

「じゃ、俺が天井を頼むから海鮮丼を頼むといい。で、天麩羅を半分ずつしよう」

「いいの？」

「当然。その代わりに、そっちの刺身も少しくれよ？」

「勿論」

そのやり取りを傍から聞けば仲の良い兄妹としか思われなかっただろう。

髪色や距離感などからそうとしか見えないからだ。

だが実際には赤の他人であり、しかも一回り以上も離れたカップルのようなものである。

「すみません。地魚天井と魚屋の海鮮丼の普通のを一つください」

仁志の隣へ寄り添うように立ち、調は笑みを浮かべていた。先程のやり取りが実に恋人らしく思えたためだ。

そつと仁志の腕へ自分の腕を絡ませ、調は自分へ顔を向けた彼へこう小悪魔のように微笑んで告げるのだ。

「ご飯、楽しみだね、仁志さん？」

どこから見ても妹ではない雰囲気を漂わせながら……。

それを見た仁志が、小さくため息を吐いて軽いげんこつを落とした事を追記する。

調が頭を擦りながら仁志へ軽い文句を言っている頃、翼はクリスとマリアを連れて長崎ちゃんぽんを扱う店で注文を始めていた。

「では、私は長崎ちゃんぽんを」

「あたしは長崎皿うどんだ」

「冷やしちゃんぽんをお願い」

こちらも既にそれぞれで分け合おうと話し合いが済んでいた。故のバラバラの注文なのである。

代金を支払い、呼び出し用の機器を受け取った三人はテーブルへと戻ろうとしてある店に気付いた。

「ねえ、あれって何かしら？」

「ん？」

「……ジュースの店だな」

それは果物をその場で絞って提供するジュースの店だった。どうせまだ注文の品も出来上がらないしと、そう思った三人はそちらへフラフラと歩いていく。

季節の果物を使ったジュースから健康志向の物まで様々な飲み物がメニューに並び、いかにも女性受けを狙っているそれを眺め、三人はどうするかと相談を始めた。

「ね、ねえ、あのグリーンバナナスムージー、惹かれない？」

「そうだな。見た目はともかく体に良さそうだ。パインもあるのか」

「あたしは普通にスイカジュースが気になるんだけどよ。てか、ちよつと濃いめのミックスジュースって名前、ズルいだろ。惹かれるっての」

まさしく女性らしい会話、なのかもしれない。結局三人で話し合った結果、一つを分け合う事にしてクリスの言ったミックスジュースを頼む事に。

スムージーは食事に影響すると思い、スイカは味が想像出来るとして却下になったのだ。

目の前で作られるミックスジュースを眺め、三人は視覚的効果が高いと感じていた。しかもそこまで時間を必要としないところも高評価と言える。

「お待たせしました」

「ありがとう」

マリアが受け取り、三人はまず誰が飲むかで相談開始。

その結果じゃんけんで決めようとなり、まずはクリスが、次にマリア、最後がまたもかつこいいチョコキで負けた翼となった。

そしてその濃厚な味にクリスが笑みを浮かべ、マリアが頷き、翼が微笑むのだった……。

「今夜どうします？ ホントにさっきの食事だけで大丈夫ですか？」

その未来の言葉にマリアさんと調ちゃんが同時に考え込む。今朝来た時とは比べ物にならないぐらい色んな物が並んでいる売り場は、とても活気があつて賑わつてる。

私もさつきからお惣菜が気になつて気になつて。というか、切歌ちゃんとエルちゃんは思いつきり興味津々で見て回つてた。

奏さんは翼さんと二人で果物を見てる。

何でも今度から朝にフルーツジュースを飲もうつて考えてるみたいで、クリスちゃんも野菜ジュースとか自分で作るべきかつて悩んでる。

フードコートで飲んだミックスジュースが美味しかったから、みたい。私が言えた事じゃないけど、結構クリスちゃん達も単純な気がする。

「ね、クリスちゃん」

「あ?」

じつと人参を手にして悩んでるクリスちゃんへ声をかけると、その意識がこつちへ向いた。

「ジュース作るのはいいけど、ミキサーとかないよ?」

「分かつてるつての。そこは、ほら、仁志に相談だ。寝る前に野菜や果物の入ったジュース飲むつてのは体に良さそうだろう?」

「ああ、成程」

仁志さんもそれなら一緒に使う用のミキサーを買おうつて言うかもしれない。

で、その仁志さんはマリアさん達の後ろでカートと一緒に待機中だ。

「なあ、スイカ安いから一玉買わないか? この人数なら食べ切れるだろう?」

「スイカかあ。私は賛成です」

言われてみればまだ今年食べてない。夏が終わる前に一度は食べておかないとね。

「そうだな。ま、いいんじゃないか?」

「夜食じゃなくてデザートが決まった……」

「くすつ、そうだね。只野さんらしいかも」

「じゃあ響、良さそうなのを選んできてくれ」

「わかりました!」

ウキウキ気分でスイカ売り場へ。どれにしようかなあ〜?

軽く叩いて音を聞く。でも分からない。どれも詰まってそうだし

……。

「何してるのさ?」

「あつ、奏さん」

そこへ奏さんと翼さん登場。その手にはバナナがある。買うのかな?

「スイカを選んでいるのか?」

「はい。仁志さんがみんななら一玉食べ切れるだろうからって」

「成程ねえ。夏の風物詩だし、丁度いい機会か」

「で、私に選んできてって仁志さんが言いまして」

「そういう事か」

説明しながら私はそのスイカをいくつもこんこんと軽く叩いていく。

うーん、やっぱりどれも同じな気がする。

すると翼さんがスイカを見つめておもむろに一つ手に取った。

「これが良さそうだ」

「えっと、翼さん? どうしてです?」

「立花が叩いた中で一番音が澄んでいたし、縞模様がはっきりしている。これなら大きく外れはないはずだ」

「よし、じゃそれにしよう」

「ですな」

さっすが翼さん。スイカの見分け方まで知ってるなんて凄いなあ。

そう思っただけで私は翼さんや奏さんと一緒にカートまで戻る。

「おっ、戻ってきた」

「おかえり響」

「ただいま未来」

「翼が持つてるのが選ばれたスイカ?」

「ああ。これなら大外れはないはずだ」

そう言うのと翼さんがカゴの中へスイカを置いた。うん、凄い存在感。

「何と言うか、こうやってどんとあると美味しそうに見える」

「だね。で、何を悩んでんの？」

「奏、貴方、さっきの量で寝るまで平気？」

マリアさんの問いかけに奏さんはすぐ苦笑して首を横に振る。やっぱりそうだよね。私も正直お腹空くと思う。

あの親子丼、美味しかったけど量がちよつと少なかつた。おかわりしたいぐらいだったけど、さすがにそれは止めておいた。

でも、美味しかったなあ名古屋コーチン。歯ごたえがあるけど、その分旨味が強くて……。

「じゃあ、いつそお手軽に炊き込みご飯とかどうだ？ あれなら素買って炊くだけでいいだろ？」

「ご飯だけつてのも寂しい気がするんだけど」

「じゃあ、海苔を巻いておにぎり？」

「それもいいけど、汁物でもやるか？ お手軽澄ましで良ければ楽だし」

「……」

仁志さんが近くの串カツを手にしながらか言った言葉にみんなで疑問符を浮かべる。

「どう作るんですか？」

「鰹節のパック、あるだろ？ あれをお椀に出して、醤油を適量かけてお湯をそこへかけるだけ」

「……お手軽」

「でもこれで意外といい味の澄ましっぽくなるんだよ」

「じゃ鰹節のパック取ってくるか。翼、行くよ」

「どうして私も？ 一人で十分でしょ」

そう言いながらついていく辺りが翼さんらしい。

「じゃあ、マリア、私は炊き込みご飯の素見てくる」

「切歌とエルも連れて行って。あの二人、このままだとお惣菜を買い

「そうだし」

「分かった」

「調ちゃん離脱。だけどすぐに切歌ちゃんとエルちゃんへ声をかけて一緒に移動開始。」

「あれ？ セレナちゃんはどこ行つたんだらう？」

「マリアさん、セレナちゃんはどこですか？」

「セレナならヴェイグと一緒に甘い物を見てくださいってたわ」

「スイーツコーナーかあ」

「じゃスイカ買った事教えてやった方がいいかもな」

「そうだね。じゃ、私が行つてくるよ」

「足取りも軽く私はその場から動き出す。」

「みんなでこうしてお買い物つていうのも珍しいから楽しくて仕方ない。」

「疲れてるはずだけど、心は全然そんな感じしないし。」

「でも、これも悪意を倒したら終わっちゃうんだ……。」

「その瞬間、足がピタツと止まる。さつきまでの楽しかった気持ちがしぼんでいく。」

「——そうしたら、また前までの日々が始まる。訓練や出勤があつて、楽しい事や嬉しい事を中断して動かないといけない時間が……。」

「嫌だ、止めてよ……。そんな事思い出させないで……。」

「——それだけじゃない。クリスちゃんは留学するし、翼さんとマリアさんはお仕事で外国だ。奏さんとセレナちゃんは一人ぼっちで別々の世界で頑張らないといけないし……。」

「ああ、そうだ……。クリスちゃんも外国へ行つちゃう。私達は六人でさえいられなくなるんだ。」

「——何より、仁志さんとも会えないかもしれないんだ……。」

「その瞬間、私の視界が滲む。ぽたぽたと何かが目から流れ落ちる。泣いてるんだと、そう気付いたのは前から歩いてきたセレナちゃんが私を見てビックリしながら駆け寄ってきた時だった。」

「響さん、どうしたんですか？ 何で泣いてるんですか？」

「その言葉でやっと私は自分が泣いてるって自覚出来た。」

同時に心配させちゃいけないと思って笑顔が無理矢理作った。

「あ、あはは、目にゴミが入っちゃったみたいなんだ」

「そうですか。じゃあ、擦らない方がいいですよ」

「う、うん。あつ、そうだ。セレナちゃん、スイカ買う事になったから」

「すいか？」

「うん。見てくるといいよ。甘い果物なんだ」

「分かりました。見てきます。響さんは？」

「私はちよつとトイレ行って目を洗って来るね」

そう言つて逃げるようにその場から走り出した。トイレの場所を探しながら移動して、何とか個室へと入った。

「……………どうしよう、かな？ 私、もう……………」

この世界から元の世界へ帰れない、かもしれない。そう、思った。いつか未来に言われた言葉が頭の中に浮かんでくる。この世界に長くいたら元の世界に帰れなくなるよつて、そんな言葉が。

——でも仕方ないよ。だって、私だけじゃなくてみんな楽しそうに幸せそうだもん。仁志さんだつてそんな私達のために頑張つてくれる。そんな時間を捨てるなんて出来ないよ……………」

それは、本当にそう思う。私達の想いが悪意に利用されなかったために仁志さんは全員の想いを受け止めるつて、そう言つた。嫌われるかもしれないのに、それでもつて。

うん、分かつてる。仁志さんは自分の心に嘘を吐きたくないつて言つてたけど、そういう気持ちはどこかにあるつて。

——だからみんなで仲良くしないと。仁志さんの想いに応えるためにも、この世界でみんなを支え合わないといけないんだ……………」

みんなで、か。だけど、悪意をこのままには出来ない。早くこの事件を解決して、そして師匠達やお父さん達を……………」

——助けて、そしてどうするの？ この平和は、幸せは、もうなくなつてしまうの。二度と戻つてこないの。仁志さんとも、会えなくなつちやうの……………」

「あ……………だめ……………っ！」

ボロボロとまた涙が出てくる。

初めて好きになった男の人。優しくて、どこか眠そうで、時々抜けて、だけど不意にカツコ良くて、とても、とてもあつたかい人……。その人と、もう会えない。声も聞けない。そう思うだけで胸が痛くて、心が痛くて……。涙が止まらない。

——ねえ、本当にいいの？ 師匠達を助けて、お父さん達を助けて、代わりに仁志さんとお別れする事に耐えられる？ また訓練や出勤の日々に、私は笑顔でいられるかな？

……………そんなの、無理。

——じゃあさ、もう少しだけ、もう少しだけこっちで過ごそうよ。せめて、仁志さんと会った季節まで。卒業近くの季節まで一緒にいるんだ……。

卒業の……季節まで……？

——だって、みんなの時間は止まってるし私達の時間も止まってるようなものだもん。春まで一緒にいて、そこでこの世界を卒業って感じで全てを終わらせよう……。

で、でも、それじゃ手遅れになるかもしれないし。

——いいの？ 戻ったら、もう仁志さんとは過ごせないんだよ？ まだキスしてもらってないのに、デートもしてもらってないのに、終わらせちゃっていいの？

やだっ！ そんなの、そんなの絶対嫌だっ！

——ね？ だからせめて春まで待つんだよ。大丈夫。師匠達ってそれぐらいは大目に見てくれるよ。それに、仁志さんも言ってくれたじゃない。胸の歌を信じなさいって……。

胸の……歌を……。

——私の胸の歌は、この世界とさよならしたいって言ってる？

ううん。

——私の胸の歌は、すぐにでも悪意を倒すべきだって言ってる？

ううん……。

——じゃあ、私の胸の歌は、仁志さんと離れ離れになってもいいって言ってる？

ううん……そんな事、そんな事、ない……。

——そうだよね。さあ、目を閉じよう？　こんな泣き腫らした目じゃ、みんなに心配させちゃう。今は少し目を休めないと……。

そこで私の意識は遠くなった。

次に気付いた時にはドアの外から未来の声がしてた。どうも泣き疲れて寝てみたい。

セレナちゃんからトイレに行った事を聞いた未来達が、あまりにも帰ってこないから探してくれたんだって、そう教えられてみんなには誠心誠意謝った。

それにしても、寝る程泣くなんて凄く久しぶりで少し恥ずかしいや。

「響、本当に大丈夫か？」

「はい。この通りです。まあ目はちよつと腫れてますけど」

仁志さんにも心配されて、ちよつと心苦しいけど少し嬉しい。

買い物も終わっていて、車に乗り込むと若干蒸し暑い感じがした。

あと、妙に気怠い。それに、胸の奥が重たい気がする。

「……デート、楽しみだなあ」

あと残るは私とクリスちゃんだけ。そのデートで、仁志さんはキスしてくれるって言ってくれた。

本当に、楽しみだ。私の初めて、仁志さんになら全部あげられるもんね。

——そう、私の全部、あげないと……。

涼やかな音を響かせる風鈴。その音楽を聞きながら仁志達は終わりゆく夏を堪能するようにスイカを食べていた。

風が吹いていて日が落ちた事もあり、少しの間扇風機のみで過ごしているのだ。

暑さはあるが、それでも耐え切れない程ではなく、誰もが汗を流しながらスイカの甘さに笑みを浮かべていた。

「初めて食べたが、不思議な味だな。甘いのにどことなくきゅうりの味がする」

「おお、ヴェイグ凄いな。スイカは西瓜と書くんだけど、胡瓜の仲間み

たいな物なんだよ」

「そうなのか。だが俺はこれも好きだぞ。ただ、種があつてちよつと食べ辛いな」

「これがスイカだからなあ。まあ種無しスイカもあるんだけど……」
「あるんだけど……?」

言葉を濁す仁志へセレナが不思議そうに小首を傾げる。

「やっぱり味が少し落ちるみたいだね。自然に手を加えすぎると良くないって事さ」

「そうなんだ」

「セレナちゃんは初めてのスイカだけど、どう?」

「美味しいです。とつても甘くて、塩をかけて食べると余計甘いなんて不思議ですし」

「汁粉なんかでも使う手法なんだよ。そうする事で甘味が引き立つんだ」

「僕、知ってます。あまじよっぱいって事ですよね」

エルフナインの言葉に仁志は首を捻る。一体どこでそれを彼女が知ったのが気になったのだ。

「ちよつと違うけど、エル、その言葉をどこで?」

「切歌お姉ちゃんが教えてくれました。甘いお菓子としよっぱいお菓子を交互に食べると手が止まらなくなるって」

「切歌?」

マリアの優しい声に切歌が背筋を伸ばす。そのまま彼女はぎこちなく首を動かした。

「な、何デスか?」

「どういう事かしらね? たしか私はお菓子は一日一つと言ってたはずだけど?」

「そ、それはデスね?」

「切ちゃん、これは私も知らないんだけど?」

「ひいっ!」

四面楚歌。そんな四字熟語が仁志の頭に浮かんだ。

このままでは切歌は憐れにもマリアと調の追及を受けて、ボロボロ

になるまでごめんなさいと言うだけの機械にされてしまうだろう。

そう考えた仁志は小さく苦笑すると切歌へ助言を送る事にした。

「切歌、とにかくまず謝るんだ。言い訳を先にするとろくな結果にならないぞ」

「ご、ごめんなさいデス！　とにかくアタシが悪かったデス！」

師匠の言う事を素直に受け入れ、切歌は頭を下げる。

こうなるとマリアと調も一旦退かざるを得なくなる。仁志の助言はまさに正しかったのだ。

誰しも言い訳をしたくなるものだが、相手が怒っているあるいは怒りなどを抱いている時にそれをするのは良くない方向へ転がる事が往々にしてある。

それを実体験で知っている仁志は、まず相手の氣勢を削ぐ事も兼ねて謝罪する方がいいと告げたのだ。

「さて、切歌？　これでマリアと調は君の話聞いてくれるよ。さっ、ちゃんと説明してごらん」

「ううっ、そのデスね？　バイト先で甘い物としよっぱい物を交互に食べると永久にお菓子を食べちゃうって聞いたんデス。で、そんなはずないって思って試してみようと思って、自分で塩味のポテチを買ってきて、お家にあつたチョコと一緒に食べてみたんデス」

「その結果、本当に止まらなくなったと？」
「デス……」

しよぼんと項垂れる切歌。申し訳なさからなのか情けなさからなのか分からないが、とにかく反省はしてるようだ。

それを察してマリアと調は呆れるようにため息を吐き、この事はどうこれで終わりにする事にした。

「切歌、今後はやらないように」

「はいデス……」

「エルももし見つけたら注意してあげて」

「はい」

「お兄ちゃん、本当にそうなるの？」

「みたいだよ。実際ポテチにチョコかけたやつとかあるし、古くは生

ハムメロンとかもそういう組み合わせだしね」

その最後の例えに響達一部の人間が納得するように声を上げる。長年の謎だったのだろう。どうしてメロンに生ハムを乗せているのか。

そこから話題は奇妙な組み合わせとある食材の味がする物の話へと変わっていく。

切っ掛けは調が問いかけた。胡瓜にハチミツをかけるとメロンの味は本当か？”と言うものだった。

そうなれば試してみようと言い出すのが切歌である。胡瓜が好きならヴェイグも乗り気になり、それを聞いて仁志がプリンに醤油でウニの味と告げると切歌達はウニの味を知らないために首を傾げ、知っている翼や奏などが露骨に嫌そうな顔をした。

「はいはい。どうせなら今度のバーベキューでウニを切歌ちゃん達に食べてもらうのはどうでしょう?」

「雲丹って焼いてもいいの?」

「たしか焼き雲丹って食べ方もあるはずだよ。エル、調べてくれ」「はい」

すっかりスマホでの検索を手慣れたエルフナインである。その手つきは最早最初の頃のぎこちなさなど皆無であった。

「ありました。焼きウニのレシピです」

「エル、ちょっと見せて」

調がスマートフォンを受け取り、マリアと一緒にになってそれを眺める。

その一方でクリスがスイカの後片付けを始めていた。

一玉あったスイカも、十二人で食べればあっという間に綺麗に食べ尽くされてしまったのだ。

「これで全部か?」

「そうだね」

「マリア、まさか皮を漬物にするとか言わないよね?」

「さすがにそこまでは言わないわよ。というか、漬物に出来るの?」

「可能だよ。瓜の一種だからね」

「すごい。そんなところまで食べられるんだ……」

感心するように瞬きするセレナへ仁志は勘違いされてると気付き、苦笑して説明を始めた。

「えっと、セレナ？ 食べられるのはあの白い部分だ。緑色の部分はさすがに捨てるよ」

「あつ、そうなんだ。でも凄いな。あの白いところ、甘くもなんともなかったのに」

「だから漬物に出来るんだよ。基本は浅漬けだったと思うけど」

「美味しいデスか？」

「人によるんじゃないか？ 漬物は漬ける物や漬け方の好みもあるだろうし」

切歌の問いかけへそう返し、仁志はふと思いつくような顔をした。
（そういえば、父さんと母さんも漬物の好みで言い争う事多かったわけ……）

一人で暮らし始めて漬物などを食べる機会も減り、元々好きではなかった事もあつて今の今まで忘れていた事。

それを思い出して仁志は小さく笑う。そういう味の好みのケンカもまた夫婦らしさなのかもしれないと。

「……そういや、俺ってあんまりみんなの食の好み知らないなあ」

基本的に好き嫌いがそこまで多くないため、下手をすれば仁志の方が偏食になってしまう程響達は食に関して寛大だった。

「し、知りたいんですか？」

ただ、そんな事を聞いて黙っている程響達の想いは弱くはなかった。

しかもそこで頷いてしまったため、仁志は一気に女性達から矢継ぎ早に情報を教えられる事となる。

響を皮切りにクリスや翼、最終的にはマリアまでも仁志へ食の好みを教え始め、彼を大いに困らせる事となったのだ。

その後、仁志はちよつと個別に話したい事があると告げ、台所の隅へと移動。そこでまずは響を呼び出した。

「話って何ですか？」

「えっと、実はクリスがリビルド、アダム戦の時のギアへなれるようになったんだ」

「え?」

「それで、その、響にもそれが可能になった時と同じ事を再現しようと思つて」

「再現?」

理解出来ないまま響は小首を傾げた。そんな彼女へ仁志は小さく頷くと凛々しく表情を変える。

(っ?! な、何で仁志さんが急に真剣な感じに!?)

キユンと胸がときめくのを覚える響を仁志は少し力強く抱き寄せる。

「ふえっ?!」

「ごめん。あまり大きな声を出さなくてももらえるか? その、みんなに気付かれたくない」

「わ、分かりました……」

久々となる抱擁にドギマギしながら響は赤い顔で仁志を見つめた。

「響、その、これは再現ではあるんだけど、一つだけ言わせてくれ。それがなくても俺はこういう事を君へしたかったって」

「へ? は、はい」

「それと、これも言わないとな。俺は、君を、立花響を愛してる」
「っ!」

告げられたのは、紛れもなく愛の言葉。これまで仁志が明言してこなかったものだった。

その衝撃を脱する事が出来ない響へ仁志は優しく笑みを浮かべた。

「目を、閉じてくれるか?」

その言葉に響はおぼろげに思ったのだ。またキスしてくれるのだろうか。

それも、いつかよりも強く愛していると分かる形で。

だから嬉しそうに目を閉じて顔を上向けた。

だが、そんな彼女の期待は斜め上に裏切られる事となる。

「んっ……」

そつと触れ合う唇と唇。その事が一瞬響には理解出来なかった。驚いて目を開ければそこには自分を見つめる仁志の照れを宿した笑顔がある。

「ひ、仁志さん……今のつて……」

「ああ、そうだよ。約束破る形になっちゃったけど、許してくれ」

「そ、それはいいん、ですけど……あう」

理解した瞬間、顔の熱が急上昇して響はその場から逃げ出したい衝動に駆られる。それでも、仁志の腕がその気持ちを静めていく。

このままでもいい。この力強さを感じたまま、もつとあつたかさに浸っていたいと。

夏の熱気とは異なる熱さが響の体を包んでいた。その瞳は潤み、キスをねだるように仁志を見つめていた。

「仁志さん……その、えつと」

もう一度キスして。そう言えない響だったが、仁志は一度上を向いて息を吐くと今度は何も言わずにキスをしたのだ。

(っ!?! ……言わないでも、分かってくれた。嬉しい……。やっぱり、私はこの人になりたい。ずっと、もつと、傍にいたいっ!)

その瞬間、響の心に芽生えていた悪意が枯れていくと同時に仁志のズボンのポケットから通知音が鳴る。

ゆつくりと離れていく二人の顔。その眼差しは両方共に熱を帯びていた。

「今、鳴りましたね」

「ああ」

「……見ないん、ですか?」

「見てもいい?」

「……………もう一度だけキスしっ」

その後確認したところ、やはり響もリビルドギアが使用可能となっていた。

これで仁志はキスだけではなく想いを伝える事が大事なのだと確信し、そしてその理由もおぼろげに思い浮かび始めていた。

(ゲージがみんなの実在性なら、ギアの追加は俺とみんなの想いが結

びついた結果じゃないだろうか？ 想いを同じくし、それを伝え合
い、結ぶ。それがアイドルギアであり今回のリビルドギアかもしれな
い)

ツインドライブに関してもそれに似た事が言えると仁志は思っ
ていた。

ゲージが上昇するには自分達の関わりが深くなる事が必要だった。
その中で言葉を交わし、想いを伝え合ったのだから。

「仁志さん、お話とは？」

そこへ現れたのは翼。赤い顔でフワフワしている響から仁志のと
ころへ行くよう言われ、こうして台所の隅へとやってきたのだ。

「あ、うん。まずは落ち着いて聞いて欲しいんだけど……」

クリスと響がリビルドギアを発現させた事を聞き翼は驚きはした
ものの、それだけで自分が呼び出された背景を察した。

「つまり、私も二人と同じ事をすればギアが追加されないかと、そうい
う事ですね？」

「まあそういう事。でも、これだけは信じて欲しいんだけど、俺はその
ためだけに君へこうする訳じゃない。翼を、君を愛してるからするん
だ」

「え？ つ!？」

仁志の言葉に疑問符を浮かべた次の瞬間、翼の唇は奪われていた。
しかも、その体を逃がさないとばかりに仁志の腕が背中へと回されて
いたのだ。

(こ、これは……キス、されている、の？ ……仁志さんっ！)

状況を理解した瞬間に翼は腕を仁志の背中へと回して抱き合う形
になっていた。

あの初めてのキスと違う、愛してるとの言葉を前置いての行為。そ
れに翼は喜びを爆発されるようにそのまま唇を重ねた。

「……驚かせてすまない」

「いえ、いいです。嬉し、かったから……」

「……翼」

「仁志さん……」

見つめ合う二人。翼は少しだけ、ほんの少しだけ背中へ回した腕へ力を込めた。それだけで、仁志には彼女の気持ち伝わった。

「んっ……」

再度のキス。今度はより想いを伝えるような、優しい口付け。

（ああ、分かってくれた。やはり私の思った通りだ。この人しか、この方しかいない。私の夫となり、この呪われた血を気にせず愛してくれるのは……）

一生をかけて添い遂げたい。そう強く思っただけで翼が目を閉じると同時に悪意の種が砕けて通知音が鳴った。

それでも翼は意に介さずキスを続ける。仁志もそんな彼女を嬉しく思っただけで抱きしめるのだった。

結果、翼もリビルドギアが可能となっており、それが彼女には仁志との愛の絆と思えて幸せそうに微笑みながら居間へと戻って行った。

「ねえ、一体何話したのさ？ 響も翼も戻ってきてから上の空なんだけど？」

「えっと、それは今から説明するよ」

翼にしたのと同じ説明を奏へ行い、仁志は彼女へある仮説を述べた。

「本来なら、奏にはリビルドギアは存在しない」

「そうだね」

「でも、アイドルギアが出ただろ？ もしかしたら、奏にもリビルドギアかそれに似たギアが追加されるかもしれない」

「……可能性はなくはないかも。それで？ どうすればいいの？」

「その前に、一ついいかな奏。聞いて欲しい事があるんだ」

奏が不思議そうに仁志を見つめる。一体今更何を話す事があるのだろうか。

「俺は、君の事が好きだ。その、あの時は明確に言葉にしなかったけど、今回はちゃんと言うよ。愛してる」

「っ!?! っ、仁っ!?!」

明確な愛の告白で動揺した瞬間抱き寄せられた事でバランスを崩し、仁志の胸へ飛び込む形となった奏は顔を上げたところでその口を

封じられてしまったのだ。

(えっ!? 嘘っ?! あたし、今、仁志に、キス、されてる……)

予想もしなかったやや強引なキス。それに奏の乙女心が歓喜に震えた。

勤務中に時々見せる仁志の強気な姿勢。それを奏は嬉しく思っていたのだ。

その集大成とも言えるようなキスに、奏は自然と目を閉じて幸せに浸った。

(ああっ、もうダメ。やっぱりあたし、この人を離したくないよ。翼達には悪いけど、あたしは、この人と、仁志と一緒に生きて行きたい。ずっと隣にいたい……)

ゆつくりと腕を仁志の背中へ回し、その想いを伝えるように抱き締める奏。

すると仁志のポケットから通知音が鳴った。

「……奏、悪いけど確認させてくれ」

「……うん」

ポケットから依り代を取り出して仁志は奏へギアを纏うよう頼む。

それに応じて奏はその場でギアを纏った。

「……どう?」

「……見慣れないギアがある。タップするぞ?」

「お願い」

そうして奏のギアが変化する。それは仁志も初めて見る奏のガングニールギアのリビルド状態だった。

「……………凄いな、これ。これだけで分かるよ。途轍もない力を感じる」

「本当に、出るんだな」

「みたい。ね、仁志」

「何だ?」

「……愛してる」

「俺も愛してる」

あの時はすぐに返せなかった。それを今回仁志は即応した。それ

に奏は目に涙さえ浮かべて噛み締め、目の前の愛しい男へ感情と共に解放した。

「っ……仁志っ！」

「っ」と

奏は喜びを爆発させてギアを解除しながら仁志へ抱き着く。その体を優しく受け止め、仁志は微笑むともう一度奏へキスをした。

そのキスの際、奏は軽く舌を入れようとして注意を受ける事となる。

若干拗ねながらも上機嫌な奏が仁志のところへ送り込んだのはマリアだった。

「さてと、一体何をしてるのかしら？ 響達の様子があまりにもおかしいから切歌やセレナを抑えるの大変なのよ？」

「あー、それはごめん」

やや呆れを滲ませた眼差しに仁志は謝る事しか出来ない。実際何をしているかを考えれば当然の事ではあったのだ。

クリスは既に理解しているだろうし、響達も事情込みで察している。仁志が呼び出しているのはある意味でキスをするためだと。

で、そんな事をされれば恋する乙女達がどうなるかは言うまでもない。それぞれ戻ってきてから上機嫌で笑みを浮かべ続け、時には赤い顔で俯いてしまうという行動を取っているのだ。

それを見て切歌やエルフナイン達が不思議に思わぬはずはない。何をしてるか見てやろうと動き出そうとしてもおかしくはなかった。

だが、それをマリア達が何とか抑えていた。

待つていればちゃんと説明してくれるはずだと、そう言つて。それを仁志も察したのである。

「その、実は響達が……」

そこで明かされる新しいギアの追加。マリアはそれを聞いて、響達の様子からある程度の察しをつけた。

「つまり、何か刺激的な事をしたのね？」

「……まあ」

「ふうん……それ、私はまだ経験してない事かしら？」

瞬間、仁志の脳裏にあの飲み会の記憶が甦る。
アルコールと三人の歌姫の匂いに包まれ続けた、夢のような一時が。

「……あるよ。ただ、場の雰囲気や酒に飲まれてだから俺が響達としたのとは違うかな」

「そう。じゃあ……」

全てを察して Мария は少しだけ恥ずかしそうに顔を赤めつつ、仁志の胸の中へと倒れ込む。

「期待、させてもらおうわ」

「 Мария ……」

もう自分が何をしようとしているか分かっている。そう仁志は気付くも、だからこそしつかりと Мария の目を見つめて口を開いた。

「 Мария 、俺は君を本気で好きだ。その想いに応えたい。今は、今だけは俺は君だけを見てるよ」

「……分かったわ。なら、私はそれを一生にしてみせればいいのね」

「もし可能ならそうしてくれ」

「ええ、やってみる。だから……」

「ああ。目を閉じて」

静かに重なる唇。それに Мария は幸せを噛み締めるように仁志を抱き締めていた。

(何て幸せなの？　これが、想いを通じ合わせるといふ事……。これが、愛し合うという事なのね……。私をただの優しい Мария として見ってくれる人は、この人だけ。私がただの優しい Мария でいられるのは、この人の隣だけなんだわ……)

ずっとこうしていたい。傍にいたい。そう強く Мария が思っただけき締める腕に力を込めると同時に依り代から通知音が鳴る。

「…… Мария 、確かめてもいいか？」

「……ええ」

やはり Мария もリビルドギアが追加されていた。それを Мария はこう評した。自分と仁志の愛の成した結果と。

その表現に仁志は恥ずかしそうに頬を掻いた。まるで赤子の事を

表す『愛の結晶』を思い出したからだ。

当然マリアはそれを意識していた。故に最後にウインクまでしてこう締め括ったのだ。

——私は結晶を作るのも吝かじゃないわよ？

仁志はその言葉に何も言えず、ただ困った表情を浮かべる事しか出来なかった。

マリアの次は未来が仁志の前に現れた。ただ、もう未来は何かを察しているかのように苦笑していたが。

「只野さんって、本当に極端ですね」

「自分でもそう思うよ」

大人であろうとしていた時は可能な限り大人を貫き、踏み込もうとすれば踏み込み続け、一度キスを解禁すればどこまでも。

仁志はそんな自分のこれまでを思い返して反省するような顔をするしかない。

「それで、私にも、その、してくれるんですよね？」

「……もうさすがに分かるか」

「はい。だって、響なんかしきりに唇触ってますよ？」

「あ……」

らしい行動だと思って仁志は苦笑する。そんな彼へ未来はトコトコと近付いてその胸へと身を委ねた。

「店長？」

「えっ？ 未来……？」

どうして今ここで役職名で呼ぶのかと、そう思った仁志へ未来は赤い顔で悪戯っぽく笑ってみせる。

「こう呼んだ方が興奮、しませんか？」

その発想に仁志は思わず息を呑んだ。以前仕事中に奏が言っていた言葉を思い出したのだ。

「……小日向さん？」

「だ、ダメ、ですか？ 喜んでももらえるかなって、そう、思ったんですけど……」

段々小さくなる声に仁志は内心で苦笑していた。可愛らしいと、そ

う思つて。

だが不用意に成人男性を挑発するとどうなるかを教えておかねばと、そんな妙な使命感に突き動かされて仁志は未来の顎を軽く持ち上げる。

「この状況で喜ぶつて意味、分かつてるのか？」

「つ……教えて、ください」

「……………目を閉じて」

「はい……閉じました」

「じゃあ、教えてあげるよ。……愛しいつて気持ちちが爆発するんだ」

「ふえ？ つ?!」

それまでの低い声から一転、告げられた優しい声に未来が小さく疑問符を浮かべた次の瞬間、その唇は仁志の唇で塞がれた。

（キス、されてるんだ、私。これが……キス、なんだ。あつたかくて、ちよつとだけ荒れてる。男の人の唇つて、こんな感じなんだ……）

ゆつくりと離れる仁志の顔を惚けた表情で見つめる未来だったが、すぐに何かに気付いたように彼へ強く抱き着いた。

「未来？」

「あ、あのつ、も、もう一回だけ、してください。私も、好きつて気持ち、只野さんへ、貴方へ届けたいんです」

「俺へ……」

「はい。その、ダメ、ですか？」

可愛らしい申し出に仁志が嫌がるはずもなく、彼はそつと未来へ二度目のキスをする。

（やつぱり、そうなんだ……。私は、只野さんが、この人が好き。大好ききつ！ 響の大好きな人だけど、私だつて同じぐらい大好きになつちやつたんだ！ 可能なら、響と二人で仲良くこの人を支えて行きたいつ！ ずつと笑い合つていきたいつ！）

悪意が根付かせ芽まで出させていた種が枯れていく。

それを示すかのように聞こえてくる通知音。その音を合図に離れようとする仁志を未来が抱き締めるようにして止めた。

もつとキスしていたい。もつとこの幸せに浸つていたいとばかり

に。

(何だ？ 何か、頭の中を誰に覗かれてたような気がする……)

一方仁志は、二度目のキスの際に感じた奇妙な感覚に内心首を捻っていた。

それでも未来を引き剥がす事はしない辺りに彼らしさが滲んでいた。

そうしてたつぷり一分は経過したところで未来は仁志を解放した。

「……情熱的だね、未来は」

「っ?!」

かあつと顔を真っ赤にし、未来は恥ずかしそうに俯いた。そんな姿にも愛おしさを感じながら仁志は依り代を手にゲームを起動させる。

この結果、未来も本来有り得ないリビルドギアを獲得する事に成功。だが仁志にとつてはここからがある意味で難関であった。

「仁志さん、教えてください。マリア達と何をしましたんですか？」

やってきた調は開口一番仁志へ詰め寄った。明らかに上機嫌な響達を見て、調はある程度察しを付けていたのだ。

ずばり大人な行為をしていると。それが調には怒りを抱く事であった。

何せ彼女は仁志へ想いを伝えた。自分も一人の女として仁志を想っているのだと言ったのだから。

「うん、それを話すためにも、まずは調に聞いて欲しい事がある」
「何ですか？」

やや苛立ちを残したまま、調は仁志を見つめた。

そんな彼女へ仁志は優しく笑みを向けるとその華奢な身体をそつと抱き寄せる。

「え……？」

「あの時は受け返せなかったけど、君の気持ちはとても嬉しかった。本当に、ありがとう」

強く感じるこれまで覚えのない匂い。それが男の匂いだと、調はその仁志の匂いに胸を騒がせた。

正確には汗の匂いなのだが、広義ではその人の匂いに分類されるの

で間違ってもいないだろう。

(これが……男の人の匂い、なんだ)

嫌いじゃないと思い、調は目を閉じて仁志の胸へ顔を埋める。そんな彼女へ仁志は感謝するように笑みを零すと、その耳元へ囁いた。

「許されるなら、調の想いに応えたい。ただ、もう知ってると思うけど」

「分かってる。仁志さんは、選べない。悪意がいなくなるまでは、私達全員大好きを貫くって」

「調……」

顔を静かに上げ、微笑みと共に見つめてくる調に仁志は小さく驚きを見せた。

いくら分かっているとはいえ、すんなり受け入れられると思っていなかったのだろう。

実際、調もこれが自分の見も知らぬ女性達であればそうだった。だが、マリア達は調にとっても大事な者達である。

(もし仁志さんが誰かを選んでたら、きつとみんなどことなくぎこちなくなってた)

自分達でさえもそうだったと調は思い、それを回避するにはどうすればいいのかを仁志は考えた結果が選ばないし選べないという結論だと理解したのだ。

「仁志さんの答えを、私は尊重します。きつとそれは、みんなの笑顔のために今一番いい答えだと思うから」

「……………すまない。そしてありがとう。やっぱり調は、大人の女性だね……………」

「んっ……………」

そつと触れ合うキス。そんなファーストキスに調の心は大きく反応していた。

彼女が思い描いていたような、そんな優しいキスだったからだ。

(あったかい……………こうしてるだけで全身から力が抜けるみたい。仁志さんに私の全て預けたいな……………)

寄りかかれる存在。それは調がこれまでもつ事が出来なかった存

在である。

マリアは自分達のために頑張っているし、切歌は大切な存在故に支え合うのが精一杯。

そこへ初めて寄りかかってもいい相手が現れた。それが仁志だったのだ。

成人であり男性の仁志は、調からすれば立派に大人であった。一人で暮らし、生きている事は十分そう思えるだけの資格として調には映っていたのだから。

ゆつくりと離れる仁志の温もりを、調は離したくないとばかりに腕を伸ばした。

「調?」

「もつと、もつと仁志さんを感じていたい。もつと、キス、して?」
「っ?!」

まだ未成年とは思えないような色香を見せて調はキスをねだる。

潤んだ瞳と艶やかな眼差し。そして、色っぽい声。そんな見た目の差に仁志は息を呑み、キスしたい衝動を何とか堪えつつ、調を強い眼差しで見つめた。

「……調」

「何?」

「大好き、いや愛してるよ」

「あ……んっ!」

全力で受け止める。悪意を恐れるものか。

そんな気持ちで告げた決意の言葉は調の心を見事に打ち抜いただけではなく、悪意の種さえも打ち抜いた。

強く優しい愛が調の中に根付こうとしていた悪意の種を砕いたのだ。

(凄く力強い……。うん、やっぱりそうだ。仁志さんなら、私を受け止めても平気。私が、寄りかかっても笑って受け止めてくれる人だっ! みんな一緒に幸せにしてくれる人なんだっ!)

普通ではない環境で育ち、普通ではない状況を送った調にとって、響達はクリスと同じく失いたくない存在だった。

特にこの平屋で過ごしている者達は特別だ。調にとって、家族というものを本当に味わう事が出来た場所と時間なのだから。

それを守るためなら複数の妻がいる事ぐらい調は気にしない。むしろ喜びと言えたのだ。

みんな一緒にいられる。みんなが家族になれる。この言葉は身寄りのない彼女にとって、何とも甘く、弱い言葉だったからだ。

(ずっと、ずっとこの温もりに寄りかかっていたい。甘えていたい……)

依り代から通知音が鳴ったのはその時だった。

それを合図に仁志はそっと調から顔を離していく。

「あの、今のは？」

「ああ、実は……」

キスを切っ掛けにクリス達がりビルドギアを発現させている。そう聞いても調は何とも思わなかった。

むしろ自分の中で確信を得たのだ。仁志は自分達全員を受け止められる存在だと。

それを仁志が聞けばそんな事はないとやんわりと否定しただろうが、残念ながら彼は調の心を読める訳ではない。

「じゃあ、このギアは私と仁志さんの気持ちを通じ合った証？」

「そう、かもしれない」

「……嬉しい。思えば、このギアはあの三人が残してくれた輝きを宿したギアだった。きつと、だから想いを通じ合わせる事で追加されたのかも」

「そうだな。そう思うと理解出来る」

何故リビルドギアなのか。その理由を教えてもらえたような気持ちとなり、仁志は視線を依り代の画面へ落とした。

(切歌も調と同じで俺を異性として見てくれている。だから、その、俺も男として想いを向ける事が出来る。でも……)

セレナは、どうなのだろうかと仁志は思った。彼女は十代前半だ。そんな年齢の少女へ三十の自分がキスなどやはりどうだろうと。

(俺、固い考えの人間なのかなあ……)

住む世界が異なる上、状況が状況である。

そういう事を背景に従来の常識で考えないようにする事も出来るが、どうしても仁志はセレナと例え両想いであり彼女が自分を異性として見ていたとしても、それでもキス出来る気はしなかった。

そんな中で仁志の前へやってきたのはやや赤い顔で落ち着きのない切歌であった。

「し、ししよー? えっと、ここでみんなと何してた、デス?」

「……その顔はある程度思い付いてるんじゃないか?」

「デデっ!? そ、そんな事はないデスよ?」

嘘だった。切歌はここへ来る前に調から耳打ちされていたのである。

——切ちゃん、えっとね、仁志さんがキスしてくれると思うよ?

その言葉を聞いて切歌は一人で舞い上がっていた。

(し、ししよーとキスなんて……ど、どうすればいいデスカね? 目を閉じて、少し顔を上へ向けていればいいカンジデスカ? そ、それともししよーにご、ゴーンに奪ってもらおうカンジデスカね?)

嬉しそうに想像している切歌を見つめ、仁志は呆れつつも微笑ましく笑みを浮かべていた。

(分かり易いな、切歌は。きつと調が教えただろ)

キスされる。それを知って乙女らしく両手を頬に当てて妄想に浸れる切歌を、仁志は男としてではなく師匠目線で見つめていたのだ。「それで、切歌に聞いて欲しい事があるんだ」

「っ!? は、はいデス!」

「うん、まずは声量を少し落としてくれるか? で、もう少しこっちに来てくれ」

「はいデス。さささっ、デス」

まるで忍者のような動きで仁志の前へと近寄る切歌。その動きに仁志は苦笑し、目の前へやってきた愛らしい弟子を優しく抱き寄せた。

「っ?! し、ししよー?」

「切歌、今日、俺へ言ってくれた事、忘れてないよ。俺のお嫁さんに

なってもいいって、そう言ってくれた事を」

「ししよー……」

「あの時言えなかった事を、ここで言うな？　俺は、暁切歌が大好きだ」

「っ?!」

大好き。これが切歌へどういう意味を持つかを仁志は知っていた。かつて調とぶつかり合った際に切歌が言うなと返した表現だからだ。

「愛してるよりも、切歌はこっちの方が響くと思った。こっちの方が、伝わると思った」

「……はい德斯。ししよーの気持ち、ちゃんと、ちゃんと伝わった德斯。アタシの心に、しっかりと届いた德斯」

伝わる温もりに混じる少し早い鼓動の音。それが切歌に笑みを零させる。

目の前の男性は緊張しているのだと、そう分かるからだ。

「それなら良かった。それで、切歌」

「德斯？」

「目を閉じてくれるか？」

「っ?!　は、はい德斯……」

遂に来たと思って目を閉じる切歌を微笑ましく思っ、仁志はその額へキスをした。

「えっと、おでこ德斯っ?!」

思っていた場所ではなかった事で切歌が目を開けて、その事で疑問を投げかけようとしたところで仁志がキスをした。

その不意打ちのキスに切歌の頭と心がパニックを起こした。

(なななっ?!　えっ?!　えっ?!　こ、これはどーゆー事德斯かっ?!)

し、ししよーとキス、しちやってる德斯よっ?!)

目を開けたまま切歌は動揺していた。そんな気持ちが治まる前に仁志の顔がそつと離れていく。

「し、ししよお……」

「えっ?」

仁志が見たのは目に涙を浮かべた切歌の今にも泣きそうな顔。

動揺したまま終わったファーストキス。しかも目の前で仁志が離れていくのを見ながら唇から温もりが失せていった事で、切歌の中に強烈な寂しさが押し寄せたのである。

「も、もう一回、もう一回キスして欲しいデス……。さっきの、いきなり過ぎて訳が分からないまま終わっちゃったんデスよお」

「切歌……」

まるで子供のような切歌に仁志は優しく笑みを浮かべ、その目元をそっと指で拭った。

「分かった。ごめんな。俺のせいで大事な切歌の思い出を悲しいものにするところだった」

「ししよー……」

「やり直しじゃないけど、仕切り直しだな。切歌、大好きだよ」

「あ……アタシも、アタシも大好きデス！」

そうして笑顔のまままで交わしたキスは、切歌の心を温め優しく包む愛に満ちていた。

（これがキス、なんデスね。さっきは分からなかったデスけど、あつたかくて幸せデス……。あ……ししよーが抱き締めてくれてるデス。力強くて頼もしいデスね。アタシ、やっぱりししよーのお嫁さんになりたいデス。ししよーの傍でお嫁さん修行して立派なお嫁さんに、奥さんになりたいデスっ！）

依り代から通知音が鳴っても仁志は切歌を抱き締め続けた。キスを終えても切歌の事を愛おしく思うようにだ。

「ししよー、さっきの音、調べないでもいいんデスか？」

「もう大丈夫か？」

「あはは、ご心配かけましたデスが、この通りいつものアタシなのデスよ」

「そつか。じゃ、ちよつと見せてもらうな」

最後に軽く切歌の頭を撫でて仁志は依り代へ目を向け、ゲームを起動させる。

そして切歌へギアを展開してくれるよう頼み、ステータス画面からリビルドギアが追加されているかを確認。

結果、切歌も無事リビルドギアを獲得。それも相まって嬉しそうに切歌は居間へ戻ろうとしたところで、ふとある事を思い出して仁志へこう耳打ちした。

——ししよー、エッチな修行も、アタシは大丈夫デスからね。

赤い顔で照れくさそうにそう告げて切歌は居間へと戻って行った。

その発言が仁志の心を大いにかき乱すと知らぬままに。

「……ホント、狙ってないからこそ性質が悪いよなあ」

無知にも近い切歌へ男の欲望をぶつける。そんな事を想像してしまい、仁志は必死に首を横へ振るのだった。

そうして最後に現れるのは当然セレナ。

「お兄ちゃん、一体何を話してるの？ 姉さん達がとっても嬉しそうなんだけど？」

「えつと……」

どう話そうか。そう思った仁志は、ふとこれまでの自分のした事からもっとも適してると思われる行動を思い出した。

それは、あのお化け屋敷での一幕。響と過ごした際の、最後の出来事だ。

（セレナなら、あれが一番だな。さすがにファーストキスは、もう少し年齢が上がってからセレナ本人が本当に恋した時に考えてもらおう）
セレナ相手には兄のような気持ちとなる仁志には額へのキスが最適と思えた。

そんな事を知る由もなく、セレナは仁志を見つめて首を傾げるのみ。

「実は、みんなに新しいギアが追加されたんだ」

「え？ そうなの？」

「ああ。それで、その時と同じ事を再現してたんだ。セレナも、それでギアが出てくるかどうかやってみてもいいか？」

「もちろんいいよ。それで、何をするの？」

素直に応じるセレナに仁志は微笑みながら耳打ちをする。その内容にセレナは驚くも、どこか期待するような表情で頷き仁志へ顔を向けて目を閉じた。

「お、お兄ちゃん、いつでもいいよ?」

目を閉じてキスを待つ姿は、まさしく恋に恋する年頃らしい可愛さだった。

それを見ていた仁志もあまりの愛らしさに思わず笑みを零す程に。

そして仁志はセレナの両肩へ手を置き、そのやや緊張している表情を見てから額へと口付けた。

「……え?」

額に感じた温もりでセレナが目を開けて仁志を見上げる。

仁志はそんなセレナに申し訳なさそうな顔で頬を掻いた。

「今はそれで我慢してくれるかい? セレナがもう少しだけ大きくなって、その時に俺の事を今よりも好きだって言ってくれるなら、俺もちゃんと覚悟を決めるからさ」

「……それって、私が切歌さんや調さんぐらいになつたらって事?」

その声には、微かな悔しさが滲んでいた。その俯いた顔には、確かな悲しさが宿っていた。

それらを感じ取りながらも、仁志は噛み締めるように頷いて告げる。

「そうだね」

「つ……分かった。なら、せめてほっぺたにもして欲しいな?」

可愛らしいおねだりに仁志もそれぐらいならとしゃがみ、セレナの頬へそつとキスをした。

すると、そこを狙ってセレナが仁志の頬へお返しとばかりにキスをしたのだ。

「せ、セレナ?」

「ど、どうかな? ドキツとした?」

小悪魔のような行為に仁志は小さく苦笑すると参りましたとばかりに頷いてみせる。

「ああ、見事にドキツときさせられたよ。セレナもすっかり女性らしくなつたんだな」

「そうだよ? もう私は立派なレディだもん」

そう言つて微笑むセレナに仁志も笑みを返す。ただ、やはりセレナ

にはギアの追加は起きなかった。

それを受け、仁志はセレナともちゃんとしたキスをしないといけなのかと思ひ悩む事となり、セレナはセレナで自分だけがギアの追加が出来なかつた事を気にするようになる。

こうしてこの日は終わりを迎え、シャワーを借りた仁志は響とクリスを連れ立ってアパートへと帰る事に。

「ひくっとしっさん」

「ひ、仁志」

「何？」

両腕にくつつく響とクリスに動じる事なく、仁志はむしろ微笑みさえ浮かべて歩く。

その堂々とした振る舞いに二人は一瞬驚くも、すぐに笑みと共に尋ねた。

——今夜、泊まってもいい（です）か？

勿論返答は却下。だけどアパートへ到着しドアの前で別れる際、仁志は二人へ少しだけ不敵に笑ってこう告げるのだ。

——そういう事はしかるべき場所じゃないとな。じゃ、おやすみ。

その意味を察して真っ赤になるクリスと理解が及ばない響という状況を作り出して、仁志は自分の部屋の中へと消える。

「く、クリスちゃん、今のってどういう意味？」

「し、しかるべき場所ってのはな、その……耳貸せ」

クリスの口から説明を受け、響も仁志の言いたい事を理解して赤面した。

そういう意味ではまだこの二人は可愛らしいと言えるだろう。

——本当に厄介ねあの男っ！ 本気で現状維持が望みっ?! しかも下心もほとんどないとか、有り得ないわっ！ それに乗っ取るどころかこちらの仕掛けをほとんど壊してしまうなんてっ！ 一体何がどうなってるのよ!? ……こうなれば残った種だけで何とかするしかないか……。

薄っすらとした黒いもやのような物が自分達を見つめているとも知らず、仁志と同じようにクリスと響も自分達の部屋へと入る。

「リビルドが手に入ったからには、もうカオスピーストなんて怖くないね」

「ああ、そうだな」

普段であれば、そこで二人揃って近い内に倒しに行こうと言いついでいた。それが、この日はなかった。

「……だ、だけど油断は禁物だもんね。もう少し、もう少しだけ様子見、しよう」

「……だな。焦ってとんでもない事になったら不味いしよ」

出て来たのは消極的な言葉。そんなやり取りを聞いて悪意は嗤う。

——ふふっ、だけど心に刻まれた細工は上々。残る装者達もきつとそこまでは消えていないはず……。ふふふ……。はははっ……。あはははははっ！

番外編 仮面ライダー編（クウガ）

誰も言葉を発しなかった。モニターの中では、仮面ライダークウガこと五代雄介の心臓が止まった瞬間が流れていた。

「う、嘘デスよね？ クウガが、五代さんが死んじやうなんて……」

キノコ怪人であるメ・ギノガ・デによる胞子攻撃を受け、五代の体ではアマダムがその胞子による腐食へ懸命に対抗していたのだが、その甲斐も虚しく五代の心電図は平行線を描いてしまった。

つまり、心臓が停止したのである。

「お、お兄ちゃん？」

「姉さん、大丈夫です。クウガは、仮面ライダーなんです。仮面ライダーは、戦いが終わるまで死にません」

五代唯一のかかりつけである椿医師から一条刑事へと五代の死亡が連絡される。

その連絡をパトカーの中で聞いた一条。その彼の声などは周囲の雨の音で聞こえない。

「一体ここからどうやって復活するんだ？」

「不思議な力？ アマダム、だっけ。それじゃないかな？」

「で、でもでも、あの怪人の胞子は内臓を腐らせるって……」

「あつ……」

ドラマは一条が五代の死を彼の妹であるみのりへ告げる場面となっていた。

一条から五代の事を聞いたみのりは、何故か悲しむ事も驚く事もしなかった。

それを不思議に思う一条へ彼女は告げる。

——それでも兄は戻ってくるような気がします。

今や戦士クウガでもある五代雄介。それを踏まえてみのりは強くそう告げたのだ。

そして、その言葉を合図にしたかのように五代の体に異変が起きる。

——瞼の下……大きな瞳……瞳孔の散大か……？

桜子が見つけた古代の碑文。そこにあった一文の意味を医学的な見地から気付く椿。

そう、五代は死んではいなかった。

怪人の胞子がある程度温度が高くないと活動出来ないと察したアマダムは、五代の体温を下げるために敢えて仮死状態にして体温を低下させたのだ。

そして胞子を死滅させると同時に再び生命活動を再開させたのである。まさしく奇跡のような肉体制御法であった。

「「「すごい（デス）……………」」」

「とんでもないね、アマダムって」

「神秘の輝石の力ね。だけど、やはりこう見ると五代雄介も…………」

「人ならざるものと、なってきたているんだな。少なくとも、その体は」
明けて翌日、晴れ渡る空に似つかわしくもない存在が街で暴れ出す。

雨による湿気などでより強力になったギノガが一条達警察を襲い始めたのだ。

懸命に応戦する一条達だが、やはりその力の差は埋められず、あわやこれまでと思われたその時……

「「「ああっ！」」」

白い影が一条を守るように現れ、ギノガを攻撃。

それは白いクウガ。グローイングフォームと呼ばれる、力の弱った時の姿であった。

「間一髪、か…………」

「分かつてはいるけど痺れる登場だよね」

「カツコイイなあ、やっぱり」

「さり気無いやり取りもいいよね。白い四号って訂正するのとか」

「全てを知ってる一条刑事だから、こそその台詞ね」

戦場を河川敷へ移し、対峙するクウガとギノガ。

共に走り出すも、クウガが全身の力を叩き込むように着地を考えないパンチを叩き込んでギノガの機先を制する。

そのパンチのダメージに呻くギノガを見て、クウガは勝機を悟り、若干距離を取って構えた。

向ける。

そこには平和的なEDが流れていた。

今日は実は恒例の週一度の集まりではなかった。

何故なら仁志やクリスは勤務があり、調もシフトに入っている日だったのだ。

更に言えば仁志は明けである。そう、つまり今日は本来集まる予定ではなかった。

それでもこうして全員集まっているのは仁志が発起人だったからである。

——切歌やセレナがクウガの続きを見たがってるんだ。なので九時にマリア達の家へ来てくれない？

既に見た事のある自分は時々仮眠を取るが、それでも良ければ全員集まらないかと。

調の勤務終わりから全員がマリア達の家の間へ集まり、二度目のクウガ鑑賞会がこうしてスタートした訳だった。

「さっきの、私達で言ったらギアインナーで勝つて感じかな？」

「G3FAが失敗した後で考えるのが妥当だろ」

「それで一度負けた相手に勝つ、か。そう考えると色々と思う事が多い展開だな」

「ギノガは身体能力で言えばメの怪人達の中でも弱い部類なんだ。それもあってクウガはグローイングでも勝てたんだよ」

どこか眠そうな顔で仁志がそう言うのとセレナがそつと彼へ近寄った。

「お兄ちゃん、そろそろもう一度寝た方がいいよ？　今夜もお仕事だよね？」

「あー……」

「兄様、姉さんの言う通りです。兄様の解説がないのは寂しいですけど、それはまた別の機会に聞かせてもらいますから」

「仁志、寝た方がいいわ。オーナーさんに心配されるわよ？」

「……そう、するか。じゃ、ごめん。どうせ昼過ぎになったら起きるだろうからライジングフォームの裏話はその時に」

「また地味に気になる事をししょーは言うデスね……」

「クスツ、切ちゃん、それが師匠だよ」

あの海水浴以降調は時折仁志を師匠と呼ぶようになっていた。

それを調は周囲へはこう説明している。将来のための花嫁修業として仁志から男性の目線や思考を教えてもらっているからだ。

未だ調は切歌以外には自分も仁志を異性として想っている事を伏せていた。その理由は一つ。知られると仁志との時間を取り辛くなるからだ。

切歌と二人で仁志の下を訪れる事があっても、今ならばそこまでうるさく言われないし気にもされない。

これが二人揃って異性としての行動と思われた瞬間からマリア達の視線が厳しくなる。それを調は理解し切歌と共謀して自分達の立場を周囲へ隠したまま動いていたのだ。

居間の隅に敷かれたマリアの布団へのろろと動き、仁志はアイマスクと耳栓を装着してそのまま眠りへついた。

「そういえば、昼はどうするんだい？」

「まだ何も考えてないの。何か案はある？」

OPが流れる中、奏とマリアを中心とした先輩組は昼食に関して悩み始める。

が、やはり食べる事に関しては右に出る者はない彼女が真っ先に手を挙げた。

「はい！ 焼きそばとかどうでしょう！」

「響、それ海水浴の時に食べられなかったからでしょ？」

そしてそのアイディアの根底を未来が瞬時に察してみせるまでで定番の流れである。

「立花らしい。だが、いい案だと思う」

「そうだな。ただ、これだけの人数となるとフライパンじゃ、なあ……」

「ホットプレートとかあれば少しはマシなんだけどね」

「あるわよ、ホットプレート」

「「「……え？」」」」

さらりと告げられた言葉に響達が目を丸くする。マリアはそんな五人に苦笑しホットプレートを買った切っ掛けを話し出した。

それは、今からもう一か月以上前の事。仁志がマリアの事を呼び捨てにし始めた頃までさかのぼる。

毎日のようにマリア達の家で夕食を食べているため、仁志はこの家の食事面へ大きく関わっていた。

ある時、マリアがエルフナイン達の朝食にパンケーキを出したいと打ち明けたのだが、フライパンでは複数一気に焼くのが面倒だと察した仁志が……

——色んな事に使えるし、いつそホットプレート買おう。

と決断。その日の内に電気屋へ向かい、嬉しそうな顔で仁志が新品のホットプレートを持って顔を出したのだった。

「で、その夜に早速仁志の希望で焼うどんをやったのよ。で、ちよくちよく使ってるわ」

「そうなんですわね。じゃ、それでお昼は焼きそばやりましょうよ」

「そうだね。ついでに夜は好み焼きとかどうですか？ それなら材料も似たようなものだし、焼きそばが余っても使えますよ」

「いいわね。じゃあ、お昼と夜とホットプレートに頑張ってもらいましょう」

笑顔で話す響、未来、マリア。そんな会話を聞いてややイラツとしている者がいた。

「やっぱ仁志先輩ってこの家、ちよつと特別視し過ぎてない？」

「奏……」

目を吊り上げ、奏はマリアを見つめていた。それは女の嫉妬。奏もどこかで分かっているのだ。仁志はマリアではなくエルフナインやセレナという幼い少女のためにと、この家へ色々気を回している事は。

だが、それをまるで自分が愛されているように振舞っている風に見えるマリアがどうしようもなく嫌だったのだ。

翼が嗜めるような声を出すも、奏はそれを無視するようにマリアを見つめていた。それは、下手をすれば睨みにも似ていて、響達が一瞬

息を呑む程険しい。

「それはエル達がいるからよ。仁志はあの子達の兄であり父のように思っただけで動いてくれているし」

「そうだろうけど、それを誰かさんがまるでうちの旦那がみたいと言ったのが気になってさ」

「あらごめんなさい。私にそんなつもりはなかったけど、気に障ったみたいね」

やや苛立つ奏とそれを余裕で受け流すマリア。言うなれば愛人と正妻の対峙だろうか。

だが、そんな二人を見て翼が大きくため息を吐いた。

「そこまでにして。奏もマリアも仁志さんの目がなくなった途端にそれ？ あの人が一番嫌がる事は、今のようない事だと思っただけど？」

「っ……」

自分を理由に装者達が揉める。それを仁志が知ればどうなるか。

最悪彼は必要ではない時は部屋へこもり、今のようない時間を取る事はなくなる。

それどころか、呼び方さえも最初の頃へ戻す可能性さえあった。

そう、仁志が極端である事をもう響達も気付いている。

故に、一度でも彼が自分が不和の原因と知ればどうするかを察していたのだ。

「先輩の言う通りだぜ。あたしらが仲良くしてるのが仁志が一番嬉しいんだ。下手すりゃ、自分と仲良くしてるよりも、だ」

「うん、それはそうだね。只野さんが今みたいな集まりをやるの、絶対それだもん」

言っただけで未来は寝ている仁志がいる位置へ目を向ける。彼女がいる場所からは見えないそこへ目を向け、未来は小さく笑みを浮かべてからやや真剣な表情で奏とマリアを見た。

「あの、二人が色んな意味で只野さんと親しいのは分かりますし、一番傍にいてくれると思うのも分からないでもないです。だからこそ、そういう事を言い合うならせめて二人だけの時にお願ひします」

「み、未来……」

「響、奏さんもマリアさんも大人の女性なんだよ。だからきつと私達よりも只野さんへ思う事が多いんだと思う。ただ、それをぶつけ合われると私達はともかくエルちゃんやセレナちゃんがどう思うか。それを忘れないで欲しいんです」

真つ直ぐ告げられた言葉は少しだけ声量を落として放たれた。

それがエルフナイン達への配慮だと気付き、奏だけでなくマリアも申し訳なさそうに目を伏せる。

そして響達三人は未来の言葉に目を見開いていた。要するに仲良くなくともいいからケンカするなら二人だけでやれと突き放したからである。

「み、未来？ それじゃ、マリアさんと奏さんがケンカしてもいいって」

「そう言ったつもり。でも、勘違いしないで欲しいんだけど、これは何も二人だけじゃないから。響やクリスマスだって、ケンカするなら自分と相手しかいない時にして。私も今後そうする。クリスマスは知ってるだろうけど、前に響としたような状況で」

今度はマリアと奏さえも目を見開いた。未来はそう言いながら笑っていたのだ。

「只野さんが私に教えてくれたんです。誤魔化さないと壊れる絆なんて早く壊してしまえって。もし私達の絆がそうなりかかっているのなら、それをどうするかを決めるのは私達自身じゃないと」

「未来、貴方……」

「でも、私はこうも思ってます。誤魔化しても壊れる絆はあるけど、誤魔化せば壊れない絆もあるんじゃないかって。私は、今の私達をこっちだと思ってます。自分達のためについて、そう誤魔化していけば、壊れないまま強く丈夫になってくんじやないかなって」

「小日向……それは……」

「あなた、もしかして現状維持を考えてるの？」

奏の問いかけに未来は小さく苦笑しながら頷き、チラリと視線をモニターへと向けた。

そこに映る五代雄介の姿を見て、未来は噛み締めるように呟いた。

「みんなが出来る限りの無理をすれば、きっと何とかなる。私は、そう思います」

「未来……」

響はその言葉がクウガの劇中で使われたものだど覚えていた。何故ならそれは、彼女も心に残った台詞だったからだ。

「ちよつと待って。未来、貴方はそれでいいの？」

「只野さんって、どこか似てるんです。私の、すぐ近くにいたお日様に」

小さく微笑み未来は響へ目を一瞬だけ向ける。それを受けて響は妙な照れくささを感じて頬を掻いた。

「自分が我慢すればみんなが笑顔に、幸せになる。そう思ったらどれだけ辛い事も、苦しい事も頑張っちゃうんですよ。だからこそ、私は、それをあの人だけにさせたくない。誰か一人だけが我慢するなんて間違ってる。我慢するならみんなで。それをしないならみんなではない。それが、私の考えです」

はつきりと未来はそう言い切った。

極論と言える考えではあるが、そこで語られた事は仁志のためにと未来なりに考えたものだど理解し響達は揃って押し黙る。

切歌達はクウガに夢中でそのやり取りに気付かなかった。ただ気付いたとしても口を挟む事はしなかつただろう。

何せ切歌の望みは未来と同じなのだ。みんな笑顔でいたい。仁志の願うものと切歌が願うものはまったく同じなのだから。

調は少し違うが、彼女の場合大事なのは仁志を誰かが独占しない事。そこには自分も含めている。

誰かが仁志を独占すれば、誰かが悲しみ、妬み、怒るからだ。それを誰よりも嫌がるのは他ならぬ仁志だと知っているからこそ、調は独占しようとは思わないのだ。

セレナは独占を考えてはいないが、誰よりも仁志を好きで居続けられるのは自分だと思いついでいるし、エルフナインは仁志を兄のように父のようにも慕っているので独占など頭がない。

つまり、年少組はまだ女のように女ではないのだ。そして未来は女

を通り過ぎて母の域に片足を踏み入れていた。

「みんなが幸せになりませんか？ みんなが笑顔でいられるために、みんなが少しづつ我慢しましょうよ。それとも、誰かに大きな我慢をさせますか？ 自分の笑顔のために。そうなったら、その誰かだけじゃなく大事な人も大きな負担を背負う事になるとしても、それでもいいですか？」

笑顔で放たれた言葉の矢は、想像以上に鋭くマリアと奏の心を突き刺した。

「未来……怖いよお」

「うん、怖いと思うよ。だって私、自分が只野さんと一緒にいられなくなるなら全員道連れに思ってるから」

「「っ!？」」

思わず息を呑む響、奏、マリア。だが、クリスと翼は驚く事もなくむしろ納得するように苦笑していた。

二人はあの海で未来から今のよう話を聞いていたのだ。

みんなが幸せになろう。それは仁志の傍で暮らそうと冗談半分本気半分で言い合った二人にとっても望むところな発想だったからだ。

「小日向、この話はここまでにしよう。今は、クウガを見ないか？」

「ああ。地味に気になる展開になってきてるしよ」

未来の話を聞きながら翼とクリスはモニターへも意識を向けていた。

二人にとっては未来の話は知っているものだったため、それによって響達三人がどう衝撃を受けるかはある程度察する事が出来ていたのだ。

だからこそ騒ぐ事はないだろうと思ひ、二人はどこか安心してクウガの視聴を再開していたのだから。

「キックの時に出てたビリビリ、何なんデスカね？」

「分からない。ライジングフォームって言ってたから、その前兆？」

「かもしれない」

「じゃあ、五代さんが強くなろうとしてなる姿じゃないんだ？」

「分からないぞ。アマダムは五代の意思で力を与えてる。強い敵が出

て来たたら、その相手に負けたくないと思うだろ？ それに応える形で強くなる可能性はあると思うぞ」

ヴェイグの意見に切歌達は成程とばかりに頷き、続きを見るためにEDを飛ばす。そして始まる次回予告に目を輝かせたのだ。

その姿に響達は小さく笑みを浮かべ、未来の言葉の意図を噛み締める。これを、未来は失いたくないのだろうと。

「……マリア」

ポツリと呼ばれた事にマリアが視線を動かす。呼びかけてきたのは奏だった。

奏は顔をモニターへ向けたまま、テーブルに肘を付けていた。

「仁志先輩、言ってたんだ。取り合うのはせめてこの面倒事が終わってからにしてくれって。だから、あたしも最低でもそこまでは我慢するよ」

「……そう。なら、私も自重するわ。仁志は必ずこの事件を終えるまでは選べないものね」

「そういう事。それに、下手な取り合いするとあの人、あたし達から離れるし」

「そうなのよね。それでこっちも、そんな男なんてって、そう言えないのが私達の泣き所だわ」

「仕方ないよ。あたしもマリアも立場つてもんが邪魔だ」

「本当に。それさえなかったらきつと……」

「仁志先輩以上の男を捕まえてる？」

「……そんな未来もあつたかも、ね」

「でも、きつと上手くいかなくなる気がするよ。あたしやマリアが背負ってる役目みたいなものへの理解、結構難しいと思うから」

クウガを見ながら話す二人。もう未来も響達もそれへ意識を向けなくなっていた。

二人の雰囲気は先程までのやんわりと棘があったのと違い、似たような立場の相手への理解と共感が感じられるものだったからだろう。

「何だか、どんどん怪人のやり口が凶悪で残虐になってませんか？」

「ああ、そうだな」

「ゲゲルってのがゲームって意味だつて仁志は言ってたな。それが、
どんどん加速してるって事か」

「酷い。でも、これって見方を変えれば人間もやってる事なんですよ、
ね？」

未来の問いかけに翼とクリスが同時に頷く。

「特定の動物や魚を執拗に狙い、食べるのではなく数を競う事をして
いる者達はある。そういう意味で言えば、怪人達の行動は人間らしい
とも言えなくもない」

「まったく胸糞わりいぜ。これが仁志が悪人にならなかった理由なん
だろうさ。人間の悪い面をこいつは皮肉ってるんだからな」

「人間の良い面も悪い面も隠す事無く見せる。だけど、少しだけ、ほん
の少しだけ優しさや希望が上回る。だからこそ、仁志さんはヒーロー
物が好きなんだろうな」

序盤はただ多く殺せばいいという風な怪人達の行動も、この頃にな
ると何かルールのような物が持ち込まれ始め、何か変化が起き始めて
いる事を見ている者へ感じさせる。

それに伴ってクウガの体に起きる謎の放電現象。複数の謎が絡み
合い、その一つはある答えとなつて響達へと示された。

「一二」紫のクウガが変わつた（デス） つ!?!「一二」

銀の鎧だったクウガが電撃を体へ走らせると同時に変化を起こし、
その鎧を鮮やかな紫へと染め上げたのだ。

持っていた剣も刀身が伸び、より強力な外観となった。それこそが
ライジングフォームと呼ばれる強化形態だった。

ライジングタイタンとなつたクウガはそれまで苦戦していたメ・ガ
リマ・バを圧倒。その力を持って見事メ集団のリーダー格を打ち倒し
てみせたのだ。

「……重厚感がすげえな」

「うん、強そうって感じ。あと、単純にカッコイイ!」

「ヒーローらしさが増したね。金色の差色がいいよ」

「こうなると他の色もどう変化するのか気になるわね」

「私は赤のクウガが気になるな。他の姿は武器を持っているから強化

が反映される部分に分かるが、赤は徒手空拳だ。一体どこへあの凄まじい力を反映させるのか」

「キックがトドメだし、足じゃないですか?」

「それは分かるんだ。問題はこういう形で見せるのかが読めない事だ」

「なら先輩、もうしばらく待つんだな。多分赤いやつは最後のお披露目だと思うぜ」

そのクリスの言葉に翼だけではなく響達も疑問符を浮かべた。何故だと、そう思ったのである。

クリスもそれを察して小さく苦笑しながら口を開いた。

「いや、思い出せよ。次が空飛んでる奴だろ? てことは緑のクウガだ。これ、あの最初の頃の逆で色を使ってくんじゃねーか?」

「……ああ」

クリスらしい鋭い読みに納得する響達。そこへ……

「クリス先輩、大当たりデスよ! パッケージ裏を見るとそんな感じデス!」

「切ちゃん、ネタバレ禁止」

「うわあ、緑のライジングフォーム、カッコイイです」

「青や赤のクウガもライジングになるともつとカッコいいね。お兄ちゃん、どのクウガが好きなんだろう?」

「……よく見ると手の甲に文字があるな」

「……どれ(ですか)?」

パッケージを見ながら話す年少組に響達は微笑みを浮かべる。どうしても彼女達のやり取りは心があつたかくなり、笑みが零れてしまふのだ。

「じゃ、一旦ここで休憩よ。お昼と晩ご飯の買い物に行かないと」

「あたしもついて行くよマリア。荷物持ちは多い方がいいだろうし」

「助かるわ。調はどうする?」

「じゃ、少しだけ仮眠する。切ちゃんは?」

「アタシは……セレナ、ししよーの部屋の掃除に行きますか?」

「あ、はい。そうします」

「俺は寝る」

「僕は姉様についていきます！」

愛らしいエルフナインに誰もが笑みを浮かべた。その表情のままクリスは翼へと目を向ける。

「先輩はどうするよ？ あたしは留守番してるけど」

「そうだな……ならば買い物へ同行するか。二食分ともなればそれなりに荷物も多いだろうし」

「私も行きまーす」

「私は……あつ、ホットプレート洗っておきます。マリアさん、場所教えてください」

「助かるわ。えつと……」

こうしてそれぞれに動き始め、調は仁志の寝ている横へ布団を敷いて少しだけ嬉しそうに目を閉じる。

ヴェイグもすっかりお気に入りとなったクッションへ身を沈めて眠り始めた。

未来はホットプレートを軽く洗い始め、クリスは何気なくテーブルへ突っ伏した。

「ねえクリス」

「ん？」

「正直に答えて欲しいんだけど」

「ああ」

「私達、元の世界に戻っても、今みたいに笑えるかな？」

その問いかけにクリスは言葉を失った。何をバカなと思った訳ではない。何を言ってるんだと思った訳でもない。

心の底からそれは自分が目を背けていた事だと理解してしまったからだ。

「出動やアラートどころか訓練さえもない。そもそもギアが必要とされてない。そんな世界でこうやってみんなを支え合って、笑い合っただけで生きて、元の生活に戻れるかな？」

「そ、それは……」

言葉に詰まる。その理由がクリスには痛い程分かっていた。

(あたしは、もうこのあつたけえ居場所が、時間が忘れられないんだ。これを失うなんて、出来るわけねえ……)

更に未来はトドメとも言える一言を投げかける。

「それに、そこに只野さんはいないんだよ?」

「っ?!」

もし調が起きていれば、仁志が起きていれば、あるいは誰かもう一人いれば何かが変わったかもしれない。

だが残念ながら今この場で起きているのは未来とクリスだけ。このやり取りを聞いているのも二人だけだった。

「私は、そんなの耐えられない。もう、耐えられる自信がない」

「……お前」

未来の震える声にクリスが呆然と顔を上げる。その視界には、泣きそうな顔で自分を見つめる未来がいた。

「ねえクリス? ここで、みんな幸せになるのはダメなのかな?」

それって、そんなに許されない事かな? 普通の暮らして、一般的な生活って、そんなに私達はしちやダメな事かな?」

「それは……」

クリスは無意識にギアペンダントを握り締めた。ひんやりとした感触がクリスの気持ちいを落ち着かせる。

未来の言葉はそのままクリスの言葉であった。この世界で、仲間達と共に仁志を交えて暮らしていきたい。

その想いが強かったからこそ、誰よりもあつたかさに飢えていた彼女だからこそ、その心に強い光を宿した直後闇へと堕ちてしまったのだから。

「装者が、そういう事から遠いのは分かってる。でも、でもさ、だからってずっとみんなは普通になれないの? 他の人達が出来る事を、許される事を、ダメだって、諦めなさいって言われ続けたいけないの!」

「未来、お前……」

心からの叫びにクリスは思わず未来の名を呼んだ。それは自分の叫びだと、そう思ってしまったのである。

そのクリスの無意識の眩きに未来は気付いて表情を驚きに変えるも、すぐに嬉しそうな微笑みを目の前の少女へ向けた。

「クリス、今、私の事を名前で呼んでくれたね」

「っ!? いや、いや、今のは、その……」

「嬉しいよ。ありがとうクリス」

陽だまりと響が評した笑顔にクリスは否定するのも憚られ、言葉にならない声を小さく漏らし続けた結果……

「……………おう」

認めて受け入れるしか出来なくなったのだった。

そこで改めて未来とクリスは話し合った。今のような時間を続けていくにはどうしたらいいのかを。

悪意を倒す事は絶対だが、それは急ぎ過ぎてもいけないと二人は意見を一致させていた。

それは表向き悪意を警戒してだが、実情は違う。本心ではもうしばらくこの時間に身を浸していたいという欲求からの考えである。

それと、二人は知らぬがある意味悪意の導きでもあった。

「じゃ、未来はこのままここで暮らすって言うのかよ?」

一度呼んでしまい、それを聞かれてしまったためにクリスは開き直って未来を名で呼ぶ事になっていた。

クリスの問いかけに未来は辛そうに首を小さく横へ振る。本音はそう言いたい、それはさすがにダメだと分かっているために。

「そうは言っていないよ。でも、もう少しぐらいこっちにいたい。で、その間に何とかこのこと行き来出来る方法を見つけるか、あるいは……」

「あるいは、何だよ?」

「只野さんに、私達と一緒に来てもらえるように説得する」
「っ」

それはクリスと翼がどこかで諦めていた事。仁志から一度明確に拒否されてしまったために、頭の中から追い出してしまっていた発想。

「無理だ。仁志は、ここを捨てるつもりはないって」

「どうして?」

「両親がいるってのが一番でかい理由だ。あたしも、そう言われたら納得するしかねえ」

「そっか……」

未来もクリスと同じだ。両親を捨てて自分達の世界へ来て欲しい。それがどれだけ身勝手に酷い事かを理解しているからだ。

世界を越えればもう連絡さえも出来ない。看取る事も出来ない可能性が高いし、死んだ事さえ知らされる事はないのだから。

両親が平行世界にしかないクリスとまだ存命な未来。

立場こそ違うが、両親への想いや愛情は同じぐらい強い二人は、仁志へ親を捨ててついて来てとは言えそうになかった。

「あれえ？ クリスと未来だけ？」

「っ?!」

そこへ聞こえてきたのは寝惚けた顔の仁志の声。それに弾かれるように顔を動かした二人に彼は寝惚けたまま笑みを浮かべた。

「みんなは買い物？」

「お、おう」

「は、はい。お昼と夕飯の買い物」

「夕飯？」

「えっと、その……」

未来からの説明を聞いて仁志は寝惚けた頭なりに理解して、ならばとふらふらと洗面所へと移動すると少しの間を置いて再び台所へと戻ってきた。

「ホットプレートで焼きそばやお好み焼きかあ。賑やかな食事時になりそうだな」

「なると思いますよ」

「間違いねえな」

「ははっ……。っと、それにしても起きた時はビックリしたよ。アイマスク取ったら調が隣で寝てるんだもんなあ」

「っ」

どこことなく嬉しそうな仁志にクリスと未来が微かに苛立ちを浮かべる。

(今日の前に私達がいるのに……)

(何でそこで後輩の事を言うんだよ……)

恋をしている二人にとって、今の仁志の言葉は決して気分のいいものではなかった。

やや不機嫌な空気を漂わせる二人に仁志もさすがに気付いたのか、どこか不思議そうな顔で彼女達を見た。

「えっと……どうかした？」

「別にっ」

明らかに機嫌を悪くしている。そう感じた仁志はその理由を考えようとして、すぐに思い当たったのか小さく声を漏らして頬を掻いた。

「ごめんごめん。今はクリスと未来を見てないといけないか」

「あ……」

苦笑と共に告げられたその一言だけで二人の心は喜んでしまう。

何せキスを交わした事もあって、今の二人は片想いではなく一種両想い。

しかも仁志は下心ではなく真心で彼女達と接している。何故なら未だに彼は彼女達へ自発的に淫らな行為をした事はないのだ。

「あの、只野さん」

そんな時、未来は先程まで話していた事で仁志へ会話を振ろうとしていた。

すると、玄関の戸が開く音がして三人揃ってそちらへと顔を動かした。

「ただいま (デス) っ！」

「「おかえり」」

戻ってきたのはセレナと切歌であった。二人は仁志が起きてるのを見るなり嬉しそうに笑みを浮かべて彼へ抱き着いた。

「お兄ちゃん (ししよー) っ！」

「つと、あつついなあ」

「む (な) っ……」

一見無邪気に見えるセレナと切歌だが、未来とクリスには分かっていた。二人が仁志へ抱き着いた瞬間から浮かべる笑みの質を変えた

事を。

微かではあるが女の顔を見せたのである。

「クリス……」

「……分かった」

視線と呼びかけだけで互いの考えを通じ合わせ、未来とクリスはその場から動き出して背中側から仁志へと抱き着いたのだ。

「えっ?! 未来!? クリスも!?!」

「だ、ダメですか?」

「ほ、惚れてる男に抱き着いて何が悪いんだよ?」

きつとかつての仁志であれば狼狽え、何かしら理由を挙げて四人を離しただろう。

だが今の仁志は違った。

「悪くはないよ。ただ一旦離れてくれ。椅子から離れるからさ。その方がいいだろう?」

その言葉と同時に仁志はセレナと切歌の頭を撫でた。ただし顔はクリスと未来へと向けて。

「俺だつて男だからな。可愛い女の子に抱き着かれるのを嫌がる理由はないよ」

微かに照れを見せながら仁志は四人の少女に偽らざる本音を告げ、その両腕を広げて笑った。

「えっと、おいで?」

その直後四人が顔を見合わせ、悪戯めいた笑みと共に飛び付いた事で仁志が支えきれず倒れ、その音で調が目覚めてしまい、結局仁志は倒れた形で五人の少女を抱き締める事となる。

「暑い……な。さすがに五人もいると体温で割とな感じだ」

「離れて欲しいですか?」

「デスか?」

「ふふっ、むしろもつとくつついちゃおうか?」

「賛成です。お兄ちゃん、嫌がってないもん」

「ま、そりゃそうだろう。でも、い、嫌ならそう言えよ?」

「了解。まあ、こんな天国はそうそう体験出来ないだろうからもうし

ばらく堪能するよ」

傍から見れば下手をすれば若い父親へ懐く娘達と言えなくもない光景。

だが、その五人全員が女として目の前の男へ好意を抱いているという状況。

しかし男がそれを正しく認識しているのは四人まで。一番年少の少女は、まだどこかで憧れにも似たものだと思っているのだ。

彼は知らない。その少女、セレナは、それ故に強く深い想いを抱いてしまっている事を。

闇の導きに誘われ、無垢な心は歪みを与えられていた。早く大人になりたいという気持ち刺激され、仁志をずっと大好きでいられるのは自分だけと思う事で。

「ちよつと、何してるのよ?」

「あらら、仁志先輩がデレデレしちゃってるよ。うし、じゃああたしも参加するか。エル、行くよ」

「はいっ!」

「私も続きまーすっ!」

「ちよ、ちよつと……」

「ふふっ、マリア、ここは私達も参加するべきだと思うぞ?」

「翼まで……もうっ!」

当然それを帰ってきたマリア達に見つかり、ならばと悪ふざけを始めた奏に続けとばかりに響やエルフナイン、翼さえも参加し、最後にはマリアも仁志へ覆いかぶさっていった。

「こ、これはさすがにヤバいって……。つ、潰れる……」

それで本気で仁志が死にかける事になるのだが、それもまた最後には笑い話の思い出となるのだった。

楽しく賑やかな食事を終えた仁志達は、ソースの香りが残る中で再び意識をモニターへと向けた。

次のゲゲルを行う怪人はゴ・ブウロ・グ。遂に最初から武器を持つ怪人が出現したのだ。

しかも、その殺害方法はこれまでと違い何らかの法則性があるというもの。そう、戦いは次の次元へと上がった事を示していた。

五代雄介はそれに一条刑事だけでなく、彼を通じて間接的に未確認対策本部の者達からも支援を受けながら対抗していく。

ライダー一人ではなく警察や桜子などの力を借り、恐ろしさを増すグロンギへと立ち向かっていくのだ。

「何だか、どんどん私達つぼくなってきた」

「デスデス。警察とクウガが協力しないと敵の行動さえ掴めないデスよ」

「対策本部の方達も、クウガへ悪印象を持ってないみたいです」

「だってあの刑事さんはクウガに助けられたんだもん。それに、ずっとクウガはみんなの笑顔のためについて頑張ってる。それを分かっているのは誰でもなく刑事さん達だよ」

セレナの言葉にエルフナインは頷き、ヴェイグも同じように頷いた。

そして劇中では、五代が恩師である神崎昭二から教え子が東京へ向かったために探して欲しいという依頼を受け、浅草でその少年と出会う会話する場面となっていた。

そのやり取りは、思わず見ている響達まで心を揺さぶられるものだった。

迷えばいい。悩めばいい。それは悪い事ではなく、誰しもが経験しながら前へ進んでいく。簡単に答えが出る事なら迷いも悩みもしないのだから、答えが出るまでいくらでも迷い悩めばいい。

そんな言葉を優しくかける五代に誰もが感じ入っていた。

彼女達はこれまで何度となく迷い、悩んできた。その度にそれを乗り越え、あるいは答えを出してきた。

だが、その裏にどこかで悩んではいけけないと、迷ってはいけけないという気持ちはなかったかと思っただのだ。

五代の言葉は、悩みや迷いを否定するのではなく、そして非難するものではなく、肯定し受け入れて生きていこうとする優しく強い言葉だった。

「……本当に、強い奴つてのは笑顔が優しいんだね」

「奏さん……」

「仁志先輩も、きつとこういうのを見てきたからそうあろうとするんだろ？」

「どう、だろうな？ でも、そうありたいとは思うよ」

「五代さんもきつと、ずっと迷い悩み続けているんだろ。クウガである事や、戦い続ける事へ」

「重みがある訳だぜ。ホント、何でこうヒーローつてのはみんな心が強いんだよ？」

「違うよクリス。心が強いからヒーローになれるんだよ。いつでもみんなの笑顔のために。こんなの、普通の心じゃ折れるからさ」

モニターの中では再び現れたブウロへ対抗するべく、五代が変身しトライチエイサーを駆ってパトカーに乗る一条とすれ違い様に拳銃を受け取っていた。

「」「お〜……」「」

「凄いな、おい。意思疎通完璧じゃねーか」

「阿吽の呼吸だな」

「カツコ良過ぎるよ一条さん。変身出来ないけど、この人もヒーローだよ」

「うん、そうだね。そういう意味じゃ警察官はみんなヒーローかも」

「クウガもやっぱカツコイイじゃん。敵の攻撃避けながら強化形態へ変わるとかさ」

「そして、そこから瞬時に敵を捕捉し必殺の攻撃を叩き込む。見事だわ」

最初の頃、五代の事を優しいだけの頼りない男と見ていた奏。

彼女は気付いているだろうか。同じように思っていた仁志へ、今では強く好意を寄せるようになっていている事を。

次のゴ・ベミウ・ギは見ている全員が怒りを露わにするルールで殺人を行った。

プールやスイミングスクールなどの頭文字を音階とし、大人や子供を音符に見立てて革命のエチュードを奏でるように殺していたのだ。

音楽というものへは理解を示す反面、人を殺す事への躊躇いはない
グロンギ怪人。

更に、初めてはつきりと子供が犠牲になったと描かれた事もあり、
響達の表情が怒りに染まる。

「酷い……子供を敢えて狙うなんて……」

「段々胸糞悪いのが増してんな、おい。もしこんな事を錬金術師共が
やった日にゃ、あたしは冷静でいられる自信がねえ」

「あたしもだよ。しかも相手はそれにまったく心も表情さえも動かな
いときてる。本当に、イラツとするね」

何とかベミウのルールを把握し、先手を打つ一条達。だが、プール
やスイミングスクールを封鎖しても、まだ人が泳ぐ場所は残されてい
る。

海水浴場も遊泳禁止としたが、その通知を知らず泳いでいる者がい
るかもしれない。その可能性を懸念した五代と一条は次の楽譜の音
からベミウの行き先を推察、そこへと急行した。

「エル、ぜったいれいどつてそんなに凄いの？」

「はい。しかも、劇中でも説明していましたが、それを瞬時に作り出し
て、尚且つ心臓だけに作用させるなんて僕らの世界でも不可能です。
本当にクウガの戦う怪人達は、存在していればノイズなどとは違った
意味で脅威となります」

「シンフォギアでも厳しいデスか？」

「切ちゃん、クウガでもライジングフォームじゃないと勝てないんだ
よ?」

「はっ!? 何て説得力のある言葉デスか!」

切歌の中ではクウガ<シンフォギアの図式となっているため、調の
言葉はまさに納得しかないものだった。

だが、ここで仁志が笑みを浮かべながらこう告げる。

「大丈夫。諦めなければギアは必ず応えてくれる。どんな恐ろしい闇
が相手でも、希望を持ち続けければ光の力を与えてくれるさ。エクスト
ライブや様々な特殊ギアのように」

暗に装者はヒーローなのだと告げるそれに切歌は瞳をキラキラ輝

かせて領いた。

「はいデス！　ししよーの言う通り、アタシ達は絶対諦めないデスっ
！」

「切ちゃん……」

「ふふっ、切歌さんらしいですね」

「はい」

苦笑する調達。それを見てヴェイグは仁志へと顔を向けた。

「クウガもそうなのか？」

「ヒーローはいつだってそうだよヴェイグ。諦めないって事は簡単そ
うで一番難しいんだ」

「……そうだな。俺も、経験した。俺もどこかで諦めかけていたから」

「ヴェイグさん……」

仁志の膝の上で遠い目をするヴェイグだったが、それもほんの少し
で消してみせる。

そしてどこか凛々しい表情でモニターの中に移るクウガを見た。

波打ち際にベミウと対峙するクウガ。その手にあつたドラゴン
ロッドは、ベミウの能力で凍らされて使い物にならなくなり素手と
なっている。

「不味いな。青のクウガは武器が無ければ決定打を与えられない」

「あの構え、私は結構好きなんだけどなあ」

「あっ……クウガの足元に枝が」

未来の言葉通り、波がクウガの足元へ小枝を運んだのだ。

それに気付いたクウガは、一か八か大きく足を踏みつけるように動
かして小枝を宙へ浮かしながらベミウの攻撃をかわす。

「「「「「「「おく（へえ）（凄いわね）……………」」」」」」」」

全員が感嘆する程の見事さでクウガは金の力と呼ばれるライジン
グフォームへ超変身。

その手に小枝を掴むと同時にそれをライジングドラゴンロッドへ
と変化させたのだ。

「おおっー！」

「カツコイイ……」

その強化された跳躍力を活かして放つライジングスプラッシュド
ラゴンがベミウを捉え、そのままクウガは遠心力を使って相手を遠く
海原へと投げ飛ばした。

「凄い爆発……」

「ですネ……。ん？ 待ってください」

セレナと共にベミウの最期を見つめていたエルフナインだったが、
その感想を聞いて何かに気付いたのか顔を仁志へと向ける。

「兄様、どうして怪人が爆発する際の威力が増してるんですか？」

その問いかけに仁志は大きく驚き、そして感心するように笑みを浮
かべた。

「凄いなエルは。まさかここでその事に気付くなんて」

「えっ？ じゃあ、やっぱりそうなの？」

セレナの言葉に仁志はどこか複雑な顔で頷いた。

Gronギ怪人達はその階級が上がるにつれてその身に秘めたエネ
ルギーも高くなり、その結果爆発時の範囲を拡大させてしまってい
る。

仁志はそれを話した後、こう付け加えたのだ。そしてそれは、怪人
が強ければ強い程凄まじい事になっていくのだ、と。

「みんな、次のカメの怪人を倒す話で今日は一旦終了にしよう。そこ
がクウガの第三のターニングポイントだから」

その言葉に誰もが息を呑んだ。何故ならそこはいよいよ赤のクウ
ガ、マイティフォームのライジングフォームが初登場する展開だから
だ。

クウガの基本形である姿。それが強化される話がターニングポイ
ントとなる。それに誰もが微かに嫌な予感を感じ取ったのだ。

「あつ、この人……蝶野さん、だっけ」

「ああ、あのピラニアの時に出来た奴か」

「未確認に憧れていたという人物だったな。まさかまた出てくるとは
……」

かつて未確認生物へ憧れていた青年、蝶野。五代がクウガである事
を知る数少ない一般人である彼が、今回の話では大きく関わる事とな

る。

とある企業の企画へと出す作品を描き上げた蝶野は、それを届けるためにバスへと乗り込む。

だが、折悪く未確認生命体が出現。その影響で道が封鎖、渋滞が発生し時間がなかった蝶野はバスを途中下車し単身走る事を選んだ。

一方その頃、クウガは対峙したゴ・ガメゴ・レの力に苦戦しタイタンフォームで金の力を解放、勝負を付けようとするが、その必殺の一撃であるライジングカラミティタイタンを、何とガメゴは受け止めたのである。

しかもそのまま金の力の使用時間が過ぎてしまい、クウガはガメゴを逃がしてしまう。

「そ、そんな……ライジングフォームが負けたデス……」

「効いてはいたみたいだけど……」

「亀がモチーフだから防御力とかが今までの奴らよりも高いって事か？」

「かもしれないね」

「貫通力をもつとも高い剣でダメとなると他の武器も似た結果となる。そうか、それで赤の金か」

翼の言葉通り、五代は今回の相手に対し赤のクウガで金の力を使ううと思っていると一条へ打ち明ける。

ただ、彼はそこで告げるのだ。とんでもない事になる気がする、と。

それを聞いて一条は珍しいと思いい五代の直感を信じた。後の事は心配するなど告げ、不安を抱える五代の背中を後押しすると、彼は彼なりの無理をやろうと動き出す。

「あの五代さんが不安を見せるって……」

「そんなに赤の金はヤバいのかよ……」

「私達の敵であるノイズなどは倒した場合そこでただ消えるだけだけど、怪人達は爆発する。これが大きな違いね」

「ああ。しかも、それがどんどん範囲を大きくしてるとなると、だ。これ、倒す場所まで考えないといけなくなるかもね」

そんな中、ガメゴ人間体とぶつかって気を失っていた蝶野は椿の勤

務先で目覚め、提出しようと思っていた作品が締切に間に合わなかった事を理解し荒れていた。

そして五代が怪人をさっさと倒さないからこうなつたと言いだめたのだ。

その内容に怒りを覚えた椿が放った言葉で、蝶野が激情のままに拳を振るって椿の顔を殴り付けた。

「……拳を握って相手へ叩き付けるって、嫌な気持ちができる人にはとつても辛いんだよね」

「響……」

椿を殴ってしまった蝶野。だがそんな彼へ椿は静かに問いかける。

——俺を殴ってどんな気がした。嫌な感じがしただろう。それをあいつはずつとやってるんだよ。みんなの笑顔を守るためにな。

告げられた言葉の重み。

恐ろしい相手と戦うという恐怖と体が自分のものではなくなるかもしれないという恐怖の中、笑顔絶やさぬようにしようとしている五代雄介という男。

その事を理解し蝶野は言葉がなかった。

更に椿は蝶野の描いた絵を見て教えるのだ。それを五代が見て心が和むと言っていた事を。

「何だか重なって見えるよな……」

「え?」

「立花に、か。ああ、私もそう思っていたところだ」

「えっ?」

「俺もそう思うよ。フロンティア事変の頃の響と五代雄介は近いんだ。その体がどんどん変化していく。その結果、響は死ぬかもしれないとなり、五代は戦うためだけの生物兵器になるかもしれないと言われる。それでも、目の前で困っている人が、流れる涙があるならと拳を握る。本当は、そんな事をしたくないのに。自分しかないならやるしかないって、そう言い聞かせて」

「仁志さん……」

そして迎える再戦の時。既に初戦での傷を癒したガメゴに対し、ク

ウガは出来るだけ人気のない場所へと相手を誘導してみせる。

一条の援護もあつて、遂にクウガはその時を迎えた。そう、赤の姿で金の力を解放する瞬間を。

「……おおっ！」

「ライダーキックの準備で変わるんだ……」

「右足に装飾品が増えました」

「カツコイイ……」

「これなら勝てるのか？」

走り出すクウガを余裕綽々といった様子で待ち構えるガメゴ。

それを意にも介さず、クウガは走る走る走る。

「決まったわね」

「ああ、自分の中の恐怖や不安を受け止めて乗り越えようとする奴と、恐怖や不安を感じられない奴じゃ、どっちが強いかは決まってる」

「キックの見た目は変化なし……」

「だが、おそらく目には見えない変化があるはずだ」

ライジングマイティキックの威力は推定約50トン。更により強力になった封印の文字も加わり、そのダメージがガメゴの耐久力を上回った。

その次の瞬間ガメゴは爆発を起こし散る。だがその爆発はこれまでもよりも大きく、街を包み込むのではないかと思わせるものとなったのだ。

「マジ……かよ……」

「これが、これが五代さんの恐れてた事なんだ……」

そこで話は終わる。流れてくるEDを聞きながら誰もが言葉を失っていた。

「……あんな爆発、街中で起こしたら被害がとんでもない事になるよ」

「それだけじゃないわ。下手をしたら二次災害まで引き起こしかねない。あれが原因で火災が起きてもおかしくないもの」

「怪人はどんどん強くなるのに、クウガは倒す時の事も考えないといけないなんて……」

「しかもあの金の力は長続きしねえ。短時間でここぞって時にしか使えねーんだ。クウガに不利な事だらけだぜ」

「金の力が優位性を作ったかのように思っていたが、逆を言えばそれを使わねば倒せないようになったという事か。であれば、クウガは劣勢に追いやられつつあると言えるな」

翼の言葉に奏とマリアは頷いた。彼女達で言えばツインドライヴなどを使わねば倒せないカオスビーストがそれである。

あとは通常のギアでは互角さえも難しい相手であるカルマ・ノイズだろう。それらがもし倒した際に大爆発を起こすとなれば、その対処法は一気に厳しさを増すとも思っていた。

「ししょー、クウガは、五代さんはこれからどうなるデスカ？ まだ強そうなお相手、沢山いますデス。しかもそのゲゲルのやり方もそれぞれで違うデスし、このままじゃ……」

「そう。もうクウガ一人では対処し切れない段階になった。一条さんとの連携も限界なんだよ。だからこそ、ここがターニングポイントなんだ。クウガ達にとっても、未確認にとっても」

「ここから更に戦いは激化していく……」

「五代さん、辛いだろうな……」

「でも、皆さんのようにきつと戦うはずですよ。いつか、クウガが必要なくなる時まで」

エルフナインの言葉に仁志は頷き、やや重たい空気を変えるべく一つの情報を告げる。

「それに、もうじきクウガ専用の新型バイクが登場するんだ。警察がクウガのために制作した特別マシン。その名も、ビートチェイサー」

「「「「「「「ビートチェイサー……」「「「「「」」」」」」」

「ゴウラムとの合体を考慮し常人では扱えない速度が出せるように作られた、文字通りクウガのためのバイクだ。トライチェイサーよりも

更に上の最高速が出せるんだよ。最高時速420キロだ」

「420………凄いですね」

「もしあの時にあれば、あの錬金術師も舌を巻いたでしょうね」

「でも、ライダーギアでも扱えるか不安」

バイクが趣味である翼にとって、その最高速は恐ろしさと同時に凄みを感じるものだった。

そんな彼女へ仁志は更なる追加情報を与える。それはゴウラムと融合した場合の最高速。

何と570キロ。その速度に翼だけでなく誰もがクウガの身体能力の凄さを感じる。

本当なら仁志はそこで最後のとおきの情報と言いたかったのだが、それはある意味で楽しみを奪ってしまうかもしれないと判断し口を閉じた。

「ししよーししよー、クウガはどんどん敵が強くなってるのが分かり易いデスが、他のライダーもこんな感じデス？」

「敵の強化されていく感じがつて事？」
「デス」

切歌の問いかけに仁志は腕を組んでどう答えたものかと悩み始める。実際にはクウガ程分かり易い流れとなっている事は少ないためだ。

彼の好きなRXなど最強という称号を冠される怪人が出る事が常だったし、BLACKでは怪人の強さに明確な差があるような描写はそこまできなかつた。

そしてそれは他のライダーにも言える事が多く、ズヤメ、ゴと言う集団で強さを区分けしているクウガが特殊と言えたためだ。

「……クウガ程分かり易くされてるのは少ないかな」

「デスカ。じゃ、ライダーと怪人はどっちも同じぐらい強くなってくデスカ？」

「えっと、基本的に先に強くなるのは怪人達、悪側なんだ。で、ライダー、ヒーロー側はそれに負けたり苦戦する事で更なる強さを身に着けるべく動く。これがどんなヒーロー物でも大抵基本になってくる。で、ライダーは現在はおもかく昔は改造人間。つまりその力は作られたもので限界が決められているんだ」

もうそこだけでエルフナインなどの一部は理解した。定められた性能。それを越えるというのがどういいう事かを。

「では、1号ライダー達は下手をすれば死んでしまうような事をしていたんですか？」

「そうなる。で、ある時怪人に負けた仮面ライダーV3、風見志郎は傷だらけの体でそれに打ち勝つ特訓をするんだけど、それを心配したおやつさん、立花籐兵衛へこんな風に答えてる。怪我は治るかもしれない。だが敵に捕えられた人達は2度と帰ってこないですよ、と……」

その言葉の持つ意味を感じ取り、響達装者は無意識にギアペンダントを握り、エルフナインとヴェイグはそんな彼女達を見ていた。

「彼らはいつだって力無き人々のために戦ってきた。人類の自由を、平和を守るためにその命を賭けた。ヒーローは死を恐れない訳じゃない。でも、それ以上に犠牲を出す事を恐れるんだ」

そこで言葉を切って仁志はゆっくりとその場にいる全員を見回していく。

「君達と、同じように」

優しい笑みと共に告げられた言葉は、一人の例外なく全員の心へ響いた。

仁志は知っている。響達の葛藤などを。故に言い切れた。彼女達もまたヒーローと同じなのだ。

「そして、俺も君達のようになれる可能性を持つてる。人は誰もが光になれるんだ。信じる気持ちか、諦めない心が不可能を可能にする。ウルトラマンだけじゃない。ヒーローの条件は、意外と簡単なんだよ。どんな時も諦めない。それさえ出来ればいいんだから、さ」

「ししよー……」

切歌の肩へそっと手を置いて仁志は微笑む。それを切歌はこう受け取った。

（ししよーはアタシ達をヒーローだって言ってくれてるデス。そして、自分もそうであろうとしてるんデスよ）

決して諦めないで欲しい。そういう願いを受け取り、切歌は力強く頷いてみせた。

「任せてください！ 誰よりもアタシは諦めるなんてかしこい事、し

ないデスから」

「それはケースバイケースでお願いしたいけどなあ。なつ、調？」

「うん、本当に。切ちゃん、時と場合を考えてね」

「何でアタシは注意されてるデスか?!」

納得いかないとはかりに叫ぶ切歌に誰もが笑った。それに切歌は最初こそ無然としていたが、ほんの少しで同じように笑顔を見せる。分かっていたのだ。仁志が自分のように場の空気を変えるために調を巻き込んだ事を。だから切歌もそれに乗った。みんなが笑ってくれるようにと。

そこから夕食作りが始まり、お好み焼きという事もあつて色々な具材を試していく事となる。

王道の豚玉やイカ玉に始まり、チーズ入りやエビ入りなどとそれぞれが意見を出し合いながらいくつも焼いていく。

「そ、それじゃあやりますっ!」

「エル、頑張つて」

「え、えいっ! ……出来ましたっ!」

ひっくり返す事をアトラクションとしてエルフナインやセレナ、ヴェイグなどが担当。その愛らしさや微笑ましさに誰もが笑顔となつていく。

仕上げにソースを塗れば、その零れたものがプレートで焦げて食欲をそそる香りを放つ。鯉節や青のりなどを振って焼き立てを切り分けて口へ運ぶ。

「はふはふっ……んっ!」

「はい、響、お茶」

「んくんく……っはあ、ありがと未来!」

「どういたしまして」

「あー、幸せ。なんで自分達で焼いたやつってこんなに美味しいんだろ?」

「さあ? でも、きつと一番は焼いてる時から楽しんでるからじゃないかな?」

奏の疑問へそう返して、翼は取り皿の上にあるモチチーズ入りのお

好み焼きを口へと運ぶ。

ソースの香りに混じって鰹節と青のりの香りが鼻腔をくすぐり、熱いのさえも御馳走とばかりにはふはふと息を吐きながら味わうそれは、言葉にするのも忘れる程幸せな味だった。

「これ食べたら俺、ちよつと散歩してくるかな。今日は運動不足過ぎるし」

「兄様、僕もいいですか？」

「エルかあ。じゃ、肩車させてもらおうかな。負荷をかける意味も込めて」

「じゃ、私も行く。ヴェイグさん、どうしますか？」

「俺は……たまにはいいか」

「どこまで行くのよ？」

まるで父親へついていく娘二人とペットだ。そう思いながらも口には出さずマリアは行き先だけ尋ねた。

散歩と言っているが、きつとあてもなく歩く事はしないだろうと思っただのである。

それはエルフナインやセレナがついていくと表明したためだ。

「そうだなあ……エルを敵情視察に連れて行った事ないし、セブンまで行くか」

「あら、じゃあ私も一緒に行こうかしら？」

「あつ、私も行きます。また行った事ないんですよ、その系列。奏さん達はどうします？」

「あたし達は遠慮しとく。翼とツヴァイウイングの事で話し合いもしたいしさ」

「そうだね。立花は……」

「私はクリスちゃんとお店の前で別れて駅前の本屋へ行きます。切歌ちゃんと調ちゃんはどうするの？」

「アタシは……お風呂掃除でもしてますか」

「じゃ、洗い物は私がやろうかな。マリア、そういう訳だから」

「悪いわね」

「別にいい。代わりに欲しいものがある」

「ふう、そんな事だろうと思ったわ。それで？ 何が欲しいの？」

「カップ麺売り場の写真」

「「「「「仕事絡み（かよ）（デスカ）っ?!」「」「」「」」

「調は仕事熱心だな」

「そうですね」

のほほんとヴェイグとエルフナインはそう言葉を交わすと、それぞれ一口サイズに切られたお好み焼きを口へと運ぶ。

口の端にソースを付けて笑みを浮かべる二人。すると、それにお互いに気付いて視線を向け合う。

「ヴェイグさん（エル）、ソースが付いています（るぞ）」

その様子を見て誰もが笑みを見せる、そんな少し早めの夕食風景だった……。

隣り合って歩く私とクリスちゃん。これからクリスちゃんはバイトで私は一人でお散歩がてら駅前をブラブラ。

ホントは仁志さん達と一緒に行きたかったけど、クリスちゃんのことを考えたら一人きりでお店へ行かせたくなかった。

「なあ」

「ん？」

そんな時、隣のクリスちゃんが声をかけてきたので顔を向ける。でも、クリスちゃんは私を見ずに少し下を見ていた。

「お前、この事が終わったらどうすんだ？」

「……………え？」

一瞬クリスちゃんが何を言ったのか分からなかった。ううん、分かりたくなかった。

「仁志はさ、あたしや先輩にこう言ったんだ。今んとここの世界を離れるつもりはないって。その理由は、ここに仁志のパパとママがいるからだ」

「そう、なんだ…………」

当然だよ。私だっってここに残り続ける事が出来ないのは向こうにお父さん達がいるからっていうのもある。

「あたしも、パパとママがいる世界にいたいって気持ちがあるから分かる。やつぱさ、余程じゃない限り自分の親を見捨てられないっての」

「うん……そうだよね」

私も、そうだった。見捨てる事なんて出来なかった。

どんなに悲しくて、苛立って、笑顔を失いそうになっても、お父さんを見捨てる事なんて出来なかった。

「だけど、あたしはあの子と一緒に仁志を説得しようと思ってる」

「説得……？」

「何とかあたしらの世界へ来てくれないかって。だって、このままじゃあたしらは、仁志のパパやママよりも大事じゃないって言われてるようなもんだ」

何故かそのクリスちゃんの言葉が、心に強く突き刺さった。

私達が大事じゃないって、そう仁志さんに言われて気がして、何だかとっても胸が痛くて苦しくなった。

「そ、んな事ないと思うよ？」

「分かってんだよあたしも。頭では分かってんだ。これとそれは別だって。でも、何だか知らねーけど胸の奥がムカつくんだよ。想いを通じ合わせて、あたしらはリビルドまで手にした。なのに、どうして世界は、あたしらを引き離そうとすんだよっ！」

「クリスちゃん……」

両目をきつく閉じてクリスちゃんが叫ぶ。その悲痛な声が私の胸を貫く。

一緒だって、同じだって思った。私もそうなんだ。

せつかく出会えて、やつと想いを結べたのに、最後にはお別れしなといいけない。しかも、下手をしたらずっと会えなくなる。

「なあ、手を貸してくれ。仁志の説得はあたしとあの子だけじゃ、二人じゃ無理だ。みんなで、みんなでやらなきや」

「クリスちゃん……」

「頼む。あたしはさ、今のこの時間が好きなんだ。大好きなんだ。失いたくねえ」

「分かるよクリスマスちゃん。私も、私もそうだから」

クリスマスちゃんの手を取って、私は出来るだけ優しく笑う。

「上手くいくか分からないけど、私達の想いは伝えようよ。仁志さんへ、私達の本気を伝えよう」

「……ああ」

この後クリスマスちゃんとは少し歩いてお別れした。バイトが終わったらまたお話ししようって約束して。

そして一人で駅前を目指しながら歩いて、ふと思う。もし、もしも私達の本気の気持ちを聞いても、仁志さんはお父さんやお母さんの方が大事って、そう言ったらどうしようって。

……大丈夫。そんな事ないよね。だって、だって仁志さんは……

——私達の、ヒーローなんだから……。

メロディアス・ムーンライト

「見てマリア。この玉ねぎ、スーパーで売ってる物よりも大きいのに安いよ」

「本当ね……」

「それよりも何よりも大根デスよ。何であんなにおっきいのに値段はスーパーと同じぐらいデスか!？」

生鮮食品を眺めてテンションを上げているマリア達を見て、俺は小さく苦笑する。

今日は土曜日。待ちに待った、かもしれない全員での外出日であった。

エルとセレナはヴェイグと共に一種のメインとも言える冷凍食品を眺めている。そちらもそちらで感心するような表情が見えた。

そう、ここは業務用スーパー。扱っている物は基本一般家庭には向かない。

まあ俺達は一種大家族のようなもので、その範疇を半分はみ出しているとも言えるけど。

「なあ仁志。見た感じ魚や肉はなさそうだぞ?」

ぼんやりとマリア達を眺めていると横からクリスがやってきて声をかけてきた。

ま、たしかに生肉や生魚などはここには置いてない。

「冷凍にあるはずだよ。一応見てみてくれないか?」

「冷凍、な。分かった」

そう答えてクリスは来た方へと戻っていく。その先には未来や響がいる。

で、そのまま三人で動き出した。本当にあの三人は仲良くなったよなあ。

その契機はきつとあの日。響とクリスが俺の横へ引越してきた日だろう。

未来はそこで初めて自分の意思で響と別れた。響もそれを止めなかった。

その瞬間、響と未来は依存体質を脱却し始めたんだ。

そして、きつとあのライブ事件以前の関係性に戻ったんだと思う。仲の良い友達としての、関係に。

そこへ共通の親しい関係であるクリス、か。

年齢は一つ違いだけど、ほぼほぼ同じ年みたいな感じだしな、あの三人。

ああしていると同級生で通りそうだし、本人達もそんな感覚でいそうだ。

「……ま、共依存が一概に悪いとは言えないけど、な」

それでも、きつと正しくはないのだろう。大体世の中には絶対正しい事なんてほとんどない。

もしあるとすれば、それはみんなが笑顔で暮らせる世の中が一番いいという事ぐらいだ。

「仁志さん」

「ん？」

後ろから聞こえた声に振り向けば、そこには翼の姿があった。その手には大量のパスタが入った大きな袋。

「どうかな？ これを買ってみんなで分ければかなりお得だと思うんだけど」

「あー、うん。そうだね」

ニコニコ笑ってかごへパスタを入れる翼だけど、彼女は若干目的を忘れてないだろうか？

今日ここへ来たのはバーベキューのためであり、普段の食生活のためじゃないんだけどなあ……。

まあ翼が可愛いのでよしとしよう。

あの飲み会以降、俺への口調が奏へのそれと同じになった事で、今の翼はその可愛さを増しているし。

「それで、マリア達はまだ野菜などを見てるの？」

「御覧の通りさ。まっ、気持ちは分かるんだけどね」

特に調とマリアはもう主婦みたいな目線だし。おかげで俺は色々と助かってるので文句はない。

食費折半だけど、もうそろそろ全額払っていいかなあと思い出しているぐらい、俺はあの家で飯を食ってるから。

カートを押して動き出すと翼もついてくる。何だか奥さんみたいでくすぐつたい。

「マリア、野菜はさすがにそこまで使い切れないだろうし、第一鮮度が持たないぞ」

「分かってるわ。だからこれは明日も使う物として買うのよ」

「仁志さん、今夜はカレーでもいい？」

「野菜ゴロゴロカレーデス！」

おい、それは中々いいかもしれない。

と、そんな事を思っていたら三人の視線がかごの中へと向いた。

「……………何これ？」

「パスタだ。三分分、でいいのだろうか？ とにかく、みんなで分ければ十分だろう？」

「それはいいけど……………」

「あの、翼さん。このパスタはバーベキュー用ですか？」

「それに、分けた後はどうやって保存するんデス？」

その指摘に翼が「あ……………」と声を漏らした。

そしてマリアと調が同時にため息を吐く。

まあそうだよな。それと、分けるとすれば保存容器が必要だ。

「そうだった…………… たしかに今日の目的はバーベキューの買い出しであり、普段買う物はその袋そのものが保存できるようになっていたな」

「でも、これはたしかに魅力的よ。いくら？」

「値段か？ すまないがそこまで覚えていない。売り場へ案内するか見て考えてくれ」

「分かったわ。調、私はちよつと翼と動くから」

「うん。野菜はこつちで選んでおく」

「お願いね。で、どこ？」

「こつちだ。ついてきてくれ」

翼とマリア離脱。ついでに玉ねぎやじゃがいも、人参がかごの中

へ。

「本当は大根やナスも欲しいけど……バーベキューだし、カレーには使えない……」

「ナスはいいんじゃないか？ 焼き野菜としても使えるし、残ったらカレーに入ればいい。夏野菜カレーなんてどう？」

「でもカレーにナスって、グチャグチャにならない？」

「軽く油で炒めるか焼いて使えばいいはずだよ」

「……うん、それならいける。切ちゃん、おナスも取って」

「ガツテンデス！」

こうしてナスもかごへと入れられ、野菜先行の買い出しとなっ
てい

る。
「兄様」

「お兄ちゃん」

そこへ駆け寄ってくる愛天使二人。

「どうした？」

「二とろろって何（ですか）？」

聞かれたのはある意味夏の精力メニュー。そうか。二人はとろろ食
べた事ないのか。

「山芋っていう物を擦って作るやつだよ。消化が良くて栄養も高いか
ら夏の疲労回復とかによく食べられるんだ」

「へえ」

「そういえばアタシも食べた事はないデス」

「私も」

そこで聞こえてくる言葉に俺はふむと手を顎に当てる。

とろろご飯とか美味いんだよなあ。それにマグロの山かけとかも
美味い。

とろろを食べた事ないなら一度食べてもらいたい。それで嫌いに
なるか好きになるかは分からないけど、せめて一度は食べさせてやり
たい。

……近いうちに、だな。

今回はバーベキューをやるためとろろの出番はない。なので早く

ても明日だ。

「じゃ、近い内にとろろを食べよう。昼飯がいいかな。だから調、その時に山芋ときざみのり、あと出来ればマグロかたたきマグロを買ってくれると助かる。とろろを作るのは俺がやるよ」

「分かった」

これでいい。さてさて、では思考をこれからの事へ向けましょうかね。

野菜が使いやすい大きさにカットされている冷凍品を調が真剣な顔で見つめたり、切歌とエル、セレナがそろってコーンの袋を欲しがったりといているとクリス達が合流。

「ソーセージとかあったけど、そういうのはどうだ？」

「こーんな長い奴を巻いて冷凍してあるんですよ」

「成程なあ。うーん……」

これまでバーベキューなどした事がないので漠然としたイメージしかないのだが、冷凍食品は解凍して持ち込めばいいのだろうか？

それとも凍ったままで持ち込んで調理するべきなんだろうか？

「未来、冷凍のままだと焼くのに時間かかるよな？」

「そうですけど、ここで買ってお店まで持っていくまでにある程度溶けると思えますよ？」

「ああ、そっか」

当たり前前の事を指摘され、俺はやっぱりまだボケてると理解した。

「そういう奏はどこだ？ パツと見た感じ見当たらないんだが……」

？

「じゃ、とりあえずソーセージとかはここで買おうか。同じ量を買うなら市販のよりは安く済むだろうし」

「じゃ、エルちゃん達に選んでもらおうかな」

「こつちだから来てくれる？」

「はいっ！」

うん、今のエルやセレナを相手にするとみんなお姉ちゃんっぽくなるんだなあ。すっかり響と未来が姉っぽい雰囲気なもの。

「な、仁志」

「ん？」

クリスの声に顔を動かせば、彼女は俺を見上げていた。で、目が合った瞬間真っ直ぐな眼差しが少しだけ照れを宿すのが可愛い。

「そ、そのさ。この後、でかいところへも買い出しに行くんだろ？ そこって肉屋入ってるか？ ここの冷凍もんじゃ美味そうに見えるねーし、精肉コーナーだと商品がしょぼいぞ」

「あー……ちよつと待ってくれよ」

スマホを出して検索をかける。えつと……ああ、あるある。じゃあ大丈夫だ。

「うん、ちゃんと精肉店が入ってる」

「そつか。んじや肉はそこで買えばいいな」

「ししよー、アイス見てきていいデスか？」

「あと、ご飯とかの冷凍食品も見てみたい」

「いいよ、ただし買うのは保留で」

「了解です（デス）、師匠（ししよー）」

揃って笑顔でそう言つてザババコンビは動き出す。にしても、調の師匠呼びは中々慣れないな。

まあ原因は一つだ。いつもそう呼ばれる訳ではないから。だからこそ呼ばれる度に若干驚きというか戸惑いというか嬉しさというかを感じてしまうのだろう。

仲良く離れていく二人の背中を見送っていると、そつとカートの取っ手を握っている手へ可愛い手が乗せられる。

当然それはクリスの手だ。どうしたのだろうと思つて顔を向けると、クリスは照れくさそうに顔を背けていた。

「クリス？」

「……少しぐらい、彼女面してもいいだろ？」

あのクリスが素直に甘えてきた。でも、それをいい変化だと俺は思っていた。

元々のクリスは捻くれてた訳じゃない。幼少期の出来事が原因で今の様になつたのだ。

その根底には素直で明るく歌う事が大好きな女の子が息づいている。それを、少しずつだけ出せるようになってきたんだと、そう思えるから。

「ああ、いいよ。ついでに奏を探そうか」

「片翼の先輩？ それならフラフラとあつちの方へ行くの見たぞ？」

「あつち？」

クリスが指さす方へ顔を向ける。そこは言うならば店の奥の端とでも言うべき場所だった。

えつと……料理酒とかがあるコーナー、か。

「なら、そっちへ行ってみよう。それに翼とマリアも中々戻ってこないし」

「何となくそつちは色々見てるだけな気がするけどな……」

ゆつくりとカートを動かして歩き出す。

時々二人であちこちの冷凍ケースを眺めては足を止めて。

見てるだけでも意外と楽しい。普段見る事のない商品が結構あるのだ。あとは、見た事はあるけどそのサイズが違うとか。

「ハンバーグだけでこんなにあるのかよ……」

「こうやってみるとファミレスはこういうの使ってるって分かるよなあ」

「うっ……で、でもよ？ 中には手作りを本気で」

「いやいやクリス、見てごらんよこの種類を。見た目で判断出来る？」

「……無理、だろうな。ん？ おい、見ろよ仁志。牛丼の素とかあるぞ」

「へえ、冷凍かあ。おおつ、中華丼だつてさ」

「こりゃいいな。しかも一食分だけ。使いやすいな」

今回は無理だが、今後を考えると欲しいと思う物ではある。

多分クリスも同じなのだろうな。手軽に済ませたい時には井程手軽で安心な食いはないのだ。

「仁志」

と、そこへ現れるは嬉しそうな顔をしたマリア。その横には似た表情の翼もいる。

二人の手には調味料が握られていた。マリアが持つてるのは……
「ステーキしようゆ？」

「そうなの。今日のメインはお肉でしょ？ で、普通のステーキソー
スじゃ今回は足りないじゃない。そこでこれを見つけたのよ。それ
に、これなら残っても今後に使えるじゃない？ 炒め物とかの味付け
とかね」

どこかテンションが高いマリアに苦笑しつつ、俺は翼の持っている
物へ目を向けた。

「で、翼のはみそだれ、ね。翼ってそういうの食べた事あるのか？」

「ないけど、仁志さんは慣れ親しんだ味だと思って」

「まあ、確実に君達よりは食べてると思うけど……」

正直悪くはないと思う。野菜などにつけて食べる事に合わない
は言わない。

ただ、なあ。全員が全員気に入るとは思えないんだよな、こればっ
かりは。

「八丁味噌ってかなり濃いんだ。それに甘味も強い。その甘さが苦
手って人もいるし、そもそも濃い味噌味が好きじゃないって人もい
る。俺も嫌いじゃないけど好んで食べる程じゃないんだよ」

「そうなの？」

「うん、地元の間でも好きじゃないって層がいる。俺の母親はそう
だった。逆に大好きって言う人間もいる。俺の父親がそうだった」

味噌カツとかどて煮とか大好きだもんなあ、父さん。

「俺のためについて選んでくれたなら、嬉しいけど今回は見送った方が
いいかな。バーベキューのためなら余計に。個人的にはたまに食べ
たくなる味ではあるから買いたいんだけどね。それならここじゃな
くても買えるからさ」

「そうなの？ 見た事ないんだけど……」

「えっと、多分ここでも売ってるんじゃないかな。翼、それはどこに
？」

「あつ、こつち」

カートを押しながら翼の後についていく。気付けばクリスの手が

離れていた。多分だけど二人を見た瞬間にそれとなく離れたんだろう。

翼の案内で味噌コーナー、でいいの？ 味噌関係の物が置かれた場所へ到着。

と、やつぱりあった。

「これだよ。見た事ない？」

「……言われてみれば」

「私はあるわ。これ、本当に味噌なのね」

「あたしも見覚えはあるな」

俺が手にしたのはこの辺りじゃ有名な味噌ダレだ。つけてもいいしかけてもいい、アレである。

「あー、やつと見つけた」

そこへ聞こえる声に俺だけでなくクリス達も顔を動かす。

そこには奏がいた。その手に何故かマシユマロを持って。

「奏？ 何でマシユマロ？」

「あれ？ 知らない？ 焼きマシユマロ。美味しいよ？」

そう言いながらかごへマシユマロを入れようとして、奏はかごの中身を見て小首を捻る。

「肉とか一つもないんだけど？」

「あー、それは」

「ししよー達発見デスっ！」

またこのパターンかと思いつつ、俺は振り返る。

そこには切歌と調だけでなく響達の姿もって、おいおい何だあの荷物。物の数は。

「お前ら、何だよその手に持つてるもんは」

「えっと、これはソーセイジだよ。普通のとハーブ入りなんだって」

「こつちは骨付きなんデスよ。見た目、ワイルドで良くないデスか？」

「エルちゃんが持つてるのは牛タンです。これ、ステーキで食べると美味しいみたいで」

「珍しいと思って持ってきました！」

笑顔で牛タンステーキを見せるように両手で持ちあげるエル。

何というか、ゼルダでアイテムを手に入れた時のSEが聞こえた気がした。

「こっちはラム。多分スーパーじゃ見ないと思って」

「子羊の肉、か。そんな物まで置いてるとはな」

「侮れないわね、業務用スーパー……」

調の見せた物へ目を向け、感心する翼とマリアに俺は小さく苦笑する。

いや、まあいいんだけどさ。色んな物を焼いて食べるのが極論言えばバーベキューだし。

「セレナのそれは何さ？」

「これはけいちゃん？ って言うんだそうです」

「ああ、岐阜の名物の奴か。鶏肉と野菜を味噌味のタレで炒めて食べるんだったかな？ そんなもんもあるのか」

まだ実家にいた頃テレビでやってた番組か何かで聞いた事がある。美味そうだなと思ったけど、そのためだけにわざわざ隣の県まで行くのは面倒なので、そこで俺の中では終わった料理名だ。

「これやるならアルミホイルを買わないといけないな。網じや焦げ付く」

「ん。じゃあたしが取ってくるよ」

「はっ」

どういう事だと思っていると、奏はこっちへ振り返って笑みを浮かべた。

「さっきブラブラしてた時にそういうのも売ってるって知ったからさ」

言われて気付く。そうか、業務用ってそういうのも扱ってるかと。

やっぱどこかボケてるな、俺。運転前に軽く目を覚ます意味合いも兼ねてコーヒーでも飲もう。

ちなみに支払いに際して一葉女史が御一人、英雄先生が御一人の計御二人が旅立ちました。

いや、飲み物とかも買ったからだけど、やっぱ肉の類は結構いくもんだ。

牛タンとソーセージだけで半分以上を占めている。

しかもこれでまだ買物が終わった訳ではないのだから恐ろしい。ただ、これでもあのプールや遊園地の時よりは安く済んでいる。

入場料やアトラクション乗り放題ってのはそれだけ高いんだと噛み締めた。

「……やっぱり夏は出費の時期なんだなあ」

でもこれで七月八月と連続高額出費だ。せめて九月は控えないとって……ダメだ。

何せ上手くいけば九月中に夢の国へ行く予定だ。そこが俺の人生で最大の出費となる事は確定しているんだし、今更か。

それにしても九月、ねえ。もう少しで響と出会って半年が経つか。

今の時間は幸せで、楽しくて、毎日が充実していると断言出来る。

だけど、それは永遠じゃないし長続きさせてはいけない。

そう、分かっているんだ。俺も、みんなも。

それでも、どこかで願っているんだ。この時間が続けばいいのにと。

せめて、年越し前には何とか決着を着けるべきだろうな。出来る事なら秋が終わる前に。

「どうしたのさ仁志先輩。眠い？」

「ん？ ああ、いや。財布の中が少し寂しくなったからな」

ぼんやりしていると段ボール箱に買った物を詰めていた奏が不思議そうに首を傾げる。

ここではそういう風に段ボール箱を使っているらしく、大き目の段ボール箱に買った物を全部詰め込む事が出来たらしい。

「ったく、相変わらずだね先輩は」

「まっ、そう簡単には変わらないよ」

そう、思ってたんだけどなあ。意外とあっさり変わったよな、俺。

エルとセレナっていう、妹のような娘のような存在のおかげで。

「まあそうだね。でも、あたしは知ってるよ」

「へ？」

段ボール箱を抱えるように持ちながら奏はこっちへ笑顔を向けた。「貴方は変わらないといけない時はすぐ変わるって事を、ね」

……ホント、こういうのは止めて欲しい。俺はどこか上機嫌で歩き出す奏の背中を少し見つめてそう思った。

思えば、最初に俺のやせ我慢を揺るがしたのは奏だったか。不意打ちを意図せずしてやってくる代表格だったな、そう言えば。

「……変わらないといけない時にすぐ変わる、か……」

だとしたら、それは君達が与えてくれた力だ。俺自身が得たものじゃなく、みんなが目覚めさせてくれたものだ。

そう思いながら歩き出す。そしてふと思った。久々に父さんや母さんに連絡でも取ってみるか。

父さんの誕生日も近いし、顔ぐらい出そう。父さんの好きなタバコでもカートンで買って……いくと母さんが嫌な顔するだろうから考えないとか。

うん、まずは母さんへ連絡取るか。で、今父さんが気に入ってる食べ物や飲み物を聞き出そう。あるいは、欲しがってる物でもいい。

そのついでに母さんへも何か渡そう。何年分かを一気に埋め合わせる訳じゃないが、久しぶりに感謝を込めて。

俺も、いい加減ガキを卒業しないと。せめて大人の入口には立つたと、そう二人を安心させないと……。

夏の暑さとは違う熱さがある。そんな場所に私はいた。

そこは建物の屋上にあるバーベキュー……テラス、かな？ ガーデンかも。とにかく開放的な場所。

仁志さんがお肉や野菜を焼いていて、切ちゃんや響さんが待ち切れないって顔で見つめてる。

「よし、こっちの肉はもういいだろう。少し赤いかもしれないけど、良い肉だから食えるし」

「お肉（デス）っ！」

「まずはエル達からよ。切歌も響も待つてなさい」

仁志さんが焼けたお肉をトングで掴んでエルやセレナの持つてる

お皿の上へ。

うん、とても美味しそう。というか、下手するとこんな感じのお肉を食べるの、こっちじゃ初めてかも。

「塩コショウはしてあるけど、もし物足りなければ買ってきたステーキしようゆを使うんだぞ」

「はーい」

ふふつ、エルとセレナの間延びした返事でみんなが笑う。で、仁志さんはさすがだ。セレナにはお肉を二つあげていた。

そしてセレナがもらったお肉をまずヴェイグへ食べさせてる。あつ、ヴェイグが目を見開いた。そんなに美味しいのかな？

「……凄いぞセレナ。この肉、噛んだら溶けた」

「えっ!？」

「ほ、ホントです姉さんっ!　じゅわってマーガリンみたいに溶けましたっ!」

エルが興奮気味に言った言葉でセレナもお肉を口に入れて……お、驚いた顔。

「ほ、ホントだ……」

「いやあ、奮発した甲斐があったよ。清水の舞台から飛び降りた気持ちで買ったからな。でもその肉は一人一つだからな。っと、これもいか。次は切歌達な?」

「おおつ、アタシ達にも美味しいお肉が来たデスよ」

「そうだね」

やっぱり年齢順みたい。だけど、このお肉かなり高いんだ。だから一人一つずつしかないんだね。

「いい値段したもののね、この肉」

「あたしもマジで買うのかって思ったぞ」

「たしかそれだけで1万はしたよね」

その瞬間、私だけじゃなく切ちゃんさえもお肉を口に入れようとした手が止まった。

このちよつと大きなサイコロぐらいで、全員分が1万円以上?

つまりこのお肉だけで今の私達のお夕飯が大体三回は余裕で食べ

られる。

「な、何て高級品デスか……」

「仁志さん、本当にいいの？」

「勿論。その、実は俺も小さい頃からたまに贅沢させてもらってたんだ。今思うと父さんの幼少期の反動なんだと思うけどな。要は、親つて子供に美味しい物を食べさせてやりたいって思うんだよ。さすがにいつもって訳にはいかないけど、こういう特別な時には、さ。時間も味も思い出しにくれると嬉しいよ」

そう言つて笑う仁志さんは、その、お父さんみたいだった。

でもそれは当然だ。だって、今の仁志さんは仁志さんのお父さんの真似をしてるんだと思うから。

そう思つて食べたお肉は、とつても柔らかくて美味しかった。噛んだ瞬間溶けてくのが分かる。

旨味、凄い。大きさや形もあつてお肉味のバターみたい。

「……幸せデエクス」

「うん、とつても幸せな味」

だけどこれは高いからじゃない。みんなで食べてるし、何より仁志さんの気持ちがこの宿つてるからだと思う。

……でも、ご飯欲しいかも。

「(「ご飯欲しい (デス)」)」

そう思つてたら切ちゃん達が揃つて同じ事を言った。やっぱり思う事は一緒なんだね。

「ご飯はないけど野菜ならあるぞ。さあさ、食べなさい。玉ねぎに人参、ナスもある。肉だけじゃ栄養が偏るからな」

「「は〜い……」」

露骨に嫌な顔。本当にこうして見ると切ちゃん達は姉妹だ。

「未来う、口の中で溶けるよお」

「……そうだね。あつ、喋ると味の余韻が消える。もつたない……」

「マジでうめえ……」

見れば響さん達もお肉の味で幸せそう。未来さんが響さんとお喋りするより味の余韻を気にするとか凄い。

「うし、これで最後だ」

「きたきた」

「ふふっ、これ一つだけと思うとより貴重な物に見えてくる」

「味わって食べましょ」

最後にマリア達。仁志さんは……次のお肉をもう焼いてる。

そっちは多分だけど庶民的なお値段のお肉のはず。どうしてかと言うと、大きさがさっきのと違って大き目だから。

「仁志、ほら貴方も食べなさい」

「つと、悪い。あー……ん〜っ!」

で、気付けばマリアが仁志さんの分のお肉を口へ入れてた。むっ、ラブラブ夫婦みたい。

「マリア、今のはどうかと思うんだけど?」

「あら? だって奏はまず自分が食べる事を優先してたみたいだったから」

「ぐぬっ……」

「奏、マリアもそこまでだ。それと、仁志さん? 食べたい時は言ってくれば私が代わるから」

「……分かった。その時はお願いするよ」

「うん」

さり気無く翼さんが奥さんっぽい感じに。むっ、こっちもこっちで夫婦な感じ。

「ししよお、もうさっきのお肉終わりデスかあ?」

「終わり。ただ肉自体はあるから安心していいよ。こっちは食べ応えがあるし」

「むう、たしかに中々ボリユームある見た目デス」

「兄様、こっちはどんなお肉ですか?」

「オージービーフ。まっ、オーストラリアの牛肉だ。値段の割に美味いから割と俺は好きだぞ。ただ、こっちはステーキしようゆ使った方がいいかな?」

言いながら仁志さんはお肉だけでなく野菜なども焼いていく。と、そこで登場のとうもろこし。下のスーパードで買った物だ。

それへ仁志さんがこれもこの下で買った刷毛を使ってお醤油を塗っていく。

次の瞬間、じゅくつて音と一緒にお醤油の焦げる匂いが広がった。

「ああつ、この匂い大好きデス！」

「美味しそうな匂いでもんね」

「兄様、これは何を？」

「焼きモロコシを作ってるんだよ。醤油を塗らないでも食べられるんだけど、こうした方が香ばしくて俺は好きでさ」

「この匂いがたまんねーな」

「ホントホント。お祭りとかの匂いだよね」

「そういえばこっちじゃお祭りとか行けなかったなあ。只野さん、この辺りってお祭りとかないんですか？」

響さんの言葉にぼんやりとお祭りの事を考えていたけど、未来さんの質問で意識を切り換える。

見ればみんなも同じみたいで、仁志さんへ顔を向けていた。

「祭りかあ。この辺りじゃもう小さな祭りはなくなっちゃったからなあ。俺が小学生の頃とかはあったんだけどね。いつ頃か不況のせいなのか何なのか終わっちゃってさ。今だと大きい祭りしかなくて……」

「それももう終わったって事ですか？」

「夏祭りはさすがにかな？ 秋祭りは……翼、ちよつと代わってくれるか？」

「あ、うん」

仁志さんから刷毛やトングを受け取って翼さんがバーベキュー奉行に。

その間仁志さんはスマホで多分お祭りを検索中。

「翼、いつそさ、野菜にも刷毛で醤油塗ってよ。玉ねぎとかナスとか」「それいいわね」

「よし分かった。なら早速……」

翼さんが刷毛で玉ねぎやナス、人参へお醤油を塗っていく。

白い玉ねぎは少しお醤油色になって美味しそうだし、ナスもそんな

感じ。人参は大きく変わった感じしないけど、香りが凄くいい。

「翼、トング貸して。肉はあたしがやつとくから」

「じゃあお願いするね」

遂にツヴアイウイングがバーベキューの番をする事に。これって地味に凄い事な気がする……。

「あー、うん。やっぱりもうこの辺りじゃないなあ。別の市まで行けばあるけど」

「そうなんだ。残念だなあ」

「ごめんな。俺自身がそういうのに全然興味ないもんだからさ」

「お兄ちゃん、お祭り好きじゃないの？」

私もセレナと同じ事を言おうとした。仁志さん、そういうの好きそうなのに。

「好きだよ。でも、それは子供の頃の話さ。自分の稼ぎで色々しないといけないってなると、祭りの出店の値段設定は高く見えてさ。ま、後はさ、男一人で、電車使って行っても、懐も心も虚しいだけつてもあつたから自然と疎遠になったって訳だ」

その言葉にみんなが納得してた。仁志さんが私達とこうなるまで貧乏だった事はよく知ってる。

それに、今もそうだけど、お金の使い方も基本節約傾向なのに使おうと思うとどんどん使う。

ならお祭りなんてどうなるかは簡単に分かる。きつとあれもこれもと買って、切ちゃんみたいな使い方をしてしまうんだ。

そう思ってたら仁志さんが切ちゃんを見た。

「何せ子供の頃は切歌のような使い方で小遣いを使ってたもんだからさ」

「どーしてそこでアタシを引き合いに出すデスカあ！」

そこでみんなが笑う。本当に仁志さんと切ちゃんはこういうところこそつくりだ。

みんなを明るくさせたり、楽しくさせたり、とにかく笑顔にさせようとするところがよく似てる。

だから切ちゃんは仁志さんを師匠って呼び続けてるんだろうな。

「師匠、か……。私も切ちゃん我真似をしてそう呼ぶ時があるけど、呼ばれてる時の仁志さん、どこか嬉しそうなんだよね。」

「何でだろうって思うけど、今の仁志さんを見てると何となく分かった。師匠って呼び方は、特別だ。只野さんとか仁志さんって呼ぶ人は複数いるだろうけど、師匠って呼ぶのは切ちゃんと私だけ。」

「それが、仁志さんには特別感を感じさせてるんじゃないかな？ 仁志さんはどう呼ばれても嬉しいって言ってたけど、無意識にそういう事を感じてもおかしくないし。」

「まあまあ、だから俺は切歌の師匠なんだろうさ。俺のようにはさせたくないし」

「でも、今では切歌ちゃん、すっかり只野さんと似てきてますよ？」

「デスデス。ししよーの責任は大きいデス」

「どうしてそこで俺が悪いみたいになるのっ!？」

「さっきの切ちゃんみたいに仁志さんが言ってまたみんなが笑う。」

「本当に、楽しい。もうみんなでこうしていると家族みたいだ。」

「仁志さんが中心にいと、本当にそう思う。」

「この後も楽しく時間は過ぎていった。ラムは初めて食べたけど、あっさりしてて割と好きな味だった。」

「牛タンステーキも柔らかくて美味しく、勿論野菜も美味しかった。」

「お醤油塗ったナスとか玉ねぎは大人気だったし、ステーキしようゆはおろし玉ねぎがとっても美味しくてビックリした。あれだけをご飯に乗せて食べたって切ちゃんや響さんが言い出すぐらい美味しかった。」

「でもそんな時間もいつかは終わる。食べ終えてみんなで手分けして片付けを始めると、不意にこんな声が聞こえてきた。」

「今度こそ夏も終わりですね」

「そのエルの声は海の時とは違ってた。あの時は寂しそうだった声だが、今はどこか前向きな感じだったから。」

「そうだね。次は、夢の国だもん」

「はいっ！」

そう、それだ。しかも何と泊まり。仁志さんが色々考えて計画中らしい。

マリアや奏さんに翼さんの年上三人と相談して、可能なら九月に、最悪だと十月になるかもしれないって仁志さんは言ってた。

「仁志さん、それってどうなりそうですか？」

「とりあえず移動は車。そうしないと交通費だけでかなりの出費だからな」

あつさり返す仁志さん。こういうところを隠さない辺りがらしい気がする。

「じゃ、車中泊かよ？」

「それはさすがにしないよ。男だけならありだけどさ。ちゃんと宿は取る」

「ビジネスホテルですか？」

「それは……ないようにはしたい。出来るだけ、だけど」

これも仁志さんらしい。

「みんな、今は片付けが先よ。その話は帰ってからすればいいわ」

「そうそう。この話はまだ決まってる事の方が少ないしき。決まったらちゃんと教えてくれるって」

「はい」

マリアと奏さんがまるでお母さんみたいにそう言うのと、それに返事をしてエルやセレナが動き出す。

それを見ると、本当に二人がお母さんなんじゃないかって思えてくる。二人共、いいお母さんになるだろうな。

「仁志さん、こっちはもう終わったよ。どうすればいい？」

「えっと、そうだな」

それにしても、翼さんは気付いたら仁志さんへの言葉遣いに変化してる。

奏さんにしかしてなかった、砕けた喋り方だ。それだけ仁志さんと仲良くなったって事なんだろうけど、何だかちよつとだけでもやもやする。

「師匠、私にも指示をください」

なのでちよつとだけ邪魔する。もう翼さんの時間は終わりです。

「ん？ そうだなあ……じゃあ、調には相棒の事をお願いするよ」

「え？」

言われて視線を動かすと、切ちゃんは名残惜しそうに骨付きソーセージの骨を口に啜えてた。

「ううっ、楽しい時間が終わっちゃうデス。もつとみんなで騒いでいたいデス……」

切ちゃん、気持ちは分かるけど骨を啜えてたらみつももないよ。

「切ちゃん、それ捨てて。エルやセレナだつてもう帰り支度してるんだから」

「調も冷たいデス……。ううっ、バイバイデス、バーベキューの思い出」

「大袈裟……」

そう言いつつ私もどこかで同じ事を思った。でも大丈夫。

だって、仁志さんはまたこういう事を企画してくれるから。

「……そうですね、師匠？」

今もみんなの中心になって色々動く仁志さんへ顔を向けて小さく呟く。

気付けば私達の中心的存在になってる、大好きな男の人を。

「ん？ 調？ 何か言ったデスか？」

「何でもない」

また、デートしたい。今度は出来れば二人きりで。

その時、また私を大人の女性として扱ってくれるかな？ また、優しくキスしてくれるかな？

そう思うだけで心があったかくなる。幸せになれる。

「そうデス。調、近い内にししよーのどこへ行かないといけないデスね」

「え？」

「その、お嫁さん修行デス」

「……うん、そうだね」

そうだった。私、仁志さんにエツちな事教えてもらおうと思つてた

んだった。

……デートでなら、教えてくれるかな？ 師匠って呼んで、ちよつとだけ大人の勉強させてつてお願いしたら、してくれないかな？

うん、試しに聞いてみよう。まずは切ちゃんと一緒に、だね。

車を返却した仁志が向かったのは自分の部屋ではなくマリア達の家だった。

というのも、今夜彼と奏は勤務があり、少しでも食事や寝る時間などで利便性の高い場所で過ごすためである。

何せ彼の部屋も奏達の部屋も、今は空調を停止してとてもではないがすぐ寝られる状態ではない。それらも踏まえて仁志はマリア達の家へと向かったのだ。

仁志が家の中へ入ると、既に居間の隅には彼用にマリアの布団が敷かれていた。

その横には奏用にもう一組布団が敷かれている。

「あく、助かるよお」

フラフラと布団に導かれるように歩く仁志を見て誰もが小さく苦笑する。

ちなみに奏用の仮眠布団は切歌の物が選ばれていた。

「仁志先輩、もう寝るの？」

「むしろ奏はまだ寝ないのかよ？」

「……ま、寝られる時に寝ておくか」

「それがいいわ。心配しなくても食事が出来たら起こしてあげるから」

「よろしく〜」

揃って声を出して布団へと入り込む夜勤二人。その姿が兄妹のように見える誰も笑った。

さてそうして夜勤二人が眠るのを合図にしたかのように夕食の準備へ取り掛かる者達がいた。

だがそれはマリアでも調でもない。ましてや未来やクリスマスでもなかった。

「さて、ではやるぞ」

「了解デス」

「はい」

翼をリーダーとし、切歌、セレナの三人だったのだ。

何せ今夜はカレー。余程がない限り失敗しないメニニューと言えた。

故に最近料理へ励み出した二人を助手に、やっと助手を脱した翼が主体となって料理をする運びとなったのである。

「ふふつ、頑張ってるね三人共」

「切ちゃん、何か分からない事があつたら聞いて」

「姉さん、何か手伝って欲しい事があつたら言ってくださいね」

眺めるマリア達は笑みを浮かべ……

「だから、ここはさつきやり方教えてやったら？」

「悪いけど、もう一度お願い出来るかなクリス」

「ご、ごめんなさい」

クリスと未来は久しぶりとなる響の勉強に付き合い……

「ふあく……俺も眠くなってきたな」

ヴェイグは一人、眠る仁志と奏を見つめて大あくびをしているのだった。

穏やかな昼下がり、平和で穏やかな時間が仁志達に流れる。

翼達のカレー作りは大きな失敗こそないものの、ところどころで危なっかしい事がありマリア達が若干不安を覚える事もあった。

響の復習はクリスと未来という二人の指導員による飴と鞭（主に鞭が多かった）が功を奏して上々の結果を収めた。

「むにゃ……」

そしてヴェイグは仁志や奏と共に夢の住人となっていたのだった。

やがて室内にカレーの香りが漂い始め、響達の食欲を刺激し始める。

「あー、良いにおーい」

「お腹空いてきちゃうね」

「ホント香辛料の香りってのはやべえよな」

「ホントデスよ。作ってる側は余計デス」

「今日のはお野菜が大きくて美味しそうですもんね」

「辛いのが好きな者達には悪いが、今日のは中辛と甘口を半分ずつ入れてある。これならエル達も一緒のものを食べられるんだろう?」

「二はい(デス)っ!」

「何で切ちやんも答えるの?」

「寝てるヴェイグの分デス」

その切歌らしい気の回し方に誰もが笑う。

「っ?! いかん! 米をしかけていない!」

が、そこでご飯をセットしていない事を翼が思い出し、慌てて準備を始める事に。

その騒ぎの中、奏が目を覚まして翼達の事を横目にシャワーを借りるため風呂場へと消えた。

熱い湯を頭から浴びながら、奏はじんわりと意識や体が目覚めていくのを感じていく。

「……起きて最初に見るのが仁志ってヤバいぐらい幸せかも」

目覚めた瞬間の事を思い出して、そんな事を呟いて幸せそうに笑みを浮かべる奏。

誰にも気付かれないうちにそっとキスをした事まで思い出し、その笑みは深くなる一方であった。

一方その頃仁志もようやく目覚め、布団の中でゴロゴロしながらエルフナインの質問に答える形で会話していた。

「えっ? ライジングフォームは電気ショックが原因じゃないんですか?」

「本来はね。ただ、脚本と演出が設定や展開に上手く合致しちやつてさ、じゃあそういう事でいいかってなったんだよ」

「そうなんです。では、元々はどうして?」

「えっと、それはまたクウガを見て話が進んだら教えるよ。それと、切歌?」

「呼びましたデスカ?」

「うん、呼んだ呼んだ。借りてきて欲しい物があるんだけど」

「何デスカ?」

「ゴジラVSデストロイア、借りてきて。そろそろいいかなと思うし」
その言葉にその場の全員が小首を傾げる。何がそろそろなのかと。
「お兄ちゃん、そろそろいいかなってどういう意味?」

「えっと、デストロイアはスペゴジの次のVSシリーズで、これでゴジラはしばらく映画が止まってしまっただよ。それだけにこの映画は何て言うか、ゴジラ映画の終わりって感じが色んな意味で強くて、さ」
どこか遠い目をする仁志を見てエルフナインとヴェイグは察するのだ。きつと何か悲しい事があるのだろうと。

仁志を見れない翼達も声からその雰囲気を感じ取り、これまで見えてきた映画のような明るいだけではない結末なのだろうと予想した。

「ただまあ、それだからこそラストシーンは感動するんだよ。特にセレナやエルは泣くかもしれないな」

「そ、そんなに辛いんですか?」

「エル、涙にも種類があるのは知ってるだろ? 悲しい時だけじゃなく嬉しい時にも人は涙を流す。ちなみに俺はラストシーンで嬉しい涙を流した。ただ、色々考えると複雑になるシーンではあるんだけど」

いつものお約束である仁志の気になる説明であった。

「ししよお、どうしてくれるデスカあ」

「何が?」

「今度の鑑賞会はクウガの続きって思ってたデスのに、今のですっごくゴジラが気になるデスよお」

「そっか。なら、もつと気になる作品の話をしてやろうか?」

「ああつ! ししよーが悪魔デース! でっ? でっ? どんなやつデスカね?」

嬉しそうに、楽しそうに切歌がそう言うのと周囲も笑う。仁志も笑った。

そこへシャワーから上がったTシャツ姿の奏が現れたのだ。

バスタオルで髪を拭きながらの彼女の登場に仁志は思わず見惚れた。

「何々? 何の話してんの?」

「あつ、奏さん。仁志さんがまた気になる話をしてきて」「切ちゃん 그게何なのか気になっちゃってるんです」

「へえ、仁志先輩、あたしにも教えてよ」

「へ……う？ つ！ あ、ああ……」

仁志が奏に見惚れたのは何も彼女が湯上りだからだけではない。今仁志は布団に横になっっている。つまり、視点が低いのだ。

そこへ奏が現れたのだが、この時の彼女は替えの下着を持っていなかったため水着ギアを展開していた。よって、それを見られる事をさして問題と思っていなかった。

結果、一種下着姿でうろついているようにも思え、うつ伏せだった仁志はそのまま布団から出る事が難しい状態となってしまうていたのである。

「とうか、いつまで布団の中にいるのさ？ 目を覚ましたならちやんと起きなよ」

「あー、うん。分かってるんだけどな。もう少しだけこのままでいさせて欲しい」

「奏、仁志さんは今日運転をして疲れてるんだよ？ 少しぐらい自堕落にさせてあげよう？」

「……ま、そう言われると仕方ないか。でも、程々にね？」
「了解」

こうして仁志は最大の危機を何とか乗り切った。

更に彼は己の思考をスケベなものから脱却するべく話へと集中する。

そこで彼が話したのは「聖闘士星矢」だった。何せシンフォギアがこれに似ている部分があるため、聞いている響達もギアとの類似性に気付いて関心を寄せたのだ。

特に彼女達が興味を引いたのは小宇宙コスモと呼ばれる力を高める事でどこまでも強くなるという点だ。

「あたしらで言うフォニックゲインみてえだな」

「ああ、しかも誰しものが内に秘めている力とは……」

「本当に似てますね。しかもしかも、着てるギアみたいな……クロス

でしたっけ？」

「そう。聖に衣と書いて聖衣。^{クロス} ブロンス、シルバー、ゴールドと等級があつて、基本それが高い方が強いんだけど……」

「土壇場でコスモを高めればブロンスがゴールドを越える事もある、だろ？ いいじゃん、そういうの。あたし好きだよ」

一世を風靡した大人気漫画だけあり、その話は響達の興味を惹いた。

もつと云えば、自分達の使っているギアに近しいところもあるのも大きい。

「星座をモチーフにしているのよね。それも中々ロマンティックじゃない」

「最強のゴールドは黄道十二星座ですし、相手も神話の神だったりするのなら、人対神でもある訳ですね」

エルフナインの言葉に仁志は頷き、ゆっくりと布団から起き出して伸びをした。

ようやく彼女達の前に姿を見せても大丈夫となったのである。

「んく……っはあ。もし興味があるなら切歌に頼んでアニメを借りて見るといいよ。漫画でもいいけど……」

「全員が見るのには適してないものね」

「そういう事。俺の話だけでもそれなりに分かるし面白いと思つてくれるだろうけど、実際に絵や映像で見たいな。聖衣のカッコよさとか技の派手さなんかは」

「ししよーは見た事あるデスか？」

「あるよ。ジャンプ漫画の名作は男だったら多少なりとも触れるものだと思うし」

「……………じゃんぷまんが？」「……………」

全員の反応に仁志は小さく苦笑する。最早お決まりの流れとも言えるものだったからだ。

（ホント、こういうのが平和って言うんだろうな……）

自分の発言の説明をしながら仁志は思う。こういう日々をいつまでも送れたらいいのに、と。

叶ってはいけない願いを胸に彼は笑う。守り続けたい十一もの笑顔を見つめながら……。

八月も終わりが近付き、深夜の人の動きもどことなく普段のそれに近付いてきてる気がする。

そんな中であたしは仁志と二人で店の外にいた。何もサボりじゃない。仁志は灰皿の掃除であたしは倉庫というか物置の整理と確認作業をしてる。

カップ麺とか袋菓子とかで発注が多すぎた時はここへ入れてるらしいんだけど、最近はそういう事も減ってきてこの倉庫って呼ばれる物置の使用頻度は減少傾向らしい。

「調、頑張ってるね」

「ホント助かってるよ。ちよつとギリギリな発注だけど、定番はきっちり切らさないようにしてるしね」

仁志の口調は店長としてじゃなくて個人としてのものだと思う。

「あたしの方はどう？」

「バツチリ。この調子でよろしく」

「あいよ」

ふふっ、これだけで笑みが浮かぶ。あー、いつそ仁志と二人で何か店やるのいいかも。

そうなる……喫茶店？ もしくはカラオケスナックとか？

「ね、仁志」

「……何？」

若干の間と帰ってきた声で分かった。今仁志は迷ったって。勤務中だからと注意しようか否か。

でも、そこで注意しなかったって事は……ヤバッ、これだけであたし嬉しくなってくるんだけど。

「喫茶店とカラオケスナック、どっちがいい？」

そう何となしに尋ねる。けれど仁志の答えはない。ただ、小さく息を呑んだのが聞こえた。

「仁志？」

「……………出来れば喫茶店、かな。酒があるとトラブルに繋がる可能性がある」

聞こえてきた声はどこか真剣なものだった。

それがちよつと気になって、あたしは物置の扉を閉めて施錠するとそこから歩き出して仁志のいる水道へと顔を出した。

「結構本気で考えてくれてる？」

「まあ、な。冗談じゃなくて本気だったらと思つてさ」

その瞬間、あたしは思わず息を呑んだ。だってそれは、いつだったか店長になった方がいいか聞いてきた仁志へあたしが返した言葉と同じだったから。

「……………そういうの、女は喜ぶって知っててやってる？」

「こういうの喜ぶのに男も女も関係ないだろ？ 嬉しかったよ、あの時の奏の答えは」

そう言つて仁志はこっちへ顔を向けて微笑んできた。その瞬間、あたしは抱き着きたい衝動に駆られる。

だってさ、これつてあたしに言われて嬉しかったから自分もそうしたつて事だろ？

そんなの、ときめかないでどうするつて言うのさ！

でもそれは不味いので一旦落ち着く。で周囲をチェック。人影も人目もない、ね。

「どうした？ 急に周囲を見回したりし……………」

そこで仁志の言葉は途切れる。当然だ。だってあたしが口を塞いだから。

顔を離すと視界の中には仁志の驚く顔があつた。意表を突かれ たつて顔してる。

「何やつてんだよ……………」

「仕方ないじゃん。したくなつたんだから」

そこで仁志が大きくため息。

「……………あのなあ」

「だって、仁志があんな事言うから」

「店の中でも不味いのに外でやる奴がいるか？」

「したくなつたんだからしようがないじゃん」

あたしの目の前には呆れた顔の仁志。だけど、その顔が大きくため息を吐くとジト目でこつちを見つめてきた。

「誰かに見られたらどうするつもりだ？」

「だから確認したんじゃない？」

外でキスって何だかテンション上がる。恋人って感じ、凄いからかな？

「それでか……ったく」

言つて仁志は呆れながら立ち上がった。そしてあたしへ若干鋭い目を向けてきた。

「そういう事をしたかったら場所を考えてくれ。俺だって色々我慢や配慮してんだからな」

「っ……うん」

嬉しかった。仁志もあたしと同じ気持ちになる時があるんだって分かつて。

「さてと、じゃあ中へ戻るぞ。ああ、それと奏、仕事終わったらちよつと付き合つてくれ」

「付き合う？ ジョギング？」

店へと歩きながら問いかけると仁志は自動ドアを開けながら……

「違うよ。あの喫茶店だ。今夜はみんなでカレーだったろ？ それ今朝も残ってるけど、それならマリアは作る必要ないからさ。だから出かけに言っておいたんだ。俺の分の朝食はいいからって」

それが若干あたしの心をざわつかせる。何だか仁志がマリアの旦那みたい。

そのまま二人して店の中へ入って事務所へ向かう。

「だから久々になって……どうした？」

「別に」

事務所に入るとこつちへ仁志が振り向いた。そこであたしの顔を見て不思議そうに小首を傾げたので若干の苛立ちを込めて言葉を返す。

いいよいいよ。どうせあたしは愛人側さ。でも、それならそれでい

い。マリアはエルやセレナっていう妹分であり子供みたいな存在がいる。

それがあんたの強みであり弱点さ。あたしは母親の顔しなくてもいいからね。女全開で仁志と接してやる。

「あのさ、一ついい？」

「何？」

「それってデート？」

あたしにとつてはそこが大事。すると仁志はその問いかけに驚く事もなく苦笑した。

「そうじゃないと思うなら、今度は俺からキスしないとイケないな」

そのはつきりとした言葉にあたしは思った。ああ、本当にこの人は強くなつていくんだなつて。

あたしが初めて会った時と今じゃ、別人つてぐらいこの人は強くなっている。

それがあたし達のためだと思うと、正直嬉しくて心が騒ぐ。

出来る事ならあたしだけを見て欲しいって女としてのあたしは思うけど、人としてのあたしは今ののように全員を笑顔にしようと頑張つて欲しいって思う。

本当にもどかしい。だつてどっちも本心だ。仁志には、あたしだけの仁志であつて欲しくもあるし、みんなの仁志であつて欲しくもあるんだから。

「……してくれてもいいよ？」

「よし、奏、仕事終わりにデートしないか？ 美味しい朝飯、食べに行こう」

こつちの言葉を見無視するようにそう言つて仁志は息を吐いた。

いいじゃん。事務所でキスしたつて。あつと、監視カメラに映つてるかもしれないか。

「いいよ。勿論仁志の奢りね」

「そこは割り勘だろ」

「キスしてあげるから」

「ぐっ……な、何という交渉だ。だが俺は負けない。キスなどに負け

るものか」

正直あたしも結構はずかしいけど、そう言われるなら仕方ない。もっと刺激的なの出すか。

「じゃ、食事終わりにどっかで休憩してもいいよ？」

「ていつ」

「いたっ」

思い切って誘ったらこれだよ。でもいいんだ。今のあたしは知ってるから。

仁志は本当はそういうのしたいって。あたしもっと深い関係になりたたって。

だから今はいい。でも、いつか、いつかはせめてそういう事をした
い。

あたしの中に仁志を刻んでもらって、仁志の中にあたしを刻み付けるために。

——そして、出来る事ならあたしの世界へ来てもらいたいな。旦那として、可能なら父親として、ね……。

「そうか。それで今朝はタダノが来ないんだな」

テーブルに座って昨日の残りのカレーを食べるヴェイグに私は小さく頷いた。

時刻は午前六時半を過ぎた辺り。普段ならそろそろ仁志が来るって、そう思って私も動いてる。

だけど今朝は来ない。正確には来るけどご飯はいらぬ。今頃奏と二人で食べてるんでしょうね。

「……ねえヴェイグ。私って、もしかして今嫌な匂い出してる？」

何となく聞いてみた。奏へ嫉妬していると自覚しているから。

「？ いや、そんな事はないぞ。まあ優しい匂いもしてないが」

「そう……」

どうやら軽い嫉妬ぐらいではヴェイグが嫌がるような事にならないらしい。

……逆に言えば悪意がどれ程強く深い負の念か分かるわね。

「マリア、俺は最近思ってる事があるんだが」

「思ってる事？」

「ああ。その、悪意を倒した後の事だ」

その言葉に私は目を背けていた事を見せつけられたような気分になった。

「以前エルとは少し話をしたんだ。ここへのゲートは裂け目だ。あれを作ったのが悪意ならあいつを倒せばきつとなくなる。そうじゃないと依り代を与えた奴が作ったとしても、きつとなくなる可能性が高いと思う」

「そう、ね。そうだと思うわ」

ズキリと胸が痛い。だけどヴェイグが私にこれを話してくれているのは信頼しているからだ。

私なら、これを話してもいいと。受け止めて考えてくれると。

「それで、俺は思ったんだ。もしゲートを作ったのが悪意だとすれば、あいつはみんなへこう言い出すんじゃないかと。自分を倒せばゲートは消える。それでもいいのか、と」

「っ!」

それはもつとも私が、いえ私達が目を背けている可能性だ。

倒さねばならない相手。それが切れるかもしれない最強にして最悪のカード。

それはこの世界との繋がり。もつと言えば仁志との、繋がり。

二度と会えないかもしれない。こんな事を土壇場で突きつけられて平気なのかと、私は自分へ問いかける。

「俺は正直こう言われて迷う事無く構わないとは言えない。きつとエールもだ。いや、誰も言えないんじゃないか？ タダノ以外は」

「っ……仁志は言えると思うの？」

「ああ。タダノは最初から俺達と別れる事を考えてたはずだ。それに、あいつはヒーローのようになりたいと思ってる。なら、自分と俺達の世界を守り、元に戻せる事を選ぶはずだ。例え、それが自分の不幸へ繋がるとしても、みんなが笑顔になれるならそれでいいって」

「ヴェイグ……」

そうだ。仁志の好きなヒーローは、自分の手で助けたかった相手を倒して世界を平和にしたのよね。

それを大好きだと言った仁志なら、私達との別れをちらつかされてもきつと選ぶ道は一つ。

問題は、それを私達が出来るか否か。そういう意味では、私達は今や装者ではなく一人の女になっているから。

そこからヴェイグは無言でカレーを食べる事を再開した。私はそれを見つめながら言葉に困るしかない。

「……タダノは、きつとヒーローに憧れ続けているんだ。それでも、あいつはただ憧れだけで決断は下さないだろう」

スプーンをそつと置いてヴェイグはそう言いながら私を見つめた。

「あいつは、タダノはタダノとして決断を下すと思う。悪意なんかに負けるかと、そう思ってる」

「……そう、ね」

悪意が私達へ揺さぶりをかけても、きつと仁志はその迷いを断ち切ってくれる。

今の彼は、間違いなく私達の支えでありヒーローだから。

でも、そんな彼にしたのはきつと私達なんだと思う。私達の支えになれるようにと、そう仁志が頑張った結果が今のはずだ。

「ヴェイグ、この話は他にも？」

「いやしてない。まずはマリアにするべきだと思った」

「そう。ありがとう。出来ればまだセレナ達には」

「黙っておく。ただ、その時になるまで考えさせないのは不味いと思うぞ」

「ええ、それは分かってるわ。よく、分かってる……」

悪意を追い詰めた時にこれを言われたら確実にセレナ達は躊躇する。それが下手をすれば命取りになりかねない。

まずは翼達と話し合うべきね。全員で話してもいいけど、まずは私達年長が意見を揃えておかないと不味い気がするし。

……仁志も、その場には居てもらわうべきね。

——その前に私が仁志の意見を確かめておくべきじゃないかしら

? もし仁志にも迷いが見えたらみんなへも波及してしまうもの……。

うん、そうね。それは必要だわ。

——そういう理由で二人きりで会うべきよ。二回目のデートも兼ねて、ね……。

デート……か。

——聞かれたら不味いし、二人きりでカラオケとかならないんじゃないかしら。そこで、歌ってもらいましょ。仁志に、あの歌を……。

二人きりで……仁志からラブソング……。

「マリア、どうした?」

「つ……ぶめんなさい。ちよつと考え事をね」

顔が少し熱い。ダメだわ。私が浮かれてどうするのよ。

だけど、だけど仕方ないじゃない。私も、女なのよ。

惚れた男がいて、しかもその男が旦那のように思えるんだから少しぐらい女の気になってもいいじゃない。

そう私は装者の私へ言い訳する。強くも弱い私へ弱くも強い私が言葉をぶつける。

装者のマリアは強くあろうとしないといられないけど、母であり女の私はそんな事を思わないでも強くいられる。

エルやセレナ達、それに仁志がいるからだ。こうは言いたくないけれど、世界を背負っている時よりも今の方が心強くいられるもの。

「とりあえず、まずは仁志と相談してみるわ」

「ああ、それがいいと思う。タダノがはつきりと意見を決めてくればみんなも意見を言いやすい」

「そうね」

仁志は自分の意見を押し付けない。そして他者の意見を聞こうとする。

当たり前だけど、これが意外と難しい。この辺りはやっぱり年齢なのかしら?

それとも、過去の経験……? 陽子さんを仁志が頼った事はかなり辛い出来事だったように感じたし。

——その辺りも可能だったら聞いてみよう。もっと私は仁志の事を知りたいから……。

時刻は午後九時になろうとしていた。そんな時刻に仁志はマリアと二人で駅前のカラオケの一室にいた。

夕食を食べていた時、マリアから大事な話があり誰かに聞かれる心配のない場所がいいと言われたため、ならばと仁志がここを選んだのだ。

「とりあえず適当に歌を流しておくよ」

「ええ」

ランキングを上から順番に入力するだけして仁志はマリアへと向き直る。

女性と二人きりでカラオケなど仁志の人生で初めての経験であり、若干彼は微妙な気分になっていた。

(どうせならデートとかで来たかったなあ……)

利用時間は二時間。だがそれも話し合いが終われば終了とするためだった。

仁志は知らないのだ。マリアがこの時間をデートでもあると考えているとは。

「それで、話って?」

「その、ヴェイグが今朝……」

悪意が追い詰められた際にゲートの事をちらつかせるのではないか。その不安を聞き、仁志は深いため息を吐いた。

「やっぱりヴェイグもそこに気付いたか……」

「そう……。じゃあ、貴方も?」

「定番だからな。しかも、それが嘘かホントか誰にも分からないだろう? 余計躊躇するんだよ」

さすがに幾多もの特撮やアニメなどを見ている仁志からすればヴェイグの不安は予想の範疇だった。

彼もどこかで悪意がそういう事を言い出すのではないかと考えてはいたのである。

「じゃあ……」

「マリア、それが本当か嘘かはこの際どっちでもいい。悪意がもしそう言って君達を揺さぶるのなら、迷う事無く倒すんだ」

「でも……」

「落ち着いて考えてくれよマリア。仮に悪意がゲートを作って維持してるとする。でも、そいつがいる以上俺達はいつまで経っても前に進めないんだ。なら、悪意を倒し、その上で俺達がまた出会える方法や可能性を探す方がいい」

「分かってる。分かってるわ。それが一番いいのは。でも、惚れた男と二度と会えなくなるかもしれないというのは、思っているよりも心にくるのよ」

ヴェイグに言えなかった本音を告げるマリア。仁志にしか言えない事だったのだ。

マリアが弱さを隠す事なく見せられる相手は、今や仁志が筆頭だった。

翼や奏ではなく仁志なのは、やはり彼がマリアの隠しておきたい色々がある程度とはいえ知っているからだ。

「マリア……」

そんな弱々しいマリアの肩へ仁志はそつと手を伸ばした。置かれた手を嬉しく思つてマリアは手を重ねる。

「はつきり言うよ。俺は、今だって許されるのなら君達の誰かともつと進んだ関係になりたい。だがそれはきつと悪意に利用されると思うから踏み出さないんだ」

「私とも?」

「むしろ真つ先にそういう対象になるよ。俺だって男だぞ?」

「そ、そうね……。あの夜の貴方は、とつても、その、男だったわ」

マリアの脳内に甦る飲み会の記憶。酔った事にして行つた、歌姫三人による仁志への行動。それに対して仁志は開き直つたかのように対処し、しっかりとドライディーヴァへ教えたのである。

自分は男であり、そういう欲求がない訳ではない事を。その時の力強さなどを思い返し、マリアは頬を赤らめた。

「あ、あの時だって本当はもつと過激な事をしたかったんだ」

「そう、でしょうね。だって、何度か私達の事、触ったもの」

「……事故って事にしてくれ」

「ふふっ、そうね。そうしておくわ」

少しだけ空気がピンクになった事を察知して仁志は大きいため息を吐いた。このままでは良くないと思ったのだ。

「マリア、この事はまだみんなには話してないんだろ？」

「ええ。貴方の意見を聞いてから、まず翼達としようと思って」

「……………いや、全員いつぺんにするべきだと思う」

「え？」

意外な意見だ。そう思ってマリアは仁志を見つめる。彼は真剣な表情でマリアを見つめ返した。

「出来るだけこの事は情報を知るタイミングに差を付けるべきじゃないと思うんだ。もし先に翼達だけが聞かされていて、後から自分達だとセレナ達が知れば、それは自分達が未熟で一人前として扱われていないと捉えられかねない。そこを悪意に突かれて乗っ取られる可能性がある」

「……………出来る限りセレナ達も子供扱いしない？」

「それがいいと思うんだ。特に今のセレナ達はエルという妹分が出来た事で姉としての自覚を持つてる。そこには自分達は守られるだけじゃないって気持ちも少なからずあるはずだ。その自尊心を傷付けない方がいい」

仁志の意見にマリアは一理あると思って頷いた。ここはかつてバイト先で年下扱いを受けた事のある仁志ならではの気付きであった。

こうしてゲートとそれを利用した悪意からの揺さぶりに対しての対応は全員で話し合う事に決まった。

その時期もカオスビーストが最後の一体となつたらと決め、ならばと仁志は帰ろうとしたのだが……

——じ、時間はあるのだし、少しだけダメかしら？ その、ゲート、したいの。

そんな風にマリアに上目で言われてしまえば無碍にも出来ず、自分

の中にあつた想いとも合致するために仁志はある程度まで過ごす事に決めたのだ。

そして、そうなれば MARIA が仁志へこれをせがむのは当然と言えた。

「愛しているよ。上手く言えないけれど」

「君の中の永遠」をリクエストしたのだ。たった一人で仁志のラブソングを聞く事。それに MARIA は胸がいつぱいになるのを覚えていた。

（分かっているわ。これが、これが私だけへの想いじゃない事は。でも、でも今だけは、今だけはそう思ってもいいわよね？ 仁志が愛しているのは私だけって、そう思ってもいいのよね？）

そうやって MARIA が瞳を潤ませて自分の歌へ聴き入るのを見た仁志は……

「なっ、これ一緒に歌ってみてくれないか？」

「え？」

とある歌をガイドボーカルで流して MARIA へ聞かせたのだ。その歌詞に MARIA は若干呆れつつも、最後には苦笑してマイクを手にした。

「三年目の浮気ぐらい大目に見ろよ」

「開き直るその態度が気に入らないのよ」

歌ったのはズバリ「三年目の浮気」である。直球のラブソングを歌った後でこれというその流れに MARIA は呆れたものの、ある意味で自分が仁志と結婚したとも思えるからと彼の頼みを引き受けたのだった。

そうやって二曲目を歌い終わった仁志へ MARIA が密着する。その距離感はまさしく恋人や夫婦といったそれだ。

「MARIA？」

「ダメ？」

普段であればダメと言う仁志も、今はデートでカラオケだと思って小さく苦笑すると首を横に振った。

「いや、いいよ。その、俺も嬉しいからさ」

「仁志……」

「それに、俺の場合は三年目どころか最初から浮気ばかりみたいなものだし」

「本当ね。しかも、それが全部本気なんだから」

「馬鹿な男と笑うか？」

「笑えるものですか。だって、そんな男に恋した私も馬鹿なもの」

そこで軽くキスをするマリア。仁志はそれに照れくさそうに頬を搔いた。

その行動がマリアには少年のように見え、可愛く思つて再度キスをする。と、そんな彼女を仁志は抱き締めたのだ。

「……ズルいわよ、そういうの」

「よく言うよ。逃げるどころか嫌がる素振りさえしなかつたじゃないか」

「したら放してくれた？」

「放して欲しいんだとこっちが思うぐらい抵抗されればな」

「意地悪ね」

「そんな俺は嫌いか？」

「……………そこで嫌いと言えない時点で私の負けか」

「残念ながらそんな君に惚れてるから引き分けて事はどう？」

「ふふっ、いいわね」

抱き合つて顔を合わせて話す二人。互いの吐息がかかる距離でのやり取りは完全に特別な男女のそれである。

この後、マリアは仁志から一曲の歌を贈られる。それは“Trust You Forever”。機動武闘伝Gガンダムの後期OPであった。

「諦めない明日を。そして振り向かない昨日を」

ある意味で仁志の心情とも取れるそれにマリアは嬉しそうに微笑み、こうして密かなデートは終わりを迎える。

隣り合つて夜の街を歩き、マリア達が暮らす平屋前まで来たところで仁志はマリアへ別れを告げようとして、その口を彼女の唇で塞がれた。

「……おやすみなさい」

「……おやすみ、マリア」

最後に優しく微笑み、マリアは家の中へと入っていく。

それを見届け、仁志は来た道を戻り始める。すると少し歩いたところで思いがけない相手と出くわす。

「あれ？ ししよー？」

「切歌……」

それはバイト終わりの切歌であった。仁志もそこで時間がそういう時間だった事を思い出した。

「これから帰りデスカ？」

「うん、そんなところ。切歌もバイトお疲れ様。ゆっくり休むんだぞ？」

「はいデス。あつ、ししよーししよー、Gガン一緒に見たいデスけど、どうすればいいデスカね？」

「え？ あー……」

仁志は夜勤で切歌は夕勤。互いの活動時間は通常ずれているため一緒に行動するのが難しい。

そう思った仁志は、ならばとある提案をした。それは全員で集まる日以外は毎日二話ずつ見る事。

一卷に収録されている話数が四話なのでDVD一枚を二日で見ると計算になる。しかもそれなら時間にして一日一時間弱なので仁志や切歌の負担にもなり難いだろうと判断したのだ。

「見る時間は……三時からおやつでも食べながら感じてどうだ？」

「了解デス。じゃ、さつそく今度レンタルしてくるデスよ」

「頼むな。料金は半分出すから」

「お願いするデス。じゃ、ししよー、おやすみなさいデース」

「おやすみ切歌」

元気よく手を振って仁志を見送る切歌だが、その背中が遠くなった時にふと呟く。

——それにしても、何でししよーからマリアの匂いがしたデスカね？

疑問符を浮かべながら帰宅した切歌は、いつものように一人で遅い食事を食べて気付くのだ。

(マリアからはししよーの匂いがするデス……)

仁志とマリアが密着した事を察し、切歌は一人密かに思った。

——マリア、ししよーとこっさりキスしてるデスか……。なら、アタシもししよーにお嫁さん修行してもらわないといけないデスね。調と相談して早めに行動開始デス……。

明るく能天気な切歌。その心に微かな影が出来る。恋心から始まるその影に、悪意が嬉しそうに嗤い出す。

——あははっ！ いい感じに色に狂い出したわね。これなら再び種を植え付けるのも容易だわ……。

番外編 二つの衝撃的展開（ゴジラ・BLACK&B
LACK RX）

物語はバース島が消滅した事で幕を上げる。

「えっ?!」

「バース島が消えた……」

「じゃ、じゃあゴジラとリトルはどうなったんですか!？」

「無事だといけれど……」

その衝撃的な幕開けからすぐ舞台は香港へと移った。

日が暮れ、夜となった空港。そこから一機の旅客機が飛び立つ中、突如としてゴジラが出現。

ただ、その様子はこれまでと大きく違っていた。

「体が、赤い……」

「背びれも赤く発光しています!」

「熱線も赤い……」

「バーニングゴジラデス……」

香港の街を蹂躪していくゴジラ。その体からは蒸気のように煙を出しながら進む姿は異様としか言えない。

OPのタイトル前に現れた謎の装置らしき物に誰もが疑問符を浮かべるだろうと踏んだ仁志がそこで説明を入れる。

「あれは、オキシジェン・デストロイヤーという発明品だ。初代ゴジラを葬った、失われた技術の結晶だよ」

「オキシジェン……デストロイヤー……」

「物騒なもんだね、名前だけでも。しかも、それでゴジラを……」

そしてOPが終わり、場面はゴジラについての対策を練る会議の場面となった。

そこで明かされるバース島消滅の謎とそれによるゴジラへの影響。

更にそのゴジラの変化について考察した日本人学生の存在が挙げられたのだ。

「学生でゴジラの事を?」

「カレッジって事は大学生ね」

その学生はかつて初代ゴジラに家族を奪われた少年の息子であった。

しかも、その少年を引き取ったのは初代ゴジラの最期をある意味で看取り、あのゴジラが最後の一匹とは思えないとの言葉を残した山根博士であったのだ。

「初代ゴジラって機龍に使われた？」

「そう。多分だけどゴジラの平行世界はそこから分岐してる。このV Sシリーズは機龍の世界とは繋がらないからね」

学生でありながら養祖父譲りの洞察力でゴジラの事を論文にまでした青年、山根健吉はあくまでもゴジラの事は趣味にしたいとGサミットへの協力を断った。

「趣味、か……」

「そうだよな。仕事にするってなるとゴジラを敵って思わないといけないだろうしさ」

だがそんな言葉も三枝未希の名を聞いた瞬間一転する。

「……こいつ」

「ミーハーなのね……」

「仁志さんは気持ち分かります？」

「そりゃあね。今の俺が似たようなもんだし」

バース島消滅から今までリトルを探し続けた未希だったが、結局見つける事は出来なかった。

それを聞き健吉はリトルが死んだ可能性を提示する。

その説明は納得出来るものであり、故に未希も反論出来ず、リトルの身を案じる事しか出来ない。

「リトル、死んじゃったのかな？」

「誰もがゴジラのようになれる訳じゃない、デスか……」

「地球環境に適応出来ないなんて……悲しい」

場面はテレビ局へと変わり、そこには健吉の姉であるゆかりが映っていた。

彼女がメインキャスターを務める番組へとある科学者が出演して

いたのである。

彼は伊集院耕作。その発明品であるミクロオキシゲンはエネルギー問題や食糧問題などの解決へ大きく貢献出来るものだった。だがしかし、それを悪用しようとするれば恐ろしい事が出来る。

その可能性を指摘された耕作だったが、そこまで人類は愚かではないとその意見を一蹴。

それを聞いてゆかりは痛烈な皮肉で彼の出番を締め括ったのであった。

「言うじゃねーか、この姉ちゃん」

「科学者独特の楽観的な意見、ですか。だけど僕はこの博士の気持ちも分かります」

「人の良心を信じたいって事だもんね。うん、私も博士の意見に賛成だよ」

ただ、かつて初代ゴジラを葬り去った発明を知るゆかりの叔母である恵美子は、耕作の発明にもっと恐ろしい可能性がある事を指摘した。

「周囲一帯の酸素を全て破壊しあらゆる生命を窒息させる……」

「だからオキシジェン・デストロイヤー……」

「その兵器転用を恐れたからこそ、己が命と引き換えにゴジラを道ずれに封印したとは……」

勿論その事を耕作も知っていた。ただ、だからといってミクロオキシゲンをオキシジェン・デストロイヤーにするつもりはないと言いつ切ったのだ。

「良かった。博士はちゃんとせりぎわ博士の遺志を継いでくれてるんだ」

「科学をみんなの笑顔のために使いたいって、きっと博士は思ってるんですね」

その裏で起きる様々な出来事。海底トンネルの不可解な事故と台湾沖の急激な海水温上昇。

「何だか怪しくなってきたね……」

「トンネルの掘削用機械のシャフトってかなり大きな物よ？ しかも

途中から溶けてなくなってるなんて……」

「師匠、何かあるの？」

「そのトンネルで掘っている場所は、かつてゴジラがオキシジェン・デストロイヤーで葬られた場所の近くなんだ。それがヒント」

「ゴジラが死んだ場所の近く……？」

「ま、まさかゴジラの怨念とかデスか!？」

「んな訳あるか。それよりもゴジラの方がやべーだろ」

「最悪の場合、核爆発って……」

「成層圏に火が点く……。地球が炎の星になっちゃうなんて……」

「規模が凄すぎます。でも、ない話ではありません」

更にそのトンネル工事の現場へ耕作が赴き、その事故が起きている場所の土を持ち帰った。

ゆかりはオキシジェン・デストロイヤーを作るためではないかと勘繰るも、耕作はそれを否定。

彼は二十五億年前の酸素が地球上になかった時代の事が知りたいのだと述べたのだ。

そんな彼の少年のような一面にゆかりは微笑んだ。

「あれ、何だかいい雰囲気……」

「最初は嫌いつて言ってたのに……」

「接している内に印象が変わるなんて珍しい事じゃないさ」

「そうよ。私達と仁志がそうだったじゃない」

「あのお、実名出されると恥ずかしいんで止めてくれない？」

一方ゴジラ対策はある意味で暗礁に乗り上げていた。

歩く火薬庫にも等しい現在のゴジラへの通常攻撃は地球を破壊するのと同義と言えたためである。

故に科学的にゴジラを消滅させる方法を取るしかないという意見が出た。

「ここで……出てくるのか……」

「悪魔の発明って言われてるのを作らないと、地球が減ぶかもしれない……」

「こんなのって、こんなのってないよ……」

オキシジェン・デストロイヤーを再び作り出さなければならぬ。そんな中、耕作へゆかりと健吉は会いに行き、思わぬ出来事を知る。水族館で魚が突然骨になる事件。その監視カメラの映像から謎の生物が確認されたのだ。

その謎の生物こそあのトンネル事故の現場に潜んでいた存在。しかも、その生物は恐ろしい事にマイクロオキシゲンを応用した攻撃が可能だった。

「兄様、もしかしてこの生物がデストロイヤーなんですか？」

「どうしてそう思うんだ？」

「……マイクロオキシゲンの先にオキシジェン・デストロイヤーがあるのなら、この生物が進化を続ければそこへ至るかもしれないと思ったんです」

そこから物語は大きく動き始める。

沖縄にゴジラが出現。未希はリトルの生存を示すかもしれない痕跡を頼りに搜索を再開。

そして臨海副都心では警察の特殊部隊が出動し、進化を遂げた謎の生物との戦闘を開始した。

「こ、こんな風になったの!？」

「ま、待って! 一匹じゃない!」

「ふ、増えたの!？」

「ぎ、ギアでもない限り無理デスっ!」

「並のテロリストよりも凶悪だぞ、こいつらっ!」

特殊部隊の攻撃をもともせず、謎の生物は彼らを蹂躪していく。遂には一体が外へと出てしまい、詰めかけていたゆかり達報道陣へと向かっていったのだ。

「火器攻撃は止めるようにって……どういう事だろう?」

「もしかして博士はあの生物について何か分かったのかな?」

そこへやってきた耕作は混乱する状況の中、ゆかりを探して副都心へと向かう。

「博士……男だね」

「彼女の事を意識しているのね」

「危険だと分かっているながら死地へと赴く。それを愚かなとは思いたくないな」

「恐怖や不安。それらを感じない人間はいないよ。だけど、それを乗り越えて一步を踏み出させる気持ちだが、勇気や愛って呼ばれるのさ」
謎の生物の騒動とは別に豊後水道へゴジラが出現。狙いは原子力発電所だった。

それでもGフォースは手を出せない。このままでは原子力発電所が襲撃され、大きな被害が出る。

そんな時、自衛隊のスーパーXⅢが出動する事となった。火器の全てが低温兵器であり、カドミウム弾まで装備している原発事故や核攻撃を想定された多目的戦闘機だ。

ゴジラと対峙したスーパーXⅢはその装備を使いゴジラの動きを封じていく。

更にカドミウム弾をゴジラへ放ちその核分裂速度を抑えてみせた。

「すごい……あの熱そうなゴジラが凍り始めて……」

「逆に言えば、それぐらいじゃないと原発事故とかには対処出来ないって事か」

「はい。原発事故で一番肝心なのは温度管理です。炉心の温度を制御しなければ大変な事になります」

「あの低温レーザー、凄い迫力デス」

「うん、ゴジラが完全に凍った……」

「奏？ どうしたの？」

「うん？ あー、何だかあんな戦闘機にしてやられるゴジラってちょっと」

「スーパーXシリーズは意外とゴジラとの対戦成績は優秀だよ。いずれも初戦は勝利してるんだ」

「そうなのかよ？ 意外だな、おい」

ただし、ゴジラの冷却は六時間しかもたないと分かり、どれだけその体温が高いかを言外に告げる。

再び動き出したゴジラは原子力発電所へ向かわず、進路を変えて日本から離れていく。

「あれ？」

「どうしたんだよ？」

「もう核燃料はいらないって事？」

「……カドミウムが抑制剤として効果を発揮したみたいです！」

「良かった。これでオキシジェン・デストロイヤーを作る必要はないね」

ゴジラの脅威は去ってもまだ謎の生物の脅威は残っていた。

それに対して耕作はマイクロオキシゲンが超低温で無力化出来る事を証明し、Gフォースや自衛隊にそれを認識させる。

丁度その頃、御前崎沖にゴジラが出現。だが、それはあの赤いゴジラではなく、どこか体色も黒というより緑がかったものだった。

「え？ これって……」

「もしかしてリトル!？」

「ゴジラになってる……」

「そうか。バース島の一件でリトルはゴジラへと変化したんだろう」

「あんなに可愛かったのに……」

「で、でも、鳴き声に怖さみたいなのは無いデスよ？」

「うん、どこか優しい感じもする」

ゴジラジュニアと呼称される事になったリトル。その現在地はゴジラが辿った経路の先と判明。

ゴジラはジュニアを追い駆けていると予想された。

地球上にたった二匹しかない同種族。その絆はやはり強く、そして固い。

しかもジュニアは北へ向かっていた。ベーリング海、アドノア島へ。

そこはジュニアの卵があった地。いわば故郷である。そこへ帰ろうとしていると未希は読んだのだ。

だがそこへ恐ろしい報告が入る。

ゴジラの心臓部の温度が9百℃という高温のままなのだ。

核分裂が抑制されている今、それでも心臓の温度が高い事が意味するのは炉心融解間近という事だった。

「メルトダウン……」

「エル、それがさつき言つてた原発事故で起きる事？」

「は、はい。考えられる限り、最悪の状況です」

「ただ死ぬだけじゃなく、地球に穴を開けながら放射能を撒き散らすなんて……」

「地球を道連れつてゴジラらしいけどさ。これはね……」

「一週間以内にそうなるなんて……」

「これじゃ、ゴジラはジュニアと再会さえ出来ないデスよ……」

一方、謎の生物は自衛隊による低温攻撃で追い詰められ、一か所に集結し合体。巨大な姿となつて襲い掛かったのだ。

「マジデスかつ!？」

「集合は合体フラグ……」

「いずれアルカ・ノイズもこういう芸当をやる種が出てきてもおかしくないかもしれん」

「翼さあん、止めてくださいよお」

「巨大アルカ・ノイズになるぐらいなら平気だけどな」

「こ、心なしか低温兵器が通じてない気がします……」

「おいつ! あいつが空を飛んだぞ!」

「何でもありかよつ!」

「デストロイア、か。名前の通り、破壊する存在なんだね……」

「響……」

ミクロオキシゲンを超えてオキシジェン・デストロイヤーまで進化してしまつたデストロイア。

その力を使い、メルトダウン寸前のゴジラを倒してもらおうとする健吉の考えに基づき、ジュニアがデストロイアへと誘導される事となる。

「「「そんなつ?!」」」

「酷い……。でも、地球の事を考えたらやむを得ないのかもしれないわね……」

「それでいいのか? 地球のためならどんな犠牲も出していいと、どうして人間だけで決める? その権利は地球に生きる全ての命にあ

るはずだ」

「ヴェイグ……あんた……」

「ゴジラも、ジュニアも、必死に生きてる。地球の事を考えると言うのなら、そもそもゴジラを生み出したのは誰だ？ デストロイアを生み出したのは誰だ？」

「ヴェイグさん……」

「人間、だよ。そうだね、原因はいつも人間にあるんだもんね」

「未来……」

「世界蛇だつてそうだった。あんな風にしたのは人間だった。本当に私達つて身勝手だよ。自分達が悪いのに、気付いたら原因を他のせいにしてる」

未希達のテレパシーによってデストロイア飛行体へと誘導されるジュニア。

だが、やはり優しいリトルだった名残なのかジュニアは戦う事への対応が遅かった。

結果、デストロイアに先制攻撃を受けて大地へと倒されてしまう。

そこへ追い打ちをかけるようにデストロイアのオキシジェン・デストロイヤーが放たれ、ジュニアを痛めつけようとする。

ビルが倒れ、その下敷きにジュニアがなると、デストロイアは標的をジュニアから未希達の乗るヘリへと変更した。

「危ないっ！」

しかし、デストロイアがヘリへ迫るのを見てジュニアが放射熱線を放った。

その一撃がデストロイア飛行体を直撃し、墜落させる事に成功する。

「」「やったあ！」「」

「やはりジュニアは優しいリトルの心を失っていないのか」

「ああ、絶対そうだったの」

ただ、デストロイアもそれで終わりではなかった。

集合体へと変化し、ジュニアへ襲い掛かったのである。

その動きと力にジュニアは苦戦を強いられた。何しろまだ交戦経

験自体が皆無なのだ。

対して相手は最強の攻撃とも言えるオキシジェン・デストロイヤーを有している。

それでも懸命に戦うジュニアはその体に傷を負いながらも、ゴジラとなつた能力を使い、辛くもデストロイヤーを撃退してみせた。

「ちよつと怖かつたデスけど、さすがゴジラデス！」

「うん。泡を吹いてた時は本当に怖かつた」

「ジュニアが生きてて良かったあ」

「最後まで諦めず勝ってみせるのは、まさしくゴジラです！」

「タダノ、ジュニアはゴジラだけどゴジラじゃないかもしれないな」

「と言うと？」

「ゴジラは人の心の闇なんだろう？ だけどジュニアはリトルだった。なら、ジュニアは人の心の光になれるんじゃないか？」

「……そう、だな。たしかにジュニアは人の心の光のゴジラかもしれない」

そして遂にゴジラとジュニアが出会う時がきた。互いに存在を確かめ合うように鳴き声を上げ、たった二匹しかいないゴジラが呼び合った。

「ウルウル……カンドーデス」

「やつと会えたんだね、ゴジラとジュニア」

「バース島がなくなつてから、ずっとゴジラはジュニアを探していたんです。きつと嬉しいんだろうな」

「このまま二匹で暮らしていけたらいいのに……」

その再会の裏でデストロイヤーが更なる進化を遂げていた。

より凶悪に、巨大になり、完全体となつたデストロイヤーは、先程の仕返しをするためなのかその場から飛び立ってジュニアを目指した。

「馬鹿な……まだ進化するとかの？」

「遂に二足歩行で飛行まで出来るようになりやがった」

「ゴジラ達を狙っているんでしようね」

刻一刻と迫るゴジラの炉心融解^{メルトダウン}。それを考慮し、耕作はGフォースへ連絡を試みる。

いざとなった場合に備え、スーパーXⅢの出動を要請したのだ。
炉心融解の瞬間、冷凍攻撃を叩き込む事で被害を最小限に抑えるた
めにと。

こうしてスーパーXⅢが出動する事となる。ありったけの冷凍弾
に超低温レーザーのエネルギーも限界まで搭載した状態で。

それを聞いた黒木特佐は呟くのだ。

——これで我々の来年度の予算はゼロだな。ま、来年度があればの
話だが。

出動体勢へ移行するスーパーXⅢ。場合によってはこれが最後の
出動かもしれない中、それでも気負う事なく黒木特佐は平然と発進す
る旨を告げた。

「来年度の予算はゼロ、か。そんだけ凄い金額使ってたね、スーパー
XⅢ」

「冷凍弾にレーザーのエネルギーを限界まで、だからね」

「勿論例えでしょうけど、そこまでするのね」

「来年度があればってどこ、何だかちよつと好きかも」

「どうして?」

「だって、この人はこのままだと来年度がないって分かってる。それ
なのにこういう事言えるって、それだけ心は落ち着いてるって事だと
思うから」

再会を喜ぶゴジラとジュニア。そのまま近付き、互いの距離を詰め
ようとしたところへ現れるデストロイア。

その一撃がゴジラを襲い、更にその巨大な翼でその体を斬り付ける
ように飛行、ゴジラを転倒させる。

デストロイアの攻勢は止まらない。今度はそのままジュニアを掴
むとその場から離脱。一路臨海副都心へと向かったのだ。

「ど、どうするつもりデスか?」

「ジュニア、何で放射熱線を使わないんだろう? 落ちちやうから?」

「セレナ、よく見てごらん。デストロイアはそれを封じるように首を
掴んでいるんだ。あれじゃ放射熱線は使えない」

「何て奴だ……」

未希達の見つめる中、デストロイアはあろう事か上空からジュニアを落下させる。しかも、その真下には当然のように建物があつた。

「「「「「ジュニアっ！」「」「」「」」」」

「相変わらずこのシーンは怒りが沸くな……」

未希達が落下したジュニアへと駆け寄ると、そこには今にも命の灯を消しそうな目をしたジュニアが倒れていた。

未希の呼びかけに一瞬だけ反応するも、そのままジュニアは目を閉じていく。そしてその目は、もう開かれる事はなかった。

「「「ジュニアあ……」「」」」

「酷い……酷いよ……せつかく、せつかくゴジラと会えたのに……っ」

「響……」

「これも、人間の犯した罪の一つだ。ああ、ヴェイグの言う通りかもしれない。自分勝手に命を弄び、科学を弄んでおきながら、こうして失われる時だけ涙を流すなど……どれだけ私達人間は……っ」

「先輩……」

「ゴジラが……泣いてる、のか？」

「仲間を失つたと、分かつたのでしようね。これで地球に自分だけになったと、一人ぼっちになったと、分かつたんだわ……」

「それだけじゃないです。本来なら先に死ぬべき自分が生き残った事も、悲しんでるのかもしれない」

「タダノ……そうなのか？」

「分からない。でも、ゴジラも自分が長くない事はどこかで察してると思うよ。だからこそ、最後にジュニアに、仲間にあつておきたかつたんじやないかな？」

傷心のゴジラの前にジュニアを殺したデストロイアが降り立つ。

オキシジェン・デストロイヤーを使い、ゴジラへと襲い掛かるデストロイアだったが、守るべきものを失い、怒りに燃えるゴジラの前にはそれさえも動きを止める力とはなり得ない。

激突を始める二体の怪獣。その中で流れるゴジラのテーマ。

その勇壮で微かな悲哀さえも宿った音楽を背負い、ゴジラは最後にして最悪の敵へと立ち向かう。

どれだけ傷付けられても怯む事なく歩みを止めないゴジラ。全身から発光しながら放射熱線を放つその姿はまさしく破壊神と呼ぶに相応しいもの。

「凄い……」

「カッコイイデス……でも、でもっ！」

「どこか悲しいです。ゴジラ、苦しそう……」

「負けないでゴジラっ！ 死なないでっ！」

「エルちゃん……うん、そうだね。ゴジラ、頑張っ！ ジュニアの分まで生きてっ！ 生きるのを諦めないでっ！」

ゴジラの連続放射熱線に怯んだデストロイアは分裂して攻撃するも、それさえも今のゴジラには通用しない。

まさしく手の付けられない状態となったゴジラは悠然とジュニアへと向かって歩き出す。

無言でジュニアを見つめるゴジラ。するとゆっくりと顔を近づけ、まるで自分の息吹を吹き込む様にジュニアへと送ったのだ。

「今のは……?」

「分からねえ。でも、まるで息を送り込んだように見えたぞ？」

「それでジュニアが目を覚ます……なんて事はないんだね」

と、そこでゴジラに異変が起きる。勝手に体が発光し、放射熱線を吐いたのだ。

「ゴジラっ!」

「最早ゴジラでさえその身のエネルギーを制御出来なくなりつつあるのか!」

自身の体の状態にゴジラが戸惑っている背後から一筋の閃光が襲い来る。

それはデストロイア完全体の攻撃だった。

「っ?! あいつ、まだ生きてたのかっ!」

「不意打ちとは……」

「でも、それでも今のゴジラは止められないわ。きっと、アブソリュートゼロがあったところで一緒でしょうね」

「私もそう思います。今のゴジラは、きっと誰にも止められない……」

そんな中、遂にゴジラの背びれが溶け始める。

それはゴジラの命の灯が尽き始めた事を意味していた。

だが、それ故にゴジラの攻撃は苛烈さを増して、遂にデストロイアさえも恐怖を感じる程となった。

「デストロイアが……逃げる……」

「無理もないデス……。今のゴジラ、とっても怖いデス……」

「あの放射熱線、見ましたか？ その準備だけで背中の方から炎が出てました」

デストロイアは空中でスーパーXⅢなどの攻撃で墜落させられ、そのまま散った。

そして遂にその時はくる。

——メルトダウンっ！

そこからはもう誰も言葉を発しようとしなかった。

ゆっくりとレクイエムのような音楽だけが室内を包んでいく。

誰も何も発しようとはせず、ただ黙ってモニターの中へ意識を向けていた。

そこでは、メルトダウン炉心融解を迎えようとしているゴジラへありつただけの超低温攻撃などが放たれていた。

「ああっ……」

誰かの悲痛な声が漏れる。遂にゴジラが溶け始めたのだ。

その姿はこれまで何があるかと生き残り、死と無縁だと思わせてきた怪獣王とは思えない程痛ましいものだった。

肉が溶け落ちて骨となり、その骨さえもすぐさま溶けていく。

それと同時にまるで火山が噴火したかのように心臓が弾けて血液が噴出し、ゴジラの生命の終わりを彩る。

そうしてこの世全てから痕跡を消すかのように、ゴジラはドロドロに溶けていった。

全てが終わった。東京に死の灰が飛び散り、凄まじい量の放射能が検知される。

ゴジラの死と共に東京という名の街も、また死んだのだ。

——放射能のレベルが急激に下がっていく……。

その言葉にモニター前の誰もが俯いていた顔を上げる。白いもやのようなものの中へと画面が迫っていく。やがてその中で動く何かが見えた。その動きと姿に誰もが息を呑む。

すると、それを合図にしたかのようにあの咆哮がこだましたのだ。

「ゴジラ……生きてたんだ……」

「いえ……いいえっ！ あれはジュニアです！ ジュニアが、ジュニアが放射能を吸収して甦ったんですっ！」

「新しいゴジラの誕生と、そういう訳か……」

「ちくしょお……喜んでいいのか悲しめばいいのか分かんねえ……」
「いいじゃないか。あたしは、喜ぼうと思うよ。だって、ゴジラは生きてていいのさ。それを生み出して、迷惑するのは人間だろ？ あいつらは悪い事をしようとしてる訳じゃない」

「ただ生きている。地球という、星の一員として、ね。ええ、そうだわ」

「また、人間とゴジラの戦いが始まるのかな……」

「どう、だろうね？ でも、もし人間が核を、科学を弄ぶのなら、ゴジラはきつと暴れる。そんな気がするな……」

「ゴジラが人間の闇の象徴なら、あいつを暴れさせるのは身勝手な人間の欲望だ。俺は人間はそこまで弱くないと思いたい」

「ヴェイグ……お前……」

「そう德斯ね。アタシも、アタシもそう信じてる德斯」

「うん。きつと人間はゴジラが暴れるような生き方をしないように出来るはずだよ」

EDのスタッフロールの流れる中、仁志達は多かれ少なかれ瞳を潤ませていた。

流れている映像がこれまでの映画のシーンを集めたものだと気づき、本当にゴジラという作品が終わったのだと強く感じられたからだ。

そうして全てが終わったところで仁志が口を開いた。

「あのゴジラでさえ最後は核を制御出来なくなった。それだけ核というものが恐ろしいと、この作品は描いているんだと思う。エル達には

分かるだろうけど、ザ・パワーもそうだったろ?」

「はい、Zマスターさえもその力を制御出来ずに滅びました」

「結局強すぎる力は身を滅ぼすんだ。そして、往々にしてそういう時、大抵人はこう言うんだよ。自分は大丈夫とか今回は大丈夫って。そこに絶対の保障などないのにさ」

悲しげな眼差しで仁志はそう告げてエルフナインへ顔を向ける。

「エルは、そんな事を言わないままでいてくれ。聖遺物だけじゃない。科学も錬金術も、元々はみんなを幸せにするための力だったはずだから」

「……はいっ!」

仁志の言葉にイザークの考えを見た気がして、エルフナインは力強く頷いた。それを見て仁志が優しく笑みを浮かべて深く頷く。

そのやり取りを見て誰もが微笑みを浮かべた。

やはり仁志とエルフナインのやり取りは親子のそれには見えな
いたためだ。

実際今のエルフナインにとって仁志は兄というよりは父に等しい
と言えた。

彼女は知らないが、かつてキャロルが様々な事を父であるイザーク
から教わったように、エルフナインもまた仁志という父にも似た存在
から様々な事を教えてもらっているために。

「でもししょー、ゴジラ映画はこの後もあるんデスよね?」

「ああ、あるよ。君達が見た機龍が出てくる作品もこれ以降だ」

「やっぱりゴジラは悪者扱いなんですか?」

「まあ、どうしても人類側から見ると、ね」

いつの間にか膝の上に座っているエルフナインの頭を撫でながら
仁志は苦笑する。

何故なら更にセレナも撫でてとばかりに密着していたからである。

映画の余韻で未だ涙目なままのセレナに上目遣いで見つめられ、仁
志は敵わないとばかりに残る片手でその頭を優しく撫でた。

「すっかり仁志さん、エルちゃんとセレナちゃんのお父さんって感じ
だね」

「そうだね。ただ……」

未来の視線はセレナへ向いていた。そう、セレナはもう無垢な少女ではないと彼女は知っているのだ。

（娘や妹って思っただけで接してるとは思えないんだよね、最近のセレナちゃん。女、になりつつあるのかも。只野さんに恋して、そうなり出した私達みたいに）

その気持ちが行き過ぎて暴走すると困る。

そう思っただけで未来はどうしようかと考え始める横で、切歌が仁志へ自分も撫でるとばかりに接近していた。

「ししよー、さっきの映画だけだとちよつとしんみりしちゃうデス。他にも何か見ようデス」

「他って言っても……」

「あるのはクウガだけですよ、切歌お姉ちゃん」

「うー……ししよー、どうしたらいいデスか？ クウガじゃ明るいだけじゃないデス」

「あー、それはそうだなあ」

切歌の望んでいる物がただただ明るい事と察し、仁志はどうしたものかと考える。

基本的に物語というのは起承転結を考えるので明るいだけでは作り難いのだ。

と、そこで仁志は気付いた。切歌が求めているのは悲しい事や辛い事がない物語ではないかと。

（クウガにはどうしてもそういう要素が入ってくるからな。じゃあ……）

よしと思いついた仁志は小さく頷くと切歌へこう切り出したのだ。

「切歌、今こそあれを借りてこよう」

目の前の光景にみんなから感嘆する声上がる。

そう、何故なら画面の中には二人の南光太郎が並んでいたからだ。

そしてその二人が同時に構えると一部から「おおっ！」って声が聞こえた。

やっぱりこの話が一番衝撃的だよなあ。何せ本当なら不可能なBLACKとRXが同時に変身するんだから。

——俺はっ！ 太陽の子っ！ 仮面ライダーっ！ BLACKっ！ RXっ！！

——仮面ライダー、BLACKっ！

あー、やっぱりこの安心感が凄い。オリジナルキャストの強みはここだよなあ。

唯一ライダーの主演俳優の中で二年間、同じ役柄で主役をただけあつて倉田さんの頼もしさと力強さは群を抜いている。

「こうやって並ぶとBLACKとRXってヒーローの色じゃないデスね」

「切歌、黒はどんな色でも変えられない色だからこそヒーローの色とも言えるんだよ」

「お〜……」

「そういえばガオガイガーも黒が基調です！」

「そっか。黒もヒーローの色なんだね」

よかったよかった。これでクウガのあの二つの姿を見てもみんなが納得してくれるだろう。

アメイジングマイティとアルティメットはBLACKと同じぐらい黒がカッコイイ姿だからなあ。

で、場面は四人のライダーと怪人軍団の戦いとなっていた。

「二体相手に苦戦どころか圧倒してるデスよ……」

「RXってやっぱり強い……」

「しかも武器もなしで、だもんなあ。ちよつと憧れるよ」

「響は響で凄いなと思うけど？」

「ああ、あたしも同感だ。さすが繋ぐこの手がアームドギアなだけあるぜ」

「あ、あはは……」

クリスの言葉に照れくさそうに笑う響だけど、俺としてはあの名乗りをクリスが覚えてた事に驚きだ。

そういえばあの名乗り、ちゃんと全員分出来たんだろうか？ 俺は

全員での決め台詞や決めポーズなんかを翌日相談されたけど……。

「切歌、そーいやあの名乗りつてちゃんと全員分考えたの？」

「へ？ えっと、未来さんと奏さんのはまだだったデスね」

「あゝ、成程」

キウウレンジャーにはまだ二人分足りないらしい。じゃ、俺はそれを考えてみますかね。

「な、何だあ？ このデイクライドつてやつ、超変身したらカッコ悪くなったぞ」

「く、クリスちゃん……」

「てか、そもそもあの道具使うの不便過ぎだろ。どんだけタッチしないといけねーんだ」

「クリス、勘弁してやって。もうこの頃はライダーや戦隊はオモチャ優先の作りなんだ」

クウガやアギトの頃はまだ何とかなっていたオモチャとのバランスも、龍騎以降はバランスが崩れていくんだよな。

特に音声ギミックが売れると分かっただけからは喋るのが当たり前になっちゃって、最近では、なあ……。

「おおつ、別のライダーが出て来たぞ」

「兄様、これがアギト、なのですか？」

「ああ、うん。アギトの最強フォームのシャイニングフォームだよ」

「二刀流なのか……」

「あっちの青い方は銃だったし、仁志先輩の言うようにオモチャありきってのは間違っただけじゃない感じだね」

気付けばデイクライドがコンプリートフォームになって怪人を倒してた。

という事はそろそろか。

場面はデイクライドとデイエンドがアポロガイストを挟んでパーフェクターを奪取しようとするところになった。

「こいつらは仲間じゃないのか？」

「仲間、とは言い辛いなあ。おそらく腐れ縁が妥当だと思うよ」

デイクライドとデイエンドのやり取りを聞いてヴェイグが当然のよ

うに疑問を浮かべたので補足する。

ま、本当にこの二人に関しては何となく単純に言っただけなものがあるから仕方ない。

で、パーフェクターはデイケイドが手にしたものの一瞬の隙を突いてデイエンドが掻き攫い、そのまま逃げおおせてしまう。

そこへクウガこと小野寺ユウスケ登場。夏海ちゃんの容体が急変した事を伝えたところでRXとBLACKが合流し、デイケイドへ夏海ちゃんのところへ行けと告げる。

「後は俺達に任せろ、かあ。安心感凄いいよね」

「何せこつちもある意味ダブルライダーデスからね！」

「本当なら揃う事のないダブルライダー……」

「今の僕とキャロルがいるようなものでしょうか？」

「うーん……このデイケイド版に関してはそれぞれ別の世界の存在だからちよつと違うかな。例えるなら、ガングニールしか持っていないマリアと最初からアガートラムのマリアみたいなものだし」

そう言うのと全員が納得するように頷いた。

こういう時ギアを二種類持つてるマリアは例えに使いやすい。

さて、デイケイドがいなくなった後アポロガイストと対峙するRXとBLACKだが、ここでRXはアポロガイストが一人で戦うなら自分も一人で戦うと告げる。

まさしくヒーローらしい宣言だよな。すると、その言葉通り一人で戦い始めるアポロガイストへRXも応じる形で一対一が始まった。

その一方でデイケイドこと門矢士はユウスケと共に夏海ちゃんがいる病室へと到着。

でもパーフェクターがないから夏海ちゃんは死んでしまう。

そうならば当然……

「あいつ、これを知っててパーフェクターとかいう奴を奪ってったのか？」

「分からない。でも、もしそうなら私は……ちよつと、あの人の事、嫌いになっちゃうな」

「デイケイドはやはり仮面ライダー、なのね。目の前の命を助けるた

めに全力だもの。でも、デイエンドは……」

「あいつは、仮面ライダーの力はあつても魂がないよ。少なくとも、あたしはそう感じた」

うわっ、奏が確信を突いた。俺もそう思うんだよなあ。デイエンドは力こそライダーだけど、その魂というか在り方が仮面ライダーじゃないんだよな。

まあ、お宝云々言ってる時点で当たり前なのかもしれないけど……ね。

名護さんは立派なライダーになったのに。そして照井も立派なライダーになるのに。どうして海東だけはどこまでも二号ライダーにならないままなのか……。

と、そうこう思っている内に海東登場。そこでツンデレみたいな台詞を吐いてパーフェクターを渡し、すぐさま立ち去るといふ若干どうかと思う行動を取る辺り、本当に男のツンデレはどうかと思う。

で、予想通りみんなの評価もよろしくない。まっ、それでもある程度理解はしてくれているようで、特にクリスは自分に似ている部分もあると思つたのか複雑そうな顔をしていた。

そしてモニターは再びRX達を映し出す。

「あつ、RXが飛び上がったデス！」

「アポロガイストが盾を投げた……けど」

「まあ弾き返すよな」

「だが咄嗟であの行動が出来る辺りが歴戦のヒーローというところだろうか」

「このまま押し切れるよっ！」

ところがぎゅっちよん。ここでアポロガイストが約束を破ってサイ怪人召喚。その攻撃でRXがダメージを負う。

「卑怯な……」

「でもBLACKが……」

「ライダーパンチ一発で……怪人を倒した……」

「強いです……」

原典では中々の強敵なんだけどな、サイ怪人。バトルホッパーを傷

だらけにしちやうんだよな、たしか。

——行くぞBLACKK!

ここからだ。RXとBLACKKが並び立ち、同時に大地を蹴って飛び上がるんだけど、RXは原典と同じ動きを入れて地面を叩いてくれるんだよなあ。

——ダブルキックっ!!

ここで“ライダー”と付けないところにこだわりを感じる。本来ならば彼らは並び立たないライダーだし、そもそもは同一人物だ。

だからこそそのダブルキックであり、ライダーダブルキックではないんだろう。ある意味では、彼らも二人で一人の仮面ライダーと言えるか。

「カッコイイ(デス)っ!」

「RXは両足で蹴るんだ……」

「単純に威力は二倍ですっ!」

「じゃ、二人で蹴ったからその二倍だねっ!」

「何だか感動するな……」

「ヴェイグ、分かってくれたか。この展開を、俺は小さい頃からずっと夢見てたんだよ」

RXとBLACKKが共に戦うのは“仮面ライダー世界に駆ける”で見たけど、同時変身と合体攻撃はなかったからなあ。

「そこまで好きなのね……」

「ああ。もうこの回を見た時の興奮と感動は忘れないよ。そっちで言うツヴァイウィング復活や幾多もの平行世界から援軍が来た時よりも上の衝撃だったんだからさ」

「そ、そこまでですか?」

「本気でこの二人のライダーが好きなんだね、仁志さんは」

翼が苦笑するけど、そこに嘲笑するような感じはなかった。どちらかと言えば、大はしやぎする子供へ仕方ないなという感じの親である。

……今の俺、そこまで子供っぽい? 頑張ってテンション抑えてるんだけど……。

最後は士が光太郎を写真に収めて、その現像された物を見てみんなが感心するような声を出した。

「いい写真デスよ。アタシ、欲しいデス」

「二人の光太郎さんの上にBLACKとRXがそれぞれ浮かんでるなんて……素敵」

「しかも、お二人共笑顔が優しいです」

「多分だけど、士がクリスを撮ったら優しく微笑むご両親が浮かぶと思うよ」

きつとクリスの肩へそつと手を置いて。そう思つてクリスを見つめると、その顔が慌てて逸らされた。

「そ、そういうの止めるよ。想像しちまうじゃねーか」

「なら、私はお父様とお母様が浮かぶのだろうな。出来れば門矢さんに会つて撮影をお願いしたいものだ」

「私も、お願いしたいわね……」

「僕は……キャロルが写るのかな？」

「意外とイザークさんが中心でエルとキャロルの肩を抱いてるかな」

「そう、かもしれないですね。僕も会いたいなあ」

「会えるかもしれないぞ。こいつも平行世界を、様々な世界を渡り歩いてるんだ。いつか、エル達の世界やセレナや奏の世界にも現れるかもしれない」

ヴェイグはそう言つてこつちへ顔を向けた。

「そうだろタダノ」

「かもしれない。本当に彼はふらつと世界を渡るんだ。で、ほんの少し関わっていなくなる事もある。必ずしも事件が起きる訳じゃない」

「でもお、なんとなく私とは出会う場合は事件絡みな気がします……」

「右に同じく、かな？」

響の苦い顔で告げた意見に未来が苦笑しつつ賛同する。うん、まあ、俺も内心そう思つてるけどさ。

「まっ、ライダーだもんねえ」

「その場合、一体どんなカードが出るのかな？」

「ズバリ、エクストライブへのフォームチェンジデス！」

「いや、デイケイド自身がギアを纏うんじゃない？」

「なら俺はデュランダルの召喚って言ってみるよ」

フィーネとの決戦で失われた完全聖遺物。ネフシユタンは後に平行世界で出て来たし、果てには鎧以外も出現したけど、デュランダルのだけはさっぱりだからな。

「まずはどういう方向か決めないとダメな気がします。フォームライドなのかアタックライドなのか」

「いつそアタックライドで新しい歌とかどうですか？」

「いいねえ。あたし達でデイケイドのOP歌ってやるの？」

「有り得るかもしれないわね。もしくはデイケイドの力を受けてギアが変化する？」

「おおつ、デイケイドギアデスカ」

「私達もカード使えるのかな？」

「ワクワクしますね」

年少組が盛り上がり始める中、俺は内心安堵の息を吐いていた。すっかりゴジラでの空気が払拭出来ていると感じて。

ありがとう、二人の黒い太陽。おかげでみんなが明るくなれました。

「そういえば師匠、最後の光太郎さんとの会話シーンで少しだけ青いバイクが見えたけど、あれってRXのバイク？」

「ああ、前に話しただろ？ あれがアクロバッターだよ」

「バトルホッパーの生まれ変わった姿ですね！」

「そんなの気付かなかったな……」

悔しがるようなセレナに笑みを浮かべつつ、俺はDVDの再生を止めた。

そしてDVDを取り出すとケースの中へと戻してみんなへ顔を向ける。

実はもう一本借りてきたDVDがある。それを手にした時、切歌が不思議そうに首を傾げていたけど、まあ無理もないと思う。

何せ、それはRXの二巻だ。何故そんなところをと思った切歌から

理由を聞かれたけどその内分かるで誤魔化したし。

「ししよー、それで次はRXデスか？」

「ある意味そうだな」

「「「「「「ある意味？」」「」「」「」」」」」」

揃って疑問符を浮かべるみんなを微笑ましく思いながら俺はDV
Dを入れ替える。

で、メインメニューを再生……の前にOPだけ見てもらおうか。

「じゃ、今からRXのOPを流すよ。そこでアクロバッターがしつかり見れる。まあ、響達はカラオケで見た事があるだろうけど」

流れ始める『仮面ライダーBLACK RX』。ただバイクで滑走路を走り続けるだけなのにカツコイイんだよなあ。

「これがアクロバッターデスか」

「青くて赤い目……」

「これは……どこかの滑走路でしょうか？」

「光の〜オーロラ〜身にまとい、君は〜戦う〜人になれ〜」

「タダノが歌い出した」

「ああ、うん。仁志さん、この歌大好きなんだって」

小声で歌い出すとヴェイグが少しだけ驚いた顔でこっちを見てきた。

で、響が説明をしてる。そうとも。BLACKも好きだけだな。

しばし画面を見つめるみんな。ただ、ようやくみんなが気付き出した。このOPは延々同じ光景が続くだけだっただって。

「ただバイクで走り続けるだけなのか……」

「あ、ああ、シンプルだな……」

「愛に勇気を〜与えてくれ〜」

「愛に勇気を……」

「ヒーローって感じの歌詞ですね」

「仮面ライダー！ 黒いボディ！」

「声が大きくなった」

いや、正直ここは少し大きく歌いたい。

「仮面ライダー！ 真っ赤な目！」

みんなが苦笑しながら俺を見る。だけど気にしない。

「仮面ライダーブルーック、RXっ！」

歌い切ると同時にメインメニューを表示させる。いや、このままじゃRX本編が始まるからな。

そこから仮面ライダー世界に駆けるを選んで再生つと。

「ししよー、一体何が始まるデス？」

「えっと、ある意味究極のお祭り作品」

そう言っている間にも話は始まる。この話の脚本、カーレンジャーとか書いてる人なんだよなあ。

だからか、若干耳を疑うような台詞が出てくるんだけど、それを吹き飛ばす力と勢いがあるのがこの話のいいところだ。

「こ、怖いですね……」

「こいつらはスカル魔。光太郎が最初に戦ったクライシス怪人だ」

「死神をイメージしてるのかしら？」

「同じ鎌使いとしては、若干複雑な気持ちデス……」

「あつ、カエルさんが……えっ?!」

「た、食べた!？」

まずは特撮あるあるな見慣れた撮影場所でのシーンから。

そこでバイクでやってきた光太郎がスカル魔達と接敵するところからスタート。

生身でのアクションが多めなのも改造人間ライダーの定番。だけどクウガなどの平成ライダーしか知らないみんなにとってはそれがやや新鮮に映るらしい。

「おおつ、光太郎さん強い！」

「改造人間だから、だろうか。怪人相手に善戦しているな」

「伊達にゴルゴムと一年間やりあってなかったって事だな」

「あつ！ 光太郎さんが落とされた！」

「いや、大丈夫みたいだよ」

「おおつ！ 変身するぞ！」

「カッコイイなあ……」

「ここでタイトルなんだ」

仮面ライダー世界に駆ける。飛びかかろうとするRXと共にその文字が表示されてOPは終了。

ここから先は、まあ良くも悪くも浦沢ワールドだ。

RXと三体のスカル魔との戦いは続く。ここ、地味に長回しのアクションシーンなんだよなあ。

「何だか、こう見てると私達の戦いとは違いますね」

「どういう意味だ？」

「えっと、ライダーの戦いって、やっぱりどこか人知れずって言うか、誰にも知られないような場所でやってるって言うか」

「そっか。大勢の人がいる場所に怪人が出るって事はそこまでないもんね」

「デスデス。だけど、その戦いは世界の運命を賭けた戦いデス」

「そうなんだよなあ。あたし達の戦いはいつも世界の運命なんて背負う訳じゃないけど、ライダーの場合はいつもそうなんだって考えると……」

「重たいわよね。それも、ほとんどがたった一人で挑まないといけないなんで」

薄暗い建物の中で戦ってるからか、より一層みんなはライダーの影の部分が感じられたらしい。

常に世界の運命を賭けて戦う、か。言われてみればヒーローってそうなんだよな。

さて、では問題のシーンその一に突入だ。画面がクライス要塞内へと変わる。

「うおっ、こ、こいつらがRXの敵か……」

「うん、四大隊長だ。女性がマリバロン、柱のようなものにくっついてるのがゲドリアン、青い一つ目のロボットがガテゾーン、残りの一人がボスガン。そして金色の体で杖を持っているのが司令官のジャーク將軍」

簡単に説明している間に問題の台詞が出てくる瞬間が近付いてきた。

みんなは一体どう反応するんだろうか？

「ちよつと、今RXには勝てないって言わなかった?」

「言ったわね……」

「待って欲しい。BLACKなら勝てる可能性があると言ったぞ。可能性がある、なのか?」

「な、何だか情けねえ悪の組織だな、おい」

「ある意味じゃちゃんと客観視出来てるって言えますけど……」

「勝てないって分かっているなら地球侵略なんて諦めて欲しいです」

「そもそもBLACKに勝てるのなら変身機能を封じたりする必要はなかったはずですし、ある意味ではクライシスは冷静に自分達の力を計れていたと言えます」

エル的神情容赦ない正論に俺は苦笑いするしかない。

そこからクライシスのRXの過去を消滅させよう作戦が語られると全員が一齐に「え〜っ!?!」って感じの声を上げた。

「い、いやいや! そんな事出来るの!?!」

「過去を消すって……どうやって!?!」

「仁志、これマジか!?!」

「マジもマジの大マジ」

実際、どういう方法か分からないけどクライシスはRXをBLACKへと戻してしまっただよなあ。

「あの、そういえば先程から気になってたのですが」

「どうしたエル」

「えっと、ところどころ妙なシーンが多いのは何故でしょう?」

「ああ、これは元々3Dで公開された短編映画だったんだよ。エルが疑問に思ったシーンは本来飛び出て見えた場所なんだ」

「そういう事ですか」

そう話している間に劇中では問題のシーンその二へ突入。RXがBLACKのED曲に反応するシーンとなっていた。

「……なあ仁志」

「うん、言いたい事は分かるよクリス。でも、言っただろ? これは究極のお祭り映画だって。細かい事は気にしたらキリが無いんだよ、これ」

「細かいって……」

「あは、あはは……クリスちゃん、きつと細かいんだよ、うん」

「これ、いつの作品なんですか？」

「1989年だよ」

俺がそう言うのと全員が黙り込んだ。何かあっただろうか、そう考えたところで思い出す。

そう、彼女達は近未来人。つまりは俺よりも更に先の西暦生まれな訳だ。なら、これは彼女達の間で言えれば生まれる遙か前の作品だろう。

「まあ、昭和の頃はリアリティよりも面白さ重視だから。というか、そもそも特撮なんてリアリティからかけ離れるのが常なんだし」

「ま、まあ言いたい事は分かるけどよ……」

「だから平成からは結構そういう傾向から脱却してるんだ。これはその過渡期のものだから大らかな気持ちで見てくださいよ」

クウガ以降のライダーが面白いのは認めるけど、昭和の頃のライダーだって面白いと思うんだ。

リアリティよりも大事なノリや勢いっていうパワーを感じられるんだよな、あの頃の作品って。

とにかく面白いものを作ろうって、そんな風に思える力が。

物語はゴルゴムの三神官が現れ、RXをその進化前であるBLAC Kへと戻った場面になっていた。

もうみんな黙って急展開のそれを見つめていた。ただ、凄いのはいてる様子も馬鹿にしている様子もない事だろうか。

……そっか。みんなにはこれは作り物でありながらどこかで本当にあった事って認識だった。

ならそれも当然か。意識を作り物からどこかであった有り得ないような現実へ切り替えたんだ。

「友情って……これが？」

「けっ、悪のいいような友情だぜ」

「手を繋ぐと見せかけて裏切るなんて……っ」

「酷い……酷過ぎる……」

「BLACK！　頑張れ！」

「ゴムなんかに負けないでっ！」

エルとセレナの応援も虚しくBLACKは三神官にいいようにやられていく。

そしてどう見てもクライシス怪人らしき手に動きを封じられ、腹部へ巨大な棘を落下させられこれまでと思われたその時、不思議な事が起こった。

「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」

ライドロンを知らないみんなは一体何が起こったのかを正確には理解出来ないだろう。

だけど、何かが助けに来た事だけは分かったはずだ。

で、ライドロンがその先端の部分で棘を受け止めた後、俺以外全員が大きな声を出した。

——ええ（な）っ?!　RXがどうして?!

そう、そうなんだ。この作品の凄いところはここにある。

何とRXは未来から来たのだ。自分の過去であるBLACKが死んでしまうと自分まで消えてしまうから、と。

「な、何がどうなってるデスカっ?!」

「BLACKが進化したのがRXなのに、どうしてRXがここに？」

「過去と現在の時間軸が交差しているの……?」

「あれだよマリア。細かい事は考えない方がいいって事さ」

「そうだね。もしかするとキングストーンの不思議な力かもしれない
「い」

「あたしはもうそれで納得する事にした。ギャラルホルンも考えてみれば大概だしな」

「だよねえ。私達も普通に考えたらどういいう事って言われそうな事体
「い」

聞いて納得。そういえば彼女達も十分不思議な事をやってのけていた。

そうこうしている内に、状況はBLACKを連れて逃げていたRXの前にクライシス怪人達が現れる場面となっていた。

「デスガロンカツコイイデスね」

「トリプロン、強そう」

「ガイナギスカンって騎士なの？へえ」

「ムサラビサラ？……ムササビモチーフ？」

「でも可愛くない……」

「姉さん、怪人ですから」

「デスガロンは実はシャドームーンの強化体って設定のデザインだったらしい。しかもそのせいかRXを一度は圧倒してる」

「凄いじゃん」

説明をしている間にも戦闘が始まっていた。

数の上では二対四と不利なのがライダー側。ただ、怪人側が有利なのはここまでなんだよなあ……。

追い詰められたかのように見えた二人のBLACK。そこへムサラビサラの火炎攻撃が襲い掛かる。

「こ、このままじゃ不味いデス……」

「待つて切ちやん。火炎の中へ誰か来た」

「っ！ ロボライダーです！」

「……もう俺は驚かないぞ」

ヴェイグの諦めたような声に思わず笑ってしまう。いや、遠い目をしてるんだよヴェイグ。まるでクライシスの幹部達のようにだ。

でも、どうやらヴェイグだけじゃないらしい。クリスやマリアさえも遠い目をしている。ま、ご都合どころかここまで来ると悪夢だ。

何せBLACKだけでも厄介なのに、そこへRXが来て、更にロボライダーまで出て来たのだから。

……本当の悪夢はこの後だけでも。

「ロボライダーって強いんですね……」

「相手の攻撃を全部物ともしてないよ……」

「ゆっくりとした動きが逆に強そうって感じデス」

「よ、四対一なのに余裕さえ感じられるね」

感心するエルと響。笑顔の切歌とやや苦笑いの未来。

うん、やっぱり本当にいい子達だ。正直今回は呆れられてしまうか

と思っていたんだが、これさえもちゃんと見てくれるとはなあ。

さて何とか逃げたBLACKとRXだったが、そこを狙う人影がある。それは四大隊長の一人、ガテゾーン。

その銃口が二人を捉え、火を噴いた。

「ま、まさかのここで幹部勢揃いデスかつ!？」

「さすがにこれは厳しい……」

「いえ、待ってください。RXの超変身はもう一つあります!」

「そっか。バイオリライダーだね!」

セレナの言葉に応えるように登場するはご存じバイオリライダー。手にしたバイオブレードで四人の幹部を相手に大立ち回りを演じる辺り、やっぱり強いよなバイオリライダー。

「あつ、四人揃ったデスっ!」

「凄い……圧巻かも」

「これ、全部同じ奴なんだよなあ」

「いかに南光太郎と言う人物が特異な立ち位置かを教えてくれるな」

そして始まるそれぞれの名乗り。それにエルと切歌だけでなく、ヴェイグもテンションを上げていた。こういうところは好きなんだな、ヴェイグも。

「BLACKのポーズ、カッコイイデスね」

「バイオリライダーは独特です」

「ロボライダーはいかにもロボットって感じ」

「RXの名乗りは力強いな。動きも鋭さがあるぞ」

そこから始まる大反撃。もう切歌とエルのはしやぎようつたらなかった。

響もヴェイグと一緒に拳を握りしめ、セレナは笑顔で頑張れくと声援を送り、残るみんなは苦笑しっぱなし。

そして遂にしつかりと描かれたリボルクラッシュと、その後の四人での決めポーズには全員が感嘆するように声を漏らした。

かっこいいんだよな、このシーン。まさしく勝ったって感じがしてさ。

「あつ……四人が……」

「一人に、RXへと重なっていく……」

「ししよー、これは？」

「過去と未来が現在のRXへ収束したって感じだと思う」

「ゆっくり歩いてくるだけで強そうな感じが凄い……」

「はい、頼もしい感じですよね」

調とセレナが噛み締めるように言ってくれた言葉に俺は小さく頷く。

「あのつくった男たちでは朝日と共に帰ってくると言ったけど、もう一つ俺は表現を作りたい。ヒーローは、風のように現れて、嵐のように戦って、夕日の中へ去っていくって」

「それも、カッコイイですね」

「うん、これもそんな感じだよね」

画面の中にはアクロバッターが日差しを浴びて映っている。そこへRXが現れ、跨って音楽が流れた。

「やっぱりライダーはバイクに乗ってる時が一番カッコイイデス！」

「はいっ！ 僕もそう思います！」

「お兄ちゃんも？」

「俺は……RXならリボルクラッシュ後の決めポーズかな？」

「おおっ、あれはカッコイイな」

「あれ、動きが独特ですけど何か意味あるんですか？」

嬉しそうに賛同してくれるヴェイグと握手していると響がそんな事を聞いてきた。

まあ普通は分からないよな。俺も後から調べて知ったぐらいだし。

「あれ、RXって動きで書いてるんだって。要するにRとXを足したような形で」

そう言うとき少し間を置いて全員が納得するように頷いた。

そして当然ながらもみんなからは完全にゴジラでの悲しさや辛さは消えていた。

見事にRXとBLACKがキングストーンフラッシュで暗い気分を払拭してくれたらしい。

で、そこからはみんな相手に詳しくRXやBLACKの事を話す事

に。

楽しい嬉しくはあるんだけど、俺だって完璧に覚えてる訳じゃないし知ってる訳でもない。

いっそ、こうなったらBLACKとRXの本編を見てもらうべきだろうか？

でも、きつとそんな時間はないんだよなあ。

そうだ、時間がない。みんながこつちで過ごせる時間に余裕はないんだ。

年越し前って思ってたけど、それでも遅い。やっぱり可能なら十月までに決着を着けるべきだ。

時間をかければかける程、きつと悪意は強くなる。なら、短期決戦を挑むべき、なんだと思う。

けれど……

「そういえば姉さん、今夜は何？」

「まだ決めてないわ。奏、何か案はない？」

「え？ うーん……中華？」

「いいですけど、家で作れる物は限度があります」

「麻婆茄子や回鍋肉などだな」

「ん？ 他に何かあるんだ？」

「は？ って事は何か？ ヴェイグはそれぐらいしか知らないのかよ？」

「無理もないってクリスちゃん。だってヴェイグさん、外のお店じゃぬいぐるみの振りしないといけないんだし」

「そもそもマリアさん達って外食とかしてるんですか？」

「してないデスよ？」

「僕らはお家で食べるご飯が一番美味しいって思ってますから」

こんな光景を見せられるとその気持ちが鈍る。

何故なら、ここでのみんなは本当の意味で一般人だからだ。

誰一人として特別な立場などなく、その過去にまつわる因縁さえもない。

みんなそれぞれがただの一人の人間として生きていけるのだから。

「……うし、車借りて買い物がてら中華食べに行くか！」

その瞬間エル達の嬉しそうな声と笑顔やマリア達の苦笑する顔が見えた。

まずはレンタカーの店へ電話し車があるかを問い合わせようと動き出すと、その間にみんなが出かける準備を始めた。

その様子を眺めながら俺は笑う。例え過ぎせる時間が残り少なくなってきたとしても、ならその密度を少しでも濃くしてみせるんだと思っ

「あつ、もしもし？ 車を借りたいんですけども……」

視界に見える沢山の笑顔達を少しでも増やしていきたいから。そんな気持ちで俺は目の前の光景に笑顔を返す。

準備出来たとばかりにこっちへ笑顔を向ける、十一人の大事な人達へ……。

Just Loving X—Edge

「おおっ！ 呼ぶと出てくるデスカ！」

「指を鳴らすとじゃない？」

「一体どういう仕組みなのでしょう？ ギャレオンはGストーンの光でしたが……」

「お花みたい……」

姉さん、事件です。俺の周囲を可愛い女の子が囲んでいます。

なんて某有名ドラマのような事を思うぐらい、中々珍しい状況だ。

時刻は午後三時半になるかならないかってぐらい。俺はどこか寝惚けた頭でモニターに映るGガンのアニメを眺めていた。

「タダノ、どういう原理だ？」

「え？ あー……その辺は未来世紀の技術力としか言えないなあ。多分だけど高感度センサーとかでドモンの声を拾ってるんじゃない？」

「じゃあやはり音声認識なんですね！」

「指を鳴らす意味は？」

「カッコイイから（デス）」

「すごい。お兄ちゃんと切歌さんの言葉が一緒だ」
思わず切歌とハイタッチ。いや、さすがは弟子と自称してくれるだけある。すっかり思考回路が俺に似てきた切歌だ。

ただ、俺としてはその言葉を聞いて「ですよねっ！」って笑顔を浮かべてるエルに一抹の不安を覚えると共に、マリアから何か言われるのではないかという底知れぬ恐怖が込み上げてくるんだが……。

そんな事を思ってる内に、モニターの中ではドモン操るシャイニングガンダムがミケロ操るネロスガンダムと戦闘を開始していた。

で、当然のように切歌達はファイティングスーツに興味津々のようだ。エルが興味深いとばかりに目をキラキラさせている。

……これ、みんなが元の世界へ戻ったら、シミュレーターがモバイルトレースシステムみたいに痛みとかをフィードバックするようになったりして。

「ぎ、銀色の足って強そう……」

「やっぱりみんな必殺技を持つてるデスか？」

「そうだね。基本登場するガンダムには必殺技みたいなものがあるよ」

「あつ、黄金の指って言うてる」

「いよいよか……」

みんなが見つめる中、シャイニングガンダムのフェイスカバーが展開。バトルモードへと変わる。

「」「おっ」「」

そしてトドメのシャイニングフィンガー炸裂。その派手さに切歌とエルが興奮し、調とセレナが感嘆していた。

それとヴェイグは小刻みに頷いていたので、どうやら興奮しているらしい。

「カツコイイデス！ ガンダムファイト国際条約第一条っ！」

「頭部を破壊された者は失格となる、だな」

「第二条っ！」

「コクピットを攻撃してはならない」

「兄様、さすがです」

「覚えてるんだ……」

尊敬の眼差しを向けてくるエルとセレナに若干照れる。こんなのが、本当は褒められるような事じゃないんだがなあ。

「まあ。ちなみにこの条約、第七条まであるんだよ」

「そうなんだ。じゃ、最後は何？」

「地球がリングだ。それと、さつき二人が掛け合いをしただろ？ あれがガンダムファイト開始の国際ルールなんだよ」

「」「へえ……」「」

ホント、こんな日が来るとはな。オタ用語やアニメや特撮などの設定を話しただけで周囲から尊敬や感心されるとか考えた事さえなかったよ。

そして続いて二話目。そこで登場するのは今後トモンのライバルとなり、頼もしい仲間でもあるチボデー・クロケットだ。

「な、何だか派手なキャラデス……」

「アメリカつてものを誇張してる感じ?」

「ま、実際そういう面もあると思うよ。ネオフランス代表は騎士だしね」

「騎士って、あの重たそうな鎧を着てる?」

「この場合は称号の方かな。今も騎士の称号つてのは存在してるんだ。名誉として授けられる事があるぐらいだし」

「そうなんだ」

セレナとそんな会話をしている中でも物語は進んでいく。

「というか、セレナは偉いなあ。俺と話してる時はちゃんとこっち向くもの。」

これ、俺が同じ年の頃だったら絶対モニター見てるわ。まず間違いない絶対。」

「ししよー、ドモンさんはあの写真の男の人を探してるんデスか?」

「うん。あの写真の男性は彼の兄なんだけどね」

「お兄さん? じゃあ、家族を探してるんだ。でも何でそれをガンダムファイターに?」

「しかも強制的に表示させていたみたいですよ。もしかして、それもあるって必殺技が接触系なのでしょうか?」

「やっぱり俺とは違うなあ」と改めて実感。俺はこれを見た時そんな事考えもせず、ただただカッコイイなあとかしか思わなかった。

でもみんなはたった一話でそれだけの事を疑問に思っただけ、考えている。この辺りがやっぱり生きてきた環境の差な気がする。

要は、頭をからっぽにして過ごす事が少なかつたんだろう。

そう思うと、俺はからっぽにし過ぎた気もするなあ。

「それもあるだろうけど、さっきも言ったようにガンダムファイターは頭部を破壊すれば失格に出来る。それもあるから確実に頭部だけを狙える攻撃を繰り返してるかもしれない」

「二成程」

「今度はエルと調さんが一緒だ……」

「仲が良いからな、エル達は」

「デスよ。今のアタシ達は前よりも仲良しデス!」

輝く笑顔の切歌に俺は頷く。実際そう思う。この家で暮らすようになって、マリア達は本当に家族の様になっていると。

本来の世界では切歌と調は寮生活で、マリアはアーティストとしての仕事があったからずっと一緒とはいかなかったし、エルなんてそもそも本部から外へ出る事も稀だったはずだ。

何よりセレナは世界が違う。ヴェイグなどは人間嫌いだから常にセレナの中だったはずだ。

それが、ここでは全て関係ない。同じ空間で寝起きを共にし、支え合って寄り添って生きている。

元々仲が良かっただろうけど、それがより深まったのはやっぱりエルの妹として扱うようになったからじゃないかと思う。

「切歌お姉ちゃん、これもガガガと同じ話数ですか？」

「そうデスね……それぐらいありました」

「一日二話。まるでガガガの時みたいだね」

「本当ですね。でも、寝る前じゃないから少しは大きな声出してもいいですよ？..」

「はい、いいと思います。それに、今日は姉様がいませんし」

「大丈夫だよエル。仁志さんがいるから、マリアがいても何とかしてくれるはず」

「おいおい」

調の言葉に若干慌てる。正直母親モードのマリアの相手は俺だつて苦手だ。

つて、これ完全に父親の扱いだよな。まあ俺は別に父さんに母さんの相手を頼んだ事はないけど。

……今日辺り、電話、してみるか。この時間だと……無理だと思うので夕食後だな。

そんな事を考えつつ、俺は膝の上に乗ったエルの頭を撫でながらモニターを見つめる。

シャイニングガンダムとガンダムマックスターの戦いは熱いよな。

そしてその再戦がまた熱いんだけど、まだ自分先だからなあ……。

「おおっ！ 肩のパーツがグローブになったデス！」

「ボクサーみたい……」

「チボデーさんの専用機らしいガンダムです！」

装甲を外して軽量化すると一気に外見がボクサーらしくなるマツクスター。

その姿に切歌達が反応する。と、そつと俺の腕へ感じる温もりがあった。

「師匠？ どうかした？」

目を動かせば調がこつそりと俺の腕へ自分の腕を絡めていた。

何というか、年齢以上に大人の女っぽい行動を取る子だな、この子。

「いや、別に」

「……そう」

まあ今はいいか。そう思つて不問に処すと調が小さく驚いた後で嬉しそうに微笑んだ。

本当にこの子の潜在的色気は凄い。本気で成人したら男を惑わすような女性になるんじゃないだろうか？

そうやってGガンを見終える辺りで調はそつと腕を離して何食わぬ顔で立ち上がった。

「じゃ、そろそろご飯の支度を始めるよセレナ」

「はい」

「頑張れよセレナ」

「調お姉ちゃん、僕も手伝います」

「ありがとう。じゃ、まずは手を洗おうか」

「はい」

本当にもう小さなお母さんだ。で、切歌はDVDを取り出してこつちへ振り向く。

「ししよー、次はドラゴンガンダムって言つてたデスけど」

「ネオチャイナのガンダムだな」

「強いんデスか？」

「それは次回を見てのお楽しみ」

「ううっ、ししよーらしいデス。じゃ、じゃあじゃあ、別の事を教えてもらうデスよ」

そう言う切歌はチラリと視線を動かしてからこつちへ目を向けた。

「し、ししよー？ えっと、デスね。お、大人のキスってどういうのデスか？」

まさかの質問だ。というか、今の視線の動きはエル達への配慮、なんだらうか？

「知ってどうするんだ？」

「で、出来れば実践をしたいデス」

「実践、ね……」

「デス。ししよー、教えてくださいデス。お嫁さん修行デス」

どうしたものかと思つて視線を動かせば、既にヴェイグはクツションへ身を委ねて睡眠体勢。

台所へ目をやれば、調を中心に可愛らしいコックさん達が冷蔵庫から材料を取り出して楽しげに会話中。

「し、ししよお……ダメ、デスか？」

で、視線を戻せば可愛い弟子が気弱そうな顔。

さすがにディープキスなんて俺も経験がないし、あつたとしても教えるつもりは……ない。

だからと言ってここでデコピンつても、大人の女性として自覚を持ち始めた切歌の自尊心を傷つけるかもしれない、か。

なのでとりあえず知識だけは教える事に。

舌を絡めるキスだと言うと、切歌は想像したけど理解出来なかったらしくて、頭の上に？マークを沢山浮かべているような顔で「よく分からないデス」と言ってきた。

仕方ないので指を使って実演……でいいのか？ ま、やってみせる事に。

すると切歌の顔がみるみる赤くなっていくではないか。最終的には熟れた林檎みたいになってモジモジとしたので指の動きを停止させる。

「し、ししよー？ 大人って、そんなキスするデスか？」

「正確には特別な関係や愛し合ってるって言葉がつく人達だらうけど

な」

男女と言いたいが、昨今の情勢ではそういうの言うのと色々怖いので自重する。

と、そこで思い出す。クリスは俺に男らしくないとか言ってたな。もしかして、みんなの世界じゃ意外とそういう事におおらかなんだろうか？

だとしたら、そっちの世界の方がいいなあ。男らしさも女らしさも差別だなんだと言われるより数倍マシな世の中だよ。

「な、ナルホド……。な、ならアタシとししよーもしていいデスかね？」

赤い顔でこっちへ詰め寄ってくる切歌。何というか、可愛いよな、ホント。

でも……

「ダメ」

「むぎゅ？」

両手で両頬を押さえ付けると、切歌が可愛いマスコツトみたいな声を出した。

さすがにディープキスは、出来る出来ないじゃなくてしてはいけないと思うんだ。

したいかしたくないかで言えば………まあしたくはあるけどさ。

「切歌？ もう一つ教えておくぞ？ 大人のキスは、基本エロいキスだ」

そう言つて手を離す。切歌は頬を撫でるように触りながら顔の赤みを増すと……

「ば、バッチこいデス……」

と言ったので今度はデコピン。痛みに額をスリスリする切歌へため息を吐きつつ、俺は複雑な心境となる。

切歌がキスに前のめりな感じがするからだ。昨夜会った時はそうでもなかったのに、どうしたんだろうか？

「切歌、その、こんな事は言いたくないけど、キスと違ってそう簡単に」「少しでもししよーとイチヤイチャしたいデス。その、アタシも大人

の女デスから」

俺の言葉を遮り、切歌はそうはつきりと言い切った。

その表情には、今まで見てこなかった切歌の女性としての強さや決意みたいなものがあるように感じた。

「……そっか」

「デス。あつ、ししよーししよー、こつちに来て欲しいデス」

そう言っつて切歌は立ち上がると居間の奥へ、押入れの前まで移動した。

一体なんだろうと思っつて俺もそちらへ移動する。

「何だ？ 何か見せてくれるのか？」

「見せると言うかデスね？ えっと……」

ちよんと目の前に座り、切歌は腕を俺の首へ回す。これっつて……

「切歌、ダメっつて言っつたよな？」

「ふ、普通のキスも、ダメ、デスか？ アタシ、ししよーとキス、したいデス」

……こつちの理性をガツンと揺るがす一撃だった。ここで普通のならいいかと思う俺は、やっぱりまだ大人になれていないんだろうな。

そう思いながら俺は切歌のおねだりに屈した。

余談だが、切歌とのキスは若干甘かった。多分おやつとして食べたキャラメルコーンの味だと思う。

「じゃ、後はしばらく煮えるまで注意してお鍋を見ててくれる？ 大丈夫だとは思っつけど」

「はーい」

セレナとエルに煮物の番をお願いしたところで私は居間へと視線を向ける。

やっぱり見えるところに切ちゃんも仁志さんもない。きつと押入れ前へ切ちゃん誘導したんだ。

そう思っつてると切ちゃんが見えるところへ現れた。で、こつちを見て小さく頷く。

作戦成功、だね。じゃあ、次は私の番だ。

「切ちゃん、どうだった？」

「ど、ドキドキするデスね。お家の中で隠れてするキスは、大人な感じデス」

「そっか。じゃ、二人をお願い」

「了解デスよ」

セレナとエルが私の邪魔をしないようにそれとなく切ちゃんに見張ってもらおう。

さつきまでの私がそうだったように、ね。

「師匠」

居間へ移動すると押入れ前で天井を見上げてる仁志さんを発見。

多分切ちゃんとキスしたからだと思う。

「調？　どうかした？」

それでもそういう事があつたって見せないようにする辺り、本当に仁志さんは大人だと思う。

でも、駄目。私と切ちゃんは情報を共有しているんだもん。そう、マリアと昨日の夜大事な話って言ってデートしてた事は既に知っているんだ。

「大事な話がある」

「大事な？」

「そう。師匠にしか言えない大事な話」

場所を移動されないように私は少しだけ急いで仁志さんの前へ移動。

で、そこへ座って向かい合う。

「師匠、お嫁さん修行して」

「……それか」

「手始めに大人のき」

「ちよい待った」

何だろう？　切ちゃんとした事のはずなのに仁志さんがストップをかけてきた。

「えつと……調？　君、もしかして切歌と示し合わせてないか？」

「クスツ、そうだとしたらどうするの？」

ちよつとだけ仁志さんを脅かすように笑うと、その顔が面白いぐらい変化した。

最初はギョツとした感じで、次は苦い物を食べたみたい。そこから困った顔になって、最後はガクツと項垂れた。

「怖いから止めてくれないか？ 正直君らのコンビは色んな意味で恐ろしいんだ」

「いいよ。大人のキスしてくれたら」

「ていつ」

「いたっ」

余裕ある大人の女性をイメージして喋ってたら仁志さんからチョップされた。

「まったく、調子に乗るんじゃない。その、気持ちは嬉しいけど」

「うん」

「そういう事は、そんな頻繁に」

「切ちゃんとしたのに私とはしてくれないんだ」

その瞬間、仁志さんが息を呑んだ。ごめんなさい。でも、私だって好きな人とイチヤイチャしたいから。

こういう言い方をしたら仁志さんがどう思うか分かる。それでも、それでも一緒にいたい。

「……調、君はきつと賢いから分かって言ってるとは思うけど」

「ズルいと思う。でも、マリアとデートしてキスしたならこう思っただ然だと思っ」

はつきり言うのと仁志さんが驚いた顔をして、それから観念するみたいに息を吐いた。

「……そんな事まで見抜かれるのか。女はいくつになっても女とはよく言ったものだよ。ホント、脱帽だ」

そうどこか疲れた声で言っ、仁志さんは私の目をしっかりと見つめてきた。

その表情は真剣で、あのキスをしてくれた時よりも胸が高鳴る。

「大人のキスは無理だけど……」

「あ……」

仁志さんの腕が私を抱き寄せる。見上げればそこには仁志さんの顔。

「んっ……」

優しい、触れるだけのキス。それでも、私にはとつても嬉しい。

触れ合う事って、こんなに幸せになれるんだって、そう思うぐらいだ。

だから離れる時がとつても寂しい。辛い。

「仁志さん、離れたくない」

「調……」

「どうしよう？ キスしてもらった時はそれだけで良かったのに、今の私、抱き締め続けてくれないとヤダ」

そう言うのと仁志さんが急に苦笑した。

「何と言うか、ここまで同じだと感心するよ。切歌もさつき同じような事を言ってくれたから」

「切ちゃんも？」

「ああ。うん、なら同じ答えを返す。俺だって寂しいよ。それに辛しさ。だけど、ずっと抱き合っていたら、キスしてたらそれが当たり前になって嬉しさも幸せもなくなっちゃうんだ。そう思えば、少しだけこの寂しさや辛さを受け入れられないか？」

今のが当たり前になる……。

ずっとキスして、ずっと抱き合って、それって凄く嬉しくて幸せだ。

でも、仁志さんの言うように、そう思っていられるのも途中までかもしれない。

だって、今嬉しかったり寂しかったりするの当たり前じゃないからだから。

「……うん、分かった。師匠の言う通りだと思う」

「ここで師匠呼びに戻るのか……」

「だって、今のとつても師匠みただった」

教えてって感じがしたし、実際私も納得出来た。やっぱり師匠は凄いいい。

「なら良かったよ。じゃ、そろそろ俺も軽くもう一眠りさせてもらおうかな」

そう言って仁志さんはマリアの布団へと横になると、耳栓とアイマスクを装着した。

そのまま見つめていると、やがて仁志さんから寝息が聞こえ始める。

ふふつ、何だか奥さんになった気分。

「調、終わったデスか？」

「切ちゃん……」

聞えた声に振り返ればそこには切ちゃん。セレナとエルはいないから、まだお鍋を見てるんだと思う。

「……ししよー、寝たデスか」

「うん」

言いながら切ちゃんが隣に座る。二人で眠る仁志さんを少し見つけた。

「大人のキス、してくれなかったデス」

「私もダメだった」

「調もデスか。じゃあ、しようがないデスね」

そう言ってる切ちゃんの顔は笑ってる。私も、笑ってる。

「ししよーは、やっぱり大人デスよ」

「そうだね。だから余計大好きになっちゃう」

私達を大事に思ってるからこそ、仁志さんはエッチな事をしないようにしてるんだと思うから。

だけど、そんな仁志さんだから私や切ちゃんはエッチな事をして欲しい。

だって、私達の事を知ってて、ちゃんと向かい合って、エッチな事をしたいのには我慢してくれるそんな強くて優しい人だから。

「……切ちゃん、やっぱりここじゃ無理だと思う」

「デスね。アタシもそう思うデスよ」

「じゃあ……」

「デス」

揃って仁志さんを見つめて私と切ちゃんは眩く。

「師匠（ししよー）の部屋で、お願いしないと……。」

あのバーベキュー以来久々の日中から夜まで全員で過ごせる集まり。

九月も半ばが見え始めた頃のそれは、その開催場所をマリア達の家
の居間ではなく久々のカラオケとしていた。

ただ、その雰囲気はどこか普段の様子とは違っていたが。

「えつと……ホントにやるの?」

仁志だけがマイクを握り、他の誰もがそんな彼を見つめて笑みを浮かべていたのだ。

「勿論です! だって、仁志さんが自分で言ったんですからねっ!」

「ソーデスソーデス!」

「仁志、言った事の責任は取りなさい」

「そうだよ。大人で、しかも男、だろ?」

そう、海へ行く際に仁志が口にした言葉。それを果たしてもらおう
としていたのである。

即ち、仁志によるラブソングの熱唱。ただし、表向きにはそれは熱
血系ロボアニメソングだ。

「ふふっ、仁志さん、自分で招いた結果だから受け止めた方がいいよ
?」

「師匠の歌、楽しみ」

「でも、多分期待してるのとは違うんだよね?」

「ま、あの曲名じゃな」

「ゴードンナー、ですもんね」

苦笑している翼達。それでも楽しみにしている事には変わらない。

「これは本編映像はなさそうです」

「そうか。残念だな」

エルフナインとヴェイグは仁志に言われたようにデンモクで曲を
入れるだけである。

ただ、エルフナインに仁志はある事を頼んでいた。それが意味する

事を彼女が気付くはずもなく、画面に「神魂合体ゴードンナー」の文字が表示される。

流れる音楽を聞きながら仁志は意を決して歌い出す。

歌詞はまさしく王道のスーパーロボットソングであり、途中には技名が入り、最後にはタイトルを歌うという定番中の定番。

切歌はその技名に反応し、調を小さく苦笑させる。響は仁志のアクションからきつと打撃技と察して、その意見に未来やクリスが呆れながらも笑った。

「ラブソング、ね。たしかに歌詞は愛を歌っているけど……」

「甘い感じじゃないよな」

仁志らしさを感じて苦笑するマリアと奏。そんな時、二番を歌い終わった仁志が叫んだ。

「ドライブチェンジっ！ ゴーッ！」

「ドライブチェンジっ！ ゴーッ！」

仁志に続いて声を出したのはエルフナイン。それに全員が驚く中、二人は声を合わせる。

「ダンナー、オンッ！」

それは仁志が事前にエルフナインへ頼んでおいた仕掛けその一であった。

切歌でさえ瞬きさせる中で仁志はここぞとばかりに叫ぶ。

「リボルバアアアオーブンッ！ ゴードンナーッ！ ツインドライブッ!!」

そのまま歌へと雪崩れ込む仁志。そして誰もが気付いたのだ。

彼が散々口にしてきたツインドライブとは、この作品で使われた表現なのだ。

「おー、道標は絆さ〜」

「道標は絆……」

「ししよーらしい歌デスよ」

「ですね」

年少組の装者三人は仁志を見つめて笑みを浮かべる。

「魂込めっ！ フルパワーでっ！」

「ダダッ！　ダダッ！　ダダッ！」

「響ったら……」

「つたく、こういうところはすぐ覚えやがる」

ノリノリでサビの一部を歌う響を未来とクリスは微笑ましく見つめる。

「ハートブレイカーだっ！　ガンガガンッ！」

「……たしかにハートブレイカーね」

「そうだね」

「うん、本当に」

本人に聞こえていないのを良い事に茶化すマリア達ドライディーヴア。

「ゴードンナアアアアッ!!」

ゴードンナーと三回繰り返し、仁志の熱唱は終わりを迎える。

一曲だけでも関わらず、既に全力を出し切ったと言わんばかりの表情で笑みを浮かべる仁志に、響達はらしさをこれでもかと感じて笑みを浮かべて言葉をかけようとしたところで……

「え？」

モニターに次の曲名が表示されたのだ。その曲名は……

「……「キングゲイナー・オーバー？」……」

装者全員が疑問符を浮かべる中、仁志はニヤリと笑ってこう言うのだ。

「まあ、聞いてくれよ。で、ノれるところはノってけると嬉しい」

どういう事だと思いなながらも響達装者九人は仁志の歌を聞く事にする。

モニターに表示される歌詞を見ながら本編映像であるアニメに感心したり、あるいは笑ったりとしていた。

だが、徐々に彼女達は気付いていく。これも仁志なりのラブソングである事に。

「愛と勇気は言葉あぁあっ！　感じられれば力あぁあぁあっ！」

ストレートに愛を歌うのではなく、熱いメッセージとして歌う事。それが仁志なりのラブソングなのだ、そう響達は思った。

さて、二曲連続で熱血系の歌を歌った仁志だが、まだ終わりじゃないとばかりに視線をエルフナイン達へと向けて小さく頷く。

「えっ!？」

「ま、まだ歌うつもりかよっ!？」

響とクリスの驚きに仁志は笑みを返して頷いた。

「当たり前だろ。俺のみんなへの想いは、伝えたい事は、俺が知ってる歌全部を歌ったとしても足りないぐらいなんだからな」

紛れもない本音を告げる仁志。その言葉に九人の乙女は胸を騒がせ、そして心を動かす。

ただし、それではクリスとセレナに巢食ったままの悪意の種は砕けない。

むしろ……

——みんな、か……。分かってるぜ仁志。今はそう言うしかねーもんな。ホントは、あたし様が一番なんだろう？ だって、最初に仁志がキスしたのは、したくなかったのはあたしなんだ……。

——やっぱりお兄ちゃんは優しいな。私の事をちゃんと女性って扱ってくれてる。私が眠ってなかったら、ちゃんと歳を重ねてたらキスしてもらえたのに……。

仁志への想いを、恋心を栄養として悪意の種は育つのだ。

恋とは心を下に書く。つまり下心がある。対して愛は心を真ん中に書く。つまり真心である。

悪意は欲望を刺激するが、真心には、情には手を出せない。故に愛には勝てない。

響達の中にあつた悪意の種や芽。それが砕けたり枯れたりしたのは、別れを最初から意識した上での仁志の強い想いが愛となって送り込まれたためだった。

ただ、クリスがキスされたのは悪意の種が植え付けられる前であり、セレナは額止まり。

この二人は仁志から強い想いを送られていないのだ。

蕾を付けたままのクリスと、芽を出して蕾へと近付くセレナ。それに仁志どころかヴェイグさえも気付く事はない。

——いいわ。その調子でどんどん欲望を深めなさい。初めて惚れた男なのよ？ その手を伸ばし、その体で求めなさいな。心のままに、ね。ふふっ……。

いつでも咲く事が可能なクリスともう蕾が間近なセレナ。それでも表面上はそんな事を気付かれるような事はなく、二人は二人のままに居続ける。

「ハートをみろくつきやないっ！」

仁志の三曲目はその名もずばり“ハートを磨くつきやない”だ。
“飛べ！イサミ”というアニメのOPである。

その今までの二曲とは異なる雰囲気之歌に響達は心をときめかせる。

それは、男が女へ惚れる内容の歌だったのだから。

「あいつに届かない光じや悔しいから〜」

歌われる“あいつ”を自分だと思いつつながら響達はその歌に聴き入った。

すると、ここで微かな、だけでも確かな反応が起きる。

(胸が……あつたけえ……気がする……)

(お兄ちゃんの歌が……心に響くような気がする……)

それまでの二曲は仁志が熱血全開で楽しんで歌っていた。だが、今回はそうではなくその場にいる全員へ届くように歌っていたのだ。

それはいつかの“鋼のレジスタンス”と似ている心の動き。歌の力を届けるような、そんな気持ちで歌われる一種のラブソングがクリスとセレナの心を揺らす。

——ば、馬鹿な……。歌が、歌ごときが悪意の種を破壊するなんてあつてたまるものですかっ！

その言葉通り、仁志の歌は悪意の種を砕くどころか弱らせる事さえ出来ない。

しかし、しっかりとクリスやセレナの心を揺さぶる事は出来たのだ。

「初めて一途にこの胸が、熱いよっ！」

響に始まり、クリス、翼、奏、セレナ、ヴェイグ、エルフナイン、マ

リア、未来、切歌に調。

異世界からの来訪者との出会いが今の仁志を作り、支えている。

中でもやはり自分へ女性として想いを寄せてくれていている九人の装者達へ、仁志は感謝と決意を込めて歌った。

「仁志……今の、その……さ」

「お兄ちゃんなの、ラブソング、だよね？」

その問いかけに仁志は少しだけ気恥ずかしさを見せるも、すぐにそれを消して頷いてみせた。

「ああ、そうだよ。今の俺があるのは、そして今の俺を支えてくれているのは、みんなだからさ。だからそんなみんなに少しでも届くように、俺はこれからも心を鍛える。ハートを磨き続ける」

ハートを磨くという言葉に、彼女達は仁志らしさを感じて笑みを浮かべる。

何故なら彼女達は知っているからだ。仁志が自分達との触れ合いでその在り方を強くしている事を。

「何て言えばいいのかな？俺は弱い人間だ。響と出会うまで、勝手に世の中に失望して、俺はこんなもんだと決めつけてた。だけど、違うんだな。その気になって動き出せば、ちゃんと少しは変わっていくんだ。俺は、今まで変えようとしてたと思ってただけで、そこに強い意志も気持ちもなかったんだと分かった。みんなが、俺の中に変える力を与えてくれて、それを支えてくれたんだ。こんな俺でも、誰かの役に立てるんだって、そう実感出来たから」

「仁志さん……」

響の見つめる先には、照れくさそうに笑う一人の男性がいた。

眠そうな顔をしていた彼は、今やすっかりとした生気あふれる顔をしていた。優しげな眼差しはそのままに、そこへ確かな意思の輝きを宿していた。

「俺の世界とみんなの世界は限りなく近く限りなく遠いかもしい。だけど、それでも俺はもう会えないなんて思わないし思うつもりもない。例えそうなるとしてもだ。だから……エル、頼む」

「はい」

モニターへ曲名が表示される。映し出された文字は「HEAVEN」
N」というもの。

天国を意味するそれにエルフナインとヴェイグ以外が？マークを
浮かべて見守る中、仁志は歌い始める。

それは「YAT安心宇宙旅行」というアニメのOP。そしてその
歌詞に全員が息を呑む。先程仁志が言った言葉の真意がそこにあっ
たからだ。

「会える事より会いたい気持ち。それが大事」

歌われる内容がまさしく別れを迎えた後の仁志の心情にしか聞こ
えない歌。それに誰もが黙って耳を傾ける。

ラブソングであるが、どちらかと言えば決意表明にも近いそれに悪
意さえも狼狽え始める。

——そんな、この男は、二度と会えなくなっても構わないとでも言
うの？ ゲートを失おうと、世界の壁に阻まれても受け入れると、そ
う言うつもりなの!?

強さは愛だと、そう仁志の好きな歌は歌う。ならば、こうも言える。
愛は強さだ。

今の仁志は紛れもなく強くあった。強くなるのではなく強くある。
強くなければならない時に強くなれるのが今の彼であった。

「せーかいが、終わるとしても、二人の愛だけは残るだろう！ マイラ
〜ブ！」

二人と歌うが、それはそのままの意味で仁志は歌っていないと誰も
が分かっていた。

特に彼を女性として想っている九人は。

(仁志さんは、何があっても私との時間は、思い出は消えないって言っ
てる。そして、絶対に会おうとする気持ちを無くさないって)

(ここまで力強いラブソングなんて……。仁志さん、貴方は本当に環
境にその器を適応させていくんだね。……。私も、そんな貴方に相応し
い心でいたい……)

(何だよ……。仁志は、あたしと会えなくなっても諦めないってか？
だからあたしにも同じ気持ちでいてくれてって、そういう事かよ？

……どう、しちまつたんだろうな、あたし。前だったら一緒に気持ちになれたはずなのに、仁志と同じ視点になれたはずなのに……)

(もうっ！ 甘い愛を歌う事なんてないと思っただけど、こんな事ある？ 仁志、貴方は今自分が何をしてるか分かってないんでしょね。貴方は私達にこう言ってるのよ？ 何があっても俺はこの絆を終わらせない。必ず私達と再会してみせるって)

(ししよー、カツコイイデスよ……。どんな時も諦めない事がヒーローの条件デスよね？ じゃあ、やっぱりししよーはヒーローデス。少なくとも、アタシにとっては一番のヒーローなのデスよ！)

(子供のような、だけど大人のようなそんな愛。きつとそれが仁志さん。私も、そんな風になりたい。真っ直ぐ、世界相手にも立ち向かえる、そんな心に……)

(ホント、どうしようかな？ 只野さんに私達の世界へ来てくださって説得しようと思っただけど、こんな熱くて強い気持ちを聞かされたら、それを信じて待ってもいいかなって、そう思えてきちゃう……)

(迎えに行くって、そういやあの誕生会でも歌ってたっけ。仁志、あんたってホント罪な男だよ。もし仮にあたしは仁志に振られたら次の恋、見つけられる気がしないんだけど？ どう責任取ってくれるんだ？)

(お兄ちゃんは、どうあっても私の世界に来てくれないって事？ 会いに来てはくれるけど一緒に暮らしてはくれないって事？ そんなの、そんなのやだ……)

ほとんどが喜びや嬉しさを抱く中、クリスとセレナだけがそうならず心を沈ませる。

その心に巢食った悪意の種が本来前向きになるはずの言葉を、想いを歪めてしまっているためだ。

響達が上向く中でクリスとセレナだけが下を向く。

それに仁志が気付く。彼は彼女達全員をちゃんと見ていたからだ。

(クリス？ セレナも……何で俯いてるんだ？)

歌い終わった時も二人は顔を上げる事無く沈むように俯いていた。

それを見た仁志はクリスはともかく、セレナに関しては心当たりがあるためにどうしたものかと内心で考え始めた。

(やっぱり、俺がどこかで子供扱いしてるのを気にしてるんだろうか。あとは、自分だけギアの追加がなかった事も尾を引いてるだろうし……。クリスの方は、近くデートをする時に探りを入れよう。多分だけど、クリスは寂しがり屋だし俺のために夢を捨ててまでも一緒にいようと言ってくれたから、その辺りが理由だろうしな)

仁志は考えをまとめると、手にしていたマイクを置いてそれとなくエルフナインとセレナの間へと座った。

「さてと、じゃあここからはみんなに歌ってもらおうかな？ 切歌を通じて色々と聞いている事は知ってるんだぞ？」

「なら早速歌いますか。翼、やるよ」
「うん」

奏が何かの曲を入力するやツヴァイウィングが揃ってマイクを手にして立ち上がる。

表示される曲名は“ウルトラマンガイア”だった。

「あつ、ガイアデス！」

「やっぱり迫力あるね、あの着地」

流れる映像にテンションを上げる切歌と調。そんな中、仁志はそつとセレナへ顔を近付けて声を掛け始めた。

「セレナ、ちよつといいか？」

「え？ 何？..」

不思議そうに顔を動かすセレナには、もう先程までの影はないように仁志には見えた。

それでも、俯いていたのは事実であり現実だった。その理由を何とか探り出そうと仁志は少しだけ直球の問いかけを試みる事にする。

「さっきの俺の歌、下手だったかな？」

「そんな事ないけど.....？」

「そっか。ならいいんだ。セレナが俯いてたから聞くに堪えない歌だったのかなって不安になってさ」

やや安堵するような仁志の言葉にセレナは戸惑いと躊躇いを見せ

る。

自分の胸の内を打ち明けるべきか否か。抱いている不安や疑問を告げるべきか否かを。

「えっと、あのねお兄ちゃん」

「うん」

「その、教えて欲しい事があるんだけど……いい？」

「いいよ。じゃ、ここじゃ何だからドリンクのお代わりを取りに行きがてら外で話そう」

「……うん」

仁志は自分のコップを手に取り、中身の緑茶を飲み干していく。セレナもオレンジジュースを飲み干していき、二人は揃ってコップを手に部屋を出た。

「それで、何を教えて欲しいんだ？」

「……私がお兄ちゃんのお嫁さんになったら、一緒に私の世界へ来てくれる？」

その問いかけで仁志はやはりと思つて心の中でため息を吐いた。

セレナが何を考えてあのデートから自分との触れ合い方を変えたのか。その理由を全て察したのである。

「セレナは、自分なら俺と別れる事はないって思うのかい？」

「うん。私はお兄ちゃんの事大好きだもん。ケンカしても絶対仲直り出来るよ」

純真無垢に言い切るセレナに仁志はどうしたものかと答えに詰まる。

何せ否定する事はセレナの事を否定する事にもなるからだ。

だからと言って否定しない訳にもいかない。何故なら世の中に絶対はない。

それをセレナを傷付けずにどうやって伝えるべきか。仁志はその方法を考えた。

「お兄ちゃん、私が大人になったら、大人だったらあの時、ちゃんとキスしてくれた？」

だが、そんな彼へセレナは更なる質問を重ねるのだ。

その裏にある想いと理由に仁志は不味いと直感的に感じた。セレナは焦っている、そう察したのである。早く大人になりたいと。

初めての恋心があまりにも普通ではない状況と相手である事もあり、セレナの精神は不安定になっているのだろうと。

まさかそこに悪意による干渉があるとは仁志も気付けるはずもなく、それでも仁志は今にも泣きそうなセレナの目線の高さへしやがむと、その細い肩へ優しく手を乗せた。

「セレナ、まずは時間をくれないか？　一つずつ丁寧に質問に答えさせて欲しいんだ。その、俺もあつさり答えが出せるものじゃないからさ。な？」

「……うん」

「ありがとう。それと、これだけは分かって欲しい。俺は決してセレナ達と別れる事になっても構わないなんて思っていないって」

「………分かった。お兄ちゃんは、何があっても会いに来てくれるんだもんね」

「ああ、約束する」

儂いながらも笑みを見せたセレナへ仁志は安堵するように笑みを返す。

その後二人は互いに飲み物を混ぜて相手へ渡すという遊びをしてから部屋へと戻った。

ちなみにセレナが混ぜたのはオレンジジュースとコーラ。仁志はピーチソーダにカルピスというどちらも不味くはない物で、セレナから少しもらったエルフナインは自分もそれをやると言う程気に入っただぐらいだった。

「いーま愛が、止まらない」

マリアの歌う「愛が止まらない」を聞きながら仁志は一人苦笑する。

(マリアまで特撮ソングを、か。何だか感慨深いなあ)

そしてその選曲はきつと切歌によるものだろうと、そこまで考えて仁志は思うのだ。

彼女達が元の世界へ帰った時、その心の支えに自分やこの世界で知った事はなれるだろうか。

ヒーロー達の心を別のヒーロー達が支える事があるように、自分の存在がシンフォギア装者の心を支えられる一助になれるのか。それをぼんやりと仁志は考える。

「兄様、一緒に歌って欲しい歌があります」

「何だ？」

そこへ聞こえてきた可愛い娘のようなエルフナインの言葉に仁志の思考は切り替わる。

一瞬にして父親モードとなった彼へエルフナインは嬉々としてデーンモクの画面を見せたのだ。

「これです！」

「……Giant Stepか」

仮面ライダーフォーゼの挿入歌である。それも男女で歌うものだ。

「いいよ。男性パートは任せろ」

「お願いします！」

そうして行われたエルフナインとのデュエットは周囲から嫉妬を向けられる事もなく、むしろ微笑ましきささえ感じさせる事となる。

「立ち止まったら」

「そこからじゃなきや」

「見えない景色」

それはまるで父親と一緒に歌う幼い少女。そんな心と合いますデュエットの後は奏がマイクを握る。

「みんなで盛り上がるよっ！」

流れるは、JUST LIVE MOREだ。

仁志達既に知っている者達が入れる合の手を聞き、切歌達もすぐに覚えて参加する流れは、まさしくこれまでのこの曲定番の流れと言えた。

「今と言うー！」

「「「「「「「「Wow!」」」」」」」」

「風はっ！」

「「「「「Wow!」」」」」」」

全員がテンション高くノリノリとなつての一体感に自然と笑みが零れる。

沈みがちだったクリスやセレナの心も明るくなるそれに悪意は正直舌を巻く思いだった。

——たったこれだけで持ち直すの？ 歌を歌うだけで？ 本当に分からないわ……。

ただもう歌で悪意の種が影響を受ける事はないと分かっているからか、どこか余裕を感じられるような雰囲気ではあったが。

根本的解決にはならないが、仲間と過ごす楽しい時間というもの思った以上にクリスやセレナには大きな力となるのだ。

何せ、装者達は皆多かれ少なかれその心の内に寂しさを抱えている。特に今などは惚れた男が出来た事もあり、その彼と過ごせない事がそれなりの寂しさとなっているのだから。

その寂しさを埋める、忘れさせてくれるのが全員で過ごす時間であり、楽しい思い出なのだ。

その後も仁志が翼に覚えてもらう事も兼ねて『我が名は牙狼』を歌い、途中から翼も一緒になって歌うという展開があったり……

「朝焼けに勝利の刃をかざせ〜」

「凄いわね、このがろう?」

「へへっ、マリア? これでガロって読むんだよ」

「カッコイイデスよ……」

「うん、金色でグリッターティガみたい」

切歌がエルフナインと『VAMOLA!キョウリュウジャー』を歌い、仁志を中心にすぐ合いの手を大勢でやって盛り上がった……

「荒れてやるぜ今日もっ!」

「「「「「ファイヤー!」」」」」」

「行くぜキョウリュウジャーっ!」

「楽しげだな」

「ホントよ。奏まで……」

セレナがヴェイグと二人で『列車戦隊トッキュウジャー』を歌い、

こちらは切歌が率先して合いの手を入れてエルフナインや調などもそれに参加し盛り上げ……

「指さし確認！」

「「G O G O G O G O っー」」

「ノリの良い曲だな、おい」

「見た目ユニークだけど歌はとつても明るくて希望に溢れてるよねっ
！」

響は「ウルトラマンレオ」を歌って仁志を驚かせ、その映像や歌詞に奏達が反応し……

「いまこの平和を壊しちゃいけない。みんなの未来を壊しちゃいけない」

「誰かが立たねばならぬ時、か……」

「何だかこれまでのウルトラマンの歌とは雰囲気違うね」

「レオは実は光の国出身じゃないんだ。そして故郷の星をあの片手がサーベルになってるマグマ星人に滅ぼされてるんだよ。この戦いは、レオが第二の故郷と思って住んでいた地球を守るために自主的に参加した最初の戦いなんだ」

更に仁志からの簡単解説を聞いて、レオの設定などに翼や奏は共感する部分もあったため、その後詳しい話をねだる一幕もあった。

クリスは響や未来と三人で「READY!!」を歌ってみせる。仁志がアイマスが好きだと知ったため、仲良しトリオで覚えたのである。

「「スタート始まる今日のステージ」」

「「「ステージ！」」」

「「チェックマイクメイク一緒に、ショータイム！ トライチャレンジ！」」

「しっかりコール入れてるわね、仁志……」

「海の時は運転してたからやってなかったのか。てか切歌達がノリノリだし」

「ふふっ、可愛いね」

その後を受けてマイクを握ったのは何とドライディーヴァ。

彼女達は “自分 R E S T @ R T” を歌ったのだ。仁志が車でリク
エストしたのを覚えていたため、三人で密かに覚えたのである。

「二輝いたくステージに立ってば」

「F O O ! F O O !」

「おおっ！ そうやってコール入れるデスカ！」

「覚えておこう」

「お前らなあ」

「クリスちゃんも覚えようよ。楽しいし」

「響つてば……」

アイマス曲が続いたのを受け、切歌が調とセレナの三人で “S M O
K Y T H R I L L” を歌って……

「二女はく天下のまわりもの」

「二可愛いなあ……」

「兄様、もっと大きな声で言ってあげてください。姉さん達が喜びま
す」

「エル、多分だがこれは無意識だぞ」

竜宮小町よろしく可愛さと色気のようなものを兼ね備えた三人に、
仁志だけでなく響や未来までも思わず感想を漏らしてしまう程の完
成度だった。

その流れを変えるように仁志が “A n y t h i n g G o e s !
” を歌う。そのオーズの本編映像に誰もが色々と？マークを浮かべ
る事に。

「まくける気しないはず〜！」

「も、もしかしてこれも最終回なのかな？」

「ウィザードはそうでしたし、有り得ますデスよっ！」

「赤いオーズ、カッコイイ……」

「アंकも一緒に戦ってるんですね」

さすがにオーズは映画を見た事で知っているため、全員が説明をし
るとばかりに仁志へ迫った。

そのため、仁志はきつと切歌達が本編を見なくなるだろうと思いつ
つ、最終回の流れを簡単に話したのだ。

「自分のコアメダルを使って変身させるんだ……」

「最後にはそこまでの信頼関係が出来上がってるんだね」

「熱い話と展開じゃないか」

「しかも、覚えていると思うけどオーズは変身する時にその使用メダルを叫ぶ音声が届く聞こえるだろ？ 最終回のアングのコアメダルのコンボだけはその声が届くことになるんだ。タカ！ クジャク！ コンドル！ まるでアングがオーズに宿ったかのように、さ」

それを想像したのだろう。誰もが先程見た映像を思い出してそういう事なのかとばかりに納得し、そして同時に胸を押さえたのだ。

グリードと人間。それが共に手を取り合って滅びへと立ち向かう。最初はいがみ合う事もあった二人が、最後にはその力だけでなく想いまでも合わせて。

「……何だか、ジーンとするなあ」

響の感想が全員の感想だった。オーズになる映司の事は映画で知っているし、アングの事もそれである程度知っているからこそ、その結末には感慨深いものがあつたのだ。

「正直平成ライダーはみんなに全部見て欲しいぐらいだ。クウガからジオウまで、きつと君達の心に刺さって、そして多分支えにしてくれるだろうから」

「ドライブもカッコ良かったデスし、アタシは本当にもっと時間が欲しいデスよっ！」

「それに、可能ならBLACKもちゃんと見たい。映画の変身と当時の違いを見比べたいし」

「あの変身はカッコ良かったな！」

「はい！ 本当に一瞬だけバツタ怪人の姿が見えて凄かったです！」

既に見た映画の記憶を思い出して切歌達が意見を述べる。

あのバーベキューの後、切歌が見ようと思って借りてきていたのだ。

オーズの映画に続いてのお祭り映画にも、やはりストーリーに雑さや粗があるものの最後の逆転劇やRXの変身などを見れた事もあり、誰もが満足していた。

「あー、うん。あの変身はカッコ良かったよね」

「ドライブの必殺技もカッコ良かったよね？」

「うん、あのタイヤが周囲を回転する中を高速で動き回ってキックを決めるのは凄かった」

「あたしはやっぱダブルライダーの復活だろ。オーズの時も思ったけどよ、あの二人だけ特別感が凄いつての」

「そうだよ。それと、安心感みたいなのも凄いある」

「だからこそそのダブルライダー、なんでしょ？」

「うん、そういう事」

そこで一段落のような空気になり、それぞれがトイレや飲み物の補充などで動き出す。

残り時間は一時間を切ろうとしていた。

「兄様、一ついいですか？」

「何だい？」

「仮面ライダーは改造人間が基本ですよ。では、その寿命はどうなっているんですか？」

エルフナインの疑問はある意味で当然とも言えた。

人ならざる存在である改造人間。その寿命は、活動限界はどうなっているのかと。

仁志はその疑問へ微かに悲しげな顔をして首を横に振った。

「分からない。内部のメカが老朽化してしまうのか。あるいは耐久限度を迎えてしまうのか。どちらにせよ、彼らの死は自然の生命とは大きく異なる状態になるだろうね」

「そうですか……」

「タダノ、クウガはどうだ？」

「下手をすればクウガは何万年単位で生きる可能性もあるよ」

「え（な）っ!?!」

エルフナインとヴェイグが揃って目を見開く。

そこで仁志は話し出すのだ。第0号と呼ばれる存在を封じていた古代のクウガは棺が開けられる瞬間まで生きていた事を。

つまり、そこから逆算すればクウガはアマダムの力を使う事で何千

年何万年と生きる事が可能なのではないか。そう仁志は告げたのである。

「実は、都市伝説みたいな話なんだけど、クウガのアマダムとBLACKのキングストーンは同一なんじゃないかって考察があるんだ」

「「「「「ええっ!?」「」「」「」」」」」」

いつの間にか全員が聞いている事に軽く驚きながら仁志は話す。

それはクウガのアマダムの色から始まり、意思によってその姿を変える能力などがRXのロボ・バイオの変化に近い事など様々だった。

「で、この説がもつとも有力に聞こえる情報は」

「ドキドキ、デス」

「……クウガの話がもう少し進んだら教えるよ。一種ネタバレになるんだ」

「仁志さあくん！」

「ここまで来てそれはないデース！」

まさかのオチに響と切歌が口を尖らせる。そんな二人に申し訳なさそうな顔をしながら、仁志はとある曲を入れた。

「時を超えろ！ 空を駆けろっ！ この星のためっっ！」

「仮面ライダーBLACK」を歌う仁志。だが響達の視線は彼ではなくモニターの映像へと向けられていた。

「あれがバトルホッパーデスかつ！」

「思ったよりも可愛い……」

「というか、あの最初の演出何？ クールじゃん！」

「イントロもあってたしかに痺れる雰囲気だったわね」

「改めて見ると、他のライダーよりも生物的な要素が多いな」

「だよな。あの腕や足のところとかそんな感じだ」

本編映像は昭和の頃のもの。それは響達にとってはどうしても古さが拭えない映像だ。

それでも、そこから感じる力のようなものは嫌いではなかった。

特に彼女達が反応したのはラスサビ付近での初変身シーンだった。

「凄い気迫……」

「怒りと悲しみが目に宿ってるみたい……」

「これが初変身、か？」

「おそらくそうでしょうね。状況が仁志の話と近いもの」

そんな風に感想を言い合いながら映像が終わると、仁志が複雑そうにマイクを持ったままでこう言った。

「あのお……BLACKの映像に反応してくれるのは嬉しいんだけど、何となく俺の歌が邪魔って言われてるかなって思うんで、感想はこここそ言わないでくれると」

「大声で言った方が傷付くでしょ？」

「いや、それなら俺も歌うよりも開き直って解説に走れるし」

「それなら最初から歌うんじゃないやねえ！」

「まあまあ、抑えてクリスちゃん」

「只野さんらしいと思って、ね？」

仁志の言葉にクリスが突つかかろうとするのを両隣の響と未来が止める。

その様子に仁志は苦笑して頬を掻いた。

「実際BLACKは話だけで終わらせたからさ。タمامシ怪人にバトルホッパーが操られてしまう話とか、カニ怪人に負けてライダーが特訓する話とか、ちゃんと見てもらいたい話がいくつもあるんだ」

「でも、仁志さん？ それはあの映像にはないよね？」

翼の苦笑交じりの指摘に仁志は無言で頷いて項垂れた。

「はい、私が悪うございました」

「ふふっ、だそうだぞ雪音。怒りを鎮めてくれないか？」

「別に怒ってなんかねーよ。ただ、仁志が自分の歌に自信を持たないのがちよつとな」

「うんうん。仁志さん、仁志さんの歌、私大好きですよ。ね、未来？」

「うん。只野さんって、何て言うか好きな歌を歌ってる時が分かり易いんです。楽しそうに、あるいは自分の気持ちを込めてるって感じがするから」

「そ、そう？」

「そうね。そういう意味じゃハートを磨く歌は逆に自分じゃなく私達へ届けて感じがしたわ」

「そうだね。仁志先輩ってさ、歌う時に全力なんだよな。ほら、鋼のレジスタンス、だっけ。あれの時なんか凄かったし」

奏の言葉に誰もが納得するように頷いた。仁志だけがそれに照れくさそうに頭を掻く。

何せあの時は本気で響達を奮い立たせたいと思って歌ったのだ。

故に歌う時に上手くなど考えず、歌の力と自分の想いが伝わればかりに叫ぶように歌ったのだから。

「そう言われるとちよつと自信がつかない。うん、じゃあ連続でいかせてもらっていいか？」

その問いかけに全員が笑顔で頷き、ならばと仁志はみんなが気に入るだろうという理由で“GEEDの証”と“オーブの祈り”を歌った。

「僕が、僕らしくいるために。誰の、笑顔も曇らせない」

まず最初に歌われた“GEEDの証”は、その歌詞からこれまでのウルトラマンらしくないものを感じ取った響達が首を傾げるものの、全てを歌い終わったところで仁志が簡単に告げた説明で興味を覚えた。

それは、このジードが作られたウルトラマンという部分だ。詳しい事は避けたが、むしろ故に興味を覚えるというこれまでの流れとなつたのである。

「せ〜かいじゆうが〜君をみつめてる〜」

「二二二つのパワーで！ 戦えウルトラマン！ オ〜ブ〜っ！」「二二二」

続いての“オーブの祈り”は一転してウルトラマンらしさに溢れる歌であり、当然のように最後には響、切歌、エルフナイン、セレナまで参加。

ここでも歌詞の内容から疑問を感じた響達が終わった後に仁志へ説明を求めた。

その全員の表情に仁志は残り時間を確認し、多少はいいかと簡単に話す。

「えつと、オーブは色々あって自分本来の姿で戦えなくなったウルトラマンなんだ」

「自分本来の？」

「そう。で、彼はそのために他の先輩ウルトラマン達の力が封じられたカードを使って変身するんだ」

「カードを使って、デスカ？」

「うん。基本形はウルトラマンとティガのカードを使って変わるスペシウムゼペリオン。光の力を借りる姿だ」

言いながらスマートフォンで検索をかけ、仁志は変身シーンの動画を再生する。

その音声を聞いて何となく理解した切歌は、当然こう仁志へ問いかけた。

「ししよー、それもクウガみたいに長いデスカ？」

「オーブはTVも比較的短い話数で終わるよ。あつ、でもその前に見ておいた方がいい映画が最低二本ある」

ここで仁志はオーブを見る前にと“ウルトラ銀河伝説”と“劇場版ウルトラマンXくきたぞ！われらのウルトラマン”を見ておく事を勧めた。

そうなる鑑賞会をしたいと切歌が言い出すのは当然である。ならばと、この後に見る事になったのは流れとしては必然だったのかもしれない。

そうしてカラオケでの賑やかで楽しい時間は終わりを迎え、そこからは三つに分かれて動き出す事に。

一つはマリア達スーパーへの買い物チーム。当然ではあるが昼食及び夕食の買い出しである。

一つは切歌達彼女のバイト先へのレンタルチーム。これから見るための映画を借りに行くのだ。

そして最後の一つは仁志達平屋への帰宅チーム。彼らは空調の切れた室内へ入り、速やかに冷房を作動させるといふ過酷な任務が課せられていた。

「じゃ、空調よろしく」

「分かったよ」

「ししよー、よろしくデスカ」

「はいはい」

マリアと切歌の言葉に微妙な表情を返して仁志は歩き出すと、その後を響とクリスがついて行く。

彼女達も帰宅組なのである。そこには乙女らしいちよつとした打算もあつた。

「仁志さん、待ってくださいよ」

「二人で行くなつての」

「こんな暑いんだ。なら、嫌な事はさっさと終わらせておきたいんだよ」

九月へ入つてもまだ炎天下の続く世の中である。

残暑と言うよりはむしろ猛暑と言つても差し支えない程の熱量を太陽は放ち、それが容赦なく仁志達を襲う。

あの夜は腕を組んだ二人も、さすがに日中はそういう事はしない。それでも、その距離感は単なる知り合いではないと思わせる程近くはあつたが。

「何だかこっちは暑さがキツイな……」

「まあ、こっちは典型的な夏暑く冬寒いからなあ。あと、湿度が基本的に高いからジメジメするんだ」

「あー……たしかに梅雨時期酷かったです」

「そーいやそーうだった。成程な、そーいう事かよ」

汗を流しながら歩く仁志達。だがその表情はどこか明るい。

仁志はある意味で自分の意思を響達へ伝える事が出来たからであり、響とクリスは好きな男と一緒にいられるからである。

今のようない愛ない時間さえも、終わりがちらつき始めた現在では大事な時間。その想いは三人共通であつた。

ただ、仁志はともかく響とクリスにとつては若干異なる想いも含んでいたが。

平屋に到着しても辛い状況に変わりはなく、むしろ室内にこもっている熱気に三人は表情を歪める。

窓を開けたまま空調を入れ、扇風機で中の熱気を逃がすようにしながら三人はしばし暑さの中へ身を置いた。

しばらくそうして、窓を閉め切り今度は室内が冷えるのを待っていると、響の額から流れた汗が顔を伝い胸元へと落ちる。

「……シャワー借りてもいいですよね？」

「構わないと思うよ」

「クリスちゃん一緒に浴びる？」

「シャワーは一つだろ」

「じゃ、お湯張る？」

「二時間かかるぞ」

仁志とクリスの声が重なり、思わず響が笑い出して、それに仁志も笑いクリスも笑い出す。

結局まず響がシャワーを浴びる事になり、次にクリス、仁志が最後となった。

「仁志さん」

「ん？」

「えっと、の、覗いてもいいですかあ！」

「馬鹿な事言っていないでさっさと汗流してきやがれっ！」

「ううっ、お尻蹴らないでよお……」

響の尻を蹴ってクリスが風呂場へと彼女を追いやった。

その光景に仁志は小さく苦笑する。響とクリスの仲の良さが最初に出会った頃より格段に上がっていると感じたためだ。

(以前だったらもっと加減してただろうな。それが無いって事は逆にそれぐらいやってもいいって事だもんなあ)

そう思っている仁志の横へクリスが座る。そのまま彼女は密着するように体を彼へ押し付けた。

クリスの大きな乳房が仁志の腕へ押し付けられて形を変える。

「クリス？」

「いいだろ、今ぐらい」

「い、いや、さすがに」

「好きな男にくっつくぐらい普通だろ」

やや照れを浮かべた表情でそう言われてしまうと仁志としても強く出られない。

それに嫌ではないのもあって、仁志は若干赤い顔のままクリスマスを受け入れる事にした。

無言で涼しくなり始めた部屋で過ごす仁志とクリスマス。言葉はないものの、クリスマスはその体で仁志の劣情を煽る様にしている。

「……クリスマス？」

「何だよ？」

「前、俺言ったよな？　そういう事されると」

「お、押し倒せばいいだろ？　あたしは、そうされても構わないって言ったぞ」

ぶつかる視線。嗜めようとしていた仁志と熱っぽく見上げるクリスの眼差しが絡み合う。

やがて仁志が少しだけ眼差しを和らげてクリスマスへ軽くキスをした。

「仁志……」

「クリスマス、場所が悪いよ。そういう事はホテルでやれ、だな」

「っ?!　そ、そこならいいのかよ？」

「まあ。ただ行く事があるとしても当分先だけだよ」

苦笑して仁志はクリスマスの事を見つめた。

「どうなるにしろ、邪魔をしてくる悪意を退治しないとエッチなんて出来ないって」

「っ……そ、そうだな」

自分で誘っておいて言葉として出されると恥ずかしくなってしまう。

そういうクリスマスの反応に仁志は微笑ましいものを感じて笑った。

「「「ただいま（デス）っ！」「」」

「「おかえり」

まず帰宅したのは切歌率いるレンタルチーム。エルフナイン、セレナ、ヴェイグと共に切歌がレンタル用の袋を手に笑顔で帰ってきたのだ。

「「「すずしく」」」

彼女達は冷房の効いた居間に入ると帽子を取って緩んだ顔を見せた。

その様子に仁志とクリスが苦笑する。切歌達三人が完全に姉妹にしか見えなかったためだ。

「今響がシャワーを浴びてる。何なら切歌達は少し温い温度で風呂に入るか？」

「ぬるい？」

「その方がいいかもしれないねーな。あたしがシャワー使う時に準備してやるよ」

「お願い。熱い湯よりはぬるま湯の方が温水プールみたいでいいと思うし」

「おう」

「温水プールデスか……。何だかあの時の水着で入ったお風呂みたいデスね」

「そうですね。何だか懐かしいなあ」

「まだ一か月ぐらい前の事なのに、僕も懐かしいって思います」

「そういえば、前にセレナはタダノと風呂に入るのを却下されていたが、エルはどうなんだ？」

扇風機の風が来る場所へクッションを移動させたヴェイグがそう問いかける。

名前の出た二人が仁志へ顔を向けると、彼は意外と思い悩むように腕を組んでいた。

「うーん……エルは微妙なラインだなあ。セレナはもう異性に裸を見せちゃいけないだろうけど、エルはまだそういう意味じゃ子供って言えるし……」

「僕は兄様なら気にしませんよ？」

「あー、うん。それは分かるんだ。でも、それはセレナも言ってたからさ」

「うん、私もお兄ちゃんなら構わないもん」

「セレナは構わないとダメデス」

「そうそう。まあ、エルも女の子だし、止めた方がいいかなとは思う」「残念です。でも、兄様は僕を女性として扱ってくれたと思って喜びます」

「あはは、それなら良かった」

そう言つてエルフナインの頭を撫でる仁志は完全に父親のそれだった。

そこでさつぱりした顔で響が現れる。その頭に南国風の飾りがあるので水着ギアを展開しているのだろう。

「あ、切歌ちゃん達だ。おかえり」

「「「ただいま（デス）」」」

「じゃ、次はあたしだな」

「うん、行つてらっしゃい」

響と入れ替わりでクリスが居間を後にすると、仁志の膝の上へエルフナインが移動した。

「あつ、エル、ズルい」

「はいはい。じゃあセレナは撫でてあげるから」

「ししよー、そうになるとアタシがさびしーデス」

「仁志さーん、私も〜」

「いや、響はダメでしょ」

「タダノは人気だな……」

膝にエルフナイン、両側にセレナと切歌、更に響が背中にくつつき、身動きがとり辛くなる仁志を眺め、ヴェイグは扇風機の風を浴びながらのんびりとそう呟く。

「ヴェイグ、上に何かかけて寝た方がいいぞ。これだけ冷房が効いてる中で扇風機の風を直に浴びると風邪を引くかもしれないし」

「あつ、じゃあ僕がタオルをかけます」

トタトタと動いて引き出しの中からハンドタオルを取り出すと、エルフナインはそれをヴェイグの体へとかけた。

そのタオルを押さえるように腕を動かし、ヴェイグはエルフナインへ笑みを見せる。

「エル、ありがとう」

「いえ。あつ、お昼ご飯になったら起こしますね」

「おお、助かる」

そんなやり取りを眺めて仁志達は笑顔を浮かべていた。

「和むなあ」

「デスデス」

「ヴェイグさん、今じゃ私よりもエルと仲良しなんですよ」

「そうなんだ。でも、ちよつと分かるかも。エルちゃん、とっても素直で優しい子だもんね」

「はい。私の自慢の妹です」

満面の笑顔で言い切るセレナ。もう彼女の中ではエルフナインは完全に妹なのだ。

この数か月の生活はセレナの中で最早一時的なものではなくなりつつある。

平和な時間。穏やかな暮らし。幸せな世界。

これが持つ見えない毒性が元来争い事が好きではないセレナの心をすつかり染め切ってしまったていた。

それに誰も気付けない。気付くはずがない。何故なら、それは多かれ少なかれ装者達全員が犯されている毒なのだから。

「つと、そうだ。えつと、マリア達が帰ってきたらみんなに相談したい事がある」

「「相談?」」

「そう。そんなに難しい事じゃないよ。それに、これは避けては通れない事だし」

仁志のその言い方に響きは首を傾げる。

やがてクリスがシャワーから出てきて、入れ替わりに切歌達三人が動き出した辺りでマリア達が帰宅。

マリアと未来による昼食の準備が始まる中、調と翼が夕食の食材を冷蔵庫へとしまい、仁志は奏から渡されたレシートを眺めて財布から何枚かの紙幣を取り出した。

「これ、マリアへ渡しておいて」

「了解。マリアへ」

「何?」

「これ、仁志先輩から」

「そう。悪いけどお財布にしまっておいてもらえる?」

「はいはい」

やり取りだけなら完全に家族だろう。

奏がマリアの財布へ千円札をしまっている横では、翼が調へ仁志から教わった贅沢ペペロンチーノの作り方を教えていた。

「と、こんな感じだ。私でも初めてで出来たから月読ならばまず失敗しないだろう」

「でも、結構材料費かかりそう……」

「何、人数分で考えればそこまででもない。何なら生パスタではなく乾麺の方を使えば手間はかかるが安く済む」

「成程。じゃあ、今度のお昼に切ちゃん達へ作ってみよう」

良い事を教わったとばかりに笑う調だったが、その会話を聞いていた奏が得意満面の翼へニヤツと笑って声をかける。

「翼？ あたしと未来、それ食べさせてもらってないんだけど？」
「っ?!」

「だよね？」

「そうですね。いつ食べたんです？」

「そ、それは……」

「そういや、いつだったか起きたらにんにくの良い匂いがしてた事あったっけ」

「じゃあ私がバイトの時に一人でお昼に食べたんですね？」

「翼、貴方ね。気持ちは分かるけどあれ結構匂うんだから」

「い、いや、失敗したらいけないと思って自分だけで試したんだ。決して独り占めしようと思った訳ではなくてだな？」

しどろもどろになる翼をマリア達が苦笑しながら見つめる。

一方、仁志達と言え寝ているヴェイグを見つめて微笑んでいた。

「可愛いなあ……」

「ま、そうだな」

「こうなるとヴェイグの一族が沢山いた頃を見てみたかったよ」

「あ……」

愛らしい光景が展開されていただろうと思い、響とクリスが思わず声を出した。

二人は女性らしく可愛いものに弱い。すやすやと寝息を立てて眠るヴェイグを見て、それが沢山いる様を想像して表情を緩ませても仕方ないと言える。

「どこかの平行世界にヴェイグの仲間がいるといいなあ」

「どうしてです?」

「いや、それならヴェイグが嫁さんもらえるかもしれないかなって」

「ヴェイグ(さん)が結婚……」

響とクリスの脳裏に浮かぶのはヴェイグとそっくりな存在が白い花嫁衣装を着ているもの。

そしてヴェイグは若干照れながら黒いタキシードを着てその横に立っているという光景だった。

その微笑ましい想像図に二人は揃って笑みを浮かべる。

(どうせなら……)

そしてそのままヴェイグ達が自分と仁志へと置き換わるのはある意味で当然と言えただろう。

恋する乙女の二人。しかも今や両想いと言えなくもないのだ。

(只野響、かあ……)

(た、只野クリス……か……)

少しだけ赤くなった頬で二人は隣の男を見上げる。

「ん? どうかした?」

「………何でもない(です)」

以前であれば照れくささと恥ずかしさで顔を背けた二人も、今回はどこか嬉しそうに笑みを返してそう告げた。

仁志はそんな二人に何か言う事なく、ただ何かを察して苦笑するしかない。

(多分自分が花嫁になる想像でもしたな?)

ただ思っても口には出さない。言えば面倒な事になると思っただけではない。望まぬ方向へ話が転がるだろうと思っただのだ。

「上がったデース」

「あつ、姉さん達だ。おかえりなさい」

「おかえりなさい」

そこへ現れる湯上り三姉妹。揃って寛ぐ格好となり、それに若干マリアが苦い顔を浮かべた。

何せ三人揃ってもう寝間着姿だったのだ。時刻はまだ午後一時を過ぎた辺りでそういう格好には早いと思っただのである。

「ただいま。それで三人共？ もう寝る格好なのはどうして？」

「この方が楽だからです（デス）（だよ）」

「……せめて夜まではちゃんとした格好で」

「まあまあ、いいじゃないかマリア。外へ出るとしたら切歌達だつて着替えるよ。な？」

マリアの視線を塞ぐように動き、仁志はチラリと三人へ顔を向けて表情を領いてくれとばかりの必死なものへ変える。

「……うん（はい）（デス）」

「ほら、こう言ってる事だし」

「……まあいいわ。それで許しましょう」

何が裏で行われていたかをおぼろげに察しながらもマリアはため息だけで不問に処した。

それに安堵の息を吐く仁志達と、それを見て微妙な表情を浮かべる奏や未来。

（何だよ、今の。完全に家族じゃん……）

（困るなあ只野さん。こうやって無意識にマリアさん達と家族らしい事されると、私達が複雑な気持ちになるんだけど……）

女として不満を覚える奏とこの状況を何とか継続しようと考えてる未来にとって仁志の父親的振る舞いはあまり歓迎出来るものではない。

だが、マリアは違う。顔には出さないがどうしても仁志の父親的振る舞いは嬉しく思ってしまうのだ。

（ふふっ、もう本当にエル達の父親気分なのね。年齢もあるんでしようけど、本当にらしく見えるわ）

ただ、それは優越感ではなく幸福感だった。仁志を夫として捉えての感情ではなく、一人の人としての感情である。

しかもそう感じているのはマリアだけではなかった。

(仁志さん、お父さんになったらこういう感じだっただけで本当によく分かる。うん、やつぱり子供に優しく出来て、時々厳しく出来る仁志さんは旦那さん向き)

調は小さく笑みを浮かべて仁志達を見つめていた。

親というものと触れ合った事がないため、調にとっては仁志の在り方や振る舞いはどこか理想とする父親像である。

それは仁志が物心ついた時から両親に育てられ、その愛情や躰を覚えていくからこそそのものだった。

「そういえば仁志さん、みんな揃ったら何か相談したい事があるって」「ああ、そうだった。えっと、残りのカオスビーストは二体だ。だから、近い内に一体倒しておきたいと思ってるんだけど、どうかな?」

間違いなくその問いかけに空気が変わった。響を始めとする数人は構わないはやや消極的な雰囲気を漂わせ、マリアを始めとする数人は構わないという雰囲気を出したからだ。

「いいと思うわ。あまり時間を与えると厄介になるだろうし」

「ああ、私も同感だ。今の私達にはツインドライブがある。それが切り札として機能する内に相手の戦力を削っておくべきだ」

「だね。うし、じゃあ昼飯前に一仕事?」

「アタシはそれでも構わないです」

「私も構わないです。師匠、怪獣ギアの力を試してみたいから鎧モスラギア、お願い」

「そうだな。アマルガムはもうその力が分かったし、なら他の戦闘向きなギアでのツインドライブを試しておく方がいいか」

調の意見に同意するように頷き、仁志は顔を響達へ向ける。

そこには今まで見た事のないぐらいに気乗りしていない響達がいる。

「えっと、そっちはどうした?」

「え、えっと……」

「残り二体、だろ。下手すると挟撃されるかもしれないねえ」

「そ、そうかも。実際最初にカオスビーストが出た時はそうされそうだった訳ですし」

響、クリス、未来の三人が揃って難色を示す。それに内心で疑問符を浮かべつつ仁志は彼女達の不安を何とかするべく頭を巡らせた。

挟み撃ちが怖いと言うのであれば、九人いる装者で前衛と後衛を決めておき、更に後衛の一人は後方への警戒を主とすれば何とかなるだろうと考えた。

「じゃ、こうしよう。みんなの中で一番防御力に秀でてる未来が最後衛になって後方への警戒をする。ミラーリングギアツインドライブなら攻防のバランスもいいし」

「そ、それは……」

「お兄ちゃん、もし二体出て来たらどうするの？」

反論出来ないような意見にクリスが何とか意見を口を開くも言葉に詰まった瞬間、セレナが不安そうにそう切り出した。

「二体同時に、か……」

「うん。悪意も私達がカオスビーストを簡単に倒した事を知ってる。だから、今度は一体じゃなくて二体で攻撃するって事、ない？」

「有り得ない、とは言えないなあ。うーん……」

「そ、そうだけ仁志。もしカオスビーストが二体同時に現れて、そいつらを倒したらそのまま悪意と決戦ってなりでもしたら……」

セレナの意見へ更に考えられる最悪の状況を重ねるクリス。それはこれまでのような前向きな気持ちではない。どうしても戦いを避けたいという後ろ向きな気持ちからの意見であった。

「成程なあ。相手も長期戦を捨てて一気に消耗したところを狙う、か。エル、どうだ？」

「ないとは言いません。悪意も既に皆さんが得た力の凄さは知っています。時間をかければ自分だけでなくこちらにも有利に働くと考えてもおかしくはないかと」

「そっか。でも、せめて残り一体にはしておきたいんだ。もしカオスビーストが時間と共に強化されていくかもしれないなら、出来るだけ早く倒すべきだと思うし」

「ど、どうしてですか？ ツインドライブを使えばそう簡単には」

仁志の不安は分からないでもないが今の自分達にはそれを感じさ

せない力がある。そんな気持ちで響の言葉には滲んでいた。

だからこそ、仁志はやや厳しい表情でそんな響へこう言い返したのだ。

「かつてのイグナイトと同じなんだよ。切り札は一度見せれば以降はただの強い札だ。それに、相手がそれへ対処してこないとも限らない。なら、まだ強い札である内に切るべきなんだ。対策されて切れない札や切っても意味のない札になってからじゃ遅い」

「一理あります。実際悪意は二度ツインドライブに敗れています。いえ、正確には三度ですね」

「そうか。セレナが巫女ギアを初めて展開した時……」

「となると、だ。何らかの手を打ってきても変じゃないね」

防人モードへ切り替えた翼の意見にマリアが反応し、奏がそれを受けて仁志の意見を肯定する。

更に仁志は響達へこう続けた。

「現状ツインドライブの弱点があるとすれば、それは柔軟性のなさだ。正確には状況適応力か」

「そっか。師匠じゃないと他のギアのツインドライブへ切り替え出来ない」

「じゃあ、アタシ達が使いたいギアのツインドライブは出来ないって事デスか」

「出来ない事はないよ。例えば戦闘中このギアのツインドライブがいと思うたなら、みんなが俺へ教えてもらえば」

「ちよつと待ってください。まさか仁志さん、我々と共に来るつもりですか？」

「ああ。最低でも最後のカオスビースト戦には、な」

そのはつきりとした言葉に誰もが息を呑んだ。

仁志は気負う風でもなく、ただ少しだけ真剣な表情でそう言い切った。

思わぬ発言に誰もが声を失う中で仁志は依り代を取り出して告げる。

「悪意が最悪の場合、こう言い出すかもしれないんだ。自分を倒せば

ゲートが消えるぞ。それでもいいのかって」

「「「「「つ?!」」」」」」

仁志の言葉にマリアとヴェイグ以外が息を呑んだ。それ程にその言葉は衝撃的で、彼女達がどこかで考えないようにしていた事だった。

「俺がそこにいなければみんなはどうする？ 迷うんじゃないか？

悩むんじゃないか？ だけど俺がいれば、その可能性はなくなるだろう？」

「ま、待つて仁志。それじゃあ、貴方は最悪の場合」

「まあ、この世界とお別れになるかもな」

「い、いいんですか？」

「どこかで考えてはいたんだ。悪意との最終決戦じゃツインドライブを使い分けたりする必要もあるんじゃないかって。その場合、俺もみんなと一緒に戦わないといけないだろう？ ここに残ったところで遠隔でドライブチェンジ出来るとは限らないし」

「でも依り代があるからって戦いになんて」

「じゃあ、俺がここに残っていても悪意の揺さぶりに動揺せず意思を貫いてくれるか？」

あくまでも冷静に、淡々と仁志は響へ尋ねた。その目は優しく、けれど返事をしない事を許さない力が宿っていた。

その眼差しを前に響は答える事が出来なかった。仁志が傍にいない時にその繋がりを断つと言われたら、彼が懸念するように迷い、悩み、意思を曲げてしまうと思つて。

「響、俺は言ったはずだよ？ 何があつたつて俺はみんなへ会いに行く。ゲートがなくなつたつて関係ない。いつか必ず会いに行くつて。そんなに俺の言葉は信じられない？」

「そ、そういう訳じゃ……」

「クリスは？」

「あ、あたしは……」

「未来、どう？」

「それは……」

「セレナはどうかな？」

「えつと……」

消極的な四人へ仁志は優しく問いかけ、その答えを待った。

マリア達も何も言わずに響達の言葉を待つ。今は急かしてはいけないとそう思つて。

しばらく静寂が居間を包む。時計の時を刻む音だけがその場に響いた。

「……なんです」

「え？」

そんな中、響の小さな呟きが仁志達の耳に聞こえてきた。

ただ、全てが聞こえた訳ではない。何を言ったのかと、そう思つて仁志が尋ねようとした瞬間だった。

「嫌なんですっ！ 仁志さんと、大好きな人ともう二度と会えなくなるかもしれないって事がっ！」

響の感情が爆発したのだ。泣きそうな顔で仁志へ己が思いの丈をぶちまけるように声を放つたのだ。

「ただ会えなくなるかもなら何とか耐えられます！ でも、でも二度となんてついたら無理なんですっ！ 初恋なんですっ！ ファーストキスの相手なんですっ！ 結婚して欲しいって思う人なんですっ！」

「響……」

「ずっと一緒にいたいって……もつと傍にいたいって……つく……仁志さんは、私の、私のお日様なんです……ヒーローなんです……っ」

ぐしゃぐしゃに泣き崩れた顔で仁志へゆつくりと歩み寄る響。

そんな彼女を仁志は目を逸らす事なく静かに腕を広げて受け止めるように抱き締めた。

「そっか。ありがとう響。嬉しいよ、君の大きな支えに俺はなつていたんだな」

「仁志さあん……」

「そっだよな。俺みたいに君と出会った時から別れを意識してたなら別だけど、そっちはこれまで平行世界とは行き来出来る結末ばかりで

来たもんな。ここだけ意識を切り換えろなんて無理な話だ」

泣いた子供をあやすように優しく背中を擦り、仁志は柔らかい声で響達の心境を慮った。

今までは訪れた世界と繋がりを持ち、それが当然としてきた響達。だからこそ訪れた世界と二度と行き来出来ないかもしれないという状況は初めてだった。

しかも、よりもよってそこで初めて恋をし、想いを結び、添い遂げたいと思う相手と出会ってしまったのだから。

「クリスも未来も、セレナもそういう事でいいのかな？俺と二度と会えないってなるのが嫌だからカオスピーストと戦いたくないって。悪意と決着を着けたくないって」

「……ああ」

「はい……」

「うん……」

「そうか。うん、そうだよな。普通に恋愛をしたり出来るならともかく、君達はそう簡単に出来ないもんな。割り切れって、いつか上書き保存すればいいって簡単に言えないか」

「上書き保存って……仁志、貴方ね」

仁志の告げた表現にマリアが苦い顔をする。

彼女として本来男女の恋愛がどういうものかがある程度知っている。

その破局後の動きも知らない訳ではなかったのだ。

一般的に男は名前を付けて保存で女は上書き保存と、そう言われている事を。

「仁志さんらしい言い方だ。だが、そうですね。私達が普通に恋愛をするのは難しいと言わざるを得ません」

「出来たとしても装者の事は秘密。急な呼び出しがあればデートだろうか何だろうが出動しないといけない、だもんな。これを理解してもらうには話すしかない訳だけど……」

「下手に私達の事を知れば、狙われる可能性も出てくる。いえ、そもそも交際を始めただけでもそうなるかもしれないわ」

「そうやって聞いていると、君らの彼氏になるには忍者か変身ヒーロー

にでもなるしかなさそうだなあ」

遠い目でそう言いながら仁志は響の頭をそつと撫でた。

「あ、あの、仁志さん。もういいです」

「そう？　なら良かった」

安堵するように響を放す仁志。その離れていく温もりに響は若干寂しそうな顔をするが、それでも振り払うように目を閉じてその場から立ち上がった。

「一緒に、来てくれるんですよね？」

「ああ、こいつがあれば俺もゲートの中へ入れる。可能なら今回のカオスビーストとの戦いで感じも掴んでおきたいし、本気で最後の決戦時は何があっても俺も参加するつもりだから」

「仁志……」

「クリス、以前君が俺へ言ってくれた言葉は嬉しかった。だから、俺もこう言おうか。俺はこの世界を捨てるつもりはないけど、悪意を倒すために離れないといけないなら受け入れるさ」

「ほ、本当にいいのかよ？　仁志のパパとママ、置いてく事になるんだぞ？」

「何も永遠の別れって訳じゃないさ。皆と別れても両親と別れても同じだよ。俺は必ず会いに行く。双方の行き来を確立させてみせるんだから」

その言葉にクリスは心が騒ぐのを覚えた。なのにも関わらず、彼女の気持ちは上向きにはならない。

むしろどんどん俯きたくなるような気持ちばかりが浮かんでくるのだ。

(仁志はこう言ってるけどそれが可能な根拠なんてどこにもねえ。むしろ本当に悪意を倒したらゲートが閉じて二度と会えないに決まってる……)

最後の戦いは仁志も同行すると言っているのを忘れ、クリスはどんどん俯いていく。

それとは逆に顔を上向かせて笑みさえ見せているのはセレナだった。

「お兄ちゃん、一緒に来てくれるんだね？」

「最後の戦いはね」

「そっか。じゃ、私が絶対守ってみせるから！」

「ありがとうな。うん、頼りにさせてもらおうよ」

「うんっ！」

表面上はセレナらしい反応だと誰もが思っていた。だがその内心では……

（お兄ちゃんが一緒に来てくれる。なら、そのまま私と一緒にママ達の世界へ来てもらおう！ お兄ちゃんがここへ戻ってこられるようにママにも協力してもらって、その間に私が大人になって、お兄ちゃんが戻る時にはお嫁さんになってあげないと）

悪意に負けるものか。絶対にママを助けるんだ。そんな風に思っていた少女はもういなかった。

そこにいるのは、初めての恋心と大人への焦りを利用して欲望に塗れている一人の少女がいただけだった。

「未来、ダメか？」

「……只野さんって本当に大人みたいな子供ですね。もしくは子供みたいな大人なのかな？ 悪意との決戦に一緒に来るって、下手をしたら死んじやうかもしれないですよ？」

「君達が悪意の揺さぶりに心を乱されてしまっても同じさ。それが早いか遅いかの違いしかない」

「それは……」

「大丈夫。それに、これは俺の長年に渡る特撮やアニメ知識から考えるに、悪意を倒しても少しの間ぐらいはゲートが維持されるはずだ。その、別れを告げるぐらいは」

「……それ、根拠ないですよね？」

「だとしても、だよ」

仁志の言葉に響達一部の者が顔を動かす。

「今まで見てきたヒーロー達はどんな時だって希望を捨てなかった。俺もそうありたいし、何より君達がそうしてきたじゃないか。ファイネとの戦いも、ネフィリムとの戦いも、キャロルとの戦いも、アダム

との戦いも、シエム・ハの時も、カルマ・ノイズの時も、世界蛇の時も、いつだつて君達は、絶望せず胸の歌を協奏して音楽とし、希望を鳴り響かせながら未来を掴むための小夜曲セレナーデを調べ歌ってきただろう」それは、仁志がこれまで見てきたからこそ言える言葉。アニメやゲームではあつたが、しかとその目で見てきた彼女達の、シンフォギアの戦いの記憶。

そこでの彼女達は誰一人として諦めなかった。希望を信じて抗い続けた。その強さを、在り方を知っているから、仁志は言い切つただ。

君達に自分は並びたいのだと。

「この時間を、日々を終わらせたくないっていう気持ちは分かる嬉しい。だけど、今のこの状況は悪意なんていう奴の監視下にあるようなものだ。それじゃ、いつまで経つても俺達は奴に怯えながら暮らさなきゃいけない。そんなのはごめん」

「仁志さん……」

「折角彼女が、嫁さんが持てるかもしれないんだ。父さんや母さんに孫を見せてやれるかもしれないんだ。何より、君達が全てをぶちまけられる相手になれるかもしれないんだ。だから、俺は今を変えたい。それで明日を、未来を変えていきたい。そして、可能ならみんなと、君達と生きていきたいんだ」

凜々しい表情でそう言い切り、仁志はふっと表情を優しいものへと緩めてこう締め括った。

「まだ、夢の国にも連れて行ってないんだぞ？」

その最後の仁志らしい言葉に響達は揃って笑みを浮かべた。クリスもその言葉には顔を上げる事が出来た。

その後、少しの打ち合わせをして久しぶりにゲートが開放された。そこへ飛び込んでいく響達。最後には、未来と共にヴェイグと一体化したエルフナインを抱えた仁志が飛び込む。

「……こうなってるのか」

初めて見るゲートの内部に仁志は視線を彷徨わす。と、一度だけ後ろを見やった。

「本当に裂け目だ……」

自分が通ってきたゲートを確認し、仁志は顔を前へと向ける。そこには響達九人の装者がいた。その視線が全て自分を見ている事に気付き、仁志は静かに頷いた。

「ヴェイグならカオスビーストの匂いを感じ取れるかもしれない。エル、聞いてみてくれ」

「は、はい」

ちなみにヴェイグがエルフナインの中にいるのは、いざと言う時ヴェイグ自身がミレニアムパズルを展開する事でエルフナインを守るからだった。

——ヴェイグさん、どうでしょうか？

——……微妙に匂うぞ。しかも一つだけだ。

——どちらか分かります？

——……ちやわんを持つ方だ！

エルフナインの中で行われた会話は以上だった。こうしてヴェイグの嗅覚を頼りにエルフナインが案内し、響達は残り二体の内の一体であるカオスビースト・ペンプトスを発見する事に成功する。

簡単な相談の後、未来が後方を注意する中で先制攻撃を任されたのは、ソルブライトギアツインドライブとなった光槍トリオだった。

仁志の提案で特殊条件のギアを試しておこうとなったのだが、ここで予想外の事が起きた。

何と三人揃ったソルブライトギアが共鳴し、戦いながらゆっくりとそのギアを金色へ染めていったのである。

戦闘開始からおよそ一分で三人のギアは金色となり、まるで本当に太陽光を放つような状態となった。

「見なよ、カオスビーストが……」

「ええ、震えてるわ……」

「やっぱりこのギアは悪意に、闇に強いんですね」

若干良心が咎めるが、それでも三人は意を決してカオスビーストへと立ち向かう。

だがこのままでは不味いと思ったペンプトスは、自分の体から子蜘蛛

蛛のような分身体を出現させて三人を妨害する。

そんな三人を支援するように動くのは翼と調の二人。ただし、その姿は少々変わっていた。

「まさかライダーギアのツインドライブがこうなるとは……」

「やっぱり師匠や私達のイメージに影響されてるんですね」

翼の姿は、あろう事かライダースーツはライダースーツでも2号ライダーを模した物となっていたのである。

調は調で1号ライダーを模した物となっていて、ツインドライブとなつた事でライダーという意味合いが変化を起こしたと思えない状態だった。

「故にアームドギアが……」

「武器じゃなくてバイクになつた」

「不思議だ。初めて乗るのに初めてではない感じがする」

「私もバイクなんか乗つた事ないのに動かし方が分かります」

「そうか。ならば月読っ、共に駆けるぞ！ ついてこられるか！」

「はい！ 今の私達は、風より速い存在ですから！」

二台の新サイクロン号がゲートの中を駆け巡る。ただ、翼のバイクはその先端に刃が、調のバイクはその両側に刃がそれぞれ出現し、それを使ってペンプトスの出した子蜘蛛を蹴散らしていく。

その刃の嵐を何とか逃れた子蜘蛛は、銃弾や鎌によつてとどめを刺される。

「何だか不思議デスよ」

「だな」

切歌とクリスのギアは、それぞれ強化服と呼ぶに相応しい見た目に変わっていた。

ただし、クリスは真紅、切歌は深緑にそれぞれ染め上げられていて、更にその装飾などは二人が見た事のあるヒーローの物とよく似ていたのである。

「これ、やっぱりゴーカイジャーデスよね？」

「海賊ギアツインドライブ、だからな。ま、いいんじゃねえか？」

「デスね。正直強くなつたかはびみよーデスけど、動きやすくてイイ

カンジデス」

「おう、本来のも悪かねーが、こっちの方があたし好みだ」

「ゴークイチェンジやファイナルウェーブが使えないのは残念デスが……っ！」

「んなもんいらねえぐらい強えからいいだろっ！」

普段よりも強化された身体能力で跳び回りながら翼と調から逃れた子蜘蛛を残さず撃ち、切って、二人は見事に雑魚掃討を完璧なものへと仕上げていく。

その光景を眺めて目を見開いている者がいた。セレナである。

「凄い……姉さん達だけじゃなくて調さんや切歌さんもヒーローみたい……」

「はい！ おそらくですが、兄様の知識と皆さんの思いが作用して一種の哲学兵装の要素をギアが発現しているんだと思いますっ！」

「エルちゃん、どういう事？」

「えっと、簡単に言えば、兄様がライダーや海賊という言葉でイメージするヒーローと、翼さん達がライダーや海賊でイメージする強い姿が一致しているからこそあんなったのかと」

「ライダーで強い姿つてのが俺と翼や調が仮面ライダーで一致したから、か……」

「そっか。だからクリスさんと切歌さんもゴークイジャーなんだ……」

そう言っているセレナのギアは怪盗ギアツインドライブ。周囲の気配や音などに敏感になるのではと仁志が期待してそうなっている。

実際にそういう能力があるかは未知数だが、今のセレナは切歌とクリスだけでなく翼や調のやり取りさえも聞こえているのでその可能性は大いにあると言えた。

一方、未来は前方へ注意を向けつつ後方の警戒も怠らないようにしている。密かに疲労が溜まりつつあった。

（正直前は大丈夫だと思う。だけど、カオスビーストの攻撃が流れてきたらと思うと意識を向けられない訳にもいかない……）

そういう意味ではミラーリングギアは未来の性格に適していない

と言える。

未来は本来守勢の人間なので攻撃へやや重きを置くギアは向いていないのだ。

「未来さん、もしかして疲れてますか？」

「え？ 大丈夫だよ。心配しないで」

「もし何でしたらヴェイグさんが匂いである程度は索敵に近い事が可能です。なのでヴェイグさんにも協力してもらいますか？」

「未来、もし辛いならそう言ってくれ。俺からもヴェイグに頼むし、何なら守りに強そうなジュエルギアへ変えるよ」

「……じゃあ、お願いします」

かつてならば言えなかった弱音。だがそれを言わない方が弱さである、そう今の未来は知っていた。

エルと仁志の頼みを受けるまでもなくヴェイグはカオスビーストの察知へ全神経を向け、未来はミラーリングギアからジュエルギアへとドライブチェンジを行った。

その姿は従来の物よりも鎧のイメージが強くなり、その手には武器ではなく防具である盾が出現していた。

「まるで鏡の盾だな……」

「鏡の……盾……」

「もしかしたら、それで攻撃を跳ね返せるのでは？」

エルフナインの意見に未来は一瞬だけ前方を見つめた。

ソルブライトギアの三人はカオスビーストを追い詰めつつあるが、まだ決め手に欠けているように見える。

「……セレナちゃん、少しだけ只野さん達をお願いしてもいい？」

「はいー」

「よろしくね」

そう告げるや未来はその場から動き出して最前線へと向かう。

前方から流れてくるカオスビーストの攻撃を手にした盾で悉く跳ね返しながら。

しかもその跳ね返された攻撃は威力を増幅されているだけでなく、神獣鏡の凶払いの力まで付与されているためにカオスビーストが苦

しみ出したのだ。

「これなら……響っ！ 三人の光を私の盾につ！」

「分かったっ！ 奏さんっ！ マリアさんっ！」

「あいよっ！」

「ええっ！」

以心伝心ではないが多くの言葉は今の彼女達に必要ななかった。数か月に渡る上位世界での日々。そこで培ってきた絆や時間が装者としての信頼を強くしていたのだから。

響達三人の太陽のような輝きが未来の手にする盾へと放たれる。それをしつかり受け止め、未来はそのまま正面へその温かく眩しい陽光に凶払いの力を付与して解き放ったのだ。

「闇を打ち払ってっ！」

強化増幅された光がカオスビーストへと直撃するやその体を消滅させていく。

跡形もなく消し去るそれは、まるで周囲を祓い清めるように消えていった。

その光景を仁志とエルフナインは呆然と見つめていた。

「………すげえ」

「はい………凄いです………」

巨大なカオスビーストが抵抗も出来ずに消滅する。そんな光景が与えた衝撃は凄まじかった。

心配された二体目の襲撃や合流もなく、それを仁志達はこう読んだ。

最後の一体はギャラルホルンの前、つまり根幹世界へのゲート前から動かすつもりはないのだろうと。

それと、おそらくその一体を倒せば奏やセレナの世界のゲートが開放されるだろうとも。

何故ならペンプトスを倒して出現したゲートの先は、あの捻くれてしまった響の世界だったのだ。

調査隊として向かったツヴァイウイングと未来が旧二課の本部へ到着、そこである響ともう一人の翼を発見したのである。

「こうなると悪意も最終決戦へ向けて動き出してる可能性がある」
「どういう事ですか？」

居間へ戻ってきてゲートを再び閉じ、仁志達は話し合いを始めた。

マリアや調は昼食の仕上げに取りかかり、セレナや切歌がその手伝いに動いている中、仁志はエルフナインやヴェイグを中心に今後の事を予想しようとしていたのだ。

「カオスビーストもこれで残り一体。悪意はこっちの動きをある程度は監視できているはずだ。なのにそれを合流または動かさなかった」
「はい」

「これって、おかしいだろ？ もし悪意の目的がみんなへの復讐なら少しでも勝率を上げる行動を取るべきだ」

「……そうか。それで逆に決戦準備をしようと思った訳ですね、兄様」
「ああ。あいつは最後の一体に何かするんだろうさ」

「あの、何かってどういう事ですか？」

質問とばかりに片手を挙げて問いかける響。それを見て未来やクリスが苦笑し、翼と奏が笑みを見せる。

「悪意がその最後の一体と同化。結果凄まじく強化されるとか、あるいは……」

「……「あるいは？」」」

「……カオスビーストが一種の負の念の集合体と仮定すると、今まで倒してきた奴らの特徴を併せ持った合体カオスビーストになるかもしれない」

「そんな……」

「で、でもよ、逆に言えばそれで終わりに出来るんだろ？」

「これも俺の特撮やアニメからの想像でしかないよ。もしかしたら、それ以上の厄介で恐ろしい事をやってくるかもしれない」

仁志がそう言うのと響達が沈黙する。これまで様々な事を経験してきた響達だが、それでも仁志の知っている情報の方が圧倒的に上なのは理解していた。

多くのヒーロー達が経験してきた事を仁志は情報として知ってい

る。言うなれば考えられる限りの悪のやり口を見てきているのだ。「もしかして、悪意がタダノを狙っていたのはその時のためかもしれないな」

ポツリと呟いたヴェイグの言葉にその場の全員が意識を向ける。

どういう事だと言うようにヴェイグを見つめたのだ。

それを受け、ヴェイグは小さく息を吐いて話し出した。自分が考えた悪意のやろうとしていた事を。

「悪意はタダノとセレナ達を戦わせようとしたんじゃないか？ さっきタダノの言ったカオスビーストと同化というのをタダノとさせて」「そうか。俺をカオスビーストの核に据えてみんなを殺させようってか。いかにも悪のやりそうな事だ。俺がみんなを殺せば俺だけでなくみんなも心が苦しむし、それを防ごうと戦えばきつとカオスビーストが受けたダメージが俺へくるってそういう魂胆だ」

「ピアデケムの戒道少年と同じですねっ！」

エルフナインの挙げた名前に響達が疑問符を浮かべるも仁志とヴェイグは深く頷いた。

「もしそうだとすれば、悪意が動き出す切っ掛けになりえるのは俺、か」

「仁志さんに乗っ取って……」

「カオスビーストと同化する……」

「阻止しなくてはならないな」

「だね。絶対そんな事させるか」

奏の言葉に頷く響達。だが、そんな彼女達を見つめ悪意はほくそ笑む。

——ふふっ、中々色々考えるわね。でも、ざあんねん。そんな分かり易い事、するものですか……。

悪意の見つめる先には、クリスがいた。そう、いつでも咲ける悪意の蕾をその身に宿した、悪意の駒が……。

昼飯を食べ終えたあたしらは、いつものように後輩が借りてきた仁志オススメの映画を見る事になっていた。

今回はカラオケで仁志が言ってたウルトラマンの映画を二本。一本目はウルトラ銀河伝説、だっけか。

その映画の事をどこか楽しそうに話す仁志がらしくて笑みが浮かぶ。あの笑顔があたしは好きだ。

——ずっとあれをあたしに見せてて欲しい。ずっとあたしを見て欲しい。あたしだけの仁志でいて欲しい……。

そう出来たら……でも、今は無理だ。悪意がいる以上仁志をあたしだけで独占なんて出来ねえ。

——そういや、仁志はあたし以外ともキスしたんだよな……。ズキッと心が痛い。ああ、分かっているさ。でも、でもきつとあたしが仁志の初めてのキス相手だ。

——そうだ。少しだけ、少しだけあたしが仁志の特別だってこいつらに言っておくか。あのキスだってあたし様がいなかったら出来なかったんだってな……。

……そうだ、よな。あたしが勇気を出して、素直になって、仁志はそれに応えてくれたんだ。

あのキスは、あのギアは、あたしと仁志の絆なんだっ！

「なあ仁志」

「ん？　どうかした？」

「仁志が初めてしたキスはあたしと、だよな？」

そう尋ねると仁志がギョツとした顔をして、先輩達年上連中が一齐に仁志を見た。

「え、えつと……」

「女とちゃんとしたキスしたの、あたしが最初だよな？」

言ってくれよ。あたしが最初だって、特別だったって。

「お兄ちゃん、そうなの？」

「つ……まあ、うん……」

その瞬間、胸の奥で何かが疼いた。何て言えばいいのか分からねえ。だけど、初めて、そうだ、初めて……

——勝ち誇るような笑みが浮かんできやがる……。

あたしはそう思いながら仁志へ詰め寄る先輩達を眺めた。

はっ、今更何を驚いてるんだか。リビルドをあたしが最初に手に入れたんなら、どういう事かは分かるだろうに。

まったくめでてえ連中だ。おうおう、嫁気取りの奴も両翼の先輩も狼狽えやがって。

しまいにはあのバカ達まで騒ぎ出した。まっ、そうだろうな。何せよりもよって両翼の先輩が自分達が先じゃないのかって言ったからな。

へっ、慌てる慌てる。どれだけ騒ごうが仁志が初めてキスしたのはあたし様だ。そうだ、あたし様なんだ。

ああ、すげえ気分がいいな。こうなったら後は仁志と一線越えるだけだ。

そうだ。どうせならデートは最後そういう事で締め括ってやんねーとな。

そう思ってあたしは一人笑みを浮かべ続けた。仁志へ群がる負け犬達を見つめながら……。

そうやってクリスが一人ほくそ笑んでいるのを見つめ、黒い霧のようなものに楽しげに噛っていた。

——ふふっ、はははっ、あははははっ！　これがお前達が言う絆とやらの限界よ！　恋だの愛だの馬鹿馬鹿しい……。一人の雄に複数の雌が群がればこうなるのが人間という生き物なの。精々醜く揉めてしまえばいいわ。その男を取り合いなさい。奪い合いなさい。表は笑顔で裏で憎み合えっ！

未完成愛 M a p p u t a t s u !

どうすればいいんだ。それが俺の正直な思いだった。

クリスの投げ込んだ爆弾は俺が思っていたよりも大きな威力を見せて、マリアや奏、翼の三人を動揺させていたんだ。

しかも、翼や奏の言った自分達が先じゃないのかって言葉に響き返して反応したもんだから困った事になった。

「仁志さん、どういう事ですか？ あの時のキスが初めてじゃないんですか？」

「先輩！ あの時部屋でしてくれたキスが最初じゃないの!? あたしが初めてって言うてよ！」

「仁志、どういう事よ？ クリスといっキスしたの？ いえ、それよりも翼や奏と一体いつキスをしたのかしら？ あの飲み会よりも前なんですよ？」

今にも顔が近付きそうな程近い三人。普段なら喜ぶところだけど、今回はさすがにそうは思えない。

奏は裏切られたって顔だし、翼は泣きそうだし、マリアなんかは怒り心頭って感じだし。

「ししよーっ！ ど、どういう事デスか！もしかしてあの日の前からししよーはキスしてたデスか!？」

「師匠、ちゃんと説明して」

「ね、姉さん達だけズルいっ！ 私だって、私だってお兄ちゃんの事大好きなのにつ！」

年少組も若干怖い。特にセレナの声に感情が乗り過ぎていて怖い。「仁志さん……」

そして響なんかは涙目だ。多分だけど俺だけでなくクリスにも裏切られたような気持ちになっているんだろう。

まず謝罪をするべきか？ いや、それは状況をおかしな方向へ展開させる気がする。

なら説明をするべきか？ だけどそれはそれで厄介な事になるよ
うな気も……。

そんな時、パンツと大きな音が聞こえてみんなの意識がその音の出所へ向く。

そこにいたのは未来だった。両手を強く合わせる事でさっきの音を出したんだろう。そのままの姿勢で止まっている。

俯いたままで……。

そしてゆっくりと顔を上げていく。その表情は怒りも憎しみもない。ただ無表情だ。

……逆に怖い。

「みんな、まずは落ち着いて。マリアさん達三人が一番狼狽えてどうするんですか？ 只野さんから事情を聞きたいのは分かりますけど、みんなしてそんな風に迫ったら何も言えないです」

「そう、ね。少し焦り過ぎたわ」

「……分かったよ」

「そう、だな……」

納得し切れてないけど、ドライディーヴァがそこで引いてくれた。

「切歌ちゃん達も、今は責め立てるのを待って。只野さんが私達全員へ言ってくれた事を思い出して、それを信じてあげよ？」

「ししよーが言ってくれた言葉、デスカ……」

「私達全員の想いを受け止める。一人じゃなくて全員……」

「でも、お兄ちゃんはクリスマスさんと」

「何にだって初めてはあるものだから。それがたまたまクリスマスだっただけ。もし只野さんがクリスマスだけを特別視してるなら、それがもつと明らかに出てるはずだよ。そういう意味で、只野さんは隠し事が下手な人だから」

反論出来ない。あと、未来の振る舞いに感心すると同時に若干の怖さもある。

今の、遠回しにクリスの自慢など自慢にならないと言い切ったようなものだ。

俺のファーストキスがクリスマスだとしても、それは特別にはならないのだぞと言い切ったからな。

「負け惜しみか」

「……負け惜しみ？」

そこへ聞こえたのはクリスの馬鹿にするような声だった。

対する未来も若干眉が吊り上ってる。

「だってそうだろう？ あたしは仁志とキスしてリビルドを手に入れたんだ。しかも」

「もしクリスが、みんなと違う、特別だってそう言うのなら、それはみんなと只野さんがキスしてクリスしかリビルドが手に入らなかった時だよ。でも、現実はどう？ ちゃんとキスされてないセレナちゃん以外みんなギアが追加された。クリスは特別じゃないよ。みんなと同じ。ただ順番が最初だっただけ」

「未来……怖いよお……」

口には出さないけど俺も心の底から同感。互いに睨み合うようにしているクリスと未来に誰も口を挟めない。

「それとも何？ クリスはその時プロポーズでもされた？ 俺は本当はクリスしか選ばないって言われた？ 違うでしょ？」

「そ、それは……」

本気で恐ろしい……。有無を言わずクリスの優越感を砕いていく未来に言葉がない。

と、そう思っていたらその未来の顔がこっちへ向いた。

「っ」

「只野さん、全部話してください。ただ、言える範囲でいいです。それと、詳しい内容を言うともた面倒になるかもしれないので、端的にあつた事やした事を教えてくれますか？」

「わ、分かった……」

どこか険しい顔でこっちを見つめる未来に、俺はそう返す事しか出来なかった。

でも、せめてこれだけは言っておこう。そう思って話し出す前に小さく深呼吸をしてから……

「未来、場を収めてくれてありがとう。その、俺が不甲斐無いせいですまない」

「……そう思うのなら、ここでキツチリみんなを納得させてください

ね」

「少しだけ表情を柔らかくしてくれたものの、まだまだ厳しい雰囲気は消えない。」

「こうして俺はあの夜、クリスとキスしてからあった異性関係の色々を話す事になった。」

「ただ、未来が言ったように詳しい話はせず、いつ誰と過ごして、キスをしたのかしてないのかぐらいで留めて。」

「その結果、当然ながらドライデーヴァへ未来達の不満の矛先が向いた。」

「でも、切歌と調のした事も告げるとセレナが二人を若干睨む事に。」

「よく分かりました。つまり、私や響、セレナちゃん以外はこっそり女の幸せを楽しんでたんですね」

「仁志さあんっ！」

「お兄ちゃんっ！」

「本当にすまないっ！……俺がそっちの立場なら悲しくて辛いのは分かるよ。本当に、ごめん……」

「頭を深く下げる。誠意が、足りなかった。配慮が、足りなかった。」

「俺自身がどこかで浮かれたんだと思う。」

「己の未熟さと至らなさを噛み締めて、ただひたすら頭を下げ続ける。」

「未来は言ってくれていた。現状を維持したいのなら協力すると。それは、俺が全員を本気で大事に思い、愛するのならという前提だ。」

「それを、俺は守っていなかった。正確には守っていると思いついていた大馬鹿だった。」

「仁志さん、私なんてまだデートしてもらってないんですけど……」
「響の言葉に身を縮ませる事しか出来ない。」

「そう、なんだよな。俺、まだ響やクリスとはあれから一度もデートはしてないんだ。」

「それで言ったらあたしもだ。そこは、どうなんだよ？」

「クリス、あんたねえ……」

「止めなさい奏。同じ女なら、理解は、出来るでしょう」

「……ちっ」

聞いていられない。俺のせいとはいえ、みんなが険悪になるのなんて耐えられない。

「全部俺が悪いんだ。俺が、みんなと関係を持った事で調子に乗ったせいだ。こういう事はちゃんと公平に、平等にしないと必ず不満が出るって分かっているのに、俺がちゃんと考えないばかりに……っ！」

「タダノ……」

「兄様……」

ああ、やっぱり俺にハーレムなんてもんは無理なんだ。

みんなを同じように大切にして、想ってなんて出来なかったんだ。

俺が振られるのならいいけど、俺が嫌われるのなら受け入れられるけど、俺のせいでみんながギスギスするなんて無理だ！

「みんなは、魅力的な女性だ。本来は俺みたいな奴とこうなる事が有り得ないぐらいに。だからどうしても俺は調子に乗ってしまう。自分をちゃんと御し切れないんだ。だからこんなダメな男は見限って」
そこで俺の言葉は途切れた。いきなり頭を上げられて、気付けば顔が横を向いていたんだ。

そしてじわりと左頬が痛くなる。そこで叩かれたのだと分かった。

視線を動かすと、俺を泣きそうな目で睨み付ける未来がいた。

「未来……っ？」

「どうして、どうしてそういう事言うんですか？ 何で自分に自信を持ってくれないんですか？ 調子に乗ってくれてもいいです。自分を制御出来ないならそれでもいい。ただ、同じ失敗を繰り返さないでくれれば、反省してくれれば、それでいいです」

「それで、いいのか……っ？」

「只野さんが私達を相手に欲望の限りを尽くしてるなら無理ですけど、むしろ只野さんはそれを抑えてますから。それとも、いつそ全開にしてみますか？ その場合、初めての相手は私かセレナちゃんになりますけど」

その苦笑しつつも涙を浮かべての言葉は、思った以上に俺の心へ響いた。

それと、ふと奏の言葉が思い出された。自分の好きな男の悪口を言う事は俺相手でも許せないって言う、あれを。

未来も、そうなんだろう。だからこそ俺の言葉を止めた。そして、それはきつと他のみんなもなんだ、と思う。

俺の魅力だけでこうなつた訳じゃない。でも、俺の魅力も現状には関わっているって、俺、自分で気付いたじゃないか。

……本当に成長してないな、俺。下手な自虐や判断はろくな事にならないって分かったはずだったのにな。

「それは、さすがに無理だよ。未来やセレナとそういう事がとかじやなく、俺自身が今はそう出来ない」

その答えに未来だけでなくみんなも小さく息を吐いた。

呆れを含んだ、でもどこか安堵するような、そんな感じで。

「その、変な話だけど、もう少しだけ自分に自信を持つよ。少なくともみんなが惚れてくれたのは事実なんだ。なら、俺が俺に愛想を尽かすんじゃないって、みんながそうなるまで俺は自信を持ってないといけないだと思ってるから」

愛想を尽かすなら俺じゃなくてみんな。そうなってから俺は自分に愛想を尽かせばいい。

そう告げると未来が目を閉じて微笑んで頷いてくれた。それでいいと、そう言ってもらえたような気がして、俺も頷いた。

「でも仁志さん、それとデートの件は別ですからね？」

「うん、分かっているよ。その、これまでと今回の分まで含めて埋め合わせする」

「あ……はいっ！」

心から詫びるように告げる。それに響が嬉しそうに笑顔を返してくれた。

でも、問題はクリスマスだな。正直今回の行動は優越感を得たいがためのものにしか思えない。

「クリスマス、一つ聞きたいんだけどいい？」

「何だよ？」

まったく現状に対し何も感じていないようなクリスマスに違和感を覚

える。

いつもの彼女なら、この事態を招いた事を後悔ないし反省しそうなものなのに……。

「どうして今ここであの事を？」

「リビルドギアを先輩達も手に入れたんだろ？」

「あ、ああ。そうだけど……」

「それは、誰が何をしたからだ？ あたしが、あたしが最初に勇気を出して飛び込んだ結果なんだ。それを言っておこうと思っただけだつての」

「それは……そうかもしれないけど……」

クリスも、やっぱり女って事だろうか。これ、どう考えても周囲への自慢だ。

ただ、これに注意するのは違う気がする。でも何もしないのも良くないか。

「その、出来るだけ周囲へ俺とあった事を自慢するような事は控えてくれないか？ 俺が言うのも」

「マリアの奴はそうしてたじゃねーか」

言葉を遮ってクリスはそう言ってマリアを見つめた。

その目付きはやや鋭さを持っている。

「わ、私は別に……」

「普段嫁みてえな事しただろ。で、それを嬉しそうに」

「クリス、そこまでにして。今只野さんが言ったばかりだよ？ そ

れに、意図してる事と意図しない事を同じに捉えちゃダメ」

今度は未来がクリスの言葉を遮った。

クリスを見つめる未来の眼差しはどこか咎めるような雰囲気だ。

「どうやってんなの分かるんだよ？」

「わざわざ言葉にしないと分からない事を言うのは確実に意図的」

「……見せつけるように幸せそうに笑ってるのはどうだよ？」

「普段からそうしてるんだとしたらマリアさんにとってはそれが日常なんだと思う。普段してないのに私達がいる時だけしてたら意図的だけどね」

な、何というか未来の胆の据わり方が凄い。下手したらこの中で一番強いんじゃないだろうか？

それにしてもクリスが何だか若干攻撃的だな。もしかして、それだけ彼女は強く俺へ想いを寄せているんだろうか？

……かもしれない。何せご両親の夢を捨ててまで俺と一緒にいたいと言ってくれたんだ。

「クリス、翼にも言ったけど君にも言わせてくれ。焦らないでいいから」

「焦る？ 違うつての。あたしはただ事実をだな」

「それが焦っているんだ雪音。周囲よりも自分が勝っていると思ひ、それを口に出して誇示するのは焦りからくるものだ。気持ちは分かるが、冷静になった方がいい」

微かに悲しそうな顔で翼がクリスへ言葉をかける。

「ああ、そうかよ。先輩までんな事言い出すのか。そんなにあたし様が仁志の初めての相手だって事が気に入らねえってか？」

「雪音、それは違う」

「クリス、どうした？ 何だか今の君は……」

と、そこで思い出す事があった。それはあの日の事。クリスがやたらとみんなへ攻撃的だった日の事だ。

俺がクリスを探しに行き、彼女が妙にイライラするって言ってきた日に似ている気がする。

……もしかして、あれって今にして考えたら悪意の仕業だったのか？

もしそうだとしたら、それに似てる今のクリスは……。

「何だか？ どうしたんだよ？」

「えっと、何でもない。響、ちよつといいか？」

「え？ は、はい？」

自分だけではどうかと思うので念のため響にも意見を伺おうと思っただ。

翼よりも響の方がこういう事は覚えてそうだと思っただのもある。

で、響へ耳打ちすると、彼女も少しの間で同意するような意見

を言ってくれた。

「じゃ、下手するとあの頃から悪意は俺達へ手を出してたのか……」
「かもしれないせん。あれって、仁志さんが私と翼さんだけ名前で呼ぶようにした日でしたもんね」

「ああ。そつか。クリスの寂しがり屋な面を刺激したんだ。疎外感を感じたクリスに俺への恨みなんかを増幅させていたんだろうな」

「だけど、それだけでは優しいクリスの気持ちを完全に操る事は出来なかった。」

「だから彼女はあの時俺へこんな気持ちになりたくないと言ってくれたんだ。」

「……響、もしもの時はギアを纏ってクリスの身動きを封じてくれな
いか?」

「え? ギアを、ですか?」

「以前のように悪意がクリスを操ってるとしたら、だ。ヴェイグに感
知されていないならそれは本格的になってないって事だ。でも、だから
こそどう動かれるか予測がつかない。最悪クリスがここでイグナイ
トギアなんて纏おうもんなら不味い。だからそうだったら」

「取り押さえて話を聞いてもらおう、ですね。分かりました」

俺の頼みを響が引き受けてくれたので、ならばと俺はその場で立ち
上がる。

その瞬間、周囲の目が集まるのを利用して俺はクリスの目を響から
逸らすように動いた。

「クリス、少しいいか?」

「今度は何だよ?」

「えっと、覚えてるかな? 俺が初めてクリスを名前で呼んだ時の事」

「……忘れる訳ないだろ」

「あの時、クリスは俺へこんな風に言ってたよな? どんどん嫌な気
持ちが湧いてくる。自分を除け者にする奴らを許すな。あたしに寂
しさを、辛さを与えるような相手へ仕返ししろって言われてる気がす
るって」

「……………ああ」

俺の言葉に周囲が何かに気付いたように息を呑んだ。そしてクリスも少しだけ答えに詰まった。

悪意に手を出されていたんだと分かったんだろう。そのおかげでクリスの攻撃的な雰囲気も若干弱くなったな。

「今のクリスには、あの時と似たものを感じるよ。だって、クリスには誰を見下して喜ぶなんて部分はないし、そもそも誰かに対して優越感を持ちたがるなんてしてこなかったじゃないか」

「それは……」

「クリス、俺は君が操られてるなんて思いたくないし思わない。だけど、今の君は誘導されてるんじゃないかとは思う」

「誘導……」

「そうデス。クリス先輩はいつも優しくして面倒見が良くて、お姉ちゃんみたいなのデス」

「うん。クリス先輩は誰の事を悪く言ったりする人じゃないはずです」

「お前ら……」

後輩二人の言葉にクリスが胸へ手を動かす。

まるで今の言葉に胸を痛めるかのように。

「クリス、あたしも二人に同意するよ。あんたは口は悪くても人は悪くない。多分だけど、仁志先輩を好きって気持ち、利用されかけてるよ」

「そうね。私もそう思うわ。貴方は弱者の気持ちが正しい意味で分かる女性だもの」

「っ……」

クリスが胸を押さえて表情を歪める。心が痛むのか？ あるいは誘導している悪意が苦しんでいるのか？

「クリスさん、兄様の言う通りです。クリスさんは誰かを貶めて自分を強く見せる人じゃありません」

「うん、クリスさんは強くて優しい人です。いつもさり気無く気を配ってくれる、素敵な人です」

「クリス、今のお前はまだ嫌な匂いはないぞ。だから心を強く持て。」

悪意に負けるな」

エル達の言葉にクリスは辛そうに胸を押さえたまま俯いた。

「雪音、お前は私よりもみなに慕われ頼りにされているんだ。その理由は、今みなが言った通りだ。お前は本当の優しさを持っている。そしてそれでみなへ接しているからだ」

「そうだよクリス。クリスが本当は誰よりも優しい事、私達は知っているから」

「うん、だから顔を上げてよ、クリスちゃん。ね？」

響がクリスの前へ手を差し出す。その手を見たんだろうクリスは、若干の間でその手を掴んだ。

「クリスちゃん……」

「……ホント、揃いも揃って心配し過ぎだつての。でも、ま、あたしもそうかもしれないねえって思ったし、その、色々言い過ぎた。悪い……」顔を上げたクリスは申し訳なさそうな表情でそう言う目を見伏せた。

やっとそこでみんなから安堵の息が漏れた。俺も最悪は回避出来たと息を吐いた。

悪意の手出しはあったらしいが、完全に操るにはまだ足りない状態だったみたいだな。良かった良かった。

「しかし、さっきの話が本当なら、悪意は奏が来る前から私達へ手を出していた事になるか……」

「クリスちゃんが飛び出した時って、私達がギアに依り代を組み込んでもらったばかりの頃ですし、可能性はありますね」

「そうだな。こうなると一度思い返してみるべきかもしれない。私達が気付いていないだけで、本当は悪意の干渉だった事があるかもしれないし」

「あつー！」

翼の言葉で思い出した。俺がああ未来と調とのデート中に思った事を。

たしかあの時翼達にメールを送ったのに揃いも揃って忘れてるとか酷くないか？

そう思つてあの時メールを出した三人へ聞くと……

「いえ、そんなメールは見た覚えがありませんが？」

「あたしもだ」

「私も見覚えはないけど……」

「え？」

俺の勘違いかと思つて送信メールを確認すると、そこにはたしかに翼、クリス、エルへの同一内容のメールが残っていた。

それを見せると三人が揃つて首を傾げ、それでも見た覚えはないと言つたのだ。更に三人が見せてくれた受信ボックスにも本当にメールがない。

「これは……？」

「もしかして、悪意が僕らの方のメールを消去したのでは？」

「ならどうして仁志の方は消えてないんだよ？」

「もしかして、俺のは依り代でもあるから？」

「だと思えます。悪意も依り代へは手を出せなかつたのでしよう」

「待つてくれ。では、未だに悪意はこの世界に滞在しているのか？」

「今はゲートを閉じてるから逃げられないとか？」

「可能性はあります。いえ、むしろそうだと思うべきです。でなければ僕らの持つているスマホへ干渉出来ないはずですよ」

ここにきて悪意が確実にこの世界にいる事が判明。いや、今回のゲート解放でいなくなった可能性がない訳じゃないが、おそらく留まっているだろうと思う。

何せ今や悪意がみんなへ執着しているのは明らかだ。なら、みんなが勢揃いしているここから目を離すはずはない。

そこからみんなで話し合う事にした。というのも、俺が思い出した事を話し出したらみんなの表情が険しくなつていつたのだ。

俺が忘れていた事の内容がいずれも悪意に関する事だったからだと思う。

まずは、アラートが鳴つた原因が悪意ではないかと考えた事。

次に、ベアトリーチェの側近の名前。

そして最後に悪意の種に関する太陽の三撃槍のイベントを忘れて

いた事。

いや、もうここまで揃うと推理もくそもない。どうやら俺も悪意の影響は少なからず受けていたんだろう。

「……本当に響さん達が一緒にいなかっただら危なかったかもしれない」

「ええ。仁志がゆつくりと悪意の影響を受けて記憶を無くしていった可能性が高いわ」

「実際自分に関係してる事をちよこちよこ忘れさせてるみたいだしね」

「正直石屋に関しては本当のド忘れな気もするけどな」

ただ、アラートの原因の件と太陽の三撃槍の件に関しては悪意の作業な気がする。

「分かりません。それも悪意が優先的に自分に関する情報を消去していたとすれば……」

「うん。仁志さん、今は少しでも疑問に思ったら悪意の作業って思ってもいいかもしれませんよ」

「あー、そうだなあ」

響の指摘も一理ある。今は疑わしきは全て悪意の作業と思う方がいいかもしれない。

そう思つて他にも何かなかったらどうかと思ひ出し始めると、切歌が言い出し辛そうにレンタルの袋をこっちへ見せてきた。

成程、そろそろ見たいつて事ね。ま、いいか。気持ちを切り替える上でも、そして悪意への闘志を燃やす意味でもウルトラ銀河伝説はうってつけかもしれないし。

「よし、みんな、一旦気持ちを切り替える意味でも今はウルトラマン達の光の力を借りよう」

「デスデスっ！」

「ふふっ、そうね。元々それを見るつもりだったし」

「うしっ、切歌、再生だ」

「了解デース！」

嬉しそうにDVDを手取る切歌に誰もが苦笑する。

でも、まあ、本当にある意味丁度良かったかもしれない。
力を求める事で闇へと堕ちた者と堕ちずに済んだ者。その分かれ目は、悪意に魅入られたか否かだったはずだから……。

楽しい時間はあつという間だつて知ってたけど、本当に速いって思う。ついさつきまでお兄ちゃん達がいて、みんなでご飯を食べてたと思っただのに、もう寝る時間になってるんだから。

「エル、今日も楽しかったね」

「はい、とても楽しかったです。まさかダイナが他の宇宙へ旅に出てたなんて驚きました」

「後はXデスよ。ティガだけじゃなくてウルトラマンまで来るとか凄すぎデス」

「防衛隊との協力も良かった。サイバーカード、カツコ良かったし」
「怪獣達とも手を取り合つて戦うウルトラマンだからな。響がかなり喜んでいただぞ」

お布団に入つてのいつものお喋り。話題はやっぱり今日見た映画。二つともウルトラマンだったけど、お兄ちゃんが前に言つてた闇のウルトラマンが今回の映画には出て来た。

「ベリアルも、可哀想です。えつとレイ……?」

「レイブラッド星人だつたと思います」

「あつ、ありがとうエル。レイブラッド星人が悪意みたいな存在だからベリアルも悪いウルトラマンにされちゃつたのに」

元々は光のウルトラマンだつたけど、力を求めて心の隙が出来ちやつたベリアルは闇のウルトラマンになった。

お兄ちゃんが言つてた“強すぎる力は身を滅ぼす”ってああいう事なんだと思つた。

私も気を付けないと。ツインドライブはとつても強力だ。普通のデュオレリックだつて強いのに、その負担が軽いだけじゃなくて他のギアの力も一緒に使えるんだもん。

「気持ち分かるけどもう寝なさい。特に調? 貴方、明日はバイトでしょ?」

「おっと、それはいけないデスね」

「はい、早く寝ましょう」

「うん、そうだね」

「調、早起き頑張れ」

「ありがとう、ヴェイグ。じゃあ、みんな、おやすみなさい」

「」「おやすみなさい」「」

その言葉で姉さんが明かりを消した。

それからすぐにヴェイグさんの寝息が聞こえてきて、次にエル。いつもなら私もそろそろ眠くなつて意識が遠のくんだけど、今夜はちよつと無理そう。

その原因は、やっぱりお昼頃のやり取りにある。

お兄ちゃんはやっぱり私以外の装者とはキスしてるんだって、そう知ってしまったから。

クリスさんの言った言葉で私ははつきりと分かった。私は子供としてお兄ちゃんに扱われてるって。

だって、私は額や頬つぺたにしてもらっただけなのに、しかも私はあの時だけしかしてもらってないのに、姉さんは隠れて他の時にもキスしてたって知ったから。

——ズルいよ。何で私はダメなの？ 大人じゃないかもしれないけど、子供でもないのに……。

そう思ったけど、そう言い出したら余計子供っぽいと思つて黙つた。

姉さん達と気持ちや考えを同じにした方が、お兄ちゃんに大人つて思ってもらえるかなつて思つたし。

——だけど違った。お兄ちゃんに大人と思つてもらうには、私をもっと大人の事を知るしかない。姉さんみたいに、奏さんみたいになるしかないんだ……。

二人みたいに……？

——体は無理でも気持ちや行動なら何とかなるはず。お兄ちゃんに教えてもらうんだ。大人の女の人にして……。

お兄ちゃんに……教えてもらう……。

——私は大人にどうやってなるのか知らないけど、お兄ちゃんは知ってるはずだから。だって、お兄ちゃんは大人だもん……。

そっか……。うん、そうだよ。お兄ちゃんに教えてもらおう。大人になる方法を。それと、私もキスしたいって言おう。

でも、よく考えたらお兄ちゃんは私と一緒に風呂は入れないって言ってた。

じゃ、じゃあ、いつそ一緒にお風呂に入ったらお兄ちゃんも私を子供扱い出来なくなるんじゃないかな？

……ちよつと恥ずかしいけど、お兄ちゃんなら平気。ううん、お兄ちゃんだから平気。

——姉さんはお兄ちゃんと時々ケンカするけど、私は絶対お兄ちゃんとケンカなんてしないよ。私は、いつもお兄ちゃんの味方だからね……。

翌日の昼過ぎ、仁志は部屋に珍しい客人達を迎えていた。

「はい、麦茶」

「ありがとうデス！」

「ありがとう」

「セレナもおかわりするか？」

「うん！　ありがとうお兄ちゃんっ！」

それは切歌達装者年少組である。

これまでも切歌とセレナ、調と切歌、などでの来訪はあったものの、三人が揃ったというのは初めてであった。

そのため、仁志は何かあったらどうかと内心で首を傾げていたのだ。

一体何の用事だろうと、そう思っ

彼は知らないのだが、実は彼女達は何も示し合わせた訳ではない。まず先に動いたのはセレナだった。

いつものように仁志の部屋の掃除をす

ると言っ

て出

かけ、そこから

今まで滞在していたのである。

切歌と調はそのセレナの様子を見てくるとマリアに言っ

たのであった。

こうして三人が仁志の部屋に揃う事となったという訳だ。

コップに入った麦茶を美味しそうに飲む三人を見つめ、仁志はまるで兄や父のような笑みを浮かべた。

「それで、今日は一体何の用だい？」

「それは……」

「えつと……」

セレナへチラリと目を向ける切歌と調。対するセレナはそんな二人へ小首を傾げる。

「何ですか？」

「……何でもない（デス）」

セレナを迎えに来たと言えば即刻帰る事となる。それでは二人の目的は果たせない。

何せ二人の目的は、ある意味セレナと同じく仁志へ少々いかがわしい行為をしてもらえないし教えてもらおう事なのだから。

（どうするデスカ、調。セレナがいたら面倒デスよお）

（つて切ちゃんは思ってるはず。でも、私の勘が正しければセレナは……）

（切歌さんと調さんが来るなんて……。で、でも諦めない！ お兄ちゃんに大人の授業をしてもらうんだ！）

（チラチラとアイコンタクトしてるけど、あれで意思疎通出来るのかね？ だとしたら……凄いな、ザババの二人は。あと、セレナのガッツポーズは可愛いなあ）

オロオロする切歌。やや鋭い目をする調。気合を入れて小さくガッツポーズをするセレナ。

そんな三人を視界に収めて仁志は一人ほっこりと笑みを浮かべる。

だが、その仁志の平穏な心を壊すように調の一言が炸裂した。

「師匠、私達三人にお嫁さん修行、して。少しエッチな修行」

「へっ？」

「ええっ?!」

一瞬理解出来なかった仁志と違い、切歌とセレナは揃って同じよう

な声を上げた。

(ど、どういう事デスカ? 調は、一体何を考えてるデスカ!?)

(え、エツチな修行って……じゃ、じゃあやっぱり切歌さん達がお兄ちゃんに大人扱いされてるのはそういう事なんだ!)

さて、それに遅れる事数秒で仁志も調の言った言葉を正確に認識、というよりは受け入れた。

「あ、あのな調? 前も言ったと思うけどそういう事は」

「昨日の事、私達忘れた訳じゃないから。師匠、マリア達一部とはキスを何度もしてデートまでしてた。その埋め合わせ、私達にして」

「そ、それは……」

「セレナも気にしてるし」

「そ、そうだよお兄ちゃん。何で私だけ仲間外れなの?」

「セレナ、それはあの時も言ったけど」

「やっぱり装者で私だけ子供扱いなんだ……。私は、今の私はもう守られるだけじゃないのに……」

「っ?!」

その言葉に仁志は己が浅慮を痛感した。

何故ならセレナが述べたそれは、自分が散々危惧していた発想だったからだ。

だからと言ってすぐに扱いを変えろと言えは待っているのは複雑でややこしい流れである。

(どうする? どうしたらいい?)

調と切歌の要求を退けつつ、セレナの心の影を払拭する術。そんな都合のいい手段が思いつく程仁志は賢くはない。

ただ、そんな彼でも分かるのは、このままではセレナの心の影は大きく深くなり、闇を呼び込む格好の呼び水となる事だった。

それだけは何としても避けたいといけない。その想いで必死に考える仁志だったが、思いつくのはやはり本当のキスをするという事だけ。

俯くセレナとそれを見て悩む仁志。そんな構図を見て調は一計を案じて小さく頷いた。

「切ちゃん、お願いがある」

「何デス？」

「セレナと師匠、キスさせたいから手伝って」

「な、何でデスか？」

「そうすれば、きつと師匠は私達ともキスし易くなる。それに、私がセレナの立場なら凄く悲しくて悔しいだろうから」

「……デス、ね。了解デス」

同じ女だからこそ分かるセレナの気持ち。更に彼女達はセレナがいなければ装者として一番年下となる。

それ故に分かるのだ、セレナの気持ちだが、悲しさが、悔しさが。

こうしてザババコンビと呼ばれる二人が動き出した。仁志の両側へ静かに近寄ると、彼へ囁き始めたのである。

「ししよー、ここは男らしく決断する時デス」

「うん、切ちゃんの言う通りだと思う。師匠、セレナを一人前の女性として扱ってあげて」

「い、いや、だけどな？」

「ししよーが言ったじゃないデスか。昔はアタシぐらいでお母さんになつてたつて」

「それで考えたらセレナは十分大人の入口にはいる」

「あれは昔の話で」

「じゃ、セレナを泣かせてもいい（デスか）？」

突きつけられた言葉に仁志は返す言葉がなかった。

チラリと仁志が目をやれば、セレナは静かに沈むように俯いたままだったのだ。

「……………分かった」

このまま自分の妙なこだわりや考えでセレナを悪意の操り人形にしたくない。そう思つて仁志は決断を下した。

そこには、セレナの心をこれ以上苦しめたくないという想いもある。かつて仁志自身も味わった未熟者や半人前扱いの悔しさ辛さを自分が誰かに与えるのはダメだと。

「セレナ、本当にすまなかつた。許して欲しい。俺は、自分がやられて

嫌な事を君にしていた。もっともらしい理由だったかもしれないけど、それを君に納得させられる程の力がない理由で」

「……お兄ちゃん。それに……」

頭を大きく下げている仁志とその両隣を見てセレナは目をゆっくりと見開いていく。

そこでは切歌と調が小さく笑みを浮かべて頷いていたのだ。

「セレナ、ししよーは大人の男の人ですし真面目さんデス。どうしても女の子相手には色々考えちゃうんデスよ」

「だから許してあげて。師匠なりにセレナの事を考えての事だったと思うから」

「……はい。どこかで分かっただけはいるんです。お兄ちゃんは私を大事にしてくれてるんだって。でも……」

「子供扱いは、ちよっと嫌だよね」

「はい……」

「大丈夫デスよ。もうししよーはセレナを大人扱いしてくれるデスから。ね、ししよー?」

「あ、ああ……うん」

切歌の確認に対しての仁志の返事は歯切れが悪かった。やはりまだ割り切れていないのだろう。

それを感じ取った調は、仁志に気付かれぬよう小さくため息を吐くとセレナへ手招きをする。

その意図が分からずも素直に従ってセレナは調の傍へと移動した。すると……

「師匠、手を貸して」

「は? 別にいいけど……?」

調のやりたい事が分からず、首を捻りながら片手を差し出す仁志。

調はその手を掴むと、セレナの胸へあっさりと導いたのだ。

微かな膨らみを感じて仁志は慌てて手を引こうとして――

「逃げないで!」

「っ?!」

調の声にその動きを止めた。

「セレナ、嫌がってないから」

「い、いや、だからって」

「セレナ、良かったデスね。ししよーが逃げようとしたって事はセレナを子供って思っただけじゃない証拠デス」

「そ、そうなんですか？」

「う……ま、まあそういう事になる、かな」

「歯切れの悪い仁志だが、それもそのはず。彼の片手は未だにセレナの胸へ当てられているのだ。」

「セレナはその仁志の手を自分の手で押さえるようにしていた。そこに彼女なりの乙女心の発露があるような気がして、仁志は押すも引くも出来なくなっていた。」

「な、なあ、もういい加減放してくれない？ さすがにさ」

「セレナ、一旦解放してあげて」

「は、はい」

「どこか照れながらも嬉しそうに手を離すセレナを仁志は複雑な心境で見つめた。」

「だが、そんな気持ちでいられたのもほんの数秒だった。」

「両手の中に異なる柔らかさが触れたのである。」

「へ？」

「何事かと思っただけで仁志が反射的に手を動かすと……」

「んっ」

「っ?! な、何してんだよ二人共っ！」

「仁志の両手が掴んでいたのは切歌と調の胸だった。」

「しかし、二人は仁志の動きを既に読んでいたため自らの手で彼の手を押さえていた。」

「えへへっ、お嫁さん修行デス」

「うん、旦那さんが喜んでくれる事を実践中」

「あ、あんなあ」

「むっ、お兄ちゃん、私もお嫁さん修行したい！」

「いや、これはお嫁さん修行とかじゃ……」

「知らないっ！ えいっ！」

仁志へ抱き着いて密着するセレナ。その甘いような匂いに仁志は困りながらも諦めるように苦笑した。

(まあ、セレナのこれは可愛いからよしとしよう。問題は……)
未だに切歌と調はその未成熟な果実を仁志の手へ委ねている。

それをどうするべきかと考える仁志へ、切歌と調は少しだけ赤い顔で微笑んでみせたのだ。

「ししよー、アタシ、何だか不思議デス。ししよーに触られてると、恥ずかしいのに嬉しいんデスよ」

「切歌……」

「私も切ちゃんと同じ。師匠の手、あつたかくて大きくて頼もしい……」

「調……」

「お兄ちゃん、私も凄く幸せだよ？　こうやってお兄ちゃんに強く抱き着いてると何にも不安がなくなる気がするんだ」

「セレナ……」

そこで仁志は気付く。この三人はある意味でスキンシップに飢えているのではと。

幼い頃から施設で育ち、誰か大人から抱き締められる事も撫でてもらう事もほとんどなく過ごしてきた三人。

そこへ父性を見せる自分と出会った事で、恋心による乙女の部分とその頼もしさや優しさに甘えたい少女の部分が混在しているのではないかと、そう仁志は考えた。

(そういや、赤ちゃんの頃に満足に抱き締められたりしないと、親の愛情を感じられないとかで後々の人格形成に影響するとかなんとか聞いた気がするなあ……)

切歌と調がやや過激な接触を求めるのは、おそらく女として見て欲しいという欲求に、兄や父のように思っている相手から愛されたいという欲求が混ざった結果かもしれない。

そう結論付け、仁志は一瞬だけ天井を見上げて息を吐くと苦笑しながら三人へこう告げた。

——三人の気持ちはよく分かったし伝わったよ。だから、少しだけ

腕を自由にさせてくれ。その上で俺が自分の意思で君達を抱き締めたいんだ。

外はギラギラ太陽さんのおかげで激熱デス。でも今のアタシ達は涼しいお部屋で激熱になってます。

「ししよー、もっとギュッとして欲しいデス」

「うん、して欲しい」

「お兄ちゃん、ダメ？」

ししよーの腕の中でアタシ達は揃って抱き締めてもらってます。ちよつと暑いデスけど、幸せで勝手に笑顔が浮かんじゃうデス。

ししよーはアタシ達のお願いを聞いて少しだけ困ったように笑うと、無言で背中に戻してる腕に力を入れてくれました。

グツて感じで力が入ってもっととししよーにくつつくのがたまらないデス。だ、大好きだよって言われてる気がして、とつても、とつても嬉しくなっちゃうデスよお。

「「あ……」」

嬉しさのあまり声が出ちゃったんデスが、まさかの三人同時とは驚きデス。

それを聞いてししよーは嬉しそうに笑いました。

「ははっ……あー、うん。可愛いよ三人共。ホント、幸せだ」

「ししよー……」

「そうだよな。結局大事なのは俺やそっちの気持ちだもんな。うん、そうだよ。常識なんてのは世間と関わる時に必要であつて、その世間が見えない時ならこつちが気にし過ぎても仕方ないか」

そんな事を言つてししよーは、その、カツコイイ顔をしました。

あのキスしてくれた日みたいな、男の人つて感じの顔デス。

「セレナ、これだけは分かつて欲しいんだ。俺は君を妹や姪のように思つてた。それでずつといたもんだから、いきなり恋愛対象には見れなかつたんだ」

「うん、分かつたよお兄ちゃん。そうだよね。私もお兄ちゃんって呼んでたもん。ならお兄ちゃんが私の兄さんって思いこんでも不思議

じゃないよ」

「あく、そう言われると何も言えないよ。たしかに思い込みも多少はあつただろうし」

そう言つて笑うししよーはいつものししよーデス。さっきのカツコイイししよーじゃないデス。

でも、アタシはそんなししよーも大好きデス！

「ししよー、ここはズバーンと男らしくセレナにもキスしちゃうデスよ」

だからアタシは言うんデス。セレナが期待してて、その心の闇を吹き飛ばせる事を。

ただ、ししよーはそれに複雑そうな顔をしました。何か問題でもあるデスカね？

「ししよー？」

「……セレナ、こんな状況でしたい？ あと、切歌と調はそれを見ても気にしないか？ 自分もつてならない？」

そう聞かれてアタシは正直迷いました。だってセレナがししよーにキスされてるのを見て、アタシもして欲しいデスって言わない自信がなかったんデスよ。

「そう思つちやダメなの？」

「ダメではないよ。だけど、そうなると俺は延々キスしないといけなくなる。そして、そうなるとキスに対するトキメキみたいなのがすごく下がる。俺はそれを危惧してる。危険視してると言つてもいい」

「どういう事？」

「要は、三人がいつぱいキスしてもらう事でキスを嬉しく思わなくなるんじゃないかって事と、それをする事が特別じゃないって思うんじゃないかって事」

ししよーの言葉に納得デス。キスをいつぱい、しかも同じ日に何回もしたら慣れちゃうデス。

で、慣れちやつたら飽きるかもしれません。アタシ達もししよーもキスに飽きたらどうするデスカ？

「大丈夫。その場合、もつと凄い事を師匠につ……いたい」

調の頭の上にゲンコツが落ちました。ししよーが少しだけ怒った顔をしています。

「そういう事を言い出すからダメだって言いたくなるんだよ。ちゃんと反省しなさい」

「……でも師匠だってエツちな事したいはず」

「だとしても、俺はちゃんと色々考えたいんだよ。後先考えずスケベな事なんて出来るのは学生の頃ぐらいだったの」

「学生の頃、デスか。ししよーの学生時代ってどんな感じだったデス？」

ふとキョーミがわいたから聞いてみました。するとししよーは軽く苦い顔で笑いました。

「もつと今よりもガキだったよ。周囲は学校に来てるのに、授業中に喋ったり漫画読んだりメールしたりと真面目に授業を聞かないどころか妨げる奴もいてさ。そういうのを見て、俺は完全に見下してた。そんな事したいのなら学校辞めるか休むなりしてこつちに迷惑かけんなって」

「でも、それは当然かも……」

「デスよ。自分だけならともかく他の人に迷惑かかる事するなんてダメデス！」

「うん」

「まあ、そこに関してはそうだけどさ。ま、とにかく俺は真面目だけが取り柄だったからなあ。授業中じゃない時に喋ったり漫画読んだりは気にしないけど……」

「分かる。リディアンにはそんな人いないけど、もしいたら私も嫌」

「デスね。みんなが勉強してる時に邪魔してくるなんてサイテーデス」

嫌な事から逃げたくなるのは分かりませんが、それなら一人で逃げなきゃデス。誰かを無理矢理巻き込むなんてダメデスよ。

「だからお友達を作らなかつたの？」

「それもある。でも、一番は必要としてなかつたのが大きいかな」

？」

「必要としてなかった？」

「どういう事デスカね？ お友達はいた方がいいデスのに。」

「俺の中では、友達ってのは作ろうとしないと出来ないもんじゃない。関わってる内に勝手にそうなるもんだ。で、まずそもそも関わろうと思う相手がない時点で友達なんて欲しいと思うか？」

「それは……」

「で、でも、友達はいた方が楽しいデスよ？」

「アタシは少なくともそう思うデス。でも、ししよーはそんなアタシに小さく微笑んで首を横に振りました。」

「それは切歌だからだよ。世の中には友達は一人いればいいって人もいれば、多ければ多い程いいって人もいる。下手したら友達なんていないって人もいるかもしれない」

「師匠は違う？」

「俺も正直友達はいなくてもいいかな？ 何せ状況が状況だ。この歳で深夜帯勤務だと日中動き回るのが基本辛いし」

「そっか。お兄ちゃん、前はよくお休みの日、寝てばかりだったもんね」

「そうそう。今はみんながいるし、ある程度体も慣れたから違うけどな」

「たしかにししよーはあのゲームに色々起きた日を切っ掛けに、お休みの日はお家に来てエル達とうんうん唸るようになりました。」

「時々眠って、ご飯を食べて、夜になったらお部屋に帰るって感じで。それが今じゃみんなと過ごすだけになってます。ししよーがいるとみんな楽しいデス。エルもヴェイグも笑顔が増えるし、何より幸せなんデスよ。」

「ご飯の時も、映画見てる時も、お話ししてる時も、ししよーがいるだけで笑顔が違うデス。」

「ま、とにかくそんな風に学生の頃の俺は生意気で自分は周囲と違っていて偉ぶってたガキだった。そんな感じだよ」

「それでもヒーローが大好きだから悪い人にはならなかったんだ？」

「むしろなる気も起きなかったよ。悪事つてのは絶対いつか報いを受ける。多かれ少なかれ、だ。そう思ってたから出来るだけ迷惑をかけるないように、ひっそりと生きてたよ」

「それが今じゃ人知れず世界を守るために頑張ってる」

「ししよーは本当にヒーローデスね」

「や、止めてくれよ。改めてそういう風に言われると照れくさいから」
「だってお兄ちゃんはヒーローだもん。私達がこうしていられるの、お兄ちゃんがいたからだよ？」

「デスね」

「うん」

アタシと調が頷くとししよーは照れながら頭を掻きました。

でも、本当にそうデス。ししよーが響さんと出会って、クリス先輩と三人でまずは頑張って動き出して、翼さんが来て、奏さんが来て、セレナとヴェイグが来て、マリアとエルを呼んで、最後にアタシ達が来て、それでも何とか生活出来たのはししよーだったからデス。

マリアやエルから聞きました。ししよーがマリアを呼んだ時の事は全部。

ししよーの持つてるお金全部を賭けてアタシ達とししよーの世界を救いたって、そう言ってマリアに来て欲しいってお願いした事を。

何て言うか、ホントししよーらしいって思いました。

いざとなったら思い切りがイイのがししよーデス。お金の使い方、覚悟を決めればどこまでもって感じデスし。

「うーん、ならヒーローはこんな歳の女の子を抱き締めたりしないから止めない」と

「そこはいいの（デス）っ」

「あははっ！ うん、了解ですお嬢様方。で、いつまでこうしてるおつもりで？」

「もうちょっと」

そこで言葉が重なって、思わず四人で笑っちゃいました。

その笑ってる間もししよーはアタシ達を優しく抱き締められて、

おでこにキスしてくれました。

それにセレナが「おでこだけ？」って言ったら、そういうキスはちやんとしたシチュエーションが欲しいだろって、軽く笑って言うからアタシと調でブーブー文句デス。

アタシや調もそういうシチュエーションでキスして欲しいデスって、そう言ったらししよーがしたのはデコピンでした。

お家の中でキスをねだるような悪い子は一回お休みだそうデス。だけど、仕方ないじゃないデスカ。ししよーともっと一緒にいたいデス。いっぱい抱き着いたりキスしたりしたいデス。

す、少しだけならエッチな事も興味あるデス。ししよーに胸を触られた時、ドキドキして、だけど全然嫌じゃなかったデスから。

「ししよー、ちよつと教えて欲しいデス」
「ん？」

アタシを見つめるししよーの目はとっても優しいデス。いつも、この優しい目で見ってくれるから、アタシはししよーが大好きデス。

「ししよーって、エッチな事がしたくなる事あるデスカ？」

そう聞いた瞬間、ししよーが見た事ないぐらい困った顔をしました。

「私も気になる。師匠、教えて」

「お兄ちゃん、私も知りたい」

「ないとは言えないよ」

「じゃあじゃあ、そういう時どうするデス？」

「他の事で発散するか、我慢する」

「発散？ どうするの？」

「運動とか」

「二運動？」

何故かそこでししよーが目を逸らしました。これはアレデス。これ以上は言いたくないって事デスね。

ふっふっふ……甘いデスししよー。今のアタシ達はししよーと密着してます。なら、ちよ、ちよつとだけ恥ずかしいデスがエッチな攻撃が可能なんデスよ。

「ししよー、どういう運動デスカ？」

「教えて？」

「運動は運動。読んで字の如し」

「どういう事をやってるのか知りたい。師匠、教えて」

「教えてくれないとお、おっぱい押し付けるデスよ？」

「脅し方として斬新過ぎるだろ。あと、それは人によつては脅しじやなくてご褒美だからな？」

「今のししよーはどっちデス？」

するとししよーはすつごく困った顔で黙りました。しばらくアタシの耳にはエアコンの動いてる音しか聞こえません。

「……………脅し4のご褒美4で勘弁して欲しいが2」

「二「複雑（デス）……………」」

「そうだよ。複雑だ。男としては脅しだよ。人としては勘弁願いたい」

「あれ？ ごほうびは？」

「…………雄として、かな」

「二「おす？」」

ししよーが言った事がちよつと分からなくて首を傾げたら、セレナだけじゃなくて調も分からなかったみたいでした。

だからししよーに説明を求めたら、苦い顔で教えてくれたデス。

おすつていうのは、つまり動物の性別の事で、本能的な感覚ではつて意味らしいデス。

…………おっぱい、押し付けて欲しいつて事デスよね、これ。

そう思いながらアタシはししよーを見つめました。

えへへっ、ししよーがオスならアタシはメスデスね。

「ししよー、じゃあオスで構わないデス。アタシはメスデスから」

「っ?! き、切歌？」

「ほえ？ 何か間違つてるデスカ？」

動物だと男の人がオスで、女の人がメスのはずデス。

「あく…………うん、何でもない。そうだよな。切歌はそういう子だった」
「何で呆れられてるデスカっ!?!」

納得いかないデース！

「ふふっ、師匠？ 私達がメスだと何か困るの？」

「し、調は何となく分かっているだろ」

「お兄ちゃん、私、まだおっぱい大きくないけどそれでも嬉しい？」

「えっと、それはどう答えてもダメなんだよセレナ」

「ししよー、アタシはこの中で一番大きいデスから安心してくださいデス」

「うん、むしろ一番安心出来ないんだよそれが」

そんな風に三人でししよーにくつついて、おっぱいを押し付けてたら揃ってゲンコツを落とされました。

で、もう寝るからってししよーに強引に追い出されて、仕方ないから三人揃って帰る事に。

でも、アタシ達は気付いてました。ししよーの、その、男の人の部分が大きくなってたって。

「私達、十分師匠に大人の女って思われてる事は確信出来た。この調子で頑張ろう」

「はい。お兄ちゃんが喜んでくれてるって事ですもんね」

「デスデス。三人で頑張ればいつか必ずオスの気持ちだけになってくれますよ」

そうなったら、きっとお嫁さん修行も一気にしてくれるはずデス。

——調やセレナと三人でししよーのお嫁さんにしてもらえるのも時間の問題デスね。楽しみデス……。

「……あと二分か」

何度も時計を見つめちゃう。気が付くと目が勝手にそこを見てる。

クリスちゃんはそんな私を見て呆れ顔。ううっ、分かっているけど露骨にため息を吐かれると地味に傷付く。

「あのなあ、待ち合わせ時刻を過ぎたらお前の行動は理解出来るけど、まだなってもいないんだ。ちったあ落ち着きやがれ」

「で、でもお」

「ったく、昨日の夜はやっとデートだってはしゃいでた癖に、今になっ

て色々慌てやがって」

そう、今日はやつと仁志さんとデート。しかも、仁志さんからクリスちゃんのスマホへメールがあつて、今回のデートは時間指定だったりする。

隣同士なのについて思つてたら、どうやら仁志さんは現在外出中。何か考えがあるんだろうなつてクリスちゃんは言つてたけど、一体何をするんだろう？

「つと、メールだ」

「っ!?!」

スマホを弄つてクリスちゃんが少し黙つてからこつちを見た。

「アパート前に来てくれたと。そこで待つてるんじゃねーか？」

「分かつた。じゃ、行つてきまーす」

「おう、行つてこい」

ウキウキ気分で靴を履く。ドアを開けて外へ出ると熱気が一気に襲い掛かつてくる。

まだ暑いなあ。と、そこで気付いた。アパート前に車が止まつてるつて。

で、見つめてると運転席側の窓が開いて……え？

「仁志さん?」

「お待たせ。さあ、早く乗つてくれ。あまり長い時間は迷惑になる」

「は、はい」

言われたように急いで助手席側のドアを開けて乗り込む。するとゆつくりと車が動き出した。

でも、この車ちよつとタバコの匂いがする。仁志さんはタバコを吸わないから……元々するのかな？

シートベルトを締め終えた辺りで、仁志さんがちらつとこつちを見て微笑んだ。

私の、好きな顔だ。

「やっぱ驚いた?」

「え? あ、はい。まさか車で来るなんて」

「まあ、響とクリスは待たせたつてもあるからさ。さすがに今暮ら

してるのとほぼ同じ部屋で過ごすつてのもどうかと思ってな。これ、実は実家の車なんだ」

「実家の？」

「そ。ちよつと前に久々に連絡取つて、まあ俺の現状を少し話したんだよ。あつと、みんなの事じゃなくて俺の仕事とかの方な？ で、この前の日曜に父さんの誕生日祝いやら何やらを持って会つてきたんだ」

「そうだったんですね」

この前の日曜日は仁志さんがお休みだったのに、みんなが集まるのを夕方からにして欲しいって言つてたけど、その理由はそういう事だったんだ。

「そして、今回は車を借りてきた」

「い、いいんですか？」

車、使う事ないのかな？

「どうせ休日の買い物ぐらいにしか乗つてないから好きにしろつて言われたよ。ああ、そうだ。タバコ臭くないか？ 一応消臭剤で少しはマシにしたけど」

「あ、大丈夫です。多少しますけど気になる程じゃないから」

「そつか。ごめんな。父さん、かなりのヘビースモーカーなんだよ。最近は歳のせいもあつて減つたらしいんだけど」

「そうなんですか。いくつなんですか？」

「今年で63だか4だか。定年近いんだよ。昔ならとつくにだけだよ」

何だか不思議な感じ。そういえば仁志さんが自分のお父さんの事話すの初めてだ。

そう思つて聞いてるといつの間にか車が見た事のない道を走つてる。

一体どこへ行くんだらう？ も、もしかしてこのままホテル、とか？

なんて、そんなバカな事を思いながら仁志さんとの会話を続けた。今はこれから行くところとしての場所の話。仁志さんが言うには、中学

生時代に一度行った事のあるボーリング場らしい。

「響、ボーリングは得意？」

「得意って程じゃないですけど、多少は。仁志さんは？」

「俺は全然。狙ってないのにガーターが取れる男だ」

「ぷっ……何ですかそれえ」

「言っただままの意味。真っ直ぐ投げてるのに何故か曲がるんだよ」

想像すると面白い。仁志さんが真剣な顔でボールを投げてるのもそうだけど、それがギョんって感じで曲がってガーターへ落ちるのも。

「まあ響も得意じゃないならいい勝負になるかな？」

「え〜？ さすがに私、仁志さんには勝てると思うなあ」

何だろう。今、私、すっごく彼女っぽい。

「おっ、言っただな？ じゃあ勝負しよう。2ゲームやって、合計スコアが高い方が勝ち」

「いいですよ」

本当に楽しい。何だろう？ いつかのお部屋デートよりも恋人っぽいから、かな？

あと、車で二人きりっていうのも大きいかも。今の仁志さん、あの頃よりも大人の男の人って感じ強いし。

車はそのまま何事もなく進んだ。仁志さんは時々「懐かしいなあ」って言いながら運転してた。

私はどうせなら仁志さんの育ったお家に行きたいなって、そう思っ
て言ってみたら……

——今の家は俺が高校を卒業した辺りで引っ越した場所だからそこ
まで思い出ないぞ。

って、そんな風な悲しい事を言われてしまった。

「その前はどこに住んでたんですか？」

「え？ あー、バーベキューやった店覚えるよな？」

「はい」

「あそこから歩いて五分ぐらいの、まあ古い作りの借家」

「えっ？ あのお店近くなんですか？」

言われてみれば、仁志さんはあの日、業務用スーパーもあのお店もナビを見ないで行ってた。

そっか。知ってる場所だったからなんだ。

「そうそう。俺が五歳ぐらいから高校卒業まで暮らした街だ」

「へえ……」

そう思うとあの辺りを一緒に歩いてみたい、かも。仁志さんの育った街を、二人で。

そんな事を思っている内に車は目的地に到着。そのボーリング場はこの辺りじゃそれなりに歴史があるみたいで、仁志さん曰く物心つく前にも家族で来た事があるんだそう。

でも、その時はボーリングじゃなくてゲームセンターがメインだったらしいって笑ってた。キャラクターものの乗り物ではしゃいでたみたい。

見たかったなあ、仁志さんの子供の頃。

「えっと、仁志さん」

「ん？」

「小さい頃のアルバムとかって、ありますか？」

「どうだろう？　あるとは思うけど……母さんに聞いてみないとなあ」

「あ、あつたら見せて欲しいなあって。ダメ、ですか？」

仁志さんが若干嫌そうな顔をしているのを見ながらお願いしてみる。で、ちよつとだけ見つめ合って、仁志さんがため息を吐いて項垂れた。

「分かったよ。じゃ、この後実家へ行くか。この時間は父さんも母さんも仕事で家にいないし、軽く探してみるよ」

「ほ、ホントですか？」

ど、どうしよ？　衝撃の展開だ！

「ああ。さてと、じゃあとりあえずは楽しもうか？」

「はいっ！」

そこからはボーリングを二人で楽しんだ。一回目は私が圧勝。ただ、スコアはそこまですもなかった。

仁志さんがガーターを連発して、でもたまにストライクを取ったりしてっという、何というか荒い感じの展開だったけど。

「この感じなら私の勝ちですね」

「そうはいくか。二回目は俺が勝つ」

そう言っただけで始まった二回目は、何と仁志さんが安定したスコアを取れるようになった。

理由は簡単。投げ方を変えたから。今までは力強い感じで投げたのを、二回目からは勢いを付けずに投げるようになった。

すると、今まで曲がってたボールが急に安定して真っ直ぐ転がるようになったって、ストライクは皆無だったけどスペアを時々取れるようになったから私よりも上のスコアに。

「な、何でこんなに変わるんですか？」

「まあ、時には力や勢いより冷静さが必要って事だろうな」

「むう、でも負けませんから！」

「それでこそ響だ。うし、じゃあ負けた方はジュース奢りってのはどう？」

「いいですよー！」

そうして出た結果は、若干の差で私の勝ち。

で、今は仁志さんが悔しそうに自販機でお金を入れてるのを聞きながら、私はどれにしようか悩み中。

ジュース系がいいかな？ 紅茶系も捨てがたい。でもでも、ちょっと変わり種っぽいのもいいかも。

こっちの自販機は私達の方とはまた違うから楽しいんだよね。あつ、この自販機限定ってやつにしよう。

「えいつ」

ガコンって音と共に缶が落ちてきた。手に取れば鮮やかな葡萄色。

「それにしたのか」

「はい。自販機限定ってあったから」

「あー、限定って言葉に人は弱いからなあ」

言いながら仁志さんが選んだのも自販機限定のものだ。私は炭酸で仁志さんは紅茶。ただし、自販機が違うけど。

「じゃ、車に戻ろう」

「はい！」

そして、いよいよ仁志さんのお家へ行くんだ。どんなところだろう？ たしかマンションみたいなアパートって言ってたけど……。

移動する事十数分で車は駐車場に止まった。そのすぐ横の三階建てが仁志さんのご両親が暮らしてる場所みたい。

階段を上がって一番上へ。右と左にドアがあるけど仁志さんは向かって右のドアへ近付いてく。

「つと、どうぞぞ」

「お邪魔しまーす」

中へ入ると左手側にドアがあつて、右手側は部屋、かな？ 正面はドアが開いてて広そうな部屋が見えるから、きっとリビングだね。

「そこは母さんの部屋。で、閉まつてるドアはトイレ。リビングは正面だからそこにあるソファに座ってくれ」

「はい」

靴を脱いでリビングへ入って軽く中を見回す。

広さは……今暮らしてる部屋よりちよつと狭いぐらい。でもダイニングがあるから合計はこつちの方が広いね。

「あの、仁志さんが暮らしてた部屋は？」

「……見たい？」

「はいっ！ ダメですか？」

このままじゃ絶対見せてもらえないと思つてお願いしてみる。やっぱり気になるもん。

でも、思つてたよりあつさり仁志さんはいよいよつて言つてくれた。

「こつち。ついてきて」

「はい」

リビングから見えてるドア。そこが仁志さんの部屋だった。

中は……狭い。翼さん達が暮らしてるより狭い。

「何も無いに近いだろ？」

「はい。ベッドと机しかないですね」

「今のところに引越す時に粗方運び出したんだ」

「そっか」

そう言いつつベッドへ座る。で、仁志さんを見つめた。

「何だか、あのお部屋よりも彼氏の部屋に来た感じ、します」

「……………まっ、実家だしな」

恥ずかしそうに顔を背けて仁志さんが鼻の頭を掻いた。

な、何だか私も照れてきちゃう。と、その時だった。

「あれ？ 仁志？ 来てるの？」

離れたところから聞こえてくる女の人の声。きっと仁志さんのお母さんだ。

「…………マジかよ。母さんだ。嘘だろ？ まだ帰ってくるような時間じゃないぞ」

不味いって顔をして仁志さんが振り返って部屋を出ようとして――

「ちよつとここにいてくれ。窓開けてくれていいから」

って言ってドアを閉めた。

でも、薄っすらとリビングの音が聞こえてくる。

「母さん、どうしてこの時間に？」

「体調悪くなったから人もいるし早上りさせてもらったの。明日夜勤だから、悪化したら私も病院も困るしね。というか、どうして来たの？ 何か用事？」

「え、えっと、俺の小さい頃の写真とかってあるかなって」

「あるけど……………そんなもんいきなりどうしたの？」

「いいだろ別に。で、どこ？」

「何その言い方。久々の親子の会話なのに…………」

「あーはいはい。ごめんごめん。というか調子悪いんだろ？ 部屋で寝てろよ。こっちは勝手に探すから。場所だけ教えてくれて」

「その私の部屋にあるんだわっ！ ホントにこの子は相変わらずだね！ 手を洗ったら出してあげるから待ってなさい！」

「自分で探すっての！ てか、元気じゃないか！ どこが体調悪いんだよ！」

「吐き気がするの！ あと、帰れないぐらい体調悪かったら病院で休

んでるわっ！」

聞こえてくる会話で何となく仁志さんの子供時代が浮かんでくる気がした。

仁志さん、お母さん相手だと割と短気なんだ。それと、仁志さんのお母さんは結構短気かも。もしくは、仁志さんと一緒に家族の前だけそうなるのかな？

どたどたと歩く音がして、水が流れる音が聞こえてきた。

多分だけどこの部屋の近くに洗面所があるんだと思う。

そういえば、ダイニング近くに洗面所らしい場所があった気がする。

「つたく。気分が悪くて帰ってくれば、久々の息子は優しくくないし……」

「この前も会っただろ」

「あの時はほとんどお父さんと喋ってたでしょうが。私は男同士の話だし邪魔しちや悪いと思って部屋にいたでしょ」

「よく言うよ。思いつきり部屋からDVDの音聞こえてたつての。また新しい海外ドラマ買ったんじゃないのか？」

「だから何？ 私が自分で働いて稼いだお金で何買おうと自由でしょうが」

「別にそこに文句は……」

声が段々遠ざかる。多分だけど仁志さんのお母さんの部屋へ行っただんだ。

何というか、ちよつとだけ、ちよつとだけだけど家の事を思い出した。

お父さんとお母さんがこんなやり取りしてた事もないし、私と違ってない。でも、何となく家族って感じがして、少しだけ心が切ない。

だからかな。仁志さんが昔使ってたベッドへ横になった。

埃とか舞うかなって思ったけど、意外とそんな事もなかった。

「……これ、時々掃除とかしてるんじゃないかな？」

いつ帰ってきてもいいように。きつとお休みとかの日に、仁志さんのお母さんがやってるんだ。

そう思うと、何だか胸があつたかくなる。やっぱりどこの家でもお母さんはお母さんなんだなあって。

私の家でも、お母さんは私が帰ってきててもいいようにしてくれ。母の愛つて、こういう事なんじゃないかな？

窓を開けてベッドに横になつてると割と涼しい。三階だからかな？ 風が入ってくる感じる。

「何だか、思いがけない事になっちゃったなあ」

ちよつとだけ興味本位で仁志さんのお部屋を覗きたかっただけなのに、まさかそこに隠れる事になるなんて。

「……これって、何か漫画みたい」

そう思つてると足音が近付いてくる。で、ドアが開いて仁志さんが入ってくるなりまたドアを閉めた。

「ふう、やれやれ。とりあえずご希望の物だよ」

「あ、ありがとうございます。お母さん、大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、聞こえてたよな、やっぱ。うん、大丈夫。吐き気が強くて、仕事をするのは難しいってだけみたいだ。今は部屋着というか寝間着に着替えてるはずだよ。隣、いいか？」

「あ、はい」

差し出されたアルバムを受け取った私の横へ仁志さんが座る。な、何だか今までで一番近いかも。

「さて、一体いつここを出れるか……」

「あつ、そうですね」

このままだと私を連れて仁志さんは外へ出れない。仁志さんのお母さんが寝てくれれば問題ないんだけど……。

「とりあえず響はここでアルバムを見てくれていいよ。俺はリビングで母さんの様子を窺う。で、出られそうになったら呼びに来るから」

「は、はい」

そう言つて仁志さんはまた部屋を出て行った。残された私はアルバムへ意識を向ける事にした。

「……仁志さんの小さい頃ってこんな感じなんだ……」

まず目に入った赤ちやんの頃はよくある赤ちやんって感じだった

ので飛ばして行って、目が留まったのは多分三歳ぐらいの仁志さん。三輪車に乗って家の前、かな？　そこで撮影した感じの写真だ。次はお父さんと一緒にテレビを見てるところ。後ろ姿のお父さんと、カメラに、多分お母さんに気付いて振り返ってる仁志さんが可愛い。誕生日らしく蝋燭の明かりとケーキだけしかない室内で撮った写真もあつた。

見てるだけで胸があつたかくなる。その理由もすぐ分かった。

写真が笑顔ばかりだからだ。仁志さんが、時々仁志さんのお父さんやお母さんも笑ってる。

勿論笑顔じゃないのもあるけど、それはそれであつたかい思い出の写真だもんね。

「響、母さんが自分の部屋へ入ったから今の内に。空調入れてるから開ける事はまずない」

「あ、はい」

気付いたら仁志さんがドアから顔だけ出してた。

なのでアルバム片手に、出来るだけ音を立てずに玄関まで移動する。

靴を履いてドアを開けると仁志さんが鍵を差し出してきた。

「これ、車の鍵。先に行って待っててくれ」

「分かりました」

鍵を片手に階段を降りて少ししたところではたと思ひ出す。

「仁志さんの部屋、窓開けっ放しだ……」

仁志さんに教えようと思つて階段を上がった。でもそこに仁志さんがいないくて小首を傾げる。

「あれ？　すぐ来ると思つたんだけど……」

とりあえず窓の事を教えないと。そう思つてこっそりドアを開けると、聞こえてくる声があつた。

「仁志、あんたの人生だからどう生きてもいいけど、私達はいくつになつてもあんたの親だから。もし困った事や助けて欲しい時は遠慮なく頼りなさい。いい？」

「……分かった。その、また夜に車返しに来るから。その時にまた話

をする」

「そう。ああ、それと一つだけ」

「何？」

「いつでもいいから彼女、紹介しなさいよ？ 来てたんでしょ？」

「っ!？」

思わず息を呑んだ。ど、どうして気付かれたんだろ？

「な、何言って」

「見慣れない靴、あつたからね。スニーカーだったからあんたの友達か知り合いだろうと思っただけど、紹介もしないしピーンときたわ」

そ、そっか。靴か……。

「絶対結婚しろとは言わないし、孫の顔見せろとも言わないけど、そういう相手が出来て、長い付き合いになりそうなら会わせなさいよ？ 私よりもお父さんの方が喜ぶだろうしね。お父さん、娘欲しがってたから」

「……そこまでの段階になったらな」

「それでいいから。そうそう、体に気を付けるんだよ。深夜業は負担大きいからね」

「母さんこそ、明日夜勤だろ。そっちこそ気を付けてな」

「ありがと。じゃ、彼女さん待たせちゃなんだから早く行きなさい」

「ああ。また顔見せるよ。ゆっくり体休めてくれ」

そこで私はドアを静かに閉めた。

ちよつと、ジーンとしちゃった。やっぱり家族っていいなあ。

もし私も将来お母さんになったら、さつきみたいな事を子供に言うのかな？

「ん？ あれ？ 響？ どうしたんだ？」

ドアを閉めた仁志さんが私を見て不思議そうな顔をする。

「実は、部屋の窓、閉め忘れたんですけど」

「あく……いいよ。後で母さんにメールしとく。今日は雨も降らないだろうし、心配いらなくて」

言いながら仁志さんが鍵を閉めた。多分だけどさつきの後だから戻りたくないんだろうな。

そう思いながら仁志さんと腕を組んで歩きながら笑顔になる。

いつか、私を紹介してくれるのかな？ 俺の彼女って、そう言ってくれるのかな？

——でもそれは無理だ。だって、仁志さんは一人に決められない。ううん、それだけじゃない。このままだと二度と会えなくなるんだもん……。

思わず胸が痛んだ。心をギュって掴まれたみたいで、凄く苦しい。さつきまでのあつたかさや幸せが一瞬で消えた気がする。

「響？ どうかしたか？」

「え？ な、何でもないです……」

足が止まったから仁志さんが不思議そうに顔を覗きこんでくれた。それだけでちよつとだけ心が軽くなる。胸の痛みが和らぐ。

「……そっか」

何か言いたそうな顔だけど、仁志さんは何も聞かないでくれた。

そのまま車へ戻ると中は灼熱地獄。

「そのままちよつとドアを開けておいてくれ。空調を入れるから」

「はい」

凄いい勢いでエアコンから風が吹き出してくる。でも涼しい。

「響」

「へ？ 何でっ?!」

呼ばれたから振り返った瞬間、キスされた。

驚いてる私の視線の先で仁志さんが少しだけ照れくさそうに頬を掻いている。

「その、これで少しは元気になれる？」

「あ……はい」

それだけで分かった。仁志さんは階段で私が気分を沈ませたって分かったから、それを何とかしようとしてくれたんだって。

「そっか……。よし、じゃあドアを閉めてくれ。昼飯を食べる店、探そう」

「はいっー」

やっぱり私、この人が好き！ ちゃんと私が見て欲しい時に見てく

れるこの人が！

車は動き出すとゆつたりとした速度で道を進む。

まるで私と仁志さんの関係みたいなのに、ゆつたりと、進む。

「昼は何食べたい？」

「えっと……美味しい物がいいです！」

「それは俺も同感だけど、具体的には？」

「うーん……お、お寿司、とか？」

「回るやつでいい？」

「むしろそうじゃないと心苦しいです！」

「ははっ、違うない。じゃ、回転ずしにするか」

「はいっ！」

本当に、仁志さんと会えて良かった。私の初恋の相手が、ファーストキスの相手が、仁志さんで良かった。

——なのに、このままじゃ世界が私達を引き裂いちやう。この幸せを、あつたかさを壊しちやう。そんなの、そんなの絶対許せない。させたくない……。

そうだ。それは、絶対そうだよ。

——悪意がゲートを作ってるなら、何とかしてその方法を聞き出せないかな？ 維持する方法でもいい。何か、何か聞き出せないかな？ ゲートに関係する事を……悪意から……。

——もしそれが出来れば、また仁志さんと会える。一緒に過ごせる。キスも、それ以上の事だつて出来る……。

仁志さんと……初めての夜を……？

——そのためにも悪意から聞き出さなきゃ。ゲートを作った方法や、それを維持している方法を……。

……そう、だね。聞き出そう。仁志さんとの出会いを悲しい結末で終わらせないために。

そして何よりも……

——只野響になるために……。

分かっていたさ、こうなる事は。それでも、置いていけとは言えな

かった。

その後にあつたチャンスさえも、俺の甘さのためにふいにしてしまつたし。

だけど、実際こうなるのを目の当たりにすると自分の判断を後悔してしまふ……。

「二二可愛いく(デス)二三」

切歌達年少組が見て可愛いと言っているのは響が実家から持ち出したアルバムである。

あの日の夜、車と共に返そうと思つたんだが……

——クリスマスちゃんに知られちゃつて……。

そう言われてしまつては諦めるしかなかったのだ。チラリと見せてもらった室内では、クリスマスが布団に寝転がってアルバムを読んでいたもんなあ。

顔は見えなかつたけど、あれ、絶対笑顔だつたと思う。だつて足が時々パタパタと動いてたもの。

「なあ、マリア？ あのアルバム、たしか響達の部屋にあるはずなんだが？」

「今日の集まりのために持つてきたみたいよ？ 何でも自分とクリスマスだけじゃ不公平だからつて」

いや、そう言われたらそうかもしれないけど、むしろそこは独占欲を發揮して欲しいというか何というか。

なんて、そんな事を言おうものならどうなるやら。今のみんなはちよつと危ない感じがする。

あのクリスマスが見せた本来ならやらないはずの行動。あれは完全に悪意によるものだ。

つまり、みんなを乗っ取るのではなく、あくまで本人のままらしからぬ方向へ誘導してゐるんだろう。

……俺が言つた事、意識してるとかないよな？ 本人らしく振舞えないから、本人のまま狂わせていこうとかしてるんだとしたら、ちよつと不味い。

疑心暗鬼に陥りかねないからなあ。もしもそれが狙いだとしたら

厄介だし、悪辣にも程がある。

何せギアを展開出来ていても乗っ取られる事はある訳だし、神獣鏡で悪意を払ってもその日の内に乗っ取られた事もあるんだ。これをしておけば大丈夫という方法がない以上、完全に安心は出来ない。

「エル、見終わったら次はあたし達に貸しておくれ」

「分かりました」

「仁志さんの小さな頃か……。どんな感じかな？」

「今とそんなに変わらない？」

「さすがに変わってるよ。学生時代とかならともかく、な」

と、そこへ……

「いえいえ、結構面影ありますよ」

「おう、仁志の顔だったぜ」

既に見終えている二人が俺の意見を否定する。

そりやまあ、完全に違うとは言わないけど、今の方が大人っぽくなってる分違うはずだろ？

「よし、この話はここまでだ。それよりもまずは聞いて欲しい事がある。はい、ちゅくもくく！」

手をパンパンと叩きながらそう言うときみんなが俺の方を見た。ただし、年少組以外は苦笑している。まあいいさ。

「夢の国ニュースの時間です。未定だった内容の一部が、つい最近の有識者会議にて決定され、出発時刻は朝七時半となりました」

「七時半、デスカ……」

「切ちゃん、また最悪起こしてあげるから」

「私達は平気だね、エル」

「はい」

年少組の反応に笑みが浮かぶ。予想通りであり、故に心あつたまるやり取りだ。

「更に、行動開始は29日と決まりました。翌日の30日の夕方頃には帰宅する予定です」

「休み予定出しておかないといけないデスね」

「私達はもう出してるようなものだから平気」

「こういう時店長が一緒だと便利だよね」

調と未来の会話に苦笑する。まあ今はシフト作ってるのたしかに俺だから、五人の休み希望は受理してるようなもんだけども。

「そして、気になる宿泊施設ですが夢の国提携のホテルに決まりました」

「提携の……」

「ホテル、デスカ……」

「じゃあ遅い時間まで遊んでいられるんですね！」

「出来なくはないよ」

「「「おく……」」」

エルの言葉に笑みを浮かべるのはヴェイグを含めた装者年少組。本当に愛らしい子達だよ。

「はいはい。ホテルの部屋割りってどうなってますか？ やっぱり四人ずつぐらいで三部屋ですか？」

「そうなる。で、悪いけどメンバーはこっちで決めさせてもらった。まず、響・未来・クリスで一部屋」

「妥当だな」

「だね」

「うん」

仲良しトリオは元々同じ部屋で暮らしてもらおう予定だったし、そういう意味では予想の範疇だろう。

「次が、奏・翼・切歌・調」

「ここも予想通り」

「だな」

「コンビ同士って感じですね」

「ツヴァイウイングと一緒になんて楽しみデスよ」

「ここも不安はない。切歌は奏と相性がいいみたいだし、調と翼は風月コンビだからな。」

「最後は俺・マリア・セレナ・エルにヴェイグ」

「ま、仕方ないわね。仁志だけシングルは費用がかさむし」

「それに、そうしたら兄様だけ寂しいです」

「うん、そうだね」

「タダノ、それぞれの部屋は遠いのか？」

「そこまでは分からないけど、多分同じ階で近くにしてくれるとは思
う。あと、エルは申し訳ないけどセレナと一緒に寝てもらおう事になる
からよろしく」

「はーい」

仲良し姉妹の返事も聞けたところで響が少しだけ遠い目をするの
が見えた。

「今月末、かあ。遠いようで早いよね」

「そうだね。もう秋がすぐそこまで見えてるし」

「そういえば、朝の常連さんの中に混じって見慣れない人がちらほら
増えてきました」

「ああ、うん。九月って転勤とかの時期なんだって。夕方に来てくれ
るおじさんの会社でも……」

調を中心に始まるコンビニートーク。ただし、そこに混ざれない人間
が俺の他にもう一人。

「ん？ 何？」

「いや、俺達夜勤はそういう話滅多に聞かないからな」

「まあ時間が時間だしさ。でも、仁志先輩も思い切ったよね。泊まり
で、しかもホテルなんてさ」

「聞いた時は驚いたわよ。ただ、詳しい話を聞くと貴方らしいとは思
ったけど」

「そうだな。私も仁志さんらしいと思った」

既にある程度の内容を知っているドライディーヴァが苦笑する。

彼女達は、ホテルやアトラクションのファストパスなどがセットの
プランと知っているのだ。

だが、まだ三人にも教えていない事がある。それは初日の昼飯をど
こで食べるかと言う事。

実は、何と途中横浜中華街で美味しい中華を食べようという訳であ
る。

しかし、これは当日中華街へ着くまでのお楽しみなのだ。

そう、これがヴェイグに言った「夢の国以外のお楽しみ」と言う訳だ。

……この際は金は気にしない。みんなの配信による稼ぎもあるし、下手をしたらこっちでの最後の思い出になるかもしれないから。

「はいはい。この話もここまで。あまりすると切歌や響が気になっちゃうからな」

「もうなってますデス」

「だよ。だってもう二週間もしたら……」

「旅行デスっ！」

そうなんだよなあ。気付けばもう九月も半ば。

あのバーベキューは半月前で、響とのデートさえも一週間近く前。光陰矢のごとしとはよく言ったもんだ。

残るクリスとのデートも今度の俺の休みにする事が決まっている。

まあ、響が半分本気でホテルに行ってみたいと言いつ出した時には危うく事故になるところだった。

あれと同じ事をクリスも言いそうで怖い。何が怖いって俺がそれを最後まで却下出来るかどうかが不安だからだ。

何せ、最近切歌達三人が毎日のようにちよつとエツチな攻撃を仕掛けてくるわ、夕食前の散歩で翼は必ず腕を組んで胸を押し付けてくるわ、奏など勤務中に一度はキスをしてくるわ、マリアは朝食前に抱き締めて欲しいとお願いしてくるわ、響とクリスは引き継ぎの際に着けるブラをこっそり見せてくるわ、未来は毎朝のジョギングの途中で「上手くみんなを受け止めて、時には受け流してくださいね」なんて言ってくる始末。

ん？ 未来だけお色気がないじゃないかって？ むしろないから怖いんだよ。

だって「私までみんなと同じになったら、只野さん、心休まらないですもんね」ってニッコリ笑顔で言ってきたんだぞ？

ただ、それが事実だったので感謝してもいるんだけど。

これ、本当に学生の頃じゃなくて良かった。二十代前半の頃じゃなくて良かった。そして夜勤じゃない頃じゃなくて良かった。

そうだったらきつと今頃、この世界は悪意によって滅ぼされたか支配されていただろう。

「そうだな。それと、分かっているとは思うけど」

「旅行が終わったら、最後のカオスビーストとの戦い、ですよね？」

無言で頷く。それできつと悪意が動くはずだ。

おそらくだけど、その戦いが最後の戦いになる。相当厳しいものになると思った方がいいかもしれない。

可能ならリビルドのツインドライブを使わず済むといいんだけど。

つと、そうだ。セレナとも、その戦い前にちゃんと向き合って、俺の真剣な想いを伝えよう。繰り返しになるかもしれないけど、それが大事なんだから。

「それで全てが終わる……いや、終わらせないといけない」

「そうね。この事件の原因である悪意を浄化して、終わらせてみせる」

「そうそう。で、その後は仁志先輩が撃破対象の戦いだからさ」

「そういう言い方は止めてくれよ。俺、ボロボロになるイメージしか湧かないんだけど……」

ドライディーヴァが揃って笑うのを見て俺は苦笑するしかない。

本当にこの三人は頼もしいし綺麗でどこか可愛い。

「正直そっちの方が今までが一番激しい戦いかもしれないねえな」

「で、出来れば拳を握るような事はないといいなあ」

「只野さんの覚悟や決意次第じゃないかな？　それで私達がどうするか、だと思っし」

仲良しトリオの意見に俺は何も言えず苦い顔。というか、未来の言葉が何気に重い。

ハーレムなんて俺には無理だと思っ反面ここまできたら実現したいと思わないでもないから。

「事実婚、なら問題ないらしいデスよ？」

「切ちゃん、それどこで聞いたの？」

「この前エルが調べてましたよ。ね、エル？」

「はい。婚姻届を出さず、同居生活を十年以上継続する事で事実上夫婦という形になれば、妻が複数いても構わないそうです」

「タダノ、知っていたか？」

「え？ あー、事実婚ならな。それなら重婚状態はいいなんて知らなかった。ま、どっちも自分には縁のない言葉だと思ってたけど」

事実婚ならハーレムも合法なんて考えた事もなかった。

でも、たしか昔何かの事件でそういう状況を作ってたとかいう話を聞いた気がする……。

「これなら悪意がみんなへ入り込む事を防げるんじゃないか？」

「あー、残念だけどヴェイグ、そうはならないと思うよ」

俺がそういうと年長者組とエルは理解したような顔をし、響と未来は若干苦笑い。

で、年少組はどうしてと小首を傾げた。

ああ、あとヴェイグもか。本当に癒し効果の高い存在だよな、今のヴェイグ。

「えっと、響達の世界と奏の世界とセレナの世界。みんなの住まう場所はそもそも分かれてる」

「ああ」

「つまりな、こうやってみんな揃って暮らすのは無理に近いんだよ」

「……そうか」

どうやらヴェイグも分かったらしい。悲しいかな、俺の体は一つ。なのにみんなの世界は三つ。

どう考えても俺が決意したところで現状のような暮らしは無理。

「それでも、だとしても気持ちいを俺は持ち続けたいとは思うけどな」
不可能だとしても、諦めず信じ続けていけばいつか叶うかもしれない。

その希望を捨てず、俺は生きていく。この世界で、たった一人になるとしても。

「みんな、きつと気持ちは同じだよ。このまま暮らしていきたいって。だけど、君達には待つてる人が、場所がある。その人達や世界を見捨てて個人として生きるのは、止めた方がいい。せめて、その場所での役目や仕事を片付けてから旅立つべきだよ」

「んな事が出来ると思ってるのかよっ」

「出来るさ。雨はいつか止むし、明けない夜はない。ノイズや錬金術師が問題を起ささない時だって、シンフォギア装者の代替わりだって必ず来る。何なら、ここがみんなの世界にとっての神様の世界って言うなら、俺が書いてやるよ。何度でも何度でも平和になってみんながシンフォギア装者じゃなくてもいい世界の話を。ただの女性としての物語を」

「兄様……」

「それで君達の世界へ影響させてみせる。いつそ前に言った夢物語も書いてやるさ。根幹世界をベースに、奏とセレナの世界が融合したよな、そんな有り得ない話を」

悪意がやった事の逆をやってやる。ああ、そうだ。俺が書いた物なんて大した影響力はないかもしれないけど、それでもだ。

もしかしたらがあるかもしれない。塵も積もればじゃないけど、俺の書く拙い二次創作がみんなの世界を変えるかもしれないんだ。

「俺はただの人だ。それでも、君達の世界からすれば神みたいなもんだって言うのなら、描いてみせようじゃないか。奇跡つてやつを、さ」

「仁志さん……」

こつちを驚きの表情で見つめるみんなへ笑顔を向ける。そうだ。俺が知ってる物語が響達もがき足掻いた結果なのか、それともこつちで考えられた結果なのかは分からない。

だけど、今こうしてみんながここにいて、俺と一緒に俺の知らない時間を生きている以上、もう答えは一つだ。

もうこれからの彼女達の物語は、彼女達自身と俺で作っていくものだって。

そこからはみんなで切歌が借りてきてくれたアイマスの劇場版を見た。

詳しくは知らないみんなも、翼やマリアの繋がりで多少知っている芸能界と近いそれに、感心したり驚いたりと楽しんでるようだった。

奏達三人もアイドルというものの厳しきなどを見て、自分達に似たものを感じたのか途中からは真剣な表情で見つめていた。

そして最後のライブシーンではみんな揃って感嘆の声を上げてくれた。

綺麗だもんな、ここのライブ。本当にそこにいるかのような臨場感もあるし、カメラワークがえぐいの何のって。

「マスターピース、いい歌デス！」

「うん、心に沁みる……」

「サビの歌詞、ウルウルしました……」

「僕はアイドルという物をほとんど知りませんが、あんなに大変なんですね」

「だからこそ、笑顔が眩しいんだろう。辛い事や苦しい事を乗り越えた先の輝きだ」

ヴェイグの言葉が胸に響く。そっかあ。それもあつての輝きの向こう側かもしれないなあ。

「私、春香ちゃんの決断、凄く分かるな。手を差し伸べ続けるのって、強さだよな」

「響みたかったよね、春香ちゃん。あつ、この響はアイマスの響じゃなくって」

「分かっているっての。でも何て言うか、あれだ。優柔不断って言われるけどよ、優しさを貫くってのは強さなんだよなあ」

クリスが言うと言得力がある。彼女はその強さに二度も助けられてるからな。

無印は響でGで翼。年下と年上から伸ばされた手を掴んでクリスはここにいる。

「アイドルというのも、何ら私達と変わらないのね……」

「人前にて歌い踊る。そこに差などないのだな」

「あのバックダンサーの子達それぞれの意見はどれも分かるよね」

「チャンスが無駄にしたくないって気持ちも分かるし、せっかくだからみんなでやりたいって気持ちもな。プロとしての意識をつて言うけど、プロだろうがアマチュアだろうが、自分がまず楽しめないと意味がないのがエンターテイメントの基本だし」

俺の意見に歌姫三人が頷いてくれた。世界を相手にしている彼女

達が賛同してくれるのなら、やっぱりこれは一つの真理なんだろう。

で、時間を見ればそろそろ店へ向かわないといけない時間だ。

「じゃ、俺はそろそろ仕事に向かおうかな。みんな、おやすみ。それと、行ってきます」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

みんなに送り出されて玄関へ向かう。靴を履いて振り返れば、そこにはエル達年少組の顔がある。

小さく手を振ると四つの笑顔が手を振ってくれた。うん、これで何があっても頑張れる。

外へ出れば蒸し暑さが体を襲う。だけど、へいき、へっちゃら。

「あとは求人募集でみんなの後任が見つかる事を祈るだけだなあ」

目下のところ、それだけが唯一の不安だ。せめて各時間帯に一人ずつ応募があればいいんだけど……。

夜道を歩く仁志を見下ろす黒い雲のようなもの。それが仁志から視線を彼の向かう先のコンビニへ向けた。

——あの場所に何とか潜り込めれば……。

仁志だけでなく響達装者の半数が働くコンビニ。そこへ影響力を及ぼせば一気にその生活を脅かす事が可能。

それだけではない。上手くすれば彼らの絆も引き裂く一手が打てるかもしれないと、そこまで考え、悪意はほくそ笑んだ。

——あはは、そうか。何でこんな事に気付かなかったのかしら。あの小娘を使えば……ふふっ、ははっ、ははははははっ！

未熟少女 Buttagiri!

「厳しいなあ……」

店からの帰り道、まだそこまで強くない陽射しを浴びながら呟く。今月に入って求人情報を店内掲示だけじゃなくてそういうサイトにも出したのだが、まだ応募さえないとオーナーに言われた。

——どこかの時間帯だけでも来てくれるかなって思ったんだけどね……。

オーナーもそう言ってガツカリしてた。厳しいとは思ってたけど、やはり場所が悪いのかもしれない。

駅前なら通学前か通学後に寄り易いけど、あの店はそういう意味じゃ駅から歩いて五分はかかる。

それに、この辺は他にも学生がやりそうなバイト先あるもんなあ。ネカフェにファミレス、ファストフードなんかも駅前だ。

「……かと言ってフリーターは基本コンビニは避けるし」
来るとしても夜勤だ。あるいはWワーク狙いで早朝か。

一番欲しい昼勤と夕勤はやはりフリーターからは敬遠される。安いからな、時給。

俺だって夜勤やってるのは生活のためだ。もしこれが日中の時給ならとつくに辞めてる。

こうなるとやっぱりみんながいかに助かる存在かって事なんだよな。

表向きは未来と奏以外は学生で通してるけど、実際は五人ともフリーターだ。

しかも今までやりたくてもやれなかったとあって、仕事への熱意や情熱も高い。

はつきり言って、あの感じならもっと時給のいい仕事へ就けると思うぐらいに。

「……最悪高山さんにお昼まで勤務してもらおう事を考えないといけな
いかも」

朝勤を俺が兼任すれば調と未来が抜けた穴は何とかなる。

問題は響とクリスだ。夜勤も問題だけど、奏が抜けて次の人が見つかるまでオーナーが繋ぐ事は出来ると思うし。

割と響とクリスの存在は大きいんだよなあ。何せ二人は既に働き出して半年近くになる。

その愛想の良さで人気の響と、仕事の覚えが早く責任感の強いクリスは、今や夕勤の中核をなしてるから。

特にキツイのはクリスだ。夕勤のバイトリーダーとしてオーナーが信頼してるし、発注もこなすし響達他のバイトのフォローも出来る。

オーナーが時々冗談で学生じゃなかったら店長にしたいと言うぐらいだ。

俺も正直同感だ。仕事の覚える速度や意欲は完全にクリスの方が上だし。

そうこう考えている間に MARIA 達の家へ到着。

「ただいまあ……」

静かに引き戸を開けて中へと入って台所へと向かう。途中で居間を覗いて可愛い寝顔を見る事も忘れずに。

到着した台所ではパジャマでエプロン姿の MARIA がお出迎え。見慣れてきたけど、やっぱり新妻っぽいよな。

「おかえりなさい」

「あ、うん。ただいま」

「もう出来るわ。シュークリームとかをしまつたら手を洗ってきて」

「了解」

「あつ、それといつものも、ね？」

その言葉にため息ではなく若干の喜びを覚える俺はやっぱりダメな気がする。

冷蔵庫の中へ持ってきたシュークリームなどを入れて閉めると、俺は料理中の MARIA を後ろからそっと抱きしめた。

「いつもありがとう。その、幸せだよ」

「……私もよ」

それだけのやり取り。でも、きっとこれが MARIA にとっては幸せな

んだと思う。

俺は……幸せでもあり苦しきでもありつてどこか。

そつとマリアから離れて洗面所へ行こうとすると、何故か腕を掴まれた。

「マリア？」

振り返ればマリアが腕を掴んでた。その表情は、どこか色っぽい。

「仁志……その」

何か言いたい。だけど言い出すのはいけない。そんな感じがする表情だ。

なら、きつと言いたい事は一つ。だけどそれは色々不味いかもしれないので別の場所に替えさせてもらおう。

「え？」

俺の腕を掴んでいたマリアの手を優しく引き剥がして、その手の甲へキスをする。

よくある騎士が姫などにする、アレだ。

「これで許して欲しい」

「……十分よ。ええ、私の騎士だもの」

「じゃ、頑張つて体を鍛えないとな。今のままじゃその称号に潰される」

言いながら台所を後にして洗面所へと向かう。

するとそこでヴェイグとでくわした。

「タダノ、おはよう」

「おはようさん。いつもの冷蔵庫の中だ」

「そうか。ああ、そうだ。タダノ、一ついいか？」

「ん？ どうした？」

冷たい水で手を洗い、ついでに顔も洗うかどうか考えていると……

「実はあのクリスの騒ぎの時、微かにだが嫌な匂いがした」

「っ?! く、クリスから？」

「いや、違う。みんなからじゃない」

「へ？」

どういう事だ？ そう思いながら俺はヴェイグの言葉を待った。

「……ほんの少しの間だが、微かに外からしていた。だけど気が付いたら感じなくなった」

「マジかよ……」

「ああ、まじだ。タダノ、悪意は本当に俺達の近くにいるんじゃないか？　もしかすれば、操る時も今なら匂いが分かるかもしれない」

「そっか。ゲートを閉じてしばらく経ったから完全にこの世界自体から悪意の匂いも薄れた……」

「だと思っ。ただ、いつかのマリアと同じだ。意識してないと気付けない」

シユンとしよげるヴェイグを見て俺は水を止めて手をタオルで拭いた。

そしてその前へしやがみ込んで肩へそつと手を置く。

「十分だよヴェイグ。今後、もしみんながらしくない言動を取り始めたら、意識して匂いを探ってくれ。これまで倒してきた悪意は本体じゃなかったけど、今回ヴェイグが感じ取ったのは間違いない本体の匂いだ。それを神獣鏡とかの悪意へ効果があるギアで攻撃すれば……」

「全てが解決出来る、か？」

「ああ」

ただ、一つだけ疑問がある。もし仮にこの世界で悪意を倒したとして、みんなは自分達の世界へ戻れるのだろうか、と。

もしかして、悪意が未だにこの世界に残っているのは、自分をここで倒す事がみんながそれぞれの世界へ帰れなくなるからかもしれない。

ゲートを閉じるぞ。俺と会えなくなるぞ。それがゲート内や根幹世界での切り札なら、この世界での切り札は『元の世界に帰れなくなるぞ』かも。

台所へ戻ってマリアを交えながらその話をすると、彼女も真剣な表情で同意してくれた。

「有り得るわ。こっちでは仁志に、他では私達に揺さぶりをかける事は十分考えられるもの」

「こうなると、次のカオスビーストとの戦いが本当に悪意との決戦になりそうだな」

「だな。ゲートを解放するのも最後になる以上、悪意もそこでゲートの中へ戻るはずだ」

俺の意見に二人が頷く。最悪悪意の本体だけはここに残ってまた同じ事を引き起こすって事も考えたけど、動画の反応を見るに多分それは不可能だと思う。

つい最近翼とマリアに『星天ギャラクシイクロス』を歌ってもらってアップしたんだが、これに聞き覚えがあると言う声が最初から割とついたので。

おそらくだが、悪意の影響力が落ちた事でゆっくりと『戦姫絶唱シンフォギア』の事を思い出せる環境が整いつつあるんだろう。

こうなるとやっぱり旅行前に何とかドライデューヴァに新曲を歌ってもらってアップしたい。

「……マリア、今日バイトだっけ？」

「そうだけど？」

となると日中は無理、か。奏は休みだから問題があるとすれば俺、か。何せ今夜も勤務だ。

だけど何とかなる。駅前のカラオケじゃなく動画撮影に使う方なら駐車場も多いし、また電車で実家まで行って車を借りてこよう。

それならギリギリまでカラオケにいられるし、バイト終わりのマリアを歩かせずに済む。

「今夜、バイト終わりに翼と奏を連れてドライデューヴァ、頼めるか？」

「いいけど……」

「じゃ、バイト終わったら迎えに行くよ。奏と翼には俺から連絡しておく」

善は急げだ。悪意もおそらく自分のしかけた事がひっくり返されつつあるのを分かってるはず。

なら、それに対処される前にこっちが手を打たないといけない。

何せ相手は一度は完全勝利目前までいったんだ。油断ならない相

手である事に変わりはない。

飯を食べ終わってマリアへ礼を言ってから外へと出る。

今週に入ってから俺は朝夕の散歩やジョギングを一人でする事にしていた。

理由は一つ。みんなと別れた後の喪失感に潰されなかったためだ。

要するに少しずつ生活も一人のものへと戻していかないといけないといけな
いと、そう思った。

みんなへは包み隠さず言っている。ただし、それはマイナスな表現
じゃない。

——みんなと再会するまでの間に寂しさや辛さに潰れないために、
少しずつ心を鍛えたいんだ。

そう言ったらみんなが納得してくれた。それがやせ我慢や納得さ
せるための方便である事も、どこかで分かっているが、だ。

やっぱり俺はみんなに支えられて立っている。強い俺でいられる
のは、みんながいるからだ。

「あつ、只野さん」

そう思って歩いていると前から未来がやってきた。ジョギング
ウェアなので一人で走っていたんだろう。

「やあ」

「散歩ですか？」

「そんなところ。未来はジョギング？」

「はい。私も心を鍛えてる最中です」

微笑みと共に告げられた言葉に頬を掻く。

「そっか。戻っても走るつもりか」

「せっかく習慣付いたし、走る事は嫌いじゃないからいいかなって」

「じゃあ、出来るだけ早い内に並走出来るようにしないと」

「……はい、信じてますから。じゃあ」

噛み締めるようにそう言って未来はまた走り出した。

その背を少しだけ見送り、俺も歩き出す。

ホント、ハートを磨くつきやない。普通じゃない経験をして、それ
を乗り越えてきたみんなに並ぶには、まだ俺のハートは輝きや強さが

足りなさ過ぎる。

「俺をみんなはヒーローだと言ってくれた。その言葉に、想いに相応しい人でありたいからな」

今の俺は、子供だった俺が少しはカツコイイと言ってくれる大人になれただろうか？

あの頃の俺が憧れる背中になれてるだろうか？

ああなりたいと、そう思える男に近付いてるだろうか？

「……思えば、俺が憧れてる背中って、よくよく考えると父さんなんだよなあ」

何の力もなくとも、自分の大事なものを一生懸命守り抜く。その原点は父さんだ。

そして、俺がエルやセレナと接してる時に無意識に真似てるのも父さんだ。

ああ、そっか。翼だけじゃない。俺も同じだ。俺の中にも父さんがいる。

「あれ？ 何だか視界が……」

そんな事を思ったからか、自然と視界がぼやけてきて大変だ。

いかんいかん。朝早いとはいえ路上で三十路のおっさんが泣きながら歩いてるなんて気持ち悪いぞ。

そう思いながらも涙は止まるどころか溢れてくる。仕方ないのであの駐車場へと移動し、その隅で座って空をしばし見上げた。

「……………今日車借りるついでに感謝でも言っておくか」

きつと突然の事に怪訝な顔をするだろう。それでもいい。伝えられる内に伝えておこう。

「親孝行 したい時には 親はなし」なんて、そんな事になる前に……………。

「マリアちゃん、今日もお疲れ様」

「お疲れ様です」

時刻は午後七時。私の勤務もこれで終わり。本当はここから九時までで独身のお客さんで忙しくなるんだけど、元々陽子さん一人で切り

盛りしてたので問題はないそうさ。

「で、お迎え来るんだろ？ だから早く上がっていいよ」

「すみません」

ニヤニヤ笑う陽子さんに頭を下げ、私は身に着けていたエプロンなどを外しながら一旦二階へ向かう。

「それにしても、どうしてあそこまでニヤニヤしてたのかしら？」

陽子さんは私が仁志と関係を発展させた事を知ってる。まあ、さすがに真実を知ってる訳じゃないけど、それでも今更仁志が私を迎えに来るぐらいであんな顔するかしら？

そんな事を疑問に思いながら階段を降りて店の外へと出ると、見慣れない車が止まっていた。

と、その車の運転席の窓が開いて……ええ？

「マリア、お疲れさん。早く乗ってくれ」

「ひ、仁志？」

まさかの展開に驚きを隠せない。レンタカーをわざわざ借りてきたの？

そう思いながら助手席側へ近付きドアを開けると、微かにタバコの匂いがする。

で、当然後部座席には翼と奏がいた。

「お疲れさん」

「マリア、お疲れ様」

「ええ」

ドアを閉めると同時にシートベルトを締める。それを見てから仁志が車を動かし始めた。

「仁志、この車って」

「レンタカーじゃないってさ」

「仁志さんが実家から借りてきたんだ。タバコの匂いは仁志さんのお父様が吸うからだそうさぞ」

「そうなの？」

「ああ。まあ、この匂いを我慢出来れば、後は借りに行く面倒と返した後の帰りが怠いだけでガソリン代程度で使える車だからさ。便利は

便利だよ」

軽く笑いながら仁志はハンドルを握る。心なしか初めて乗った時よりも運転が上手くなってるわね。

まあ、あの日から定期的に車を運転してたもの。慣れてきても当然か。

それにしても、実家の車、ね。いつの間にかご両親と関り合うようになったみたいでちよつとだけ嬉しいわ。

「もしかして仁志先輩がタバコ吸わないのって、親父さんの影響？」
「そうだな。小さい頃からタバコの匂いが嫌いで、ある程度したらそれに害しかないって知って余計に。父さんは俺が反面教師になったからだって笑ってたけどな」

そう言つて仁志は軽く苦い顔で笑つた。

ふふつ、何となく浮かんでくるわね、仁志のパパさんの顔。

きつと仁志にどこか似た顔でニヤツと笑ってるんでしよう。

「で、急遽ドライディーヴァとして動いてもらう事になってすまない。可能な限り悪意の対応より早く動いておこうと思つてさ」

「悪意の対応……そういう事ね」

要するに一番最初行つたような行動を取られる前に、以前よりも強烈に私達の、シンフォギアの事を世界へ刻み付けようつて事か。

「残すカオスピーストは一体。そいつを失えば悪意の手駒はないからね」

「故に、その保険として再度この世界から戦姫絶唱シンフォギアを消そうと準備をする可能性があるわ」

「ああ、仁志さんらしい判断だと思う。先手を打つのは大事だし」

「ありがとう。で、今回はテーマを設けてみたいんだ」

「「テーマ？」」

前回は好きに歌つてと言つて天鳴ノ協奏曲が出来た。だから今回はそれとは違う形にしてみようつて事かしら？

「ああ、希望を歌つて欲しい。もしくは光でもいい。それをイメージして三人のハーモニーを聞かせてくれないか？」

まるでプロデューサーだ。でも、そうかもしれない。ドライディー

ヴァに関しては仁志のユニットだもの。

そう考えるとまるでアイマスだわ。私達からすれば、仁志はあの眼鏡の男性なのね。

「いいわ。プロデューサーがそう言うなら」

「え？ マリア？」

「そうだねえ。あたしもいいよ。プロデューサーさんに従うさ」「奏？」

「うん、そうだね。私もいいよ、プロデューサー」

「翼まで……。こういう事に悪乗りしてくれるようになったと喜ぶべきか悲しむべきか……」

そう言って複雑そうな表情のまま仁志は運転を続けた。

普段だったら十五分以上はかかる道のりがほんの数分で着いた時は、分かつてはいたけど車の便利さを実感した。

もう見慣れたカラオケ店の中を歩き、部屋の中へ入るなり奏が口を開いた。

「さてと、希望や光って言われたけど、どうする？」

奏の問いかけはテーマを一致させようというものだった。

なら、私は……

「いいじゃない。希望の光って事にすれば」

「ああ、私もそれがいいと思う。何も分ける必要はない。一緒にして歌えばいい」

「……うし、じゃそれで」

そこで揃って仁志へ目を向けると彼は頷いてスマートフォンของเกมを起動させる。

私達はその間に聖詠を唱えてギアを展開。すると即座にアイドルギアへと姿が変わった。

「じゃあ、頼むぞドライディーヴァ」

その言い方が本当にプロデューサーみたいに思えて、私達は苦笑しながら頷いた。

そうして歌った歌は、何とか自分達でも分かったぐらい「アイマス」に影響されていた。

だけど、仁志は嬉しそうに曲名を考え「貴方ト云ウ 音流レ 満チルナラ」と名付けた。

そのタイトルに私達は仁志の想いを感じて微笑み、こうして帰るだけとなった——のだけど……

「知らぬがく仏ほつとけない」

仁志の希望により、そのままの格好でドライディーヴァは竜宮小町の代表曲である「Smoky Thrill」を歌う事に。

格好もあつてか仁志が幸せそうな表情でその歌を聴き入ってくれて、私達も笑みを浮かべたまま歌う事が出来た。

仁志は今夜も勤務のため、九時には店を出なければならぬ。でも逆を言えば九時まではいられる。

私だけでなく奏も翼もこんな機会を逃すつもりはなかった。三人での歌もそこに、残った時間で私達は一人が代わる代わる歌いながら残る二人で仁志へじゃれつく事にした。

だけど、私がある歌を歌ったらそれを翼も奏も歌い出した。

仁志が一緒に歌ったからだけど、それだけじゃないのは明白。

何故なら私も翼も奏も不敵な笑みを浮かべたままで歌ったから。

だから最後には同じ歌を三人で歌う事に。一つのマイクを手にと揃って視線を仁志へと向けたままで。

「三年目の浮気ぐらい大目にみるよ」

「開き直るその態度が気に入らないのよ」

終始苦い顔の仁志と終始笑顔の私達。

でも、分かっているわよ仁志。貴方は浮気と言うよりは全部に本気。だって、そんな浮気なんて器用な事が出来る人じゃないもの。

翼も奏もそれを分かっているから笑っている。それでも、どこかで自分を見て欲しいと思ってる。

それが女。仁志、貴方が私達の揉め事を嫌がるし、悪意に利用されたくないから私達は大人しいだけで、本来ならとっくに揉めに揉めているのよ？

これを回避したいのなら、未来が言ったように貴方がもつと強く意思を示して、私達をねじ伏せてみせて。

力じゃなく、心で。あるいは、愛と欲で。なので店を出る前に私達は共謀して仁志へある事を迫った。

「さすがにそれは……」

「仁志、そういうところよ？ 貴方の優しいところは好きだし、好感も抱いてるわ。だけど、たまには強気に、ちよつと生意気に生きてもいいの」

「そうだよ先輩。時々見せる素顔な男らしさ、見せてくれない？ 本で読んだ男らしさなんて早く飛び越してよ」

「仁志さん、貴方に少し足りないのは押しの強さだよ。今は前だけ見ればいい。信じる事を信じればいいから」

「……………ふつ、分かった。要はもつと自分に自信を持って、それとそつちに流されないような意思を見せろつて事だもんな」

そう言つてこちらを見つめる仁志は、その、たまに見せる頼もしい表情をしていた。

「優しさだけじゃ愛は守り切れないんだもんな。なら……」

私を抱き寄せて少しだけ鋭い眼差しで見つめる仁志に胸が高鳴る。

「マリア、後悔はさせないよ」

「つ……………ええ」

そこからは、その、夢みたいな時間だった。

ほんの数秒だったけど、彼に、仁志に出会つて良かったと心から思えた。

私の次に深く求めるキスをされた奏も、翼も、私と同じでしばらくソファに座つて呆然とした。

「気持ち分かるけど、悪いが俺は仕事があるんだ。車へ行こう」

「え、ええ……」

「う、うん、分かったよ……」

「は、はい……」

気付いたらギアが解除されてた。それぐらい精神を乱したんだと分かつて、顔が熱くなる。

車に乗り込むと仁志は平然とシートベルトを締めて発車準備を始

めた。

その横顔には、本当に動揺など見えない。本気でもう覚悟を決めたの？

「じゃ、動かすぞ。店の駐車場に止めるから、悪いがそこからは歩いて帰ってくれ」

そこからの数分間はよく覚えていない。

気付いたら車が仁志の働くコンビニの駐車場に着いていて、私は翼や奏と一緒に道を歩いていたから。

「……ね」

そんな中、奏が空を見上げて声をかけてきた。

「何？」

「仁志先輩ってさ、ホントに極端だよね」

「うん、そう思う。以前仁志さんが言ってたんだけど、本当に環境で人って変わるんだなって」

「……そう、ね。仁志は環境で変わってると思う」

今夜の行動なんてまさしくそれだ。私達が言った言葉を受けて、腹を括ったかのように動いてみせたもの。

……このまま帰ったら確実に不味いわ。もう少し気持ちを落ち着けてから帰りましょ。

「ねえ、ちよつとだけ散歩に付き合ってくれない？」

そう二人へ声をかけると、彼女達も同じ事を考えていたのか苦笑して頷いた。

夜道を女三人で歩きながら話して笑う。話題はさっきのカラオケだ。

三連続で同じ歌を歌うのもおかしいのに、最後には全員でもう一度歌ったのだから余計だろう。

「仁志さん、最後には疲れたように笑ってたね」

「ホントだよ。でも、それもあつたから帰りには……さ」

「そうね。男、見せてくれたわ。あの飲み会の時はどこかでお酒の勢いもあつたのにしなかったけど、今回は素面のままであんなに情熱的なキスをしてくれた」

「……覚悟、決めたんだろうね」

「だと思っよ。あの時の歌みたいだね」

「歌？」

私と奏が揃って疑問符を浮かべると、翼は小さく苦笑して口ずさんだ。

「みんなののために、覚悟決めるぜ、ウルトラマン」

「ああ……」

成程、納得だね。仁志なりにみんなのヒーローであろうとしたのね。

その方法がああいう方向って言うのはちよつとどうかと思うけど、でも仕方ない。

何せ私達が求めているのはそういう事だもの。女として、もっと求めて欲しいってそういう事だ。

——今の仁志なら、強く求めれば応えてくれるかもしれない。私を、強く深く愛してくれるかもしれない……。

でも、さすがにそれは無理って言われるわ。悪意に利用されるって確信が持てるもの。

——だからって諦められない。みんなの前では平気な振りをするけど、私だって二度と会えないかもしれない事を恐れてる。せめて、仁志と強く繋がった証が、思い出が欲しい……。

強く繋がった思い出……。

——私一人じゃ断られるなら、かなり抵抗感はあるけど複数で頼めばどうかしら？ そう、例えばドライディーヴァとして……。

そ、それは……仁志も男性だから嫌とは言わないでしょうけど……。

——頼む時は複数で、実際の時は二人きりになるようにすれば奏と翼も賛同してくれると思うし……。

どこかで二人も同じ事を思ってるはず、よね……。

そう思って私は思い切って二人へ持ちかけてみる事に。

すると丁度二人も似たような事を考えていたらしく、とんとん拍子に話は進んだ。

——じゃ、まずねらい目は旅行後の仁志の休みの日ね……。
——そこでドライディーヴァとして相談があるって持ちかけてあたし達の部屋へ呼ぶ……。

——順番は仁志さんに決めてもらおう。それなら文句もないだろうし……。

話が終わった瞬間、私達は同時に同じ笑みを浮かべた。

その日が待ちどろしくして仕方ないって感じの、笑みを……。

いつものようにお兄ちゃんの部屋のお掃除を終えた私は、出してもらったお茶を飲んで一息ついてた。

すると、そんな私を見てお兄ちゃんは大事な話があるって切り出した。

「大事な話？」

「ああ。その、今月末の旅行が終われば残るは最後のカオスビーストとの戦いだろ？ その時、何が起きるか分からない。そのためにも、セレナにもリビルドギアを手に入れて欲しい」

「でもそれには……」

リビルドってギアは私はなつた事がない。奏さんもそうだったみたいだけど、お兄ちゃんとのキスでなれるようになったって聞いた。

だけどお兄ちゃんは私とはまだキスしてくれていない。そういう状況って言うか、私が喜ぶような時にしたいって事らしい。

「そうだ。だからセレナ、まずは聞いて欲しい。俺は、ギアの事がなくても君の事を大切に思っているし、許されるのならキスだってしたかった。でも、ここで許してなかったのは他ならぬ俺自身だったと気付いたんだ」

「お兄ちゃん自身が？」

「そうなんだ。セレナはあの夜にそうされてもいいよって気持ちでいてくれたのに、俺は自分の中で妹のように思ってた相手をいきなり女として見て、扱う事が許せなかった。だけど、それで傷付くのが他ならぬセレナだって分かった」

私から一度も目を逸らさず、お兄ちゃんはそう言って頭を下げた。

「本当にごめん。セレナの心を守ろうとして、自分よがりな考えで余計心を傷付けた」

「お兄ちゃん……」

前も聞いたけど、本当にお兄ちゃんは私を妹みたいに思ってくれてたんだ。

でも、それだけじゃ私が嫌だつて言ったから、今はちゃんと女の人としても見てくれてるんだね。

「ううん、いいの。私も子供だった。お兄ちゃんが大人として私を大事にしてくれたのに、それを子供扱いって思つて嫌がつたんだもん」

それに、今は違う。今は私を一人の女性としてお兄ちゃんは扱ってくれてる。

「だから顔を上げて、お兄ちゃん。私、嬉しいんだ。だって、まだ私は子供なのに、こうしてちゃんと向き合つてお話ししてくれるから。大人の姉さん達と同じように接してくれるから」

そこでお兄ちゃんはゆっくりと顔を上げた。その表情は安心するように笑つてた。

「ありがとう、セレナ」

「どういたしまして」

お兄ちゃんの笑顔を見てると心があつたかくなる。

それにしても、どうして今日は切歌さん達一緒に来てくれなかったんだろう？

「ねえお兄ちゃん」

「ん？」

「切歌さん達、どうして今日来ないか知ってる？」

「まあ俺が頼んだし」

「どこか気まずそうにお兄ちゃんはそう言った。どういう事なんだろう？」

「その、セレナとキスするために、な」

「っ!？」

ドキツとした。お兄ちゃんは、その、とつてもカッコイイ顔をして

だから。

大人の男の人って感じ。顔が熱くなってくる。でも、でも嬉しい。

「こっちにおいで」

「あ……うんー」

お兄ちゃんに呼ばれてすぐにお兄ちゃんの前まで行く。

その次の瞬間、お兄ちゃんが私を抱き締めてくれて胸に顔を埋めた。

お兄ちゃんの匂いがして胸がキュンってなって、顔も熱くなってくる。でも、幸せ。

「セレナ、上を向いてくれ」

聞こえた声に顔を上げれば、そこには優しく笑うお兄ちゃん。

「俺の想いが君の力になる事を心から願うよ」

「お兄ちゃん……」

ゆっくりと近付いてくるお兄ちゃんの顔を見て私はそっと目を閉じた。

「んっ……」

そのすぐ後、私の唇に何かに触れた。

あつたかくて、ちよつとだけガサガサしてるような、不思議な感じのもの。これがお兄ちゃんの唇なんだって、そう思ってる間にそれは離れてった。

「……お兄ちゃん、えつと」

もう一回して？ そう言おうと思ったたらお兄ちゃんが小さく微笑んだと思うと、すぐにチュツとしてくれた。

それと同時に抱き締めてくれて、まるでお兄ちゃんの気持ちが伝わってくるみたい。

大好きだよ。大事にするね。そんなお兄ちゃんの気持ちが、心が流れてくるみたい……。

胸の奥があつたかくなって、軽くなっていく感じがする。

今まで早くお兄ちゃんのお嫁さんになりたいって思ってたけど、そんなに急がなくてもいい気がしてきた。

だって、お兄ちゃんは待っててくれるもん。私が大人になるのを、

ゆっくり待っててくれるから。

私、しつかり大人になりたい。お兄ちゃんがおじさんだってみんなに言われてもいいから、お兄ちゃんが結婚してくださいって言いたくなるような、そんな大人の女性に。

ピコンって音が聞こえて、お兄ちゃんと一緒になって依り代へ顔を向ける。

「……見てもいいか？」

「う、うん」

お兄ちゃんが依り代を手を取ってゲームを起動させる。私はギアを展開させてお兄ちゃんを見つめた。

「……あった。タップするぞ？」

「うん」

そうして変わったギアは、何だか不思議な輝きのギアだった。それと凄くあったかい力を感じる。

「これが、リビルド？」

「ああ、そうだよ。これで九人全員リビルド所持した、か。万が一の場合も、これのツインドライブで何とかかなりそうだ」

「万が一？」

「悪意がこっちの想像も出来ない事をしてきても、みんなが危ない事にならずに済む可能性が高く出来るんだ。リビルドはね、簡単に言うて見た目は普段と同じなのに強さがエクスドライブみたいなものなんだ」

その説明に私は何度も瞬きしちやった。だって、エクスドライブと同じって凄い事だから。

だからお兄ちゃんは私にもこのギアを持って欲しかったんだ。悪意がカオスビーストを使って恐ろしい事をして大丈夫なように。

だけどそれだけじゃない。私が大事で、好きだからキスしてくれただって、今なら分かる。

ギアを解除してもう一度お兄ちゃんに抱き着いた。身長差があつて、どうしてもまだまだ大人と子供って感じがする。

でも、もう焦らない。悪意に私の恋を利用されたくないから。だけ

ど、ちゃんと確認はしておこうかな？

「ね、お兄ちゃん」

「何だ？」

「私、ちゃんと大人になるから。それまで、待っていてくれる？」

「むしろ俺がセレナに幻滅されないようにしないとだよ。どんどんおっさんになってくんだしな」

「お兄ちゃんっ！」

告げられたのは、望んでいたよりも嬉しい言葉。

向けられたのは、望んでいたよりも優しい笑顔。

うん、やっぱりお兄ちゃんを好きになって良かった。私、この人のお嫁さんになりたい。なって、支えてあげたい。

思い出すのは初めて会った時のお兄ちゃん。疲れてて、どこか眠そうで、でも優しい目をした、初恋の人。

その人の腕に抱かれながら私は微笑む。一緒に歳を取って、先におじいちゃんになったこの人の隣でおばさんの私が抱き締めてあげたいなって。

今と逆になれば、それはそれで素敵かもしれない。そんな風に思いつながら私は大好きな人へ笑顔を向けた。

「大好きだよ、お兄ちゃん」

その言葉への返事は、優しい触れるだけのキスでした……。

最近時々バイト終わりに少しだけ意識が遠くなる事がある。

ま、こんな事言えばあのバカがどう反応するか分かってるから言うてねえ。

仁志にも言えるはずもねーし、それにほんの数分だ。疲れてぼくっとしてたんだと思う。

ただ、不思議な事にあのバカと組んでる時はねーんだよなあ。やっぱりあのスケベとやる時なんかは気付かねー内に気を張ってるのか？

あっちの方は、あたしへ仁志の事を話題に振ってくるもんだから気が気じゃねえ。

とびきり美人って訳じゃねーけど、それなりに容姿は整ってるし、

磨けば光るってタイプだと思う。

まさか、仁志の事狙ってないだろうな？

「どうかしたか？」

「っ?! な、何でもねえ。ちよつと考え事してただけだ」

隣から聞こえた声に意識を切り換える。そこには目だけこつちへチラつと向けた仁志がいた。

そう、今日は待ちに待ったデート。しかも仁志のパパから車を借りてきてのドライブデートと来てやがる。

向かう先は聞いてねえ。それも含めてデートの楽しみだろって、そう言われたらしつこくは聞けねーっての。

「考え事、ね。俺で良ければ相談に乗るよ？」

「ん。そ、その、ありがとな。じゃ、話したくなったら話す」

「了解」

小さく苦笑しながら仁志はハンドルを握り続ける。

何て言うか、今の恋人っぽい。にしてもちよつと新鮮かもしれない。このタバコの匂いが微かにするっていう感じは。

これが、仁志にとってはパパの匂い、らしい。

かなりのヘビースモーカーだったって話してくれた。

牡蠣が大好きらしくて、でも仁志とママさんは嫌いなもんだから食卓に出る事もなく、秋になると一人だけ惣菜のカキフライを買って食べてたって話は、何て言うか家族っぽいと思った。

あたしも、そういう家庭を築きたい。

仁志と一緒にパパとママになって、あたしがして欲しかった事、やって欲しかった事、それを全部やってあげたい。

——でも、だからこそ仁志をパパやママと引き離すなんてダメだ。あたしの場合は平行世界だからまだ割り切れたけど、仁志の場合はそうじゃねえ……。

ああ、そうだ。だからあたしがこつちに来る方がいい。あたしの世界には、パパもママもない。

もう今のあたしには身寄りはない。だからあの世界を離れる事が出来る。捨てる事が、出来る。

「仁志」

「ん？」

「やっぱ、仁志はここに残ってないとダメだ。仁志のパパやママが泣いちゃう」

あたしの頭の中に、あの平行世界での別れが甦る。パパもママも泣いてた。あたしが本当の娘じゃないのに、それでもクリスマスだって泣いてくれた。

あたしも同じだ。あたしのパパとママじゃないって分かってた。それでも、それでも涙が出て来たんだ。

実の親子を、いくら成人してるからって二度と会えなくなるかもしれないなんて事には、させたくねえ。

「……ありがとう。でも、だからこそ俺はみんなと一緒に行くよ。だって、そこで俺が残ったせいでもしもの事になったら、結局父さんも母さんも守れない」

優しいけどはつきりとした口調で言われた言葉にあたしは黙るしかなかった。

ああ、やっぱ仁志は大人だ。泣かせる事はしたくねえけど、死なせるよりはマシって事だもんな。

死なれて絶対会えなくなるよりも、二度と会えないかもしれないけど、ど会える可能性を残したいって、そういう事か。

「クリスマス、俺は君のような複雑な経験をしてない。だからきつと、家族って事に関しては納得出来ない意見かもしれないけど、俺は親の死に目に会えなくても構わないって思ってる」

「っ?!」

思わず仁志へ顔を向ける。仁志はどこか遠い目をしながら運転を続けてた。

「実際、今回の事がなかったら自発的に連絡を取ったり会いに帰ったりしなかったんだ。それぐらい、もう俺は両親と離れて、関わらないで生きてたからさ。正直どこかで次に会うとしたらどっちかの葬式かもしれないって思ってたくらいに」

「そこまでかよ……」

仲が悪い訳じゃない。でも、多分だけど仁志の場合は早く自由になりたかったのかもしれないねえ。

その結果、親つてもんがしがらみや枷みたいに思えてたんじゃねーか？

「でも、君達と関わって、エルなんて言う娘みたいな存在が出来て、俺はようやく気付けたんだ。やっぱり親つてのは凄いなだと、偉いなだと。俺みたいな奴でも父親らしい事が出来るのは、真似事が出来るのは、ちゃんとそうしてくれてた人達がいるからなんだってさ」

たしかに仁志のエルへの接し方はパパって感じた。その根底は仁志が小さい頃から見てきたパパの姿なんだろう。

……あたしも、今ならあのママの姿を参考にするかもしれないねえ。

「この前、響とのデートのために借りたこいつを返した時に少しだけ会話したんだけど」

「ああ」

「そこでそれとなく二人へ言ったんだ。もしかしたら長い間外国へ行くかもしれない。連絡も出来ない可能性が高いような、そんなところへって」

「……それで？」

ある意味直球だ。つたく、こういうところが仁志らしさだけ。良くも悪くも、な。

「そしたら、父さんはたった一言、そうかで終わり。母さんなんかは、頼むから死ぬなら自分達が死んだ後にしてくれ、だつてさ」

「ま、マジかよ……」

「それが本音かは分からない。でも、要は好きにしろって事なんだと思う。あと、母さんのは歳も歳だし、海外渡航なんて嫌だつて言うある種の本音だろうなあ。で、深読みすれば、だから自分達より先に死ぬなつて事だと思うよ」

そう言う仁志はどこか優しい顔で笑ってた。

「と、言う訳で、最悪の場合に備えて最低限の根回しはした。問題があるとすれば店だけど、まあこれは決戦前にオーナーへ辞表を書いて渡すしかないかな？」

「あたしらの抜ける分の人材はどうすんだ？」

「それが、どうも茂部が自分の知り合いを数人紹介したいって言ってきたらしい。まだ面談はしてないそうだけど、希望時間は深夜と夕方だ。で、近藤さんも妹さんが大学生になって半年近く経ったらしくて、やっとバイトを解禁するんだって。それで最初はお姉さんと一緒の方がいいって言ってるみたいだね」

「上手くすりや三人増える？」

「茂部の紹介する人数がはつきりしてないから何とも。でも、最低でも近藤さんの妹さんを入れて三人増えるなら人数だけは何とかなる。発注とかは……まあ調の発注を高山さんに覚えてもらって、近藤さんに用度品を覚えてもらうしかないかなあ。このままじゃオーナーが寝る時間を削って発注って事になりかねない」

「そういえば仁志も結構発注やってるよな。それはどうするつもりだ？」

「仁志のやってる仕事はどうすんだ？」

「そう聞くと仁志は凄まじく苦い顔をした。って事は……」

「このままだとオーナーに丸投げになる」

「……そっか」

「考えてみりや当然だ。仁志はもう二年以上やってて、店長になったような存在だ。」

「その仕事をいきなり他の奴にやれってのが無理な話だぜ。」

「何とか一部だけでも他の人達へ覚えてもらうなり、やってもらうなりする。無理そうなら……最後の手段を講じるよ」

「最後の手段？」

「まあ、まだ半月は時間があるんだ。たった半月、されど半月。もしかしたら近藤さんの妹さんがクリスマス並に優秀かもしれないし」

「だどいいけどな……」

「ここであの野郎の知り合いと言わない辺り、仁志も期待はしてないってところか。」

「ま、あたしも同感だけど。あいつの知り合いなんて多分口クなものじゃねえ。」

それでも頼らないといけないぐらい、喜ぶぐらい、あの店はあたしらが支え過ぎてる。

車はそのまま走って、着いた場所は海に行く時寄ったショッピングモール。

その裏側へ回ったところから駐車場に入った。映画館側……つてあつたな。

「なあ、映画でも見るのか？」

「ベタだけど、そういう事の方が良くないか？」

「どうやら当たりらしい。にしても、ベタ、か。まあデートで映画つてのは定番っちゃ定番だ。」

「ただ、どういう映画がこっちじゃ公開されてんのか全然知らねーぞ？」

車を降りて仁志と腕を組んで歩く。正直これだけでもあたしは嬉しくなっちゃう。

エスカレーターを上がった先を少し歩けばもうそこは受付だった。

「クリス、どれか気になるものはあるかい？」

「そうだな……」

上映してる作品のポスターとかを眺めて考える。

まあありきたりな系統が多い。アクションにホラー、ラブストーリーにヒューマンドラマ。ただ、時代劇っぽいものもあるのがらしいかもしれないねえ。

あとは、まあ子供向けのものか。それと、ライダーやらスーパー戦隊もある。ただ、こっちはもう終わりが近いせいかな上映回数が少ない。

「……仁志はどうせこれとか見たいんだろ？」

「あー、まあ見たくはあるけどさすがにクリスとのデートでは選ばないよ。切歌なら選択肢に入るけどな」

たしかにあいつなら喜んで見ると言い出すな。

「それに、現行作品は俺も現状追えてないんだ。今俺にはPCがないし」

「ああ、そういう事な」

つまりこれまではネットで見てたんだろうな。そりゃ追い駆ける事も出来ないか。

にしても、今のライダーはこんな感じか。カッコ悪くはねーけど……。

「どうした？」

「ん？ ああ、今のライダーってこんなのかって」

「ゼロワンは結構いいと思うよ。少なくともエグゼイドよりはライダーって見た目だし」

「エグゼイド？」

「あく……クリス達にはまだ見せた事なかったか。歌は歌った事あるよ。サビでエキサイ〜エキサイ〜……って繰り返すやつ」

「……あのMVのダンスがすげえやつか？」

「そうそう」

たしかに二回目に行ったカラオケで歌ってたな。ちよつと気になるな。エグゼイド、か……。

「つと、ライダー談義は今止めておくか。それで、何見る？」

「う〜ん……」

悩んだ結果、アクションものを選んだ。

若干ラブストーリーも迷ったけど、後で感想を言い合うならこつちだろうつて思つてアクションにした。

飲み物を買つて、ポップコーンを買つて、上映時間まで少し時間があるからって売店を眺めて、そんな事初めてだった。

普段なら気にもしないパンフやグッズなんかを見ては、仁志とああだこうだと言ひ合つて笑う。それだけで幸せだ。

映画は……まあ悪くなかった。銃撃戦は派手だったけど、それだけだ。

仁志が隣で「クリスがやった実際の攻撃を知つてると見劣りしちゃうなあ……」つて苦笑してたのが印象的だった。

見終わった後は、モールの中にある喫茶店へ入つて軽く飯を食いながらさつき見た映画の感想を言い合う事にした。

あのシーンが最高だった。あの役者はカッコ良かった。あそこの

演出はいまいちだった。

そんな事を言い合っていると頼んだ物がやってきて、そこからはそれを食べながらこれからの事を話し合った。

間違いなく今まで一番幸せを噛み締める事が出来る時間だった。

仁志があたししか見てない。あたしの事しか考えてないって、そう確信出来たし。

「それで、クリスはこの後行きたいところはない？ あるなら言ってくれば予定を少し変えて連れて行くよ」

「行きたいところ、か……」

正直あたしはこっちの事をほとんど知らないに近い。行動範囲もあの街が精々だ。

あつちにあるものがこっちにあるとは限らないし……。

——いつそ、思い切って言ってみるか？ ああいうところを見学してみたいって、そう言って……。

……見学、なら仁志も構わないって言う、かもしれないえか。

「あるって言えばある。その、中を見てみたいってぐらいだけど」

「中を見てみたい？」

「ああ。その、女一人で入るにはハードルが高えんだよ」

「……………まさか」

さすが仁志も男だよな。それだけで察しやがった。

だからその後の言葉を出す前にあたしは問いかける。

「興味、ねーのかよ？ その、ああいうところの中」

「それは……ないとは言えないけど……」

仁志の顔はやや渋い。多分だけど、行ってしまったらそういう事をする可能性が高いって思ってるんだろうな。

——つまり、仁志もあたしとスケベな事をしたって事だよな。なら、させてやりたい。あたしも、仁志と繋がりたい……。

そうすれば今よりも仁志があたしを見てくれる。悪意を倒した後
の仁志があたしを選ぶ可能性が上げられる。

「ダメ、か？」

あたしの女が疼き出す。ここを逃すなって、そう囁いてる。

そんな気持ちを出るだけ出さないように仁志を見つめた。

仁志は、考え込んでるみたいだった。きつと仁志の中で大人と男が戦ってるんだと思う。

だからあたしは男が勝ってくれる事を願った。そうすれば、そうすればきつと……

——この人をあたしのものに出る……。

それだけがあたしの目標だ。あたしには、このあつたけえ人が必要なんだ。

「……………分かった」

「ほ、ホントか？」

今すぐにも叫び出したい気持ちだった。それを何とか押し留めてあたしは確認を取った。すると……

「こんな事で嘘なんてついても男に得はないよ」

若干苦い顔で仁志はそう言った。言ってくれた。

「じゃ、じゃあ……」

今すぐ行こう。そう言おうとしたあたしへ仁志は小さく微笑んで口を開いた。

「ああ、ちゃんと連れて行くよ。悪意を倒した後のデートで」

「……………は？」

心が急速に冷めていく。何でだよ？ どうしてだ？ 仁志だってスケベな事したいんだろ？

あたしを押し倒したいって、メチャクチャにしたいって思ってたんだろ？

この無駄にでけえ胸を揉みしだいたりしたいんだろ!?

——あのスケベ野郎はそういう下心ばかりだったのに……。

……何だ、今の。一瞬だけ、あたしをスケベな顔で見つめるあのスケベ野郎が頭ん中に浮かんできた。

あんな顔、見た事ねーぞ？ てか、初めて会った時よりもその、ムカつく顔だったな、さっきの。

混乱するあたしの目の前で、仁志は静かに会計の紙を掴むと立ち上がった。

「やっぱり焦ってるよクリス。その、気持ちは嬉しいけどさ。悪いけど、今の俺は最悪を想定して動かないといけないんだ」

「最悪を……」

言ってる事は、分かる。仁志の意見は正論で、あたしとしても反論はねえ。

なのに、どうしてこんなにも胸が、心が、寂しいんだ？ 辛いんだよ？

涙が出そうなぐらい、冷たくなつてく。

と、そんな時、あたしの手をアツたけえ手が優しく掴んだ。

「とりあえずここを出よう。早く二人きりになりたい」

その言葉と少しだけ照れくさそうな笑顔に、あたしは少しだけ心がアツたかくなるのを覚えた。

手を繋いだまま店を出てそのまま車へと戻ると、当然あたしは助手席に座る。で、仁志が運転席に座ったかと思うとシートベルトもせずにごつちへ身を乗り出してきて……

「……い、いきなり何すんだよ」

「嫌だった？」

キスしてきやがった。その、一瞬に近いやつだけど、凄くアツたかいキスを。

……正直嬉しい。

「い、嫌じゃねーけど……」

「そっか。なら良かった。じゃあ、車を出すよ」

あたしの答えに嬉しそうに微笑んで仁志はシートベルトを締める。それを見ながらあたしはそつと唇へ手を当てた。

「……………前なら、これで十分だったのにな」

あの夜、仁志からキスされた時、あたしはもうこれ以上の幸せはないって思うぐらい心が高鳴ってた。

なのに、今はそこまでは無理だとしても、あの時の半分も心が弾んでくれねえ。

嬉しいはずなのに、幸せなはずなのに、アツたけえはずなのに。

ゆつくりと加速していく車とは逆に、あたしの心は停止したまま加

速する事はない。

何で、なんだろうな。仁志と二人きりでデートしてるつてのに、キスマでされたのに、こんなにも気持ちが沈むもんか？

——だとしたら、やっぱりさっきの提案を先延ばしにされたから、だろうな。あたしが恥ずかしい気持ちを抑えて頑張つて口に出したつてのに……。

イラツとする気持ちよりも悲しい気持ちが強くなる。あたしの恥ずかしさを仁志は考えてくれねーんだつて、そう思つて。

「クリス、何か俺に言いたい事があるなら構わず言つてくれ」

そんな時、隣からそんな言葉が聞こえてきた。顔を向ければ、仁志が真剣な表情で前を向きながらハンドルを握つてる。

「不満、文句、愚痴。何でもいい。報連相だよ。俺は肝心なところで君の気持ちを見誤つた事があるだろ？ だから教えて欲しい。言つて欲しい。このバカ野郎つて言いながらもいいし、鈍感野郎でもいい。君の気持ちを知りたいんだ」

「仁志……」

「出来るだけ同じ失敗はしないように心掛けているつもりだけど、それでもないとは言い切れない。だから、もし愛想が尽きたなら容赦なく捨ててくれていい。でも、もし愛想が残つてるのなら、少しでも希望を持つてくれるのなら、やり直しや再起の機会をくれないか？」

あたしの耳を打つ声は、優しく、強くて、あつたかいものだった。少しだけ、ほんの少しだけ胸の奥が軽くなった、気がした。

「……愛想を尽かすなんてねーよ。てか、それがあつたとすれば、簡単に性欲へ走る事じゃねーか？」

ああ、そうだった。あたしは、あたしは仁志が最初から胸を見ないで目を見つめてくるところに好感を持つたんだ。

そんな風にスケベな心を抑えようとしてる奴に、あたしは何を言つてたんだろうな。

仁志だつてそういう事はしたいに決まつてる。なのに、しないつて事はどういう事かつて言えば、こいつはあたしの事を思つてるんだ。

悪意に操られないように、またみんなと揉めるような事にならない

ようにって。

「それ酷くないか？ さつき自分から誘っておいで」

「あたしは中を見たいって言ったただけだろ。何もす、スケベな事したいななんて言ってるねえ」

「ほー、じゃあ今から行こうか？ それで本当に中を見ただけで帰ろうってなるんだよな？」

「つたりまえだつての！ そっちこそやっぱムラムラして押し倒すんじゃないのか？」

「ないない。今の俺はヒーローの心だから。性欲とかスケベ心とか無縁だから」

「言つたな？ じゃあ、行こうぜ。そこでお互いに言つた事を守れるって証明しようじゃねーか」

そうあたしが言い切つて少しすると車が信号で停止する。で、仁志がこつちへ向いた。

「……何だよ？」

なのにならずと無言であたしの目をジッと見つめてくるだけ。

何だかこつぱずかしくなつて口を開くと、仁志の顔が一瞬にして申し訳なさそうなものになつた。

「ごめん。ああは言つたけど自信がないので勘弁してもらえない？」

「へ……う？」

「いや、冷静に考えたらクリスとラブホなんて絶対ダメな展開にしかならないと気付いたんだ。だから、俺の負けでいいので勘弁してください」

そこでようやくあたしは理解した。仁志はあたしとそういうところへ行つたら手を出すしかないんだつて。

「ぶっ……あははははっ！ わ、分かった……そ、そういう事にしてやるよ……っ！」

「本当にすまない。出来ない事を言うもんじゃないな」

情けない顔と声でそう言つて仁志は前を向いた。信号が気付けば青へ変わっている。

仁志がブレーキから足を離してアクセルをゆつくりと踏み込んで

いく。今度は車とあたしの気持ちと同じように加速を始めた。

「にしても情けねえな。三十路になった男だろ？ もうちったあ見栄を張れっての」

「返す言葉もない……」

「しよげるなよ。ま、仕方ねえよな。あ、あたし様の体は魅力的、なんだろ？」

「はい……」

「そ、そうかそうか。じゃ、まあ、勘弁してやるよ。それに、スケベな目で見てもいいって許可も出してたしな」

車は走る。仁志をからかうあたしのどこか楽しげな声と共に。

そう、だよな。やっぱあたしどこかで焦ってたんだ。心配しなくても仁志はあたしを意識してくれてる。

「……ま、そりやそうだよな」

考えてみりや、仁志はその気になればあたしらの誰でもキス出来た。それが最初に選んだのはあたしなんだ。

その事を密かに自信に思ったりやい。この分なら、あ、ああいう事の初めてもあたしかもしれねーし。

——でも、やっぱそれでもあたしだけの思い出は欲しい。だから、今度の旅行が終わったら……。

そう、だよな。うし、あたし様の決意と覚悟を見せる意味でも、仁志へ報連相してやるか。

出来れば、それに対して先延ばししないでくれよ？

そんな事を思いながら、あたしは隣で笑みを浮かべる大好きな男の顔を見つめた。

昼に食べたい物はあるか？ お詫びに奢るよ、なんて言って笑う、年上らしくない彼氏を……。

「はい、みんなで読んでおいて」

その日は皆さんで集まる日でした。ただ、兄様は明けだったので夕方近くまでぐっすり眠っていたけど。

それでも響さん達が来る頃には目を覚まして、一度部屋へ帰ってか

ら戻ってきた時にはその手に本屋さんの袋を持っていた。

そこから一冊の本を出して、兄様は僕らへ笑顔で差し出して最初の言葉を言ってくれた。

「これは……」

「ガイドブックですっ!」

それは今度の旅行で行くテーマパークの事が載った本でした!

すぐにヴェイグさんがクッションから起き上がってこちらへ駆け寄ってきます。

「エル、俺にも見せてくれ!」

「いいですよ」

「ヴェイグさん、私の膝にきてください。一緒に見ましょう」

「分かった」

ガイドブックを囲むように僕らは座りました。

本の正面に僕、両隣に姉さんと切歌お姉ちゃん。調お姉ちゃんは切歌お姉ちゃんと寄り添って見えています。

「仁志、あれ、高くなかった?」

「まあそれなり。でも、予備知識なしじゃあそこは楽しめないんだよ。園内が広い上に、人気のアトラクションは一時間待ち二時間待ちとか当たり前だから」

「うげっ、マジかよ……」

「ただ、一部はファストパスってのが使える」

「へえ、そんなもんがあるのかよ」

台所の方から聞こえてくる話へ耳を傾けたいけど視覚から入ってくる情報も気になるので難しい。

ううっ、体が二つ欲しい。

「こんなにあるデスか……」

「一日じや回り切れない……」

「いくつかのエリアに分かれてるみたいです」

「だな。乗り物に乗らないで見ても回るだけでも時間がかかりそうだぞ」

姉さん達の会話に頷きながら、僕は本に書かれている情報を得る事

に必死だった。

今まで色んな書物を読んできたけど、この世界に来てから読んだ中でもっとも情報量に溢れていたからだ。

写真や文字、それらを追いつながら得られた情報を頭の中で整理して記憶していく。

以前の生活では考えられない事かもしれないけど、今の僕にとって今度の旅行は、エルとして過ごせる最後の大きなイベントだからだ。

「キャラクター達の街があるんだ……」

「面白そうデスね」

「うん、可愛い感じだしね」

「エルは何が気になる？」

「そうですね……」

姉さんの言葉に考える。色々気になるものはあるけど、やっぱり一番はこれかな。

「僕はこのシンデレラ城が気になります」

一番目立つ建造物で、おそらくランドマークでもあるだろう場所。

チフオージユ・シャトーとは違い建築物としての外観も考えられた物に、僕は何故かそれを重ねてしまう。

キャロル、今も僕の中で眠っている君に見せたいんだ。誰かに夢や希望を与える錬金術を。

兄様は全ての技術は誰かの笑顔のために生まれたんじゃないかって、そう教えてくれた。

僕もそう思う。そしてそれは、言い換えれば笑顔を作り出す術。笑顔の錬金術だ。

パパが思い描いていたものは、理想としていたものは、そういう事なんじゃないかなって思うんだ。

きっと君は、何を馬鹿げた事をつて笑うかもしれない。でも、かつてならそこに有り得ないという否定や拒絶の言葉がついたはずだ。

それが、今の君からは聞こえないような気がしてる。受け入れられないだけで否定はしないんじゃないかって、そんな淡い期待を僕はしているんだ。

「ここもアトラクション？」

「……みたいデスね」

「お城探検、楽しそう」

姉さん達は僕の意見に好反応。でも、僕は自分の意見だけを通すつもりはない。

「あのっ、姉さん達は何が気になるんですか？」

みんなの意見を聞きたい。僕が思わない事や気付かない事、ない視点や思考。それらを知る事はとても楽しくて、そして僕を成長させてくれるから。

「私は西部劇のところかな！」

と、そこで聞こえてきた声に振り返る。そこには笑顔の響さんがいた。

「えっと、ジェットコースターがあるから、ですか？」

「そうなんだけど、仁志さんが言うにはそこには二つもそういうものがあるんだって」

「だから響としては絶対それには乗りたいんだって」

未来さんもその横から顔を出して苦笑してる。

「そうなんだ。ここにはコースター系が二つもあるんだ。」

「じゃ、またししよーは来ない感じデスね」

「俺は向こうじゃカメラマンをするつもりだしな」

「二「カメラマン？」」」

「どういう事だろう？」

「デジカメを買うんだってさ。今回の旅行の思い出を残すんだって」

「仁志さんらしいよ。使うと決めたらどこまでも、なんだから」

「だってなあ。スパーランドもバーベキューも写真が数えるだけだ。これだけじゃ寂しいだろ。なので今回は俺はあちこちのグループにお邪魔して撮影してくから」

苦笑する翼さんに兄様がしみじみと言いながらスマートフォンを取り出した。

それは僕が持っているのと同じ機種スマートフォン。正確には僕が兄様と同じ物にもらった。

そこに入っている写真は、僕も持っているもの。プールで撮ったも
らった写真と、遊園地で撮ってもらった写真の計二枚にバーベキュー
の最中に撮った数枚だ。

「で、悪いんだけど俺がいない時はそれぞれのグループのスマホ持ち
が撮影してもらおうか、園内のスタツフさんに頼んで撮ってもらって
くれ」

そう言う兄様の視線は僕を見つめていた。

きつと姉さん達と一緒に行動するからだろうな。僕も姉さんや
ヴェイグさんは絶対一緒だと思ってる。

姉様は……一緒かな？ あるいは切歌お姉ちゃんと調お姉ちゃん
かもしれない。

「スマホを持つてるのって、翼にクリスマスだろ。あとはエルに……仁志
先輩だけか」

「だから当日は俺のスマホを、依り代の方を誰かに貸すよ。さすがに
ゲートもないところへノイズを出すなんて事をやるような悪意じゃ
ないさ。もしやれるのだとすれば、とつくに俺は店の中で炭化して
だろうし」

縁起でもない事だけど、実際僕も兄様の意見に同意だった。

今、悪意は最後の戦いに向けて色々と画策しているはずだ。そんな
中でかなりの力を使うだろう事をやるとは思えない。

何せゲートを利用して出来たのはノイズを一体出現させる事だ
け。つまり、あれがあの時点で悪意が問題なく出来る限界だった。

今はゲートを閉じているし、ここは上位世界。そこへ世界の壁を越
えて無理矢理ノイズを出現させる事がどれ程の労力か。

だから兄様も分かっているんだ。悪意が現時点でノイズや何らかの
妨害をしてくるなんて有り得ないと。

もしそんな事をしてくるのなら、とつくにこれまでも何度も機会は
あったはずだ。なら、きつともう悪意が直接的な手出しをするのは可
能性が極めて低い。

「ま、今はこんな話はやめやめ。悪意の事を考えるのは旅行の後嫌っ
て程やらないといけないんだ。今は旅行の事だけ考えよう。な？」

その兄様の言葉に皆さんが苦笑して、同時に頷いた。

そこからは場所を居間から台所へ変えて、テーブル上に本を置いてみんなで眺めた。

響さんや切歌お姉ちゃんや積極的に意見を出すのはいつも通りだけれど、意外にも姉さんやヴェイグさんも行きたい場所や乗りたい物を口に出していた。

ただ、ヴェイグさんはぬいぐるみ扱いになるからコースターのような物には乗れない。でも、どうやらヴェイグさんも兄様と同じで絶叫系は興味がないみたいだ。

「当日俺はセレナと一緒にいればいいのか？」

「エルでもいいよ。何ならクリスマスでもいい。そこはヴェイグが選んでくれ」

「仁志は最初どうするの？」

「あー……まずは最初に全員で城を背景に一枚撮ろうと思ってる。で、その後はとりあえずエルと一緒に動こうかな」

「僕と？」

兄様は小さく頷いた。

「多分ここに来て一番変化したのはエルだと思うからな。その姿を一枚でも多く形に残しておきたいんだよ」

「そうね。たしかにエルが私達の中で一番変化成長したわ。あとはセレナもかしらね」

姉様はそう言って僕へ微笑んだ。思わず僕は姉さんへ顔を向けると、姉さんもこつちを向いていた。

「エル、私達が一番変化したって」

「は、はい。僕も姉さんはそうだと思います」

「それなら私はエルだって思うよ」

顔を見合わせて言い合うのはある意味同じ内容だ。

けど、それを聞いて周囲の皆さんは笑ってた。

「うん、両方の事を同じぐらいにしか知らないあたしが断言するよ。今のあんた達は本気で姉妹にしか見えないうつてさ」

「そうだね。今の二人は、本当の姉妹のようだ。勿論マリアを長女と

する三姉妹に」

「じゃあじゃあ、アタシと調はどうなるデスか？」

「私達もエルにお姉ちゃんって呼ばれてます」

「二人は……親戚？」

「それが無難かな」

響さんと未来さんの結論にクリスさんが頷いてお姉ちゃん達を見た。

「ま、それでいいだろ。大事なのは周囲からどう見られるかよりお前らがどう思ってるかだ」

「アタシ（私）たちがどう思ってるか……」

「そうだよ。それに、きつとエルは切歌も調も本当にお姉ちゃんって思ってると思う。だからこそエルって呼んで欲しいって頼んだんだろうしさ」

兄様がそう言うとお姉ちゃん達がこつちを見たので力強く頷いてみせる。

「はい！ 今の僕にとって、切歌お姉ちゃんも調お姉ちゃんも本当のお姉ちゃんだって思ってます！」

「エル……」

「つーわけだ。だから胸張ってお姉ちゃんやってろ。お前らも、その、こつち来てから成長してると思うからよ」

「クリス先輩……」

「……こつち見るんじゃねえ」

ちよつとだけ照れくさそうに顔を背けてクリスさんがそう言ったら、お姉ちゃん達が嬉しそうに微笑んだから余計クリスさんが顔を背けてしまった。

だけど、それがクリスさんらしさだと思う。うん、今なら分かります。あの頃は、エルフナインだった頃は分からなかった色々な事が、エルになった僕には分かるんだ。

感情の機微や愛や希望と言った抽象的なものの意味。それを僕はここで教わり、学び、感じたから。

世界を識るって、こういう事なんだね、パパ。

色んな事や人と出会い、触れて、感じ、思う。それが僕の中で様々な反応を起こして新しい発見や気づきに繋がるんだ。

世界はひとつじゃない。みんなそれぞれに世界を持つてる。

それを見せ合ったり、教え合ったりして、影響させ合って世界を大きくしていく。

キャロル、僕は今、君の世界が知りたい。世界を分解再構築しようとしていた君の世界でもいい。それが阻止された後の、僕と一緒にシエム・ハに抗った時の世界でも構わない。

僕は、君の世界を見たい。そして今の僕の世界を見せたい。どちらが正しいとかじゃなく、きつと同じものを目指しているはずの、もう一人の自分の世界を識りたいんだ。

「でも、きつと今回の事で変化成長してない人なんていないよ。俺だってそうだ。みんな、必ず変わってる。まあ一部は良くも悪くも、だけど」

「そうね。特にエルは本当に誰かさんの影響を濃く受けたものね」

「アタシもししよーの影響でこうなりましたし」

「切ちゃんも望んでなった気がする」

「うんうん。私もそう思うよ」

「響もそっち側だもんね」

「さて、そろそろ話題を変えようか」

「仁志さんが変えたのに……」

「まっ、いいけどね。先輩らしいよ」

「話題を変えるって、何を話すの？」

「旅行に関する事か？」

「それともまたヒーローの話ですか、兄様」

「おっ、よくぞ聞いてくれたエル。実はな？」

「……………そういうところ(デス)……………」

僕へ意気揚々と話し始めようとした兄様へ、皆さんが苦笑しながらその声を揃えた。

「……………ですね。反省します」

しよんぼりと肩を落として小さな声で兄様がそう言うのと、みんなが

笑った。

僕も笑って、すぐに兄様も笑った。

少しの間、笑い声だけが耳に聞こえてた。こんな時間がずっと続けばいいのにな。

そんな事を思いながら僕は笑う。目の中に映る、沢山の笑顔を出として記憶しながら……。

旅行まであと十日と迫ったその日、仁志はオーナーから見慣れぬ顔を紹介される。

それは茂部が紹介した新しい夜勤スタッフの男だった。

「どーも、脇谷二つす。よろしくお願いします」

「はじめまして。店長の只野仁志です。分からない事や疑問に思った事は何でも聞いてくれていいから。これからよろしく」

見た目は軽薄そうに見える『今時の若者』と言われそうな彼は、予想に反して真面目であり、仕事も多少手を抜くところはあるがそれも許容できる範囲であったため、仁志としては意外に思いつつ内心で安堵した。

(これで奏に辞めてもらえるな)

希望日数も週3で、奏の代わりになると思えたのも大きいと言える。

更にその翌日、仁志は一人の女性をオーナーから紹介される事となる。

「はじめまして。近藤ふみと言います」

「はじめまして。只野仁志です。お姉さんから話は聞いていたよ。何かあったら俺かオーナーへ遠慮なく言って欲しい」

それは近藤の妹であった。姉と同じ夕勤として週4を希望していて、これによって響がバイトを辞める理由が出来たと仁志は考えた。

(クリスはともかく響ならまだ痛手にはならない、か……)

そして更に仁志はオーナーから報告を受ける。それは茂部の紹介するもう一人の人間について。

何と女性であり、しかも夕勤が無理なら昼勤でもいいと言っている

との事だったのだ。

希望勤務日数は週3〜4であり、オーナーとしては面談をした感じでは悪くはないと思うとの感想を抱いた。

「それで、どうかな？」

「オーナーが大丈夫だろうと思ったのなら俺から言う事はありませんよ」

「そうか。じゃ、昼勤で採用って形で話をしてみるよ」

「分かりました。休み希望等は後で教えてください」

思わぬ展開に仁志は内心で息を吐いていた。何せこれで未来の辞職も可能となったからである。

（働いてもらわないと分からないけど、未来も辞められるかもしれない……）

旅行を目前に控えた中で迎えた予想外の状況に、仁志は懸念していた事のほとんどが片付きそうだと安心していた。

まず旅行前に奏からオーナーへ十月中旬で辞めたいと持ちかけてもらい、響はシフトを週1〜2へ減らしたいと相談してもらおう事とし、未来は旅行後に別の仕事もやってみたいという理由で十月中の辞職を申し出る事になった。

オーナーは、夢を追い駆ける事へもう一度全力をと語る奏を応援する形でそれを承諾、響に關しても構わないと許可を出した。

その後、出勤した昼勤の女性も、茂部の知り合いのフリーターとは思えない程しっかりしており、一緒に勤務した未来からも真面目だと思おうという評価が出る程だった。

こうして仁志の懸念していた事の一つである、事件解決後の店のシフト破綻は一先ず回避された。

残る調だが、こちらは上手くすれば南條にあてがあるらしいと仁志は知る。

というのも、南條がワーク先として働いているドラッグストアの同僚で、彼女と同じように働きたいと考えている相手がいるのだがと相談されたのだ。

「正直難しいって言ったのよ。ほら、今朝の時間、人が足りてるでしょ

？」

「その人は週どれくらいを希望してるんです？」

「そうねえ。出来れば3か4って」

「……今話が出てるって事は、今すぐにつて事じゃないですよね？」

「そうそう。何でも来年から娘さんが大学受験でね。予備校へ通わせるための足しにWワークって事みたい」

この話を逃すと調を辞めさせる事が難しい。そう考えた仁志は、オーナーと相談してみるのも十月半ばまで待つて欲しいとの伝言を頼んだ。

そしてすぐにその日の夕方前にオーナーへ報告等を行い、調が最近成績が落ち始めた事でバイトを続けるか否かで悩んでいると伝え、この機会に学生の本分へ戻してやりたいと告げたのである。

「……月読さんがねえ」

「責任感の強い子ですから、発注もあつて辞めるとは言えないのかもしれません」

「そうだなあ。彼女、歳に似合わずしっかりしてるしね。うん、じゃあその南條さんの紹介する人が問題なさそうなら、月読さんと相談かな」

「なら、俺がやりますよ。オーナーは朝はゆつくり寝てください」
最終決戦前にクリスを除いた四人の装者がアルバイトから解放される可能性が出て来た。

それをこの時の仁志はただ運がいいとしか思っていなかった。

その裏に関与する闇の気配など、微塵も感じていなかったのである。

——思わぬ事もあつたけど、こちらに有利に働いてくれたわ。これで装者共がああ場所からほとんどいなくなる。残るのはいつでも咲ける蕾のみ。ふふふ……。

誰にも聞こえぬ悪意の囁きがこだまする中、いよいよ仁志達の最後のイベントが幕を上げようとしていた。

国内最大のテーマパークである通称“夢の国”への一泊二日の旅行へと……。

TESTAMENT

「「「「「「おくっ（へえ）……」「」「」「」「」」」」」

東京方面へ向かうため、俺達は名古屋高速から新東名高速を使つて行く事にした。

で、最初のサービスエリアである岡崎SAへ来たのだが、これが思っていたよりもみんなには驚きだったようだ。

通常上りと下りで別々のSAを作るのだが、ここはその両方から来れるように出来ており、しかもかなり大きいからだろうな。

「兄様、この高速道路は全部こういう作りのサービスエリアなんですか？」

「いや、たしか全部ではなかったはずだよ。大抵は上りと下りで別々だったかな？」

俺もここを使うのは初めてだけど、一時ニュースで何度も新東名のSAを取り上げてたから知ってるだけは知ってる。

「早く中へ入りましょう！」

「テストス！」

予想通り響と切歌がテンションを上げていた。でも、どうやら声に出していないだけでみんな多かれ少なかれテンションは高いようだ。

何せ全員して俺を見つめてる。別に俺の許可なく入ればいいと思うけど……あつ、そういう事か。

「待ってくれ。一枚だけ写真を撮らせてくれよ」

「はい。じゃ、どうしましょうか？」

「エルとセレナを中心にしてくれ。マリアと奏は両端で頼む。後は自由で」

「了解。んじゃ、さつきと並ぼうか」

「そうね」

俺は少しだけ建物から離れて位置取りを決め、ファインダー越しにみんなを見つめる。

何だか気分は女子校の教師だ。いや、だって見事に女性しかないからな。

「じゃあ撮るぞ〜。一足す一は〜?」

「「「「「「に〜」」」」」」」」

こうして見事にみんなの笑ってる写真が撮れた。で、近くにいた人に頼んで俺も入れて一枚撮ってもらって無事撮影終了。

「ありがとうございます」

撮影してくれた人へ礼を述べ、デジカメをしまつて顔を前へ向けるとそこには待ち切れないと言った顔の響や切歌の姿。

いや、エルとヴェイグもだろうか。本当に愛らしいマスコットコンビだ。なら入店許可を出しましょうかね。

「お待たせ。もう中へ入っていいよ。で、とりあえず自由行動とする。ただし、エルは必ず誰かと一緒」

「はい」

「あと、連絡手段を持ってない人は持つてる相手と一緒にいてくれると助かる。つと、そうだ。調、これを」

「これって……」

俺が彼女へ差し出したのは依り代と呼ばれる方のスマホ。

まあいくら何でもここで襲撃はないと思うし、俺も必ず装者の誰かと一緒にいようと思ってるので問題はないだろう。

「誰に渡そうかと考えたけど、コンビで動く事が多そうな切歌か調だ なつておもつたんだ。で、それなら調が連絡役には適任だと思つてね」

「適任……」

「うん。ま、さすがに自由自在にノイズを出せるとは思えないし、今の状況でそれをやるならとつくにやっけてきてると思うから」

「……分かった。師匠の信頼、たしかに受け取った」

「いや、さすがにそこまで重くはないんだけど」

「じゃ、あたし達は行くとするか。翼、マリア、行くよ」

「はいはい」

「ドライディーヴァで行動だな」

率先して動き出す年長組。そうならば当然……

「未来、クリスちゃん、行こう!」

「うん、いいよ。クリスマスもいい?」

「おう。ま、あたしはこのバカの面倒見るんだろうなって気がしてたし」

「あつ、ひどーい」

仲良しトリオがそれに続いて……

「それじゃ、アタシと調はエルと行くデスよ」

「いいんですか?」

「うん。お姉ちゃん達の傍から離れないでね」

「はいっ!」

「レッツゴーデス!」

切歌を先頭に調と手を繋いで歩き出すエル。ヴェイグはすっかりエルの腕の中が定位置になりつつあるな。

「えつと、お兄ちゃんは?」

「セレナと一緒にいいんだけどダメかな」

「っ! ううん! そんな事ないよ!」

弾けんばかりの笑顔を見せてくれるセレナに俺も笑顔が浮かぶ。

そうして二人で並んで歩き出す。普段ならちよつと周囲の目になるけど、まあ街中じゃないし、堂々としていれば変な勘ぐりはされないだろう。

でも、一応対策みたいな事はしておくか。

「セレナ、一つお願いがあるんだけど」

「何?」

「お兄ちゃんだけじゃなくて仁志お兄ちゃんって呼んでもらえるか?」

「仁志お兄ちゃん?」

そう、名前を付けて呼ばれる事で、俺達はちゃんとした知り合いなんですよってアピールになる、はずだ。

ないと思うけどお兄ちゃんだけじゃ迷子を連れていると思われかねないし。

そういう事を耳打ちして伝えるとセレナも理解してくれたようで、小さく苦笑して頷いてくれた。

中は思っていた以上に色んな店が入っていた。
フードコートもあり、土産物を扱う売店も広く、パン屋や地元で有名な練り物の名店なども出店している。

コンビニまであり、従来のサービスエリアとは別物と思う程の内容だ。

「仁志お兄ちゃん、見て見て。お肉を焼いてるよ」
「お〜……」

普通に販売するだけでなく、店内で調理し手軽に食べられる系統の物を出している店も多くあり、正直時間がもつと遅ければ食事を目当てに沢山の人間が訪れるだろうと思えるぐらいだった。

「あつ、ししよーとセレナを発見デス」

「本当だ」

「姉さ〜ん」

「エル達だ」

嬉しそうに小走りで駆け寄っていくセレナの背中を見つめ、俺は微笑む。

視線の先ではエルとセレナが顔を合わせて笑みを見せ合っている。本当に姉妹のようだなあ。きつとエルがいなければ、セレナはもつと早く一番年下って事で心へ闇が忍び寄っていたはずだ。

それを回避出来たのは、エルという妹分がいて、セレナとお互いに本当の姉妹のようになっていったからだろう。

「仁志さん、お父さんみたいな顔してる」

「デスね」

聞こえた声に顔を動かすと両隣にザババコンビがいた。

「私の旦那さんになる人にも、そういう感じのお父さんになって欲しい」

「デスデス。アタシも旦那さんにはししよーのような人になって欲しいデス」

「……それはいいけど二人共？ どうして俺と腕を組んでるのかな？」

気付けば両腕を切歌と調が絡み取っている。

それに、さり気無く胸へ当ててるし。

「組みたいからだ（デス）けど、ダメ（デス）？」

「ダメ。気持ちは嬉しいし俺も嫌じゃないけどな」

出来るだけ優しく告げると、二人もそう言われると分かっていたのかちよこつと舌を出して腕を離れた。

本当に可愛い小悪魔なこと。何て言うか、増々魅力が磨かれてる気がするな。

「で、何か発見はあったかね、切歌隊員」

「はいデス！ シューマイや中華ちまきのお店を見つけましたデス！」

「響さん達が言うにはあのデパ地下にあったお店の系列みたい」

「へえ、じゃあ味は保証付きだな」

軽く食べ物を買っておこうと思ってたし、丁度いいかもしれない。ただ、今日の昼が中華なんだよなあ。それにパン屋も惹かれないでもない。

どうしたものかと思っていると、エルとセレナが仲良く手を繋いでこっちへ向かってきた。

「兄様」

「仁志お兄ちゃん、向こうに中華のお店があるんだって」

「ああ、今二人からも聞いたよ」

若干迷ったが、ここで変に嫌がると昼のサプライズを気付かれる可能性もあるかもしれない、か。

「どうする？ 見に行くか？」

「うん」

頷くセレナを見てから俺はエルへ視線を合わせる。さて、こちらは どうするんだろうか？

「エル達は どうする？」

「僕達は……お姉ちゃん達、どうしますか？」

「ここはししよーにゴチになるデス」

「可愛い弟子と妹分に美味しい物を買って、師匠」

「はいはい。じゃ、とりあえず見に行くぞ」

「はい(デス)」

年少組は本当に仲が良い。今や本当に姉妹のようだ。

切歌と調もエルが姉として扱うようになって、より一層年上としての自覚や成長が起きたし、やっぱり呼ばれ方や扱われ方って大事なんだなと実感する。

セレナと手を繋いで歩くエルや、その後ろを並んで歩く切歌と調を眺めながら、俺は四人がこっちへ来たばかりの頃を思い出す。

あの頃は、まだ四人には互いに壁があった。それは他者としての壁。いわば他人扱いの壁だ。

それが悪い訳じゃない。何せそれは誰しもが必ず持っているものだから。

だけど、あの平屋での暮らしがそれを覚えていった。同じ家に住み、同じ食事を食べ、同じ時間を過ごす事で他人は家族となったのだ。夫婦がそうであるように、互いの呼び方を姉妹としたのも大きいだろう。

「ここです」

「わあ、ホントだ。シューマイとか売ってる」

「でっ、でっ、こっちには串に刺さったやつも売ってるんデスよ」

「お団子みたい……」

「これなら一つで色んな味が食べられるんだって」

仲良し四姉妹の会話を聞きながらショーケースの中を眺める。

豚まんや中華ちまきの他に焼売などが並んでる。時間も時間だからそんなに多く並んではない。

それでも販売はしてるんだから頭が下がる。なので感謝と応援も込めて人数分串に刺さった焼売を買わせてもらおう事にした。

「はい、座って食べるんだぞ」

「うん」

「はい(デス)」

さり気無くヴェイグも小さく首を動かしている。俺の分はヴェイグの分として渡した。

いや、俺も食べてみたいけど、見た目は五人なのに六本買うのは気

が引けたのだ。

「『美味しい(デス)！』」

笑顔で焼売を食べる四人を眺めながら、俺は手にした串をテーブルの上に乗ってるヴェイグへ差し出して周囲をそれとなく見渡す。

「……いいぞ」

「はむっ」

まるでこっそりと動物を飼っているようだ。

でも、仕方ない。車まで待てなんて言えるはずないし。

「……タダノ、美味いぞ」

「そっか。全部食べてくれていいからな。それはヴェイグの分だし」

「そうなのか？ 分かった」

モクモクと笑顔で食べるヴェイグ達に癒されつつ、俺はぼんやりと今後の事を考える。

この旅行が終われば、みんなの退職を待つて最後のカオスビーストを倒しに行く。

そこできつとこの日々は終わる。例えどんな結末になろうと、こんな時間はもうないはずだ。

響達はそれぞれの世界で暮らし、たまに会う事はあっても同じ場所で同じ時間を過ごす事はないんだ。

その時俺はどうしてるんだろうか？

この世界でもがき足掻いているだろうか？ それともみんなの世界でこっちへ戻れるように無い知恵を捻り出そうとしてるだろうか？

あるいは、もうどこにもいなくなってるだろうか？

「タダノ、もういいぞ」

「ん？ ああ……」

気付けば手にしていた串から焼売は消えていた。目の前には満足そうに笑みを浮かべるヴェイグがいる。

で、見ればエル達も食べ終わったようだ。ただ、まだ足りないって顔をしてるな。

無理もない。何せ朝早くから起きてほとんど何も食べてないんだ。

普段なら朝飯の時間を過ぎてるし、仕方ない。

「……パン屋で車の中で食べる用の物を見ようか」

「「「やったあ！」」」

満面の笑みで喜ぶ四人と小さく頷くヴェイグに微笑みながら俺は椅子から立ち上がる。

さてさて、他のみんなはどうしたんだろうか。若干視界の隅にあるフードコートに響達の姿が見えるけど、うどんとか食べてるのか？

まあいいや。じゃ、そちらへみんなが気付かない内に来た方へ戻るように誘導しましょうかね。

昼飯に美味い中華を食べさせたいと思っているので、出来るだけここでお腹いっぱいにはしたくないんだよ。

……響は大食漢だから構わないけどな。

「パン屋さんデスカ。何がいいデスカね？」

「サンドイッチとかバーガー系があるといいな」

「メロンパンとか好きです！」

「クリームパンとかもいいよね」

「……あんばんんでもいいぞ」

「渋いなあヴェイグ。じゃ、パンは一人二つまでだからな？」

「「「はーい」」」

気分は本当に父親だ。うん、今なら分かるよ父さん。何で父さんがあんなに俺へ色々食べさせてくれたか。

こんなに嬉しそうに、幸せそうに笑ってくれるなら、そりや色々食べさせたくなるよ。

と、そんな事を思ってたらそのパン屋にドライディーヴァがいた。

「揚げパン？ 奏、知ってる？」

「いや、初めて見るよ。パンを揚げてあるだけじゃないのか？」

「砂糖やきなこをかけてあるみたいだよ。カロリーが高そう……」

何というか、庶民的な会話をする世界の歌姫達である。

「おおっ、マリア達もパン屋さんでお買い物デスカ？」

「あら、切歌達じゃない」

「あんだ達もパンを買うのかい？」

「はい。車の中で食べる用に一人二つまでって師匠が」

「イイにおーい」

「はい、パンの焼ける匂いです」

「ふふっ、エル達もいるならさっきの食パンを買ってもいいんじゃないか、マリア」

「どうやら女性らしく美味しそうなパンにテンションを上げているようだ。」

なので俺は大人しくサンドイッチコーナーを眺める事に。

「おつ、カツサンドがあるじゃないか。定番だから買っておこうかなあ。」

「つと、あんぱんがあるじゃないか。ヴェイグ用にこれを買おう。後は……」

「ちよつと仁志、一人で黙々と選んでないで会話に参加しなさいよ」

「クリームパンをどうするかと悩み始めたところでマリアから突っ込みを入れられた。」

「いや、だつてさ、女性だけで楽しそうだったから邪魔しちや悪いと思つて気を遣つたんだぞ？」

「女性だけで賑やかにしてたからさ」

「だからつてね……」

「仁志さん、揚げパンつてこちらでは普通なの？」

「なの？」

「翼の質問にセレナが小さく笑いながら語尾を繰り返す。本当に可愛いな、この子も。」

「えつと、たしか母さんが子供の頃の給食に出て来た事があるとか」

「「「「給食……」」」」」

「揃つて微妙な顔をする女性達を見て俺は気付いた。多分だけど給食つていう物を体験した事があるのつて、下手したら奏だけかもしれないつて。」

「母さんが小学生の頃の話だから……今からざつと半世紀前つて思つてくれていいよ」

「半世紀前……」

「そ、そんなに昔の事なの？」

「ああ。しかも聞いた話だと、地域によつてはまったく出なかつたところもあるから、人によつては懐かしくもなんともないっていう物だよ」

少し聞いただけの知識で喋る。その話の最中にも切歌が俺の持つてたトングを使ってトレイへパンを乗せていき、エル達の言葉を聞いて追加するようにどんどん乗せていく。

マリア達はそんな光景を見て苦笑しつつ、俺の話へ興味を示して聞き続けてくれた。

結局会計をしている間も話は続き、気付けば俺の給食の思い出を語ってた。

青りんごゼリーは中央が凍ったままでそれがまた美味かつたとか、若鶏のピーナツ揚げが大好きだつたとか、数年に一度ある非常用のレトルトカレーを食べるのが地味に楽しみだつたとか、そういう話だ。

パンを買つた後は、切歌たつての希望で地鶏などの肉をメインに扱う店へ向かう事に。

で、そこには予想通り響がいた。未来とクリスが若干呆れる中、その手に見事な鳥のモモ焼きを受け取ろうとしているところだつた。

「二二凄いい(デス)……二二」

そしてそんな物を見た年少組は目を見開いている。

ふむ、少々値は張るが二本を四人で分けるなら安いもんだ。

「あつ、みんないる」

「よつ。そつちは何買ったんだ？」

「パンです」

「はい。ほら」

セレナが未来とクリスへ見せるように袋を広げているのを横目に、俺は焼き場近くのレジへと向かう。

「すみません。モモ焼きを二つください」

「ありがとうございます。持ち帰りですか？」

「あ、はい」

「かしこまりました。1400円です」

料金を払おうと財布を出していると横から切歌が顔を出した。

「ししょー、何買ったデスカ?」

「モモ焼き。二つ買ったから、切歌はエルと、調はセレナと分け合って食べるんだぞ?」

「おおっ、りょーかいデース」

嬉しそうにそう返すと切歌は早速とばかりにエル達の方へ駆けて行く。

少し見るとエル達が小さく驚いてこっちへ顔を向けたので、ちょいちよいと手招きしてやった。

するとトタトタと可愛い義姉妹がやってくるのではないか。おっ、ヴェイグが興味深そうに焼いている様を見る。

「兄様、モモ焼きを買ったって聞きました」

「私と調さんで一つ食べていいの?」

「いいよ。ほら、切歌と調じゃ、調があまり食べられそうにない気がするだろ?」

俺がそう言うと二人が揃って苦笑して頷いた。

「お待たせしました。モモ焼きです」

「どうも」

差し出された二本のモモ焼きを受け取り、それをエルとセレナへ差し出す。

「はい、ちゃんと分け合って食べてくれ」

「はーい」

笑顔で切歌達へと駆け寄っていくの眺めつつ財布から代金を出して店員さんへ差し出す。

一応レシートを受け取って財布へとしまおうと後ろへ向き直った。

「みんな、飲み物は? 自販機でいいなら外に沢山並んでるところがあるぞ」

その言葉にどうするかと意見を述べ合う女性陣を眺め、俺は一人笑みを浮かべた。

まだ始まったばかりの旅行だけど、どうやら今のところは楽しんで

もらえていると確信して。

「……もうこれを超える思い出なんてないって、そう思ってもらえるように頑張らないとな」

みんなのためにも、俺自身のためにも、そして何より、それを超える時間を掴み取るためにも……。

急がず焦らず、ただどのんびりでもないそんな速度で車は進む。

俺は今、響の膝上でタダノが買ってくれたあんばんを食べている。

「ヴェイグさん、美味しい?」

「ん? ああ、美味しいぞ」

あんばんにはつぶあんとしあんがあるが、俺はつぶあんが好きだ。タダノはこしあんが好きらしい。

何でも皮があるのが嫌だと言ってた。食べられない程じゃないが、選べるならこしあんだと、そう力説してマリア達に呆れられていたな。

「響」

「何?」

「つぶあんとしあんならどっちが好きだ?」

「ついでだ。響にも聞いてみよう。」

「うーん……どっちもじゃダメ?」

「いや、いい。そうか、両方か」

盲点だった。すっかりどちらか選ぶと思っていたが、別に両方と言っても良かったな。

「ししよーししよー! 次のサービスエリアはどこですか?」

「え? 当分止まらないぞ?」

「えーっ!? サービスエリア食べ歩きしないデスカ!」

「しません。それは……俺の財布があと二つは必要になるから」

タダノの言い方で俺は察した。本当はまた別の機会にと、そう言うおとしただらうと。

だけど、もうそれは無理だ。この旅行が終わってみんなが仕事を辞めたら、いよいよ悪意との決戦だ。

タダノの話だと遅くても来月中にはゲートを通ってカオススペースと戦うと言っていた。

つまり、こうやって全員で遠出するのはこれが最後になる。集まる事はあるかもしれないが、こんなに金を使うのは最後だ。

……タダノは俺にだけ教えてくれた。タダノが思う、今回の事件解決の結末予想を。

俺は、それを聞いた時言葉を失った。でも、どこかで納得もしてしまっただ。

何故みんなの外見へ事件の経過が大きく影響しないのか。そこからタダノはこう言っていた。

——おそらくだけど、あれはこの世界でどれだけ過ごそうとそれぞれの世界の人達に分からなくするためだ。つまり、見た目で何かあった事を察する事が出来ないって事。

そしてそれが何を意味するのか。タダノは時々見せていた表情で俺へこう教えてくれた。

——多分だけど、ここでの事がなかった事になるようにだ。

全てが終わった時、おそらく本当に全てがなかった事になる。そうタダノは言っていた。

誰の記憶にも残らず、下手をすれば事の始まりから全て痕跡が消えるかもしれない。

そう話してくれた後でタダノは言った。だけど、自分だけは覚えていられるかもしれないと。

——俺の世界はみんなにとっての神様の世界だろ？ なら、俺だけは覚えていられる可能性がある。悪意が消えて、そのやっていた事の反動が起きたとしても。

真剣な顔でそう告げていたタダノは、今はどこか楽しそうに運転をしている。

誰も知らないんだ。タダノの苦しみや悲しみは。

俺だけが見てきた。教えてもらえた。それはきつと、俺がタダノの友達だからだ。

「……タダノ、昼ごはんは美味しい物を期待しているのか？」

だから俺も明るく振舞おう。タダノだけに明るく楽しい時間を作らせる訳にはいかないからな。

「ああつ！ 旅の楽しみは基本的に食事だからな！」

「仁志さくんつ！ それって、園内のレストランじゃないって事ですか？」

「当然！ 昼飯をゆったり食べて、ホテルにチェックインして荷物を置いて、そこから夜のパレードを見るまでは自由に過ごしていいよつ！」

「おおつ！ パレードまで見れるデスカ！」

「ガイドブックはどうしますか？ 一冊ですから情報を共有するのは難しいかと」

「大丈夫よ。それを持つてる人間へスマートフォンで連絡してもらえばいいわ」

「そうだね。じゃ、いつでも連絡取れてフリーな仁志先輩に決まりつて事で」

「「「「「異議なし」」」」」」

「タダノ、だそうだぞ？」

「へいへい。賛成多数により可決されましたつと。くそつ、これが民主主義つてやつかよ。ただの数の暴力じゃないか！」

そうタダノが言ったらみんなが笑った。何故ならタダノも笑つてるからだ。

タダノが笑うとみんなが笑い、みんなが笑うとタダノが笑う。

マリアがタダノをだいきくばしらと呼んでいたが、その意味をエルに調べてもらったら「家の中の一番太い柱」だそうだ。

そこから転じて集団などの要の存在という意味もあるらしい。まさにタダノの事だ。

悪意がタダノを狙ってるのは、そういう事を理解しているからだと思ふ。

正直、今タダノが倒れでもしたらみんな気がなくなるはずだ。

エルはタダノを兄と呼んでいるが、俺から見ればもう父だろう。タダノの好きな事を聞いて笑顔を浮かべるエルを俺は沢山見てきた。

その上でタダノはエルの事もちゃんと聞く。今何に興味があるのか。どういう事をその日したのか。

そうやってエルが話しているのを最初の頃見たマリアが驚いていたぐらいだ。

——あの子があんなに自分の事を話すなんて……。

その時の俺は知らなかったが、元々エルは自分の話をするような事はあまりなかったらしい。

だが、今なら分かる。その頃のエルはそういう事が仕事の一言で終わっていたんだ。

この世界ではエルの仕事は居間の掃除などの家事の手伝いが精々で、後は俺と一緒に昼寝をしたり、スマホで気になった事を調べたり、調と買い物に行ったり、切歌と借りてきた歌を聞いたり、セレナと遊んだり、色々とやっている。

だから自分の事で話せる事が多い。一言では終われないぐらい、沢山の出来事や思い出があるんだろう。

「ヴェイグさん、一口どうですか？」

そんな事を考えていたら、エルの声が前から聞こえてきた。

視線を動かせば、エルがこっちへ顔を出して手に持つてるパンを差し出してきてる。

「いいのか？」

「はい」

「なら遠慮なく」

手を伸ばして受け取り、あむっと一口齧る。

うん、美味しい。甘くてサクサクしてるな。で、それと一緒に少しだけ柔らかかフワフワな部分もある。メロンパンはやはり美味しいぞ。

「どうですか？」

「ああ、美味しい。やっぱりメロンパンはいいな。外はサクサク、中はフワフワだ」

「ですよ。僕も好きです」

「ジュルっ……エルちゃん、私も一口もらっていい？」

「あつ、はい。どうぞ」

俺とエルの話聞いて響が物欲しそうな声を出した。

エルが小さく笑い、俺もらしいと思つて笑みを浮かべる。

俺の手から響へメロンパンが移動し、その大きさをまた変えていく。

……結構大きく食べるな、響は。

「んくつ！ ホントだあ。美味しいね、これ」

「美味しいね、これ、じゃないでしょ？ 響？ これはエルちゃんのかなだよ？」

そこへ未来が顔を出した。その顔はやや怒ってるな。

「あ……ぶ、ごめんねエルちゃん！」

「いいんです。その代わり、お昼ご飯の時に響さんからお返しをもらいますね」

「ふふつ、エルちゃんも強かになったね。だつて？」

「あはは、うん、いいよ。何食べるか分からないけど、私が頼んだ物をエルちゃんに絶対一口あげるね」

「はいっ！」

エルが嬉しそうに笑うと響と未来も笑った。俺も笑った。

この後未来もメロンパンを少しもらつて微笑んだ。たった一つのパンで四人も笑顔にするんだから食べ物は凄い。

そういえばタダノが言っていたな。ある絵本作家が本当の正義は何かという答えを出していると。

——それは一体何だ？

——みんなのお腹をいっぱいにしてくれる事、だつて。要するにみんなを笑顔にする事さ。

ライダーは、怖い事をする怪人と戦つて、恐ろしい事や悲しい事をなくそうとする。

ウルトラマンは、暴れる怪獣や侵略者と戦つて、傷付く事や苦しむ事を止めようとする。

スーパー戦隊は、色んな悪と戦つて、自由と平和を取り戻そうとする。

つまりヒーローとは、みんなの笑顔のために戦う奴だ。

だからタダノはヒーローなんだろうな。少なくとも、みんなにはヒーローだ。

だけど、そんなみんながタダノにとってはヒーローなんだ。きっと、誰もが誰かのヒーローなんだな。

「俺も、ヒーローになれるだろうか……」

何があっても諦めず、希望を信じ続ける。これが難しい事を俺はよく知ってる。

俺は、一度諦めかけた。人間を信じる事を止めた。闇に堕ちはしなかったが、光でもなくなってしまった。

光を見てきたはずなのに、闇を嫌っていたはずなのに、気付けば俺は心に影を住まわせた。

それを払ってくれたのがセレナだ。光へ目を向けさせてくれたのがタダノだ。

そして何より、俺をヴェイグに戻してくれたのはここでみんなと過ごす時間だ。

一度光を手放した俺だからこそ、その有難さを知ってる。重みが分かる。

人間全てを信じる事は出来ないけど、それでも全て信じない事もしない。

一人一人と向き合って、そして考えていく。

大事なものは希望を捨てない事だと、そう俺もヒーロー達に教えてもらったからな……。

何度かの休憩をはさみながら仁志達を乗せた車は横浜の街へ入り、俗に言う中華街へ到着していた。

ここに至ればほとんどの人間が仁志の考えに気付き、普段では食べられない物を食べられると切歌達が盛り上がるのも無理はないと言えた。

「ヴェイグ、今から行くところは個室だから喋っても大丈夫な時が多いんだ」

「本当か？」

「ああ。でも注文した物を運んでくる事とかがあるから注意はしてくれよう。」

「分かった」

今回の旅行の中でヴェイグのために仁志は事前予約に加えて個室を押さえていた。

食べ歩きでもいいかとも思ったのだが、それではヴェイグが安心して食べる事も意見を言う事も出来ない。

それはひいてはエル達の心にも若干の影を作りかねないと、そこまで思ったのだ。

駐車場から外へと出た仁志達は、予約した時間まで多少余裕があるため少しの間散策する事にして歩き出す。

昼時前ながら街は観光地でもあるため人で賑わい、あちこちで肉まんなどの食べ歩き可能な物を販売している事もあって活気に溢れていた。

「響さん響さんっ！ あのシューマイ美味しそうデス！」

「そうだね！ あつちの豚まんも美味しそうっ！」

「やれやれ、相変わらず食い気が強いね、この二人」

「無理もないよ。立花も暁も昼食を楽しむために最初以降のサービスエリアでの買い物を押さえていたみたいだし」

「そうだったわね。財布を二人して調と未来へ預けていたぐらいだもの」

呆れ顔の奏に苦笑する翼とマリア。そんな三人の後ろでは、エルフナインとセレナがヴェイグと共に雑貨店らしき店先に飾ってるチャイナ服を眺めていた。

「実物を初めて見ました」

「うん、そうだね」

彼女達がそういうものを見たのは切歌のカンフーギアである。それとはまた異なっているのだが、二人にとっては分かり易い中華街らしきと言えた。

「仁志も、こういうの好きなのかよ？」

「嫌いじゃないよ。まあ、可愛い女性が着てれば、だけど」

「ふふっ、只野さんらしい」

「じゃ、私達だとどうなの？」

「調達がチャイナ？ うーん……」

言われて想像し始める仁志を見て三人は苦笑する。

今なら強く望めばカンフーギアならぬチャイナギアが出現するよ
うな気がしていたのだ。

「兄様、僕らはどうですか？」

「似合うかな？」

「エルとセレナもかあ。うん、似合うと思うよ」

可愛い二人のチャイナ服姿を想像し、仁志は父親のように微笑む。

ただ、それを見ていた三人の乙女はやや膨れ顔。

「むっ、只野さん？ 私達の感想、聞いてないんですけど？」

「師匠、酷い」

「仁志、今のはちよつと酷いんじゃないか？」

「ご、ごめん。その、似合うとは思うんだけど、スリットがあるもんだ
から……ね？」

その言い方でクリス達は悟る。若干セクシーな姿を想像したため、
仁志はそれ以上おかしな想像をしないために即座にエルフナイン達
の方へ切り替えたのだろうと。

（もう、只野さんってば……。そう言われると、少し大胆かも……）

（足が見えるのって、そんなにエッチなのかな？）

（ど、どんだけ深いスリット想像してやがるんだ？ ……ま、まあ仁志
だけなら構わねーけど……）

（正直チャイナは、分かり易いアピールポイントがあるクリスより未
来と調の方がスリットから覗く脚線美とかの威力が高いんだよなあ
……）

それぞれにチャイナ服を見つめ、頬を搔いたり首を傾げたり赤面し
たりと反応を見せる乙女達と、何とも言えない顔で空を見上げる仁
志。

エルフナインとセレナはそんな四人に揃って小首を傾げ、同時に
ヴェイグへ目を向けた。

「ヴェイグさん、兄様達はどうしたんでしよう？」

「何か変な事、ありました？」

「……分からないから俺に聞くな」

目を閉じるやため息混じりにそう告げ、ヴェイグは少しだけ鼻を動かす。

(ここも色んな匂いがするな。腹が減ってくる……)

嗅ぎ覚えのない食べ物らしき匂いがあちこちからしてくる中華街。そこはヴェイグにとってはフードコートと同じぐらい食欲を刺激する場所であつた。

「……エル、何か軽く食べたい」

「軽く？」

「あつ、じゃあ分け合おつか。エル、好きなを選んで。私が買ってあげる」

「ありがとう姉さん」

セレナに手を引かれてエルフナインはヴェイグを抱えて肉まんなどを蒸かしている店先へと向かう。

その背を見送り、仁志達は微笑みを浮かべた。

視線の先では肉まんやチャーシューまんを前に目を輝かせて迷うエルフナインと、それを見つめて笑うセレナの姿がある。

「いいんですか？ これからお昼なのに」

「いいよ。中華まん一つを三人で分け合うなら、より胃袋が動き出すさ」

「そうだな」

「セレナ、お姉ちゃんしてる」

「エルといると誰もがお姉ちゃんになるから当然だよ」

四人の見つめる中、セレナが持っている財布からチャーシューまんの代金を支払い、その間にエルフナインはこっそりヴェイグへ食べさせていた。

「クリス達はいいのか？」

「私は響を止めないといけないので」

「私は切ちゃんを」

「あたしはそこまで空腹って訳じゃ」

そこで可愛らしい音が鳴った。仁志達の視線が音の出所へと動く。
「……んだよう？」

軽く腹部を押さええながら恥ずかしそうに俯くクリスマス。その愛らしさに仁志達は小さく笑みを浮かべて、セレナ達がチャーシューまんを買った売店へと歩き出した。

「あつ、おい」

「じゃ、俺は軽く豚まんでも食べようかな」

「いいと思いますよ。でも、結構大き目ですから一人で全部食べるのはどうかな？」

「そっか。調、半分食べない？」

「ごめんなさい。切ちゃんがいるから」

「未来は？」

「すみません。私も響が」

「そっかあ。どうしようかな？ さすがに一人で食べるのはなあ」

そこでチラリと仁志がクリスマスを見た。

その意図が分からないクリスマスではない。それでも、きつとかつての彼女なら無視しただろう。

だが今のクリスマスは、仁志達のやり取りがどういう意図で行われているかを理解していた。

「あ、あたしが半分食べてやるよ」

「そっか。じゃ、買おう。すみませーん」

仕方ないとばかりに仁志が望む答えを告げるクリスマスを未来と調が小さく微笑みながら見つめると、互いの顔を見合わせて笑みを向け合う。

「クリスマスもこっちに来てからかなり素直になってきたね」

「はい。どんどん親しみやすい先輩になってます」

「聞こえてんぞ？」

やや照れくさそうにそう言ったクリスマスだったが、そんな彼女へ未来と調はにっこりと笑顔を向けて……

「何か問題（ですか）？」

まったく悪びれもせず、問い返したのだ。

「つ……ひ、人の事を話す時はそいつに聞こえないようにやれ、バカ……」

結局そう言う事しか出来ず、クリスは仁志から半分になった豚まんを受け取り、俯き気味に黙々と食べるのだった。

かなり軽くなった財布の中を眺めながら店を出る。いや、覚悟はしてたけどまさかここまでとは。

諭吉先生が何人旅立ったのか思い出したくない程だ。いくら全部で十二人とはいえ……なあ。

「仁志、本当に大丈夫？ 今のだけでもかなりの出費でしょ？」

店を出て来た俺へ真っ先にそう声をかけてくるマリアに苦笑いを返すしか出来ない。

だけど、ヴェイグが喜んでいて。エルやセレナ達が楽しんでいて。みんなが笑ってくれた。それを思い出せば何て事ない。

「いいんだよ。お金は天下の回り者。みんなの笑顔と思い出が増えて、世の中にも貢献出来るなら安いもんさ」

やせ我慢じゃなく本音だ。それに俺もこんな機会でもなければ北京ダックなんて食べなかつたし。

「……そう。ならいいけど」

俺の真意が伝わったのか、マリアはどこか微笑むようにそう言っただけで離れていく。

その先には笑顔でこっちを見つめる響達がいた。そこへ俺もマリアに続くように近付くと全員が笑顔を浮かべて……

「「「「「「御馳走（ごちそう）様です（デス）」」」」」」

なんて、同時に言ってきた。あつ、ヤバい……。これは、地味にくる……。

「ま、まあ美味しい飯は旅行の醍醐味だからな！ じゃ、車に戻ってホテルへ向かおうかつ！」

慌てて顔を背けて早足でみんなを先導するように歩き出す。

幸い涙は出てこないでくれたらしい。視界良好、オールクリアだ。

さっきの光景があと一か月もしたら見れなくなると、そう考えてしまったのがいけなかった。

もう、さっきのような時間を彼女達が過ごす事が出来ないかもしれないと、そう思ってしまったのが不味かった。

「どうしたんデスカ、ししよー?」

「ん? いや、まあ、照れくさくなっただよ」

切歌が目の前へ回り込んで顔を覗きこんでくるのでそう言って誤魔化す。

ある種照れくさくなっただのは事実だ。だから切歌も納得してくれるだろうと思った。

「照れくさく、デスカ。ししよーらしいデス」

につこり笑う切歌は相変わらず可愛い。これが最初出会った時はまったく笑いかけてくれなかったと思うと感慨深い。

「仁志さん、そんなに急がないでくださいよ。ちよつと苦しいんでゆっくり歩いて欲しいです」

「響は食べ過ぎ」

「デスデス」

「あつ、切歌ちゃんがそれ言う? 最後に私が片付ける事になった鳥の丸揚げ、誰が追加注文したやつだっけ?」

「ギクツ!?! で、でもでも響さんも頼もうって言ったじゃないデスカ!」

「はい、そこまで。響も切歌ちゃんも同罪だよ」

必愛コンビの仲裁をするのは未来。鳥の丸揚げなあ。美味かったもんなあ。

皮が香ばしくて、パリッパリで、セレナがフライドチキンと全然違うって目を見開いて、エルがそれに同意するように頷き、ヴェイグなどは無言でムシヤムシヤ食べていたぐらいだ。

「師匠は何が良かった?」

「俺は……感動したのはやっぱりフカヒレスープで、長年の夢が叶ったのが北京ダック」

「あれなあ。まあ分かってはいたが先輩は食べた事があるってのが

……」

俺の言葉を聞いてクリスが翼へ目を向ける。そう、翼はやはり高級中華も食べた事があるらしく、久しぶりに食べましたと言っていたのだ。

マリアでさえ食べた事がなかったと言ったので、どうやら彼女はまだまだ高級店とは縁が遠いらしい。あるいは中国での公演などをした事がないのか？

「あの時もあったと思うが、食べたと言っても一度きりだ」

「その一度が庶民は人生で一度あるかないかなんだよ」

「あたしも聞いた事はあっても食べた事はなかったからねえ」

「それぐらいにしましょう。翼は自慢なんてしてないし、何より他のメニューには色々可愛い反応してたじゃない。特にエビマヨなんて頬を押さえて喜んでたし」

「ま、マリア？ それはそれで恥ずかしいんだが……」

援護射撃がそのままフレンドリーファイアになってる。

まあ実際翼の反応は可愛かった。やはり日本で考案された中華はあまり食べた事がないらしく、前述のエビマヨは可愛い笑顔で美味しと言っていたのだ。

「黒い酢豚なんて初めて食べたなあ」

「あれ美味しかったです。本当の酢豚ってあれなんですか？」

「あー、たしかそうだったはず。よく見る赤いのは、こっちに来て日本人好みに作られたとか材料が手に入らなかったからケチャップを使ったとか、そういう理由だったはずだよ」

「「そうなんだ」」

未来と調の「絶対いい奥さんになるよコンビ」が感心するような表情を見せる。

「炒飯もパラパラで美味かったよな」

「はい！ とっても美味しかったです！」

「ヴェイグさんもお家で食べるのと全然違うって驚いてましたし」

「仕方ないのよ。家庭の火力でああしようと思うと色々難しいの」

「中華は火力が命。それはもう知ってる」

「そうなの?」

「はい。サイ・サイシーが言っていました」

「」「さいさいしー?」「」

Gガンを見た事のない響達が揃って疑問符を浮かべる。マリアは時々見てるので知ってはいるからな。

エルがサイ・サイシーについて説明するのを聞きながら俺は中華街を歩く。

今度はいつ来る事が出来るだろうか? もしくは、今度があるのだろうか、そう思いながら。

気付けば両隣をザババコンビが陣取ってて手を繋いできていた。まあ可愛いからいいか。

「ししよー、次はいよいよ夢の国デスか?」

「まあ厳密には違うけど、提携ホテルだからその一部ではあるか」

「ホテルはどういう感じなの、師匠」

「俺からは何も言わないよ。楽しみにしておいて」

「はい (デス)」

微笑みと共に頷く二人は本当に可愛い。

でも、普段の俺の部屋ではセレナとトリオで若干小悪魔なんだよなあ。

さすがにもう大人しくしてくれるようだ。いや、もしかしたら今は子供な面が強くなってるのかもしれないな。

今も俺を挟んで楽しいげに会話する切歌と調を見つつそんな風に思う。と、俺の前へ現れる二人の少女と、抱えられたヴェイグ。

「仁志お兄ちゃん、切歌さん達だけズルい」

「僕と姉さんも手を繋ぎたいです」

「分かった。切歌、調、交代してあげて」

可愛い妹分と友人のためならと二人はあっさり手を離してくれた。で、入れ替わるようにセレナとエルが俺の手を掴む。何というか、さっきまでが親戚のおじさん感全開なら今はお父さん感全開だな。

「仁志さん、父親みたいだよ」

「実際似たような気分だよ。ただ、俺の子供ならエルのような賢い子

には中々育たないだろうけど」

「男の子なら今のエルに近い気もするけどね」

「あ、それ同感です。仁志さんって男の子相手だといいいお父さんに絶対なりますよね」

言われて考える。実際エルやヴェイグに趣味の事を教えてるのは楽しかった。

オモチャはさすがにどうかと思ったから買わなかったけど、本当に男の子がいたら買ってただろうなあ。

切歌相手でも若干考えてしまったぐらいだ。小さな男の子がいて、ヒーロー物に興味があつたら確実買ってたと断言出来る。

「ししよーはエルにとってもお父さんみたいな感じデスよ？」

「うん、それは思う」

「おかげでエルが女の子らしくない趣味を持ちつつあるのが困りものだけだね」

マリアの言葉には何も言う事が出来ない。実際少しだけ罪悪感を抱いてはいる。

ただ、エルがそれを切っ掛けに趣味と言うものを持ち始めている事だけはマリアも喜んでいるので、多少は大目に見てくれてはいるのだ。

「エルちゃん、趣味があるの？」

「はい。今はプラモデル作りです」

意外な答えに響達が揃って軽く驚く声を出すのを聞きながら、俺はあのマリアとエルと出かけた数日後の事を思い出す。

——兄様、これは？

——例のWのプラモ。それとニッパーにやすり。本格的にやるならまだまだ用意する物はあるけど、まずはこれぐらいでいいかなってな。

その渡した物を受け取ったエルは、毎日少しずつ組み上げていき、今やその完成した物は埃を被らぬように元々の箱の中へしまわれ、今は俺の部屋の押し入れに眠っている。

エル曰く、今まで俺にもらってばかりだからそのお返しだそうだ。

だから俺もそれを大事にしようと思ってとりあえず押入れへ安置しているんだが……。

やっぱり保管用のケース、買おうかな？

「ガンプラも興味があります。むしろギアへの応用や改良に役立ちそうなので、僕としてはそちらの方が気になってますし」

「え、エルちゃんが模型作りかあ……」

「仁志の影響、ガンガンに受けてやがるな」

「エル程じゃないですけど切歌さんもかなりです。この前もスマホでライダーの変身ベルトを眺めてました」

「み、見るだけデスよ？ さすがに買おうとは……」

「バイト代で買えるからどうしようってウンウン唸ってたのに……」

「調べ……」

聞こえてくる前や後ろから聞こえてくる会話に笑みを浮かべながら歩く。

いつの間にか俺の前を響と未来が歩き、切歌と調がセレナの近くを歩いている。

エルの近くにはマリアがいるし、俺の後ろにはクリスと奏に翼がいた。

いつかも思ってたけど、今の俺達は周囲にどういう風に見られているんだろうか？

家族……はちょっと無理か。なら……何かのサークル？ でもエルやセレナがいるからそれも難しいか。

「……ま、どうでもいいか」

周囲の目を気にし過ぎても仕方ない。まったく気にしないってのも問題かもしれないけど、意識し過ぎるのも問題だろうし。

俺達は歩く。時に揉め、時に呆れながら、それでも最後には笑みを浮かべて。

神様ってのがいるのなら、お願いだから彼女達に少しでも早く普通の女性としての日々を与えてやって欲しい。

こんな本来いるべき場所じゃないとそうなれないなんて、創作物ならともかく現実として考えた場合酷いと言いがたいんだ。

もう彼女達は十分戦ったし、世界を守っただろ。生まれながらの戦士じゃないんだ。戦う事は使命かもしれないけど宿命じゃないはずだ。

だから頼む。彼女達がギアなんて物と関わる必要がなくなるようにしてやって欲しい。

「兄様、肩車してもらってもいいですか？」

ふと横から聞こえた声に顔を動かせばエルの腕からヴェイグがいなくなっている。で、よく見れば隣のマリアの腕の中。

「いいぞ。じゃあ……」

しゃがんでエルの体を持ち上げる。そんな俺を見る周囲の目はどれも優しさに満ちていた。

「つと、ちゃんと掴まっててくれよ？」

「はいっ！」

思い返せば俺も小さい頃こうやって父さんにねだったもんだ。視点が一気に高くなって大人になれたような気持ちになったんだよな。

「良かったね、エルちゃん」

「はい！」

「視界はどう？」

「とつても良好です！」

響と未来へそう返すエルは、本当にどこにでもいそうな女の子だ。

これが錬金術やら科学やらを研究してた才女とは誰も思わないだろう。

それにしてもエルはあの初めて肩車した時から肩車がお気に入りらしい。

何でも一瞬キャロルがお父さんにされている光景が浮かんだからだそうだ。

それを聞いた時、一枚のメモリアカードが思い出されたの言うまでもない。

「うー、ちよつとだけ羨ましいです」

「切ちゃんがされると仁志さんが捕まるからダメ」

「そうだなあ。可能性がゼロじゃないから何とも言えない」

「じゃ、じゃあホテルの中ならどうデス？」

「そこまでしてもらいたいの？」

「マリアに同感だ。切歌ってそこまで肩車とかが好きだと思えないんだが……？」

「な、何だかエルがされてるのを見るとししよーがお父さんみたいに見えるデス。だから……」

そこで理解した。要は父性を肩車に感じてるんだろう。

チラと見ればマリアもそれを察したらしく複雑そうな顔でこつちを見ていた。

「そういう事ならいいよ。切歌にとって俺はマスターアジアだもんな」

「さすがししよーデスっ！」

「……マスターアジア？」

俺の表現で響達Gガンを知らない五人が再び？マーク。ただ、今回説明役になるエルは俺の頭上なのでそれには適さない。

それを察したのかセレナが困った顔を見せていた。頑張れセレナ。お姉ちゃんとしてエルの代わりをしてあげるんだ。

「え、えっと、調さん、どう説明したらいいかな？」

と思ったら即行で調を頼っていた。うん、ある意味で賢いな。

で、頼られた調は少しの間考え込み……

「……素手でロボットを倒せるおじいさん？」

なんて、正解だけど最初に聞かせるにはあまりにもな表現をしたのであった。

「どういうじいさんだよ!？」

同感だよクリス。普通なら誰だってそう思う。俺だってそう思う。

「あ、あのっ、布で大きな砲弾を受け止めて弾き返せる人です」

うん、セレナ？ 正解だけど説明って言うならもつと簡単なものがあるだろうか？

「セレナちゃん、それ余計混乱するから。他の情報はないかな？ どういう性格の人とかね」

未来は本当にお母さんだ。苦笑しつつセレナへもつと具体的な情

報提示の方向性を示しているし。

「ふふっ、仁志の言葉を借りるなら司令よりも強いのは確かだそうよ？」

「何と……」

「翼達のとこの旦那より、ね。そんなじいさんがいるなら会ってみた
いもんだ」

「師匠よりも強いおじいさんかあ。ちよつとジーガン？ それも興味
出て来たなあ」

「マリアなど分かかっていてより面倒な表現をしてる始末。ま、正直G
ガンは響には刺さるかもしれない。」

駐車場を目指しながらあちこちで会話が始まる。

Gガンについて聞き出す響へ切歌が応じれば、クリスや未来は調や
セレナとさつき食べた昼食を話題に話し始め、マリア達ドライデー
ヴァはさつきの店で出されたお茶について意見を交わし出していた。

で、ヴェイグはお腹いっぱいになったからか目を閉じていた。あ
れって、もしかして寝てないか？

「兄様、どうかしましたか？」

「ん？ ああ、ヴェイグが寝てるように見えてさ」

「……………僕からだと思辛いです」

「じゃ、車に着いたら確認してくれ」

「はい」

エルの明るい声を聞きながら俺は歩く。次はいよいよ今回のメイ
ンだ。

今まで以上の安全運転で行こうと改めて心に誓い、俺は笑みを消す
事なく歩いた。

終わりが近付きつつある幸せを噛み締めるように、一步一步を踏み
しめながら…………。

大勢の人々で賑わうテーマパーク内。その中に仁志達の姿があっ
た。

「ありがとうございました」

二人組の女性に礼を述べ、仁志は頭を下げた。
テーマパークのランドマークである城をバックに全員での写真を
撮ってもらったのである。

撮影された集合写真は見事なもので、また一枚旅の思い出が出来たと仁志は笑みを浮かべていた。

「じゃ、ここからはグループ行動だ。ただし、必ず一人はスマホ持ちを入れてくれ。エルは絶対に一人にならない事。トイレの場合は仕方ないけどね」

「はい」

「夕食は多分全員で食べるのが難しいと思う。混雑するからさ」

「時間をずらしたらどう？」

「正直早くする以外は効果が薄いと思うよ。みんなパレード前につて動くからね」

「つまり、それぞれのグループ毎で食事は済ませておけつて事？」

「そうして欲しいかな。何せ総勢十名以上だ。団体、とは言えないけど、普通の利用数じゃないから」

そうしてそこからは夜のパレードが始まるまで分散行動となった。

どうせなら部屋割りのグループで行動しようとなり、三つに分かれて仁志達は動き出す。

「まずどこから行こうか？」

「当然西部劇のどこー！」

「ま、だろうな」

響、未来、クリスの三人は西部開拓時代をイメージしたエリアへ……。

「よし、あんた達、どこへ行きたい？」

「えっと……」

「キャラクター達の街デス！」

「そうなる……向こうか」

奏、翼、切歌、調の四人はトゥーンの名を冠したエリアへ……。

「エルはあのお城へ行きたいんだよね？」

「はい！」

「じゃあ行きましようか」

「ヴェイグ、よっぽど大きな声を出さなきゃ喋つてもいいからな？」
「分かった」

仁志を伴いマリア、セレナ、エルフナイン、ヴェイグは中央の城へとそれぞれ向かう事になった。

さて、まずは響達から見えていこう。園内は広く、彼女達の向かおうとしているエリアまでそれなりに距離があった。

それでも普段から定期的に走っている事もあり、三人はそれを苦とも思わず初めて訪れたテーマパークにテンションを上げていた。

「あつ、見て見て。やっぱり耳付けてる」

「見てると大抵あれ付けてるよな」

「うーん、記念に買う？」

「そうしようよ！ クリスちゃん、いいよね？」

「そう、だな。記念品みたいなもんだし、仕方ねえか」

可愛い物が好きなクリスは、いかにも渋々という風を装って響と未来と共にテーマパークの顔とも言えるキャラクターを模したカチューシャを買おうと動き出す。

程なくして露店として展開しているワゴンを見つけ、そこで三人は売り子から女性ならとりポンをあしらった可愛いカチューシャを勧められた。

「どうするっ？」

「じゃ、響だけ男の子の方で」

「だな」

「ええっ!？」

「うそうそ。じゃあそつちを三つください」

「未来……」

「ほらさつさと財布出せ。ファストパスがあるって言つても時間は貴重だぞ。全部が全部ファストパスがある訳じゃねーんだ」

そうして仲良く同じカチューシャを付け、三人は更にテンションを上げて歩き出す。目的のアトラクションまでの道のりさえも楽しい時間として。

元々の世界でも過ごす事がなかった訳ではないがどうしても響は未来との割合が高く、クリスはそれを理解し二人へ距離を取つていた。

それがこの上位世界での出来事や時間で変化し、今や三人での行動は珍しい物ではなくなつていたのだ。

何せコンビニで引き継ぎなどを行う仲であり、未来さえ休みなら三人での短時間の外出など気軽に出来るためである。

「あつ、見えてきた!」

「わあ、ホントに西部劇の世界みたい……」

「へえ、割と凝つてるじゃねーか」

「ねえ、あれじゃないかな? ほら、向こうで何かが降下してたよ」

未来の指差す方へ顔を向けた響とクリスは水が流れる滝のような場所を見つけ、目的の一つである事を察して頷いた。

「じゃ、あれがスプラッシュの方だね」

「もう一つは……あれじゃねーか?」

トロツコを模したコースターがかなりの速度で通過していくのを見て、クリスは二人へ分かるように指さした。

「お……」

「うん、きつとそうだね」

「うし、じゃあどっちから先に乗る?」

「濡れると困るから先にあっち」

「そうか? むしろ濡れてもあっちに乗ったら乾くの早く出来そうじゃねーか」

思わぬ発想に響と未来は少し黙った後で……

「じゃ、そうしよう」

と、あつさり意見を変えたのである。

その後、三人はファストパスを利用して目当てのアトラクションへ短時間で乗れ、長い行列を作っている光景を見て、バケーションパークと呼ばれるものを選んだ仁志の配慮に感謝しながらアトラクションを楽しむのだった。

今度は視点を変えて仲良しコンビでのグループを見てみよう。

「凄い人気だね……」

「うん、どこも行列だよ」

「う〜……お家入ってみたいデス。はっ！ そうデス！ このファストパスを」

「切ちゃん、それ使えるものと使えないものがあるから」

「がっかりデス……」

冷静な指摘にガツクリと肩を落として項垂れる切歌を横目に、調はキャラクター達の住む街と言う設定の現在地を見回していく。

トウーンとの名の通り、全体的に可愛らしい印象が強いため客層も子供の方が多いそこは、きつとセレナやエルフナインの方が楽しめるだろうと調には映った。

「で、どうするんだい？ 並ぶ？」

「もし並ぶのなら付き合おうぞ」

「ホントデスカ!？」

ツヴァイウイングの思わぬ申し出に切歌が勢いよく顔を上げる。

その反応の速さに二人は苦笑しながらも頷いた。

今の奏と翼は気分的には先輩と言うよりは姉に近かった。定期的に顔を合わせ、しかも食事だけでなく同じ物を見たり遊んだり、そうやって切歌達と過ごしていた事もあって気分がすっかり単なる先輩後輩から変わっていたのである。

「じゃ、どこに並ぶの？」

「とーぜんー一番人気デスー」

「じゃ、並ぼうか」

「暁、並んでいる間にががいがー、だったか。その話をしてくれないか？」

「了解デス。調、間違ってることや抜けてるところがあったらよろしくデス」

「いいけど、正直私よりもそういうのは師匠やエルにお願いしたい……」

そんな調の愚痴に気付くはずもなく、切歌は翼の要望へ応えるようにガオガイガーの話 시작했다。

それを聞きながら調は覚えている範囲で補足や説明を入れ、それは見事なものだった。

奏と翼は楽しそうに話す切歌に笑みを浮かべつつも、耳に入ってくる内容に驚いたり息を呑んだりとしていった。

「それで、ゴルディオンハンマーは何でも光に変えちゃうんデスよ」

「そーいやそんな事をカラオケで言ってたね」

「何でも、か……。例えば？」

「えっと、竜巻とかデス」

「風も？」

「凄いなそりゃ」

「天候を操るソルダーロボ相手にやってみました。あとは木星にある衛星とかも」

「衛星……」

スケールの大きな話に奏と翼が感心するように呟く。

何せそもそも話が宇宙規模なのだから当然ではある。だが、切歌と調からすれば今話している事はまだ序の口であった。

何せ彼女達はその後に待つ宇宙収縮現象というとんでもない規模の展開を知っているのだ。

それに比べればまだまだ現在の段階は規模がマシと言えた。何せ表向きは太陽系だけで済む話だからである。

が、そんな風に話している間に彼女達が家の中へ入れる時がきた。

その中々洒落た家の中へ入ると、そこにはネズミをモチーフとしたテーマパークの主役がいた。

「おおっ！ やつと会えたデース！」

抱き着きに行く切歌を嬉しそうに受け止め、そこから動きで気持ちを表す姿を見て、調達は感心するように目を見開いていた。

「動きが凄い。喋ってるみたい……」

「言葉を使わずにこれ程感情を伝えてくるとは……」

「やるね。さすがはプロって事か」

横にいるアテンドの女性が通訳をする中でも動きで感情を見せる様はまさしくエンターティナー。

その仕事に違う分野のプロであるツヴァイウイングは感嘆し、調はただただ驚くのみ。

最後には四人で彼を中心に写真を撮影し、最後まで手を振って見送られてその場を後にする事に。

「バイバイデース！」

「あれは中々重労働だな」

「だね。うん、若干舐めてたかも。凄いや、こここのスタッフ」

「あの、そういえば師匠から言われてた事を思い出しました」

「言われてた事？」

「はい。このキャラクター達は実在している。中の人などいない」

「……………そういう事ね（か）」

仁志の言いたい事を理解し、ツヴァイウイングは小さく苦笑する。

まるで遠回しに彼が二人へ注意したようにも思えたのだ。

「じゃ、次はどこ行く？」

「アタシは今ので希望を聞いてもらったので少しお休みするデス」

「だつてさ。翼は何かある？」

「私よりも月読を先にしてあげて」

「じゃあ調は？」

「私は……ハニーハントって言うのが気になってます」

「よし、じゃあそれへ行くよ」

「レッツゴーデスっ！」

奏と切歌を先頭に歩き出す四人。陽気でノリのいい二人を見ながら翼と調が小さくため息を吐きつつ笑みを見せ合う。

ある意味で似た者コンビ同士であるグループは賑やかに会話へ花を咲かせながら次の目的地目指して歩くのだった。

そうなれば最後は仁志が同行中のグループだろう。

「楽しかった〜」

お城探検ツアーを終えた仁志達。彼とマリアは満足そうに笑うエルフナインとセレナを見つめて微笑んでいた。

それはどこから見ても子供達の事を見つめる父と母でしかない。ヴェイグもエルフナインの腕の中で笑みを見せている。

「それは何よりだよ」

「ふふっ、でもたしかに楽しかったわ。中々お城の中を見て回るなんて出来ないもの」

「シャトーの中は……まあそんな余裕なかったか」

「そうね。エルはどう？」

「シャトー、ですか？ その、あまりあの頃はそういう事に興味なかったもので」

そのらしい発言に仁志は笑い、マリアも苦笑する。セレナは二人と違って小首を傾げていたが、上位世界で共同生活を始めたばかりの頃を思い出したのか、最後には納得するように頷いていた。

そしてヴェイグは一人それとなく周囲を見回してとある物を目にして小さく頷くと、エルフナインの手を軽く叩いて意識を向けさせた。

「どうしました？」

「エル、あの細長い物は何だ？」

「細長い物？」

ヴェイグの視線を追ってエルフナインが顔を動かすと、小さな子供がその手にチュロスと言う食べ物を持っているのが見えた。

「……食べ物でしょうか？」

「ここに来る前には色が付いているのも見た」

「色が……」

「ねえ、それってチュロスじゃないかな？」

二人の会話を聞いていたセレナがそう言うと、ガイドブックで見たからと仁志からそれを受け取ってその場で読み始めた。

「やっぱり女の子って甘い物に目がない？」

「どうかしら？ ただ、ここに関してはセレナもエルもご執心だったからかも」

「成程ね」

マリアの言葉に頷くと、仁志はデジタルカメラを構えてガイドブックを眺めて笑みを浮かべるセレナ達を撮影した。

すると当然彼女達が気付いて顔をカメラへと向ける。それさえも

シャッターチャンスとばかりに仁志は写真に収めた。

「兄様、撮る時は教えてください」

「うん、出来れば教えて欲しいな」

「ごめんごめん。自然な感じの写真も欲しいんだよ」

「仁志、ちよつと見せてもらってもいい？」

「どうぞ」

ベンチ付近を舞台に展開される家族なやり取り。誰も思わないだろう。彼らが赤の他人の集まりなどは。

それ程までに仁志達の雰囲気は家族のようであり、その構成さえもらしさに溢れていたのだから。

ただ、呼び方を聞くと疑問符が浮かぶだろうが。

こうして次の目的地はヴェイグが気になったチユロスを買いに行く事となり、仁志はそこで一旦別のグループへ合流するために別れる事を決める。

手を繋いで歩くエルフナインとセレナを見つめ、仁志とマリアは微笑み合う。

「ねえ仁志」

「ん？」

「今だから言うけど、正直ここへ来る事はないと思ってた」

「……俺もだよ。あれからここまで変わるなんてなあ」

エルフナインが夢の国と呼ばれる場所へ興味を抱いたのはまだ切歌達が上位世界を訪れる前だ。

その時は仁志も自分がここまで状況が変わるとは思っていなかった。マリアも、まさか自分が仁志へ好意を寄せて夫にしたいと思うなど考えもしなかった頃だった。

それを思い出して二人は揃って少しだけ遠い目をする。その先には仲良く手を繋いで話す義姉妹となった二人の少女がいた。

「今だけ、年長らしくない事を言ってもいい？」

「俺の前ではいつだってそんな事抜きでいいさ」

「……このまま時が止まればいいのにつて、心の底から思うわ」

「そうか。なら俺はこう返すよ。このまま一緒に時間を生きていける

ようにしたいって」

思わぬ返しにマリアが思わず足を止めた。仁志は半歩だけ前へ出て後ろへと振り返る。

「止めてしまうなんて虚しいだろ？ 動かし続けて今の状態を維持していきたくないか？」

「……………貴方って人は」

噛み締めるようなマリアの言葉に小さく微笑み、仁志はその場から歩き出した。

その背を見つめて、マリアは小さく微笑むとすぐに小走りでその後を追う。

そして仁志の腕へ軽く抱き着くと小さく耳元へ囁くのだ。

——絶対逃がさないから。

それに対する仁志の反応は困ったようで嬉しそうな笑みと頬を掻く動きだった。

「ししよー！ 早く撮って欲しいデース！」

「師匠、お願い」

「はいはい」

切歌達に言われて仁志がデジカメを構える。ホント、ああしてると二人の兄貴って感じだね。

「ふふっ、暁も月読も楽しんでいるようで何よりだ」

「ホントだよ。まあ切歌の方は心配してなかったけどね」

何せどこでも楽しもうとする子だ。良い意味で子供になれる奴だしき。

ただ、相棒の調はちよつと分からなかった。大人びたところがあるし、こういう子供っぽいところは好みじゃないかと思ってたしな。

けど、ちゃんと楽しんでもみたいで良かった。どうやら調は初めて乗ったアトラクションのキャラがお気に入りみたいだ。

帰りにぬいぐるみを買おうかどうか迷ってたし、後で仁志に教えてやるか。

「奏と翼もおいでよ。彼も結構人気のキャラなんだぞ」

「だって?」

「じゃ、お言葉に甘えて」

「もう一枚お願い出来るデスか?」

「……いいよって言ってます」

大きく頷くアヒルのキャラに思わず苦笑する。当たり前だけれどアクションがオーバーだね、こいつは。

でも、まあ、可愛くないとは思わないし、あたしも意外とこういうのが嫌いじゃないみたいだ。

翼とアヒルの右側に陣取り、切歌達が左側。で、全員で笑顔を向けると仁志がパシヤリ。

「ありがとなー!」

「ありがとデース!」

「バイバイ」

「ありがとう」

あたし達の言葉に両手を振って去っていくアヒル。

いや、ホントに見事なもんだ。この暑いのにすっかり切り切ってるよ。

で、切歌と調は見送り終るや仁志へ駆け寄る。

「ししよー、どんな感じデス?」

「見せて」

「どうぞ」

差し出されたデジカメを受け取り、二人は写真の確認を始める。はっ、可愛いもんじゃないか。

「仁志さん、私達とはいつまで居てくれるの?」

「そうだなあ。とりあえずどこかのアトラクションへ行つて終わるか、もう何枚か写真を撮つたら響達と合流しようと思ってる」

「じゃ、どっか行くべきだね。仁志先輩の希望はあるかい?」

時間経過でさよならなんて嫌だ。どうせマリア達とは家族みたいに過ごしてたに決まってるし。

ならこっちは男女な感じで過ごしてもらうさ。そういう意味じゃ翼達は結構女してくれるしね。

「俺？　じゃあ……お化け屋敷的なものでもいい？」

「あたしはいいよ」

「私も構いません」

「あ、アタシは……」

「師匠、そこは二人で行くの？」

「いや、この五人で行くつもり」

「だって」

「さあ！　時間がもったいないですっ！　早く行くですよっ！」

現金な奴だね。ま、そこが可愛いところもあるんだけど。

見れば仁志も苦笑してる。その優しい笑顔に胸がときめく。本当にドンドン魅力的になってくよね。

「切ちゃん、単純……」

「言ってやるな。あれでこそ暁だ」

「そういう事さ。だろ？」

「ははっ、そうそう。切歌はそうでなくっちゃな」

「師匠も割と酷い」

その調の言葉に仁志は苦笑して歩き出す。そしてすぐに切歌の隣へと並んでやる辺りにあの人らしさが見える。

「さて、私達も後を追うぞ月読。このままでは置いて行かれる」

「はい」

「奏も」

「ああ」

見れば仁志と切歌が足を止めて振り返って手を振ってる。そうしてるとまるで兄妹だ。

実際切歌の慕い方は妹にも近い。ただその奥底には女がいる事をあたし達はもう知ってる。

ま、マリアや調の隠し方に比べれば可愛いもんだ。そういう意味じゃ切歌は響に似てるよ。

翼もそっち側、かな。あたしは……どうなんだろうね。自分としてはそこまで隠してないし。

……この旅行が終わった後こそがあたし達ドライディーヴァには

大勝負だしね。

マリアから持ちかけられた仁志との特別な時間。未来には、その日響達と一緒にあってマリア達の平屋で泊まってもらうつもりだ。

ただ、素直にあの子へその理由を打ち明けると確実に邪魔される。いや、きつと仁志へバラされるから無理。

——あたしはマリア達と違って一人だ。だから、せめて仁志の赤ちゃんぐらい望んだっていいじゃないか。それに、そもそも本当に妊娠出来るか分かったもんじゃないし……。

そう、今のあたし達は普通の状態じゃない。依り代なんてもんでこへ存在出来てるようなものだ。

「そういえば四人は夕食をどうするんだ？」

聞こえた声に意識を切り換える。顔を上げれば仁志がこつちへ顔を向けていた。

「まだ決めてないデス」

「うん。師匠、ガイドブック後で見せて」

「いいよ」

「どうせならあたし達と食べるとかどう？」

そうしてくれたら嬉しいんだけど……。

「私もそれがいいと思うな。仁志さん、どう？」

「うーん……正直そこは迷ってるんだよ。ただ、金銭面でマリアしか収入がないエル達と一緒にいいかなと思ってはいてさ」

瞬間、あたしの中で強烈な嫉妬が沸き上がる。ズルいと、そう思つて。

——またエルをだしに使つてマリアが仁志を連れて行くの？ 悔しい……。

ああ……本気で嫌になる。エルさえいなければあたしが仁志の嫁さんみたいになれるのに。

あの子が仁志にとって娘みたいになつてるから、親子みたいになつてるから必然的にマリアが奥さん顔してるんだ！

「そっか。エルとセレナはバイトしてないから」

「デスね。セレナはお小遣いデスし」

「そうだな。なら仁志さんはそちらと一緒にがいいか」

「ごめんな。出来れば全員一緒にいいんだけど、ここじゃ……」

「分かっているって。見ただけでも分かるよ。いつかのプールとかよりも圧倒的に人が多いし広いからね。仁志先輩はエル達の方へ行つてやんな」

「……悪い」

「いいって事さ」

本当に申し訳なさそうな仁志にあたしは物わかりがいい女を演じる。

必死に、本音を隠して。

——憎い……。 MARIAが、エルが憎い……。あの二人さえいなくなつたら、仁志はあたしを嫁さんみたいに扱ってくれるはずなのに。じゃなかったらあんなにキスしてくれない……。

そうだよ。バイトの度に一度はしてくれるんだ。それも軽くする時もある。バイトの度にくれる事もある。

——そうだ。MARIAの提案を逆に利用してやろう。三人で順番を決めるだろうから、あたしは最後になってやるんだ。そうすれば時間を朝まで使える……。

朝まで……。仁志と……。

——そうだよ。MARIAと翼には持ち時間を決めておいて、あたしはそれを破ればいい。それぐらいは許されるはずだ。今までどれだけMARIAに仁志を譲つてやった？ その分を少し返してもらおうんだ……。

……。そうだね。それぐらいは、当然の権利だ。

あたしは仕事でしかほとんども関われないのにあいつは日常で関わって、しかもあたしの見てる前で奥さん面してきたんだっ！

「ははっ、そうだよ……。どうして気付かなかつたんだろう……」

——あたしは今までMARIAに大分遠慮してやったんだ。だからその分をお返ししてもらおうのは当然だって事に……。

「奏？ どうしたの？」

そう思つてたら翼が不思議そうな顔でこっちを覗き込んできた。

「ん？ ああ、何でもないよ。独り言」

「そう？ ならいいけど……」

そう、何でもないのさ。もうマリアなんて何でもない。

いくら嫁さん面したっていいのさ。仁志の性格上、子供さえ、子供さえ出来ればあたしの勝ちだ。

あははっ、そう思うと気分がすっごく良くなってきた。うん、いいよ。この旅行中ぐらいいは、いやこの旅行まではマリア達に仁志を譲ってやるさ。

——だけど、そこから先はあたしのもんだ。仁志は、この人はあたしがもらう。絶対、誰にも譲るもんか……。

さすがにちよつと疲れたかも。響は元気だけどクリスマスと私は若干バテてるし。

園内にあるコースター系は全部乗りたいうっていう響の希望を叶えてたら、広い園内を結構な距離歩く事になって地味に疲れちゃった。

「お疲れ様」

「……おう」

「はい……」

「あ、あはは……何かごめんね」

そして今は只野さんが出迎えてくれた。

ここの宇宙をイメージしたコースターへ乗る前にクリスのスマホへ連絡が入って、只野さんが合流したいって分かったから場所を教えながらアトラクションへと乗ったからだ。

申し訳なさそうな響を見て只野さんはデジカメを取り出して構えた。

「今の三人、ある意味いい感じだから一枚いい？」

「ダメだ（です）」

声が揃った。でも当然だよ。こんな疲れた顔、写真になんて残されたくない。しかも、それを初恋の人の手元に残されるんだから。

「ダメかあ。じゃ、いいよ。こっそり撮るか」

「仁志さん、それ盗撮って言うんですよ？」

「いやいや、今こうして時々撮るからって宣言したから。予告撮影だから」

「ずっと気を張ってろってか？」

「そうは言わないよ。むしろ気を抜いた可愛い表情を撮りたいなあ」

「只野さん？ それを私達は嫌がってるんですけど？」

屁理屈を述べる只野さんへ私達はやや睨むような視線を向ける。

それを受けても只野さんは苦笑するだけで堪えてない。ううん、むしろ嬉しそうに見える。

「正直そういう顔でもいいんだよ。普段見れない表情って意味じゃ同じだし」

「「むう……」」

どこか喜ぶ只野さんを見てると強く文句を言えなくなる。

この人は本当に私達の事が好きなんだろうなって思えるからだ。

じゃないとこんなムスツとした顔なんて写真に撮りたいなんて思わないもん。

「あははっ、仲が良いなあ。ま、この話は置いていて」

置いておくんだ……。

「何枚かは三人の写真を撮りたいんだ。それは、構わない？」

「まあ、撮る時に言ってくれれば……」

「おう、今みたいにな」

「でも、ダメって言ったらダメですからね？」

「了解。じゃ、普通に一枚いいか？ カチューシャしてる姿が可愛いからさ」

ズルいなあ。こう言われたらダメって言えない。

まだちよつと疲れてるけど、チラツと見ればクリスも仕方ないって感じで息を吐いてるし。

「はい、チーズ」

三人で並んで撮ってもらった写真は、何て言うか普通に仲良しトリオって感じだった。

初めて来たテーマパークではしゃぐ三人って風で、クリスの少しはにかむような笑顔も、響の心から嬉しそうな笑顔も、私の微笑みも、

とつてもあつたかくなるような写真だつたから。

で、そこから少しの間只野さんとツーショット撮影みたいになつた。

だつてこうでもしないと恋人みたいな事が出来ないと思つたからだ。

まずは響と撮ってもらつて、二番目がクリス、次が私で、最後は園内のスタッフさんをお願いして四人で撮つた。

「只野さん、これ、みんなと撮つてくださいね。エルちゃんともです」「エルとも?」

「そうです。記念になりますし、それに、そう言えばエルちゃんが遠慮する事はないですから」

あの子は気が利く。時に利きすぎるぐらいに。

只野さんをお父さんのように思つてるし、あまり声に出してないけど、今のあの子はマリアさんをお母さんのように慕つてる。

それは、不味い。セレナちゃんが少し落ち着いてくれたけど、エルちゃんがマリアさんをお母さん、セレナちゃんをお姉ちゃんとして扱ひ出したらまた暴走しかねないし。

「エルが遠慮、かあ。ありえるかも」

「ですね。エルちゃん、子供らしくない時ありますから」

「まあ、ちよつと配慮し過ぎな時あるよな。最近は結構減つたけどよ」「うん。それでもエルちゃんは私達に遠慮するかもしれないから。だから、これは只野さんとの記念写真なんだつて言つてあげないと」

只野さんとの思い出が欲しいのはエルちゃんも一緒だ。

みんな仲良くが願ひの只野さんだけど、若干エルちゃんへは配慮がずれてる時がある。

エルちゃんは私達と違って只野さんを異性として思つていないけど、代わりにお父さんみたいに思つてる。

だからこそ、只野さんはエルちゃんを子供として扱つて可愛がつてるんだけど、正直デートをエルちゃんともしてもらうべきだつたかなつて思わないでもない。

だつて、このままじゃ私達だけ只野さんと二人きりの思い出があつ

て、エルちゃんだけないって事になっちゃう。

「あと、もし出来たらエルちゃんともデートしてあげてください」

「エルとデート?」

「はい。このままだとあの子だけ只野さんと二人きりの思い出、ないんです」

そう言うのと只野さんがしまったって顔をした。やっぱり気付いてなかったですよ。

「そっか……。どこかでデートってそういう相手とするもんだって思
いこんでた」

「あー、私もです」

「仕方ねーよ。あたしだってそういうもんだって思ったぜ」

「エルちゃんはきつと気にしないとしますけど、出来れば」

「ああ、うん。分かった。ありがとう未来。出来るだけ早くエルや
ヴェイグと二人だけで過ごす時を作らないとな」

「「ヴェイグ（さん）も?」」

私達の疑問に只野さんは笑顔で頷いて話してくれた。

エルちゃんと二人きりの思い出を作るなら、ヴェイグとも作らない
といけない。どちらも大事な存在だからって。

そういう風に言い切って笑う只野さんを見て私は改めて思った。

こういう人だから私は好きになっちゃったんだなあって。

「でも、とりあえず今は三人との思い出作りをしないとイケないな。
と、言う訳で……。どこ行く?」

言いながらガイドブックを取り出す只野さんに私達は揃って苦笑
した。

本当にこの人は大人のように子供みたいだ。

だから、どんどん好きになる。だって、この人はギアもなかった頃
の私を指すと言ってくれた人だから。

——何の力もない人なのに、只野さんは私達を支えてくれようとし
てる。みんなで仲良く出来るように心を砕こうとしてる。それなの
に、最近のみんなはどこかそれを壊そうとしてるとしか思えない
……。

不意にそんな事を思った。只野さんからそれとなく話は聞いている。響達がそれぞれに女性として迫ってる事を。

私はそれをしなかった。すればきつと只野さんは疲れ果てちゃうと思ったからだ

——でも、本当は違う。そうすれば只野さんが私を安らげる場所として選んでくれると分かってたからだ……。

ズキッと胸が痛む。実際そうだ。私は、只野さんの逃げ場所になる事である人の傍にしようとした。

——どうしてみんな只野さんの願いを忘れたように動くんだろう。この人は、ただみんな仲良くして欲しい人なのに。本当はハーレムなんて望んでた訳じゃないのに……。

……そう、なんだよね。只野さんはただ私達を元の生活に戻したいと頑張ってくれてただけだ。

その中で私達がこのままだと恋心を悪意に利用されかねないと思ったから、全員受け止めるって言う事で何とかしようとした。

それで自分が嫌われてもいって、そう思ってたはずだ。ううん、むしろその方がいいとさえ思ってたかもしれない。

そうなれば、恋心さえ無くなれば、悪意が私達へ入り込む隙はそこまで沢山ないはずだから。

——みんなへ只野さんのいないところで一度はつきり言うべきかもしれない。もう一度只野さんの願いを、理想を思い出して。みんな仲良くする事だけが只野さんの望みなんだって……。

もう一度……みんなへ……。

——マリアさんや奏さんでさえ女性として動いてるなら、私しかない。私だけが、私だけが只野さんの願いを分かってあげられる。叶えてあげられる……。

私だけが……。

「未来、どう？」

「っ?!」

聞こえた声にハツとなって意識を切り換える。顔を動かせば響がこつちを見て首を傾げてた。

「ご、ごめん。ちよつと聞いてなかった」

「珍しいな。どうかしたのかよ？」

「え、えつと考え事をしてて……」

「そっか。じゃ、もう一回言うね」

「うん、お願い」

響が言うには、クリスがカリブの海賊をイメージしたアトラクションに乗ってみたいって言ってるのでそれへ行くのと同時に、出た後どこかでご飯を食べようって事らしい。

只野さんはアトラクションまでは一緒だけど、ご飯は食べずにエルちゃん達とまた合流しに行くみたい。

「うん、それでいいよ」

「じゃあ早速移動しよう。早くしないと日が暮れ始める」

そう言つて歩き出す只野さんを追う形で私達も歩き出す。

すぐに只野さんの横を響とクリスが押さえるのを見て、私は呆れるように息を吐いた。

それ、絶対本来はダメな事だからね。そう言いたいけど、普段は出来ないからこそやっているんだろうなとも思うので何も言えない。

ただ、私だつてそういう事がしたくない訳じゃないんだから。

——私だけ、私だけが我慢させられてる。本当は只野さんに甘えたいの。もつとイチヤイチャしたいのに。みんな、ワガママ過ぎるよ。もつと只野さんの事を考えないと……。

本当にそうだ。せめて二人きりの時にして欲しい。

響もクリスも私が何も感じないって思ってるの？ 只野さんの事が好きなのは、二人だけじゃないんだよ？

——私だつて、私だつて好きなんだからっ！

そう思った瞬間、何だか胸の奥にドクンって脈打つような感覚が走った。

まるで何か心宿ったような、そんな不思議な感覚が。

「未来、どうかした？」

気付けば只野さんがこっちへ振り返つてた。

「え？」

「いや、何だか笑ってたから」

言われて気付いた。私、今笑ってるって。

じゃあ、きつとそれは……

——とつても今、気分がいいからですね……。

そう答えた私に只野さんは笑顔を返してくれた。

その笑顔、出来ればずっと私に向けて欲しい。響やクリスじやなく、私に向けて欲しい。

だけど、そう言ったらきつと只野さんは困っちゃう。ふふつ、分かっていますからね、只野さん。

私は、私だけは分かっています。只野さんはみんなを大事にしたいんだから。

——だから、それを壊そうとするみんなは、私が只野さんの代わりに注意しないと……。

「本当に凄い人の数ね……」

姉さんの言葉に私とエルは頷く事しか出来ない。

時刻は、えつと午後五時半ぐらい。さつきエルがスマホで見てたから間違いないはず。

私達は今、園内にあるレストランに来てる。あまりにも値段が高く姉さんとお兄ちゃんが一瞬固まってたぐらいだ。

「外食は初めてじゃないですけど、ここまで賑やかなのは今日のお昼以上です」

「うん、そうだね」

今日のお昼も沢山のお客さんがいるお店だった。でも、そこではみんなでお部屋に入って回るテーブルでご飯を食べたからここまでガヤガヤしてなかった。

「……俺が喋っても気付かれないか?」

「かもしれないなあ」

こそつとヴェイグさんが呟くと、お兄ちゃんがカレーをスプーンですくってヴェイグさんのお口へ入れる。

あ、ヴェイグさんが笑った。良かった、美味しいんだね。

「でも、どこもこうだとすると、切歌お姉ちゃん達は大丈夫でしょうか？」

「切歌の場合は値段が高くて困ってるかもしれないわ」

「あー、ありそうだ」

私も頭に浮かぶ。お腹いっぱい食べようとするとお金が全然足りなくて、調さん達に泣き付いてる切歌さんが。

「ねえ仁志お兄ちゃん。どうしてこんなに高いの？」

「ストレートに聞くなあ。えっと、要は需要と供給のバランスなんだけど……分かる？」

「じゅようときようきゆう？」

何だろう？ 初めて聞く言葉かも。

「つまりね、何かを欲しいって人と何かを与える人ってところかしら」
「この場合はこの中でご飯を食べたいって人達の数が多いから、店側は強気な値段設定を出来るってとこ」

「うーん……」

姉さんの説明もお兄ちゃんの説明もよく分からない。

「姉さん、ここは遊園地です。基本的にここに来てる人達は遊びたい人達なのは分かりますか？」

「うん」

「だから基本的にご飯を食べに行くために外へは行きたくないんです。だからこの中で食べようとします。あとは海の家と同じ発想です」

「海の家と……？」

「はい。だから、余程割高な値段ではない限り、皆さんそういうものかとお金を支払うんです」

「……ああ、そういう事なんだ」

簡単に言うと、みんな手早く近くでご飯を食べたいからこのレストランを使いたい気持ちを利用して値段を高くしてるんだね。

「エルは賢いな」

「ホントだ。俺よりも説明上手いし」

「でもセレナもそういう事に疑問を持つのはいい事よ。勉強の始まり

は疑問を抱く事だから」

「そうなんだ……」

言われてみればエルは色んな事へ疑問を抱いてお兄ちゃん達へよく聞いている。

そっか。だからエルは賢いんだね。

で、そのエルは何だか照れてる。可愛いなあ。

格好が例のフィリップをイメージした物だから余計かも。

エルが言うには「この服装は僕の一番お洒落な格好なので旅行はこれで行きます」って決めたものだもん。

「それにしても、この分だとパレードはかなり混雑するだろうな」

「そうね。けど予想してたんでしょ？」

姉さんがそう言うとお兄ちゃんは苦笑して頷いた。

だけど、そんな中でもヴェイグさんへカレーを食べさせるのを忘れないのがお兄ちゃんの優しさだ。

ヴェイグさんもモクモクと口を動かして笑顔だし。

「まあいざとなればエルは俺が抱っこするよ。あとは場所取りに今から動いてしまえばいい」

「場所取り？ どこ？」

「チュロスを買った場所覚えてるか？ あそこからキャラクター達の暮らす街ってエリアあっただろ。あそこ」

「あ〜」

エルと二人で声を出した。チュロスを買ってお兄ちゃんと別れた後に行った場所だ。

街のあちこちにネズミさんが隠されてるってガイドブックに書いてあったから、エルやヴェイグさんと一緒に一生懸命探したのは楽しかった。

「ん？ 何々？」

「貴方と別れた後にそこへ行ったの」

「ああ、そういう事か。じゃあ場所は分かるか」

「食べ終わったら移動でいい？」

「そうしよう。みんなへは俺から連絡しておく」

そうやって話してるお兄ちゃんと姉さんを見ると、やっぱりどこか夫婦みたい。

それと、気付けばエルがキッズプレートを食べ終わりそうだった。私も冷めない内に食べよう。つと、そうだ。

「エル、パレード楽しみだね」

「はいー」

可愛い妹へ声をかけてから私は食べる事へ集中した。

ヴェイグさんはカレーを食べ終えて満足そうに目を閉じてお腹を両手で擦ってたし、お兄ちゃんと姉さんもお話を終えてそれぞれ食事を進めてた。

こうしていると本当に家族みたい。うん、やっぱり私はお兄ちゃんと姉さんが夫婦の方がいいかな。

——でも、もしそれで二人が喧嘩とかしたら嫌だな……。

動かしてた手が止まった。いつかの想像がよみがえってくる。

お兄ちゃんと姉さんがケンカしてしまったら、私はもう二人と一緒にいられない。今みたいな風に過ごす事も出来ない。

——いつそ姉さんだけじゃなくて私も一緒にお嫁さんならどうだろう？ それなら二人と一緒に暮らせるし、喧嘩しても私が頑張って仲直りさせられるんじゃないかな？

私と姉さんで……お嫁さん？

——それだけじゃなくて切歌さんや調さんもいればもつと上手くいくはず。だって、今のお家と一緒にだもん。

今と一緒に……？

その時、私の頭の中にエルの寂しそうな顔が浮かんだ。

違う！ エルがいない！ それじゃ一緒にじゃないよっ！

「どうしたんですか姉さん。手が止まっていますよ？」

「あ、うん。えっと、ヴェイグさん、ちよつとそのまま聞いて欲しいんですけど……」

私はさっきまでの自分の中での事を思い出して、ヴェイグさんへ悪意の匂いがしないか聞いてみた。

だって私はエルが大好きだ。自慢の妹で、本当に一緒にずっと暮ら

したいぐらいだもん。

そんなエルを忘れて、今のお家と一緒になんて思うはずがない。そう伝えるとヴェイグさんだけじゃなくてお兄ちゃんと姉さんも頷いてくれた。

でも悪意の匂いはしなかったみたい。それをお兄ちゃんは良い事だよって言ってたけど、多分本当は違う。

やっぱりどこかで悪意は私達を見てるんだ。そしてお兄ちゃんを大好きな気持ちを利用して私を悪い子にしようとしてる。

ご飯を食べ終わってパレードのために移動してる途中でも、私はエルの手を握って悪意なんかには負けないって心を強く持つ事にした。

エルと一緒に私はお姉ちゃんにいられる。お姉ちゃんは、姉さんは強いんだ。だから悪意なんかには負けない。

「姉さんを悪意が狙っているとすれば、それだけ姉さんの力を警戒してるんでしょ？」

「警戒？」

エルの言葉に小首を傾げる。そんなに私って強くないんだけどな。

「はい。姉さんのギアは悪意を隔離出来る力を持っていますし、巫女ギアで浄化も可能です。現状一人で悪意を退治出来ます」

言われて思い出す。お兄ちゃんが今は私が一番悪意に対して強いんだよって言ってくれたのを。

「ま、悪意がセレナだけにちよっかい出してるとは思えない。マリアも気を付けてくれ」

「分かってるわ。でも今はその話はこのへんでいいでしょ？」

苦笑する姉さんは周囲を軽く見回した後で微笑んだ。

「今は、この時間を楽しみたいじゃない？」

「うん！」

エルと声を揃えて頷く。そうだ、今は楽しまなくっちゃ。

この後パレードのための場所取りをしてみると、響さん達もそこへ合流して一気に賑やかになった。

みんなが乗ったアトラクションとかの話の話を聞いたり、同じ物に乗ってた時には感想を言い合ったりとしてたら、気付けば周囲には大勢の

人達がいた。

「そろそろ始まるぞ」

そのお兄ちゃんの言葉を合図にみんなが正面を見つめた。これが今日最後のイベントだ。

目に焼き付けておこう。そう思っただけで私はパレードを待った。近くには切歌さんと調さんがいる。

「楽しみデスねえ」

「うん、楽しみ」

「はいー」

この世界に来て、本当の意味でのお友達になった二人だ。

ママ、帰ったら色々お話ししたい事があるんだ。色々見せたい事があるんだ。だから、待ってて。

絶対悪意を浄化してママのところへ帰るから。

——か、可能なら姉さんとお兄ちゃん、エルも一緒にいいな……なんて。

叶わないかもしれないけど、想像するぐらい、いいよね？ 私の家族、なんだもん。

パレードの終わりと共に仁志達もホテルへの帰路へ就いた。

ただ、土産を見たいとなり、混雑する店の中へ分散して入っていく事になる。

キャラクターのぬいぐるみを前に長考する事になるクリス。クッキーなどの食べ物を買うべきかと悩む響や切歌。ボールペンなどの実用性のある物にしようかと考える未来や調。これまでこういう物に縁が無かったため迷う翼と可愛い物ばかりで迷うマリア。

そしてさり気無く仁志とエルフナインの傍に立ち、彼の選ぶ物を買おうとする奏とエルフナインの欲しい物を買おうとするセレナというように。

「ヴェイグは何かあるのかな？」

「……特にないそうです」

店は混雑しているため、何かあつては不味いと判断されてヴェイグ

は現在エルフナインの中にいた。

「特にない、か。じゃお菓子の類にするか」

「仁志先輩は？」

「俺？」

「エルは欲しい物ない？」

「僕ですか？」

隣にいる存在からそう尋ねられ、仁志とエルフナインは互いに顔を見合わせる。

「兄様、どうするんですか？」

「俺はなあ……そこまで興味ないし……」

「記念品みたいなもんだろ？　じゃ、何か買った方がいいって」

「そう言われると……じゃ、ストラップにでもするか」

それを聞いた奏が一瞬だけ不敵に笑い、仁志が手に取った物と同じ物を手にしたのは言うまでもない。

一方のエルはと言えば、セレナと揃いのキーホルダーを選んでいった。可愛い二匹のリスがモチーフのものである。

「じゃあ、これにしようか」

「はい」

関係性で言えばこの二人よりも切歌と調が近いのだろうが、生憎そこまでエルフナインもセレナも詳しくはなかった。

ただ仲良そうな二匹という点が自分達のように見えたのだから選んだのである。

こうして土産物も購入し、そろそろとホテルへ戻るために送迎バスへ乗り込み、仁志達は宿泊するホテルへと戻ってきた。

ロビーで一旦解散し、部屋へ戻る者達とホテルの散策を始める者達に別れて動き出す。

仁志やマリアなどは部屋へと戻る事にし、響や切歌などは散策と言う具合である。

やがて響達も散策を終えて宿泊する部屋へと戻ったのだが、何故か彼女達は同じ部屋へと向かった。

呼び出し用のボタンを押してしばらく待つ響達。するとドアが開

いて出て来たのは翼だった。

「おかえり、というべきか？」

「「「ただいま(デス)」「」」」

響を始め、切歌、調、未来、奏、セレナが声を揃えて笑みを見せる。ちなみに翼がいる部屋は彼女が泊まる部屋ではない。そこは仁志達が泊まる部屋であった。

響達が中へ進むと、既に一番奥のベッドの上で仁志がぐったりとしていた。その横ではエルフナインも横になって目を閉じている。

まるで親子のようなその光景に誰もが微笑みを浮かべた。マリアやクリスもそんな光景に笑みを浮かべていたのだ。

「あら、おかえりなさい」

「おう、何か発見はあったか？」

「うん。えつとね……」

クリスへ報告を始める響を横目に、未来は仁志を見つめて苦笑した。

「ずつとあなんですか？」

「ええ。シャワーも浴びずにああしているわ。エルも寝てはいないけど……」

「気を抜くと寝そうだよ。なあエル？」

「はい……」

今にも寝そうな声でそう告げて仁志は体をゆっくり起こした。

エルフナインはそれで目を開けて擦りながら体を起こす。

「エルちゃん可愛い……」

「エル、いつも朝起きる時はこんな感じですよ」

エルフナインの寝起きを初めて見た未来はその愛らしさに微笑み、セレナは見慣れた光景に笑みを見せる。

「仁志、もう寝たら？　そうでなくてもシャワーを浴びた方がいいわよ」

「だね。先輩、いつ寝てもいいように最低限シャワーだけは済ませておきなつて」

「……そうする」

マリアと奏の言葉に疲れた声で返事をし、仁志はフラフラと荷物へと近寄って着替えなどを取り出すバスルームへと歩き出す。

「大丈夫かよ?」

「仁志さん、お願いだから寝ないでくださいね?」

「分かってるって。さすがにシャワーで寝落ちはしないよ」

力なく笑って仁志はバスルームへと消える。

その後ろ姿をどこか不安そうに全員が見送った。

「……いざとなったらまずヴェイグに確認を頼みましょう」

「まあ、それがいいか」

「あつ、そういえばヴェイグさんはどうしたの?」

「ヴェイグさんなら僕の中で眠っています……」

眠そうなエルフナインの言葉にマリアはしまったとばかりに額に手を当てた。

「……エルとセレナを先にシャワーへ行かせるべきだったかも」

「いや、仁志さんでいいと思うぞ。何せ仁志さんと奏は明日勤務がある」

「そうそう。仁志先輩は運転もあるから余計今日は早く休ませないと」

「そっかあ。仁志さんと奏さん、明日仕事なんですよね」

「大変だな、仁志達は」

連休となっている響とクリスはそう言いつつ、視線を今にも寝そうなエルフナインへと向けていた。

セレナがその体を優しく抱き締めるようにしているが、それが余計眠気を誘うらしくエルフナインが何度も目を擦っていたのだ。

(エルちゃん、可愛いなあ……)

(完全におねむじゃねーか。仕方ねえ。あたしらの部屋でシャワーを浴びさせてやるか)

ただ可愛いと思う響と違い、クリスはその母性を発揮してため息を吐くと座っていた椅子から立ちあがった。

「エル、セレナもあたしらの部屋でシャワー浴びろ。あたしが一緒に入ってやるから」

「クリス、いいの？」

「ああ。見るからにエルは限界だろ」

「すみません……」

「気にすんな。セレナはエルと自分の分の着替えを持ってきてくれ。あたしはエルを連れて先に行ってる」

「はい、わかりました」

眠そうなエルフナインの手を引き、クリスは部屋を後にする。それを見て響と未来は小さく笑みを見せ合う。

「クリスちゃんらしいね」

「ホント。でも、私達も部屋へ戻ろうか。みんな疲れてるだろうし」

「……そうだね。ちよつと残念だけど今日はあちこち見て回ったし、私も若干疲れたって感じるしなあ」

「ふふつ、じゃあ私と響も部屋へ戻ります。おやすみなさい」

「おやすみなさいーい」

「おやすみデス」

「おやすみなさい」

「おやすみ。寝坊するんじゃないよ？」

「また明日、ロビーで会おう」

「おやすみなさい」

「あつ、待ってください！ 私も一緒に行きますっ！」

響と未来が部屋を出ようとするのを見て、セレナが二人分の着替えを持って慌てて追いかけた。

そうして揃って部屋を出て行く三人を見送り、奏は翼達へ顔を向けた。

「じゃ、あたし達も行くかうか」

「そうだね」

「はいデス」

「マリア、おやすみなさい」

「おやすみなさい。奏、翼、悪いけど二人をお願い」

「大丈夫だよ。この二人も割とお疲れみたいだし、さ」

「あはは……そうデスね」

「正直もう眠い……」

疲れた顔で笑う切歌と調を見てマリアが苦笑する。

奏と翼もまるで妹達を見るかのような顔で二人を見つめた。

この後、就寝の挨拶を交わして四人もマリア達の部屋を後にする。残されたのはマリアと仁志のみ。

「……これが終われば、後は私達がそれぞれの仕事を辞めるだけ。私はいもう陽子さんへ相談済み。来月の中旬には辞める事が出来る」

マリアの脳裏に甦るのは辞職の事を話した時の陽子の言葉だった。

——辛くなったらいつでも戻っておいで。仁志君にも言ったけど、ここはあんた達の第二の家みたいなもんだからさ。

その陽子の言葉を聞いた時、マリアは本当の母親と接しているかのような錯覚に陥ったのだから。

「……ママとは違うけど、あの人も私にとってはママかもしれないわね」

少しだけ滲んだ視界でそう呟き、マリアは天井を見つめた。そうしなければ、きつと泣いてしまうと思ったのだ。

「あれ？ マリアだけ？」

「っ?!」

そこへシャワーから上がった仁志が姿を見せた。バスタオルで頭を拭きつつ不思議そうにマリアの座る椅子へと近付いたのだ。

慌ててマリアは顔を背けるようにし、窓の外へと視線を向けた。夜の闇の中、建物などの明かりが見え、中々悪くない光景がそこには広がっている。

「え、ええ。奏達はそれぞれの部屋へ戻って、エルとセレナはクリスが自分達の部屋のシャワーへ連れて行ったわ」

「あー、そっか。しまったな。先に二人をシャワーへ入れるべきだった」

「いいのよ。貴方は明日も運転があるでしょ？ それに、仕事もあるんだから」

「でもなあ……」

「いいの。それに、貴方がクリス達の部屋でシャワーなんて浴びれな

いでしょ?」

「ごもつとも」

完全に夫婦の会話である。これで仁志の手にビールでもあれば完璧だったろう。

夜景を眺めて話す様だけはそうではないのだが、二人の雰囲気だけはまさしくそれであったのだから。

そこからしばらく二人に会話はなかった。ただ黙って夜景を眺め続けたのである。

「ねえ」

それを破ったのはマリアだった。仁志の顔が横へ向く。そこには窓の外を物鬱気に見つめる美人がいた。

「もう、こんな時間はないのかしら?」

問いかけられたのは仁志さえも答えに窮する内容。ないとは言いたくないがあるとは言えないものだった。

「向こうでも、ホテルに泊まった事は勿論ある。美味しい物を食べた事だつてない訳じゃない。でも、でもね? 初めてだったの」

「何が?」

「こんなにも周囲を気にせず遊べる事が。大勢の人達がいるのに、まったく見向きもされない事が。普通当たり前の事が、私にはとても幸せだった。サインを求められる事も、写真を求められる事もない。何も気にせず、私はただの私でいられる。ただのマリアでいられるの。こんなに幸せな事はないわ」

最後には仁志へ顔を向けて心からの笑顔をマリアは見せた。

その笑みに仁志は一瞬息を呑むもすぐ安堵するように笑みを返す。

(いつかの翼と一緒だ。ただのマリアが、俺には只野マリアに聞こえてしまう、あれだ)

(さっきの仁志の反応は何かしら? ただのマリア、に反応してたみたいだったけど……? ん? ただの……マリア……)

以前と同じ失態をせずに済んだと笑みを浮かべる仁志と、そんな彼に小首を傾げるマリア。

だが、そこでマリアは気付いてしまう。何に仁志が反応したのか

を。

「あっ!？」

「へ? どうかした?」

「な、何でもないので。ええ、何でもないので」

赤面するマリアとそれに疑問符を浮かべる仁志。

そう、マリアは理解したのだ。自分の言った言葉が聞き様によっては「ただのマリア」ではなく「只野マリア」となる事を。

(そ、そういう事なのよね? 仁志は私が自分の姓を名乗ったように聞こえたから一瞬驚いたんだわ……)

そこで止まらないのが今のマリアである。何せ彼女は母ではなく妻の方を優先する事にしたのだ。

「えつと、仁志? ちょっと聞きたいのだけど、いい?」

「いいよ。何?」

「その、私が只野マリアって言うの、嫌?」

「え? いや、別に嫌じゃないけど……」

「なら、嬉しい?」

「えっ?」

「私、只野マリアよ……って、そう名乗るとしたら?」

「ま、マリア……君は……」

明らかに理解していると感じて仁志が若干息を呑む。翼は可愛らしく思えた事も、女の色香を漂わせるマリアだと別の雰囲気になるのだと思つて。

「只野マリア、か。どうせなら、マリア・カデンツァヴナ・タダノ・イヴ?」

「そ、それは若干どうかと思うぞ……?」

「そう? これはこれでいいと思うけど」

クスクスと笑うマリアに仁志は自分がからかわれていると気付くも嫌な気分にはならなかった。

何故ならそうやって笑うマリアが可愛らしい少女に見えたからである。

「……まあいいよ。言うだけはタダだしな」

「只野だけに？」

「止めてくれよ。そういうつもりじゃないっての」

「ふふっ、分かっているわ。ほんの冗談よ？ うふふ」

和やかでいい雰囲気の二人。そこで仁志は荷物からデジタルカメラを取り出してきた。

「ちようどいいや。ここでも撮ろう」

「どこで？」

「そっ。あー、心配はいらないぞ。明日みんなも撮るから」

「はいはい」

夜景を背景に微笑むマリアを仁志は写真に収める。

ちようどそこへ呼び出し音が鳴った。

セレナ達だろうと思いい仁志がドアを開けると、そこには寝間着姿のセレナとエルフナインの姿があった。

「ただいま」

「……ただいま戻りましたあ」

「おかえり。さっ、入った入った」

「うん。ほら、エル」

「は〜い……」

寝惚けた声にエルフナインに仁志は小さく笑みを浮かべてドアを静かに閉める。

仁志が部屋へ戻ると既にセレナとエルフナインは同じベッドへ入って目を閉じていた。

「歯磨きはっ」

「向こうでしてきたんだそうよ。きっとクリスが世話を焼いたのね」

「違うない」

眠そうに目を擦るエルフナインの後ろに立って歯ブラシで優しく葉を磨いてやるクリスの姿を想像し、仁志とマリアは小さく微笑み合う。

「じゃ、俺も寝るか」

「そうしなさい。私はシャワーを浴びてくるわ」

「ああ、そっか。じゃあ俺が寝た方が安心だ」

軽い口調でそう言いながら仁志はベッドへと向かう。その背中へ
マリアは……

——別に覗いてもいいわ、よ？
——へ……？

聞こえた言葉に振り返った仁志が見たのは、少しだけ恥ずかしそう
に髪を指で弄りながら目を泳がせるマリアの姿だった。

「貴方、ならね」

「えつと……その、光荣だけど、遠慮しておく」

「……………そう。うん、貴方らしいわ。じゃあ、おやすみ」

「おやすみ……………」

着替えを手にし、マリアは颯爽とその場から去る。それを呆然と見
送り、仁志は寝ようとしてはたと気付く。

「歯磨きしてないじゃないか……………」

さすがにそれはどうかと思い、彼は少しだけその場で待ってから静
かに洗面所へと、ある意味バスルーム付近へと向かう。

(平常心平常心……………)

聞こえてくる水音へ意識を向ける事なく備え付けのアメニティか
ら歯ブラシを取り出して、仁志はコップへ水を酌むと同時に歯ブラシ
を軽く洗う。

最後に歯磨き粉を少しだけ乗せて歯磨きを始めた仁志だったが、ど
うしても背後から聞こえる水音が気になるのは仕方ないと言えた。

それでも決して振り向くものかとばかりに歯磨きを続け、うがい
して後はそこを去るだけとなった時だった。

「誰かそこにいるの？」

「っ!？」

思わず振り向いた仁志が見たのはすりガラス越しのマリアの裸体
だった。

当然ではあるが肌色である事以外はよく分からない。それでも仁
志には中々刺激の強いものだ。

「っお、俺だよ」

「仁志?…どうしたのよ?…」

「えつと、歯磨きを忘れてたって気付いて……」

「ああ、そういう事。まったく、貴方らしいわね」

ドキドキしている仁志と違い、マリアは平然としていた。

そこにはマリアから仁志への信頼がある。彼なら決して覗く事はないというのもあるが、もう一つはそうする場合しつかりと責任を取る覚悟があると思っっているためだ。

(バスルームのドア越しの会話って、本当に夫婦みたいね。何て言うか、悪くない。ええ、悪くないわ)

むしろ覗いてくれた方が嬉しいかもしれない。そう言ってもいい程にマリアは仁志へ惚れ込んでいた。

「驚かせてすまない。その、もう戻るから」

「あつ……」

幸せな時間は唐突に終わりを迎える。口をタオルで拭って仁志は逃げるように洗面所から立ち去ったのだ。

残された形になったマリアは途端に心を襲う寒風に身を震わせた。

「……早く私も歯を磨いて寝ましょう」

かつてクリスが悪意に魅入られ闇へ堕ちた時に近い状況ではあるが、マリアはあの時のクリス程の幸福感に浸っていないなかった。

何より、彼女はクリス程の寂しがり屋ではない。多少とは言え母親をしている事とその心や在り方を強くしたのだから。

仁志に遅れる事十数分後、マリアもベッドルームへと姿を見せる。

一番手前のベッドにセレナとエルフナインが眠り、一番奥のベッドで仁志が眠っているのを見て、彼女は小さく微笑んだ。

「本当に……こうなれたら……」

噛み締めるような呟きを発してからマリアは空いているベッドへと身を沈ませる。

その呟きを聞いて不気味に笑う存在に気付く事が出来ずに……。

——見つけた。あの女の心の隙間。女だけじゃダメなのね。母であり妻の顔を持つ、と……。じゃあ、お望み通りにすればいいのよ？

私が力を貸してあげる……。

眠るマリアへ黒い影のような物が入り込む。しばらくうなされる

様にマリアが表情を歪め、その額に汗さえも浮かばせる。

それから数分後、マリアがゆっくりと目を開けた。

——翼が、あの時ただの翼と連呼していたのはそういう意味だったんだわ。許せない……。仁志の妻に相応しいのは私よ？ そう、だって私がずっと仁志を陰日向に支えてきたんですもの。こうなったら仁志の子を宿すしかないわ。そうすれば、私は名実ともに仁志の妻になれる。彼と家庭を、家族を築ける……。

妖艶な笑みを浮かべてマリアが眠る仁志へと近付いていく。

悪意に操られるまま、マリアの白くて綺麗な指が仁志へと迫る。

静かな寝息だけが聞こえるベッドルームで、悪意の魔の手が今、仁志に襲いかかろうとしていた……。

Bye—Bye Lullaby

なんだ……？　なんかひとのけはいがするような……？

「仁志……」

こえが、きこえる？　これ、だれのこえだ？

「ごめんなさい。こんな事、はしたないと分かっているの。でも……」
「マリア……？」

聞こえてくるのはマリアの声だ。と、そこで目を開ける。

「私は貴方が、仁志が欲しいの」

目の前にはマリアの姿。ただ、瞳が潤んでいて、吐息が熱を帯びてる、気がする。

「ま、マリア？　な、何をしてんだよ？」

見れば寝間着だろう物が若干はだけそうになってるし、一番上のボタンが外されていて、その、魅力的な谷間が露わになってる。

「分からない？」

「いや、えつと……」

分かってはいる。だけど、ここには寝てるとはいえエルやセレナもいるんだ。

「……声を出しそうになったらキスで塞いで」

「む、無茶言うなよ。と、というかな？　経験のない童貞野郎にそんな慣れた対処出来ると思ってるのか？」

そ、そもそもここは普通のホテルだ。つまり避妊具などない訳で……。

「じゃあ私がキスをねだるわ」

「い、いやいや、そういう問題でもなくてな？」

妖艶に微笑むマリアにドキツとするも、何とか冷静に寝惚けた頭で言葉を返す。

まさか逆夜這いなんて想像もしなかった。エルやセレナがいればそういう事はないと思ってたし、マリアもきつと初体験は二人きりを望むだろうと思ってたから。

けれど、どうやら違ったらしい。マリアはこの機会を好機と捉えて

いたんだ。

「っ?!」

その時、俺の股間を何かが触れた。

「少し硬くなったわね。興奮、してくれてるの?」

「あ、あのな? 俺は健全な男性だ。マリアみたいな美女がそんな格好で迫ってきて、しかも触られて反応しないはずないだろ」

今も優しく触るマリアにドキマギしながら俺はその手を何とかしようと思いを起こして――

「ダメよ」

マリアの体で押し戻されるようにベッドへと沈む。

「ま、マリア……」

「ダメ?」

「だ、ダメだ。その、せめてこういう事は」

「子供達の目を盗んで求め合う夫婦みたいじゃない?」

「そ、それがダメだったの」

いつかの奏もそうだけど、やっぱり人っていけない事をしてると思う方が燃えるのだろうか?

生憎俺は理解は出来ても協力は出来ない性質らしい。現に、今も頭の中で考えてるのはエルやセレナが起きないかどうかだ。

それも、興奮してとかじゃない。むしろ逆だ。あの二人に嫌われやしないか、冷たい目で見られやしないかと恐怖している。

「マリア、その、気持ちは嬉しいし俺も出来る事ならしたくはある。でも、さすがにこんな状況じゃ」

「バスルームならいい?」

いつかの飲み会でのやり取りを思い出して俺は頭を抱えなくなつた。

あの時の君はそれを否定しただろ? なのにここで持ち出すのかと、そう思つて。

「とりあえず一旦どいてくれないか? その、俺としては女性に押し倒される形でそういうのはしたくない」

「じゃあ押し倒してくれるの?」

あー、もう。らちが明かない。というか、酔ってるのかマリアは。俺が寝てる間に寝酒でもって缶ビールか缶チューハイ辺りを飲んだのかもしれない。

ただ、そうだとしたら息にアルコール臭が混じるはずなんだよなあ。

「あー、はいはい。押し倒してあげるよ」

今は酔っ払いを相手してると思おう。

そう考えてややおざなりに返事をする……

「ふっつ、分かったわ。ならどいてあげる」

上機嫌で俺の上からマリアがどいた。そこで俺は確信する。これは酔ってるかふざけてるんだらうと。

もし後者なら……軽いお説教が必要か。そんな風に考えながら俺は体を起こしてチラと周囲を見回した。

サイドテーブルには酒の類はない。こうなるとマリアがふざける可能性が高いか。

だけど、何故急に？俺が疲れてるし明日勤務だという事を知って、早く休んでと言ってくれたのはマリアだぞ？

その瞬間、俺は嫌な予感がした。思い出したのだ。

あの日、マリアが二度も悪意にそそのかされてしまった日の言葉を。

まさか、マリアの事をまた乗っ取ってるんじゃないか？あるいは、操ってるのかもしれない。

こうなるとまずは確認が必要だ。かなり心苦しいけど、エルを起こしてヴェイグに起きてもらおうしかないな。

「マリア、その、やっぱりここじやエル達が起きるかもしれないから……」

「だから？ まさかやつぱりダメなんて」

「バスルームへ、行こう。そこで初めてなんて不本意かもしれないけど、今はそれぐらいしか無理だ」

さあ、これでどうする？

「……「緒い？」」

「出来れば俺は後から行きたい。その、トイレを済ませておきたいし」
「もうっ……。でも、許してあげるわ。早くきてね？」

嬉しそうにそう言つてマリアはバスルームへと向かう。

その背を見送り、俺は間違いなく悪意が干渉していると踏んだ。

クリスの一件で薄々思つてたけど、どうやら本当に俺の言つた事を意識して乗っ取るのは止めたらしい。

今の反応もかつての時よりマリアらしいものだった。多分マリア自身が悪意の誘導する方向で動いているんだろう。

「とりあえず今は……」

まずエルを、正確にはその中で眠っているヴェイグを起こさないと。

「エル、エルっ、すまないけど起きてくれ。ヴェイグに確かめて欲しい事があるんだ」

軽く揺すつて声をかける。本気で心が痛いけど、今は緊急事態だと思つて諦めてもらうしかない。

「ん……。う。にい……。さま？」

「エル、ごめん。ヴェイグを起こしてもらえないか？　ちよつと不味い事になつて」

「まずいこと……。？」

寝惚け眼の愛らしいエルへ俺は簡単に説明した。マリアが悪意に操られてる可能性が高いと。

それだけでエルは事態を理解してヴェイグへ呼びかけを始めてくれた。後は念のため翼へ連絡……。いや、それはエルに頼もう。

「エル、翼へここへ来てくれるように連絡を入れておいてくれ。俺はそろそろマリアの足止めに行かないと」

「わ、分かりました。気を付けてください、兄様」

あまり時間をかけ過ぎるとマリアに、いや悪意に気付かれる。

そう思つて俺はバスルームへと向かった。何というか、寝る前に似たような状況になつたけど、あの時とは違う意味でドキドキしてる。

……。出来れば寝る前の方が好ましかつたんだがな。

俺の考え過ぎであつてくれと思いつつ、その場から移動する。

一度深呼吸をして、まずは脱衣所兼洗面所へのドアを開けた。そこにマリアはいなかった。ただ、彼女がその先にいるという証拠だけがある。

「……どうする、べきかな」

脱衣籠には彼女が着ていた寝間着が畳んでおいてある。その、何となくマリアらしいと思ってしまった。

とりあえず俺も脱衣所へと入る。シャワーの音はしないので本当に裸で俺の事を待ってるだけのようだ。

「仁志？ まだ？」

「つちよ、ちよつと心の準備をさせてくれ。思い描いてたどのシチュエーションにも該当しないんだよ」

突然聞こえたマリアの声に焦りながら本音混じりの言葉を返す。

いや、だつてな。どうやったら、みんなで遊びに来た夜泊まったホテルで、エルやセレナもいる中、こっそりバスルームで初体験、なんて想像をするんだよ。

「ふふつ、貴方らしいわね。でも、出来るだけ早くお願い。あまり女に恥をかかせないで欲しいの」

「わ、分かってる。その、風邪を引いて欲しくないし、万一のための消音も兼ねて熱めのお湯を浴びててくれないか？」

「はいはい」

やり取りの声だけはマリアそのものだ。だけど、やっぱりどこかがらしくない。

その、これからしようとしている事への不安感も緊張感も感じられないんだ。

マリアだって、いくら惚れた相手とはいえその身を初めて委ねるなんてなったら、きつと多少は動揺したり緊張したりするはず。

それが、今の彼女からは欠片も感じられない。それは、いくら何でもおかしいんじゃないか？

聞こえてくる水音に俺は深呼吸をもう一度する。

あの夜、俺はマリアを乗っ取って迫ってきた悪意と対峙した。思えば、あれが俺にとっては初めての戦いだったのかもしれないな。

なら、もう一度戦おう。あの時よりも強い想いで大切な女性を助けるために。

「なあマリア」

「ん？ 何？」

「このままだと、君は妊娠するかもしれないって分かってるんだよね？」

「……覚悟の上よ。いえ、むしろしたいぐらい。初めて愛した男の子供を産み、私は失っていた本当の家族を取り戻すのだから」

その噛み締めるような言葉で俺は悟った。いかにして悪意が彼女を操っているかを。

よりにもよってマリアの家族愛を利用して。この場合は、セレナと言う血を分けた妹を失った事による喪失感か。

「そんな事になったら大変な事になるのも？」

「……ええ。大騒ぎでしょうね。自慢じゃないけど、私に男の影なんて欠片もなかったから」

苦笑するマリアだけど、これも悪意によって思考を誘導されてると思うと複雑な気分だ。

何故ならマリア自身に俺の子を欲しいという欲求があり、そのためなら元の世界で混乱を招いてもいいと思う気持ちが多量なりともあるという事だから。

……嬉しくない訳じゃない。許されるのなら飛び上がりたいぐらいの喜びだ。

だけど、今の俺にはそう出来ない理由がある。マリアだけを見つめて、愛して、寄り添っていけない理由がある。

「そっか。ありがとう。そこまで思ってもらえて素直に嬉しいよ。だけどさ……」

「何？」

「それは、出来れば悪意なんかには唆されてない君の口から聞きたかったよ、マリア」

一瞬だけ音が消えたような錯覚に陥った。

でも当然だけどシャワーからお湯は出続けているし、その音が常に

俺の耳には届いている。

それでも、音が消えたような気がした。

「仁志、何を言ってるのよ？ 私操られてるって言うの？」

「悲しいけど、そうじゃないかと思ってる。マリア、思い出してくれ。俺は明日勤務があるんだ。しかも車を運転してからな。だから君も早く休んだ方がいいって言うてくれたじゃないか」

そう告げた瞬間、マリアが息を呑んだのか黙った。

俺はそれを無視するように語りかける。こっちに來てから事ある毎に俺の体を心配し、気を配ってくれたマリアが、ついさっきまで俺の事を気にかけてくれていたマリアが、いきなりその事を忘れて動くなんておかしいと。

「マリア、クリスもそうだったけど、君も俺への気持ちをも、家族を欲する気持ちを利用してるんじゃないか？ 今の時間が、日々が愛おしいからと、それを手に入れろと唆されてるんじゃないか？ 俺には、そんな風にしか思えない」

「仁志……」

「俺がいい歳してキス以上の踏み込みをしていない事で君達に不安や不満を与えているとは思う。だけど、分かって欲しい。それをしていけど、それは君達を悪意なんかにいよいよにさせてしまう切っ掛けになるんだ。だったら俺は、例え最低と罵られても全員と言いつけるし、例え最悪と言われても性的な関係を持つつもりはない」

この一件が終わるまでは。その言葉は敢えて言わなかった。

今は言わない方がいい気がしたからだ。何故かは分からない。だけど、今のマリアには言わない方がいい気がした。

「兄様っ！」

そこへエルが姿を見せた。顔を向ければその後ろには翼がいる。

「エル、ヴェイグは？」

「そ、そのっ、微かにですが嫌な匂いがすると！」

「仁志さん、月読からこれを預かってきました」

「助かる」

翼が差し出してきたのは依り代と呼ばれている俺の元々のスマホ。

すぐにゲームを起動させてステータスを開いてマリアのアイコンを確認する。

「……異常はない、か」

「え？ あ、あの、ヴェイグさんが匂いが少しずつ強くなってるって言ってます」

「匂いが強く？」

エルの言葉に翼が疑問符を浮かべた瞬間だった。

「翼がいるの……？」

「え？ あ、ああ。夜分遅くにお邪魔している」

マリアの声がして、それに翼が答えたんだ。

その次の瞬間、俺でも分かるぐらい場の空気が重くなった。

これは……あの響とクリスの時と同じっ!?

「翼っ、ギアを！」

「え？」

「早くっ！ 出来るだけ攻撃させないでくれ！」

「っ！ 分かりました！」

「エルっ！ ヴェイグに言っつてミレニウムパズルを展開してもらっつてくれ！」

「わ、分かりました！」

バスルームの内と外で響く聖詠。だが、俺はもう理解していた。

だから翼に呼びかけながらエルへ、正確にはその中のヴェイグへ声をかける。

このままだとホテルの設備を破壊するかもしれない。そうなら、弁償出来るかどうかわからないんだ。

翼がギアを纏うのとほぼ同時に周囲の空間が変わり、やや見慣れた感さえあるものとなる。

「翼あああああっ！」

「くっ！ マリアっ！ 正気に戻れっ！」

漆黒のギアを纏ったマリアが翼へと槍を手にして迫る。

ん？ 槍だっつてっ!?

「あれはアガートラームじゃない！ ガングニールだっ！」

「は、はい！ どういう事でしょう!？」

目の前で展開される戦いを見つめながら俺とエルは目を見開く。
マリアが纏っているのは本来よりも更に黒くなったガングニールだった。

言うなれば、ブラックガングニールVerイグナイトか。

「このっ、この泥棒猫があああっ!」

「何の事だっ! 私は何も盗っていないっ!」

「嘘おっしやい! 仁志を、あの人を私達から密かに盗ろうとしてたでしょ! 只野翼でいたいなんて、そう歌ってっ!」

「っ?!」

間違いなくその瞬間、俺と翼が息を呑んだ。

多分翼はどうしてその事にといい、俺は自分の失態がマリアが現状に至る切っ掛けだったと痛感して。

「エルも・セレナもっ! ヴエイグもっ! 切歌や調もそうよっ!
みんな仁志を父や兄として慕ってるの! そんな彼を奪おうなんて……許せないっ!」

「姉様……」

マリアの言葉にエルが辛そうに胸を押さえて俯いた。

そうだよな。あのマリアを見てるのは辛いよな。

俺も辛いけど、あのマリアを止めてもらうためにも翼へ手を貸さないで。

そう思っつてステータス画面から緒川さんのアイコンをタップし、ツインドライブを起動、そのままマルガムギアへとチェンジさせた。
「っ?! これなら……っ!」

黄金の輝きをその身に宿し、翼は劣勢になりつつあった状況を好転させる。

だが、それを受けてマリアがこちらへ目を向けてきた。

「仁志っ! どうして!?! どうして翼に味方するの!?! 私は、私は貴方の事をこんなにも想っているのっ!」

「マリア……」

「どうして……どうしてよお!」

涙ながらの悲痛な声に俺は奥歯を噛み締める。

悪意に操られているとはいえ、あれは紛れもないマリアの本音だ。彼女は、俺と疑似家族を形成していた。最初は仕方なく、途中からは互いに楽しむようにして。

エルやセレナを子供のように思い、切歌と調を妹のように扱いながら、互いに稼いで、あの平屋で様々なものを共有していた。

その生活が、優しいマリアにはどれ程の安らぎだったのだろう。

そう、彼女は優しいのだ。ただの優しいマリアこそが、彼女の本質なんだから。

「私は貴方になら何をされてもいいっ！ 例え傷付けられても構わな
いっ！ 一緒に、一緒にいてくれさえすれば、エル達を大事にしてく
れば、それ以上何も、何もいらなのっ！」

「マリア、君はそこまで……」

翼の攻撃を防ぎながら叫ばれる言葉に俺は胸がいつぱいになった。

これが、俺にさえも言えなかった、言わなかった、マリアの本音。そ
の本心か。

「マリア、それは私とて同じだ。いや、きつとみなそうだ。だからこ
そ、仁志さんは全員を」

「煩いっ！ その中で密かに抜け出そうとしていた癖によく言うわね
！」

「っ、べ、別に私にそんなつもりは……」

「どうかしら？ じゃあ、あの歌は、あの言葉はどういう意味よ？ た
だのつばさ。これが、何の変哲もないという意味ならいいわ。だけ
ど、只野という姓を名乗るという意味なら……分かってるでしょ
ねえ？」

マリアの言葉に翼が完全に押し黙った。それが、何よりの答えだっ
た。

マリアの表情が一気に豹変する。憤怒と呼ぶのなら、ああいう顔を
言うのだと言われるぐらいの、表情へ。

「ほら見なさいっ！ 貴方は仁志だけに伝わると踏んでっ！ 何度
もっ！ ただの翼と繰り返し返したのよっ！ さぞかし滑稽に見えたで

しようね、私達が。何も気付かずにいる私達がっ！」

「ち、違う……。そんなつもりは本当に……」

「そんなつもりは？　じゃあやっぱり他のつもりはあったんじゃないっ！　仁志へのアピールでしょ！」

「それは……」

「素知らぬ振りをして、ズルい女ね翼！　だから焦らないんだわ！

自分だけがこっそり女として仁志へ強烈にアピールしているんだものっ！」

「っ……」

これは不味い。いつの間にか舌戦となっていて、生真面目な翼が自分の痛いところを突かれてその太刀筋に迷いを生じさせている。

心なしかアマルガムの輝きも鈍くなってきた気がする程だ。このままじゃ、悪意に操られたマリアの容赦ない言葉と攻撃に翼がやられてしまう。

「ヴェイグ、以前みたいにブロックでマリアの動きを封じれないか？」
「……ダメです。今回はこの空間の維持で精一杯だそうです。今の姉様から出る匂いで集中力が乱されるらしくて」

「そうか……」

しかもあの時は空間展開と維持をセレナが担当していた。それがない今、ヴェイグだけじゃ空間の維持で手一杯か。

「……一か八かだ」

チラリとスマホのバッテリー残量を見る。八割はないけど六割はある、な。これなら咄嗟の防御壁ぐらい展開してくれるだろう。

「エル、ここを動くなよ？」

「え？　兄様？」

スマホを手に俺はその場から走り出すとマリアと翼の方へと向かった。

マリアの苛烈な攻めが翼を襲い、それを何とか捌こうとする翼だがやはり動きや表情が精彩を欠いている。

それを好機と見たんだろう。マリアがここぞとばかりに攻勢を強めていくのを見て、俺は翼を守る形で二人の間に割って入ろうと叫ん

だ。

「マリアっ！ 待ってくれっ！」

形はどうであれ、翼を傷付けたなんてなったらマリアが後で深く傷付く。それだけは絶対に避けたい。

その想いだけで俺はスマホを片手に戦闘中の装者達の間へと体を滑り込ませようとしていた……。

目の前に現れた仁志に私は咄嗟に手を止める。アームドギアを突き出す事なく何とか動きを止めて私は息を吐いた。

仁志は荒い呼吸のまま両手を広げて翼を守る様に立っている。それが、やけに私の癩に障った。

「仁志、どいて」

「いいやどかない。はあ……っマリア、君にこれ以上仲間を攻撃させたくないんだ」

仲間？ 何を言ってるのよ仁志。そこにいる女は一人だけ抜け駆けしていたのよ？

「私は周囲を出し抜いて幸せになろうとする女を仲間なんて思わないわ」

「っ……」

仁志の後ろで翼が息を呑んだのが聞こえた。

当然でしょ？ 私の知っている風鳴翼はそんな姑息な手段を取るような人物じゃないもの。

「マリア、止めてくれ。翼への言葉が自分にも返ってくるって何で気付かないんだ？」

「私に？」

何を言ってるのかしら？ 私は別に出し抜こうなんて思っていない。ただ、私は今までであった形をより一層確かなものにしたかった。

「そうだ。さつき君はこう言った。周囲を出し抜いて幸せになろうとする。それは、さつきまでのマリアもだろ？」

仁志が告げた言葉に私は悲しくなった。どうして分かってくれないの？ 翼は私達の幸せを壊そうとしたのよ？

私は、エルやセレナ、切歌に調、そしてヴェイグの幸せを守ろうとしたんだから。

まったく同じじゃないわ。人の幸せを壊そうとするのと人の幸せを守ろうとするの、どちらが正しいか仁志にも分かるはずでしょ？

——きつと仁志は翼に何か吹き込まれたのよ。仁志は優しいし疑う事を極力しない。そこを翼に利用されたんだわ……。

っ！ その瞬間途轍もない怒りが沸いてきた。

手にしたアームドギアを握り締め、私は仁志ではなくその背に卑怯にも隠れている防人もどきを睨み付ける。

「仁志、貴方は翼に騙されているの。その女は自分を正当化しているだけ」

「なっ！ マリア、それは違う！ 翼は俺に何か言った訳じゃないっ！」

「いいの。貴方が優しい事は分かってる。でもね、さすがに今回は見逃せないわ。翼は、エルやセレナ達の幸せを、せつかく出来た家族を、壊そうとしたんだもの」

ああ、言っているだけで怒りと憎しみが湧いてくる。私からもう家族を奪わせはしない。

セレナを、マムを失った痛み、苦しみ、悲しみ。それをもう二度と味わいたくないっ！

「だから仁志どいて。人の幸せを、暮らしを壊そうとするとうなるかを翼におしえ」

私の言葉はそこで止まった。何故なら仁志が私を抱き締めてきたからだ。

「もう、止めてくれ。頼むよマリア。君がああの平屋での暮らしへ思っていた事はちゃんと分かったから。伝わったから。だからお願いだ。これ以上悪意の囁きに身を委ねないでくれ。いつもの強く優しく美しい君に戻ってくれ」

仁志の言葉が私の体から力を奪っていく。怒りや憎しみが薄れていく。

——でも、ここで翼を野放しにしたら、また隠れて仁志ヘアピール

するに決まっている。それは阻止しないといけない……。

そう思つてアームドギアへ力を入れようとするけど、それも出来なかった。

私の視界の先にいた翼がギアを解除して申し訳なきような表情で立っていたのだ。

「マリア、すまない。そちらの言う通りだ。私は、仁志さんが言った言葉を使って一種の駆け引きをしていた。これではそちらの言う通りエルやセレナ達の幸せを壊そうとしていると言われても否定出来ない。本当に、すまなかつた」

「翼……」

「なあマリア？ 君はそんなに俺が信じられないか？ あの飲み会の時だつて手を出す事も出来なかつたある意味へタレだぞ？ 今更隠れて迫られたところで猿になれると思うか？」

私の耳をくすぐるような優しい声に気持ちがちんちん落ち着いていく。

それと同時にギアがものすごく重くなつていくのが分かる。

「……それ、自慢にならないわよ？」

だけど、不思議と心は軽くなつていく。気付けばそんな軽口が出るくらいに。

それを聞いた仁志が一瞬息を呑むのが分かつた。でもすぐに抱き締める力が強くなる。

「いや、自慢になるさ。少なくとも、今のような状況ならね」

「そう、かもしれない」

噛み締めるように呟く。手を出せないじゃなくて出さない。なの
にこの人はそれを敢えて自分が情けないと言ひ切れる。

本当に、どこまでも相手の事を気遣うのね。そんな貴方だからこそ、私達は惹かれてしまつたつて気付いているんでしょ？

「兄様っ！ 匂いは薄れていないとヴェイグさんがっ！」

「マリア、アガートラムの聖詠を。きつと悪意は依り代のないガングニールだから今もギアに擬態出来ているんだ」

「分かつたわ。白銀の輝きで払いのけてみせる」

私の言葉に小さく頷き、仁志は一瞬だけ口付けをしてくれた。

「見せてくれよ。君の本当の輝きを」

「……ええっ!」

「翼、君ももう一度ギアを。そして悪意や俺にも見せてくれないか？」

あの月遺跡で見せたよりも見事なユニゾンを」

「はいっ!」

私と翼の聖詠が響く。だけど私のギアが変わる事はなかった。

いえ、正確にはギア同士がぶつかり合っている。先に展開していた
ガングニールと後から展開しようとしているアガートラームが干渉
し合って、私の周囲で衝突していたのだ。

「これは……ギア同士の干渉?」

「悪意がギアから弾き飛ばされまいと必死なんだ。こうなったら
……」

そう言っただけで仁志は手にしていたスマートフォンを私へと突き出した。

次の瞬間、何かの力場のようなものが私を包み、気付けば体を見た
事のないギアが包んでいた。

「これは?」

アガートラームの色合いの中に、所々黒が入っている。これは……
ガングニールの色?」

「仁志さん、これはどういう事ですか?」

「分からないけど……多分依り代の力が作用してこうなったんだ」

「ダブルドライブ、ってところかしら?」

「……きつと」

アガートラームとガングニールの合わせ技、ね。本当に何でもアリ
ね、依り代は。

だけど、今はそんな事よりも優先するべき事がある。

私がそう思って視線を上げると仁志と翼も視線を上へ向けた。そ
こには弾き飛ばされる形となった悪意がいた。

「まさか、そんな事まで可能とするなんてっ!」

「喋った!?!」

「どうやらこの悪意はこれまでとは違うようね」

「そのようだ。もしや、これが悪意の本体か！」

「かもしれないせんっ！ ヴエイグさんが今までにない程嫌な匂いだと
言ってますっ！」

その時、私と翼のギアが黄金に輝いた。

振り向けばこちらを優しく強い笑顔で見つめる最愛の男性がいる。

「聞かせてくれないか？ 灰の中から甦る、不死鳥の羽ばたきを」

瞬間的に私と翼が同時に頷いたのは言うまでもなかった。

「Ignition:!!」

もうそこから言葉はいらなかった。ただ心のままに歌い、動くだけで良かった。

ダブルドライブギアはツインドライブとなる事が可能なようで、更にアマルガムさえも使用可能だった。

黒の部分が赤色に発光し、まるでアマルガムの輝きに陽光のそれを加えてくれているようで、とても温かく、そして力強く感じた。

不死鳥のフレームをこうやって戦いながら歌うのは二度目だ。

だけど、あの時と今はまったく気持ちが違う。

あの時は、相手に負けたくないという勝利への欲求だった。

でも今は……

「もう私を倒したところで無駄よ。既に次の手は動いてる。そちらに勝ち目はないわ」

この闇を綺麗に浄化してやらなければという使命感しかない。

迫るこちらを見て、悪意は笑う。その笑い声にさえも気持ちを動かす事なく、私達は声と想いを重ねるのみ。

「歌えPhoenixSongッ！」

例え悪意が何度も甦るとしても、その度に私達が払い清めてみせよう。

この歌のように、不死なる夢を羽根に願う明日を共に飛び続けるために。

その想いを込めた私の槍と翼の剣が悪意という名の闇を貫いてみせた。

「ふふっ、あははっ！ あははははっ！」

不気味な笑い声を残して悪意は消えた。それを見届けたように空間が元に戻っていく。

「……お疲れ様、エル。ヴェイグもお疲れ」

聞こえた声に振り返れば、仁志がエルの傍でしゃがみ、その頭を優しく撫でていた。

「兄様こそお疲れ様です」

「っと、まさか悪意の本体らしき奴と戦う事になるなんて思わなかったぞ」

そしてヴェイグもエルの中から出て来た。その体を即座に仁志が受け止め、安堵するように息を吐いている。

別にその高さから着地してもヴェイグは平気でしょうに……。本当に心配性なんだから。小さな子供を見る父親そのものじゃない。

「それにしても、気になる事を言ってたな。次の手は動いてるって」

「そうですね。あの悪意は本体ではないと言う事でしょうか？」

「いや、あいつはこれまでのと嫌な匂いが違い過ぎる」

「となると、バックアップが、コピーがいると言う事でしょうか？」

「分からないわ。とりあえず今夜はもう寝ましょう。特に仁志は明日も仕事があるし運転もしないといけないもの」

そう言ってから私は顔を伏せた。

「その、ごめんなさい。私のせいで」

「いや、いいんだよ。悪いのは悪意だ。マリアじゃないさ」

「マリア、それを言うなら私も同罪だ。ダメだな。どうしても仁志さんの前では女が強く顔を出してしまう」

顔を上げれば翼も申し訳なさそうに俯いていた。ああ、本当にそうだわ。

今の私達は仁志の前では女になり過ぎる。いえ、弱くなってしま

う。
それは、この人がどんどん強くなっているから。男として、人として強くあろうとしてくれるからだ。

「はいはい。この話はもう終わり。マリアも翼もあまり引き摺らない

でくれ。多分だけどさっきの悪意は本体の分身だと思う。本物は今頃カオスビーストの中か、あるいはまだどこかで俺達を見てるかもしれない。なら、これ見よがしな心の隙を作らないでくれ。俺は気にしてないし、二人はこれでお相子だ。それと、これだけは言っておくよ」そこで仁志は照れくさそうに頬を掻いてから私と翼へ微笑みを向けて……

「只野翼も只野マリアも嬉しかったから。俺と二人きりなら言ってくれて構わないよ」

なんて、そう言つて仁志は私達からエル達へ顔を向ける。

「ヴェイグ、何なら今夜は俺と寝るか？」

「いいのか？」

「勿論。エルはマリアと一緒に寝た方がいい。セレナを起こしちゃうかもしれない」

「あつ、そうですね。姉様、いいですか？」

「ええ」

「では、私は部屋へ戻ります。この事は明日向こうへ帰った後にでも」翼の意見に私達は頷いた。せめて旅行中はあまり難しい事を考えさせたくないって事だもの。

帰る翼を見送り、私は一旦洗面所でパジャマを着直してからベッドルームへと戻る。セレナは……うん、よく寝てるわ。

「それじゃおやすみ」

「おやすみなさい」

ヴェイグと共にベッドへと横たわる仁志。どう見てもペットと寝る父親って感じよね。

私はエルと一緒にベッドへ。思えばエルと一緒に寝るのは新鮮だわ。

「あの、姉様」

「どうしたの？」

横になった瞬間、エルが小声で声をかけてきた。何かあったのかと思つて顔を横へ向けると、そこには若干恥ずかしそうなエルの顔。

「えつと、今だけ、ママって呼んでもいいですか？」

告げられたのは可愛いお願い。エルらしさを感じる、愛しいものだった。

「いいわよ。さっ、早く寝ましようね、エル」

「はい、ママ」

天使の笑顔で呼ばれた「ママ」に胸があつたかく、どこかくすぐつたい。

胸に顔を埋めるようにして抱き着くエルを優しく抱き締め、私は目を閉じる。

本当に馬鹿ね、私は。仁志と子を設けるなんてしなくても、こうして擬似的な母親をさせてもらっているじゃない。

エルは、こつちで本当に子供になっている。それは、仁志と私が父と母に見えているからだ。

なら、それで十分じゃない。これ以上を望むなら、それは全てが終わった後よ。

——それに、エルを向こうでも私の養女にしてもいい。仁志やセレナが傍にいれなくても、エルさえいてくれれば、今の私は強くあれると思うから……。

翌朝、全員で時間を合わせて朝食を取ろうとする仁志達の姿がホテルのレストランにあった。

並んでいる物を好きだけ食べていいビュッフェスタイルのそれに、響や切歌は朝から目をランランに輝かせて皿一杯に食べ物に乗せていくのを未来や調が若干呆れた眼差しで見つめる横で、セレナとエルフナインが楽しそうにどれを食べるかと迷う。

一方では翼とマリアが栄養バランスを考えて料理を取っているのを後目に、奏と仁志が食べたい物だけ取っているのをクリスがジト目で注意する。

(タダノ達、誰もがみんな楽しそうだ。優しい匂いがするぞ)

それをヴェイグはエルフナインの腕の中で見つめ、優しく微笑んでいた。

それぞれが料理を取り終えてテーブルに集まると、全員揃うまで誰

も食べようとしない辺りもこれまでの経験が出ていた。

最早このメンバーが揃うなら、食べ始めの合図は仁志が出すと誰もが思うぐらいになっていたのである。

「じゃ、手を合わせて……」

「……………」

密かにヴェイグも声を合わせ、賑やかに朝食は始まる。

「クリスちゃん、それ何？」

「焼きたてオムレツだ。てか、お前も見てただろ」

「ダメだよクリス。響ったら、すぐに横のカリカリベーコンに目を奪われてたから」

「仕方ないじゃん。美味しそうだったんだもん」

「こういうのはダメデス。あちこちに美味しそうな物があつて、嫌でも目移りするデスよ」

「朝からこんなに沢山の物が選べて、しかも食べられるなんて幸せ」

「調さんはいつも作る側ですもんね。調さんや姉さんはいつも私達の朝ごはん作ってますし」

「私は仕事が休みの日だけ。マリアはほとんど毎日だから凄い……」

「それでもないわよ。みんなが美味しいと言ってくれるもの。疲れなんて感じないわ」

「あつ、それ分かります。私も奏さんや翼さんが美味しいって言うってくれるから毎朝頑張りますし」

「エル、良かったらイチゴジャム使うか？ 残り物でもいいなら、どうぞ」

「いいんですか？ ありがとうございます、兄様」

「おつ、じゃああたしのマーマレードも使うかい？」

「それ私が欲しいです。ダメですか？」

「いいいいいよ。持ってきてな」

「翼さん達のバターロール、美味しそう……」

「軽くトーストしてもらったんだが、一口食べるか？」

「焼いてくれるのかよ？ じゃ、次はそうしてもらおうか」

「アタシ、次はご飯にするデス。やっぱり朝はご飯を食べないと食べ

た気がしないデスよお」

会話だけ聞けば完全なる大家族だろう。互いの食べている物へ意見を言い合えば、別の場所では互いの食べ物を分け合ったりする。

ヴェイグはエルフナインの膝上に座り、時折彼女や両隣のセレナや調から密かに食べ物を与えられていた。

誰もが気付いているのだ。こんな事はもうないのだろうと。

この顔ぶれで泊まりで旅行など、二度と出来ない事を。

住む世界も違えば、それぞれの置かれた状況や立場が違う。こうして一堂に会する事は出来るかもしれないが、それで泊まりの旅行は不可能に近いのだから。

それでも今だけはそれを忘れるように誰もが笑っていた。

何故なら旅行も今日は帰り。ホテルを出た後は高速を使って帰るだけなのだ。

それが意味するのは、次の大きな出来事はカオスピーストとの決戦のみという事。

そう、もうこの日々は終わりを迎えつつある。

非日常だった今の日常が失われ、これまでの非日常が日常として戻ってくる。それがもう目の前まで迫っていた。

賑やかで楽しい朝食を終え、それぞれが泊まった部屋へと一旦戻るために動き出すのだが、その前に仁志が……

「チェックアウトは九時を予定してる。それまでに帰り支度を終えてロビーに集合でいいかな？」

と、まさしく引率者らしい事を述べて、それに全員が頷いたところで本当に朝食は終了となった。

エレベーターに全員で乗り込み、泊まっている階まで向かう仁志達。

密室となるため、仁志にとっては色々と理性に悪い環境だ。何せ彼以外は全員女性。そのため、彼は邪な事を考えないよう会話を始めた。

「でも、全員成人とかじゃなくて良かったよ。そうだったらこれ、多分乗れないから」

「エルとセレナで大人一人分つてところかしら？」

「そうじゃないか？　ここで言う大人一人つて大体60キロつて聞いた事あるぞ」

「じゃあアタシ達も全然デス」

「さすがに60キロもない」

「だよねえ。私達だと、リディアン組で大人二人とエルちゃんぐらい？」

「エルつて体重いくつなの？」

「僕、ですか？　えっと、最後に計った時は……」

「ストップ。エル、女性が男性のいる場所で軽々しく体重を口にしないの。それと、もう着くわよ」

マリアの言葉を合図にしたかのようにエレベーターの扉が開き、エルフナインを先頭にと続々と降りて行く。

仁志は開閉ボタンを押すのではなく、扉が出てくる場所へ直接手を置いて彼女達が降りるのを待った。

「ありがとう先輩」

「見事なドアマンね」

「お褒めに預かり恐悅至極。お客様も残りの時間ごゆるりと」

「その言い方、翼みたい（だ）よ？」

「ちよつと！　二人してその言い方はないでしょ!？」

妙に時代がかった言い方に思わず二人が告げた言葉。それを聞いて先に降りていた翼が思わず振り返り目を吊り上げたのだ。

「翼、気持ちは分かるけど、ここ廊下だから声落としてくれ」

「つ……だ、大体仁志さんがいけないんだからね？　普通に言えばいいのに、わざとそういう言い方を」

「ごめんごめん。俺なりに防人っぽい言葉遣いを試みてきたさ」

「っ！　仁志さんっ！」

「はいはい、イチャつかないの。ほら、いくよ翼。ザババの二人も早くきな」

「奏までっ！　もうっ！」

笑みを浮かべながら横を通り過ぎていく奏に目くじらを立てつつ、

翼もその後を追うように歩き出す。

それを見て仁志達は小さく苦笑する。翼がそういう風に地を見せるのが常になりつつあるからだ。

防人とは翼の仮面のようなもの。それがはがれやすくなっている事が意味する事は、ある意味では嬉しい事でもあったのだ。

「ししよー、帰り支度した後でお部屋へ行ってもいいデスカ？」

「トランプでエル達と遊びたい」

「いいよ」

「あつ、私達もいいですか？ 部屋だと響がまた寝ちやいそうなので」

「はい？」

「実は今朝、一回起こした後あたしらが目を離れた際に高いびきかきやがって」

「あはは……未来だけじゃなくクリスちゃんもいると思ったらつい」

「ふふつ、響さんらしいです」

「そういえば、僕らの家に泊まった時もよく切歌お姉ちゃんと二人で二度寝をしています」

「そうだったわね」

そうやって話しながら廊下を歩く仁志達。結局仁志達の部屋に後で全員が集まる事となり、それぞれに別れて部屋へと入る。

各自荷物を整理整頓し持ってきたバッグなどに詰めていくのだが、ここでもやはりというかそういう事が苦手な者達がいるもので……

「あ、あれ？ 閉まらない……」

「翼さん、無理矢理詰めてませんか？」

「い、いや、そんなはずは……」

「あー、悪いけど調、見てやって。行きは未来が手伝ってたんだよ」

「あ、アタシも出来ればお願いしたいデス……」

「そつちは奏さんお願い出来ますか？ 私、たまには切ちゃんの世話したくないんで」

「デスっ?!」

「あははっ、いいよ。どら、いつペン見せてみな」

それぞれに閉まらないバッグを見つめて苦い顔をする、片付けが苦

手な次女と三女。

それを長女と四女が世話を焼くような、そんな様子のコンビ組。

「こっちは終わったぞ」

「こっちも終わり。響は？」

「こっちも終わったよ〜って、わわっ!？」

「……見事に弾けたな」

「うん、大爆発」

「あ、あはは……未来く、クリスちやくん、助けてもらっていい？」

手を離れた瞬間、バッグの中身が弾き出されるのを見て呆れる二人。

そんな彼女達へ響は申し訳なきように手を合わせるといふ、そんな仲良しトリオ。

「これで……いいわね。エル、セレナ、荷物は綺麗にまとめられた？」

「うん」

「はい」

「……うん、大丈夫ね」

「タダノ、そっちはどうだ？」

「こっちも……もう……終わり、かな」

唯一荷造りが滞りなく終わった疑似家族組。すると、エルフナインとセレナが嬉しそうに仁志の傍へと駆け寄る。

「兄様！」

「お兄ちゃんっ！」

「つと、どうしたどうした？」

「嬉しいのよ。ほら、朝起きてからずっと仁志といるなんて今までないでしょ？」

自分へ抱き着いてくる二人を微笑みながら抱き留めた仁志が疑問を浮かべると、マリアが同じように笑みを見せて理由を告げる。

朝食を共にする事は時折あるし、仁志と過ごす事や寝ているところも見る事はある。だが、朝起きた時からずっと一緒にという事は今までなかったのだ。

「そういう事？」

「はい（うん）っ！」

「ね？」

「ああ。そっかそっか。俺も嬉しいよ」

笑みを見せ合う仁志達を眺め、ヴェイグは優しい笑顔で頷く。

（凄い優しい匂いがするな。今のエル達は、それだけ嬉しいんだろう……）

「よし、チェックアウトまで軽く寝るかあ」

「ダメです兄様。もうパジャマじゃありません」

「そうだよお兄ちゃん。起きて」

「なら二人も巻き込んでやる。うりゃ！」

「あははっ！」

「ちよつと、止めなさい。服に皺が出来るでしょ？」

仁志と一緒にベッドへ倒れ込みながら笑うエルフナインとセレナ。

それをやや苦笑しながら見つめているマリア。

その光景を眺めてヴェイグは笑う。これまでにない程の優しい匂いに包まれながら……。

「全然人の数が違うね……」

奏さんの言葉に私達は頷くしかない。

今、私達は行きに寄った最初のサービスエリアに来てる。時刻は……お昼になる少し前ってとこかな？

行きの時の時間でもそれなりに賑わってたけど、もう今はそれよりももっと多くの人がいるのが分かる。

「さて、じゃあ昼ごはんを買って帰ろう。晩飯は……どうする？」

「高速を降りたらどこかのスーパーにでも寄ってくれませんか？　そこで買った方がいいかなって」

未来の意見にマリアさん達が頷いて話は決まったみたい、だね。

それにしても、もう旅行も終わりが見えてる。楽しかったし、すごく充実した時間だったけど……。

寂しい、なあ。これが終われば後はカオスビーストと戦って、悪意と決戦だ。

そして、それが終わったら私達は……

「響、どうしたの？」

「へ？ あっ、ごめん。お昼ご飯何にしようかなってここのお店を思い出してた」

気付いたら未来が顔を覗きこんでたから、咄嗟に言い訳をしちゃった。

何となくだけど、素直に言ったら未来まで悩んじゃうって思ったから。

「もうっ、響ったら」

「あはは、ごめんごめん」

「おら、さっさと行こうぜ。早めに決めねーと余計混むぞ」

クリスちゃんの言葉に頷いて私と未来は揃って建物の中へと入る。

もう中の構造自体は行きで来たから分かるから、お昼を買うってなるとやっぱり……

「うわっ、大盛況……」

「だね」

「だろうなとは思ったけど、ここまでかよ」

入って早々のフードコートは凄い人の数。まだお昼前だけど、ここで食べて行こうって人がこんなにいるんだ……。

それを横目にしながら私達は先へと進む。あのデパ地下でも見た点心のお店を眺めつつ（昨日の中華街でも食べたけどね）目指す先は色んなご飯をカップに入れて売ってるお店だ。

九条ネギが売りのお店らしくて、行きに来た時は買えなかったけど気にはなってたんだよねえ。

「ほっ、ここはそこまででもないね」

「でも多い事に変わりはねえぞ」

「それで、ここにするの？」

「ダメかな？」

「あたしは構わねーぞ」

「じゃ、ここで決めよっか」

三人でメニューを眺めて、どうするどうする……って話し合う。この

時間が、私結構好き、なんだよね。

あれもいいよね。あれも気になる。いつそ分け合う？ そんな事を言い合いながら三人で笑う。

本当に、幸せ。でも、この幸せはもう終わりが近いんだって、そう思うと、かなり辛い。

クリスちゃんは留学するから、三人でこうしていられるのも本当にあと少しだ。

ううん、それだけじゃない。奏さんやセレナちゃんともお別れしないといけないんだ……。

それと、もしかしたら……。

「じゃ、注文してくる」

「お願い」

ふと気付けばいつの間にかクリスちゃんがレジへと並ぼうと歩き出して、それを未来が送り出した。

「さて、響？」

そう言いながら未来がこっちへ顔を向けた。

「何を悩んでるのかな？ 言わないと後で怖いから」

「え、えっと……」

どうやら未来にはとっくにお見通しみたい。これは隠しきれないなって思ったので大人しく白状する事に。

「……そう。そういう事を考えてたんだ」

「うん……」

クリスちゃんを待つ間に私は考えちゃった事を未来へ教えた。

今のような時間がもうすぐ終わっちゃう。もうこんな時間は過ぎせないんだって、そう考えて気持ちが落ち込んでる事を。

それに何より、仁志さんと一緒にいられなくなるかもしれないって事を。

「未来の言った通りになっちゃった。私、もう、向こうに戻っても大丈夫って言えない」

「響……」

へいき、へっちゃら。その魔法の言葉さえも通じない程、ここは

あつたかくて、楽しくって、幸せだ。

訓練は平気。任務も、まだ何とかなる。だけど、だけど、みんなで一緒に過ごせない事が、仁志さんと同じ場所で生きていけない事が、何より辛い。

「おう、買ってきたぞ。出来上がるまで少しって……何だ何だ？ 二人してお通夜みてえな顔しやがって」

そこへクリスちゃんが戻ってきて、手にしたレシートをヒラヒラさせながら私と未来を見るなり呆れたような顔をした。

「えつと……」

「クリスは平気？ その、向こうへ戻っても」

私はどう言おうと迷った瞬間、未来がズバツと聞いた。

何だかこつちに来て未来は前よりも強くなっていると感じるなあ。

「向こうへ戻っても、な。正直分からねーよ。あたしは留学するし」
そう。クリスちゃんは留学する。私達の傍から、しばらくいなくなる。

「まあ、その間はしばらく装者稼業とおさらばだ。気楽にやるとするさ」

「クリスちゃん……」

何でもないように言ってるクリスちゃんだけど、絶対そんな事ない。だって、仁志さんの事、あんなに強く想ってるんだから。

「……って、言えたらいいんだけどな」

寂しそうにそう言ってるクリスちゃんのため息を吐いた。

「結局、あたしらはまだガキなのかもしれないねーな。仁志も、あたしらと関わってく内に大人になったみたいに、あたしらもここで過ごした後、戻ってからの時間で大人になってくんだろうさ」

その意見は、何だかとっても大人な感じがした。

そう言ってるクリスちゃんの横顔が、とても寂しそうで、悲しそうで、だけどそれを受け止めようとしてる風に見えたから。

大人、か……。私から見れば仁志さんは最初から大人だった。

一人で暮らしてて、何とか生きてるだけでも凄いなと思えた。

今のお父さんに近かったからかもしれないけど、それでも十分大人

だと思った。

「だけど、そうだね。今なら、今なら少しだけクリスちゃんの言いたい事が分かる気がする。」

仁志さんは私やクリスちゃんといった時は……ううん、エルちゃん達が来るまではまだ大人の入口にいたぐらいだったと思う。」

「戻ってからの時間、か。そう、だね。戻るんだ……。戻るしか、ないんだよね……」

「未来？」

暗い声で呟く未来に顔を向ける。未来の顔は俯いてて見えない。

「……あるいは、悪意の奴から何か聞き出せるかもしれないねえ」

その言葉に未来の顔が弾かれたみたいに上がった。私も思わずクリスちゃんへ目を向ける。

クリスちゃんは私達を見つめて真剣な表情をしていた。

「ゲートを作った方法でも維持する方法でもいい。それを何とかして吐かせるんだ。方法さえ分かれば、何とか出来るかもしれないねえ」

それは、いつか私が思った事と同じものだった。

「そうだよね……うん、きつとそうだよ！」

エルちゃんがいる。平行世界の了子さんやフィーネさん、キャロルちゃんにサンジェルマンさんだっている！

きつと、きつと何とか出来るはずだ！ 絶対、絶対何とかなるよつ！

「それよりも、只野さんにこっちへ来てもらおう方が現実的だよ」

けど、未来は前にクリスちゃんから聞いた事を持ち出してきた。

「それは……」

「未来、それはもう」

「ううん、むしろ今の只野さんなら来てくれるよ。だって、あの人は言ってくれた。例えばこっちを離れる事になっても構わないって」

たしかに仁志さんはそう言ってくれた。でも、それはそうなくても構わないってだけで、進んでこっちの、私達の世界で暮らす事を受け入れた訳じゃない。

それでも、私もクリスちゃんも何も言えなかった。仁志さんと一緒

の場所で生きていける。そう考えただけで私の心は嬉しくなっちゃったからだ。

「つと、呼んでるな。取りに行ってくる」

店員さんが呼ぶ声を聴いてクリスちゃんが見失ったように動き出した。それで私も動けるようになったみたい息を吐く。

未来、そんな風に考えてるんだ。仁志さんへ私達の世界へ来てくださって、そう言うつもりなんだ。

「未来、さっきの話だけど本気？」

「じゃ響は諦められる？ 只野さんともう会えないってなってもいいんだ？」

ちよつとだけ強めの口調で放たれた言葉が、私の心をギュツて掴んだ。

未来は仁志さんが望んでいる事を少しでも実現しようとしてる。ハーレム、って言うよりはみんなで仲良く、かな。

そう、みんなで仲良く。私が、望んでいた事。なのに、なのに今の私はそれを望めない。

いつそ仁志さんが私を、私だけを見てくれたらって、そう思うから。みんなの中で私だけ、仁志さんの特別になりたい。一緒にウルトラマンを見たい。もつと色んな仁志さんの好きな物を見て、あの人の事を知りたい。

そして私の好きな物を知って欲しい。きっと仁志さんも、私の好きな物を知ろうとしてくれるはずだから。

「ほら、注文のもんだ」

「じゃ、後はみんなと合流だね」

「どこにいるのかな？」

「どうせ後輩達はあの肉の店だろ」

今は、先の事を考えないでいよう。今は今だけ見て考えていたい。それに、もう私はバイトを来月には辞める方向だ。クリスちゃんだけにするのは気が引けるけど、仁志さんが言うにはクリスちゃんまで同時に辞めさせるのは無理らしいから仕方ないよね。

バイト、辞めるんだよね。辛い事や大変な事もあったけど、楽し

かった。

何だか普通の学生みたいな感じだったもんね。もし、私がシンフォギアやらなかったら似たような事、してたかな？

……実は少しだけバイトを辞めるの嫌だ。あれが、私にとって一番向こうとの違いだったから。

ううん、今までの平行世界とも違う、ここだけの特別って感じだったから。

「あつ、ホントにいた」

未来の言葉通り、切歌ちゃんが調ちゃんと一緒にお肉を使ったお弁当を眺めて悩んでいた。

「エルちゃんとセレナちゃんもいるね」

「あつちはもう選り終わってるみたいだな」

「あつ、クリス先輩デス！」

「響さんと未来さんもご飯選り終わってますか？」

近付いた私達に気付いて切歌ちゃんが元気よく手を挙げると、調ちゃんもこつちに気付いて顔を向けた。

それにしても、こつちのお弁当も美味しそう。ううっ、お肉ってやっぱり反則な見た目になるよね。

「うん、あつちのお店で買ったの」

「本当は十分以内に食ってくれって言われたけどな」

「へ？ 何でデスか？」

「九条ネギをたっぷり入れるからじゃないかな？ ほら、蓋もしてるし、ご飯とかの熱気でネギがしゃきしゃきしなくなっちゃおうし」

「あく……」

未来の言葉に納得する切歌ちゃんと調ちゃん。そういえば仁志さんは時々二人をザババコンビって言ってるっけ。

奏さんもそれを受けてか時々二人をザババの二人って言ってる時がある。多分切歌ちゃんと調ちゃんって呼ぶより短いからだろうなあ。

「ねっ、エルちゃん達はもうご飯買ったの？」

「はい。二人はヴェイグの分も入れてそれぞれ違うの買いました」

「アタシ達はどうしようかと迷ってる感じデスね」

困ったように笑う切歌ちゃん。見た感じどれも美味しそうだもんね。

それと、値段も中々だ。けど、こういう時って割とお財布が緩むから気にならずに買ったちゃうんだよねえ。

そうやって選んでいるとそこにマリアさん達が現れた。その手には……え？

「あの点心のお店で買ったんですか？」

「いや、中華おこわの弁当が美味しそうだし」

「昨日食べた物とは比べていけないだろうが、気になってしまったな」

「それに煮豚も入ってるの。値段もあって、庶民的な感じがしたし、いいね」

マリアさんのその言葉について笑っちゃった。

庶民的って、マリアさんが使うとどこか面白いけど、ここでのマリアさんは本当に庶民だったや。

だって、芸能人でさえない。普段はお弁当屋さんでバイトして、あの平屋で暮らすエルちゃん達のお姉さんだから。

「あれ？ 仁志は一緒にじゃねーのか？」

「仁志なら一人でフラフラとどこか行ったわよ」

「昼食はコンビニで買うと言っていたな」

ああ、そっか。ここに入ってるコンビニは最大手のお店だ。仁志さん、時々チェックしてるって言ってたっけ。

店長になった後からだけど、仁志さんは他のコンビニの新商品を気にするようになった。

でも、それが旅行最後に買う物って寂しい気がするんだけどな……。

そんな事を思いつつ、私は迷う切歌ちゃんと一緒になってお弁当を見つめる事に。

ちなみに後で分かった事だけど、仁志さんは一人でこっそりプリンソフトなんてものを食べてたみたい。

どうしてそれが分かったかと言うと、エルちゃんとセレナちゃんが

仁志さんを探しに行つて、外のベンチに座つてそれを食べてる仁志さんを見つけたから。

——口止めに一口あげただけどなあ……。

私達から文句を言われた時、仁志さんがそうぼやいて項垂れたのが面白かつた。

だつてエルちゃんもセレナちゃんも仁志さんが何かを食べてるなんて言わなかつた。ただ、ヴェイグさんが仁志さんが変わった物を食べてたつて教えてくれたんだもん。

マリアさんからそれを言われて「だから詰めが甘いのよ」つて言われた時の仁志さんは恨めしい目でヴェイグさんを見つめてた。

——ヴェイグ……。

——……俺は口止めをもらつてないからな。

その言葉にみんなで笑つた。プリンソフト、食べたかつたんだね、ヴェイグさん。

仁志さんはヴェイグさんの言葉を聞いてがっくりと項垂れて、余計笑い声が大きくなつた。

そんな楽しいサーブエリアでの一時だつた。

こういう時間が、もっと続けばいいのにつて、そう心から思つた……。

レンタカーを返してマリア達の住む平屋へ仁志が戻つた後、昨夜の悪意によるガングニールのイグナイト事件は全員の知るところとなつた。

それと同時にアガートラームとガングニールのダブルドライブギアも聞き、切歌達一部が見たいと声を上げるのも道理と言えたため、再現出来るかどうかの検証を兼ねて挑戦してみる事に。

その結果、ダブルドライブギアはゲームから起動ではなく、依り代を直接ガングニールへ近付ける事で可能になるという事が分かつた。

現状でどのツインドライブよりも強いと思われるダブルドライブギアツインドライブ。何故なら、そこにはアマルガムの輝きさえも加える事が出来るからだ。

「おそらくですが、これは元々星の声さえも想定していなかった事なんだと思います」

ダブルドライブが可能となった事を受け、仁志達は思い出していたのだ。

ガングニールをマリアが手に入れて帰った時、ダブルドライブが可能かどうかを確かめた事を。

結果は失敗。なのにも関わらず、今は出来ている。その理由は何だと考えて、エルフナインはそう結論付けたのである。

「想定していなかった?」

「はい。このダブルドライブが誕生した経緯は、まず悪意が依り代のないガングニールを利用した事が発端です。それを纏ったまま、姉様がアガートラームの聖詠を唱えた結果、悪意が依り代がないギアから離れる事を拒否出来たのだと思います」

「その結果、マリアの持つ二つのギアが干渉し合い、ぶつかり合った訳か」

「そこへ俺が依り代を近付けて悪意を弾き飛ばそうとした結果……」

「内側と外側からの力で悪意は弾き飛ばされ、二つのギアが私に装着された?」

「かと思いません。なのでダブルドライブは依り代の強い干渉が必要なんだと」

そのまともに誰もが納得するように頷いた。

それと共に、ダブルドライブギアがどうしてツインドライブまで使用出来るかもエルフナインは説明し出した。

ダブルドライブの基本をアガートラームとしている。つまり、ツインドライブの影響を受ける状態であるため、ガングニールギアを合わせた状態でもそれが使用可能。

ただし、アマルガムなどの他の特殊ギアの恩恵を受けるのはあくまでツインドライブ出来ているアガートラーム部分のみ。

故にガングニールギア部分は若干性能が負けているだろうと、エルフナインは予想したのだ。

「それにしても、悪意が喋ったデスか」

「きつと本体かそのコピーなのは間違いねえな」

「それぐらい悪意も追い詰められてるって事ですね！」

「でも、次の手は動いてるって、そう言ったんですよね？」

未来の問いかけに仁志達その場にいた全員が頷いた。

「次の手、か……。エル、何か分かる？」

「確実に言えるのはまだ悪意は完全に倒し切れていない事です。次の手、と言うのはおそらくカオスビーストに関係すると思うのですが……」

そこでエルフナインは言葉に詰まる。何も手がかりもなければ証拠もなく、何より本当に悪意の次なる手がカオスビースト関連かも定かではないのだ。

それともう一つ、エルフナインが言葉に詰まった理由がある。それは、今回悪意がコピーとはいえ本体と同等の存在を使用した事。

これまでは物言わぬ分身を用いていた。それが何故あの時はそうしなかったのか。これがエルフナインに不安を与えていた。

(もしや悪意は最早分身を使う必要がない？ あるいは、今の姉様にギアを纏わせるには本体と同等でなければいけなかった?)

真剣な顔で考え込むエルフナインだったが、仁志はこれまで見てきた作品などから悪意の打った次の手を予想しようとしていた。

「考えられるのは……。一つはエルが言ったようにカオスビースト。二つ目は実はあの時倒したと思った悪意は死んだように見せかけてまだ生きてる。三つ目は」

「ま、まだあるのか？」

淀みなく喋る仁志に思わずクリスが目を見開いた。ただ、翼はそんな彼女へ苦笑しながら喋り出した。

「気持ちに分かるぞ雪音。だが、仁志さんの知識はある意味で数多の闇とヒーローの戦いの記録だ。我々が思い描く事さえない事も知っているからな」

「まあ、そうだろうけど……」

「いい？ 三つ目は、エル達に分かるように言うとは機界新種パターン」
「「「「「?!」」」」」

その表現でマリア達平屋で暮らしていた者達が揃って息を呑んだ。一方その意味が分からない響達は疑問符を浮かべるしかない。

「えっと、多分エルちゃん達だけって事は、ガガガなんだよね？」

「は、はいデス。で、でも機界新種って……」

「仁志さんは、私達の中に悪意が種を植え付けてるって言うの？」

「「「「なっ?!」」」」

今度は響達が息を呑んだ。仁志が苦い顔で頷いたためだ。

「しかもこれの厄介なところは、おそらく悪意が完全に手駒を失った瞬間に起動するタイプだと思うんだ。それまでは何をしても排除も除去も出来ない」

「しえ、神獣鏡ならー!」

「えっと、あまり女性相手に言いたくない例えなんだけどね。ゴキブリの卵っておそろしい程の耐性を持つてるって知ってる？ それこそゴキブリが本来耐えられない寒ささえも凌げる程に」

沈黙が室内を包んだ。それだけで仁志の言いたい事は伝わったからである。

要するに悪意が種を埋め込んだ場合、神獣鏡の光さえもやり過ぎすもしくは効かない物となっているはずだと仁志は言ったのだ。

何せ彼にはそう言える根拠があった。それは、悪意が最後に言い残した言葉そのもの。

「次の手は動いてる。こんな事を言えば、俺達が念のためにとって全員に神獣鏡の光を浴びせる可能性が出てくるだろ？ なのに敢えて言った。それはもうそんな事をしたところで意味がないって事なんだよ」

「で、でも、もしかすればそう考えるって思ってた可能性も」

「いや、それはない。ならばそもそも言わなければいいだけだ」

「翼の言う通りだよ。でも、悪意が種を植え付けてるとして、一体誰に？」

「可能性があるとすれば、過去に悪意に操られた経験持ちだけど……」
「ツインドライブが可能な時点でそれも確かめようがない。それに、悪意が言う次の手をいつ仕込んだのかも定かじゃないし、本当にこの

方向かも確証がないんだ」

「カオスビーストの方向という事も考えられるって事デスか？」

「ああ。もしくは、今言った全てに更なる事も加えてのとんでもない可能性だってある」

その言葉に誰もが真剣な表情で頷いた。

悪意は最悪を想定して動かなければいけない相手であり、今までとは攻め方も狙いも違い過ぎる事を全員が嫌になる程知っていたのだ。その話は一旦そこで中断し、それぞれ買ってきた食事を食べる事にした。

空腹のままでは気分が減入ると判断したためである。

「……………おおっ（へえ）（お〜）……………」

全員が買った物をテーブルに並べると、その光景に感嘆の声が漏れる。

ただ、一か所だけあまりにも他の物と見劣りする部分があったが。そこに全員の視線が集まり、テーブル中央に陣取ったヴェイグが代表するように呟く。

「タダノの物だけ浮いているな」

「分かっているから改めて言わないでくれよ。コンビニのおにぎりがないのと同じや場違いなのは認めるさ。ただ、これ、これはいいだろう？」

そうやって仁志が指さしたのは、おにぎりの傍に置かれたプラスチックの容器に入った手羽先の唐揚げだった。

「……………美味しいのか？」

「試しに食べてみてくれよ。つと、これもこの地方の味の一つだ」

「いいのか？　じゃあ……………」

仁志が容器を開けて中身を取り出し易いように差し出すと、ヴェイグは嬉しそうに手羽先の唐揚げを手を取った。

「おつと、ヴェイグちよつと待ってくれ。綺麗な食べ方を教えるから」

「綺麗な食べ方？」

「ああ。そもそもどう食べていいか分かりにくいだろう、これ」

「たしかに……………」

まじまじと手羽先の唐揚げを見つめるヴェイグ。正直どこからど

う食べればいいのか見当もつかないようで、その目はやや怪訝なものへと変わっていた。

「よければみんなも一つ食べてみてくれ。そのために多めに買ったんだ」

「じゃ、私もらいまーす」

「アタシもイタダキデス」

「ならあたしももらおうかな」

「僕ももらいます」

「師匠、私も欲しい」

「どうぞ。ただ少しコショウが効いてて辛めだから、そこだけ注意してくれ」

次々と手を伸ばす響達に仁志はどこか嬉しそうに笑みを浮かべる。

やはり郷土の味を食べてもらえるというのはどこか嬉しいものなのかもしれない。

「仁志さん、私もいい？」

「ああ」

「わ、私も食べてみる」

「無理はするなよ？」

「じゃあたしも食べるか」

「ふふっ、私もいただくとするわ」

「じゃあ、私ももらいますね、只野さん」

「どうぞどうぞ」

結局全員の手到手羽先の唐揚げは行き渡り、仁志がその手に持って食べ方を教え始めた。

それを見ながら全員が初めての手羽先の唐揚げを食べて行く。

口の中に広がるスパイシーな香ばしさと味に肉の脂とパリパリになった皮の美味さが押し寄せ、あつという間に誰もが食べ終わっていた。

「どう？ 本当は酒のツマミなんだけど、普通に美味しいだろ？」

「ああ、俺は好きだぞ」

「僕もです！ これなら食べられます！」

「うん！ でも、やっぱり少し辛いかも……」

「じゃあ今度はセレナとエル用に風来坊の手羽先唐揚げ甘口を買ってくるよ」

「「「「「「「ふうらいぼう？」」「」「」「」「」」」」」」」

仁志の地元トークがそこから始まり、それを聞きながらそれぞれは買ってきた弁当などを食べ始める。

そこから派生し、味噌カツやういろなどの名物を食べたいと切歌が言い出して、ならばと仁志が実家から車を借りて買いに行ってくる事となり、今度の集まりにはこの地方の名物試食会を兼ねたクウガの最終回までの鑑賞会に決まった。

口々に楽しみだと告げながら笑みを見せ合う響達。

残り少ない平和な世界での日々。それを惜しむかのように彼女達は食事をゆつくりと噛み締めながら進める。

そうなれば話題はクウガ一色となる。何しろ前回の終わりが終わりだ。

誰もがあそこからどうなるのかと予想を話し始め、知っている仁志はそれを聞きながらニヤニヤと笑みを浮かべるのみ。

「あっ、ししよーがニヤニヤしてるデス！」

「仁志さーん、どこか違ってるんですかあ？」

「いや、そういう事じゃないよ」

「ううん、師匠、今悪い顔してる」

「兄様、少しでいいのでヒントをください」

「うん、ヒントちょうだい？」

「そうだなあ……」

「前、戦士を意味する文字が四本角でどのとか言ってたよな？ あれはどういう事だ？」

「クリス、よく覚えてたね」

「そういうえば……警告として黒いクウガがどうのとも言ってたよな……」

間違いないとその翼の言葉に全員が仁志へ視線を向けた。どういう意味だと、そう問いかけるように。

「……俺がネタバレしといてなんだけど、聞くと楽しみ減るよ?」

「「「「「「「ヒント」」」」」」」」」」」」

「ええ……。じゃあ……四本角の文字は黒いクウガと関係してる」

「「「「「「「もう少し」」」」」」」」」」」」

「もう少し? えく……ライジングフォームの力は黒いクウガの力と関連してる」

誰の顔にも笑顔があった。尋ねる側も答える側も楽しげな笑みを浮かべている。

こんな何でもないようなやり取りさえも、今の彼らには愛おしい時間だった。

だからこそ、誰もがどこかで思うのだ。こんな事はつい一か月前なら珍しい事ではなかったのに、と。

失われつつあると分かった時、どれだけ今までが幸せで輝いていた時間だったのかを人はやっと痛感出来る。

感謝はしていた。幸せを噛み締めてもいた。それでも、それでも限りが迫った時、人は後悔してしまうのだ。

もつとああすれば良かった。もつとこうすれば良かった。その想いが渦を巻き、誰も心のをかき乱す。

だけど、その悲しみを吹き飛ばすかのように仁志が笑い出した。何もおかしくないのに大笑いを始めたのだ。

「え、えつと、仁志さん?」
「どうしたんだよ?」

「こういう時は笑うんだ。笑う門には福来るって言うだろ? どこか湿っぽい感じがしたから笑ってその空気を吹き飛ばすんだ。がははははっ!」

仁志の頭の中に浮かんでいるのは某有名アニメ映画のワンシーンであった。

娘二人と風呂に入っていた父親が笑い出した場面。それを彼なりにアレンジしていたのである。

「じゃ、アタシもやるデス。あはははははっ!」

「僕もやりますっ! あはははははっ!」

「私もやりますっ！ あははははっ！」

「切ちゃん……」

「エルや響さんまで……」

「仕方ないね。あたしもやってやるか。翼、マリア、踊る阿呆に見る阿呆だよ」

「ふふっ、うん！」

「はあ……そうね」

「じゃあ、私達もやりましょう。調さん、未来さん、クリスさん」「うん」

「何だか大変な事になってきちゃったなあ」

「今更だ。つたく、違う意味で笑えてくるぜ」

「俺もやるぞ。がははははっ！」

「おっ、ヴェイグいいぞ！ わははははっ！」

こうしてしばしの間居間に大勢の笑い声が響く事になる。

最初こそ無理矢理笑っていたのが、段々自分達のやっている事のカバカしさに笑えてきて、最後には大笑いではなく楽しげな笑い声に変わっていた。

そんな中、仁志がデジタルカメラを取り出して全員の写真を撮り始める。沢山の笑顔が思い出として記録され、それぞれの中に記憶として残っていくようにと。

この後も他愛ない時間を仁志はカメラに収めていく。

時には撮影を誰かが変わり、仁志も交えて撮っていく内に時間は過ぎていき、二時になりそうな辺りで仁志と奏は仮眠を取るべく動き出した。

と、ここで普段とは異なる展開が起きる。

「ありがとうございます、兄様」

「まあいいけどさ。一緒に昼寝するぐらい」

エルフナインが仁志と一緒に昼寝をしようと言いだしたのである。

仁志もエルフナインならとなり、こうして仲良し親子のように二人が布団へ横になるのを見て響達は微笑む。

奏もそんな様子に笑みを浮かべて目を閉じた。その光景はある意

味で三人親子のようにも見えなくもない。

「……エルちゃんも、分かっているんだね」

「だろうな」

「ああ、もうこうして仁志さんと過ごせる時間は少ないとな」

嬉しそうに笑みを浮かべて目を閉じているエルフナイン。それを見つめて優しく微笑む響達。

けれどその微笑みには、微かな寂しさが宿っている。

「エル、ししよーの事、大好きデスからね」

「そうだね。思えばエルの事をただの子供として可愛がったの、師匠が初めてかも」

「そう、ね。仁志はエルの事を最初から子供として大切に扱っていたもの」

「お兄ちゃん、エルの事を普通の女の子だっつてずっと大事にしてた」

弦十郎達はエルフナインを錬金術などを知る研究者として扱った。それは言うなれば大人に等しいものだった。

対して仁志はエルフナインを最初から一人の少女として扱い、どこまでもそれを貫いていた。

どちらが正しいとかではなく、それぞれの世界と状況で適切な対応をしていただけなのだ。

ただ、普通の子供として扱われた経験がなかったため、エルフナインが仁志に対してそれまでの大人達とは異なる反応を見せていっただけである。

その結果がエルという愛称で呼ばれる少女であり、みんなの妹分として天真爛漫に生きる存在だった。

「タダノが時々呟いてたぞ。エルはエルフナインとエルを別人のように思ってるかもしれないと」

「……かもしれないわ。あの子は、こちらでの自分は本来の自分ではないと思っっているみたいだし」

「そういえば……」

「私達の事をお姉ちゃんって呼ぶ時も、エルって呼んで欲しいって」

「デスね。その方がここでの自分だっつて思えるっつて言ってたデス」

思い出したのは切歌と調が姉として扱われた際のやり取り。

エルフナインが二人へ頼んだのは、エルフナインではなくエルと呼んでくれる事だった。

「じゃ、エルは元の世界へ戻ったらもうエルじゃないの？」

「いえ、そんな事はないわ。エルは別人格じゃない。エルはエルフナイン本人なんだから」

「そうデス。エルって言うのは愛称デス」

「うん、エルに一度ちゃんと言ってあげないとね」

笑みを見せ合う切歌と調。姉貴分としてだけでなく、共に戦う仲間としてもあの笑顔を守りたいと思つて。

その二人の言葉を聞いて響達も小さく頷いた。

エルフナインが思っているだろう考えは少し違っていると伝えてやろうと、そう思つて。

幸せそうな顔で仁志と寝ているエルフナインを見つめながら彼女は笑みを浮かべるのだった……。

あの旅行が終わつて数日後、依り代から通知音が鳴つてあたしらはゲートの中へ入った。

すると、まさかのカルマ・ノイズがゲートへと侵入しようとしてるところにでくわした。

すぐさまツインドライブで片付けていったけど、それはその時だけじゃなかった。

二日か三日ぐらいで依り代が鳴つて、仁志から連絡を受けてあたしらの中で動ける奴がゲートへと入る。

一人でもツインドライブならカルマ・ノイズさえも倒せるつて分かつて、あたしらは今まで使つてなかった特殊ギアの試しも兼ねてカルマ・ノイズの駆除をやっている。

そんな中、十月も中旬に差し掛かった今日、一つの変化があたしの日常に起きた。

「それじゃ、短い間でしただけどお世話になりました」

「立花さん、もし良かったら遊びに来てくれていいから。それに、また

働きたくなったらいつでもおいで」

「はい！」

あたしの横であのバカがオーナーへ笑顔を向ける。今日はいつ
のバイト最終日だ。

先んじて辞める相談をした後輩を利用して、設定としては親戚にあ
たるこいつも学業不振のために勉強に集中するって理由で辞める事
にしたからだ。

「じゃあ、勉強頑張るんだよ？ それと、今までありがとう。お疲れ
様」

「お疲れ様です」

「雪音さんもお疲れ様。また明日もよろしくね」

「お疲れ様です」

それぞれ挨拶して事務所を出る。チラツとレジを見れば仁志が新
人と一緒に勤務中。

「店长っ！ 今までお世話になりました！」

「ああ、立花さん。こちらこそ色々と助かったよ。勉強、頑張つて」

「はい！ 脇谷さんもお仕事頑張ってください！」

「ありがとね響ちゃん。でも結構さびしーよ。折角仲良くなれそう
だったのに」

「すみません。私もここでの仕事、好きだったんですけど……」

「っと、ごめん。そろそろ……」

仁志の言葉であたしらは悟る。店内は割と客がいるし、あまり長話
も印象良くねえか。

「ほら、帰るぞ」

「う、うん。それじゃお疲れ様です」

「「お疲れさま（っす）」」

店の外へ出ると風が若干心地いい。秋めいてきやがったな。

ふと横を見ればあいつは店を見上げて寂しそうな顔をしてやがる。

「……もう、ここで働く事はないんだな」

「噛み締めるようにんな事言うな。まだどうなるか分からねーんだ
ぞ」

悪意を倒した結果、そのやってた事の反動で何が起きるか分からない。それが最近エルの奴が出した推測だ。

結果としてあたしらがこの世界に留まる事になるかもしれないねえ。その可能性はゼロじゃないってのがエルやヴェイグの意見だった。

「それはそうかもしれないけど……」

「いいから行くぞ」

あのバカの手を引いて歩き出す。寂しいのはお前だけじゃねえ。あたしだって、その、こいつがいなくなるのは寂しいんだ。

今まで二人であの店で働いて、色んな愚痴を言い合ったり、気付いた事や思った事を言い合ったり、とにかく二人で支え合ってきたんだ。

これから少しの間、あたしは一人だ。こいつが抜けてもあたしは夕方の時間バイトしないとならねーんだから。

「クリスマスちゃん、もしかして寂しく思ってくれてる？」

「っ……わりいか」

足を止めて振り返ってそう言ってる。すると、このバカは嬉しそうに笑いやがった。

「ううん、そんな事ない。嬉しいよ。でも、これだけは言わせて。私も寂しいんだよって」

「……おう」

「まあ、でもこれからは毎回クリスマスちゃんを出迎えてあげるから。おかえりなさいクリスマスちゃん。ご飯にする？ お風呂にする？ それとも」

「はっ！ あたしらの部屋に風呂はねーだろ！」

「ああっ、クリスマスちゃん！ それは言わない約束だよお！」

手を離して置き去りにするように歩き出すと、あのバカが情けない声で歩き出す。

程なくしてあたしの隣にあいつが並んで、またいつものように喋り出した。

そう、これが今のあたしにはいつもの事。いつの間にか、こいつが隣にいるのが当たり前になってる。

「でや……」

笑いながら何でもない事を話すこいつは、本当に見た感じは能天気に見える。

だけど、その裏じゃ色んな事を考えて、時にバカだから抱え込んで潰れそうになる時がある。

一緒に暮らし始めてそれをあたしはまざまざと知った。こいつは強くなんかねえ。ただ、強くあろうとしてるだけだつて。

「なあ」

「ん？ 何？」

「覚えてるか？ 初めて二人だけで仁志の部屋へ帰った日の事」

「……うん、覚えてるよ。忘れる訳、ないじゃん」

足をお互い止めて顔を見合う。あいつの顔は、どこか照れくさそうだ。

「私が泣いちゃって、クリスちゃんに抱き締めてもらって……」

「おう、あの時は驚いたぜ。でも、ま、あれがあったから今があるんだろうな」

「うん、そうだね。私も、そう思うな」

しみりした雰囲気があたしらの今に流れる。だけど仕方ねえ。あそこでのバイトがあたしらの今の始まりなんだ。

そこから、今日、こいつがいなくなった。それは、この生活の終わりが近いって言う、紛れもない証拠なんだから。

「……帰るか。あたしらの部屋に」

「……うん」

そう言うときあたしの手を握ってきた。そのあつたかさに何も言わず、あたしは歩き出す。

そこからは会話はなかった。だけど、それでも伝わるもんがある。きつとあたしもこいつも思ってる事は一緒だ。この時間が終わるのが嫌だつて。それでも、終わらせなきゃいけないって分かっている。けどどな、分かっている事と納得してる事はⅡにならねえんだよ。特に、今回は。

きつと誰だつてそうだ。可能ならこんな感じで生きて行きたいっ

て、そう思ってるに決まってる。

あたしらはこれまで普通じゃない状況に置かれ過ぎてて麻痺してたけど、これが本当は普通なんだ。

訓練やら任務やらが日常に組み込まれてる方がどうかしてんだよ。それもこれもシンフォギア装者だからだ。あたしらがギアを使えるから。この一点だけであたしらに普通はこねえ。近付きもしねえ。だけど、それだけしか知らなかったら、もしくはそれが当たり前になっただけだ。

実際、これまであたしらはそこまで疑問にも不満にも思わなかった。

ここに来るまでは。いや、ここでこんなにも生活するまでは、か。

「クリスちゃん、来月には私達、元の世界に戻ってるんだよね？」

「……ああ」

「そうしたら、クリスちゃんと一時的にお別れが来るんだよね？」

「………ああ」

まだ会話が途切れる。沈黙があたしらを包む。

と、不意にあいつが……

——寂しいなあ……。

なんて、噛み締めるように言いやがった。

あたしが、あたしが思ってる事と同じ事を言いやがったんだ。

「……留学、止めるって言ったたら、どうする？」

だから気付いたらそう口が動いてた。こつちを見るあいつの顔は驚き一色って感じた。

「く、クリスちゃん……本気？」

「それぐらい、今のあたしは一人になるのが怖いんだ。いや、寂しい。戻れるのなら一年前に戻って自分に言っただけでやる。留学なんて止める。信じられねえぐらいあの子達と親しくなって、一人で外国行くのが辛くなるぞってな」

これを弱くなったと言うならそうかもしれないねえ。あたしは間違いない。でも、ある意味では強くなったとも言えるのかもしれないな。

「せ、せっかくここまで仲良くなったんだ。こんなあつたけえ時間を共有した後で、一人で何年も外国で過ごせつてのは無理つてもんだろ」

「クリスちゃん……」

「でも、一度決めた事だ。さすがに今更止める訳にはいかねえ」

それに、パパやママの夢を叶えるためにもあたしは頑張らないといけないんだ。

あつちで叶えず、こつちで仁志と叶えるとしても、な。

「まあ、その、長期休暇になったら帰ってくるからよ。その時は」

「迎えに行くからっ！ 絶対に迎えに行つて、そして沢山遊ぼうっ！」

「……おう」

結局部屋の中に入るまでこいつは手を繋いだままだった。

何とかなくだけでも放したらダメな感じがしたんだろうな。あたしもそんな感じだった。

手を繋いだままで何するでもなく床に座る。隣り合つて、会話もせず。

汗を流しにあいつらの家に行く事もしない。まあ最近はそこまで暑くねえし、汗もそんなに掻いてないからいいか。

「クリスちゃん」

「ん？」

「可能なら、一緒に辞めたかったね」

「ん……」

「早く夕方時間帯、応募くるといいね」

「ん」

「……これから暇な時間、増えるなあ。どうしたらいいかな？」

「ん……」

「勉強、は一人じゃちよつと……。いつそ切歌ちゃん達と遊んでようかな。どう？」

「ん〜？」

「……クリスちゃん、遊んでるでしょ？」

「やっど気付きやがったか」

そこであのバカが膨れ顔をする。こんなのもこういう暮らしをしてきたからだ。

少しだけ軽く言い合いをして、まあふざけ合って、気付けば十一時になりそうだったから着替えて、布団を敷いた。

——おやすみクリスちゃん。

——……おう、おやすみ、ひ、響……。

で、その最中にあいつから、その、名前で呼んで欲しいって言われて、あの子も、未来も二人きりの時だけは名前で呼ぶようにしてたら、同じ条件ならって事で響って呼ぶ事にした。

これも、強さ、なのかもしれねーな。少なくとも、弱さだけじゃねーとは思う。

——そうだ。あたしはやつと本当の強さを手に入れたんだ。自分の弱さを認める強さを。だから、仁志にもつと素直に甘えよう。もつと素直になっていいんだ……。

もつと……素直に……。

——カオスビーストを全部倒して悪意の事を片付けたら、そんな時はあたしからキスしてやるんだ。きつと仁志の奴、驚いて、でも喜んでくれる……。

あたしから……キス……。仁志が……喜ぶ……。

——そうさ。あたしの想いの全てを仁志へ伝えるような、本気のキスをしてやるのさ……。

本気の、キス……。それは……いいな……。

——きつとそうすれば、あの人あたしものになるはずだ……。

気付けば十月も上旬が終わろうとしてる。既に響と未来が店を辞めた。調も、南條さんの紹介で来た井口さんが年長者ならではの感じで上手く仕事をこなしてくれるので、今月末には辞める事になっている。

切歌も同じく今月末にはバイト先を辞める事に出来たそうで、本人曰く「時給を上げるから何とか残ってくれないかって、そう言われたデス」との事。

……まあ可愛くて愛想良くて真面目な女の子ってどこでも即戦力だもんなあ。

「奏も後数日だし……」

残るはクリスマスだけ。ただ、クリスマスの場合は少々事情が特殊だ。

夕勤のバイトリーダーとしてもそうだが、何よりその業務レベルが割とバイトにしては高い。

他のバイトのフォロワーや発注に始まり、在庫管理や他の時間帯への申し送りなんかもこなしてる。

正直俺よりも優秀なんだよなあ。

オーナーもクリスマスにだけは辞められたくないと言っているぐらい、店にとっては要になってる存在である。

まあ、響が辞めた事で大分オーナーも参ってるらしく、俺にちよくちよくクリスマスは辞めないだろうかと聞いてくるぐらいだ。

……まさか響が辞めただけで売り上げに多少とは言え変化があるとは思わなかった。いや、コーヒーの売り上げ落ちたもんな、明らかに。

ただ、そこはふみさんの頑張りに期待したい。初めてのバイトだけあって初々しさが凄いのだ。

お姉さんよりも愛想も良く、理由をそれとなく聞いたら……

——初めて見た時の立花さんの接客が凄くいいなあって思っ、私なりにお手本にしてるんです！

との事。響にそれを教えてあげたらすっごく照れてたのを今でも思い出せる。

自分がいなくなってもその影響はちゃんと残ってるんだって、そう思ったからかもしれない。

意外な事に茂部の紹介した二人はどちらも大きな問題もなく仕事をしてくれていて、オーナーと二人でホッと胸を撫で下ろしたものだ。

「それにしても、一体何の用なんだ？ ドライディーヴアで相談したい事があるって……」

今俺は奏達が暮らす部屋へ向かっている。時刻は午後九時を過ぎ

た辺りだ。

切歌がバイトのためみんなでの集まりはないのだが、響達仲良しトリオが今夜はマリア達の家へ泊まりだそうで、故にどうせならと成人組は邪魔しないように場所を変えて相談となったらしい。

ま、俺もそれには賛成なので構わない。残り僅かなこつちでの日々。クリスは留学が、響達でさえそれぞれの寮生活だし、エルも本部内の研究室が自室だし、セレナは世界が異なるためにみんなと過ごす事自体難しい。

だから、少しでも思い出になるような時間をと、そう思わないでもないんだ。

見えてきたアパートの階段を上がり、一番手前の部屋のドアをノックする。

「どちら様？」

「プロデューサーだよ」

ちよつとふざけてそう告げるとドアがゆっくりと開いた。

「いらつしやい、プロデューサーさん？」

「こんばんは。失礼するよ」

こちらに向かってニヤリと笑う奏に苦笑を返しながら中へと入る。

もうマリアも来ていたようで、翼と二人でこちらを見るなり微笑みを向けてくれた。

「こんばんは、仁志」

「仁志さん、いらつしやい」

「やあ、お邪魔するよ。で、もう話し合いみたいなのは始まつてるのか？」

「まあそんなとこ。今、丁度三人での大事な話は終わったとこさ」

靴を脱いで部屋へ上がつてふと寝室へ目をやれば、そこには奏と翼と未使用の布団が敷いてある。

「あれ？ マリア、ここに泊まるのか？」

「たまにはいいかと思ってね。向こうにはクリスと未来がいるし」

「まあ、たしかに不安はないけど……」

時には年長者さえ抑える事の出来る二人だ。きつと夜更かしをし

過ぎようものなら静と動、二つの怒りを見せてくれる事だろう。

「ほら先輩。まずは座って座って」

「はいはい」

で、俺は奏に促されるまま椅子へと座る。俺の隣をマリア、向かいにツヴァイウイングという形だ。

「それで、一体相談って何？」

旅行前のカラオケで歌ってもらった『貴方ト云ウ 音流レ 満チルナラ』は既に百万再生を超えている程の人気曲だ。

『天鳴ノ協奏曲』も気付けば3百万再生を超えているし、ドライデーヴァに関してはもう十分だと言える。

コメントにも「何だか涙が止まらない」とか「どこかでこれを望んでいた気がする」とかのかつての適合者と呼ばれてただろう人達らしきものが沢山見られた。

もしかして、ダメ押しにもう一曲歌うべきか否かって事か？ それならたしかに相談が必要だ。

何せもう俺達に残された時間は少ない。今月末には悪意と決着を着けるんだからな。

「それは……」

「仁志先輩、単刀直入に言うよ。あたし達を抱いて」

「……はい？」

翼が赤い顔で俯いたと思ったら、奏がそんな事を言ってきた。

えっと、この抱くってあれか？ ハグじゃない方か？

「仁志、私達三人の本来の立場、覚えてる？」

「あ、ああ……」

「私達は元の世界へ戻った場合、自由恋愛など出来ないに等しい。いえ、出来たとしても以前貴方が言ったように、普通の相手では色々不安が残る」

「でも、先輩ならそれが無い。あたし達の過去から今までの事がある程度知ってて、何よりあたし達が心から惚れ込んだ相手だ」

「い、いやいや、ちよつと待てよ。その、三人の過去云々についてはさうかもしれないけど、俺は自分の身を守る程の強さは」

「分かってるよ。あのね仁志さん、私達は貴方に伴侶になって欲しいなんてお願いは出来ない」

翼の言葉に疑問が大きくなる。一体どういう事だ？ だって、今はそういう事じゃないのか？

「仁志、だから私達は決めたの。傍にいてもらえないのなら、せめて思い出をとって」

「思い出?」

「そう、思い出。私達それぞれの身と心に刻みつけてもらおう、思い出」
「身と心って……」

「仁志先輩、お願いだよ。それとも、あたし達三人じゃ不満?」

「そ、そんな事はないけど……」

こ、この流れは不味い。そう思うけれど、ここで俺が逃げ出せば三人の心はきつと大きく傷付く。

その傷口から悪意が入り込まないとも限らない。で、でもここで彼女達と、その、肉体関係を持つっていうのも不味い気がするし……。

そんな風に俺が色々と考えている間にもドライディーヴアは行動に移る。

まずはマリアが俺へ抱き着いてきて、奏と翼が席を立つ。そのまま奏がマリアの逆から抱き着いて、翼が背中から抱き着いてきた。

「あ、あのさ? せめて、その、そういう物を用意させて欲しいんだけど……」

最後の抵抗とばかりに放った言葉だ。

頼む、これで何とか状況を変えさせてくれ……っ!

「「必要ないから」」

「えっ!」

な、何だっつ?! ま、まさかまた悪意に三人して操られているのかっ!?

「もう用意してあるのよ」

「そういう事」

「は、恥ずかしかつたんだからね?」

そう言っつて翼が見せてきたのは、その、まっとう事なきアレの箱であ

る。

俺も実物をこんなに近くで見るのは初めてだ。

いや、たまにドライの荷物で見える事はあったけど、その時とは色々と考える事が違うもんだし、思わず手に取りまじまじと見つめた。

……極薄、か。これ、絶対翼が独断で買ったとは思えない。

だって翼の思考なら、薄いと丈夫じゃない。なら厚い方がいいだろう、つと、こう考えるはずだ。

「翼、誰に入れ知恵された？」

「え？ え、えつと、奏、から……」

「う、薄い方が気持ちいいんでしょ？」

揃って真つ赤になるツヴァイウィング。何て言うか、ここだけ見れば可愛いんだけど……。

「マリアは知ってた？」

「ど、どっちの事？ 薄いのが気持ちいいって事？ それとも」

「両方って言いたいとこだけど、翼がこういうのを買ってきてるって」

「し、知ってたわよ。私が翼に頼んで買ってきてもらったんだもの」

そして結局赤い顔になるマリアである。

だけど、少しだけ安心した。どうやら悪意に操られている訳ではな
いらしい。

……あれ？ その方が問題じゃないか、これ。

でもおかげで落ち着いてきた。

どうやらテンパってたから気付かなかったけど、思い出して見れば彼女達もそういう事は未経験な訳で、しかも俺と違ってそういうものへの耐性が低い訳で……うん。

これでいいようにされては年上の立場がない。

何せ相手は揃って可愛い処女だ。童貞と処女じゃ価値が違うらしいが、強さは童貞の方が上つてとこを見せてやる。

「そっかそっか。で、当然着け方も勉強したんだらうな？」

俺がそう聞くと三つの真つ赤な花が咲いた。ただ、それは勉強したからではないようだ。

「ん？ どうしたんだよ？ こういうのは女性がちゃんと知らないと

いけないんだぞ。男に任せると、わざと緩く着けて避妊の意味を無くさせる事が出来るんだ」

「「そ、そうなんだ……」」

うん、何だこの可愛い成人女性達。よし、ならこのまま三人への講習会な空気にしてやろう。

「そうだよ。ほら、一旦離れて。ちゃんと教えてあげるから。まず三人共、布団の上へ座りなさい」

言われるままに寝室へ移動する三人。いかん、笑うな。気付かれたら空気が不味い方向へ変わるぞ。

そう言い聞かせて俺は三人へ背を向けて椅子を引き出すと、背もたれを前にするように跨って座る。

「じゃ、いいか？ まず、避妊具を選ぶ際、大事な事があります。それは何ですか？ はい、マリア」

「えっ!? え、ええつと……大ききさ?」

「うん、よろしい。要は男性器の大ききに合わせる事だな。他にもあるぞ。はい、翼」

「ええつ!? え、えつと……め、メーカー?」

「まあ大事と言えば大事かも。他にはあるかい?」

「じゃ、じゃあ……あつ、色や匂い?」

「うーん……それは個人差みたいなものだなあ。でも、二つも意見を出したのは偉いぞ。じゃ、最後は奏」

「あたし!? てか、ま、まだあるのっ!?」

真つ赤な顔で自分の顔を指さす奏へ深く頷く。いや、正直俺ももう思いつかないけど、ここはハツタリを利かせる場面だと思った。

すると顔を赤くしたまままで考え始める。どうやら元々真面目な性格が功を奏してららしい。

気付けばエロい空気はどこへやら。今やドライデーヴァ相手に避妊具の勉強会となっていた。

で、どこか適当なところで切り上げて、もっと有耶無耶にしないといけないな。

そんな事を考えながら、俺はエロ漫画やら動画やらで知った知識を

さも熟知してますみたいな顔で話しているところである意味名案を
思い付いた。

「じゃ、ちよつと大人の散歩と行こう」

「「え?」」

「そういうの置いてる店、行かないか?」

この提案に、意外とムツツリだったらしい歌姫達は無言で小さく頷
いたのでした。

とりあえず、当面の危機は回避出来たな。

後はどうやってこの空気を持続させて有耶無耶にするか、だ……。

そんな事を考えながら俺は三人を連れて部屋を出る。向かう先は
駅。実家の車を借りようと思って。

この時の俺は知らなかったのだ。まさか両親に俺の現状がある意
味でバレているなどは……。

番外編 仮面ライダー編（クウガ）

「ただいま〜」

俺がそう声を出して戸を開けるとひよこつとエル達年少組とヴェイグが廊下へ顔を出した。

「二二「おかえりなさい（デス）」二二」

「ただいま。もうみんな揃ってる？」

その問いかけに五人が揃って頷いたのを見て、俺はならばと少しだけ急いで居間へと向かう。

そこには響達の姿と既に準備完了しているモニターとDVDプレイヤーと化したゲーム機がある。

とりあえず俺は手に持つてる荷物の中身をテーブルへ並べる事にした。

手羽先、天むす、味噌カツ、いろいろ、守口漬などなど、この地方の名物と思われる物を袋から取り出して置いていく。

「ししよー、これはてばさきデスカ？」

「そうだよ。前回と違う店のやつ」

「これは……何でしょう？ 串に刺さっていますが……」

「みそ串カツって書いてあるね。何のカツなんだろう？」

「これ、何だろう？ 翼さん、分かりますか？」

「竹の皮、だとは思うが……」

「見た目は和風な感じだな。弁当とかじゃねえのか？」

「こつちは……漬物かしら？」

「みたいだね。中身は見えないから気になるっっちゃ気になるね」

「これは分かり易いですよ！」

「書いてあるもんね、いろいろって」

「くんくん……微かに甘い匂いがするぞ」

俺がテーブルに物を置き出すとみんながその周囲へ集まってくる。

ヴェイグは未来に抱えられていて、それはそれで可愛い感じだ。

きしめんは以前食べたので今回は除外してある。

なら手羽先もと言うところかもしれないが、あの時約束した風来坊

という店の物を用意したのでこちらはOK。

「お待たせ。とりあえず今から食べられる物を食べてみてくれ。その竹の皮に包んであるのは天むすって言って小エビの天ぷらを乗せたおにぎりだよ」

どて煮は温めないと食べられないので後だな。

そう思ってる間にもみんなはそれぞれに食べ物へと手を伸ばしていた。

ただし守口漬に関してはまず洗う必要があるし、食べ易い大きさに切らないといけないので俺が支度を引き受ける事にした。

たまにはこういう事をしないと、いつもマリアや調に甘えるばかりなので良くないと思っただし。

「このおにぎり美味しいデス」

「うん、小エビの天ぷらとおにぎりがすごく合う」

「大きさも小さ目で食べやすいです」

「切歌お姉ちゃん、このおみそがかかった串も美味しいです！」

「甘辛く濃い味だが、だからこそ油ものに合うんだろうな」

「そうだな。悪くねえ。人によっちゃあソースよりも好きだろうぜ」

「手羽先もこちらの方が前回のよりもスパイス控えめよ」

「でもパリパリ感はしっかりあるし、これも完全酒のツマミだね」

「俺はこつちの方が好きだぞ」

「仁志さくん、このういろって最後ですか？」

「えっと、響？ どう見ても甘い物だから聞くまでもないでしょ？」

「そういう事。っと、よしこれでいいな」

切り分けた守口大根を器に盛って運ぶ。

「はい、これも良ければどうぞ。守口大根って物を使った一種の粕漬け、かな。エルやセレナ達は止めておいた方がいいかもしれない。かなり酒粕に漬かってるからな」

「って言われると食べたくなるのが人間デース」

「切ちゃんだけだと思っよう……」

我先にと箸を伸ばす切歌と若干呆れながら箸を伸ばす調。

本当に息ピッタリだな、この二人は。

「ならこの天むすと共にいただきますね」

「おつ、それいいね。漬物とおにぎりなら合わない訳がないし」

「そうね。じゃあ私も一ついただくわ」

ドライディーヴァは天むす片手に守口漬をパクリ。

「しつかり漬かつてるって感じだねえ」

「そうだね。匂いは若干お酒の匂いがする」

「甘い匂いでもあるな」

仲良しトリオも箸を伸ばし……

「エル、どうする？ 食べる？」

「ちよ、挑戦してみます」

「よし、なら俺も食べてみるか」

「ならエル達は一つを少しだけ齧るといいよ。ほら、これを齧ってごらん」

残った癒しトリオへは俺が一つ差し出して食べさせる事に。

まずはエルが齧り、次にセレナが齧り、最後をヴェイグがパクリ。

「……………変な味」

で、揃って微妙な顔をする三人である。可愛いな、ホントに。

見れば切歌と調も似たような顔だ。やはりまだ酒粕漬は早かったかもな。

「こいつは酒粕に一年以上じつくり漬けるんだ。だから結構アルコールが利いてて大人でも苦手な人がいるぐらいなんだよ」

「……………そうなんだ……………」

エル達だけでなく響や未来までも納得していた。

そんな訳で守口漬はドライディーヴァと俺で食べる事に。

ちなみにこいつは食べると飲酒運転になるらしいと言うと全員が驚いて、同時に納得もしてた。

ああ、そうそう。真つ先に無くなったのは天むすでした。さすがの人気である。

次に手羽先でほぼ同時に味噌串カツか。前者は年上組に好評で、後者は年下組に好評だった。

特に切歌とエルは、とんかつにみそだれをかけたものを丼に乗せる

みそかつ丼があるんだと教えたなら食べてみたいと言ったぐらいだ。

それとういろに関してでは三時のおやつにする事に決め、みんなへは鑑賞中に摘む用としてしてるこサンドとなごやんを提供した。

「兄様、これはビスケットですか？」

「まあそんな感じ。間に餡子が挟んであつて名前の通りの味だから食べてみて」

「こっちはおまんじゅう？」

「そうだよ。中は黄身餡で周りの皮が美味しいんだ」

お菓子となれば目がキラキラするのが年少組だ。

今もエルとセレナが主体になって質問しているが興味の強さは切歌やヴェイグ、更には響だつて負けていない。

「はいはい、みんな飲み物を持ってクウガの続きを見ましょ」

「つと、そうだ。俺が買物してる間でどこまで見た？」

「見てないよ。エル達が最後まで全部仁志先輩と一緒に見るんだってね」

「デスよ！ なので特別編つて奴を見ました！」

「ああ、あの一話と二話のディレクターズカットか」

母さんは本当にクウガにドハマリしていたので、嬉々として買ったんだよなあ。

あと新春スペシャルのDVDも買ってたけど、BOXはさすがに買わなかった辺りはしっかりしてるよ。

……俺もガガガのブルーレイBOX、買わなかったし。

「でも、びっくりした。思ってたよりも見た事ないシーンが多かった」「デスデス。だけど、ある意味納得デスよ。ししよだつてアタシ達の事を全部知ってた訳じゃないデス。なら、これがそういう事なんデスよね？」

「そうだな。俺がみんなの事を知ってるのはあくまで作品として作られた部分だけ。そこにはない……例えば学院での日常やレコーディング風景、ライブ前の苦労なんかはまったく言っていない程知らない」

今なら知らなくて良かったと思うけど、とは言わないでおいた。

みんなのプライベートをほとんど知ってるなんて嫌われていただろうしなあ。

「じゃ、クウガを見ようか。ここからは色々終わりに向かって動き出すから」

俺がそう言うのと切歌が意気揚々とゲーム機へと向かう。

さて、なら俺は解説や説明役へ回りますかね。

そして、いよいよクウガも終わり、か。果たしてみんなはどんな感想を抱くんだろう……。

「四号特別視の代償、か……」

始まりは、ポレポレの開店準備をする五代とみのりの会話から。兄を、クウガを心配するみのりの問いかけに五代が答えようとした時、店内のテレビから前回グロンギ怪人を倒した際の大爆発の影響が流れてきたのだ。

それはある意味でクウガへのバツシングなどでもあった。

シンフォギア装者はその存在を秘匿されているためこういう事とは無縁に近い。

だが、だからこそ思うのだ。こんな風を守ってきた者達から一方的に攻められる事が心優しい者にどう響くかなど。

「五代さんは、みんなの笑顔のために頑張ってるだけなのに……」

「セレナ、だからって何でも許される訳じゃない。それに、クウガが五代雄介と知ってる人の方が少ないんだ。なら、クウガは人間に味方するかもしれない怪物と考えてる方が普通なんだよ」

「やりきれないわね。今回の事だって彼は嫌な予感を感じて最大限の配慮はしたのに」

「まったくだぜ。死者が出なかつただけでも御の字だろ」

何故クウガがここまで力を得たのかを振り返る総集編も兼ねた展開となり、誰もがそのダイジェストとも言えるクウガの苦戦と奮闘の流れを見て表情を苦しそうなものへ変えた。

以前はカツコイイと感じたライジングフォームも、その背景と現状を考えれば素直に喜べない事に気付いたのだ。

強すぎる力を使わねば倒せない相手。どんどん凶悪に、残虐になっていくグロンギの手口。

更にその倒した際の爆発までも無視できない威力となってきた事。全てがクウガにとつてのマイナス要素でしかなかったのだ。

「ただ戦って倒せばいい段階を過ぎてしまったのか……」

「しかもだ。相手のルールを解明して先回りしないといけないってのも追加されてる。これ、あたし達に置き換えたら……」

「心がすり減るわよ。だつてもつと早く解き明かせれば犠牲は減らせたつてなるもの」

「それだけじゃないぜ。倒す際の事まで考えねえといけないんだ。あたしらはおっさん達がいるからまだマシだけど、それをもし一人でギリギリの戦いをしながら考えろつて言われたら……」

クウガは戦いの場では一人きりと言えた。一条刑事という支えはあるが、彼とてグロンギ怪人との戦いに巻き込みたくないのが五代の想いだ。

故に戦闘が激化すれば五代はたった一人で色々な事を考えないといけない。一条もサポート出来る事は限界がある。

今まで二人三脚でやってきた戦いも、互いの力だけではどうにもならないところまでできていると、そう響達は感じ取っていた。

「ししよー、これからどうなるデスか？　けーさつはクウガと協力してくれなくなるデス？」

「そんな事はないけど、クウガを味方として考える論調は小さくなる。ただ、それは上層部であり現場の、クウガと関った事のある人たちは違う」

「そっか。杉田刑事はクウガに直接助けられています」

「それだけじゃない。同僚の警察官達だつてクウガがメビオを倒すところを見てる。しかもその後彼らへ危害を加える事なく去つた事もね」

「分かりました！　クウガを本当に支えている人達は今回の事で黙つてないって事ですわね！」

「響正解。そしてその現場の声を上層部に届けられる人が対策本部に

はいる。しかもその人はこれまで一条さんへ理解を示してきた人でもあるんだ」

クウガへの世論が厳しさを増す中、いよいよ次のゲゲルが始まろうとしていた。

その実行者はバツタ怪人でもあるゴ・バダー・バ。そのルールは……

「鉄の馬から引き摺り下ろして……」

「ひき殺す……」

「つまりバイクに乗ってる奴が狙いか」

「それってクウガもって事じゃない？」

「成程な。邪魔者さえもその気になったら数に入れられるってか」

そして遂に始まるバダーのゲゲル。そのやり口は残虐極まりないもので、見ている響達が辛そうな顔を浮かべていく。

そのルールも早々に判明したもののバダーは警察が手を打つ前に犠牲者を増やしていく。

それがクウガとのバイクバトルへと発展した時、思わず全員が声を上げた。

「おおっ！ 凄い事になったデスよっ！」

「クウガも凄いけど怪人も凄い……」

「これ、実はバイクトライアル選手の兄弟がやってるんだ。クウガが兄でバダーが弟。世界で活躍してた二人だから腕前はご覧の通り」

「翼、どう？」

「……っ!? そんな方法でバイクの向きを変えるのっ!?」

「あー、もうダメだ。先輩は画面に夢中らしい」

「カツコイイなあ。バイクであんな事出来るんだ」

「絶対五代さんの技の一つはバイクアクションだよね」

仮面ライダーの名に恥じないバイクアクションの応酬。

海岸近くの岩場で展開される激しいバイクバトル。

だがそこで恐れていた事が起きてしまう。

「あっ！ トライチエイサーがっ！」

クウガのバイクであるトライチエイサー2000が、ゴウラムとの

融合による金属疲労やこれまでのダメージなどで機能を停止してしまっただ。

動かなくなったトライチエイサーを見つめ五代が何とも言えない表情を浮かべるのを見て、響達も同じような顔をしていた。

「トライチエイサー……頑張ってくれましたからね」

「デスよ。ゴウラムとの合体が負担になってるって言われてたデスしね」

「時には怪人の攻撃で傷付く事もあったし、お休みさせてあげる時なんですけどね」

「だが今はよりもよってバイクを使う怪人が相手だ。このままじゃクウガはあいつに追いつく事さえ出来ないぞ」

本来ならばクウガの手に渡るはずの新型専用バイク、ビートチエイサー2000は未だ上層部判断によりその授与を止められていた。

このタイミングで力になれない事を悔やむ一条へ、五代は何とかしてみせると明るく返す。

その笑顔と気遣いに一条は何とか力になろうと動き出す事となるのだ。

「どんな時も前向きに、か。本当にヒーローって強いわね」

「しかもヒーローだからこうじゃないんだよな。こういう事を言える、出来るからヒーローなんだからね」

機動力を失ったクウガを嘲笑うようにバダーはゲゲルを進めて被害者を増やしていく。

そんな中、一条は科警研へと向かいビートチエイサーを接收しようとする本庁の人間と対峙し、自分出来る事をとの思いで説得を開始する。

同じ頃、対策本部の本部長である松倉は、上層部相手にビートチエイサーの引き渡し停止の報告を行うと同時に一警察官としてその想いを吐露しようとしていた。

「おおっ……本部長さんも一条さんも熱いデス！」

「みんな、クウガを、五代さんを助けようとしてくれてるんだ……」

それは彼女達には風鳴弦十郎達を想わせた。

時には組織に逆らっても現場で命を賭ける者達の代弁をし、その便宜を図ろうと戦う姿はそういうものだった。

一方五代は量産型であるトライチェイサー2000Aやゴウラムを駆使して対抗するが、やはりバダーの速度には敵わず絶望感が漂い始める。

「速い……」

「仁志さん、ゴウラムの飛行速度って知ってます?」

「時速500キロで、クウガが掴まってる時は時速250キロぐらいだったかなあ? まあ、その速度で動きながら圧縮した空気弾を放ってるんだよ。それをおそらく風の流れだけで察して回避するんだからバダーの恐ろしさつたらないよ」

「ホントにゴの集団は化物ぞろいって訳か……」

一条の説得を聞いた本庁の人間は一瞬彼の言葉を一蹴するかに思われた。だが、その手に持っていたビートチェイサーの起動キーが入ったアタッシュケースをその場へ残し、警察組織のために何が正しいかを考えた結果だと言い残して去っていく。

「カツコイいなあ、この人達も」

「うん。この人達も警察官なんだね」

「力無き人達を守る。それが警察の使命だ。その正義を彼らも胸に持っている、そういう事だな」

その裏では警察による必死のバダー誘導策が実行されていた。

全ては被害の少ない場所へ誘導し、五代に、クウガに全てを託すという作戦だ。

パトカーでそこへ向かう五代と杉田刑事だが、何かに気付いて五代が後ろへ振り向き車を止めさせる。

車を降りた二人が見たのは、陽炎の中を突き進んでくる一台のバイクとスーツの男性だった。

それはビートチェイサーを駆る一条だったのだ。

「す、スーツでバイクに……」

「それ程急いでたんでしょうね」

その姿が一条の手によって本来のものへと変わった瞬間、全員が感

嘆の声を漏らした。

「「「「「カッコイイ……」」」」」」

「トライチェイサーにもあつたマトリクス機能だ。解除パスコードは五代さんの誕生日らしい」

その姿を見た五代もならばとその場で変身。

一条によつて届けられたビートチェイサー。託される想いと願い。それらを受け取り、五代はクウガとなった。

初めてクウガへの変身をその目にした杉田刑事から思わず感嘆の息が漏れる。

サムズアップを見せ、クウガはビートチェイサーに跨るとバダーの追跡を始めた。

その速度はあつという間にバダーに追いつき、追い越す程のもの。それに対抗心を燃やし、バダーがマシンを加速させるも速度はビートチェイサーの方が上。

それでも喰らい付こうとするバダーとクウガによる激しいチェイスが展開される。

「すげえな……」

「でも負けてない。だってビートチェイサーはクウガ専用なんだよ。それに、未確認からみんなの笑顔を守りたいって警察の人達の想いと願いが込められてるんだから」

「そうだな。疾風かぜよりも速く駆けるのが仮面ライダーだ」

「あつ、クウガがウイリーをしましたっ！」

白熱のデッドヒートはクウガがアクセルを解き放ち、バダーを突き放す事で終わりを迎える。

何とか追従しようとするバダーだったが、最高速の違いは埋め切れずそのまま完全に姿を見失ってしまった。

「「「「「やったあ！」」」」」」

「仁志さん、ビートチェイサーの最高速ってたしか……」

「時速420キロ」

「うひゃあ、そりゃ速いわけだよ」

「それを制御出来るのはクウガだけ、か」

「仮面ライダー、ですからね」

そしてその時は来た。

最高速だったビートチェイサーに急制動をかけ、パラシュートを展開させての急減速を行い、クウガは静かに地面へ足を着けるとただ正面を見つめる。

やがてゆっくりとその視線の先にバイクを駆るバダーの姿が見えてきた。

相手との距離が必殺の間合いになるのを計るように若干待ち、クウガは全身に電流を走らせライジングマイティへと変わる。

「くるよ。クウガの中で一番かっこいいライダーキックが」

そのままキックの前準備として構え、向かって来るバダー目指してクウガは走り出した。

その足に感じる熱を踏みしめるようにしてクウガは走る走る走る。

——うおりやあああああっ!!

繰り出されるライジングマイティキックが見事バイクに乗ったバダーを蹴り飛ばして地面を滑らせていく。

何とか勢いを殺して立ち上がるとバダーはまだ戦えるとはばかりに歩き出す。クウガはそれに慌てる事もなくその場に佇むのみ。

やがて封印の文字がバダーの体へ作用し爆発させる。

爆発の規模を考えての誘導により、見事人的被害もなく周辺への被害も最小限へ留まった。

まさしくクウガと警察の連携による勝利。そしてこれが今後のクウガの戦い方の基本となるのだった。

「いやあ、最後のキックカッコ良過ぎるデスよっ!」

「やべえよな。分かってるのにゾクゾクしたぞ」

「あれだけ苦戦した相手も、力を合わせる事で勝利する。クウガだけでも、警察だけでも勝てない相手にも、双方が力を合わせる事で勝ち目は見える、か」

「連携とは良いタイトルだね。まさしく連携の勝利だし」

「三話連続のバダー、だったかしら。その怪人回だけど、仁志が言ったようにターニングポイントだと思ったわ」

「そういえばタダノ、あの怪人の変身ポーズ、一号と似てないか？」
「おおつ、よく気付いたなヴェイグ。赤いマフラーもそれをイメージ
というか、オマーージュしてるんだよ」

そこから始まるちよつとした寄り道的小話に響達は小さく感心し
た。

どうしてそういう事をやったのかという背景までも仁志は話した
からだ。

だが、バダーを倒した後に続く話は先程までの雰囲気を一気に嫌な
ものへと変えるような展開となる。

緑川高校という場所の二年生男子だけを狙うという、今までにない
ルールでのゲゲル。

しかもその手口はどのような方法でも見つからず、取り除く事も出
来ない針を打ち込み、四日後に殺すという陰湿極まりないものだった
のだ。

「酷い……っ！」

「今までで一番苛立つやり方と相手だよっ」

「わざわざ煽りにきて、苦しみ死ぬのを見るのが楽しいって……っ！」

彼女達が今まで相手にしてきたどんな相手よりも残虐非道で陰湿
なゴ・ジャラジ・ダ。

だが、仁志はポツリと呟く。

「でも、似たような思考や趣味をしている人間もいる。人が苦しんだ
り困るのを見て楽しそうに笑う奴は。それでも、そんな存在でさえも
命懸けで守るのがヒーローであり自衛隊や警察関係者に医療従事者
だ」

「お兄ちゃん……」

「例え死んで当然な存在でも、そいつを見捨てたら、見放したら、自分
まで最低な人間の仲間入りだ。俺は、そうヒーロー達から学んだ。勿
論君達からも」

「兄様……」

「優しさは強さだ。それはそういう事でもあるんだってね。みんな、
このジャラジ回の二話はクウガを語る上で外せない部分だ。俺はこ

れを見たからこそ、ヒーローも人間なんだって心に刻む事が出来たんだから」

ゲゲルはその方法もあってか成功してしまう——かに思われたが、死の恐怖から一人が自殺してしまい、ジャラジは転校してきたばかりの生徒を最後の一人とするべく動き出すのだった。

ここにきて、響達の口数が減った。いや、減ったではない。なくなった。

誰もが悲痛な表情を浮かべ、画面から目を逸らしたい衝動に駆られていた。

ノイズに怯える人々よりも、四日後という明確な期限を示されて死と強制的に向き合わされた存在が見せる恐怖と不安、その心情の吐露は胸に、心に響いたのだ。

——何で俺達殺されなきゃなんないんですかあ……。

——理由なんてないよ。だから……殺させない。

そんな絶望しそうな少年へ五代がかけた言葉に誰もが息を呑んだ。どうして自分達が怪人に殺されなきゃいけないのかという言葉への、真正面からの断言であり約束だった。

「五代さん……」

「そうだ。相手が何であろうと殺されていい命などない。理由などあろうとなかろうと、だ」

「ああ、どんな悪人だろうがそのけじめは法の裁きつてもんでつけるべきだ。暴力なんかで終わらせるのは、獣や化け物のやり方だぜ」

ただ、そんなやり取りがあっても響達の心は沈んでいた。

やがてジャラジが少年のいる場所へ現れ、陽動を仕掛けて護衛を引き離していく。

その毒牙が眠る少年へ迫る中、クウガが間一髪助けに来てもそれでも彼女達の心は完全には晴れない。

もし、自分達がジャラジのような敵と出会ったらどうすると、そんな有り得ないと言い切れない事を想像しながら響達が見つめる画面の中では、クウガがジャラジヘトドメを刺すシーンが流れていた。

「……………」

そこで、彼女達は見るのだ。漆黒のクウガが炎の中で動いているのを。

まるで闇の化身のようなそれに、マリアと未来、エルフナインやヴェイグ以外は思い出すのだ。

そう、かつて仁志が言っていた言葉をだ。

——アマダムが警告として見せる黒いクウガとか。

その言葉を思い出して仁志へいくつもの視線が向けられると、彼は画面を見つめたままこう告げた。

「聖なる泉枯れ果てし時、凄まじき戦士雷の如く出で、太陽は闇に葬られん」

「それが……さっきのクウガって事ですか？」

「ああ。聖なる泉は優しい心。あの瞬間の五代雄介は、優しさを失い憎悪に突き動かされていたんだ。それを感じ取ってアマダムが見せたのさ。そのままじゃお前はこうなるぞって」

「憎悪に突き動かされて……」

「どうして仮面ライダーは怪人とは違うのか。それは気高い人の魂があるからだ。そこにはこういう意味もある。優しさを失わない事だ。どれだけ残酷非道な行為を目の当たりにしても、その怒りや憎しみをそのままにせず、犠牲者への祈りや平和の誓いへ変えて力と成せる。だからこそ彼らは欲望のままに動く怪人とは違うんだ」

そこで仁志は息を吐いてその場の全員へ少し疲れた笑みを見せた。

「少し、休憩にしよう。ちよっと早いけどさ、みんなでいろいろを食べようじゃないか」

思っていた以上にジャラジ回はみんなの心にダメージを与えたらしい。

俺も覚えるてはいたけどくるものはあつたし当然か。

エルやセレナが俺の服を掴んできたし、切歌や響も俺の手へ手を重ねてきていたぐらいだ。

「ほい、ぶっぶっ」

食べやすい厚さに切った白ういろと黒ういろが載った皿へ爪楊枝

を持った手が一斉に伸びる。

俺はそんなみんなを見つめて反応を待った。

「あく、甘くて美味し〜」

「デスデス。ねっとりしてるデスけど、これは？」

「ういろは米から作ってるんだよ。だから粘り気があるんだ」

「こつちの黒いのはどうやってるの？」

「そつちは黒砂糖が入ってるんだよ」

「ヴェイグさん、どうですか？」

「俺は黒い方が好きだ。でも白い方も美味しいぞ」

良かった。甘い物のおかげで少しだけみんなに明るさが戻ってきた。

クウガはここからどんどん残忍なゲゲルが続く。その中でもトツプクラスに酷いのがジャラジの一件だからな。

次の鬼門は……ジャザーザかな。ガドルに関しては何しろある意味で納得しそうだし、バベルは……怒りや憎しみよりも驚きが先に立ちそう。

「そうだ。なごやんはどうだった？」

「アタシは好きデスよ。ししよーの言う通り皮が美味しいデス」

「うん、美味しかった。中のアンコも好き」

「しるこサンドは、何というか新鮮な味でした。不思議と言ってもいいかも」

「うんうん。たしかにおしるこの味なんだよねえ」

「でもサクサクするんだよね。妙な感じだけど、美味しいとは思わずに意図的にかもしれないけど切歌が率先して明るい声を出してくれる。

それに周囲も合わせるように明るく感想を述べてくれて、やっと場の空気が軽くなってきた。

「そういうえば、今日のお昼はどうするの？」

セレナの問いかけで全員の視線が一斉にマリアへ注がれる。

まあこういう集まりの際は最終決定権はマリアにあるので仕方ない。

「何よ、みんなして」

「いやいや、ここはあたし達の母親役なマリアの意見を聞こうと思つてさ」

「だから、そういうの止めて。エルやセレナならともかく、翼や奏の母親役なんて受け入れられないから」

「それは置いておくとしてもだ。マリア、昼食はどうする？」

「……仁志、意見は？」

「俺？」

まさかのこちらにお鉢が回ってきた。

昼飯、ねえ。内外食つてのは面倒だし、前回のクウガ鑑賞会はホットプレートを使つての焼きそばやお好み焼きだったし、何か楽しくて安上がりな物は……あつ！

「餃子はどうだ？」

「「「「「「ぎょうざ？」」」」」」」」

「そう。で、基本の餡を作つて、包む時にそれぞれ一っだけ追加材料を入れるんだ。自分以外は誰が何を入れたか知らない状態で品評会をするつてのはどう？」

「面白いデス！ アタシはサンセーデスよっ！」

「僕も賛成します！ 楽しそうです！」

「私も！ ヴエイグさんも今回は一緒にお買い物に行きましょう！」

「それはいいが、俺の手でやっても大丈夫か？」

「そこは心配いらないよ。餃子を包む器具が百均で売ってる。それを使えばほとんど触らないで餃子が包めるんだ」

「そうか。なら俺も賛成するぞ」

ヴェイグが賛成した以上反対者などいるはずもなく、ならばと気分転換も兼ねて全員で買い物へ出かける事に。

ただ俺はスーパーの後で百均へ行く事になっていた。ヴェイグ用の餃子包み器を買うためだ。

全員でぞろぞろとスーパー目指して歩き出す。

先頭は切歌と調にエルとセレナ。そのすぐ後ろを響とクリスに未来が歩く。俺は後方でドライディーヴァの少し前。

「基本のあんつてどういう物ですか？」

「調、どーゆー物デス？」

「えっと、豚ひき肉に白菜とかニラとかを混ぜる？」

「白菜の代わりにキャベツでもいいよ。あたし達はそれでやったけど美味しかったしね」

「要するにご飯のおかずになる物で考えて欲しいって事ですね。エル、分かった？」

「はい」

もう本当の姉妹と呼べるようなセレナとエルである。

心なしか二人を見つめるみんなの眼差しも優しい。

スーパーへ入るとカゴをマリアが持つて、年少組が四人固まって動き出す。

響達は……三人で行動か。もうこの光景も見慣れてきたなあ。

「さてと、何を入れようかね？」

「仁志さん、もし誰かと同じ物になったらどうするの？」

「それならそれでいいと思うよ。要は話題になればいいんだ。美味しい食卓の要素は明るく楽しい事だしな」

「そうね。じゃあ、私はカゴに入る物を見ないようにするべき？」

「あゝ……そうだな。そうしてくれ」

会話がまるで夫婦のそれだなと、そう思いながら俺はマリア達と別れてスーパーの中を歩き出す。

一体何を入れようかなあ。と、そこで閃く思いつき。

きつとみんな具材を入れる方向だ。なら、俺は具材じゃなくて調味料やスパイスにしよう。

「そうなる……」

目指すは香辛料などが置いてあるだろう場所だ。

色々考えると液体じゃない方が望ましいし、残っても別の物に利用出来る方がいい。

ズラリと並ぶスパイスの数々を眺め、俺は目的の物を見つけた。

「あったあった」

それはズバリカレー粉。以前クリスが俺のために作ってくれた炒

め物はカレー粉が良い仕事をしていたし、これなら残っても色んな用途がある。

今の調やマリアならこれを使ってカレーを作る事もしそうだし、これなら手軽に違う味へ餃子を変えられるしな。

出来るだけ値段の安い物を選んでマリアの下へ。

彼女は普通に餃子用の野菜を選んでいるようで今は白菜を睨むように見つめていた。

まだ若干高いからなあ、白菜。

「マリア、いつそキャベツって手もあるぞ」

「……美味しいの?」

「甘味は白菜よりも出るから好きな人は好きだよ。この辺りで人気の餃子もキャベツを使うって聞いたし」

「そうなの? じゃあ……」

あっさりと白菜から手を離してキャベツへと向かうマリアを見ると、本当に彼女が根幹世界では世界の歌姫と呼ばれているんだろうかと思ってしまう。

今なんて真剣にキャベツを手にして、どれが一番良いかをプロのような眼差しで見つめているぐらいだ。

けど、そんな横顔はやっぱ美人で、彼女が二つの意味で俺とは違う世界の住人だと思わせてくる。

「これにしましょう。で? 一体どうして戻ってきたの?」

「え? あ、ああ……俺の入れる物を決めたからカゴに入れようかね」

「そういう事ね」

キャベツをカゴに入れるのを見て、俺はふとある事を思い付いた。

「なあマリア。昼夜兼用にしないか?」

「はい?」

「その、餃子を沢山作っておいて、昼は焼き餃子で夜は水餃子やスープ餃子にするんだよ」

「……まあ手間は省けるし、調理法が変われば飽きもしないだろうけど……」

「そうだ。なら春巻の皮も買っていこう。それならどうだ?」

「あら、いいわね。なら春巻は海鮮にでもしようかしら」

「おおつ、いいじゃないか。じゃ、俺は春巻の皮探してくる」

「じゃあ私は春巻用の具材を選んでおくわ」

俺は持っていたカレー粉をカゴへ入れると笑顔のマリアと別れ、精肉コーナーへと向かう事にした。

往々にして餃子や春巻の皮は豚ひき肉の上辺りに置かれている事が多いからだ。

「おおつ、あつたあつた」

目当ての物を発見し、春巻の皮を手取る。

ついでに餃子の皮も手に取り、そこで気付いた。

「……餅粉入りの皮、かあ」

そちらはきつと水餃子やスープ餃子にしたら美味いだろう。

と言う事でそれも手を取ろうとしたところ……

「あれ、仁志さん？」

「何だ？ 春巻の皮あ？」

「餃子じゃないんですか？」

響達仲良しトリオに声をかけられた。

手には何も持っていないので既に選び終えてカゴへ入れてきたのか、あるいはまだ決めてないかのどちらかだろう。

「実は……」

さつきマリアと話した事を教えると三人は納得するようにある事を教えてくれた。

どうやら選んだ物をカゴに入れに行ったら、マリアが春巻の材料をエルにスマホで検索してもらっていたらしい。

最初は春巻のような具材の餃子を作るのだろうかと考えたそうだが、俺の話聞いて理解出来たと苦笑したのだ。

「それにしても、昼も夜も似た物で済ませるたあ……」

「完全考え方が楽をしたい人だよな」

「マリアさんも只野さんに影響されてるんじゃない？」

「否定はしないよ。俺からの提案だしさ」

「兄様」

そこへ聞こえる可愛い声に顔を向ければ、そこにはヴェイグを両腕で抱えたエルがいた。

ちよつとだけ小走りで駆け寄ってくる様は何とも言えない愛らしさがあるな。

「エル、どうした？」

「はい、姉様が揚げ餃子を追加したいと」

「ああ、春巻で油を使うからか」

「みたいです。なので揚げ餃子にも何か案を欲しいそうです」

「ならピザ風にすればいい。トマトソースとチーズならあとに何を入れても大抵の物がマッチするはずだよ」

「美味しそう……」

「揚げた皮の中からアツアツのトマトソースと溶けたチーズ……」

「止めろって。想像してよだれ出てくんだろうが」

「エル、マリアのとこまで案内よろしく」

「分かりました」

俺が両手に餃子や春巻の皮を持って歩き出すとそれにつられるように響達も動き出す。

エルの先導に従って歩けば既に全員集合していた。

カゴは結構色々な物が入っていて重そうだけど、それを平然と持っている辺りにマリアの筋力が俺よりもある事を如実に示してる。

「じゃ、これでよろしく」

「ええ」

マリアへ一万円を渡して俺はスーパーを後にする。

ヴェイグ用の物を買うついでに何か珍しいお菓子がなか探してみるか。

そうやって外へ向かおうとすると俺の後をついてくる愛らしい存在がいた。

「ししよー、アタシ達も一緒に行きますデスよ」

「兄様、ダメですか？」

見た目だけならセレナやマリアよりも姉妹らしい組み合わせだ。

なので構わないと言うように笑顔で頷いた。

それに切歌とエルが嬉しそうに笑って俺の両隣へと移動してきたので手を繋ぐ事にした。

三人なら手を繋いだ方が周囲の目は誤魔化せるのだ。

それに切歌とエルなら見た目も相まって姉妹らしさに溢れてるの
で、こうして手を繋いでおくと俺は完全親戚のおじさんで見られると
言う訳だ。

「切歌お姉ちゃん、何か買うつもりですか？」

「うーん、どうしようかなって思ってるデスよ。ししよーはどう思う
デスか？」

「そうだなあ。正直ここから重たい展開が多いから甘い物を用意して
おこうかなとは思ってる」

「重たい……」

若干不安そうな声を出す二人を見て、きつと他のみんなも似たよう
な感想を抱くだろうなと思いつながら歩く。

重たい気分になるかもしれない可能性を考慮すると、甘さが強め
のお菓子を選ぶべきだな。それもくど過ぎない物が望ましい。

そんな事を考えながら俺は切歌とエルを連れて百均へと向かう。

ちなみに、二人の表情は店へ入ってお菓子コーナーに着いた瞬間眩
しいばかりの笑顔へ戻った事を記す。

餃子作りとその味を楽しんだ仁志達はクウガの鑑賞会を再開して
いた。

あれだけの一件の後、五代雄介達が直面したのは人が王水以上の酸
で溶かされるといふゲゲルだった。

その犯行場所も最初こそタクシー限定と思われたものの、タクシー
の営業を自粛した直後別の乗り物でその殺害は続いたのだ。

「今度は溶かすなんて……」

「これ、ギアでも溶けるんだろうなあ」

「おうすいつて何？」

「金さえも溶かす酸性の液体、だったかな？」

「はい、間違ってます。おそらく耐えられる生物は存在しないかと」

「ブルブルっ……恐ろしいデス」

そんな中、ズ・ゴオマ・グの暗躍が始まる。

これまでも怪しげな動きをしていたゴオマだったが、ここにきてその体に明らかな変化が出たのだ。

しかもあれだけ貧弱だったはずの身体能力が、ゴの怪人やクウガを相手にしても引けを取らないレベルにまで上がっていたのだから響達の顔にも驚きが浮かぶというもの。

「髪の毛が生えただけじゃないデスか!？」

「な、何だか強くなってるねえか？」

「こ、ここにきて意外な展開過ぎるよっ!」

「もしかして、これって以前体に取り込んだ何かの影響?」

以前の話でゴオマは自分の体へ何かの破片を取り込んでいたシーンが存在していた。

それをマリアは覚えていたのである。

そしてそんな異常な強化を見せたゴオマを圧倒してみせる存在が出現する。

ゴ集団のトップであるゴ・ガドル・バだ。

カブトムシをモチーフとする彼は、そのデザインや強さから強敵の風格が漂っていた。

「カッコイイデス……」

「か、怪人なのにヒーローみたいな感じです」

「クウガのモチーフはクワガタ。対するガドルはカブトムシ。対になってるんだよ」

「立ち振る舞いから只者ではないと思っていたけど、まさかここまでなんてね」

「きつと最後に立ちはだかるのはこいつだな」

桜井のメモから五代はゲゲルのルールを解明。

何と今回は乗り物とその使われている色でローテーションしていたのだ。

最初の被害者のタクシーの色から順番に考えていき、判明した色合いと合致する乗り物は電車。

「やっと判明したデス」

「あのネイルの色がルールだったんだね」

遂に本格的戦闘を開始するクウガとゴ・ザザル・バ。

その強酸性の体液に警戒しながらも桜井達が一瞬の隙を突き、ザザルへその体液を中和させる効果を持った弾丸を使用した射撃を行い、そこへクウガのマイティキックが炸裂する事で形勢はクウガ優勢へと傾く。

「相変わらず警察の人達のナイスアシストっ！」

「クウガの危機を何度も救ってくれますねっ！」

「クウガ一人じゃ守れないし負けてたかもしれないと痛感するぞ」

「みんなで出来る限りの無理をする。それを警察の人達もやってるからだろうね」

「地味に拳銃を渡す辺りもポイント高いよな」

「怪人の特性的に直接攻撃は不向きと察しているからだろう」

「一条刑事以外にもクウガの事を熟知し出しているって事ね」

ザザルをある程度弱らせた事でビートゴウラムのカウルへ乗せる形で移送を始めるクウガ。

選ばれたのは酸性の体液を撒き散らしてもいい密閉空間に出来る地下倉庫。

杉田刑事達が待ち構えるそこへクウガが到着。通信機を使い、シャッターを下ろさせるやペガサスへと変わり、ふらふらとしているザザルへビートゴウラムで接近しつつライジングフォームへ変化するやライジングブラストペガサスを叩き込む。

そして素早くターンしつつマイティフォームへ戻るとビートゴウラムで来た道を急いで戻り出す。

一枚目のシャッターを通過し、二枚目も何とか通過していくクウガ。

「ま、間に合うデスカ?」

「クウガ、急いでっ！」

最後のシャッターが下り切る寸前で車体を傾けて潜り抜け、ビートゴウラムを停車させてクウガが振り返ると同時に下り切ったシャッ

ターが内側からの衝撃で変形する。

「間一髪、だな」

「痺れるねえ。あの冷静だけど大胆な判断。ホント、ヒーローって感じじゃん」

「で、でも三枚もシャツターがあるのに最後のシャツターが爆発で変形するなんて……」

「ホントに凄い威力なんだね……」

「響達はフロンティア事変の最後を覚えてるだろ？　ゴの怪人と戦うって事は、あのネフィリムを倒す時の心配を常にしないといけないうって事だよ」

仁志の例えに響達六人の装者が息を呑み、話だけは知っている未来とエルは目を見開き、まったく知らない奏達三人が首を傾げた。

画面では、クウガが使っていた拳銃を杉田刑事へ返して別の現場へと動き出していた。

そう、実は同時に究極体となったゴオマが別の場所で暴れており、警官の被害者が増えていたのだ。

「い、今のゴオマの強さは異常です」

「残虐性も高くなってるような気がするよね……」

「太陽光が効かないって時点でヤバいと思ってたけど、あれ、下手したらライジングフォームでも勝てないんじゃないかねえか？」

「ダグバの力を取り込んだって言ってたわよね。じゃ、第0号はあれ以上の強さって事？」

マリアの言葉に全員が息を呑んだ。何せゴオマの弱さはよく知っている。

それが最強集団であるゴの怪人達と戦えるレベルまで強化され、今などその体が明らかに別物へと変わっていたのだ。

「みんな、あのゴオマの体に見覚えはない？」

そんな中で仁志が問いかけた質問にほとんどの人間が疑問符を浮かべる中、エルフラインが目を見開いた。

「そ、そんな……で、でももしそうだとしたら……」

「エル？　どうしたの？」

「似ているんです！ あの黒いクウガの体と、今のゴオマの体は似ているんですっ！」

まさかの発言に誰もが目を見開いていた。

黒いクウガとは凄まじき戦士を意味する。クウガが優しさを失った時になってしまふ、禁断の姿。

それとゴオマの体が似ているという事が意味するのは、ダグバとクウガは同質の存在だと言う事に他ならないからだ。

「ひ、仁志さんっ！ どういう事ですか!？」

「く、クウガはライダーなん德斯よね!? ど、どうして怪人のボスの力が凄まじき戦士と似てる德斯かっ!」

「4本角の戦士の文字とダグバが残したと思われる署名の文字は酷似してるって事、覚えてる?」

「まさか、戦士という文字は本当にグロンギのもの?」

「俺が以前クウガとBLACKの共通点を話しかけた事、覚えてるかい? あの時しなかった事を今こそ話すよ。キングストーンは太陽と月の2つでそれを取り合う事で創世王を決める。一方クウガではこんな言葉がある。黒き闇と白き闇。黒い方がクウガで、白い方がダグバだ」

絶句。それが響達全員の反応だった。

既にBLACKがどういう展開と内容だったかを把握している彼女達にとって、仁志の話はクウガの本質も闇であり、尚且つ敵対する存在と同等の存在だと理解出来てしまったのだ。

「凄まじき戦士を意味するクウガの古代文字だけは4本角。そしてダグバの署名も4本角。戦士の文字はリントが考えたのではなくグロンギ由来だとすれば、もう分かるだろう? リントはクウガがダグバと同じか類似する存在だと知っていた。あるいは知った。ではそれはどうしてだ?」

「凄まじき戦士になったのね、古代のクウガは」

「おそらくね。その姿を見たリントが凄まじき戦士の文章だけ文字を変えたんだと思う」

画面の中ではクウガをあっさりと圧倒してみせたゴオマがダグバ

の名を呼びながら移動し、最後には人間体での無残な姿で屍を晒すラストが流れていた。

誰もが言葉を失っていた。その頭の中には「戦うためだけの生物兵器」という言葉が浮かんでいるのだ。

誰よりも笑顔が好きで、青空が好きで、冒険が好きで五代雄介。そんな彼がみんなの涙を見たくないし決意し覚悟して手にした力が、やりにもよってその涙を流させる存在と同じであるという事実が重くのしかかっていた。

「それって、私達で言ったらギアがノイズから出来てるって感じですか?」

「そう、だね。あるいは、使用し続けて制御に失敗すればノイズになる、とかかも」

「やりきれねえ……。やりきれねえよ。それでも、大丈夫って、そう言うんだよな、あいつ」

「心強い者だけがヒーローになれる。その言葉の意味を痛感しました。こんな、こんな事とは……」

「仮面ライダーって、本当に重たい称号なん德斯ね。ししよーが好きなの、分かる德斯」

「カッコイイだけじゃない。その裏に人に言えない辛さや苦しさを隠してる。だけど、みんなには笑顔を見せて生きてる」

「ウルトラマンもスーパー戦隊もそうでした。ヒーローは、必ず秘めた苦しみや辛さがあります。でも、それを言い訳に悪い事をしたりはしません」

「きつと、そこがヒーローか悪者かの違いなんだよね。力に善悪はないってお兄ちゃんが教えてくれたけど、そういう事なんだ」

「私達も、分からないでもないわ。ギアも超常の力よ。誰でも使える訳じゃない。それに、使い方次第では容易に悪となれる」

「まさしく壊す者と守る者、だね。あたし達は守る者で居続けられるといいんだけど」

「俺は大丈夫だと断言してやる。セレナ達なら、必ずヒーローのままでいられるはずだ。その心は、魂は、気高いままでいられるはずだ」

暗いはずの話題でも、それでも最後には明るさを、希望を感じさせるように出来る。

今のヴェイグは仁志に負けず劣らずのポジティブシンキングをするようになっていた。

上位世界で見聞きした事や響達との関わりで感じ取った事。それらが彼の本質であった光を甦らせていた証拠であった。

「そうとも。いつだって力を振るう事に疑問を抱き、それでもみんなの笑顔のために戦おうと出来るなら、きっと大丈夫っ！」

最後に仁志が言葉と共にサムズアップを見せれば響達の影も薄れていく。

気持ちを切り替えた響達は次の怪人であるゴ・ジャーザ・ギに怒りを露わにした。

何せ彼女は、ゲゲルを簡単に進めるために老人や子供を狙うような残虐極まりない効率重視の思考をしていたのだ。

その殺害方法も残忍の一言で済ませる訳にはいかない程の惨さで、狭い通路へ追いやり、逃げ場を無くしたところを銛で貫くというもの。

「あのハリネズミと同じぐらいムカつく野郎だっ！」

「許せないよっ！ 弱い人達を狙って動くなんてっ！」

「今までは特殊なルールに沿っていただけで、そこに狙う相手の性別も年齢もなかったが、今回は逆とはな……っ」

「ああ。こいつは楽に終わらせるためだけにルールを作ってやがる。胸糞悪いね、この女怪人」

「いかにも私は優秀だと言わんばかりですものね。虫唾が走るわ……っ！」

奇しくも画面の中の警察官達も同じ心情だった。

ジャーザの殺害方法とそのターゲットを知り、怒りや悔しさを隠せない杉田刑事などはその典型であった。

飛行機から飛び降りたジャーザを迎撃しようとしたクウガは、ライジングペガサスになった事でダグバの気配を感じ取ってしまい、それに意識を乱されたところをジャーザに狙われ肩を銛で貫かれ、磔のよ

うにされてしまう。

結局何とかその場から脱したものの、限界時間を迎えてしまい変身は強制解除。再変身まで二時間を要するという事態となっていました。

「い、痛そう……」

「いくらペガサスだったって、ライジングともなれば強化されてるはずだ。その肩を貫いてあそこまで出来るって……」

「あの女怪人、見た目以上に力があるって事でしようね」

「水中から投げて、だからな」

変身出来ない間五代は一旦ジャーザの事件から離れて過ごす、そこへ問題が起きる。

おやつさんの親戚である朝比奈奈々が、オーディションから戻ってきてから様子がおかしいらしいのだ。

事情を聞こうとする五代へ奈々はオーディションであった事を話し始める。

元々彼女は女優になりたくて上京してきた。それから半年としない時期に大好きな芝居の先生を未確認に殺されているのだが、今回のオーディションの最終試験が好きな人を未確認に殺されるというテーマだった。

切り替えて芝居に集中しようとするも、どうしてもかつての先生を思い出して割り切れない奈々。

そんな彼女へ同じオーディションを受けていた仲間がこう告げたのだ。

——先生が未確認に殺されたの、役に立ちそうだね。

その言葉に奈々は気が付いたらオーディション会場を飛び出していた。

一部始終を話した奈々は叫ぶ。そんな事言った相手を一発殴つてもいいはずだと。

だがそれはクウガとして望まぬ暴力を振るい続けている五代にとってには心の痛い意見であった。

だからこそ、五代は奈々へ殴つてしまおうと殴り返され、それが延々

と続くかもしれないから止めるべきだと告げる。

それを綺麗事だと叫ぶ奈々へ五代は己が心の内を述べるのだ。

——そうだよ。でも、だからこそ現実にしたくないじゃない。

ヒーロー達全員の心の声とも言えるそれに、響達は言葉に詰まった。

心の真芯を貫かれたのだ。

綺麗事で世界は変えられないと幾多の悪が、闇が口にしてきた事実。

それに対する模範解答がそれであった。変えられないからと言って、それは綺麗事を諦めていい理由になどならないのだと。

心を強く持ち、優しさを失わずに生きる事。それがどういう事かを、その台詞は簡潔に述べていたのだから。

「……私、五代さんの気持ち分かります」

「響……」

「サンジェルマンさんにも、これを見せて感想を聞きたかったです。ううん、可能ならみんなにこれを見て考えて欲しいかもしれない。綺麗事じゃ何も出来ないって言う人達に、だからこそそれを現実にしようとする事を忘れないでって」

奈々の言い分が、響にはサンジェルマンのそれと重なって聞こえていた。

統一言語無しでは人は分かり合えないままだという、そんな意見と。

五代雄介ならその言葉にそんな事はないと返すと響は確信していた。

何故なら同じ人間同士なら分かり合えると彼は信じているからだ。

そしてそれは立花響も同様だと、今なら強く断言出来るのだから。

「そうだな。立花の言う通りだ。話せば分かるを貫けないのは、一種の逃げだ。この身を剣として戦場にて歌い踊らせるのは、ある意味では負け戦と同義か」

「本当に、これは私の心を容赦なく突き刺すわね。だけど、だからこそ私は五代雄介の言葉に賛同するわ。綺麗事を現実になりたい。それか

ら逃げた結果が、あのフロンティアの一件だったもの」

「姉様……」

「でも、きつと五代さんならあれを責めたりしないはずデス。きつと、きつとマリアやママの決意や覚悟をダメなんて言わないデスよ」

「うん、私もそう思う。五代さんは頭ごなしに否定したりはしないと
思うから」

「姉さんが何をしたのか私はよく知らない。だけど、きつとそれがその時姉さんに出来たみんなの笑顔を守る事、なんだよね？ なら、大丈夫」

「セレナ……」

綺麗事を現実にした。そう告げた五代はジャーザが狙う客船へゴウラムで向かい、その甲板へと降り立つと拳を無言で握り締める。

それはまるで、あんな事を言いながら綺麗事とは真逆の行動を取るしかない自分への怒りと悔しさを押し殺すようだった。

ジャーザとの戦いはクウガが終始圧倒される展開となる。

何とか対抗するクウガだったが、何とジャーザはその体を変化させて俊敏な状態から怪力を誇る状態へと変わってみせたのだ。

「「「「「超変身っ!」「」」」」」

「そう。ゴの怪人の一部はクウガのようにその能力バランスを変える事が出来る」

「余計クウガとグロンギが同種の存在だと裏付けられていきます……」

そんな強敵にクウガも予想外の手段で対抗する。

ライジンググタイタンとなったクウガは、なんと両手にライジンググタイタンソードを持つ二刀流でジャーザを突き刺したまま共に海へと落下したのだ。

やがて海の中から巨大な爆発が起こる。ジャーザが倒された証明だった。

「何と……」

「まさかのタイタンソード二刀流かよ……」

「考えてみれば可能なんだよね。でも、頭の中から抜けてたよ」

残す未確認も片手で足りる程となり、いよいよ物語の終わりも近くなった。

ゴ・バベル・ダとの戦いも一条のアシストとビートゴウラムへ金の力を使用した攻撃で勝利を収め、束の間の平和の中、一条の持つ二面性を目の当たりにし夏目実加が衝撃を受ける事件が発生するも、怖い面も優しい面もどちらもその人の持つ顔なのだとして五代が諭す事である。

「怖い顔も優しい顔もその人の本当、か……」

「ライダーやってる奴が言うのと重みが違うよな」

「彼も、表で見せてる顔と怪人相手に見せる顔は異なっているものね」
「でも、五代さんは本当なら未確認だって殺したくないんだよ。話しても分かり合えないって分かっちゃったから拳を握るんだもん」

セレナの言葉に仁志は静かに頷いた。

そして遂にその時は来る。最後のゴの怪人であるガドルがゲゲルを開始したのだ。

狙いはリントの戦士である男性警察官。彼らのみを狙いとしたゲゲルは強者との戦いを切望するガドルらしいルールだった。

クウガは警察官を殺害しようとするガドルへ対して落ちていた拳銃を使いブラストペガサスを放つも、それはガドルにはダメージにさえならない。

それどころかそれを受けたガドルは瞳の色を緑へ変え、手にしたボウガンのような物でクウガへ反撃を開始したのだ。

「なっ!?!」

「同じ色っ!?!」

「まさかこいつ、クウガと同じ超変身が出来るのかよっ!?!」

そこからガドルは紫の力を使い、最後には金の力まで使用。

ライジングマイティキックを正面から受け止めた挙句、お返しとばかりに放った電撃キックはクウガを戦闘不能まで追い込んだ。

「嘘、だろ……」

「あの発電施設で行った行動はこのため?」

「クウガの頼みの綱であり唯一の切り札を怪人までも……」

「こんな相手にどうやって勝つデスカあ」

病院へと運ばれた五代は命に別状はなかった。

知らせを受けて駆け付けた桜子へ椿医師はそう説明した矢先のことだった。

何と五代の心臓が停止し、一気に危篤状態へと変わったのだ。

「兄様、これはまさか五代さんの意思を汲み取ったアマダムが？」

「どうしてそう思うんだい？」

「その、以前五代さんは電気ショックをもう一度浴びれば更なる強化が出来るかもと言っていましたから」

「だから完全敗北した事でその事を実行に？」

「マジデスカ!？」

「五代さん……そこまで……」

椿も桜子からの言葉でそれに思い至り、五代の意を酌んで電気ショックを行う事にした。

——強くなったお前の笑顔、見せてもらうぜ。

その一言を意識のない五代へ呟きながら。

「椿さんも一条さんと同じですね」

「ああ、彼の身を案じながらもその意を酌んで動く。これも信頼だ」

「何だか絆の力つてものをすっごく感じます」

「だね。五代雄介つて人の在り方に周囲が共感して支えていく。結果としてクウガは一人で戦うけど孤独じゃない」

「見事に奏やセレナと同じね。前線に立つのは一人でも、それを周囲が全面的に支えている」

ガドルはゲゲルを台無しにしたとして記録係であるラ・ドルド・グとの戦いを望み、それをドルドも受けた事で怪人同士の戦いが始まる。

その場所へ一条達も駆けつけ、逃げ去るドルドを杉田・桜井の両刑事が追い、一条は一人建物の中へと潜入する事となる。

そこで一条はガドルの襲撃を受けるも、新型弾丸である神経断裂弾を発射した。

それは何と同じ物を使って杉田と桜井がドルドを倒した程の威力

を持っていたため、ガドルもその場に倒れ、一条は窮地を切り抜けバルバ、B1号と対面し究極の闇やダグバの謎に迫ろうとする。

だが……

「なっ!? 立ち上がるだと!?!」

「嘘だろ!?! あっちの鳥怪人は倒せたつてのにつ!」

神経断裂弾を喰らったガドルが意識を取り戻して一条へと襲い掛かったのだ。

その間にバルバは一条の前から去っていく。

「本当にこいつは強敵って事デスね……」

「クウガ、早く来て。一条さんが危ない……っ!」

一条が殺されそうになったその瞬間、ビートチェイサーの駆動音と共に五代が登場。

そのままガドルへ突撃し一条を救出する事に成功する。

変身した五代は最初からライジングフォームとなり、常時金の力で戦えそうだと話すのだった。

「ずっと金でいけるって……」

「時間制限のあった金の力の弱点を克服したと、そう思えばいい事かもしれないが……」

「それは裏を返せばそれだけ五代雄介の体が人間離れた事を意味する。素直には喜べないわね」

そんなクウガへ一条は誘導地点である付近の雑木林を教えて周辺の避難誘導へと回った。残ったクウガはライジングフォームの力でガドルと戦う。

「こいつ、やっぱつええ」

「赤の金で互角がやっただもんね」

「しかも、相手はまだ金の力を使っていません。このままでは初戦と同じ結果になってしまいます」

夜の闇の中、対峙するクウガとガドル。

静かな雑木林に二人の息遣いと格闘戦の音だけが響く。

そして、その時は来た。

「クウガが構えた……」

「っ!? 左足に装飾品が増えたぞ!」

「それだけじゃないよ。電流は体へも走ってる」

「あの体色、黒じゃないですか!？」

「ま、まさか、ライジングフォームの力とは凄まじき戦士の力の一端?」

「目が光ったデス!」

「カツコイイ……」

「……決まるぞ!」

同時に飛び上がり蹴りの体勢を取るクウガとガドル。

それは両足でのキックの応酬だった。

互いに蹴り合い、だがクウガは咄嗟に腕で体を庇う。

同時に地面へと落下する二人。しかし先に立ち上がったのはガドルだった。

「そんな……」

「……いや待て。様子がおかしい」

よろめいたガドルが胸から手を離すと、そこには封印を意味する二つの古代文字が浮かび上がっていた。

胸への直撃を防いだクウガと防がなかったガドル。その差が勝負を分けた瞬間だった。

一条から受けた神経断裂弾のダメージなどもあったガドルは、その封印エネルギーに耐え切れなくなり爆発する。

「二つの封印エネルギーがないと倒せないなんて……」

「セレナ、世界蛇の時と同じだ。ミョルニル一つじゃ倒せなくなつたあいつは、大勢が力を合わせる事でようやく眠らせる事が出来たんだからな」

その爆発はまるで昼間のような明るさで周囲を照らす巨大な火柱となった。

だがしかし、それは最後の敵を動かす狼煙でもあった。

ガドルが倒れた事でダグバが究極の闇を始めると宣言。物語はクライマックスへと雪崩れ込もうとしていた。

「あれが、ダグバ……」

「ずっと登場してきた白い服の存在がやはりダグバだったのか」

「あんなどこにでもいそうな感じなのに……」

「究極の闇って一体……」

「仁志さん、もしかしてそれがブラックで言う創世王ですか？」

「かもしれないとも言われてる。実態は全人類の殺害って考えられるけど」

「黒いクウガはどういう事ですか？」

「あれはアメイジングマイティ。言うなれば凄まじき戦士の手前。クウガが限りなく凄まじき戦士に近付いている証拠。あるいはアルティメットフォームへの準備段階かな」

「アルティメットフォーム……」

「究極の形態？ 待って。じゃあやっぱり究極の闇ってそういう事なの？」

「ダグバが負けても、クウガが凄まじき戦士になったら同じ事って意味かよ！」

そのクリスの言葉に仁志は静かに頷き、一旦DVDの再生を止める。

「時間も時間だ。晩飯にしよう。残りは三話だしね」

それはつまり残り三話が持つ重さやエネルギーが凄いという事だろうと響達は感じ取った。

こうして仁志達は少々遅めの夕食準備に取り掛かる事となる。

誰もが固唾を飲んで見守っていた。

画面の中では五代さんと一条さんの最後の会話が流れている。

ここは、誰もが挙げるクウガの名シーンだろう。

「一条さんに会えたから、か……」

「私なら、クリスちゃん達に会えたから、かな？」

「響……」

「あのライブへ行ったから今がある。辛い事や苦しい事、悲しい事もあったけど、けど今はそれ以上に嬉しい事や楽しい事があるから」

響の言葉もある意味でヒーローの言葉だと思う。

生きるのを諦めるなどの言葉で一命を取り留め、天羽奏の残したガングニールを継ぎ、今も彼女の遺志は響の胸に生きているんだから。そして五代さんが一条さんへ初変身の時と同じ言葉を告げて目の前で変身。

普段とは違うそれは、アルティメットフォームへの超変身だ。響達も声を出さずに見つめている。

「あれ？」

そんな中、セレナが不思議そうな声を出した。

「どうしたデスか？」

「えっと、たしか凄まじき戦士って目まで黒だったと思うんです」

「タダノ、どうなんだ？」

「そうだよ。凄まじき戦士は目が黒い」

「え？ で、でもでも五代さんは赤い目をしてましたけど？」

響の言葉に俺は仮面ライダークウガのOPの一節を口にする事にした。

「伝説は塗り替えるもの、俺が変えてやる、って事さ」

「……仁志さん、もしかして凄まじき戦士とアルティメットフォームを分けて言ったのはそういう事？」

「今は物語に集中して。答えはいずれ出るよ」

雪山の吹雪の中、たった二人だけの最終決戦が始まっていた。

クウガが負ければ世界は闇に、ダグバが負ければ世界は未確認の恐怖から解放される。

だけど、どちらにせよ五代雄介の心には大きな傷が残るのだ。

「ただ殴り合うだけ……」

「お互いの能力は同じだから特殊能力が効果を発揮しないんだよ。だから純粹な格闘戦しか選択肢に残らない」

「五代さん、泣いてる……」

「対してダグバは笑ってやがるのか……っ」

辛そうな未来の声と苛立つクリスの声に俺は何も言わず画面を見つめ続ける。

響は、きつと一番五代さんへ感情移入しているだろう。

拳を握って誰かへ振るう。その事が嫌なのは彼女も同じだからだ。だからこそ、この戦いは響にとって自分の戦いと同じに見えるはずだ。

ただ、唯一の違いは響は殺人を犯した事はなく、五代雄介は殺人を行ってきたも同然と言う事だろうか。

そして一条さんがやっと二人が戦っていた場所へ到着した時には、雪原に横たわって動かない五代さんとダグバの姿があった。

——ごだああああいつ!!

絶叫と呼ぶに相応しい叫びで「空我」は終わる。

凄まじい吹雪の残響を耳に残して。

「ご、五代さんどうなったデスかつ!」

「師匠、死んだりしてないよね?」

切歌と調が不安そうな表情で俺へそう尋ねてくるけど、答える訳にはいかならないと思ってそつと二人の頭を撫でた。

「次の話が最後だ。それで仮面ライダークウガは終わる。答えはそこにあるから」

そして始まる最終回予告。そのサブタイトルを見てみんなが息を呑んでいた。

何せ「雄介」なのだ。しかも予告で流れた台詞は、みなどこか五代雄介が遠くへ行ってしまったかのようなものばかり。

「……五代さん」

セレナの泣きそうな声に心が痛むも俺は何とか歯を食いしばって耐えた。

ネタバレは駄目だ。俺が初めて見た時に同じ事をされたらどう思うかを考えろ。

最終回は前話、空我の三か月後から始まる。

未確認対策本部はその役目を終える事となり、解散に向けて動き出していた。

ダグバの死の後、他の未確認は出現せず、もう全滅したと判断されたのだ。

「良かった。世界は、守られたんだ」

「でも、クウガは、五代さんはどうなったデスか？」

そこから長野へ戻る事となった一条さんが今まで世話になった人達へとあいさつ回りを始める。

そう、最終回は戦闘など一切なく、平和な日常が戻ったと言う事を描くための話だ。

これはライダーシリーズでもクウガのみの展開だ。最終回こそラストバトルとして盛り上げるのがほとんどだし。

みんなもその事に気付いたのか意外そうな表情でモニターを見つめていた。

そんな中、みんなが揃って息を呑んだ言葉がある。

——でも、四号なんかいなくてもいい世の中が一番いいと思うんだ。

五代みのりの“ヒーロー達の本音の代弁”だ。

どんなヒーロー達もこれをどこかで思ってるはずだ。

自分達のような存在が必要ない世界が一番だと。

「……これが五代さんが、ヒーローが、願ってる事なんだ」

響が呟いた言葉が胸に響いた。何故なら彼女達もまた、そういう意味ではヒーローだからだ。

シンフォギアなんかなくてもいい世の中。それを彼女達はこの世界で見て感じている。

故に、きつとこの言葉の意味と尊さが分かるんだろう。

俺と違い、ノイズなどの恐ろしい存在を相手にしてきた彼女達ならより強く。

「平和って、ヒーローが戦いを終わらせる事じゃないんですね。ヒーローが必要ない世界になる事なんだ」

セレナの言葉に改めて考える。

平和と、そう口にするのは簡単だ。でも、その意味は、内容はとても一言じゃ言い表せない。

ただ、みんなが笑顔でいられる事。それが本質だとは思う。

「凄まじき戦士になったらゴウラムは砂になっちゃった、デスか」

「じゃあ、やっぱり五代さんは凄まじき戦士にならなかったんだ」

「憎しみの心でしかねない姿にそれ以外の心で超変身したんですね！」

「それはきつとみんなの笑顔のために、だろうな」

「成程な。伝説を塗り替えた、か。まさしく仮面ライダークウガだぜ」
「そうだな。戦士クウガではなく仮面ライダークウガになった。いや、そうだったからこそそのアルティメットフォームか」

もう物語も終わりへと近付いている。

一条達日本での描写は終わり、砂浜をゆつくりと踏みしめるように歩く誰かが映し出されたんだ。

「もしかして……」

「これ、五代さん？」

「良かったあ。生きててくれたんだ」

「子供の喧嘩？ 外国人？」

「じゃあ冒険に出たんですね！」

「ここで走り出すのが五代雄介って感じだな」

「おい、ズルいだろ。ここでED流すとか」

「ジャグリングだ……」

「クウガの力を使わず笑顔を取り戻す、か。これが本来の五代雄介なんだったな」

「みんなイイ笑顔してるよ……」

「ホントね。青空の下を歩く、か。彼らしい終わり方だわ」

「青空になる」が流れる中、雲一つない青空の下を五代雄介は歩く。

やっと彼はクウガではなく一人の青年へと戻れたのだ。冒険家という、元々の在り方へと。

そう思うとこのEDは感慨深いものがある。

仮面ライダーはそれまで悪を倒すと次なる悪に備えるように旅立った。だけどクウガは違う。

彼はもう自分が必要とされない事を願っているし、そうであると信じているはずだ。

拳を固く握り、誰かへ振り下ろす必要などない事を。

そして最後に五代の願いというか胸に抱き続けている言葉が表示されて物語は幕となった。

「これで仮面ライダークウガの物語は終わり。RXとはまた違うけど、根底にあるものは同じって分かってもらえたかな？」

「はい。ライダーは全てが終わると一人の人として平和を願って生きていくんだって」

「そう。ただ、昭和ライダー達はまた新たな悪が現れるかもしれないと思って旅立つんだけどね」

「クウガには悪の組織はいなかった。それも違いですね」

「でも、人間の中にはグロンギも驚くような事をしでかす奴もいるかもしれないねえ」

「だけど、その人だって人間なら話せば分かるはずだよ。五代さんならそう言うと思う」

「もう、私は五代さんに寄り道、させたくないです」

「アタシもデスよ。クウガとしての寄り道なんて、二度とあっちゃダメなんデス」

「それでも、それでも必要となったら五代さんはまたクウガになるんだと思う。戦う悲しみを仮面に隠して」

調の言葉に俺は小さく頷いた。

それこそが仮面ライダーだからだ。争う痛みを正義感で抑えつけ、戦う悲しみを仮面で隠す。

クウガはそれがもつとも強いライダーだった。だからこそ今でも五代雄介を理想のヒーロー像に挙げる人は多い。

南光太郎と五代雄介。この二人はライダーの中でもかなり辛い事を経験し、乗り越えて笑顔を見せてくれる心の強い優しい存在だ。

俺も、その十分の一でもいい。心の強さを持たないといけない。

目の前にいる女性達は、少なくともそんな彼らに近しい生き方をしているのだ。

それを支え切るには俺も心強くないといけない。

せめて、悪意との戦いが終わるまでは……な。

「さて、エル、セレナ、お風呂入っちゃいなさい。その後は切歌と調よ」

「いや、いつそ今からスーパー銭湯に行こう。その方がいい」
俺がそう言うのと笑顔があちこちから向けられる。

つと、ヴェイグだけが微妙な顔をしてるけど、それはある意味いつもの事か。

「やったあ。久しぶりの広いお風呂です」

「エル、セレナ、風呂上りに何飲むか相談だ。俺はコーヒーがいい」

「ふふっ、じゃあ私はイチゴにします」

「その前に準備、準備をしないとデスよ」

「バスタオルは忘れないでね、切ちゃん」

「じゃあ、私とクリスちゃんは一回部屋へ戻ります」

「現地で合流しようぜ」

「なら私達も？」

「そうすると時間かかり過ぎませんか？」

「マリア、あたし達三人分のタオル、貸してくれない？」

「いいわよ。仁志達は悪いけど」

「了解してるよ。俺達あのアパート組は一旦帰宅してから現地へ向かうさ」

こうして俺は響やクリスと共に一旦部屋へと戻る事に。

夜道を歩いて空を見上げる。そこには僅かな星明りが見えるだけ。

まあこの辺りも田舎って表現をされる程じゃないから仕方ないか。

「これでクウガも見終わっちゃったなあ」

寂しそうな響の声に顔を向ける。

彼女も少し上を向いて歩いてた。

「まあ、もうこういう時間も取れないしな。何とか見終われてホツとしてるぜ」

そう言いながらクリスは下を向いている。

寂しがつてくれているようだ。

「俺もまさかみんなとクウガを最後まで見れるとは思ってなかったよ。その、目を背けたくなるような話もあるからさ」

そもその切っ掛けはBLACKの話をした事か。装者に近い立ち位置の仮面ライダー。

それも特にクウガは警察との関係もあってより装者達に似ている。だからこそ、途中から若干不安を覚えたのも事実だ。クウガの中盤からかなり辛い事が増えてくるから。

「でも私、クウガを見て良かったです。握ると痛いこの手を、それでも握り続けられた五代さんは、とっても強くて優しい人だった。私、可能なら五代さんに会ってお話をしたいです」

「そっか」

「自分の笑顔を擦り減らして、みんなの笑顔のために戦う、か。ライダーだけじゃなく、それがヒーローってもんなら、あたしはそうはなれねえな」

「いいんだよなれなくて。ヒーロー達だってなって欲しいとは言わないうさ。ただ、そうあって欲しい時になってくれたらとは思ってるかも」

「そうあって欲しい時……」

「人は強くある事は出来ても強くあり続ける事は出来ない。だからその強くあつて欲しい時だけでも強くなってくれたら、それがみんなが出来る限りの無理をするって事じゃないかな。俺はそう思うよ」

きつと響達はそれを無意識にやってきたはずだ。

心強くなければいけない時は決して折れない心で戦ってきたんだろうと。

「ヒーローって大きく分けると二通りなんだ。一つは世界とかの大きなものの平和や自由を守る存在」

「もう一つは何です?」

「簡単だよ。家族とか友人とか自分の手の届く範囲の人達を守る存在。それだってヒーローなんだ。誰もが誰かのヒーローになれるんだよ」

そう言いながらふと思う。今の俺は誰かの、彼女達のヒーローになれているんだろうかと。

俺自身はそんな風に思えないけど、これは本人がどう思うかは関係ないからな。

子供にとって父親や母親がヒーローのように見える時があれば、と

んでもない悪者に見える事もあるように。

俺も、出来るだけ誰かから見た時にヒーローのように見えるようになりたいと思う。

実行できるかは分からないけれど、な。

そんな風に思っている内に目の前に見慣れたアパートが見えてくる。

今はとりあえず久々の広い風呂を楽しみにしておくでしょう。

「仁志さん、すぐ準備しますから」

「待つてくれよう？」

「分かっているって。そっちこそ置いていかないでくれよう？」

響とクリスと別れて俺は部屋の鍵を開けた。

「……次の集まりは、もうこういう事ではないだろうな」

終わりは見えている。残るカオスビーストは一体。それを倒せば必ず悪意は何らかのアクションを起こす。

願わくば、それがみんなにとって最後の戦いとなってくれる事を祈るのみだ。

そして、可能ならばみんなとの絆が途切れる事無く、今の様な触れ合いが続けられる事も……。

Glorious Break

マリア達を連れて夜道を歩いて駅へと向かう。向かう先は俺の両親が暮らす場所の最寄駅だ。

で、何故それを伝えると三人して若干緊張するんですかね？ 言っておくけど実家には寄らないぞ。

そう告げたら何故か三人して不満顔。可愛いけど、納得いかないの一言物申す。

「時間考えてくれよ。今から電車乗って実家に着くと十時過ぎだ。そんな時間に、息子が、美女を、三人も連れてきたら、確実に面倒な事になるだろ」

「でも、私は仁志に色々とお世話になってるし、ご両親にもご挨拶しておきたいわ」

「あたしも先輩には結構助けてもらってるから、家に行ったのに挨拶もしないなんて心が痛いし」

「わ、私は全て仁志さんに支えてもらっているんだよ？ ご両親の住む家まで行って挨拶なしなんて……」

「体よく俺の両親を使って俺の心を乱そうとするんじゃないやありません」

それで苦笑する三人を見て、俺は何となくだが危機は回避出来そうだと思った。

駅で切符を買い、四人で電車に乗って過ごす事十数分。到着したのはそれなりの大きさの駅。ただし、急行は止まっても特急はそうそう止まらないレベル。

「ここが仁志の住んでた家に一番近いの？」

「厳密にはこの一つ隣。ただ、そっちは普通しか止まらないからこつちをよく使ってた」

「そういう事か」

美女三人を連れて駅を出る。さて、ではここから十分強歩く事になるんだが、どうしようかね？

マリア達に周囲を囲まれると、下手すると母さんの耳に入る可能性がある。

いや、ないとは思うけど、この辺には昔から母さんの勤務する病院がある。俺の顔を覚えてる人や知ってる人もいない訳じゃないし、可能性だけはあるんだよなあ。

「どうしたの？」

「ん？ ああ、何でもない。行こう」

考え過ぎても仕方ない。

それに、俺の事を覚えてるとしても、それは俺が成人する前だ。なら心配ないだろ。下手の考え休みに似たり。その精神で行くとする。

「この街で仁志さんは育ったんですか？」

「まあそうなる」

引つ越す前はこの駅が本当に最寄駅だったし。

「何だか静かなとこだね」

「ベッドタウンって言えばベッドタウンだからな。昔ながらの町だし、見ての通り若者向けの店なんかもないだろ？」

「……そうね」

「それに町並みもどこか古さを感じます」

「だろうね。何せ、ここは昔東海道の宿場町の一つだったんだ」

「二へえ……」

同時に声を出すドライデーヴァ。何というか仲の良い事だ。

そのまま俺達は旧東海道を歩いた。そうして歩く事十分と少々、俺達は旧東海道を抜けて住宅街の方へと歩く。

で、ほんの一・二分で両親の住む場所に到着。一応俺は車の使用許可を取りに家へ行く事にして、三人には車の近くで待ってもらおう事に。

「じゃ、すぐ戻ってくるから」

「はいよ」

「仁志のパパさんとママさんによろしく」

「言えるか」

「だよね。ふふっ」

からかうように笑うマリアへそう言い返して俺は階段へと向かう。

翼の可愛い苦笑を聞きながら階段を上り始めて一番上まで——とは言っても三階だけ——上り切り、玄関のドアの鍵を取り出して開ける。

「ただいま」

小さく声を出して靴を脱ごうとするとりビングから父さんが顔を出した。

「何だ？ どうした？」

「えっと、車を借りようと思って一応断りを。この時間だと返すのは明日になるから」

「何だ、そういう事か。好きにしろ。どうせ休みにしか使わないから」
「それでもだつての。とりあえずありがとさん。おやすみ」

「ああ」

会話終了。ま、男同士なんてこんなもんだ。

脱ぎ掛けていた靴を履き直し、ドアを開けて出て行くこうとして——
「仁志、せめて女を乗せた後は軽く座席を確認して掃除ぐらいしておけ」

「っ?!」

告げられた言葉に振り向いた。そこにはニヤニヤと笑う父さんがいる。

「髪の毛、落ちてたぞ。しかも複数とはどういう事だ？ ん？」

「み、店のバイトの子達を乗せたんだよ」

「へえ、そうかそうか。それにしても大分やんちやな子達だな。銀に赤、青みがかった黒に」

「じゃあもう行くからな。タバコの吸い過ぎに気を付けろよ」

戦略的撤退。逃げるように外へ出るべくドアを開ける。

「ああ、鍵はかけといてやる。気を付けろよ」

「ありがとさん！」

ドアを閉めるとやや慌てて階段を降りる。

迂闊だった。そうだよな。髪の毛が落ちる事ぐらいあるよな。

しかも俺が実家の車に乗せたのは、響を始め見事に髪色がバラバラな女性達。そりゃあんな顔もするよ。

「……確実母さんはその中の誰かがあの時連れ込んだ相手って察して
るよなあ」

「当分ここへは違う意味で来れないな。そう思いながら俺は階段を
降りて車まで向かう。」

「もういいの?」

「ああ」

「少し顔が赤いけど、何か言われた?」

「車の中で話すよ」

「何かあったんですか?」

「まあ、うん」

運転席側のドアノブにある出っ張りを押して鍵を開ける。ミラー
が動いていくのを見ながらドアを開け、シートへと乗り込むと助手席
には翼が座る。

ボタンつと音がしたのを確認し、俺はシートベルトしながらさつき
の父さんとの会話を話した。

すると三人揃って若干赤くなっていた。まあそうだよな。今まで
はレンタカーだったから気にもしなかったけど、これは父さんと母さ
んが乗る訳で、そこに色取り取りの女性らしき髪の毛があればどう思
うかは想像に難くない。

車をゆつくりと発進させ、目指すのは激安の殿堂。ただ、どうやら
ドライディーヴァはそれどころではないようだ。

「ひ、仁志さんのご両親に……」

「やんちゃ、かあ。まあ普通はあたしの髪色ってそう思うよね」

「仁志、貴方、女遊びしてると思われてない?」

「それはないと思うよ。そんな事が出来るような奴じゃないってあつ
ちも分かってるさ。だからこそ、父さんはニヤニヤしてたんだよ。母
さんから俺が誰かを部屋へ連れて来てた事を聞いて、その中に彼女が
いるんだらうって思ってたな」

間違いなくあの顔はそういう事だ。しかも厄介な事にある意味間
違ってない。

響もこの車に乗っている。しかもある意味最初だ。

って、待てよ？　だとしたらもう父さんも母さんも察しはつけてるんじゃないか？

だって響を乗せた後に車を使ったはずだ。そこで髪の毛を見つけたとしたら、もう確定だろ。

「……あの親父っ」

ニヤニヤの本当の意図に気付いて俺は思わず奥歯を噛み締めた。

くそっ、要はもう向こうは彼女を響と決めつけているんだ。その上で奏やマリア、クリスの髪の毛を見つけて俺をからかってきたって事かっ！

「ひ、仁志さん？　どうしたの？」

「あの親父のニヤケ顔の意味が分かったんだよ。響はこの車に最初に乗ってる。その後俺が誰かを乗せる前に父さん達は車を使ってる。そこで響の髪の毛を見つけたんだ。母さんは俺が誰か女性を部屋へ連れ込んだ事を知ってるから、もう二人の中じゃ響が彼女って事になってるんだよ。なのに敢えてクリスや翼達の髪の毛を話題に出して俺をからかってきたんだっ！」

本当に性格の悪い親父だ。久しぶりに関わったけど、きっとそれが嬉しいんだと思う。

「だけど、十年ぶりに関わった息子の女性関係でニヤニヤするとか趣味が悪い。」

「ふーん、じゃあたしがやっぱ挨拶した方がいいんじゃない？　仁志先輩にはいつもお世話になってるって」

「それなら私の方が適任よ？　エルやセレナも連れて来れば完璧かしら」

「私の方がいいと思う。その、私は見た目が一番日本人然としてるし」「はいはい、誰か一人を紹介するぐらいなら全員連れていくっての。この全員は三人じゃなくて文字通り全員だ。エルやヴェイグなんかも含めた、な」

そう言うと三人が納得するように苦笑した。

「ま、それでいいさ。何せ三人もどこか笑ってたから。ふぎけ合ってるんだとは思ったけど、面倒な事になりかねないと思ったから打ち

切ったんだし。

車で走る事数十分後、俺達は目的の店に到着した。実家から一番近いところでも良かったのだが、やはりもっと大きなところがいいかと思いい、繁華街に近い場所までやってきたのである。

止めにくい駐車場へ入り、車を止めて四人で店内へと向かう。

「ここ、何の店？」

「激安の殿堂って書いてあったけど……」

「言うならば何でも屋。もしくはディスプレイショップってやつ」

「へえ、だから激安の殿堂って訳か」

店内へ入って三人を連れて俺は所謂アダルトコーナーへと向かう。

十八歳未満お断りの暖簾を見て少しだけ三人の足が止まったみたいだけど、俺は気にせず中へと入る。

「どうした？ やっぱり恥ずかしい？」

俺がそう言うことやや間を置いて真っ先に足を踏み入れたのは翼。

次にマリアで奏が最後。ただ、マリアと奏はほぼ同時と言えた。

まあ、そこからは割愛する。ただ、色々と刺激の強いものから可愛いものまでドライディーヴァの見せられない姿や反応を見れた事だけ記す。

……おかげで帰りが少々面倒な事になったけど。

何せ目立つラブホがあったのだ。そこへ今から行こうよなんて奏が言い出し、翼とマリアも悪乗りしたからさあ大変。

——ここなら色々その後始末を考えないで済むわね。

——それに、その、い、いやらしい物を買う事が容易だし？

——先輩、あたし達とき、その、ぱ、パコパコしょ？

——しませんっ！ それと運転中っ！ 集中力乱さないでくれっ

！

この時程奏が隣じゃなくて良かったと思つた時はない。

真っ赤な顔でパコパコって言つたんだぞ、パコパコって。隣の翼は「どういう事？」みたいな顔をしてるのを少しだけ見たけど、それがまた可愛かったし。

車を運転しているのがある意味で良い方へ転がって、俺は何とかド

ライダーヴァアの誘惑を撥ね退ける事が出来た。

そのまま少しだけ夜のドライブと洒落込み、日付けが変わるぐらいで店の駐車場へと到着。俺はオーナーへ駐車場の使用許可を取るからと告げ、三人を先に送り出す事に成功したのである。

「……でも、これだけって言うのは寂しいかもしれないな」

店へ入る前に急いで三人の後を追う。すぐにその背中が見えてきて、足音に気付いた三人がこっちへ振り返った。

「どうしたの？ 何か忘れ物？」

「ああ、そういう意味では忘れ物」

「そういう意味では？ 仁志さん、それはどういう事？」

「うん、それは今から分かると思う。奏、ちよっと」

「ん？ 何々？」

こちらへ無防備に近付いてくる奏を抱き寄せるなりキスをする。

普通のキスよりも長い時間を使う、深いやり方だ。奏の腕が俺の背中へと気付いたら回っていた。

「……今回はこれで勘弁してくれないか？」

「……うん、いいよ」

こっちを熱っぽく見つめるトロンとした奏へそう尋ねると、彼女はその表情のまま小さく頷いて離れてくれた。

「翼、こっちへ」

「あ……うん」

もう何をされるか分かった翼がドキドキしながら近づいてきたので、その華奢な身体を優しく抱き寄せてキスをする。

互いの間に微かな糸が出来たのを見ると恥ずかしくなるけど、それを顔に出さないように我慢した。

「今は、こう刻むのが精一杯なんだ。許してくれ」

「……十分、だよ。仁志さんの気持ち、刻まれたから」

うつとりしながら微笑む翼には、そこはかとない色気があった。

「マリア、来てくれ」

「っ……ええ」

潤んだ瞳でこっちへ近寄ってくれるマリアの体をやや強めに抱き

寄せてキスをする。

少し強引な方がマリアは喜ぶ気がすると、そう思つての事だけども、どうやら当たりらしい。

胸を押し付けるように強く抱き返されたのだ。顔を離れた後の眼差しも悩ましい。

「何とか許しは得られそうか？」

「……いつか、いつか必ずこの先をしてくれるなら」

その問いかけに俺は何も言えなかった。だけど、せめてとばかりにマリアの体を優しく離して、ドライディーヴァの事を見つめて立ち尽くした。

少しの間そうしてて、俺は一言だけ告げる。

「おやすみ」

送つていきたいけど、今そうするときつと止まれなくなると、そう思つてそれだけ告げた。

「「おやすみ（なさい）」」

彼女達も、それが分かつたらしい。小さく苦笑して、でもどこか嬉しそうに俺に背を向けて歩き出した。

遠くなつていく背中を見送り、俺は息を吐いて店へと向かうために三人へ背を向けて歩き出す。

「……………惜しい事してるよなあ」

心の底からそう呟いて俺は歩く。絶対にこんなチャンスもう二度とない。

そう分かつていても、手を出せない出しちゃいけない時がある。

いや、むしろだからこそこんなチャンスが訪れるんだろう。本当に、いつだつて世界はこんなはずじゃない事ばかりだ。

「とりあえず、今はオーナーへ許可を取ろう」

以前も同じ事を頼み許しを得たけど、前回そうだったと言つて今回もそうとは限らない。

それに何より、何があろうと許可を得ると言う行動が大切だ。オーナーはきつと「いいよいいよ」つて言ってくれるだろうけど、それを言われるという保証がない以上は筋を通すべきだし。

この後、店へ行つてオーナーへ駐車場の件を頼むとあっさりと許可が出た。

今後は一々聞かなくてもいいよと、そう言ってもらえたけど、一応店長をしてるんで筋は通しませんと示しがつきませんと言ったら苦笑された。

——只野君は本当に真面目だね。うん、君に店長になつてもらえて本当に良かった。

……その言葉を聞いた瞬間、密かに書き始めてる辞表の事が頭に浮かんで胸が痛くなつた事を追記しておく。

本当に、どうなるんだろうなあ。出来れば最後の手段に頼りたくはないけど……。

そんな風に思いながら俺は自分の部屋への帰路へ就く。色んな意味で重くなつた足取りで……。

「……そつか。雪音さんも……」

あたしの前できつくりと項垂れるオーナーを見てると心がいてえ。何せあたしも今月一杯で辞めさせて欲しいって切り出したからな。

何と十月も半ばを過ぎて、夕勤がもう一人増えたんだ。

まあ正直期待はしてなかったけど、意外と運が良いぜ。

名前は高垣つて言う女子大生で、何でも近藤妹の紹介らしい。

あたしも一度だけ研修に付き合つたけど、今まで女子校で過ごしてきたせいか、あたしの本来の言葉遣いに最初はかなり驚いてやがったぐらい、その、擦れてない真面目な奴だ。

「その、すみません。あたしも続けたいんですけど……」

「そうだね。たしかに区外へ引越す事になるんじゃないや学生さんとしてはバイト先を変えたいよ」

理由はそうした。仁志が最低でも一か月は前に言わないと仕事は辞められないからって、そう言つて考えた理由がそれだった。

何せあたしの設定は色々あって家出した学生だ。それだからこそ引越す事をギリギリまで知らなかつた事も通用するだろうって。「ホント、すみません。あたしは一人でも何とかやっていけるって

言ったんですけど、親の監督責任が何とかかんとかって」

「あー、うんうん。気持ち嬉しいよ。でも、やっぱりまだ雪音さんも学生さんだし、大学とかは自力で通うとなると色々厳しいからね。親御さんが戻っておいでって言うてくれたのなら、一度だけそれを受け入れてやり直してごらん。もしそれがダメだった時は、遠慮なくここへ来るなり電話してきなさい」

「……ありがとうございます」

心の底からそう思っ頭を下げる。マジでオーナーはおっさんと同じぐらいでけえ大人だ。

仁志がこの人だから続けてられるって言うのが分かるぜ。ホント、あたしだって出来る事なら支えたいって、そう思うぐらい優しくってあつたけえ人だから。

「うん。とりあえず今月中はいてくれるんだね？」

「はい。店長からせめて今月だけはって言われましたし、あたしも、その、出来るだけ恩を返したいんで」

「ありがとう。雪音さんは歳の割に義理堅い子だね。でも、意外と大事だからね、そういう気持ち。因果応報って本当にあるんだ。良い事続けていれば必ず最後には自分を助けてくれるんだよ。僕にとつての只野君や君のように」

「て、照れるんで止めてください。その、お先に失礼します」

「はい、お疲れ様」

頭を下げて事務所を出る。レジにはあの新人野郎が一人いるだけ。

仁志は……ああ、売り場整理か。

「お疲れ様です。お先に失礼します」

「お疲れ様です」

新人がいやらしい目であたしの胸を見る。イラッとするけど受け流す。どうせ半月後にはおさらばだ。

そのままレジを横切ってチルド飲料の場所へ。

「店長、お疲れ様です。お先に失礼します」

「雪音さん、お疲れ様。気を付けて帰ってね」

優しく微笑む仁志に小さく頷いてあたしは店を出る。

そしてそのまま部屋へ戻ろうとして、ふと灰皿が置いてある場所にあのスケベ野郎が立ってるのが見えた。

あいつ、まだいたのか？ しかもこつちを見てニヤニヤ笑ってやがる。気持ちわるいな。

「あれ……何だか……意識が……」

やべえって……そう思う間もなくあたしの体から力が抜けて倒れそうになったところで、あのスケベ野郎の足が見えて……

「あれ？」

気付いたら店の隅の方に座ってた。スマホを取り出して時間を確認すると上がってから十分近く経ってやがる。

「……店を出てから三分ぐらい記憶が飛んでんな」

ぶるっと怖さが体を走る。でも、そんだけで何が出来るってんだ？ 周囲を見回しても特に何も無い。スケベ野郎もいなくなってる。

「気のせい、か？」

あのスケベ野郎が上がった後に店近くにいるなんてそもそもおかしいもんな。

きつと疲れて見間違えたんだろ。早く部屋へ帰って後輩達の家行ってシャワー借りるとすつか。

「響も、待ってるだろうし、な」

まだ慣れねえけど、それでも恥ずかしさみたいなもんは結構減った。

何せあれから毎朝呼んでんだ。嫌でも恥ずかしさは減るっての。

慣れないのは、きつとあれだ。使い分けてるからだな、うん。

部屋の前へ到着すると一応鍵を取り出して開ける。

あいつはもうバイトを辞めたから、基本的に鍵はあたしが持つ事になってる。

「おかえりクリスマスちゃん」

「……おう」

ドアを開ければあいつが笑顔で出迎える。なんつーか、やっぱ照れくさい。

で、そのままこつちへタオルとかを手にとってくる。

「はいこれ、タオル」

「ん」

「じゃ、行こう」

「ああ」

靴を脱ぐ事なくあたしは部屋を出る。すぐにひ、響も出てきて鍵を閉めてとこつちを見てくるので差しっぱなしの鍵を動かした。

「それで、辞められそう?」

「まあ、な。仁志の言う通りの理由を伝えたら了解してもらえた」

ちよつと心が痛かったけどな。

「そっかあ。オーナー、やっぱりがつくりしてた?」

「……ああ。てことはお前の時も?」

「クリスちゃん?」

あたしの方を見て寂しそうな顔をするひ、響。これは、あれだ。呼び方だ。

「ひ、響の時もそうだったのかよ?」

「そうなんだよ。だからすつ……ごおく胸が痛くて。思わず、いえ!

ホントはまだやりたいですつ! って、言っちゃうとこだった」

「そうか。あたしも、似たような感じだった」

今まで色々世話になってきたからな。週に一度はこいつと一緒に何かもらってたし。

「でも良かったよね。ふみさんは良い人みたいだし、奈々美さんもふみさん来たから張り切ってるんでしょ?」

「まあな。妹に接客で負けたくないんだろ。最近愛想良くなったしな」

オーナーや仁志が驚いたぐらいだ。あのスケベ野郎はそうでもなかったけど。

てか、あいつ珍しく妹や高垣へはちよつかい出してないんだよな。結構可愛いと思うぞ、あの二人。

……好みじゃねーのか? それはあり得るから何とも言えねーけど。

あの家までの道をあいつと、響と喋って歩く。こうして過ぐすのも

一月ねーんだな。

そう思うとやっぱ寂しさがある。だけど、いつまでもそうしていらねえ。

仁志はこの世界を捨ててでもパパやママを、この世界を守るためにあたしらと一緒に戦うって決めたんだ。

寂しいって言うなら、むしろこれからの仁志かもしれないから。

そうなってもいいようにあたしがいる。あたしがひとしをささえてやらねえと……。

「ねえクリスちゃん」

「っ……何だ？」

また一瞬意識が飛んでた。顔を動かせばこつちを響が笑顔で見つめてる。

「今日と一緒に汗流そうよ」

「窮屈だろうが」

「へいき、へっちゃらだよ。その方が楽しいしさ」

ホントにこいつは……。

「……背中、流せよ」

「うんっ！」

「つたく、声がでけえんだよ」

「あ、あはは……ごめん」

苦笑いを浮かべるバカにため息を吐いてあたしは歩く。

ま、これがこいつだ。立花響だ。あたしと手を繋ぎたいってしつこく言い続けて、本当に繋いだ奴なんだ。

こいつはだいじなともだちだ。たんなるなかまじゃねえ。だからあたしのそばにいてほしい……。

「クリスちゃんってば」

「っ!?!」

気付いたらバカがあたしの手を握ってた。思わず顔を動かすとそこには怪訝そうな表情でこつちを見つめる響がいる。

「マリアさん達のお家、通り過ぎる気？」

言われて気付く。たしかにそこは後輩達の暮らす家だ。

「わ、わりい。ぼくつとしてた」

「疲れてる？」

「……かもしれねえな。そういう意味でもお前が」

「クリスちゃん？」

「……響と一緒に入ってくれるのは有難いかもな」

「クリスちやくん」

がばつと抱き着いてくるバカを暑苦しいって思いながらあたしはチャイムを押した。

するとすぐに小さ目の足音が聞こえてくる。これは、エルか。

「どちら様ですか？」

「エルちゃん、響でーす」

「悪いけど風呂貸してくれねーか？」

あたしらの声に引き戸がゆつくりと開いた。

「響さん、クリスさん、こんばんは。中へどうぞ」

「おう、邪魔するな」

「お邪魔しまーす」

「それで、お風呂なら今は姉様が入ってますのでその後でもいいですか？」

「うん、構わないよ」

「ああ」

玄関の中へ入って靴を脱ぎながらエルと話す。もうパジャマで後は寝るだけって感じだな。

靴を脱いで居間へ入ると布団が人数分敷かれてて、後輩達がそこへ座って喋ってた。

「あつ、クリス先輩に響さんデス」

「「こんばんは」」

「こんばんは。ヴェイグさんもこんばんは」

「ああ。二人はシャワーか？」

「お風呂だそうです」

「うん、一緒に入るんだ」

「一々言うなっつての」

ほらみろ。後輩達だけじゃなくてエル達まで笑ってるじゃねえか。にしても、本当にこいつらも笑顔が増えたよな。向こうにいた時だって後輩達はよく笑ってたけど、ここまで多くはなかったぞ。

そこからしばらくバカを中心に他愛のない事を喋った。

バイトから解放されて喜んでもるかと思いきや、どうもそうじゃないらしい。

「やっぱり時間の使い方に困るんだよね」

「そうなんですか？」

「うん。未来も似たような事言ってる」

そう言ってバイトを辞めたあいつが苦笑する。

どうやら今までバイトで過ごしてた時間が完全にフリーになったせいで、そこをどう使おうかと悩んでるみてえだ。

あたしと後輩二人は今月末までバイトがある。だからあたしらは今までとギリギリまで変わらないんだが、他はそうでもないからな。「何か新しく始めるにしても、そうすると今度は時間が足りませんよね」

「そうなんだよねえ。結局未来と二人で勉強するしかなくて」

「マリアもあと少しでお弁当屋さんを辞めるデスし、そうしたらアタシと調だけバイトする形デスよ……」

「き、切歌さん頑張ってるっ」

「お姉ちゃん達はそれだけ必要とされてるんです。頑張ってくださいっ」

友人と妹分から励まされてる辺り、こいつも相当寂しいんだろうな。

気持ちは分かる。あたしもあの店で一人ぼっちだ。仁志はいるけど、一緒じゃねーし。

「そうだよ切ちゃん。あと少し一緒に頑張ろう？」

「そうデスね。だけど、こうなると一緒に働く相手がいないのはさびしいデス。クリス先輩、お互い辛いデスねえ」

「……まあ、それも半月の辛抱だ。むしろ最初からそうだっただけお前の方がマシだろ。あたしやこっちは引き継ぎであの子と会う事も

なくなつたんだ」

「ううっ、そうデスね。分かったデス」

「あら、来てたのね」

「聞こえた声に顔を向けりや、そこには湯上りのママ役が立ってた。本気でエルのママって言われても納得するぞ、今のこいつ。」

「お邪魔してます」

「悪いが風呂貸してくれ」

「どうぞ。もし温かったら沸かし直してくれていいわ」

「おう（はい）」

揃って風呂場へと向かう。それにしても、本当に家族みたいだな、あいつら。

あそこに仁志がいれば完璧だ。ま、そうでなくても元々家族みたいな間柄だった奴らが中心だけだよ。

「つと。結局体重とかほとんど変わらなかったね」
「だな」

互いに着てるもんを脱ぎながら話す。エルの予想じゃ、あたしらは依り代で安定性を得てるためか、元々の世界の状態を維持するようになってるんじゃないかねーかって事らしい。

だからどれだけ食べようが運動しようが身体的な変化はほとんど起きない可能性が極めて高い。髪の毛が伸びる事もほぼなかったしな。

って、何故かバカの視線があたしの胸へ。

「んだよ？」

「いやあ、相変わらずの重量感だなあって」

「……羨ましいだろ？」

「……………今は本当にそう思う」

ふふん、だろうな。仁志の奴も男だ。胸は出来れば大きい方がテンション上がるだろ。

こいつも小さくはねえ。ただ、あたしやマリア程はないからな。

「こ、こうなったら大きくしてもらえないかな？」

「あっ」

何言つてやがる。大きくしてもらおう、だあ？

「あれ、クリスマスちゃん知らない？ 男の人に揉んでもらうと大きくなるって言う話」

「……………あれは一種迷信に近いぞ？」

「い、いいんだよ。ひ、仁志さんが触ってくれたら……………あう」

「自分で言つて自分で穴に落ちるんじゃないよ……………つたく。先行くぞ」

「あつ、待つてよクリスマスちゃん」

風呂場への戸を開けて中へと入る。すぐその後をあのバカも追い駆けてきた。

まずはシャワーで軽く汗を流す。で、それが終わればシャワーをあいつに渡して、あたしはボディソープを手取る。

「ねえクリスマスちゃん」

「ん？」

何かあったかと思つて顔を動かせば、そこにあつたのはニタニタ笑うバカの顔。

「背中だけじゃなくて全身洗つてあげようか？」

「……………時間が遅いし、ここはある意味よそ様の家だ。だからまずはこう言つてやる。そういう事はあの子とやれ」

「は〜い……………」

呆れと怒りを混ぜながらそう言つてやると、バカは拗ねるように口を尖らせた。

やれやれ、でも今ので何も言わね〜つて事は、本当にあつちじゃあの子とそういう事してたのか？

んな事を考えながら両手でボディソープを泡立てると、急に胸を優しく触る手が出てきやがった。

「おおつ、これがクリスマスちゃんのっ?!」

「こ、このバカっ。今言つたばっかだろっ」

「痛いよクリスマスちゃん……………。うわ、髪の毛に泡がついてる……………」

頭を擦つて付いた泡に表情を顰めるバカを見て、あたしはいっそやられた事を仕返してやろうと思つた。

「ただ驚いたと思ってやがる。それと、人に触られるのって思ってる以上にくすぐったいんだぞ。」

「ひゃんっ!？」

「そつと下から持ち上げるようにバカの胸を触る。お、思ったよりも重たいもんだな。」

「それに、やつぱ自分のとどつか違う感じがするぜ。こう、いつまでも触っていたいぐらいだ。」

「軽く揉んでみるとあたしのよりも弾力がある気がする。やつぱ鍛えてるからか？」

「く、クリスちゃん!？」

「っ!？」

「あのバカの上ずった声で我に返って手を離す。や、ヤバかったな。」

「あのまま揉み続けるところだった。」

「わ、分かったか。やられて嫌な事を人にすんじゃねえ」

「え、えっと、嫌じゃないよ?」

「は?」

「何言ってるやがるんだ、こいつ。」

「そ、その、むしろ嫌じゃないから止めたと言いますか……」

「嫌じゃないから止めた?」

「だ、だって、女の子同士でそういう事は……さ。せめて仁志さんとしてからがっていたあ!」

「とんでもねー事を言い出すバカにげんこつ一つ。」

「な、なんつー事言い出すんだよお前は! あたしはノーマルだつての!」

「……でも、私のおっぱい揉み出してたじゃん」

「あ、あれは……」

「私がやろうとしたら怒ったのに、自分はいいなんてクリスちゃん酷いよ」

「うっ……」

「痛いところを突かれてあたしは言葉に詰まる。」

「私も一度だけ揉ませてよ。だって、私は触っただけだけど、クリス

「ちゃんは揉んだんだもん」

「……………い、一回だけだぞ?」

今回ばかりはあいつの言い分が正しい。しかも今自分で言ったばかりだもんな。やられて嫌な事を人にすんなって。

「うん、ちゃんと一回で止めるから」

で、何でこいつは妙に嬉しそうなんだよ。あとその手は何だよ?

何でワキワキさせてんだ?

一回だけだろ!? どう見ても揉みしだく気満々じゃねーか!

「い、一回だけだよな?」

「……………気持ち」

「何だよ気持ちはって」

「……………もしかしたら体が勝手にやっちゃうかも?」

「お前なっ!」

この後、案の定バカは一回で止める事なくあたしの胸をメチャクチャにしようとした。

まあ、何だ。説教したし、あいつも反省したから許してやるけど、二度目はねえ。

「とか言いつつ、クリスちゃんも可愛い声出してたじゃん」

「人の心を読むんじやねえっ!」

揃って湯船に入りながら少し温いお湯に浸かる。これも、考えてみれば珍しい経験だよな。

「あはは、当たってた? 私、エスパーになれるかな?」

「ああいうのはなるもんじやないだろ」

「そうかもしれないけどさ、もしかしたらなれるかもしれないよ?」

突然、私が超能力に目覚めて」

「ちゃんと肩まで浸かれよ」

「相手してよお」

そう言いながらこいつはちゃんと肩まで浸かるんだから育ちがいいと言うか、何と言うかだ。

こうやって過ごせるのも、後一月ないんだな。そう思うと急に寂しく感じるな、やっぱ。

そのまま二人で黙ってお湯に浸かって、特に何か言った訳でもなく同じぐらいに出て、持ってきたバスタオルで体を拭いて、水着ギアを展開して服着て、あいつらに声をかけて帰る。

これも、後少しで終わる。心が、寒い。だけど、そう思っただけで俯きそうなたたしの手を握るあつたけえ手があった。

「どうしたの？」

「……何でもねえ」

特別な事をしてるなんて顔じゃなく、いつもの事だっただけのバカに少しだけ寒さが和らぐ。

思えば、この手があたしにあつたけえ場所をくれたんだ。

「早く帰って寝ようぜ、ひ、響」

「……うんっ！」

あの頃のあたしが今のあたしを見たら腰を抜かすかもしれない。バカって呼んでた相手を名前で呼ぶようになってきてるわ、心から惚れた男が出来たわ、留学するわ。きつと驚きすぎて信じないだろうな。

本当に、人生ってのは分からない事だらけだぜ。

あの日、パパやママを失った時からどう考えれば今の状況を思い付ける？

そういう意味じゃ、やっぱ明日は誰にも分からないって事か。

ああ、そうだよな。明日の事は神様だっただけ分りやしねえ。

だから希望がある。頑張ろうって思える。変えられる。

未来のあたしは、どうなってるんだろうな。今よりももっと幸せになってるんだらうか？

「ねっ、クリスマスちゃん」

「ん？」

まあ、もつとも……

「今夜は久々に一緒に寝ようよ」

「……おう」

不幸になるなんて考えたくもねーし、考えさせない奴らが傍にいてくれるから心配はしてねーけどな！

「お待たせしました兄様」

いつかの外出で買った勝負服（って言うんだと切歌お姉ちゃんが教えてくれた）を着て僕は兄様の部屋を訪れてる。

開いたドアからは兄様が顔を出して笑ってた。その温かい笑顔に僕も笑顔を返す。

何と、今日は僕と兄様のデートだ。お部屋デート、だったかな？

「いらっしやい。さあ、上がって」

「お邪魔します」

ここにこうやって来るのは久しぶりだ。最初は忘れもしないこの世界へ初めて来た日。

僕がまだエルフナインだった、あの日だ。

「はい、お客さん用のクツション」

「ありがとうございます」

兄様の置いてくれたクツションへ座る。これはヴェイグさんが寝てるクツションだ。

柔らかくて沈むみたいで、切歌お姉ちゃんが自分の分も買おうかどうか迷ってたのをよく覚えてる。

「それと麦茶な」

「ありがとうございます」

「さて、じゃあどうしようか?」

「そうですね……」

兄様とデートと言われても、正直何をしたらいいのか分からない。あつ、そうだ。

「まず兄様、依り代をお返しします」

「ああ、そうだった」

今朝朝ごはんを食べに来た後、兄様が僕のために置いていってくれた依り代を差し出す。

久しぶりに持ったけど、何だか少しだけ懐かしい感じがした。

思えば僕が最初に兄様から預けられた信頼の証みたいな物だからかな。とつても懐かしくて、そして少しだけ重かった。

「あの、それで帰りなんですが」

「分かってるよ。晚ご飯食べに行きがてら送るから」

「よろしくお願いします」

これで伝えないといけない事は終わった。麦茶の入ったコップへ手を伸ばして少し休憩。

「ふくっ」

こつちに来て僕は色んな事を知らなかった事に気付いた。その一つがこれ。

本部では友里さんがあったかい物を淹れてくれてたから飲む事になかったけど、お茶にも色んな種類があって、それぞれの味や香りが全部違うって事は知らなかった。

知識だけあっても経験がないと意味がない事もある。それを僕はここで体験した。兄様が僕やヴェイグさんへ色んな物や事へ触れさせてくれたから。

「とりあえず、何かしたい事とかある？」

「えっと……特には思いつかないです」

兄様としたかった事は、この前出来た。一緒に寝る事。エルフナインだった僕が、した事のなかった事の代表格だ。

だって、僕は一人でいる事が多い。研究室で寝る時間を惜しんで色んな事をやっていたから、睡眠というのは生きるために必要だからする行為って思っていたし。

だけど、こつちでお昼寝をする事で分かった。お日様を浴びながら誰かと寝る事は、とっても幸せなんだって。

寝てることを優しく起こされる事も、ご飯を作ってる音を聞きながら目を覚ますのも、とってもあったかくて幸せなんだって。

ヴェイグさんや姉さん、時々切歌お姉ちゃんや調お姉ちゃんとも一緒に寝た事がある。

ヴェイグさんとは隣り合って、姉さん達には抱き締めてもらって。「そっか。じゃ、やっぱり出かけるしかないかなあ」

兄様がそう言って腕を組んだ。でも、僕と兄様二人で外出するのは問題が多い。

一番は兄様が特殊性癖の人間と思われてしまう可能性がある事。ロリコン、だったかな？ ペドフィリア、だったかも？

「待ってください。それだと兄様が」

「けど、エルを退屈させるのもなあ」

「あのっ、僕は兄様と二人でいる事で退屈しません」

「そう？」

「はい。あつ、そうです。何かお話してください。僕、兄様のお話が好きです」

兄様はヒーローの話をよくしてくれるけど、たまに違う話もしてくれる時がある。

僕やヴェイグさんや姉さん相手にこの国の童話を聞かせてくれるんだ。

桃太郎や浦島太郎、かちかち山などの、一種の説話も兼ねてるそういう物語を。

「話、ね。じゃあ……むかし、とあるところに一人の少年がおりました。少年の家は貧乏で、しかも姉や弟などがいて、少年は子供なのにある程度の歳になると働く事になりました」

その兄様の話は、これまでの童話と違っていた。鬼などの空想上の存在や打ち出の小槌のような不思議な道具も登場しなかった。

ただ、その少年が家族や自分のために頑張る事はかなり具体的な内容で、僕は容易に想像が出来たけど。

少年もやがて大人になり、家を出て一人で生活を始めた。最初は会社の寮で生活して、その内職場を変えて……と、そんな風に働いている内にお見合いの話が舞い込んだ。

乗り気ではなかった彼だけど、紹介された手前すぐ断るのもと思っ
てそれを受け、相手の女性と数回のデートを重ねて気付けば結婚する事になっていた。

「えっと、好きだからとかじゃないんですか？」

「まあ彼も相手も結婚するつもりはそこまでなかったんだ。だけど、まあ、お互いこの相手とならって、どこかで思ったんだよ。若い内は一人でもいいって思っても、歳を重ねるとやっぱり寂しくなるもん

だつて言うし」

「そういうものなのですね」

歳を重ねると一人は寂しい。もしかしてキャロルもそうだったのかな？

一人でパパの命題を解こうとしてる内に寂しくなつて、それでガリイ達を作つたのかも知れない。

「つと、話が途中だったな。そうして青年は妻を得て、その翌年には父親となりました。生まれた子は男の子だったので、彼が好きな言葉である『少年よ、大志を抱け』と言う言葉から大志と名前を付ける事にしたのです」

「大志、ですか？」

「それを話すと妻はこう言いました。それじゃ私の意見が入つてないから、大ではなく仁つて文字に変えて仁志つて言うのはどうかと」

「あつ!？」

それは兄様の名前だ！ そう気付いた僕に兄様は小さく笑つた。

「彼はそういう事ならと頷いて、子供の名前は仁志となりました。ただ、悲しいかな。成長した息子は名前にそぐわない人生を送つてしまいました」

「そんな事ありません。兄様は、とつても優しくて立派です」

「ははっ、それは嬉しいな。でも、出来れば最後まで聞いてくれないか？ そんな息子でしたが、それでも名前のような気持ちを持ち続けられる出会いや出来事を経験し、今は少しだけ、名前通りの人間になれるそうです。コンビニではありませんが、店長という役職となつた事を息子から聞いた彼は、少し黙つた後でこう噛み締めるように言つたのです。俺はずつと役職なんてもんと無縁で働き続けた。それを俺が結婚する前の歳で超えたなら大したもんだ、と。それを聞いた彼の息子は、初めて父親に男として認められた気がしたんだそうな」

その瞬間、僕の頭の中にいつか見た写真の中の兄様のパパの顔が浮かんだ。きつと嬉しそうに言つたんだろうな。

そして兄様もきつと嬉しかつたんだ。パパに男性として立派になつたつて、そう思ってもらえたから。

「と、まあこれがめでたしめでたしになるかどうかはまだ分からない。出来るだけそうしたいとは思ってるけど」

「きつと、きつと出来ます。兄様ならきつと」

姉様達もいますからとは、言えなかった。言えば兄様が困った顔で笑うのが分かってたから。

兄様は本当に優しく強い人だ。本当は姉様達ともっと親密になりたいのに、それをすれば悪意が姉様達の心へ入り込むと思つて必死に自分を律してる。

僕はそんな兄様のある意味で安らげる相手と言えるかもしれない。ヴェイグさんと僕は、兄様が何も考えず、頑張る事もなく過ごせる相手だと思つうから。

兄様のパパの話聞いた後、僕は兄様の膝の上に乗せてもらつてギアの改良に役立ちそうな話をお願いした。

「ギアって言うなれば一種のパワースーツみたいなもんだよな？」

「はい」

「だけど、どちらかと言うと戦隊よりはメタルヒーローに近い、と」

「宇宙刑事のシステムはともかく、個別に装備などの差があるのはそうですね」

「となると、だ。参考になるのはメタルヒーローか」

「かもしれない」

切歌お姉ちゃんは蒸着に凄い憧れてた。僕もあのシステムは興味がある。ギアを装者自身が携帯するのではなく、どこか別の場所に保管・運用する事で万が一の際にも装者がギアを展開出来る可能性を上げられるからだ。

「じゃ、ギアの部分展開とか？」

「部分展開……」

「そう。例えば通信機能だけを展開させる。しかも、普段のようなヘッドセット状にする事なく」

「難しいです。ギアは基本的に完全展開しないと各種機能が使えません」

「そつかあ。じゃあ、起動時にエネルギーを纏つて敵へ攻撃、あるいは

その場からの移動手段にするってのは？」

「……おそろく不可能です。フォニックゲインをそういう風に使えるのかさえも判断出来ませんから」

兄様の意見は実現不可能な事が多いけど、大いに刺激にはなる。

特にギアを展開した後やギアを起動させる事自体でバリアのような物を展開させるのは、装者の安全面から見てもとても有効だ。

ヒーロー達が緊急回避として変身をするのはそういう意味も兼ねているんだろうな。要するに変身時のエネルギーを使つて相手の攻撃を弾いたり、あるいは防いだりしているんだ。

オーズの変身はまさしくそういう感じだった。あれと似たような事がギアでも出来れば、アルカ・ノイズの中をギアを展開しながら突破出来るのに。

「こうなるとシンフォギアって未知のエネルギーを使った未知の武装って面が強いなあ。たしかエクストライブでさえ全てのロックが解除された訳じゃないって設定だっけ」

「あ、はい。シンフォギアのロックは全てで」

「あー、いいよ。数はどうでもいいんだ。こうなると、エクストライブを超える形態があるかもって事かあ」

「そう、ですね。理論上はそういう事になります」

「意外とき、今回のツインドライブやダブルドライブも本当はその隠されてるロック部分に該当するって可能性、ないか？」

「言われてみると有り得ないとは言えない。依り代がやっているのは、本来シンフォギア自体が使用出来るのに現状出来ないため、無理矢理別の力で使用しているという事かも。」

「可能性は十分あります」

「そっか。じゃあ、シンフォギアって拡張性が高いんだな。外部的な力への順応性が高いし、もしかすると最終的には真ゲッターみたいな事も可能だったりするんだろうか？」

「しんげったー?」

初めて聞く名前だ。一体どんな存在なんだろう？

「えっと、こいつは色々面倒なロボットなんだよ。設定がアニメや

漫画、下手したら作品ごとに違ったりするから」

「えっと、つまりどういう事でしょう?」

兄様の説明によると、真ゲッターはゲッターロボという宇宙開発用のロボットに、ゲッター線という物を浴びせた結果生まれる凄まじい力を持った存在、らしい。

そして、兄様が言いたかったのは、その真ゲッターが漫画で迎えた最後にあった。

全てのものと融合して宇宙と溶け合ってしまった、と言う事みたい。シンフォギアの拡張性が最悪の場合そこまでいくんじゃないかって、そう思ったそうだ。

そこから兄様は色んなロボットの話をしてくれた。巨大ロボットから等身大のロボットまで、いつかの切歌さんロボと調さんロボのように、人間の友人になってくれるロボットを作って欲しいって。

「エルなら出来ると思うんだ。戦うためじゃない。誰かを助け、守り、支える存在としてのロボットを。アトムやロックマンみたいな、人と変わらぬ心を持った存在を」

「はいっ!」

その後、少しだけ兄様と一緒に仮眠を取った。初めて兄様の布団で寝たけど、どこか兄様の匂いがした。

だけど、どうやら兄様はそれがちよつと複雑な気分になるみたいだ。

「あー……加齢臭がしてくるんじゃないかと戦々恐々としてるんだよ……」

「加齢臭……ですか……?」

「そう。俺も……ふあゝ……三十を過ぎたし、そろそろだと思っんだ。気を付けてはいるけどな」

起き抜けて兄様とそんな会話をする。お互いまだ眠そうで、それを指摘すると兄様がふにやつとした顔で笑った。

二人してこのままだと二度寝しそうだからって顔を洗って、何をするでもなくボくつとした。

その時間が、僕にとっては新鮮だった。エルフナインだった頃には

決してなかった時間だからだ。

「エル」

「何ですか？」

そんな時、兄様が何でもないような声で僕の名を呼んだ。

「俺はな、エルフナインとして大人顔負けの賢さや閃きを見せる君も好きだけど、エルとして家の手伝いをしたり、セレナ達と遊んだりして笑顔を見せる君も好きなんだ。出来れば、その両方を合わせてやって欲しい」

「兄様……」

それは、戻ってもエルを捨てないでいいんだって言葉だった。姉さん達も言ってくれた言葉、だった。

僕はエルフナインのままでもいいんだよって、そう兄様も言ってくれた。

「クウガで言ってただろ？ 人には色んな顔がある。今のエルもそうだ。エルフナインの顔とエルの顔。それはどちらかだけじゃない。どっちも合わせて君なんだ」

「……はい」

「向こうじゃ色々ところとこつちと同じようには出来ないかもしれない。それでも、仕事だけのエルには戻って欲しくないんだ。心にゆとりを持てるようにしてごらん。それが出来ない、昔の俺みたいにただ生きてるだけになっちゃうからな」

「ただ、生きてるだけ……」

兄様の言葉がやけに胸に響く。ただ生きてるだけなんて、とても悲しいと思った。

そして兄様はそうなっていた頃があると僕は以前聞いていた。死ぬのうと思つた時があるって、兄様と姉様と初めて買い物へ出かけた時に教えてくれたから。

「まあエルにはそんな心配はないと思うけどさ」

そう言つて苦笑すると兄様は僕の体を持ち上げた。

「兄様？」

「意外と重いんだよな、エルも」

「そ、そうですか？」

体重はそんなに重くないと、思う。適正体重だと思っただけど……。
「ああ、命の重さだ。この重さが、俺が今みたいになる重石になってくれた。感謝してるよ。ありがとう、エル」

真っ直ぐな眼差しで僕を見つめて兄様は優しく微笑んだ。

「……いえ、僕の方こそありがとうございます。兄様が僕を子供にしてくれました。子供を、教えてくれました。兄様は、僕のもう一人のパパです」

「そっか。そりや光栄だ。じゃ、エルの家へ行くか？」

「はいっ！」

こうして僕は兄様と一緒にお家へ帰った。

玄関へ入るとヴェイグさんが姉さんと一緒に出迎えてくれて、切歌お姉ちゃんと調お姉ちゃんは台所から顔を出しておかえりを言ってくれた。

あったかい僕の家。初めて出来た、僕の家。ここにいるのは、僕の大事な家族。

優しくいつも一緒に遊んだりしてくれるセレナ姉さん。

優しくいつも色んな話に付き合ってくれるヴェイグさん。

優しくいつも明るい切歌お姉ちゃん。

優しくいつもしつかりしてる調お姉ちゃん。

優しくいつもみんなを見守ってくれるマリア姉様。

そして、優しくいつも頼れる仁志兄様。

みんな、みんな僕の大好きな家族だ。

ご飯も出来て、後は姉様が帰ってくるだけとなって、みんなで居間で時計を見つめてその時を待つ。

「ただいま」

声が聞こえた瞬間、みんなで居間から玄関へ顔を出すと姉様がこつちを見て苦笑してる。

「「「「おかえり（なさい）（デス）」」」」」

「ふふっ、ただいま」

みんな笑顔を見せ合う。この瞬間が、とても、とっても幸せだ。

「よし、切ちゃん、お皿出して」

「ガツテンデス」

「お茶は私が出しておきます」

「ヴェイグ、掴まれ。テーブルまで移動するぞお」

「すまん。助かる」

「姉様は手を洗ってきてください」

「ええ、分かったわ」

晩ご飯の支度にみんなが動き出す。姉様は洗面所へ、兄様はヴェイグさんを抱えてテーブルへ、三人のお姉ちゃんはそれぞれで料理を並べたりお茶を出したりしてる。

なので僕はみんなの分のお茶碗やお碗を出す事にした。

この暮らしを戻つてもしていきたいって、そう思うのはやっぱり贅沢なのかな？

——ふん、ならまずは口に出せ。それからだろうが。

一瞬間こえた声に動きを止める。今の、キャロルの声だったような……。

キャロル？　ねえキャロルなんだよね？　僕の声が聞こえてるなら返事をして。

……聞こえない。何も、聞こえない。

「でも……」

キャロルは言ってくれた。まずは思ってる事を口に出させて。

なら、せめて姉様達だけには言ってみよう。そう思いながら僕は人数分のお茶碗とお碗を並べていく。

やがてみんなが席に着いて兄様を見つめる。

「じゃあ、手を合わせて……」

「……いただきます」

僕は、やっぱりこの暮らしが大好きだ。近い内に兄様とはお別れになるけど、絶対僕は諦めない。

この光景を、失いたくないから。だから、絶対諦めない。

キャロル、君とまた話す事も、だからね。

平和な時間。穏やかな日々。九人の装者と二人の純真な存在が忘れていた、あるいは知らなかった生活。

上位世界というそんな場所での滞在は、一年にも満たない時間で終わりを迎えようとしている。

響達はそれぞれの住む場所の整理を始め、翼が根幹世界で購入した家電は何が問題になるか分からないと言う理由でギアを使つての解体がミレニウムパズル内で行われた。

響達やマリア達も仁志の部屋へ運び込める物は運び込む事にし、決戦当日に最後の運搬をするだけになるようにアルバイトから解放された者達が率先して行動する。

その作業をしながら誰もが噛み締めるのだ。この時間が終わるのだと言う事を。

祭りの終わりは寂しいと言うが、それに似た感情を彼女達も抱いて時間は流れる。

そして遂にその日はくる。

十月末、ギリギリまで働いていたクリスマス、切歌、調の離職を受け、全員が平屋の居間へと集まつての最後の時間が……。

「えっと、いよいよ明日、カオスビーストとの最後の戦いに挑む。こうしてみんなで助け合つて、支え合つてから半年にもならないけど、本当に、その、楽しくて幸せな時間だった。本当にありがとう」

深々と頭を下げる仁志に誰もが笑みを浮かべる。だが、口は開けない。こみ上げてくるものがあつたからだ。

どこかで望んでいた世界。それがこの上位世界だった。しかも、一部の者にとっては決して戻れない状態にもなれたのだから。

ゆっくりと仁志が頭を上げると、その表情は凜々しくなっていた。

「俺も、オーナーへ今日、辞職願を出してきた」

その言葉に全員が息を呑む。本気で仁志が戻れない時の事を考えているのだと、そう感じ取つて。

「ただ、オーナーへはある程度のお金を包んでこう頼んでもある。俺が一月しても戻らなかつたら辞職したつて事にしてください。それまでは、この金を使つて本部から人を呼んで凌いでくれませんか」

て」

「それが最後の手段かよ？」

以前のデートで仁志が言っていた言葉を思い出し、クリスはどこか驚きながらそう問いかけた。

「ああ、そうだ。オーナーは驚いてたけど、最後には受け入れてくれたよ。きっと初めてのケースじゃないかって。辞職願と一緒にそれを留保して欲しいって言って、しかもその間の人件費をある程度出すなんてのは。そう言って笑ってくれた」

仁志の脳裏にはその後のオーナーの言葉が甦っていた。

——何か理由があるんだろうね。だから、出来ればそれを聞かせて欲しい。これを君に返す時にでもね。それぐらいはいいだろう？

ねえ、店長？

それは仁志が一月以内に帰ってくるという信頼の表れ。泣かないと決めた仁志が思わず目を潤ませて頷く事しか出来なかった、オーナーの優しさだった。

「みんなの部屋も解約手続きはした。俺の部屋の事も、情けないけど両親へ万が一に備えて頼んである。俺も、後顧の憂いは断った。後は悪意に勝つだけだ」

その言葉に全員が力強く頷く。

「みんな、心を強く持つて欲しい。優しさよりも激しさが大事な時がある。それが、きつと明日なんだ。希望の光で闇を照らして、あしたを、未来を切り開こう。みんなの力で！」

「……………了解（はい）（ああ）っ！……………」

誰もが仁志を司令官のように感じていた。実際、今の彼はそういうものを意識している。

自分含め全員を鼓舞しようと思い、自身の知識からそれらしい言葉や言い回しを引っ張り出していったのだ。

「……………ゲートは、明日ここから俺の部屋へと移す。ある意味で最初に戻る訳だ」

「そう、ですね」

「そうだったな。最初は、仁志の部屋にあっただよな」

「それが、私達のアパートへ移動し……」

「今は私達の家、ね。そう思うと、ゲートの移動が仁志の状況の変化でもあるわ」

全員の視線が閉じられたノートPCへと向けられる。全ての始まりの一つであるそれに、色々な想いを込めるように。

「思えば、あつという間でした」

「そうだね。エルに初めて姉さんって呼ばれた時を思い出すよ」

「……俺も、こっちに来て動けなかった時を思い出す」

そつとエルフナインを抱き寄せ、セレナはその小さな体を抱き締める。ヴェイグはそんな二人を見てからノートPCへと視線を戻した。

ある意味では、この上位世界で一番変化したと言える三人は、この時間の終わりを誰よりも悲しんでいた。

「楽しかったよ。バイトなんて出来ないと思ってたし」

「はい。コンビニの裏側、色々知っちゃいました」

「アタシも本屋さんの裏側を知ってしまったデス。でも、アタシはそれよりもウィザードやディケイドを見れなかった事が残念デス」

がつくりと肩を落とす切歌の頭へそつと誰かが手を乗せた。

それに彼女が視線を上げると優しい笑みを浮かべる仁志がいた。

「また、こっちに来れるさ。そっちの世界で夏休みになったら来るといい。もしくは連休や予定のない時でもいいよ。定期連絡って形で遊びにおいて」

「ししよー……」

「大丈夫さ。俺達は負けないし、世界は終わらない。この出会いは遠い日の奇跡に出来るよ。大事なものは、信じ抜く事だ」

「……はいデス」

「よし、ならば……」

その仁志の言い方で切歌は何かを悟り、頷く。

「流派、東方不敗は……」

「王者の風よ」

「全新」

「系裂」

「天破侠乱」

周囲はそのやり取りに苦笑していた。知つていようが知らなからうが、二人らしいと感じていたのである。

「見よ。東方は、紅く燃えているうううううっ」

手を繋ぎ合つて声を合わせる仁志と切歌。すると、切歌が瞳一杯に涙を浮かべた。

「ししよっ！」

「つと、どうしたんだよ？」

「グスッ！ やっぱり、やっぱりさびしー德斯っ！ これでししよーと離れ離れなんて嫌德斯よおっ！」

「切歌……」

毎日二話ずつ見ていた『機動武闘伝Gガンダム』。その中の名場面であるマスターアジアとドモンの最後の掛け合い。それを知ってしまった切歌は、今のがそれにしか思えなかったのである。

涙を流して胸に顔を埋める切歌を仁志は優しく抱き締める。自分との別れを感覚的に察しているのだろうと、そう思つて。

「兄様あ……」

「エルも、か……。いいよ、おいで？」

「兄様あ！」

切歌の涙にもらい泣きし、エルフナインも仁志へと泣き顔を見せながら抱き着いていく。

そうなればもう後の流れは決まっていた。

「お兄ちゃん……っ！ 私も、いい？」

「ああ」

「師匠……」

「調もおいで。今だけは、今だけは泣いてもいいから」
「……うん」

年少組が仁志に抱き着いて涙する。父であり兄でもあった存在との別れ。それは、四人にとっては物心ついてから初めての、親しい存在との生きたままの別離。

また会えるかもしれない。そう思うも、出会い方などを考えればそ

の可能性は低いと言わざるを得ない。

故に、最後の別れと思ってしまうのも無理はないと言えた。仁志もそれをどこかで危惧しているからこそ、四人を優しく抱き留めていたのだから。

室内に聞こえる大小四つの涙声。どれも仁志の事を呼んでいた。

「ちくしょお……泣かないって、そう決めてたのになあ」

「仕方ないわ……。だって、あのエルが泣いてるんですもの……」

「胸にくるね、あの光景はさ……」

「本当に。今の四人の気持ちは、よく、分かる……」

年長組四人も涙を流し、胸を押さえていた。

まだ悪意との決戦に勝った訳でもない。まだ泣くには早いと、そう言うべきだとどこかで思っている。

それでも、その瞬間には仁志と引き離されているかもしれない。その不安が彼女達に四人への注意を躊躇わせていた。

「ヴェイグさん、泣いてるよ?」

「グスツ……そう言う響もだ」

「ふふっ、いいんじゃない、かな? 今だけは、今ぐらいはみんな泣いても……」

誰もが涙する中、仁志だけは泣かないで必死に笑みを浮かべていた。

(泣くなっ! ここで俺まで泣いたらダメだっ! 俺が泣くのは、全てが終わった後だっ!)

男の意地とでもいうような気構えで仁志は心の中で己を叱咤激励していた。

泣くならそれは喜びの涙にしたいと、そういう想いで彼は四つの悲しみを受け止め包む。

これが彼ら全員で平和な中で過ごした最後の夜となる。

翌朝、仁志の部屋に初めて響達全員が勢揃いした。

さすがに手狭ではあったが、部屋の奥に置かれたノートPCを見つめて彼女達は既に戦う者としての顔つきをしていた。

「ヴェイグはエルの中に頼む」

「分かった」

「ヴェイグさん、よろしくお願いします」

「ああ」

エルフナインの中へヴェイグが入ると同時に九人の装者達が聖詠を唱えギアを纏う。

その姿を見て仁志が依り代のゲームを使いドライブチェンジを実行、瞬く間に九人の姿が変わっていく。

「相手が何を企んでいるかは分からない。だけど、きっとみんなならそれを打ち破ってくれると信じてる。俺も、自分の出来る事でみんなを支えてみせるから」

「はいっ！ お願いしますっ！」

「響達六人はアマルガム、未来はジュエル、奏はゴジラ、セレナはアラビアン、のギアでいく。もし途中でギアを変えて欲しいとなったらそのギアへ自分で変えるか、俺へ教えてくれ。俺は定期的にスマホ画面のみんなのアイコンを見ておくから、それが変化したらそれでツインドライブを発動させる」

その言葉に装者達が頷く。気分は作戦前のブリーフィングだった。

「未来は基本エルと俺の護衛を頼む」

「はい！」

「セレナと奏は前衛六人の支援及び援護」

「うんっ！」

「ああっ！」

「響達六人はアマルガムによる破邪の輝きでカオスビーストを攻撃」

「任せて！」

「おう、やってやらあ！」

「アタシ達の輝きで悪意なんて吹き飛ばしてやるデスよっ！」

「うん、サンジェルマンさん達のくれた輝きに仁志さんの想いも加えたギアならっ！」

「例えどんな闇でも祓い清めてみせましょうっ！」

「これで全てに決着を着けるっ！」

「必ず勝ちましょうっ！」

エルフナインの言葉に全員が頷き、仁志がノートPCを開く。
「行こうっ！」

仁志の言葉を合図にまず装者達がゲートへと飛び込んでいく。そして最後に仁志がエルフナインを抱えて飛び込んだ。

響を先頭にゲートの中を進む仁志達。目指すは根幹世界のゲート、ギャラルホルンだった。

「……ヴェイグさんが警告しています！ 匂いがこれまでにない程酷いそうですっ！」

その言葉と同時にクリスがポツリと呟いた。

「いやがった……」

ギャラルホルンを塞ぐように存在するのは最後のカオスビースト・トゥリトス。

見た目は仁志がゲームで知る物と何ら変わりはない。それでも警戒を厳にするべく彼は告げた。

「見た目は変わりないけど気を付けてっ！ 何か新しい特殊能力を付与されてる可能性もあるっ！」

仁志の言葉を合図に弾かれるように六つの金色が動き出す。それ続く形で奏とセレナも動いた。

「只野さんとエルちゃんは私の後ろに」

「ああ」

「はい」

「絶対守りますから。ミーナさんがくれたアイギスと、カーバンクルのくれたこのジュエルギアの力でっ！」

守りに関して右に出る者がない今の未来。その守護の下、仁志とエルは二度目となるカオスビースト戦を見守る。

素早い動きで装者達をかく乱しようとするトゥリトス。だが、それに翻弄されるような響達ではなかった。

「その程度の速度でっ！」

「私達を振り切れると思うとはっ！」

「思わないこったっ！」

マリアの鞭のような攻撃がトゥリトスを捉えて動きを鈍くさせる。

その瞬間を分かっていたかのように翼の剣閃とクリスの銃撃が羽を斬り裂き、風穴を開ける。

「受けてみなっ！ インフィニット熱線をつ！」

そこへ奏のギアが放つ灼熱の放射熱線が炸裂。羽を完膚なきまでに溶かして燃やす。

「これでっ！」

大きくよろめくトゥリトスへ迫るはザババの刃。それを見て、やられてばかりではないないとばかりに反撃の光線を放つトゥリトスだったが、それが二人へ当たる前に聞こえる声があった。

「守りを固めますっ！」

セレナのギアによる魔神の加護が切歌と調を包み、光線を弾かせる。

その光景に動揺するトゥリトスへ魂まで刈り取るザババの刃を持つ二人が迫った。

「ダメ押し（デス）っ！」

合体攻撃の結果黄金の刃と化してトゥリトスを貫通する二人。腹部へ巨大な穴を開けられ、苦しむトゥリトスへ、最後のトドメとばかりに響がその拳を握りしめて突撃していく。

「いっくぞおおおっ！」

大きくダメージを負った状態からトゥリトスがその両手を動かして響へと狙いを合わせる。

「っ!? 不味いっ！」

「響さんっ！」

相討ち覚悟の攻撃を放つつもりだと察して仁志とエルフナインが叫ぶ。

それでも響は恐怖も不安も表情に浮かべる事もなく突撃を敢行する。

そんな彼女へ放たれる巨大な閃光。それが響の体を包み込もうとして——跳ね返された。

「させないっ！」

「ありがとっ未来っ！」

阿吽の呼吸とでも言えればいいのか。あるいは以心伝心が相應しいのか。

響の動きを読んでいたかのように未来が既に彼女の前に控えていた。

それによりトウリトスの最後の反撃は自身へのこの上ないダメージとして返ってしまい、最早響への反撃はおろか逃げ出す事さえも叶わない。

「終わりだあああつ！」

神殺しの力を有したその拳が最後のカオスビーストを捉え、貫き、滅ぼしていく。

跡形もなく消滅していくトウリトスを見つめながら誰も喜びを見せる事はなかった。

ただ、何かを警戒するように周囲を見回していた。

「後ろから凄く嫌な匂いがくるっ！」

「皆さんっ！ 後ろから悪意が来ますっ！」

「後ろだあ!？」

「ゲートを通過してきたと、そういう事かっ！」

「やはり上位世界に留まっていたのねっ！」

全員が後方へと意識を向けて移動する中、仁志はエルフナインを抱えて後退する。

やがて黒い雲のようなものが彼らの前に出現した。

「ふふっ、こうして会うのは初めてね。でも久しぶりと、そう言うべきかしら?」

「こ、これが悪意の本体、デスカ……」

「大きい……」

「姉さんや奏さん達の時に見たのとは比べ物にならないですっ！」

「こんなに成長してやがったのかよ……」

巨大な黒雲と呼んでも差し支えない悪意に誰もが表情を険しくしていた。

「だが、一体どうやって? 全ての世界は時間停止状態だったのに」

「まさか、上位世界だけでここまでの負の感情を吸収したと言うのっ

!？」

「ふふっ、さあどうでしょう？　ただ一つ教えてあげるのなら、貴方達の負の感情がとても美味だったって事ね」

「私達の……」

「負の感情、なあ？」

「ええ。とおっても濃厚だったわよ？　その男を想い、他の女へドロドロとした想いを抱く貴方達の心は」

その言葉に響達が思わず息を呑んだ。心当たりしかなかったからだ。

仁志を想い、求める気持ち。それと共に浮かんでくる他の女性達への嫉妬、恨み、憎しみ。

多かれ少なかれ抱いてきた事を否定出来る者は、女性は、装者達の中にいなかったのだ。

「あははっ！　凄かったわよ、貴方達の感情は。あいつさえいなければいいのに。どうして自分を見てくれないの。自己中心的な想いの塊で、他者を激しく排斥するような心の動きだったもの。なのに表では絆とか仲良くとか言ってる滑稽だったし」

「黙れっ！　それが人間なんだっ！　愛憎入り混じる心こそが、矛盾する生き方こそが、人間らしさだっ！　それをまるで闇だけが人間の本質みたいに言いやがってっ！」

「仁志さん……」

「兄様……」

悪意の指摘に仁志が吼えた。悪意の指摘は仁志さえもどこかで分かっていた事だった。

恋をすると人間はどこか自分勝手になる。それを彼は知らない訳ではなかった。

何故なら彼も恋をした事はあったのだから。想いを告げて振られた事もあれば、告げるまでもなく破れた事さえある。

彼も知っていたのだ。恋をする人間の醜さと酷さを。だからこそ吼える。人間はそれだけではないのだと。

「誰だって自分を見て欲しいって思うんだよっ！　自分を一番にして

欲しいって思うんだっ！ それはちつともおかしな事じゃない！
それが普通だっ！ 当然なんだよっ！ そんな当たり前の心の動き
を、在り方を、恋もした事のないお前にあれこれ言われたくないねっ
！」

「貴様……装者でもない癖に……っ！」

「ああ、そうだ！ 俺は装者じゃないっ！ 何の特別な力もない、ただ
の人だっ！ それでもお前と戦おうとするだけの気持ちは、心の力は
あるんだっ！」

そう言い切り、仁志は依り代を操作した。

「いくぞみんなっ！ 悪意を浄化してやるんだっ！」

「「「「「了解っ！」「」「」「」」」」」

もう彼女達に動揺はなかった。惚れた男の魂の言葉がその胸の歌
を刺激したのである。

「ソルブライドギア、起動っ！」

「行きますっ！」

「遅れるなよっ！」

「貴方こそっ！」

太陽の名を冠したギアへ身を包み、三つの光が槍となって悪意へと
向かっていく。

「巫女ギア、起動っ！」

「これをこのギアでやる最後の神楽にしてみせるっ！」

「悪意をキレイにしてあげるデスよっ！」

「はいっ！」

瘴気を祓い清める姿となり、三人の年少装者が悪意を囲む様に動き
出す。

「翼とクリスはそのままで支援や援護を頼むっ！」

「はいっ！」

「任せろっ！」

三人の錬金術師の想いを宿したギアのまま、他の装者達を導き支え
てきた二人が動いた。

「未来は一旦下がってくれ！」

「分かりましたっ！」

本来の得意分野である護衛へと戻りながら、これまで見守るしかなかった少女は凜とした表情を浮かべる。

「小賢しい……。そんな物が今の私に通用するとは思わない事ねっ！」

巨大な黒雲がその声と共に瘴気を撒き散らしながら姿を変えていく。

それだけではない。ゲートのあちこちから五つの黒い影のような物がそこへ吸い込まれるように出現したのだ。

「ず、凄く嫌な匂いだっ！ マリアを操った奴よりも酷いぞっ！」
「ミレニアムパズルで動きを封じる事は出来ませんか？」

「無理だ！ 信じられないが、これはあの時の世界蛇を超えてるっ！」

「世界蛇をっ?!」

「っ!? エルっ！ あれをっ！」

仁志の声にエルフナインが顔を上げる。そこには漆黒の世界蛇が出現していた。

大きさこそ違うが、その威圧感はかつてのそれを越えているとエルフナインでさえ確信出来るものが。

響達もそれを感じ取って思わず動きを止める程に、漆黒の世界蛇である邪悪龍は周囲へ瘴気を纏わせながら強大な存在感を放っていた。

「どうしたの？ そんなに私の姿が美しくて見惚れてしまった？」

「っ！ 奏さんっ！ マリアさんっ！」

「分かってるよっ！ 何が美しいだっ！」

「そうよっ！ こんなにおぞましい姿でっ！」

光槍が動く。邪悪龍へその陽光の輝きを浴びせるように攻撃を放ったのだ。

最初に見せた際、カオスブーストが怯える程の力を見せた黄金のガングニールトリオ。その攻撃を浴びて邪悪龍は……

「効いてないっ?!」

まったくダメージを負う事なく平然としていたのである。

「あははっ！ とつても気持ちいい温度の刺激だったわ。でも、出来ればもう少し強くても良かったのよ？」

「こいつ……っ！」

「ソルブライドギアの力を……克服したとでも言うの？」

動揺する響、苦い顔をする奏、驚愕するマリア。前回の戦いとは真逆の結果に邪悪龍はほくそ笑む。

「なら私達がっ！」

「その闇を弱くしてやるデスっ！」

「やってみせますっ！」

三人の巫女ギアによる神楽。それを邪魔する事なく邪悪龍は悠然と佇む。

まるで、その程度では自分を倒す事など出来ないと言うように。

だが三人の神楽の結果、邪悪龍の周囲にある瘴気が薄れていく。

「あら、これぐらいは出来るのね」

「今ならばっ！」

「こいつの輝きが通るっ！」

それを好機と見て翼とクリスがアマルガムの輝きを重ねて放った。

飛ばされた剣閃と銃撃が合わさり瘴気を貫いて邪悪龍へ命中する

も……

「その程度じゃ逆鱗さかさつらしには触れられないわ」

「くっ！ 二つでは力不足と言う事かっ！」

「これだって十分強力になってるってのにっ！」

余裕を感じさせる声に翼とクリスが悔しげにアームドギアを握り締める。

すると、そんな状況で聞こえる声があった。

「響っ！ 前にやった攻撃を試そうっ！」

「分かったっ！ 奏さんっ！ マリアさんっ！」

「よしっ！」

「それしかないわねっ！」

「あら、中々楽しそうな事をしてくれそうね」

未来の持つ鏡の盾へソルブライドギアの輝きを集束させて放つ攻

撃。それが現状もつとも悪意へ有効な攻撃ではないかと未来は考えたのである。

その動きに邪悪龍は焦るのではなく、むしろどこか嬉しそうな声を出しながら薄れた瘴気を正面へと集束させる。

それを見ていたエルフナインは、どこかでその展開を見たような気がしていた。

——ヴェイグさん、どこかで今のような状況を見た気がするんですが、心当たりはありませんか？

——今のような？

——はい。これまでは有効だった攻撃が悉く無力化ないし弱体化されて相手に通用しない。そして以前決め手となった協力攻撃を使うという流れです。

——……………言われてみると、たしかにどこかで見た気がする。

——僕らが見てきた中で…………

——今と似てるもの…………

そこで二人は同時に目を見開いて互いを指さす。

——ガガガだっ！

それは、Zマスターという相手と対峙した際の話。あらゆる攻撃が通用しない相手に対し、合体原種と呼ばれる存在を倒した攻撃を試そうとする展開だった。

劇中では、その攻撃を逆に押し返されて味方に大きな被害が出てしまう。その光景を思い出して、エルフナインは自分を抱き抱える仁志へ顔を向けた。

「兄様っ！ 響さん達を止めてくださいっ！」

「え？」

「Zマスターなんですっ！ 集束レンズの時と流れが同じなんですっ！」

「Zマスター…………集束レンズ…………っ?! そういう事かっ！」

エルフナインの言いたい事を察し、仁志は素早く響のアイコンをタップしてアマルガムへと変更する。

「あれっ?!」

中心的存在である響のギアが変わった事で奏とマリアの動きが止まり、未来がすぐさま後ろを振り返った。

「只野さんっ！ どうしてっ!？」

「あいつの狙いがっ！ 今の合体攻撃の誘発の可能性があるからだっ！」

「悪意は、皆さんの攻撃を利用してこちらへ反撃をするつもりかもしれませんっ！」

「なんですってっ!？」

二人の言葉に誰もが邪悪龍へと顔を向ける。すると、邪悪龍の瘴気の中から沢山の小さな鏡のような物が浮かび上がってきた。

「ざあんねん。やっぱり流用はダメね。折角忌々しいギアをその光の力で残さず消し去ろうと思ったのに……」

「お前っ！ やっぱり俺の世界でみんなと一緒に特撮やアニメをっ！」

「そうよ。中々有意義な情報や知識を得たわ。でも、どうするの？ そちらの使うツインドライブとやらはもう私には通じない。同じ攻撃にやられる程愚かじゃないの。何せ凄まじい力を見せられたもの。そのためにある時から情報収集に徹してきたのよ?」

「凄まじい力? ……まさかっ！ 立花と雪音を操った時か!」

「なら、これまでのカルマ・ノイズの出現は情報収集って事っ!？」

アマルガムのツインドライブを初めて使用した出来事。

その圧倒的な力を見て、悪意はそれを危険視したのだ。それだけではない。仁志と装者達の繋がりが手にした力と、その可能性もだ。

故にカオスビーストやカルマ・ノイズを使い、その力を研究・分析し、倒された存在の瘴気を吸収する事で現在のような状態になったのである。

「ご明察。アマルガムとやらの力は私には脅威だった。それにソルブライドギア、だったかしら。それなんかもね。それをより厄介にするツインドライブという強化法のおかげで、このままでは勝ち目は薄いと思った。だから待ったの。そちらが手の内を見せてくれるのを。おかげでもう負けないわ。浄化の光だろうが太陽の輝きだろうが、今

の私は飲み込んでみせる」

「くっ、ならそれを確かめてやる！ みんな、それぞれのギアの力を総当たりでぶつけてくれ！」

そこから仁志達は特殊ギアのツインドライブをこれでもかど試した。

だが、ライダーギア三人によるトリプルアタックも跳ね返され、アラビアンギア三人の魔神の力さえ通じず、海賊ギア三人による一斉攻撃も、晴着ギア五人の同時攻撃も、和装ギアもメイドギアもサンタギアすらも一切ダメージを与える事は出来なかった。

それもそのはず、かつての世界蛇相手にさえ普通の総力戦以上の世界を越えた総力戦の末、何とか勝利を掴めたのである。

それよりも強力になった上、ツインドライブが通用しなくなった邪悪龍相手に有効な手段など、仁志達に存在しなかったのだ。

ただ一つ、リビルドギアを除けば。

だがしかし、仁志はどこかでその使用を躊躇っていた。理由はない。もしあるとすれば……

(何というか、これってこっちの最後の切り札を切らせようとしてる流れだよな……)

彼のこれまでの特撮やアニメ視聴からの経験による一種の予感だった。

アマルガムを超えるギアと言えば、残されるのはリビルドかエクスドライブである。その内、仁志達が任意で使用可能なのはリビルドだ。

しかも、それはカルマ・ノイズ相手にもカオスビースト相手にも使っていない、文字通り最後の切り札である。

けれど、その事を悪意は知っているはずだと、そう仁志は思っていた。

これまで自分達を監視してきて、リビルドギアに気付かないはずがないと。

つまり、知っている上でそれ以外のギアでは自分は倒せないと知っているのである。

これに仁志は嫌な予感をひしひしと感じていたのだ。何かある、と。

リビルドギアを使う事は、悪意にとって望み通りの展開になるのではないかと、そう考えていたのだ。

(だけど……)

チラリと仁志は前を見つめた。そこでは本格的な攻撃を始めた邪悪龍に苦戦する響達の姿がある。

リビルドギアを使わないままでは、響達はいずれ力尽きるだろうと思う程だ。

巫女ギアの神楽も今は邪魔されるようになり、瘴気の壁が邪悪龍を包んであらゆる攻撃を阻むバリアとなっていた。

最早完全に打つ手なしである。

「……………分かっているもやるしかない、か」

残された切り札は一つだけ。相手の思惑に乗る事になるとしても、それを響達が上回ってくれる事を信じようと、そう思って仁志は遂に決意した。

「みんなっ！ ドライブチェンジだっ！ 奴の狙いは明らかだけど、それを打ち破ってくれっ！」

響、翼、クリス、マリア、切歌、調、奏、セレナ、未来。それぞれのギアが通常の姿へと戻り、淡い輝きを放つ。

更にそれが一瞬にして眩いばかりの光を放った。リビルドギアツインドライブ。現状響達になれるもつとも強い姿である。

「こ、これ程なんて……ああっ!? 体が、燃える様に熱いっ!?」

九つのギアが放つ光だけで邪悪龍の瘴気が消し飛ばされていく。それだけではない。邪悪龍の体を覆う鱗さえも溶け始めたのだ。

「これが……リビルドギアツインドライブ……」

「温かな光だ……」

「ああ、とつてもあつたけえ……」

「まるで誰かに抱き締めてもらっているかのようだわ……」

「だとしたら、きつとししよーデスよ……」

「うん、そうだね。だってこれは、師匠の思いがくれたギアだから

……」

「想いがくれたギア、か。なら、見せてやろうじゃないか、あいつに……」

「はい。想いは、大好きって気持ちには、闇に負けないうて……」

「これで終わりにしましょう。みんなで……」

静かに頷き、九人の戦姫は邪悪龍へと向かっていく。

「くっ！… この程度でえー！」

口から瘴気を炎のように吐き出す邪悪龍だが、その炎は未来のアームドギアが受け止め消し去った。

「邪悪な存在は、神獣鏡が祓けますっ！」

「ちっ！… なら……」

鱗から閃光を放ち、拡散攻撃を始める邪悪龍。その漆黒の閃光を薙ぎ払うように放たれる二筋の閃光がある。

「白銀の輝きの使い道はっ！」

「攻撃だけじゃないわっ！」

「おのれえ……」

二つのアガートラムによる攻撃が一時的に邪悪龍の攻撃を阻むや、その間隙を突く形で複数のギアが絡み合うように動く。その数、四つ。

「合わせるよっ！ 翼っ！」

「分かってるっ！ 暁っ！ 月読っ！ そちらも遅れるなっ！」

「はい德斯っ！ ツヴァイウィングとザババの力でっ！」

「勝利を掴み取ってみせるっ！」

「馬鹿めっ！ 噛み砕いてくれるっ！」

一直線に正面から突撃する二組へ邪悪龍がそのアギトを広げて迎え撃とうとして——そこへ大量のミサイルやビームが炸裂しそれを阻む。

同時に四色の突撃攻撃が邪悪龍を直撃、更なる追い打ちとなる。

「~~~~~っ!？」

声さえ出せず呻く邪悪龍へ、それを御膳立てしたクリスがニヤリと笑って言い放った。

「馬鹿はてめえだ。イチイバルは弓なんだぜ？ 大口開けて、狙ってくださいってか」

「っ！ この小娘があああっ！」

怒りに任せての火炎と閃光による一斉攻撃が前面へ殺到する。

それらはさすがに防ぎ切る事が出来ず、未来達は回避や防御に追われた。

「あははははっ！ 所詮この程度よ！ 私が本気を出せばシンフォギアなど敵ではないっ！」

攻勢を強めて行く邪悪龍。だが、そこでその目は気付く。自分の攻撃に対処しているギアの数が一つ足りない事を。

「……足りない。ガングニールが足りないっ！」

その時、邪悪龍は後方から感じる気配で首を動かした。

「はあああああっ！」

「いつの間に後方へっ!？」

全ては未来が動いた時から始まっていた。どんな時も最後の決め手は響が担ってきた。だからこそ、誰もが彼女を邪悪龍の意識から逸らすために動いたのだ。

邪悪龍の意識を正面に釘付けとするべく、全員がその正面へ陣取り攻撃し続けたのはそういう意味であった。

「行けっ！ 響っ！」

「お願いしますっ！」

ヴェイグとエルフナインの声援が飛ぶ。それに頷くように拳をきつく握り、響はまるで光の槍のような速度で邪悪龍へと向かっていく。

「ベルちゃんを歪めた悪意っ！ ここで絶対に倒してみせるっ！」

響の拳が邪悪龍を捉える。が、それが邪悪龍を貫く事はなかった。

「ぐっ……」

「残念だったわね。一瞬ヒヤリとしたわ。だけど……」

瘴気を響の突き立てられた拳へ盾のように展開させ、邪悪龍は己を守ったのだ。

その瘴気が響の輝きを飲み込むように包んでいく。

「このまま飲み込んであげる。終わる事のない夢の世界へ連れて行ってあああつ!？」

余裕を感じさせていた邪悪龍の声が絶叫へと変わる。原因はその体へ叩き込まれた八つの攻撃にあった。

「今だ響っ!」

「はいっ! うおおおおっ!」

仁志の声で響のギアが一際強く輝きを放つ。その黄金の輝きが拳を阻んでいた瘴気を消し飛ばした。

「そ、そんな……そんな馬鹿なあああつ!」

ダメージによって防御が緩んだ事もあり、それによって一気に響の拳が突き進んだ。

邪悪龍の体を貫くようにし、光の槍は漆黒の闇を撃ち砕いていく。

「これがっ! 撃槍っ! ガングニールだああああつ!!」

やがて邪悪龍の体を貫通して響が姿を現した。

その背後で邪悪龍が光の中へと消えていく。

——その力も覚えたわ……。

最後に消えゆく中、不気味な言葉を漏らしながら。

そうやって邪悪龍が光の粒子となって消えて行くのを仁志達は眺め、全てが消えた後もしばらく周囲やお互いを警戒した。

仁志の危惧していた事が起きないかどうかを確かめるために。だが、心配していたような事は起きず、ならばと一旦来た道に戻る事となった。

悪意が上位世界からやってきた事を踏まえての最終確認である。

その結果、何故か上位世界のゲートである裂け目は消えてはいなかった事を確認出来た。

ただ……

「何だか最後に見た時よりどこことなく小さくなってねーか？」

「言われて見れば……」

「だとすれば、おそらくですが、星の声がゆっくりと裂け目を直しているんだと思います。一気にやるとゲート全体に何か影響が出るのかもしれない」

「有り得るわ。それぐらい仁志の世界は特殊な世界だもの。それで、どうする？ 帰る？ それとも、戻る？」

その問いかけに誰もが言葉に詰まる。どちらがどちらだと、そう思ったからだ。

ゲートへ帰る、なのか。ゲートへ戻る、なのか。それによってマリアの問いかけは大きく意味を持つのだから。

ただ一人、そんな事を意識せず口を開いたが。

「俺は帰るべきだと思うぞ。こういう形になったのなら、迷うまでもない」

「仁志さん……」

仁志の言葉はある意味でその場の全員が読めていたものであった。

「正直ちよつとだけホツとしてるんだ。最悪を回避出来たから、ね」

その言葉に誰もが同意するように笑みを見せる。

この時、ヴェイグ以外は知らなかった。仁志が告げた最悪がどういう意味かを。

「つと、そうだ。一旦みんなも来てくれ。エルに依り代を渡さないといけないし、その、一旦お別れしないといけないだろ？ 最後に写真、撮らせてくれよ」

告げられた言葉へ秘められた想いに響きは気づきながらも、それを分からない風にして笑顔で頷いた。

そして仁志とエルフナインを先頭に裂け目へと入っていく。

どこかで、もう次にそこを通ればもう通る事はないのだろうと思いつつ、誰もが言葉を発する事なく黙ったままで……。

「はい、これ」

俺が差し出したスマホをエルは見つめて動こうとしない。それでも俺はじつと待った。

「……兄様、やはりこれは受け取れません」

「どうして？」

「これがないと、兄様が僕らの世界へ来れないからです」

「じゃあ、むしろ余計俺はエルに持って欲しいよ」

「えっ？」

きよとんとするエルの頭を優しく撫でながら俺は目線を合わせた。もう、こうして撫でる事もないかもしれない。そうどこかで思いながら。

「俺じゃこいつを調べる事さえ出来ない。でもエルなら調べる事も、もしかしたら仕組みを解明する事も出来るかもしれない。なら、どちらが持ってた方が有益かは、賢く強いエルなら分かるだろう？」

「で、でも……」

「それに、エルだけで無理ならキャロルやフィーネ、櫻井了子さんにプレラーティとも協力してくれ。そのためにも、これはエルに持ってて欲しいんだ。ダメか？」

「兄様……」

綺麗な瞳に涙を浮かべるエルに笑顔で頷いて、その小さな手へスマホを、依り代を握らせる。

「男に二言はない。エルへこれを貸すって約束しただろ？ なら、分かっているよな？ 貸したって事は？」

「ぐすつ……返しにきますっ！ 絶対、絶対僕がここへ返しに来ますっ！」

「ああ、待ってる。俺も、自分なりに頑張ってみるよ。ゲートは作れないでも、みんながいつ来てもいいように、もう少し広い場所へ引っ越せるようにさ」

「はいっ！」

涙を流しながら笑顔を見せてくれるエルの髪をもう一度だけ撫でる。その感触を忘れないようにと。

「さてと、じゃあ撮影するか。さすがにここだと狭いから……」

「いいじゃないか。ここで撮ろうよ。で、次に撮る時はこことは違う場所になって、みんなで懐かしく思えるようにさ」

さり気無くプレッシャーをかけてくるな、奏は。

でも、うん、それぐらいの重圧がないと俺はダメかもしれない。

「分かった。じゃ……」

「あつ、師匠。どうせならツインドライブギアを展開させて欲しい」

「ギアを？ 何で？」

調の思わぬ意見に首を傾げる。見ればみんなも同意見らしい。いや、切歌だけは何かに気付いたように笑みを浮かべてる。

「デスデス！ その方がいいデス！ で、アマルガムデスよね？」

「さすが切ちゃん。私の考えをよく分かってる」

「とーぜんデス！ さっ、ししよー、早く早くデス」

「え？ ああ、うん」

折角感動のやり取りをエルとしたばかりなのに……。

苦笑するエルからスマホを受け取り、俺は調をアマルガムギアツインドライブへと変える。

で、調がアームドギアをつて……ああ、そういう事か。

「出来た」

「デスね」

ロボット形態となったアームドギアが俺の方へ歩いて来て手を差し出した。

「この子に撮影してもらおうって？」

「うん。そうしないと師匠が入れない」

「デス」

「そういう事だったのね」

俺がデジカメラを渡すとギアロボはちゃんとそれを手に構えてみせた。

「おおっ、どうなってるんだ、これ。凄いなあ……」

「只野さん、感心してないで早くこっちにきてください」

「あ、はい」

未来からややつり目がちに注意され、俺は慌てて中心へと。

俺の前にエルやセレナが立って、両隣には響とクリス。

セレナの横には調が立って、エルの横に切歌がいる。

後列の左端にマリアで、右端は奏。翼は奏の横で、未来がマリアの横。

ちなみにヴェイグはエルが抱っこしている。

「じゃ、撮るね。お願い」

調がそう告げるとギアロボは頷いてシャッターを押した。

器用なもんだ。そう思いながら俺は笑みを浮かべる。泣くのは、もう少し後だ。そう自分に言い聞かせて。

二枚程撮影してもらい、最後に俺が普段の姿であるみんなを一枚だけ撮らせてもらった。

そして写真撮影が終わると、何とも言えない空気が流れる。

多分だけど、一番近いのは楽しく遊んだ後の別れ際。

互いにバイバイとかまたなって言い合いながらもそこからあまり離れていかないような、そんな感じ。

「みんな、名残惜しいのは分かる。でも、裂け目がいつ閉じるか分からないから早めに」

「分かってます。でも、でもお……」

響が泣きそうな顔を見せる。ああ、本当に君は乙女なんだな。

その本質は、どこにでもいそうな女の子だとして関わり合ってよく分かったよ。

「大丈夫っ！」

だからこそ、俺は最後まで君達のヒーローであり続けよう。

サムズアップをし、俺は心からの笑顔を見せる。

「一度出来た事なら絶対に出来ないはずはないさ。俺がこの絆を途切れさせたくはないと思うように、みんなもそう思ってくれれば、いつか、いつか必ずまた会えるよっ！」

青空のような心の、笑顔が大好きなヒーローにあやかって、俺はそう言い切った。

「仁志さん……」

「どこまでも貴方はそうしてくれるんだね……」

「くそっ……最後の最後までヒーローしやがって……」

「本当に、らしいわ……」

「ししよーは、それに相応しいと思うデス……」

「だから、私達も相応しい人で居続ける……」

「そうだね。ああ、そうしようか……」

「お兄ちゃん、絶対、絶対また会おうね……」

「今度会う時は、私達ももつとイイ女になってますから……」

「兄様、約束は果たします……」

「タダノ、またな……」

「ああっ！ みんなも元気でっ！ 俺も、俺も頑張るからっ！」

その言葉にみんなも笑ってサムズアップを返してくれた。

それに俺はもつと笑顔を深くする。と、そこで……

「仁志っ！」

「っ?!」

クリスが飛び付いてきて、そのままキスをしてきた。

しかも舌を入れるような、デ IPPキスを。

あまりの事に驚いて一瞬意識が飛んだぐらいの衝撃だ。

「く、クリスっ?!」

「へへっ、ど、どうだ？」

「クリスちゃんズルいっ！」

「へっ!」

クリスを下ろしたと思ったら、今度は響。こちらは……普通のキス。

「響……」

「えへへっ、しちやいました」

「な、なら私もするっ！」

「は?」

響が離れたら翼が足を踏み出してキスしてきた。こっちはおずおずと舌を入れてくる可愛いキス。

「翼、君まで」

「だ、ダメ？」

「ダメじゃないわ。私もするから」

「はいっ!」

翼を優しく離れたところへマリアがカットイン。予想通り舌を入れてくるデ IPPキス。

クリスよりも激しいそれに一瞬意識が乱れる。

「マリアっ！」

「いいじゃない、これぐらい」

「これぐらいってなあ」

「アタシも行くデスっ！」

しれつとしてるマリアへ詰め寄ろうとすると元気よく割って入るは切歌。愛らしいキスは、響と同じ普通のキス。

「ししよー、どうデス？」

「あー、ある意味毒気を抜かれたよ」

「それは良かった。次は私だよ、師匠」

「だよなあ」

切歌の後ろから出てくる調にため息さえ出ない。もう抵抗する気さえ失せた。

調の可愛いキス——と思いきや途中で舌を入れようとする変則的なキス。

「……調？」

「ちよつとだけ冒険してみた」

「冒険、か。じゃあたしも」

「だと思ったよ」

チロツと舌を出してウインクする調と入れ替わりに出てくる奏。そのまま抱き着くように情熱的なキスをしてきた。

呼吸できないかと思うぐらいのそれに意識が一瞬飛びかける。ちよつと怖くなってきたんだけど。

「御馳走様」

「おい。表現」

「今のって何か問題なの？」

「うん、そうだよ。で、セレナ？　そう言いながらどうして背伸びをしてるかな？」

「だ、ダメ？」

いじらしく爪先立ちをして俺へキスをしようとするセレナにこっちの心が折れた。

そつと抱き寄せるようにキスをして、少しだけゆっくりと離れる。

「……お兄ちゃん、私、嬉しい」

「そうか。それは良かった」

「じゃあ、最後までやってくれますよね？」

「ここまで来て未来だけしないなんて俺が嫌だったの」

ややむくれている未来を抱き締めるようにするや、向こうからキスされた。

しかもデイープ!? 予想だにしない行動に一瞬意識が乱される。

「……未来？」

「只野さんが悪いんですからね。私だって女、なんですよ？」

「まあ、それは……」

「あ、あのっ」

と、そこで聞こえる可愛い声。目を向ければエルがやや赤い顔でこつちを見上げてる。

「ぼ、僕もした方がいいんでしょうか？」

「……頬にお願いしようかな。俺もそうする」

「あっ、はいっ！」

エルの前にしゃがんでまずはこつちが頬へキス。その後こつちの頬へ軽く触れる温もりがあった。

「ど、どうですか？」

「うん、すつごく幸せだよ。ありがとな、エル」

「僕もです。兄様、お元気で」

可愛い笑顔でそう言うってくるエルに、涙が流れそうになるのをグツと堪えていると感じる視線。

目を向ければヴェイグがエルの腕の中からこつちを見ていた。

「タダノ、さすがに俺はしないぞ」

「俺も出来れば遠慮したいよ。ただ、これぐらいは、な？」

そつとヴェイグへ右手を差し出す。それを見て、ヴェイグも意図を分かってくれたらしく、静かに顔を上げると頷いてくれた。

「そうだな。これぐらいはしよう」

ヴェイグと握手をする。俺にとつての隠れた相談相手であり、全てを打ち明けられた大事な友人へ、沢山の想いを込めて。

そしてその後すぐにみんなはギアを纏ってゲートへと消えた。エ

ルは依り代を持ってマリアに抱えられるように。

「……行った、か」

静かになつた室内を見回し、ゲートが心なしか穏やかになつたような気がしたところで、俺は膝から崩れ落ちた。

「は、ははっ……思つてたよりも、くる、もんだ、な……っ！」

耐えていたものが一気に溢れた。なけなしの大人成分はどうやら尽き果てたらしい。

声もなく泣いた。いや、声が出せない程に泣いた。

分かつていたはずなのに、覚悟していたはずなのに、それでも、それでも足が震えるし、視界は滲むし、頭は痛いし、最悪だ。

「ぐっ……ううううっ！」

何とか出せてもうめき声にしかならない。今まで俺を支えていた糸のようなものが、何か大事なものが切れたような、そんな気さえしてくる。

どれぐらいそうしていたか分からない。十分なのか、一時間なのか、もう時間の感覚さえ曖昧だ。

全身から力は抜け、何もする気にもなれない。だけど、それじゃダメだ。ダメなんだ。

「生きるのを……諦めるなっ！」

この言葉に助けられるのは二度目だな。でも、その言葉を言っていた存在に会えたんだ。喋って、触れ合って、抱き合った。

「愛と勇気は言葉……っ！ 信じられれば力あつ！」

無理矢理起き上がる。そうだ、寝てなんかいられない。

俺はまたみんなと会うつて決めたんだ。次に会う時はこの部屋じゃなく、もう少し広い場所で会うつて約束したじゃないか。

「……うし、オーナーに会いに行こう。理由は……突発的に外国に行こうと計画したんですけど、パスポートが間に合わずに断念しましたつて言おう。ある意味で間違つてないし」

そうと決まれば善は急げだ。今日は休みだから、ゆっくりオーナーと話すなら今日しかない。

財布や鍵を持って俺は部屋を出ようとして、ふと慣れた重さには何

か足りない事に気付く。

「……返しに来てくれるのを、楽しみに待つか」

娘のように思っていた少女の顔と言葉を思い出して、俺は今度こそ部屋を出る。

鍵を閉めて向かうは店だ。その後は一旦帰ってきて飯を食べて、デジカメのデータを現像してもらうために写真屋へ行つて……やらないといけない事もやりたい事もいっぱいあるな。

「うん、例えもう会えないとしても、だとしてもその精神で頑張ろう」
次に会った時、少しでも今よりカッコイイと言ってもらえるように。

それにしても、妙に体が怠いな。原因は、緊張の糸が切れた事と泣き疲れかな？

そんな情けない事は認めたくないんだが……あんなに泣いたのは久しぶりだし、有り得なくもないか。

ゲートの中に行く響達。その表情は誰もが暗い。

「……仁志さん」

原因は言うまでもなくつい先程まで共にいた一人の男性。

いつの間にか皆の中心となり、彼女達を支え続けた、ただの人。

「立花、気持ちは分かるが今は本部へ戻り司令達の無事を確認する事が必要だ」

「はい……」

「私達もそれぞれの世界へ帰る前に顔を出した方がいいですよね？」

「まあそうだろうね。まだ一人で動くには早いと思うよ」

セレナと奏の世界へのゲートも無事出現している事は確認したが、まだ単独行動をするのは危険と判断していたのだ。

「でも、良かったデスよ。ししよーとすぐにお別れって事にならなくて」

「うん、そうだね。やっぱりゲートは星の声が作ってくれたんだ」

「こうなるとその可能性が高いでしょうね」

現状唯一と言つていい好材料がそれであった。

悪意を倒しても裂け目がすぐに閉じなかった事。それが意味するのはそういう事だったのだから。

「にしても、呆気なかった気もするな」

「そうだね。でも、それだけリビルドギアツインドライブが強かったんだと思うよ。だって、強さだけならエクストライブだし」

悪意との決戦は想像よりもあっさり決着がついたと、そう誰もが感じてはいた。

ただ、それは未来の言う通りリビルドギアツインドライブの力あつての事だと思っていたのだ。

「あつ、見えてきました」

「ああ」

根幹世界へのゲートが、ギヤラルホルンが見えてきた事で誰も顔に笑みが浮かぶ。

これで今回の事件は一応の終わりを迎えたと、誰もが思っていた。

——さあ、今こそ咲く時。その内に秘めた想いを、ぶつけてしまえ……。

密かに植え付けられた呪いが動き出す。

クリス、奏、マリア、未来。半数近くの装者へ仕込まれた、悪意の蕾が一斉に花開いていく。

それに気付く間もなく、久しぶりの本部へと降り立った響達。だが

……

「ど、どういう事？」

そこで見たのは、何故か未だ時間の停止した世界だった……。

ルミナスゲイト

「時間停止が……解除されていない？」

「ど、どういう事でしょう？ たしかに悪意は倒したはずですが」

翼さんの疑問にエルちゃんも続く。私も同じ気持ちだ。

たしかに、たしかにこの手で悪意を倒せたはずなのに……。

「も、もしかしてまだ悪意が生きてるデスか？」

「そんな事ないと思いたいけど、この感じじゃ……」

切歌ちゃんと調ちゃんが不安そうな顔を見せた。

そうだよ。だって、今は仁志さんは一人だ。もし悪意が生きてた

ら、仁志さんが危ない。

「翼さんっ！　せめて半分ぐらい仁志さんの世界へ戻った方が！」

「そう、だな。なら」

「待ってください」

私の言葉で翼さんが考えようとしたところへ、待ったをかける声が聞こえてきた。

顔を向ければ、そこには未来が立っている。ただ、何故か顔を俯けた状態で。

「待てとは、どういう事だ？　説明してくれ小日向」

「そのメンバーが、こつちに戻ってこれるって保障はありますか？」

「「「「え（は）？」「」」」」

未来の言葉にマリアさんと奏さん、クリスちゃんを除いた全員が疑問符を浮かべる。

ど、どういう事？　戻ってこれる保障って、そんなものは……

「ねえよ。ある訳がねえ」

「そうだね。そもそも裂け目は閉じ始めてた。今から行けば通る事は出来るだろうけど、それがいつまで続くかは分からない」

「そうなるよ、今から仁志の下へ行く人間は最悪そこへ残り続ける事となるわ」

三人の言葉にハツとなった。もしかして、未来はそれを察して今の言葉を言った？

「し、しかし、この状況は明らかにおかしい。悪意を倒したのなら、この時間停止は解除されているはずだ」

「どうだろうね？ あたしは、これはあたし達の問題だと思うよ」

「私達のもつて、どういう意味ですか？」

「デスデス」

奏さんへ調ちゃんと切歌ちゃんが詳しい説明を求めると、奏さんはどこか怖い顔で私達全員を見回した。

「この中に、仁志先輩の世界でずっと暮らしたいって思ってる奴がいるんじゃないか？ その気持ちに依り代の力を弱めて、この時間停止を解除させないんじゃない？」

思わず、息を呑んだ。だって、その気持ちが少しもないかって言われたら、私は首を動かす事が出来ないから。

「それ、貴方が言うの？」

「あ？」

そんな時、マリアさんが鋭い視線を奏さんへ向ける。

それに奏さんも似たような視線を返した。

「誰よりもそう思ってるのは奏、貴方でしょ？ だって、貴方は自分の世界で唯一の装者。セレナと違ってヴェイグのような存在もない。本当に心を許せる相手もおらず、孤独に戦い続けるしかないもの」

「言ってくれるじゃないか。それで言えばあたし以上に向こうへ残りたいのはお前だろマリア。こっちじゃあんたは大人気の歌手で、しかも世界を守った救世主だそうじゃないか。ただの女でいられて、しかも自分の過去を知った上で受け止めてくれる仁志の傍にいたいって思ってるだろっ！」

「なんですってっ！」

「奏っ！ 落ち着いてっ！」

「止めてください姉様っ！」

初めての二人の剣幕に私やセレナちゃん、切歌ちゃんに調ちゃんは言葉を失っていた。

クリスちゃんの時なんか比じゃない。これが、これが本気の女のぶつかり合いなんだって、そう思ってた。

「はっ！　今ので答えが出たじゃねーか。要は、だ。年長二人が揃って仁志と一緒にいたいって思ってるからこうなってんだろうが」

「クリスマスちゃん……」

マリアさんと奏さんをどこか呆れるように見つめながら、クリスマスちゃんはそう言つて大きくため息を吐いた。

それに二人の目付きが吊り上る。ううつ、凄く怖い……。見れば切歌ちゃんと調ちゃんは抱き合うようになってるし、いつの間にかエルちゃんをセレナちゃんがその腕の中で抱き締めてる。

「仁志があたしらを信じて送り出してくれたんだぞ？　なのに、いつまでもうじうじと未練たらしく……」

「クリスマスっ！　それを貴方が言うのっ！」

「そうだよっ！　あんただだって悪意に操られたらっ！」

「だから言つてんだろうが。いいか？　今あたしらがやるべきは、一刻も早く本部を元に戻して、エルの奴に依り代を研究してもらおう事なんだよ。で、可能なら平行世界からキャロルやフィーネを呼んで、それに手を貸してもらおうんだ」

クリスマスちゃんの意見は、分かる。私もそうするべきだと思うし。

でも、でも何だか今のクリスマスちゃん、昔に戻ったみたいだよ。

触れるものを全部傷付けて、壊しちやいそうな、そんな感じがする。

「こんな事も分からねえとは……仁志と再会する資格なしだぜ」

「っ?!　クリスマスっ！　貴方（お前）っ！」

「っ！」

「「「「「っ?!」「」」」」」

マリアさんと奏さんがアームドギアを握り締めると同時にクリスマスちゃんも銃口を二人へ向けた。

「やんのか？　いいぜ、あたしは。いっぺんガツンとやられねーと分からねえみたいだしな」

「はっ！　……それはこっちの台詞だよっ！」

「そうね。今は黙っていられないわ……っ！」

三人の表情が、その、戦ってる時みたいになってる。

目の前の相手を絶対許せないって感じの、顔つきになってる。

あまりの事に私だけじゃなく翼さんさえ動けないみたい。切歌ちゃん達なんて泣きそうだ。

「そこまでにしてくださいっ！」

今にもぶつかり合いそうだった中へ、未来が険しい顔で割って入った。

「どうして、どうして仲良く出来ないんですか？　なんで、なんで揉めるの？　只野さんが望んでた事は、願ってた事は、こんな事じゃないっ！」

「未来……」

私とヴェイグさんの声が重なる。

「「未来さん……」」

エルちゃん達も同意するみたいに安心したような声を出した。

「小日向の言う通りだ。マリア、奏、雪音も、まずは武器を下ろしてくれ。今私達がするべきは内輪揉めではなく、急ぎ上位世界のゲートを確認しに行き、そして他の世界もこのこと同様なのか確かめる事だ」

翼さんの意見に私は頷いて、クリスちゃんへと駆け寄ろうとした。だけど……

「翼さんも、どうして私の言葉を分かってくれないんですか？」

「はっ！」

未来が険しい顔のまま翼を見た。それに翼さんも小さく驚きを見せるみたいには瞬きをする。

「み、未来？　どういう事？　翼さんは」

「だから、只野さんの世界へ近付いたら、戻ってくるのを嫌がる人出て来ますよって、そう私は言ってるの」

そう言うとき未来はマリアさんと奏さんへ顔を向ける。

「そこに、そういう事言いそうな人が二人いますし」

「っ！」

「小日向っ！　お前も煽るのかっ！」

「いいえ？　今のは事実を言ったまです。なので、マリアさんと奏さんは本部に残ってもらって、クリスは響や翼さんと一緒に動いてもらえませんか？　エルちゃんは切歌ちゃんや調ちゃん、それにセレナ

ちやんと一緒にここで待機って形がいいと思うんです。そうすれば
マリアさんも大人しくしてくれるはずですし、奏さんは私がしつかり
抑えますから」

未来の言葉はさっきの事を考えると納得出来る事だった。

翼さんもそう思ってたんだろう。小さく息を吐いて頷いていた。

「分かった。立花、雪音、私達で確認作業を行うぞ」

「はい」

「ああ」

何だかさっきまでの一体感が嘘みたいに消えて、どこかギスギスし
た空気が漂ってる。

でも、未来やエルちゃん達がいればマリアさんと奏さんももうケン
カしないよね？

そう思っただけは翼さんの後を追うようにギャラルホルンへと入っ
た。

「ん？ 雪音はどうした？」

「え？」

言われて振り返るとクリスちゃんがない。って、そう思ったらク
リスちゃんが出て来た。

「雪音、どうした？」

「ああ、あの子に注意されたんだよ。言葉には気を付けろって」

「未来らしいなあ」

「そうだな。では行くぞ」

翼さんを先頭に私とクリスちゃんも動き出す。

さつき通った道を行くんだけど、何だろうな？ さつきと今じゃ、
心の沈み方が違う。

さつきは寂しさを沈んでたけど、今は悲しさを沈んでる。マリアさ
んと奏さんがあんなに睨み合うなんて……。

「翼さん、さつきの事なんですけど、マリアさんと奏さんってもう少し
大人だったと思うんです……」

「ああ。私も正直驚いている。たしかに揉める事はあったが、あそこ
までは見た事がなかったからな」

「そうなんですか？」

意外だった。翼さん、マリアさんと奏さんが揉めるところを見た事あるんだ。

「揉めるとは言っても、酒が入った席での口論だ。仁志さんもいたし、そちらへのアピールも兼ねていたと思う」

「ああ、そういう事ですか」

じゃ、さっきのとはかなり意味が違う。さっきのは、その、本気で相手が憎いみたいな感じが、した。

もし未来が割って入らなかつたら、クリスマスちゃんを交えた三人で戦い始めてたって、そう思うぐらいに。

「さっきのは、良くない感じですよね」

「そうだな。奏もマリアもそういうところのはしつかり線引きを出来ていると思っていたんだが……」

「だからこそ緩んだんじゃないのか？ 悪意を倒して、仁志と別れて、それまでの重圧やら何やらが吹き飛んだんだよ」

「雪音、お前の意見が事実ならば、何故あの時あんな挑発的な態度を」「じゃあ聞くが先輩。悪意や仁志絡みで平然としてられる奴があそこにいるか？ それに、今までの事で色々と重荷を背負ってきたのはあの二人だけじゃねえ。なのに、真っ先に年長同士が揉めてどうするってんだ。せめて後輩二人とかだろ」

その静かに怒りを秘めた言い方に私も翼さんも言葉がなかった。

クリスマスちゃんも、きつとマリアさんや奏さんみたいに叫びたかったんだ。

だけど、それは自分だけじゃないって思ってた必死に耐えてた。

そこへさっきの事が起きたから、色んな意味で悲しみと怒りを込めてあんな言い方をしたんだ。

「もうこの話は止めにしようぜ。今は片付けないといけねえ事があるしな」

それを最後にクリスマスちゃんは黙り込んだ。翼さんも何も言わず、黙って仁志さんの世界へのゲートを目指す。

やがて裂け目が見えてきた。けど、やっぱり今までより少し小さく

なってると思う。

「翼さん、これ……」

「ああ。ゆつくりだが確実に閉じていくだろう。どれぐらいで完全に閉じ切るかは分からないが……」

「結局、現状だと行き来出来なくなるのも時間の問題ってどこか。それがどれくらいかも……分からねーな。で、どうすんだ？」

「今回は確認だけだ。それよりも他の平行世界の」

「今なら、あたしらだけで戻れるぞ？」

一瞬、クリスちゃんが何を言ってるのか分からなかった。

翼さんと同時に顔を動かすと、クリスちゃんは……笑ってた。

「今戻れば、あたしらだけ仁志の傍だ。なあ、思い出せよ。あの部屋で仁志と共同生活したのは、あたしらだけなんだ」

「く、クリスちゃん、それはダメだよ」

「どうしてだ？ もし悪意が実は生きてるってなってみろよ。确实真っ先に狙うのは仁志だ。ノイズを送り込まれたら、今の仁志は身を守る術がないんだぞ。依り代はエルが持つてる。どうやって助かるんだ？」

「っ!?!」

心臓を掴まれたような感覚がした。いつかの誕生日会の光景が、気持ちいが、甦る。

あのライブの日に見た人が炭になっていく光景。何も出来ずに見てる事しか出来なかった無力感。それらが一気に押し寄せる。

そうだ……そうだよ。奏さんの意見が正解なんて誰にも分からない。むしろ悪意が実は生きてるって方が納得出来る。

「翼さん、どうしたらいいんですか？ クリスちゃんの意見も、否定出来ないです」

「そ、それは……」

「あたしがどうしてこのタイミングで言ったか教えてやろうか。それはな、あそこで言ったら余計揉めたからだ。絶対行きたがる奴ばっかだろ？ でも、もうあつちで大勢での生活は出来ないんだ」

そうだった。翼さん達のアパートも、マリアさん達のお家も、私達

の部屋だつて解約しちゃった。

それだけじゃない。家電製品は一部を売って、残りはギアを使って燃えないゴミに出したし、家具なんかもほとんど処分してる。

「ところが、だ。布団とかの一部は仁志の部屋に運んだだろ？ まだ使えるし、あつても困らないからって」

「あ……」

そうだった。しかも布団はとりあえず全員分残ってる。

「仁志のここには人数分の布団が残ってる。な？ あたしらはまたあの部屋で生活出来るんだ」

クリスちゃんがそう言いながら私と翼さんの後ろへ回り込んだ。

そして、両手を私と翼さんの肩へ置いて顔を耳元へ近付けてくる。

「一度戻ったら、この三人でこうしてゲートまで来るのは難しいぜ。それに布団はあつても部屋はそこまで広くない。数が多いとまた仁志が大変になっちゃうんだ」

それは……そうだけど……。

「先輩、家事上達したんだろ？ なら、それで仁志を支えてやってくれないよ。妻、みたいになさ」

「妻……私が、仁志さんの……」

「なあ響、あたしと響はオーナーからいつでも戻ってきていいって言われてんだ。なら、当面の仕事は確保したようなもんだろ。仁志を助けてやろうぜ」

「仁志さんを……助ける……」

クリスちゃんの声を聞いてると、何だか頭がフワフワしてくる。

まるでそれが一番いいみたいだな、そんな感じに思えてくる……。

「また三人で仁志を支えて暮らしていこうぜ……。そして、明るく、楽しく、幸せになるんだ……」

「明るく、楽しく、幸せに……」

ああ、仁志さんと一緒にいられる。また、また一緒に、一緒に暮らせるんだ……。

「ダメですっ！ 今のクリスさんの言葉に耳を貸してはいけませんっ！」

「っ?!」

突然聞こえた大声に顔を動かす。そこにはエルちゃんがあった。

「え、エルちゃんっ?! どうしてここに!？」

「雪音の言葉に耳を貸すなどはどういう意味だっ!？」

「今のクリスさんにはイグナイトギアのアイコンがありますっ!」

「っ!？」

それが意味する事を理解するや、弾かれるように私と翼さんはクリスちゃんから距離を取る。

「ふふっ、ふふふ、あはははは……」

それを受けてクリスちゃんは、俯いて笑ってた。その声は、たしかにクリスちゃんなのに別人みたいに聞こえる。

「少々咲かせ過ぎたか。それに私の事を察知する機能がある事を忘れてたわ」

「っ、口調が雪音ではない!」

「まさか、本当につ!? でもどうして!？」

「姉様と奏さん、そして未来さんにもイグナイトギアのアイコンがありましたっ! それを依り代が教えてくれたんですっ!」

「っ!?! 未来達にもっ!?! じゃあ!」

「お姉ちゃん達はっ! 僕とヴェイグさんを逃がすために姉様達と戦闘中ですっ!」

悲しそうな顔で叫ぶエルちゃんに胸が痛くなる。きつとセレナちゃん達、エルちゃん達を逃がすために必死に動いたんだ。

だって、戦うべき相手はマリアさんや奏さんに未来。きつと切歌ちゃん達にとっては今までで一番辛い相手だもん。

それでも、妹みたいなエルちゃんだけは逃がそうって、そう思って……。

「まさか……先程の衝突もこの状況も全て悪意の企みかっ!」

「あはははははっ! 今更気付いてももう遅いわ。その端末を押さえられなかったのは想定外だけど、まあいい。どうせ結末は変わらない」

そう言っつてクリスちゃんは、ううん悪意はアームドギアをこっちへ向けた。

私は咄嗟にエルちゃんを守る様に動く。依り代があるって言うても、どうなるか分からないから。

「エルちゃん、大丈夫だよ。絶対、絶対守るからね」

「はい、信じてます。響さんは、嘘は言いませんから」

「……うん」

背中に感じる小さな温もり。

……あつたかい。これがあれば、私はどんな時だって、どんな相手だって戦える！

「雪音を返してもらおうっ！」

「返す？ ああ、勘違いしてるみたいだから教えてあげる。これはね、いつかのような強引な乗っ取りではないの」

「どういう意味だっ！」

「そうね。お前達に分かるように言うなら………シエム・ハとやらと同じよ」

「「なっ!?!」」

告げられた名前に私だけじゃなくて翼さんとエルちゃんも驚く。

ど、どうして悪意がシエム・ハさんの名前を？ クリスちゃんの記憶から引っ張り出したっ?!

「つまり、雪音は望んでお前と一体化していると言うのかっ！」

「以外に聞こえたかしら？」

「っ！」

クリスちゃんがそうだって事は、未来達もそういう事って意味、だよね。

信じられないけど、分からない訳じゃ、ない。きっと仁志さんを利用したんだ。

「現に、今のあたしは普通のギアを纏ってるぜ。イグナイトじゃない、通常の状態の、な」

「くっ、雪音で囁^{ささや}るなっ！」

翼さんがアームドギアを握ってクリスちゃんへ、悪意へ斬りかかった。

「先輩っ！ 止めてくれよっ！」

「手中で踊るものかつ！」

「あら、躊躇なく攻撃するのね。あの三人は多少躊躇ったのに」

「何だとっ！」

「本当ですっ！　今のように姉様達の口調で動揺を誘ってきたんですっ！」

「っ！　卑劣なあああっ！」

「翼さんっ！」

悪意を押しやる様に戦う翼さんを見て、私も加勢しようと思って拳を握る。

「立花っ！　お前はエルを連れて上位世界へ、仁志さんの下へ行けっ！」

「っ!?　でもっ！」

「行けっ！　そして、態勢を整えられるまでゲートを閉じろ！　悪意が邪魔出来ないようにっ！」

「そんなっ！　そうしたら翼さん達がっ！」

「私達の事は気にするなっ！　今はっ！　少しでも、悪意を倒せる可能性をお！　残すべきだっ！」

「翼さん……」

悪意のアームドギアの攻撃を弾いたり、斬り裂いたりしながら翼さんは私へ言葉をかけてくれた。

「絶対っ！　絶対助けにきますっ！」

流れそうになる涙をこらえて、そう強く言い切った。この約束は、絶対に果たすんだって心に誓うように。

「それでこそ立花だっ！　さあっ！　早く行けっ！」

「行かせるものかあああっ！」

「押し通させるっ！」

悪意の放ったミサイル攻撃を翼さんが無数の刃で迎え撃つ。

その爆発を背に、私は短く息を吐いた。振り返るものかと、そう心へ言い聞かせて。

「エルちゃんっ！　しっかり掴まってっ！」

「はいっ！」

「いづくぞおおおっ！」

両腕の推進力で一気に加速してゲートへと向かう。
振り返りたかったけど、一度として振り返らずに。

あの時は事故で吸い込まれた場所へ、今度は意図して飛び込んでいく。

その背中に感じる、小さな温もりを守るために。

仁志さん、再会がこんな形になって落ち込むかな。

もしそうだったら、私とエルちゃん、それとヴェイグさんもいるから、三人で励ましてあげよう。

でも、まずは私が泣かないようにしないと。せめて泣くとしたら、エルちゃんが泣いた時に一緒に、だ。

「ゲートですっ！」

「このまま飛び込むよっ！」

裂け目へと飛び込んだ次の瞬間、私の目の前には見覚えのある景色が広がった。

つて、このままじゃ天井へぶつかる！

慌ててギアを解除して天井への衝突を避ける。

ただ、ドシ〜ンって感じて着地する事になっちゃって足が痺れる……。

「あつ、そうだ！ ゲートを閉じないと！」

「もうやったぞ」

振り向けばヴェイグさんがノートPCにぶら下がってた。

多分だけど落ちた時に掴まって、その勢いでそのまま閉じたんだと思う。

そしてエルちゃんは……カーペットに突っ伏してる!?

「わわっ、エルちゃん大丈夫!?!」

「は、はい。着地の衝撃で手を離してしまっただけですから」

「そこで俺も飛び出たんだ」

「そ、そうなんだ。でも、二人に怪我がなくて良かったあ……」

ホッと一安心。でも、仁志さんいないみたい。

時計は……ないんだよね、この部屋。

痺れも取れたから窓へ近付いてカーテンを開けると、外は陽射しが
出てる。

少なくとも夕方とかではないね。あれからそんなに時間経ってな
いといいんだけど……。

「どこからお出かけしてるのかな？」

そう思っただけカーテンを戻そうとした時だった。

ドアから鍵を開ける音が聞こえたんだ。弾かれるみたいに顔が勝
手にそつちへ向く。

「あー、疲れた。今日が休みで良かったよ……」

そこにいたのは、私の大好きな、初恋の人。もう会えないかもって
思いながら別れたはずの、大事な人っ！

「仁志さんっ！」

「兄様っ！」

「タダノっ！」

「へ？」

私達の声に顔を上げた仁志さんは、私の良く知る仁志さんだった。

思わずその場から駆け出して抱き着く。そこへエルちゃんとヴェ
イグさんも合流。

「え？ え？ 響？ それにエルとヴェイグも？ ど、どうしたんだ

？ 忘れ物でもあった？」

「実は、実はあー！」

仁志さんの声を聞いてたら安心しちゃったのか、勝手に涙が浮かん
できて涙声になった。

エルちゃんも泣き出したもんだから二人で泣いちゃって、仁志さん
が優しく抱き締めて背中を擦ってくれた。

少しして仁志さんがゆっくりでいいから何が話してくれ
るかかって、そう優しく言ってくれて、私はエルちゃんと何が話したか
を話していくと、仁志さんの表情がどんどん険しくなっていた。

「……そうか。つまり、悪意は潜伏して決起したって事か」

「はい……。だから依り代を持つてる僕にヴェイグさんが入って、兄
様のところへ逃げたって、お姉ちゃん達が……僕を……っ」

「エルちゃん……」

率先して動いたのはセレナちゃんだったみたい。一番優しくて戦う事が嫌いなセレナちゃんが真っ先に動いたから、切歌ちゃんと調ちゃんも何とか動く事が出来たって、そうエルちゃんは教えてくれた。

「セレナは、真っ先にマリアへと向かっていった。それを受けて切歌と調も動いて未来と奏を相手に出来たんだ」

「グスツ……はい。ツインドライブさえ出来れば、僕が依り代を使えば、姉さんと、お姉ちゃん達と一緒に戦えたのに……」

俯いて小刻みに震え始めるエルちゃん。それを見て仁志さんがその体を抱き締めた。

「自分を責めるなエル。出来ない事を出来ればと悔やんだって仕方ないんだ。それよりも、今の自分に出来る事を一生懸命やればいい。それが、成長に繋がるんだよ」

「兄様あ……」

「こうしてエルが来てくれたおかげで、最悪の結末は避けられたじゃないか。これが響だけじゃ、俺は何も出来なかったんだぞ。エルが依り代と一緒に来てくれたおかげで、今後の事を考える事が出来るんだ。エル、君は無力なんかじゃない。大事な、大事な力の一つで、かけがえのない存在なんだから」

「うん、そうだよエルちゃん。私と仁志さんだけじゃ分からない事だらけだし」

「俺もそう思うぞ。だからエル、元気を出せ。泣いてる顔より笑ってる顔の方が俺は好きだ」

「響さん……ヴェイグさん……」

「さあ、涙は拭って。ね？ 笑顔、見せてくれないかな？」

泣き顔のエルちゃんだけど、その涙をそっと指で拭ってあげた。

そして私が笑顔を見せる。それがエルちゃんの笑顔に繋がるという感じで、そう思ってた。

「……はいっ！」

「うん、イイ笑顔だよ。ね、仁志さん」

「ああ、とても可愛くて元気になる笑顔だ。ヴェイグもそう思うだろうか？」

「そうだな！ エルはやっぱりそうしててくれないと困る」

まだ涙声だけど、ちよつとだけ涙が見えるけど、それでもエルちゃんも笑ってくれた。

この笑顔を守りたい。もう、この顔を泣き顔なんかにしたくない。そう心から思っただけは頷く。

翼さん、絶対助けに行きます。今すぐは、さすがに無理だけど、出るだけ早く合流しますからね。

まさかの事態に俺は頭を抱えなくなった。

いや、だっただけの数時間前に二度と会えないかもと別れた相手が戻ってきたんだ。

どこのバツクトウザフューチャーだよ、これ。次は未来に行く流れか？

なんて、そう馬鹿げた事を思っていないとどうにかなりそうだ。

悪意がよりにもよって生きてて、しかもクリスを始め、マリア、奏、未来と同化してるとか、悪夢以外の何物でもない。

おまけに響はこつちでバイトを辞めたばかりに近いし、エルは働けない。

ここで共同生活するにも、シャワーのないここじゃ女の子二人を住まわせるには心苦しい。

「……背に腹は代えられない、か」

幸いオーナーからは駐車場の使用を許可されてるし、両親は以前の事で響が俺の彼女だと思っ込んでる。

なら、いっそ利用させてもらおう。今は少しでも普通の生活で精神面を癒すべきだ。

「みんな、少し休んだら出かけよう。いや、ある意味で引越しか」「え？」「」

揃って疑問符を浮かべる三人へ、俺は深呼吸してから告げる。

「三人がこれから住む場所へ行くんだ」

そうやって俺は響達と一緒に最寄駅へと向かい、いつかドライ
ディーヴァと共に来たあの駅へとやってきていた。

ここで普通に乗り換えて実家に一番近い駅へ行こうと思う。あの
時はここから十分強歩いて実家へ行ったが、エルの足じゃそれは結構
大変だ。

でも実家の最寄駅なら歩いて十分はかからない。それならエルの
足でも、ここから歩くよりは疲れないはずだ。

「あの、仁志さん。どこへ行くんですか？」

「響は一度行った場所」

「私は一度行った？」

「兄様、ここで乗り換えですか？」

「そう」

ちなみに俺の片手にはエル用の荷物が、響の片手には彼女用の荷物
がある。

燃えるゴミとして何回かに分けて捨てるはずだった物だ。

何というか、ある意味当日で良かった。これが一か月も後なら彼女
達の服や下着などを買い直す羽目になっていたぞ。

そうして電車を待つ事数分、やってきた普通に乗り換えて一つ隣の
駅へ。

そこから歩いてしばらくすると、響が何かに気付いたように驚いた
声を出した。

「あっー！」

「ん？ 何だ？ 何かあったか？」

「どうしました？」

「え、えっと、何て言うか……。仁志さん、あれってまさか……」

「そういう事。とりあえず行こう」

「は、はい。エルちゃん、ヴェイグさん、後で教えるね」

「分かりました」

「分かった」

見えてきた建物で響も分かったのだ。俺がどこへ行こうとしてい
るか。

階段を上り、一番上の三階へ。向かって右側のドアの鍵を開けると靴が一足。

「……母さんか。丁度いい」

おそろく夜勤明けか、休みだったのかもしれない。

正直母さんさえ説得ないし納得させられれば父さんは何とでもなる。

「ヴェイグ、いいって言うまでは黙っててくれよ?」

「ああ」

「兄様、ここは? 鍵を持つてるって事は、兄様の新しく借りた部屋ですか?」

「それはちよつと違うな」

「あの、仁志さん。いいんですか?」

「状況が状況だ。もうなりふり構ってられないよ」

ここがどこかを分からないエル。分かっているからこそ不安そうな響。

そして、エルの腕の中でしばらく黙るヴェイグ。

今、俺が守らないといけない存在だ。だが、悲しいかな今の俺ではどうにも出来ない。

シャワーや風呂がある部屋へは引つ越せないし、探してやるのも厳しい。第一、響一人じゃ家賃が払えない。

三人を連れて正面のドアを開けてリビングへ入ると、ソファに座ってテレビを見ている母さんがいた。

「ん? 仁志?」

「ただいま。ちよつと話があるんだけど」

「話? って、そっちの女の子達は?」

「紹介するよ。こっちはこの前、俺が部屋に連れ込んだ子だ」

「は、はじめまして。立花響って言います!」

「で、こっちは響の大事な友人。エル、自己紹介して」

「あ、はい。エルフナインです。エルって呼ばれてます」

「はあ……」

突然の事に理解が追いつかないって感じだな。さて、ならここから

か。

「母さん、悪いんだけどしばらく彼女達をこの家に下宿させてやってくれないか?」

「「ええっ!?!」」

見事に母さんと響にエルの声が重なった。

でも、これしかない。ここなら家賃を払う事もないし、俺がある程度金を出す事で食事や洗濯などの最低限の事が揃った生活が送れる。

「頼む。信じてもらえないかもしれないけど、彼女達は色々と込み入った事情持ちなんだ。俺の部屋は、トイレはあってもシャワーとかない。そこで彼女達と同居なんて色んな意味でアウトだ」

「そりやそうだけど……て言うかね? それ以前の問題でしょ」

「分かってるよ。その、俺が小さい頃好きだったヒーロー物、覚えているか? 変身じゃなくて装着するやつ。重甲って言ったりするあれ」

「覚えてるけど、それが何? いきなり話を変えないの」

よし、これでいい。

「響、ギアを」

「え? で、でも」

「ここは君の世界じゃない。ギアを見ても守秘義務はないし、見せていけない決まりもない。何より、実物見ないと信じられないよ」

「そ、それはそうかもしれないですけど……」

「ちよつと、その子困ってるじゃない。何をさせるつもりか知らないけど、無理矢理はダメだって教えたでしょ。そんな事だからその歳になっても彼女が出来ないんだわ」

「それは関係ない、とは言いきれないけど黙っててくれよ」

実際は無理矢理色々して欲しいって女性もいたとは口が裂けても言えない。

マリアとか奏とかが主にそれ。パツと見た感じが強気で男に対して負けないって言いそうな女性なのに、惚れた男にはとことん甘いというか弱かったよなあ。

「響さん、ここは兄様の考えに従いましょう」

「兄様?」

「えっと、エルはもう実の家族がないんだ。それで俺の事をそう呼んでくれる」

「……………あんた、捕まるような事してないでしょうね？」

「大丈夫だから。ロリコンじゃないから。てか、それだったらここへわざわざ連れてくるかっての」

実の息子をまるで犯罪者を見るかのような目で見てくる母親ってどうだよ。

「けど、まあ、一般的に言えば、金髪の可愛い少女が、縁も所縁もなさそうな黒髪の三十男を、兄様って呼ぶ、なんて多少偏見の眼差しを向けるのも当然か。」

「あ、あの、少し見せてもらっていいですか？」

「え？ ああ、はい。ごめんなさいね」

何故響には笑みを見せるんだよ、おい。

むしろ息子へ見せろ、その笑顔。外行きの笑顔か、それ。もしくは業務用か。

そこへ聞こえるは響の聖詠。で、展開される GANG ニールのギア。

「こ、こういう物を持つてるんです」

「母さん、分かったか？ その、実はこの子達は」

「……………これ、テレビの企画か何か？」

「え？」

訝しむような顔で俺を見て告げられた言葉に響とエルが目を見開く。

ただ、俺は無理もないかと思つてため息を吐いた。これがライダーなどの全身が変わるものならアクションも違つただろうけど、ギアはどうしても良く出来たコスプレに思えない事もない。

だから母さんもテレビの企画か何かとして、早着替えみたいなものだとして処理して理解しようとしてるんだ。

「よし、分かった。母さん、これはクレしんのヘンダーランドでひろしやみさえ相手に雛形さんと呼び出すシーンと同じ意味なんだよ。こ
う言えば分かってくれるか？」

「くれしん？ へんだーらんど？」

「……………本当に？」

うしつ、伝わった！

見ていて良かったクレヨンしんちゃん。ありがとう、クレヨンしんちゃん。

「ああ。ヴェイグ、喋ってくれていいぞ」

「本当か？」

「うそっ!? ぬいぐるみが喋った!？」

予想通りのリアクションだ。

「母さん、ヴェイグは言うなればトツペマの立ち位置。まあ、魔法は使えないし元々こういう種族だけだ」

「……………本当に、嘘じゃないの？」

「響、ギアを解除してやって」

「あ、はい。っと」

一瞬にして格好が元に戻るのを見て、母さんもさすがに早着替えなどではないと察したらしい。

更にエルがヴェイグを母さんへ抱かせると、その体温や感触で生物と分かったらしく、目を見開いて驚いていた。

「どうだ？ これなら信じてくれるか？」

今、俺は色々はしゃいで疲れている母さんの正面にしゃがんで問いかけていた。

響達はダイニングにあるテーブルの椅子に座ってもらっている。

「これだけ見せられて疑う訳にもいかないわ。にしてもまさか、こことは違う世界が本当にあるなんて……………」

「しかもそのパラレルワールドまであるんだ」

「もう止めて。明けの頭にはこれ以上の情報は無理」

勘弁してって感じでソファの背もたれへもたれる母さんを見て、俺は小さく息を吐いて立ち上がる。

「それで、とりあえず響達に俺の部屋を使わせてやってくれないか？」

あと、出来れば食事や風呂なんかも」

「さ、さすがに飯は」

そう言っつて響が勢いよく椅子から立ち上がると同時に可愛い音が

鳴った。

出所は、言うまでもなく赤面して立ち上がったままの可愛い少女である。

「……別の世界の存在って言っても、生きてる以上お腹は減るんだね。いいよ、分かった。えつと……」

「響」

多分名前が分からないんだろうと思って教えてやると、母さんが思い出したみたいな顔で細かに頷いた。

「ああ、そうそう。響ちゃん、嫌いな物とかある?」

「特にはないです!」

「あらそう。仁志は結構好き嫌いが」

「今はそんな話いいだろ」

「ちよつと、女同士の会話に口挟まないの。それじゃ、えつと?」

「え、エルです」

「エルちゃんはどうか?」

「僕も特にはありません」

「あら、良い子ね。誰かさんとは大違い」

「へいへい。どうせ昔から好き嫌いが多かったですよ」

すつかり母さんの気分が親戚のおばちゃんだ。

ま、年齢から言ったらおばあちゃんが見えつつあるんだが、それを言ったら何を言われるか分からないので黙っておこう……。

「それと、べ、ベイグ?」

「ヴェイグだよ。まあ言い難いだろうけど」

「すまない」

「いいのいいの。大事な名前だしね。ちゃんと呼んで欲しいものねえ」

母さんの言葉にヴェイグが目を見開いた。多分だけど、何も知らない母さんがヴェイグの心の琴線に触れる事を言ったからだろうか。

「あつ、じゃあ何か愛称を付けるのはどうですか?」

「エルちゃん、ナイスアイディアだよ。えつと、仁志さんのお母さんは、どういう風に呼びたいですか?」

「おばさんでいいから。そうねえ……本人は今まで呼ばれた呼び名とかなない？」

「特にはないな。だが、好きに呼んでくれていい」

「え？ いいの？」

「ああ。タダノの母親だしな」

「私もその只野なんだけどね。じゃあ……仁志、何か案出しなさい」

「ここで俺に振るのかよ」

「だけど、ヴェイグが母さんを気に入ったのは予想外だった。匂いが分からないのも好印象に一役買ってる気もするな。」

「じゃあ……ベー君とか？」

「「ベー君？」」

「ああ、呼び易いわ。じゃ、それでもいい？」

「一度呼んでもらっていいか？」

「はいはい。ベー君、ご飯よ」

何て言うか、すっごくペット感がする……。多分その原因は、母さんが何故か付けた後半部分がでかい。

見れば響も同じ事を思ったようで、微妙な顔をして笑ってる。

「これでいい？」

「ああ、それでいいぞ」

「良かった。じゃあお礼にベー君は私の事をママさんって呼んでいいから」

「ママさん？」

「おい」

何しれつと昔呼んでもらいたかった呼び名で呼ばせようとしてるんだ、この人は。

「いいじゃない。私はね、母さんとかお母さんって呼び方よりもママって方に憧れが」

「分かったままさん。これでいいか？」

「上出来よお。ベー君は私の実の息子より賢いわ」

「賢さ関係ないだろ」

いかん、母さんと接していると完全に気分が一人暮らし前に戻る。

「とりあえず車借りるぞ。響とエル枕とかヴェイグの寝床とか持つてこないといけないんだ」

「ああ、そう。気を付けてね」

「あつ、私一緒に」

「あー、うん。気持ちは嬉しいし、居辛いかもしれないけど、当分暮らす場所になるからさ。少しでも慣れてくれ」

「そ、それはそうですけど……」

「いいのよ響ちゃん。ここを本当の家だと思ってくれていいから。狭いかもしれないけどね」

「そ、そんな事ないです！ 寮よりも多分少しだけ広いですから！」

その言葉に母さんが興味を示して、響がりディアンの事を話し始める。

それを見て俺は大丈夫そうだなと判断し、とりあえず車でアパート前まで行く事にした。

「つと、そうだ。母さん、父さんの説得、手伝ってくれよ？」

「はいはい。まあ私と同じ事すれば必要ない気もするけどね。そうだ。三人共、そつちじゃなくてこつちのソファに座ったら？ それと冷蔵庫の物、勝手に飲んだり食べてもいいわよ。ただ、食べる時だけは前もって聞いてくれる？」

「分かった」

「は、はい」

若干緊張の残る響とエルとは違い、すっかりいつもの調子のヴェイグ。

そのヴェイグがソファに来るなり膝の上に乗せて笑う母さんには、やはり永遠に勝てそうにない気がしてくる。

その後、俺が二つの枕とヴェイグ用のクッションを持って帰ってくると、母さんは部屋で仮眠していて、響とエルがりビングでソファに座ってテレビを眺めていた。

「あつ、おかえりなさい仁志さん」

「おかえりなさい兄様」

「ただいま。ヴェイグは？」

姿が見えないヴェイグの事を尋ねると、二人揃って苦笑してテレビを指さした。

だが、当然テレビ付近にヴェイグはいない。って、ああ、そういう事か。

「母さんの部屋？」

揃って頷く二人に俺は若干呆れた。母さんの奴、すっかりヴェイグを気に入ったらしい。

もしかして、昔から犬や猫が飼いたいって言ってたからヴェイグをそれと思つてないか？

「おばさんが仮眠するって言ったのを聞いて、ヴェイグさんが俺もするって」

「それで、なら一緒に寝ましようかっておばあちゃんのお部屋へ」

「そっか……」

予想通りだな。ヴェイグの睡眠好きは今に始まった事じゃないし……ん？

「エル、今母さんの事なんて呼んだ？」

「え？ おばあちゃんですか？」

「おばあ……ちゃん？」

どうやら聞き間違いではなかったらしい。と、言う事は……。

「僕は孫みたいだからと、そう言われました。響さんは兄様の年齢で考えるとさすがに子供とは言えないからって」

「あ、あはは……私はおばさんをちよっつとだけ止めたんですけど、このままじゃ孫の顔は見れないだろうからせめてって」

「……理解した」

要は彼女が出来たと喜んでいたら、その相手が有り得ないような世界の存在と分かって嫁は無理そうと思われたってどこか。

まあある意味間違つてないと思うので何も言えない。でもこれが響で良かったかもしれない。

マリアや奏だったなら、ここぞとばかりに母さんをお義母さんとか呼んでそうだ。

歳も一回りは離れてないし、割と本気で俺の嫁について言い出しかね

ん。こう言ったらなんだけど、ある意味助かった。

とりあえず俺の部屋へ入り、ベッドへ二人の枕を、その近くにヴェイグ用のクッションを置いてリビングへ戻る。

さて今夜はどうしたもんか。俺はあの部屋に帰るべきだとは思いますが、実家に三人を置き去りにするようで心苦しさもある。

「響、これからどうする？」

「え？」

「その、いつまでこっちにいろのか分からないけど、ずっと何もしないでここにいろつての、気まずいだろ？ この辺りでバイト先、探すか？ コンビニならこの辺りにもあるし」

その方が精神的に少しは楽になるかもしれないと思った。

仕事をしてれば、その間は何かと現実を忘れられる事もある。

「あー……そうした方がいいです、よね？」

「多分な。その、週1でも2でもいいから外に出てないと気が滅入るかもしれないぞ」

「そう、ですよ。でも、エルちゃんが」

「僕なら大丈夫です。ヴェイグさんと二人でお留守番はよくしてました」

何となく、俺にはその言葉が健気に思えた。響の事を気遣っているような、そんな気がして。

「……そっか。じゃ、探すだけ探してみます。でも、出来れば前の」

「気持ちは分かるけど、ここから通うのか？ 通いやすい駅までは歩いて十分強かかって、店の最寄は電車で十数分、更に駅から店まで五分はかかる。面倒な上に金もかかるんだ」

「うっ、そ、それは……」

俺が突きつけた言葉に響が嫌な顔をする。

歩きだけで通えたこれまでと違って、今回は交通費がかかるんだ。まあオーナーなら出してくれそうだけど、きつと響が気にするだろう。

「それに、だ。またいつ辞める事になるか分からないだろ？ あの店に戻るならそれは避けるべきだ」

正直人はいるけど響に辞めて欲しくはないってのがオーナーの本音だったしな。

「そうですね……」

「ああ。それにしても、何があっても翼達は生きているとは確信出来るけど……」

「悪意の支配下になっている可能性があります。そうなれば、今は響さんしか戦えませんが」

俺が言い淀んだ事をエルがしつかりと言ってくれた。本当にこの子は強いな。

まず間違いなく悪意はみんなを普通には殺さないだろう。そんな事をするつもりなら今まで何度もチャンスはあった。

だから、きつと最悪でも生きてはいると断言出来る。これが良い事なのか悪い事なのかは何とも言い難いけど。

「そうだな。もし翼達が無事逃げおおせたとしても、だ。相手は四人。響だけじゃ相手するには厳しい」

「はい。接近戦のマリアさんと奏さんに遠距離のクリスちゃんと未来。私一人じゃさすがに止められません」

「ツインドライブを使っても厳しいだろうな。何とか翼達と合流出来れば……」

一人でもいい。装者が二人になれば安全面が違うんだ。四対一じゃ絶望的でも、四対二ならまだ何とかかなるかもしれないし。

「エル、依り代を貸してくれ。それでもしかすれば現状がある程度把握できるかもしれない」

「は、はい」

スマホを受け取りゲームを起動。ステータスをタップしアイコンを確認する。

「……響以外はギアを展開中だ」

まず八人の無事を確認。次に翼達悪意に同化されていないだろう四人のアイコンをタップしていく。

イグナイトギアの表示はない。それを確かめてから四人のツインドライブを起動させる。

「どうだ？」

四人のアイコンが変化したのを見てホツと胸を撫で下ろす。それにしても、これに頭が回らないって、俺だけじゃなくエルも相当テンパってたんだと分かった。

「とりあえず翼達のギアはツインドライブが起動した」

「ホツ……」

揃って胸を撫で下ろす二人を見てると癒されると。こうして見ると響とも姉妹みたいに見えなくもないな。

とりあえずリビルドギアにしておこう。これでそう簡単にはやられないはずだ。

それに、ギアを纏ったままになってくれれば、俺達もこうして無事が分かり易い。

「これで一先ず希望は持てるな」

「はい。翼さん達がまだ無事なら何とか出来ます」

「それにツインドライブが使えるなら姉さん達は高確率で安全を確保出来ます」

「どうして？」

「簡単です。ミレニアムパズルを展開すれば悪意と同化してしまった姉様達は入れません」

「成程。ヴェイグがやってたやり方か」

優しい心の持ち主しか入れないようにすれば、悪意は何も出来ないはずだ。

なら、やはり先に合流を図るのは翼がいいだろう。

ただし、今日はさすがに止めておくべきだ。色々あつて響も精神が疲弊してるはずだし、そんな状態でクリスマス達と戦うなんてなったらどうなるか分からない。

「響、とりあえず今日はもう休んだ方がいい」

「……………分かりました。折角翼さんが私を信じて送り出してくれたなら、万全の状態にして助けに行かないと意味ないですもんね」

そう言った響の表情は、どこか凜々しい。覚悟を決めたんだろうな。クリスマス達と対峙する事になっても、気弱な事にはならないって。

「兄様は今後どうするんですか？」

「とりあえずはあつちの部屋で生活。で、定期的にここへ来るよ。だから依り代は、今はエルが持つててくれ。それと、二人用のスマホを持つてくるよ。解約するの忘れてたからまだ使えるんだ」

「あつ……」

そう、これもうつかりしてた。でも、まあ、これは怪我の功名って事でいいよな？

こうしてまた俺は車を使ってアパートまで移動し、エルが使っていたスマホとクリスが使っていたスマホを持って実家へと戻る。

すると、響はクリスが使っていたスマホを見つめて微かに悲しそうな顔をした。

「どうかしたのか？」

「あ、えつと……これを見てください」

そう言つて響は俺達へスマホを見せてくれた。

待ち受け画面が、あの夢の国で撮影したものに設定されていたのだ。

響達三人が笑顔でカチューシャを付けたままピースサインをしている、そんな画像に。

きつとこれがクリスにとってはいつでも見ておきたいものだったんだ。この世界で出来た、親友達との思い出が。

「私、絶対クリスちゃん達を元に戻してみせます」

「響……」

「これは、クリスちゃんからの私への声だつて思つて。絶対、絶対また三人でこんな風に笑えるように」

「ああ、きつと出来るさ」

「はい。僕もそう思います」

俺達の言葉に笑顔で頷いて響はスマホをそつと抱きしめる。

それはまるで、失われてしまった絆を優しく抱き留めるようにも俺には見えた。

「……まあ事情は分かつた。正直まだ実感が湧かないが、これだけ信

じられないものを見せられれば信じるしかない」

ギアの展開と解除、それとヴェイグさん。おばあちゃんが納得したやり方に兄様達の言葉もあって、兄様のパパはそう言っただけで苦い顔で隣のおばあちゃんを見た。

正確には、おばあちゃんを見た後で、その膝の上で撫でられながら自分を見つめるヴェイグさんを何とも言えない感じで。

「何?」

「何だ?」

「……なあ、お母さん。どうしてその、べーって奴を子供みたいに扱ってるんだ?」

「いいじゃない。べー君はこれでもいいって言ってくれたのっ」

「仁志が言った事を聞いてなかったのか? そいつは、見た目は小さくてもちゃんとした大人であってだな」

「うるさいわね……。本人が気にしてないんだからいいでしょっ」

「居候になるから気を遣っているって事は考えないのか?」

ど、どうしよう? おばあちゃん達がヴェイグさんの事でケンカを始めそうだ。

「ストップっ! 父さんも母さんも相変わらずだな。ヴェイグが気にしてないならいいじゃないか。あと、ヴェイグは居候になろうが何だろうが気にせず本音を言うから心配すんな。な、ヴェイグ」

「ん? ああ。と言うか、どうして気を遣う必要があるんだ?」
「な?」

不思議そうなヴェイグさんの言葉に兄様が苦笑しながらおばあちゃん達に顔を向ける。

「……少しぐらいは遣ってもいいと思うんだが」

「何よ。さっきは逆の事を言ってた癖に」

「逆じゃない。ちゃんどこつちの言っただ事を理解しながら聞きなさい」

「はいはい。いつも貴方は正しいですもんね」

「そうやってまた思ってもいない事を……」

ま、まただ。おばあちゃん達は仲が悪いのかな?

「だからストップっ！ なあ、もしかして俺がいなくなってもこうやって二人してケンカしてんのか？」

「……まあ、もういつもの事だし」

「私はそんな事したくないんだがな」

「あー、はいはい。頼むから熟年離婚とか止めてくれよ？ こう見えても、俺だって二人の老後の面倒を見たいって程度には親への恩義を感じてるんだから」

「それは当然だ（から）」

兄様へおばあちゃん達が口を揃えてそう言った。

あまりの息の合い方に僕だけでなく響さんも驚いてる。

ただ、兄様はそうでもない。どこか呆れるようにため息を吐いていた。

「つたく、こういう時は本当に息が合うんだな」

「当たり前でしょ。何年夫婦やってると思ってるの」

「それは関係ないでしょうが。と、まあそれはいいとして」

そこで兄様のパパが僕と響さんを見た。

「まさかこんな年若い子を連れ込むとはなあ」

「あのな、前に連れて来たのは響だけ。エルは初めてここに来たからな？」

「お父さんもエルちゃんにおじいちゃんって呼んでもらったら？」

「無視すんな」

「それなんだが、どうしておじいちゃんだ？ お父さんでもいいだろ」

「おいこら」

「歳考えなさいよ。あんな小さな子が娘だとしたら、一体私は何歳で産んでる計算よ？ 超高齢出産なんてもんじゃないから」

「だから、どうしてそこで現実的にだな」

「はいストップ」

お二人がまたヒートアップしてききそうなところで兄様が割って入った。

「俺は慣れてるけど、エルや響はそういう夫婦の関係には不慣れなんだぞ。険悪な関係なのかなって勘違いするだろ」

「タダノ、大丈夫だ。もう何となく分かってきた」

「は、はい。えっと、おばさん達ってこういう風に暮らしてるんだなあって」

僕も頷く。ケンカする程仲が良いって聞いた事があるけど、こういう事を言うんだ。

「ほら、響ちやん達も分かってくれたでしょ。下手に取り繕うと余計こじれるんだから、これでいいの」

「そうだな。しばらくここで暮らすんだ。早く慣れた方がいいだろう」

「何を偉そうに……」

「エルちやーん、この人の事はおじいちゃんでもいいから」

「あ、はい。分かりました」

「ほら、お父さんもエルちゃんって呼んであげたら？」

「何でそんな事をあなたに言われないと」

「あ、あのっ、止めてくださいおじいちゃん」

理解は出来たけど、出来ればあまり口論のような事はして欲しくない。

そう思っ僕は兄様と姉様を止めた時のように呼びかけてみた。

すると、おじいちゃんは僕を見て少しの間止まったみたいになった。

「ほら、いいもんでしょ？ まあ、欲しかったのは娘だろうけど、この際一足飛びに孫が出来たと思いなさいよ」

「あなたは黙ってなさい。その、エル、と言ったか」

「は、はい」

「……何か欲しい物があつたら遠慮なく言っていていいぞ。出来る限り買ってやるから」

「え？ あ、ありがとうございます」

どこか兄様みたいな顔で嬉しそうに笑うおじいちゃんに頭を下げる。

何だろう？ やっぱり兄様のパパなんだなって、そう思った。

「本当に礼儀正しい子ねえ。きつとご両親が立派に躡けたんだわ」

「そうだろうな。っと、仁志、この子達のご両親はどうしてるんだ？心配してるだろうに」

「えっと、簡単に言うとな？ 今、二人の世界は……」

状況を説明し始める兄様の言葉を聞いて、おばあちゃんとおじいちゃんは驚いたりしながら、最後には辛そうな顔で僕らを見つめた。「そう……。まあ、こんな有り得ない事が続けばそういう事なのかもとは思わわ」

「まるで仁志が好きなライダーとか戦隊の話だな」

「否定はしないよ。てか、自分で言っておいて何だけど、よく信じるな？」

「あんたがこんな可愛い子を二人も連れてきて、しかもあんな事を見せられたんだもの。信じるわよ」

「それに、お前が前からこの立花さんって子といたのは分かってるしな。なら、そういう事なんだろう」

優しい笑顔で兄様を見つめるお二人は、とっても温かい感じがした。

僕はパパの記憶しかないけど、きっとママもいたらこんな感じだったんだろうなって、そう思えるぐらいに。

「……ありがとう、父さん、母さん。いつまで分からないけど、彼女達の事、よろしくお願いします」

「お世話になりますー！」

「なりますっ！」

「世話になる」

兄様が頭を下げたのを見て響さんも頭を下げたから僕も同じようにする。

でも多分ヴエイグさんは頭を下げてない気がするなあ。

「はいはい。響ちゃん達は頭下げなくていいから。だって、出来れば私達じゃなくて仁志と一緒にがいいんだろうし」

「そうなのか？」

「でしょうよ。そうそう、聞いてよお父さん。仁志の部屋、お風呂どころかシャワーもないんだって」

「は？ 私でもそんな部屋に住んだ事はないぞ」

「だからここへ連れてきたのよ。前は別の部屋を借りてあげて、そこで暮らしてもらってたんだって」

「ならどうして今回もそうしないんだ？」

「その、その時は響だけじゃなかったからな。複数でバイトしてもらってその収入で家賃を」

兄様の説明に納得するように頷いてお二人は響さんを見た。

「苦労したのね」

「まだ若いのに」

「あ、あはは……訓練とかに比べればへいき、へっちゃらでしたから」「訓練……」

「はい、ギアを使った訓練です。えっと、本当は定期的にあつて……」
今度は響さんが話し出す。それにお二人は感心したり疑問を浮かべたりと忙しい。

僕も途中から加わって説明や解説をしてるとお腹が鳴った。

は、恥ずかしい……。

「ああ、もうそういう時間だったわ。仁志、ご飯しかけてある？」

「それぐらいはな。俺も今日はこっちで飯を食べる気だったから五合炊いた」

「ちやつかりしてるわね、この子は。えっと、響ちゃん、エルちゃん、手伝ってくれる？」

「はい！ あまり料理は得意じゃないですけど頑張りますっ！」

「頑張りますー！」

「おい、この子達を働かすのか？」

「こうでもしないとむしろ気まずいわよ。少しでも家の事する方が世話になるのも気が楽だし」

「俺もそう思う。二人もその方がいいだろ？」

「はいっー！」

こっちではそういう風に過ごしてたし、出来ればお家の手伝いをしたい。

だって今の僕は本当に出来る事が少ない。だからせめて出来る事

を一生懸命やりたいたんだ。

こうして響さんと二人でおばあちゃんの手伝いをした。

僕はテーブル拭きとか食器を出すお手伝い。響さんは料理の助手をした。

兄様とヴェイグさんはおじいちゃん相手に色々と話をしてた。多分だけど僕らの事を。

今は椅子が足りないって事で、ヴェイグさんは響さんの膝上に座り、僕は兄様の使うはずだった椅子に座る事になった。

ちなみにヴェイグさんが以前はテーブルの上で食べていたって聞いたおばあちゃんとおじいちゃんは、そんな不作法はダメって許してくれなかった。

それと、兄様が軽く叱られてた。ただ、兄様は異種族だからこっちの文化を押し付けるのはって反論してたけど、だからって教えないのは違うって論破されていた。

えっと、ごうにいつてはごうにしたがえ、って教えがあるんだってそこで知った。

要するに、その場所に行ったらその場所の決まりに従いなさいって事らしい。

「美味しいっ！」

「そう？　あまり料理は得意じゃないけど、口に合ったようで良かったわ」

「いえいえ、十分上手だと思います。私なんて、得意じゃないって言うより下手ですから」

「大丈夫。私も結婚するまで料理なんてほとんどやってこなかったから。何事も慣れよ」

「なるほど……」

すっかり響さんはこの家に順応してる気がする。

「響、俺にも味噌汁をくれ」

「あつ、ごめんね。はい、どうぞ」

「すまん」

ヴェイグさん用のお味噌汁もちゃんとお椀に入っている。

兄様が何か言った訳じゃない。おばあちゃんがヴェイグさんも一人分って考えてくれたんだと、思う。

「おおっ、マリアや調の味とは違うな」

「マリア？ しらべ？」

「べーと一緒に住んでた時の相手だそうだ」

「へく、可愛い？」

「私は知りません。というか、どうして知ってると思う？」

「べー君、どう？」

「これだからあなたと話すのは嫌なんだ……」

自分を無視するおばあちゃんにおじいちゃんは呆れたような顔でお味噌汁を啜った。

その顔がやっぱりどこか兄様に似てる。

「可愛いかどうかは分からないが、仁志は美人だと言っていたぞ？」

「ヴェイグ……」

兄様が困った顔をした。椅子が足りないから兄様は一人だけ立って食べてる。

「おおっ、そうなのか？ 年齢はどれぐらいだ？」

「何で父さんが興味持つんだよ？」

「歳は知らない。エル、どれぐらいだ？」

「えっと、姉様は今年で23になります。調お姉ちゃんは16です」

「あら、マリアって子は仁志にまだ近いわ」

「そうだな。エル、髪の色を教えてくださいか？」

「姉様は桃色の髪です。調お姉ちゃんは黒髪で」

「あく……」

何故かお二人は姉様の髪色を聞いて何かを理解したかのように兄様を見つめました。

で、兄様は嫌そうな顔でご飯を食べてる。何かあったのかな？

「そういうば響ちゃんの歳を聞いてなかったけど」

「あつ、17です。今年、でいいのかな？ えっと18になります」

「……ギリギリ？」

「本人達次第じゃないか？」

「あのな、響が困ってるから止めろよ」

たしかに隣の響さんは赤い顔で俯き気味にご飯を食べてる。

兄様のお嫁さんになりたいって、そう思ってるんだろうか？

うん、きつとそうだ。姉様達もそうだったし、きつと響さんもそういう気持ちがあるんだ。

「いいじゃないこれくらい。出来れば孫を見せて欲しいって親は思うもんなんだからね」

「それは……分かってはいるけど……」

「立花さん、こいつは真面目で酒もたばこもギャンブルもやらない。親が言うのも何だが、旦那にする最低限は揃ってる。考えてやってみてくれないか？」

「父さんっ！」

「あ、あの、えっと……わ、私もそんなにお嫁さん向きな人間じゃないんで……」

「そんな事ないから。明るくて元気ってだけで十分よ」

「母さんまで……。響、聞き流してくれていいぞ。というかな、別の世界の人間だって言っただろ」

その言葉に心が少しだけ痛い。兄様の口から告げられるその言葉に、そこまで強い意味はないと分かっている。

それでも、僕らとはずつと一緒にいられないんだってはずきり言われたみたいで、辛い……。

「何言ってるのよ。だからこそでしょう？ あんた、この世界で今まで彼女どころか女友達さえ出来なかったじゃない」

「そうだなあ。そう考えると、世界が違うぐらいじゃないと仁志は嫁は持てないか」

「ぐっ……反論し辛い……」

そんな兄様達のやり取りを僕と響さんは聞いて唾然としてた。

だって、兄様はこの世界とは違う世界からお嫁さんをもらうぐらいじゃないと結婚出来ないって言っているからだ。

「まますん、タダノはそんなに友達がいなかったのか？」

「男友達はいたけど……」

「女友達はさっぱりだったな」

「当然だろ。義務教育が終わっても特撮やらアニメやらに夢中で、周囲がファッションだのなんだのに金を使う中、俺はそんなもんへ目も向けず、ライダーやガガガのグッズを買おうかどうかで悩んでたんだ。そんな男、どこに彼氏にしようとする女がいるよ？」

「こ、ここにいます……」

そつと響さんがそう言っつて手を挙げる。でも顔は恥ずかしそうに俯いてた。

「ホント？　ほんつ……とくに、この子でいいの？」

「考え直すなら今の内だぞ、立花さん」

「あんな事言っつた俺が言うのも何だけど、酷くないか二人して。あと父さんは掌の返しが早すぎだ」

「仁志は黙つてなさい」

真剣な顔で響さんを見つめるおばあちゃんとおじいちゃん。兄様は無然とした表情を浮かべてる。

僕は姉様達の事を言うべきかどうか迷つた。兄様はみんなから好かれてるんですつて。

姉様は本当に兄様のお嫁さんになりたがつてたし、お姉ちゃん達もそんな感じだった。

姉さんは……一時期そんな感じだったけど、最後は姉様が無理ならつてそれぐらいだったかな？

「え、えつと……私の方こそいいのかなあつて。世界が違うし、その、私、こつちで暮らす事は本来出来ないんです」

「いいのいいの。婿に出してもいいわ」

「そうだな。たまに顔を出してくれればいいぞ、立花さん」

「そうだ。あとは孫の顔さえ見せてくれたら十分」

「おい。さらつと要求増やしてるんじゃないやねえ」

「あは、あはは……」

何だろう。前までとは違った意味で賑やかだ。それに、何というか、あつたかい。

姉様達と一緒にいる時とは違う兄様が見られるからかも。新鮮だ。

その後はご飯を食べる事に集中した。響さんが沢山食べるのでおばあちゃんとおじいちゃんは驚いてたけど、兄様が気まずい顔で食費とかを少しは出すって言ったら苦笑してた。

「じゃ、俺は部屋へ帰るよ」

シャワーを浴びた兄様はそう言った。時間は……もう九時。以前の生活だったらお風呂の時間だ。

「そうか。気を付けてな」

「仁志、いつそあんたも帰ってきたら？ お父さんの部屋なら男二人ぐらい寝られるし」

「それも考えたけど、やっぱ仕事があるからさ。基本はあつちで暮らす。ただ、車を貸してくれ。朝飯と晩飯は食べにくる」

「あんたねえ……」

「いや、それでいいだろう。どうせコンビニの夜勤だ。余程じゃない限り朝には車をこっちへ戻すだろ？」

「ああ。で、父さんの布団で仮眠を取らせてもらうよ」

「らしいぞ」

「はあ……ま、それでいいならいいけど。あつ、そうそう。明日、響ちゃんとエルちゃんを連れて買い物行きたいからよろしく」

「へいへい。ヴェイグも一緒にな」

「べー君もって、大丈夫？ ほら、さすがに」

「人前で喋らなければバレない。今までもそういう風にやり過ごしてきたる」

「あらそう。じゃ、べー君も一緒に行くから」

兄様達のやり取りはやっぱり家族って感じがすごいする。

僕の記憶に薄っすらとあるパパとキャロルのやり取りには似ても似つかないけど、だけどどこか同じような気がするから不思議だ。

「了解。じゃあ、また明日来るよ。響、エル、ヴェイグ、また明日。おやすみ」

「「おやすみ（なさい）」」

最後にそう言って兄様は出て行った。見送った後、僕は少しだけ寂しい気持ちになる。

以前の生活でもそうだったけど、今回はより強いかもしれない。

「あいつもすっかり大人になったなあ」

聞こえた声に僕は振り返ると、おじいちゃんが感心するような顔をしていた。

「ホントに。エルちゃん達の前じゃ、大人になれるのねえ」

おばあちゃんもどこか嬉しそうだ。

「タダノは大人じゃないのか？」

「私達からすると、まだまだ子供なの。いえ、いくつになってもきつと親から見れば子供は子供よ」

「そういう事だ。べー、子供って言葉には二つの意味がある。一つは未熟だから子供という意味。もう一つが、親子関係という意味での子供という意味だ」

隣に座ってるヴェイグさんを見つめておじいちゃんは笑う。その顔が、どこか兄様と重なって見えた。

「……タダノは後者か」

「そういう事になるかしら。ただ、子供っぽい趣味も持つてるから、前者もきつとなくならないわ、あれは」

「まあ、それが仁志だろう。そのおかげで人として道を踏み外す事はなかったと思うしかないな」

「ホントに」

揃って苦笑するおばあちゃんとおじいちゃん。何だかとっても親って感じがする。

「そうそう。二人もシャワー浴びちゃいなさい。お風呂がいいなら張ってくれればいいから」

「遠慮しなくていいぞ。孫と娘が出来たようなもんだからな」

「ありがとうございます」

「ぱぱさん、俺もいるぞ」

「ああ、そうだった。べーも遠慮なく何でも言ってくれ」

「分かった。ありがとう、ぱぱさん、ママさん」

この後、僕は響さんと一緒にヴェイグさんを連れてシャワーを浴びた。

少しだけ前のお家よりも狭かったけど、響さんとなら余裕があった。

シャワーから出てパジャマ（これも捨てるはずだった物）に着替えると、おばあちゃんがグラスにお茶を注いでくれていた。

「ほうじ茶だけど、飲める？」

「はい」

「ママさん、俺にも欲しい」

「あつ、ごめんね。ベー君の分も用意するわ」

苦笑しながらおばあちゃんがグラスを一つ追加してお茶を注ぎ始める。

僕と響さんは、ヴェイグさんの分が注がれるのを待ってから飲み始める事にした。

「……………ふくっ」

初めて飲んだけど美味しい。ふと見れば僕らを見ておばあちゃんがにっこにっこしてる。

「仲が良いのね、エルちゃん達は」

「はい。僕にとって響さん達は仲間であり家族みたいなものです」

「そうなの？」

「はいっ！」

毎週一度はみんなで集まって何かをした。映画を見たり、カラオケに行ったり、旅行だつて行つたし、絶対ご飯と一緒に食べてた。

お家でのあの時間は、僕にとってかけがえのないものだ。家族って言葉の意味を体験させてくれた、貴重な時間だった。

それを話すと、おばあちゃんだけじゃなくておじいちゃんも小さく驚いた声を出していた。

「そうか……。あいつも、家族のなり方だけはちゃんと分かってるんだなあ」

「だと思っ。きつとエルちゃん達はこっちじゃ頼れる人もいないから、仁志なりにエルちゃん達をまとめようとしたんでしょ」

「あ、あの、家族のなり方って？」

僕が聞きたかった事を響さんが尋ねてくれた。

兄様が小さい頃、嫌いな物が入ってる料理とかを嫌がってどうしてそんな物を食べないといけないのって、そう聞いた事があるらしい。それにおじいちゃんはどう答えた。家族なんだから同じ物を一緒に食べるんだよって。

みんながバラバラの物を食べていたら、お互いの好きな物や嫌いな物が分からないままだし、好きな味や嫌いな味を知る事が出来ないからだって。

「嫌いな食べ物でも、中には料理法が変わったり、味付けで食べられたり食べられなかったりがあるだろう?」

「はい」

「だけど、個人個人で別々の物を食べていたら、それを知る事も、あるいは嫌いな物を好きになる機会もない」

「それに、自分のと違う物を誰かが美味しそうに食べてるのを見てると、羨ましくなったりしない?」

「「あ〜……」」

思わず僕らの声が重なった。それにおじいちゃんとおばあちゃんが小さく笑う。

「古いやり方かもしれないが、同じ釜の飯を食うとも言うし、意外と連帯感を培う常套手段なんだ」

「まあ仁志は、自分がそうやって育ったからそうしただけかもしれないけどね」

何だか、胸があったかくなかった。おじいちゃんとおばあちゃんとの時間が、兄様の今に繋がってるってそう思えたから。

「そっかあ。仁志さんは、おばさんやおじさんの教えを守ってたって事ですね」

「教えて、そんな大層なもんじゃないぞ、立花さん」

「そうそう。でも、嬉しいもんだわ。ちゃんと小さい頃の事、覚えてるもんなのね」

噛み締めるようにおばあちゃんがそう言って笑う。おじいちゃんはまだもうこつちを見てなかった。

でも、テレビを見つめるその横顔がどこか嬉しそうだ。

この後、僕らは三人揃って歯磨きをして、おじいちゃんとおばあちゃんに挨拶をして兄様が以前使っていた部屋へ入った。

「じゃ、寝ようか」

「はい。ヴェイグさん、おやすみなさい」

「ああ」

部屋の隅に置かれたクッションへ体を乗せると、ヴェイグさんは嬉しそうに目を閉じる。

僕も響さんと一緒にベッドへと横になった。い、今までお布団だったから違和感が凄い。

「な、何だか妙な感じだなあ」

「響さんもですか？」

「てことはエルちゃんもか」

「はい」

「……お布団にしてもらおうか？」

「兄様に持って来てもらおう事になりますね」

揃って小さく苦笑して、僕らも目を閉じる。

正直不安は尽きないけど、それでも、シャワー前に見た姉さん達のアイコンはツインドライブのままだった。

きつと、きつと無事でいてくれるはず。そう信じて僕は体を休める事にした。

——両親、か。もしママが生きていてくれたら、俺も……。

夢うつつに、キャロルの声を聞いたような気がしながら……。

翌日、仁志は自分の母の希望を叶えるために、響達を連れてあの大型ショッピングモールへとやってきていた。

平日ではあるが、それなりの人混みの中を仁志の母と共に響とエルフナインは歩く。ヴェイグはいつものようにエルフナインが抱き抱えていた。

ぬいぐるみ扱いではあるが、ヴェイグにとってはそれが上位世界では常だったので気にもしない。ただ、喋らないようにしているのに仁志の母が話しかけてくるので、時々困った顔をしてはいたが。

「エルちゃん、これなんかどう?」

「え? ぼ、僕にですか?」

「そうよ。女の子なんだから少しは着飾らないと」

「だ、だけど僕は……」

いつまでいるか分からない。そう言おうとしたエルフナインへ仁志の母は笑顔で静かに首を横へ振った。

「気にしないでいいの。孫が出来たら甘やかすのがおばあちゃんやおじいちゃんなんだから」

「だからって程々にしてくれよ? エルは金額に敏感で」

「それはあんたが甲斐性なしだからでしょう。もっと稼いでいれば、エルちゃんだって服の一枚や二枚で遠慮したりしないんだわっ」

「ぐっ!」

ざっくりと仁志の胸を突き刺す一言だった。

実際、彼もどこかで情けないと感じてはいるのだ。今も稼ぎは所謂同年代の中では下の方。

それでさえ、老いを少し感じ始めた体で頑張つての結果である。

社会に出てからずっと看護師として働き、いつぱしの収入を得てきた母の言葉には悲しいかな仁志が反論出来る部分は皆無であった。

「あ、あの、あまり兄様を悪く言わないでください。兄様なりに僕らへ色々とお金をかけてくれました」

「分かってるわ。でもね、だからって子供にお金の心配をさせちゃダメなのよ。それは、出来るだけ隠すか、いつそはつきりと向かい合つて教えるべきかしら? まあ、きつとこの子はその辺りはちゃんと言つたんでしようけど、今は店長つて役職になつたんだから少しは見栄を張りなさいって発破をかけただけ」

「仁志さんも大変ですね……」

「いいんだよ。これが高校を出てから好き勝手やつた報いだ」

「そういう事。だからせめて何か資格でも取つたらって口酸っぱくして言つたのに」

最後のトドメに仁志は声もなく項垂れた。何せ目の前でそれを言っている母親は、その資格を得た事で定職に就いたのだから。

「今からでも何か取れるかなあ……」

「んなもん本人のやる気次第。薬剤師だって弁護士だって、結局はその人の気持ちがないとなれないんだからね」

「仰る通りです……」

完膚なきまでに叩きのめされ、仁志はトボトボと母親の後を歩く。そんな姿を見て響とエルフナインは小さく苦笑するのだった。

買い物で仁志の母はエルフナインと響、それとヴェイグ用に服やタオルなどを購入した。

それらの値段は高いとは言えないが、けして安くもない。それを仁志の母は嬉しそうに購入し、帰宅後響達へプレゼントしたのだ。

「色々事情はあるけど、新しい門出には違いないから。これをそのお祝いにあげるから、嫌な風に捉えるよりも良い風に捉えてね」

その言葉と共に、優しい笑顔で。

これに響もエルフナインも共感を覚えて頷き、その服を普段着とする事にしたのだ。

それは仁志の母の気持ちを常に肌身離さずいようとする気持ち故に。

ヴェイグは寝る時用のタオルを嬉しそうに受け取り、早速とばかりに昼寝して仁志の母を苦笑させる。

そして仁志も同じく仮眠を取り、日が暮れる前に彼は響達を伴ってあのアパートへ向かう事に。

「翼さん達を探す、ですか？」

「ああ。まずヴェイグに匂いを探ってもらうんだ。嫌な匂いが一つだけである場所があれば、そこへ行つてクリス達の誰かと出会える。上手くすれば翼達の事も聞き出せるはずだ」

「もし複数固まっていた場合はどうしますか？」

「なら避ければいい。まだ翼達はツインドライブ状態なんだろう？」

「ああ。朝確認したし、今もそのままだ」

「ツインドライブが解除されてないなら、少なくとも悪意が入り込んで好き勝手はしてないはずだ。とにかく、今は多少危険でも情報を得るしかない」

車を勤務先であるコンビニの駐車場へと止め、仁志達はゲートであるノートPCがある部屋へと向かう。

部屋の中は静かであり、仁志が朝軽く寝ていた痕跡だけが残っていた。

ゲートであるノートPCを仁志が実家へ運ばなかった理由は、もし何か起きた時を考えての事だった。

両親を巻き込みたくない。もし最悪の場合でも、少しでも長生きして欲しいという、そんな仁志なりの気持ちからだ。

「とりあえず、エルはヴェイグとコンビニを組んでくれ」

「はい」

「ああ」

「で、俺はエルを脇に抱えて移動する。響は前方へ注意を配ってくれ」
「分かりました」

ギアを展開した響の姿が一瞬にしてアマルガムギアツインドライブへと変わる。

それを確認してから仁志はゲートを解放した。

「な、何だ？ 嫌な匂いがしてくるぞ」

「兄様、ヴェイグさんがこの時点で嫌な匂いがすると言ってます」

「マジか……」

想像以上に厄介な状況になっているかもしれない。そう仁志は思った。

「響、先に入ってくれ。待ち伏せされてるかもしれないから気を付けろ」

「はいっ！」

ゲートへ先に飛びこむ響を見送り、仁志はエルフナインを脇に抱えたまま少しだけ待った。

「よし、行くぞ」

「はい」

そうしてゲート内へ移動した仁志が見たのは、明らかにこれまでと雰囲気の変わったゲート内部だった。

「これは……どういう事だ？」

黒一色になったかのようなそれは、さながら闇の中と言っても過言ではなく、見ているだけで気が滅入りそうな感覚に陥りそうだった。そんな中、響はゲートから出て来た仁志達を見て周囲を警戒しながらゆっくりと近付く。

「仁志さん」

「響、これは君達が逃げてくる時から？」

「いえ、あの時はまだ普通でした」

「なら、たった一日でこうなったって言うのか……？」

それだけ悪意が力を持ったと言う事かと、そう考えて仁志は息を呑む。

そこへエルフナインが悲鳴にも近い声を上げた。

「に、兄様っ！ ヴェイグさんがこの中じゃ嫌な匂いが強すぎて何も分からないとっ！」

「そういう事かっ！」

今まで悪意の探知やカオスビーストの発見に大きく寄与してきたヴェイグ。

その能力を封じるために悪意がゲート内部をこうしたのだと確信出来た瞬間だった。

「仁志さん、どうしますか？ このままじゃ……」

「かと言って何もしないのは不味い。四対一でも厳しいのに、八対一にされたら逆転は不可能だ」

翼達四人が悪意の手に堕ちれば響一人ではどうあがいても勝ち目がない。

それは仁志だけではなくそこにいる全員の共通見解だった。

「では、どうしましょう？」

「……翼がどこへ行きそうかは分かるか？」

「え、えっと……最後に見た時はクリスちゃんを向こうへ追いやるようにしてました」

響の指さす方を見て、仁志は頷いて尋ねる。その先にゲートはあるか。あるならどこの世界のゲートだと。

それに響は少し黙り込んだ後、シャロン達のいる世界だと答えた。

その言葉に仁志は僅かな望みを賭けてそこへ行く事を決断した。
「もしかしたら、そこにいる八紘さんを頼ったのかもしれない」
「え？ 時間停止してるかもしれないのに、ですか？」
「だからこそ確認も兼ねて逃げ込んだ可能性がある。今はそれに賭けてみるしかないんだ」
「響さん、僕も今は兄様の意見に賛成です。多少危険を冒してでも、今は情報を得るべきです」
「……うんっ！」

こうして仁志達はシャロン達が住まう平行世界へと向かう。そこにいるかもしれない翼を探して……。

一方、根幹世界のS・O・N・G本部内発令所では……。

「どうやら只野さんも来たみたいです」

「あら、思っていた以上に早かったわね。じゃあ出迎えてあげないと」
「待ちな。それはあたしが行くから」

「何言ってるやがる。まんまと後輩どもに逃げられたんだ。しばらくそっちの出番はなしだ」

「それ、翼に逃げられた貴方が言うの？」

「あ？ 状況的に有利だったお前らと違ってこっちは」

「そこまで。揉めるようなら私が行きます。只野さんだけじゃなくて響もいるんだもの。一番会いたいのは私なんですからね？」

その言葉に誰も何も言わなかった。今一番してはいけないのは何かを理解していたからだ。

そんな三人を見て最後に口を開いた者は頷くと、その場からゆつくりと発令所を出ようと動き出す。

「結局お前が行くのかよ？」

「そうだよ。だって、私が調ちゃん達を逃がしちゃったの、マリアさんと奏さんが揉めたせいだし」

「ちっ！」

「仕方ないわね。行ってくるわいいわ。その代わり」

「分かっています。その代わり……」

そこで彼女、未来は心から幸せそうな笑みを浮かべて振り返った。

——ちやくんと殺さないようにして、連れてきますから。
黒く変色した肌で、漆黒の禍々しいギアにその身を包みながら
……。

いつかの虹、花の思い出

「ここが、平行世界か……」

初めて訪れる平行世界。というか、俺は自分の世界へのゲート以外を通るのが初だ。

「やっぱり停止してる……」

「そうですね。本部と同じ状態です」

「じゃあ、とりあえず翼を探しながら調べてみよう。それと、ヴェイグの方はどうだ？」

「……少しはマシだと言ってますが、やはりまだゲート内の影響が残ってるそうです」

「そっか。じゃあ、鼻が利くようになったら教えてくれるか？」

「……分かったとの事です」

響を先頭にゆっくり歩く。エルは一先ず下ろして手を繋いでいる。

それにしても、初めて訪れる異世界があこのシャロンちゃんがいる世界とはなあ。

てつきりどこかで根幹世界だと思い込んでたから意外だった。

「まずは二課の発令所ですね」

「そうだな。八紘さんがいるとすればそこぐらいしか心当たりないだろうし」

翼もこの世界では異邦人だ。ここの八紘さんの行動範囲を正しく把握はしてないだろう。

そう思っただ俺達は響の案内で二課の発令所へと向かった。施設内の設備は稼働していなかったが、響が触れば動き出すのでそこまで困る事はなかった。

そうやって辿り着いた発令所に八紘さんの姿はなく、俺達は早速困る事に。

「ど、どうしたらいいかな？」

「僕もこの事は詳しくありませんが、まずは八紘さんが行きそうな場所の心当たりはありませんか？　ここ以外です」

「ここ以外、かあ……」

俺はゲームでの知識で考える。この世界の八紘さんは翼と上手く
いってなかったからか、友人の娘であるシャロンちゃんの事を実の娘
のように大事にしてる描写があった。

それに、シャロンちゃんは定期的に薬を使用しないと融合症例状態
が悪化するみたいな事もあった気がする。

「なあ、シャロンちゃんの部屋は分かるか？」

「え？ 分かりますけど……？」

「この八紘さん、彼女の父親みたいな感じだろ？ そこにいるって
可能性、ない？」

「ああっ！ そうかもしれないっ！ 案内しますっ！」

響がその可能性があったかみたいいな声を出して歩き出す。

俺とエルはそれに置いていかれないように動き、歩く事しばらくで
一枚のドアの前へ。

「開くといいんだけど……」

ポツリとそう響が呟いた。成程な、ロックされてると厄介か。

「あつ、開いた」

が、意外とあっさりドアが動いた。

中はゲームで見たのと同じ、かと思えば細かに違う。

まあ、あれって言っちゃえば汎用背景だもんなあ。

「シャロンちゃん……それに……」

「八紘さん、だな」

きつと何か話していたところなのだろう。

シャロンちゃんは笑顔を見せ、八紘さんも微かに笑みを見せてい
る。

何とも心があったかくなると同時に微かな痛みも感じるな、この光
景。

「翼さんは……いませんね」

「まあ、あくまでここにいるかもしれないって可能性だけで来たから
なあ」

「でも、これではつきりしました。まだ平行世界の時間も止まった
ままなんだって」

響の言葉に頷く。悪意が一度倒れたにも関わらず時間停止が解けたとは思えない。

なら、やはりこれは星の声やってくれている事だろう。

だが、どうしてここまで一気に悪意は力を増したんだ？ みんなの心にある負の感情だけでここまでなるとは思えないし思いたくない。

何か、何かあったんだ。それも俺の世界で、上位世界で悪意が急激に力を得られる事が。

それを見つけ出すか探し出さないと同じ事の繰り返しになる可能性がある。

そつちの事も考えないといけないか……っ?!

「ど、どうしたんですか兄様!？」

「仁志さん!？」

急に頭痛がした。思わずその場へ膝を付くぐらいの、激しい痛みが。

「……っはあ……だ、大丈夫だ。ただの、頭痛だよ」

少しじつとしていたら治った。だけど、脂汗が凄い。

一体今のは何だ？ もしかして、あのゲート内の状況が今になって俺へも出たのかもしれない。

「エル、きっきのゲート内の異変だけど」

「はい」

「あれの影響って、ギアのない俺やエルに出ないと思う?」

「そ、それは正直分かりません。っ?! ま、まさか今の兄様の頭痛はそれが原因ですか?」

「えっ?!」

「俺は、その可能性があると思ってる。ヴェイグがしばらく鼻が利かなくなる程の悪臭だ。感じる事は出来なくても体に害はありそうじゃないか?」

「で、でも僕は何ともありません」

「それなんだけどさ……」

エルに影響がない。もしくは出難い理由が俺にはある。

エルの体は特別と言ってもいい。何せキャロルが錬金術を使って

作り出していた自分のスペアボディだ。

それが全て自然のままとはちよつと思ひ難い。何らかの錬金術などで細工じゃないけど手が加えられていると思う方が自然だ。

そう考えを述べるとエルは納得するように頷いた。

「かもしれません。キャロルが作った体ですし、自然のままとは思えないです」

だが、そう言つてエルはどこか悲しそうな顔をして俯いた。

その瞬間俺は気付いた。どうしてエルがそんな反応を見せたかを。

「ごめんっ！俺、今エルに凄く酷い事を！」

「いえ、いいんです兄様。僕の体はキャロルの体で、その体はキャロルが作り出した物。それは自然の摂理に反していますから」

「エル……それでもだよ。ごめんな」

「兄様……」

そつとエルの体を抱き締める。俺、何してんだよ。

この子の心を傷付けるような言い方しないで良かっただろ。いくらでも言い方はあるじゃないか。

これじゃ、あの時と同じだ。俺が勇気を出してヒーローらしいと思つてやった時と。

——只野さんが余計な事言つたせいですっ！

甦る過去の記憶。思い出したくない、辛い言葉と時間。

何でだよ。どうしてここでそれを思い出すんだ？

たしかにある程度は似てるかもしれないけど、エルは俺を裏切つたりしないのに。

「あ、あの、兄様？もう大丈夫ですから」

「っ……あ、ああ」

エルの言葉で我に返る。ホント、どうしたんだらうな？

あの時の事は、陽子さんへ洗いざらい話して楽になつただらうが。しかももう五年近く前だぞ。いい加減乗り越えろよ。てか、乗り越えたじゃないか。

そつとエルから離れて息を吐く。今は昔の事を思い出してる場合じゃない。

翼達と合流し、クリス達を悪意の支配下から助け出す。それだけを
考えないといけないんだ。

「仁志さん、これからどうしますか？」

「そうだな……」

チラリと八紘さんを見る。翼が仮にここへ来ていたとして、彼女は
迷う事なく八紘さんへ会いに来るだろうか？

クリスと、悪意と交戦したならその追撃を当然考えるはずだ。な
ら、万が一巻き込んでしまう可能性を考慮し、会う事は避けるかもし
れない。

それでも、きっと八紘さんを、もつと言えば父親を感じられる場所
へ行くはずだ。

その考えで行けば……

「響、風鳴邸の場所、分かる？」

「え？ えっと、師匠の家じゃなくて、ですよね？」

「ああ。八紘さんの、翼が生まれ育った家だ」

そこなら戦闘になってもそうそう周囲へ被害を出さない。何せG
Xで思い切り戦場になってたしな。

ただ残念ながら響も翼の生家を訪れた事はないそうで場所は分か
らないとの事、

打つ手なしかと、そう思った時だった。

「兄様、ヴェイグさんがやっと匂いが分かるようになったと」

「マジか。じゃあ、この世界で響達以外の匂いを感じるか？」

そう尋ねるとヴェイグがエルの中から出て来た。そしてエルの腕
の中へスポツと収まる。

「っと。ああ、感じるぞ。しかも悪意の匂いじゃない」

「じゃあ、そこへ案内してくれ」

「分かった」

翼でなくてもいい。この際誰でも構わない。今は一人でも戦力が
欲しい。

響一人じゃ四人を相手にするには頼りなさ過ぎる。俺とエルに
ヴェイグじゃ支援としても脆弱だ。

一縷の望みを賭けてヴェイグの案内のまま歩き続けた。やがて、その視界に立派な屋敷が見えてくる。

しかも、日本家屋然としたものだ。門があつて、石段があつて、いかにもな感じのそれに俺は息を呑む。

「あれだ。あれが風鳴邸だ！」

アニメでチラツとだけ見た門構えそっくりだ。というか、ここまで来たらず間違いない。

「ヴェイグさん、匂いはあの建物からするんですか？」

「ああ」

「じゃ、やっぱり翼さんはここにいらっしゃるんだ！」

「ですね！」

響の声に明るさが増す。心なしかエルもだ。ただ、何故かヴェイグが首を捻っているのが気になった。

「ヴェイグ、どうかしたのか？」

「妙なんだ。その、嫌な匂いではないんだが、優しい匂いでもない」

「嫌な匂いでも優しい匂いでもない？」

「どういう事だと俺達三人の声が一致する。それを聞いてヴェイグは困った顔を見せた。」

「何と言うか、両方混じってるような変な匂いだ。匂いへ近付いてきたから分かるようになったのかもしれない」

「混じってる、か……」

これは早く合流した方がいいな。何か起きてるのは間違いないだろう。

「響、悪いが俺達を抱えてあの屋敷の庭まで行けるか？」

「まっかせてください！」

こうして俺はエル達を抱え、その俺を響が抱えて移動する事に。

うん、男としての尊厳やら何やらは欠片もないけど、仕方ない。だって俺が全力で走るよりも早く響の跳躍が距離を稼ぐんだもの。

あっさりと中庭へ到着し、俺は間違いないここがあのファラと翼が激戦を繰り広げたのと同じ場所だと確信した。何せ要石あるしね。

「ヴェイグ、匂いはあつちか？」

「そうだな」

「じゃあ、そこに翼の部屋があるはずだ」

「良かった。翼さんが無事で」

「早く合流しましょう！」

嬉しそうなエルの言葉に頷き、俺達は翼の部屋へと向かう事にした。

まず玄関だが意外な事に俺が触っても開いた。多分依り代を持つてるからだろうってエルは推測したけど、まあそうだろうな。

「響、先に行ってくれ。何があるか分からないから」

「分かりました」

玄関の戸を閉めて鍵をかけようとして、俺は何となく鍵をかけるのを止めた。

というのも、最初から開いていたって事は鍵はかけられていなかったって事だ。

なら、かけなくてもいいかと思っただけ。それと靴は脱がないでいた。

逃げる事になった時に困るし、そもそも時間が停止してるから汚れもしないだろうって思ったからだ。

それにしても、時間が停止しているためかまったくの無音で少々気が滅入る。

ヴェイグの案内を頼りに屋敷を歩き、やがて俺達はある部屋の前で足を止めた。

「ここだ」

「翼さん、私です。響です」

「翼さん、ご無事ですか？」

「翼、俺だ。只野だ。いるんだろう？ 開けてもいいか？」

反応は……ないな。どういう事だろうか？

一応依り代を取り出して確認してみると、翼はまだツインドライブ状態だった。

「……ステータスに変化なし。どうしたんだ？」

「開けてみましょうか？」

「それがいいかもしれません。その、匂いが混じっているのが気になるます」

「そうだな。タダノ、どうだ？」

「俺も中の様子を見るべきだと思う」

「じゃあ、開けます。翼さん、開けますからね？」

響が再度声をかけながら障子を開けた。

「ううっ……ぐうううっ」

すると部屋の奥にギア姿の翼がいたのだが、どうも様子がおかしい。

蹲って苦しそうに呻いているのだ。これは一体……？

「翼さんっ!? 大丈夫ですか翼さんっ!」

「はあはあ……っ……た、立花？ それに……」

「翼さんっ! しっかりしてください!」

「翼、しっかりしろ」

「エル……ヴェイグ……っ!」

「翼、どうしたんだ？ 何があった？」

俺を見て翼の目が見開かれた。それと同時にボロボロと涙が流れ始める。

「仁志、さん……っ!」

「ああ、俺だ。何があったんだ？ クリスはどうした？」

「っ!? そうだ……雪音は、悪意は何とか撃退出来ました……っ。この、ギアのおかげです……。仁志さんと立花が合流出来たと、そう分かった悪意は……っ、こちらのギアの力もあってか、少し交戦した後であっさりと退いたのです……」

あっさりと、退いた？

「じゃあ、どうして翼さんはこんなにも苦しんでるんですか？」

「や、奴は去り際に私へ迫り、その、不意を突いて私へ何かを打ち込んできた」

「まさかっ! それで悪意の種を!」

そう考えれば納得出来る。以前ギアがどうやって悪意を弾き飛ばしているかをエルが説明してくれたけど、あれは要するに風船が膨ら

むようなものであつて、ギアを展開しているから悪意の侵入を防げる訳じゃないって結論を出してた。

つまり、今の翼はギアを纏った状態で悪意の種を打ち込まれたんだ。

しかも、おそらくだがかなり濃度の濃い物を。

「た、立花、私をソルブライドギアで攻撃してくれ。それで私の中に根付こうとしている悪意の種を除去して欲しい……っ！」

「で、でも……」

「エル、どうだ？ それで果たして悪意の種を除去出来ると思うか？」

俺は正直疑問が残る。何せ相手は神獣鏡の光さえも克服した悪意だ。

今更響一人での太陽の輝きで除去出来るような物を植え付けるだろうか？

それも、今まで一度も悪意に操られた事のない翼相手に。

「正直分かりません。ただ、多少効果はあるかもしれませんが」

「多少、か。そうだな、本人も望んでいるし、今後同じような事をしないといけないんだ。なら、一度だけやってみるべきかもしれない」

クリスマス達四人は悪意と同化している。おそらくだけど、正確には同化と言うより同調だろう。

悪意が囁く言葉に心を合わせてしまっているんだ。クリスマスで言えば寂しさを、マリアで言えばおそらく家族愛を、奏は多分嫉妬を、未来は……何だろうか？ とにかく、それぞれの心の闇とも言える部分を刺激しているに違いない。

それを完全に祓う事が出来なくても、少しでも弱める事が出来れば元に戻せるかもしれない。

「響、心苦しいだろうし、やりたくないだろうけど、それでも翼の気持ちと今後のために一度だけ頼めないか？」

「………分かりました。未来達を悪意から助け出さないといけないですもんね」

「ああ、ごめんな。嫌な事を響へ押し付けて」

拳を握って戦う事が嫌な響へ、よりもよってそれをさせて仲間を

攻撃させるなんて一番嫌な事だと思う。

「いいんです。仁志さんのその気持ちだけで、私の心は沈まないで済みます」

「響……」

微笑んで響は俺の事を見つめてくれた。その優しさと強さに感謝して、俺は彼女のギアをソルブライドギアへとドライブチェンジさせる。

「……やっぱり一人じゃ光らないんだ」

少しだけ悲しそうにそう呟いて響はその拳を握った。これまではゆっくりと金色の輝きを帯びていったギアも、響一人では差色が入る以外に変化はない、か。

響の握った拳へ光が集束していくのを見て俺達は息を吐く。

まるで太陽の輝きがそこに生まれるかのようだ。安心感が凄い……。

「温かいです……」

「ああ、今の響からは優しい匂いがするぞ」

エルとヴェイグの言葉に響は小さく微笑むと翼へ凛々しい表情を向けた。

「翼さん、いきます」

「あ、ああ……っ頼む……っ!」

「はあああぁっ!」

響の手の中に宿った太陽の輝きが翼目掛けて放たれる。

が、その瞬間俺達の後方から何かが飛んできた。

真っ黒いそれは響の光を飲み込み、そのまま翼を包み込んだ。

「あああああぁっ!」

「!!」翼(さん)っ?!」

まるで闇の繭に閉じ込められたような翼。どういう事だと動揺する俺へヴェイグが弾かれたように顔を向けたのはそんな時だ。

「っ! タダノ! 嫌な匂いがするっ!」

「っ!」

慌てて後ろを振り返る。そこには……

「ふふっ、やっぱり只野さんだ。響達と一緒にゲートをくぐってきたんですね」

「未来……」

禍々しいデザインの漆黒のギアを纏った未来がいた。しかも色黒になっついて宙に浮いてる。間違いなく普通じゃない。

それに、その、露出度が高くて悪の女幹部みたいな雰囲気だ。インナーの切れ込みが凄いいし、あれ、普段の未来なら絶対着ない気がする。

「未来っ!? 翼さんに何をしたのっ!?」

「何って、私達と一緒にになるようにしただけだよ？ みんな一緒に響も嬉しいでしょ?」

「っ！ 違うっ！ 私の望んでる事はそういう事じゃないよっ！」

「只野さんはどうです？ 響はこんな事言ってますけど」

怒りと悲しみに震える響を冷めた目で見つめて、未来はそう俺へ問いかけてきた。

「俺も響と同じだよ。悪意に満ちた君達なんて、俺は見たくない」

「そうですね。やっぱり響も只野さんも分かってくれないんだ。みんなで仲良くしようって、私はこんなにも想ってるのに……」

がっかりするような未来の声を聞いて俺は分かった。彼女は協調性を利用しているんだ。

悪意によつて、みんな仲良くして欲しいという響や俺の願いを叶えようと思う未来の気持ちを歪められてるんじゃないだろうか。

「でも、それならいいです。二人にも分かってもらえばいいだけだし」
楽しそうに笑う未来だが、やっぱりその顔はどこか本来の明るさや

優しさが感じられない。

「未来っ！ 今、元に戻してあげるからっ！」

「クスッ、それはいいけど、翼さんはどうするの?」
「えっ?」

言われて俺は視線を翼へと向ける。すると、闇の繭にひびの様なものが見えた。

同時にスマホから通知音。嫌な予感がして見てみると、ステータス画面が更新されたとの表示。

慌ててステータスを開けば、翼のアイコンがイグナイトへと変わっている!?

「不味いつ!? 翼まで向こうへ取り込まれたっ!」

「二っ?!」

「お目覚め、かな?」

未来の楽しげな声と共に闇の繭が消え、そこから禍々しい漆黒のギアを纏った翼が姿を見せた。

こちらも、その、色黒になっていて悪の女幹部って感じのきわどいデザインだ。

「つ、翼さん……」

「立花か」

「う、嘘ですよね? 翼さんまで悪意と同化なんて……」

「悪意? 同化? 何を言ってるんだ立花。私は私だ。風鳴翼だ。見て分からないか?」

口調こそ翼だが、その表情は常にニヤニヤと笑っていて翼らしくない。

響もそれを分かっているんだろう。今にも泣きそうなくらい辛そうな顔をしている。

「翼さんっ! 悪意に負けちゃダメです!」

「エル、私は負けてなどいない。こうして悪意を御して己が力と変えたのだ」

「違います! それはそう思っているだけです!」

「ふふつ、言っても分からんらしいな」

「今の翼からは嫌な匂いがする。俺の知っている翼は、もっと優しい匂いだ」

エルが涙目になったのを見てヴェイグが毅然と言葉を放つ。

だが、それさえも今の翼には響かないらしい。

「強さを得るには多少の変化はつきものだ。立花、見ろこの姿。いつかのアルゴスギアなど足元にも及ばん禍々しさだ。それでいて、この体の奥から力が漲る感じは堪らない……」

「翼さん……」

「お前も私達と同じになろう。とても心地がいいぞ」

「もう止めてください翼さんっ！」

「止めろ、か。相変わらず甘いな、お前は」

「ダメですよ翼さん。響はこの素晴らしさが分からないんです」

聞きたくないとばかりにかぶりを振る響へ翼はどこか冷たい目を向ける。そこへ未来が呆れるような口調で言葉を投げてきた。

完全に悪堕ちしたかつての仲間同士なやり取りだ。そういうのがある作品、みんなと見た覚えはないんだが……。

とはいえ、このままじゃ響が体より先に心をやられてしまう。それは何とかしないといけない。

まずはそれとなく未来と翼の位置を見て、このままでは完全に挟撃の形になると理解した。

なのでまずはエルの体をそつと抱き寄せると、小声で俺の考えを告げる。

「響へ声をかけて一旦外へ出るぞ。ヴェイグはエルの中へ。で、エルはしっかりと俺に掴まってくれ」

このままじゃ響は二人を相手に俺達を守る事になる。ならせめて俺達だけでもこの場を離れて、響が自分の事へ専念出来るようにするしかない。

それに上手くすれば、一時的にでも響が二人のどちらかと一対一になれるかもしれない。

俺は、ヴェイグが消えるのと同時にエルの体を抱えるとその場から走り出す。そして叫んだ。

「響っ！ こっちは撤退するっ！ ゲートで会おう！」

「っ!? わ、分かりましたっ！」

「逃がしませんから」

俺達が逃げ出すと同時に未来がこちらを追い駆けてくる。

だが、俺だつて伊達に色んな特撮を見てる訳じゃない。そんな事想定内だ。

やみくもに逃げても意味がないので、まず俺は部屋を出るなり廊下ではなく庭へと降りた。そのまま走って玄関先へと向かう。

一度として後ろを振り返る事無く走り、玄関の戸を開けて中へ入ると同時に戸を閉めて鍵をかける。

そして屋敷の中を静かに歩きながらある程度まで奥へと進み、一度だけ振り返った。

「つはあ……つはあ……追ってきては……つないか……？」

本来なら攻撃して建物を壊したり出来るだろうが、今は時間停止状態。依り代の力がなければ何も出来ないと言える。

つまり、悪意がどれだけ殴ろうと壊す事は出来ない。戸を閉められては開ける以外に入る方法はないが、そこへ鍵をかけられては手も出せないだろう。

何故なら、今の未来は依り代の力を失ってるはずだ。じゃないと悪意に取り込まれるはずがない。

要は時間停止状態へ手出しする術がないんだ。

鍵を壊す事も戸を開ける事も出来ないなら、施錠された建物の中への逃亡は厄介以外の何物でもないだろう。

そうなると建物の中はギアがあるうと追跡がし辛い場所となる。攻撃しても壊せないからだ。

そう予想して敢えて屋敷の中へ来たんだが、どうやら当たりらしい。

それにしても、あのギアはヤバい。響が纏っているのはソルブライトのツインドライブだ。

悪意への対抗力はトップクラスのはずなのに、それと対峙して余裕を崩さなかった。

て事は、あれはそれと同等か下手すりや上の力を持つてる。

漆黒のギア、か。イグナイト以上にイグナイトって感じだったよな、あれ。

ん？ ちよつと待て？

たしか翼の表示も未来の表示も、ステータスで見ればイグナイトだった。

じゃあ、あれはイグナイトギアの変化型？ 名付けるならイーヴィルギアか。

「兄様、これからどうするんですか？」

「これから……」

エルの問題かけに考える。正直俺達だけなら逃げる事は可能かもしれない。

ただ、その場合結局終わりだ。響が翼みたいにされたら打つ手なし。

だからと言って、俺達に出来る事なんて精々がドライブチェンジとミレニウムパズルの展開だ。

……ミレニウムパズルっ!?

「ヴェイグっ！今の翼と未来をミレニウムパズルへ閉じ込める事は可能かっ!？」

「す、少し待ってください」

俺の問題かけにエルが胸に手を当てて少し黙る。

「……二人は無理だそうです。でも、翼さんだけなら何とか」

「未来は無理か。理由は？」

「えつと……未来さんの方が嫌な匂いがキツイそうです」

「それだけ悪意に飲まれてるって事か。でも、それならある意味丁度いいか」

思い浮かんできた作戦を少し変えれば十分だ。何より一番大事なのは響を数的不利から脱させる事だし。

「いいか？ 響はきつと翼と交戦中だ。未来も俺達の追跡を諦めてそっちへ合流する可能性がある」

「はい。きつと今頃はそうしてるはずですよ」

「ああ。だから俺達も戦闘音が聞こえる方へ向かう。で、可能ならエル達には……」

考えている未来と翼の分断案に二人は最初難色を示したが、俺が今はこれぐらいしかないと力説すると、エルは頷いて、分かりましたと言ってくれた。ヴェイグも賛同してくれたらしい。

こうして俺は、響のギアをアマルガムギアヘドライブチェンジさせると、エル達を連れて再び翼の部屋がある方へと向かう。力がないなら知恵で戦うしかない、そう思って……。

「どうした立花。動きが鈍いぞ」

私へ笑いながら斬りかかる翼さん。その表情は初めてみるぐらい、怖くて不気味。

まるで剣を振るう事が、私を攻撃するのが楽しくて仕方ないみたいなその顔に、やり場のない悲しさと怒りが沸いてくる。

悪意に染まるところなるんだ。ベルちゃんが歪んだのは当然だよ。あの翼さんでさえこうなるんだもん。

「翼さんっ！ お願いです！ 心を強くもってください！ いつもの凜としてカツコイイ翼さんに戻ってくださいっ！」

「凜としてカツコイイ、か。ふんっ！ そんなもの、飾り立てられた私だっ！」

「っ?!」

吐き捨てるような言い方と共に突き出された刃を辛うじて避ける。

今の、完全に私を刺し殺すつもりだった。最初の頃の翼さんでもやらなかった、明確な殺意を宿した攻撃だった……。

「何を呆けている？ ああ、私の殺意にあてられたか？」

「っ、翼さん……」

「ふん、甘いぞ立花。戦場であれば、そこにあるのは生か死か。それが嫌なら逃げ出せ。まあ、もつとも？」

「逃がすつもりはないけど、ね」

「っ！ 未来っ!？」

横から聞こえた声に目を向ければ、そこには仁志さん達を追い駆けたはずの未来がいた。

まさか、仁志さん達は捕まったの？ それとも……。

「っ?! これは……」

そんな時、ギアが変化した。アマルガムギアツインドライブ。つまり、まだ仁志さんは無事だ！

「小日向、逃がしたのか？」

「すみません。このギアの攻撃を通さないんです、今のこの世界。だから屋敷の中へ入られて鍵をかけられたら追跡が面倒で……」

「ちっ、そういう事か。さすが仁志さんだ。頭が回る」

翼さんと未来を視界に入れられるように少し下がりがりながら考える。何で仁志さんがこのギアへ変えたのか。リビルドじゃなくてアマルガムの理由を。

きつと、きつと何かあるんだ。単純に考えれば腕が四本になったから二人相手にも互角に戦えるって事、だよな。

でも、それだけじゃない気がする。とにかく、今は翼さんと未来を相手に何とか立ち回るしかない！

「あれ？ どうしたの響。急にやる気になっちゃって」

「まさか私達を相手に勝てるでも思っているのか？」

「勝てる勝てないじゃありません！ 絶対勝ちます！ 勝って二人を元に戻してみせますっ！」

そうだ。今の私は一人じゃない。このギアは、元々サンジェルマンさんのくれたギアだ。

そこに仁志さんの想いも加わった、あつたかいギアなんだっ！

「花咲く勇気いいっ！」

ヴァネツサさん達と戦った時は二人だった。でも、今の私は三人だっ！

サンジェルマンさんと仁志さんが傍にいてくれる。

それが、それがこのっ！ アマルガムギアツインドライブなんだっ！

「ぐっ！ さすがに四つの攻撃を全て捌くは困難か……っ！」

今まで余裕があった翼さんが初めて表情を険しくした。

このままならって、そう思うけど私は知ってる。ピンチがチャンスなら、チャンスはピンチ。

だから一旦距離を取る。するとそこへ何本もの閃光が降り注いだ。

「さすが響。気付いてるか」

少しだけ上を見上げればそこには未来。やっぱりそうだよな。

いつもの私ならあそこで踏み込んで。未来がそこを狙わないはずない。

「小日向、私はともかく立花のギアに当たったらどうするつもりだ？」

「まだ利用価値はあるんだぞ」

「心配いりません。今の響のギアはツインドライブ。しかもラピスの輝きを秘めたアマルガムです。このギアの力でも簡単には消せませんから」

「確証はないだろう?」

「はい。でも、そんな気がしませんか?」

「……違くない」

私の目の前で笑う二人。その笑顔が、全然いつもと違う。

今の二人は、笑顔さえも邪悪な感じ。ずっと私の事を見下してるよな、馬鹿にしてるよな、そんな感じがする。

「だけど、どうしようかな。さすがに二人相手じゃ厳しい。しかもあのギア、何となくだけどツインドライブ以外で殴ったら不味い気がする。」

「きつとあれは悪意そのものがギアになってる、と思う。イグナイトの表示が出てたって言うから、きつとベースはイグナイトなんだろうけど、それよりも更に出力が高いんだと思うし。」

「それにしても、素晴らしい力だな、このギアは。歌う事無くツインドライブと同等の力を、下手をすればそれ以上の力を出せるとは」

「ですよ。だから早く響達にもこうなって欲しいんです」

歌い続けながら私は考える。どうすればいいのかを。

仁志さんはゲートで会おうって言ったけど、さすがにちよつと私はそこへ行くのが難しい。

と、そこで思った。仁志さんだつて私がない状態で逃げても危険だつて分かつてるはずだつて。

「なににあんな事を言ったのは、何で?」

「……そっか! そういう事なんだ! 仁志さんはまだこの近くにいます!」

だから私のギアをアマルガムへ変えたんだ。自分は無事で、今もどこかで私を見てるぞつて伝えるために。

答えは分からないし、誰も教えてくれない。だけど、だけどきつとそうだ。そうだと信じたい。

仁志さんが私を一人置いて逃げ出すはずはないって！

「何だ？ 立花の目が変わった……？」

「ですね。嫌な目……。さっきまでの不安げな方がとつても魅力的だったのに」

もう二人の言葉に心を惑わせない。

今は自分を信じて、仁志さん達の事を信じて、それに何より、胸の歌を信じて戦おう。

「響っ！」

そんな時、私の視界に仁志さんが現れた。けどエルちゃんの姿は見えない。

でも、やっぱり仁志さんはここにいた。いてくれたっ！

「仁志さんっ！」

「只野さん、逃げてなかったんですね」

「まあだろうとは思っていました。貴方が立花を置き去りに出来るとは思えませんでしたし」

「響っ！ 翼は俺が引き受ける！ 君は未来を何とか元に戻してやってくれっ！ ラピスは浄化の力を持つてる！ その輝きを引き出すんだっ！」

ラピスは浄化の力を持つてる……。そうだ。だからイグナイトが使えなかった。

「分かりましたっ！」

繋がった。今、全部分かった。何でこのギアか。どうしてこのギアか。

相手のギアのベースがイグナイトなら、ラピスはそれへの対抗策。しかも、未来のギアには愚者の石は使われてない。

「ならっ！ やれるっ！」

拳を握り締める。目の前にいる二人を見つめて、今は拳を握る。

開いて繋ぎたいけど、今は出来ない。だから、そう出来るまでは

……

「私は歌でっ！ ぶん殴るっ！」

「とか言ってますけど、どうしますっ。」

「面白いじゃないか。仁志さんがどうやって私を相手にするかお手並み拝見といこう。小日向、ぬかるなよ?」

「そちらこそ、足元すくわれないでくださいね?」

「ふんっ……」

鼻を鳴らして仁志さんの方へ跳んでいく翼さん。心配だけど、仁志さんがああ言ったんだ。

なら、きつと大丈夫。

「さてと、じゃあ響? 遊んであげる」

「悪いけど今の未来と遊ぶつもりはないよ」

「つれないなあ。いつもは逆なのに」

楽しげに笑う未来だけど、その笑顔は私の大好きな陽だまりの笑顔じゃない。

今は、底なし沼みたいなドロドロした感じがする。それだけ悪意が未来を包み込んでるんだ。

「けど、いいよ。そんな響でも私のお日様だから。ちゃんと私達と同じにしてあげるから」

そう言って不気味に笑う未来だけど、急にその顔が驚きが変わって後ろを振り返った。

私の視界からは何も見えない。でも、多分だけど翼さんに何かあったんだ。

「……そういう事か。あの男、やはり厄介ね」

聞こえた低い呟きは未来の声だけど未来じゃないもの。

そこで思い出した。クリスちゃんだって途中から悪意が喋ってた。クリスちゃんの声を使って、クリスちゃんじゃない口調で。

その上でまたクリスちゃんと同じ喋り方をした。

なら、目の前の未来やさっきの翼さんだって本人が本当に言った事とは限らない。

あのシエム・ハさんの時のように、喋ってるのは悪意だって思おう。そして、今度は未来らしい口調を使われても動揺しないようにも。

仁志さんが教えてくれたライダーの話は、ある意味であの時負けてしまった時の私の話だ。

ここで私が負けたら、迷ったら、みんなが悪意に操られちゃう。私達の世界も、仁志さん達の世界も、闇に飲み込まれちゃう。

だから、もう私は負けない。迷わない。

「行きますよ、サンジェルマンさん……」

小さく呟く。このギアに宿った、大切な仲間の一人へ。

「まあいいか。響、私はね、響に戦って欲しくないの」

そこへ放たれた言葉に拳を強く握り締める。よりにもよって、その言葉を使うのか！

「私と未来の大事な思い出を踏み躪るなっ！」

「大事な思い出？ 戦い合った事が？」

「そうだっ！ あれは、未来が私を想ってくれた結果だ！ 私と未来、お互いの想いをぶつけ合った結果だっ！ あの時はそうじゃなくても、今は思い出になってる。それを、それをよくもっ！」

あの未来が操られて好き勝手された出来事。その時に言われた言葉を、悪意はそっくりそのまま使ってきた。

許せない。怒りが沸いてくる。でも、それに支配されちゃいけない。

この怒りも浄化の光に変えないといけないんだ。未来の心を包む、悪意の闇をキレイにしないといけないからっ！

「ふふっ、響ったら怖いよ？ もっと笑って？」

飛び出しそうになるけど、一旦深呼吸。うん、相手の思惑には乗らない。

今、自由に動ける装者は私だけ。切歌ちゃん達はきつとまだ動けない。下手をしたら翼さんのように悪意の種を打ち込まれてるかもしれないんだ。

だから私が行って手を差し伸ばす。そのためにも、今は未来を元に戻してみせる！

「今ので確信出来たよ。未来はそんな人を煽るみたいに聞こえる言い方しない。ううん、そもそも誰かを馬鹿にしたりしないんだ。未来の記憶を探れるのなら、それぐらい分かっておくべきだね」

「チツ……」

そう言い切ると目の前の未来の振りした悪意が舌打ちをした。

もうこれで迷う事はない。やっぱり目の前のは未来の振りをした悪意だって分かったから。

本当に未来が悪意と同化してるならこんな事ぐらい分かるし、今だって悔しそうな顔なんてしない。

きっとそれらしい事を言ってきたはずだ。つまり、目の前の相手は時々未来で時々悪意。だけど基本が悪意になってるんだ。

「繋ぐこの手がアームドギアっ!」

私の声に未来の振りした悪意が疑問符を浮かべた。

あの日、仁志さんが考えてくれた私の名乗り。それを使うなら今しかない。

「ガングニールの装者……響っ!」

待っててね、未来。すぐにいつものあつたかい陽だまりに戻してみせるからっ!

響と未来が激突を開始した頃、エルフナインとヴェイグは何もない空間を見つめていた。

「どうですか?」

「パズルを維持する事は出来る。ただ、中の様子ははつきりとは分からない」

仁志が発案した翼と未来の分断策はミレニウムパズルを使つての隔離だった。

しかも、その中に自分も一緒に入るといふものだ。

当然エルフナインとヴェイグはそれはさすがにと反対したのだが、翼一人を隔離するとそれを利用して悪意がよりその浸透を進めてしまふかもしれないと仁志は述べ、共にパズル内へ入ったという訳だった。

「兄様、無事でしょうか?」

「少なくとも殺される事はないはずだ。もしそうするぐらいなら、タダノが言ったようにとづくに殺されてる」

「そうですね……」

仁志が二人の反対を押し切れたのはその一点だった。

ヴェイグがノイズに襲撃された際、仁志がそれを守るように動いただけでノイズの動きが鈍くなり、咄嗟に止めろと叫ぶだけで動きを止めた事実がある。

それを理由に仁志は懇願してパズル内へと入ったのだ。自分は死ぬために動くのではなく、翼を助けに行くのだと。

二人が不安そうな表情で何も無い空間を見つめている中、そのミレニウムパズル内では仁志が翼と対峙していた。

「考えましたね、仁志さん。自分を囿に我々を分散させるとは」

ニヤリというような表情で笑う翼を仁志は無言で見つめていた。

この状況になってから仁志はずっと無言を貫いている。それが翼には理解出来なかった。

「いつまで翼のつもりで喋ってるんだ？」

そこへ放たれた仁志の言葉は翼にとって疑問符を浮かべるものだった。

「何を言っているんですか仁志さん。私は」

「前にも言ったはずだ。お前はどれだけ真似ようとも上辺だけしか真似出来ない。翼はな、俺と話す時はもつと砕けた話し方をするんだ。ずつと監視しておきながらそんな事も分からないのか？」

言葉を遮り、仁志はハッキリと言い切る。その声には、静かな怒りが込められていた。

「きつと翼自身に喋らせてる時もあるんだろうが、こつちを煽ったりあるいは追い詰めようとする時はらしさが消えるんだよ。つまりだ。みんなの人格をそこまで闇には寄せられないんだろ？」

「さて、何の事だか」

「そこだ。やっぱりお前は所詮負の感情の塊なんだなって思うよ」

「何？」

「普通頭の回る奴なら、こういう時はだんまりを決め込むもんさ。あるいは、こちらへそれらしい情報ないし嘘を吹き込む。なのにお前にその辺りの駆け引きみたいなのがない。出来ないんだろうな、そういう事か」

仁志にはある種の確信があった。悪意は響達への復讐に囚われて
いるだろうと。

そのために可能な限りの悲しみや苦しみ、悔しさなどを味わわせる
事へ固執しているのだ。

故に簡単に勝つ事を止め、時には非効率的な方法で響達へ執拗な攻
撃を繰り返してきた。

それから考え、仁志は今回悪意が狙っている事をぼんやりとではあ
るが察し始めていた。

「お前、みんなを内輪揉めさせて殺し合いをさせようとしてもして
るん
だろ」

彼の好きなヒーロー物でもよくある展開ではあった。

仲間同士を様々な方法で争わせて同士討ちさせる。本来助け合う
べき者達が互いを敵として認識し、傷付け、殺し合う。

それを本来の敵が高みの見物という、趣味の悪い話だ。

「だとしたら？」

そこで翼の口調が本来のものとは異なるものとなる。

どこか相手をからかう、見下すようなものへと。

「そんな事させないっ！」

「へえ、どうするつもり？ お前に出来る事でこの装者を助けられる
とでも？」

「ああ。俺にはこいつがある」

「例の端末、か」

「こいつの力でお前を翼から弾き飛ばす」

「はははっ！ ……こちらの攻撃を避ける事も難しそうなお前がそれ
を成功できるとでも？ そんな行動、成功率などないに等しいだろう
に」

「思いつきを数字で語れるものかよっ！」

一喝。その気迫溢れる声に悪意が笑みを消す。

「それに、確率は目安だっ！ あとは勇気で補えばいいっ！」

手にした依り代を握り締め、仁志は翼の体を使う悪意へと向かって
駆け出した。

「面白い。なら、見せてもらいましょうか」

その手にした刃を構え、悪意は迫りくる仁志を斬ろうとして——大上段に上げた腕が止まる。

「なっ!?!」

“仁志さんを殺したくないっ!”

「くっ、やはりまだこの男へ危害を加える事は無理かつ!」

「あああああっ!」

「くっ!・しまっあああああっ!?!」

仁志がやったのは依り代を翼の体を覆う禍々しいギアへ押し付ける事だった。

マリアが悪意によって誘導された際、ギアへ擬態していた悪意を弾き飛ばした時の事を思い出して、おそらく悪意そのものであるうーヴィルギアへ、依り代のエネルギーを使い切っても構わないとばかりの直接攻撃に賭けたのである。

「翼っ!・聞こえてるか翼あ!」

「がああアアアッ!?!」

「今助けてみせるからっ!・だからそっちももがき足掻いてくれっ!」

「ム、ムダダッ!・オマエノコエナドキコエルモノカアアアアッ!!」

「救助って言うのはな!・一方だけじゃダメなんだっ!・助けられる側も手を伸ばさないと、助かろうとしないと成功しないんだっ!・俺はそう救急戦隊から教わったんだよっ!」

“助かる側も……助かろうとしないと……”

仁志には聞こえないが、たしかに彼の声は翼へ届いていた。

悪意が強引に根付いて間もなかった事と依り代によってその影響が弱まった事が合わさり、惚れた男の必死の叫びが翼の心を揺らしたのだ。

「目を開けろっ!・信じてろっ!・真っ直ぐ君を助け出すっ!」

最後の言葉と共に依り代をより一層強く押し付ける仁志。

「ギャアアアアアッ!」

“私も……その手を掴みたいっ!”

悪意がもつとも弱った瞬間、翼の意思が顔を出す。
主導権を奪い取り、翼は聖詠を唱える。

——Imyuteus amenohabakiri tron
……っ！

ここで仁志は一つ勘違いをしていた。翼達が纏うギアはイグナイトギアを更に変質させた物だと。

実際には、悪意そのものが装者達の体を包み込み、ギアとして固着していたのだ。

つまり、彼女達本来のギアではない。外側から弾き飛ばされそうになっっているところへ内側からも同じ力が働き、その力は共鳴して倍加される。

「ととっ?!」

悪意のギアが弾き飛ばされた結果、依り代を押し付けていた物が消えたためにバランスを崩す仁志。

その体をそっと抱き止める腕があった。反射的に顔を上げた仁志が見たのは……

「翼……」

女神のような微笑みを浮かべる翼の笑顔だった。

「仁志さんの手、何とか届いたよ。だから、次は私が仁志さんを助ける番だね」

「おのれっ！ やはりあれだけでは染め上げる事は出来ないかっ！」

頭上から聞こえた声に翼と仁志が顔を上げる。

そこには黒い肌の翼がいた。しかもイーヴィルギアを纏った姿で。

「翼そっくりだ……」

「だけど、本物はここにいます。だから仁志さん」

「ああっ！ ツインドライブ起動っ！」

一瞬にして翼のギアが変わり、更に金色の輝きを放つものとなった。

リビルドギアツインドライブ。その輝きにはさしものイーヴィルギアもたじろいた。

「くっ……この光、あの時よりも強くなっている……っ！」

「翼、頼むぞっ！」

「はいっ！ 貴方からもらった輝きで、闇を断ち切ってみせますっ！」
「ほぎくなあつ！」

急降下するように迫る悪意へ翼はその手にした刃を両手で掲げるように構える。

そして静かに深呼吸を一つするや……

「はあああああつ!!」

勢い良く振り下ろしたのだ。

名付けて「雲耀うんようノ一閃」。稲妻を意味するその言葉の如く、力強く速い一撃にて相手を両断するものだった。

その金色の斬撃が形となって悪意へ迫り、その手にしていた剣ごと左右にその身を斬り裂いた。

「いい、一撃!? こんな、こんな事があああああつ！」

光となって消滅する悪意へ背を向け、翼は剣を振り払うように動かして呟く。

「お前のような紛い物に忒の太刀はいらぬ」

その呟きと共に周囲の空間が元へと戻り、二人の近くにエルフナインとヴェイグが現れた。

「翼（さん）っ！」

「二人共、心配をかけた。この通り、私は無事だ」

「エル、響達はどうか？」

「やや響さんが押され気味です」

「なら、私も加勢に」

そう言つて動き出そうとする翼だったが、その場へ膝を付く様に倒れた。

「翼（さん）っ!?!」

「だ、大丈夫だ。ただ足元がふらついただけだ。おそらく思った以上に疲弊しているんだろう……」

力なく笑みを見せる翼に三人が安堵するように息を吐く。

だが、翼が戦えない以上どうする事も出来ない。

何せ仁志が先程と同じ事をやろうと思つたのだが、既に依り代の

バッテリー残量が半分を切っていたのだ。

翼へ押し付ける前は満タンに近かったので、やるとしてもその後依り代がバッテリー切れを起こしてしまう可能性がある。

そうなった場合、仁志やエルフナインがゲートを通過出来なくなってしまう可能性が非常に高いため、思い切った行動が取れない。

しかし……

「……それでもやるしかないか」

仁志は決断を下した。このまま響が負ければ最悪の事態は避けられないと気付いたからだ。

翼は疲弊していて戦闘不能。ヴェイグも先程のミレニアムパズルで疲労し、エルフナインは戦闘面では何も出来ないに等しい。

つまり、依り代のバッテリーを気にしていても、響が敗北すれば意味がないと理解したのである。

「エルはここで翼と一緒に居てくれ。翼、ライダーギアにしておく。もし万が一の場合はエル達と一緒に俺の世界へ行くんだ。ツインドライブ状態なら、抱えていればエルもゲートを通れるかもしれない」

「仁志さん……」

「兄様、それは……」

「このままじゃ全滅するかもしれないなら、やれる事をやっておきたいんだ。それに、今はこの場の安全を確保したい。未来も戻せれば一気に三人だ。なら、相手も早々手を出してこないだろ？」

「……可能性は高いとは思いますが」

「ヴェイグ、もし響達が戦えない状態で悪意が来たら、限界までパズルへ匿ってくれ」

「タダノ……」

「最後まで諦めない心。それが不可能を可能に変えるんだ。今までみんながそうだったように、俺も、そうでありたい」

静かに依り代を握り締めて、仁志はそう告げると笑みを見せて立ち上がる。

翼のギアをライダーギアへ変えると、彼は意を決してその場から走り出す。

響を援護し、未来を元に戻すために……。

漆黒の閃光が煌めく中、黄金の輝きが瞬く。その輝きはそのまま暗黒の存在へと向かっていき、その巨大な拳を突き出す。

それを暗黒の存在は辛うじて受け止め、笑みを見せる。邪悪な笑みを湛える存在へ黄金の輝きはその眩しさを更に増させるように歌を唄いあげた。

その響きが拳へ力を与え、邪悪な笑みを失せさせる。このままなら押し切れると、そう思ったところで何かに気付いて距離を取った。

「残念。よく気付くね響」

「未来の声で喋るなっ！」

ラピスフィロソフィカスの輝きを秘めたアマルガムギア。

その光を高めるために唄っている響だが、どうしても一人の輝きでは未来を包む闇を祓えないでいた。

しかも未来は浮遊しており、地上戦主体の響はどうしても苦戦を強いられていたのだ。

「ふふっ、おかしな響。私は未来だよ？ 小日向未来」

「違うっ！ 本物の未来はそんな風に笑わないっ！」

「どうして分かってくれないの？ 響はみんなで仲良くしたくない？」

「悪意に染まって歪められたのを仲良くなんて言わない！ 私達は、私達のままで仲良くしないとイケないんだっ！ 未来っ！ 聞こえてるよねっ！ 無理矢理悪意でみんなの気持ちを一つにするなんて間違ってるんだよっ！」

魂の叫びは悲しいかな未来の心へは届かない。けれど、それが一人の人間の心へ響き、その行動を後押しした。

「俺も同じ気持ちだぞ響っ！」

「っ!? 仁志さんっ!？」

「何をするつもりですか只野さん」

「知れた事っ！ 未来を元に戻すんだよっ！」

そう言い返すと同時に仁志は響へ目を向ける。

「悪意を地面へ引き摺り下ろしてくれっ！」

「分かりましたっ！」

何故、どうして。それを聞く事もせず、仁志の頼みに響は即応した。だが、それよりも先に悪意は仁志へ向かって攻撃を放とうとする。

「あちらは無理だったがちならっ！」

「っ!？」

「仁志さんっ！」

翼は抵抗されたが未来の抵抗は起きず、悪意による攻撃が仁志へと放たれた。

その漆黒の閃光が仁志へと一直線に進むが、そのままなら依り代によって展開される防壁で無力化されるはずだった。

「させるかあああっ！」

「っ?!」

しかし仁志はその目的が分かっていた。悪意は翼へやった事を知り、依り代のバッテリーを消耗させようとしているのだろうと。

だからこそ自分へ防がれるような攻撃をしてきた。強力な一撃ではなく軽い攻撃なのもそれを裏付けている。

故に仁志は当たってなるかとヘッドスライディングの要領で閃光を回避する。

ただ、完全に回避は出来ず、左足を僅かに掠ってしまった。ジーンズが裂け、更にふくらはぎから僅かではあるが出血が起きる。

「ぐあっ！」

それを確認した瞬間、未来が大きく絶叫した。

「いやあああああっ！」

「ひ、響っ！ 今だあっ！」

「っ！ うおおおっ！」

動きを止めた悪意を捕まえ、響はその体を無理やり地上へと引き摺り下ろす。

そのまま羽交い絞めにして強引に仁志の前へと連行していく響。

「仁志さんっ！ これでいいですか！」

「ああっ！ 十分、だっ！」

「があああああっ!？」

寝そべったままでイーヴィルギアへ依り代を押し付ける仁志。

それによる悪意の呻きに表情を歪めながら響はそれを見つめる。

「響っ！ 君から未来へ呼びかけてくれっ！ 今なら悪意の影響力が低下してるはずだっ！」

「そっかつ！ 未来、未来、聞こえてる？ お問い合わせ、こんな事もう止めよ？ 私や未来が望んでるみんな仲良くは、こういう方法で目指す事じゃないはずだよ」

「だ、黙れええええっ！」

「黙らないっ！ 私は今、未来と話をしたいんだっ！」

一喝と呼べるような心胆を震わせる声に悪意が思わず黙り、仁志などは完全に目を見開いて息を呑んでいた。

そして、その声が遂に未来の心へ届く。

「私も、私も響と話がしたい……」

それは、いつかの焼き直し。話を出来ないまま別れてしまった結果、互いに傷付けあってしまった二人。

それ故に話をしたいという言葉にもっとも弱いのが響と未来と言えた。

「未来、聞いて。ケンカをしないで仲良く出来るのは理想だけど、世の中にはケンカみたいなやり取りをずっと続けてる仲良し夫婦もいるんだ。仲良くするためにはケンカもあった方がいいし、むしろお互いの事を知って欲しいって気持ちがあつたり合つてケンカになるんだよ。私と未来だつてケンカして、それでももっと仲良くなれた。大切なのはケンカしない事じゃない。それでも相手と居たいと思うかどうかじゃないかな？」

仁志の両親の事を思い出し、響は優しく問いかけた。

羽交い絞めだったはずの拘束は、いつしか愛おしく抱き締めるものへと変わっている。

「私は、ケンカしても未来と一緒に居たいって思うよ。あの時、二人で話して決めたよね。学院を卒業したら二十歳までは別々に暮らさうって。あの時だつて、私と未来はお互いの気持ちを知って欲しくて

ぶつかった」

「ひ、響……」

「っ?! 未来っ!」

「そう、だよね……。ケンカしても、本当に大事な相手となら、本物の絆なら、壊れる事なく関係は続いてくんだ……」

「そう、そうだよっ! 私と未来だっつてそうだった! だからっ! みんなとだっつて同じような絆は出来るはずだよっ!」

だが、そこで依り代のバッテリー残量が10%を切り悪意への干渉力が低下してしまった。

「そうだね……。だけど……」

「え?」

「そんな面倒な絆よりも私が簡単に結び付けてやろうと言っているっ!」

「っ?! うわあああっ!」

「響っ!」

弾かれるように悪意によって吹き飛ばされる響。

仁志はそれを見て依り代へと視線を向けた。

「もうバッテリーの残りが少ない……。だからか」

「おかげで助かったわ。やはりその端末は壊しておくべきだったわね。まあ、これで終わり。端末を破壊し、お前は私が有用に使ってあげる」

既に口調を未来へ寄せようともせず、悪意は寝そべったままの仁志を見下ろしてほくそ笑む。

「これで終わりだっ!」

その手にしたアームドギアで依り代を破壊しようとする悪意。そこへバイクのエンジン音が鳴り響く。

甲高いそれに仁志と悪意の意識が向き、彼らは同時に息を呑んだ。

「そうはさせんっ!」

「翼っ!」

「しまったっ!」

それは、新サイクロン号となったアームドギアを駆る翼が出した音

だった。

従来のバイクなどをはるかに凌駕する加速力を発揮し、翼は真紅の疾風となって悪意へと迫る。

ブオオオオオと轟音を鳴らしてバイクが宙を駆け、そのまま悪意を跳ね飛ばして仁志の前方へと着地した。

「ほ、本当にライダーじゃないか……」

まるで本物の仮面ライダーのようなアクションに仁志が感動していると、翼はそんな彼へ視線を向けて小さく笑みを見せた。

「仁志さん、無事で良かった」

「あ、ああ。おかげで助かった。ありがとう……っ！」

何とか起き上がる仁志だが、左足の痛みに表情を歪ませる。

幸い出血はもう止まっているものの、歩く事は厳しい痛みがその体を襲う。

それでも何とかその痛みをねじ伏せるようにして仁志は立ち上がった。

「え、エル達は？」

「先程の場所で待っています。逃げるのは最後の手段だと」

「……そうか」

それがどういう気持ちからの言葉かを察し、仁志はどこか嬉しそうに呟いた。

「おのれっ！ 小癩な真似をっ！」

「くっ、やはりあれだけでは痛手にはならないかっ！ なら……」

「翼っ！ どうするつもりだ！」

「バイクアクションで戦います！ クウガのように、私もこれを手足のように扱ってみせましょうっ！」

アクセルを吹かし、翼は再びバイクとなったアームドギアで悪意へと挑む。

それを見て仁志は気付く。翼が意識しているのが共に見たクウガのものだと。

ジャックナイフやアクセルターンなど基本的な動きを入れつつ、悪意へバイクで向かっていく様はギアの形状もあり仁志には仮面ライ

ダーにしか見えないものだ。

「このっ……調子に乗るなっ！」

「しまったっ!？」

前輪を持ち上げて攻撃しようとした翼へ悪意が反撃を叩き込み、アームドギアごと彼女の体は地面へと転がった。

「翼っ!？」

「だ、大丈夫です……」

駆け寄ろうにも足の痛みでその場から動けず、仁志は声をかける事しか出来ない。

それでも、そんな彼へ翼は安心させるように笑みを返した。

「ふんっ、手こずらせてくれたな。まあいい。また私の色に染め上げてやる」

不敵に笑い、悪意はその手に闇を凝縮させていく。翼はそれを見つめ悔しそうな顔をしていた。

仁志はどうする事も出来ない自分の無力さに唇を噛み締めて叫んだ。

「止めてくれ未来うううっ!」

すると、その声に悪意の動きが止まった。いや、正確には動きを止めたのだ。他ならぬ未来自身が、である。

「ぐっ……ば、馬鹿な……っ!」

「させない! もうこれ以上私の大切な人達を傷付けさせないっ!」

仁志が傷を負った事を始め、響を弾き飛ばし、翼へダメージを与えた悪意は、まさしく未来にはかつてのシエム・ハそのものだ。

だからこそ、余計その心を刺激した。あの時は何も出来ないままだった。それを繰り返したくないという強い思いが、その前に聞いていた響の言葉もあつて悪意へ抗う力となったのだから。

更にそこへ聞こえる歌があつた。その歌声に仁志と翼が笑みを浮かべ、悪意が表情を歪める。

「貴様あ……生きていたか……っ!」

ぎこちない動きで振り返った悪意が見たのは、凛々しい表情で歌う

響だった。

彼女が口ずさむは“Rainbow Flower”。かつてドクターウエルによって操られた未来を助ける際に唄った歌だ。

「……未来があの時と違って手を伸ばしてくれてる。なら、私がそれを掴みに行かない訳にはいかない」

“響……っ”

「ぐっ、馬鹿な……。あの依り代とやらの力もなしに、私から主導権を奪おうなんて……っ！」

「未来、今度と一緒に戦おう。あの時はそんな事言えなかったけど、今なら言える。私達はもう自分達の足でちゃんと立てるんだ。支え合わないといけない二人じゃない」

“一緒に……戦う……。そうだ……。今の私はもう待ってるだけの私じゃない。響と一緒に並んで歩く事も、離れて歩く事も出来るんだっ！”

「だ、黙れっ！ 黙れ黙れっ！ こんな事、こんな事認めないわっ！ 認めるものかあ！」

狼狽える悪意。内側から未来がその強い心の輝きを取り戻し始めている事に気づき、翼の時同様の現象を引き起こされると思ったのだ。

だが、仁志は違った。ここからは自分が翼を助け出したのと異なる展開になるだろうと確信していたのだ。

何故なら……

（俺は依り代ありきで助け出した。でも、響と未来はその干渉なしで同じ事を起こしつつある。内と外から、悪意を弾き飛ばそうと……）
心の光。そう自分達が呼んでいる輝きが悪意を内側と外側から照らし出していると、仁志は感じていたのである。

「ラピスの輝きだけで足りないのならっ！ 私の心の光をそこに加えて輝かせてみせるっ！」

「そうだっ！ 行け立花っ！」

「ハートの全部でっ！」

「はいっ！ はあああああっ！」

ラピスフィロソフィカスの輝きへ響の心の光が合わさっていく。その柔らかな、けどどこか激しい波動が悪意を包み、未来の心へと届いて響く。

「な、何だっ!? この、忌々しい光は……っ！ 私が、弾き飛ばされそうだ……っ！」

「そんなの脱いじゃえっ！ 未来ううううっ！」

「あつたかい……。響らしい、光……。やっぱり響はお日様だよ。だから……っ！」

受け取った温もりに未来は意を決して叫ぶ。

「私も、陽だまりでありたいっ！」

お日様と陽だまり。自分達の関係を彼女達はそう表現してきた。ならば、響が光を与えれば、それを受け取った未来がどうなるかは言うまでもなかったのだ。

「未来っ！ 聖詠をっ！ それで悪意を追い出せるはずだっ！」
凜とした表情で宣言した未来へ仁志がすかさず助言を送る。

——Rei shen shou jing rei zizz
l……っ！

頷いて唱えられた力ある言葉が眠っていた依り代の力を目覚めさせる。

その波動がイーヴィルギアと化していた悪意を弾き飛ばした。

「未来っ！」

「響……」

本来の姿へ戻った未来へ響が駆け寄る。一度だけ抱き合い、響は未来へ微笑みかけた。

「おかえり、未来……」

「ただいま、響……」

これまでは逆だったやり取り。だが、今はそれが相応しいと二人は思った。

「二人共、まだ終わってないぞっ！」

「悪意はまだ健在だっ！」

「っ！」

聞こえた言葉に二人が視線を上へ向ける。そこにはイーヴィルギアを纏う色黒の未来がいた。

「おのれえ……忌々しい光めっ！」

眼下に見える四人へ憎しみを隠す事なく表情を歪める悪意。

それを見て仁志は思わず呟いた。

「やっぱり未来らしくないエロさだよなあ……」

「当然です！」

「私、あんな格好しませんっ！」

「仁志さん、貴方と言う人は……」

この状況でもどこか普段のような事が言える胆力に翼は苦笑する。

そして未来のギアが姿を変え、ミラーリングギアツインドライブへと変わった。

「後は頼んだ！」

「はいっ！」

まるで同じギアを纏っているかのような二人は、同時に飛び上がると悪意へと向かっていく。

「消えろおおおおっ！」

悪意が凝縮した闇を二人目掛けて放つも、それを見ても響も未来も欠片として表情を変えない。

「苦しみや痛みがっ！」

「二人を邪魔してもっ！」

「歌い合って乗り越えてみせるっ！」

巨大な手と手が繋ぎ合って凝縮された闇を撃ち砕く。

アマルガムギアを模した状態のミラーリングギアツインドライブだからこそ可能な事だ。

そう、神獣鏡が持つ凶払いの力と浄化の力であるラピスフィロソフィカスの輝きの相性はベストマッチと言えたのだ。

それはさながら響と未来のように。

「繋ぐこの手がっ！ アームドギアだああああっ！」

「これで終わったと思うなあああああっ！」

邪悪を祓い清める二つの輝きが悪意を捉えて光へと変えて消滅さ

せる。

揃って着地し、響と未来は互いへ目を向けて微笑み合う。

「やったね」

「うん」

軽く両手を合わせて勝利を喜ぶ二人の耳に聞こえてくる声があった。

「だ、大丈夫ですか皆さんっ!」

「嫌な匂いがしなくなったぞっ!」

ヴェイグを抱えてエルフナインが姿を見せたのである。

その姿に響と未来は笑顔を見せ、仁志と翼も安堵するように息を吐いた。

こうして翼と未来との合流を果たし、仁志達は少し休んでから一旦上位世界へと帰還する事に決めた。

一方その頃、とある平行世界では……。

「切ちゃん、大丈夫? 少し休んだ方が……」

「大丈夫、デスよ……。そ、それよりセレナは無事デスカね……っ」

「うん、きつと無事だよ。エルだつてヴェイグがいれば大丈夫だから」

「そ、それはそうデスね……。っ! ししよーなら、きつと何とかしてくれるはずデスから……」

「切ちゃん、やっぱりここで少し休もう? 追手は来てないみたいだし」

「そ、そうデスカ……。じゃ、じゃあちよつとだけ休むデスよ……」

ビルとビルの隙間に身を隠すように座る切歌と調。

荒く呼吸を繰り返す切歌を背に、調は周囲を警戒するように意識を動かす。

「ぐっ!?!」

「っ!?! 切ちゃんっ!?!」

そんな時、切歌が胸を押さえて倒れた。慌てて調が駆け寄ると、切歌の両腕がゆっくりと日焼けをしたかのような変色を始めていた。

「切ちゃんっ! 切ちゃんっ! 切ちゃんっ! 切ちゃんっ!」

「し、調……っ! やっぱりアタシの事はいいデスから、早くししよー

のどこへ行くデスよ……っ」

「ダメだよっ！ 今の切ちゃんを置いて行ったら、私が師匠に怒られちゃうっ！」

顔色が優れない切歌の手を握り締めて悲痛な表情を見せる調。

実はゆつくりとではあるが切歌の肌は黒く染まり始めていたのだ。

既に両足が色黒くなっていて、残すは上腕部と首から上を残すのみとなっている。

「そ、そんな事ないデスよ。ししよーは……っはあはあ……や、優しいデスから。じじよーを聞けば……許してくれるデス……」

「でも、でもっ！」

自分が必死に呼びかけているから切歌は闇に飲まれる速度が抑えられている。そう調はどこかで感じ取っていた。

一人になれば、その孤独感から一気に闇がその進行を早めて切歌を悪意へ染め上げるだろうと。

「っ！ 調はっ！ アタシに調をこうさせろって言うデスかっ！」

「っ?!」

放たれた言葉が持つ意味を理解し、調は息を呑んだ。
このまま切歌の傍にいれば、いつかは彼女が悪意に染まり、その手で自分も同じにしようと動き出す。

それをさせるのかと、切歌は怒鳴るような声で調へ叫んだのである。

「アタシは……っ！ ……アタシは、調をこうしたくないデス」

「切ちゃん……」

「だからお願いデス……っ。し、ししよーのどこへ行って欲しいデス。それで……アタシを迎えに来て欲しいんデスよ……」

「切ちゃん……っ」

辛そうにだが、最後には笑みを浮かべて自分を送り出そうとする切歌に、調は流れる涙を止められなかった。

それでも、彼女は大好きな親友の想いと願いを受け取り、意を決した顔で立ち上がる。

そんな調を見て、切歌は嬉しそうに力なく笑みを見せた。

「それでこそデス。今の調、最高にカッコイイデスよ……」

「切ちゃん、絶対、絶対助けを連れてくるから」

「お、お願いするデス。ここで、大人しく待つてるデスから」

力強く頷き、調はその場から脚部のローラーを使って走り出す。

その音が遠ざかっていくのを聞きながら、切歌はぼんやりと空を見上げた。

時間停止している空は、色を失い、見ても気分を変える力はない。

それでも、切歌は見上げ続けた。下を向いていたら、気分まで下向きそうだったのだ。

(ししよーが言ってくれてたデスのに、アタシ達の中に悪意が種を植えてるかもしれないって。それなのに、アタシはダメダメデスね。マリア達が攻撃してきただけで心が乱れちゃったデスよ……)

切歌の脳裏に浮かぶ、響達がゲート内へ出て行った後の記憶。

若干怯えるエルフナインをセレナや調と共に慰めていると、突然依り代から通知音が聞こえ、慌てて四人で確認しようとした瞬間……

——切歌お姉ちゃんっ！ 横に避けてっ！

エルフナインの声に咄嗟に反応した切歌が見たのは、自分へアームドギアを突き出す奏の姿だった。

——何をするデスかつ!?

——未来さん、何のつもりですかっ！

——姉さんっ！ 答えてっ！

その後の事を、今でも切歌は鮮明に思い出せる。

自分達の見ている前で、三人が怖い笑みを浮かべたのを。それと同時にエルフナインが叫んだのだ。

——姉様達にイグナイトギアの表示がありますっ！ クリスさんにもですっ！

信じられない報告に戸惑う切歌と調だったが、即座にセレナが動いて見せた。

彼女はマリアへと斬りかかると凜々しく叫んだのだ。

——エルっ！ ヴェイグさんと一緒にそれを持ってお兄ちゃんの

世界へ逃げてっ！

姉としてエルフナインへ接してきたセレナが見せた、最大の成長と変化がそこにあった。

戦う事を誰よりも嫌うからこそ、大事な者のために戦う事を選んだのだ。

中途半端な気持ちでは、流れる涙がある。それをセレナは仁志の世界で知ったためだった。

「……セレナ、無事でいてくれるといいですが」

「人の心配より自分の心配するべきじゃない？」

「っ!？」

聞こえた声に切歌が顔を動かすと、そこには今は一番会いたくない相手となった二人がいた。

「あ？ 一人しかないぜ。食べ物とか取りに行ってるのか？」

「かもしれないわね」

「ど、どうしてここが……」

平行世界へのゲートは複数ある。

しかも、今切歌がいる場所はゲートからそれなりに離れた場所であった。

あてずっぽうでこんなに簡単には見つけれないはずだ。それを思って驚く切歌へ二人は不敵に笑った。

「さて、どうしてだろうな？ 教えてやってもいいが、交換条件というぜ」

「そうね。教えて切歌。調はどこへ行ったの？」

「マリアとクリス先輩を真似るの止めるデスっ！ もう騙されないデスよっ！」

禍々しいギアを纏う色黒のマリアとクリスへ、切歌はそう叫ぶとアームドギアを支えに何とか立ち上がった。

その見るからに戦えない様子に二人はニヤニヤと笑うのみ。それに切歌は怒りを覚えた。

(本物の二人は、そんな顔絶対しないデスっ！)

弱っている相手を見て、馬鹿にするような笑みを浮かべる。そんな

事をマリアとクリスは決してしないと切歌は知っていた。

「仕方ないわね。切歌が教えてくれないんじや、自分達で探すしかないか……」

「まっ、どうせ行き先は分かっているさ。仁志のところ、だろ？」

「言うもんかつ！ デスっ！」

「そうかよ。まあ別にいいけどな」

「そうね。むしろ、そっちの方が面白くなりそうだし」

そこでマリアとクリスは楽しげに嗤い出す。その声に苛立ちを覚えて切歌は叫んだ

「どういう意味デスカ！」

「あら？ まだ分からない？」

「それとも、分かかってて分からない振りしてんのか？」

言いながら二人はその手を切歌へ向ける。その掌へ闇が集まり収束していく。

それを見て、切歌は感覚的に察した。あれを受けたら一瞬で自分もつとも恐れている状態へ変えられてしまうよ。

「調はいずれここへ戻ってくる」

「そこをお前が出迎えてやるんだよ」

「私（あたし）達と同じになって」

「ぜ、絶対お断りデスっ！」

「なっ!？」

なけなしの力を振り絞り、切歌は両足でしっかりと立つと同時にアームドギアで地面を攻撃。

巻き上がる煙に紛れてその場から逃走を図ったのだ。

（ししよーっ！ アタシ、諦めないデスよっ！）

背後から感じる不穏な気配の正体に勘付きながら、切歌は掠れる声で呟く。

——調、信じてるデス……っ！

その言葉を最後に切歌は闇の繭に飲まれてしまう。

同じ頃、調はその世界のゲート前へようやく到着しその内部へ入ろうとしていた。

「っ!? 切ちゃんっ!？」

虫の知らせとでも言うべき何かで大事な相手の窮地を感じ取り、調は来た道を振り返った。

それでも、最後の会話を思い出して、調は顔を前へ戻す。

「必ず、助けを連れてくるんだっ!」

常に二人一緒のようだった切歌と調は、上位世界での日々で一人でもしっかり立てるように成長していた。

それは、絆を弱くするのではなく、より一層強いものへと変える事。今、切歌と調は互いを信じて離れる事が出来る強さを持っていた。そしてそれが、互いの運命を切り開く力となる……。

君が泣かない世界に

「そろそろ戻ろうか」

そう俺が切り出すとみんながこっちを向いて、そして視線を左足へと向ける。

「それはいいけど、その足で動ける?」

翼の問いかけに俺は苦い顔をするしかなかった。

響と未来が偽未来というか黒ギヤル風未来を倒して大体十分ぐらい経った、かな。

翼達の体力もそれなりに戻ってきたようだし、悪意がここへ第二波を送りこんでこないとも限らないので、出来るだけ早く撤退するべき、だとは思う。

ただ、情けない話、俺は左足の負傷のせいで満足に歩けそうにないのだ。

「それなんだけどさ、翼のバイクに乗せてもらえないか?」

「そういう事か。うん、いいよ」

「助かる。で、エルはヴェイグと一緒に響に運んでもらってくれ」

「二分かりました(分かった)」

「未来はジュエルギアにしておくから、ゲートに入ったら俺達の護衛役、お願い」

「はい」

こうして俺達は急ぎゲートへと向かい、再びあのヴェイグの鼻が使えない物にならなくなる中へと入る事に。

だが、ここで俺はある事を未来に試してもらおう事にした。それは、アイギスの力を周囲に展開してもらおう事。

「エル、どうだ? ヴェイグは何て言ってる?」

「これならまだ何とかなるそうです。でも、完全に嫌な匂いがしない訳じゃないと言ってます」

「アイギスの力でも完全遮断は出来ないなんて……」

「やはり、このゲート内は完全に悪意によって支配されていると見ていいな」

「セレナちゃん達、大丈夫かな……」

響の言葉に俺も不安を抱く。

未来に聞いた話じゃ、根幹世界へ戻った後の記憶は曖昧だそうであらう。覚えに近い上に断片的にしか思い出せないらしい。

その中で思い出せるものの一つに、調が切歌と一緒にギャラルホルンから逃げて行くという光景があったので、少なくとも調と切歌は無事だと思う。

セレナは、どうか分からない。無事でいて欲しいし、そうだとは思わない。

一つ希望と言うか、期待しているのは経過時間のズレだ。

俺の世界では響達と別れて一時間以上経過してたのが、彼女達としては一時間も経過してなかったみたいなのに、どうもまた時間のズレが生じているらしい。

つまり、セレナ達が悪意を纏った未来達と戦ってから一日も経過していないようなのだ。

これなら、俺の世界で休息を取っても三人の経過時間が大きく変化していない可能性が高い。

「とりあえず一旦俺の部屋へ戻って、ちゃんと体を休めた方がいい」

「それと、只野さんの手当ですね」

「スマホの充電もしないとです！」

「そうだな。今は態勢を立て直す事が先決だ」

装者三人の言葉に頷いていると、突然エルが目を見開いた。

「兄様っ！ ヴエイグさんが、微かに優しい匂いがするとっ！」

「何だっつ?! どっちだ！」

「……進行方向から近付いてきているそうです！ ただっ！ その後ろから嫌な匂いもするそうですっ！」

「追われているっ?!」

「小日向は仁志さん達を護衛し裂け目へ向かえっ！ 立花っ！ 乗れっ！」

「はいっ！」

ライダーギアの本領発揮。ゲート内を爆音と共に響を乗せて駆け

抜けて行く翼。

それを見送り、俺はエルへと顔を向けた。

「嫌な匂いの数は？」

「一つだそうです。けど、この状態でもはつきり分かる程強いそうです」

「要するにちよつと前までの私に近いって事か」

やや苦い声で告げられた言葉に俺は静かに首を横に振った。

「あれは未来じゃなかった。未来は本部へのゲートをくぐった時から響と手を繋ぐまで眠らされていたんだよ」

「只野さん……」

こんな言葉でどれだけ彼女の心を軽く出来るか分からないけど、言わないよりはマシだと思って告げる。

「それに未来もあの時言ったじゃないか。自分はある格好しませんって。じゃ、それが答えだよ」

「……ありがとうございます、只野さん」

柔らかく微笑む未来に若干照れくさくなって頬を掻く。

やっぱり可愛くて綺麗な子だよな、未来も。

未来に守られながらゲートまで移動する。

正直言えば響達を待っていたいけど、依り代のバッテリーが心もとない以上長居は出来ないで先んじて俺とエルはゲートをくぐる事に。

「未来、君はここで響達を待つのか？」

「はい。いざとなったら守れるように」

「そうか。その……」

「あ……」

「気を付けて」

「……はい」

未来の額にキスをして、俺は一言かけてからエルと共にゲートへと入った。

見慣れた景色が広がると、一気に忘れていた痛みや疲れが押し寄せ

「え、エル……その三段ボックスの一番上にタオルが入ってるから、それを濡らしてもってきてくれ」

「は、はい」

　　這うように移動しながら俺は布団へうつ伏せになった。

　　じわりと左足のふくらはぎが熱を持つてるのを感じる。

「も、持つてきました」

「悪いけど、それで軽く怪我してるところを拭いてくれるか？」

「はい」

「つと……タダノ、俺に出来る事はないか？」

　　エルがパタパタと動き始めるとヴェイグが現れた。なので俺は手にしたスマホを差し出してコンセント付近に転がっている充電器を指さした。

「これ、充電しておいてくれ」

「よし、任せろ」

　　そうやって動く二人を見て、無力な存在なんていないんだと改めて実感する。

　　エルもヴェイグも、勿論俺もだ。何かしらの役には立てるんだ。

「兄様、終わりました。消毒液などはありませんか？」

「タダノ、これでいいか？」

「ありがとう、エル、ヴェイグ。それと消毒液なら食器棚の上に置いてある四角い缶の中だ」

「四角い缶ですね」

「ああ。ヴェイグの方はそれでいいよ。後は俺の傍にいてくれるか？」

「分かった。何かあったら言ってくれ」

「うん、ありがとな。頼りにするよ」

「ヴェ、ヴェイグさん、手伝ってください。僕だけじゃ届かないので」
「つと、すまんタダノ、呼ばれた。エル、今行く」

　　気怠くて辛いけど、視界に見える光景に心は和む。

　　エルが両手でヴェイグを持ち上げて缶を取ってもらおうとしているからだ。

「だけど、やっぱり眠気が強い……。」

「わるい……ちよつとねむ、る……。」

「それだけいって、おれはめをとじた。」

そのしゅんかん、うしろのほうでなにかおとがしたのをききながら……。

仁志が目を閉じるのとほぼ同時に響達がゲートを通過して部屋へと現れると、エルフナインとヴェイグはその中にいた人物を見て驚きを浮かべた。

「二調（お姉ちゃん）っ！」

「エル……ヴェイグ……無事で良かった」

「疲れた顔ではあったが、嬉しそうに笑みを浮かべて調はギアを解除するとエルフナインへ近寄り、その小さな体を優しく抱き締めた。」

「良かった……お姉ちゃんが無事で良かったあ……。」

「エル、ありがとう。エルがちゃんと師匠と合流してくれたおかげで私は助かったんだよ」

「つく……姉さん達が逃がしてくれたからです。僕の力じゃありませんっ」

「それでもだよ」

そんな二人のやり取りを聞きながら翼はゲートを閉じる。

既に響と未来もギアを解除してカーペットへ座り込んでいた。

特に響の疲弊度合は高い。何せ調を追い駆けていたのはマリアだったのだ。

接近戦主体の彼女を相手に、響は疲れた体で調を守るように立ちはだかり、気力だけでそれを隠し通す程の気迫を見せたのだから。

——響さんっ！ 翼さんもっ！

——調ちゃんっ！ 早くこつちへっ！

——あら、こんなところで会えるなんてね。

——マリアっ！ 月読を追い回すとは……やはり悪意に染まり切っているかっ！

悪意を纏っていた未来と同じくマリアも、その白く綺麗な肌を変色

させられ日焼けでもしたかのようなものへと変貌させていた。

だがさすがに多勢に無勢と思ったのか、それとも鬼気迫る響を相手にするのは厄介と思っただのかは分からないが、マリアはあっさり撤退したのである。

その際、気になる事を言い残して。

「仁志さんは……寝てしまったか」

無理もないと翼は思った。何せ今回はある意味仁志にとって初めての本格的戦闘だ。

今までのカオスビーストや悪意との戦いとは違い、彼が主体的に動き、考え、事を成していた。

更には初めて戦闘でのダメージを負う事にもなった。

故に肉体的にも精神的にも、その疲労は戦いに慣れている自分達よりも強いと察していたのだ。

「怪我もしたし、仕方ないですよ」

「只野さん、私のために……」

「あつ、そうだ。消毒しないと」

響と未来の言葉を聞いて、エルフナインが手にしていた消毒液の存在を思い出した。

ただ、既に仁志は眠っているため消毒すると目を覚ますかもしれない。しかし、全員の結論は同じだった。何かあつてからでは遅いから手当をしよう。

「エルちゃん、私にやらせて」

「未来さん……」

「これは、私が負けさせちゃった傷みたいなものだから」

「……分かりました。お願いします」

手渡された小さなボトルを手に、未来は消毒液を少しだけ仁志の傷口へと吹き付ける。

「っ……」

幸い少し反応こそしたが仁志が起きる事はなく、未来は安堵しながら手当を続けた。

その後ろでは響と翼が押入れから布団を二組取り出していた。

今は少しでも体を休めておこうと考えたのである。

「月読、私とだが一緒に寝よう」

「え？」

「さすがに一人ずつで寝るには些か場所が足りないのだ」

「それに、あまり布団を出して埃を舞わすのもどうかと思うしね。未
来は私と一緒にだから」

「うん、分かった」

「エル、お前はタダノと一緒に寝るといい。俺はあのクッションで寝
る」

「……そうですね。今は体を休めるべきです」

こうして響達も眠る事にし、エルフナインは仁志の布団で、ヴェイ
グは来客用のクッションで眠る事に。

(また兄様と一緒に寝られるなんて……)

(このクッション、微かにだが切歌やセレナの匂いもする。二人共、無
事でいてくれ……)

幸せそうに目を閉じるエルフナインと、どこか心配そうに目を閉じ
るヴェイグ。

その二人を見て響達四人は小さく笑みを浮かべるも、調だけがすぐ
に顔を伏せてしまう。

「どうかしたのか、月読」

「いえ、何でもないです。疲れが出て来ただけなので」

「そうか。では、私達も寝るとしよう」

「ですね。正直もうヘトヘトで……」

「響ったらって、そう言いたいけど私もかな」

「激戦、だったんですね」

「ああ。互いの詳しい話は休んでからにしよう。今は体を休めた方が
いい」

こうして四人も布団へと入り、あっという間に寝息を立てる事とな
る。

一時の安らぎが、ようやく仁志達へ訪れたのだ。

そこから数時間後、外がすっかり暗くなった辺りで仁志の普段使いのスマートフォンが振動し、その音で彼が目覚めました。

「ん……あれ……？　暗い……」

寝惚けた頭で布団から出ようとして、仁志は傍で寝息を立てるエルフナインの存在に気付いた。

「……エル？　……そっか。俺達はゲートへ入って……」

ぼんやりと寝る直前の記憶を思い出していく仁志。そこへ……

「っ!？」

左足からの痛みで強制的に意識を覚醒させられたのだ。

仁志が目を向ければ、そこには本当の意味でダメージジーンズとなったズボンと、少し腫れたふくらはぎの傷口があった。

「……これ、ヤバいな」

今夜の勤務に支障が出る。そう思う仁志だったが、どこかでそれどころではないかもしれないとも考えていた。

「と、とにかく今はスマホだ」

出来るだけ左足を動かさないように布団から這い出し、仁志は振動しているスマートフォンを手にした。

「……母さん？」

一体何だろうと思いつつ、仁志が通話を選ぶと……

『仁志っ、エルちゃん達はいつになったら帰してくれるの！　もう7時近いし、晩ご飯の支度、始めちゃうけど!』

「わ、分かったって。その、今からそっちへ向かうから。って、ちよつと待った」

『何？　今更やっぱりご飯いらなんて言わないでしようね?』
「えくつと、ものは相談なんだけどさ……」

仁志は思い出したのだ。人数が増えてしまった事を。

響達だけ送り、翼や未来はこの部屋で食事をと言うのもどうだろうと思った彼は、人数の追加は可能かどうかと持ちかけたのである。

当然、彼の母親は大きな声で事情を話せと返し、仁志はそれを宥めつつ室内を見回して思わず絶句。

「……調が、いゝる?」

『は？ 何？ しらべ？ 音楽でも聞いているの？』

「っ!? じ、実は、追加人数に変更が……」

『はああああっ!?!』

母親の怒りを一身に受けながら仁志は簡単に事情を説明した。

事情があつて離れ離れになっていた響達の仲間であり友人達と合流出来たと。

で、寝泊まりは無理でもせめて食事だけは一緒にさせてやりたいという事も。

そう言われてしまえば無碍にも出来ない辺り、やはり彼女は仁志の親なのだろう。

母親は諦めるようにため息を大きく吐くと、近所のスーパーへ買い物へ行つて追加材料を買つてくると返して通話を終えたのだ。

勿論、それに対して仁志が深い感謝を述べたのは言うまでもない。さて、そうなる今度は自分の事をどうするかが仁志の悩む事となる。

何せ今夜は勤務がある。いくら平日深夜のコンビニとはいえ、まったく動かないでいい訳ではない。

荷物がある以上動かなければならないのだ。休むという選択肢も考えないではないが、この時間からでは交代してもらうのも難しい。

それでもと、一縷の望みをかけて彼は脇谷へ連絡を試みた。

『もしもし? 店長つすか?』

「ああ、こんな時間にすまない。ちょっと相談があるんだけど……」

足に怪我をしてしまったので、申し訳ないが今日と明日の夜勤を代わってもらえないかという申し出をする仁志。

その結果は……

『いいつすよ。んじや、明日代わりをお願いしまつす』

「ありがとう。本当に感謝するよ」

意外にもあつさり交渉は成立し、即座に仁志は店へと連絡を入れる。

「あつ、只野です。オーナーに取り次いでもらえないかな?」

電話口のふみへ優しくそう告げ、待つ事数分でオーナーが電話に出

た。

『どうしたんだい?』

「あつ、実はですね……」

足に怪我をして歩くのがやつとな状態になってしまったので休ませてほしい事と、既に脇谷とシフトを代わってもらった事を伝え、仁志はその場で頭を下げた。

「ご迷惑おかけします」

『気にしないでいいよ。まあ、只野君は店長だから構わないけど、本来は別に休ませて欲しいって連絡だけでもいいんだよ? それを聞いてどうこうするのは僕の役目だからね』

「オーナーにご迷惑をおかけしたくないんで」

『ははっ、それはごつちもだよ。とにかく、交代要員の話をつけてくれてありがとう。でも、もし良かったら明日も休むかい? 荷物の少ない日だし』

「でも、脇谷さんには……」

『荷物が終わるまでは本部から人を呼ぶよ。ドライがないから三時には上がってもらえば出費も最低限で済むさ』

「……ありがとうございます。でも、本当にいいんですか?」

『無理をさせて君が入院、なんてなった方が痛手だからね』

その軽いが温かい言葉に仁志は一瞬言葉に詰まり、更に深く頭を下げた。

「本当にありがとうございます。なら、お願いします」

『分かった。その代わり、この二日で絶対に治しておいてくれるかな。さすがに三連休は許さないよ?』

「はいっ!」

オーナーの厚意に深く感謝し、仁志は通話を終わると息を吐いた。

(俺、やっぱり人に恵まれてるなあ……)

人生最悪の期間を超えた後、仁志はつくづく人との縁に恵まれていると感じた。

行きつけの弁当屋の店主である陽子に、近所だからとだけで仕事先を選んでコンビニのオーナー。

そして、響達だ。

仁志が今、こうしてちゃんと生きているのはまさしく良縁との出会いがあればこそだと言えた。

「でも……」

この足の状態では車の運転が厳しいかもしれない。

そう思つて仁志はどうしたものかと考える。

「とにかく今はみんなを起こそう」

傷が早く治る絆創膏を買つてきてもらおうと、そんな事を考えながら仁志はまずヴェイグから起こしていくのだった……。

「どう、ですか？」

心配そうな声のエルへ仁志さんが息を吐いた。

「うん、何とか運転ぐらいは出来そうだ。ただ、あまり速度を出すのは怖いから、到着時間は普段より遅くなりそうだけど」

今、私達は仁志さんのご実家所有の車に乗っている。

私は助手席に座り、立花達が後部座席に少しだけ窮屈そうに座っていた。

「まさか只野さんの実家で響達が生活してるなんて……」

「あの部屋じゃ、エルちゃんが暮らすにはちよつとつて」

「シャワーもないですからね、師匠の部屋」

「ぼ、僕は構わないんですが……」

「……ダメ(だ)……」

ヴェイグを除く私達の言葉がエルへと放たれる。

まあ、ヴェイグは車内が狭いからとエルの中へ入っているのですが、同じ事を言っていたとしても声が聞こえないから何とも言えないか。

「ただ、その事で相談がある。このままじゃ響達が来た当初と同じ流れになつちまう」

「うわあ、本当だ。毎日シャワーだけを借りに駅前のネカフェ通いだあ」

「そう、だな。シャワー代だけで毎日一人300円かかる計算だ」
「えつと……」

「聞いてたよりも大変な頃があつたんですね、響さん達」

私の言葉を聞いて小日向と月読が苦い顔をした。

思い出すとあの頃は色々と資金繰りに困っていたな。何しろまだ立花と雪音のバイト代が出ない頃で、動画配信なども始めていなかったし。

「今夜は緊急事態だから俺の部屋で寝てもらうけど、今後を考えるといつそどこかの部屋を借り直す事も視野にいれるべきかもしれない」「あ、あの、その場合、僕はそちらへ行きたいです」

エル的气持ちは分かる。

何せ軽く聞いただけでも、エルは仁志さんの実家で仁志さんのご両親から可愛がられてるのが容易に想像出来た。

きっと、若干居心地が悪いだろう。そういう意味ではエルは気を遣つてしまう子だからな。

「悪いけど、エルには現状実家に居て欲しいんだ。母さん達があれだけ喜んでくれてるからさ。せめてもの親孝行みたいな感じなんだよ」「そ、そうですか」

「でも、エルがどうしてもって言うなら構わない。その場合は、現状だと響と調に俺の実家暮らしをしてもらうかも」

言いながら仁志さんが車のエンジンをかける。重低音が聞こえ、ライトが点灯した。

にしても、立花と月読か。何故小日向ではないのだとそう思ったが、おそらく寢床の関係だろうな。

「シートベルトはした？ 出発するぞ」

ゆつくりと動き出す車に揺られながら、私は一度だけ行つた場所へ向かう事になった。

初めて訪れた時は、奏とマリアが一緒だった。

仁志さんを含めて四人で笑い合い、楽しく過ごしていた。まだ、あれから一月も経過していない。

それなのに状況は激変している。マリアと奏は悪意に囚われ、染め上げられてしまっているのだ。

私も、そうなったから分かる。あれは、乗っ取りなどではない。言

うなれば刷り込みだ。

同じにする事が立花のためになる。仁志さんのためでもある。

そう思いこまされたところへ凄まじい力を感じて高揚させられるのだ。

まるで、何でも出来るような気分へと。

「仁志さん、足の具合はどう?」

「まあ痛みはあるけど、大分マシにはなったかな。翼が買って来てくれたやつのおかげだ」

「なら良かった。だけど、無理はしないで」

「ああ。とりあえず出来るだけ大人しくしてるさ」

噛み締めるようにそう答える仁志さんに少しだけ疑問が浮かぶ。

一体どうしたのだろう? 何か、あつたんだろうか?

そういえば今日と明日を急遽休みにしてもらえたと言ってたっけ。じゃあ、きつとそれ関係だね。

「ねえ響、只野さんのご両親ってどんな感じ?」

「えつと、仲が良いんだけど仲が悪い?」

「どういう事ですか?」

「え、エルちゃん、どう言ったらいいかな?」

「おばあちゃんとおじいちゃんは、喧嘩する程仲が良いという言葉の意味を教えてください二人です」

「それだつ!」

聞こえてくる言葉に私は隣へ顔を向けた。

仁志さんがそれを聞いて苦笑していたからだ。

その横顔は、どこか優しい。一瞬だが、何故かお父様と重なった。

「ちよ、ちよつと待って。エルちゃん、只野さんのご両親をなんて呼んでるの?」

「え? おばあちゃんとおじいちゃんですか?」

「エルが、師匠の子供になってる……」

「あー、それには色々訳があるんだ。簡単に言うと、俺の母がエルを孫みたいに扱う事にした。で、昔から娘が欲しかった父もそれに追従した。だから呼び方をそうさせた」

「あゝ……」

どうやら小日向と月読は納得出来たらしい。私は、正直納得は出来ないが理解はした。

仁志さんのご両親は、立花の事を恋人と思っていたはずだ。それが事情を知り、そうとは言えない事に気付いたのだろう。

だからせめてと、エルを孫として扱う事にしたのではないだろうか？

仁志さんが妻を持ち、子を成す事を願いつつ、それが出来なかった場合の慰めとして。

「エルはそれでいいの？」

「はい。その、兄様には言ったんですが、僕にとって兄様はもう一人のパパみたいな存在なので」

「そっか。じゃ、只野さんのご両親はエルちゃんにはおばあちゃんとおじいちゃんだ」

「はい。二人共、とつても優しくしてくれます」

「ホントだよ。実の息子よりも可愛がつてるんだ。響もそう思うだろう？」

「え、えつと、さすがに成人した仁志さんとエルちゃんは差が出来て当然かな〜って」

「素直過ぎるぞ立花」

「まったく。でも、他ならぬ俺もそう思うんだから仕方ないよなあ」
そこで全員が笑った。だが、私は気付いた。すぐに月読の笑い声が止まった事に。

それとなくバックミラーで月読の様子を窺う。その表情はどこか暗い。

……暁、だろうな。離れ離れになったか、あるいは共にいたが引き離されたのか。

どちらにせよ、気にかけて、声をかけておくか。私ではなく仁志さんの方が適任かとは思いますが、私も出来るだけの事はしてやりたい。

そのまま車内は駐車場へ着くまでの間、仁志さんのご両親の話題に終始した。

それにしても、聞けば聞く程理解のあるご両親だと思う。お父様や叔父様もそういう意味では理解があったと思うが、それは立場などがあればこそだ。

ごく普通の一般家庭の方がこの事態を受け入れ、理解を示すなどやはり俄かには信じがたいものがある。

しかし、それもこの一言で不思議と腑に落ちてしまうのだ。

「仁志さんの親、だからね」

ここへ来た立花と出会った際、仁志さんがまずしたのが、この世界は立花にとって異常である事の説明だった。

そこから考えるに、その反応や対処はご両親からの教えか遺伝なのだろう。

「よし着いた。響、これ家の鍵。これを持って未来達を連れて先に行ってくれ。母さんはとりあえず食事の人数が増える事を知ってるから」

「分かりました」

「翼、悪いけど肩を貸してくれるか？ 歩けるとは思うけど、念のためにさ」

「うん」

先に車を降りて歩き出す立花達を見送り、私は仁志さんと連れ立って歩く。

な、何だかいつかの散歩の時よりも近いせいか夫婦のような気分になる。

「翼、少しいいか？」

「何？」

階段を上ろうとした辺りで仁志さんが心持ち小さな声で会話を求めてきた。

「調の事、気付いてる？」

「……うん」

思わず、さすが仁志さんと唸ってしまいそうになった。

やはりこの人は私達の事を見てるんだ。

「詳しい事情はまだだけど、十中八九理由は切歌だ」

「私もそう思う。初戦の後、追跡を撒くために別れたんじゃないかな？」

「やっぱそういう事だよなあ」

噛み締めるような声で仁志さんが呟く。私も似た想いだ。

こちらの生活でかなり変化したとはいえ、月読と暁の仲の良さは立花と小日向を凌駕するものがある。

マリアに追われていた事から考えても、おそらく逃げた先で見つかったのだろう。

ただ、気になるのは去り際に放たれた一言だ。

——助けない方がいいかもしれないわよ？

あれは、おそらく月読へ言っていたのではないだろうか。あの時は私達かと思っていたが、状況的に月読だと思っただ方がいい気がする。

だとすれば、助けない方がいいとは誰をだ？ 決まってる。暁だ。

そう考えると、暁を助けるために月読は一人ゲートを移動していた事になる。それは何故だ？

きつとギアが変化した事で仁志さんへ依り代が、エルが合流したと分かったからだ。

上位世界へ行き、仁志さんの力を借りて暁を助けようとした。そう考えるのが妥当だろうな。

「仁志さん、まずは私に任せてくれない？」

「むしろ俺からお願いしようと思っただぐらいだ。でも、あまり無理はしないでいいよ。未来にもお願いしようと思ってるんだ」

「……うん、分かった。小日向なら私よりも月読の立場や心境へ寄せられるしね」

「そういう事。まあ、まずはその前に、俺の両親への詳しい説明っていう面倒事を片付けないといけないけど」

そう言っって苦い顔をした仁志さんに私は小さく苦笑する。

ああ、本当にこの人で良かった。こんな事になっても、この人は強くあろうとしてくれ、そして明るくいようとしてくれる。

立花が言ったように、仁志さんは私達のヒーローなんだ。

でも、情けない声を出しながら階段を上るのは止めて欲しい。

そんなところも、貴方らしいとは思うけどね。

「何と言うか、こうなると嫌でも信じるしかなくなってくるな」

師匠のお父さんの言葉には若干の苦笑が混じってる。

師匠のお母さんが作ってくれた晩ご飯（色んなふりかけを使った沢山のおにぎり・豚汁・玉子焼き）を食べながらの時間は、何とというか一種炊き出しみたいに思えた。

「ホントよ。まさか一気に三人も女の子が増えるなんてね」

「と、突然押しかける形になってすみません」

「すみません」

翼さんの言葉に合わせて未来さんと一緒に頭を下げる。私もご飯を作るから分かる。突然人数が増えるのがどれだけ大変か。

しかも、いきなり三人も。でも、きっと私だったらこんなに思い切った事は出来ない。

まさかお家で炊き出し風の献立にするなんて、新しい発見。やっぱりちゃんとお仕事と家事を両立させて子育てをした人は凄い。

「ああ、いいのよ。貴方達はなんつ……にも悪くないんだから。悪いのは、こっちへの連絡を忘れてたこの子だから」

「だから何度も謝ったじゃないか。しかも、珍しく真剣に」

申し訳なさそうだけど、どこか不服そうな顔で豚汁を啜る師匠。

こんな師匠も珍しい。私がよく知ってる師匠は、もう少し感情を抑えてるから。

「珍しくがおかしいって気付きなさい。それで、未来ちゃん達はどこに泊めるの？ あんたの部屋はもう限界だし、リビングで寝てもらうには布団がないわよ？」

「えっと、今夜は何とか出来る。で、父さんに頼みがあるんだけど」

「この子達の事だろ。とりあえず言ってみろ」

その言葉に師匠が思わず言葉を飲んだ。私達も驚きの表情で師匠のお父さんを見た。

師匠の……うん、長いから略そう。パパさんは平然とした顔で師匠を見つめてる。

「そ、その、住んでる街に、以前借りるかどうかが迷ってた3LDKの一軒家があつて」

「平屋か？」

「んな訳あるか。二階建てだよ。風呂とトイレが別々でシャワーもある」

「リビングや部屋の広さは？」

「リビングはここよりほんの少し広い。部屋の方は、合計してもこっちの勝ち」

「それで家賃は」

「6万5千」

「は？ ちよつと仁志。あんたの稼ぎじゃ」

「お母さんは黙ってなさい。それで、お前は私にどうして欲しいんだ？」

「頼む。半分とは言わない。3分の1程度の2万円、出してくれ」

真剣な表情で頭を下げる師匠を見つめるパパさん。

ママさんはどこか不満そうにおにぎりを食べてる。

……この状況でそう出来るのも強さな気がする。母は強しって、こういう事？

「2万、か。どうせ頼むならもう少し欲張れ。3万出してやる」

「い、いいのか？」

「お前が男として覚悟を見せたからな。まあ店長の就任祝いも渡してなかったし、それだと思つて出してやる。それに、それぐらいこの子達がやらないといけない事っていうのは大変な事なんだろう。世界平和が云々なんて一生縁のないもんだと思つてたが、まさかこんな風をやってくるとはなあ」

「仁志がそういうの好きだから引き寄せたのかもしれないわ。類は友をつつて……これは違うか」

「今回は嘘から出た実まことが近いでしょう。まったく、無理して難しい事を言おうとするから……」

「別にいいでしょつ。それに途中で違つて気付いたんだからいいじゃないっ」

「だからっ、そういう問題じゃなくて」

「はいはい、そこまでにしてくれ。翼達はそれ、初めてなんだからさ」
……はっ！ 思わず呆然としてた……。

これがエルの言ってた事か。ケンカする程仲が良いって言葉の意味を教えてくれるって。

何せもうパパさんもママさんも、さつき口喧嘩しそうになったのが嘘みたいに平然とご飯を食べてる。

この感じは敢えてそうしてるんじゃない。本当にさつきの事が気になってないって空気だ。

「とにかく、ありがとう父さん。その、一か月分だけで終わる可能性もあるんだ。みんながいつまでこっちにいるかも分からないからさ」

「そうか。そうだな……」

「あと、最終的にここから五人増える可能性がある」

「五人？ 成程な。だからLDKなんて選ぶ訳か。全員の寝る場所だけは確保したいと」

「まあ、そんな感じ」

何だか、男同士のやり取りって言うよりはやっぱりどこか親子の会話って感じがする。

どこがって言われると分からないけど、お互いに分かり合ってるよ
うな、通じ合ってるような、そんな感じがした。

「っと、そうだ。母さん、少し見て欲しいんだけどさ」

「何を？」

「その、実はちよつと怪我したんだ。左足のふくらはぎ」

「はっ」

そう言っって師匠がテーブルから離れてソファ近くに行く。ママさんも仕方ないって感じでそっちへ行っって、貼ってある絆創膏を勢いよく剥がした。

「くっくっ!! も、もう少し優しく剥がせよ！」

「痛いねえ。男でしようが」

「それでも看護師かよっ！」

「家族相手なんだからいいでしょ。それに仕事としてなら給料もらう

わよっ。」

「なんて親だ……」

「家の中まで仕事モードでいたくないのよ。で、どれどれ……」
「ったく……」

どこことなくママさんが一瞬マリアや奏さんに重なって見えた。

接し方、どこか似てるからかも。もしかして師匠がああ二人に弱い
の、ママさんと近い時があるから？

「あんだ、どこで何してこうなったの？ 単なる切り傷じゃないんだ
けど……」

「……みんなが戦ってる敵の攻撃」

傷口を見たママさんの問いかけに師匠が迷って返した答え。

それを聞いたママさんは弾かれたみたいに顔を上げた。

「どういう事!？」

「俺もみんなと一緒に戦ってる。そうしないと勝てない相手なんだ」

「戦ってるって……ろくにスポーツもやってこなかった三十男が？」

「ああ」

「呆れた……。仁志？ あんたは自衛官でもなけりや警察官でもない
んだからね？ 今まで体を」

「分かってる。それでも、こんな俺でも力になれるし、俺しか出来ない
事もあるんだ」

「だからってね……」

不安そうなママさんを見て私は何も言えない。実際ギアがない師
匠は、戦闘になったら危ない状況しかないから。

前は未来さんやセレナが気を配ってたけど、今回はその二人が傍に
いなかった。しかも、きつと師匠の事だから無茶をしたんだと、思う。

どこか師匠って響さんに似てるどころあるし。

「連絡さえも出来ない外国へ行くかもしれないって言ったのは、そう
いう事か……」

そんな時、パパさんが噛み締めるように告げた言葉が部屋の中に響
いた気がした。

見れば師匠もママさんもパパさんへ顔を向けてる。

「仁志、お前の人生だ。好きにしろ、とは思う。ただな、一つだけ言わせてもらおうなら私達より先に死ぬな。事故や病気なら諦めもつくが、自殺なんてもつてのほかだ」

「分かっているさ。俺だって死にたくないっての。せつかく学生時代に出来なかつた事が出来るようになってきたって言うのに」

「お前な……」

「父さん、母さんも聞いてくれ。たしかに俺なんか力もそこまでないし、秀でてるものなんか無いに等しい。それでも、今俺がみんなを手伝わないといけないんだ。傷付く事を恐れたら、地球は、この世界は、悪の手に落ちる。そんな馬鹿みたいな話が、本当になろうとしてるんだよ」

師匠の言葉は、今だと事実だ。ツインドライブを使い分けたりしないと、今の悪意が操ってるマリア達にはきつと勝てない。

軽く聞いただけだけど、翼さんまで悪意に操られたみたいだし、それなのに未来さんまで元に戻せたのは、きつと師匠と一緒に戦ってくれたからだ。

「……ヒーロー物が好き過ぎて、今の自分に酔ってないだろうな？」

「むしろそれぐらいにならないと怖くて戦えないんだよ。ランナーズハイじゃないけど、脳内麻薬出して、自分はヒーローだって思いこむぐらいじゃないと、余計死ぬ可能性が高いんだ。恐怖で怯えたら、それが死へ繋がりがねない」

「おじさん、おばさん、その、私達だけじゃ今回は勝てないんです。仁志さんがいてくれないと、私達さえ相手に操られちゃうかもしれないから」

「実際、私や小日向はそうになりました。ですが、仁志さんが立花達と協力し救い出してくれたのです」

「仁志が……ねえ」

「まだどこか信じられん話だが、本当にそうなんだろう。この子達が私達の常識では計れない世界から来たのは間違いないし」

「そうだけど……この部活もやらなかつたような子が……」

「それは関係ないだろ」

師匠とパパさんの声が重なって思わず少し笑っちゃった。

見ればみんなそうだった。仁志さん達親子だけがムツとした顔をしてる。

「とにかく、私はお前が私達より先に死なないのなら好きにしろと思ってる。ああ、人様に迷惑もかけんようにな」

「当たり前だっつての」

「ならいい。お母さん、それでいいじゃないか」

「でも、もしかしたら死ぬかもしれないって言われて、それでも好きにしろなんて私は言えないわよ」

「仁志が戦わないならどちみちこいつも死ぬしかない。なら、まだ生き残れる道を選んだ。そういう事だろう」

「っ……。お父さんはそれで納得してるかもしれないけど……」

「私だっつて心から納得出来るて訳じゃない」

「そんな風には見えないわよっ。貴方は我が子が死ぬかもしれないって聞いて、よくそんな風に冷静でいられるわねっ！」

「だからこそ仁志は長生き出来るように自分の精一杯をやろうとしてるんでしようがっ！」

「「「「「「っ!?!」」」」」」

パパさんが怒鳴ると同時にテーブルを叩いてみんなが息を呑んだ。翼さんさえも驚いた顔をしてる。

「私だっつて本音を言えばそんな危ない事は止めろと言いたい！ お前以外に出来る奴がないのか！ その子達だけじゃ無理なのかとっ！」

そこでパパさんは一旦言葉を切って息を吐いた。まるで自分の気持ちを冷やすみたいに。

「……だけど、そんな事を考えない私達の子供じゃないでしょう。きつと、仁志も関わるしかないんだよ」

その言い方でママさんが師匠へ顔を向けた。師匠は、何とも言えない顔をしてる。

「それに、女の子達だけを戦わせて平気な育て方はしてないと思ってる。仁志なりに、大人に、男になった結果だ」

少しだけ落ち着いたパパさんだけど、その言葉にはきつと深い愛が込められてる。

師匠を、自分の子供を思う、愛情が。

「……仁志、そうなの？」

「ああ、俺が手を出さなけりや最悪の結末は確定レベルって言っている。だから、少しでもこの世界を、父さんや母さん達を守れて俺も生き残れる方法を選んだ。ジーンとしててもドーにもならないから、もがき足掻いておきたいんだよ。こんな俺でもやれる事があって、出来る事があるのなら」

はつきりとした言葉に私は胸を押さえた。

切ちゃんは師匠のこういふところを信じてたんだ。私よりも切ちゃんは師匠の事を知ってたから。

「お母さん、もう仁志は成人してるんだ。私達がその生き方へあれこれ口出す時期はとづくに終わってる。人様に迷惑をかけないのなら、な。そうじゃない以上、ここは大人しく見守ってやろう」

「お父さん……」

「その、確約は出来ないけど、俺は自分の言った事を破るつもりはないよ。二人の面倒を見るし、先に死ぬつもりもない」

そのしつかりした声は、私達への言葉でもあるって分かった。

師匠は、仁志さんは私達と約束した。あの時、サムズアップと笑顔で。

それを果たすつもりだって、仁志さんはそう言ってる。私達へ伝える。

仁志さんの決意が伝わったのか、ママさんは諦めたようにため息を吐いて俯いた。

それを見てパパさんが立ち上がると、ママさんへ近付いてその肩へそつと手を置く。

顔を上げたママさんへパパさんは静かに頷く。それだけで何か伝わったようにママさんも小さく頷き返した。

思わぬ事になった晩ご飯だったが、改めて仁志さんの、師匠の気持ちと親って存在のあったかさを知れた。

ご飯が終わって、私達は響さん達が使ってる部屋へ入った。翼さん達が使ってたアパートの寝室ぐらいしかないからちよつと狭い。

ベッドへ響さんと未来さんにエルが座って、私はヴェイグのクツシヨンを使わせてもらう事に。

翼さんは師匠と一緒にドア近くで立っていて、みんなの視線が私へ集まっていた。

「じゃあ、調、話を聞かせてくれるか？ エルが脱出した後、何があったかを」

「うん、分かった」

エルとヴェイグを逃がした後、私達三人はギャラルホルンを守るように戦っていた。

だけど、途中からマリア達三人の姿が闇に包まれたみたいになって、どういう事だろうと思っていると、少し間を置いてその中から真っ黒のギアを着た三人が出て来た。

しかも肌の色とかまで変化してて、その、ギアインナーもエツチな感じになっていた。

なのに強さは桁違いに上がってて、私達は一気に追い詰められる事になった。

「そこでギアが変わって、私達はエル達が師匠と合流出来たって分かって一気に巻き返せた」

「リビルドギアツインドライブだからな。私もそれで雪音を騙る悪意を撤退させた」

「はい、私達もマリア達がそれで少し怯みました。でも、すぐに立ち直ってきたんです。私達は歌ってるのに向こうは歌無しで互角だったから、このままじゃ不味いと思って……」

まず、私はセレナを逃がすべきだと思った。こうは言いたくないけど、セレナはエルの次に幼いから。

——セレナっ！ 先にゲートへ！ 私達もすぐに後を追うから！

——また後で会おうデスっ！

——っ！ 分かりましたっ！ 絶対後で会いましょうっ！

きつと、あの時のセレナは分かったんだと思う。私と切ちゃんが自分を逃がそうとしてるって。

それでもワガママを言わずに動いてくれたのは、セレナなりの成長なんだと思う。

以前のセレナだったら、そこで素直に動かず時間をくったはずだ。「セレナに逃げてもらったんですけど、すぐにギヤラルホルンへの動線を未来さんが塞ぎました。私と切ちゃんはユニゾンで強引に突破しようとしたんですけど、マリアと奏さんがそれを阻止するように私達をそれぞれで激しく攻め立ててきて……」

私と切ちゃんはこのままだと不味いって理解して、何とか隙を作り出さないとって動いた。

ギアの攻撃でも本部が傷付かないのは分かったから、ならって飛び道具系の攻撃で一時的に距離を稼ごうとしたら、それを弾き合ったマリアと奏さんへそれぞれの弾いた攻撃がヒット。

「それで、二人が揉め始めたんで私と切ちゃんはユニゾンで一気に未来さんを突破して、ギヤラルホルンへと入ったんです」

「じゃあ、調ちちゃんと切歌ちゃんはやっぱり一緒だったんだ？」

「はい。でもセレナがどこへ逃げたかは分からなかったし、クリス先輩が戻ってくるかもしれないと思って、私達は一先ず上位世界とは逆方向の平行世界のゲートを目指しました。ただ……」

「……ただ？」

今でも思い出せる。未来さんを突破して、ギヤラルホルンの前で速度を落とした時の事は。

——切ちゃん、早く！

——分かってるデスよっ！

——簡単に逃がすと思わないで。

——っ?! 調っ！

——えっ？

ギヤラルホルンへ入ろうとした直前、私へ未来さんが何かを放ってきて、それを切ちゃんが咄嗟にアームドギアで弾こうとしてくれた。でも、それはアームドギアに当たった瞬間消えて、切ちゃんが苦し

そんな顔をしながら私に続いてギャラルホルンへと入った。

「最後に切ちやんが私を庇って何かをアームドギアで受け止めたんです。それが切ちやんの体をゆっくりと蝕んでいった」

「翼さん……これって……」

「ああ。私が悪意にされたのと同じだろう。暁も悪意の種をその時に植え付けられたのか」

「それで、二人で逃げて、司令やドクターのいる世界のゲートへ入りました」

「何でそこに？」

「私達がドクターのいる世界なんて選ばないだろうって思うんじゃないかなって」

でも、マリアは私がゲートを出てから少しすると追い駆けてきた。

つまり、既にあの世界に来てたって事だ。

ただ、私と鉢合わせにならなかったって事が気になる。

どうしてゲートを目指した私とすれ違わなかったんだろう？

そう思つて師匠達へ聞いてみた。すると、エルが……

「もしかしたら、切歌お姉ちゃんに植え付けられた悪意の種が発信機みたいな役割を果たしたのかもしれない。それで悪意はゲートから切歌お姉ちゃんの居場所へ最短距離で向かったのでは？」

「そっか！ 翼さんのところへ悪意がすぐ来たみたいだね？」

「おそらくですが……」

「なら、セレナはまだ悪意に発見されていない可能性が高いな」

「逆に言えば、きつと切歌ちゃんは……」

「私のようにされているだろう。きつと今はその別れた世界で月詭を、私達を待ち構えているはずだ」

私を待ってる、か。それはきつと間違いない。悪意に支配されてもされなくても切ちゃんはあそこで私を待つって言ったんだ。

そして、私はそこへ助けを連れてくるって約束したんだっ！

「師匠、切ちゃんを助けに行ってくださいますか？」

「聞く必要のない事だよ調。むしろそこへ一緒に来てくれるか？」

「うん！」

切ちゃんを助けたいって気持ちには変わらないから！

「じゃあ、明日行こう。で、昼前に行こうか。今回の事で分かったけど、人数と相手もあってカオスピースト戦よりも疲労具合が高いから」

その師匠の言葉に私達は頷いた。

この後は二人ずつで汗を流す事になり、響さんは未来さんと、私は翼さんとお風呂へ行く事に。

エルはママさんと一緒に入る事になった。ヴェイグは何とパパさん。

「俺はいいんだが……」

「……ダメ(だ)……」

相変わらずお風呂が苦手なヴェイグへみんなで注意する。

でも、師匠は一人で大丈夫なのかな？ 左足を怪我してるし、歩くのも結構大変みたいだった。

ママさんが言うには、縫う程じゃないけど少し間違ったら入院確実だったぐらいの深さみたい。

ただそこで「保険は入ってる？ 実費はバカ高いから気を付けなさい」って言いながら絆創膏を叩いて締め括ったのは、何とか凄いなと思った。

「師匠、一人で大丈夫？」

「ああ、心配いらないよ。今日は濡れタオルで体を拭く事にするから」
「成程」

それなら大丈夫だ。でも、きつと MARIA がいたら自分が水着を着て一緒にとか言ってる。

……あの MARIA、怖かった。悪意が MARIA を真似てるとしても、声や口調が同じだとやっぱりどこか悲しい気持ちになるし。

と、そこへノックの音が聞こえる。で、ドアが開いてママさんが顔を出した。

「何だよ？」

「あんたに用はないから。エルちゃん、おばあちゃんと一緒にお風呂に入るわよ」

「あ、はい。今行きます」

とつても嬉しそうなママさんを見てると私も少しだけ心が軽くなる。

少し恥ずかしそうな、でも嬉しそうでもあるエルを見てると余計に。

「エルが出たら響達で、次が翼達かな」

「仁志さんはいつですか？」

「俺は濡れタオルでいいからなあ。正直渡してさえくれればここでも上半身は拭けるし」

「ふふっ、何なら私や響と入ります？」

「遠慮しとくよ。まあ、この足じや変な事は出来ないから安全っちゃ安全だけど」

師匠はそう言つて左足のふくらはぎを指さした。そこにはママさんが新しく張った絆創膏がある。

「まあ、今夜は風呂に入ったら響は早く寝てくれ。で、翼達は悪いけどリビングで待つて欲しい」

「構いませんよ」

「はい、私もです」

「仁志さんこそ運転大丈夫？」

「ああそれなんだけど、父さんと話をつけてアパート前まで送つてもらう事にするよ。きつとみんなのためって言えば受けてくれるし」

たしかにパパさんは私達に優しい。エルがおじいちゃんって呼ぶ度にどこか嬉しそうだし、響さんがおじさんと呼んでもだ。

私がパパさんって呼んでもいいですかって言ったら、一瞬だけ笑みを見せてすぐに何でもないような顔をして頷いてくれたし。

この後、お風呂上がり私からパパさんへ師匠の住むアパートまで車で送って欲しいってお願いしたら、二つ返事でいいよって言われた。

それを教えると師匠がしみじみと……

——可愛い正義。娘が欲しい親父には特に効くらしい……。

って、そんな事を呟いた。それに私は師匠らしいなって、そう思っ

た。

「何だか新鮮です」

調の声が浴室内に軽く反響する。翼は体の泡を流しながらそれに小さく苦笑して頷いた。

「そうだな。私も月読と二人で入浴する事があるとは思わなかった」

仁志の実家のバスルームは、大人二人で入るには些か狭い。それでも、一人が先行して入り、体や頭を洗い終わった後に湯船へ浸かり、そこでもう一人が入る事で二人での使用でも狭さを感じないように配慮していた。

現在は、調がその長い髪をタオルでまとめ上げて濡れないようにして、ゆつたりと湯船へと浸かっている。

「けど、あのお家ってお風呂場広かったですね」

「そうだな。ここもあのアパートのシャワールームよりは広くはあるが……」

「あのお家、二人は割と余裕で洗えました」

「だったか」

「はい。私と切ちゃんともリアでも何とかできました」

「そうなのか？」

「ただ、その場合は今みたいに誰かはお風呂の中じゃないとダメですけど」

「ああ、そういう事か」

和やかな雰囲気のある二人ではあるが、翼は気付いている。調の顔に普段よりも笑顔が少ない事を。

（暁が自分を庇って悪意に取り込まれた事が心苦しいのだろうか。それで、今はあまり笑わないようにしている、か……）

かつてあのライブ会場で片翼を失った後の自分と似た気持ちなのかもしれない。

そう思って翼は髪を洗いながら小さく笑みを浮かべた。

「あまり自分を責めないでやれ」

「え……？」

突然の言葉に調は翼へ顔を向ける。翼は調へ顔を向ける事無く髪を丁寧洗っていた。

「暁は、きつと今の月読を見ればそう言っただろう。暁は、月読に笑っていて欲しいと言う人間だ」

「それは、そうですけど……」

「自分を許せない気持ちは分からないでもない。もつと自分に力があれば、もつと注意を払っていけば。そんな後悔の念が次々と浮かんでくる。そんな経験は私にもあった」

「翼さん……」

「だからこそ、思うのだ。そうやって反省し成長を誓う事は大事だが、過ぎた事を引きずり過ぎてはいけないのだとも」

「過ぎた事を、引き摺り過ぎる……」

その瞬間、調の脳裏に甦るのは切歌が言ってくれたあの言葉。

切歌の願いを聞き入れ、彼女を苦しめる原因となった事を吹っ切るように立ち上がった際に言われた一言。

——今の調、最高にカッコイイデスよ……。

（そうだ。今の私を切ちゃんが見たらそう言ってくれない。こんな沈んだ暗い気持ちの私じゃ、カッコイイなんて思ってくれない）

切歌でさえ気にするなと言ってくれた。それをいつまで気にし過ぎるのか。

そう自問し調は一度だけ風呂の湯の中から手を出すと頬を軽く叩く。

「……翼さん、ありがとうございます。私、また自分のした事を引き摺ってました」

「そうか。だが、それでこそその月読かもしれん」

「そう言われると何とも言えないです……」

「ふふつ、これは難しい事だからな。引き摺り過ぎるのは良くないが、まったく気にもしないと云うのも、な」

「はい」

「だから、月読は今ままでいればいい」

「え？」

それではダメなのではないかと、そう言おうと思った調へ翼はやつと顔を向けて微笑む。

「今のようになっていたら、また私達が教えよう。そうやって支え合っていけるはずだ、今の私達は」

「……はい。翼さんがそうだった時は私が教えます」

「むっ、言うようになったな月読」

「口喧嘩しても仲良く出来るってパパさんとママさんが教えてくれましたから」

「あははっ、そうだな。あなれるかは分からないが、一種の理想ではある」

「私ももつと切ちゃんと言見を言い合って知っていききたいです。ケンカしてもいいって、そう思っ」

「ああ、するとい。きつと月読達ならそれを良い方へ転がしていける」

「はいっ！」

その後、髪を洗い終わった翼と入れ替わりで調はバスルームを後にする。

水着ギアを展開して服を着直した調の顔を見た仁志達は、その顔が明るさを取り戻しているのを見て安堵するように微笑んだ。

それに気付いて、調もまた、優しく微笑み返すのであった。

まさか、この部屋で寝る時が来るなんてなあ。

そんな風に思いながら私は使い慣れた布団を見つめる。

場所は只野さんの部屋。おじさんに車でアパートの前まで連れてきてもらって、ここへ戻ってきたのが今から大体10分前。

そこから処分されるはずだった衣服からパジャマを取り出して、只野さんに背を向けてもらって着替えた。

振り向いたら私達三人からお嫁さん選んでもらいますからねって、そう三人で念押しして着替えたけど、だからか見事に只野さんはピクリともしなかった。

「じゃあ、悪いけど先に寝るよ。おやすみ」

「「おやすみなさい」」

私達が布団を敷き終わると、只野さんはそう言って目を閉じた。で、一分とかからず寝息を立て始めた。

何でだろう？ 人生で初めて男の人と一緒に部屋で寝るのにドキドキがない。

「懐かしいな。ここで私が立花達と暮らしていた頃は、これが朝の日常に近かった」

「そうなんですネ」

「ああ。あの頃の仁志さんは今よりも体力がなくて、夜勤を終えて帰ると食事もしないで寝る事が常だった」

「へえ……」

調ちやんと声が重なる。つと、いけないいけない。私達も早く寝なくっちゃ。

明日は響とエルちゃんにヴェイグがこつちへ来て、そこから切歌ちゃんを迎えに、助けに行くんだ。

「えつと、とりあえず私達も寝ませんか？ 明日は切歌ちゃんを迎えに行かないといけないし」

「そうだな。では、寝るとしよう」

「はい。おやすみなさい、翼さん、未来さん」

「おやすみ、月読。小日向もいい夢を」

「はい、おやすみなさい翼さん。調ちやんもね」

三人揃って布団へ入る。何だかこの組み合わせは初めてだから不思議と笑みが浮かぶ。

いつそ、これが悪意とかなしの状況だったら良かったのに。そう思いながら私は目を閉じる。すると、疲れがまだ残ってたのかすぐに意識が遠のいていく。

気が付けば、私は真つ白な場所にいた。

格好は何故か神獣鏡のファウストローブ。一体どうして？

——人の子よ。

聞こえた声に顔を上げれば、そこにいたのはシエム・ハ。

「な、何で貴方が？」

——あれだけおぞましいものを叩き付けられれば嫌でも目を覚ます。いつぞやの我を超えておる。

「シエム・ハを……」

正直怖くなる。あの時だって響達がエクストライブで何とか頑張ってくれての結果だったのに。

——何故なら、汝らが相手するモノは力では決して倒す事叶わず。

「え？」

どういう意味？ 悪意は、ギアじゃ倒せないって事？

——そうだ。アレは、元々人の負の感情。感情は感情でしか倒せぬ。

「感情は感情でしか倒せない……」

——人の子よ。思い至れ。汝らは既にアレを何度か倒しているのだ。

「っ?! どういう事!」

——人を苦しめるのが人ならば、人を助けるのもまた人だ。全ては汝らの心にかかっている……。

薄れて行くシエム・ハの姿と声。待つて！ まだ聞きたい事があるのっ！

——無理だ……。それに、これもどこまで覚えていられるやら……。

「覚えていられる？」

——鍵は……のお………。……いを……そ……。

途切れ途切れでしか聞こえない声。もうシエム・ハの姿は見えなくなつてた。

お願い……行かないで……。

「っ?!」

目が覚めたら何故か私は手を伸ばしてた。どうしてかは分からない。い。

でも、何かとつても大事な事を聞いた気がする。

「……けど、思い出せない」

寝たままで夢の内容を思い出そうとするけど、ほとんどもやがが

かったみたいに浮かばない。

ただ、ぼんやりと思い出せたのはたったこれだけ。

「力じゃ、悪意は倒せない……」

噛み締めるように呟いて考える。

今までカオスビーストは普通にギアで戦って倒してる。悪意も、ギアで倒した。

世界蛇だってそうだった。なのに、どうして力じゃ倒せないんだろう？

少しだけそのまま考えても分からないから静かに起き上がる事にした。

するとまだ翼さんさえも寝てる。

だから時間を見ようと思って時計を探して、やっとそこで思い出した。

「そっか。只野さん、時計持ってないって言ってたっけ」

仕方ないから、そつと布団から出て充電が終わってるスマホを手にして時間を確認。

「……午前五時、か」

さすがに早過ぎるなあ。こっちで生活してた時だって六時ぐらいに起きてた。

でも二度寝したら絶対寝坊というか、七時過ぎまで寝るだろうな。

いつそ今からジョギングでもしようか？

「つと、ダメダメ。今日は切歌ちゃんを迎えに行くんだもん」

なら今日は散歩にしておこう。そうと決まれば着替えなきゃ。

そう思っただけは立ち上がって、ふと只野さんの布団を見た。

「ふふっ、只野さん、掛布団ずれちゃってる」

こっちへ背中を向けるように体半分が掛布団から出てるのを見て思わず笑っちゃった。

直してあげようと思って近付くと、当然視界に只野さんの全身が入って……っ!?

「あ、え、その……あう」

お、男の人が朝にそうなるって言うのは知ってるけど、こうやって

見ると、えっと、何とも言えない気持ちになる。

あのプールでも見たかもしれないけど、あれは一瞬に近い。今みたいにじっくりと見た訳じゃないし。

「お、大きい、のかな？」

男の人のなんて当然見た事がある訳ない。正確には勃起したのを見た事はない。

や、やだ。どうしようかな、これ。見なかった事にしておくのがいいとは思うけど……。

「そういえば、男の人って疲れてるところなり易いって言うよね……」
しかも、昨日は下手をすれば死んでたかもしれない。だから余計こうなったのかな？

……これ、生存本能だよな？ 自分の遺伝子を残さないと言って言う、そういう反応のはず。

わ、私はいいですよって、そう言ったら只野さん、困るよね。
でも、それぐらい今の私はこの人が好き。

「響と二人で、私へ手を精一杯伸ばしてくれたもん」
依り代を押し付けられた後は私もすっかり覚えてる。

只野さんは響と一緒に私を助けようとしてくれた。

翼さんを攻撃しようとした悪意を私が止められたのも、只野さんが私の名前を叫んでくれたからだ。

「……前より、もっと、好きになっちゃったよね」

今までは只野さんの人柄や考え方なんかには惹かれてた。そこへ、男らしさって言うか、分かり易い強さを見せられて余計胸がキュンってしちやっただ。

いざとなったらこの人は危険の中にも飛び込んでいける。大事なものを守るために動ける人だって。

「只野さん、貴方はやっぱり私達のヒーローですよ」
初恋の男性へそっとそう呟いて、大好きって想いを込めて頬へキスする。

そうしてから私は掛布団を直そうと持ち上げて……
「あれ？」

もうおちんちんが小さくなってる事に気付いた。

それがまるで、さつきスキスのキスで疲れがとれたよって只野さんの体が言ってくれたみたいで、恥ずかしかつたけど嬉しく思えた。

……私もちよつと危ない発想してるかも。

「んっ」

「っ!？」

聞こえた寝息に思わず背筋を伸ばす。顔を動かせば翼さんが寝返りを打ってた。

と、とにかく今は着替えよう。そう思つて私は水着ギアを展開してから服を着るのだった……。

「あゝ……よく寝たあ」

大きく伸びをすると全身から音が聞こえた、気がした。それぐらい体が疲れていたのだと思う。

実際、まだ寝ようと思えば寝れるぐらいだ。こんなの最近だった事がないぞ。

現在時刻は午前八時過ぎ。そろそろ起きてくださいと未来に優しく起こされて現状に至る。

それにしても心配していた事は避けられたようでよかったよかつた。

朝から三人の乙女に見せられない状態になつてたらどうしようかと思つていたんだよ。

昨日の朝なんて、その、酷いものだったし。

「それは良かったです。疲れ、取れました？」

「あー、うん。かなり」

「師匠、まだ疲れが残ってるの？」

そう言つてこつちを見つめてくるのは布団を片付けている調。

翼は朝食を買いに出かけている。そう、今朝はファストフードとなりました。

ま、赤と黄色が目印のハンバーガーショップだ。さすがの調や未来でも材料がないのでは料理のしようがないんでね。

「みたいだ。でも、大丈夫。勤務明け程じゃない」

「あの、それは当然じゃないと困るんですけど……」

苦笑する未来は相変わらず可愛い。

「ですね。あつ、師匠、足はどう？」

「ああ、そつちはもう大丈夫みたいだ。痛みもないし、ほら、この通り」
左足を伸ばしたり曲げたりを繰り返す。

心なしか母さんに手当されてから一気に良くなった感じがしたんだよなあ。

「やっぱ本職は何か違うのかな？」

「良かった。もしそうじゃなかったら、師匠はここで待機してもらおうつもりだった」

「え？」

「そうだね。昨日はおじさんとおばさんがいたから何も言わなかったけど、実際私達も出来るだけ只野さんには安全な所に居て欲しいし」
「ちよつちよつ……」

まさかの未来まで調側？ 初期の頃の君は今の俺の側だろ？

「つて、思いますけど、只野さんの気持ちも分かりますから。きつとそうじゃなくてもついてきたい、ですもんね」

「未来……」

「調ちゃん、覚えておいて。ううん、調ちゃんも知ってるか。戦う力がなくても、一緒に戦いたいって思う時はあるって」

「……はい。私達もリンカーがなかった時、悔しい想いをしました」

「それと似た想いを只野さんもしてくれてるんだよ。だから、下手に置いてくと余計危ないかも」

「おいこら」

味方だと思ったら最後にちやつかり落とすんだからこの子は。

俺がそう思つて突つ込むと未来は小さく笑つて舌をペロつと出した。可愛い。

「だって只野さん、響から聞きましたけど私が放った攻撃」

「未来じゃなく悪意」

これだけは譲れないとばかりに口を挟む。

「クスっ、はい。悪意が放った攻撃で依り代を使わないために無茶な避け方したって」

「え？」

「あー、うん。ヘッドスライディングって分かる？ それみたいな感じでズザーっ」と

もしあれをやらなかったら未来をこう出来たかちよつと不安だ。

「ね？」

「……はい。師匠って、やっぱり無茶苦茶ですね」

「おーい、言うに事欠いてそれか？ 師匠って呼んでるのにそういう事言っちゃうの？」

敬意ゼロ。まあ、切歌と違って調の師匠は深い意味とかはないだろうけど。

……てか、切歌もなかったわ、そういうえば。

「うん。でも、だからこそ師匠らしいって思う」

「はい？」

「時々無茶苦茶な事をするけど、でも最後には不思議とみんな笑顔にしちゃう。それが師匠だと思う」

噛み締めるような声でそう言われると何も言えない。

それと、やっぱり調の顔から暗さが消えてる。それが今は何よりも嬉しい。

「そうそう。例えば誕生日会とか」

「あれは心臓が止まるかと思った」

「あれは」

「あとは、海に行った時もだよな」

「はい。師匠、後で聞いたら泳ぎが得意じゃないのに切ちゃんを助けに来たんです」

「あの」

「そうそう、中華街でご飯食べた時もあつたね」

「お金はあるって言って高い物結構頼んで、お会計見てお財布の中身何度か確認してた」

「ごめんなさい。今後気を付けますのでそれぐらいで勘弁してくれな

い？」

このままだと恥ずかしさで悶える気がしたので止めに入る。
すると二人して小さく苦笑した。その表情さえも可愛いんだから
ズルいよなあ。

「つと、電話だ」

普段使いのスマホが震えたので手に取ればそこにはエルの文字。

「もしもし？」

『あつ、兄様おはようございます』

相手は予想通りエル。何かあっただろうか？

「おはようエル。で、どうした？」

『はい。あの、こちらはもう後片付けを終えてそっちへ向かおうと思
うんですが構いませんか？』

あー、そつか。向こうは普通の勤め人二人だもんな。朝飯は八時ま
でには食べ終わるか。

で、おそらく響とエルの二人で洗い物とかを引き受けたんだろう。

「構わないよ。急がなくていいから気を付けておいで」

『はい！』

「只野さん、響達もうこっちへ来るんですか？」

通話を終えるや未来がそう尋ねてきたので頷いた。

「エル達が来るんだ。じゃあ、早く食事を済ませないと」

「そんな事はないよ。あそこからの最寄駅は各駅停車しか止まらない
んだ。それだとここまで20分以上かかる。で、駅からここまで10
分だ」

「30分はかかるならゆっくり食べても大丈夫だね」

「そうですね。ただ、残り香で響さんがいいなって言いそう」

「あゝ……」

容易に想像が出来る。室内に残るポテトの匂い。ゴミ箱にある見
慣れた紙袋。

それらを見て響が「ポテトぐらい残しておいてくれてもいいじゃ
ん」とか言いそうだ。

「ただいま帰りました。意外と混雑していて時間を取られてしまっ

た」

とそこへ翼が帰宅。さつそくとばかりに四人で朝食を取る事に。

「じゃ、手を合わせて……」

「……いただきます」

久々のジャンクフードだけど、だからか意外と美味しく感じる。

ただ、これはたまにだからこそいいのだ。これが毎日なんて絶望するレベルだし。

そうやって食べていると未来がこんな事を言ってきた。

「悪意は力じゃ倒せない？」

「はい……。何となくだけど、そんな事を言われた気がして」

何でも夢でそんな事を誰かに言われた気がするとの事。

夢で、ねえ。これがエルならキャロルかもと思うところだが、未来だと……なあ。

でも、夢ってというのは脳の情報整理みたいなもんだって聞いた事がある。

なら、もしかしてこれは未来が無意識で感じ取った閃きかもしれない。

「でも、実際は私達、力で悪意を倒してますよ？」

「そうなんだよね。だから私も分からなくて……」

はむつとマフィンを齧る未来。どうやら自分でも納得出来ないって感じだな。

「だが、一考の価値はあると思う。私達は悪意の本体と思われる存在と戦い、これに勝利した。なのに、今の現状だ。つまり、純粋な力だけでは悪意を完全消滅させられないと言う証拠だろう」

「そうなるか、どうすればいいんでしょうか？」

「師匠、悪意がゾンダーみたいなものなら浄解出来ない？」

「浄解、かあ……」

良い発想だとは思う。

ただ、あのリビルドギアツインドライブは、そういう意味で言えば十分そういう力を見せていた気がするんだよなあ。

「力じゃ倒せない、か。そうなる必要なのは……愛？」

「何故そこで愛？」

シンフォギアと言えば決め手になるのは「愛」だ。
そういえばGガンでもガガガでも最後は男女愛が勝利の鍵だったっけ。

「……まさか、そういう事なのか？」

悪意は人の負の念の塊だ。

それを倒す。つまり対消滅させるには相対するエネルギーや存在、正の念が必要だとすれば理解は出来る。

何で俺に依り代が与えられたのか。どうしてツインドライブが俺にしか起動出来ないのか。

それは、男女で手を取り合う事で悪意へ対抗するためじゃないだろうか？

太古の昔、日本神話でイザナギとイザナミという男女の神が手を取り合って国を創造したように。

男女は陰陽でもある。で、男は陽の立ち位置だったはずだ。なら、余計それが信憑性を増してくる。

悪意は元々ファイネでもある世界蛇の巫女、ベアトリーチエの中にいた。要は陰の立ち位置だ。

そこへ装者達陰の気をぶつけても対消滅は起きないんじゃないか？
陽の気を、男性の力を加える事で打ち倒せるんじゃないだろうか？

だからこそのツインドライブであり、依り代かもしれない。

「その、聞いて欲しい事がある。響達が来たら少しだけ話をさせて欲しい」

俺の表情と声で何かを察したのか三人は真剣な顔で頷いてくれた。ただ光の力をぶつけるだけじゃダメなのかもしれない。

俺も、もつとみんなと手を取り合って戦わないといけないんじゃないか。

そんな事を思いながら俺はポテトを齧る。気のせいかな、記憶にある味よりも塩味がキツイ気がした……。

仁志達の部屋へ響達が合流を果たした頃、根幹世界にあるS. O.
N. G 本部内発令所では……

「あれ？ マリアはどこ？」

「ああ、あの世界に残ってる。先輩は失敗しちまったから、あいつは入念に染めてやるんだとき。それに、妙に抵抗してるらしいな」

「成程ねえ。んじゃ、あたしもそろそろ動くか。大体の場所は分かってるし」

「それはいいけど、大丈夫かよ？ 今のあいつ、歳の割に強いぜ？」

「分かってるさ。だからこそ……」

そう言って奏は怖い笑みを浮かべた。

——染める愉しみがあるってもんだろ？

——はっ、違いねえ。

同じ笑みを見せ合う二人。

一方、マリアはと言えば、闇の繭を愛おしげに撫でながら恍惚の笑みを浮かべていた。

「ふつつ、感じるわ切歌。貴方の寂しさ、悲しさ、苦しさを。ああつ、とつてもいい。とつてもいいわあ。その感情を殺す事なく出しているきなさい……」

目を閉じて熱っぽい吐息を漏らすマリア。そのまま彼女は闇の繭へ向かって囁くのだ。

——貴方を置いていった調への不満をぶつけていいの。今頃仁志達と幸せになってる調を憎んでいいのよ。いつも一緒だった貴方をこんな暗く冷たい場所へ置き去りにして、明るく温かい場所で笑っているあの子を恨んでいいの……。

その言葉に繭の中で胎動が起きる。その鼓動を聞いてマリアは、いや悪意はほくそ笑んだ。

——やつと堕ちた……。

ドクンドクンと脈打ち始める闇の繭。その中で眠る暁の名を冠していた少女は……

——ズルいデス……。調だけ、調だけししよー達と幸せになんて……絶対許せないデス……。っ！

その名前に似つかわしくない表情を浮かべ、まるで呪詛のように調
の名を呟き続けるのだった……。

ギザギザギラリ☆フルスロットル

闇の道となったゲート内を通って、俺達は調の案内でゲームで言う
“先覚の協力者”の舞台となった平行世界へやって来ていた。

未来のアイギスとジュエルの合わせ技なバリアのおかげでヴェイ
グの鼻も前回程酷い状態にはされなかったが、それでも即座の感知は
不可。

なのでとりあえず調が切歌と別れたという場所を目指す事に。

「切ちゃん、無事でいて……」

「調ちゃん……」

「仁志さん、ここは移動力を重視して私と月読をライダーギアへして
ください」

「そうだな。念のため、響と未来はエルとヴェイグと一緒に後から合
流してくれ。俺は翼達と先行するよ」

「二「分かりました（分かった）」」

翼の提案に乗って俺は風月コンビをライダーギアへとドライブ
チェンジ。

二台の新サイクロン号となった二人のアームドギアに思わず感嘆
の息を吐いてから、俺は翼の後ろへと乗った。

「いくぞ月読」

「はい」

唸りを上げるエンジン音。すぐに二台のバイクは凄まじい速度へ
と加速していく。

俺は振り落とされないように必死に翼へしがみつくなかない。

「それで月読、どの辺りだ？」

「もうすぐです。この速度ならもう見えてきます」

そんな中でも平然と会話出来る二人は凄い。

ギアがあるからだとは思うけど、本当に仮面ライダーみたいだ。

「あそこです。あのビルとビルの間隙間で別れました」

「よし、減速するぞ」

その言葉からあつという間にバイクは速度を落としました。

やっぱり、これって既存の技術じゃ無理だよなあ。

どれだけの速度が出ていたか分からないバイクがあつさりと急停止もせずに静かに止まり、俺は改めてツインドライブとギアの凄さを感じた。

「……いない」

「やはり、か」

ビルの隙間というか、室外機を置いてあるようなスペースの道に切歌の姿はなかった。

おそらくだがもう悪意の支配下にされてしまったのだろう。

僅かな可能性として今も逃げ続けているというのもあるが、それがどれだけ有り得ないかを二人も分かっているはずだ。

「もしかしたら、まだどこへ逃げ続けているかもしれない。悪意が切歌を追跡出来るからって絶対に捕まえられると決まった訳でもない。希望を捨てずに探そう」

「そう、だね。でも、一体どこから探すべきか……」

「なら、まずは響さん達と合流しませんか？ 切ちゃんだけならいいですけど、マリア達までいたら……」

「だな。じゃ、とりあえず」

来た道に戻ろうと、そう言おうとした時だった。

依り代から通知音が鳴り響いたのだ。

嫌な予感がして取り出してゲームを起動すれば、ステータスが更新されたとの文字。

限りなく見たくないけど、そういう訳にもいかないので見てみる事に。

「……やっぱりか」

切歌のアイコンがイグナイト状態になってる。

どうやら今彼女は闇に墮とされたらしい。

「仁志さん、暁の事？」

「ああ。イグナイトになってる」

「切ちゃん……」

「こうなるとここに切歌だけと言うのは有り得ないな。」

切歌だけを放置して帰還するとは思えない。

こういうものの定番は、かつての味方同士で争うのをどこかで眺めるか、共になって戦うかだ。

「翼、調、きつと切歌の傍には誰かいる」

「うん、おそろくマリア……」

「きつとそうです。私を追い駆けてきたし、切ちゃんが言う事を聞くだろうから」

「さすがに三人とは思えないし、俺もマリアの可能性が高いと思う。ただ、もし二人で行動されるとエル達が危ない」

「うん、響さんと未来さんだけなら何とかなくても、エルを守りながらは難しい」

「ヴェイグがミレニアムパズルを展開すれば安全は安全だが……」

「とにかく、今は合流を急ごうか」

俺達は再びバイクで移動開始。すると程なくして響達と合流を果たせた。

ただ、四人も切歌の事を聞くと表情を曇らせた。

更に傍に悪意が最低一人はいると言うとその顔が陰しくなる。

「マリアさんが……」

「あくまで可能性が一番高いんじゃないかってだけだよ」

「それでも私もそう思います。切歌ちゃんを闇に染めるにはこれ以上ない相手だし」

「うん、そうだね。只野さん、これからどうしますか？」

「向こうもこっちが来てるのは把握してるはずだ。なら、下手に分散するよりは……」

考える。どうすれば相手の奇襲などへ対応出来るかを。

出来ればこっちが気を配らずともいい方法が理想的だ。

時代劇に出てくる鳴子とかだな。でも、そんな物は用意出来るはずもないし……。

「……あっ」

ならこっちのパッシブスキルかアビリティで対処しよう。

即座に俺は四人をリビルドギアヘドライブチェンジ。

「これは……リビルド?」

「師匠、どうしてこのギア?」

「悪意が九人揃ってこれになっただけで苦しんだら? なら、半分近い四人でも平気には感じないんじゃないかなって」

リビルドギアの光の波動みたいなものなら、少なくとも無反応とはいかないんじゃないか。

それが俺の出した考えだった。みんなもそうかもしれないと同意してくれ、そのまま切歌を探す事に。

ヴェイグもゲート内の影響から脱して嗅覚が戻っており、俺とエルにヴェイグを中心にした集団はゆっくりと周囲を見回りながら切歌の搜索を開始したのだ。

「あの明るい切歌お姉ちゃんまで闇に染めるなんて……」

「翼でさえあの短時間で染めてみせたからな。時間をかければ切歌がそうなくてもおかしくない」

若干落ち込むエルへヴェイグが冷静に述べる意見に俺も頷く。

いくら前々から仕込んでいたとはいえ、意志力の強い翼さえほんの少いで闇へ堕としたんだ。

根っから明るくて強い心の切歌が相手でも、じっくりと時間をかければあの時の翼以上出来るんだろう。

「切歌が出て来たらその主な相手は調にお願いするとして、問題は随伴員だ」

「マリアが有力だと考えてるけど、もし雪音や奏なら……」

「奏さんでも私が相手します。ただ、クリスちゃんの場合は……」

「遠距離戦、か。じゃあ私が頑張って抑えてみる」

「切ちゃんは私と翼さんならいいんじゃないでしょうか? 響さんと未来さんのコンビなら余程じゃないと押し負ける事はないと思いますし」

「そうだな。仁志さん、それでいい?」

「正直戦闘に関してはそっちの方が慣れてるからね。四人が納得出来るなら俺からは特にないよ」

俺の指揮経験なんてスパロボ程度が関の山だ。

今まで上手くいってるからってずっとそうだとは思わないし思えない。

基本は戦い慣れたみんなの意見を尊重して、時々俺は疑問に思った事や浮かんだ考えを聞いてもらうぐらいがいいだろうし。

先頭を翼と響、最後尾を未来、調は中団で俺達と一緒に歩く。

あてもなく探すのなら、分散するべきだとは思う。ただ、既に切歌が悪意に飲まれてしまった以上、それは悪手でしかない。

「ヴェイグ、どうだ？」

「……とても嫌な匂いが二つ、こっちへ向かってきてる」

ヴェイグの言葉に全員が息を呑んだ。

「ど、どこからくる？」

「……上だ！」

「「「「つ!?!」「」」」」

ヴェイグが目を見開いた瞬間、俺達は一斉に上を見た。

そこには色を無くした空や雲があつたが、同時に何かが降り注いでくるのも見えた。

「させないっ！」

未来が瞬時にアイギスの力にカーバンクルの力を掛け合わせたバリアを展開。

それらが降り注ぐ刃や光線を弾いていく。それにしても、光線か。

「立花っ！ マリアは任せたぞ！」

「はいー！」

「月読っ！ 行くぞっ！」

「はいっ！」

バリアから飛び出していく三人。未来は上を見つめて苦い顔をしている。

俺やエルも上を見つめて、そこに予想通りの相手がいる事を確かめた。

「切歌お姉ちゃん……姉様……」

上空には漆黒のイーヴィルギアを纏った二人の装者がいた。

その眼差しはこちらを見下すように冷たい。

「エル、辛いかもしれないが今は……」

「はい。二人を元の二人に戻すために僕も出来る事をします」

「ああ、それでいいぞエル。俺もセレナと会うために頑張る」

マスコットな二人だけど、その決意と心は頼もしい。

それにしても、あの二人も浮遊してるのか。イーヴィルギアはもしかして飛行能力持ちか？

もしそうなら厄介だな。基本エクストライブ以外でギアが飛行したのを見た事がない。

ライダーだって空を飛ぶ怪人には苦労させられたし、リビルドギア ツインドライブだって空は飛べないからな。

それでも響達は果敢に向かっていく。それをどこか馬鹿にするようにマリアの体を使っている悪意が笑う。

「無様ね貴方達。こうやって空も飛べないなんて」

「マリアさんを返せっ!」

「返す? 何を言っているの? 私は自分の意思でこうしている。仁志を夫として、エルを娘にするために」

「そんなマリアさんじゃ仁志さんもエルちゃんも喜びませんっ!」

「ふんっ、現実が見えてないようね。そんな言葉で今の私は止められないわ」

響の言葉へ吐き捨てるように返すと、悪意の背中に黒い翼のような物が出現する。

あれは……もしかしてガングニールのマント?

「っ?! あいつ、もしかしてダブルドライブ状態なのかっ!?!」

依り代のないガングニールをイーヴィルギアと共に展開してる可能性がある。

もしそうなら、あの悪意は強敵だ。下手すればリビルドギアツインドライブさえも上回る。

「響っ! 気をつけろっ! そいつはガングニールギアを併用してる可能性があるっ!」

「分かりましたっ!」

「さすがに気付くか。でも意味はないわっ!」

黒い翼を使い、自由に空を飛ぶ悪意。

その機動に響が翻弄される。チラリと見れば翼と調も切歌相手に苦戦していた。

というか、切歌さえも羽のような物が見える。どういう事だよ、あれ。

「エル、マリアの方はガングニールってまだ納得出来るんだけど、切歌のあの黒い羽はどう思う?」

「……分かりませんが、どこことなく切歌お姉ちゃんの方は姉様の物よりも邪悪な印象です」

「そうだな。実際マリアよりも切歌の方が匂いはキツイぞ」

二人の意見を基に考える。おそらくだが、あの飛行能力は悪意が与えたものだ。

そうなるとマリアはギアを応用している可能性が高い。

対する切歌はイガリマにそういう能力がない以上、ギアを応用して云々は考えにくい。

じゃ、あれは悪意そのものが羽のようになっていてと考えた方が自然、か。

「只野さん、私も響の援護を始めます」

「分かった。じゃあ、俺達はどこかの物陰にでも隠れるよ」

「お願いします」

エルの体を抱えると同時にヴェイグが消える。それを合図に俺はその場から手近な建物へと身を隠した。

「この時間停止状態、ある意味でデイバイディングドライバーな役割だな」

「そう、ですね。調お姉ちゃん達でも触れないと解除出来ない以上、攻撃で壊す事はありません」

「ああ。そして悪意なんかはその解除さえ出来ない」

「兄様が以前の戦いで発見してくれたおかげで、響さん達も思い切つて攻撃出来てますし、周囲への被害を考える必要もありませんから」

エルの意見に頷きながら、俺は顔を少しだけ出して戦闘の様子を見つめる。

やっぱり響と未来のコンビでも、あのダブルドライブもどき相手は苦戦しているようだ。

翼達の方も切歌相手に苦戦をしてる。いや、あれは何か様子が違う？

何となくだけど、切歌が調を集中的に狙っているような感じだ。

「ここからじゃ何も聞こえないから判断出来ないな……」

だからと言って接近するのは特撮とかだけだ。俺はみんなの邪魔になりたくない。

ただ、依り代の出番となったらその時は迷う事無く突っ走るつもりだけだ。

「兄様、ヴェイグさんが姿を見せてもいいかって」

「ああ、勿論」

「つと、タダノ、一ついいか？」

「どうした？」

エルから出てくるなりヴェイグが俺へ妙な顔を向けてきた。

何だろうと思っていると、ヴェイグは俺のように建物から顔を少しだけ出して切歌を見つめた。

「……やっぱりだ。今の切歌は嫌な匂いが二つある」

「二つ？」

「どういう意味だ？」

「一つはもう嗅ぎ慣れた悪意の匂いだ。で、もう一つはそれより濃い嫌な匂いだ」

「えっと、つまり嫌な匂いに濃淡がある？」

「ああ」

何故切歌だけそうなっているんだ？ しかも悪意の匂いよりも濃い？

もしかして、それがあの黒い羽にも繋がるんじゃないだろうか。

ただ、切歌の感情を大きく闇へ向けさせるものって何かあるか？

あの子は周囲のために能天気であろうとしているような子だ。その心を歪めて、悪意よりも強い闇へ染める事なんて可能なんだろうか？

「……虎穴に入らずんば虎児を得ず、かもな」

小さく呟く。前日もそうだったけど、悪意に染められたみんなを戻すには依り代が必須かもしれない。

そのためにも、俺はまた危険の中へ飛び込まないといけない可能性がある。

……怖くないとは言わないけど、それよりも怖い事が今の俺にはある。

死ぬ事も怖いけど、それを恐れて守りたい人達を失う方が俺は嫌だ。

「ヴェイグ、一応聞いておくな。パズルの中に隔離出来そうか？」

「無理だ。ただ、可能性があるのはマリアだろう。切歌の方は、今のままだと俺一人じゃ抑えきれない。セレナがいてくれれば出来ただろうが……」

「そうか……」

前回やった作戦は現状無理、か。つまり、俺が動くのはそれが可能になった時、だ。

「みんな、頑張ってくれ……」

祈る事しか出来ない自分に嫌気が差すが、今は仕方ないと受け入れる。

「っ!？」

ズキッと、痛みが走る。今度は頭痛じゃなくて昨日負った怪我の部分に。

朝にはもう痛みが引いていたから大丈夫だと思ったんだが、もしかして傷口開いたのか？

「どうかしましたか、兄様。汗が出てます」

「あ、ああ……昨日の傷口が軽く開いたかもしれない」

「大丈夫なのか？」

「まだ分からない。開いたと思ってるだけかもしれないしな」

「え、えっと、何か僕に出来る事はないですか？」

オロオロするエルに小さく笑みを浮かべて、ならばと俺はある事を頼む事に。

「こ、これでいいんでしょうか？」

「うん、十分だよ」

俺の左足に貼られている絆創膏へエルが手を当てている。手当の語源だ。心なしか痛みが和らいでいくような気がする。

「俺もやってやろうか？」

「じゃあお願いするよ」

ヴェイグまで手当てしてくれて、俺はその光景に心が和んだ。

更に本気で痛みが消えるだろうと思える事があった。それは……

「いたいのでいいのとんでけ」

エルとヴェイグがやってくれるおまじない、だ。

気分は本気で父親だった。涙が出そうになるぐらい、嬉しかった。

俺は二人の優しさに感謝しながら響達の戦いを見守った。

自分が動けるチャンスがくるその時を待つように……。

「調ええええっ！」

切歌の憎悪に満ちた声と共に普段以上に鋭く、また禍々しくなった鎌が調へと迫る。

「っ！ これぐらい……っ！」

エクストライブと同等程度の出力を誇るリビルド。それに各完全聖遺物の力を乗せたツインドライブは、本来であればそう苦戦する事はない。

それでも、今の調は若干力負けしていると感じ取っていた。

(切ちゃんの様子がおかしいのは覚悟の上っ！ でも、でも何でこんなにも私だけ目の仇にするの……っ！)

戦闘開始から今まで、一度としてぶれる事なく切歌の狙いは調に固定されていた。

時折翼へも攻撃するが、それはあくまで自衛の範囲であり、積極的に狙うあるいは排除する事はなかったのだ。

「月読っ！」

「っ！ 邪魔するなデスっ！」

「くっ！」

調が押し負けると読み、加勢しようとする翼へ切歌の背にある羽が漆黒の光弾を放つ。

それらを手にした剣で払い、斬り裂く翼だが、止まる事のない攻撃に一向に調へ近付けない。

そう、実は切歌は悪意とタッグを組んでいるようなものだった。

あくまで切歌の体を動かしているのは切歌自身の意思なのだ。

ただし、その意思を悪意によって誘導されてはいたが。

「切ちゃんっ！　お願い！　元の明るくて優しい切ちゃんに戻ってっ！」

「黙るデスっ！　調は、調はっ！　アタシを置いてししよー達と幸せな時間を過ごしてましたっ！　アタシを捨ててっ！　一人だけあつたかい場所で笑顔になつたデスっ！」

「っ!?　切ちゃん、それはっ！」

「憎いっ！　憎いデスっ！　アタシは調が憎いデエエエスっ！」

切歌の叫びと共に背中の中が鋭く、禍々しさを増していく。

切歌の負の念を吸って成長変化しているのだ。

「切ちゃん……そこまで私を……」

悪意による誘導だとは分かっている。それでも、あの切歌が自分をそこまで憎んでいる事が調には衝撃だった。

かつてフロンティア事変の際に激突したのとは意味が違う。

あの時は小さな切っ掛けから切歌が勘違いを起こし、それが巡り巡って戦う事へと至った。

だが、今回は誘導されたとはいえ切歌が調を明確に憎み、殺意を持って戦っている。

その事が持つ意味は調には大きい。これまでケンカもした。言い争う事も、口を利かないようにする事もあった。

しかし、それでもどこかで互いに相手を思う気持ちはあった。それが、今や一方通行となったのである。

「傷付けてやるデスー！　ボロボロにしてやるデスっ！　メチャクチャにしてやるデエエエスっ！」

半狂乱に近い絶叫をし、切歌は調への憎しみを露わにする。

その声に思わず翼だけでなく響達さえも意識を向けてしまう程に。「アタシを、アタシを一人にして、暗くて冷たい場所に置き去りにして、そんな調は、調は……この手で同じ場所に落としてやるデスよっ!!」

「っ!?!」

目を見開いて睨み付けるような切歌へ調は思わず言葉を失っていた。

(切ちゃん……本当に闇に飲まれちゃったんだね……)

あの逃避行で調へ切歌が告げた言葉。したくないという意味で告げた事を、今の切歌は進んでやろうとしている。

だが、それで調は覚悟が決まった。最後に切歌の告げた言葉に想いを同じくしたのだ。

「分かったよ切ちゃん。そうだね。一人で辛い所にいたんだから私を憎むのも分かるよ。私が師匠達と一緒にいた時、切ちゃんは一人で闇と、悪意と戦ってたんだから」

「月読っ!?! 何をしてる! ギアを展開し直せっ!」

両手をゆつくりと広げ、調はギアを解除して切歌の前に立つ。

敵対する気もなければ抵抗するつもりもないと示すように。

「今更何のつもりデスカ。そうやってアタシを騙す気デスカ?」

「ううん、違うよ切ちゃん。ごめんね切ちゃん。一人で辛かったよね。

私も、その暗くて冷たいものを一緒に飲み込んであげたいんだ」

一人にされた事。それが切歌が闇へ堕ちる切っ掛けだ。

そう調は感じ取り、切歌が抱えてる闇を減らそうと決意した。

しかし、それを周囲が止めないはずはなかった。

「調ちゃんっ! ダメだよっ! そんな事したら調ちゃんまでっ!」

当然響など考え自体へは理解が出来ても納得出来なかった。

「響っ! 前っ!」

「っ!?! マリアさんっ!?!」

「余所見とは随分と余裕ね」

未来の声に響が気付いた時には、既に目の前に色黒のマリアの顔があった。

その表情は不敵に笑みを浮かべていて、響は直感的にダメージを覚悟した。

だが、悪意はニヤッと笑うと響の腹部へ手を押し付ける。

「っ!？」

(な、何っ!? 何か体に……この感じはっ! 不味いつ!)

痛みなどもほとんどないそれにおぞましい何かを感じ取った響は、かつてマリスシードと呼ばれる物を埋め込まれたのに近い感覚だと思いつ出した。

「未来っ!」

即座にギアを解除しながら未来の名を呼ぶ。

そうなった瞬間、悪意は苦い顔をしてその場を離れた。

それと時をほぼ同じくして響の胸から下を鮮やかな閃光が貫いた。

「響っ! 大丈夫っ!？」

「ありがと未来……。今の、ちよつと危なかったよ」

「やってくれる……っ!」

ギアペンダントを効果範囲から外しながら、未来は響の体へ入り込もうとしていた悪意の種を神獣鏡の光で貫いてみせたのである。

さしもの悪意の種も根付く前なら神獣鏡の光に耐えられるはずもない。

この辺りも翼や調の話を聞いていたからこそその判断だ。

ギアを再展開させ、響はツインドライブとなるのを見て一瞬だけ笑みを浮かべた。

(仁志さんはやつぱり私達を常に見てくれてるんだ)

グツと拳を握り締め、響は悪意を睨み付けた。

「私達を争わせようとしてるのは分かってる! もう、簡単には闇に染まらないっ!」

「私達の気持ちや想いを好き勝手にさせないからっ!」

「ふんっ、言ってなさい。それに、こちらの目的は果たせたもの」

「? っ!?! 調ちゃんっ!」

何故自分が悪意にしてやられそうになったのかを思い出し、響は視線を調の方へ向ける。

そこには切歌の背にあつた羽を横していた悪意に包まれていく調の姿があつた。

翼は切歌と戦闘中であり、それを阻止する事が出来ないでいた。

「暁っ！ お前は、お前は本当にこれでいいのか!？」

「とーぜんデス！ これで調もアタシと同じ事になります！ やつと、やつとアタシと調を同じ目にあわせられるデスよ」

「そこまで悪意に、闇に見初められてしまったか……っ！」

悔しさと悲しみが怒りに変わって翼の力となる。

上位世界での日々で、翼はこれまで深く関わる事の出来なかつた切歌と調の持つ様々な顔を知つた。

学院では先輩後輩の関係となる事もなく終わってしまったため、日常の二人を、普段の二人を見る事も知る事も中々出来なかつたためだ。

（お前はあれ程明るく、どんな時も誰かを楽しませようと、笑顔にしようとしていた！ 月読との依存性のある関係を進化成長させ、正しく手を取り合つて支え合えるようになっていた！ それなのに、それさえも悪意は、闇は、こうも変えてしまふのかっ！）

エルフナインを相手に姉のような振る舞いをするようになった後は、翼も感心するようになぐらいに切歌も調も頼もしい面を見せていた。

奏と二人で旅行先で行動を共にした時は、その無邪気さにも似た素直さに自然と笑みが零れてしまう程だった。

その事を思い出して、翼は怒りを力へ変えて刃を握る。

「暁っ！ お前のその陰我、私が断ち斬つてやろうっ！」

その言葉と共に翼のギアが金色の光を放つ。

その眩しさに切歌が思わず顔をしかめた。

「ま、まぶしーデス……」

「この剣は、敵を斬るのではない！ この刃は、闇を斬るためにあるのだっ！」

「黙るデスっ！」

「黙るものかっ！ 暁っ！ 私はお前を信じているっ！ その在り方

を、心の光を、暁切歌を信じているんだっ！」

「ぐっ!?」そ、そのまぶしーのを止めるデスっ！」

翼の心の光に切歌の心が呼応するように、ギア同士がぶつかるとだけ金色の輝きが生まれる。その度に切歌のギアが軋み、表情が歪む。

きっとここに仁志がいれば息を呑んだだろう。それはある意味でとある作品での黄金騎士に酷似していたからだ。

一方、仁志達は遂に動き出そうとしていた。

「ホントなんだな？」

「ああ、今の切歌なら隔離できる」

「兄様っ！」

「依り代を使って切歌を元に戻す！ エル、ヴェイグ、行こうっ！」

「はい（おう）っ！」

悪意が調を染めるために切歌から離れた事により、ヴェイグ単体でもミレニアムパズルでの隔離が可能となった。

それを聞いて仁志は動くならここしかないと踏んだのだ。

こうして事態は次なる局面を迎えようとしていた。

その頃、とある平行世界に奏の姿があった。

「やっぱりこの世界か……」

奏の目の前にあるのは、時間停止した世界に似つかわしくない可愛らしいドア。

色を失ったかのようなになった世界に不釣り合いなそれは、人の目を忍ぶ様にひっそりと存在していた。

奏がドアノブへ手をかけるも、それは一向に回る事はない。

「ま、そりゃそうか」

あつさりとドアノブから手を離すや、奏はその手にアームドギアを構えて勢いよく突き出した。

それさえもドアを開ける事は叶わない。ただ、奏は笑っていた。

「ははっ、いいねいいね。こうなってから全力を出せないで困ってたんだ。セレナ、あんたの心のドアを相手に存分に力を振るわせてもらうよ」

そう言い放つと奏はその身に溢れる力をアームドギアへ集中させ、ドアへ向かって何度も攻撃を繰り返し始める。

その重たく沈むような攻撃の振動にセレナはただ一人で耐えていた。

(大丈夫……。きつと、きつとエルがお兄ちゃんを連れて助けに来てくれる……。っ！)

たった一人、孤独に震えながらセレナはかつてのヴェイグに似た環境でいつか来る助けを待つ。

以前であれば耐え切れなかったかもしれない状況で、セレナはあの上位世界での暮らしから得た強い心でただただ助けを信じ続けた。

——エル、お兄ちゃん、ヴェイグさん、私、待ってるからね。

「っはあ……。はあ……」

「響、大丈夫？」

少し息が上がってきてる響へ声をかけつつ私はマリアさんを、ううん悪意を警戒する。

とても不気味で怖い漆黒のギア。只野さんはイーヴィルギアって呼んでるそれを纏う悪意は、多分だけあのダブルドライブに近い状態みたい。

ガングニールをベースに悪意がギアとなって装着されてるせいか、リビルドギアツインドライブでさえ互角がやっただ。

「う、うん。でも……」

「分かってるよ。攻撃当てると力が吸われるみたい、なんでしょ？」

「分かってるんだ。さすがだね、未来」

響が何度か攻撃を当てる度に顔を顰めるのが見えたからそうじゃないかなって思ったんだけど、どうやら間違ってたみたい。

こうなると、間違いなくあの状態のクリスや奏さんを相手にするならツインドライブじゃないと不味いね。

特に響は直接自分の手で触れるからかもしれない。

それにしても悪意がリビルドギアにさえ対応してきている事に恐怖を感じる。

これ、今度決戦になった時、私達に有効な手段、あるのかな？

「中々やるじゃない。さすがコンビを組むと一番強いかもしれないと言われるだけあるわね」

「マリアさんのような顔をするなっ！」

響と気持ちを合わせる。もう私達は知ってるから。

それに私はああなつてた時があるから余計に。

自分で喋る時なんてあるようでない。あれもマリアさんの意思で言ってる事じゃない。

響が言うには、クリスを真似た悪意はシエム・ハの名前を出したらしいけど、たしかにあれに近い。

ぼんやりと自分の意思はある。見ているものや聞いているものを認識出来ない事もない。

だけど、それが全部ばやけてるんだ。なのに時々それが消える時がある。それは、私の心を良くない方へ転がせる時だけ。

「私は私よ。マリア・カデンツァ・イヴよ」

「違うつ！ マリアさんなら切歌ちゃんと調ちゃんを戦わせないっ！」

「お願いですマリアさん！ 悪意にいいようにされないで！ 心を強くもってっ！」

「ふふっ、何を言っているの？ 私は心を強くもっているわ。それに、切歌と調はやつと一緒になれるのよ？」

「っ！」

思わず奥歯を噛み締める。響も拳をキツク握ってた。

こつちを馬鹿にするみたいな声と顔。やつぱり悪意だ。マリアさんへ私達の声が届いてないみたい、だね。

「響……」

「何？」

悪意から目を逸らさず隣の響へ小声で声をかける。

「やつぱりマリアさんを戻すには依り代の力が必要なのかも」

「……そう、かもね。私の声が未来へ届いたのは、元はと言えば仁志さんが依り代を使ってくれたおかげだし」

きっと只野さんもどこかでそう思ってるはず。なら、きっとまた無茶な事をする。

その時、今度は私が守ってみせる。傷付けてしまったからこそ、今度は守る力として。

「でも、もしかしたら依り代なしでも届くかもしれない。ううん、届かせてみせるっ！」

「響……」

らしいなっ、そう思った。

拳を握って悪意へ向かっていく背中を見ながら、私もそれを届かせるために手助けする。

あの頃は出来なかった事だ。

響は、私へこれからは一緒に戦おうって言うてくれた。おかえりって言うてくれた。

もう今の私は出迎えるだけの存在じゃない！ 響と一緒に誰かへ手を差し伸ばせるようにもなったんだっ！

「届けええええええっ！」

「無駄な事を……」

響の言葉を悪意が鼻で笑う。

でもその表情が一瞬で驚きに変わる。

響がどいた瞬間、私の放った閃光が現れたからだ。それを何とか避けて悪意が私を睨んだ。

「小癩な真似をっ！」

それで確信出来た。やっぱりそういう事なんだ。

「響っ！ やっぱり神獣鏡の攻撃は痛手にはならないけど効果はあるみたいっ！」

「分かった！ 行くよ、未来っ！ マリアさんをここに釘付けにするっ！」

「うんっ！」

詳しい話はいらない。打ち合わせもしない。それでも、今の私と響は通じ合ってる。

だって見えたから。切歌ちゃん達の方へ向かう男の人の姿を。

エルちゃんを抱えて懸命に走る、初恋の人が。

きつとあつちは大丈夫。切歌ちゃんと調ちゃんの事は、翼さんと只野さん達に任せよう。

「だからっ！」

私と響でマリアさんを、悪意をここに足止めする。

向こうの邪魔はさせない。させる訳にはいかない。

「うおおおおっ！」

「出来るものならやってみるがいい。私はお前ら如きに止められはしない」

「くっ！…もつと高くへ……」

響の攻撃を上昇する事で悪意がかわす。これも響が苦戦している原因。

空中戦は基本不利だ。相手は上下左右に動けるし、高度だって自由自在。対する響は細かな調整は出来ない訳じゃないけど簡単じゃない。

このままじゃ若干こつちが押されてる。私は飛べるけど、それだって相手程の柔軟性はないし……。

でも、出来ないからって諦めるつもりはない！何か、何か考えないと。響が相手の動きについていける方法を。

「……そっか！」

只野さんが読んでた漫画。そこで似たような話をやってた。

ジャンプ力を活かして戦うライダー。それがそのジャンプ力を使えない空間で戦う事になった時、怪人を倒した手段。それを応用すれば……響も！

「響っ！」

「未来？」

落下しないようにギアの反動で何とか滞空してる響へ接近する。

こつちを響が見た瞬間、私は叫んだ。

「私が足場になるからっ！」

「っ!? でも！」

「今やらないといけない事は私を気遣う事じゃないでしょっ！」

「っ！」

息を呑む響へ私は笑みを浮かべて頷いた。

「ありがとう、未来……っ！」

滞空するのを止めて落下してくる響。その響の足元へ私は回り込んで、アームドギアを展開して足場に変える。

「何？」

ズンッと重さを感じる。けど、これぐらい今の私なら……っ！

「はっ！」

「なっ!？」

「いっけえっ！」

私の押し上げるタイミングと響の飛び上がるタイミングが一致して、凄い速度で上昇していく。

その速度は悪意を超えて、その体を僅かに掠める。これならいける。

だから私は続けて叫んだ。

「絶対拾うからっ！ 響は相手の動きだけ注意してっ！」

「うんっ！ お願いっ！」

響よりは自由に飛べる私が足場役になって、攻撃力に長けた響をサポートする。

それと……

「くっ、忌々しい……」

勿論私だって攻撃出来る時はする。神獣鏡の光で少しでも悪意へダメージを与えれば、それだけマリアさんへ私達の声が、手が、届くはずだから。

「翼っ！ 切歌は一旦俺達に任せてくれ！ 君は調を頼む！」

「仁志さん……」

「ししよー……やっと会えたデス……」

切歌お姉ちゃんの背中にあつた羽が調お姉ちゃんを包んだ事でヴェイグさんが隔離出来るようになった。

だから僕らは今、翼さんと戦う切歌お姉ちゃんの傍へとやってきて

いる。

「切歌、そんな黒ギャルみたいな見た目になって欲しくなかったよ」「くろぎやる？ ししょーは相変わらず色んな事を知ってるデスね。でも、これはこれでイケてないデスか？」

どこか無邪気に笑う切歌お姉ちゃんは、僕の良く知る顔だった。

見た目は大きく異なってるけど、未来さんや翼さん程の乖離を感じない。

「悪くはないよ。でも、俺はいつもの切歌の方が好きだ」

「っ……大好き、デスか」

「ああ、好きだよ。今の切歌も悪くはないけど、普段の切歌がやっぱり一番だ。だから……」

兄様の言葉と同時にヴェイグさんが僕から出てミレニアムパズルを展開する。

翼さんは既に距離を取っていて、今もまだ闇の繭に包まれたままの調お姉ちゃんの傍にいた。

「……よし、これでいい」

「ヴェイグさん、ありがとうございます」

「ああ。ただ、維持し続けるのが厳しいかもしれない。今は大人しいが、切歌が暴れ始めたらどうする？」

「それは……」

さっつきの様子を見るに切歌お姉ちゃんは兄様へは以前と同じような雰囲気だった。

でも、何故か大好きって言葉に若干嫌そうな顔を見せたけど、あれは一体どういう事なんだろう？

とにかく今は兄様を信じて待つしかない。そう思って僕はヴェイグさんと何も無い空間を見つめる。

「っ!? 月読が出てくるかっ!」

そこへ聞こえた声に僕は思わず振り返る。

翼さんの傍にある闇の繭にヒビが生じて、まず腕が出て来た。次に頭、そして体だ。

「調、お姉ちゃん……」

姉様達のように黒い肌となって禍々しいギアを纏った調お姉ちゃんが僕の視線の先にいた。

けど、どこか様子がおかしい。翼さんへ見向きもせず、調お姉ちゃんは僕らの方へ向かって歩き出した。

「っ！ 待て月読！ エル達に手出しは」

「エルやヴェイグには用はありません」

歩みを止めず、調お姉ちゃんはそう返した。僕はこっちへ近付いてくる調お姉ちゃんを見つめる。

すると、一度だけ目が合って小さく頷いてくれた。

「どういう意味だ？」

「私の目的は、切ちゃんです。だから邪魔しないでください。邪魔するなら」

「邪魔するなら、どうする？」

そこで初めて調お姉ちゃんは足を止めた。それと同時にアームドギアが展開されて凄まじい音を上げる。

「翼さんでも切り刻みます。エルやヴェイグだって邪魔をするなら同じように」

「月読……お前は、もしや……」

「ヴェイグ、私をパズルの中へ入れて」

「ダメだ。今の調を入れたら、俺一人ではパズルが維持できない」
「入れて」

「無理だと言ってる」

「……これが最後だよ。パズルに入れて」

「無理なものは無理だ」

「ぼ、僕が手伝います！ それなら、それならどうですか！」

無言で鋭利なノコギリをヴェイグさんへ突き出そうとしたのを見て、僕は慌ててその間へ体を入り込ませて叫んだ。

ヴェイグさんは自分だけではってそう言った。なら、僕が手伝えれば少しは変わるんじゃないかってそう思った。

「……それなら今より少しはマシか」

「じゃあ」

「待て。ただ、それはエルもパズルの負荷を背負う事だ。それでもいいのか？」

「構いません。それで、お姉ちゃん達を元に戻せるのなら」

「エル……」

翼さんが僕を見て驚いたような顔をしてる。

もう僕は見てるだけじゃない。今、僕に出来る事を精一杯やるんだ。それが成長に繋がるって、そう兄様は言ってくれたから！

「ヴェイグさん、一緒に頑張りましょうっ！」

「……分かった。ただ、限界だと思っただら言え」

「はいー！」

諦めるようなヴェイグさんだけど、最後に言ってくれた一言には優しさを感じた。

姉さんみたいには出来ないかもしれないけど、僕にだって多少はやれるはずだ。

「調お姉ちゃん、今、ドアを出します。そこから中へ入ってください」
「うん、分かった」

ヴェイグさんの言葉に従ってドアをイメージする。すると、本当に調お姉ちゃんの前にドアが現れた。

そこを開けて調お姉ちゃんは中へと入る。それを見届けて僕はドアを消した。

「エル、月読はもしかして……」

「きつと、切歌お姉っ!？」

ギシリと、僕の中で音が聞こえた。それと共に体を何とも言えない脱力感が襲う。

「エル、大丈夫か？」

聞こえる声に僕は声に出す事なく心で思う。

「はい、何とか大丈夫です」

「そうか。これが今の切歌と調を入れた場合の負荷だ。辛くなったら言え。無理をし過ぎて気を失うと困るからな」

「はい、ありがとうございます」

正直声を出すのも億劫に感じる程だ。

きつと、ヴェイグさんはパズルの制御に慣れてるからそこまでもないんだろうけど、僕には未知の感覚で体が少しずつ悲鳴を上げ始めてる気がする。

「エル？ どうした？」

「い、いえ、何でもありません。その、調お姉ちゃんは、切歌お姉ちゃんに……近い状態です。っ悪意を、その身に取り込んで……ますけど、制御される……程ではないのか……っ。あ、あるいは、意図して制御下に置かれていないかと……思います」

「そうか。それと、もう喋らなくていいぞ。答えてくれて、ありがとう」

優しい微笑みと共にそう告げると、翼さんは後ろを振り返った。

多分だけど響さん達が苦戦してるんだ。なら、今はそっちへ行つて欲しい。

「っ、翼さん……っ！ 僕らはいいいので、今は姉様をお願いしますっ！」

「………分かった」

辛そうな表情を見せながら、翼さんはそう言つてその場から飛び去った。

僕はヴェイグさんと一緒になってパズルの維持へ意識を集中する事に。

でも、凄く辛い。ギアの補助があった姉さんでさえも世界蛇相手には苦勞していた。

今の僕には、何もない。それでも、それでもやるんだ！

あの時の僕は、何も出来なかった。しようともしなかった。

ただ言われるままに逃げる事しかなかった。だけど、だけど、ただどっ！

「今は違うっ！」

勇気があれば、諦めない心があれば、いつだって奇跡は、希望は、そこにあるっ！

例えギアを纏えなくても、ファウストローブがなくても、僕にはこのキャロルからもらった体がある！ 兄様からもらった言葉がある

！ 皆さんからもらった思い出があるっ！

それに何より……っ！

「僕はっ！ みんなと生きるのを諦めたくないっ！」

こんな負荷がなんだ！ こんな苦しさがなんだ！ こんな辛さがなんだ！

生きてるから負荷がかかるんだ！ 苦しいんだ！ 辛いんだ！

だったら、これさえも生きてる証だ！

もう僕は逃げない！ 諦めない！ 例え何も出来ないでも、勝利を信じる事が、平和を願う事が、力になるって、そう今の僕は知っているからっ！

「ぐっ……ま、まだだっ！」

感じる負荷が大きくなった……っ。

中で何が起きてるのか分からないけど、きつと良くない事が起きたんだと、思う。

兄様、大丈夫だろうか……っ！ お姉ちゃん達ならっ、兄様を……殺す事は、しないだろうけど……っ！

「エル、もういい！ これ以上は危険だ！」

ヴェイグさんの声が聞こえる。けど、今僕が止めたらヴェイグさんがどうなるかも分からない。

「だとしてもっ！僕は最後までヴェイグさんと一緒に戦いますっ！

これが、僕に出来る精一杯の戦いなんですっ！」

忘れない。あの時の気持ちは。

姉さん達が僕を逃がすように戦ってくれている背中を見ながら、ギヤラルホルンへと飛び込んだあの日。

僕だけでも逃げて。そう姉さん達が叫んでくれた事。託された想い。

もう、僕は嫌だ。託されるだけは、守られるだけは、嫌だ！

例えどれだけ惨めで情けなくてもいい。僕は、戦う！ 戦ってみせるっ！

もうっ、大事な人達を目の前で失う事なんてごめんだっ！

——よく吼えた。なら、少しだけ力を貸してやる……。

キャロルの声が聞こえたと思った瞬間、僕の半身が勝手に動いて何かを空間の中から呼び出した。

それが僕の体を包んでいく。これは……ファウストローブ？
それも、キャロルのダウルダブラだ！

「え、エル、それは何だ？」

「……僕の、一番大事な相手からの借り物です」

「一番大事な相手……？」

不思議な力が湧いてくる。キャロル、やっぱり君は僕の中にいるんだね。

そつと胸に手を当てて、僕は目の前をキツと見つめる。

キャロルのように戦えないけど、それでも僕に出来る精一杯をやつてやろうと思つて。

「ヴェイグさん、やりましょう！ 今の僕らなら維持ぐらい余裕のはずです！」

「ああ、そうだな。今のエルからは強い力を感じるぞ」

そうだ。今の僕らは二人じゃない。キャロルも入れた三人だ。

三つの心が一つになれば、一つの勇氣は百万パワーなんだから！

「兄様、調お姉ちゃん、切歌お姉ちゃん。次に会う時は笑顔を見せてください……っ！」

小さく呟いて僕はパズルの維持へ全力を注ぐ。

あの平和な日々で出来た、僕の新しい家族達へ祈りを込めるように……。

「調……っ！」

「切ちゃん……っ！」

どういう事だ？ 何で調がつて、そう思っていたのも束の間、俺の目の前ではザババの二人が睨み合うようにして互いのアームドギアで火花を散らしている。

切歌を何とか言葉で説得して近付き、依り代でその悪意を取り除こうとしたんだが、不思議な事に依り代が切歌には反応しなかっただ。

——あ、あれ？

——ししよー、どうしたデスカ？ 早く大人のキスするデスよ。エツチなキス、教えて欲しいデス。

ま、まあ説得というか何とかな内容ではあったけど、接近して密着するまで出来たのに、だ。

で、どうすればいいんだと、そう思って頭を抱えなくなった俺へ切歌が強引にキスをしようとしたところに、黒ギャル化した調が登場となって現状へ至る。

「どうして、どうして邪魔するデスカ！ アタシとししよーがやつと二人きりになれたデスのにっ！」

「分からないの？ どうして私が切ちゃんを止めに来たのか！ どうやって今みたいになっても私そのままでいられるかっ！」

その調の言葉にハツとした。

そうだ。どうして切歌も調も未来や翼のように悪意らしくない雰囲気のままなんだ？

こればかりは悪意の演技やら芝居じゃない事ぐらい俺にも分かる。

じゃないと俺の言葉にあそこまで素直な反応を返さないし、依り代を押し付けるはずの俺に自分から接近してこない。

「何を言ってるデスカ！」

「今の切ちゃんをそうしてるのはっ！ 私への嫌な気持ちだから！」

私を包んだ悪意は全部切ちゃんへの憎しみや恨みを持ってって迫ってきた。こんな暗くて冷たい場所へ私を追いやった切ちゃんを許すなっつて！」

そういう事か。つまり、切歌に関して悪意はこれまでのやり方を変えたんだ。

自分が主導権を握ると依り代によって強制剥離されると知って、ならばと剥離されない方法を探った。

それが切歌自身の思考誘導。これまでもクリスやマリアにやってきた事の強化版だ。

主導権を切歌自身が握り続けるから依り代で元に戻す事は不可。

だけどギアへは影響力を発揮して、イーヴィルギアへ変質させる。
で、それを調も受けてあぁなっている訳、か。

「つて、ちよつと待て！　じゃあ今二人は!?!」

互いを憎み合っている状態じゃないかつ！

「なら分かつてるデスね！　今つ！　アタシがどうしたいかつ！」

「分かつてるよ！　今つ！　切ちゃんはどうしたいかつ！」

「調ええええええ（切ちやああああん）っ！」

どこかで似たような光景を見た事があると思つたら、これ、まんまGの時の衝突になりつつあるじゃないか。

あの時はお互い正気のままでの対決だったけど、こっちはそれより性質が悪い。

何せ互いへの憎しみが……ん？

「さつき、調は妙な事言つてたな」

たしか、今の切歌をそうさせてるのは自分への嫌な気持ちだつて、そう言った。

それを切歌は否定しなかったからある意味事実なんだろう。

でも、それっておかしくないか？　こう、何て言うか、調なら嫌な気持ちなんて言わずに嫌悪感とか、あるいは憎悪とか表現出来そうなのに。

「……………憎悪、か」

ふと思ひ出すのはそれを使ったクウガのサブタイトルだ。

あれで漆黒の姿で黒い目のクウガが初登場だった。

「ん？　何だ？　何か引つかかる……」

俺は今まで見た悪意に飲まれたみんなの姿を思い出す。

未来も翼もマリアも切歌も調も、みな同じように禍々しいギアを纏い、際どいインナー姿だった。

でも、調と切歌は何かが異なっていた気が、する。

「……………あつ！」

気付いた。二人だけ、あの禍々しいギアなのにマイクユニットがあつた。

あれつて、つまりそういう事だよな。まだザババの二人はシンフォ

ギアのままの部分、残ってるって事だ。

多分だけどそれが主導権を切歌と調へ与え続けている証拠なんだろう。

もしくは、悪意が主導権を握るには依り代の力を完全に沈黙させるしかないんだ。

そして、切歌と違って調は短時間故に思考誘導が完全じゃない。

だから調は切歌へ強い言葉を使わないんだ。

「なら俺にも出来る事はある！」

俺は依り代の画面をステータスからメインへ戻し、ミュージックボックスをタップする。

そしてソート機能で調と切歌を選択し、二人が使える曲を表示させた。

「どこだ？ どこにある？ ……あつたっ！」

目当ての曲を見つけ出して、俺はそれをタップする。

「っ?!」

すると予想通り二人のギアから音楽が流れ始めた。状況には少し似合わない明るくアップテンポな感じの曲が。

そのタイトルは「ダイスキスキ」だ。

「調っ！ その歌を唄ってくれ！ 切歌の心へ君の歌声に乗せた想いをぶつけるんだっ！」

「師匠……」

「切歌は黒い目の状態だけど、君は赤い目の状態のはずだ！ なら、塗り替える！ 黒い太陽に暁の光を取り戻させるんだっ！」

「……うんっ！」

調の声が流れている歌と重なる。当然それからは切歌の歌声も微かではあるが流れている。

まるで切歌の良心が歌っているかのようだ。調は二つの声に想いを乗せて、自分への憎しみを燃やして迫る切歌へと向かっていく。

「くっ……その耳障りな歌を止めるデスっ！」

心なしか切歌の動きが鈍り始めた気がする。

相手をする調は歌声を震わせる事もなく、切歌の攻撃を全て捌いて

歌い続けていた。

「止めろって言ってるデエエエスツ！」

鎌の刃の部分が巨大化し、しかもそのまま切歌が思い切り振ると調へ向かって飛んでいく。

あんな巨大な状態にして投げ飛ばすとか真ゲッターかよ！

「くっ！」

さすがにそれには調も歌を中断するしかなかったらしい。

二つの回転刃で受け止めて弾き返したけど、既に切歌はそこにはいなかった。

「いないっ!?!」

俺と調の声が重なる。慌てて周囲を見回すけど切歌はどこにもいない。

「……そうっ！」

そんな中でも調はすぐさま切歌の位置に気付いたらしく、お返しとばかりに回転するノコギリを無数に上へ向けて射出していく。

「こんなもん、ナンボのモンデスっ！」

そう言っただ量に迫る回転ノコギリを手にした鎌で薙ぎ払うように切り刻んでいく様は、まさしく死神。

魂まで刈り取るイガリマの装者らしい感じがした。ただ、見た目が黒いせいで本気で死神っぽいけど。

けれどそこへ調がノコギリを射出しながら接近していく。それに気付いて切歌が表情を険しくした。

「アタシの邪魔ばかりしてっ！ 調なんて大っ嫌いデスっ！」

その言葉に若干調が表情を歪ませた気がしたけど、それでも彼女は意を決したように……

「それでも私は大好きって言い続けるっ！ 好き過ぎるぐらい、切ちゃんの事を大好きだからっ！」

「っ!? 大好きなんて言うなっ！」

思わず絶句。そこまで同じ言葉を返すのかつて、そう思った。

だけど、切歌もそう言った後で息を呑んだみたいな顔をした。

多分フロンティア事変の時の事を思い出したんだろう。

「思い出した？ 私、あの時も言ったはずだよ。切ちゃんの事、大好きだって」

「し、らべ……」

「何度でも何度でも言うよ。切ちゃんがどれだけ私を嫌っても、遠ざけても！ それでも私はっ！ 切ちゃんが大好きだってっ!!」

「っ!?!」

切歌が怯んだ。間違いなく調の声に初めて弱気になった。

「憎んでくれていい！ 恨んでくれて構わない！ それで切ちゃんの気持ち、心が晴れるならっ！」

「しら、べ……」

「私だけがみんなと一緒にいたのは事実だから！ 切ちゃんを置いて、一人だけあつたかい場所で幸せになつたのは事実だからっ！ だから、だからごめんね切ちゃんっ！ ごめんねっ！」

「し……ら……べえ……っ！」

ゆっくり切歌へ近付き、最後には抱き締める調。

俺からは見えないけど、声の感じから察するに泣いてるんだと思う。

対する切歌もその顔が歪んでいる。

「えっ？」

そんな時、依り代が鳴った。画面を見るとステータスが更新されたとのメッセージ。

一体何だと思つてステータス画面を開いて、おそらく切歌や調だと思つたので、まず切歌のアイコンをタップ。

「……これって……」

そこにはあのロボと合体する事でしかなれないはずのギアが追加されていた。

続いて調のアイコンをタップすれば、そちらにも同じギアの追加が確認出来た。

「……………よし」

物は試しとばかりにメカニカルギアをタップ。だが、一向に変化が起きない。

「もしかしてまだ悪意の支配下から脱してないからか？」

「だけど、それなら何故追加された？」

「と、そこで思い出す。あれは切歌ロボや調ロボと合体する事で可能になったギアだ。」

「それがいない今、依り代からの遠隔で出来るとは思えない。」

「外部的なエネルギーでなったんじゃないかと、あれは明確な付属物があつての変化だからだ。」

「なら、それを可能にするとしたら……互いのギアにくつついてる悪意を利用するしかない！」

「一種のダブルドライブだっ！」

「よしっ！ やあああああつてやるぜっ！」

「気分はもう獣を超え、人を超え、神を超えるアレに乗るキャラな感じだ。」

「俺は依り代を片手に涙を流しながら抱き合う二人へと駆け寄っていく。」

「すると当然のようにその音に気付いて二人が体を離してこっちへ顔を向けた。」

「二人共、悪意を、イーヴィルギアを利用するぞっ！」

「えっ？」

「光と闇を繋ぎ合わせてくれっ！」

「依り代を二人の間へ差し込むと、予想通り光り始める。」

「その輝きが二人を包み込んで俺の前から姿を消す。」

「だが、調と切歌の声だけは聞こえてきた。」

「切ちゃん、これ……」

「あつたかいデス……」

「うん、あつたかい」

「……調、アタシ、バカだったデス。調はアタシの頼みを聞いてくれたデスのに、それを……」

「ううん、いいの。あのね切ちゃん。私、師匠のお母さんとお父さんに会ったんだ」

「何デスと？」

「そこで、思ったんだ。このあったかい場所にずっといたいって。切ちゃんの事を一瞬忘れちゃうぐらいに」

「調……」

「だから、おあいこ。私も切ちゃんもダメダメだった。それで、許し合おう?」

「……デスねっ! おあいこデスっ!」

二人が互いを許し合った事を切っ掛けにするかのように、光の中から依り代が弾かれるようにして俺の手へと戻ってきた。

そして次の瞬間光が弾けて消えて、俺の目の前にはメカニカルギアを纏った二人の姿があった。

「これは……?」

「メカニカルギア、デスね」

ならばと、俺は早速ツインドライブを起動させる。

すると、二人の姿が変わって……え?

「え? 光竜……?」

「闇竜、デスか……?」

そう、メカニカルギアツインドライブとなった二人は、見事なまでの勇者ロボチックな姿となっていたのだ。

それにしても、どうして光竜が調で闇竜が切歌だ?

もしかしてあれか? 立場的には光竜が姉だから調なのか?

いや、これはあれだ。闇に堕ちたのが切歌で、光を失わなかったのが調だからだ!

と、そこで周囲の空間が元に戻る。で、何故か二人が俺の方を見て驚いた顔をした。

「えっ!? キャロルっ!」

「へっ?」

どういう事だと思って振り向けば、そこにはダウルダブラを纏ったキャロル、じゃない!?

この優しい目付きはエルだ! どうなってるんだ!?

「良かった……。兄様達が無事で」

「エル、その格好は一体どっ!」

どういふ事だつて聞こうとしたら、エルが目を閉じて体を揺らしながら倒れそうになった。

慌てて駆け寄つてその体を支えると、眠っているだけと分かった。

「エルっ!?!」

「大丈夫。眠つてるだけだ。きつとかなり疲れたんだろう」

「ほっ……」

お姉ちゃんズは揃つて息を吐いた。本当にすつかりエルのお姉ちゃんだよな。

「タダノ、悪いが俺も少し休む」

「ああ、エルの中でゆっくり休んでくれ。後は何とかするよ」

「頼む」

疲れたけど、どこか嬉しそうな顔でヴェイグはエルを見つめて姿を消した。

それを合図にしたかのようにエルの体からダウルダブラが外れて良く分からない空間へと消えた。

「ししよー(師匠)」

聞こえた声に目を向ければ、そこには凜々しくこっちを見つめる二人の装者。

「私達でマリアを止めます」

「だから、最後の仕上げはししよーにお願いしたいです」

「分かった。エルのお姉ちゃん二人の頼みだ。必ず叶えるよ」

俺が言った言葉に二人は小さく微笑んで頷くとその場から跳んでいく。

俺はその向かう先へ顔を向け、思わず息を呑んだ。

「……三人相手にやや不利で済むのかよ」

イーヴィルギアダブルドライブはどうやらかなりのポテンシャルを持つているらしい。

今も響達三人を相手に何とか渡り合っている。

俺もあっちへ行かないとな。

「と、その前にと……」

エルの体を優しく抱き上げて歩き出す。

きつとこの小さな体で頑張っていたんだろう。

ダウルダブラをどうやって使ったのかは知らないけど、おそらくエルの中のキャロルが目覚めてくれたんじゃないかな？

「起きた時には、マリアも微笑みかけてくれるようにしてみせるからな」

密かに誓いを立てて俺は顔を上げる。

「二人のお姉ちゃん達が、頑張ってくれるし」

そこではイーヴィルギアダブルドライブ相手に攻勢をかける、白と黒の輝きを放つ竜がいた……。

「な、何なのこの力はっ!？」

アタシ達の攻撃にマリアのフリをする悪意が慌ててるデス。実際、今のアタシと調は凄いと思うデスよ。

声に出さなくても、視線さえ合わせなくても、まるで心が繋がってる感じがしてて、とつても心強いデスから。

響さん達には休んでもらってるデス。今まで頑張ってもらった分、アタシ達が頑張る番デスからっ！

「たった一人で響さん達を相手によくやったと思うデスが！」

「でも、それもここまで！」

「アタシ（私）達二人が揃えば悪意なんかには負けない（デス）っ！」
「くっ！ ほざけえええっ！」

悪意の手にしたアームドギアが展開して、そこにエネルギーが集まってくる。

これは光線を撃つつもりデスね。

でも、無駄デス。それならこつちには……。

「プライムローズの月っ！」

同じような事を、もつと強力に出来る調がいます！

「死ねえええええっ！」

激突するピンクと真っ黒な輝き。互角、デスカ。さすがはダブルドライブデス。

「なら……っ！」

アタシの意思に応じてギアが展開してくれます。

今の悪意は動けません。チャンスデス！

「シエルブルーの雨っ！」

「なっ!？」

クリス先輩のお得意なミサイル攻撃デス！

マリアを痛めつけるようで心が痛いデスが、ここで迷ったら余計悪意がマリアの事を好き勝手にしちゃうデスっ！

「ここだっ！ 最大出力っ！」

って、何デスとおおおっ！

ま、まさかの調は全力じゃなかったデスか!?

アタシのミサイルが当たる直前に調のビームが悪意の攻撃を押し込むように進んで、結果二つの攻撃が悪意へ直撃デス。

……お、恐ろしいデス。本当に容赦ないデスね、今の調。

「切ちゃん、どうしたの?」

「え、えっと、このギア凄くなって思ったデスよ」

誤魔化しながらある意味の本音を言ったデス。

ダブルドライブ相手に互角どころか若干有利デスから。

「そうだね。でも、これはユニゾンしてるようなものだからじゃないかな?」

「ほえ?」

ユニゾン、デスか?

「うん、シンパレートが上がってるんだと思う」

「デデデ!? し、調、今アタシの心を読んだデスか?」

口に出してないのにアタシの思った事へ頷いたデスよ!

「何となく分かった。切ちゃんもきつと出来るよ」

「わ、分かったデス……」

とは言っても調の心を読むなんて……どうすればいいデスかね? とりあえず調の事を考えていればいいデスかねえ。

——今はマリアの体を使う悪意を弱らせないと。ある程度のダメージは……仕方ないかな。

っ?! き、聞こえた、デス。ならっ!

「今はマリアを元に戻す方が重要デスからね！」

「……うん！」

笑みを向け合って二人揃って動き出す。

——上下の動きを私が牽制するっ！

——なら左右はアタシにお任せデス！

どんだん調の考えが伝わってくる。言葉さえもいらなんて凄すぎるデスよっ！

本当に今のアタシ達は同調してるんデスね！　メカニカルギアツインドライブ、凄いでスっ！

「ど、どうしてだ!?　何故声も視線も使わず意思疎通が出来るっ!?」

悪意が動揺してますがアタシ達は何も口にしません。

アイコンタクトを越えた、ハートコンタクトなアタシ達に、
ART TO HEART” なザババの刃に、勝てる者はいないんデスっ！

「はっ！」

「くっ！」

「ほっ！」

「がっ!?　既に回り込んで!?」

「見え見えっ！」

「ぐふっ!?　こ、こんなはずは！」

「そこデスっ！」

「せ、競り負ける、だどっ!?」

「競りもしないっ！」

「しまっ!?」

どれだけ強くても一人きりじゃ勝てないデス。届かないんデスよ。

だからアタシと調は手を取り合っただんデス。あの環境で生きて行くには、誰かと支え合うしかないって分かったデスから。

でも、それだけじゃない。それだけじゃないデス。

始まりはそうでも、今のアタシ達はただ生きて行くために手を繋いでる訳じゃないデスから。

それが分からない悪意に、アタシ達を倒せるはずはないデス。

支え合わないといけない弱さは、支え合える強さでもあるって分からない悪意にはっ！

——決めるよ切ちゃんっ！

——分かつてるデスよっ！

調と手を繋ぎ合って指まで絡める。

「シンメトリカルドッキングっ！」

その言葉にアタシと調のギアがパージされて、一つに合体していきます。

アタシ達はギアインナーになったんですけど、体を守る様に周囲を金色の淡い光が包んでくれてますね。

まるでアマルガムのアレみたいデス。

「切ちゃん、出来上がったら分かつてるよね？」

「モチロンデスよ」

ギアがなくなったせいでもう調の心は聞こえないデスけど、それならちゃんと声に出せば大丈夫デス。

「嘘お……」

「ふ、二人のギアが……合体して……」

「な、何かの形を作っていく、だと……？？」

下から聞こえる響さん達の声は驚きが混じってますね。

気持ちは分かるデス。アタシもガガガを見てなかったら大きくお口を開けてたはずデスから。

そう思ってる内に合体完了デス。じゃあ……

「天・竜・神っ！」

アタシと調の声に合わせて完成した天竜神ギアがポーズを取ってくれました。

これでもう仕上げデスね。

「ひ、人型ロボットっ?!? これはまさかっ?!」

「天竜神！ 光と闇の舞い（デース）っ!!」

悪意が天竜神ギアを見て大きく驚いたデスが、もう遅いデス。

むしろ知ってるのなら大人しく負けを認めてマリアを返して欲しいデスよ！

そう思ってる間にまずはミサイル攻撃が悪意を襲います。ただ、その意味を知ってるからか悪意は反撃せずに逃走しようと思いました。

「その攻撃は知ってる！　みすみすやらせるものかつ！」
ゲートのある方へ逃げようとする悪意デスけど、アタシと調は慌てません。

だって、もうそっちには……

「どこへ行くこうと言うのだ？」

「なっ!？」

巨大な剣に乗って腕を組む翼さんがいます。

「もう逃げられません」

「くっ!」

睨むように悪意を見つめる未来さんがいます。

「そんな速度なら振り回されないっ!」

「ちい!」

気合十分って感じの響さんがいます。

「後方に注意せよ」

「何?」

その足元ではししよーがニヤリと笑ってました。

で、悪意はその言葉の意味を分からずに戸惑ったようデスが、すぐにある事を思い出して後ろを振り返ったところでミサイルが爆発してその煙が悪意を包み込みました。

「これで終わり……」

「デスね……」

あの中ではもう悪意の戦力をとことん奪うように天竜神ギアが戦ってくれています。

その後はししよーにお任せデスね!

「くっ、しまった。完全に奴らの術中にはまったか……」

黒煙の中、悪意はこれから始まるだろう攻撃を回避するべくそこからの脱出を図った。

周囲は響達装者が囲んでいた事を覚えていたため、仁志がいた足元、つまり下方へと移動を開始したのである。

切歌と調による攻撃で悪意の状態は既に継戦不可に近付きつつあり、その移動速度は目に見えて低下していた。

それでも、十分に脱出できる速度は有していたのだ。

普通なら。

「っ!？」

死角から襲い来る閃光。それを間一髪回避する悪意だが、それがあまりに過ぎない事を悪意はよく知っていた。

「ま、不味い……っ!？」

悪意が包まれている煙はただの煙ではない。

その中には微小な大きさの鏡のような物が含まれていて、それらを使つて高出力レーザーを反射させて攻撃するのが「光と闇の舞い」であった。

そう、それは悪意が邪悪龍となった際、応用しようとしていた攻撃法と同じである。

「ぐあっ!…こ、このままではっ!？」

ありとあらゆる角度から襲い来る閃光を防ぐ術はなく、攻撃している相手を探ろうにも反射を利用しているために正確な位置を割り出すのは不可能に近い。

闇雲に攻撃すれば、実弾攻撃や直接攻撃でない限りそれが反射させられて自分への牙となるのだ。

しかも、今悪意が相手にしているのは二つのギアが合体したギアロボットである。

その息遣いなどあるはずもないし、生物でない以上悪意が精神へ影響して操る事も気配を探れるはずもない。

「ならばっ!？」

どうやってもダメージを負うのなら、それを覚悟でこの中から脱出すればいい。

そう決めて黒煙の中を下へ向かって移動する悪意。その動きを執拗に閃光が追い駆ける。

それらにギアを焼かれ、傷付けられても悪意は動きを止めず、遂にそこからの脱出に成功した。

「これでっ！」

「終わりだっ！」

「なああああつ!?!」

ようやく抜け出した悪意を待っていたのは、依り代を突き出す仁志だった。

その背後には天竜神ギアが立っていた。つまり、既に悪意がどこから脱出するかを天竜神ギアが仁志へ教えていたのである。

「マリアっ！ 聞こえているか！ いつまでそんな奴の言いなりになってるつもりだ！ ウエル博士よりも嫌な相手だろ、そいつっ！

そんな奴に自分の体、好き勝手させて平気かよっ！」

「アアアアアッ!?!」

「そいつはなっ！ 君の体を使って、切歌を悪意に染めさせ、調を追い回し、エルとヴェイグを疲弊させたんだ！ それでもまだそいつに体を使わせるのか？ マリア・カデンツァヴナ・イヴでいさせるのかよっ！」

「いや……そんなの、絶対にイヤっ！」

仁志には聞こえていないが、マリアの眠らされていた深層心理が目覚め始める。

悪意が家族愛を利用してマリアに寄生しているのなら、同じ物を揺り動かして追い出そうと仁志は考えたのだ。

「ガアアアアッ！ ニ、ニドモオナジテヲッ！」

「ダブル・リム・オングル（デス）っ！」

依り代の干渉に耐え悪意が仁志へ抵抗を試みるも、それは切歌と調の意思を受けたギアが阻止する。

その両手に光の刃を出現させ、それで悪意そのものでもあるイーヴィルギアを斬ったのだ。

勿論、その刃は真正正銘のザババの刃である。即ち魂を刈り取る刃。

悪意に魂はないが、代わりに強烈な自我がある。

それをザババの刃は一気に消耗させたのだ。

「ツ！」

「うぷっ!？」

だが、それでもマリアに根付いた悪意を刈り取る事は叶わなかった。

悪意はイーヴィルギアを分離させてその瘴気を周囲へ撒き散らしたのだ。

それに包まれる形となった仁志を見て、五人の装者は表情を凜々しくした。

「ギアの光で瘴気を祓うぞっ！」

「「はい（デス）っ！」」

翼の声掛けに響達が応じてツインドライブギアから依り代の輝きが放たれる。

それによる浄化の力が瘴気をすぐさま消し祓った。
が――。

「……逃げられたかつ」

目くらましを兼ねたそれが晴れた時にはもう悪意の姿はなかった。

仁志はその翼の言葉を聞きながら手にした依り代へ目を落とし深くため息を吐いた。

（エルの奴に、残念なお知らせしないといけないな……）

あと少しでマリアを悪意から取り戻せる。

そう思ってた仁志にとって、この逃亡はかなり悔しさの残るものだった。

「翼さん、マリアさんを追い駆けちゃダメですか？」

「それはダメだ。手負いの相手を追い駆けると思わぬ反撃を喰らう事もある。今はその時ではない」

「それはそうかもしれませんが……」

「響、気持ちは分かるけど切歌ちゃん達も疲れてるし、私達だって万全じゃないんだよ？」

「そう、だな。もしあいつを追い駆けて奏とクリスが出てこられたら不味い。エルとヴェイグだって疲れ切ってるんだ」

「あつ……」

響はそこでエルフナインとヴェイグの事を思い出したのか小さく声を漏らした。

結局追撃は中止となり、仁志達は素早くその場からの撤退を開始する。

そうして仁志達が上位世界のゲートへ辿り着こうとしていた頃、根幹世界にあるS・O・N・G本部内発令所へ奏が満足げな顔で戻ってきていた。

「今帰ったよ」

「おう、どうだった？」

「収穫あり。セレナの居場所は完全に分かったよ。それであいつは？」

「まあ言わなくても分かってたんだろ？ 大方それで一旦戻ってきたんだろうし」

「ははっ、そんなとこさ。それにしても情けないねえ。色々と考えた結果、結局負けてんだから」

奏の表情は嬉しそうな笑顔だ。マリアの失態を心から喜んでいたのである。

それがどういう想いからの笑顔かを察しているクリスは、どこか呆れたような眼差しを向けていた。

その眼差しを気にもせず、奏は発令所を見回してマリアの姿がない事を確認して首を傾げた。

「で？ 負け犬はどうした？」

「戻ってくる訳ねーだろ。今頃どつかでリベンジの機会を窺ってるはずだ」

「けっ、そういう事か。こうなるとあたしの動きに合わせてくるかもしれないって事かよ」

心底嫌そうに呟き、奏はため息を吐いた。自分が仁志達と事を構える時にマリアが乱入してくると確信しているのである。

実際今のマリアは体のダメージを癒しながら再戦への闘志を燃やしていた。

「まさかあれだけの力を発現させるなんて……。こちらのした事を逆手に取る、か。厄介な光の力め……っ！」

忌々しいとばかりに呪詛を吹き、マリアは目を閉じてその場で眠る。

一方では、奏とクリスの瞳が闇に染まっていた。

何も映し出さない虚空の様なその瞳のまま、二人は口を揃えて咳く。

——順調にいけば、残す必要情報は神殺しのみ。閉じこもった娘へは、あの手段で十分だろう……。

不気味なその吹きが発令所内に響く。

段々と戦力を失っているにも関わらず、悪意は嗤う。

まるでそれも最初から計算の内と言わんばかりに……。

かばんの隠し事

部屋へ戻ってくるなり、俺は布団へと大の字で寝転がった。
足の痛みが地味に戻ってきていたし、何よりも気怠さが凄い。

「これが戦うって事か……」

奏が働き始めた辺りで軽く体力作りを始めていたのに、そんなものは意味がないとばかりの疲労っぷりである。

やっぱり俺がみんなと一緒に戦うなんて無理なんだろうか？

「ししよ〜っ！」

「へっ？っ っぷっ!？」

天井を眺めながら呟いていたら、いきなり切歌がのしかかってくる。

暑い柔らかいちよつと重いけどいい匂い。

「切ちゃん、そのままだと師匠が息出来ないよ？」

「はっ!？」

バツて感じで飛びのく切歌だけど、俺としては実にらしいと思えて安心出来た。

視界の中には申し訳なさそうな切歌の顔がある。

「し、ししよー、ごめんなさいデス」

「いいよ。おかげで切歌が本当に戻ってきたって思えた」

「だって。良かったね切ちゃん」

「ししよ〜……」

上半身を起こして切歌の頭を撫でてやると、その瞳がジワツと潤んだ。

だから余計に労うように優しく撫でる。

こんな年齢で並の大人でさえも音を上げる事をやってきた少女の癒しになればと、そう思っただ。

「それにしても、マリアは残念でした」

「そうだね。もしかしてマリアさんは悪意が未来よりも強く根付いてるっ。」

「可能性はある。思い返してみれば、マリアが悪意に最初に乗っ取ら

れた。そして旅行先のホテルでもイグナイトギア状態にされた。悪意が根付き易い状態なのかもしれない」

「だとしても……」

「今度は絶対元に戻してみせるデスよ」

翼の推測に調と切歌が決意を新たにしたところで可愛らしい音が鳴る。

出所は俺の目の前の少女からだった。

「あ、あはは……お恥ずかしいデス」

「そつか。切ちゃん、あれから何も食べてないもんね」

「デスよお。ししよー、何か食べ物くださいデース」

「はいはい。えっと、じゃあお金を渡すから自分で好きな物買っておいで」

「いいんデスかっ!?!」

今日一番の食いつきだ。

「いいよ。調、君も一緒に行くといい」

「私も?」

「ああ。たった少しかもしれないけど、それでも無理矢理引き裂かれたのは間違いないんだ。その分、平和な中で埋め合わせておいで」

そう言っただけは財布から千円札を一枚取り出した。

多分調はそんなに食べないだろうから、これで十分足りるだろう。

「はい、これ。おつりは返してくれると嬉しい」

「うん、分かった。師匠の気持ち、ありがたく受け取る」

「ししよー、ありがとデス」

嬉しそうに笑顔で部屋を出て行く二人を見送り、俺は息を一つ吐くと顔をエルへ向けた。

響へ持たれるようにして休んでいる様はどこか癒しでもある。

「エル、体の方はどうだい?」

「大分楽になりました」

「それなら良かったよ。まさかエルがダウルダブラを纏うなんて想像もしてなかったから」

あれには本当に驚いた。一瞬キャロルが目覚めたのかと思ったぐ

らいに。

ただ、あの場合は何て言うんだろうか？

キャロルナインと呼ばれたのが、エルの体の大ききでキャロルの状態なら、エルのままでダウルダブラは……エルフロル？

「うん、話を聞いた時はホントにビックリしたよ」

「エルちゃん、キャロルは寝てるの？」

「え、えっと、多分ですがまだ以前のように体を制御出来る程の状態ではないんだと」

「きつとあれだ。意識だけは目覚めてるってやつだろう」

ヴェイグの言葉にエルが頷いたので、どうやらそういう事らしい。

それにしても、キャロルの意識が目覚めた、かあ。これはもしかするともしかするかもしれない。

「埒外物理を超える七つの旋律。それを上回る十の旋律が可能かもしれないのか」

「そっか！ 今の私達は奏さんとセレナちゃんも加えられるんだっ！」

「そこにキャロルが入れば、十人による音色で歌を奏でる事が可能か。もしや、それが悪意を倒すための必要条件？」

「かもしれないな。でも、俺はやっぱり愛だと思うよ」

幾多ものヒーロー物でも、最後の決め手が人の強い想い、要は心の光だった事は多い。

悪意が人の心の闇の集合体なら、確実にその弱点は愛や希望などの光のはずだ。

「愛、かあ」

「そういう事なら、立花が小日向を元に戻したのもそうと言えるな」

「ですね。翼さんもそうですもんね？」

「っ?! い、いや、その、私は……」

してやったり顔の未来と狼狽える翼に俺は笑みが浮かぶ。

愛の力、か。俺の気持ちや翼や未来を戻した一助になれたのならこんな嬉しい事はない。

「兄様、兄様の方こそ体は大丈夫ですか？ 見たところかなりお疲れ

のようですけど」

「やっぱりそう見える?」

「はい(ああ)」

エルだけでなくヴェイグまで頷いてきたので、俺は苦笑しながら布団へ横になった。

「じゃ、やっぱり寝かせてもらおうよ。エル、良かったら一緒に寝るか?」

「はいっ!」

「ん。じゃ、悪いけど休ませてもらうな」

「はい、えっと、いつ起こせばいいですか?」

「一時を過ぎても寝てたら起こしてくれ」

さすがに昼飯を食べない訳にはいかない。

それに今日は車がない。まあ、あったところでさすがにこの人数が乗れる程大きな車じゃないけど。

俺の言葉に小さく笑って頷いてくれた響達に感謝し、俺はエルとヴェイグも一緒に布団へ横になって目を閉じる。

すると疲れてたからかあつさり意識が遠のいていく。

——辞める?

——はい……。

もう思い出したくない夢を見た。

少し薄暗い倉庫として使われている場所。

そこにいる白い作業着を羽織った俺と、茶色や紫を使った女性用の店舗制服を着た女の子。

忘れたい、俺の一番の後悔の記憶だ。

——そっか……。その、何て言えばいいか……。

原因は、明らかに俺がした事だと分かった。

俺が店長へ口出した事で彼女へも迷惑がかかっているのは、何となく感じ取っていたから。

——ホントです。ここ、時給も良くて気に入ってたのに……。

——っ……。

明らかに不満を露わにしているの眩きは、思った以上に俺の心を抉っ

た。

まるで俺だけが悪いと言われたような気がして、その怒りのようなものを顔には出さないように拳をキツク握って抑えた。

——…：…なら、何も辞めなくても。

——只野さんが余計な事言つたせいですっ！ そのせいで私、ここを辞めないといけなくなつたんですからねっ！ 泣いてたからって勝手な正義感を出されるの迷惑なんですよっ！ おかげで只野さんとデキてるんじゃないかとか言われるし…：…。

そこは女性が多い職場だった。そのためか、どうしてもその手の話題が盛り上がるらしかった。

しかも、幸か不幸か彼女はそれなりに容姿も整っていた。

付き合つてるとあの時の彼女は言つたが、おそらく本当は俺が気があるからいいところ見せようとしたとか、そんな辺りだったはずだ。

——…：…申し訳ない。

そう返すのが精一杯だった。彼女は頭を下げる俺に何か言う事もなく、着替えるためにその場を無言で去つた。

残された形となつた俺はしばらくその場に力なく座り込んだ。

良かれと思つてやった事だった。たしかにやり方は不味かつたと思つた。

けれど、まさか助けようと思つた相手にお前が悪いと言い切られた事は、全身から力が抜ける程堪えたから。

その後、どうしたのかよく覚えていない。

気付いたら部屋に戻つていて、倒れるように玄関先に寝転んだ事だけ覚えてる。

そして派遣会社の担当の人へ、来月いっぱい派遣先を辞めさせてくださいと連絡した。

そうしたら、まあ当然かもしれないが昼休憩の時に職場の店長に喫茶店へ連れて行かれ…：…

——困るよ只野君。その、商品補充のシフトは人数に余裕がないのを知つてるだろ？

よりにもよつて、あの店長がそんな事を言つて慰留しようとしてき

ただ。

許されるのなら、あの時俺はグラスの水をかけてやりたかった。

——代わりならいくらでもいるって言ったのは誰だっ！

彼女だって商品補充の裏方だ。それを厄介な客一人のために心を傷付けたのは誰だと。

だけど、それを言ったところで何も変わらないと分かっていた。

だから俺はただ淡々と……

——もうここで働く事は出来ません。可能なら今日限りで辞めた
いぐらいです。

と、そう返して残るつもりはないと告げるだけに留めた。

本当は、あんたの下ではと付けてやりたかったけど。

——本当にいいの？ 言つとくけど、君が辞めるって事は君の派遣
会社からこつちが人を雇う事を止めるかもしれないんだけど。

——ご勝手にどうぞ。

——あの場所の他の店で働く事、出来ないけど？

——構いません。

あの頃は分からなかったが、今にして思えばあれはパワーハラだろ
う。

本当に俺は無力で考えが足りなかったな。あれ、録音しておけば訴
えられただろうに。

ああ、本当に苛立ちと憎しみが湧いてくる。

思えば勤務を始めた当初に客の動きが悪く補充などのやる事がな
くなった時、店長へ出来る事がないんですと言った時に……

——仕事はいくらでもある。

とだけ言われて何も具体的な指示も出さなかった時から、ちよつと
どうかと思つてたんだよ。

今にして思えば、やつぱりそういう人だったんだと思う。

そんな奴が店の長という事がある意味不幸だったんだろう。

「……さんっ！ 仁志さんっ！」

「っ!？」

体を揺すられた上に聞こえた声に目を開ける。

汗が噴き出したかのように流れていて、寝たはずなのにむしろ疲れを感じさえある。

「良かったあ。仁志さん、うなされてたんですよ」

「……そっか」

響の言葉に納得するように返して上半身を起こす。

エルは……まだ寝てるか。

「えっと、今何時？」

「正午を少し過ぎたぐらいです」

スマホを手に未来がこつちへ画面を見せてくれた。

そこには12:04と表示されている。

大体三時間ぐらいいは寝たか。なのに全然疲労感が抜けてない。

「ししよー、何だか寝る前よりも顔が疲れてるデスよ？」

「うん、悪い夢を見てたの？」

「あー、うん」

正確には夢じゃなくて記憶、だけど。

何であんな事を思い出したんだ？　もしかして、これも悪意の影響か？

……あり得る。俺の人生で一番心に闇を抱えていた頃があの時だ。そして一番荒んだのがその後だ。

陽子さんへここでバイトをさせてくれと、そう言い出すまでになるには割と色々あった。

主に心の問題だけど、この部屋で自分の人生について考えた日々を過ごしたし。

「あの、仁志さん。もう少し寝てた方がいいんじゃないですか？」

「私も響の意見に賛成です。只野さん、本当に疲れた顔してますよ？」
心配そうにこつちを見つめてくる響と未来。

翼達も声には出さないけど同じ気持ちらしい。表情が二人と一緒にだ。

ただ、何となく今寝てもうなされそうなんだよなあ。

その不安を告げると、響達五人が揃って考え込んでくれた。

その間、俺は眠ってるエルやヴェイグを眺めて心を癒していた。

優しくて可愛い寝顔を見てると、これを何としても守りたいって気持ちになる。

「じゃ、じゃあ、膝枕、しましようか？」

そこへ聞こえてきた未来の言葉に俺は思わず顔を上げた。

「ど、どうですか？」

「それは……嬉しいけど……」

少し照れている未来の可愛さにどう返したのかと考えていると、その隣に座ってる響が勢い良く手を挙げた。

「わ、私もやりますっ！」

「ま、マジで？」

ブンブンと音が聞こえそうな感じで首を縦に振る響に俺はどうしようと考ええる。

いや、未来や響の膝枕なんて拒否する理由がない。けど、こうなると流れるに……

「じゃ、アタシもやるデス」

「私もやる」

やっぱりザババコンビも手を挙げた。さて、こうなるとオチは一つしかない。

そこで俺は翼を見つめた。すると響達四人も翼を見つめてくれたのだ。

「えっ？ えっ？」

突然注目された事に戸惑う翼だが、さすがに俺達が見つめ続けた事で何か察したのだろう。

少しだけ恥ずかしそうに小さく手を挙げて……

「な、ならば私もやろう」

「」「どうぞどうぞ」

見事オチた。というか、このネタって響達も知ってるんだな。

で、なら俺は翼の膝枕を堪能する事に。

「重たくない？」

「それは大丈夫。その、硬くない？」

「うん、女性らしい柔らかさだと思うよ」

翼に自分の布団の上に座ってもらって、俺はその膝を枕代わりにして横になる。

そんな俺達を響達がどこか微笑みながら眺めてくるのが少しだけ恥ずかしくはあるけど、それよりも翼に膝枕してもらえている事の喜びが勝っているのでへいき、へっちゃら。

「仁志さん、嬉しそうですね」

「うん。でも、これは誰にしてもらえても同じ反応だと思うよ」

「じゃあ次は私がしてあげますね」

「あつ、未来の次は私ですよ」

「じゃあじゃあアタシはその次デス」

「最後は私だね」

「ふふっ、だつて？」

「そりや嬉しいや。幸せ過ぎてどうにかなりそうだ」

目を閉じて少しでも体と意識を休めようとする、微かにいい匂いがする。

それが翼のものだと理解して興奮ではなく安堵するのは、やっぱりそれだけ疲れているって事なんだろうと思った。

「寝てもいいよ仁志さん。今は、仁志さんが一番休んでくれないと困るから」

「ありがとな……つばさ……」

そつと俺の鼓膜を揺らす優しい声に脱力して、俺は再度意識を手放した。

今度は夢を見る事もなく起きる事が出来たので、やっぱり膝枕って効果あるんだなと実感出来た。

翼の膝枕で目覚めた後は未来達にもそれをしてもらって、何だか軽くイチヤイチャしたような感じになったけど、おかげでかなり体も心も軽くなった感じになれたので良しとする。

昼飯は未来と調が作ったラーメンになった。即席の物に野菜やソーセージをいれたものだけど、空腹には十分過ぎる御馳走だった。

「じゃ、ちよつと行ってくる」

「」「行つてらっしゃい(デス)」「」

「気を付けて(な)」

で、食べ終わった俺は駅前の不動産屋へ例の借家について話を聞こうと思って向かう事に。

装者五人とエルやヴェイグに送り出されて、俺は足取りも軽く少し肌寒くなり始めた秋空の下を歩く。

「非常事態かもしれないけど、少しぐらいは幸せになってもいいよな？」

誰にでもなく呟いて俺は駅前を目指す。

あの借家、まだ空いてるのなら内見させてもらって、余程じゃなければ即決しようと思心に決めて……。

帰宅した仁志さんはニコニコ顔だった。

「これ、決めてきた家の間取りだよ」

そう言っで見せてくれたお家の間取り図は、二階建てのそれなりに広い感じのする家だった。

二階に部屋が三つあって、一階にリビングとダイニングキッチン、お風呂やトイレがある作りだ。

「決めてきたんですか？」

「ああ。ここなら最悪全員集まっても何とかなるだろ？」

「ししよー、相変わらず決断力が凄いデスよ……」

「うん、凄い」

「で、さっさと契約してきたから引っ越し開始だ。とりあえず布団かな。で、エル達はどうする？」

そこで私とエルちゃんは話し合いを開始。

「エルちゃんはどうしたい？」

「僕は……もう少しおばあちゃんとおじいちゃんの傍にしようと思いません」

「そっか。じゃ、私ももうちょっとおばさんとおじさんのお世話になるのかな」

でもあつさり仁志さんの実家にそのままお世話になる事に決定。

ヴェイグさんはエルちゃんが行くところへ一緒に行く事にしてた

らしく、特に言う事はないらしい。

「仁志さーん、私も手伝っていいですか？」

気付けば翼さん達はそれぞれの布団を圧縮袋へ詰めていて、切歌ちゃんと調ちゃんも枕を二つずつ持っていた。

なので私も何か手伝おうと思ったんだけど、仁志さんは私の言葉に苦笑して首を横に振った。

「気持ち嬉しいけど、特にしてもらう事はないよ。あるとしたら、エルの布団を一応移動させるぐらいかな？」

そっか。私の布団はもう仁志さん家の部屋に移動させたっけ。

「エルちゃん、どうする？」

「そうですね……」

「むしろエルの布団はここに残すべきだと思うぞ立花」

聞こえた言葉に私とエルちゃんが顔を動かす。

翼さんはこつちを見ながら笑った。

「全てを終えたとしても、私達はまたここへ来る事もあるだろう。その時に寝具がないのは困るだろう。特にエルはここへ必ず来なければいけないからな」

「……そうですね！」

うん、そうだ。エルちゃんは依り代を返しにここへ絶対来るんだ。

「でも、一度見てみたいよね？」

「はいっ！」

「仁志さーん！」

「はいはい、聞こえてたよ。じゃあ、一先ず全員で行こうか」

仁志さんが苦笑してそう言う未来達も同じような顔をした。

でも、何となく前みたいなきもちがしてきて、私は少しだけ嬉しかった。

早くここにクリスちゃん達も取り戻したい。またみんなで笑い合いたいな。

布団を入れた圧縮袋を翼さんと未来、それに私も持って歩く後ろを枕を持った切歌ちゃんと調ちゃんが歩く。

一番先頭を仁志さんと手を繋いだエルちゃんが歩いているのが、本当

に親子みたいに見えて微笑ましい。

「古いつて言ってたけど、どんな感じかな？」

歩きながら未来がそう話題を振った。仁志さんの言い方だと築30年ぐらいは経ってると思うなあ。

「さあな。だが、あのアパートよりは新しいらしいから、あの平屋とい勝負なのではないか？」

「でも、ちよつとだけ楽しみですね」

私がそう言っていると未来と翼さんが小さく笑って頷いてくれた。

仁志さんのアパートから歩く事大体八分ぐらいかな。それで見えきたのは、やっぱり古そうな二階建てのお家。

「兄様、ここですか？」

「そう。見た目よりは新しい感じの作りだよ」

言いながら仁志さんが鍵を開けて玄関のドアを開ける。

思えばマリアさん達の家はドアじゃなくて引き戸だったっけ。

「まず暁達を先に入れるぞ」

「あ、はい」

「そうですね」

私達は視界が悪いし時間がかかる。なので身軽な二人を先にするのは分らないでもない。

「暁、月読、先に中へ入ってくれ」

「了解デスよ」

「分かりました」

仁志さんとエルちゃんに続いて切歌ちゃんと調ちゃんが家の中へ入っていく。

で、その後は未来、私、最後に翼さんだった。

まず布団を二階へ運んだ。階段上がってすぐの部屋を仁志さん曰く寝室にするみたい。

「結構広いですね」

「だろ？　ここなら物が無い今は五人ぐらい余裕で寝れる」

「残りの二部屋も……物が無い今なら三人は余裕で寝れますね」

翼さんの言う通り、他の部屋もそれなりの広さがある。

「ここだけでエルちゃんを入れた全員で寝れるね。」

「ああ。生活空間は下のリビングやダイニングで十分だろ？」

「兄様、どうしてここを最初から選ばなかったんですか？」

「空いてなかった？」

「もしくは家賃が問題デスか？」

エルちゃん達三人の問いかけに仁志さんは苦い顔で話してくれた。何でもここを見つけたのは夏も終わりになった頃だったらしい。

私とクリスちゃん、それに翼さん達三人を合流させようと思った時、部屋を探して偶然見つかったんだって。

「でも、思ったよりも早くクリスマスまで辞める算段がついて、合流させる必要性がなくなったから」

「それでここを借りる事はなかった、と？」

「そういう事。まあ、もしこうならなかったら俺がここへ引越そうかなって思ってたんだけどね」

「そうなんですか？」

「だって、この家賃だと仁志さんのお給料の半分近くがなくなっちゃう。」

「それなのに住むなんて理由が分からない。」

「ほら、奏が別れ際に言ったじゃないか。再会したらあの部屋よりも少しは良い場所に暮らしててさって」

「「「「あく……………」」」」」

まさかのヴェイグさんまで同意するように声を出した。

「で、収入もシフトを若干残業して九時まで働けば割と増えるし。それなら家賃払っても何とかなるかなあって」

「行き当たりばったりデス!？」

「師匠らしいと言えばらしいけど……………」

「兄様、そんな事したらきつと体調を崩します!」

エルちゃんの言う通りだと私も思う。

実際前は週4のシフトでさえ辛そうにした。

今でこそ週5でも平気な顔をしてられるのは、マリアさんや調ちやんが毎日ごはんをちゃんと作って食べさせてたからだ。

それだけじゃない。きっとエルちゃん達や私達との関わりも癒し
になってたはず。

「そ、そうかな?」

「タダノ、今までと違ってマリアや調が食事を作って待っていてくれな
いんだ。それでどうやって栄養を取る?」

「それは……えっと……野菜ジュースとかで?」

「「「「やっぱり(デス)……」」」」

さつきからみんなの意見が一致し過ぎてて若干面白い。

仁志さんも、みんなも笑ってるのはそういう事だよ。

「つと、いかんいかん。このままじゃ話してるだけで時間が過ぎてく」
そう言つて仁志さんはゆっくり立ち上がつて、少しだけ左足の具合
を確かめるように動かしした。

うん、どうやら左足はもう大丈夫みたい。仁志さんだけじゃなくみ
んなもどこか安心するみたいな顔をつて、切歌ちゃんだけが首を傾げ
てる。

「ししよー、左足怪我したデスか?」

「ああ、うん。悪意にちよつと攻撃されて」

「なななっ! 何デスと!?!」

「そっか。切ちゃん知らないんだっけ」

私も忘れてた。切歌ちゃんは未来や翼さんを元に戻した時の話、知
らないもんね。

なのでそこで簡単に事情を説明。私とエルちゃん、時々仁志さんで
話すと理解してくれたみたいでふんふんつて頷いてくれた。

三人で徹底したのは、未来と言わずに悪意って呼び続けた事。

でも実際そうだ。あれは未来じゃない。未来の振りをした悪意
だった。

「でも、良かったデスね。ししよーのママが看護師さんで」

「仕事モードじゃないと優しいの欠片もないけどな」

「私は逆にだからこそ優しいって感じましたよ。ああ、お母さんつて
感じだなあつて」

実際、おばさんは仁志さんだから遠慮がない感じがした。

家族だからこそ、変に笑顔を浮かべる事もなく自然体で接してたと
思うから。

「まあ母さんらしいとは思ったけどな」

「うーっ、ししよー、アタシもししよーのパパとママに会いたいデス」
「別にいいけど、俺は一緒に行かないからな？」

「」「えっ？」「」

「どうしてだ？」

私達の疑問へ仁志さんは苦い顔で左足を指さした。

「この怪我があるから俺は今日は実家へ帰らないで、大人しく部屋で
休んでいようと思うんだよ」

「じゃ、じゃあ……」

「晩飯は……悪いけど響、今から陽子さんの店で買ってきてくれない
か？ 夜用にさ」

「それはいいですけど……」

折角仁志さんと一緒に毎日ご飯食べてたのに、よりにもよって一人
でご飯食べさせるなんて、何かやだなあ。

「響さん、大丈夫です。僕からおじいちゃんにお願いします。兄様を
迎えに行ってくださいって」

「え、エル？」

「兄様、夜もみんなで食べましょう」

「でもなあ……」

「兄様が怪我を理由に一人でご飯なんて、おばあちゃんが知ったら
きつと悲しみますっ！ おじいちゃんも怒りますっ！ 家族は同じ
物を一緒に食べるから家族なんですっ！ そう僕らに教えてくれた
のは兄様なんですっ！」

「」「エル（ちゃん）……」「」

力説するエルちゃんに私達は言葉がなかった。

特に私のはあの日、おじさんとおばさんから同じ事を聞いてる。

頼れる人が仁志さんしかいなかった私達を、何とかして繋ぎ止めよ
うとしてただろう仁志さん。

だからか、仁志さんがやってくれたのがみんなで出来るだけ一緒に

ご飯を食べる事だった。

私とクリスちゃんの時も、翼さんが来た時も、奏さんが来た時もそうだった。

マリアさん達が来た後はバラバラになったけど、それでも複数でご飯を食べた。

それがあつたから、私達は孤独感を感じる事もなく、支え合っていたんだと思う。

「タダノ、俺もエルの意見に賛成だ。ぱばさんもママさんもきつとタダノがいないと気にするぞ」

「それは……」

「ししよー、さすがのアタシも紹介なしで人様のお家に上がるのは抵抗あるデスよ」

「師匠、私も師匠がいないのにおじさんやおばさんにご飯を御馳走になるのは、ちよつと嫌」

「うっ……」

切歌ちゃんと調ちゃんの言葉に仁志さんが若干たじろく。

「只野さん、ここはエルちゃんの言う通りにしたらいいと思いますよ？」

「だな。仁志さん、ご両親もきつと仁志さんがいてくれた方が嬉しいはずだよ？」

「そ、そうかな？」

未来と翼さんの言葉で仁志さんが気弱になった。ここが決め所だねっ！

「はいっ！ それは間違いありませんっ！」

「力強い断言だなあ……」

観念するように苦笑して、仁志さんは息を吐くとスマホを取り出した。

そして多分だけどメールを打ち始めた。

きつと宛先は、おばさん、かな？

しばらく私達は仁志さんの行動が終わるのを待った。

「……………これよし。響、エル、ヴェイグと一緒に先に家へ行って

くれ。で、調も一緒についていってくれるか？」

「いいけどどうして？」

「買い物頼みたいんだ。響、最寄駅から実家までの道分かるよな？」

「はい」

今朝もそこから電車に乗ってこつちまで来たからもうバッチリだ。

「じゃ、駅から歩いて最初の信号のある交差点分かるよな？」

「あ、はい。分かりますけど？」

「家からならそのまま直進。駅からなら向かって右手へ進むと、すぐにスーパーが見えてくるんだ」

「そうなんですか」

知らなかった。でも、たしかにぼんやりとそれらしい看板や建物を見た気がする。

「そこへ調と一緒に行って買い物してくれないか？　母さんに今夜は調達が腕を振るってくれるって送ったんだ」

「師匠、せめて相談して欲しかった」

「ご、ごめん。でも、それなら家人が誰もいない人の家に入っても平気かなってさ」

仁志さんの申し訳なさそうな表情と声に調ちゃんも仕方ないって感じのため息を吐いた。

「気持ち分かるよ調ちゃん。たまくに仁志さんってこういうところあるよね。」

「只野さん、それなら私も一緒に行つた方が良くないですか？」

「え？　いいの？」

「むしろ響よりも私の方が調ちゃんの役に立ってますし」

「みくくくう。そうだろうけど言い方あ」

何て言うか、元に戻してから未来がちよつとだけ厳しいというかキツイ気がする。

今までは言わなかった事も言ってくれるようになったのは嬉しいけど、これって前以上に遠慮がなくなつたって事？

「ふふつ、じゃあ頑張ってお料理やる？」

「うん、いいよ。おばさんが言つてたしね。要は慣れって」

おばさんだつて結婚するまではほとんど料理をしてなかつたつて言つてた。

なら、私だつて今から頑張れば、二十歳までには一人前になれるはず！

「なら私と暁はここでしばらく待機？」

「そうだなあ……」

「アタシ、出来ればもう少し何か食べたいデス。ハンバーガーとラーメンだけじゃ足りないデスよお」

その切歌ちゃん言葉に一瞬の間があつてからみんなが同時に笑つた。

なので私達は仁志さんのお家へ向かう事にして、切歌ちゃんは仁志さんからお金をもらいお弁当を買いに陽子さんのお店へ。

翼さんは仁志さんと一緒に一度仁志さんの部屋へ戻つて、そこで迎えが来るまで待つ事になった。

ちなみに切歌ちゃんは陽子さんのお店を知ってるらしい。

マリアさんが働いてるところを一度見たくて、みんなでこっそり見に行った事があるんだつて。

「じゃ、仁志さん。また夜に」

「ああ。色々面倒だと思ふけどごめん。エル、父さんへお願い、よろしく」

「はい。おじいちゃんならきつといいよつて言つてくれます」

「うん、まあエルが頼めば俺達の誰でも領いちやうよ」

仁志さんのその言葉にエルちゃん以外が頷いた。

今のエルちゃん、本当に前よりも可愛いし守つてあげたくなるんだよね。

こうして私達は駅へと向かつた。

見慣れない道を歩くのつて、若干不安だけどどこかワクワクする。

この街で暮らして半年は経つたけど、まだまだ知らない場所や知らない道があるんだつて、そんな当然の事を思いながら駅前へと到着。

「じゃ、切符買つてくるね」

「うん、お願い」

お金を預かっている未来が窓口へ向かうのを見送って、私はエルちゃんに調ちゃんへ顔を向ける。

「切ちゃんも戻ってきたし、きつとご飯が五合じゃ足りない」

「はい。どうしますか?」

「……」ご飯の量を増やせるやり方をするしかないかな? 混ぜご飯とかいいかも。あるいはおばさんがやったみたいに、おにぎりにして数を多くする」

「いつそ兄様の部屋にある炊飯器を持っていくのはどうでしょう?」

「そっか。師匠の部屋にもあるね」

「あつ、じゃあ私が仁志さんに言っ借りに来てよ」

二人の会話を聞いて、ならとばかりに手を挙げる。

だってエルちゃんにそんな事はさせられないし、調ちゃんはエルちゃんの傍に居て欲しいし、未来にはお買い物してもらわないといけない。

「はい、切符買ってきたよ」

「未来、ごめん。私、ちよつと戻らないといけなくなった」

「へ?」

「その、このままだと今夜のご飯、足りないのが確定なんです」

「兄様のお家の炊飯器は五合までしか炊けないので」

「……ああ、そういう事か。只野さんの部屋のを借りるって事?」

「さっすが未来! 理解が早いっ!」

未来から切符だけ受け取って、私は仁志さんのアパートへ向かった。

すると、アパートまで後少しってところで切歌ちゃんの後ろ姿を発見。

「切歌ちゃん!」

「ほえ? 響さん? どうしたデスか?」

お弁当の入った袋を下げてこつちへ振り向いた切歌ちゃんへ事情説明。

「あー、それはそうデスね。アタシ達はししよー分を入れて七合炊い

てギリギリでした」

「そういえばみんなでご飯食べる時はどうしてたの？」

「アタシ達の家炊飯器は十合まで大丈夫でしたから、それとしょーのこの炊飯器で合計十五合炊いてたみたいですよ」

「成程」

そういえばマリアさん達の使ってた炊飯器、ちよつと大きかったもんなあ。

そんな事を話しながら歩いてるとアパートに到着。

「ただいまアース」

「お邪魔します」

「あれ？ 響？」

「立花、どうした？ 何か忘れ物でもあったか？」

部屋の中では仁志さんが翼さんに膝枕してもらってた。

ちよつとだけ羨ましいと思うけど、仁志さんのうなされ方を見ると仕方ないって思うので受け止める。

「実は……」

調ちゃんとうエルちゃんの会話内容を話すと仁志さんは納得してくれた。

で、私は仁志さんの部屋にあったクリスマスちゃんがつてきた炊飯器を借りる事に。

「二度手間でごめんな。俺も配慮が足りなかった」

「いえいえ。あつ、そうだ。仁志さん？ あまり翼さんとイチヤイチヤしないでくださいよ？」

「あー、少しだけ大目に見てくれ。正直これもイチヤイチヤというよりは癒しに近いんだ」

「むう」

言ってる事は、分かる。けど、やっぱちよつと嫉妬しちゃう。

「立花、気持ちは分かる。私とて、その、逆の立場なら心を穏やかに出来ないかもしれない。ただ、私にも邪心はない。仁志さんはギアもなければ錬金術の加護もない。あの悪意に満ちたゲートの影響を受け、平気とは思えないのだ」

「デスね。ししよー、翼さんの次はアタシが変わるデスよ」

「ありがとう切歌。その、響。ごめんな。俺がもう少し強ければ……」

仁志さんの顔が曇るのを見て私は慌てて首を横に振った。

「いえいえっ！　むしろそれは私達の方です！　と、とにかく、これ、借ります」

「……ああ。気を付けてな」

「はい」

炊飯器が入ったバッグを手に私は仁志さんの部屋を後にする。

もう見慣れた道を歩き出して、ふと思った。

仁志さんがあんなに弱気になってるの、初めて見たかもしれないって。

「弱い所を私達に見せてもいいって、そう思ってくれたって事かな？」

強い自分だけじゃなく、弱い自分もさらけ出せる。

そう考えてくれたのなら、思ってくれたのなら、私は嬉しい。

「情けないところも見せられるって、一種の信頼だもんね」

そう呟いて私は駅へと向かう。

おじさんとおばさんから仁志さんの小さい頃の話とか、教えてもらおうかな。

アルバムだけじゃない。まだみんなが知らない仁志さんの思い出を、私は知りたいから。

……それぐらいはいいよね？

「眠ったデスか？」

「ああ」

翼さんの膝を枕にししよーは目を閉じて寝息を立ててるデス。

その寝顔は、アタシも時々見た事のある穏やかなものデス。

だけど、アタシが調と一緒にここへ帰ってきた時のししよーは、とつても怖い顔でした。

うんうん唸ってたデスし、何より、その、初めて見るぐらいの嫌な顔をしてたデス。

「翼さん、ししよー、やっぱり悪意の影響受けてるデスかね？」

「……分からない。だが、ないとは言いきれないな。ヴェイグの嗅覚をダメにし、守りに秀でた小日向がアイギスの力を併用しても防ぎきれないものだ。正直エルにも悪影響が出ていないと限らない」

「エルにも、デスか？」

それは困るデス！ 今じゃエルはアタシ達の妹みたいなものデスっ！

セレナがいない今、アタシと調でしっかり守ってあげないとダメなデスよ。

「そうだ。ただ、エルの方はおそらくそこまで心配しなくてもいいと思っている」

「な、なんでデスか？」

「以前、悪意が手を出し易くなるには依り代の力が増して、この上位世界で実在性とも言うべき要素を強く得る事だと話したのは覚えてるか？」

言われて思い出します。

えっと、えっと、たしかプールとかに行つた後にそういう話をした気がします。

「ふふっ、暁？ 素直にはつきりと思ひ出せないと言ってくれ。別に怒りはしないぞ」

「ご、ごめんなさいデス。プールに行つた後デスか？」

「そこまでは覚えてるか。ああ、そうだ。マリアが二度も悪意に操られ、初めて乗っ取られた翌日だ」

「ああっ！」

思い出しました！ たしかにそんな話をしたデスよっ！

「エルは、依り代を持つていない。なら、悪意がエルに手を出すのは出来ないと思うのだ。そしてヴェイグも同様に。ただ、仁志さんは別だ」

「え？ どうしてデスか？」

ししよーはこの世界の人間デス。依り代があつてもなくても悪意が手を出せないはずデス。

「忘れたか？ 悪意は私達を利用し仁志さんへ手を出してきた。幸

い、これまではそれを寸前で阻止出来ていたが、唯一阻止出来なかった可能性がある瞬間が存在する」

「えっ!？」

い、一体いつデスか？ そうアタシが言おうとした時デス。翼さんは辛そうに師匠の顔を見つめて眩きました。

——あの別れ際、雪音がキスをしただろう。あるとすればそこだ。思わず息を呑みました。言われてみれば、たしかにあの時、クリスマス先輩はししよーへキスをしました。

しかも、自分からデス。つまり、あのキスの時にししよーは悪意に？

「まだたしかではない。だが、あの悪意に飲まれた中で雪音だけが私と立花と共に来た。そして、悪意は雪音を騙り、こう囁いたのだ。今なら自分達だけでここへ来れるぞ」

「そ、それってつまり……」

「これは私の勘だが、あの四人の中で雪音がもつとも悪意に侵食されている気がする。そう考えれば、だ。あの別れの際、雪音が真っ先に動いた事も納得出来るのだ」

「あ、あの時からもうクリスマス先輩は悪意に操られてた、デスか？」

「あるいは、その意に沿うように仕向けられていたかもしれない」

アタシは言葉がありませんでした。

まさか、ししよーに悪意が入り込んでるかもしれないなんて。

「暁、これはまだ確定ではない。それに、悪意がはつきりと動き出していたならあの時に依り代が反応していたか、ヴェイグが感じ取っていたはずだ」

「で、デスよね」

「ああ。聞けば仁志さんが異常を訴えたのは立花達とゲートをくぐった後だそうだ。なら、本当にあのゲートの影響だけかもしれない」

そう言って翼さんはアタシの方へ顔を向けました。

「暁、この事は今夜にでも全員で話そう。仁志さんが自分で言い出すのを待っていたが、きつとこの人は余計な心配をさせまいとして黙ってしまう気がしてきた」

「デスね。ししよーならそうする気がします」

誰よりもみんなに笑って欲しいって思ってるデスからね、ししよーは。

それにしても、ししよーに悪意が手を出してるかもしれない、デスカ。

だとしたら、巫女ギアや神獣鏡でししよーの事を助けてあげないといけないデスね。

そんな事を思いながらアタシは翼さんと一緒に眠るししよーを見つめました。

静かに眠るししよーのちよつと伸びた髪の毛を、翼さんが優しい笑顔で撫でていきます。

すると、ししよーが少しだけ笑いました。思わず驚いて翼さんの顔を見ると、翼さんも小さく驚いたみたいに目を見開いてたデス。

「笑った、な」

「デス」

「……暁も、やってみるか?」

「……はいデス」

翼さんがやったみたいにあタシがししよーの髪を撫でると、またししよーが小さく笑ってくれました。

な、何だか嬉しいデスね。ちよつとだけ胸がときめくデスよ。

「クスツ、また笑ったな」

「デスデス。ししよー、アタシ達が撫でてるって分かるんデスカね?」

「さてな。だが、こうして反応があると嬉しくなるものだ。今の私達に出来る事は、これぐらいだしな」

「……そうデスね」

今のアタシ達はもうバイトとか出来ないデス。

悪意との戦いは、正直今までが一番キツイかもしれません。

相手がクリス先輩やマリア、奏さんデスから。

それからしばらくアタシと翼さんはししよーの事を時々撫でる事になりました。

時々ししよーがうなされるので、アタシや翼さんで大丈夫デスよっ

て感じて撫でてあげると、少しするだけで笑ってくれるからデス。

「何だかおつきな子供みたいデスね」

「ふふっ、そうだな。仁志さんが聞いたら怒るだろうか？」

「意外と苦笑して認めるかもしれないデス」

「……あり得る、か」

そこで二人で小さく笑いました。

翼さん、やっぱり笑顔増えたデスね。しかも、柔らかい感じデスし、
とっても優しい顔デス。

ここに来てからの翼さんは、本当に頼れるお姉さんって感じデス。
アタシや調に対しても、呼び方は前と一緒にデスけど、その声は柔らかい
感じになりました。

「翼さん翼さん、ししよーのパパとママってどんな人デス？」

「仁志さんのご両親、か。そうだな……」

翼さんが少し笑いながら話してくれたのは、ししよーのパパとママ
のやり取りでした。

その内容にアタシは驚きしかないデス。ケンカみたいなやり取り
を普段からしてるとか、考えられないデスし。

でも、それだからこそいいのかもしれないって、そう翼さんは言
いました。

「ケンカしてるようなやり取りが、デス？」

「ああ。仁志さんのご両親は要するに相手を信頼しているからこそ本
音を言い合うんだらう。これでダメになるような相手との絆じゃな
いと」

「お〜……」

そう言われるとそんな気がします。

「私も、一度くだらない事で奏と口喧嘩をした事があるから分かる。
喧嘩出来るというのは一種の甘えだ。相手との関係が切れてもいい
と思ってる時もあるのかもしれないが、相手を信頼しているから出
来ると言えなくもない」

「ナルホド」

言われてみるとアタシと調はあまり口喧嘩とかしないデス。

それはそういう必要がないからデスけど、どこかでこの関係を壊したくないって思ってるからかもしれません。

「暁、その、こういうのは何だが、たまの喧嘩は互いのためにもいいかもしれないぞ」

「ふえ？」

「どういう意味デスカね？」

「私と奏が口喧嘩した日、私は仁志さんと偶然出会ってな。そこで仲直りすればいいと言われて、一緒にスーパーでアイスを買って、私はそれを手土産に奏へ謝り、前よりも仲が深まったのだ」

「アイス、デスカ？」

「ん？ ああ、説明が足りなかったな。私と奏が口喧嘩したのは、私の買ったアイスを奏が無断で食べた事が切っ掛けだったのだ」

「な、何て言うか、翼さんのイメージからは想像出来ない切っ掛けデス。」

「というか、翼さんもそういうので怒るんデスね。何だかすつごく親しみがわいたデスよ。」

「奏も私の言葉と渡した物に苦い顔をしてくれてな。こっちこそ悪かったと謝ってくれた。許し合える関係というのは、やはりいいものだとそこで感じた」

「ほうほう」

「暁、お前もそうだったのではないか？ 月読とぶつかり合い、そこで互いの気持ちや考えを知った事でより強く絆を結んだ事はないか？」

「調と……」

「言われて思い出せば、あのフロンティアでの衝突も、ミカを前にした時の事も、あの不和のりんごの時も、調と激しくぶつかってケンカして、そのおかげでもっと調と仲良くなれました。」

「そっか。ケンカ出来て仲直り出来るのって、やっぱり凄い事なんデスね。」

「未来さんが言った、誤魔化さないと壊れる絆かどうかはそこで分かる気がします。」

「ううっ……」

そんな時、ししよーが苦しそうな声を出してアタシと翼さんの目が動きました。

「ししよー、苦しそうデス……」

「ああ」

そつと翼さんがししよーの髪を撫でると、その苦しさが和らいだみたいな顔へ変わりました。

なのでアタシもししよーの髪を撫でました。それだけでししよーの表情から苦しさがなくなっていくのが、とっても嬉しいデスよ。

「ししよー、やっぱり悪意のせいで嫌な夢見てるデスカね？」

「……かもしれない。仁志さんの睡眠を妨げ、その心を弱らせようとしているのか？」

「そ、それだったら不味いデスよ。ししよー、基本一人で眠るんデスし」

「だからかもしれない。悪意はこちらで私達の事を監視していたはずだ。となれば、仁志さんが就寝時一人である事を知っている」

「ししよーが一人で寝るから、悪夢を見せれば弱つてく、デスカ？」

アタシの質問に翼さんは真剣な表情で頷いてししよーを見つめました。

もしこのままししよーが弱っていったらバイトでクタクタになっちゃつて、生活するのが難しくなっちゃうデスよ。

でも、今のアタシ達じゃバイトして支える事は出来ません。

「つ、翼さん、どうしたらいいデスカ？ ししよーは今、たった一人でアタシ達を支える事になってます。しかも、もうアタシ達はバイトなんて出来ないデスよ」

「……こうなれば仁志さんにもあの家で暮らしてもらうしかない。それなら、何か起きても私達の誰かが対応出来る」

アタシはその意見に賛成したかったデスけど、多分ししよーは受け入れてくれない気がして悩みました。

だけど、今はどんな小さな事でも不安要素は無くすべきデス。悪意がししよーに影響してるのは多分間違いないですから、アタシ達でせめて助けてあげたいデスし。

「そうデスね。ししよーが起きる前に調や未来さんへ相談デスカね？」

「それがいいだろう。まあ二人も嫌がる事はないと思う。一番難色を示すのはきつと仁志さん本人だろうからな」

「ちよつとだけ苦笑する翼さんにアタシも同じような顔を返しました。」

でも、ししよーがこんなになされるなんて絶対おかしいデス。

今のこの世界に悪意はいなくなったのに、それで苦しむなんて何かあるに決まっています。

「んっ……」

そう思ってたらししよーがゆっくりと目を開けてアタシと翼さんの顔を見てから、どこか安心するみたいに笑顔を浮かべてくれました。

「ししよー、相談したい事があるんデスけど……」

「そうだん？」

「うん。仁志さんに大きく関わるだろう事だよ」

「おれに？」

どこか寝惚けた声で起き上がりながらししよーは目を擦っていました。

それが何となく寝起きのお父さんみたいで笑えてきちやうデス。

ししよーはフラフラと流しへ行って、そこで顔を洗ってからタオルで顔を拭きつつ布団の上へ戻ってきました。

「はあく……それで、俺に関わる相談って？」

そこで翼さんがさっきの話をししよーへも聞かせました。

ゲートを完全に自分の影響下にした悪意のせいで、ししよーの体に異変が起きてる事。

クリスマス先輩が一番悪意に操られてるかもしれない事。

そして、だからこそあのお別れの時にキスしてきたかもしれない事を。

「……否定は出来ない。たしかに恥ずかしがり屋のクリスマスにしては、あの時の行動は若干らしくなかったかもしれない」

「ええ。雪音ならば、自分からするとしても周囲がそういう風になつて仕方なくの方がらしいかと」

「うん、その通りだ。となると、俺に悪意が何かしたかもしれないのも十分あり得る」

「だからししよー、アタシ達と一緒にあの家で生活してくださいデス。さつきなんて、翼さんに膝枕されてたのにうなされたんデス」

「でもな……」

「仁志さん、私からもお願い。こんな事を言っても分からないかもしれないけど、今まで仁志さんが寝ててうなされた事なんてなかったと思うよ」

「デスデス。アタシが知る限りでもないデス」

あの家でししよーが寝てる時、うなされてた事なんて一度もなかったデス。

「……だけど」

「ししよー、深夜のバイトは疲れるデスよね？ それなのにちやんと寝れないなんてダメになるに決まっています」

「暁の言う通りだよ。仁志さん、今日はいいけど明日からどうするの？ 今日の仮眠の状態が常になったら、疲れ取れる？」

「うっ……」

ししよーが言葉につまりました。ここが決め所デス！

「ししよーに何かあったら、マリア達を元に戻す事が出来ないんデス。お願いデスからもっと体を大事にして欲しいデス」

調や未来さんがいたら、マリア達がいたらきつとこう言ってます。

それに、ししよーがもし倒れでもしたらエルが泣いちやうデス。

「……分かった。本当に悪意を倒せる時まではあの家で俺も暮らすよ。ただし、俺はリビングに布団を敷いて寝る。それなら二階で寝てる翼達へ変な事を簡単に出来ないしな」

大きいため息を吐いてから、ししよーはどこか諦めるようにそう言ってくれました。

でも、変な事ってなんデスかね？ え、エツチな事デス？

「仁志さん？ それじゃ意味がないんだけど？」

「で、でもな？ さすがに今の俺は翼達四人と一緒に寝て理性を保てる自信がないよ」

「じゃあ、ししよーがお家に戻って、代わりに響さんにこっちへ来てもらうデスよ」

我ながら名案デス。エルと一緒にならししよーも大丈夫デス。

「えっと、翼？ 今の切歌の意見をどう思う？」

「正直不安が拭えないかな。エルだけじゃ仁志さんの苦しみを緩和出来ない気がする」

およ？

「だよなあ。実際俺がうなされた時ってエルと一緒に寝てた時だし」

あつ、そうでした。

「じゃあじゃあ、アタシと調が両側で腕を押さえるように寝るってのはどうデスカね？」

「もっと問題」

まさかの二人から同じ事を言われるとは……。

でもでも、ししよーのうなされ方はちよつと変デス。おかしいデス。

あれをどうにかするにはアタシ達と一緒にいてあげるべきだと思うデスよ。

そうして話し合った結果、ししよーはアタシ達と同じ部屋で普通に寝る事で様子を見る事になりました。

でも、最初の頃は響さん達三人と一緒に寝てたデスのに、どうして今はダメって言ったんデスカね？

その理由については、ししよーは絶対に言えないって教えてくれませんでした。

ただ、これでししよーの役に立ってます。

今のアタシ達は戦う事しか出来ないデスからししよーの生活の役に立てないって思ってたデスが、やっとそうじゃないって思えるデスよ。

「ししよーのお布団も移動させないといけないデスね」

「そうだなあ。でも、もう圧縮袋がないから買ってこないと」

「なら私が行ってくる。百円均一に売ってるんだよね？」

「ああ。じゃ、資金を渡しておく。頼むな翼」

「うん」

お金を受け取って翼さんが部屋を出てくと、ししよーはまた布団へ横になりました。

「ししよー、もしかしてまだ疲れてる感じデス？」

「……みたいだ。足の痛みは消えたけど、全体的な気怠さが残ってる感じ」

これはいけないデス。じゃ、アタシが今度は膝枕してあげる番デスね。

「ししよー、じゃあアタシが」

「いや、膝枕はいいよ。嬉しいけどな」

「で、でも……」

そうしないとししよーがうなされちゃうデス。

それは絶対阻止したいデスし、どうすればいいデスかね？

「だからさ、手を握ってくれないか？」

「手？」

「そう。その、二人が撫でてくれたら俺の表情が和らいだんたる？」

なら、大事なのは手を当てる事なんじゃないかって思うんだ」

「ナルホド。じゃ、やってみるデスね」

「お願いするよ。もしこれでうなされないなら今後はこれで凌げるし」

こうしてアタシはししよーと手を繋ぐ形で翼さんの帰りを待つ事になりました。

ちよつとドキドキしたデスが、これはこれで嬉しくてあったかいデス。

すると不思議な事にししよーが一度もうなされる事なく眠つてくれました。

翼さんが帰ってきてても眠り続けてくれたデスから、二人で夕方まで寝かせようって話したぐらいデス。

……アタシのゆっくり寝て欲しいって気持ち伝わったデスかね

？

「こうして手を繋いでいると、不思議な気分になってくるな」

「不思議、デスカ？」

「ああ。思い出さないか？ あの初めて六人で手を取り合った時を」

「……ああ」

アタシ達が響さん達と手を取り合った時デスね。

ネフィリムと戦ったあの戦いで、アタシ達は初めてエクストライブ
になりました。

「意外と仁志さんもそれを意識してくれたのかもしれない。誰かと手
を取り合う事で人は心強くなれるからと」

「かもしれないデスね」

結局ししよーが起きたのは、スマホへエルから連絡が入った後でし
た。

アタシと翼さんで呼びかけて、ししよーが顔を洗ったりしてる間に
二人でお布団を圧縮して、真っ暗になる前にお引越しさせて、それが
終わって戻ってきたところでしたししよーのパパが運転する車が到着デ
ス。

「は、はじめましてデス。暁切歌デス」

「暁さん、か。エル達から話は聞いてるよ。とりあえず、まずは乗りな
さい」

「はいデス」

ししよーのパパはどこかししよーに似てる気がしました。

翼さんにこそつとそう言うと言った翼さんもそう思うって言ってくれた
デス。

「それで、足の方はどうだ？」

「もう大丈夫だって。えっと、心配かけて悪い」

「別にいい。お母さんもそこまで気にしてなかったしな」

「いや、そこは少しは気にしろっての」

「私に言うな。それでも色々と薬だのを買ってきてたから心配はして
るんだろう。後で見せておけ」

「……そうする」

アタシはその会話に驚きました。ししよーが子供に見えたからデス。

「やっぱりししよーもパパの前では子供なんデスねえ」

「ああ、そうだ。暁、おばさまはもっと私達の知らない仁志さんを見せてくれるぞ」

「知らない、デスカ。楽しみデス」

でも、こうして誰かのパパとママに会うのは初めてデスね。

やっぱり、家族ってあったかいんだって、そう感じます。

ししよーはこのあつたかさを知ってるから、それをエルやセレナ、アタシや調に与えてくれたんデス。

じゃあ、ししよーのパパにもお礼を言わないとデスね。ししよーのお家についたら言っておくデス！

「切歌ちゃんも可愛いわねえ」

「あ、ありがとうございますデス」

仁志の母に褒められ、切歌は照れくさそうに頬を掻いた。

未来と響を中心に用意されたビーフストロガノフを食べ終わり、何もなかった翼と切歌が後片付けを引き受けたのだが、仁志の母はそんな二人を眺めて嬉しそうに笑みを浮かべていたのだ。

「翼ちゃんは綺麗だし」

「そ、そうですか？」

「仁志、あんた本当に幸せ者よ。こんなに綺麗で可愛い子達に頼られて」

「言われないでも分かってるよ。きつと俺の人生の運は今回でほとんど使い切ったと思うぐらいだったの」

やや疲れた顔でソファに座ったまま仁志はそう返してため息を吐いた。

その横には彼の父が座っているのだが、その膝上にはエルフナインがヴェイグを抱えて座っている。

それもニコニコと笑って、仁志の父の話す鉄道絡みの話を嬉しそうに聞いていたのだ。

「ダイヤグラムという呼び名はそういう意味だったんですか！」

「ああ。今でこそ過密なダイヤになったが、昔は本当に綺麗なもんだったんだ。この時刻表を見るだけで、色々と楽しかったもんだ」「どう楽しいんだ？」

「ん？ 例えばな……」

時刻表トリックで有名な作家が大好きな仁志の父は、嬉々としてその事を話に絡めながら二人へ時刻表を眺める楽しさを説いていく。

それを聞きながら仁志はまるで自分の将来の姿を見てるかのよう
に苦い顔をした。

ちなみに仁志の父の横には響が座っていて、その様子を見て小さく
苦笑していた。

(やっぱりおじさん、仁志さんのお父さんだなあ)

自分の好きな事を話している横顔が仁志そっくりだと感じ、響はそ
れが仁志の歳を重ねた姿に思えて仕方なかった。

「あの、ママさん。師匠の怪我、どうなんですか？」

「もう痛みはなくなっただって言ってるんですけど」

テーブルの椅子に座っているのは調と未来である。

仁志の実家のソファは精々が四人掛けなので、二人は仁志の母のた
めに空いている椅子へと座っていたのだ。

「それが不思議なんだけど、あの深さの割に結構治ってきてるのよ。
まだ若いって事かしらね？」

仁志の左足の怪我は、看護師である彼の母から見ても奇妙だった。

普通なら年齢を考えれば一日程度ではそこまで治らないはずなの
だが、もう傷口が塞がってきていて、明日には完治していてもおかし
くないと思われたのである。

「それにしても心配ね。まだ全員じゃないんでしょ？」

「はいデス。マリアにセレナ、奏さんにクリス先輩。四人も助けない
といけません」

「大変よね。その、何とかかなりそうなの？」

「大丈夫デスよママさん。ししよーと協力すればマリア達を助ける事
は出来ますデスっ！」

皿洗いを終えて切歌はハンドタオルで手を拭きながら笑顔を見せる。

ただ、仁志の母はその言葉に複雑そうな顔を返した。

やはりまだ自分の子供が戦いという物へ関わっているという事が受け止め切れていないのだ。

「おばさま、お気持ちは分かるつもりです。安心してください、とはい言切れませんが、私達が可能な限り仁志さんやエルへ危険が及ばないように全力を尽くしますので」

「ええ、分かっているの。翼ちゃん達が極力危なくならないようにしてくれてるのは。けどね、やっぱり想像出来ないのよ。あの子が小さい頃見てたヒーロー達みたいに変身出来たりすれば少しはいいんだけど……」

「只野さんが、変身？」

「ギアみたいな物を展開？ 依り代、そういう事してくれないかな？」
「無理だと思うぞ。というか母さん、俺が変身なんて出来るようになったら絶対見せてるって分かっているだろ」

「でしようねえ」

その最後のやり取りに切歌達だけでなくエルフナイン達も笑みを浮かべた。

何せ二人して呆れ声だったのだ。共に相手の言葉や考えに呆れているのである。

そこから話題は仁志の母による仁志の昔話となった。

物心ついた頃からヒーローに憧れ、変身ポーズを練習したり、必殺技の名前を覚えては父親相手にごっこ遊びをしていた事など仁志からすれば恥ずかしい思い出だが、響達にとっては彼らしさに溢れ、そして同時に心をあつたかくするものだった。

仁志の母だけでなく父までも参加してのそれは、仁志からすれば時折覚えていない事もあり、それだけ親というものが子供へどう愛情を注いでいたのかを思い知る事にもなった。

（そっか。俺だって、自分の事よりもエル達と関わっている事の方が強く覚えてるもんなあ）

些細な事でも思い出そうとすれば思い出せる。自分とエルフナインでさえそうなら、血の繋がりもあって生まれた時から一緒にいる親ならもつとそうなくてもおかしくない。

そう思った仁志は、恥ずかしさや照れくささなどを感じつつも両親の思い出話を止める事はしなかった。

その話を聞いていると体の気怠さも若干薄れていくような気がしたのも大きい。

「つと、こんな時間か。悪いけど俺達はそろそろ戻るよ」

気付けば時刻は午後九時を過ぎていた。仁志の思い出話は時折脱線や補足などもあって思いの外時間を食ったのである。

「あらホント。じゃエルちゃん達、汗流してきなさい」

「はい、分かりました」

「分かった」

仁志の母の言葉にエルフナインとヴェイグが返事をしその場から動き出す。

仁志の父は膝上からいなくなった二人を見送り、少しだけ微笑みを見せる。

その顔を見た誰もが思ったのだ。仁志に似ていると。

何せ仁志本人さえもそう感じたぐらいだ。やはり蛙の子は蛙なのである。

「エル、ヴェイグ、また明日。おやすみ」

「おやすみ（なさい）」

着替えとタオルを手に行っているエルフナインとヴェイグへ声をかける仁志。

翼達も二人へ声をかけ、最後に仁志の両親へも挨拶し玄関へと向かう。

「では立花、エルとヴェイグの事を頼む」

「はい」

「じゃあね響。おやすみ」

「おやすみ未来」

「響さん、エル達の事お願いします」

「しますデス」

「うん、任せて」

「じゃ響、また明日な。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

静かに閉まるドアを見つめ、響は若干の寂しさを覚えた。

(分かってはいる。ここにエルちゃんとヴェイグさんだけを残すのはちよつと不味いつて。でも、折角未来達を助けたのに、私一人みたくで辛いなあ)

しかも仁志が自分以外の装者を連れて帰るのだ。まるで自分だけが選ばれなかったようにも思え、それが響の心を悲しみへ包む。

「響ちゃん、ちよつといい？」

「あつ、はい」

そんなところへ仁志の母が声をかける。

何だろうと思つて響が少し急いでリビングへと戻ると、仁志の両親が彼女を見つめてきた。

「あの、何か？」

「立花さん、率直に教えてくれないか？ どうして仁志は君とエルにべーだけをここに置いていく？」

思わぬ質問に響は一瞬返事が出来なかった。

「え、えつと、それは……」

エルフナインの事を孫のように可愛がっている只野夫妻のためと、そう言つていいものかと響は考え、言葉に詰まる。

それだけで二人は何かを察したようにため息を吐いて同時に呟いた。

「あのバカ息子……」

自分達の事を考え、妙な気遣いでエルフナインとヴェイグを実家に置いているのだと理解したのである。

「響ちゃん、あの子に言つてやつていいわ。妙な気遣いするぐらいなら本当の孫を見せろつて」

「そ、それは……」

「あるいはこう言つてくれてもいい。自分の両親の気持ちは気遣つ

て、何故私達の気持ちには気遣えないのかと」

「本当よ。あの子、やつぱりまだまだ子供だわ。エルちゃんの親代わりをやったのなら、優先するべきはそっちでしょうに」

響もここまでくれば分かっていた。只野夫妻が何を考え、何を思っているかを。

「たった三日だったが、君達がいってくれた日々は楽しく幸せだった。孫や娘が出来た気持ちを、味わえた」

「そうね。でも、だからってそれを押し付けるつもりはないの。響ちゃんもエルちゃんもベー君も、本当は仁志達といたいのでしょ？」

「それは……」

そうだとはいえない。だが、そうじゃないとも言い切れない。それが響の本音だった。

何故なら響もエルもヴェイグも只野夫妻と過ごす時間はあったか
いと思っていたからだ。

響にとつては忘れかけていた温もりを、エルフラインとヴェイグにとつては知らない温もりを与えてくれた時間だったのだから。

「あいつが借りた家なら、今の君達も共に暮らせるだろう。なら、本音を言ってみよう」

「勿論本当に響ちゃん達がここにいたいって言うってくれるなら、私達は喜んで受け入れるから」

「おじさん……おばさん……」

「私達には、君達のやらなければならない事の手助けは何も出来ない。だが、だからといって何もしないつもりはない」

「こうして知り合っただけのもの。あの子にも言ったけど、困った時は遠慮なく頼ってくれていいから」

「でも、私はおじさん達の子供じゃ……」

「いいのよ。もう響ちゃんは半分娘みたいなものだし」

「ああ。何なら仁志の代わりに子供にしたいくらいだ」

揃って笑みを浮かべて告げる只野夫妻の言葉に響はそっと胸を押さえた。

その温かさは、仁志から感じたものと同じだと気付いて。その優し

さは、仁志に宿っているものと同じだと気付いて。

「……分かりました。エルちゃんやヴェイグさんと今夜相談して決めます」

「そうしてちょうだい。あつ、もし他の子で家に来たい子がいるなら教えてね。切歌ちゃんとか調ちゃんとかなら嬉しいわあ」

「え？」

まさかのその発言に響は目を丸くした。

「また貴方はそういう事を……」

「いいじゃない。調ちゃんと切歌ちゃん、すつごく仲良しなのよ。いっそ揃って養子に欲しいわ。調ちゃんなんて私よりも家事が出来そうだし、切歌ちゃんは響ちゃんみたいに明るいいし」

「あのなあ」

「貴方だってあの二人の事気に入ってるでしょ？ パパさんって呼ばれてデレデレしてたじゃない」

「いや、あれは……」

「翼ちゃんからはおじさまなんて言われて照れてたし、未来ちゃんからおじさんって呼ばれて嬉しそうだったし、本当に娘が欲しかったんだって分かったわ」

「別にそれであの子達の面倒を見るつもりになった訳じゃない」

「どーだか？ ならどうして今更になって持ち家の方が良かったかもなんて言い出してるのよ。しかも割と広い物件で考えちゃって」

目の前で繰り広げられる夫妻のやり取り。それが仁志との未来図にも一瞬思え、響は小さく微笑んだ。

（うん、やっぱり仁志さんはおじさん達の子供だ。そして、きっとおじさんみたいに仁志さんもなるんだろうなあ）

いざとなれば妻を御し、一家をまとめられる存在。だけど、普段はどこか妻に押され気味な旦那。

それが仁志の未来予想図にも見え、響は無意識に笑みを浮かべていた。

結局その口論が激化する前にシャワーから二人が上がった事で中断となり、湯上りのエルフナインを夫妻が可愛がる事で幕となった。

それを眺めヴェイグは響へこう尋ねたのだ。

「なあ響、ぱぱさんとママさんは何かあったのか？」

「え？ 何で？」

「いや、どこことなく二人が寂しそうだからな」

「……そっか」

響からは昨日と変わりなくエルフナインへ話しかける夫妻にしか見えない。

しかし、そこにはたしかに昨日とは違う気持ちがある事を知った今、ヴェイグの気付きは正しいかもしれないと思って響は一瞬だけ悲しみを抱く。

「ヴェイグさん、寝る前にエルちゃんも入れて話したい事があるんだ。だから」

「分かった。それが終わるまでは寝ないでおく」

「お願いするね」

それだけ告げて響もタオルなどを手にシャワーへと向かう。

その熱い湯を浴びながら響は思うのだ。早くこの事件を解決しよう。

——お母さん達に会いたい。会って久しぶりに声を聞きたい。

久しぶりに触れた親の温もり。それを実の両親からも感じたいと、そう思つて……。

「それじゃあ……」

「お先にお風呂いただくデス」

「うん、ごゆっくり」

「寝ないようにな」

「そうだぞ。特に切歌は気を付けろ」

「分かつてますデスよししよー」

お風呂場へと向かう切歌ちゃんと調ちゃんを見送り、私と翼さんは只野さんへ顔を向ける。

まさかあの後もうなされてたとは思わなかった。だけど、その理由を聞いたなら納得しかない。

クリスがああ別れだと思った時に真っ先にキスした理由。それが悪意に誘導されたものだとしらつて。

「それで、体の調子はどうですか？」

「うん、気怠さが抜けない感じだ。それでも戻ってきた時よりはかなりマシだけど」

「こうなると、今後は仁志さんがお休みの時しか悪意と対峙する事は出来ないね」

「それはダメだ。手遅れになる可能性がある」

「だけど私も翼さんの意見に賛成です。今のままじゃ、只野さんが倒れちゃう」

実際私を元に戻してくれた時には怪我までした。

そのせいで二日休まないといけない事になった。

明日は勤務がある以上、只野さんを連れていくのは無理だ。

もし何かあったら私達の世界やこの世界を守れても、只野さんの生活を守れない。

「それは……否定し切れないけど……」

苦い顔をする只野さんだけど、その声はどこか弱い。

「仁志さん、私達はたしかに一刻も早く悪意を打ち倒し、奏達を元に戻さないといけません。ですが、そのために仁志さんを犠牲にしたくはないんです」

「翼……」

普段の砕けた口調じゃない事で翼さんがどういう気持ちかを只野さんが察したみたいに見開いた。

多分、今の翼さんは装者としての言葉を言ってる。普段の風鳴翼としての言葉じゃないんだ。

「それに暁や月読も疲弊していると思います。エルやヴェイグもでしょう。なので、最低でも明日は丸一日休養にあてるべきかと思えます」

「……分かった。そうしよう。ピンチの時程、ふてぶてしくいようじゃないか」

「はい、そういう事です」

そこで二人は同じように小さく笑った。何だか、ちよつといい雰囲気
気で複雑。

「つと、電話だ」

只野さんがスマホを取り出すと少しだけ首を傾げた。多分だけど
響かエルちゃんからなんだろうな。

で、仁志さんはスピーカーモードにしたみたいで、スマホを床の上
へ静かに置いた。

「もしもし？　どうかした？」

『あつ、その、実は仁志さんにお問い合わせがあるんです』

「お願い？」

『はい。えつと、私達もそつちで一緒に暮らしたいんです』

その言葉に私はやっぱりと納得。だって、響達が只野さんの実家で
暮らしてた理由は、只野さんの部屋がシャワーもない場所だったのが
大きい。

それが解消された以上、あの家で暮らす理由はないって言えなくも
ないから。

きつとエルちゃんは、お姉ちゃんって扱ってる切歌ちゃんや調ちや
んと一緒にいたいって思ってるはずだし。

「それは……」

『あの、おじさんやおばさんが言ってくれたんです。こつちを気遣う
ぐらいならエルちゃんの気持ちを気遣いなさいと仁志さんへ言っ
てくれて』

「……………そっか」

噛み締めるようにそう言っただけで只野さんは天井を仰いだ。

『それで、エルちゃんにヴェイグさんと話し合っただけです。で、エル
ちゃんはやっぱり切歌ちゃんや調ちちゃんと一緒にいたいって』

「ああ、うん。分かったよ。じゃあ、明日の朝に迎えに行く。悪いけど
荷物をまとめておいてくれ」

『分かりました。つと、ちよつと代わります』

『あのつ、兄様！』

「エルか。ごめんな、俺のワガママで」

『僕っ、出来ればこっちで兄様達と暮らしたいですっ。でも、それは無理ですから……』

「そうだな……」

『おじいちゃんもおばあちゃんも大好きです。でも、やっぱり僕はお姉ちゃん達と一緒に』

「うん、分かったよエル。ありがとう。それとごめんな」

『いえ、僕も本当に悩みました。だけど、おばあちゃん達が家族の傍にいなさいって言うてくれたんです』

その言葉で只野さんが言葉を失った。

多分だけどエルちゃんが告げた“家族”に自分も含まれてるって気付いたんだ。

きつとそうだ。エルちゃんにとつて、こっちでの只野さんはお兄ちゃんでありながらお父さんでもあるだろうから。

「エル、そちらの気持ちはしっかり仁志さんに伝わった。だから立花に代わってもらえるか？」

『あつ、はい』

只野さんが何も言えなくなったのを見て、翼さんが小さく微笑んで会話を引き継いだ。

チラツと見れば只野さんは顔を上へ向けてた。

もしかしたら、ちよつと泣きそうになってるのかもしれない。

『翼さん、代わりました』

「立花、明日は一日休養日に当てるからそのつもりでいてくれ」

『休養日？ お休み、ですか？』

響の口調からは若干の疑問が感じられる。

無理もないよね。今日の事を考えると、早くマリアさんを元に戻すべきだって思うもの。

「ああ。仁志さんは仕事がある。その休み以外は基本悪意と事を構えない方がいいと思ってな」

『……そうですね。でも、セレナちゃんが心配です』

「それは分かる。だが、今の悪意と戦うには仁志さんの存在が必須だ。そして、悪意に飲み込まれてしまったマリア達との戦いは私達でさえ

疲弊度合が強い。それへ一般人の仁志さんを巻き込むのだ。せめてそれだけで一日を終わらせる事が可能な時にするべきだ」

『そう、ですね。分かりました』

『ではまた明日会おう。いい夢をな』

『はい、おやすみなさい』

そこで通話は終わった。翼さんはスマホを手に取ると只野さんへ顔を向ける。

でも、まだ只野さんは天井を見上げてた。

「えっと、仁志さん？ 通話が終わったけど……」

「……ああ、うん。ありがとう」

そこで私と翼さんは気付いた。只野さんの声が若干涙声になっている事に。

思わず私は翼さんと顔を見合わせた。無言のままでもうしましようつて感じで見つめると、翼さんが少し困った顔をしてから、何かを思い出したみたいに視線を私から只野さんの手へと向けた。

そして翼さんは手を握った。

「翼……？」

それに只野さんが顔をこっちへ向けた。その目は潤んでいて、顔は軽い驚きに包まれてた。

「仁志さん、私は今、嬉しいんだ。やっと、やっと仁志さんが精神的に私を頼ってくれたから」

「あ……」

その言葉で私も気付いた。今の只野さんは、私達に弱いところを見せてくれてるんだって。

だから私も只野さんの手を握った。

「未来……」

「只野さん、泣いてもいいですから。私達だって只野さんへ涙を見せたんですし」

あの別れの時、みんながこれでお別れだってどこかで思って泣いてた。

だけど只野さんだけが頑張って泣かないようにしてたのを覚えて

る。

それが、今は涙を見せてくれた。だから私も翼さんの気持ちは分かる。

「強くありたいのかもしれないけど、常にそうであろうとすると気疲れしてしまふから。仁志さんも私達だけの時ぐらい弱くなつて欲しい。ここは気を張らないでもいい場所にして」

「翼……」

「そうですね。この家や私達の前ぐらひは、弱い只野さんでもいいですよ」

「未来……」

そこで只野さんは服の袖で目元を拭おうとして、私達が手を握つてる事を思い出して小さく苦笑した。

「その、少しだけ離してくれないか？　ほんの少しでいい」

合図した訳じゃないけど、私と翼さんは同時に手を離した。

手が自由になった只野さんは袖で目元を拭うと……

「二人共、ありがとう……」

「っ……」

そう言つて微笑んでくれた。

その時の只野さんは、初めてみるぐらい素敵な笑顔だった。

翼さんと二人で思わず魅入つてしまふぐらい、胸がいつぱいになるような、そんな笑顔だった……。

仁志が新しく借りた戸建の二階にある一番大きな部屋。

そこに五組の布団が敷かれ、誰もが眠りに就いていた。

階段に一番近い場所に翼、その横に調、仁志、切歌、未来となつている。

安らかな寝顔を見せる女性達の静かな寝息の中、仁志だけが苦しそうな表情でうなされていた。

「ううつ……ぐっ……」

彼がうなされているのはその夢が原因。

仁志が一番絶望していた頃やその理由となつた記憶。仁志が忘れ

ていたい、思い出したくない記憶を引つ張り出されていたのである。クリスを始めとする悪意に魅入られていた四人からの別れのキス。そこで送り込まれた闇の種の欠片達があのゲートを通った事で急激に活性化し、結果仁志の精神を苛む事となっていたのだ。それはかつて響が味わった出来事と同じと言えた。マリスシードと呼ばれた、悪意の種。それによってあの響でさえ心を弱らせ、それに伴い体までも衰弱させてしまった一件だ。今、それと似た事が仁志を襲っていたのである。

「んっ……しししょう？」

隣から聞こえるうめき声のようなものに目を擦りながら調が起き出す。

隣に眠る仁志が明らかに苦しんでいるのが分かり、調は仁志の手をそつと握り締めた。

(しししょうがたのしいゆめをみれますように……)

純粹な想いがギアペンダントに埋め込まれた依り代を通じて仁志へ流れ込み、その表情を和らげていく。

無心な願い。無垢な気持ち。その愛が力となって注がれた結果だった。

「……よかった」

自分の手の温もりが仁志の体へ伝わったかのようにその眠りをゆっくり落ち着けていくのを見つめ、調は嬉しそうに笑みを浮かべて布団へ横になった。

そして再び室内に静けさが訪れるも、その静寂の中、どこかで声ならぬ声が響く。

——……たじゃ………は………った……。

だがしかし、それは今までと違い、言葉がかすれ気味な上にどこにも姿らしきものが見えない。

けれど、たしかにそこにいるのだ。邪悪な息吹は、今もまだ仁志達を狙っているのだから……。

アカツキノソラ

「父さん、母さん、短い間だったけど三人を置いてくれてありがとう」
そう言ってから頭を下げる。

今日は日曜日で時刻は午前七時半過ぎつてどこか。

父さんは休みだけでも母さんは日勤だから早めにやってきた。

勿論響達を迎えに来たのと同時に、その事への感謝を告げるためだ。

「別にいい。私達も貴重な経験をさせてもらった」

「響ちゃん、エルちゃん、ベー君、仁志がまた何かやらかしたらすぐに教えてね。しっかり注意しておくから」

「あはは……はい、ありがとうございます」

「おじいちゃん、おばあちゃん、本当にありがとうございました。僕、初めてグランパやグランマが出来て嬉しかったです!」

「ぱぱさん、また機会があったら色々教えてくれ。ママさん、タオルありがとう。大事にする」

頭をゆっくり上げると、そこには笑う母さんと笑みを見せる父さんがいた。

それが一瞬俺の記憶にある昔の姿と重なる。けど、やっぱり当然だけど老けたよなあ。

……少しでも、恩返しできるように俺なりに頑張ろう。

せめて、二人を見送るぐらいはしないとな。

「それじゃあ、もう行くよ。母さん、仕事頑張つてな。父さんはタバコ、控えろよ? 響達がいいた間は大分抑えたらしいじゃないか」

「無理よお。お父さん、仕事場の方でその分吸ってたみたいで」

「余計な事は言わなくていい。とにかく、エル達の事をちゃんと見てやれ。兄様、なんだろう?」

「……ああ」

父さんの言い方に含まれた意味合いを感じ取り、しっかりと頷いた。

それに満足そうに笑みを見せた父さんは、幼い頃に俺が良い事をし

た時の顔と一緒にだった。

こうして俺は響達と一緒に実家を後にし、車ではなくあの日来た時と同じで電車で帰る事に。

「何だか、たった数日なのに寂しいです……」

「そうだね。おじさんもおばさんもあつたかい人達だったもんね」

ヴェイグを抱えて歩くエルの寂しそうな言葉に響も同意しながら後ろを振り返る。

そこには三階建てのアパートがある。その最上階の右側へ二人の視線はきつと向いているはずだ。

「もうこれで会えない訳じゃないさ。何かあつたら頼ってくれていいって言ってくれたんだろ？」

「「はい（ああ）」」

顔をアパートへ向けたまま、響達が返事を返す。

ヴェイグもどうやら寂しさを感じているらしい。

どうやら父さんの趣味の話が気に入ったらしく、エル曰く寝台特急に乗って北海道へ行きたいと言いついていたそうさ。

……実の息子さえ持ちかけられた事のない旅行なんだが、もしかしてヴェイグなら表向き旅費は一人分で済むからか？

「エルや響の使ってるスマホにも父さんと母さんの番号登録してあるし、翼のも登録してもらってる。こっちにいる間はいつでも頼ればいいや」

きつと、それを父さんと母さんも望んでいるはずだ。

すっかり響達三人を家族のように扱ったあの二人なら、きつと……。

「……はい、そうですね」

響がそう言つてエルの肩へそつと手を乗せた。

「エルちゃん、今はみんなと合流しようよ。おじさんとおばさんには、また会いに来れるしね」

「……はい」

こうして俺達は実家からの最寄駅へ向かい、そこから電車で暮らししている街の最寄駅へと移動する。

その道中はもう響もエルも明るい顔を見せてくれ、ヴェイグも声を出す事は出来ないが時折周囲の目を盗んで笑みを見せてくれた。

駅に到着し、新しく借りた一時的な住居へと向かう。

もうエルに哀しさや寂しさはないように見える。でも、一応念のため聞いておく事にした。

「エル、一ついいか？」

「はい、何でしょう？」

「寂しいや悲しいって気持ち、言ってくれていいからな。客観視すれば正解だとしても、それが主観になっても納得出来るとは限らないだからさ」

「兄様……」

「ワガママ言ってくれていいって事だ。子供の内しかワガママを好き放題言える時期はないんだしな。もし俺に言えないなら響達でもいいから。癩癩って言って分かるか？ エル、あまり我慢しなくていいぞ。せめてその、俺達には遠慮なく思った事や言いたい事を言って欲しいんだ」

実家に居てくれと、そう俺が言った事でエルは少なからず我慢をしてくれた。

いや、俺が我慢をさせてしまったとも言える。その事を父さんと母さんは俺へ教えてくれた。

子供に我慢をさせる事は必要だ。だけど、それは仕方ない時であり、しなくてもいい我慢をさせるのは違うって。

同じ失敗をしないためにも、俺はもう一度ちゃんとエルと向き合うとの、その想いで言葉をかけた。

「ありがとうございます、兄様。でも、それなら僕はもう昨日の夜、それを言ってます」

「……そっか」

可能なら父さんや母さんも入れてみんなで暮らしたい。あれはエルの紛れもない本音なんだ。

「おじさんやおばさんも一緒にいてくれたら、マリアさん達を元に戻した後も仁志さんの負担減りますね」

「代わりに精神的負担は増えそうだよ」

特にマリアと奏なんて父さんと母さんが知れば間違いなくからかってくる。

で、あの二人だと下手すりゃ本気で俺の妻になろうとして、余計父さんと母さんが喜びそうだ。

「でも、響さんはおばあちゃんからお料理を教えてもらおうとしてまじしたし……」

「え、エルちゃんっ!？」

「母さんから料理?」

何故だ? 本人も言ってた通り、母さんは料理が得意でもなければ好きでもない人だ。

どうせ教わるなら未来や調の方がよっぽどいいと思うんだが……?

「はい。兄様が慣れ親しんだ味を覚えたいって」

「俺の……」

理由が納得出来て響へ目を向けると、そこには赤い顔で下を向く可愛いお日様がいた。

「……別に俺の慣れ親しんだ味を知らなくてもいいよ。むしろ、俺が響が慣れ親しんだ味を知りたいぐらいだ」

「え?」

「えっと、夫婦が揉めやすい事って色々あるらしいけどさ。その上位に入るのが互いの家庭の味の違いなんだって。カレーや味噌汁、雑煮など色んな食べ物の味付けやら入れる物やらの違いだ」

「あつ、そういえばマリアさん達が作るカレーと、未来が作るカレーは入ってる物が違ってました」

「きつと響のお母さんが作った物もそうじゃないか? で、きつと俺の母さんが作るのもだ。それらが家庭の味ってやつなんだよ」

そこで一旦俺は言葉を切って鍵を取り出す。目の前にはまだ見慣れないドアがある。

「夫婦ってのは、赤の他人同士が家族になる事だ。なら、一方だけが合わせてもダメなんだと思う。互いの味を教え合って、そこから新しい

味を作るんだ。その家だけの、味をさ」

「新しい味……。その家だけの、味……」

これも色んな漫画やアニメからの受け売りに近いけど、俺もそう思う。

食事は絶対に必要なものだ。そこの差異を放置したらきつと揉める。

だからこそ、最初にお互いでそれを教え合って妥協点みたいなものを探すんだ。

これ、言うなれば人生の教訓だよなあ。譲れないところは譲らず、譲れるところは譲る。

これが出来ない事の、何と多い事か。俺もそういう意味ではまだまだなんだだろう。

鍵を開けてドアを開ける。まずエルが中へ入り、響がそれに続いて入るのだけど……

——仁志さん、今の話って、私と新しい味作りたいうて事で、いいですか？

なんて赤い顔で聞かれてしまい、俺は答えに困ってしまった。

無意識にプロポーズのような事を言ってたんだと気付いて。

響は俺が答えない事で何かを察してくれたみたいに苦笑して家中へ入ってくれた。

「……何やってんだよ俺」

これ響だから今みたいな感じで終わらせてくれたけど、セレナだったらもつと厄介な事になってたかもしれないぞ。

ホント、気が抜けてるにも程がある。あのゲートの中へ入ってからずっと続いている倦怠感もあってか、本当に体の調子が良くない気がする。

翼や未来には喜んでもらえたみたいだけど、俺自身はあんな風に弱いところを見せる事への罪悪感や抵抗感はまだある。

だけど、そう思っても弱くなってしまうぐらい、今の俺は精神的に疲弊してるんだろうな。

その原因は、おそらくあの夢。俺が一番心を病んでいた頃の記憶。

何でそんな事を思い出すんだと不思議だったけど、翼と切歌の話で理解した。

あれは、悪意が俺に見せているんだと。ただ、困った事にそれが分かったところで打つ手がない。

実は、昨日寝る前に未来へ頼んで神獣鏡の光を当ててもらったんだが、それでも寝てる時に悪夢を見た。

途中でそれが終わってくれたから良かったけど、あれはおそらく調が手を握ってくれてたからだと思う。

朝、起きた時に調と手を繋いでたからな。

「ただいま」

「二」おかえり（なさい）（デス）「二」

エルや響に遅れる事少しで俺も玄関へと入ると同時に声を出すと、翼達の声が返ってくる。

それに笑みを浮かべながらドアを閉めて鍵をかけると靴を脱いでリビングへと向かう。

そこにはこつちを見つめる五人の装者と二人の支援役がいた。

「……ある意味、あの平屋を超えたな」

そう告げるとエルとヴェイグが頷き、響達は苦笑した。

「デスよ。ただ……」

「うん、今は師匠しか働けない……」

「私達は、もうバイトしない方がいいからね」

未来の言葉に切歌と調が小さく頷くのを見て、俺は五人が金銭面を心配しているだけではないと察した。

俺だけが勤務し、その上で悪意とも戦う事を申し訳なく感じているのだろう。

「いいよ。それなら歌を唄ってくれ。動画配信の『戦姫絶唱シンフォギア』はちゃんと残ってるんだ」

「そっか！ 歌があるんだっ！」

「それなら今の状況でも協力出来るな」

忘れてたとばかりに笑顔になる響へ翼も似たような顔を見せた。

そう、今の響達なら戦闘曲とは異なる歌を唄えるはずだ。

それをアップしてもらえば多少なりとも収入となるだろう。

「兄様、なら僕にやり方を教えてください。今の僕は何でもいいので役に立ちたいんです」

エルの言葉は俺の言葉でもあると思った。だから笑顔で頷いた。

「ああ、いいよ。でもエル、これだけは忘れないでくれ。エルが笑顔でいてくれる事で、俺達も笑顔になれるって事を。エルがこうして元気であるだけでも、十分役に立ってってくれるって事をさ」

「……はいっ！」

元気な笑顔で嬉しそうに頷いてくれたエルを見て、俺だけじゃなく響達も笑顔になった。

だが、ここで新しい問題が……

「冷蔵庫、か……」

「はい。あと洗濯機も欲しいです」

未来の口から告げられた内容に俺はため息を吐きたくなった。

当然の事だが、俺の部屋には洗濯機がない。冷蔵庫も一人用の小さな物だけだ。

それをどうにかするために以前は翼が根幹世界で家電を購入し持ち込んでくれたのだが、それらはもうゴミとして処分済み。

マリア達が使っていた物は売却処分したため手元がない。要するに大人数で暮らすための家電がないのだ。

「……よし、分かった。買おう。で、俺の部屋にある物を取りあえず全部こっちへ持ってくる」

腹を括ろうと、そう思った。決断の時だとも。

この借家へ完全に引越し、みんながいなくなった後もここで暮らす。

俺は今、そう決めた。

「それはいいですけど……」

「ししよー、アタシ達が帰った後、またお引越しデスよ？」

「いや、しない。俺はここで暮らすって決めた。で、あの部屋を引き払う」

「」「」「ええっ?!」「」「」

ヴェイグ以外が驚きの声を上げたけど、俺はもう決めたとばかりにキッチンへと向かった。

そこには洗濯機を置ける場所が設置されている事を知っていたからだ。

「……これなら馬鹿でかい奴じゃない限り置けるな」

「ひ、仁志さん！ 本気ですか？ ここ、家賃だけで仁志さんの収入の半分ぐらいあるんじゃない？」

「それでもいいよ。むしろ、そうなれば仕事へもつと励む理由になる。芸人さんの中じゃ、暮らす場所を自分の収入ギリギリにしろって言う人もいるぐらい、家賃を理由に仕事へ精を出させるって考えは珍しい事じゃないんだ」

「で、でも……」

不安そうな響へ俺は笑みを見せる事にした。

俺だって不安がない訳じゃない。でも、今は心機一転を図るべき時なんだと思う。

それに、父さんに金を出してもらう以上、ここを借り宿のように扱いたくないとも思うんだ。

「だ〜いじょうぶ。それに、考えてみればさ、みんなが今後遊びに来た時、ここだったら寝る場所にも困らないだろ？ いい物件だと思うよ」

「仁志さん……」

「だから、心配よりも応援してくれないか？ 大丈夫。俺ならもつといいところにもいけますとかさ」

「……はいっ！ 仁志さんならきつともつと綺麗で新しいところに行けますー！」

「うん、ありがとう。出来れば四十を超える前にはそうなりたいな」

お日様の笑顔を俺に向けてくれた響へ感謝するように言葉を返す。
と、そこへ切歌と調が顔を出した。

「ししよー、お部屋の鍵、貸してくださいデス」

「私達が荷物運んできます」

「あつ、じゃあ俺も一緒に行くよ。大家さんとも話しておきたいし」

こうして俺はザババコンビを連れて部屋へと向かう事に。
とりあえず未来には響と共にコインランドリーへ行ってもらい、今日のところはそれで何とかしてもらった。

翼にはエルとヴェイグと一緒に留守番を頼んだ。ついでにすっかり忘れていた動画のコメントチェックなどもお願いしておいた。

「で、何で手を繋ぐ事に？」

現状俺の両手はザババコンビと繋がれている。

嫌じゃないし嬉しくもあるのだが、何故だろうと首を傾げたい。

「ししよー、やっぱり夜うなされてたつて調から聞いたデス」

「だから、少しでも長く私達が触れておかないと」

「ああ、そういう事か」

寝てる時だけじゃなく起きてる時も可能な限り人の温もりを与えておこうと、そういう事らしい。

二人らしい考えと気持ちに心があつたかくなる。

そのまま二人と手を繋いだまま部屋へと到着し、早速とばかりに切歌と調は荷物を運び出す。

まずは切歌が冷蔵庫って……え？

「き、切歌、それ一人で平気なのか？」

「デスっ！」

「師匠、私達の頭をよく見て欲しい」

「へ？」

調の言葉で二人の髪をよく見れば……あつ、南国風な髪飾り。

「……ギアを展開してるのね」

「そういう事」

「だから安心してくださいデス」

水着ギアを仕込んでいるのなら俺よりも今の二人は力持ちだ。
なら過度な心配はいらないか。

「分かった。でも気を付けるんだぞ？」

「はいデス」

「うん、分かってる」

切歌に続いて調が運び出したのは……折り畳みテーブルか。

ギアがあるとはいえ、それらを平然と運び出していく二人を見送り、俺は十年以上過ごしてきた部屋を眺めた。

「……あまり物増えてないなあ」

初めて引越してきた時とそこまで変わらない部屋に乾いた笑いを浮かべて、俺はため息を吐いた。

思い出がない訳じゃない。むしろこの半年近くは忘れられない思い出だらけだ。

響と出会い、クリスと出会い、翼と出会った。その三人とここで過ごし、奏さえも一晩泊めた事がある。

セレナ、切歌、調を招いた事もあるし、マリアとエルに初めて会ったのもここだ。

未来に手料理を作ってもらった事もある。本当に、思い出が沢山出来た。

「……………あゝ、ダメだなあ。涙もろくなってる。これも歳か？」

涙を我慢する事無く流して、俺は一人笑う。

やっぱあの時一人で泣いたのを契機に心が弱ってる気もする。

これが悪意のせいなのかもしれないけど、現状打てる手はないに等しい。

「そういえば、未来が力じゃ倒せないって言ったのもそれかもしれないな」

俺の体へ悪意が手を出してるとすれば、それは力でどうこうなるものじゃないはずだ。

悪意が力を増す前はたしかに力で何とかしてきた。神獣鏡の光で祓ったり、ギアを展開する事で依り代の力を増して弾き飛ばしたりと。

だけど、あのイグナイトギアへ変化した辺りからそれだけじゃ悪意をどうこう出来なくなってた。

いや、正確にはそれで何とかしても同じ事の繰り返しになってるんだ。

神獣鏡でも依り代でも、出来るのは一時的な事で根本的な解決にはなっていないんじゃないか？

「……それがどうにか出来るかすれば、やっぱり愛なんだろうか？」

そう思った瞬間、ズキッと頭が痛む。

けど、以前のような膝を付く程じゃない。

「……………この事を考えられると都合が悪いってか」

どうやら悪意はやっぱり駆け引きとか出来ないみたいだ。

思い出せば最初の激痛も悪意の事を考えてた時だった。

「つと、いけないいけない。大家さんへ電話しないと」

そのまま部屋の中で大家さんとやり取りを始め、今月いっぱい解約したい旨を告げると何と納得されてしまったのだ。

何でも大家さんも年齢のためか色々考える事があるらしく、そろそろこのアパートも処分する事を考え始めていると教えてくれた。

考えてみれば、俺がここへ来た時からおじさんじゃなくておじいちゃんだったしなあ。

「さてと……………どうしたもんかな？」

行き当たりばったりに近い行動だけど、思い返せば俺ってそういう生き方をしてたっけ。

響と出会ってからが人生で一番頭を使ってた気がする。

まあそれは今もかもしれないけど…………。

「俺も何か運びたいけど…………」

誰もいなくなった部屋の鍵を開けっ放しはさすがにどうかと思う。

なので切歌や調が戻ってきたらどちらかに少し休んでもらって、俺が物を運ぶとしよう。

「……………今日は晩飯を食べずに寝るとしよう」

こうなってから初めての勤務だし、オーナーに心配させたくない。

元気な感じで仕事しておかないとな、うん。

「今日のところは、ちゃんとお昼と夕方それぞれで買い物行ってご飯を作らないといけないね」

「そうですね。師匠が冷蔵庫と洗濯機を急いで設置してくれるように頼んでくれるみたいですけど、それでも当日は無理ですし」

キツチンで話す未来と調。その視線は揃って本来物が置かれるは

ずの場所を見つめていた。

排水口や水道などが完備されているそこは、洗濯機を置くための場所である。

そしてその視線が別の場所へと向いた。そこには仁志が使っている一人用の小さな冷蔵庫が置かれている。

「冷蔵庫は……とりあえずこれを使うとしても、入れられて精々飲み物だね」

「ですね」

「調味料とかは只野さんが使ってた物が少しあるけど……」

「新しく買うとしたら、どれだけの大きさ買うか迷います」

「そうだね。そこは、今後次第って事にしよう」

「はい。じゃあ……」

この家の家事を主に担当する事になるだろう二人の打ち合わせがキッチンで行われる中、リビングではゲートであるノートPCを見つめるエルフナインとヴェイグの姿があった。

「この状態なら匂いはしないんですよね？」

「ああ」

「じゃあ、こうやって閉じている時はあの裂け目は悪意に見えなくなつてると考えていいんだ。そして、おそろくだけど時間の流れ方さえも異なつてははず……」

「だが、裂け目はゆっくりと閉じていつてる。いや、この場合は閉じられようとしているかもしれないな」

「まさかっ!?! じゃ、あれは悪意がやっているんですか!?!」

「可能性はある。星の声は悪意の力が増してるから時間停止へ力を多く向けてるんじゃないか?で、その結果ゲートである裂け目の維持が難しくなつてきてると考えれば色々と納得出来る事は多い」

ヴェイグの意見にエルフナインは息を呑んだ。

あの悪意に勝利したと思った時に見た裂け目の変化。それが既に悪意の次なる動きの予兆だったのかと思つたのだ。

そこから二人は悪意が裂け目を閉じようとしている理由を考え始める。

悪意にとって上位世界との行き来はもう出来なくなっても構わないと考えているのか。

あるいはそうする事で自分達を焦らせるためかもしれないなどと、色々と意見を述べ合う二人。

一方、二階の寝室とされた場所には仁志を始めとする四人がいた。

「じゃ、お願いするな?」

「はい」

「デス」

「任せて」

体の気怠さが取れない仁志はこれまでの事を踏まえ、響達三人に頼んでうなされないで眠れる方法を模索しようとしていたのだ。

翼に膝枕をしてもらい、響と切歌に手を握ってもらおうという形で目を閉じる仁志。

ある意味では羨ましいと言われるかもしれないが、本人達にとっては真剣な問題であった。

仁志が悪意に何かされている。

これはもう仁志達全員の共通認識であり、疑いのような事実であったからだ。

事実、響達は気付いている。今朝の仁志はどこか元気がないと。

「……もう寝っちゃった」

「早いデス……」

「ああ、やはり疲れが取れていないのだろう」

目を閉じて五分と経たずに眠りに落ちた仁志を見て、響達は小さな驚きを浮かべていた。

そのまま仁志を見つめていた三人だったが、次第に彼の寝顔が苦しそうなものへと変わり出すのもすぐだった。

「ううっ……ああっ……」

「仁志さんっ!?!」

「立花、起こす方向ではダメだ。何とか落ち着かせるんだ」

「ししよー、大丈夫デス。アタシ達がついてるデスよ」

「ぐっ……はあはあ……っ!」

強く手を握り締める切歌の想いも虚しく、仁志のうなされ方は酷くなる一方だった。

翼が昨日のように仁志の髪を優しく撫でるも、それでさえ沈静化させる事が出来ず、響達は表情を曇らせる。

もう起こすしかないのではないか。そう誰もが思うも、それでは今後仁志は体を休める事が出来なくなるのと同義であると考え、何とかしようと知恵を巡らせた。

「……そうデスっ！　もしかしたらこれで……っ」

何かを思い付いたように切歌は仁志の頬へと顔を近付け、その頬へそっと口付ける。

（ししよーがゆっくり寝れますように。アタシの気持ち、届いてくださいデス……）

仁志が言っていた愛の力が悪意を倒す方法ではないかとの言葉を思い出し、切歌は心の底から仁志を想って優しい気持ちを伝えるようにキスをしたのだ。

すると、その瞬間仁志の表情が若干ではあるが和らぐ。

切歌の真っ直ぐな想いがギアペンダントに埋め込まれた依り代を通じて仁志の体へ作用し、その悪夢を弱めたのだった。

「凄い……。切歌ちゃんがほっぺたにキスしたら仁志さんが少しだけ落ち着いた」

「暁、どうしてキスを？」

「えっと、ししよーが悪意を倒すには愛の力が必要じゃないかって言ってたのを思い出したんデスよ。それで、ならししよーがゆっくり寝れるようになって思ってたキスしたら伝わらないかなって、そう思ったんデス」

少しだけ照れながらの言葉に響と翼はそういう事かと納得し、ならば自分もと気持ちを入れて仁志の頬へ口付ける。

（仁志さんが楽しい夢を見れるように……。この想い、届いてっ！）

（仁志さんが体をちゃんと休める事が出来ますように。私のこの心が、その一助となって欲しい）

響や翼の強い想いもギアペンダントに埋め込まれた依り代を通じ

て仁志へと注がれ、何とその表情を穏やかなものへと変える事に成功する。

「……本当に、効果があるのか」

「ししよー、やっとな静かに眠れてるデスね」

「うん。翼さん、思い出してみると私達がリビルドギアを手に入れた時って……」

「そうだな。あの時も切っ掛けはキスだった。そう考えれば仁志さんの考えは的を射ているかもしれないか」

「じゃあじゃあ、ししよーをこうやって寝かせてあげるためには、今みたいな事してあげればいいデスカね」

愛の力。そんな抽象的な言葉をこれまで形にしてきた事もあり、三人は互いの顔を見合って頷く。

自分達の間で眠る男の穏やかな寝顔。そのために今後も真っ直ぐな気持ちを込めたキスをしてやろうと、心に誓って。

だが、この時彼女達は気付いていなかった。最初は膝枕だけで良かったものがすぐに触れるという行為を必要としたように、手を繋ぐ事で良かったはずが頬へキスをしなければいけなくなっている事を。

それが意味する事は、仁志の安眠を阻む力が強くなっているという事だ。

つまり、いずれ今のような行為でさえ無力化されるという可能性を秘めていた。

しかしそれにまだ誰も気付く事なく、ただただ仁志が穏やかに眠ってくれている事を喜ぶように響達は微笑むのだった。

翌朝、気怠そうに道を歩く仁志の姿があった。

（何だろな、この脱力感……。勤務中は何とかなったけど、終わった途端ガクツとくるみたいに疲れがきたし……）

まるで体の状態が響と出会う前に戻ったぐらい体力が落ちている。そう感じながら仁志は新しい家とも言える借家へと向かっていた。

同時刻、その借家では調が仁志のために簡単な朝食を作り始めていた。

「何だか懐かしい気もする……」

当分朝早い時間に起きて食事を作る事はないと思っていた調にとつて、仁志のために朝食を用意するのは若干の懐かしさを感じさせる事だった。

ちなみに翼も起きているが、彼女はリビングにてトースターを前にし食パンが焼き上がるのを今か今かと待っているところである。

そのトースターは翼があ部屋で奏や未来と暮らしている時に使っていた物だ。

これなら自分も使えると仁志が譲り受けたため、今もこうして残っていたと言う訳だった。

「あつ、焼けた。って、そういえばバターも何もない……」

上機嫌でトーストを手にとった翼だったが、そこでバターやジャムなどがない事を思い出してガツクリと肩を落とした。

きつとそれを仁志が見ていれば笑みを浮かべただろう。

それ程今の翼は愛らしさに溢れていたのだから。

その頃二階の寝室では未来が目を覚まそうとしていた。

「んっ……ふっふっ」

ゆっくりと瞼を開けて見えてきた光景に未来は思わず笑みを零した。

何故ならそこには可愛らしい寝顔を見せる響や切歌、そしてエルフナインやヴェイグがいたのだ。

「……マリアさんも、こういう気持ちだったのかな？」

この寝顔を守りたい。この温かさをずっと見つめていたい。そんな気持ちでいたのだろうか、そう思いながら未来は体を起こすと大きく伸びをした。

そしてパジャマのまま静かに動き出して階段へと向かった。

「ただいま……」

そこで仁志が玄関へと姿を見せた。ただ、その雰囲気は未来が初めて見る程疲労困憊と言えた。

「只野さん、おかえりなさい。お疲れ様でした」

「ああ、おはよう未来。うん、かなりお疲れだよ」

力なく笑う仁志に未来は思わず息を呑んだ。

これまで彼女が見てきた中でも、ここまで仁志が疲れているのは初めてだったのだ。

(やっぱり悪意の影響が出てるんだ……)

もしこれが夏場であれば本当にバテていただろうと思い、未来は靴を脱いだ仁志へと近寄るとその体をそっと抱きしめた。

「未来……？」

「只野さん、やっぱりお仕事しばらく休んだ方がいいです。今のままだと、いつか倒れますっ」

朝早い時間であるため未来は若干声を抑えたが、許されるのなら叫んでいただろう。

一緒にジョギングしていた時でさえ、今のような疲れた顔を見せた事はなかったのだ。

だから未来には分かったのだ。今の仁志の状態が異常である事が。

「悪意が絶対何かしています。只野さんを弱らせてしまえばマリアさん達から自分を引き剥がす事が出来ないって分かっているんです。今一番悪意が警戒してるのは私でも響でもない。只野さんなんです」

事実、今まで悪意に染め上げられた装者達を助け出す際、依り代は全てに関わっている。

それは、現状の悪意を弾き飛ばすにはギアに埋め込まれた依り代の力だけでは足りないという事だ。

「未来……」

「それだけじゃないです。只野さんが倒れでもしたら私達全員落ち着いていられません」

「仁志さんおか……小日向？」

二人の気配に気付いてリビングから翼が顔を出したが、玄関先で仁志へ抱き着いている未来を見て首を傾げた。

「翼さん、やっぱり只野さん、疲れ方が変です。私とジョギングしてた時だってここまで疲れた顔してませんでした」

そう言われて翼は仁志の顔をじっと見つめた。

顔色は悪くはないが生気があまり感じられず、漂う雰囲気もどこか

弱々しい感じがあり、翼は表情を少しだけ歪めた。

「……仁志さん、まずは朝食を食べて。月読が作ってくれたから」

「分かった。いただくよ」

「小日向も顔を洗ってくるといい」

「……そうします」

リビングへ向かう仁志に続く形で歩き出す未来と翼。

ダイニングに置かれた折り畳みテーブルには、まだ温かさを持つチーズオムレツと市販のコーンスープ、それとトーストが置かれていた。

「おかえり師匠。お疲れ様」

「ただいま調。飯、ありがとな」

「ううん、今の私に出来るのはこれぐらいだから。あつ、でも手を洗ってきて」

「ああ、そうだな。じゃ、手を洗って来るよ」

フラフラと表現するような足取りで歩き出す仁志を調は不安そうな眼差しで見送る。

「……師匠、やっぱり疲れが取れてないんだ」

「調ちゃんもそう思うんだ」

「……未来さん」

後ろから聞こえた声に調が振り返ると、そこには少しだけ影がある顔をした未来と不安げな翼が立っていた。

二人の視線は調ではなく仁志が歩いて行った方を見つめている。

「月読、仁志さんが食べ終わったらとりあえず今後の事を私達で話し合おう。仁志さんの事も含めて、な」

その言い方で調は一瞬にして真剣な表情へと変えて頷いた。

彼女にも分かっていたのだ。今の仁志の疲弊度合が普段と異なる事を。

（今の師匠の状態だと本当にお休みの日じゃないと悪意と戦わせられない。ううん、下手したら連休じゃないと無理かも）

明けの状態では危ない上に翌日仕事があるなど、今の仁志の様子を見ている限りとてもではないが戦いに連れ出せるはずがない。

そう調は考え、洗面所の方から聞こえる水音に顔を動かした。

「今は師匠が私達を中心ですからね」

「そうだな。仁志さんがいなければ今の私達は悪意に打ち勝つ事は厳しい」

「だからこそ悪意は只野さんを狙ってるんですよ。それも、あたかもマリアさん達の手でやるように見せる形で」

「ああ。本当に悪逆非道なやり方だ」

そこへ手を洗い終わった仁志がフラフラと戻ってきて、テーブルに置かれた食事の前へ座って笑みを見せた。

「あく、本当に美味そう。調、ありがとう。じゃ、いただきます」

「どうぞ。それとトーストは翼さんだから」

「そうなのか？　じゃ翼もありがとう」

「大した事してないから。でも、そう言ってもらえると嬉しい」

「未来、もう洗面台使えるから。待たせてごめんな」

「あ、いえ。別に気にしてませんから」

まだ力が感じられないが、それでも仁志の声に込められた気持ちに三人はそれぞれ笑顔を返した。

そして朝食を食べ終えた仁志は、幾分か気怠さが薄れたような気がしながら翼達と共に今後の事を話し合い始めた。

まず、仁志は日課でもある散歩をしようと思っていたのだが、それさえも億劫な程の倦怠感を覚えており、それ故に翼達は余計散歩へ行くべきと考えた。

「仁志さん、私が付き添うから少しでも運動した方がいいよ」

「……やっぱり？」

「悪意が狙ってるのが只野さんの弱体化なら、運動量を減らすのは避けた方がいいですよ」

「それは、そうだけど……」

「師匠、辛いかもしれないけど頑張つて。散歩から戻ってきたらシャワーで汗を流してすぐ寝れるように準備しておくから」

「……分かった。じゃ、翼、付き添い頼むな」

「うん」

こうして仁志と翼が連れ立って散歩へと出かけ、調と未来はそれぞれで後片付けや着替えなどに動き出す。

「おはようございます、調お姉ちゃん、未来さん」

「おはよう、エル（ちゃん）」

そうこうしているとエルフナインがリビングへと姿を見せて、顔を洗うべく洗面所へと向かう。

ちなみにヴェイグは起きてこそいるが寝惚けた響に捕まっていた。

「クリスちゃん……」

「……まあ、もうしばらくこうさせてやるか」

これまでほとんど共に暮らしていたクリスの名を寂しげに呟いた響に、ヴェイグは微かに悲しそうな表情を浮かべて脱出する事を止めていたのだ。

「……マリアあ」

切歌は切歌で枕を抱き締めるようにしてマリアの名を呟いていた。

普段能天気に見える二人だからこそ、その内面に秘めた寂しさや辛さは大きいかもしれない。

結局響と切歌は仁志が汗を流して寝室へ現れるまで眠り続けた。

勿論、それをある意味で仁志が羨ましいと思ったのは言うまでもない。

正午を少し過ぎた頃、寝起きに近い仁志が玄関で靴を履いていた。

「じゃあ、行ってくる」

「ついでにお昼の買い物もしてくるから」

「留守番、お願いします」

「二いつてらっしや〜い（デス）」

まだ眠そうな仁志と共に未来と調が外へと出て行く。

三人はこれから電気屋へと向かい、冷蔵庫や洗濯機を選んでくるのだ。

そのために一番良く使うだろう未来と調の意見で選んでもらおうと仁志が考えたのである。

「翼、タダノは大丈夫なのか？ さつきはうなされてなかったみたい

だが」

「ああ、やっと仁志さんにちゃんと寝てもらえるようになった」

「そうか。だがこうなると、あのゲートの目的は俺の嗅覚をダメにするよりもタダノが狙いな気がしてくるな」

「……かもしれない。悪意は、あの決戦の時から既に現状を想定して動いていたのかもしれない」

ヴェイグの言葉に悔しげな顔でそう言葉を返し、翼はゲートであるノートPCを見た。

（そう考えると雪音達が悪意に魅入られたのは……リビルドを得た後と考えるのが自然か……）

依り代が悪意の存在をある程度感知できる事を考えれば、ギアの追加をする際にその存在に気付かないはずがないと翼は考えたのだ。

故にあの海へ行った日以降から悪意が自分達をつけ狙っていたと思ひ、その執念深い部分に悪意たる所以を感じて翼は嫌悪感を抱いた。

嫌な顔をする翼に気付かず、仁志達を見送った響達はこれからどうするかを話題に会話を始めていた。

「僕、リビングの掃除をします」

「じゃあアタシはお布団干してくるデスよ」

「私は……お風呂掃除？」

「ならエル、ここが終わったら二階の使っていない部屋も掃除しよう。俺も手伝うぞ」

「使っていない部屋、ですか？ 構いませんけど……」

ヴェイグの意見の意図が分からないエルフナインだが、そんな彼女へヴェイグは力強く頷いてみせた。

「ああ。マリア達が合流したらあの部屋だけじゃ足りないだろ？」

「っ！ そうですっねっ！」

一瞬にして輝く笑顔を見せるエルフナイン。

今はここにいない悪意に捕えられたマリア達もここに来るのだと、そう強く告げたヴェイグの気持ちに応えたのだ。

「その場合、どうなるデスカね？」

「うーん……翼さんと奏さんで一部屋？」

「じゃあ、姉様と僕に姉さんで一部屋です」

「そうなるとお……」

「響さん、未来さん、クリス先輩、アタシ、調でししよーデス」

「……タダノは寝れるのか、それで」

「「あ……」」

「ふふっ、今ならむしろそうじゃないと寝れないだろう。ただ、そのような頃はリビングで寝ると言っただけで逃げそうだが」

「聞こえてきた三人の声に小さく笑みを浮かべて翼が会話へ参加した。」

「あまりの和やかさについて反応してしまったのだ。」

「響達は翼の言葉にその状況を想像し、揃って苦笑した。」

「容易に想像出来たのだ。困った顔で両手を左右に動かして勘弁してくれと言っている仁志の姿が。」

その後、エルフナインは掃除機を手に持ちリビングの掃除を始め、切歌は翼と共に二階へ上がり布団を干しに行き、響は風呂場へ向かってスポンジ片手に掃除を始める。

ヴェイグはクツションに座ってエルフナインの事を眺め、ふと思いついたかのように問いかけた。

「エル、そういえばあの時言っただけで大事な相手とは誰だ？」

「えっと、キャロルって言って、僕の……双子のお姉ちゃんです」

「双子の姉？」

「その、そういう風に呼んでいいのかわかりませんが、僕としてはそういう認識です」

「そうか。もし良かったら教えてくれ。エルの姉の事を」

「そう言われればエルフナインが黙っていられるはずもなく、どこか嬉しそうにキャロルの事を話し始めた。」

となれば当然掃除の手は止まる事となり、ヴェイグの向かい側にエルフナインがクツションを置いて座れば、もうそれはあの平屋での日常に近いものとなる。

そして、それは仁志の実家でも珍しい光景ではないので、ある意味

で二人にとっては何の代わり映えもない日常風景だった。

キャロルの事を話すエルフナインは、どこか悲しそうで寂しさもありませんが、それでも嬉しそうに語っていた。

そこには、あのミレニアムパズルを維持していた時の出来事が大きく関係している。

(キャロル、君は僕の中にちゃんといるんだね。きつとまだあの時のように主導権を握る事は出来ないんだろうけど、あの時ダウルダブラを貸してくれたようにいつかまた僕らの前に姿を見せてくれるんだよね?)

はつきりと聞こえたキャロルの声。エルフナインだけしかそれを知らないが、だからこそ彼女は強く実感しているのだ。

キャロル・マールス・デインハイムは、今たしかに自分の中に存在していると。

「あれ? エル、休憩デスか?」

「あまり掃除が進んでいるようには見えないが……」

布団を干し終わった切歌と翼がリビングへ戻ってくると、当然クツシヨンに座って話し込んでいるエルフナインとヴェイグを見て小首を傾げた。

「あつ! えつと……ごめんなさい」

「俺がキャロルの事を聞いたからだ。悪いのは俺だ」

「キャロル?」

ヴェイグの口から挙がった名前に二人が同時に疑問符を浮かべるも、切歌はすぐにどうしてかを気付いた。

「ああつ! そういえばあの時エルがファウストローブを着てたデス!」

「そうか。それでヴェイグがキャロルの事を知りたがったのだな」

「まあそういう事だ。エルの双子の姉とは思わなかったが……」

「双子の姉?」

「あつ、えつと、僕がそういう風に思ってるって事です。キャロルも、僕の家族ですから」

胸へ両手を当て、噛み締めるように告げられた言葉。それに翼も切

歌も一瞬だけ驚きを見せるも、すぐに優しく微笑みを浮かべて頷いた。

二人も知っているのだ。シエム・ハとの戦いの際にキャロルの協力がなければ今の状況はない事を。

それもエルフナインを守るようにキャロルが目覚めた事もだ。ならばエルフナインの姉という例えや考え方も分からないではなかったのである。

「エル、ヴェイグに話の続きをやってくれ。掃除は私が引き受けた」

「で、でも……」

「いいんだ。暁、後で私に教えてくれ」

「りよーかいデス！」

翼の配慮に切歌は元気よく返事をしエルフナインの近くへ腰を下ろした。

「エル、アタシにもお話を聞かせて欲しいデス。エルの知ってるキャロルの事、全部教えて欲しいデスよ。後で翼さんに教えないといけないデスからね」

「はいっ！」

切歌の言葉に感謝するように笑顔を見せ、エルフナインは再び話を始める。

それを聞きながら翼は掃除機のプラグをコンセントから外して、それを手に二階へと向かった。

掃除機の音が話の邪魔になると考え、先に二階からやろうと思ったのだ。

「お風呂掃除終わったよ〜って、あれ？」

翼が階段を上がり始めたのと入れ替わるように響がりビングへと姿を見せる。

彼女も想像していたのと異なる状況に小首を傾げるも、エルフナイン達が笑顔を浮かべている事に笑みを見せた。

（良かった。マリアさん達の事や仁志さんの事でみんな若干暗かったけど、少しは明るくなってきてるみたい）

その要因にムードメーカーである切歌の合流があると思い、響は小さく頷いてエルフナイン達の近くへと歩き出す。

その頃、仁志達は電気屋で家電製品を眺めていた。

「姉さん、これとかどうですか？」

「うーん……ちよつと大き過ぎない？」

人目を気にして、以前インターネットカフェへ行った時と同じ兄妹設定の状態であったが。

「でも、マリア達も合流したらこれぐらい必要です」

「そっか。今よりも増えるんだもんね……」

難しい顔で冷蔵庫を前に話し合う二人を仁志が少しだけ疲れた顔で見つめている。

本来であればまだ寝ている時間だからというのもあるが、やはり体の不調がまだ尾を引いているのだ。

それでも、今後を考えれば冷蔵庫と洗濯機は必要不可欠。仁志があの家で今後も暮らしていくなら用意しなければならぬ物だった。

だから彼は仮眠を切り上げてここに来ていた。全ては、自分と響達のためにと。

「二人共、あまり後の事を考えないでいいよ。どうせ大人数でいるのはそう長くはないんだから」

「っ」

仁志のその疲れた声と言い方に未来と調が息を呑んだ。

まるでもう自分達と過ごす事がそこまでないと言っているような内容だったためだ。

マリア達を助けたとして、彼女達とこつちで暮らすのは短期間。だからそこまで悩む必要はない。

それはある意味では正しい見立てかもしれない。ただ、これまでの仁志であれば思っても言わないか、あるいはもつと違う言い方をしたはずの内容だった。

「お兄ちゃん、今の、どういう意味？」

「え？」

「あの、今の言い方だと私達と兄さんが一緒に過ごす事がもうそこま

でないって聞こえました」

「……………ごめん」

未来の言い方で仁志も自分の発言が持つ意味合いをようやく察し、申し訳なきように項垂れた。

その様子はこれまでの仁志が見せてきたものであるが、だからこそ二人は彼が疲れている事を痛感していた。

「調ちゃん、只野さん、やっぱり本調子じゃないね」

「はい。でも、師匠の言いたい事は分かりました。マリア達全員を助け出したら、その時こそ本当に決着です」

「うん、そうだね。じゃあ、それなりの大きさでも十分か」

「はい」

項垂れた仁志を見ながらのひそひそ話。それが仁志には何とも居心地の悪い印象を与えた。

(嫌だなあ。まるであの頃みたいだ……………)

自分を見て女性が何やらこそこそと話す。

それがもつとも思いついたくない頃の光景を連想させ、仁志の気分を重くしていく。

「お兄ちゃん、もう気にしてないから顔上げて？」

「つ……………そ、そうか……………」

調の優しい声で仁志が頭を上げた。そこには彼の事を見つめて小さく微笑む二人の少女がいた。

「兄さん、これがいいと思います」

「あ、うん。分かった」

「洗濯機はさっきのでお願いするね、お兄ちゃん」

「了解」

やっと意見がまとまった事に安堵し、仁志は店員へと声をかける。

その交渉が始まるのを眺めて、未来と調は少しだけ悲しそうな表情を見せた。

「悪意が師匠の心を弱らせてるのは間違いないです」

「うん」

「でも、そうだって思っても、結構辛いですね」

「そう、だね……」

そこで未来は何か思いついたような顔をして椅子に座って話す仁志へと近寄る。

そしてその右肩へそつと手を置くとニツコリと微笑んでみせたのだ。

「えつと、未来？」

「兄さん、ごめんね。仕事で疲れてるのにこんな事頼んで」

「……ああ、そういう事か。いいんだよ。自分がやりたくてやってる事だしさ」

一瞬面食らった仁志であつたが、未来の言葉で何事かを察して小さく嬉しそうに笑つた。

そのやり取りを見て調も未来の意識した事を察したように頷き、仁志へと駆け寄るとその左肩へ手を置いた。

「お兄ちゃん、本当にありがとう」

「調もか。いいんだって。俺のためでもあるんだから」

「それでも。お兄ちゃん、ありがとう」

「うん、ありがとう兄さん」

二人は妹と言う設定を崩さない形で仁志を労つたのだ。

心が弱っているからこそ優しく癒してあげたい。

ただし、周囲に男女関係と思われると色々と面倒になる。

そこで未来が取った行動から調もその流れに乗つたのだった。

その想いを仁志も感じ取り、疲れてはいるが嬉しそうな笑みを返したのである。

「妹さん想いなんですね」

「まあ、大事な家族なんで」

「っ！」

さらりとはあるが告げられた表現に未来と調が顔を少しだけ照れたように赤める。

それが店員には臆面もなくそういう事を言う兄に妹が恥ずかしかつているように映つた。

冷蔵庫と洗濯機の設置は交渉の結果明日の午後となり、仁志達はそ

れに礼を述べて店を後にした。

「じゃ、私と調ちゃんはスーパーへ行きますから」

「師匠は部屋に戻ってゆっくり休んで」

「ああ、そうさせてもらおうよ。二人共、気を付けてな」

未来と調と別れ、仁志は一人借家へと向かう。

すると、少し歩いたところで珍しい相手と出会ったのだ。

「あれ？ 茂部君？」

そこにいたのは勤務先の夕勤バイトである茂部だった。

ただ、妙だなと仁志は思った。

まだ時刻は午後一時前であり、茂部の勤務時間にはあまりにも早過ぎる上、そこは勤務先であるコンビニがある通りとは違う場所だったのだ。

何故そんな場所に茂部がいるのか。仁志がそう疑問を浮かべていると、彼は人を不快にさせるような表情を見せた。

「店長って結構やり手だったんですね」

「はっ」

ニヤニヤと下品な笑みを浮かべる茂部に仁志は理解出来ないという表情を返した。

だが、その表情が一瞬にして強張る事となる。

——いやあ、まさかあの店を最近辞めてった女の子達が店長のお手付きだとは思わなかったすよ。

仁志は心臓が止まるかと思った程の衝撃を受けた。

知られたくない事を知られてしまったと、そう思ったのだ。

しかも、よりにもよってもつとも知られてはいけない相手に。

「も、茂部君、それは」

「いつから口説いてたんですか？ いや、それよりもやる事大胆ですよねえ。昼勤だった未来ちゃんに、たしか朝勤だった調ちゃんすよね、あの子。二人の女の子手籠めとか、すっげえすよ」

「違う。俺は別に二人を」

「は？ じゃあ何で電気屋なんてとこにあの二人連れて一緒にいたんですか？ 姉妹でもないし、そもそもあの子ら高校が同じだっただけの

繋がりつすよね？」

「っ……」

茂部のしらばっくれると言わんばかりの表情に仁志は返す言葉がなかった。

一緒に歩いていただけならまだ言い訳もつくが、電気屋に三人でいたところを見られては言い訳のしようがなかったためだ。

(どうすればいい？ このままじゃ、俺は仕事を失うかもしれない。いや、失わないとしてもそこまで広くない町だ。噂はあつという間に広がる……)

コンビニ店長が立場を利用してバイトの学生達へ手を出したと、そんな風に言われてもおかしくないのだ。

そしてそれは、仁志の中での悪夢を思い出させるに十分な状況と言える。

「まっ、いいつすよ。じゃ、俺はこれで」

黙り込んだ仁志へ興味を失ったように背を向け、茂部は歩き出した。

その背中を見つめ、仁志はどうしたものかとあまり回らない頭で考える。

(どうする!?! 引き留めたら余計厄介になる！ でもだからってこのまま放置すれば、オーナーの耳に入って俺の信用はなくなるだろうし……)

どんどん遠くなっていく茂部の背中。

が、そこで仁志はふと閃いたのだ。

「そうだ……。これなら何とかなる」

もう遠くなつた茂部の背中を見つめ、仁志は凜々しく表情を引き締めるやその場から急ぎ足で歩き出した。

「茂部君、ちよつと待ってくれ」

「なんすか？」

「いや、誤解を解いておこうと思ってね」

「誤解？」

訝しむ茂部へ仁志は小さく頷くと以下の様に話し出した。

事の発端は未来が一人暮らしを計画した事から始まる。

それをコンビニバイトで親しくなった響へ話したところ、一人暮らし歴が長い仁志に色々聞いてみたらとなった。

ちようど引越しを考えて家電などを買い替えようとしていた事もあり、もし良かったら見学も兼ねて一緒に行ってみるかと話が転がり、そこへテスト期間になる事もあって暇を持て余していた調も合流してきた。

そう説明をし、仁志はどこか苦笑混じりにこう続けた。

「月読さんは、色々事情があつて立花さんの家でお世話になつてる居候みたいなものらしくてね。彼女も高校を卒業したら一人暮らしを考えてるんだそうだ」

「へえ、つまり店長はあの二人と付き合つてるとかじゃない？」

「逆に聞くが、どこの世の中に二股をオープンにしてる男へ入れ込む女性がいる？ しかも俺はしがないコンビニの雇われ店長だぞ？」

「ま、それもそうっすよね。なくんだ、折角面白いネタが出来たと思つたのになあ」

「趣味が悪いぞ茂部君。まあ、別にオーナーへ話してくれてもいいよ。何も問題はないし」

暗にやましい事は何もないと告げる仁志。

実際にやましい事はないのだが、話されると面倒な事になる事は事実である。

それでも仁志は開き直つてそこまで口にした。

下手に止めると怪しまれると踏んだのだ。

「そうすか。そこまで言うって事はマジでそうじゃないって事か」
「ああ」

「ならもういいっす。じゃ、俺はこれで」

去つていく茂部を見送りながら仁志は内心で安堵の息を吐く。

だが、同時にある不安を抱き始めてもいたが……。

——このままじゃ、下手すれば俺と響達が同じ家に住んでいる事が露見して面倒な事になりかねない。何とか、何とかしないと……。

帰宅した仁志を出迎えた響達だったが、彼の様子が出かける前よりも疲れている事に気付いて疑問符を浮かべる事に。

何かあったのかと響が問いかけると、仁志は疲れた声で茂部との一件を話し出した。

それはある意味で悪意よりも恐ろしく、また厄介な事と言えた。

何せ悪意は依り代などで何とか出来るが、茂部の口から話される言葉は防ぎようがないからだ。

それも、仁志の現状はある意味では致命的と言えた。何せ茂部の想像と似ているのだから。

「仁志さん、とにかく今は休んだ方がいいよ。ね？」

「……そうだな。疲れた頭じゃろくな考えも浮かばないし、そうするか」

仁志の疲労度を考え、翼はその手を掴んでリビングから連れ出す。

その背中を見つめ響はどうしたものかと考えた。

(茂部さん、か……。私、結局苦手なままで避けちゃったからなあ。クリスちゃんがいれば少しは違ったんだろうけど……)

あのコンビニで働き始めてすぐに響は茂部との関わりを避けた。

そのため、響の中では彼は苦手なタイプで終わっており、その情報などは仁志よりもないと言えたのだ。

「響さん、その茂部って人、どんな人デス？」

「えっと……一言で言えば可愛い女の子に目が無い人、かな」

「つまりどういう事だ？」

「その、私やクリスちゃんを彼女にしようとしてバイト中に色々迫ってきたんだ。それと、よく胸とかお尻を見られてた」

「サイテーデス」

切歌は幸いバイト先でそんな経験はしなかったが、もし似た事を経験していればと考えると響からの情報は軽蔑するしかないものだった。

エルフナインとヴェイグは響と切歌の嫌悪感はよく分からなかったが、あまり気分のいい行動ではないとは分かるため、二人の反応に對しては納得をしていた。

「でも、私が辞める時にはある程度そういうの減ったって聞いてたんだけどなあ」

「スケベじゃなくなったデスか？」

「うん。クリスちゃんからもそういう話を聞く事なかったし……」

一時期は毎回のように勤務を共にすると愚痴を零していた事を思い出し、響はそう告げた。

（クリスちゃんがそういう事言わなくなったのって、いつ頃だったっけ？ たしか……海に行った時には言わなくなってたっけ）

実際その頃辺りから響自身も近藤からそういう話を聞かなくなったので覚えていたのだ。

「ですが、今回の事は由々しき問題です。兄様がもし仕事を失うと僕は一気に苦しくなります」

「ああ。今俺達が悪意の事だけ考えていられるのもタダノが働いているからだ。もしタダノが仕事を失ったら、響達がばいとをしないといけなくなる」

「いえ、下手をすれば響さんや未来さん、調お姉ちゃんはこの街では働けません」

「えっ!？」

エルフナインの言葉に響と切歌が驚きを見せる。

だが、ヴェイグはそれでエルフナインの不安を悟ったのだ。

「そうか。タダノが仕事を失う以上、響や調の事をあの店の人間達が知るといふ事か」

「っ?!」

「はい、そういう事です。兄様はあのコンビニから自分達の事が噂として流れる事を危惧しているんだと思います」

その締め括りに響と切歌は顔を見合わせた。

現状、仁志は一人で寝ると悪夢を見てうなされ、疲労してしまう。それを避けるために自分達と共に暮らしているが、今度はそれを見られてしまうと仁志の仕事や生活が壊れてしまうと気付いたために。

「ど、どうするデスカ響さん。ししよーの生活が大ピンチデス」

「そうだね。だけど、どうすればいいかなんて私じゃ……」

「ただいま〜」

そこで聞こえるのは未来と調の声。

天の助けとばかりに響と切歌はリビングから動き出して二人を出迎えに行った。

「未来、調ちゃん、知恵を貸して」

「え？」

「ししょーが色んな意味で大変なんデスよお」

「どういう事？」

一先ず買った物がある程度冷蔵庫へ片付け、調が切歌を助手として昼食を作り始める事に。

未来はその間響達から何があったかを聞かされ、思わず口元を両手で隠す程衝撃を受けていた。

「……つまり、私達の事を見られてたって事？」

「うん……。仁志さんが何とか機転を利かせて誤魔化してくれたけど……」

「そつか。今までは只野さんは一人あの部屋で寝泊まりしてたもんね。それだったら何とか誤魔化しも出来るかもしれないけど……」

そこで未来の表情が曇る。今の仁志は一人で寝ると悪夢にうなされてしまうのだ。

悪意によるそれは、響達が強い気持ちで触れ合う事でしか緩和する事が出来ないため、現状で仁志を一人にする事は不可能と言えた。

「今兄様に一人寝をさせるのは悪意の思うつぼです。ですが、そのために今の暮らしを続けるのは違う意味で兄様の暮らしを危険に晒すかもしれません」

「難しいところだよね。だからって短期決戦を挑む事は出来ないし」

「そうだね。仁志さんの体の事もあるし」

「今のタダノは明らかに弱ってる。あのゲートのせいだ」

無然とした表情でそう言い切るヴェイグ。明らかに怒りを静かに燃やしている口調だ。

響達もそんなヴェイグを嗜める事はない。彼女達も仁志の不調の原因の一つは間違いなくあのゲートの状態にあると思っていたのだ

から。

「ん？ 小日向、帰っていたのか。おかえり」

「ただいまです」

そこへ仁志がうなされず眠れた事を確認して二階から下りてきた翼が現れた。

「翼さん、仁志さんはどうでした？」

「ああ、やはり疲れているんだろう。すぐに眠ってくれた。やはりうなされるようなので、先程のように頬へ口付けたところ落ち着いてくれた。ただ、その、一度では効果がなくて何度かする事になったが……」

最後には少々気恥ずかしさを表情に浮かべ、翼は言葉を締め括った。

頬ではなく口にしようかと迷った挙句、やはりそこはどうだろうと思つて頬へ何度も口付けた結果、余計に恥ずかしくなったという純情っぷりだったのだから。

「翼さん、それも問題ですけど、今回の事、どうしたらいいんでしょうか？」

「今、私達はここで一緒に暮らしてますけど、これって客観的に見たらあまり良くない状態ですし」

「そうだな……」

「兄様の生活基盤はあのコンビニ勤務で成り立っています。しかも今や店長という立場です。年齢を考慮すると、ここから別の仕事へ就くのは難しいと思います」

「ママさんが資格を取れと言つてたが、それも難しいのか？」

「ものによる、としか言えないな。ただ、仁志さんの年齢では中々厳しい事も多いと思うが……ん？」

ヴェイグの疑問にやや難しい顔で返す翼だったが、そこへ食欲をそそる匂いが漂つてきた。

それはキッチンからの匂い。それも醤油の焦げるような香りだった。

「未来、今日のお昼って何？」

「豚肉が安かったから生姜焼き」

「おおっ！」

「ヴェイグさんの大好物ですね！」

「あー、お腹空いてくるなあこの匂い」

「まったくだ。日本で育った者には堪らない匂いと言えるな」

朝は簡単にスクランブルエッグとトーストにお湯で溶かすコーンスープだったため、響だけでなく翼達も空腹を覚えていたのだ。

そして、この食費というものも以前と違って仁志の財政を直撃してくる問題であった。

以前まではそれぞれのグループでの収入もあつた上で、食事をそれぞれ別々に取っていた。

それが今は仁志だけの収入となり、なのに食費はかつてのマリア達の家を超える金額となる事が決定しているのだ。

いくらこれまでの貯蓄があるとはいえ、この数日で仁志が支払っている金額は決して少なくはない。

だが、きつとそれでも彼は何も文句も不満も愚痴さえも言わないだろう。

この世界と響達の世界を守るために全財産を投げ打つと決めたのだから。

「お待ちせーす！」

「お昼ご飯、出来ました。ご飯は各自でお願いします」

「分かった。では食事にしよう。空腹のままではいい考えも浮かばない」

「賛成ですっ！」

「はいっ！」

「そうだなっ！」

「クスッ、響だけじゃなくてエルちゃん達もお腹ペコペコなんだね」

途端に元気になる響に負けじと声を上げるエルフナインとヴェイグに苦笑し、未来はその場から動き出してダイニングへと向かう。

炊飯器から炊き立てのご飯を切歌が茶碗へと盛っていく中、調がポツリとリビングを見つめて呟いた。

「やっぱり師匠は食べないんだ……」

「ああ、今は睡眠を優先してもらっている。仁志さん自身も眠りたいようだったしな」

「ですよ。電気屋さんでも眠そうでした」

「師匠、よく眠れてないんでしょうか?」

「かもしれない。ただ、暁が発見してくれた手段でかなり落ち着いて眠れるように」

なつたと、そう翼が言おうとした時だった。

——っ!? 嫌な匂いがしたぞっ!

ヴェイグが弾かれたように顔を上へ向けるやそう告げたのだ。

すぐに響が二階へと上がると、そこでは仁志が顔面蒼白で横になっていた。

「仁志さん!?! 何かあったんですか!?!」

「……………響、か」

安堵するように響の名を呼び、仁志はゆっくりと体を起こした。

その様子は明らかに帰宅した時よりも疲弊しているように響には見えた。

「仁志さん、無事ですか!?!」

「ししよー、大丈夫デスか!?!」

そこへ翼達も遅れて現れるも、その目が仁志の顔を見て息を呑んだ。

「……………みんな、いるか。そうか、そうだよな……………」

そう呟いて仁志は力なく笑った。

もうそれだけで誰もが理解していた。また仁志が何か悪夢を見たのだろうか。

それも自分達関係で。

「兄様、もし良ければどんな夢を見たか教えてください」

そんな中、エルフナインが単刀直入に切り出す。

仁志はその言葉に苦い顔をするものの拒否するような言葉は言わず、一度だけ深呼吸をして話し始めた。

「実は……………」

兄様の語った話に僕らは言葉がなかった。

何も内容が問題と言う訳じゃない……とは言い難いけど、一番はその内容が持つ意味だ。

「つまりタダノが見せられたのは全てを失う夢って言う事でいいの？」

「ああ、そういう認識でいいよ。みんなとの暮らしが露見して、それが切っ掛けで噂が立って、俺は仕事を失って、次の仕事が決まらなかつたり、あるいは続かなかつたりで収入が減って行って、ならいつそ仕事に就かずに悪意と決着を着けようとした結果、みんなは勝つんだ。だけど依り代が碎けて、ゲートは消えて、もう俺には何も残されない」
淡々と話す兄様だけど、その顔色は一向に優れないままだ。

まるで生気が抜け切ったようなその顔は、見てるだけで辛い。

「只野さん、その、夢みたいになるなんて私は」

「俺もそう思いたいよ。でも、今回はさすがに参った。有り得ないと言えないんだ。心が弱るとダメだつて分かってる。それでも、さすがに今回の悪意のやり口はキツイ……」

ああ、兄様が沈んでる。誰よりも笑顔を、明るさを、強さを保とうとしてた兄様が、暗くなっている。

「兄様っ！」

気付けば勝手に体が動いてた。兄様の体へ抱き着いて、思い切り抱き締めてた。

「エル……」

「大丈夫です！ 絶対、絶対僕らは兄様を一人なんてさせませんっ！ 僕だつて約束を、一度口にした事を破るつもりはありませんからっ！」

あの別れだと思つた時のやり取り。依り代を僕に貸してくれた兄様。

その時、こう言ってくれた。貸したつて事は？ あれが僕の心にとれだけ響いたか。

だから、返しに来る。必ず悪意との決着をつけ、依り代を分析・研

究してここを訪れてみせるんだ！

「ししよー、アタシもエルと同じデスよ。永遠のお別れなんてしたくないデス」

「うん、私も。師匠、元気出して」

「切歌……調……」

切歌お姉ちゃんと調お姉ちゃんが兄様の手を掴んで微笑みかける。

「仁志さん、きつと空腹なんじゃない？ 月読達が生姜焼きを作ってくれたんだ。一緒に食べよ？」

「それがいいです。只野さん、食欲はどうですか？ あるのならみんな

まで食べませんか？」

「翼……未来……」

翼さんと未来さんは兄様に優しい声をかけて笑いかけた。

「タダノ、それがいい。みんなで食べる食事が一番美味しいと教えてくれたのはお前だ」

「そうですよ仁志さん。さつ、一緒にご飯にしましょう」

「ヴェイグ……響……。そう、だな……。うん、そうだ」

ヴェイグさんと響さんの言葉に兄様が少しだけ笑ってくれた。

「うし、寝るのは止めた。みんなと一緒に飯にするよ。代わりに今日は夜を食べないでギリギリまで寝る事にするか」

空元気だとは思いう。けれど、その兄様の言葉で僕らはみんな笑顔になれた。

まず切歌お姉ちゃんや響さんが階段を下りて、次に未来さんや調お姉ちゃんが続く。

翼さんはヴェイグさんを抱えて下りていって、僕は兄様を先導する形で階段を下りた。

「おっつ、良い匂いだなあ」

リビングへ入ると兄様がそう言ってフラフラとテーブルへ近付いていく。

でも、やっぱりこれだけの人数になってくると兄様が使ってるテーブルじゃ狭い。

「仁志さん、その、ちゃんとしたテーブルを買わない？ せめて五人掛

け程度で」

「あー、そうだなあ。じゃ、悪いけど父さんを頼ろう。響、君から連絡取ってくれるか？俺抜きでも動けると思うし」

「分かりました。おじさんをお願いしてみます」

「頼む」

「はい師匠、ご飯」

「ありがとう」

「ししよー、お茶どうぞデス」

「ああ、助かるよ」

「お箸どうぞ」

「どうもどうも」

す、凄い。お姉ちゃん達と未来さんが兄様の世話係みたいになってます。

この後のご飯は少しだけ静かに進んだ。

兄様がやっぱり疲れているみたいで、ご飯も一杯食べるのがやっとだったからだ。

それでもお姉ちゃん達にお礼を言つて、翼さんに頼んでリビングへ布団を持つて来てもらつて、ここで寝る事になった。

階段の上り下りが辛いからつて、そう言つて力なく苦笑した兄様は、本当に弱っている感じがして胸が苦しかった。

後片付けを翼さんと響さんが引き受け、お姉ちゃん達と未来さんとは言うとう……

「あ……何だか癒されるよ」

兄様の腕の中で抱き締められて嬉しそうに笑ってました。

「ししよー、もつと強くてもいいデスよ？」

「うん、構わない」

「でも、これで只野さん、本当に元気出ますか？」

「厄介な方の元気は沈黙してるけど、代わりに嬉しい方の元気は活性化してるんだ。だからこのまま幸せに浸らせてくれるか？」

「それはいいですけど、もう少ししたら響と翼さんも来ますからね？」

「ああ、そつかあ。もつと幸せ度が上がるんだなあ」

「兄様、僕とヴェイグさんもいますよ」

「あく、じゃあ翼と響には背中から抱き着いてもらおう。じゃ、エル、ヴェイグ、来てくれるか？」

「はい（ああ）ー！」

僕は未来さんと隣り合って兄様の胸へ抱き着いて、ヴェイグさんは背中にくっついていた。

そこへ洗い物を終えた響さんと翼さんが来たみたいで、僕らの状態を見て苦笑する声が聞こえた。

「ふふつ、人気者だね仁志さん」

「ですよ。私達もやりましょうよ」

「是非お願いするよ。ただ、二人は背中側でよろしく」

心なしか少しだけ兄様の顔色が良くなってきた感じがする。

もしかして、本当にこういう触れ合いで兄様の事を癒せるのかもしれない。

兄様は未来さんが夢で聞いたという「悪意は力で倒せない」との言葉から愛の力が悪意を完全に倒すために必要なのではと考えているらしい。

そう思えば、こういう触れ合いで悪意の影響を弱く出来るというのはその説を裏付けている気がする。

「ししよー、マリア達よりも先にセレナを助けてあげたいデス」

「セレナ、か……」

「多分セレナは自分の世界にいると思う」

「俺もそう思うぞ。マムの傍にいるはずだ」

「だろうなあ……」

どこかフワフワした声の兄様。よく見れば目を閉じて幸せそうに笑ってる。

これ、もしかして半分寝てないかな？

「セレナちゃん、大丈夫ですかね？」

「分からない。ただ、セレナはミレニアムパズルという緊急避難が可能だ。なら、私達の誰よりも安全を確保する事は容易いだろう」

「そっか。仁志さん、今度のお休みっていつですか？」

響さんがそう問いかけても兄様は答えない。

見上げれば兄様が幸せそうに俯くような状態で寝ていた。

「響、只野さん、寝ちゃった」

「え？」

「本当です。とても幸せそうに寝ています」

「……そのようだ。なら、このまま布団へ寝かせよう。立花、ギアを。私は足を持ち上げる」

「はい」

こうして兄様はお二人によって布団へと寝かされました。

頬へキスしなくても悪夢を見る事は阻止出来ると分かり、翼さん達はどこか残念そうに、だけど安堵するような顔をしていた。

「……仁志さんは当然ここで寝てもらおう方がいいだろうな」

「はい。階段の上り下りが辛いって、きつと本音です」

「ししよー、本当に体力落ちちゃってるデスね」

「悪意のやり口は本当に酷い。師匠に悪夢を見せて心を弱らせるなんて」

「睡眠を妨害し、疲労を重ねさせ、心身ともに衰弱させる。悪意は兄様を本当に一番排除したいようです」

殺すとしても、一気にじゃなくてこうしてジワジワといたぶるようにやるなんて……。

「翼さん、只野さんが言った事、実はそれが一番いい気がしてきました」

「短期決戦、か。私もそう思う。だが……」

「今のタダノを見てると、それも危ない気がしてくるな。ただ、このまま時間が経っても良くなるとも思えない」

ヴェイグさんの言葉に誰も何も言えなかった。

あのゲートを通るだけで兄様は少しずつ悪意の影響を受けるとしたら、何度もあの中を通るのは問題だ。

なら、出来るだけその回数は減らすべきだ。

この後は兄様をゆっくり寝かせてあげようとなり、相談などは二階かキッチンで行う事となった。

僕は兄様の傍で寝顔を見つめる事にした。

少しでも誰かが傍にいた方がいいんじゃないかと思って。

すると、僕と同じ事を思ったのか切歌お姉ちゃんも兄様の傍に座って寝顔を眺めてくれた。

「ししよー……」

「悪夢を見ないようにするには、僕らで兄様に心の光を送る事かもしれません」

「心の光、デスカ」

「はい。愛の力とはきつとそういう事です」

「……じゃあ、やっぱり悪意に勝つには愛の力を、心の光をぶつける事が必要なんデスカね」

「おそらくですが……」

兄様は僕らの物語でも最後の勝利の鍵は愛だと言ってくれていた。なら、今回だってそのはずだ。人の心の光。それこそが勝利の鍵になる。

「だけど、どうやったらいいデスカね？ 正直あの時だってアタシ達は心の光で戦ってたと思うデスカ」

「そうなんです。リビルドギアは間違いなく心の光のギアでした。入手方法が兄様と皆さんの絆の強化でしたし」

「デスカよ。こうなると、やっぱりエクストライブが必要なんデスカね？」

「エクストライブ……」

ギアの単体で至れる最強状態。例えば、リビルドは出力こそエクストライブと同等だけど、それはギアが単体で至れるはずのないものだ。

なら、やはりそういう事なのかもしれない。まだ兄様と皆さんの絆は上の力を引き出せるんだ。

それが出来た時、初めて悪意を完全に倒す事が出来る。そんな気がしてきた。

「何の話してるの？」

「あつ、調。えっと、悪意に本当に勝つにはエクストライブを使うしか

ないかもって話デス」

「エクストライブ……」

「依り代は兄様とお姉ちゃん達の絆が深まると力を貸してくれました。あるいは、兄様の機転によって意図しない力を授けてもくれま
す。ダブルドライブやメカニカルギアはそれです」

「うん、そうだね。あれはあの子達がいなくなれないギアのはず」
「そう考えると、やっぱり依り代がエクストライブを出してくれない
のは変デス。だって、あれがギアの中で一番強いんデスよ？ それを
何で出してくれないデスカ」

たしかにそうだ。もし依り代が悪意の完全撃破を願っているのなら
エクストライブを授けてくれてもいい。

兄様が言っていた「ダブルドライブやツインドライブも本来はシ
ンフォギア自体で実現可能かもしれない」という考えがもし当たっ
ているのなら、既に皆さんが実現したエクストライブは何故再現して
くれないんだろう？

切歌お姉ちゃんがあの時言った、最後にはエクストライブを可能に
してくれるという考え。

あれは意外と的外れではないような気がする。ただし、それには想
像もつかないような厳しい条件があるとは思うけど。

「切ちゃん、強い力に最初から頼ったらダメ。ヒーロー達はいつも自
分に出来る事を精一杯やって、その結果新しい力を得てきた」

「うっ……そ、それはあ」

「師匠も言ってた。ギリギリまで頑張つて、それでも届かない時に
ヒーローは現れる。最初からその存在を頼りにするのは間違ってる
んだって」

「あう」

そうだ。今までの皆さんもそうだった。

最初からエクストライブに頼るとか思わず、その時その時を精一杯
もがき足掻いていた。

生きる事を諦めない強い気持ちに奇跡を起こし、エクストライブや
リビルドなどのギアの変化を掴み取ってきたんだ。

「なら、やっぱり今の僕らに出来る事を続けていくしかありません。もしかすれば姉様達を悪意から解き放てば何か起きるかもしれませんし」

「デスね。マリア達を助け出したら救出ボーナスとか出るかもしれません」

「本当にゲームみたいな考えだね。でも、ないと言い切れないのが依り代の凄いいところかも」

「デスデス」

「ううっ……」

そんな時、兄様がうなされ始めた。

するとすかさず切歌お姉ちゃんが兄様の頬へキスをした。

それだけで少しだけ兄様の表情が和らぐ。でも、少しだけだ。

「だ、ダメデスカ」

「切ちゃん、ちよつとどいて。私もする」

今度は調お姉ちゃんが頬へキス。

それも兄様の表情を和らげた。だけど、まだ苦しそうだ。

「私もダメみたい」

「いえ、効果は出ています」

と、そこで思いついた。

「そうです。二人同時に両頬へキスするのはどうでしょう？　もしか

すればその方が効果は高くなるかもしれません」

「二成程（ナルホド）」

そう言ってお姉ちゃん達は左右に別れて兄様の頬へそつとキスをした。

「あっー！」

それを合図にしたように兄様の表情が安らかなものへ変わっていき。

それと、お姉ちゃん達のギアペンダントが微かにだけ光った気がする。

「……上手くいった（デス）ね」

嬉しそうに微笑むお姉ちゃん達だけど、その頬が少しだけ赤いのは

照れてるんだと思う。

「けど、あんなに幸せそうだったのにうなされるなんて……」

「悪意がししょーを本気でダメにしようとしてるデスよ」

兄様が見せられた悪夢。それは現状で考えられる最悪だ。

しかも、その要因となりそうな出来事が起きた事がその引き鉄になってる。

あれ、でも兄様がうなされていたのは今日からじゃない。

なら、悪夢の内容は同じだったんだろうか？

「あの、切歌お姉ちゃん」

「どうしたデスか？」

「兄様が最初に見た悪夢は今日のと同じなんですか？」

その質問に切歌お姉ちゃんだけじゃなく調お姉ちゃんも何かに気付いた顔をした。

「聞いてないデスけど……多分違うはずデス」

「どうしてそう言えるの？」

「だってもしそうならししょーが苦しむはずないデスよ。さつき教えてくれた内容は、今の状況になったからの嫌な夢デス」

「何の話をしてるんだ？」

「あつ、翼さん。ヴェイグも」

僕らの前に翼さんとヴェイグさんが姿を見せた。

響さんと未来さんはいないと場所を見るとまだ二階にいるみたいだ。

「翼さん、兄様の見ていた悪夢ですが、先程とそれ以前では内容が異なるはずなんです」

「内容が異なる？」

「はい。兄様はさつき起きた時にこう言っていました。ここで僕らと暮らしてる事が露見してと。それは、この状況になり、しかも調お姉ちゃんや未来さんといるところを知り合いに見られたからです」

「……そういう事か」

僕の言いたい事を翼さんは分かってくれたようだ。

もし兄様の見ていた悪夢がさつき教えてくれた内容なら、きっと兄

様はそこまで苦しむ事はなかったはずだ。

何故なら、兄様が僕らとしばらく寝食を共にすると決めたのは本当に最近で、うなされるのはその前からあったのだから。

「タダノが起きた時に教えてもらうべきだ。今はどんな些細な事でも注意するに限る」

「ヴェイグの言う通りかもしれない。よし、仁志さんが起きたら見ていた悪夢の内容を教えてもらおう」

そう言つて翼さんは兄様を見つめた。静かに眠る兄様の寝顔を見て心配そうな表情をする翼さんは、どこか儂い感じに見えた……。

夜になって晩ご飯を食べ終わった辺りでししよーが起きてきて、後片付けを終わらせたところでエルが思った疑問を翼さんが聞くとししよーは辛そうな顔をして黙り込みました。

それを見て翼さんが言い辛いなら構わないって言ったら、ししよーは静かに首を横に振って息を吐くと……

——いや、いいよ。聞いてもらったら楽になるって経験で知ってるからさ。

って言つてポツポツ話してくれました。

今から五年ぐらい前、ししよーはあの水着を買った百貨店で働いてました。

そこでちよつとした揉め事が起きて、ししよーはそれで泣いた同僚さんのために店長さんへ文句を言ったそうデス。

だけど、その言い方が悪かったみたいでししよーだけじゃなくその同僚さんもそこに居辛くなったそうで、結局その同僚さんが辞めて、ししよーはそれに関して文句を言われたらしいデス。

「……そんな事があつて、俺もそこで働き続けるのが嫌になったんだ。で、翌月仕事を辞めて、色々考えた結果生きるのが辛くなった」

その言葉にアタシだけじゃなくみんな息を呑みました。

「死のうと思つた。自分自身に見切りをつけたんだ。今にして思えばとんだ自惚れだよ。自分がヒーローだと、そうなれると思つていたつて事なんだ。自分が良かれと思つてした事で誰かが不幸になった。

しかも助けようと思った相手から恨み言をぶつけられた。あれが、致命的だった。本気で自分なんていなければ良かったのにと、そう強く思ったんだ」

言葉がありませんでした。ししよーに、そんな事があつたなんて……。

「でも、兄様は生きる事を諦めなかつたんですよ」
「っ」

そのエルの言葉に頷くししよーに響さんがすっごく驚いてました。きつと今の言葉に何か響さんだけが分かるものがあるんデスね。

「……ああ。でも、こうして話していると悪意の狙いが分かってきたよ。あいつは俺の心が一番病んでた頃に戻したいというか、闇に引きずり込みたいんだ」

「仁志さん相手じゃ私達のように瞬時の墮落はさせられないから、夢を使ってジワジワと侵食してる?」

「うん、そんな気がしてきた。で、クリスを使って送り込んだ自分の分身を、ゲート内に溢れさせた力で少しずつ活性化させて影響力を強大にしているんだろうな」

「それじゃ、ゲートを通る度に師匠の中の悪意が大きくなるって事?」
「おそらくね」

そう言つてししよーは息を吐きました。

まるで体の中の嫌なものを吐き出すみたいに。

「神獣鏡の力でも浄化出来ないものが、みんなとの触れ合いで弱体化出来る以上、やはり悪意の弱点は人の心の光。幸福感や愛情などだと思う。きつとそれに負けないように、奴はこの世界で何らかの方法を使って自分を強化したんだ。だから単なる浄化じゃ効果がないんじゃないかと思う」

「この世界で、ですか?」

「だと思ふんだ。思い出してくれよ。あの決戦で悪意はどこから現れた?」

「上位世界のゲート、だと思われます。そうか、あれはこの世界に滞在していただけじゃなく、ここで何かをしていたからなんだ……」

深刻そうなエルの声にししよーは深く頷きました。

見れば翼さんもヴェイグも真剣な顔デス。

響さんや未来さんも、調さえ暗い感じデスよ。

「だがタダノ、あの時悪意はみんなの負の感情で成長したような事を言っていたぞ」

「うん、それは間違いない。だけど、それだけであそこまで強くなれるとは思えないんだよ。幾多の平行世界を滅ぼして強化されていた世界蛇の残滓としても、だ。一時は消滅の危機に瀕していたところからシンフォギアの存在の消去なんて大それた事をして、そこからみんなの負の感情だけであそこまで肥大化出来るものか。きっと、何かあるんだ。特にあの決戦前のカルマ・ノイズの召喚だよ。あれだってかなりの力を使うはずなのに、悪意は惜しげもなくデータ収集に使い捨てた」

「そうです……思えばそれだけの力を使う事に躊躇がなかったのが妙でした」

「じゃ、本当に悪意はこの世界で自分を強化出来る方法を見つけ出したのか?」

「だとしたら、もしかしたら今もここにその痕跡があるかもしれません」

「ヴェイグ、どうデス? 何か分かりませんか?」

悪意の探知ならヴェイグにお任せデス。

今ならゲートも閉じてますし、この世界の匂いも分かるようになってきたみたいデスから、もしかしたら何か分かるかもしれません。

でも、ヴェイグは難しい顔をして首を横に振りました。

「無理だ。俺に分かるのは、この家の近くに嫌な匂いはしないって事ぐらいだ」

「デスか……」

残念デスが仕方ないデス。

でも、でも、とりあえずこの家は安全って分かって安心デスね。

そこからししよーは汗を流しにお風呂場へ行って、未来さんは残しておいたご飯でおいぎりを作り始めました。ししよーの夕食につて

持たせてあげるみたいデス。

響さんはエルに何かを聞いてますし、調は翼さんと相談中。

ヴェイグはアタシの膝の上に座って、ぼんやりと天井を見上げてコクンと首を動かしました。

「ヴェイグ、どうかしたデスカ?」

「ん? ああ、ふと考えたんだが、一体悪意はいつ切歌や調の負の感情を食べたんだ?」

「ふえ?」

どういう意味デスカね?

「いや、タダノの言葉で思い出したんだ。悪意はたしかにみんなから負の感情を吸収したと言った。でも、クリスやマリア、奏に未来以外は悪意に飲み込まれてない。じゃあ、一体いつそれを吸収してたんだ?」

「……………ああつー!」

そうデス! アタシと調が悪意に入り込まれてたのはこっちに来たばかりの頃デスつ!

なのに、そこからどうやってアタシ達の負の感情を吸収なんてするデスカ!

自慢じゃないデスが、アタシはあの後一度も悪意に操られも乗っ取られもしてないデス!

……………こ、この前のはあの言葉の後だから関係ないデス。うん、そういう事にします。

だけどこのヴェイグの疑問はじゅーよーな気がします。

なので早速みんなへ話してみる事にしました。

すると、みんなが揃って顔を驚きに変えました。やっぱりアタシと同じで気付いてなかったんデスね。

「ヴェイグの言葉から考えると、悪意はもれなく我々の中に入り込んでいた事になる」

「でも、あの決戦の時にはクリス先輩達限られた人の中だけにいた……………」

「じゃあ、どうして私達は悪意がいなくなってたのか、だね」

「はい、きっとこれは重大なヒントです。僕たちは知らない内に悪意を倒していたんです」

「あっー!」

エルの言葉で未来さんが口を大きく開けました。

すつごくビックリしてます。何かありましたかね？

「ど、どうしたの未来?」

「今の言葉で、思い出したの。夢で聞いた言葉の一つ」

「例の悪意は力で倒せないという、あれか?」

「はい。その、もう何度か私達は悪意を倒してるんだって、そう言われた気がします」

「もうアタシ達は悪意を何度か倒してる、デスカ」

「神獣鏡や巫女ギアでって、そういう意味じゃないんですよね?」

「うん、多分そうだと思う。じゃないと力でつてとこが納得出来ないから」

これはどういう意味デスカね? アタシ達が悪意を倒してる?

えっと、多分デスけどリビルドを手に入れた時は悪意がアタシ達に入り込んでたはずないデスカから、あの後のはずデス。

そうになると、有力なのはいつデス? バーベキューの時デス? あるいは旅行の時デスカ?

だけど分かりません。考えても心当たりがないんデス。

例えば、最初の時に操られてた時もアタシと調にそんな感覚はありませんでした。

で、どうやら翼さん達も同じみたいデス。

「さっぱりしたあ」

そこへししよー登場デス。

「ん? みんなしてどうしたんだ?」

「ししよー、アタシ達一体いつ頃悪意に入り込まれてたと思うデスカ?」

「へ?」

そこでししよーへ事情説明をします。

……翼さんやエルが、デスけど。

ししよーはその話を聞いて難しそうな顔をしていきます。

多分デスけど、ししよーも見当がつかないんだと思うデスよ。

「一つだけ確かなのは、リビルドギアが追加された時はみんなは悪意の影響下にないって事だ。で、そこから考えると、クリス達四人はその後悪意に魅入られてあの時を迎えている」

「うん、それは間違いないと思うよ。ただ、私や立花達はその後悪意に魅入られてないのかが分からないんだよね」

「そこが厄介なんだよなあ。悪意をギアじゃなくて心の光で排除したとして、それは一体何だっつて話だし」

「き、キスじゃないんですか?」

響さんが少しだけ恥ずかしそうに言った言葉に、ししよーは困った顔である事を例に挙げてくれました。

それは、キスしただけではリビルドギアが増えなかった事デス。

つまり、ただキスするだけじゃ悪意は倒せない。悪意を倒すにはもっと別の何かが必要だとししよーは言いました。

たしかにキスだけで悪意が倒せるならラクショー過ぎます。

でもでも、アタシ達がししよーのほっぺへキスしたらうなされる事を止められました。

「ししよーししよー、だけどアタシ達がししよーのほっぺへキスしたらうなされなくなつたデスよ?」

「あー、らしいな。だから、きつと大事なものは想いだと思うんだよ。相手への強い正の想い。それを伝えて、ぶつける。この前の切歌と調のぶつかり合いもそれだつたら?」

「あつ……」

思わず調と顔を見合わせます。

たしかにあの時のアタシと調は自分達の想いをぶつけ合って、悪意に操られてたアタシへ調が大好きって言う強い想いをぶつけてくれました。

「じゃあ、悪意が強化されたのは強い負の念を吸収したから……」

「しかもこの上位世界で、だよね。私達以外から、かな?」

「その可能性はないと思いたいが、正直この世界でも人間同士の内紛

などは存在している。そういう意味で言えば悪意の餌となり得る感情は渦巻いていると言えよう」

「とにかく、だ。今は俺の次の休みまでそれぞれの出来る事をして備えておいて欲しい。この事はまた明日話し合おう。で、調。父さんには頼んでみた？」

そこからは家具の話に変わりました。

今、この家にはししよーの折り畳みテーブルしかなくて、せめてちゃんとしたテーブルを置こうと決まったんデスが、そのためには家具を見に行かなければならないのデス。

でもこの近くに家具を扱うお店はないし、ししよーは夜勤な上車もないデス。

だからパパさんの力を借りて、何人かで見学に行つて決めてきてもらう事になりました。

「あ、うん。エルのスマホからメールを送ったら明日お仕事を休んで行つてくれるって」

「はっ。」

「ホントデスよ。パパさん、どうせ今は仕事も落ち着いてるからって言つてたらしいデス」

「はい。これがそのメールです」

エルがスマホを見せるとししよーはその文面を見て大きいため息を吐きました。

いやあ、パパさんはホントに優しいデス。それと、エルに甘々デスなあ。

「……あの馬鹿親父め。どこまでエルに甘いんだよ」

「それで、家具を見に行くのは誰がいいかなって。エルは絶対連れて行きたい。パパさん、喜んでくれるから」

それは間違いないデス。

「ならば暁と月読も行くといい。ヴェイグも連れていけばおじさまがより喜んでくれるはずだ」

「ああ、うん。それがいいよ。で、翼も行ってやつてくれるか？ 一応監督役というか父さんだけじゃ切歌達に甘くなるから」

「ふふっ、うん、分かった」

「響と未来は留守番と家事を頼める？」

「はい」

こうして明日の予定は決まりました。

ししよーの次のお休みは木曜日。つまり三日後です。

そこでししよーはセレナを探しに行こうと決めました。

けどししよーの体が心配です。でも、そう言ったアタシ達へし

しよーは少しだけ笑ってこう言いました。

——俺の体が弱り切る前にセレナ達を助け出さないとダメなんだ。進んでも立ち止まっても苦しいなら、少しでも前に進むんだよ。そうすれば、出口が見えてくるかもしれないだろ？

その、ししよーらしい言葉にみんなで黙るしかありませんでした。

やっぱりししよーは強いですよ。これがギアがない代わりに魂だけでも装者のようについて、そういう事なんです。ね。

その後は、ししよーがお仕事に行くまでみんなでししよーへ抱き着きました。

お昼の時、それでししよーがしばらくうなされずに済んだからです。

お仕事頑張ってくださいって気持ちでみんなでししよーへくっついたですけど、ししよーはそれにずつと照れてたのが印象的でした。

「じゃ、行ってくるよ」

「「「行つてらっしゃい（です）」」」」

未来さんの作ってくれたおにぎりを持ってししよーはお仕事へ向かいました。

アタシ達はそれを合図に順番にお風呂へ入る事に。

まずはエルとアタシ。次が調と未来さん。最後が翼さんと響さんにヴェイグです。

「ここのお風呂場、広さはあの家とそんなに変わらないです。ね」

「でも、湯船自体はそこまででもないから、大人だと二人が限度だと思います」

まずエルがシャワーを使って体や頭を洗います。

その間、アタシとそれを手伝ってあげて、エルをピカピカにしてあげます。

「うん、これでいいデスね。エル、お湯に入って50数えるデスよ」「はい」

エルがどいたらアタシが体を洗い始めます。

きつとセレナがいたら、これはセレナの役目だったはずデス。

「切歌お姉ちゃん」

「ん？ 何デスか？」

体をアワアワにしたところでエルがアタシへ声をかけてきたので振り返ります。

そこには不安そうな顔のエルがいました。

「兄様は、大丈夫でしょうか？」

どういう気持ちでエルがそう聞いてきたのかアタシにはすぐ分かりました。

だってマリアや奏さんさえも悪い状態にする悪意デス。それがししょーの体の中にいるなんて、不安しかありません。

「大丈夫デスよ！ アタシ達みんなでししょーを心の光で照らしてあげればいいんデス！」

だから、お姉ちゃんとして妹を元気づけないといけません！

アタシはエルのお姉ちゃん、ししょーの一番弟子デスから。

「心の光で……」

「デスデス。エルが元気に笑顔でししょーと一緒にいてあげる事もそれデスよ」

「そう、なんですか？」

「とーぜんデス！ アタシ達だってエルの笑顔で元気をもらってるんデスよ？」

「僕の笑顔で……」

こつちに来てからエルはみんなの妹みたいになりました。

ヴェイグと二人でいやし担当の可愛い存在デス。

エルフナインだった頃よりも可愛くて、もくつと守ってあげたいって思うような感じになりました。

「エル、ししよーが今みたいに頑張っていられるのはエルがいるからデス。だから難しい事をあまり考えないでいいデスよ。そういう事を考えて欲しい時は今じゃないデスからね」

「……はいー」

とびっきりの笑顔を見せてくれたエルにアタシも笑顔を返しました。

その後エルが湯船から出てきて、アタシの背中を流してくれました。

——切歌お姉ちゃん、どうですか？

——いいカンジデスよ。その調子でお願いするデス。

調と洗いっこするのは違う感覚で、何だかとってもあったかくて幸せな時間でした。

セレナは、こういう事をいつものようにしてたデスカ。じゃあ、エルのお姉ちゃんは自分だっけって思うはずデス。

アタシだっけってこんな事されたらエルの事、今よりもっと大事な妹って思っちゃうデスから。

早く、セレナとも合流しないとデスね。

アタシはエルと二人でお風呂から上がって、タオルで髪を拭いてあげながらそんな事を思うのでした……。

此の今を生きるヒカリ

「じゃ、行こうか」

俺の言葉にリビルドギアツインドライブ状態の響達が頷く。

やっと俺の休みの日になったのだが、当然と言うか明けだつたため
現在時刻は既に昼を過ぎて二時が見えてきている。

あれ以来俺は寝る時に響達装者の誰かと手を繋いだり、あるいは下
手をするとキスやハグをしてもらわないとうなされるようになって
いた。

原因は間違いなく悪意だと思う。ただ、それをどうやって排除すれ
ばいいのかが俺達には分からない。

依り代を常に所持している俺の中に存在する悪意を追い出す術が
ないに等しいからだ。

「ゲートを開放します」

「ああ、頼む」

エルが閉められたノートPCを開けると同時に響達がゲートの中
へと飛び込んでいく。

俺はエルを抱えてその中へと入った。

「相変わらず嫌な感じデス……」

「うん、気分が悪くなりそう」

ザババコンビの意見に俺も同意するように頷く。

未来の力で俺とエル、そしてヴェイグはある程度守られているが、
それでもこの瘴気は完全には遮断出来ていないのだから。

「セレナちゃんはどこにいるんだろう?」

「私のように関わりがありそうな場所を探すのがいいだろうな」

「そうなる……セレナちゃんの世界、ですね」

「僕はそこを最初に探す事を提案します。姉さんはきつと僕らがすぐ
見つけられるように動いたはずです」

「だな。何せセレナにはミレニアムパズルっていう手段がある。な
ら、悪意を寄せ付けず身を守る事が出来るからな」

エルの意見を後押しするように俺も意見を述べて響達を見た。

こちらを見つめるみんなは、凜とした表情をしている。

どうやら全員の意見は一致しているようだ。

「じゃあ、セレナの世界へ行こう。先頭は切歌と調、頼めるか？」

「うん（はいデス）」

「最後方は響にお願いしたい」

「私、ですか？」

「ああ。怪盗ギアツインドライブへ変える。それなら通常よりも聴覚とか鋭くなると思うんだ」

「分かりました」

こうして俺は響のギアを怪盗ギアへドライブチェンジさせ、エルと共に未来の守護を受けながらゲート内を進む事になった。

そこまで心配していなかったが道中は何事もなくセレナがいるであろう平行世界のゲートへ到着。

時間の停止したそこを進みながら、俺は妙な気怠さを感じていた。

何というか、歩くのも地味に辛いと感じるような疲労感だ。

これ、もしかするとゲートを通過したせい？

「兄様、どうかしましたか？」

「え？ ああ、うん。まさかこんな形でナスターシャさんのいる世界へ来るなんてなあって」

「ママもきつと動けなくなってるはずデス」

「セレナ、どこにいるんだろう？」

先頭を歩くザババコンビの声はどこか不安な感じがする。

きつとセレナを心配してるんだろう。

ただ、セレナも何も考えなくミレニアムパズルを展開してるなんて事はないはずだ。

「何か思い当たる事はないか？ セレナが考えなくパズルを展開するとは思えないからさ」

「姉さんはここが生まれ育った世界です。なら、きつと所縁のある場所に身を隠しているはずですよ」

「じゃ、セレナの部屋とかデスカね？」

「あるいはママのいる場所？」

「となると施設内か。おそろくセレナも私達がそこを探すだろうと考えたはずだ。行ってみる価値はあるな」

「じゃ、急ぎましょう。悪意がやってこないとも限りません」

「もしくは、もう待ち伏せてるかもしれないね。気を付けて行こう」

未来の言葉に頷いて俺達はセレナが生活していた場所を目指す。

ただ、やっぱり体が怠い。歩くだけでもしんどいと思うなんていくら何でもおかしい。

ここまで分かり易い変化を起こすなんて、悪意はそこまで俺を、依り代を恐れてるって事か。

「はあ……はあ……」

歩いてるだけなのに息が上がってくる。

これ、不味いな。体力が落ちてるってレベルじゃない。

ただ歩いてるだけで体力を奪われてる感じさえあるぞ。

「兄様、やっぱり疲れが残ってるんですね」

「い、いや、これは多分だけど俺の中にいる悪意のせいだ。ゲートを通った事でまた少し強くなっただんじやないかって思う」

もう隠しても意味がないだろうと判断して考えている事を明かす。

すると全員の足が止まった。

「ひ、仁志さん、それホントですか？」

「多分、ね」

「未来さんが守ってもダメデスか……」

「師匠、このままじゃ悪意に乗っ取られるの？」

「どうだろう、な。その可能性もあると思うけど……」

正直そんな簡単な事じやない気もする。

何故なら乗っ取ったところでみんなを倒す事は出来ないからだ。

まあ依り代を封じられるのは大きいかもしれないが、どことなくそうなったらみんなはエクストライブを発現させてくれそうだし。

第一俺自身に強い力はないし、精々が俺へ危害を加える事を躊躇うぐらいしかみんなへの有利な点が存在しないからな。

「こうなってくるとやはり悪意の狙いは私達の同士討ち。それと同時に仁志さんの体の中にいるだろう自身の分身を育てる事かもしれないな」

い。出来るだけゲートを通過する回数を減らしたいものだが……」

「今回でセレナと合流出来たとしても、きつとクリス達全員を元に戻すのは無理だろうな。特にマリアと奏は一緒に出てこないはずだし」「そっか。悪意に操られる前からマリアと奏さん、雰囲気良くなかった」

「デスね。でもクリス先輩も来なかったデスよ？」

「クリスはおそらく悪意の本体が宿ってるんだと思う。だから前線に出てこないんじゃないかと思うよ。じゃないと前回の戦闘で援軍に来なかった理由が分からない」

と言いつつ俺には一つだけ嫌な理由が浮かんでる。

それは、悪意が敢えてみんなを解放しているんじゃないかと言う事。

その狙いは分からない。最初は未来や翼の中に潜伏してるんじゃないかと思っただけど、切歌と調の一件でそれも可能性が薄いと感じた。

悪意はやはり様々な形でみんなを制御下に置こうと試してる感じがしたんだ。

特に依り代で翼と未来を取り戻された事を受けて、切歌でそれを回避するような手を打ってきた事がそれを裏付けてる。

あの決戦の際もカルマ・ノイズを使ってツインドライブのデータを得たりしていたし、悪意なりに経験を基に対応してきてるのは間違いない。

ただ、みんなを解放しているというよりはそうなっても構わないって感じがある。

実際、あの決戦もそうだった。悪意はあの敗戦さえもおそらく想定内の事だったはずだ。

つまり、リビルドギアツインドライブはもう悪意が学習済みのはず。

それと同じく未来や切歌の解放も想定内なんだろう。そうなると、クリス達もその可能性が高い。

もし仮にそうだとすれば、悪意は最後までどんな手を使うつもりなんだ

？

俺を使うとして、どうするって言うんだ？

「とりあえず今はセレナちゃんを探しましょう。只野さん、歩けますか？」

「ああ、それは大丈夫だよ」

「ううん、今は少しでも体力を温存して。立花、仁志さんを抱えて移動してくれ。小日向はエルを頼む」

「分かりました」

こうして俺は響に抱き抱えられるようにして移動する事に。

男としての尊厳とか誇りとかあつてないようなもんだけど、情けなしいとは思う。

「ごめんな響」

「いえいえ、これぐらい気にしないでください。仁志さんはいつも私達のために頑張ってくれてますし」

ニツコリと笑ってくれる響だが、何故か心は沈む一方だ。

これが悪意のせいなのか俺自身の本当の気持ちなのかも分からない。

一番有力なのは俺の情けないって気持ちを悪意が増幅してる、だろうか。

このままじゃ不味いと思いつつも、どうしようも出来ない気がしてくる。

「ひよとのひよとみが背中」

「ひよ、仁志さん？」

気分が滅入らないようにと前向きな歌を唄い出すと当然のように響が軽い驚きを見せた。

それだけじゃなく、他のみんなもこっちを見てくる。

「気分が妙に落ち込みそうなんだよ。だから悪い。明るい歌を唄わせしてくれ」

「そ、そういう事ですか。えっと、そういう事みたいです」

「本来であれば止めるどころだが、状況が状況だ。仁志さんがそうしないと不味いと感じたなら好きにして」

「ありがとな。じゃ、続きを……」

そのまま俺は「新世紀GPサイバーフォーミュラ」のEDの「W
i n n e r s」を歌い続けた。

前向きで明るく希望が溢れる歌詞だったからかみんなも気に入ってくれたらしく、特に響と切歌はサビの歌詞が気に入ったようだ。

「愛で結ばれる、かあ」

「えっと、この場合のあいは愛情とかじゃなくて信頼って書いてあ
いって読ませるんだよ」

「信頼で結ばれる、デスカ。余計いいデス」

「私はスピードは空がくれた最後の魔法と言う歌詞が好きだな」

「実はそこもそらが青空の方じゃなくて奏の苗字の方なんだ」

「そうなんだ。奏にも聞かせてあげたいな」

思いがけない効果だが、俺だけじゃなくみんなの気分を明るい方向
へ変える事が出来たようだ。

なので気を良くして俺は次の歌を唄う事に。

「君の、涙、最後にするわけは」

「魔神英雄伝ワタル」のOPの「STEP」を歌っている途中で
俺の視界に見た事があるような建物が見えてきた。

「あれが……セレナが本来生活している場所か……」

あのイノセントシスターで見た通りの建物だ。

あそこのどこかにセレナがいてくれるといいんだが……。

依り代を取り出してゲームを起動させてステータスを確認すると、

セレナはまだツインドライブ状態だった。

そこでふと思った。ここでドライブチェンジさせたらセレナも俺
達が来たと気付いてくれないかなど。

ただ、それをするならセレナの居る場所を見つけてからだな。

「響、ここまでいいよ。ありがとな。ここからは自分で歩くよ」

「分かりました。でも、また疲れたら言ってくださいね？」

「ああ」

歌ったおかげか少しだけ気怠さが消えたので、ここからは自分の足
で歩く事にした。

それにセレナを迎えに行くなら、俺もちゃんと自分の足で立って出迎えてあげたいしな。

「翼さん、ここ開いたままです」

建物へと近付くと、入口の一部が開いたままになっていた。

そこを通ろうとしている存在はいないので、おそらくセレナが開けたはずだ。

「ああ。付近に誰もいない以上、セレナが開けたと見て間違いないだろう」

「じゃあ、姉さんはここにいますね」

「そのはずだよ。悪意はこの時間が停止した世界でその解除が出来ないし」

「アタシ達もここに来るのは久しぶりデスね」

「セレナちゃんがいるのはどこかな？」

そう未来が言いながら小首を傾げるとエルの腕の中へヴェイグ出現。

「つと、おそらくセレナの部屋だ。微かにだが優しい匂いがする」

「ヴェイグ、他に匂いはあるか？」

「……………いや、今のところはない」

どうやらまだ悪意は動いてないらしい。

なら、善は急げだ。セレナと早く合流しよう。

「案内頼めるか、ヴェイグ」

「任せろ」

こうして俺達はヴェイグの案内で施設内を進む。

本当に何の障害もなく俺達はセレナの部屋の前へと到着した。

ただ、そのドアはこれまで見てきた物と雰囲気異なっていた。

その、何とというか可愛らしいのである。あと、デザインが明らかに周囲から浮いているのだ。

木製のドアでチョコレートのような色と模様があり、ノブもそれに合わせたように黒い物となっている。

まるでビターチョコだ。セレナならミルクチョコの方がイメージに合うんだけどなあ。

そんな事を考えたからか、お菓子の家のドアってこんな感じかもしれないと思った。

そうして目の前のドアを見つめていると響が不思議そうな顔をしておそれ顔で近付けた。

「これって……」

「ああ、ミレニアムパズルの入口だ。セレナが俺のやってた事を真似てるんだろう」

「じゃあ、このドアを開ければいいデスか？」

「ちよつと待った。その前にセレナへ俺達が来た事を教えてみるよ」

早速とばかりに切歌がノブへ手を出そうとしていたのでそう言っ
て待ったをかける。

俺はステータス画面からセレナのギアを巫女ギアへドライブチェンジさせた。

「今セレナのギアを巫女ギアへ変えた。誰かノックしながら声をかけてくれるか？」

「じゃあ僕がやります」

エルがドアの前に立って軽く数回ノックする。

「姉さん、僕です。エルです。兄様達と迎えに来ました」

「ん？ ちよつと待てエル。みんな、見てくれ。ドアに細かな傷が沢山ついでる」

「え？」

ヴェイグの言葉で俺達はドアをよく目を凝らして見つめた。

言われた通り、たしかにそこには細かな傷が沢山存在している。

つまり、誰かがここへ来たって事だ。しかも、刃物による傷だと考えると奏かマリアしかないない。

「奏かマリアのどっちだ？」

「おそらく奏の方だよ。傷跡が剣によるものにしては窪み過ぎてる。これ、刺突によるものだと思う」

「でも、ならどうしてここに誰もいないんでしょう？」

「どこかに隠れてるデスか？」

「いや、それはない。匂いを隠す事は出来ないはずだ」

ヴェイグの力強い断言に俺も頷き、ドアをノックする。

「セレナ、聞こえてるかい？ 俺だ、只野だ。迎えに来たよ」

「おかしいな。セレナの匂いが変わらないぞ」

「……「変わらない（デス）？」」「……」

「ああ。エルが声をかけた時もタダノが声をかけた時も、セレナの優しい匂いが強くないんだ」

不思議そうにヴェイグが首を傾げるのを見て、俺達は顔を見合わせた。

「おそろくだけど、俺達がここへ来る前に悪意がやってきてセレナの事を怯えさせたはずだ。それもあって寝てるかもしれない」

「あるいは悪意による襲撃で疲れ切ったのかも」

「今のししよーがうなされた後みたいなのに、デスか？」

「有り得ます。それに、もしかするとこのドアに何か細工をしているたかもしれません」

「じゃ、今のセレナちゃんにはエルちゃんや仁志さんの声が聞こえてない？」

「可能性はあるね。じゃあ、開けるのが一番早いんじゃない？」

「いや、ここでセレナのツインドライブを解除すればいいと思うよ。

なら自然パズルも消えるし、セレナも俺達と会える」

「そっか」

ステータス画面からセレナのツインドライブを解除すると、俺達の前目前にアガートラムのギアを纏ったセレナが現れた。

そしてその体をブルリと一度震わせてゆつくりと瞼を開けると、こつちを見つめて静かに体を起こした。

「んっ……おにいちゃん？ える？」

「姉さんっ！」

「……「セレナ（ちゃん）っ！」」「……」

どうやら本当に寝てたらしい。可愛らしく目を擦るセレナへエルが真っ先に駆け寄っていく。

その後は切歌と調が、ヴェイグはゆつくり歩いて近寄っている。

セレナはエルの事を抱き締めながら切歌や調へ笑顔を向けていた。

安堵するような微笑みからは、これまでたった一人で耐えてきた事が窺える。

「良かったあ。セレナちゃんが無事で」

「本当だね。後はマリアさん達を元に戻すだけ」

「ああ。一先ずこの場を離れよう」

「だな。建物内じゃ戦い辛いし」

そう言いながらも、俺達は再会を喜ぶあの平屋の年少組を微笑みながら見つめていた……。

セレナと合流した仁志達は悪意の襲撃に備えて施設内から出てゲートへと向かった。

心配された襲撃はなく、それをどこか訝しみながら仁志達はゲートを目指す。

ただ、セレナが合流してからずっと体調不良を訴えていたのだ。

「姉さん、大丈夫ですか？」

「う、うん。ちよつと体が重たいだけだから」

そのやり取りは、調と切歌にどこか自分達の事を思い出させる事だった。

悪意の種を植え付けられた切歌とそれを支える様に動いていた調。

その時の姿が今のセレナとエルフナインに重なったのだ。

「切ちゃん、もしかして……」

「デス、ね。聞いてみるデス」

揃って頷き、二人はセレナへ向き直る。

「セレナ、正直に教えて」

「アタシ達と別れた後、悪意に何かされましたか？」

「え？ えっと、私はあの後……」

セレナの口から語られたのは一人でギャラルホルンからゲートへ出た後の事。

一人ゲートへ出たセレナは、すぐに自分の暮らしていた世界へ向かった。

そして久しぶりとなるナスターシャと再会するもそこで涙が込み

上げてきたため、泣いたら心が折れると思ってその場から急いで離れた。

その後、自分の部屋の中へ入ろうとしたところでミレニアムパズルを展開する事を思いつき、その中へ隠れたのだ。

「一度だけ奏さんの声が聞こえて、ドアを何度も何度も攻撃されたんだけど、私はお兄ちゃん達が助けに来てくれるって信じて耐えたんだ」

「姉さん……」

儂げな微笑みをエルフナインへ向けるセレナ。その笑みにエルフナインも笑顔を返す。

「じゃあ、セレナは悪意と接触してないデスね」

「うん。なら考え過ぎ？」

「切歌ちゃんみたいに何か悪意の攻撃を受けた訳じゃないなら、今までの疲れが出ただけかな？」

「かもしれない。とにかく今は」

ここを離れよう。そう響が言おうとした時だった。

ヴェイグが何かに気付いて鼻を動かした。

「っ?! 嫌な匂いがするぞー!」

「!!!!!!」

すぐさま翼と響が前衛として先頭へと移動し、仁志がエルやヴェイグと共に後ろへ下がりがり未来が三人を守るように位置を変え、切歌と調はセレナの事を守るように構え、周囲を警戒する。

「ヴェイグ、数と位置は分かるか？」

「……数は一つだ。ゲートがある方向から真っ直ぐこっちへ向かってきてるぞ」

「真っ直ぐ?」

「どういうつもりだ? まあいい。皆、気を抜くな」

翼の言葉に装者達全員が頷き、エルフナインが仁志へ顔を向けた。

「兄様、一応姉さんをツインドライブへ戻すべきかと」

「そうだな。セレナの自衛のためにもリビルドギアツインドライブに戻そう」

そう言つて仁志がステータス画面からセレナのギアを変化させようとヴェイグのアイコンをタップした瞬間だった。

——えっ!?

それは誰の声だったろうか。

エルフナインののだろうか。切歌や調だろうか。あるいは、セレナ自身の声だろうか。

仁志は視界の中に映る光景に言葉を失っていた。

何せセレナのギアがツインドライブへと変化した瞬間、彼女を包むようにギアから黒い物が噴出して繭を形成したのだ。

「姉さんっ!?!」

「「セレナっ!?!」」

「タダノっ!　これはどういう事だ!?!」

「分からないっ!　普通にツインドライブを展開させただけ……っ!?!」

そこで仁志は思い出した。

セレナが言っていた中であつた“奏が一度襲撃してきた”という言葉。

「もしかして……これを最初から想定してたのか?」

「タダノ、どうした?」

「……してやられた、可能性がある。悪意は、セレナのミレニウムパズルを利用して襲撃を計画してたのかもしれない」

「どういう事だ?」

「その、奏を操つた悪意はミレニウムパズルの入口であるドアへ、多分自身の欠片か何かを仕込んだんだ。それは開けようとした相手かパズルから出て来たセレナを捕えるようになってたんじゃないかって」
その仁志の言葉にヴェイグが息を呑むのと、どこからか声が聞こえてくるのは同時だった。

——いい読みしてるじゃないか仁志先輩。

呼び方だけでその場の全員が誰か察してやはりとばかりに表情を険しくする。

木々の間からゆつくりと何者かが歩み出てくるのを見つめ、仁志は

その相手をその目で確かめて悲しそうな顔をした。

「奏……」

「久しぶり、でいいのかな？ 元気そうで嬉しいよ仁志先輩。翼達も相変わらずだね」

「奏を装って囁^{ささ}るなっ！」

「装う？ ああ、そっか。未来やマリアはそうだったっけ」

「ど、どういう意味デスカ！」

「あたしは、真正正銘あたし自身として喋ってるって事さ」

全員が息を呑んだ。何故なら奏はそう言って笑ったのだ。

それは仁志達がよく知る奏の笑みだった。

「そりゃ勿論悪意の影響がないとは言わないよ。でも、あたしは自分の意思で動いてる」

「あ、アタシを攻撃したのもデスカ!?!」

「そうさ。だって、今のあたしからすればあんた達は敵だからね。まあ、この分だとセレナは仲間になりそうだけど」

奏の言葉に仁志とヴェイグは闇の繭となったセレナへ目を向ける。

翼の時のようなヒビはなく、まだ静かな状態のそれはかえって不気味さを放っていた。

「奏だと言うならどうして悪意に従うっ！ 何故私達を攻撃するっ！」

「簡単だよ翼。あんた達を片付けて、あたしは仁志先輩の特別になりたいんだ」

「俺の……特別？」

「マリアがそうなっただら？ まっ、あいつはもう終わったけどさ」
「マリアが……終わった？」

「あいつ、あんた達に負けたからな。まあどこかに身を隠してるらしいけど、もう無理だろうね。あたしやクリスもリンクをほぼ感じられないって事はかなり弱ってるって事だし」

放たれる言葉は色々と仁志達に衝撃を与えていた。

これまででは悪意が振りをしてると思える事や喋らせていると思える事が多かったが、奏に関してはここまで本人じゃないかと思わせる

事だらけだったのだ。

「他はどう言ってたか知らないけど、あたしは仁志さえ諦めてくれるならそっちに危害は加えないよ。何ならエルもどうだい？ あたしを姉か、いつそ母親でもいいさ。仁志と三人、あの世界で楽しく暮らそうよ」

「お、お断りします」

「俺もだ。奏、気持ちは嬉しいけど、俺は本当の君が好きだよ」

「本当の、ね……。ははっ、勘違いしてないか仁志先輩。あたしはね、許されるのならとつくにこうしたかったんだよ。マリアからあたしへ貴方の目を、意識を向けさせたかった。あの家でっ！ あいつがっ！ 貴方と家族やってるのを妬ましく思ってたんだっ！」

その最後の言葉には紛れもない憎しみが込められていた。

目付きも鋭さを持ち、体中から怒気を放って、奏は仁志を見つめていた。

「奏……君は……」

「エルやセレナを使ってっ！ あいつは貴方を隣へ置いたっ！ 表向きはそうじゃないと言いつつ、内心で貴方の妻を気取ってほくそ笑んでたっ！ 自分は特別なんだと言うように、真っ先にゲージをMAXにしてっ！」

「奏さん……」

「奏……」

響と翼はその奏の言葉が痛い程分かった。分かってしまった。

何故ならそれは仁志へ想いを寄せるようになった自分達もどこかで感じていた事だったからだ。

あの日々にマリアが少しだけ、ほんの少しだけ仁志との関係性が異なっていたのは誰もが感じ取っていた事だった。

「だけど、それももう終わり。あいつは貴方達に負けて行方をくらました。正直元に戻っても構わなかったんだけどね。それならいっそこの手で……っ！」

「っ!?! 奏、まさか君は……っ」

「あははっ！ 怖い顔しないでよ仁志先輩。あたしだって殺すつもり

はないさ。だけど、今まで味わった悔しさや妬みを少しぐらいぶつけるぐらいはいいだろ？」

「奏……本当に……」

「悪意に姉様への嫉妬や憎悪を増幅されています。だからお姉ちゃん達と戦っていた時も仲が良くなかったんでしょう」

奏のある種の本音に翼が悲しみを抱く中、エルフナインは辛そうな表情を見せてその変化の要因を述べる。

仁志はそれを聞きながら自分を責め始めていた。何せ、奏の告げた言葉に彼自身も思い当たる節があったのだ。

（俺がマリアと一緒に擬似夫婦をしていたのを見て、奏達がどう思うかなんて少し考えれば分かったはずだ。それなのに、俺は目先の温もりに甘えてしまった。彼女達の心へ、傷や痛みを与えてしまった……。奏や翼が注意してくれたのに、俺は……っ！）

一度翼や奏から注意さえ受けていた事まで思い出し、仁志の心は負の方向へ大きく傾いた。

「っ!？」

その瞬間、ズキリと彼の何かが痛みを上げた。声を上げる事はなかったが、許されるのなら叫びたい程の痛みが。

それはその後も仁志の体を苛み、痛めつけていく。

まるで良心の呵責が実現したかのようなそれに、仁志は思わず胸を押さえて蹲る。

「ぐっ……ううっ!」

「兄様っ!？」

「タダノっ! どうしたっ!」

突然の事に狼狽えるエルフナインとヴェイグ。

響達も何事かと仁志へ目を向ける中、奏はそれを見て悲しそうな顔をした。

「仁志先輩、受け入れた方が楽だよ。人間、みんな多かれ少なかれ醜い部分があるのさ。あたしだってそうだった。マリアや未来、クリスだってそうだ。翼も切歌も調だって一度闇に堕ちた。仁志先輩がそうだったっておかしくないさ。あたしやクリスと一緒にならうよ」

「い、嫌なこった。俺は、せめて魂ぐらいはヒーローでありたい……っ」

「へえ、ヒーロー、ね」

そこで奏の瞳から光が失せる。

——その気持ちがあんな事を引き起こしたのに？

——っ!?

今の仁志の心を貫く一言だった。

あの忘れたい記憶。その切っ掛けは、仁志が良かれと思って動いた正義感によるものだ。

言葉などが拙かったために誰一人としていい結果にならなかった出来事。

その事が刃となって仁志の心へ突き刺さったのだ。

そんなお前にヒーローなどと言う言葉を使う資格があるのか、と。

「奏さんっ！ どうしてその事を知ってるんですか!」

「むしろ何で知らないと思うのさ。そっちも気付いてるんだろ？ 仁志先輩の体の中に悪意がいるって」

絶句。そうとしか表現出来ない表情を誰もが浮かべていた。

ただ一人仁志だけが苦しげな顔で奏を見つめている。

「じゃあ、やっぱり俺の変調は悪意が原因だったのかっ!」

「正確には仁志先輩が自分に嘘を吐き続けてるから、かな?」

「う、嘘?」

「そう。仁志先輩はね、本当はあだし達にエツちな事したいって思ってる。響、時々見えてたあんたの胸元を仁志先輩はしっかり記憶してるんだよ」

「えっ!?!」

「っ!?!」

響の表情が驚きと恥じらいに染まり、仁志の表情から血の気が引いていく。

「翼、あんたが触らせた胸の感触を覚えてるし、ザババの二人なんかも似たような事しただろ? それも仁志先輩はしっかり覚えてるんだ。未来、あんたはジョギング中だね。見てないようで結構仁志先輩も」

「ああそうだよっ！ 俺だって男だっ！ エロい事を、スケベな事を考えてるよっ！ 覚えてるさっ！ だからもう奏の口を使ってそんな事を言わせるのを止めろおおおおおっ！」

怒鳴り声と呼んで差し支えない音量で仁志が叫んだ。

怒りと申し訳なさともなさに心をグチャグチャにしなごらも、それでも奏の事を思つて仁志は己の恥部を認めて吐き出した。

全員の視線を一身に受けている事を自覚しつつ、悪意に染まつた奏を怒りの形相で見据えるように。

「良い顔してるね、仁志先輩。もつと自分に素直になれば体は楽になるよ」

「ふざけるなっ！ ……自分に素直になつていい時とダメな時を無くすつてのは、理性を捨てて獣になるのと同じだ。それは、人間じゃない。厄介な知恵を付けた化物だっ！」

「タダノ……」

「兄様……」

仁志を見つめてヴェイグとエルフナインが小さく笑みを浮かべる。

何故なら仁志は、奏へそう言い返しながら動き出し、その体で二人の事を守る様な位置取りをしたのだ。

「こんな痛みが、苦しみがなんだっ！ こんなもの、君達が味わつてきた痛みや苦しみに比べれば些細なもんだっ！」

言い切る。それは仁志にとって間違いのない真実だからだ。

アニメとして、ゲームとして、彼は装者達の戦いを知っている。

そこで見た事が、一つの現実だと知っているのだから。

「命を賭けて、心を傷付け、血を流してきた君達に比べれば、こんな痛みも苦しみもちっぽけなものだ。何せ俺はまだ自分のためだけにしか、この痛みを、苦しみを感じてない。なのに、それに屈して闇に身を任せろ？ そんな事出来るかっ。俺は、せめて魂だけでもみんなと同じでありたいんだよっ！」

吼えた。受け売りの言葉でも、誰かの考えた思想であつても、今の場においては仁志のものだ。

彼自身を形成する要素としてそれらがある以上、それは借り受けた

ものではない。紛れもなく仁志のものであると言えた。

何故なら、それを彼は言おうとして言っているのではなく、自然と心から言い放っていたのだから。

それと同時に仁志は気付いていた。

(不思議だ……。あんなに苦しかったのが、辛かったのが、今は何も感じられない……。そうか、もしかすると俺の心が強くあろうとすれば悪意の影響を撥ね退けられるのかもしれない……)

病は気からと言う言葉があるように、人間とは思ひ込みの生き物でもある。

エルフナインがマリアやセレナを、切歌や調を姉と扱って妹と、子供となつていったように。

あるいは、セレナがエルフナインを妹として扱って姉として、人として成長していったように。

仁志もまた、心だけでも装者達のようにと強く思う事で少しだけ人として強くなれたのだった。

「カツコイイよ、仁志先輩。じゃあ、そのカツコよさで見事助け出してあげなよ」

その言葉と同時にピシリと、何かが軋むような音がその場に響く。誰もがその音の出所を察して悲痛な表情を浮かべる。

ただ一人、奏だけが楽しげに嗤っていた。

「貴方が闇へ墮としちゃった、憐れな女の子を、さ」

口の端を歪めながら、心を強く持とうとした仁志へ更なる鋭い言の葉を突き刺して……。

「姉さん……」

僕の目の前には闇の繭から出て来た姉さんがいた。日焼けしたかのような肌となつた、姉さんが。

純白のギアは漆黒に染まり、どこか可愛ささえ感じられるはずのインナーは、扇情的な雰囲気を持つ物へと変わっている。

「うふふ、エル、どうしたの？　まるでこの世の終わりみたいな顔して」

楽しげな姉さんの声だけど、その表情は僕が今まで見た事のないものだった。

どこか人を馬鹿にしてるような印象を覚える顔だから。

「セレナ……何て嫌な匂いだ……。以前の切歌に近いなんて……」
「ヴェイグさん……」

僕の隣で辛そうに項垂れるヴェイグさん。

人間嫌いになっていたヴェイグさん。それを变える切っ掛けになったのが優しい匂いをさせる姉さんだった。

そんな相手がとても嫌な匂いを出している事。それがヴェイグさんには耐えられないんだと思う。

「セレナ、心を強く持つてっ!」

「そうデス! 悪意なんかには操られちゃダメデス!」

「ふふっ、調さんも切歌さんも何を言ってるんですか? 私、操られてなんかいいですよ? あははっ、操られてないですから」

楽しげに、軽やかに笑い、姉さんはその場でくるくると回ってみせた。

まるで今の自分を周囲に見せつけるように。

「セレナ……」

そんな姉さんを見て兄様が辛そうな声を出した。

多分だけど、こうなった原因が自分にあるって思ってるんだ。

「あっ、お兄ちゃん。見て見て? 今の私、大人っぽいでしょ? これならお兄ちゃんのお嫁さんになれるかな?」

とつても可愛い笑顔でそう問いかける姿は、僕が良く知る姉さんだった。

だけど、そんな姉さんを見て兄様は表情を歪めるだけだ。

「どうしたのお兄ちゃん? 何で喜んでくれないの? もしかして……」

そこで急に姉さんの雰囲気が変わった。

少し身震いしてしまうような、そんな雰囲気へ。

「まだ私を子供扱いしてる?」

目を細めて兄様を見つめる姿は、姉さんじゃなかった。

恐ろしさや怖さを感じさせるそれは、絶対姉さんじゃない！

「セレナ、仁志先輩に見せてやんなよ。今のセレナは子供じゃないってさ」

「はい、分かりました。じゃあ……っ！」

奏さんがその声をかけると、姉さんはその手にアームドギアを取り出して身を低くすると同時に駆け出した。

「っ!? 月読っ！ 構えろっ！」

「っ!？」

狙いは調お姉ちゃん。金属同士が激しくぶつかり合う音が響いて、調お姉ちゃんが表情を歪めるのが見えた。

姉さんは僕からは背中しか見えない。でも、調お姉ちゃんが悲しそうな顔をしたからきつと笑ったんじゃないだろうか。

「エルっ！ 一旦離れるぞっ！」

「は、はいっ！ ヴエイグさんっ！」

「分かったっ！」

兄様に抱えられて、僕はヴェイグさんと一緒にその場から離れる。

視線の先では姉さんとお姉ちゃん達が戦い始めていて、奏さんを相手に響さん達三人が向かっていくのが見えた。

「くそっ！ 結局俺はっ！ こうして逃げる事しか……っ！」

兄様の悔しげな声を聞きながら僕はヴェイグさんへ声をかける事にした。

—— ヴエイグさん、どうして悪意は奏さんと姉さんを支配下に置かないんでしょうか？

—— 奏は分からないが、セレナは簡単だ。依り代で簡単に助け出せないようにだろう。

—— そうか。切歌お姉ちゃんの時と一緒にですね。

—— ああ。あの時の切歌と同じじゃないからまだ隔離は出来るが、元に戻す事は多分タダノだけじゃ無理だ。

—— 必要なのは……姉様、でしょうか？

—— あるいはエル、お前だ。セレナはエルを本当の妹みたいに大事にしてたからな。

——僕が……。

気が付いたら兄様はあの建物の前まで来ていた。ただ、もう走ってはいなかったけど。

「こ、ここのままでくれれば……とりあえずは……大丈夫、だろう……」
そう言うのと兄様が僕をゆっくりと下ろしてくれました。

僕が地に足を着けると同時にヴェイグさんが姿を見せた。

「タダノ、大丈夫か？」

「あ、ああ……っ。何となくだけど、体の調子を良くする術が分かった気がするよ……」

「ほ、ホントですか？」

兄様の言葉が本当なら朗報以外の何物でもない。

だけど兄様は僕へ複雑そうな顔をした。

「でも、これは正直精神論だ。心を強く持つ事。この一点なんだよ」
その言葉には、どことなく無力感が滲んでるように僕には聞こえた。

多分兄様は悪意の影響で以前よりも精神が不安定になってるんじゃないだろうか？

しかも、おそらくそのバランスは負の方向へ偏り易いはずだ。

それを引き起こしているのは、兄様が夢と言う形で見せられてる過去の嫌な思い出や最悪の未来予想図。

健全な精神は健全な肉体に宿ると言うらしいけど、今の兄様を見るとそれは真理なんだと分かる。

思い出してみれば、響さんと出会う前の兄様は食生活もそこまで気を配らず、運動不足だったらしい。

今はそうでもないけど、代わりに快適な睡眠を阻害されているせいで心が弱っている。

悪意は、眠りを阻害し悪夢を見せる事で兄様の体力と共に精神力まで衰えさせようとしてるんだ。

「じゃあ、今はどうなんですか？」

「正直奏と話し始めた時よりかなりマシ。ただ、それでも若干の気怠さは残る」

「神獣鏡でも祓えないのか……」

「効果はないらしい。こうなると、悪い意味で俺の存在への概念が働いてるんじゃないか？」

「っ！ 神の世界の住人っ!？」

僕がそう言うのと兄様は苦い顔でゆっくり頷いた。

有り得ると思う。僕らは兄様の世界を上位世界、つまり神の世界にも近いと考え、そこに住む兄様を自分達とは少し違う存在と捉えた。

実際ヴェイグさんも匂いを感じられないと言っていたし、それは今も継続中だ。

「……あれ?」

何だ? 何か引つかかる……。

「エル、どうした?」

「何か気付いたのか?」

「あ、あの、ヴェイグさん」

「何だ?」

「えっと、今も兄様の匂いは分からないんですよね?」

僕の問いかけにヴェイグさんだけじゃなく兄様も不思議そうな顔をした。

「あ、ああ。それがどうした?」

「でも、兄様の世界の匂いは分かるようになったんですよね?」

「ああ」

やっぱりっ！ じゃあ、そういう事なのかもしれない!

「……エル、もしかして俺の概念を変えればヴェイグは匂いを感じられるし、神獣鏡の効果も出せるのか?」

兄様の言葉は僕の仮説と同じものだ。

そう、ヴェイグさんが上位世界の匂いを感じ取った事。

多分だけどその背景にあるのは、ヴェイグさんが上位世界を姉さんの中から見た世界と大差ないと感じ続けた事のはずだ。

なら、兄様の事を僕らと何も変わらない存在だと思えば……。

—— 待て。そうなると一気に悪意とやらが侵食してしまう可能性もあるぞ。

——っ!?

思わず息を呑んだ。

聞こえてきたキャロルの言葉に驚いただけじゃない。その意味する事が分かってしまったからだ。

そもそも悪意が兄様へ直接手を出せなかったのは神の世界の住人だったからだ。

その概念を崩してしまうと、キャロルが危惧してる事が起きる可能性は高い。

だけど、どうしてキャロルがまた僕へ声をかけてくれたんだろう？

——……あの男はお前にとつてのもう一人のパパなんだろう？

なら、あらゆる可能性を考えろ。

——キャロル……ありがとう。

そこから声は聞こえなくなった。

きつとまだキャロルは少ししか覚醒してないんだ。

それでも僕と兄様の関係を考えて意見を出してくれた。それがとても嬉しい。

「兄様、今はそれは不味い可能性があります」

「不味い？」

「その、悪意が兄様へ直接手を出せなかった理由を喪失するかもしれないんです」

「……上位世界の住人も他の平行世界の住人と変わらないってなると、悪意の影響をもっと強く受けるかもしれない？」

「はい。キャロルがその危険性を教えてくれました」

「きや、キャロルが!？」

驚く兄様へ僕は頷く事で返事とかえた。

僕に出来るのは考える事だ。この知識を使って兄様達を支える事だ。

今の自分に出来る事を一生懸命やる。それが成長に繋がるって僕は教えてもらったから。

「タダノ、これからどうする？ セレナと奏を元に戻さないといけないが……」

「ああ、切歌と似た感じだったし、依り代だけで元に戻すのは難しいかもしれない。ただ、奏はともかくセレナはまだ染められたばかりだ。狙うならそつちだ」

「はい。僕もヴェイグさんと一緒に兄様とパズルの中へ入ります」

「ありがとなエル。それならきつとセレナを元に戻せるはずだ」

そこで一度だけ深呼吸して兄様は来た道へと向き直った。

「まずはセレナを助け出そう。それから」

「そうはしません」

聞こえた声に僕らは思わず息を呑んだ。

だって、その声はここで聞くはずはないって思ってたものだったから。

「マリア……」

兄様の掠れた呟きの通り、僕らの前には所々傷を負った漆黒のギアを纏う姉様が立っていた。

前回見た時よりも若干威圧感が薄れた印象だけど、それでもまだ禍々しさは残る姿の姉様が……。

「まだ万全ではないが、お前達だけなら十分相手に出来る」

「どうかな？ 俺達だって弱いとは限らないぞ」

そう言いながらタダノがエルの体を抱き抱える。

俺もエルの中へと入った。

マリアを操る悪意はかなり消耗してるのが俺には分かる。

匂いが薄れているんだ。前見た時よりもかなり弱い。

これなら今度こそマリアを元に戻せるはずだ。

「とりあえず……二十六計逃げるが勝ちっ！」

「なっ!？」

タダノが逃げた先はセレナ達がいる方とは逆。つまり施設内だった。

「に、兄様っ!? どうしてこっちへ!」

「喋るな! 舌をかむ! 理由は後で教えるからっ!」

タダノは必死な顔で走った。以前は入口を閉めて安全を確保した

のに今回はそうじゃない。

きつと何か考えがあるんだろう。今までもタダノはそうだった。力がないから知恵を絞り、機転を利かせ、勇気を以って色んな事を乗り越えてきたからな。

そうして進んでいくと、タダノが少しだけ速度を落とした。

「ヴェイグ、ナスターシャさんがいる司令室みたいな場所、分かるか？」

その問いかけの意図は分からないが、それが重要な事は分かった。

——エル、俺が案内する方向を口に出してくれ。

——わ、分かりました！

俺が姿を見せるとタダノの負担が増える。

なのでエルへ声をかけて俺の代わりをしてもらおう事にした。

俺の指示をエルが告げてタダノが急ぐ。

やがて俺達はマムのいる場所へと到着した。

「はあ……っはあ……」

「だ、大丈夫ですか兄様？」

「あ、ああ……っ。エル、ヴェイグと一緒にどこかに隠れててくれ……っ。で、頃合いを見て、パズルを頼む。ふくっ……セレナにやろうとした事をマリアへ試そう」

「あ……はい、分かりました」

言われてエルが手近な物陰へ隠れた。

俺は今の状態だとエルの見てる光景しか見えないが、どうやらまだ悪意は来てないな。

——ヴェイグさん、嫌な匂いはしますか？

——いや、今はしない。少し待ってろ。

今のマリアは匂いが薄くなってる。だから普段よりは察知に時間がかかる。

それでも意識を集中すれば分からないはずはない。

……微かに嫌な匂いが近付いてくる。だが、どこか優しい匂いも混ざってる気がするな。

もしかすると、前の事でマリア自身も悪意と戦い始めてるかもしれ

ない。

——エル、ここに悪意が近付いてきてるぞ。

——分かりました。

「兄様、そろそろ来ます」

エルがタダノへ呼びかけるのを聞きながら、俺はふと考える。

俺は、ここへ来るまで人間の戦いに興味を持つ事はなかった。

セレナの戦いだって見ていただけで、一緒に戦うなんて事はしなかった。

それが、今じゃ気付けば自分から戦いへ首を突っ込んでる。

言われなくても意見を出したり、悪意の接近なんかを教える。

それは何故だと、そう考えると浮かんでくるのはやっぱりタダノだ。

あいつは、初めて会った時から俺を見て目を輝かせていた。

俺の名前を知っていて、最初からそれで呼んでくれた。

それだけじゃない。ここで俺はもう一度人間を見つめ直す事になった。

セレナ達が悪い奴じゃないのは知っていたが、タダノのままさんとぱばさんと出会って余計分かった。

人間は、たしかに嫌な匂いをさせる奴らが多いし、自分達の勝手に他の存在を平気で巻き込み、利用し、踏み躪る。

だけど、そうじゃない奴だってたしかにいる。

——大切な名前だしね。ちゃんと呼んで欲しいものねえ。

ままさんのあの言葉は、俺の中にあつた人間への考えを完全に变えてくれた。

タダノは自分の事を普通だと言っていた。ぱばさんやままさんも自分達を特別ななんて思っていないだろうし言う事もなかった。

なら、きつと、きつと人間の中にはタダノ達のような奴がまだいるはずだ。

俺はそれを忘れて、目立つ奴らばかりが人間だと決めつけ、思い込んできた。

「見つけたぞ」

聞こえた声に意識を切り換える。タダノの目の前にマリアの姿をした悪意が立っていた。

タダノは依り代を片手に険しい顔で悪意を見つめている。

——ヴェイグさん、いつパズルを展開しましょう？

——……よし、今からやるぞ。

——分かりました。

俺とエルでミレニアムパズルを展開すると悪意が若干驚きを見せた。

タダノはそんな悪意を見て何か気付いたような顔をする。

何だ？ 何かあったんだらうか？

「装者もない状態で、しかもあの時とは違って私はお前を攻撃出来るのに隔離するとはな」

「どうだろうな？」

「何？」

「むしろお前が使ってる体がマリアだからこそ俺達はこうしてるんだ」

「……どういう意味だ？」

「マリアは誰よりもあの日々を、暮らしを大切にしていた。エルという娘のような存在にセレナという妹、それに切歌と調という妹分、そしてヴェイグという小さくも頼もしい相談相手。あの平屋はマリアにとって一種の理想だった。俺は、そこで光栄にも旦那役にしてもらっていた」

そうだ。あの家でタダノはマリアにとって大事な存在だった。

二人だけの時間はマリアからすれば特別なものだった。

だから俺は時々タダノと二人にしていた。その方がマリアから優しい匂いがするからな。

「姉様っ！ 聞こえてますかっ！ お願いです！ 本当の姉様に戻ってくださいっ！ 優しくって！ 時々怖くてっ！ だけどあつたかいマリア姉様っ！」

「無駄だっ！ この装者の意識はとうに私が……っ!？」

エルの叫びへ悪意が馬鹿にするような笑みを見せていたところで

その顔が急に歪んだ。

これは……匂いがより強く混じり合ってるっ！

そう思った瞬間には俺はエルの中から出ていた。

「今の悪意からは優しい匂いもするっ！ マリアも戦ってるぞっ！」

「そうかつ！ なら……っ！」

「くっ……同じ手をやらせるとでもっ！」

「させないっ！」

「悪意の攻撃を妨害するようにエルがブロックを出現させる。

よし、なら俺もっ！

「なっ……小賢しい真似をっ！」

「エルっ！ 俺は悪意の方をやる！ お前はタダノの守りをっ！」

「はいっ！」

セレナ程じゃないが今のエルは強い。

前、俺と一緒にパズルの維持を頑張った時から、その心は優しいだけじゃないものへ変わった。

強さを、得たんだと思う。

それにはキャロルという双子の姉の存在が大きく関わってるはずだ。

そう、人間は成長する。出会った時は嫌な匂いをさせても、もしかしたら最後には優しい匂いを出せるようになるかもしれないんだ。

「おおおおっ！」

「く、来るなあっ！」

タダノだっけそうだ。初めて会った時は情けなくて頼りない感じだったのに、今じゃ本当に頼もしく思える。

ああ、そうだ。あの頃の俺と同じだったタダノは、俺と違って闇じゃなく光を見つめ続けたんだ。

だからタダノはウルトラマンになれるんだ！

「兄様っ！ 姉様をお願いしますっ！」

「くそっ！ また邪魔をっ！」

エルは的確に悪意の攻撃からタダノを守るようにブロックを配置してるな。

「俺も負けてられないぞっ！」

「なっ!? 足元がっ！」

悪意の足元をブロックで固めてやった。これで自由には動けない。
「マリアを返せえええええっ！」

「こうなれば……っ！」

タダノが悪意へ接近していく。それを見て悪意は……構えを解いた？

「エル、念のために悪意の動きを完全に封じるぞ」

「はいっ！」

何をしようとしてるか知らないがタダノへ危害は加えさせない！

「マリアっ！」

タダノの手が依り代を掴んだまま悪意へそれを押し付けようとする。
る。

それを見て悪意が笑った気がした。

「っ!? タダノっ！ そいつ、何かしようとしてるぞっ！」

「えっ!?」

「もう遅いっ！」

タダノの目の前で悪意が瘴気を撒き散らした。

あの時と同じ事だが、今のタダノにあれは不味い。

「ぐあああああっ！」

「兄様っ!？」

聞こえてきたのはタダノの絶叫。

おそらくだが瘴気を大量に浴びた事で体内の悪意が暴れ始めたんだ！

あいつはこれを狙っていたんだっ！ 今のタダノを苦しめられる

一番の方法を最高の状況で使うために！

「エルっ！ 行くなっ！」

「で、でもっ！」

タダノへ駆け寄ろうとするエルの手を掴んで俺は首を横に振る。

「行けばお前も瘴気を吸う事になる。そうなたらどうなるか分からないんだ」

「だ、だけど……だけど……っ」

辛そうにタダノの方を見るエル。俺だって出来る事なら助けに行きたい。

だが、ここからでも分かる程あれは強い嫌な匂いを放ってる。きつと悪意も力のほとんどを使い果たすつもりでやったはずだ。拘束されてるとはいえ、未だに何もしようとしなのはそういう事なんだろう。

「ヴェイグさん、僕はそれでも行きます！ もう見てるだけは嫌なんですっ！」

「エル……」

俺へそう告げるエルの目は今まで見た事がない程強く輝いていた。そこに決意を見て、俺はそつとエルから手を離れた。

「ありがとうございます！ いますヴェイグさん。それと、ごめんなさい」

そう言っつてエルはタダノへ向かって走り出す。

その背中を見つめて俺は久しぶりの無力感を感じていた。

あの頃は常だったそれを、まさか今になって感じるなんてな。

「……………俺は、強くなったつもりになってただけなのかもしれない」

力を、知恵を、強さを得たと、そう思っていた。

あの頃のような未熟な俺じゃないと、そう考えていた。

でも、現実はどうだ？ 俺は何も出来ない。苦しむタダノを見つめ

る事しか、それを助けに行こうとするエルを見送る事しか出来ない。

あの瘴気の中へ足を踏み入れようとする事さえ出来ない。足が、動いてくれない。

——もがき足掻く事こそ生命の本質！ それ無くして何の生命かっ！

ふと頭の中をそんな言葉が過ぎった。

エル達と一緒に見ていたガガガの中の台詞だ。

「もがき足掻く事こそ、生命の本質……か」

勇気という言葉が何度も出てくる物語だった。

そしてそれはどんな生き物にも存在するとガガガは言っていた。

心さえあるのなら、勇気は何にでも宿るんだと。

「……俺は、勇気を忘れてたんだな」

目の前では瘴気の中からタダノを引っ張り出そうと頑張るエルがいる。

口元を隠す事もせず、瘴気に苦しみながらも一生懸命にタダノの腕を引っ張っている。

タダノは……どうやら気を失ったらしい。

「俺も、俺も勇者になるんだっ！ 最後までもがき足掻いてみせるんだっ！」

そう叫んだ瞬間、あんなに動かなかった足が動いた。

今までだったら嫌だった瘴気の中へ俺は向かって行ける。

「もう、もう……っ！」

思い出すのはあの頃の気持ち。エルの言葉で思い出した、弱かった頃の俺の想い。

「見てるだけは嫌なんだっ！ 俺は仲間をつ！ 友達をつ！ 失いたくないっ!!」

あの頃の俺にあつて今の俺になかったものがあるとすれば、それは間違いなくその気持ちだ。

「エルっ！ 俺も手伝うぞっ！」

「ヴェイグさんっ！」

とても嫌な匂いだし、呼吸が出来なくなる程苦しいけど、俺はそんな事に構わずエルと一緒にタダノの腕を掴む。

「一緒に引っ張るぞっ！」

「はいっ！」

「せーのっ！」

少しだけタダノの体が動く。けど、まだ瘴気の中から出る事は出来ない。

それでも諦めず俺とエルは声を合わせる。想いを、心を合わせる。「せ、せーのっ！」

今までタダノは俺達のために頑張ってくれた。ギアも錬金術もないのに、依り代が使えるっただけで勇気を持って悪意と戦ってきた。だけど、決してタダノは俺やエルを半人前扱いなんてしなかった。

それどころかいつも頼ってくれた。

守ってくれもするけど、同じぐらい守られもしてた。一緒に、支え合ってたんだ。

「はぁ……はぁ……っ。せーのおっ！」

息が苦しい。体が辛い。気持ちが悪い。

それでも、この手は離さない。今、タダノを助けられるのは俺とエルだけなんだっ！

「ヴェ、ヴェイグさん……っ。僕……もうダメかもしれない……」

「エル、頑張れ。もう少し、もう少しだ……っ！」

俺とエルは瘴気から少しだけ体が出るようになった。

後少しでタダノも瘴気から頭が出せる。もう少し、もう少しなんだ。

なのに、どうして俺の体は動いてくれないんだ？　なんで目の前がかすんでくる？

意識が、薄れていくんだ？

「兄様……っ！」

見ればエルが目を閉じて倒れた。

ダメだ。せめて、せめてエルだけでも瘴気の外へ出してやろう……っ。

「俺は……俺は……っ！　もう、無力なんかじゃない……っ！」

エルの体を瘴気から完全に引っ張り出して、俺はそれを見届けてその場へ倒れた。

タダノ、すまない……。もう、おれはたすけてやれない……。

「拘束が消えた……か。ははっ！　所詮装者もないお前達などこの程度だっ！」

あくいの、かちほこるこえがきこえる……。

くそお……おれに、おれにもっとちからがあつたら……っ。

「だれでもいい……っ。おれのだいじななかまを、ともだちを、かぞくをたすけてくれ……っ！」

うすれゆくいしきのなかで、おれはそうつぶやくことしかできなかった。

——いいだろう。この体を助けてくれた礼だ。その願い、俺が叶えてやる。

だれかがなにかいつている……？

でも、だめだ……。

もう……ねむ……い。

悪意は言葉を失っていた。

何せ目の前には、ゆつくりと起き上がるなり自分を鋭くにらみ付けるエルフナインがいたのである。

「な、何だど？ ど、どうしてまだ立てる？」

「ふんっ、むしろお前の瘴気で俺は俺として立てるんだがな。まあ、この場合はそれが良かったんだろうが……」

動揺する悪意へエルフナインは笑みを見せる。否、今の彼女の名前はそうではない。

「覚悟しろよう？ こんな風に起こされて俺は少々機嫌が悪い。手加減など期待してくれるな」

キャロルはそう言い放つと右手を前へかざす。

すると緑の光と共に魔力が放たれ風が巻き起こって瘴気を吹き飛ばしたのだ。

「こ、これは……」

「這う這うの体のお前などにファウストローブは必要ない。今の俺でも、お前程度ならあしらえる」

「まさか……お前はキャロル!？」

「這い蹲れっ！」

黄の光と共に放たれた力が悪意の足元を襲う。

「があっ!？」

さすがにそれは予想外だったのか、ろくな回避行動や防御も出来ずに悪意は天井へと勢い良く叩きつけられ、そのまま床へ強く落下する。

それはまさしく、キャロルが宣言した通り這い蹲るような体勢で。

「ふん、今回はこれで終わりにしてやる」

意識を手放した悪意へ吐き捨てるようにそう告げ、キャロルは視線を眠るヴェイグへ向けた。

「……家族を助けてくれと、そう言われたからな」

エルフナインの中で時折聞いていた会話ややり取り。

そこからキャロルはヴェイグの言う家族にマリアが含まれていると考えたのである。

キャロルは静かに仁志へと近付き、その頬を軽く叩いた。

「うっ……」

「起きろ。俺もそろそろ限界だ」

「……えるっ？」

その言葉にキャロルはそっと仁志の頭から手を離す。

「お前のパパに関する情報は、有益であり害でありと複雑だった。だが、一応礼を言っておこう。今回の事はそのおまけとやらにしてやる」

「……キャロル、なのか？」

「お前もエルフナインの父親を気取るなら、無茶な行動は控えろ。

……俺のような想いは、させるな」

「分かった。無茶はするけど無理はしないよ」

「……ふんっ」

仁志の返事に顔を背けてキャロルは体の主導権をエルフナインへと返した。

仁志の目の前でゆっくりと倒れる小さな体。それを仁志は咄嗟に受け止め、息を吐いた。

「……ヴェイグは眠ってる、のか。それに……」

周囲を見渡し現状を把握する仁志。

目を閉じて寝息を立てているヴェイグと床へ伏しているマリアの姿に、仁志はキャロルが目覚めて戦ってくれた事を察し、腕の中の少女へ小さく微笑みかけた。

「ありがとう、キャロル」

そっとエルを床へ寝かせ、仁志は手の中にある依り代を強く握り締めた。

「最後の仕上げは、俺がやらないとな」

静かにマリアへ近付き、仁志は依り代をそのギアへ押し付けた。
だがその次の瞬間っ！

「ああああああっ!?」

あろう事か悪意だけでなく仁志自身も苦しみ出したのである。

それはあの瘴気を吸った事で仁志の体内の悪意がその根を張る程の成長を遂げた事による拒絶反応だった。

「だ、だとしても……っ!」

理由は分からずでも原因は理解している仁志は、悪意などに屈してなるかとの気持ちで依り代を更にマリアのギアへと押し付けた。

「アアアアアアっ!」

声の感じがマリアのものから変わった事に気付き、仁志は全身を襲う痛みと倦怠感をねじ伏せるように叫んだ。

「マリアっ! 聖詠をつ! 自分を取り戻せえええええっ!」

(仁志の声……? 私を、呼んでる……っ!)

その魂の叫びに眠っていたマリアの意識が目覚めた。愛する男の必死の叫びがその魂を揺さぶり、動かしたのである。

それは前回の行動があればこそそのもの。一度悪意を弱らせ、マリアの心へ強く呼びかけた事による結果であった。

——Seilien coffin airgatlamm
tron……っ!

内と外から依り代によって攻め立てられた悪意は、堪らず逃げ出すようにマリアから離れた。

その姿をイーヴィルギア姿の漆黒マリアとして、悪意はへたり込む仁志と純白のギアを纏ったマリアを見下す。

「おのれえ……だが、今の疲弊しているお前達など敵ではないっ!」

「仁志、後は任せて。自分の闇は、自分でケリをつけるわ」

「ああ、頼むよ」

力なく笑みを返しながら仁志はマリアのギアをアマルガムギアツインドライブへと変える。

「ええ、そこで見ている。私の心の光を」

その言葉と同時にギアから金色の輝きが放たれた。強くも優しい光が室内を包み、悪意の視界までもその輝きの中へ収めようとする。

「ちっ！・小癩なまつ!？」

それが、悪意の最後の言葉だった。

眩しさを避けるように腕を動かしたその一瞬の隙だけで、マリアはその手にしたアームドギアで己が闇を斬り裂いてみせたのである。

「マイターン、と言うまでもなかったわね」

例えばボロボロの状態であろうと、愛する家族を自分の手で苦しめ、傷付けさせた事をマリアが許せるはずがなかった。

故にその怒りと悔しさを力へ変え、ヘルメスの加速と共に解放。その爆発的な瞬発力で見事悪意をその一撃にて撃破するという快挙を成し遂げたのだから。

着地したマリアは疲れた体で仁志へと駆け寄った。

「仁志、大丈夫?」

「あ、ああ……。これぐらい平気さ……」

「無理しないで。エルやヴェイグも疲れて眠ってるみたい……。私
が、貴方達をここまで苦しめてしまったのね……」

「気にするなつて、言っても無駄だよな……。じゃ、一つだけ頼みを聞
いてくれるか?」

「いいわ。何?」

「セレナが悪意に染められたんだ。それを元に戻す手助けを、して欲
しい」

「……………二人で?」

「エルとヴェイグも一緒にだ。セレナには、その方が効果が高いと思
う」

一度として逸らされる事のない二人の視線。

どちらも真剣であり、真っ直ぐなものだ。

やがてマリアの方が根負けしたように息を吐いた。

「分かったわ。でも、今すぐは無理よ。私も貴方も疲れ切ってるもの
「だけど……」

「気持ちには分かるけど落ち着いて。翼達が戦ってるんでしょ？ なら、すぐにやられる事はないわ」

「……ならせめてエルとヴェイグをベッドへ移動させてやりたい」

「……そうね。じゃあ、ここで待ってて。私が二人をセレナの部屋へ運ぶわ」

「頼む」

そうしてマリアがエルフナインとヴェイグを移動させ始めた頃、響達は奏とセレナを相手に苦戦を強いられていた。

「ほらほらどうしたのさ？ 三人もいるんだからあたし一人ぐらい圧倒してごらんよっ！」

「くっ……攻撃に迷いが無い上に的確に急所を狙ってくる……っ！」

本気で私達を殺しても構わないと思っっているのっ、奏っ！」

「歌っても出来て互角がやっとなんて……っ！」

「このままじゃ……みんなやられちゃう……っ」

悪意の影響で攻撃的になっている奏の攻勢は激しく、更に彼女の意思そのもので戦っているため動きも鋭く、響と未来どころか翼さえも互角にするのが精一杯だったのだ。

「セレナっ！ もう止めてっ！ 私達はセレナと戦いたくなんかないっ！」

「そうデスよっ！ セレナだって戦う事は大嫌いだったはずデスっ！」

「クスクスっ、切歌さんも調さんもだらしないですよ？ ユニゾンを使ってくれていいですから、もつと年上らしいところを見せてください。それを私は超えて、大人になったって証明してみせますから！」

セレナはセレナで厄介さを見せていた。

決して致命傷を与える事はしないが、それが逆にジワジワと切歌や調をいたぶる結果となり、にも関わらず自分が傷付く事を恐れないという行動を取るため、二人は下手な攻撃が出来ないでいたのだから。

そう、五人それぞれが相手をしてる者達の振る舞いは悪意による演技ではないと感じ取っていた。

だからこそ心が迷う。覚悟が、決意が鈍る。

非情になれと思う事はあれど、仁志がいない状況では悪意を完全に排除する事は出来ない。

しかも、今の二人を相手にするには響達も全力を出すしかないため、最悪二人を殺してしまうかもしれないのである。

「こうなったら……」

そんな状況で翼はある決断を下そうとしていた。

「施設まで撤退する！ ギアの光を合わせるんだっ！」

「二りよ、了解（デス）っ！」「」

このままでは最悪の状況になる。

そう判断した翼は仁志との合流を図ったのだ。

「うっ……」

五つの金色の輝きが奏とセレナを包み、その動きを止める。

その隙に五人はその場から離脱を開始、元来た道に戻って施設へと急いだ。

「……逃げられた、か」

「ですね。どうしますか？」

「追い駆けてもいいけど、どうせならあいつが来るのを待ちたいね」

「あいつ？」

「ああ。あんたの姉だよ。完全にリンクが切れたから仁志先輩が戻したんだろうさ」

「そうなんです。姉さん、早く来て欲しいなあ」

そう会話し二人はゆっくりとゲートへと歩き出した。

そこで待っていれば必ず待ち望んでいる者達は来ると確信しているからである。

こうして一旦仁志達に一時の休息が訪れる。

ただ、それは次なる激戦までの僅かな時間でしかない、この時誰もがどこかで察していた……。

「……そう。私も未来と同じよ。本部へ戻った後は記憶が途切れ途切れだわ」

マリアさんはそう言って俯いた。

場所はセレナちゃんの部屋。そこに他の場所にあったベッドをいくつか運び込んで私達は休んでる。

エルちゃんとヴェイグさんはセレナちゃんのベッドで眠っていて、仁志さんもその近くに置かれたベッドで横になってる。

たった三人で、ううん四人で悪意と戦ってマリアさんを元に戻したから疲れ切ってるんだ。

「こうなると奏を元に戻した時に全てがハッキリするな」

「ですね。もし奏さんも未来さんやマリアみたいに途切れ途切れなら……」

「奏さんも悪意に操られてたって事ですな」

「でも、奏さんが本当に全部覚えていたら……」

「うん、奏さんが言ってた通り、自分の意思で動いてたって事になるね」

正直そうじゃない事を願うけど、半信半疑って感じた。

たしかにあの奏さんは奏さんだった。それでも、あんな風に私達を攻撃する時に笑う奏さんは奏さんじゃないと思いたい。

「……ある意味で奏もセレナも悪意に操られてるんだよ」

疲れた声で仁志さんがそう呟いた。

その瞬間みんなの視線が仁志さんへ向く。仁志さんはベッドに横になったまま話し続けた。

仁志さんが見た事のあるヒーロー物でも似たような事はあったって。

最初から最後まで自分の意思だと思っていたけど、結局全部悪い奴の掌の上だったキャラクターがいた事を。

「じゃあ、奏の言ってる事はある意味で事実？」

「きつとね。奏は自分の意思で全部やってると思ってるけど、そもそも本当に彼女自身がやってるとすればイーヴィルギアなんて纏えるものか。悪意の干渉がなければギアをイグナイト以上の禍々しい形態にどうやって個人で変化させるんだよ？」

「そう、ね。イグナイトはそもそもが呪いの力を利用した決戦仕様。個人の心象変化で出来るぐらいなら苦労はないわ」

「そうだな……」

そこでマリアさんと翼さんが揃ってため息を吐いた。

言われてみれば当然だけど、イグナイトギアは私達だけの力で出来るものじゃなかった。

それを基本にしたイーヴィルギアは絶対個人の力で実現出来ないんだ。

なら、奏さんもセレナちゃんも自分の意思って思い込まされて悪意に操られてる。

「切歌と調の時に思ったけど、悪意は依り代対策を講じ始めてる。切歌の場合は、ギアを展開させたまま取り込んだ時に響やクリスでやったような形で自分の影響力を及ぼした。でも自分が切歌の意思を奪う事はせず、切歌の憎悪などの負の念を肥大化させて動かしたし」

「うん、私もそうだった。切ちゃんへの憎しみを煽るような事を延々繰り返し言われた」

「でも調はアタシを助けてくれました。あれはどうしてデス？」

「えっと、切ちゃんもこんな風に私の事を憎めって言われたんだって思ったら受け止めようって思った。だから切ちゃんじゃなくて自分を憎んだの。切ちゃんを悪意に染めたのは自分だって」

「自身を憎んだ、か。成程、それで悪意に染められたようになっても暁程自我を操作されなかったのか」

調ちゃんらしい考え方も。

切歌ちゃんを憎むんじゃないかって自分を、なんて。

こうなるとセレナちゃんはどうかやって悪意に操られてるんだろう？

「切歌ちゃん、調ちゃん、セレナちゃんはこういう風に操られてるのかな？」

「セレナは……多分大人になりたいって気持ちだと思います（デス）」

「やっぱりか……」

仁志さんが納得したみたいに呟いてゆっくりと体を起こした。

その表情は辛そうに歪んでる。きつとセレナちゃんの事を引き

ずってるんだ。

「セレナは、一時期大人になろうと焦ってた頃がある。もしかするとあの時に悪意が入り込んでいたのかもしれない」

「じゃ、じゃあ、ししよーと一緒に昼寝したいって言ったのって……」

「悪意がセレナを使って師匠の中へ入り込もうとしてた？」

思わず耳を疑った。セレナちゃんが仁志さんとお昼寝しようとした事じゃなく、やっぱり私達の知らない間に悪意が入り込んでいた事だ。

今だからそう思えるけど、その時には分からなかった事、か。それで言えば私は一度そうなっていたから分かる。

あの日、私は仁志さんとエッチしてもいいって、ううん、したいって思ってた。

あれも、今にして思えば悪意の影響だったんだね。

……い、今はとてもじゃないけどそんな事言えないし。

「あれ？　そう考えるとあの飲み会って結構ヤバかったんじゃないか？」

「ああ……」

そんな中で仁志さんがポツリと呟いた言葉に翼さんとマリアさんが小さく声を漏らした。

飲み会って言われて思い出した。

そういえばある時未来が言ってたっけ。翼さんと奏さんがお酒の匂いをさせて帰ってきた時があるって。

「だけど何もなかったって事は、あの時のドライデューヴァには悪意は潜んでなかったって事か？　いや、あるいは酒が悪意に効いたかもしれないなあ」

「ど、どういう事デスか？」

「ん？　いや、飲んだ物の中に日本酒はなかったけど、お神酒って物があるからさ。神様へのお供えとして酒ってのは割とメジャーだから、もしかして哲学兵装みたいな効果があったのかなってさ」

「ない、とは言い切れないかもしれないわ。悪意を倒す事は出来なく

ても弱らせたり沈静化させたのかも」

「もしくは、アルコールで思考が緩くなる事で悪意も思考を制御出来なくなっただのかもしれない」

もしそうだとしたら、いつそ仁志さんに寝る前にお酒を少し飲んでもらうのはどうだろうか？

それでうなされる事がなくなったら嬉しいし。

「あ、あの、なら戻ったら仁志さんは寝る前に少しだけお酒飲むのはどうでしょう？」

「あく、お神酒によく使われる日本酒とかな。寝酒に少しならいいかもしれない」

「じゃあ、私がお酌してあげますね」

未来がそう言っただけ微笑んだ。むう、それなら私だとしてあげたい。

だ、だって奥さんって感じるもん、それ。

「いえアタシがするデスよ」

「ううん、私がする」

切歌ちゃんが手を挙げると調ちゃんも負けじと手を挙げた。

あれ、この流れてもしかして……

「な、ならば私がやろう」

「私がやります！」

「だめだめ。最初に言い出したの私だから私がやるよ」

未来が手を挙げてそう言うと、みんなしてマリアさんを見つめた。

「え？ な、何？」

私を含め見つめてるみんなが笑ってるからマリアさんが困惑してる。

それでも、みんなして手を挙げてるから戸惑いながら手をそつと挙げて……

「わ、私がやるわ？」

「」「」「どうぞどうぞ」「」「」

そうやってみんなで言うマリアさんが困った顔で仁志さんを見た。

「説明してもらえらる？」

「あははっ……あー、うん。戻ったら教える。だけど、今のでちよつとだけ暗い気分が飛んだよ。こりゃセレナや奏も加わったバージョンで見てみたいな」

たしかに私も少しだけ暗い気持ち薄れた。

見れば未来達も小さく笑ってる。マリアさんさえもだ。

「多分だけど奏とセレナはゲート前だ。建物内だと向こうも戦い辛いから、こつちが確実に現れて広い場所を陣取るだろうし」

「でも、ここのゲート前はそれほど開けた場所ではないわ。それでも？」

「木々が邪魔だつて事だろ？ でも、それなら向こうは姿を隠してこつちを待ち構えていられるんだ」

「そつか。たしかに奇襲を仕掛ける側にとつては有利だね。しかもこつちはそう分かっていても進むしかない」

「成程ね……。こうなるとどうすればいいのかしら？ 不意を突かれる可能性が高いのにそれへ何も手を打たないのは……」

マリアさんの意見はもつともだ。だって絶対に二人は私達を待ち伏せてるんだから。

「ゲートが見えてきたらミレニアムパズルを展開してもらおうのはどうでしょう？ それなら障害物がなくせるし、もし二人がその中にいなくても不意打ちされません」

「いい案かもしれない。そうやって少しずつゲートへ近付いていけば、悪意の出鼻を挫く事が出来るはずだ」

「……そうね。今のところそれが一番いい方法かもしれないわ」

「エルとヴェイグが起きたらお願いしないとデスね」

「うん。疲れてるだろうけど、もうひと頑張りしてもらおう」

切歌ちゃんと調ちゃんはセレナちゃんのベッドへ眠る二人へ顔を向けた。

エルちゃんとヴェイグさんはお互いに寄り添うようにスヤスヤと眠ってる。

「仁志、貴方も少し寝ておいた方がいいわ。瘴気を吸いこんだので

「しよ?」

「……ああ」

「「「えっ!」」」

私達の声が重なる。そんな、今の仁志さんが瘴気を吸ったなんて……。

「ひ、仁志さんっ! 大丈夫なんですかっ!」

「……………依り代を悪意へ押し付けると痛みが俺にも走るようになった」

誰も言葉を出せなかった。だってそれは、どう聞いても良い事じゃなかったからだ。

仁志さんの中にいる悪意がより厄介さを増したって、そう思うしかない事だった。

マリアさんは事情を知らないから驚きと同時に疑問符を浮かべてる。

「ど、どういう事よ?」

「マリア、実は……」

翼さんと私でマリアさんへあの本部へ到着してからの事を簡単に説明する。

その最中、仁志さんの手を切歌ちゃんと調ちちゃんが握っていた。

未来はエルちゃん達の傍へ静かに近寄って寝顔を見つめてた。

そして私達から話を聞き終えたマリアさんは辛そうに仁志さんへ顔を向けた。

「そんな……悪意が仁志へ入り込んでるなんて……」

「マリアさん……」

「クリスマスだけじゃないわ。きっと私も同罪よ。思えばあの時、私は無意識に舌を絡めにいったもの」

「そうなると奏や小日向も悪意の影響下だったと見るのが正しいだろうな。最初が雪音だった事を考えると、そこで主となるものを送り込み、マリア達を使ってよりそれを強大なものへと変えていたのか?」

「あるいは、クリスマスが種子を、私達で肥料を、かもしれないわ。そう考えれば、変質したゲートの空気や瘴気は……水、かしら」

マリアさんの例えに息が止まるかと思った。

そう考えたら仁志さんの異変が納得出来たから。

依り代で悪意を追い出そうとする痛みが走るっていうのは、悪意の種が仁志さんの中で根付いたからじゃないかって。

「……マリア、仁志さんは悪意を完全に倒すには愛の力が必要かもしれないと考えているんだ」

「何故そこで愛？ ……いえ、何となく分かったわ。愛とはつまり人の心の光だものね」

「そういう事だ。それとは別に、私達はキャロルを含めた十もの旋律を使った歌が必要なかもしれないと考えている」

「キャロル？」

「この前、エルちゃんにファウストローブを貸してくれたんです。どうも意識だけは目覚めてるみたいで」

「いや、今回はどうやら悪意と戦ってくれたんだ」

その言葉に私だけじゃなく未来達も驚いた顔を見せた。

「俺が瘴気を吸って意識を手放した後、エルとヴェイグも倒れたらしくてさ。だけど、俺が目を開けたらそこには目付きが少しだけ鋭いエルがいたんだよ」

「……それがキャロルちゃんだった？」

「うん、少しだけ話しました。でもダウルダブラを着てなかったからまだ本調子じゃないんだろうな」

「デスデス。いくらキャロルでも悪意相手にファウストローブを着ないなんて危ないデスし」

「全力を出したくても出せなかったんじゃないかな？ エルも瘴気を吸っただろうから。それでもエルや師匠達を守るために戦ってくれたのかも」

調ちゃんの意見に賛成するように私は力強く頷いた。

「そうだよっ！ シェム・ハさんの時だってそうだった。キャロルちゃんはまた私達と一緒に戦ってくれてるんだよ」

きつとそうだ！ キャロルちゃんも悪意を許せないんだ。

じゃなかったらエルちゃんにファウストローブを貸したりしない

はずだし。

「うつ……んう……？ ……ここは……？」

聞こえてきた可愛らしい声に私は顔を動かした。

セレナちゃんのベッドの上でエルちゃんが起き上がってコシコシと目を擦ってる。

その可愛さにみんなが微笑んだ。心が優しくなる光景だからだろ
うね。

「エル、おはようデス」

「切歌お姉ちゃん？」

「エル、体は大丈夫？」

「調お姉ちゃん……はい、特に何とも」

「良かった（デス）……」

どうやらエルちゃんは瘴気の影響がないみたい。

安心してる二人は本当にエルちゃんのお姉ちゃんみたいだ。

「んう……？ ……なんだ？ ……やさしいにおいがする……」

「ヴェイグさん、おはようございます」

「……える？」

「はい、僕です」

「良かった……。無事だったんだな」

目を擦りながらエルちゃんに優しい声をヴェイグさんがかけた。

よく分からないけど、きつと何かあったんだろうな。

「ヴェイグ、エル、悪意が瘴気を出した後の事を教えてくれないか？」

仁志さんのその言葉でエルちゃんがヴェイグさんと顔を見合わせた。

「えっと、僕も最終的に意識を失ってしまったので……」

「エルが意識を失った後、俺も少しして意識を失ったんだ。だから、どうしてこうなってるのかが分からない」

「そっか。じゃ、ヴェイグが気を失った後でキャロルが起きてくれた
んだろうな」

「キャロルがっ!？」

「そうか。エルの姉が悪意を倒してくれたのか」

「姉？」

「マリアさんがヴェイグさんの言葉に疑問符を浮かべた。」

「エルちゃんはキャロルちゃんが助けてくれた事に驚きの顔で仁志さんを見つめてる。」

「もしかして、今のキャロルちゃんはエルちゃんが寝てる時や意識を失ってる時じゃないと動けないのかも。」

「あるいは、キャロルちゃんはその体をもうエルちゃんのものって思ってるのかもしれない。」

「そんな事をエルちゃんやヴェイグさんから話を聞いているマリアさんを見つめながら思った。」

「仁志さん、これからどうする？ 依り代のバッテリー残量から逆算するとセレナと奏両方は元に戻せないんだよね？」

「……多分、な。ならここはセレナを元に戻すべきだと思う」「セレナを……」

「奏さんはどうするデスか？」

「奏は次回にするって考えでいないと不味い。二兎追う者は一兎も得ずって言うしな。なら、確実性の高いセレナを優先するべきだ。エルやヴェイグだけじゃなくマリアもいるのなら、その心へ訴えられる要素が多いし」

「その仁志さんの考えに誰も反対しなかった。」

「だって誰よりも悔しそうな顔を仁志さんがしてたから。」

「出来る事なら二人を助きたい。だけどそれは無理みたい。」

「もうマリアさんを助けたから依り代のエネルギーが減ってるからだ。ただ、いつもよりは消費が少ないって仁志さんは言ってたけど。なら、最初から悪意に染められてる奏さんよりもセレナちゃんの方が確実に助けられるはずだ。」

「でも……」

「二兎追う者一兎も得ず、か。もどかしいな。」

「いつもならだとしてもって、そう言うところだけど依り代の事を考えるとそれは出来ないから。」

「奏はマリアを除いた五人で相手してくれ。セレナは俺達とマリアで」

引き受ける」

「……分かった。立花、小日向、私達三人で暁と月読を援護する形で対応するぞ。ユニゾンした二人ならば奏も余裕を保つ事は難しいはずだ」

「はいっ！」

「暁、月読は奏を倒してしまつてくれていい。そう出来れば連れて帰り、依り代を充電しながら元に戻せる」

「分かったデス！」

「はい、遠慮しないでぶつかります！」

切歌ちゃんと調ちゃんのユニゾンなら奏さんでも強気なままではいられないはずだ。

それを私達で支えてあげれば、本当に翼さんの言う通り奏さんを連れて帰れるかもしれない。

「エル、ヴェイグ、また大変な目に遭わせるかもしれないけど、一緒に戦ってくれるか？」

「はいっ！」

「当たり前だ。セレナを元に戻したいからな」

はつきり答える二人に仁志さんは優しく微笑んでその頭へそつと手を置いた。

「ありがとう、二人共。絶対セレナを助け出そう」

「はい（ああ）っ！」

力強く頷く二人を見つめる仁志さんはどこことなくおじさんに似てて、お父さんみたいに見えた……。

ゲートへと向かつて慎重に進む仁志達。

周囲の木々から奏やセレナが不意打ちをしてくる事を警戒しているのだ。

不気味な程静かな森の中を歩きながら、やがて彼らの視界にゲートが見えてくる。

「エル、頼む」

「分かりました」

——パズルを展開するぞ。

ゲート周辺を包むようにヴェイグがエルフナインと協力してミレニアムパズルを展開する。

するとそこにはイーヴィルギア姿の奏だけがいた。

「なっ!? 奏だけ!?!」

「どういう事!?!」

「ふふっ、仁志先輩達の考えなんてお見通しだよ」

不敵に笑う奏を見て翼は響達へ目を向けながらアームドギアを構えた。

「仁志さん、ここは私達に任せてそちらはパズルの外へ!」

「それは……いつそ奏をここで」

「仁志、今は翼の言う通りにしましょう。確実性を取るって決めたのは貴方よ?」

「っ……そう、だな。迷ったら負けるもんな。よし、エル、外へのドアを出せるか?」

「は、はい。ただ、僕とヴェイグさんはここに残ってパズルの維持に集中しないとイケないので……」

奏の身を包む悪意の力は以前の切歌を上回る程であり、ヴェイグ一人では維持が難しい。

そう感じ取ったエルフナインは外へのドアを出現させると、仁志とマリアへ凜々しい表情を見せた。

「姉さんの事を頼みます、兄様、姉様」

「ええ、必ず助け出してみせるわ。ね、仁志?」

「ああ、今夜はセレナと一緒に飯を食べれるようにな」

「……はいっ!」

仁志の言葉に込められた意味に嬉しそうに笑みを返してエルフナインは頷いた。

その笑顔に送り出されるように仁志とマリアがドアからミレニアムパズルの外へ出る。

ドアを閉めると同時にそれは跡形もなく消え、二人の視界には色を失った木々だけが映った。

「セレナは、一体どこにいるんだ？」

「分からない。でも、きつとこの近くにいるはずよ。仁志、背中を合わせてお互いに周囲を警戒しましょう」

「分かった」

周囲を警戒するように二人は背中を合わせる。

時間の停止した中、風の音さえもないその場に聞こえるのは二人の息遣いだけだ。

ある意味仁志としては初めて敵の襲撃を待つ形となり、その精神的疲労が彼に汗を流させる。

いつ、どこから、どうするのか。それらが分からない中で待つという行為は仁志には強いストレスとなった。

「ねえ仁志」

そんな中でマリアが警戒を緩める事なく声をかけた。

小声での声かけに、仁志はセレナに聞かれたくない事かと思つて周囲への警戒を続けながら小声で返す事にした。

「……何だ？」

「さつき奏はこう言ったわ。こつちの考える事はお見通しと。あれをどう思う？」

マリアの問いかけの持つ意味を考え、仁志は息を呑んだ。

「まさか、俺の中の悪意が奏やセレナへこつちの作戦を？」

「……正直可能性が高いと思うわ。こうなると、今後こつちの事は全て悪意に筒抜けと思う方がいいわね」

悔しげなマリアの言葉に仁志は何も言えずに俯くしか出来なかった。

（俺の、俺のせいでみんなを窮地に追い込むかもしれないなんて……っ！）

これまでは様々な形で響達の助けとなつてきた仁志。

だが、それがここにきて遂に完全な弱点となろうとしていた。

その身に潜んだ悪意を通じて、仁志達の考えや行動が伝わるようになってしまったのである。

それが悪意の一つの狙いであった。

響達の司令塔であり様々な逆転の切っ掛けとなってきた仁志。

その思考や動きを全て把握する事で心が弱り易くなっている仁志を更に追い詰めるつもりだったのだ。

「だけど、だからこそ貴方は今まで通りでいて」

「……………え？」

理解出来ない。そんな気持ちで声を出す仁志へ、マリアは凜々しい表情のまま口を開いた。

「相手の考えを読んで動けるといいうのは、一聴すると有利に思えるわ。だけどね、それは読んでいる相手にそれを知られていない場合よ。私達は悪意がこちらの考えを読んでいると分かっている。なら、それを逆手に取る事だって出来るわ。仁志、貴方は考えや思いつきを全部私達へ教えて。悪意が貴方を通じて読めるのはあくまで私達の行動や言葉だけ。私達の心や考えを読める訳じゃないの」

「……………そういう事か」

マリアの言いたい事を理解し、仁志は嬉しさを噛み締めるように呟く。

悪意が読めるのは上辺だけ。響達の心や考えまでも読める訳ではない。

それはかつて仁志自身が調相手に言った言葉そのものだ。

心を読めはしないけど理解しようとはしてる。

なら、対悪意の時はそれを止めればいいのかもかもしれないと、そう仁志は考えてマリアへそれを伝えた。

するとマリアは小さく苦笑したのだ。

「そこまで神経質にならなくていいわ。今の貴方は心が揺らぎ易くなってるのね。悪意を意識するのはいいけど、過剰な意識は心と頭を疲れさせるだけよ？ だからっ!？」

言葉を中断させてマリアがアームドギアを鞭のようにしならせて動かす。

それが飛んできた短剣の雨を弾き飛ばした。

「っ!?! セレナっ!」

「ふっつ、姉さん怖い顔してるよ？ そんな顔じゃお兄ちゃんに嫌わ

れちゃうんじゃない？」

「セレナ……」

「お兄ちゃん、どう？　今の私、大人っぽいでしょ？」

妖艶に微笑みながらその場から歩き出すセレナ。

マリアはそれを見て仁志を守る様に手にしたアームドギアを構えた。

その瞬間、セレナの歩みが止まる。

「邪魔しないで姉さん。私はこれからお兄ちゃんに大人の女性にしてもらうんだから」

「セレナ、貴方はそれがどういう事か分かってないでしょう」

「あははっ、おかしな姉さん。分からないから教えてもらうんだよ？」

お兄ちゃんは私の旦那さんになるんだしね」

「セレナ……。そう、貴方のそういう気持ちを悪意は利用しているのね……」

自身も悪意に操られていたからこそマリアは分かっていた。

セレナの中にある大人への憧れや仁志への想い。それらを悪意が負の方向へ転がるようにしているのだと。

「姉さんはお兄ちゃんとケンカしたら一緒にいたくなくなるかもしれないけど、私は絶対そんな事ないもん。そうだよ……姉さんじゃお兄ちゃんのお嫁さんに相応しくない。私が、私だけがお兄ちゃんのお嫁さんに相応しいんだ！　お兄ちゃんがおじいちゃんになっても、私はおばさんになって隣に居続けるんだからっ！」

「セレナ……君はそこまで……」

セレナの体から瘴気が溢れるのを見つめ、仁志はその真っ直ぐな想いが闇に利用されると痛感していた。

以前セレナとのデートで彼女の考えをやりわりと改めさせた話。それが今のセレナを動かす原因にされていると察して。

「……仁志、お願いがあるんだけど私をダブルドライブにしてもらえない？」

「……分かった。俺とマリアでセレナを取り戻そう」

「っ……ええっ！」

凜として声を放ち、マリアはアガートラムを纏ったまま目を閉じる。

——Gran zizel bilfen gungnir zizizii……。

響くはガングニールの聖詠。その瞬間仁志が依り代をマリアへと押し付ける。

それを切っ掛けにマリアの体をもう一つのギアが包む。

銀と黒の色合いが混ざり合うように鎧となってマリアの力となる。

ダブルドライブギアツインドライブ。そのマリアだけがなれる強力なギアを見て、セレナは驚くでも怯えるでもなくただつまらなさそうに目を細めた。

「そのギアは今の私には通用しないよ?」

「そう……なら、試してあげるわっ!」

その手に短剣と槍を携え、マリアは神速の如き速さでセレナへと迫る。

「はっ!」

「クスッ、見えてるよ?」

「ならこれで……っ!」

「ムダだから」

マリアの繰り出す攻撃をその手から発生させる障壁で完璧に防ぐセレナ。

瞬間移動のような速度で動き続けるマリアとそれを最低限の動きで相手し続けるセレナ。

その攻防を見つめ、仁志は身動き出来なかった。自分が入り込めるようなレベルではないと痛感していたのである。

(あの戦う事が嫌いなセレナが本気のマリア相手に余裕を保ち続けているとか……悪意による強化はどんどんその恐ろしさを増してるぞ。翼の時より切歌、切歌の時よりセレナだ。こうなってくると、真っ先に悪意に染められていたクリスがどうなってるかが不安でしかない……)

もつとも長く悪意に犯されているクリス。

その力がどうなっているのかは未だによく分かっていない。何せ翼が相手した時はイーヴィルギアではなかったのだ。

そう、まだ誰もクリスのイーヴィルギアを見ていない上に戦った事もないのである。

「……まさかクリスをコアにカオスビーストを生み出すなんてないよな？」

悪意がマリア達と一緒に「勇者王ガオガイガー」を見ている事を知っている仁志は、そのTVシリーズの最後を思い出して呟いた。

不安げに表情を曇らせる仁志の目の前では、笑みを浮かべ続けるセレナ相手に徐々にマリアが表情を険しくしていくのだった……。

「っ!？」

闇で出来た短剣がまた私のギアを掠める。

たったそれだけなのに体の力が抜けるような感覚が生まれるのは厄介以外の何物でもないわね。

「姉さん、どうしたの？ 速度、落ちてきてるけど？」

こつちを心配するように見つめるセレナだけど、その目は笑っている。

悪意が喋っているのかそうじゃないのかはもう関係ない。

あれは、私の妹じゃない。悪意そのものだど、そう思う事にした。

「悪意、私はお前を許さない。優しいセレナを利用してこんな事をさせている事を」

「何を言ってるの姉さん。私は」

「セレナ、許してとは言わない。後でいくらでも謝るわ。貴方を傷付ける事でしか止める事が出来ない私の弱さを憎んでくれていいから。だから……っ!？」

短剣状のアームドギアを投げ放つと同時に残った槍状のアームドギアへ力を込めて動く。

「これぐらいじゃ驚かないよ」

造作もないとばかりに短剣のアームドギアを手から出現させた障壁で弾くのを見て、私は薄々気付いていた事が間違っていないと確信す

る。

あの障壁は手を使う事でしか使えない。つまり、攻撃している最中は展開出来ない。

あるいは、両手が塞がっていれば展開出来ないはずだ。

「はっ！」

横薙ぎにアームドギアを動かす。

同時に一瞬だけ視線を上へ動かした。まだ短剣状のアームドギアは上空にある。

「ムダなのに……」

私の攻撃を片手で防ぐ悪意だけど、ならばと右足で蹴りを放つ。

「くうううっ！」

それさえも残る片手で止められる。

「さすが姉さんだね、諦めが悪いのは。だけどどこまでかな」

勝ち誇るような悪意へ私は笑みを返して見せた。

それに相手が訝しむような顔をするのを見て、こう言い放つ。

「それはどうかしらね？」

「えっ？ つ?!」

その言葉とほぼ同時に悪意目掛けて閃光が放たれる。

言うまでもなくアガートラムのアームドギアから私が放たせたものだ。

それを見た瞬間、悪意が僅かに逡巡した。蹴りを防ぎ続けるか閃光を防ぐか迷ったのだろう。

たったそれだけの時間だけど、こういう状況ではそれが致命的になる。

結局悪意が選んだのは閃光を防ぐ事だった。

つまり……っ！

「はあっ！」

今の私を阻むものは何もないっ！

障壁が消えた事で私の右足が悪意へと直撃する。

「っ！ この程度でええええっ！」

体を感じる若干の痛みと微かな倦怠感をねじ伏せるように足を蹴

り抜いた。

心が少し痛むけど、セレナが元に戻った時こちらを傷付けた事で心を痛めずに済むように、私が痛めつけた事の方を強く刻んでおく。そうすれば、セレナは自分だけを責める事はないはずだ。

私の目の前では悪意がたたらを踏みながらこちらの攻撃を弾いていた。

やっぱり蹴りだけじゃ大したダメージにならないようね。

「……本気で覚悟を決めるしかない、か……」

傷付けても構わない、ではなく、傷付けてでも止める、にする必要がある。

嫌でも思い出すのは、あのフロンティアを巡る一件の頃に経験した生身の人間を相手にギアで戦った時の事。

あの感触は、想いは、忘れたくても忘れられない。

見も知らぬ相手でも心を軋ませたのに、平行世界の実妹を傷付け、血を流させる事を受け入れられるのかと、そう自問した時だった。

「マリアっ！ 迷っちゃダメだっ！」

後ろから仁志の声が聞こえたのだ。

「正義無き力は暴力でしかないが、力無き正義は無力だ！ 力だけでも思いだけでもダメなんだっ！ これから君のする事は俺のする事でもあるっ！ 一緒に背負うからっ！ だから、君の信じる道を貫けっ！」

本当に……こんな事を言われたら余計惚れてしまうじゃない。

「仁志、貴方って人は……」

耳に聞こえてくる音に私は空いている片手を上へ上げた。

そして落下してきたアームドギアを受け止め、深呼吸を一つする。

「……………これで決めるっ！」

神速の如き速度の私を前に悪意は慌てる事もなく笑みを浮かべたまま両手を前へ突き出した。

「くっっ！」

そこへ突き出した二振りの刃が悪意の展開する闇の障壁に阻まれた。

予想通り、この加速を乗せた二つのアームドギアによる攻撃でも突破は出来ないみたいね……っ！

「ね？ 言ったでしょ？」

余裕の笑みを見せる悪意に表情が歪む。

ダブルドライブギアツインドライブは、おそらく出力だけならエクストドライブを超えているはず。

それを相手に余裕を崩す事なく笑みを浮かべていられる事から分かるのは、悪意の持つ力がそれと同等レベルになりつつある事を意味している。

何とか障壁を貫こうとするけど、悪意の余裕と同様少しとして崩れる事はなかった。

それでも私は諦める事無く二つのアームドギアへ力を込める。

そんな私を悪意は悲しそうに見つめていた。

「無駄なのに……。今の姉さんじゃ私には勝てないよ。私を傷付ける事が出来ない姉さんには、ね。さっきだって追撃が来なかった。その槍で私を突き刺すのが怖かったんだ」

否定はしない。たしかにそういう気持ちはあった。

だからこそ、私はもう迷わない。信ずる我が道のためなら、それを共に歩いてくれる相手がいるのならっ、灰になってもいいっ！

「っ……へえ、本気なんだね。姉さんは、たった一人の妹をその手で貫く事になってもいいんだ？」

私が両方のアームドギアへ力を注ぎようとしている事に気付いたのか、悪意がこちらの心を乱そうとしてくる。

そんな言葉へ耳を貸すものかと私は沈黙を続け、ただひたすらに目の前の障壁を突破する事だけ考えた。

「いいよ。そんな姉さんが相手でも今の私は負けない。今日ここで私は姉さんを超えるんだから」

「超える、ね……。なら、敢えてこう言ってあげるわ。忘れたのセレナ。最後に勝つのは……勇氣ある者よっ！」

「っ!？」

その叫びと同時に二つのアームドギアの切っ先に閃光が生まれる。

アガートラムと GANG ニールによるエネルギー放射の前準備だ。しかも本来であればチャージ時間が必要なそれも、ダブルドライブギアなら刹那の間で完了する。

「かつて私は正義のために悪を貫くと決めたっ！ 故にっ、実妹を殺しかねない一撃を放つ事に躊躇いはないっ！」

キツと目の前の悪意を睨み付ける。

対する悪意は、怯えるような顔をしていた。

「ね、姉さん……怖いよ……」

今にも泣きそうなその表情に、今までの私だったら、さっきまでの私だったら揺らいでいただろう。

勇気を、手放してしまった事だろう。

「セレナ……安心して」

「姉さん……」

優しく声をかけると目の前の泣き顔が緩む。

安堵したのか。あるいは、やはりと内心でせせら笑っているのか。

どちらにしろ、私の取るべき道は一つだ。そこに、何ら変わりはないと教えてやろう。

「もしこれで貴方が死んだら、私も悪意を倒した後ですぐに追い駆けるわ」

「っ!？」

悪意の表情が驚愕へ変わる。ここからは瞬きさえもせず、全てを記憶に焼き付ける。

両手に感じる力を、目の前の最愛の存在へと放つからだ。

私の罪を、弱さを、受け止めて、忘れないために。

「セレナアアアアッ!!」

白銀と黒鉄の閃光が障壁を撃ち砕きながらセレナごと悪意を貫く。

それを見つめ、私はありつただけの力を放出し続けた。

感覚的にだけど、絶唱と同等程度の負荷を感じながら私は消えゆく光を見つめていた。

「……セレナ」

確実に10メートルは離れてるだろう位置に倒れているセレナ。

身じろぎ一つしないのを内心不安に思いながらゆっくりと近付こうとして、ガクリと体が揺れた。

歩けない程疲労しているのだとそこで気付いた。

本当に私の全力を出し切った一撃だったのだ。

「うっ……」

そこへ聞こえてくる声に顔を上げる。

見れば悪意がゆっくりと起き上がろうとしていた。

「不味い……うっ」

身構えようとするも、体に力が入らずその場へ崩れ落ちる。

ギアを展開しているのがやっただ。それさえもいつまで持つか怪しい。

そんな私の横を何かが通り過ぎて行く。

「仁志……っ」

依り代を片手に走る仁志の背中を見つめ、私は祈る事しか出来なかった。

悪意が瘴気を出さない事を。これ以上彼を苦しめるような事にならないようにと。

「間に合えええええっ！」

起き上がろうとしていた悪意へ仁志が依り代を押し付けようと腕を伸ばす。

それは間一髪悪意が行動を起こす前にギアへと依り代を接触させた。

「があああああっ!?!」

「ぐううううっ!」

仁志の苦痛に呻く声が悪意の絶叫に混じって聞こえる。

すると仁志がこちらへ顔を向けて……

「ま、マリアアっ！ 君の声を！ セレナへ届けてくれ……っ！ 今ならっ……届くっ!」

「わ、分かったわ……っ」

気怠い体へ気合を入れるように息を吐いて立ち上がる。

そして苦しんでいる悪意へ、その中で眠っているだろうセレナへ想

いをぶつけようと息を吸った。

「起きなさいセレナっ！ 貴方が本当に大人になったと言うのならっ、大人になりたいと思うのならっ！ 悪意の囁きに身を委ねてはいけないわっ！ 優しさとは戦わない事じゃないのは、もう今の貴方は知っているはずよっ！」

「ダ、ダメレ……っ！ コノチカラニマケテ」

「しまえっつてんだよおおおおっ！」

「ギャアアアアアッ!!」

仁志がセレナの体を抱き締めるように動いた。

多分ああする事で痛みで悪意から離れないようにしたのね。

「セレナっ！ 勇気を思い出してっ！ 貴方はエルを助けるために率先して戦ったんでしよう！ その勇気を、強さをつ、今ここで私にも見せてっ！」

「ああっ、俺にも見せてくれ……っ！ セレナの勇気の輝きを！ 強さの光をつ！」

仁志の言葉に頷きながら私はその場からゆっくりと足を踏み出した。

正直倒れそうではあるけど、私もセレナの事を抱き締めてあげたいと思うから。

「ね、姉さん……っ！ お兄ちゃん……っ！」

「セレナっ!？」

「わ、私……酷い事を……っ」

「いいんだよ……っ。セレナ、君の迷いや悩みを悪意が利用しただけなんだ……っ」

「そうよ。それに、それを言うなら私も同じ。貴方達を攻撃したのだから……」

「姉さん……っ！」

セレナの顔が泣きそうなものへ変わる。それを見た瞬間、不思議と力が出た。

自然と足が動いて、あの子を抱き締めてあげないと思って思った。

「セレナっ！」

やっとセレナの事を抱き締められる距離にこれた。

そう思った瞬間にはあの子の小さな、だけど頼もしくなり始めている体を抱き締めていた。

「姉さん……っ！ 姉さんっ！」

「せ、セレナ……っ。せ、聖詠を……っ！」

苦しそうな仁志の声で私は我に返る。そうだ、今の仁志は依り代の強い力で苦しんでしまっただった。

「セレナ、悪意を自分の中から追い出さない。そして決着をつけるの」

「……うんっ！」

そう返事をする表情は、私の良く知るセレナのものだった……。

「おのれえええ……やはりその力、真っ先に潰しておくべきだったか……っ！」

私の見上げている先にいるのは、日焼けした肌の私みたいな姿の悪意。

その着ているギアはとつても怖くて、触れたら傷が出来そうな感じがする。

まるで悪意そのものみたいな印象だ。だけど負けないって思って、私は小さく息を吐いてアームドギアを構えた。

「セレナ、一撃で終わらせるわよ」

「うん、姉さんと二人ならきつと大丈夫」

そつと空いてる手を姉さんと繋ぐと、姉さんも優しく握り返してくれた。

「これは……よしっ！」

後ろから何かの音とお兄ちゃんの声が聞こえたと思ったら、次の瞬間にはギアが変化してた。

だけど、それは今まで見た事のないものだった。銀色のギアで、姉さんもまったく同じギアになってる。

ただアームドギアがない。どういう事だろう？

「これって……」

「分からない。ただ、それなら必ずあいつに勝てるはずだ」

「勝てるはずって……」

「お兄ちゃんらしい……」

姉さんと揃って苦笑する。

でも、本当に不思議な力が湧いてくる。まるで誰かが力を与えてくれているみたい。

「姿を変えたとしてもおおおっ！」

悪意が私達へ両手に集めた闇の力みたいなものを叩きつけてくる。

——守らないとっ！

咄嗟にお兄ちゃんを守ろうと腕を動かすと同時に頭の中に姉さんの声が聞こえた。

思わず顔を動かすと姉さんも同じような動きをしたまま私を見つめてた。

「す、すげえ……ドーム状のバリアとか……」

お兄ちゃんの言葉で私と姉さんも周囲の様子に気付いた。

本当に私達を包むように銀色のバリアが展開されてる。これ、姉さんと一緒にやってるからかな？

「姉さん、さっきのって……」

「もしかするとこのギア、同一ギアとしての共鳴を増幅しているのかもしれないわね」

「共鳴を増幅……」

「名付けるならレゾナンスギア、かしら」

「いいじゃないかそれ。うん、じゃあ姉妹によるレゾナンス、見せてくれよ」

お兄ちゃんのその言葉に私は姉さんと同時に頷いた。

その間も悪意の攻撃を銀色のドームが弾き続けてた。

少しもヒビとかなないのが凄い。けど、多分これ、姉さんと手を離したらなくなっちゃう気がする。

「姉さん、これでどうやって攻撃すればいいかな？ アームドギアがないし、手を離しちやいけない気がするんだ」

「そうね……」

どうも姉さんも同じ事を感じてるみたい。
少し困った顔で考え込むように黙った。

「いつそこのバリアをぶつけてみたら？」

思わず耳を疑った。お兄ちゃんは特に表情を変える事無くいつもの顔に近い感じで私達を見つめてる。

本当にお兄ちゃんの発想って時々凄い。これも沢山のヒーロー物を見てきたからかな？

「で、出来るかな？」

「やってみましょう。セレナ、意識を集中するわよ」

「うん」

目を閉じて意識を周囲のバリアへ向けると姉さんの声が聞こえてくる。

——きつとこれが私達のアームドギアなのよ。

——これって……このバリア？

——ええ。響がアームドギアを出せない代わりに凄まじい力を攻撃全てへ出せるように、私達もアームドギアがない代わりに攻撃にも防御にも使えるバリアを使えるのかもしれない。

——じゃあ……お兄ちゃんが言ってたような事、出来る？

——それを試してみるの。さあ、やるわよっ！

——うんっ！

目を開けて繋いでない方の手を姉さんと同時に前へ突き出す。

「はっ！」

「なっ!？」

その瞬間バリアがドームから花みみたいな形に変わって悪意へと向かっていった。

凄い……。悪意の攻撃を受け止めてる衝撃がさつきよりも伝わってくるけど、全然怖くない。

だって、繋いでる手から姉さんの温もりが伝わってくるから。

「セレナ、最後の仕上げよ」

「うん、分かった」

そう言ってから二人で頷き合って、突き出した手を繋いでる手へ

そつと重ねた。

「おおつ、バリアが悪意を包んでいく……」

お花みたいな形のバリアが悪意をゆつくり包んでいくのを見つめながら、私は心の中でそつと祈る。

悪意が、静かに眠れますように。

その気持ちが届いたのか、悪意を包み込むと同時にキラキラとした光がその中から流れてきた。

「光になったのね……」

「うん、光になれたんだと思う。だって、悪意も元々はみんなの中にある心の欠片なんだから」

だから、浄化させてあげたいんだ。

改心するのはもう心から離れちゃった悪意には無理だけど、キレイにしてあげる事なら出来るはずだから。

「セレナ、疲れてるとこ悪いけどパズルへの入口、出してくれないか？

響達が奏を相手にまだ戦ってるんだ」

「うん、任せて」

「このギアでなら支援ぐらいは出来るわ。仁志、バッテリー残量は大丈夫？」

「……思ったよりも、セレナでの消費、抑えられたみたいだ。だから、ギリギリ……か、な……」

「っ!? 危ないっ!」

そこでお兄ちゃんがグラリと揺れて倒れそうになったから、慌てて姉さんと二人で体を受け止めるように動いた。

何とか受け止めるとお兄ちゃんから静かな寝息が聞こえてくる。

これって……

「……寝てる?」

「みたいね。疲れすぎて意識を失ったんでしょう」

「姉さん、どうしよう?」

「……今の仁志を無防備なまま一人には出来ないわ。セレナ、このままパズルの中へ入るわよ」

寝てるお兄ちゃんを連れて戦ってる場所へ一緒に行くの?

思わずそう聞きそうになっただけど、姉さんの表情がとても真剣だったからきつと理由があるんだって思ってた。頷いた。

たしかに寝てるお兄ちゃんだけをパズルの外に置いていたら、悪意がやってきて連れていくかもしれないもんね。

「姉さん、これで中へ入れるよ」

「ありがとう。じゃあ、行くわよセレナ」

「うんっ！」

こうして私と姉さんはお兄ちゃんを抱えたままパズルの中へと入る事にした。

待っててね、エル、ヴェイグさん。このレゾナンスギアでみんなを助けてみせるから！

「くそっ！ さ、さすがに分が悪いね……っ！」

響達五人を相手に何とか耐え凌いでいた奏も、新たな力である「レゾナンスギア」を得たイヴ姉妹が参戦した事で一気に敗北寸前まで追い込まれていた。

そもそもザババの刃である切歌と調のユニゾンに響と未来による見事な連携、更に奏の戦い方がある意味で一番間近で見知っている翼がフォローに回っているため、いくら彼女達が疲弊しているとはいえ五人相手に劣勢で踏み止まっていた事が奇跡に近かったのだ。

「奏さんっ！ 今度こそ悪意を祓ってあげますデスっ！」

「このギアの輝きで、心の光でっ！」

「ぐっ………必要ないってんだよっ！」

切歌と調のギアが放つ光に対抗するように奏のイーヴィルギアが闇を放ってその身を覆う。

だが、その闇の衣とも言うべき物は瞬時に浄化されるように消える。

「奏さんっ！ 闇に、悪意に負けないでっ！」

「私達の光を受け取ってくださいっ！」

「ううっ………鬱陶しいんだってのっ！」

響と未来のギアの放った光が奏を照らす。その強くも温かい陽射

しのような輝きが闇の衣を剥がしたのだ。

「姉さんっ！」

「ええっ！」

奏の動きが止まった事を受け、セレナとマリアが銀色のバリアを花の形へ変えて動かした。

その花卉が奏の体を包むように拘束する。

「こ、こんなものでえええええっ！」

何とか脱出しようともがく奏だが、四つの光によつてその力は衰え、闇による勢いは失われつつあった今、姉妹の絆による拘束から抜け出せるはずもなかった。

「奏……本当の、いつもの奏に戻って」

翼の祈るような願いを込めた光が奏へと放たれる。

その金色の輝きに奏の身を包むイーヴィルギアが悲鳴を上げるように軋み始めた。

「ああっ!? あ、あたしのギアが、力が……消える……」

「ううん、そんなものはギアでも力でもないよ。奏のギアは、力は、そんな禍々しいものじゃない」

「っ、翼……っ」

ゆっくりと奏へ近付き、翼はその前で止まると微笑みを浮かべた。

「あのアリシアとの一件で奏が私を単身助けに来てくれたように、今度は私が奏を助ける。憎しみや嫉妬に塗れた奏なんて見たくないから」

「あっ……ああっ……」

五つの金色の輝きが優しく奏を包み込む。その中でも一際強い光を放つ翼の言葉が奏の中に根付いた悪意を揺るがせ、その支配を弱体化させていく。

——エル、タダノを起こそう。今の奏は嫌な匂いが弱くなってきたる。

「わ、分かりました」

その光景を見つめていたエルフナインへヴェイグが好機を伝える。実際エルフナインもミレニアムパズル維持の負荷が減ってきたと

感じていたのだ。

エルフナインは静かに眠る仁志へ近寄ると、若干の申し訳なさを覚えながらその体を揺さぶった。

「兄様、兄様起きてください」

「んっ……えるっ？」

「はい、僕です。兄様、依り代はまだ使えそうですか？ 奏さんがかなり悪意の支配から脱してきているんです」

「奏が……っ？」

「ですので、もしかすれば依り代の負担を想定よりも減らせるかもしれません」

寝惚けた頭でエルフナインの話を聞いていた仁志だったが、千載一遇の機会を得た事だけは理解した。

だからだろう。手にしていた依り代へ目をやり、そのバッテリー残量を確認するや小さく頷いて立ち上がったのだ。

「分かった。やるだけやってみようか」

「お願いします」

残ったバッテリー残量は30%程度。それはこれまでの事から考えればかなりの残量である。

前回の戦いでザババの刃によりマリアを包んでいた悪意がその力をかなり削られていた事に加え、元々戦いに対して懐疑的なセレナへの悪意による支配が根強くなかった事が影響し、二人を元に戻してもバッテリー消費量が翼と未来を戻した際よりも結果的に少なく済んでいたのだ。

（未来の時みたいになるかもしれないけど、そうなれば後はみんなの光に、想いに託そうっ！）

少しでも悪意の力を弱める事が出来ればと、そう考えて仁志は奏へと近付いていく。

そんな彼に気付いて奏が顔を動かした。

「仁志先輩……」

「奏、少しの間だけ痛いだろうけど我慢してくれ」

「仁志さん、お願い」

「ああ」

翼の言葉に頷き、仁志は手にした依り代を奏の身を包むイーヴィルギアへと押し付けた。

「ぐううううう（ああああああ）っ！」

二人を襲う強い痛み。だが、それでも仁志は奥歯を食いしばりながら耐え続ける。

（負けるかつ！ こんな痛みに、苦しさに、負けてたまるかつ！ 必ず俺達はっ！ 全員でっ！ お前の企みを打ち砕いてみせるっ！ 覚悟してろよ悪意いいいつ！）

自分の考えなどを悪意が読んでいるかもしれないなら逆に宣戦布告をしてやる。

そんな風に思つての魂の叫びに依り代が呼応するように光を増した。

それがイーヴィルギアへ更なるダメージを与えていく。

「翼っ！ 奏へ呼びかけをっ！ 闇の中から本当の奏を引っ張り出してやってくれっ！」

「分かった。奏、聞こえるよね？ 聞こえてるよね？ みんな、みんな待ってるんだよ。奏がいつもの奏になって帰ってきてくれるのを待ってるんだ」

「っ、ば……さっ！」

「奏なら悪意なんかのいいようにされない。嫉妬や憎悪を掻き立てられても、信頼や優しさでねじ伏せてみせて、私達にどうだいすごいだろって、そう笑ってくれるぐらい強い人だっけ知ってるから」

「っ、強い……？」

「っ！ そうだよ。異なる世界の私を受け入れて、一緒に飛んでくれた奏は強いよ。私は立花達と出会って関わり合っただけで少しづつ強くなっただけだよ。奏はそれよりも早く強くなった。それだけじゃない。私達の事を装者の先輩として時に励まし、時に叱咤し、支えてくれる」

「せん……ばい……」

「何よりも、戸惑い躊躇う私の手を掴んでステージへ連れ出してくれ

た。あの時の奏は、私の良く知る奏だった。天羽奏は、どこでもそうなんだって分かって嬉しかった」

そつと翼は手を伸ばして奏の手を掴んだ。

その感じる温もりに奏の目が潤み出す。その瞳に映る微笑みに奏の心が騒ぎ出す。

「あの日、奏が引つ張ってくれた手を、今度は私が引つ張るよ。だから奏、一緒に飛ぼう」

「あつ、ああつ……ああああつ！」

奏の脳裏に思い出される様々な記憶。それがとある光景で止まる。彼女自身が笑みを浮かべて翼をステージへと連れ出そうとしている、そんな思い出のワンシーンだ。

「ヤバい……つ！ そろそろ依り代の方が限界だ……つ」

「奏、聖詠を、聖詠を唱えて。一度奏は悪意を自分で追い出してみせたでしょ？ それをもう一度、ここでやってみせてっ！」

「あ、悪意を……追い出す……つ！」

「そうだよっ！ そしてまた一緒に飛ぼうっ！ まだ私達は、風を奏で天へ鳴る羽で出来た翼なんだからっ！」

「っ!？」

翼の告げた言葉に奏の目が見開く。それは、上位世界で彼女達の事を意味する言葉だったのだ。

双翼でツヴァイウイングはなく風^ツを奏^{ヴァ}で天^イへ鳴^ウる羽^イで出来^ンた翼^グと、そう彼女達は名付けられたのだから。

それを奏が思い出した瞬間だった。

「あああああつ!？」

——あああああつ!？」

エルフナインの悲鳴と共に周囲の景色が一瞬にして色の抜けたものへと変わったのは。

「「「「「エル（ちゃん）っ!？」「「「「「」

全員の意識がエルフナインへ向き、弾かれるようにマリアとセレナがエルフナインへと駆け寄る中、漆黒の弾丸がその場へ雨のように降り注いだ。

「不味いっ！ 全員守りに徹しろっ！」

言いながら翼はその手に二振りの刃を出現させるや、それを接続させてプロペラのように回転させ始めて仁志と奏を守るように動かす。マリアとセレナはエルフナインを守るようにバリアを展開し、響達もそれぞれの方法で襲い来る銃弾の雨へ対処していた。

その光景をスコープから見つめた襲撃者は、微かに不敵な笑みを零すとその視線を仁志と奏へと向けた。

奏への拘束は消失していたが、彼女は毒気が抜かれたかのようにその場で座り込むのみであり、それを見た襲撃者は興味を無くしたように意識を仁志へと移した。

仁志は自分達を守るように刃を動かす翼へ無力感を滲ませたような表情を向けていた。

それにどこことなく嬉しそうな笑みを浮かべると、襲撃者はポツリと呟く。

——さて、気付くか？ まっ、気付かねーならそこまでだけどな。

小さくそう呟いて襲撃者は仁志の首元へとレーザーポインターを照射する。

「っ!? 仁志危ないっ！」

「えっ?」

それに気付いたのは奏だけだった。

放たれた漆黒の弾丸は、仁志の首へ命中する事なく奏の体へ命中する。

「うわあああああっ!!」

「奏ええええっ！」

漆黒の弾丸が命中した瞬間、奏の体を闇が包み込みそのまま宙へと浮かび上がらせたのだ。

それと同時に雨のような攻撃が止み、装者達の目が上へ向いた。

「奏さんっ!?!」

「な、何という禍々しさだ……っ」

「アタシにも分かるぐらいヤバい感じデスよ……っ!」

「さっきの攻撃、どう考えてもそういう事だよ切ちゃん」

「それだけじゃないわ。ミレニウムパズルを内側からじゃなく外側から崩すなんて、普通不可能よ」

「じゃあ、やつぱりここにいるんですね、あの子が」

「で、でも一体どこに……」

「奏に当たった攻撃は、水平じゃなく斜めから飛んできてたっ！だからきつと高所からの狙撃のはずだっ！」

仁志はそう言って視線を浮遊する闇の繭よりも上へ動かした。

「クリスっ！　そこにいるんだろっ！」

それに合わせて響達も視線を上へと向ける。

そして、見たのだ。漆黒のギアを纏い、自分達を見下ろして笑う色黒となった銀髪の少女を。

「まさか身内に邪魔されるとはなあ。とんだ役立たずだぜ、おい」

聞こえてきた声は、紛れもなく雪音クリスのものだった。

しかしゆっくりと降下して見えてきた姿は、本来の雪音クリスとは似ても似つかぬ姿であった。

ギアはまるで下着のような形状となっていて最低限の部分しか覆っておらず、インナーに至っては所謂スリングショットのような形状となっており、ギアの方がインナーよりも覆っている面積が多い状態となっていたのだ。

イーヴィルギアは禍々しさこそあるが、それまでの凶悪な装飾などはなく、むしろ色合いや雰囲気以外はクリスのイチイバルに良く似ていた。

「クリス……なんて姿に……」

「へへっ、エロいだろ？　仁志が見てみたい格好にしてみたんだぜ？」

その言葉に誰もが言葉を失う。誰よりも仁志が絶句していた。

奏の言った事など可愛いものとなるような、そんな爆弾発言だったのだから。

「まあ、あたしも銃使いだ。装甲を厚くしてゴテゴテするのは好きじゃねーし、こっちの方が都合がいいからな。で、どうだ？　おっ立つかよ？」

「っ!?　く、クリスのフリをするなっ！　もうお前の事は響と翼から

聞いてるんだっ！」

狼狽えながらも一度別れた際にクリスといた二人の話を思い出して仁志はそう叫ぶ。

だが……

「フリ？ ああ、そうだったな。悪意があたし様を制御したってそう思っただけやっただ事だろ？ それならもう過去の話だ」

そんな仁志の言葉にクリスは小さく笑うと、何かを思い出すかのような表情で納得しながら言葉を紡ぐ。

まるでそんな事もあったなど、そう笑い話をするかのように。

「どういう意味だっ！」

「簡単に言えば、今のあたしは悪意の巫女ってとこだ」

間違いなく、その場の空気が凍った。

悪意が言わせてる事だろうと、クリス自身が言っている事だろうと、その言葉の持つ意味の重さは変わらなかったためである。

言葉が出てこない仁志達を見つめ、クリスは闇の繭となった奏へ近寄ると笑みを見せながらこう告げた。

——詳しい話はまた今度だ。あたしはこの片翼の先輩と、その世界で待っててやるよ。そこでの決戦の場所で、な。

その言葉を残してクリスは闇の繭を抱えたまま一瞬にしてゲートへと移動して消えた。

まるで最初から何もいなかったかのように、一切の痕跡を残さず、消えたのだ。

仁志だけでなく響達もその場から視線さえも動かす事が出来なかった。

誰もがみな、何もいない虚空を見つめて固まっていたのである。

「……見え、ました？」

「……いや、動いた事さえ……分からなかった……」

呆然と問いかけるような響の呟きに、翼は力なくそう返す事しか出来なかった。

他の誰も、そこからしばらく何も言わなかった。

その事こそが何よりの同意であると感じ、響はその場へ崩れ落ち

た。

(戦える、のかな……？ あのクリスちゃんを相手に……)

悪意の巫女という言葉と底知れぬ力の一端を見せ、クリスは響達の前から去った。

重苦しい空気が流れる中、仁志は立ち上がると周囲へ聞こえるように告げた。

「今は、帰ろう。そして喜ぼうじゃないか。セレナとマリアを元に戻せた事と、こうしてちゃんと生きてる事を、さ」

そして仁志は沈んだ顔をしている響達一人一人の手を取り、その足で立ち上がらせていく。

最後にエルフナインを抱えて、彼は疲れた顔で微笑んでみせたのだ。

「明日の事は明日考えよう。それに腹が減ってちや、暗い事ばかり考えるしさ」

「……はい、そうですね」

その笑顔で響がやつと笑みを浮かべる事が出来た。

それだけではない。それを皮切りに未来が、翼が、マリアが、セレナが、切歌が、調が、それぞれに笑みを見せていった。

帰り道では、未来に加えてマリアとセレナが周囲へバリアを展開する事で完全に瘴気を遮断する事に成功。

一先ず仁志の状態がゲートの行き来で悪化する事は避けられた事に小さな喜びを見出し、彼らは上位世界へと帰還する。

その頃、クリスは闇の繭と共に奏の世界にあるライブ会場を訪れていた。

「さてと、次に仁志達が来るのはいつになるんだろうな？ なつ、片翼の先・輩？ ははっ！ ははははははっ！」

どこか楽しげに呟いてクリスは笑う。

その笑い声が時間の停止した世界に響き渡るかのようにこだまする中、クリスは来たる日を待ちわびるかのように笑顔を浮かべ続けるのだった……。

永愛プロミス

「帰ってこれたか……」

ゲートから出るなり俺は倒れるように床へ寝転がった。

正直もう限界だった。体力も気力も底を突いてた。

あともう少しで奏を元に戻せるとなった後からの、怒涛の展開。

初めて見たクリスのイーヴィルギアと衝撃の発言。

何より、俺でも分かるぐらいの凄まじい力。

みんなの心が折れかかったのも無理はないと思う。

だからかみんな口数が少ないし、何より雰囲気暗い。

「兄様、大丈夫ですか？」

「タダノ、寝るなら布団で寝た方がいいぞ」

寝転がった俺を心配してエルとヴェイグが声をかけてくれる。

その心配そうな表情に俺は何とか上半身を起こしてそつと二人の頭を撫でた。

「ありがとな二人共。でも、そつちこそ大丈夫なのか？」

あのクリス……いや、悪意と呼ぼう。

悪意によるミレニアムパズルへの外部干渉突破というとんでもないより、エルとヴェイグは大きなダメージを負った。

二人が多少でも回復した背景には、あの場で俺がセレナに歌を唄ってもらった事が関係している。

ゲームでは、セレナは最初に全員の回復技を持ったキャラだった。

それを利用して以前悪意を追い出すために歌を唄ってもらった事があったが、今度はそれでみんなの事を回復出来ないかと考えたのだ。

——セレナ、疲れてるだろうけどお願い出来るか？

——うん、いいよ。エルやヴェイグさんのためにも、お兄ちゃん達のためにも、私、唄うね。

優しく心に染み入るような歌声が流れ始めると、少しだけ響達の顔から疲労の色が抜け、エルとヴェイグも動けるようになったのだ。

俺も、ほんの少しだけ体の気怠さがなくなったので、やはりセレ

ナの歌には癒しの効果があるんだと思う。

「まだ少し痛いところはありますけど……」

「これぐらいなら平気だ。少なくともタダノよりはな」

「そっか。なら良かったよ」

笑顔を見せてくれる二人に俺も軽く笑みを返す。

それにしても、悪意の恐ろしさは尋常じゃない。

あの速度はヘルメスの力を使ったマリア以上だ。あれが軽量化されたギアだからなのか、それに関係なくなのかによって大分戦い方が変わってくる。

「ししよー、依り代充電しとくデス」

「え？ ああ、うん、お願い」

切歌へスマホを差し出して俺は視線を動かす。

もうゲートは閉じられていて、それをしただろう未来と目が合った。

「どうかしましたか？」

「あ、いや、特に何もないんですけど……」

小首を傾げる未来が可愛いなと思つて頬を掻く。

「つと、そうだ。晩飯の材料足りるのか？ 何を作るのか知らないけど、マリアとセレナの二人分の追加は少なくないだろ？」

俺が寝てる間に買い物へ行つた事ぐらいは知ってるが、さすがに晩飯のメニューまでは聞いてない。

なので家事を主に受け持つ未来へ尋ねてみたら、思いがけない答えが返ってきた。

「それなら大丈夫です。今夜はお鍋にしようかと調ちやんと決めてたので」

「鍋？」

「うん。この前パパさんと一緒に家具を見に行った時、そろそろお鍋の季節だつて話になって、お鍋ならみんなで食べられるし、お肉や野菜も沢山食べられるから楽でいいって」

「……でも鍋なんて俺持っていないぞ」

正確には持つてるけどそこまで大きくない。

一人鍋には少し大きいかな程度だ。あれじや精々三人前がやつただろう。

「そこは大丈夫。パパさんが引越し祝いって事で買ってくれた」「は？」

「デスデス。それとパパさんからししよーが好きなお鍋とかも聞いてあるデス。すきやきよりもしゃぶしゃぶ派とか」

おいおい、何を勝手にやってくれてるんだよ、あの人は。

すっかり娘に甘々な父親そのものになってやがる。

「翼、本当か？」

「う、うん。私は遠慮したんだけど、おじさまがろくな手伝いも出来ないからせめてって言ってくれて……」

どうやら翼の性格もある程度把握したらしい。

くそつ、我が父ながら性質の悪い。みんな根は素直で優しい子だから善意に弱いんだよなあ。

「兄様、おじいちゃんは僕らの事を思ってくれただけで」

「ああ、うん。それは分かってる。多分父さんや、母さんもそうだろうな。二人共みんなの手助けをしたいんだろうさ。ただ、今の自分達が出来るのは金銭面ぐらいしかないって分かってるんだ」

それこそ最初の頃の俺に近い。

何とかみんながこつちで動ける拠点を確保しないとって、そう考えてた頃の俺に。

「ねえ、一っいいかしら？」

そんな時、マリアの声が聞こえた。

顔を動かせばマリアとセレナが揃って不思議そうになって、ああそういう事か。

「もしかして貴方達、仁志のご両親に会ったの？」

「それと、エルはどうしてお兄ちゃんのパパをおじいちゃんって呼んでるの？」

「響、エル、説明任せた」

当然の質問が来たので返答や説明を俺は響とエルへ任せる事にした。

その間、俺は未来と調に言って父さんが買ってくれたと言う鍋を見る事に。

「……結構大きいな」

「うん、五人から六人用だつて」

「値段は？」

「5千円はしなかったはず」

「まあ、それなら引越祝いには丁度いいか」

「食事の事ですけど、お鍋だけじゃなくてご飯も炊きますし、それならマリアさんとセレナちゃんが増えても何とかなると思うんです」

「うん、そうだな。それならまあ」

調と未来の言葉を聞きながら俺はぼんやりとこれからの事を考えていた。

俺の次の休みは日曜日。そこで悪意が言ったように奏の世界へ行って決戦となる訳だが、本当に今のままで勝てるのかと。

何せ既に悪意はリビルドギアツインドライブさえ脅威と感じていない。

メカニカルギアやレゾナンスギアは突発的だった事もあつて悪意を圧倒してみせたけど、おそらくもうそこまでの勢いはない。

こうなると完全にお手上げだ。あのスピードに対処するには現状のどのギアも力不足が否めないし。

「あの、只野さん？ 何か考え事してます？」

「え？ ああ、うん。ちよつと今後の事を」

「今後？」

揃つて小首を傾げる黒髪コンビ。うん、癒されるな、これでも。

「少し暗い気分になるだろうから、これは食事の後にしたいんだ。せめて空腹を満たしてからじゃないとな」

それだけで二人は俺の言いたい事を察してくれたらしく小さく頷いてくれた。

「ししよー、一つ聞きたい事があるデスよ」

「へ？」

後ろから横から聞こえた声に顔を動かせば切歌がキラキラした目

でこつちを見てる。

「えつとデスね？ アタシ達がししよーと一緒に暮らしてるのは、あまり良くないって思われるデスよね？」

「うん、まああまりいい印象は持たれないだろうね」

「なら、それをどうにか出来る方法ないデスか？」

「それをどうにか出来る方法？」

「デス。ほら、調と未来さんはししよーの妹って感じで電気屋さんを誤魔化したじゃないデスか。それみたいな感じで何とかならないデスか？」

切歌の意見にふむと考える。

疲れてはいるけど、この意見は重要だからなあ。

要するに、俺がみんなと一つ屋根の下が問題なのは他人であり、しかも男が俺しかいないという事だろう。

「一応はルームシェアって事で通じるは通じるか？」

何せ二階の部屋数は三つ。俺がリビングで寝てる事にすれば、そこまで大きな問題じゃないし、みんなの関係性もマリアと翼は以前の設定を流用すればいいし、切歌と調は同じ高校の同学年設定だしと、何とかなる気がしてきた。

「仁志、私達の動画はまだ残ってるの？」

「ああ、うん。残ってるけど……」

「じゃあ、いつそこにいる全員で一度一緒に唄った動画でも上げない？ しかもこの家で撮影して」

そのマリアの提案に俺は少しの間思考が止まった。

でも、たしかにそうすればいざとなった時の言い訳の一つにはなる。

つまり、ここはシェアハウスのような状態になっていて、俺は学生組の親御さんと面識があつて、それが切っ掛けでこの家での監督役を頼まれたとかならどうだろう？

正直そんな事を言う必要がない事を望むけど、最悪を想定しておくのは必要だ。

「……そうだな。じゃ、明日にでも全員でAppleを唄ってもらお

うか」

そこまで防音がしつかりしてないここでも、あれなら何とかなるだろう。声を張り上げる歌じゃないし。

こうしてまずは食事となった。

未来と調にマリアが手分けして支度を始める中、響と切歌が手伝いに動き、翼は二階へ上がって布団の準備をしに行く。

で、俺はと言えば、セレナとエルを抱き締めていた。

「お兄ちゃん、元氣になれそう?」

「うん、二人のおかげで幸せな気持ちになれるからな」

「兄様、気分が楽になったり明るくなれる事があつたら教えてください。あるいは自分でそれをやってみてください。今は心を暗くしたり沈ませない事が大事です」

「ああ、そうだな。エルの言う通りだ」

気分はまさに父親である。

可愛い娘二人を持ったような気分になりながら、俺はその温もりで癒されていた。

こうして接していると、やっぱりあの頃のセレナは悪意に唆されてたんだなと思う。

今のセレナからはちよつとのエロさも感じられない。

ちよつと恥ずかしそうなのは、年頃故のそういうのが出てきたって事だろうし。

「タダノ、なべとはどういう食べ物だ?」

「えつと、鍋は調理器具であり料理の名称でもあるんだ。さつき未来達が使ってたのは料理名としてだな。で、鍋って言う物を使った煮込み料理だよ」

「煮込み料理か……」

「味付けによって色々変わるし材料によつても名前が変わるんだ。寄せ鍋や海鮮鍋、すき焼きに水炊き、しゃぶしゃぶ、火鍋、おでん、トマト鍋やカレー鍋なんてもんもある」

「ふむふむ」

「おでんって何?」

「兄様、教えてください」

ヴェイグに説明していたら腕の中の二人も興味を持ったようで、目をクリクリと輝かせてこつちを見上げてくる。

ああ、父親ってこんな気持ちなんだなって本当に強く思うよ、この二人といると。

とりあえず、俺は腕の中の可愛い二人とこつちを見上げる異種族の友人へ鍋の話をする事にした。

そうしてると、あの平屋に切歌や調が来る前の頃を思い出してくる。

エルとセレナが本当に無邪気に色んな事を聞いてきて、ヴェイグも交えながら俺がそれに答えていた頃を。

「「もちきんちやく?」」

「そう。えっと、油揚げは分かるよな? その中に餅って言っても分からないか。その、すつごく熱を加えると伸びて柔らかくなる食べ物なんだよ。それを入れて出汁で煮るんだ。すると出汁の味がお揚げに沁み込んで、当然餅にも出汁の味がつく。アツアツで火傷しそうなんだけど、それが美味いんだよ」

もう時期も秋の中旬に差し掛かってきたし、一度本物を食べてもらってもいいかもしれない。

何となくだけど、エル達と接していると体の気怠さが薄れてく気がするし、本気でこれは有力なのは俺の気の持ちようかもしれないな。

「何の話をしてるんだ?」

そこへ布団の支度を終えただろう翼が姿を見せた。

何というか、翼もお母さんになつたら今よりも綺麗になりそうだなあ。

「あつ、翼さん」

「今、もちきんちやくの事を教えてもらってました」

「餅巾着?」

「おでんの話からタダノが教えてくれたんだ。タダノが一番好きだなね、だったか?」

「そうそう。翼はおでんのタネだと何が好きだ?」

「私？ そうだなあ」

立ったまま考え始める翼。すると、それを見てヴェイグがトテトテとリビングの隅に置かれている座布団やクッションから一つ手にして戻ってきた。

「翼、これを使え」

「ん？ ああ、すまない。ありがとう」

こうして翼も座って座談会再開。

翼が来てくれた事で俺の説明に補足役が加わり、エル達への話がスムーズになった。

そうこうしていると漂ってくる良い匂い。

これは……醤油系だな。でも、切歌が俺の好きな鍋を教えてもらったって言うてたけど……？

「いいにおい」

「ああ、腹が鳴る」

「よし、じゃあ三人共テーブルへゴー」

「二はい（うん）（分かった）二」

揃って動き出す可愛いマスコツト的立場の三人。

その背中を見つめて俺と翼は笑みを浮かべた。

「ふふっ、可愛いね仁志さん」

「ああ、癒されるよ」

今の君の微笑みにもって、そう言ったらキザみたいな気がして言えなかった。

テーブルには鍋がどんと置かれて、既に椅子にはエルやセレナ、そしてヴェイグが座っている。

ちなみにヴェイグ用の椅子はベビーチェアだ。父さんがヴェイグ用にと買ってくれたらしい。

普通の椅子だとヴェイグが座ってもテーブルの上の物が見えないためだと、言われてから気付いた。

こういうところ気付く辺りはさすがは経験者だ。俺、まったく考ええなかったからなあ。

そうそう、さすがは家具選びを何度も経験している人間は違った。

予想よりも安くダイニングテーブル一式を購入してくれたのだ。

——こういう時大手はダメだ。値段交渉に融通が利かない。

父さんはそう言って個人経営の家具店を何軒か回ってくれたらしい。

しかも現金でその場払いと言う形で交渉をしたと聞いた。

いつの時代も強いのは現金なのだと理解した。

その場で現金一括払いと言うのが持つ強みを思い知った話となりました。

その代金はちゃんと後で動画収入の口座と俺自身の口座から半々で払うつもりだ。

みんなのでもあり俺の物にもなるからと、そういう考えだけだ。

そういや、父さんは水着ギアを着込んで家具の運搬をした響に驚いてたっけ。

それがよりみんながこの世界の住人じゃないと分かる出来事となったみたいで……

——あの細い腕で大の男が数人で運ぶテーブルをなあ……。

と、感心し切りだったのだから。

「仁志、これ貴方のお椀と箸ね」

そんな事を思っていると目の前に差し出される木製のお椀と箸。

顔を動かせば当然マリアが立っていた。

「ありがとう」

「どういたしました。あつ、言っておくけど鍋の蓋はかなり熱いから素手で触ると火傷するわよ」

「「っ?」」

その言葉に、中を見ようとしていたマスコットトリオが恐る恐る手を引っ込めていく。

それがとても可愛くて、微笑ましくて、気付けば俺は笑っていた。すると響達も笑い出して、エル達も笑った。

あの一件で消えかけてた心の灯みたいなのが、また煌々と燃え始めたような気がした。

「あゝ、笑った。こんなに笑ったのは久しぶりだよ。ありがとな、エ

ル、セレナ、ヴェイグ」

体を包んでいた倦怠感まで吹き飛んだ気がする。

ああ、うん。久しぶりに気分爽快だ。

「何だか嬉しくないかも……」

「奇遇だなセレナ。俺もだ」

「ぼ、僕は嬉しいです。兄様がやっと以前のようない顔をしてくれました」

苦い顔のセレナとヴェイグとは違い、エルだけは困り顔ながら嬉しい事を言ってくれた。

だからそつとエルの頭を撫でた。あまり撫でるとどうかと思うので二、三回で止めたけど、エルは嬉しそうに笑みを浮かべてくれた。

「蓋開けるよ〜」

そう言つて鍋つかみを着けた未来が鍋の蓋を取ると、大量の湯気と共に食欲をそそる匂いが立ち込める。

「「「「お〜……」」」」」

俺を含めた鍋を主に作つてなかった響達で感嘆の声を上げた。

鍋の中には白菜やえのきなどの野菜と鶏肉が入っていた。

それと白い竹輪のようなこれは……

「きりたんぽ〜」

「あつ、はい。只野さんが好きだつて調ちゃんに教えてくれたので、スーパ〜を探したら売つてたんです」

「それと比内地鶏のスープとかがセットになつて売つてたから買つてみた。師匠、きりたんぽ鍋が好きなんですよ？」

「パパさんが思い出話と一緒に教えてくれたデス。小学生の頃、試しにやったらししょーが大好きになっちゃつて、そこからしばらく鍋はそればかりになつたつて」

……思い出した。切っ掛けは父さんが不意に見つけたきりたんぽ鍋セットだった。

秋田名物のそれを聞いた事しかなかった父さん達は、現地へ行つて食べるよりも手軽だからと買った。

で、当然その日の夜は鍋となり、俺は生まれて初めて食べるきりた

んぽにドハマリしたのだ。

いや、人によつては嫌いかもしれないが、俺はご飯で出来た食べ物
が基本大好きだったためか気に入ったんだよなあ。

五平餅とか煎餅とか磯辺焼きとかもそうだから、素養はあったんだ
ろうと思う。

「……うん、そうだよ。思えば父さんも母さんもよくそんな事を許し
てくれたもんだよ。他のもんも食べたかつたろうにさ。嫌な顔一つ
せず、その年の冬はずっと鍋と言えぱきりたんぽを入れてたよ」

懐かしいと思ひながら、俺は鍋の中から半分に分られたきりたんぽ
を取り出した。

「何がそんなに良かったんだらうかなあ。今にして思うと不思議だ
よ」

ただ、味が好きだったとかじゃないのは事実だ。

食感？ それともご飯だからって事だったんだらうか？

何となく記憶がサルベージされそう。もう少し、もう少しで思い
出せそうだけど……。

「兄様、それ、美味しいんですか？」

「え？ うーん、人による、かな。誰もが美味しいと認める物じゃない
と思う。そもそも本来は保存食というか、残ったお米の使い道だった
んだよ」

「そうなんだ。じゃあ、これって残ったご飯で作ったの？」

「こういう製品は違うよ」

「どうやって作るんだ？」

「えっと、昔は木の棒へお米を潰した物をペタペタと付けていつて
……」

と、昔教えてもらった事を話していると、ふとそこで思い出した。
父さんに俺も似たような事を聞いた時、そこで……

——つまりな、昔は残り物で作った物を今はこれを作ろうとして
作ってるんだ。贅沢だよな。

そう言つて食べた時の父さんの笑顔を見て、俺はきりたんぽを食べ
ると父さんが笑顔になるって思い込んだんだ。

普段あまり笑わない父さんが笑ってくれる。ああ、そうだ。だから俺はきりたんぽ鍋が好きになったんだ。

あの父さんの笑顔を見たくて、そしてその笑顔で俺も嬉しくなれたから。

「……そっか。子供ってそういうもんか」

「え？」

ポツリと呟いたらエルが不思議そうな顔をした。

いや、それだけじゃない。みんなが俺を見つめていた。

「思い出したんだ。俺がどうしてこれが好きだったか。今のエル達みたいにきりたんぽについて聞いた俺へ父さんが答えてくれて、その後には残り物で作った物を、今は最初からきりたんぽにしようとして作ってる事を贅沢だなんて、そう言っただけを食べて笑ったんだ。あまり普段から笑わない父さんが笑顔になったのが嬉しくて、だから俺はきりたんぽが好きになったんだって思い出した」

少しだけきりたんぽを齧ると、飛びぬけて美味いって感じはなく、やっぱり思い出込みで好きだったんだなと実感した。

「そういえばおじさん、そんなに笑わないですね」

「そうだな。ただ、でんしゃの話をする時はよく笑うぞ」

「僕はおじいちゃんやんの笑ってる顔、よく見たんですが……」

「エルちゃんはおじさんからは孫扱いだったからじゃないかな？」

「そうだろうな。おじさまは特にエルを可愛がっているように見えただ」

「デスね。パパさんはエルが大好きでした」

「うん、家具を見に行った時もエルをずっと傍に置いてた」

「そうなのね。仁志のパパさん達に会ってみたいわ」

「うん、私も会ってみたい。お兄ちゃん、ダメ？」

「いいけど……あつ、ならこういう事は出来ないか？」

ミレニウムパズルの中に花畑じゃなくて草原を作ってもらおう。

で、俺の部屋でパズルを展開、そこでみんなが寝ればただの床で寝るよりマシだし、ここの全員で泊まれるんじゃないかって。

その考えを聞いてヴェイグが可能だと返してくれて、ならばとすぐ

さまエルが母さんへメールする。

「そっか。パズルなら部屋の広さ関係ないね」

「あつ、これなら仁志さんの実家でみんな暮らせませんか？」

「響、それはここ以上に周囲の目が面倒だよ。あの間取りでどうやって十人以上生活出来ると思う？」

「あつ……」

そう指摘すると響が気恥ずかしそうに項垂れた。

でも気持ちは分かるし嬉しいので笑みを向けた。

「だけでも可能ならエルのためにもそうしたいな。頑張つて稼いでいつか二世帯住宅とかさ」

「そんなにエルはお兄ちゃんのパパやママが好きなの？」

「はい！ おばあちゃんは兄様の小さい頃の話をしてくれますし、病院での話も興味深いんです。おじいちゃんは小さかった頃のお話がとても興味深く楽しくて」

「父さんの子供の頃、かあ。たしかに色々と思う事は多い話だよなあ」
俺も何度か聞いた。高度経済成長の時代とはいえ、まだまだ戦後の空気が残ってた頃だ。

戦争を経験した人達があちこちにいて、父さんのお祖父さん、つまり俺の父方の曾祖父は陸軍の人間だったらしいし、薪で風呂を沸かした事もあるって聞いた。

「ご近所づきあいつてものが日常だった頃で、見も知らない人間に怒られる事が当然のようにあった時代だ。」

「すつかりエルは仁志の子供扱いなのね」

「おばあちゃんが本当の孫は見れないかもしれないって、そう言っていました」

地味に否定出来ないのが困りものだ。

……って、一年前なら言えたんだけど、な。

「そ、そう。孫……ね」

そう言いながらこちらをチラリと見るマリアや響達がいる今、俺はその気になれば孫を見せてやれるんだから。

ただ、それはやっぱりこの面倒事を何とかしてからだ。その上でそ

の結果次第では……やっぱり孫を諦めてもらおうしかない、かな。

「さて、話は後でするとしようか。今は食べる事に集中した方がいい。いくら鍋でも放置すれば冷めちゃうしさ」

「そうですね！　じゃ、私もきりたんぽ食べてみようっと」

「アタシもいただくデスよ！」

「あつ、僕も欲しいです」

「一人一つはあるから慌てないでいいよ」

「ヴェイグさんのは私が取ってあげますね」

「すまん。助かる」

「おじさまが笑顔になる食べ物か。楽しみだ」

「ですね。パパさん、師匠と違って普段から笑ってくれなかった」

「ママさんはどんな人なの？」

「良くも悪くも思った事をすぐ口にするぞ。というか、マリアも近い内に会わせるから。にしても、きつとセレナもエルと同じように孫扱いだろうなあ、二人共」

賑やかで明るい食事風景。

本当はみんなどこかで不安や罪悪感を抱えてるかもしれない。

だけど、今はそれを忘れるように明るく振舞ってるんだろう。

自分達のために、そしてきつと俺のためにも。

「どう？　きりたんぽの味は？」

「私は嫌いじゃないです」

「アタシもデス。不思議な感じデスけど……」

「おつゆの中にご飯を入れて食べてる感じですね」

「「それだ（デス）！」」

エルの表現に必愛コンビが我が意を得たりとばかりに声を揃えた。

本当に姉妹じゃないか、この二人。

「はふはふっ……俺も嫌いじゃないぞ。それに、この味は好きだ」

「比内地鶏は一種のブランド鶏なんだよ。ただ、流通用の交配種でね。

本当の比内鶏は天然記念物に指定されててあまり食用にはされてなかつたんじゃないかな？」

「そうなのね。じゃあ、このお肉は普通の鶏？」

「えっとそれも入ってる。きりたんぽ鍋セットに入ってたから物もあるから、そっちは比内地鶏だけど」

「マリア、食べてみるといい。味が明らかに良く食べる物とは違う物がある」

翼がそう言って笑みを見せた。あの翼が笑みを零すとは、さすがは比内地鶏と言うべきか？

で、マリアがならばと鍋の中を見つめて明らかに小さ目の肉を掴んだ。

おそらく鍋セットの具材だから小さ目だろうと予想したんだな。

「……本当ね。味がしっかりするわ。臭みもない」

「何よりこの鍋つゆとの相性がいい。同じ物同士だからだろうな」

「本当にこの鍋つゆ、美味しいですね。シメは雑炊かな？」

「卵はあるか？ あるなら溶き卵を入れよう」

「あつ、それ賛成です！」

「あつ、白菜美味しいデス。つゆの味が染みてますよお」

「えのきも美味しいですよ」

「ヴェイグ、お椀貸してくれ。追加入れてやるよ」

「おおつ、頼む。出来れば野菜を多めにしてくれ」

あつたかい鍋を囲んでみんなで食べる。

たつたそれだけなのに、気付けばみんなが笑顔になってる。

奏やクリスの事は心配だけど、今は気持ちを暗くしたくない。

その気持ちとみんなで鍋をつつくあつたかさが混ざり合って、こんなにもあつたかい時間になってるんだと思う。

ちなみにシメの雑炊はとっても美味しく、あつと言う間になくなった事を記す。

「あの悪意に対抗できるギア、ですか」

翼さんの言葉に只野さんが静かに頷いた。

食事を終えて後片付けまでした後、私達はリビングで今後の事を話し合っていた。

あのクリスは凄かった。速さもそうだけど、何より外部からの干渉

でミレニアムパズルを無力化したのが大きい。

ヴェイグが言うにはそれだけでも世界蛇を越えてるって事らしい。「ああ。正直今のみんなの使えるどのギアでも厳しいだろうと思うんだ。もうリビルドギアさえ、悪意には有効とは言えなくなってきた」

「それは感じてました。これってやっぱり……」

「あの決戦で悪意が学習したという事だろうな。あるいは、耐性を身に着けたか」

「両方かもしれないわ。でも、そうね。正直あの悪意相手に有利に戦えるギアはないかもしれない」

「れ、レゾナンスギアは？」

「セレナ、相手はミレニアムパズルを外部から干渉して破壊出来る相手だ。レゾナンスのバリアも、果たしてどこまで耐えられるか……」

その言葉にセレナちゃんが黙った。言ってる只野さんも苦い顔をしてる。

実際私も、アイギスにジュエルの力を使った状態でさえあの悪意の全力を防ぎ切れる自信は無い。

「ししよー、ならここは特訓デス」

「「「「「特訓?」「「「「「」」」」」」」

「デス。アタシ達はまだツインドライブを完全に使いこなしてないデス。メカニカルギアだけじゃなくて、他の色んなギアもデス」

「そうだな。思えば私達はそのギアの基本性能だけで押し切ったところもある」

「成程ね。まだ私達自身も知らない能力や技が眠ってる可能性がある……」

「だから特訓?」

「はいデス!」

切歌ちゃんがキリツとした顔で頷くのを見て只野さんも頷いた。

「そうだな。俺達はまだ全てのギアの能力を把握出来た訳じゃないもんな。うん、なら今度の休みは特訓にあてよう」

「い、いいんですか? 早く悪意を止めないと余計強くなるかもしれ

ないのに」

響に私も同意見。でも、どうやら翼さんやマリアさんは違うみたい。

「いや、ここは慌てて決戦を挑むよりも、少しでも勝算を立てられるようになってから戦うべきだ」

「そうね。今のままじゃ私達はあの悪意に勝てない可能性が高い。忘れてるかもしれないけど、相手は一人じゃないのよ?」

そこで私達は息を呑んだ。そうだ、奏さんがいる。あの悪意に再度染められてしまった奏さんが。

「正直再度染め直しなんてどうなるか想像も出来ない。だけど、きつとより禍々しいものとなる事は間違いないと見ていいはずだ」

「うん、きつとそうだと思う。今度は私の声も届かないかもしれない」
「翼、だとしても、よ」

「そうです。届かないなら届くまでやるだけです!」

響らしい言葉に翼さんが笑みを浮かべて頷いた。

只野さんも静かに頷いてた。ただ、奏さんとクリスを相手にするなら今のままじゃ不味いのは分かる。

何とか、何とか二人を相手にしても元に戻せるようにならないと。

「そうだ。忘れてたけど、俺の考えが悪意へ伝わるようになったらしい」

一瞬どういう事か分からなかった。

きつとみんなそうだったと思う。一人マリアさんだけが驚く事もなく只野さんを見つめていた。

「原因は私を乗っ取っていた悪意が放った瘴気を二度吸ったせいだと思っわ」

「ああ、きつとそうだろうな。だから悪意は奏とセレナを分散させてたんだ」

「そういう事か……」

「じゃ、じゃあ今も?」

「分からない。ゲートの先だけ、ならまだいいんだが……っ!?!」

そこで只野さんが何かに気付いたような顔で息を呑んだ。

「ど、どうしたんですか兄様」

「……特訓の際、俺は目隠しと耳栓をするよ。ドライブチェンジして欲しい時は俺の指を使ってエルがやってくれ。もし俺の見た事聞いた事までも筒抜けになったら意味がない」

険しい顔で告げられた言葉に込められたのは、ある意味での決意だった。

只野さんは出来るだけ悪意に私達の情報を与えないようにしようとしてる。

「ししよー……」

「で、でも、私達の能力とかを仁志さんが知って色々考えてくれる事で」

「それを思い付いた瞬間、悪意もそれを知るなら意味がない。なら、俺が知らないままでみんなだけ知ってる方がいい。それに、一つだけ悪意に俺の思考とかを読まれないかもしれない状況に心当たりがある」
「思考を読まれない状況？」

「ああ。とあるアニメに似たような能力を持つ敵が出てきた話があった、そこで主人公は思考を読まれるのならといつそ大きな声で自分の本音をぶちまけたんだ。愛の告白ってやつを、ね」

「それは効果があったのか？」

「その作中ではね。相手が健全な男女交際が死ぬほど嫌いで聞きたくなくなっただけだよ。それと同じように、もしかしたら悪意も自分の弱点となり得るだろう感情を俺が強く発露したら、それを嫌がって思考を読む事を一時的に止める可能性があると思うんだ」

たしかにあり得るかもしれないって思う。

でも、何でそう考えたんだろう？

「そう思う根拠は？」

私と同じ疑問を抱いたのかマリアさんがそう問いかけた。

みんなも何も言わないから同じ事を思ってるんだと分かった。

「俺の思考を読むって事は、多分だけどその瞬間俺とリンクって言うか同調してるんだと思うんだよ。そこで俺が心の光を強くしていたらその光も悪意の本体というか、悪意全体へ伝わるんじゃないかなっ

て。実際俺がみんなとの触れ合いや言葉に温もりで体が楽になつて
るから」

「そっか。お兄ちゃんの心をみんなであつたかくしてるのを悪意が嫌
がってるなら、その間はお兄ちゃんの心とかをのぞけないかも？」

「そういう事」

「理屈は分かりますし納得も出来ます。ただ、それは言う程簡単じゃ
ないと思います」

エルちゃんの言葉に只野さんはゆっくりと頷いた。

「そうなんだよ。でも、それについても俺はみんなからヒントをも
らってる」

「「「「「「ヒント?」」」」」」

みんな揃つて声を出すと只野さんが楽しそうに笑つた。

その笑顔は私達がよく見てきた只野さんの笑顔だ。

「歌、だよ。前向きな歌を唄う事で多少でも気分が良くなったし、そも
そも歌ってる時は歌詞を思い出したりするから余計な事を考えずに
済む」

告げられた答えに私は思わず笑つちやつた。只野さんらしいって、
そう思つて。

実際、今回も気持ちが沈みそうだからって歌を唄つたぐらいだし、
納得しかない。

けど、うん。私も似たような事をやって響達を応援した事があるか
ら否定しない。

「歌には力がありますもんね」

「そう。だから、俺も今後はみんなみたいに歌を唄う事にする。つと、
そうだ。翼、コメントの方に聞き覚えがあるつてのが増えてきてるん
だよな?」

「うん、確認したけどあの日を切つ掛けが増えてきてると思う」

「なら、悪意は俺を使ってそれも根本からひっくり返そうとするかも
しれないな。エル、それとヴェイグに頼みがあるんだが、今からログ
イン用のパスワードを変更しようと思う。で、俺は新しいやつを見な
いでいるから、二人で相談して決めてくれ。出来れば響達も見たり聞

いたりしないでくれるか？　もうないと思うけど、悪意にまた忍び込まれるかもしれない」

「了解です！」

「なら、私達は二階へ移動しましょうか」

「ああ、なら後で俺も行くよ」

そう言いながら只野さんはスマホを操作してエルちゃんへ差し出して簡単な説明を開始。

私は階段へ向かうマリアさん達に続いてリビングを離れる事に。

だけど、本当に只野さんは一気に持ち直した感じがする。

きつと切っ掛けはお鍋の思い出、かな。

あの時の只野さんは、とっても優しい笑顔をしてた。どこかおじさんを思い出すような、そんな顔を。

「お兄ちゃんのパパとママ、早く会いたいなあ」

そんな中、階段を上りながらセレナちゃんが漏らした一言に私達は苦笑した。

だって、それはここへ戻ってきたみんなが必ず一度は思う事だから。

「たしかママさんは看護師なのよね？」

「ああ、そうだ。もうすぐ還暦と仰っていたが、まだまだ元気で明るい方だ」

「でもお料理は苦手で、結婚するまでほとんどやってこなかったんです」

「そうなの？」

「デスデス。料理に必要なのは愛情じゃなくて継続だつて言ってたデス。愛情があろうとなかろうと作っていればその内に慣れてそれなりに上手くなる、だそうデス」

おばさんらしいって、そう思うぐらいには私も只野さんのお父さんとお母さんと接した。

たった二回の触れ合いだけど、それでもおじさんもおばさんも優しくてあったかかった。

……只野さんの性格や考え方ってこの二人だからだったんだ

なあって、そう思った。

二階に上がるとセレナちゃんとマリアさんが軽く息を吐いた。

多分だけど思ってたよりも広いからだと思う。

こここの寝室、あの平屋の居間ぐらいあるもんね。

「ここで寝るの？」

「いや、さすがに全員は無理だ。だから私とマリアは別室にしようと思っっている」

「別室、ね。どっち？」

「奥側だ。ただ、戸は閉めないでおくが」

「マリアがいるならエルとセレナとヴェイグと一緒にした方がいい気がします」

「デスね。セレナ、どうデス？」

「うん、どうせならその方がいいかな？ あの旅行の時みたいだし」

こうして寝る場所と組み合わせは決定となった。

奥の四畳半にマリアさん、セレナちゃん、エルちゃんにヴェイグ。階段からすぐの寝室に残りのみんなと只野さん。

で、そこで階段が上がってくる音が聞こえた。

「お兄ちゃんだ」

「でしようね」

セレナちゃんが嬉しそうに笑うとマリアさんも笑顔を返す。

何というか、本当に今の二人を見てると只野さんの奥さんと娘みたいいに見えるなあ。

「つと、お待たせ……で、いいのか？」

「仁志さん、寝る場所が決まりました！」

「寝る場所？」

「マリアとセレナにエルとヴェイグは奥の部屋で寝る」

「ああ、そういう事か。じゃあ、手前側の四畳半は未使用のまま終わるのかね？」

そう言っただけで只野さんは手前側の部屋の戸を開けた。

そこには窓があるだけの空間が広がってた。

「……………ここも使う事があるかもしれないけどな」

「それって、奏さんやクリス先輩を助けても終わらないって事デスか？」

「可能性はある、と考えた方がいいかもしれないぞ暁。実際、今の事態がそれだ」

「そうですね。でも、そうになると……」

調ちやんが何かに気付いたように只野さんを見つめた。

他のみんなもそうだ。只野さんはそれに気付いてるんだろう。こっちへ振り向かないで軽く天井を見上げた。

「このままだと、俺が悪意のバックアップって事になるだろうな」

その言葉は、悪意に只野さんの考えが読まれてるって事よりも私や響達の気持ちを乱した。

「まさか、それも狙いの内？」

「ないとは言えないよ。まるでゴースの展開だな」

「「「「「ゴース？」「」」」」」

聞き覚えのない言葉だ。でも、きっとヒーローなんだろうな。

「特命戦隊ゴースターズ。詳しい説明は避けるけど、そのラスボスと言うか相手は自分のバックアップをよりにもよってレッドの中に仕込んでたんだ。しかもレッドが自殺しようとしても出来ないような仕組みまで組み込んで」

「本当に今の状況に似てますね」

「うん、でもゴースはゴーカーの後の作品でみんなと見た事もない……っ?!」

そこで只野さんが息を呑んだ。

みんなでどうしたんだろうと思って見つめると、只野さんがゆっくりと向き直って私の事を見た、気がした。

「……聞いて欲しい事が出来た。もう少ししたらリビングへ戻ろう。エル達にも聞いて欲しい」

そう告げる只野さんは真剣な表情をした。

嫌な予感もするけど、それでもきつと何とかなる気がする。

だって、これまでもみんなで何とかしてきたんだから。

私達の目の前にいる人と、一緒に。

仁志が話したのは、あの海へ行つた日の夜の事。

未来へキスした際に誰かに頭を覗かれたような気がした事を思い出し、そこから悪意が現状の計画を考えたのではないかと推測したのだ。

「あの時、悪意は未来の中に既にいたんだと思う。そして、そこで俺の記憶を覗いたんじゃないだろうか？　そして、相手の中心人物を使つたバックアップ方法を知つた」

「でも、その前から悪意は仁志を狙つてたじゃない」

「その時は漠然と俺を利用しようとしたか考えてなかつたと思う。でも、俺の記憶から得た知識でそこに変化が生まれたんだ。要は、俺を操り人形にするのではなく、俺のまままでみんなの邪魔になるように。仮の話だけど、俺が自殺しようとしても悪意は止められないし、みんなが俺を物理的に消滅させようとしても同じだ。悪意自体が手を出す事は出来ない」

「だからこそ、悪意は私達全員が揃い何らかの方法で倒しても、仁志さんがいる限り復活出来ると見せつける気か……」

「そして、きつとそこでこう迫るんです。自分を完全に倒したければ兄様を殺せと」

エルフナインの言葉で誰もが表情を歪めた。それは怒りと悔しさだ。

実際このままではそうなる可能性が高いと感じているのだ。

何せ仁志の体内に悪意が潜んでいるのは確定と言つていいのだから。

「どうしたら、どうしたらいいのかな？　エル、お兄ちゃんから悪意を追い出すにはどうしたらいい？」

「それは……分かりません。でも、今のを聞いて一つ思った事があります」

「思った事？」

「はい。兄様、未来さんとキスした時に悪意に頭を覗かれた気がしたと言いましたが、それはリビルドギアが追加された時ですか？」

「え？ ああ、うんそうだよ。最初にした時は追加されなかったけど、その時はそんな感覚なかったしな」

その発言にエルフナインとヴェイグ以外の全員がある事に気付いた。

そしてそれを確かめるべく、装者の七人は顔を見合わせる。

「ねえ響、響がリビルドギアを手に入れた時って」

「待って未来。翼さん、これって前の話に繋がりますね」

「ああ。マリア、もしかすると私達全員が……」

「可能性は高いわ。いえ、この場合はきつと同じはずよ」

「切ちゃん、セレナ、何度目のキスでリビルド増えた？」

「ええっ?! え、えっと……に、二回目です」

「わ、私も二回目で増えました」

真つ赤な顔の切歌と赤い頬のセレナ。調は平然としているように見えるが、内心ではその時の事を思い出してほんのり頬を朱に染めていたし、未来と響もやや落ち着きを無くしていた。

翼とマリアは落ち着き払っていたが若干の気恥ずかしさのようなものはあつたようで、互いに頬を搔いていた。

「えっと、つまりどういう事？」

「仁志さん、全員二度目のキスでリビルドが追加されてるって事は、そこでやっと私達と仁志さんの心が繋がったって事だと思う。だからこそ、小日向の中にいた悪意とも一瞬繋がったんじゃないかな？」

「そして、そこで仁志の想いが流れた事で悪意は未来の中から消えた。そう考えれば理屈は通るわ」

「そっか……だからあの時悪意はクリスからキスをさせたんだ。俺の想いを流し込まれる前に自分の分身を流してやろうって」

点が線になった瞬間だった。まだ全てが繋がってはいないが、一つの解決策のようなものが見えてはきたと言える。

想いを繋げた瞬間、愛情を流せば悪意を倒せる。それが今、仁志達の中で考えられた悪意の撃破法だった。

ただ、これを試しにやってみるには危険が高いと言えた。

それは次の仁志の言葉にある。

「仮にこれが悪意に有効だとしてもだ。みんなにキスしてもらったからって、悪意が本当に消えたかどうか確かめようがない上、下手すれば俺からみんなへ入り込む可能性があるんだよな」

「そうデス。ししよーは依り代に通知みたいなものがないデス」

仁志は当然ながらギアを所持していない。それは響達と違い、彼は悪意を駆逐出来たか否かが判別出来ない事を意味する。

であるのなら、それを確認する方法は仁志にゲートを通ってもらう事だが、それがどれ程危険かは言うまでもない。

それに奏とクリスが悪意の支配下にある今、もし響達の誰かに悪意が入り込んだらそれはそれで厄介な事になる。

つまり現状ではその思いつきを試すには状況が悪すぎるとしか言えなかった。

「なら、これは最後の手段ですね」

「そして、おそらく唯一の切り札かもしれないぞ」

ヴェイグはそう言ってエルフナインから顔を仁志へ動かした。

「タダノ、賭けに出る事も必要だと思う。そして、それをいつにするかはお前が決める。そうすればみんなも納得してくれる」

「俺が……」

「ああ。あのまんがのライダーの言葉じゃないが、命には賭け時があるんだろう？ それはタダノ自身が決めるべきだ」

「命の賭け時、か……。そうだな。今は俺の命がこの世界の運命も同じだ。なら、賭け時を見誤らないようにするよ」

そう告げる仁志の表情に響達は胸をときめかせた。

それは久しぶりとなる彼本来の“大人の男”としての顔だったのだから。

その後は風呂の支度をして、一番疲れているだろうエルフナインとセレナを優先的にしようとなり、マリアと三人で入る事となった。

そうなる次は切歌と調に決まり、続いて響と未来。翼はヴェイグと入る事となり、仁志が最後という流れだった。

と言うのも、仁志が自分を最初にする事を嫌がったためである。

「汗を掻いた三十男が入った後のお湯なんて女性は嫌だろ」

その一言を、さすがの響達も否定はし切れなかったのであった。
よって仁志が順番は最後となったのである。

ただそれも仁志が一人で入るからであり、響達の本心としては……
（わ、私と一緒に入ってくれるなら気にしないんだけどなあ……。む、
むしろ背中とか洗ってあげたいかも……）

（別に仁志さんの後が嫌な訳じゃないけど、どうせなら一緒に入って
背中を流してあげたいかな。……。そ、そうすれば少しはし、新婚気分
を味わえそうだし）

（配慮としては十分理解出来るしむしろ良識があると思えるけど、こ
れって本当に大家族のそれよね。……。いつそ私達と一緒にって、ダ
メ、なのよね……）

（ししよーと一緒に風呂は色々ダメですが、み、水着着ればどうデス
かね？ あつ、でもでもその場合アタシは隠せてますけどししよーは
……。あう）

（切ちゃんと私と師匠でお風呂……。三人して水着着て入るのかな？
でも、それじゃ体洗うのは難しい。師匠が見てない時に少しずらす
？……。そこを見られそうで恥ずかしい）

（只野さん疲れてるだろうから早く休ませてあげたいけど、たしかに
男の人の後って抵抗あるかも。でも、これって一緒に入ってたら気に
ならないんだろうなあ。……。そうなると今度は別の事が気になりそ
うだけど）

（お兄ちゃんと一緒に風呂はダメって前に言われたから分かるけ
ど、私やエルよりもお兄ちゃんの方が疲れてるはずなのに……。いいの
かな？ 私は……。ちよつと恥ずかしいかも）

悪意の影響が完全に消えた今、全員が多かれ少なかれ乙女な感情を
正常に抱いていた。

それぞれ濃淡の異なる赤い花を眺めて、仁志が柔らかく微笑んでい
ると知らずに。

そうして女性達が入浴を始めると、仁志は入浴していない者達に囲
まれる事となった。

「これで仁志さんが楽になるって分かりましたし、今後のためにも

しつかりやって行きますね」

「私達の温もりで師匠を癒してあげないと」

「デスデス」

「ははっ、うん、お願いするよ」

響達三人の笑顔に笑みを返しつつ、仁志は嬉しそうに腕の力を少しだけ強くする。

彼の正面には切歌、調、響の三人がいた。その背中に回されている腕が力強さを僅かに増した事で三人の乙女の笑みが深くなった。

「只野さん、調子良さそうですね」

「そうだな。だが油断は出来ない」

「本当だよ。少しでも気を抜きすぎたら一気にダメダメモードになりそうだし」

背中から密着している翼と未来に若干ドキドキしながらも仁志は思っている事を述べた。

マリア達が風呂から上がれば、今度は背中側にマリアが来る事になる。

だが、そうなくても仁志は見られて不味い状態にならないだろうと確信していた。

(何だか今は欲望よりも愛しさの方が強いんだよなあ……)

愛されているという実感。一人ではないと思える温もり。

それらが仁志を包み、癒していたのだ。

そしてそんな彼らを眺め、ヴェイグは一人嬉しそうに微笑んでいた。

(やつとみんなから優しい匂いが出てくるようになった。やっぱりタダノが笑顔じゃないとダメだな)

ムードメーカーである響や切歌。そんな二人の雰囲気へ影響する仁志の存在。

今やこの中で一番のムードメーカーは紛れもなく仁志であるとヴェイグも感じていたのだ。

「あゝ、幸せだなあ。世の男が羨むような状況だよ」

噛み締めるようなその声に響達五人が微笑む。

分かるのだ。今の仁志は自分達がよく知る状態だと。

「ふふっ、そうだね。仁志さん、刺されるかもしれない」

「ないとは言い切れないですよ。私達の世界だと翼さんとマリアさんってだけで大問題です」

「学院でも凄い事になるよ。切歌ちゃんと調ちゃんは人気者だし」

「デス？」

「そうなんですか？」

「あー、何となく分かるかもしれないなあ。切歌も調も転入生だろ？」

で、常に二人で行動するし、その仲の良さは単なる友人って枠を越えてるからな。禁断の関係って思われてもおかしくない」

「禁断（きんだん）の関係……？？」

「それならむしろ私は立花と小日向だと思うよ」

「っ、翼さんっ!?!」

「ははっ、そうだな。切歌と調よりは響と未来の方がらしいか。あの三人組も似た事を言いそうだ」

「仁志（只野）さんっ!」

そのやり取りを眺めながらヴェイグは笑みを深くして頷いていた。

今、仁志達はとても強い優しい匂いで包まれていたのだ。

やがてそこへ風呂上りのマリア達三人が現れ、入れ替わりに切歌と調がいなくなる。

「兄様、どうですか？」

「お兄ちゃん、どう？」

「うん、あったかい。カイロみたいだよ」

エルフナインとセレナが来た事で響は正面から仁志の横へと移動していた。

娘二人を抱き締める父親のような仁志を、マリア達四人の女性は自分達が妻になったような感覚で見つめていた。

そんな視線に気付く事もなく、仁志はエルフナインとセレナを優しく抱き締めて幸せに浸っていた。

抱き締められている二人も仁志の腕の中で嬉しそうに笑っていた。

「すっかり父親モードね」

「実際おじさまがエル達と接している時もこういう感じだったぞ」
「ですね。マリアさんもおじさんと会えば分かりますけど、仁志さんが歳を重ねるとこうなるんだらうなって思いますから」
「趣味の話をしてる時なんて、本当に只野さんと同じ表情してますよ」
「あのおく、せつかく俺がエルとセレナに癒してもらってるんだからさ、複雑になる未来予想を話題にしないでくれよ。俺も本気で父さんみたいになるんだらうかって微妙な気持ちになったんだ」
「苦い顔でそう言いながらエルフナインとセレナの頭を優しく撫でる仁志。」

どこからどう見ても父親なそれに響達は苦笑する。

「だがタダノ、俺もお前はぱばさんに似てると思うぞ」

「うん、それは分かってるんだ。分かってるけど複雑なんだよ」

仁志からすれば父は十分尊敬出来る存在である。だがしかし、だからといってそうなりたいかは別だ。

何せ仁志からすれば父とは似たくないと思う部分がある。

そこまでも似たら彼自身としては目も当てられないと考えていたのだから。

「ヒーローの話をしてる兄様と電車の話をしてる時のおじいちゃんはそっくりです」

「そうなのお兄ちゃん」

そこへ放たれる無邪気な感想と確認が仁志の心を揺らす。

「……うん。趣味の話をしてる時の俺と父さんは良く似てると思うよ」

「あつ、そういえば仁志さんとおばさんは普段の考え方が似てます」

「その場その場のテンションや思いつきで喋るところもな。否定しないよ」

「ふふつ、俄然仁志のパパさんとママさんに会うのが楽しみになってきたわ」

「俺は若干恐怖してきたよ」

マリアの声に苦い顔をしながら仁志は腕の中の温もりを抱き締める。

「でも、きつとおじいちゃんやおばあちゃんは姉様や姉さんと会うのを喜んでくれると思います」

「それはそうだろうなあ」

「お兄ちゃん、私もエルみたいにグランパやグランマって呼んだ方がいいかな？」

「そこは……本人達に聞いてごらん。きつと父さんも母さんもセレナにそう聞かれたら呼んで欲しい呼び方を教えてくれるさ」

「うん、分かった」

「じゃあ二人共、歯を磨いてきなさい」

「はーい」

マリアの言葉に従い、二人は仁志の腕の中から離れて洗面台のある脱衣所まで向かう。

それを見送り仁志は微笑んだ。

（やっとエルとセレナが間延びした返事をしてくれるようになったな。少しは不安が薄れたってところか）

あの平屋生活だった頃はよく聞こえていた間延びした二人の返事。

それがまた聞こえた事に満足感と達成感にも似たものを覚え、仁志は小さく頷いた。

「……久しぶりに聞いたな、エルちゃんのおんな声」

そう呟いて響は笑みを浮かべた。

「うん、そうだね。エルちゃん、気の抜けた声だった」

「あの家の頃はよく出してたぞ」

「そうなのか。そうか、あの平屋の頃か……」

未来と翼も笑みを浮かべている。

「仁志、これでいいのよね？」

「ああ、いいよ。少しでもあの二人が子供らしくいれるような時間を作ってやらないとな。こんな状況だからこそ、せめてあの二人には笑っていて欲しいし」

マリアの問いかけにそう返して仁志は振り向いた。

そこにいる四人の女性達に笑みを見せながら。

「俺も最後まで戦うよ。みんなの笑顔のために、さ」

心だけは強くあろう。そう思い直した仁志の笑顔には、以前までの力強さが戻りつつあった。

それに響達は嬉しそうに笑顔を返すのだった……。

「はじめまして、マリア・カデンツァヴァ・イヴです」

「は、はじめまして。私っ、セレナ・カデンツァヴァ・イヴです」

土曜日の午後、あの三階建てのアパートの一室にイヴ姉妹の姿があった。

丁度その日に両親が揃って休みと知った仁志は、電車賃を浮かせるためミレニアムパズルを利用しての移動を提案。

その結果、響とエルフナイン以外は電車に揺られる事もないまま、気付いた時には部屋の中という稀有な経験をする事となったのだ。

「マリアちゃんにセレナちゃんね。名前はエルちゃんやベー君から聞いているわ」

「姉妹とは聞いていたが、歳が結構離れているんだな」

「そうね。でも本当に美人姉妹ねえ。マリアちゃんもセレナちゃんも美人さんだわ」

「ベーが出てきたドアから出てこなかったら仁志と知り合いなんて信じられんな」

「はいはい。どうせ俺は保育園時代しかモテてなかったですよ」

夫妻の言葉に苦い顔を見せる仁志に響達が小さく笑う。

それに仁志がバツが悪そうに頭を掻いた。

「あ、あのっ、お二人の事は何て呼んだらいいですか？」

そんな中、セレナが只野夫妻へそう切り出す。

その姿が二人にはとても幼く見えたのだろう。どこか優しい声で返事をしたのだ。

「好きに呼んでくれて構わない。おじさんでもパパさんでも、おじいちゃんでも」

「そうそう。セレナちゃんの呼び易いように呼んでくれていいから」

「じゃあ、えっと……」

「ならおじさんとおばさんだな。実は、セレナは俺の姪っ子って設定

で前の部屋の大家さんには話してたんだ」

「姪っ子、か……。成程」

「言われるとしつくりくるわ。見かけや雰囲気も親戚の子って感じだもの」

仁志の話にセレナへ感じていた感覚を理解し、小さく頷くと只野夫妻は目の前の少女へ顔を戻した。

「だそうだが、どうかな？」

「もし良かったらそう呼んでくれる？」

「えっと、おじさん、おばさん」

言い慣れない呼び方に違和感を覚えながらセレナがそう呼びかけると、只野夫妻はそれぞれに笑みを浮かべた。

「何（だ）？」

「っ……ううん、呼んでみただけ」

優しい笑みにあったかくなる胸をそっと押さえ、セレナは嬉しそうにそう返した。

ちなみに仁志はセレナからはお兄ちゃんと呼ばれている事を知られ、両親に「本当にそういう趣味はないだろうな」と確認される事となり、若干揉めた事を記す。

さて、そんな事もあった後、早速とばかりに只野夫人はみんなで購入物へ行こうと提案した。

ミレニウムパズルを利用すればこの大人数でもあの車で移動可能と分かったからである。

「どう、ベー君。ダメ？」

「いや、構わないぞままさん。ただ、すーぱーへ着いた後、みんなを出すのが難しい」

「お母さん、ベーの言う通りだ。今じゃ駐車場にだって監視カメラがあるんだから」

「でもせっかくだからみんなでお出かけしたいじゃない」

「出かけるだけなら出来るが、それでこの子達が楽しめないのなら意味がないでしょう」

「それをどうにか考えるのっ。あなたは私よりも賢いんでしょ？」

じゃあ考えてみせて」

「思ってもない事を言うのは止めなさい。まったく、都合の良い時だけそういう事を」

「それはそっちでしよ！ 普段は偉そうに講釈たれるのにこういう」

「はいストップ。つと、セレナ、マリア、こういう二人なんだ、俺の両親」

ヒートアップしそうな気配を感じて仁志が止めに入る。

もう見慣れた感さえある響とエルフナイン、ヴェイグは笑みを浮かべ、知っている翼達が苦笑し、初めて見たイヴ姉妹だけが目を丸くしていた。

「き、聞いてはいたけど……」

「本当にケンカみたい……」

マリアとセレナの視線の先ではもう何事もなかったかのように平然としている只野夫妻がいた。

「でも、俺は母さんの気持ちも父さんの気持ちも分かるよ。なので、こういうのならどうだ？ あの車に乗れるのは運転手を除けば……精々大人四人だろう。だから母さんと俺、マリア、そしてセレナとエルは最初から車。残りはパズル内で待機してもらって……つと、母さん行き先は？」

「そうねえ……今日はそこまで大きなとこじゃない方がいい？」

「私に聞かないでください。それと、この子達はむしろ大きい所の方がいいでしょう。見たい物だってあるでしょうし」

「それもそうか。じゃあ……岡崎のイオン？」

「遠すぎる」

運転できる男二人が声と表情を揃えて突っ込んだ瞬間、只野夫人以外が思わず笑った。

只野夫人だけはそのツツコミに慥然としていた。

「何よ二人して。じゃあどこならいいの？」

「運転するのは父さんだから父さん決めてくれよ」

「私は別にどこでもいい。ただ、あまりにも遠いところはどうかと思っただけだ」

「なら……東浦のイオン？」

「だから遠い。あとイオンしかないのか」

「またも見事なハモリを見せる只野親子に響達が楽しげに笑う。

「何せ今度は只野夫人も笑っていたのだから。」

「そう言われると分かって言っていたのだとそこから分かり、今度は只野親子が慥然としていた。」

「まったく、父さん、これはこっちで決める方がいいぞ」

「だな。エル、セレナ、何か見たい物はあるか？ あるなら言ってみなさい」

「え？」

「まさか話を振られると思っていなかった二人が少し驚きを見せるも、そんな少女達へ仁志が軽く笑みを浮かべて二人の目線の高さへ合わせるようにしゃがんだ。」

「父さんは二人の希望を優先したいんだよ。だから好きに希望を言っごらん。服でも靴でも本でもオモチャでも何でもいい。二人が見たい物を言えばいいんだ」

「そうなんですか？」

「つぶらな瞳を向ける二人に仁志は苦笑しながら頷くと振り返って自分の父を見た。」

「彼も孫や姪のように思っている少女二人のその眼差しが照れくさいのか少し横を向いて頬を掻いた。」

「それが仁志の照れ隠しと同じだと気づき、響達は親子の絆のようなものをそこに感じ取って笑みを浮かべる。」

「それで、何かないか？」

「姉さん、何かありますか？」

「そうだね……」

「そこでセレナは只野夫人へと顔を向けた。」

「あら、どうしたの？」

「えっと、おばさんは何かありますか？」

「まあなんていい子なの。エルちゃんもいい子だったけどセレナちゃんもいい子ね。でも私の事は気にしなくていいから。セレナちゃんも」

んとエルちゃんの好きな物を言ってみて？」

そつとセレナの頭を撫でる手付きは、もう何度もそういう事をしてきたと分かるものだった。

そしてそれはセレナに母を思わせるに十分な温もりであった。

(ママって、こんな感じなのかな……?)

ママと呼ぶナスターシャはセレナの事を撫でる事などないに等しく、それ故セレナにとっては初めてにも等しい家族以外の成人女性からのスキンシップだった。

「あ、あの、おばさん」

「なあに？」

「も、もう少し撫でてもらってもいい？」

気付けばセレナはそう言い出していた。それは久しぶりとなる甘えん坊の顔だ。

それを見たマリアはすぐにセレナの心情を察して複雑な顔をしていた。

(セレナ、貴方は仁志のママさんに母親を見たのね……)

まだ幼いセレナが甘えられる相手を求めるのは当然であり、その相手にある程度歳を重ねた者を選ぶのはマリアにも理解出来てしまったのだ。

どこか複雑そうに平行世界の妹を見つめるマリア。

その瞳の中には、只野夫人に頭を撫でられて微笑むセレナの姿が映っていた。

「う〜……ママさん、アタシも撫でて欲しいデス」

「え？」

「私も、お願いしたいです。ダメですか？」

「あらあら……」

幸せそうなセレナを見ていた切歌が声を上げると、ならばとばかりに調も声を上げる。

彼女達も母の愛を知らず育った二人だ。セレナ同様母親を思わせるくれる相手はいたが、スキンシップを経験してこなかったに等しいため羨ましくなったのだった。

こうして三人の少女を優しく撫でながら只野夫人は微笑む。その隣ではエルフナインが仁志の父に同じ事をされていた。

「えへへ、おじいちゃんの手は兄様と違ってごつごつしています」「痛くないか？」

「平気です。僕、この手も大好きです」

高校を卒業してからずっと製造業で働き続けているその手は、とてもではないが綺麗な手ではない。

作業機械を触り続けてきた事もあり、色はどこか黒ずみ、爪も一部は割れたりしているのだ。

それでも、そんな手がエルフナインは好きだった。職人の手と、そう感じる事が出来るからかもしれない。

そして仁志もそんな父の手が好きだった。

（俺もそうだったっけ。たまに父さんに撫でられた時は、硬くなった掌とか指の皮の感触があつて、少し痛い時もあったりするんだけど、それが父さんに撫でられてるって強く感じられて嬉しかったのかな……）

そんな父が父親になった年齢に自分は近づきつつあると、そう思い出して仁志は小さく息を吐いた。

自分も父のような父親になれるだろうか。

妻を得て、子を持ち、家庭をしつかりと守っていけるだろうかと自問して。

「ぱぱさん、ママさん、買い物はどうするんだ？」

「あつ」

そこへ放たれるヴェイグの純粹な疑問。

それが久しぶりに小さな子を持つ親モードへ戻った夫妻を現実に戻した。

「ったく、仕方ないな。もう俺が決めるぞ。母さんの夜勤の買い物で御用達のとこでいいだろ。あそこならみんなもある程度店の配置とか知ってるしな」

「そうなの？」

「はい（デス）」

「そうなのか？」

「はい！」

「と言う訳で、父さん、屋上駐車場に止めてくれ。そこなら監視カメラはないから周囲の目だけ気を付ければいいしな」

「それはいいが帰りはどうする？」

「屋上なら周囲さえ気を付ければ何とかなると思うんだ。だろ、みんな」

その問いかけに響達が頷いた事で打ち合わせは終わった。

一部の者を残して響達がミレニアムパズルへと入っていき、ヴェイグはエルフナインの中へと消える。

残された仁志達は、まるで三世代家族のような状態で車へと乗り込んだ。

「じゃ、運転よろしく」

「分かってる」

「マリアちゃん、狭くない？」

「大丈夫です。セレナとエルはどう？」

「うん、平気」

「僕もです」

笑顔の二人にマリアは微笑みを返して頷いた。

と、そこで助手席から仁志が後部座席へ顔を出した。

「シートベルトを忘れるなよ？」

「そっちも大丈夫よ。ちゃんと確認済み」

まるで夫婦のようなそのやり取りに只野夫人がニヤニヤと笑みを浮かべた。

「まるであんた達夫婦みたいね」

「っ?!」

「貴方はまたそうやって余計な事を……」

揃って赤面する二人を横目で見ながら仁志の父はアクセルをゆっくり踏み始めた。

動き出す車と反対に仁志とマリアはその場からまったく動かなくなっていた。

そんな二人に、只野夫妻はどこか微笑ましいものを見るような気持ちでいたのだった……。

「こんなに綺麗な子や可愛い子がいるのに、まだ二人もそういう子がいるなんてねえ……」

以前全員で撮ったテーマパークでの画像を見ながら、只野夫人は噛み締めるようにそう呟いて顔を上げると、そこにいた響へスマートフォンを差し出したため息を吐いた。

戦姫絶唱シンフォギアを見た事がないでも、彼女も幼い頃の仁志に付き合っていくつかの特撮やアニメを見た事がある故、悪と戦うという事が持つ恐ろしさや危険性をぼんやりとではあるが理解出来てしまふのだ。

「響ちゃん達、大変だろうけど体に気を付けて頑張つてね。もしガーズとか点滴とかが必要になったら教えて。私で手に入る物なら何とかするから」

「あ、ありがとうございます」

「もしそうだったら、その時はおばさんを遠慮なく頼らせてもらいます」

その未来の返事に只野夫人は嬉しそうに頷いた。

ただその未来の手には小さ目の紙袋がある。しかも同じ色の袋を響も手にしていたのだ。

実は、買い物を終えて帰宅した只野夫妻はそれぞれで響達へ何かをプレゼントしていた。

夫妻も悟っているのだ。響達がいついなくなってもおかしくなく、別れの挨拶さえも出来るかどうか怪しい事を。

だからこそその贈り物だった。餞別の品と言う訳ではないが、息子の事を守ってくれている事への礼も含めての感謝の品であったのだ。

エルフラインとセレナはその手にそれぞれ揃いの髪飾りを持っている。星を模ったそれは、そこまで高価な物ではない。

夫妻からのプレゼントであるそれを二人は笑顔で見つめていた。エルフラインが黄色の、セレナが緑色の星の髪飾りである。

「姉さん、早速着けてみましょう。こつちに洗面台がありますから」
「うん、じゃあ着けてみようか」

連れ立って洗面所兼脱衣所へ向かう二人。

その後ろでは、切歌と調が世界的に有名な猫のキャラクターが付いたキーホルダーを見つめて微笑んでいた。

「可愛いデス」

「うん、可愛い」

「寮の鍵とか付けないとデスね」

「そうだね。大事に使おう」

自分達の世界にはないキャラクターをあしらった品物。

それが持つ意味と贈ってくれた相手の事を思うと常に身に着けられる物は嬉しいのだろう。

二人はずつとニコニコと掌のキーホルダーを眺め続ける。

だが、何故か翼とマリアはその手に紙袋を二つ持っていた。

「思いがけない事になったな」

「そうね。でも、もしかするとこれがあの二人を元に戻す力になってくれるかもしれないわ」

一つは翼とマリアへのプレゼントであるが、もう一つは何とクリスマスと奏用のプレゼントだったのだ。

「これを見ていると、おじさまとおばさまはやはり仁志さんの両親だと強く感じる」

「本当よ。まさかない二人の分までなんて……」

「その二人も仁志を支えてくれたらしいじゃないか。なら、そのお礼みたいなものだ。今は色々あって難しいだろうが、いつか渡してくれると嬉しいよ」

「おじさま……」

聞こえた言葉に翼が振り返ると、そこには仁志に似た笑みを浮かべる彼の父が立っていた。

「私はあまりヒーロー物を見た事がある訳じゃないが、それでもこれだけは知っている。最後に勝つのは諦めない者だ。なら、君達はきつと最後には勝つはずだよ」

「……はい。パパさんの気持ちもきつとその助けになります」

「そうか。それは嬉しいな。こんな私でも君達の助けになれるのなら、いくらでも願うし祈ろうじゃないか」

そう言つて微かに笑みを見せる姿が翼とマリアには仁志と重なる。

そしてそれだけではなく、二人には一瞬ではあるがとある人物を思い出させたのだ。

(お父様……のようだったな……)

(一瞬翼のパパさんみたいに見えたわ。年齢と不器用そうな雰囲気のせい、かしら?)

そんな風に響達が過ごしている中、仁志はやっと買つてきた食料を冷蔵庫へ片付け終えて息を吐いていた。

「ふっつ、全部しまい終わつたぞ」

「はいご苦労様。あとは手を洗つてきなさい」

「言われなくてもそうするつての。つたく、いつまで子ども扱いだ……」

「いつまでもよく。子供はね、親からすればずっと子供なんだから」

「へいへい。そうでしたそうでした」

洗面所へ向かつて動き出す背中へ放たれる言葉とその反応に響達が小さく笑みを浮かべる。

すると、その笑みが深くなるような事がそのすぐ後に起きた。

「あつ、兄様。これを見てください」

「お兄ちゃん、この髪飾りどうかな？ 似合つてる？」

それぞれ贈られた髪飾りを着けてエルフナインとセレナが洗面所から姿を見せたのだ。

その二人からの眼差しに仁志は優しい笑みを浮かべると深く頷いた。

「勿論さ。二人共妖精か天使かつてぐらい可愛いよ」

「あ……ふふっ」

そつと撫でる程度の触れ合い。それに嬉しくなつて微笑む二人は、仁志の娘と言つても不思議ではないぐらいに彼へ懐いているのが分かる程だった。

只野夫妻もその様子を見て一瞬軽い驚きを見せたものの、すぐに感慨深そうな表情へ変わって静かに頷いていたのだ。

「ほら、みんなにも見せておいで」

「はい（うん）！」

そう言つて二人を送り出す様はまさに父親のそれであつた。

そこに仁志の人間的な成長を感じ取り、夫妻はそれぞれ小さく笑みを見せた。

髪飾りを着けたエルフナインとセレナを響達はそれぞれに愛でて、二人の天使はその愛らしさをより強くする。

ヴェイグはそれによつて強くなる優しい匂いに満足そうに何度も頷き、仁志も嬉しそうにその光景を眺めた。

「タダノ」

「ん？」

「やっぱりままさんやぱぱさんがいるとエルは嬉しそうだ」

「そうだな」

「ああ。それとままさんやぱぱさんもだ」

「……そう、だな」

「タダノ、俺はここに來て良かったと本当に思う」

「え？」

聞こえた言葉に仁志はヴェイグへと顔を向ける。ヴェイグは目の前の光景を見つめて微笑んでいた。

「人間は悪い奴だけじゃない。そう俺はこの世界で思い出せた。タダノやままさんにはぱぱさんのおかげだ」

「ヴェイグ……」

「だから俺もこの世界を守りたい。俺に出来る事なんてそんなにない。それでも、それでも俺は戦う。俺の大事な友達に住む世界を守るために」

そこでヴェイグは仁志へと顔を向けた。見た目も生まれた世界も異なる二人の眼差しが交わる。

真つ直ぐに相手を見つめるそれに、二人は同時に笑みを浮かべた。

「タダノ、これからはヒトシつて呼んでもいいか？　それがお前の名

前なんだろう?」

「ああ」

「ならこれからはそう呼ぶ。ママさんやぱさんもタダノらしいからな。そういう訳でヒトシ、これからもよろしく頼む」

「こちらこそ心強いよ。これからもよろしく頼むな、ヴェイグ」

そう告げて仁志はその場でしやがむとヴェイグへ手を差し出した。それにヴェイグはすぐ手を差し出して繋ぐ。

「これからも一緒に戦おう」

告げ合うのは誓い。交わすのは約束。

互いに名前で呼び合う事でより二人の絆は強いものへと変わった。

ヴェイグは仁志を通じて人間を見つめ直し、その心から完全に影を取り払った事で信じる強さを取り戻したのだ。

繋ぎ合う手から感じる温もりに異なる種族の若者は笑みを向け合う。

単なる友人から親友へとその絆が成長した瞬間であった……。

「仁志の好物?」

時刻は午後四時を過ぎた辺り。私はこの辺りを散策すると言ってエル達が出かけたのを利用し、ママさんから仁志の味の好みを探ろうとしていた。

仁志はヴェイグと一緒にになって自分の部屋で寝ている。今夜も勤務だから少しでも、そう言っていた。

傍には響と未来がついている。あの二人は散策へ行かずに残ったのだ。

私は夕食の支度を手伝うために残っている。パパさんはエル達と一緒にになって出掛けていった。

その時の表情は嬉しそうだったので、今頃エル達と手を繋いでいるかもしれないわね。

「はい。その、私達と違って仁志は体を鍛えてる訳でもないですし、ギアという防備がある訳でもありません。なので、せめて食べ物で精神面のストレスなどを緩和させたいと」

私がそう言うともママさんは小さく笑みを浮かべて手招きしてきた。えっと、これは耳を貸せばいいのかしら？

「何ですか？」

「マリアちゃん、もしかしてあの子の事、本当に好き？」

「っ!？」

顔から火が出るかと思うぐらいの恥ずかしさだった。

何せ本当にと付けられたと言う事は、私が仁志の事を好きってママさんからは見えてたって事だもの。

「ふふっ、その様子じゃそうなのね。あの子、いつの間にこんな美人さんに惚れられたんだか……」

「あ、あの、私も最初はそんな相手と思ってなかったんです。でも、その、色々と世話を焼いたり焼かれたりしてる内に……」

「ああ、そうなの？　じゃ、ある意味私に似てるわね」

「え?」

そこでママさんは自分とパパさんの馴れ初めを話してくれた。お見合い結婚だった事や、それ故に結婚してからパパさんの良い所も悪い所も知った事を。

「恋愛対象ならあの人はないってあの頃の私は思ってた。冴えない人でね。真面目だけが取り柄って感じだったもの」

まさしく仁志だと、そう思った。

だからかもしれないけど、ママさんは続けてこう言ってきた。

「物は試しつて言うけど、きつと人間もそうなのよ。ないと思ってた相手でも、付き合ってみると意外と悪くないって思う事もあるの」

「そう、かもしれません」

私も仁志とはそうだった。嫌いとはまではいかないでも、そういう対象として見ていた事はなかった。

けれど、あの平屋で関わっていく内に彼の色んな面を知る事になった。

エルやセレナ、ヴェイグを相手にしている姿を見て、ただ優しいだけじゃないとも思った。

「それに、結婚してから惚れる事だってあるのよっ。」

「え？」

「お見合い結婚で良かったと思っただのはそこかしらね。要はね、結婚生活を送りながら知らず恋愛してたのよ」

「結婚しながら恋愛……」

「そうそう。あの人、乗り物とかが好きなんだけど、それを私が知ったのは結婚して仁志を産んでしばらくしてからなの」

ママさんが言うには、仁志が三歳になった頃、家族であのテーマパークへ行く事にして新幹線に乗ったらしい。

その時、パパさんが嬉々として計画を立てて、新幹線を前にした時にとびきりの笑顔を見せたそうだ。

「そこで無邪気に笑うあの人を見て、ああ、この人ってこんな風に笑うんだって思ったのよ。子供みたいな、そうねえ、少年みたいって言えばいいのかしら？ その笑顔でやられちゃったのよ」

同じだ。私が仁志を好きになっていったのもそういうふとした時の笑顔だった。

「あと、あの人かなり子煩悩でね。仁志が物心ついた辺りからは毎年お盆と正月は旅行に連れて行ったの。まあもつとも、自分が乗りたい電車やら船やらを組み込んでたから自分のためでもあったんでしょうけど」

そう言つて苦笑するママさんは幸せそうに見える。

その後もママさんの話を聞いて私は思った。

この人は本当に夫や息子を大事に思ってるんだと。そして夫への信頼と愛情があるから、相手へ甘えるようにあんな風な接し方が出来るんだとも。

だから分かった。ああ、これは惚気られてるんだと。

だけど、同時に一つの助言でもある。結婚したらゴールじゃない。そこからまた新しいスタートなんだって。

ママさんがパパさんに夫婦となってから惚れたように、私も仮に仁志と結婚したらそこから彼とまた恋愛を出来ないと続かないかもしれない。

「「「ただいま（デース）」」」」

そうしてママさんの話を聞いているとエル達が帰ってきたので思
い出話はそこで終了。

ただ、ママさんは最後に私へこう言った。

——結婚つてものをあまり重く考え過ぎないようにね。誰だって
初めての事は失敗するのが普通なんだから。

きっとママさんも失敗しそうになった事があるんだろう。

何となくだけどそう思った。

「分かりました。でも、出来ればまたお話を聞きたいです」

「いいわよ。いつでもいらっしやい。仁志の事に関係なくね」

「……ありがとうございます、ママさん」

ニツコリと微笑んでくれたママさんに、私も遠い記憶の中のママを
重ねた。

本当に、あつたかい場所ね、この家も。

だからこそ余計に思う。この家を悪意との戦いに巻き込みたくな
いと。

仁志がどうしてここへ戻らないかはきつとそこにも関係してるは
ず。

……守り抜きたいと、そう強く思う。この家の人々を、この世界を。

ギアも聖遺物も存在しない世界だからこそ、ここを悪意の好きにし
てたまるものか。

「さて、じゃあ晩ご飯の支度を始めましょうか」

「はい」

「あつ、それなら私も手伝いをさせてください」

「じゃあいつそ翼ちゃんとマリアちゃんに作ってもらいましょうか」

「貴方はそうやって楽をして……」

その言葉へパパさんがそう呆れ気味に言うと、ママさんがフフンと
言うように笑った。

「いいのよ。だって、マリアちゃんは仁志の好物を知りたいみたいだ
し、なら実際に作ってもらって覚えてもらう方がいいでしょ？」

「……そうなのか、イブさん」

パパさんの軽く戸惑う顔に何と返せばいいのか分からない。

見れば翼が私を見て苦笑していた。

「ははっ、成程仁志さんの好物をか。なら私も知りたいです、おばさま」

「あら、そうなの？ これは大変な事になってきたわ。お父さん、あの子、知らない間にモテるようになったみたい」

「……私は信じられません」

「でも事実よ？ 嬉しい悲鳴ね。響ちゃんにもらってもらおうと思っただけど、マリアちゃんや翼ちゃんも絶対いい奥さんになるだろうし、困るわ」

「イブさん、風鳴さん、立花さんにも言ったが仁志よりも将来性がある男は沢山いるぞ。その、君達は事情が事情だからあまり男と深く関わった事がないか少ないんだろう？ 悪い事は言わないから多くと多くの男を見なさい。手近なところで妥協するのは止めた方がいい」

パパさんは本気で私と翼の事を心配しているようだった。

普通逆じゃないかしらと思うけど、仁志のパパと思った瞬間納得出来てしまう。

成程、仁志の他者優先な考えはパパさんに影響されたんだわ。

「ご心配なく。ある意味で私や翼にとって仁志以上の相手はいませんので」

「ああ。おじさま、お気持ち嬉しく思いますが、私もマリアも自分の判断を反省する事はあっても後悔はしませんから」

そう翼が言い切るとパパさんは驚いた顔をして二回瞬きをした。

ママさんは……嬉しそうに微笑んでる。

「お父さん、女は腹を括ると強い。それと、色恋は他人が首を突っ込み過ぎると蹴られちゃうから」

「……だとしても、どうして仁志なんかが……」

「私達だってもう十年以上あの子の事を見てないんだから、その十年で何かあったのかもしれないじゃない。まあ、たしかに再会しても変わった感じがなかったけど」

ちゃんと最後にオチをつける辺りママさんも厳しいわ。

でも、響にも、か。やっぱりあの子は仁志への想いを悟られたのね。

結局夕食の支度は私と翼が中心となってやりながら、時々ママさんが教えてくれる形となった。

けど、すっかり調やセレナも聞いていて覚えようとしているのには笑ってしまった。

切歌はエルと二人でお風呂掃除をしていたらしい。

それと、仁志はやはりうなされたようだ。

未来が言うには、響と二人で頬へキスをしたらすぐに収まったとの事だけど、やはり実家でもダメなのね。

こうなるとやはり私達が仁志と触れ合う事が重要なんだろう。

ギアを持った私達が仁志へ触れているという事が。

ギア、か……。

もしかするとそこに埋め込まれた依り代が関係してるかもしれない。

悪意をこれまで祓い続けてきた力を持つ依り代の欠片。それが埋め込まれているからこそ、私達は悪意に抗えているのだから……。

「じゃ、行ってくる」

「「「「「行つてらっしゃい（ブス）」」」」」

響達に見送られ、仁志は玄関を出て駐車場へと向かう。

体調も最近の中では一番と言つていい程良く、彼は翌日の事を考えていたぐらいだった。

（明日は勤務終わりでこっちへ戻ってきて、仮眠を取ってから父さんに頼んで家の前まで送ってもらうとして、それからみんなの特訓に付き合う感じだな）

本音を言えば仁志も奏やクリスを助けに行きたいところではある。

だが、現状ではそれが厳しいと分かっているため断腸の想いで先送りする事になっていた。

実家の車を借り、勤務先へと向かう仁志。

寒さも厳しさを増しており、冬の足音が聞こえ始めている中、仁志は車を駐車場に止めて店へと入っていく。

「いらっしゃいませー！ あっ、店長」

「おはよう近藤さん。オーナーは中？」

「おはようございます。はい、中にいます」

レジで笑顔を浮かべるふみへ挨拶をしながら仁志は事務所へと入った。

そこではオーナーがPCを見つめて腕組みをしていた。

「おはようございます」

「ん？ おっ、只野君。おはよう」

「おはようございます。で、何かありました？」

「え？ ああ、特にそういう訳じゃないよ。おでんの売り上げが上がり出してるなあって」

「最近寒くなってきましたからね。じゃ、そろそろ夜中も仕込んでいきますか？」

「そう、だね。売れ筋を朝買えるように仕込んでいこう」

「分かりました」

話は終わったと自分のロッカーから上着を取り出して羽織る仁志。

その背中へふと思いつ出したかのようにオーナーが声をかけた。

「そうそう。只野君は知ってたかい？ 僕は全然知らなかったんだけどね」

「何をです？」

次の言葉に仁志は絶句する事となる。

——茂部君、雪音さんと付き合ってるらしいよ。

勤務も終わり、俺は実家へと車を走らせながらずっとある事について考えていた。

「どういう事なんだ？ クリスと茂部君が……付き合ってる？」

正確には付き合っていた、になるんだろうか。

何せ今のクリスは悪意に動かされる状態だし、この世界にはいない。

ただ、茂部君が付き合っていると行っていただけとオーナーは教えてくれた。

正直茂部君はクリスが嫌うタイプの筆頭のような相手だし、仲良くしているところを見た事がない。

オーナーも俺と同じだったらしくそれとなく同じ夕勤の女性陣へ聞いたが、たしかに茂部君本人がそう言ってるのを聞いた事はあってもクリス本人からは一切そういう情報は出た事はなかったらしい

だからそこが気になっている。全て茂部君発信なのだ。

しかもオーナーへは昨日から言い出したそうで、クリス自身からの発信は当然ながらこれまでなかったらしい。

そもそも、彼女は俺へ好意を寄せてくれていた。その裏側で茂部君と関係を持つとは考えにくい。

「……………待てよ？」

はたと気付く。クリスは、おそらくみんなの中で一番悪意に毒されている。

それはつまり、真つ先に悪意をその身に宿してしまったとも言えるはずだ。

そして、当然だがクリスは茂部君と二人で夕方働く事もあった。

もし、もしも悪意がクリスをあの日以前から操っていたとしたら、茂部君を仕事終わりに誘い……

「キス、させて自分の分身を宿した、可能性がある……」

今の俺とは別で、おそらく悪意から見ても分かり易い欲望の塊の存在。

その内部へ入り込み、言うなれば神の邪心を吸収して力を増した？
あるいは、俺と違ってあらゆる欲求を抱えて抑える事をしない彼や
その仲間達から負の念を取り込んでいた？

その結果がああの状態であり、現状の強さかもしれない。
そして、そう考えればああ時に何故茂部君があそこにいたのかも納
得出来る。

視線の先に赤信号が見えたのでゆっくり減速させて車を停止させ
る。

アイドリング状態特有の音が車内に響く中、俺はハンドルを握り締
めて呟いた。

「揺さぶりにきたのか。あるいは、俺の心を乱しに来たんだ」

その瞬間信号が青へ変わったので車をゆつくりと発進させて加速
させる。

俺を通じてどう動くかを把握したから茂部君をあそこへ行かせた
とすれば、どうして勤務時間の数時間前に彼がいたのかが理解出来
る。

それと、悪夢の内容が変わった事もだ。俺の過去を繰り返しても今
があるためにもう効果が出せないと気付いたんだ。

だから今を壊す方向へ切り替えた。

ただそれもいきなりじゃ効果が薄いと考えて、そうなりえそうな要
素を作ったんだろう。

「まあ、そのために結果手の内を明かす事になった訳だけど」

逆に言えばそれぐらい悪意も追い詰められてるんだろう。

残るは奏とクリス。その二人を取り戻してしまえば、残るは俺の中
にいるだろう悪意のみ。

だけどその除去方法もぼんやりとではあるが浮かんできている以
上、悪意としてはなりふり構っていられないんだ。

実際、今の俺は以前よりはかなり体調が良くなってきている。

これは、やっぱりみんなからの想いの力が作用しているんだと思
う。

「愛はミラクルってか」

愛の心にて悪しき空間を断てるんだろうか、今の俺達は。いや、きつとそういう事なんだ。悪意を唯一断ち斬れるのは愛なんだろう。

やがて車は見覚えのあるアパート横の駐車場へと到着。所定の位置へ駐車し、俺はアパートの入口へと向かった。階段を上り、最上階である三階まで到着すると向かって右側のドアへと近付く。

静かに鍵を開けてそつとドアを開けて中へと入る。

「ただいま」

まだ誰も起きてないかとも思いながら靴を脱いでリビングへと向かう。

母さんの部屋の戸は閉まってるのでまだ寝てるらしい。

なので静かにリビングへのドアを開けるとソファに父さんが座ってた。

「ただいま。それとおはよう」

「ああ、おはよう。風鳴さんとイブさんが散歩に行ってる。あとは誰も起きてきてないぞ」

「母さんはやつぱり？」

「まだ寝てる。ただ、今日は日勤だからそろそろ起きると思うが……」

「そっか」

一度だけこつちを見た後はテレビへと視線を戻してずっとニュースを見つめる父さんは、俺がよく知る父さんだ。

あとは新聞があれば完璧だが、おそらくまだ回収してないんだろう。

ドアのところにある郵便受け、開け閉めするとちよつとうるさいかな。

母さんの部屋に聞こえるかもしれないと気を遣ってるんだ。

ここもきつと、俺が知らなかっただけで変わらないところなんだろう。

そう思つて父さんを見てるとこつちへ父さんが顔を向けた。

「何だ？」

「ん？ いや、何でもないよ」

母さんが父さんと上手くいつてる理由の一端を見た気がして、俺は軽く笑みを浮かべながら洗面所へと向かう。

手を洗って、ついでに顔も洗って、タオルで拭いたら自分の部屋だった場所の中へと入る。

俺は大きいため息を吐いてからそこにある一枚のドアを見つめた。

「……やっぱりドアの色が違うなあ」

あの時見たドアは黒い物になってたけど今は茶色のドアだ。

やっぱりあのドアそのものが悪意の欠片というかエネルギーで塗られていたんだろう。

さて着替えようと部屋に置いた荷物から寝間着を取り出したところではたと気付く。

これ、誰かが起きてきたら不味い。別に俺は見られてもいいが、向こうは年頃の少女達だしな。

こうなると誰か出てくるまで待つべきか。うん、安全策ならそれがいい。

なので計画変更し俺はリビングへと逆戻り。

父さんの不思議そうな視線を浴びながらその隣へと座る。

「どうした？」

「いや、中で着替えてる時に誰か出て来たらどうしようかと」

「……………ああ、そういう事か」

そこで父さんから聞かされたのは、何と父さんと母さんも一度パズルの中へ入ってみたとの事。

明らかに俺の部屋よりも広い草原に二人は感心したそうで、ヴェイグから簡単な説明を受けたらしい。

「何せ広い草原があったからな。どういう事だと思った」

「まあそうだろうな」

「ベーは凄いな。ミレニアムパズル、だったか。せいりぶつの力でやっていると言っていたが……」

「そうそう。完全聖遺物っていう、まあとんでもアイテムだ。ヴェイ

グの一族はそれを創り出せる力を持つてたんだよ」

「……それで今ベーは一人なのか」

さすがに鋭いな。いや、もしかすると軽くヴェイグも話したのかも
しれない。

何せ実の息子を差し置いて寝台特急での旅行を持ちかけられる程
だし、職人氣質の父さんに仲間の誰かでも重ねた可能性もある。

「その力に目を着けた人間がヴェイグ達を戦争に巻き込んだんだ。
で、当時未熟だったヴェイグは仲間達を守る事も出来ず、ただ一人で
自分に、ヴェイグという存在に会いに来る相手を待ち続けた」

「……あのドアが誰でも開けられる訳じゃないのはそういう事か」

「開けようとしたのか?」

「いや、ベーが私やお母さんなら開けられるだろうが他の人間じゃ開
けられないと言ってたんだ。だからもし泥棒などが入っても大丈夫
だと」

そうして話していると父さんが何かに気付いた顔をしたので俺も振
り返ると、そこには寝間着姿の未来がいた。

「おはようございます、おじさん」

「おはよう小日向さん」

「おはよう未来。ただいま」

「おかえりなさい只野さん。お疲れ様です」

何だか未来が嫁さんみたいな雰囲気になったな。

心なしか父さんが嬉しそうなのはそういう事なんだろうか?

「未来、他に誰か起きてる?」

「いえ、みんな寝てますよ」

「なら今なら着替えられるか。俺も着替えたら仮眠取るよ。父さん、
部屋と布団貸してもらっていいか? 夕方までには俺達戻るから」

「そうか。好きに使え」

「ありがと。じゃ、未来、そういう事だから朝飯はいいってマリアや調
に伝えておいてくれ」

「分かりました」

さくつと着替えてから父さんの部屋に入ると、そこは出て行く前と

何も変わってないなって印象だった。

置いてある物も匂いも、何もかもが俺が出て行く前と同じだった。その懐かしささえ感じる部屋で、俺は畳まれてる布団を敷いて横になった。

「……父さんの匂いがするな」

加齢臭なんだろうとは思うけど、俺にとっては父さんの匂いだ。小さい頃、休みの日の父さんとたまに一緒に寝た事を思い出す。そうそう、それとは別に父さんの布団で寝る事もあったなあ。

俺が小さい頃は我が家は万年床に近くて、常に布団が敷かれてたっけ。

で、時々学校から帰ってきた俺は何となしに父さんの布団に入っ
て、そのまま寝てしまう事もあったんだ。

そんな事を思い出しながら俺は目を閉じて眠りへと就いた。

で、起きたのは昼過ぎだった。

久しぶりとなるぐらいの、夢を見ないで眠れた時間だった。

何せそこで思い出したぐらいだ。今の俺はみんなが傍にいてくれないとちゃんと寝れないって。

「……理由は父さんの匂い、だろうか？」

ぼんやりとある作品の一場面を思い出す。

それは、現在を忘れて過去に戻ってしまった父を息子が元に戻すシーンだ。

何と、あろう事かその息子は父親の靴の匂いを嗅がせる事で子供に戻っていた父親の記憶を大人の、親の記憶へと時間経過させるんだ。「匂い、か。そういうえば、嗅覚と味覚は記憶へ直結するってよく言うなあ」

父さんの匂いが染み付いた布団だから、俺はある意味安心して眠れたのだろうか？

あるいは、父親の匂いに包まれる事で子供として守られてるような気持ちになれたのだろうか？

答えは分からないが、これまでの事から考えるに愛つてものを俺がこの布団から感じたのかもしれない。

「……親の愛、か。一種無償の愛だよな」

悪意の弱点が愛なら、きつとそういう事なんだろう。

ただ、これはみんなの内の誰かじゃ無理なんだ。それじゃ、俺が強い愛を感じられない。

父さんや母さんみたいにこれまでの、小さい頃からの記憶と紐付いてないからな。

まだ若干寝惚けてる頭をガシガシと搔いて布団から出る。

微かに声がするのでみんな起きてるんだろうな、やっぱり。

なので布団を畳んで、寝る前の状態へ戻して部屋の外へ。

「あら？ 起きたのね」

出てすぐにダイニングテーブルに着いていたマリアと顔を合わせる。

そこには翼と未来にセレナの姿もあった。

「おはよう。昼は食べた？」

「ううん、まだだよお兄ちゃん」

「只野さん、朝を食わずに寝たからきつとお腹空かせてるだろうし、お昼ご飯になったら起こしましょうかって話してたんです」

「成程」

「仁志さん、よく寝れたみたいだね」

「ああ、うん。父さんの匂いのおかげかも」

「二「匂い？」」

「そう」

と、そこで気付いた。父さんがいない事に。

それとエルやヴェイグ、響とザババコンビもだ。

「父さん達は？」

「おじさま達なら車で買い物へ行ってる。昨日とは違う……アピタへ行くとか」

「ああ、成程ね」

助手席に響、後部座席にザババコンビとエルにヴェイグなら余裕だろう。

じゃ、マリア達は留守番か。それも、何となくだけ俺のために

残ってくれた気がする。

「でも良かったあ。お兄ちゃんがうなされてないかみんなの時々
チェックしてたんだよ」

「そっか」

「おじさまへ理由を話したら驚かれました。そんな事までしてくるの
かと」

「でも安心して。手を握ったりとかの触れ合う事で鎮静するって言っ
ておいたから」

さすがマリア、嘘は言っていないな。

何せ頼とは言え、可愛く綺麗な女の子達にキスされないとうなされ
る、なんて聞いたたら大抵の人間がふぎけるのかと思うだろうし。

父さんなら「まんじゅうこわい」かって言いそうだ。

「にしても、父さんは本気でエルとヴェイグ気に入り過ぎだろ」

「おじさん、ヴェイグさんの事をもう一人の息子みたいに思ってるっ
て言ってた。お兄ちゃんに弟か妹をつくってあげたかったけど、お金
の事で大変で諦めたからって」

「おじさまは姉弟が多かったと聞いたから、余計そう思ったのかもし
れないね」

「そうだなあ。しかも長男だったからな、父さん」

その辺りの話はちよこちよこ聞いた事がある。

特に食事は戦争だったと笑い混じりに教えてくれた。

だから父さんは右でも左でも箸が使えるようになったとも。

実際見せてもらったけど、見事なもんだったなあ。

なんて話をマリア達へもするとやっぱり軽く驚かれた。

「右でも左でも箸を、ね」

「凄いなあ。でも、それぐらいしないとおかずが食べられないぐらい
だったんだ……」

「何せ四人も育ち盛りがいるんだ。父さんが言うには好き嫌いもして
られないぐらいだったらしい」

「そうなんだ……。じゃあ、好き嫌いが出来るってある意味幸せな事
なんだね」

「そうなるな。そんなおじさまの好物は何？」

「父さんの？ 筆頭は牡蠣、かな。貝の方だ。あとはレバー。味噌カツや味噌煮込みうどんとかの、八丁味噌を使った料理全般もか」

そう言うのとマリア達が思い出したかのような顔をした。

「ああ、あの甘辛い味付けね」

「あれ切歌さんやエルが大好きだね」

「おじさん、ああいうのが好きなんですか？」

「そうなんだよ。というか、結構地元の名物は好きじゃないかな、父さん。きしめんも天むすも俺は父さんから知ったから」

クウガの鑑賞会を兼ねたこの地域の名物試食会を思い出す。

まだみんな揃っていて、こんな事になるなんて欠片も思っていなかった頃を。

「天むす美味しいですもんね」

「うん、私も好き。小エビの天ぷらとご飯だけなのにとっても美味しい」

「あつ、そうそう。どて煮が特に好きなんだよ。要するにモツが好きなんだ」

どて煮はみんなには受けが悪かったのを記憶している。

味付けではなくモツが敬遠されたのだと分かっているので、どこか嫌な顔をされるかと思ったのだが……

「……あ……」

まさかの納得でした。

理由を聞くと、例の試食会の時、俺がどて煮を飯にかけてどて井を美味そうに食べてたからだそう。

……まあたしかに俺も嫌いじゃないけど、父さん程好きとは思っていないだけだなあ。

「……」

そこへ聞こえてくるエル達の声。

それだけで笑みが浮かぶのは何でなんだろうな。

とりあえず、今は父さん達を出迎えるでしょう。

そして、昼飯を食べたらあの街に、あの家に戻るんだ。

……クリスの件は、今はまだ黙っておこう。

おじいちゃんに家の近くの百均まで送ってもらって、そこで少し買い物をしてから僕は兄様と姉様、そして姉さんの四人で今の家に帰ってきました。

リビングに到着するとヴェイグさん達もパズルから出てきて一気に賑やかになります。

少しみんなで休憩した後はパズルの中へ入って特訓開始です。

「じゃ、あとはエル、頼んだぞ」

「はい」

姉様達全員をツインドライブにして、兄様は目隠しと耳栓——ではなくイヤホンを着けました。

百均で購入したもので、スマホから音楽を聞くそうです。

耳栓では多少でも聞こえてしまうのでそれを防ぎつつ、好きな音楽を聞く事で自分の中の悪意と戦うためと兄様は言っていました。

「では、まずは何から試しますか？」

「エル、私と切ちゃんはメカニカルギアをお願い」

「デスね。新しい力過ぎて試してないデスし」

「分かりました」

言われた通り、兄様の手を動かしてお姉ちゃん達のギアを変えます。

「ドライブチェンジ！」

調お姉ちゃんが光竜のギアへ、切歌お姉ちゃんが闇竜のギアへ変化したのを確認して安堵します。

兄様の手なら作動させられるようです。姿の変わった二人を見て姉様と姉さんが驚きの表情を見せます。

「貴方達、その姿って……」

「光竜と闇竜ですね！」

「そう。これが私達のメカニカルギアツインドライブ」

「しかも、この奥の手は天竜神なんデスよっ！」

「うん。でも、今は使えそうにないかな。切ちゃんの心の声、聞こえな

いし」

「デスね。やっぱりあれはシンパレットを上げないとダメみたいデス」

そんな会話を聞きながら僕は視線を翼さんへ向けました。

「翼さんはどうしますか？」

「そうだな……。なら、ライダーギアを頼む。徒手空拳でも戦えるのか試したい」

「分かりました。えっと……ドライブチェンジっ！」

兄様のように声に出す事で僕も少しでも気持ちを感じている風にしようと思つてやっているんですが、何故か皆さんの反応は苦笑ばかりです。

「よし、これでいい。立花、出来れば相手をしてもらえるか？」

「分かりました。つと、エルちゃん、私は……水着ギアにしてももらえる？」

「え？ はい。はい。ドライブチェンジ！」

まさかの選択に少し戸惑ってしまった。

けど、そこで僕は思い出す。水着ギアのツインドライブは試した事なかったって。

「……こうなるんだ」

響さんの水着ギアツインドライブは、通常の状態と違ってどこかあのプールの時に来ていた水着に近くなっていた。

「戦闘力は上がっているんだろうか？」

「見た目では分からないわ。だけど、身軽な分素早そうではあるわね」

「エルちゃん、私もいいかな？」

「あ、はい。未来さんはどうしますか？」

「私はジュエルギアでお願い」

「了解です。ドライブチェンジ！」

基本的に悪意との戦いは兄様が依り代を使って悪意の支配を弱めてからが本番と言える。

だけど、まずそこまでするのに皆さんが悪意をある程度弱らせないとけない。

あのクリスさんの動きは尋常じゃなかった。あれに対抗するには純粋な速度で勝負するか、あるいはそれを封じられる何かで戦うしかない。

それを見出すための時間が今だ。だから兄様は自分の目と耳を塞いで僕らに託してくれている。

悪意にそれを知られないために。

姉様と姉さんはレゾナンスギアへ変わったところで特訓開始。

お姉ちゃん達二人と姉様と姉さんがコンビでの模擬戦開始。

翼さんと響さんに未来さんで三つ巴の模擬戦開始。

僕はヴェイグさんと一緒に兄様の隣でそれを観戦する形だ。

「翼のジャンプ力は凄いな……」

「はい。本当にライダーみたいですよ」

今まではバイクを使っていたから分からなかったけど、ライダーギアツインドライブはその身体能力そのものを仮面ライダーと同じにしてるみたいだ。

あの翼さんが肉弾戦で響さんと渡り合い、時には優勢を作り出している。

対する水着ギアツインドライブは、特に目立ったものはないようだ。

響さんも微妙な表情で戦っているのがその証拠。

ただ、未来さんは凄かった。

そのギアで覆われた部分全てから凶祓いの光を放ったのだ。いや、放ったと言うよりは出現させた、だろう。

まるで光の棘のようなそれは未来さんの周囲全てを同時に攻撃出来る。

おそらくけどあのクリスさんでも回避は至難の業だと思う。

実際翼さんと響さんはそれぞれ回避出来ないと思ったのだろう。ギアを解除してペンダントを自分の手で守ってた。

「こ、小日向、それは凄いな……」

「うん！ 凄いや未来！」

「あ、ありがとう。ただ、これはあまり使えないかも……」

「周囲への被害か？」

「それもありますけど、疲れ方が酷いんです。正直今にも休みたいぐらい」

先程の攻撃は、自分の周囲全てを凶祓いの光で攻撃するというよりは守るような出現の仕方だった。

そう考えると、光を光線として放出させるよりも棘にして維持する方が疲労するのは当然だ。

「未来さん、少し休んでください。今の攻撃はある意味で最後の手段に近いものですし」

「そうする。すみません翼さん」

「いやいい。それと立花、おそろくだがあの水着ギアツインドライブは局地戦特化に磨きがかかった物だと思う」

「です、よね。水辺とかなら凄く強い気がします」

「ああ。ただ、おそらくあの悪意が待っている場所は……」

「はい、あのライブ会場のはずですよ。なら、水着ギアは止めておきます」

「その方がいい。それにしても、何故水着ギアを？」

その疑問は僕も抱いたものだ。

響さんがどう答えるんだろうと思ってその言葉を待っていると、響さんは後ろ手で頭を掻いた。

「いやあ、何か特殊能力とか発動しないかなあって」

「くくっ、そういう事か」

「もうっ、響ったら」

苦笑する翼さんと未来さんと一緒に僕も実に響さんらしいと思つて苦笑する。

だけどこの目的からすれば響さんのそういうのは間違っていない。

「発想自体は正しいです。今回の目的は様々なツインドライブの性能や能力を把握する事ですし」

「そうだな。では立花、次はどうする？」

「じゃあ……ソルブライトにします。やっぱりあれが一番悪意に効いたイメージがあるんで」

「よし、エル、私はさつきと同じでいい。ライダーギアが格闘戦も出来ると分かった以上、雪音や奏の記憶を利用する悪意には効果的かもしれない」

「分かりました」

そうして翼さんと響さんが再び模擬戦を始める中、姉様達とは言い
ば……

「くっ！ まさかこんな事が出来るなんて……っ！」

「大ききこそ本物より小さいけど、それでも天竜神だけあって強いっ
！」

「とか言いながらしつかり天竜神の攻撃をバリアで受け止めてるじゃないデスかっ！」

「本当にそのバリアは凄い……でもっ！」

「勇氣の力は無限大（デス）っ！」

まるでガガガだって、そう思いながら僕は姉様達の戦いを見つめた。

「エル、見ろっ！ 翼がっ！」

「えっ？」

ヴェイグさんの声で僕は顔を姉様達から翼さん達へ向ける。

そこでは翼さんが空高く跳び上がっていた。しかも、そのまま回転しながら蹴りの体勢へ移行しようとしている。

「あれは……まさかっ!？」

「ライダーキックだっ！」

「響っ！」

「そっちがそう来るなら……っ！」

響さんが拳を握り締めるとそこへ光が集束していく。

あれは、以前翼さんを攻撃しようとした時にやった事と同じだ。

「いざっ！ 参るっ！」

「負けるかあああっ！」

まるでライダーキック対ライダーパンチだ。

だけど見た目は全然違う！ 翼さんの周囲には風が刃のような形を作っているし、響さんの拳には小さな太陽が出来上がっていたっ！

風刃の脚と太陽の拳。その激突は凄まじい熱風を巻き起こした。僕とヴェイグさんは咄嗟に兄様へしがみついて、そんな僕らを守るように未来さんがバリアのような物を展開してくれた。

その瞬間熱風による熱さを一切感じなくなった。まるで未来さんの優しさに体が包まれてるみたいで安心感さえある。

「す、凄いな……」

「はい。翼さんを戻そうとした時よりも威力が出てると思います」

「……あの時はやっぱり加減してたのか？」

「おそらく無意識にしてたんだと」

拮抗するお二人を見ながらヴェイグさんと言葉を交わす。

それにしても、こんな力の激突を受けてヴェイグさんは平気なんだろうか？

「ヴェイグさん、パズルの維持は大丈夫ですか？」

「ああ、まだ平気だ。もし難しくなったら力を貸してくれ」

「はいっ！」

言葉を交わしながらも視線はお二人から離さない。

「おおおおおおっ！」

お二人の声が重なる。その時、一瞬だけマイクユニットの部分が光った気がした。

「ああっ!？」

そしてそれと同時にお二人が弾き飛ばされた。きつと互いの攻撃の威力が相殺し合った結果、衝撃波となって弾けたんだ。

「す、凄い衝撃っ！ エルちゃんっ！ ヴェイグっ！ 大丈夫っ！」

「ぼ、僕達は平気です！」

「ああ。未来こそ大丈夫か？」

「うん、私は大丈夫。けど……」

未来さんの見つめる先には床へ倒れる響さんの姿があった。

反対側を見れば同じように倒れる翼さんの姿がある。

おそらくだけど、本来なら土煙が起こったり、地面が大きく砕けたり抉れたりしていたはずだ。

パズルの中でやっていて良かった。そう心から思いながら前を見つめているとそつと手に触れる物があつた。

「えつと、多分エル、だよな？ 一体何があつたか知らないけど、大丈夫か？ 一瞬すつごい熱風が押し寄せたんだが……」

目隠したままの兄様が、探り探りの手付きで僕の事を気遣つてくれていた。

多分だけど、本当なら頭を撫でたいのかもしれないって思って、僕は兄様の手を取って自分の頭へ置いてみた。

「あ……」

すると優しく兄様が撫でてくれた。

見えてなくても聞こえてなくても兄様は兄様です。

ちなみに響さんも翼さんもすぐに起き上がりました。

お二人共に自分のギアに秘められた力の一端を感じ取つてはいましたが、あのクリスさんを操る悪意に通用するかは疑問のようでした。

一方の姉様達は揃つて単身では本領を發揮出来ないギアのため、分断されたら全力を出せないという難点が。

そこで一旦休憩にして、何をしていたかはある程度伏せて兄様の意見を聞いてみる事に。

「あー、そつか。メカニカルもレゾナンスも二人揃つてこそその力だもんなあ」

「はい。なので何か打開策はないかなと」

そう僕が問いかけると兄様は未来さんと姉さんに視線を向けました。

「えつと……何か？」

「お兄ちゃん、私と未来さんに何かあるの？」

「……翼、マリア、二人に聞きたいんだけど、かつてやったユニゾン訓練でどういう事をしてたか覚えてるか？」

たったそれだけで僕は、それに姉さんとヴェイグさんを除いた全員が兄様の言おうとしている事を理解しました。

「まさか、セレナと未来を入れてユニゾン訓練を？」

「たしか今のみんなは依り代で共鳴し合ってるんだろ？ なら、出来ると思うんだ。全員共通のリビルドギアツインドライブ。その輝きを共鳴させて、可能ならツインだけじゃなくてトリプル以上にもなれるように」

「さ、三人以上でのユニゾンですか!？」

まさかの考えに響さんが大きな声を出した。

だけど、兄様は真面目な顔をした。

「可能だと思うよ。根拠はドライディーヴァだ。三人で共鳴し合って唄った歌がある。あれは一種のユニゾンだ。悪意もクリスの記憶からユニゾン自体は調べられるだろうけど、三人でのユニゾンなんてクリスさえも知らない。俺も知らない。だからこそ、悪意の想定の上を行くにはもってこいだ」

そう言って兄様はスマホの時計を見ました。

「……晩飯の事もあるし、午後7時には終了にしよう。で、明日からは昼間から夜までは毎日リビルドギアでユニゾン訓練をしてくれるか？ それなら」

「あのっ！」

兄様の言葉を遮るように響さんが手を挙げた。

誰もが響さんを見つめると、響さんはこう告げた。

それは、リビルドギアじゃなくて水着ギアでやらせて欲しいというものだった。

水着ギアも全員共通だし、何より下着代わりに出来るため日常生活にも支障はないからという理由で。

それならばと兄様も納得し、目隠しをした状態の兄様の手を使って僕が皆さんを水着ギアへと変える事になった。

何故なら皆さんは一旦服を脱がないといけないからだ。下着代わりにすると言う事は下着も脱がないといけないために。

「な、何だかドキドキしますね……」

「あ、ああ。目隠しをして音楽を聞いているのにな……」

「し、視界に只野さんがいるって事が大きいんだと思います……」

「ないと思うけど、仁志が少しでも目隠しを動かしたら……」

「や、止めて姉さん。想像すると動けなくなりそう……」

「し、ししよーはそんなスケベな事しないデス！ それにアタシはししよーなら見られたって平気デス！」

「……切ちゃん、師匠がこっち見てる」

「っ!？」

切歌お姉ちゃんが体を隠すように腕を動かしました。

ただ、当然兄様は目隠しをしたままです。

それに切歌お姉ちゃんも気付いて小首を傾げました。

「冗談」

「しくらぐく」

どこか楽しげな感じもする姉様達だけど、ただやはりヴェイグさんと僕にはまだ理解出来ない世界だと思う。

特に僕はまだブラジャーを必要としてない。可愛い下着に姉様達は喜んだりするみたいだけど、僕にはそれが理解出来ないから。

「なあエル」

「はい」

「下着と水着の違いは一体なんだ？」

「え、えつと……水に濡れてもいいように出来てるかいなかでしようか？」

「成程な」

「なあ、まだか？ もしOKなら目隠し取ってくれよ？」

兄様のその言葉を聞いて僕はヴェイグさんと顔を見合わせる。

「どうしましょうか？」

「聞いてみればいいんじゃないか？」

「じゃあ同時に聞きましょう」

「分かった。せくのっ」

「目隠し取ってもいい（です）か？」

「……ダメっ!」

それまで軽く騒いでた切歌お姉ちゃんと調お姉ちゃんも、それを見て苦笑してた響さん達も、呆れていた姉様さえも声を揃えたのに驚いた。

「……息ピッタリだな」

「ですね……」

その後姉様達がギアを展開したのを確認して兄様の目隠しを取った。

目隠しを取られた兄様は何度か瞬きした後で姉様達全員を水着ギアツインドライブへと変えていった。

ただ、その姿が全員あのプールへ行くために買った物そっくりになった事に気付いて兄様が驚いていたけど。

「こうなるとやっぱ俺とみんなのイメージが影響するんだろうなあ」

「ツインドライブ、ですか？」

「うん。もしかすると、それも悪意への対抗策になるかもしれない」

「どういう意味だ？」

「もしも、もしもツインドライブが俺とみんなのイメージに左右されるのなら、俺は無理でもみんなのイメージを変えればツインドライブ状態が変化する可能性がある。それこそ、心象変化だ」

「えつと……?」

「ライダーギアが一番分かり易いと思うから言うよ。今、翼と調とマリアがなれるそれは、ツインドライブが一号、二号、V3だ。でも、例えばライダーつてもので三人がイメージするものが変われば、もしかすればギア形状が変わるかもしれない」

驚きの発想だった。

でも、言われてみればそもそも水着ギアなどは皆さんの心象変化で起きた現象だ。

なら、ツインドライブが変化する事も十分あり得る。

「海賊ギアがツインドライブだとゴーカイジャーになったのは、明らかにみんながゴーカイジャーを知ったからだろ? なら、試してみる価値はあるよ。つと、それと成功しても失敗しても俺には教えないでくれ。悪意への懸念材料にしてやるよ。何せあっちは俺からライダーの知識を知ってる。もし他のライダーになれるとしたら、なんて考えると結構不安だよ? クウガなんて多彩なフォームチェンジが

出来る。そうになったら一人で複数の能力持ちだ」

「成程。仁志さんから情報を得ている事を逆手に取るんだ？」

「さっすがししょーデス。転んでもただじゃ起きないデスね」

切歌お姉ちゃんの言葉で兄様が笑みを浮かべて頷いた。

そしてそこからはまた兄様は目隠しとイヤホンをして情報を遮断し、僕が兄様の手を使って翼さん、調お姉ちゃん、姉様のライダーギアツインドライブを試してみる事に。

結果は、変化せず。残念ながらそう上手くはいかないようです。

ただ、翼さんの事で分かったようにライダーギアツインドライブは格闘戦が可能。

調お姉ちゃんや姉様は翼さんよりも技が多彩に出せる事に気付き、三人でのトリプルキックは未来さんが全力で防御しても防げない程の威力を見せました。

おそらくだけど、あの攻撃は三人での絶唱以上だ。きっとあれも一時的なユニゾンに近いと思う。

「未来、大丈夫？」

「う、うん。でも、あの攻撃は凄いなと思う。アイギスにジュエルの力でもあつさり貫かれたから」

未来さんの手を響さんが掴んで起き上がらせるのを見てから僕は姉様達へ顔を向けた。

「姉様、どうですか？」

「そうですね。威力だけならあの悪意にも通用すると思う。ただ……」

「当てられるか、だな」

「あの速度だと、直撃させるのは難しい……」

「でもでも、格闘戦が出来るのはかなりのプラスデスよ。アームドギアなしでも十分過ぎる程デスし」

「そうだな。そこはたしかに収穫だ。むしろそういう意味では、ライダーギアツインドライブは全身がアームドギアかもしれない」

「……元々のライダーを考えればそうでしょうね」

「うん、戦うためだけの生物兵器だった怪人、だもんね。だからこそ、私達もライダー達と同じようにこの力をみんなの笑顔のために使い

たい」

「そうデス！ 人類の自由のために戦うデスよっ！」

切歌お姉ちゃんの言葉に姉様達が頷いた。

そう、人類の自由のために戦う。兄様は教えてくれた。何故ライダーは正義のために戦わないのかを。

——正義は、その時その時で変わる。だからライダーは正義ではなく自由のために悪と戦うんだよ。

正義とは、その時の情勢や世相で変わる事がある。戦争を経験した原作者だからこそ、それを痛感したらしい。

そう考えれば悪意は人々の自由を脅かす存在だ。自らの意思で悪へ転がるのならばいいが、悪意はそれを助長するように干渉する。

きっとライダーがいれば悪意へ立ち向かったはずだ。例え倒す術がないとしても、それでもと。

皆さんもそういう意味ではヒーローだ。正義じゃなく平和を守ろうとしているから。

その後は皆さんはリビルドギアでユニゾン訓練を始めた。

姉さんと未来さんは初めての事に戸惑い苦労していたけど、それでも当然のように姉さんは姉様と、未来さんは響さんとユニゾンする事は早かった。

依り代の手助けもあるんだとは思うけど、今の皆さんは奏さんとクリスさんを助け出したって思いが共通している事も大きい気がする。

それと、やはり一度やっていたのが大きいのか、姉様達はそれぞれの組み合わせでのユニゾンをすぐに取り戻してみせた。

終わってみれば収穫が多い結果となり、あの悪意へ対抗できる可能性を見出せたとも言える雰囲気になった。

兄様は何も聞かずとも姉様達の様子だけで嬉しそうに笑みを浮かべていた。

みんなが明るくいてくれる事。それが悪意への一番の攻撃だってそう言っつて。

「俺は信じてるよ。みんななら必ず悪意に打ち勝ってくれるって。奏

もクリスマスも元に戻して、今度こそ悪意に完全勝利してみせようっ！」好きな曲を聞き続けていたおかげか兄様は明らかに元気だった。その明るさに僕らも笑顔を返して晩ご飯の支度を始める事となる。姉様と調お姉ちゃんが中心となる中、兄様は翼さんに何かを頼んでいるようだったのが気になった。

晩ご飯は千切り野菜の豚しゃぶ鍋でした。

人参やキャベツ、玉ねぎなどをお出汁の中で煮た後、その出汁で豚肉をしゃぶしゃぶして食べるんです。

お姉ちゃん達や姉さんはお肉ばかり食べて怒られてましたし、ヴェイグさんは逆にバランスよく食べて褒められました。

僕は……何とか怒られる事は避けられました。兄様が野菜を巻いて食べた方が美味しいと教えてくれたからです。

「あく、お腹いっぱいデス」

「肉も野菜もご飯もあれだけ食べればそうもなるよ」

「切歌ちゃん、一番食べてたもんね」

「次点は響だけだな」

「いやあ、大勢で食べるご飯って何でこんなに美味しいんですかね？」

「本当にそれデス！ 早くここにクリスマス先輩と奏さんも加えたいデスよ」

「なら、今週の金曜に行こう。そこまでユニゾンを形にしておいてほしい。セレナや未来とも組めるように」

切歌お姉ちゃんの言葉に兄様が即座にそう告げた。

まるで僕らが沈む間を与えないように。

「一週間もないけど、何とか出来ないかな？ あまり時間を空けすぎると怖いんだ」

「分かってるわ。何とか間に合わせてみせる。ね、みんな」

姉様の確認に響さん達が頷いた。僕とヴェイグさんも頷いた。

だって姉様が僕らの事も見てくれたからだ。

この後は響さんと翼さんに切歌お姉ちゃんが後片付けを始めた。

姉様達晩ご飯を作った人達はリビングでのんびり休憩です。

僕とヴェイグさんはお風呂の準備へ取り掛かります。

「それじゃあ、ヴェイグさん、頑張りましょう」
「ああ」

あのお家でもやってた事ですが、お風呂掃除は僕が基本受け持ってたお手伝いでした。

ヴェイグさんはそれを時々手伝ってくれてたので、ここでも手伝ってくれるみたいです。

「よいしょっと……」

「よし、離していいぞ」

「は、はい……」

「っと」

ヴェイグさんを湯船の中へ送り込みました。

このお家のお風呂はあの家よりも深くて少し大変です。

「エル、スポンジをくれ」

「ちよっと待ってください」

スポンジへ洗剤を吹き付けてからヴェイグさんへと差し出す。

「どうぞ」

「……よし、まずは俺からだな」

スポンジを手にとってヴェイグさんが湯船の下の方を磨き始める。

「(ぎしぎし)っー」

声を出すのは僕が教えた事が切っ掛け。

そうすると力が入り易いと教えたなら、ヴェイグさんが何て言えばいいかって聞いてきて、(ぎしぎし)はどうでしょうって言ったならそれ以来こうしてる。

僕は湯船の下の方を懸命に磨くヴェイグさんを見ながら考える。

キャロルが僕と一緒にまた戦ってくれるかもしれないなら、僕はどうすればいいんだろう。

この体は元々キャロルのものだ。僕は、それを使わせてもらっているに過ぎない。

——そんな事を考えるよりも相手の思惑などについて考えろ。

……聞こえてきた声に僕は思わず苦笑する。

キャロル、君はもしかして僕だけじゃなく兄様達の事も心配してく

れてるんだらうか。

だとしたら、こんなに嬉しい事はないよ。

「ヴェイグさん」

「ごしご、どうした？」

僕の声にヴェイグさんが手を止めて振り返った。

「悪意は、兄様を最終的にどうしたいのでしょうか？」

「……………分からない。だけど、きつとろくでもない事だ」

「ですね。でも、僕は一つ気になってる事があるんです」

「気になってる事？」

そう、気になる事。それはあの皆さんとの決戦前に悪意がこの上位世界で何かしていたという、そんな兄様の予想から考えた事。

「兄様は悪意に苦しんでいます、それは兄様が自分の欲望に従うのを良しとしないからだあの時奏さんは言いました」

「……………嘘を吐いてると言ってたあれか」

「はい。つまり、逆を言えば自分の欲求へ素直な人なら悪意はあつさりとその人間を支配下に置けるはずです」

「それがどうした？」

兄様は心を強く持てば悪意の支配に打ち勝てるかもしれないと言っていた。

それを悪意も分かっていたからこそ、兄様へは瘴気を吸わせたりして無理矢理心を弱らせようとしてるんだ。

そうなる問題は、この上位世界の人間でも自分の欲望に素直なら悪意は容易に根付ける事かもしれない。

「兄様が言っていた悪意の強化法とは、この世界で自分の欲望へ素直な相手へ根付いた事ではないでしょうか？」

「エル、それには」

「分かっています。まず悪意がどうやって入り込むか、ですよね。そこについては兄様と同じ可能性が高いと思います」

「……………キス、という行為か」

「だと思えます。悪意がクリスさんを操って、兄様の前に同じような事をやっていた可能性は十分に考えられます」

もしそうだとすれば、狙われたのはあのお店の人間だ。

そしてクリスマスさんなら容易に粘膜接触出来る相手となると、男性、しかも年齢が兄様と同じかそれ以下のはず。

おそらくだが、立場や家庭などがある人は簡単にクリスマスさんとキスなんか出来ないはずだ。

だから必然的に……っ!?

「ど、どうしたエル？ 急に目を見開いたりして」

「分かったんです！ 兄様以外にこの世界の人間で悪意に入り込まれてる相手が！」

「何だっつて!？」

「ヴェイグさんっ！ すみませんが」

「ああっ、掃除は後だ。すぐにヒトシ達と話そう」

ヴェイグさんが僕の中へ消えると同時に急いでお風呂場の戸を開けた。

そのまま脱衣所を抜けてキッチンへ向かうと、そこには洗い物をしている響さん達がいた。

「あれ？ エルちゃん、どうしたの？」

「あのっ、凄い事が分かったんです！ 兄様以外に悪意が入り込んでいる人物が！」

「なんデスとお!？」

「落ち着け暁。エル、それは本当か？」

「はい、かなり確実に近いと思います」

「分かった。立花、暁、洗い物は一旦中断だ」

「はい（デス）」

こうして翼さん達と一緒にリビングへ戻って、僕は兄様達へさっきの仮説を話した。

そして当然その人物は誰だとなる。ただ、もうそこまでくれば候補に挙がるのは多くはない。

「茂部君、か……」

「はい。兄様達の買い物後に現れて悪夢の変化を引き起こしましたし、僕はその人が悪意に利用されると思っています」

きつとこれは間違いない。その僕の予想は間違つてなかつたところの後兄様から確信する事となる……。

仁志はエルフナインの推測を聞いて大きく息を吐いた。

(エルの意見は俺のそれに近い。じゃあ、やっぱりそういう事なんだろう……)

茂部が悪意に操られている、もしくは思考を誘導されている。

それが仁志の中で確定し、その流れさえも確定した瞬間であった。

「聞いて欲しい事がある」

そう切り出して仁志は例の茂部がクリスと付き合つてると言っている事を打ち明けた。

それは響達になさからず動揺を与え、且つエルフナインとヴェイグ以外には怒りを抱かせるに十分な話だった。

何故ならそれは、好きでもないどころか嫌っている相手へキスをさせたという事に他ならないのだから。

「もしかして仁志さん、夕食後に私へ散歩について来て欲しいと頼んできたのは……」

「ああ、十時ちよい前に店へ行くつもりだった。茂部君は今日勤務だから」

「クリスちゃんとの事を問い詰めに、ですか？」

「いや、もう俺も茂部君が悪意に操られてると踏んでたから依り代を押し付けてみようと思つてた」

「それで翼なのね。いざと言う時に対応出来る相手として選んだ？」

「それもあるけど、このメンバーの中なら一番翼が荒事に向いてると思つたんだ。いざとなれば影縫いも使えるし」

そんな仁志の意見を聞いてマリアが疑問符を浮かべた。

「ちよつと待つて。仁志、影縫いつて光源がないと使えないし、そもそも往來で使つていいものじゃないわ。あと、周囲に見られたら不味いんだからセレナかヴェイグを連れていくべきでしょ？」

「……そう、だな」

どうしてそんな当たり前の事を忘れていたのかと、そんな顔をした

仁志に翼が息を呑んだ。

「まさか、仁志さんの思考を悪意が誘導していた？」

「有り得るわね。仁志から私達の情報を得るのがいまひとつ上手くないから、もう一つの分身を使って一気に……って考えかしら」

「お兄ちゃん、それならヴェイグさんも連れていった方がいいよ」

「そうデスよししよー。ヴェイグにミレニアムパズルを展開してもらうべきデス」

「今の師匠、悪意に知らない内に操られてるかも。ねえ師匠、他に何か聞いた事や見た事で気付いた事はない？ 喋ってない事、ない？」

「それは……」

仁志の中に浮かんできたのは響と出会って間もない頃に心に決めた事。

それは、この世界に元々あった所謂男性向け同人誌などの事だった。

彼女達を題材に使った“エロ系”の物があった事と、自分もそういう物を読んだり見たりしていた事だ。

（どうする……？ 俺の記憶を悪意が読んでいるのなら、この事もきつと知ってるだろう。それを明かされたら絶対みんな少なからず意識を乱す。もし悪意との戦いでそうなら……）

どうせ知られて幻滅されるのなら早い方がいい。

今の仁志は自分の評価よりも響達の方が大事だった。

あの頃もそうでなかった訳ではないが、あの頃よりも一層その想いは強くなっていたのだ。

それでも話すには勇気がある。

だからか仁志はゆっくりと深呼吸をした。

顔を響達から隠すように下げて、一度だけ目を閉じてから意を決したように瞼を開いて顔を上げた。

「実は……」

語られた失われた事実には、響達は少なからず顔を赤くした。

マリアや翼はそういう事もあるだろうと予想していたのかまだ何とか受け止められていたが、セレナは完全に絶句していた。

切歌と調も顔を真つ赤にしたまま黙り込んでいたし、響と未来に關しては赤い顔ではなく嫌悪感を覚えていた表情をしていた。

そしてエルフナインでさえ頬を赤らめていた。

「今までそれを黙っていたのはどうしてだ？」

「ヴェイグ、男だって自分を使ってエロい物を書かれていたなんて聞いて嬉しくはならないんだよ。なら年頃の女性がどう思うかは言うまでもない。俺だって悪意の事がなければ墓まで持って行った話だよ」

どこか達観したような声でそう告げると、仁志は響達へ深々と頭を下げた。

その行動の意図を誰も理解出来ないのか若干の間が空く。

「すまない。きつと気持ち悪いとは思う。何せただでさえ自分を勝手に使われてるのに、その内容がいかかわしいものだ。嫌悪なんて言葉で済まされる内容じゃないと思う」

「え、えつと、でも、それを今聞いてなかったら……」

「ああ、きつと私達は集中力を乱していただろうな」

「それこそ悪意が狙いそうな事よ。ええ、仁志の懸念はきつと正解」

「です、ね。只野さんの心配はきつと当たってます」

マリア達年上四人は仁志の予想した悪意の手段へ理解を示し、何とか飲み込んでみせた。

それに仁志が安堵するように息を吐く。

「……ししよーは、アタシ達のそーゆーの、えつと、持ってたデスか？」

「あつたよ。多くはなかったけどね」

「そ、そうデスか……あう」

「お、お兄ちゃん、私のもあつたの？」

「セレナのは………絵はあつたかな。少なくとも俺はそれしか知らない」

「絵なんだ……。ど、どういふのなんだろう……？」

「師匠、その、ありがとう。私は師匠の事、軽蔑しないから。だって、あの時師匠は言ったから。自分だって男だって。エッチな事を考えるんだって」

「そ、そうです。むしろ健全な男性らしいと思います」

年少組の反応はやはり具体的に想像出来ないからか、どこか可愛らしいものだった。

かと言って、さすがに仁志も彼女達へ詳しい話をするつもりはなかった。

ただ、今は疲れ切った心のままその場で後ろへと倒れるだけである。

「俺の事は正直どうでもいいよ。みんながこの事を知って、悪意の揺さぶりにやられる事がなくなってくればそれでいいんだから」

紛れもない本音を告げ、仁志は天井を見上げた。

正直に言えば、この事を言えて胸のつかえが取れたような気がしていたのである。

自分は立派な男ではない。どこにでもいる特別でもなんでもない存在なのだ、そう言えたような気もして仁志は微かに笑った。

（俺の事をみんなに教えて幻滅されても構わない、か。そう思えるのも、一種の強さかね？）

そう思って仁志はふとある事を思い出して表情を凛々しくした。

（そうだ……そうだよ。あの時俺はみんなに気付かせてもらったじゃないか。俺が俺を見限るのはみんなに愛想を尽かされた後だって。なら、幻滅されたっていいじゃないか。飾ったところで仕方ない。俺の本当を見せないでどう信頼してもらうんだ？ どれだけ頑張ったって、俺は風鳴弦十郎にも緒川慎次にもなれないんだから）

開き直りにも近い気持ちを思い出したおかげか、仁志は状態を起こすと翼とセレナとマリアの三人を見つめた。

「力を貸して欲しい。俺一人じゃ悪意に出し抜かれるかもしれないんだ」

「良かった。やっとお兄ちゃんらしくなった」

「そうだな。マリア、私は念のため店内へ仁志さんよりも先に入っておく」

「了解。じゃあ私とセレナは仁志より店へ行くのを少し遅らせるわ」

その会話を聞き仁志は視線をヴェイグへと向ける。

「ヴェイグも来てくれ。セレナの中で茂部君から嫌な匂いが感じられるかどうかを確かめて欲しい」

「分かった」

しつかり頷くヴェイグに感謝するように仁志は頷き返すと、最後に響達へ顔を向けた。

「残りのみんなは一応待機しておいてくれ。ないと思うけど、万一呼び出した場合は頼むな」

「二二「はい（デス）」二二」

「さて、先程の続きをやるか。立花、暁、行こう」

「はい！」

「了解デス！」

「ヴェイグさん、僕らも戻りましょう」

「ああ」

キッチンや風呂場へと向かう背中を見送り、仁志はふとある事を思い出してマリア達へと視線を移した。

「少しいいか？」

「何よ？」

「あの時、クリスのギアにマイクユニットってあったか？」

その問いかけにマリア達四人は虚を突かれたような顔をしてから一斉に考え込んだ。

記憶を辿って思い出そうとしているのである。

ただ、どうしても覚えているのは全体的なものばかりであり、あるいは覚えていたとしても女性として絶対人前では着れないインナーなどへ目がいつていたのだ。

結局四人が出した答えはよく覚えていないと言うもの。

ならばと仁志は戻ってきた翼達へも同様の質問を行った。

だがしかし、やはり翼や響、切歌にエルフナインさえも明確に覚えている者はおらず、直接相對するまで確認は出来ないかと思われたその時だった。

「みんなのギアの首元にある飾りのような物なら、あのクリスにもあったぞ」

「っ!? ほ、ホントかヴェイグ」

ヴェイグがあっさりと言ったのである。

確認する仁志へ彼は頷きながら、再度たしかにクリスのギアにマイクユニットはあったと言いつつ切った。

それは、ヴェイグがあの中で一番まっさらな状態の意識でクリスを見ていたからだ。

際どいインナーやギアへ意識を奪われる事無く、ヴェイグだけが全身を見つめていた。

それはまさしく種族も性別も異なるからこそその視点と思考だったと言える。

「だがそれが何かあるのか?」

「以前切歌と調が悪意に飲まれた時、二人はマイクユニットが存在していた。俺はそれを利用して二人の歌を流したんだ」

「うん、そうだった。切ちゃんと唄った歌を師匠が流してくれて、私はそれに合わせて唄った」

「はつきりと覚えてるデス。その歌を聞いて、アタシは調の言葉がどんどん心へ届くようになったんデスよ」

思い出しているのか若干微笑む調と切歌。

そんな二人に響達が微かに笑みを見せる。

「でもお兄ちゃん。それとクリスさんが関係するの?」

「正直半信半疑ではあるけどね。今からゲームを起動してクリスの歌を流す」

「「「「「「え?」」」」」」」

マリアと翼を除いた全員が疑問符を浮かべるも、年長二人は仁志のやろうとしている事の意図を察して笑みを浮かべていた。

「成程ね……クリス自身の歌を流す事で悪意へ少しでも対抗しようって事か」

「ああ、おそらくそういう事だろう。仁志さん、そうだよね?」

「正直効果があるとは思えないが、少しでもやれるだけの事はやっておこうと思うんだ。と言う訳で……」

早速とばかりに仁志はゲームを起動させるとミュージックボックス

スを選択した。

ソート機能を使いクリスの楽曲だけを表示させ、その中から仁志が選んだのは「放課後モノクローム」だった。

静かな室内にクリスの楽しい歌が流れる。

それが秋桜祭で彼女が唄ったものだど気付いた響達は、過ぎし日の事を思い出して神妙な顔をし、マリアやセレナなどその事を知らない者達は、奪われてしまったその楽しい歌声に神妙な顔をした。

「……悪意の巫女とクリスは言ったけど、俺はそんなものはないと考えてる」

優しい歌声が響く中で仁志はそう告げて響達を見つめる。

「フイーネの巫女や世界蛇の巫女なんて言葉はあったけど、あれだつて別に元々あった言葉じゃなく自称に近いものだ。それに、俺は悪意がゲート前でクリスを装ったという話を忘れてない。つまり、今のクリスは悪意と完全同調した状態って事じゃないだろうか？ 要は切歌や調、セレナがされた事の完成系だと思っただよ」

「悪意と完全に同調した結果、か……」

「そう思う方がいいかもしれないな。ただ、雪音の何を刺激して悪意はそこまで入り込めたのだろうか……」

「多分、クリスちゃんの場合は寂しさだと思えます」

そう告げた響へ全員の視線が集まる。

彼女は悲しげな表情で依り代を見つめていた。

「クリスちゃん、留学する事になってるじゃないですか。なのに、ここで仁志さんと出会って、私達と前よりも仲良くなりました。なのに、悪意を倒したらもう仁志さんに会えないかもしれない。そうじゃないけども留学する以上、当分私達とも会えない。そんなクリスちゃんの寂しい気持ちを利用した気がします」

「響……」

誰よりもクリスと共に過ごした響だからこそその言葉だった。

互いに寂しがり屋であり、最初に支え合った響とクリス。

だからこそ揃って悪意に飲み込まれそうになった事もある。

「孤独感、つてどこか。有り得るな。俺へ見せてきた悪夢もそういう

方向だったし、人は孤独に弱いものだから……」

「特にクリス先輩、寂しいの嫌いです」

「デスね。夏休みにアタシ達の部屋へよく来てたの、そーゆー事デスし」

「そうかつ！ だからクリスさんは兄様を狙ったんです。自分と同じにしようと思ったんでしょ」

「誰よりもヒトシに傍に居て欲しいんだな。奏も言っていたが、クリスも特別になりたかったのか……」

ヴェイグのその言葉に全員が押し黙った。

繰り返し流れ続ける放課後モノクロームがその場の空気を少しだけ和らげる。

まるでクリスが照れ隠しをするように唄っているようにも聞こえ、仁志は息を吐くと上を見上げた。

「誰だって、好きな相手が出来ればその人の特別になりたいって思うものさ。俺だって学生の頃はそう思って動いた事があるよ」

「がくせい？」

「中学と高校の頃だな。中学の頃は告白して呆気なく振られ、高校の時は好きになった相手に告白出来ないまま終わった」

「どうしてだ？」

その問いかけに仁志は思い出すように微かに笑う。

「相手に彼氏がいたのさ。幸せそうに笑ってたんだよ。俺じゃ、彼女をそんな笑顔には出来ないって思った。で、俺の好きな歌の歌詞をそこで思い出して自分へ言い聞かせた。男と女が心に描いてる幸せの形は同じじゃないって」

「っ」

仁志の言葉にマリアだけが微かに反応した。

以前陽子に聞いた話を思い出したのである。

（あの言葉はそういう中で抱いたものだったのね。しかも、歌の歌詞なんて……仁志らしいわ）

一人密かに苦笑するマリアだが、どこかでこうも思っていた。

（それにしても、高校生の時に思った事を陽子さんのお店で働くよう

になっても言っていたって事は、もう仁志の中ではそういう信念に変わっていたのね)

始まりは一種の自己暗示。それがもうそれで自分はいいいという考えへと変わった事。

そこに仁志らしさを感じ取り、マリアは好ましさを覚えていた。

そこから話は仁志の恋愛話へと変わっていった。

意図的に仁志が話し出したのもあるが、やはり響達も女性故にそういう話が嫌いではなかったのだ。

モテモテだったと仁志自身が確信出来る保育園から始まり、六年間同じ女子に恋していた小学校の話には全員が彼の一途さにらしさを見て微笑み、中学で卒業式の日には告白してあっさり振られて涙は出なかったがしばらく無気力になった事には思わず励ましたりと、気付けばその場の雰囲気は普段のものへと戻っていた。

それに伴い話題も別のものへと変わっていく。

仁志はこれまでしてこなかった幼少期の話をしたのだ。

父や母との思い出。それが普通の家庭環境になかった事がほとんどの装者達にどう刺さるかを知っていた仁志が避けてきた話題を。

案の定切歌や調、セレナといった年少組は笑顔ではなく寂しそうな顔をしていく。

だが……

「もし、俺の話を聞いて羨ましいと思ってくれるのなら、近い事を俺がみんなにするよ。セレナ、切歌、調、甘えたいのなら甘えてくれ。ワガママを言いたいのなら言ってくれていい。全部応えられるとは思わないし思えないけど、俺だってそうだったんだ。父さんや母さんだって全部受け止めて叶えてくれた訳じゃない。それでも、出来る限りの愛情を注いでくれたと思う。それを、俺でよければさせてくれ」

「ししよー(師匠)(お兄ちゃん)……」

「翼やマリアもいいよ。勿論響や未来だって、エルとヴェイグもそれでいい。俺がみんなに支えられているように、俺も可能な範囲でみんなの支えになりたいんだ」

「兄様……」

「ヒトシらしいな」

そう、それは悪意に入り込まれる前の仁志らしきだった。

皮肉にも悪意の巫女とクリスが名乗り、凄まじい力を見せた事で仁志の心は強くあらねばと思うようになってたためである。

悪意と直接戦う事が出来ぬからこそ、自分は心だけでも負けてなるものかと思つたからの結果であつた。

空元気で元氣とばかりに仁志は明るく振舞つた。

これまで沈んでいた分を取り戻すかのように。

響達もそれが分かつていた。だからこそ今は暗い事を考えるのを止めた。

そしてこれだけを考え始めたのだ。何があつても奏とクリスを元に戻すのだと。

(みんなの優しい匂いが強くなった。ヒトシはやっぱりみんなに大きな影響を与えるんだな)

そうしてエルフナインが響と共に風呂へと向かうのを合図に、仁志は依り代のバッテリーを確認した。

「……よし」

しっかりと充電されている事を確認すると、仁志はマリアと翼へ顔を向けた。

「今回の事は正直不安が強い。悪意は事前に手を打てるかもしれないからだ。しかも、依り代で追い出せなかった場合、打つ手がない」

「ヒトシ、そこはエルの言つてた事を応用したらどうだ？」

そのヴェイグの言葉に翼とマリアが疑問符を浮かべる中、仁志だけが息を呑んだ。

「そうかつ！ その手がある！ 未来っ！」

「は、はい？」

「君も来てくれ！ 茂部君には、神獣鏡での凶祓いが通用するんだ！」
「わ、分かりました」

エルフナインの立てた推測である。『概念を変える事で上位世界の人間も平行世界の人間と同じに出来る』という事を思い出した仁志は、かつて響達三人へ告げたベアトリーチエに関する言葉を思い出し

ていたのだ。

(みんなは俺が断定で言った事を事実だと信じてくれる。それがこの場合、哲学兵装と似た効果を發揮してくれるはずだ！)

そう強く思い込んで仁志はその場にいる全員へ再度言葉をかけた。「彼には依り代がない。つまり本当にどこにでもいる一般人だ。なら、悪意が宿っていてもギアペンダントのない君達と同じだ」

「ナルホド。ししよーに神獣鏡の光が効かないのは、依り代があるからデスか」

「有り得るかも。だって、今までもみんなから悪意を引き剥がしたのは依り代だから」

「じゃあ、お兄ちゃんも依り代を手放したら効果がある？」

「いや、俺は多分依り代に選ばれてるみたいだから効果がないんだと思う」

「「そっか」」

揃って納得する年少組に仁志だけでなく翼達も小さく笑みを浮かべた。

その頃風呂場では響がエルフナインに背中を洗ってもらっていた。

「どうですか？」

「うん、丁度いいよ。ありがとエルちゃん」

「いえ、僕も嬉しいんです。こっちに来てから一人でいる事がなくなりましたし」

「そうなんだ」

「はい。前の家では必ずヴェイグさんや姉さんにお姉ちゃん達がいましたし、兄様の実家では響さんやヴェイグさん、今の家だと皆さんがいてくれますから」

弾けるような笑顔でそう告げるエルフナインを見て、響も嬉しそうに笑顔を返した。

「そっか。じゃあ、向こうに戻ったらどうするの？」

「戻ったら……そうですね……」

手を止めてエルフナインは考え込み始め、そこで気付いたのだ。

(そうだ。僕、元の世界へ戻った時の事、何も考えてなかった)

本来は研究室兼自室で一人きりで生活するエルフナイン。
本体内であるため厳密には孤独ではないかもしれないが、上位世界での暮らしに慣れてしまった今のエルフナインではそれを思い出すと寂しさに襲われたのだ。

「……エルちゃん?」

「あ、あの、どうすればどなたかと暮らせますか?」

押し寄せた思いがけない寂しさにエルフナインの表情が悲しみに歪む。

それを見て響は微笑みを浮かべて彼女を優しく抱き締めた。

「そっか。やっぱり寂しいよね」

「……はい。想像したら、急に辛くなりました」

「じゃあ……私が卒業したら一緒に暮らそうか?」

「え? いいんですか?」

響の申し出にエルフナインが目丸くする。てつきり未来と暮らし続けると思っていたからだ。

だが、卒業して二十歳までは別々に暮らしてみようと話し合った響からすれば何の問題もないものだった。

更に、学院生活を未来と共に過ごしていた響からすれば、エルフナインの気持ちはある意味で痛い程分かるものだったのだ。

「うん、いいよ。ただ、一応二年間って事でいいかな?」

「二年間?」

「そう。卒業して二十歳までは別々に暮らそうって未来と約束してるんだ。で、二十歳になったらもう一度二人で暮らすか話し合おうって」

「そういう事ですか。分かりました。なら、その二年の間に僕は何とか兄様達と暮らせるようにしてみせます」

「おおっ! エルちゃんならきつと出来るよ!」

「はい! 絶対実現してみせます!」

笑い合いながらエルフナインは響の背中を再び洗い始め、少ししてその役割を交換する。

それをセレナや切歌が見れば少し嫉妬するだろう程の仲良し姉妹

の様相を呈しながら、二人は笑みを見せ合う。

それは湯に浸かってからも変わる事無く、二人で暮らす事になった場合のあれこれを話し合って盛り上がっていく。

結局その話し合いは二人が風呂を出ても続き、仁志達が動き出した後も終わらないままだった。

切歌と調が入浴している間、響はエルフナインとの生活を想像して笑みを浮かべて続けた。

——じゃあ、エルちゃんはお掃除とお洗濯をお願いするね。

——はい。響さんは買い物とお料理ですか？

——あー、でも本部内だと食堂使えるよね。

——じゃあ、たまに何か二人で作りましょう。

——なら甘い物にしようよ。ホットケーキとか簡単だし。

二人きりとなったりビングに響とエルフナインの楽しげな声が響く。

必ず明るい未来はやってくる。自分達で掴んでみせる。

そんな雰囲気を漂わせるように二人は笑顔を浮かべ続けたのだった。

夜のコンビニ店内へ来るのは久しぶりだった。

とはいえ、最後に来たのはセレナとヴェイグを連れて来た時なので当然なのだが。

客数はまばらで、チラとレジへ目をやればやる気があまり感じられない男性と笑顔で対応する女性の二人だけで、おそらくオーナーと呼ばれる男性はカウンターの奥にいるのだろう。

「……あの男性が茂部、か」

飲み物を選んでいるような振りをしつつ観察する。

見ている感じは特におかしなところはない。無気力に見える以外は至って一般人の範疇だ。

時刻は午後10時近く。そろそろシフト交代の時間だ。

見ていると見知らぬ男性が現れ、茂部という男性が何か話し始めた。

見た目や雰囲気からしてオーナーとはあの人だろう。

そして女性の方にも見知らぬ男性が近付き、そちらは何やら打ち合わせ、だろうか。

いやノートを手に行っているの、あれは申し送りというものだろう。

奏からも小日向からも聞いた事がある。

やがて茂部と女性はカウンター奥へと消えていく。

そこで私の持っているスマホが震えた。

「……いよいよ、か」

発信者は仁志さん。つまりマリア達も店の外に到着したと言う事だ。

「出て来たな」

そのまま少し待っていると、先に先程の女性が店内に現れて店の外へ出て行き、あの男性がその後店内へ現れて店の外へと出て行く。

それを見届け、私も店の外へと出た。

駐車場へと向かうと、その奥の辺りに男性と仁志さんの姿があった。

気配を殺して耳をそばだけると二人の声が聞こえてきた。

「それで何ですか？ 俺に話して」

「ああ、手短に聞く。雪音さんと付き合ってるそうだけど」

「なんだ、その事ですか。やっぱ店長も狙ってたんですか？ クリスの事」

馴れ馴れしい口調で雪音を呼び捨てる男性に仁志さんが軽く拳を握ったのが見えた。

何しろ相手の表情は勝ち誇っているかのようなものだったからだ。

「狙ってた訳じゃない。彼女は君の事を嫌っていたようだからおかしいと」

「そうなんですよねえ。俺もそう思ってたんです。でも、ある時急にバイト終わりに話があるって言われて」

そこで男性は自分のいる場所を軽く足踏みした。

「丁度この辺りでいきなりキスされたんですよ。で、付き合ってた欲し

いって言われて」

「っ!？」

分かつてはいたが、やはり悪意は雪音を利用し彼の中へ入り込んでいたのか。

「いや、マジ女って分からないもんですね。その日からちよくちよくエロい事させてくれるようになりましたよ。ただバイト終わりじゃないとダメだって言われて、しかも泊まりや長時間は無理って事で精々キスや胸を揉むのが精一杯でしたけど」

……今日という今日は悪意への怒りを禁じえない。

雪音の意識を奪い、よりにもよって嫌悪しているような相手にその身を委ねさせるとはっ!

ここからでは分からないが、おそらくマリア達も同じ気持ちでいる事だろう。

何しろこれだけのやり取りでも、あの茂部という男性は雪音が心惹かれるような男性ではないと分かるのだ。

「俺はてつきりあいつも店長が好きなんだと思ってましたけど」

「あいつも?」

「気付いてなかったとは言わせませんよ? 響ちゃん、完全に店長へ

女の顔してたじゃないですか」

「彼女は基本人懐っこいだけで」

「の癖に、俺は苦手だって言っただけの回数組んだらもう会う事もなくなりましたけどね」

「それは君が」

「まあもういいんですよそんな事は。で、話っただけの事ですか? ならこう言わせてもらいます。もうクリスは俺の女なんで、下手に関わらないでください」

そう告げて仁志さんへ背を向けた男性だったが、そこで何故か振り返った。

「最高だったぜ。あいつの胸」

最低な捨て台詞に私は思わず飛び出しそうになった。

だが、仁志さんは大きく息を吐いてその手に依り代を取り出してい

た。

「やっぱりか。これで安心出来る」

「は？」

その次の瞬間仁志さんが依り代を持って男性へ押し付けた。

「があああああっ！」

そして仁志さんと男性が同時に叫んだ瞬間には周囲の景色が変わっていた。

見ればマリア達と目が合った。

「翼っ！」

「分かっている！」

手にアームドギアを出現させる。

今の私達は全員水着ギアを着込んでいる。手にした刃を男性の影へと突き刺して、私は視線を仁志さんへと向けた。

「仁志さん、動きを封じたから一旦離れて！」

「わ、分かったっ！」

転がるように男性から仁志さんが離れた瞬間、眩い閃光が走った。

「悪意を祓ってっ！」

小日向の放った光が男性を貫く。

光が通り抜けた後、私はその光景に安堵した。

「……効果があつた、か」

「みたいね」

そこには茂部という男性が気を失って倒れていたのだ。

「いや、確認はしておくよ。マリア、君の短剣を翼へ貸してやってくれ」

「再度影縫いをさせるの？」

「こういう時に油断しちゃダメだ。死んだふりの可能性だってある」

「姉さん、ヴェイグさんも悪意のしぶとさを忘れるなって」

「そうね。翼っ！」

「ああっ！ はっ！」

こちらへ向かって投げられた刃を受け取り、私は倒れている男性の影へマリアのアームドギアを突き立てる。

「ヴェイグ、ブロックで両手両足を動かさないようにしてくれ」
「て、徹底してる……」

「ああ。だが、仁志さんの慎重さは間違っていない」

小日向の言葉に私は頷いてそう告げる。

これまでの事を考えれば悪意はしぶとさが異常だ。

ブロックによって両手両足を拘束されたような男性へ仁志さんは依り代を再度押し付けた。

だが、もう何も起きなかった。これで男性の悪意は祓えたと思っ
いいのか分からないが、今はそう思うしかないだろう。

「とりあえずこれで作戦終了、ってところかしら」

「そうだな」

「お、お兄ちゃん？ 何してるの？」

セレナの言葉で顔を動かすと、仁志さんが男性のボディチェックを
していた。

「スマホを探してるんだ。クリスとの写真とかあるかもしれない」

「そつか。それがあつたら面倒ですもんね」

「きつと悪意が入り込んでからの記憶はあやふやになってるはずなん
だ。だから確信出来るようなものがあると……あつた」

仁志さんの手には見た事のないスマホがある。

「ロックとか……ないのか。助かったけど、落としたら大変だぞ茂部
君」

言いながら操作を始める仁志さん。

そして目的の物を見つけたのだろう。表情は歪むのが見えた。

「……やっぱりあつたか。これも下手をしたらこちらを動揺させる手
段にするつもりだったのかもしれない。っと、一応動画も確認してお
こう」

「そうね。徹底的にやるべきよ」

「そくゆく事つと……」

そこからしばらく仁志さんは男性のスマホをチェックし、全てが終
わった後でそれを服の裾で拭ってから元あつたズボンのポケットへ
と戻した。

「よし、もういいよ」

周囲の光景が元に戻ったのと同時に仁志さんが私達へ顔を向けた。「翼達は一旦離れてくれ。何も無いと思うけど、もしもの時はまた頼む」

それに頷きを返して私達は一旦距離を取ると、仁志さんが男性の頬を叩いた。

「ん……？」

「ああ、良かった。茂部君、こんなところで寝ると風邪引くぞ」

「……店長？」

「年末のシフトの事を相談しようと思ったら、急に倒れたからビックリしたよ。連日のバイトで疲れたのか？ 言ってくればシフト組む時に配慮するけど」

「いや、そういうのじゃないっすけど……つかしいなあ」

納得出来ないように首を傾げて立ち上がる男性を仁志さんは安堵するように見つめていた。

「そういえば茂部君、最近雪音さんと会った？」

「は？ いやいや俺がどうして会えると思います？ 連絡先も知らないのに」

「そうなんだ。それはすまない。いや、実はこの前、名駅で雪音さんに似た後ろ姿を見てね。隣にいたのが茂部君に似てたもんだから」

「マジですか？ うわあ、じゃあきつとそいつはあのおっぱいに目がいかない奴ですよ」

「……どうやら悪意が宿っていなくてもいても大きく変わらないらしい。ただ、今の方が若干ではあるが愛嬌のようなものは感じられるかもしれない。」

「茂部君、今のような事、あまり言わない方がいいぞ」

「分かってますって。こんな事店長相手にしか言いませんよ」

「出来れば俺相手にも止めて欲しいんだけどね。とにかく仕事終わりに引き留めて悪かった。お疲れ様」

「いえ、こつちこそ心配させてすいません。お疲れさまっす」

そのまま駐車場を去っていく背中を見送り、仁志さんは大きく息を吐いた。

私もやつと安堵出来た。どうやら本当に悪意を祓う事は出来たようだ。

「どうやら悪意に完全支配されてたみたいだ。多分だけドクリスと接触してた時は悪意の制御下に置かれてたんだろう。だから記憶がそこだけ抜けてるんだ」

「誤魔化してるって可能性は？」

「ないとは言い切れないけど、多分大丈夫だ。もし悪意が残ってるなら俺の作り話にあそこまで下世話な返しは出来ないよ。あれは間違いないく茂部君だ」

何とも言えない判断基準に私達は苦笑するしかない。

と、そこで夜風が吹いて私達の体を強く冷やした。

「寒い……」

「そうだな。今はとりあえず帰ろう。ただ、俺はちよつとオーナーと話をしてくれるからそつちだけで先に向かってくれ」

「分かりました」

こうして私達は仁志さんと別れて帰る事になった。

夜道をマリアとセレナが歩き、私は小日向とその後ろを歩いていった。

「寒くなってきましたね」

「そうだな。何せ暦の上ではもうじき冬だ」

けれど、元の世界ではまだ春を迎えようとしている頃だと思いつし、何とも言えない気持ちになる。

正しく時が動き出した時、私達はどう思うのだろうか？

いつそこちらで冬を越して春になる辺りで戻りたいと、そう思うのはいけない事、なのだろうな。

「それにしても良かったです。神獣鏡の光が茂部さんには効果があった。只野さんには効果がなかったから」

「ああ。やはり依り代に選ばれた仁志さんは特別な立場なのかもしれない」

この事態になってから時々思う事ではあるが、もしも立花が出会った相手が仁志さんでなかったらどうなっていたのだろうか。

依り代は与えられたのか。そもそもゲートはどこになったのか。色々と思う事は多い。

だが、同時にこうも思うのだ。仁志さんだから選ばれたのではないのかと。

しかしそれを裏付けるものは何もない。

何せ仁志さんと同様にPCとスマホで我々のゲームをやっていた人間は他にもいたはずだからだ。

偶然なのか必然なのかは今もって不明だが、少なくとも仁志さんで良かったと思う事は多い。

もしも金銭面で余裕がある人間であれば、私達は精々家事をやるぐらいしか働く事が出来ず精神面で負い目を感じる事となっただろうし、居住面で余裕がある人間であれば、私達はあのいくつかの住まいで支え合う事はなかっただろう。

今の私達があるのはどちらにも恵まれておらず、けれどそれを何とかしようと懸命になってくれた仁志さんだからこそだ。

「小日向、雪音と奏を取り戻すとして、悪意はその後どうすると思う？」

「え？」

「仁志さんは自身の中の悪意がバックアップになるだろうと予想していたが、私はそれだけとは思えない。いや、下手をすればそれとは異なる方法を使ってくる事も考えられると思うんだが、どうだ？」

私がそう話を振ると小日向は真剣な表情で考え込んだ。

もし仁志さんの言う通りだとしても、だ。あの悪意がその事を知ってそのままにいるだろうか？

かつて仁志さんは悪意をこう評した。ベアトリーチエの時は面白さを求めていたのが、悪意になってからは復讐を果たす事しか考えていないと。

つまり、悪意は復讐を最高の状況で果たそうとしているはずだ。

私達世界蛇を倒した者達へ、苦しみや悲しみを味わわせるために。

「翼さん」

そう考えていると隣の小日向から声をかけられた。

顔を向ければそこには凜々しい表情の小日向がいた。

「今、悪意は只野さんの考えを読んでいます。なら、きつと只野さんの予想のままではない気がします」

「そう思うか？」

「はい。だから奏さんとクリスを元に戻す前に、只野さんをどうにかするべきじゃないですか？」

「……悪意の除去、だな？」

私の言葉に小日向が静かに頷いた。

愛の力を仁志さんに注いで体内の悪意を倒す。それがきつと唯一の悪意を完全に倒す方法だ。

仁志さんは自分から私達へ悪意が入り込むのを恐れていたが、最悪のシナリオを考えれば一か八か賭けに出るしかない。

「不意打ちでやろう。雪音を操った悪意がやったように、事前準備をさせない事が大事かもしれない」

「そうですね。なら、畳みかけるのはどうですか？」

「……悪意がやったように、か。いいだろう。向こうのやった事でその企みを潰すのは意趣返しとしても最高だ」

「じゃあ、帰って響達と相談ですね」

仁志さんから悪意を排除したい。その想いは全員共通だ。

その想いと仁志さんへの感謝を込めて口付けに乗せよう。

奇襲は相手の意表を突ければ突ける程いい。

ならば、早く帰宅するでしょう。

「マリア、セレナ、すまないが走って帰ろう。相談したい事が出来た。仁志さんには内緒で、だ」

「相談？」

「走るんですか？」

「そうだよ。悪意に聞かれないようにね」

「そういう事。分かったわ。セレナ、急ぐわよ」

「うんっ！」

ギアを展開している今の私達なら普段以上の速さで走れる。
怪しまれない程度に急ぐとしよう。

あー、意外と話し込んでしまった。ほんの10分程度で帰るつもりが気付けば20分以上話してたのかなあ。

こうなるとおでんを買ったのも不味かったかもしれない。

売り上げに貢献してよってオーナーに冗談半分で言われたし、エル達も興味があるだろうと思っただし、気付けば廃棄になりそうな物からついついあれこれと……。

きつとこの時間に食べさせるのはマリアが難色を示すだろうなあ。
その場合は……何とか折れてもらおう。

毎日そういう事をさせる訳じゃないならって感じで。

「ただいまあ」

少々心苦しさを覚えながらドアを開けて鍵を閉める。

靴を脱いでリビングへ入れば予想に反して全員勢揃い。

「…………おかえり（なさい）（デス）……………」

「うん、ただいま。これ、お土産のおでん」

そう言っただけにした袋を軽く持ち上げた瞬間、一部が満面の笑顔。
言うまでもなく響と切歌にエルである。

「仁志？…この時間に食べるのは」

「分かってるって。でもさ、エルやセレナにヴェイグはおでんを知らないんだ。俺も店の売り上げになるしと思っただけ。今日だけだからさ。いいだろ？」

「はあ……仕方ないわね」

母親モードのマリアを何とかやり過ぎし、俺は持っていた袋を響へ渡す。

「これ、テーブルに置いてくれる？」

「はい」

嬉しそうに袋を運ぶ響を見送り、俺は疑問に思っていた事を尋ねる事に。

「で、どうしてマリア達の誰も風呂入ってないんだ？ 見た感じ切歌

と調は入ったんだろ？」

「ちよつと全員で相談する事があってね」

「相談？」

「うん、でもそれも終わったからセレナとマリアが次に入浴する事になってる」

「そっか」

じゃあ俺はそれまでおでんを食べるエル達でも眺めさせてもらおうと、そう思つて座った瞬間だった。

「仁志、こっち向いて」

「へ？ んっ!？」

声がした方へ振り向くやいきなりマリアにキスされた。

心なしか胸の奥があつたかくなるようなキスを。

「ま、マリア？」

「ふふっ」

悪戯を成功させたように微笑むも、その頬が若干赤いので照れてはいるんだと思う。

と、そこで顔を強制的に逆側へ向けられた。そこにはセレナがいた。

「っ!？」

軽く触れるだけのキスだけど、また胸の奥があつたかくなつた。

何だろうか、これ。

「セレナ……どうして……」

「え、えつと……したかつたから？」

恥ずかしそうに顔を赤めながらそう言つてセレナはそそくさとその場から離れる。

「只野さん」

「え？ んっ」

未来の声が聞こえたと思つて振り向けばキスされていた。

ああ、また胸の奥があつたかくなる。幸福感つて、こういうのかもしれない。

「未来……もしかして」

俺の言葉に応えず、照れ笑いを見せながら未来も視界からいなくなる。

「師匠、まだ終わってない」

代わりに視界の中へ現れたのは調。

勿論彼女も当然とばかりにキスをしてくれた。

ああ、胸の奥があつたかくなつて、何だか体の中から力が湧いてくるような気がする。

「えっと、調も教えてはくれないんだよ、な？」

「德斯よ。ししよー、今は大人しくアタシ達の気持ちを受け取ってください德斯」

「んっ!？」

抱き着くようにキスしてきたのは切歌。

な、何だ？ 胸の奥があつたかくじやなく熱くなつたぞ？

本当に太陽のような子だな、切歌は。

「き、切歌？ ちよつとびっくりしたぞ？」

「えへへ、アタシのししよーへの気持ちが暴走した德斯」

そんな事を言いながら切歌も照れくさそうな笑みを残して離れていく。

「仁志さん、まだだよ」

「へ？ っ!？」

後ろから声が聞こえたかと思つたら、視界に現れたのは翼。

で、そのままキスされると、あつたかい気持ちになつてきた。

ずっと体中を覆つてた倦怠感が薄れてきた感じさえある。

ゆつくりと離れて行く翼の顔を見つめていると、彼女は柔らかに笑みを浮かべてくれた。

「仁志さん」

そして、こうなると残るは当然彼女しかない。

顔を向けた先ではお日様のような少女がはにかんでいた。

「響……」

「えっと……体の方はどうですか？」

「え？ あ、ああ……それが不思議なんだけど気怠さや疲労感が抜け

てっ!？」

完全に、不意を突かれた。

来るのかもって思っていたけど、喋ってる途中はないだろうと油断してた。

しかも舌を入れてきたから余計驚いた。

だけど、それが愛しくてそつと響の体を抱き締める。

それと同時に依り代から音が聞こえた。

「……今のは？」

「依り代、からだな」

キスを終えてやや赤い顔をしている響とそうやって会話して、俺は依り代を取り出してゲームを起動させる。

するとステータスが更新されたとの表示。

すぐに確認をと思ったが、俺はある事を思い出して手を止めた。

「仁志さん？」

「……ステータスが更新されたみたいだ。多分だけど、響に新しいギアが追加されたんだと思う」

「じゃあ、確認しましょう兄様」

「いや、止めておこう。これは、ある意味切り札だ」

今のみんなからのキスで俺の体は楽になったけど、悪意がいなくなった保障はどこにもない。

せめて奏やクリスへ依り代を押し付けた時に痛みがなくなっていれば、そう考えてもいいかもしれないけどな。

「まだ悪意が俺の中にいるかもしれない以上、確認はしない方がいいと思うんだ。だから響、土壇場になるかもしれないけど」

「構いません。きつと、きつとそれがクリスちゃんと奏さんを助け出す力になってくれるはずですよ」

そう言い切ってくれた響からは、強い信念のようなものを感じる。そうだな、きつとそうなってくれるはずだ。

開けてビックリ玉手箱じゃないけど、悪意さえも予想出来ない力が、強さが、今の響には出来たんだから。

「それにしても、本当にビックリしたよ。えつと、悪意対策？」

「ええ。翼の提案にエルの意見を加えた結果、成功率の高い方法だとみんなで思ってた実行したの」

「兄様へ悪意が入り込んだ時、真つ先に動いたのはクリスさんでした。あれは、兄様の想いが定まっていけない、心の無防備な状態を狙ったんだと思います」

「だから、私達もそうしようと思つて奇襲をかけたんだ」

成程とばかりに細かに頷く。

実際俺は何の心構えも出来ず、みんなにされるがままになった。

それはあの別れの際に近いと言える。

「でも、ただそれだけじゃいけない。みんなで只野さんへの気持ちを込めないとな」

「俺への気持ち？」

「デス。ししよーへの感謝と悪意なんかには負けないでつて気持ちデス」

「正直師匠が悪意のせいで弱つていくのが辛かった。それでも私達と一緒に戦つてくれる師匠に、私達もお返しがしたかった」

「お兄ちゃんを苦しめる悪意に私達の心の光をぶつけてキレイにしてあげる事。それが一番のお返しじゃないかなって」

「それで不意打ちのキス、か……」

俺から悪意が入り込むとすれば、それは悪意もそういう風に準備している時だ。

なら、その準備をさせなければいい。つまり、俺にも知られないように、気付かれないように動く事か。

「それで、最後はちよつとだけ意表を突くために話しかけて、その途中でつて」

「うん、よく分かった。敵を欺くにはまず味方からつて奴だな」

「そういう事。でも、まだ分からないのは事実だし、後は寝てみてだね」

「そこでヒトシがうなされなかったら大丈夫だな」

「だな」

ヴェイグの言葉にそう返して、俺はマリアとセレナへ視線を向け

る。

「とりあえず二人はお風呂へ入って来るといい。この時期だと湯が冷めてくるから沸かし直してくれよ?」

「うん、分かった」

「じゃあ、お先にお湯、いただくわね」

イヴ姉妹が揃って立ち上がるのと同時に俺はエルへ視線を向けた。

「さてと、ならおでんと対面しようか」

「はい!」

「ヴェイグもな」

「ああ。楽しみだな。さつきから良い匂いがしてるんだ」

ワクワクしながらテーブルへと向かうエルとヴェイグ。

さて、ならあとは……

「切歌、あまり食べ過ぎないように必ず誰かと分け合うんだぞ?」

「デッ!? わ、分け合うデスカ?」

「色々買ったけど同じ物を複数を買ってないからな。エルかヴェイグと分け合いなさい」

「りよーかいデクス……」

「響もな」

「分かってますよ。それに、この時間にすっかり食べると太るかもしれないんで」

「かもじゃなくて絶対、だからね」

未来の言葉にたははと苦笑する響を見て俺も若干苦笑する。

視線を動かせばおでんの容器の蓋を取って表情を輝かせるエル達
がいた。

調は切歌に呆れ顔で、未来はそんな調に苦笑している。

で、翼はその光景に笑みを浮かべていた。

何となくだけど、少しだけあの頃が戻ってきた気がした。

まだここに居て欲しい人達が足りないけど、それもすぐに取り戻して
みせる。

奏、クリス、待っていてくれ。必ず俺達みんなで助け出してみせるか
ら。

「つと、しまった。今食べるとしばらく風呂入れなくなるぞ」

「でもお風呂入ってないの、この中だと未来と翼さんだけだし……」

「響？ つまり私と翼さんに見せつけるように食べるのかな？」

未来がジト目と共に放った言葉に響が無言で首を大きく横へ振った。

翼はそんな二人に苦笑しているものの、別に構わないと言わないところを見るに食べたいらしい。

「じゃあ、みんなが風呂入り終るまでお預け、かな」

「それがいいと思います。だから切ちゃん、エル、ヴェイグ、今は見るだけ」

「「そんなあ……」」

揃って肩を落とす三人に自然と笑いが出た。

久々だと自分でも分かるぐらい、心から笑えた。

そうやって笑ってたら、いつの間にかみんなも笑ってた。

そしたらマリアとセレナが風呂から戻ってきて、笑う俺達に近所迷惑だからそれぐらいにして揃って注意してきたのでみんなでも同時に黙った。

だけど、今度はそれがおかしく思えてまた笑った。

そんな俺達を見て、マリアとセレナが呆れた顔をしたのも束の間、同じように笑い出した事で余計笑えた。

ちなみにマリア達は服を脱ぐ前に風呂の温度を確かめ、若干ぬるくなっていたので沸かし直しをしようとしていたら俺達の笑い声が聞こえたために注意をしに戻ってきたらしい。

その後、イヴ姉妹が風呂に入り、翼と未来が入って、俺が入った――ところでおでんは食べ始められていたようで、俺が上がった時には出汁さえも残ってない空の容器と割り箸だけがテーブルの上に残っていたのだった。

……道理で俺が寝間着に着替えてキッチンに出た瞬間、エル達が歯磨きを始めた訳だよちくしよう。

双翼のウィングビート

「ここが奏の世界、か……」

こうしてゲートをくぐり、別の世界を訪れるのもこれで四度目。可能ならこれで最後にしたい。いや、しないといけない。

未来にイヴ姉妹の力でゲート内の濃度の高い瘴気は吸う事なく動けるようになった。

だからと言って安心出来るとは言いい切れない。

悪夢を見る事はなくなったし、体の倦怠感は消えたと言ってもいいけど、悪意のしぶとさを俺はよく知ってる。

「きつと悪意が待っているのはあのライブ会場」

「この世界でカルマ・ノイズと戦った、あの場所ですね」

翼と響の言葉を聞いて俺は思い出す。

ゲームでのイベント一発目がその『片翼の装者』だった。

初めて出現したカルマ・ノイズという敵、ギャラルホルンという完全聖遺物、そして平行世界という概念。それらがファンへと示された記念すべきものだ。

「仁志、体の方はどう？」

「気怠さとかないですか？」

「ああ、大丈夫だ。みんなの愛のおかげだよ」

心配してくれるマリアと未来へ安心させるように笑顔を見せる。

本当に何ともないと信じてもらえるように。

二人も俺の表情や雰囲気やせ我慢などではないと察してくれたのか安堵するように笑みを返してくれた。

「とりあえず、今は全員リビルドギアにしておく。それと、これも言うておくよ。今回、相手は前衛と後衛でバランスがいい二人が揃ってる。だから、まずはその連携を断ち切る必要があると思うんだ」

「はい。皆さんからの話を聞く限り、クリスさんを操る悪意は凄まじい力を持っていると思われます。もしそこに奏さんという強力な前衛が加われば手が付けられません」

「そこで、俺とエルで奏を。パズルに隔離する」

「ちよつと待つてください。ヴェイグさん、今の悪意はパズルを外から」

「分かっています。だから僕に考えがあります。きっとそれなら前回のように簡単にパズルを無力化出来ないはずです」

セレナへそうはつきり言い切るエルには強さというか覚悟のようなものが見えた。

おそらくだけどキャロルの力を借りるんだろう。

エルフロル、再びかもしれない。

「……エルがそこまで言うなら信じる。だけど、あまり危ない事はないで欲しいな」

「姉さん……」

「みんな揃ってないの意味がないんだからね？ みんなで、奏さんもクリスさんも、勿論エルやヴェイグさんも笑顔でいられないと」

「はい！ 大丈夫です！ 僕もヴェイグさんも絶対笑顔でお二人を迎えます！」

そう言つてエルが見せたのはサムズアップ。

それを見たセレナも笑顔でサムズアップを返す。

クウガのワンシーンのようで、ちよつと心が熱くなる。

「そうと決まれば、あとは悪意をクリス先輩と奏さんから追い出して、完全勝利するデスよっ！」

「師匠、依り代の方は大丈夫？」

「バッテリーなら心配ないよ。ちゃんとフル充電済み」

奏とクリス。共に悪意に強く染められているだろうと予想されたから、今回依り代は完全にバッテリーが尽きる可能性が高い。

だけど、ここで終わらせるのならそれでもいい。次のチャンスを待つよりも、このチャンスをものにしようと思わないと気持ちで負ける。

「じゃあ行きましょう。悪意は待っていると云ったけど、念のために警戒はしなげね」

「そうだな。狙撃されないと限らないか」

「ならライダーギアを使いませんか？ 今なら三人いるから」

「じゃあ、まず翼と調が先行して移動してくれ。翼の後ろに未来、調の後ろに切歌でお願い。で、二人に少し遅れてマリアとエルだ」

「そして、小日向と暁をライブ会場前で降ろしたらまた戻ってくる?」「出来ればマリアが到着してからにして欲しい。ないとは思うけど、狙撃された時にお互いが邪魔になる可能性がある」

こうして三人はライダーギアツインドライブとなり、未来と切歌を乗せてある意味ダブルライダーが先行して出発する。

その姿がすぐに見えなくなったのを確認してマリアがエルと共にアームドギアである“ハリケーン”へと乗った。

「エル、しっかりと掴まってなさい」

「はいっ!」

「マリア、ハリケーンの最高時速は600キロだ。二人の新サイクロン号よりも速いから追い付かないようにな」

「ええ、速度に気を付けながら移動するわ」

笑みを見せてそう返すと、マリアはアクセルを解き放って風となった。

何というか、本当に凄いよなあ。

「すごい……あつという間に見えなくなっちゃった……」

「あれでも300も出してないんだろなあ。本当にライダーマシンの凄さを思い知らされるよ」

目を丸くするセレナに笑みを浮かべながら、俺はもう見えなくなつたマリアに息を吐く。

「仁志さん、奏さん、どうなつてると思いますか?」

その質問が意味する事を理解し、俺は首を力なく左右に振るしかない。

「分からない。ただ、前回よりも禍々しくなつてる可能性が高いとは思ふ。あるいは……」

「あるいは?」

「お兄ちゃん、他にどんな可能性があるの?」

「あるいは、クリスに近い状態になつてるかもしれない」

「それって……」

「あの、えつと……」

「軽装のイーヴィルギア、になつてる可能性もある。あれだと、大抵のアームドギアによる攻撃で肌が傷付く」

「っ!？」

そう、今にして思えばあれはそういう事なんだ。

露出が高いというのは速度を上げるためと思われがちだが、逆に言えば防御力が低下する事を意味する。

大抵はそれが弱点でもあるんだが、今回のように操られた味方が相手だとそれさえも強みになってしまう。

「特に響以外は殺傷能力が高い。当たり所が悪ければ……」

「そういえばセレナちゃんが操られた時、切歌ちゃんも調ちゃんも戦い辛そうでした。操られたセレナちゃん、攻撃を避けなかつたから」「下手すれば悪意は自分から攻撃に当たりにいくかもしれないぞ。ギアに守られてない場所は生身と同じだ。そこにアームドギアが当たれば……」

「ど、どうしようお兄ちゃん。このままじゃ、私達、戦えない……」

「セレナちゃん……」

項垂れるセレナの肩を響がそつと抱き寄せるのを見て、俺はどうしたのかと考える。

翼やマリアはいざとなつたら致命傷じゃなければと割り切るかもしれないが、それをセレナやザバコンビに求めるのは酷だろう。

特にクリスのギアは異常な程の軽装だった。あのままだとすれば、最悪そういう手段もやってこないとも限らない。

「待てよ?」

もし悪意の狙いが同士討ちだとすれば、自傷行為に近い事をしてきてもおかしくない。

そしてそれを可能にするのは攻められた時だけだ。つまり、ある種のカウンター攻撃だ。

「響、悪意はある意味で君を狙つてる可能性があるかも」

「え?」

「今言つたように悪意はクリスや奏の体を守らない事で攻撃し辛くす

るかもしれない。そうなった時、誰が一番攻撃し易い？」

「……私、です」

「そうなんだよ。素手で戦う響は殺傷能力が他のみんな程高くない。いざとなれば拳じゃなくて掌底にすればいいし」

攻撃力としては落ちるとは思わないが、イメージ的に拳を突き立てるよりも殺傷力は落ちる気がするんだよな。

「な、何で悪意は響さんを狙うの？」

「響はね、神殺しって言う特性みたいなものを持つちゃってるんだよ。ガングニールが持つてる哲学兵装の力に、響自身の特性である束ねるってものが組み合わさってさ」

「うん、そうなんだ。でも、それは悪意には」

「えっと、俺の知ってるものの中には悪の親玉が神になるとか結構あるんだ。悪意が最終的に邪神みたいな存在になる可能性は十分ある」
そうなった場合、きつとあの瞬時の再生能力を發揮するはずだ。

「じゃあ……悪意は私を操りたい？」

「かもしれない。あるいは、神殺しさえ分析するなり学習して無効化出来るのかもしれないな」

有り得ないと言えないのが悪意の恐ろしさだ。

まさかとは思うけど某ゲームのラスボスみたいにウルトラマンもどきになって神を名乗らないだろうな？

「とにかく響、攻撃する時は気を付けて。接触したところから取り込もうとする罠がないとも言いきれない」

「分かりました」

そうやって話した後は三人で響の追加ギアの予想をし合った。

俺はいつそエクストライブと告げると、響とセレナからズルいと言われてしまった。

どうやら考える事は同じらしい。なのでエクストライブはなしでとなつて再度予想。

「ならメビウスギア」

「あつ、私も似た事考えてました。ウルトラマンギア」

「私はガンダムギアです」

見事にコラボギアみたいなラインナップだ。

しかも実現が厳しそうな奴だし、一つなんか自分で言っておいてなんだけどキャラまで限定してるもんなあ。

にしても、セレナのガンダムギアには驚きだ。

「えっと、セレナ？ ガンダムギアって……」

「響さんは格闘戦で戦うから、ゴッドガンダムとか似合うかなって」
「あ〜……」

ソルブライトギアがその系統だし、有り得ないとは言い切れない。ただ、Gガン知らない響は理解出来ないため首を左右に揺らしていた。

「ゴッドガンダム……？ それってジークンってやつ？」

「はい。必殺技を出す時に背中中のウイングが展開して虹色の輪を作るんです。お兄ちゃんが言うには日輪って言って、お日様の回りの光の輪をイメージしてるらしいです」

「日輪かあ。カツコイイね」

「それと、最後の方だと全身が黄金に光るんです！」

「黄金？」

「真・ハイパーモードって言われてるやつなんだ。明鏡止水の境地で使うもので、要するに心が乱れもなく済み切った状態っていう、一種の悟りみたいな感じ。仏様みたいな心をイメージしてくれると分かり易いかな」

「お〜……」

セレナからGガン話を聞き始める響を眺め、俺は少しだけホツとしていた。

あの響がエルとヴェイグを連れ立って俺の部屋に戻った時からやっと、やっと重苦しい空気が減ったと感じられたからだ。

勿論今もクリスと奏が悪意の手の中で、取り戻せる保障はどこにもないような状況ではある。

それでも、こうして響とセレナが気を張り詰め続けなくてもいられる事は大事だ。

きつと翼達もそうだろう。今のみんなには、悲壮感がない。

意図してるのかしてないかは分からないが、前向きな心構えでいられる事は重要だと思う。

特に、悪意と対峙するにあたっては。

「おっ」

そこへ聞こえてくるバイクの音。どうやら翼と調が戻ってきたらしい。

そんな風に思った次の瞬間には俺達の前で二台の新サイクロン号が停止する。

「お待たせしました」

「仁志さん、どうしますか？」

「先に翼が先行しよう。調は翼が出発してから30秒後に出発してくれ。で、響が調の後ろへ。セレナは、ここでマリアを待っていてくれるか？」

「うん、分かった」

本当は響に残ってもらおうと思ったが、きっきの話で悪意に狙われている可能性を見出した以上一人にするのは少々怖い。

なのでセレナに残ってもらう事にした。セレナなら守りは得意だから、そうそう簡単にはやられないだろうと思って。

翼の体にしっかりとしがみつき、俺は合図を送るように声を出した。

「いいぞ」

「じゃあ、しっかりと掴まってて」

こうして翼の後ろに乗るのも二度目だ。

しかもあの時よりも心なしか気持ちが良い。

余裕が生まれたのかどうか分からないが、風を切って進むのが心地いいのだ。

まさしく風よりも速い感覚、だろうか。

「仁志さん！」

「どうした！」

風の音が大きいから音量を大きくしないと会話は出来ない。

「奏へは私とマリアで当たらせてくださいっ！」

その一言だけで分かった。

きつとマリアも同じ事を思っているんだろうと。

ドライデューヴァで解決したいと、そういう事だろうか。

「分かったっ！ ドライデューヴァの事はドライデューヴァに任せ
るっ！」

そう告げると速度が更に上がったのが分かった。

それが何よりの翼からの返事だと思い、俺は笑みを浮かべる。

何となくだけど奏の事はこれで大丈夫だと思えたのだ。

翼だけでは届かない手も、マリアも入れば届かせる事が出来るはず
だと。

ライブ会場が見えてくると、さすがに翼も速度を落とし始めた。

それでも結構速い方だと思う。元々バイクに乗ったりしていた翼
だから運転には自信があるんだろうと思っていたのだが、降りた後に
驚きの言葉が。

「ううん、このギアの時は不思議とどれだけ速度を出してもバイクを
制御出来る気がするだけ」

「マジ？」

「うん。多分本当にライダーになってるんだと思う。手足のように扱
えるんじゃないかな？」

どうやら本当にバイクと人機一体になっているらしい。

恐るべしライダーギアツインドライブ。

やがて響も調と共に到着し、そこから10分と経たずにマリアもセ
レナと共に戻ってきた。

ただ、セレナが少し怯えていたので聞いてみると、一瞬ではあるが
マリアが最高速を出したらしい。

その瞬間、セレナの中では時間が消し飛んだ感覚になったそうだ。

「な、何とも貴重な経験をしたね……」

「ううっ……ライダーってああいうのを平気でやれるんだね。私には
無理」

「セレナ、大丈夫か？」

「姉様、急ぐ気持ちは分かりますが姉さんの事も考えてください」

「ご、ごめんなさい。ギアもあるし大丈夫かと思ったのよ」

セレナを心配するヴェイグとマリアへ注意するエル、そして申し訳なきようなマリアという光景に俺は密かに笑みを浮かべた。

敵地だろうと気負い過ぎてないのは良い事だと思つて。

「みんな、一つだけいいか？」

戦場となる場所へ入る前にみんなへ響やセレナと話した事を伝えた。

悪意の狙いが響である可能性が高い事。クリスと奏の体を守る部分を減らして、こちらの攻撃へ当たりにくるかもしれない事。

故に響以外は基本防衛を意識して欲しい事を告げた。すると切歌と調は俺の言葉に真つ先に頷いてくれた。

「悪意はセレナを操った時、アタシ達の攻撃防ぐ事をしませんでした」「むしろ傷付いてもいいから私達を攻撃するって感じだった」

成程、既に片鱗は見せてたのか。

これまでの悪意のやり方や動きを思い返せば、あちらさんも色々手を変え品を変え挑んでいるのが分かる。

翼と未来は積極的に攻撃したものの、本人との乖離が激しく精神的な動揺は誘えず失敗。

切歌は本人の思考を誘導する事であらうしさを保ったままだったが、故にギアを完全に思い通りとは出来ず失敗。

マリアは純粹に力で押し切ろうとしたものの、それさえも超えるギアが出現した事で敗北し、最終的にはマリア自身の覚醒もあつて失敗。

セレナは切歌系統のやり方且つダメージを恐れない方法を採用したものの、傷付けても構わないという覚悟のマリアによって敗北。

奏は切歌やセレナの上位というか元祖のような状態で、更に攻撃性を高めて自らの意思で悪意に従っている事で精神的揺さぶりもかける事が出来たものの、数の差には勝てず失敗。

見事に最終的には失敗に終わっているものの、奏に関しては数の差をもつてしてやつとだ。

つまり、その奏をより悪意は強化してくるに決まってる。

そこに悪意の巫女なんて名乗るようになったクリスマスまでセットだ。「みんな、平行世界との付き合いが始まり、カルマ・ノイズとの決戦を初めて行ったここで同士討ちを狙う悪意の企みを終わりにしよう。絶対響を取り込ませはしないし、二人を無事に元に戻してみせるんだ」

俺のその言葉にみんなは静かに頷いてくれた。

そのまま俺達はライブ会場へと向かう。

そこで待つであろう、悪意に染められた仲間達を助け出すために……。

「よお、意外と早かったじゃねーか」

「クリス……その姿は……」

会場内に足を踏み入れた仁志達が見たのは、ステージ中央で自分達を待ち構えるように腕を組むクリスの姿だった。

それも、その身を包むギアは更なる変化を遂げていた。

漆黒だった色合いが赤黒いものへと変わり、マイクユニットは消え、両肩にもギアが出現しそれには鋭い棘が裝飾されていたのだ。

その足元の靴の踵にも同様の棘が増えていて、傍には奏だろう闇の繭が不気味な程静けさを保って転がっている。

まさに特撮などでよくある悪の幹部と云うような見た目であった。

「何だかここそやってたみてえだな。そうそう、あのスケベ野郎まで解放するとはやってくれたぜ。いいエネルギー源だったのによ」

「クリスっ！ 本当に貴方はそれに何にも思っていないのっ！ 勝手に体を操られ、嫌いな異性とキスをさせられたのよっ！」

「しかもお前は体まで触られていたんだ！ お前は知らない」

「知ってるよ。とっくの昔に、な」

翼の言葉を遮るようにクリスの声が響く。

どこか自棄になったかのような、声が。

「驚いたか？ あたしも驚いたぜ。まさかあたし様の体をあの時より前から勝手に悪意が使ってたとはな。どーりで時々バイト終わりに記憶が飛んでる時があったはずだ」

ははっ、と、そう乾いた笑いを浮かべてクリスは顔を伏せた。

誰も何も言えなくなる中、彼女は尚も言葉を続ける。

「で、あたしが知らなかったあたしの記憶を、悪意は急に見せてきやがった。多分あたしをもっと自分の支配下に置きたかったんだろ。さ。で、こつちとしては驚きしかなかった。何せ、何の前触れもなくあのスケベ野郎とキスをしたり、あるいは胸を触らせてた記憶が浮かんできたんだからよ」

そこで少しだけ息を吐いてクリスは弾かれるように顔を上げた。

「その記憶の中のあたしは、あいつに心底惚れた女みたいに振舞ってたんだっ！ あたしが、あたしが仁志にしてみたかったような感じになあっ！」

「クリスちゃん……」

悪鬼羅刹のような表情で叫ぶクリスに響が表情を悲しみで染める。

無意識に片手を胸に当て、今にも泣きそうになりながら彼女は目の前を見つめた。

「信じたくなかったっ！ 信じられなかったっ！ あたしは、あたしは仁志にもさせた事のない事を、よりもよってあのスケベ野郎にさせてたなんてっ！」

誰も何も言えなかった。

特に同じく恋をしている響達は。

クリスの叫びは、同じ事をされた場合の自分の叫びだと思っていたのだ。

自分が嫌っているような相手と、知らぬ間に親密なやり取りをさせられていたと見せつけられたらと。

「イラついたっ！ 悪意が憎くて憎くて仕方なかった！ 気が付いたらあたしはあたしに戻ってた。だけど、その怒りや憎しみが力に変わるのを覚えて、あたしは笑ってたんだよ。あんなにも怒り狂ってたのに、体に溢れる力に勝手に笑ってたんだよ……」

乾いた笑いを浮かべながらクリスは仁志達を見つめた。

闇のような瞳で、涙を流しながら。

「もうあたしは変わっちゃった。汚れちゃったんだよ。悪意の奴が、

あたしの体を勝手に使って、あのスケベ野郎といやらしい事をさせてたその時から」

「違うっ！ それは違うよクリスっ！」

「……何が違うって言うんだよ、仁志」

睨むような眼差しでクリスは仁志を見やった。

その眼光の鋭さに一瞬怯みかけた仁志であったが、ここで怯んではクリスの心の傷を広げるだけだと思ひ辛うじて踏み止まった。

「君は汚れてなんかいない！ キスや体を触らせたからってそんな風に俺が思うものかっ！」

「仁志が思わなくてもあたしが思うってんだよ。生きるためとか殺されそうだったからとか、そういうやむにやまれぬ事情があつてならあたしだって今の言葉で救われるさ。だがな、悪意がやった事はそんなんじゃない。あたしが、自分から、あいつへキスをして、胸を触らせたんだ。仁志には言えないような言葉を使って、悪意はあたしをあの手スケベ野郎の女にしてたんだよ」

怒声と呼ぶには、それはあまりにも悲しく、絶叫と呼ぶには、それはあまりにも静かだった。

クリスの心からの告白は仁志達の心を貫き、特に女性達にはその言葉に込められた様々な感情が深く刺さったのだ。

無理矢理ならばまだ受け入れられる。何か代償をもらっているのなら、まだ理解出来た。

だが、悪意がさせていたのはどちらでもなく、ただただ仲睦まじく過ごしている事の延長線上の行為だ。

しかも、本当に好きな相手とはまだそこまで出来ていない事をさせられていた。

それを突き付けられた時、クリスの中でどれだけの憎悪が生まれただろう。

好意を告げて唇を重ねた相手はたった一人だと、そう思っていたところへ心はそれでも体は違ふと突きつけられたのだ。

更にその相手は、自分の嫌いな相手なのだから。

「分かるか？ あたしは、もう汚れちまったんだ。悪意のせいかもしれ

れねーが、入り込まれたのはあたしの責任だ。こんなあたしに、今の仁志の近くにいる資格はねえ」

「クリス……」

「だから……あたしと同じところまで堕ちてくれよ、仁志」

そう告げてクリスはその手にアームドギアを出現させた。

それは、漆黒の弓。見る者を闇へと吸い込みそうな程の色合いのそれを手に携え、クリスはゆっくりと構えた。

「ダメだよクリスちゃんっ！ 仁志さんの事、まだ大好きなんだよね？ なら悪意に、闇に負けないでっ！」

「負けてなんかねーよ。あたしはむしろ悪意に勝ったんだ。悪意をねじ伏せて力と変えた、悪意の巫女さ」

「ううんっ！ 響の言う通りだよクリスっ！ クリスは悪意に勝ったって思ってるだけ！ じゃなかったら、只野さんを闇に落とす事なんてしないっ！」

「ほざいてろ。あたしの邪魔をする奴は、誰だろうと容赦しねえ」

言葉と共に放たれたのは漆黒の光で出来た矢。

それらを見た未来は瞬時に嫌な予感を感じ取ってその矢を凶祓いの閃光で迎撃した。

丁度その時、漆黒の矢が増殖を始めようとしていた。それを阻止する形で閃光が矢を貫いて消滅させる。

「切歌と調でユニゾンっ！ セレナと未来はここで念のために仁志達の護衛をっ！ 翼っ、響っ、行くわよっ！」

「「「了解（デス）っ！「「「」

ステージへと向かっていくマリア達を見送り、仁志は悔しげに唇を噛む事しか出来なかった。

クリスの心を抉るような事をしていた悪意のやり口と、その傷を癒してやれない自分の情けなさに、である。

「兄様……」

「ヒトシ……」

一時も目を離さずクリスを見つめている仁志を見て、エルフナインとヴェイグが複雑な表情で彼を呼ぶ。

それでも仁志は一度として二人へ目を向ける事無くステージ上のクリスを見つめ続けていた。

そこでは、切歌と調による “Cutting Edge×2 Ready Go!” が響き渡り、そのユニゾンによるフォニックゲインの上昇によつて二人の動きはこれまでにない程研ぎ澄まされていた。「相変わらず二人セットじゃねーとダメなのか、よっ！」

そこでクリスが取った手段はその場を動かずに天井へ手にした弓を掲げる事だった。

するとその瞬間弓が銃へと変化したのだ。それもガトリングガンである。

「ほらよ。遊んでやる」

言葉と共に放たれる漆黒の弾丸は、あろう事か軌道を変えて落下するようステージ上の装者達を襲ったのだ。

「「「っ!?!」」」

「おらおら、それで終わりじゃねーぞ」

まるで意思を持つかのような弾丸に響達は僅かではあるが動きが乱れる。

そこへ更にクリスによつて弾丸が追加されていく。

このままでは不味いと察した翼とマリアは、即座に視線を向け合い領くと手にしたアームドギアを構えて自ら弾丸へと向かつていった。「はっ！」

淡い光を纏った刃が闇の弾丸を斬り裂き消滅させる。

それを確認して二人の戦女神は表情をより凛々しくするやクリスへと向かつていく。

弾丸を迎撃しながら迫ってくる翼とマリアにクリスはどこか楽しげな笑みを浮かべると、足元に転がっている闇の繭へ視線を向けた。

「さすが年長つてとこか。そうじゃねえとらしくねーよなあ」

「雪音っ！ お前の闇を、陰我をっ！」

「私達が断ち切つてあげるわっ！」

「そりゃ有難いが、遠慮しとくぜ。先輩達にはこっちの相手をしてもらいたいしな」

視線を足元へ向けたまま、翼とマリアの繰り出した攻撃をその両手に出現させたバリアで防ぐクリス。

その強度に表情を歪める翼とは違い、マリアはそれが前回の戦いでセレナが使用していたものと同系の力だと察して苦い顔を浮かべた。(この障壁、簡単には破れそうにないか……っ！　だが、手をかざさねば使えないのなら勝機はあるっ！)

(余所見をしても平然としているなんてね……っ。おそろくあの時と同じ方法では突破は出来ないわ。なら、両手を封じるまで！)

共に考えるのは自分達の攻撃を阻む力の攻略法。

が、その時闇の弾丸の一つがあろう事かクリスの足元にある闇の繭へと直撃したのである。

「なっ!?」

翼とマリアの無防備な背中を狙う事なく、だ。

「うし、これでいいだろ」

対するクリスは二人の反応など気もせず、視界に広がる光景に満足そうに笑みを浮かべた。

闇の繭は弾丸により亀裂を生じさせ、それが一気に全体へと広がっていく。

そして、やっとそこでクリスは顔を上げて翼とマリアを見たのだ。

「お目覚めだぜ、三人目のディーヴァがな」

その言葉を合図にしたかのように闇の繭が弾け飛び、そこには一人の女性が寝転がっていた。

「か、奏……」

「何て重たい空気よ……」

静かに体を起こし、ゆっくりと立ち上がるのは赤い髪の褐色女性。

身に纏う鎧のようなものは前回のクリスのように最低限であり、胸部と局部だけしか覆っていない。

ギアインナーもクリスと同じく紐のようなものとなっていて、普段であれば決して奏も着ようとは思わないだろう仕様となっていた。

「奏さん……そんな……」

「ま、前よりもエツちな感じデスよ……」

「……見てるこつちが恥ずかしくなる」

何とか弾丸の嵐を全て迎撃した響達も、目の前に現れた奏の変貌ぶりに愕然としていた。

そして、それは離れた場所でステージ上を見つめていた仁志達も同様である。

「ううっ、耐えられない程酷い匂いだ……」

「ヴェイグさん、良かったら一旦僕の中へ」

「すまない……」

クリスだけでなく奏まで現れた事でヴェイグはエルフナインの中へと避難する。

それ程までに今の二人が放つ嫌な匂いは強烈だったのだ。

「奏さんまで……クリスみたい……」

「そんな、そんな事って……」

前回よりも悪化するだろうとは思っていた。

それでも、それでもどこかでクリス程にはならないだろうと思っていたのだ。

それが、今呆気なく裏切られた。奏の姿は、前回よりも過激に、扇情的になっていたのだから。

「奏……っ！」

誰よりもそれに心乱れているのは仁志であった。

クリスと奏のギアインナーは、かつて女性達が水着を選んでいた際に見た時の事が影響していると彼は察していたのだ。

即ち、二人のいかがわしい姿の原因は自分自身にあると突きつけられていた。

そんな仁志の視線に気付いたのか、奏は一瞬だけ彼の方へ顔を向けると微笑んで手を振ってみせた。

「っ!？」

悪意がやっているのだとすれば、それは非常に奏らしい反応だと仁志が思う程の愛らしさで。

(まさか……奏もクリスと同様なのか？ くそっ、ここからじやさすがにマイクユニットがあるかどうかまで見えない！)

仁志が未来やセレナに奏のマイクユニットの有無を確認し始めた頃、奏は体を解すようにあちこち動かし始めていた。

「あく、やつと出られたよ。クリス、ちよつとあれ分厚過ぎ」

「そう言うなよ。あたしは仁志を狙ってたんだぜ？　なら、依り代込みで取り込むだろ？　だったらあれぐらい必要だったの」

「そういう事か。ん、なら納得」

周囲の反応などお構いなしで平然と会話する二人。

そこだけ聞けば、悪意に染められる前と何ら変わらぬ雰囲気である。

ただ……

「じゃ、とりあえず……」

「っ!？」

奏が翼とマリアへ向けた視線が、獰猛な野獣の如きものへ変わらなければ、だが。

「クリス、翼とマリア、あたしがもらうよ」

「いいぜ。あたしは残りと遊んでるさ」

揃って野性的な笑みを浮かべるクリスと奏。

それに翼とマリアは一瞬だけ視線を合わせると小さく頷きその場から離れるように動く。

「立花っ！　そちらに雪音は任せたっ！」

「代わりに奏は私達で引き受けるわっ！」

「分かりましたっ！」

「やってやるデスよっ！」

「クリス先輩、絶対に助け出してみせるっ！」

当初の作戦通り、クリスと奏を分断する動きに出る翼とマリア。

それを目で追いかけながら奏は小さく笑った。

「楽ませてくれよ、翼、マリア」

言い終わるや軽くステージを蹴って跳ぶ奏だが、その速度は目を疑う程だった。

「っ!？」

「つと……へえ、思ったよりも凄いね、これ」

何せ先に動いていた二人の間を駆け抜けるかのように動き、着地してみせたのだから。

「じゃあ、とりあえず慣らしも兼ねて……」

奏の両手に漆黒の槍が二振り出現する。

多少長さが異なるそれは、通常のアームドギアと違いその刃の部分が両側ともノコギリのような形状となっており、殺傷能力が高い物となっていた。

「相手、してくれよ」

「奏……どうして……」

「奏っ！ 貴方、本当に悪意に染められてしまったのっ！ 仁志を庇った貴方は、本当の貴方はどこへ行ってしまったのよっ！」

「どこへ、か。だとすれば塗り潰されたのかもしれないね」

「っ」

その表現に二人は聞き覚えがあった。

世界蛇の巫女を名乗ったベアトリーチェ。その彼女が今わの際に発した言葉と同じだったのだ。

「まさか……奏の魂を悪意が？」

「かもしれないよ。そうだとしたら……どうする？」

「決まっているわ。だとしても、よ。私達は全員笑顔で勝利しようと決めた。その全員の中には貴方もいるのよ奏」

凜とした表情と声で言い切るマリア。

そんな彼女を見て奏はどこか冷めた目を返して息を吐いた。

まるで、何も自分の事を分かっていないとでも言うように。

その冷たい視線を向けたまま、奏は手にした長い方の槍をゆつくりと右肩に乗せた。

「本当に腹が立つね、マリア。まるで仁志先輩みたいだよ」

「当然でしょ。今の言葉は仁志の言葉だもの」

「……そうかい。なら納得だよ」

そう言って微かに奏は口元を緩める。その一瞬の動きを翼は見逃さなかった。

「奏っ！ やっぱり奏は奏のままだよっ！ 悪意なんかにはいい様にさ

れないでっ!」

「心配いらないよ翼。あたしは自分の意思で動いてるさ。そう、あの時と同じ。やっど、やっどこの時が来たんだからね……」

「っ!」

思わずマリアが息を呑んだ。

理由は目の前から発される殺気だった。

それも、自分だけを狙っているような濃密な殺意に満ちた殺気である。

「あの時はセレナがいたし、あたし自身も疲弊してたから無理だったけど、今回はそうじゃない。マリア、あたしの恨み辛み、全部受け止めてもらうよ」

「止めて奏っ! 奏の気持ちは分かるけど、奏だつてマリアの立場だつたら同じようになつてるでしょ? 私だつてきつとそうだから。それにマリアを羨む気持ちは分かるけど、奏だつて仁志さんと一緒に仕事して、二人だけの時間や思い出、沢山あるでしょ? 私には、私にはどちらもない! 私は仁志さんと二人きりだった事なんて数える程しかないんだからっ!」

「翼……貴方……」

奏にもマリアにも自分は嫉妬していると、そう翼は言ったようなものだった。

だからだろうか、奏も殺気を消してしまっていた。

自分さえも羨ましいと思われる立場なのだと翼に突きつけられた事で。

(あたしは、翼から妬まれる側? 仁志と二人きりだった時間なら、あたしもマリアに負けてないって事?)

忘れていた当たり前の事実。

あのコンビニでの時間はそう短いものではない。

週に必ず三回は仁志と奏は二人きりとなり、笑みを見せ合ったりしながら過ごしていたのだから。

「恨み辛みって言ったけど、そんなの私達なんかは奏にもあるよっ! マリアと奏だけなんだよ! 仁志さんと定期的に二人きりの時間

があつて、しかもそれが短くなかつたのはっ！」

「そ、それは……」

「それでもっ！ それでも、私達はみんな互いを憎む事も恨む事もなく支え合つてきたはずだよ？ 奏だつて、本来ならマリアを憎んだり恨んだりするよりも、自分を磨いて仁志さんの意識を向けさせてやるつて、そう考えられる人だよ。そういう強さを持つてるはずだよ、奏はっ！」

叫び。魂の叫び。

翼の心を震わせるような言葉が奏の心を揺らす。

だが、それを感じ取つた悪意が蠢き出した。

—— 誤魔化されては駄目。その女もあの男を相手に妻のような事をしていた頃があるのよ？

それは、あの古いアパートの一室で仁志達四人で暮らしていた短い期間の事。奏が知る事はないはずの情報だ。

それを悪意から教えられ、ぼんやりと奏の脳裏に浮かぶのは、勤務終わりで疲れて帰つてきた仁志を微笑みながら出迎える翼の姿。

「っ!？」

それは事実であつた。それは確かにあつた現実であつた。

故に怒りが込み上げる。悔しさが湧き起こる。

自分がそれ以上の事をしていた事は問題ではない。自分がした事のない事をしていた事だけが問題なのだから。

「よく言うね翼。あんただつて、仁志先輩相手に奥さんみたいな事してた頃があるじゃないか」

「違ふよ奏！ それは」

「煩いっ！ マリアも翼も本当に女だよ！ 表向きはそんな顔を隠して、裏では仁志先輩だけに女の顔を見せてさ……っ!？」

奏の体から瘴気が溢れ出していく。

それに翼もマリアも息を呑む。その闇が奏の体を包み、力となつていったからだ。

それも鎧ではなく刃として形作り、手にしていたアームドギアを更に凶悪な形状へと変えた。

マイクユニットも包み込まれるように見えなくなり、目の周囲へ漂った瘴気を奏が指でなぞると紫色のアイシャドーへと変わり、より一層の闇堕ちを示した。

「仁志の妻気取りをする奴は、全員あたしがこの手で排除してやる……っ！ あの人の、仁志の隣はあたしだけいれればいいんだっ！」

「奏……」

「翼、こうなったら仕方ないわ。奏を操る悪意を引き剥がすためにも、今は戦うしかない」

「分かっている。ああ、嫌と言う程分かっているっ！」

揃ってアームドギアを構える翼とマリア。

それを見て奏は表情を動かす事なく目を閉じた。

その行動を警戒するように身構える翼とマリアへ、奏は目を閉じたまま告げる。

「好きにかかってくるなよ。あんた達の力じゃ今のあたしは倒せないって教えてやるから」

馬鹿にするでもなく見下すのでもなく、ただ淡々と事実を告げるような奏に翼もマリアも表情を険しくした。

これが十代半ばであれば二人も怒りに身を任せ、あるいはその自信を打ち砕いてやると思っただけで攻撃を仕掛けたかもしれない。

だが、今の二人は幾多もの戦いを経験した上に成人している。目の前の相手が油断出来るような存在ではない事ぐらい分かっていた。

言葉を発する事無く視線を互いに送り、静かに頷き合う翼とマリア。

(あの雪音と同等か下手をすればそれ以上……)

(間違いなく普通にやっても止められない……)

(ならっ！ あれをやるしかないっ！)

二人の気持ちの一つになったのを示すかのように二人のマイクユニットが淡く光る。

その次の瞬間、二人は唄い始めた。

会場に響き渡るその歌の名は、カデンツァ天鳴ノ協奏曲だ。

さすがの奏もまさかの歌に目を見開いた。

「君に届けたい胸の歌あああつっ！」

二人で唄う事で始まるその歌は、本来であればドライディーヴァで唄う部分だ。

それまでは雄大な青空に浮かぶ雲のような雰囲気、歌声と共に一変して激しくなる。

まるで風が吹き抜けるや天に鳴り響いていくように。

「ちっ、ユニゾンってやつか。だが、そんなもので今のあたしはっ」

左右から同時に攻撃する翼とマリア。その攻撃を慌てる事なく手にした槍で祓い飛ばすかのように動く奏。

漆黒の槍が刀と短剣のアームドギアへと直撃し、その重たさに翼とマリアの表情が歪む。

「始まりは小さな出来事だったねっ！」

翼が負けるものかと歌声と共にアームドギアを太刀から大太刀へと変える。

「君と出会い過ぎて抱いたあ……想いつっ！」

この程度とばかりにマリアは槍の重さを払いのける。

「あの日々も笑顔も思い出にしてっ！ ずっとこの時間が続けばいいって思ってたっ！」

本来であれば奏が唄う箇所から三人で唄う箇所までを二人で唄い、翼とマリアは目の前の相手へ歌声と共に想いをぶつけていた。

初めて三人でギアを使って唄った歌で。

想いを、心を一つにして生まれた歌で。

ドライディーヴァというユニットしか歌えない歌で。

(奏っ！ お願いだから思い出してっ！)

(あの時の私達は、同じものを見て、同じ人を想い、同じ未来を望んでいたはずよっ！)

仁志を観客に三人で行ったファーストライブ。

ドライディーヴァとしてのオリジナル楽曲を完成させるとい喜びと興奮を味わいながら、三人で唄う感動や楽しさを噛み締めたあの

日の思い出を、記憶を想起させるように歌へ気持ちを込める。

「無駄だよ。その程度の歌であたしに勝てると思うな……っ」

そんな歌声を受けても奏は同時に襲い掛かる二つのアームドギアを軽々と受け止め、あっさりと弾き返したのだ。

だがそれでも翼もマリアも諦める事無く唄い続ける。

フォニツクゲインを高めながら奏の心へ想いを届けるために。

ドライデーヴァの一員である奏と、また一緒に唄うためにと……。

「おいおい、どうしたどうした？　せつかくこつちが動かずにいてやってるのに……」

そう言っただけクリスさんは腰からミサイルポッドを出現させて撃ち出してくる。

その数は50でも少ないぐらいだ。100を越えてるかもしれない。

今は切歌さんと調さんのユニゾンの影響で私もフォニツクゲインが高くなってるのに、それでもクリスさんには近付けない。

響さんと未来さんの連携なら時々近付けてるけど、それでもクリスさんを止める事は出来ない。

「せめて援護だけでもっー」

攻める事よりも守る事の方が得意な私は、さつきからずっとクリスさんの攻撃を防ぐ事へ集中してる。

それでも撃ち漏らす事があって、それは未来さんが処理してくれていた。

でも、このままじゃ不味い。切歌さんと調さんの合体攻撃さえ今のクリスさんはその場に立ったまままで防いでしまう。

両手を使えなくしても、あのイーヴィルギアがバリアを展開するからだ。

お兄ちゃんが思ってたような事はしてこないけど、何となくその必要がないからしてないだけののような気もしてる。

「これならっ！」

今もミサイルの中を突破して切歌さんと調さんがクリスさんへ攻撃を繰り返すけど……

「はっ！ なんもんじやあたし様へ傷一つ付けられねーぞ？」

イーヴィルギアが展開するバリアに阻まれてしまつて届かない。

「それならっ！」

「これも持つてけええええっ！」

未来さんと響さんがそこへ攻撃を重ねる。

「足りねーなあ」

けれど効果はない。本当にあのバリアは凄い。

きつと五人で一斉攻撃しても破れない。

……今のままじゃ、絶対に。

「そろそろ鬱陶しいから離れろっ！」

「「あああああっ!!」「」」

「っ?! ミレニアムパズル展開っ！」

クリスさんが叫んだ瞬間、バリアが弾けて衝撃波となった。

それに響さん達が吹き飛ばされたのを見て、私は咄嗟にパズルを展開して四人をその中へと移動させる。

あの中は、ヴェイグさんが最初に会った時やっていたように環境を好きに設定出来るはずだ。

だから草原をイメージしておいた。きつとこの床に叩きつけられるよりも痛くないって思ったから。

「へえ、中々面白い事すんじやねーか。味方をパズルの中へ閉じ込めるなんてよ」

クリスさんの声が聞こえると同時に私はパズルを解除する。

当然だけどころに響さん達が目の前に現れた。

若干戸惑つてたけど、それでもすぐに身構えるのは私よりも沢山戦つてるんだなつて感じられた。

「大丈夫ですか？」

「うん、ありがとうセレナちゃん」

「草のベッドがクツション代わりになつてくれたよ」

「デス。助かったデスよ」

「ファインプレーだったよ、セレナ」

「お役に立てたなら良かったです」

見た感じだと四人とも怪我とかはしてないみたい。

でも、五人で戦っても互角にさえ出来ないなんて……。

「あのっ！　こうなったら五人で唄うしかないんじゃないでしょうかっ！」

だから思ってた事を言ってみた。

未だに私は姉さんか響さんぐらいしかユニゾン出来ないけど、二人でのユニゾンじゃクリスマスさんを助けられないのは分かった。

切歌さんと調さんのユニゾンが二人でやる場合一番強いって聞いたからだ。

「五人で、か。三人でも厳しいのに……」

「だけどセレナの言う通りデス。アタシと調だけじゃ届かないデスし、正直三人でやってもあのクリスマス先輩に届かせるのは難しい気がするデスよ」

「やるだけやってみませんか？　ぶっつけ本番ですけど、だとしてもの気持ちで」

「……響、どうする？」

未来さんの問いかけに響さんは少し黙って、はっきりと頷いた。

「やろうっ！　クリスマスちゃんを助けたいって気持ちで唄えば、きつと胸の歌が応えてくれるからっ！」

その言葉で私達の心は決まった。

胸の歌、か。私も経験があるから分かる。

あの初めてエクストライブになった時、私の中から歌が生まれてきた。

あれがきつと胸の歌。なら、今の私達はきつと出来るはずだ。

だって、クリスマスさんを本当のクリスマスさんに戻したいって気持ちは一緒だから！

「手を繋ごうっ！」

響さんの言葉でみんなで手を繋ぐ。

響さんは未来さんと私、調さんは未来さんで、切歌さんが私とだ。すると不思議な事に、胸の奥があつたかくなってきた。

何かが手を通して私に流れてきているような、そんな不思議な感覚

がする。

「なんだ？ 絶唱でも使うつもりかよ？」

クリスさんがどこか馬鹿にするみたいな顔をするけど、そんな事が気にならないぐらい体が軽い感じだ。

今なら本当に何でも出来そうな気がしてくる。

そう思った時、首元があったかくなかった気がして勝手に声が出た。

「諦めないで〜」

「悔やまないで〜」

私に続いて未来さんが唄う。自然と顔がそつちへ動く。

未来さんは微笑んでた。思わず私も笑顔になる。

「負けないために」

声が重なる。未来さんの笑顔が深くなって私も笑顔が深くなった。

「振り向かないで〜」

そこで聞こえてくるのは切歌さんの声。顔を動かせば切歌さんも微笑んでる。

「躊躇わないで〜」

今度は調さんの声だ。やっぱり調さんも笑顔を浮かべてる。

「負けないために」

切歌さんと調さんの声が重なる。何となく分かる。次はきつと……

「この歌が、この声が、この命がある限り」

響さんの力強い歌声が聞こえる。

うん、これが、これがユニゾンなんだ。心を合わせて一つにするって事なんだ！

「「「守り続けるんだ！ 心の光で未来を照らし続けるために」

！」「」」

「へえ、五重奏……か」

凄い……体中に力が湧いてくる。

「みんな、行こうっ！」

「「「はい（うん）（Ges）っ！」「」」

響さんの合図で手を離して私達は動き出す。

だけど、まだあつたかさは消えない。

「暗い闇の中、突き進むのが怖くてえええっ！」

響さんが唄いながらクリスさんへと迫る。

「ただクリスさんはその手にあるアームドギアから沢山の弾丸を
発射した。」

「ならっ！」

「立ち止まって竦んでいた弱い私っ！」

「そうはさせないと思つて手にしたアームドギアから光線を放ちな
がら弾丸を薙ぎ払つた。」

その直後私の左右を何かが駆け抜けていく。

「もう歩けなくて動けなくて立っているのも嫌になつてっ！」

「目を塞いで耳を塞いで全てから逃げ出したかつたっ！」

「後輩コンビか……。さつきよりも速いな」

クリスさんのイーヴィルギアが展開するバリアへアームドギアを
突き立てる切歌さんと調さん。

それはさつきまでと違つて心なしかバリアを軋ませてる。

「そんな時思い出したんだよ。あの言葉をつ、約束をつ！」

未来さんの歌声と一緒に閃光がクリスさんの背中へ回り込むよう
に軌道を変えながら向かう。

それはさすがにギアのバリアだけじゃ防げないのか、クリスさんは
どこか楽しげに笑つて片手を動かした。

「割とやるじゃねえか」

クリスさんがそう呟くのが聞こえた瞬間、未来さんが私へアイコン
タクトしてきた。

あ……分かる。今の私にはそれがどういう意味か分かる！

「諦めないよ！ 悔やまないよっ！」

私もアームドギアから光線を放つてクリスさんの正面へとぶつけ
る。

「見えないけど、きっとクリスさんが残った手を使って防いだはず
だ。」

「「「負けたくないんだ、自分にはっ！」「」」」

凄い……凄いよっ！　どんどん力が増してる！

今までで一番歌の力を感じてるかもしれないってぐらい、私は勢いを感じてる！

「振り向かないよ！　躊躇わないよっ！」

切歌さんと調さんの方もバリアを突破しそうなぐらいアームドギアが唸りを上げてる。

「「負けたくないんだ、絶望にっ！」「」

「ぐっ……だがこんなもんであたしは……っ！」

何だろう。あの時見たクリスさんは本当に凄いなと思った。

絶対勝てないって、どこかでそう思うぐらい怖かった。

なのに、今のクリスさんはそんな感じがしない。

ユニゾンしているからだけじゃない。あの時のクリスさんにあつたはずの威圧感、みたいなものが減ってる気がする。

でも、このままじゃ押し切れない。

そう思っても、今の私に不安はなかった。

だって、まだ私達にはもう一つアームドギアが残ってるから。

誰よりも強くて優しい、装者がいるから！

「さあ！　もう一度前を向こうよおっ！」

「なっ!？」

バリアは切歌さんと調さんが、両手は私と未来さんで使わせた。

ならもうクリスさんには響さんを阻めるものは何もない。

「「笑顔を取り戻せえええええっ!!」「」

クリスさんの真横から響さんが拳を突き出して突っ込んでそのまま突き抜けて行く。

私と未来さんの攻撃は相殺し合って消えて、切歌さんと調さんはアームドギアをすぐに引いて顔を動かす。

私もそっちへ顔を向けると、そこには響さんがクリスさんを抱き締めようとしていた。

「クリスちゃん！　お願いだから元に戻って！　またみんな楽しく過ごそうよっ！」

「まだお前はんな事言ってるのか」

「何度でも言うよ！ 仁志さんだつてクリスマスちゃんの事を気にしてないって」

「あたしが気にするんだつて言ったはずだ。いいから離せ。あたしは仁志を同じ風にしたいだけなんだ」

「離すもんかつ！」

「そうかよ。じゃあ……」

その瞬間嫌な予感がした。だから咄嗟に響さんをパズルの中へ閉じ込めた。

「……いい読みしてんじゃねーか。ここにきて冴えてるぜ、セレナ」
「クリスマス……その手のは……」

クリスマスさんの右手には、真つ黒なボールみたいな物があった。

何となくだけど、あれが私や奏さんを悪い存在へ変えたものだと思つた。

「セレナ、早く響さんを」

「っ！ はいっ！」

調さんに言われてパズルの出口を目の前へ出した。

「セレナちゃん、ありがとう」

「いえ」

そこから響さんが出てきてすぐにクリスマスさんへ顔を向ける。

そしてクリスマスさんの手にあつた真つ黒なボールみたいなものを見て、その顔が険しいものになった。

「クリスマスちゃん、それはもしかしてっ！」

「ああ、お前もあたしと同じにしてやろうと思つてよ。まあ、何なら……」

そこでクリスマスさんは私達をゆっくり見回した。

——全員そうしてやってもいいけどな。

なんて、そう楽しみに言いながら。

私はそこで少しだけ、少しだけクリスマスさんにあの時と同じ怖さを感じた……。

「……不味いな。このままじゃ各個撃破されかねない」

クリスは響達五人のユニゾンを見ても狼狽えなかつたし今も平然としてる。

奏の方は、ヴェイグが言うには嫌な匂いがきつくなつたらしいから危険度が上がったのだと思う。

つまり、どちらも互角か精一杯にされているんだ。

人数差があつてそれはかなり不味い。

こうなつたら、俺達非戦闘員が何とかしてそのパワーバランスを崩すしかない。

「ヴェイグ、エル、今までよりも危険だけど、一緒に来てくれるか？」
揃つて二ヶ所の戦闘を見守るようにしている小さな二人へ、俺はそう問いかけた。

今までだつて危なくなかつた訳じゃないけど、今回はこれまでの比じゃないぐらいだと思う。

だから一応確認しておく。もし二人が無理だと言つたら待つてもらふために。

「当然だ」

「はい、一緒に戦います」

なのに、二人は迷う事無く頷いてくれた。

その勇気と決断に感謝するように俺は頷いて二人の肩へ手を置いた。

「よし、行こうっ！」

「おう（はい）っ！」

ヴェイグが消えたのを確認して俺はエルの体を両腕で持ち上げると抱き抱える。

クリスカ奏かとなれば、当然先に行くのは奏の方だ。

翼とマリアが相手をしてるが一向に優位に立てないでいる。

おそらくだが、今の奏は切歌の時よりも強烈な悪意の加護を受けてるんだろう。

依り代の力でどこまでやれるか分からないけど、今はやれるだけの事をやるだけだ。

「奏えええええっ！」

奏の名を叫びながら走る。少しでも意識を逸らせたらと思っただけどさすがに無理か。奏はこちらを見る事もしない。

「いやっ……違う……っ！」

あれは見ないんじゃない。見れないんだ。

翼とマリアの歌声が聞こえてきて、俺はそう察した。

二人が唄っているのは天鳴ノ協奏曲だ。それはあの三人が本当の意味でドライディーヴァとなった時の歌だから。

「兄様っ！」

もう少しで三人が戦っている場所となった辺りでエルが叫んだ。

何かあったのかと足を止めると、エルがこつちを凜々しく見つめていた。

「パズルを展開します！ 僕を下ろしてください！」

「わ、分かった」

普段のエルにはない強さを感じ取り、俺は言われるままにエルの体を地面へ下ろした。

するとエルが目を閉じて片手を何も無い空間へ突き出す。

「なっ!？」

まるでウィザードの変身みたいにそこから豎琴のような物が出現する。

これ、ダウルダブラか！

「キャロル、ありがとう……っ！」

エルがそう呟いた瞬間、その体をファウストローブが包んで行く。

体の大きさを変える事はなかったけど、いつか見た姿と同じものへエルが変わった。

「ミレニウムパズル、展開っ！」

その言葉を合図に俺達の周囲が変わり、響達の姿が見えなくなった。

「兄様、今の僕らなら簡単にパズルを壊されません」

「分かった。エル、ヴェイグ、後は任せろ」

周囲の景色が変わっても奏は狼狽えも驚きもせず、ただ翼とマリアを追い詰めるようにその槍を振るっている。

翼とマリアの金色の輝きさえも意に介さない様子は、さながら修羅や悪鬼羅刹と言ったところだろうか。

「……あれを何とか出来るんだろうか？」

手にした依り代をチラリと見やる。

バッテリーはほぼ満タンだ。これを半分ぐらいの消耗で何とかしたい。

「なんて言ってもらえる場合じゃないな」

依り代が使えなくなっただとしても奏とクリスを元に戻してみせる。

それぐらいの気構えを持たないと今の二人は止められない。

「ふっ……」

もしかしたら今までにない激痛が走るかもしれない。

下手をすればそれで死ぬかもしれない。

それでも、それでも今俺に出来る事を！

「奏、待ってる。今、助けに行くから……っ！」

自分へ言い聞かせるように呟いてその場から走り出す。

目指すは翼とマリアを追い詰めようとする奏の背中。

と、そこで俺の気配に気付いたのか奏が振り返った。

「奏っ！」

「仁志じゃん。ふっ、嬉しいけど今は邪魔しないでよ」

表情も雰囲気も俺の良く知る奏じゃなかった。

だからこそ俺も完全に踏ん切りがなかった。

速度を何とか上げて奏へと迫る。体力作りで走ってなかったら転

んでたかもしれないな、これっ！

「……そう。仁志もあたしの邪魔するんだ。じゃ、先にそっちから何とかするか」

奏のアームドギアが展開して闇が集束していくのが見える。

それでも俺は怯まない。

あんなものを浴びたら死ぬだろうなと思うけど、どうせここで怯めば死ぬしかないんだ。

なら、上手くいけば死なずに済む道を通って走るだけだったのっ！

「おおおおっ！」

「逃げない、か。ホント、らしいよ仁志。それじゃっ?!」

攻撃しようとした奏の表情が驚きに染まる。

その両腕を翼とマリアが動かせないようにしていたからだ。

「仁志さんっ! 今ですっ!」

「早くっ! そんなに長くは無理よっ!」

「くっ! 邪魔だああああっ!」

何とか振りほどこうとする奏だけど、さすがにすぐ離す程二人も弱くない。

だが確かに長くは無理だろうと思った。

もう少しで奏へ届く。そう思った瞬間だった。

「あああああっ!」

「っ!?!」

奏が吼えたかと思うとアームドギアが変形して、まるでワニの口みたいになるや意思を持ったように動き出したのだ。

「「なっ!?!」」

思わず足を止めた。何せ完全に生物みたいな変化だったんだ。

翼とマリアもさすがの出来事に面食らっているような顔をしている。

「喰らい付けっ!」

「っ!?!」

奏の言葉を合図にそれが翼とマリアへ噛み付くとギアを砕かんばかりの音を立てた。

「~~~~っ!?!」

リビルドギアツインドライブじゃなかったら、きっと通常のギアだったらそれで終わっていただろう。

ただ、俺の視界に映る翼とマリアの表情は当然のように苦痛に歪んでいた。

「さっさと離しなっ!」

「い、嫌よっ!」

「こんな痛みで! 奏を手放すものかっ!」

「そうか。ならもつと痛くしてやるよっ!」

その言葉と共に二人へ噛み付いてたアームドギアがより強く刃を立てた。

「ああっ!?!」

「翼っ！ マリアっ！ くそっ!」

そこでやっと俺は再び動き出した。二人が俺の方を見て苦しみながらも笑みを見せたからだ。

二人は何のために今の状態に甘んじてるのかを思い出し、俺は走る。

今は奏へ依り代を押し当てて悪意の支配を弱める事が大事なんだと、そう思つて。

俺が再び走り出すと、奏がこつちを見るなり両手を大きく動かしてアームドギアを引つ張つた。

待てっ！ そんな事したら二人の体に大きな傷が出来るだろっ！

「止めろおおおおっ!」

「あああああっ!?!」

二人の叫びと同時に翼とマリアのギアからアームドギアの牙が離れたが、それは噛み付いたままやられたため二人のギアが一部砕け散つたのが見えた。

それと、僅かだけど血も見えた……っ！

「はっ、あたしの邪魔をするからだよ。さて」

奏の顔が俺へ向けられる。その眼差しには冷たさしかない。

「もう邪魔は入らない。仁志、あたしと同じになつてもらおうよ……」

両手に闇を集束させていくのを見ても俺は走るのを止めなかった。

そんな俺へ奏は憐れむような視線を送る。

「……本当に仁志は仁志なんだね。ならっ、お望み通りにしてやるよっ!」

放たれた漆黒の球体が俺へ向かつてくる。

避けようと思つても咄嗟にそんな事が出来る程俺は体が出来てる訳でも若くもない。

「うわっ!?!」

で、結果足がもつれて転んで回避というギャグ漫画のような結果に

なった。

ただし、当然勢いがついてるから無様に転がって、痛みには呻きながら起き上がった時には奏がこっちへ片手を突き出してた。

「運がいいんだか悪いんだか……。でも、これで終わりだよ仁志」

そう言つて奏が集束させた闇の塊を俺へ放とうとした瞬間、その足元が突然弾けた。

「何っ!？」

あれは錬金術かっ!?

「兄様っ! 今ですっ!」

「分かったあああっ!」

エルの声に俺はそう返しながら痛む体で立ち上がって、手にした依り代を奏の腹部へと押し当てると同時に、俺は全身に走るだろう痛みを耐えるように目をキツク閉じた。

「がああああっ!？」

「い、たく……。ない?」

が、予想していたような痛みはなかった。

どうやら本当にみんなのキスのおかげで悪意から解放されたらしい。

「ならっ!」

「ああああアアッ!？」

奏の体を抱き寄せるようにして更に依り代を押し付ける。

と、奏が右手のアームドギアを手放して俺の首を掴んだ。

「キ、キサマアアアッ!」

そのまま首を折られるんじゃないかと思った。

だから俺は依り代を腹部から更に上へと動かしていく。

そう、イーヴィルギアへと当ててるために。

「サ、サセルモノカアッ!」

「っ!!」

残るアームドギアさえも手放して俺の事を止めようとする悪意だったが、間一髪俺の動きの方が速かった。

「ギアアアアアッ!」

ギア部分に依り代が触れた瞬間悪意が絶叫した。

おそらくだが今までよりもギア部分が少なかったため、そこがより一層依り代に弱くなっていたのだろう。

悪意が凝固した部分と言ってもいいのかもしれない。

「つはあはあ……」

息苦しきから解放され、俺はやっと空気を吸う事が出来た。

だが、すぐに俺は目の前の女性へと呼びかけた。

「奏！ 奏っ！ 聞こえてるんだろ？ 聞いてるんだろっ！ なら目を覚ましてくれっ！」

「キ、キサマア……ッ！」

「お前じゃないっ！ 俺は奏と話してるんだっ！ 黙ってろおおおっ！」

「~~~~~ッ!!」

奏の事を強く想いながら依り代をギア部分へと更に押し付けると、悪意が声も出せずに痙攣を始めた。

今の悪意はきつとこのギアそのものだ。以前よりも強く染め上げたからこそ、より依り代への耐性が落ちたんだろう。

そのまま俺は依り代を押し当てながら移動させ、遂にマイクユニットがあるべき場所へと持っていく。

「奏っ！ ごめんなっ！ 俺が君からの注意をちゃんと守らなかったから、マリアへ甘えるのを控えなかったから君の心をこんなにも傷付けてしまったっ！」

目の前からは何も返ってこない。それでも、俺は言葉だけでなく想いを伝えたいと思って奏の事を抱き締めるように片腕へ力を込める。すると、微かに口が動いたのが見えた。

「……………」

何を発した。しかも、それは今までの悪意らしい声ではなく、俺が良く知る奏の声だ。

だから畳みかけるなら今だと思った。俺の気持ちを、想いを、心を届けるのは今しかない。

何故なら、奏の口はたしかに“ひとし”と動いたから！

「ちゃんと君にも甘えれば良かった！ もっと君を大人として思い、頼れば良かったっ！ 仕事で甘えてるから日常ではって、どこかで思ってたのかもしれないっ！ 本当にごめんっ！」

「……としい」

「でも分かって欲しい。俺は君に甘えていたんだ。君との勤務は仕事なのに楽しみであり安らぎでもあった。奏がいてくれたから、俺は店長になれたんだ」

「ああ……ああっ！」

奏の声がどんだん俺の知っているものへ戻っていく。

だけど悪意はまだ奏から出て行かない。

「奏、本当にありがとう。そして、ごめん」

「ひとし……っ！」

「聖詠を、唄ってくれないか？ 今の奏は扇情的で魅力的ではあるけど、俺はやっぱ本来の奏の方が好きだ」

そう告げると奏が嬉しそうに微笑んで頷いてくれた。

それと同時にマイクユニットが依り代の下に出現する。

——Gran z i z e l b i l f e n g u n g n i r z i
z z i ……っ！

聞こえてくる聖詠。なのに、これまではそれで分離出来たはずの悪意が分離してこない。

「どうして……」

「あ、あたしがあいつと深く結びついてるみたい……っ！ 体中にあいつの根があるみたいな感じがするんだ……っ！」

「奏……」

「仁志、あたし、バカだった……。口にすればいいのに、言ったら貴方に嫌われるって思ってた。マリアと夫婦みたいな、家族みたいな貴方を見て、素直に羨ましいって言えば良かったのに……っ！」

「いいんだよ奏。それが、それが普通さ。俺だって言えなかった。君や翼が指摘するまで、俺だっどこかでマリアとの関係が少し違うと分かっていたのに、それを直そうと出来なかったんだから。君だけが悪い訳じゃない」

誰もが常に心強くあれる訳じゃないと思った。

それは俺は勿論、奏だつてそうだろうと。

そう思うから俺はこれ以上奏に自分を責めないで欲しかった。

悪意と同調するのはおかしな事じゃない。本当の意味で清廉潔白な人間なんていないんだ。

ああ、そうだよ。そうあろうとして、そう出来る人がいるだけなんだ。

「……ありがとう、仁志……っ！」

微笑む奏の瞳から涙が流れるのを見て、俺は謝罪と感謝の想いを込めてキスをした。

その瞬間、何かの絶叫が聞こえた気がした。きつと悪意の声だと思ふ。

だがそれを気にする事もなく、俺はただただ奏へ長く長くキスをした。

どれぐらいそうしていただろう。俺はそつと体を押し返す力を感じて顔を離した。

「奏……」

「つたく、あんなに長いキスしないでよ。その、本気で仁志の傍から離れたくなくなるじゃん」

そう言つて照れくさそうに目元を拭い微笑む姿は奏そのものだった。

ギアも本来のガングニールへと戻っている。

と、そこで気付いた。普段あるはずの展開がない事に。

「か、奏、悪意は？」

「ん？ ああ、多分だけど消えちゃった。仁志とキスしてたら、あたしの中で苦しみ悶える声が聞こえてきたから」

「そ、そっか……」

そこで依り代のバッテリーを確認する。うっ、もう残り30%を切ってる……。

つまり依り代は効果時間の長さで消費量が変化するんじゃない、使用相手によつて消費量が変わるらしい。

クリスへは、この感じだと下手すりや1分も使えないかもしれないな。

「奏っ！」

そこへ聞こえた声に俺と奏が顔を動かす。

「翼……それに……」

「元に戻って良かったわ、奏」

翼とマリアがそれぞれ安堵の笑みを浮かべて立っていた。

複雑な表情を浮かべる奏へマリアが小さく息を吐くと、静かに歩み寄ってくる。

「奏」

「っ……何？」

「色々と言いたい事はあるけど、今はこれだけ言わせてもらおうわ」

そこでマリアは大きく息を吸うと、一瞬奏が身構えたのが分かった。

「おかえりなさい。無事で良かった」

「……………それだけ？」

正直言えば俺も奏と同じ気持ちだった。

てつきり何か色々言ったりするのかと思っただし。

ただ、マリアはそんな奏へあつさりと口を開いた。

「以外に何かある？」

「で、でもあたしは」

「私が逆の立場なら、あの気持ちは当然なもの。むしろあそこまで言ってくれて良かったわ。私、貴方と憎しみ合うなんてごめんだから」

「マリア……」

奏が名を呼ぶとマリアは小さく微笑んで頷いた。

「傷付けられるのは嫌だけど、そうね……。一度だけビンタしてくれていいわ。それで今までの事を水に流してくれる？」

「い、いや、さすがにそこまでは……」

「悪意に突き動かされてやった事は罪悪感があるでしょ？ 私としてもどこかで分かっていたのに貴方の心に傷を作っていた。なら、お願

い」

「……分かったよ。マリアの気持ちは、受け取った。じゃあ……」

パシンと乾いた音がして、直後同じ音がまた聞こえた。

「えっ!？」

俺と翼の声が重なる。

何せ奏がマリアの頬を叩いたかと思ったら、すぐさまマリアが奏の頬を叩き返したからだ。

奏は何が起きたのか理解出来てない表情でゆっくり頬を押さえながらマリアへ顔を向けた。

「ま、マリア?」

「これでお相子、よ。あんなに長いキスを見せつけられた側の気持ちになりなさい」

「……いい性格してるよ」

「お互い様。これでもう何の遠慮もなく言い合えるでしょ?」

「……………だね」

相手へ笑みを見せ合う年長二人。何とというか、女の友情ってこういうのなのか?

そう思っていると翼が俺の横へそそくさとやってきた。

「あの、私も二人を叩いてもいいかな?」

「いいんじゃないか? 翼からすれば奏もマリアも羨ましいんだろ?」

「……でも止めておく。それに、二人を叩くよりも仁志さんに、その、キスして……欲しいし……」

最後には恥ずかしくなって声が小さくなる上俯く翼。

そんな彼女は、今が戦闘中じゃなかったら本気で抱き締めてキスしてたぐらい可愛かった。

それにしても、やっぱり悪意の弱点は愛なんだな。

なら、最悪依り代が使えなくなってもクリスを戻せるかもしれない。い。

それに、未来が見た夢のお告げでも力じや倒せないと言われたらしいし、悪意を完全に倒すにはそれしかないか。

……命の賭け時、って奴かもな。

「よし、これで残るはクリスだけだ。奏、まだ戦えそうか？」

「ああ、さっきのキスとビンタが効いてるからね」

「仁志、奏もツインドライブに」

「分かった」

言いながら俺は顔を後ろへと向ける。

土壇場で素晴らしい援護をしてくれたエルへと。

「エル、体は大丈夫か？」

「はい、ただもう錬金術の行使は難しいです」

「いや、もう必要ないよ。だろ？」

俺がそう問いかけながら顔を前へ戻すと、ドライデーヴァは力強く頷いてくれた。

「っ!? 皆さんこっちへっ!」

突然エルが切羽詰まったような声を出したので、俺達は考える前にその場から走った。

直後周囲の景色が元に戻って、俺達がいた場所に漆黒のレーザーのようなものが直撃した。

「ちっ、気付かれたか」

「クリスっ!」

そりやこの状況じゃそんな事をやれるのは一人しかいないけど、響達五人を相手にしていたのに……。

「っ!? 響っ!」

ステージ上には傷付き倒れる響達五人の姿があった。

ギアが消えてないところを見ると生きてはいるようだ。

「たった一人で立花達を……」

「切歌っ! 調っ!」

「セレナや未来まで……これをクリスが……」

あのパズルを展開してから今までの時間で、クリスが響達にかなりのダメージを負わせたのは間違いなかった。

それだって言うのにクリスはまったくダメージを負ったようには見えないのが恐ろしい。

響達が無抵抗でやられたはずはないからだ。

「中々頑張ったんだぜ？ 五人でのユニゾンを成功させてな。ただ、それぐらいでどうにかなる程、悪意の巫女は甘くねえって事だ」

空中に浮いたままクリスは笑みを浮かべながら奏へ顔を動かす。

「にしても、まさかあそこから元に戻せるとはな。依り代つてのは無茶苦茶だぜ」

「こつちからすれば悪意こそがそれだよ。でも、それももう終わりが近い」

「へえ、あとはあたしだけだからか？」

「そうだ。クリス、後は君を元に戻せば全てが終わる。終わるんだ」

依り代へ目をやり俺はステータスをタップする。

奏をリビルドギアツインドライブへと変え、俺はクリスを見つめた。

「俺は、みんなを、そしてクリス、君の事を信じてる。悪意になんて負けないと、必ず最後には光と共に笑顔で笑い合えるって」

「そうかよ。まあ、たしかにそうしてやってもいいぜ。ただし、光じゃなくて闇、だけだな」

「エル、響達を一旦パズル内へ保護してくれ。マリア、奏、翼、三人だけどクリスの相手、お願い出来るか？」

武装をフルオープンさせるクリスを見つめ、俺は彼女から視線を外さずにエルやドライデーヴァへ声をかける。

目の前にいるのはクリスだけどクリスじゃない。悪意に変わりないんだと思つて決して目を逸らしたくなかった。

「分かりました！」

エルの力強い返事に少しだけ遠い目になる。ああ、本当に頼もしいな、今のエルも。

「三人だけど？ 違うわよ仁志。三人だから、よ」

「そういう事。なんたってあたし達はさ」

「ドライデーヴァ、なんだからね」

頼もしく凛々しい返事に俺は思わず笑みが浮かんだ。

そうだ。人数は問題じゃないかもしれない。

要はフォニックゲインをどこまで高められるかなんだ。

なら……っ！

「よし、頼んだぞドライディーヴァっ！ 最高のステージを見せてくれっ！」

あのメモリアカードをここで実現させるだけだ！

俺の言葉にとびきりの笑顔を返してくれた三人の歌姫を信じて送り出す事。

それだけが今の俺に出来る事なんだから。

だが、何故かこつちを見ているクリスは面白くなさそうにため息を吐いた。

「はあ……ドライディーヴァか。悪いがあたしは少し疲れてんだよ。だから先輩達はこいつと遊んでろ」

そう言うところクリスの前方に黒い霧みたいなものが出現する。

それはあつという間に形を成して、あろう事か悪意に染められていた奏そつくりとなったのだ。

「どんなもんだ？ 今のあたしはこういう事も出来るんだぜ？」

自慢げにクリスが偽奏の後ろから顔を出した。

普通なら敵が増えた事は嫌がるどころだが、正直言わせてもらえば今回はむしろ嬉しい事かもしれない。

何故なら、偽奏が現れた瞬間、間違いなく奏の目付きが鋭さを増したからだ。

「マリア、翼、あいつはあたしに任せてもらうよ」

「ええ、いいわ」

「でも奏、あまり時間はかけないで」

「分かってるって。30秒で片付けるさっ！」

言うや否や奏はその場から跳び出して偽物へと向かっていく。

偽物は偽物でその奏の動きに不気味な笑みを浮かべるとその場から一瞬にして消えた。

「消えたっ?!」

だけど驚いているのは俺だけらしい。

翼もマリアも驚きもせず、ただ正面を、奏の背中を見つめていた。

「……所詮、心のない作り物だな」

「ええ、そうね。想像力がないみたい」

ポツリと呟かれたそのやり取りに俺はどういう事だと思いつつながら奏を見つめ続けた。

彼女は着地した先でまったく身動きもせず、ただその手にアームドギアを握り締めているだけだ。

「……え？」

すると突然奏が手にしたアームドギアを何も無い場所へ突き出した。

が、その穂先が一瞬見えなくなったかと思うと、何も無い空間からぼんやりと何かが浮かび上がってきたのだ。

「ギギギギギ」

「あたしを真似た癖にせこい手使うんじゃないよ。まあ、姿は消せても気配は消せない時点で意味ないけど」

け、気配？ どういう意味だろうと思っていると奏のアームドギアが偽物を買いたまま展開する。

「ガハッ！」

「覚えておきな。本当に凄い奴はね、相手へ殺気を出す事無くそういう事が出来るんだよ。ま、お前にはどれだけ訓練しようが出来ない芸当だろうがねっ！」

穂先にエネルギーを集束させたまま、奏が偽物からアームドギアを引き抜きながらそれを放射した。

当然偽物はそれを浴びて消滅する。本当に、1分とかからなかった。

「で、クリス、どうする？ 今のあたしを止めたかったら、さっきの奴だース単位で出さないと休めないよ。大体さ、あんたもこんなんでゆっくり休めると思っただけじゃなかったら？」

「ああ。でも、もう少しは時間稼ぎ出来るかと思っただけ。あんた、明らかに力が上がってるじゃねーか」

「だとしたら、王子様の目覚めのキスが効いたんだよ。正直ね、今のあたしは誰が相手でも負けない気分さ」

そう言うなり奏はクリスへ挑戦的な笑みを浮かべた。

「あんたもしてもらうかい？ 目覚めのキス」

「結構だ。生憎とこう見えてとつくに悪夢から覚めてるんだよ」

「悪夢、ね。違うよクリス。あたしも似た状態だったから分かる。今こそがその悪夢だよ。あんたも、さつきまでのあたしも、それが悪夢だと思わずにいたのさ。妬みや憎しみなんてもんをここまで持っていたなんて認めたくなくて」

「違う。あたしは、あたしはそんなんじゃない」

「違わないじゃないか。あの闇の中であたしは聞いたよ。あんた自身が言ったはずさ。今の自分は今の仁志と一緒にいられないって。それはどうしてだい？ 自分が汚れたからだって言ったけど、その意味は本当は違うんだろ？ あの茂部って奴とキスしてたとかじゃない。自分が悪意に入り込まれて仲間を、仁志を傷付けるような事をしたと知ったから闇に堕ちた」

奏の言葉に初めてクリスから余裕が消えた。

表情が抜け落ちて、まるで能面のように正直怖い。

「だからあんたは悪意よりも自分を憎んだんじゃないか？ あんたは優しくて真面目で、誰よりも早く仁志への恋心を自覚してたから」
「……だったら、だったらなんだってんだよ？」

聞こえてきた声は、どこか震えていた。

泣いてるのかとも思ったけど、涙声じゃないと気付いて俺はクリスを見つめた。

彼女は、怒りで体を震わせていた。

「どれだけ言い訳したって、あたしの頭ん中にはあのスケベ野郎とイチャついてる記憶がある。響や先輩を狙って引き鉄を引いた記憶がある。あたし自身がどうこうじゃねえ。やってない事なのに覚えてるんだよ……っ」

アームドギアを握り締めてワナワナと震わせるクリスに俺は言葉がなかった。

泣いていないだけできつと心は泣いてると思ったからだ。

「あいつとの会話を！ 触られた事をつ！ 仁志としたよりも多くあ

いつとあたしはキスしてる事もだっ！」

「クリスっ！ もういいっ！ もういいよっ！ 分かったからっ！
君の痛みや苦しみは伝わったからっ！」

もう見ていられなかった。今のクリスは泣きじやくる子供みたい
だったから。

抱き締めてやりたい。慰めてやりたい。だけど、俺じゃ彼女まで届
かない。

今日ほど己の無力を感じる事はないだろうと思う程に、見上げる彼
女との距離はどうやっても埋まらない事に我が身の非力さを痛感し
た。

「俺達が気にしないと云っても、君自身が自分を許せないのは分かる
よ！ だけど、だからって一人で抱え込まないで欲しいんだっ！ 響
だつてきつとそう言ってくれる！」

間違いなくクリスの心の叫びを聞けば響はそう断言する。

それに、あのクリスが名前と呼んだんだ。響がそれを聞いてどう思
うかなんて考えるまでもない。

「それでもっ、それでもあたしはっ！ あたしはあ！」

「俺と話してみたい事があるならいくらでも付き合うっ！ あちこち
触られたのなら俺がそれを全部上書きしてみせるっ！ キスだつて
すぐに回数を超えてやるっ！ だからっ！ だからあっ！」

声が枯れてもいいと思つて大きく息を吸いこんで叫ぶ。

「もうそんな悲しい顔をしないでくれええええええっ!!」

腹の底から叫んだ。

すると、急に依り代が光つてその場に歌が流れ始めた。

「これは……」

それも「あしたのあたし」だ。

クリスの歌が何故勝手に……？

「な、何だこの歌……っ。あ、あたしはそんな歌知らねーぞっ！」

そして何故かクリスが狼狽える。

でも、そうか。カップリング曲は基本原作中じや唄う事はないもん
な。

つまり、クリスの心情をより歌ったこれは彼女にとっては切歌の「手紙」と同じような位置付けなのかもしれない。

「クリス、俺は前に言ったよ。君の事をクリスちゃんって勝手に呼んでいた頃があるって。君が本当は寂しがり屋で素直になれない事を、俺はこういう歌から知ったんだ」

「違うっ！ あたしは」

「強がっていないと生きていけなかったんだよな？ 大人達の中で親を亡くした子供が生きていくには、隙を見せたら、弱さを見せたらダメだったから」

目を逸らす事なくクリスを見つめる。

今の彼女からは最初の頃のような余裕やふてぶてしさが失せていた。

もしかして今のクリスはマイクユニットが見えないだけで歌自体は聞こえてるんじゃないだろうか？

奏もマイクユニットが隠されていたように、クリスも放課後モノクロームを聞かされた事で悪意が危険と判断して収納したのかもしれない。

「クリス、同じ女だから今の貴方の気持ちは分かるつもりよ！ だからこそ言うの！ 悪意に身を任せていては駄目！ ちゃんと貴方自身を取り戻さないと、今度は貴方が本当に守りたいものを勝手に失う事になるわ！」

「そうだよクリス！ あたしもあんたも、仁志先輩の世界へのゲートを隠されたから最後の一線を無くさず済んだんだよ！ じゃなかったら、きつと今頃あたし達、女として一番嫌な事をさせられてたはずさ！」

「雪音っ！ あの時も私はお前に手を差し伸べた！ 今度も差し伸べようっ！ 一人で抱え込まないでくれ！ そんなに私は頼りない存在か！」

三人の言葉にクリスが僅かに、だけど確かに反応した。

言葉ではなく表情で、目で、三人の言葉に返事をしたんだ。

その目は、顔は、辛そうに歪んでいた。

「翼っ！ 奏っ！ マリアっ！ クリスを俺の前まで、俺の手が届く場所まで連れてきてくれっ！ 今のクリスはこつちへ手を伸ばせない。なら、こつちが行って手を掴んで引っ張るしかないんだ。だけど俺だけじゃそれは無理なんだ……」

間違いなく今の依り代じゃクリスを元に戻す事は難しい。

それでも、やらない訳にはいかない。

チラリと依り代を見れば、残りのバッテリー残量は20%を切ろうとしてる。

どうやら今のクリス相手に歌を流すのもかなりの消費らしい。

このままじゃ依り代をクリスに押し付ける前にバッテリーセーブが作動すると、そう思って俺は顔を上げて三人の歌姫を、ドライデーヴァを見た。

「だから頼むっ！ 俺の代わりにクリスの手を掴んでくれないか！」

俺の言葉にドライデーヴァは何も言わずに頷いてくれるとその場から跳んだ。

あしたのあたしが微かに聞こえる中、三人は動きが鈍いクリスへと向かっていく。

俺は、その背中を祈る様に見つめる事しか出来なかった……。

「クリスっ！ 手を伸ばして！ 一緒に帰りましょうっ！」

「嫌だっ！ あたしはもうあの頃には戻れないんだよっ！」

マリアの言葉へそう返してクリスが闇の弾丸を放つ。

けど、それがどこか勢いを失っているようにあたしは感じた。

「雪音っ！ お前の想いは、この歌のままのはずだ！ 強がる事と強さは同じじゃない事はお前も知っているだろうっ！」

「うるせえっ！ あたしは強がってなんかないっ！ 強いんだってのっ！」

翼へも言葉と共に闇の衝撃波みたいなのを放つクリスだけど、その顔はともじやないけど強気には見えない。

むしろ、今にも泣きそうだ。若干いじめてるみたいで心が痛むけど、今はそんな事言ってもらえないね！

「なら甘えてみなよ！ 強い奴はね、自分の弱さを認めて、誰かにそれを見せられるのさ！ クリス、あんたが強いって言うなら、あたし達に甘えてみなっ！」

「っ！ ちよせえ事言ってんじゃねえっ！」

向かってくる闇の銃弾をアームドギアで弾く。

ぼんやりと記憶に残ってるクリスの狙撃の速度や精度とは雲泥の差の攻撃だ。

確実にクリスの心が、意思が乱れてる。

あの歌がその要因だと思う。まあクリス自身からは薄っすらとしか聞こえないけど。

ただ、このままじゃ不味いとは思う。

クリスの攻撃に鋭さや勢いが無いとはいえ、三人がかりでも優勢とはいかないって事は歌が消えたらどうなるかは言うまでもない。

あたし達が今度は響達みたいにされるだろうね。

「なら……っ！」

ここはあたし達も歌うしかない。

「翼っ！ ここはツヴァイウィングでいくよっ！ マリアもいいねっ！」

「うん（ええ）っ！」

少しでもいい。クリスをあたしと翼の二人で抑えて後はマリアに託すとする。

そう思った瞬間胸の奥が熱くなった。

思わず翼へ顔を向けると向こうもこっちを見ていた。

「奏、いける？」

「誰に聞いているのさ」

「じゃあ……」

「ああ……」

もう心は一つだ。そう強く感じてあたしと翼は同時に頷く。

「テイクオフっ！」

双翼が羽ばたき、色の抜けた空を駆けぬける。

どれぐらい振りだろうね、この感覚は。

考えてみればこの事件に関わってから翼と二人だけで肩を並べて戦うのは初めてかも。

「なら余計気合入れますか！ 久々のツヴァイウイングのライブだ！ 派手にいくよっ！」

「舐めんじゃねえっ！ 今更ツヴァイウイングなんかで怯むあたし様じゃねーんだよっ！」

クリスが弾幕を展開する。その数はたしかに凄いと思う。

「だけど、今のあたし達は双翼なんだ。空は、あたし達の領域なんだよクリス。」

「くそっ！ 何でだっ！ どうしてっ、どうして当たらねーんだっ！」

誘導弾も拡散弾も、ありとあらゆる方法でクリスがあたし達を撃ち落とそうとしてくるけど、その悉くをあたし達は避け続けた。

「防ぐ必要も弾く必要もない。ただ飛び続ければいい。普段の、本来のクリスだったらこうはいかないだろうね。」

「今のあいつは、クリスは冷静さを失ってる。だから攻撃にも本来あるはずの正確さが無くて、代わりに焦りが宿ってるんだろう。」

それに、あたし達の歌もきつとその理由の一つだ。

「翼と二人で口ずさむこの歌は『双翼のウイングビート』って言うらしい。」

「曲名まではあたしも翼も知らなかったけど、教えてもらって納得した覚えがある。」

「あたし達の羽撃きでクリスの心を震わせてやろうじゃないかっ！」

「クリスっ！ 自分の物語を思い出せっ！」

「あたしの、物語？」

「そうだ！ 雪音っ、お前も見ていたはずだ！ お前の、お前だけの夢を！ それを見失うなっ！」

「あたしの、夢……」

「攻撃が止んだっ！ ここしかないっ！」

「あたしがクリスへと突っ込むのと翼が突っ込むのは同時だった。」

「さすが翼だよ、分かっているね。」

「勝機はここだ。だから零すつもりはない。」

「クリスっ！」

「雪音っ！」

「夢をつ！ 生きることをつ！ あきらめるなっ！」

「っ?! 武装が!？」

あたし達が狙ったのは最初からクリスじゃなくてその武装。

アームドギアはあたしが弾き飛ばし、周囲にある砲台みたいな物は翼が斬り捨てた。

そしてそのままあたし達はクリスの両横を駆け抜けて上昇する。するとクリスは思った通りこちらへ意識を向けて顔を上げた。

「まだだっ！ まだあたしにはこいつが残ってるっ！」

腰部から展開されたミサイルポッドから無数のミサイルが飛んでくる。

それは急降下していくあたし達を迎撃するように向かってきていて、このままじゃ回避は難しい。

けどね、そんな事はこつちだつて分かっているのさクリス。

下方から上空への半包囲攻撃。しかも急降下中じゃさすがのあたし達も回避出来るなんて思ってたよ。

ただ、それはあたし達が二人だけの場合だ。

「なっ!？」

ミサイルの雨はあたしや翼が何もしないでも爆発四散した。

なんてことはない。ピンクの閃光が先頭のミサイルを撃ち抜いただけさ。

そしてその閃光が次に狙ったのは展開されたミサイルポッドだ。

「くそっ！ もう一人いたのを忘れるとはなっ！」

今度こそ武装を全てダメにされたクリスが忌々しげに睨み付けた先にいたのは MARIA。

その MARIA はクリスの睨みを無視するようにあたし達の方を見上げてる。

「行きなさいっ！」

「言われなくてもっ！」

視線の先にいる無防備となったクリスへあたしと翼はアームドギ

アを収納して突っ込む。

「何だどっ!？」

理解出来ないって顔をするクリスの両腕をあたしと翼で掴んだまま、あたし達は仁志の前まで向かう。

その勢いや速度を殺せないから仁志の手前で止まるのは至難の業だったけど、何とかマリアが仁志を抱き抱えて場所を移動させてくれたおかげで最悪の結果は避けられた。

「手を離せっ! 離しやがれっ!」

「それは出来ない相談だね」

「仁志さん、お願いします」

「……ああ」

ん? 今、一瞬不安げな顔を仁志がしたような気がしたけど、どういう事だ?

そんな事を思っていると、仁志がクリスの首元へ依り代を押し付けた。

「あああああっ!？」

クリスが苦しむような声を出すのを見て、あたしは思わず息を呑んだ。

こういう事を今まで仁志はやってきたんだって、そう思い出して。そう、あたしはあの日、根幹世界へと戻った時から今までの事はつきり覚えてる。

……と、思う。ところどころあやふやな部分もない訳じゃない。

いや、鮮明じゃないところ、か。

切歌へ攻撃した事は覚えてるけど、どこを狙ったかとは覚えがない。

セレナの世界へ行ってパズルの入口を見つけて攻撃したのは覚えてるけど、始めと終わりしか記憶にないみたいなの、そんな感じであったしの記憶は歯抜けてる。

「クリスっ!」

「ぐうぐうっ! む、ムダだっ! 今のあたしは、依り代だろうともう……っ!」

「ムダなものか！ クリス！ 俺は君を諦めるつもりもなけりや手放すつもりもない！ 悪意なんかに渡してたまるかっ！」

「痛いだけなんだよっ！ 辛いんだってのっ！ もうあたしなんかは光の差す道を歩けないんだっ！」

そうクリスが叫んだ瞬間、仁志は優しい顔をした。

「そんな事はないよ。前にも話したかもしれないけど、ウルトラマンの中に闇へ堕ちてしまった存在がいる。だけど、そうなくてもちやんと闇から解放されて元の光の当たる場所へ戻れたんだ。クリスも、そうなれるよ」

「それは作り物だからだっ！ あたしは」

「作り物だろうとそうじゃなからうと関係ないよ。大事なものは、諦めない気持ちだ。闇から生まれても光を目指す事でそこへ近付ける。時には光にもなれる。クリス、君もそうだったじゃないか。ご両親を失って、フィーネと出会って闇に堕ちた。そこから響達と出会い、関わり、手を繋ぎ合って光の中へと戻っていった」

「あ……」

そうだったんだって、そこで初めて知った。

クリスも両親を失ってるんだ。そして、響や翼に出会って今みたいになっただんだ。

「戻れるよクリス。もう一度、君からも手を伸ばせば、光はいつも傍にある。だから」

「ムダだって言ってるだろ。あたしは、もう闇に堕ちるしかねーんだ」

クリスが仁志の言葉を遮るようにそう言った瞬間、仁志が何かに気付いて視線を依り代へ向けた。

「くそっ！ もうバッテリーセーブに！」

「へっ……やっぱり無理なんだよ。あたしを元に戻す事なんかな……」

どうやらあたしを戻すために予想以上に依り代が疲弊したらしい。

と、仁志はそこで依り代を更にクリスへと押し付けた。

「諦めるなっ！」

「っ?!」

ビリビリと空気を震わせる声がその場に響いた。

あまりの事にクリスさえも目を見開いて仁志を見つめてる。

「俺は諦めないぞっ！ だからクリス、君も諦めないでくれ！ 絶対、絶対助け出ししてみせるからっ！ だからっ！」

クリスから目を逸らさず、仁志はそう言つて手にした依り代を強く握り締めた。

「これで使えなくなつてもいいっ！ 今俺に必要なのは依り代よりもクリスなんだっ！」

その仁志の言葉と同時に依り代が光を放った。

その光がクリスの首元を包み込むと、そこにヒビが生じたのが見えた。

「がああああつ!! や、ヤメロオオオツ！」

「声が変わつた!?!」

「悪意の声よっ！ 仁志、頑張つて！」

「雪音っ！ 聞こえるかっ！ 聞こえるのなら聖詠をっ！ 自分を取り戻せっ！」

突然の事に動揺するあたしと違い、マリアと翼はもう慣れてるのか狼狽えもしなかった。

「兄様っ！ 響さん達が意識を取り戻しました！」

そこへエルが現れた。その後ろには響達がいる。

「クリスちゃんっ！」

「クリスっ！」

「クリス先輩っ！」

「クリスさんっ！」

「お、お前ら……っ！」

響達の声にクリスが辛そうに声を絞り出す。

ああ、そうか。あたしだって依り代だけじゃ無理だったんだ。クリスもきつとどうしようもないんだろう。

「だからこそ、だよな」

あたしだから言える事がある。

あたしだから分かる事がある。

クリス、あんたの迷い、苦しみ、あたしも断ち切れるように手伝うよ。

「クリスっ！ 聖詠を唱えるんだよっ！ まずはそこからだ！」

「聖……詠……っ」

「まず自分が悪意を追い出そうとする事。それが大事なんだ」

「自分で……っ！ 追い出すっ！」

クリスの声に力が宿った。

クリスの瞳に光が宿った。

きつとみんな同じ事を感じ取ったはずだ。

それと、ヒビが少し割れて何かが見え始めた。

「そうですっ！ クリスさんっ！ 頑張ってくださいっ！」

「お前なら出来るっ！ 頑張れクリスっ！」

「クリスさんは優しくして強い人です！ 私、知ってますっ！」

エル、ヴェイグ、セレナが声をかける。その顔は祈るような表情だ。

また少しだけヒビが割れて首元のギアを減らした。

「クリス先輩なら悪意なんかにいいようにさせ続けませんっ！」

「デスよっ！ クリス先輩、ガツンと悪意を追い出すデスっ！」

「悪意に苛立ちを覚えたのでしょ？ ならちゃんと自分の手でお返し

しなさいっ！」

調、切歌、マリアが声をかける。こっちは励ますような表情をして

る。

またギアが割れて、マイクユニットが見えてきた。

「雪音、私達は信じている。お前なら悪意に支配されたとしてもそれ

から脱する事が出来るよ」

「クリス、ちゃんと周りを見て？ 私達、みんなクリスを待ってるんだ

よ？」

「クリスちゃん、また一緒に遊ぼうよ。みんなと一緒に出かけした

り、映画見たり、ご飯食べて笑おう？」

翼、未来、響が優しく声をかける。こっちは笑みを浮かべてるね。

またギアが割れて、完全にマイクユニットが見えた。

「聞かせてくれよクリス。君の本当の声を」

「い、いのか？ あたしは……だつて、酷い事をしたのに……」
「それは悪意がやらせた事だよ。そんな事言い出したら響以外の装者全員に同じ事が言えるんだし、俺は、俺達は気にしてないさ。そうだろう？」

仁志がそう問いかけたからあたしは頷いた。当然だけど翼達もだ。それを見たクリスが泣きそうな顔をしたのと同時にマイクユニツトが微かに光った気がした。

「さあクリス、手を伸ばして」

仁志の言葉であたし達全員で手を差し伸ばした。

するとクリスが目を見開いて、ゆっくりと笑顔を浮かべて涙を流しながら手を伸ばした。

その手を響と未来が掴むと、クリスが泣き笑いのまま口を開く。

——Killter Ichai val tron……。

聞こえた聖詠と共にクリスの口から何かが飛び出していくのが見えた。

顔を動かせば、そこには真つ黒な塊のような物が浮かんでいた。

「あつさりと出てきた？ まさか……でも……」

そんな時間こえた仁志の眩きが妙に気になったけど、今は目の前の悪意へ意識を集中するべきだつて思つて、あたしは空を見上げた。

そこに浮かぶ黒い物を睨むように……。

「正直予想外だったわ。その端末を使えなくなつてもいいとまで思い切るなんて」

「だからだ！ お前の想定を超えるには、俺も今まで避けてた事をやるしかないつて思い切れたのさっ！」

暗に仁志は悪意のおかげでクリスを助けられたと言つていた。

自分を通じて読んだらう考えや気持ち。それ故に依り代を失つてもいいという決断が下せたのだと。

そこで仁志は手にしていた依り代へ目をやり、微かに驚くと笑みを浮かべた。

「それに、どうやらまだツキは俺達に残つてるらしい！」

そう言うなり仁志は依り代を持ち上げると画面をタップする。

瞬時にクリスのギアがリビルドギアツインドライブへと変わったのを見て周囲は悟った。

依り代のバッテリーが辛うじて残っているのだと。

「みんな、きつと俺に出来る事はもう何もないと思う。だから、想いで、心で一緒に戦うよ」

「仁志さん……。はいっ！一緒に戦ってくださいっ！」

「仁志さんの想いがあれば、私達は負けないから！」

「あたし様を好き勝手した事、後悔させてやらあ！」

「そうね、私もまだ仕返し足りないわ！」

「アタシだってそうデス！」

「それだけじゃない！ 師匠を苦しめて弱らせた事だっ！」

「みんなの心を傷付けて苦しめた悪意っ！ 絶対に祓い清めてみせるっ！」

「これを、今度こそ最後にするよっ！」

「悪意をキレイな状態にして終わらせますっ！」

セレナが言い終わった瞬間、全員のギアが金色に輝く。

その光に悪意が怯んだ。

「こ、この光は……。っ！ あの時と同じか……。それ以上だわ……。っ！」
リビルドギアツインドライブの力を学習したとはいえ、悪意も完全に無効化出来る訳ではなかった。

何せリビルドとはギアにラピス・フィロソフィカスの力を宿したものだ。

しかも、それは呪いの魔剣を焼却しながら発現した力である。呪いに近い悪意にとって、それは相性が悪いにも程があった。

故に、その力を最大限まで引き出した九人によるリビルドギアツインドライブは、未だ悪意にとっては苦手とするものだった。

「パズルを展開しますっ！ そうすれば悪意が逃げる事は出来ません！ 皆さん、後はお願いますっ！」

——俺達に出来るのはこれだけだ！ みんな、頼むっ！
エルフナインの言葉とヴェイグの願い。

それを受け、響達は力強く頷いた。

「いいわ……。ならば、今度こそその輝きさえも飲み込んでみせる……っ！」

蠢き姿を変え始める闇を相手に金色の装者達が立ち向かう。

光と闇の決戦、その第二幕が終わりを迎えようとしていた……。

UNLIMITED BEAT

「未来は仁志達の護衛を！ 残りで悪意を、闇を叩くっ！」

「「「「「了解（デス）っ！」「「「「「」」」」」」」

マリアの言葉と共に金色の輝きが八つ、宙に現れた邪悪な龍へと向かっていく。

その大きさは前回よりも大きい。それだけ悪意が力を増したって事なんだと思う。

「只野さん、私の傍から離れないでくださいね？」

「ああ、分かってる。頼りにしてるよ未来」

そう言うとき未来は小さく頷いてくれた。

エルはヴェイグと共にパズルの維持へ全力でその場から動けないため、俺は未来と一緒にエルの傍に立っている。

それにしても、どうして悪意が龍になったのかがこれで納得出来た。

あいつ、世界蛇を模してたんじゃない。俺から得た仮面ライダー PIRITS の情報で龍を選んだんだ。

太古の昔に地球へやってきた三人の宇宙人。神と崇められた彼らが乗っていた乗り物こそが龍だ。

正確には竜と書くべきだろうが、そこは別の知識もあって龍になってるんだと思う。

より攻撃的なイメージを持っているのが龍だ。

日本の竜神様は基本的に人の役に立つ事もあるが、西洋では龍は本人に害を為す存在。それを俺の記憶や知識から得て、悪意は龍をイメージしているんだと。

悪意が変化した邪悪龍は、響達の輝きに若干怯んでいるものの前回程の弱体化は見られない。

鱗が溶ける事もないし、周囲の瘴気が消し飛ぶ様子もない。

つまり、確実にリビルドギアツインドライブへ対処していると言える。

「……リビルドギアじゃ押し切れないかもしれない、か」

悪意の言った飲み込んでみせるとはそういう事なんだろう。

とはいえ、九人揃って展開出来るギアはあとは水着やサンタぐらいしかない。

それでは邪悪龍に有効打を与えられるとは思えない。

そして、もう一つの問題は例の特訓によって色々と見つけただろう戦法や攻撃法も、空中戦となるとどこまで使えるか分からないという事だ。

「もしかして、これも考えてあいつはここを戦場に選んだのか？」

ゲート内の戦いは例えるなら空間戦闘だ。空中ではないが地上でもない。いわば不安定な空間での戦い。

そこなら飛行能力の有無は問われないから前回は響達も邪悪龍相手に互角に立ち回れた。

ただ、ここだと邪悪龍は浮遊しているがみんなには飛行能力はない。リビルドギアでもそれは変わらない。こうなると一気にみんなが不利になる。

「只野さん、何かいい方法ありませんか？ 以前は私が足場になって響を援護したんですけど……」

色々と考えていると未来が悔しそうな顔でそう聞いてきた。

唯一装者の中で飛行能力を持つのが未来だが、それも飛行出来るだけであり空戦能力に優れるという事とはちよつと違う。

それでも響達よりは空戦能力は高い。だけど未来は戦闘経験がみんなに比べると圧倒的に少ない上、防御力が優れているために俺達の護衛役が最適だ。

そんな彼女さえ悔しさに唇を噛むような表情で空を見上げていた。

そこでは響達が邪悪龍を相手に苦戦を強いられている。

クリスは射撃攻撃だからまだいいが、響などは近接攻撃の上格闘戦のために瘴気が邪魔になって攻めあぐねていた。

「何とか空中でも戦えるように……か」

翼や奏、マリアも苦戦している。ザババコンビもやはり空中戦は不得手だからか動きにキレがない。

セレナはおそらく空中戦自体経験がないのか戸惑いが隠せていない。このままじゃ遅かれ早かれ追い詰められる。

現状で有利な点と言えばパズルの中に閉じ込められている事ぐらいだろう。

もしそうじゃなかったら、今頃あのゲートの瘴気を吸いこんで強化とかやってきたはずだ。

「……………ん？ パズルの中……………？」

何か、何かが引つかかる。

今まで俺はこのパズルの中で何度も悪意と対峙してきた。

それだけじゃない。悪意に染められたみんなともだ。

思い出せ。何か、何かがあったはずだ。何かみんなの役に立てる要素がきつと……………っ！

「そうかつ！ その手がある！」

俺は驚いた顔をする未来を無視して、苦しんでいるセレナへ顔を向ける。

「セレナっ！ 攻撃じゃなくて支援に回るんだっ！」

俺がそう叫ぶとセレナがこっちへ顔を向ける。どうやら聞こえたらしい。

「みんなの足場になるようにブロックを展開してやってくれえええっ！」

「分かったっ！ やってみるっ！」

セレナがそう返した直後、邪悪龍の周囲にブロックが出現する。

見た感じはまるでアクションゲームのようだ。

「みんなっ！ そのブロックを足場にして体勢を整えたり邪悪龍へ攻撃をするんだっ！」

「……………了解（デス）っ！……………」

よし、これで多少はマシになるはずだ。

けどまだ足りない。これでは互角にするのが精々だろう。

「それに……………」

クリスを助け出した時からずっと気になっている事がある。

これまで悪意は響を除く装者全員を一時的とはいえ支配下に置い

た。

それを依り代を使い、これまで助け出してきた訳だが、二度の例外を除いて必ず起きていた事がある。

それは、装者から弾き出された悪意が彼女達の姿を模して襲い掛かってきた事。

これが起きなかったのはこれまで二度。

一度は切歌と調の二人を助け出した時。

あれはおそらくだが二人の体に同化していただろう悪意を、依り代がギアパーツとして利用しメカニカルギアへと変わるようにしたためだ。

二度目は奏。依り代とギアに埋め込まれた欠片の相乗効果でも弾き出せなかったため、俺がいちかばちかでキスをした事で撃退あるいは浄化出来たと思われる。

そこで気になってるのがクリスの時だ。

クリスの時も悪意がクリスを模してこなかった。そのまま現状へと至ってる。

それが、どうも俺には気になってる。あの時、たしかにクリスは聖詠を唱えた。

けど、あの時依り代はもう力をかなり失ってたはずなんだ。なのに悪意を追い出した。

……あれ、本当に追い出したんだろうか？

もしかしたら追い出したんじゃないやなく逃げ出したとしたら、どうだろう？

しかもその前に俺が奏とキスした事で悪意を完全撃破したからな。あれで悪意は悟ったのかもしれない。

下手にクリスの中に居座ろうものなら、依り代のバッテリーが少なかった俺が賭けに出てキスするかもしれないと思っただ。

そう考えるとここで悪意を倒す事は出来ないんじゃないかと思う。邪悪龍になった悪意を前回ののようにギアの力で倒しても、あいつはどこからか復活を遂げるんじゃないかって。

「もしそうだとしたら……」

どこが復活の要かと考える。

でも、そこまで考えるまでもなく浮かんだものがあつた。

「ゲートだ……」

今のゲート内は瘴気に満ちてる。もしかするとあれも一種のバツクアツプかもしれない。

なら、ここで邪悪龍を倒すよりもゲート内の浄化を優先するべきか？

ただ全員でここを離れたらゲート内で邪悪龍と事を構える事になる。瘴気溢れる中で、だ。それは避けれないといけない。

「……よし、こうなったらいちかばちかだ」

ここで戦力分散は厳しいし、何より響達の負担が増えるだろうけどやるしかない。

「一旦全員集合してもらうしかないか。未来っ！」

「何ですかっ！」

たまにこちらへ流れてくる邪悪龍の攻撃を未来は防いでくれているのだが、その表情に余裕はない。

これは、ちよつと無理かもしれないな。そう思いながらも俺は思い切つて切り出した。

「少しの間でいい。ここにみんなを集める間、邪悪龍の攻撃を防ぎ続けてくれないか？ ジュエルギアに変えるから」

俺のその言葉に未来は少しだけ黙った後で口を開いた。

「分かりました」

「……ありがとう」

凜とした表情と声で応えてくれた未来に感謝し、俺は大きく息を吸つて声としてそれを吐き出した。

「みんな集まれええええええっ！」

若干緊迫感に欠ける呼びかけだがなりふり構つていられない。

即座に俺は依り代を使って未来をジュエル、響、奏、マリアをソルブライトギアへ変えた。

響達光槍トリオはその変化にどこか驚きながら、翼達もここにきてドライブブチエンジさせた事に疑問を抱きながらもそれぞれにこつち

へ向かってきてくれる。

「何をするつもりか知らないが簡単に出来ると思うなっ！」

「それはこっちの台詞だからっ！」

邪悪龍の瘴気ブレスを鏡の盾で受け止め、凶祓いの力を付与して跳ね返す未来。

その間にまずはセレナがこっちへ合流した。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「セレナ、パズルの維持を手伝ってくれないか？ あるいはセレナもパズルを展開してくれ。それでエル達の負担が減ると思うんだ」

「分かったっ！」

パズルの二重展開なんて考えた事もなかったけど、おそらく単純に効果が重複するか倍加するはずだ。

「ぐっ……お、おのれえ……小癩な真似を……っ！」

邪悪龍の声が苦しげなものへ変わった。

どうやらパズルの二重展開はあいつも負荷を感じるらしい。

「エル、どうだ？ 負荷は減ったか？」

「は、はい。ヴェイグさんも楽になったと」

「よし」

とりあえず第一段階は成功だ。エルの知恵を借りる事が出来るようになったのは大きい。

「仁志、一体どうしたってんだ？」

「ちよつと相談したい事が出来たんだ。それも別々じゃなく全員に」

「全員に？」

「ししよーっ！」

「どうしてマリア達だけドライブチェンジ？」

クリスの疑問へ答えていると切歌と調が合流。

行きがけの駄賃とばかりに邪悪龍へ同時に刃を投擲する辺りが恐ろしい。

ただ、それは邪悪龍の瘴気に阻まれて弾かれていたのがより恐ろしいけど。

リビルドの攻撃が簡単には通用しなくなってるって事だからな。

「それを今から説明する。悪いけどそれまでは防御に」

「仁志さくんっ！」

聞こえた声に顔を動かせば残る響達が一齐に合流してくれた。

最前線で戦っていたんだろう。四人の顔には疲労の色が見える。

「遅れました」

「ごめんよ。さすがにさ」

「連戦になってるから疲労が、ね」

そうだった。みんな、多かれ少なかれ前哨戦で疲弊してるんだ。

これも前回との違いか。もしかしてこれも悪意は企みの中に組み込んでいた？

……だとすればいやらしい事してくれる！

「いいか、よく聞いて欲しい。このままだといたちごっこだ。悪意をここで倒しても、あいつは復活する可能性が極めて高い」

その瞬間、全員が息を呑むのが聞こえた。

未来とセレナが邪悪龍の攻撃を防いでいる中でも、それだけはしっかりと聞こえた気がした。

「悪意に本当の意味で勝つには力じゃダメなんだ。おそらくだけど、ここでギアの力で押し切れたとしてもあいつはゲートの中の瘴気を使って復活する」

「っ！ そうかつ！ あれはそういう目的でもあつたんだ！」

「仁志さんへ植え付けた分身の育成、ヴェイグの嗅覚阻害だけでなく自分の復活用の瘴気か……」

「用意周到にも程があるわ。だけど、言われてみれば納得しかない」
「だから光槍トリオにはこれからゲート内の浄化をお願いしたい。そのギアに秘められた日輪の力なら、きっとあの場所を元の状態に戻せるはずだ」

三人でツインドライブを使用すれば最終的に金色の輝きを放つソルブライトギア。

おそらくだけど、あれは太陽の光でもある。古今東西太陽の光は闇を払い、夜明けを告げる神聖なものとして扱われてきた。

なら、哲学兵装の観点からもこの上なく瘴気に有効なはずだ。

「でも……」

俺の言葉に響が躊躇いを浮かべる。

その理由は簡単だ。現状総力戦で互角に出来るか出来ないかなのに、ここで戦力を減らして大丈夫だろうかと不安なのだ。

「へっ、お前らがゲートの中を綺麗にしてくる間ぐらい、あたしらで十分だつての」

「クリスちゃん……」

「そうだな。立花、心配はいらない。それに奏やマリアと一緒にならそこまで時間もかからないだろう?」

「翼さん……」

「響さん、こっちはアタシ達に任せてくださいデスっ!」

「師匠達を守って響さん達の帰りを待ってます」

「切歌ちゃん……調ちゃんも……」

「戦う事は苦手でも守る事なら得意です!」

「響、お願い。私達は響を信じるから、響も私達を信じて!」

「セレナちゃん……未来……」

残留組の言葉に響の目が若干潤んでいく。

と、そこでその両肩へ二つの手が乗せられた。

「ここまで言われたらやるしかないだろう?」

「奏さん……」

「行きましょう。三本の GANG ニールで瘴気を全て祓い清めるの」

「マリアさん……」

ゆっくりと色が変わりつつある三人を見て、俺はそっとエルの肩へ手を置いた。

するとエルがこっちへ顔を向けたので、笑みを見せて頷いてみせる。

きつとこれで俺の言いたい事は伝わると思つて。

エルもその頷きを見て小さく頷いてくれ、すぐに響へ顔を向けた。

「響さん、ここは僕らに任せてください! ヴエイグさんも、頼むと言つてます!」

「エルちゃん……ヴエイグさん……」

「ここが正念場だ。踏ん張りどころなんだよ。だから頼む」

「仁志さん……はいっ！」

響の表情が凛々しさを戻す。うん、これで大丈夫だって、そう確信出来る何かがある。

パズルの外へ出られるようにエルがドアを出現させ、そこから三人のガングニールが出て行った。

こうなると後は三人が戻ってくるまで耐え凌ぐだけか。

「何をやるうとしてしているか知らないが、何をしようと私には勝てない事を教えてやろうっ！」

そう宣言すると邪悪龍が分裂した。

しかも、その分裂体は黒い影の状態から姿を変えていき、あろう事かカオスビーストへと変化していく。

「嘘だろ……」

「まさか、この人数で五体のカオスビーストを相手にしなくてはいけないとは……」

「くそっ、やってやらあ！」

「セレナはここで俺やエル、ヴェイグの護衛を頼む！ 翼っ！ 残りの五人それぞれでカオスビーストを一体ずつ抑える事は可能か！」

正直無茶を言っている自覚はある。いくらツインドライブとはいえ、カオスビーストを一人で相手するなど危険極まりないと。

だけど、翼は笑みを浮かべた。それだけじゃない。クリスも、切歌も、調も、未来さえも不安そうな表情ではなく笑みを見せたのだ。

「任せて。今の私達なら、例え相手がカオスビーストだろうと負けはしないから」

「ああ、むしろ丁度いいハンデだ。これぐらいじゃねーと全員の見せ場がないしな」

「アタシ達のギアはししよーの気持ちちが込められてるギアデス。カオスビーストなんかには負けないデスよ」

「師匠、私達の歌を聞いてて。闇に負けない光の歌を」

「響達が戻ってくる頃には私達も悪意を浄化してみせますから」

「……ありがとう」

それだけしかかける言葉がなかった。

ある意味で死地へ俺は彼女達を送り出すしかないからだ。

これが、これが弦十郎さん達が味わってきた苦しみか。情けなきか。

俺に出来るのは、笑みを見せてくれた五人の装者へ感謝を伝えて頭を下げる事だけだ。

それが、直接戦う事の出来ない俺に出来るせめてもの事だった。

「行くぞ！ いいか、欲張るな！ 倒そうとするのではなく負けまいとすればいい！ そうすれば自ずと状況を有利に出来るっ！」

「了解だっ！」

「目にモノ見せてやるデスよっ！」

「ツインドライブギアならカオスビーストにも負けないっ！」

「響達の分まで頑張るんだっ！」

変化を完了したカオスビースト達へ向かっていく翼達を見送り、俺は依り代へ目を向けた。

「……残り3%か」

正直よくもったと思う。クリスを助け出すのにバッテリー全て使い切ると思っていた。

ただ、おそらくだがこの分だとこの戦いが終わった時にはバッテリーが切れるだろう。

その時、俺はどうなるのだろうか。いや、よそう。今は不安など抱いている余裕はない。

今はただ目の前の戦いを見守るだけだ。見ている事しか出来ないのなら、最後まで見届けるために……。

「さて、どうやってこのゲートの中の瘴気を消し飛ばす？」

奏さんの言葉に私はマリアさんへ顔を向けた。

「仁志さんは私達なら出来るって言ってくれました。だけど、さすがにゲートのあちこちへ行ってたら時間がかかり過ぎます」

「そうね。なら……」

少しだけ考え込むような顔をしてマリアさんは……笑った。

「歌いましょう。フォニックゲインを高めて、このギアの出力を上げるの。そして、その輝きで、太陽の光でこの中を照らす」

「それしかないか。よし、やるよー」

「はいっ！」

三人で手を繋ぐ。それだけで何故か胸の奥があつたかくなる。

それと、頭の中に音楽が流れてくる。これは、あの時の歌だ。

今の私達はこの歌の名を知っている。教えてもらったから。見せてもらったから。

「「光槍！ ガングニールっ！」」

そう告げた瞬間、ギアから音が流れ始める。

ギアが完全に金色となって、その光が周囲を照らす。

瘴気が消えて、私達の回りだけまるで朝日が昇つたみたいに明るくなっている。

私達の歌声と共にその光は広がって行って、どんどんゲートの中が明るくなっていく。

それに感化されるみたいに私達の歌声も明るく、大きくなっていく。

歌を唄う事が楽しいってギアをまとったままで思うのは久しぶりだ。

最後は動画のために唄った時だからもう一か月は前だから。

「こんな時に言う事じゃないって分かってるけどさ、楽しいね」

そんな時、奏さんが言った言葉に私は反射的に頷いた。

「はいっ！ この歌をこんな気分で唄う事があるなんて思ってたませんでした！」

「そうね。激しく戦うために唄うのではなく、信頼出来る相手と手を取り合って闇を照らすためだけに唄うんですもの」

歌を止めてもゲートの中はかなり明るくなった。

気のせいか本来の時よりも明るいつて感じるぐらいに。

「だけど、まだ足りない気がします」

「そうだね。まだきつと瘴気は、闇は残ってる」

「もう一度唄う？」

「おいおい、二度も同じ歌、しかも連続なんてライブでやるか？」

「それは……」

「じゃあ、やってみませんか？ 私達の胸の歌を合わせて、新しい歌を唄う事」

ユニゾン曲って言えばいいのかな？

「だけど戦うためじゃない。このゲートの中を元の姿に戻すためだけに唄うんだ。」

奏さんとマリアさんが不思議そうな顔で私を見つめて、やがて同時に苦笑した。

「ははっ、いいね。うん、出来る気がしてきた」

「本当よ。ええ、きつと出来るわ。今の私達なら」

「絶対出来ます！ やってみせましょうっ！」

両手から感じる温もりと両側から向けられる微笑み。

それに私の胸の奥があつたかく、ううん熱くなる。

ギアから音が流れ始める。それは初めて聞く音楽だ。

それに気付いて私達は顔を見合わせる。

そして合図した訳じゃないのに同時に頷き合った。

「「ひかりくあくれっー」」

そう唄った時、ギアが一瞬眩しい光を放った。

ゲートの中全てを照らすぐらいの、輝きを。

それを合図に私達は手を離して動き出す。

私はその場に留まって、マリアさんと奏さんはそれぞれ左と右に散って進み始める。

「そう、神様が人にくれたのは力？ 知恵？ そのどちらでもない」

「みんな持っている可能性こそが体に宿す奇跡の光」

「希望こそが、夢見る事が、生きると言う意味なら」

「「生きる事を諦めず進もう！」」

ギアの輝きがどんどん強く、温かくなっていく。

本当に今の私達は太陽みたいだ。心なしか体の疲れも消えていく。

「正義なんてものを振りかざすのはダメ」

「今を変えるため足掻こう」

「勇気のその先で闇が笑っている」

「飲まれるな。希望を」

「二いつだって力は自分のためじゃなく！」

「誰かの笑顔を守るため」

「二解き放てえええええつ!!」

太陽の輝きがゲート中を包んでいく。

闇を包み、瘴気を消し飛ばしていく光が進んでいく。

何となくだけど感覚で分かった。もうゲートの中に瘴気は残っていないって。

奏さんとマリアさんもそう感じたんだと思う。こっちを見て満足そうに笑顔を見せてくれた。

「急いで戻りましょう。みんなが心配です」

「ああっ！ 超特急で戻るよっ！」

「私達のこの行動で多少でも悪意が困ってくればいいけど……」

マリアさんの言葉に同意するように頷いて、私は再び奏さんの世界へのゲートをくぐった。

ゲートを出てすぐ私達はあのライブ会場へと向かった。

普段なら飛び越えられないようなビルを足場に、みんなが戦っている会場を目指す。

ツインドライブじゃなかったらきつと無理だったね、この動き。

おかげでかなり早く戻れる。

上空にあがった時に会場内を見てみる度に、パズルが突破されてないから何も見えない事に安心しながら。

「そういえば私達が戻った事をどうやって伝えればいいんですか？」

「歌を唄えばいいんじゃないか？」

「いい考えね。このギアが輝けばヴェイグが気付いてくれるかもしれないわ。あまりギアを変化させない方がいいだろうし」

「え？」

どういう意味ですかって、そう聞こうとしたら奏さんが苦い顔をした。

「そっか……。依り代のバッテリーはもう少ないんだった」

「あ……」

そうだ。仁志さんが使えなくなってもいいって、そう思ってたクリスちゃんを元に戻すために依り代を使ったんだ。

「ええ。おそろくだけど、もう頻繁にギアを変更させる事は出来ないはずよ」

「成程ね。じゃあ余計このままであたし達が戻ってきたって察知してもらわないと」

「そうですね！」

今は暗くなっても仕方ない。むしろ明るくしていないといけないんだ。

ライブ会場へ戻った私達はドアで出て来た場所近くで歌を唄った。

それはあの歌。新しい胸の歌だ。

そうだ、この歌の名前を仁志さんに付けてもらおう。きっと良い曲名を付けてくれるはず。

「見て。ドアが出て来たわ」

「よしっ！ 中へ戻るよっ！」

「はいっ！」

出て来た時と同じドアが目の前に現れたので一旦歌を中止してパズルの中へと戻る。

するとそこには……

「「カオスビーストっ!?!」」

倒したはずのカオスビーストが五体もいて、それぞれと翼さん達が戦っていた。

一体どういう事だろう。そう思いながら私達は仁志さん達へ合流した。

仁志さんも私達に気付いてくれて、安心するように笑顔を見せてくれた。

「響っ！ 奏もマリアも無事で良かった！」

「仁志、これは？」

「悪意が、邪悪龍が分裂したんだ」

「姉さん達が出て行った後からずっと翼さん達が食い止めてくれるん

です！」

「それで、ゲートの方はどうですか？」

「バッチリ！」

「元の状態に戻せたわ」

「そういう事。じゃ、あたし達も翼達の援護に入るよ！」

「はい（ええ）っ！」

「頼むっ！」

仁志さんの声に背中を押されるように私達はそれぞれ別れて援護へと回る。

私は未来、マリアさんはクリスちゃん、奏さんは翼さんだ。

当然あの歌を唄いながらだ。

「響っ！」

「未来、お待たせっ！」

私のギアが放った光にカオスビーストが怯んだおかげで未来がこっちにすぐ気付いてくれた。

やっぱり悪意はリビルドギアと同じぐらいこのギアが苦手なんだ。

「一緒に戦おう！」

「うんっ！」

それだけで良かった。未来とはそれだけで通じ合えるから。

あの歌のおかげで私達光槍となったガングニールは絶好調だし、その光がカオスビーストを弱らせてみんなを元気にしてるような感じだ。

奏さんとマリアさんもギアが輝いていて、私達で三つの太陽みたいになってるからか翼さん達も勢いを取り戻してきてる。

「「「お、おのれえ！ まさかそのギアにそこまでの力が秘められていたなんてっ！」「「「悪意の声が重なって聞こえる。」

五体のカオスビーストが全部悪意なんだってよく分かるね。

「一気に押し返すよっ！ あたし達の輝きに続けっ！」

「「「了解（デス）っ！」「「「私達のギアの光が未来達のギアへ当たって共鳴するみたいにキラ

キラしてる。

もしかしたらソルブライトギアが太陽のギアだから、他のギアにその光を与える事が出来るのかもしれない。

そのおかげなのか未来とのコンビが今まで以上に噛み合った。

何をしたのか何をしようとしているのか何をするのか。それら全てが声に出さずとも分かるような、そんな感覚があったから。

ソルブライトギアもずっとフル稼働って感じで、クリスちゃんを相手に戦ったのにその疲れが完全に消えてた。

お日様の光を浴び続けているからかもしれないって思いながら、私は目の前の悪意へ拳を振るう。

手を繋ぐ事が出来ない相手。ううん、ある意味では繋ぐなんて考えもないのかもしれない。

みんなの心の中に入り込んで、憎しみや恨みを大きくする悪意。

……私も仁志さんへの気持ちを利用された事がある。

初めての恋を、想いを、もてあそばれた。

それだけじゃない。悪意はクリスちゃんの体さえも自分のために利用した。

許せない。許せる訳がない。きつとこの気持ちはみんな同じだ。

あれを自分がされていたらって思えば、悪意のした事は決して許せる事じゃない！

「「「「「解き放てええええええっ!!」「「「「「」」」」」」

私達の歌に未来達も合わせてくれた。

九つの声が重なり合って凄い力を感じる。

繰り出す攻撃が一斉にカオスビーストへ直撃して一気にその巨体を押しやった。

「「「「「、こんな事で負けるものかあああああつ!」「「「「」」」」」

その言葉でカオスビーストが一か所に集まっていく。

これは、もしかして……

「集合は合体フラグ!」

「させるものデスカっ!」

「もう一度さっきのいくよ!」

奏さんの言葉に頷いてもう一度唄いながらフォニックゲインを高める。

だけど、その前に五体のカオスビーストが集まって混ざり合うみたいに一つになっていく。

早く攻撃しないとって焦りがみんなにも浮かぶ。

「焦っちゃダメだっ！」

そこへ仁志さんの声が響いた。

「こういう時焦って動いたらダメだっ！ 相手が合体するならさせてやれっ！ どんな時も冷静さを失ったら負けるっ！ みんななら何があっても大丈夫だからっ！ へいき、へっちゃらの気持ちを忘れないでっ！」

その言葉で頭が冷えた。心が落ち着いた。

きっと仁志さんは沢山のヒーロー物でこういう状況を見てきたんだ。

だから私達の気持ちがあったんだ。そしてそれがどれだけ危ないかも。

「相手が合体した直後にみんなの全力の一撃を加えてやればいいっ！

自分達の力を！ 歌を！ シンフォギアを信じるんだっ！」

本当に、仁志さんがいてくれて良かった。
この状況でみんなの心を落ち着かせて、一つにしてくれるんだもん。

だからもう大丈夫。目の前でカオスビーストがよく分からない姿へ変わり出しても焦らない。

そうだよ。何が出て来てもみんな一緒なら大丈夫。これまでだって何とかしてきたんだ！

「一二三四」解き放てええええっ!!「一二三四」

さつきよりも気持ちを込めた一撃を放つ。

みんなの攻撃が一つに重なって悪意へと向かっていって、直撃するのが見えた。

その威力で爆発が起きて光が広がる。その光で視界が満ちて何も見えない。

「ど、どうなったんだよ?」

「分からん。私もまだ何も見えない」

クリスちゃんと翼さんの声が聞こえる。

二人もまだよく状況が分からないみたいだ。

「だけどきつきの一撃はかいしんの一撃でしたっ!」

「うん、あれが通じてないとは思わない」

切歌ちゃんと調ちゃんの声がある。

二人も元気そうでまずは安心。

「それにしてもセレナ、貴方はどうして?」

「お兄ちゃんが姉さん達が帰ってきたら一緒に攻撃に参加して欲しいって言うってたから。戦力のちくじとうにゆう?はダメだからって」

「仁志先輩って部隊とか指揮した事あるのかね? 理には適ってるよ」

マリアさんとセレナちゃんの声に奏さんの声も聞こえてきた辺りでやっとぼんやりと視界が戻ってきた。

「けど、そこに見えたのは信じられない相手だった。」

「響……あれって……」

未来の怯えるような声。私も気持ちは分かる。

でも、そんな事って、そんな事ってないよ……。

「どこまで私達の、仁志さんの想いを踏みにじるんだっ!」

拳を握りしめて私は叫ぶ。目の前にいる、銀色の巨人へ……。

「マジかよ……」

仁志は悪意が取った姿に天を仰ぎたくなっていた。

何せその姿はある意味で彼が予想していたものに近かったのだから。

「に、兄様、あれはウルトラマンですか!?!」

エルフナインの問いかけに仁志は首を横に振った。

「違うよエル。あれはウルトラマンなんかじゃない。言うならばそれを模したカオスウルトラマンと呼ばれるものだ」

返された声には静かな怒りが宿っていた。

悪意を、銀色の巨人を見つめるその眼差しには悔しさが宿っていた。

仁志にとって「ウルトラマン」とは大好きなヒーローの一角である。

それを、よりにもよって横しただけでなくシンフォギア装者と戦わせるという状況に、彼は怒りと悔しさを覚えていたのだ。

「悪意は俺の記憶からどんな姿が一番みんなに、そして俺に怒りや憎しみを抱かせられるかを考えたんだろう。そして、見つけたんだ。光の象徴でありながら闇に染まったように見える、アンチヒーローとも言える存在を」

「それが、カオスウルトラマン、ですか？」

「きつとな」

そこで仁志は一人心中で呟いた。

（かつて神の力に飲まれた響がウルトラマンに似た姿になった事がある。悪意はそれも知って余計ウルトラマンの姿を模したんだ。俺の世界じゃ、ウルトラマンは神にも近い捉え方をされているしな……）
視線の先で始まった響達九人の装者と悪意の戦いに無力さを噛み締めながら、仁志は拳を握り締める。

ソルブライトギアの光を浴びて怯むどころかむしろ勢い付くその姿に仁志だけでなく響達も息を呑む。

「くそっ！ 怯みやしねえっ！」

「かえって威圧感が増していないか!？」

「神獣鏡の光さえも平気な感じですよっ！」

「さつきまでとは大違いデスよっ！」

「こいつっ！ もしかしてこっちの光を吸収してるのかっ!？」

「しかもそれを力に変えているみたいよっ！」

「そんなんっ！ 見た目だけじゃなくて能力までウルトラマンになったって言うのっ!？」

「闇のウルトラマン……」

「そんなん……そんな事って……」

ソルブライトギアが三つ揃って放つ金色の輝き。

太陽の光とも言うべきそれを、あろう事か悪意は吸収し己が力と変えていたのだ。

「ハハハッ！ もうお前達の光とやらは全て理解した！ 最早その光も、私には無意味ッ！ 無価値ッ！ 大人しく我が力の前に屈し、無様な屍を晒せッ！」

勝利宣言をしながら悪意はその両手を動かしていく。

それが何を意味するかを即座に察したのは仁志だった。

「っ!? スペシウム光線だっ！」

「「「「「「「っ?!」」」」」」」

仁志の告げた単語で響達全員も表情を強張らせる。

それはウルトラマンの必殺技の代表格ともいえるものだったのだ。

響達へ叫ぶその間にも、仁志は残り少ない依り代のバッテリーを消費してドライブチェンジを敢行する。

それによりマリアとセレナのギアが変化を起こし、白銀の輝きを放つ揃いのギアへと変わった。

「これは……姉さんっ！」

「ええっ！ 未来っ！」

「分かりましたっ！ 響達も早くっ！」

「うんっ！」

レゾナンスギアとなったイヴ姉妹は即座に合流すると手を繋ぎ、未来も二人の前へ立つように位置取りを変えた。

それは仁志とエルフナインを守る位置だ。更にそこへ響達も合流した瞬間、三人が守りの力を解放する。

「「守り切るっ！」」

「消し飛ばえええええッ！」

放たれる漆黒の光線。それを受け止めるは守護に特化した二つの力、レゾナンスとジユエルギア。

それらの力を以ってしても悪意の放つ光線は強力であり、その展開したバリアへ亀裂が入っていく。

「不味い……っ！ このままじゃ……っ！」

「レゾナンスギアでもダメなのっ!？」

「アイギスにジュエルの力だけじゃない……っ！ レゾナンスギアの力も加わってるのにつ！」

「こうなったら少しでも威力を殺すしかねえっ！」

「そうだねっ！ やれるだけやろうっ！」

「アタシ達の攻撃がどこまで通用するか分かりませんがっ！」

「やらないよりもマシっ！」

「合わせるぞ！」

「いいかい？ 3……2……1……0っ！」

カウントと同時に六人の表情が鬼気迫るものへと変わる。

「「「行けええええええっ!!」」」」

繰り出された一斉攻撃は漆黒の光線と拮抗する事もなく消滅。だがその少し後で何故か光線も止んだのだ。

「ちっ、小賢しい真似を……」

それは悪意の頭部へ殺到したミサイル攻撃によるもの。

光線を放っている間は無防備になると踏んだクリスが、正面だけでなく側面からも攻撃を送り込んでいた事による結果であった。

「まあいい。所詮死ぬのが少し伸びただけにすぎない」

悪意の見つめる先では疲弊し切ったような未来達三人と、それを支えるようにしている響達の姿があった。

その様子に悪意はほくそ笑むように体を休めるようにその場で立ち尽くす。

先程の攻撃は響達の光を吸収した上で自身の力を加える攻撃のため、その負荷や反動が大きい。

それ故の行動だった。生憎と仁志達には、それが余裕を見せつけるようなものにはしか見えていなかったが。

「未来っ、大丈夫っ!？」

「な、何とか……」

「マリア、しっかりしな」

「立てるか？」

「な、何とかね……」

「セレナ、よく頑張ったデス」

「ありがとう」

「い、いえ、これぐらい……」

たった一撃。それだけで先程までの優勢は崩され、一気に劣勢どころか敗色濃厚となったのだ。

「仁志、どうすんだよ……。正直今のをもう一度やられたら……」

「分かってる。分かってるけど……」

チラリと仁志は依り代へ目を落とす。バッテリー残量は1%。もう何も出来ないに等しいと言えた。

（どうする？ 正直現状は手詰まりだ。歌を唄ってフォニックゲインを高めたところでソルブライトギアのあれ程の光を克服した悪意にリビルドギアも通用しないだろう。レゾナンスやメカニカルも同じだ。今必要な爆発力を持つギアが俺達には残されて……）

そこで仁志は思い出す。まだ一つだけ残されたギアがあると。

だが、残りバッテリーではそれが何を確認している余裕はない。

選んだが最後そのギアから別のギアへ変更など出来ないのだ。

「……響」

「え？」

だからこそ仁志は響の名を呼んだ。

最後の希望は、彼女なのだから。

「俺達の最後の切り札に、なってくれるか？」

その問いかけの意味を分かったのは奏とクリス以外の者達。

しかしその二人も仁志の雰囲気と言葉で何かを察して息を呑んだ。

響は、無言で仁志を見つめ返している。

「正直それが依り代の最後の力だ。失敗だったとしても変更は出来ない。それでも、やってくれるか？」

仁志の声は凜々しいものだった。

仁志の表情も凜々しいものだった。

だけどその眼差しだけはそうではなかった。

それを理解し、響は思わず苦笑する。

（仁志さんらしいや……）

最後の最後に見せた仁志の弱くも彼らしい部分。それに好ましい

ものを覚え、響はしつかり領いてみせる。

「はい。私は依り代を、そして仁志さんを信じます」

「……分かった。ありがとう」

依り代は最後の力を使って仁志の想いに応えるように響のギアを変えろ。

それは、黄金の輝きでギアを包んでいく。

金色ではなく黄金。金を錬成していくようなそのギアは、奏とセラナは知らないギア。

「これは……」

「そういう事かよ……」

「あの時のギア、デスか……」

「アダムを倒した時の、ギア……」

「黄金のギア、再びね……」

「何て輝きだよ……」

「キレイ……」

「兄様、このギアの名はあるんですか？」

「アルケミツクゴールドだよ。まさかこのギアが出てくるなんて……」

「響、どんな感じ？ 大丈夫そう？」

以前身に纏ったとはいえ、その時とは状況などが大きく違う。

それを考えての未来の問いかけに響はゆつくりと手を握ると息を吐いた。

「……うん、大丈夫。あの時よりも強い力と安心感を感じるから」

そう響が答えた瞬間、ギアの形状が変化した。その姿を見て仁志達一部の者達が息を呑む。

「こ、これは……」

「……「ゴッドガンダムっ!?!」」

アルケミツクゴールドギアツインドライブ。それはある意味でバーニングエクストライブさえ越える最強のギアかもしれない。

シンフォギアとファウストローブ。その両方が融合したかのような特性を持ち、黄金錬成という力と依り代という未知なる力が宿った

ギアなのだから。

「また新しいギアか……。だが、まあいい。どうせ今の私には無駄な事。その力も蹂躪してくれる」

仁志達の好意を悪あがきとしか思わず、悪意は体の疲れも抜けた事もあり再び光線を放とうと腕を動かした。

だが……

「させるかあああつー！」

「何っ!？」

まるで瞬間移動でもしたかのように響がその目の前に現れたのだ。背中にある六枚の羽が展開してフィールドを発生、それによる推進力で一気に加速したからだ。

「ゴッドフィールドダツシユ」と作中で呼称された技である。

その加速を乗せて繰り出される拳を咄嗟に腕を交差させて受け止める悪意だが、その瞬間両足が震えた。

これが通常の状態であれば、ライブ会場は大きく窪む様に凹んでいた事だろう。

響の拳による一撃の衝撃を逃がす事が出来なかったため、悪意はその両足へダメージが直接走ってしまったのである。

「こ、これは……っ!」

「まだまだあつー！」

交差している腕をこじ開けるように響の蹴りが炸裂する。

蹴りは単純に拳の三倍の威力と言われている。それ故当然……

「なっ!? あ、足がっ!？」

先程の衝撃から抜け切れていない悪意の両足は崩れるように膝を折ったのだ。

体勢が崩れれば防御も崩れる。何とか腕の交差は崩れなかったものの、腕自体が下がってしまえば意味がない。

「オラオラオラオラッ!!」

「ば、ばかなあああッ!？」

今の悪意は巨人となっている。さすがに40メートルとはいかないが、それでも20メートルはあるだろう。

本来であれば、2メートルにも満たない響がそんな相手へ痛打を与える事など不可能だ。

それを可能とするのがアルケミックゴールドギアツインドライブである。

黄金鍊成という鍊金術の中でも最高位に位置する秘術。

その輝きをその身に宿し、共に宿すミョルニルの力は雷、即ち神鳴である。故にゴッドガンダムという神の名を冠したガンダムの姿となったのだから。

言うならば神の力を宿している今の響は何が相手だろうとそのサイズ差をもものともしないのだ。

そして、かつてアダムを相手にした時とは違う点がまだある。

「立花に続けっ！」

「一人だけ美味しいところ持ってくんじゃねーってのっ！」

「アタシ達もっ！」

「続きますっ！」

「相手がウルトラマンを模してると言うならっ！」

「弱点は胸のカラータイマーっ！」

「もし弱点じゃないとしてもそこが脆い事は間違いないはずっ！」

「光の巨人を闇が真似しても本物には及ばないって教えてあげましようっ！」

あの頃は、仲間達が全てを託すように響をアダムへと向かわせた。その背を見守る事しか出来ない者もいた。その戦いさえ知らない者達もいた。

だがしかし、今はその仲間達が全員揃っている。揃って響の背ではなく肩を並べて戦ってくれている。

それが、響にとっては小さな、けれど最大の違いであった。

（私は一人じゃないっ！ みんなが、みんなが一緒にいてくれる！ 戦ってくれるっ！ それにっ！）

悪意の繰り出す拳を両腕でしっかり受け止め、響は一瞬だけ後ろを見た。

「響っっ！ 負けるなっっ！」

「みなさくっ！ 頑張ってくださいさくっ！」

もうミレニアムパズルは必要ないと思ったのか、エルフナインの腕の中でヴェイグまでも大声で声援を送っていたのだ。

当然彼もそんな二人の横に立って依り代を握り締めながら真っ直ぐ響を見つめていた。

「響……信じてるよ」

二人のように叫ぶのではなく祈る様に呟いて。

「はあっ！」

その呟きが届いたように響の目が見開かれ、悪意の拳を力いっぱい蹴り上げた。

更に響は地面へ下りるや両足でそこを蹴り弾丸のような速度で悪意へと再接近し、顔面へ思い切り拳を突き出そうとしたのだ。

「っ！」

「このっ、調子に乗るなあ！」

だがそうはさせまいと悪意も蹴り上げられた拳を振り下ろして反撃する。

しかしその一撃は響へ届く前に花卉のようなバリアによって阻まれる。

「させないっ！」

「おのれっ！ こんなもの砕いてくれるっ！」

それでもバリアを悪意は力任せに砕こうと拳へ力を込める。

やはり力の差は覆せず、レゾナンスギアのバリアは無情にも砕かれてしまう。

そのままの勢いで悪意は拳を響へと振り下ろした。

が……

「そうはっ！」

「させないデスっ！」

「邪魔をするなっ！」

拳を何とか受け止める調と切歌。

ならばと悪意は残る片手を振り払うように動かそうとして、別の存在にそれを阻まれる。

「たった一人でもっ！ このギアは強いんだよっ！」

「虫けらがっ！」

アームドギアを両手で構えて奏は悪意の腕を辛うじて受け止めたのだ。

「もらったあああっ！」

(くっ、もう間に合わない！ いや、待て。足の痺れが消えたぞ)

眼前へと迫る響を見た悪意は、両足が動くようになった事に気付いてその場から立ち上がるうとした。

けれど、その行動は実行に移される事はなかった。

「か、体が動かないだっ!?」

「ふっ、この攻撃は何度もお前を封じたはずだぞ、悪意っ！」

「こ、この程度でええええっ！」

「なっ!?」

悪意の影へと突き刺された巨大な剣。翼による影縫いが身動きを封じたのだ。

だがそれで諦める悪意ではなかった。

なんと悪意は影縫いを無理矢理力でねじ伏せるように打ち破り、ギリギリで立ち上がって響の攻撃をその大胸筋で受け止めてみせた。

「か、硬いっ！」

ウルトラマンはその鍛え上げられた大胸筋で何度も相手の攻撃を受け止めてきた。

大胸筋バリアと呼ばれる程の強度を持つそれを悪意は忠実に再現してみせたのである。

予想だにしない強度に響の表情が歪んだのを見逃さず、悪意は更に大胸筋へと力を入れてみせたのだ。

「吹き飛ばっ！」

「うあっ!?」

弾き飛ばされるように悪意から離れて行く響。

が、その体が落下する前にミサイルによって受け止められる。

「何っ!?」

「もってけダブルだっ！」

響を受け止めたのとは別のミサイルが悪意へと飛んでいく。

その狙いは悪意の胸部にあるカラータイマーだ。

「させるかっ!」

飛んできたミサイルを手で叩き落とすように爆発させた悪意だが、続けて響を乗せていたミサイルが向かってくる。

それさえも手で叩き落として爆発させた悪意へ、クリスは空を見上げるようにして不敵な笑みを浮かべた。

「何を笑っている? お前達の希望とも言うべき存在は死んだ。そのあまりの絶望に気でも触れたか」

「へっ、違うっての。やっぱお前は何も分かってねーって実感出来ただけさ」

「何?」

「姿形だけ真似したところで意味はねーんだよ。大事なのは魂、心なのさ」

仁志から学んだヒーローの条件。それを思い出している言葉を悪意は鼻で笑った。

「はっ、馬鹿馬鹿しい。何が魂だ。心だ。そんな事を言っているお前達は私の掌で踊り続けたではないか。絆? 愛? 信頼? 無駄な事だ。所詮人間は欲望の塊に過ぎないのだっ!」

「だとしてもっ!」

「っ?! な、何だと? 馬鹿なっ! どこだ!? どこにいるっ!」

響き渡ったのは響の声。

だが彼女の乗ったミサイルは悪意の手によって爆発四散したのだ。

響が生きているとしても、声は下から聞こえなければおかしい。そう悪意が思った時、クリスが見ていた先を思い出して顔を上へ向けた。

「……そこかっ!」

悪意が目から光線を上空へ向かって放つ。

それが何も無いはずの空へ当たり、未来の姿を出現させる。

「響っ! あとはお願いっ!」

未来が鏡面のバリアを展開して周囲と同化させていたのだ。

そのカモフラージュを失った事で悪意の視線の先に響の姿が現れる。

「くっ……」

色を失った空に、眩いばかりの黄金の輝きがあった。

日輪を背負い、悪意を見つめるその姿は神か仏かと思紛う程の神々しきだ。

「持つて行け立花っ！」

「仕方ねーからこれも貸してやるっ！」

「役立てて頂戴っ！」

「どうぞっ！」

「アタシのもデスっ！」

「使つてくださいつ！」

「持つてけっ！」

「響に力をっ！」

その輝きへ八つの色が集まっていく。

温かくも優しい光が、響のギアへ引き寄せられるように。

「みんなの光の力、借りますっ！」

力強い言葉を合図に響の全身へ装着されていく八つの異なる輝き。

それらが彼女のギアへ装着される度に黄金へと変わっていく。

剣が、銃が、二振りの短剣が、鎌が、鋸が、槍が、鏡が、黄金の輝きへと変わって響の力となる。

「そんなこけおどしでええええっ！」

両腕を交差させて悪意は響へと漆黒の光線を放った。

その奔流を見ても響は怯えもしなければ緊張もしなかった。

「未来、マリアさん、セレナちゃん、三人の力、借ります」

二つの短剣と鏡が重なり合い、響の前に三角形のバリアを創り出した。

そこへ漆黒の光線が直撃するも、ヒビさえ生じさせる事無く受け止めてみせる。

「クリスちゃん、翼さん、奏さん、三人の力、借ります」

銃がライフルの形へ変わり、剣と槍がそこへ合体して巨大なキャノ

ンとなる。

そこから放たれた閃光がバリアを通過すると増幅されて光線と衝突したのだ。

しかも、ゆつくりとはあるが閃光の方が押し返し始めた。

「切歌ちゃん、調ちゃん、二人の力、借りるね」

鎌と鋸が合体し、まるで飛行ユニットのようになって響の背中へと装着される。

そして鋸部分が回転を始め、プロペラのような推進力を生み出した。

背中の六枚の羽が稼働し日輪の如きフィールドが展開。それらからの推進力を乗せた響はまるで光のようになって、あろう事か自らバリアの中を通過して閃光の中へと入っていく。

「馬鹿めっ！ 焦って自ら攻撃の中へ飛び込むなどどっ！」

このままいけばもしかすれば光線が押し負けたかもしれないと、そう悪意も思っていた事がそこから分かる。

響の行動を嘲笑うように悪意は全力を注ぐように光線を放つ。

漆黒の光線は勢いを強め、黄金の閃光を僅かに押し返したその次の瞬間だった。

「っ?!」

何かが砕けるような音が響き渡ったのだ。

それが何なのかを最初に理解したのは仁志だった。

「やった……っ！」

彼の目でも分かるように、悪意の胸部にある半球状の出っ張りのような物が砕けていたのだ。

勿論それをやったのは一人しかない。

「ば、馬鹿な……何故……」

自身の重要な器官を破壊された悪意はゆつくりと後ろを振り返った。

するとそこで見たのは黄金の球のようになっていた響であったのだ。

黄金の鎌が羽のように柔らかく響を守るように包んでいたため、あ

の光線の中もダメージを負う事無く突き進んでこれたと言う訳だった。

「あ、あれで無傷で移動出来た、だと……」

「ふう……これで後は」

愕然とする悪意に対して響はウイングを展開し直すとその場で向き直り、未だ動いている銀色の巨人へその拳を高々を掲げてみせた。それに呼応し、響のギアの胸部のカバーが展開、エネルギーマルチプライヤーと呼ばれる“気”の増幅機関が作動する。

その光景が意味する事を察し、仁志はここぞとばかりに叫んだ。

「みんなっ！ 響へギアのエネルギーを集中させるんだっ！」

仁志の狙いがあるのかを察して、奏とセレナを除いた六人がその右手を突き出すように動かしながら叫ぶ。

「天羽々斬っ！」

「イチイバルっ！」

「アガートラームっ！」

「イガリマっ！」

「シユルシヤガナっ！」

「神獣鏡っ！」

六人の行動を見て奏とセレナもどういう事をすればいいのかを理解する。

今は響に文字通り全てを託すべきなのだ。

「成程な。じゃ、やるか？」

「はいっ！」

「ガングニールっ！」

「アガートラームっ！」

八つのギアのフォニックゲインが響の拳へと集束する。

黄金のギアを纏う響の右拳が虹色を創り出して鮮やかに輝いた。

だが、そこで響は何かを思い出したかのような顔になった。

(このままこの拳をぶつけても……)

自分の右拳に宿った力を叩き付けければ悪意を倒す事は出来る。

そう響は確信しながらそれを行った後の事を考え、意を決した表情

で仁志へと顔を向けた。

「仁志さんっ！」

「へ?」

このタイミングで声をかけられると思っていなかったのだろう。

仁志は完全に間の抜けた声と顔を響へ返した。

「最後まで、私を信じてくださいいねっ！」

「えっと……」

何故今それを言うのだろうか、そう思う仁志の視線の先で響は悪意へと向かっていく。

そしてその虹色の拳を悪意へ突き出さ——なかった。

——えっ!?

しかもあろう事か響はギアを解除して砕けたカラータイマーの中へと入ったのである。

理解が追いつかない仁志達を他所に悪意はその姿を維持できなくなったのか収縮していく。

やがてその姿は消え、響だけがその場に残る。

「どうして……」

日焼けをしたような肌の色となった響が。

——ふふっ、ははっ……あははははっ！ 遂に最後の一人を取り込んでぞぞ！

悪意の勝ち誇るような声を聞きながら、仁志はただ目の前の響だった相手を見つめる。

その真意を探るように、汲み取るように……。

METANOIA

「何を考えたか知らんが、私を倒す絶好の機会を手放すとはな。気でも狂ったとしか思えんぞ」

俺の耳に聞こえてくる声は響のものだ。だけど、その口調は響ではない。

色黒の肌となった響は今まで悪意がみんなを支配してきた時と同じものだ。

「立花は何を考えてあのような事を……」

「分かるかっ！　ただ、信じてくれって言ったんだよ、あいつは」

「響……」

そう、響はたしかに言った。自分を信じてくれと。

あれはどういう意味なのか。

考えろ。響だったらあの時どういう事を考えるのか。

俺に最後まで信じてくれと言ったのは何を期待しての言葉か。

「さてと、力はかなり失ったが……」

「『『『『『『『『』』』』』』』』』」

動き出そうとする悪意に翼達が身構える。

もう依り代は使えない。こうなると響を助け出すには……あ。

「そういう……事なのか？」

悪意をギアで倒しても同じ事の繰り返し。

それを響も知っている。だからこそ、あの瞬間響はとどめを刺す事を止めたんじゃないだろうか。

悪意を本当の意味で倒すには力では無理。愛を注ぐ事だけが、心の光を注ぐ事だけが唯一の方法なんだと。

「だから俺に信じてくれと……」

悪意の狙いが自分だと響は俺との話で感じ取っていたはずだ。

故に自分がギアもなく悪意の中へ飛び込めばどうなるかは容易に想像が出来る。

そして依り代が使えない以上、俺が考えるだろう方法は一つしかない。

それに何より……

「今の悪意が自分から逃げ出す事は有り得ない、か……」

力のほとんどを響達との戦いで失った以上、悪意が起死回生を図るには現状を利用するしかない。

つまり、響の体を使って俺達と戦う事だ。大切な仲間を自らの手で傷付け、殺し、最後にはそれを響へ突きつけるつもりだろう。

「……待てよう？」

ふと気付く。今の悪意は響を乗っ取ってるはずだ。

なのに、そのギアはこれまでのような際どいデザインではない。

通常のイグナイトとそこまで大差ないんだ。インナーだってクリスや奏がされたようなものじゃない。

「さて、どこまで抗うのかな？」

「くっ、みんな、構えろ！」

奏の言葉に翼達が身構える。

それを見ても悪意は余裕の表情を浮かべていた。

「ははっ！ お前達も憐れだな！ この神殺しがその拳を振り抜いていれば終わっていた話なのに」

「っ!？」

その悪意の言葉で思い出した。

響は拳を握りしめ続けるをよしとしない子だ。

もしかしたら、悪意に対しても最後まで拳を握るのではなく何とか手を繋げないかと考えてもおかしくない。

例えその可能性がゼロだとしても、やってみなけりや分からないと。

「……………なら」

きつと今も響は手を伸ばし続けているはずだ。

クリスに始まり、マリア、キャロル、サンジェルマン、シエム・ハと手を繋ごうとしてきた響なら。

「みんなっ！ ここは俺に任せてくれっ！」

「っ!？ 仁志先輩!？ 何を言ってるのさ!？」

「そうよ！ 依り代はもう使えないんでしょ!？」

「それでも、俺に任せてくれないか？ 響は俺に言ったんだ。最後まで自分を信じて欲しいと。俺はそれに応えたい」

そこで深呼吸をしてゆっくりと歩き出す。

そんな俺を翼達が不安げな表情を見つめる。

でも、止めようとはしない。それが嬉しかった。

「兄様……」

「ヒトシ、気を付けろ」

「心配いらないよエル。ヴェイグ、ありがとな」

エルとヴェイグに見送られて俺は悪意へと向かっていく。

「ししょー……」

「師匠、危なくなったらすぐに助けるから」

「ああ、頼りにしてるよ調。切歌、大丈夫だから笑ってくれ」

切歌と調の頭をそつと撫でて通り過ぎる。

「お兄ちゃん、信じてるから」

「そういうところ、似てるわ、あの子と」

「響は自然で俺は意図的だけどな。でも、二人の信頼には応えてみせる」

イヴ姉妹へ笑みを返して歩き続ける。

「仁志さん、ご武運を」

「怪我、すんじやないよ」

「分かってる。きつと二人の想いが俺を守ってくれるさ」

ツヴァイウイングに少しキザな事を言っつて歩を進める。

「只野さん、響をお願いします」

「絶対、無事に戻ってこいよ」

「引き受けた。必ず笑顔でみんなと帰るよ」

未来とクリスにサムズアップを見せて俺は遂に悪意と対峙する。

「あの端末の使えぬお前が、一体どうすると言うんだ？」

「よく言うよ。俺が何をするかを一番分かっているのはそっちのくせに」

そう即答してやると悪意が明らかに嫌そうな顔をした。

「ここで俺を攻撃しないのは、きつと響が抗っているからだ。」

いつかの翼と同じだ。まだ染め上げて間もないから響の強く嫌がる事は出来ないだろう。

無抵抗で何の防備もない相手を攻撃する。そんな事が平気な響じゃないから。

「それで私をどうにか出来ると思っっているのか？」

「逆に聞くが、出来ないとすればどうしてお前は奏の時とクリスの時、これまでのようにイーヴィルギア状態で現れなかったんだ？」

「必要が」

「ない、なんて言わせないぞ。クリスが奏の分身のようなお前を出した以上、奏の時はお前の分身はそう出来なくなってたんだ」

「何を根拠にそんな事を」

「お前が俺の中へ入り込んできた方法だよ。そもそもあのプールでマリアが狙った事はキスだ。そしてあの別れだと思つた日にクリスがしてきたのもキス。なら、どうして俺が響達とキスした時にはギアが追加されたんだ？ それが答えだ。俺がみんなへキスした時はお前を倒していたんだ。だからお前はあの日俺がセレナ以外にキスすると読んで、最後の未来へする時に僅かに抵抗して俺の記憶を覗いた」

そこで悪意が表情を歪めた。

「どうやら予想は間違っていないらしい。ならここからだ。」

「響が俺を信じてくれてお前へ体を委ねたのは何故か。それは、力ではお前を本当の意味で倒す事が出来ないと思いついたからだ。故に自分の体へお前を取り込んで閉じ込めた。お前、一度誰かの中へ入ると自由に出たり入ったり出来ないんじゃないか？ もしそうじゃないなら、俺がキスする前にされてない相手から抜け出していたはずだ」

「っ」

悪意が唇を噛むのが見えた。やはりそういう事らしい。

そう、今まで気付かなかったけど、悪意が自由にみんなの体へ出入り入ったり出来るのならもつと厄介なことになっていたはずなんだ。

響とエルにヴェイグが逃げてきたのは悪意がクリス達に宿っていると依り代が教えたからだだった。

もし出入りが自由自在に出来るのなら、あそこで悪意はクリス達から抜け出して依り代を誤魔化したはずだ。

「クリスからお前は自主的に出て来たが、あれは依り代と欠片の力でお前とクリスの結びつきが弱まったから何とか逃げ出せたんだ。そうしなければ奏の時と同じでキスされてしまうと思ってるな」

「よくもまあベラベラとよく喋る。いつまでも私が何もしいと思つたら大間違いだ」

「いや間違いじゃない。響は俺に言った。最後まで信じて欲しいと。今も響は戦っているんだ。その証拠にお前のギアはイーヴィルギアまでは変化していない。インナーも際どいものじゃない。お前が翼を染め上げた時の事を俺はよく覚えてる。翼は俺を攻撃する事を嫌がつてお前の支配に抗つた。なら、最初からお前に体を委ねても心まではそのつもりがない響を完全に支配出来るはずがないっ！」

一歩足を踏み出す。その瞬間悪意が僅かに、だけど確かに後ずさつた。

「か、勝手な事を……」

「だったらっ！　今ここで俺を攻撃してみるといいっ！　もう俺を利用する必要も価値もないだろう！　……むしろ今やお前を完全に倒せる唯一の存在だ。生かしておくよりも始末する方がお前は気が楽になるだろう？　さあ！　やってみせろっ！」

一歩一歩足を踏み出して悪意へと迫る。

その度に悪意が後ずさつていく。その表情を悔しさに歪めて、じりじりと下がっていく。

「どうした？　もう依り代も使えない俺に何を怯える必要がある？

ギアを纏った状態なら鍛えてもいない俺なんて物の数じゃないだろう」

「くっ……っ、こんな虫けら一匹が……っ」

拳を握るも、それが振り上げられる事はない。そしてその手が震えている。

響が戦ってくれている証拠だ。拳を握りたくないと叫んでいるんだ。

「虫けらだって生きてるんだっ！ 生きてるって事はなあ、その身に無限の可能性を秘めてるんだよっ！」

そうだ、俺だってそうだった。

響と出会う前まで俺はただのしがない深夜のコンビニバイトだった。

それがみんなと出会い、人生が、日々が変わり出した。こんなもんだと思っていた俺が、腐らず、懸命にもがき足掻いて気付けば店長だ。

こんな事、ほんの一年前は考えもしなかったし思いもしなかった。

自分が変われば世界が変わる。人から見れば取るに足らない変化でも、俺にとっては奇跡と呼べる程の出来事だ。

「諦めない気持ちが可能に変える。信じる勇気が魔法に変わる。そうさ、一つの命は地球の、宇宙の未来だ。誰だって光になれる。俺は、それをヒーロー達から、そしてみんなに改めて教えてもらった。英雄はなろうとした時点で失格だが、ヒーローはなろうと思った時がスタートだ。俺はまだまだヒーロー見習いだけど、それでもこうしてみんなを助け、ここまでこれた」

俺は後ろを振り返る。そこには俺が守りたいと思った人達がいた。全員が俺を見つめて笑みを浮かべてくれている。信頼の笑顔だと、思う。

それに俺も笑みを返して頷くと顔を前へ戻す。

「だから、最後まで俺は俺の光を走り切る。響を、返してもらおうぞ」

そう告げて俺は悪意の腕を掴む。

「は、離せっ！」

抵抗する悪意だが、その力は信じられないぐらい弱い。

響の抵抗が思った以上に強いのだろう。ならと俺は響の体を強引に引き寄せる。

「くっ！ ま、まさかここまでとは……っ」

俺の腕の中で弱々しく動く悪意は、どこか平行世界のグレ響を彷彿とさせた。

きっと彼女はこんな事になる前に俺を殴り飛ばしそうだけど。

「お前は忘れてるみたいだから教えてやる。立花響はどんな時でもど

こかで繋ぐ手を握り締める事へ疑問を持ち続けられる強い人だ。その心の強さを見誤ったのがお前の最大の敗因だ」

心の底から思っている事を言っただけは響の唇へ自分のそれを重ねた。

心からの感謝と想いを込めてキスをした。

奏の時と同様か、それ以上の時間していたと思う。

俺がゆっくりと顔を離すとそこには本来の姿へ戻った響の真っ赤な顔があった。

「響……」

「えっと……その……私を信じてくれて、本当に……ありがとうございます
いました」

まるでプシューと聞こえてきそうな感じで顔を俯ける響を愛おしく想いながら、俺はそつと彼女の体から腕を離した。

「で、でも、これで全部終わったんですね」

照れ隠しなのかそう告げる響。

だけど俺はそれに対して頷く事はせず後ろを振り返った。

「仁志っっ！」

真っ先にこっちへ駆け寄ってくるクリスを受け止め、俺はそのままキスをした。

「っ!？」

それにクリスは目を見開いた。

しかも俺を突き飛ばそうとしてきたので、そうはさせないと強く抱き締めた。

「ひ、仁志さん？」

「だ、大胆……」

「クリス先輩、また抜け駆けデス！」

「ホント。こういう時のクリス先輩、凄い」

「でも、今回はキスをしたのは仁志からよ」

「う、うん。お兄ちゃんからしてたね」

「……まさかっ!？」

「ど、どうしたのさ翼？」

周囲の声を聞きながら俺はクリスマスへの謝罪と感謝と、そしてありつたけの気持ちを込めてキスをした。

いつかのクリスのように舌を絡めはしなかったけど、その分時間をかけて想いを伝えるように。

——な、何故だっ！ 何故私の最後の計画を読んでいた!?

聞こえてくる声に対して俺は敢えて答えなかった。

今はそんな事よりもクリスの心を少しでも癒したかったからだ。

悪意のせいで望まぬ相手とキスをしていたと知ったクリス。

その心を可能な限り包んでやりたいと。

——ば、馬鹿な……っ。こんな事が、こんな事が……っ！

悲しそうな声に俺はふと思った。

悪意も考えてみれば被害者だったなど。

人間の負の念の集合体がお前なら、お前も人間のエゴによる被害者だ。

だから、せめて綺麗な光となってくれ。

——光、だと……？ 馬鹿な事を……。

返ってきた声に俺は一瞬意識が遠くなった気がして、気付いたら真っ暗な空間にいた。

そこには俺以外何も見えない。全てが闇、漆黑だった。

だけど、俺はさつきまでの言葉を思い出して告げる。

「いや、なれるさ。お前も元々は誰かの心にいたものなら光になれる。

そうだ。セレナが言っていたんだよ。悪意と手を取り合いたいと。

あの時の俺は出来ないと言ったけど、今なら違う答えを出せる。お前

も光になればいい。闇から生まれても光を目指せば光になれるんだ」

——……無駄。どれだけの間「わたし」の中で「ワタシ」が蓄積

されたと思っっているの。フィーネの魂もベアトリーチェの魂も塗り潰したのよ？

返ってきた声に俺は首を横に振る。

「だからこそじゃないか。あの二人の魂がお前の中に溶け合っているのなら、お前も光になれるさ。諦めるな。信じ抜けば、もがき足掻けば、希望を持ち続ければ、奇跡は起こせるんだ」

——……………闇でも光に、か。

心なしか漆黒が少しだけ淡くなつた気がした。闇が、薄れた気がした。

「ああ、そうさ。お前も見ただろう？ ウルトラマンティガも、ダークカブトも、仮面ライダーディケイドも、それだけじゃない多くの闇だった存在が光に、ヒーローになれた事を」

——……………どうして貴様は私へそんな事を言う？ 私を許すのか？

声が純粹に疑問を抱いたようなものへ変わった。

だからだろうか。俺はエルへ接するような声を意識した。

何となく今の悪意は小さな子供のように思えたから。

「許すわけじゃない。だけど、恨む事も憎む事もしたくないんだ。すれば、俺はお前を余計闇に変えてしまう。俺は立派な人間じゃないけど、それでも最低になりたいとは思わない。悪意を抱かないで生きるのは無理だけど、悪意を抱き続けないで生きる事は出来るはずだ。俺は、そうでありたい。憎しみや恨みを持ち続ける事ない人生を歩んで行きたい」

——悪意を抱き続けなくて、か……………。

「無理だと思うか？」

——……………どう、だろうな。貴様達ならあるいは出来るかもしれない。

「ならいつそ見守ってみるか？」

——何？

俺の頭の中にはシエム・ハの事が浮かんでいた。

彼女も最終的には響と未来に人の可能性を感じて見守る事を決めた。

悪意も、いやベアトリーチェだったものも人の中でもう一度世界を見てみればいいと思つた。

「俺の中でこの世界を、ギアやら錬金術なんかもない世界を見て、それでも人間が闇を生み出すだけの存在か。それを見てみるといい。その中でお前が力を取り戻していけるのなら、その時はまた好きに動けばいいよ」

——いいのか？ 今度こそ全てを滅ぼしてしまうぞ？

「やれるものならどうぞ。ただし、俺達人間は抵抗させてもらう。何
度も何度でも立ち向かって阻止してみせるさ」

今回のように。

例え悪意が何度力を取り戻し、何度強大になろうとも。

——……………私を倒さないの？

「和解というか共存出来るのならそうしたいと思う子が最低でも二人
はいるからね。それに知ってるかもしれないけど、ヒーローの中には
戦っていた相手と最後は手を取り合って平和を掴んだ存在もいる。
なら、今回もそう出来ればいいかなと思う」

憎む事も恨む事もしたくない。そんな事はもうこりごりだ。

可能ならいつも笑っていたい。みんなに笑顔でいて欲しいのは俺
だって一緒なんだ。

——ふふっ……………あはははっ……………あはははははっ！ 本当に信じられな
いわ。ここまで本気でバカげた事を言い切れる人間がいるなんて！

「意外と思うよ。まあ悲しいかな多くないのは認めるけど」

急に悪意の雰囲気が変わった。最初の頃はやはりドロドロした感
じだったのが、今はどこか無邪気な感じだ。

もしかして、これってベアトリーチェ、なんだろうか？ だとすれ
ば最初の方は世界蛇の巫女？

しばらく薄れてきた闇の中に楽しげな少女の笑い声みたいなもの
が響く。

それはまるで今まで押し込めていた何かを吐き出すかのように続
いた。

——あつ、不味いかも。

どれぐらい笑い声を聞いていただろうか。

急に可愛らしい声がそんな事を言い出した。

——うん、やっぱりだわ。 “わたし” と “ワタシ” が分離しそう。

「はっっ。」

どういう意味だ？

——えっと、簡単に言うならわたしは貴方の中で世界や人間を見て
みようと思うんだけど、ワタシは復讐を果たす事しか考えられないみ

たい。

それはつまりどういう事？

——悪意って貴方達が呼んでたものはその純度を高めて、更に今まで他事に使ってた力を自分の強化に使って外へ出ようとしている。

「なっ!？」

とんでもない事じゃないか！ 今まで「戦姫絶唱シンフォギア」を消そうとしていた力を自分の体内へ戻すって事だろ!？」

——悪いけどわたしは何も出来ないから。あつ、最後に一つだけ。

「……何だい?」

今慌てても仕方ないと思っただけ落ち着いた声をかける。
すると可愛らしい声が小さく笑った。

——ある意味こうして私が「わたし」を取り戻せたのは貴方達のおかげだから。それだけは感謝するわね。じゃあ幸運を祈るわ、ヒーロー見習いさん。

そこで周囲が一瞬だけ真っ白に光輝き、俺の目の前にクリスの顔が現れたのだった……。

仁志がクリスとのキスを終えて離れた瞬間、彼の持っている依り代が微かに光り、それと同時に漆黒の何かが二人の体から出て行った。

「な、何が起きた?」

「仁志とクリスから悪意が出ていったように見えたけどどういう事よ?」

動揺する翼とマリアだが、声には出さないだけで響達もそれは同様であった。

仁志へクリスが駆け寄ったかと思うと、仁志が突然クリスへキスしたのだから。

その行動が悪意が以前やった行動に近いと思っ出して響達は固唾を飲んで見守っていたのだが、そんな最中に悪意が二人の体から出てくるといふ事態に陥ったのだ。

「あれは……世界蛇のコアを吸収したベアトリーチェじゃないかっ!」

奏の声に響達全員が息を呑んだ。

悪意が最後に取った姿は、あの世界蛇との決戦で追い詰められたベアトリーチェが至ったおぞましいものだった。

「みんな気を付けろっ！ あいつの匂いは嫌な匂いじゃない！ 吐きそうな匂いだっ！」

ヴェイグの言葉が意味する事に誰もが気付く。

それはこの悪意は今までと大きく異なるのだらうという事だ。

そしてそんな中で仁志はクリスからゆっくりと離れて悪意へと顔を向けた。

「あれが……そういう事なのか」

深層意識の中での会話を思い出して、仁志は今見ているものこそが真正正銘純度100%の悪意だと確信した。

「仁志……」

聞こえた声に仁志は顔を動かすと、そこには潤んだ瞳で自分を見上げるクリスの姿があった。

「クリス、その、大丈夫か？」

「……ああ。えっと、伝わったから、さ。仁志の気持ちも、その想いも」

照れくさそうに、けれど嬉しそうに噛み締めるようにそう告げてクリスはそつと胸を押さえた。それを見た仁志も微笑みを浮かべて小さく頷く。

「仁志さんっ！ えっと、だ、大丈夫ですか？」

「響……ああ、大丈夫だよ。悪意の中にいたベアトリーチェを助け出す事も出来たらしい」

「えっ!? ベルちゃん!?!」

「詳しい話は後だ。今は……」

静かに仁志は顔を悪意へと向ける。

未だ悪意は身動きせずその場に佇んでいた。

「あいつをどうするかを考えないと」

「仁志、どうするも何も既に依り代は使えないのでしょ？ 響はツインドライブにはなれないし私達も現状のまま。それなのに……」

「相手は今ままで一番ヤバそうな感じっていうね。ホント、ああして

るのがかえって不気味だよ……」

嫌そうに表情を歪める奏。

見た目のせいで否応なくあの決戦の事を思い出すためだ。

響がミヨルニルを制御する事で何とか逆転出来た、あの戦いを。

「それでもやるしかないデスよ」

「うん、ここまでできたら目指すのは勝利だけ」

「そうです。諦めない気持ちが可能にするんですから！」

年少組三人の目はまだ輝きを失っていないかった。

仁志の趣味であるヒーロー物に一番感化されたのが、エルフナインを始めとするあの平屋の四人であったのだ。

「そう、だな。ここまで来て諦める事なんか出来ない。最後の最後まで戦い抜くのみっ！」

「だな。例え依り代が使えないからなんだってんだ。今回の事が起きる前はそれが普通だったんだ。その頃に戻ったと思えばいいだけだぜ」

共に先輩として響達へ指示を出したりしてきた翼とクリス。

その表情を揃って凜々しくし、手にしたアームドギアへ力を込める。

心を折る事が一番不味いと分かっているからだ。

故に心を強くもってみせている切歌達に負けじと凜とした姿を見せた。

「ぼ、僕も戦います！ 例え錬金術は使えなくても、出来る事を精一杯やりますからっ！」

「ああっ！ 俺達もセレナ達と一緒に戦うぞっ！」

「うん、みんなで戦えばきつと勝てるよ」

エルフナインとヴェイグの言葉に笑みを返して未来は頷く。

彼らは本来であれば装者達を見守る事しか出来なかった。

だが、その身に力を宿され、それを強い心で振るえる様になったのだ。

だからこそ今更戦いから逃げる事も退く事もしないで最後まで戦うのだと、そう決意を示したのだ。

「仁志さん、最後まで一緒に戦ってくださいますか？」

そう問いかける響の表情は優しい笑顔だった。

仁志が返す言葉を一瞬忘れる程の、綺麗な微笑みだった。

「……ああ、勿論」

「ありがとうございます。じゃあ、行ってきますっ！」

「気を付けて」

弾かれるように響が、翼が、クリスが、マリアが、切歌が、調が、奏が、セレナが、未来が仁志の前から走り出す。

その背を見つめ、仁志は依り代を握り締めた。

（みんな、死ぬなよ……）

祈るような眼差しを送る仁志。

その視線の先では、響達の接近を感じ取ったのか悪意が体の向きを変えようとしていた。

悪意の周囲に溢れる瘴気はこれまでにない程濃く、通常ギアである響はそれに近付くだけで拒絶反応の如く痛みが走った。

ツインドライブである他の八人でさえも弱くではあるが疲労感を覚える程の瘴気だ。

自然響だけが足を止めてしまうのも無理もないと言えた。

（どうしよう……。何となく無理矢理進んだら大変な事になる気がする……）

本能が危険を察知し足を止める。更にこれまでの経験からもこれは無理をすれば不味いと警報を鳴らしていたのだ。

そんな響の視線の先では瘴気に苦しめられながらも戦おうとする翼達の姿があった。

「はあっ！」

大上段からの剣による一撃。それを悪意は回避するどころか防ぐ事さえせず、平然とその場で立ち尽くす

「なっ!？」

悪意へその一撃が当たる瞬間、瘴気がアームドギアを包むように動き、腐食したかのように溶かしたのだ。

不味いと察して翼は即座に刃を引いて悪意から距離を取る。

それと入れ替わりに攻めようとしていた切歌と調へ注意を呼びかけながら。

「奴へアームドギアを接近させるなっ！ 溶かされるっ！」

「っ！」

「ならこいつはどうだっ！」

「神獣鏡ならっ！」

慌てて攻撃を中止し後方へ下がる切歌と調。

それを援護するような形でクリスと未来が射撃を行う。

叩き込まれる弾丸と閃光。それさえも今の悪意は周囲の瘴気で無力化してしまうのだ。

「……マジかよ」

「そんな……」

「それならレゾナンスでっ！」

「包み込んでみせるっ！」

イヴ姉妹の放った花の形をしたバリアが悪意を包む。

その次の瞬間、バリアは音もなく消滅した。

悪意の放つ瘴気に逆に包まれる形となったのだ。

「嘘、でしょ……」

「このギアでもダメなんて……」

「くそっ、どうすりやいいんだ！ 直接攻撃もダメ、間接攻撃もダメ。おまけにこの瘴気に触れてるだけでダメージを受けてるようなもんだ」

「突破口が見つからない……」

「こうなったら絶唱デスっ！ 九人での絶唱なら何とかかなるはずデスっ！」

切歌の言葉に誰もが苦い顔をした。

現状考えられる限り最大の攻撃である九人での絶唱。

だが、それは裏を返せばそれが通用しなかった場合完全に打つ手なしとなる事を意味する。

「どうするのさ、翼、マリア。あたしは切歌の意見に賛成するよ」

そんな中で奏は即断した。どうせ出来る事が他にないのなら、疲労

が強くなる前に絶唱を使うべきだと思ったのである。

「……分かった。私も暁の提案に乗ろう」

「そう、ね。現状出来る最後の切り札を切りましょう」

年長組三人の意見がまとまれば残りの者達の意見が割れるはずもなく、全員瘴気の範囲外へ出て響を中心に手を繋ぎ合った。

「九人での絶唱の負荷は想像以上よ。それでもいい？」

「はい。それしかないならやるしかないですから」

マリアの確認に響は笑みさえ浮かべてそう返した。

そこに、あるヒーローらしさを感じ取り、マリアは一瞬呆気に取りれてすぐに苦笑した。

「九人による絶唱のフォニックゲインを一つに束ねて二つのアガートラームで再配分する。セレナ、いいわね？」

「うんっ！」

「よし、やるぞっ！」

未だにその場から歩き出す事さえしない悪意に底知れぬ不安を覚えながらも響達は絶唱を使う。

重なり合う九つの声。それがまったく同じメロディーを唄う。

その悲しくも美しい歌を聞きながら仁志達は固唾を飲んで九人の装者を見守っていた。

そしてその時は来る。解き放たれた絶唱による膨大なフォニックゲイン。

それを響が一つに束ねてマリアとセレナが九人へ再配分する。

凄まじいフォニックゲインを浴びて九人のギアが変化を起こす。

単体でなれるギアの最強形態と思われるエクストライブだ。

更に彼女達のそれはバーニングエクストライブと呼ばれる最上位の姿であった。

「これならっ！」

これまで強敵を相手に立ち向かい、必ず勝利を掴み取って来た形態。

その上に当たるバーニングエクストライブの力強さに響達は表情も凛々しく悪意へと向かっていく。

瘴気を物ともせず突破し、響がその拳を悪意へと突き当てようと迫る。

「うおおおおっ!」

それを見ても悪意は何もしようとはしない。
ただ無防備なままその身を晒すだけである。

遂に響の拳が悪意へと直撃した。

だが……

「あああああっ!?!」

何故か攻撃を当てた響の方が苦しみ出したのだ。

悪意は何もしていない。ただその場で響の拳を体に受け止めているだけだった。

「立花っ!?!」

「響さんに何したデスカっ!」

響を助けようと切歌が手にした大鎌を振るい、悪意へと突き当てる。

それさえ悪意は何の反応も見せず佇むのみ。

すると……

「あああああっ!?!」

切歌にも響と同じ現状が起きたのである。

まるで恐怖に怯えるかのような表情で苦しみ出し、まったくその場から動けなくなったのだ。

「切ちゃんっ!?!」

「響っ!」

「一体どうなってんだ!?! 今回はアームドギアが溶かされてないつてのにつ!」

慌てて切歌へと駆け寄る調と未来。

それを見て奏は理解出来ないとばかりに叫ぶ。

だが、マリアはそこに疑問を抱いた。

(アームドギアが溶けたのも遠距離攻撃が瘴気によって無力化されたのも、揃って今のようになる前、つまりツインドライブ状態だった。エクストライブとなった今はアームドギアが溶かされる事はないの

に、何故か響も切歌も攻撃しただけで苦しんでいる……?」

何か嫌な予感がする。そう思ったマリアはクリスへと顔を向けた。

「クリス、あいつへ攻撃して」

「は? 言われねーでもそのつもりだけど一体どうした?」

「もしそれが瘴気で無力化されない場合、状況は悪化したとなるのよ」

「……そう言う事か。分かった。もしもの時は頼む」

「ええ。ありがとう」

マリアが漠然と抱いた不安をクリスはそれだけのやり取りで理解した。

響を未来が、切歌を調がそれぞれ悪意から引き離したのを確認し、クリスは大声で叫んだ。

「全員一旦下がれっ! 10秒後に最大火力を叩き込むっ!」

その宣言からきつちり10秒でクリスのギアからありったけの弾丸や光線、ミサイルなどが放たれた。

瘴気の中を貫く様にそれらは一斉に悪意へと殺到する中、マリアとクリスは目を凝らしてその着弾を見守った。

「っ!」

そして同時に確認したのだ。

クリスの攻撃は全て悪意へと着弾した事を。

瘴気による防御は行われなかった。全てを悪意はその身で受け止めたのだった。

「これは……不味い事になったわ」

「マリア、一体何が不味いのだ? たしかに立花と暁の事は不可解ではあるが、攻撃は可能に」

「それが不味いのよ。翼、ツインドライブの時、アームドギアが溶けたと言ったわね。それはどうして?」

「瘴気がアームドギアへまとわりつくかのように動いたためだ」

「なら、その後のクリスと未来の攻撃はどうなったかを覚えてる?」

「……瘴気によって無力化されたな」

「気付かない?」

その一言だけで翼は息を呑んだ。

「エクストライブとなつてからは瘴気で防ぐ事をしていない!？」

「そういう事。おそろくだけど、あの悪意はツインドライブでないとダメージを受けないんじゃないかしら」

悔しげにそう告げてマリアは唇を噛んだ。

何故悪意が絶唱を邪魔しなかつたかを察したためだ。

(悪意は私達がツインドライブでなくなる事を望んでいたんだわ。しかもこちらの最後の頼みであるエクストライブを無力化する事でこの上ない絶望感を与えられると思った)

これまで逆転勝利の代名詞であつたエクストライブ。

それを正面から打ち破る事は自分達の心を折るには十分過ぎる威力を持つている。

マリアはそう考え、怒りと悔しさを握り締めるようにアームドギアへ力を込めた。

「皆さんっ！ 大変ですっ！ 響さんと切歌さんがっ！」

そこへ聞こえるセレナの悲痛な声に誰もが意識をそちらへ向けた。するとそこにはギアが解除された響と切歌が倒れていたのだ。

「これは……」

「響っ！ 響しっかりしてっ！」

「切ちゃんっ！ 目を覚まして切ちゃんっ！」

「一体何があつたの!？」

「分からないの！ 響さんと切歌さんが苦しまなくなつたと思つたら急にギアが……」

「エクストライブを解除させたというのか……」

「嘘だろ……。こいつでさえ太刀打ち出来ないって言うのかよ……」

漂い始める絶望感。攻撃が通用しないだけでなくエクストライブを解除させられてしまう。

その事が持つ意味は重い。何せまだ悪意は何もしていないに等しいのだ。

ただその場で立ち尽くすのみであり、攻撃らしきものは何一つとして行っていない。

もし、ここから悪意による攻撃が始まったら。そう思えば恐怖しか

ないと言えた。

「っ!? 悪意が動くぞっ!」

「「「「っ!?」」」」

クリスの切羽詰まった声で気を失っている二人を除いた六人が振り向く。

悪意はゆつくりとその場から装者達の方へ歩き出そうとしていた。一歩一歩着実に迫るそれは、さながら死刑執行のようでもあった。濃厚な死の匂いや憎悪や怨念のようなものを纏わりつかせながら動く悪意は、死神か冥王と呼んでも構わない程の威圧感と存在感を放っていた。

そのあまりの迫力にセレナや調、未来は足が竦み、マリア達年長組さえもその場から逃げ出したい気持ち湧き起こる程である。

それは、生物としての本能による危険察知であった。

あれには勝てない。相手しては駄目だ。そういう生命としての根源からの警告だった。

だからだろう。普段であれば何か指示を出すはずの翼もマリアも、奏やクリスさえも判断が遅れた。

退却するべきか応戦するべきか。逃げるのならどこへ逃げるか。戦うのならどうやって。

様々な事が頭を駆け巡るも冷静な判断が出来ない状況では答えは出せない。

そうなれば当然こんな緊迫した時にそれがどういう事に繋がるかは考えるまでもなかった。

「応戦するぞ（逃げましょう）っ!」

翼とマリアの声が重なるも、それは正反対の意見だった。

装者達の中で指揮系統を一本化していかない事がここにきて裏目に出た瞬間だった。

「逃げると言うがどこへ逃げる!? 立花と暁は気を失っている上依り代が力を失った今、仁志さん達がゲートを安全に渡れる保証はないっ!」

「じゃあどうやってあいつと戦うの!? 直接攻撃すれば二人の二の舞

よ！ 間接攻撃だつて効果はなかった！」

「しかしっ！」

「落ち着けっ！」

「っ!?」

奏の怒声が翼とマリアの口を閉じさせた。

更に彼女は怒気を漂わせたまま言葉を続ける。

「ここで討論してる時間はないよ。抗戦か退却か。まずはそれだけを決めないと全滅だ」

「ならあたしは抗戦を選ばせ。逃げたつて状況は変わらねーし良くなるとも思えねえ」

「そう……。セレナ達はどうかだい？」

クリスの意見に小さく頷き、奏は何も言えないままの三人へ話を振った。

「わ、私は逃げたい……です」

「ん……分かった。未来と調は？」

「私は……戦います。ううん、守ります」

「私もです。それに、切ちゃんをこんな目に遭わせたお返しはしたい」

「翼、マリア、二人の意見は変わらないかい？」

その問いかけに二人は静かに頷いた。

「よし、なら撤退する奴は素早く撤退。戦う奴は徹底抗戦といこうか。有効な攻撃法なんて分からないけど、下手な鉄砲数撃ちや当たるつて言うし」

何を気楽な事を、とそう思ったマリアだったが、奏が掻いている汗の量を見てその言葉を言うのを止めた。

尋常ではない量の汗だったのだ。そこから奏も恐怖と戦っているのだと察したのである。

それでも周囲にそれを感じ取らせないように可能な限り平静さを装った奏に、マリアも年長としてあるべき姿を見て自分の心を落ち着ける。

「ね、姉さん……」

「セレナ、やっぱり私も戦う事にするわ。貴方はエル達と一緒にここ

を離れなさい。依り代を充電出来れば状況を変える事が出来るかもしれない」

一緒に逃げようと言おうとしていたセレナへ、マリアは優しくそう告げてアームドギアを構えた。

それはセレナを突き放すのではなく、彼女の選択もまた意味がある事だと言う後押しであった。

しかし、セレナはその言葉を聞いて何かを思い出したかのような顔をした。

(そうだ……。エルが、ヴェイグさんが、お兄ちゃんがいるんだ。私の背中には、守りたい人達がいる……)

まだ足は震えているし怖いと思う気持ちは消えていない。

けれど、セレナの目はただ怯える事を脱していた。

あの上位世界での日々が彼女に培った強さが戻ってきたのである。

「私も、私も戦うっ!」

「セレナ……」

「エルを、ヴェイグさんを、お兄ちゃんを守るためにっ!」

「……ええっ!」

「いよしっ! 全員の気持ちが揃ったところでやるよっ!」

「奏さんっ! 私、唄いますっ! もしかしたらそれで悪意が少し弱るかもしれないですからっ!」

「分かった! 頼むよセレナっ!」

セレナの歌が流れ始める中、奏達は間接攻撃のみで悪意との戦闘を開始する。

それを見つめ、仁志は無力さを噛み締め続けていた。

(くそっ! 依り代が使えないと何も出来ないのは分かってたけど、ここまで自分が情けないと思ったのは初めてだっ!)

バーニングエクストライブの強さを知っている仁志としては、それを攻撃せず無力化させた悪意には恐怖しか感じない。

だがそれでも心ぐらひは響達と一緒に戦うと決めた事を思い出して、一度として逃げ出す事も目を逸らす事もなくその場に留まっていた。

「兄様、このままでは皆さんが……」

「分かってる。だけど、あれ以上の強さを持ったギアは存在しないだ」

「じゃあ、あの悪意を止められるギアは……」

「……現状ない、と思う。だけどだからって絶対無敵な存在なんていないんだ。どこかに、どこかに弱点や欠点があるはずだ。それを見つけて出すしかない」

今まで見てきた幾多もの作品で描かれてきた展開。それだけが仁志の心を支えていた。

諦めない限り必ず最後に希望は輝く。奇跡は起きるものではなく起こすもの。

そんな言葉を胸に、仁志は折れそうになる心を必死に奮い立たせる。

「エル！ もしもの時はパズルの中に隔離するぞっ！」

「わ、分かりました！」

そんな事が可能なのかとエルフナインはヴェイグへ問いかけなかった。

ヴェイグもそんな事が可能だとは言わなかった。

二人共理解していたのだ。可能かどうかではなく、いざとなればそれをやるしかない事を。

悲壮な雰囲気を漂わせる仁志達の視線の先では、奏達の辛く苦しい戦いが展開されていた。

「翼っ！」

「うんっ！」

「マリアっ！」

「ええっ！」

「……これならどうだっ!!」

ドライディーヴァによる同時攻撃。その三色の光が炎を纏って悪意へと殺到する。

だが、悪意はそれさえも何事もないように歩き続けて無力化してしまった。

「いくぞっ！ 息を合わせろっ！」

「うんっ！」

「はいっ！」

「「いけえええっ!!」」

クリスの攻撃に合わせて未来と調も悪意へ攻撃する。

押し寄せる回転刃や閃光、ミサイルに光線などを物ともせず、悪意は悠然と歩き続ける。

セレナの歌により多少威圧感による疲労などが軽減してはいたが、それもスズメの涙程の効果しかない。

悪意との距離が縮まる度に奏達の汗は流れる量を増し、その身を苛む疲労は強くなる一方だったのだ。

そんな中でも装者達は諦めず戦い続ける。

ジリジリと追い詰められるように悪意が接近する中、懸命に有効打を与えられないかを探り続けた。

「っ!? 止まった?」

もうこれ以上は下がれないという位置まで来た辺りで悪意の歩みが止まった。

「な、何をするつもりデスカ……」

「分からない。でも、嫌な感じはするよ……」

気を失っていた響と切歌もセレナの歌のおかげで何とか立ち上がる事は出来ていたが、ギアを展開しても通常ギアでは悪意と戦う事は危険と判断されたため、仁志達を護衛する事しか出来ない状態となっていた。

「っ!? 匂いが強くなっっていくぞっ！」

「ヴェイグさんっ！ パズルをつ！」

「よしっ！」

エルフナインの言葉でヴェイグが彼女の中へと消える。

それを合図にエルフナインは両手を前へ突き出すようにし叫ぶ。

「ミレニウムパズル展開っ！」

——ミレニウムパズル展開っ！

一瞬にして悪意の姿が仁志達の前から消える。

その瞬間、空気が少しだけ軽くなったように思っただけでエルフナイン以外が息を吐いた。

「エル、大丈夫なのか？」

「いい、今のところは大丈夫です……っ」

——な、何て負荷だ……っ！ 世界蛇どころの騒ぎじゃないぞお……っ！

じつとりと脂汗を滲ませて答えるエルフナインに仁志は思わず息を呑んだ。

ファウストローブを展開している今のエルフナインは、悪意と強く結びついた奏相手でさえ汗一つ掻かずにミレニウムパズルを維持してみせた。

そんな彼女が展開して隔離しただけで脂汗を滲ませる。それが意味する事を察したのである。

「エル、」

せめて心だけでも寄り添おうと、そう思っただけで仁志が声をかけようとした瞬間だった。

エルフナインの体からファウストローブが弾き飛ばされて、ヴェイグさえもその体から弾き出されたのは。

誰もが、声を失っていた。

エルフナインとヴェイグを辛うじて仁志が抱き止めるようにして受け止める光景を、誰もがスローモーションのように感じていた。

そんな彼らへ津波かと思間遠える程の瘴気が押し寄せたのは仁志が二人を受け止めて倒れた直後だった。

誰も声さえ出せず意識を手放すと同時にギアを失っていき、その場で倒れていく。

圧倒的な死の気配を漂わせ、悪意だけがその場で立ち尽くしていた。

「……終わったか」

初めて悪意が発した声は、これまでとは違うものだった。

これまででは女性的な声色だったのが、まるで合成音声のように男女区別の出来ない声となっていたのだ。

それは悪意の中に溶けていたベアトリーチエの魂が抜けた故の變化。

そして、それ故に今の悪意はそれまでとは行動指針が異なっている。

“装者達に復讐を”から“この世全てに復讐を”となっていたのだ。

そのため、悪意は“戦姫絶唱シンフォギア”を消そうと使っていた力を自身へと戻していた。

アカシックレコードへ干渉していただだけの力をその身に宿した事で、今の悪意はバーニングエクストライブさえも寄せ付けられない強さを有していた。

「最初からこうしていれば良かったのだ。無駄に苦しめようと手心を加えるから長引く。恨み憎しみの募る相手の感情などどうでもいい。相手の苦しみも痛みも無駄だ。ただその命脈を絶ってしまえばそれでいい」

それはまるで自身へ言い聞かせているようにも思える独白だった。事実、これまで悪意を動かしてきたのは仁志が分離させた“わたし”と名乗る部分だったのだ。

悪意を長きに渡りその身に宿していたからこそ、その魂は塗り潰されても大きな影響を与え続けた。

その魂の光を仁志が解き放った事により、悪意は完全に混じり気なしの闇へと変わった。

もう仁志達が苦しむ事にも悩む事にも興味はなく、ただその命を奪う事のみしか興味などない存在へと。

「だが、我も学習というものをした。人間とは体があると命脈を絶つたとしても迷って甦る事があるらしい。故にその体も跡形なく消し去るとしよう」

仁志の記憶から知った幾多もの闇の敗北。

その中には勝利目前までいっぺいながら慢心や油断などで逆転を許す事が多々あったのだ。

悪意の両手へ集束していく漆黒の波動。

その場に漂う瘴気を全てそこへ凝縮しているのだ。

未だに誰一人として立ち上がる事も意識を取り戻す事もない仁志達へ、悪意は容赦なくその力を放つだろう。

「これでも十分だろうが、念には念をという言葉もあるらしい。何が起ころうとも防げぬ程までにこの力を高めてくれよう」

その言葉と同時にゆつくりと浮かび上がる悪意。

そのまま悪意は倒れている仁志達を見下ろせる高さまで上昇すると、しばしその場で滞空したかと思うや、両手に集まった凝縮された闇を呆気なく下へと落とす。

まるで線香花火の最後のように、これ以上は凝縮出来ないとなった瘴気が闇となって落下したのだ。

「これが復讐の始まりだ……」

悪意の勝利宣言と共に闇は仁志達へと迫る。

それは、悪意による全平行世界の破滅の狼煙になるだろうと、誰もが思うような光景だった……。

何だ……？ 俺は……どうなった？

たしかエルの体を何とか受け止めて、そのまま津波みたいに闇が迫ってきた事だけは覚えてるけど……。

ゆつくり目を開ければ、そこは光の中とでもいべき真っ白な空間だった。

「……は？」

で、何故か俺の目の前にはぼんやりとはあるが何かのラインが見えた。

半透明で水色、が一番近いんだろうか？ そんなような色合いの存在がいる事は分かる。

というか、俺、どこかでこれと似たような光景を見た事ある気がするんだけどなあ……。

「あの、もしかして依り代の力は貴方の力？」

こちらの問いかけに反応せず、半透明な存在はおそらく俺を見つめていた。

どうしたもんだらうと思っていると、不意に頭の中に声が聞こえた。

——一つにせよ。

一体何をと、そう思う間もなく半透明の存在は消えて周囲の空間も弾けるように消えていく。

その光に包まれながら俺は聞こえた言葉を反芻した。

一つにせよとは一体何の事を言ってるのか。

もし依り代の事だとしても別にバラバラにはなっていないぞ。

……っ!?! そういう事か?!

ある仮説が思い浮かんだ時には目の前に倒れている響の姿が見えた。

そして俺の腕の中にはエルとヴェイグがいる。まずは無事だった事を喜び、すぐに俺は周囲を確認する。

「いない……っ?」

悪意の姿がない事に疑問を覚えたが、今はそんな事よりも大事な事がある。

「一か八かだ……」

手の中に握り締めた依り代を見つめ、俺はエルとヴェイグの体をそつと地面へ下ろすと近くにいた響のギアペンダントへ依り代をくつつけてみた。

「どうだ?」

すると、響のギアペンダントから何か光のような物が依り代へとくつついたのだ。

「……やっぱそういう事なんだな」

一つにせよとは依り代の欠片の事らしい。

俺の世界での活動に当たり依り代なしじゃ身動きが取れないみんなのためにと、エルが依り代の四隅を砕いてその破片を響達のギアペンダントへ組み込んでいた。

要するに今まで依り代は不完全な状態だったんだ。

それを元々の姿へ戻すために欠片を全部回収しろとあの存在は伝えたかったんだろう。

こうして俺は何とか全員のギアペンダントへ依り代をくつつけて欠片を回収し終えた。

でも、何か起こる気配はない。

「バッテリーが残ってないからだろうか……」

ここにきてあまりにもな原因に俺は天を仰いだ。

「っ!？」

そこで見たのだ。こつちを見下ろすように浮かんでいる悪意の姿と、その両手にある巨大な闇の球のようなものを。

「不味いっ!」

とはいえ俺の力じや咄嗟に運び出せるのはエルとヴェイグが精々だ。

しかも、おそらく逃げ切る事は出来ない。

だけど見た感じみんなを起こして逃げられるだけの時間もない!

「っ!？」

そう思ってる間に悪意の両手から闇の光球が放たれた。

それはまるで黒い太陽のように俺達へ向かって落ちてくる。

「今の俺に出来る、最大限の事を……っ!」

その場に何とか立ち上がり、俺は落下してくる闇の光球を見上げる。

「少しでもみんなが助かる可能性を上げられるなら、やってみる価値はあるっ!」

両腕を広げて俺は出来る可能性のないだろう事をしようとしていた。

そう、落ちてくる闇の光球を受け止める。それが俺に今出来る最大の事だ。

受け止められるとは思っていないし、下手をすれば触った瞬間死ぬかもしれない。

それでも、もしかしたらがある。万に、いや億や兆に一つの奇跡が起こせるかもしれないんだ。

そう思っただけでも足が震える。歯が鳴る。体は竦んで心が弱る。

「っ! 闇が怖くてどうするっ! アイツが怖くてどうするっ!」

歌を唄った。今の俺にピッタリな歌を。

ゆつくりと近付いてくる闇へ負けるかとばかりに大きな声で。

音程も何もあつたもんじやないかもしれない。それでも、それでも今は歌の力を借りないと戦えないと思つた。

傷付く事を恐れたら世界は闇の魔の手に沈む。

俺は本物のヒーローじゃないけれど、そんな力はないけれど、それでも魂ぐらい、魂ぐらいは本物らしくありたいっ！

「男ならあつ！ 誰かのために強くなれっ！ 歯を食いしばって精一杯守り抜けっ！」

叫ぶ。弱気になりそうな自分へ喝を入れるために。

きつとみんなは俺のやろうとしてる事を知ったら止めてくれと言うだろう。

けど、命には賭け時つてもものがある。なら、俺は今がその時だ。

好きな人達を少しでも守れるのなら、例え自己満足に過ぎないとしても俺はこの身を捧げよう。

この命を差し出してみんなの夢を守る事は出来ないかもしれないけど、やってみなくちゃ分からないっ！

「ただそれだけっ！ 出来ればっ！ 英雄さあああああつ！」

目を見開いて俺は闇の光球を受け止める。

「があああああつ！」

悪意に巢食われていた頃に依り代使用で受けた痛みなど比べ物にならない激痛が走った。

声を出せるだけマシなのかもしれないがそれだけだ。

頭の中には呪詛のように同じ言葉が聞こえてくる。

——死ね。

体を襲う激痛と頭を襲う呪詛や怨念。正直耐え切れなと思った。体のあちこちから血が噴き出てきたし、全身が悲鳴を上げている。きつと、昔の俺ならとうに折れてた。諦めてた。

それでも俺はあの言葉を支えに辛うじてその場に踏ん張った。

「生きるのを諦めるなっ!!」

悪意に飲まれて、屈してなるものかつ！ 力で戦えないなら心で

戦ってみせるんだよっ！

俺の魂なんかすぐ塗り潰されるかもしれないけど少しでも抗ってやるんだっ！

「知ってるかっ！ 光は闇を消し去る事が出来るが闇は光を隠す事しか出来ないんだっ！ 何故ならっ！ 光は闇の中から生まれるからだっ！ これまでも！ そしてこれからもそれは変わらないっ！ 変わってたまるかあああっ！」

そう叫んだ瞬間、手にした依り代が輝いた。

直後、眩い光が闇を飲み込み、そのまま俺達までも飲み込んでいく。それはほんの一瞬の出来事だった。

気付いた時にはもう闇の光球は消えていて、俺はボロボロではあったけど五体満足なままでその場に立ち尽くしていたのだ。

と、そこへ久々の音が聞こえた。

もう聞こえないはずの通知音だ。

依り代の画面を見てみれば、そこには何故かゲーム画面が表示されていて、お知らせをタップすればたった一文だけ表示される。

——ステータスが更新されました。

よく分からないが、どうやら奇跡を起こす事に成功したらしい。

慌ててステータスをタップすると特に変化はない。

だが、そんなはずはないと思つて俺は触れるところを全てタップする事にした。

個人のアイコンは反応なし。ツインドライブは今更なのでスルー。

そうなると残りはゲージ部分。

「ただ、これはゲージの拡大なんだよな」

それでも一応タップすると、予想通りゲージが拡大される。

「……………」

しかし、俺は気付いた。ゲージの色が拡大前と違って虹色に変わっている事に。

どういう事だと再度タップすると、拡大が通常状態へ戻ってしまった。

だけど、ゲージの色は虹色のまま。

「もしかして……」

残る八人のゲージも拡大してはタップするを繰り返していく。程なくして九人全員のゲージを虹色へと変化させられた。

「えっ!？」

するとツインドライブのアイコンが変化し、何故か周囲が虹色で縁取りされたのだ。

「よく分からないけど、ツインドライブプラスって事でいいのかな?」

ツインドライブギア自体が強化されたのかもしれない。

依り代の欠片が無くなったはずなのに効果があるのかと思うけど、今は考えられる余裕がないのも事実だ。

何せ悪意の奴がまた上空で両手に闇を集めてるんだ。今度あれを使われたらさすがにどうしようもない。

「みんな頼むっ! 起きてくれっ!」

そう祈るように叫んで、俺は九つのツインドライブアイコンをタップしていく。

それが終わると俺の周囲には九つの光の柱が出来ていた。

それぞれのイメージカラーの光の柱。見てるだけで安心感が湧いてくるような、強くも優しい光の数々だ。

そこへ再び放たれる闇の光球。その大きさはさっきよりもでかい。なのに、どうしてだろうか。まったく不安も恐怖もないのは。

何となくだけど、もう大丈夫と心から思える何かが今の俺にはある。

「……行ってらっしゃい」

「「「「「行ってきます (デス)」「」「」「」」」」」

光の柱の中からこっちを見ているだろう彼女達へそう声をかけて送り出すと、九つの優しい声が返ってきた。

その光の柱は光の球となってそのまま闇の光球へと向かっていく。そしてそのまま闇を貫いてみせた。

きつと悪意も驚いた事だろう。あの状況からどうやってと、そう思っ

「兄様……あれは?」

「セレナ達、なのか？」

「エル、ヴェイグも……」

意識を取り戻した二人へ声をかけ、俺はまずはヴェイグを持ち上げるとエルへと渡して、そこからエルの体をそっと抱き抱える。

「一体何が起きたんだ？」

「奇跡、だよ。そして、それは今もまだ続いている」

「奇跡、ですか？」

「ああ。求めよ、さらば与えられんってとこさ」

優しくエルの頭を撫でて俺は空を見上げた。

そこに輝く九つの光を頼もしく、そして嬉しく思いながら。

「エル、ヴェイグ、最後まで見届けようか。俺達の希望の光を」

悪意は状況が理解出来ていなかった。

自身が唯一弱点としている「愛」と呼ばれる力を注がれる事がないように具現化し、それに類する力は瘴気によって完全遮断した。

更にその類する力を与えていた端末はその力を失い沈黙した事を確認している。

最早自身に敵はいない。そう確信していたのだ。

先程までは。

「どういう事だ？ 何故まだ生きている？」

悪意は目の前に並ぶ九つの光の球へ疑問を投げかける。

そう、悪意には分かっていたのだ。それが正面から打ち破ったはずのシンフォギア装者達である事を。

「歌が、聞こえたんだ」

「歌？」

「そうだ。歌だ。心からの想いを叫ぶような、魂を揺さぶる歌だ」

「ピッチも何もあったもんじゃねーけど、それでもあたしらの心に響く歌だった」

「……理解出来ぬ」

「そうだと思います。だからこそ、悪意なんデスね」

「悲しいね。歌がどういいうものか分からないなんて……」

「別に構わぬ。我に歌など不要」

「なら、その不要と思うものに貴方は負けるのよ」

「そうさ。実際あんたは愛も分からないんだろ？」

「あい……我を滅ぼすもの」

「違う。愛は滅ぼす力なんかじゃありません」

「愛はね、強さなんだよ。優しさなんだ。心の光なんだから」

「そんなものがあるから人は苦しみ、傷付く。我を生み出す原因だ」

その言葉に九つの光の球が弾けた。

——違うっ！ 心の光があるから人は生きていける（んデス）っ！

悪意の前に姿を見せたのは純白のギアインナー姿の響達。

その周囲には黄金の光がバリアのように展開されている。

ラピス・フィロソフィカスの輝きと同質の、だがそれ以上に強い聖なる光だ。

「目障りな……消えろ」

悪意の手から放たれる漆黒の波動。

そのおびただしい濃度の瘴気を響達の周囲のバリアは平然と受け止め、彼女達は凜々しさを失わぬまま正面を見つめていた。

「……何？」

「今の私達はもう闇に負けません」

「この身を包む光こそお前が自分を滅ぼすと言った愛で出来ている」

「そういうこった。これは、ただのツインドライブじゃねえ」

「私達を想い、支えてくれた人の強い心。それが私達にこの光をくれた」

「たった一人でアタシ達のために頑張ってくれた、とつても大切な人の光デス」

「私達はずっと愛ではなく恋をしてきた。だから貴方に付け入られた」

「だけど、そんなあたし達をあの人には本気で心配して助け出してくれた」

「ギアもないのに、自分に出来る事をつてそう思ってた」

「そんな人だから、私達も同じ想いを返したい」

ゆつくりと純白のギアインナーへ鎧のようにギアが装着されていく。

純白で出来たそれらは、形状だけならエクストライブだった。だが、一か所だけ大きく異なる点がある。

それは、首元のマイクユニット。その中央のギアペンダントでもある部分に小さな窪みのようなものがあつたのだ。

依り代の欠片が埋め込まれていた箇所である。そこだけが寂しうに穴として存在していた。

「くだらぬ……。無限の闇に沈み、永久とこしえに眠るがいい」
そこへ聞こえてくる音楽があつた。

静かに、まるで胎動のようなその旋律に悪意が訝しむように目の前を見つめる。

その音楽は目の前の九人から聞こえていたからだ。

「何だ、それは」

「音楽だよ。これは、歌の前奏かな？」

「前奏？」

「うん。多分だけど……」

そこで響達全員は視線を下へ、正確には斜め後方へ向ける。

そこには依り代を片手に自分達を見上げる仁志と、彼の腕の中から顔を上げるエルフナインとヴェイグがいた。

「あの人が、流してくれてるんだと思う」

「何のためだ？」

「きつと、貴方を止めるため」

「我を止める……？」

その瞬間、音楽が一変した。

激しいサウンドが流れ、歌の始まりを告げるようなものへと変わったのだ。

—— Listen to my song……。

聞こえた歌声に響達は小さく笑みを浮かべて頷き合つた。

伝わってきたのだ。仁志の想いが、考えが。

その彼らしいものに九人の装者は最初で最後だろう行動を始めた。

「繋ぐこの手がアームドギアっ！ ガングニールの装者、響っ！」

「蒼の一閃、全てを斬り裂くっ！ 天羽々斬の装者、翼っ！」

「真紅の弾丸、闇を撃つっ！ イチイバルの装者、クリスっ！」

「魂を刈り取る深緑の鎌っ！ イガリマの装者、切歌っ！」

「絶望を薙ぎ払う回転刃っ！ シュルシャガナの装者、調っ！」

「全てを守る慈愛の白銀っ！ アガートラムの装者、マリアっ！」

「貫き穿つ緋色の衝撃っ！ ガングニールの装者、奏っ！」

「優しく包む癒しの白銀っ！ アガートラムの装者、セレナっ！」

「支え護る神秘の鏡っ！ 神獣鏡の装者、未来っ！」

それぞれが名乗りを上げると、その開いていた穴にそれぞれのアウフヴァアツヘン波形が浮かび上がり、穴が塞がれると同時にヘッドセットが展開され、完全にギアが展開し終える。

「「「「希望を紡ぐ光のシンフォニーっ！」「」「」「」

「っ!」

放たれた言葉の迫力に悪意が僅かではあるが怯む。

邪悪を見逃さないという迫力のようなものをその声から感じたのだ。

怯んだ悪意へ戦姫達は凛々しさを輝きに変えて告げる。

「「「「戦姫絶唱っ！ シンフォギアっ!!」「」「」「」

九つの声が重なり合い、その身を包むギアの色を一瞬にしてそれぞれのイメージカラーへと染め上げる。

縁取りに金色を施されたそれこそ「エクストライブギアツインドライブ」。

またの名を「エクストライブアンリミテッド」という、あらゆる闇に負けない光のギアだ。

その名乗りを聞いて悪意は怯み、仁志達は目を輝かせた。

「本当にヒーローだな……」

「はいっ！ スーパー戦隊みたいですよっ！」

「見てるこっちまで気分が高揚するぞっ！」

「ああ、そうだな」

悪意による瘴気と共に絶望感さえも吹き飛ばした九人の装者を見

つめ、仁志は小さく呟く。

「あとは頼んだぞ、シンフォギア」

決戦の幕開けを告げたのは防人を自任する彼女の一撃だった。

「先陣を切らせてもらおうっ！ 行けっ！」

放たれた一閃は、蒼迅ノ一閃。

天羽々斬と天叢雲剣が融合したアームドギアによるそれが悪意へと向かう。

「無駄だ……」

瘴気を展開し翼の一撃を防ぐ悪意だったが、これまであらゆる攻撃を無力化してきた防壁をあつさりとその一撃は斬り裂いてみせた。

「何？ 馬鹿な……っ」

「無駄なものなどこの世にはない。あるとすれば、それはお前がその価値や意味を見いだせないだけの事」

更に悪意へと届いた一撃は見事にダメージを与える事に成功した。

心の光を宿したギアが放つ攻撃は全て悪意に対して特効となるためだ。

「翼に続くよっ！」

「おうよっ！」

クリスのギアと奏のギアが合体して巨大な飛行要塞となる。

しかもその先端には槍がドリルのように装着されていた。

実弾、光学、あらゆる射撃攻撃を前方へ集中させながら突撃していく二人。

瘴気による防壁などありはしないとばかりに突破し、そのまま先端の回転衝角と化した槍で悪意を貫いて駆け抜ける。

その名は Meteor∞Lightだ。

「こ、こんなはずは……」

「チャンスデスっ！」

「行こう切ちゃんっ！」

体勢を崩した悪意へ切歌と調が互いのアームドギアを重ね合わせると投擲した。

二つの刃は空中で交じり合い、高速回転する大鎌状の刃となって悪

意を守る瘴気をズタズタに切り裂いていく。

最後には上空へと舞い上がり分離すると、そこで待ち構えていた切歌と調の足元ヘイガリマの鎌が、背中にシウルシャガナの回転刃が装着される。

背中で回転を始める鋸は風を動かして推進力を生み出し、足元の鎌は鋭い棘のようになって攻撃力を増加させた。

「ダブルキックツ!!」

「がはっ……」

炸裂するのは『双X式・ダ武R^{カイ}u姫ツ駆』。

腹部に孔を穿つような一撃が悪意を襲い、大きくその体を震わせたのだ。

「致し方ない。ここは一度守りに入るか……」

ここで悪意もやられてばかりはいないと周囲へ濃厚な瘴気を噴出させた。

それはシンフォギアからの守りであると同時に自身の回復も兼ねている行為だった。

「そうはさせませんっ!」

「どんなに濃い瘴気だろうともっ!」

「私達が祓って見せるっ!」

セレナとマリアが互いに大きさの異なる三角形のバリアを未来の前へ出現させる。

それを見て未来が集束した凶祓いの光線を発射した。

光線は二枚のバリアをレンズ代わりにして更にその集束率を上げ、レーザーとなったそれは瘴気へと照射されて悪意へも届く。

「ぐっ! あ、有り得ぬ……っ! 有り得ぬぞ……」

その『聖光 Holy Bless』により悪意の回復は阻止され、また同時に瘴気も綺麗に浄化されたのだ。

瘴気の守りを完全に失い、体にもダメージを受けても悪意はまだ健在だった。

だがそれはあくまでも見かけだけの話だ。

実際にはこれまでの攻撃によるダメージはしっかり蓄積されてお

り、回復をしようと放出した瘴気を失った事で一気に消耗していたのである。

「こ、このままでは……滅ぶ。なのに、何故我はそれを恐れていない……？」

エクストライブギアツインドライブの攻撃は全て心の光を宿している。

それはいわば愛の力。悪意を唯一倒せる力に満ちていた。

闇であるはずの純粹な悪意。それを照らし続けるシンフォギア達の光は、ゆつくりと暗闇しかないはずの漆黒の悪意を綺麗にし始めていたのだ。

「私も行きますっ！」

そして最後の一人である響が拳を握り締め悪意へと迫った。

加速しながら拳へ輝きが宿っていく。それは太陽は太陽でも日の出の光。

夜明けを告げるその輝きを宿した拳が悪意の腹部を捉え、そのまま突き進む。

「チェストオオオオツ！」

発声と共に拳を突き出して悪意をライブ会場の壁へと叩き付ける響。

名付けるのなら「我流・昇光正拳」だろう。

「ああ……我の中に、光が満ちる……満ちていく……」

「これは……」

体のあちこちに亀裂が走り、そこから瘴気だけではなく光さえ漏れ出す悪意に響は言葉を失う。

一体何が起きているのか理解出来ない響の周囲へ翼達が合流する。

「立花、どうした？」

「あの、これを見てください」

響が体をどかすと翼達の目に入ってきたのは体中から瘴気と共に光が漏れ出している悪意だった。

「これは……どういう事だ？」

「分からないわ。でも、もしかしたら私達の光で悪意の中の瘴気が浄

化され始めてる？」

「それって悪意をキレイにしてあげられるって事？」

「多分そうなるね。でも、まだ完全って訳じゃないらしい」

奏の言葉通り悪意の体から生じている亀裂は光と瘴気を同時に噴き出している。

あれが光だけになれば悪意を綺麗に浄化してやれるかもしれないと、そう誰もが思った。

「なら、もっと攻撃すればいいんじゃないデスか？」

「切歌ちゃん、こんな状態の悪意でも遠慮なく攻撃出来る？」

「私は出来ないから切歌ちゃんだけでやってね」

「デデッ!? あ、アタシだって気が引けるデスよ！」

「となると、だ。残された手立ては一つしかねーだろ」

そのクリスの言い方でその場の全員が瞬時に理解し、誰ともなく笑みを浮かべた。

すると聞こえていた音楽が止まり、別の音楽が流れ始める。

その音楽を聞いた瞬間、翼と奏が小さく驚き、微笑みを見せた。

響や未来、クリスはそれが何の曲か察して笑みを浮かべる。

切歌と調などは嬉しそうに顔を見合わせていた。

マリアは小首を傾げるセレナへそれが何の曲かを教える。

全員のギアが金色へとゆっくり染まっていき、黄金のギアへと変える。

そしてその状態で唄われる歌は『虹色のフリーユージェル』や『未来へのフリーユージェル』に続く『こがね黄金色のフリーユージェル』だ。

「初めて聞く歌です……」

「依り代にも入ってないな……」

「そりやそうだよ。何せこれは、神様も知らないヒカリから生まれる胸の歌なんだから……」

空から聞こえてくる九つの歌声に耳を傾けながら仁志は笑みを浮かべる。

(倒すのではなく浄化する、綺麗にするという決着を望んだみんなが起こした奇跡、なんだろうな)

天高く響く九つの旋律。その調べと音色に包まれ、悪意は不思議な感覚を味わっていた。

「これは……何だ？ 我が……滅ぶというのに……恐怖はなく……むしろ温かさを感じる……」

「これが歌だよ」

「これが、歌……」

「そう。ほら、貴方も一緒に唄おう？」

「うたう……？」

未来の言葉の意図が理解出来ない悪意だが、そんな彼へクリスがサビの出だしを軽く唄って聞かせると、最後に小さく笑みを見せた。

「ほら、今みたいに口に出すんだよ」

「やってみて？ きつと出来るはずだから」

そう言つてセレナは悪意の手を取った。

それが切つ掛けになつたのだろう。悪意はたどたどしくも唄い始めたのだ。

既に音楽は止まり、そこには悪意の合成音声のような歌声だけが響く。

「よし、そのまま唄い続けな。あたし達もそれに合わせるから」

「ええ。ゆっくりでいいから」

奏とマリアに小さく頷き、悪意は初めて歌を唄う子供のようにサビだけを唄い続ける。

「おう、だんだん上手になつてる気がするデスよ」

「ホント。その調子で頑張つて」

切歌と調べも小さく頷き、悪意は歌を唄い続ける。

その声は次第に女性の声へと変わっていく。

そしてその声はつきりとしたものへ変わり切つた時、誰もが軽い驚きを浮かべる事となる。

「これは……フィーネの声か」

翼の言つた通り、今の悪意が発している歌声はフィーネのものであつた。

その歌声に響達は笑みを浮かべて歌声を重ねる。

十の声が重なり、旋律となって空へ響いて消える。

「……不思議だ。我は闇のはずなのに光で満ちている」

「光と闇は表裏一体なんだって。だから貴方も光になってもおかしくないよ」

もう悪意の亀裂からは光しか漏れ出ていなかった。

それに伴いその体もゆつくりとではあるが消滅していつている。

既に下半身は消え、上半身も後は肩から上しか残っていないかったのだ。

「そうか……我も光になれるのか……」

噛み締めるような言い方で悪意は眩くと空を見上げた。

色が抜け落ちていいる空だが、響達九人がいるおかげでそこだけは色鮮やかな空となっている。

それを見つめ、悪意は、世界蛇の巫女の残滓は安堵するようにこう告げた。

——見事な空だ。これが綺麗という事か。ああ、成程たしかに無駄なものなどない。我はやつと価値や意味を見出せたようだ……。

満足そうにそう告げ、悪意と呼ばれた存在は歌を口ずさみながら静かに消滅していく。

キラキラと輝く、光の粒子となりながら……。

アクションの風

「終わったんだな、本当に……」

綺麗な光の粒子になって消えていく悪意を、心の闇だったものを見送りながら呟く。

最後の最後に拳を握り締める事なく、歌を唄って終わらせた響達に拍手を送りたい気分だ。

「はい、終わりました。本当に、全部、終わりました」

静かに降りてきた響の言葉に込められたのは、きつと喜びだろう。

あの悪意と最後には一緒に唄って終われたんだ。

それは、きつと響からすれば一種の理想的な結末だろうし。

「そういえば仁志、依り代はどうして使えるんだよ？」

「ああ、それか」

クリスの疑問に俺は手にした依り代へ目をやった。

バッテリーは今も0%なのに画面がついているという不思議状態のそれ。

「多分だけど、今のこいつは電気以外のエネルギーで動いてるんだと思う。みんなのギアにあった欠片を全部回収させてもらったから」

そう言つて依り代をみんなへ見せると響とクリス、そしてエル以外が小さく頷いた。

まあ元々の状態を知ってるのは三人だけだもんな。

「でも、電気以外のエネルギーって……何？」

セレナの質問へ俺は小さく笑つてこう答える事にした。

「そうだなあ。それこそ人の心の光、じゃないかな？ あるいは……」

「絆、のエネルギーかも。単なる欠片が依り代本体と同じまになつた。だからこそそれらを一つにした事で依り代は元々よりも強化されたかもしれないしさ」

俺の記憶が間違つてなければ、あの時見た存在は絆の名を冠されたヒーローの究極状態だ。

ただ、はつきりと見た訳じゃないし、そもそも俺の中にある記憶を

使って星の声が姿を作っている可能性もある。

だから、明言は出来ない。違う可能性がある以上、これはみんなにも黙っておこう。

そんな時、微かにだが風が流れた。

「そよ風ね……」

「ああ……心地いいな」

戦い終わって感じる風、か。たしかにいいもんだ。

「待ってください。風が流れると言う事は……」

「時間停止が解け始めてる……?」

言われて空を見上げるも、そこはまだ色が抜けている。

だが、よく見ると雲がゆっくりと動いていた。

「……マジだ。雲が動いてる」

「……………本当だ。じゃあ、やっぱり時間停止は星の声がやってた?」

「みたいです。悪意が光になってくれたからもう時間を止めてる必要がなくなっただって事なんだ」

「やったデスよ！ これでみんな元通りデス！」

「本部もきつとその内元の状態に戻るはず！」

喜び合うザバコンビを見て俺は遠い目になった。

時間停止が終わると言う事が何を意味するかを、俺は正しく認識出来たから。

「じゃあ、勝利の余韻に浸りたいところだけど俺の世界まで一旦来てくれるか？ 今度こそちゃんとした区切りの時だし」

俺がそう切り出すと、セレナ達は笑顔で頷いてくれたがマリア達はどこか悲しげな顔を一瞬見せた。

どうやら年長組はやはり分かっているらしい。今回の別れこそ本当の別れになるかもしれない事が。

ゲートを通ってすっぴん綺麗に、元通りになったギャラルホルンの中に行く。

切歌やセレナは響へここを綺麗にした事を凄い凄いと褒めちぎり、調はエルやヴェイグと父さんや母さんへも挨拶しないとなんて話をしていた。

そんな会話を聞いたクリスへ未来が説明をする横で、奏が MARIA や翼から似たような話を聞かされていた。

俺の世界のゲート、つまり裂け目へ到着すると初めて見た時の半分程の大きさになっていた。

そして同時に依り代が微かに震える。バイブにしたはずはないのにといいながら画面へ目をやれば、バッテリー残量を示す電池の部分が点滅を始めている。

「これは……」

「一気に小さくなり過ぎデスよ」

「そうだね。大人一人ぐらいは余裕だろうけど……」

「みんなで通るのはもう無理ですね」

セレナ達の言葉を聞き、画面の変化からやっぱりそういう事なんだろうと思う。

ゲートの大きさもそれを後押しするようなものだ。

なら、ちゃんと切り出そうか。

「うん、どうやらここでお別れした方が良さそうだ」

「え？」

俺の言葉に腕の中のエルが顔を上げてこっちを見つめる。

「多分だけど、もう俺の世界とのゲートは必要ないんだと思う」

「必要ないって……」

「どういう意味ですか？」

調とセレナの言葉に俺は手にした依り代を見つめる。

電池の点滅は心なしが早くなっていて、残り時間があまりない事を俺に伝えているようだった。

「どうやら時間がないらしい。星の声の加護も、そろそろサービス終了みたいだ」

そう言っただけ俺はみんなへ依り代の画面を向ける。

「見てくれ。バッテリー残量を示す電池の部分が点滅してるだろ？ みんなが悪意と唄ってる時はこうなってなかったんだ」

「つまり、もうすぐ依り代は依り代ではなくなる？」

「かもな」

ゲート間の移動を可能にし、デュオレリックを負荷無しで実現させ、各特殊ギアの強化形態どころか遂にはエクストライブの強化まで成し遂げた。

だからこそ、こいつは役目を終えようとしてるんだろう。

そんな強い力に頼る事無く生きていけと言いたいのかもしれない。もしくは、これからは自分達でその力を掴んでみるかも。

「そうだ。えっと……」

忘れない内に終わらせないといけない事を済ませておこう。

そう思つて俺はポケットから二つのブローチを取り出した。

壊れてはいなかった事にホツとする。もし壊れていたら最悪だった。

「クリス、奏、これ、俺の父さんと母さんからだ」

「は？」

「仁志の両親がこれまで仁志が世話になったお礼について、私達全員へプレゼントしてくれたの」

「私とマリア、そして奏と雪音はブローチだった。立花達は学生と話したからか、私達四人を社会人と捉えたらしい」

「ちなみに赤のクローバーがクリスでオレンジのクローバーが奏だそうだ」

我が親ながらいい着眼点をしてるなと思つたもんだ。

幸運のお守りでもある四葉のクローバー。それを四人に、それぞれのイメージカラーで購入だもんなあ。

「……先輩達のは？」

「私は青だ」

「私は白よ」

「そっか。仁志先輩の両親、ね。会つてみたかったよ」

「会えるさ。いつかきつと会える」

寂しげに呟く奏を見た俺は反射的に口を開いていた。

その瞬間奏だけじゃなくみんなが俺を見たのが分かった。

「希望を信じて待ち続けるってのはかなり辛いと分かつてる。けど、それでも俺は諦めるつもりはない。いつか必ず、みんなとまた遊

びに行ったり出来ると信じて生きていくよ、これからも」

あの時よりも強い気持ちでそう告げる。

そうだ、ベアトリーチエにも約束したんだ。また悪意が現れて何かする時、俺は必ずそれに立ち向かい阻止してみせるって。

例えそれが出来るような力はなくても、それでもと。

「っ!?」

いきなり体が後ろへと引っ張られる。

振り向けば裂け目が吸いこむように動きながら収縮を始めていた。

「仁志さんっ!」

「兄様っ!」

響が手を伸ばしてくれたけど、俺はそれを掴むのではなくエルへ依り代を握らせて差し出した。

「エルとこいつを頼む!」

「仁志さんっ!」

「約束なんだっ! そうだろエルっ!」

「兄様あつ!」

「待ってるからっ! 返しに来てくれるのをっ! 俺は待ち続けているからっ!」

「兄様あああつ!」

遠くなっていく大切な人達へ俺は右手の親指を立てた。

もう言葉を出す事も出来なかったけど、せめてと思って気持ちを伝えた。

みんなの俺を呼ぶ声が遠く聞こえる中、俺は意識を失った。

目覚めた時には俺はリビングにいて、ゲートだったはずのノートPの画面は何も映さず沈黙していた。

これが、俺の有り得ないような日々の終わり。

そしていつ終わるか分からない再会までの戦いの始まりだった……。

「よく無事に戻ってきてくれた!」

発令所に師匠の声が響く。

でも、師匠の表情がそこで微妙なものへ変わった。

「とはいえ、今回に関しては想像以上に困難な出来事の連続だったよ
うだな」

「そうですね。まさか時間が停止していたなんて……」

「正直あの時の経験がなかったら信じられませんが」

友里さんも藤堯さんも一度依り代で意識だけ取り戻した時がある。

だから私達の報告も信じてくれるんだけど、これはきつと他の人達
は信じられないだろうなあ。

仁志さんが裂け目に吸いこまれて見えなくなった後、そこは何もな
かったように綺麗な状態へ戻った。

みんな、あまりの事に呆然としてた。しばらくそこから動けなかつ
た。

その内切歌ちゃんが涙混じりに師匠って呟いて、それを切っ掛けに
一部が泣き始めた。

エルちゃんは仁志さんが持たせた何も表示しない依り代を抱き締
めてしばらく泣いてたし、セレナちゃんや調ちゃんなんかも涙混じり
に仁志さんの事を呼んでた。

クリスちゃんや未来でさえ涙を流して何度も目元を拭ってた。

マリアさんはエルちゃんとセレナちゃんを後ろからそつと抱きし
めてたし、翼さんは調ちゃんの、奏さんが切歌ちゃんの肩へ手を置い
て傍にいてあげていた。

私は、不思議と涙は出なかった。どこかでまた必ず会えるって、そ
う思えたからかもしれない。

もしくは、あそこで泣いたらもう泣き続けて動けなくなると思った
のかもしれない。

それと、一つだけ分かった事がある。

それは、依り代はバッテリーがなくなっても平行世界を渡る力はあ
るって事。

エルちゃんが言うには、多分だけどあのスマホ自体がもうギャラル
ホルンを通過出来る物質に変換されてるんじゃないかって事みたい。
ただ、前のように砕いて欠片をついていうのは止めた方がいいかもし

れないって事だった。

——依り代のバランスが狂う可能性があります。

あの頃は星の声が保護してくれてたみたいな依り代も、今はただのスマホに近い。

だから何がどうなってギャラルホルンを、平行世界を渡る力を失うか分からないって言うのがエルちゃんの意見だった。

本部へ戻る間ずっと泣き腫らした目で私達へそう説明するエルちゃんが、エルフナインちゃんじゃなくてやっぱりエルちゃんのまま
で安心はしたけど。

「とにかく、だ。悪意とやらの企みを阻止し、こうして全員元通りの状態へ戻れた事は喜ばしい。現地の協力者である只野氏へも感謝を伝えたいところだが」

「実はその事なのですが……」

「ん？」

翼さんが師匠へ一歩だけ前に出た。

それに師匠が不思議そうな顔をしたけど、私達はもう何を言うか分かっている。

「上位世界へのゲートは、裂け目は跡形もなく消えてしまいました。現在、あちらとの行き来は不可能です」

「……………そうか。出来れば感謝を述べたかったが」

師匠の複雑そうな声に誰も何も言えない。

私達も、ちゃんと改めてお別れと再会の約束の言葉を言いたかった。

最後の光景を思い出すと胸が苦しくなる。

「大丈夫ですっ！」

そこへ涙声が聞こえてきた。

声のした方へ顔を向けると、エルちゃんが依り代を抱き締めたまま師匠を見つめてた。

「僕は、僕は必ず依り代を、このスマホを兄様へ返すと約束しましたっ！
！ 幸いギャラルホルンの中を行き来する力は失っていません！

これを分析し再現出来れば、今後の平行世界関係の事件への相互協力

がより容易なものとなります！　もしかしたら、その研究途中で上位世界への行き方やゲートの痕跡を発見出来るかもしれない！」

「それはそうかもしれないが……」

「エルフナインちゃん、それでも上位世界とのゲートは……」

「そもそも裂け目だったんだろ？　そうなると仮にまたゲートが出来たとしても、同じ場所へ繋がるかどうか……」

「だとしてもっ！　僕は決して諦めません！　必ず、必ず兄様との約束を果たしてみせます！」

エルちゃんのその言葉に師匠達が目を見開いた。

でも私達はむしろ微笑んだ。ああ、エルちゃんもそうなんだって。

「司令、悪いけど私達もエルと同じ気持ちよ。たしかにゲートは消えた。だけど、私達は知っている。あの世界を、フィーネも神の力も錬金術も聖遺物さえも存在しない、そんな世界を」

「私達の世界とは歩んでいる道は違いますが、それでも目指すものは、願うものは同じ人達がいる世界を」

「何より、あたしらの事を知っていて、ヒーローが大好きで、子供みてえな大人の顔を持つ奴を」

「ししよーはアタシ達に約束してくれました。諦めないって。アタシ達が会いたって気持ちを持ち続ける限り、いつか必ずまた会えるって」

「あの人は、師匠は生きるのを諦めないって言いました。きっと今も私達と再会出来るって信じて頑張ってるはずです」

「あの世界はあたし達には色々と誘惑に満ちてるのは認めるよ。だけど、あの人は、仁志先輩はあたし達がそこに逃げる事をよしとしない人なんだ」

「きつとお兄ちゃんは私達が装者を辞めて逃げてきたら、ちゃんと自分のするべき事をしないとダメって言うと思います」

「せめて引き継ぎをしてからおいでって言うんじゃないかな、只野さんなら」

「ヒトシならそっちだろうな。セレナ達が装者を辞める事は理解するはずだ」

「うん、そうだと思う。仁志さんは私達をただのひとにしたがってたし」

その言葉にみんなが頷いた。

出来ればあれがずっと続けばいいのについて思ってたけど、それは言わない。

だって仁志さんは言った。あそこは休憩場所だって。逃げ場所じゃないんだって。

それに仁志さんは私達とまた会えるって信じて生きると言った。逃げないって、そう言ったんだ。

なら私達が逃げる訳にはいかない。これからも自分達の居場所ので、世界で頑張っていけないと。

でも、ちゃんとシンフォギア辞める事が出来たらいいですよね？

それなら仁志さんも、星の声も許してくれるよね？

「君達をただの人に、か。只野仁志、だったか。一度会って話をしてみたいものだ。一般人でありながら君達の心をそこまで掴み、支えた男と」

「おっさんとは話が合うかもな」

「ほう？」

「仁志さんは特撮のヒーローだけでなく怪獣映画なども好きなのです。巨大ヒーローなどもですが」

「きつと司令があの世界へ行ったらレンタルで映画を食い入るように見ていきそうね」

「それは別の意味で楽しみな話だ。俺も休暇を取ってそこへ行ってみたいものだな」

師匠はそう笑って言うのとエルちゃんへ顔を向けた。

「エルフナイン君、そういう訳だ。俺個人としても、そしてS.O.N.Gとしても出来る限りの支援はしよう。依り代のギャラルホルン渡航能力を分析解明し、今後の平行世界との連携へ役立ててくれ」
「はいっ！」

「それと、君達平行世界の装者達はそれぞれの世界へ帰還後、今回の顛末を報告して欲しい。そして可能ならば依り代の分析に協力を依頼

するかもしれない事もな」

「分かったよ。了子さんへ話しておく」

「私もママへ話しておきます」

「頼む」

これで話は終わりつてそう思った時、エルちゃんが手を挙げるのが見えた。

「あ、あのっ」

「どうした？ まだ何かあるのか？」

「ぼ、僕は奏さんについて行きたいんです。キャロルに、もう一人のキャロルに会いたいんです」

「もう一人のキャロルに？」

そっか。そもそも仁志さんが依り代をエルちゃんに貸したのはそういう目的なんだっけ。

「師匠、それなら私が護衛もかねて同行します」

「それは構わないが、疲れていないのか？」

「そうだよ。特にエル、あんたはかなり泣いてたんだし、今日のところは止めときな。キャロルに関してはあたしが旦那に頼んで向こうへ連絡入れてもらうよ。きっと依り代の事を話せばあっちだって興味を示すはずだしね」

「私もそれがいいと思うぞエル。立花も気持ちちは分かるがここは体を休めるべきだ。お前も悪意に体を操られていたしな」

「うっ、そ、そうですね。分かりました」

言われてみればちよつと体が怠いかも。

今になつて疲れが出てきた気もする。

こうして奏さんとセレナちゃんにヴェイグさんを見送つて私達は体を休める事になった。

エルちゃんは今日だけはマリアさん達と一緒に過ごす事になつて嬉しそうに笑つてた。

出来ればこれからずっとエルちゃんが一人にならずに済むようにしたいけど、今はちよつと無理そうかな？

私は未来と一緒に帰る事にしたし、クリスちゃんは翼さんと一緒に

今日は過ごすみたい。

こっちはこっちで一人が辛いつて思ってるんだって分かって、翼さんもクリスちゃんも苦い顔をした。

でも、そうなるかとセレナちゃんはヴェイグさんいるからいいとして奏さんはどうするんだろ？

寂しく思いながら一人暮らし続けるんだろうか？

そんな事を考えてる内に本部の外へ出た。そこには一台の車があつて、緒川さんがその傍に立ってる。

「ではゆつくり休め」

「またな」

「うん、またねクリス」

「翼さんもちやんと休んでくださいね」

「ああ」

緒川さんの運転する車に乗ってクリスちゃんと翼さんは帰って行く。

それを見送りながら私は未来と歩き出す。

と、そこである事を思い出した。

「あっ！」

「ど、どうしたの？」

「クリスちゃん、お部屋の炊飯器仁志さんの世界に残したままだ……」

「……別にいいんじゃない？ 多分今夜は二人もご飯作る気力はないと思うし」

「そ、そうかもしれないけど……」

今後困るんじゃないかな。クリスちゃん、まだもう少しこっちにいいんだし。

「それに、クリスが翼さんの部屋でしばらく泊まる理由にもなるし」

そう言つて未来が笑う。そっか、そうだよな。

「じゃあ、帰ろっか」

「……うん！」

そうだ、帰ろう、私のいるべき場所へ。

もうそこにクリスちゃんはいないけど、隣に仁志さんは住んでない

けど、代わりに未来がいてくれるから大丈夫。

「未来、そのヘアピン、似合ってるね」

「響の方こそ可愛いよ。また今度、改めておばさんとおじさんにお礼言わないとね」

「そうだね。また今度会いに行かないと」

私と未来の頭にある可愛い花飾り。私がヒマワリで未来がナゲシコだ。

おばさんとおじさんが私と未来にくれたプレゼントで、あの世界との確かな繋がりでもある大事な物。

二人してそれをそつと触って笑い合う。

あの世界は今も私達へ元気や希望をくれる。未来と一緒に歩いていくけど、思えばそれも久しぶりだ。

そしてこの服もだ。大切に着よう。そして絶対にあの世界へ行く時には着ていくんだ。

「ところで今夜のご飯はどうする？」

「そうだなあ……牛丼とか？」

「ふふつ、オレンジの看板も赤い看板なんかもこつちにはないよ？」

「そっかあ。じゃあ……」

すっかり私達の中にあの日々は生きてる。

いつか、きつといつかあの日々を思い出話として語り合える日が来る。

その時には、必ずあの人もいてくれるはずだ。子供みたいに笑う、私の初恋の人が……。

上位世界とのゲートが消えて、ゆつくりと響達の生活は本来のものへと戻り始めた。

訓練や時折入る出勤要請をこなす日々も戻ってくる。勿論、平行世界関係の面倒事も。

だが上位世界で得た有形無形問わぬ様々な力がそれらを本来よりも少しだけ、ほんの少しだけ良い方向へ変えていく事を彼女達は気付けない。

——翼さんっ！ クリスちゃんっ！ ユニゾンを試みましょうっ！

——そうだな！ 例え依り代の欠片は失おうともっ！

——あたしらには、あの世界で過ごした時間と同じ男への想いがあるっ！

本部内へ突如として出現した謎の侵入者とその使役する蛇のような存在を相手に、響達はユニゾンを以って対抗。

何と侵入者を追い詰めその逃げた先の世界で新たな出会いと絆を掴む事となる。

本来ならば起きるはずだった衝突や誤解をある程度回避し、メックヴアラヌスと呼ばれる力を強化しながら。

——どうしてそっちはわたし達を、メックヴアラヌスを信じてくれたの？

——闇から生まれた力でも、魂が光を目指せば光になれるって知ってるから、かな？

どこまでも生きる事を諦めない気持ちと姿。そこに目指すべき在り方を見た少女達は闇から生まれた禁じられた力を御してみせた。

ヒーローになりたい少女とヒーローを知っている少女はまたの再会を約束するように手を繋ぎ、笑顔で別れる。

——貴方達がウルトラマンだと言うのなら、最後の最後まで希望を捨てず不可能を可能にしようと出来るはず。

——そうデスっ！ 地球人だって宇宙人デス！ それなのにどうして他の星の人達を簡単に殺そうとするデスかっ！

——本当のウルトラマンだって神様じゃない。だからこそ悩みもがいて手を伸ばし続けた。力だけあっても大事なものは守れない。一番大事なのは、本当の優しさを持ち続ける事です。

ギヤラルホルンのアラートによって繋がった新しい世界。

そこでマリア達はウルトラマンを名乗る若者達と出会い、彼らへ復讐しようとする侵略者の先兵とされていた宇宙人を助け出す。

新たなギアの入手にも成功するが、それは本来とは違い彼女達が本当のウルトラマンを知っているからこそ得た姿だった。

——マリアさん、俺、これからも悩み迷いながらも足掻き続けるよ。みんなの笑顔のために。

——ええ。今の貴方ならそれが出来るわ。今の貴方は、立派なウルトラマンだもの。

スペシウム光ではなく心の光でウルトラマンギアになった事実。それをウルトラマンを真に知らぬ若者への指針として残して三人は帰路へ就く。

——呪いの魔剣……。イグナイト、か……。それしか、ないのかもね……。

——例え呪いの力でも、心さえ強く持ち続ければ光に出来ます。なら、やってみましょう。

——そうです！ 闇から生まれた力でも、誰かを、笑顔を守る事は出来るって私達は見せてもらったからっ！

——ああっ！ 今のセレナ達なら呪いの力だって光に出来るはずだっ！

ヴェイグの同胞を助けるためにイグナイトギアを使用可能としたセレナ達へ、エルフナインはかつて依り代だったスマートフォンを手渡した。

それがあればもしかすれば呪いに囚われたドヴァアリンを解放出来るかもしれないとの、淡い希望を込めて。

——依り代よ頼むっ！ 俺に、ドヴァアリンを助け出す力を貸してくれっ！ ヒトシがセレナ達を助け出したように、俺も大事な仲間を、友をつ、家族を助けたいんだっ！

セレナ達が道を切り開き、ヴェイグがスマートフォンを握り締めてドヴァアリンへと押し付ける。

その結果、一瞬だけスマートフォンが光を放ち、ドヴァアリンを包み込む事に成功。

呪いの魔剣の大元であったドヴァアリンが光に包まれた事を受け、その力で動いていた機械群は全て機能を停止。

全世界に己の技術や力を見せつけようとした小物の野望を潰し、事件は解決される事となる。

——ヴェイグ、ありがとう。お前も、成長したんだな。

——ああ、セレナ達が、そしてヒトシが俺に心の光を思い出させてくれたんだ。それにこいつも、依り代も応えてくれたんだと思う。

ドヴァリンは奇跡的に一命を取り留めたものの衰弱が激しいため、少しの間根幹世界に残って治療を受けた後、ヴェイグとは別の世界で人を見つめ直したいという理由で自ら奏と共に暮らす事を選び、ビルデガント社が引き起こした一件は幕となった。

そんな激戦が一段落した辺りでエルフナインは一人寝の寂しさを切歌や調へ相談する。

——切歌お姉ちゃん、調お姉ちゃん、僕はもう一人で寝るのが辛いです……。

研究室はとてでもないが誰かが泊まれる場所ではない。

そのため、お姉ちゃんとして二人はそれを何とかしようとして弦十郎へ相談し、研究室とは別にエルフナインの私室とも言える場所が用意される事となった。

——エルフナイン君が自室を研究室にした時から考えていた事ではあったんだが、要らぬ世話かと思つてな。

実際かつてのエルフナインであれば丁重に断つた話であつた。

こうしてエルフナインは本当の意味で自室を得る事となる。

そしてそこへしばらく客員研究者という形である少女がやってくる事となるのだ。

そう、その少女とは平行世界のキャロルだった。

——は、はじめましてっ！ 僕はエルフナインです！ エルト、そう呼んでくださいっ！

——……キャロル・マールス・ディーンハイムだ。

依り代を使って平行世界のキャロルへ会いに行くという仁志からの提案を叶えたエルフナインは、沸き上がる喜びや嬉しさを殺す事もなく満面の笑顔で挨拶する。

そんな彼女を見たキャロルは、自分そっくりだが雰囲気や喋り方が異なる相手に奇妙な感覚を覚えながらも、エルフナインとの時間は案外楽しいものだったらしく依り代の研究への協力を快諾するに至る。

これによりエルフナインとキャロル、そしてオートスコアラー達の賑やかな共同生活もとい共同研究は幕を上げる。

——キャロル、起きて。もう朝だよ。

——んっ……もう少し寝かせろ。寝たのが遅いんだ。

——だから日付が変わる前で寝ようって声かけたんだゾ……。

——仕方ありません。私達で着替えさせましょう。

——地味な仕事だがマスターのためなら受け入れよう。

——エル、あんたは先に食事に行つていいわよ。あとはガリイチヤン達がやつておくから。

——ううん、僕はみんなを待つよ。ご飯は一人で食べるよりも大勢で食べた方が美味しいし、僕はキャロルともっと仲良くなりたいから。

あの上位世界での日々で家庭的な思考へ変化したエルフナインは、キャロルにどこかかつての自分自身を思い出させ、更に彼女自身の中にいるキャロルへも刺激を与えた。

そんなキャロルの反応を見て、オートスコアラー達は学友というべき存在の大きさを実感し、エルフナインをマスターに次ぐ重要人物として認識していく事となる。

当然エルフナインだけではなく響達学院組にも変化は起きていた。

——調、今日はちよつと帰りが遅くなるデスよ。

——……補習？

——違うデスよっ！ その、お友達からクレープを食べに行かないかって誘われたデス。

——そっか。私も一緒にコスメ見に行かないって誘われた。

——デスカ。じゃ、寮に帰る前に連絡するデス。

——うん、私も連絡するね。

まず切歌と調は二人一緒の行動を常に取らないようになっていた。それ故にクラスメイト達とこれまででなかった付き合いを出来るようになり、その交友関係を広げ始めたのだ。

その距離感が変化した響と未来も、仲の良い板場弓美・寺島詩織・安藤創世の三人娘からそれを指摘される事となった。

——何だかビツキーとヒナの雰囲気変わったよね？

——そうですね。以前よりも距離は近くないのにより親密さが増した気が……。

——そう？

——そうよ。何？もしかして一線越えた？

——ないからっ！私も未来も好きな人いるからっ！

——へえ……詳しく聞かせてもらいましょうか？当然男、よね？

——え、えつと……それはそうだけお……。

——えっ!? 嘘でしょ!? あんた達が揃って男に惚れるとかアニメでも有り得ないわよっ！

——さ、さすがにそれは言い過ぎでは……。

——ま、まあ気持ちは分かるけどね……。

——酷いつ!?

——言っておくけど私と響だって女の子なんだからね？

——うんうん、それはそうだよねえ。で、一体どこの誰？

——是非教えていただきたいです。

——そうね。さあ、ちやきちやき吐きなさい？

響と未来は、それまでの恋人のようにも感じられる接し方から幾分落ち着いたものへと変わり、その裏には二人が異性に強く心惹かれたからと響の失言から発覚。

これを切っ掛けに響と未来は根掘り葉掘り追求される事となり、色々な意味で学生らしい日々を送る事となる。

勿論翼達も変化を起こしていた。

——個人でライブ配信、ですか？

——はい。様々な理由で会場などへ来れないファンのために不定期ですがやってみたいのです。

翼は上位世界での日々で感じた事を活かして新たな活動を始めた。生で接する事にこだわるのではなく、また販売などを考えないで純粹に自分の歌を聴きたい者達へ届けたい事だけを考える試みをも。

そこで唄われたのはあの上位世界で知った歌の数々。
さすがに固有名詞が出る歌は避けたが “甲賀忍法帳” や “E T E

RNAL BLAZE”などが好評を博し、CD化を望む声が多く上がる程の人気を得る事となる。

——やるわね翼。じゃあ私だって……。

翼に触発される形でマリアも同様の試みを開始。

こちらにも上位世界で覚えた歌を唄い人気を得るが、それだけで終わらせないのがマリアである。

——まさかこんな形でマリアと唄う事になるとは……。

——ふふっ、個人的な事だしお金を取る訳じゃないからいいのよ。

あの凱旋ライブの被害者への追悼も込めた二人のライブ配信は、事前の予告もなかったのにも関わらず凄まじい反響を呼び、特に最後に唄われた『自分RESET@RT』はこれまでの二人らしくない歌詞と雰囲気もあり話題となった。

——ホントは仁志にも見送って欲しかったけど仕方ねえか……。

クリスも留学先へと出発し、両親の夢を継ぐ為の道を歩き出す。

慣れない異国の地で生活するのはかつてと同じだったからか順応するのも早く、何より歌への真摯な取り組み方とあの上位世界での日々は周囲との交流を図る上でプラスに働いたのだ。

——クリス、先に行ってるよ。

——遅れないでね。

——ああ、分かってるっての。

数人ではあるが友人も出来、クリスは新しい場所でも自分の居場所を得る事となる。

夏休みに一時帰国した際にはかつてのクラスメイトとも過ごし、そこで彼女達とは初めてカラオケへ行く事に。

そこで楽しそうに唄う姿を隠す事なく見せた事で彼女達ともより強い友情を結び、クリスは笑顔が深くして眩くのだ。

——仁志のおかげであたしは笑顔が増えてるぜ。だから、今度はあたしがそっちの笑顔を増やしてやるからな。

当然根幹世界だけでなく平行世界側にも変化は起きていた。

——適合係数が著しい上昇を見せている、だと？

——そうなのよお。どういう事かしら？

——さてね。可能性があるとすれば、あたしに惚れた男が出来たからかね？

——あるいはあの呪いを制御したからかもしれないな。

奏の適合係数が正規適合者と呼んでもおかしくないレベルまで上昇し、そのギア形状も多少ではあるが変化を起こしたのだ。

白色合いが増したそのギアを見て、奏はあの最後の戦いの影響だろうと思って一人微笑み、そんな彼女の笑みを見たドヴァリンも微笑むのだった。

——はい、飲んでみてマム。

——安心しろ。ちゃんと味見はしてある。

——……いただきましょう。

自分の世界へ戻ったセレナはナスターシャへ野菜多めの豚汁を振舞った事を皮切りに、毎日必ず野菜を使った味噌汁を作るようになっていた。

それを飲んだナスターシャの表情が驚きから笑みに変わるのを見て、セレナとヴェイグは笑みを見せ合う事となる。

これまでと同じなようで少しずつ変わっていく日々。

未だアルカ・ノイズという災厄は存在しているが、それでもあの戦いを経験した装者達には敵ではなかった。

ツインドライブやダブルドライブなどなくても、デュオレリックさえ必要ない程に今の彼女達は強くなったのだから。

そして時は経ち、桜が散って、蝉が鳴き、木枯らしが吹いて、クリスマスを過ぎたある日の事……

「すまんなクリスマス君。せつかくの休暇中に」

『別にいいっての。むしろあたしがいる時で良かったぜ』

『アタシ達四人でも大丈夫デスけど、クリスマス先輩がいればカンペキデス！』

「油断は禁物だ。今のところ相手の数は少ないがこちらの動きを知ってどう出るか分からん」

「装者達、間もなく現着します」

「っ!? 現場のアルカ・ノイズ反応増殖っ！ その数……およそ20

「O!?!」

「しかも施設のあちこちに分散していきますっ！」

「防衛を困難にするつもりか……」

渋い顔をする弦十郎だが、そこへ凜々しい声が響く。

『大丈夫ですっ！ こっちは五人ですし、離れたって心は一つですから！』

『そういうこった。それに折角の冬休みだ。面倒事はさっさと終わらせて遊びたいんだよ』

『アタシ達は戦姫絶唱シンフォギアデス。それが五人なら十分デスよ！』

『うん、今の私達なら五人も揃った時点で勝ち確定』

『司令、私達を信じてください。必ず施設を防衛して全員無事に戻ります』

「……分かった。くれぐれも無理はするな」

その言葉に響達は小さく笑い、頷き合うとへりから地上向かって飛び降りていく。

聖詠を唱え、ギアを纏い、別々の場所へと降り立つ五人の戦姫。

いや、敢えてこう言おう。五色の戦士と。

「……希望を紡ぐ光のシンフォニー！ 戦姫絶唱シンフォギアっ！……」

一瞬その背に個人のイメージカラーでの爆発が起きたような光景が浮かび上がったのか、その宣言にアルカ・ノイズ達が若干怯むように後ずさり、通信で聞いていた弦十郎達が絶句する中、五人の戦姫はそれぞれ小さく笑みを零すと同時に弾かれるように動き出す。

あの仁志と心が繋がっていた時に名乗った口上を言う事で、今も彼と繋がっているような気になれるためだ。

「本当はっ！ ちゃんとしたのを言いたいんだけどお！」

「仕方ないよっ！ そんな時間の余裕はないから……ねっ！」

「まったくだっ！ でも意外と悪くねえっ！ ……な」

「デスよっ！ 本当にい！ つと、戦隊みたいデス！」

「個人名乗りはっ！ ……ふう……また別の機会かな」

ふざけている訳ではない。油断している訳でもない。

ただ、今の彼女達には心の余裕があった。揺るがない強さがあった。

想いを寄せる男が考えてくれた心強くする言葉。自らを鼓舞する行為。

それらを行う事で、自分達が今も彼と一緒にいるような気がしていたのだ。

「各装者のフォニックゲイン上昇？ どういう事？」

「歌つてもいけないのか？」

「そのようです。え？ げ、現在も上昇中っ！」

「凄いな、これ。まるでギアが装者の感情と共鳴してるみたいだ」

これまで起きなかつた現象に疑問符を浮かべ続けるあおい。

朔也は感心するようにモニタリングを続ける。

そんな二人とは違い、無言でモニターを見つめているのがエルフナインとキャロルであった。

「エル、どういう事だ？」

「きつと皆さんのギアが強くなったんだ。あの日々で得た色々なものを、絆を力に変えて」

既に依り代の欠片はない。それでも、同じ物を食べ、同じ時を過ごした日々は、時間は消えない。

そこで培われた絆は今も彼女達の胸で黄金色に輝いている。

いつか、もしかすると彼女達は本当に自力でツインドライブのような事を成し遂げるかもしれない。

それでもきつと彼女達はこう言うのだろう。それはツインドライブではないのだと。

何故ならそれは、只野仁志という男との絆で至る姿を言うのだから……と。

あの別れから少し時は流れ、上位世界は新年を迎えていた。

仁志は店長となって初めての年越しを店で迎え、年越しそばとしてオーナーが用意していたカップそばを受け取り、店を出て寒さに震え

ながら自宅へと戻る。

片手には廃棄となつたおでんのタネがいくつか入った容器入りの袋を持ち、残る片手には同じく廃棄のおにぎりが三つ程とカップそばが入った袋がある。

「結局今回も年越しは店だったなあ……」

悲しそうに呟きながら仁志は人気のない道を歩いていった。

元旦の朝6時過ぎなど普段よりも人気がなくなるものだ。

ましてや仁志の暮らす街など観光地でもないために余計静かなものである。

「さっさと帰って飯食って、散歩する気持ちになれたら散歩して、どっちにしろ風呂には入って、仮眠取ったら実家帰るか」

本来であれば今すぐにも帰りたいところではあったが、仁志も新年早々汗を掻いたままで年始の挨拶をする程ズボラではなかった。

玄関の鍵を開け、ドアを開けて中へ入る。当然ながらそこは外よりマシンな程度の温度であり、仁志は靴を脱ぐや逃げ込むようにリビングへと入った。

「あゝ、あつたかいなあ」

タイマー設定で暖房を作動させておいたため、リビングの中はそれなりに暖まっていた。

それでも厚手の防寒着を脱ぐ事なくテーブルの上へ袋を置くや、仁志は手近な椅子に座ると脱力するようにテーブルの上へ頭を乗せた。

「はあゝ……寂しいなあ」

あの引き離されるような別れから既に一か月以上が経過し、一人の寂しさに仁志は心身ともにすっかり疲れ果てていた。

何とか現状を維持してはいるものの、中々マリアや調が食事を作ってくれていた頃のように出来ず、食生活がかつての頃に近しくなっていた事も原因の一つかもしれない。

「さてと、飯にしますかね」

このままだと寝ると判断した仁志は体を起こし、椅子から立ち上がるとキッチンにある冷蔵庫へと向かった。

そこから紙パックのお茶を取り出し、フラフラとコップを持って

テーブルへ戻る。

「コップへお茶を注ぎ、袋の中からおでんの容器やおにぎり、割り箸を取り出してテーブルの上へ並べると、仁志は再び椅子へと座った。割り箸を袋から取り出して二つに割り、さあ食べようとなった時、仁志は思い出したかのように顔がある場所へ向けた。

それは響達が使っていたクッションや座布団などが置かれている場所。

正確にはその一番上に置かれているノートPCだった。

「……みんな、元気にしてるかな？」

毎朝ノートPCを見て、そう呟きながら食事をとるのが仁志の日課となっていたのだ。

そう、あの日から戦姫絶唱シンフォギアは元に戻った。

ただ、仁志が知らぬ間にアプリのゲームはいくつかのイベントを経た事になっていて、まったく知らないイベントやコラボなどを後から知った仁志はがっくりと肩を落とした。

勿論、そのイベントの中に今回の事件は存在していなかった。

それと、仁志が開設した「戦姫絶唱シンフォギアチャンネル」は残っていたもののほとんどの動画が消えており、唯一の救いはドライヴアーヴァオリジナルの二曲が残っていた事だった。

それを知った時、仁志は心の底から安堵の息を吐いたぐらいだ。

そしてその二曲のコメントを読んで理解したのだ。悪意のしていた事の最後の影響が動画のほとんどと全てのコメントを消したのだらうと。

何故なら「天鳴ノ協奏曲」と「貴方ト云ウ 音流レ 満チルナラ

”にはどうやって作ったのかと不思議がるコメントが後を絶たず、元々のコメントは消えていたのだ。

ちなみにタグとして付けていた「ドライヴアーヴァ」というユニット名もファンの中で浸透しつつあり、仁志は知らぬが関係者の耳にもその二曲は知られつつあった。

後日、この二曲が縁で思いもよらぬ関わりを得る事になるとこの時の仁志は知る由もない。

「いただきます」

言い終わっておでんの容器の蓋を外す仁志。

立ち上る出汁の香りに表情を緩めながらおでんを食べ始める。

合間におにぎりを食べ、出汁を汁物代わりにしながら仁志の朝食は進んでいった。

「…………ちそうさま」

一心地ついたところで仁志は空き容器やごみを片付け始める。

それが終わると仁志はやっと厚手の上着を脱ごうとして手を止めた。

「…………散歩に行くか」

外の寒さを思い出すも、いつか響達と再会した時に少しでも外見を維持しておこうと思って、仁志は脱ぎ掛けた上着を着直して玄関へと向かう。

と、その足が何か思い出したように動きを止め、反転すると風呂場へと向かって歩き出した。

外出前に風呂の準備をしておこうと思ったのである。

「帰ってきたらすぐ入りたいから…………」

寒い中を帰ってくる事を考え、仁志は入浴の支度を前もって始めた。

着替えやバスタオルを脱衣所でもある洗面所へ運び…………

「よし、こんなもんか」

全ての準備を終えた仁志は玄関へと向かう。

靴を履いてドアを開けると刺すような痛みにも似た冷たさが仁志の顔を襲った。

その寒風に表情を歪めるも、仁志はドアへ鍵をかけると身を縮ませながら歩き出す。

「…………適当に歩くか」

そう呟いて仁志がまず向かったのはかつてマリア達が住んでいた平屋だった。

その前で少しだけ立ち止まる仁志。

仁志が解約してから借り手が未だに見つかっていないそこは、あの

日々が本当に終わった事を突き付けるような静けさに包まれていた。仁志の脳裏に浮かぶ幾多の思い出、笑顔、声。全てがもう戻らないものだ。

「……行くか」

それを噛み締めるように白い息を吐いて仁志はまた歩き出す。

そこから少し歩いてあの駐車場を通過しつつ次に向かったのは奏達が暮らしていたアパート。

あの部屋は解約してから二か月近く経った現在、新しい入居者が入ったようで住宅情報からは消えていた。

「やっぱここまでは結構あるな……」

少しだけゆっくり歩きながらアパート前を通り過ぎる仁志。

そこもまた思い出の場所だ。

奏、翼、未来の三人とジョギングや散歩した事を思い出し、自分の人生が大きく変わった第一歩でもあった事をどこかで噛み締めながら仁志は歩く。

アパートを通過した仁志はそのまま公園へと到着し、その中をゆっくりと歩き始めた。

最初に彼が行った体力作りの再現である。

「ここをこうやって歩くのも久しぶりだな……」

公園内のウォーキングは一月もしない内に町内の散歩へと変わったため、こうやって仁志が歩くのは半年以上振りだった。

「……あの頃はまだ初夏になるかならないかだったんだけどなあ」

思い浮かぶのは奏が来たばかりの頃の記憶。

まだ悪意の恐ろしさもよく分からず過ごしていた頃の事だ。

そして公園内を一周した仁志は来た道に戻るように歩き出す。

だが、その足はもうマリア達の暮らしていた平屋へは行かなかつた。

しかし仁志の歩みは止まらない。何故ならその道のりはかつては帰路であったものだったからだ。

やがて仁志の視界に古い木造のアパートが見えてくる。

そこは彼が十年以上住んだ思い出の場所。この街で彼が生活する

起点となった場所だった。

「あそこも四月には取り壊しか……」

しみじみと呟く仁志の視線の先には、彼が引越してきた頃よりも幾分寂しさを増したアパートの姿がある。

いよいよ今年春には目の前の建物は取り壊しが始まるのだ。

仁志がそれを知ったのはふとした偶然だった。

今のように散歩をしていた時にアパートの大家と出くわし、そこで軽い世間話をした際に教えられたのだ。

「……出会いの数だけ別れがあつて、別れの数だけ出会いがある、か。よろしくと言った数ときよならと言った数、今の俺はイコールになつてるといいんだけど……」

そう呟いて仁志は小さく笑みを見せるとアパートへ背を向けて歩き出すなり歌を口ずさむ。

「都会まちの人ごみ、肩がぶつかってひとりぼっち〜」

そうやって仁志が歌を口ずさみながら歩いていた頃、彼の暮らす借家のリビングに置かれたノートPCに小さな変化が起きていた。

何も映さない真っ暗な画面に、ほんの少しではあるが揺らぎのようなものが現れたのだ。

まるで水面の波紋のように広がっては消えるを繰り返す揺らぎ。

それは何かの余波で起きているようでもあった。

あるいは、何かを発している影響なのかもしれない。

「ただいま……つと」

それからしばらくして仁志は帰宅し、着ていた上着を脱いでソファへ投げ捨てるように放ると風呂場へと向かった。

ノートPCには相変わらず波紋のようなものが出現していたが、当然のように仁志はそれに気付かないままだ。

思いもしないのだ。ノートPCに変化が起きているなどと。

しかも劇的な変化ではなく静かな変化なのだから余計だろうか。

「寒いなあ……」

キツチンを通過して脱衣所で着ている物を素早く脱いで、下着類はそのまま洗濯かごへと入れるや仁志は風呂場へと入った。

風呂の蓋を外せば湯気が一気に立ち上って風呂場を包む。

そうして仁志が風呂で汗や疲れを流し始めた頃、ノートPCの画面の揺らぎはその起きる感覚を短くしていた。

最初の頃は1分間に一度だったのが今は10秒に一度波紋が起きていたのだ。

だがそこから変化は起きなかった。ただただ波紋のような現象がノートPCの画面に起き続けるのみだった。

それは仁志が風呂から上がった後も変わらず、しかも彼は気付く事も無かった。

「さてと、昼過ぎまで寝るかあ」

欠伸をかみ殺しながら暖房を停止させてフラフラとリビングを後にする仁志。

静まり返ったりリビングでノートPCの画面だけが変化し続ける。

波紋は遂に常となり、画面はまるで揺れ続けているかのような状態となっていた。

だがしかし、変化はそこが終点だったらしくそれ以上の進展は一切見られなかった。

それは仁志が起きてくるまで延々と続き、画面の中だけが振動し続けているかのようなのだ。

やがて仁志が目覚め、寝惚けた顔でリビングへと戻ってくる。

「ふわっつ……しまったなあ。いつそ風呂は起きてからにするべきだったか？ 眠気が酷いや……」

独り言を呟き、ふらふらと歩いていた仁志は軽くその場でよろけてしまう。

「ととつ……ぶっ！」

そしてその体は座布団やクッションを積んである場所へと倒れ込んだのだ。

無論、その上に置いてあるノートPCへも仁志が咄嗟に突き出した手が触れた。

その瞬間、画面の波紋が止まった。ただ、それを仁志が見る事はなく気付く事さえもない。

「まいったな。倒れた先がここで良かったよ」

体をクツションや座布団に埋もれさせるようになりながら、仁志は一人そう言って苦笑する。

立ち上がると顔を洗いに移動を始めた仁志だったが、その後ろで何かの気配がしたので振り返った。

「つと……え？」

そこで仁志が見たのはノートPCの画面から現れたのだろう立花響、だったのだが格好がおかしかった。

身に纏っているのは見慣れたガングニールではなく、どこか禍々しささえ感じさせるような物だったのだ。

だが、仁志はそれを知っていた。更にはそれを身に纏っている立花響の事も。

「嘘……だろ……」

それはいつかの再現のようだった。違いがあるとすれば現れた異邦人だろうか。

しかしその彼女に異変が起きる。

「な、何？」

身に纏っていたエレクライトと呼ばれる装備が細かに振動し、何故か待機状態へと戻ってしまったのである。

「どういう事?!? 故障?!? くっ、起動しないっ!」

突然の事に動揺するもう一人の立花響へ仁志は何かを察したように頷いた。

「もしかしたら、それはこの世界じゃ展開出来ないんじゃないかな？」

「……何でそんなに平然としてるの？」

警戒心を全身から感じさせる立花響へ、仁志はある思い出との違いを感じ取って内心でため息を吐いた。

(これ、あの時以上に面倒な事になるなあ)

それでも見捨てる事も見放す事もしたくない。そう決断し、仁志はまず立花響へ状況説明などをするべく行動を開始する。

「それを説明する前にまず自己紹介するよ。俺は只野仁志、見ての通りのただのおっさんだ」

「……立花響」

「うん、名前を覚えてくれてありがとう。じゃあ立花さん、まず聞いて欲しい事があるんだ。落ち着いて聞いて欲しい」

仁志がこの世界の異常性を説明し始めた頃には、ノートPCの画面は何事もなかったかのように静かになっていた。まるでもう役割は終わったとばかりに。

仁志が出会ったのはもう一人の立花響。彼女は歌を捨てて繋ぐ手も硬く握る事を決めた、そんな存在。

シンフォギアをよく知り、ヒーローをよく知り、そして何よりも彼女がどうして今のようになったかを知っている仁志は、果たして復讐鬼となろうとしている少女とどうやって関わっていくのだろうか。

そして、何故エレクトライトは展開出来なくなったのか。依り代がなくても立花響が動けるのは一体どうしてか。

新しい謎を感じさせつつ、只野仁志の物語は新しい局面を迎えようとしている。

それがどうなっていくのかは、誰にも分からない。

けれど、一つだけ確実な事がある。

「シンフォギアはここで展開出来た。でもエレクトライトは展開出来ない。その差は、きつと君の意識にあると思うよ」

「わたしの……意識……？」

九人もの装者やエルフナインにヴェイグと絆を結べた仁志ならば、必ず荒んでしまったもう一人の立花響とも絆を結べるだろうと言う事だ。

かつて仁志は言った。復讐を目的として動き続けた者はヒーローではないと。

だがしかしこうも思っている。復讐を切っ掛けにヒーローになる事はあると。

果たして彼の目の前にいる少女はどちらだろうか。

「哲学兵装って……知らないか」

「……知らない」

「あく……つと、そうだ。とりあえず今から俺は出かけるところなん

だ。悪いけど一緒に来てくれ」

「は？ 何でわたしが」

「いいから。そこが当分君の暮らす場所になる」

「いや意味が分からないんだけど」

「分かるように言っていないからな。ほらほら行くぞ」

「っ!? 気安く手を引つ張らないでっ!」

新年早々厄介事が始まった。そう思いながらも仁志はどこか笑っている。

一方手を引かれる形の立花響は不服そうだ。

それでも今は従うしかないと分かっているのだろう。大人しく歩いていた。

かつての時とは違い、波乱が起きる事は約束されているような二人。

だが、それを乗り越えた先に仁志が、そして立花響が望む結末が待っているのだ。

今はそれを知らず二人は行く。

大事な者達との再会を信じ続けて生きると決めた男と、大事な者を失ったと思い復讐に生きると決めた少女が。

——ねえ、いい加減離してよ。ちゃんといいてくから。

——分かった。それと無理に手を繋いでごめん。

いつか少女は知るので。目の前の男の口から語られる陽だまりに
関する真実を。

いつか男は知るので。少し離れて歩く少女こそが世界の壁を突破
する鍵なのだ。

いつだって運命を切り開くのは諦めない気持ち。

男を支え、かつて少女も聞いたはずのあの言葉が、定められた流れ
を変えるのだから。

生きるのを諦めるな。その言葉を胸に今日も仁志は生きていく。

あの日々を支え、自分を変えてくれたシンフォギアの消えた世界で
……。